

# 遊戯王GX～鉄砲水の四方山話～

久本誠一

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

遊戯王GXの世界に生きる少年、遊野清明。彼はアカデミア入学試験会場に向かう途中事故で死んでしまうが、『全く同じ時間』に、こちら側の世界でもデュエリストが一人死んでいて……。ああもう、難しいことは別にいい。さあ、デュエルと洒落込もう！（壊獣グレイドル出しながら）

憑依モノともトリップともいえなくもない、そんな曖昧な感じでお送りします。むしろ遊馬とアストラルの立ち位置です、主人公たちは。基本的に原作アニメ沿い。※この作品は暁く小説投稿サイトくにも投稿してありますが、中の人は同じのマルチ投稿ですのであしからず。

追記：ためにしに1・2話だけ2015年9月1日現在の書体で修正してみました。

# 目次

## 入学編

ターン1	生き返って、入学試験	1
ターン2	河に吹く風との出会い	13
ターン3	ポロロッカ VS HERO	28
ターン4	氷上のプリマ	50
ターン5	移動砲台型戦闘機械、VWXYZ!	68
ターン6	闇のゲーム、チェスデーモンの罠!	92
ターン7	出動!はたらく機械たち!	116
ターン8	圧倒!ダブルサイバーVS鉄砲水のHERO!	133
ターン9	迅雷!無限の電極骨を撃つ!	156
ターン10	激突!襲い来る門番の魔手!	177
ターン11	知略!水でなくなる鉄砲水!	194
ターン12	野性!SuperAnimalLearning!	211
ターン13	怪奇!人造人間召喚術!	224
ターン14	伝説!世界最強の片鱗!	239
ターン15	融合!英雄と騎士の意地!	266
ノース校特別編くプリンセス・Tの甘い褒美く		
ターン16	先鋒、玩具箱の勇士達	288
ターン17	次峰、必殺のスペシャルバーガー	312
ターン18	中堅、形を変える襲撃者	338
ターン19	副将(?), 戦いの中進化する竜	356
ターン20	大将、最後に英雄が救うもの	373
ターン21	死神の羽は黒い羽根	385

七つの鍵と守護者たち編

ターン22	真紅の瞳と闇色竜	409
ターン23	吸血美女と5000年の負の歴史	429
ターンEX	真紅のロードを歩む龍	458
ターン24	青い瞳は何を見る	488
ターン25	捨てられたモノと見捨てられた者	509
ターン26	今週のビツクリドツキリ：	530
ターン27	女戦士と宝石騎士	554
ターン28	蘇った少年と不死を目指した男	573
ターン29	聖戦！三幻魔く神の炎、ウリアく	599
ターン30	激戦！三幻魔く神の雷、ハモンく	619
ターン31	決戦！三幻魔く幻魔皇、ラビエルく	633
ターンEX-2	鉄砲水ともう一つの『真紅』	648
ターン32	南方の大自然と暗黒の中世	672
ターン33	冥府の姫と『白き龍』	689
ターン34	鉄砲水と完全なる機械龍	704
ターン28 (裏)	愉快なトリックスターと人工生命	727
ターン35	鉄砲水と菓子屋の陰謀	744
2年生編：そして、光が溢れ出す		
ターン36	鉄砲水と伝説のHERO	763
ターン37	鉄砲水と変幻忍法	776
ターン38	鉄砲水と光の天使	797
ターン39	変幻忍者と太古の鼓動	810
ターン40	鉄砲水と過去の源流	828
ターン41	天上の氷炎と正義の誓い	846

ターン42 冥界の河と三連コンビ

ターンEX-3 鉄砲水と光、光、光

ターン43 ノース校と選ばれし戦士(前)

ターン44 ノース校と選ばれし戦士(中)

ターン45 ノース校と選ばれし戦士(後)

白い光の中で

ターン46 壊れた鉄砲水

ターン47 泥水と永久電力

ターン48 正義の闇と運命の光

ターン49 鉄砲水と負の遺産

ターン50 鉄砲水と優しき闇

ターン51 鉄砲水と歯車と地獄

ターン52 冥府の姫と天球の司

ターン53 冥府の姫と純白の龍

ターン54 鉄砲水と『D』と冥界の札

ターン55 鉄砲水と冥府の姫と

ターン56 鉄砲水と愉快な奇術師

ターン57 鉄砲水と手札の天使

ターン58 鉄砲水と太陽神(陽)

ターン59 鉄砲水と太陽神(陰)

ターン60 邪魔蠍団と正義の誓い

ターン61 鉄砲水と真紅の瞳

ターン62 鉄砲水ともう1つの『真紅』(前)

ターン63 鉄砲水ともう1つの『真紅』(後)

ターン64 鉄砲水と『D』

869

889

906

925

945

960

975

993

1016

1034

1048

1070

1087

1103

1126

1139

1156

1175

1192

1208

1235

1254

1270

1285

ターン65 鉄砲水と移動砲台と侵略者  
ターン66 未知の鉄砲水と帰ってきた『D』

ハメツノヒカリ編

ターン67 光の結社とアカデミア―1F―  
ターン68 光の結社とアカデミア―2F―  
ターン69 光の結社とアカデミア―3F―  
ターン70 光の結社とアカデミア―4F―  
ターンEX―4 光の結社とアカデミア??  
ターン71 鉄砲水と破滅の光  
ターンEX―5 真紅の竜と『真紅の』竜

嵐の転入生編

ターン72 鉄砲水の午後  
ターン73 変幻忍者と黄昏の隠密  
ターン74 鉄砲水と灼熱の傭兵  
ターン75 鉄砲水と七色の宝玉  
ターン76 鉄砲水と流離の浮雲  
ターン77 鉄砲水と魔性の甘味  
ターン78 鉄砲水と『万』の結束  
ターン79 鉄砲水と暗黒の中世  
ターン80 鉄砲水と泡沫の英雄  
ターン81 鉄砲水と毒蛇の神域  
ターン82 鉄砲水と分岐の英雄

砂漠の異世界編

ターン83 鉄砲水と砂上の異形  
ターン84 鉄砲水と天部の舞姫

ターン 85	鉄砲水と天王星の主	1728
ターン 86	冥府の姫と白き魂	1756
ターン 87	鉄砲水とゾンビ軍団	1771
ターン 88	鉄砲水と黒騎士の刃	1786
ターン 89	炎の幻魔と暴食の憑依	1802
ターン 90	科学水龍と神の雷	1820
ターン 91	鉄砲水と幻魔の皇者	1836
ターン 92	鉄砲水と叛乱の歯車	1851

霸王達の戦い編

ターン 93	鉄砲水と精霊の森	1863
ターン 94	蹂躪王と暴食の憑依	1880
ターン 95	蹂躪王と怪異の演目	1897
ターン 96	墓場の騎士と最速の玩具	1920
ターン 97	蹂躪王と墓場の騎士	1941
ターン 98	蹂躪王と荒廃のHERO	1968
ターン 99	蹂躪王と鉄砲水	1989
ターン 100	鉄砲水と大蛇の深淵	2013
ターン 101	霸王の粛清	2033
ターン 102	霸王達の戦い(前)	2050
ターン 103	霸王達の戦い(後)	2067
ターン 104	封印の神と『D』	2086
ターン 105	鉄砲水と封印の神	2114
ターン 106	鉄砲水と優しき闇	2142
ダークネス・カウントダウン		
ターン 107	冥府の姫と変幻忍者	2170

おまけ	鉄砲水の軌跡	277
番外編その2	鉄砲水とGX	273
番外編その1	鉄砲水と絆の英雄	269
ターン127	鉄砲水と遊戯の王	264
you know	あなたのことを知っている	249
ターン126	遊野清明と河風現	261
ターン125	鉄砲水と小さな挽歌	225
ターン124	鉄砲水と、覚悟	258
ターン123	真紅の暴君と紅蓮の災厄	425
ターン122	鉄砲水と紫毒の記憶	502
ターン121	百鬼の疾風と虚無の仮面	132
ターン120	鉄砲水と変幻の銀河	488
ターン119	科学水龍と大地の龍脈	246
ターン118	鉄砲水と決別の歯車	72
ターン117	邪魔の化身とラスト・『D』（魔）	240
ターン116	邪魔の化身とラスト・『D』（邪）	123
ターン115	学園英雄と邪魔の化身	80
ターン114	鉄砲水と表裏の皇帝	235
ターン113	鉄砲水とシャル・ウイ・デュエル？	523
ターン112	鉄砲水と五行の竜魂	312
ターン111	鉄砲水と紅蓮の黒竜	305
ターン110	鉄砲水と英雄、空爆	228
ターン109	鉄砲水と冥界の札師	622
ターン108	鉄砲水と死神の黒翼	241
		222
		219



## 入学編

### ターン1 生き返って、入学試験

「じゃあ……頼んだぞ。俺のデツキのこと」

「わかってる。一緒に頑張らせてもらうよ」

「ああ。そんじゃ、俺はしばらくお前の中に引っ込んでるとしようかね。ま、案外もう二度と会うことがないかもしれんが」

じゃあな。最後にそう言って、目の前の少年は霧になって消えていった。なんだかつくづく嘘みたいだけど、僕の手には確かにデツキがある。だから、これは夢でもなんでもないんだろう。多分。

………僕の名前は、遊野清明<sup>ゆうのあきら</sup>。今年デュエルアカデミアの入学試験(筆記)を受けて、今日が実技試験だつてのに電車が事故起こしよつたせいでニュース速報見た瞬間ヤケになって自転車で飛び出して、それで——車にリアルダイレクトアタックされて、死んだ。笑うに笑えないね、うん。でもその時に、声が聞こえた。たまたま『全く同じ日付の』、『同じ時間に』死んだ子がいたらしくて、そいつも決闘者だから、つていう雑な繋がりで僕は、生き返った。

正確には『死にかけの魂二つを足して二で割った』らしいけど、まあ難しいことはいいや。なんでも決闘者は普通の人間よりも生存能力が強いから、そういつたこともできるらしい。さすがにほんとにかよそれ、つてツツコミたくなつたけど、まだ生きてデュエルできるんならそれでいいんじゃないか?……つて、その僕の魂の半分になつた奴に言われた。まあいつか、そんなもんで。それにほら、あれだよね? 『この世界(≡遊戯王)ならよくあること』つてやつだよね? いや、意味はよくわかんないけど。アイツのいた世界なら、とりあえずそう言つときゃだいじょぶな魔法の言葉らしい。

そして、それがつい10分前のこと。ただいま、壊れた自転車を押しながらアカデミア試験会場前にたどり着いたところです。

「つて、受付さんもう片付けしてるじゃん!? わーわーわー!! 待って待って待っててくださいっ! 受験番号92番、遊野清明ただいま参りま

したっ！」

大声で怒鳴ると、気づいてくれた黒服の人が急いだ様子で叫び返してきた。

「今も110番の生徒が駆け込みで入ってきたところだ！遅刻については『時間ギリギリに到着した』ということにしといてやるから、早く行くといい!!」

「ありがとうございますー！」

叫び返して中に入ると、その110番がちょうどデュエルを始めたところだった。

経過については省略。フレイム・ウイングマンはカッコいいなあ、と思ったとだけ述べておく。さて、今度は僕の番だ。

「全く、今年々の受験生には、危機感というものがないんですか？二人も遅刻ギリギリにやってくるなんて、前代未聞ナノーネ！」

「す、すいません………」

返す言葉もないので、素直に謝る。こればかりは、ねえ？

「まあいいでしょう。それでは受験番号92番、このままクロノス・デ・メデイチが相手になるノーネ！」

「はい！よろしくお願いします、先生！」

「少なくとも、礼儀はわきまえてるようなノーネ。結構なことでスーノ」

「デュエル!!」

遊野LP4000 クロノスLP4000

「入学試験において、先攻は受験者のものでスーノ。さ、カードをドローするノーネ」

「じゃあ……僕のターン、ドロー！」

えっと、手札は……どうしよう、見たことあるカードが一枚しかない。なんだこのカード、今からテキスト読めとでもいうのか。

『あー、そりやそうだわな。今の時代はまだGXだしな。つーか何92番て?どーせなら後8番くらい落とすとけばキリもいいしネタにもなったつてのによ、半端すぎてリアクションに困るわそんな順位』いきなり、頭の中で声が響いた。さらつと理不尽なこと言われた気もするけどスルーしとこう。

「!?……………つてあれ?まさか君?」

『落ち着けみつともない、そのとーり俺だよ俺。いいか?俺はお前だし、お前は俺でもあるんだ。だから、そいつらの戦い方も体がわかつてもおおかしくないんだよ!それと、アドバイスするしたらこの人相手にそのカードは……………あー待てよ、これアドバイスなんかしたらズルになるか?んじややっぱ俺これ以上はなんも言わないわ。頑張れよー』

「え、え、えつと?」

今の声は、僕と一緒に死んだアイツの声だ。間違いない。言いたいだけ言つて引つ込みやがつて、まるで意味が分からんぞ!……………まあいい。えつと、とりあえず今できることとしては、まずモンスターを出さないかね。世の中にはモンスター0のデッキとかもあるらしいけど、僕のセンスで使えるデッキはいたつて普通のビートぐらいです。ソリティアとかややこしくて無理。

「手札から、オイスターマイスターを召喚つ!」

そう言つてカードをディスクに置くと、ソリットビジョンになった魚の戦士が表れた。……………こういつちや悪いかもだけど、とてもじゃないけど魚には見えない。

「そしてフィールド魔法、伝説の都アトランティスを発動!これによりオイスターマイスターの攻守は上がり、さらにお互いのフィールドおよび手札の水属性モンスターはレベルが1下がります」

これだけは見たことあるカード。周りが海に沈んだ都市に囲まれた。

オイスターマイスター 攻1600↓1800 ☆3↓2

「カードを二枚伏せて、ターンエンドです」

さあ、一体どう来るかな?

「私のターン、ドローナノーネ！私ーは永続魔法、アンティーク・ギアキャッスル古代の機械城を2枚発動するのーネ！さらに、アンティーク・ギアナイト古代の機械騎士を召喚！」

古めかしいつくりの、大砲を正面に備えた城が2つもクロノス先生の前にそびえ立つ。一夜城なんてレベルじゃないな、なんてのんびりしたことを考えているとそのうち片方の城門が軋んだ音を立てて開き、そこから歯車をむき出しにした槍と盾を持つ機械仕掛けの騎士が現れる。

「モンスターが召喚されたことにより、まず古代の機械城にカウンターがそれぞれ1つ置かれますー。そして、古代の機械城の効果により、私の攻撃力は300ポイントアップするのーネ！」

古代の機械騎士 攻1800↓2100↓2400

「待ったあ!!永続罫、アイスバーン発動！このカードは場に水属性モンスターが存在する限り、お互いに場に出したモンスターが水属性以外ならば守備表示にします。オイスターマイスターは水属性……：効果を受けてもらいますよ」

重々しく構えて一步を踏み出したロボ(?)が、そのまま足元に広がった氷でずっこけそうになり、持っていた槍を地面に突き立てて強引に踏みとどまった。……：なんかゴメンよ、騎士さん。

古代の機械騎士 守500

「むう……：カードを三枚伏せて、ターンエンドにするのーネ」  
「僕のターン、ドロー！」

また見たことないカードだ。でも、これならいける！

「モンスターとなる罫カード、メタル・リフレクト・スライム発動。そのスライムを生け……：リリースして、超古深海王シーラカンスを召喚！まあ、城にカウンターは乗りますが。あ、アトランティスの効果でレベルが下がってますから本来レベル7のシーラカンスもレベル6としてリリース1体で場に出せますからね。説明するまでもないでしょうけど」

超古深海王シーラカンス 攻2800↓3000

フィールド上にベチャリ、という音とともに上半身が筋肉ムキムキな牛っぽいスライムが現れたかと思うと、その筋肉をフルに使い手札

の魚の王様を掴んでフィールド上に引つ張り出した。なお、スライムはその後溶けて消えてしまった。……………何このツツコミどころ満載な演出。

「こ、攻撃力3000ですーと!? (あ、危なかったのーネ…………)」

「攻撃力3000だと!」

「でかい魚だ…………あれ食えるんか?」

「色合いがちよつと地味ですわね〜」

よつぽどシーラカンスが珍しいらしく、出した瞬間ざわざわと観客がどよめく。個人的には2番目の奴が気になったんだけど、うちの相手の考えは違うらしい。

『怒らねえから、最後の奴ちよつと表でろ』

「(どうどう。いや、ムツチャ怒ってるじゃん) オイスターマイスターで、古代の機械騎士を攻撃! オイスターショット!!」

オイスターマイスター 攻1800 ↓古代の機械騎士 守500

(破壊)

「シーラカンスでダイレクトアタック!!」

「確かに、思ったよりもやりませーネ。ですが、私だつてまだまだデスーノ! 罨発動、邪神の大災害! 相手モンスターへの攻撃宣言時、フィールドの魔法及びトラップをすべて破壊するノーネ!」

宣言とともに黒い嵐が巻き起こり、海と城、それに海底(互いの足元)に広がるスケート場のような氷(アイスバーン)がまとめて吹き飛ばされて……………つてあれ? 先生のモンスターゾーンに、ちっこいのが二ついるような?

「私が破壊した自分のカードは、二つとも黄金の邪神像だったのーネ。このカードは破壊されて墓地に送られた時、モンスターとして特殊召喚されますーノ」

邪神トークン 守1000

邪神トークン 守1000

「んなつ……………なら、シーラカンス、こっちから見て右側の邪神像を攻撃だ! マリン・ポロロッカ!」

超古深海王シーラカンス 攻3000 ↓2800 邪神トークン

守1000 (破壊)

ちっこい金色のトークンめがけて某携帯獣ゲームの波に乗っちゃう技のごとく勢いでぶつかっていく魚の王様。迫力あるなあ、コイツ。

「ターン、エンドです……………」

マズいな、アイスバーンもアトランティスも破壊されちゃったか。でも、先生だつて今はハンドレス。トークン一枚でそうそう何ができるとも思えないし……………」

『なあなあ、なんで今シーラカンスの効果を使わなかったんだ?』

あ。

「……………作戦、です」

『忘れてたんだな』

「……………」

「私のターン、ドロ―! モンスターを一体セットして、更にカードを一枚伏せて、ターンエンドナノーネ」

「僕のターン、ドロ―。ここは一気に攻める! やれ、オイスターマイスター! オイスターショット、二回目!!」

『ア、アホ! んな見え見えのところを攻撃なんか……………』

「セットモンスターはメタモルポット。さあ、お互いの手札をすべて捨てて5枚ドロ―する、リバー効果の処理を行うノーネ!」

「しまった!」

『言わんこつちやない……………つか、それくらい予想しとけよ……………』

オイスターマイスター 攻1600 メタモルポット 守600  
(破壊)

くつ……………マズイ! クロノス先生はノーリスクで5枚ドロ―、一方こつちは手札3枚捨てての5枚ドロ―……………何を引かれるかわかったもんじゃないな。

まあしようがない、ドロ―。つて! あんまい手札じゃない!?

「えーい、シーラカンスで連撃! とりあえずダイレクトアタック!」

「甘いノーネ! 手札から速攻のかかしを捨てて効果発動、攻撃を無効にしてバトルフェイズを終了させるのノーネ!」

「タ、ターンエンドです」

『クロノス先生が速攻のかかしせんせーだど!?どうなってるんだ一体!?』

「むむうゝ、なかなか危なかったのーネ。私のターン、ドロロー!」

あの表情を見る限り、いいカードが来たらしい。正直もうチートドロローは勘弁してほしいけど。

『お前なあ、本物のチートドロローはあんなもんじゃねえぞ?いやマジな話』

「私は、手札からトロイホースを召喚しますーノ。更に魔法カード、二重召喚を発動!」

トロイホース 攻1600

『トロイホースはダブルコストモンスターで、二重召喚は通常召喚の補助。となると、ヤツがくるんだろうな』

どうやら僕の中のこいつには、これから何が起こるかの予想がついたらしい。ただ、教えてくれるつもりはないみたいだけど。

「さあ、覚悟はいいですか?トロイホースを生け贄にして現れるのーアンティーク・ギア・ゴレムネ、古代の機械巨人!!」

『きた……!』

「でかい……」

仁王立ちをして立ちはだかるのは、歯車により動く巨人。赤い目を光らせて、こちらを見下ろしている。関係ないけどこの『光る目』って、ロボットとしてはよくあることだけどやっぱり胸熱だよな。カッコいいな、うん。

古代の機械巨人 攻3000

『なんかずいぶん余裕だな』

「(マイスターが攻撃されてもダメージは1400……それくらいは受けてやるさ)」

『それで済みやあいいけどねえ』

「さらに、速攻魔法月の書を発動、対象は超古深海王シーラカンスにするのーネ!」

「くっ……でもシーラカンスは、効果の対象になった時に魚を一匹

リリースして発動を無効にできる！さらにオイスターマイスターが戦闘以外の方法でフィールドから離れたから、オイスタートークンを一体生み出しますよ……守備表示でトークンを召喚します」

『あ、そういうことか!!サーセン先生、俺アンタのことちよつとなめてました！いやー流石実技担当最高責任者、伊達じゃなかったか』  
「え？」

嫌な予感がしたけど、今更チェーンは止まらない。月の書から放たれた光からシーラカンスを守るように牡蠣の戦士が両手を広げて立ちほだかり、目も眩む光が弾けたと思っただらそこには牡蠣が一つ転がっていただけだった。

「(効果はちゃんと発動できたけど、これで何か問題でもあるの?)」  
こつそり聞いてみると、衝撃の事実を言われてしまった。

『ギアゴの効果は貫通だからな』

えっと……ギアゴってのは多分古代の機械巨人のこと、だよな……?で、貫通……貫通……

「攻撃力3000の貫通!」

「おおっ!?そ、その通りナノーネ……デスーが、人のセリフをとってはいけませんのーネ!オイスタートークンを攻撃、アルティメット・パウンド!!」

「うわああああっ!」

飛んできた拳が牡蠣を突き破り、そのまま僕の足元に命中する。イテテテ……いや、ソリッドビジョンだし別に痛くはないんだけど、ただなんか変な感じだ。

遊野LP4000↓1000

「うう……」

『ま、今更何言ったってどーしようもないしな、くよくよせずに頑張れや』

「そんな他人事みたいに」

『他人事だろ?』

「ひどい話だよ」

「これで、ターンを終了するのーネ」



「あ、はい。僕のターン、ドロー！」

正直、状況はかなりマズイ。ここで反撃できないと、あっさり負ける。さあ、引いたカードは？

「……………よしっ！魔法カード、クロス・ソウル……………発動っ！相手モンスターをリリースする場合、相手モンスターをその材料にできる！」

『ここで引いたか！テメーもドロー運は十分に高いじゃねーか、先生のことを言えるような立場じゃないな』

あれ？なんで逆転カード出したのにボロクソ言われてんだろ僕？

「先生のフィールド上の古代の機械巨人と、こっちのシーラカンスをリリースして……………」

『来い、マイフェイバリットカード!!霧の王っ!!』

二つのモンスターが霧に変わり、フィールド上に現れた青白く神秘的に輝く騎士……………にしか見えない魔法使いの全身に吸い込まれる。これこそが、ずっと昔から変わらない僕にとってのエースカード。

「霧の王の攻撃力は、生け贄にしたモンスターのもともとの攻撃力の合計……………」

「っ、つまり……………」

『5800、だな』

霧の王 攻0↓5800

おお、と湧き上がる試験場。この感覚、悪くないね！

「僕はこれでターンエンドです」

『それで正解。クロス・ソウルの発動ターンにバトルができないデメリットもあるしな』

「まだ私は負けないノーネ！ドロー！カードをセットして、ターンエンドですーノ」

「ドローーいけ、霧の王！ミスト・ストラングル!!」

「畏発動、ガード・ブロッカー！その攻撃を無効にして、カードをドローするノーネ」

霧の王が大剣を振り上げ大上段に切りかかるが、その一撃は命中す

る寸前に見えない壁に阻まれた。激しい火花が散るものの、結局その壁を両断することはできない。

『くっ、落としきれなかったか……次のターンは気をつけろよ、何が起きてもおかしくない』

「え？う、うん、わかったけど……」

本当にここから何か起きるのか。そんな思いを読み取ってか、さらに言葉をかけてきた。

『何かしらのことはある。俺はそう信じるね』

「(ねえ、一体どっちの味方してるわけ?)」

『さあな。いいデュエルが見たいだけさ』

全く……!」

「私のターン、ドロー……魔法カード死者蘇生を発動、これにより古代の機械騎士を守備表示で召喚しますーノ!」

「でも、騎士さんの守備力じゃあ攻撃は耐え切れませんよ!」

古代の機械騎士 守500

「甘いのーネ、このモンスターに装備魔法、古代の機械戦車アンティーク・ギアタンクを装備。これで攻撃力が600上がりーノ、ターンエンド」

ゴゴゴゴゴツ、とうなりをあげてどこからともなくやってきた戦車に、よっこらせいといわんばかりに乗り込む騎士。ちゃんと槍も楯も手放さないところは偉いと思う。

って、そうじゃなくて。肝心のモンスターが守備表示なのに攻撃力が上がる装備カードなんて出して、どうするつもりだろう。

古代の機械騎士 攻1800↓2400

『まずいな……ここで戦車か。いいか、戦車は破壊された時、相手に600のダメージを与えることができるカードだ、うかつに攻撃しない方がいい』

「え?でも倒しきれば問題ないんじゃない」

『まあな。古代の機械砲台ってのもあるにはあるが、霧の王の前には無力だし』

「でしょ?ドロー!霧の王、今度こそミスト・ストラングル!」

物凄い剣速で振られた剣が、戦車ごと騎士を一刀両断する。が、

真つ二つにされる瞬間に戦車の砲台が火を噴き、砲弾が足元に飛んできて爆発する。

「ぐっ……………」

遊野LP1000↓400

「カードを一枚セット。ターン、エンドです……………」

「私のターン、ドローナノーネ!」

さあ、何を引いた?

『BGM：運命のテーマ(仮) ってところかな』

「(へ?)」

『…………気にしないでくれ、お約束みたいなもんだ』

「魔法カード、貪欲な壺を発動!墓地の古代の機械騎士、古代の機械巨人、速攻のかかし、メタモルポッド、トロイホースをデッキに戻し、2枚ドローしますーノ!…………そして手札を1枚捨てて魔法カード、ライトニング・ボルテックス発動!相手フィールドの表側モンスターをすべて破壊するノーネ!」

『ここで定番：困ったときの壺ときて、さらにそこからの除去!?なんちゅうドロー運だ!?!』

「でも、させない!カウンター罫、神の宣告!!ライフを半分払い、ライトニング・ボルテックスを無効に!!」

遊野LP400↓200

天から降り注ぐ雷が直撃する瞬間に白い服の神様がいきなり現れて手を前に突き出し、バリアを張って雷を弾き返した。

「そ、そんな馬鹿なナノーネ…………ターンエンドですーノ……………」

「それじゃあ…………いくぞ、霧の王!ミスト・ストラングル!!!」

クロノスLP4000↓0

「楽しかったです、クロノス先生!ありがとうございました!」

「どういたしましたして、ナノーネ…………結果は後日配布しますから、待っていて欲しいのーネ……………」

「はい!」

『デュエルアカデミア、か………はてさて、どーなることやらねえ』

## ターン2 河に吹く風との出会い

クロノス先生に辛勝してからはや一週間。内心けっこう不安だったけど、めでたく届いた合格通知。……いやまあ、レッドだけ。お情けで入れてもらっただけみたいだけど。そして来ましたヘリの上、これから入学式なのだ。

「祝、合格♪」

『いや、まあいいんだけどさ……一体いつまで浮かれてるつもりなんだ?』

意外とノリの悪い幽霊に水を差され、口をとがらせて抗議する。

「なに、ユーノ。せっかく僕が合格したつてのに、少しくらい祝ってやろうとかは思わないの?」

『そりや祝ってやるのは別にいいさ。ただ・し!毎日毎日毎日毎日一時間ごとに喜んでる奴の相手なんぞなんで俺が毎回やってやらにやいかんのだ!?!……それともう1つ。受かったのはお前じゃない。俺たち、だ。そこ忘れんなよ』

「ねえ、ユーノ……」

『んー?今度はなんだ?』

「今の、言つてて恥ずかしくなかった?」

『やつかましいわ!!』

あ、やつぱ恥ずかしかったんだ。はっはっは。そんな感じでのんびりだべつてたら、突然後ろから声をかけられた。

「あ、お前!確か俺の後に試験受けた奴だろ!」

振り返ると、むっちゃ元気そうな見覚えのある顔があった。

『あ、十代さんだ。つてん?翔はいないのか?』

「えつと……確か110番、だったっけ?」

「おう、覚えててくれたのか!俺は遊城十代っていうんだ。よろしくな!えつと……」

「名前も知らずに声かけたのね……僕は遊野清明。よろしく、遊城」

「別にいいぜそんな他人行儀なの。十代、で構わないからな」

「そう?んじやよろしく、十代」

「ああ、こつちこそ！」

制服を見るに、どうやら僕と同じオシリスレッド所属らしい。よかつた、少なくとも1人は友達ができそうだ。こつそりほつとしているとそこに、息を切らせながら小柄な丸メガネの生徒が走ってきた。いくら広いとはいえへりの中で走るのはやめてほしいなあ、口にはしないけど。

「ちよ、ちよつとアニキ、速すぎるツスよ〜」

「清明、紹介するぜ。こいつは翔。俺らの同輩だぜ！」

「へ？あ、君はあの時の！丸藤翔です、よろしくツス！」

「翔、ね。了解。僕は遊野清明だよ。これからよろしく」

「あ、そうだ清明！早速だけど、今からデュエルしようぜ！」

はい!?なにこのトンデモブツトビ論理。いや僕もデュエルは大好きだけど、さすがに今はマズいんじゃないだろうか。どうせもうすぐ到着だし。でも、確かにあのHEROとはちよつと戦ってみたいんだよなあ……。

ユーノはユーノで後ろの方でニヤニヤ笑って見てるだけで、特に口をはさむつもりはないらしい。果たしてこの誘いを受けるべきか受けざるべきか困っていると、使い物にならないユーノの代わりに後ろから助け舟が来た。

「十代君に、清明君だね。ちよつといいかい？」

『今日は随分と、後ろから声をかけられる日だこつた……お、三沢っちか。それにしても、デュエル脳って楽しいけど怖い』

「ああ、えつと？」

見覚えのないその学生……その学生服の色から見てライイエロー、つまり僕らより1つ上のクラスになった人のようだ。特にこだわりがないのか本人がのんきなのか、それを見ても気軽に返事する十代の態度は見習いたいと思う。

「……十代、この人知り合い？」

「翔、お前の知り合いか？」

「なんで僕に聞くんスか!？」

「失礼。俺の名前は三沢大地。君たちの、あのクロノス先生を打ち

破ったデュエルスタイルに興味があるのだが、話を聞かせてもらってもいいかな？」

「別に僕は構わないよー」

「俺のヒーローの話を知りたいってことだろ？俺も構わないぜ」

「ありがとう、じゃあまずは……」

この時の僕たちは思わなかったよ、まさかこの後島に到着するまで延々デュエル談義で大盛り上がりすることになるとは。あー楽しかった。十代も翔も三沢もいい奴だし。

さ、校長センセのお話だ。

ゆ、油断してた……。それが第一印象だった。というよりむしろ、それ以外の感想は出てこない。立ってるだけだったのに、なんだかすごく脳が疲れた。

『退屈で精神的ライフポイントはとっくにゼロだな……バタツ』

「同感。鮫島校長、だっけ？これからは注意しないとね……」

しかし先生の話つてのは、どうしてこうも長いんだろうか。おまけに立場の偉さに比例して長くなるときたまもんだし。十代なんて途中から立ったまま寝てたぞ。そんなことを考えながら、ぐったりした体を引きずるようにしてパンフレットに書いてあるレッド寮のある場所に進む。一体どんな部屋だろうか。

『あんま期待しない方がいいぞー』

「え、どんな感じの寮か知ってるの!？」

意外じゃないけど。ユーノって、常識的なところは時々抜けてるくせに妙に物知りなんだよなあ。生前は何をやってたんだろ。

『普通の学生さんさ』

あ、聞こえてた。

「その君、さっきから何をブツブツ喋ってるの？って言ってるみたい」

『!?!』

え、誰？別にそういうのは得意じゃないけど、気配を全く感じな

かった。慌てて声の方を見ると、ニコニコと愛想よく笑っている女の子が1人。きれいな青髪を肩のあたりまで伸ばして、なかなかどうして可愛い。

後になってから時々考えたけど、多分僕の気持ちはこの瞬間、初めて彼女に出会ったまさにこの瞬間から決まっていたのだろう。一目惚れ、だなんて恥ずかしい話だけどき。

「え、えっと。どちら様、ですか？」

「私？多分あなたとおんなじだよ、だつてさ。それとも名前を聞いているの？なら、あなたから言うものでしょう、だつて」

「え？ああ、えっと、僕は遊野清明。今日入ってきたばつかの一年坊だよ。そっちは？」

「遊野君、ね」

「……清明、でいいよ」

「わかり辛いし。遊野だけじゃ『どつちのだよ！』って近い将来なる気がしてならないし。音だけだとユーノと同じなところが辛い。」

「私の名前は河風夢想<sup>かわかぜむそう</sup>、だつて。夢想だけでいいよ、だつてさ。実は私も、今日入学したばかりなんだ、つて言ってるみたい」

「そ、そう……」

それにしてもなんだろう、このちよいちよい違和感がある喋り方。声自体は柔らかくて暖かい、いい声なだけに余計気になる。そう思っていたのが顔に出ていたらしく、彼女はのんびりした笑顔のまま口を開いた。

「ちよつと気になる？ごめんね、これが癖なの。………つて言ってるよ」

なんとなく把握。まあ、世の中いろんな人がいるんだつてことだけはわかったよ。でもそれはそれとして、雑にしか聞いてなかったけど確か……

『その通りだな。女子は無条件でブルー寮入りするはずだからこんな所にいるはずないんだよな』

「(だよ。いまさらツツコむのも馬鹿らしいからなんも言わないけど)」



『それが正解だな。どうも伝統らしいし』

「それでさ、君にちよつとお願いがあるんだけど、聞いてもらつていいかな？つて言つてるけど……どう？いいかな、だつて？」

「構わないよ」

『即答っ!?!』

可愛い女の子の頼みを断るほどの根性は欠片もありませんから。だいたい、上目づかいで頼んでくるとかもう反則でしょ。

「ありがとう！つて、お礼を言つてるみたいだよ！」

『なっさけねえの』

るっさい。夢想も喜んでるし、それでいいじゃないか。それにしてもこうやって笑つた顔なんて、ああ可愛いなあもう。もう今ならその崖から海に飛び込んでつて言われてもできそうな気がする。

「それじゃあ、早速デュエルしよう！だつて！」

「よしきた！……つて、それが頼みごと？」

「うん！それじゃあ、デュエルだよっ！」

『デュエル脳全開がまた一人……でもま、そこがこの世界の魅力つてやつか……な？』

「デュエル!!」

清明LP4000 夢想LP4000

「先攻は私からみたい。ドローー！」

カードを引いた瞬間、めちやくちや嬉しそうな顔をした。よっぽどいいカードでも来たんだろうか。

「私はまず、ワイトを召喚するんだつて。それからカードを二枚伏せて……うくん、永続魔法、弱者の意地を発動するみたい。これで、ターンエンドらしいよ」

フィールドに仁王立ちする、青い衣のガイコツが一体。ワイト………ねえ？

『このタイミングで、手札が0じゃないと意味をなさない弱者の意地？とりあえず出しただけなのか、それとも伏せに何かあるのか、ある

いはそれを考えさせるためのブラフか……まだなんとも言えないな  
「(あ、今のだけでそんなに深く考えるものなの!?)」

『なんでその位考えねえんだよ!?!』

びつくりしたら怒られた。なにこの扱い。

「まあ、僕が悪いんだろうけど……ドロロー！ウミノタウルスを召喚、ワイトに攻撃！」

『漢探知かよ。まだ序盤だから別に正解だとは思うけどな』

仮にブラフだとしたら、僕にはまるで意味がない。何がどうなるとしても、とりあえず殴ってみないとね。召喚されたんだかよくわからない見た目の青白い戦士が、二枚貝のような斧を振りかざして突っ込んでいく。

「悪いけどこの瞬間にトラップカードを2枚発動、どっちもライジング・エナジーなんだってさ。その効果によりそれぞれ1枚ずつの手札コストを払い、攻撃力を1500ポイントアップさせるんだって」  
「うわっ！やっちゃったー！」

『言わんこつちやない……なるほど、ここまで読んでの弱者の意地か。それにしても、なーんであんな怪しいところで攻撃するかねえウチの馬鹿は。これがあれか？原作モブキャラの限界ってやつか?』

ちよつと待てユーノさんや、あんたついさっきこれが正解とか何とかほざいてませんでしたかねえ。

そんなことを考えている最中にもフィールドでは、僕の納得のいかない思いをよそに突っ込んでいった海の戦士の斧をひらりとかわしたガイコツが、お返しとばかりになんか物凄い気の力がこもったパンチを胴体に叩きつける。次の瞬間、ウミノタウルスが大爆発した。

ワイト 攻300↓3300

ウミノタウルス 攻1700 (破壊) ↓ワイト 攻3300

清明LP4000↓2400

突っ込んでいった海の戦士の斧をひらりとかわしたガイコツが、お返しとばかりになんか物凄い気の力がこもったパンチを胴体に叩きつけると、ウミノタウルスが大爆発した。

『ファル○ンパンチ!!……ってか？攻撃力3300ってスゲーな』

さすがのユーノも若干呆れ気味の声を漏らす。というか、やっぱり『あの』パンチに見えたんだ……。

「この瞬間、弱者の意地の効果が発動するみたい。手札がない時にレベル2以下の通常モンスターが相手モンスターを破壊したから、カードを2枚ドローするんだってさ。他に何かある?」

「カードを一枚伏せて、ターンエンド……」

清明 LP:2400 手札:4

モンスター:0

魔法・罠:1(伏せ)

夢想 LP:4000 手札:2

モンスター:ワイト(攻)

魔法・罠:弱者の意地

「うん。それじゃあ私のターン、ドローするみたい。うん、よし、ワイト夫人を守備表示で召喚、ワイトも守備表示にしてターンエンドにするみたいだよ」

ゴゴゴゴツとボロボロの椅子が地面からせり上がり、そこに女物のドレスを着たガイコツが座っている。すると前からいたワイトが、そのゴージャス(?)なワイトに向かって慌ててひざまずく。

ワイト夫人 守2200

ワイト 攻300↓守200

『ああ、ウミノタウルスが今いればなー。ワイト夫人の効果で戦闘破壊耐性もちになったワイトを貫通能力付与でポツコボコのサンドバックにしてやれたのになー』

果てしない棒読みで嫌味を言ってくる。うわあ、これは腹立つ。なまじ本当のことだけにタチが悪い。おまけにいつの間にか、僕1人のプレミスみたいな扱いになってるし。自分だって反対しなかつたくせに。

だけど、今はこっちで喧嘩してる場合じゃない。アドバンス召喚せずにワイト夫人を突破する方法は数少ないから、そっちは諦めて何か別の手を引かないと。一応手札にあるこのカードを使えばワイト夫人は突破できなくもないけど、それだとダメージが与えられないし。

「僕のターン、ドロロー……よっしや、ドリル・バーニカルを召喚」

宣言と同時にフィールド上に出てきたどでかいフジツボもどきから、ニヨキニヨキツといくつものドリルが生えてくる。

ドリル・バーニカル 攻300

「……？その子の攻撃力なら確かにホワイトの守備力より上だけど、ワイト夫人が突破できないと意味がないよ？」

「慌てなさんなって。そして魔法カード、アクア・ジェットを発動！対象はもちろんバーニカル！このカードの効果でバーニカルの攻撃力は、永続的に1000ポイントアップする！」

ドリル・バーニカル 攻300↓1300

『出た！清明さんのマジックコンボだ!!』

外野がなんか言ってるけど、無視。無視したら無視。

『無視すんなって……しやーないだろ、アクア・ジェットが出たらこれ言うのがお約束なんだから』

そんなお約束、聞いたことがない。今重要なのは、これでバーニカルの攻撃力が4倍以上にはね上がったということだけだ。

「ドリル・バーニカルはダイレクトアタックに成功するたびに攻撃力が1000ポイントずつアップしていき、さらに自身の効果で相手モンスターがいてもダイレクトアタックができる！攻撃、ドリルアタック！」

バーニカルの無数のドリルのうち1本が夢想の方を向いて超回転しながら発射され、盛大な音と共に命中した。

ドリル・バーニカル 攻1300↓夢想（直接攻撃）

夢想LP4000↓2700

ドリル・バーニカル 攻1300↓2300

「いよしっ、ターンエンド」

清明 LP：2400 手札：3

モンスター：ドリル・バーニカル（攻）

魔法・罫：1（伏せ）

夢想 LP：2700 手札：2

モンスター：ホワイト（守）

ワイト夫人（守）

魔法・罨：弱者の意地

「私のターン、ドロローしてワイトをリリースするんだって。来て、龍骨鬼」

ワイトがガシヤガシヤツと崩れたかと思うと、その骨が再び組み合わさって大きな骨でできた鬼に姿を変える。サイズ違うけど質量おかしくね？とか言っってはいけません。

龍骨鬼 攻2400

「龍骨鬼でドリル・バーニカルを攻撃するみたいだよ？」

「……残念ながら、何にも発動できるようなカードがないんだよねー」  
足元に散らばる骨の中から適当に一本取り出して投げつけた龍骨鬼に対し、ドリルを発射して迎え撃とうとするバーニカル。二つの飛び道具がぶつかり合って互いの威力を打ち消し合ったすぐ隣を二本目の骨が回転しながら飛んでいき、ドリルを発射した後の無防備な穴に突き刺さる。

龍骨鬼 攻2400↓ドリル・バーニカル 攻2300（破壊）

清明 LP2400↓2300

『ちよーつと押され気味だな』

「うるさい」

言い返したものの、劣勢は間違いない。打点上昇のアクア・ジェツトも使っちゃったし、龍骨鬼の攻撃をなんとかいなす手段を探さないとこのまま押し切られる。

「僕のターン、ドロロー……おっ」

『ふむ、使い方は任せる。どっちを選んでもプレミスっていうほどひどくないし』

「(そう?なら、お言葉に甘えて)」

「モンスターをセット、ターンエンド」

清明 LP:2430 手札:3

モンスター:???(セット)

魔法・罨:1(伏せ)

夢想 LP:2700 手札:2

モンスター：龍骨鬼（攻）

ワイト夫人（守）

魔法・畏：弱者の意地

「私のターン、なんだって。ドローして……うぐん、このまま攻撃するみたい。お願い、龍骨鬼、つてさ」

再び投げつけられる骨。それを受け、セットされたモンスターの姿が明らかになる。

「この瞬間にスノーマンイーターの効果発動！リバーズした時、フィールド上の表側モンスター1体を破壊する！」

さて、普通に考えたら破壊するのは龍骨鬼。でも、ワイト夫人にはなかなかどうして突破しにくい破壊耐性を味方に受けさせる効果がある。どっちにしようか……よし、決定。

「やっちゃって、スノーマンイーター。ワイト夫人を破壊する！」

雪だるまを背負ったよくわからない獣がシャカシャカと相手フィールドまで駆けていき、ワイト夫人にガブリと噛みつく。それと同時にどういう仕組みなのかホーミングして追いかけてきた骨が雪だるまに突き刺さって動きを止める。

龍骨鬼 攻2400↓スノーマンイーター 守1900（破壊）

「私のワイト夫人が……カードを伏せて、ターンを終わるんだってさ」  
「ドロー！罫カード、リビングデッドの呼び声を発動！甦れ、ウミノタウルス！そして、ウミノタウルスは水族モンスター……この特殊召喚をトリガーにして、シャーク・サッカーを手札から特殊召喚するよつと」

地面に開いた魔法陣から勢いよく飛び出してくる、青白い肌の海の戦士。よくよく見ると、その頭ののっぺりした部分にはコバンザメがひっついていた。

ウミノタウルス 攻1700

シャーク・サッカー 攻200

「さらに僕はこの二体をリリースして、青氷の白夜龍をアドバンス召喚する！」

『これをアド損とみるよーな世界にいたんだよなー俺……なんだか

悲しくなってきた』

氷の翼を広げた、真つ青なドラゴンがフィールドに現れる。おお、かっこいいかっこいい。

「なら私は、ここでリバースカードの発動をするんだって。手札を一枚捨てて、サンダー・ブレードクック！この効果で、その氷のドラゴンを破壊するみたい」

ビシツ！とポーズまで決めて、罨を発動する。だけど、相手だって伊達に最上級モンスターなわけじゃない。ジグザグな軌道を描きながら飛んできて絡みついた雷を、あつさりと氷のドラゴンは振り払った。

「む。つてさ」

「白夜龍には、自身を対象にする魔法・罨を無効にする効果がある！そのまま龍骨鬼に攻撃……いつけえー！孤高の冬色輪氷弾！」

青白く光るプレスが、あつという間に龍骨鬼を飲み込んで消し去る。そして夢想のところにも、その余波が届いてダメージを与える。

「くっ……いやっぱり強いね、だつてさ。さすがはあのクロノス先生を倒した人だね、つて」

青氷の白夜龍 攻3000↓龍骨鬼 攻2400（破壊）

夢想LP2700↓2100

「見ててくれたの？ありがとう。僕はこれで、ターンエンド」

清明 LP：2400 手札：2

モンスター：青氷の白夜龍（攻）

魔法・罨：リビングデッドの呼び声（対象無し）

夢想 LP：2100 手札：1

モンスター：なし

魔法・罨：弱者の意地

「私のターンだね。ここで逆転できないと、私の負け。でも、まだ私は自分のデッキを信じるんだって言ってるよ。ドロー！」

勢いよくドローして、そつとそのカードを確認する。さあ、一体何を引いたんだろう？なんだかこつちまでドキドキしてきた。

「ありがとう、私のデッキ！つて凄く喜んでるみたいなの。お願い、ワ

イトキング!!」

ドラゴンと向かい合い、自分の主人を守るように立ちふさがる骸骨の王。その相本から大量の霊魂が噴き上がり、骸骨の王の空になった眼の跡や服の隙間などからその体内に注入されていく。

『まずいな、ワイトキングは墓地のワイトの数1体につき1000。確か今の攻撃力は裁定でもワイトが1枚にワイト夫人が1枚の2枚だから2000か。さあ、あのたくさんの手札コストの中で、一体何枚がワイトかね?』

相変わらず楽しそうに解説してくれるユーノ。この様子からいつて、ホントに僕が負けてもいいって思ってるんだろなあ。

「今のこの子の攻撃力はね、まずフィールドから墓地に行ったワイトとワイト夫人、ライジング・エナジーのコストにしたワイト2枚、さらにサンダー・ブレイクのコストにしたワイトメアが1枚の、合計5000なんだよ!だって言ってるよ」

『って、あれ全部ワイトだったのかよ!?!』

あ、ハモった。なんて言ってる場合じゃない。あれだけの手札コストが全部攻撃力に回るとすると……もしかして、あのサンダー・ブレイクもミスじゃなくてわざと、ここでワイトキングの火力を上げるために……?」

「ワイトキング、その綺麗なドラゴンに攻撃して!!」

不気味なステップを踏みながら、ゆったりとこちらにやってくるワイトキング。そして次の瞬間、目に見えないほどのスピードで踊りだしたワイトキングが何が起こったのかわからないうちにきれいなステップの蹴りで白夜龍を撃破していた。え、なにこのメツチャ速いガイコツさん。

ワイトキング 攻5000↓青氷の白夜龍 攻3000 (破壊)

清明LP2300↓300

「逆転だね。私はここでターンエンド、だって」

くっ、かなりマズいな……。攻撃力5000のワイトキングか。突破できる、かな?できるよね、きつと。

『できるな。とゆるかき、仮にもデュエリストが一瞬でも弱気になっ





魔宮の賄賂「やあ」

そんな幻聴が聞こえた気がした。

「ターン、エンド……」

「じゃあ私のターン、ワイトキングで攻撃！だよ！」

そして空っぽのフィールドをワイトキングが爆走しながらこつちに近づいてきて、吹っ飛ばされて……。

ワイトキング 攻5000↓清明（直接攻撃）

清明 LP300↓0

デュエルの終了と同時に、ソリットビジョンも消えていく。負け

た、か。そしてちよつとわかったユートの気持ち。こりや泣きたくもなるわ……。

「ありがとう、清明。私も危なかったよ、だって」

「いやいや、こつちこそありがとう。帰ったらデツキ調整だなー」

まず真つ先に、魔宮の賄賂は2枚積みから1枚積みになろう。絶対に。

「あ、ちよつと待って、だって。もう1つだけ、お願いなんだけどこいかな？つて頼んでるんだけど……どう？」

はて、まだ何かあるのだろうか。まあ、別にデツキは後でもいいし断る理由もないか。

「別にいいけど、何？」

「えつと……」

ちよつと目をそらしながら口ごもる夢想。

「その、えつと、恥ずかしいんだけど……私、今迷子なのっ、て言ってるみたい。だから、その……ブルー寮まで案内してくれるかな？なんて……」

結論。ただの迷子さんでした。ちなみに同じころに十代が万なんとかってブルー生徒とデュエルしてたらしいけど、それはまた別の話。

## ターン3 ポロロッカ VS HERO

「お、終わ、った……………」

「あゝ、今日もよく寝たぜ！」

「アニキ……………」

『うん、翔以外お前ら全員おかしいね。なんで清明はあのレベルの授業で瀕死になって、十代に至ってはなに堂々とサボってんだよ』

「(多分聞こえてないと思うけどなあ)」

『誰かが言ってるのが優しきってもんだろが』

そんなもんかなあ……………? うゝむ。というか、コイツは僕が誰のために気を使ってるのかわかんないんだろうか。

『俺の存在がばれないように、とは確かに言っただけだな。んな思い詰めてたら逆に怪しいわい』

「なあ、清明」

「え、どったの十代？」

「お前今、誰かと喋ってたか？」

『ほらみる。でもそーいやこの辺りからもう見え始めるフラグはちよいちよいい立ててたんだよなコイツ。まあとりあえず否定しといてちよーだい』

「……………いや? いきなりどーしたの一体」

「うーん、なーんかわかんねーけどそんな気がしたんだよな。翔、お前は聞こえたか？」

「え!? 僕は何も聞こえなかったツスけど……………寝過ぎじゃないツスか?」

「そうかなあ……………確かになんか聞こえたような気がしたんだけどな。ってどうした!? すごい汗だぞ、清明！」

『命令、なんでもいいからごまかせ! 今見えるようになるのは(原作的に) いろいろマズイような気がする!!』

「ほえ!? え、えゝと……………」

『そーだ、今すぐデュエル申し込め! 多分それなら効くはずだ!』

「十代、いきなりだけどデュエルしよっ！」

ってなんでやねん。怪しすぎるでしょいくらなんでも。どうしてこうなった。十代だつて急にこんなこと言われたら迷惑だろうs

「よし、じゃあデュエルだ!」

……………。デスヨネー。それにしても、ほんとにこれだけでユーノのことは忘れてくれるかな……………?

「それじゃあ……………」

「デュエル!!」

清明 LP4000 十代LP 4000

「お、先攻は僕か。ドロー、キララー・ラブカを召喚して、フィールド魔法ウオーターワールドを発動」

黄色がかつた色の尻尾が刃物で武装されたサメがフィールド上でとぐるを巻き(守備表示だからだろうか)、十代を威嚇する。……………が、直後に自分の足元(?)から吹き上がった水柱に打たれてバランスを崩してしまう。それにしても、例えばユーノのことを誤魔化せるかなあ?

キララー・ラブカ

効果モンスター

星3 / 水属性 / 魚族 / 攻 700 / 守1500

自分フィールド上に表側表示で存在する

魚族・海竜族・水族モンスターが攻撃対象に選択された時、墓地に存在するこのカードをゲームから除外して発動する。

攻撃モンスター1体の攻撃を無効にし、

その攻撃力を次の自分のエンドフェイズ時まで500ポイントダウンさせる。

「キララー・ラブカ」の効果は1ターンに1度しか使用できない。

ウオーターワールド

フィールド魔法

フィールド上に表側表示で存在する水属性モンスターの攻撃力は500ポイントアップし、

守備力は400ポイントダウンする。

キララー・ラブカ 守1500 ↓ 1100

「カードを一枚セットして、ターンエンド」

『あながちプレイングミスとも言えない………な。守備力低い方がさっさと墓地行きやすいし。まあふつーやらんだろうけど』

「俺のターン、ドロロー！魔法カード、融合を発動。手札のバブルマンとフェザーマンを融合するぜ！来い、E・HEROセイラーマン！」

融合

通常魔法

手札・自分フィールド上から、融合モンスターカードによつて決められた

融合素材モンスターを墓地へ送り、その融合モンスター1体をエクストラデッキから特殊召喚する。

E・HEROフェザーマン

通常モンスター

星3／風属性／戦士族／攻1000／守1000

風を操り空を舞う翼をもったE・HERO。

天空からの一撃、フェザーブレイクで悪を裁く。

E・HEROバブルマン

効果モンスター

星4／水属性／戦士族／攻800／守1200

手札がこのカード1枚だけの場合、

このカードを手札から特殊召喚する事ができる。

このカードが召喚・反転召喚・特殊召喚に成功した時に

自分のフィールド上と手札に他のカードが無い場合、

デッキからカードを2枚ドロローする事ができる。

E・HEROセイラーマン

融合・効果モンスター

星5／水属性／戦士族／攻1400／守1000

「E・HERO バブルマン」＋「E・HERO フェザーマン」

このモンスターは融合召喚でしか特殊召喚できない。

自分の魔法&罠カードゾーンにカードがセットされている場合、

このカードは相手プレイヤーに直接攻撃をする事ができる。

「セイラーマンは水属性だから、ウォーターワールドの効果を受けさせてもらおうぜ」

E・HERO セイラーマン 攻1400↓1900

「カードを一枚セットして、バトル……………ただしセイラーマンは自身の効果で、自分が魔法、罠カードをセットしているときにはダイレクトアタックができるぜ！アンカー・ナツクル！」

折よく地面から噴き出した水柱の上に飛び乗ったセイラーマンが、頭上から右手についた錨を打ち込んでくる。

「ぐっ……………」

E・HERO セイラーマン 攻1900↓清明（直接攻撃）

清明 LP4000↓2100

「俺はこれで、ターンエンドだぜ」

清明 手札：3 モンスター：キラァ・ラブカ 魔法・罠：1（伏せ）  
フィールド：ウォーターワールド

十代 手札：2 モンスター：E・HERO セイラーマン 魔法・罠：1（伏せ）

場：ウォーターワールド

「やった、先手はアニキがとったツス！」

「……………くっ」

「どうした清明？ほんとに体調でも悪いのか？」

「え？あ、ああ。別に問題ないよ。ドロ……………シャクトパスを召喚、ウォーターワールドの効果で攻撃力がアップする……………セイラーマンに攻撃」

シャクトパス

効果モンスター

星4／水属性／魚族／攻1600／守 800

このカードが相手モンスターとの戦闘によって破壊され墓地へ送られた時、

このカードを装備カード扱いとしてその相手モンスターに装備できる。

この効果によってこのカードを装備したモンスターは

攻撃力が0になり、表示形式を変更できない。

シャクトパス 攻1600↓2100

「甘いぜ清明！罨発動、ヒーローバリア！」

ヒーローバリア

通常罨

自分フィールド上に「E・HERO」と名のついたモンスターが表側表示で存在する場合、相手モンスターの攻撃を1度だけ無効にする。

通常の三倍の速度で（嘘です）突っ込んでいったシャクトパスの突進は、セイラーマンに届く前に光る壁で防がれた。うーん、防がれたか。それにしても、一体十代達にはなんて言えばいいんだろう。

「ターンエンド……………」

大丈夫、まだあと一回のダイレクトアタックなら耐えられる。それにしても、どーしようかねえ。

「俺のターン、ドロロー！へへ……………行くぜ、清明！手札から魔法カード、ヒーローハートを発動！これでセイラーマンは攻撃力が半分になる代わりに、このターン2回攻撃できる！それから魔法カード、Hーヒーロハートを発動！これでセイラーマンの攻撃力はエンドフェイズまで500ポイントアップし、貫通能力が付く！」

ヒーローハート

通常魔法

自分フィールド上に表側表示で存在する「E・HERO」と名のついたモンスター1体を選択して発動する。

このターン選択したモンスターの攻撃力は半分になり、1度のバトルフェイズ中に2回攻撃する事ができる。

Hーヒーロハート

通常魔法

自分フィールド上に表側表示で存在するモンスター1体を選択して発動する。

選択したモンスターの攻撃力は500ポイントアップする。

そのカードが守備表示モンスターを攻撃した時、



その守備力を攻撃力が越えていれば、  
その数値だけ相手ライフに戦闘ダメージを与える。

この効果は発動ターンのエンドフェイズまで続く。

十代の宣言に合わせてまずセイラーマンの錨が両腕につき、さらに  
青いオーラが全身を包み込んだ。

E・HERO セイラーマン 攻1900↓950↓1450

「そ、それじゃあー！」

「行けえ、セイラーマン！アンカー・ナツクル!!」

「くっ」

E・HERO セイラーマン 攻1450↓清明（直接攻撃）

清明 LP2100↓650

「まだまだだぜ、セイラーマンでダイレクトアタック！もう一度アン  
カー・ナツクル！」

E・HERO セイラーマン 攻1450↓清明（直接攻撃）

清明 LP650↓0

「ガツチャー！……でも本当にどうしたんだ？やっぱり調子悪いの  
か？」

『お前なあ、心配してくれんのはとりあえずありがとさんとだけ伝  
えとくけど、そんな気の抜けたよーなデュエルしかできないようじや  
十代にも俺にも失礼なただけだぞ？まあとりあえずデッキに謝れコノ  
ヤロウ』

「(……………手厳しいね)」

『上の空でなんかやるのは見てるだけで腹立つからな』

「そう、かあ……………」

ふむ、そんなキツく言ったつもりはないんだが、だいぶこたえてる  
みたいだな。しょうがねえ、もとはといえば俺のせい、このユーノさ  
んが一肌脱いでやりますか。

『清明、ちよい体借りるぜ』

「(え？ちよ、わっ!?)」

なんか言ってるけど無視だ無視。

「ん……………しかしあれだ、肉のある体つてのも久しぶりだな」

感覚を思い出しがてら、軽くストレッチ。ああよしよし、ちゃんと動くな。

「なあ十代、俺ともう一回デュエルしてくれないか？」

「え、アレ？お、おう……………売られたデュエルは買うのが礼儀だし俺は構わないけど、なんか雰囲気変わってないか？」

「終わったら……………教えてやる、かもな。さ、それじゃ始めようか」

「デュエル!!」

ユーノ LP4000 十代 LP4000

「先攻は譲るぜ、十代」

「ありがとよ、清明！俺のターン、ドロー！クレイマンを守備表示で召喚、カードを一枚伏せてターンエンドだ」

十代の場に現れる、巨大な体の堅い壁役ヒーロー。アニメで見たときも思ったけど、やっぱりヒーローのなかでもかなりでつかいなコイツ。

E・HERO クレイマン

通常モンスター

星4 / 地属性 / 戦士族 / 攻 800 / 守 2000

粘土でできた頑丈な体を持つE・HERO。

体をはって、仲間のE・HEROを守り抜く。

つと、そんなこと考えてるほど暇じゃないな。清明のヤロー、抵抗すんなコラ。体が動かしづらいだろうが。

「俺のターン、ドロー……………よし、近年稀に見るほどの良手札だな。まず永続魔法、ウォーターハザードを発動」

ウォーターハザード

永続魔法

自分フィールド上にモンスターが存在しない場合、

手札からレベル4以下の水属性モンスター1体を特殊召喚できる。

この効果は1ターンに1度しか使用できない。

「この効果で、手札からレベル4の水属性のヒゲアンコウを攻撃表示で特殊召喚」

ヒゲアンコウ

効果モンスター

星4 / 水属性 / 魚族 / 攻1500 / 守1600

水属性モンスターを生け贄召喚する場合、

このモンスター1体で2体分の生け贄とする事ができる。

「ヒゲアンコウをリリース……………来てくれ、超古深海王シーラカンス」

そして現れる、魚の王様。何回見ても納得いかんのだが、深海王デビルシャークとはえらい違いだよなあ。弱いとまでは言わんが、なんだろうあの鮫さんから漂うコレジャナイ感。何回だつて繰り返し返すけど、アイツは弱くない。ただ、明らかにあれは切り札って感じじゃないんだよなあ。

超古深海王シーラカンス

効果モンスター

星7 / 水属性 / 魚族 / 攻2800 / 守2200

1ターンに1度、手札を1枚捨てて発動できる。

デッキからレベル4以下の魚族モンスターを可能な限り特殊召喚する。

この効果で特殊召喚したモンスターは攻撃宣言できず、効果は無効化される。

また、フィールド上に表側表示で存在するこのカードが

カードの効果の対象になった時、

このカード以外の自分フィールド上の魚族モンスター1体をリリースする事で

その効果は無効にし破壊する。

「二ターン目から大型モンスターを出すなんて……………」

翔よ、お前の兄貴は後攻一ターンでサイバー・ドラゴンをポンポン出してくるんだぞ。つーか俺も、ここまでデッキが応えてくれるのは予想外だったわ。ピンチになると魔宮の賄賂しかくれなくせに。

ちくせうちくせう。

「ま、今言ったってしよーがないことではあるんだがね。いくぜ、俺はシーラカンスの効果発動！手札を一枚捨て、デッキから仲間を四体特殊召喚する！俺は、シャクトパス攻撃表示、オイスターマイスター守備表示、ハリマンボウ守備表示、竜宮の白タウナギ攻撃表示で召喚！」  
魚の王の咆哮に応え、デッキから飛び出してくる4体の魚たち。

シャクトパス

省略

オイスターマイスター

効果モンスター

星3 / 水属性 / 魚族 / 攻1600 / 守 200

このカードが戦闘で破壊される以外の方法でフィールド上から墓地へ送られた時、

自分フィールド上に「オイスタートークン」(魚族・水・星1・攻 / 守0) 1体を特殊召喚する。

ハリマンボウ

効果モンスター

星3 / 水属性 / 魚族 / 攻1500 / 守 100

このカードが墓地へ送られた時、

相手フィールド上に表側表示で存在するモンスター1体を選択して発動する。

選択した相手モンスターの攻撃力は500ポイントダウンする。

竜宮の白タウナギ

チューナー(効果モンスター)

星4 / 水属性 / 魚族 / 攻1700 / 守1200

このカードをシンクロ素材とする場合、

他のシンクロ素材モンスターは全て魚族モンスターでなければならない。

さて。一応生前のノリで出しちゃった白タウナギを使えばシンクロもできるし、エクシーズもできるわけだが。まあ、エクストラの中のこいつらを使うつもりは(今のところ)無いしな。この時代誰も

持っていない種類のカードだし、さすがにそれは気が咎める。とりあえず全員立たせておこう。

「残念ながらこの効果でやって来た魚達は攻撃ができないうえ、フィールド上では効果も無効になる。……………行け、シーラカンス！クレイマンを攻撃！マリン・ポロロッカ!!」

水の鎧を身にまとったシーラカンスが、がっちりと防御態勢をとる石の戦士に突撃していく。

超古深海王シーラカンス 攻2800↓E・HERO クレイマン  
守2000（破壊）

「へへ……………やるな、清明！でも俺だって負けないぜ！罨発動！ヒーロー・シグナル!!」

クレイマンの破壊をうけて、空に輝くHのシグナル。

ヒーロー・シグナル

通常罨

自分フィールド上のモンスターが戦闘によって破壊され墓地へ送られた時に発動する事ができる。

自分の手札またはデッキから「E・HERO」という名のついたレベル4以下のモンスター1体を特殊召喚する。

サーチカードか。さあ、何が飛び出してくる？

「俺は、デッキからスパークマンを特殊召喚するぜ」

E・HERO スパークマン

通常モンスター

星4／光属性／戦士族／攻1600／守1400

様々な武器を使いこなす、光の戦士のE・HERO。

聖なる輝きスパークフラッシュが悪の退路を断つ。

「スパークマン……………厄介な相手だな、融合的な意味で。カードを一枚セットしてターンエンド」

ユーノ 手札：1 フィールド：超古深海王シーラカンス、シヤク

トパス、ハリマンボウ、オイスターマイスター、竜宮の白タウナギ

魔法・罨：1（伏せ）

十代 手札：4 フィールド：E・HERO スパークマン 魔法・

罨：0

「俺のターン、ドロー！手札から魔法カード、融合を発動！」

出たな、融合召喚！さあ、一体どいつが飛び出る？

「場のスパークマンと、手札のネクロダークマンを融合！来い、E・HERO ダーク・ブライトマン!!」

E・HERO ネクロダークマン

効果モンスター

星5 / 闇属性 / 戦士族 / 攻1600 / 守1800

このカードが墓地に存在する限り1度だけ、

自分はレベル5以上の「E・HERO」と名のついた

モンスター1体をリリースなしで召喚する事ができる。

スパークマンが闇に包まれ、体が一部黒くなりマスクの形もだいぶ変わり、全体的にダークヒーローっぽくなる。個人的に、コイツは融合HEROの中でもかなり格好いい方だと思うよ。

E・HERO ダーク・ブライトマン

融合・効果モンスター

星6 / 闇属性 / 戦士族 / 攻2000 / 守1000

「E・HERO スパークマン」+「E・HERO ネクロダークマン」

このカードは融合召喚でしか特殊召喚できない。

このカードが守備表示モンスターを攻撃した時、

その守備力を攻撃力が超えていれば、

その数値だけ相手ライフに戦闘ダメージを与える。

また、このカードは攻撃した場合、ダメージステップ終了時に守備表示になる。

このカードが破壊された時、

相手フィールド上のモンスター1体を選択して破壊する。

「ダーク・ブライトマンでオイスターマイスターを攻撃！ダークフラッシュ!!そしてダーク・ブライトマンの効果により、貫通ダメージを受けてもらうぜ」

「くっ、守備表示は失敗だったか」

E・HERO ダーク・ブライトマン 攻2000 ↓ オイスターマ

イスター 守200 (破壊)

ユーノLP4000↓2200

「さらにダーク・ブライトマンは攻撃終了時、守備表示になる！へへ……………どうだ！」

E・HERO ダーク・ブライトマン 攻2000↓守1000

「やるな、十代！やっぱりお前は強いぜ！」

「やった、アニキがまた先制をとったツス」

しかも、ダーク・ブライトマンの効果で破壊された時に誰かが道連れになる、と。さて、どう突破する？強引に押し切ってもいいし、シラカンスなら身代わり効果で耐えられるけど、うーん。

「まあいいか。ドロロー！よし、アームズ・シーハンターを召喚！」

今日マジで引きいいな。俺近いうちに成仏しちゃうんじゃないだろうか。

アームズ・シーハンター

効果モンスター

星4 / 水属性 / 海竜族 / 攻1800 / 守 400

自分フィールド上にこのカード以外の水属性モンスターが存在する場合、

このカードと戦闘を行った効果モンスターの効果をダメージ計算後に無効化する。

また、フィールド上に表側表示で存在するこのカードが破壊される場合、

代わりに自分フィールド上に表側表示で存在する

レベル3以下の水属性モンスター1体を破壊できる。

「シーハンターでダーク・ブライトマンを攻撃！」

背中にしよった矢筒から矢を一本引つ張り出して構え、放たれた矢は狙い変わらずヒーローの心臓あたりに突き刺さる。

アームズ・シーハンター 攻1800↓ E・HERO ダーク・

ブライトマン 守1000 (破壊)

「でも、これでダーク・ブライトマンの効果が……………つてアレ？」

いつまでたっても何も起きないフィールドに、十代が疑問の声を上

げる。それじゃあ、こつちも種明かしと行こうかね。

「残念だったな、十代。アームズ・シーハンターが戦闘を行った時に自分フィールド上に他の水属性が一体でもいれば、その相手の効果を無効にできるんだぜ！」

「そんなー！」

墓地効果すら止められるってのがなかなかの食わせもんだよなあ。身代わり効果はあんまし使わないけど。

「さあ、遠慮はなしでいかせてもらうぜ！シーラカンスのダイレクトアタックだ！マリリン・ポロロッカ！」

「うわあっ！」

超古深海王シーラカンス 攻2800↓ 十代（直接攻撃）

十代 LP4000↓1200

「ターンエンドだ」

ユーノ 手札：1 フィールド：超古深海王シーラカンス、シャクトパス、ハリマンボウ、アームズ・シーハンター、竜宮の白タウナギ  
魔法・罠：1（伏せ）

十代 手札：4 フィールド：なし 魔法・罠：なし

「俺のターン、ドロロー！しょうがない、これを使うか……………俺は、バブルマンを通常召喚！さらに手札から魔法カード、ミラクル・フュージョンを発動！バブルマンと墓地のクレイマンを融合させて、来い！E・HERO マッドボールマン!!」

ドシイイイイン、と地響きをたてて地面に降り立ちファイティングポーズをとる、クレイマンよりも丸っこくてデカイHERO。それにしても、十代。ミラクル・フュージョンなんて隠し持ってたのか。……………待てよ？今の状況なら墓地にスパークマンもいるし、サンダー・ジャイアントだつて出せたはず。なのになんで特にメリット効果もない壁役を、しかも攻撃表示で出してきたんだ？考えろ、俺。これには何か裏があるはず……………。

ミラクル・フュージョン

通常魔法

自分のフィールド上または墓地から、融合モンスターカードによつ



て

決められたモンスターをゲームから除外し、「E・HERO」という名のついた融合モンスター1体を融合デッキから特殊召喚する。

(この特殊召喚は融合召喚扱いとする)

E・HERO マッドボールマン

融合・効果モンスター

星6/地属性/戦士族/攻1900/守3000

「E・HERO バブルマン」+「E・HERO クレイマン」

このモンスターは融合召喚でしか特殊召喚できない。

E・HERO マッドボールマン 攻1900

「そしてさらに魔法カード発動!Oーオーバーソウル、対象はスパークマン!」

光り輝くO字から飛び出す光の戦士。……………つて、こいつも攻撃表示?

Oーオーバーソウル

通常魔法

自分の墓地から「E・HERO」と名のついた通常モンスター1体を選択し、

自分フィールド上に特殊召喚する。

E・HERO スパークマン

省略

E・HERO スパークマン 攻1600

「そして装備魔法、スパークガンをスパークマンに装備するぜ!」

スパークマンの右手が一瞬光ったかと思うと、いつの間にか握られていた黒い銃。……………某米国版のスパークガンを、俺は絶対にスパークガンとは認めない。カツコよさも何もあつたもんじゃないしなあ……………。

スパークガン

装備魔法

「E・HERO スパークマン」にのみ装備可能。

自分のターンのメインフェイズ時に表側表示モンスター1体の

表示形式を変更する事ができる。

この効果を3回使用した後、このカードを破壊する。

それにしても、スパークガンか。だが、それじゃあまだシーラカンスは突破できないぜ？

「そして、手札のE・HEROキャプテン・ゴールドの効果を発動！このカードを墓地に送り、デツキからスカイスクレイパーをサーチ……………そして、たった今加えたスカイスクレイパーを発動！」

E・HERO キャプテン・ゴールド

効果モンスター

星4／光属性／戦士族／攻2100／守 800

このカードを手札から墓地へ捨てて発動できる。

デツキから「摩天楼 ―スカイスクレイパー―」1枚を手札に加える。

また、フィールド上に「摩天楼 ―スカイスクレイパー―」が存在しない場合、

このカードを破壊する。

ゴゴゴゴゴ、という音と共に地面からニョキニョキ生えてくるビル群。そして、いつの間にかビルの上でポーズをとるヒーロー達。マッドボールマンのシュールっぷりが半端ないな。どうやってあそこまで登ったんだろーか。

摩天楼 ―スカイスクレイパー―

フィールド魔法

「E・HERO」と名のつくモンスターが攻撃する時、

攻撃モンスターの攻撃力が攻撃対象モンスターの攻撃力よりも低い場合、

攻撃モンスターの攻撃力はダメージ計算時のみ1000ポイントアップする。

……………ふむ。あれ、これ結構マズくね？

「行くぜ、清明！マッドボールマンでシーラカンスを攻撃、この時スカイスクレイパーの効果で、攻撃力が1000ポイントアップする！マッド・スタンプ！」

よいしょおっ！とばかりに飛びあがった泥団子……………もとい  
マッドボールマンが、自分の体の重さをフルに使つての飛び蹴りを  
シーラカンスにブチ当てた。

E・HERO マッドボールマン 攻1900↓2900

E・HERO マッドボールマン 攻2900↓超古深海王シーラ  
カンス 攻2800 (破壊)

ユーノ LP2200↓2100

「そのままスパークマンでアームズ・シーハンターを攻撃！スパーク  
フラッシュ!!」

わざわざ右手の銃を左手に持ち替え、右手から雷の塊を打ち出すス  
パークマン。白タウナギが電気で焼かれて蒲焼きになる……………と  
いうようなことは一切起きずに、ごくふつーに爆発した。

E・HERO スパークマン 攻1600↓2600

E・HERO スパークマン 攻2600↓アームズ・シーハン

ター 攻1800 (破壊)

ユーノ LP2100↓1300

「ちよーつとばかりマズイな、もうライフが並びつつある」

「メインフェイズ2、スパークガンの効果を発動。スパークマンと  
マッドボールマンを守備表示にするぜ」

E・HERO スパークマン 攻1600↓守1400

E・HERO マッドボールマン 攻1900↓守3000

「俺はこれで、ターンエンドだ」

「……………確かにやや不利にはなつた、でもまだまだこれからだ、ド  
ロー！来てくれると信じてたぜ、相棒!!見せてやるぜ、俺の切り札  
……………シャクトパスとハリマンボウをリリース！来い、霧の王!!」

鎧に身を包み、堂々とそびえ立つ騎士……………にしか見えない魔法  
使い。

「ゴイツの攻撃力は、リリースしたモンスターの元の攻撃力の合計。  
つまり今のパワーは3100だ！それと、発動する意味も特にないけ  
どハリマンボウの効果で、マッドボールマンの攻撃力を500ポイン  
トダウンさせるからな」

地面に開いた魔法陣からいくつものぶつとい針が打ち出され、マツドボールマンにぶつかって爆発する。

E・HERO マッドボールマン 攻1900↓1400

霧の王

効果モンスター

星7／水属性／魔法使い族／攻 0／守 0

このカードを召喚する場合、生け贄1体

または生け贄なしで召喚する事ができる。

このカードの攻撃力は、生け贄召喚時に生け贄に捧げた

モンスターの元々の攻撃力を合計した数値になる。

このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、

いかなる場合による生け贄も行いう事ができなくなる。

霧の王 攻0↓3100

「行け、霧の王！……ここは、融合が怖いスパークマンを討つ！ミスト・ストラングル！」

霧の王 攻3100↓ E・HERO スパークマン 守1400

(破壊)

「これで俺は、ターンエンドだ」

ユーノ 手札：1 フィールド：霧の王(攻) 魔法・罨：1(伏せ)

十代 手札：0 フィールド：マッドボールマン(守) 魔法・罨：

0

場：摩天楼 ―スカイスクレイパー―

「俺のターン、ドロロー！……モンスターをセットしてターンエンドだ」

「手が止まってるなら、こっちからガンガン行かせてもらうぜ！ドロロー！」

残念、ここでアタッカーを引けてれば……まあ、引けなかったもんに文句言ってもしょうがないか。さて、どっちを攻撃しようかなにしる相手はあの十代だ。あの伏せモンスター、手札に來ないことで有名なネクガさんや、戦闘破壊で効果を発揮するフレンドッグ、一枚ドロローのカードガンナーあたりだと思った方がいいだろう。そし

て、今の俺はそれをカウンターでできるカードを持ってない。なら!

「霧の王でマッドボールマンに攻撃、ミスト・ストラングル!」

霧の王 攻3100↓E・HERO マッドボールマン 守300  
0 (破壊)

「ターンエンドだぜ」

ユーノ 手札:2 フィールド:霧の王(攻) 魔法・罠:i (伏せ)

十代 手札:0 フィールド:モンスター(仮・守) 魔法・罠:0

場:摩天楼 —スカイスクレイパー—

「俺のターン、ドロロー!.....よっしゃ!魔法カード、ホープ・オブ・ファイフス!」

「なに!？」

「アニキー、やっぱり凄いつす〜!!」

ホープ・オブ・ファイフス

通常魔法

自分の墓地の「E・HERO」と名のついたカードを5枚選択し、デッキに加えてシャッフルする。

その後、デッキからカードを2枚ドロローする。

このカードの発動時に自分の手札・フィールド上に他のカードが存在しない場合は

カードを3枚ドロローする。

「選択するのはマッドボールマン、ダーク・ブライトマン、スパークマン、キャプテン・ゴールド、ネクロダークマン.....そしてカードを2枚ドロローするぜ」

ゆっくりと、祈るようにカードを引く十代。さあ、お前は一体どんな逆転の一手を引いたんだ?

「清明、お前にも俺のフェイバリットカードを見せてやるぜ!魔法カード、融合を発動!手札のフェザーマンとバーストレディを融合して、E・HERO フレイム・ウイングマンを召喚っ!!」

満を持して.....ってところか?ついにその姿を見せた、十代にとって永遠のフェイバリットカード。

E・HERO フレイム・ウイングマン

融合・効果モンスター

星6／風属性／戦士族／攻2100／守1200

「E・HERO フェザーマン」＋「E・HERO バーストレディ」

このカードは融合召喚でしか特殊召喚できない。

このカードが戦闘によってモンスターを破壊し墓地へ送った時、

破壊したモンスターの攻撃力分のダメージを相手ライフに与える。

「さあ、行くぜー！フレ임・ウイングマンで霧の王を攻撃！スカイスクレイパー・シュットオツツ！！」

「迎え撃て、霧の王！！ミスト・ストラングル！」

E・HERO フレ임・ウイングマン 攻2100↓3100

E・HERO フレ임・ウイングマン（破壊）↓霧の王（破壊）

二体のモンスターがぶつかり合って、激しい爆発が起こり………そして誰もいなくなった。って、これじゃホラーじゃねえか俺のバカ。

「ターンエンドだぜ」

「俺のターン、ド………待てよ、なあ十代」

せつかくだからここは、あの名ゼリフでも持ち出すとするか。うろ覚えだけど。

「どうした、清明？」

「もしも俺がここで攻撃力1200以上のモンスターを召喚できたら、………面白いよな！」

そう言うのと十代は一瞬あつげにとられた顔をして………につこりと笑い、勢いよく頷いた。

「ああ！」

「よく言った、それでこそ十代だ！俺のターン、ドロー!!!」

「どうだった、清明!？」

俺の手札に即出せるモンスターはいない、けど………。

「諦めたらそこで試合終了なんだ、まだ勝負はわからないぜ！魔法カード、強欲なウツボを発動！手札の氷帝メビウスとジョーズマンをデッキに戻し、3枚ドローするぜ！」

強欲なウツボ

## 通常魔法

手札の水属性モンスター2体をデッキに戻してシャッフルする。  
その後、デッキからカードを3枚ドロウする。

「……………ありがとよ、俺のデッキ。手札から、氷弾使いレイスを召喚！」

氷弾使いレイス

チューナー（効果モンスター）

星2／水属性／海竜族／攻 800／守 800

このカードはレベル4以上のモンスターとの戦闘では破壊されない。

氷弾使いレイス 攻800

「攻撃力800なら、アニキのライフはまだ残るッス！」

「慌てなさんなよ。レイスの召喚に合わせて、手札からシャーク・サツカーを特殊召喚！」

シャーク・サツカー

効果モンスター

星3／水属性／魚族／攻 200／守1000

自分フィールド上に魚族・海竜族・水族モンスターが召喚・特殊召喚された時、

このカードを手札から特殊召喚する事ができる。

このカードはシンクロ素材とする事はできない。

シャーク・サツカー 攻200

「だが攻撃力の合計は1000……………まだあと200足りないぜ！」

そう言いながらも十代の目は、すごくキラキラしていた。これから俺が何をするのか、楽しみでしようがないという目。ひたすら純粹にデュエルを楽しんでる、そんな感じの目。なら、精々その期待に応えてやりますかね。

「手札の最後の一枚……………フィールド魔法、忘却の都 レミューリアを発動！」

俺たちの辺りを囲むようにそびえ立つ摩天楼がさびれて海に沈ん

でき、巨大な神殿のような建物が新しく現れる。

忘却の都 レミューリア

フィールド魔法

このカードのカード名は「海」として扱う。

このカードがフィールド上に存在する限り、

フィールド上の水属性モンスターの攻撃力・守備力は200ポイントアップする。

また、1ターンに1度、自分のメインフェイズ時に発動できる。

このカードがフィールド上に存在する限り、

自分フィールド上の水属性モンスターの数と同じ数だけ、

自分フィールド上の水属性モンスターのレベルをエンドフェイズ時まで上げる。

シンクロもエクシーズも使わないならアトランティスや海の方がいいのはわかってるんだけど、何となく抜く気になれないんだよなあ、このカードも。

氷弾使いレイス 攻800↓1000

シャーク・サッカー 攻200↓400

「これじゃあ攻撃力の合計は……………」

「せ、1400になるッス……………」

「その通り。まずはシャーク・サッカーのダイレクトアタック！」

勢いよく十代に飛びつき、鋭い牙でガブリと噛みつくシャーク・サッカー。

シャーク・サッカー 攻400↓十代（直接攻撃）

十代 LP1200↓800

「氷弾使いレイスでダイレクトアタック！ヘイルランチャー！」

脇に抱えた大きな銃から、連射された氷の弾が十代にぶつかっている。

氷弾使いレイス 攻1000↓十代（直接攻撃）

十代 LP800↓0

「ふう……………」



やれやれ、どうにか勝てたな。疲れた疲れた。

「ちえー、負けちまったかあ」

さすがに十代も悔しそうだな。ふむ、せっかくだからあのセリフも借りてくか。

「十代」

「え？」

「ガツチャ、楽しいデュエルだったぜ!!」

「……………ああ！」

「さてと、とりあえず夕飯には間に合うように帰らねーとな。話はメシが終わってからのんびりしちやる。それじゃ、寮まで競争な！」

「あ、ずるいぜ清明！」

「ふ、二人とも待つて欲しいツスよ〜！」

## ターン4 氷上のプリマ

「皆さん、初めまして。体育教諭の鮎川です。これから三年間、よろしくね」

あのデュエルからはや三日。十代も翔も最初はピンときてないみたいだったけど、業を煮やしたユートが説明途中で割り込み交代。ようやく納得してくれたようだ。もっとも翔は『二重人格ってヤツっスか?』なんて、微妙にわかつたんだかわかってないんだか始末に困る反応だったけど。それともう一つ不思議なことが起きた。どうも十代にはユーノの姿が見えるようになったらしい。本人いわく、『ハネクリボーも見えるぜ!』とところでお前の横で泳いでるソイツって、もしかしてシャーク・サツカーか?』だそうだ。いや、僕には何も見えなだけで……。ちなみにユーノの感想は『驚いたな。ま、原作の大まかな流れに変わりはないだろ』とのこと。なんのことだかさっぱりわからない。前からちよいちよい思ってたけど、コイツら会話のキャッチボールをまともにする気があるのかなあ……?』

そんなことを考えていたら、頭の中で声がした。

『体育………なあ清明、お前ってボート漕げるか?』

「(は、はい?)」

まるで意味が分からない。体育とボートと一体何の関係があるってんだろう。まあ一応できるっちゃあできるけどさ。

『あーいや、別に授業には関係ないんだけどな。今日はボートを漕ぐスキルが必要になる可能性がひじょーに高いから、そのつもりでいろよ』

………なんで?その後も一日中間ただしてみたけど、結局ユーノが答えてくれることはなかった。ただ、ほかにも気になったことがあります。

「えへへ………」

「なあ清明、翔の奴一体どうしちゃったんだ?」

「さあ?」

ぼんやりと頬杖ついて座り、ニタニタとしまりなく笑ってる翔。

「ユーノー、お前はなんか知ってるか？」

『……………さあな（スーツと明後日の方を向く）』

「ムツチャ怪しいー!!？」

もうよくわかんないので十代と相談して、ある程度注意しながらもそのままほつとくことにした。まあそのうち治るでしょ、うん。

——で、夜。のんびりデツキをいじくってたらず、隣の部屋の十代がいきなり飛び込んできた。

「清明!!翔がどこ行ったか知らないか!？」

「え、何?何?」

「それが、さつきから翔がどこにも居ないんだ!」

「あれだよほら、忘れ物でも取りに行ったんじゃないの?」

「それでも、もう一時間もたつんだぜ!何かあつたんじゃないのか?」

「そんなこと言われてもなあ……………でもいいよ、手伝おうじやないの。ところで隼人は?」

隼人……………あー、隼人さんってのは僕らの先輩。なんでも留年生らしいけど、基本的にはいい人。ただちよつと後ろ向きなところもあるんだけど。

「それが、『どうせ飯の時間には帰ってくるだろー』って」

「うん……………まあ実際そうだと思うけどなあ」

「そう……………かなー?」

「とりあえず、この辺りからもう一回探し直そ。夕飯になっても帰ってこなかったら、最悪先生のところまで行った方が早いだろうし」

「そっか!じゃあ清明、悪いけどそっちの方探しててくれ!」

「オーケー!」

まず結論。見つかりませんでした、まる。

「帰ってこないね……………」

「どこにも居ない……………」

まったく、人に心配させて。帰ってきたらまず説教でもしてやりますかね。と、そのその時十代のPDL……………だっけ？なんかそんな感じの名前の、入学時に一人一個もらった機械が鳴った。

「ん、なんだ？」

そう言ってポケットから引つ張り出し、覗き込む十代。と、驚いたようにメールの文面を見せてくれた。そこには簡単に一言、

『翔君のことで、話したいことがあります。ブルーの女子寮まで来なさい』

と書かれていた。お願いじゃなくて命令口調なのがイラツとくる。けどまあ、

「行くしかないよねーこれは」

「よし、じゃあ早速行ってみるか！」

『……………ふむ。ちよい待ち、お二人さん』

ようやく手掛かりが見つかって盛り上がってきたところに、ずつと部屋の隅で精霊体になって寝つ転がってたユーノが声をかける。

『女子寮は基本的に男子禁制だぞ？さあ、どうやって潜り込む？』

あ。ど、どうしよ十代。

「え、えーつと、なにかいい方法あるか、清明にユーノ？」

うーんと、何か、何か……………。と、そこでふと一つのことを思い出した。それは、今日の昼にユーノが振ってきた、意味の分からない会話。

「ボートだ！あれで脇の池から行けばいい！」

「それだ！よし、確かこの寮にも手漕ぎボートなら一隻あるはずだぜ！」

それにしてもユーノ、まさかこうなることを知ってたのかな？いや、まさか、ね。

そして、所変わってブルー女子寮前………の池。特徴、デカイ。以上。いーかげんボート漕ぐのも飽きてきたんだけどなあ。

「おい、誰だか知らないけど来てやったぜ！翔を返せ！」

「ようやく現れたわね、遊城十代」

「アニキ、助けて〜！」

「あ、翔！………何やってんのそんなところで」

ロープでぐるぐる巻きにされた翔が棧橋に放り出されているその姿は、まあなんとというか、

「みつともないな、翔」

『前から思ってたけど、お前って結構えぐいところあるよな』

「ちよつと、そこのあなた!!」

はて、僕のこと………なんだろうなあ、やっぱり。十代は今あつちの金髪っ娘と何やら喋ってるし。

「はーい。何か用？」

「何か用、じゃありません！あつちは明日香さんが直々に呼びつけたのだからまだわかるとしても、貴方は一体誰なんですか？」

「そうよそうよ！部外者の、それもレッド生は特別に見逃してあげるからさっさと帰りなさい！」

いや、レッド関係なくね？と言いたいののはぐつと我慢して、とりあえず当たり障りのない返事を返す。

「そりゃどーも。でもまあお気遣いなく。第一、今ここで僕が帰ったら十代が帰れなくなるし」

「なによその態度！貴方、自分がオシリスレッドだという自覚はあるの？」

「そーいや隼人………先輩も言ってたなー、そんなこと。でもまあ、悪いけど特に気にするつもりはないから」

『へえ、なかなか言うじやないの。ちつとは見直したぜ』

「(そう言ってもらえて嬉しいよ)」

『ま、あっちのお二人さんはそう思ってはくれないみたいだけどな』  
やっぱりというかなんというか、まあブルーの傾向から考えて当たり前だけど。結構怒ってるねー、二人とも。そしてそのうちの片方(いまだにどっちの名前もわかんないから、こうとしか言いようがない)が口を開いたその時。

「二人とも、少し落ち着かなきゃだめだよ? って言ってるよ。それとやっほー、清明。久しぶり〜、だつてさ!」

「あれ? その声……………」

『もしかなくても、だな』

「あの時はありがとうね、だつてさ。夢想ちゃんの登場だよー、なんだつて!」

「夢想ちゃん!」

「ちよつと貴方、夢想さんに対してなんですかその態度は!」

「え、何夢想ちゃん実はそんな偉い人だったの!?!」

「いや、だから二人とも呼び捨てでいいんだけど、つて言ってるのに……………。それと清明、別にそういうわけじゃないよ、だつてさ!」

「え、じゃあなんで?」

「ちよつとね、勝ちすぎたのかな? みたいなの!」

「今のブルー女子寮の二大トップと言えば、あそこのドロップアウトと話している天上院明日香さんと、ここにいる河風夢想さんの二人なんです! いやしくもオシリスレッドなんかには、話しかけることさえ許されませんわ!」

「え〜と……………どゆこと?」

説明を求めてチラツと見ると、心底困った顔で答えてきた。

「正直私もやめてほしいんだけど何回言っても直らなくて、つて言ってるの!」

「大変そうだね……………」

「うん!」

なんとなく二人でしみじみしていると、そこに十代の大声が響いた。

「サンダー・ジャイアントで攻撃！ボルティック・サンダー!!」  
「きやあつ!!」

あ、十代が勝った。それじゃあ、今の今まですつかり忘れてたけど。  
「ほら翔、さつきと帰って……………説教な」

「何か今殺気を感じたツスよ!?!」  
「当たり前だつて。つたく、何があつてこんなトコまで来たかは知らないけど……………そういやそこのお二人さん、一体翔が何したつてのさ」

「コイツが覗きをやつてたのよ!」  
「やっぱ僕ら帰るんでこのメガネは煮るなり焼くなり好きにしてください」

「ちよ、誤解つスよ清明君！なにホントに帰ろうとしてるんスカ!」

「だつて覗きでしょ？そりやさすがに庇いきれそうにないわー」

「だから誤解だつてば〜!」

「とにかく、許すわけにはいきませんわ!」

「別に返してあげていいと思うんだけどな、つて言つてるのに」

「いいえ、そんなことを一度でも許したらつけあがるに決まっていますわ!」

「そんなく、そもそも僕は覗いてないツスよ!」

『もー収集つかなくなつてきたな』

「(だね。どーしようこれ)」

「話は聞かせてもらったわ」

「!?!」

「あ、明日香さん!」

ふと後ろを見ると、さつきまで十代とデュエルしてたらしい(見てなかったもん)金髪。そうかそうか、この人がその明日香さんとやらか。

「初めまして、遊野清明君。もう知つてるとは思うけど、私は天上院明日香、明日香でいいわ。よろしくね」

ふむ、この人は少なくとも礼儀正しいな。なら、こつちもそれなりの態度をとるべきだろう。別に皮肉を言う理由もないし。

「ああ、こつちこそ初めまして。それと、こつちも清明だけで構わないよ」

「それで、翔君の話だけど。どうかしら、その前に私ともデュエル、してくれない?」

「おい明日香、話が違うぞ!俺が勝ったから翔は返してくれるんじゃないのかよ!」

「わかってるわよ、十代。これは、私が純粹にデュエルがしたいから頼んでいるだけ。結果がどうなっても今日のことにはなかったことにするわ。ジュンコ、ももえ、それでいいわね?」

「は、はい!」

「明日香、気を付けたほうがいいよ、だつてさ。清明はかなり強いよ、つて言いたいみたいだよ」

「わかってるわよ、夢想。クロノス教諭を倒した実力、改めてこの目で見せてもらおうわ」

「清明も頑張つてね、だつてさ。明日香の強さもなかなかのものだよ、つて忠告してるからね」

「わかったわかった………まったく、人がまだOK出してないのに勝手に盛り上がりちゃつて。でもまあ………」

『デュエリストなら、常識だろ?』

『売られたデュエルは、買うのが礼儀!………つてな』

「そう、ありがとう。それじゃ早速だけど」

「デュエル!!」

「先攻はあなたからでいいわよ」

「ありがとう。それじゃあ僕のターン、ドロー!」

「さーて、どうしようか。さっきのデュエルに気づいてなかったせいで、明日香のデッキタイプが掴めない。じゃあ、ここは守りを固めるか。」

「僕は、ヒゲアンコウを守備表示で召喚」

「ずいぶん強面のチョウチンアンコウが、明日香に向かって牙をむく。」

ヒゲアンコウ



効果モンスター

星4 / 水属性 / 魚族 / 攻1500 / 守1600

水属性モンスターを生け贄召喚する場合、

このモンスター1体で2体分の生け贄とする事ができる。

ヒゲアンコウ 守1600

「そしてヒゲアンコウは魚族。その召喚に成功した時、手札からシャーク・サツカーを特殊召喚！」

シャーク・サツカー

効果モンスター

星3 / 水属性 / 魚族 / 攻200 / 守1000

自分フィールド上に魚族・海竜族・水族モンスターが召喚・特殊召喚された時、

このカードを手札から特殊召喚する事ができる。

このカードはシンクロ素材とする事はできない。

シャーク・サツカー 守1000

「そしてフィールド魔法、忘却の都 レミューリアを発動！」

ゴゴゴゴつと地面から生えてくる、忘れ去られた無人の都。ヒゲアンコウもシャーク・サツカーも、それぞれその周りの海の中に飛び込んだ。

忘却の都 レミューリア

フィールド魔法

このカードのカード名は「海」として扱う。

このカードがフィールド上に存在する限り、

フィールド上の水属性モンスターの攻撃力・守備力は200ポイントアップする。

また、1ターンに1度、自分のメインフェイズ時に発動できる。

このカードがフィールド上に存在する限り、

自分フィールド上の水属性モンスターの数と同じ数だけ、

自分フィールド上の水属性モンスターのレベルをエンドフェイズ時まで上げる。

ヒゲアンコウ 守1600 ↓ 1800 攻1500 ↓ 1700

シャーク・サッカー 守1000↓1200 攻200↓400

「カードを二枚伏せて、ターンエンド」

「まずは様子見、といったところかしら？ 私のターン、ドロ―！ 私はサイバー・チュチュを召喚するわ」

サイバー・チュチュ

効果モンスター

星3 / 地属性 / 戦士族 / 攻1000 / 守 800

相手フィールド上に存在する全てのモンスターの攻撃力が

このカードの攻撃力よりも高い場合、

このカードは相手プレイヤーに直接攻撃する事ができる。

踊るようにしてフィールドに現れる、スケート靴をはいた女性モンスター。さあ、一体どんなデュエルを見せてくれるんだろう。

「そして速攻魔法、突進を発動！ 対象はシャーク・サッカー！」

突進

速攻魔法

フィールド上に表側表示で存在するモンスター1体の攻撃力は

エンドフェイズ時まで700ポイントアップする。

シャーク・サッカー 攻400↓1100

「んなっ!？」

『あーなるほど、そうきたか。ライフ4000なら確かにそんなゴリ押しでもいけなくはないわな』

「ユーノ、今のは一体どういうことなんだ？ 自分のモンスターの攻撃力をあげれば、どっちか片方は突破できるのに」

『んー？ まあ見てなつて十代。どうせすぐに本人が説明してくれるさ』

先に言われちゃったけど、僕の疑問も十代と同じ。いつもどおり、ユーノは全部お見通しみたいだけだ。

「そしてマジックカード、ダブルアタックを発動。手札のチェミナイ・エルフを捨てて、このターンサイバー・チュチュが二回攻撃できるようにするわ」

ダブルアタック

## 通常魔法

自分の手札からモンスターカード1枚を墓地に捨てる。  
捨てたモンスターよりもレベルが低いモンスター1体を自分  
フィールド上から選択する。

選択したモンスター1体はこのターン2回攻撃をする事ができる。

デミニナイ・エルフ

通常モンスター

星4 / 地属性 / 魔法使い族 / 攻1900 / 守 900

交互に攻撃を仕掛けてくる、エルフの双子姉妹。

「そしてサイバー・チュチュで攻撃、この瞬間に効果発動！あなたの  
フィールド上のモンスターの攻撃力がすべてチュチュより上だった  
場合、チュチュは相手プレイヤーにダイレクトアタックができる！  
ヌーベル・ポアント！」

スケート靴は凶器じゃありません。良い子の皆さんは、間違っても  
人を蹴るための道具として使ったりなんてしないでください。

「ぐっ！」

サイバー・チュチュ 攻1000 ↓ 清明 (直接攻撃)

清明 LP4000 ↓ 3000

「もう一度ヌーベル・ポアント！」

スケート靴は凶器じゃありません (ry)

というかそんな喰らったらいきなりライフ半分じゃないか。く、  
ここはしようがない！

「待った！二回目の攻撃時にトラップ発動、ポセイドン・ウエーブ！」  
スケートの要領で突っ込んでくるサイバー・チュチュを、大津波が  
押し戻す。

ポセイドン・ウエーブ

通常罠

相手モンスターの攻撃宣言時に発動する事ができる。

相手モンスター1体の攻撃を無効にする。

自分フィールド上に魚族・海竜族・水族モンスターが表側表示で存  
在する場合、

その数×800ポイントダメージを相手ライフに与える。

「このカードの効果でチュチュの攻撃は無効、さらにヒゲアンコウとシャーク・サッカーの存在でダメージは1600だ!」

「やるわね!」

明日香 LP4000↓2400

「やったツス!」

「頑張れー、清明!」

「あのレッド生、よくも明日香さんにダメージを!」

「貴女たち、ちよつと黙っててね……………だつてさ。そんなことばかり言っていると、ブルー寮の品位が下がっちゃうよ?別に私は気にしないけど、なんだって」

「カードを一枚伏せて、ターンエンドよ」

清明 手札：1 ファイルド：ヒゲアンコウ(守)、シャーク・サツ

カー(守) 魔法・罠：1(伏せ)

明日香 手札：1 ファイルド：サイバー・チュチュ(攻) 魔法・

罠：1(伏せ)

場：忘却の都 レミューリア

「僕のターン、ドロー」

さて。今のところはこつちが微妙に押ししてるけど、正直攻めの一手が見つからないな。これを伏せたのは間違いだったかな?ただまあ、あのサイバー・チュチュは残しておくど厄介だ。

「ヒゲアンコウを攻撃表示に変更して、サイバー・チュチュを攻撃!」

ヒゲアンコウ 守1800↓攻1700

ヒゲアンコウ 攻1700↓サイバー・チュチュ 攻1000(破

壊?)

「なら、ここでトラップ発動!ホーリーライフバリアー!」

ヒゲアンコウが大きな口を開けてサイバー・チュチュに噛みつきうとするも、その真ん中にいきなり表れた青い服の修道女たちがバリアを張って攻撃を防ぐ。あれ、ホーリーライフバリアーの効果って確か……………。

ホーリーライフバリアー

通常罨

手札を1枚捨てる。

このカードを発動したターン、相手から受ける全てのダメージを0にする。

『言いたいことはわからんでもないが、残念ながらあのカードならモンスターとの戦闘破壊もナシにできるんだよ』

え、そうなの？じゃあ一時k……

『念のため言っとくけど、一時休戦あたりではふつーに戦闘破壊されるぞ』

「……………なんで？」

『そんなもんだ、としか言いようがねえな。こればかりは俺も今一つ理解できなかった』

「ふーん。あ、これでターンエンド」

「私のターン、ドロー！ヂエミナイ・エルフを召喚！」

フィールド上に降り立つ、双子のエルフ姉妹。どーでもいいけどこれって、二人がかりで攻撃力1900なら、一人になると攻撃力950っていうことになるんだろうか。

『お前は何を言ってるんだ』

「……………うん、ごめん。ちよつと反省してる」

ヂエミナイ・エルフ

省略

ヂエミナイ・エルフ 攻1900

「ヂエミナイ・エルフでシャーク・サッカーを攻撃！」

「ごめんよ、シャーク・サッカー」

ヂエミナイ・エルフ 攻1900↓シャーク・サッカー 守120

0 (破壊)

「これであなたのモンスターは攻撃力1700のヒゲアンコウ一体……………行きなさい、サイバー・チュチュ！ヌーベル・ポアント！」  
本日二回目の、スケート靴によるハイキック。く、さっきのターンで倒せなかったのは痛いな。

サイバー・チュチュ 攻1000↓清明 LP3000 (直接攻撃)

清明 LP3000↓2000

「これでターンエンド」

清明 手札：2 フィールド：ヒゲアンコウ（攻） 魔法・罨：1（伏せ）

明日香 手札：0 フィールド：チェミナイ・エルフ（攻）、サイバー・チュチュ（攻） 魔法・罨：0

場：忘却の都 レミューリア

「僕のターン、ドロロー！」

今ならセットカードもない、ここは押し切る！って言いたいところなんだけどなあ……………。手札が…………。

『わー、モンスターが一体もいねえ』

どう見ても事故です、本当にありがとうございます。

「しよがないか、まずはヒゲアンコウでサイバー・チュチュをもう一度攻撃！」

ヒゲアンコウの噛みつきは、今度こそサイバー・チュチュをしつかりと捉えた。

ヒゲアンコウ 攻1700↓サイバー・チュチュ 攻1000（破壊）

明日香 LP2400↓1700

「カードを一枚セット、ターンエンド」

「私のターン、ドロロー……………そうね、エトワール・サイバーを召喚。そして、チェミナイ・エルフでヒゲアンコウを攻撃するわ」

フィールドに降り立つ二人目のプリマは、紅白デザインの衣装を着た長髪の女戦士。

エトワール・サイバー

効果モンスター

星4／地属性／戦士族／攻1200／守1600

このカードは相手プレイヤーを直接攻撃する場合、

ダメージステップの間攻撃力が500ポイントアップする。

エトワール・サイバー 攻1200

くっ、ここでこの伏せカードを使うか？いや、でもここで発動した

ら後でどうしようもなくなる!

『ふむ、ここで見送るか。……………エトワール・サイバーの効果を把握したうえでやってくれてんだよな?』

「へ、効果?」

『もうやだコイツ』

ヂエミナイ・エルフ 攻1900↓ヒゲアンコウ 攻1700 (破壊)

清明 LP2000↓1800

「エトワール・サイバーでダイレクトアタック!さらにこの時エトワール・サイバーの効果で、攻撃力が500ポイントアップするわよ!」  
そんな効果だったのか!ならやっぱり、さっきヒゲアンコウがやられるときにあのカードを使っておけばよかったかな?

エトワール・サイバー 攻1200↓1700

エトワール・サイバー 攻1700↓清明 (直接攻撃)

清明 LP1800↓100

「うわあっ!」

『ふむ。鉄壁だな』

いやちよつとユーノさん何落ち着いてんの!!残りライフ100って相当まずいんじゃないの!?

『まずいっちゃあまずいんだけどな。すっげー楽しみに見させてもらうぜ、次のお前のターン。自分でやったポカなんだし。わーい鉄壁だー鉄壁だー』

えー、何その反応友達なくすよ?とりたいのをぐつとこらえる。言ったところでせんぜん応えないのは目に見えてるし。

「エトワール・サイバーの攻撃力が元に戻って、ターンエンド。さあ、あなたのターンよ?」

エトワール・サイバー 攻1700↓1200

清明 手札:2 フィールド:0 魔法・罠:2 (伏せ)

明日香 手札:0 フィールド:ヂエミナイ・エルフ (攻)、エトワール・サイバー (攻) 魔法・罠:0

場:忘却の都 レミューリア

「わかってますよ、だ！ドロー！」

頼む、モンスター来い！

「よし！オイスターマイスターを召喚！」

もうすっかりお馴染みになった、牡蠣に見えない牡蠣の戦士が池から飛び出してフィールドに着地する。何か今池の方で『マンマミッヤ！足をつつたのーネ!!』とか聞こえたような気がしたけど、多分空耳だろう。

オイスターマイスター

効果モンスター

星3 / 水属性 / 魚族 / 攻1600 / 守 200

このカードが戦闘で破壊される以外の方法でフィールド上から墓地へ送られた時、

自分フィールド上に「オイスタートークン」(魚族・水・星1・攻 / 守0) 1体を特殊召喚する。

オイスターマイスター 攻1600 ↓ 1800 守200 ↓ 400

「オイスターマイスターを対象に、マジックカードアクア・ジェット！」

『出た！清明さんのマジックコンボ「うるさい」……………はい』

アクア・ジェット

通常魔法

自分フィールド上の

魚族・海竜族・水族モンスター1体を選択して発動できる。

選択したモンスターの攻撃力は1000ポイントアップする。

オイスターマイスター 攻1800 ↓ 2800

「レベル3で攻撃力2800!?!」

「行け、オイスターマイスター！エトワール・サイバーに攻撃！オイスターショット！」

「やるわね……………！でも、まだライフは1000残る！まだ戦えるわ！」

「それはどうかな！」



「なんですつて!?!」

「トラップ発動!メタル化・魔法反射装甲!!」

そう、これこそが前から伏せてあったとっておき。さつき発動を渋ったのは、素の攻撃力が低いヒゲアンコウじゃあ効果が今一つ薄いと思っただけからなんだけど………結果的にはオイスターマイスターも100しか変わらないね。まあいつか。そんなこっちの思いをよそに、右腕にジェットを付けてサイボーグのようになったオイスターマイスターがメタルの鎧を身に着け、いよいよ生き物に見えなくなっていく。もうこれ二足歩行つてことしか原型留めてないんじゃないかってぐらいいい。

メタル化・魔法反射装甲

通常罠

発動後このカードは攻撃力・守備力300ポイントアップの装備カードとなり、

モンスター1体に装備する。

装備モンスターが攻撃を行う場合、そのダメージ計算時のみ

装備モンスターの攻撃力は攻撃対象モンスターの攻撃力の半分の数値分アップする。

「まず、メタル化の効果で攻守300ポイントアップ!さらに、エトワール・サイバーの攻撃力の半分………600ポイントの攻撃力アップ!」

オイスターマイスター 攻2800↓3100↓3700 守400↓700

「そんな……」

オイスターマイスター 攻3700↓エトワール・サイバー 攻1200 (破壊)

明日香 LP1700↓0

はあ、勝った……。へたり込みそうになるのをぐつと踏ん張って、先に座り込んでしまった明日香のところに近づいていく。

「えつと、大丈夫?」

「ええ……」

「手え、貸そつか?」

「それじゃ、お願いしようかしr」ちよつと貴方!いくらまぐれで明日香さんに勝ったからって、そんなにいい気にならないでくれる!」

「……………ごめんなさいね、自分で立たないとまた言われそうだし」

「ちよつと、さすがにそれは言い過ぎじゃ……………」

『だな』

「それでも同じブルーとして、私からも謝っておくよ、だって。ごめんね?」

「ノープロブレム」

『……………そのカタカナ英語発音やめろ、カツコ悪いぞ』

「え、そうだった!?!」

『お前が英語できないことだけはよく伝わってきたな』

「そんなく……………えーい、十代に翔!もう帰ろう!!」

「お、おう!」

「だからアニキ、まずこのロープをほどいてくださいってば〜!」

「あ、すまん翔!すっかり忘れてたぜ!」

「ちよつと、二人とも僕の扱いが悪くないっすか?」

「だって……………なあ?」

「なんでハモるんスか?!」

いや、だって今回ここまで来るきっかけは翔なわけだし。

「じゃあねー。まあ翔には説教しておくから、それで水に流しといて」

「それじゃあなー。ところで清明、説教っていったいどのくらいなんだ?」

「……………5時間ぶっ続けコース、かな?」

「ひいつ!?鬼がいたツス!」

「ユート、俺と隼人は今日どこで寝りやあいんだろう……………?」

『大徳寺先生かアラオにでも頼みこんだらどうだ?俺も一緒についてくから。巻き込まれちゃかなわん』

「……………だな」

その後、本当に5時間の間翔の悲鳴が響き渡ったかどうかは別の

話。ちゃんちゃん♪

『怖えなオイ』

「もう済んだこと、気にしない気にしない」

## ターン5 移動砲台型戦闘機械、VWXYZ!

気持ちのいい青空。吹き抜ける潮風。……………なんてもの、今の俺らには関係ない。なぜなら、明日香撃破後に起こる最初のイベントがあるからだ。そう、テストである。正直めんどくさいのだが、ここで退学にでもなられちゃ馬鹿みたい、というか馬鹿そのものなので清明をしごき倒す。するとあの野郎、一人でも道連れを増やそうとしたのか死者蘇生を頭に巻きつけてお祈り中の翔と実技一本に絞ってデッキ調整中の十代を首根っこ掴んでズルズルと涙目になりながら引つ張ってきた。正直この二人はなんだかんだいって合格してたからどっちでもよかったけど、せっかくだから正史に干渉してみる……………早い話が一緒にカードの知識から暗記させることにする。まあ、どうせまだテストまで一週間はあつた。プリントに書いてあつた。

以上、今回ここに至るまでの経緯でした。

『よし十代、怒らないからゆつくり答えてみる。モンスターを墓地から一体蘇生させる魔法カード5種類!』

「えっと、まず死者蘇生だろ、オーオーバースウルだろ、ヒーローフラッシュだろ、後ブランチ、えっと……………」

『お前、ホント自分のデッキに関係あるのしか覚えてないのな。ちなみにあとパツと思いつくものとしては、禁止カードになった早すぎた埋葬なんかかな? んじゃ次、清明! 自己再生能力もちのモンスター5種類!』

「なんか十代より問題難しくない!? んくと、黄泉ガエルに、ドル・ドラ、それとタスケナイトにリバイバルスライム、あと……………不死武士! どーだ!」

『ほお、少しはやるじゃねえか。他にはナチュラル・パイナポーとかもいるぞー。よし、ちよつと体借りるぞ』

「え、あ、ちよ……………よし、次はテメーだ翔! カードを破壊する効果持ちのカード、種類も枚数も言わないから3枚答えてみる」

「は、はいっ! えっと、えっと……………」

「がんばれ翔！落ち着いて考えれば、お前ならこんな問題でできるはずだぜー！」

「じゃあヒント。確かビークロイドの中にも無効にして破壊の効果持ちがいたよな」

「そうか！ネイビイロイドツスね！」

「ん、そーだな。でも、まだ二枚答えてないぞ？」

「わかってるツスよ！ステルスロイドでしょ？」

「あと一枚だ。んじゃ、ここで最後のヒント。別に効果破壊ならモンスターでも構わんぞ？」

「もしかして、ドリルロイド……………ツスカ？」

「よし、やりやあでできるじゃねーか」

と、そこで疑問に思ったらしい十代が声をかけた。……………不満たつぷりに。

「なあユーノ、ちよつと翔だけ最真しすぎじゃねーか？問題も俺の方が難しかったし」

「うん、まあそうなんだけどな。ただ、はつきり言って今の翔はちとレベルが低いうえに自分に自信がまるでないからな。まず自信つけることから始めてもらわんと)」

それに、今の受け答えだけではつきりしたことが一つある。この世界、俺の知ってるアニメGXよりもビミョーに原作キャラが強い。十代にはああ言ったけど、翔の最初期といったら例の『先攻チームロイド攻撃表示』が示すほどひどかったはず。でも、ここにいる翔は少なくとも自分の使うロイドの効果はしつかり把握している。『俺』に『清明』というイレギュラーが入った影響なのか？そして、それよりなにより……………

「ぶちやぶちやゆうな十代。つぎ、チューナーモンスターを三体ずつそれぞれ答えてみる」

「チューナーか……………まずこの間お前が使ってた氷弾使いレイスに竜宮の白タウナギだろ、それに……………」

「アニキくひどいツスよ！僕がそれ言おうと思ってたのに！」

「へへっ、早い者勝ちだぜー！」

これだ。この時代にいちやおかしいモンスター、チューナー。やっぱり俺がデツキごとこの世界に持ちこんできたのがまずかつたんだらうか？もつともこの世界にはシンクロもエクシーズもなくて、チューナーの意味は単に『トラスト・マインドで蘇生できたり、チューナーズ・バリアで守つたりできるモンスター群』というもの……………乱暴に一言でまとめると、癖のないスピリットやユニオンみたいなカテゴリである。ちなみに……………

『はーい！』

「ん、清明」

『氷結界の水影！でもさ、ユーノ？』

「はいせーかい。どした？今ちよつとばかり忙しいんだ。後にしろ後に」

『いや、でもさ』

「後だ後」

『まあ、いいんだけど……………』

「だろ？よーし、じゃあ次の問題だすぞー」

「じゃ、もう寝よつか」

「ああ、俺らも部屋に戻るぜ」

「おやすみなさいツス」

『おう。明日も覚悟しとけよー』

「明日も!?!」

『……………何驚いてんだお前ら。ほれほれ、さつさと寝ろ』

「は、は〜い」

全く、なにかおかしいなと言ったか俺？

『……………何驚いてんだお前ら。ほれほれ、さっさと寝ろ』

思えば、この時点で何かがおかしいと気づくべき……………いや、僕だってそこまで馬鹿じゃないよ、気づいてたんだよはつきりと。いや、でもさ？ぶつちやけ、テスト勉強してたくないじゃん？ねえ？だから、僕は悪くない……………と、思いたいなあ。

まあ、何が言いたいかというと。

「じゃあお休み、ユーノ」

『ん』

「そういえば、さっきの話だけどさ」

『おう、そういや何か言ってたな。なんだ？』

「ユーノは普段授業中って校舎内うろついたり一緒に授業効いてたり一日中昼寝決め込んでたり忙しいけどさ」

『ハッキリ言ってくれ、ハッキリ。うっとうしいからグダグダ喋んな』

「その……………ほら、ユーノはテストの日って、プリントでしか見てないよね」

『まあそうだな。特に聞かなかったし……………まさか！』

「その、あの後で訂正が入ってね？ほんのちよびーつとだけ、日付がずれたんだよね」

『怒らないから言ってみろ、結局テストはいつなんだ？』

「え？えっと、えーっと、イツダツタカナ」

『……………』

「明日、です」

『……………』

「……………」

『今すぐ十代と翔たたき起こしてこい！まだ基本すら終わってねえぞ』

!?せめてチェーンに乗る乗らない特殊召喚ぐらいは脳みそに詰め込んでやるからキリキリ動けこの野郎つつ!!』

「たった今怒んないって言ったじゃん!!」

『やかましーわ!どうもさっきの反応がおかしいと思ったらそーゆーことか!テスト前日にぐーすか寝ようとするたあいい度胸じゃねーかこのすつとこどつこい!』

「やっぱ言うんじゃなかったー!!!」

その後?二人ともたたき起こして延々知識の詰め込み作業。あ、ちゃんと睡眠時間もとらせてもらえたよ?まあ下手に徹夜させて本番で寝オチとかいまどきギャグ漫画でもやらないパターンだろうけど。つてユーノが言ってた。

『……………ろーおい、起きろつつつてんだろ!』

何か聞こえる気がする。でも眠い。うるさい。寝る。

『つの野郎……………よーしわかった、ちよい右手貸せ』

「むにや、右手?よくわかんないけど、好きにすれば……………」

『言ったな?歯あくいしばれ馬鹿!』

「ぐぎゃんつ!」

自分の右手に本気で殴られてたたき起こされるって、人生の中でもそうはない経験だと思う。人って自分のことを殴る際にはある程度のリミッターがかかって無意識のうちに威力が落ちてるらしいんだけど、この場合動かしてるのがユーノだから遠慮も何もないマジパンチ。むっっちゃ痛いです。

『目え覚めたか?さっさと起きろ!』

「なにすんのいきなり!痛いよ?ふつーに痛いよ今の?」



『時計見てからものを言えっ!』

「とけ……………でえええええつつつつ!!?」

『いやー、俺が昨日余計なこと言ったせいでフラグ立つちゃったんだろ。すまない。本当にすまないと思ってる』

「俺にわかるように説明しろ!……………つて、言ってる場合か!とりあえず今からでも行かないと!そーいや十代達は?」

『多分、俺らが先に言ってると思っただろうな。翔はともかく十代も遅刻組だし』

「え、十代も?」

『あーいや、こつちの話。とりあえず走れ!』

「わーってますよ、つとー!」

大慌てで食パン一枚だけ口にくわえて寮から校舎への地味に長い上り坂(この間ユーノが『こういう所もレッドなんだなあ…………』つて物凄いしみじみした声で言ってた)を駆け上がっていくと、ふと見慣れた赤い制服と髪型、そして一台の車が見えた。ふむ。

「おーい、十代!何やってんの?」

「あれ、清明?なんでお前がこんなところにいるんだ?」

「……………どっかの誰かさんが起こしてくんないから」

『……………どっかの誰かさんが電池の切れた目覚まし時計を放っておいたから』

『……………一体誰のことだろうな(ね)』

「そ、そうか」

何か言いたそうだったけど、とりあえず何も言わないことにしたらしい。でもとにかく、僕は悪くないはず。

「んで、十代こそ何こんところで車押してんの?」

「ああ、実はな…………」

「アタシの車の調子が悪くなってねえ。手伝ってもらってるんだよ」

十代が話そうとした瞬間、いきなり新しい声が出た。車の陰に隠れて気づかなかったけど、どうもずっといたらしい。ちよつとぼつちやりした体系の、優しそうな人だ。

「ああ、それでこの車を校舎まで押してかなきやいけないんだ。やつ

ば困ってる人はほっとけないしな」

「なるほどねえ……………オーケー十代、せっかくだから僕も手伝うよ」

「え、いいのか？お前まで遅刻することはないぜ」

「まったく、今自分でも言ったばかりじゃないの。この遊野清明、困ってる人の横をたったか走っていけるほどの薄情者に見える？」

「ありがとな、清明！」

結局、ガッツリ遅刻しましたとき。とつぴんぱらりのふう。わかっ  
てたけどね！……………そういや、あの人結局誰だったんだろう？名前  
がトメさんってことだけはわかったけど。

「それで、アニキも清明君も遅れちゃったんスか？」

「ああ、もうこうなったらしょうがない、勉強の成果を見せられなかつ  
たのは残念だけど実技試験で本気出すしかないな！」

「いや、むっちゃ嬉しそうじゃん」

なんてことをダベりながらの昼食タイム。すると、そこに見慣れた  
顔がやって来た。……………僕のおにぎり勝手に盗られたー！

「やあ、君たち。もしよかったら、俺も混ぜたっていいかい？」

「ああ、別にかまわないぜ三沢」

「三人とも久しぶり、だつてさ。それと、このおかか美味しいよ、とも  
言ってるよ」

「そりやどうも、夢想……………」

ああ、僕の一日のエネルギー源が……………まあいつか。もう全部食  
べられたものについてあーだこーだ言ってもしょうがないし、ね。

「二人ともこんなところまで、一体どうしたんスか？」

「ああ、実は今日から新しいカードのパックが購買で販売されるんだ。  
遅刻した君たちに、それを教えないのも不公平だろう？」

ふーん、新しいパックかあ。興味はあるけど、ユーノがなんて言う  
かなあ。

『新しいパック……………ああ、あれか。ま、行く行かないは自分で決めな  
あれれ、意外と淡泊な反応。』

『んー、だってあれなあ……………』

なんかコイツにしては珍しい、今一つはつきりしない物言い。うーん、

「な〜んか気になるなあ」

「？」

「あーいや、こっちの話。それで、三沢はそのパツクを買いに？」

「いや、下手に新しいカードを入れて上手く回らなくなるのも嫌だからな。俺は俺のデツキを信じるさ」

「つまり行く気はない、と。じゃあ僕もやめよつかな……………あーでもやっぱちよつとは気になるし、冷やかしぐらいには見に行ってみよつと」

「私も同じ、だってさ」

「あ、僕も行くツス〜」

「じゃあ俺も!」

「みんなが行くんなら、せっかくだし俺もついて行ってみるかな」

そうと決まれば前進前進。

「ところで三沢」

「どうした、清明？」

「……………購買ってどこ？」

「俺もわかんねーな」

「あれ、アニキもわかんないんスカ？」

「君たち、学校のどこに何があるかぐらい覚えておいてくれよ。なあ、河風君？」

「……………ごめんなさい、だってさ」

「そ、そうか……………あれ、もしかして俺がおかしいのか？」

『多分そんなことはないと思う、って俺が言っても聞こえねーか精霊体だし』

まあとにかく、三沢せんせーによる道案内でたどり着いた購買。うーん、さすがにだいたいぶ人が集まってるなあ。できればその新パツク、収録カードのリストとかが出てるといいんだけどなあ。そううまくはいかな……………アレ？

「ねー十代、あの人ってさ」

「あ、そうだな！おーい、トメさーん！」

「あら、十代ちゃんに清明ちゃん。ごめんねえ、実は……………」

「「買占め!?!」」

「そうなのよ、みんながくるちよつと前にきてね、ウチにあるパツク全部買って行っちゃったお客さんがいたから、もうカードは無いの。ごめんね、せつかく来てくれたのに」

「そうかー。まあいいか、そろそろ時間だし戻ろうぜ」

「ああ、そうだね（ユーノさーん?）」

『どした?』

「（いや、どしたじゃなくて。最初からこうなることがわかったの?）」

『はてさて、何のことやら、だな』

「（むー、なかなか口を割らないなあ）」

「ああ、ちよいとお待ちよ二人とも！」

「え、なんですか?」

「ふふふ、ちよいとこつちへおいでよ。あ、静かにね！」

「……………」

「はいこれ。さっきのお礼にね、こつそりーパツクだけ隠しておいたんだよー」

「え、これ俺らがもらっていいの!?!」

「ほかの生徒には内緒だよ?それじゃあ試験、頑張ってね！」

「やったな清明!それじゃあ、あつちで翔たちと一緒に開けようぜ！」

「おー!」

「レッド寮より遊野清明です、こうなったらヤケだ、よろしくお願いしますー！」

「ブルー寮、万丈目準だ。まあいくらレッド寮とはいえ、遊城十代とデュエルする前の前座ぐらいにはなつてくれるだろうな」

実技試験で、僕の相手はブルー生徒………しかも、話を聞く限りではかなりのエリートらしい。ソースは夢想から聞いたブルー男子についての噂話だけど。どうしてこうなった。

『やんなくていい喧嘩吹っかけたお前が悪い』

「………とか言いながらユーノさん、ムツチャ嬉しそうですよ?」

そう、あれはちよつと前、三沢と夢想がそれぞれイエローとブルー女子のテスト部屋に帰っていき、それと入れ違いに現れたこの万丈目さ………あー、呼び捨てでいいや。万丈目とその取り巻きが『あること』を伝えに来た時だった。

『以下、回想です』

「………誰と話してんの?」

「おい、遊城十代!」

「お前確か、万丈目!」

「万丈目さん、だ! いいか、今回の実技試験、お前の相手は俺になった!」

「え、本当か!」

「感謝しろよ、レッド生相手にわざわざ万丈目さんから直々にお呼びがかかったんだ!」

「そうだそうだ!」

「でも、そんなの不公平っスよ! だいたい、決まりでは違う色の寮の生徒どうしでは原則公式なデュエルはしないんじゃないんすか!」

「だからこそ、俺様が直々に出向いてやったんだ! さあ、どうする遊城十代! この勝負受けるのか、それとも尻尾を巻いて逃げ出すのか!」

「へっ、上等だぜ！売られたデュエルは買うのが礼儀！それに、お前との決着はまだついてないもんな！」

「ん？翔、十代ってアイツとデュエルしたことがあるの？」

「入学初日に校舎に忍び込んで………わっ！な、なんでもないツス〜!!」

「だいたい把握した」

「そこ、黙っている！お前らレッド寮ごときはな、本来万丈目さんとは口を利くことすら許されないほど差があるんだよ！」

「ほー、口を利くことも、ね………よーし面白い、その………えーと、名前なんだっけ？」

「万丈目、さんだ！」

「よし万丈目！レッド寮には十代もいるけど、この僕遊野清明がいることも忘れるなっただ！十代とデュエルする前に、僕ともデュエルしてみろ！」

「あー？何言ってるんだこのレッド、万丈目さんはなあ、お前みたいなクズとデュエルなん？何、貴様が遊野清明だったか！」ええっ！

「あれ、僕も結構有名人のかな？」

「クロノス教諭を倒したもう一人のレッド生………いいだろう！そのデュエル、受けて立ってやる！」

『別にわざわざ売らなくても何も問題ないデュエルだったよな。あ、これで回想終わりね』

「だから誰に向かって言ってるの？というか、もうほっといてよ………」

反省はしてないけど。無論後悔もしてません。

『駄目じゃねえか』

「細かいことはいーの！いくぞ万丈目！」

「さんだ！」

「デュエル!!」

「先攻は俺がもらうぞ！ドロー！俺は、手札抹殺を発動！さあ、お前の

手札を捨ててドローしろ！」

うわあ、せつかく初手にきてたペンギン・ナイトメアとスノーマン  
イーターが……………。

手札抹殺

通常魔法（制限カード）

お互いの手札を全て捨て、それぞれ自分のデッキから  
捨てた枚数分のカードをドローする。

「さらに俺は、X―ヘッド・キャノンを召喚！」

X―ヘッド・キャノン

通常モンスター

星4／光属性／機械族／攻1800／守1500

強力なキャノン砲を装備した、合体能力を持つモンスター。  
合体と分離を駆使して様々な攻撃を繰り返す。

X―ヘッド・キャノン 攻1800

「カードを三枚セットして、ターンエンドだ」

『さいて、どうする？ 残念ながらあのセットカードがどうにかできる  
手札じゃない。かといって、あいつを放っておいたらユニオン合体さ  
れて手が付けられなくなるぞ』

「どっちにしても危険なら、突っ走ってみるのみさ！ ドロー！ 永続魔  
法ウォーターハザードを発動、効果によりオイスターマイスターを特  
殊召喚！」

フィールドにいきなりどこからともなく波がかぶさり、水が引いた  
後に立っていたのは毎度おなじみ牡蠣の戦士。

ウォーターハザード

永続魔法

自分フィールド上にモンスターが存在しない場合、

手札からレベル4以下の水属性モンスター1体を特殊召喚できる。

この効果は1ターンに1度しか使用できない。

オイスターマイスター

効果モンスター

星3／水属性／魚族／攻1600／守 200

このカードが戦闘で破壊される以外の方法でフィールド上から墓地へ送られた時、

自分フィールド上に「オイスタートークン」(魚族・水・星1・攻／守0)1体を特殊召喚する。

オイスターマイスター 攻1600

「さらに、オイスターマイスターをリリース！カモン、ジョーズマン！」

そして牡蠣の戦士が光に包まれて姿を消し、その後立っているのは体中に鋭い牙の生えた口をたくさん持つ、サメの名を持つくせに魚ではなく獣戦士なお方。ほらその観客さん、聞こえてますからキモいだのなんだの言わないでください。カッコいいのになあ。

ジョーズマン

効果モンスター

星6／水属性／獣戦士族／攻2600／守1600

このカードは特殊召喚できない。

このカードをアドバンス召喚する場合、

リリースするモンスターは水属性モンスターでなければならない。

このカードの攻撃力は、このカード以外の自分フィールド上に表側表示で存在する

水属性モンスター1体につき300ポイントアップする。

ジョーズマン 攻2600↓2900

「馬鹿な!? 攻撃力が上昇しただと!？」

「そりゃそうさ。ジョーズマンを召喚するためにリリースしたカードはオイスターマイスター………こいつの効果でオイスタートークンが一体守備表示で特殊召喚されてたからね」

オイスタートークン 守0

「行け、ジョーズマン！ シャーク・ストリーム!!」

「甘いぞ！ メインフェイズ終了時にトラップ発動、デモンズ・チェーン！」

ヘッド・キャノンに突撃しようとしたジョーズマンだったが、その途中でどこからともなく飛んできた無数の鎖に全身を縛られて動き



が止められてしまう。

デモンズ・チェーン

永続罫

フィールド上の効果モンスター1体を選択して発動できる。

選択したモンスターは攻撃できず、効果は無効化される。

選択したモンスターが破壊された時、このカードを破壊する。

「さらに効果が無効となったことにより、そのモンスターの攻撃力が元に戻る！」

ジョーズマン 攻2900↓2600

「……………カードを一枚セット、ターンエンド」

万丈目 手札：1 フィールド：X―ヘッド・キャノン（攻） 魔法・

罫：デモンズ・チェーン（ジ）+2

清明 手札：3 フィールド：ジョーズマン（攻・デモチェ）、オイ

スタートークン（守） 魔法・罫：1（伏せ）

「俺のターン、ドロロー！まずトラップ発動だ、ゲットライド！墓地のYードラゴン・ヘッドをXードラゴン・キャノンに装備！」

墓地から赤い機械龍が舞い上がり、X―ヘッド・キャノンと合体

……………合体？正直乗っただけのようn『それ以上言わないでおいでやれ。さすがにかわいそ過ぎる』……………えーと、とにかく合体する。ゲットライド！

通常罫

自分の墓地に存在するユニオンモンスター1体を選択し、

自分フィールド上に表側表示で存在する装備可能なモンスターに装備する。

Yードラゴン・ヘッド

ユニオンモンスター

星4／光属性／機械族／攻1500／守1600

1ターンに1度だけ自分のメインフェイズに装備カード扱いとして

自分の「X―ヘッド・キャノン」に装備、または装備を解除して表側攻撃表示で特殊召喚する事ができる。

この効果で装備カード扱いになっている時のみ、  
装備モンスターの攻撃力・守備力は400ポイントアップする。

(1体のモンスターが装備できるユニオンは1枚まで。

装備モンスターが戦闘によって破壊される場合は、

代わりにこのカードを破壊する。)

Xーヘッド・キャノン 攻1800↓2200 守1500↓1900

「そして、ドラゴン・ヘッドのユニオンを解除!」

「せっかく合体したのに、ここで解除!?!」

Xーヘッド・キャノン 攻2200↓1800 守1900↓1500

Yードラゴン・ヘッド 攻1400

「まだまだ行くぞ、リビングゲッドの呼び声を発動!蘇生させるのはZーメタル・キャタピラーだ!」

Zーメタル・キャタピラー

ユニオンモンスター

星4/光属性/機械族/攻1500/守1300

1ターンに1度だけ自分のメインフェイズに装備カード扱いとして

自分の「Xーヘッド・キャノン」「Yードラゴン・ヘッド」に装備、

または装備を解除して表側攻撃表示で特殊召喚する事ができる。

この効果で装備カード扱いになっている時のみ、

装備モンスターの攻撃力・守備力は600ポイントアップする。

(1体のモンスターが装備できるユニオンは1枚まで。

装備モンスターが戦闘によって破壊される場合は、

代わりにこのカードを破壊する。)

「いくぞ、三体合体!フィールド上のX、Y、Zを全てゲームから除外することにより、XYZードラゴン・キャノンを召喚する!」

『ちっ、なんだかんだ言ってもやっぱ強いな万丈目!』

XYZードラゴン・キャノン

融合・効果モンスター

星8／光属性／機械族／攻2800／守2600

「Xーヘッド・キャノン」＋「Yードラゴン・ヘッド」＋「Zーメタル・キヤタピラー」

自分フィールド上に存在する上記のカードを

ゲームから除外した場合のみ、エクストラデッキから

特殊召喚する事ができる（「融合」魔法カードは必要としない）。

このカードは墓地からの特殊召喚はできない。

自分のメインフェイズ時に手札を1枚捨てる事で、

相手フィールド上に存在するカード1枚を破壊する。

「さらにマジック・プランターを発動、リビングデッドを墓地に送ってカードを二枚ドロウする」

マジック・プランター

通常魔法

自分フィールド上に表側表示で存在する

永続罠カード1枚を墓地へ送って発動できる。

デッキからカードを2枚ドロウする。

『おいおい、あんな扱い難しそうなデッキであっさりXYZを出したってのに、まだぶん回すつもりかよ!?』

全くだよ……！さすがにブルーのトップ、伊達じゃないね！

「ふむ……いいだろう、遊城十代と戦うその時まで見せないつもりだったが、気が変わった。このデッキの真の切り札、貴様に見せてやる！マジックカード、アイアンコールを発動！墓地に眠るVータイガー・ジエツトを召喚だ！」

アイアンコール

通常魔法

自分フィールド上に機械族モンスターが存在する場合に発動できる。

自分の墓地のレベル4以下の機械族モンスター1体を選択して特殊召喚する。

この効果で特殊召喚したモンスターの効果は無効化され、エンドフェイズ時に破壊される。

V―タイガー・ジェット

通常モンスター

星4／光属性／機械族／攻1600／守1800

空中戦を得意とする、合体能力を持つモンスター。

合体と分離を駆使して立体的な攻撃を繰り出す。

ひらりと墓地から飛んできたのは、虎がモチーフになった戦闘機。

………なんで緑色のパーツが多いんだろうか。

「さらに、俺はこのターン通常召喚を行っていない。W―ウイング・カタパルトを召喚する！」

続いて現れたのはなぜかコックピットが二つある、ひじょーに飛びにくそうな青い戦闘機。

W―ウイング・カタパルト

ユニオンモンスター

星4／光属性／機械族／攻1300／守1500

1ターンに1度だけ自分のメインフェイズに装備カード扱いとして

自分の「V―タイガー・ジェット」に装備、

または装備を解除して表側攻撃表示で特殊召喚する事ができる。

この効果で装備カード扱いになっている時のみ、

装備モンスターの攻撃力・守備力は400ポイントアップする。

(1体のモンスターが装備できるユニオンは1枚まで。

装備モンスターが戦闘によって破壊される場合は、

代わりにこのカードを破壊する。)

「二体合体だ！フィールド上のVとWを除外することで、VW―タイガー・カタパルトを特殊召喚！」

「またもや行われる、今度はモンスター二体での乗っただけ融合………合体。」

VW―タイガー・カタパルト

融合・効果モンスター

星6／光属性／機械族／攻2000／守2100

「V―タイガー・ジェット」＋「W―ウイング・カタパルト」

自分フィールド上に存在する上記のカードをゲームから除外した  
場合のみ、

融合デッキから特殊召喚が可能（「融合」魔法カードを必要としな  
い）。

手札を1枚捨てることで、相手フィールド上モンスター1体の表示  
形式を変更する。

（この時、リバース効果モンスターの効果は発動しない。）

大型モンスターが二体か。でも落ち着け僕、きつとなにか抜け道が  
あるはずだ！…………おや？

「確かに驚いたよ。でも、その二体の効果にはどっちも手札コストが  
かかるはず！今のお前の手札じゃ、大したことはできない、違うか万  
丈目！」

『お前なあ、何をドヤ顔で恥ずかしいことぬかしとるか…………いや  
まあ、知らないつつーか教えてないから無理もないんだけど』

「フン、笑わせるな遊野清明！言っただろう、このデッキの真の切り札  
をみせてやると！フィールド上のXYZ、VWの二体を除外して、最  
強の合体、VWXYZードラゴン・カタパルトキャノン等特殊召喚だ  
！」

二体の合体戦闘機がさらに複雑な変形をし、ついには一体の、人型  
の巨大なロボットになる。おお、カッコいい…………いや、言ってる  
場合じゃないんだけども。

VWXYZードラゴン・カタパルトキャノン

融合・効果モンスター

星8／光属性／機械族／攻3000／守2800

「VWタイガー・カタパルト」＋「XYZードラゴン・キャノン」

自分フィールド上に存在する上記のカードをゲームから除外した  
場合のみ、

融合デッキから特殊召喚が可能（「融合」魔法カードを必要としな  
い）。

1ターンに1度、相手フィールド上のカード1枚をゲームから除外  
する。

このカードが攻撃する時、攻撃対象となるモンスターの表示形式を変更する事ができる。(この時、リバー効果モンスターの効果は発動しない。)

「ドラゴン・カタパルトキャノンの効果発動！相手の場にあるカード一枚……ここは、その厄介なウォーターハザードを除外させてもらう！VWXYZーアルティメット・デストラクション!!」

肩の部分の砲台がグイーンとこちらを向き、そこから発射された光線がウォーターハザードのカードを打ち抜いてしまう。

『ちつ、やっぱりそっちで来たか。こりやちよつとキツイかな?』

「そしてオイスタートークンに攻撃、この時もう一つの効果発動！オイスタートークンを攻撃表示にする！」

オイスタートークン 守0↓攻0

「ゆけ、ドラゴン・カタパルトキャノン！VWXYZーアルティメット・デストラクション！」

VWXYZードラゴン・カタパルトキャノン 攻3000↓オイスタートークン 攻0 (破壊)

清明 LP4000↓1000

「うわあっ!!」

ととと、ソリットビジョンなのはわかってるけどやっぱりこんな大型モンスターからの攻撃は怖いな。思わず手をあげて頭を守ってしまった。

「さあ、このVWXYZの壁、越えられるものなら超えてみる！俺はこれで、ターンエンドだ」

「くっ……」

越えてみる、そう万丈目は言った。でも、こんな状況、僕に突破できるのかな？相手の場にいるのは、一ターンに一度ノーコストで出しているカードを除外してくるうえに下手に攻守が偏ったモンスターを出してもすぐに倒してしまう攻撃力3000の超大型モンスター。一方こつちの場にいるのは、効果が無効になって、攻撃することすらできないジョーズマン。クロノス先生の古代の機械巨人も攻撃力3000で強い効果持ちのモンスターだったけど、あの時は手札にフェ

イバリットカード……………霧の王がいた。でも、今の手札にはクロス・ソウルはおろか上級モンスターすらいない。じゃあ、もう……………『まったく、めんどくせーなお前。他の奴とデュエルしてた時には、どんな状況だつてわりと笑ってたじゃねえの。なんでまた今回だけ気弱になる必要がある？あれか、場の空気にでも呑まれてんのか？』

「ユーノ、でもそうは言ってもさ『おっと、何か言いたいのは俺だけじゃないみたいだぜ？ホレ、あっち見てみ』え？」

「頑張れー、清明！次は俺も控えてるんだからな、負けるんじゃないぞー！」

「十代……………」

「清明君、レッド生の意地を見せてやるツスよ！」

「翔も……………」

「クロノス先生を倒したその諦めない心、もう一度俺にも見せてくれ！」

「三沢……………」

「どうしたのかしら？私に勝つたのだから、もう少し堂々としていて頂戴」

「そうよ、いくらまぐれとはいえ、そんな顔しては明日香さんに対して申し訳ないです！」

「明日香……………」

と、えーっと、名前なんだっけあの二人？とは言わないでおこう。また怒られそうだし。

「私もいるよ？ほら、あなたの实力はまだそんなものじゃないでしょう……………だって、さ」

「夢想も……………」

『まったく、出る時代間違えてんじゃねーつてのぐらいコテコテのお涙頂戴話だこつた。一部変なの入ってたけど。ま、嫌いじゃないがな。んで、どーする？あんだけ言われて、まだサレンダーするとか言い出したりするワケ？』

「いやー、期待されるってキツイもんだね。……………でもま、わざわざ見に来てもらったんだ。折角だからその期待、しっかり応えてみま

すかね。ドロー！」

引いたカードは……………よしー

『なんつーか、ホンツとお前って引きがいいんだか悪いんだかわからん奴だよな』

後攻一ターン目からいきなりシーラカンス出せるぐらい引きのいい奴は黙つといてください。

『いや、俺だってあれはちよつとびっくりしたからな?』

「ホントかなあ? まあいいさ、手札からアトランティスの戦士の効果発動! コイツを手札から墓地に送って、伝説の都 アトランティスをデッキからサーチ! そして、そのアトランティスをそのまま発動するよ!」

見る見るうちに、辺りの風景が水中の都に変わっていく。レミューリアとはまた違う、完全に水没しきった町。

アトランティスの戦士

効果モンスター

星4 / 水属性 / 水族 / 攻1900 / 守1200

このカードを手札から墓地へ捨てて発動できる。

デッキから「伝説の都 アトランティス」1枚を手札に加える。

伝説の都 アトランティス

フィールド魔法

このカードのカード名は「海」として扱う。

このカードがフィールド上に存在する限り、

フィールド上の水属性モンスターの攻撃力・守備力は200ポイントアップする。

また、お互いの手札・フィールド上の水属性モンスターのレベルは1つ下がる。

「ふん、今更レベルを下けたところで、俺のドラゴン・カタパルトキャノンの攻撃力を超えることができるモンスターなど」

「残念、いるんだなこれが」

「どういうことだ!?!」

「僕は、アトランティスの効果でレベルが4になった深海の怒りを召



喚！このモンスターの攻撃力は、自分の墓地の水・魚・海竜族の数だけ上がっていく！」

レイジ・オウ・ティーフシー  
深海の怒り

効果モンスター

星5 / 水属性 / 魚族 / 攻 0 / 守 0

このカードの攻撃力・守備力は、自分の墓地の

魚族・海竜族・水族モンスターの数×500ポイントアップする。

「だが、墓地にそんなモンスターなど……まさか！」

「その通りさ！万丈目、お前が発動した手札抹殺で墓地に送られた手札はペンギン・ナイトメア、シャクトパス、ウミノタウルス、スノーマンイーター、シャーク・サッカーの計五体。そして今アトランティスの戦士を墓地に送ったことで、水・魚・海竜族の数は六体になった！！」

圧倒的な威圧感を誇る海の王に、墓地から六つの青い光が降り注いでその力を上げていった。

深海の怒り 攻0 ↓ 3200 守0 ↓ 3200 ジョーズマン

攻2600 ↓ 2800 守1600 ↓ 1800

「ば、馬鹿な……だが、その攻撃を受けてもまだまだ俺のライフは残るぞ！」

「ふっ、それはどうかな？」

「何い!？」

「見てればわかるさ！マジックカード発動、受け継がれる力！この効果で僕はジョーズマンを墓地に送って、深海の怒りの攻撃力を上げる！」

闇の鎖を振り払って青い光になったジョーズマンの魂(?)が、深海の怒りをさらに包み込む。

受け継がれる力

通常魔法

自分フィールド上のモンスター1体を墓地に送る。

自分フィールド上のモンスター1体を選択する。

選択したモンスター1体の攻撃力は、

発動ターンのエンドフェイズまで墓地に送った  
モンスターカードの攻撃力分アップする。

深海の怒り 攻3200↓5800

「深海の怒りでVWXYZードラゴン・カタパルトキャノンを攻撃！  
アビス・ライジング!!」

『いや、どこのパック名だよ……………いや、この世界にはないみたいだ  
けど』

深海の怒り 攻5800↓VWXYZードラゴン・カタパルトキャ  
ノン 攻3000（破壊）

万丈目 LP4000↓1200

「ふん、やはり俺のライフはまだ」

「ここでトラップ、リビングデッドの呼び声発動……………蘇生させる  
のはジョーズマン、って言いたいところだけど、デメリット効果があ  
るからね。戻って来い、シャクトパス！」

シャクトパス

効果モンスター

星4／水属性／魚族／攻1600／守 800

このカードが相手モンスターとの戦闘によって破壊され墓地へ送  
られた時、

このカードを装備カード扱いとしてその相手モンスターに装備で  
きる。

この効果によってこのカードを装備したモンスターは

攻撃力が0になり、表示形式を変更できない。

シャクトパス 攻1600

「そ、そんな馬鹿な、この俺がレッド生なんか……………」

「レッドだからって舐めてると、痛い目に合うぜってことさ。シャク  
トパスで攻撃、コンバット・イート！」

シャクトパス 攻1600↓万丈目（直接攻撃）

万丈目 LP1200↓0

「勝った……………」

『だな。ところで最後のリビングデッド、あれでシャクトパスを呼ん

だのはもしかして……………」

「ん、まあね。あんまりレッドレッド言うもんだから、赤い子で決めてやろうかと思っただけ。あ、そうだ一言だけ。万丈目！」

「……………なんだー！」

僕に負けたことがよっぽど悔しいらしい声色の万丈目に、軽く笑いかける。

「楽しかったよ、とつても。またデュエルして欲しいな」

「……………フン！」

『このころはプライド高かったからな。そういやあ、もともとアイツ十代とデュエルするんじゃないのか?』

「あ、そういえばそんなこと言ってたような……………おーい、十代は!? あ、もう行っちゃった」

「えー!?俺、実技試験だけまだ誰ともやってねえぞ!」

「ど、どうしよう!?!このままじゃアニキが赤点になっちゃうツス！」

『ど、とりあえず誰か先生呼んで事情説明して来い!!』

「あ、じゃあ僕がとりあえず行ってくるよ!ほら、十代も急いでデツキもってー!」

「おうー!」

とまあ、せっかく勝ったって休む暇すら貰えなかったけど。こういうのも悪くない、なんて思う今日この頃。

## ターン6 闇のゲーム、チェスデーモンの罠！

「…………でも、最近はついに聞こえるだけじゃなくて見えるようになってるんだよな。たとえば翔、お前の後ろにはハネクリボアの精霊が！」

「えっ……………なんだアニキ、脅かさないでくださいよー」

「ホントなの、ユーノ？」

『ああ、いるな。ちなみにシャーク・サッカーはお前の右肩のあたりを泳ぎ回ってるぞ』

そう言われて、右肩の方をじーっと注意して見つめてみる。うん、やっぱり何も見えないけどなあ。ちなみに今僕ら……………僕と十代、翔に隼人に（さん付けはいらんだそうだ）ユーノがやってるのは、怖い話大会。でたために積んだカードから順番に一枚ずつカードを引いていき、そのモンスターのレベルに合った怖い話をしていく、というものだ。そして今終わったのは、十代の引いたキラースネーク……………つまりレベル1の話。ぶっちゃけ怖くない。

「さてと、それじゃあ次は僕が「何をやってるのかニヤ〜？」うわっ!」「びっくりさせんなよ、先生〜」

「ほ、本気で驚いたツス……………」

今どこからともなく現れたのが、我らレッド寮の寮長、大徳寺先生。担当学科は錬金術。なにかおかしいのは多分気のせい。

『気のせい気のせい、よくあることだし』

やっぱり気のせいらしい。

「それで、どうしたんですか先生？」

一番早く立ち直ったのが隼人。さすがに寮生活が長いと、こんなことも慣れっこなんだろうか。

「いやー、ふと気になってニヤ。私も混ぜて欲しいのニヤ」

そう言って、カードを一枚引く先生。あ、僕の話……………って、F・G・D!?レベル12なんて、どんだけおいしいとこ持ってくるのこの先生!?

「ふむ……………」

「んで、ホントに行っちゃうんだもんねーこの人たち」

『お前だつてえらいノリノリで懐中電灯とか準備してたじゃねえか』

「ユーノだつてどっから知らないけど備品のリュックサックまで持ち出してきて」

「まあまあ二人とも、ちよつと落ち着こうぜ」

「なんかもう、この二人には僕らに見えないものが見えることをなんとも思わなくなってきた自分が怖いッス……………」

「慣れつて恐ろしいんだな〜」

次の日。昨日の『そんな廃寮があるとなつちやあ、もう行つてみるしかあるまい』つて感じのノリを一日中維持していた僕らは、あれこれ道具を持ち出しての肝試しに向かう最中なのだ。

「お、見えてきたぞ」

そして、今僕らの前に姿を見せたのが、噂の『闇のゲームやつてたら生徒消えちやつた☆しようがないから閉めちやうね☆』な寮。

『……………まあ、なんだ。うん、何も言わないでおいてやる』

ちよつとふざけすぎたか。と、そんな気まずい感じを打ち破るかのように、どこかピリピリした声が出た。

「あなた達、ここで何をやっているの!?!」

「ひい、出た〜!!」

そう言つて騒がしく十代と僕の後ろに隠れる隼人と翔。まったく、少しは落ち着けばいいのに。だつてこの声、多分……………。

「よう、明日香。こんなところで何やつてんだ?」

「それはごつちのセリフよ。あなた達こそ、こんなところで何をしているの?」

「肝試し。えつと、明日香こそ一人で何やつてんの?」

何か静かだと思つたら、あのぺらぺらとよーしゃべる二人組がいな

いのね。夢想もないっぽいけど。

「……………ここは立ち入り禁止のはずよ。今なら先生には黙っておいてあげるから、早く寮に帰りなさい」

「ちよつと待てよ。そっちはまだ、俺らの質問に答えてないぜ。お前はここで何をしてたんだ？」

「……………」

はて、何か言いたくないことでもやってたんだらうか。

「明日香、別に言いたくないなら言わなくてもいいけど？」

「……………いえ、あなた達がここに来たってことは、ここがどういう所か知っているんでしよう？」

「えっと、俺らが聞いたのは確かアレだな。もともと特待生のための寮だったけど、闇のデュエルのせいだか何だかのせいで生徒が行方不明になって廃寮にされたとかいう」

「そこまで知っているのに、自分が行方不明になるとは思わなかったの？」

「そんなの、迷信だろ？俺は信じないぜ」

「僕はちよつと信じるけど……………でもやつぱり見て見たい、かなー」

「お、俺もなんだな」

「僕は別にわざわざ来なくても……………」

「まあいいわ。そこまで言うなら、勝手にしなさい。ただね、ここで行方不明になった生徒。その中の一人には、私の兄もいたのよ」

そう言って、こちらに背を向けて歩いていく明日香。

「……………十代、どーする？こりやなんかマジな話っぽいけど」

『いや、このまま行ってみようぜ』

「ああ、せつかくここまで来たんだ！いっぺんぐらい覗いてみないとな」

「待って欲しいんだな」

「ま、待ってくださいよー！」

『俺も俺も』

ぼつーんと一人残される。あらら、皆行っちゃったか……………しようがない。

「僕も行くから、ちよつと待って待って!!」

入口までたどり着いたみんなの後を、慌てて追いかける。

「それにしても、ずいぶん埃がたまってるな」

「クモの巣もいっぱい張ってるんだな」

「でも、僕らの寮よりずっと立派ツスね。いつそのこと、ここに引越  
しちやいますか?なんて。あはは」

「お、それいいな!やってみるか?」

「えー、冗談に決まってるツスよ!」

「なんだよ。それにしても、なんか変な絵だな。こいつが千年アイ  
テムってやつか?」

『ああ、千年アイテムの絵だな。もつとも、俺だって本物を見たわけ  
じゃねーけど』

「ふーん。あれ、この写真って……………10、JOIN?」

『……………出たなJOINさん。十代、そいつの読み方はテン、ジョイ  
ン、フブキ、だ』

「テンジョイン……………天上院……………もしかして、明日香の言ってた兄  
さんって!」

「キヤアー!!」

その時、いきなり悲鳴がした。しかもあれは!

「明日香の声だ!」

「こつちからツス!」

「でも、なんで外で別れたはずの明日香の声が奥の方から……………!」

「そんなことどうでもいいだろ!今は早く行かねえと!」

「まっただね!」

大急ぎで全員そろって走り出す。廊下をわたって、階段を下りて

……………昔は広間だったんだろう部屋に出たとき、ふと何かが落ちてい  
るのに気付いた。

「これは……………エトワール・サイバー!」

「明日香のカードか!ってことはやっぱり、明日香はこの向こうに!」

進む道がより明らかになって、外見よりも長く感じる廊下を駆け抜

けて（レッド寮じゃ味わえないような贅沢だね、あそこ狭いから……とゆーか廊下なんてももの屋外にしかないし）、そして。

「明日香！」

そこにいたのはなんだかよくわからない棺桶みたいなものに入れられた明日香。どっから持ってきたんだろう。それとも最初っからあんなもんが備品であるような寮なんだろうか。だとしたらそんなもんばかり買ってるバチが当たっても文句は言えないような気がする。

「来たなあ、遊城十代。それに、遊野清明」

「誰だ!？」

「我が名は、タイタン。千年アイテムの力を持つ、闇のデュエリストだあ」

「闇のデュエリストだ!？」

「その通り。その女を返して欲しくば、我にデュエルで勝利するにとだなあ」

「上等じゃないの、なら僕が」

「いや、ここは俺が行くぜ!」

『…………いや、ここは俺らに行かせてくれ』『ユーノ?』

「どうしてだよ!別に俺が行ったって」

「ちよつとした思い付きだけど、いっぺん試してみたいことがあるんでね。悪いな、十代』

「えー!？」

『ホレ行くぞ、清明。それと十代、今度ドローパーン奢ってやるから』

「わ、わかった!ごめん十代!」

「おいおい、だからってそりやないだろ!」

『だから悪いって』

「ほう、お前が最初に闇のゲームの餌食となるかあ、遊野清明」

「生憎だけど、負けるつもりはまるつきりないね!勝って明日香は連れ帰る!」

『さあて、上手くいくといいんだが……………!』

「デュエル!!」



「先攻は私だあ。私はまず、フィールド魔法の万魔殿―悪魔の巣窟―を発動するう」

そう宣言した瞬間、フィールドが不気味なコロシウムに変更される。

万魔殿―悪魔の巣窟―

フィールド魔法

「デーモン」という名のついたモンスターはスタンバイフェイズにライフを払わなくてよい。

戦闘以外で「デーモン」という名のついたモンスターカードが破壊されて墓地へ送られた時、

そのカードのレベル未満の「デーモン」という名のついたモンスターカードを

デッキから1枚選択して手札に加える事ができる。

「万魔殿………ということはデーモンデッキか！」

「いかにも、私のデッキは『デーモン』だあ。そしてこのカードはお前にとってさしずめ、地獄への一丁目といったところだなあ。フフフフ」

なかなか単体では強力だが、展開して戦線を維持するにはかなりのライフコストを覚悟しなくちゃいけないチェスデーモン。でもこのカードの効果のせいで、そのライフコストがなくなった、か。

「そして私は、インフェルノクインデーモンを攻撃表示で召喚するう」そしてタイタンの前に立ちふさがる、女王の名を持つチェスデーモンの一体。こいつやっぱ女性モンスターなんだから。

インフェルノクインデーモン

効果モンスター

星4／炎属性／悪魔族／攻 900／守1500

このカードのコントローラーは自分のスタンバイフェイズ毎に500ライフポイントを払う。

このカードが相手のコントロールするカードの効果の対象になり、その処理を行う時にサイコロを1回振る。

2・5が出た場合、その効果を無効にし破壊する。

このカードがフィールド上に存在する限り、スタンバイフェイズ毎に

「デーモン」という名のついたモンスターカード1体の攻撃力を  
エンドフェイズまで1000ポイントアップする。

インフェルノクインデーモン 攻900

「さらに手札から永続魔法、フィールドバリアを発動するう。そして  
カードを一枚セット。これで私は、ターンエンドだあ」

フィールドバリア

永続魔法

このカードがフィールド上に存在する限り、

お互いにフィールド魔法カードを破壊できず、

フィールド魔法カードの発動もできない。

「フィールドバリア」は、自分フィールド上に1枚しか表側表示で存在  
できない。

「僕のターン、ドロー！」

うーん、フィールドバリアが痛いなあ……：手札のアトランティス  
の戦士からアトランティス引っ張ってきて張り替えてやろうと思っ  
たのに、それもできない。ならー！

「おっと、待ってくれ。この瞬間、インフェルノクインデーモンの効果  
発動だあ。エンドフェイズまで自分のデーモン一体の攻撃力を10  
00ポイントアップするう。私はこの効果で、インフェルノクイン  
デーモンを選択だあ」

インフェルノクインデーモン 攻900↓1900

「それがどうした、このまま出す！アトランティスの戦士を通常召喚  
！」

アトランティスの戦士

効果モンスター

星4／水属性／水族／攻1900／守1200

このカードを手札から墓地へ捨てて発動できる。

デッキから「伝説の都 アトランティス」1枚を手札に加える。

アトランティスの戦士 攻1900

「アトランティスの戦士で、インフェルノクインデーモンを攻撃！」  
『……………ま、居座られるよりはマシだわな。自爆特攻って俺あんま好きじゃないけど』

僕だって嫌いです。

アトランティスの戦士 攻1900（破壊）↓インフェルノクインデーモン 攻1900（破壊）

「戦闘破壊なら万魔殿の効果も発動しないから、カードを二枚セットしてターンエンド」

ブラフにも一枚伏せておこうっと。

「ならばエンドフェイズにチェーンだあ、トラップカード、リビングデッドの呼び声！」

せつかく倒したインフェルノクインデーモンが、再び甦ってくる。  
リビングデッドの呼び声

永続罫

自分の墓地のモンスター1体を選択し、表側攻撃表示で特殊召喚する。

このカードがフィールド上から離れた時、そのモンスターを破壊する。

そのモンスターが破壊された時、このカードを破壊する。

インフェルノクインデーモン

省略

タイタン 手札：2 モンスター：インフェルノクインデーモン

（攻・リ） 魔法・罫：フィールドバリア、リビングデッドの呼び声（イ）

場：万魔殿―悪魔の巣窟―

清明 手札：3 モンスター：なし 魔法・罫：2

場：万魔殿―悪魔の巣窟―

「まあいい、ドロー！私には、まずインフェルノクインデーモンの効果で自身を選択。さらに、ジェノサイドキングデーモンを召喚するう」  
次に現れたデーモンはいかにもといった恰好をした、キングの名を持つチェスデーモン。

ジェノサイドキングデーモン

効果モンスター

星4／闇属性／悪魔族／攻2000／守1500

自分フィールド上に「デーモン」という名のついた

モンスターカードが存在しなければこのカードは召喚・反転召喚でき  
ない。

このカードのコントローラーは自分のスタンバイフェイズ毎に8  
00ライフポイントを払う。

このカードが相手のコントロールするカードの効果の対象になり、  
その処理を行う時にサイコロを1回振る。

2・5が出た場合、その効果を無効にし破壊する。

このカードが戦闘で破壊した効果モンスターの効果は無効化され  
る。

インフェルノクインデーモン 攻900↓1900

ジェノサイドキングデーモン 攻2000

「行け、私のデーモン達よ！まずはジェノサイドキングデーモンでダ  
イレクトアタック！炸裂！五臓六腑!!」

「くっ……………！こっちもトラップカード、リビングデッドの呼び声  
!!」

『なんで今出しちゃうかなーこの馬鹿は』

甦ったアトランティスの戦士が、ジェノサイドキングデーモンが体  
から大量に発射した虫の群れに対して防御の構えをとる。

「……………ゴメン、アトランティスの戦士」

そう言うとアトランティスの戦士は驚いたことにこっちをちらり  
と振り返り、気にしなくてもいい、と言いたげにうなづいた。あれ、ソ  
リットビジョンのはずなのに……………。

アトランティスの戦士 攻1900

「構わん、このまま攻撃を続行だあ。ゆけ、ジェノサイドキングデーモ  
ン！」

ジェノサイドキングデーモン 攻2000↓アトランティスの戦

士 攻1900（破壊）

清明 LP4000↓3900

「うわあああああつ!!」

「な、なんだよ翔いきなり……………って清明、お前!!」

「え、何!?どつたの二人とも!」

「清明ー、お前、何にも感じないのかー?」

「いや、だから何が?」

『俺からは左手に見える。肘のあたりな』

「左手の肘……………なんじゃこりゃー!!」

「ふふふ、やつと気が付いたかあ。最初に言っただろう、これは闇のゲームだと」

僕の左手、その肘のあたり。ない、体がない!いい、一体どこ行った!?やだよ肘から先が宙ぶらりんとか気持ち悪いよ!

「闇の、ゲーム?」

その通りだあ、と言い、懐から目のマークがついた金色のペンダントを引っ張り出す。あれ、あの形どつかで見たことあるような?

「この千年パズルの力により、闇のゲームは行われるう。そして闇のゲームにおいてライフポイントは命と同じもの、ライフが減るたびに少しずつ体が消えてゆき、0になった時消滅するのだあ!」

「なんだって!」

「じゃあ、今清明君の右手が消えてるのは、その闇のゲームのせいツスカ!」

「ああ、そうなんだろうな」

「翔も隼人も、何言ってるんだ?消えかかっているのは左膝のあたりだろ?」

「「え?」」

なんか後ろが妙なことを言ってる。だって、今消えているのはどう見ても左肘なのに。一体どういうことだろう?

「それでは、バトルを続けるう。ゆけ、インフェルノクインデーモン!」

「くっ……………!!」

この攻撃は、防げない!!

インフェルノクインデーモン 攻1900↓清明(直接攻撃)

清明 LP3900↓2000

『おー、さすがに半分持つてかれるとだいぶ消えてんなー』

「え、嘘……………気持ち悪いなコレ」

もう、胴体のあたりがだいぶロボロボ。肘から先と膝から下、それに首から上はあらかた残ってるからまだカードは持ってるんだけどさあ。

「ほう、ずいぶんと落ち着いているなあ遊野清明あ。恐怖のあまり感覚がマヒしたかあ？私はこれで、ターンエンドだあ」

インフェルノクインデーモン 攻1900↓900

「いや、そういうわけじゃないんだけどね」

実際、僕は別に慌てているわけじゃない。まあ痛みとかが一切ないから実感がわかないのもあるけど、何しろユーノがまだまだ余裕そうだからね。こいつがどうってことないって思ってるなら、実際それはいしたことはない。それが、ここしばらくの間こいつと一緒にいて感じたこと。こう、無条件で安心できるというか、なんかそんなオーラでも出してるんだろうか。だから……………

「僕はまだまだ、やってられるさ！ドロー！」

「もちろん、このターンにもインフェルノクインデーモンの効果を発動するう。対象は同じくインフェルノクインデーモンだあ」

インフェルノクインデーモン 攻900↓1900

攻撃力1900と2000、か。この手札じゃあまだ越えられない……………なら、守りを固めるまでさ！

「ハンマー・シャークを守備表示で通常召喚して、その効果を発動！このカードのレベルを一つ下げ、手札のレベル3水属性、ハリマンボウを守備表示で特殊召喚！さらに、ハリマンボウの召喚にチェーン！魚族の召喚成功時にシャーク・サッカーを守備表示で特殊召喚！」

一気にフィールドに出そろった、三体の魚モンスター達。

『水差して悪いが、シャーク・サッカーは別にチェーン作る効果じゃねえぞ』

ハンマー・シャーク

効果モンスター

星4／水属性／魚族／攻1700／守1500

1ターンに1度、自分のメインフェイズ時に発動できる。

このカードのレベルを1つ下げ、

手札から水属性・レベル3以下のモンスター1体を特殊召喚する。

ハリマンボウ

効果モンスター

星3／水属性／魚族／攻1500／守1000

このカードが墓地へ送られた時、

相手フィールド上に表側表示で存在するモンスター1体を選択して発動する。

選択した相手モンスターの攻撃力は500ポイントダウンする。

シャーク・サッカー

効果モンスター

星3／水属性／魚族／攻2000／守1000

自分フィールド上に魚族・海竜族・水族モンスターが召喚・特殊召喚された時、

このカードを手札から特殊召喚する事ができる。

このカードはシンクロ素材とする事はできない。

ハンマー・シャーク 守1500 ☆4↓3

ハリマンボウ 守1000

シャーク・サッカー 守1000

「ちい、小賢しい真似を」

「こつちだつて命懸かつてんの！カードを一枚セットしてターンエンド！」

インフェルノクインデーモン 攻1900↓900

タイタン 手札：2 モンスター：インフェルノクインデーモン

(攻・リ)、ジェノサイドキングデーモン(攻) 魔法・罫：フィールド

バリア、リビングデッドの呼び声(イ) 場：万魔殿―悪魔の巣窟―

清明 手札：0 モンスター：ハンマー・シャーク(守)、ハリマン

ボウ(守)、シャーク・サッカー(守) 魔法・罫：2

場：万魔殿―悪魔の巣窟―

「私のターン。インフェルノクインデーモンの効果で自身を強化して、シャドウナイトデーモンを召喚！」

そして現れる3体目の、騎士の名を持ったチェスデーモン。

シャドウナイトデーモン

効果モンスター

星4／風属性／悪魔族／攻2000／守1600

このカードのコントローラーは自分のスタンバイフェイズ毎に900ライフポイントを払う。

このカードが相手のコントロールするカードの効果の対象になり、その処理を行う時にサイコロを1回振る。

3が出た場合、その効果を無効にし破壊する。

このカードが相手プレイヤーに与えるダメージは半分になる。

インフェルノクインデーモン 攻900↓1900

シャドウナイトデーモン 攻2000

「そして今フィールド上には攻撃力の同じモンスターが二体いるう。マジックカード、クロス・アタックを発動う!!」

クロス・アタック

通常魔法

自分フィールド上に表側攻撃表示で存在する、

同じ攻撃力を持つモンスター2体を選択して発動する。

このターン、選択したモンスター1体は相手プレイヤーに直接攻撃する事ができる。

もう1体のモンスターは攻撃する事ができない。

「これで終わりだ、遊野清明あ！ジエノサイドキングデーモンでダイレクトアタックう！炸裂！五臓六腑!!」

「マズイ、この攻撃が通ったら清明のライフが0になるんだな！」

「清明ー!!」

『いまだ、やっちまえ!』

「当然！トラップ発動、ポセイドン・ウエーブ！」

ポセイドン・ウエーブ

通常罫



相手モンスターの攻撃宣言時に発動する事ができる。  
相手モンスター1体の攻撃を無効にする。

自分フィールド上に魚族・海竜族・水族モンスターが表側表示で存在する場合、

その数×800ポイントダメージを相手ライフに与える。

「ならばここで、ジエノサイドキングデーモンの特殊能力だあ！カード効果の対象になったときにサイコロを振り、2か5が出れば無効にする！」

「ええっ!？」

『だー！忘れてたーっ!!ってあれ？あのお手製ルーレットじゃないのか?』

サイコロの数值は………3!た、助かった。

『あら？イカサマが入ってない?』

「むう、あのシャーク・サツカーさえいなければそのトラップを計算に入れてもフィールドをがら空きにできたんだがあ」

タイタン LP4000↓1600

「だが、まだインフェルノクインデーモンの攻撃はできる！ゆけ、インフェルノクインデーモン！ハンマー・シャークを攻撃だあ！」

インフェルノクインデーモン 攻1900↓ハンマー・シャーク

守1500（破壊）

「私はこれで、ターンエンドだあ。なかなかしぶといな、遊野清明あ」

インフェルノクインデーモン 攻1900↓900

「まったく、なーんでライフで負けてるのにそんな偉そうなのか、ね………!」

『ボードで勝ってるからだろ』

「う、反論できない………ドローー!」

「インフェルノクインデーモンをお、パワーアップさせるう」

インフェルノクインデーモン 攻900↓1900

「なら、リバースカードオープン！マジックカード、スター・ブラスト！ライフを1000払って、レベルが2下がったこいつを通常召喚だ！来てくれ、ジョーズマン！」

咆哮と共に仁王立ちする、むしろこつちがデーモン的一种っぽい人間のモンスター。相変わらず頼もしい攻撃力だね。

『パワー馬鹿は嫌いじゃないよな』

「ジョーズマンの効果により、攻撃力が600ポイントアップ！」

スター・ブラスト

通常魔法

500の倍数のライフポイントを払って発動できる。

自分の手札または自分フィールド上に表側表示で存在するモンスター1体を選び、

そのモンスターのレベルをエンドフェイズ時まで、

払ったライフポイント500ポイントにつき1つ下げる。

ジョーズマン

効果モンスター

星6 / 水属性 / 獣戦士族 / 攻2600 / 守1600

このカードは特殊召喚できない。

このカードをアドバンス召喚する場合、

リリースするモンスターは水属性モンスターでなければならない。

このカードの攻撃力は、このカード以外の自分フィールド上に表側表示で存在する

水属性モンスター1体につき300ポイントアップする。

清明 LP2000 ↓ 1000

ジョーズマン 攻2600 ↓ 3200

「もちろん攻撃！ジョーズマンでインフェルノクインデーモンを攻撃、シャーク・ストリーム！」

ジョーズマン 攻3200 ↓ インフェルノクインデーモン 攻1

900 (破壊)

タイタン LP1600 ↓ 300

「よしー！」

「やった、タイタンも右手が消えていくんだな」

「え、何言ってるんですか？消えてるのは左足でしょ？」

「ええ？」

………やっぱりおかしい。ちなみに僕からは、右足が消えてるよ  
うにしか見えない。よし、ちよーつと揺さぶってみるか。

「おーい、タイタン！お前、本当に闇のデュエリストなのかよ！」

「もちろん、私はこの千年アイテムの一つ、七つある千年パズルの持ち  
主だあ」

「七つ？千年パズルが？」

「何かおかしなところでもあったかあ？」

「そういうことか！やいタイタン、お前実は闇のデュエルなんてイン  
チキだろ！」

あー！今度は十代にセリフ盗られた！まだ僕がデュエルしてるの  
根に持ってたんだろうか。まあ十代に限ってそんなこともないと思っ  
たいけど。

「何い!？」

「え、どういふことツスカアニキ？」

「千年アイテムっていうのは別に千年パズルが七つある訳じゃなく  
て、そのほかにも千年ロッドとか、七種類のものがあるんだな」

『あれ、隼人意外と賢い』

「でも、タイタンはそれを知らなかった。つまり」

「この闇のゲームは、インチキだ!!」

『あ、ハモった』

「くっ………う、うおおおおおおお!!」

僕と十代が同時に言った瞬間。ライフポイントがごっそり削られ  
たせいで自棄にでもなったのか、なんかいきなりタイタンが叫びだし  
た。それと同時に床が巨大な目の形に光り、どこからともなく黒い霧  
が出てきてフィールド全体を包み込んでいく。

「おいタイタン、これ一体何の真似!？」

今度は何を仕掛けるつもりかと聞いてみるも、帰ってきたのはうめ  
き声のみ。あれ、これもしかして本物?………まさかね。そ、そんな  
手の込んだことしたってもうタネも仕掛けもあることはわかってる  
んだから………ね?

『下からくるぞ気をつけろっ!』

「下?つてなにこれ!？」

全く気が付かないうちに、なんだかよくわからないもぞもぞ動く黒い生き物みたいなのに取り込まれていた。え、やだこれ怖い。わ、足に引っ付いてきた。

『よし、ここまででは最初の狙いばつちりだ……後は頼んだぞー!』  
「こんな誰得プレイが狙いとかなどんな趣味してんのユー……アレ?」

叫び返してからもう一度足元を見ると、へばりついていた黒いのが2〜3匹まとめて吹き飛ばされるところだった。そしてそれをやってくれたのは。

「シャーク・サッカー………」

十代もユーノも見えるといい、それでも僕には見えなかったカードの精霊。でも、なんで今ここで見えるようになったんだろう?」

『はつきりしたことはなんとも言えんけど、多分この空間は擬似的に闇のゲームを再現しようとして行方不明になったアホの先輩達が作ったものなんだろ。闇のゲームにしようとした以上、精霊が見えやすい環境になったって別にそこまでおかしくはあるまい』

「いや、そのりくつはおかしい……とも言ってらんないか、実際見えるようになったし。ありがとね、シャーク・サッカー」

お礼を言うと、嬉しそうにすり寄ってくるシャーク・サッカー。なにこれかわいい。

「うおおおおおおおおお!!」

「タイタン!？」

『あ、やべ。忘れてた』

「いやいやいや!僕も忘れてたけど」

そうこういつてる間にタイタンに取り付いていた黒いモノがどんどん多くなり、そして霧のようになって体の中に入っていく。もう、今度は何が起きるってのさ!

「……………か?」

「え?」

「ターン……エンド、か?」

「う、うん。ジョーズマンのレベルが元に戻って、ターンエンド」

なんだ、別にどうもなっていない………よね？別に何も変なところないよね？だよねきつと気のせいだよね？

タイタン 手札：2 モンスター：ジェノサイドキングデーモン（攻）、シャドウナイトデーモン（攻） 魔法・罠：フィールドバリア  
場：万魔殿―悪魔の巣窟―

清明 手札：0 モンスター：ハリマンボウ（守）、シャーク・サツカー（守）、ジョーズマン（攻） 魔法・罠：0

場：万魔殿―悪魔の巣窟―

「私のターン、ドロ………私は、装備魔法墮落を発動！その目障りなジョーズマンのコントロールを得るう!!」

「ジョーズマン！」

目の前でいきなり苦しみだしたジョーズマンが抵抗むなく一度地に倒れ、ゆっくりとなにかに操られるような動きでタイタンのフィールドのほうに立ちあがる。

墮落

装備魔法

自分フィールド上に「デーモン」という名のついたカードが存在しなければ

このカードを破壊する。

このカードを装備した相手モンスターのコントロールを得る。

相手のスタンバイフェイズ毎に、自分は800ポイントダメージを受ける。

「そんな！」

「さらあに！私はこのジョーズマンとシャドウナイトデーモンをリリースして、アドバンス召喚を行う！」

『リリース二体!?迅雷の魔王じゃないだど!?』

「いでよ最強のチェスターモン、プリズンクインデーモン!!」

二体のモンスターをリリースして召喚されたのは、両手足が鎖につながれた格好の女性型（多分ね）デーモン。

プリズンクインデーモン

効果モンスター

星8／闇属性／悪魔族／攻2600／守1700

このカードのコントローラーは自分のスタンバイフェイズ毎に

1000ライフポイントを払う。

フィールド上に「万魔殿―悪魔の巣窟―」が存在し、このカードが墓地に存在する場合、

自分のスタンバイフェイズ毎にフィールド上に存在するレベル4以下の悪魔族モンスター

1体の攻撃力はエンドフェイズ時まで1000ポイントアップする。

プリズンクインデーモン 攻2600

「まずはジェノサイドキングデーモンでハリマンボウに攻撃い！炸裂！五臓六腑!!」

ジェノサイドキングデーモン 攻2000↓ハリマンボウ 守100（破壊）

「でも、ハリマンボウの効果で…………アレ？」

『いや、それは無理だ!』

「残念だったなあ。ジェノサイドキングデーモンが戦闘で破壊したモンスターの効果は、無効となるう!」

「なんだって!?!」

「そのまま、プリズンクインデーモンでシャーク・サッカーを攻撃い!」

「シャーク・サッカー!!」

プリズンクインデーモン 攻2600↓シャーク・サッカーシャーク・サッカー 守1000（破壊）

「私はこれでターンエンドだあ。さあ絶望しろ、遊野清明!」

『ちつ、思ったより苦戦してんな…………』

「悪かったね、まだまだで!僕のターン、ドロ!」

くつ、確かにこの状況はキツイ。攻撃力2000越えのモンスターが二体で、そのうち一体は破壊相手の効果を無効にできるとききたもんだ。とりあえず、今引いたカードは?」

『ほう、こりやなかなかきついギャンブルだな。構わねえさ、どうせ負けるなら最後まであがいてやれ!』

「わかっただらいい!モンスターをセット、ターンエンドだ!」

タイタン 手札：1 モンスター：ジエノサイドキンググデーモン  
(攻)、プリズンクインデーモン (攻) 魔法・罠：フィールドバリア

場：万魔殿―悪魔の巣窟―

清明 手札：0 モンスター：1 (セット) 魔法・罠：0

場：万魔殿―悪魔の巣窟―

「もはや守りを固めることしかできないかあ!私のターン、ドロ―!」  
「なんとでも言えっ!こいつが僕の最善手だよ!」

さあ、ここでどっちが攻撃してくるかですべてが決まる!もしあのモンスターから攻撃してきたりもう一体デーモンを展開してきたらこっちの負けだけど、そうでなければまだいける!

「もしそのモンスターが何かの効果持ちならジエノサイドキンググデーモンで攻撃すればいいがあ、その場合そのモンスターが守備の高い壁だった時にこちらが反射ダメージを受ける……………決めたぞお!プリズンクインデーモンでそのモンスターを攻撃い!!」

『いよっしゃあつ!首の皮一枚で持ちこたえたぜ!』

「セットモンスターはグリズリーマザー!効果により、デッキから深海の……………」

『いや、よせ!』

「な、なんでさ!ここで深海の怒りを出せば攻撃力2000、ジエノサイドキンググデーモンと並ぶことができるのに!」

『あのタイタンの、一ターン目からずつと握りっぱなしの手札……………あのカードを俺は、デスルークデーモンだと思う。効果を簡単に言うと、ジエノサイドキンググデーモンが破壊された時に手札から捨てると、そのジエノサイドキンググデーモンを復活させられる専用蘇生カードだ。もしそうだった場合、どうなるか考えてみる!』

デスルークデーモン

効果モンスター

星3 / 光属性 / 悪魔族 / 攻1100 / 守1800

このカードのコントローラーは自分のスタンバイフェイズ毎に500ライフポイントを払う。

このカードが相手のコントロールするカードの効果の対象になり、その処理を行う時にサイコロを1回振る。

3が出た場合、その効果を無効にし破壊する。

自分フィールド上の「ジェノサイドキングデーモン」が破壊され墓地に送られた時、

このカードを手札から墓地に送る事で、その「ジェノサイドキングデーモン」1体を特殊召喚する。

「えっと………深海の怒りを出してもジェノサイドキングデーモンが攻撃してきて相打ちになって」

『そのまま復活されてダイレクトアタック、だろうな』

「じゃ、じゃあ何を出せば!」

『……………死に出し、だな』

「それしかない、か!デッキからヒゲアンコウを特殊召喚!」

ヒゲアンコウ

効果モンスター

星4 / 水属性 / 魚族 / 攻1500 / 守1600

水属性モンスターを生け贄召喚する場合、

このモンスター1体で2体分の生け贄とする事ができる。

ヒゲアンコウ 攻1500

「悪あがきをお!炸裂!五臓六腑!!」

ジェノサイドキングデーモン 攻2000 ↓ヒゲアンコウ 攻1500 (破壊)

清明 LP1000 ↓500

「ごめんグリズリーマザー、それにヒゲアンコウ……………」

やっぱり死に出しつてのは好きじゃないな。ソリットビジョンだと特に。ユーノも同じことを考えているらしく、複雑な顔をしていた。

『いいか、死に出しまでしてこのターンを生き延びたんだ。下手なものの引いて負けたりすんじゃないやねえぞ』



「ああ、もちろんさ」

「ちい、やはりジエノサイドキングデーモンから攻撃していればあ  
……………ターンエンドだあ」

「ドローー！」

こ、このカードは！

『困ったときのなんとやら〜♪』

「マジックカード、貪欲な壺を発動！墓地のアトランティスの戦士、ハ  
ンマー・シャーク、ヒゲアンコウ、ジョーズマン、グリズリーマザー  
をデッキに戻して2枚ドロー！」

貪欲な壺

通常魔法（制限カード）

自分の墓地のモンスター5体を選択して発動できる。

選択したモンスター5体をデッキに加えてシャッフルする。

その後、デッキからカードを2枚ドローする。

「だが、今更何をドローしようともー」

『……………それはどうかな？』

「何い!？」

「マジックカード、サルベージを発動！墓地にいるハリマンボウ、  
シャーク・サッカーを手札に！そしてハリマンボウをそのまま通常召  
喚、そしてシャーク・サッカーを特殊召喚！」

サルベージ

通常魔法

自分の墓地の攻撃力1500以下の水属性モンスター2体を選択  
して手札に加える。

ハリマンボウ 攻1500

シャーク・サッカー 攻200

「そんな低攻撃力のモンスターを攻撃表示でだとお？ついにおかしく  
なったのかあ？」

「残念ながら、いたってこっちは正常だよ！マジックカード発動、ミニ  
マム・ガッツ!!この効果でハリマンボウをリリースして、プリズンク  
インデーモンの攻撃力をエンドフェイズまで0にする！それと、ハリ

マンボウの効果対象をプリズンクインデーモンに！」

「何い!？」

『まあ意味はないけどな』

ハリマンボウがプリズンクインデーモンに向かって突進して、そのまま爆発を起こす。残ったのは、衝撃で体がぼろぼろになったプリズンクインデーモンのみ………今日は本当にごめん、ハリマンボウ。何回も墓地に送っちゃって。

プリズンクインデーモン 攻2600↓0

「シャーク・サツカーでプリズンクインデーモンに攻撃！よろしく、シャーク・サツカー！」

シャーク・サツカー 攻200↓プリズンクインデーモン 攻0

(破壊)

タイタン LP300↓100

「く、だがまだ私のライフは100残っているう。次のターンでまだなにか仕掛けがあるとしても、フィールドにはジェノサイドキングデーモン、手札にはデスルークデーモンがいるう！つまり万一ジェノサイドキングデーモンの破壊に成功したとしても、私の勝ちが決まっているのだあ！」

「な、ホントにデスルークデーモンだったのか！でも残念だけど、次のターンは回ってこないよ！この瞬間ミニマム・ガッツのもう一つの効果により、プリズンクインデーモンの元々攻撃力、つまり2600のダメージを受けてもらうっ！」

ミニマム・ガッツ

通常魔法

自分フィールド上のモンスター1体をリリースし、

相手フィールド上に表側表示で存在するモンスター1体を選択して発動できる。

選択したモンスターの攻撃力はエンドフェイズ時まで0になる。

このターン、選択したモンスターが戦闘によって破壊され相手の墓地へ送られた時、

そのモンスターの元々の攻撃力分のダメージを相手ライフに与え

る。

「ば、馬鹿なあああああつ!!」

タイタン LP100→0

『はあ、今回もギリッギリだったな。先が思いやられるぜ』

「勝ったからいいじゃないの。あ、霧が晴れてきた」

『闇のゲームもどきもおしまい、つてわけだ。それじゃそろそろ「た、助けてくれええつ!!」……………なんだ?』

「タ、タイタン!」

叫び声の方を見ると、タイタンがさっきの黒いモノに呑みこまれかかっていた。

「えーい、ほら早くつかまって!」

……………ま、見捨てることなんてできないよね。必死になって引つ張り、どうにかこうにかタイタンも霧の中から引きずり出す。と、十代達が慌てて駆け寄ってきた。そうそう、忘れるところだった。

「おい、そいつタイタンじゃ」

「十代!」

「な、なんだよ?」

「僕もついに精霊が見えるようになったぞ!どーだ!」

「おお、やったな清明!」

タイタンそつちのけで盛り上がる僕ら相手に、複雑な表情で明日香の入った棺桶に向かう翔と隼人がいた。その隙にタイタンが「世話になった、すまない」とだけ書いた紙を置いてどこかに消えていたのは……………まあ、別にいいか。本来ここは立ち入り禁止の場所だから下手に先生に説明はできないし、考えようによつちやあタイタンのおかげで精霊が見えるようになれたんだし、大目に見ることにしよう。

『お前も、ほんとに甘い奴だなあ』

「ほつといてよ!」

別にいいじゃない、甘ちゃんだった!

ターン7 出動！はたらく機械たち！

その日も、これまでどりの朝がくると思っていました。ええ本当に。というかついさつきまで何事もなかったんです。フツーに寝ただけでした。

「このドアを今すぐ開けろ！おい、聞こえていないのか！今すぐここを開けるんだ！」

……………えらい威圧的な人にドア越しで怒鳴られるまでは、ね。

「な、なんだ……………？」

あ、十代が起きた。隼人はとりあえず様子見といった感じで二段ベッドの上からこつちをちらちら見てる、翔はこの大音量の中布団にくるまり頑張つて寝ようとしてる。

『……………来たか。変われ、俺が出る』

「なに、ユーノの知り合……………ムグツ、いんや別に。ただ、用件の想像はつくな」

『なんで？というかまだOK出してないのに』

「細かいこと気にすんなよ。ま、見てりやわかるさ」

「今すぐ開けないか！速やかに行動しない場合、この扉を爆破する！」

『ば、爆破あ!?!』

「わかったぜ、今開けるよ」

爆破の一言で眠気が吹き飛んだのか、ジャージ姿のまま扉を開ける十代。そこに立っていたのは、まあなんとというかこう簡潔にまとめる

「偉そうなこった」

『だよねえ』

すつごい偉そうな女の人だった。正直苦手なタイプです。

「お前の好みなんぞ別に聞いちやあいなんだけどな。んで、おたくら一体どちらさんで?」

『あれ、用件はわかかってるって今言ってなかったっけ?』

「わかってるさ。でもま、こういうのは聞いてやるのが礼儀ってもんだろ」

「私たちは、この学校の査問委員会の者だ。わかったら遊野清明、遊城十代の二名は今すぐ服を着替えて私たちについて来い」

「ちよつと待ってくれよ!?俺たちが一体何やったってんだ!」

『うん、いくらなんでも展開についてけないよ!ちよつとユーノ、体使うなら使うで何か言つてよ!』

「とぼけるな!お前たちがこの前、立ち入り禁止区域の廃寮に入ったことはもうわかってるんだ!ちゃんと証拠も出ているから、つまらない言い逃れは聞かないぞ」

『ね、ねえつてばユーノ……………?何とかするあてはあるんだよね?』

でなきやわざわざ交代なんてしないはずだし、ね?

「……………あいよ。とりあえず着替えるんだから、もうこれ閉めていい?」

そう言いながら、ドアを顎で軽く示すユーノ。え、何このドライな対応。

「いいだろう。五分だけ待ってやる」

「気が利かない、つっ—かノリが悪いなあ。そこは当然『三分間待ってやる』って言うところだろ?」

そう言うと、物凄い剣幕でこつちを睨んでから大きな音を立てて扉を閉めた。正直、今のは殴られてても文句言えないと思う。まあ、そうすると後で痛い思いするのは僕なんだけど……………。

「それでは我々査問委員会は、あの寮に入ったお前たち全員に退学処分を命じる—」

「ちよい待ち。確かに俺たちはあそこの寮に入ったけど、なんでまたそのせいで退学までされなきやいかんわけだ!」

「校則違反者が何を言うか!」

「朝っぱらから怒鳴り込んできやがって、少しは他人様の迷惑ってもんも考えろつっつてんだよ!」

「ま、まあまあ遊野君。一度落ち着いてくれないか」

『ほらユーノ、鮫島校長もああやって言ってるよ?というかこれ以上ペラペラ喋られると後々目えつけられんのは全部僕なんだから勘弁しやがれくださいお願いしますユーノ様』

「(おいユーノ、そろそろ止めとかないとヤバいんじゃないか?)」

『ねえ十代もそうやって言ってるよ?だからお願いします抑えてください』

「ちっ、言いくるめるまでは頑張ってみようと思ったのによ」

『待てよオイそんなこと考えてたのかよやだよ退学』

「わめくなやかーしー。それじゃあ……………お願いします、何でも(コイツが)言うこと聞きますから退学だけは勘弁してください!」

『あれ、今「コイツが」って言わなかった?てことはなに、言うこと聞くのは僕なわけ?』

「あーるっさいいるっさい。……………お願いします校長、クロノス先生!お慈悲を下さいっ!」

「ならば、私から一つ提案があるのーネ」

「と、言いますと?」

「それはでスーネ校長、ズバリ制裁デュエルですーノ!」

「せ、制裁デュエル?なんだそれ?」

「そう、よく聞きなさい遊城十代。アナタと丸藤翔の二人にはタツグを組んでもらい、学校の決めた相手と退学を賭けたタツグデュエルをして貰うのーネ!」

タツグデュエルか!面白そうだな!」

『……………僕は?』

「おう、十代と翔はそれでいいかもしれないが、俺はどしたらいいんだ?もしかしてアレか、俺にはおとがめなしなのか?」

「遊野君、できれば君にもタツグを組んでもらいたいところなのですが、なにぶん校則違反者がちやうど三人しかいないもので……………」

『あれ、校長の言ってることなんかおかしくない?隼人はもういない扱いなわけ?』

「ああ、ちーつとばかし妙だな。ま、とりあえずクロノスせんせと鮫島校長が結論出してくれるだろ」

その言葉どうり、あーだこーだと言いつけてやつと結論が出たらしい。その位呼び出す前に考えとけよ、と思っただのはナイショ。どうせ言っても不毛なだけだし。

「では決まりました。君には申し訳ないのですが、誰か本校の生徒の中から、ただし遊城十代君及び丸藤翔以外の人とペアを組んでもらってください。もちろん、その場合君が負けてもペアの人には影響ありません」

『……………何その果てしなくわけわからんルール』

「……………とまあ、こんな所かな」

ようやく先生たちから解放されて体もユーノから取り返して、購買で勝ったドローパンを食べながらどつかから今朝の話を聞きつけてきた明日香と三沢に、しよっ引かれてからどうなったのか心配で追いかけてきたらしい隼人、よくわからないなりに興味があったらしく寄ってきた夢想に対して愚痴っていたところ。ちなみにユーノは十代と翔にレツド寮でタッグの指導をするんだそうだ。

「ふーん。ちなみにそのペアの相手してもう決まったの？だつてさ」

「うんにゃ、まだ誰にも頼んですらいないよ」

「なら私が手伝ってあげようか？だつて」

「いえ、私のことを助けてくれたんだから、その借りは返させて頂戴」  
「ちよつと待て、そもそも俺もついていったんだから、当然俺がやるんだな」

「確かに俺は何のかわりもない。だがな、この三沢大地がそこで見捨てるような薄情者に見えるか？」

「……………ありがと、皆」

「というかそもそも、一緒に行った俺だけおとがめなしなんて目覚めが悪すぎるんだな。ちよつと校長先生のところ行って抗議してくる」  
「あ、待って隼人君！私もあの寮には入ったんだし、一緒に行かせてもらおうわ」

「ありがとうなんだな、明日香さん」

そう言うが早いが、止める間もなくすたすたと歩いていく二人。

「とりあえずあなたのペアは私たちに任せて、って言ってるよ」

「だな、清明。安心しろ、いかなる奴が相手でもこの俺の計算の前では無力、お前の勝ちが決まったようなものだ」

「骨の実力、もう一回魅せてあげる。………だつてさ」

持つべきものつて友達だよね。つくづくそう思う。

「じゃ、じゃあお願いします」

「準備はいいか、ユーノ？」

『おお、こっちはいつでもいいぜ。お前こそしくるなよ、十代』

「ああ、わかつてるぜ！翔もほら、そんなに緊張すんなよ。デュエルは楽しむもんだぜ？」

「は、はいー」

『まだまだ固いなあ。ま、おいおい直つてけばいいさね』

さて、一方こっちは俺ことユーノに十代、翔。やつぱり原作とは微妙にずれがあるらしく、なんと翔の方から足を引っ張りたくないから自分たちに稽古をつけて欲しいと言ってきた。んで、ならよかろうと俺が相手してやろうとして実体がないことをようやく思い出し、とりあえず指示だけ出して十代にカードを引いてもらうことにする。すまん、十代。こんな役ばつか押し付けて。

「デュエル！」

『先攻は俺らか』

「俺のターン、ドロワー！………で、俺はどうすればいい？」

『まずこいつを守備表示、それからこっちは伏せといて』

「わかつたぜ、俺は氷弾使いレイスを守備表示で召喚！カードを一枚セットしてターンエンドだ。落ち着いてやれよ、翔」

「は、はい………」

自分から言い出したこととはいえ今になって気が引けてきたのか、あまり乗り気じゃなさそうな翔。ま、こればかりはしゃーねえのかな。



氷弾使いレイス

チューナー（効果モンスター）

星2／水属性／海竜族／攻 800／守 800

このカードはレベル4以上のモンスターとの戦闘では破壊されない。  
い。

氷弾使いレイス 守800

「僕のターン、ドロー……………パトロイドを攻撃表示で召喚！そしてその効果で、そのセットされたカードを確認する！」

勢いよく飛び出してくる、デフォルメされたパトカー。頭の上の非常灯がぐるぐると回転すると、伏せておいたカードが表向きになった。

パトロイド

効果モンスター

星4／地属性／機械族／攻1200／守1200

相手フィールド上にセットされているカードを1枚めくり、確認した後元に戻す。

この効果は1ターンに1度だけ自分のメインフェイズに発動する事ができる。

パトロイド 攻1200

「こっちの伏せカードは攻撃反応のトラップ、ポセイドン・ウェーブだぜ」

「なら、速攻魔法サイクロンを発動！ポセイドン・ウェーブを破壊するッス！」

サイクロン

速攻魔法

フィールド上の魔法・罠カード1枚を選択して破壊する。

『……………ふむ』

「ん、どうしたんだユーノ？」

『いや、大したことじゃないさ』

そう、大したことじゃない。パトロイドの効果をきちんと使った、ただそれだけの事。でも、俺の記憶が正しけりやこの時翔はパトロイ

ドの効果を使わずに攻撃の無力化めがけて突っ込んできてたはずだ。やっぱり原作よりこつちの世界のほうが強いってことなんだろう。

「行け、パトロイド！氷弾使いレイスに攻撃、シグナル・アタック！」  
車輪で殴りかかろうとしたパトロイドだったが、レイスが慌てて地面にまきびしのように氷の弾をばらまいたおかげで途中で進むのを断念し、すぐごと翔のフィールド上に引き返していく。まったく、自分のカードの効果で手一杯になって、相手モンスターの効果を確認してなかったな？

「翔、残念だったな。氷弾使いレイスは、レベル4以上のモンスターとの戦闘では破壊されないのさ」

「そんな!？」

「だめだぜ、ちゃんと効果は確認しとかないと」

おお、なんか十代がいいこと言った。お前が言うなと返したいところだけど。

「アニキ、いいからお説教なんてしないでよ!」

「悪い、たしかに説教みたいだったな。やっぱり、デュエルは楽しもうぜ!」

「こつちこそごめん、せっかくアニキがアドバイスくれたのにあんな事言つちやつて……………カードをセットして、ターンエンド」

ユーノ&十代 手札：4 モンスター：氷弾使いレイス(守) 魔法・罠：0

翔 手札：3 モンスター：パトロイド(攻) 魔法・罠：1(伏せ)

「いや、気にするなつて。ドロ!」

『うくん、どうすつかない……………まあいいさ、全力でやつちやつてくれ』

「ああ、わかった。ハンマー・シャークを召喚して効果発動!レベルを一つ下げて、手札からオイスターマイスターを特殊召喚!」

ハンマー・シャーク

効果モンスター

星4 / 水属性 / 魚族 / 攻1700 / 守1500

1ターンに1度、自分のメインフェイズ時に発動できる。

このカードのレベルを1つ下げ、手札から水属性・レベル3以下のモンスター1体を特殊召喚する。

ハンマー・シャーク 攻1700 ☆4↓3

オイスターマイスター

効果モンスター

星3 / 水属性 / 魚族 / 攻1600 / 守 200

このカードが戦闘で破壊される以外の方法でフィールド上から墓地へ送られた時、

自分フィールド上に「オイスタートークン」（魚族・水・星1・攻 / 守0）1体を特殊召喚する。

オイスターマイスター 攻1600

「バトル！オイスターマイスターで、パトロイドを攻撃！オイスターショット！」

牡蠣の戦士がいいフォームで投げつけた牡蠣がフォークボールとなってパトロイドに飛んでいく。わざわざ変化球まで投げられるようになったとは、お主なかなかやりおるな。

「ト、トラップ発動！スーパーチャージ！」

牡蠣をまともに喰らってよれよれになったパトロイドが最後の力を振り絞ってサイレンを鳴らし、翔のデッキの上からカードを二枚はじき出した。

スーパーチャージ

通常罠

自分フィールド上に「ロイド」と名のついた機械族モンスターのみが存在する場合、相手モンスターの攻撃宣言時に発動する事ができる。

自分のデッキからカードを2枚ドローする。

『だが切れ味は受けてもらう………ってな』

「切れ味？」

『こつちの話』

オイスターマイスター 攻1600↓パトロイド 攻1200（破

壊)

翔 LP4000↓3600

「さらに、ハンマー・シャークでダイレクトアタックだ！」  
「うわあっ！」

ハンマー・シャーク 攻1700↓翔(直接攻撃)

翔 LP3600↓1900

「大丈夫か、翔!？」

「う、うん……………でも」

『でも?』

「でも、どうしたんだ?」

「やっぱり、無理なんだよ……………僕の弱さでアニキの足を引っ張らずにデュエルするなんて……………」

「翔、お前」

「気張れ、気張るんだな翔!」

「は、隼人君!？」

「あれ隼人、お前確か校舎でメシ食ってたんじゃないのか?」

「校長に、俺と明日香さんも制裁デュエルに参加できないか聞きに行った帰りなんだな」

「僕も来たよ」

「私も来てみたわよ」

「同じく、みたい」

「俺もいるぞ!」

『なんだ、帰ってきたんなら覗き見なんぞせずに素直に見にくりやいのこ』

「でも隼人君、気張れって言っても僕じゃあ」

「それじゃだめだ! いいか翔、このままじゃあお前は今の留年してレッド寮にいる俺以下ってことになるんだな! それに、お前は絶対に弱くなんかない、だからもつと自分と自分のデッキに自信を持つんだな!」

『いいこと言うなあ隼人。俺が出張るまでもなかったか?』

「いつも大声なんて出さない隼人君が僕のためにあんなに必死に

……うん、わかったよ！アニキ、それに多分そこにいるユーノ君、心配かけてごめん！僕はもう大丈夫ツス！」

「よく言っただぜ、翔！それでこそ俺の弟分だ！じゃあ、次はお前のターンだ！」

「うん！僕のターン、ドロー！ジェット・ロイドを守備表示で召喚するツス！」

続いてフィールドに現れたロイドは、パトロイドと同じくデフォルメされた赤い飛行機型のロイド。それにしても、ジェットか。なんか嫌な予感がするな。

ジェット・ロイド

効果モンスター

星4 / 風属性 / 機械族 / 攻1200 / 守1800

このカードが相手モンスターの攻撃対象に選択された時、

このカードのコントローラーは手札から罠カードを発動する事ができる。

ジェット・ロイド 守1800

「さらにカードを一枚セットして、ターンエンドツス」

ユーノ&十代 手札:手札:3 モンスター:氷弾使いレイス(守)、

ハンマー・シャーク(攻)、オイスターマイスター(攻) 魔法・罠:

0

翔 手札:4 モンスター:ジェット・ロイド(守) 魔法・罠:1

(伏せ)

「俺のターン、ドロー！さてユーノ、攻撃するか？」

『そーだな十代、ジェット・ロイドの効果は確かに怖いがんもん気にしてたらいつまでたっても攻撃なんてできねえからな！まあ、一応危険は減らしておくか。こいつをこいつ使って召喚してくれ』

「了解っ！俺は氷弾使いレイスをリリースして、氷帝メビウスを召喚！さらにその効果で、お前の場の伏せカードを破壊するぜ！」

『フリーズ・バースト！』

氷帝メビウス

効果モンスター

星6／水属性／水族／攻2400／守1000

このカードがアドバンス召喚に成功した時、

フィールド上の魔法・罫カードを2枚まで選択して破壊できる。

氷帝メビウス 攻2400

「ならこの瞬間、破壊されたワンダーガレージの効果を発動して手札にいるシャトルロイドを特殊召喚！」

メビウスのつららが貫いた伏せカードが巨大な工場になり、そのシャッターが開いてスペースシャトルのロイドが飛んできた。

『あっちゃー、やっちゃったか』

ワンダーガレージ

通常罫

セットされたこのカードが破壊され墓地へ送られた時、

手札からレベル4以下の「ロイド」と名のついた

機械族モンスター1体を特殊召喚する事ができる。

シャトルロイド

効果モンスター

星4／風属性／機械族／攻1000／守1200

このカードが攻撃対象に選択された時、このカードをゲームから除外する事ができる。

このカードは次の自分のスタンバイフェイズ時に自分フィールド上に特殊召喚される。

その時、相手ライフに1000ポイントダメージを与える。

シャトルロイド 守1200

『まあ、しょうがないか。ハンマー・シャークを守備表示にして、メビウスでジェットに攻撃な』

「わかった、ハンマー・シャークを守備表示にして氷帝メビウスでジェット・ロイドに攻撃！」

ハンマー・シャーク 攻1700↓守1500

氷帝メビウス 攻2400↓ジェット・ロイド 守1800（破壊

？）

「ここで僕は、ジェット・ロイドの効果を発動！手札からの必殺トラッ

プ、魔法の筒！」

『やっぱり、か。まあそんな予感はしてたぜ』

魔法の筒

通常罠

相手モンスターへの攻撃宣言時に発動できる。

攻撃モンスター1体の攻撃を無効にし、

そのモンスターの攻撃力分のダメージを相手ライフに与える。

ユーノ&十代 LP4000↓1600

『シャトルへの攻撃は遠慮しときたいな。これだけ伏せてターンエンドで』

「カードをセット、ターンエンド」

「僕のターン、ドロー！こ、このカードは……………」

『……………引いたか』

「え、ユーノ？もしかして今翔が引いたカードがわかんのか？」

『まあな、予想くらいはつく』

「一体何をドローしたんだ？なんかすげえ難しい顔してるけど」

『今はまだ、黙っていておいてやれ。今は、な』

「て、手札からスチームロイドを召喚！そのままオイスターマイスターに攻撃！」

お次に現れた機関車のロイドが、煙突から煙をまき散らしながらオイスターマイスターにタックルを仕掛ける。

スチームロイド

効果モンスター

星4/地属性/機械族/攻1800/守1800

このカードは相手モンスターに攻撃する場合、

ダメージステップの間攻撃力が500ポイントアップする。

このカードは相手モンスターに攻撃された場合、

ダメージステップの間攻撃力が500ポイントダウンする。

スチームロイド 攻1800↓2300

スチームロイド 攻2300↓オイスターマイスター 攻160

0 (破壊)

ユーノ&十代 LP1600↓900

「カードを一枚セットして、僕はターンエンドッス」

ユーノ&十代 手札：3 モンスター：氷帝メビウス（攻）、ハンマー・シャーク（守） 魔法・罫：1（伏せ）

翔 手札：1 モンスター：ジェット・ロイド（守）、シャトルロイド（守）、スチームロイド（攻） 魔法・罫：1（伏せ）

「俺のターン、ドロー！このままじゃ守りを固めててもジリ貧だ！メビウスでスチームロイドを攻撃！」

「リバースカード、二枚目のスーパーチャージを発動！カードを二枚ドローするッス！」

つららに貫かれたスチームロイドがさっきのパトロイドのように最後の力を振り絞り、煙突から噴き上げた蒸気で翔のカードを二枚はじき出す。

「でも戦闘は止まらないぜ！」

スチームロイド 攻1800↓1300

氷帝メビウス 攻2400↓スチームロイド 攻1300（破壊）

翔 1900↓800

「うっ、せっかくライフで勝ってたのに、一瞬で追い抜かれた……………」

「まあそんなもんさ。でも、だからデュエルってのは面白いのさ！俺はこれで、ターンエンド」

「僕のターン、ドロー！このままターンエンド」

ユーノ&十代 手札：4 モンスター：氷帝メビウス（攻）、ハン

マー・シャーク（守） 魔法・罫：1（伏せ）

翔 手札：4 モンスター：ジェット・ロイド（守）、シャトルロイ

ド（守） 魔法・罫：0

「俺のターン、ドロー……………どうする、清明？」

『こっちのライフも1000切ってるからな、あと一ターンだけ様子を見て、それでも安全策が見つからなかったら力押しで行けるかやってみようぜ』

「わかった。なら、俺らもここで、カードを一枚だけ伏せてターンエンドッ」



「僕のターン、ドロロー！……………ほ、僕は……………」

「いきなりどうしたんだよ、翔？お前、さつきからちよいちよいおかしいぞ？…具合でも悪いのか？」

「い、いや、平気ッスよアニキ」

「そうか？無理はすんなよ、翔」

『うん、良い対応。まあとりあえずデュエルが終わるまではそつとしておいてやれ、どうせ俺らがどうこう言っただけで何とかなるような話じゃねえし』

「わ、わかった」

「マジックカード死者蘇生を発動して、スチームロイドを特殊召喚！」

死者蘇生

通常魔法（制限カード）

自分または相手の墓地のモンスター1体を選択して発動できる。

選択したモンスターを自分フィールド上に特殊召喚する。

スチームロイド 攻1800

「さらに、僕はマジックカード……………マジックカード、融合を発動！手札のジャイロイドと、場のスチームロイドを融合！マイフェイバリット、スチームジャイロイドを召喚！」

融合

通常魔法

手札・自分フィールド上から、融合モンスターカードによって決められた

融合素材モンスターを墓地へ送り、その融合モンスター1体を

エクストラデッキから特殊召喚する。

ジャイロイド

効果モンスター

星3／風属性／機械族／攻1000／守1000

このカードは1ターンに1度だけ、戦闘によっては破壊されない。

（ダメージ計算は適用する）

スチームジャイロイド

融合モンスター

星6／地属性／機械族／攻2200／守1600

「ジャイロイド」＋「スチームロイド」

「行け、スチームジャイロイド！ハンマー・シャークを攻撃、ハリケーン・スモーク!!」

スチームジャイロイド 攻2200↓ハンマー・シャーク 守1500（破壊）

「クッ、あの攻撃力じゃあもう伏せておいたうちの一枚、好敵手の記憶はもう使えないな」

好敵手の記憶

通常罠

相手モンスターへの攻撃宣言時に発動できる。

自分は攻撃モンスターの攻撃力分のダメージを受け、そのモンスターをゲームから除外する。

次の相手ターンのエンドフェイズ時、

この効果で除外したモンスターを自分フィールド上に特殊召喚する。

「カードを一枚セットして、ターンを終了するッス」

ユーノ&十代 手札：4 モンスター：氷帝メビウス（攻） 魔法・罠：2（伏せ）

翔 手札：1 モンスター：ジェット・ロイド（守）、シャトルロイド（守）、スチームジャイロイド（攻） 魔法・罠：1

「俺のターン、ドロー！いくぜユーノ！」

『ああ、もうやっちゃまうぞ十代!!』

「フィールド魔法、ウォーターワールドを発動！そしてバトルだ、氷帝メビウスでスチームジャイロイドを攻撃！」

ウォーターワールド

フィールド魔法

フィールド上に表側表示で存在する水属性モンスターの攻撃力は500ポイントアップし、

守備力は400ポイントダウンする。

氷帝メビウス 攻2400↓2900 守1000↓600

「ならトラップ発動！シフトチェンジ!!」

シフトチェンジ

通常罠

自分フィールド上に存在するモンスター1体が相手の魔法・罠カードの効果の対象になった時、または相手モンスターの攻撃対象になった時に発動する事ができる。

その対象を自分フィールド上に存在する正しい対象となる他のモンスター1体に移し替える。

「この効果で攻撃対象をシャトルロイドに変更、さらにシャトルロイドの効果で自身をゲームから除外する!」

「攻撃対象になったとき除外する………だけ?」

「ええ、でもこれで僕の勝ちも確定したも同然ツスよ!今のメビウスの攻撃力じゃ、スチームジャイロイドを倒しても僕のライフは持ちこたえるツス!」

『ああ、これでこのターン内に決着をつけないと俺らの負けだ。つか十代、お前も人のカードの効果見てねえじゃねえか。でもまあ、一つわかったことがあるとすれば』

「翔!」

「は、はい!なんすかアニキ!」

「お前、意外と強かったんだな!さつき隼人も言ってたけど、もっと自信持ってデュエルしろよ」

「ありがとう、アニキ………」

『確かに思ったよりは強いけど、まだまだ詰めが甘いな、ってことか』  
「でもな、翔。今ユーノも言ってるけど、まだほんのちよっぴりだけ詰めが甘いぜ!トラップ発動、メテオ・レイン!」

メテオ・レイン

通常罠

このターン自分のモンスターが守備表示モンスターを攻撃した時に

その守備力を攻撃力が越えていれば、その数値だけ相手に戦闘ダメージ

メージを与える。

「あ、あのカードは！」

『そう、このカードなら、そして今のメビウスの500ポイント上がった攻撃力なら突破できる！』

「まだバトルは終わってないぜ！メビウスでもう一度ジェット・ロイドを攻撃！アイス・ランス!!」

氷帝メビウス 攻2900↓ジェット・ロイド 守1800(破壊)

翔 LP800↓0

「ああ、結局負けちゃった……………」

「いや、面白いデュエルだったぜ！ところで翔、お前の残りの手札は一体なんだったんだ？見せてみろよ」

「あ、勝手に見ないで！」

「パ、パワー・ボンド!?!お前、このカードがあつたなら」

「これは、このカードは使えないんすよ……………」

「ん？そりや一体どういうことだ？」

まあ、そこからの話は正史どうりだったので省略。十代がVSカイザーを宣言したところでひとまずお開きになりましたとき。

『んでさ、結局お前のパートナーは見つかったわけ？俺まだまだ忙しいから手伝えねーぞ』

「あ!!マズイ忘れてた！結局さつきは隼人と明日香が校長室から帰ってきてうやむやになっちゃったから……………」

「今すぐ誰でもいいからあたって来いこの馬鹿！」

訂正。お開きにはもうちよい時間がかかりそうです。

## ターン8 圧倒！ダブルサイバーVS鉄砲水のHE RO！

「デュエル許可願い、つと……………」

「翔とその兄貴の間になにがあったのかは知らないけど、デュエルしてみりゃわかるだろ。デュエル許可願い……………」

「丸藤亮、だっけか……………ん？」

「清明!？」

「十代!？」

『……………お前ら仲いいな。息びったりじゃねえか』

「で、こんなところで清明は何やってんだ？」

「そつちこそ。何か今気になる単語が聞こえた気がするけど」

「俺か？俺は今、翔の本物の兄貴に対してデュエル許可願いを書きに来てたんだ」

「やっぱり！僕も申請しようと思ってここまで来たのに！」

「お前もか。こうなったら、どうするかはわかってるよな？」

「当たり前前よ！喜んで受けて立とうじゃないの！」

「デュエ二人とも、何をしているのーネー……………え？」

デュエリストの常識、デュエルで決着をつけようとしていた僕らの前にいきなり現れたのは、いつものレッド嫌いで有名なあの人。

「ク、クロノス先生！」

「まったく、ドロップアウトボーイが二人もそろって一体こんなところで何を……………うん？その紙をちよつと見せるのーネー！」

「あ、まだ書き終わってないのに」

「何々、デュエル許可願い？それで相手は、カイザー!?!あなたがた、寝言は寝てから言うのーネー！」

そう言うや否や、僕たちの持っていたデュエル許可願い証をビリッビリに細かく破り捨てるクロノス先生。ああ、せっかく書いたのに。すぐにシヨックから復活した十代が先生に食ってかかる。

「いきなり何すんだよ、先生！」

「黙るのーネ！カイザー亮は、この学校の中でも一番といわれるブルーの中のトップ、いわばエリート中のエリートですーノ！そんな相手にドロップアウトボーイがデュエルを挑むなんて、口にするだけでもおこがましいのーネ！」

「そんな無茶苦茶な！」

「ささ、わかつたらさっさと自分たちの寮に戻って荷物の整理でもしているのーネ」

「そんなあ〜」

「んで、これからどーしよっか」

結局あれからも少しは粘ったものの、最終的にはクロノス先生に追い出されてしまった。ユーノも加勢してくれりやいのに、なーんも言わないんだもんなあ……………。例えばさ、うるせーいいから受理しやがれ！とか俺のデッキが火を噴くぜ！とかそのコアラが黙っちゃいないぞ！とか……………コアラ？

『日頃からお前が俺に対してどんなイメージを持ってるかはよくわかった。わかつたから一発殴らせろ』

「そ、そんなことよりあれ見て十代！」

そこにいたのは隼人。いや、別に隼人だつてこの生徒、どこにいたつてそんなに不思議じゃない。でも、なんでまた木の上なんかにいるんだろうか。

「へ？あれ、コアラ……………隼人！そんなところで何やってんだ？」

あ、今十代もコアラつて言いそうになつたな。

「わわっ！べ、別になんでもないんだな!!」

そういう隼人が乗っていた木の枝からぱらぱらと落ちてくる、デス・コアラやビッグ・コアラといったカードたち。それを見た十代が、なにかに納得したような顔になった。

「ははーん、まさかお前、デュエルやろうとしたのか？」

「え、ホント！じゃあ後で一戦お願いしようかな」

「ち、違うんだな！別にそんな訳じゃない！」

「ふーん、まあいいさ。今はこんなことしてる場合じゃないしな！」  
「清明、今度はお前ら何をする気なんだ？」

「いや、僕も知らないよ。というかなにか策があるってことも今初めて聞いたし」

『聞かれる前に言っとくけど、俺も相談されてないぞ』

そうこうしてる間に、たったか走っていく十代。あいつかわらず運動神経は無駄にいいんだよな。あのペースについてくだけでこっちまで最近体力ついてきたし。

「ちよつと十代、どこ行くのさー！」

「ブルー寮に行つて、直接カイザーに勝負を申し込む！」

「あ、抜け駆けっ！隼人、急ぐよ！」

「え、俺は別に行きたいなんて言っていないんだな」

「いいからいいから！レッツゴー！」

「うわあ〜！」

『……………んで、結局ダメでしたとき』

ものの見事に門前払い。まあしょうがないよね、あいつらエリート意識だけ無駄に高いし。やれやれ。まあとりあえずは、

「じゅーだーい？だいじよぶ？」

「あんまり……………ヘックシ！それにしてもあいつら、俺はこんなことじゃ諦めねえぞ……………ヘックシ！」

「今日はもう、あつたかくして寝たほうがいいんだな」

ブルーのエリート相手に粘りに粘った結果、頭からバケツの水を被ることになった十代に声をかけて、まだまだへこたれてないことを確認する。よかった、まだ諦めてない。

「ほれ十代、部屋だぞー」

「うう、ただいま……………翔、まだ部屋に閉じこもってんのか？もうそろそろ元気出せよ」

ただ、こっちはいまだに元に戻ってないみたいだけど。この間はせつかく自分からやる気になったのに、かなりいいところまで持ち込

んで結局負けたことがよっぽどショックだったらいい。あとパワー・ポンドがどうたらとかも言ってたつけ。

「ちよつとやりすぎたんじゃないのユーノさんや」

『かもしれないな。途中からつい本気になっちまったから………』

「ほら、一緒にデツキ調整でもしようぜ、つてあれ!? 翔がいねえ!？」

「え?」

「ここに、手紙が置いてあるんだな。なになに、僕は島を出ます………」

「何! あいつ、逃げやがったな! 清明、ユーノ、隼人!」

「わかってるって!」

『行くぞ、お前ら!』

「え、どういふことなんだな?」

「決まってるだろ、翔を連れ戻すために探しに行くんだよ!」

「でももう食事の時間が」

「いいから行くぞ!」

「そんなく!」

「どうだ、いたか!？」

「だめだ、こつちにもいないよ!」

「翔、出てくるんだな!」

あれからかなり探し回ったけど、いまだに翔は見つからない。まさか、もう島から出て行っちゃったとか? こうなったら、この子にも手伝ってもらうか。デツキからカードを一枚取り出して、ちよつと出てきてくれる、と呼びかける。あ、出てきた。

「じゃあシャーク・サツカー、悪いけど翔を探すの手伝ってくれる?」

「なるほど! じゃあ俺も、相棒?」

十代もハネクリボーを繰り出して協力を求める。と、二体の精霊はきよろきよろと辺りを見回して、同じ方向にすすい進んでいく。

「ついて来い、つてことか?」

「なら、ついて行ってみようじゃないの」



「二人とも、一体何が見えてるんだ？俺には今、なにか声が聞こえたのに姿が見えない……………」

まあそんなこんな言いながらも僕らが前を迷わずに歩いているからか、その後をついてくる隼人。と、そこで十代が何かに気づいた。「翔！」

なんとそこには、いつの間にか作ってあつたらしいイカダに乗って今まさに島を離れようとしている翔……………というか、あのまさかあのイカダ一つで海を渡ろうとしてるんだろうか。途中で落ちたらシャレにならないよ？と、そんなこと言ってる場合じゃないか！

でも、結局僕の出番は来なかった。相変わらずの反応速度でイカダの上に飛び乗った十代が強引に翔を止めたからだ。あ、二人とも海に落ちた。

「大変だ、清明も早く助けに行かないと！」

「いや、大丈夫でしょ」

「ど、どうしてなんだな!？」

「だってあそこらへん確か」

そういうが早い、海中から十代と翔が顔を出す。顔だけじゃなくて胸のあたりまで出てきた。

「……………すつごい浅いもん」

「あー、なるほど」

「逃げるのか、翔」

「「へ？」」

いきなり見知らぬ人の声にして、その場にいた全員がそちらを向く。えっと、明日香と……………あっちのブルー生は一体？

『ついに来たか』

「お、お兄さん!？」

『カイザー……………』

「さあかかって来い、遊城十代」

「よし、行くぜ！見てろよ、翔！！」

「選別デュエルかあ……………僕もやりたかったなあ、カイザーと」

『じゃんけんで負けるお前が悪い。なんであそこでパー出すかなあ』  
「なんだ、君も俺とデュエルしたいのか？」

「え、ええ！もちろんですよカイザー！」

「そうか……………ふむ。遊城十代、君の友人もああ言っていることだし、どうだろう。ここは一つ、タッグデュエルにしてみないか？」

「タッグか！面白そうだな、受けて立つぜ！」

「決まりだな。君と遊野清明がタッグを組むといい」

「え、僕も参加していいの?! いよっしやあつ！」

「じゃあよろしくな、清明！」

『十代とタッグ、か。面白そうなことになってきたな』

「ああ……………あれ、そうするとカイザーのペアって？」

「明日香、手伝え」

「え、ええ!? 私が!? ちよつと二人とも、何とか言つて！」

「明日香とカイザーのペア……………相手にとって不足はないぜ！」

「抜かるなよ、十代！」

「期待した私が間違つてたわよ……………いいわよ、引き受けるわよ」

「なら、最初に確認しておこう。ライフは8000で墓地とフィールドは共有、順番はターンごとの交代制で、全員最初のターンが終わるまでは攻撃できない。異論はないな？」

「ああー！」

「なら……………」

「二「デュエル!!」二」

「先攻は俺だ！ドロー！俺は、クレイマンを守備表示で召喚！カードを二枚セットして、ターンエンドだ」

泥で体ができている(らしい)戦士が、その太い腕で防御の構えをとる。

『なるほど、まずは様子見できたか。さすがにカイザーを警戒しているのか?』

E・HEROクレイマン

通常モンスター

星4 / 地属性 / 戦士族 / 攻 800 / 守 2000

粘土でできた頑丈な体を持つE・HERO。

体をはって、仲間のE・HEROを守り抜く。

E・HEROクレイマン 守2000

「ならこちらの先攻は俺からだ。ドロー！俺は、相手のフィールドにモンスターが存在することにより、サイバー・ドラゴンを特殊召喚。さらに、サイバー・ドラゴン・ツヴァイを通常召喚する」

『出たな、本家とちよつとシャープになった方のサイバー・ドラゴンコンピ』

サイバー・ドラゴン

効果モンスター

星5 / 光属性 / 機械族 / 攻 2100 / 守 1600

相手フィールド上にモンスターが存在し、

自分フィールド上にモンスターが存在しない場合、

このカードは手札から特殊召喚できる。

サイバー・ドラゴン 攻2100

サイバー・ドラゴン・ツヴァイ

効果モンスター

星4 / 光属性 / 機械族 / 攻 1500 / 守 1000

このカードが相手モンスターに攻撃するダメージステップの間、

このカードの攻撃力は300ポイントアップする。

1ターンに1度、手札の魔法カード1枚を相手に見せる事で、

このカードのカード名はエンドフェイズ時まで「サイバー・ドラゴン」として扱う。

また、このカードが墓地に存在する場合、

このカードのカード名は「サイバー・ドラゴン」として扱う。

サイバー・ドラゴン・ツヴァイ 攻1500

「そして、エヴォリューション・バーストを発動！サイバー・ドラゴンが存在することにより、その伏せカードを破壊する！」

エヴォリューション・バースト

## 通常魔法

自分フィールド上に「サイバー・ドラゴン」が表側表示で存在する場合のみ

発動する事ができる。相手フィールド上のカード1枚を破壊する。

このカードを発動するターン「サイバー・ドラゴン」は攻撃する事ができない。

サイバー・ドラゴンのオーラを纏ったツヴァイが口からレーザーを出し、正確に伏せカードを打ち抜いた。

「くつ、ヒーロー・シグナルが」

セットしていたのはE・HEROの戦闘破壊に対応してE・HEROを呼び出すことのできるトラップ。フリーチェーンじゃない、か……。

『あんまり褒められたプレイじゃなかったな。どうせまだ誰も攻撃できないんだから、伏せる意味は特になかったし』

「カードを一枚セットし、サイバー・ドラゴン・ツヴァイの効果が切れてターンエンド」

十代&清明 LP8000 手札：十代×3、清明×5 場：E・

HEROクレイマン（守） 魔法・罠：1（伏せ）

亮&明日香 LP8000 手札：亮×2、明日香×5 場：サイ

バー・ドラゴン（攻）、サイバー・ドラゴン・ツヴァイ（攻） 魔法・

罠：1（伏せ）

「よし、僕のターンだ！ドロー！」

ふむ……よし、決めた。

「フィールド魔法、ウォーターワールドを発動！そして、グリズリーマザーを攻撃表示で召喚してターンエンド」

フィールドが海に包まれて、クレイマンの隣に体が青いクマがかぎ爪を光らせて二本足で立ちあがる。

ウォーターワールド

フィールド魔法

フィールド上に表側表示で存在する水属性モンスターの攻撃力は500ポイントアップし、

守備力は400ポイントダウンする。

グリズリーマザー

効果モンスター

星4 / 水属性 / 獣戦士族 / 攻1400 / 守1000

このカードが戦闘によって破壊され墓地へ送られた時、

デッキから攻撃力1500以下の水属性モンスター1体を

表側攻撃表示で特殊召喚できる。

グリズリーマザー 攻1400 ↓ 1900 守1000 ↓ 600

「なら、私のターンね。ドロロー！融合を発動、手札のエトワール・サイバーとブレード・スケーターを融合して、来なさい私のエース！サイバー・ブレイダーを召喚！」

融合

通常魔法

手札・自分フィールド上から、融合モンスターカードによって決められた

融合素材モンスターを墓地へ送り、その融合モンスター1体を

エクストラデッキから特殊召喚する。

サイバー・ブレイダー

融合・効果モンスター

星7 / 地属性 / 戦士族 / 攻2100 / 守 800

「エトワール・サイバー」 + 「ブレード・スケーター」

このモンスターの融合召喚は上記のカードでしか行えない。

相手のコントロールするモンスターが1体の場合、

このカードは戦闘によっては破壊されない。

相手のコントロールするモンスターが2体の場合、

このカードの攻撃力は倍になる。

相手のコントロールするモンスターが3体の場合、

このカードは相手の魔法・罠・効果モンスターの効果を無効にする。

『こっちは場にはモンスターが二体、か。よかったな、もう一体展開しないでおいて。ロックされるとこだった』

「相手モンスターが二体の時、サイバー・ブレイダー第二の効果発動！

パ・ド・トロワ！」

サイバー・ブレイダー 攻2100↓4200

「カードを三枚伏せて、私もターンエンド」

十代&清明 LP8000 手札：十代×3、清明×4 場：E・HEROクレイマン（守）、グリズリーマザー（攻） 魔法・罠：1（伏せ）

亮&明日香 LP8000 手札：亮×2、明日香×0 場：サイバー・ドラゴン（攻）、サイバー・ドラゴン・ツヴァイ（攻）、サイバー・ブレイダー（攻） 魔法・罠：4（伏せ）

場：ウォーターワールド

「俺のターン、ドロロー！さすがに二人とも強いな！でも負けないぜ、こつちも融合を発動！場のクレイマンと、手札のスパークマンを融合！来い、サンダー・ジャイアント！」

E・HERO サンダー・ジャイアント

融合・効果モンスター

星6／光属性／戦士族／攻2400／守1500

「E・HERO スパークマン」＋「E・HERO クレイマン」

このモンスターは融合召喚でしか特殊召喚できない。

自分の手札を1枚捨てる事で、フィールド上に表側表示で存在する元々の攻撃力がこのカードの攻撃力よりも低いモンスター1体を選択して破壊する。

この効果は1ターンに1度だけ自分のメインフェイズに使用することができる。

E・HERO サンダー・ジャイアント 攻2400

「そして、手札を一枚捨てて……………」

「待ちなさい！召喚時に速攻魔法発動、禁じられた聖衣！これでサイバー・ブレイダーはサンダー・ジャイアントの効果の対象にもできないわよ」

禁じられた聖衣

速攻魔法

フィールド上に表側表示で存在するモンスター1体を選択して発

動できる。

エンドフェイズ時まで、

選択したモンスターは攻撃力が600ポイントダウンし、カードの効果の対象にならず、カードの効果では破壊されない。

サイバー・ブリーダー 攻4200↓1500↓3000

「なら、手札を一枚捨ててサイバー・ドラゴンを破壊だ！ヴェイパー・スパーク！」

「この瞬間にトラップ発動、アタック・リフレクター・ユニット！対象になったサイバー・ドラゴンをリリースして、デツキからサイバー・バリア・ドラゴンを特殊召喚する！」

「そんな、モンスターを一体も破壊できなかったなんて……………」

アタック・リフレクター・ユニット

通常罫

自分フィールド上の「サイバー・ドラゴン」1体を生け贄に捧げて発動する。

自分の手札・デッキから「サイバー・バリア・ドラゴン」1体を特殊召喚する。

サイバー・バリア・ドラゴン

効果モンスター

星6／光属性／機械族／攻 800／守2800

このカードは通常召喚できない。

このカードは「アタック・リフレクター・ユニット」の

効果でのみ特殊召喚する事ができる。

このカードが攻撃表示の場合、1ターンに1度だけ相手モンスター1体の攻撃を無効にする。

サイバー・バリア・ドラゴン 攻800

「攻撃力800？なら、サンダー・ジャイアントでサイバー・バリア・ドラゴンを攻撃！ボルテック・サンダー！」

「なら、サイバー・バリア・ドラゴンの効果発動！その攻撃を無効にする！」

「グリズリーマザーで連撃すれば倒せるけど、今は攻撃力3000の

サイバー・ブレイダーもいるしダメージを狙うのは危険か………グリズリーマザーを守備表示に変更、ターンエンドだ」

「禁じられた聖衣の効果も切れるわよ」

グリズリーマザー 攻1900↓守600

サイバー・ブレイダー 攻3000↓4200

「俺のターン、ドロー！明日香の伏せたトラップカード、強欲な瓶を發動。カードを一枚ドローする」

強欲な瓶

通常罠

自分のデッキからカードを1枚ドローする。

「よし。プロト・サイバー・ドラゴンを召喚だ」

さつきまでのサイバー・ドラゴンのコンビや今いるサイバー・バリア・ドラゴンに比べると装甲が若干黒ずんでいて、大きさも小さ目な機械竜が咆哮を上げる。正直本家と比べるとあんま怖くない。

プロト・サイバー・ドラゴン

効果モンスター

星3／光属性／機械族／攻1100／守 600

このカードはフィールド上に表側表示で存在する限り、

カード名を「サイバー・ドラゴン」として扱う。

プロト・サイバー・ドラゴン 攻1100

「そして手札のマジックカード、融合を見せてサイバー・ドラゴン・ツヴァイをサイバー・ドラゴン扱いにする。融合を發動！場のサイバー・ドラゴン二体を融合して、サイバー・ツイン・ドラゴンを召喚！」

サイバー・ツイン・ドラゴン

融合・効果モンスター

星8／光属性／機械族／攻2800／守2100

「サイバー・ドラゴン」＋「サイバー・ドラゴン」

このカードの融合召喚は、上記のカードでしか行えない。

このカードは一度のバトルフェイズ中に2回攻撃する事ができる。

サイバー・ツイン・ドラゴン 攻2800



双頭の機械竜が、二つの首でそれぞれ僕と十代を威嚇する。

「そしてサイバー・ツイン・ドラゴンに装備カード、ブレイク・ドローを装備する」

『……………なんだろう、このサイバー流のお手本を見てるような感じ。と思ったけど、この人文字どうりサイバー流のお手本だったなそーいや』

ブレイク・ドロー

装備魔法

機械族モンスターにのみ装備可能。

装備モンスターが戦闘によって相手モンスターを破壊し墓地へ送った時、

自分のデッキからカードを1枚ドローする。

このカードは発動後3回目の自分のエンドフェイズ時に破壊される。

「いくぞ、まずはサイバー・ブレイダーでサンダー・ジャイアントを攻撃！」

サイバー・ブレイダーの放った回し蹴りが、受け止めようとしたサンダー・ジャイアントを弾き飛ばす。

サイバー・ブレイダー 攻4200↓ E・HERO サンダー・

ジャイアント 攻2400 (破壊)

十代&清明 LP8000↓6200

「これでサイバー・ブレイダーの効果は第一のもの、戦闘破壊耐性を得るわ。パ・ド・ドウ！」

サイバー・ブレイダー 攻4200↓2100

「続いてサイバー・ツイン・ドラゴンでグリズリーマザーを攻撃！エヴォリューション・ツイン・バースト！」

サイバー・ツイン・ドラゴン 攻2800↓グリズリーマザー 守

600 (破壊)

「そしてブレイク・ドローの効果でカードを一枚ドローする」

「こつちも効果発動だ！……………ドローは怖いけどダメージはもつとキツイな、レイスは出せない！ハリマンボウを特殊召喚！」

ハリマンボウ

効果モンスター

星3／水属性／魚族／攻1500／守 100

このカードが墓地へ送られた時、

相手フィールド上に表側表示で存在するモンスター1体を選択して発動する。

選択した相手モンスターの攻撃力は500ポイントダウンする。

ハリマンボウ 攻1500↓2000

「もう一度攻撃だ、エヴオリューション・ツイン・バースト！」

サイバー・ツイン・ドラゴン 攻2800↓ハリマンボウ 攻20

00（破壊）

十代&清明 LP6200↓5400

「でも、ハリマンボウの効果で攻撃力が下がる！対象はサイバー・ツイン・ドラゴン！」

「こちらもブレイク・ドローの効果で、カードを一枚ドローする」

サイバー・ツイン・ドラゴン 攻2800↓2300

「さらに、サイバー・バリア・ドラゴンでダイレクトアタック！エヴオリューション・バリア・ショット！」

サイバー・バリア・ドラゴン 攻800↓十代&清明（直接攻撃）

十代&清明 LP5400↓4600

「カードを一枚セットして、ターンエンドだ」

十代&清明 LP4600 手札：十代×1、清明×4 場：なし

魔法・罨：1（伏せ）

亮&明日香 LP8000 手札：亮×2、明日香×0 場：サイ

バー・バリア・ドラゴン（攻）、サイバー・ツイン・ドラゴン（攻・ブレイク）、サイバー・ブレイダー（攻） 魔法・罨：ブレイク・ドロー

（ツイン）、2（伏せ）

場：ウォーターワールド

「なら、僕のターン！ドロー！」

うーん、だいぶ押され気味だな………なんとか巻き返さないと。

「十代、構わないね？」

横から聞いてたら何のことだか訳が分からないだろうけど、十代のカンはデュエルの事ならかなり冴えるし、これでも何をしようとしているかは気づいてもらえるはずだ。案の定、一瞬も迷わずに返事してきた。

「おう、頼んだぜ！」

「任せて！永続魔法ウォーターハザードを発動、効果でペンギン・ナイトメアを特殊召喚！」

フィールドを波が包み込み水が引いた後には、静かにたたずむ蝶ネクタイを締めたペンギンの姿があった。正直温存しておきたかったけど、ここは打点の確保が大事！

ウォーターハザード

永続魔法

自分フィールド上にモンスターが存在しない場合、

手札からレベル4以下の水属性モンスター1体を特殊召喚できる。

この効果は1ターンに1度しか使用できない。

ペンギン・ナイトメア

効果モンスター

星4／水属性／水族／攻 900／守1800

このカードがリバースした時、

相手フィールド上のカード1枚を選択して持ち主の手札に戻す。

また、このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、

自分フィールド上の水属性モンスターの攻撃力は200ポイントアップする。

ペンギン・ナイトメア 攻900↓1400↓1600 守180

0↓1400

「さらにマジックカード、死者蘇生！十代がサンダー・ジャイアントのコストにしたHERO、エッジマンを特殊召喚！」

死者蘇生

通常魔法（制限カード）

自分または相手の墓地のモンスター1体を選択して発動できる。

選択したモンスターを自分フィールド上に特殊召喚する。

E・HERO エッジマン

効果モンスター

星7／地属性／戦士族／攻2600／守1800

このカードが守備表示モンスターを攻撃した時、

その守備力を攻撃力が越えていれば、

その数値だけ相手ライフに戦闘ダメージを与える。

E・HERO エッジマン 攻2600

「そしてこの2体をリリースして……………こいつが僕の切り札だっ！  
霧の王を召喚！」

十代の持つ墓地から特殊召喚できる最大攻撃力の、金色の鎧を全身に纏うHERO。そして僕が呼び出した無駄に偉そうなポーズをとったペンギンが霧になって、フィールド上の一点に集まってく。そしてその霧の中から現れたのが！

『お、久しぶりの出番か』

霧の王

効果モンスター

星7／水属性／魔法使い族／攻 0／守 0

このカードを召喚する場合、生け贄1体

または生け贄なしで召喚する事ができる。

このカードの攻撃力は、生け贄召喚時に生け贄に捧げた

モンスターの元々の攻撃力を合計した数値になる。

このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、

いかなる場合による生け贄も行いう事ができなくなる。

「このカードの攻撃力はペンギン・ナイトメアとエッジマンの元の攻撃力の合計……………つまり、3500だ！」

『水差すようで悪いが、ウォーターワールドも計算に入れてくれ』

「あ、その、えっと……………4000、です」

霧の王 攻4000

「まあ気を取り直して」

『お、立ち直った』

「気を取り直して、どうせ攻撃してもサイバー・バリア・ドラゴンに止

められるか。カードを一枚セットして、ターンエンド」

「私のターン、ドロロー！さすがに貴方達、並みの生徒とは違うわね。あそこまで引き離されておいて、まだ逆転しようとするなんて」

「とんでもない、ブルーが貧弱すぎるんじゃないの？」

「そうだそうだ、よく言ったぞ清明！レッド生は成績こそ悪いかもしれないけど、諦めだけは悪いんだよ！」

「そうみたいね。でも、私たちにもプライドはあるもの。そう簡単には倒させないわよ？速攻魔法、魔法効果の矢を発動！そちらのフィールドにある魔法カードを破壊して、その数だけダメージを受けてもらうわ」

### 魔法効果の矢

#### 速攻魔法

相手フィールド上に表側表示で存在する魔法カードを全て破壊する。

破壊した魔法カード1枚につき、相手ライフに500ポイントダメージを与える。

「させるか！伏せといてくれてセンキュー十代、速攻魔法非常食を発動！こっちのウォーターワールドとウォーターハザードを墓地に送って、2000ライフ回復！」

#### 非常食

#### 速攻魔法

このカード以外の自分フィールド上に存在する

魔法・罠カードを任意の枚数墓地へ送って発動する。

墓地へ送ったカード1枚につき、自分は1000ライフポイント回復する。

「でも、貴方のフィールドには非常食のカードがある！500ダメージだけでも受けてもらうわ」

十代&清明 LP 4600↓6600↓6100

霧の王 攻4000↓3500

「そうね………本当なら攻撃したいのだけど。サイバー・ツイン・ドラゴン、サイバー・バリア・ドラゴンを守備表示に変更してターンエン

ドよ」

サイバー・ツイン・ドラゴン 攻2300↓守2100

サイバー・バリア・ドラゴン 攻800↓守2800

十代&清明 LP6100 手札：十代×1、清明×0 場：霧の

王（攻） 魔法・罫：1（伏せ）

亮&明日香 LP8000 手札：亮×2、明日香×0 場：サイ

バー・バリア・ドラゴン（守）、サイバー・ツイン・ドラゴン（守・ブ

レイク）、サイバー・ブレイダー（攻） 魔法・罫：ブレイク・ドロ

（ツイン）、2（伏せ）

『なるほど、サイバー・ブレイダーはあえて攻撃表示のまま立たせておいてこっちの動きを牽制しに来たわけか』

「えっと、つまりどゆこと？」

『十代がもう一体自分でもモンスターを出したら攻撃力はそこで4200になるからちよつとやそつとじゃ越えられねえし、それを恐れて展開しなかったら戦闘破壊耐性がついたままになるってことさ。もつとも十代のことだ、必ず何かしら期待に込めてくれるだろうよ』  
「俺のターン、ドロロー！………貪欲な壺を発動して、墓地のクレイマン、スパークマン、サンダー・ジャイアント、エツジマン、グリズリーマザーの五体を選択してデッキに戻し二枚ドロロー！よし来たぜ、融合を発動！手札のフェザーマンとバーストレディを融合してマイフェイバリットカード、フレイム・ウイングマンを融合召喚！これなら霧の王の効果にも邪魔されないぜ！」

『なるほど、この間相打ちになったエース同士のご登場か。なかなか絵になるじゃねえの』

貪欲な壺

通常魔法（制限カード）

自分の墓地のモンスター5体を選択して発動できる。

選択したモンスター5体をデッキに加えてシャッフルする。

その後、デッキからカードを2枚ドロローする。

E・HERO フレイム・ウイングマン

星6／風属性／戦士族／攻2100／守1200

「E・HERO フェザーマン」+「E・HERO バーストレディ」  
このカードは融合召喚でしか特殊召喚できない。

このカードが戦闘によってモンスターを破壊し墓地へ送った時、破壊したモンスターの攻撃力分のダメージを相手ライフに与える。

E・HERO フレイム・ウイングマン 攻2100

「モンスターの数が増えたことで、サイバー・ブレイダーの攻撃力が倍になるわ」

サイバー・ブレイダー 攻2100↓4200

「まずは霧の王で、サイバー・バリア・ドラゴンを攻撃!」

霧の王 攻3500↓サイバー・バリア・ドラゴン 守2800(破壊)

「続けてフレイム・ウイングマンで、サイバー・ブレイダーを攻撃!」

「一体何を考えてるの!?!サイバー・ブレイダー、フレイム・ウイングマンを迎撃しなさい!」

「甘いぜ、明日香!俺はこの瞬間に清明の伏せたトラップ、メタル化・魔法反射装甲を発動!」

メタル化・魔法反射装甲

通常罠

発動後このカードは攻撃力・守備力300ポイントアップの装備カードとなり、

モンスター1体に装備する。

装備モンスターが攻撃を行う場合、そのダメージ計算時のみ

装備モンスターの攻撃力は攻撃対象モンスターの攻撃力の半分の数値分アップする。

E・HERO フレイム・ウイングマン 攻2100↓2400↓4500

E・HERO フレイム・ウイングマン 攻4500↓サイバー・

ブレイダー 攻4200(破壊)

「ぎゃあっ!」

「さらにフレイム・ウイングマンの効果で、2100ポイントのダメージを受けてもらうぜ」

「よし、これでライフの逆転だ!」

『だが、そう喜んでばかりもいらねえな』

「なんで? あっちの場にいるのは攻撃力の下がったサイバー・ツイン・ドラゴンだけなの?」

『……………自分の目で確かめたほうが分かりやすいからな、まあ見てなつて』

そんな不穏な会話を知ってか知らずか、ターンエンドの宣言をする十代。だが。

「なら、俺はエンドフェイズにトラップカード、リビングデッドの呼び声を発動。墓地のサイバー・ドラゴンを特殊召喚する」

リビングデッドの呼び声

永続罫

自分の墓地のモンスター1体を選択し、表側攻撃表示で特殊召喚する。

このカードがフィールド上から離れた時、そのモンスターを破壊する。

そのモンスターが破壊された時、このカードを破壊する。

サイバー・ドラゴン 攻2100

「ここでサイバー・ドラゴンを!」

「そして俺のターン、ドロ。……………遊城十代、それに遊野清明。君たちの本気は見せてもらった。確かに君たちは強い」

「へへっ、そう言ってもらえて光栄だぜ!」

「呑気だなあ十代は。く、来るなら来い!」

「その強さに敬意を表して、俺の本気をもってして相手する! まずはマジックカード、貪欲な壺を発動! 墓地のサイバー・ドラゴン・ツヴァイ、プロト・サイバー・ドラゴン、サイバー・バリア・ドラゴン、サイバー・ブレイダー、エトワール・サイバーをそれぞれのデッキに戻し、カードを二枚ドロする……………マジックカード、パワー・ボンドを発動!!」

「なっ!」



「パワー・ボンド!？」

「お兄さん……………」

「手札にいる二体のサイバー・ドラゴンと、場のサイバー・ドラゴンを融合！出でよ、サイバー・エンド・ドラゴン!!」

これまでのサイバー・ドラゴン系統とは格の違う、圧倒的な威圧感を持った三つ首の機械竜がその羽を広げる。これが、恐らくはカイザーの切り札……………!」

パワー・ボンド

通常魔法

手札またはフィールド上から、

融合モンスターカードによって決められたモンスターを墓地へ送り、

機械族の融合モンスター1体を融合デッキから特殊召喚する。

このカードによって特殊召喚したモンスターは、

元々の攻撃力分だけ攻撃力がアップする。

発動ターンのエンドフェイズ時、このカードを発動したプレイヤーは

特殊召喚したモンスターの元々の攻撃力分のダメージを受ける。

(この特殊召喚は融合召喚扱いとする)

サイバー・エンド・ドラゴン

融合・効果モンスター

星10／光属性／機械族／攻4000／守2800

「サイバー・ドラゴン」＋「サイバー・ドラゴン」＋「サイバー・ドラゴン」

このカードの融合召喚は上記のカードでしか行えない。

このカードが守備表示モンスターを攻撃した時、その守備力を攻撃力が超えていれば、

その数値だけ相手ライフに戦闘ダメージを与える。

サイバー・エンド・ドラゴン 攻4000↓8000

「攻撃力、8000……………」

「そして明日香が伏せていた二枚目の強欲な瓶を発動。ふ、面白い。

装備魔法の巨大化をサイバー・ツイン・ドラゴンに装備して、攻撃表示に変更する！」

「しまった！攻撃力が低くなったから放つておいたのが裏目に出たか！」

『そういうこつた。ライフで勝つたからつて一瞬だけでも舞い上がりちまったんだな、お前ら。もちろんそんなつもりじゃないのはわかっているけど、ほんの一手だけ読みが甘くなつてたんだろ』

巨大化

装備魔法

自分のライフポイントが相手より下の場合、

装備モンスターの攻撃力は元々の攻撃力を倍にした数値になる。

自分のライフポイントが相手より上の場合、

装備モンスターの攻撃力は元々の攻撃力を半分にした数値になる。

サイバー・ツイン・ドラゴン 守2100↓攻5600

「さあ、行くぞー！サイバー・ツイン・ドラゴンで、フレイム・ウイングマンを攻撃！エヴォリューション・ツイン・バースト!!」

サイバー・ツイン・ドラゴン 攻5600↓ E・HERO フレ

イム・ウイングマン 攻2400 (破壊)

十代&清明 LP6100↓2900

サイバー・ツイン・ドラゴン 攻5600↓1400

「そんな、フレイム・ウイングマンが……」

「そしてサイバー・エンド・ドラゴンで霧の王を攻撃！エターナル・エヴォリューション・バースト!!」

サイバー・エンド・ドラゴン 攻8000↓霧の王 攻3500 (破壊)

三つの首から同時に放たれた熱線をなんとか手にした剣で受け止めて弾き返そうとするものの、その圧倒的な勢いに霧の王が押し負かされてしまう。

「うわあっっ!!」

十代&清明 LP1400↓0

勝てなかつたか……まさかあの状況を、力技でひっくり返して

くるなんてなあ。

「負け、た……でも、カイザー」

「どうした？」

「楽しいデュエルだったぜ！」

「ああ、俺もだ。もう行くぞ、明日香」

「え、ちよつと亮！」

そう言つてすたすと歩き去っていく亮と、その後を慌てて追いかける明日香。その後ろ姿を見つめながら、翔がそつと頭を下げた。

「翔？」

「アニキも清明君も隼人君も、心配かけてごめん。今度こそ僕も迷わない、いつかきつとパワー・ボンドを使う資格を持つぐらいのデュエリストになつてみせるよ！」

『ようやく吹っ切れたか。俺の知つてる歴史とはやっぱりずれてるけど、まあ大まかなところはあつてるしいいか。とりあえず、今は制裁デュエルに集中しますかね』

「いやー、よかつたよかつた翔が元気になつて。つてあれ？どしたの隼人、嬉しくなさそうだけど」

「もう、寮の食堂はとつくに閉まつてる時間なんだな……」

「何!?今から走つて帰れば間に合うかもしれないねえ、早く帰るぞみんな！」

「アニキ、ちよつと待つてくださいいよー！」

「十代、置いてかないで欲しいんだな〜！」

「じゃあみんな、急ごう！」

「「おう！」」

## ターン9 迅雷！無限の電極骨を撃つ！

「カイザー、かあ」

あのデュエルから、もう一週間たった。でも、いまだに心に引つ掛かるものがあるんだよねえ。

「結局あの時も唯一ダメージ与えたのは十代のフレイム・ウイングマンだったし……………ハア」

僕はどうかだったかっていうと、手も足も出なかったからなあ。まだまだ、つてことなんだろうか。そんなことを考えながら、たった今十代&翔の制裁デュエルの真っ最中であろうデュエルアカデミアの方をちらりと見る。ユーノも隼人も観戦しに行っちゃったし、僕は明日に控えてるから今日一日は校舎への立ち入りが禁止されてるし。夢想は今どこにいるかわかんないし。なんでも相手の情報を事前に知るのを防ぐためらしい。ユーノ行っちゃったけど。まあいっか。

「うーん、デツキ調整でもしよっかな」

こう呟くのも、もう8回目くらい。何回も何回も見直して、特に問題もないことはわかりきってる。正直タッグ用の調整もした方がいいと思うんだけど、ユーノも相方もやらなくていいって言っし、第一下手にいじくって失敗するのも馬鹿らしい、というかシヤレにならない。そういえば相方と言えば、昨日はなかなか驚いたっけ。そう、あれは昨夜のこと……………。

「というわけで、河風君。もともとこれはデュエルの話、デュエルで決めようじゃないか」

「望むところだよ、だつてさ」

『おーやってるやつてる。間に合つてよかつたぜ』

「三沢ー、夢想ー、どっちも頑張れよー！」

「またアニキはそんな呑気なこと言つて……………僕らのテストはもう明日なんつスよ!?!大丈夫なんスか?」

「翔は心配性だな。俺らなら絶対勝てるって！」

「僕のせいで……申し訳ないな」

『ああ、お前は本気で反省してろ。山よりも高く海よりも深く反省してろ』

「うう………」

『泣きたいのはこつちだ馬鹿。とつくに決めといたんだろうと思つて聞かなかつた俺も一ミクロンぐらゐは悪いのかもしれないが、なんでまだこの時期になつて相方一人決められてねーんだよ』

「いや、その………すいません」

『俺に謝つてどーするお前は。むしろこんな時期からでも付き合つてくれる三沢と夢想に対して謝つてこい』

ちなみに明日香はブルー寮でどうしても抜けられない晩餐会とやらがあるらしい。じゃあなんで夢想は来れたんだろうと思つて聞いてみたら『逃げてきちやつた、なんだつてさ♪』つてすんごい笑顔で言い切られた。ありがたいことはありがたいんだけど、多分あの表情を見るに単に面倒だからこつちに來た、つてのも理由の一つなんだろうなあ。

まあそうこつち僕らが言つてる間に、三沢と夢想のデュエルが始まつたわけで。そういえば、三沢のデツキつて何なんだろう？まだ見た覚えがないんだけど。

「まずデュエルを始める前に、今回の俺のデツキについて一言言わせてもらおうか」

「今回の？どういう意味、つて聞きたいんだつてさ」

「俺は常に各属性一つずつ、計6種類のデツキを携帯している………そして今回使うのはこれ、光のデツキだ！」

「三沢、どうして光なんだ？」

「このデツキは最近作つたばかりでな、一度調整もしてみたかったんだ」

「あー、なるほど」

「では、行くぞー！」

「デュエル！」

「先攻は私、ドロロー！スカル・コンダクターを手札から捨てて、効果発

動！もう一体のスカル・コンダクターに、ワイト夫人を特殊召喚するんだってさ」

指揮棒を持った顔色の悪いおっさんの亡霊が現れ、指揮棒を巧みに振りまわして二つの魔法陣を作り出す。その魔法陣からは、それぞれ違ったモンスターが現れた。ひとつはボロボロのドレスに身を包むガイコツ、もう一つは服の色がちよつと違うけど、顔もシルエツトもそっくりな指揮者その2。

スカル・コンダクター

効果モンスター

星4／闇属性／アンデット族／攻2000／守 0

このカードがフィールド上に表側表示で存在する場合、

バトルフェイズ終了時にこのカードを破壊する。

また、手札からこのカードを墓地へ送る事で、

攻撃力の合計が2000になるように

手札からアンデット族モンスターを2体まで特殊召喚する。

スカル・コンダクター 攻2000

ワイト夫人

効果モンスター

星3／闇属性／アンデット族／攻 0／守2200

このカードのカード名は、墓地に存在する限り「ワイト」として扱う。

また、このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、

「ワイト夫人」以外のフィールド上のレベル3以下の

アンデット族モンスターは戦闘では破壊されず、魔法・罨カードの効果も受けない。

ワイト夫人 守2200

「さらに、スカル・コンダクターをリリースして龍骨鬼を召喚、だつてさ」

龍骨鬼

効果モンスター

星6／闇属性／アンデット族／攻2400／守2000

このカードと戦闘を行ったモンスターが戦士族・魔法使い族の場合、

ダメージステップ終了時にそのモンスターを破壊する。

龍骨鬼 攻2400

「カードを一枚セットして、ターンエンドだつて」

『いきなり飛ばすねえ。こりや三沢も大変だ』

「でも、三沢むしろ笑ってるよ?」

『そりやそうだろ。強い相手と戦うのは面白いもんさ、だろ?』

「まあね」

「俺のターン、ドロー!手札のサンダー・ドラゴンを捨てて効果発動、デッキにいるサンダー・ドラゴンを二枚手札に加える。そして魔法カード、融合!今手札に加えたサンダー・ドラゴン二体を融合して、双頭の雷龍を召喚!」

サンダー・ドラゴン

効果モンスター

星5 / 光属性 / 雷族 / 攻1600 / 守1500

自分のメインフェイズ時に、このカードを手札から捨てて発動する。

自分のデッキから「サンダー・ドラゴン」を2体まで手札に加える。

融合

通常魔法

手札・自分フィールド上から、融合モンスターカードによって決められた

融合素材モンスターを墓地へ送り、その融合モンスター1体をエクストラデッキから特殊召喚する。

双頭の雷龍

融合モンスター

星7 / 光属性 / 雷族 / 攻2800 / 守2100

「サンダー・ドラゴン」+「サンダー・ドラゴン」

双頭の雷龍 攻2800

「そして手札から、電池メン—単一型を通常召喚する」

電池メン―単一型

効果モンスター

星1／光属性／雷族／攻 0／守1900

このカードが自分フィールド上に表側表示で存在する限り、

相手は自分フィールド上に存在する「電池メン―単一型」以外の

雷族モンスターを攻撃対象に選択できない。

電池メン―単一型 守1900

『あれ、ここで単一型？……………ああなるほどね、だいたい読めた。ここで龍骨鬼を何とかする気なのか』

「さらに魔法カード、魔霧雨を発動！双頭の雷龍の攻撃力以下、つまり2800以下の守備力を持つモンスターをすべて破壊だ！」

双頭の雷龍が空に向かって咆哮を放つとどこからともなく霧が出てきて、龍骨鬼とワイト夫人を飲み込んでいく。そして、霧の中で数回稲妻が走るのがぼんやりと見えた。

魔霧雨

通常魔法

自分フィールド上に表側表示で存在する「デーモンの召喚」

または雷族モンスター1体を選択して発動する。

相手フィールド上に表側表示で存在する、

選択したモンスターの攻撃力以下の守備力を持つモンスターを全て破壊する。

このカードを発動するターン、バトルフェイズを行う事ができない。

「私のモンスターが……………ちよつと甘く見てたかな、だつてさ」

「お褒めに預かり光荣だな。残念ながら魔霧雨のデメリット効果で俺はバトルフェイズを行えない、カードを一枚伏せてターンエンドだ」

夢想 LP4000 手札：1 モンスター：0 魔法・罫：1（伏せ）

せ）

三沢 LP4000 手札：0 モンスター：双頭の雷龍（攻）、電

池メン―単一型（守） 魔法・罫：1（伏せ）



「今のところ、三沢が押ししてるみたいだね」

『まあそうだな。どっちが先に動くか?』

「私のターン、ドロー!………一時休戦を発動して、カードカー・Dを召喚!何かある?だって」

「カードカー………いや、いいだろう。ここは通す!」

「だったら効果により、リリースして二枚ドローしてターンエンド」

一時休戦

通常魔法

お互いに自分のデッキからカードを1枚ドローする。

次の相手ターン終了時まで、お互いが受ける全てのダメージは0になる。

カードカー・D

効果モンスター

星2/地属性/機械族/攻 800/守 400

このカードは特殊召喚できない。

このカードが召喚に成功した自分のメインフェイズ1に

このカードをリリースして発動できる。

デッキからカードを2枚ドローし、このターンのエンドフェイズになる。

この効果を発動するターン、自分はモンスターを特殊召喚できない。

「カードか。意外だね、ガイコツ以外のカードも入ってたんだ」

いやまあ、当たり前的事なんだけども。

「問題ないんだ、って言ってるよ。カー・DのDはドクロのDだもん! だってさ」

「え、マジなのそれ?」

『んなわけねえだろ』

「あ、やっぱり」

「待った、エンドフェイズにトラップ発動だ。サンダー・ブレイクでそのセットカードを破壊する!」

サンダー・ブレイク

## 通常罨

手札を1枚捨て、フィールド上のカード1枚を選択して発動できる。

選択したカードを破壊する。

「あつ、私のミラーフォースが！……改めてターンエンド、だってさ」

『やっぱミラーフォースか。相変わらず働かない奴だな』

「俺のターン、ドロロー！カードを二枚セットしてターンエンドだ」

夢想 LP4000 手札：2 モンスター：0 魔法・罨：0

三沢 LP4000 手札：0 モンスター：双頭の雷龍（攻）、電

池メンー単一型（守） 魔法・罨：2（伏せ）

「私のターン、ドロロー！カップ・オブ・エースを発動……お願い、コイン！表、出てきて！」

そう言いながら天高く打ち上げられたコインはくるくると回転しながら落ちてきて、夢想の手の甲の上に。出たのは……表！

カップ・オブ・エース

## 通常魔法

コイントスを1回行う。

表が出た場合、自分はデッキからカードを2枚ドロウする。

裏が出た場合、相手はデッキからカードを2枚ドロウする。

「それじゃ遠慮なく、二枚ドロウするんだって。それからモンスターを一体セットして、魔法カード発動、強制転移！私はこのセットモンスターを選択するけど、あなたは？」

「何？……いいだろう、俺は電池メンー単一型を選択する」

## 強制転移

## 通常魔法

お互いはそれぞれ自分フィールド上のモンスター1体を選び、そのモンスターのコントロールを入れ替える。

そのモンスターはこのターン表示形式を変更できない。

「なら私は、二重召喚を発動してマッド・デーモンを召喚。セットモンスターに攻撃、ボーン・スプラッシュュ！」

## 二重召喚

### 通常魔法

このターン自分は通常召喚を2回まで行う事ができる。

マッド・デーモン

効果モンスター

星4 /闇属性 /悪魔族 /攻1800 /守 0

このカードが守備表示モンスターを攻撃した時、

その守備力を攻撃力が超えていれば、

その数値だけ相手ライフに戦闘ダメージを与える。

フィールド上に表側攻撃表示で存在するこのカードが攻撃対象に  
選択された時、

このカードの表示形式を守備表示にする。

声を受けたおどろおどろしい悪魔が自分の腹にある頭蓋骨をかみ  
砕き、それをセットモンスターめがけて吹き付けた。そしてあっさり  
破壊されるセットモンスター。だが、なぜか破壊された後に三つの骨  
が夢想のフィールドに飛び込んできて、そのままモンスターゾーンに  
居座ってしまった。

マッド・デーモン 攻1800 ↓?? (破壊)

三沢 LP4000 ↓2500

「まさか、今のカードは!」

『なるほど、そういうことかっ!』

三沢もユーノも何か気づいたみたいだけど、誰か僕にも今何が起  
こったのか教えてください。

『よーするにだな、あのセットモンスターはチュウボーンで……………』  
「なるほど、見事だ河風君。チュウボーンのデメリットとしての色合  
いが強い効果を逆手に取り、自分フィールドにトークンを出したか」  
『さらにステータスの低いチュウボーンを貫通もちで、しかも双頭の  
雷龍からの反撃もノーダメージで受け流せるマッド・デーモンでの攻  
撃。こいつは面白くなってきたな』

チュウボーン

効果モンスター

星3 / 地属性 / アンデット族 / 攻 300 / 守 300

リバース：相手フィールド上に「チュウボーンJr. トークン」

(アンデット族・地・星1・攻100 / 守300) 3体を守備表示で特殊召喚する。

チュウボーンJr. トークン×3 守300

「私は、これでターンエンド」

「ならば俺のターン、ドロロー！」

「さっきのターンで一気に巻き返してきたよね」

『ああ、このターンは一体何が起きるかねえ』

「マジックカード、死者蘇生を発動！俺の墓地から、さっきのサンダー・ブレイクで捨てた電池メン―単三型を特殊召喚する。更に取りバースカードオープン、地獄の暴走召喚を発動！俺は単三型を選択して、デッキからもう二体を特殊召喚する」

「私は、何もできないね。チュウボーンJrはトークンだし、マッド・デーモンも一枚しか入ってない。単一型だって、そもそも私のデッキに入っていないもん。ほら、デュエルディスクも異常なしって言ってるよ？」

そうやって掲げた腕のデュエルディスクを見れば、確かに不正なしを示している。

死者蘇生

通常魔法 (制限カード)

自分または相手の墓地のモンスター1体を選択して発動できる。

選択したモンスターを自分フィールド上に特殊召喚する。

電池メン―単三型

効果モンスター

星3 / 光属性 / 雷族 / 攻 0 / 守 0

自分フィールド上の「電池メン―単三型」が全て攻撃表示だった場合、

「電池メン―単三型」1体につきこのカードの攻撃力は1000ポイントアップする。

自分フィールド上の「電池メン―単三型」が全て守備表示だった場

合、

「電池メンー単三型」1体につきこのカードの守備力は1000ポイントアップする。

地獄の暴走召喚

速攻魔法

相手フィールド上に表側表示でモンスターが存在し、自分フィールド上に

攻撃力1500以下のモンスター1体が特殊召喚に成功した時に発動する事ができる。

その特殊召喚したモンスターと同名モンスターを自分の手札・デッキ・墓地から

全て攻撃表示で特殊召喚する。

相手は相手自身のフィールド上に表側表示で存在するモンスター1体を選択し、

そのモンスターと同名モンスターを相手自身の手札・デッキ・墓地から全て特殊召喚する。

電池メンー単三型×3 攻3000

「バトル、俺のモンスターは返してもらおうぞ！一体目の単三型で、単一型を攻撃！バッテリースパーク・3！」

電池メンー単三型 攻3000↓電池メンー単一型 守1900

(破壊)

「そしてトラップカード、奇跡の軌跡を発動！今攻撃を行った単三型を対象にする！」

「……………一枚ドロ、だつてさ」

奇跡の軌跡

通常罠

自分フィールド上に表側攻撃表示で存在するモンスター1体を選択して発動する。

相手はデッキからカードを1枚ドロする。

このターンのエンドフェイズ時まで、

選択したモンスターの攻撃力は1000ポイントアップし、

1度のバトルフェイズ中に2回までモンスターに攻撃する事ができる。

そのモンスターが戦闘を行う場合、  
相手プレイヤーが受ける戦闘ダメージは0になる。

電池メンー単三型 攻3000↓4000

「もう一度攻撃だ、単三型！マッド・デーモンに、バッテリースパーク・3ー2！」

「でもマッド・デーモンの効果で、デーモンは守備表示になるよ」

マッド・デーモン 攻1800↓守0

電池メンー単三型 攻4000↓マッド・デーモン 守0 (破壊)

「二本目の電池メンー単三型で、チュウボーンJr. トークンを攻撃！バッテリースパーク・3ー3！」

電池メンー単三型 攻3000↓チュウボーンJr. トークン 守300 (破壊)

「続いて三本目！バッテリースパーク・3ー4！」

電池メンー単三型 攻3000↓チュウボーンJr. トークン 守300 (破壊)

「双頭の雷龍も、チュウボーンJr. トークンを攻撃！」

双頭の雷龍 攻2800↓チュウボーンJr. トークン 守300 (破壊)

「ダメージは無いが、まあしょうがない。ターンエンドだ」

夢想 LP4000 手札：1 モンスター：0 魔法・罠：0

三沢 LP2500 手札：0 モンスター：双頭の雷龍 (攻)、電池メンー単三型 (攻)、電池メンー単三型 (攻)、電池メンー単三型 (攻)、魔法・罠：0

「私のターン、ドローして………来た！これが私の、無敵の切り札！ワイトキングを召喚！」

「何!？」

「え、ここでワイトキング!？」

『一体何しようとしてるんだ？ま、何かしら考えてるんだろうけど』

低攻撃力とは思えないほど圧倒的なカリスマと威圧感をたたえた

ガイコツの王が、大地を割って地の底から現れる。でも、今墓地にいるのはワイト夫人一枚だけ……………！

ワイトキング

効果モンスター

星1／闇属性／アンデット族／攻　　？／守　　0

このカードの元々の攻撃力は、自分の墓地に存在する「ワイトキング」

「ワイト」の数×1000ポイントの数値になる。

このカードが戦闘によって破壊され墓地へ送られた時、

自分の墓地の「ワイトキング」または「ワイト」1体を

ゲームから除外する事で、このカードを特殊召喚する。

ワイトキング　攻0↓1000

「カードを一枚セットして、ターンエンドなんだって」

「一体何を……………いや、考えても仕方ないか。ドロー！カードを一枚セットする」

「それで、どうするの？私のエースに攻撃するの？だつてさ」

「くつ、俺は……………」

『いい心理フェイズだな。さあどうする三沢』

「……………俺は、攻撃をする！行け、単三型！バッテリースパーク・3！」

「トラップ発動、針虫の巣窟！私のデッキの上から、カードを5枚墓地に！」

針虫の巣窟

通常罫

自分のデッキの上からカードを5枚墓地へ送る。

「なるほど、デッキの上に何枚ワイトがいるかにすべてを賭けたわけか」

「二枚目、ワイト！二枚目、ワイト！三枚目、守護神の銚！四枚目、ワイトメア！5枚目、ワイトキング！このカードを全部墓地に送ることで、ワイトキングの攻撃力を上げるよっ！」

「『何いっ!!?』」

『…………もう笑うしかねえな。ごしゅーしよー様、三沢。いや待てよ、むしろあと一枚ホワイトが来なかっただけアイツ運いいのか?』

ホワイト

通常モンスター

星1／闇属性／アンデット族／攻 300／守 200

どこにでも出てくるガイコツのおぼけ。攻撃は弱いが集まると大変。

ワイトメア

効果モンスター

星1／闇属性／アンデット族／攻 300／守 200

このカードのカード名は、墓地に存在する限り「ワイト」として扱う。

また、このカードを手札から捨てて以下の効果から1つを選択して発動する事ができる。

●ゲームから除外されている自分の「ワイト」または「ワイトメア」1体を選択して自分の墓地に戻す。

●ゲームから除外されている自分の「ワイト夫人」または「ワイトキング」1体を選択してフィールド上に特殊召喚する。

守護神の鋒

装備魔法

装備モンスターの攻撃力は、お互いの墓地に存在する

装備モンスターと同名のカードの数×900ポイントアップする。

ワイトキング 攻1000↓5000

0  
電池メン―単三型 攻3000（破壊）↓ワイトキング 攻500

三沢 LP2500↓500

電池メン―単三型×2 攻3000↓2000

「すまない、単三型……………だが勝負はまだまだこれからだっ！俺はあ



きらめたりしない、全てのモンスターを守備表示にしてターンエンド」

電池メン―単三型×2 攻2000↓守2000

双頭の雷龍 攻2800↓守2100

夢想 LP4000 手札：0 モンスター：ワイトキング（攻）

魔法・罨：0

三沢 LP500 手札：0 モンスター：双頭の雷龍（守）、電池

メン―単三型（守）、電池メン―単三型（守） 魔法・罨：1（伏せ）

「私のターン、ドロ―。ジャイアント・オークを召喚して、単三型を攻撃するんだって」

ジャイアント・オーク

効果モンスター

星4 / 闇属性 / 悪魔族 / 攻2200 / 守 0

このカードは攻撃した場合、バトルフェイズ終了時に守備表示になる。

次の自分のターン終了時までこのカードの表示形式は変更できない。

ぶつとい骨を握ったガチムチ系オークが、その骨を軽く振り回してから器用にブーメランよろしく投げつけた。見かけによらず器用なのね。そう思いながら見ていると、自分のところに帰ってきた骨を掴み損ねて転んで頭を打った。よって前言撤回。

ジャイアント・オーク 攻2200↓電池メン―単三型 守200

0（破壊）

ジャイアント・オーク 攻2200↓守0

電池メン―単三型 守2000↓1000

「それからワイトキングも、双頭の雷龍に攻撃して！」

ワイトキング 攻5000↓双頭の雷龍 守2100（破壊）

「これでターンエンド、だってさ」

「俺のターン、ドロ―！よし、やはり俺のデッキは間違っていない！墓地の電池メン―単三型を二本除外して、手札から電池メン―業務用を特殊召喚！」

もはや冷蔵庫並みのサイズになった馬鹿でかい電池が、ちよつと放電してる赤青二本のコードを振り回しながらなぜか空から降ってくる。よつぽど重いらしく、かなりの砂埃が立ち上がった。そして砂埃越しでも目立つ、ロボットのよう光る両目。

電池メン―業務用

効果モンスター

星8 / 光属性 / 雷族 / 攻2600 / 守 0

このカードは通常召喚できない。

自分の墓地の「電池メン」と名のついたモンスター2体を

ゲームから除外した場合のみ特殊召喚できる。

1ターンに1度、自分の墓地の雷族モンスター1体をゲームから除外して発動できる。

フィールド上のモンスター1体と魔法・罠カード1枚を選択して破壊する。

電池メン―業務用 攻2600

「そして効果発動！俺の墓地の電池メン―単一型を除外して、ワイトキング及び俺のセットカードを破壊する！」

「そんな、ワイトキングー」

『ま、ワイトキングの復活は戦闘破壊限定だからな。ただ、思い切ったな三沢。そいつはずいぶんと分の悪い賭けだぞ？』

「え、なんで？おかしなところでもあったっけ？」

『いや、あながちミスとも言い切れねえんだがな。まあ結局のところ、全部は夢想次第だな』

「そして俺の破壊したカード、呪われた棺の効果発動だ！もつとも君の手札は0枚、ジャイアント・オークを破壊することになるんだがな」

呪われた棺

通常罠

セットされたこのカードが破壊され墓地へ送られた時、

相手は以下の効果から1つを選択して適用する。

●自分の手札をランダムに1枚捨てる。

●自分フィールド上に存在するモンスター1体を破壊する。

「うう………ジャイアント・オークを破壊、だつて」

「今だ、業務用！単三型は守備表示のまま、ダイレクトアタック！バッテリースパーク・インダストリー！」

電池メン―業務用 攻2600↓夢想 LP4000（直接攻撃）

夢想 LP4000↓1400

「俺はこれでターンを終了する」

夢想 LP1400 手札：0 モンスター：0 魔法・罠：0

三沢 LP500 手札：0 モンスター：電池メン―業務用（攻）、

電池メン―単三型（守） 魔法・罠：0

『はたして今のバトル、単三型で攻撃しなかったのが吉と出るか凶と出るかね』

「……………カードを一枚セットしてターンエンド、だつて」

「俺のターン、ドロ―……………業務用、そのままダイレクトアタック！バッテリースパーク・インダストリー！」

「まだ私も負けないよ！トラップ発動、闇よりの罠！」

「闇よりの罠だ?!?だが、君が使ったトラップは針虫の巣窟くらいしか……………はっ！」

「トラップ……………トラップ……………あー、思い出した！」

『サンダー・ブレイクで破壊されたアレ、だな。まったく、仕事しないかと思ったら最後にオイシイとこ持ってきやがって』

「1000のライフを払って、墓地のミラーフォースの効果をコピー!!」

闇よりの罠

通常罠

自分が3000ライフポイント以下の時、

1000ライフポイントを払う事で発動する。

自分の墓地に存在する通常罠カード1枚を選択する。

このカードの効果は、その通常罠カードの効果と同じになる。

その後、選択した通常罠カードをゲームから除外する。

夢想 LP1400↓400

聖なるバリア―ミラーフォース―

通常罨（準制限カード）

相手モンスターの攻撃宣言時に発動できる。

相手フィールド上に攻撃表示で存在するモンスターを全て破壊する。

「くっ、確かに予想外だったが、まだまだ勝負はこれからだ！」

夢想 LP400 手札：0 モンスター：0 魔法・罨：0

三沢 LP500 手札：0 モンスター：電池メン―単三型（守）

魔法・罨：1（伏せ）

「確かにそうだね、だってさ。私がこのドロで勝利の一手を掴まないと……………ドロー！」

『さあて、何を引いた？』

「貪欲な壺、発動するよ。墓地のマッド・デーモン、ジャイアント・オーク、龍骨鬼、スカル・コンダクター、カードカー・Dをデッキに戻して2枚ドロ……………そしてランサー・デーモンを召喚するよ」

『まーた壺か』

貪欲な壺

通常魔法（制限カード）

自分の墓地のモンスター5体を選択して発動できる。

選択したモンスター5体をデッキに加えてシャッフルする。

その後、デッキからカードを2枚ドロする。

ランサー・デーモン

効果モンスター

星4／闇属性／悪魔族／攻1600／守1400

相手フィールド上に守備表示で存在するモンスターを

攻撃対象とした自分のモンスターの攻撃宣言時に発動する事ができる。

そのモンスターが守備表示モンスターを攻撃した場合、

その守備力を攻撃力が超えていれば、

その数値だけ相手ライフに戦闘ダメージを与える。

この効果は1ターンに1度しか使用できない。

ランサー・デーモン 攻1600

「ならそ攻撃する前に、こちらのトラップを通してもらおう！ライフを半分払い異次元からの帰還だ、電池メン―単三型を二本、単一型を一本守備表示で特殊召喚する！ここでこのターンを耐えきって、次のドロ―で「エレキ」のモンスター、ダイレクトアタッカーを引くことさえできれば直接攻撃で……………!!」

異次元からの帰還

通常罠（制限カード）

ライフポイントを半分払って発動できる。

ゲームから除外されている自分のモンスターを

可能な限り自分フィールド上に特殊召喚する。

この効果で特殊召喚したモンスターはエンドフェイズ時にゲームから除外される。

電池メン―単三型×3 守3000

電池メン―単一型 守1900

三沢 LP500↓250

「ならこっちはマジックカード、生者の書―禁断の呪術―を発動！あなたの業務用を除外、私のワイトキングを復活させるんだって」

「馬鹿な、俺の計算の上を行くというのか?!」

生者の書―禁断の呪術―

通常魔法

自分の墓地に存在するアンデット族モンスター1体を選択して特殊召喚し、

相手の墓地に存在するモンスター1体を選択してゲームから除外する。

ワイトキング 攻5000

「ワイトキングで単三型に攻撃、さらにランサー・デーモンの効果発動！ワイトキングに貫通能力を！後はお願い、ワイトキング！」

「俺の負け、か……………」

ワイトキング 攻5000↓電池メン―単一型 守1900（破壊）

三沢 LP250↓0

「おめでとう、夢想！それと残念だったね、三沢」

「残念？何を言ってるんだ。勝てなかったのは確かに悔しいが、これもお前のためじゃないか」

「え？どゆこと？」

『いや、え？って何言ってるんだお前は』

「よろしくね、清明。明後日は一緒に勝とうね、だつてさ」

「明後日……………っ!!」

『忘れてたのか。……………馬鹿』

「あ、ああ、うん、こつちこそよろしくね、夢想。そ、それじゃデツキ調整でもしようか！ね、ほらほら行こつ！」

「え、ええ」

「じゃあ俺はイエロー寮に帰るぞ。このデツキもまだまだ課題がある」

「うん、三沢もありがとー！」

「あー、なんか思い出したら色々吹っ切れたし、デュエルしたくなってきたな。早く帰ってこないかな」

そうぼやきながら窓の外を見ると、いつの間にか夕方になっていた。もうそろそろ、皆が帰ってくるころだろうか。

一方そのころ、レッド寮へと向かう道では。十代、翔、三沢、隼人、俺のメンバーが先勝報告を一人寂しく寮の中にいるであろう清明にするため帰り道を歩いていた。

「いやー、何とか勝てたな、翔！」

「はい、よかつたツス〜！」

「おいおい、何も泣くことないじゃないかよ」

「だってアニキ、僕もう嬉しくて！」

正直、ここで聞くのも無粋だとは思う。でもやっぱり気になるし、もし俺の思っている通りの理由なら間違っても清明に聞かせるわけにはいかん、とすると今しかチャンスはない。

『……………水差して悪いが、ちよつといいか十代。昨日からずっと気になってることがあるんだが、俺の代わりに三沢に聞いてくれねえか？』

「ああ、いいぜ。なあ、三沢」

「ああ、どうした十代？」

『昨日のデュエルだが、最後のところで業務用の効果を使えばお前が勝ってたんじゃないのか？単三型と闇よりの罫を破壊して。お前に限って気づかないなんてことはないだろ』

「ホントだ……………！三沢、どうしてお前、昨日のデュエルではわざと負けたんだ？」

「おいおい、一体何のことだ？俺がわざと負けるとでも？」

『三沢、教えてくれ』

「なあ三沢、教えてくれよ」

一度はとぼけた三沢もさすがに誤魔化しきれないことを悟ったのか、諦めたように口を開いた。

「おいおい、それを俺の口から言えと？恥ずかしいじゃないか」

「恥ずかしい？ああなるほど、そういうことっスね」

『やっぱり、な』

「え、どういうことだよ、わかんねえ！」

そう言っって頭を抱える十代に、やれやれといった感じの三沢が説明をする。

「いいか、十代」

部屋の机にデュッキのカード、全59枚を並べて特に何をするでもなくそれを見てみると、ドアがノックされる音がした。多分十代達が帰ってきたんだろう。

「おかえり、ドアは開いてるよー。どうだった？」

「じゃあお邪魔するよ、だつてさ」

予想に反して返ってきた返事は、明日一緒にタッグを組むパートナーのもの。一瞬返事に詰まった間に部屋の中に上り込んできて、ナチュラルに僕のすぐ隣に座る。多分今、僕の顔はかなり赤いだろう。心臓もバクバクいってるし。え、何コレ。もしかして今あれですか、二人つきりってヤツですか!?

「じゃあ明日の作戦でもたてようか、なんだつて」

「う、うん！明日もよろしく！」

「あの二人の邪魔をするなんて、無粋以外のなんでもないじゃないか。なあ？」



## ターソン10 激突！襲い来る門番の魔手！

昨日寝て朝起きたら日付が一つ進んでました。

『……………何を言ってるんだお前は』

「いやほらだってアレじゃん、個人的にはもう昨日の時点で今日という日が来なくても別に文句なかったんだよ？やだよ退学とか」

『もう負け試合前提かい。いーから起きた起きた、さっさと着替えてメシ食って来い』

ぶつくき言いながら体を起こし、布団をはねのけてベッドから降りる。とはいえ、別に僕だって本気で言ってるわけじゃない。一つの冗談、軽口のようなもの。……………半分はね！まあそれはそれとしては、メザシと白米と味噌汁とたくあんでも食べに行こう。

「お、起きてきたか」

「おはようツス、清明君」

「おはようなんだな、清明」

「うん、おはよー」

もう食事中だったいつもの三人に軽く挨拶して席に着くと、後ろから声をかけられた。

「おはようなんだニヤ、清明君。今日は先生も見に行くから、頑張って欲しいのニヤ」

「びつくりさせないでくださいよ先生……………でも、頑張りますよ。そういうや先生、今日の相手って一体誰なんですか？」

「申し訳ないですが、それはまだ教えるわけにはいけないのニヤ。クロノス先生から釘を刺されているのニヤ」

む、またクロノス先生か……………あの人ホントにレッド嫌いだなあ。まあ、どんなところにも一人くらいは合わない人っているもんだよね。

「よし、それじゃあ行こうか。大丈夫？緊張してない？だつてさ」

「うん、こっちはへーき。でもさ」

「どうかしたの？だって」

所変わってデュエルちょっと前の控え室。ついさつきまで応援にいろんな知り合いが来てくれてたけど、今は僕ら以外誰もいない。もう出番まで10分もないからのんびり駄弁ってる暇はないんだけど、どうしても先に一言だけ、彼女には言っておきたいことがあった。「…………今更だけどき。ごめん夢想、わざわざこんなことに付きあわせて」

今更この話題を持ち出したところで意味がないのはわかってる。第一お礼だったら昨日のうちに何回も繰り返したし。でも、しつこいって思われてるかもしれないけど、こっちのけじめとしてもう一回だけ言っておきたかったんだよね。空気読んで部屋の外で待機してるユーノには感謝してます。

「ううん、大丈夫だよ。全然気にしないで、だつてさ」

ちよつと笑いながらこっちを振り向き、安心させるように返事を返す夢の姿は、なんだか僕には眩しく感じられて。

「う、うん……………」

まともに目を合わすこともできずに赤くなった顔を伏せて、ちよつぱり気弱な返事を返すことしかできなかった。情けないよね、自分から話振つといて。

「あ、そろそろ時間だ。行く？だつて」

「そう、だね……………ありがとう」

こんな所でも気を遣わせちゃったんだろうか。でもおかげで、いいタイミングで気持ちを切り替えることができた。今回のデュエルは人生懸かっているんだ、メンタルが弱くつちや話にならない。だから今は、これでいい……………んだらう、多分。

「それでは、準備はよろしいのーネ？」

「僕はいつでも！」

「私もいいよ、だつてさ」

「ドロップアウトボーイ、あなたには聞いてないのーネ！」

「……………あ、さいですか」

「私もいいぞ」

「こちらもだ」

最後の二つは僕らの対戦相手、迷宮兄弟のもの。あのデュエルキング武藤遊戯と、その最高の友たる凄腕ギャンブルデュエリスト城乃内克也のコンビを苦戦させたというその実力……まあ並みのものではないんだろう。でなきやわぎわぎ呼び出すとは思えない。そんなことを考えながら悶々としていると、あちらの方から挨拶をしてきた。

「遊野清明、といったか。本日はよろしく頼む」

「あ、はい」

「われわれとしてもお前個人に恨みはないがこれも仕事のうち、すまないが全力で行かせてもらう」

「……………ええ、こちらこそよろしくお願いします」

なんだろう、第一印象は絶対関わり合いになりたくない感じだったのに。なんか思ったよりいい人だった。手加減なんてできないし、できたとしてもする気はないけど。

「それでは、ルールを確認しますーノ。フィールド及び墓地は共有、ライフポイントは共同で4000。以上ですーノ！それでは、デュエル開始ナノーネ！」

「**「デュエル!!!」**」

デュエルディスクのランダム機能が示した先攻は……………僕だ！

「僕のターン、ドロー！」

『よし、このカードだ。何が来ても対応できるようにしとけよ』

「わかってるって！フィールド魔法、伝説の都 アトランティスを発動！さらに氷弾使いレイスを守備表示で召喚、カードを一枚伏せてターンエンド」

氷弾使いレイス 守800↓1000 攻800↓1000 ☆  
2↓1

フィールドが水属性モンスターのレベルを1下げる、海底に沈んだ都に変わる。そしてそこにレベル4以上のモンスター相手の戦闘では破壊されない安定の壁役、レイスが陣取る。更にセットカードも

あるから守りはだいぶ固まったはずだけど………さあ、一体どんな手を使ってくるかな？

「私のターン、ドロー」

次のターンプレイヤーは、迷の字がある兄の方らしい。正直頭の文字がなかったら全然見分け付かないけど、言ったら怒られそうだからやめとこう。

「相手の場にモンスターが存在して自分の場に存在しない時、バイス・ドラゴンは攻守を半分にして特殊召喚できる！」

『今だ、モンスター効果発動！』

「うん！バイス・ドラゴンの特殊召喚により、手札のドラゴン・アイスを捨ててそのまま墓地から特殊召喚！」

バイス・ドラゴン 攻2000↓1000 守2400↓1200

ドラゴン・アイス

効果モンスター

星5／水属性／ドラゴン族／攻1800／守2200

相手がモンスターの特殊召喚に成功した時、

自分の手札を1枚捨てる事で、このカードを手札または墓地から特殊召喚する。

「ドラゴン・アイス」はフィールド上に1枚しか表側表示で存在できない。

ドラゴン・アイス 守2200↓2400 攻1800↓2000

☆5↓4

「くっ、さらに壁が増えたか………まあいい、バイス・ドラゴンをリリースしてアトランティスの効果でレベルが1下がった水魔神―スーガを召喚！」

「しまった、アトランティスのせいだ！」

水の文字が書かれた青い魔神が、激流の中から顔を覗かせる。

水魔神―スーガ

効果モンスター

星7／水属性／水族／攻2500／守2400

このカードが相手のターンで攻撃された場合、

そのダメージ計算時に発動する事ができる。  
その攻撃モンスター1体の攻撃力を0にする。

この効果はこのカードがフィールド上に表側表示で存在する限り1度しか使用できない。

水魔神—スーガ 攻2500↓2700 守2400↓2600

☆7↓6

「そしてフィールド魔法、死皇帝の陵墓を発動！アトランティスを上書きする！」

みるみるうちに海の水が干上がっていき、残った遺跡も地面から生えてきた巨大な陵墓に塗り替えられてしまう。毎回思うけど、フィールド魔法のソリッドビジョンって妙に気合入ってるよね。

死皇帝の陵墓

フィールド魔法

お互いのプレイヤーは、アドバンス召喚に必要な

モンスターの数×1000ライフポイントを払う事で、

リリースなしでそのモンスターを通常召喚できる。

氷弾使いレイス 守1000↓800 攻1000↓800 ☆

1↓2

ドラゴン・アイス 守2400↓2200 攻2000↓1800

☆4↓5

水魔神—スーガ 攻2700↓2500 守2600↓2400

☆6↓7

「そして魔法カード、二重召喚を発動……………このカードで私はもう一回の通常召喚が可能となる。そして陵墓の効果により、2000のライフを払うことで陵墓のはにわを使い、手札の風魔神—ヒューガを召喚！」

いきなりフィールドに竜巻が巻き起こり、その風の中から現れる風の字を持つ緑の魔神。これで……………

『これで、二体目か』

「だ、大丈夫かな？」

『お前の相方を信じてやれ。こっちができることはこのセットカード

ぐらいいしか特にないんだ』

風魔神―ヒューガ

効果モンスター

星7／風属性／魔法使い族／攻2400／守2200

このカードが相手のターンで攻撃された場合、

そのダメージ計算時に発動する事ができる。

その攻撃モンスター1体の攻撃力を0にする。

この効果はこのカードがフィールド上に表側表示で存在する限り1度しか使用できない。

迷宮兄弟 LP4000↓2000

風魔神―ヒューガ 攻2400

「そして、ヒューガでドラゴン・アイスを攻撃！魔風衝撃波！」

風魔神―ヒューガ 攻2400↓ドラゴン・アイス 守2200

(破壊)

「くっ……………」

「他にすることはない。カードを一枚セットして、ターンエンドだ」

清明&夢想 LP4000 手札：清明×2、夢想×5 モンス

ター：氷弾使いレイス(守) 魔法・罠：1(伏せ)

迷宮兄弟 LP2000 手札：兄×0、弟×5 モンスター：水

魔神―スーガ(攻)、風魔神―ヒューガ(攻) 魔法・罠：1(伏せ)

場：死皇帝の陵墓

場：死皇帝の陵墓

「私のターン、ドロ―だね。氷弾使いレイスをリリースして、龍骨鬼をアドバンス召喚！」

龍骨鬼 攻2400

「龍骨鬼で、風魔神―ヒューガを攻撃！」

「相打ち狙いだ?!?だが無駄だ、ヒューガの効果発動！龍骨鬼の攻撃力を0にする、リフレクト・ストーム・バリケード！」

「……………計画通り、だつてさ」

「何!?!」

龍骨鬼 攻2400↓0

龍骨鬼 攻0（破壊）↓風魔神―ヒューガ 攻2400

清明&夢想 LP4000↓1600

「教えてあげる、なんで私が死皇帝の陵墓の効果を使わずに龍骨鬼を出したのか。龍骨鬼の効果によって、戦闘を行った魔法使い族………つまりヒューガを破壊するよ！」

「なんだと!？」

「そうか、アドバンスで龍骨鬼を出せばライフの差は400で済むけど陵墓の効果を使えば1400、その差を嫌ったから」

『はいはい説明お疲れさん』

龍骨鬼の投げつけた骨はヒューガの息によって弾かれ龍骨鬼に突き刺さってしまうが、その直後に口から火の玉を吐き出してヒューガを火だるまにする。2体のモンスターが倒れるのは、ほぼ同時だった。

「カードを三枚セットして、ターンエンドだつてさ」

「私のターン、ドローだ!」

次のターンプレイヤーは宮の字が書かれた弟の方。兄の方が一ターンで三魔神のうち2体を出してくるタクティクスを持ち主だから、多分こつちも同じくらい強いんだろう。

「魔法カード、死者蘇生を発動!対象はもちろん風魔神―ヒューガだ」  
『まさか、このターン中に奴を出す気か!?まあ、原作者えりやありえん話でもないか』

再び巻き起こる竜巻から姿を見せる緑の魔神。また帰ってきてちやつたか………。

風魔神―ヒューガ 攻2400

「そしてメインフェイズ、手札からマツボツクル一体を捨てることにより、コロボツクリを特殊召喚する。さらにマツボツクルがコロボツクリの効果で捨てられたため、マツボツクルも特殊召喚だ」

コロボツクリ 攻200

マツボツクル 攻400

『来るぞー!』

「そして私は、この二体をリリースすることで手札の雷魔神―サンガ

を召喚する！」

どこからともなく数本の稲妻が飛んできて、その落下地点にそびえ立つ雷の名を持った魔神シリーズ最後の一体。まさかこんな早くに出してくるなんて！

雷魔神―サンガ

効果モンスター

星7／光属性／雷族／攻2600／守2200

このカードが相手のターンで攻撃された場合、

そのダメージ計算時に発動する事ができる。

その攻撃モンスター1体の攻撃力を0にする。

この効果はこのカードがフィールド上に表側表示で存在する限り1度しか使用できない。

「……………っ、ならここで私のトラップを発動！サンガの攻撃力は1500以上、奈落の落とし穴で破壊からの除外だってさー！」

「甘い！速攻魔法、収縮を発動！サンガの攻撃力を元々の攻撃力の半分……………つまり1300にすることで、奈落の対象範囲外にする！」

「そんな、夢想のトラップがかわされた!?!」

『カウンターの一つや二つでわめくな！落ち着いて深呼吸して、もう一回周りの状況を見ろ！お前の伏せたりバースは一体何のためにあるってんだ!』

「そうか、僕の伏せたカードはメタル・リフレクト・スライム……………あの三体じゃ、越えられない守備力だ」

『ああ。ふつうこんな状況なら、合体せずにバトルフェイズに行くはずだ。その方が確実だしな。だからこのターンは耐え切れる……………はずだ』

メタル・リフレクト・スライム

永続罫

このカードは発動後モンスターカード（水族・水・星10・攻0／守3000）となり、

自分のモンスターカードゾーンに守備表示で特殊召喚する。

このカードは攻撃する事ができない。（このカードは罫カードとし



でも扱う)

「ふっ………俺は、フィールド上にいる三魔神をリリースする！出  
でよ、ゲート・ガーディアン！」

『何い!?』

「う、うそつきー!!」

三体の魔神が上下に積み重なり、最強の門番たる巨人が誕生する。  
いいかそこ、乗っただけとか言うなよ！絶対に言うなよ!!

ゲート・ガーディアン

効果モンスター

星11／闇属性／戦士族／攻3750／守3400

このカードは通常召喚できない。

自分フィールド上に存在する「雷魔神―サンガ」「風魔神―ヒュー  
ガ」

「水魔神―スーガ」をそれぞれ1体ずつリリースした場合に特殊召喚  
する事ができる。

ゲート・ガーディアン 攻3750

「う、嘘でしょ……?」

『まだまだ！墓地からドラゴン・アイスの効果発動!』

「そっか！手札のハリマンボウを捨てて、墓地のドラゴン・アイスの特  
殊召喚！さらにハリマンボウの効果で、ゲート・ガーディアンの攻撃  
力を下げる!!」

ハリマンボウ

効果モンスター

星3／水属性／魚族／攻1500／守 100

このカードが墓地へ送られた時、

相手フィールド上に表側表示で存在するモンスター1体を選択し  
て発動する。

選択した相手モンスターの攻撃力は500ポイントダウンする。

ドラゴン・アイス 守2200

ゲート・ガーディアン 攻3750↓3250

「ゆけ、ゲート・ガーディアンでドラゴン・アイスに攻撃だ!」

「夢想、僕のカードを！」

「ごめんね清明、トラップ発動！メタル・リフレクト・スライム！」

「む？守備力3000か。だがゲート・ガーディアンは敵ではないわ！ゲート・デストラクション!!」

メタル・リフレクト・スライム 守3000

ゲート・ガーディアン 攻3250↓メタル・リフレクト・スライム 守3000 (破壊)

「いいだろう、私はこれでターンエンドだ」

「待つて、エンドフェイズにトラップカード発動、針虫の巣窟！自分のデッキの上からカードを5枚墓地に送るんだってさ」

今落ちたカードはワイトが二枚にワイト夫人が一枚、永続魔法のつまづきにタスケルトンか。相変わらずいい落ちしてるなあ。

清明&夢想 LP1600 手札：清明×1、夢想×2 モンスター：ドラゴン・アイス (守) 魔法・罫：1 (伏せ)

迷宮兄弟 LP2000 手札：兄×0、弟×0 モンスター：ゲート・ガーディアン (攻) 魔法・罫：1 (伏せ) 場：死皇帝の陵墓

場：死皇帝の陵墓

「僕のターン、ドロー！………クツ！」

『まだまだ！諦めたらそこで試合終了なんだよ！だからお前は、そのカードをセットするんだ！』

「………カードを一枚セット、ターンエンド」

「私のターン！カードを一枚セットしてドラゴン・アイスに攻撃！ゲート・デストラクション！」

「夢想在墓地に送ったタスケルトンの効果発動！除外して、その攻撃を無効に！」

ゲート・ガーディアンは拳の前に一匹の子豚が立ちふさがり、体を風船のように膨らませて攻撃をなんとか弾いてくれた。

タスケルトン

効果モンスター

星2 / 闇属性 / アンデット族 / 攻 700 / 守 600

モンスターが戦闘を行うバトルステップ時、

墓地のこのカードをゲームから除外して発動できる。  
そのモンスターの攻撃を無効にする。

この効果は相手ターンでも発動できる。

「タスケルトン」の効果はデュエル中に1度しか使用できない。

「ちっ、まあいい。私はターンエンドだ」

清明&夢想 LP1600 手札：清明×1、夢想×2 モンス

ター：ドラゴン・アイス（守） 魔法・罫：2（伏せ）

迷宮兄弟 LP2000 手札：兄×0、弟×0 モンスター：ゲ

ト・ガーディアン（攻） 魔法・罫：2（伏せ） 場：死皇帝の陵墓

場：死皇帝の陵墓

「私のターン、ドロ！魔法カード、暗黒界の取引を発動！全員カードを一枚ドローして、そのあと手札を一枚捨てるんだって。さらに魔法カード、おろかな埋葬を発動！デッキにいるモンスター1体を墓地に……この効果で私は、ワイトを墓地に送るんだってさ」

『ぼちぼちワイトがたまってきたな……まあタイミング的にもそろそろだろうな』

「だね」

「もう準備は整ったかな？これが私の、無敵の切り札！ワイトキング、召喚！」

ワイトキング

効果モンスター

星1／闇属性／アンデット族／攻 ？／守 0

このカードの元々の攻撃力は、自分の墓地に存在する「ワイトキング」

「ワイト」の数×1000ポイントの数値になる。

このカードが戦闘によって破壊され墓地へ送られた時、

自分の墓地の「ワイトキング」または「ワイト」1体を

ゲームから除外する事で、このカードを特殊召喚する。

「今の私の墓地には針虫の巣窟で送ったワイトモンスターが三体、暗黒界の取引で送ったぶんが一体、おろかな埋葬で送ったぶんが一体……攻撃力は、5000になるんだってさ」

「レベル1で攻撃力5000のモンスターだと!？」

『うし、やっぱり期待を裏切らねえな』

ワイトキング 攻0↓5000

「ワイトキング、お願い!トワイライトダンシング!」

「よし、これで大ダメージを!」

『……………いや、まだまだっばいな』

「え?」

「まだまだ勝負はこれからだ!我らは負けぬ、決して負けぬ!この瞬間、トラップカードを二枚発動だ!一枚目、攻撃の無敵化!この一つ目の効果により、ゲート・ガーディアンは破壊されない!」

ゲート・ガーディアンの巨大な拳とワイトキングの拳が激突する直前、不思議なオーラがゲート・ガーディアンの全身を包み込んだ。そして次の瞬間、両方のパンチのあまりの威力に衝撃波が巻き起こる。

攻撃の無敵化

通常罠

バトルフェイズ時にのみ、以下の効果から一つを選択して発動できる。

●フィールド上のモンスター1体を選択して発動できる。

選択したモンスターはこのバトルフェイズ中、

戦闘及びカードの効果では破壊されない。

●このバトルフェイズ中、自分への戦闘ダメージは0になる。

「でも、そのカードならダメージは受ける!やっぱり大ダメージだ!」

「ふっ、聞いていなかっただのか?私はトラップを『二枚』発動するといったんだぞ?」

「じゃあ、もう一枚!？」

「そうだ!二枚目、聖なる鎧—ミラーメール!ゲート・ガーディアンよ!ワイトキングのその力を、お前のものにするのだ!」

拳をぶつかり合わせたまま膠着状態に陥っていたゲート・ガーディアンがまばゆい光に包まれ、ワイトキングをついに力技で殴り飛ばしてしまった。そんな、あのワイトキングが……………。

聖なる鎧—ミラーメール

通常罠

自分フィールド上に表側表示で存在するモンスターが  
攻撃対象に選択された時に発動する事ができる。

攻撃対象モンスターの攻撃力は、

攻撃モンスターとの攻撃力と同じになる。

ゲート・ガーディアン 攻3250↓5000

ワイトキング 攻5000 (破壊) ↓ゲート・ガーディアン 攻5

000

『…………やるじゃねえか』

「ワイトキングは自身の効果で、戦闘破壊された時に墓地のワイトを  
除外して特殊召喚できるよ。戻ってきて、ワイトキング……………」

ワイトキング 攻0↓4000

「私はこれでターンエンド、だって」

『攻撃表示、か。まあ実際どうしようもないし、ああするしかないのか  
ね』

「私のターン、ドロロー。ふむ…………あの伏せカードがいい加減目障り  
だな。魔法カード、大嵐を発動！場の全ての魔法・罠カードを破壊す  
る！」

「!？」

夢想の伏せていた最後のカードは…………自分フィールドのモンス  
ターが攻撃された時に、攻撃をするモンスターの攻撃力の半分の数値  
分攻撃対象モンスターの攻撃力をアップさせるトラップ、ハーフ・カ  
ウンター。これまでゲート・ガーディアンの攻撃が守備表示モンス  
ターだけにしかなかったために発動されなかった、攻撃反応型のカー  
ドだ。そして、僕の伏せていたカードも破壊される。これでバックは  
から空きになり、残ったのはワイトキングとなかなか狙われなかった  
ドラゴン・アイスの二体だけ。とすれば当然、攻撃対象は。

「ゲート・ガーディアンで、ワイトキングを攻撃！ゲート・デストラク  
ション！」

ゲート・ガーディアン 攻5000↓ワイトキング 攻4000

(破壊)

「くっ……ごめんね清明、だつてき。……清明？」

「ふむ、もう絶望で声を出すこともできんか。だが恨んでくれるな、これでターンエンドだ」

「……………だ」

「何？」

「……………定。……………だ」

「もう一度言え、聞こえないぞ」

聞こえない？ならもう一回言おうじゃないの！ニヤリと笑ってからもう一度、今言ったことを大声で繰り返す。

「対象を指定！ゲート・ガーディアンだ!!」

「一体何の話をしているんだ!?!」

「わからないんなら見てみなよっ!」

恐る恐るといった風に、迷宮兄弟が仁王立ちするゲート・ガーディアンの方に目をやると。

パン、パン、パアン!!と、いきなり数発の銃声が響き、銃弾をまともに喰らったゲート・ガーディアンが、その攻撃力がうそみたいにあっけなく倒れてきた。

「そんな、我らのゲート・ガーディアンが」

「だが一体なぜ……む、なんだそのモンスターは!?!」

そう言って迷宮兄が指差したのは、腕を組んで防御姿勢をとるドラゴン・アイスの隣でまだ煙を上げる銀色のライフルを肩に担ぎ、雪のたくさんついた防寒具を身にまとった一人の男。今回の逆転のキーになったカードだ。

「エンドフェイズ時に、さっきの大嵐で破壊された白銀のスナイパーの効果によってゲート・ガーディアンを破壊、さらにスナイパーを特殊召喚したのさ!」

『やれやれ、大嵐してくれてよかったぜ。あれがなかったら正直どうしようかと思った』

「そ、そんな馬鹿な……私のせいで負けとなってしまうのか……」

白銀のスナイパー

効果モンスター

星4 / 地属性 / 戦士族 / 攻1500 / 守1300

このカードは魔法カード扱いとして

手札から魔法&罠カードゾーンにセットできる。

魔法&罠カードゾーンにセットされたこのカードが

相手のカードの効果によって破壊され墓地へ送られたターンのエ

ンドフェイズ時、

このカードを墓地から特殊召喚し、

相手フィールド上のカード1枚を選択して破壊する。

白銀のスナイパー 攻1500

「それじゃあ僕のターン……ゲート・ガーディアンがそっちのエアスなら、こつちもエースカードで行くよ！ドラゴン・アイスと白銀のスナイパーをリリースして……こいつが僕の切り札だ！霧の王を召喚！」

霧の王

効果モンスター

星7 / 水属性 / 魔法使い族 / 攻 0 / 守 0

このカードを召喚する場合、生け贄1体

または生け贄なしで召喚する事ができる。

このカードの攻撃力は、生け贄召喚時に生け贄に捧げた

モンスターの元々の攻撃力を合計した数値になる。

このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、

いかなる場合による生け贄も行う事ができなくなる。

霧の王 攻0 ↓ 3300

「後は任せたまよ、霧の王でダイレクトアタック！ミスト・ストラングル!!!」

「うおおおおつ!!!」

霧の王 攻3300 ↓ 迷宮兄弟 (直接攻撃)

迷宮兄弟 LP2000 ↓ 0

「いいデュエルだった、礼を言おう」

「いえ、こちらこそ。ありがとうございました、迷宮兄弟さん」

「いい経験になりました、だつてさ」

無事にデュエルも終わり、退学の話もなかったことに。いやー、よかつたよかつた。そして迷宮兄弟が帰っていく船をユーノに夢想と一緒に見送って………つてアレ？ユーノがいない？どこ行つたんだ一体。しようがない、探しに……。

「ねえ、清明」

「うん、なーに？」

探しに行くのは後でいいか。どうせ迷子になるような奴じゃないし。

「今朝、言つてたよね。私に、ありがとうつて」

「うん、まあ言つたけど？」

「あの時は別に気にしないでつて言つたけど、本当はすごく嬉しかつたんだ。なんだつて」

「嬉しかつた？なんで？」

どうもよくわからない。何かしてもらつたらお礼を言うなんて、当たり前行為じゃないだろうか。それを言うと彼女は、ちよつぱり困つたような、でも嬉しそうな顔をして。

「まったく、もう少しデュエル以外のことには鋭くなつてもいいんじゃないの？だつてさ。じゃあ私はもう寮に帰るからね」

そう言つて、素早い身のこなしで歩き出してしまった。なんだか話が急展開過ぎてついていけないかつたので、慌てて後を追いかける。もうちよつとわかりやすい説明をお願いしたいんだけどなあ………。

「あ、そうだ」

ピタリと歩みを止めて、くるりと振り返る夢想。その顔がちよつぱり赤く染まつて見えたのは、夕日のせいだろうか。

「なに？」

「えーつと、その………またいつか、一緒にタッグ組もうね。だつて」

ちよつぱりあつた溜めが若干気になつたけど、まあどうでもいいか。もしもまたタッグを組む機会があるんなら、僕にとつてはもちろん大歓迎だ。だから、この返事は胸を張つて言うことができる。



「……………うん！そのときもまた、よろしく頼むよ！」

## ターナー 1 知略！水でなくなる鉄砲水！

〜遊野清明の日記より、抜粋〜

○月△日

今日で、あの退学がかかった制裁デュエルから4日が経った。考えてみれば早いものだ。迷宮兄弟の二人は今どうしているんだろう？ 思ったより悪い人たちじゃなかったから、元気にしているといいんだけど。そういえばあの制裁デュエルも、もとはといえば廃寮に忍び込んだことが原因なんだっけ。タイタンはまだインチキ闇のデュエルを続けてるんだろうか。なんとなくあの人にはまた会いそうな予感がする。

と、日記なんだから今日の事も書かなきゃだめか。今日は、イエロー対レッドで野球をした。途中までは十代無双だったけど、途中でいかなかった三沢が入ってきてからガラリと流れが変わってポッコポッコにやられてしまった。………悔しい。18対8とかバスケやってんじやないんだからさ。

そのあとは三沢の部屋に行って簡単なバイト、人の部屋にペンキ塗りたいくるのって楽しいね。終わったらいエロー寮のごはんをご馳走になったけど、日ごろからあんな贅沢なもん食ってんだろうか。だもしたら思う所がないわけでもない。いやメザシ美味しいけど。

そして、万丈目と三沢の退学及び進級を賭けたデュエル。ダメーじこそ結構食らってたもののあの万丈目相手に………なんかこう、全部計算づくって感じのデュエル展開だった。夢想には勝ててなかったけど、やっぱり学年トップだけのことはある。そう言ったらなぜかユーノが憐みの混じったすごく微妙な顔でこっち見てたけど。

さて、今日はもうこれぐらいで寝よう。なにしろ明日は、授業が終わったら三沢とデュエルする約束を取り付けたんだ。一体何属性のデッキを使ってくるんだろうか。ウォーター・ドラゴンは炎のメタカードだから残り5属性のどれかだろうけど、どんな手を見せてくれるのか楽しみだ。

『ふと読んでみて思った。あれ、これ最後の一文フラグなんじゃねえ

の?』

「いよっしゃあ、今日も授業終了っ!」

さあ、ここからはデュエルの時間。ここ最近、偽物だったとはいえ闇のゲームに学園最強と言われるカイザーとのタッグデュエル、こっちの退学が懸かった迷宮兄弟戦……純粋に楽しいだけじゃない、あの程度の緊張が混じったデュエルばかりやってたからね。もつとも、その緊張感があつたからこそ楽しい、なんて思ってる自分がいることも否定できないけど。ただ今日みたいな、難しいことを考えずにできる……いや、別に普段も考えてないかな?まあとにかく、デュエルはやっぱ楽しみだ。

「おお清明、今日はお前と三沢のデュエルだったな!早く見たいぜ!!」  
全く十代は……これ、僕のデュエルなんだよ?って言ってやろうかとも思ったけど、まあデュエルならなんでもいいコイツにとってはその馬の耳になんとやらだろう。

「慌てなさんな十代、まずはイエロー寮まで行くよっ!」

「え、なんで僕らがイエローまで行くんスか?」

「なんだ翔、お前聞いてなかったのか?」

意外そうに聞く翔と、それに説明する十代。まあ理由といつても、昨日三沢の部屋に塗ったペンキが乾いただろうからってんで荷物の中に入れなおすの手伝うだけなんだけど。ついでにまたご飯奢ってもらえればなおよし。

『というか、十代はちゃんと聞いてたんだな。授業態度はアレなのに』  
「いや、アレって……確かにほぼ毎時間寝てるけどさ」

『毎回起こそうとするお前も、こう、何というかお人よしだよなあ』  
「だって、ほっとくわけにもいかないでしょーが」

いくらなんでも隣の席で寝てばっかいられたらこっちも困るし。  
ねえ?

「……………ってわけだ。わかったならさっさと行こうぜ、翔!清明! ユーノ!」

あ、終わったらしい。なら、返事はただ一つ。

「りょーかい！」

「アニキ、ちよつと待ってよ〜」

『うし、行くか』

「お、来てくれたか。なら悪いけど、このタンスのそっち側を持ってくれないか？」

「よし三沢、任せろ！」

そう言うが早いかわっせわっせと一人で荷物を部屋の中に運び入れる十代。さすがの三沢もこの働きっぷりは予想外だったのか、驚き半分呆れ半分といった感じでその様子を見ている。だから、なんで十代がこんなに熱くなってるんだろう。

『とかなんとか言いながらちやぶ台を一人で持って平気な顔して動き回る清明であった』

「るっさい」

「さてと、三沢。準備はいい？」

「ああ、いつでもいいぞ。それじゃあ……………」

「デュエル!!」

「先攻は……………お、また僕か。なら僕は、グリズリーマザーを守備表示で召喚！」

全身真っ青な毛に包まれた熊が、片膝をついて腕を組み、防御の構えをとる。

グリズリーマザー

効果モンスター

星4 / 水属性 / 獣戦士族 / 攻1400 / 守1000

このカードが戦闘によって破壊され墓地へ送られた時、

デッキから攻撃力1500以下の水属性モンスター1体を

表側攻撃表示で特殊召喚できる。

「ほう、リクルーターか」

『守備表示でマザーか……ま、慎重にやるのは悪いことじゃないしな』

「カードを一枚セットして、ターンエンド」

「ならば俺のターン、ドロロー……そういえば、まだ俺が何属性のデッキを使うかは教えてなかったな」

「え？ああ、そうだね」

「ならば今、このカードで教えよう。来い、ハイドロゲドン！」

「んなつ!?ハ、ハイドロゲドン!?!」

『あ、やっぱりフラグだった』

フラグ？何のことだろう。でも、ハイドロゲドンがいるってことはあのデッキは水のデッキ………ということとは、エースモンスターはやっぱり昨日も見たウォーター・ドラゴンのはずだ。でもどうしてだろう、僕がいつもの【ポロロッカ】を使うことなんて誰でも予想できるだろうに………それとも、まだ何か考えがあるのだろうか。だとしたら、一体どんな？

ハイドロゲドン

効果モンスター

星4／水属性／恐竜族／攻1600／守1000

このカードが戦闘によって相手モンスターを破壊し墓地へ送った時、

自分のデッキから「ハイドロゲドン」1体を特殊召喚する事ができる。

「……………いや」

『ん、どした?』

「どうせ考えたってわかんないんだ!だったら迷うだけ馬鹿らしい、何が来ようと全力で行くまできー!」

『はは、違いねえや。よし、俺は何も言わんようにするから全力でやって来い!』

「なら行くぞー!ハイドロゲドンでグリズリーマザーを攻撃、ハイドロ・ブレスー!」

ハイドロゲドンが口から吐き出した泥水が、グリズリーマザーを吹き飛ばす。

ハイドロゲドン 攻1600↓グリズリーマザー 守1000(破壊)

「グリズリーマザー、効果発動！僕は、二体目のグリズ……」

そこまで言いかけて、はっとハイドロゲドンの特殊効果を思い出した。危ない危ない、ここで二体目を出してたら後続のハイドロゲドンにやられるところだった。なら攻撃表示だからダメージは痛いけど、これも必要経費！

「……いや、氷弾使いレイス等特殊召喚！」

どこからともなくひらりと飛んでフィールドに立つ、相変わらず人間にしか見えないけど海竜族な僕のデッキにとって頼れる壁役のうち一人。今回も頼りにしてるよ、毎度毎度悪いけど。

氷弾使いレイス

チューナー(効果モンスター)

星2/水属性/海竜族/攻 800/守 800

このカードはレベル4以上のモンスターとの戦闘では破壊されない。

「ふ、やはりレイスを出してきたか。清明、もし俺がこの展開を予想していたとしたらどうする？」

「え………？そんな、僕がレイスを出すことを読んでたって？」

『いや、別におかしな話じゃねえぞ。俺らのデッキの中では、この状況ではレイスを出すのが最善手………逆に言えば、出すモンスターはほぼ100パーセントでレイスになる。読むことだつてできない話じゃない』

な、なるほど。でも、この展開が読めていたとしても、レベル4のハイドロゲドンじゃ突破はできないはず。少なくともこのターンは耐え切れる！

「まずハイドロゲドンの効果で、デッキから二体目のハイドロゲドンを特殊召喚する。そしてこのハイドロゲドンで、氷弾使いレイスを攻撃！ハイドロ・ブレス！」

「残念、氷弾使いレイスはレベル4以上のモンスターとの戦闘では破壊されないよ」

「そんなことはわかっているさ、速攻魔法スター・チェンジャーを発動！二つ目の効果により、このハイドロゲドンのレベルを3にする！」

「そんな……………」

スター・チェンジャー

速攻魔法

フィールド上に表側表示で存在するモンスター1体を選択し、

以下の効果から1つを選択して発動できる。

●そのモンスターのレベルを1つ上げる。

●そのモンスターのレベルを1つ下げる。

ハイドロゲドン ☆4↓3

ハイドロゲドン 攻1600↓氷弾使いレイス 攻800（破壊）

清明 LP4000↓3200

「……………」

「そしてレイスを戦闘破壊したことで、このハイドロゲドンも効果発動する。三体目のハイドロゲドンでダイレクトアタックだ！ハイドロ・ブレス！」

ハイドロゲドン 攻1600↓清明（直接攻撃）

清明 LP3200↓1600

「俺はカードを3枚伏せて、ターンエンドだ」

清明 LP1600 手札：4 モンスター：0 魔法・罠：1（伏

せ）

三沢 LP4000 手札：1 モンスター：ハイドロゲドン×3

魔法・罠：3（伏せ）

「僕のターン、ドロロー！」

三沢の場にいるのは、もう後続を呼ぶことのできないハイドロゲドンが三体。そして、全員攻撃力は1600……………何とかなりそうではあるんだけど、そうすると気になるのがあの伏せ2枚。ええい、気にしてたって仕方ない！って言いたいところなんだけど、あいにく今は守るしかないか。

「僕は、モンスターを一体セット。さらに永続魔法、強者の苦痛を発動してターンエンド」

強者の苦痛

永続魔法

相手フィールド上のモンスターの攻撃力は、

そのモンスターのレベル×100ポイントダウンする。

ハイドロゲドン×2 攻1600↓1200

ハイドロゲドン 攻1600↓1300

「ふむ………ということとは、多分こいつらではあのセットモンスターを突破できないな。ならば俺は、オキシゲドンを召喚！」

オキシゲドン

効果モンスター

星4／風属性／恐竜族／攻1800／守 800

このカードが炎族モンスターとの戦闘によって破壊され墓地へ送られた時、

お互いのライフに800ポイントダメージを与える。

オキシゲドン 攻1800↓1400

「そして魔法カード、ボンディング―H2Oを発動！自分の場にいる水素と酸素を化学反応させ、水の生成を行う！来い、ウォーター・ドラゴン!!」

「出た、三沢の水デッキの切り札………」

でも、一体何を考えているんだろう？僕のデッキに炎系のモンスターはいないから、実質バニラ同様のウォーター・ドラゴンを見上げながら、必死に考える。

ウォーター・ドラゴン

効果モンスター

星8／水属性／海竜族／攻2800／守2600

このカードは通常召喚できない。

「ボンディング―H2O」の効果でのみ特殊召喚する事ができる。

このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、

炎属性と炎族モンスターの攻撃力は0になる。



このカードが破壊され墓地へ送られた時、自分の墓地に存在する「ハイドロゲドン」2体と「オキシゲドン」1体を特殊召喚する事ができる。

ウォーター・ドラゴン 攻2800↓2000

「ウォーター・ドラゴンで、セットモンスターを攻撃！アクア・パニツシャー！」

「へへ、油断したね三沢！リバーモンスター、ペンギン・ナイトメアの効果発動！対象はもちろんウォーター・ドラゴン!!」

ウォーター・ドラゴン 攻2000↓??? (破壊)

ペンギン・ナイトメア

効果モンスター

星4 / 水属性 / 水族 / 攻 900 / 守 1800

このカードがリバーした時、

相手フィールド上のカード1枚を選択して持ち主の手札に戻す。

また、このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、

自分フィールド上の水属性モンスターの攻撃力は200ポイントアップする。

『これが通ればだいぶ有利にはなる………が』

「やはりそのカードか、だがそれも計算のうちだ！カウンタートラップ、リ・バウンドを発動して、ペンギンの効果を無効にする！」

『まあ、通しちゃうくんねえだろうな』

リ・バウンド

カウンタートラ

フィールド上のカードを手札に戻す効果を相手が発動した時に発動できる。

その効果を無効にし、相手の手札・フィールド上からカードを1枚選んで墓地へ送る。

また、セットされたこのカードが相手によって破壊され墓地へ送られた時、

デッキからカードを1枚ドローする。

「さてと、それじゃあり・バウンドの二つ目の効果だ。そのセットカー

ドを墓地に送ってもらう」

「メタル化・魔法反射装甲まで……………」

「そして、残ったレベル3のハイドロゲドンでダイレクトアタックだ。  
ハイドロ・ブレス！」

ハイドロゲドン 攻1300↓清明（直接攻撃）

清明 LP1600↓300

「俺は、これでターンエンドだ」

清明 LP300 手札：3 モンスター：0 魔法・罫：強者の

苦痛、0

三沢 LP4000 手札：1 モンスター：ウォーター・ドラゴン（攻）、ハイドロゲドン（攻） 魔法・罫：2（伏せ）

うわ、完全に動きが読まれてる。これはかなりマズいな、こっちのライフがなくなる前に早く勝負を決めないと。

「ドロー、ブリザード・ドラゴンを攻撃表示で召喚！そして効果発動、パーフェクトフリーズツ！ウォーター・ドラゴンを氷漬けにしてやれ！」

ブリザード・ドラゴン

効果モンスター

星4／水属性／ドラゴン族／攻1800／守1000

相手フィールド上に存在するモンスター1体を選択して発動する。  
選択したモンスターは次の相手のエンドフェイズ時まで

攻撃宣言をする事ができず、表示形式を変更する事もできない。

この効果は1ターンに1度しか使用できない。

青いドラゴンが口から猛吹雪を吐き出すと、見る見るうちにウォーター・ドラゴンが氷に包まれていく。

「それからブリザード・ドラゴンで、ハイドロゲドンを攻撃！」

ブリザード・ドラゴン 攻1800↓ハイドロゲドン 攻1300

（破壊）

三沢 LP4000↓3500

「よし、初ダメージだ！さらにカードを2枚セットして、ターンエンド」

「俺のターン、ドロロー……特にすることもないか。カードを一枚セツトして、カードカー・Dを召喚して効果を発動する。強制エンドフェイズでターンエンドだ」

カードカー・D

効果モンスター

星2 / 地属性 / 機械族 / 攻 800 / 守 400

このカードは特殊召喚できない。

このカードが召喚に成功した自分のメインフェイズ1に

このカードをリリースして発動できる。

デッキからカードを2枚ドロローし、このターンのエンドフェイズになる。

この効果を発動するターン、自分はモンスターを特殊召喚できない。

清明 LP300 手札：1 モンスター：ブリザード・ドラゴン

(攻) 魔法・罫：強者の苦痛、2 (伏せ)

三沢 LP3500 手札：2 モンスター：ウォーター・ドラゴ

ン(攻) 魔法・罫：3 (伏せ)

そして三沢のターンが終わると同時にウォーター・ドラゴンが氷を弾き飛ばして復活する……けど。

「僕のターン、ブリザード・ドラゴンの効果をまた発動！パーフェクトフリーズ！」

結局また吹雪に包まれ、あっという間に氷漬けになるウォーター・ドラゴン。ふ、不憫だ。やってんの僕なんだけど。

「それから、ドリル・バーニカルを召喚、そしてこのモンスターは自分の効果でダイレクトアタックができる！ドイルミサイル、発射！」

ドリル・バーニカル

効果モンスター

星3 / 水属性 / 水族 / 攻 300 / 守 0

このカードは相手プレイヤーに直接攻撃する事ができる。

このカードが直接攻撃によって相手ライフに戦闘ダメージを与える度に、

このカードの攻撃力は1000ポイントアップする。

ドリル・バーニカル 攻300↓三沢（直接攻撃）

三沢 LP3500↓3200

ドリル・バーニカル 攻300↓1300

「僕はこれで、ターンエンド」

「ならば俺のターン！まず俺は、黄泉ガエルを召喚。そして大嵐を発動する！」

「このタイミングで大嵐!?!」

黄泉ガエル

効果モンスター

星1／水属性／水族／攻 1000／守 100

自分のスタンバイフェイズ時にこのカードが墓地に存在し、自分フィールド上に魔法・罠カードが存在しない場合、

このカードを自分フィールド上に特殊召喚する事ができる。

この効果は自分フィールド上に「黄泉ガエル」が

表側表示で存在する場合は発動できない。

大嵐……：お互いの魔法・罠を問答無用で全破壊するわかりやすくてかつ強力な効果を持ったカード。でも、今は三沢だって伏せカードを三枚も伏せている。巻き込まれる自分のカードだって相当な量になるのに。ということとは、あの黄泉ガエルには何か裏がある……？『それくらい一発で気づけばバカ。むしろなんで裏がないなんて思えるんだよ』

「うう………」

「そして俺は、この大嵐にチェインして三枚のトラップを発動する。DNA改造手術、暴君の威圧、そして……：……：宮廷のしきたりだ！」

DNA改造手術

永続罠

種族を1つ宣言して発動する。

このカードがフィールド上に存在する限り、

フィールド上に表側表示で存在する全てのモンスターは宣言した種族になる。

暴君の威圧

永続罨

自分フィールド上に存在するモンスター1体をリリースして発動する。

このカードがフィールド上に存在する限り、

フィールド上に表側表示で存在する元々の持ち主が自分となるモンスターは、

このカード以外の罨カードの効果を受けない。

宮廷のしきたり

永続罨

このカードがフィールド上に存在する限り、

お互いのプレイヤーは「宮廷のしきたり」以外の

フィールド上に表側表示で存在する永続罨カードを破壊できない。

「宮廷のしきたり」は自分フィールド上に1枚しか表側表示で存在できない。

「まずDNA改造手術の効果で炎族を選択し、これでウォーター・ドラゴンの効果によりすべてのモンスターの攻撃力が0になる。だが黄泉ガエルをリリースして発動された暴君の威圧の効果で、俺のモンスターは炎族にならない。そして大嵐の効果で互いの魔法・罨が全破壊されるが、宮廷のしきたりの効果でこのカードが身代わりになる」  
「う、うわぁ……って、ぼけっとしてる場合じゃないか!」

ブリザード・ドラゴン 攻1800↓0

ドリル・バーニカル 攻1300↓0

ウォーター・ドラゴン 攻2000↓2800

「生憎と、攻めの一手がないな。カードを一枚セットしてターンエンド」

『首の皮一枚残して繋がった、ってか?ギリギリ助かったな』

清明 LP300 手札:1 モンスター:ブリザード・ドラゴン

(攻)、ドリル・バーニカル(攻) 魔法・罨:0

三沢 LP3200 手札:0 モンスター:ウォーター・ドラゴ

ン(攻) 魔法・罨:DNA改造手術、暴君の威圧、1(伏せ)

「僕のターン、ドロー！」

今のところ三沢の引きが絶妙に悪い(らしい)せいでぎりぎりライフは残ってる。残ってはいるけど、もう息も絶え絶えだ。おまけにウォーター・ドラゴンの特殊効果さえ強引に発動された。

「ブリザード・ドラゴンの効果で……………」

「待った、その前にこのカードを発動しよう。速攻魔法、禁じられた聖杯！ブリザード・ドラゴンの攻撃力を400ポイントアップさせる代わりに、効果を無効にする！」

吹雪を吐き出そうとしたブリザード・ドラゴンに、頭上にいきなり現れたコップの水が降りかかってしまう。その水が目に入ったのか、いったん吹雪をストップして前足で目をこすり始める。マズイ、止められた！

「なら、モンスター二体を守備表示に！さらにモンスターを……………セットで召喚、ターンエンド！」

「俺のターン。コアキメイル・アイスを召喚して、ドリル・バーニカルを攻撃！」

コアキメイル・アイス

効果モンスター

星4 / 水属性 / 水族 / 攻1900 / 守1200

このカードのコントロールは自分のエンドフェイズ毎に、

手札から「コアキメイルの鋼核」1枚を墓地へ送るか、

手札の永続魔法カード1枚を相手に見せる。

または、どちらも行わずにこのカードを破壊する。

また、自分のメインフェイズ時に手札を1枚墓地へ送って発動できる。

フィールド上の特殊召喚されたモンスター1体を選択して破壊する。

コアキメイル・アイス 攻1900 ↓ドリル・バーニカル 守0 (破壊)

「追撃だ！ウォーター・ドラゴンで、ブリザード・ドラゴンを攻撃！ア  
クア・パニツシャー！」

ウォーター・ドラゴン 攻2800↓ブリザード・ドラゴン 守1000 (破壊)

「あと一回攻撃が通ればいいんだがな……。まあいい、ターンエンドだ。そしてこの時、コアキメイル・アイスのデメリット効果によりこのカードは自壊する」

清明 LP300 手札：1 モンスター：??? 魔法・罠：0

三沢 LP3200 手札：0 モンスター：ウォーター・ドラゴン

ン(攻) 魔法・罠：DNA改造手術、暴君の威圧

「僕のターン、ドロー!!」

場の状況から見れば、多分これがラストドローだろう。そして実は、もう勝ち筋は見えてきている。ただあと一枚、あのカードさえ来てくれれば……………。

「頼むから来てくれ……………よし!!三沢、こっからが僕の逆転劇だ!まず、夜叉を通常召喚!!」

「なに、夜叉だと!」

夜叉

スピリットモンスター

星4 / 水属性 / 天使族 / 攻1900 / 守1500

このカードは特殊召喚できない。

召喚・リバースしたターンのエンドフェイズ時に持ち主の手札に戻る。

このカードが召喚・リバースした時、相手フィールド上に存在する魔法・罠カード1枚を選択して持ち主の手札に戻すことができる。

「その様子だと、効果は知ってるみたいだね!夜叉の効果で、DNA改造手術をバウンスするよ!」

「くっ、やられたか」

「さらに、セットモンスターを反転召喚……………このモンスターは、ニードル・ギルマンさ」

ニードル・ギルマン

効果モンスター

星3 / 水属性 / 海竜族 / 攻1300 / 守 0

このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、  
自分フィールド上の魚族・海竜族・水族モンスターの  
攻撃力は400ポイントアップする。

ニードル・ギルマン 攻1300↓1700

「だが、そのモンスターではウオーター・ドラゴンを突破できないぞ  
?」

「もちろんわかってるさ。だから僕は、魔法の呪文を唱えるのさ」

『あいつまさか、魔法の呪文ってアレの事か?アレ出そうとしてんのか?』

「魔法の呪文、ボチミズゴタイ!墓地にグリズリーマザー、氷弾使いレイス、ペンギン・ナイトメア、ブリザード・ドラゴン、ドリル・バーニカルが存在することで、氷霊神ムーラングレイスを特殊召喚!!」

『あ、やっぱり。ボチヤミサンタイと同じノリで出てくる奴だ』

氷霊神ムーラングレイス

効果モンスター

星8／水属性／海竜族／攻2800／守2200

このカードは通常召喚できない。

自分の墓地の水属性モンスターが5体の場合のみ特殊召喚できる。

このカードが特殊召喚に成功した時、

相手の手札をランダムに2枚選んで捨てる。

「氷霊神ムーラングレイス」のこの効果は1ターンに1度しか使用できない。

このカードがフィールド上から離れた場合、

次の自分のターンのバトルフェイズをスキップする。

氷霊神ムーラングレイス 攻2800↓3200

「なに、俺のコンボを崩しただど!」

「知らなくつても無理はないさ、なにしろこのムーラングレイスは、まだ三沢には見せてないカードだからね」

覚えてる人はいるだろうか、僕が万丈目と戦った日、新パックの中であつた一つだけ買占めから逃れたものがあつたことを。その中に入つていた進化する翼とハネクリボーLV10こそ十代が貰つて



いったものの、このムーラングレイスは僕のものになった。

「つまりは、そういうことさ」

「なるほど……俺もまだまだ、勉強不足だったってことか。この点には反省しないとな」

「いくよ！ムーラングレイスで、ウォーター・ドラゴンを攻撃！ムーラングレイスレーザー！」

ムーラングレイスの額の角から発射された青いビームが、ウォーター・ドラゴンを打ち抜く。やった、これで残りのモンスターたちで直接攻撃すれば……!!

氷霊神ムーラングレイス 攻3200↓ウォーター・ドラゴン 攻2800 (破壊)

三沢 LP3200↓2800

「清明、確かに君は強い。だが、今はまだ俺の方が一枚上手だ！ウォーター・ドラゴンの、もう一つの特効果！このカードが破壊された時、墓地のハイドロゲドン2体とオキシゲドン1体を特殊召喚する！」

「えっ……？」

『えっ、じゃねえよ……いつからウォーター・ドラゴンの効果が一つだと勘違いしてたんだお前は。しかし、少しはタクティクスも上がってきたのかと思った瞬間にこんなボケかますんだもん！お前は』

「う、うるさい！夜叉、オキシゲドンに攻撃！ニードル・ギルマン、ハイドロゲドンに攻撃！」

夜叉 攻1900↓オキシゲドン 守800 (破壊)

ニードル・ギルマン 攻1700↓ハイドロゲドン 守1000 (破壊)

「スピリットモンスターは、ターンエンド時に手札に帰る……僕はこれで、ターンエンド」

「俺のターン、ドロロー……貪欲な壺、この効果で墓地のハイドロゲドンとオキシゲドン、カードカー・Dにコアキメイル・アイス、そしてウォーター・ドラゴンをデッキに戻して2枚ドロローする。これで終わりだ清明、アビス・ソルジャーを召喚！」

アビス・ソルジャー

効果モンスター

星4／水属性／水族／攻1800／守1300

1ターンに1度、手札から水属性モンスター1体を墓地へ捨て、フィールド上のカード1枚を選択して発動できる。

選択したカードを持ち主の手札に戻す。

「ニードル・ギルマンの攻撃力を超えるアタッカーが……」

「アビス・ソルジャーの効果で、手札のグリズリーマザーを捨ててムラングレイスを手札に。そしてそのまま、ニードル・ギルマンを攻撃！」

アビス・ソルジャー 攻1800↓ニードル・ギルマン 攻170

0（破壊）

清明 LP300↓200

「ハイドロゲドンでダイレクトアタック！ハイドロ・ブレス!!」

「うわあああつっ!!」

ハイドロゲドン 攻1600↓清明（直接攻撃）

清明 LP200↓0

「いやー、負けちゃったか」

「だが、いいデュエルだったと俺は思うぞ。ほら、一人で立てるか?」

そう声をかけながら、へたり込んでる僕に手を差し出す三沢。素直にその手を掴んで立ち上がる。

「センキュ、三沢」

「この程度のこと、気にするな。それじゃあ皆、今日も手伝ってくれたお礼にメシぐらい奢ってやるよ」

「おお、ホントか三沢!やったな、翔!」

「やったツスね、アニキ!」

そう言っつて、何とはなしにみんなで笑いあう。負けちゃったのは悔しいけど、まだまだ僕だつて若いんだからこれから強くなれる、はず。とりあえず今は、ただ飯を美味しくいただくとしよう。

# ターン12 野性! Super Animal Learning!

その知らせは、いきなりやってきました。

「大変だー、万丈目君が行方不明になっちゃったー!」

「……………へ?」

どうも話を聞くと、今朝早くに荷物をまとめてデュエルアカデミアから出ていく姿が何人かに見られていたらしい。……………見てたんなら止めてやれよお前ら。

「まさか、この前のデュエルに負けたのを苦にして岸壁から飛び降りたとか」

「馬鹿野郎、そんなことあるワケない……………よな、清明?」

「いやなんでそこ僕に振るの。ない、よね?」

『ノーコメント』

今回のことに関しては、ユーノも答える気はないらしい。だ、大丈夫かなあ……………。

「しっかし十代、よくまあこんな所見つけたね」

今僕たちがいるのは、なんでもこの学校から安全に出られる先生も知らない抜け道、というかただの穴の中。ホントにいつの間にかこのもの見つけたんだろう。

「ああ、これか?この道は、俺たちの部屋に置いてあった何年も前の先輩のノートに書いてあったんだ。俺も最初に見た時はビックリしたぜ、まさかこんなものを作ってあったなんてな」

「実際に使うのはこれが初めてなんスけどねー。ちゃんと外につながっててよかったツスよ」

『マジか、この道そんないわくつきのだったのかよ。つーかななことやってる間にデュエルの腕でも磨いてりやいいのに』

と、そんなことを言いながら外に這い出る。ユーノ、多分そこは言っちゃいけないかと。さてと、万丈目を探し出しますかね。

「ちよつと待ちなさい、貴方達」

「げえ、あ、明日香?」

「なによ、人を化け物か何かみたい。それで貴方達、一体どこに行くつもりなの?」

また出たよこの人。なんかちよいちよいこの明日香、ジュンコ、もえのコンビには会うけど、実はかなりの暇人なんじゃないだろうか。「さすがにほっとけないし、万丈目見つけて首根っこひつつかんでモアカデミアに戻すつもりだったんだけど。そっちこそ何やってんのさ」

「私たちも同じよ。放っておくわけにもいかないでしょう?」

「なるほど、つまりそっちもサボりだと」

「うるさいわね」

う、マズイ。一言余計だったか。と、とりあえず別の話題をつと。

「あ、あれ、そういえば今日は夢はないの?」

「本当は彼女もついてくるつもりだったんだけど、途中であの子だけ見つかって捕まっちゃって……」

『……あー、じゃあ今回は欠席か』

かわいいそうに……捕まえたのがクロノス先生あたりならまだブルー寮補正がかかって大したおとがめなしで済むかもしれないけど、どうなんだろう。とりあえず今は無事に済むようにお祈りでもしておこう。

「おーい、万丈目ー!!」

『声も姿も聞こえず見えず、か』

「うーん、探す場所が悪いのかな?」

『さあな。それより十代はどこだ、十代は』

それとなく隣でふわふわしてるユーノに鎌をかけてみるけど、引つかかってはくれなかった。残念。というか、真剣な話十代達は今頃どこにいるんだろう。さっきまで一緒にいたんだけど、ねえ。いやあのその、ほら。

『十代、翔、明日香、ジュンコ、ももえー。迷子になりやがったこの馬

鹿が探してますよー』

「るっさいー!」

だって!なんか歩いてたら草むらが動いた気がしたんだもん!ちよつと見に行っただけなのに!というかユーノも別に止めなかつたじゃん、それを馬鹿扱いはいくらなんでも理不尽だと思うんだけどなあ……………」

『見に行くのは別に止めねえけど、迷子になれなんて誰も言ってねえよ!』

「んな無茶な!子供か!!」

『幽霊に年は関係ねーよーだ!』

「そゆこと言ってるんじゃないよ!」

『……………ハア』

力いっぱい怒鳴り合ってちよつと気持ちが悪く落ちて着いたところで、改めてユーノに声をかける。

「んでさ、結局どうしよつか。アカデミアどつちかなあ」

『んー、もうそろそろだと思っただけだな』

「もうそろそろ?何が?」

そう尋ねた瞬間。

「キヤー、助けて明日香さーん!!」

「悲鳴!?あつちの方か!」

『ほらな』

「ちよつと、いい加減に降ろしてよ!!」

あれ?なんかさつきより声が近くなってるような?気のせいかな、どんだんこつちに来てるような……………」

「キヤー!ってあれ、あなたは」

「ジュンコ……………だよな?何やってんのこんなところで」

「ウキ」

「えつと、あのさ。なにがなんだかさっぱりわからないんだけど、この猿何者?」

目の前の木の枝にいるのは、なんかサイボーグっぽい猿。そして片手で抱えられたジュンコ。何この絵面。

「ちよつとあなた！そんなところでぼうつとしてないで、早く私を助けなさい！」

「いやそんなこと言われましてもどうやって、ってねえ猿」

「ウキー？」

「その腕についているもの、もしかしくなくてもデュエルディスクでしょ」

「ウキーウキー」

「……………えつと。お前、デュエルできるの？」

「ウキ」

「うーん、じゃあこうしよつか。猿、今から僕とデュエルだ。僕が勝つたらその子は返してもらおうよ」

『んで、お前が負けたら？』

「あーそつか、じゃあ僕が負けたら……………負けたら……………負けたら……………う、とりあえずデュエルだ！」

『なにその理不尽』

「ウキー！」

「なんでもいいですけど、頼んだわよー！」

『デュエル!!』

「……………つてちよつと待って、何今の声」

『あの機械からだな。さすがに相手がウキーウキー言ってるだけじゃデュエルにならないだろ。それからな清明、アイツは猿じゃない』

「え、どこが？猿にしか見えないんだけど」

『あいつは正式名称 Super Animal Learning  
……………通称SALだ』

「おお、なんかかつこいい！じゃあSAL、僕が先行をもらおう！シャクトパスを攻撃表示で召喚！」

『(カツコいい……………?)』

シャクトパス 攻1600

「これでターンエンド」

【私のターン、ドロー。私は、怒れる類人猿バーサークゴリラを召喚、シャクトパスに攻撃】

怒れる類人猿

効果モンスター

星4／地属性／獣族／攻2000／守1000

このカードが表側守備表示でフィールド上に存在する場合、このカードを破壊する。

このカードのコントローラーは、このカードが攻撃可能な状態であれば

必ず攻撃しなければならない。

怒れる類人猿 攻2000↓シャクトパス 攻1600（破壊）

清明 LP4000↓3600

「くっ、だけどこの時、シャクトパスの特殊効果発動！このカードを怒れる類人猿に装備！」

ゴリラがその怪力をフルに使ってシャクトパスをぶん殴るも、かろうじて堪えたシャクトパスが8本のタコ足でゴリラをぐいぐいと締め付ける。そのままゴリラに引っ付いて猿のフィールドまで行ってしまうた。

シャクトパス

効果モンスター

星4／水属性／魚族／攻1600／守 800

このカードが相手モンスターとの戦闘によって破壊され墓地へ送られた時、

このカードを装備カード扱いとしてその相手モンスターに装備できる。

この効果によってこのカードを装備したモンスターは

攻撃力が0になり、表示形式を変更できない。

怒れる類人猿 攻2000↓0

「どうだ！」

【私は魔法カード、おろかな埋葬を発動。デッキからADチェンジャーを墓地に送る。そしてADチェンジャーの効果により、このカードを除外して怒れる類人猿の表示形式を守備表示に変更する。そしてこのカードのデメリット効果によって怒れる類人猿が自壊、こ

ここで1000ライフポイントを払って手札から森の番人グリーン・バブーンを特殊召喚する」

「シャクトパスの効果が無駄になった!？」

おろかな埋葬

通常魔法（制限カード）

自分のデッキからモンスター1体を選択して墓地へ送る。

ADチェンジャー

効果モンスター

星1／光属性／戦士族／攻 100／守 100

墓地に存在するこのカードをゲームから除外し、

フィールド上に存在するモンスター1体を選択して発動する。

選択したモンスターの表示形式を変更する。

怒れる類人猿 攻0↓守1000（破壊）

SAL LP4000↓3000

森の番人グリーン・バブーン

効果モンスター

星7／地属性／獣族／攻2600／守1800

自分フィールド上に表側表示で存在する獣族モンスターが

カードの効果によって破壊され墓地へ送られた時、

1000ライフポイントを払って発動できる。

このカードを手札または墓地から特殊召喚する。

【カードを二枚セットし、ターンエンド】

清明 LP3600 手札：5 モンスター：なし 魔法・罫：なし

SAL LP3000 手札：2 モンスター：森の番人グリーン・

バブーン（攻） 魔法・罫：2（伏せ）

「思ったより強いね、SAL……でも負けないよ、僕のターン、ドロロー！キララー・ラブカを通常召喚して、そのままリリース！シャークラーケンを特殊召喚！」

キララー・ラブカ 攻700

シャークラーケン



効果モンスター

星6／水属性／魚族／攻2400／守2100

このカードは自分フィールド上の水属性モンスター1体をリリースし、

手札から特殊召喚できる。

「ちよつと、何をやっているの!?!そのモンスターの攻撃力じゃあ、次のターンにやられるだけよ!?!」

「そんなことわかってるさ、ウォーターワールド発動!」

ウォーターワールド

フィールド魔法

フィールド上に表側表示で存在する水属性モンスターの攻撃力は500ポイントアップし、

守備力は400ポイントダウンする。

シャークラーケン 攻2400↓2900 守2100↓170

0

「このままグリーン・バブーンに攻撃!」

シャークラーケン 攻2900↓森の番人グリーン・バブーン 攻

2600(破壊)

SAL LP3000↓2700

「僕はこのまま、ターンエンド」

【私のターン、ドロウ。そしてリバースカード、リビングデッドの呼び声を発動。墓地のグリーン・バブーンを特殊召喚、そのままリリースしてツインヘデッド・ビーストを通常召喚する。そしてもう一枚のトランプカード、血の代償を発動。ライフポイントを500払い、手札のアクロバットモンキーを通常召喚】

リビングデッドの呼び声

永続罫

自分の墓地のモンスター1体を選択し、表側攻撃表示で特殊召喚する。

このカードがフィールド上から離れた時、そのモンスターを破壊する。

そのモンスターが破壊された時、このカードを破壊する。

ツインヘッド・ビースト

効果モンスター

星6／炎属性／獣族／攻1700／守1900

このカードは1度のバトルフェイズ中に2回攻撃する事ができる。

血の代償

永續罫（制限カード）

500ライフポイントを払う事で、モンスター1体を通常召喚する。

この効果は自分のメインフェイズ時及び

相手のバトルフェイズ時にのみ発動する事ができる。

SAL LP2700↓2200

アクロバットモンキー

通常モンスター

星3／地属性／機械族／攻1000／守1800

超最先端技術により開発されたモンキータイプの自律型ロボット。

非常にアクロバティックな動きをする。

【そして速攻魔法、野性解放を発動。対象はもちろんツインヘッド・ビースト】

野性解放

通常魔法

フィールド上の獣族・獣戦士族モンスター1体を選択して発動できる。

選択した獣族・獣戦士族モンスターの攻撃力は、

そのモンスターの守備力分アップする。

この効果を受けたモンスターはエンドフェイズ時に破壊される。

ツインヘッド・ビースト 攻1700↓3600

【バトル。ツインヘッド・ビーストで、シャークラーケンを攻撃】

「待って、ここで墓地のキラァー・ラブカの効果発動！」

墓地から一瞬だけ姿を見せた半透明のキラァー・ラブカが、触ったら痛そうな尻尾を振り回してツインヘッド・ビーストの二つある頭の

うち片方をはたいて怯ませる。

ツインヘッズ・ビースト 攻3600↓3100

【だが、このカードは自身の効果で一ターンに二回の攻撃を行える。もう一度シャークラーケンに攻撃】

「…………それは止められないよ」

ツインヘッズ・ビースト 攻3100↓シャークラーケン 攻2

900 (破壊)

清明 LP3600↓3400

【アクロバットモンキーでダイレクトアタック。アクロバット・ウツキー】

アクロバットモンキー 攻1000↓清明 (直接攻撃)

清明 LP 3400↓2400

【そしてこのエンドフェイズ時、ツインヘッズ・ビーストは野性解放のデメリット効果で破壊される。ライフを1000払い、墓地のグリーン・バブーンを特殊召喚】

『ここでバブーン出すか……………やっぱまだコンピューターが不完全なのか?』

SAL LP2200↓1200

森の番人グリーン・バブーン 攻2600

清明 LP2400 手札:2 モンスター:なし 魔法・罠:なし

し 場:ウォーターワールド

SAL LP1200 手札:なし モンスター:森の番人グリーン

ン・バブーン (攻)、アクロバットモンキー (攻) 魔法・罠:リビン

グデツドの呼び声 (無)、血の代償

「僕のターン、ドロー!」

SALの場に発動できるカードは無いし、血の代償を使おうとしても手札がない、か。よし、このデュエルはもらつて「ウッキー、ウッキー……………な、なんだ? 「ウツキー」「ウキウッキー」「キーツ」ねえなんかどンドン聞こえる数が増えてきてるんだけど、この鳴き声ってもしかしてさあ。

『猿だな』

「やっぱりー!というかさ、SALってこんなにいっぱいいるの!」  
『とりあえず後ろを見てから物を言え。今度来たのはSALじゃない、猿だ』

「発音が一緒だからわかんないんだよ!」

そう言いながら後ろをチラツと振り返ると……あ、本当だ。確かに猿だ。ごくごく普通の、どうってことない猿。なんだもう、びつくりしたなあ。

「でも、なんでこんなに猿がいるの?」

『そこはSALに聞いてみな』

「ねえSAL、もしかしてあっちの猿達は知り合いだったりする?」

「ウツキー」

「……野生に帰りたい、って?」

「ウキ」

「なるほどねえ。じゃあどうしよつか」

「ウキウツキ」

「ん、じゃあこうしよつか。いい?まずこのデュエル、僕が勝ったらその人質は放してもらおう。それでSAL、お前が勝ったらお前が野生に帰るのに協力するよ」

「ウキツ!」

「なに、疑ってんの?だいじょぶだって、このおにーさんに任せときなさい。でもまあ、それはそれでこれはこれ。デュエルは本気で行くよ!まずそっちの場に地属性モンスターが二体いることで、手札の神禽王アレクトールを特殊召喚!それから魔法カード死者蘇生、この効果でシャークラーケンキングミストを蘇生!二体のモンスターをリリースして、来い、マイファイバリット!霧の王を召喚!!」

「というか、なんであの人はナチュラルにあの猿と会話できるのかしら。レッド生だから?」

神禽王アレクトール

効果モンスター

星6／風属性／鳥獣族／攻2400／守2000

相手フィールド上に同じ属性のモンスターが表側表示で2体以上

存在する場合、

このカードは手札から特殊召喚する事ができる。

1ターンに1度、フィールド上に表側表示で存在するカード1枚を選択する。

選択されたカードの効果はそのターン中無効になる。

「神禽王アレクトール」はフィールド上に1体しか表側表示で存在できない。

死者蘇生

通常魔法（制限カード）

自分または相手の墓地のモンスター1体を選択して発動できる。

選択したモンスターを自分フィールド上に特殊召喚する。

シャークラーケン 攻2400↓2900

霧の王

効果モンスター

星7／水属性／魔法使い族／攻 0／守 0

このカードを召喚する場合、生け贄1体

または生け贄なしで召喚する事ができる。

このカードの攻撃力は、生け贄召喚時に生け贄に捧げた

モンスターの元々の攻撃力を合計した数値になる。

このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、

いかなる場合による生け贄も行いう事ができなくなる。

霧の王 攻0↓4800↓5300

「霧の王、アクロバットモンキーに攻撃！ミスト・ストラングル!!」

「ウツキー!!」

霧の王 攻5300↓アクロバットモンキー 攻1000（破壊）

SAL LP1200↓0

「さてとSAL、僕が勝ったんだから、まず最初に人質を返してくれる？」

「ウツキー……………」

しよんぼりと肩を落としながらも、木の上までするりと登ってジユ

ンコを小脇に抱えて降りてくるSAL。降りてきた辺りを見計らって、もう一度声をかける。

「そういえばさ、その機械類って自力で取れるもんなの?」

この質問には、無言で首を横に振った。なるほど、無理なのか。

「だったらほら、こつちおいで。多分とれると思、う……………あ、取れた。というかこれ、スイッチ一つで簡単に取れるじゃん」

誰がこんなものつけたのか知らないけど、雑な装置もあつたものだ。いやむしろ、こんな取り外し簡単な装置で猿がSALになるんだから大したものなのかもしれない。ま、そんなこと今はどうでもいいか。どうしてただの猿がSALになつてるかの理由は知つたこつちやないけど、本人(?)が戻りたいならそれが一番いいと思うし。「というこで、バイバイSAL。ほら、僕もまだ人探しの最中でやることあるんだから、行つた行つた」

「ウ…………ウキー?」

「助けてくれたことには一応お礼を言っておきますけど、勝手に外したりしていいのかしら?」

「いいのいいの。『勝つたら協力』とは言つたけど、『負けたら協力しない』なんて一言も言つてないんだから。僕はここで偶然ジュンコと再会した、体中に機械を付けたデュエリスト猿なんてこれっぽっちも見えない。それでいいじゃないの。ジュンコ、そつちもそれでいいね?」

『なんつっ—かお前、お人よしだよなあ……………ま、その屁理屈には大いに賛成するがね』

「レツドの言うことを聞くのも癪ですが、まあそれくらいならいいでしょう。明日香さんやももえには話しておきますけど、それ以外には黙っておくわ」

「ウキー!」

最後に一声上げ、身軽な動きで仲間の猿と一緒に森の中へひよいひよいと去っていく猿たち。

「これで一件落着、かな?」

「あ、いたいた!おーい清明!」

「ジュンコ、貴女こんなところにいたの？」

「やつほー十代、迷惑かけて悪かったね」

「明日香さん！一時はどうなるかと思いましたがよー！」

無事に感動のを再会を果たし、これでアカデミアに帰れると思つて安心したのもつかの間、十代達の後ろに見覚えのない黒スーツの銃を構えた人たちが走つてきた。

「ああそこの君、こっちの方に我々のSAL……いや、体中に機械を付けた猿が来なかつたかね？」

なんかずいぶんと物騒なもの持つてるし、ここはすつとぼけるのが得策だろう。ということ、猿たちが走つていったのとは真逆の方向を指さしておいた。

「え、えーつと、そういえば見ましたよ。た、確か僕に気付いたらこつちの子を降ろしてすぐにあつちの方に走つてつちやつたんじやないですかー？」

『嘘下手だコイツー!』

うん、自分でも今のはちよつとないな、つて思った。でま、そんなのでもあつさり騙されてくれたらしい。

「そうか、わかつた！よしお前ら、追うぞ！」

「はっ！」

そして十代がポツリと漏らした一言、

「いったいこりゃ、何の騒ぎだったんだ？」

つてというのが今日の全てを物語つてると思う。ちなみにその後結局万丈目は見つからず、しかも帰りにはレッド寮前でわざわざ張り込みしてたクロノス先生に捕まつてしまい、かなり辛い一日を過ごすことになったとだけ言っておく。というかそれ以上思い出さたくない……………。

### ターソン13 怪奇！人造人間召喚術！

アカデミアは今、冬真っ盛りです。冬休みになって他の寮の生徒は大半が島を出て行っちゃったけど、レッド寮住民は………というか、僕の周りの人たちはなぜかみんな島に残ってるので特に問題は無し。偶然って凄い。

そして今、僕らが何をしているかというところ。

「あーらよつ、と」

夜の寒い寒い空気の中、雪がしんしんと降り積もるレッド寮屋根の上での雪下ろしという苦行のような作業をしていた。明日の朝にでもやればいいと思ってたんだけど、大徳寺先生曰く『そんなのんびりしたこと言ったら確実に屋根が抜け落ちるんだニヤ』だそう。古い建物だとは前から思ってたけど、まさかそこまでひどい、じやなかった………えーつと、味がある建物だとは思わなかった。ちなみにその大徳寺先生はというと、寮の中で隼人やアラオと一緒に餅を焼いて待っている。なにこの理不尽。というか、

「十代、ホントにちゃんとやってる？なんかさつきから僕一人で頑張ってる気がするんだけど」

「え？お、おう！………よし続きだ翔、クレイマンでサイクロイドを攻撃！」

「あれ？」

なんか今、明らかにおかしい一言が聞こえたような？まあでも、きつと気のせいだろう。さすがに屋根で作業してるのが僕だけだなんてことあるわけ……

『………バカだな十代。だから言ったら、もう少し声抑えないとサボってんのばれるぞって』

「しつかりしてくださいよアニキ」

「じゅーうだーい？しよーう？ユーノ？」

「しまった!!いいや違うんだ清明！ユーノ、そうユーノが俺らがデユエルするのが見たいって言うからしかたなく………！」

『おいコラちょっと待て十代、なに人に罪かぶせようとしてんだ！』



「問答無用！今降りるから三人ともそこで待って「た、助けてくれー!!」……………え、何ごと?」

助かったあ、と下に降りてデュエルしていた三人がほっと息を吐くのを目の片隅でとらえながら、森の奥からこっちに向けて走ってくる一人のブルー生のところへ近寄る。

「えーと、いったいどうしたの?」

「た、頼む!!ヤツが来るんだ、とにかくここにかくまってくれ!!」

「高寺オカルトブラザーズ?」

「はい、僕とあと二人で結成した、デュエルモンスターズの精霊について調べる会で……………」

まあ要約すると、興味本位でサイコ・シヨツカーの精霊をこっくりさんの要領で呼び出そうとしたら三体の生け贄を要求され、アドバンス召喚に必要なリリースの事だと思い軽い気持ちでOKしたら次の日に一人、また次の日にもう一人のメンバーが行方不明になったらしい。そして彼、高寺自身も今日の昼にサイコ・シヨツカーらしき何かと遭遇したらしい。マジですかおい。ただ、いつもニコニコしてるイメージだった大徳寺先生が珍しく真面目な顔をしているところから、少なくともただ事ではなさそうさ。

「じゃあ高寺、だったか?今夜はこの寮に泊まってけよ。そのかわり、お前ブルー寮なんだろ?俺とデュエルしようぜ!!」

「ええ!?デュエル、ですか?」

「十代、ちよつと落ち着きなよ。明らかにそんな気分じゃないって様子じゃないの」

『かわいい目してんな……………俺は好きなんだよな、怯えた小動物のような目をしたヤツが』

「いきなり何言ってるのこの人」

『ここで言わなきゃ男がすたる気がした。反省も後悔もしてない。でも似合わなかったらうなあととは思ってる』

「あの、さつきから何をブツブツ言ってるんですか?」

「あ、いやいや!なんでもないよ、なんでも!」

「そう、ですか。じゃあすいません大徳寺先生、今夜だけでもここに  
厄介になつても……………」

そこまで言った時にブツン、と音がして、いきなり寮中の電気が消  
えた。

「え、停電?」

『見事なまでに真つ暗だな』

「おい翔、隼人、そんなにくつつくなよ!」

「みなさん落ち着くのニヤ、今ブレーカーを戻すのニヤ!」

そしてまた、電気がついた。こんなタイミングでいきなりブレ  
ーカーが落ちるなんて、いくらなんでも空気の読みすぎでしょ。不意打  
ち過ぎたわ。

「あれ?高寺どこ行った?」

「……………え?」

ふと見ると、さつきまで七輪のそばにうずくまってあつたまつてい  
た高寺の姿が見えない。何か動く気配がしてパツと振り向くと、そ  
こにはさつきまでいなくつた黒ずくめの格好をしたいかにも怪しい  
男が小脇に気絶した高寺を抱え、森の奥に走っていくのが見えた。

「あれって、もしかして……………」

『はら、なにボサツとしてんだ!』

「急がないと危ない!追いかけるぞ、みんな!」

「う、うん!」

「え〜つと、ここは?」

「ここは、デュエルアカデミアに電気を送る送電施設なんだニヤ。危  
ないから普段は鍵がかかっているはずなんだけどニヤ」

「あ、高寺!おい、大丈夫!」

金網で囲まれたそこにはいくつもの発電機っぽい建物が建つてい  
て、その中央にはなぜか広場……………そして、その奥に見覚えのあるブ  
ルー生が一人倒れていた。さつきの怪しい奴はいないみたいだけど、  
いったいどうなってるんだろう?と思ひながら足を踏み入れたその  
瞬間……………。

「邪魔をしないでもらおうか」

え？……まずありえないとはいえ翔や隼人のTPOを読まないはずらの可能性もあるので、ギギイツと音がしそうなぐらいぎくしやくと後ろを振り返る。

「……………この声、一体どこから？」

「きききつとお化けツスよアニキ、さっさとみんなで逃げましょうよ」

「そ、そうなんだな。とりあえず寮まで戻った方が……………」

「馬鹿野郎、高寺を見捨てる気か？俺は行くぜ！」

『よし行け清明、お前もだ！』

「ん、んな他人事だと思って！いや放っておくわけにもいかないから結局は行くんだけどさ」

『どうせ俺にとつちやあ他人事だしな。つーか膝震えてるけど大丈夫かお前』

「セリフ前半と後半の優しさの量が全然違うんだけどこれどーゆーこと!？」

相変わらずの言い合いをしながらも、おっかなびつくり近づいてみる。と、またさっきの声があった。

「お前たち、ここに何の用がある」

「うるせー！お前、もしかして本物のサイコ・ショツカーの精霊なのか？」

「……………いかにも。私の名はサイコ・ショツカー」

「やつぱりそうか……………！」

今度は僕が、その自称サイコ・ショツカーに向かって声をかける。一緒に来ておいて十代に全部任せるってのもどうかと思うし。

「ならサイコ・ショツカー、一つ聞かせてもらおうよ！一体お前は高寺と、その前にいなくなった二人をどうする気だ!!」

「知れたこと、我が復活のための生け贄となってもらう。それに、私はお前の言う三人に対してきちんと『生け贄を捧げろ』と要求し、そいつらはそれに了承した。何がおかしいのだ？」

うっ……………いくら勘違いしてたとは言え、それ言われるとつらい

なあ。でも、僕が一瞬怯んでも十代は全く迷わない。それどころか、とんでもないことを言い出した。

「だったらこうしようぜ、サイコ・シヨツカー！俺が、お前とデュエルするー！もし俺が負けたら、その生け贄とやらに俺も追加してやるよー！」

「十代……！」

「えーアニキ、その『俺たち』ってもしかして僕も入ってるんですか!？」  
「心配するなよ、翔！俺が負けるわけないだろ！」

「……なるほど。お前、それとその横にいるお前もだ。精霊を見ることができる程度の力は持っているようだし、どうせ生け贄にするなら強い力を持った人間のほうがいいだろう。その提案、乗ってやる」「そうこなくっちゃな！いくぜ、サイコ・シヨツ「待て!!」……え？」  
「精霊が見えるのは、その二人だな。まずは、そちらの人間から相手してやろう」

「え、僕!？」

ちよ、なんでいきなり僕が入るわけ!?!十代だけに危険な橋を渡らせるなんてことやったら後で自分の良心に押しつぶされそうだし断るつもりはあんまりないけど、流石に文句の一つでも言ってみようとして口を開いた瞬間、

「ちよつと待てよ、こいつは別に関係ないだろ！サイコ・シヨツカー、俺とデュエルしろ！」

どうしてこう人が何か言う暇もくれないのかねこの子は。

「弱そうな方から順に倒す、戦い方の基本だろう?」

「おいちよつとまで、その挑発乗ったあ！十代、間違っても止めないでよー！」

「え、お、おう……」

『ふふふ、弱そうな方、か……くくつ、こりやなかなかの名言来たな……ふっ』

セリフのところどころに違和感を感じてなるべく首を動かさないようにそつと後ろを振り向くと、最大限に声を立てないようにしながら体を曲げて爆笑してるユーノを視界の端でちらりと捉えた。この

デュエル終わったら、アイツはどうしてくれようか。

「デュエル!!」

宣言した瞬間に頭上の電線から雷が落ちて、そこに立っていたのはサイコ・シヨツカーそのもの。ええい、そんなことでいちいち驚いてられるかつ!

「先攻は私が貰おう。ドロー! 私は、永続魔法エクトプラズマーを發動。そして、怨念のキラードールを召喚する」

エクトプラズマー

永続魔法

各プレイヤーは自分のターンのエンドフェイズ時に1度だけ、自分フィールド上の表側表示モンスター1体を生け贄に捧げ、元々の攻撃力の半分のダメージを相手プレイヤーに与える。

怨念のキラードール 攻1600

「そして速攻魔法、手札断殺を發動。さあ、手札を入れ替えろ」

手札断殺

速攻魔法

お互いのプレイヤーは手札を2枚墓地へ送る。

その後、それぞれ自分のデッキからカードを2枚ドローする。

「カードを三枚セットしてターンエンド……の前にエクトプラズマーの効果發動! キラードールをリリースし、800ポイントのダメージを受けてもらう!」

清明 LP4000↓3200

「ぐっ………僕のターン、ドロー!」

「そこでトラップカード、ギャンブルを發動! 宣言するのは裏だ!」

「ギヤ、ギャンブル!」

サイコ・シヨツカーが發動したのは、あのデュエルキング武藤遊戯さんの親友である城之内克也さんが使ったという、外れた時の条件があまりにもキツイドローカード。そーいや城之内さんもサイコ・シヨツカーの使い手だっけ話だけ………まあ、別に関係ないだろう。って当ててるし! コイン裏出ちゃったよしっかりと!!

ギャンブル

## 通常罨

相手の手札が6枚以上、自分の手札が2枚以下の場合に発動する事ができる。

コイントスを1回行い裏表を当てる。

当たった場合、自分の手札が5枚になるようにデッキからカードをドローする。

ハズレの場合、次の自分のターンをスキップする。

「これでよし……私は、手札を五枚にする」

「き、気を取り直していくぞ！オイスターマイスターを召喚！そしてバトル！オイスターマイスターでダイレクトアタックだ！」

オイスターマイスター

効果モンスター

星3 / 水属性 / 魚族 / 攻1600 / 守 200

このカードが戦闘で破壊される以外の方法でフィールド上から墓地へ送られた時、

自分フィールド上に「オイスタートークン」(魚族・水・星1・攻 / 守0) 1体を特殊召喚する。

オイスターマイスター 攻1600 ↓サイコ・ショッカー (直接攻撃)

サイコ・ショッカー LP 4000 ↓ 2400

「エクトプラズマーがうつつとうしいな。カードを一枚セットして、エクトプラズマーの効果！行け、オイスターマイスター！」

サイコ・ショッカー LP 2400 ↓ 1600

「なんだ、あっさりダメージは通すのか……ふん、偉そうなこと言つてその程度？オイスターマイスターの特殊効果でオイスタートークンを特殊召喚、これでターンエンド」

オイスタートークン 守0

清明 LP 3200 手札：4 モンスター：オイスタートークン

(守) 魔法・罨：1 (伏せ)

サイコ・ショッカー LP 1600 手札：5 モンスター：なし

魔法・罨：2 (伏せ)、エクトプラズマー

「私のターン、ドロロー。この時、墓地にいる怨念のキラードールの効果を発動！甦れ、キラードール!!」

怨念のキラードール

効果モンスター

星4 / 闇属性 / 悪魔族 / 攻1600 / 守1700

このカードが永続魔法の効果によってフィールド上から墓地に送られた場合、

自分のターンのスタンバイフェイズ時に墓地から特殊召喚する。

「ここでトラップ発動、フィツシャーチャージ！オイスタートークンをリリースして、エクトプラスマーを破壊！」

「その程度か？ならば私もトラップ発動、サイコ・シヨックウエーブ！手札を一枚捨ててデッキからわが分身、サイコ・シヨッカーを特殊召喚する！」

フィツシャーチャージ

通常罠

自分フィールド上の魚族モンスター1体をリリースし、フィールド上のカード1枚を選択して発動できる。

選択したカードを破壊し、デッキからカードを1枚ドロローする。

サイコ・シヨックウエーブ

通常罠

相手が罠カードを発動した時、

手札から魔法・罠カード1枚を捨てて発動できる。

自分のデッキから機械族・闇属性・レベル6のモンスター1体を特殊召喚する。

人造人間―サイコ・シヨッカー

効果モンスター

星6 / 闇属性 / 機械族 / 攻2400 / 守1500

このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、お互いに罠カードの効果は発動できず、

フィールド上の全ての罠カードの効果は無効化される。

「そしてサイコ・シヨッカーの効果によりフィツシャーチャージは無

効になるが、コストにしたオイスタートークンは帰ってこない。これでお前の場はがら空きになり、私の場のモンスター総攻撃力は4000。これで私の勝ち確定したな……だが、一応他の手も打てるようにしておこう。手札のジェスター・コンフィを特殊召喚する」

ジェスター・コンフィ

効果モンスター

星1／闇属性／魔法使い族／攻 0／守 0

このカードは手札から表側攻撃表示で特殊召喚できる。

この方法で特殊召喚した場合、次の相手のエンドフェイズ時に相手フィールド上に表側表示で存在するモンスター1体を選択し、そのモンスターと表側表示のこのカードを持ち主の手札に戻す。

「ジェスター・コンフィ」は自分フィールド上に1体しか表側表示で存在できない。

「まだまだあー！その特殊召喚に対して手札のドラゴン・アイスの効果発動！手札を一枚捨てて特殊召喚、そして今捨てたハリマンボウの特殊効果により、サイコ・シヨツカーの攻撃力を下げる！」

『馬鹿だねえ、いらんことせずにそのまま攻撃すりゃあいいのに。余裕ぶっこいてるからだな』

ドラゴン・アイス

効果モンスター

星5／水属性／ドラゴン族／攻1800／守2200

相手がモンスターの特殊召喚に成功した時、

自分の手札を1枚捨てる事で、このカードを手札または墓地から特殊召喚する。

「ドラゴン・アイス」はフィールド上に1枚しか表側表示で存在できない。

ドラゴン・アイス 守2200

ハリマンボウ

効果モンスター

星3／水属性／魚族／攻1500／守 100

このカードが墓地へ送られた時、



相手フィールド上に表側表示で存在するモンスター1体を選択して発動する。

選択した相手モンスターの攻撃力は500ポイントダウンする。  
人造人間－サイコ・ショッカー 攻2400↓1900

「小賢しい真似を……まあいい、ジェスター・コンフィに装備魔法、ワンドー・ワンドを装備する。そしてワンドー・ワンドの効果でコンフィをリリースし2枚ドロウ。永続魔法ウイルスメールを発動し、怨念のキラードールを選択。直接攻撃」

『ほう、この状況でウイルスメールか。つてことはあの手札の中には大方アレだろうな、リビデあたりが入ってたんだな』

ワンドー・ワンド

#### 装備魔法

魔法使い族モンスターにのみ装備可能。

装備モンスターの攻撃力は500ポイントアップする。

また、自分フィールド上のこのカードを装備したモンスターと

このカードを墓地へ送る事で、デッキからカードを2枚ドロウする。

ジェスター・コンフィ 攻0↓500

ウイルスメール

#### 永続魔法

1ターンに1度、自分フィールド上に表側表示で存在するレベル4以下のモンスター1体を選択して発動する事ができる。

このターン、選択したモンスターは相手プレイヤーに直接攻撃する事ができる。

そのモンスターはバトルフェイズ終了時に墓地へ送られる。

怨念のキラードール 攻1600↓清明（直接攻撃）

清明 LP3200↓1600

「カードをセットし、ターンエンドだ。そしてエクトプラズマーの効果でサイコ・ショッカーをリリースし、元々の攻撃力の半分である1200ポイントのダメージを与える」

「ハリマンボウで下げた意味が……」

『いや、全くないってわけじゃねえぞ。少なくともドラゴン・アイスは生き残った』

清明 LP1600↓400

「僕のターン、ドロロー！下手に展開して激流葬とか撃たれたらやだな………ドラゴン・アイスを攻撃表示に変更して、そのままダイレクトアタック！」

ドラゴン・アイス 守2200↓攻1800

ドラゴン・アイス 攻1800↓サイコ・ショッカー（直接攻撃）

「うおおおおおおおおつつつつ!!!」

「やった！これで一件落着！」

「ふ、ふふふ」

「ははははははははっ！惜しかったな、人間！」

サイコ・シヨツカー LP1600↓700

「ラ、ライフが900しか減ってない…………でもどうして」

「理由は単純だ。私はリバースカード、ダメージ・ダイエットを発動していた」

『お、ほんとにリビデ以外の手で耐えきったか。わざわざフラグ立たたかいがあったな』

ダメージ・ダイエット

通常罠

このターン自分が受ける全てのダメージは半分になる。

また、墓地に存在するこのカードをゲームから除外する事で、

そのターン自分が受ける効果ダメージは半分になる。

そ、そんな…………状況はかなりまずい。というか勝てない。このままターンエンドしたら、エンドフェイズにエクトプラズマーで450ダメージが通る。それからサイコ・シヨツカーのターンでキラードール復活、それに合わせてドラゴン・アイス蘇生、それからウイルスメーブルの効果…………いや、それすら使う必要もないのか。バトルフェイズなんてわざわざしなくてもドロウゴーでエンドフェイズに移行してエクトプラズマーの効果を使う。ただそれだけで、僕のライフはゼロになる。でも、こんな状況だったのにユーノはまだまだ余裕っぽい。一体、なんでこんなに余裕なんだろう？まだ何か、僕の気づいてない勝ち筋があるの？

「くそっ、わからない…………」

『…………しゃーねーなあ、俺も消えたくはないし、今回は交代してやるよ。でも、こんな手ぐらい自分で気づいてほしかったぞ』

悔しくて、情けなくて、何も言い返せない。ユーノは何も言わずにポン、と僕の肩に慰めるように手を置いて、いつもとは違った優しい笑みを浮かべて見せた。

『ちよい言い過ぎたな。でも大丈夫だ、これからたっぷり強くなる時間はある。今は、そっちで俺が勝つのを見てろって』

その言葉を最後に、僕とユーノが入れ替わる。まっすぐに立ってサ

イコ・シヨツカーと対峙するユーノの背中を、ただ見ていることしか僕にはできなかった。

「よし、選手交代だぜ。今からお前をぶち倒してやるよ、精々覚悟しときな」

「様子が変わった……？……まあいい、なにをたわごとを。私の勝利は今度こそ確定している」

「さてさて、そいつはどうか？マイフェイバリットカード、霧の王を召喚！このカードは自身の効果で、リリースなしでの召喚もできるのさ」

霧の王 攻0

「ふん、いくらレベルが高くても攻撃力ゼロのモンスターに一体何ができる」

「俺の狙いはそこじゃないんだな、これが。そして墓地のハリマンボウとオイスターマイスターを除外して、墓地から爆征竜―タイダルを特殊召喚する。カードを二枚セットし、ターンエンドだ」

「エクトプラズマーの効果………なに、発動されないだど!?!」

「おい清明、お前霧の王を単なる最高打点としてしか使ってなかっただろ………まあ無理ねえけど。使ってる方も時々忘れそうになる霧の王の第二の効果！このカードがいる限り、いかなるリリースも行えない！つまり、発動条件が『モンスターを生け贄にする』のエクトプラズマーの発動はされなくなる！」

霧の王

効果モンスター

星7／水属性／魔法使い族／攻 0／守 0

このカードを召喚する場合、生け贄1体

または生け贄なしで召喚する事ができる。

このカードの攻撃力は、生け贄召喚時に生け贄に捧げたモンスターの元々の攻撃力を合計した数値になる。

このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、

いかなる場合による生け贄も行う事ができなくなる。

爆征竜―タイダル

効果モンスター

星7／水属性／ドラゴン族／攻2600／守2000

自分の手札・墓地からこのカード以外のドラゴン族

または水属性のモンスターを合計2体除外して発動できる。

このカードを手札・墓地から特殊召喚する。

特殊召喚したこのカードは相手のエンドフェイズ時に持ち主の手札に戻る。

また、このカードと水属性モンスター1体を手札から墓地へ捨てる事で、

デッキからモンスター1体を墓地へ送る。

このカードが除外された場合、

デッキからドラゴン族・水属性モンスター1体を手札に加える事ができる。

「瀑征竜―タイダル」の効果は1ターンに1度しか使用できない。

そうか、確かにこの効果を使えばダメージは通らない………そして、今ユーノが伏せた二枚のカード、あのカードさえあれば！

清明 LP400 手札:0 モンスター:霧の王(攻)、ドラゴン・

アイス(攻)、瀑征竜―タイダル(攻) 魔法・罨:2(伏せ)

サイコ・シヨツカー LP700 手札:4 モンスター:なし

魔法・罨:エクトプラズマー、ウイルスメール

「まあいい、どうせ私の場にはまだウイルスメールがあるし、第一あの霧の王は攻撃表示だ。私のターン、ドロロー！そして、怨念のキラードールを再び復活させる！」

「はっ、そいつを待ってたのさ！リバーズ発動、激流葬！」

カードから飛び出した荒れ狂う水流がフィールドを暴れ回り、合計三体のモンスターを一度に押し流していく。水が引いた時、フィールドはカラになっていた。

激流葬

通常罨(準制限カード)

モンスターが召喚・反転召喚・特殊召喚された時に発動できる。

フィールド上のモンスターを全て破壊する。

「だが、私が今ドローした死者蘇生でサイコ・ショットカーを特殊召喚すれば」

「させねえよ……………もう一枚のリバース、激流蘇生を発動！」

今度カードから溢れる水は、先ほどの水流とは真逆の力を持った水。ユーノの場に二本の水柱が立ち、その中から霧の王とドラゴン・アイス、タイダルが姿を見せる。

激流蘇生

通常罫

自分フィールド上の水属性モンスターが

戦闘またはカードの効果によって破壊され墓地へ送られた時に発動できる。

その時に破壊され、フィールド上から自分の墓地へ送られたモンスターを全て特殊召喚し、

特殊召喚したモンスターの数×500ポイントダメージを相手ライフに与える。

「激流蘇生」は1ターンに1枚しか発動できない。

「俺が今蘇生したモンスターは3体。従って1500ポイントのダメージだ。ダメージ・ダイエツトのもう一つの効果を使っても、どうしようもねえな」

「ば、馬鹿なあああ!!」

サイコ・ショットカー LP700↓0

ライフがゼロになり、すうっと消えていくサイコ・ショットカー。いつの間にか雪もやみ、空にかかっていた黒雲も消え、朝日が差し込んでまわりも明るくなっていった。もうすぐ、デュエルアカデミアに春が来るんだらう。僕は、次に春が来るまでにはもっと強くなれるんだらうか？

自分の体に戻り、思わずへたり込んで空を見上げる。風が、静かに木の葉を揺らしていた。

## ターン14 伝説！世界最強の片鱗！

「うわあああああつ!!……………また、かあ」

『また、だな。うるさくて寝れやしねーぜ』

「…………ゴメン」

ふと枕元の時計を見ると、まだ夜真つ盛りの午前2時。やれやれ、もういいかげんになんとかなんないのかな。

『なあ清明、今日もいつもの夢か?』

「まーね。僕はもう立ち直ってるつもりなんだけど」

ここんところ一週間ぐらい、同じ夢ばかり見る。山の中でドロローの練習してた人に会った日も、ゴ布林使いの二人組と十代がデュエルした日も、なんかテニス部の人と十代がデュエルするのを観戦してた日も。そしてその夢の中で、僕はデュエルしている。でも、どんなに手を尽くしてもすぐにモンスターが消え、セットカードが割られ、手札が捨てられて。最終的にはサイコ・ショツカーの攻撃を食らってライフがゼロになるところでいつも目が覚める。そしてその夢の中で、なによりも深刻な問題が。

「もう無理、むこう十年くらいサイコ・ショツカーは見たくない……………やだよあのいろんな意味で濃い顔と二人つきりで毎日会うとか」

『トラウマなのそこかよ!……………お前、つくづくズレてるよな。せっかくシリアスになりかけたところをギャグで落としに来るか』

「んなこと言われても僕は負けるなんてもう慣れっこだし、確かに悔しいとは思うけど怖いなんて考えたことないからさあ」

そう、僕は昔っからデュエルが弱かった。近所の子と遊ぶ時も決まってビリだった。そのたんびに泣きそうになるのをぐっところええて、再戦を申し込んで。たまくに誰かから一勝でももぎ取れると、毎回すごく嬉しかったつけ。懐かしいな、あの頃が。あえて戻りたいとは思わなかったけど。まあ今思えば、そんなに負けがかさんだのもタクティクス以前のデッキ構築の問題だったんだだけ。上級下級モンスターのバランスとか、ピンポイント過ぎるメタカードとか。

『僕は、か。別に俺だって、強いデュエリストだったわけじゃないんだ

ぜ？むしろ勝ち星の方が少ないし』

「嘘」

『マジ。ま、そんなことはいいさ。自分から話振つといてなんだけど、生前のことはあんま思い出したくねーし。それより、あれ確か今日じゃないのか？お前も楽しみにしてたら』

「あ、そうだった！しょうがない、もっかい寝なおすのは無理だしこのまま購買の前に陣取って整理券だけ貰つとくとしよう」

『警備員さん真夜中のガツコで床に寝転んでる見るからに怪しい男はコイツです』

「……………やっぱ部屋にいます」

『今はああ言ってるけど、あの目には見覚えがあるな。ありや……………負けることを本気で怖がってる奴の目だ。手遅れになる前にどっかで矯正してやらねーとな』

まあ結局あの後一睡もできずに、気が付けば朝までデツキに入れたいけど枚数的に無理なカードとにらめっこして過ごしていた。この作業、毎回楽しいけど難しいんだよねえ。まあ今回は特に入れ替えなかつたけど。なんだったんだあの四時間。

「それで清明、なんで今日は朝からお前も翔も妙にドタバタしてるんだ？ユーノは眠そうだけど」

『十代、俺は眠そうなんじゃない……………眠いんだ』

「あーうん、だからごめんってばユーノ。十代は十代で、ちよつとは授



業寝ないで聞いてみようよ……昨日チラシまで貰ったじゃん。」

「う。まあ、固い事言うなって!」

「どこが!? ってあれ、翔?」

「わいわい言いながら昼食にドローパンを求めて購買に行くと、そこにはレッドとイエロー、それと見覚えのあるブルーの人だから。いやあの、廊下のだ真ん中で居座られちゃ通れないんだけど。」

「三沢、一体どうしたんだ?」

「夢想、おっひさー。何やってんのこれ」

一瞬だけ十代と顔を見合わせ、それぞれ別方向から情報収集にかかると。まあ、ちよつと前の方を見ればわざわざ人に聞くまでもなかったんだけど。翔が、誰かイエロー生とデュエルしていた。

「ちなみに、今デュエルしてるイエロー生の名前は神楽坂。座学に關してはとても優秀な生徒なんだが、いかんせん記憶力がよすぎてな。自分でデツキを組んでみると、どうしても他の誰かが作ったものそっくりになってしまふんだ」

「ちなみに、今使ってるデツキはクロノス先生と同じ【古代の機械】だったき。本人に言ったら【暗黒の中世】って言いなおされるだろうけど、だって」

「なるほどねえ……あ、翔が勝った。というか、一体なんでまたこんなところでデュエルしてたのさ」

「整理券だよ、あれの」

そう言って三沢が指差した先には、伝説のデュエルキング武藤遊戯さんがデュエルディスクを構えたポーズの写真がプリントされた一枚のチラシ。ああ、そういうことね。遊戯さんのデツキ展示の整理券か。

「でもおっかしーな、僕が整理券取りに行ったときに翔も一緒についてきたはずなんだけど」

「マジか!なんで俺もその時起こしてくれなかったんだよ!」

「……………ごめん、これというのも全部サイコ・ショッカーのせいなんだわ」

「へっ?なんだそりゃ?」

いや、実際あの悪夢のせいで朝は毎日精神的に余裕ないし。

「まあいいや。それで翔、結局その整理券は誰の分なんだ？」

「何言ってるんスか。アニキのに決まってるでしょう？ ホントは朝の時に二枚もらってくるつもりだったけど、うっかり忘れちゃってて」  
「翔ー！ ありがとうなー!!」

なんかいい話っぽくまとまったところで、ちょうどチャイムが鳴る。さて、午後の授業に行きますか。

『ん、今日は昼飯は抜きなのか？』

「あ。と、トメさーん！ ドローパン三つちようだいっ！」

「そういえば私も明日香たちに頼まれたんだって、なんだって。ちよつと遅れちゃったけど……私も三つ下さいな」

お詫びも込めて十代達の分も買って行こうつと。あんまお金ないけど。

「というわけで清明、翔、それに隼人にユーノ。せっかくだから行ってみようぜ、遊戯さんのデッキを見に」

部屋のだ真ん中で仁王立ちになり、胸を張った十代がそんなことを言い出したのは、その日の夜のことだった。というか、『大事な話があるから飯食ったら来てくれ』なんて言うから何事かと思ったら、そんなことか。方法もわかんないや、明日になれば見れるのにわざわざ夜の学校に忍び込んでまで見る理由もわからない。だから当然返事は……。

「行くに決まってるじゃないの十代！ というか、むしろ十代の話が終わったらかこつちから誘おうと思ってたのに同じこと考えてんだもんなー」

『ですよー。まあそんな気はしてたぜ、とりあえず俺も一枚噛むから連れてけよ』

結局満場一致で忍び込むことに決めた。ここまでの間約一分。素早いことはいいことだ。そしてひとたびすることが決まれば、あとはレッド寮特有の行動力がものを言う。こんなことばっかやってるから成績がからつきしなだらうなあ、なんて思わないでもない今日こ

の頃。

『わかってんならちつとは勉強せい』

「あー聞こえない聞こえない!!」

「おい清明、警備員に見つかったらどうすんだよ！お、あの部屋だ。みんな、着いたぞ！」

「む、君たちも来ていたのかい？」

「あれ、三沢!？」

声の方を見ると、なるほど確かに三沢。まあわざわざこんな時間はこの部屋の前にいるんだから、用件は推して知るべし。

「声が大きいぞ、十代！整理券は持っているんだが、今日は気になって眠れそうにないんでな。いつそのこと人が少ない今のうちに見るだけ見てみようかと」

「なるほどな。意外だったな、俺たち以外にも同じことを考えるやつがいたなんて」

「ちなみに私も来てるよ、だってさ」

「っ!? 夢想、一体いつからいたの……?」

「たった今ね、だって」

それにしても、ひい、ふう、みい………ユーノを人数としてカウントしないとしても六人か。忍び込んで何かするにはちよつと人数が多い気もするけど、そんなもん今更気にしてたつてしようがないので突撃。しようとした瞬間、校舎中に絶叫が響いた。

「なんだなんだ!」

「今の声、クロノス先生か？」

『お、始まったか』

「一体どうしたんだな、まさかお化けでも出たのか？」

「隼人君、そんな怖い事言わないでよ！」

「………とりあえず行ってみようか、だってさ」

「そだね」

ということ慌てて駆け付けるとなぜか鍵がかかっているはずのドアが開いていて………ふむ、せっかく持ってきた針金が無駄になった。って、そんなことはどうでもいいんだよ。むしろ重要なのはその

部屋の中。部屋のど真ん中に配置されたガラスケースは割れていて、その横で鍵を持った姿勢のまま彫像のように固まっているクロノス先生。あー、えーつと、これは……………」

「クロノス先生、ついにドロボウまで」

「今ならまだ謝って全部返したら許してもらえるんじゃないやあ?」

「とりあえず、警備員さんに言わなきゃ」

「ちよちよちよちよ、ちよつと待つの一ネ!」

あ、復活した。とりあえず顔がえらいことになってるから涙をふきなさい。つて言いたいのを我慢して、一体何があつたのか事情を聴く。いくらなんでも先生は鍵持つてんだし、わざわざケース破らなくても持ち出しちゃうことはできるだろうし。そして、ついさっきまでデッキは間違いなくあつたこともわかつた。ここから導き出せる結論、それはつまり!

「まだh」まだ犯人はこの近くにいるはずだ、みんな得手分けして探そう!」

三沢……………セリフとらないでよ……………。せつかく夢想もいることだし、カツコよく決めようと思つたのに。はあ、海の方でも探しに行つてみようかな。

「あ、翔。どう?なんかいた?」

「清明君、こつちは全然。もしかして、もう犯人はこの島にいないんじゃないやあ……………」

「うくん……………ん?ね、もしかしてアレ、今日の昼にもいた神楽坂とかいう人じゃあ」

「あ、本当だ!おーい、そんなところで何してるんだよー!」

『……………ほんつとに一度勝つた相手には強気になれるタイプなんだな、翔』

やたらと勝ち気な翔に、そんな翔の態度にちよつと呆れた様子の子ーノ。ただ、神楽坂はこちらに背を向けたまま仁王立ちで海の方を見ている。別におかしなところはない。ただなんなんだろうか、このなんとも言えない嫌な予感。と、今までこちらを無視し続けていた

神楽坂がゆつくりと振り返る。その目は、不自然なほどの喜びと自信に満ち溢れていた。

「丸藤翔か、ちょうどいい。このデッキの実験台になってもらうぜー！」  
「え、デュエル？……いや、アニキだったらこの勝負も受けて立つはず！いいよ、また返り討ちにしてあげるから！」

「……えっと。置いてきぼりを食らったわけですが、どしたらよからうでしょうかユーノさん」

『デュエルディスクの調子をチェックしとけよ。どうせすぐ出番だ』

「うわあっ！」

翔 LPO

「もう負けた!? っていうか今のモンスターってあの」

『有翼幻獣キマイラ……【遊戯デッキ】を作るときにはほぼ必須モンスターだな』

「うう、ごめん清明君……負けちゃった」

「くつ、神楽坂！そのデッキ、やっぱり遊戯さんのだろ！」

「そうだが、それがどうかしたか？」

「今度は僕が相手だ！僕が勝ったら大人しくそのデッキは返してもらおうよ……翔、今すぐみんなをここに呼んできて！」

「わ、わかった！」

そう言っつて、ダダダツと駆けていく翔。よし、あとは十代や三沢、夢想あたりが来れば僕が負けたとしてもなんとかなる！もつとも僕がここで勝てば、そんなこと心配する必要もないんだけどね！

「なるほど、今のデュエルを見ていながらなお向かってくるとは大した自信だと思っただが、お前はただの時間稼ぎか。だがまあ関係ない、なにしろ今の俺が持つデッキは武藤遊戯さんのデッキ、つまり今の俺の力はデュエルキングにも匹敵するからだ！」

「御託はいいからかかってきなよ、それともこっちの時間稼ぎに付き合ってくれてるの？」

「フン、精々今のうちに痺がっっておけ！それでは、このデッキの恐ろしさを味あわせてやる！」

「デュエル！」

「先攻は俺が貰う！モンスターを一枚セット、さらに永続魔法、凡骨の意地を発動！カードを伏せてターンエンドだ」

凡骨の意地

永続魔法

ドローフェイズにドローしたカードが通常モンスターだった場合、そのカードを相手に見せる事で、自分はカードをもう1枚ドローする事ができる。

「僕のターン、ドロー！」

『セットモンスターは壁だろうな。クリッターもう使えねえし（※1）、さすがに禁止カードは抜いてあるだろ。ってことは、だいたい三択だな』

※1 2013年3月27日現在の情報です

三択？えっと、ホーリー・エルフと岩石の巨兵と……あとなんだったっけ？この2枚は破壊神の系譜のイラストにも出てるから覚えただよね。まあいいや、確かあの2体の守備力は2000、つまり攻撃力2001あれば突破できるはず！

『考え方は間違っていないけどな、なんだよ攻撃力2001って。出せるもんなら出してみる』

「いいのっ！僕は、永続魔法ウォーターハザードを発動！その効果でアームズ・シーハンターを召喚するよ」

一瞬フィールドに波が覆いかぶさり、水が引いた後には上半身が人型、だけど下半身がいかにも海竜っぽい弓を片手にしたモンスターがいた。

アームズ・シーハンター

効果モンスター

星4 / 水属性 / 海竜族 / 攻1800 / 守400

自分フィールド上にこのカード以外の水属性モンスターが存在する場合、

このカードと戦闘を行った効果モンスターの効果をダメージ計算後に無効化する。

また、フィールド上に表側表示で存在するこのカードが破壊される場合、

代わりに自分フィールド上に表側表示で存在するレベル3以下の水属性モンスター1体を破壊できる。

「そして、ウミノタウルスを通常召喚！」

ウミノタウルス

効果モンスター

星4 / 水属性 / 水族 / 攻1700 / 守1000

このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、自分フィールド上の魚族・海竜族・水族モンスターが守備表示モンスターを攻撃した時、

その守備力を攻撃力が超えていれば、

その数値だけ相手ライフに戦闘ダメージを与える。

「これだけじゃ終わらないよ、フィールド魔法発動、ウォーターワールド！」

ウォーターワールド

フィールド魔法

フィールド上に表側表示で存在する水属性モンスターの攻撃力は500ポイントアップし、

守備力は400ポイントダウンする。

アームズ・シーハンター 攻1800 ↓ 2300 守400 ↓ 0

ウミノタウルス 攻1700 ↓ 2200 守1000 ↓ 600

「よし、準備は整った。アームズ・シーハンターでセットモンスターを攻撃！さらにウミノタウルスの効果で、貫通ダメージも受けてもらおうよ！」

「ふっ、残念だったな！セットモンスターは守備力2600、ビッグ・シールド・ガードナーだ！」

アームズ・シーハンター 攻2300 ↓ ??? 守2600

清明 LP4000 ↓ 3700

「うわっ！でもビッグ・シールド・ガードナーには攻撃表示になるデメリット効果が……」

『いや、無理だ!』

「えっ!? だってあのモンスターテキストにはちゃんと」

ビッグ・シールド・ガードナー

効果モンスター

星4 / 地属性 / 戦士族 / 攻 1000 / 守 2600

フィールド上に裏側表示で存在するこのモンスター1体を対象にする魔法カードの発動を無効にする。

その時、このカードは表側守備表示になる。

このカードは攻撃された場合、ダメージステップ終了時に攻撃表示になる。

「ほら、やっぱり」

『馬鹿野郎、アームズ・シーハンターの効果無効能力を完全に逆手に取られたんだよ。今のガードナーは守備力2600でノーデメリットの壁モンスターだ』

「むむむ。えーい、このままターンエンド!」

清明 LP 3700 手札: 2 モンスター: アームズ・シーハンター (攻)、ウミノタウルス (攻) 魔法・罠: ウォーターハザード

場: ウォーターワールド

神楽坂 LP 4000 手札: 3 モンスター: ビッグ・シールド・ガードナー (守) 魔法・罠: 凡骨の意地、1 (伏せ)

「俺のターン、ドロー! ドローカードは通常モンスターのジャックス・ナイト、よつてもう一枚ドロー! このカードも通常モンスターのクインズ・ナイト、さらにドローだ! 念のため手札に残しておいたが、その程度のタクティクスの奴が相手ならここで出しても問題なさそうだな! 手札の融合を発動し、手札のキング、ジャック、クイーン、三騎士を融合! 来い、アルカナ ナイトジョーカー!!」

『いや、それ使うのかよ! とかいうツツコミも疲れてきたなあ』

融合

通常魔法

手札・自分フィールド上から、融合モンスターカードによって決められた



融合素材モンスターを墓地へ送り、その融合モンスター1体をエクストラデッキから特殊召喚する。

アルカナ ナイトジョーカー

融合・効果モンスター

星9 / 光属性 / 戦士族 / 攻3800 / 守2500

「クイーンズ・ナイト」＋「ジャックス・ナイト」＋「キングス・ナイト」

このカードの融合召喚は上記のカードでしか行えない。

フィールド上に表側表示で存在するこのカードが、

魔法カードの対象になった場合は魔法カードを、

罨カードの対象になった場合は罨カードを、

効果モンスターの効果の対象になった場合はモンスターカードを、

手札から1枚捨てる事でその効果を無効にする。

この効果は1ターンに1度しか使用できない。

「ジョーカーでウミノタウルスを攻撃する！切り札の力を見せてやれ！」

ジョーカーが片手で軽々と操る巨大な剣がウミノタウルスの持つ二枚貝の斧とぶつかり合い火花を散らす……が、すぐにウミノタウルスはその斧ごと真つ二つに切り裂かれてしまった。

アルカナ ナイトジョーカー 攻3800 ↓ ウミノタウルス 攻

2200 (破壊)

清明 LP3700 ↓ 2100

「ぐっ……でもまだだ！まだ諦めるもんか！僕のターンドロ！伝説の都 アトランティスを発動、フィールド魔法の張替えだ！」

『もともと粘り強い奴だとはいえ、今回のこの妙なやる気……もしかしして、自分に自信が欲しいのか？負けることは怖いけど自分の実力には自信がなくなってきた、サイコ・シヨッカーの時途中で諦めかけた自分が情けなくて悔しくて、だからここで伝説扱いされるデッキに勝って自信を取り戻したい、ってところか。この場合俺は応援してやりやいいのか？一回どん底まで叩き落としてやるのがアニメ的には正しい気がしないでもないが……いや、今の俺にとつちやここが

「現実」か。なら………」

伝説の都 アトランティス

フィールド魔法

このカードのカード名は「海」として扱う。

このカードがフィールド上に存在する限り、

フィールド上の水属性モンスターの攻撃力・守備力は200ポイントアップする。

また、お互いの手札・フィールド上の水属性モンスターのレベルは1つ下がる。

アームズ・シーハンター 攻2300↓2000 守0↓600

☆4↓3

「わざわざフィールドを張り替えたか。そこまでして、一体何をやる気だ？」

「決まってるでしょ？シーハンターをリリースして、超古深海王シィラカンスを召喚！」

超古深海王シィラカンス

効果モンスター

星7／水属性／魚族／攻2800／守2200

1ターンに1度、手札を1枚捨てて発動できる。

デッキからレベル4以下の魚族モンスターを可能な限り特殊召喚する。

この効果で特殊召喚したモンスターは攻撃宣言できず、効果は無効化される。

また、フィールド上に表側表示で存在するこのカードが

カードの効果の対象になった時、

このカード以外の自分フィールド上の魚族モンスター1体をリリースする事で

その効果は無効にし破壊する。

超古深海王シィラカンス 攻2800↓3000 守2200↓

2400 ☆7↓6

「そしてシィラカンスに装備魔法、団結の力を装備！攻守800ポイ

ントアップするよ」

団結の力

装備魔法

装備モンスターの攻撃力・守備力は、自分フィールド上に表側表示で存在する

モンスター1体につき800ポイントアップする。

超古深海王シーラカンス 攻3000↓3800 守2400↓

3200

いわばこれは、とんでもなくハイリスクな賭けだ。神楽坂が団結の力かアトランティスのどちらか一枚でも破壊できるカードを持っている、あるいは次にドロウしたら……それだけじゃない、仮にそんなカードが無くても最悪次のドロウで手札に幻獣王ガゼルみたいなアタッカーが来ればシーラカンスとジョーカーが相打ちになったところでダイレクトアタックされ、敗色がかなり濃くなってしまう。でも、もしもこのターンを膠着状態で乗り切ることができればまだ逆転のチャンスがある。可能性は低いけど。でも守備表示で出せば、確かにここではダメージを受けないけどその後がない。次につなげる一手がない。だからこそシーラカンスをあえて攻撃表示で出し、団結の力も発動コストでなく装備させた。さあ、どう出る神楽坂？

「僕はこれで、ターンエンド」

清明 LP2100 手札：0 モンスター：超古深海王シーラカ

ンス（攻、団） 魔法・罠・ウォーターハザード、団結の力（シ） 場：

伝説の都 アトランティス

神楽坂 LP4000 手札：2 モンスター：ビッグ・シールド・

ガードナー（守）、アルカナ ナイトジョーカー（攻） 魔法・罠：凡

骨の意地、1（伏せ）

「俺のターン、ドロロー……くそつ。攻撃はしない、ターンエンドだ」

「よし、まだいける！僕のターン、ドロウしてシーラカンスの効果発動！手札を一枚コストにしてデッキからシャクトパス、ハリマンボウ、竜宮の白タウナギ、フィッシュボーグアーチャーを全員守備表示で

特殊召喚！」

シャクトパス 守800↓1000 攻1600↓1800 ☆  
4↓3

オイスターマイスター 守200↓400 攻1600↓1800  
0 ☆3↓2

竜宮の白タウナギ 守1200↓1400 攻1700↓1900  
0 ☆4↓3

フィッシュボーグアーチャー 守300↓500 攻300↓  
500 ☆3↓2

超古深海王シーラカンス 攻3800↓7000 守3200↓  
6400

「いっけえ！シーラカンスでジョーカーを攻撃！マリン・ポロロッカ  
！」

「かかったな！トラップ発動、聖なるバリアーミラーフォースー!!」

全身に激流を纏って突撃していったシーラカンスだったが、ジョーカーに攻撃が届く寸前その目の前に鏡のようなものが現れ、そこから出てきたシーラカンスの偽物とぶつかり合って消えてしまう。

聖なるバリアーミラーフォースー

通常罠（準制限カード）

相手モンスターの攻撃宣言時に発動できる。

相手フィールド上に攻撃表示で存在するモンスターを全て破壊する。

「そんな、シーラカンスが……」

『ミラーフォースは対象を取らないから、な。なるほど神楽坂、さすがのプレイングだな』

清明 LP2100 手札：0 モンスター：シャクトパス（守）、  
オイスターマイスター（守）、竜宮の白タウナギ（守）、フィッシュボー  
グアーチャー（守） 魔法・罠：ウォーターハザード 場：伝説の都  
アトランテイス

神楽坂 LP4000 手札：3 モンスター：ビッグ・シールド・  
ガードナー（守）、アルカナ ナイトジョーカー（攻） 魔法・罠：凡

骨の意地

「どうした、ターンエンドか？ならば俺のターン、ドロロー！俺はビッグ・シールド・ガードナーをリリースし、ブラック・マジシャン・ガールを召喚！そしてガールが場に存在することで、賢者の宝石を発動！デッキからブラック・マジシャンを呼び出すぜ！」

ブラック・マジシャン・ガール

効果モンスター

星6 / 闇属性 / 魔法使い族 / 攻2000 / 守1700

お互いの墓地に存在する「ブラック・マジシャン」

「マジシャン・オブ・ブラックカオス」1体につき、

このカードの攻撃力は300ポイントアップする。

賢者の宝石

通常魔法

自分フィールド上に「ブラック・マジシャン・ガール」が

表側表示で存在する場合に発動する事ができる。

自分の手札またはデッキから、「ブラック・マジシャン」1体を特殊

召喚する。

ブラック・マジシャン

通常モンスター

星7 / 闇属性 / 魔法使い族 / 攻2500 / 守2100

魔法使いとしては、攻撃力・守備力ともに最高クラス。

『出たな、マジシャンコンビ。待ってましたー』

「さあ、攻撃だ！ジョーカーで白タウナギを、ガールでアーチャーを、ブラック・マジシャンでオイスターをそれぞれ攻撃！」

アルカナ ナイトジョーカー 攻3800 ↓ 竜宮の白タウナギ

守1400 (破壊)

ブラック・マジシャン・ガール 攻2000 ↓ フィッシュボーグ

アーチャー 守500 (破壊)

ブラック・マジシャン 攻2500 ↓ オイスターマイスター 守4

00 (破壊)

「で、でもまだシャクトパスが……………」

「メインフェイズ2、千本ナイフを発動！対象はシャクトパスだ！」  
千本ナイフ

### 通常魔法

自分フィールド上に「ブラック・マジシャン」が  
表側表示で存在する場合のみ発動する事ができる。

相手フィールド上に存在するモンスター1体を破壊する。

「さあ、俺はターンエンドだ。どうだ、このデッキの力！」

「ぐっ……………」

『よし決めた、せつかく俺もここにいるんだし、発破くらいはかけてや  
りますかね』

「え、今何か言った？」

『ああ。……………なあ清明、まさかこんなところで音を上げるんじゃない  
えだろうか？』

「で、でも……………相手はあの遊戯さんのデッキだし、実際問題さつきか  
らダメじゃだって通ってないし」

『お前もあれだな、強気になったり弱気になったり忙しい奴だな。な  
あ、そんなにデッキが信用できねえか？』

「えっ?」

『だってそうだろう？デュエルの途中であきらめるってのは、単に自信  
のなさの現れだけ？と、俺は思う。まだデッキにはカードが残ってる  
し、墓地は肥えてる。手札がちと心もとないけど、ま、次のドロワー  
があるだろ。次で起死回生の一発を引く。絶対に引く。そんなことも  
信じられないようじゃ、デュエリストなんてやってけないぜ。だいた  
い、昨夜の話を聞く限りじゃ昔のお前だってそう思ってたんだろ？そ  
の点だけ見りゃ、今のお前よりも前の方が数段マシだろうな。負ける  
ことを考えてそれを怖がってちゃ、その時点でもう負けてんだよ。何  
回負けたって次に食らいついてきやいい、つまりはそーゆーこと』

ハツとした。ほんっと、コイツには背中押してもらってばっかりだ  
よなあ……………でも、確かにそうだったかもしれない。あれだけ強気にな  
ってたのも、負けることへの恐怖の裏返しだったのかも。ちよつと  
目をつむって、深呼吸をする。こんなことをするのは、サイコ・シヨツ

カーの事件以来初めてかもしれない。でも、おかげでちよつと目が覚めた。感謝の念を込めて振り返ると、ユ一ノといつの間にか出てきていたシャーク・サッカーと目が合った。ありがとう。

「僕のターン、ドロロー・アトランティスの効果でレベル4になった深海の怒りを召喚！」

レイジ・オウ・テイフシー  
深海の怒り

効果モンスター

星5／水属性／魚族／攻 0／守 0

このカードの攻撃力・守備力は、自分の墓地の

魚族・海竜族・水族モンスターの数×500ポイントアップする。

『な、言った通りだろ？逆転の一手ってのは、出ると思ってたや出せるもんなんだよ。本気で願うなら、デッキは何かしら応えてくれるもんさ』

「今の僕の墓地にいるのはシーハンター、ウミノタウルス、シーラカンス、シャクトパス、オイスターマイスター、アーチャー、白タウナギ、そしてシーラカンスのコストで捨てたシャーク・サッカーの計八体。さらにアトランティスの上昇値も加えて、攻撃力はジョーカーを超える4200!!」

「馬鹿な、まだそんなモンスターを出すことができたのか!？」

深海の怒り 攻0↓4200 守0↓4200

「まずはジョーカーに攻撃!アビス・ライジング!」

深海の怒り 攻4200↓アルカナ ナイトジョーカー 攻38

00 (破壊)

神楽坂 LP4000↓3600

清明 LP2100 手札:0 モンスター:深海の怒り(攻) 魔法・罫:ウオーターハザード 場:伝説の都 アトランティス

神楽坂 LP3600 手札:i モンスター:ブラック・マジシャン(攻)、ブラック・マジシヤ

ン(攻)、ブラック・マジシヤン・ガール(攻) 魔法・罫:なし

「俺のターン、ドロロー。……これでターンエンドだ」

「やけっぱちにしては、あの余裕たっぷりな顔……一体何をたくらんでるんだらう?どうにも怪しいけど、僕のターン!深海の怒りでブ

ラック・マジシャンを攻撃、アビス・ライジング！」

深海の怒り 攻4200↓ブラック・マジシャン 攻2500（破壊）

ブラック・マジシャン・ガール 攻2000↓2300

「この時、手札からクリボアの効果発動！その戦闘ダメージを0にするぜ！」

クリボア

効果モンスター

星1／闇属性／悪魔族／攻 300／守 200

相手ターンの戦闘ダメージ計算時、このカードを手札から捨てて発動する。

その戦闘によって発生する自分への戦闘ダメージは0になる。

「クリボアじゃ戦闘破壊は防げないし、ブラマジがいなくなったから千本ナイフの二本目や騎士の称号がきても大丈夫だけど、やっぱり嫌な予感が……モンスターをセット、ターンエンド」

清明 LP2100 手札：0 モンスター：深海の怒り（攻）、???

魔法・罨：ウォーターハザード 場：伝説の都 アトランティス

神楽坂 LP3600 手札：1 モンスター：ブラック・マジシヤ

ン・ガール（攻） 魔法・罨：凡骨の意地

「俺のターン、ドロー！まず、天よりの宝札を発動！この手札一枚と場のブラック・マジシャン・ガール、凡骨の意地を除外して二枚ドロー。さらに貪欲な壺を発動するぜ、デッキに戻すカードはブラック・マジシャン、ビッグ・シールド・ガードナー、絵札の三騎士だ。二枚ドロー！」

天よりの宝札

通常魔法

自分の手札と自分フィールド上に存在する全てのカードをゲームから除外する。

自分の手札が2枚になるようにカードをドローする。

貪欲な壺

通常魔法（制限カード）



自分の墓地のモンスター5体を選択して発動できる。  
選択したモンスター5体をデッキに加えてシャッフルする。

その後、デッキからカードを2枚ドロウする。

たった一枚のドロウから、一気に手札を三枚まで増やされた。うーん、本当に勝てるかな……いや、そうじゃない。僕はこのデュエル、勝ってみせるんだ！

「さあ、再び俺の逆転だ！墓地の光と闇であるアルカナ ナイト ジョーカーとクリボーを除外！出でよ、カオス・ソルジャー——開闢の使者——！！」

『ほう、思ったよりメンタル強えじゃねえか。もつとも、そうこなくっちゃ面白くないぜ！』

カオス・ソルジャー——開闢の使者——

効果モンスター（制限カード）

星8 / 光属性 / 戦士族 / 攻3000 / 守2500

このカードは通常召喚できない。

自分の墓地の光属性と闇属性のモンスターを1体ずつゲームから除外した場合に特殊召喚できる。

1ターンに1度、以下の効果から1つを選択して発動できる。

●フィールド上のモンスター1体を選択してゲームから除外する。  
この効果を発動するターン、このカードは攻撃できない。

●このカードの攻撃によって相手モンスターを破壊した場合、もう1度だけ続けて攻撃できる。

「開闢の効果発動！このターンの攻撃を放棄し、その深海の怒りを除外する！カードを二枚セットし、ターンエンドだ」

「悪いけど、もう僕は吹っ切れてるんでね！まだまだへこたれないよ、こつちも貪欲な壺！シーラカンス、シャクトパス、オイスター、ウミノタウルス、シャーク・サツカーをデッキに戻して二枚ドロウ、そしてセットモンスターを反転召喚！スノーマンイーターの特殊効果で、開闢の使者を破壊！」

ひよっこりと地面から生えてきた雪だるまがシャカシャカと歩き、開闢の使者を押しつぶす。………棒立ちで雪だるまに押しつぶされ

る開闢が妙にシユールだった。

スノーマンイーター

効果モンスター

星3 / 水属性 / 水族 / 攻 0 / 守 1900

このカードがリバーブスした時、

フィールド上に表側表示で存在するモンスター1体を選択して破壊する。

「なら、開闢の破壊に合わせてリバーブス発動、魂の綱！1000のライフを払い、デッキから翻弄するエルフの剣士を守備表示で召喚する！」

魂の綱

通常罫

自分フィールド上のモンスターがカードの効果によって破壊され墓地へ送られた時、

1000ライフポイントを払って発動できる。

デッキからレベル4モンスター1体を特殊召喚する。

神楽坂 LP3600 ↓ 2600

翻弄するエルフの剣士

効果モンスター

星4 / 地属性 / 戦士族 / 攻 1400 / 守 1200

このカードは攻撃力1900以上のモンスターとの戦闘では破壊されない。

「攻撃力1900以下のモンスターはいない……スノーマンイーターをリリースして、氷帝メビウスを召喚！さらに効果で、そのセツトカードを破壊する！フリーズ・バースト！」

「残念だったな、フリーチエーンだ！砂塵の大竜巻を発動、この効果でアトランティスを破壊するぜ！」

氷帝メビウス

効果モンスター

星6 / 水属性 / 水族 / 攻 2400 / 守 1000

このカードがアドバンス召喚に成功した時、

フィールド上の魔法・罨カードを2枚まで選択して破壊できる。  
砂塵の大竜巻

通常罨

相手フィールド上の魔法・罨カード1枚を選択して破壊する。  
その後、自分の手札から魔法・罨カード1枚をセットできる。

「アトランティスまで……ターンエンド」

清明 LP2100 手札:i モンスター:氷帝メビウス(攻)

魔法・罨:ウォーターハザード

神楽坂 LP2600 手札:0 モンスター:翻弄するエルフの

剣士(守) 魔法・罨:なし

「俺のターン、ドロー!黒魔術のカーテンを発動!ライフポイントを半分払い、デッキからもう一度ブラック・マジシャンを特殊召喚!」

黒魔術のカーテン

通常魔法

ライフポイントを半分払って発動する。

自分のデッキから「ブラック・マジシャン」1体を特殊召喚する。

このカードを発動するターン、自分は召喚・反転召喚・特殊召喚する事はできない。

神楽坂 LP2600↓1300

ブラック・マジシャン 攻2500

「メビウスの攻撃力が越えられた!」

「翻弄するエルフの剣士を攻撃表示に変更し、バトル!ブラック・マジシャンでメビウスを攻撃、黒・魔・導!!」

ブラック・マジシャン 攻2500↓氷帝メビウス 攻2400

(破壊)

清明 LP2100↓2000

「そのまま、翻弄するエルフの剣士で追撃!精・剣・斬!」

『あれ、それ本家エルフの剣士の攻撃名だったような……まあいつか』

翻弄するエルフの剣士 攻1400↓清明(直接攻撃)

清明 LP2100↓700

「さあ、それで終わりか？俺はターンエンドだ」

「まだまだ、さっ！ドロ、封印の黄金櫃を発動して、選択するカードは爆征竜―タイダル！そしてタイダルの効果でブリザード・ドラゴンをサーチして召喚！」

封印の黄金櫃

通常魔法

自分のデッキからカードを1枚選択し、ゲームから除外する。

発動後2回目の自分のスタンバイフェイズ時にそのカードを手札に加える。

爆征竜―タイダル

効果モンスター

星7／水属性／ドラゴン族／攻2600／守2000

自分の手札・墓地からこのカード以外のドラゴン族

または水属性のモンスターを合計2体除外して発動できる。

このカードを手札・墓地から特殊召喚する。

特殊召喚したこのカードは相手のエンドフェイズ時に持ち主の手札に戻る。

また、このカードと水属性モンスター1体を手札から墓地へ捨てる事で、

デッキからモンスター1体を墓地へ送る。

このカードが除外された場合、

デッキからドラゴン族・水属性モンスター1体を手札に加える事ができる。

「爆征竜―タイダル」の効果は1ターンに1度しか使用できない。

ブリザード・ドラゴン

効果モンスター

星4／水属性／ドラゴン族／攻1800／守1000

相手フィールド上に存在するモンスター1体を選択して発動する。

選択したモンスターは次の相手のエンドフェイズ時まで

攻撃宣言をする事ができず、表示形式を変更する事もできない。

この効果は1ターンに1度しか使用できない。

「ブリザード・ドラゴンの効果をブラック・マジシャンに発動、パーフェクトフリーズ！さらに、翻弄するエルフの剣士に攻撃する！」  
ブリザード・ドラゴン 攻1800↓翻弄するエルフの剣士 攻1400（破壊）

神楽坂 LP1300↓900

「また形勢逆転っ！これでターンエンドだよ」

清明 LP700 手札：1 モンスター：ブリザード・ドラゴン

（攻）魔法・罫：ウォーターハザード

神楽坂 LP900 手札：0 モンスター：ブラック・マジシヤ

ン（攻）魔法・罫：なし

「すぐに巻き返してやるぜ、ドロロー！ちっ、ホーリー・エルフを守備表示で召喚してターンエンドだ」

ホーリー・エルフ

通常モンスター

星4／光属性／魔法使い族／攻 800／守2000

かよわいエルフだが、聖なる力で身を守りとても守備が高い。

「僕のターン、ドロロー！黄金櫃の一ターン目……まあそれはいいとして、もう一度ブラック・マジシャンにパーフェクトフリーズ！カードをセットして、これでターンエンド」

清明 LP700 手札：1 モンスター：ブリザード・ドラゴン

（攻）魔法・罫：ウォーターハザード、1（伏せ）

神楽坂 LP900 手札：0 モンスター：ブラック・マジシヤ

ン（攻）魔法・罫：なし

「俺のターン！ホーリー・エルフをリリースして、闇紅の魔導師を召喚するぜ。そしてブリザード・ドラゴンに攻撃する！」

ダークレッド・エンチャンター  
闇紅の魔導師

効果モンスター

星6／闇属性／魔法使い族／攻1700／守2200

このカードが召喚に成功した時、

このカードに魔力カウンターを2つ置く。

このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、

自分または相手が魔法カードを発動する度に、このカードに魔力カウンターを1つ置く。

このカードに乗っている魔力カウンター1つにつき、このカードの攻撃力は300ポイントアップする。

1ターンの1度、このカードに乗っている魔力カウンターを2つ取り除く事で、相手の手札をランダムに1枚捨てる。

闇紅の魔導師 攻1700↓2300

闇紅の魔導師 攻2300↓ブリザード・ドラゴン 攻1800

(破壊)

清明 LP700↓200

「でも、ここでもリバーズ発動！激流蘇生で、今破壊されたブリザード・ドラゴンを特殊召喚！」

激流蘇生

通常罫

自分フィールド上の水属性モンスターが

戦闘またはカードの効果によって破壊され墓地へ送られた時に発動できる。

その時に破壊され、フィールド上から自分の墓地へ送られたモンスターを全て特殊召喚し、

特殊召喚したモンスターの数×500ポイントダメージを相手ライフに与える。

「激流蘇生」は1ターンに1枚しか発動できない。

神楽坂 LP900↓400

「なかなかしぶといな……俺はターンエンドだ」

「僕のターン、ドロロー！そしてこの時、黄金櫃の封印が解かれてタイダルが僕の手札に。そしてタイダルのもう一つの効果によって、墓地の深海の怒りとアームズ・シーハンターを除外して特殊召喚！」

爆征竜―タイダル 攻2600

「これで終わりにするよ、神楽坂っ!!タイダルとブリザード・ドラゴンをリリースして、マイフェイバリットカード、霧の王を召喚!!」

霧の王  
キングミスト

効果モンスター

星7 / 水属性 / 魔法使い族 / 攻 0 / 守 0

このカードを召喚する場合、生け贄1体

または生け贄なしで召喚する事ができる。

このカードの攻撃力は、生け贄召喚時に生け贄に捧げた

モンスターの元々の攻撃力を合計した数値になる。

このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、

いかなる場合による生け贄も行いう事ができなくなる。

霧の王 攻0 ↓ 4400

「そんな、このデッキは世界最強のデッキのはずだ、なのになぜ……………」

「僕は人に説教できるほどえらい人間になったつもりなんて一回もないよ。でも一つだけ言うとしたら、僕はこのデッキに対して愛着がある。誇りがある。ちよつとの間揺らいでた時期もあったけど、今はこのデッキとカードを全面的に信頼してる。そこらへんにヒントがあるんじゃないかなーなんて思ったり。……………ブラック・マジシャンを攻撃だ！ミスト・ストラングル!!」

霧の王 攻4400 ↓ ブラック・マジシャン 攻2500 (破壊)

神楽坂 LP900 ↓ 0

「なん、とか……………勝った……………」

そう呟いたところで急に足から力が抜けてしまい、ふらふらとその場にへたり込んでしまう。どうやら知らず知らずのうちに、結構緊張してたらしい。全然力が入らない……………と、そこでようやく翔の声と、たくさんの足音が聞こえた気がした。というのも、そのまま僕が意識を手放してしまったからだ。なんとなくだけど、あの夢はもう見ない気がした。

「三沢ー、そーいや結局さ、神楽坂はどうなったの?」

「ん、知りたいか?」

その次の日のレッド寮、放課後。見舞いがてら遊びに来た三沢にお茶の用意をしながら、ずっと気になっていた事を聞く。恥ずかしい話

ではあるけれど、あれからついさつきまでぶっ続けで寝てたから詳しい話はまだ聞いてないんだよね。

「別に大した話ではないさ。きちんとデツキを返して、なんとか穏便に済ませてもらったからそこは安心していいぞ」

「そりゃよかった。ところで、もう一つ聞きたいことがあるんだけど」  
「おお、いいぞ。俺に答えられることならな」

「僕が倒れちゃってから、誰がここまで運んできてくれたの？まだお礼が言えてないから、改めて言っておこうと思って」

そう言うのと、なぜかニヤリと笑ってみせる三沢。僕、なにかおかしいなことも言っただろうか。

「河風君だ………と言ったらどうする？」

「……………マジ？」

『マジだぜ』

「ああ、大マジだ。誰よりも早く駆け寄って、普段の様子からは考えられないくらい取り乱してたぞ」

「そ、そう……………」

とりあえず、赤くなつた顔を見せないように明後日の方を向く。まあ、十中八九ばれてるだろう。三沢のにやにやした顔が何よりの証拠だ。

「そ、それで？今、夢想はどこにいるの？」

「彼女は今『お見舞いの品持ってくる』って言って5分くらい前に出て行ったぞ。ゆうべからつきつきりで君のそばにいたんだから、ちゃんとそこにもお礼を言っとけよ」

聞き捨てならない言葉について聞き返そうとしたちようどその時、狙ってたんじゃないかと聞きたくなくなるくらい Тайミング で扉が開く音がした。

「ただいま、だつてさ。三沢、清明の調子はどう？」

「えっと、その……………おはよう」

「っ!!起きたの!?よかったあ、って言ってるよ……………」

「さて、それじゃ俺はもう帰るかな、っと」

そう言つてそつと立ち上がる三沢は、そのまま本当に部屋を出て



行っちゃった。おいこらユーノ、なんでお前まで一緒に退出してんだ。二人つきりは……その、嫌じゃないし、むしろ嬉しいんだけど、やっぱり照れくさいといふかなんというか。

「ええと、ゆうべはなんでもここまで引っ張ってつてくれたみたいで、あ、ありがとう」

「そんなこと気にしないで、だってさ。それより、もう体は平気なの？  
だって」

「うん、そりやまあね。別に病気だとか怪我だとかいうわけじゃなし、もうどつてことないよ」

「そう……本当によかった、だってさ」

そこで、会話が止まる。でも、別に気まずくはない。それどころか、ずつとこうしていたいような気もする。そんなことを考えていると、左手に何かに触れた。ちよつと視線を落とすと、手が握られている。慌てて夢想の顔を見ると、彼女は照れくさそうに微笑んで見せた。

## ターン15 融合！英雄と騎士の意地！

「え、俺？」

「そうなのニヤ、三沢君とデュエルして、勝った方がノース校とのデュエルの代表となるんだニヤ」

あいもかわらず何の役に立つのかよくわからないけど聞いているぶんには結構面白かったりする錬金術の授業中、大徳寺先生が軽い口調でとんでもない話を振ってきた。一瞬固まった部屋の空気の中でやはりとうかなんというか、最初に復活したのは彼女だった。

「大徳寺先生、一体何があつたんですか？………って聞きたいみたいです」

「いい質問だニヤ夢想君。実は」

ちなみに彼女の名誉のためにつけたしておくけど、別に今の発言に悪意はない。ただ、つい昨日わざわざ校内放送で『ノース校とのデュエルの代表はシニョール亮に決定したのーネ!!』とえらくハイテンションなクロノス先生からの発表があつたことを踏まえてのことだ。

『そんで？ノース校代表が一年だからこつちも一年で対抗しましょう（by 鮫島校長）↓遊城十代だな（by カイザー）↓ならば私は私は三沢大地を推薦するのーネ！（by クロノス）………ま、ここはそのまままか』

「そのまんま？何が？まあそんなことはどうでもいいんだよ、問題はさ、僕だつてその代表の候補ぐらいにはなつてもよかつたんじゃないの？つてことなんだよ。一応万丈目には勝てたんだし」

『面白くなさそーな仏頂面で帰ってきていきなり何を言い出すかと思つたらただの愚痴か。でもお前個人だと極端に実力にムラがあるだろ？同じ格上が相手でも勝ちつぱなしの十代と違つてお前勝つたり負けたりでなんかこうパツとしないし』

「うー否定できないー」

『そーゆーこつた。ま、諦めて観戦してよーぜ』

「そだね。あ、そうそう十代から呼ばれてたんだつた。デツキ調整や

るから手伝ってくれって」

『先行ってるぜ』

「……………壁抜けは卑怯だと思う」

『なはは、悔しかったら死んでみーろ』

「僕だつて一回死んで……………まあいいや、思い出したくもない。それに、どうせこの部屋の壁抜け程度なら造作もないもんね。よっころしよつと」

「それでーは、これよりライイエローの三沢大地と、オシリスレッドのドロップアウ……………じゃなかったノーネ、遊城十代によるデュエルを始めますーノー！」

「頑張れ十代、三沢ー！」

「アニキ、負けるなー！」

『一晩寝てりやさっぱりしてるあたり、こいつも単純というか素直と  
いうか』

「……………頑張れ、だつてさ」

いつの間にか横に来ていた夢想と一緒に声援を送る。そういや、いまだ入学以来負けなしのはずなのになんで夢想はこっち側にいるんだろうか。選ばれるだけの實力はあるはずなのに。

「私？この間清明と一緒に制裁デュエルやったでしょ。あれの後でまた出すのもなんだからつてことで学校側がやめたみたいだよ、だつてさ」

「スケール違うねなんか。こっちは単に實力の問題なのに」

「ありがとね、だつてさ」

ちよつと得意顔になる彼女を見て、普通にアリだと思ったのはナイショ。ちなみにその頃ステージの中央では、十代と三沢が話し合っていた。

「へへ、お前とこんな早くに戦うことになるとはな」

「ああ、俺も驚いている」

「ところで、七番目のデッキはできたのかよ」

「いや、あれはひとまず保留だ。俺は俺のこれまでに作ってきたデツキを信じることにしたよ」

『……………ん?』

へー、じゃあ何を使うんだろ。これまで見たことがあるのは……………光の【電池メン】、水の【ウォーター・ドラゴン】だったけど、またそのどっちかだろうか。それとも、まだ見たことない他の属性デツキだろうか。わくわく。

『うーん、今更とはいえ一体どうなってんだ?もうこっからは全く先が読めねえな…………』

もつとも、隣でウチの馬鹿ユルンがうんうん唸ってるせいでやかましくて今一つ集中できなかつたけど。

「へえ、ちなみにどんなデツキなんだ?」

「いろいろ考えたんだが十代、俺がお前のデツキにメタを張って勝つてもそれは本当に俺が勝ったことにはならないからな。なるべく同じ条件の元勝ちたい……………そう思った時、ぴったりのデツキがあることを思い出したんだ。このデツキは俺の名前と同じ大地のデツキ、地属性のものだ」

『地属性でHEROと同じようなデツキ……………ああ、あれか。つーか【磁石の戦士】でも【妖怪】でもないのな』

「え、もう何使うかわかったの!?!とところで【磁石の戦士】と【妖怪】って?」

「清明、いきなり何と喋ってるの?だつてさ」

「え、ああ、なんでもないよなんでも!あ、ほら始まるよつ!」

慌てて話を振って、再び十代と三沢の方に注意を向けさせる。まったく、こつちの声は人に聞こえるんだからもつと気をつけとかないと。注意注意。

「俺のヒーローと同じような?おお、なんかワクワクしてきたぜ!」

「ああ、俺もだ!」

「デユエル!!」

「先攻は俺からだぜ!俺は、手札のクレイマンとバーストレディを融合!来い、ランパートガンナー!」

まず十代の場に先陣切って飛び出し防御の構えをとったのは、いかにもクレイマンとバーストレディの融合形態らしい攻撃的なんだか守備的なんだかよくわからない効果を持ったメカメカしい見た目の女性兵士。

エレメンタルヒーロー  
E・HERO ランパートガンナー

融合・効果モンスター

星6／地属性／戦士族／攻2000／守2500

「E・HERO クレイマン」＋「E・HERO バーストレディ」

このカードは融合召喚でしか特殊召喚できない。

このカードが表側守備表示の場合、

守備表示の状態相手プレイヤーを直接攻撃する事ができる。

その場合、このカードの攻撃力はダメージ計算時のみ半分になる。

「さらに、フレンドッグを守備表示で召喚するぜ。カードを一枚伏せて、ターンエンドだ」

片膝をつく女戦士の隣に、メカメカしいどころかもろに機械の犬がお座りのポーズをとる。

フレンドッグ

効果モンスター

星3／地属性／機械族／攻 800／守1200

このカードが戦闘によって破壊され墓地へ送られた時、

自分の墓地から「E・HERO」と名のついたカード1枚と

「融合」魔法カード1枚を手札に加える。

「なるほど、守備固めか……ならばあのカードは恐らく！」

「三沢、何ブツブツ言ってるんだよー！もうお前のターンだぜー！」

「え、ああ、すまない。俺のターン、ドロー！見せてやるぞ十代、俺の融合戦士を！俺は手札から、ジェムナイト・フュージョンを発動！手札のサファイアとルマリンを融合し、パーズを召喚する！」

三沢の場に現れたのは、トパーズの名を持つ刺激的な黄色のナイト。なるほど、融合の地属性ってジェムナイトのことか。

ジェムナイト・フュージョン

通常魔法

自分の手札・フィールド上から、融合モンスターカードによって決められた融合素材モンスターを墓地へ送り、

「ジェムナイト」と名のついたその融合モンスター1体を

融合召喚扱いとしてエクストラデッキから特殊召喚する。

また、このカードが墓地に存在する場合、

自分の墓地の「ジェムナイト」と名のついた

モンスター1体をゲームから除外する事で、このカードを手札に加える。

ジェムナイト・パーズ

融合・効果モンスター

星6/地属性/雷族/攻1800/守1800

「ジェムナイト・ルマリン」+「ジェムナイト」と名のついたモンスター

このカードは上記のカードを融合素材にした融合召喚でのみ

エクストラデッキから特殊召喚できる。

このカードは1度のバトルフェイズ中に2回攻撃する事ができる。

このカードが戦闘によってモンスターを破壊し墓地へ送った時、

破壊したモンスターの元々の攻撃力分のダメージを相手ライフに与える。

「パーズでランパートガンナーを攻撃する！」

「攻撃力の低いモンスターで攻撃!?怪しいな、ヒーローバリアを発動!その攻撃は止めさせてもらうぜ」

ジェムナイト・パーズ 攻1800↓E・HERO ランパートガ

ンナー 守2500

ヒーローバリア

通常罫

自分フィールド上に「E・HERO」と名のついたモンスターが

表側表示で存在する場合、相手モンスターの攻撃を1度だけ無効にする。

「お、十代が防いだー」

『いや、まだわからんぞ。パーズの効果は2回攻撃だから、もう一度ランパートガンナーに攻撃すれば……いや、待てよ。読めたぞ三沢、

そういうことか!」

「あれ、今の攻撃の狙いってもしかして、なのかな?」

ほぼ同じタイミングで何かに気付いたらしい二人。ごめん、何が言いたいのかさっぱりなんだけど。

「かかったな十代! パーズでもう一度攻撃、対象はフレンドッグ!」

『やっぱり!!』……だつて!」

ジェムナイト・パーズ 攻1800↓フレンドッグ 守1200

(破壊)

「そしてパーズのもう一つの効果でフレンドッグの元々の攻撃力分、つまり800ダメージだ!」

「ぐわっ!」

十代 LP4000↓3200

「やるな三沢……だけど、フレンドッグも効果発動だ! 墓地の融合とバーストレディを手札に戻すぜ」

序盤の攻防は、どうやら三沢の方が若干有利に終わりそうだ。それにしても二人とも、一体何がやっぱりなのさ。

『んー? 簡単なことさ、ハナっから三沢の手札にパーズの攻撃力を上げるカードなんてなかったんだろうさ』

「え!? で、でもそれじゃ最初の攻撃は……?」

「あれは多分、伏せカードが攻撃反応だと仮定したうえで、そのカードを無駄打ちさせるための引っ掛けだったんじゃない? なんだって」

「そ、それじゃあ」

『ああ。確かに最初の攻撃がそのまま通つてりゃ、無駄にダメージを受けただけだったな。ただ、十代は1ターン目からランパートガンナーとフレンドッグの二体で守備固めをしてきた。なら、伏せカードがその守りをさらに強化するものでも不思議じゃないってこつた。特に、十代の引きの強さならな』

つまり三沢は、あるかどうかわからない攻撃反応罠に賭けて今の攻撃を、一瞬の迷いすらせずに繰り出したのか……つくづく凄いな、三沢。僕には真似できない戦い方だと思う。

『俺もあえて真似しようとは思わん』

あ、はい。ですよー。

「ふむ……あえてこの状況でバーストレディの回収を優先したか。なるほど十代、今のお前の手札はフェザーマンだな？そして返しのターンでフレイム・ウイングマンを召喚して俺にダメージを与えるつもりだろう」

「んなつーど、どうしてそう思うんだよ！」

「簡単なことだ。パーズの攻撃力は1800、ならば確かに俺がどんなカードを持っているかわからないとはいえ少なくとも単体で突破されることの少ないクレイマンを回収するのが基本というものだろう。だが十代、お前はあえてバーストレディを回収した。つまり、次の融合でパーズを突破できる組み合わせのモンスターが確実に出せるということ。バーストレディの融合体なら、一番可能性が高いのはフレイム・ウイングマンというだけさ。カードを一枚伏せてターンエンドだ」

「ぐ、ぐう……」

十代 LP3200 手札：3 モンスター：E・HERO ラン  
パートガンナー(守) 魔法、罠：なし

三沢 LP4000 手札：2 モンスター：ジェムナイト・パ  
ズ(攻) 魔法・罠：1

「俺のターン、ドロー！……三沢、確かに俺の手札にはフェザーマンがいる。でもな、俺のヒーローの融合には無限の可能性があるんだぜ！手札のフェザーマンとワイルドマンを融合！ワイルド・ウイングマンを召喚だ！そして手札のバーストレディを捨てて、そのセットカードを破壊！」

バツサバツサと翼を広げ地面に降り立つ、人の体と言いつい鳥脚といい微妙にハーピーと似てなくもないような気がしないでもない鳥人ヒーローが、その白い羽根から衝撃波を放ち三沢のセットカードを木端微塵にする。

E・HERO ワイルド・ウイングマン

融合・効果モンスター

星8／地属性／戦士族／攻1900／守2300



「E・HERO ワイルドマン」＋「E・HERO フェザーマン」

このモンスターは融合召喚でしか特殊召喚できない。

手札を1枚捨てる事で、フィールド上の魔法・罨カード1枚を破壊する。

「かかったな、十代！今破壊された荒野の大竜巻の効果で、ワイルド・ウイングマンを破壊する！」

衝撃波をまともにくらってバラバラになったセットカードから竜巻が巻き起こり、とても速いスピードでフィールドを駆け十代の方に近づいたそれがワイルド・ウイングマンをあつという間に飲み込んでしまう。

荒野の大竜巻

通常罨

魔法&罨カードゾーンに表側表示で存在するカード1枚を選択して破壊する。

破壊されたカードのコントローラーは、

手札から魔法または罨カード1枚をセットする事ができる。

また、セットされたこのカードが破壊され墓地へ送られた時、

フィールド上に表側表示で存在するカード1枚を選択して破壊する。

『えぐいなー。これ、普通にフレイム・ウイングマン出しときや攻撃通ったじゃねえか』

「ワイルド・ウイングマンが……なら、背に腹は代えられないか。ランパートガンナーを攻撃表示に変更して、バトル！ジェムナイト・パースに攻撃、ランパート・ショット！」

E・HERO ランパートガンナー 攻2000↓ジェムナイト・パース 攻1800 (破壊)

三沢 LP4000↓3800

「これで俺はターンエンドだぜ」

「俺のターン、ドロー！墓地のルマリンを除外し、ジェムナイト・フュージョンを墓地から回収する……そして融合だ、ジェムナイト・フュージョン！手札のガネットとアンバーを融合し、来い！ジェ

ムナイト・ルビーズ！」

二体目に現れたナイトの色は、赤。色合いがよく映える真っ青なマントをなびかせて、鎌を持った戦士がランパートガンナーの前に仁王立ちする。

ジエムナイト・ルビーズ

融合・効果モンスター

星6 / 地属性 / 炎族 / 攻2500 / 守1300

「ジエムナイト・ガネット」+「ジエムナイト」と名のついたモンスター

このカードは上記のカードを融合素材にした融合召喚でのみエクストラデッキから特殊召喚できる。

1ターンに1度、自分フィールド上に表側表示で存在する

「ジエム」と名のついたモンスター1体をリリースして発動できる。

このカードの攻撃力はエンドフェイズ時まで

リリースしたモンスターの攻撃力分アップする。

また、このカードが守備表示モンスターを攻撃した時、

その守備力を攻撃力が超えていれば、

その数値だけ相手ライフに戦闘ダメージを与える。

「攻撃力2500………！」

「ルビーズでランパートガンナーを攻撃する！行け、ルビーズ！」

ジエムナイト・ルビーズ 攻2500↓E・HERO ランパート

ガンナー 攻2000 (破壊)

十代 LP3200↓2700

「このターン、俺は通常召喚をしていない。モンスターをセットしてターンエンドだ」

十代 LP2700 手札：0 モンスター：なし 魔法、罠：なし

し

三沢 LP3800 手札：0 モンスター：ジエムナイト・ルビーズ

ズ(攻)、??? (守) 魔法・罠：なし

「十代、ここが正念場だね」

『そーだな。まあ十代だし、ここ一番でカードが引けないなんてありえねえだろ』

「俺のターン、ドロロー！……このカードは！カードを一枚セットして、ターンエンドだぜ！」

「伏せカードが一枚、か。まあいい、ドロロー！ジェムナイト・アイオーラを召喚し、アイオーラでダイレクトアタック！」

ジェムナイト・アイオーラ

デュアルモンスター

星4 / 地属性 / 水族 / 攻1300 / 守2000

このカードは墓地またはフィールド上に表側表示で存在する場合、通常モンスターとして扱う。

フィールド上に表側表示で存在するこのカードを通常召喚扱いとして再度召喚する事で、

このカードは効果モンスター扱いとなり以下の効果を得る。

●1ターンに1度、自分の墓地の「ジェム」と名のついたモンスター1体をゲームから除外して発動できる。

自分の墓地の「ジェムナイト」と名のついたカード1枚を選択して手札に加える。

このまま2体のナイトの攻撃を受けたら、十代のライフは0になる。が、やっぱり黙ってやられる十代じゃなかったようだ。

「リバーズ発動、クリボーを呼ぶ笛！デッキからハネクリボーを守備表示で特殊召喚だ！」

クリボーを呼ぶ笛

速攻魔法

自分のデッキから「クリボー」または「ハネクリボー」1体を選択し、

手札に加えるか自分フィールド上に特殊召喚する事ができる。

ハネクリボー

効果モンスター

星1 / 光属性 / 天使族 / 攻 300 / 守 200

フィールド上に存在するこのカードが破壊され墓地へ送られた時に発動する。

発動後、このターンこのカードのコントローラーが

受ける戦闘ダメージは全て0になる。

「ならばアイオーラの攻撃を中止し、ルビーズでハネクリボーを攻撃  
！」

ジェムナイト・ルビーズ 攻2500↓ハネクリボー 守200  
(破壊)

十代 LP2700↓400

「そんな、なんで俺がダメージを受けたんだ？」

『十代……ハネクリの弱点についてはテストのときに教えといてやつ  
ただろうが。もう忘れたんか』

「確かハネクリボーの効果って、自分が戦闘するときのダメージは防  
げないんだっけ、って聞きたいみたい」

「うん、そのはずだよ。……………(だよね、ユーノ?)」

『せーかい。ったく、困ったもんだ。こりや後で詰め込み直しだな』

観客席で僕がまた一つ賢くなったところで……………あ、もちろん僕は  
知ってたよ？ホントホント、僕ちやんとわかってたから。あ、あはは  
はは……。コ、コホン、とにかくハネクリボーは破壊されて、十代の  
ライフが一気に削られたわけで。

「アイオーラをこのままにするのは危険か。メイン2でルビーズの効  
果を使えば……………いや、まあいいだろう。ここでターンエンドだ」

十代 LP400 手札：0 モンスター：なし 魔法、罠：なし

三沢 LP3800 手札：0 モンスター：ジェムナイト・ルビー  
ズ(攻)、ジェムナイト・アイオーラ(攻)、??? (守) 魔法・罠：なし

「頼むぜ、俺のヒーロー達……俺のターン、ドロロー！」

ここで逆転しない限り、十代にとっては最後となる一手。会場にい  
る全員が、息をのんで十代のドロローカードを見守る。さあ、その結果  
は……………?

「よっしゃあ！俺の手札がこのカード一枚の時、バブルマンは手札か  
ら特殊召喚できる！さらにバブルマンの効果発動、カードを2枚ド  
ロロー！」

『出たな、強欲な泡男！』

E・HERO バブルマン

効果モンスター

星4／水属性／戦士族／攻 800／守1200

手札がこのカード1枚だけの場合、

このカードを手札から特殊召喚する事ができる。

このカードが召喚・反転召喚・特殊召喚に成功した時に

自分のフィールド上と手札に他のカードが無い場合、

デッキからカードを2枚ドローする事ができる。

「さらに、装備魔法バブル・シヨットをバブルマンに装備！これで攻撃力アップだ、アイオーラに攻撃！バブル・シヨット！」

巨大な、まるで水鉄砲のような形状の銃を片膝ついて構えたバブルマンが、勢いよくその銃から泡を発射してアイオーラを押し流す。

バブル・シヨット

装備魔法

「E・HERO バブルマン」にのみ装備可能。

装備モンスターの攻撃力は800ポイントアップする。

装備モンスターが戦闘で破壊される場合、

代わりにこのカードを破壊し、装備モンスターの

コントロールへの戦闘ダメージを0にする。

E・HERO バブルマン 攻800↓1600↓ジェムナイト・

アイオーラ 攻1300（破壊）

三沢 LP3800↓3500

「カードを一枚セットして、ここでターンエンドだ！」

「俺のターン、ドロー！駄目だ、このカードだけではバブルマンの処理ができなくて、次のターン十代に流れを持って行かれる………しようがない、あまり自分からは使いたくなかったんだが背に腹は代えられないか。セットモンスターを反転召喚、メタモルポット！さあ十代、カードを5枚ドローするんだ」

メタモルポット

効果モンスター（制限カード）

星2／地属性／岩石族／攻 700／守 600

リバース：お互いの手札を全て捨てる。

その後、お互いはそれぞれ自分のデッキからカードを5枚ドロースる。

「ただし俺はこれだけでは終わらん、今手札から捨てたジェムナイト・ラズリーの効果により墓地のガネットを回収、そして召喚する！」

ジェムナイト・ラズリー

効果モンスター

星1／地属性／岩石族／攻 600／守 100

このカードがカードの効果によって墓地へ送られた場合、

自分の墓地の通常モンスター1体を選択して手札に加える事ができる。

ジェムナイト・ガネット

通常モンスター

星4／地属性／炎族／攻1900／守 0

ガーネットの力を宿すジェムナイトの戦士。

炎の鉄拳はあらゆる敵を粉碎するぞ。

「そして墓地のラズリーを除外し、ジェムナイト・フュージョンをまた手札に。そしてまた発動！手札のクリスタと場の岩石族メタモルポットを融合して現れる、ジェムナイト・ジルコニア！」

拳がメラメラと燃えている赤みがかったオレンジ色の闘士の隣に現れた3体目の融合ジェムナイトの色は、クリスタル。ダイヤモンドそっくりの輝きを放つヘビィ・ナツクルを両腕に装着した、余分な効果を全て捨てての戦闘力に特化したパワーファイターだ。

ジェムナイト・ジルコニア

融合モンスター

星8／地属性／岩石族／攻2900／守2500

「ジェムナイト」と名のついたモンスター＋岩石族モンスター

「バトル！ガネットでバブルマンを攻撃！」

ジェムナイト・ガネット 攻1900↓E・HERO バブルマン

攻1600（バブル・ショット破壊）

E・HERO バブルマン 攻1600↓800

「続いてルビースでもバブルマンを攻撃！」

「セットカード発動、バブル・シャッフル！ジルコニアとバブルマンを  
守備表示に変更、さらにバブルマンをリリースしてエツジマンを特殊  
召喚！」

ルビーズの鎌があと一步でバブルマンに届く寸前、周りにバブルマ  
ンの姿が見えなくなるほど大量の泡が湧く。そしてその泡の中から  
姿を見せるのは、金色に輝く鎧を着た十代のメインデッキ最強の攻撃  
力を持つモンスター、エツジマン。

バブル・シャッフル

速攻魔法

「E・HERO バブルマン」がフィールド上に

表側表示で存在する時のみ発動する事ができる。

自分フィールド上に表側攻撃表示で存在する「E・HERO バブ  
ルマン」1体と

相手フィールド上に表側攻撃表示で存在するモンスター1体を守  
備表示にする。

守備表示にした「E・HERO バブルマン」1体を生け贄に捧げ、  
「E・HERO」と名のつくモンスター1体を手札から特殊召喚する。

E・HERO エツジマン

効果モンスター

星7 / 地属性 / 戦士族 / 攻2600 / 守1800

このカードが守備表示モンスターを攻撃した時、

その守備力を攻撃力が越えていれば、

その数値だけ相手ライフに戦闘ダメージを与える。

ジェムナイト・ジルコニア 攻2900 ↓ 守2500

「エツジマンとは、また厄介なモンスターを……悔やんでも仕方がな  
いか、カードを一枚伏せてターンエンド」

十代 LP400 手札：4 モンスター：E・HERO エツジ  
マン (攻) 魔法、罫：なし

三沢 LP3800 手札：3 モンスター：ジェムナイト・ルビー  
ズ (攻)、ジェムナイト・ガネット (攻)、ジェムナイト・ジルコニア  
(守) 魔法・罫：1

「いくぜ、三沢！俺のターン、死者蘇生でワイルドマン復活！さらに融合を発動してワイルドマンとエッジマンを融合！ワイルドジャギーマンを召喚だ！」

E・HERO ワイルドジャギーマン

融合・効果モンスター

星8/地属性/戦士族/攻2600/守2300

「E・HERO ワイルドマン」+「E・HERO エッジマン」

このモンスターは融合召喚でしか特殊召喚できない。

相手フィールド上の全てのモンスターに1回ずつ攻撃をする事ができる。

「さらに魔法カード、Hーヒートハートを発動！ワイルドジャギーマンの攻撃力を500ポイントアップさせるぜ」

燃え上がるHの文字をバックに、ワイルドジャギーマンが自らに気合を入れる。

Hーヒートハート

通常魔法

自分フィールド上に表側表示で存在するモンスター1体を選択して発動する。

選択したモンスターの攻撃力は500ポイントアップする。

そのカードが守備表示モンスターを攻撃した時、

その守備力を攻撃力が越えていれば、

その数値だけ相手ライフに戦闘ダメージを与える。

この効果は発動ターンのエンドフェイズまで続く。

E・HERO ワイルドジャギーマン 攻2600↓3100

「ワイルドジャギーマンでガネット、ルビース、ジルコニアに攻撃！インフィニティ・エッジ・スライサー！」

E・HERO ワイルドジャギーマン 攻3100↓ジェムナイ

ト・ガネット 攻1900 (破壊)

三沢 LP3800↓2600

E・HERO ワイルドジャギーマン 攻3100↓ジェムナイ

ト・ルビース 攻2500 (破壊)



三沢 LP2600↓2000

E・HERO ワイルドジャギーマン 攻3100↓ジエムナイ

ト・ジルコニア 守2500 (破壊)

三沢 LP2000↓1400

「カードをセットして、ターンエンドだ」

E・HERO ワイルドジャギーマン 攻3100↓2600

「すごい、ここまで巻き返した……！」

「やるね、だつてさ」

『三沢も三沢で、ちよつと勝負を急ぎすぎてたかもしれねえけどな。それにしたつてつくづく大したもんだ、十代』

「ふつ、だがそれでこそ面白い！俺のターン、ドロー！手札の死者蘇生を発動、墓地のジルコニアを蘇生！」

「またワイルドジャギーマン以上の攻撃力のモンスターが」

ジエムナイト・ジルコニア 攻2900

「ああ、だがそれだけじゃないぞ。墓地のクリスタを除外し、ジエムナイト・フュージョンをもう一度手札に。そして発動し、場のジルコニアと手札のアンバー、エメラルを融合！見せてやるぞこのデッキの切り札、ジエムナイトマスター・ダイヤ!!」

満を持してフィールドに現れる、これまでのジエムナイトたち以上の威厳をもつ騎士の王にして宝石の王。ワイルドジャギーマンが思わずといった感じで一步退いたように見えたのは、僕の気のせいだろうか。

ジエムナイトマスター・ダイヤ

融合・効果モンスター

星9 / 地属性 / 岩石族 / 攻2900 / 守2500

「ジエムナイト」と名のついたモンスター×3

このカードは融合召喚でのみエクストラデッキから特殊召喚できる。

このカードの攻撃力は、自分の墓地の「ジエム」と名のついたモンスターの数×100ポイントアップする。

また、1ターンに1度、自分の墓地のレベル7以下の「ジエムナイ

ト」と名のついた

融合モンスター1体をゲームから除外して発動できる。

エンドフェイズ時まで、このカードは除外したモンスターと同名カードとして扱い、  
同じ効果を得る。

「ダイヤは墓地にいるジェムナイトの力を自分のものにできる……：まず、俺の墓地にいるジェムナイトはサファイア、パース、アンバー、アイオーラ、ガネット、ルビーズ、ジルコニア、アンバー、エメラルルの9体だ、したがって攻撃力が900ポイントアップする。もつとも俺はダイヤの特殊効果を発動、墓地のパースを除外してその効果と名前を得る！」

「パースの効果……：フレイム・ウイングマンが二回攻撃するのと同じあれか！」

三沢が効果を発動すると、ダイヤの手にする大剣に埋め込まれた宝石の一つ……：……トパースがひととき強い輝きを放つ。

ジェムナイトマスター・ダイヤ 攻2900↓3700

ジェムナイトマスター・ダイヤ↓ジェムナイト・パース

「最後のバトルだ！パースとなったダイヤで、ワイルドジャギーマンに攻撃！」

「なあ、三沢！」

「……………？どうした、十代」

「デュエルって、やっぱり面白いよな！最後まで何が起きるかわからなくてよ！」

「ああ、そうだな。楽しかったぞ、十代！」

宝石の大剣とワイルドジャギーマンの抱える剣。二つの剣がフィールドのど真ん中でぶつかり合い、爆発を起こす。

ジェムナイト・パース（ジェムナイトマスター・ダイヤ） 攻3700

0↓E・HERO ワイルドジャギーマン 攻2600（破壊）

十代 LP400↓0

「どうやら、今回は俺の勝ちのようだな」

「それはどうかな？これが俺の、最後のトラップだ！リバーズカード

オープン、英雄変化ーリフレクター・レイ!!」

チェンジ・オブ・ヒーロー  
英雄変化ーリフレクター・レイ

通常罠

自分フィールド上に存在する「E・HERO」と名のついた融合モンスターが

戦闘によつて破壊され墓地へ送られた時に発動する事ができる。

破壊された融合モンスターのレベル×300ポイントダメージを相手ライフに与える。

「なに!? まだそんな隠し玉を持っていただど!？」

「だから言つたら、デュエルは最後まで何が起こるかわからないって!」

三沢 LP1400↓0

「いやー、終わった終わったー!」

『そういや、結局ノース校の件どーすんだろーな。引き分けだから二人出します、つてのは無理だろ』

「じゃあ清明、私は寮に帰るからね? だつてさ」

「うん、それじゃあまた」

「また明日会おうね、だつて」

そう言つて夢想が席を立つ……………た瞬間、校内放送が響いた。この声、校長だな。

「三沢大地君、遊城十代君、お疲れ様でした。両者ともに、素晴らしいデュエルでしたね。さて、すみませんが二人とも、それにオシリスレッドの遊野清明君、オベリスクブルーの天上院明日香さん、河風夢想さんは、このあと校長室まで来てください」

『えっ?』

とりあえずさつき呼ばれた5人で集まって校長室へ歩いていく……………んだけど、僕と十代はちよつと顔色が悪い。というか行き

くない。もちろん、校長室に行きたくないということはそれ相応の理由があるワケで。

「ねえ十代。……まさかとは思うんだけど、『アレ』ばれたのかな？」  
「い、いや、大丈夫……だろう？ほら、大徳寺先生だって2階に上がってきたことはないし、昼は俺らと一緒に学校にいるわけだし、な……」

「貴方達、さつきから何の話かしら？」

「い、いや、こつちの話だぜ明日香！」

「一体お前ら、何をやらかしたんだ？」

「や、やだなー三沢ったら！別に何もしてないよっ！」

「ホントに？嘘ついたら駄目だよ、だってさ」

「う」

見るなー！そんなまつすぐな目で僕を見ないでくれー！

「で、お遊びはいいとして。貴方達が一体何をしたのか、正直に言いなさい」

十代と顔を見合わせて、アイコンタクトだけでなんとかこの場を言い逃れるすべがないか緊急会議を開く。

「(十代、なにかいい話題ある?)」

「(さっぱり思いつかないぜ。清明も、何かあるか？チクシヨウ、なんぞ校長室はこんな遠いんだよ!)」

「(いや、校長室に着いたら本末転倒だから)」

「早く言いなさい、二人とも?」

『諦めろ、お前ら。もう言い逃れは無理だぜ?それにどーせコイツらには黙っててもそのうちばれるだろ』

「ハイ………実は、誰にも言わないでほしいんだけどさ」

「まったく………」

「清明、ずいぶん大胆だね……だってさ」

「呆れて声も出ないわね」

「いや、だって、その、ね?」

「な、なあ!あれはしようがないよな、清明」

ああ、皆からの呆れた視線が痛い。まあぶつちやけ何をやったかっ  
ていうと、レッド寮あるでしょ。僕らの愛すべきボロ……こほん、味  
のある家。この間、僕の部屋と十代の部屋の間にあった壁を寝ぼけて  
蹴りつけた拍子に大穴開けちゃってね？慌てて土木工事した結果、壁  
を埋めるはずだったのになぜか気が付いたら僕のいる部屋と十代達  
の部屋の間にはドアが一つ増設されることになって。いや、壁ぶち抜い  
てそこに廃品回収で捨ててあったのを拾っておいたドアはめ込んだ  
だけなんだけど。でも、おかげで僕らの部屋だけ出入りは随分楽に  
なったよ。もう他のレッド生も退学だの転校だので数が減っていつ  
て、気づいた時にはだいぶ人が少なくなってたからこそ通った無茶。  
あんま反省してない。後悔も特にする気はない。でも怒られるだろ  
うな、つてのはさすがに想像つくからなあ。

とりあえず正直に打ち明けた3人には絶対秘密にしておくようお  
願いして、ついにたどり着いた校長室。代表して十代がノックを  
……しようとしたら、自動ドアがスウツと開いた。だいぶ緊張して  
んな、十代。

『お前も膝、震えてんぞ』

あ、どうりで視界がカクカクすると思ったら。そんな僕らを見かね  
たのか、三沢が救いの手を差し伸べてくれた。

「三沢大地以下四人、ただいま参りました。それで校長、用件というの  
は？」

「よく来てくれましたね。実は、非常に急な話で申し訳ないのですが  
……………」

なんだろう。さすがに『退学』ってことはないだろう。それならわ  
ざわざ関係ない夢想たちまで呼びつける意味がない。あ、じゃあ『停  
学』あたりかな？つて、それを言うにしても僕らだけで十分だろう。  
じゃあ……………？

「あなた達5人には、今度のノース校とのデュエルで本校の代表を努  
めていただきたいのです」

時が止まった。

「……………は？えっとすいません校長、もっかい言ってくれませんか？」

「混乱するのも無理はありませんが、あなた達5人に本校の代表になつて欲しいのです」

「それはどういった訳があるんでしょうか、校長？」

さすがの明日香も、この発言には戸惑いを隠せないようだ。校長の机にバンツと手を置き、そのまま詰め寄る。軽くため息をつきながらえらく手慣れた感じで夢想が明日香の腕を持つて後ろに引つ張つて勢いを殺してたけど、もしかして女子寮の日常風景つてこんななんなんだろうか。

「実はですね、さっきのデュエルの最中、ノース校の校長から電話がかかってきました。なんでもあちらの代表が、お互いに5人ずつ選手を決めて順番に戦い先に3勝したほうが勝つ団体戦デュエルというのを提案して、生徒全員がそれに乗り気になったようです」

「それで、断りきれなくなったノース校の校長がこちらに同意を求めてきたと？」

「はい。できればこの試合、君たちが受けてくれると有難いのですが……………」

団体戦つていうと、あれか。先鋒、次峰、中堅、副将、大将にわかれてやるやつか。

『そうそう。ちなみに一つ補足しとくと、鋒の読み方は「ほう」だからな。「ぼう」なんて読んで恥かくなよ』

まあ、ほうだろうがほうだろうがどつちでもいい。返事？もちろんきまつてるさ。こんな面白そうな話なんだから。

「「」もちろん引き受けます」「」……ですって」

「そうですか……ありがとうございます。詳しいことはまた、追って連絡しますので」

そう言つてほほ笑む校長の顔を見て、もしかしたらこの返事も織り込み済みなんじゃないかと思つた。いや、別にそれでもかまわないんだけど。

ノース校特別編くプリンセス・Tの甘い褒美く  
ターン16 先鋒、玩具箱の勇士達

なんのかんので月日は流れ、あつという間にノース校がやってくる日になってしまった。いや、月日つたつてまだ一週間しか経ってないんだけど。で、もうそろそろ時間なんだけど……。

「さて、いよいよ今日になっちゃったわけだけどさ十代。なーにやってんのこんな時間になって。もうあつちの船着いちゃうよ？ちゃんとお迎えぐらいはやつとかないとダメでしょやっぱり」

「え、もうそんな時間か？悪い悪い。じゃ、さっさと行こうぜ！」

「どっちのセリフなんだか……あ、ちよつと置いてかないでよ！わざわざ呼びに来たのにこの扱い！」

『はらはら、早く来ないと置いてくぜー』  
「ユーノまでっ!？」

相も変わらずいつも通りの十代に置いて行かれそうになりながら、慌てて島にある港に走っていく。案の定、もう船は来ていた。船というより潜水艦だね、ありや。

「おー、あんたがノース校の校長か！よろしくな、俺遊城十代！それでさ、俺らの対戦相手ってどこにいるんだムグ」

「はーいちよつとおちつこーね十代。どうも、同じくアカデミア代表、遊野清明です。今日はわざわざ遠くからお越し下さり、ありがとうございます  
ございます」

じたばたともがく十代を羽交い絞めにしながら、とりあえず校長と思しき人にあいさつする。えーつと、ちゃんとしたあいさつってのはこんな感じでいいのかな？

『まあこんなもんでいいんじゃないやね？後ろで鮫島校長が出番とられて泣きそうになってるぐらいだし』

……ごめん、校長。そしてそう思っで一瞬腕の力が弱まったところを、十代は見逃さなかったらしい。ウナギ並みにスルスルと抜け出して、懲りずにまたタメ口。



「ぷはー、やつと出れた……。それで、校長のおっちゃん！早く紹介してくれよ、対戦相手痛あつ！」

「ちよつと落ち着けつつってんでしょ」

「痛てて……いきなり殴ることないだろ、清明ー」

「ええい、茶番はもうたくさんだ！久しぶりだな、遊城十代に遊野清明!!」

「そ、その声はー！」

聞き覚えのある声がノース校生徒の人垣の向こうからして、そつちに視線を向けるとその人垣が左右真つ二つに割れた。そしてその向こうに一人、腕を組んで堂々とふんぞり返っていたのは。

「ま、万丈目!?!」

「そんなに知りたいのなら教えてやる、この俺がノース校代表の大将、万丈目準だ！」

まあその後なんの脈絡もなくいきなりやってきた万丈目の兄さん二人が今回のデュエルをテレビ中継するとか言い出したりしてなんかもういろいろ大変だったけど、機材の準備やらなんやかんやでドタバタしてて緊張する暇がなかったからそういう意味ではむしろ良かったのかもしれない。そして今、僕らは選手控え室にいる。さつきまで翔や隼人や神楽坂や高寺、それにブルーからはジュンコにももえ、そしてなんとカイザーまでもが応援しに来ていたけど、もう皆自分の席を取りに帰っていった。

「いやー、まさか万丈目がノース校まで行ってたなんてね。まあ無事でよかったよ」

「それもそうだが、今日の俺らの試合はなんでも全国に向けて万丈目グループ主催でテレビ中継されるそうだな。考えてみるとすごい話だ」

「まったくね。まあ私は別にかまわないけれど。自分のデュエルをやるだけよ。それにしても彼、一体この学校を逃げ出すほどの価値のある何かを見つけられたのかしら?」

「手厳しいね、明日香……………だつてさ。あれ、そういえば一人足りないみたいだけど？」

「ああ、十代は一回レッド寮に戻ったよ。身だしなみがきちんとしてるか不安だからテレビに出ても大丈夫なぐらいキツチリやつてくるって」

『で、帰ってくるころにトイレの中で例のシーンがあるんですねわかります』

「何例のシーンて」

『無理に知る必要はないな』

どうやらウチの相方は、今日も何か隠してるようだ。まあ、それもいつも通りっちゃあそうなんだけど。おっと、そろそろ時間だ。十代は……………ま、そのうち来るでしょ。たぶん。

「あぶねー、遅れるとこだったぜ！それじゃ皆、デュエルしに行こうぜ！」

ほら、ね。

「お集まりの皆さん。それではこれより、デュエルアカデミア本校対ノース校の、対抗試合を始めますノーネ！どうもテレビの前の皆さん、ワタクシこのデュエルアカデミア本校で実技担当最高責任者を務めているクロノス・デ・メデイチと申しますノーネ。それでは、まずこちら本校の生徒たち、右から順に天上院明日香、河風夢想、そして三沢大地……………とドロップアウト、じゃなかった、遊野清明に遊城十代ですーノ！」

クロノス先生の紹介の後、観客席にサクラでも入ってるのかどうかは知らないけど歓声が起こる。と、とりあえず手でも振つところかな。多分僕宛てじゃあないだろうけど、そこはまあノリつてやつで。ところで、僕ら5人の紹介が終わったあたりで万丈目がちよつと不思議そうな顔をしたのはなんでだろう？まさか、ね。ユーノが見えるってことはないだろう。

「そして対するは、ノース校代表……………」

「要らん、俺の名は自分で言う！マイクを貸せ、おかつぱ頭」

言うが早いがクロノス先生からマイクを奪った万丈目が、ステージの中心で客席に向かい声を張り上げる。

「お前たち、この俺を覚えてるか！この学園で俺が消えて清々したと思っている奴！俺の退学を自業自得だとほざいた奴！知らぬなら言つて聞かせるぜ、その耳かっぱじつて良く聞かがいい！地獄の底から不死鳥の如く復活してきた俺の名は！………一！十！」

そう言いながら万丈目がビシツと上、というか天井を指差すと、ノース校の生徒たちが一斉に声を上げた。なぜかユーノまで混ざつてた。それも結構ノリノリで。

「『百・千・』」

そしてカウントが千に達した時、万丈目が再び声を上げる。

「万丈目、サンダーツ！！」

「『サンダー！サンダー！』」

なにがなんだかわからず、僕も含めた本校の生徒たちがポカーンとしている間に、勝手に試合を仕切り始めてしまった。まあ、クロノス先生はさっきのマイクのコードが絡まって身動き取れないんだし別に嫌がる理由もないけど。

「さあ、行つて来い飯田！大丈夫だ、お前らサンダー四天王ならきつとやれる！」

「任せてください、サンダー！本校の奴らに一泡吹かせてやりますよ！………俺の名前は飯田、ノース校先鋒にしてサンダー四天王の一だ！さあ、お前らも先鋒を出せ！」

そう言いながらデュエルステージに上がってきたのは、不良っぽい見た目のガタイのいい兄ちゃん。てかこの人、ホントに僕らと同年なんだろうか。隼人よりも年上に見えるんだけど。

『つーかサンダー四天王ってなんなんだよ。いやまあ5人って時点でそんなオチかとは思ったけどさ』

「サンダー四天王？面白いわね、私がこちらの先鋒、天上院明日香よ」  
でも、こつちの先鋒は流石というかなんというか、そんな相手にもひるむことなくまっすぐに立つ。「キヤー明日香様ー！」とかあつ

ちで叫んでるのは多分ジュンコとももえの二人だろう、いつも通り。「いいか、一切の手加減を俺はせん。そのかわりお前も、全力でかかって来い！」

「あら、そんなの当たり前でしょう？」

「デュエル！」

「先攻は俺が貰う、俺は手札のブリキンギョを守備表示で召喚！そしてブリキンギョの効果により、手札のアイアイアンを特殊召喚！」

ブリキの名前通り木製っぽい見た目の玩具が地面をカタカタと跳ね回ると、両手のシンバルを鳴らしながらアイアイの玩具がシャンシャンと音を立てて背中のゼンマイをゆっくりと回しながら歩いてくる。

ブリキンギョ

効果モンスター

星4 / 水属性 / 機械族 / 攻 800 / 守 2000

このカードが召喚に成功した時、

手札からレベル4モンスター1体を特殊召喚できる。

アイアイアン

効果モンスター

星4 / 地属性 / 機械族 / 攻 1600 / 守 1800

1ターンに1度、自分のメインフェイズ時に

このカードの攻撃力を400ポイントアップできる。

この効果を発動するターン、このカードは攻撃できない。

「あら、可愛いらしいモンスターね」

「舐めてもらっちゃ困るぜ？アイアイアンの効果発動！このカードの攻撃力を400ポイント上げる！」

一度止まりかけたゼンマイが急に高速回転し、目をカッと見開いたアイアイアンがシンバルを一度だけ力いっぱい鳴らした。うお、うるさい。

アイアイアン 攻 1600 ↓ 2000

「そしてカードを二枚セット、ターンエンドだ」

「私のターン、ドロロー！手札のサイバー・ジムナクティスを守備表示で

召喚するわ」

サイバー・ジムナクティス

効果モンスター

星4／地属性／戦士族／攻 800／守1800

手札を1枚捨てる。

相手フィールド上に存在する表側攻撃表示モンスター1体を破壊する。

この効果は1ターンに1度しか使用できない。

「そして手札を捨ててジムナクティスの効果発動、破壊するのはアイアンしかないわね」

「俺の大事なアタッカー、そう簡単には捨てないぜ！リバーズカード、禁じられた聖杯！これでそのモンスターの効果は無効になって、手札を捨てただけで終わる！」

「なら、カードをセットしてターンエンドよ」

飯田 LP4000 手札：2 モンスター：ブリキンギョ（守）、

アイアイアン（攻） 魔法・罠：1（伏せ）

明日香 LP4000 手札：3 モンスター：なし 魔法・罠：

1

「俺のターン、ドロロー！ここは………ゼンマイソルジャー、召喚！」

緑色を基調としたおもちゃの兵隊が、背中のゼンマイを回転させる。

ゼンマイソルジャー

効果モンスター

星4／地属性／戦士族／攻1800／守1200

自分のメインフェイズ時に発動する事ができる。

エンドフェイズ時までこのカードのレベルを1つ上げ、

攻撃力を400ポイントアップする。

この効果はこのカードがフィールド上に表側表示で存在する限り1度しか使用できない。

「そして永続魔法、ゼンマイマニユファクチュアを発動するぜ。ゼンマイソルジャー、それにアイアイアン！効果発動だ！」

二体のモンスターの体についたゼンマイが動き出すとアイアイア  
ンはまたシンバルを鳴らし、ゼンマイソルジャーは両腕をぐるぐると  
回転させた。

アイアイアン 攻2000↓2400

ゼンマイソルジャー 攻1800↓2200 ☆4↓5

「そしてゼンマイソルジャーが効果を使ったことでマニユフアクチュ  
アの効果、デツキのゼンマイマイを手札に加えておく」

ゼンマイマニユフアクチュア

永続魔法

「ゼンマイ」と名のついたモンスターの効果が発動した場合、

自分のデツキからレベル4以下の

「ゼンマイ」と名のついたモンスター1体を手札に加える事ができる。

この効果は1ターンに1度しか使用できない。

「アイアイアンは攻撃できないからな。ゼンマイソルジャーでサイ  
バー・ジムナクティスを攻撃！」

ゼンマイソルジャー 攻2200↓サイバー・ジムナクティス 守  
1800 (破壊)

「へへっ、よくやったぞソルジャー！カードを伏せて、これでターンエ  
ンドだ！」

ゼンマイソルジャー 攻2200↓1800 ☆5↓4

「私のターン、ドロロー！もう、しょうがないわね。手札の融合を発動、  
エトワール・サイバーとブレード・スケーターを融合するわ。来なき  
い、サイバー・ブレイダー!!」

サイバー・ブレイダー

融合・効果モンスター

星7/地属性/戦士族/攻2100/守 800

「エトワール・サイバー」+「ブレード・スケーター」

このモンスターの融合召喚は上記のカードでしか行えない。

相手のコントロールするモンスターが1体の場合、

このカードは戦闘によっては破壊されない。

相手のコントロールするモンスターが2体の場合、

このカードの攻撃力は倍になる。

相手のコントロールするモンスターが3体のみの場合、

このカードは相手の魔法・罠・効果モンスターの効果を無効にする。

「今、あなたの場のモンスターは3体………無効効果ね、パ・ド・カトル！そしてサイバー・ブレイダーでアイアイアンを攻撃するわ、グリツサード・スラツシユ！」

「何い!?アイアイアン、迎撃を………!」

「待ちなさい、墓地のブレイクスルー・スキルの効果を発動!このカードを墓地から除外して、アイアイアンの効果をエンドフェイズまで無効にするわ!」

アイアイアン 攻2400↓1600

サイバー・ブレイダー 攻2100↓アイアイアン 攻1600  
(破壊)

飯田 LP4000↓3500

「お、俺の勇敢な玩具の戦士が!」

「あら、貴方が本気で来いって言ったんじゃないのかしら?そして貴方のモンスターが2体になったことで、サイバー・ブレイダーの効果もパ・ド・トロワになるわ。私はこれでターンエンドよ!」

サイバー・ブレイダー 攻2100↓4200

飯田 LP3500 手札:1 モンスター:ブリキンギョ(守)、  
ゼンマイソルジャー(攻) 魔法・罠:ゼンマイマニユフアクチュア、  
2(伏せ)

明日香 LP4000 手札:1 モンスター:サイバー・ブレイ  
ダー(攻) 魔法・罠:1(伏せ)

「俺のターン、ドロー!ソルジャーを守備表示にしてターンエンドだ  
よチクショウ!」

ゼンマイソルジャー 攻1800↓守1200

「さっきまでの威勢はどこに行ったのかしらね………ドロー!サイ  
バー・ブレイダーにビツクバン・シュートを装備するわ。残念だった  
わね、守備表示にしたのが裏目に出て!」

ビツクバン・シュート

## 装備魔法

装備モンスターの攻撃力は400ポイントアップする。

装備モンスターが守備表示モンスターを攻撃した時、

その守備力を攻撃力が超えていれば、

その数値だけ相手ライフに戦闘ダメージを与える。

このカードがフィールド上から離れた時、装備モンスターをゲームから除外する。

サイバー・ブレイダー 攻4200↓4600↓5000

「サイバー・ブレイダーでゼンマイソルジャーを攻撃！グリツサード・スラッシュュ！」

「トラップ発動、攻撃の無力化！このカードでバトルフェイズを終わらせるぜ。今のサイバー・ブレイダーならこのカードも使えるってもんさ」

「……………ターンエンドよ」

飯田 LP3500 手札：2 モンスター：ブリキンギョ（守）、ゼンマイソルジャー（守） 魔法・罠：ゼンマイマニユフアクチュア、1（伏せ）

明日香 LP4000 手札：1 モンスター：サイバー・ブレイダー（攻・ビ） 魔法・罠：ビックバン・シユート（サ）、1（伏せ）  
「んー、明日香の方が押ししてるのは間違いないんだけど、なーんかこうスッキリしないものがあるなあ」

「あの飯田という奴の守りもわりと固いからな。彼女も突破しかねているんだろう。お前がスッキリしない気分なのは、単に最近のデュエルがどれも激しいものばかりだったからじゃないか？」

「あ、そういうことかな。さっすが三沢、頭いいー！」

『その程度の推測に頭いい扱いするのはいかなもんじゃないか？』  
「るっさい」

「俺のターンドロー、ゼンマイマイはやっぱりまだ召喚できない……………なら、俺はブリキンギョとゼンマイソルジャーをリリースする！人形の王、パペット・キングを召喚！」

パペット・キング



効果モンスター

星7 / 地属性 / 戦士族 / 攻2800 / 守2600

相手がドロー以外の方法でデッキからモンスターカードを手札に加えた時、

手札からこのカードを特殊召喚する事ができる。

この方法で特殊召喚した場合、次の自分ターンのエンドフェイズ時にこのカードを破壊する。

「攻撃力は下がるけど、サイバー・ブレイダーの効果は戦闘破壊耐性になるわ。パ・ド・ドウ！」

サイバー・ブレイダー 攻5000 ↓ 2500

「構わねえさ、これでダメージが通る！パペット・キングの攻撃、マジエスティックチェッカー！」

パペット・キング 攻2800 ↓ サイバー・ブレイダー 攻250

0

明日香 LP4000 ↓ 3700

「これでターンエンドだ！」

「私のターン、ドロー。サイバー・チュチュを召喚して、その効果で貴方にダイレクトアタックするわ！ヌーベル・ポアント！」

サイバー・チュチュ

効果モンスター

星3 / 地属性 / 戦士族 / 攻1000 / 守 800

相手フィールド上に存在する全てのモンスターの攻撃力が

このカードの攻撃力よりも高い場合、

このカードは相手プレイヤーに直接攻撃する事ができる。

サイバー・チュチュ 攻1000 ↓ 飯田 (直接攻撃)

飯田 LP3500 ↓ 2500

「ターンエンドよ。さあ、どうするのかしら？」

飯田 LP2500 手札:2 モンスター:パペット・キング(攻)

魔法・罫:ゼンマイマニユファクチュア、1 (伏せ)

明日香 LP3700 手札:1 モンスター:サイバー・ブレイ

ダー(攻・ビ)、サイバー・チュチュ(攻) 魔法・罫:ビックバン・

シユート(サ)、1(伏せ)

「俺のターン、ドロ―！速攻魔法、サイクロンを発動！そのビツクバン・シユートを破壊するぜ！」

「だったら速攻魔法、移り気な仕立て屋を発動！このカードの効果で、装備カード一枚を別の正しい対象に移し替える………ビツクバン・シユートは貴方の王様にプレゼントするわ。そしてサイクロンの効果で破壊された時、装備モンスターのパペット・キングは除外されるわよ」

「差し引きするところがちが損かよ……。まあいいさ、ゼンマイジャグラーを召喚してサイバー・チュチュに攻撃！」

ゼンマイジャグラー

効果モンスター

星4／風属性／サイキツク族／攻1700／守1000

このカードが相手モンスターと戦闘を行った場合、

その相手モンスターをダメージ計算後に破壊する事ができる。

この効果はこのカードがフィールド上に表側表示で存在する限り1度しか使用できない。

キリキリキリ、とゼンマイが回る音を立てつつ一定のリズムでポンポンと器用にお手玉をするジャグラーが持っていたボールを全て宙に放り投げ、さらに足のバネを使って自身も空高くジャンプする。そしてその勢いでサイバー・チュチュに体当たりを仕掛けた。その後もう一度バネを使って野田の場に戻り、ちようど上から落ちてきた自分のボールでジャグリングを再開する。

ゼンマイジャグラー 攻1700↓サイバー・チュチュ 攻100

0(破壊)

明日香 LP3700↓3000

「ごめんなさい、サイバー・チュチュ………」

「ターンエンドだ」

「いくわよ、私のターン！サイバー・ブレイダーでゼンマイジャグラーに攻撃！グリツサード・スラッシュ！」

「ジャグラーの効果を知らないってわけじゃなさそうだし、何か企ん

でるな？リバースカード、バトル・ブレイク発動！さあ、その手札はモンスターカードかい？」

バトル・ブレイク

通常罠

相手モンスターの攻撃宣言時に発動できる。

相手は手札からモンスター1体を見せてこのカードの効果は無効にできる。

見せなかった場合、その攻撃モンスターを破壊し、バトルフェイズを終了する。

「……………この手札は見せないわ、効果は通すわよ」

「いよしっ！」

「カードをセットして、ターンエンドするわ」

飯田 LP2500 手札：1 モンスター：ゼンマイジャグラー

(攻) 魔法・罠：ゼンマイマニユファクチュア

明日香 LP3000 手札：0 モンスター：なし 魔法・罠：

1 (伏せ)

「俺のターン、ドロー！ゼンマイマイを守備表示で召喚、効果発動！その伏せカードには退場してもらおうぜ！」

ゼンマイマイ

効果モンスター

星2 / 水属性 / 水族 / 攻 1000 / 守2000

自分のメインフェイズ時、フィールド上にセットされた

カード1枚を選択して持ち主の手札に戻す事ができる。

この効果はこのカードがフィールド上に表側表示で存在する限り1度しか使用できない。

「戻される前に発動、スケープ・ゴート！貴方の攻撃は、4体の身代わり羊が引き受けるわよ」

羊トークン×4 守0

「で、でもゼンマイマニユファクチュアの効果は生きてる！デッキからゼンマイナイトを手札に加えるぜ！そしてゼンマイジャグラー、黄色の羊を攻撃だ！」

ゼンマイジャグラー 攻1700↓ 羊トークン 守0（破壊）

「カードをセット、ターンエンドだ」

「私のターン、ドロー！装備魔法、再融合を発動！墓地のサイバー・ブレイダーを呼び出して、このカードを装備するわ。そして貴方のモンスターは2体、パ・ド・トロワ！」

再融合

装備魔法

800ライフポイントを払う。

自分の墓地から融合モンスター1体を選択して

自分フィールド上に特殊召喚し、このカードを装備する。

このカードが破壊された時、装備モンスターをゲームから除外する。

明日香 LP3000↓2200

サイバー・ブレイダー 攻2100↓4200

「サイバー・ブレイダーでゼンマイジャグラーを攻撃！グリッサード・スラッシュよ！」

「やべ、そんなの受けたらジャストキルされちゃう！トラップ発動、螺旋式発条！この効果で手札のゼンマイナイトを特殊召喚！」

甦ったサイバー・ブレイダーのハイキックがゼンマイジャグラーの回避により空振りし、一度バランスを崩した隙に素早く駆け寄ってきたゼンマイ戦士がその行く手をふさいだ。

らせんしきぜんまい  
螺旋式発条

通常罠

自分フィールド上の攻撃力1500以上の

「ゼンマイ」と名のついたモンスター1体をリリースして発動する。

手札から「ゼンマイ」と名のついたモンスター1体を特殊召喚する。

その後、この効果で特殊召喚したモンスターと同じ攻撃力を持つ「ゼンマイ」と名のついたモンスター1体をデッキから特殊召喚できる。

ゼンマイナイト 攻1800

「なら、改めて攻撃よ！ゼンマイナイトに攻撃！」

「ゼンマイナイトの効果！一度だけゼンマイモンスターへの攻撃を止めろ！」

ゼンマイナイト

効果モンスター

星4 / 光属性 / 戦士族 / 攻1800 / 守1200

自分フィールド上に表側表示で存在する

「ゼンマイ」と名のついたモンスターが攻撃対象に選択された時、

そのモンスターの攻撃を無効にする事ができる。

この効果はこのカードがフィールド上に表側表示で存在する限り1度しか使用できない。

キリキリと音を立てて玩具の騎士のゼンマイが回ると左手の盾を地面に突き立ててその後ろにしゃがみ込み、サイバー・ブレイダーの回転蹴りを受け止めた。ただしその衝撃で盾にひびが入ったため、もうあれは防御には使えないだろう。

「ゼンマイナイトが効果を使ったことでマニユファクチュアの効果も発動、次のサーチはゼンマイニャンコだ。こいつはギリギリまでとっておくつもりだったんだけどな、だんだんそうも言ってられなくなってきた」

「ターンエンドするわ」

飯田 LP2500 手札:i モンスター:ゼンマイナイト(攻)、

ゼンマイマイ(守) 魔法・罫:ゼンマイマニユファクチュア

明日香 LP2200 手札:0 モンスター:サイバー・ブレイ

ダー(攻・再)、羊トークン×3(守) 魔法・罫:再融合(サ)

「ドロー！来たぜ、ゼンマイニャンコを召喚！そしてそのゼンマイが回りだすことで、手札のゼンマイシャークを特殊召喚！」

ゼンマイ仕掛けの子猫と鯨が、ポンポンと手札から飛び出てくる。あつという間にモンスターの数が4体になった。そしてサイバー・ブレイダーの効果は、相手が4体以上モンスターを使っている場合にはただの飾りになってしまう。こ、これは明日香、ピンチかな？

「そしてゼンマイニャンコの効果発動、一度だけ相手モンスターを手札に戻すぜ！いい加減帰れ、サイバー・ブレイダー！」

ゼンマイニヤンコ

効果モンスター

星2 / 地属性 / 獣族 / 攻 800 / 守 500

自分のメインフェイズ時に発動する事ができる。

相手フィールド上に存在するモンスター1体を選択して持ち主の手札に戻す。

この効果はこのカードがフィールド上に表側表示で存在する限り1度しか使用できない。

「そしてマニユファクチュアの効果、デッキのゼンマイネズミを手札に入れる！」

ゼンマイシャーク

効果モンスター

星4 / 水属性 / 魚族 / 攻1500 / 守1300

自分フィールド上に「ゼンマイ」と名のついたモンスターが召喚・特殊召喚された時、

このカードを手札から特殊召喚できる。

また、1ターンに1度、以下の効果から1つを選択して発動できる。

●このカードのレベルをエンドフェイズ時まで1つ上げる。

●このカードのレベルをエンドフェイズ時まで1つ下げる。

「そして俺のゼンマイたちを全員攻撃表示にして攻撃！シャークは青い羊、マイマイは赤いの、ニヤンコはピンク、そしてがら空きになったところをナイトでダイレクトアタック！」

ゼンマイシャーク 攻1500 ↓羊トークン 守0 (破壊)

ゼンマイニヤンコ 攻800 ↓羊トークン 守0 (破壊)

ゼンマイマイ 攻100 ↓羊トークン 守0 (破壊)

ゼンマイナイト 攻1800 ↓明日香 (直接攻撃)

明日香 LP2200 ↓400

「…………なるほどね、面白いわ」

「それ、褒めてんだよな？目が怖いぜ。ターンエンドっ」と

「ドロロー、荒野の女戦士を守備表示で召喚！」

もう後がない明日香が召喚したモンスターは、他のリクルーターよ

りも若干低いステータスが目につく戦士族専用のリクルーター。でも、あれじゃあ後続を呼んだって表側攻撃表示限定だし攻撃力は最大でも1500だし、次のターンを生き残ることなんてできるのかな。いや、明日香のことだ。なにかこんな時に備えての策があるんだろう。

荒野の女戦士 守1200

「私はこれでターンを終了するわ」

飯田 LP2500 手札:i モンスター:ゼンマイナイト(攻)、ゼンマイニャンコ(攻)、ゼンマイシャーク(攻)、ゼンマイマイ(攻)  
魔法・罫:ゼンマイマニユフアクチュア

明日香 LP400 手札:0 モンスター:荒野の女戦士(守)

魔法・罫:なし

「俺のターン、ドロロー！ネズミもあえて出す意味はないか。なら、バトルだ！ゼンマイシャークで荒野の女戦士に攻撃！」

ゼンマイシャーク 攻1500↓荒野の女戦士 守1200(破壊)

「荒野の女戦士の効果によって、デッキからカードガードナーを特殊召喚！そしてカードガードナーは自身の効果で、召喚成功時に守備表示になるわ」

鎧に身を包んだゼンマイたちよりさらにちっこい戦士が、いつちよまえに盾を構えて明日香を守る最後の騎士としてゼンマイの前に立ちふさがる。

カードガードナー 攻400↓守400

「守備力400……だがまあ、念には念を入れるか。ゼンマイナイトで追撃！」

「甘いわね、カードガードナーの特殊効果！デッキからカードを3枚墓地に送って、守備力を1900までアップさせるわ！」

明日香のデッキからカードが墓地に送られたことで小さな戦士の体を青いオーラが包み込み、ゼンマイナイトの一撃を回避して爪楊枝なみに細いその剣でブスリと一突きやり返した。

カードガードナー

効果モンスター

星3 / 地属性 / 戦士族 / 攻 400 / 守 400

このカードは召喚・反転召喚・特殊召喚に成功した時、守備表示になる。

自分フィールド上に表側表示で存在するモンスターが攻撃対象に選択された時、

このカードに攻撃対象を変更する事ができる。

このカードが攻撃対象になった時、

自分のデッキのカードを上から3枚まで墓地へ送る事ができる。

墓地へ送ったカード1枚につき、

このカードの守備力はエンドフェイズ時まで500ポイントアップする。

ゼンマイナイト 攻1800 ↓ カードガードナー 守400 ↓ 1900

飯田 LP2500 ↓ 2400

「ちつくしよ、シャークとマニユファクチュアの効果でウオリアーを持ってきてれば！悔やんでもしょうがねえ、ゼンマイシャークの効果発動、自分のレベルを1下げる！そして発動したマニユファクチュアでゼンマイウオリアーを手札に加えてカードを伏せてターンエンドッ！」

「ペラペラとよくしゃべる割にはずいぶん手札を増やしたわね……ドロー！貪欲な壺を発動、墓地のサイバー・チュチュ、サイバー・ジムナクテイス、サイバー・プリマ、荒野の女戦士、ジェミナイ・エルフの5体をデッキに戻して2枚のカードをドロー……手札の戦士の生還を発動、墓地の戦士族モンスター1体であるブレード・スケーターを手札に加えるわ。そして、手札の伝説の賭博師を召喚よ！」

レジエンド、ギャンブラー  
伝説の賭博師

効果モンスター

星4 / 闇属性 / 魔法使い族 / 攻 500 / 守1400

コイントスを3回行う。

3回とも表だった場合、相手フィールド上モンスターを全て破壊す



る。

2 回表だった場合、相手の手札をランダムに1枚捨てる。

1 回表だった場合、自分フィールド上に存在するカード1枚を破壊する。

3 回とも裏だった場合、自分の手札を全て捨てる。

この効果は1ターンに1度だけ自分のメインフェイズに使用できる事ができる。

「って、攻撃表示!?明日香、いくらなんでもそりや攻撃的すぎるんじゃない?」

「ううん、むしろあのほうが明日香らしいかも、だってさ」

「……………いつもあんな感じなの?」

「どんなに劣勢でもあくまで攻撃的に、というわけか。その姿勢は俺たちも見習うべきなのかもしれないな」

「さあ、いくわよ?まず一回目のコイントス!」

そう言っただけにはじき出されたソリットビジョンのコインが見せる面は、表。

『まずは一回、か。さあ、あと二回表を出してもらおうじゃないか』

「2 回目、コイントス!」

またもやソリットビジョンのコインがくるくると回転しながら落下する。今度の面も表。あと一回だ!

「これで、最後!」

この場にいる全員が、きらきらと光る小さなコインの行方に注目する。これまでの2枚より妙にゆっくりに感じる落下速度でコインが落ちてきて……………そして……………。

「表、ね。賭けは私の勝ちかしら」

その言葉に反応して、賭博師がニヤリと笑いながらゼンマイモンスター全員にどこからともなく取り出したコインを一枚ずつつけていく。するとそのコインが当たった瞬間爆発を起こし、炎が収まった時に飯田の場に立っているモンスターはいなかった。

「俺の、俺のモンスターが！」

「どうやら、まだ私に運はあるようね！伝説の賭博師でダイレクトアタック！」

なぜか今度はさっきの爆発コインを使わず、近づいて行って素手で殴りつける伝説の賭博師。そんなんだから攻撃力低いんだろうか。コインを使えばいいのに。

伝説の賭博師 攻500↓飯田（直接攻撃）

飯田 LP2400↓1900

「これでターンエンドするわ」

飯田 LP1900 手札：1 モンスター：なし 魔法・罠：ゼンマイマニユフアクチュア、1（伏せ）

明日香 LP400 手札：1 モンスター：カードガードナー（守）、伝説の賭博師（攻） 魔法・罠：なし

「落ち着け俺、まだ俺の方が有利なんだ！ゼンマイネズミ召喚、効果発動！甦れ、ゼンマイジャグラー！」

機械仕掛けの小さなネズミがどたとどとフィールドを走り回ってどこからともなく機械の部品を拾い集め、それを一か所に積み上げる。するとそのガラクタの山の中からゼンマイジャグラーがスプリングを使って飛び出してきた。

ゼンマイネズミ

効果モンスター

星3／地属性／獣族／攻 600／守 600

自分のメインフェイズ時に発動できる。

自分フィールド上に表側攻撃表示で存在するこのカードを表側守備表示に変更し、

自分の墓地の「ゼンマイ」と名のついたモンスター1体を選択して表側守備表示で特殊召喚する。

この効果はこのカードがフィールド上に表側表示で存在する限り1度しか使用できない。

ゼンマイジャグラー 守1000

「マニユファアクチュアの効果、サーチするのはゼンマイソルジャー！これでターンを終了だ！」

「守備固めのつもりかしら？ドロー！マジックカード、融合回収を発動！墓地の融合と、融合素材として墓地に送られたエトワール・サイバーを手札に戻すわよ。そして融合！もう一度踊りなさい、サイバー・ブレイダー！パ・ド・トロワ！」

サイバー・ブレイダー 攻2100↓4200

「そして……そうね、もう一度運試しと行こうかしら？伝説の賭博師の効果、コイントスよ！」

そして再びコインが3枚宙を舞う。が、さすがに奇跡は起こらなかった。出た面はなんと裏、裏、表。手札が一枚もない明日香にとっては、下手に表がでて自分フィールドのカード一枚を破壊するデメリット効果よりも、いつそのことすべて裏の手札を全て捨てる効果の方がよかつたんだろうなあ。ちなみにこの効果で、明日香は伝説の賭博師を破壊。最後に、自分で投げた爆発コインが自分にあたって爆発というコントみたいな散り際を見せてくれた。

「気を取り直して、サイバー・ブレイダーの攻撃！ゼンマイネズミを破壊するわ！」

サイバー・ブレイダー 攻4200↓ゼンマイネズミ 守600

(破壊)

「そしてサイバー・ブレイダーの効果もまた変わるわ。ターンエンドよ」

サイバー・ブレイダー 攻4200↓2100

飯田 LP1900 手札：2 モンスター：ゼンマイジャグラー

(守) 魔法・罨：ゼンマイマニユフアクチュア、1 (伏せ)

明日香 LP400 手札：0 モンスター：カードガードナー (守)、サイバー・ブレイダー (攻) 魔法・罨：なし

「俺のターン、ドロロー！ゼンマイウオリアーを召喚して、効果発動！ゼンマイジャグラのレベルを2、攻撃力を600上げる！マニユフアクチュアではゼンマイドッグをサーチしておくぜ。そして魔法カード、打ち出の小槌を発動！俺の手札のカードを………せっかくだから全部デッキに戻してその枚数と同じだけ、つまり2枚ドロロー！」

ゼンマイウオリアー

効果モンスター

星4 / 地属性 / 戦士族 / 攻1200 / 守1800

自分フィールド上に表側表示で存在する

「ゼンマイ」と名のついたモンスター1体を選択して発動する事ができる。

エンドフェイズ時まで選択したモンスター1体のレベルを1つ上げ、

攻撃力を600ポイントアップする。

この効果はこのカードがフィールド上に表側表示で存在する限り1度しか使用できない。

ゼンマイジャグラ 攻1700 ↓ 2300 ☆4 ↓ 6

「パ・ド・トロワ！」

サイバー・ブレイダー 攻2100 ↓ 4200

打ち出の小槌

通常魔法

自分の手札を任意の枚数デッキに加えてシャッフルする。

その後、デッキに加えた枚数分のカードをドロローする。

「よし、準備は万端だ！手札からモンスター1体の攻撃を相手のエンドフェイズまで1000ポイント上げる魔法カード、破天荒な風をゼンマイウオリアーに発動！」

ゼンマイウオリアー 攻1200 ↓ 2200 守1800 ↓ 28

00

「さあ、バトル！ゼンマイウオリアーでカードガードナーを攻撃！」  
「守備力は足りないけど、効果は使うわよ」

ゼンマイウオリアー 攻2200 ↓カードガードナー 守400  
↓1900 (破壊)

「そしてこれが、最後のバトルだ！ゼンマイジャグラでサイバー・ブレイダーを攻撃！」

「効果を使って突破する気なのか、それともまだ隠し玉があるのか。どちらにせよ、その攻撃は通さないわよ！墓地のタスケルトンの効果発動！その攻撃、止めさせてもらおうわ！」

「明日香、使ってくれたんだ。ちょっと嬉しいかも、なんだって」

「あれ、あのカードって夢想なの？いや、確かに迷宮兄弟のあたりで見えたことあるけど」

「一枚余ってたからね、だってさ。二枚以上入れる意味もないし」

まあ元の持ち主が誰だったにせよ、タスケルトンのやることは変わらない。一匹の子豚が体を膨らませ、スプリングでの飛び蹴りを受け止めた。

タスケルトン

効果モンスター

星2 / 闇属性 / アンデット族 / 攻 700 / 守 600

モンスターが戦闘を行うバトルステップ時、

墓地のこのカードをゲームから除外して発動できる。

そのモンスターの攻撃を無効にする。

この効果は相手ターンでも発動できる。

「タスケルトン」の効果はデュエル中に1度しか使用できない。

「ふっ、言っただろう、これを最後のバトルにすると！速攻魔法、ダブル・アップ・チャンス発動！こっちが本命の攻撃だぜ、ゼンマイジャグラー！」

ダブル・アップ・チャンス

速攻魔法

モンスターの攻撃が無効になった時、

そのモンスター1体を選択して発動できる。

このバトルフェイズ中、  
選択したモンスターはもう1度だけ攻撃できる。

その場合、選択したモンスターはダメージステップの間、攻撃力が倍になる。

ゼンマイジャグラー 攻2300↓4600

「でも、その攻撃だけじゃ私のライフは削りきれないわよ！」

「その攻撃だけなら、な！リバースカード発動、オーバー・レンチ！ゼンマイジャグラー、真の力を開放するんだ！」

ゼンマイジャグラーのゼンマイが目にも止まらぬほどのスピードで超高速回転し、本来出せる以上の出力に体中が激しい熱とともに真っ赤な光を放った。そして投げつけられる無数のジャグリング用ボールがさながら火矢のようにまつすぐ飛び、サイバー・ブレイダーを打ち抜いた。

オーバー・レンチ

通常罠

自分フィールド上に表側表示で存在する

「ゼンマイ」と名のついたモンスター1体を選択して発動する。

選択したモンスターの攻撃力・守備力は倍になり、

このターンのエンドフェイズ時に手札に戻る。

「オーバー・レンチ」は1ターンに1枚しか発動できない。

ゼンマイジャグラー 攻4600↓9200 守1000↓2000

ゼンマイジャグラー 攻9200↓サイバー・ブレイダー 攻4200 (破壊)

明日香 LP400↓0

「ごめんなさい、負けちゃったわ」

「気にしちゃダメだよ、明日香………だって。こんな日だったまにはあるよ、だってさ」

「そうだと、明日香！あとは俺たちに任せとけて！」

「うんうん、まだ一回戦目、十分僕たちで巻き返せるって！それで、次は三沢か。じゃあ頑張ってるね！」

「ああ、わかってるさ。俺に任せておけ」

そう言っただュエルディスクを腕に付け、ゆっくりと迷いなく歩いていく三沢。次は一体、どんなデュエリストが待ってるんだろう。

## ターン17 次峰、必殺のスペシヤルバーガー

「三沢ー、早くしないと始まっちゃうよー?」

「わかってる、わかっているからあと1分待ってくれ!このカードとこのカードを入れ替えて、と」

さつきカッコつけて出て行ったはいいけど試合ごとに5分間の休憩があるとかいう理由で肩透かしを食らって帰って来た三沢が、さつきからデツキをガサゴソといじってる。いじってるのはいいんだけど、もう休憩終わっちゃうんだけど……。

『こんな土壇場で調整なんて、ずいぶんらしくない真似だな。つーかこれ生放送だつてのに、休憩なんてとってどーやって万丈目グループは間を持たせる気なんだろうーな』

「さあ……でも生放送なら、なおさら遅れるわけにはいかないでしょー三沢ー三沢ー、急いで急いでー!」

「俺がデュエルアカデミア本校の次峰、三沢大地だ。よろしく」

「……ああ。俺はサンダー四天王の十、天田だ」

そしてきっかり1分後、デュエル前に軽く自己紹介する三沢と………てんだ?というかなんだろ、四天王の十って。二じやだめなんだろか。

『一の飯田の次は十の天田か。ってことはあれだな、中堅は四天王の百で名前が百田だな』

「いや、いくらなんでもそんなマンガみたいないい加減な名前ってことはないでしょ。あ、でも四天王の百ってのはあるかも」

『だろ?』

「四天王の十?……いや、まあいい。早速だが、デュエルだ!」

「……望むところ!」

「デュエル!!」

「先攻は俺が貰った、ドロー!手札のオキシゲドンを召喚!」

オキシゲドン 攻1800



三沢の水デツキにおける重要な構成員、酸素のオキシゲドンが翼を広げる。そしてそれは三沢のデツキが今回、「ウォーター・ドラゴン」であることを示す。

「そして手札から水征竜―ストリームの効果発動！このカードと手札の水属性またはドラゴン族一体を捨て、デツキからタイダルを特殊召喚する！俺が捨てるのは水属性の黄泉ガエルだ！来い、タイダル！」

爆征竜―タイダル 攻2600

「そしてカードをセット、ターンエンドだ」

「……俺のターン、ドロ―。手札抹殺を発動。お互いはすべての手札を捨て、その枚数ぶんカードをドロ―する」

「いいだろう、少し待て」

そう言つて自分の手札を捨てる三沢。その後、2枚カードをドロ―した。

「……手札から、儀式魔人プレサイダーを召喚。カードを3枚セットしてターンエンドだ。そしてこのタイミングでお前のタイダルは手札に戻る」

太った魔人が天田のフィールドで仁王立ちし、三沢にガンを飛ばす。ずいぶん柄悪いなこの魔人。

儀式魔人プレサイダー 攻1800

三沢 LP4000 手札:3 モンスター:オキシゲドン(攻)

魔法・罠:1

天田 LP4000 手札:1 モンスター:儀式魔人プレサイ

ダー(攻) 魔法・罠:3

「俺のターン、ドロ―！手札の……いや、オキシゲドンで普通に攻撃！」

オキシゲドン 攻1800↓儀式魔人プレサイダー 攻1800

「……攻撃宣言時、ピンポイント・ガードを発動。墓地の儀式魔人、リリーサーを召喚」

地中から巨大な岩石の握りこぶしが突き出され、その手がゆつくりと開くとその中にはまた太った魔人が一人。

ピンポイント・ガード

## 通常罫

相手モンスターへの攻撃宣言時、

自分の墓地のレベル4以下のモンスター1体を選択して発動できる。

選択したモンスターを表側守備表示で特殊召喚する。

この効果で特殊召喚したモンスターはそのターン、戦闘及びカードの効果では破壊されない。

儀式魔人リリーサー 守2000

「攻撃の巻き戻しか。だがまあ、どのみち破壊できないなら同じこと！改めてプレサイダーを攻撃！」

「……それは通さん！リバースカード、グラヴィティ・バインドを発動」

三沢と天田の間に光の網が張り巡らされ、そこを突破できなかったオキシゲドンの爪が虚しく空を切った。

グラヴィティ・バインド―超重力の網―

## 永続罫

フィールド上のレベル4以上のモンスターは攻撃できない。

「仕方がない、ターンエンドだ」

「……ドロー！クレインクレインを召喚し、墓地の儀式魔人プレコグスターを特殊召喚」

クレインクレイン

効果モンスター

星3/地属性/鳥獣族/攻 3000/守 900

このカードが召喚に成功した時、

自分の墓地のレベル3モンスター1体を選択して特殊召喚できる。

この効果で特殊召喚したモンスターの効果は無効化される。

「クレインクレイン」の効果は1ターンに1度しか使用できない。

儀式魔人プレコグスター 攻400

クレインクレインが地面に開いた紫色の魔法陣の中に鎖を投げ入れ、キリキリと重そうに巻き上げる。その鎖の先端には、案の定というかなんというか太った魔人がしがみついていた。それにしても、な

んで魔人ってのはどいつもこいつも太ったのしかないんだろう。

『ほう。今のセリフ、マエストロークに聞かせてやりたいぜ』

「誰それ。知り合い？」

『ちよつと前までの戦友。ド派手なこととはできなかったけど、いつも堅実で一定以上の働きをしてくれるいい奴だったんだよ』

「ふーん」

知らんがな。

「そして手札から死者蘇生を発動、墓地から光帝クライスを特殊召喚。効果発動、クライス自身とこの伏せカードを破壊する。そしてそれにチェーンしてトラップカード、妖怪のいたずらを発動。あらゆるモンスターレベルを2下げる」

全身が光り輝く戦士が、その光で天田の場にあるカードとグラヴィティ・バインドをそれぞれ射抜いて破壊した。

光帝クライス

効果モンスター

星6／光属性／戦士族／攻2400／守1000

このカードが召喚・特殊召喚に成功した時、

フィールド上に存在するカードを2枚まで破壊する事ができる。

破壊されたカードのコントロールは、破壊された数だけ

デッキからカードをドローする事ができる。

このカードは召喚・特殊召喚したターンには攻撃する事ができない。

妖怪のいたずら

通常罫

フィールド上に表側表示で存在する全てのモンスターのレベルをエンドフェイズ時まで2つ下げる。

また、墓地に存在するこのカードをゲームから除外する事で、フィールド上に表側表示で存在するモンスター1体を選択し、そのレベルをエンドフェイズ時まで1つ下げる。

この効果はこのカードが墓地へ送られたターンに発動する事はできない。

儀式魔人プレサイダー ☆4↓2

儀式魔人プレコグスター ☆3↓1

儀式魔人リリィサー ☆3↓1

クレーンクレーン ☆3↓1

オキシゲドン ☆4↓2

「……クライスのもう一つの効果。破壊したのはどちらも俺のカード、よって2枚ドロする」

「レベルの変更カード、そして増えた手札……来るか、儀式召喚！」

「……手札の儀式魔法、ハンバーガーのレシピを発動！場のプレサイダー、プレコグスター、リリィサー、クレーンクレーン、そして墓地の儀式魔人ディザースを使い、ハングリーバーガーを降臨させる。さあ、これが俺のメインディッシュだ！」

ハングリーバーガー

儀式モンスター

星6／闇属性／戦士族／攻2000／守1850

「ハンバーガーのレシピ」により降臨。

フィールドか手札から、レベル6以上になるよう

カードを生け贄に捧げなければならない。

「ハ、ハングリーバーガーだ?!……いや、儀式魔人のサポート能力を考えると侮れない、か」

「……そういうことだ。ハングリーバーガーでオキシゲドンを攻撃。

……暴飲暴食メタボリック！」

ハンバーガーが空を飛び、光の網を食い破って酸素の名前を持つ翼竜に食らいつ……かなかった。途中で光の壁にぶつかったのだ。

「……何？」

「俺は今の攻撃の前に、このトラップを発動していた……!和睦の使者の効果により、お前のバトルは実質無効だ！」

和睦の使者

通常罫

このカードを発動したターン、相手モンスターから受ける全ての戦闘ダメージは0になる。

このターン自分のモンスターは戦闘では破壊されない。

「……なるほど、確かにそのカードなら今のハングリーバーガーであつても攻撃が届かん。少しは楽しめそうだ、ターンエンド」

「つて、今の一体なんだつたの？いくら黄泉ガエルが墓地にいるとはいえ、なんでたかだか200のダメージを防ぐためにこのタイミングで和睦の使者を……」

『お前なあ……儀式魔人どもの効果に決まってるだろ。詳しいことはお前の彼女にでも聞け。俺は観戦で忙しい』

「かのっ?!いい、いや別に僕そんなじやつ!」

『あーるっさい。少しぐらい静かにしてろ』

「ど、どうしたの急に、だつて?」

「いや、その、えーと……今何が起きたの?」

一瞬迷つたけど、どうせ今わからないとずつともややもやるだろうから素直に聞いておく。三沢が理解してるから天田も説明する気配が見えないし。

「つまり、儀式魔人たちにはそれぞれの効果があつてね?それで……」

要約すると、儀式魔人にはそれぞれ儀式召喚に使つた時その儀式モンスターに特殊効果をつける能力があつて、プレサイダーはそのモンスターが戦闘で相手を倒した時に1ドロー、プレログスターによつて戦闘ダメージを与えた時に相手は手札を1枚捨て、リリーサーの効果が生きてる限り相手はモンスターを特殊召喚できず、デザイナーによつていかなるトラップの効果も受け付けなくなる。らしい。今和睦の使者が効いたのは、ハングリーバーガーに対して影響を与えるトラップじゃないから、とのこと。

「よくわかつた、ありがとうね」

「どういたしました、なんだつて」

「……さあ、続けるぞ。とはいえ、ターンエンドだがな」

三沢 LP4000 手札:4 モンスター:オキシゲドン(攻)

魔法・罠:0

天田 LP4000 手札:0 モンスター:ハングリーバーガー

(攻)、光帝クライス(攻) 魔法・罨：0

「俺のターン、ドロロー!黄泉ガエルは自分が魔法、罨を使っていない場合、スタンバイフェイズに墓地からノーコストで特殊召喚できる……はずなんだが、リリースの効果でそれも無理、か。まあ仕方がないか、ハイドロゲドンを召喚!」

酸素の翼竜の隣に水柱が立ち、水素の名を持つ恐りゆ……恐……竜……?まあ、本人が恐竜だと言ってんだから恐竜なんだろう。とにかく立ち上がる。

ハイドロゲドン

効果モンスター

星4/水属性/恐竜族/攻1600/守1000

このカードが戦闘によって相手モンスターを破壊し墓地へ送った時、

自分のデッキから「ハイドロゲドン」1体を特殊召喚する事ができる。

『ハイドロゲドン!?三沢、一体何企んでんだ?』

「……何をやる気だ?」

「まあ見ている。手札を3枚伏せ、ターンを終了する」

そう自信満々に宣言した三沢に、ざわざわと会場がざわめく。あの三沢が何も考えずにハイドロゲドンを出すとは思えないけど……。

「……ドロロー。リチュアル・ウエポンをハングリーバーガーに装備。レベル6儀式モンスターのハングリーバーガーは、攻守が1500アップする」

「おっと、そこでカードを発動するぞ。リバースカード、スター・チェンジヤーの効果で、ハングリーバーガーのレベルを1上げて7に変更する。これでリチュアル・ウエポンは対象不適切で破壊だな」

「……墓地から妖怪のいたずらのもう一つの効果発動。このカードを除外し、ハングリーバーガーのレベルをエンドフェイズまで1下げて5にする。これでこのターンの間は問題ない」

ハングリーバーガー ☆6↓5↓6 攻2000↓3500 守

1850↓3350

リチュアル・ウエポン

## 装備魔法

レベル6以下の儀式モンスターのみ装備可能。

装備モンスターの攻撃力と守備力は1500ポイントアップする。

今の一瞬のやり取りもすごかったけど、個人的にはそれよりソリツトビジョンに反映された、大口を開けたハンバーガーが身にまとったポテトの剣と包み紙の鎧のほうが気になってしょうがなかった。確かにハンバーガーが鎧をつけるのは無理があるんだけども。あ、なんかおなか減ってきた。

『なにが腹減っただ、今生放送中だろが。全国に恥晒すな空気読めバーカ』

「相変わらず口悪いね。もう慣れたけどさ」

「……ハングリーバーガーで、ハイドロゲドンを攻撃。暴飲暴食メタボリック！」

「ああ、かかってこい」

ハングリーバーガー 攻3500↓ハイドロゲドン 攻1600

(破壊)

「……む？」

「永続トラップ、スピリットバリア発動。このカードが場にあって俺がモンスターをコントロールしている限り、俺への戦闘ダメージは0になる」

スピリットバリア……三沢のあのデッキはウォーター・ドラゴンが軸だけど、罨モンスターの数も割と多い。宮廷のしきたりとの相性がいいからとのことらしい。そして僕のメタル・リフレクト・スライムのように、罨モンスターというのは一回伏せておくだけでいいのだから出しやすい。モンスターが基本途切れることのないデッキだからこそ投入していたカードなんだろうけど、一切の特殊召喚ができない今じゃその守りもいつまで持つだろうか。ああそうか、だからこそ用心のためにハイドロゲドンを出したのか。それでもリスクな選択だけだ。

「……モンスターの戦闘破壊は完了、よって一枚ドロ。ターンを終

了する。そしてこの時妖怪のいたずらの力がなくなりハングリーバーガーのレベルが7になり、リチュアル・ウエポンが対象不相当で自壊する」

ハングリーバーガー ☆6↓7 攻3500↓2000 守3350↓1850

三沢 LP4000 手札：1 モンスター：オキシゲドン（攻）  
魔法・罠：スピリットバリア、1（伏せ）

天田 LP3800 手札：1 モンスター：ハングリーバーガー  
（攻） 魔法・罠：0

「俺のターン、ドロー！カードをセットしてターンを終了するっ！」

モンスターの表示形式すら変えず、ただ引いたカードをそのまま伏せただけの三沢に対し、再びざわざわと会場が揺れる。正直、僕にも三沢の狙いがさっぱりわからない。

「……手札が悪いのか？まあいい、ドロー。速攻魔法サイクロン発動、スピリットバリアを破か……」

「それも待った。この伏せカード、宮廷のしきたりを発動させてもらう」

サイクロンが巻き起こした小型の竜巻が、三沢を覆い隠す半透明のバリアに届くことなく霧散してただの風になる。

宮廷のしきたり

永続罠

このカードがフィールド上に存在する限り、

お互いのプレイヤーは「宮廷のしきたり」以外の

フィールド上に表側表示で存在する永続罠カードを破壊できない。

「宮廷のしきたり」は自分フィールド上に1枚しか表側表示で存在できない。

「……ならばモンスターを潰していくまで！ハングリーバーガーでオキシゲドンに攻撃、暴飲暴食メタボリック！」

「ダメージは受けず、従って手札破壊効果も発生しない！もつとも、俺の手札は今0だがな」

ハングリーバーガー 攻2000↓オキシゲドン 攻1800（破



壊)

「……カードをドロウ。1枚セットしてターンエンドだ」

三沢 LP4000 手札：1 モンスター：なし 魔法・罫：ス  
ピリットバリア、宮廷のしきたり

天田 LP4000 手札：1 モンスター：ハングリーバーガー  
(攻) 魔法・罫：1 (伏せ)

「俺のターン、マジック・プリンターを発動！場の宮廷のしきたりを墓地に送って、カードを2枚ドロウ！」

マジック・プリンター

通常魔法

自分フィールド上に表側表示で存在する

永続罫カード1枚を墓地へ送って発動できる。

デッキからカードを2枚ドロウする。

「……手札増強か。好きにしろ」

「なら、このままやらせてもらうぞ。カードを1枚セットし、カードカー・Dを召喚してリリースしさらにドロウ、強制エンドフェイズでターンエンドだ」

カードカー・D

効果モンスター

星2 / 地属性 / 機械族 / 攻 800 / 守 400

このカードは特殊召喚できない。

このカードが召喚に成功した自分のメインフェイズに

このカードをリリースして発動できる。

デッキからカードを2枚ドロウし、このターンのエンドフェイズになる。

この効果を発動するターン、自分はモンスターを特殊召喚できない。

「……何を狙っているかは知らぬが、ドロウ！手札のキラートマトを召喚する」

闇属性版グリズリーマザーであるリクルーター、顔のついた真っ赤なトマトが、ぴよんぴよん飛び跳ねながらケタケタと不気味な笑い声

を上げる。そうかそうか、ハンバーガーの次はトマトかあ。

『まーた腹減ったとか言い出すんじゃないやねえだろーな』  
ぎく。

キラー・トマト 攻1400

「……キラー・トマトで直接攻撃を」

「レインボー・ライフ発動！手札のタイダルを捨てることで1400回復！」

レインボー・ライフ

通常罠

手札を1枚捨てて発動できる。

このターンのエンドフェイズ時まで、

自分は戦闘及びカードの効果によって

ダメージを受ける代わりに、

その数値分だけライフポイントを回復する。

キラー・トマト 攻1400↓三沢（直接攻撃）

三沢 LP4000↓5400

「……ターンを終了する」

「俺のターン、ドロロー！カードを2枚伏せ、ハイドロゲドンを召喚する。そしてキラー・トマトに攻撃、ハイドロ・ブレス！」

ハイドロゲドン 攻1600↓キラー・トマト 攻1400（破壊）

天田 LP4000↓3800

「……キラー・トマトの効果発動！デッキから攻撃力1500以下の閻属性、イナゴの佃煮……もとい、イナゴの軍勢を攻撃表示で特殊召喚する」

『こつちもあくまで食い物扱いかよ』

イナゴの軍勢

効果モンスター

星3／閻属性／昆虫族／攻1000／守 500

このカードは1ターンに1度だけ裏側守備表示にする事ができる。

このカードが反転召喚に成功した時、

相手フィールド上に存在する魔法・罠カード1枚を選択して破壊す

る。

「ハイドロゲドンの効果は封じられているからな。ターンエンドする」

三沢 LP5400 手札：0 モンスター：ハイドロゲドン（攻）  
魔法・罠：スピリットバリア、1（伏せ）

天田 LP3800 手札：2 モンスター：ハングリーバーガー  
（攻）、イナゴの軍勢（攻） 魔法・罠：1（伏せ）

「……ドロー。まさにこの状況に合致したカードだ、まずはイナゴの軍勢を裏側守備表示に変更。そして悪魔の調理師を召喚する」

「この状況では一番来てほしくなかったモンスターだな……まあ、これまでのデッキパターンから言って入っているだろうとは思ってたが」

デビル・コック  
悪魔の調理師

効果モンスター

星4／闇属性／悪魔族／攻1800／守1000

このカードが相手ライフに戦闘ダメージを与えた時、

相手はデッキからカードを2枚ドローする。

「……ここは堅実にいかせてもらうぞ、ハングリーバーガーでハイドロゲドンに攻撃」

ハングリーバーガー 攻2000↓ハイドロゲドン 攻1600

（破壊）

「スピリットバリアによって、ダメージは通らないがドローはできる、か。だがそれを待っていた！永続トラップ、グリード発動！」

「……おのれ、だがそれは諸刃の剣となる。悪魔の調理師でダイレクトアタック。さあ、2枚ドローしろ」

悪魔の調理師 攻1800↓三沢（直接攻撃）

三沢 LP5400↓3600

「……そしてグリードの効果により、俺たちはダメージを受ける」

グリード

永続罠

カードの効果でドローを行ったプレイヤーは、そのターンのエンド

フェイズ終了時に

カードの効果でドロワーしたカードの枚数×500ポイントダメージを受ける。

三沢 LP3600↓2600

天田 LP3800↓3300

「俺のターン、ドロワー！3枚、か……まあ悪くない数字だ、カードを2枚伏せ、手札抹殺を発動！俺の手札はこのカードのみだから何も起きないが、お前は3枚捨て3枚ドロワーしてもらおう」

自分と相手の手札を総とつかえする豪快な手札交換カード、手札抹殺。だがそのカードすらも、この状況では相手の手札を引っ掻き回したうえにライフの四分の一以上ものダメージまで与えられるお手軽バーンカードだ。

「……甘い。チェーンしてトラップ発動、全弾発射。俺の手札を全て弾丸にして射出する」

フルバースト  
全弾発射

通常罠

このカードの発動後、手札を全て墓地へ送る。

墓地に送ったカードの枚数×200ポイントダメージを相手ライフに与える。

三沢 LP2600↓2000

「手札抹殺が発動になったか。できることもない、ターンエンドだ」

三沢 LP2000 手札：0 モンスター：なし 魔法・罠：ス

ピリットバリア、グリッド、3（伏せ）

天田 LP3300 手札：2 モンスター：ハングリバーガー

（攻）、???（イナゴの軍勢、伏せ）、悪魔の調理師（攻） 魔法・罠：1（伏せ）

「……ドロー。万一のためにやれることはやっておくか。イナゴのつく……ゴホン、軍勢を反転召喚し、効果によってグリッドを破壊する」

茶色い体の大イナゴが群れになってグリッドのカードに飛びかかり、その小さくも鋭い牙で跡形もなく食らいつくそうとする。が、彼

らが飛びかかったのはなぜかその隣に伏せられたカード………よ  
く見るとそこには『スカ』の二文字が黒々と力強い書体で書かれて  
いた。

「偽物のわなをチェーン発動、これでグリードは破壊されない」

偽物のわな

通常罠

自分フィールド上に存在する罠カードを破壊する魔法・罠・効果モ  
ンスターの効果を

相手が発動した時に発動する事ができる。

このカードを代わりに破壊し、他の自分の罠カードは破壊されな  
い。

セットされたカードが破壊される場合、そのカードを全てめくって  
確認する。

「……イナゴの軍勢を裏守備表示に変更。悪魔の調理師で直接攻撃」

「……が使いどころか！攻撃の無力化を発動、その攻撃を無効にして  
バトルフェイズを終わりにする！」

「……トラップを受け付けないハングリーバーガーで攻撃していれば  
よかったか。ターンエンドだ」

三沢 LP2000 手札：0 モンスター：なし 魔法・罠：ス  
ピリットバリア、グリード、1（伏せ）

天田 LP3300 手札：2 モンスター：ハングリーバーガー  
（攻）、???（イナゴの軍勢、伏せ）、悪魔の調理師（攻） 魔法・罠：1  
（伏せ）

「俺のターン、ドロー！魔法カード、強欲で謙虚な壺を発動！自分の  
デッキの上からカードを3枚めくり、1枚を手札に加える。今の状況  
なら特殊召喚を封じるデメリットも気にならないしな。そして手札  
に加える効果はグリードの対象にもならない。1枚目、ジェネクス・  
ウインディーネ。2枚目、マインドクラッシュ。3枚目は………こ  
の、カードは………」

「………どうした、公開しろ」

「ああ、わかってる。………3枚目、白魔導士ピケル、だ」

一瞬だけ、デュエル場が完全に静まり返った。へえ、三沢もやつぱりああいう女の子カードを入れるんだ、って思ったのは胸の中にしまっておく。明日香が、というか観客席の女子全員がビミョーに引いた目で見てたのがすごく印象に残ったから、あんまり下手なことを口に出すのは控えておこう。そういや僕のデツキもレイス入ってるけど、なんなんだろうこの扱いの差は。三沢、哀れ。

『あー、うん。いいか十代、清明。何も言ってるなよ、ただでさえ公開処刑みたいなもんだってのにここで追い打ちかけるのはあんまりすぎる』

「……三沢大地、といったな。この勝負、俺にとってはより負けられぬ理由ができた」

「なに？ま、まさか天田、お前」

今の会話で何かに気付いたらしい三沢の瞳に、これまで僕が見たこともないほどの闘志が宿る。と思つたら、向かい合う天田の気迫も段違いになっていた。

「……その通り。俺はクラン派だ」

「ふ、なるほど。そういうことならこの勝負、なにがなんでも勝つしかなさそうだ。俺は、ピケルを手札に加える。そしてそのまま召喚だ」

ここにきて突然負けられない理由が増えたらしい三沢が召喚した、白い服を着た可愛らしい女の子の魔法使い。笑顔を振りまいて登場したものの相手の強面のハンバーガーと見るからに危ないコックを見て、ちよつと泣きべそをかいた。

白魔導士ピケル

効果モンスター

星2 / 光属性 / 魔法使い族 / 攻1200 / 守 0

自分のスタンバイフェイズ時、自分のフィールド上に存在する

モンスターの数×400ライフポイント回復する。

「そして、墓地のネクロ・デライフエンダーの効果発動。このカードを除外し、ピケルを守らせる」

ネクロ・デライフエンダー

効果モンスター

星2／闇属性／悪魔族／攻 0／守 800

自分のメインフェイズ時に、

墓地に存在するこのカードをゲームから除外し、

自分フィールド上に存在するモンスター1体を選択して発動する事ができる。

次の相手のエンドフェイズ時まで、

選択したモンスターは戦闘で破壊されず、

選択したモンスターの戦闘によって発生する自分への戦闘ダメージは0になる。

「そしてピケルで裏守備のイナゴの軍勢に攻撃、ターンを終了する」

白魔導士ピケル 攻1200↓?? (イナゴの軍勢) 守500 (破壊)

「……ドロー、やれることもなくターンエンドだ」

三沢 LP2000 手札:0 モンスター:白魔導士ピケル (攻)

魔法・罫:スピリットバリア、グリード、1 (伏せ)

天田 LP3300 手札:3 モンスター:ハングリバーガー

(攻)、悪魔の調理師 (攻) 魔法・罫:1 (伏せ)

「俺のターン、まずスタンバイフェイズにピケルの効果が発動し、ライフを400回復」

三沢 LP1600↓2400

「そして魔法カード、光の護封剣を発動。これでお前のモンスターはどちらも攻撃ができない」

光の護封剣

通常魔法

相手フィールド上のモンスターを全て表側表示にする。

このカードは発動後、相手のターンで数えて3ターンの間フィールド上に残り続ける。

このカードがフィールド上に存在する限り、

相手フィールド上のモンスターは攻撃宣言できない。

「……小賢しい真似を」

「お互い様だろう。【ウォーター・ドラゴン】にとって、特殊召喚封じ

は最高のメタだからな。ターンエンドだ」

「……ふん、ドロー。魔法カード、簡易融合を発動。エクストラのカルボナーラ戦士を特殊召喚する」

コックとハンバーガーの間にボワンと音を立てて現れた超巨大なカップ麺の蓋が開き、大量の湯気の中から紫色の鎧を着た戦士が剣を構えて飛び出してくる。カルボナーラ、か。ふむ、今度作ってみようかな。材料は明日香にでも頼み込んで分けてもらおうと。ブルー寮なら食料も山のようにため込んでるだろうし。

インスタント・フュージョン  
簡易融合

通常魔法

1000ライフポイントを払って発動できる。

レベル5以下の融合モンスター1体を融合召喚扱いとしてエクストラデッキから特殊召喚する。

この効果で特殊召喚したモンスターは攻撃できず、エンドフェイズ時に破壊される。

「簡易融合」は1ターンに1枚しか発動できない。

天田 LP3300↓2300

カルボナーラ戦士 攻1500

「……カルボナーラ戦士をリリースし、ドドドウオリアーをアドバンス召喚する」

ドドドウオリアー

効果モンスター

星6/地属性/戦士族/攻2300/守 900

このカードはリリースなしで召喚できる。

この方法で召喚したこのカードの元々の攻撃力は1800になる。

また、このカードが攻撃する場合、

ダメージステップ終了時まで相手の墓地で発動する効果は無効化される。

背中に『怒』の文字を背負い、斧を持ったバイキングの格好をした戦士。でもなんでドドド?……ああそうか、食バイキングか。放でもここまでくるとこじつけも立派なもんだよね。



「……護封剣の効果で攻撃はできない、ターンエンドだ」

三沢 LP2000 手札：0 モンスター：白魔導士ピケル（攻）

魔法・罨：スピリットバリア、グリード、光の護封剣（残2）、1（伏せ）

天田 LP2300 手札：2 モンスター：ハングリバーガー

（攻）、悪魔の調理師（攻）、ドドドウォリアー（攻） 魔法・罨：i（伏せ）

「俺のターン、ドローしてピケルの効果！再び回復を行う。そしてメイン1、カードを1枚伏せてターンエンド」

三沢 LP2400↓2800

「……ドロー、ターンエンド」

三沢 LP2800 手札：0 モンスター：白魔導士ピケル（攻）

魔法・罨：スピリットバリア、グリード、光の護封剣（残1）、2（伏せ）

天田 LP2300 手札：3 モンスター：ハングリバーガー

（攻）、悪魔の調理師（攻）、ドドドウォリアー（攻） 魔法・罨：i（伏せ）

「俺のターン、ドロー！準備は万全ではないにしろ整った、ここで攻めに行く！その前にまずはピケルの効果で、400の回復をするがな」

三沢 LP2800↓3200

「行け、ピケル！悪魔の調理師に攻撃！そしてこの攻撃時、リバーズカード発動！奇跡の軌跡！」

懐から木の杖を取り出したピケルが、元から持っていたものと合わせ2本の杖から光を放つ。その光は正確に、ハンバーガーとコックを貫いていた。

奇跡の軌跡  
ミラクルルーカス

通常罨

自分フィールド上に表側攻撃表示で存在するモンスター1体を選択して発動する。

相手はデッキからカードを1枚ドローする。

このターンのエンドフェイズ時まで、

選択したモンスターの攻撃力は1000ポイントアップし、1度のバトルフェイズ中に2回までモンスターに攻撃する事ができる。

そのモンスターが戦闘を行う場合、

相手プレイヤーが受ける戦闘ダメージは0になる。

「まずこの効果で、お前にはカードをドローしてもらう。そして俺のピケルの攻撃力は2200に上がり、お前の自慢のハンバーガーを打ち砕く！」

白魔導士ピケル 攻1200↓2200↓悪魔の調理師 攻1800 (破壊)

白魔導士ピケル 攻2200↓ハングリバーガー 攻2000

(破壊)

「カードをセットしてターンエンド………そして、お前にはさつきドロした分のダメージを受けてもらう」

天田 LP2300↓1800

「……まさか奇跡の軌跡のデメリットを逆手に取るとはな。ドロ、儀式の準備を発動。デッキから2枚目のハングリバーガー、墓地からハンバーガーのレシピをサーチする」

儀式の準備

通常魔法

デッキからレベル7以下の儀式モンスター1体を手札に加える。

その後、自分の墓地の儀式魔法カード1枚を選んで手札に加える事ができる。

「……そしてハンバーガーのレシピを発動。墓地のレベル3の儀式魔人、リリーサーとプレコグスターを除外してハングリバーガーを再臨させる。せっかく苦労して倒したところ悪いが、これでまだ特殊召喚封じと手札破壊の効果は使うことができる。ドロ効果は邪魔になるだけだ」

ハングリバーガー 攻2000

「……そしてとどめに、護封剣の効果もこれで切れる。ターンエンドだ」

エンド宣言と共にその力を失った光の護封剣が、文字通り光になって消えていく。そしてそれに伴い、照明は点いているにもかかわらずなぜかデュエル場全体が日食のような暗闇に包まれる。

「エンドフェイズ時にリバーズカード、皆既日食の書だ」

皆既日食の書

速攻魔法

フィールド上に表側表示で存在するモンスターを全て裏側守備表示にする。

このターンのエンドフェイズ時に相手フィールド上に

裏側守備表示で存在するモンスターを全て表側守備表示にし、相手はその枚数分だけデッキからカードをドロウする。

ハングリーバーガー 攻2000↓(セット状態) ↓守1850

ドドドウォリアー 攻2300↓(セット状態) ↓守900

白魔導士ピケル 攻1200↓セット

「エンドフェイズだからすぐに表に戻るが、その時のドロウ効果は受けてもらどうぞ」

「……おのれ……!」

天田 LP1800↓800

三沢 LP3200 手札:0 モンスター:???(白魔導士ピケル、

伏せ) 魔法・罫:スピリットバリア、グリード、2(伏せ)

天田 LP800 手札:6 モンスター:ハングリーバーガー

(守)、ドドドウォリアー(守) 魔法・罫:1(伏せ)

「ねえユーノ、今の三沢の手つてちよつと危険じゃない?1000ダメージは大きいけど、それで2枚もドロウさせてたらいくらなんでも危ないんじゃない」

「ふむ、まだお前は雑魚だなんてことはとてもとてもよくわかった」

「ひどいっ!」

『しゃあねえなあ、簡単に解説してやる。儀式魔人がモンスターにつける効果はどれも厄介揃いだ所詮はどの効果もその器、つまり儀式モンスターに完全に依存してんだよ。いや、この言い方じゃちよつと

違うか。まあとにかく、儀式モンスターがいて初めて成立する効果なんだってこった。今の皆既日食はあのハンバーガーをセット状態にしただろ？あの時点で儀式魔人たちとハンバーガーの間にあったつなかりは消えたんだ』

「えつと、つまり……………」

『これでハングリーバーガーはただの守備力1850のバナラになったってこと。これで三沢のデッキは特殊召喚が使えるようになった。これはとんでもなくデカイ、2枚ドローのリスクを受けてでもやる意味のあることだぞ?』

「な、なるほど!」

「俺のターン、ドロー!ピケルはセット状態だから効果が使えないが…………2枚目のマジック・プランターを発動、グリードを墓地に送って2枚ドローする」

あれだけ大量のバーンダメージを稼いだグリードも、三沢の特殊召喚が復活したことでその役目が終了した。まさか、ここからあのカードが出てくるんだらうか。

「3枚目、最後のマジック・プランターを発動!スピリットバリアを墓地に送ってさらに2枚ドローだ。そしてさらに貪欲な壺!俺の墓地の黄泉ガエル、ストリーム、タイダル、アビス・ソルジャー、カードカー・Dをデッキに戻して2枚ドローを行う」

あれよあれよという間に神がかった引きの良さで手札を増やしていく三沢。アビス・ソルジャーは多分、天田の手札抹殺で墓地に送ったモンスターなんだろう。

「さて、待たせたな。まず手札のオキシゲドンを召喚する。そして死者蘇生発動、墓地のハイドロゲドンを復活させる!」

オキシゲドン 攻1800

ハイドロゲドン 攻1600

「そしてピケルを反転召喚し、バトル!ハイドロゲドンでドドドウオリアーを攻撃、ハイドロ・ブレス!」

??? ↓白魔導士ピケル 攻1200

ハイドロゲドン 攻1600 ↓ドドドウオリアー 守900 (破

壊)

「この時ハイドロゲドンの特殊効果により、もう一体ハイドロゲドンをデッキから特殊召喚！」

ハイドロゲドン 攻1600

「だが、いくらモンスターを並べてもハングリーバーガーの守備力は1850！そのモンスターではまだ力不足だ！」

「ああ、確かにそうだな。だがな天田、覚えておけ！水素と酸素は単体ではちっぽけな元素だが、二つを合わせることで全ての命を生み出した偉大な存在、水となる！メイン2に移行し、ボンディングーH20を発動！オキシゲドン1体とハイドロゲドン2体をリリースし、化学反応！デッキのウォーター・ドラゴンを特殊召喚する！」

やっぱり、というべきなんだろうか。満を持して特殊召喚される、三沢の水デッキ最大のキーカードにして切り札モンスター。3体の恐竜が混ざり合って1体の海竜になり、ハングリーバーガーを静かに見下ろす。

ボンディングーH20

通常魔法

自分フィールド上に存在する「ハイドロゲドン」2体と

「オキシゲドン」1体を生け贄に捧げる。

自分の手札・デッキ・墓地から

「ウォーター・ドラゴン」1体を特殊召喚する。

ウォーター・ドラゴン

効果モンスター

星8／水属性／海竜族／攻2800／守2600

このカードは通常召喚できない。

「ボンディングーH20」の効果でのみ特殊召喚する事ができる。

このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、

炎属性と炎族モンスターの攻撃力は0になる。

このカードが破壊され墓地へ送られた時、自分の墓地に存在する

「ハイドロゲドン」2体と「オキシゲドン」1体を特殊召喚する事ができる。

「カードをセットして、ターン終了だ」

「……ドロー！ 装備魔法、巨大化をハングリーバーガーに装備！ 俺の方がライフは下だ、よって攻撃力が倍になる」

ぶるぶるとハンバーガーが震えだすと、なんとポンツと音を立てて具材のトマト、レタス、ミートの量が倍になり、さらにピクルスまで追加された。頭の日の丸の旗も心なしかおつきくなつたし。巨大化っていうよりメガ盛りだねこりや。

巨大化

装備魔法

自分のライフポイントが相手より下の場合、

装備モンスターの攻撃力は元々の攻撃力を倍にした数値になる。

自分のライフポイントが相手より上の場合、

装備モンスターの攻撃力は元々の攻撃力を半分にした数値になる。

ハングリーバーガー 攻20000↓4000

「……この攻撃が通ればいい、それだけの事！ ハングリーバーガーでピケルを攻撃！ 暴飲暴食メタボリック！」

「残念だったな、天田。このカードが攻撃反応じゃない可能性に賭けたんだろが………リバースカードを2枚、援護射撃と攻撃の無敵化を発動！ ウォーター・ドラゴン、ピケルの援護に回ってくれ！ そしてピケルは無敵化2つ目の効果で、戦闘破壊されなくなる！」

ウォーター・ドラゴンが吐き出した水のブレスとピケルが杖から放った光の球が一つになり、ハングリーバーガーのピクルス乱れ撃ち攻撃とぶつかり合って激しい爆発を巻き起こした。なんでデュエルデイスクの演出って、モンスターどうしが引き分けになつた時はやたらと爆発させたがるんだろう。

『海馬コーポレーションの趣味なんじゃね？』

「なんかありそうな話だね」

援護射撃

通常罨

相手モンスターが自分フィールド上モンスターを攻撃する場合、ダメージステップ時に発動する事ができる。

攻撃を受けた自分モンスターの攻撃力は、

自分フィールド上に表側表示で存在する他のモンスター1体の攻撃力分アップする。

攻撃の無敵化

通常罠

バトルフェイズ時にのみ、以下の効果から1つを選択して発動できる。

●フィールド上のモンスター1体を選択して発動できる。

選択したモンスターはこのバトルフェイズ中、

戦闘及びカードの効果では破壊されない。

●このバトルフェイズ中、自分への戦闘ダメージは0になる。

ハングリーバーガー 攻4000（破壊）↓白魔導士ピケル 攻1200↓4000

「……カードをセット、ターンエンド（……まだ大丈夫だ、俺の場の伏せたままのカードは『闘争本能』。このカードで手札の素早いモモンガを特殊召喚し、さらに今伏せた死力のタッグ・チェンジに繋げる。これでダメージを消しつつ、手札のマッシュ・ウオリアーを特殊召喚する。これならモンスターが3体になって、少なくとも次のターンは耐え切れるはずだ」

闘争本能

通常罠

相手が直接攻撃を宣言した時、自分フィールド上に

モンスターが存在しない場合に発動する事ができる。

手札からレベル4以下の獣族モンスター1体を

表側攻撃表示で特殊召喚する。

素早いモモンガ

効果モンスター

星2 / 地属性 / 獣族 / 攻1000 / 守 100

このカードが戦闘によって破壊され墓地へ送られた時、自分は1000ライフポイント回復する。

さらにデッキから「素早いモモンガ」を任意の数だけ裏側守備表示

で特殊召喚できる。

死力のタッグ・チェンジ

永続罨

自分フィールド上に表側攻撃表示で存在するモンスターが  
戦闘によって破壊されるダメージ計算時、

その戦闘によって発生する自分への戦闘ダメージを0にし、

そのダメージステップ終了時に手札からレベル4以下の

戦士族モンスター1体を特殊召喚する事ができる。

マッシュ・ウオリアー

効果モンスター

星2/地属性/戦士族/攻 600/守1200

このカードの戦闘によって発生する自分への戦闘ダメージは0になる。

このカードは1ターンに1度だけ、戦闘では破壊されない。

………なんだろう、今一瞬だけすごい負けフラグが立った気がしたのは。気のせいかな？

『いや、俺も同じこと思った。なんか盛大なフラグ立てやがったんだな』

三沢 LP3200 手札：0 モンスター：ウォーター・ドラゴン（攻）、白魔導士ピケル（攻） 魔法・罨：なし

天田 LP800 手札：5 モンスター：なし 魔法・罨：2（伏せ）

「俺のターン、ドロロー。ピケルの力でさらに回復し、ナイト・ショット発動！このカードは相手の場の魔法、罨を1枚破壊するが、相手はそのカードをチェインして発動できない………そうだな。俺が破壊するのは、先に伏せてあった方のカードだ！」

「………くっ、俺の負けか」

「ウォーター・ドラゴンでダイレクトアタック！アクア・パニッシャー！」

三沢 LP3200↓4000

ウォーター・ドラゴン 攻2800↓天田（直接攻撃）



「勝ってきたぞ、みんな。後は任せた」

「お疲れ様、三沢。それでさ、少し聞きたいことがあるんだけど」

「どうした？」

「まず一つ目だけど、試合前に入れ替えてたカードってグリードだよ  
ね。なんでバーン要素を詰め込んだの？」

「ああ、あれか。万丈目はプライドこそ高いがけつして馬鹿じゃない、  
俺のデッキが特殊召喚に頼り切りなことは気づいていたはずだ。だ  
から、それに対するメタ要素を持つデュエリストを俺にぶつけてくる  
のは読めていた。ライオウや黒角笛3積みぐらいならまだ何とかな  
るが、最悪の事態が起きた時のために保険をかけておいたのさ」

「それじゃあさ、もう一ついいかな？」

「ああ、言ってみてくれ」

「ピケ…」

「さあ河風君、次の出番は頑張ってくれ!!ここでもう一勝できればだ  
いぶこつちが有利になるからな!!」

「い、いやあの三さ…」

「頼んだぞ、本当に!油断しないようにな!!」

「……………」

『だーから言っただろー?あんましいじめてやんなって』

## ターン18 中堅、形を変える襲撃者

「じゃあ行ってくるよー、だつてさ」

「うん、頑張つてね」

5分休憩も終わり、1勝1敗で迎えた中堅戦。ここで勝つておくとグツと有利になれる、結構大事な試合なんだけど……まあ、夢想はいつも通り、一切気負わずいつも通りの自然体で歩きだす。この物怖じとか緊張とかと縁がなさそーな性格も彼女の人気の一つなんだろう。んでもって、それは相手にする側からしたらたまったもんじやないわけで。なにしろ自分のペースがうまく取れなくなるからなあ。

『たまにいるよな、ああいうプレッシャーがかかる場所でまるつきり自然体だから精神的に始まる前から有利になれる奴。それに対抗するにはあつちも例えば………』

「よろしく、だつてさ」

「おうともよ！俺は酒田さけだ、サンダー四天王の百だぜ！こんな晴れ舞台に立てたんだ、ガンガン行くから覚悟しとけよ！」

『……そう、こーゆータイプの奴だな。あえて言うなら十代タイプ？』  
「ていうか、やっぱり百田じゃなかったね。まあそんな都合いい話あるわけ……」

『三桁↓さんけた↓さけだ↓酒田。つてのはどうだ？』

「あつたー!？」

「デュエル!!」

「先攻は俺からだな、ドロー！最初から飛ばすぜ、手札抹殺！」

手札抹殺

通常魔法（制限カード）

お互いの手札を全て捨て、それぞれ自分のデッキから捨てた枚数分のカードをドローする。

「さらにさらに、手札のモンタージュ・ドラゴンの効果発動！手札から鉄巨人アイアンハンマー、異次元ジェット・アイアン号、異次元エスパー・スター・ロビンを墓地に送って、こいつを特殊召喚だぜ！聞いて

驚くなよお前ら、このカードの攻撃力はたった今捨てたモンスターのレベルの3000倍だあ！」

何の前触れもなく、3つ首の龍が現れる。よく見るとその首はそれぞれ今捨てたモンスターの顔に似た形だった。

『事故率半端なさそうだな……えーつと、確かアイアンハンマーが8でアイアン号が10でロビンが10レベルだったな。つてことは28の3000倍で8400とかいうサイバー流並みのパワー馬鹿になるわけだ』

呆然としながらユーノが呟くが、全くだと思う。なんで最上級モンスターばかりあんなに入ってるんだろう。

モンスタージュ・ドラゴン

効果モンスター

星8 / 地属性 / ドラゴン族 / 攻 ? / 守 0

このカードは通常召喚できない。

手札からモンスター3体を墓地へ送った場合のみ特殊召喚できる。

このカードの攻撃力は、墓地へ送ったそのモンスターのレベルの合計×300ポイントになる。

モンスタージュ・ドラゴン 攻0 ↓ 8400

「さらにさらにさらに、強欲なカケラを発動！ターンを終わってやるぜー！」

『……だんだんイライラしてきたな』

「まあまあ、そーゆーこと言わないの」

強欲なカケラ

永續魔法

自分のドローフェイズ時に通常のドローをする度に、

このカードに強欲カウンターを1つ置く。

強欲カウンターが2つ以上乗っているこのカードを墓地へ送る事で、

自分のデッキからカードを2枚ドローする。

「私のターン、ドロー！」

さつき酒田がした墓地肥やし………モンスタージュ・ドラゴンのイン

パクトのせいで頭から吹っ飛んでたけど、よく考えたら彼女のワイトにとつては墓地肥やしこそが勝利への道そのもの。この状況からでも十分巻き返せるんじゃないだろうか。

「モンスターをセットして、強制転移を発動するんだってさ。私のセットモンスターをあげるから、あなたのそのドラゴンを私にちょうだい？」

「なっ、ふぎけんな………ああ、俺のモンタージユ・ドラゴン！」

あー、うん。ワイトも墓地肥やしもまるつきり関係なかったわ。

『まあ、あんだだけ手札消費荒けりや妨害もできんわな』

### 強制転移

### 通常魔法

お互いはそれぞれ自分フィールド上のモンスター1体を選び、そのモンスターのコントロールを入れ替える。

そのモンスターはこのターン表示形式を変更できない。

「モンタージユ・ドラゴンで私のセットモンスターに攻撃するんだってさ。ぱ、ぱわー・こらーじゅ？」

モンタージユ・ドラゴン 攻8400↓??? 守300 (破壊)

「破壊されたチュウボーンのリバース効果で、私の場合にはトークンが3体やってくるよ」

チュウボーン

効果モンスター

星3 / 地属性 / アンデット族 / 攻 300 / 守 300

リバース：相手フィールド上に「チュウボーンJr. トークン」

(アンデット族・地・星1・攻100 / 守300) 3体を守備表示で特殊召喚する。

チュウボーンJr. トークン×3 守300

「これでターンエンド、だって」

酒田 LP4000 手札：0 モンスター：なし 魔法・罠：強

欲なカケラ (0)

夢想 LP4000 手札：4 モンスター：モンタージユ・ドラ

ゴン (攻)、チュウボーンJr. トークン×3 (守) 魔法・罠：なし

「ちくしように、よくも俺のモンスターを！ドロロー、これでカケラにカウ  
ンターがたまるぜ！そして俺のエース、フアントム・オブ・カオスを  
召喚だあ！効果発動、変☆身！異次元ジェット・アイアン号出航！」  
なんだかよくわからないドロドロした黒いヘドロのようなモン  
スターが、いきなり動き出して異次元ジェット・アイアン号の形になる。  
……真っ黒だけど。

フアントム・オブ・カオス

効果モンスター

星4 / 闇属性 / 悪魔族 / 攻 0 / 守 0

自分の墓地に存在する効果モンスター1体を選択し、ゲームから除  
外する事ができる。

このカードが自分フィールド上に表側表示で存在する限り、

このカードはエンドフェイズ時まで選択したモンスターと同名  
カードとして扱い、

選択したモンスターと同じ攻撃力とモンスター効果を得る。

この効果は1ターンに1度しか使用できない。

このモンスターの戦闘によって発生する相手プレイヤーへの戦闘  
ダメージは0になる。

「変身したこのカードは、このターンだけ異次元ジェット・アイアン号  
になるんだぜ！まいったか！」

フアントム・オブ・カオス↓異次元ジェット・アイアン号 攻0↓  
4000

「そしてアイアン号の効果、このカードをリリースして墓地のロビン  
ファミリートを全員集合させる！」

異次元ジェット・アイアン号

効果モンスター

星10 / 光属性 / 機械族 / 攻4000 / 守 0

このカードは通常召喚できない。

自分の手札・フィールド上から、

「異次元エスパ・スター・ロビン」「野獣戦士ピューマン」

「鳳王獣ガイルーダ」「鉄巨人アイアンハンマー」を

それぞれ1体ずつ墓地へ送った場合に特殊召喚できる。

また、自分フィールド上のこのカードをリリースする事で、

自分の墓地の「異次元エスパー・スター・ロビン」「野獣戦士ピューマン」

「鳳王獣ガイルーダ」「鉄巨人アイアンハンマー」をそれぞれ1体ずつ選択して特殊召喚する。

異次元エスパー・スター・ロビン 攻3000

野獣戦士ピューマン 守1000

鳳王獣ガイルーダ 守1200

鉄巨人アイアンハンマー 守3500

「アイアンハンマーの効果発動！ロビンを選択することで、このターンロビンはダイレクトアタックができる！決めるぞロビン、ビック・リパンチ！」

鉄巨人アイアンハンマー

効果モンスター

星8/地属性/岩石族/攻 900/守3500

自分フィールド上に「異次元エスパー・スター・ロビン」「野獣戦士ピューマン」

「鳳王獣ガイルーダ」が存在する場合、

このカードは手札から特殊召喚できる。

このカードはフィールド上に表側表示で存在する限り、表示形式を変更できない。

また、1ターンに1度、自分フィールド上のモンスター1体を選択して発動できる。

このターン、選択したモンスターは相手プレイヤーに直接攻撃できる。

異次元エスパー・スター・ロビン 攻3000↓夢想（直接攻撃）

夢想 LP4000↓1000

「……………さっきからポンポン出てきているモンスターの攻撃力がとてもデュエルの序盤とは思えないんだけど」

『インフレだよなあ。でもこういう脳筋の殴り合いって俺はわりと好

きだぜ』

「ターンエンドしてやるよ。ふふふ、こりやあ俺の勝ちが決まったよ  
うなもんかな？なにしろロビンが場にいる限り、お前はロビン以外の  
モンスターを攻撃とカード効果の対象にすることができないからな  
わっはっはー！」

「話はそれで終わり？なら、ドローするんだって。通らないとは思  
けど、一応モンスター・ジュ・ドラゴンでロビンを攻撃！パワー・コ  
ラー  
ジュー！」

「当然通さないぜ！墓地のネクロ・ガードナーを除外して、相手の攻撃  
一回を無効にするー！」

「あー、うん、だよなー、だって」

十代のデッキにも入っている闇の戦士が半透明な姿でロビンの前  
に仁王立ちし、三つ首竜のブレス攻撃をはじく。まあ、わざわざロビ  
ンを攻撃表示にしたんだから当然何かしらの対策はあるよね。当然  
夢想もそれはわかってて攻撃したようだ。今の攻撃は単に、ネクガを  
使わせるためだけの一撃だったんだろう。

「メイン2に移行して、モンスター・ジュ・ドラゴンをリリース！神秘の中  
華なべを発動するみたいだよ。あ、選ぶのは攻撃力ね」

『こつちもこつちでなかなかにえげつねえな』

神秘の中華なべ

速攻魔法

自分フィールド上のモンスター1体を生け贄に捧げる。

生け贄に捧げたモンスターの攻撃力が守備力を選択し、

その数値だけ自分のライフポイントを回復する。

夢想 LP1000↓9400

「カードをセット、ターンエンドだってさ」

酒田 LP4000 手札：0 モンスター：異次元エスパース  
ター・ロビン(攻)、鳳王獣ガイルーダ(守)、野獣戦士ピューマン(守)、  
鉄巨人アイアンハンマー(守) 魔法・罠：強欲なカケラ(1)

夢想 LP9400 手札：3 モンスター：チュウボーンJr.  
トークン×3(守) 魔法・罠：1(伏せ)

「ええい、ライフがどんだけ増えたって、全部削ればいいだけさ！ドロ、そして二つ目のカウンターが乗ったカケラを墓地に送ってさらにドロ！これで手札は3枚だ、このままガンガン攻めてやる！アイアンハンマー以外のモンスターを攻撃表示に変更し、アイアンハンマーでロビンを選択！そしてフィールド魔法、混沌空間を発動！さらにフアントム・オブ・カオスを召喚して………ここは安全に、その伏せから潰しておくか。変☆身！コアキメイル・マキシマム参上！」

カオスゾーン  
混沌空間

フィールド魔法

モンスターがゲームから除外される度に、

1体につき1つこのカードにカオスカウンターを置く。

1ターンに1度、自分フィールド上のカオスカウンターを4つ以上取り除く事で、

取り除いた数と同じレベルを持つ、

ゲームから除外されているモンスター1体を選択し、

自分フィールド上に特殊召喚する。

フィールド上のこのカードが相手の効果によって墓地へ送られた時、

このカードに乗っていたカオスカウンターの数以下のレベルを持つ

光属性または闇属性のモンスター1体をデッキから手札に加える事ができる。

コアキメイル・マキシマム

効果モンスター

星8／風属性／ドラゴン族／攻3000／守2500

このカードは通常召喚できない。

手札の「コアキメイルの鋼核」1枚をゲームから除外した場合に特殊召喚する事ができる。

このカードのコントローラーは自分のエンドフェイズ毎に

手札から「コアキメイルの鋼核」1枚を墓地へ送るか、

「コアキメイル」と名のついたモンスター1枚を墓地へ送る。



または、どちらも行わずにこのカードを破壊する。

1ターンに1度、自分のメインフェイズ時に

相手フィールド上に存在するカード1枚を選択して破壊する事ができる。

フアントム・オブ・カオス↓コアキメイル・マキシマム 攻0↓3000

「墓地のマキシマムが除外されたことでカウンターが1つ乗り、そのマキシマムの効果で伏せカードを除去させてもらうぜ！」

コアキメイル・マキシマムの形になったフアントム・オブ・カオスのブレス攻撃が、夢想の伏せだった血の代償を打ち抜き焼き尽くす。多分バトルフェイズ開始時にチュウボーンJr. トークンをリリースして上級モンスターを呼び出すつもりだったんだろうけど、今は酒田のメインフェイズだからその効果も使えない。

「さあ、バトルだ！フアントム、ピューマン、ガイルーダでそのネズミ野郎に攻撃！がら空きになったところをロビンで攻撃、ビック・リパンチ！」

コアキメイル・マキシマム(フアントム・オブ・カオス) 攻300

0↓チュウボーンJr. トークン 守300(破壊)

野獣戦士ピューマン 守1000↓攻1600↓チュウボーンJ

r. トークン 守300(破壊)

鳳王獣ガイルーダ 守1200↓攻2500↓2800↓チュウ

ボーンJr. トークン 守300(破壊)

異次元エスパスター・ロビン 攻3000↓夢想(直接攻撃)

夢想 LP9400↓6400

「……………まだまだ平気だよ、だってさ」

「ぐぐぐ、そりやそうだろうよ！モンタージュの攻撃力8400もあつたんだぞ?!メイン2、カードをセットしてターンエンド！」

コアキメイル・マキシマム↓フアントム・オブ・カオス 攻300

0↓0

「私のターン、ドロロー。うくん、しょうがないかな？手札の生者の書―禁断の呪術を発動。墓地のアンデット族のゾンビキャリアを特殊召

喚して、そっちの墓地のバーサーク・デッド・ドラゴンを除外するんだってさ」

「ちっ、最初にこっさり送つていたのがばれてたのかよ！まあいいさ、混沌空間に2つ目のカウンターが乗るぜ」

『うまいな。なるほど、さつきはダメージ重視でバーサークを使うか安全重視でマキシマムになるかで迷ってたのか』

ゾンビキャリア 攻200

「へっ、俺のロビンファミリー相手にその幽霊が何をするってんだ！」「む。私のカードをなめないでね、ゾンビキャリアをリリースして砂塵の悪霊をアドバンス召喚するよ、だってさ」

フィールドが何も見えなくなるほどに猛烈な砂嵐が吹き荒れると、その砂に触れたすべてのモンスターが破壊されていく。そして最後に残ったのは、さつきまでそこにはいかなかった化け物。赤い肌に爛々と光る目、そして全身から生えた謎の針が、なんとも不気味な味を出している。

砂塵の悪霊

スピリットモンスター

星6／地属性／アンデット族／攻2200／守1800

このカードは特殊召喚できない。

召喚・リバースしたターンのエンドフェイズ時に持ち主の手札に戻る。

このカードが召喚・リバースした時、

このカード以外のフィールド上に表側表示で存在するモンスターを全て破壊する。

「げーっ！ロビンファミリーも、ファントム・オブ・カオスも、全員吹っ飛んじまったーっ!?!」

「砂塵の悪霊でダイレクトアタック！」

砂塵の悪霊 攻2200↓酒田（直接攻撃）

「まだまだあー！スター・ロビン第二の効果発動！相手がダイレクトアタックを宣言した時、このカードは表側守備表示で特殊召喚できる！スター・ロビンよ永遠に！」

「なら、そのロビンを攻撃！」

砂塵の悪霊 攻2200↓異次元エスパースター・ロビン 守1500（破壊）

「この効果を使ったロビンは除外されるから、混沌空間のカウンターはこれで3つだけ！」

「カードを2枚伏せて、エンドフェイズ。砂塵の悪霊はスピリットモンスターだから、手札に戻って今度こそターンエンドみただよ」

酒田 LP4000 手札：0 モンスター：なし 魔法・罠：なし 場：混沌空間（3）

夢想 LP6400 手札：1 モンスター：なし 魔法・罠：2（伏せ）

「手札も場もすつからかんか……参ったねこりや、ドロー！永続魔法、炎の護封剣を発動！」

燃え盛る青い炎の剣がドスツドスツとフィールドに突き刺さり、どんなモンスターでも突破できないような防御の構えを作る。

炎の護封剣

永続魔法

自分フィールド上にモンスターが存在しない場合、相手フィールド上のモンスターは攻撃宣言できない。

自分フィールド上にモンスターが存在する場合、または相手の手札が5枚以上の場合、このカードは破壊される。

「この布陣、突破できるならしてみやがれ！」

『布陣も何も自壊効果ふたつも抱えたのが1枚しかねーじゃ……うんにや、言うだけ野暮だな』

「私のターン、ドロー！冥界の使者を召喚するよ」

冥界の使者 攻1600

「そのモンスターだけで何ができるってんだ！」

「それさつきも聞いたよ……この冥界の使者をコストに、闇霊術―欲を発動！手札の罠を見せられたら効果が不発になっちゃうけど、今なら問題ないね。闇属性1体をリリースして、2ドローするんだって。さらに冥界の使者の効果で、お互いにレベル3以下の通常モンスター

がデッキにいるならそれを手札に強制的に加えるみたいだよ。私はレベル1のワイトを手札に加えるけど、あなたは？」

「俺のデッキにレベル3以下の通常モンスターなんて……残念だったな、入ってるよ！って言えばたらカッコいいんだろうけどな」

「そう言いながらデュエルディスクをガサゴソと操作し、対象となるカードがデッキにないことをこの場にいる全員に証明する酒田………よーするに入っていないんだよね？」

「残念、手札があんまり。暗黒界の取引を発動して効果の処理が終わったらターンエンド」

### 暗黒界の取引

#### 通常魔法

お互いのプレイヤーはデッキからカードを1枚ドロ―し、その後手札を1枚選んで捨てる。

酒田 LP4000 手札：0 モンスター：なし 魔法・罠：炎

の護封剣 場：混沌空間（3）

夢想 LP6400 手札：3 モンスター：なし 魔法・罠：1（伏せ）

「ドロ―！闇の誘惑を発動、2枚ドロ―して闇属性一体を手札から除外する！手札の堕天使ゼラートを除外するからこれでカウンターも4つ目、だいぶ集まってきたぜ！カードを伏せてターンエンドだ」

「私のターン、ドロ―。そろそろ攻めさせてもらうね、ゾンビ・マスター召喚！」

ゾンビ・マスター 攻1800

「ゾンビ・マスターは効果で、手札のモンスターを捨てると墓地からレベル4以下のアンデット族を1体蘇生できるんだってさ。砂塵の悪霊を捨てて、ボーンクラッシャーを特殊召喚するよ。さらにボーンクラッシャーの効果で、炎の護封剣を破壊するんだってさ」

ボーンクラッシャー

効果モンスター

星4／地属性／アンデット族／攻1600／守 200

このカードがアンデット族モンスターの効果によって

自分の墓地から特殊召喚に成功した時、  
相手フィールド上に存在する魔法・罨カード1枚を破壊する事ができる。

このカードは特殊召喚したターンのエンドフェイズ時に破壊される。

「まずゾンビ・マスターでダイレクト……」

「攻撃宣言時、墓地のタスケナイトの効果発動！このカードが墓地にいて俺の手札が0の時に相手が攻撃してきたら、このカードを特殊召喚してバトルフェイズを終了する！ここで使わないとデッキの裁きの龍が完つ全に腐りまくりまくるからな！」

タスケナイト 攻1700

「これでターンエンド、だつてさ。ボーンクラッシャーは自壊するみたいだけど」

酒田 LP4000 手札：0 モンスター：タスケナイト（攻）

魔法・罨：1（伏せ） 場：混沌空間（4）

夢想 LP6400 手札：2 モンスター：ゾンビ・マスター

魔法・罨：1（伏せ）

「ドロー、よし！伏せカード、ダーク・バーストを発動するぜ！このカードで俺は墓地の攻撃力1500以下の闇属性モンスターを1体手札に戻す！俺が戻すのは当然俺のキーカードにして攻撃力0、ファントム・オブ・カオスだ！そしてこのファントム・オブ・カオスを通常召喚するぜ！さらに変☆身！ダーク・パシアス推参！」

ファントム・オブ・カオス↓ダーク・パシアス 攻0↓1900

↓2000

ダーク・パシアス

効果モンスター

星5／闇属性／天使族／攻1900／守1400

このカードが戦闘によって相手モンスターを破壊した場合、

自分の墓地に存在する闇属性モンスター1体をゲームから除外する事で、

自分のデッキからカードを1枚ドロウする。

このカードの攻撃力は、自分の墓地に存在する  
闇属性モンスターの数×100ポイントアップする。

「GO!ダーク・パーシアスでゾンビ・マスターを攻撃!」

ダーク・パーシアス（ファントム・オブ・カオス） 攻2000↓ゾ  
ンビ・マスター 攻1800（破壊）

「そしてこの瞬間、墓地のファントム・オブ・カオスを除外してドロ  
ー!混沌空間に6つ目のカウンターが乗って、今だけタスケナイト!ダ  
イレクトアタックを決めてやれ、ヘルプツシュ!」

タスケナイト 攻1700↓夢想（直接攻撃）

夢想 LP6400↓4900

「かかったね?トラップ発動、無抵抗の真相!手札のワイトを見せて、  
ワイト2体を特殊召喚!」

無抵抗の真相

通常罫

相手モンスターの直接攻撃によって自分が戦闘ダメージを受けた  
時、

手札のレベル1モンスター1体を相手に見せて発動する。

相手に見せたモンスター1体と、自分のデッキに存在する同名モン  
スター1体を

自分フィールド上に特殊召喚する。

ワイト×2 攻300

「ちっ!これでバトルフェイズは終わりにしといてやるが、まさか俺  
がこのまま終わるなんて思っていないよな?永続魔法、ゼロゼロック発  
動!どーだ、これでタスケナイトしか攻撃できまいざまーみろ!これ  
で今度こそターンエンドっ!」

ゼロゼロック

永続魔法

このカードがフィールド上に存在する限り、

相手は表側攻撃表示で存在する攻撃力0のモンスターを攻撃対象  
に選択できない。

ダーク・パーシアス↓ファントム・オブ・カオス 攻1900↓0

「むー。ドローして、ホワイトをリリース！龍骨鬼をアドバンス召喚するんだって」

龍骨鬼

効果モンスター

星6／闇属性／アンデット族／攻2400／守2000

このカードと戦闘を行ったモンスターが戦士族・魔法使い族の場合、

ダメージステップ終了時にそのモンスターを破壊する。

「龍骨鬼、やっちゃって！タスケナイトに攻撃！」

龍骨鬼 攻2400↓タスケナイト 攻1700（破壊）

酒田 LP4000↓3300

「メイン2、ホワイトを守備表示にしてターンエンドするんだって」

ホワイト 攻300↓守200

酒田 LP3300 手札：1 モンスター：ファントム・オブ・

カオス（攻） 魔法・罠：ゼロゼロツク 場：混沌空間（6）

夢想 LP6400 手札：1 モンスター：ホワイト（守）、龍骨鬼

（攻） 魔法・罠：なし

「俺のターンドロワー！おろかな埋葬を発動して、デッキの天魔神ノーレライスを墓地に送るぜ。そして墓地の光と闇、野獣戦士ピューマンとノーレライスを除外して開闢の使者を特殊召喚するからな！これで混沌空間のカウンターも一気に2つ増えちゃうぜい！」

「……………っ！」

開闢の使者。いつぞや僕が神楽坂とデュエルした時も、あのカードには苦労したっけ。あの時は運よくスノーマンイーターが助けてくれたけど、夢想はあのカードを切り抜けるんだろうか。……いや、彼女は僕よりずっと強いデュエリストなんだ。大丈夫、彼女ならどんな相手にも負けないはず。

カオス・ソルジャー——開闢の使者——

効果モンスター（制限カード）

星8／光属性／戦士族／攻3000／守2500

このカードは通常召喚できない。

自分の墓地の光属性と闇属性のモンスターを1体ずつゲームから除外した場合に特殊召喚できる。

1ターンに1度、以下の効果から1つを選択して発動できる。

●フィールド上のモンスター1体を選択してゲームから除外する。この効果を発動するターン、このカードは攻撃できない。

●このカードの攻撃によって相手モンスターを破壊した場合、もう1度だけ続けて攻撃できる。

「そしてファントム・オブ・カオス、変☆身！混沌空間のカウンターをさらに増やして、ヴェルズ・サラマンドラ見参！」

ファントム・オブ・カオス↓ヴェルズ・サラマンドラ 攻0↓18

50

ヴェルズ・サラマンドラ

効果モンスター

星4／闇属性／恐竜族／攻1850／守 950

自分の墓地のモンスター1体をゲームから除外して発動できる。

このカードの攻撃力は相手のエンドフェイズ時まで300ポイントアップする。

この効果は1ターンに2度まで使用できる。

「サラマンドラの効果を2回使ってアイアンハンマーとガイルーダを除外し、混沌空間のカウンターを11個に！んで、そろそろこの効果も使い時だな！混沌空間のカオスカウンターを8つ取り除いて、異次元エスパースター・ロビンを除外ゾーンから特殊召喚しちゃうからな！」

混沌空間 11↓1

異次元エスパースター・ロビン 攻3000

「バトルだぜいっ！ファントム・オブ・カオスで龍骨鬼に攻撃！」

ヴェルズ・サラマンドラ（ファントム・オブ・カオス） 攻2450

↓龍骨鬼 攻2400（破壊）

「後はわかるな？開闢でホワイトに攻撃、開闢双破斬！」

カオス・ソルジャー―開闢の使者― 攻3000↓ホワイト 守20

0（破壊）



「開闢の第一の効果あ！さらにさらにさらに、ロビンでもダイレクトアタックだあ！時空突刃・開闢双破斬！アーンド、ビック・リパンチ！」

カオス・ソルジャー―開闢の使者― 攻3000↓夢想(直接攻撃)

夢想 LP6400↓3400

異次元エスパースター・ロビン 攻3000↓夢想(直接攻撃)

夢想 LP3400↓400

「ぎゃあっ！」

「悪く思うなよ、これこそが真剣勝負！ターンエンドだっ！」

鳳王獣ガイルーダ↓フアントム・オブ・カオス 攻2500↓0

「…………私のターン、ドロ―だっ。私も手札抹殺を発動、このカードを捨てて1枚ドロ―。私の墓地にはワイトが2体に龍骨鬼、ゾンビキヤリア、ゾンビ・マスター、冥界の使者、マッド・デーモン、ワイト夫人がいるみたいだよ。魔法カード、終わりの始まりを発動するんだっ。除外するのは龍骨鬼、ゾンビ・マスター、冥界の使者、マッド・デーモン、ゾンビキヤリアにするみたい」

「ワイト2に夫人1、メア1かあ。えっと、あれ？珍しいな、今日はワイトが少ない」

『いちいち驚くようなこと…………なんだよなあ、あの女の場合』

終わりの始まり

通常魔法

自分の墓地に闇属性モンスターが7体以上存在する場合に発動する事ができる。

自分の墓地に存在する闇属性モンスター5体をゲームから除外する事で、

自分のデッキからカードを3枚ドロ―する。

「終わりの始まりい!?えーい、混沌空間にカウンター5つ乗せだ！」

「これが私の、無敵の切り札。見せてあげるよ、ワイトキング！」

ワイトキング

効果モンスター

星1／闇属性／アンデット族／攻

?／守

0

このカードの元々の攻撃力は、自分の墓地に存在する「ワイトキング」

「ワイト」の数×1000ポイントの数値になる。

このカードが戦闘によって破壊され墓地へ送られた時、

自分の墓地の「ワイトキング」または「ワイト」1体を

ゲームから除外する事で、このカードを特殊召喚する。

ワイトキング 攻4000

「手札から速攻魔法、サイクロンを発動。ゼロゼロックは破壊するね」「ぐっ……でもな、まだロビンの効果が残ってる！ロビンがここに立っている限り、お前はロビンしか攻撃できないんだよ！そしてロビンの攻撃力は3000で俺のライフは1500！つまり、やっぱり俺の勝ちだ！」

「手札の禁じられた聖杯の効果発動！スター・ロビンの攻撃力を400上げて、その効果を無効にするんだってさ」

異次元エスパー・スター・ロビン 攻3000↓3400

「そ、そそそそんな……」

「さっきのドローが終わりの始まりなら、この攻撃は終わりの終わり。

ワイトキングでファントム・オブ・カオスを攻撃、だってさ」

「すいません、サンダー!!!」

ワイトキング 攻4000↓ファントム・オブ・カオス 攻0（破壊）

酒田 LP3300↓0

「ただいま、清明。勝ってきたよ、なんだって」

「お帰り。さてと、いよいよ……」

『おー、俺らの出番だな。全国生放送でドジ踏むんじゃねーぞ』

こんな嫌味な言い回しをしてるけど、別にユーノに悪気はない。こういう、とことん素直じゃない奴なんだ。だから僕も、ちよっぴり皮肉めいた笑みを浮かべてそっと一言返すにとどめておいた。

「そっちなこそ、僕のデュエルスフィックスにびつくらこいてひっくり

返っても知らないよ？」

『…………お前はどこのホープ使いだと。タクティクスもまともに言えねー奴なんか副将において大丈夫かこのチーム』

## ターン19 副将(?)、戦いの中進化する竜

「よしっ、ようやくとデュエルができる！さあ、僕の相手は？」

『四天王もこれでラスト、か。いいか清明、目標は十代にデュエルさせないことだ！』

「うわなんかそのセリフだけ聞くとすごい悪い人みたい」

いやまあ、ここで僕が勝てばそこで勝負が決まるのはわかっているんだけどさ。わかってるんだけど、なんかほら、もうちよつと言いつつてもんがないのかな。えーとえーと、例えばほら……。

「…………まあそんなことはともかくとして、いったい僕の相手はどんな人さ」

『思いつかなかったか』

「そこ言わないのが優しさってもんでしょー!？」

あーだこーだ言ってるうちにスツとデュエル場に上がる、一人の少年。高校生で少年つてのも正直ちよつと違和感あるけど、まあとりあえず少年。そしておもむろに口を開き、これまでの3人同様自分の名前を名乗る。

「俺こそがサンダー四天王の千と呼ばれた男にしてノース校のナンバー2、よろし…ちよつと待ってくれ、よろい鎧田」……なんですか、サンダー？」

少年改め鎧田の言葉を遮ったのは、意外なことに総大将の万丈目。だけど皆にとつてもつと意外だったのは、その次の言葉だった。

「遊野清明の相手は、俺が出る」

「えっ!？」

そう言ったのは、十代なのかユ一ノなのか鎧田なのか、それともほかの誰かか。僕が言ったのかもしれない。

「もとはと言えば俺はあいつに一度負けた。この場を借りて今、お前にもう一度勝負を申し込む！そして俺がお前に勝ったら、その次は遊城十代、まだ勝負がついていないお前の番だ！」

『勝負がついてない……？あーそっか、VWXYZ回に俺らが出たせいで第2話でうやむやになってからやりあつてないのか』

「わかりました、サンダー。ご武運を！」

「………すまないな、鎧田。だが、この2人だけは俺の手でカタを付けたいんだ！」

『じゃあなぜ呼んだし』

「おいそこのお前、見ない顔だから黙っていてやったがさつきからなんだその態度は！」

ビシツと万丈目が指差した先には………ユーノ。どっからどう見てもユーノ。後ろにだれも立ってないから、ユーノでなけりや壁でも指差してんだろう。

『じゃあ俺だろうな』

「いやいやいやちよつと待ってよ。そんなこと言ったら万丈目にも精霊が見えるってことになるじゃない」

『馬鹿だねえお前は。ノース校で修行する……ちよつと前に奴に精霊がついたのは常識だぜ?』

「どこの!?!てかそれ初耳!え、マジで万丈目!?!」

「万丈目サンダー!おいそのこのふわふわ浮いてる貴様、どこでそのことを知った!」

『あ、ヤベ。んじゃ、俺は一切ノータッチだから頑張ってくれ』

あ、逃げよつた。………えーと、とりあえず全国各地の皆さんも何が何だか分かんないだろうし。

「デュエル!」

同じこと考えてたのね、万丈目。やるじゃないか。

「わざわざリターンマッチ仕掛けてきたとこ悪いけど、遠慮なく返り討ちにさせてもらうよ!ドロー、ドリル・バーニカル召喚!そして水属性のドリル・バーニカルをリリースして、シャークラーケンを特殊召喚!」

シャークラーケン 攻2400

「これでターンエンド」

「俺のターン、ドロー!俺は、仮面竜を召喚してカードを1枚伏せ、ターンを終了する」

マスクド・ドラゴン  
仮面竜

効果モンスター

星3 / 炎属性 / ドラゴン族 / 攻1400 / 守1100

このカードが戦闘によって破壊され墓地へ送られた時、

自分のデッキから攻撃力1500以下のドラゴン族モンスター1体を

自分フィールド上に特殊召喚する事ができる。

「確かに伏せは怪しいし危険だと思うけど……ドロー、グリズリーマザーを召喚してそのまま攻撃！」

グリズリーマザー 攻1400

リクルーターは全員攻撃力1400。まあ、たまにもっと低いモンスターもいるが、それでも1400が基準ラインと言えるだろう。そして僕のグリズリーマザーも万丈目の仮面竜もその例に漏れず、その攻撃力は同じ。仮にあの伏せが攻撃反応のカードだとしても、ノーダメージでサーチできるこの攻撃は確実にいけるだろう。その後で連撃をかけるかどうかは、万丈目のモンスターを見てから決めればいいや。

グリズリーマザー 攻1400 (破壊) ↓仮面竜 攻1400 (破壊)

「ここでグリズリーマザーの効果！デッキのハリマンボウを特殊召喚！」

「こちらも仮面竜の効果だ！もう一体の仮面竜を召喚！」

ハリマンボウ 攻1500

仮面竜 攻1400

「んー、ここは攻めるべし！シャークラーケンで連撃！」

この攻撃で様子を見よう。ここで3体目の仮面竜が出てくるならよっぽどデッキから特殊召喚して生き残らせたいモンスターがいるってことだから、攻撃をストップしてやればいい。もし本命のモンスターがここで出てくるならハリマンボウで……まあ、あんまりたくないけど相打ちにすればいいし。

「トラップ発動、ガード・ブロック！」

ガード・ブロック

## 通常罾

相手ターンの戦闘ダメージ計算時に発動する事ができる。

その戦闘によって発生する自分への戦闘ダメージは0になり、自分のデッキからカードを1枚ドロウする。

シャークラーケン 攻2400↓仮面竜 攻1400 (破壊)

「もう一度仮面竜の効果だ！来い、アームド・ドラゴン LV3！」

次に出てきたのは3体目のリクルーター……ではなく、黄色い体のコミカルなデザインのドラゴン。ついに来たか、本命。

アームド・ドラゴン LV3 攻1200

「でも、攻撃力1200なら相打ちに持ち込む必要すらないね！ハリマンボウで攻撃！」

ハリマンボウ 攻1500↓アームド・ドラゴン LV3 攻12

00 (破壊)

万丈目 LP4000↓3700

「やった、倒した！ターンエンド！」

『うんわかった、わかったからちよつと落ち着け。小学生かお前は』

「フン、そこの奴の言うとおりだな」

清明 LP4000 手札：4 モンスター：シャークラーケン

(攻)、ハリマンボウ (攻) 魔法・罾：なし

万丈目 LP3700 手札：5 モンスター：なし 魔法・罾：

なし

「俺のターン、レベル調整を発動！お前にカードをドロウさせる代わりに、墓地のアームド・ドラゴン LV3を特殊召喚する！さらに通常魔法、レベルアップ！この効果でLV3を墓地に送り、デッキのLV5を特殊召喚！」

レベル調整

通常魔法

相手はカードを2枚ドロウする。

自分の墓地に存在する「LV」を持つモンスター1体を、

召喚条件を無視して特殊召喚する。

この効果で特殊召喚したモンスターは、このターン攻撃できず

効果を発動及び適用する事もできない。

レベルアップ！

通常魔法

フィールド上に表側表示で存在する「LV」を持つ  
モンスター1体を墓地へ送り発動する。

そのカードに記されているモンスターを、

召喚条件を無視して手札またはデッキから特殊召喚する。

黄色のドラゴンが光に包まれ、サイズが倍以上になりカラーリングも黒っぽい灰色と赤に変わってちよびつとだけ厳めしい顔つきになった。

「攻撃力2400は確かにすごいさ。でも、それだってシャークラーケンと互角！それに、モンスターの数だってこっちの方が多いんだよ」

「ああ、確かにそうだな。そこで俺は、こんな手を使う。手札から攻撃力2800のフェルグラントドラゴンを捨てることで、シャークラーケンを破壊！デストロイド・パイル！」

「そんな、破壊効果持ち!?!」

「これで貴様の場にはモンスターが1体だな。バトル！アームド・ドラゴンでハリマンボウを攻撃！アームド・バスター！」

アームド・ドラゴン LV5 攻2400↓ハリマンボウ 攻1500 (破壊)

清明 LP4000↓3100

「でもこの時、ハリマンボウの特殊効果！アームド・ドラゴンの攻撃力をダウン！」

アームド・ドラゴン LV5 攻2400↓1900

墓地からいくつものぶつとい針が乱射され、アームド・ドラゴンの体に突き刺さって爆発を起こす。よし、これで戦闘破壊しやすくなった。破壊効果は厄介だからね、早めに退場してもらおう。

『……………とかなんとか考えてんだろーなー。ここじゃアームド・ドラゴンなんてトンデモレアカードだから効果知らんだろーし。ま、頑張ってくれや』



「ふ、それで勝ったつもりか？メイン2に強欲なカケラを発動してエンドフェイズ、アームド・ドラゴン第2の効果発動！こいつがバトルでモンスターを破壊したターンのエンドフェイズ、このカードはもう一度進化を遂げる！」

アームド・ドラゴンが咆哮と共に再び光に包まれ、レベル3や5の時の面影がほぼなくなりギゴバイトからゴギガ・ガガギゴ並みの謎進化を遂げた巨大なドラゴンが万丈目のそばにそびえ立った。

強欲なカケラ

永続魔法

自分のドローフェイズ時に通常のドロローをする度に、このカードに強欲カウンターを1つ置く。

強欲カウンターが2つ以上乗っているこのカードを墓地へ送る事で、

自分のデッキからカードを2枚ドロローする。

アームド・ドラゴン LV5

効果モンスター

星5／風属性／ドラゴン族／攻2400／守1700

手札からモンスター1体を墓地へ送る事で、

そのモンスターの攻撃力以下の攻撃力を持つ、

相手フィールド上に表側表示で存在するモンスター1体を選択して破壊する。

また、このカードが戦闘によってモンスターを破壊したターンのエンドフェイズ時、

フィールド上に表側表示で存在するこのカードを墓地へ送る事で、手札またはデッキから「アームド・ドラゴン LV7」1体を持殊召喚する。

アームド・ドラゴン LV7 攻2800

「ハリマンボウの効果か、打ち消された……」

「その通り。俺はこれでターンエンドだ」

「まだまださー！ドロローっ！」

いつぞや会った大山先輩を参考にして、いつも以上に気合を込めて

カードを引いてみる。む、残念。ここは、守りを固めるか……。

「僕は、フィッシュボーグーアーチャー―を守備表示で召喚！そして魚族のアーチャーを召喚したことで、頼むよ戦友！シャーク・サッカー特殊召喚！」

シャーク・サッカー

効果モンスター

星3 / 水属性 / 魚族 / 攻 2000 / 守1000

自分フィールド上に魚族・海竜族・水族モンスターが召喚・特殊召喚された時、

このカードを手札から特殊召喚する事ができる。

このカードはシンクロ素材とする事はできない。

フィッシュボーグーアーチャー― 守300

「さらにカードをセットして、これでターンエンド。これなら、なんとかこのターンはしのげるはず……」

『わけねえだろ。つたく、まさか万丈目と当たることはないだろうと思ってアームド・ドラゴンの効果を覚えさせとかなかったのが裏目に出たか』

清明 LP3100 手札:3 モンスター:フィッシュボーグー

アーチャー― (守)、シャーク・サッカー (守) 魔法・罫:1 (伏せ)

万丈目 LP3700 手札:2 モンスター:アームド・ドラゴ

ン LV7 (攻) 魔法・罫:強欲なカケラ (0)

「俺のターン、ドロー！強欲カウンターが一つ増えてメイン1、さらに進化したアームド・ドラゴンの力を見せてやる！手札から攻撃力400のミンゲイドラゴンを捨てて、貴様の雑魚モンスターを全部吹き飛ばす！ジェノサイド・カッター！」

「そんな、破壊効果がパワーアップしてるなんて!?!」

『知らんカードが出たら素直に効果見せてもらえよ……』

アームド・ドラゴン LV7

効果モンスター

星7 / 風属性 / ドラゴン族 / 攻2800 / 守1000

このカードは通常召喚できない。

「アームド・ドラゴン LV5」の効果でのみ特殊召喚する事ができる。

手札からモンスター1体を墓地へ送る事で、そのモンスターの攻撃力以下の攻撃力を持つ、相手フィールド上に表側表示で存在するモンスターを全て破壊する。

「ゆけ、アームド・ドラゴン！アームド・ヴァニッシャー！」

「ぎゃっ！一気に削られた……………」

アームド・ドラゴン LV7 攻2800↓清明（直接攻撃）

清明 LP3100↓300

「メイン2に入り、カードを2枚伏せてターンエンドだ」

「万丈目！僕は今の攻撃、あえて直接受けたのさ！こうするためね、ドロロー！メインフェイズに墓地のフィッシュボーグアーチャーの効果発動！手札の氷帝メビウスを捨てて、このカードを特殊召喚！」

がら空きになった僕のフィールドに、さきほどアームド・ドラゴンの効果を受けて倒れた魚……………魚？って、このネタは前もやったか。とりあえず魚が四本足で走ってくる。なんかおかしい気もするけど、多分気のせいだろう。

フィッシュボーグアーチャー

チューナー（効果モンスター）

星3 / 水属性 / 魚族 / 攻 300 / 守 300

このカードが墓地に存在し、

自分フィールド上にモンスターが存在しない場合、手札の水属性モンスター1体を捨てて発動できる。

このカードを墓地から特殊召喚する。

さらに、この効果で特殊召喚したターンのバトルフェイズ開始時に水属性以外の自分フィールド上のモンスターを全て破壊する。

「フィッシュボーグアーチャー」の効果は1ターンに1度しか使用できない。

「またその雑魚モンスターか？」

「これだけじゃないよ、というかそもそも雑魚なんかじゃない！トランプ発動して、メタル・リフレクト・スライム召喚！」

毎度おなじみ銀色の筋肉スライムが、そのぶつとい腕をアームド・ドラゴンに見せつける。そんなことしたってお前、攻撃力0だろうに。

メタル・リフレクト・スライム

永続罫

このカードは発動後モンスターカード（水族・水・星10・攻0／守3000）となり、

自分のモンスターカードゾーンに守備表示で特殊召喚する。

このカードは攻撃する事ができない。（このカードは罫カードとしても扱う）

「これでモンスターが2体、そして僕には召喚権が残ってる………来い、僕のドラゴン！青氷の白夜龍！」

これがやりたかったから、さつきはアームド・ドラゴンの攻撃を通したんだよね。なにしろスライムの攻撃力は0、さつき攻撃を防ぐのにお世話になってたらメイン2で一瞬で処理された可能性があった。どうだユーノ、僕だつてこれくらいはできるんだぞ！

『あきら は ほめてほしそうな め で こつちをみている！つてか？………まあ悪くはないが、今ので一体なにを褒めろつてんだ。ふーん、で終わりだろ』

ブルーアイズ・ホワイトナイト・ドラゴン  
青氷の白夜龍

効果モンスター

星8／水属性／ドラゴン族／攻3000／守2500

このカードを対象にする魔法・罫カードの発動を無効にし破壊する。

自分フィールド上に表側表示で存在するモンスターが攻撃対象に選択された時、

自分フィールド上に存在する魔法または罫カード1枚を墓地に送る事で、

このカードに攻撃対象を変更する事ができる。

「これだけじゃ終わらないよ、サルベージを発動。墓地のドリル・バーニカルとシャーク・サッカーを手札に加えて、これで墓地のモンスターはシャークラーケン、グリズリーマザー、ハリマンボウ、氷帝メビウス、フィツシユボーグアーチャーの5体！そしてこの条件が整った時、氷霊神ムーラングレイスは特殊召喚できる！」

サルベージ

通常魔法

自分の墓地の攻撃力1500以下の水属性モンスター2体を選択して手札に加える。

氷霊神ムーラングレイス

効果モンスター

星8／水属性／海竜族／攻2800／守2200

このカードは通常召喚できない。

自分の墓地の水属性モンスターが5体の場合のみ特殊召喚できる。

このカードが特殊召喚に成功した時、

相手の手札をランダムに2枚選んで捨てる。

「氷霊神ムーラングレイス」のこの効果は1ターンに1度しか使用できない。

このカードがフィールド上から離れた場合、

次の自分のターンのバトルフェイズをスキップする。

「ムーラングレイスの効果……は使えないけど、バトル！ブルーアイズでアームド・ドラゴンを打ち抜け！孤高の冬色氷輪弾!!」  
ウィンターストリウム

青氷の白夜龍 攻3000↓アームド・ドラゴン LV7 攻28

00（破壊）

万丈目 LP3700↓3500

「ムーラングレイスも攻撃！」

氷霊神ムーラングレイス 攻2800↓万丈目（直接攻撃）

万丈目 LP3500↓700

「僕はこれで、ターンエンドだよ」

清明 LP300 手札：2 モンスター：青氷の白夜龍（攻）、氷  
霊神ムーラングレイス（攻） 魔法・罫：なし

万丈目 LP700 手札：0 モンスター：なし 魔法・罫：強  
欲なカケラ（1）、2（伏せ）

アームド・ドラゴンの破壊効果は確かに面倒だったけど、効果の発動にはモンスターを手札から捨てる必要がある。今の万丈目の手札は0、次のドロローだけだなにかしらのカードを引くなんてことはまさかないだろう。……………いや、万丈目の目は本気だ。なんだろう、嫌な予感がする。

「俺は……………俺は、もう負けるわけにはいかんのだ！」

「ま、万丈目？」

「いいか遊野清明、それに遊城十代！俺はお前らのように、ただ毎日ヘラヘラ笑って楽しんでデュエルしていればいいのではない！俺のこの肩には、万丈目グループとしての誇りと期待がかかっているんだ！だから俺は、とにかく勝たなくてはいけないんだ！今日も明日も明後日も、その次の日もまた次の日も！だから頼む、俺のデッキ！俺を勝たせてくれ！」

正直なところ、何も言うことができなかつた。出てく前とあんま変わってなかつたからあんま心配してなかつたけど、まさかここまで万丈目が思い詰めてたなんてねえ。

「……………ドロロー！そして、強欲カウンターが2つになったカケラを墓地に送ってさらに2枚ドロロー！2枚目のレベル調整を発動、相手のドロローと引き換えに俺が召喚するのは、アームド・ドラゴン LV7！そして俺の場のLV7をリリースすることで、アームド・ドラゴンは究極の進化を遂げる！出て来い最後のアームド・ドラゴン、アームド・ドラゴン LV10！」

万丈目の本気に、そのデッキは答えたらしい。アームド・ドラゴンの全身が全体的に黒っぽい色になり、体も一回り大きくなる。だが何よりも大きな変化は、その巨体が放つ圧倒的な威圧感だろうか。

アームド・ドラゴン LV10

効果モンスター

星10／風属性／ドラゴン族／攻3000／守2000

このカードは通常召喚できない。

自分フィールド上に存在する「アームド・ドラゴン LV7」1体を

リリースした場合のみ特殊召喚する事ができる。

手札を1枚墓地へ送る事で、

相手フィールド上に表側表示で存在するモンスターを全て破壊する。

『なんだこの万丈目。すげー漫画版っぽいんですが』

「アームド・ドラゴンでムーラングレイスに攻撃、アームド・ビッグ・パニツシャー!!」

アームド・ドラゴン LV10 攻3000↓氷霊神ムーラングレイス 攻2800 (破壊)

清明 LP300↓100

「くっ……………」

「俺はこれで、ターンを終了する。そうだ遊野清明、いつまでもこのぬるい環境でばかり戦ってきたお前が、一度地獄を見てきたこの俺に勝てるものか!」

『ん、LV10の効果を使わない? 確実な勝ちのチャンス捨ててまで手札に残しておきたいほどのカード……………まさかアレか?』

清明 LP100 手札:4 モンスター:青氷の白夜龍 (攻) 魔法・罠:なし

法・罠:なし

万丈目 LP700 手札:1 モンスター:アームド・ドラゴン LV10 (攻) 魔法・罠:2 (伏せ)

「なんの、まだまだ……………ドロー! ねえ万丈目、一つ聞いてもいい?」

「万丈目サンダー! まあいい、なんだ」

「万丈目はさ、デュエルしてて楽しい?」

僕がそう聞くと、万丈目はまずきよとんとした顔をした。そして一瞬だけ後ろめたそうな顔になったけど、すぐに表情を取り繕う。わかりやすいやつ。人のことは言えないかもしれないけど。

「俺の話を聞いていたのか? 俺には万丈目グループとしての責任がある、楽しんでデュエルをする暇などない!」

「ありがと、今の顔でだいたいわかったよ。…………ちよつと荒療治だ

けど万丈目、ここで全力でぶっ飛ばすよ！この全国放送でもう一回僕が勝って、少しでもその肩の荷を降ろしてやる！デュエルはやっぱ、皆で楽しくやるものだよ！フィールド魔法、ウォーターワールドを発動してブリザード・ファルコンを守備表示で召喚！」

ウォーターワールド

フィールド魔法

フィールド上に表側表示で存在する水属性モンスターの攻撃力は500ポイントアップし、

守備力は400ポイントダウンする。

ブリザード・ファルコン

効果モンスター

星4 / 水属性 / 鳥獣族 / 攻1500 / 守1500

このカードの攻撃力が元々の攻撃力よりも高い場合に発動できる。相手ライフに1500ポイントダメージを与える。

この効果はこのカードがフィールド上に表側表示で存在する限り1度しか使用できず、

「ブリザード・ファルコン」の効果は1ターンに1度しか使用できない。

青氷の白夜龍 攻3000 ↓ 3500 守2500 ↓ 2100

ブリザード・ファルコン 守1500 ↓ 1100 攻1500 ↓ 2

000

「ブリザード・ファルコンの効果発動！これで終わりにするよ、1500ポイントダメージ！」

「まだだ！リバーズ発動、黒板消しの罠！そのダメージは受け付けん！」

黒板消しの罠

カウンター罠

ダメージを与える効果が発動した時に発動する事ができる。

自分が受けるその効果ダメージを無効にし、相手は手札を1枚選択して捨てる。

「僕の手札を1枚………ドリル・バーニカルを捨てるよ」



『これで攻撃ができれば勝ちだったんだがな。たれば論とはいえ、さっきのタイミングでムーラングレイス出さない方がよかつたかもしれんな』

「ムーラングレイスのデメリット効果でこのターン僕はバトルができないから、貪欲な壺を発動。ムーラングレイス召喚の時に見せたモンスターをデッキに戻してドロロー、カードを2枚伏せてターンエンド」

僕が今伏せたカードはそれぞれ、リビングデッドの呼び声とポセイドン・ウエーブ。万丈目のアームド・ドラゴンの効果はどれほどレベルアップしても、当たり前ながらバトルフェイズに発動することはできない。つまり、攻撃に合わせてリビングデッドを発動してドリル・バーニカルを蘇生させる。そのまま攻撃宣言をし直すならポセイドン・ウエーブで返り討ちにすればいいし、攻撃をやめるなら返しの僕のターンで攻撃力800に上がってるバーニカルで直接攻撃を決めてやればいい。唯一気になるのが万丈目のさつき使わなかった手札だけど、あそこまで追い詰めた状況でも捨てないようなカードなら多分メイン2で使ったりはしないだろう。よし、完璧。

「俺のターン。……このデュエル、俺の勝ちだ」

「好きなだけ言つてなよ。僕が何にも考えずにターンを渡すわけないでしょ?」

「どんな小細工を仕掛けたのかは知らんが、それでも、だ。まず、リビングデッドの呼び声を発動。墓地のミンゲイドラゴンを特殊召喚する」

ミンゲイドラゴン

効果モンスター

星2／地属性／ドラゴン族／攻 400／守 200

ドラゴン族モンスターをアドバンス召喚する場合、

このモンスター1体で2体分のリリースとする事ができる。

自分のスタンバイフェイズ時にこのカードが墓地に存在し、

自分フィールド上にモンスターが存在しない場合、

このカードを自分フィールド上に表側攻撃表示で特殊召喚する事ができる。

この効果は自分の墓地にドラゴン族以外のモンスターが存在する場合には発動できない。

この効果で特殊召喚されたこのカードは、フィールド上から離れた場合ゲームから除外される。

「そして今ドロウしたカード、お ज्याマ・イエローを捨ててアームド・ドラゴン LV10の効果を発動。お前の場のモンスターを破壊する」

「ごめんブルーアイズ、それにファルコン……でも、僕は負けるつもりはないよー！」

「言っただろう、どんな小細工も通用しないと！ミンゲイドラゴンをリリースし、俺はこのモンスターをアドバンス召喚するー！」

『万丈目の最上級ドラゴンで、手札に置いておきたいカードときたら、やっぱアレしかないよなあ』

「来い、光と闇の竜！」

万丈目の場に、2体の最上級ドラゴンがそろろう。体の半分が白、もう半分が黒。きれいにカラーリングが分けられた白黒の龍が、アームド・ドラゴンと共に雄たけびを上げた。

光と闇の竜 攻2800

「光と闇の竜でダイレクトアタック、シャイニングブレス！」

「トラップ発動、リビンググデッドの……」

でも、カード名を最後まで宣言することはできなかった。発動したはずのリビンググデッドが、僕のモンスターを呼び寄せる前に粉々に砕け散ったからだ。

「なっ、僕のカードが？」

「これこそが俺の、光と闇の竜の効果だ！自らの攻守を犠牲に、いかなるカードの効果も無効にする！」

ライトアンドダークネス・ドラゴン  
光と闇の竜

効果モンスター

星8 / 光属性 / ドラゴン族 / 攻2800 / 守2400

このカードは特殊召喚できない。

このカードの属性は「闇」としても扱う。

このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、効果モンスターの効果・魔法・罠カードの発動を無効にする。

この効果でカードの発動を無効にする度に、

このカードの攻撃力と守備力は500ポイントダウンする。

このカードが破壊され墓地へ送られた時、

自分の墓地に存在するモンスター1体を選択して発動する。

自分フィールド上のカードを全て破壊する。

選択したモンスター1体を自分フィールド上に特殊召喚する。

光と闇の竜 攻2800↓2300 守2400↓1900

「改めて攻撃だ、光と闇の竜！ダークパプティズム！」

「ポ、ポセイドン・ウエーブを……………」

もちろんわかってる。通るわけがない。でも、なにかせすにはいられなかったんだと思う。無理なのは百も承知だけど、それでも半ば無意識に発動していた。

光と闇の竜 攻2300↓1800↓清明（直接攻撃）

清明 LP100↓0

僕のライフが0になったことでデュエルが終わり、ゆっくりとソリットビジョンのドラゴンたちが消えていく。完全に姿が見えなくなる寸前にチラッと見えた2体の表情がなんとなく悲しそうに見えるのは、本当に僕の気のせいなんだろうか。ごめん、なんとかしようと思ったけど、僕じゃ万丈目は止められなかったよ。

「ねえ、ユーノ」

『んー?』

「僕、今はまだ弱いけど、もっと強くなるよ。もっと強くなって、もうこんなやつてらんない気持ちも味わうことがないようにするんだ」

正直、自分でもいいかげんな宣言だと思う。小学生が作文に書く未来の夢じゃあるまいしね。きっと笑われるかと思ったけど、意外にもユーノは真面目な顔で、黙ったまま最後まで聞いてくれた。

『そっか、頑張れよ。俺も応援ぐらいは片手間にしといちやるからな。』

でもま、今はとりあえず顔上げとけ。まだ十代が残ってんだろうが」  
「うん、そうだね……」

僕に気を使ってくれてるんだろうか。まだ5分経たないと始まらないのに。まったく、肝心なところで抜けてるんだから。でも、『強くなる』って言ったそばからいつまでも落ち込んでちやいけないよね。後は任せたよ、十代。

## ターン20 大将、最後に英雄が救うもの

「なあ万丈目、お前とデュエルするのって、考えてみれば結構久しぶりだよな！」

「万丈目サンダー！……だがまあ、確かにそうだな。入学式の夜以来か」

「あの時の勝負だって、実質俺の勝ちだったんだ！ここであらためて決着つけてやるぜ！」

「なんだ、まだそんな負け惜しみを言ってるのか？まあいい、俺もあの時の俺ではない！清明はすでに倒した、次はお前に格の違いを教えるやる！」

「デュエル！」

「先攻は俺だ！俺は、ゴーレム・ドラゴンを守備表示で召喚する。さらにカードを2枚伏せ、ターンエンドだ」

ゴーレム・ドラゴン 守2000

「俺のターン、ドロー！最初から行くぜ、フィールド魔法発動、フュージョン・ゲート！そしてこの効果で、手札のスパークマンとクレイマンを融合する！サンダー・ジャイアント召喚！」

フュージョン・ゲート

フィールド魔法

このカードがフィールド上に存在する限り、

ターンプレイヤーは手札・自分フィールド上から

融合モンスターカードによって決められた融合素材モンスターをゲームから除外し、その融合モンスター1体を融合召喚扱いとしてエクストラデッキから特殊召喚することができる。

エレメンタルヒーロー  
E・HERO サンダー・ジャイアント

融合・効果モンスター

星6／光属性／戦士族／攻2400／守1500

「E・HERO スパークマン」＋「E・HERO クレイマン」

このモンスターは融合召喚でしか特殊召喚できない。

自分の手札を1枚捨てる事で、フィールド上に表側表示で存在する

元々の攻撃力がこのカードの攻撃力よりも低いモンスター1体を選択して破壊する。

この効果は1ターンに1度だけ自分のメインフェイズに使用する事ができる。

「サンダー・ジャイアントの効果で、手札を捨ててゴレム・ドラゴン  
を破壊するぜ！ヴェイパー・スパーク！さらに手札のバーストレディ  
を召喚して、バトル！まずはサンダー・ジャイアントからだぜ、ボル  
ティック・サンダー！」

『十代、せっかくバーストレディ出したんならそっちらから攻撃しろよ  
……』

E・HERO バーストレディ 攻1200

E・HERO サンダー・ジャイアント 攻2400↓万丈目（直  
接攻撃）

万丈目 LP4000↓1600

「ぐっ……だがこのダイレクトアタック時、両方のトラップを発動！  
1枚目、ダメージ・コンデンサー！そして2枚目、痛恨の訴え！」  
『言わんこっちゃねえけど、俺が予想してたのより一段とえげつねえ  
な』

「まず手札を捨てて、ダメージ・コンデンサーの効果だ。俺のダメージ  
は2400、よって攻撃力2400のアームド・ドラゴン LV5を  
特殊召喚する！そして痛恨の訴えの効果により、守備力1500のサ  
ンダー・ジャイアントのコントロールを貰っていくぞ！」

「俺のサンダー・ジャイアントが！」

ダメージ・コンデンサー

通常罫

自分が戦闘ダメージを受けた時、手札を1枚捨てて発動する事がで  
きる。

その時に受けたダメージの数値以下の攻撃力を持つモンスター1  
体を

デッキから攻撃表示で特殊召喚する。

アームド・ドラゴン LV5 攻2400

痛恨の訴え

通常罨

相手モンスターへの直接攻撃によって自分が戦闘ダメージを受けた時に発動できる。

相手フィールド上に表側表示で存在する守備力が一番高いモンスター1体の

コントロールを次の自分のエンドフェイズ時まで得る。

この効果でコントロールを得たモンスターの効果は無効化され、攻撃宣言できない。

「くっ、カードをセットしてターンエンドだ」

十代 LP4000 手札：0 フィールド：E・HERO バー  
ストレディ（攻） 魔法、罨：1（伏せ）

万丈目 LP1600 手札：2 フィールド：アームド・ドラゴン  
LV5（攻）、E・HERO サンダー・ジャイアント（攻） 魔法、罨：なし

場：フュージョン・ゲート

「俺のターン、ドロロー！サンダー・ジャイアントをリリースして、創生竜をアドバンス召喚する」

ジェネクスドラゴン  
創生竜

効果モンスター

星6／光属性／ドラゴン族／攻2200／守1800

1ターンに1度、手札からドラゴン族モンスター1体を墓地に送る事で、

自分の墓地に存在するドラゴン族モンスター1体を手札に加える。

このカードがフィールド上から墓地に送られた時、

自分の墓地に存在するドラゴン族モンスターを全てデッキに戻す事ができる。

「創生竜の効果は使わん。バトルだ！アームド・ドラゴンでバーストレディを攻撃、アームド・バスター！」

「トラップ発動、攻撃の無力化！その攻撃を無効にして、バトルフェイズを終わらせるぜ」

「相変わらず姑息な手を使う……まあいい、俺の優位に変わりはないのだからな。ターンエンドだ」

「俺のターン、ドロー！Eーエマーゼンシーコールを発動して、デッキのエツジマンを手札に加えるぜ。そして墓地からネクロダークマンの効果発動、一回だけE・HERO召喚のリリースをなしにできる！この効果でエツジマンを通常召喚だ！」

Eーエマーゼンシーコール

通常魔法（準制限カード）

自分のデッキから「E・HERO」と名のついたモンスター1体を手札に加える。

「エツジマンでアームド・ドラゴンに攻撃！パワー・エツジ・アタック！」

E・HERO エツジマン 攻2600↓アームド・ドラゴン L

V5 攻2400（破壊）

万丈目 LP1600↓1400

「バーストレディを守備表示に変更、これでターンエンドだぜ」

E・HERO バーストレディ 攻1200↓守800

十代 LP4000 手札：0 フィールド：E・HERO バース

トレディ（守）、E・HERO エツジマン（攻） 魔法、罨：なし

万丈目 LP1400 手札：2 フィールド：創生竜（攻） 魔法、

罨：なし

場：フュージョン・ゲート

「まだまだこの程度！俺のターン、ドロー！レベル調整、レベルアップ！のコンボでアームド・ドラゴン LV7をデッキから特殊召喚！そして手札のランサー・ドラゴニユートを通常召喚する」

「うわ、僕もやられたコンビだ……」

アームド・ドラゴン LV7 攻2800

ランサー・ドラゴニユート

効果モンスター

星4／闇属性／ドラゴン族／攻1500／守1800

このカードが守備表示モンスターを攻撃した時、



その守備力を攻撃力が超えていれば、  
その数値だけ相手ライフに戦闘ダメージを与える。

「アームド・ドラゴンの効果は使わん。ドラゴニユートでバーストレ  
デイに、アームド・ドラゴンでエッジマンにそれぞれ攻撃！そして創  
生竜でダイレクトアタックだ！」

ランサー・ドラゴニユート 攻1500↓E・HERO バースト  
レデイ 守800 (破壊)

十代 LP4000↓3300

アームド・ドラゴン LV7 攻2800↓E・HERO エッジ  
マン 攻2600 (破壊)

十代 LP3300↓3100

創生竜 攻2200↓十代 (直接攻撃)

十代 LP3100↓900

「どうだ十代、これが俺の覚悟！ターンエンドだ！」

「やるな、万丈目！なんだかワクワクしてきたぜ！」

「ええい、お前という奴はここまで追い込んでまだヘラヘラ笑って  
られるのか！」

「当たり前だろ？ヒーローってのは、どんな時でもへこたれないもん  
さ！ドロー！オーバーソウルを発動して、墓地のバーストレデイ  
を特殊召喚！さらにフュージョン・ゲートの効果で、手札のフェザー  
マンとバーストレデイを除外融合！来い、マイファイバリット！フレ  
イム・ウイングマン召喚！」

オーバーソウル

通常魔法

自分の墓地から「E・HERO」と名のついた通常モンスター1体  
を選択し、

自分フィールド上に特殊召喚する。

エレメンタルヒーロー

E・HERO フレイム・ウイングマン

融合・効果モンスター

星6／風属性／戦士族／攻2100／守1200

「E・HERO フェザーマン」＋「E・HERO バーストレデイ」

このカードは融合召喚でしか特殊召喚できない。

このカードが戦闘によってモンスターを破壊し墓地へ送った時、破壊したモンスターの攻撃力分のダメージを相手ライフに与える。

「フレイム・ウイングマンでランサー・ドラゴニユートに攻撃！フレイム・シユート！」

「攻撃時に墓地のダメージ・ダイエツトの効果発動！戦闘ダメージは無理でも、その効果ダメージは半減する！」

『コンデンサーで捨てたコストだな』

ダメージ・ダイエツト

通常罫

このターン自分が受ける全てのダメージは半分になる。

また、墓地に存在するこのカードをゲームから除外する事で、そのターン自分が受ける効果ダメージは半分になる。

E・HERO フレイム・ウイングマン 攻2100↓ランサー・

ドラゴニユート 攻1500（破壊）

万丈目 LP1400↓800↓50

『しかし、50残して倒し損ねたか！十代、これは痛いな。さあどうする』

「くっ………カードをセットして、ターンエンドだ」

十代 LP900 手札：0 フィールド：E・HERO フレイ

ム・ウイングマン（攻） 魔法、罫：1（伏せ）

万丈目 LP50 手札：0 フィールド：アームド・ドラゴン

LV7（攻）、創生竜（攻） 魔法、罫：なし

場：フュージョン・ゲート

「せっかく引いたカードだ、使っておくか。フィールド魔法、サベージ・コロシラムを発動！」

それまで広がっていたポリゴンの山が粉々になり、フィールド全体が古めかしい闘技場に変化する。これで、十代は融合召喚がさらにできにくくなったわけだ。もっともそれも、このターンを耐え切ったからの話だけだ。負けないでよ、十代………！

サベージ・コロシラム

## フィールド魔法

フィールド上に存在するモンスターが攻撃を行った場合、そのモンスターのコントローラーはダメージステップ終了時に300ライフポイント回復する。

このカードがフィールド上に存在する限り、攻撃可能なモンスターは攻撃しなければならない。

エンドフェイズ時、ターンプレイヤーのフィールド上に

表側攻撃表示で存在する攻撃宣言をしていないモンスターを全て破壊する。

「だが、この効果が役に立つことはあるまい。なぜならお前はここで負けるからだ、十代！アームド・ドラゴンでフレイム・ウイングマンに攻撃、アームド・ヴァニツシャー！」

アームド・ドラゴン LV7 攻2800↓E・HERO フレイム・ウイングマン 攻2100（破壊）

十代 LP900↓200

万丈目 LP50↓350

「ヒーローは決して諦めないぜ、お前にデュエルは勝ち負けだけじゃないってことを、ましてや誰かのためにやるもんじゃないってことを教えるまではな！デュエルは、自分が楽しいからするんだ！ここでトランプ発動、ヒーロー・シグナル！デッキのバブルマンを守備表示で特殊召喚して、カードを2枚ドロ！」

『出たな強欲な泡男！』

ヒーロー・シグナル

通常罫

自分フィールド上のモンスターが戦闘によって破壊され

墓地へ送られた時に発動する事ができる。

自分の手札またはデッキから「E・HERO」という名のついたレベル4以下のモンスター1体を特殊召喚する。

エレメンタルヒーロー

E・HERO バブルマン

効果モンスター

星4／水属性／戦士族／攻 800／守1200

手札がこのカード1枚だけの場合、

このカードを手札から特殊召喚する事ができる。

このカードが召喚・反転召喚・特殊召喚に成功した時に

自分のフィールド上と手札に他のカードが無い場合、

デッキからカードを2枚ドローする事ができる。

「ええい、サベージ・コロシアムさえ発動してなければ！創生竜でバブルマンを攻撃、剛炎弾！」

創生竜 攻2200↓E・HERO バブルマン 守1200（破壊）

万丈目 LP350↓650

「ありがとうな、バブルマン………ドロー！魂の解放を発動、俺の墓地のバブルマンを除外する！」

「何？俺の墓地ならまだしも、自分の墓地を自分で荒らすだと？」

「ああそうさ、これでこのカードが使えるからな！マジック発動、平行世界融合！俺が除外したフェザーマン、バーストレディ、クレイマン、バブルマンをデッキに戻して究極のヒーロー、エリクシーラーを召喚！」

パラレル・ワールド・フュージョン  
平行世界融合

通常魔法

ゲームから除外されている、融合モンスターカードによって決められた

自分の融合素材モンスターをデッキに戻し、「E・HERO」と名のついた

融合モンスター1体を融合召喚扱いとしてエクストラデッキから特殊召喚する。

このカードを発動するターン、自分はモンスターを特殊召喚する事はできない。

エレメンタルヒーロー  
E・HERO エリクシーラー

融合・効果モンスター

星10／光属性／戦士族／攻2900／守2600

「E・HERO フェザーマン」＋「E・HERO バーストレディ」

＋「E・HERO クレイマン」＋「E・HERO バブルマン」  
このモンスターは融合召喚でしか特殊召喚できない。

このカードの属性は「風」「水」「炎」「地」としても扱う。

このカードが融合召喚に成功した時、ゲームから除外された全てのカードを

持ち主のデッキに戻し、デッキをシャッフルする。

相手フィールド上に存在するこのカードと同じ属性のモンスター1体につき、

このカードの攻撃力は300ポイントアップする。

「エリクシーラー第一の効果で、俺のスパークマンとお前のダメージ・ダイエツトをデッキに戻すぜ。そして第二の効果によって、光属性の創生竜と風属性のアームド・ドラゴンの分だけ攻撃力アップだ！」

E・HERO エリクシーラー 攻2900↓3500

「覚悟はいいな、万丈目！エリクシーラーでアームド・ドラゴンを攻撃、フュージョニスト・マジスタラー！」

E・HERO エリクシーラー 攻3500↓アームド・ドラゴン

LV7 攻2800（破壊）

万丈目 LP650↓0

「ガツチャ、万丈目！」

「やった、十代が勝った！」

これで勝負は2対3、僕らの勝ちだ！十代のところに駆け寄ろうとした………とところで、それより早く万丈目の前に2人の男が立った。あの面白味も何にもない真っ黒スーツは、万丈目の兄さんとやらか。ねぎらいの言葉でもかけてやるのかな、と思ったけど、放たれた言葉は優しいものとは程遠かった。

「準、きさま何をやっているのだ！自分のやったことが分かっているのか！」

「万丈目一族の名に、泥を塗りおって！」

あんなに頑張つてこの言いさま。そのまま黙つて………というか

あつけにとられて聞いてたらまあひどいのなんの。俺たちのカードを使えばもつと強いデッキができたはずだ？自分の力で組んだデッキを使うことがふざけてるだ？万丈目も何か言い返せばいいのに、「すまない、兄さんたち……」って力なくつぶやくだけしかしない。人の家の話に口出しちゃいけないのかもしれないけど、そんなもん人前で話す方が悪いんだよね！

「「「「やめろ、あんたたち!!」「」」」」

あれ、ハモった。僕と、十代と、あと5人はサンダー四天王の皆さん方。全員で素早くアイコンタクトして、一同代表として十代が喋りだす。いったん観客席まで戻ってたせいでやってくるのが遅れた三沢に明日香、夢想になぜかついてきた翔、隼人、カイザーも僕らのところに来た。心強いね、味方が増えると。喋るの十代だけ。その後当然のようにひと悶着あったけど、思えばこつちにこれだけの人が集まってくれた時点で結果は見えてたのかもしれないね。

そして時刻は夕方、テレビ屋の後片付けとかでまだ島でぐずぐずしてた万丈目兄弟のヘリが帰っていくのをベーっと舌を出して見送り。ついに万丈目が、ノース校の皆が帰る時が迫っていた。

「また帰っちゃうんすね……」

「元気でな、万丈目」

そうお別れの言葉をかける中、万丈目は意を決したように意外な言葉をお口にしました。

「……………いや、俺はノース校には帰らん」

「「「「ええ〜!」「」」」」

どうやらその情報、サンダー四天王にも教えてなかったらしい。相変わらず一人で詰め込む奴め。っていうか、ノース校に帰らないってまさか……………。

『喜べ清明、そのとーりだ。な、サンダーさんよ?』

「フーン!そういうわけだ校長、また厄介になる」

と、その時。レッド寮生の空気を読まないことに定評のあるクロノ

ス先生が、またもややってくれた。このタイミングでマイクを使って何やら喋りだしたのだ。まあ、聞こえない位置だからしようがないっちゃあそうなんだけどね。なんでも、今から表彰式を始めて、プレゼントの授与をミス・デュエルアカデミアとやらが行うらしい。

ちなみに正直なところ、後ろを振り返って夢想の姿がいなくなっていることを期待したのは否定できない。あっさり見つけたから、少なくとも彼女のことじゃないってのはすぐわかったけど。しかし、一体誰なんだろう？……って、トメさん!?そして啞然とした僕らが見ているうちに、スキップでもしそうな勢いでウチの校長が表彰台上つてそのままトメさんのキスを受けた。

「えーつと……………」

『いかん、間近で見るとわかっててもアホらしくなってくる。この手のギャグで落とすノリは嫌いじゃないんだがな』

「俺たち、こんなものために戦ってたのかよ……………」

なんかもう、この十代の一言にすべてが詰まってると思う。あと、後ろで地団駄踏んで悔しがってるノース校校長が印象的だった。そのままノース校校長は走って船に飛び込み、皆が男泣きに泣きながら船はゆっくりと離れていった。

『そろそろ衝撃発表その2だな。万丈目と再戦したがってるお前にやいい知らせだろーな』

「……………」

『ま、黙って大徳寺先生の話聞いてな』

言われた通り黙って聞く。なにになに、万丈目は出席日数が足りない、だから進級するためにはオシリスレッドに入らないといけない。オシリスレッド……………僕らのとこ、だよ。っていうかウチの寮って3か月学校にいらなくても進級できるんだ。レッド寮凄。いろんな意味で凄。

「なんで俺がこいつらと!」

「そんじゃ、万丈目の入寮を祝して!」

「勝手に決めるな!」

往生際が悪いなあ、万丈目め。僕らは全力挙げて歓迎するよ? だっ

てほら、おきまりの掛け声だつて。

「一！十！百！千！」

「二！三！万！丈！目、サンダー！！サンダー！サンダー！！」

ねえ？これからよろしく万！丈！目、サンダー。



## ターン21 死神の羽は黒い羽根

万丈目がこっちに帰ってきた日の夜。ちょうど空き部屋が一つあったのでとりあえずそこに入ってもらい、あーだこーだと薄い壁と部屋の中のドアを通して聞こえてくる文句に耳を塞ぐ。せめてこのドアがなければもうちよつと静かだったんだろうけど。ちなみに僕の部屋は十代や翔の部屋と今万丈目がいる部屋の間位置してるんだけど、なぜか両方の部屋に通じる壁に一つづつドアがついている。いや、なぜかじゃない。こうなったのはだいたい十代が悪い。つい昨日まで空き部屋だったのをいいことに、どうせだから2階の部屋全部通り抜けできるようにしようぜ！とか言い出したのは十代だ。

『んで、ハンマーだののこぎりだので嬉々として壁ぶち抜いたのはお前な。挙句の果てに終わってからタイタンのいた寮まで行ってそこから辺のドア引っぱがして持つてくるとかお前ら何がしたいんだ』  
「いいじゃないの。どうせ誰も使わない寮なんだし、あそこでホコリかぶってるよりはこっちで部屋の行き来を楽にする役に立つ方が道具としても幸せでしょ」

あらかじめ考えておいた言い訳を口にする。しかしこれ、いまさらとはいえやってることは泥棒だよ。すると、不意にまじめな顔になったユーノがポツリと一言言った。

『…………明日香が来たたらなんて言い訳すんだ？さすがにドアの形ぐらい見りや一発でわかるだろ。あれだけ言われて懲りずに入ったどころか備品まで持ち出してきてからに』  
「あ」

一瞬だけ時間が止まった。今の話はなかったことにした。別に思考放棄とかそういうんじゃない。断じて違うよ！と、そこで部屋のドア…………あ、玄関のある方ね。つまり最初からついてたやつ。それがノックされた。はて、どちらさんだろうか。十代とかなら壁のドア使って入ってくればいいはずだし、わざわざ外からお客さんなんて来るような場所でもないし。どーでもいいけどレッド寮って校舎からも遠いんだよね。だからこそ大徳寺先生以外に監視の目はまずない

から大規模な土木工事もできるんだけど。

「はいはい、今開けますよつと」

もう一度ノックされたので、とりあえずドアを開けてみる。そこに立っていたのは、いろんな意味で意外すぎる人物だった。

「すいません、サンダー。実は折り入ってご相談が……アレ？」

「えつと、鎧田……だよな？」

そこにいたのはサンダー四天王最後の男、鎧田。何してんのこの人。ノース校の皆、もう帰っちゃったよ？というかサンダー隣の部屋だし。そう言うと言、

「マジか。あー、そりゃ悪かったな。んじゃ」

それだけ言っただアを閉めようとした。

「待て待て待てちよつと待て」

「んー？どした？俺、サンダーに頼みがあつてわざわざここに残つてんだけど……つてちよつと待て！お前、遊野清明とかいう奴だろ！」

「僕？うん、確かにそうだけど」

「ちようどいい、今日の俺にはツキがあるんだな。とりあえずサンダーに会うのは別に後でもいいし、おい、デュエルしろよ！」

へ？……へ？とりあえず後ろで『蟹!』とか言つて跳ね起きた奴のことは無視しよう。てか、今何時だと思つてんのこの人。もう深夜だよ？よい子はもう寝る時間だよ？

『ちなみにお前は？』

「悪い子です」

24時間365日、売られたデュエルはいつでもどこでもデツキがある限り受け付けます。

「よーし、ここら辺でいいかな」

そして今、僕らがいるのは寮からちよつと離れた海辺。暗い海の波の音をバックに向かい合い、デュエルディスクを起動する。なにしろ夜も遅い時間、寮の近くでデュエルしたら近所迷惑なんてレベルじゃ

ないからね。

「なあ、始める前に一つ言っておきたいんだが」

「うん?」

「俺は、1ターン目には本気を出さないからな。もし俺のターンを生きてやり過ぎることができたら、そんな時は本気を出してやる」

「なんだか妙に真剣な顔で、挑発としか思えないセリフをのたまう鎧田。ほほう、言ってくれるじゃないの。ちよーつとカチンときたかな、うん。」

『煮えたぎってきたぜ、つてか?』

「あー、まさにそんな感じ。煮えたぎってきた。ま、その自信がどこから来るのか見せてもらおうじゃん！」

「デュエル!」

先攻は………僕か。ざつと手札を見て、ドローしたカードと比べ合わせる。さっきのセリフが口だけじゃない場合のことも考えて、まずは様子を見るべきだろう。幸い、今の手札ならそれができる。

「僕は、ヒゲアンコウを守備表示で召喚。そして魚族のヒゲアンコウ召喚に合わせて、シャーク・サッカーを特殊召喚!」

「巨大なチョウチンアンコウとそこにくつつくコバンザメのコンビ。シャーク・サッカーもさつきまでデッキの中にいたところをいきなりたたき起こされたせいかちよつと眠そうだ。ごめんね。」

ヒゲアンコウ 守1600

シャーク・サッカー 守1000

「さらにカードを2枚セットして、ターンエンド」

「とりあえず、先攻1ターン目としてはまずまずの布陣だろう。だいたいこのデッキには対抗できるはずだ。」

『ツツコミ待ちだよな? ブラホー一枚で突破できるその布陣でその自信はツツコミ待ちだよな?』

「俺のターン、ドロー! おおい、その程度じゃ俺のワンキル圏内だけ? 手札のBF、暁のシロツコを通常召喚! こいつはレベル5だが、相手の場にモンスターがいて自分の場が空の時リリースなしで通常召喚できるからな」

B F―暁のシロツコ 攻2000

B F……話には聞いたことがある。大量展開が得意な鴉と鴉天狗の集団だとか。だけどなんだろう、この妙な感じは。一回も戦ったことがないテーマなのに、懐かしいような苦々しいような感じになる。

『シロツコか。ヤバいな、とりあえずそれ使っとけ!』

ぼんやりとユーノの声が聞こえた気がしたけど、自分の考えに閉じこもっててよく聞こえなかった。なんだろう、この感覚。間違いない、一回もこのテーマを相手にしたことはない。なのに、なんだか……。

「なにもないならもつと行くぜ?俺の場のモンスターがB F1体だけの時、白夜のグラディウスは特殊召喚できる!そして俺の場にB Fがいることで、黒槍のブラストを手札から特殊召喚だ!」

ブラックフェザー

B F―白夜のグラディウス

効果モンスター

星3 / 闇属性 / 鳥獣族 / 攻 800 / 守 1500

自分フィールド上に表側表示で存在するモンスターが、

「B F―白夜のグラディウス」以外の

「B F」と名のついたモンスター1体の場合、

このカードは手札から特殊召喚できる。

このカードは1ターンに1度だけ、戦闘では破壊されない。  
ブラックフェザー

B F―黒槍のブラスト

効果モンスター

星4 / 闇属性 / 鳥獣族 / 攻 1700 / 守 800

自分フィールド上に「B F―黒槍のブラスト」以外の

「B F」と名のついたモンスターが存在する場合、

このカードは手札から特殊召喚できる。

このカードが守備表示モンスターを攻撃した時、

その守備力を攻撃力が超えていれば、

その数値だけ相手ライフに戦闘ダメージを与える。

最初の鴉天狗の隣に、大きな槍を持った鴉天狗と銀色の鎧を着た鳥

人間が黒い羽根を巻き上げながら姿を見せる。無茶苦茶な展開力だ！

「そして俺の場に3体のBFがそろった時、このトラップは手札から発動できる！デルタ・クロウーアンチ・リバーズ！」

デルタ・クロウーアンチ・リバーズ

通常罠

自分フィールド上に「BF」と名のついたモンスターが存在する場合に発動できる。

相手フィールド上にセットされた魔法・罠カードを全て破壊する。

自分フィールド上の「BF」と名のついたモンスターが3体のみの場合、

このカードは手札から発動できる。

『おい馬鹿聞いてんのか！今更遅いが、やらんよりはるかにマシだ！』

「え？あ、そっか！トラップ発動、フィッシュチャーージ！シャーク・サッカーをリリースして、暁のシロツコ破壊！」

あ、考え込んで気づかなかった！もう一枚は発動できるカードじゃないけど、せめてこっちだけは通させてもらおう。青い弾丸になったシャーク・サッカーが突撃して、シロツコのどてっ腹をぶち抜くという見ようによつてはなかなかエグイ映像を見た後で、ありがたくカードをドローする。

フィッシュチャーージ

通常罠

自分フィールド上の魚族モンスター1体をリリースし、

フィールド上のカード1枚を選択して発動できる。

選択したカードを破壊し、デッキからカードを1枚ドローする。

「ほう、ちよつとは楽しめそうだ！何しろ今のコンボ、ノース校じゃあワンキル率7割越えだったからな」

7割………！すさまじい数字だ。そうか、だからあんなに自信があつたのか。

「だがな、まだ俺のバトルフェイズは始まってすらいらないからな？ブ

ラストでヒゲアンコウに攻撃、デス・スパイラル!」

BF―黒槍のブラスト 攻1700↓ヒゲアンコウ 守1600

(破壊)

清明 LP4000↓3900

「ターンエンドだ」

「このエンドフェイズ、白銀のスナイパーの効果発動!特殊召喚して、白夜のグラディウスを破壊!頼むよ、スナイパーさん」

パン、パン、パンと三発の銃声が響き、グラディウスの鎧が銃弾に貫かれる。それをやったのはモンスターゾーンにいつのまにやら潜んでいた、一人のスナイパー。おお、渋い。

白銀のスナイパー

効果モンスター

星4/地属性/戦士族/攻1500/守1300

このカードは魔法カード扱いとして

手札から魔法&罠カードゾーンにセットできる。

魔法&罠カードゾーンにセットされたこのカードが

相手のカードの効果によって破壊され墓地へ送られたターンのエンドフェイズ時、

このカードを墓地から特殊召喚し、

相手フィールド上のカード1枚を選択して破壊する。

「グラディウス!……面白くなってきやがった、久しぶりに本気が出せるぜ!」

清明 LP3900 手札:3 モンスター:白銀のスナイパー

(守) 魔法、罠:なし

鎧田 LP4000 手札:2 モンスター:BF―黒槍のブラス

ト(攻) 魔法、罠:なし

「僕のターン、ドロー!」

カードを引いた時点で、横のユーノがふと気になったといった感じで声をかけてきた。

『なあ清明、なんかさつきから変だぞ。BFになんか恨みでもあんのか?』

「んー、恨みっていうかね。とりあえず孤高のシルバー・ウィンド苦手」

『ああ、出しづらそうだけどわりと厄介だ……よ……な？』

なぜかフリーズしたユーノのことはとりあえず無視するとして。さあ、どうやってこの場をひっくり返そうか。まあ、そんなに変わったことができるわけじゃないけど。ちなみにさつきブラストじゃなくてグラディウスを狙ったのは、こうすることができたからなのさ。

「スナイパーを攻撃表示に。アトランティスの戦士を通常召喚して、黒槍のブラストに攻撃！スナイパーさんもダイレクトアタック！」

アトランティスの戦士 攻1900↓BF―黒槍のブラスト 攻1700（破壊）

鎧田 LP4000↓3800

白銀のスナイパー 攻1500↓鎧田（直接攻撃）

鎧田 LP3900↓2400

「ターンエンド。さあ、本気とやらを見せてみてよ！」

そう言うと、鎧田はニヤリと笑った。一体、どんな手を見せてくれる？と、そこで固まっていたユーノがようやく動き出した。

『おい、ちよつと待て今言ったこともう一回繰り返してみろ』

「なに？今すんごく忙しいんだから後にして！」

『それどころじゃね……チツ、わかったわかった。んじや俺は寮に戻ってるぞ。どうしても今すぐ確かめたいことがある』

そう言って大急ぎですつ飛んでいくユーノ。一体何なんだろう、確かめたいことって。まあいいさ、今は集中集中。

「俺のターン、ドロ……んじや、約束だ。俺のデッキの本気を魅せてやらあ！フィールド魔法発動！」

フィールド魔法？BFは閻属性、ダークゾーンでも張るつもりなんだろうか。でも僕のそんな予想は、もろくも崩れ去ることになる。

「アンデットワールド!!」

空が黒い不気味な雲に覆われ、すぐ横の海がRPGの毒沼みたいな粘ついた紫色になり、あたりにほんやりと霧が立ち込めて……様変わりしたフィールドのなか、アトランティスの戦士がまるで落ち武者

のようにボロボロの姿になる。

アンデットワールド

フィールド魔法

このカードがフィールド上に存在する限り、

フィールド上及び墓地に存在する全てのモンスターをアンデット族として扱う。

また、このカードがフィールド上に存在する限り

アンデット族以外のモンスターのアドバンス召喚をする事はできない。

アトランティスの戦士 水族↓アンデット族

白銀のスナイパー 戦士族↓アンデット族

「あ、アンデットワールド!？」

「そう、これこそがこのデッキの真骨頂！元から展開を得意とするBFに展開の上手いアンデット族を混ぜ合わせることでさらに動きを速め、なおかつ相手のアドバンス召喚を封じることでもアフターケアも行う最速のデッキ！BFを超えた黒羽、かの有名なUアンデットフェザーFの鎧田とまささに！この！俺のことだあああ！」

「ごめんそれ初耳！」

「あらら、マジか」

残念ながらマジ。……………なんて言ってる場合じゃないよ！

「まあいいさ。BF……………いや、UF―疾風のゲイルを通常召喚だ！

そしてゲイルの効果で、アトランティスの戦士の攻守を半分に！」

アンデットフェザー  
UF―疾風のゲイル

チューナー（効果モンスター）（制限カード）

星3／闇属性／アンデット族／攻1300／守 400

自分フィールド上に「UF―疾風のゲイル」以外の

「UF」と名のついたモンスターが存在する場合、

このカードは手札から特殊召喚できる。

1ターンに1度、相手フィールド上のモンスター1体を選択して発動できる。

選択した相手モンスターの攻撃力・守備力を半分にする。



アトランティスの戦士 攻1900↓950 守1200↓600

「ゲイル、やっちまえ！ブラック・スクラッチ！」

UF―疾風のゲイル 攻1300↓アトランティスの戦士 攻950（破壊）

清明 LP3900↓3550

「さあ、俺の本気は止められないぜ！これでターンエンドだ」

清明 LP3550 手札：3 モンスター：白銀のスナイパー

（攻） 魔法、罨：なし

鎧田 LP2400 手札：0 モンスター：UF―疾風のゲイル

（攻） 魔法、罨：なし

場：アンデットワールド

「僕のターン、ドロー！」

さて、とりあえずゲイルの効果がとんでもないのはよくわかった。まずはあつちから叩かないと、どんなモンスターを出してもすぐ突破されちゃう。あのセットカードは多分ゲイルを守るためのものだろうけど、今の手札じゃどうにもできない以上、せめてさっさと使わせないと！

「僕は、オイスターマイスターを通常召喚！」

オイスターマイスター 攻1600 魚族↓アンデット族

「スナイパーさんでゲイルに攻撃！」

「甘いぜ、そんな攻撃がゲイルに届くかよ！手札のUF、極夜のダマスカスの効果発動！こいつを捨てれば、このターンのエンドフェイズまで自分のUF1体……つまりゲイルの攻撃力は500ポイントアップだ！」

白銀のスナイパー 攻1500（破壊）↓UF―疾風のゲイル 攻1300↓1800

清明 LP3550↓3250

あつちやー、かわされた……。しかも悪いことに、伏せカードは残したままだ。まずい、攻撃力1800をこんなに越えられない壁に感じたのは人生初かもしれない。できれば一生味わいたくない感覚だ

けど。

「最善の策がダメだったなら、次善の策で何とかするしかない、つてね。カードをセットしてターンエンド」

「次行くぜ次！白い羽根のUF、極北のブリザードを召喚！このカードは特殊召喚できない代わりに、召喚した時レベル4以下のUFを守備表示で特殊召喚できるのさ。カモン、黒槍のブラスト！」

UF―極北のブリザード 攻1200

UF―黒槍のブラスト 守800

白い羽根がところどころ抜け落ちて骨が見えている鳥のゾンビが鎧田のデュエルディスクをコンコンと嘴でつつくと、そこから落ち武者のようなボロボロの姿になったブラストが飛び出して来る。しかし、墓地からも特殊召喚してくるなんてこれは予想外すぎる！

「ブラストは痛い……けど、トラップ発動！イタクアの暴風！」

竜巻が鎧田の場に吹き荒れると、さすがの鳥たちも飛ぶことができなくなって地面に着地する。よし、このまま次で体勢を立て直そう。

イタクアの暴風

通常罠

相手フィールド上に表側表示で存在する全てのモンスターの表示形式を変更する。

UF―疾風のゲイル 攻1300↓守400

UF―極北のブリザード 攻1200↓守0

UF―黒槍のブラスト 守800↓攻1700

「ちっ、どのみちこのターンじゃ倒しきれないってのに粘るねえ。ゲイルの効果でオイスターマイスターの攻守半減、そこをブラストで攻撃！」

オイスターマイスター 攻1600↓800 守200↓100

UF―黒槍のブラスト 攻1700↓オイスターマイスター 攻

800 (破壊)

清明 LP3250↓2350

「これでターンエンドだぜ」

清明 LP2350 手札：2 モンスター：なし 魔法、罠：な

し

鎧田 LP2400 手札：0 モンスター：UF―疾風のゲイル  
(守)、UF―黒槍のブラスト(攻)、UF―極北のブリザード(守)  
魔法、罫：なし

場：アンデットワールド

「僕のターン、ドロー！」

とりあえず、状況はかなりマズイ。結構追い込まれてる。ライフだけならさっきの暴風のおかげでそこまで変わらないし手札もこつちの方が多いけど、フィールドに差がありすぎる。せめてアンデットワールドさえなんとかできれば、もう少しやりようもあるんだけど……そう思いながら、今引いたカードに目を通す。お、ラッキー。最高のカードじゃあないけど、この状況ならなかなかいいカードだ。結果論だけど、さっきイタクアの暴風を使つといたのは正解だったね。

「魔法カード発動、スター・ブラスト！1000のライフを支払って、手札のジョーズマンのレベルを4に！そのまま通常召喚！」

スター・ブラスト

通常魔法

500の倍数のライフポイントを払って発動できる。

自分の手札または自分フィールド上に表側表示で存在するモンスター1体を選び、

そのモンスターのレベルをエンドフェイズ時まで、

払ったライフポイント500ポイントにつき1つ下げる。

清明 LP2350↓1350

ジョーズマン 攻2600 獣戦士族↓アンデット族 ☆6↓4

「おっと、これだけじゃ終わんないよ。墓地の水属性2体、ヒゲアンコウとシャーク・サツカーを除外して、手札のタイダルを特殊召喚！」

爆征竜―タイダル

効果モンスター

星7／水属性／ドラゴン族／攻2600／守2000

自分の手札・墓地からこのカード以外のドラゴン族

または水属性のモンスターを合計2体除外して発動できる。

このカードを手札・墓地から特殊召喚する。

特殊召喚したこのカードは相手のエンドフェイズ時に持ち主の手札に戻る。

また、このカードと水属性モンスター1体を手札から墓地へ捨てる事で、

デツキからモンスター1体を墓地へ送る。

このカードが除外された場合、

デツキからドラゴン族・水属性モンスター1体を手札に加える事ができる。

「瀑征竜―タイダル」の効果は1ターンに1度しか使用できない。

爆征竜―タイダル ドラゴン族↓アンデット族

これで2体の上級モンスターを揃えられた、さあ一気に反撃開始！  
「ジョーズマンは自分フィールドの水属性1体につき攻撃力が300上がる……バトル！攻撃力が上がったジョーズマンでブラストを攻撃！」

ジョーズマン 攻2600↓2900↓UF―黒槍のブラスト

攻1700（破壊）

鎧田 LP2400↓1200

「いいぞ！次はタイダル、ゲイルを攻撃だ！」

爆征竜―タイダル 攻2600↓UF―疾風のゲイル 守400  
（破壊）

「どうだ、まだまだ負けないよ！エンドフェイズにジョーズマンのレベルが6に戻って、僕はこれでターンエンド」

「俺のターン、ドロ―。モンスターをセットしてターンエンドだ」

相手のエンドフェイズを迎えたことで、タイダルが光に包まれ手札に帰ってくる。お疲れ様。また働いてもらうけど。なにしろアンデットワールドのせいでアドバンス召喚が全くできないんだから。

ジョーズマン 攻2900↓2600

清明 LP1350 手札：1 モンスター：ジョーズマン（攻）

魔法、罫：なし

鎧田 LP1200 手札：1 モンスター：UF―極北のブリザード（守）、1（セット） 魔法、罨：なし

場：アンデットワールド

「僕のターン、ドロロー……うーん、墓地のオイスターマイスターとアランティスの戦士を除外して、もっかいタイダルを特殊召喚。ジョーズマンでブリザードに攻撃！」

あの手札がまたダマスカスみたいな手札誘発だとしても、ジョーズマンの攻撃力2600を超えてくることはまず無理だろう。第一、向こうのモンスターは全部守備表示なんだから使うメリットもない。ここは、ややこしい事なんて考えずにサクッと攻撃しちやうに限る。

ジョーズマン 攻2600↓2900↓UF―極北のブリザード  
守0（破壊）

「タイダルでセットモンスターに連撃！」

爆征竜―タイダル 攻2600↓??? 守600（破壊）

「メタモルポットのリバーズ効果！お互い手札が5枚になるぜ！」

メタモルポット

効果モンスター（制限カード）

星2／地属性／岩石族／攻 700／守 600

リバーズ：お互いの手札を全て捨てる。

その後、お互いはそれぞれ自分のデッキからカードを5枚ドロースる。

たった今攻撃したのは、よりにもよってメタモルポット。ノーコスト5枚ドロートかもうふざけてんでしょ鎧田さんよう。こっちは一枚とはいえ手札捨てなくちゃいけないってのに。いやいかんいかん、落ち着け僕。まだ僕のターン、できることはある。とりあえず……

「カードをセットして、ターンエンドっ」と

「きしし、反撃してやるぜ？まず永続魔法、黒い旋風を発動。手札のUF―鉄鎖のフェーンを通常召喚だ！」

錆びついてボロボロになった鎖を振り回す鴉天狗の亡霊が、なぜか地面の中から這い出てくる。……そこは空飛ぼうよ。

アンデットフェザー  
UF―鉄鎖のフェーン

効果モンスター

星2 / 闇属性 / アンデット族 / 攻 500 / 守 800

このカードは相手プレイヤーに直接攻撃する事ができる。

このカードが直接攻撃によって相手ライフに戦闘ダメージを与えた時、

相手フィールド上に攻撃表示で存在するモンスター1体を守備表示にする。

「そしてこの時、黒い旋風の効果も発動だ！俺が攻撃力500のUFを召喚したから、攻撃力0の熱風のギブりをサーチしておくぜ」

黒い旋風

永続魔法（制限カード）

自分フィールド上に「UF」と名のついたモンスターが召喚された時、

そのモンスターの攻撃力より低い攻撃力を持つ

「UF」と名のついたモンスター1体をデッキから手札に加える事ができる。

「フェーンの効果で直接攻撃、そのままジョーズマンを守備表示に変更だ！」

UF — 鉄鎖のフェーン 攻500 ↓ 清明（直接攻撃）

清明 LP1350 ↓ 850

ジョーズマン 攻2900 ↓ 守1600

フェーンの投げつけた長い鎖がジョーズマンとタイダルの間を縫うようにして僕に直接当たり、それを引っ張り上げる際にジョーズマンの足元をすくう。あ、ジョーズマンがこけた。でも、相手ターンでの表示変更なんて別に怖くない。次のターンにはまた表示形式は変更できるんだ！

「メイン2にカードを3枚セット、さらに魔法カードの浅すぎた墓穴を発動。モンスターをお互いセット状態で蘇生させて、ターンエンドだぜ！さっさと帰れ、征竜野郎！」

タイダルがまた光に包まれ、手札に戻ってくる。もう僕の墓地の水属性はいないし手札の水属性を使ってあとあとやれることの幅が狭

まるのも怖いから、当分タイダルの出番はなさそうだ。本音を言えばもうちよつと戦ってほしいところだけど。ちなみに僕のセットモンスターは内緒。メタモルポットで墓地に行つた手札のモンスターだよ。

清明 LP850 手札：5 モンスター：ジョーズマン（攻）1  
（セット） 魔法、罫：1（伏せ）

鎧田 LP1200 手札：2 モンスター：UF―鉄鎖のフェー  
ン（攻）、1（セット） 魔法、罫：黒い旋風、3（伏せ）

場：アンデットワールド

「僕のターンドロ―……手札の」

「おっと、待ちな。リバース発動、リビングデッドの呼び声！墓地の暁のシロッコを特殊召喚するぜ」

UF―暁のシロッコ 攻2000

「ここでシロッコ？そんなこととしても、ジョーズマンの攻撃力には勝てないよ？」

「慌てんなって。シロッコの特殊召喚に合わせて、この伏せカードも発動！ブラック・リターン！」

シロッコがぼろぼろの両腕を振り、羽をまき散らしながらジョーズマンに風を吹き付けると、なんとジョーズマンの巨体が吹き飛んでいってしまった。ジョ、ジョーズマン!?!

ブラック・リターン

通常罫

「UF」と名のついたモンスター1体が特殊召喚に成功した時、相手フィールド上に表側表示で存在するモンスター1体を選択して発動する。

選択した相手モンスターの攻撃力分だけ自分のライフを回復し、そのモンスターを持ち主の手札に戻す。

鎧田 LP1200↓3800

「さ、続けてくれ」

「ぐぐぐ……ハンマー・シャークを召喚して効果発動、レベル3のドリル・バーニカルを特殊召喚！」

ハンマー・シャーク

効果モンスター

星4／水属性／魚族／攻1700／守1500

1ターンに1度、自分のメインフェイズ時に発動できる。

このカードのレベルを1つ下げ、

手札から水属性・レベル3以下のモンスター1体を特殊召喚する。

ハンマー・シャーク 魚族↓アンデット族 ☆4↓3

ドリル・バーニカル 水族↓アンデット族 攻300

毎度おなじみトンカチ型の鯨が、これまたおなじみのでかいフジツボを呼び寄せる。もつとも、僕の狙いはそこじゃない。今回やりたかったことは、このカードの発動！

「バーニカルの召喚成功で、このトラップを発動！デイメンション・スライドの効果で、暁のシロツコ除外！」

僕が発動したカード、デイメンション・スライドとは、自分がモンスターを特殊召喚した時に相手の表側モンスター1体をノーコストで除外することができる万能除去カード。本当は今使うつもりはなかったんだけど、ジョーズマンがバウンスされるなんて予想外の事態があった後じゃあシロツコ突破のためにはやむを得ないだろう。いわゆる必要経費ってやつだ。

「甘いぜ、甘々だぜ！そんなカード、俺が通すもんかよ！カウンタートラップ、ツタン仮面！」

ツタン仮面

カウンター罠

フィールド上に表側表示で存在するアンデット族モンスター1体を対象にする

魔法・罠カードの発動を無効にし破壊する。

「こ、これも止めちゃうの!?ならバトルフェイズ！ハンマー・シャークでフェーンに攻撃！」

ハンマー・シャーク 攻1700↓UF―鉄鎖のフェーン 攻50

0 (破壊)

鎧田 LP3800↓2600



「ドリル・バーニカルは自分の効果で、相手に直接攻撃できる！ドリル・ハリケーン！」

「その攻撃宣言時、手札の熱風のギブリを特殊召喚！」

発射されたドリルの間を縫うようにして、素早い動きで黒と赤の羽をした鳥が羽ばたき羽を広げる。……もつとも、そんなことしたつて直接攻撃はするんだけどね。

アンデットフェザー

U F — 熱風のギブリ

効果モンスター

星3 / 闇属性 / アンデット族 / 攻 0 / 守 1600

相手が直接攻撃を宣言した時、このカードを手札から特殊召喚する事ができる。

1ターンに1度、このカードの元々の攻撃力・守備力をエンドフェイズ時まで入れ替える事ができる。

ドリル・バーニカル 攻300 ↓ 鎧田 (直接攻撃)

鎧田 LP2600 ↓ 2300

「バーニカルは直接攻撃に成功するたびに攻撃力が1000アップするよ。とはいえ、次のダメージが怖い……カードを2枚セットしてターンエンド」

あれ、なんか忘れてるような気がする。なんだっ……たっ……け………あー！

「せ、セットモンスター表側にするの忘れてた……」

これはヤバい。大チョンボとかピンチとかいうレベルじゃないくらい馬鹿だ。大馬鹿だ。ドアホウだ。え、ちよつと待って？え、ホントになんで僕こんなことしちゃったんだろ。うわー、やらかした。デイメンジョン・スライドからのラッシュで勝つ気満々だったから、カウンターされるなんて予想外すぎたから………こんなことやってるからオシリスレッドなんだろうな、僕。

「ドロー、メイン1にセットモンスターを反転召喚メタモルポット！リバース効果によって、もう一回手札を補充するぜ。ギブリのもう一つの効果発動！そしてシロッコの効果で、このターンシロッコ以外の攻撃を封じる代わりに場のUFすべての力を結集！シロッコでドリ

ル・バーニカルに攻撃、ダークウイングスラッシュ！」

UF―熱風のギブリ 守1600↓0 攻0↓1600

UF―暁のシロッコ 攻2000↓3600↓ドリル・バーニカル  
攻1300

「そんなの受けたらライフ一撃でなくなるじゃん！リバースカード発動、ポセイドン・ウエーブ！」

大波がシロッコの突撃を防いでくれた。けど、今は全員アンデットだからダメージが入らないんだよねえ。

「それでも、このターンはなんとか首の皮1枚で繋がった、かあ……」  
「だがな、次で仕留めてやるぜ？メイン2に魔法カード、ブラックフェザー・シユートを発動。手札のUF、尖鋭のボーラを捨ててお前が墓穴で蘇生したモンスターを墓地送りに。カードを3枚セットしてターンエンドだ」

ブラックフェザー・シユート

通常魔法

手札から「UF」と名のついたモンスター1体を墓地へ送り、  
相手フィールド上に守備表示で存在するモンスター1体を選択して発動する。

選択したモンスターを墓地へ送る。

UF―熱風のギブリ 守0↓1600 攻1600↓0

UF―暁のシロッコ 攻3600↓2000

清明 LP350 手札：5 モンスター：ハンマー・シャーク

(攻)、ドリル・バーニカル(攻) 魔法、罨：1(伏せ)

鎧田 LP2300 手札：1 モンスター：UF―暁のシロッコ

(攻)、UF―熱風のギブリ(守)、メタモルポット(攻) 魔法、罨：  
黒い旋風、2(伏せ)

場：アンデットワールド

「僕のターン、ドロー！」

はつきり言って、状況はかなり厳しくなってきた。とりあえずタイダルはまた出せるようになったけど、このままじゃジリ貧……：すぐに打つ手がなくなっちゃう。そんな中、思いを込めてドローしたカー

ドは、と。

「……………あれ、コレ詰んだ？」

手札はいっぱいあるのに、なんも思いつかない。モンスターはいることはいるけど、鎧田がまた1ターン目みたいな展開してきたらひとたまりもないだろう。絶望のまま、ヤケになってエンド宣言をしようとする瞬間。

『よ。ヒーローは遅れてやってくる、ってな。しかしあれだな、とつくの昔にやられてるかと思っただら昔一回は天下とつたテーマ相手によく粘ってんじゃねーか』

どうしようもなく口が悪い、とびっきりの相方が相変わらずのマイペースっぷりで帰ってきた。

「ユーノ、どこ行つてたのさ！」

『調べもんだつてーの。もつとも、まるで成果なしだったけどな。その話は後ですとして、どれ、ちよつと手札と墓地と伏せ見せてみる。……………ふーん、おめでとさん。今はお前のターンなんだろう？ちよいと運任せだが、勝利への方程式はもう5割がた揃つてんぜ』  
ユーノの言う『調べ物』が一体何なのかも気になったけど、それよりもセリフの後半が衝撃的だった。勝て……………る？僕が？ここから？

「ほ、ほんと!？」

『おう、つーか狙つてたわけじゃないのね。……………さ、勝つぞ』  
「うん！」

本当、頼りになる相方なんだよなあ。そばにいるだけで、ぐつと心強くなる。それじゃあ、いっちょ勝ちに行こうか！

『手札から魔法カード、死者転生を発動！手札のモンスターカード、グリズリーマザーを捨てることで墓地のモンスターカード1枚、タイダルを手札に。そしてタイダルもう一つの効果により、このカードと水属性のシャーク・サツカーを捨てることでデッキのモンスター1体を墓地に送る！この効果でデッキのシーラカンスを墓地に……………ここで死者蘇生、たった今墓地に行ったシーラカンスを特殊召喚！』

万能蘇生魔法、死者蘇生の効果によって魚の王が地中からさながら鯉の滝登りのように飛び出してくる。いっぺん見てみたいよね、鯉の

滝登り。本当に竜になったりするんだろうか。今度それモチーフのモンスターとか出ないかなー。

超古深海王シーラカンス 攻2800

「へっ、大型モンスターを出したのは褒めてやるぜ。だけどな、それだつて俺にはまだ勝算があるんだよー!」

鎧田よ、そーゆーのをフラグって言うんだよ?もう遅いけど。だつて今の状況ならドリル・バーニカルのダイレクトアタックで1300ダメージ、さらにシーラカンスでメタモルポットを破壊して2100ダメージで計3400ダメージ、これなら僕の勝ちだ!

『勝算、ねえ。読めたぞ、まずはシーラカンスから攻撃だ!』

「バーニカ……え、わかった!シーラカンスでメタモルポットに攻撃、マリン・ポロロッカ!」

超古深海王シーラカンス 攻3000↓メタモルポット 攻700 (破壊)

鎧田 LP2300↓200

「もういいんだよね?バーニカルで連撃、ドリルアタック!」

ドリル・バーニカル 攻1300↓鎧田 (直接攻撃)

「まだだ、こいつが俺の勝算!トラップ発動、バックフラッシュ!このカードで返り討ちだぜ!」

発射したドリルが命中すると思われた瞬間にいきなり鋭い閃光が弾けて、大量の黒い羽根が僕のモンスターたちに突き刺さって爆発する。ぜ、全滅!?

アンデットフェザー

U F | バックフラッシュ

通常罠

自分の墓地に「UF」と名のついたモンスターが5体以上存在する場合、

相手モンスターの直接攻撃宣言時に発動する事ができる。  
相手フィールド上に存在するモンスターを全て破壊する。

『やっぱり張ってやがったな、トラップを……すまん、お前ら。だが、これで終わりじゃねえんだよ。清明、わかっているとは思うがあのモンスターだぞ』

「うん！リバーズ発動、リビングデットの呼び声！僕が蘇生させるのは、墓地の青氷の白夜龍！」

青白い氷の竜、僕のデッキで最大攻撃力を誇るモンスター。さつき墓穴で蘇生させたのもこのカードだったんだけど……いや、もうあの事件は忘れよう。忘れようたら忘れよう。ユーノにばれたらどんだけ馬鹿にされることかわかったもんじゃない。

青氷の白夜龍 攻3000 ドラゴン族↓アンデット族

「白夜龍でシロッコを攻撃、孤高の冬色氷輪弾!!」  
ウインターストリウム

「もう一枚のトラップ発動、フェイク・フェザー！手札からUF―激震のアプロオロス捨てて、お前の墓地のポセイドン・ウエーブの効果をもらってくぜ！」

フェイク・フェザー

通常罠

手札から「UF」と名のついたモンスター1体を墓地へ送り、相手の墓地の通常罠カード1枚を選択して発動できる。

このカードの効果は、選択した通常罠カードの効果と同じになる。無数の黒い羽根が風もないのにくるくると回り、浮かび上がった大津波の幻影が白夜龍の吐き出すブレスを抑え込もうとする。……でも！

「確かにこの攻撃が止められたら、僕の負けは確定するよ。でも、僕だって考えなしに白夜龍を出したわけじゃないんだ！白夜龍の効果は、そんな偽物の波なんて突き破る！」

ブルーアイス・ホワイトナイツ・ドラゴン  
青氷の白夜龍

効果モンスター

星8／水属性／ドラゴン族／攻3000／守2500

このカードを対象にする魔法・罠カードの発動を無効にし破壊する。

自分フィールド上に表側表示で存在するモンスターが攻撃対象に選択された時、

自分フィールド上に存在する魔法または罠カード1枚を墓地に送る事で、

このカードに攻撃対象を変更する事ができる。

青氷の白夜龍 攻3000↓BF―暁のシロツコ 攻2000(破壊)

鎧田 LP200↓0

「ちえー、負けちゃったかー。ま、楽しかったぜ」

「僕もね」

そう言つてよつこらせと起き上がり、右手を差し出す鎧田。僕は、無言でその手を握り返した。二人で寮の方へ戻りながら、ずっと気になつてたことを聞いてみる。

「ところでさ、こんな言い方もなんだけど、なんでこっちの学校にいるの?」

「んー、それか。サンダーの部屋まで案内してくれよ。そしたらそこでまとめて話すからさ」

「はいはい。おーい、万丈目」

もう寝ててもおかしくない時間なので、割と強めにノックしながら名前を呼ぶ。意外にもまだ起きてたらしく、反応はすぐにあった。

「ええい、うるさいぞ! だいたい俺は万丈目サンダー……鎧田? お前、こんなところでいつまでも何やつてるんだ」

「あ、すみませんサンダー、実は……」

「まあいい、とりあえず上がれ。あいにく茶の用意はないがな」

『お構いなく』

「誰がお前に出すといった!」

「それで? 一体何があった」

「はい、実は……」

「実は?」

わざわざこんな時間まで学校に残ってたんだ、きつと大事な用なんだろう。

「出発前にちよつともよおしてきて、トイレ行ったら船が帰っちゃって……」

あ、そうですか。うん、まあそんなことだろうとは思ったよ！

『さっきと言ってること違うぞ』

「るっさい！」

「……まあ、お前の事情は分かった。明日校長に言つて船を出してもらうから、今日はもう泊まってけ」

「ホントですか！ありがとうございます、サンダー！」

「そのかわり、帰ったらノース校の連中をまとめ上げるんだぞ。来年の友好デュエルでつまらん連中でも連れてきたら、この万丈目サンダーが許さんからな！」

「はい！」

さてと、用も終わったし僕も帰つて寝よう。壁のドアを開けて部屋に戻ろうとすると、鎧田に呼び止められた。

「あ、待ってくれよ」

「どつたの？まだなんかあった？」

まだ何か聞きたいこともあるのかと振り返る。すると違う違うと首を横に振つて差し出したのは、1枚のカード。受け取つて表にしてみると、そこにはBF―疾風のゲイルの文字が。

「今日はありがとな。これ、よかったら受け取つてくれよ」

「え、でもこれって……」

「気にすんなつて！どうせ制限カードだから1枚余ってるんだよ、俺が使わないのに持つてるよりもお前に使つてもらおう方がゲイルだつて幸せだろ？」

ど、どうしよう。正直なところを言うと、このカードは欲しい。フィールド魔法の補助がないと若干素の打点が低めな僕のデッキでは、あの攻守半減効果はかなり使えるだろう。でも、本当にもらっちゃつていいのかな？ちらりと隣を見ると、うなづくユーノの姿。視線を前に戻すと、満面の笑みを浮かべる鎧田。……誰も反対しないみたいだし、じゃあ、もらつとこうかな。

「ありがとう、鎧田！」

「おいおい、さっきも言ったろ？気にすんなって」

こうして、僕にとつてのノース校友好デュエルは終わりとなった。次の日鎧田は帰っていったけど、なんでもノース校校長になんで万丈目君のアームド・ドラゴンを返してもらってこなかったんだ！って怒られたらしい。自分で忘れてきといて、そりやいくらなんでもあんなりじゃなかろうか。万丈目も万丈目だけどき。

そう言えばあの後、ユーノに気になったことってのは何か聞いてみた。そしたらちよつとデツキ見せてみろつて言うから素直に渡したらカードを1枚ずつじっくりと見た後でポツリと『やつぱり、ない……な』つていつもとは違いやたらとシリアスな顔で言ったのが心に引っ掛かった。まったく、一体何を隠してるんだろう。一人で悩んでたつて何も解決しないつてのに。



## 七つの鍵と守護者たち編

### ターン22 真紅の瞳と闇色竜

僕がゲイルをもらったあの日から、またしばらくたった。変わったことと言えば、墓守たちの世界まで行ってきたことだろうか。いやー、あの時はビックリした。でも、そんな非日常な世界も終わってみれば思い出話の中の一つになるんだよね。そういえばあの時十代が受け取ったペンダント、その半分は一体誰が持つてるんだろう。そんなことをつらつらと考えながらの授業中。明らかに授業態度悪いけど大丈夫、隣で爆睡してる十代よりは起きてるぶんだけマシだと思う。お、チャイムだ。よし、今日も昼飯だー！

「ああ、遊城十代君。それから遊野君に、万丈目君。三沢君に明日香さん、河風さんも。ちよつとお昼は後にして、私と一緒に校長室まで来てください。もしいるんでしたらユーノ君も、別についてきてもらって構いませんよ」

ちなみに大徳寺先生がユーノのことを知ってるのは、墓守の世界で実体化したところを見られたから。これまで半信半疑だった隼人や翔も、これでユーノがいることにはつきり気づいてくれた。というかユーノ、やっぱり扱いとしては精霊体なんだね。

「ちなみにさ、何の話か分かる？」

『こりゃあれだな、レッド寮魔改造のことがばれててド叱られるパターンだな』

「…………マジ？」

何気なく話を振ってみたら、即答された。あっちゃー、短い青春だったなあ。いつかばれるかとは思ってたけど。

『嘘に決まってるだろバカヤロウ。なんでそれに三沢だの明日香だのまで呼ばれなきゃいけないんだよ。ほれ、さっさと行こーぜ』

な、なんだ嘘か…………よかったよかった。それから道中さりげなく聞いてみたけど、どうも大徳寺先生も用件は知らないらしい。うーん、一体何の話なんだろう。

「三幻魔のカード？」

「そうです、この島に封印されている、古より伝わる3枚のカード……」

いきなり呼び出されて始まったのは、校長によるまるでお伽噺のような昔話。ついこの間、入学する前にはこんな話聞かされても多分信じてなかったらうけど……今は幽霊とかシャーク・サツカーだのがすぐ近くにいますから、この話も本当なんだろうなあ、つてのはすんわり受け入れられた。しかしそんな、解放したら世界が魔に包まれるような危険なカードを封印した島に平気な顔して学園を建てちゃうなんて、これが世界に羽ばたく海馬コーポレーションクオリティーなんだろうか。

「そのカードの封印を解こうと、挑戦してきた者達が現れたのです……」

七星門だかセブンスターズだか知らないけど、随分大それた真似をする人たちもいたもんだ。名前から察するに、全員デツキには七星の宝刀が3積みしてあるんだろう。というかコーユーのつて大体あれだよ、一回は解放に成功してパワーアップするけどすぐ自分が取り込まれてえらい事になっちゃうパターンだよ。

「……そして、これが七星門を守る7つの鍵です。そこで、あなたたちにはこの鍵を守って頂きたい」

そう言っただけで校長がそつと取り出した小箱の中には、なるほど確かに7つの鍵、というかパズルのようになってる金属片。

「守ると言っても、一体どうやって」

万丈目の疑問は、すぐくもつともだと思ふ。いくらなんでもこっちは高校生、そんなアブナイ人たちを相手にできる方法なんて……

「もちろん、デュエルによつてです。だからこそ、学園内でも屈指のデュエリストであるあなた方に集まってもらつたのです」

それくらいしかないよね、やつぱり。でも、なんなんだろうその『鍵を奪うにはデュエルで勝たねばならない』とかいう謎ルール。まあで

も封印されてるのもカードなんだし、ある意味筋は通ってるのかな。しかし、僕が学園屈指のデュエリスト、か。うーん、ここまで正面から褒められると照れくさいね。

『いや、そのりくつはおかしい。……とも言い切れねーんだよなー、遊戯王だし。セブンスターズなんてまだマシな方だ』

それにしても、なにかマズイことやったのがばれたのかと思ったら全くの予想外な話だ。……ま、僕だってデュエリストの端くれ、目の前に出てきたデュエルのチャンスは掴むだけさー！ということに鍵に手を伸ばしたけど、同時に十代も手を伸ばしたために鍵を手にするのはほぼ同時だった。

「おもしろえ、やってやるぜ！」

「その話乗った！じゃあ、僕このピースね！」

そしてその後もカイザーは静かに笑いながら、三沢は真剣な顔で領きながらそれぞれ鍵を手にし、明日香と万丈目、夢想もすぐに手を伸ばした。……あれ、大徳寺先生とクロノス先生の分は？

『七星門、だからな。当然7つしかないだろうな』

「教諭のお二人には、この7人の生徒たちのサポート役に回って頂きたい。何しろ敵の力は未知数ですからな」

「わかりましたニャ」

「校長、このクロノス・デ・メイイチに任せてください。私がいる限り、学園の平和は守られますノーネ！」

「いいですか、みなさん。戦いはもう始まっています、常にデュエルの準備をしておいてください」

最後に校長先生から締め言葉があり、ちょうどチャイムが鳴ったこともありその場はそれで解散となった。あ、お昼まだ食べてないのに。

その日の夜。十代が翔や隼人に自慢話してるのを壁越しに聞きながら、僕はちよつと外に行く準備をしていた。

『ん、どっか行くのか？』

「いやー、ちよつとね。なんとなく眠れなくて」

早くデュエルがしたいような、やつぱりちよつと怖いような、でもワクワクするのが抑えられない。そんなこんなで眼が冴えてしょうがないので、軽く散歩にでも行こうと思ったのだ。

『いや、それは今が9時半だからだと思うぞ』

「いーの。どうせデツキもチエツクしたし、特にすることないもんじゃ、行つてきまーす」

『原作通りなら今日いきなり、か……よし、俺もついてくぞ』

一応デュエルディスクだけは手に付けていつでも動かせるようにして、靴を履いて外に出る。と、こつちに向かって歩いてくる人影を見つけた。

「誰!?!……つてなんだ、明日香じゃん。おーい!」

「あら、どうしたの? なんとなく不安になったから様子を見にきたんだけど」

「いや、ただの散歩。どうも落ち着かなくてさ」

「あまり一人で出歩くのはお勧めしないわよ。そういえば、この間の彼は今もいるの?」

この間の彼? ああ、ユーノのことか。

そこまで言ったところで、たった今出てきたばかりの部屋から眩しい……レッド寮の電力事情じゃとてもじゃないけど出せないぐらい眩しい光が放たれた。あれだけ光が出るライトなんて買おうものなら、一瞬も持たずにブレーカーが落ちるだろう。

「え、何!?!」

『始まったか!』

ここにるのが僕一人だったらどうしたかはわからないけどまだ中には十代達がいるんだ、早く助けに行かないと!」

「じゆうだーい! 翔ー! 隼人ー、万丈目ー!」

みんなの名前を呼びながら部屋に駆け込むと、なんと光っているのは部屋の壁に机に天井に……つまり、部屋全体が光を放っていた。驚いて動きを止めている間に、光はどんどん強くなっていく。そしてあまりの眩しさに目を開けていられなくなり、思わず目を閉じると

……。

「(ハハ)ど(ハハ)？」

『地球ん中』

あ、はい。ありがとうございます。別にそういうことを聞きたいんじゃないただただ。まあ前向きに考えると、また異世界に来たわけじゃないってことがわかっただけよしとしよう。

「んで、(ハハ)ど(ハハ)？」

『見ての通りの火山だな。先に言つとくと、この島ど真ん中に火山あるだろ。あの火口ん中』

なるほど、火山か。そう思つて辺りを見回すと、確かにちよつと暑い。十代と明日香が後ろで倒れて……あ、起き上がった。よかつたよかつた。それと、マグマが下の方でボコボコいつてるのも聞こえてくる。そのすぐ近くに翔と隼人もいるね。

「つてちよつと待つて!?何やってんのあの二人!？」

「それについては私が答えよう、遊野清明」

「誰だ！」

いつの間にか後ろに立っていた、全身黒服に身を包んで黒いマスクをかぶった怪人がこちらに向けて歩いてきた。

「私はセブンススターズの一人、ダークネス。七星門の鍵を持っているということは、細かい説明は不要だろう。さあ、互いの魂を賭けた闇のゲームを始めよう！」

「……………なんかもう予想はついてきたけど、あえて聞かせてもらうよ。あの二人、翔と隼人までなんで巻き込んでるの？鍵を持つてる僕に十代、明日香が連れてこられたのはまだ分かんないでもないけど、あの二人はなんも関係ないでしょ」

はたして仮面男改めダークネスの答えは、最悪の予想通りのものだった。

「あの二人は、お前に本気を出してもらうためにあの位置に置いた。今はあの壁によりシャットアウトされているが、時間と共に壁は崩れていき最終的にマグマの中に落ちるだろう。そうしたくないならば、私にデュエルで勝つことだな」

「時間制限つき!?!上等、何が何でも勝ってやるさ!」

「では、ゆくぞ!」

「デュエル!!」

「先攻は私だ。私は、手札の軍隊竜を守備表示で召喚。さらに魔法カード、一時休戦を発動。カードをセットしてターンエンドだ」

「ダークネスの場に、ちよつとした鎧を着こんだ身軽そうな竜人が盾を構えた。」

アーミー・ドラゴン  
軍隊竜 守800

一時休戦

通常魔法 (制限カード)

お互いに自分のデッキからカードを1枚ドローする。

次の相手ターン終了時まで、お互いが受ける全てのダメージは0になる。

「僕のターン、ドロー!」

さつきからなんだろう、どうもこの場所に来てから自分でも妙に感じるぐらい全身に力が満ち溢れていて、今ならなんだつてできそうな気がする。知らず知らずのうちに、ニヤリと笑みを浮かべていたことにふと気が付いた。一体、僕はどうしちゃったんだろう。まあ、悪い気はしないからどうでもいいさ。

「グリスリーマザー、召喚!軍隊竜を攻撃!」

青い体毛の熊が、その鋭い両手の爪で容赦なく竜人をひつかいていく。一撃目で盾がバラバラに壊れ、二撃目で体を守る鎧が吹っ飛んでいき、そして三撃目ががら空きの胴体に叩き込まれた。

グリスリーマザー 攻1400↓軍隊竜 守800 (破壊)

「軍隊竜の特殊効果。このカードが戦闘破壊された時、デッキから軍隊竜を特殊召喚できる!」

軍隊竜 攻700

「ちつ………メイン2にカードをセット、ターンエンド」

「エンドフェイズにトラップ発動、リビングデッドの呼び声!甦れ軍隊竜!」

「おっと、蘇生カードか」

軍隊竜 攻700

ダークネス LP4000 手札：4 モンスター：軍隊竜×2  
(攻・リ&無) 魔法・罨：リビングデッドの呼び声(軍)

清明 LP4000 手札：5 モンスター：グリズリーマザー  
(攻) 魔法・罨：1

これでダークネスは、自分のターンにレベル7以上のモンスターもアドバンス召喚できるようになったわけだ。はたして、次の一手は最上級モンスターだった。

「ドロロー、私の場の軍隊竜2体をリリースし、真紅眼の黒竜を召喚する！」

いきなり足元のマグマが巨大な竜の姿になって立ち上がり、その炎の中から真つ黒いドラゴンが現れた。

レッドアイズ・ブラックドラゴン  
真紅眼の黒竜

通常モンスター

星7／闇属性／ドラゴン族／攻2400／守2000

真紅の眼を持つ黒竜。怒りの黒き炎はその眼に映る者全てを焼き尽くす。

「レッドアイズ……」

『出たなレッドアイズ。用心してけよ?』

「バトル、真紅眼でグリズリーマザーに攻撃!ダーク・メガ・フレア!」

真紅眼の黒竜 攻2400↓グリズリーマザー 攻1400(破壊)

清明 LP4000↓3000

グリズリーマザーが破壊された瞬間僕の体にも命の<sup>ライフ</sup>3分の1、つまり1000ポイントダメージ分の痛みが走った。たまらず顔をしかめるけど、思ったよりひどいダメージじゃなかったおかげでなんとか倒れたりはしなかった。アドレナリンでも出てきたのか、それとも闇のゲームのダメージもこんなもんなのか。まあなんにせよ、十代だつてこんな痛みを感じながら平気な顔してデュエルしてたんだ、僕がやられるわけにはいかないさ。あれ?今、僕の体の周りに紫色のオーラっぽいモノが立ち上ったような気がしたけど……:気のせいかな、

うん。見直してみたら何も見えなかったし。

「グリズリーマザーも特殊効果発動！ただしこつちが呼ぶのは同名モンスターじゃなくて、攻撃力1500以下の水属性だけだね。来い、ハリマンボウ！」

ハリマンボウ 攻1500

「ふ、お互いリクルーターを失った訳か。マジック・プランターを発動。私の場のリビングゲッドを墓地に送ってカードを2枚ドロ、そしてカードをセットしてターンエンドだ」

「僕のターン、ドロ！ハリマンボウをリリースして氷帝メビウスをアドバンス召喚、その効果フリーズ・バーストで伏せを破壊、さらに今ハリマンボウが墓地に送られたことでその特殊効果！レッドアイズの攻撃力を500下げる！」

これが決まれば、いくらレッドアイズと言えども攻撃力は1900、さらに伏せカードのサポートも受けられなくなるはず。ライフはそんなに削れなくても、ボードアドバンテージはだいぶ稼げる！けど、そんな僕の考えは十分に予想の範囲内だったようだ。

「ならば私は、この伏せを発動しよう。竜魂の城の効果で墓地の軍隊竜を除外してレッドアイズの攻撃力をエンドフェイズまで上げ、その後メビウスの効果が適用され破壊されることで今除外した軍隊竜を特殊召喚する」

#### 竜魂の城

##### 永続罫

1ターンに1度、自分の墓地のドラゴン族モンスター1体をゲームから除外し、

自分フィールド上のモンスター1体を選択して発動できる。

選択したモンスターの攻撃力はエンドフェイズ時まで700ポイントアップする。

また、フィールド上に表側表示で存在するこのカードが墓地へ送られた時、

ゲームから除外されている自分のドラゴン族モンスター1体を選択して特殊召喚できる。



「竜魂の城」は自分フィールド上に1枚しか表側表示で存在できない。

真紅眼の黒竜 攻2400↓3100↓2600

軍隊竜 守800

「決まれない、か………だけどダークネス、ひとつ教えてあげるよ！火山の中じゃあ今のメビウスはレッドアイズに勝てないかもしれないけど、海の中なら話は別さ！フィールド魔法、アトランティス発動！」

伝説の都 アトランティス

フィールド魔法

このカードのカード名は「海」として扱う。

このカードがフィールド上に存在する限り、

フィールド上の水属性モンスターの攻撃力・守備力は200ポイントアップする。

また、お互いの手札・フィールド上の水属性モンスターのレベルは1つ下がる。

氷帝メビウス 攻2400↓2600 守1000↓1200

☆6↓5

「行け、メビウス！今ならお前はレッドアイズとも互角に戦える！」

『っ!?!おい、何を』

「うるさい！メビウスでレッドアイズを攻撃、アイス・ランス！」

氷帝メビウス 攻2600(破壊)↓真紅眼の黒竜 攻2600(破壊)

メビウスの投げつけた氷の槍がレッドアイズの吐き出した炎の球とぶつかり合い、激しい爆発の脇をすり抜けて駆け付けたメビウスがレッドアイズをがっしりと掴んで自分もろとも足元のマグマに飛び込んでいく。……ソリットビジョンの調子が悪いんだろうか、また僕の周りに一瞬だけ紫の炎が見えた気がした。他の皆が気づいてないのは単に気のせいなのか、それともフィールドに注目してたからか。まあ、そんなことはやっぱりどうだっていい。メビウスには悪いことしたけどダークネス、まだまだ僕は全然暴れ足りないんだ。もっと付き合ってもらおうよ！

「カードを一枚セット、ターンエンド！」

『おい清明、一体どうしたってんだ！なんかさつきから変だぞ、ちよつと頭冷やせ！』

「いいじゃないの、るっさいなあ」

『清明……？』

「せつかくこつちは力が溢れてきてんだよ、邪魔しないでくれる？」

ダークネス LP4000 手札：4 モンスター：軍隊竜（守）

魔法・罨：なし

清明 LP3000 手札：5 モンスター：なし 魔法・罨：1

場：伝説の都 アトランティス

「私のターン。魔法カード、思い出のブランコを発動。墓地のレッドアイズを特殊召喚する」

思い出のブランコ

通常魔法

自分の墓地の通常モンスター1体を選択して発動できる。

選択したモンスターを特殊召喚する。

この効果で特殊召喚したモンスターはこのターンのエンドフェイズ時に破壊される。

真紅眼の黒竜 攻2400

「そして攻撃……いや、黒炎弾を発動。私の場のレッドアイズの攻撃を放棄することで、2400のダメージを与える！」

黒炎弾

通常魔法

自分フィールド上の「真紅眼の黒竜」1体を選択して発動する。

選択した「真紅眼の黒竜」の元々の攻撃力分のダメージを相手ライフに与える。

このカードを発動するターン「真紅眼の黒竜」は攻撃できない。

清明 LP3000↓600

「ぐっ……！」

流星にさっきの倍以上のダメージだけのことはあり、結構効いた。でも、やめたいとかつらいとかは全然感じない。本当に、さつきから僕はなにか調子がおかしい。

「そして私の場のレッドアイズをリリースして、カイザー・グライダーをアドバンス召喚する！」

カイザー・グライダー 攻2400

『まだ闇竜の出番じゃねえってか？まあ、今のこっちにとつちやありがたい事ではあるが』

「バトル！カイザー・グライダーで直接攻撃だ！」

「させないよ！トラップ発動、メタル・リフレクト・スライム！」

「ならば攻撃は中止だ！戻って来い、カイザー・グライダー」

金色に光る体を持つ竜の突撃を、銀色に光る巨体のスライムががつしりと両腕で受け止めてダークネスの場に投げ返す。本当はレッドアイズの攻撃をこれで受けてノーダメージで済ますつもりだったが、済んだことについてどうこう言うのは趣味じゃない。

メタル・リフレクト・スライム

永続罫

このカードは発動後モンスターカード（水族・水・星10・攻0／守3000）となり、

自分のモンスターカードゾーンに守備表示で特殊召喚する。

このカードは攻撃する事ができない。（このカードは罫カードとしても扱う）

メタル・リフレクト・スライム 守3000↓3200 攻0↓2

00 ☆10↓9

「カードを1枚セット、ターンエンドだ」

「僕のターン、ドロロー！場のスライムをリリースして、レベル6になった超古深海王シーラカンスをアドバンス召喚する！」

超古深海王シーラカンス

効果モンスター

星7／水属性／魚族／攻2800／守2200

1ターンに1度、手札を1枚捨てて発動できる。

デッキからレベル4以下の魚族モンスターを可能な限り特殊召喚する。

この効果で特殊召喚したモンスターは攻撃宣言できず、効果は無効

化される。

また、フィールド上に表側表示で存在するこのカードが  
カードの効果の対象になった時、

このカード以外の自分フィールド上の魚族モンスター1体をリ  
リースする事で

その効果を無効にし破壊する。

超古深海王シーラカンス 攻2800↓3000 守2200↓

2400 ☆7↓6

「……………いいだろう、続けてくれ」

「シーラカンスの効果！手札を捨てて、魚族を展開！来い、シャクトパ  
ス、竜宮の白タウナギ、ヒゲアンコウ、ハンマー・シャーク！」

『よりによってそのカードがコストかよ。つてかハリマンボウもア  
チャーもナシだど!?おい、今攻撃力だけ見て出す奴考えたろ!?』

ユーノがごちゃごちゃ言ってるけど、知ったこっちゃやない。4体の  
色とりどりの魚が、魚の王様の前に集まってくる。

「トラップ発動、奈落の落とし穴！お前が特殊召喚したモンスターの  
攻撃力はすべて1500以上、よってまとめて除外だ！」

「っ!!」

確かに、そうすることはできる。僕のモンスターの攻撃力はヒゲア  
ンコウの1500にシャクトパスの1600、ハンマー・シャークと  
白タウナギの1700だから、攻撃力1500以上のモンスターの召  
喚、特殊召喚に対応して全除外する奈落の発動トリガーとしては十分  
以上だ。だけど……………！

『確実にくるシーラカンスの攻撃より、デツキの魚をこっさり除外し  
たかったってわけか。くそ、下級モンスターがずいぶん減ったな。事  
故んなきやいいが。おい清明、どう間違ってもグライダーにだけは攻  
撃すんじゃないぞ?』

「なんでさ！軍隊竜なんて攻撃したってダメージは入らないし、3枚  
めに繋がるだけだからなんにも変わらない！グライダーの攻撃力は2  
400、ダメージを通せる！」

『だから駄目だっつってんだよ！カイザー・グライダーは破壊された

時、場のモンスター1体をバウンスする効果があるんだよ。今シーラカンスまでいなくなったら、軍隊竜の攻撃一発でやられちゃうだろうが!」

「そんな、早くしないといけないのに!シーラカンス、軍隊竜に突撃! マリン・ポロロッカ!」

超古深海王シーラカンス 攻3000↓軍隊竜 守800 (破壊)  
「へへっ、ざまーみ……」

「軍隊竜の特殊効果!デツキからもう一体の軍隊竜を特殊召喚する!」

『アホかああああ!!リクルーター相手にわざわざ無駄な攻撃仕掛けてどーするってんだよ!?!デツキ圧縮と墓地肥やしのお手伝いなんてしてんじやねえ!!?ーかたつた今自分で意味ないって言ったじやねえかなんでやるんだよ!?!』

軍隊竜 守800

「や、やっちゃった……?いいやたかだかこの程度、さっさと叩き潰せば問題ないねっ!」

まただ。かあつと頭が熱くなって、異様に力がみなぎってくるあの感覚。それと同時にちらりと見える、紫色の炎。ユーノには位置の関係で見えてなかったみたいだけど、ここまで連続して見ると本当に気のせいなのかどうかも怪しいもんだ。いやまあ、心当たりなんてまるでないんだけど。

『しゃーない、次行くぞ次。説教は後だ。とりあえずそれは伏せとけよ』

「う、うん。カードを1枚セットして、ターンエンド……」

ダークネス LP4000 手札:1 モンスター:軍隊竜(守)、  
カイザー・グライダー(攻) 魔法・罫:1 (伏せ)

清明 LP600 手札:1 モンスター:超古深海王シーラカンス(攻) 魔法・罫:2

場:伝説の都 アトランティス

「ドロー!俺の場のカイザー・グライダーと軍隊竜をリリースして、2体目のレッドアイズをアドバンス召喚!」

真紅眼の黒竜 攻2400

もし今のダークネスの手札がもう1枚黒炎弾だったら、僕にはそれを防ぐ手立てがない。だけどありがたいことに、もう1枚は違うカードだった。

「そろそろ見せてやろう、私の切り札を。場のレッドアイズをリリースすること、このカードは手札から特殊召喚する！現れる、レッドアイズ・ダークネスドラゴン真紅眼の闇竜！」

レッドアイズの体がカードから湧き出る闇に覆われていき、その闇を自分の中に取り込んだレッドアイズが更なる進化をする。羽の一部が赤く光り、前足の形が変わり、顔つきもより鋭くなり、さらに凄みを増した声で一声吠えた。……………前言撤回！よくわかんないけどなんかヤバそう！

真紅眼の闇竜 攻2400

「つてあれ？別に攻撃力変わんないんじゃない？」

ダークネス「闇の力を受け生まれ変わった新たなレッドアイズの特効果！このカードの攻撃力は自分の墓地のドラゴン族1体につき300ポイントアップする！今の俺の墓地には、軍隊竜3体とレッドアイズが2体、そしてカイザー・グライダーが存在する。したがって攻撃力は4200だ！」

真紅眼の闇竜 攻2400↓4200

「シーラカンスを超えた!？」

しかも、僕のライフ600じゃ受けきれない！そうだ、今伏せたカードなら……………だめだ、このままじゃ何の意味もない！だったら？と、そこまで考えた時。またあの感覚がして、自分の中から恐怖感がいつぱんに消え去った。面白い、負けたら魂を取られるだあ？まだそんなの体験したことねえんだ、ぜひやってもらおうじゃないの。幻魔や世界がどうなろうと、そんなの僕の知ったこっちゃない！

「これで終わりだ！レッドアイズの攻撃、ダークネス・ギガ・フレイム！」

「ああ、やってみやがれってんだ!!」

『おい馬鹿!!えーい、こうなったら……………!』

真紅眼の闇竜 攻4200↓超古深海王シーラカンス 攻300

0

「ふん、たわいない。この程度が七星門の守護者とはな……む？」

先ほどとは比べ物にならないほどの爆炎の塊が起こした砂煙のせいでよく周りが見えないながらも、自分の勝ちを確信したダークネスが目にしたものは。

清明↓ユーノ LP600

「選手交代だぜ、この野郎……。『このアホ』はどーだか知らんが、まだ『俺ら』は終わっちゃいねえんだよ」

全く減っていないライフポイントで、燃え盛る海中の街をバツクにしっかりと立っている僕の姿だったろう。だって、また元に戻って気分が落ち着いた僕が最初に見たのも、その後ろ姿だったんだから。

「馬鹿な！お前の場にシーラカンスはいない、なのになぜダメージを受けていない！」

「理由？んなもん簡単だぜ。戦闘なんて最初っからしてねえのに、俺にダメージが通るわけねーだろが」

流石のダークネスも僕の性格が急に変わったことには驚きを隠せないようだけど、それ以上に自分の攻撃が通らなかつたことに驚いてるみたいだ。僕も、今ならわかる。さっきはなんでか暴走しちやつてたから思いつかなかつたけど、最初から攻撃を防ぐ一手は場にあつたんだ。

「まず俺は攻撃を受ける前に、今は墓地に行ったあるトラップ……：儀水鏡の反魂術を発動していた。この効果でシーラカンスはデツキに返しておいたんだよ。ちなみに手札に戻したのはハリマンボウと霧の王、シーラカンスの発動コストにしてたモンスターな」

儀水鏡の反魂術

通常罫

自分フィールド上の水属性モンスター1体を選択してデツキに戻し、

自分の墓地に存在する水属性モンスター2体を選択して手札に加える。

「だが、それならば私のレッドアイズのダイレクトアタックが命中しているはず！ダメージが増えこそすれ、0になる理由にはならない！」

「ああそうさ。だから俺はこっちのトラップ、バブル・ブリンガーも発動した。俺の場にモンスターがいなくなった以上、必然的にお前の攻撃は直接攻撃になる。その点を利用させてもらったぜ」

バブル・ブリンガー

永続罫

このカードがフィールド上に存在する限り、レベル4以上のモンスターは直接攻撃できない。

自分のターンにフィールド上に表側表示で存在するこのカードを墓地へ送る事で、

自分の墓地の水属性・レベル3以下の

同名モンスター2体を選択して特殊召喚する。

この効果で特殊召喚したモンスターの効果は無効化される。

「くっ……だが所詮は悪あがきにすぎん、その防御カード1枚で何ができる！ターンエンドだ！」

「まあ見てなって、ドロロー！手札の爆征竜―タイダルの効果発動、このカードと水属性のハリマンボウを墓地に送りデッキのモンスター1体、ハリマンボウを墓地に落とすぜ。ここでハリマンボウ2体分の特殊効果が発動、対象はどっちもレッドアイズ！」

真紅眼の闇竜 攻4200↓3700↓3200

「私のレッドアイズが！」

「まだ終わんねえよ、バブル・ブリンガー第2の効果発動！このカードを墓地に送って墓地のレベル3水属性で同名モンスター、ハリマンボウ2体を特殊召喚！」

ハリマンボウ×2 攻1500↓1700 守100↓300

☆3↓2

「さらにフィールド魔法の張替えだ、ウォーターワールドを発動！」

ウォーターワールド

フィールド魔法



フィールド上に表側表示で存在する水属性モンスターの攻撃力は500ポイントアップし、

守備力は400ポイントダウンする。

ハリマンボウ×2 攻1700↓2000 守300↓0 ☆2  
↓3

「さらに、ハリマンボウ2体をリリース！頼んだぜマイフェアリツト、霧の王を召喚！そしてハリマンボウがリリースという手段で墓地に送られたから、さらにレッドアイズの攻撃力を1000ポイントダウン！」

霧の王

効果モンスター

星7／水属性／魔法使い族／攻 0／守 0

このカードを召喚する場合、生け贄1体

または生け贄なしで召喚する事ができる。

このカードの攻撃力は、生け贄召喚時に生け贄に捧げたモンスターの元々の攻撃力を合計した数値になる。

このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、いかなる場合による生け贄も行いう事ができなくなる。

霧の王 攻0↓3000↓3500

真紅眼の闇竜 攻3200↓2700↓2200

「霧の王でレッドアイズに攻撃、ミスト・ストラングル！」

霧の王が掲げた大剣が、黒いドラゴンを一刀両断した。やっぱりこの攻撃方法は魔法使いのやることじゃない気がする。

霧の王 攻3500↓真紅眼の闇竜 攻2200（破壊）

ダークネス LP4000↓2700

清明 LP600 手札：0 モンスター：霧の王（攻） 魔法・罫：なし

ダークネス LP2700 手札：0 モンスター：なし 魔法・

罫：なし

「おのれ、私のレッドアイズを！私は何もせずにターンエンドだ」

「俺のターン、ドロロー！……なあ、ダークネス」

てつきり挑発でもするのかと思いきや思いがけないほど真剣な声  
音で、静かにユーノは語りかける。

「お前のデッキの中で一番の切り札は俺が倒した。今のお前は、心の中を切り札を倒された怒りで煮えたぎってるはずだ。お前のたった今引いたカードは確かに考えられる中でも最高の一手だろうさ。だけれどな、ちよつと冷静になってみればそのカードにも弱点があることに気付けるはずだ」

「何だど？」

「教えてやるよ。俺にはそのカードの見当があらかたついてる。なにしろダークネス、あんたはこの大事な場面でいいカードが引けないなんてことはないほど強いデュエリストだからな。逆に考えれば、この状況で引くようなカードなんてほんの数枚しか考えられない。そのカード、バトルフェーダーの弱点はこれだ！俺の墓地の水属性はグリズリーマザーに氷帝メビウス、ハリマンボウ2体にタイダルの5体………氷霊神ムーラングレイス、特殊召喚！」

氷霊神ムーラングレイス

効果モンスター

星8／水属性／海竜族／攻2800／守2200

このカードは通常召喚できない。

自分の墓地の水属性モンスターが5体の場合のみ特殊召喚できる。

このカードが特殊召喚に成功した時、

相手の手札をランダムに2枚選んで捨てる。

「氷霊神ムーラングレイス」のこの効果は1ターンに1度しか使用できない。

このカードがフィールド上から離れた場合、

次の自分のターンのバトルフェイズをスキップする。

「バトルフェーダーは手札誘発だが、相手の攻撃宣言に合わせてしか効果が発動できないモンスター。なら、このメインフェイズで叩き落としてやるよ」

「私の……速攻のかかしが……！」

とりあえずユーノのために、聞かなかったことにしてあげよう。何

も言うなという無言の圧力と共にジト目でこっちの方をにらんできたユーノから慌てて目をそらしながら、そう思った。

「霧の王、そろそろ全部終わらせようぜ！プレイヤーにダイレクトアタック、ミスト・ストラングル！」

霧の王 攻3500↓ダークネス（直接攻撃）

ダークネス LP2700↓0

ユーノが勝った瞬間、叫び声をあげながらダークネスが炎の柱に呑みこまれていく。あっちも気になるけど、まずは翔と隼人を……！と、そちらの方に向かおうとしたユーノがぐんと崩れ落ちるように倒れた。

『ユーノっ!?!』

さらに、その場にいた僕ら全員が炎のわっかの中に閉じ込められてしまう。デュエルには勝ったのに、何でこんなことに！とパニックになりそうになった瞬間光が弾け、ふと気づいたらどうという原理なのか火山の外まで章や隼人も含めたみんなまでワープしていた。よかった、二人とも無事で！

『じゃあ、ユーノに一体何が起きたってのさ!!』

思わず叫ぶと、無茶苦茶に苦しそうな声で倒れた本人からコメントが入った。

「ギャーギャー……耳元で、わめくうるさい……おい清明よ、お前の……体、もろすぎ、んぞ……なんで、この程度で……ぶっ倒れるんだよ……」

！  
しょうがないでしょ、なんでデュエリストに体力が必要になるのさ

『だからお前は、アホだってんだ……デュエリストの……身体能力ってのは……そっちの道でも、食ってけるんじゃねーかって……思うぐらいには、しとくもん、だぞ……』

『それっておかしくないかな?!』

「知る、か……とりあえず、交代……な……」

へ、交代？そう思った瞬間、なにかを言う暇もなくユーノと僕の位置が入れ替わる。いや違う、僕の魂が元の体に戻って、ユーノがいつ

もの精霊体になったんだ。って、全身痛い！デュエル中はアドレナリンとかなんかそーゆーののせいで何にも感じなかったけど、今になるといういろいろ痛いよこの体！あまりの痛みにあっさり意識を手放す寸前、

『あー、痛みが消えた。目え覚ましたらいつペン体力づくりと喧嘩リアルファイトの仕方をみっちり叩き込む時間を作ってやんなきゃな』

そんな恐ろしいことを呟く相方の声が聞こえた。僕、生きてられるんだらうか。

## ターン23 吸血美女と5000年の負の歴史

「痛くて……………」

目が覚めると、知らない天井があった。どうやら、どこかのベッドに寝かされてるらしい。そうだ、ダークネスと闇のデュエルして倒れちゃったんだっけ。きよろきよろと辺りを見回してみると、どこかで見たような気がするイケメンさんが隣のベッドで入院中だった。えーつと、確か…………この顔は…………と、また意識がぼやけてきた。

「アニキ、清明君が！」

「おう、ついに起きたか！」

そんな声が聞こえてきた気がするけど、これ以上はもう体が持たない。全身を支えることができなくなってもう一度ベッドに倒れこみ意識が消える寸前、隣の人が誰か、ようやく思い出した。

「確か、明日香の兄ちゃん…………吹雪さん、とかいったような…………」  
「行方不明の人が何でここに、なんてことを考える余裕は、全くなかった。おやすみなさい。」

「寝過ぎしたあっ!!」

『やかましいわあ!!』

慌てて跳ね起きた瞬間、自分の右手に全力で殴られた。多分、というか間違いなくユーノさんの仕業だろう。いったいなあ。

「とういかユーノさんや、今何時？」

『午後9時34分7秒、いや8、9、10…………』

「もういいや、あんがと。今日のテストどーしよ、こんな成績じゃ退学になっちゃうよ！」

『オーケーわかった、入院中にしちやずいぶん調子よさそうじゃねえか。寝ぼけて跳ね起きるぐらいならまだ余裕あるな』

へ？だって今日はテストの日…………そこまで考えたところで、いろんな人が一斉に近づいてきた。

「ついに起きたのか、清明！」

「もう大丈夫ツスか!？」

「よかった……!」

えーと、これなに?なんだかみんな、すごく喜んでるんだけど。特に十代と夢想の笑顔っぷりがハンパなく眩しいです。僕が寝過ぎしたのがそんなに嬉しいですかそーですか。そんな調子で人間不信に陥りかけた時、どうしようもねえなといった感じのユーノが明らかに馬鹿にした顔で一言つぶやいた。

『ヒント、ダークネス』

「あ、思い出した。えつと……おはよ、皆。心配かけてゴメン。そーいえばさ、なんで吹雪さんがここにいるの?」

「貴方がデュエルしたあのダークネス。彼は、闇の意識に乗っ取られた兄さんだったのよ」

「明日香……」

そうと知ってたら、と言いかけてやめた。そうと知ってたら、僕に何ができたってんだ。あのデュエルはわざと負けてたど?いや、実際僕一人じゃ負けてたけど。僕だってせつかく取り戻した命、もう一度失うなんてまだしたくない。じゃあ、どうあろうと全力で行くしかなかったじゃないか。そんな思い空気を振り払ってくれたのは、悪いニユースと共に飛び込んできた隼人だった。

「大変なんだな!今、クロノス教諭が湖で闇のデュエルを!」

「今すぐ行こう」

大体、クロノス先生は七星門の鍵を持ってない。まさかあの人が負けるとは思わないけど、万が一のことがあったら!頼む、間に合ってくれ!

よろめく体を支えてもらいながらなんとかたどり着いた時には、もうデュエルは終わりかかっていた。あっちの女の人が、今回の闇のデュエリストなんだろう。そして僕が見ている前で、クロノス先生の古代の機械巨人をアンデットサポートの効果で上回った攻撃力3200の大型モンスター、ヴァンパイアジェネシスが姿を見せた。伏せ

カードもないうえに、墓地発動のカードもない今の先生のライフじゃ、あのモンスター三体の攻撃は耐え切れない！でも先生は意外に落ち着いた顔で自分の場と相手の場を見渡し、真剣な顔つきでこちらの方を向いた。

「諸君、よく見ておくのーネ。そして約束するのーネ。例え闇のデュエルに敗れても、闇は光を凌駕できない。そう信じて、決して心を折らぬこと。ワタクシと約束してください」

そう言うと、自らバトルフェイズを催促した。クロノス、先生

………！

「ヴァンパイアジェネシスで古代の機械巨人を攻撃、ヘルビシヤス・ブラッド！」

ヴァンパイアジェネシス 攻3200↓古代の機械巨人 攻3000（破壊）

クロノス LP1700↓1500

「さらに私の場のモンスターたちで攻撃！」

身を守るためのカードを持ち合わせていないクロノス先生が狼男の爪に引き裂かれ、蝙蝠にまわりつかれてさらにダメージを受けていく。闇のデュエルを体感した僕だからわかるけど、闇のデュエルのダメージは質で来るより数で来られる方がキツイ。わかりやすく例を挙げると、僕とダークネスのデュエルの際に受けた黒炎弾のダメージは2400。この数値はグリズリーマザーがレッドアイズに戦闘破壊された時の1000ダメージの2倍以上だけど、実感できる痛み自体にはそこまで差がなかった。つまり、闇のデュエルをするのならいっぺんに4000以上のダメージを与えてワンキルするよりも100ポイントずつ細かくバスターダメージを蓄積させる方がはるかに途中で相手がデュエル続行不可になる確率が高いのだ。そしてクロノス先生は、わずか1ターンの間に三回も戦闘ダメージを受けた。あまりの痛みに気を失っていても何一つおかしくない。でも、クロノス先生は違ったらしい。ライフが0になって倒れる寸前、はつきりはこちらの方を見て一言、言った。

「ボーイ！光のデュエルを……」

クロノス LP1500↓100↓0

そして相手の人、もといヴァンパイア・カムイウラはクロノス先生が鍵を持っていないことに気付くと、そのことについて嘲りながら湖に浮かんだ城と一緒に霧の中に消えていった。僕らはそれを、ただ見つめることしかできなかった。

クロノス先生がカムイウラの手によって人形になった次の日、夢想と僕以外の皆はカムイウラ探しに行っていた。本当は僕も行きたかったんだけど、まだ体が本調子じゃない今行っちゃって途中で力尽きて迷惑になるだけだ。それがわかっているから、おとなしく留守番。夢想は、もし今の僕のところカムイウラが来たら、という心配から自発的に残ってくれている。ユーノとシャーク・サッカーも残りたがってたけど、結局は十代達についていった。鮎川先生も他のクラスの明日の授業の用意があるとやらで隣の部屋にいる。だから僕は今、意識不明の吹雪さんを除けば彼女と二人なわけで。

「えーっと……」

「どうしたの、どこか痛いのか？それともお腹すいた？飲み物持ってこようか？だつてさ」

好意はありがたいです。倒れてる間寝ずに看病してくれてたみたいで、とてもとても感謝してます。だけど、だけど正直に一言だけ言わせてもらえらるならば。

「大丈夫だよ、なんだつて。鮎川先生もこの分ならすぐよくなるつて言ってたし、今は無理しないでね、だつて」

居心地、悪いです。すごく。いつもだつたらちよつとお金に余裕ができてワクワクしながら新しいパックスを買った時並みに手放して喜ぶような状況なんだろうけど、昨日の今日じゃとてもそんなドキドキするような気分にはなれません。ちくしよう、こんなイベント一生に何回あるか分かったもんじゃなかったのに……。これというの間違いないく、全部が全部カムイウラのせいだ！吸血鬼、許すまじ。

そんな下心丸出しの怒りに燃えて決意を新たにし、クロノス先生を



助けて心置きなくこの状況を満喫するためにも夢想にある『お願い』をした。

んで、その5分後。正直もうちよつと説得には手間取るかと思つたのでうれしい誤算だったけど、ともかく。

「清明、本当に動ける？無理してない？だつてさ」

「余裕余裕。どつてことないよ、もう大丈夫」

突然だけど、脱走つて素晴らしい言葉だと思う。ただし、

「ただし、自分でやる場合に限る、とか？」

「さつすが夢想、ご名算」

「まったく……なんだつて」

という訳でただ今、二人で抜け出してカミューラ探してます。さつさとあんな吸血鬼ぶつ飛ばして、一回死んでからついに僕にも来た青春をエンジョイするんだ！後になって考えれば、この時の僕は明らかにおかしかったと思う。体の痛みが不自然なほど消えて、気分も妙に高揚してきてたし。例えるなら、ちょうどダークネス戦と同じようなことになりかけていた。

「出て来い、カミューラアアアア!!!」

「待つてー！そんなに叫んだら体に響くし皆に見つかっちゃうよ、だつてー!!」

そんな会話をしながら、なんとなくクロノス先生が以前デュエルした湖までやって来た。ここにいるんなら手間が省けてよかつたんだけど、さすがにそんなことはな……い……か………つて、

「あつたー!？」

「だから叫ばないで、だつてばー!!」

ついさつきまで何にもなかったはずなのに、今見たら霧の中にぼんやりとかすんで見える城。そして、その方角から水上を突っ切つて伸びているレッドカーペット。まあここまでお膳立てしてもらつたんだ、行かないつてのはさすがにありえないだろう。

「よいしょ、つと」

ひよいつと飛び乗る。あら、思ったより足場しつかりしてるのね。これで、後はここをまっすぐ進んでいけばあのうすぼんやりと見え

る、ここにあるはずのないあの建物にたどり着けるだろう。つーか、これで毘だつたら性格悪すぎんぞ。もしそんなことやられたら、この鍵その場でへし折って再現不可能にしてやる。

「おい、そこで何をしているー危険だからそこには立ち入るな……お前ら、何をしてるんだこんなどころで!？」

ギギギギギ、と音がするぐらいゆっくりぎこちなく振り返ると、そこにはこめかみに青筋立てて静かに怒ってるカイザーの姿があった。  
………ばれた。

「えっと、カイザーさん？まだ怒ってる？」

「………。黙っている」

「ハイ」

結局、今はそれどころではないということでお説教はされなかった。帰れとは一言も言われてないので、許可が下りたと解釈して勝手に後ろをついていく。目つきがとても怖かったけど、やっぱり何も言わなかったのでもちらも余計なことは言わないようにして黙って歩く。と、カイザーが歩みを止めた。慌てて僕らも進むのをやめると、これまでのような通路ではなく大広間のようになった一つの部屋になつていた。そして、その上にいたのは。

「カミューラー！」

「あら、後ろの坊や達まで呼んだ覚えはないのだけれど……まあいいわ、今度の相手は全員鍵を持つてるみたいだし、こっちの彼を倒した後でなら遊んであげてもいいわよ？」

「………清明に手を出さないで、この面食い年増。だつてさ」

ボソツと夢想が呟いたその一言は、どうも地獄耳のデビルイヤーにははつきり聞こえていたらしい。というか夢想さん、なんでいきなり誰よりも早くケンカ売ってんですか。

「なんですつてえ……？」

あ、案の定キレた。やっぱ女性に年の話ってしちゃいけないのね。一瞬だけ二人の間に火花が散った気がしたけど、先に冷静になったの

はカミューラの方だった。

「まあいいわ、今はあなたの番。さあ、私とデュエルをして下さらない？」

「あいにくだが、俺にも好みがあるのでな。だが、今は好き嫌いはい言っ  
てられん。俺が勝つたらクロノス教諭は元に戻してもらおうぞ」

「いいわよ？そのかわり、私が勝てばあなたの魂をこの人形にいた  
くわ」

「デュエル！」

そして始まった二人のデュエル。今日のカイザーは相当頭に来て  
いるらしく、いつものリスペクトデュエルを放棄するような圧倒的な  
パワーで攻め続けていく。そしてカミューラをあと一歩のところま  
で追いつめたところで、そういつたことに関しては素人の僕から見  
てもわかるぐらい闇の力がこもったあるカードを彼女がドロウした。

「魔法カード、幻魔の扉を発動！相手モンスターをすべて破壊し、その  
後お互いの墓地の中からモンスターを1体を召喚条件を無視して特  
殊召喚する！」

「サンダー・ボルト効果に加えて死者蘇生の完全上位交換！？そんな無  
茶な、インチキカードもいい加減にしやがれ！」

思わず突っ込んだけど、効果の説明にはまだ続きがあるらしい。

「ただし、このカードにはそれ相応のリスクがある。このカードを使  
い敗北したプレイヤーは、幻魔に魂を捧げなければならぬ！でも、  
ただ私の魂を使うだけじゃ芸がないと思わない？そこで私は、今日の  
特別ゲストの魂を代わりに賭けさせてもらおうわ」

そう言っパチンと指を鳴らすと、カミューラの分身がなんの脈絡  
もなく彼女の後ろから現れる。吸血鬼すげえ。そのわきに抱えてい  
た、今は気絶してるらしくてぐったりしてるけど見覚えのあるメガネ  
のレッド生はまさか。

「翔！！」

最悪の予感は見事に的中した。僕らのよき友人でありカイザーの  
弟でもある、翔がそこにいたのだ。

「私はこの坊やの魂を生け贄とし、あなたのサイバー・バリア・ドラゴ

ンとサイバー・レーザー・ドラゴンを破壊！そして、サイバー・エンド・ドラゴンを召喚条件を無視して特殊召喚！」

サイバー・エンド・ドラゴン 攻4000

「これで終わりよ、サイバー・エンド・ドラゴンでプレイヤーにダイレクトアタック！」

カイザーの場にはまだ伏せカードがあつたけど、カイザーはそれをちらりと見たのみで結局何もせず3つ首機械竜の光線に呑みこまれた。

亮 LPO

「ぐっ……………」

「さあ、いい子ね。あなたの魂をいただくわよ！」

「待て、カミューラ……………」

ライフも無くなってふらふらになりながら、最後の意地を振り絞ってカミューラを睨みつけるカイザー。その目からは、まだ闘志は消えてなかった。

「あら、どうしたのかしら？」

「その前に、俺の…………俺のサイバー・エンドを、返してもらおうぞ！」

サイバー・エンド・ドラゴンのカードはカミューラが復活させて彼女の場に呼んだカードだから、彼女のデュエルディスクのモンスターゾーンにセットされたままだ。多分、そのことを言ってるんだろう。よほどカイザーを倒したことがうれしいのか、カミューラはその頼みを快諾した。

「ああ、このカードかしら？いいわよ、最後にそれくらいの頼みはお姉さん聞いてあげるわよ」

そう言つて無造作に片手で投げつけたサイバーエンド・ドラゴンのカードが宙を飛んでカイザーの目の前の床に突き刺さる。人のカードをあんな乱暴な投げ方するなんてマナー違反だと思ふけど、まあカードそのものが大根すら真つ二つにできるとか上手く投げれば鉄板に突き刺さるとか言われるぐらい頑丈だから石の床程度じゃ傷がついたりはしないだろう。

「ふ……………すまない、サイバー・エンド！」

そう言い放ってカイザーが最後にとった行動は、僕らの度肝を抜いた。サイバー・エンドを床から引っこ抜き、カミューラにめがけて思いつき投げつけたのだ。完全に油断していたカミューラはそれ、俗に言うカード手裏剣を避けきることができずにその白い手に……：……いや、その手に持っていたあるカードに突き刺さって、そのまま2枚のカードはどこかへ吹っ飛んで消えていった。か、カイザー？

「清明！」

「は、はい！」

こういうのを鬼気迫る表情、というのだろうか。いきなり話の矛先がこっちに向いたので、思わず背筋が伸びる。

「幻魔の扉は俺が消し去った……：……お前の腕ならば、きっとあの女にも勝てるはずだ。後は……頼んだ、ぞ……：……」

そう言ったところでついに限界が来たのか、ゆっくりと倒れていくカイザー。その体が床にぶつかる前に青い炎に呑みこまれ、カミューラの持つていた人形の姿がデフォルメされたカイザーのものになる。クロノス先生の時と同じだ、魂が人形に吸い込まれたんだ。そしてそれを見た瞬間、僕の中で何かが弾けた。

「ちっ、全く最後まで生意気ね！」

カミューラがそんなことを言った気がしたけど、そんなもの耳に入ってこない。とりあえず今考えることはただ一つ。

「おい、カミューラ」

「あき……：……らっ？」

声のトーンから何かを感じ取ったのか、夢想がこっちの方を心配そうに伺ってくる。そのきれいな目が驚愕に見開かれたところを見ると、やっぱり彼女にも見えてるんだろう。今僕の体を静かに包んでる、ダークネス戦の時にも見たあの二つの紫の炎のことが。また心配、かけちゃうな。こんなもん見たらだれだって驚くだろうし。ごめん、と心の中で一声呟いて、さっきまでカイザーが立っていたところまで歩く。あれからこの炎について考えてみたけど、どうもこれが出ると僕は感情のコントロールができなくなるらしい。おかしいぐらいにブチ切れたり、不自然なぐらい相手を憎く思ったり。ちなみに今

はその両方。でも、多分これがなくても本気で怒ってただろう。

「あら、坊や。あなた、並みの人間じゃなさそうね。七星門の鍵も持つてみたいだし、少しくらいなら遊んであげてもいいわよ?」

「幻魔の扉、拾ってくれば? どうせそれがなきや僕には勝てないよ」

普段の僕なら絶対にしないであろう挑発。こーゆーのはむしろユーノが得意とするところなんだけどなあ。でもまあ、今回はキツチリ効果があったらしい。

「言ったわね? 別にかまわないわ、あなたごときは幻魔の扉がなくても勝つてあげるもの」

「はいはいそーですか。…………じゃあ、始めようか」

「デュエル!!」

「先攻は私だわ! 私は速攻魔法、手札断殺を発動するわ。さらにヴァンパイア・レディを通常召喚! カードをセットして、ターンエンドよ」  
青白い肌でドレス姿の女性が、持ち主そっくりの高圧的な態度で睨みつけてくる。別に今は怖いとは思わないけど。

手札断殺

速攻魔法

お互いのプレイヤーは手札を2枚墓地へ送る。

その後、それぞれ自分のデッキからカードを2枚ドロウする。

ヴァンパイア・レディ

効果モンスター

星4 / 闇属性 / アンデット族 / 攻1550 / 守1550

このカードが相手プレイヤーに戦闘ダメージを与える度に、

カードの種類(モンスター、魔法、罫)を宣言する。

相手はデッキからその種類のカード1枚を選択して墓地に送る。

「僕のターン、ドロロー・レミューリアを発動してウミノタウルスを召喚、さらに水族のウミノタウルス召喚成功によりシャーク・サッカーを特殊召喚!」

忘却の都 レミューリア

フィールド魔法

このカードのカード名は「海」として扱う。

このカードがフィールド上に存在する限り、  
フィールド上の水属性モンスターの攻撃力・守備力は200ポイントアップする。

また、1ターンに1度、自分のメインフェイズ時に発動できる。  
このカードがフィールド上に存在する限り、  
自分フィールド上の水属性モンスターの数と同じ数だけ、  
自分フィールド上の水属性モンスターのレベルをエンドフェイズ時まで上げる。

ウミノタウルス 攻1700↓1900 守1000↓1200  
シャーク・サツカー 守1000↓1200 攻200↓400  
「バトル・ウミノタウルス、真つ二つにしてやれ！」

ウミノタウルス 攻1900↓ヴァンパイア・レディ 攻1550  
ウミノタウルスの斧が勢いよく振り下ろされ、激しい音を立てる。  
攻撃力の差は350、まあ少ないけど先制ダメージとしてはこんなも  
んだろう。というかむしろ、少ないダメージでじわじわ痛みを味あわ  
せてやりたい今にとってはそっちの方が都合だ。……………ん？  
「ウミノタウルスが、止められた？だって……………」

夢想の言った通りだ。ウミノタウルスの斧の一撃は、なんとヴァン  
パイア・レディの細い腕一本で受け止められていた。ウミノタウルス  
もかなりの力を込めているのに、押ししても引いてもびくともしない。  
呆然とする僕らの耳に、カミューラの高笑いが聞こえた。

「ホーツホツホ！残念だったわね坊や、私はあなたの攻撃宣言の時に  
トラップカード、ヴァンパイア・シフトを発動していたのよ！」

「ヴァンパイア・シフト？」

「……………発動時にあるフィールド魔法をデッキから発動するカードだ  
よ、なんだって。私もそのフィールド魔法は使ってみようか迷ったけ  
ど、イメージに合わないからやめたんだけど……………」

「一体、そのフィールド魔法って？」

「私が教えてあげるわ。それは私たち、誇り高きヴァンパイア一族の  
帝国……………ヴァンパイア帝国発動！」

ヴァンパイア・シフト

## 通常罾

自分のフィールドカードゾーンにカードが存在せず、自分フィールド上に表側表示で存在するモンスターがアンデット族モンスターのみの場合に発動できる。

デッキから「ヴァンパイア帝国」1枚を選んで発動する。

その後、自分の墓地から「ヴァンパイア」と名のついた

闇属性モンスター1体を選んで表側守備表示で特殊召喚できる。

「ヴァンパイア・シフト」は1ターンに1枚しか発動できない。

ヴァンパイア帝国<sup>エンパイア</sup>

フィールド魔法

フィールド上のアンデット族モンスターの攻撃力は

ダメージ計算時のみ500ポイントアップする。

また、1ターンに1度、相手のデッキからカードが墓地へ送られた時、

自分の手札・デッキから「ヴァンパイア」と名のついた

闇属性モンスター1体を墓地へ送り、

フィールド上のカード1枚を選択して破壊する。

「それじゃあ、レミューリアが……」

「そう、フィールド魔法は1枚しか存在できないのよ。あなたの建物は私の趣味に合わないわ?」

まるで彼女のセリフに合わせるように神殿のようなレミューリアの建物のほとんどが崩れ落ちていき、残ったほんの一部の上に真っ赤な満月がかかった。

ウミノタウルス 攻1900↓1700 (破壊) ↓ヴァンパイア・

レディ 攻1550↓2050

清明 LP4000↓3650

「ぐうっ……!」

「そして私のヴァンパイア・レディが戦闘ダメージを与えたことで、レディと帝国の効果が発動するわ。まずレディの効果であたなのデッキから魔法カード1枚を墓地に送り、さらに帝国の効果でデッキのヴァンパイア・ドラゴンを墓地に送ってシャーク・サッカーを破壊す



るわ」

「……………僕が選択するのは、アクア・ジェット。この魔法カードをデッキから墓地に送るよ」

デッキからアクア・ジェットを選択して墓地に送った瞬間、いきなり赤い月がさらに輝きを増して血のような光を放つ。その光に当てられたシャーク・サツカーが突然苦しみだし、そのまま破壊されてしまった。普段ならここでなすすべもなくターンエンドしたっておかしくない状況だけど、今回は特に負けられない理由がある。その執念が、最初の手札にいいカードを入れてくれたのだ。そして僕は、さっきの手札断札でそのカードを墓地に送っておいた。

「メイン2に入って墓地のフィッシュボーグアーチャーの効果を発動、手札のオイスターマイスターを捨てて、このカードを特殊召喚！カードを1枚セットしてターンエンド」

まあ、まだ受けたダメージも一度だけ。この程度なら、どってことない。だから大丈夫、まだいける。闇のデュエルでの痛みを怖いと思ったら、それを乗り切れなかったら、そんなデュエルで勝つことなんてできない。

フィッシュボーグアーチャー

チューナー（効果モンスター）

星3 / 水属性 / 魚族 / 攻 300 / 守 300

このカードが墓地に存在し、

自分フィールド上にモンスターが存在しない場合、

手札の水属性モンスター1体を捨てて発動できる。

このカードを墓地から特殊召喚する。

さらに、この効果で特殊召喚したターンのバトルフェイズ開始時に水属性以外の自分フィールド上のモンスターを全て破壊する。

「フィッシュボーグアーチャー」の効果は1ターンに1度しか使用できない。

カミューラ LP:4000 手札:3 モンスター:ヴァンパイ

ア・レディ（攻） 魔法・罫:なし

清明 LP:3650 手札:1 モンスター:フィッシュボーグ

―アーチャー（守） 魔法・罨：1（伏せ）

場：ヴァンパイア帝国

「私のターン、ドロ―！坊や、粹がってたわりにはもう息切れかしら。まだまだ夜は長いわよ？墓地のヴァンパイア・ソーサラーの効果発動、このカードが墓地にいる時、このカードを除外することで一度だけヴァンパイアと名のつくモンスターのアドバンス召喚に必要なリリースを1体減らすことができる！そして私は手札のシャドウ・ヴァンパイアを召喚し、その効果によってデツキのヴァンパイア・ベビーを特殊召喚するわ」

シャドウ・ヴァンパイア

効果モンスター

星5／闇属性／アンデット族／攻2000／守 0

このカードが召喚に成功した時、

手札・デツキから「シャドウ・ヴァンパイア」以外の

「ヴァンパイア」と名のついた闇属性モンスター1体を特殊召喚できる。

この効果で特殊召喚に成功した場合、

このターンそのモンスター以外の自分のモンスターは攻撃できない。

また、このカードをエクシーズ召喚の素材とする場合、

闇属性モンスターのエクシーズ召喚にしか使用できない。

ヴァンパイア・ベビー 攻700

まさにシャドウの名前どりに影が立体になったような真っ黒いヴァンパイアがぬるりと床を突き抜けて這い上がってくる。そしてゆっくりと右手をかざすとどこからともなく蝙蝠が集まってきて、それが小さな、まだ赤ん坊と言ってもいいぐらいの子供の形をとった。「こんなにたくさんさんのモンスターが……こりやマズイかな？」

アーチャーの守備力300だけで防ぎきれぬ数じゃない。だけど、どうやらカミューラはよっぽど人のことをいたぶるのが好きらしい。「安心しなさい、坊や？このターンはシャドウ・ヴァンパイアのデメリット効果でヴァンパイア・ベビーしか攻撃はできないわ」

助かった、なんて表情は絶対見せてやらない。ここはあえて、もう一度挑発に回ることにする。なにせ効果の処理はもう終わってるんだ、今何を言ったってこのターンベビーしか攻撃できない事実は変わりっこない。

「ふーん。だけど、偉そうなこと言ってるけど実はただのプレミスじゃないの?」

「あら、違うわよ?あなたにはじつくりと、なるべくたくさんのダメージを与えたいもの。今の私はそういう気分なのよ。だから、精々楽しませて頂戴?バトル!ヴァンパイア・ベビーでフィッシュボーグアーチャーに攻撃!」

ヴァンパイア・ベビー 攻700↓1200↓フィッシュボーグアーチャー 守300 (破壊)

「ぐっ!だけど、また次のターンで復活させれば……………」

「残念だったわね。ヴァンパイア・ベビーの特殊効果発動!あなたのモンスターを私のフィールドによみがえらせるわ」

ヴァンパイア・ベビー

効果モンスター

星3 / 闇属性 / アンデット族 / 攻 700 / 守1000

このカードが戦闘によってモンスターを破壊したバトルフェイズ終了時、

墓地に存在するそのモンスターを自分フィールド上に特殊召喚する事ができる。

フィッシュボーグアーチャー 守300

「カードをセットして、私はこれでターンエンドよ」

今のターン、シャドウの効果を使わなければ僕にもっとダメージを与えられたはずだ。でも彼女はあえてそれをしなかった。つまり、僕はそれくらい余裕をもって倒せる相手だとみられている。俗にいう舐めプというものだろう。面白い、すぐ後悔させてやるから覚悟してもらおうじゃないの。

「僕のターン、ドロロー!」

とはいえ、カミューラの場には実質攻撃力1200のベビーから2

500のシャドウまでいる。この場を突破できるモンスターなんて……いや、いるじゃないか。いいカードが。

「モンスターをセットして、ターンエンド」

カミューラ LP:4000 手札:2 モンスター:ヴァンパイア・レディ(攻)、シャドウ・ヴァンパイア(攻)、ヴァンパイア・ペビー(攻)、フィッシュボーグーアーチャー(守) 魔法・罠:1(伏せ)

清明 LP:3650 手札:1 モンスター:1(セット) 魔法・罠:1(伏せ)

場:ヴァンパイア帝国

「私のターン！ やっぱりあなたみたいな無様な雑魚の相手をしても面白くないわね。このターンで終わらせてあげる！ 私はもう一体のヴァンパイア・ソーサラーの効果を使って、ヴァンパイア・ドラゴンをリリースなしで召喚するわ。それと……せつかくだからあなた自身のモンスターの手でも葬ってあげるわよ、フィッシュボーグーアーチャーを攻撃表示に変更。バトル、シャドウ・ヴァンパイアで伏せモンスターに攻撃！」

ヴァンパイア・ドラゴン 攻2400

シャドウ・ヴァンパイア 攻2000↓2500↓?? 守1800

(破壊)

「フフ、これであなたの場にモンスターはいなくなったわね」

「な、何勝った気ているのさ！ セットモンスターだったペンギン・ナイトメアの特殊効果発動！ このカードがリバスしたことで、ヴァンパイア・ドラゴンをバウンスする！」

ペンギン・ナイトメア

効果モンスター

星4/水属性/水族/攻 900/守1800

このカードがリバスした時、

相手フィールド上のカード1枚を選択して持ち主の手札に戻す。

また、このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、

自分フィールド上の水属性モンスターの攻撃力は200ポイント

アップする。

「なんですつて!? だけど、あなたのフィールドはがら空きなことに変わりはないわよ! ヴァンパイア・レディでダイレクトアタック!」

ヴァンパイア・レディ 攻1550↓2050↓清明(直接攻撃)

清明 LP3650↓1500

女性ヴァンパイアの鋭い爪の一撃がまともに命中する。い、痛ったあ……でも、おかげでこのターンは何とかなりそうだ。

「ま、まだまだ……」

「ヴァンパイア・レディの特殊効果が発動するわ。私が次に宣言するのは罠カード!」

「トラップ、トラップか。じゃあ、フィッシュチャーチを墓地に」

「次はヴァンパイア帝国の番ね。デッキから最後のヴァンパイア・ソーサラーを墓地に送って、その伏せカードを破壊するわ」

やっぱり来た! 考えてみれば皮肉な話だけど、この破壊効果のおかげで僕はまだ戦うだけでなく、次につなげることができるんだよね。

「それを待ってたんだ! この発動してあるトラップカード、安全地帯の効果発動! 僕はこのカードを、シャドウ・ヴァンパイアに対して発動していた!」

安全地帯

永続罠

フィールド上に表側攻撃表示で存在するモンスター1体を選択して発動する。

選択したモンスターは相手の効果の対象にならず、

戦闘及び相手の効果では破壊されない。

また、選択したモンスターは相手プレイヤーに直接攻撃する事はできない。

このカードがフィールド上に存在しなくなった時、そのモンスターを破壊する。

そのモンスターがフィールド上から離れた時このカードを破壊する。

「デメリット効果によって、シャドウ・ヴァンパイア撃破!」

正直、この決断には勇気がいった。ここでベビーを破壊しておけば、このターンで受けるダメージは一回少なくなりライフもその方が多く残る。だけど、それじゃあダメなんだ。それじゃあ、返しのターンでシャドウ・ヴァンパイアをどうにもできない可能性の方が高い。とはいえ、これだとこのターンだけであと2回のダイレクトアタックを受ける計算になるわけで。このターンを立ったまま終わることができるといいんだけど。

「誇り高きヴァンパイアの一族を、よくもこんな姑息な手で葬ってくれたわね!! だけどプレイングミスね、私の場にはまだ攻撃をしていないベビーがいる! ベビー、アーチャーでダイレクトアタック!」

ヴァンパイア・ベビー 攻700↓1200↓清明(直接攻撃)

清明 LP1600↓400

フィッシュボーグーアーチャー 攻300↓清明(直接攻撃)

清明 LP400↓100

さつき僕が考え抜いた末にあえてとったシャドウの破壊という一手を、カミューラはプレミスの一言で片付けた。そこら辺に考え方の違いってもんが如実に表れてるんだろうな、と思う。というか、そうやって何か考え続けて思考力を保ってないと今にも気絶しそうだ。痛い、痛い、痛い。一回経験済みだからわかってたけど、やっぱりハンプなく痛いです。

「もう立ってるのもやっとかしら? ターンエンドよ」

「僕の……ターンツード……ロー!」

このターンで決定的な何かをしない限り、多分これが最後のドロウになるだろう。お願いしますデュエルの神様、なにか逆転の一手を授けてください!

「魔法カード、サルベージを発動! 攻撃力1500以下の水属性2体を墓地から手札に……僕が加えるのは、ペンギン・ナイトメアとシャーク・サツカー! さらに魔法カード、強欲なウツボを発動! 手札の水属性2体をデッキに戻すことで、3枚のカードをドロウできる!」

これで手札は3枚、何かしらのコンボができるといいんだけど。お

そるおそる引いた1枚目は、死者蘇生。強力なカードではあるんだけど、いかんせん今は墓地にそこまで攻撃力の高いモンスターがいないから壁を出すことにしか使えなさそう。次に引いた2枚目は、シヤーク・サツカー。ありがとうシヤークさん、こんな時でも僕の精霊は僕を助けてくれるらしい。だけど、そこまで考えたところで凍りついた。次のターンで壁を出しても、モンスター2体じゃ耐えきれない。もし仮に、また舐めプをする気になったとかの理由で耐え切れなかったとしても、その次のターンで何をやる？手札だって次のドロ1枚しかないのに、逆転なんてできるのか？つまり僕に残された唯一の生き残る手段は、この最後の1ドロで巻き返すしかない。カードをドロ1するためにデュエルディスクに手を伸ばすけど、その手は僕の意思とは関係なくガクガクと震えていた。いつの間にか流していた汗が、つーつと頬を伝って床に落ちる。痛み関係なく緊張と恐怖で倒れそうになったその時、どこからともなく声が聞こえた。

『……………力が、欲しいか』

え、嘘。今の誰？ちらつちらつと周りを見回すけど、僕ら以外に新しい人はいない。不思議に思う暇もなく、もう一度その声が聞こえた。

『貴方は力が欲しいか？この勝負、勝ちたいか？』

どうやらこの声、夢にもカミュラにも聞こえてないらしい。ついに幻聴まで聞こえるようになったんだろうかってH A H A H A H A H A、ちよつとそれシヤレにならないな。

『……………少しは緊張感を持ってくれ。私がシリアスやってるのに、肝心の要の貴方がそんな調子では私の立つ瀬がない』

「緊張感がないんじゃないやなくて色々吹っ切れただけ。だいたい、ここに入学してから僕がどんだけ濃い人生送ってると思ってるのさ」

自分でもちよつと驚きだけど、正体不明の声の主との会話はなんだか心が落ち着いた。まるで、ずっと前からの知り合いと駄弁ってる時のような。なんでだろう。

『それは後で話すとして、まずはあの吸血鬼を倒す。改めて聞こう。遊野清明、貴方は私の力を使いたいと願うか？』

「…………君の力を使えば、この状況からでも勝てるってこと？」

『勝つー！』

声の主が誰かは、まだわからない。でも、なんとなくだけで、この声は信用してもいい気がした。だから、僕もきっぱりと答えることにする。

「じゃあ、よろしく頼むよ！僕は勝つ、勝ってあの2人を元に戻す！」  
あと夢想と2人でいられる時間のために、って言うのは心の中だけに留めておいた。

『ならば私の力を使うといい。デッキトップに私はいる』

どれどれとデッキを見てみると、なんかデッキトップの1枚が明らかにヤバイ感じの紫色のオーラに満ち溢れていた。

「あの一。これ、使っても大丈夫なの？」

『すまない。正直その邪気は、私が消そうとして消せるものではないのだ。心の闇に囚われなければたぶん大丈夫なはずだが……………私も、貴方ならなんとかしてくれると信じているから私のカードを託している。信用しているぞ、遊野清明』

うーん、そんなふうに言われたら断れないじゃないか。最初からそんなつもりもなかったけど。

「それじゃあ最後の1枚いくよっ！ドローツ!!」

引いた瞬間、とんでもない量の負の感情が流れ込んできた。それと同時に、僕の体全体がこれまでも何回か見た例の紫のオーラに包まれる。これまでは体の一部にしか見えなかったから、全身すっぽりつてのは初めてだ。『な、なんとか耐えきつてくれ！』という声がぼんやり聞こえた気がしたけど、これは……………ちよつと、キツイ……………か……………も……………!!!!

「うわああああああああっ!!!」

誰かの叫び声が聞こえてくる。いったい誰だろう、と思っただろうも無意識のうちに自分で叫んでたらしい。足にうまく力を入れられなくなり、後ろの方に倒れていく。だけど地面に体が叩きつけられる前に、誰かが優しい手つきで背中を支えてくれた。ほんの少し頭を動かすと、心配そうに僕の顔を覗き込む夢想の顔が見えた。



「ほ……僕、は……」

「もういいの、清明。私があなただを助けてあげるから、だって」

何か言おうとするけど、上手く言葉が出てこない。必死になって喋ろうとする僕の唇に黙っていて、と言うかのように人差し指を当てて、ゆっくりと顔をあげてカミューラと目を合わせる。

「ねえその年増。これ以上清明に無茶させないで、だってき」

「あくまでも年増呼ばわりかしら？確かに私も、その子はある限り好みじゃないから別に魂をもらったって持って帰ろうとは思わないわ。でも私だって鍵は欲しいし、第一誇り高きヴァンパイアの末裔として一度狙った獲物を無条件で逃がすわけにはいかないのよ」

「なら、私の鍵ぐらい持って行って構わないから。だから今すぐ清明とのデュエルを中止して、だって」

「……っ!?む、そう」

慌てて起き上がろうとするけど、まだ体中から吹き出ている紫のオーラのせいで動くこともままならない。このっ、このっ！

「へえ……ご立派なことね。そうね、鍵がもらえるなら確かに悪い話じゃあないわね。ただし、もう二つ注文があるわ」

「なに？なんだって」

とても邪悪な笑みを浮かべながら、カミューラは一言一言強調するように言葉を発した。

「まず一つ目に、その坊やを放す代わりに鍵二つ。あなたの分だけじゃなくて、その坊やの鍵もよこさない」

「そんな程度なら……構わない、だってき。はい、まず私の分」

そう言って首にかけていた七星門の鍵を、ヒュツと投げつける。それをカミューラが片手でキャッチすると、その鍵が光になって消えていった。ここまではまだいい。だけど次のセリフをきいた瞬間、心臓が止まりそうになるほどの衝撃を受けた。

「はい、よくできました。それじゃあ、ふたつ目の条件ね。坊やの鍵、それにあなただの魂も一緒に付けるって言うなら考えてあげてもよくってよ？私は坊やの魂をあきらめる。だからあなただの魂を代わりに貰っていく。合理的じゃなくって？」

「ふぎ、けん、な……」

「わかった。だって」

動かない体で何とか思いとどまらせようとするけど、彼女はそつと僕の体を地面に横たえ、僕の首から七星門の鍵を取るとそれを持ったままカミューラと向かい合う。何とか、少しでも体が動きさえすれば！

『落ち着きなさい。私の持つ負の力は、100年も生きていない人間が力づくで押さえつけられるようなものではない。力と正面からぶつかりあうのではなく、うまくコントロールするのだ。そして貴方にはそれをする素質と能力がある』

そうこうしている間にも夢想はゆっくりとカミューラの方に一步一步近づいていき、その分僕との距離も離れていく。その距離がなんだか、二度と埋められないような気がして。……そんなの絶対に嫌だ。そう思った瞬間体が急に楽になって、ほぼ無意識のうちに口が動いていた。

「待ちな、お二人さん。夢想、僕なんかのためにそこまでしてくれてありがとう。カミューラ、お前はここで終わらせてやる」

「清明!?もう無理しないでっ……って、その顔はどうしたの!？」

「あら、また動く気になったのかし……あなた、本当に人間なの!?目、目が……」

なんだろう二人とも。僕の顔だの目だのがどうかしたんだろうか。いや、それは後でいい。今は、このデュエルにケリをつけるだけさ。

「僕のターンはこれから、だからね。僕はまず、死者蘇生を発動。そうだな、墓地からウミノタウルスを蘇生。水族のウミノタウルスが出てきたことで、シャーク・サッカーを特殊召喚」

1ターン目と全く同じ組み合わせの2体。あの時と違うのは、さらに続きがあるということだ。

「そしてこの2体をリリース。七つの海の力を纏い、穢れた大地を突き抜ける!来い!地縛神Cha<sup>チャ</sup>cuc<sup>ク</sup>Cha<sup>チャ</sup>llhua<sup>ア</sup>!!」

『よく頑張った、後は私の力に任せておいてくれ。……ダークシングナー、遊野清明』

突如地面に亀裂が走り、その中から紫色のシヤチのような形の『何か』が飛び出す。これが僕の新しい力、地縛神。

地縛神 Chacuc Challhua 攻2900

「攻撃力2900ですって!?でも残念ね、私はトラップカード発動、重力解除!このカードの効果で、あなたのモンスターも私のモンスターも守備表示になるわ!どんなに高い攻撃力のカードを出そうとも、攻撃ができないんじゃない?」

重力解除

通常罠

自分と相手フィールド上に表側表示で存在する全てのモンスターの表示形式を変更する。

地縛神 Chacuc Challhua 攻2900↓守240

0

ヴァンパイア・レディ 攻1550↓守1550

ヴァンパイア・ベビー 攻700↓守1000

フィッシュボーグアーチャー 攻300↓守300

「それはどうかな?ってね。チャクチャルアの5つ目の特殊効果を発動、このターンの攻撃を放棄して相手にこのカードの守備力の半分、つまり今は1200のバーンダメージを与える!ダーク・ダイブ・アタック!」

カミューラ LP4000↓2800

「ターンエンド。さあカミューラ、これがアンタの長い人生最後のターンだ。精々抵抗してみなよ!」

カミューラ LP:2800 手札:3 モンスター:ヴァンパイ

ア・レディ(守)、ヴァンパイア・ベビー(守)、フィッシュボーグ

アーチャー(守) 魔法・罠:なし

清明 LP:100 手札:0 モンスター:地縛神 Chacuc

Challhua(守) 魔法・罠:なし

場:ヴァンパイア帝国

「一回ダメージを与えただけで、ずいぶん言ってくれるじゃないの!ドロ、墓地のヴァンパイア・ソーサラーの効果!手札のヴァンパイ

ア・ロードを通常召喚して、このロードを除外！現れなさい、高貴なる夜の王！ヴァンパイアジェネシス、特殊召喚！」

紫色の体をした、ヴァンパイアの王様。クロノス先生の古代の機械巨人と同じ攻撃力を持つ大型モンスターだけど……もうそれも、怖くない。ヴァンパイアだか何だか知らないけど、今の僕には5000年近い歴史がある地縛神が味方に付いてくれてるんだ。いったい何を怖がることがあるうか、いや、あるはずがない。

『反語表現だな。人間のことは封印されながら暇つぶしに観察していたがあの時にこの島国で一般的だった言葉が過去のものとは、つくづく移り変わりの速い種族だ』

ヴァンパイアジェネシス

効果モンスター

星8 / 闇属性 / アンデット族 / 攻3000 / 守2100

このカードは通常召喚できない。

自分フィールド上に存在する「ヴァンパイア・ロード」1体を

ゲームから除外した場合のみ特殊召喚する事ができる。

1ターンに1度、手札からアンデット族モンスター1体を墓地に捨てる事で、

捨てたアンデット族モンスターよりレベルの低い

アンデット族モンスター1体を自分の墓地から選択して特殊召喚する。

「私のモンスターたちを攻撃表示に変更するわ。さあ攻撃しなさい、ヴァンパイアジェネシス！ヘルビシヤス・ブラッド!!」

その言葉に従い、ヴァンパイアジェネシスの体が攻撃のために紫色の霧になる。だが、その体がチャクチャルアを覆い尽くすことはなかった。何もできずに元の体に戻ったヴァンパイアジェネシスを見て、カミューラが金切声をあげる。

「なぜ！どうして攻撃しないの、ヴァンパイアジェネシス！」

「地縛神 Chacu Chailhua、第6の効果発動！このカードが守備表示でいる限り、相手はバトルフェイズを行うことができない！」

まあ、実のところを言うと第3の効果のおかげでどっちみち攻撃はされないんだけど。わざわざ言うことでもないから黙っておこうと。

「そ、それでも私の場で一番攻撃力の低いモンスターはフィッシュボーグアーチャーの300、このカードが破壊されてもまだ私のライフは残るわよ。カードを1枚伏せてターンエンド！（さあ、早く攻撃してきなさい？今伏せたカードは攻撃反応の罠、援護射撃。どのモンスターを攻撃して来ようと、ヴァンパイアジェネシスの攻撃力300を加算すれば私の勝ちね）」

援護射撃

通常罠

相手モンスターが自分フィールド上モンスターを攻撃する場合、ダメージステップ時に発動する事ができる。

攻撃を受けた自分モンスターの攻撃力は、

自分フィールド上に表側表示で存在する他のモンスター1体の攻撃力分アップする。

あの、ほんの一瞬だけ見えた勝ち誇ったような表情……張ってるな、罠を。だけど、怖くなんてないね。何度だって繰り返すけど、こっちにはぎっくり5000年の歴史があるんだ。たかだが500年も生きてないような吸血鬼ごときに、後れを取るなんてことはない。

「僕のターン、ドロー……さあカミューラ、自分の人生にお別れは言った？チャクチャルア、攻撃！」

「かかったわね、トラップを……」

「もう一回言わせてもらうけど、それはどうか？チャクチャルア、第4の特殊効果！このカードは相手に直接攻撃ができる！」

「なんですって!?!」

「これでとどめだよ、ダイレクトアタック！ミッドナイト・フラッド！」

地縛神 Chacu Chailhua 攻2900↓カミュー

ラ（直接攻撃）

カミューラ LP2800↓0

ライフの無くなったカミューラの体が、風になって消えていく。そして彼女がすっかり消えた瞬間、なにやら地響きがした。見ると、あれよあれよという間に館が崩れてきている。く、ここは湖の上、下手したら沈んでっちゃう！

「夢想、逃げるよー！」

「う、うん！」

そう言っただけでまだ気絶したままの翔を背中に担ぎ、さつさと来た道を戻りだす……前にカミューラがさつきまでいた場所に引き返し、なぜかまだ人形のままのカイザーを拾い上げる。そのまま脱出しようとしたその時ひときわ大きく館が揺れ、天井が僕と夢想の間に落ちてくる。全力で走り抜ければまだ間に合ったのかもしれないけど、慌てて後ろに飛びのいてしまったのがまずかった。……通れねえ。

「清明!？」

砂埃の向こうから夢想の声が聞こえてくる。というか、まだそんなところにいたのか。さつきと逃げないとそっちまで危ないってのに、全く何してるんだか。そんなことを考えてると、今度は真横の柱が倒れてきた。

「うおっと危なっ！こりゃ、まずこっちの心配しないとダメかな……？」

自分一人ならまだなんとでもなるんだけど、人形カイザーと翔を抱えながらつとこがなんともマズイ。これだけで難易度が一気に跳ね上がってる。どうしよう、と思っただけで特に何も思いつかないので大人しく相談してみることにする。

「チャクチャルさん、どうすればいいと思う？」

『「ア」の一文字ぐらいわざわざ略さなくても……まあ、いくら今の貴方でも正面突破は難しいだろうな。そうだな、私の力を応用すればある程度精霊としての力を持ったカードなら実体化させることができるはずだ』

「なにそれすごい」

なんというかもう、人間飛び越えちゃってるね。いやまあ、リアル死者蘇生やらかした時点で人間やめてるって言われたらそれまでだけ。

「でさ、具体的にはどのカードならできそう？」

『ふむ……霧の王だな。さすがに愛着がこもっているだけのことはある。正直、私が手を貸さなくても放っておけば実体化できるだろう』

「ホント!？」

『うむ』

嬉しいなあ、ありがとうマイフェイバリットカード。早速デッキをデュエルディスクから取り出し、その中から霧の王のカードを掲げてみる。お願い相棒、力を貸して！そう心の中で呟いた瞬間、きれいな青い光がカードからほとばしる。そして光が収まった時、そこに立っていた一つの影。僕がデュエルを始めるきっかけになったカードであり、どんなデッキにも必ず入れていたカード。ユーノは自分がいた世界の話をなぜかめつたにしてくれないけど、それでもこのカードと出会ってからは僕と似たようなものだったらしい。

「霧の王……」

ついにソリットビジョンじゃない実体化した霧の王が、僕に向かってコクリとうなずく。そして右手の大剣を一振りすると、一瞬で道をふさいでいた瓦礫の山が消滅した。魔法が凄いか剣が凄いかはよくわからないけど、とにかく霧の王はできる子だったことはよくわかった。

そう思っただけで一分後。僕たち3人+人形1個は、湖のほとりに立っていた。

「訂正。スペック高いとかできる子とか通り越してとんでもないチートっ子じゃないですかー」

助かった、とか嬉しい、とかよりもここまであっさりしていると正直呆れの方が先にくる。ちなみにあれよあれよという間にゆく手を阻むがれきを消し去り、僕らのことを抱え上げて文字通りのひとつとびで元の場所まで運んでくれた当の本人は、僕のすぐそばで何も言わず

に立っている。

あ、そうだ。せつかくだからこれも頼んでみよつと。

「ねえ霧の王、この人形元に戻せたりとかする？」

そう言っつてポケットからカイザー人形を取り出して見せる。最初のうちにはカミューラも倒したんだしすぐ元に戻るだろう、なんて思っつてたけどいつまでたつても人形のままで、そろそろ不安になってきたのだ。さすがに多くを求めすぎた気もするけど、彼(?)はあつさり領くと、僕の手から人形を受け取つてそれを地面に置いた。そして手をかざすと、地面に魔法陣が浮かび上がる。そして魔法陣の中心で光が弾けると、さつきまで人形の転がっていた位置にはカイザーが座り込んでいた。うーむ、霧の王が魔法使いっぽいところ見るとこれが初めてな気がする。

「すまなかつたな、清明。俺が不甲斐ないばかりに」

「いや、いいつていいつて。もうこれで皆助かつたんだし、ひとまずハッピーエンドつてことでいいじゃないの。それとありがとう、霧の王。これからもよろしく！」

霧の王にお礼を言つてカードの中に戻つてもらい、相変わらず律儀なカイザーに軽く返事してから、ふと思ひ立つてデッキを取り出してみる。地縛神、地縛神……あつた。

地縛神 チャク Chacu チャル Chalhua

効果モンスター

星10 / 闇属性 / 魚族 / 攻2900 / 守2400

「地縛神」と名のついたモンスターはフィールド上に1体しか表側表示で存在できない。

フィールド魔法カードが表側表示で存在しない場合このカードを破壊する。

相手はこのカードを攻撃対象に選択できない。

このカードは相手プレイヤーに直接攻撃できる。

また、1ターンに1度、このカードの守備力の半分のダメージを相手ライフに与える事ができる。

この効果を発動するターン、このカードは攻撃できない。



このカードがフィールド上に表側守備表示で存在する限り、相手はバトルフェイズを行えない。

こうやってじっくりテキスト見直してみると、なにげにひどい効果だよなチャクチャルさん。

『使うだけ使っておいてその言いぐさはあんまりではないか?』

あ、聞こえてた。ごめんごめん。さて、それじゃあユーノ達に見つかる前に病室に戻ろうかな。チャクチャルさんのことも、遅かれ早かればれるだろうし皆には話しておこう。

そう決心して帰る途中ユーノ達に見つかり、こっぴどく怒られたのはまた別の話。とほほ、せつかく勝ったのに……………。

## ターンEX 真紅のロードを歩む龍

「でき、僕思う訳よ。『ハチャメチャ』って言葉あるじゃん？あれって後半のメチャが滅茶苦茶のメチャなのはまあわかるんだけど最初の『ハチャ』って何者？いや、そもそもあれってハチャがメチャするからハチャメチャなの？ハチャをメチャるからハチャメチャなの？」

夜、レツド寮の一室。ここ数日セブンスターズ側の動きもなくつかの間の小休止的な日々を送っていた清明たちは、なんとはなしに清明の部屋に集まってダベっていた。いくらデュエリストとはいえ、一年三百六十五日二十四時間千四百四十分八万六千四百秒の全てをカードの話ばかりして過ごしているわけではない。たまには違う話もする。ちなみに、今絶好調で喋り続けているのは清明。意外かもしれないが、こういった死ぬほどくだらない話はだいたい彼から振り始めることが多い。

『バーカ。ハチャメチャってのはな、もとはと言えば古代アトランタル語で「混乱」を意味するハンチャンってのと「台無し」を意味するメンチャルルって言葉をくっつけたのが語源で、さらにそれが日本に伝わって訛ったから「ハチャメチャ」になったっていう逸話があるんだよ。お前ら高校生にもなってそんなことも知らんのか』

そして、その手の話題に真つ先に返事を返すのがユーノ。なんだかんだいってこの二人もいいコンビである。もっとも困ったことに、「ええー！おいユーノ、それマジかよ！なあ万丈目、お前は知ってたか？」

「騙されるな十代！そんな話、この万丈目グループの俺ですら聞いたこともないぞー！」

『おお、嘘だぞ。んなもん一から十まで出まかせに決まってるだろ』  
その答えの9割方は無駄に手の込んだ大嘘なのだが。それで誰も気にしない辺りおおらかというかのんきというか、とにかくそういう所なのだろう。

「それと十代、前々からずっと聞きたかったことがあるんだけど」  
「え、俺？どうしたんだよ、急に改まって」

「うん。ワイルドマンってさ、名前から言ってるター○的な野生児モンスターだよ。なんで大都会のスカイスクレイパーで攻撃力上がっちゃうわけ？あれビジュアル的には1000ポイント下がったって文句言えないでしょどーみても」

「そんなこと俺に聞かれてもなあ……………」

別に酒が入っているわけではない。それでも清明本人は全くの素面である。だけどセリフ内容は酔っ払いが絡んでると大差ない。どれどれ俺が答えよう、とまたもや出まかせを口にすべくユーノが口を開きかけたその時、玄関がガチャリと開いた。とりあえずこれで話を切ることができる、とその場の全員が微妙にほっとした顔になる。

「みんなー、ただいまッスー」

「ちゃんと帰ってきたんだなー」

そして入ってきたのが、翔と隼人。別に大した用事があったわけではない、じゃんけんに負けたから下の階まで行って戸棚の奥に押し込まれている大徳寺先生秘蔵のかりんとうをこっそり持つてくる役目を押し付けられただけだ。ちなみにこのかりんとうを見つけたのも清明である。変なところだけ目ざといのも彼ならではといったところか。

「あ、お帰り〜」

「早速みんなでおおうぜー！」

「遅かったな」

その後もあーだこーだと色々なことに対して文句を言い続ける清明を尻目に急須から湯呑に熱い番茶を入れて一口すすり、ほーっと一息つくユーノ。どうやって急須やら湯呑やらを掴むことができたのか、そもそもなぜお茶を飲むことができるのかなどは永遠の謎である。そして、そんな二人を呆れ半分に見つめるほかのメンバーたち。こんな感じで、レッド寮の夜は今日も更けていく。

時はさらに飛び、草木も眠る丑三つ時となる。さつきまでの皆もとつくに眠りについていて、今動くものはいなかった。………たった一人を除いては。

「うし、これでいいか。じゃ、行ってくるぜ」

そう小声で同居人に呟いて声の主、ユーノは自分の腕にデュエルディスクを装着して窓を開け、ひよいつとそこから外に飛び出した。「よつ………と」

そして空中で減速し、ふわりと足から着地する。どうやら体がある時の癖でつい窓を使ってしまったらしいが、そもそも壁抜けができる彼にとつて今の行為に意味はない。

「うし、誰も見てねーだろうな」

『私が見ていた。ところで、今夜の話だが。私もついていこうか？』  
「よつ、チャクチャル。まあお前はむしろ見てもらわないと困ったことになるからいいや。それと悪いけど、今夜は留守番頼むわ」

『だが……』

「頼むわ。俺が何とかするつもりで入るけど、万一って言葉もあるからな。地縛神が守り神やってくれるんならこつちも安心できるってもんだ」

一瞬の沈黙。だが、先に折れたのはチャクチャルの方だった。

『わかった。指一本触れさせないし、何一つ見せない。それが頼みたかったんだろう？』

「ははは、さすがによくわかってらっしやるもんだ。………んじゃ、な。結界は任せませ。それと、これも預かっててくれ。万一の時は、そのまま清明の奴に受け渡しとけよ」

そう言つて投げ渡したのは、デッキの魂ともいえる霧の王のカード。そのカードをわざわざデッキから抜くということとはそれだけ事態を深刻にとらえているということなのだろうが、軽く伸びをし、ゆっくりとレッド寮に背を向けて森の中に入っていくユーノの背中にそんな深刻な色は見られない。その後ろで、レッド寮の建物がシャチをかたどった青い炎に包まれた。本来はダークシグナーがシグ

ナーと戦う際に勝負がつくまで出られないようにするためのものだが、裏を返せばそれはデュエルが終了するまで何人たりとも入ることができない鉄壁の結界となるのだ。

ユーノはひたすら歩き続ける。どこへ向かっているのかはともかく、少なくともその足取りに迷いは一切ない。そして、どれほど歩き続けたらうか。歩き続ける彼の後ろ姿に、声をかける影がいた。

「よう、転生者。こんな夜中にどこまで行く気だよ」

「あー？わざわざそつちから出向いてくれるたあご苦労なこつたな、このストーカーの盗撮魔。さつきからじろじろじろじろ人の部屋覗いてやがって、バレバレなんだよバーカ」

お互いに嫌味たつぷりの口調でにらみ合う二人。今度先に口を開いたのは、ユーノの方だった。

「まあいいさ。お前の用件はある程度予想できるけどな、あえて様式美ってやつに従って聞いといてやる。……………一体何の用だ？」

「テンプレ通りに答えてやるよ。今すぐここで消えろ、この屑転生者が！」

激昂して怒鳴る少年に対し、ユーノの態度はあくまでも冷静だった。そうかやっぱりか、いつかこうなるのはわかっていたぜといわんばかりに冷静に、皮肉たつぷりの口調で話しかけていく。

「消えろ、ねえ。一体どーゆー見だ？俺シンクロもエクシーズも出してねえぞ？」

「はっ、シーラカンスがGX時代にあるとでも？原作で明日香以外が白夜龍を出したのか？万丈目のドラゴンデッキだって漫画版混じってんだらうが。わかったか屑野郎、お前らのせいで原作はもう十分以上メチャクチャなんだよ。だからさつさと消えちまえ」

「メチャクチャのメチャはハチャメチャのメチャ、だな」

「は？一体何の話だ」

「うんにゃ、こつちの話。それで？要するにお前は俺が許せない、と？」

それは、彼なりの最終通告。もつとも彼にとっては、ここで話し合いで済むならそれもそれで悪くない、といった程度の認識であり最初

から実力行使する気満々だったのだが。そんなことを考えているとは知る由もない少年……いや、転生者狩りの返事は案の定、右腕のデュエルディスクの起動だった。

「ああそうだ、この原作破壊者め。もういい、お前とは話すつもりもない。転生者、お前はこの場でこの俺、富野が消し去って最初からこの世界にいなかったことにしてやる！」

「そもそも俺、転『生』者じゃねーんだけどな。幽霊だし。しかしこれ、傍から聞いてりや完全に俺が悪者だな。ふむ、なら悪者っぽくやつてみるか。……さあ、よからぬことを始めようじゃないか！」

「デュエル!!」

「先攻は俺だ！俺は手札のハンマー・シャークを召喚！そしてその効果で、自分のレベルを下げてフィッシュボーグアーチャーを守備表示で特殊召喚するぜ」

ハンマー・シャーク

効果モンスター

星4 / 水属性 / 魚族 / 攻1700 / 守1500

1ターンに1度、自分のメインフェイズ時に発動できる。

このカードのレベルを1つ下げ、

手札から水属性・レベル3以下のモンスター1体を特殊召喚する。

ハンマー・シャーク ☆4 ↓3

フィッシュボーグアーチャー 守300

この時彼がふと思ったのは、とりあえず封印してあるエクストラデッキに眠る白黒のカードたちだった。実際チューナーとそうでないモンスターがそろったこの状況ならばレベル6のシンクロモンスターも、リンク3のエクシーズモンスターも出すことができる。どうせこいつはそのカードのことを知ってるから問題ないだろうし使っちゃおうか、そんな気持ちが一瞬頭をよぎったのだ。だが、彼はそんな考えを頭を軽く振ることで追い出そうとする。ここはGXなんだ、エクストラの連中には悪いけど大人しくしてもらおう。そう自分に言い聞かせ、彼はターンを譲り渡す。

「俺はこれでターンエンドだ」

「けつ、その程度かよ。それじゃあこつちも潰しがいつてもんがないぜ。俺のターン！相手の場のモンスターが俺の場のモンスターより2体以上いる時、このカードは特殊召喚できる！来い、魔導ギガサイバー！」

富野の場に現れたのは、ハングリーバーガーとほぼ同じ時期とかなり昔からあるカードでありながら今でもある程度単体で実戦級の力を持つ、人間大のサイズの黄色を基調とした派手な色の鎧に身を包んだ戦士。

魔導ギガサイバー 攻2200

「さらに手札から、レベル2のフォース・リゾネーターを通常召喚だ」

フォース・リゾネーター 攻500

フォース・リゾネーターの登場に対し、ユーノは少し嫌な予感を感じる。たった今彼がわざわざ口にした『レベル2の』という部分はどうも引っかけたのだ。そして、その嫌な予感は現実のものになる。

「レベル6の魔導ギガサイバーに、レベル2のフォース・リゾネーターをチューニング！赤き王者が立ち上がる時、熱き鼓動が天地に響く。防御に回る臆病者に、生きる価値など欠片もない！シンクロ召喚！叩き潰せ、レッド・デーモンズ・ドラゴン！」

「っ!!」

☆6+☆2=☆8

レッド・デーモンズ・ドラゴン 攻3000

「お前が何で今のターンで何もしなかったのか。俺にとってはどうでもいい、とにかくこの場は一刻でも早くゴミを叩きのめすのみ！行け、レッド・デーモンズ！ハンマー・シャークに攻撃、灼熱のクリームゾン・ヘルフレア！」

禍々しい顔つきの、まさに悪魔竜と呼ぶにふさわしい見た目のドラゴンが吐き出したブレス攻撃が、一瞬にしてハンマー・シャークの姿を消し炭にしてしまう。

レッド・デーモンズ・ドラゴン 攻3000↓ハンマー・シャーク

攻1700 (破壊)

ユーノ LP4000↓2700

「ぐわあああつつつ!!?」

ソリットビジョンのはずのその炎の余波をまともに受けてしまい、その痛み思わず叫ぶユーノと何か言うこともなく破壊されるフィッシュボーグアーチャー。ユーノはすぐに立ち上がったが、このデュエルがリアルダメージを受ける闇のゲーム状態になることをまるで考えていなかった自分のうかつさに舌打ちする。そして今のダメージからざっくり換算し、ライフが0になるまであの威力のダメージを受け続けたら相当ヤバいことになるな、と頭の隅でぼんやり考える。

レッド・デーモンズ・ドラゴン

シンクロ・効果モンスター

星8／闇属性／ドラゴン族／攻3000／守2000

チューナー＋チューナー以外のモンスター1体以上

このカードが相手フィールド上に守備表示で存在するモンスターを攻撃した場合、

そのダメージ計算後に相手フィールド上に守備表示で存在するモンスターを全て破壊する。

自分のエンドフェイズ時にこのカードがフィールド上に表側表示で存在する場合、

このカード以外のこのターン攻撃宣言をしていない自分フィールド上のモンスターを全て破壊する。

「メイン2でおろかな埋葬を発動、このデッキのモンスター1体を墓地に送る効果でフレア・リゾネーターを墓地に。カードを3枚伏せてターンエンド。どうした？もつともつと抵抗してみろよ。どうせお前は消えるんだからさ」

ユーノ LP2700 手札：4 モンスター：フィッシュボーグ

アーチャー（守） 魔法・罠：なし

富野 LP4000 手札：0 モンスター：レッド・デーモンズ・

ドラゴン（攻） 魔法・罠：3（伏せ）

「抵抗、ねえ。その前に一つ聞かせろや。てめえ、何のつもりでシンクロをしやがった？ここがGXだってわかってんのかコノヤロ」



ユーノの質問の意味は、転生者を嫌っているらしい彼が真っ先にシンクロ召喚をしたことに対する純粹な疑問。その問いに、彼は笑って答える。

「はっ、確かにそうだな。けども、これは力だ。お前らみたいな転生者をさっさとぶち倒すために俺に許された正義の力だ。何も考えずにシンクロやエクシーズを持ち出して原作をぶっ壊すお前らとは訳が違うんだよ訳が」

「許した、ねえ。嘘くさい話だぜ。まあ、そっちがその気なら俺だってやらせてもらうぜ。お前ら、久しぶりの出番だけど腕は鈍ってねえだろうな！」

そう言っただけ胸ポケットから、15枚のカードを取り出す。気のせいとそのカードたちはまた戦えることを楽しんでいるようにも見えて、思わず口の端に笑みが浮かぶ。それは、彼が自分の霊体としての人生でやるべきことをはっきり自分で決めたしるしでもあった。

「なんだ、お前も出すのか？ 所詮お前も転生者、でかい口叩いてもエクストラ頼みなことには変わらないな」

「なんとでも言えよ。俺はもう死んじまってるから今更どうこう言わねえが、清明の奴にはまだ未来ってもんが残ってたんだ。だから、俺はあいつを守り抜く。あいつだってダークシグナーになったりなんかんだでわりとハードな人生送ってたんだ、間違ってもお前らなんぞの好きにはさせんよ。あいつには、ありったけのハッピーエンドを届けてやるさ。俺のターン！ ブリザード・ファルコンを召喚。そしてレベル4のブリザード・ファルコンに、レベル3のアーチャーをチューニング！ 七つの海を凍てつかせ、敵を貫け奇跡の槍よ。シンクロ召喚！ 神槍一閃、氷結界の龍 グングニール!!」

☆4＋☆3＝☆7

氷結界の龍グングニール

シンクロ・効果モンスター

星7／水属性／ドラゴン族／攻2500／守1700

チューナー＋チューナー以外の水属性モンスター1体以上

1ターンに1度、手札を2枚まで墓地へ捨て、

捨てた数だけ相手フィールド上のカードを選択して発動できる。  
選択したカードを破壊する。

アーチャーが3つの緑に光る輪になり、その中をブリザード・ファルコンが通り抜けていく。富野には知るよしもないが、その白を基調とした落ち着いた色合いの竜は、ユーノが存命中に初めて手に入れたシンクロモンスターである。特に融合ギミックは取り入れてなかった彼のデッキにおいて、生まれて初めてエクストラデッキに入れたカード。そんな思い出深いモンスターだっただけに、ソリットビジョンにより立体化したその姿を見つめる彼の瞳はまるで普段の清明のように、実に無邪気に輝いていた。

「いくぜ、グングニールの効果発動！俺は2枚の手札を捨てて、レッド・デーモンズと伏せのうち俺から見て右側にある方を破壊する！ゼロ・スピア！」

「甘いぜバーカ、トラップ発動！強欲な瓶の効果で、カードを1枚ドロロー！」

グングニールが翼をはためかせ、フィールドに吹雪を巻き起こす。その寒波はレッド・デーモンズ・ドラゴンを一瞬で身動きしない氷像にし、それが地面に落ちて粉々に砕けちった。

「くっそ、手札一枚は空撃ちになったか。もったいないけど、このまま突っ切るぜ！グングニールで直接攻撃、スピア・ザ・グングニール！」  
おそらく全国のグング使いが攻撃させるときに一番多く言われているであろう攻撃名を受け、氷結の竜が巨大な槍のような形をしたエネルギー波を打ち出す。それは富野の体を貫き、彼を5〜6メートルほど吹っ飛ばした。

氷結界の龍 グングニール 攻2500↓富野（直接攻撃）

富野 LP4000↓1500

「このまま立ち上がってこなきや俺の勝ちなんだろうけど……あ、起きた。ま、あれだけええばつといてこんなあっさり倒れられたら拍子抜けなんだけだな。カードを1枚伏せてターンエンド」

「調子に乗るなよ転生者！正義は必ず勝つてことを教えてやる！ドロローしてトラップ発動、ロスト・スター・デイセント！甦れ、レッド・

デーモンズ！」

ロスト・スター・デイセント

通常罫

自分の墓地に存在するシンクロモンスター1体を選択し、自分フィールド上に表側守備表示で特殊召喚する。

この効果で特殊召喚したモンスターの効果は無効化され、

レベルは1つ下がり守備力は0になる。

また、表示形式を変更する事はできない。

レッド・デーモンズ・ドラゴン 守20000↓0 ☆8↓7

「なにが正義だバカヤロウ。つーかこのタイミングで蘇生ときたらまさか！」

「さすがに察しがいいな、その通りだよ！もう一枚のトラップ発動、スカーレット・カーペット！このカードはどちらかの場にドラゴン族のシンクロがいる時に墓地のリゾネーターを2体まで特殊召喚するカードだ！そして俺が蘇生させるのは、もちろんレベル2のフォース・リゾネーターとレベル3のフレア・リゾネーター！」

フォース・リゾネーター 攻500

フレア・リゾネーター 攻300

赤黒い悪魔の竜の両脇に、雷と炎をまとって現れる2体のリゾネーター。単体では大した力を持たない彼らだが、今この場においてはステータスも低くレベルもそう高くない彼らの存在が脅威となっていた。

「レベル8のレッド・デーモンズ・ドラゴンに、レベル2のフォース・リゾネーターとレベル3のフレア・リゾネーターをダブルチューニング！赤き王者のプライドが、神も悪魔もねじ伏せる。天地を統べる偉大な魂！シンクロ召喚、出でよ、スカーレット・ノヴァ・ドラゴン！」

2体のリゾネーターが口上に合わせてそれぞれのレベルの数と等しい赤く光る炎の輪になり、レッド・デーモンズ・ドラゴンを包み込む。そしてその中から、デュエルモンスターズ史上最強ドラゴンの一角と名高い赤を超えた真紅の竜。

☆7+☆2+☆3||☆12

スカーレット・ノヴァ・ドラゴン 攻3500↓4800

「ふふふ、スカーレット・ノヴァの特殊効果だ。このカードの攻撃力は、俺の墓地のチューナーの数×500ポイントアップする……：……さらにフレア・リゾネーターがシンクロ召喚に使われた時、そのモンスターは300アップする。貴様のグングニールなんて雑魚じゃ、逆立ちしたってかなわねえよなあ？」

攻撃力4800のスカーレットに対し、グングニールは2500。この攻撃を受ければユーノのライフはたった400にまで減ってしまううえ場にカードがなくなってしまうのだが、彼は不敵な笑みを崩さない。それがなにか策があつてのことか、はたまたただのハツタリかはその表情からは読み取れないのだが。

「気に入らねえなあ、その顔。お前も転生者ならそろそろ自分が主役や主人公なんかじゃないってことに気付いて絶望してみろよ。どうせ勝てねえんだって、そろそろ認めてみろよ！」

それはとても奇妙なことなのだが、この場で冷静さを欠いているのはピンチが間近に迫っているはずのユーノよりもむしろ絶対的優位に立っているはずの富野の方だった。

彼は思う。彼にとって転生者とは、これまで星の数ほど消し去ってきた存在がそうであつたように、ここまで追い詰めれば絶望的な表情を見せるはずだった。原作では存在しない展開。自分だけの特権だと、そう思い込んでいたシンクロモンスター。白黒の棒を持つそのモンスター群を『自分だけが』使いこなせるから、そう信じていて事実そうであつたからこそ原作のキャラ相手に無双を続けられる。だからそれを使う自分は彼らにとって数か月、下手をすれば十数年ぶりに出会った対等な条件で戦う相手となる。彼に言わせれば転生者にとってGXとは、例えるならばぬるま湯のような世界なのだ。シンクロもエクシーズも転生者以外は存在すら知らないゆえに、計り知れないほどのアドバンテージを持ち続けることができる世界。そんなところにならずと浸かっていれば、どれほどデュエルを続けようと本人の腕が鈍っていくのは必然のはずだった。それに初めて気が付いた彼らの顔が絶望にゆがむのを見ながら叩き潰してやるのは、仕事という

よりむしろ自分の楽しみであった。なのに、この男はどうだろう。あの笑い顔に腹が立つ。なんで絶望しないんだ。そんな理不尽な怒りが彼の体を駆け巡り、頭にかあつと血がのぼる。ニヤリ、とユーノが悪い笑みを浮かべたのさえ見ていなかった。

「スカーレット・ノヴァでグングニールに攻撃、バーニング・ソウル」  
スカーレット・ノヴァ・ドラゴン 攻4800↓氷結界の龍 グングニール 攻2500（破壊）

ユーノ LP2700↓400

ユーノ LP400 手札：1 モンスター：なし 魔法・罠：1（伏せ）

富野 LP1500 手札：2 モンスター：スカーレット・ノヴァ・ドラゴン（攻） 魔法・罠：1（伏せ）

結論から言えば、ユーノの狙いは富野の頭に血をのぼらせること。早い話、先ほど笑って見せたのは単なるブラフである。そういう意味では狙いどおりにいったのだが、それをするために彼が受けたダメージはさつきとは比べ物にならない。清明は闇のゲームについて『ダメージ量は痛み按比例しない』という法則を見つけた気になっているが、実際にはそれは違うことをユーノは薄々感づいていた。彼の説はこうである。いわく、

『痛みはそれをもたらずカードの質に比例する』

と。わかりやすく例を挙げると、黒炎弾の2400ダメージとレッドアイズの攻撃による1000ダメージで感じる痛みは黒炎弾のほうが多いもの。そこまで変わるわけではない。だがこれはどちらも同じレッドアイズの攻撃及び必殺技カードによるダメージだったからである。ここでいうカードの質とは、決してレアリティのことではない。使用者の愛着やそのカード自体の持つ力のことである。彼のメインデッキでいうと精霊体になれる霧の王にチャクチャルア、それとシャーク・サッカーあたりの攻撃が闇のゲームでは格別に強いだろうか。

そして、レッド・デーモンズ・ドラゴンの進化体であるスカーレット・ノヴァ・ドラゴンの攻撃は当然進化前よりはるかに熱くて痛い。

さっきの痛みとは5階建てビルの屋上と地下の駐車場並みに違う。衝撃に耐えきれなくなった彼の体が吹っ飛んでいき、辛うじて受け身こそとったものの体はもうボロボロの状態である。

「いよっいせ、っとー！」

それでも彼には、負けられない理由がある。言い返したいセリフがある。だから、悲鳴をあげる体のあちこちをきっぱりと無視して立ち上がった。立ち上がっただけでなく、なるべくピンピンしているように聞こえるよう声を調整して声を張り上げる。

「お前のファイルはその程度か、ってな……あのな富野さんよ、お前は一つ間違ってるぜ。まずここがGXである以上、主役は十代に決まってる。ここまでオーケー？だけどな、それとは別に主人公ってのがあるとするなら、そいつは俺じゃねえ。死んじまったのに主人公やってられんのはどこぞの不良霊界探偵ぐらいのもんだぜ。俺の役目はあくまでもサポーター、遊野清明って人間の人生を全力で助けてやることだけだよ。俺がダメになった以上、せめてあいつにはまともな長生きしてほしいんでな。とどのつまりはそういうことさ」

「けっ、口ではなんとでもいえるからな。つまらん屑の言い訳なんて聞いてやるほど暇じゃないぜー！」

「そりや残念。今、俺けっこういいこと言っただっぽかったのになー。まあいいさ、俺のターナー！手札から魔法カード、サルベージを発動。この効果で、墓地の攻撃力1500以下のモンスター2体……ペンギン・ナイトメアとブリザード・ファルコンを手札に加えるぜ。モンスターをセットして、ターナーエンドだ」

「なら俺のターナー！はっ、どうせそのモンスターはペンギン・ナイトメアだろお？忌々しいが、確かにスカーレット・ノヴァ・ドラゴンといえどもバウンスには弱い。かといって何もしなかったら結局スカーレットはバウンスされる………なら、こうしてやればいいだけのことよ！魔法カード、クロス・ソウルを発動！」

クロス・ソウル

通常魔法

相手フィールド上のモンスター1体を選択して発動できる。

このターン自分のモンスターをリリースする場合、

自分のモンスター1体の代わりに選択した相手モンスターをリリースしなければならない。

このカードを発動するターン、自分はバトルフェイズを行えない。

「この効果で、お前の邪魔なセットモンスターをリリース！そして召喚、パワー・インベーター！」

小さい頭に不釣り合いな大きさの体を持つ自称インベーターの悪魔が、太い腕に不釣り合いなほどちっちゃい手で腕を組む。

パワー・インベーター 攻2200

「クロソのデメリットで、俺はこのターンバトルフェイズできねえからな。カードを1枚伏せて、ターン終了だ」

ユーノ LP400 手札：2 モンスター：なし 魔法・罠：1  
(伏せ)

富野 LP1500 手札：1 モンスター：スカーレット・ノヴァ・ドラゴン(攻)、パワー・インベーター(攻) 魔法・罠：2(伏せ)

「俺のターン、ドロー！あ痛つつ……」

カードを引いた瞬間に走る痛み。意志力だけでそれを抑え込み、引いたカードを確認する。

「永続魔法、強欲なカケラを発動。モンスターをセットして、ターンエンドだぜ」

強欲なカケラ

永続魔法

自分のドローフェイズ時に通常のドローをする度に、

このカードに強欲カウンターを1つ置く。

強欲カウンターが2つ以上乗っているこのカードを墓地へ送る事で、

自分のデッキからカードを2枚ドローする。

それは、先ほどのターンとほぼ同じ動き。ひたすら守りを固めに行く彼の姿を、富田は嘲笑う。

「おいおい、デカイ口叩くわりにはずーいぶん消極的なデュエルじゃ

ないか。なら、こっちは攻撃的に生かしてもらおうぜ？バトル！パワー・インベーターで伏せモンスターを攻撃！」

パワー・インベーター 攻2200↓??? 守1800 (破壊)

ソリットビジョンのカードがダメージ計算のため表側になる瞬間、富野は自分が完全にはめられたことを悟った。そのカードには「ペンギン・ナイトメア」の文字が描かれていたのだ。

「最初のモンスターがファルコン、だからさっきのはブラフ……！だが、まだだ！トラップカード、亜空間物質転送装置を発動！スカールレッドをエンドフェイズまで除外する！」

〔亜空間物質転送装置

通常罠

自分フィールド上に表側表示で存在するモンスター1体を選択し、このターンのエンドフェイズ時までゲームから除外する。

完全に頭に血が上っていた故の、痛恨のミス。だがそれに気付いても諦めず、自分にできる最善の一手を取るあたりは伊達に転生者狩りをしているわけではない、ということだろう。奇妙な形の機械が作動し、スカールレッド・ノヴァ・ドラゴンの姿が異次元へと消えていく。「さくつと退場してもらえりゃ万々歳だったんだが、思ったよりやるじゃねえか！ペンギン・ナイトメアの効果で俺は、パワー・インベーター……いや、お前が最後に伏せたそのセットカードをバウンスする！」

ユーノがバウンスするカードをギリギリになって変えた理由は、全くの勘だった。彼のデュエリストとしての本能が、あのカードはヤバい、とささやいたのだ。

「ちつ、俺はもう一度このカードをセットして、エンドフェイズ。スカールレッド・ノヴァ・ドラゴンが帰還してターンエンドだ。もつとも、フレア・リゾネーターの効果はリセットされてなかったことになるがな」

スカールレッド・ノヴァ・ドラゴン 攻3500↓4500

ユーノ LP400 手札：1 モンスター：なし 魔法・罠：強  
欲なカケラ、1 (伏せ)



富野 LP1500 手札：1 モンスター：スカーレット・ノ  
ヴァ・ドラゴン（攻）、パワー・インベーター（攻） 魔法・罫：1（伏  
せ）

「どーでもいいけどお前さん、そのさつきからブレまくりなキャラは  
どうにかなんないのかね。ドロー、強欲カウンターが一つ乗ってシャ  
クトパスを守備表示で召喚。ターンエンドだぜ」

シャクトパス 守800

「シャクトパス？しつっこいカード出しやがるぜ。でもな、そんなも  
んぶつ潰してやる！パワー・インベーターでシャクトパスに攻撃！」  
「シャクトパスの特殊効果！執念深い鮫の呪いを受けてみる！」

パワー・インベーターがダダダツと走ってきておもむろにシャクト  
パスを掴むと、なんとそのタコ足部分をぶちつとまとめてちぎってし  
まった。痛そうだな、とちよつと顔をゆがめるユーノの前でその胴体  
から引き離されたタコ足がもぞもぞと動き出し、インベーターの全身  
をギリギリと締め付ける。

シャクトパス

効果モンスター

星4／水属性／魚族／攻1600／守 800

このカードが相手モンスターとの戦闘によって破壊され墓地へ送  
られた時、

このカードを装備カード扱いとしてその相手モンスターに装備で  
きる。

この効果によってこのカードを装備したモンスターは

攻撃力が0になり、表示形式を変更できない。

パワー・インベーター 攻2200↓0

「だからどうしたってんだよ！スカーレット・ノヴァ・ドラゴンでダイ  
レクトアタック、バーニング・ソウル！」

「まだまだあー！リバース発動、バブル・ブリンガー！レベル12のス  
カーレット・ノヴァ・ドラゴンは攻撃できねえぜ！」

無数の泡が吹き上がり、炎の塊になって突撃するスカーレット・ノ  
ヴァ・ドラゴンを押しとどめる。攻撃は止めたはずなのにユーノへ炎

の余波がまた襲いかかり、服の端が少し焦げてしまう。

「バブル・ブリンガー……レベル4以上のモンスターの直接攻撃を完全に封じるトラップか。しつっこいっただらありやしない……カードをセットしてターンエンドだよターンエンド」

ユーノ LP400 手札：1 モンスター：なし 魔法・罠：強欲なカケラ（1）、バブル・ブリンガー、シャクトパス（パ）

富野 LP1500 手札：0 モンスター：スカーレット・ノヴァ・ドラゴン（攻）、パワー・インベーター（攻・シャ） 魔法・罠：2（伏せ）

とりあえずこのターンを乗り切れたことに対して気づかれないようにほっと息を吐くユーノ。これから反撃だ、と気合を新たに入れなおす。

「俺のターン！強欲カウンターが2つ乗ったカケラを墓地送りにしてもう2枚ドローするぜ」

「ちよつと待て！ドローする前のスタンバイフェイズにトラップカード、闇霊術―欲を発動！パワー・インベーターをリリースして2枚ドローするが、そのドローフェイズに引いたカードはトラップか？」

闇霊術―欲

通常罠

自分フィールド上の闇属性モンスター1体をリリースして発動できる。

相手は手札から魔法カード1枚を見せてこのカードの効果を無効にできる。

見せなかつた場合、自分はデッキからカードを2枚ドローする。

「いや、どっちにしろこれは見せないぜ」

問いには直接答えず、ちよつと迷うふりをしてから効果を通すユーノ。ここら辺の駆け引きは清明も割と得意であり、間違つてもトラップかどうかを直接言うようなまねはしない。もともと、相手を惑わすことこの演技力にかけてはユーノの方が一枚も二枚も上手なのだ。

「なら、欲の効果でドローする」

「んじや改めてメイン1、カケラを墓地に送って俺もドローだ。

……よし、やる価値はあるか。貪欲な壺を発動、墓地のハンマー・シャーク、ブリザード・ファルコン、ペンギン・ナイトメア、シャクトパス、オイスターマイスターをデッキに戻してもう2ドロウする。そして墓地のフィッシュボーグアーチャーの効果発動、手札から水属性の超古深海王シーラカンスを墓地に送ってレベル3のこのカードを召喚。さらに手札からもう1体レベル3モンスター、オイスターマイスターを通常召喚する。そしてレベル3のアーチャーとマイスターでオーバーレイ、2体のモンスターでオーバーレイネットワークを構築。七つの海の水中に、回れ発条弾ける機雷！エクシース召喚！稼働しろ、発条機雷ゼンマイン！」

2体のモンスターが光になって絡み合いながら飛んでいき、宇宙のような場所に吸い込まれていく。そしてその中心から爆発が巻き起こり、外国のお菓子並みに派手な色合いの背中に巨大なゼンマイが付いたモンスターがスカーレット・ノヴァ・ドラゴンの前に立ちふさがった。その体は目の前のドラゴンよりはるかにちっぽけだったが、ユーノはこのモンスターが耐え切れることを知っている。知っているからこそ、この場を任せただの。

発条機雷<sup>ぜんまいきらい</sup>ゼンマイン

エクシース・効果モンスター

ランク3 / 炎属性 / 機械族 / 攻1500 / 守2100

レベル3モンスター×2

フィールド上のこのカードが破壊される場合、

代わりにこのカードのエクシース素材を1つ取り除く事ができる。

この効果を適用したターンのエンドフェイズ時に1度、

フィールド上のカード1枚を選択して破壊する。

「ゼンマイン？おいおい、まーた守り固めかよ。こっちはちやつちやと終わらせてえつてのによ！」

「なんとも言いやがれ！悪いなゼンマイン、久しぶりの出番がこんな役目で。すまん」

謝るユーノに対し、気にするな、と言いたげに首を振るゼンマイン。もしかすると、このモンスターにも意志があるのかもしれない。ただ

の偶然と言ってしまえばそれまでだが、なんとなくユーノにはそんな気がした。

「俺はカードを2枚伏せる。これでターンエンドだ！」

おそらくは、次のターンが正念場。ゼンマインの破壊耐性は優秀だが、それだつて時間稼ぎに過ぎない。だが、もし何らかの手段でレッド・デーモンズ・ドラゴンが再び出てくるようなことがあれば自身の攻撃力と効果を合わせてわずか1ターンで突破されてしまう。ユーノは今のターンで、あの手札でできることはすべてやっておいた。あとは、富野の引きにすべてがかかっているのだ。

「俺のターン、ドロ―！来たぜ来たぜ、死者蘇生を発動！俺の墓地からレッド・デーモンズ・ドラゴンを蘇生させてやる！」

レッド・デーモンズ・ドラゴン 攻3000

よりもよつてこの場で富野が引いたカードは、デュエルモンスターの豊富なカードプールにおいても最高峰の蘇生カードである『死者蘇生』。この効果により完全蘇生された悪魔の竜が、再び夜空に吼える。だが、ユーノはあくまでも表情を崩さない。もつとも、富野の方もそんな暇は与えなかったのだが。

「さらに手札の速攻魔法、サイクロンを発動！さつきから鬱陶しかったバブル・プリンガーはここでお別れだ！」

このカードにはもう少し残つていて欲しかったな、とちよつと不安になるユーノ。だが、このおかげで伏せカードには手を付けられなかったんだから結果オーライだろう、と気持ちを切り替える。ユーノはただゼンマインを出して時間を稼ごうとしているのではない。待っているのだ。この伏せカードを使うことのできる状況を。

「レモンで攻撃して素材全部引っぺがして……スカレで破壊。ただ、それだとこのターン中にダメージ通んねーんだよなあー。だから俺は、こういう手を使ってやるよ！最後の手札、地碎きを発動！このカードは相手の場で一番守備力の高いモンスターを破壊するカード、この効果でゼンマインの素材を一つ取り除いてやるぜ！」

空から巨大な握りこぶしが振り下ろされ、ゼンマインを殴りつける。その一撃に耐えながら、ゼンマインはユーノに対してもう一度領

いて見せる。ユーノもそれに対して覚悟を決めたように頷き返し、口を開いた。

「俺はゼンマインの効果でオーバーレイユニットを……使わねえ！ゼンマインはこれで破壊だ！」

「何!?!」

富野にとって、その行動はまったくの想定外。破壊耐性を使わなかったことで、ゼンマインが握りこぶしに押しつぶされて地面にクモの巣状の亀裂が走る。防御が無駄と知り、自分の負けを認め大人しく覚悟を決めたのか。だが、そういうことではない。ユーノはまた笑って見せた。実際、このターンに起きたすべての行動は彼の想定内だったのだ。

「そしてゼンマインが破壊されたことで、このリバーズカード、ヘイト・クレバスを発動！堕ちろ、スカーレット！」

「へ、ヘイト・クレバスだお!? スカーレット・ノヴァ・ドラゴンは効果破壊されないが……」

「わかってんだろ? 『墓地送り』にさせてもらうぜ！」

ヘイト・クレバス

通常罫

自分フィールド上に存在するモンスター1体が

相手のカードの効果によって破壊され墓地へ送られた時、

相手フィールド上に存在するモンスター1体を選択して墓地へ送り、

その元々の攻撃力分のダメージを相手ライフに与える。

これが彼の秘策。ゼンマインをさっさと除去してこのターンで決着をつけるためにレッド・デーモンズ・ドラゴンを呼び戻し、さらに除去カードまで使ってくることに賭けた逆転の一手だった。だが、まだデュエルは終わらない。

「まだだあー！リバーズカード、生贄の祭壇を発動！スカーレット・ノヴァ・ドラゴンをリリースし、攻撃力分のライフを回復する！墓地に送れなけりゃ、クレバスは空撃ち！ダメージは発生しないぜ！」

地面がパツクリと割れ、その中に落ちていくスカーレット・ノヴァ・

ドラゴン。だが完全に地中に呑みこまれる寸前、その姿が光になって富野の中に吸収された。

生贄の祭壇

通常罠

自分フィールド上のモンスター1体を選択して墓地に送る。

このモンスターの元々の攻撃力分のライフポイントを回復する。

富野 LP1500↓5000

「嘘だろ!？」

「惜しかったな、転生者!レッド・デーモンズ・ドラゴンで直接攻撃!灼熱のクリムゾン・ヘルフレア!」

レッド・デーモンズ・ドラゴン 攻3000↓清明(直接攻撃)

「くっそ、リバーズカードオープン!メタル・リフレクト・スライム!」  
「攻撃だ攻撃!しつこいんだよ、なんでさつさと潰されねえ!」

銀色に輝くスライムが両腕でプレス攻撃を受け流したが、代償としてあまりの高熱のためかその体がどろどろに溶けてしまった。

レッド・デーモンズ・ドラゴン 攻3000↓メタル・リフレクト・スライム 守3000

「守備全滅のデモン・メテオでどのみち破壊……でもなんとか耐えきった、か」

「くそ、ターンエンド」

ユーノ LP400 手札:1 モンスター:なし 魔法・罠:なし

富野 LP5000 手札:0 モンスター:レッド・デーモンズ・ドラゴン(攻) 魔法・罠:1(伏せ)

「俺のターン!参ったなこりゃ……まさかクレバスが防がれるとはな。でも、そうこなくっちゃ面白くないぜ!氷弾使いレイスを守備表示で召喚、ターンエンドだ。すまん、レイス」

氷弾使いレイス 守800

さつきのゼンマインと違い、このレイスには時間稼ぎとしての意味しかない。ヘイト・クレバスが防がれた以上、何とかして時間を稼ぐしか今の彼にできることはないのだ。もつとも、そんな態度はおくび

にも出さないのだが。

「俺のターン、ドロロー！くそ、なんでモンスターが来ねえんだよ！リ  
バースカード、紅蓮魔竜の壺を発動！カードを2枚ドロロー！」

紅蓮魔竜の壺

通常魔法

自分フィールド上に「レッド・デーモンズ・ドラゴン」が  
表側表示で存在する場合のみ発動する事ができる。

自分のデッキからカードを2枚ドロローする。

このカードを発動する場合、次の相手ターン終了時まで  
自分はモンスターを召喚・特殊召喚する事はできない。

ふう、と一息つくユーノ。少なくともこれで、さらにモンスターが  
出てくることはない。このターンでの敗北は免れたわけだ。

「そしてレッド・デーモンズ・ドラゴンでレイスに攻撃！灼熱のクリム  
ゾン・ヘルフレア！」

「アブソリュート・パワーフォースは使わんのか。……………熱っ！」

レッド・デーモンズ・ドラゴン 攻3000↓氷弾使いレイス 守  
800

「レイスはレベル4以上のモンスターとの戦闘では破壊されないけ  
ど」

「デモン・メテオ！」

レイスの姿が炎に包まれ、次の瞬間には破壊される。

「カードを3枚伏せてターンエンドだ。いい加減無駄な抵抗つてのは  
やめろよ畜生！」

ユーノ LP400 手札：1 モンスター：なし 魔法・罫：な  
し

富野 LP5000 手札：0 モンスター：レッド・デーモンズ・  
ドラゴン（攻） 魔法・罫：3（伏せ）

「ドロロー！よっしゃ、魔法カード、クロス・ソウル発動！レッド・デー  
モンズ・ドラゴンをリリースして、氷帝メビウスをアドバンス召喚！」

氷帝メビウス 攻2400

「さらにメビウスがアドバンス召喚に成功したことで、その特殊効果

発動！お前から見て右から2枚の伏せカードを破壊する、フリーズ・バースト！」

「なに、俺のミラフォ2段重ねが!？」

「ミラフォは仕事しねーからなー。クロソのデメリットで俺はバトルフェイズができんから、どうしようもなくターンエンドだ」

「エンドフェイズにカード発動、破滅へのクイック・ドロー！」

破滅へのクイック・ドロー

永続罠

お互いのプレイヤーはドローフェイズ開始時に手札が0枚だった場合、

通常のドローに加えてもう1枚ドローする事ができる。

このカードのコントローラーは自分のターンのエンドフェイズ毎に

700ライフポイントを払う。

この時にライフポイントが700未満だった場合、ライフポイントは0になる。

自分フィールド上に表側表示で存在するこのカードがフィールド上から離れた時、

自分は3000ポイントダメージを受ける。

「そして俺のターンが訪れる。クイック・ドローの効果で2枚ドロー！俺の場にモンスターがいなくて貴様の場にモンスターがいる時、サイバー・ドラゴンは手札から特殊召喚できる！」

サイバー・ドラゴン

効果モンスター

星5／光属性／機械族／攻2100／守1600

相手フィールド上にモンスターが存在し、

自分フィールド上にモンスターが存在しない場合、

このカードは手札から特殊召喚できる。

「そしてアステル・ドローンを通常召喚。アステル・ドローンは特殊効果により、エクシーズ召喚時のみレベル5として扱える！俺はレベル5扱いのドローンとレベル5のサイバー・ドラゴン2体でオーバーレ



イ！2体のモンスターで、オーバーレイ・ネットワークを構築！玩具の意思が一つになる時、新たな時代のネジが巻かれる。エクシーズ召喚、発条装攻ゼンマイオー！」

発条装攻ゼンマイオー

エクシーズ・効果モンスター

ランク5／風属性／機械族／攻2600／守1900

レベル5モンスター×2

1ターンに1度、このカードのエクシーズ素材を1つ取り除き、フィールド上にセットされたカード2枚を選択して発動できる。

選択したカードを破壊する。

「ヴォルカじゃないだけマシか……ちつくしよ、メビウスもすまん！ここは堪忍してくれ！」

「そしてアステル・ドローンもう一つの効果により、カードをドローする。ゆけ、ゼンマイオー！メビウスを破壊しろ！」

発条装攻ゼンマイオー 攻2600↓氷帝メビウス 攻2400

(破壊)

ユーノ LP400↓200

「そしてカードを1枚セットし、エンドフェイズにクイック・ドローの効果で700のライフを払う……ターンエンドだ」

富野 LP5000↓4300

ユーノ LP200 手札：0 モンスター：なし 魔法・罠：なし

富野 LP4300 手札：0 モンスター：発条装攻ゼンマイ

オー(攻) 魔法・罠：破滅へのクイック・ドロー、1(伏せ)

「俺のターン！ありがたいことにクイック・ドローの効果は俺も受けられるからな。カードを2枚ドロー！」

ゼンマイオーは高い攻撃力に加え、セットカードならなんでも破壊する能力を持つ。つまり、中途半端な防御策では何かする前に破壊されてしまうのだ。その、かなりギリギリの状況で引いた2枚のカードを見る。ありがたいことにどうやら彼のデッキは、まだ彼を負けさせる気などみじんもないようだ。

「俺は手札の、オイスターマイスターを召喚！カードをセットして、ターンエンド」

オイスターマイスター 守200

「いい加減にしろっての！クイック・ドロウの効果で2ドロウ、そしてゼンマイオーの効果！オーバーレイ・ユニットを一つ使うことで、俺の場の伏せカードとお前の伏せカードを破壊する！」

ゼンマイオーの体の周りをぐるぐる飛び回っていた2つの光の球のうち1つがゼンマイオーの胸に吸い込まれ、右腕のドリルとハサミ型のゼンマインにうりふたつの左腕がそれぞれ伏せカードめがけて飛んでいく。だが虚しいことに、その攻撃はどちらのカードにも当たらなかった。

「俺はその効果にチェインして、ブラック・アローを発動！これでゼンマイオーは貫通能力を得るぜ！」

ブラック・アロー

通常罠

自分フィールド上に表側表示で存在するモンスター1体を選択して発動する。

エンドフェイズ時まで、そのモンスターの攻撃力は500ポイントダウンし、

守備表示モンスターを攻撃した時、その守備力を攻撃力が超えていれば、

その数値だけ相手ライフに戦闘ダメージを与える。

選択したモンスターが戦闘によってモンスターを破壊し墓地へ送った時、

破壊したモンスターの元々の守備力分のダメージを相手ライフに与える。

「悪いが、俺もゼンマイオーの効果に合わせてカード発動！フィッシュチャーチャージでオイスターマイスターを弾丸にして、ゼンマイオーを破壊する！んでもって一枚ドロウ！」

フィッシュチャーチャージの発動に合わせてオイスターマイスターがフィールドを爆走してそのままの勢いでゼンマイオーにタックルを

仕掛けると、よろめいたゼンマイオーの体にちょうど戻ってきたドリルが突き刺さり、そのままオイスターマイスターを巻き込んで爆発する。そしてユーノの場には、いつも通りちよこんとたたずむ牡蠣が一つ。

フィッシャーチャージ

通常罠

自分フィールド上の魚族モンスター1体をリリースし、

フィールド上のカード1枚を選択して発動できる。

選択したカードを破壊し、デッキからカードを1枚ドロウする。

オイスタートークン 守0

「ぐぐぐ……もう抵抗すんなよ、この腐れ野郎があ！手札のクロック・リゾネーターを召喚して、オイスタートークン撃破！」

クロック・リゾネーター

チューナー（効果モンスター）

星3 / 地属性 / 悪魔族 / 攻1200 / 守 600

このカードがフィールド上に表側守備表示で存在する限り、

このカードは1ターンに1度だけ戦闘またはカードの効果では破壊されない。

クロック・リゾネーター 攻1200 ↓ オイスタートークン 守0

（破壊）

「700払ってターンエンド……なあ頼むぜ、いつまで俺にいらん手間かけさせるんだよ。さっさとサレンダーして消えちまえ」

富野 LP4300 ↓ 3600

ユーノ LP200 手札：1 モンスター：なし 魔法・罠：なし

富野 LP4300 手札：1 モンスター：クロック・リゾネー

ター（攻） 魔法・罠：破壊へのクイック・ドロウ

「消えちまえだあ？やなこったバカ。なぜなら、そのでかい面はこのターンで吹き飛ばしてやるからだ！クイック・ドロウの効果は使えないから普通にドロウ、死者蘇生を発動！甦れ、シーラカンス！」

先ほど富野が使いユーノをピンチに陥れた必殺の蘇生カードが、今

度はユーノのデッキの核となるモンスターを呼び寄せる。その効果を知っている富野が、体を固くした。

超古深海王シーラカンス

効果モンスター

星7／水属性／魚族／攻2800／守2200

1ターンに1度、手札を1枚捨てて発動できる。

デッキからレベル4以下の魚族モンスターを可能な限り特殊召喚する。

この効果で特殊召喚したモンスターは攻撃宣言できず、効果は無効化される。

また、フィールド上に表側表示で存在するこのカードが

カードの効果の対象になった時、

このカード以外の自分フィールド上の魚族モンスター1体をリリースする事で

その効果は無効にし破壊する。

「シーラカンスの効果はわかるよな？海王の咆哮がモンスター3体蘇生なら、こっちはモンスター4体展開だ！あえて言うなら、さしずめ深海王の咆哮ってところか？来い、竜宮の白タウナギ、ヒゲアンコウ、ハリマンボウ、ゼンマイシャーク！」

「く……そんな……！」

竜宮の白タウナギ 攻1700

ヒゲアンコウ 攻1500

ハリマンボウ 攻1500

ゼンマイシャーク 攻1500

「いくぜーレベル4の白タウナギ、ヒゲアンコウ、ゼンマイシャークでオーバーレイ！3体のモンスターでオーバーレイ・ネットワークを構築。七つの海を噛み砕く、最凶の牙が獲物を喰らう。エクシーズ召喚！やっちまえNo.32！海咬龍シャーク・ドレイク！」

三体のモンスターが光となって絡まり合い、先ほどのような爆発を起こす。そして魚の尾びれのような形のもが出てきたかと思うと、その姿が変形してこれまた凶悪な面構えのモンスターになった。そ

してこのカードを出した瞬間、ユーノの左手の甲に『32』と読める光が浮かび上がったのだが……当の本人はちよつと見ただけであやっぱりか、と思うのみだった。地縛神の痣だつて出てきたんだから、今更ナンバーズの刻印ごときで驚きはしないのだろう。

「シャーク・ドレイクでクロック・リゾネーターに攻撃！デプス・バイト！」

No. 32 海咬龍シャーク・ドレイク 攻2800↓クロック・リゾネーター 攻1200 (破壊)

富野 LP3600↓2000

「ぐああああっ！」

「シャーク・ドレイクの効果発動！モンスターを戦闘破壊した時、オーバレイ・ユニットを一つ使つてそのモンスターの攻撃力を1000下げた状態で特殊召喚！そしてこのターン、もう一度だけ攻撃ができるようになる。いいか富野サンよ、俺も清明も絶対お前らなんかに狩られたりなんてしねえからな！わかつたらさっさと帰れ、デプス・バイト2連打！」

クロック・リゾネーター 攻1200↓200

No. 32 海咬龍シャーク・ドレイク 攻2800↓クロック・

リゾネーター 攻200 (破壊)

富野 LP2000↓0

「はー、終わった終わった……おい富野サンよ、生きてるかー？」

デプス・バイトを受けて吹っ飛ばされたつきりピクリとも動かない富野を見てちよつと心配になってきたらしく、慌てた様子で声をかけるユーノ。幸い意識はあつたらしく、ポツリとつぶやくのが聞こえた。

「……………んで……………だよ……………」

「うん？」

「なんでなんだよ……………なんで、なんでお前らはそんなに普通に生きてられるんだよ……………」

「ふむ、なんか奥深そうな話だな。どれどれ、おにーさんに相談してみ？」

さすがに言わないかな、たダメもとで聞いてみたのだが、富野は返り討ちにあつたことがよほどシヨックなのか、抵抗もせずにするなり話し出した。自分ももとは転生者だつたこと、レッド・デーモンズ・ドラゴンの使い手<sup>シグナー</sup>としてジャックの代わりに5D<sup>5</sup>Sの世界に生まれたのに、なぜか原作通りに事が進まなかつたこと、他のシグナーたちが戦いの中で一人また一人と倒れていくというありえない展開を経ついに世界そのものが滅んでしまったこと。

「おいちよつと待て。さらつととんでもねー爆弾発言してくれちゃつたわけだけど、なんでそれが転生者狩りに繋がるんだよ」

「ああ、それは今から話すところだ。俺はその後もしばらく、一人ぼつちで守れなかつた世界をうろついていた。そこで、ある男にあつたんだ」

「ある男？」

「ああ、シルクハットにマントをつけた男が、いきなり俺の前に出てきたんだ。そりやあびつくりしたさ、もう人間どころか動物すら何一ついなくて、ビルの残骸とかから缶詰を持ち出しては食うだけの生活だつたんだからな。とりあえず新しい缶詰を開けて差し出したんだけど、それを無視して俺に聞いたんだよ。君はこんな結末に納得がいつてるかい、つてな。その時言われたセリフは全部覚えてるぜ。君という転生者がいなければ、この世界も原作通りのハッピーエンドで終われたはずだ。ああもちろん、君を責めるつもりはない。ある意味、これは不可抗力のようなものだ。だがもし、君がこの世界に対して責任を感じているなら、君と同じ過ちを繰り返す人を止める仕事を頼まれてくれないか。つてな」

「それが、転生者狩りつてわけか。転生者を潰して、原作通りに物事を進ませれば」

「ああ。そうすれば、世界が減ぶことは絶対にならないからな。だから、俺はもうあんなことになつた世界を見たくないからずっと戦つてきたつてのに……………」

ふー、とユーノは息をついた。どうやら自分が最初に思ってたよりも、話は大きなものらしい。シルクハットにマントの男？ 転生者狩り？ やれやれ、と思いつながら、東の空を見る。水平線の向こうから、朝日が昇ってくるのが見えたのだ。朝焼けを少し眺めてからもう一度富野の方を振り返ると、そこにはもう、誰もいなかった。

「んなっ……！ おい富野、テメーどこ行きやがった!？」

慌てて叫び、周囲を見回すユーノ。後ろからいつの間にか近づいてきた足音に気が付いて警戒しながら振り返ると、黒いシルクハットに黒いマントといういかにもな格好をした怪しい男が一人。

「お前か、さつき富野が話してた変な奴って？ お前らのせいでえらい迷惑だぜ」

ユーノの言葉は、質問ではなく確認。それと文句。並みの人間ならたまらず目をそらすような敵意をぶつけられてなお、怪人の歩みは止まらない。そのままユーノから5メートルほど離れた位置までまっすぐ歩いてきて、無言のまま全身をすっぽり包んでいたマントから手を出してデュエルディスクをセットする。

「…………話すつもりはさらさらない、か。いいぜ、どうせ授業受けるのは清明なんだから俺は遅刻の心配もねえ。一試合も二試合も同じことってもんよ」

そう言いつつ、自分もデュエルディスクを構える。その後何が起きたかは、誰も知らない。

## ターン24 青い瞳は何を見る

「ねーってばユーノ、こっち来てお風呂入ろうよー。あつたかいよー」  
『……………』

「どうなんだな、こっち来たのか？」

「ダメ。もう、一体どうしたんだろ」

僕らが今いるのは、校舎のはずれの方にある温泉の建物。正直こんなレジャー施設並みの風呂場を作るぐらいならレツド寮のごはんにつく沢庵をもう一切れぐらい増やしてほしい。とはいえ、楽しいことに変わりはない。朝起きた時からなんかユーノの元気がないから何かあったのかと思って気分晴らしに連れてきたんだけどやっぱりふさぎ込んだままで、お湯に入ろうともせず岩の上に座り込んでぼーつと遠くを見ている。腰にタオル巻いた格好でそんなこととして、寒くないんだらうか。正直、絵面がシニールすぎて反応に困るからやめてほしい。

この場の空気を変えようとしてか、それとも単に天然なのか。十代がお湯に潜って翔のタオルをひっpegし、それを翔がメガネに浮き輪というよくわからない装備でバシャバシャと追いかけるのをのんびり眺めていると、いつの間にか海パン姿の万丈目まで入ってきてもつとややこしいことになった。でも、ユーノはやっぱり無反応のままだ。なんかもやつとするなあ、よしこうしよう。

「ユーノっ！ちよつとこっち見て！」

『……………おう、ってぶあつ!!?』

呼びつけてこっちを向いた瞬間、狙い澄まして水鉄砲を食らわせる。ぶるぶると犬のように頭を振って水を払い、ようやくまともにこちらを向いてくれた。

『……………何すんだいきなり』

「ほらほら、そんないつぞやの天田みたいな喋り方になってないでこっち来る。ほらサッカーにチャクチャルさんもなんか言っただげて」  
そう言つて横を見ると、さっきまで横でぱちやぱちや遊んでいたシャーク・サッカーがふらふらと湯の中のある一点を目指して泳いで



いく後ろ姿が見えた。

「あ、あれ？何かあったの？」

なんとなく気になったので追いかけてみる。するといきなり、底に足がつかなくなった。ちよ、ここってどこも水深1メートルぐらいだと思っただけだ?!?そしてものすごい勢いで落ちて行っただ先には、なんだかずいぶん広い洞窟のような空間になっていた。……………どこここ。なんか服着てるし。デュエルディスク持つてるし。デツキもちゃんと入ってるし。

「安心しろ、オゾンより下だ」

「なんかもういろいろアバウトだよ……………ってあれ、ユーノいつの間に実体化できるようになったの」

そんな馬鹿話をしているうちに、どさりどさりと十代、翔、隼人、万丈目、おジャマ・イエロー、隼人……………じゃない、デス・コアラが落ちてきた。なぜかみんなも服を着た状態で。そして、そんな僕らに声をかけてきた人がいた。

「精霊に導かれしデュエリストとは、貴様達のことか」

最近このパターン多いな、なんで背後ばかり取られるんだろう、と思いつつ慌てて振り返ると、そこにいたのは銀色を基調としたスーツを着て、仮面をかぶって素顔を隠した怪しい男。腕にデュエルディスクのような何かをつけているところからいって、この人もデュエリストみたいだ。えっと、どっかでこの人見たことあるような……………。

「カイバーマン様！」

ああそうだ正義の味方カイバーマンだ、ありがとうおジャマ・イエロー。って、そうじゃなくて。

「いったい俺らをこんな所に連れてきて、どういうつもり？待てよ、もしかしてセブンスターズの！」

「ごちやごちや騒ぐな。デュエルをすればすべてわかる、貴様らは常々そうほざいているそうではないか」

……………貴様らって、その極論言ってるのは十代だけなんだけど

なあ。僕はいまだにカミューラのことサイコ・ショッカーのこともわからないしそんなもんわかりたくもないぞ。確かに、わかるようになった人も多いからあながち間違っただけは理解できた。ならば、とあ、とりあえずデュエルを売られたのだけは理解できた。ならば、とデュスクを起動させようとすると、カイバーマンはユーノの方を指差した。

「その貴様、何を悩んでいる。ひとつ教えてやろう、負け犬は自力で這い上がらん限り負け犬のままだ。俺は特に興味もないが、貴様らにも何が起きたのか見せてやろう。来い、ミラージュー！」

カイバーマンの声に応えて、さつきまで後ろの方からこっさり僕らの方をうかがっていたモンスターの1体、鏡を抱えたでっかい鳥が器用に飛んできた。

ミラージュー

通常モンスター

星4 / 光属性 / 鳥獣族 / 攻1100 / 守1400

手にする鏡から仲間を呼び出すことのできる鳥のけもの。

ミラージューの鏡の中を覗き込むと、そこには夜が写っていた。夜の森で、ユーノと……誰だこれ。シルクハットにマントを着たなかなかの怪人がデュエルを始めていた。とりあえずシルクハットマンと呼ぶことにする。あ、これ音声も入るのね。

『デュエル!!』

先攻を取ったのは、シルクハットマン。一体何が起きてるんだらう。

『私は魔法カード、闇の誘惑を発動。カードを2枚ドロし、ネクロフェイスを除外する。そしてネクロフェイスの効果で、お互いデッキトップのカードを5枚除外する』

闇の誘惑

通常魔法（制限カード）

デッキからカードを2枚ドロし、

その後手札の闇属性モンスター1体を選んでゲームから除外する。手札に闇属性モンスターが無い場合、手札を全て墓地へ送る。

ネクロフェイス

効果モンスター（制限カード）

星4／闇属性／アンデット族／攻1200／守1800

このカードが召喚に成功した時、

ゲームから除外されているカード全てをデッキに戻してシャッフルする。

このカードの攻撃力は、この効果でデッキに戻したカードの枚数×100ポイントアップする。

このカードがゲームから除外された時、

お互いはデッキの上からカードを5枚ゲームから除外する。

『カードを2枚伏せ、ターンエンドだ。さあ、何を恐れている？もつとも、これで私の勝ちは確定したかな』

『くっ………そうだな、俺の予想通りなら確かにお前の勝ちだ』

『その予想は多分正しいよ。えっと、この世界ではユーノ君、だったかな？』

『俺がドローする前に、一つ聞かせろや。なんでお前が最初つからでてこなかった？富野いらねーだろ明らかに』

『彼については少々期待はずれだったよ。と言うより、彼の行動は私にとつても予想外だった。君はまだエクストラデッキを使うつもりはなかったはずだし、それならまだ放っておいても大丈夫だったんだが。今私が出てきたのは、警告のためだ。まずないとは思うが、君のそのカード達はこれからも使わないように。今回はデュエル終了時に君が消滅するようなことはないし、意識が回復したら寮に戻ってもらって構わない。もう一度繰り返し、これは警告だからな』

エクストラデッキ？警告？富野って誰？等々疑問点たつぷりの映像がさつきから続いているけど、画面全体から漂ってくる異様な雰囲気呑まれて何も言えなかった。ただ、苦渋の表情でカードをドローするユーノがやたらと印象的だった。

『……………ドロー』

『スタンバイフェイスにトラップカードを発動。まずは異次元からの帰還だ。ライフを半分払い、封印されしエクゾディア、封印されし者

の右腕、左腕、右足、左足を特殊召喚する』

異次元からの帰還

通常罠（制限カード）

ライフポイントを半分払って発動できる。

ゲームから除外されている自分のモンスターを

可能な限り自分フィールド上に特殊召喚する。

この効果で特殊召喚したモンスターはエンドフェイズ時にゲームから除外される。

シルクハットマン（仮名） LP4000↓2000

封印されしエクゾディア 攻1000

封印されし者の右腕 攻200

封印されし者の左腕 攻200

封印されし者の右足 攻200

封印されし者の左足 攻200

『そして2枚目のカード、撤収命令を発動。怒りの業火、エクゾード・フレイム』

そして画面が真っ白になって、そこで再生は終わった。

撤収命令

通常罠

自分フィールド上に存在するモンスターを全て持ち主の手札に戻す。

「うわあ……………」

とりあえずこれが第一感想。普通にワンキルするんじゃないやなくて相手にカードを一回引かせてから何もさせずに倒すってあたりがまたいやらしい。そりゃこんなもん食らったら誰だって落ち込むよ。そんなことを考えていると、カイバーマンが口を開いた。

「ふん、つまらん勝負だ。こんなつまらん負けをいつまでも引きずっているような男では、俺のこのブルーアイズもがっかりするぞ」

そう言っただュエルディスクのてっぺんのカードを抜いてこっちに見せつけてくる。あのカードは！

ブルーアイズ・ホワイト・ドラゴン  
「青眼の白龍！」

「すっげえ、本物は初めてだ！」

僕らの反応を見てから、再びユーノの方にカイバーマンが向き直った。当然のごとくブルーアイズは掲げたままだけど、あんなポーズで腕は疲れないんだろうか。

「さあどうする？俺のブルーアイズをがっかりさせるなよ」

「……………わかった。そのデュエル、買おうじゃないか」

そうは言いながらも、まだちよつとためらい気味の態度が心に引っかけた。

「デュエル!!」

「先攻は俺だ、ドロロー！俺は手札からスター・ブラストを発動、1500のライフを払って手札のシーラカンスのレベルを7から4に下げる！そしてレベル4のシーラカンスを通常召喚だ」

スター・ブラスト

通常魔法

500の倍数のライフポイントを払って発動できる。

自分の手札または自分フィールド上に表側表示で存在するモンスター1体を選び、

そのモンスターのレベルをエンドフェイズ時まで、

払ったライフポイント500ポイントにつき1つ下げる。

ユーノ LP4000↓2500

超古深海王シーラカンス ☆7↓4

超古深海王シーラカンス

効果モンスター

星7／水属性／魚族／攻2800／守2200

1ターンに1度、手札を1枚捨てて発動できる。

デッキからレベル4以下の魚族モンスターを可能な限り特殊召喚

する。

この効果で特殊召喚したモンスターは攻撃宣言できず、効果は無効化される。

また、フィールド上に表側表示で存在するこのカードがカードの効果の対象になった時、

このカード以外の自分フィールド上の魚族モンスター1体をリリースする事で

その効果が無効にし破壊する。

「その効果発動、魚介王の咆哮。手札一枚捨てて、デッキからヒゲアンコウ、ハリマンボウ2体、オイスターマイスターを特殊召喚！」

「今日も飛ばしてるなあ」

「ああ、ユーノって引きがいいよな」

「………初手が最初のドロアあたりに融合が来ること前提でデッキ組んでるヒーローに言われたくないと思う」

ヒゲアンコウ 守1500

ハリマンボウ×2 守100

オイスターマイスター 守200

「まだ終わらねえぜ、フィールド魔法発動！ウォーターワールドの特殊効果で、俺の場のモンスターは防御を捨てて攻撃力を上げる！」

ウォーターワールド

フィールド魔法

フィールド上に表側表示で存在する水属性モンスターの攻撃力は500ポイントアップし、

守備力は400ポイントダウンする。

超古深海王シーラカンス 攻2800↓3300 守2200↓1800

ヒゲアンコウ 守1500↓1100 攻1500↓2000

ハリマンボウ×2 守100↓0 攻1500↓2000

オイスターマイスター 守200↓0 攻1600↓2100

それにしても、今日のユーノは一体何が狙いなんだろう。確かに、今呼び出してたモンスターたちの守備力はヒゲアンコウ以外お世辞

にも高くない。高くないけど、なにもウオーターワールドで0にする  
ことはないんじゃないか。

「ならば俺のターン！俺は手札の、正義の味方カイバーマンを通常召  
喚！」

「!?」

意気揚々と自分が印刷されたカードをデュエルディスクに置き、カ  
イバーマンを召喚するカイバーマン。いや、カイバーマンのカードを  
デッキに入れること自体は何もおかしくはないんだけど……なん  
かこう、分身の術を見てるような感じだ。あ、でも細かいところか  
ちよつと違うかも。

正義の味方 カイバーマン 攻200

「そしてカイバーマンの効果発動、このカードをリリースすることで  
あるモンスターを特殊召喚する」

「あるモンスターってまさか」

「ああ、海馬瀬戸の忠実なるしもべ！」

「見るがいい、そして慄くがいい。降臨せよ、青眼の白龍！」

カイバーマン（カード）が光に包まれ、その光の中から巨大な一匹  
のドラゴンがその姿を見せる。あれがソリットビジョンで見る生の  
ブルーアイズ……すつごい、初めて見た！

ブルーアイズ・ホワイト・ドラゴン  
青眼の白龍

通常モンスター

星8 / 光属性 / ドラゴン族 / 攻3000 / 守2500

高い攻撃力を誇る伝説のドラゴン。

どんな相手でも粉碎する、その破壊力は計り知れない。

ブルーアイズは守備力2500……あ、そうか。ユーノがウオー  
ターワールドを張ったのは展開したモンスターをどうこうするため  
じゃなくて、シーラカンスの攻撃力を3000以上にしてブルーアイ  
ズを攻撃表示で出させないためだったのか。

「攻撃力3300のシーラカンスで攻撃を防ぐつもりか？甘いな、手  
札から魔法カード、滅びの爆裂疾風弾を発動！このターンブルーアイ  
ズの攻撃を放棄することで、貴様の場のモンスターを全て破壊する

！」

強烈な光が弾けて、思わず目を閉じてしまう。光が収まって目を開けた時には、ユーノの場に残っているのは小さな牡蠣が一つだけだった。

「オイスターマイスターの効果によって、このカードが戦闘以外で場から墓地に行ったからオイスタートークンを特殊召喚するぜ。さらに2体のハリマンボウの効果で、ブルーアイズの攻撃力は合計1000ポイントダウンする」

オイスタートークン 守0 攻0↓500

青眼の白龍 攻3000↓2500↓2000

「ふうん、少しは考えているようだな。いいだろう、カードを1枚伏せてターンエンドだ」

ユーノ LP2500 手札：2 モンスター：オイスタートーク

ン(守) 魔法・罫：なし

カイバーマン LP4000 手札：2 モンスター：青眼の白龍

(守) 魔法・罫：1

「俺のターン、ドロ。オイスタートークンをリリースして、水属性のジョーズマンをアドバンス召喚だ」

「その召喚にトラップ発動、クローン複製！俺の場に貴様のジョーズマンの複製を呼び出してやる」

クローン複製

通常罫

相手がモンスターの召喚・反転召喚に成功した時に発動する事ができる。

フィールド上に表側表示で存在するそのモンスターの

元々の種族・属性・レベル・攻撃力・守備力を持つ

「クローントークン」1体を自分フィールド上に特殊召喚する。

そのモンスターが破壊され墓地へ送られた時、このトークンを破壊する。

ジョーズマン 攻2600↓3100 守1600↓1200

クローントークン 攻2600↓3100 守1600↓1200



「マジか……でも、ジョーズマンでブルーアイズに攻撃する！」

ジョーズマンが大きな右腕を叩きつけながらそこについている口でブルーアイズの体を噛みちぎった。そして相変わらずの謎爆発が起きたけど、もうツツコんだら負けな気がする。

ジョーズマン 攻3100↓青眼の白龍 守2500（破壊）

「ほう、俺のブルーアイズを倒したか」

「……………カードを2枚伏せる」

「ならば俺のターン！手札のマンジユ・ゴツドを召喚！このカードは召喚時にデッキの儀式魔法または儀式モンスター1枚をサーチできる。俺はこの効果により、白竜降臨を手札に加えるぞ。そして儀式魔法、白竜降臨を発動！場のマンジユ・ゴツドをリリースし、白竜の聖騎士を儀式召喚して効果発動！このカードをリリースし、デッキから2体目のブルーアイズを特殊召喚する！」

マンジユ・ゴツド 攻1400

ナイト・オウ・ホワイトドラゴン

白竜の聖騎士

儀式・効果モンスター

星4／光属性／ドラゴン族／攻1900／守1200

「白竜降臨」により降臨。

フィールドか手札から、レベルが4以上になるよう

カードを生け贄に捧げなければならない。

このカードが裏側守備表示のモンスターを攻撃した場合、

ダメージ計算を行わず裏側守備表示のままそのモンスターを破壊する。

また、このカードを生け贄に捧げる事で手札またはデッキから

「青眼の白龍」1体を特殊召喚する事ができる。

（そのターン「青眼の白龍」は攻撃できない。）

青眼の白龍 攻3000

「何とか倒したってのにもう2体目か……わかってるとはいえ冗談キツイな」

「なんだその弱気な態度は！貴様もその辺に転がっていた、ポンコツ

デュエリストと同じなのか。ブルーアイズをがっかりさせるな！だがせめてもの情けだ、この勝負のとどめはブルーアイズの手でさしてやる。まずはクローントークンでジョーズマンに攻撃！」

このままジョーズマン同士が相打ちになったら、がら空きになったところにブルーアイズの攻撃を受けてそのままユーノが負けてしまおうだろう。残る可能性はあの伏せカードしかない。しかないんだけど、ユーノの顔を見た瞬間に思った。あ、これ駄目ですわ。もしかして、いつもユーノが見るに見かねて交代してくるときの自分もこんなみじめつたらしい、負けムード出しまくりでやる気も何もあつたもんじゃない顔だったんだらうか。そう思ったらなんか我慢できなくなって、自然と口が動いていた。

「ユーノ！」

いきなり僕が叫んだせいで、その場にいる全員がこつちを見てきた。ちよつと気まずいけど、言い出した以上後に引くわけにはいかないのでよ。

「カイバーマンの言うとおりでよ、なんでこんなつまんない負けかたいつまでも引つ張ってうじうじしてんのさ。負けることなんてしよつちゆうだって笑ってたのはユーノじゃない、次行くぞ次ついても言ってるじゃない！なのになんで、なんでそのユーノが一回負けただけでこんなに落ち込んでるんだよ！僕にとってユーノは、他の誰よりも大きい一番の目標なんだ……僕と同じデッキを使ってるのに、毎回僕じゃ思いつかなかった逆転の一手を言い当ててくれる、そんな僕よりはるかに上にいる、いつか僕が必ずたどり着いてみせる場所にいるデュエリストなんだ！だから、そんな弱気にならないでよ！一回や二回負けたくらいでそんな顔されたら、僕は……僕はこれから、一体どうすればいいのさ！」

最初は煮え切らないユーノに喝を入れるだけのつもりだったのに言いながらだんだん感傷的な気分になってきて、最後ではボロボロと涙をこぼしながら喋っていた。皆がポカンとしてるのが見えたけど、そんなことに構ってるだけの余裕がない。

「ねえユーノ、いい加減元に戻ってまたいつもみたいに楽しくデュエ

ルしようよ。いつもの自信満々で凄く強いユーノになってさ。そして、僕が今度こそ勝つて見せるから。昨日も一昨日も3日前もその前もまたその前も勝てなかったけど、今日こそ負けないからさー！」  
「貴様の歩んできたデュエル道など、まだ入り口だ。世界には、まだ未知のデュエルがある。見えるはずだ、果てしなく続く戦いのロードが。なのに、貴様はここで立ち止まるのか！」  
「そう、だな」

僕とカイバーマンの激励を受けて、ゆつくりと口を開くユーノ。これでもまだくだらぬこと言うようなら、一発ぶん殴つてでも目を覚まさせてやる。そう思つて密かに拳を固めたのを知つてか知らずか、苦笑して頭をかいた。

「悪い、なんかずいぶん心配かけたみたいだな。………だいぶマシンな気分になつたぜ、清明。カイバーマン、俺はまだ立ち止まんないぜ！  
トラップ発動、安全地帯！この効果でジョーズマンは破壊されなくなる！」

安全地帯

永続罫

フィールド上に表側攻撃表示で存在するモンスター1体を選択して発動する。

選択したモンスターは相手の効果の対象にならず、  
戦闘及び相手の効果では破壊されない。

また、選択したモンスターは相手プレイヤーに直接攻撃する事はできない。

このカードがフィールド上に存在しなくなった時、そのモンスターを破壊する。

そのモンスターがフィールド上から離れた時このカードを破壊する。

0  
クローントークン 攻3100（破壊）↓ジョーズマン 攻310

そうだよ、僕が憧れて追いかけてるユーのはやっぱりこうじゃなくつちや。下見てるところなんてこつちが見たくない。

「ふうん、やっとその気になったか。まあ30点、と言ったところだな」

「よくわからんがそのテストは30点満点なんだろう？なら満点だ、問題ないぜ」

「減らず口を、俺はターンエンドだ。さあ、恐れずにかかって来い！」

ユーノ LP2500 手札：0 モンスター：ジョーズマン（攻・

安）魔法・罨：安全地帯（ジョ）、1（伏せ）

カイバーマン LP4000 手札：1 モンスター：青眼の白龍

（攻）魔法・罨：なし

場：ウォーターワールド

「俺のターン、ドロロー！ジョーズマンでブルーアイズに攻撃！」

ジョーズマン 攻3100↓青眼の白龍 攻3000（破壊）

カイバーマン LP4000↓3900

「やった、ついにカイバーマンのライフを削った！」

「やっぱりやればできるじゃないかユーノ。頑張れー！」

「俺はこれで、ターンエンドだ！」

「ドロロー！闇・道化師のペーテンを守備表示で召喚してターンエンドだ」

闇・道化師のペーテン 守1200

ユーノ LP2500 手札：1 モンスター：ジョーズマン（攻・

安）魔法・罨：安全地帯（ジョ）、1（伏せ）

カイバーマン LP3900 手札：1 モンスター：闇・道化師

のペーテン（守）魔法・罨：なし

場：ウォーターワールド

「俺のターン、ドロロー！んー……攻撃するうまみはない、か。カードをセツトしてターンエンドだ」

一瞬悩む様子を見せたが、なぜか攻撃をせずにターンを終了したユーノ。へんなの、僕ならとりあえず攻撃したのに。

「だからお前はそこ止まりのデユエリストなんだ」

「万丈目、それどーゆー意味？」

「闇・道化師のペーテンは墓地に送られた時、その手段を問わず自分を

除外することでデッキまたは手札から同名モンスターを特殊召喚できる効果を持っている。リミッター・ブレイクがスピード・ウオリアーを特殊召喚するのと似たようなものだ。恐らく、後続を呼ばれてデッキが圧縮されることを嫌ったんだろう」

うーん、なるほどねえ。やみくもに突っ込んでくだけじやダメダメだってことか。

「俺のターン、ドロー！何もせずこれでターンエンドだ」

……怪しいなあ。まあ、僕が心配してもしようがないんだけど。

ユーノ LP2500 手札：1 モンスター：ジョーズマン（攻・安） 魔法・罨：安全地帯（ジョ）、1（伏せ）

カイバーマン LP3900 手札：2 モンスター：闇・道化師のペーテン（守） 魔法・罨：なし

場：ウォーターワールド

「俺のターン！そろそろサイクロンが怖くなってきたから、ジョーズマンにや悪いがここで選手交代だ。マジックカード、浮上を発動！このカードは、俺の墓地からレベル3以下の水・魚・海竜族モンスター1体を表側守備表示で復活させる！俺が呼ぶのはオイスターマイスター！」

オイスターマイスター 守2000↓0 攻16000↓2100

「ふうん、そんな壁にもならん雑魚モンスターを呼んだところでどうする気だ？」

「慌てなさんなって。俺はジョーズマンとオイスターマイスターをリリースして、このカードをアドバンス召喚だ！来い、俺のブルーアイス……青氷の白夜龍！それとオイスタートークン！」

ブルーアイス・ホワイトナイト・ドラゴン  
青氷の白夜龍 攻30000↓3500 守25000↓2100

オイスタートークン 守0 攻0↓500

「ほう、ブルーアイズの偽物か。いいだろう、俺の本物のブルーアイズ  
の力で葬り去ってくれ」

「偽物？そりゃ心外だな、大事な切り札の一つに対して。とはいえ攻撃はしたくないな、カードを伏せてターンエンドにする」

「ドロー！貪欲で無欲な壺を発動、墓地のドラゴン族、白竜の聖騎士に天使族のマンジユ・ゴツド、戦士族であるこの俺自身、正義の味方カイバーマンをデッキに戻して2枚ドローをする！」

貪欲で無欲な壺

通常魔法

メインフェイズ1の開始時に自分の墓地から異なる種族のモンスター3体を選択して発動できる。

選択したモンスター3体をデッキに加えてシャッフルする。

その後、デッキからカードを2枚ドローする。

このカードを発動するターン、自分はバトルフェイズを行えない。

「まだ終わらなくて！手札からマジックカード、黙する死者を発動！俺の墓地のブルーアイズを特殊召喚する！」

黙する死者

通常魔法

自分の墓地に存在する通常モンスター1体を選択して発動する。選択したモンスターを表側守備表示で特殊召喚する。

この効果で特殊召喚したモンスターは

フィールド上に表側表示で存在する限り攻撃する事ができない。

青眼の白龍 守2500

「さらにもう一枚！墓地に眠るブルーアイズを特殊召喚！」

青眼の白龍 守2500

「魔法カード、融合を発動！3体のブルーアイズを融合することで、青眼の究極竜を召喚する！」

ブルーアイズ・アルティメット・ドラゴン

青眼の究極竜

融合モンスター

星12／光属性／ドラゴン族／攻4500／守3800

「青眼の白龍」＋「青眼の白龍」＋「青眼の白龍」

「貪欲で無欲な壺のデメリットにより、俺はバトルフェイズを行うことができない……カードをセットしてターンエンドだ」

ユーノ LP2500 手札1 モンスター：青氷の白夜龍（攻）、

オイスタートークン（守） 魔法・罠：2（伏せ）

カイバーマン LP3900 手札：0 モンスター：青眼の究極竜（攻）、闇・道化師のペーテン（守） 魔法・罠：1（伏せ）

場：ウォーターワールド

ユーノの状況はかなりマズイ。白夜龍は僕らのデッキで最高打点のモンスターだけど、それでも攻撃力はウォーターワールド込みで3500……4500のブルーアイズの前にはひとたまりもない。このターンで何かしないと、ジリ貧になるのは目に見えてる。

「俺のターン、ドロロー！カードをセットしてターンエンドだ！」

「ならば俺のターン！」

「この瞬間、たった今伏せた俺のカードを発動！フィツシャーチャージの効果でオイスタートークンをリリースして、ブルーアイズを破壊！」

フィツシャーチャージ

通常罠

自分フィールド上の魚族モンスター1体をリリースし、

フィールド上のカード1枚を選択して発動できる。

選択したカードを破壊し、デッキからカードを1枚ドロウする。

「甘いぞー！リバースカードオープン、神の宣告！ライフポイントを半分払うことで、そのカードの発動を無効にする！」

「!?融合解除じゃない、だど?」

ごろんと転がっていた牡蠣が弾丸のような勢いでブルーアイズに向かって突進していったが、その固い殻がドラゴンに命中する前にどこからともなくやって来た白髪のおじいさんのチョップを受けて爆ぜた。神様すげえ。

カイバーマン LP3900↓1950

「どうした、これで終わりか？魔法カード、カップ・オブ・エースを発動！コイントスを一度行い表が出れば俺が、裏が出れば貴様がカードを2枚ドロウする。……表！さらに俺は手札から装備魔法、巨大化を発動！俺のライフポイントが貴様を下回っていることで、ブルーアイズの攻撃力は倍となる！攻撃だ、アルティメット・バースト！」

青眼の究極竜 攻4500↓9000

「融合解除は絶対手札にあると思ってたんだけどな。つーか強欲な壺の代用品2枚目か。ええい、ポセイドン・ウエーブ発動、その攻撃を無効にする！俺のブルーアイズはドラゴン族だからダメージは通らないが、それでも攻撃を防ぐことはできるぜー」

ただでさえ大きいのにさらに体のサイズが倍になった三つ首の竜がそれぞれの口から一齐に放った三本のブレスが一つに混ざり合っ  
て青氷の白夜龍を飲み込もうとする寸前巨大な波が巻き起こり、分厚  
い水の壁が白夜龍を守ってくれた。なんとか首の皮一枚で繋がっ  
た、つてトコかな？なにしろ攻撃力9000なんだ、一撃でも喰らっ  
たらオーバークイル間違いなしだ。

「なかなか粘るな。俺はターンエンドだ」

ユーノ LP2500 手札：1 モンスター：青氷の白夜龍（攻）  
魔法・罠：1（伏せ）

カイバーマン LP1950 手札：1 モンスター：青眼の究極  
竜（攻・巨）、闇・道化師のペーテン（守） 魔法・罠：巨大化（青）

場：ウオーターワールド

「さあて、そろそろジリ貧が近づいてきましたかね、つと……：：：ドロ  
ー！伏せてあったサルベージを発動、攻撃力1500以下の水属性2体  
を墓地から手札に加える！さらに強欲なウツボを発動、手札の水属性  
2体をデッキに戻してカードを3枚ドロロー！俺が戻すのは当然、さっ  
き回収したハリマンボウとヒゲアンコウだ！」

サルベージからの強欲なウツボ……：：：僕のデッキにある、一番カー  
ドを引ける枚数が多いドロローコンボだ。サルベージで回収したモン  
スターを使つてウツボを発動すれば、コスト1枚で3枚のカードが引  
ける計算になる。いいぞ、3枚も引けばまだ何かできるかもしれない  
！

「カードを2枚セット。ターンエンドだ……！」

あれ？

「俺のターン、ドロロー！ブルーアイズで攻撃、アルティメット・バース  
ト！」

「待ちな、メインフェイズにトラップ発動！リビングデッドの呼び声



で、墓地の超古深海王シーラカンスを特殊召喚！そして俺の場にモンスターが特殊召喚されたことで、デイメンション・スライドは発動できさる！」

超古深海王シーラカンス 攻2800

デイメンション・スライド

通常罠

自分フィールド上にモンスターが特殊召喚された時に発動できる。  
相手フィールド上に表側表示で存在する

モンスター1体を選択してゲームから除外する。

その特殊召喚がエクシース召喚だった場合、

このカードはセットしたターンに発動できる。

一時はどうなるかと思っただけど流石はユーノだ、ちゃんとあの大型モンスターを攻略する方法を考えていたなんて。これでカイバーマンの場にはテーペン1体がいるだけ……ってあれれ？なんか増えてませんかドラゴンさん。

青眼の白龍×3 攻3000

「手札から速攻魔法、融合解除を発動した！これにより対象を失ったデイメンジョン・スライドは空振りとなり、俺の場には3体のブルーアイズが残される！」

「融合解除、たった今引いたのか……でも、それなら俺のブルーアイズの方が攻撃力は上だぜ！」

「わめくな！魔法カードサイコロンを発動、サイコロを一回振る！………出た目は5、リビングデッドとウォータワールドを破壊だ！ブルーアイズの偽物は、本物の手で葬ってくれるわ！」

サイコロン

速攻魔法

サイコロを1回振る。

2〜4の目が出た場合、フィールド上の魔法・罠カード1枚を破壊する。

5の目が出た場合、フィールド上の魔法・罠カード2枚を破壊する。

1または6の目が出た場合、自分は1000ポイントダメージを受

ける。

多分さっきのカップ・オブ・エースの時に引き当てたのであろうサイコロンが、周りの荒波を吹き飛ばしてフィールドをがらんとさせる。リビングデッドも破壊されたことでシーラカンスも再び倒れてしまい、場に残っているのは3対1で向かい合うドラゴンとしぶとく生き残っているペーテン一人になった。ペーテンの浮きっぷりがハンプないけど、さすが道化師というべきなんだろうか。

青氷の白夜龍 攻3500↓3000 守2100↓2500

「許せ、ブルーアイズ。だが、本物の力を見せてやれ！ブルーアイズで攻撃、滅びのバーストストリーム！」

「攻撃時に速攻魔法、収縮を発動。対象はもちろんブルーアイズだ！迎え撃つてやれ、孤高の冬色氷輪弾!!」

収縮

速攻魔法

フィールド上に表側表示で存在するモンスター1体を選択して発動する。

選択したモンスターの元々の攻撃力はエンドフェイズ時まで半分になる。

青眼の白龍 攻3000↓1500（破壊）↓青氷の白夜龍 攻3000

カイバーマン LP1950↓450

2体のドラゴンが真っ向からブレスを打ち合って、例のごとく爆発が巻き起こる。その砂煙の中から無傷で姿を見せた白夜龍に対し舌打ちをして、カイバーマンは連撃を仕掛ける。これで伏せカードも何も打ち止めなのに、ユーノはなんだか楽しそうだった。

「許せとは言わん。恨むなら俺を恨め、ブルーアイズ。もう一度攻撃だ、滅びのバーストストリーム！」

2体のドラゴンが弧を描くようにぐるぐると回りながら上昇していき、同時に放ったブレス攻撃が互いの体をとらえて両方とも灰になった。これでユーノの場はすっからかん、だけどカイバーマンの場にはまだ攻撃宣言をしていないブルーアイズ……と、ペーテン。ま

あペーテン守備表示だけど。

青眼の白龍 攻3000（破壊）↓青氷の白夜龍 攻3000（破壊）

「どーやら、これまでみたいだな。なあカイバーマンさんよ、またいつか、一手指南してもらえるか？」

「ふっ、考えておいてやろう。ブルーアイズでダイレクトアタック、滅びのバーストストリーム！」

青眼の白龍 攻3000↓ユーノ（直接攻撃）

ユーノ LP2500↓0

「じゃあカイバーマンさん、うちの馬鹿に喝を入れるのを手伝ってもらってありがとうございます」

「礼には及ばん。俺のブルーアイズを一度のデュエルであれば破壊したデュエリストは初めてだ」

あはは。ユーノ、ジョーズマン2回白夜龍2回の計4回も破壊してたからなあ。

「なあカイバーマン、今度は俺ともデュエルしてくれよー！」

十代がすっごいキラキラした目で頼み込んでたけど、さっきユーノが言われたのと同じく『考えてやろう』の一言で終わりになった。

「ところで、僕らはどうやって帰れば？」

「この世界はお前たちの世界とつながっている。目を閉じて強く念じてみる」

言われた通りに皆で目を閉じる。えーと、帰りたい帰りたい帰りたい………つと。ふわっと体が宙に浮き、上に向かって引つ張られるような感覚を感じる。最後に一言だけ、カイバーマンの声が聞こえた。

「いいか貴様ら、己がデュエルを、己がデツキを信じて進め！そこに記したロード、それがお前の未来となるのだ！」

「もぐもぐもぐ………ぷはーっ！あ、危なっ！今溺れるとこだったよ

絶対！」

『気をつけるアホ。そんなしょーもない理由で死にやがったらわざわざ生き返らせてくれたチャクチャルアに申し訳がたたんだらうが』

『全く、少しは自分の身もことも心配してほしい』

「あれ、チャクチャルさんいたの？」

『……………そう言われるだろうとは思っていたが、私は最初からいた。体が大きいから出てこれなかっただけだ』

いつの間にかすり寄ってきてきたシャーク・サッカーの頭をなでながらまだやいのやいのと言ってるチャクチャルさんとユーノの声を聞き流していると、訳もなく笑えてきた。ふふ、十代達も復活したみたいだしそろそろ帰ろうか。ユーノも元気になったみたいだし、今日の目的は十分果たせた。

## ターソン25 捨てられたモノと見捨てられた者

「狭い、狭い、狭すぎる！この寮は何をやるにも狭ーい！」  
「うるさーい！」

のんびり昼寝していたとある日の昼下がりに、いきなり隣の部屋で万丈目がわめく声が聞こえた。とりあえず安眠妨害の罰としてドア一枚開けて万丈目の部屋に入り込み、そのまま蹴りの一つでも喰らわせようとして……何か部屋そのものに違和感を感じた。おかしいな、僕や十代の部屋も狭いつちやその通りだけど、床が見えなくなるほどひどくはなかったはず。というかなんだこれ。……ふむ。

「おお、フカフカだ」

「あ、こちら！人のベッドで勝手に飛び跳ねるな！」

そこにおいてあったのは、どう見てもダブルサイズはある馬鹿でっかいベッドと部屋の端から端までいきわたるほど大きなソファー。ふと玄関を見ると、このバカデカグッズを運び込むためか扉が取り外されていた。でもこれ、扉を外しただけで通るようなサイズとは思えないんだけど。わざわざバラしてから入れたんだろうか。言えば手伝ってあげるのに、まったく意固地というかなんというか。と、そこに騒ぎを聞きつけたのか十代と翔がやって来た。

「おーい万丈目！お、なんか楽しそうだな！俺もやるぜ、それっ！」

「あ、僕にもスペース分けてくださいよアニキ」

「おい十代、どうせ言ったところで止めないのはわかっているからせめて靴を脱げ！」

ベッドでポンポンと飛び跳ねる僕がそんなに楽しそうに見えたのか、すぐに二人とも真似して飛び跳ねる。うわ、ちよ、いくらでっかいベッドでも4人は狭いって！

「そんな無理に入ってきたら……うわああっ!？」

無理矢理入ってきたせいでバランスが崩れ、3人そろってベッドから転がり落ちる。なぜか僕が一番下になったせいで2人分の体重がダイレクトにきて痛い。

「十代、一体何しに来たのさ……」

「そうそう、忘れるとこだった。万丈目、校長先生が呼んでるぜ。大事な話があるんだってよ」

「はあ?」

はて、なんだろう。まさか万丈目がこんなでつかいベッド運んだせいで壁ぶち抜いたことが今度こそばれたかな?……………とりあえずついてこう!下手に逃げると後でどーなるか分かったもんじやない!

「…………で、万丈目グループが来るわけかあ」

『そーだな』

ありがたいことについて素直に喜んでいいのかどうかわからないけど、とりあえずまだ改築の件はばれてないようによかったよかった。いやよくないけど。なんでも、この学校を『財界、政界、そしてカードゲーム界』が合言葉の万丈目グループが買収しようとしているらしい。このあいだ十代が万丈目に勝ったのがよっぽど悔しかったんだろうか。当然鮫島校長は抵抗。そこにこの学校のオーナーからの鶴の一声がかかり、万丈目グループ側が出した『お互いに代表者を選びデュエル、ただしアカデミア側は万丈目準を出してデッキのモンスターはすべて攻撃力500以下』という言ってて情けなくなってるのが不思議でしょうがないぐらいの条件を快諾。まあ、それだけの学校のことを評価してるってことなんだろう。というか、そうとも思わないとやってられん。

「でもさ、万丈目」

「なんだ」

「…………正直に答えて。攻撃力500以下のモンスター、何枚持つてる?」

「…………2枚」

わお。VWXYZといいアームド・ドラゴンといいどうもパワーデッキばかりだから嫌な予感はしてたんだけど、まさか2枚ですか。

「ち、ちなみに何と何？」

「貴様とのデュエルで使ったミンゲイドラゴンと、何回抜いても勝手にデツキに入ってくるこの雑魚だけだな」

『もー、そんなにオイラのことを雑魚雑魚言わないでよく。確かにオイラは攻撃力0だけど、オイラの兄弟と力を合わせればきつと強くなるから、だからお願い万丈目のアニキ、オイラの兄弟を探してよう』  
「おいーっす、おジャマ・イエロー」

『あらこんにちわ。ねえ清明のアニキにシャーク・サッカーの旦那も、オイラの兄弟のこと何か知らない？』

そう言つてこつちにすり寄ってくるおジャマ・イエロー。だけど、この会話ももう8回目ぐらいなんだよなあ。万丈目がいつまでたつても探し出さないから見てらんなくなつて結構いろいろと探してはいるんだけど、なにせ情報が少なすぎるんだよね。

「万丈目君、お困りかニヤー?」

「大徳寺先生?」

そこに声をかけてきたのが、我らが大徳寺先生。この人、いつも突然何の脈絡もなく出てくるんだもんなあ。

「いい話を教えてあげるのニヤ。実は、この学校の裏に……」

「ねえ万丈目、その井戸ってどこにあるんだろうね」

さつきから30分は歩いているのに、いつまでたつても森しか見えない。つくづく学校1つ立ってるだけにしちや広い敷地だよなあ、この学校。島一つ分あるんだから当たり前か。

「知らん!というかなぜお前たちがついてくるんだ!」

『説明しよう!俺らはいさつき、大徳寺先生からこの学校の涸れ井戸に弱小カードを捨てた馬鹿が何人もいる、という情報を手に入れた。万丈目は今、その場所を最後の可能性として歩いているのだ!そして俺らは、そこにさも当然のような顔をして面白そうなのでついていくのであった!』

「……ユーノ、誰と喋つてんのそんなハイテンションで」

「あ、私はもしワイトとかチュウボーンとかのカードが落ちてたら回収しようかと思つて、だつてさ」

「相変わらずこつちはこつちで全然ぶれないのね。だがそれがいい……おっと、なんでもないよ」

『お前もお前で最近変態度が入学当初に比べて増してきたな。まあ寮に男しかいないんだからそんなもんなのかもしれないが』

暇なときはひたすら途切れないように会話をつなげる。いつの間にか確立していた僕らの暇つぶしの黄金パターンです。お、なんか浮いてる。

『浮いてるな』

「飛んできますな」

そこにいたのは、白くて半透明でふわふわ飛び回つて、とにかくもと言つた感じの幽霊、のような何か。でも、特に緊張はない。何かあるならとつくの昔に霧の王やチャクチャルさんが黙つてないだろうし、特に害はないんだろう。多分。あ、気づかれた。

「突っ込んできた!?!うわ、や〜ら〜れ〜た〜………つてアレ?」

なんとこの幽霊、よほどしつげがなつてないのかいきなり突っ込んできた。反射的にギョツと目をつぶつて痛みを耐えようとしたけど、いつまでたつても痛くない。体を通り抜けた時にちよつとひんやりした感じがしたけど、ただそれだけ。

「痛みはない、な。恐らく、こいつらは攻撃力0のカードの亡霊なんだろう。目的地は近そうだ」

隣を見ると、万丈目も同じような幽霊にたかられてた。うーん、成仏させてあげたほうがいいんだろうか。まあでもやり方もわからなしいし、とりあえず放つておいて夏場に暑くてたまらなくなつたら体を通り抜けてもらおう。きつと涼しくなる。

「さつきから、いったい何が見えてるの?だつてさ」

精霊が見えないせいではまひとつ状況が呑み込めてないらしい夢想にたいして肩をすくめて見せ、僕たちはもう少し歩いてみることにした。

………そこから道を間違えて30分ほど無駄に歩き回り、結局井戸



が見つかったのはこの地点から徒歩1分の場所だったのは密に、密に。

「む、辛気臭い井戸だな」

「まあまあ。よし、降りるぞー！」

「おー！」

万一水がたまつてたらえらい事になるので、わざわざ持ってきた懐中電灯で照らしてみる。あ、カードがあっちにもこっちにも落ちてくる。やっぱり本当のネタだったんだ、カードを捨てる井戸。正直なところ、本当にカードを捨てる人がいるなんてまだ半信半疑だったんだよね。

そして三人とも降りて、とりあえず足元のカードを物色する。あ、これ攻撃力600あるや。もったいないから回収はするけど。そうやって拾い集めていくと、なにやら隅のほうで動く気配がした。

「ん？」

あれから一日。万丈目兄と万丈目の学園を賭けたデュエルとあって、全校生徒のほとんどが早いうちから詰めかけてきていた。ちよつと万丈目に用があつたせいで場所取りに遅れちゃったけど、立見席でいいから空いてる場所があるだろうか。

「お、清明。こつちだこつち！」

「ほら、こつちっスよ！三沢君が僕たちの分の席も確保しておいてくれたんだ！」

ラッキー。やっぱ、持つべきものは友達だね。感謝しながら席に着くと、十代に三沢に翔に隼人に夢想と、ブルー生特別席に座っている明日香とカイザーを除くいつものメンバーが揃っていた。昨日はあれだけ落ちてたカードの中にホワイトが一枚もなくて結構へこんでた夢想も、もうすっかり元気そうだ。

「ってあれ？夢想、あっちの席じゃなくていいの？僕が言うのもなんだけど男ばつかだよこっ」

『ホントにお前が言うのもなんだな。というか空気読んでさっさと爆

発しろ』

「……………ん。いいの、だつてさ」

「そ」

やった嬉しい。普段は察が違うからどうしてもレッドの皆より会う頻度は低くなつちやうから、こういうチャンスは無駄にしないようにしないと。……………まあどうせ僕のことだから座ってるだけしかできないだろうけどな！

『へタレ。ムツツリスケベ』

るっさいわ。

「お、始まるみたいだぜ！」

十代の言葉通り、ゆっくりとデュエル場の両脇の入場口からそれぞれ万丈目兄弟上から二人と我らがサンダーのほうの万丈目が出てきた。やったれー、万丈目ーっ！

「兄さん、デュエルの前に一つだけ言わせてもらう。兄さんは俺にハンデとして、デツキのモンスターを全て攻撃力500以下のものにするよう言つたな」

「ああ、言つたとも。それがどうした？今更条件を変えろとでも？」

落ち着いた雰囲気の方丈目にいらだちを感じたのか、どこかムキになったように突つかかる万丈目兄……………えーと、正司のほうだったけ。

『長作の方だぞ』

あ、ごめん万丈目兄。間違えた長作だった。

「フツ、まさか。俺が言いたいののは、俺が組んだこのデツキのモンスターの攻撃力はすべて0だということだ！」

「何!? 貴様、私のことを馬鹿にしているのか! もういい、始めるぞ！」

「デュエル！」

「先攻は私だ、ドロー! サファイアドラゴンを通常召喚する！」

当然サファイアの青いドラゴンが出てくる……………と思つたのもつかの間、なんかやたらとキラキラして虹色のオーラっぽい物が全身から立ち上つてる、サファイアというよりもプリズムサファイアドラゴンとでもいふべき何かが出てきた。とりあえず、僕の知ってるサファ

イアドラゴンと違う。というか長作さん、自分から攻撃力500以下って言いだしておいて万丈目が全部0宣言した瞬間怒るとかあんまりじゃないですかね。

『パラレルレアだな』

さっすが金の方で作ったって本人も認めるだけのことはある。いくらしたんだろう、あれ。

サファイアドラゴン 攻1900

「私はターンエンドだ。さあ準、お前の雑魚モンスターを見せてみる！」

「ドロー！俺の場にモンスターが存在せず相手の場にモンスターがいる時、このカードは手札から特殊召喚できる！来い、アンノウン・シンクロン！」

万丈目が出したのは、丸まった銀色のダンゴ虫に触角を付けたような見た目のモンスター。でもなんで攻撃表示？アドバンス召喚するから表示形式はどっちでもよかったとか？

アンノウン・シンクロン 攻0

「さらに手札から、ガンバラナイトを通常召喚！これも攻撃表示だ！」  
ガッチガチの鎧で全身を包み、さらに両腕に盾を装備した騎士が颯爽と地面に降り立つ。万丈目、いったい何を狙ってるんだろう。

ガンバラナイト 攻0

「カードを4枚セットし、ターンエンドだ」

そして攻撃力0のモンスター2体を特に何かすることなく、カードだけ伏せてターンを終える万丈目。1ターンで手札全部使い切っちゃったけど、あんなハイペースでいいんだろうか。まあ、こつちとしては万丈目を信じてるぐらいしかやることないんだけど。それに、あのデッキにはあのカードたちが入ってるんだ。きつと大丈夫。

長作 LP4000 手札：5 モンスター：サファイアドラゴン

(攻) 魔法・罫：なし

万丈目 LP4000 手札：0 モンスター：アンノウン・シン

クロン (攻)、ガンバラナイト (攻) 魔法・罫：4 (伏せ)

「私のターン、ドロー！手札の融合を発動、同じく手札のロード・オブ・

ドラゴン―ドラゴンの支配者―と神竜ラグナロクを融合！来い、竜魔人 キングドラグーン！」

案の定というかなんというか、パラレルレア仕様のキラキラした竜人がその巨体を見せる。

竜魔人 キングドラグーン

融合・効果モンスター

星7／闇属性／ドラゴン族／攻2400／守1100

「ロード・オブ・ドラゴン―ドラゴンの支配者―」＋「神竜 ラグナロク」

このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、

相手はドラゴン族モンスターを魔法・罠・モンスターの効果の対象にする事はできない。

1ターンに1度だけ、手札からドラゴン族モンスター1体を

自分フィールド上に特殊召喚することができる。

「さらにキングドラグーンの効果発動、ワンターンに一度手札のドラゴンを特殊召喚する！来い、ダイヤモンド・ドラゴン！」

当然パラレルレアの以下略。

ダイヤモンド・ドラゴン 攻2100

「さらにこのターン、私は通常召喚をしていない！ドラゴン・ウィッチ―ドラゴンの守護者を召喚！」

当然パラ以下略の、竜のオーラを纏った女性魔法使いが長作のドラゴンたちの前に半透明の壁を張る。ねえ、この人本当に初心者なわけ？

ドラゴン・ウィッチ―ドラゴンの守護者―

効果モンスター

星4／闇属性／魔法使い族／攻1500／守1100

このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、

自分フィールド上のドラゴン族モンスターを相手は攻撃対象に選  
択できない。

フィールド上のこのカードが戦闘またはカードの効果によって破  
壊される場合、

代わりに手札からドラゴン族モンスター1体を墓地へ送る事ができる。

『キングドラグーンである程度の効果耐性、ドラゴン・ウィッチで戦闘破壊耐性……まるでお手本みたいがいいコンボだな』

「バトルだ、キングドラグーンで……」

「待った、その前に伏せカードのうち3枚を発動、すべて捨て身の宝札だ！俺の場のアンノウン・シンクロンとガンバラナイトの攻撃力合計は0で、兄さんのドラゴン・ウィッチより低い！従ってカードを6枚ドロー！」

捨て身の宝札

通常罠

自分フィールド上に表側攻撃表示で存在するモンスター2体以上の攻撃力の合計が、

相手フィールド上に表側表示で存在する攻撃力が一番低いモンスターよりも低い場合、

自分のデッキからカードを2枚ドローする。

このカードを発動するターン、

自分はモンスターを召喚・反転召喚・特殊召喚する事ができず、表示形式を変更する事もできない。

万丈目が発動した3枚の同カード。条件が満たせるモンスターが手札にいたからよかったけど、これ一步間違えれば手札事故って言うレベルじゃないね。

「小癩なマネを！キングドラグーンでアンノウン・シンクロンを攻撃、トワイライト・バーン！」

キングドラグーンが杖から出した光線が、アンノウン・シンクロンのボディを一瞬で焼き尽くした。

竜魔人 キングドラグーン 攻2400↓アンノウン・シンクロン

攻0（破壊）

万丈目 LP4000↓1600

「さらに、サファイアドラゴンでガンバラナイトに攻撃！サファイア・スパーク！」

「ガンバラナイトの特殊効果！このカードが攻撃対象になった時、守備表示にすることが出来る！」

サファイアドラゴン 攻1900↓ガンバラナイト 攻0↓守1800（破壊）

「おのれ、無駄な抵抗を！ダイヤモンド・ドラゴンでとどめだ、ダイヤモンド・ブレス！」

「手札から速攻のかかしを捨てる！これで兄さんのバトルフェイズは終了だ！」

帽子を被ったかかしが万丈目の手札から飛び出し、ダイヤモンド・ドラゴンのブレスを黒こげになりながらもなんとか防ぎ切った。ふー、危なかった。

速攻のかかし

効果モンスター

星1／地属性／機械族／攻 0／守 0

相手モンスターの直接攻撃宣言時、このカードを手札から捨てて発動する。

その攻撃を無効にし、バトルフェイズを終了する。

「ええい、これでターンエンドだ！」

「俺のターン、ドロロー！……ほう、このカードか。モンスターをセツトして、カードを2枚伏せる。ターンエンドだ」

長作 LP4000 手札：1 モンスター：竜魔人 キングドラ  
グリーン（攻）、サファイアドラゴン（攻）、ダイヤモンド・ドラゴン（攻）、  
ドラゴン・ウィッチードラゴンの守護者―（攻） 魔法・罫：なし

万丈目 LP1600 手札：3 モンスター：??? 魔法・罫：3  
（伏せ）

「ならば私のターン！ちっ、いいモンスターがない。キングドラ  
グーンの効果で、ラブラドライドラゴンを守備表示で特殊召喚だ」

やっぱりパ以下略。幸いにも攻撃力は0のため守備表示での登場  
だったけど、万丈目のピンチには変わりない。

ラブラドライドラゴン

チューナー（通常モンスター）

星6／闇属性／ドラゴン族／攻 0／守2400

ラブラドレッツセンスと呼ばれる特有の美しい輝きを放つウロコを持ったドラゴン。

そのウロコから生まれる眩い輝きは、見た者の魂を導き、

感情を開放させる力を持つ。

——その光は前世の記憶を辿り、人々を巡り合わせると伝えられる。

「バトル！キングドラグーンでセットモンスターに攻撃、トワイライト・バーン！」

竜魔人 キングドラグーン 攻2100↓?? 守1900（破壊）

「ふはは、これでお前を守るモンスターはいなくなっただ！」

「まだまだ！今破壊されたモンスター、スノーマンイーターの効果発動！ドラゴン族モンスターはキングドラグーンの効果で対象にできないが、魔法使い族のドラゴン・ウィッチは別！ドラゴン・ウィッチを破壊する！」

スノーマンイーター

効果モンスター

星3／水属性／水族／攻 0／守1900

このカードがリバーズした時、

フィールド上に表側表示で存在するモンスター1体を選択して破壊する。

「やった、僕のモンスターだ！」

思わず叫んでしまう。そう、あれこそが僕が今朝万丈目に渡したものの。ふと、今朝の会話を思いだした。

（回想）

『万丈目ー、いるー？』

『清明！お前、何をしに来た！ここは選手控え室、立ち入り禁止のはずだ！』

『ゴメンゴメン、思ったより届くのが遅れちゃって。おかげで風邪ひくかと思っただよ』

『届く？遅れる？一体何の話だ』

『はいこれ。どういふことかは言わなくてもわかるよね?』

『このカードたちは……』

『じゃ、場所取りいなくなっちゃ。頑張れよー、万丈目』

『万丈目サンダーだ!………だがまあ、すまないな。礼を言うぞ』

『なーに、気にすんなつて。じゃあねー』

(終了)

という訳で今の万丈目のデッキには、ある5枚のカードが追加で入っている。そのうちの1枚が僕のスノーマンイーターなのだ。なにせゲイル入れたらデッキ枚数がオーバーしちゃって、使わないのにならずと持つてるよりはいつそちゃんと使ってくれの人にあげたほうがいいのかな、と。

「まだ私の場には攻撃宣言していない2体のドラゴンがいる! サファイアドラゴンで攻撃、サファイア・スパーク!」

「相手の直接攻撃宣言時、このカードは手札から特殊召喚できる! B F―熱風のギブリ、召喚!」

そしてあれが、僕が昨夜ノース校の鎧田に頼んで届けてもらった、サンダー四天王のカードの一枚。さすが鎧田、攻撃力500以下で使いやすいのをちょうだい、なんて無茶なお願いにもちゃんと答えてくれた。あとで『ギブリ使われたよー』って電話しとかなきゃな。

ブラックフェザー

B F―熱風のギブリ

効果モンスター

星3 / 闇属性 / 鳥獣族 / 攻 0 / 守1600

相手が直接攻撃を宣言した時、このカードを手札から特殊召喚する事ができる。

1ターンに1度、このカードの元々の攻撃力・守備力を

エンドフェイズ時まで入れ替える事ができる。

「かまわん、サファイアドラゴン! そのまま攻撃だ!」

サファイアドラゴン 攻1900 ↓ B F―熱風のギブリ 守16

00 (破壊)

「今度こそとどめだ! ダイヤモンド・ブレス!」

「トラップ発動、ヒーロー見参! 俺の手札は2枚………さあ兄さん、右



か左か選んでもらおう！」

「おお、俺のカードだ！」

そう言っってはしゃぐ十代。あれ、十代も僕と同じことしてたんだ。気づかなかった。

ヒーロー見参

通常罠

相手モンスターの攻撃宣言時に発動する事ができる。

自分の手札から相手はカードをランダムに1枚選択する。

選択したカードがモンスターカードだった場合、自分フィールド上に特殊召喚する。

違う場合は墓地へ送る。

「選ぶのは、右のカードだ！」

「右だな？ならば俺はこのカード、おもちや箱を特殊召喚！」

おもちや箱、か。あれは飯田のカードだ。飯田もきつと喜ぶだろうし、デュエルが終わったらちちゃんと伝えておこう。

おもちや箱 守0

「守備力0のモンスターに何ができる！ダイヤモンド・ドラゴンで破壊だ！」

ダイヤモンド・ドラゴン 攻2100↓おもちや箱 守0（破壊）

「この瞬間、おもちや箱の効果発動！このカードが破壊された時、デッキから攻撃力または守備力0の通常モンスターを2体表側守備表示で特殊召喚する！もつとも、俺のエンドフェイズには破壊されてしまおうがな。来い、魂虎！千眼の邪教神！」

ブレスを浴びて黒こげになったおもちや箱のリボンが解かれ、中から青白く燃える虎と体中に目がいっぱいいた変な奴が無傷で出てきた。

魂虎 ソウル・タイガー 守2100

千眼の邪教神 守0

「まだ粘るか！カードを伏せてターンエンドだ」

「俺のターン、ドロロー！トラップ発動、闇霊術―欲！俺の場の闇属性、千眼の邪教神をリリースすることで発動し、カードを2枚ドロース

る。ただし、兄さんの手札からトラップカードを見せればこの効果は無効になるがな。もつとも、手札がない今の状況で止めることはできない！」

「くっ！」

「2枚ドロロー。そして手札のジェスター・コンフィを特殊召喚する」

怪しげな小太りのピエロが、玉乗りとジャグリングを同時にこなしながらゆらゆらと不気味なリズムで万丈目の手札から飛び出してくる。なんかちよつと不気味。

ジェスター・コンフィ

効果モンスター

星1／闇属性／魔法使い族／攻 0／守 0

このカードは手札から表側攻撃表示で特殊召喚できる。

この方法で特殊召喚した場合、次の相手のエンドフェイズ時に

相手フィールド上に表側表示で存在するモンスター1体を選択し、

そのモンスターと表側表示のこのカードを持ち主の手札に戻す。

「ジェスター・コンフィ」は自分フィールド上に1体しか表側表示で存在できない。

「さらにジェスター・コンフィと魂虎をリリースし、破壊竜ガンドラを召喚！」

禍々しい黒と赤の竜が、万丈目兄のドラゴン軍団相手に一步もひるまず咆哮をあげる。よし、これなら一発逆転だ！

破壊竜ガンドラ

効果モンスター

星8／闇属性／ドラゴン族／攻 0／守 0

このカードは特殊召喚できない。

自分のメインフェイズ時にライフポイントを半分払う事で、

このカード以外のフィールド上に存在するカードを全て破壊しゲームから除外する。

さらに、この効果で破壊したカード1枚につき、

このカードの攻撃力は300ポイントアップする。

このカードが召喚・反転召喚したターンのエンドフェイズ時、この

カードを墓地へ送る。

「ガンドラの効果発動、デストロイ・ギガ・レイズ！」

万丈目 LP1600↓800

「残念だったな、準・トラップ発動、ブレイクスルー・スキル！これでガンドラの効果は無効、攻撃力0のでくの坊だ！」

「何!？」

ブレイクスルー・スキル

通常罫

相手フィールド上の効果モンスター1体を選択して発動できる。

選択した相手モンスターの効果をターン終了時まで無効にする。

また、墓地のこのカードをゲームから除外する事で、

相手フィールド上の効果モンスター1体を選択し、

その効果をターン終了時まで無効にする。

この効果はこのカードが墓地へ送られたターンには発動できず、

自分のターンにのみ発動できる。

それにしても、このタイミングでブレイクスルー・スキルか……

状況はだいぶキツイ。頼むよ、万丈目。僕らの生活もかかっているんだ。

「くっ……強欲なカケラを発動、ターンエンドだ。そしてエンドフェイス時、ガンドラは自身の効果で墓地に送られるはずだがそれできないな」

強欲なカケラ

永続魔法

自分のドローフフェイス時に通常のドロローをする度に、

このカードに強欲カウンターを1つ置く。

強欲カウンターが2つ以上乗っているこのカードを墓地へ送る事で、

自分のデッキからカードを2枚ドロローする。

長作 LP4000 手札：0 モンスター：竜魔人 キングドラ

グリーン(攻)、サファイアドラゴン(攻)、ダイヤモンドドラゴン(攻)、

ラブラドライドラゴン(守) 魔法・罫：なし

万丈目 LP800 手札：1 モンスター：なし 魔法・罫：強  
欲なカケラ（0）、1（伏せ）

「私のターン、ドロロー！アレキサンドライドラゴンを通常召喚する」  
アレキサンドライドラゴン 攻2000

当然以下略。だから全員プリズム加工するのは止めてくださいモンスターのカラリングが変わらないからいい加減わけわかんなくなってきたぞ。

「そして全モンスターで一斉攻撃！準のライフをゼロにしろ！」

「攻撃宣言時にトラップカード、攻撃の無敵化を発動！ふたつ目の効果を選択し、このターン俺の受けるダメージは0になる！ただしガンドラは破壊されるがな」

攻撃の無敵化  
通常罫

バトルフェイズ時にのみ、以下の効果から1つを選択して発動できる。

●フィールド上のモンスター1体を選択して発動できる。

選択したモンスターはこのバトルフェイズ中、戦闘及びカードの効果では破壊されない。

●このバトルフェイズ中、自分への戦闘ダメージは0になる。

竜魔人 キングドラグリーン 攻2400↓破壊竜ガンドラ 攻0  
（破壊）

「いい加減にしろ、見苦しいぞ準！ターンエンドだ！」

「なんとも言うってくれ、兄さん！ドロロー、ゼロ・ガードナーを攻撃表示で召喚、さらに永続魔法ゼロゼロロックを発動！」

ゼロ・ガードナー 攻0

ゼロゼロロック

永続魔法

このカードがフィールド上に存在する限り、

相手は表側攻撃表示で存在する攻撃力0のモンスターを攻撃対象に選択できない。

ゼロ・ガードナーは天田のカードで、ゼロゼロロックは酒田のカード。

なんでも天田いわく、ゼロ・ガードナーは見てるうちに料理を乗つけるプレートに見えてきたから投入とのこと。そんなこと言い出したらもうなんでもありな気がする。受け取った時にふと気になってなんで酒田のカードがファントム・オブ・カオスじゃなくてゼロゼロツクなのかと聞いてみると、ファンカスはきっかり3枚しか持っていないから送れない、すいませんサンダー決して恩義を忘れたわけじゃありません俺のことを許してくださいって言うておいてくれって電話の向こうで本気で泣いてた。でも酒田、ファンカスのせめてもの代わりについて送ってくれたカードのおかげで万丈目はもうちよつと戦えそうだ。人生、何が幸いするかわかんないもんだねー。

長作 LP4000 手札：0 モンスター：竜魔人 キングドラ  
グリーン(攻)、サファイアドラゴン(攻)、ダイヤモンドドラゴン(攻)、  
ラブラドライドラゴン(守)、アレキサンドライドラゴン(攻) 魔法・  
罫：なし

万丈目 LP950 手札：0 モンスター：ゼロ・ガードナー(攻)  
魔法・罫：強欲なカケラ(1)、ゼロゼロツク  
「まあいい、ゼロゼロツクを破壊するカードを引くまでのことだ。ドローして成金ゴブリンを発動、私がカードを引く代わりにお前のライフを1000回復させる。ラブラドライドラゴンをリリースしてエメラルド・ドラゴンを召喚、ターンエンドだ」

万丈目 LP8000↓1800  
エメラルド・ドラゴン 攻2400

当然以下略。これまでの宝石竜にも言えるけど、こんなプリズム加工されてたらエメラルドでも何でもないと思う。

「ドロー、強欲カウンターが2つあったカケラの効果によりもう2枚ドローする。ターンエンドだ」

長作 LP4000 手札：0 モンスター：竜魔人 キングドラ  
グリーン(攻)、サファイアドラゴン(攻)、ダイヤモンドドラゴン(攻)、  
エメラルド・ドラゴン(攻)、アレキサンドライドラゴン(攻) 魔法・  
罫：なし

万丈目 LP1800 手札：3 モンスター：ゼロ・ガードナー

(攻) 魔法・罨：ゼロゼロツク

「私のターン、ドロロー！ついに来たぞ、魔法カード大嵐を発動！わざわざゼロゼロツク1枚のためにこれを使うのも贅沢な話だが、これで私の勝ちだ！」

ゼロ・ガードナーの前にできていた半透明のブロックが組み合わせさせた壁が吹き飛ばされていき、万丈目の場は実質がら空きになってしまった。……………なんてね。

「ゼロ・ガードナーの効果発動！このカードをリリースし、このターンの戦闘ダメージを0にする！」

ゼロ・ガードナー

効果モンスター

星4 / 地属性 / 戦士族 / 攻 0 / 守 0

このカードをリリースして発動する。

このターン自分のモンスターは戦闘では破壊されず、

相手モンスターとの戦闘によって発生する自分への戦闘ダメージは0になる。

この効果は相手ターンでも発動する事ができる。

ふっふっふ、なんてったってあのカードを万丈目に渡したのは僕だからね、当然ゼロ・ガードナーの効果だってわかってるわけさ。

「ブレイクスルー・スキルの効果を発動！墓地のこのカードを除外し、ゼロ・ガードナーの効果を無効に……………！」

「その行動は俺の読み通りだぜ兄さん。だが、自分のデュエルディスクを確認してみな！」

そう言われた万丈目兄が素直に自分のデュエルディスクに目を落とすと、そこには赤いバツ印……………つまりはエラーが示されていた。

「馬鹿な、今は私のターンだから問題なく発動できるはずでは……………！」  
「ゼロ・ガードナーは兄さんがブレイクスルー・スキルを使ったタイミングではもうとつくりリリース済みでフィールド上にはいない、つまりゼロ・ガードナーの効果は有効になる！」

「何い!?!」

あ、出た。いまだに何言ってるのか今一つよくわかんない細かいとこのルール。これホントややこしいんだよなあ……。

「さあ、ターンエンドか兄さん」

「そうだ。だが、これで今度こそお前を守るカードは無くなった。次のターンが最後だ！」

「それはどうか？ドロー！魔の試着部屋を発動、800のライフを払ってデッキのカードを4枚めぐり、レベル3以下の通常モンスターを特殊召喚する！一枚目、おジャマ・イエロー！二枚目、おジャマ・グリーン！三枚目、おジャマ・ブラック！四枚目、キャッスル・ゲート……はレベル6の効果モンスターだからデッキに戻す。来い、雑魚ども！」

万丈目 LP1800↓1000

魔の試着部屋のカーテンが開き、そこからイエロー、グリーン、ブラックの昨日井戸の中でついに再会を果たしたおジャマ3兄弟が飛び出してきた。

『『ぶつも〜』』

おジャマ・イエロー 攻0

おジャマ・グリーン 攻0

おジャマ・ブラック 攻0

「何かと思えば、そんな雑魚モンスターか。3体のモンスターを出したのは褒めてやるが、攻撃表示の壁にもならん雑魚モンスターに私の光り輝くモンスターの攻撃を止められるものか！」

「こいつらを馬鹿にすることは、俺が許さん！確かにこいつらは攻撃力0で、見てくれも性格も間違いなく最悪！だが、俺はこいつらに教えてもらった！」

はて、なにかあの4人(?)で喋ってたっけ。ゆうべはこっちの部屋にも入ってきた、大量につれてきたカードの精霊とちよつと寝た後でサンダー四天王のカードを乗せた船が到着するまでトランプやったりして遊んでたから、万丈目の部屋で何があったかはよくわかんないけど。

『兄弟のきずなをさー！』

『力を合わせれば！』

『なんだってできるってことを！』

おお、ずいぶんいい話。そうか、ずいぶん深いことを……………

「下には下がいるということを!!こいつらに比べたら俺なんて、全然マシだ！見せてやるぞ、落ちこぼれの意地を！マジックカード発動、おジャマ・デルタハリケーン!!」

うん、まあ、それで元気になったんならそれでいいと思うんだけどさあ……………なんかなあ。それはともかくとして、一度はずっこけた3体のおジャマが気を取り直して輪になって飛び上がり、ものすごい勢いで回転しながら万丈目兄のドラゴン軍団の周りを取り囲む。するとなぜかドラゴン軍団が苦しみだし、なぜか全員爆発した。どーなってるのこれ。ただ、最後に見せたすつごく嫌そうな顔が印象的だった。

おジャマ・デルタハリケーン!!

通常魔法

自分フィールド上に「おジャマ・グリーン」「おジャマ・イエロー」「おジャマ・ブラック」が表側表示で存在する場合に発動する事ができる。

相手フィールド上に存在するカードを全て破壊する。

「馬鹿な！」

「攻撃力0の役目は終わりだ！魔法カード、サンダー・クラッシュユ！」  
フィールドに現れたソリッドビジョンのサンダー・クラッシュユのカードを見て、おジャマ三兄弟が丁寧に効果の音読を始めた。それによると、自分の場のモンスターを全破壊してその数×300ポイントのダメージを与えるらしい。

『『『そ、そんな〜！』』』

……………かわいそうな奴ら。

長作 LP4000↓3100

「だが、まだ俺の有利に変わりはない！」

「忘れたのか兄さん、俺はこのターン、まだ通常召喚をしていないことを！カオス・ネクロマンサー召喚！このカードの攻撃力も元々は0だ



が、自身の効果により俺の墓地のモンスター1体につき300ポイントずつアップする！」

確かこのデュエルで万丈目が使ったカードはアンノウン・シンクロンにガンバラナイトに速攻のかかし、スノーマンイーターに熱風のギリにおもちや箱とそこから出てきた魂虎に千眼の邪教神、ジェスター・コンフィに破壊竜ガンドラとゼロ・ガードナー、そしておジャマ三兄弟の計14体。ってことはつまり………えーと？

『遅い。4200だな』

カオス・ネクロマンサー 攻0↓4200

「攻撃力4200だど!?!」

「これで終わりだ、兄さん！カオス・ネクロマンサーで攻撃、ネクロ・パペットシヨール！」

カオス・ネクロマンサー 攻4200↓長作（直接攻撃）

長作 LP3100↓0

「万丈目が勝った！」

そう言つて皆で騒いでいると、万丈目がビシツ！と天を指した。

「俺の名は………一！」

なるほど、例のアレね！いいよ、もちろん呼ぶよ！

「二十!!」

「二百!!!」

「二千!!!!」

ここでぐつ、と一呼吸おいてから、大きく息を吸い込んで万丈目は声を上げた。

「万丈目……サンダー!!」

そしてサンダー！サンダー！とその場にいた全員でコールする中、どこか満足げな顔をして万丈目兄弟は静かに立ち去って行った。後日アカデミア買収計画は白紙になり、またほんの少しの間だけ日常生活が戻ってきた。めでたしめでたし。

## ターン26 今週のビツクリドツキリ：

「ねー十代ー、今ヒマ？」

「いや、今日は翔と隼人と万丈目と釣り競争する約束してるぞ。どうしたんだ？」

ある休日の午後、どうしても気になることがあったから十代の部屋につながってる扉を軽く蹴り開けて声をかけてみる。というか十代、そんな予定初耳なんだけどなんで僕も誘ってくんないのさちよつと寂しいじゃん。

「悪い、今朝聞こうと思ったんだけどよく寝てたからさ。別に構わないから一緒に行こうぜ！」

「うーん、自分から話振つといてこんなこと言うのもなんだけど、今日はちよつとやつときたいことがあるから。暗くなる前には帰ってくるからー！」

『面白そうだな、俺も付いてくぞ。というかどうせ俺が釣りに行ったところで竿が持てん』

よっこらせ、と立ち上がって靴をはく。さーて、うまく入れるといいけどなつと。

『ところで、どこに行くつもりなんだ？』

「特待寮」

『……………は？』

大体10分後、僕らは前にも一度入った特待生用の廃寮の前にいた。いやー懐かしいな、十代達と扉を2〜3枚引っぺがしに来た時以來だ。あのときはお世話になりました。

『んで、また来たわけだが。入る算段はついてるんだろうな』

怪しむような声で疑問を投げかけるユーノだが、その疑問はもつともだと思う。一回タイタンと偽闇のデュエルをした時にあっさり入れちゃったのが問題になったせいでバリケードが強化されて、前来た時は中に押し入るのにとんでもなく苦労したからなあ。でも、今は大

丈夫なんだよね。

「チャクチャルさん、よろしくっ！」

『了承した。存分にやってくれ』

腰に付けたデツキケースに声をかけて、ダークシグナーの能力を全開放する。啞然とした表情のユーノを放っておいて、自分の腕に紫色の痣が浮かび上がってくるのを眺める。たぶん、目もそろそろ白目の部分が真っ黒になって黒目の部分に紫色が出てきただろう。

「……………よし、完璧」

『うむ』

満足げに頷く僕とチャクチャルさんとは対照的に、呆れてものも言えない、といった様子で佇むユーノ。どうしたんだろう、急に。そう思いながらも、誰かに見つかったらやばいなんてもんじや済まないのであんまりのんびりはしてられない。ということで、ダークシグナーの身体能力を生かして高さ3メートルぐらいの柵をひよいつとジャンプして飛び越えた。おお、体が軽い。ちらつと後ろを振り返ると、幽霊だけができる特権のリアル壁抜けをしてユーノが敷地の中に入ってきた。

『んで、お前ら。これはどういうこった？』

呆れてものも言えんわ、と言いたげな表情のユーノの第一声がこれ。まったく、もうちよつと気のきいたことは言えないもんなのかね。

「何って言われても、ダークシグナーの能力・応用編だけど。別名身体能力底上げ法」

『うむ』

『うむじゃねえよその自爆神。フィールド魔法たたき割るぞコラ』

「まあまあ、別にチャクチャルさんだって悪気があつて僕をダークシグナーにしたわけじゃないし」

『うるせこの駄ークシグナー。もうちよいそれっぽいことに能力使えるようになって出直してこい』

「……………精霊実体化っ！出てきてブリザード・ファルコン！」

『うわちよ、やめれ！つつくなトリ！ってかなんでお前は俺に触れる

んだ、やっぱり精霊だからか?.....あ痛つ!」

わーわー騒いでるユーノの声が万一精霊の見える人に聞かれたりしたらいろいろめんどくさいことになりそうなので、ブリザード・ファルコンに戻っておいで、と声をかけてきつさと建物の中に入る。前に来た時と同じで、誰も使っていないにしては妙に滑らかに動く扉だった。

「えーつと、確か前に来たときはこっちにあったと思ったんだけど.....」

『それよりそろそろ教えてくれよ。俺らはいったい何しにここまで来たんだ?』

「あれ、まだ言ってなかったつけ。ちよつと欲しくなったものがあってね。前ここに来たときチラツと見たのを思い出して」

そこまで言った時、コツ、コツ、と足音が聞こえた。冷や汗がタラリ、と頬を伝うのを感じたけど、それをぬぐってるほどの余裕はない。え、ちよつと待って。なんで今ここに人がいるの!? 十代にも結局行先は教えてないのに、なんでこの場所に!? とりあえず逃げて隠れなきゃ、そう思ってたゆっくりと後ろを振り返った瞬間、オベリスクリューの制服を着て、丸メガネをかけたいかにも頭のいい優等生という感じの生徒と目が合った。.....嘘、いつの間後ろをとられたんだろう。まるで気づかなかつただけどどゆこと。

「えつと.....」

先に話しかけてきたのは向こうだった。その声を聞いた瞬間、自分のすべきことを思い出す。すなわち、

「後ろを向いて全速全身っ!」

「え、ちよつと君!」

慌てて追いかけてきたけど、無視! ダークシグナーの身体能力があれば、バイクより速く走ることだってできる!

『それ違う人だな』

「ぜー、ぜー.....(汗)ど(汗)ど!」

あれから10分ほど脇目もふらずに走り続け、ふと気づいたら一回も通ったことのない長い廊下にいた。足元の赤いカーペットにはたつぷりと埃が積もっていて僕の足跡がはつきり見えるけど、さすがにあれだけ走ったら追いつかれるまでにはまだまだかかるだろう。

「あ、いたー！おーい、待ってよ君！」

えっ。恐る恐る振り返ると、足音を立てずに走ってくる例のブルー生の姿が見えた。あれ、これ人生詰んだ？

「待ってー！せっかく久しぶりに人に会えたんだから、せめて話だけでも聞いてっつてー！」

『ん？なにかしら聞いたほうがよさそうじゃねーかこれ。もしかしたら吹雪みたく帰ってきたあの人コースかもしれないぞ』

そっか。確かにここは行方不明者の出た廃寮、ダークネスになつた吹雪さんの例もあることだし絶対違う、とは言い切れないか。

「じゃ、じゃあ少しだけ……」

「ホント!?よかったー！それじゃあまず、君の名前は？ほら、いつまでも君ってだけじゃ話するのも不便でしょ？ちなみに自分は稲石いないしっていうんだ。よろしく！」

久しぶりに人と話をする（本人談）からか妙にハイテンションな稲石……先輩？の話をざつとまとめていると、どうもこの人は吹雪さんよりももう一つ上の学年の人らしい。吹雪さんはその年の新入生の中でもカイザー、そして藤原さんとかいう人と並んでトップクラスの強さを誇る人だったから印象に残っていたそうだ。どうでもいいけど吹雪さん、その頃は獣戦士デツキの使い手だったらしい。ちよつと意外。稲石さんのことに話を戻すと、ある夜に地下が騒がしいから様子を見に行ってみたら不思議な光に包まれて、ふと気づいたら埃まっけの廊下に倒れてて僕を見つけたから近寄ったらしい。

「……ねえユーノ、これあなたの時代から数年経つてますよつて教えただほうがいいのかな」

『うーん、まあ黙っててもすぐにばれるだろうな。遅かれ早かれならまだ今のうちに教えてやるのが優しさってもんじゃねーか？』

『（それはわかってるんだけど、でもやっぱり言いくいなあ）』

ぼそぼそと稲石さんに聞こえないように後ろのユーノと作戦会議してると、本人が不安げに声をかけてきた。

「ねえ遊野君、どうしたんだいさつきから？まさか、自分が嘘ついてるって思ってる？確かに自分だっていまだに信じられないけど、全部本当のことなんだ！」

「ああいや、別にそういうわけじゃ……」

「じゃあこうしよう！」

いやあの、だから信じてないわけじゃないんですが。人の話を聞かないのはルール違反ですぜ兄さん。

「自分と今からデュエルしてもらおう！自分が勝ったら自分の話は本当のことなんだって認めてもらうからな！ついてきてくれ、ここは狭い。この近くだと食堂が広いから、そこまで案内するよ」

『安定と信頼のデュエル脳お疲れさんです。あれ、なんか……妙だな』  
流れで押し切られて稲石さんの後を歩く途中、ユーノが首をかしげた。

「何が？」

『いや、よくわからん。間違い探し見てるみたいな感覚がするのは気のせいかな？』

そう言われてみれば、なんとなくおかしな気がする。何がおかしいってわけじゃないんだけど、何となく違和感。何気なく後ろを振り返っても、そこには積もった埃にくつきりと浮かび上がる僕の足跡だけ。うーん、なんなんだろう？

「ほら、この部屋が食堂さ。さ、入った入った。自分はロウソクに火をつけてくるから、ちよつと待っててね」

そう言いながらポケットからマッチ箱を取り出し、素早くでっかいテーブルの上に置かれた燭台に火をつけていく。ろうそくの明かりに照らされた室内は思ったよりも明るく、カーペットの赤色もきれいに映えている。そうか、ロウソクってのも電気代節約にいいなあ。レッド寮みたいなどころでも毎月電気代はばかにならないから、うまく誤魔化せれば毎月の電気代とロウソク代の差額でういたお金で設備をよくできるかも。これは覚えておかないと。

『この部屋、まるでシャドウ・スペクターズのCMに出てきたみたいな食堂だな。まあ、偶然……なのかな?』

「さあ、これで明るくなったね。いくよ!」

「デュエル!!」

「先行は自分だね。ドロー、手札断殺を発動!自分はこのカードを墓地に送るよ」

手札断殺

速攻魔法

お互いのプレイヤーは手札を2枚墓地へ送る。

その後、それぞれ自分のデッキからカードを2枚ドロウする。

えつと、手札2枚を墓地に、か。あれ、今チラツと見せてきたカードに見覚えのあるのがいたような。気のせいかな?とりあえず僕は手札にレベル3モンスターを置いておきたいからこのカードと、それと……うん、ごめんチャクチャルさん。ぶっちゃけフィールド魔法もないのに初手に来られるときさすがに邪魔。闇だからヒゲアンコウが使えるわけでもないし。

「そして自分は、キラール・トマトを召喚!カードをセットして、ターンエンドさ」

フランス料理の盛った皿の上にかぶせるあの丸い取っ手付きの蓋、なんでもクロッシユという道具らしい。とにかくそのクロッシユが稲石さんの場に現れたかと思うと、それをはねのけてケタケタと笑う真っ赤なトマトが飛び出してきた。

キラール・トマト 攻1400

「闇属性リクルーター……闇属性使いですか」

「ふふふ、君はどう思う?ターンエンドさ」

伏せカードもないし、今いるのはリクルーターのみ。よし、先制攻撃で一気にライフを削っておこう。

「ドロー!手札のハンマー・シャークを召喚、効果発動!自分のレベルを1下げて、手札のレベル3以下水属性を特殊召喚する!来て、オイスターマイスター!」

ハンマー・シャーク ☆4↓3 攻1700

オイスターマイスター ☆3 攻1600

「へえ、もうモンスターを2体も！」

「バトル、オイスターマイスターで攻撃！オイスターショット！」

投げつけられた牡蠣は勢いよく飛んでいってキラール・トマトの顔面、つまり体全体のだ真ん中に命中する。よし、まずは一撃！

オイスターマイスター 攻1600↓キラール・トマト 攻1400

(破壊)

稲石 LP4000↓3800

「モンスター効果発動！自分のデッキから攻撃力1500以下の閻魔性を特殊召喚する！ゴーストリックの魔女、召喚！」

またどこからともなくクロツシュが運ばれてきて、その中から魔女衣装の女の子がほうき片手に元気いっぱいの様子で飛び出てきた。あれ意外、2体目のキラール・トマトじゃないんだ。

ゴーストリックの魔女 攻1200

「でも、攻撃は止めないよ！ハンマー・シャークでゴーストリックの魔女に攻撃！」

「いいや、攻撃は止めてもらう！自分は手札から、ゴーストリック・ランタンの効果発動！その攻撃を無効にして、このモンスターを場にセットする！」

魔女に向かって空中を泳いでいったハンマー・シャークが、いきなり天井から飛び出してきたとんがり帽子にかぼちや頭の幽霊に動きを邪魔されてあきらめて帰ってくる。むー、残念。

ゴーストリック・ランタン

効果モンスター

星1／閻魔性／悪魔族／攻 800／守 0

自分フィールド上に「ゴーストリック」と名のついた

モンスターが存在する場合のみ、

このカードは表側表示で召喚できる。

このカードは1ターンに1度だけ裏側守備表示にする事ができる。

また、相手モンスターの直接攻撃宣言時、

または自分フィールド上の「ゴーストリック」と名のついた



モンスターが攻撃対象に選択された時に発動できる。

その攻撃を無効にし、このカードを手札から裏側守備表示で特殊召喚する。

『魔女だけならまだわからなかったが、やっぱり「ゴーストリック」か。ライフ4000なこの世界じゃあなかなか厳しいな』

「カードをセットして、ターンエンド」

稲石 LP3800 手札：2 モンスター：ゴーストリックの魔女（攻）、1（ゴーストリック・ランタン） 魔法・罫：1（伏せ）

清明 LP4000 手札：3 モンスター：ハンマー・シャーク（攻）、オイスターマスター（攻） 魔法・罫：1（伏せ）

「ドロー：自分の場にゴーストリックモンスターが表側でいる場合、このカードは通常召喚できる！ゴーストリック・シユタイン召喚！」

ゴーストリックの魔女がほうきを振ると、ボワンと音を立てて案の定クロツシュ登場。その中から出てきたのは、ずいぶんコミカルなタッチのフランケンシユタインだった。

ゴーストリック・シユタイン 攻1600

「さらにゴーストリックの魔女の効果発動！1ターンに一度、相手モンスターを裏守備にできる！自分はこの効果で、オイスターマスターを選ぶよ」

ゴーストリックの魔女

効果モンスター

星2／闇属性／魔法使い族／攻1200／守 200

自分フィールド上に「ゴーストリック」と名のついた

モンスターが存在する場合のみ、

このカードは表側表示で召喚できる。

このカードは1ターンに1度だけ裏側守備表示にする事ができる。

また、1ターンに1度、相手フィールド上に表側表示で存在するモンスター1体を選択して発動できる。

選択したモンスターを裏側守備表示にする。

「さらにランタンをリバーズしてバトル、裏守備になったオイスターマイスターをゴーストリック・ランタンで攻撃！」

ランタンのかぼちや頭の周りにいくつもの人魂が浮かび、それが同時に突っ込んできて裏側になったオイスターマイスターを焼き尽くした。

ゴーストリック・ランタン 攻800↓???(オイスターマイスター)

守200(破壊)

「オイスターマイスターが……」

「まだまだ！って言いたいところだけど、自分の場にハンマー・シャーク以上の攻撃力を持つモンスターはいないね。カードをセットして、ターンエンドさ」

てつきり手札か場にコンバットトリックできるカードがあるのかと思ったら、予想に反してあっさりとターンを終わらせた稲石さん。あれ、もしかしてこの人初心者とか？さすがに特待生っていうぐらいだからそれはないんだろうけど、じゃあなんでわざわざ攻撃するわけでもないモンスターを攻撃表示で出したんだろう。

「うー、怪しいけどそれ言い出したらきりがない。もういいか、ドロー！ハンマー・シャークの効果を使ってハリマンボウを特殊召喚！」

ハンマー・シャーク ☆3↓2

ハリマンボウ ☆3 攻1500

「さらに、僕はまだモンスターを通常召喚していないから、それもいくよ！竜宮の白タウナギ、召喚！」

竜宮の白タウナギ 攻1700

「これだけモンスターがいれば、なんとかなるはず……」

「残念でした、ここで激流葬を発動！全モンスターを破壊さ！」

激流葬

通常罫(準制限カード)

モンスターが召喚・反転召喚・特殊召喚された時に発動できる。

フィールド上のモンスターを全て破壊する。

『なるほそ、シユタイン棒立ちを警戒して大量展開することも全部織り込み済みってわけか。ってことは、あのもう一枚の伏せカードは……』

「さらに自分は、この激流葬にチェーンしてゴーストリック・アウトを

発動！自分が見せるのは、ゴーストリック・スペクターさ」

ゴーストリック・アウト

通常罠

手札の「ゴーストリック」と名のついたモンスター1体を相手に見せて発動できる。

このターン、自分フィールド上の「ゴーストリック」と名のついたカード

及び裏側守備表示で存在するモンスターはカードの効果の対象にならず、

カードの効果では破壊されない。

さあ、まずいことになった。僕はもうこのターンにモンスターを出す手段がない。これでこっちの場は完全になら空き、だけど稲石さんのゴーストリックたちは無傷。幸いにもゴーストリックは全員攻撃力が低いからあのモンスターの総攻撃を受けたとしてもギリギリライフは残るけど、さらに2体以上のモンスターを出されたらだいぶ危ない。とりあえず、やれることだけでもやっておこう。

「ハリマンボウが墓地に贈られた時の効果で、ゴーストリック・シユタインの攻撃力を500ダウン！カードを1枚伏せて、ターンエンド」

ゴーストリック・シユタイン 攻1600↓1100

稲石 LP3800 手札：2 モンスター：ゴーストリックの魔女（攻）、ゴーストリック・ランタン（攻）、ゴーストリック・シユタイン（攻） 魔法・罠：なし

清明 LP4000 手札：1 モンスター：なし 魔法・罠：2（伏せ）

「自分のターン、ドロー！うーん残念、みんなで一斉攻撃！」「うわあっ！」

ゴーストリック・ランタン 攻800↓清明（直接攻撃）

清明 LP4000↓3200

ゴーストリックの魔女 攻1200↓清明（直接攻撃）

清明 LP3200↓2000

ゴーストリック・シユタイン 攻1100↓清明（直接攻撃）

清明 LP2000↓900

いてて、あつという間にライフが4分の1以下にまで減らされた。セットカードのうち一枚はバブル・プリンガーだけど、これレベル1のランタンにレベル2の魔女、レベル3のシユタイン相手じゃ何の意味もないんだよね。

「そしてゴーストリック・シユタインが相手に戦闘ダメージを与えたことで、自分はデッキからゴーストリック・ハウスをサーチしておくよ。そしてそのハウスを発動！これが自分らのお化け屋敷さ！」

ゴーストリック・シユタイン

効果モンスター

星3／闇属性／アンデット族／攻1600／守 0

自分フィールド上に「ゴーストリック」と名のついた

モンスターが存在する場合のみ、

このカードは表側表示で召喚できる。

このカードは1ターンに1度だけ裏側守備表示にする事ができる。

また、このカードが相手ライフに戦闘ダメージを与えた時、

デッキから「ゴーストリック」と名のついた

魔法・罠カード1枚を手札に加える事ができる。

「ゴーストリック・シユタイン」のこの効果は1ターンに1度しか使用できない。

「さらにゴーストリックのみんなの効果発動！全員裏側表示に変更さ  
！」

稲石がそう言うのと三体のゴーストリックが煙に包まれ、さつきまでモンスターがいた場所に計3つのクロツシュが置かれていた。

「それと自分は、忘れずにこのカードも使っておくよ。永続魔法うごめく影！ライフを300払って、自分の場の裏守備モンスターをシャッフルして並び替えるね」

稲石 LP3800↓3500

今度は3つのクロツシュがグルングルンと動き回ってシャッフルされ、どこにどのモンスターが入っているのかわからなくなってしまう。もう、これじゃあ次の攻撃で一番危険な魔女を当てられる確

率が3分の1になっちゃったじゃないか！

『いや、もつと確率は低いな。何せハウスをどうにかしないとモンスターには攻撃すらまともに届かんぞ』

「ふふっ、ターンエンドさ。さあ、もつと楽しくデュエルしようよ！」  
「まだあきらめないよ、僕のターン！リバーブス効果が怖いなら、こつちもセットで対抗してやる！モンスターをセットしてターンエンド！」  
『……………あほ。ハウスの効果があるってのに』

稲石 LP3500 手札:2 モンスター:3 (ゴーストリック・シユタイン or ゴーストリック・ランタン or ゴーストリックの魔女) 魔法・罠:うごめく影

清明 LP900 手札:i モンスター:i (???) 魔法・罠:2 (伏せ)、うごめく影

場:ゴーストリック・ハウス

「自分のターン、場のゴーストリックを全員リバーブして、さらにゴーストリックの雪女を攻撃表示で召喚！」

ゴーストリックの雪女 攻1000

「さらにゴーストリック・ハウスの効果によって、自分のモンスター皆でまたまたダイレクトアタック！さあ、この4連打を止められるかな？」

ゴーストリック・ハウス  
フィールド魔法

このカードがフィールド上に存在する限り、

お互いのフィールド上のモンスターは、

裏側守備表示のモンスターに攻撃できず、

相手フィールド上のモンスターが裏側守備表示のモンスターのみの場合、

相手プレイヤーに直接攻撃できる。

また、このカードがフィールド上に存在する限り、

お互いのプレイヤーが受ける効果ダメージ及び、

「ゴーストリック」と名のついたモンスター以外のモンスターがプレイヤーに与える戦闘ダメージは半分になる。

「そのオーバーキル狙いにイラツとくるね！トラップ発動、イタクアの暴風！」

一斉に僕の伏せモンスターをジャンプで飛び越えて踊りかかってきたゴーストリックたちが、激しい風にあおられて元の場所まで吹き飛ばされる。その後ふくれっ面でくしゃくしゃになった髪型を整える魔女やずれたとんがり帽子をかぶりなおすランタン、頭を振って起き上がるシュタインに風でめくれかかっていたスカートを押さえる雪女と、なんとも思い思いの反応を見せてくれた。

イタクアの暴風

通常罫

相手フィールド上に表側表示で存在する全てのモンスターの表示形式を変更する。

ゴーストリック・ランタン 攻800↓守0

ゴーストリックの魔女 攻1200↓守200

ゴーストリック・シュタイン 攻1600↓守0

ゴーストリックの雪女 攻1000↓守800

「ごめんごめん、ちよつと失礼だったね。メインフェイズ2に雪女以外の皆を裏守備に変更、うごめく影の効果を使用さ」

稲石 LP3500↓3200

またもや3体のモンスターがクロツシユの中に隠れてしまい、シャツフルされることでどれがどれだかわからなくなる。ただ一人、ぼつんと佇む雪女を除いて。

「さ、これで自分はターンエンドさ」

「僕のターン、ドロー！」

状況はかなり悪い。バブル・ブリンガーが使い物にならない今最後の砦だったイタクアまで使っちゃったし、このドローによっては詰みもありえる。……頼むよ、僕のデッキ！

「よし！まずセットモンスターを反転召喚、ペンギン・ナイトメア！このモンスターの効果で、ゴーストリックの雪女を手札に戻す！」

ペンギン・ナイトメア

効果モンスター

星4／水属性／水族／攻 900／守1800

このカードがリバスした時、

相手フィールド上のカード1枚を選択して持ち主の手札に戻す。

また、このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、

自分フィールド上の水属性モンスターの攻撃力は200ポイントアップする。

「あ、雪女！」

「さらに実は、もう一つ手があるのさ！僕の墓地の水属性はハンマー・シャークにオイスターマイスター、ハリマンボウに竜宮の白タウナギとゼンマイシャークの5体！手札から氷霊神ムーラングレイスを特殊召喚！」

「へえ……………」

氷霊神ムーラングレイス

効果モンスター

星8／水属性／海竜族／攻2800／守2200

このカードは通常召喚できない。

自分の墓地の水属性モンスターが5体の場合のみ特殊召喚できる。

このカードが特殊召喚に成功した時、

相手の手札をランダムに2枚選んで捨てる。

「氷霊神ムーラングレイス」のこの効果は1ターンに1度しか使用できない。

このカードがフィールド上から離れた場合、

次の自分のターンのバトルフェイズをスキップする。

「さらにムーラングレイス召喚時の効果で、そっちから見て右から2枚のカードを捨ててもらおうよ！」

「くっ、2枚は痛いなあ。キョンシーなんてまだ出してすらいらないのに」

「僕はこのターン通常召喚していないから、ペンギン・ナイトメアをリリースして、氷帝メビウスをアドバンス召喚！そしてフリーズ・バーストを使って、その左側の伏せとゴーストリック・ハウスを破壊！」  
メビウスの投げつけた2本のつららが正確に2枚のカードの中心

を射抜いた。だけど、まだまだ僕のターンは終わらないよ！

「バトル、ムーラングレイスで真ん中のモンスターを攻撃！」

氷霊神ムーラングレイス 攻2800↓??? (ゴーストリック・シユ  
タイン) 守0 (破壊)

「シユタイン撃破、やっこれで1体倒した……あれ？」

『手札半分捨てさせたのにまだ落ちてなかったのか。運が悪かった  
な』

確かにシユタインは倒した。なのにセットモンスターの数、つまり  
クロツシユの数が一つ増えて3つになっているのはなぜだろう。

「残念、自分は今の攻撃終了後に手札からあるモンスターの効果を発  
動させたのさ。そのモンスターの名は、ゴーストリック・スペクター  
！そしてそのもう一つの効果で、自分はカードをドロウする」

ゴーストリック・スペクター

効果モンスター

星1／闇属性／悪魔族／攻 600／守 0

自分フィールド上に「ゴーストリック」と名のついた

モンスターが存在する場合のみ、

このカードは表側表示で召喚できる。

このカードは1ターンに1度だけ裏側守備表示にする事ができる。

また、「ゴーストリック」と名のついたモンスターが、

相手のカードの効果または相手モンスターの攻撃によって

破壊され自分の墓地へ送られた時に発動できる。

このカードを手札から裏側守備表示で特殊召喚し、

デッキからカードを1枚ドロウする。

「だったら次、メビウスの攻撃！アイス・ランスで左側のモンスターを  
撃破する！」

「残念だったね、こっちはゴーストリック・ランタンさ。魔女じゃない  
よ」

氷帝メビウス 攻2400↓??? (ゴーストリック・ランタン) 守0

(破壊)

「魔女が倒せなかった……ごめんメビウス、ターンエンド」



稲石 LP3500 手札:i モンスター:2 (ゴーストリック・スペクター or ゴーストリックの魔女) 魔法・罠:うごめく影、1(伏せ)

清明 LP900 手札:0 モンスター:i (氷帝メビウス)、氷霊神ムーラングレイス(攻) 魔法・罠:1(伏せ)

「自分のターン、ドロー！グレイヴ・オー ज्याを守備表示で召喚」

これまで稲石さんが使ってきたのとは全く毛色の違う岩人間が、そのごつつい腕で守備体勢をとる。

グレイヴ・オー ज्या

効果モンスター

星4/地属性/岩石族/攻1600/守1500

自分フィールド上に裏側守備表示モンスターが存在する限り、

このカードを攻撃対象に選択する事はできない。

自分フィールド上のモンスターが反転召喚する度に、

相手ライフに300ポイントダメージを与える。

「そしてゴーストリックの魔女、ゴーストリック・スペクターをそれぞれ反転召喚！これでグレイヴ・オー ज्याの効果が2回発動して、合計600のダメージさ」

『あと一体伏せモンスターがいたら即死だったな』

清明 LP900↓300

「さらに魔女の効果でメビウスを裏守備にして、そのまま攻撃！」

ゴーストリックの魔女 攻1200↓??? (氷帝メビウス) 守10

00 (破壊)

「メイン2、魔女とスペクターをもう一回裏守備に変更して、カードをセットする。これで自分はターンエンド。もう一回自分のターンが回ってきたら、自分の勝ちは確定。さあ、君はどうする？」

「どうするかって？もちろん僕はこのドローに、このデッキに賭けるよ！ドローっ！」

威勢よく啖呵を切ったはいいけど、このターン中にグレイヴ・オー ज्याをなんとかしないと負けは確定……逆転のカードが来ますよ  
うに！

「さて、何のカードを引いたかな？」

「来た来た来た！貪欲な壺発動、墓地のオイスターマイスター、ハリマンボウ、ハンマー・シャーク、竜宮の白タウナギ、氷帝メビウスをデッキに戻して2枚ドロロー！そしてサルベージと強欲なウツボのコンボで、墓地のペンギン・ナイトメアとゼンマイシャークを手札からデッキに戻して3枚ドロロー！伝説の都 アトランティスを発動して死者蘇生、僕が墓地から呼ぶのはこのカード！七つの海の力を纏い、穢れた大地を突き抜ける！地縛神 Chacu Chailhua、特殊召喚！……いい、チャクチャルさん。これ闇のゲームでもなんでもないから大人しくしててね。暴れちゃダメ、ゼツタイ」

『承知している。私のことはただのカードと思ってくれて構わない』  
『お前、実際カードはカードだが』

伝説の都 アトランティス

フィールド魔法

このカードのカード名は「海」として扱う。

このカードがフィールド上に存在する限り、

フィールド上の水属性モンスターの攻撃力・守備力は200ポイントアップする。

また、お互いの手札・フィールド上の水属性モンスターのレベルは1つ下がる。

氷霊神 ムーラングレイス ☆8 ↓7 攻2800 ↓3000 守

2200 ↓2400

地縛神 Chacu Chailhua

効果モンスター

星10 / 闇属性 / 魚族 / 攻2900 / 守2400

「地縛神」と名のついたモンスターはフィールド上に1体しか表側表示で存在できない。

フィールド魔法カードが表側表示で存在しない場合このカードを破壊する。

相手はこのカードを攻撃対象に選択できない。

このカードは相手プレイヤーに直接攻撃できる。

また、1ターンに1度、このカードの守備力の半分のダメージを相手ライフに与える事ができる。

この効果を発動するターン、このカードは攻撃できない。

このカードがフィールド上に表側守備表示で存在する限り、相手はバトルフェイズを行えない。

「攻撃力2900の最上級魚族だつて!?!そんなカード……:そうか、自分が使った手札断殺か!」

「その通り!さらに手札から、ウミノタウルスを通常召喚!」

ウミノタウルス

効果モンスター

星4 / 水属性 / 水族 / 攻1700 / 守1000

このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、

自分フィールド上の魚族・海竜族・水族モンスターが

守備表示モンスターを攻撃した時、

その守備力を攻撃力が超えていれば、

その数値だけ相手ライフに戦闘ダメージを与える。

ウミノタウルス ☆4 ↓3 攻1700 ↓1900 守1000

↓1200

「バトルフェイズ、ウミノタウルスでセットモンスターのうち右側に攻撃!そしてウミノタウルスは自身の効果によって、貫通能力を持つ!」

「ぐっ……:スペクター!」

ウミノタウルス 攻1900 ↓???(ゴーストリック・スペクター)

守0 (破壊)

稲石 LP3500 ↓1600

「やれやれ、次の攻撃を受けたらひとたまりもないね。君もオーバーキル狙いかい?」

「とぼけないで。手札断殺で墓地に送ったカード……:1枚はネクロ・ガードナーなのはわかってるんだよ」

「なんだ、ばれてたのか。つまんないの」

むしろばれてないと思うほうがどうかしています。さつきあれだけ

見せてきたじゃん。

「チャクチャルアの効果で、プレイヤーにダイレクトアタック！」

「ネクロ・ガードナーっ」とー」

まあ、使ってくるとしたらここだよね。

ネクロ・ガードナー

効果モンスター

星3 / 闇属性 / 戦士族 / 攻 600 / 守 1300

相手ターン中に、墓地のこのカードをゲームから除外して発動できる。

このターン、相手モンスターの攻撃を1度だけ無効にする。

「でも、これで僕の勝ち！貫通能力はついてるんだ、構うことはない！ムーラングレイスでそのまま攻撃だ！」

「ここで最後のトラップ発動、マジカルシルクハット！」

これまでのようなクロッシユではなく、クエスチョンマークが描かれた青いシルクハットが2つ上から降ってくる。さらに魔女が入っていたはずのクロッシユも同じデザインシルクハットになり、計3つのシルクハットが稲石さんの前に壁を作った。

マジカルシルクハット

通常罠

相手のバトルフェイズ時に発動する事ができる。

自分のデッキからモンスター以外のカード2枚を選択する。

その2枚をモンスター扱い（攻 / 守 0）として、

自分フィールド上に存在するモンスター1体と合わせてシャッフルし裏側守備表示でセットする。

デッキから選択して特殊召喚した2枚のカードはバトルフェイズ終了時に破壊される。

×??? 2 守 0

「な、なんだ？」

「さあ、攻撃してごらん。ちなみに自分がセットしたカードは、それぞれ黒いペンダントとコザツキーの自爆装置。どれを攻撃するのも君

の自由さ。自分のライフがなくなるのは変わりないけど、5割以上の確率で相打ちに持ち込める」

『黒いペンダントはフィールドから墓地に送られた時に相手へ500のダメージ、自爆装置はセット状態のとき破壊したプレーヤーに1000のダメージ……うまく魔女に攻撃が当てられたらこっちの勝ちだが、外したら戦闘破壊が終わってからライフ0になるこの世界なら相打ち、か』

ど、どうしよう……戦略も何も関係ない、完全に運任せってことか。僕が勝つ確率は3分の1とやや不利だけど、いいね、燃えてきた。たまにはこういうのも面白い。

「じゃあ、僕は……」

「うん、僕は？」

「僕は、一番左のカードを攻撃！頼むよムーラングレイス！」

ムーラングレイスが放った青白い光線がシルクハットの一つをぶち抜く。攻撃するカードを選んだ以上、できることは何もない。あのカードの正体は？

「……ふふ、自分の完敗だよ。運も実力のうち、君は強いね」

氷霊神ムーラングレイス 攻2800↓?? (ゴーストリックの魔

女) 守200 (破壊)

稲石 LP1600↓0

「負けちゃったけど、久しぶりにデュエルができて楽しかったよ。ありがとう」

「いや、そっちこそ強かったです。特待生はさすがにレベル高いですね」

素直に感心したのでそう言うと、なぜか稲石さんはあははと笑った。

「うん、ありがとう。ああそうだ、これはお礼って言ったらなんだけど、よかつたら君がもらってくれない？自分が持っても使い道がよくわかんないし」

ポケットに手をつ突っ込んで、僕に金属片を見せる稲石さん。細長い形のそれは、一方の端にひもがついてちょうどペンダントのようになっていて……………ってこれ!

「しゅ、守護者の鍵い!? まままさか稲石さん、あんたセブンスターズだったのっ!?!」

確かあの鍵の形は、夢想がカミューラに投げ渡した奴だったはず。慌てて飛び退り、デュエルディスクを構えなおして警戒態勢に入る僕をぽかんと見つめる稲石さん。あれ、なんだか思ってたのと反応が違う。

「違うよ。これは、自分が数日前に地下でなんだかよくわからない変な喋り方のデーモン使いの人に会ったときデュエルを挑まれてね、とりあえず倒したらこれ落として逃げちゃったのさ」

変な喋り方のデーモン使いつて、もしかしてタイタンだろうか。今度はその人何しに来てたんだろう。まあそれはいいとして、人を疑ってたんだから謝らないとね。

「どうもすみません、ここ最近いろいろ立て込んでたから」

「いや、今の反応だけでもこれがなにかすごいものだったのはわかったよ。はい」

「ど、どうも……………」

そう言つて、妙に冷たいその鍵を受け取る。自分の首に引つ掛けてる鍵とも見比べてみたけど、たぶん本物だ。うーん、なんでタイタンがこんな物を。帰ったら夢想到に渡しておこうつと。

「じゃあ、外に出ましようか」

「そうだね。今日は楽しかったよ」

それから歩くこと数分。玄関前の大広間に出たあたりで後ろにいるはずの稲石さんの足音が聞こえないことに気づき、振り返ってみる。

「……………あれ?」

誰もいない。おつかしいな、確かにいたと思ったのに。来た道を探しに戻ろうとしたところで、デュエルが終わってから黙りっぱなしだったユーノがゆつくりと口を開いた。

『……なあ、清明』

「何？今稲石さんを捜しに行くんだけど」

『その稲石のことなんだけどな？俺やっとなづいたんだよ、デュエル前に感じた違和感がなんだったのか』

あ、それは聞きたい。まだちよつと気になってたし。すると心なしかひきつった声で、ゆつくりと語りだした。

『……あいつ、お前と一緒に歩いてたろ？おかしいじゃねえか、なんでも足跡がひとり分しかつかないんだよ。あの時、廊下に残ってたのはお前の足跡だけだったろ？』

「え」

『おかしなところはまだあるぜ、その七星門の鍵だ。どうしてたった今日が覚めてうろついてたらお前を見つけた男が数日前にタイタンとデュエルして鍵をぶんどれるんだよ』

「え」

『もう一つ。その鍵、受け取ったとき妙に冷たかったろ』

「え」

『まだある。いくらあつちのほうが道に詳しいって言っても、仮にもダグナーの身体能力だぞ。俺みたいに壁抜けでもしない限り、あんなすぐに追いつけるはずがないんだよ』

「え」

『さつきからえしか言っていないけど、とどめさしてやるよ。この地図よーく見てみる』

いやな予感しかしないけど、見てみないわけにはいかない。ゆつくりと首を動かすと、何の変哲もないこの建物全体の案内図があるだけだった。えつとユーノさん、これが一体どうしましたか……？

『ここ。この寮の食堂つてな、俺らが今通つたのとは真反対の方向に何か所あるだけで、今俺らが来た道はどう見ても行き止まりのはずなんだよ』

「えつと、それって……」

『ああ。俺らはいさつきまで存在しない部屋で、なぜか、足跡がつかない人間とデュエルしてたんだよ』

「……………」

『…………』

「もう出るっ！レッド寮に帰る！」

「つてことがあったんだよ。これが証拠の鍵。どー思う皆」

「まじかよーくく、俺も行つときやよかった！」

その日の晩、レッド寮の狭い食堂でいつものメンバーと食卓を囲みながら今日会ったことの報告。さすがにみんな最初は疑ってたけど、少なくとも何かあったらしいことはわかってくれたようだ。

「それで、どんな人だったんスカ？その稲石って人」

「うん、いい人そうだったよ。いやー、まさかユーノ以外の幽霊に会うなんてね、思わず気づいた時には冷や汗が出たよ」

「ふん、意気地のない。ところで清明、一体何をしにあんな場所まで行ってきたんだ？」

あ。万丈目に突っ込まれるまできれいさっぱり忘れてたけど、そういえば目的があったんだっけ。

「実は…………」

「実は？」

「あの寮、やたらと高級そうな皿とか食器とかあったでしょ？ウチのちよつと欠けちやつてるお茶碗とかと交換しようかなーと」

『え、俺そんなくだんないのについてったの？お前、そりや幽霊が出ても文句言えませんわ』

その瞬間、玄関でコトリと音がした気がした。普段なら放っておくところだが、何となく気になったので席を立てて玄関に行く。ドアを開けると誰もおらず、足元に高そうな食器が何十枚も積んであり、その横に銀製つぽいフォークやらスプーンやらの束が重ねてある。その上に手紙が一枚置いてあったので、慎重に取って文面を見る。

『なにになに？「今日は楽しかったよー♪君が欲しがってたみたいだから、これは自分からのプレゼントさ。裏はないから受け取ってちょうだい。稲石より 追伸：稲石なんてあの寮にはいないし…………ってね。』



なんなら歴代名簿でも見てごらん、稲石なんて名前の生徒は一人もないから。じゃあ一体、僕は誰でしょう？」……よかつたじゃないか、欲しいもんが手に入って』

あはは、と笑いながら食器を拾い上げる。そんな僕の笑い声がちよつとひきつっていたのは否定できない。否定できないけど、また稲石とデュエルしたいな、とも思う自分がどこかにいた。

## ターン27 女戦士と宝石騎士

「ん……よし、そろそろかな」

まだ日も昇っておらず、ちよつと東の空が白んで見えるくらいの間、僕に、レッド寮を出た。夕べ新しいことに手を出してみたのだが、その成果が知りたくなかったのだ。

『ふわあ……なんだお前、もう行くのか?』

「あ、起こしちゃった?ごめんごめん、まだ寝てていーよ」

ふわふわとユーノが飛んできて僕の半歩後ろにつく。さらにシャーク・サッカーも僕の右隣をゆったりと泳ぎだす。ふーむ、なんか悪いことしちゃったかな。

「あ、そろそろだ」

もう一回謝つところかな、そう思ったところで海に面した崖、とはいっても水面までの距離はせいぜい一メートル程度の場所に出て、目印にしていたひもに括り付けた浮き輪がぶかぶかと浮かんでいるのが見えた。

「いよっこいせえー!」

掛け声とともに、その浮き輪に手を伸ばして思いっきり引っ張る。あれ、これ意外と重いよね。もうちよつと人手がいるし、またデッキの誰かに手伝ってもらおうかな?さっそく呼び出そうとすると、すぐ近くに三沢がいるのを見つけた。まだこっちには気づいていないように、海に向かって何やら体操をしている。

「おーい、みっさわー!暇ならこれ手伝ってくれるー?」

手を口に当てて声を張り上げる。すぐに気付いてくれたみたいで、こっちに向けて走ってくるのが見えた。

「おいーっす、三沢。おはよ」

「ああ、おはよう。それはいいが、一体こんな時間から何をしてるんだ?」

お前もな、と言いたいのをぐつと飲み込む。あまり無駄話をしてる

暇はない。今はそれより、こつちを手伝ってもらいたいのだ。

「訳は後で話すからさ三沢、ちよつとこれ引つ張るの手伝つて……くれる……？」

「わ、わかった！」

割と全力で引つ張つてるのにちつとも海から引つ張り出せない浮き輪を見て、慌てて手を貸してくれる三沢。

「ありが、と……！」

「気に、する、な……！」

二人がかりで思いつきり引つ張つてると、何かバチツと嫌な音がした。そしてみるみる軽くなつてくる浮き輪。あああああ、やっちゃった！

「きよ、今日のごはん……！」

涙目になつてもう一人でも持ち上げられる重さの浮き輪を引つ張り上げると、案の定無残に大穴のあいたでつかい網がくつついていた。それを黙つてみていた三沢が、信じられない、といった様子で声をかけてくる。

「ま、まさか今日のごはん……！」

「ここの、十代と釣りしてもよく釣れるポイントだから、レッド寮の食卓に刺身なり焼き魚なりを出そうと思つてゆうべの夜遅く頑張つて定置網張つておいたのに、せつかく金曜のエビフライと毎日のメザシ以外にも海産物を安定して全員に出せると思つたのに！」

「そんなに困つてるなら一言相談してくれ！」

『うん、俺もずつとそう思つてた。なんで定置網張つたり投網ぶん投げたりする方向に走るんだよお前は。つてツツコミができないぐらい必死だったから黙つてたけどな』

「ありがと三沢。でもいいよ、とりあえず僕は今から寮に帰つてこの網を縫い直すから。あ、大量になつたらライイエローにもおすそ分けするから楽しみにしててね」

『これ全部嫌味抜きの本音で言えるんだからお前つて大した奴だよな』

何代前の先輩が何を考えて買ったのかまるで訳が分からないけど

せつかなのでありがたく使わせてもらってる軽く20メートルはある投網をバサツと肩に担ぎながらそう言うと、三沢は心底呆れたようにため息をついた。そのまま僕の肩に手を置き、真剣な目で一言、「わかった、わかったからとりあえず今日はお前ら全員でウチまで来てくれ。樺山先生のことだ、今日もカレーの仕込みはもう終わってるだろうしな」

って言うてくれたのがなんか泣きそうになるほど嬉しかった。樺山先生、カレー美味しかったです。あ、それと投網修理に使う針だのなんだのも貸してくれてほんとありがとうございました。この恩はいつかこの網でたくさん魚が獲れたら返します。

『お前……三沢がメシおごってくれた意味ぜんっぜん理解してねーな？』

そして、朝カレーをおなか一杯頂いてから。僕と十代、隼人に翔は三沢からライイエローのすぐ近くの崖まで呼び出されていた。なんでも、デュエルの早朝特訓を始めるらしい。そう思ってた時期が僕にもありました。始まったのは、掛け声とともにひたすらカードを引く特訓。確かに効果があるであろうことは大山先輩が実証済みだけど、だけど……あえて言わせてもらおう、どうしてこうなった。

「アン、ドゥー、ドロー。アン、ドゥー・ドロー。アン、ドゥー、ドロー……ねえ三沢、これあと何セットやるんだっけ？」

「アン、ドゥー、ドロー。もちろん、自分のデッキがなくなるまでだ！」  
「アン、ドゥー、ドロー……ってことは、俺と隼人と翔はあと11回か！」

「アン、ドゥー……ってことは何？デッキ枚数60の僕はこの3人より20回多くやんなきゃいけないの!?!」

「そもそも、なんで俺らまでやんなきゃいけないんだなく。お、翔、そのカード雷電娘々か？」

「あ、ばれた？えへへ、僕のアイドルカードなんだ」

残りデッキの枚数が10枚を切ったあたりで、隼人と翔が雑談を始

める。隼人のおかーさん、ディアン・ケトに似てるってどんな顔なん  
だろ。少なくとも隼人本人が父親似なのはこの前よくわかったけど。  
ふむ、アイドルカード、か。まあ僕のデツキならレイス一択だな。  
三沢は間違いなくピケルだろう。まあ本人にとっては触れてほしく  
ない点らしいので、あえて何も言わないでおく。それが自分でもわ  
かっているのだろう、特にとがめられることはなく特訓は終わりにな  
った。さ、授業授業。確か今日は、1時間目から大徳寺先生の錬金  
術だっけか。

「ガラツガラだ」

「スカスカっすね」

おかしい。何がおかしいって、もう授業はじまってるのに空席がや  
たらと目立つ。青黄赤、全色合わせてもせいぜいいつもの4分の3ぐ  
らいしかない。いつものほほんとした大徳寺先生もさすがに不安  
そうな顔をして、無断欠席の理由を知っている人がいないか尋ねてい  
る。が、どうも誰もわからないらしい。そういや、今朝もレッド生が  
数人いなかったな。貧乏根性のしみついたオシリスレッドでただ飯  
に來ないなんて何かあるとは思ってたけど、まさかこんなに人がいな  
いとは。

「大変です先生、森でこんなものが！」

素晴らしいながら事務の人が、何やらカバンを持って駆け込んでく  
る。そのかばんにはくつきりと『GOTOU』の文字があった。後藤  
……一体どこに行っちゃったんだ？その後人がいないので授業は中  
止となり、いったん生徒は各自寮に戻るようアナウンスがあった。け  
ど、

「これはもう、探してみるしかないね。ちよつと手かしてね、サツ  
カー」

「だな。手伝ってくれ相棒！」

当然のごとく無視。ハネクリボーとシャーク・サッカーを呼び出し  
て、僕らも素早く森の中に入るのであった。

そして、かれこれ10分ほど歩きまわったところ。いきなり森の開けた場所に出ると、そこには謎の石造りの建物がそびえ立っていた。え、なにこれ。

「ああ、みんな、あれを見るんだなく！」

隼人が指差した先には、見覚えのある制服を着たたくさんの男子高校生が四角い石を運んだり切ったりしてその建物を作り上げていくシユールな光景。それと、虎。英語にするとタイガー。

「……………虎？」

なんかもう手遅れな気もしたけど、なるべく刺激しないようにしてゆっくりと後ろを向き、そのまま一歩ずつ前に進む

「こっち来たー！逃げろーっ!!」

大慌てで走り出し、必死になつて建設途中の柱の一本にしがみついてよじ登った。チラツと下を見たら、こっちが手を放すまで粘るつもりなのか足元でうろろうろしてる虎と目があった。今気づいたけど、この虎片目がないのね。でっかい傷跡が残ってる。まあどうでもいいことだけど。

「バース！」

「ん？」

さて、これからどうしようかと考えだしたとき、建物の中から凜とした女性の声が聞こえた。するとその虎、いやバースはさつきまでの態度が嘘のように、例えて言うなら借りてきた猫のようになって大人しく声のほうに走って行った。

「ようこそ、私の城へ。もう降りてもらっても構わないぞ」

そのたくましい褐色の肌の女性の言葉に従って地面に降りると、当の女性はさつきまで作業していたアカデミア生に対してひとりひとり丁寧になぎらいの言葉をかけて給料袋とおぼしきものを手渡していた。くっ、バイトがあると一声かけてくれれば僕だつて行つてたのに。

「いやいやいや、だつてさ」

うん、さすがに半分は冗談。まあどう考えてもこんなところで闘技場作らせてる女なんてただ者なわけがないし、こっちから遠慮してた

だろう。……しかし給料ってあれいくらぐらいもらってたんだらうか。

「さて、待たせたな。私はセブンススターズの一員にしてアマゾネスの末裔、タニヤ。このコロシウムで七星門の鍵をかけた聖なる戦いを行う」

わかっていたこととはいえ、サツと場に緊張が走る。アマゾネス、確か地球のどこかにあるっていう女性だけの一族のことだ。しかしこの人、下手すると一回で終わるデュエルのためだけにわざわざこんな建物作らせたのか。暇人というかなんというか。と、いきなりタニヤの声がぶりっ子っぽくなった。

「でもね、私と戦うことができるのは、男の中の男だけ」

「何よそれ！」……だつて！

語尾にハートマークでもつきそうな声で事実上あんたらとはデュエルしないという宣言をされ、女性人二人が怒りの声を上げる。もうこの迫力からいっても明日香は資格あるんじゃないかな、本人の前では死んでもこんなこと言えないけど。あ、また声戻った。

「我こそは男というもの、出て来い！」

「俺が！」

「いや、俺だろう！」

「いや、俺だ！」

「僕が行く！」

我こそは男！ということで一斉に名乗りを上げる男性陣をじっくりと見つめたタニヤ。これ、当ててもらえなかったら地味にへこむだろうな。

「面構えは全員悪くないけど………ユー！」

そういつてタニヤが指差したのは、三沢。くっ………なんかちよつと一瞬だけドヤ顔になってたのが無駄に悔しい！

「いいだろう、この三沢大地が相手しよう」

「まず、デュエルの前に聞かせてもらう。ここに2つのデッキがあるが、一つは勇気のデッキでもう一つは知恵のデッキ。さあ、どちらを選ぶ？」

「当然、知恵のデツキだ！」

なにが当然なんだろうーか。

「そっちがデツキの内容を決めさせたならば、俺も同じことをしてやろう。ここに6つの属性デツキがあるが、どれを相手にするか選んでもらおうか！」

そう言つて黄色の制服をはだけ、常に身に着けている6つのデツキケースを見せつける三沢。三沢よ、仮にも女性の前でいちいちそのポーズとるのはやめたほうがいいと僕は思うよ。素肌は見せてないとはいえ、セクハラ扱いされても文句言えないし。

「キヤー、三沢つちつたら大胆ー！じゃあタニヤ、あなたの名前と同じ地属性のデツキをお願いするわー！」

コロシアム全体に、何とも言えない空気が広がった。……………三沢、フアイト。

「ええい、そんな見え透いたお色気作戦なんか引つかかってたまるか！」

「三沢つちつたら硬派ね、そこがまた素敵ー！……………では、ゆくぞー！」

「デュエル！」

「先行は私がもらうー！ドロー、手札からフィールド魔法、アマゾネスの里を発動！」

周りにニヨキニヨキと木が生えてきて、まるで南国の森のようになった。木の向こう側には、なにやら木製の家もいくつか見える。

アマゾネスの里

フィールド魔法

このカードがフィールド上に存在する限り、

フィールド上に表側表示で存在する「アマゾネス」と名のついた

モンスターは200ポイントアップする。

「アマゾネス」と名のついたモンスターが戦闘または

カードの効果によって破壊され墓地へ送られた時、

その「アマゾネス」と名のついたモンスターのレベル以下の

「アマゾネス」と名のついたモンスター1体を自分のデツキから特殊召喚する事ができる。



この効果は1ターンに1度しか使用できない。

「さらに、アマゾネスの聖戦士を通常召喚する。このカードの攻撃力は1700だが、自分の場のアマゾネスモンスター1体につき100ポイントアップする。今の私には聖戦士1体しかないが、アマゾネスの里の効果でさらに200ポイントアップする！カードをセットして、ターン終了だ」

アマゾネスの聖戦士 攻1700↓2000

「いきなり攻撃力2000のアタッカーを通常召喚一回で召喚!？」

「イロモノかと思っただらなかなかやるね、だつてさ」

「い、いやイロモノつてさすがに失礼じゃ」

別にタニヤをかばうつもりはさらさらないが、さすがにいきなりイロモノ扱いはあんまりじゃなからうか。そう思っただけなのに何が気に入らなかつたのか、夢想はぷうつと頬を膨らませてそっぽ向いてしまった。え、僕何かまずいこと言った!?

「いいわよ、どうせ清明は女の人には甘いんだもん、だつてさ。どうせあの人がちよつと露出高いからつてデレデレしてるんでしょ、なんだつて」

「え、ええ!?!べ、別にそんなことないよ!」

「どうだかね、だつて。ふんっ!」

……………嫌われたらどうしよう。いや、ホント誤解なんだけどなあ。ほんとほんと。ちよつと胸のあたり見たとかそういうのは決して否定しないけどいやでもそれぐらいは気づいてほしくなかつたというか気づいててもノーカンにしてほしかったといえますかだつて僕だつて男のはしくれですし、ねえ?

「俺のターン、ドロー!手札のレスキューラビットを召喚、効果を使つてデッキのジエムナイト・サファイアを2体特殊召喚する」

そんな僕の沈んだ気持など知つたこつちゃない、という顔をした首から笛を下げたウサギがぴよぴよ跳ねてきてフィールドの真ん中で笛を吹くと、その音につられた水で楯を作ることができるジエムナイトの戦士が寄ってきた。

レスキューラビット

効果モンスター（準制限カード）

星4 / 地属性 / 獣族 / 攻 300 / 守 100

このカードはデッキから特殊召喚する事はできない。

自分フィールド上に表側表示で存在するこのカードをゲームから除外して発動する。

自分のデッキからレベル4以下の同名通常モンスター2体を特殊召喚する。

この効果で特殊召喚したモンスターはエンドフェイズ時に破壊される。

「レスキューラビット」の効果は1ターンに1度しか使用できない。

ジェムナイト・サファイア×2 守2100

「そしてこのジェムナイト専用の融合、ジェムナイト・フュージョンを発動！場のサファイア2体を融合してジェムナイト・アクアマリナを特殊召喚！」

ジェムナイト・アクアマリナ

融合・効果モンスター

星6 / 地属性 / 水族 / 攻1400 / 守2600

「ジェムナイト・サファイア」+「ジェムナイト」と名のついたモンスター

このカードは上記のカードを融合素材にした融合召喚でのみ

エクストラデッキから特殊召喚できる。

このカードは攻撃した場合、バトルフェイズ終了時に守備表示になる。

このカードがフィールド上から墓地へ送られた時、

相手フィールド上のカード1枚を選択して持ち主の手札に戻す。

「キヤー三沢っち、後攻1ターン目から融合召喚なんてかっこいいー！」

「そんな手に俺は引つかからんぞと言ったはずだ！さらに墓地のサファイアを除外することで、再び回収したジェムナイト・フュージョンを発動！手札のジェムナイト・サニクスと場のアクアマリナを融合！来い、ジェムナイト・マデイラ！」

三沢の場の青いジェムナイトと手札の赤いジェムナイトが融合し、

高熱のため真っ赤に光る両腕と剣を持った炎のジェムナイトが胸の核石<sup>コア</sup>を光らせた。でも、なんでわざわざ融合してから融合なんて手間のかかる真似を？

『アクアマリナの効果で場を開けてからマデイラで確実に一撃叩き込むか……いきなり2200ダメージとかやってらんねえな。まあ、どうせ三沢が解説するからそれ聞いとけ』  
「？」

「そしてこの時、アクアマリナの効果発動！このカードが場を離れたことで、相手のカードを1枚バウンスする。俺が選ぶのは、アマゾネスの聖戦士だ！さらにジェムナイト・マデイラは、戦闘時に相手のあらゆるカードの発動を封じ込めることができる。この戦闘、確実にダメージを通らせてもらおうぞ！」

おお、なるほど！これならあの伏せカードも手札誘発も気にせずバトルができるってことか。しかし、よくまあこんなコンボ思いつくなあ。

「さすがにやるようね。だけど、まだ甘いわよ！メインフェイズ最後に速攻魔法発動、死者への供物！ジェムナイト・マデイラには破壊されてもらおうわ！」

死者への供物

速攻魔法

フィールド上に表側表示で存在するモンスター1体を破壊する。

次の自分のドローフェイズをスキップする。

「くっ………ターンエンドだ」

タニヤ LP4000 手札：4 モンスター：なし 魔法・罠：なし

三沢 LP4000 手札：3 モンスター：なし 魔法・罠：なし

場：アマゾネスの里

「私のターン、ドロー……は飛ばしてメインフェイズ、もう一度アマゾネスの聖戦士を召喚して攻撃！聖剣の舞！」

アマゾネスの聖戦士 攻1700↓2000↓三沢（直接攻撃）

三沢 LP4000↓2000

「三沢！」

「この程度案ずるな……俺の場に何もカードがない状態でダイレクトアタックを受けた時、冥府の使者はもう一人の使者を伴ってフィールドに特殊召喚できる！ゴーズ、カイエン特殊召喚！」

聖戦士が手にした細身の剣で三沢を切り裂いた瞬間、地面に伸びた三沢の影の色が急に濃くなったかと思うとその真下に闇に包まれた地下へ続く階段が現れ、その中から二体のモンスターがゆつくりと登ってきた。

冥府の使者ゴーズ

効果モンスター（準制限カード）

星7 / 闇属性 / 悪魔族 / 攻2700 / 守2500

自分フィールド上にカードが存在しない場合、

相手がコントロールするカードによってダメージを受けた時、

このカードを手札から特殊召喚する事ができる。

この方法で特殊召喚に成功した時、受けたダメージの種類により以下の効果を発動する。

●戦闘ダメージの場合、自分フィールド上に「冥府の使者カイエン トークン」

（天使族・光・星7・攻／守？）を1体特殊召喚する。

このトークンの攻撃力・守備力は、この時受けた戦闘ダメージと同じ数値になる。

●カードの効果によるダメージの場合、

受けたダメージと同じダメージを相手ライフに与える。

冥府の使者ゴーズ 守2500

冥府の使者カイエン トークン 守2000

やれやれ、一時はどうなるかと思ったけどこれで状況はまた五分五分か、どちらかといえば三沢がちよつと有利になったわけだ。よかったよかった、このまま押し切ってくれるといいんだけど。

「カードを2枚伏せる。ターンエンドだ」

「俺のターン、ドロー！ジェムレシスを召喚して効果発動、デッキから

「ジェムナイト・ラズリーを手札に加えるぞ」

ジェムレシス

効果モンスター

星4／地属性／岩石族／攻1700／守500

このカードが召喚に成功した時、

デッキから「ジェムナイト」と名のついた

モンスター1体を手札に加える事ができる。

「さらに墓地からジェムナイト・フュージョンの効果を使い、墓地のジェムナイトモンスターであるサファイアを除外することでこのカードを手札に加える。そして発動！手札のラズリーと、場の光属性のカイエントークンを融合！ジェムナイト・セラファイ召喚！」

カイエントークンの体が光に包まれ、光り輝くレイピアを掲げる天使の羽のようなものを背中に生やしたジェムナイト唯一の女戦士へと変わった。

ジェムナイト・セラファイ

融合・効果モンスター

星5／地属性／天使族／攻2300／守1400

「ジェムナイト」と名のついたモンスター＋光属性モンスター

このカードは上記のカードを融合素材にした融合召喚でのみ

エクストラデッキから特殊召喚できる。

このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、

自分のメインフェイズ時に1度だけ、

自分は通常召喚に加えてモンスター1体を通常召喚できる。

「さすが三沢つち、たった1ターンでモンスターをこんなに揃えるなんてー！」

「その三沢つちというのをやめろ！……墓地に行ったラズリーは、墓地の通常モンスターを代わりに手札に加えることができる。俺はこの効果により、墓地では通常モンスターとして扱うジェムナイト・サニクスを手札に加えてセラファイの効果でそのまま通常召喚！」

ジェムナイト・サニクス 攻1800

「うわー、三沢本気だね」

『久しぶりにここまでのソリティア見た気がするな。あつという間にモンスター0から4体か』

どこか緊張感の抜けた観戦ムードの僕らを尻目に、一人真面目に攻撃準備を整えていく三沢。これだけモンスターがいれば、ちよつとぐらい余裕もつてもいいと思うけどなあ。

「……念のためゴーズは守備表示のままにしておくか。バトル！セラフィでアマゾネスの聖戦士に攻撃！」

「トラップ発動、アマゾネスの弩弓隊！全員迎撃しなさい、アマゾネスの聖戦士！」

タニヤの号令によって森の奥から数人の弓を構えた部隊が統率のとれた動きで並び、一斉に三沢のモンスターに弓を撃った。2人のジェムナイト、ジェムレシス、そしてゴーズの体に数本の矢が突き刺さってゆき、身に着けていたマントなどがすっかりボロボロになってしまう。

アマゾネスの弩弓隊

通常罫

相手の攻撃宣言時に、自分フィールド上に「アマゾネス」という名のついたモンスターが存在する場合のみ発動する事ができる。

相手フィールド上の全てのモンスターは表側攻撃表示になり

(リバーズ効果は発動しない)、攻撃力は500ポイントダウンする。

相手は全てのモンスターで攻撃しなければならぬ。

ジェムナイト・セラフィ 攻2300↓1800

ジェムナイト・サニクス 攻1800↓1300

ジェムレシス 攻1700↓1200

冥府の使者ゴーズ 守2500↓攻2700↓2200

「残念だったな、セラフィの攻撃はもう止まらないぞ！」

タニヤの言葉通り、すっかりぼろぼろになった青いマントを羽織ったセラフィが若干ふらつく動きで放ったレイピアでの突きをあつさりかわした聖戦士が素早くセラフィの体を切り返す。普段の状態ならまだしも、全身に矢を受けた今の状態ではかわすことすらできなかった。

ジエムナイト・セラファイ 攻1800（破壊）↓アマゾネスの聖戦士 攻2000

三沢 LP2000↓1800

「くっ……だが、俺の場にはそれでもお前のモンスターの攻撃力を上回るゴーズがいる！ゴーズでもう一度聖戦士に攻撃！」

「残念ね、三沢っち！トラップ発動、奇策！私が捨てるのは攻撃力1500、アマゾネスの格闘戦士！これで2度目の返り討ちだ！」

これまたぼろぼろになった服装のゴーズが手にはめたかぎづめで聖戦士の体を切り裂こうとするも、その攻撃すらもひらりとジャンプしてよけた聖戦士がその剣で上空からゴーズの体を貫く。聖戦士、さつきから攻撃パターンが妙に多いな。

奇策

通常罠

手札からモンスター1体を捨て、

フィールド上に表側表示で存在するモンスター1体を選択して発動できる。

選択したモンスターの攻撃力は、捨てたモンスターの元々の攻撃力分ダウンする。

冥府の使者ゴーズ 攻2200↓700（破壊）↓アマゾネスの聖戦士 攻2000

三沢 LP1800↓500

「ごめんね三沢っち、このターンの攻撃は強制なのー。さあ、残りはその2体ね」

例によってぶりっ子な声音でさらっと鬼畜なことを言うタニヤに対し、圧倒的に不利なはずの三沢は、なんとかすかに笑っていた。ちよ、ちよつと三沢？

「ふっ、もし俺がこの最悪の事態まで想定して対策していたとすれば、どうする？」

「え？」

「まさかここまでボロボロにされるとは思っていなかったから単なる保険のつもりだったが……まさか本当に使うことになるとは、な。

わからないかタニヤ、これでお前の場に伏せカードはない。俺はその瞬間を待っていたんだ！ジエムナイト・サニクスで攻撃！」

「迎え撃ちなさい、聖戦士！」

「この瞬間、手札からジエム・マーチャントの効果発動！今はまだ通常モンスター扱いのサニクスの攻撃力は、これで1000ポイントアップする！」

赤いモーニングスターを手にしたサニクスが、うなりをつけて鎖を振り回しながら聖戦士に戦いを挑んでいく。だが、その動きにもやはり精彩が欠ける。また攻撃がかわされるんだろうと思った瞬間、いきなりサニクスの胸の核石コアが真っ赤に輝いてそのスピードが跳ね上がった。聖戦士の剣がむなしく空を切り、がら空きになった胴にサニクスのモーニングスターが命中する。

ジエム・マーチャント

効果モンスター

星3 / 地属性 / 魔法使い族 / 攻1000 / 守1000

自分フィールド上の地属性の通常モンスターが

戦闘を行うダメージステップ時、

このカードを手札から墓地へ送って発動できる。

そのモンスターの攻撃力・守備力は

エンドフェイズ時まで1000ポイントアップする。

ジエムナイト・サニクス 攻1300 ↓ 2300 ↓ アマゾネスの聖

戦士 攻2000 (破壊)

タニヤ LP4000 ↓ 3700

「やるわね三沢っち！だが、この瞬間にアマゾネスの里の効果が発動する！出てきなさい、アマゾネスの射手！」

タニヤの声を聞きつけ、ほかのアマゾネスよりも色白で体の線も細い弓を持った女戦士が森の奥から駆けつけてきた。

アマゾネスアーチャー  
アマゾネスの射手

効果モンスター

星4 / 地属性 / 戦士族 / 攻1400 / 守1000

自分フィールド上に存在するモンスター2体をリリースして発動



する。

相手ライフに1200ポイントダメージを与える。

「くっ……これはどうしようもない、ジエムレシスで攻撃」

ジエムレシス 攻1200（破壊）↓アマゾネスの射手 攻1400  
0↓1600

三沢 LP500↓100

「さあ、これで残るモンスターは私のターンに攻撃力1300に戻るサニクス1体のみ。潔く負けを認め、サレンダーしたらどうだ？」

「誰が！まだ俺には最後の賭けが残されている、馬の骨の対価を発動！」

三沢が発動したのは、自分の場の通常モンスター1体をリリースすることでカードを2枚引くことができるドローカード、馬の骨の対価。そこそこ使い勝手のいいドローソースだ、という程度の知識は僕だって持つてるけど、このタイミングで使うのは危険すぎる。

もちろんこのプレイングは確率や計算を重視する三沢のスタイル通りの戦法だ。ここでターンエンドして確実に負けるよりは、2枚ドローして最後の賭けに出る方がいいに決まってる。だけどそれはただ計算づくなんじゃなくて、一回一回のドローに全てを賭けてる十代や僕の戦い方に似たところもある。自分の引くカードを、自分のデッキを信じる戦い方には運がいる。計算と運、この二つを同時に使うことが三沢の最大の強みだと思う。僕なんかはいまだに運と勘とその場の閃きだけで頑張ってるようなものだから、そういうところが僕にとっては羨ましい。

「いくぞ、タニヤ………ドロー!!!」

素早く引いた2枚のカードをちらりと見て、三沢はあくまでも表情を崩さない。

「カードを2枚セットする。これでターンエンドだ」

タニヤ LP3700 手札：0 モンスター：アマゾネスの剣士

（攻）魔法・罫：なし

三沢 LP200 手札：0 モンスター：なし 魔法・罫：2（伏せ）

場：アマゾネスの里

「さっき何を引いたかは知らないが、このターンで終わりだ！アマゾネスの射手で直接攻撃！」

「トラップ発動、攻撃の無力化！このターンのバトルフェイズはこれで終了だ！」

「ならばメイン2にアマゾネスの射手をリリースし、アマゾネス王女を召喚！この壁、超えられるものなら超えてみる！」

アマゾネス王女<sup>クイーン</sup>

効果モンスター

星6／地属性／戦士族／攻2400／守1800

このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、

自分フィールド上に存在する「アマゾネス」と名のついたモンスターは

戦闘では破壊されない。

「戦闘破壊されない攻撃力2400か……甘いな、タニヤ。俺を倒しきることができず、この伏せカードを残した状態でターンを終了した時点で、お前の負けは既に決まっている！」

「なんだと!?!」

「証拠を見せてやろう。永続トラップ発動、零式魔道粉碎機！」

三沢が発動した最後の伏せカードの古めかしい機械が、ガタガタと音を立てて蒸気を吹き上げながら起動する。

「このカードは、自分の魔法カードを1枚捨てることで、相手に500のバーンダメージを与える効果を持つ」

「だが、お前の手札は1枚のはず！」

『いや、魔法カードに限って言うなら最低でも5枚、だな』

え、5枚……えっと、どゆこと？

「墓地からジェムナイト・フュージョンの効果が発動、サニクスを除外してこのカードを手札に戻す。そして零式魔道粉碎機の効果で射出、ファイヤー！」

タニヤ LP3700↓3200

「ぐっ……そうか、そういうことか！」

「そういうことだ。今ならサレンダーを受け付けてもいいが……」

「いや、私とて誇り高いアマゾネスの末裔！勝負から逃げはしないから存分にかかってこい、三沢大地！」

「いいだろう、墓地からジェムナイト・フュージョンの効果発動！マデイラを除外して手札に戻し、ファイヤー！」

タニヤ LP3200↓2700

「墓地のアクアマリナを除外し、ジェムナイト・フュージョンを射出！

ファイヤー！」

タニヤ LP2700↓2200

「墓地のラズリーを除外！ファイヤー！」

タニヤ LP2200↓1700

「墓地のセラフィを除外！」

タニヤ LP1700↓1200

「こ、これでお前の墓地のモンスターは品切れのはずだが……」

「無論、対策はある。さっきはああ言ったが、本当はこのドローフエイズでこのカードがなかったら俺の負けだったな。速攻魔法、異次元からの埋葬発動！除外されたサファイア2体とラズリーを墓地に戻し、すべてジェムナイト・フュージョンのコストにする！ファイヤー！」

異次元からの埋葬

速攻魔法（制限カード）

ゲームから除外されているモンスターカードを3枚まで選択し、そのカードを墓地に戻す。

タニヤ LP1200↓700↓200↓0

「私の負け、か」

「いや、もし零式魔道粉碎機がなかったら俺が圧倒的に不利だった。俺の計算をお前の戦法が上回ったのは事実だ」

「だが、それを引いたのもお前の実力……では、私は精霊界にでも帰

るとしよう。このコロッセオは好きに使ってくれ。さらばだ、三沢大地」

そう言うと、みるみるうちにタニヤの姿が一匹のメス虎へ変化していく。呆然としている僕らをよそに、いつの間にか近く寄ってきていたバースとタニヤは僕らに背を向けてゆっくりと去っていった。その姿が完全に見えなくなったあたりで、思わず気になったことをぽつりとつぶやいた。

「好きに使ってくれて……こんな校舎から絶妙に距離が離れた建物どう使えっていうのさ……」

レッド寮が限界を迎えたあたりで新生オシリスレッドにでもしろと？あ、でもそれはそれでありかも。敷地広いし。とりあえず、月一ぐらいで掃除しに来ようかな。維持管理が大変そうだ。

## ターソン28 蘇った少年と不死を目指した男

とある朝。のんびり朝ご飯を食べながら、なんだかこの数日間はずいぶんとイベント盛りだくさんだったなあ、なんてことをぼんやり考えていた。なにせ黒蠍団の面々に鍵を盗まれそうになったけど最終的には万丈目、もとい名探偵万丈目サンダーの活躍によってレッド寮に住みついてもらったり、アビドス三世とかいう正直聞いたことない名前の昔の王様がスピリッツ・オブ・ファラオを引き連れて十代と戦ったり、コスプレデュエル大会にブラマジガールが出てきたり。ちなみに僕はジョーズマンのコスプレで出てました。

「よう、清明」

「あ、おはよ万丈目。十代たちはまだ？」

寝てるのか、という意味を込めて軽く上を指さすと、無言でうなずいて肯定する万丈目。まったく、こっちは最近始めたレッド寮すぐこの土地で（勝手に）始めた畑の世話とかようやく直った投網の練習とかで忙しいってのに。

「……………なんか理不尽。とゆーことでこれはもらってこつと」

言いながら、盆の一つから焼き魚を一匹くすねる。いったきまーす。

「ふむ、じゃあ俺も」

万丈目が取ったのは、味噌汁と納豆。それぞれ別のトレイからとつてある程度のバランスをとるあたり、こいつもなんだかんと言っているやつだと思う。

それからしばらくの間、特にこれといった会話もせず無言でむしゃむしゃと朝ご飯をほおばった。普段なら僕ら二人でもなにがしかの会話があるもんなんだけど、何せ今日はいつもとは勝手が違う。僕ら全員が隠してはいるけど、正直不安でいっぱいなのだ。

「ごちそうさまでした。ねえ、万丈目」

「なんだ」

「大徳寺先生、どこにいるんだろうね」

「……………さあな。ほら、早く出発しないと遅刻するぞ」

「そう、だね」

昨日から姿を見せない、大徳寺先生。夕飯も朝ごはんも食べに来ないけどもしかしたら、授業の準備をして朝早くから学校にいるのかもしれないし。まさかあの先生に限って、誰にも何も言わずにセブンスターズにケンカを売るなんてありえない……はず。

「よし、今日も行ってきましたす！」

『おー、行って来い』

とりあえず僕に今できることなんて、ユーノの声を後ろに聞きながら、一時間目の錬金術の授業に大徳寺先生が出ることを願いつつ遅刻しないように校舎まで急ぐことだけだ。……あ、十代起こすの忘れてた。ごめんね。

「やっぱダメ、か」

「来ないね、だってさ」

「別にお前のことを疑ってるわけじゃないが、本当に昨日から大徳寺先生のことは見てないのか？」

三沢、その質問はこれで3回目だよ。まあ、その気持ちもわからないではないので素直に同じことを言うだけにしておくけど。

「うん、昨夜からいないんだよ。昼までは間違いなくいたのに」

昼間購買に行ったときにトメさんにもりそば頼んでるのが電話越しに聞こえたから間違いない。しかしお蕎麦も取り扱ってるって、無駄にレパートリー広いねこの学校。まあ海の中にぽつんと浮かぶ離れ島だし、それぐらいなきややってらんないけど。そうやって教壇に誰もいない教室で座りながらむなしくだべっていると、なぜかクロノス先生が入ってきた。行方不明の大徳寺先生の代わりに錬金術の授業をすることになった、とのこと。あのオカルト嫌いの人がねえ、ちゃんとした錬金術の授業なんてできるんだろうか。

……結果？なんだかよくわかんないぐだぐだな流れで終わったよ！錬金術のマークとかいうのは覚えてたけど。あんな『丸書いてちゃん』で終わるようなマークなら僕だって書けるな。そしてそのままの

流れで今日の授業は終わり。土曜日だからね、午前中で授業はなくなるのだ。いつもだったら寮でゴロゴロしたりデュエルしたりするところだけど……………」

「わかってるな、お前ら」

「「もちろん！」「」」

万丈目隊長（仮）の言葉に合わせて返事を返す、我らオシリスレツドのいつもの4人。何があったかは知らないけど大徳寺先生ひとりで行ける場所なんて限られてるんだ、絶対僕らで探し出してやる！

「それで隊長、質問でーす！」

「なんだ、清明隊員」

「まずどこを探すんですかー！」

「……………そうだな、まずはヒントになるものがあるかもしれんし、大徳寺先生の部屋からあたってみるか」

というわけで、意外とまともだった名探偵？なサンダーの言葉に従って大徳寺先生の部屋の前まで来てみたのはいいのだが。

「で、結局これだもんなー。なんでこうこの寮はすることなすこと全部犯罪チックなのかね。あ、ご苦労様サッカー」

「うるさいーそもそも実行犯はお前らだろうが」

なんのことはない。鍵がかかっていた部屋の扉を開けるために精霊体のシャーク・サッカーを先に中に入れ、そのまま中で実体化して鍵を解除してもらったのだ。まあ非常時だからしようがないね。怒られたらその時は万丈目がやれって言った、とでも言っておこう。どれ、なにかあるといいなー。

そして1時間後。ある地図を囲んでその周りに座っていた僕らは、一斉にその地図のある一点を指さした。

「森だな」

「森だね」

「森ツスね」

「森が怪しいな」

「森っぽいんだな」

『……………』

それは、このデュエルアカデミアのある島全体の地図。見慣れた校舎、火山などの地形の中に一か所だけ、ついさっきの授業で覚えた錬金術マークが手書きで書かれていたのだ。そしてその場所が、今言った森の中。正確に言うと、この位置は洞窟かなんかがあるんだっけか。

「よし、これから俺たちはこの位置に向かう！大徳寺先生をなんとしても探し出すぞ！」

「「「おー！」「」」

なんか妙にしゃべらないユーノが気になるけど、今はそれより先生優先！レッツゴー！

「ねえ万丈目」

「サンダー」

「……ねえサンダー」

「なんだ」

「迷った………よね」

「ノーコメントだ」

そう言っつて、話は終わりだといわんばかりにそつと目をそらす万丈目。迷ってるな。これまではまだもしかしたら迷ってないんじゃないやないかっていう希望もあったけど間違いない。完全に迷子になってしまう。

「まったく……」

「キヤー……キヤー!!」

そのまま文句の一つでも言っつてやろうとした時、いきなり悲鳴が響いた。あの声……明日香!?慌てて声の方向に駆け出そうとしたその瞬間、ポケットにねじ込んでおいた僕のPDLが鳴り響いた。相手は………夢想だ！

「はいこちら清明、もしもしどうしたの!?今ちよつと忙し……!」

『お願い清明！今森の中にいるんだけど、明日香とはぐれちゃった、だって！それで探してたら悲鳴が聞こえてきて………細かいことは



後で話すから、とにかく森まで来て、だつて……さう？」

「あれ。えつと、やあ、夢想」

歩きながら話してたら案外すぐ近くにいた夢想に話を聞いてみると、なんでも明日香の部屋が誰かに荒らされて犯人が森に駆け込むのが見えたから追いかけてきたらしい。ふむ、大徳寺先生がいないのと何か関係が……まさかね。

「ちようどいるなら話は早いね、だつてさ。明日香っ！」

そう言つて走つていくのを慌てて追いかける。と、いきなり前を行く夢想の足がぴたりと止まった。そのままぶつかりそうになるのをなんとかストップし、背中越しに何かがあるのかをしてみる。するとそこに落ちていたのは、誰かのデュエルディスクと散らばったカード。恐る恐るそのなかの何枚かをひっくり返してみると、それは案の定『エトワール・サイバー』『サイバー・チュチュ』『スケープ・ゴート』『プリマの光』『ドゥーブルバツセ』等々、明日香のカードばかりだった。

「一体、明日香に何が……」

大徳寺先生の行方不明に加え、明日香の身にデッキを放り出してどこかへ行くほどの何かが起きた。これにはさすがの十代も警戒の色を強くし、翔に隼人も不安そうにあたりを見回している。あれ？

「ねえ十代、万丈目、見なかつた？」

一人足りない。ついさっきまでいたはずの万丈目までどこかに行ってしまった。万丈目は、普段の言動とは裏腹に面倒見がかなりいい。すぐ近くで悲鳴が聞こえたのを無視したり逃げ出したりするような男じゃあないはずなんだけど。

「うわあああーっ！」

つてまた悲鳴?!しかも今度は万丈目の声だ!

「行くよ、みんな!はぐれないでね!」

本当は一人で突つ走つて様子を見に行きたいところだけど、さすがに二回目だからある程度警戒する。一人でいるのは論外。助けに行つてこつちがやられました、じゃああんまりすぎる。もうすぐそつちまで行くから、それまで何やってんのか知らないけど何とか持ちこ

たえてよ万丈目！

「っ！遅かった……」

駆け付けた湖のほとりに散らばっていたのは、これまたデュエルデイスクに『アームド・ドラゴン L V 7』『レベルの絆』『おじやマシンドラ』『おじやマシンドラブリフ！』『X―ヘッド・キャノン』……ああこれ間違いない、万丈目のカードだ。アームドとVWXYZは別のデッキに分けてたはずだから、デッキ二つが混ざって散らばってるんだろう。

「な、何か二人の手がかりは……」

『そこだ。ここからでも見えるだろ、アムナエルのマーク』

またいつの間にかそばに来ていたユーノが指差した方を見ると、確かにどういう原理なのか、空中に浮かぶ黄色い丸書いてちよんのマークがひとつ。それを僕が見た瞬間、激しい音とともに海からこの島を囲むように計3本の光の柱が立ち上がった。え、ちよ、もうどうなってるの!?

『三幻魔……ふん、若輩者が粋がった演出を』

「あれ、いたのチャクチャルさん？」

『最初からだ。それはどうでもいいが、今三幻魔の封印は7つ中3つが解放された。あの光はその目印だろう。……私がいつだって貴方にはついてるが、ゆめゆめ油断しないように』

なるほど、つまり万丈目と明日香の鍵はもう取られちゃったと。あと一本はカイザーの分だろうし。だけど今は、そんな悠長なことを考えてる場合じゃない。光の柱を見て一番早く行動を起こしたのは、いつも通り十代だった。

「清明、こうなったら俺らで行ってみようぜ！きっと大徳寺先生もあの中にいるはずだし、こうなると万丈目や明日香もあの中にいる可能性が高い！」

「う、うん！」

僕らが決意を固めると、まるでそれに反応するかのように錬金術師アムナエルのマークが空中を明滅しながら移動していった。

「ついて来い、ってことなのかな？だってさ」

「上等さ、最後のセブンスターズも振り返りにしてやる！」

「しっかし、まーたこの廃寮に戻ってくるとはねえ」

「くっそー、中に入ったらマークが消えちまった。そーいやお前、ついこの間ここで幽霊に会ったんだってな」

「うん。いい人だったんだけどねー」

「初耳。だつてさ。あとで教えてね、清明」

「へえ、彼女さんかい？それにしても今度はずいぶん大所帯じゃないの。自分びつくりしちゃったよ」

「ちなみにその時の幽霊つて、どういう奴だったんだなく………うん？」

あれ、この声つてもしかして？

『む、出たな幽霊』

「君に言われたくないけどね。みんなの期待にお応えして、自分の率いるゴーストリック軍団ただいま参上ー♪なんちつて」

「い、いいいい稲石さんっ!？」

いつの間にかナチュラルに僕らに紛れ込んでいて、やっほーと明るく手を振るのは身元も経歴も不明だけどデュエル脳では一級品、謎の廃寮に住むゴーストリック使いの幽霊、稲石さん。びつくりすんなあもう。

「えっと、どしたんですかこんなところで」

「なーに言ってるの。ここ自分が住み着いてるんだよ？むしろいない方がおかしいっしょ。あ、清明以外の人には初めましてだね。廃寮住込みの幽霊、稲石です。どもよろしく」

「えーと……初めまして、なんだって」

「ど、どうもなんだな」

「初めましてッス」

ぎこちないなりに自己紹介を終える夢想たち。相手が幽霊だからある程度ぎこちなくなるのは仕方ないんだろう。僕も最初に気づいたときは本気で怖かったから人のことは言えないし。

「それで君たち、いったい何しに来たんだい？」

セブンスターズとかのことも全部ばらしちゃっていいんだろうか、と素早くアイコンタクトをかわす。いいのかなあつきり言っちゃって、まあいいんじゃない悪い人じゃないし。

「実はかくしかじか、ってわけ。ねえ稲石さん、何か知ってない？」

「まるまるうまうま。なるほど、そういうことか。ねえ君たち、実は自分に心当たりが一つあるんだ。つい昨日のことなんだけどいきなり地下通路の一部が何者かに爆破されて、その向こう側に隠し通路が見つかったんだよ。いかにも怪しいからスルーしてたんだけど、たぶんそこが怪しいと思う。案内するからついてきて」

そういうが早い、ひらりと体を反転させて相変わらず足音ひとつ立てず、もつとと言うと足すら動かさずにすうつと床の上を滑るように先頭に立つ稲石さん。願ったりかなったりだ、ここは迷わずついてくしかないね。と、そんな僕の服の襟をぐつとつかんだ隼人が、稲石さんに聞こえないようにそつと耳打ちしてきた。

「(いいのか、清明？なんか話ができすぎてる気がするけど、本当に信用して大丈夫なのか?)」

なんだ、何かと思えばそんなことか。

「大丈夫、僕は稲石さんを信じてるよ。だって、僕はある人とデュエルして友達になった……かどうかは向こうがどう思ってるかわかんないけど、あの人が信用できるってことはわかったんだ。十代のいつも言ってる『デュエルすれば分かり合える』ってのも、あながち間違いないんじゃないのかもね」

「ここ、さ。ここから先には自分もまだ入ったことがないんだけどね」  
「なるほど、じゃあ……」

ここから先は僕らだけで、と言おうとしたのを遮るようにして、素早く言葉続ける稲石さん。

「だから、自分もついてくよ。そもそも、ここは自分の家なんだ。勝手

に荒らされていい気はしないしね」

「あー、はい。そうですか。じゃあ行きましょ」

この人の性格からいって、何言ったって勝手についてくるだろう。こつちだつて急いでるんだし、無駄に言い争つてる暇はない。覚悟を決めて、僕らはゆつくりとその通路に足を踏み入れた。

「と思つたらすぐ出口だつた」

「まだ3分も歩いてないね。待てよ、さっきの通路のあの位置からこの向きに直線で3分弱……駄目だ、どうしても計算が合わない。こんな位置に部屋があるはずなのに」

いぶかしむ稲石さんだけど、前に僕が来たとき存在するはずない場所の部屋に案内してデュエルしたどっかの誰かとはどっこいどっこいの不気味っぷりだと思う。少なくともお前が言うな。

「ね、ねえ、あれ見てよ」

部屋の中をきよろきよろと見回していると、翔が何かを見つけたようだ。そっちの方を向いてみると、そこにはいかにもな棺桶が壁に立てかけてあつた。……ここつて一応は学校の一部だよね。もうなんでもありだなデュエルアカデミア。いまさらといえばその通りだけど。

「入ってますかー、失礼しますよ、つと」

とりあえず開けてみる。いやだつてほら、これがお約束つてもんでしょ。まーたカミューラみたいなのが入つたら速攻で閉めるつもりだつたけど、そこに横たわっていたのはスーツ姿でメガネをかけたミイラ。ミイラあ!?

「なんじゃこりやー!? つてあれ、この顔もしかして、大徳寺先生?」

「よく来たな、七星門の鍵の守護者よ」

そのミイラについてはいろいろ考えたいこともあつたが、どうやらその時間はないらしい。コツ、コツ、と静かに足音を立てながら近寄ってきたフードにマスクの男、こいつが最後のセブンスターズだろう。

「一応確認させてもらうよ。お前が明日香や万丈目をさらつて大徳寺先生をこんな姿にしたのか!」

「最後の一つは間違っている。そのミイラは、はるか昔からここにあったものだ。だが、彼らを襲ったのは確かに私だ。返してほしければ、私と闇のデュエルだ！」

「上等っ！セブンスターズ、また返り討ちにしてやる！」

「自己紹介がまだだったな。私の名はアムナエル、そして私こそが最後のセブンスターズ！」

「デュエル！」

「先行は私がもらう！ドロー、錬金生物　ホムンクルスを召喚！カードを2枚伏せてターンエンドだ」

錬金生物　ホムンクルス　攻1800

アムナエルがまず出したのは、黒い目隠しをつけた片腕と片足が金属のようになっていほぼ全らの人間型モンスター。攻撃力1800はなかなか大きいけど、このまま押し切る！

「ドロー、アームズ・シーハンターを召喚！そして手札から爆征竜―タイドルの効果発動、このカードと水属性を墓地に送ることでデツキのモンスターを一体墓地に落とすことができる。この効果で僕が手札とデツキからそれぞれ落とすのは、手札がオイスターマイスターでデツキからハリマンボウだよ。その効果を受けて、ホムンクルスの攻撃力は500ダウンしてもらおう」

アームズ・シーハンター　攻1800

ハリマンボウ

効果モンスター

星3／水属性／魚族／攻1500／守　100

このカードが墓地へ送られた時、

相手フィールド上に表側表示で存在するモンスター1体を選択して発動する。

選択した相手モンスターの攻撃力は500ポイントダウンする。

錬金生物　ホムンクルス　攻1800↓1300

「そこにそのまま攻撃！」

狙い澄まして放たれた必殺の矢が、大量の針を受けて弱体化したホムンクルスめがけて一直線に迫っていく。が、命中する寸前にアムナ

エルの前に怪しく音を立てる機械のような何かが出現し、その一撃を止めてしまう。

「永続トラップ発動、エレメンタル・アブソーバー！私は手札の水属性モンスター、水の精霊 アクエリアを除外することでその攻撃を無効にする！」

「なっ?！」

エレメンタル・アブソーバー

永続罠

手札のモンスターカード1枚をゲームから除外する。

この効果によって除外したモンスターと同じ属性を持つ相手モンスターは、

このカードがフィールド上に存在する限り攻撃宣言をする事ができない。

「さあ、どうするかね?！」

「だったらしょうがない。カードを2枚セット、これで僕はターンエンド」

アムナエル LP4000 手札：2 モンスター：錬金生物 ホ

ムンクルス（攻） 魔法・罠：エレメンタル・アブソーバー（水）、1

（伏せ）

清明 LP4000 手札：1 モンスター：アームズ・シーハン

ター（攻） 魔法・罠：2（伏せ）

「ならば私のターン。この伏せカード、マクロコスモスを発動！そしてその効果により、デッキから原始太陽ヘリオスを特殊召喚する！見るがいい、これが私のたどり着いた錬金術の力だ！」

アムナエルがマクロコスモスを発動した瞬間、不思議なことが起こった。さつきまで洞窟の中の部屋にいたはずなのに、いきなり周りの風景が宇宙になったのだ。ソリッドビジョンでもなさそうだし、一体何が起こってるってのさ！

「今、我々のデュエルは人間の世界を飛び越え、宇宙へと転換した。マクロコスモス  
大宇宙……………このカードがある限り、お互いの墓地へ行くカードはすべてゲームから除外される。そして先ほども言ったがこのカー

ドの発動時、私は原始太陽ヘリオスを特殊召喚できるのだよ」

原始太陽ヘリオス

効果モンスター

星4／光属性／炎族／攻　　？／守　　？

このカードの攻撃力・守備力は、

ゲームから除外されているモンスターの数×1000ポイントになる。

原始太陽ヘリオス　攻0↓1000

「だ、だけど攻撃力1000ならこのまま」

「まあそう慌てるな、悪い癖だぞ。手札からマジックカード、闇の誘惑を発動！カードを2枚ドロウし、手札のネクロフェイスを除外！」

闇の誘惑

通常魔法（制限カード）

デッキからカードを2枚ドロウし、

その後手札の闇属性モンスター1体を選んでゲームから除外する。

手札に闇属性モンスターが無い場合、手札を全て墓地へ送る。

ネクロフェイス

効果モンスター（制限カード）

星4／闇属性／アンデット族／攻1200／守1800

このカードが召喚に成功した時、

ゲームから除外されているカード全てをデッキに戻してシャッフルする。

このカードの攻撃力は、この効果でデッキに戻したカードの枚数×1000ポイントアップする。

このカードがゲームから除外された時、

お互いはデッキの上からカードを5枚ゲームから除外する。

「この効果で、お互いはデッキの上からカードを5枚除外する。私の除外するカードの中のモンスターカードは4枚だ」

デッキの上から5枚……ウミノタウルス、氷霊神ムーラングレイス、ジューズマン、竜宮の白タウナギ、グリズリーマザー。つてちよつと待てえ！全部、よりにもよつて全部モンスターつて。そんなにデッ



キバランス悪くした覚えはないよ！

原始太陽ヘリオス 攻1000↓1000

「そして私は、カオス・グリードを発動。カードをもう2枚ドロースる」

カオス・グリード

通常魔法

自分のカードが4枚以上ゲームから除外されており、

自分の墓地にカードが存在しない場合に発動する事ができる。

自分のデッキからカードを2枚ドロースする。

「そして私はこのターン、まだ通常召喚を行っていない。錬金生物  
ホムンクルスをリリースし、黄金のホムンクルスをアドバンス召喚！  
そして錬金生物がリリースされ除外されたことで、ヘリオスの攻撃力  
もまた上がる」

同じホムンクルスと名がついてはいるが、さっきのホムンクルスは  
割と人間に近かった。服着てなかったけど。だけど今度は違う、金色  
に光り輝くゴーレムだ。

黄金のホムンクルス

効果モンスター

星6 / 光属性 / 戦士族 / 攻1500 / 守1500

このカードの攻撃力・守備力は、  
ゲームから除外されている自分のカードの数×300ポイント  
アップする。

黄金のホムンクルス 攻1500↓4500 守1500↓4500

原始太陽ヘリオス 攻1000↓1100

「そして速攻魔法、ダブル・サイクロンを発動！私のエレメンタル・ア  
ブソーバーと君の伏せカード1枚を破壊する」

2本の竜巻がフィールドを駆け抜け、それぞれ1枚ずつカードに襲  
い掛かる。だけど、それはむしろラッキーだった。なにせ、ノーコス  
トで厄介なエレメンタル・アブソーバーがなくなってくれたのと同じ  
だからだ。

「チェーンしてトラップ発動、八咫鳥の骸！残念ながらスピリットモンスターはいないから、一つ目の効果でカードをドロロー！」

ダブル・サイクロン

速攻魔法

自分フィールド上に存在する魔法・罠カード1枚と、

相手フィールド上に存在する魔法・罠カード1枚を選択して発動する。

選択したカードを破壊する。

八咫鳥の骸

通常罠

次の効果から1つを選択して発動する。

●自分のデッキからカードを1枚ドロローする。

●相手フィールド上にスピリットモンスターが表側表示で

存在する場合に発動する事ができる。

自分のデッキからカードを2枚ドロローする。

「まあいい。ダブル・サイクロンの発動により、除外ゾーンに送られた私のカードは2枚増えた。ホムンクルスの攻守がもう600ポイントアップする」

黄金のホムンクルス 攻4500↓5100 守4500↓5100

「行け、黄金のホムンクルス！ゴールデン・ハーヴェスト！」

「トラップ発動、ポセイドン・ウェーブ！その攻撃を止めて、800のダメージを受けてもらう！」

ポセイドン・ウェーブ

通常罠

相手モンスターの攻撃宣言時に発動する事ができる。

相手モンスター1体の攻撃を無効にする。

自分フィールド上に魚族・海竜族・水族モンスターが表側表示で存在する場合、

その数×800ポイントダメージを相手ライフに与える。

アムナエル LP4000↓3200

「むっ……」

大津波の一撃を受けて返り討ちにあつた黄金のホムンクルスの巨体がバランスを崩して倒れ、その衝撃でアムナエルがかぶっていたマスクがポロリととれる。

「ちようどいい、その素顔を見せてもらおうか！ って、そんな、まさか……」

そこから見えた顔は、まぎれもなく大徳寺先生のもの。そんな、でも、さっきのミイラが大徳寺先生ってことは。

「偽物?！」

「いや、違う。そこでミイラになっている男と、今こうして君とデュエルしている私は同一人物だ。私の名はアムナエルであり、大徳寺でもある。詳しい説明は省くが、私のこの体はホムンクルス、の一種、平たく言えば人造人間だ。もつとも、もう長く持ちそうもないがな」

「そんな、大徳寺先生、ずっと嘘ついて裏切ってたっての!？」

「今はそう思ってくれて構わない。君の性格上、その方がデュエルに熱が入るだろうからな。さあ、これは私からの最後の試験だ！ 落第しなくては、私を倒してみろ！」

「先生、いやアムナエル、僕にはもう何が何だか分かんないよ……」

これは紛れもない本音。今日一日で、色々なことがありすぎた。そんな、いくらなんでも話が急すぎる。

「だからどうした。私は君の準備が整うのを待つつもりはないぞ！」

「………わかってる、それはわかってるよ。だから僕は、難しいことは考えない。今の僕にできることは、せめて万丈目たちを助け出すこと！ そのためにアムナエル、お前はここで絶対倒す！ ドロー！ マジックカード、アクア・ジェット発動！ シーハンターの攻撃力は、この効果で1000ポイントアップ！」

アクア・ジェット

通常魔法

自分フィールド上の

魚族・海竜族・水族モンスター1体を選択して発動できる。

選択したモンスターの攻撃力は1000ポイントアップする。

アームズ・シーハンター 攻1800↓2800

「そんな程度では、私のホムンクルスを倒すことなどできないぞ！」  
「わかってらい！僕はここで手札のモンスター、BF―疾風のゲイルを通常召喚！」

前にサンダー四天王最強の男、鎧田からもらったBFの名前を持つ鳥のモンスター。この子の力なら、ホムンクルスだって倒すことができる！

ブラックフェザー

B F ―疾風のゲイル

チューナー（効果モンスター）（制限カード）

星3 / 闇属性 / 鳥獣族 / 攻1300 / 守 400

自分フィールド上に「BF―疾風のゲイル」以外の

「BF」と名のついたモンスターが存在する場合、

このカードは手札から特殊召喚できる。

1ターンに1度、相手フィールド上のモンスター1体を選択して発動できる。

選択した相手モンスターの攻撃力・守備力を半分にする。

「そしてゲイルの効果発動、黄金のホムンクルスの攻守を半分にする

！これで黄金のホムンクルスの攻守は2250だ！」

「何!?!」

ゲイルがその翼をはためかせ、名前通りの黒い疾風を巻き起こすとその風を受けたゴレムの体の光沢が徐々に弱くなっていき、すつかりくすんだ色になっていった。

黄金のホムンクルス 攻4500↓2250 守4500↓2250

「今だ、シーハンター！」

アームズ・シーハンター 攻2800↓黄金のホムンクルス 攻2250（破壊）

アムナエル LP3200↓2650

「黄金のホムンクルスが除外されたことで、ヘリオスの攻撃力もまた上がるが……」

「無論、そのままゲイルで攻撃！ブラック・スクラッチ！」

BF―疾風のゲイル 攻1300↓原始太陽ヘリオス 攻110  
0↓1200 (破壊)

アマナエル LP2850↓2750

「どうだー！これでターンエンドー！」

アマナエル LP2750 手札：2 モンスター：なし 魔法：

罨：マクロコスモス

清明 LP4000 手札：1 モンスター：アームズ・シーハン

ター(攻)、BF―疾風のゲイル(攻) 魔法・罨：なし

「私のターン！手札からもう1枚のカオス・グリードを発動して2枚ドロ、そして速攻魔法、グランドクロスを発動！場のモンスターをすべて破壊し、300ポイントのダメージを与える！」

周りをふわふわと漂っていた星がまるで十字状に並んだかのような形になり、ぐにやり、と空間がゆがんでシーハンターとゲイルの体が爆発した。まずい、これでモンスターは一気に全滅だ！

グランドクロス

速攻魔法

自分フィールド上に「マクロコスモス」が存在する時に発動する事ができる。

相手ライフに300ポイントダメージを与え、

フィールド上のモンスターを全て破壊する。

清明 LP4000↓3700

「そして次元の歪みを発動！今私の墓地にカードはない、よって除外された原始太陽ヘリオスを特殊召喚する！」

次元の歪み

通常魔法

自分の墓地にカードが存在しない場合に発動する事ができる。

除外された自分のモンスター1体を選択し、

自分のフィールド上に特殊召喚する。

原始太陽ヘリオス 攻0↓1400

「ヘリオス？黄金のホムンクルスじゃなくて？」

「ふ、あのカードは所詮錬金術を完成させる過程での試験体にすぎな

い。私がたどりついた錬金術の究極の形こそがこのカード、ヘリオスシリーズだ！自分の場の原始太陽ヘリオス1体をリリースすることで、このカードは特殊召喚できる！来い、ヘリオス・デュオ・メギストス！」

ヘリオスの体が光に包まれて頭の太陽がより大きく赤くなり、その下の胴体はむしろずんぐりむっくりした体系へと進化していった。

ヘリオス・デュオ・メギストス

効果モンスター

星6 / 光属性 / 炎族 / 攻　　？ / 守　　？

このカードは自分フィールド上の「原始太陽ヘリオス」1体を生け贄に捧げる事で特殊召喚する事ができる。

このカードの攻撃力と守備力は、

ゲームから除外されているモンスターカードの数×200ポイントになる。

このカードが戦闘によって破壊され墓地へ送られた場合、

エンドフェイズ時に攻撃力・守備力を300ポイントアップさせて特殊召喚される。

ヘリオス・デュオ・メギストス　攻0↓2800　守0↓2800

「やっぱホムンクルスのほうが攻撃力高いんじゃない？」

「わからないか、私は君自身に興味があるんだよ」

はい？いきなり何を言ってるんだこの人は。そんな思いが顔に出ているのだろう、やれやれと息をついて説明してくれた。

「正確に言うと、君自身の体に、だ。一度死んでおきながら遠い異国の地で伝説とされた邪神の力により再び蘇り、さらにその力の一部を秘めた人間の体というのはいったいどれほどの変化があるのか。死人を復活させることと不死の人間を作ること、この二つはとてもよく似ている。つまり遊野清明、君という存在はある意味錬金術がずっと追いついてきたものの一つの形というわけだ」

『……私のことか。誤魔化すのは無理そうだな』

うーん、チャクチャルさんがそう言うんなら無理なんだろう。とはいえさすがに参ったな、できれば後ろの夢想たちに教えたい話じやな

かつたんだけど。……怖がられたり怯えられたりするの、寂しいから、嫌だ。

「したがって私は、私の見つけた私なりの錬金術最高の答えをもって君とデュエルがしたい。それが錬金術師としての私の、つまらないちっぽけな意地だ。ヘリオス・デュオ・メギストスで攻撃！ウルカヌスの炎！」

ヘリオス・デュオ・メギストス 攻2800↓清明（直接攻撃）

清明 LP3700↓900

「あ……熱っ！」

闇のデュエルならではの強烈な痛みと熱さに、ライフの余裕も一気になくなり立っているのもやっとの状態になる。でも、ここで僕が負けたら万丈目たちがどうなるかもわからない。まだ倒れるわけにはいかないんだよねっ！

「さあアムナエル、続きと行こうか！」

「ほう、目つきが変わったな。だが、私とて君に関してはいろいろ研究している。具体的に言うと、君はこういう状況に追い込まれるとかなり高い確率で極端に堅い守りを固めるか、一気に反撃に出るかの2択をとる。そこで私は、一時休戦を発動する。これでターンエンドだ」

一時休戦

通常魔法（制限カード）

お互いに自分のデッキからカードを1枚ドローする。

次の相手ターン終了時まで、お互いが受ける全てのダメージは0になる。

「二気に押し切られるよりは守りを固められる方がましってわけね。僕のターン！シャクトパスを守備表示で召喚、さらにこっちも一時休戦返し。カードをセットしてターンエンド！」

シャクトパス

効果モンスター

星4／水属性／魚族／攻1600／守 800

このカードが相手モンスターとの戦闘によって破壊され墓地へ送られた時、

このカードを装備カード扱いとしてその相手モンスターに装備できる。

この効果によってこのカードを装備したモンスターは攻撃力が0になり、表示形式を変更できない。

シャクトパス 守800

アムナエル LP2750 手札:0 モンスター:ヘリオス・デュオ・メギストス(攻) 魔法・罫:マクロコスモス

清明 LP900 手札:i モンスター:シャクトパス(守) 魔

法・罫:i(伏せ)

「私のターン！ヘリオス・デュオ・メギストスでシャクトパスに攻撃、ウルカヌスの炎！」

「そこでトラップ発動、フィッシャーチャージ!!魚族のシャクトパスをリリースして破壊するのは、マクロコスモス！」

「しまったー！」

飛んできた炎を身をよじって避けたシャクトパスが、ずっと大徳寺先生の間にあつたマクロコスモスのカードをそののこぎりのような形をした頭の先で串刺しにする。その瞬間、ついさっきまで広がっていた宇宙にひびが入り、そのまま崩れていった。

フィッシャーチャージ

通常罫

自分フィールド上の魚族モンスター1体をリリースし、

フィールド上のカード1枚を選択して発動できる。

選択したカードを破壊し、デッキからカードを1枚ドロウする。

「一時休戦の効果でダメージは通らない、か。流星にしぶといな、だがそれでこそ面白い！私はこのヘリオス・デュオ・メギストスをリリースする！これこそが私のたどり着いた錬金術の究極の答え、ヘリオス・トリス・メギストス！」

ヘリオス・デュオ・メギストスの姿がまたしても光に包まれ、その姿が3つに分かれる。一体一体の太陽と体はこれまでと比べてずっと小さくなったが、その熱量は明らかに跳ね上がっている。

ヘリオス・トリス・メギストス 攻0↓4200 守0↓4200



「さあ、私はこれでターンエンドだ」

「だいぶきついけど、とにかくこのターンは耐えきつた……僕のターン！オイスターマイスターを守備表示で召喚、さらにカードを伏せてターンエンド」

オイスターマイスター 守200

アムナエル LP2750 手札：1 モンスター：ヘリオス・トリス・メギストス（攻） 魔法・罠：なし

清明 LP900 手札：1 モンスター：オイスターマイスター（守） 魔法・罠：1（伏せ）

「私のターン、流星の弓―シールをヘリオス・トリス・メギストスに装備する！」

流星の弓―シール

装備魔法

装備モンスターの攻撃力は1000ポイントダウンする。

装備モンスターは相手プレイヤーに直接攻撃をする事ができる。

ヘリオス・トリス・メギストス 攻4200↓3200

「ヘリオス・トリス・メギストスで直接攻撃！フェニックス・プロミネンス！」

3つの太陽から立ち上った炎の柱が上で合体し、巨大な不死鳥の姿になって襲い掛かってくる。ううむ、弓の要素がかけらもない。

「なんてこと言ってる場合じゃなくて！トラップ発動、バブル・ブリンガー！」

不死鳥の突撃は、僕に命中する寸前に無数の泡の壁によって消えさった。

バブル・ブリンガー

永続罠

このカードがフィールド上に存在する限り、レベル4以上のモンスターは直接攻撃できない。

自分のターンにフィールド上に表側表示で存在するこのカードを墓地へ送る事で、

自分の墓地の水属性・レベル3以下の

同名モンスター2体を選択して特殊召喚する。

この効果で特殊召喚したモンスターの効果は無効化される。

「ならば、モンスターを攻撃すればいいだけの話！改めて攻撃、フェニックス・プロミネンス！」

ヘリオス・トリス・メギストス 攻3200↓オイスターマイスター 守200（破壊）

「カードを伏せてターンエンドだ。この土壇場での勝負強さ、それがお前の一番の力なのかもしれないな」

「褒め言葉として受け取っとくよ、ドロー！来た来た来た！バブル・ブリンガー第2の効果を使って、このカードを墓地に送って2体のオイスターマイスターを特殊召喚！そしてそのままリリースしてマイフェイバリットカード、霧の王をアドバンス召喚！」

キングミスト  
霧の王

効果モンスター

星7／水属性／魔法使い族／攻 0／守 0

このカードを召喚する場合、生け贄1体

または生け贄なしで召喚する事ができる。

このカードの攻撃力は、生け贄召喚時に生け贄に捧げたモンスターの元々の攻撃力を合計した数値になる。

このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、いかなる場合による生け贄も行う事ができなくなる。

霧の王 攻3200

「さらにオイスターマイスターが戦闘以外の方法でフィールドから墓地に送られたことで、オイスタートークンを2体特殊召喚！」

オイスタートークン×2 守0

「攻撃力3200か。相打ちでも狙っているのか？」

「とんでもない。装備魔法、団結の力を霧の王に装備！僕の場にモンスターは計3体、だから攻撃力2400アップだ！」

言わずと知れた有名装備魔法、団結の力。自分の場のモンスター1体につき装備モンスターの攻守を800上げる単純ながら強力な効果は、ヘリオス・トリス・メギストスと霧の王の互角だった攻撃力に

一気に差をつけた。

霧の王 攻3200↓5600 守0↓2400

「なるほど、団結の力……それが君の見つけた答え、というわけか」  
「さらに、墓地から爆征竜―タイダルの効果発動、水属性のオイスター  
マイスター2体を除外して特殊しよう

「だが、私もまだ負けるわけにはいかないのだよ！トランプ発動、転生の  
予言！このカードは発動時、お互いの墓地から合計2枚のカードを  
選択して持ち主のデッキに戻す。この効果で選ぶのはマクロコスモ  
スと爆征竜―タイダルだ！」

「そんなー！」

タイダルを復活させれば霧の王の攻撃力はさらに上がってもっと  
ダメージを増やすこともできたんだけど、見通しが甘かったか。

「だけど、霧の王の攻撃力が上なことには変わらない！ミスト・ストラ  
ングル！」

霧の王 攻5600↓ヘリオス・トリス・メギストス 攻3200  
(破壊)

アムナエル LP2750↓350

霧の王がひと振りした大剣が、一気に3つの太陽を横一文字に両断  
した。よし、このターンで倒しきれなかったのは残念だけど、さすが  
に、これ、で………？

ヘリオス・トリス・メギストス 攻4700 守4700

「そ、そんな、どうして!？」

「ヘリオス・トリス・メギストスはたとえ戦闘で破壊されても、その能  
力を上げて蘇る不死の太陽。残念だったな、清明」

ヘリオス・トリス・メギストス

効果モンスター

星8 / 光属性 / 炎族 / 攻 ? / 守 ?

このカードは自分フィールド上の「ヘリオス・デュオ・メギストス」  
1体を

生け贄に捧げる事で特殊召喚する事ができる。

このカードの攻撃力と守備力は、ゲームから除外されている

モンスターカードの数×300ポイントになる。

このカードが戦闘によって破壊され墓地に送られた場合、エンドフェイズ時に攻撃力・守備力を500ポイントアップさせて特殊召喚される。

相手フィールド上にモンスターが存在する場合、

もう1度だけ続けて攻撃を行う事ができる。

アマナエル LP2750 手札：0 モンスター：ヘリオス・トリス・メギストス（攻） 魔法・罠：なし

清明 LP900 手札：1 モンスター：霧の王（攻・団）、オイスター・トクン×2（守） 魔法・罠：団結の力（霧）

「私のターン、ドロウ。ヘリオス・トリス・メギストスでオイスター・トクンに攻撃、フェニックス・プロミネンス！」

ヘリオス・トリス・メギストス 攻4700↓オイスター・トクン 守0（破壊）

霧の王 攻5600↓4800 守2400↓1600

「だ、だけど僕が次のターンにまたモンスターを出しさえすればまだチャンスはあるはず」

「いいや、ヘリオス・トリス・メギストスは相手の場にモンスターがいる場合にもう一度だけ攻撃できる！もう一体のオイスター・トクンにも攻撃だ、フェニックス・プロミネンス！」

ヘリオス・トリス・メギストス 攻4700↓オイスター・トクン 守0（破壊）

霧の王 攻4800↓4000 守1600↓800

「また形勢逆転、だな。これでターンエンドだ」

僕の手札にモンスターは今、いない。というか手札そのものがもうない。うまくモンスターが引けるとは限らないし、引けたとしてもそれが下級モンスターの保証もない。

「このドロウに、このデュエルの、僕らの全部がかかってるわけか…… おお、責任重大」

『つたく、まじめにやるっつー選択肢はねーのかよ』

『思い起こせば初めに話しかけた時も同じことを言った気がするが

……少しは緊張感を持ってくれ。私らがシリアスやっってるのに、肝心の貴方がそんな調子ではこちらの立つ瀬がない」

「えっと、確かあのときはこう答えたんだっけ？緊張感がないんじゃないかって色々吹っ切れただけ。だいたい、ここに入学してから僕がどれだけ濃い人生送ってると思ってるのさ、ってね。これが最後だ、アムナエル！このドローで全部決めてみせる！ドローっ!!」

気合を込めて、最後のドローをする。さあて、引いたカードは？

「っ！僕は手札の、ダブルフィン・シャークを召喚！そして召喚時の効果で、墓地からハリマンボウを特殊召喚！」

ダブルフィン・シャーク

効果モンスター

星4 / 水属性 / 魚族 / 攻1000 / 守1200

このカードが召喚に成功した時、

自分の墓地からレベル3またはレベル4の

魚族・水属性モンスター1体を選択して表側守備表示で特殊召喚できる。

この効果で特殊召喚したモンスターの効果は無効化される。

この効果を発動するターン、自分は水属性以外のモンスターを特殊召喚できない。

ハリマンボウ 守100

「手札1枚から2体のモンスターの展開……………」

「ある意味、これも錬金術の一種なのかな？まあなんだっていいさ、場に2体のモンスターが出たことで、霧の王の攻撃力もまた1600ポイントアップ！」

霧の王 攻4000 ↓ 5600 守800 ↓ 2400

「ミスト・ストラングル……………先生、最後の試験の結果は合格ですか？」

そう言うのと、アムナエルはちよつと驚いた顔をした後でふつと笑い一言、

「期待以上の満点なんだニヤ」

そう言った顔は、僕らがよく知っている大徳寺先生のものだった。

霧の王 攻5600↓ヘリオス・トリス・メギストス 攻4700  
(破壊)

アムナエル LP400↓0

デュエルが終了し、ソリッドビジョンがふっと消えていく。それと同時に、アムナエルと棺桶のミイラが同時に床に崩れ落ちた。慌ててアムナエルのほうに駆け寄ると、体が文字通りボロボロになって床に叩き付けたゆで卵の殻みたいなひび割れが全身に走っていた。そういえば、デュエル中にもこの体は長くない、みたいなことを言っていた気がする。

「アムナエル……」

「よく聞いてくれ、清明。私は確かにセブンスターズでは最後の一人だが、これで三幻魔の件がすべて片付いたわけではない」

「え……？」

「ちよつと待て、それどういうことだよ！まだ他にもいるってのかよ！？」

「その通りだ、十代。私の上にもう一人、三幻魔を復活させようとする者がいる。私はそれを止める力を持つものを見極めるために清明、君と戦った。君ならばきつと、三幻魔の復活を阻止できるはずだ！後のことは、任せた」

本当は、まだ何か言おうとしていたのかもしれない。だけど、その声が言葉になる前に、アムナエルの体は限界を迎えて砂の山になった。

「大徳寺先生ー!!」

本音を言うと、ちよつと泣きたい。だけどアムナエルは最期に言っていた、まだすべてが終わったわけじゃないって。だから、そういうのは全部後回し。いまはただ、その最後の敵とやらの企みを止めてやることだけを考えるんだ！

## ターン29 聖戦！三幻魔く神の炎、ウリアく

「ちよ、万丈目ー!?どこ行っちゃうのさー!!」

「万丈目サンダー！そ、そんなこと俺に聞くな、鍵が勝手に……………うお  
おっ!？」

七星門の鍵に引つ張られながらも律儀に返事をしようとした万丈目の体が、鍵に引つ張られるような形で宙に浮いていく。と、さすがにそこで首に引つ掛けていた鍵の紐に限界が来たらしくぶちつとちぎれて万丈目を地面に落とす。おもりのなくなつた鍵はさらにスピードを上げて飛んで行った。

「どうしてこうなつたのさ……………」

思わずそう呟いて、地面でピクピクしてる万丈目に一発蹴りを入れながら鍵が飛んでいくのをただ茫然と眺めていた。大体これというもの、タイミング的に考えればたぶん万丈目が悪いんだ。あと悪乗りした吹雪さん…………いや、10JOINさんと呼ぶべきか。大体あの人だつて黙つて寝てりや普通にイケメンだつたのに、なんであんな残念かつ面白愉快的人になつてるんだろう。でもモテてるところが妬ましい。

『それ、お前にもある程度同じこと言えるけどな。大人しくしてりや背も顔もそこそこだつてのに、朝早く起きて畑に水撒いて雑草抜いてから投網をぶん投げに海まで行く高校生ってどんなんだよ』

「そう思うならなんか手伝つてくんない?」

『いや、俺が言いたいのはそういうことじゃなくてだな』

じゃあ何が言いたいんだろう。いや、今はとりあえず万丈目だ。大体こいつが七星門の鍵を持ち出したりするからいけないんだ。明日香に惚れたつてのは別にいい。それは個人の自由だし、一言でも言つてくれれば応援だつてしただろう。そもそも、僕だつてその点では人のことが言えた身分じゃない。問題なのは、吹雪さんとよくわかんない同盟を結んで僕を含めて人様に迷惑かけまくつたことだ。

「……………とりあえず万丈目、今日の夕飯は絶対作つてやんないからね」  
何か足元でもごもご言つてたけど、無視。無視つたら無視。完全に

余談だけど、大徳寺先生がいなくなってから僕の忙しきは数倍に跳ね上がった。寮監としてあの人がやっていた雑用をまさかフアラオに押し付けるわけにもいかず、十代も万丈目も翔も隼人も今一つこういったことを任せるには信用できなかったので僕が引き受けてたらいつの間にか予算の交渉にまで駆り出されるようになったのだ。僕、まだ生徒なんだけどなあ。

「つと、そんなことより鍵だ鍵!」

慌ててさつき鍵の飛んで行った方を見るが、時すでに遅く何も見えない。えーと、えーと……

「こ、こっちかな!」

さつきまでの方角からある程度の見当をつけて、その方向に走り出す。ああ、これ間違ってたらどうしよう。三幻魔の復活なんてシャレになんない。

タツタツタツ。

『……なあ、清明さんや』

タツタツタツ。

『もしもーし、清明ー?』

タツタツタツ。

『いい加減にしろこの駄ークシグナーがっ!!』

「うおおっ!」

無視され続けたことにイラツと来たらしいユーノが走っていた僕の体のコントロールを奪い、無理やり足をもつれさせる。とっさのことで受け身もとれず、顔面から地面に叩き付けられた。

「何すんのいきなり!」

『何やってんだお前はー!』

さすがに怒って声を張ると、その1, 3倍くらい大きな声で怒鳴り返された。うるさい。

「仏の顔も三度までって言うでしょ!?!せめて3回は話しかける努力しようよ!」



『それは仏さんの場合だろ！俺はそんなに人間ができてないっつーの！』

「仏さんには違いないでしょうがこの幽霊！で、何、何の用？」

鼻が痛いのを無視してこんなことをした理由を聞くと、実に簡潔なお答えが返ってきた。

『三幻魔はあっちだばか』

びしっと彼が指差した方向を見ると、見るからに禍々しい黒雲がいつの間にか立っていた謎の柱の周りを取り囲んでいた。つまり、僕はこれまで見当違いの方向に走ってたど。

「先に言つてよユーノっ！」

『お前のせいだかな!?』

わーわーと罪をなすりつけながら現場に急行する僕らの姿は、さぞかし情けなかったらうと思う。

「皆っ!!」

「どこに行つてたんだ、清明！お前の代わりに十代がもうデュエルを始めてるんだぞ！」

ようやく駆けつけた時には、いったい何があったのかすでに三幻魔と思しきオーラを放つ3体のモンスターが場に出ていた。そしてぼろぼろの十代と、本気でいったい何があったのか上半身裸のマツチヨな変態がデュエルを繰り広げていた。だけど、この分なら十代が勝ちそうだと。というか、ちょうど十代が最後の切り札を使った瞬間に間に合ったらしい。

「エリクシーラーで幻魔皇ラビエルに攻撃！フュージョニスト・マジスターー!!」

E・HERO エリクシーラー 攻14500↓幻魔皇ラビエル

攻4000（破壊）

変態 LPO

そして十代曰く『究極のE・HERO』であるエリクシーラーの一撃がちよつとオベリスクっぽい幻魔を縦に一刀両断し、デュエルは終

わりを告げた。が。

「雲が、晴れない……?」

『しつこいな。私たち地縛神もたいがいだったが、少なくとも負けた時はさっさと封印されたぞ』

若干呆れた風にチャクチャルさんがつぶやいた瞬間、十代とデュエルしていた変態のデュエルディスクから赤、青、黄の三本の光が飛び出した。その光は一度大空高くに上っていき、すぐに折り返してきて地面に衝突して爆発を起こした。そしてできた3つのクレーターの中心から、それぞれ人型をした『何か』が姿を見せる。

「つて、何?!何?!」

「さあ、第2ラウンドと洒落込もうか」

きれいに声を合わせ、寸分たがわず同じ姿にそれぞれ赤、青、黄のマントを羽織ったその姿は、まるで悪魔のようだった。

「あの姿……まるでさつき影丸理事長が使っていた幻魔の殉教者トークンじゃないか」

「トークン!?!」

僕がいない間に、一体何があったんだろう。幻魔って実はトークンテーマだったんだらうか。しかし殉教者ってまた物騒な名前なこと。いまだに状況が半分ぐらいしか呑み込めてない僕がそんなことを考えていると、三沢が思わずといった風に声を上げた。

「ちよつと待て!第2ラウンドだと?一体どういうことだ!」

「そもそも、この人間に我々の開放など期待してはいなかった。この人間が強い欲望を持ち、我々にとって都合がいい地位を持つ存在だったために精霊の知識を与え、この島で闇のデュエルを行うことで力を我々に送り届けさせるよう仕向けただけのことだ。もつとも、先ほどの精霊使いとのデュエルの間にだいぶ調子を取り戻すことができたのはうれしい誤算だがな。ここまでやってくれるとは思わなかった」

えつと……つまり、どゆこと?」

「我々とデュエルモンスターズでもう一度勝負してもらおう。その戦いで我々が勝利し、敗者の魂を取り込むことで今度こそ我々は完全な形で復活することができるからな」

「要するに、結局はデュエルってことだな！なら、俺がもう一回戦って……あ、あれ？」

地面にへたり込んでいた十代が再び相手をしようとして立ち上がるも、さつきまでやってきた闇のゲームによるダメージが大きかったのか膝に力が入らなかつたらしく再びへたり込む。これ以上何かやらせるのは危険、か。

「まずは私からだ。さあ、この神炎皇ウリアの贄となる者は誰だ？」

そう言いながら、右端のクレーターから赤マントの殉教者が登ってくる。すぐ前に出ようとした僕を手で制して、三沢が前に進み出た。

「三沢！」

「安心しろ。神炎皇ウリア……あのカード単体の相手なら、この中にいる誰よりも俺が有利だ。それに、俺はまだ七星門の鍵を奪われていなかった。あれはただの道具にすぎなかつたそうだが、それでも俺にはここで戦う権利があるはずだ」

そして、こちらにいつも通りの笑顔を向けてくる三沢。大丈夫、三沢は強いんだ。ウリアつてのがどんなカードかは知らないけど、あそこまで言うなら何か勝算があるんだろう。

「三沢、といったな。いいだろう、いぎ勝負だ！」

「デュエル!!」

「先行は我がもらう、ドロー！我はカードを5枚伏せ、カードカー・Dを召喚！そのまま効果を発動し、ターンエンドだ」

いきなりカードをガン伏せした殉教者が呼び出したのは、夢想曰くDは髑髏のDな平べったい車。通常召喚してリリースするとカードを2枚ドローできるが、その代償としてそのターンのエンドフェイズまで飛ばされてしまう。モンスターのない今なら三沢の攻め放題だが、5枚も伏せられたらさぞかし不気味なことだろう。

「俺のターン、ドロー！よし、魔法カード、簡易融合を発動！1000ライフポイントを払い、エクストラデッキから朱雀を特殊召喚！」

インスタント・フュージョン  
簡易融合

通常魔法

1000ライフポイントを払って発動できる。

レベル5以下の融合モンスター1体を

融合召喚扱いとしてエクストラデッキから特殊召喚する。

この効果で特殊召喚したモンスターは攻撃できず、エンドフェイズ時に破壊される。

「簡易融合」は1ターンに1枚しか発動できない。

三沢 LP4000↓3000

朱雀 朱雀 攻1900

「さらに俺はこのモンスターをリリースし、氷帝メビウスをアドバンス召喚！そして効果発動、リリース・バースト！お前の場の両端の伏せカードを破壊だ！」

赤い髪を着物を着た戦士は速攻でリリースされ、代わりに僕も愛用する氷の名を持つ帝……アドバンス召喚時に2発までサイクロンをぶちかませるメビウスが姿を見せ、素早く2本のつららを殉教者の場のカードめがけて打ち出す。

「なら、まず1枚をチェーン。永続罫、女神の加護。この効果により我は、3000のライフを得る」

「くつ、やはり永続トラップ……だが、そのカードにはデメリットもある。結局は何も変わらないぞ！」

殉教者—ウリア— LP4000↓7000

三沢の言葉は正しい。女神の加護は発動するだけで3000という破格のライフを回復できるが、そのリスクとして破壊された場合に3000のダメージを受けてしまう。どやっ、これぐらいは僕だって知ってるのさ。

『そーいや翔が言ってたけど、ちょうど3日前の授業にライフ回復に關しての講義があったらしいなー？』

く、ばれてたのか。せっかくユーノを見返してやれるかと思っただの。でも実際、ここで女神の加護を発動するメリットは何もないはず。なのに、なんでわざわざチェーンしたんだろう？

「そして我は、こちら側のカードもチェーンする。トラップカード、幻蝶の護り」

殉教者がもう1枚のカードを発動した瞬間、色とりどりの無数の蝶

が一斉にメビウスの周りを飛び回ってその視界を攪乱する。目の前を動き回る原色に目を回したのか、たまりかねたようにメビウスが片膝をついた。

幻蝶の護り

通常罠

フィールド上に表側攻撃表示で存在するモンスター1体を選択して発動できる。

選択したモンスターを表側守備表示にする。

このカードを発動したターン自分が受ける全てのダメージは半分になる。

氷帝メビウス 攻2400↓守1000

殉教者―ウリアー LP7000↓5500

「なるほど、守りも万全だったわけか。手札にサイクロンか何かがあれば神炎皇ウリアの召喚はさせなかったんだが……カードを2枚伏せ、ターンエンド」

殉教者―ウリアー LP5500 手札：2

モンスター：なし

魔法・罠：3（伏せ）

三沢 LP3000 手札：2

モンスター：氷帝メビウス（守）

魔法・罠：2（伏せ）

「私のターン、ドロロー。リバースカード三枚を同時に発動。死霊ゾーマ、棺桶売り、死の演算盤」

「やはり、か……！」

そういう趣味なのか、えらくおどろおどろしい名前のカード3枚を一度に発動させる殉教者。そしてそのうちの1枚、死霊ゾーマは攻撃力1800のトラップモンスター。これで上級モンスターのアドバンス召喚も視野に入れることができるようになってしまったわけだ。「そして、この3枚の永続罠を墓地に送る。出でよ我が分身、神炎皇ウリアー！」

と思ったけど別にそんなことはなかった。3枚のカードが同時に

燃え上がり、立ち上った3つの火柱が絡み合って一つの炎の竜の姿になる。そしてその炎の中からまるでデュエルキング武藤遊戯さんも愛用した神のカードの一つ、オシリスの天空竜にも似た姿の赤い竜が静かな威厳を漂わせながらその巨体でメビウスと三沢を見下ろした。そうか、『永続トラップ3枚』なんてつけたいな召喚条件を持つカードだから三沢もさつきエンドフェイズのときにあそこまで警戒してたんだ。

「ウリアの攻撃力は、私の墓地の永続トラップ1枚につき1000ポイントアップする。今私の墓地にある永続トラップは女神の加護、死霊ゾーマ、棺桶売り、死の演算盤の4枚。したがって攻撃力は4000だ！」

神炎皇ウリア 攻0↓4000

「そしてその効果、トラップデストラクション！相手の場の魔法、罠カードを1ターンに1度だけ、そのカードおよび他の魔法、罠カードの効果を発動させることなく破壊させる！」

顔に二つある口の上にある方を開き、そこから強烈な衝撃波を放つウリア。三沢がせっかく伏せたカードも、発動すらさせずに破壊してしまった。

「そして氷帝メビウスに攻撃、ハイパーブレイズ！」

今度は下の口が開き、火炎放射が一瞬でメビウスの体を灰にする。さつき幻蝶の護りで守備表示になっていたから三沢へのダメージはないのが唯一の救いだらう。

神炎皇ウリア 攻4000↓氷帝メビウス 守1000（破壊）

「私はカードを伏せ、ターンエンドする」

「俺のターン、ドロロー。ふむ、ハイドロゲドン召喚！」

三沢が召喚したのは、ウォーター・ドラゴンを形作る一角となる水素のハイドロゲドン。定番のアタッカーではあるけど、この状況でウリアの相手をするにはあまりにも攻撃力が低い。

ハイドロゲドン 攻1600

「さらに速攻魔法、月の書発動！このカードの効果で、お前の神炎皇ウリアを裏守備表示にする！」

「何!？」

そうか、ウリアの効果で上がっていくのはあくまでも攻撃力だけ。守備表示にしさえすれば、その数値は0!それに……………

「ハイドロゲドンで攻撃、ハイドロ・ブレス!」

ハイドロゲドン 攻1600↓???(神炎皇ウリア) 守0(破壊)

「おのれ、よくも我が分身を!」

「だがそれだけじゃない、モンスターを戦闘破壊したハイドロゲドンの効果発動!デッキからもう1体、ハイドロゲドンを特殊召喚する!」

ハイドロゲドン 攻1600

そう、ハイドロゲドンにはこの特殊能力がある。確かにこの方法なら、ウリアを処理しつつもダメージを叩き込むことができる。

「今呼び出したハイドロゲドンでダイレクトアタック!ハイドロ・ブレス!」

ハイドロゲドン 攻1600↓殉教者—ウリア—(直接攻撃)

ウリア LP5500↓3900

壁となるモンスターがいない状態で、まともに濁流を受ける殉教者。だがその一撃で冷静さを取り戻したのか、さっきまでとは違って変わった低めのテンションになった。

「それで終わりか?」

「あ、ああ。メイン2にカードを1枚伏せて永続トラップ発動、ガリトラップ—ピクシーの輪—」

三沢の発動したピクシーの輪により、2体のハイドロゲドンが光り輝く輪に包まれる。これで…………えつと、どうなるんだつけユーノせんせー。

『ウリアが攻撃できないとだけ覚えとけ』

「なるほど、つまりロックパーツなわけね。じゃあ、あつちの伏せは永続トラップを破壊から守る宮廷のしきたりってどこかな」

『さあ、な』

ガリトラップ—ピクシーの輪—

永続罫

自分フィールド上にモンスターが表側攻撃表示で2体以上存在する場合、

相手は攻撃力の一番低いモンスターを攻撃対象に選択する事ができない。

殉教者―ウリアー― LP3900 手札：1

モンスター：なし

魔法・罫：なし

三沢 LP3000 手札：0

モンスター：ハイドロゲドン×2（攻）

魔法・罫：ガリトラップ―ピクシーの輪―

1（伏せ）

「私のターン、カードを2枚伏せてターンエンドだ」

「もしもう一枚ウリアのカードがあつたとしても、またトラップを3枚準備する前に倒させてもらう！2体のハイドロゲドンで一斉攻撃、ハイドロ・ブレス！」

ハイドロゲドン 攻1600↓殉教者―ウリアー―（直接攻撃）

ウリア LP3900↓2300

ハイドロゲドン 攻1600↓殉教者―ウリアー―（直接攻撃）

ウリア LP2300↓700

「これでターンエンドだ」

殉教者―ウリアー― LP700 手札：0

モンスター：なし

魔法・罫：2（伏せ）

三沢 LP3000 手札：1

モンスター：ハイドロゲドン×2（攻）

魔法・罫：ガリトラップ―ピクシーの輪―

1（伏せ）

これは闇のデュエル。いくらなんでも一度に3200のダメージを受けたんだから人間ならそのまま気を失つてもおかしくなくらいの痛みを感じているだろうに、殉教者はその名の通り神のためにその命を平然と使っているのだろうか、まるで痛みを感じていないかの



ように立ったままにいる。そもそも人間じゃないんだろうけど。

「ドロー。モンスターをセットして、我はターンエンドだ」

「くっ……怯んでいる暇はない！カードを伏せて手札のモンスター、オキシゲドンを召喚！そしてバトル、まずはハイドロゲドンで伏せモンスターを攻撃！ハイドロ・ブレス！」

オキシゲドン 攻1800

見るからに怪しい伏せモンスターだが、リバー効果もちならまだここで戦闘破壊した方がまだ。僕と同じ結論を三沢も出したらしく、ちよつと嫌そうな顔をしながらもハイドロゲドンのブレスをぶつけさせる。守備力の高い壁モンスターなら反射ダメージを受けるだけで済んだんだけど、案の定そのモンスターはあっさりと破壊された。

ハイドロゲドン 攻1600↓?? 守600 (破壊)

「我のモンスターはメタモルポット、そのリバー効果によりお互いカードを5枚ドロウする」

「あー、やっぱり……」

『まあ定番だな。だけどやっぱりこの土壇場で引く運命力って恐ろしいわ』

「だが、こっちもハイドロゲドンの効果発動だ。モンスターを戦闘破壊したので、さらにもう一体特殊召喚！」

ハイドロゲドン 攻1600

これで殉教者の手札は5枚に増えたけど、それは三沢も同じこと。それに三沢の場には、まだ動いてないモンスターが3体もいる。この中でどれか一つでも攻撃が通れば！

「ハイドロゲドン2体目で攻撃！ハイドロ・ブレス！」

「この瞬間我の手札からモンスターカード、護封剣の剣士を特殊召喚する。そしてその効果で、ハイドロゲドンは返り討ちだ」

光の剣を両手に持った二刀流の剣士がハイドロゲドンのブレスの前に立ちはだかりその剣を一閃すると、俗に言う波動斬りのような光の衝撃波が起こってそのブレスごとハイドロゲドンの体を両断した。

護封剣の剣士

効果モンスター

星8／光属性／戦士族／攻 0／守2400

相手モンスターの直接攻撃宣言時に発動できる。

このカードを手札から特殊召喚する。

さらにこのカードの守備力がその攻撃モンスターの攻撃力より高い場合、

その攻撃モンスターを破壊する。

また、フィールド上のこのカードを素材として

エクシーズ召喚したモンスターは以下の効果を得る。

●このカードは1ターンに1度だけ戦闘では破壊されない。

「守備力2400……ならば、もう1枚カードを伏せてターンエンドだ」

殉教者―ウリアー LP700 手札：5

モンスター：護封剣の剣士（守）

魔法・罫：2（伏せ）

三沢 LP3000 手札：4

モンスター：ハイドロゲドン×2（攻）

オキシゲドン（攻）

魔法・罫：ガリトラップ―ピクシーの輪―

2（伏せ）

「私のターン、死者転生を発動。手札を1枚捨てることで墓地のモンスターカードを1枚手札に戻す。我はこの効果で、無論神炎皇ウリアを手札に。さらにカードを3枚伏せターンエンドだ」

「俺のターン！守備力2400の護封剣の剣士を突破するためには……いや、やめておこう。オキシゲドンを守備表示に変更してターンエンドだ」

オキシゲドン 攻1800↓守800

「私のターン、ドロー！永続トラップ3枚発動、デスカウンター、倍返し、反撃準備。そしてこの3枚をリリースし再び顕現せよ、神炎皇ウリアー！」

ついに3枚のトラップの発動を許してしまい、再び召喚されるウリ

ア。だけど、その禍々しきというかカリスマというか覇気というか、それはさつきまでいたウリアとは比べ物にならなかった。まあ攻撃力が3000も違うんだ、無理もないことなんだろう。どうでもいいけど今ウリアの召喚コストにしたトラップ、あれ明らかに狙ってやってるよね。

神炎皇ウリア 攻0↓7000

「ガリトラップ……いや、貴様から見ても一番右の伏せカードを破壊だ！トラップ・デストラクション！」

「残念だったな、ここでガリトラップではなくこのカードを狙うことは想定済みだ！今破壊されたカード、荒野の大竜巻の効果発動！このカードが破壊された時、場の表側カード1枚を破壊する！俺が破壊するのはもちろん、神炎皇ウリア！」

ウリアの衝撃波が破壊したカードは、三沢のブラフだったようだ。激しくうねる砂の竜巻が、赤い竜の姿を飲み込む。

荒野の大竜巻

通常罠

魔法&罠カードゾーンに表側表示で存在するカード1枚を選択して破壊する。

破壊されたカードのコントローラーは、

手札から魔法または罠カード1枚をセットする事ができる。

また、セットされたこのカードが破壊され墓地へ送られた時、

フィールド上に表側表示で存在するカード1枚を選択して破壊する。

「どれほど攻撃力を上げたところで、あくまでも三幻魔はただのモンスターカード。攻略の道は必ずある……む？」

砂嵐が収まったそこには、何事もなかったかのようにそびえる赤い幻魔がいた。そんな、確かに荒野の大竜巻が命中したはずなのに。

「三沢大地、どこまでも忌々しい男よ。だが、今度は私のほうが一枚上手だったようだな。永続トラップ、暴君の威圧……我はこのカードを、護封剣の剣士をリリースすることで発動していた」

暴君の威圧

## 永続罾

自分フィールド上に存在するモンスター1体をリリースして発動する。

このカードがフィールド上に存在する限り、フィールド上に表側表示で存在する元々の持ち主が自分となるモンスターは、このカード以外の罾カードの効果を受けない。

「オキシゲドンに攻撃！ハイパーブレイズ！」

そしてバトルフェイズに入り、放たれる火炎放射がオキシゲドンを一瞬で焼き尽くす。するとそのオキシゲドンが、完全に焼き尽くされた一瞬前に炎の中で壮絶な自爆を遂げた。

神炎皇ウリア 攻7000↓オキシゲドン 守800（破壊）

「ぐっ！だが、水素に火をつけた場合、化学反応により爆発が起きる！具体的には、このモンスターが炎族のモンスターとの戦闘で破壊された時お互いに800ポイントの効果ダメージを受ける。これで終わりだ！」

三沢 LP3000↓2200↓1400

殉教者―ウリア― LP700

「ぐわああっ?!俺が倍のダメージを受けて、お前がダメージを受けていない……………まさか?!」

「その通り。カウンタートラップ、地獄の扉越し銃の効果により私のダメージは貴様に代わりに受けてもらった！」

地獄の扉越し銃

カウンタ―罾

ダメージを与える効果が発動した時に発動する事ができる。

自分が受けるその効果ダメージを相手に与える。

「我はカードを伏せる。これでターンを終了」

「俺のターン！死者蘇生を発動、オキシゲドンを蘇生する！」

オキシゲドン 攻1800

「ふん、それがどうした。まさか絶望のあまり自爆特攻でも狙っているのか？」

馬鹿にした様子の殉教者の言葉に、三沢は笑顔で答える。まだ諦め

てなんかいない、ここからが勝負だとその眼は語っていた。

「とんでもない。むしろ俺は嬉しいんだ、いくつか予想外の点もあったとはいえ、俺の戦略が幻魔に通用することが分かかってな」

「……なんだと?」

「じゃあウリアよ、一つ理科の質問をしてやろう。H、つまりハイドロゲンが2つにO、オキシゲンが1つ。この物質が化学反応を起こすことで、何ができると思う?」

「貴様、何が言いたい」

「答えは水、だ。その証拠を見せてやる!魔法発動、ポンディングーH2O!これが俺の、化学反応召喚!来い、ウォーター・ドラゴン!」  
ハイドロゲドンとオキシゲドンの姿が混ざり合い、その姿が一つの水龍になっていく。青い体に赤く光る目、三沢の切り札が場に現れた。

ポンディングーH2O

通常魔法

自分フィールド上に存在する「ハイドロゲドン」2体と

「オキシゲドン」1体を生け贄に捧げる。

自分の手札・デッキ・墓地から

「ウォーター・ドラゴン」1体を特殊召喚する。

ウォーター・ドラゴン 攻2800

「だが、そのモンスターを出したところで攻撃力は2800!我の前には塵も同然の攻撃力だ!」

「なら、自分の目で見てみるといい。その自慢の幻魔の攻撃力をな」

「何?……ハッ!?!」

神炎皇ウリア 攻7000↓0

この時、ようやく三沢が最初に言っていた『ウリア相手なら誰よりも自分が有利』という言葉の意味が分かった。さっきまで十代がデュエルしていたから、すでに三沢はウリアの効果を完全に見切っている。あの破壊効果が1ターン1回なことを生かしてガリトラップを守りつつウリアを破壊しようと荒野の大竜巻をブラフにしたり、守備力が上がらない点について月の書からハイドロゲドンで畳み掛けた

り。そしてさらに、あのカードが炎属性なことも三沢は知っていた。そしてウォーター・ドラゴンがいる限り、場のすべての炎族、および炎属性モンスターの攻撃力は0で固定される。だから、あんなに自身があつたんだ。

「今だ、ウォーター・ドラゴン！アクア・パニツシャー！」

ウォーター・ドラゴンの巻き起こした水流がウリアの巨体を押し流す……その寸前、その体がふっとかき消えた。代わりに、ばかどつかいモグラたたきのような上部分に穴がいくつか開いた箱がデン、と据えられる。そしてその穴の一つから、ひよつこりとモンスターの方のウリアが顔を出した。

「永続トラップ発動、モンスターBOX！」

モンスターBOX

永続罠

相手モンスターの攻撃宣言時、コイントスを1回行い裏表を当てる。

当たった場合、その攻撃モンスターの攻撃力はバトルフェイズ終了時まで0になる。

このカードのコントロールは自分のスタンバイフェイズ毎に500ライフポイントを払う。

または、500ライフポイント払わずにこのカードを破壊する。

「なるほど、二分の一に賭けたか。どうにかする手はない、通しだ」「ゆくぞ、コイントス！我は表を選択する！」

ソリッドビジョンでできた金色のコインが宙をくるくると舞い、皆の注目を集めながらゆっくり地面に落ちていく。ここで裏さえ出れば一気にウリアのライフを減らせる、お願い裏出て裏！

「くっ」

「表だ、よってウォーター・ドラゴンの攻撃力もまた0になる。そしてお互いのモンスターの攻撃力が0ならば、どちらも戦闘破壊されな  
い」

『なんかこの間から思ってたけど、三沢ってビミョーに運悪くね？どこがどうってわけじゃねーけど、何となくそんなイメージがついた

んだが」

ウォーター・ドラゴン 攻2800↓0↓神炎皇ウリア 攻0

「カードを2枚伏せる。ターンエンドだ」

ウリア LP700 手札：0

モンスター：神炎皇ウリア（攻）

魔法・罫：暴君の威圧

モンスターBOX

三沢 LP1400 手札：2

モンスター：ウォーター・ドラゴン（攻）

魔法・罫：ガリトラップ―ピクシーの輪―

3（伏せ）

「私のターン！スタンバイフェイズ、我はモンスターBOXの維持コストである500ライフを払わずこのカードを自壊させる」

「墓地にいくら永続トラップを増やそうと、ウォーター・ドラゴンがいる限りウリアの攻撃力は0だ！」

「そんなことはわかっている、忌々しいがな。まずは効果発動、左の伏せをトラップディスプレイストラクションで破壊する」

「……まだまだだ！」

破壊されたカードは、これまたただのブラフ。偽物のわなだ。

「そしてこんなのはどうだ？装備魔法、愚鈍の斧をウォーター・ドラゴンに装備する」

愚鈍の斧

装備魔法

装備モンスターの攻撃力は1000ポイントアップし、効果は無効化される。

また、自分のスタンバイフェイズ毎に、

装備モンスターのコントローラーに500ポイントダメージを与える。

ウォーター・ドラゴン 攻2800↓3800

神炎皇ウリア 攻0↓8000

「まずい、ウリアの攻撃力が8000まで上がった！」

『ンなもん見りやわかるわ！』

「これで終わりだ！ハイパーブレイズ！」

「三沢っ！」

「いいや、まだだ！リバーズカードオープン、ダメージ・ダイエツト！」

「ダメージ・ダイエツト……発動ターンのあらゆるダメージを半減するカードか。だが、それでも貴様のライフを削るには十分！」

くやしいけど、殉教者の言うとおりだ。三沢のライフは1400、そして今のウリアとウォーター・ドラゴンの攻撃力の差は4200。ダメージ・ダイエツトの効果で半減することを計算に入れても三沢の受けるダメージは2100で、敗北を免れることはできない。そんな思いをよそに、ウリアの炎がウォーター・ドラゴンの放つ水流を押し返していき力尽きたウォーター・ドラゴンが炎に包まれてゆつくりと倒れていった。

神炎皇ウリア 攻8000↓ウォーター・ドラゴン 攻3800

(破壊)

三沢 LP1400↓2400↓300

「三沢……！」

「クツ、さすがに闇のデュエル、だいぶこたえるな。だが、他のやつらだってこの痛みと戦ってきたんだ、俺だけが倒れるわけにはいかん！」

「馬鹿な、なぜだ！なぜまだ立っている！」

「それは簡単な話だ。俺は攻撃前、ダメージ・ダイエツトと合わせてこのカードを発動していた。この永続トラップ、炎虎梁山爆をな！」

炎虎梁山爆

永続罫

このカードの発動時に、自分は自分フィールド上の

永続魔法・永続罫カードの数×500ライフポイント回復する。

また、フィールド上に表側表示で存在するこのカードが

相手の効果によって墓地へ送られた場合、

自分の墓地の永続魔法・永続罫カードの数×500ポイントダメージ



ジを相手ライフに与える。

「お前がフィールドにガリトラップを残し続けてくれていて助かったよ。もしこのカードが途中で除去されていたら回復量は500、俺のライフは200の差で負けになっていたからな」

「お、おのれおのれおのれえ！」

「さらにウォーター・ドラゴンは破壊された時、墓地のハイドロゲドン2体とオキシゲドン1体を特殊召喚する効果を持っている。帰って来い、ハイドロゲドン、オキシゲドン！」

ハイドロゲドン×2 攻1600

オキシゲドン 攻1800

「だが、いくらそんなモンスターを再びそろえたところで！」

「確かにそうだろう。だが、もし俺の手札にもう1枚ポンディング―H20があつたとしたら、どうなる？」

「なっ……………！」

「俺の変幻自在の水デッキにおいて水素と酸素に分かれた水は、再びここで水となる！魔法カード、ポンディング―H20発動！場のハイドロゲドン、オキシゲドンをリリースして墓地のウォーター・ドラゴンを特殊召喚する！」

ウォーター・ドラゴン 攻2800

神炎皇ウリア 攻8000↓0

「馬鹿な、我が、この三幻魔の一角たる我が！」

「残念だったな、ウリアー！ウォーター・ドラゴンで神炎皇ウリアを攻撃、アクア・パニッシャー！」

ウォーター・ドラゴン 攻2800↓神炎皇ウリア 攻0（破壊）

殉教者―ウリアー LP700↓0

「うああああああっ！見事であつた、三沢大地……………！！」

ライフポイントのなくなった殉教者が赤い光になって、火山の方向まで飛んで行った。力を失ったからまた封印された、つてところだろうか。それを見送りながら、

「まずは一体、か……………」

そうつぶやき、静かに倒れこんだ。慌てて近寄ってみると、どうも気を失っただけらしい。とりあえずホッと一安心したところで、これまでずっと黙っていた残りの黄マント青マントの殉教者のうち、黄マントの方の声が響いた。

「さあ、次は我の番だ。この降雷皇ハモン、軟弱なウリアとは一味違うぞ」

## ターン30 激戦！三幻魔く神の雷、ハモンく

「……………なら、これは僕が！」

そうだ、まだ三幻魔はその三分の一しか片付いてない。闇のゲームに一番耐性があるのはダークシングナーの力を使える僕だろうし、あと2戦ぐらいなら何とか……………！」

「待って、清明。まずは三沢君を安全なところに、だって」

さっそくデュエルディスクを構えようとしたところで、夢想の声を聞いて我に返った。確かにこんなところで倒れたままにしておいたら危ないしね。とりあえず肩を貸すような体勢で抱え上げ、一歩下がった翔や隼人がいるところまで引きずっていく。よし、これで大丈夫。さあ、デュエルをはじめよ

「デュエル!!」

……………あれ？ちよ、夢想さーん!?あんた何やってんですか一体!?

「騙してごめんね、清明。だけど、私だけ何もしないで見てるだけなんて嫌なの、だってさ」

「だ、だからって」

「それに」

「!?!」

相変わらず彼女は考えてることが今一つ読めない。言ってることはわからないでもないし、そこもまた一緒にいて楽しいところの一つでもあるんだけど。とりあえず今思ったこととしては、セリフ後半のそれに、の部分で急に声のトーンが下がったマジ切れモードになってすごくこわかったです。夢想があそこまで怒るなんて、い、一体どんな理由が。

「人に迷惑をかける骨。私が許さない」

「そこお!?」

よりにもよって三幻魔を骨扱いですか。ハモン、っていったっけ。どんなガイコツが出てくるんだろう……………。

「茶番は終わったか？我が先行だ、ドロロー！手札から永続魔法、強者の苦痛を3枚発動！そして自分の場に永続魔法が3枚以上あるとき、こ

のモンスターは特殊召喚できる！出でよ我が忠実なる部下、バッド・エンド・クイーン・ドラゴン！」

強者の苦痛

永続魔法

相手フィールド上のモンスターの攻撃力は、

そのモンスターのレベル×100ポイントダウンする。

バッド・エンド・クイーン・ドラゴン

効果モンスター

星6／闇属性／ドラゴン族／攻1900／守2600

このカードは通常召喚できない。

自分フィールド上の永続魔法カードが3枚以上の場合に特殊召喚できる。

このカードの攻撃によって相手ライフに戦闘ダメージを与えた時、相手は手札を1枚選んで墓地へ送り、

自分はデッキからカードを1枚ドロウする。

また、このカードがフィールド上から墓地へ送られていた場合、

自分のスタンバイフェイズ時に、自分フィールド上に表側表示で存在する

永続魔法カード1枚を墓地へ送る事で、このカードを墓地から特殊召喚する。

「3幻魔じゃないの？なんだって」

「フン、わざわざ人間相手に我が直接出向くまでもなからう。ウリアなどと我を一緒にするな」

「…………その余裕、潰してあげるんだって。ドロウ、冥界の使者を守備表示で召喚」

とにかくホワイトをデッキから引っ張り出した理想のデッキにとって中核を担うアタッカー、冥界の使者がその鎌を杖のようにして座り込む。守備表示なら、強者の苦痛の効果もあまり意味がないしね。

冥界の使者 守600 攻1600↓400

「さらにカードを2枚伏せてこれでターンエンド、だつてさ」

殉教者―ハモン― LP4000 手札：2

モンスター：バッド・エンド・クイーン・ドラゴン（攻）

魔法・罫：強者の苦痛

強者の苦痛

強者の苦痛

夢想 LP4000 手札：3

モンスター：冥界の使者（守）

魔法・罫：2（伏せ）

「我のターン、コアキメイル・アイスを召喚してそのまま攻撃！」

氷の体に氷の槍を持った巨人が、一突きで冥界の使者を破壊してしまう。なるほど、確かに幻魔のカードを使うつもりは今のところないらしい。

コアキメイル・アイス 攻1900↓冥界の使者 守600（破壊）

「だけどここの瞬間、冥界の使者の効果が発動！このカードが墓地に送られた時、お互いにレベル3以下の通常モンスターをデッキから手札に加えるんだってさ。私はワイトを、この効果でサーチするね」

「我がデッキに通常モンスターなど不要、加えるカードなどない！

バッド・エンド・クイーン・ドラゴンで直接攻撃！トラジエディ・ストリーム！」

バッド・エンド・クイーン・ドラゴン 攻1900↓夢想（直接攻

撃）

夢想 LP4000↓2100

「痛い……でも、この瞬間トラップ発動、無抵抗の真相！手札のワイト、デッキのワイトを1体ずつ特殊召喚するみたい」

無抵抗の真相

通常罫

相手モンスターの直接攻撃によって自分が戦闘ダメージを受けた時、

手札のレベル1モンスター1体を相手に見せて発動する。

相手に見せたモンスター1体と、自分のデッキに存在する同名モンスター1体を

自分フィールド上に特殊召喚する。

ワイト×2 守200 攻300↓0

「だがバッド・エンドの効果も発動する。我がカードを1枚ドロ―して人間、お前が手札を1枚墓地に送れ。そしてエンドフェイズ、手札の永続魔法を見せねば自壊してしまうコアキメイル・アイスの維持コストとして騎士道精神を見せてやる。ターンエンドだ」

「私のターン、ドロ―！」

悔しいけど、確かにハモンは言うだけのことはある。あの夢想が今のところ防戦一方だなんて、相当の腕前のデュエリストに決まってる。とにかく、あの強者の苦痛をなんとかしないことにはモンスターでの力技で攻め込むこともできない。

「魔法カード、簡易融合を発動！1000ライフを払ってレベル3の融合モンスター、アンデッド・ウォリアーを特殊召喚するんだって。さらにそのままこのカードをリリースして、竜骨鬼をアドバンス召喚！」

夢想 LP2100↓1100

竜骨鬼 攻2400↓600

「それがどうした？」

「今からこの子が、目にももの見せてくれるの。トラップ発動、帝王の凍志！」

夢想のトラップからいかにも冷たそうな霧が竜骨鬼の体を包み、おもむろに霧が晴れるとそこには薄い氷の鎧を全身に纏う竜骨鬼の姿があった。

竜骨鬼 攻600↓2400

「なに、強者の苦痛の効果が切れただろ!？」

「ううん、そうじゃないみたいだよ。帝王の凍志の効果を受けた竜骨鬼に、その小細工は通用しないってこと、だってさ」

帝王の凍志

通常罫

自分のエクストラデッキにカードが存在しない場合、

自分フィールド上に表側表示で存在する

アドバンス召喚したモンスター1体を選択して発動できる。  
選択したモンスターの効果は無効になり、このカード以外のカードの効果を受けない。

「くっ……甘く見すぎたようだな」

「うん。竜骨鬼でバッド・エンド・クイーン・ドラゴンに攻撃！」

竜骨鬼 攻2400↓バッド・エンド・クイーン・ドラゴン 攻1900 (破壊)

殉教者―ハモン― LP4000↓3500

「少しは目が覚めたかな？カードをセットしてターンエンド」

よかった、さすがは学年最強って言われるだけのことはある。このまま一気に押し切れば、勝てる！

『だどいいけどな。竜骨鬼の素の打点は2400……ハモンが直接出てきたらちよつと分が悪いぞ。ま、あんなだけギャーギャー偉そうに言ってたんだからまだまだ出るのは先だろうけど』

殉教者―ハモン― LP3500 手札：3

モンスター：コアキメイル・アイス (攻)

魔法・罫：強者の苦痛

強者の苦痛

強者の苦痛

夢想 LP1100 手札：0

モンスター：ワイト (守)

ワイト (守)

竜骨鬼 (攻)

魔法・罫：1 (伏せ)

「私のターン！バッド・エンド・クイーン・ドラゴンが墓地にいるとき、場の永続魔法一枚と引き換えに特殊召喚できる！強者の苦痛をコストに蘇れ、バッド・エンド！」

バッド・エンド・クイーン・ドラゴン 攻1900

ワイト×2 攻0↓100

「ここで永続魔法、騎士道精神を発動。そして場の永続魔法3枚をリリース！我が分身よ、愚かな現世に裁きの光を！降雷皇ハモン、特殊

召喚！」

『……………なんつーか、その……………すまん。外した』

降雷皇ハモン 攻4000

大地から巨大な水晶が隆起し、それが粉々に砕け散ると中から黄色いカラーリングのさつきウリア並みにでかいモンスターが現れた。その第一印象は、確かに神のカードの一枚、ラーの骸骨といった感じ。なるほど、言われてみれば確かに骨だ。だけど永続罫の次は永続魔法ねえ。つくづく変な召喚条件だなあ。

ワイト×2 攻1000↓300

「まずはバッド・エンドでワイトのうち片方に攻撃！トラジエデイ・ストリーム！」

バッド・エンド・クイーン・ドラゴン 攻1900↓ワイト 守2

00（破壊）

「コアキメイル・アイスで連撃！」

コアキメイル・アイス 攻1900↓ワイト 守200（破壊）

「さあ、これで残るのはそのちっぽけな鬼のみだ。降雷皇ハモンの攻撃、失楽の霹靂！」

「ううん、まだ！ガード・ブロック発動！」

ガード・ブロック

通常罫

相手ターンの戦闘ダメージ計算時に発動する事ができる。

その戦闘によって発生する自分への戦闘ダメージは0になり、

自分のデッキからカードを1枚ドロウする。

降雷皇ハモン 攻4000↓竜骨鬼 攻2400（破壊）

「アイスの効果を使わなかったのはお前にとって吉と出たか。だが、我が分身の攻撃は2段構え！降雷皇ハモンの効果発動、このカードが相手モンスターを破壊して墓地に送った時に1000ポイントの追加ダメージを与える！地獄の贖罪！」

夢想 LP1100↓100

「夢想っ！」

「だ、大丈夫、だつてさ……………」



口ではああいつてるけど、かなり苦しそうだ。それもそうだろう、まだ数ターンしかたつてないのにあつという間にライフが100とレッドゾーン突き抜けデンジャラスゾーンに突入してるんだから。「さっきまでの威勢はどうした、女。我は手札の永続魔法、禁止令を見せることでコアキメイル・アイスの自壊を防ぎターンを終了する」「私の……ターンっ！魔法カード、闇の誘惑を発動！カードを2枚ドローして、手札の闇属性モンスター1体を除外するよ！私が除外するのは、ワイトキング！さらにワイトキングが除外されたことで、手札のワイトメアの効果発動！このカードを墓地に送って、今除外したワイトキングを特殊召喚！」

ワイトキング

効果モンスター

星1／闇属性／アンデット族／攻 ？／守 0

このカードの元々の攻撃力は、自分の墓地に存在する「ワイトキング」

「ワイト」の数×1000ポイントの数値になる。

このカードが戦闘によって破壊され墓地へ送られた時、自分の墓地の「ワイトキング」または「ワイト」1体をゲームから除外する事で、このカードを特殊召喚する。

ワイトメア

効果モンスター

星1／闇属性／アンデット族／攻 300／守 200

このカードのカード名は、墓地に存在する限り「ワイト」として扱う。

また、このカードを手札から捨てて以下の効果から1つを選択して発動する事ができる。

●ゲームから除外されている

自分の「ワイト」または「ワイトメア」1体を選択して自分の墓地に戻す。

●ゲームから除外されている

自分の「ワイト夫人」または「ワイトキング」1体を選択してフィー

ルド上に特殊召喚する。

「出た、ワイトキング！えつと、今墓地にいるワイトの数はワイト2のワイトメア1で3枚かな？」

『正解。きっちり覚えてるあたり少しは進歩してきたのかね』

ワイトキング 攻0↓3000

「ワイトキングでコアキメイル・アイスに攻撃！お願い、私の切り札！」

軽やかなフットワークでワイトキングがフィールドを走り、その骨の拳がコアキメイル・アイスの氷の体を貫通して大穴を開けた。いつものこととはいえ、相変わらず武闘派なお方だ。

ワイトキング 攻3000↓コアキメイル・アイス 攻1900

(破壊)

殉教者―ハモン― LP3500↓2400

「これでターンエンド。まだまだ負けないうよ、だつてさ」

殉教者―ハモン― LP2400 手札：3

モンスター：降雷皇ハモン(攻)

バッド・エンド・クイーン・ドラゴン(攻)

魔法・罫：なし

夢想 LP100 手札：1

モンスター：ワイトキング(攻)

魔法・罫：なし

「私のターン！永続魔法、禁止令を発動！宣言するのはワイトキングだ」

禁止令……あのカードが場に出ている限り、夢想はもうこのデュエルの間ワイトキングを使うことができない。それはつまり、もし今場に出てるワイトキングが倒れたらその自己再生効果を使っても何一つアクションを起こせず文字通りの死体になるということだ。だから、もう夢想にあとはない。頼むよ、夢想。お願いだから、いつもみたいに勝ってこっち側に帰ってきてね。

「ハモンでワイトキングに……」

「墓地から効果発動、タスケルトン！このカードを除外して、モンス

ター同士の戦闘を無効にするよ！」

ワイトキングに向けて空から落ちてきた無数の雷を、体を風船のようにふくらませた黒豚がすべてその体で受け止める。一発、二発と受けるにつれその破壊力でぼろぼろになっていきながらも、最終的にタスケルトンはワイトキングを守り切った。

タスケルトン

効果モンスター

星2 / 闇属性 / アンデット族 / 攻 700 / 守 600

モンスターが戦闘を行うバトルステップ時、

墓地のこのカードをゲームから除外して発動できる。

そのモンスターの攻撃を無効にする。

この効果は相手ターンでも発動できる。

「タスケルトン」の効果はデュエル中に1度しか使用できない。

「バッド・エンドの効果で捨てさせたカードか……役立たずめ、メイン2にバッド・エンドを守備表示に変更してターンエンドだ」

バッド・エンド・クイーン・ドラゴン 攻1900 / 守2600

「私のターンだね。手札の魔法カード、至高の木の実を発動！」

暗雲立ち込める空から一羽の白い鳥が飛んできて、夢想の頭の上のあたりで木の実を一つぽとりと落として飛び去って行った。決して  
フンではない……と、思う。多分。

スプレマシー・ベリー  
至高の木の実

通常魔法

このカードの発動時に、自分のライフポイントが

相手より下の場合、自分は2000ライフポイント回復する。

自分のライフポイントが相手より上の場合、

自分は1000ポイントダメージを受ける。

夢想 LP1000 ↓ 2100

「ふー、ちよつと楽になったかな。それじゃあここで、一時休戦を発動するんだって。お互いにカードをドローして、次のそっちのエンドフェイズまで受けるダメージはゼロみたいだよ」

「つまらん延命手段だな。醜い足掻きだ」

「べーだ。そしてカードを1枚セット、そのままワイトキングでバッド・エンド・クイーン・ドラゴンに攻撃！」

さっきの攻撃がボクシング風のワイトパンチ（仮）だったのを意識してか、今度はまるでムエタイのような動きで軽やかにハイキックで決めたワイトキング。このワイトキングの人、骨になる前は何やってたんだろう。

ワイトキング 攻3000↓バッド・エンド・クイーン・ドラゴン  
守2600（破壊）

「これで残ったのはあなただけ、ターンエンド」

殉教者―ハモン― LP2400 手札：4

モンスター：降雷皇ハモン（攻）

魔法・罫：禁止令（ワイトキング指定）

夢想 LP2100 手札：0

モンスター：ワイトキング（攻）

魔法・罫：1（伏せ）

「私のターン、どうせダメージが入らないなら、ここは攻撃をしないで置いてやろう。が、それと何もしないこととは全く別の話、手札から魔力の枷を発動」

「攻撃してこないんだっけつつかくだしこの伏せカード、針虫の巣窟をチェーンするね。お願いワイトたち、私の声に応えて！」

魔力の枷

永続魔法

お互いのプレイヤーは500ライフポイントを払わなければ、

手札からカードを召喚・特殊召喚・発動・セットする事ができない。

針虫の巣窟

通常罫

自分のデッキの上からカードを5枚墓地へ送る。

「ちっ、そんなカードだったのか。大方運に任せてワイトを墓地に送るつもりなんだろうが、まあそれが成功する可能性は低いだろうな」

そんなことを言ってられるのも今のうちですよ、殉教者さん。夢想の針虫ワイト率は平均3枚なんだから。

「1枚目、ワイトメア。2枚目、ワイト夫人。3枚目、またワイト夫人。4枚目、またワイト夫人だつてき。それでラストは……あ、これはゾンビ・マスターだね」

「何!?馬鹿な、ありえん!」

「そんなこと言つたつて出てきたものは出てきたんだもん、しょうがないじゃないだつてき」

ワイトキング 攻3000↓7000

「くっ……ならば500ライフを払いカードをセットしてターンを終了する」

殉教者―ハモン― LP2400↓1900

「私のターン!お願いワイトキング!」

「幻魔にそんな単調な攻撃が通ると思つたか!トラップ発動!強制脱出装置の効果で、ワイトキングを手札に戻す!」

ハモンとの距離を詰めようとしたワイトキングが最初の一步を踏み出した瞬間に地面の一部が爆ぜ、その爆発で空のかなたまで吹っ飛んでしまうワイトキング。これはまずい、普段ならそのまま通常召喚し直せばいいだけなんだけど、禁止令は依然として生きている。つまりワイトキングは完全な死に札、夢想はさつきまでの圧倒的優位から一気に大ピンチになつたわけだ。

「まだ諦めないよ、だつて清明も、皆もそうなんだから。500ライフ払つてモンスターをセットして、ターンエンド」

夢想 LP2100↓1600

殉教者―ハモン― LP1900 手札:4

モンスター:降雷皇ハモン(攻)

魔法・罫:禁止令(ワイトキング指定)

魔力の枷

夢想 LP1600 手札:1

モンスター:1(セット)

魔法・罫:なし

「私のターン、その伏せモンスターに攻撃!失楽の霹靂!」

降雷皇ハモン 攻4000↓??? 守1400(破壊)

「守備力1400だど？だがそれがどうした、地獄の贖罪！」

夢想 LP1600↓600

雷を浴びた伏せモンスターがそのまま破壊されると、そこには一つのピラミッドがそびえていた。そしてその入り口がゆつくりと開き、中から一人のワイトが歩いてくる。

「ピラミッド・タートルの効果発動、デッキから守備力2000以下のアンデット族一体、つまりワイトを特殊召喚！」

ワイト 攻300

「その程度の雑魚、守備表示で出せばよいものを。まあいい、ターンエンドだ」

…………でも実際、なんでワイトなんだろう？確かにハモンの攻撃力と渡り合えるようなモンスターをピラミッド・タートルの効果で出すことはできないけど、たとえば戦闘破壊耐性もちの魂を削る死霊とかもつとほかにも候補はあるはずだ。今の夢想的ライフは600、何か手を打たない限りあとたった1枚のカードしか発動することはできない。

「夢想…………」

その声が聞こえたのか、夢想は一度こちらを振り返り、僕の方へ笑いかけてきた。まるで、心配しないでね、というかのように。

「引けばいいの。私のデッキが私の気持ちに伝えてくれるなら、あとたった一枚のカードで私は勝てるから、だつてさ」

「貴様……………言わせておけばそのような戯言を！」

「なら、試してみる？私のターン。これがラストドロ、だつてさ」

ゆつくりと落ち着いた動きでデッキトップに手をかけ、そのまま1枚のカードを引く夢想。でも、攻撃力4000のハモンを出している今の殉教者をたった1枚のカードで倒しきるなんて、そんなことどうやって…………。

「来たよ、だつて。私は手札から500ライフを払って装備魔法、守護神の矛をワイトに装備！」

『ああ、その手があったか。なるほど、そーゆーことか』

夢想 LP600↓100

ワイトがおもむろにどこからともなく金色に輝く槍のような武器を手にし、その白い骨の腕で器用に振り回す。そのバックに、ぼんやりといくつもの骸骨の顔が重なって見えた。

守護神の矛

装備魔法

装備モンスターの攻撃力は、お互いの墓地に存在する

装備モンスターと同名のカードの数×900ポイントアップする。

「だが、そんなカードを使ったところで墓地のワイトは2体、よって上昇地は800止まりなはずだ。我が分身を倒すにはまだ役者が足りないな」

「ううん。ワイトメアとワイト夫人の共通効果がこの瞬間適用するよ」

「共通効果、だど?」

「このカードのカード名は、墓地に存在する限り「ワイト」として扱う……ここまで言えば、もうわかるよね」

笑顔で語る夢想。だけど、僕は……。

「(すいませんユーノ先生、どういうことか教えてください)」

『前々からアホだアホだとは思ってたけど、ほんつとにアホだなあお前。今はワイト夫人もワイトメアも墓地にいるからワイト扱い、そして場にいるのはワイト。夫人とメアがワイトになった以上、その数も守護神の矛の強化に使えるってことだよ。今でいうと、ちょうど7体分だな』

ワイト 攻3000↓6600

「正面から……押ししてくるだど!」

「これが私のデュエルスタイルだもん、だつてさ。ワイト、攻撃!」

ハモンが5本の雷を落としてワイトに攻撃を仕掛けるも、ワイトは手にした矛でそのうち4本を薙ぎ払う。最後の1本が命中して爆音と土煙が上がった、と見えたのもつかの間、黒こげになった服を放置して飛び上がった素っ裸の骸骨がケタケタと笑い声をあげながらハモンの顔面に真正面からとどめの一撃を叩き込んだ。

ワイト 攻6600↓降雷皇ハモン 攻4000(破壊)

「馬鹿な、この我があああああつ!!!」

最後に一声叫び、黄色い光となって火山へ飛ばされるハモンの殉教者。

「ごめん、清明……。私が、残り全員、相手するつもりだった……。けど、もう、限界……」

そう言つて、さつきの三沢同様ぱつたりと倒れる夢想。さつき同様慌てて駆け寄つて抱き起こすと、こつちもただ気絶してるだけだった。少し顔を上げると、いつの間にかこちらにきていた最後の殉教者が見えたので啖呵を切つておく。

「やい、その三幻魔!このダークシグナー遊野清明がいる限り、お前らの好きにはさせないからね!すぐ相手するから、そこで待つてろこのやろ!」

三幻魔も残るはあと一体、僕がこの手で始末をつけてやる!



## ターン31 決戦！三幻魔く幻魔皇、ラビエルく

「ウリアが倒れ、ハモンもまた眠りにつかされた……どうやら我々が封印されている間に、人間の力は大きく進化したようだ。いや、ただの人間が我らの封印を解いた時点でそれは察するべきだったか」  
そう言つて苦笑のような表情を浮かべる、青いマントを羽織った殉教者。なんだろう、セリフのそこかしこに何かを感じるような気がする。

「だがこの我、幻魔皇たるラビエルが今あやつらの仇をとろう。ウリア、そしてハモン。地獄の底か煉獄の果てかは知らぬが、せめて我がこの地上を制覇するところを見ていてくれい」

今度は上を向き、まるで涙をこらえるようなポーズをとる。……うーん、この感じ。

「さあ、すべてをこの一戦で終わらせようではないか！」

「え、あ、えつと……ハイ」

いかん、急に話を振られたせいで思わず間抜けな返事になってしまった。反省反省。

「デュエル!!」

「先行のドローは我が手の中にあり。来たれ、ジャイアントウイルス！」

デュエルディスクによる決定を待たずに勝手にターンを始めやがったラビエルが、小さな岩ほどのサイズのでっかいウイルスを呼び出した。

『む、リクルーターか。まあ定番だわな』

ジャイアントウイルス

効果モンスター

星2／闇属性／悪魔族／攻1000／守 100

このカードが戦闘によって破壊され墓地へ送られた時、相手ライフに500ポイントダメージを与える。

さらに自分のデッキから「ジャイアントウイルス」を任意の数だけ表側攻撃表示で特殊召喚する事ができる。

「さらにカードを伏せ、私のターンはこれで終了としよう。さあ、呪われし運命の人間よ。カードを引くがよい」

「の、呪われてやっぱこの人……人？まあいいや、調子くるうなー。ドロー！頼むよ、オイスターマイスター！」

オイスターマイスター 攻1600

「オイスターマイスターで攻撃！オイスターショット！」

『え、攻撃すんの!? やっちゃったもんはしようがねーけど』

オイスターマイスターの投げた牡蠣は、狙いたがわずジャイアントウイルスのど真ん中の核をぶち抜いて体に風穴を開けた。だが、そこからぶるぶるとジャイアントウイルスがその体を震わし、なんとそのまま体が二つに分裂した。サイズは半分になったものの、さつき致命傷を与えたことなんて嘘みたいにぴんぴんしている。

オイスターマイスター 攻1600↓ジャイアントウイルス 攻1000(破壊)

殉教者―ラビエル― LP4000↓3400

清明 LP4000↓3500

ジャイアントウイルス×2 攻1000

「ジャイアントウイルスは不死身。一度その身が減びようと、輪廻の輪より蘇る」

「くっ」

だ、だめだ、この中二臭い雰囲気には耐えきれない自信がない！でも、ここはこらえてまずはデュエル！

「僕はこれで、ターンエンド」

殉教者―ラビエル― LP3400 手札：4

モンスター：ジャイアントウイルス×2 (攻)

魔法・罫：1 (伏せ)

清明 LP3500 手札：5

モンスター：オイスターマイスター (攻)

魔法・罫：なし

「私のターン。手札の悪魔族カード、ダーク・リゾネーターを墓地に送ることでマリスボラス・フォークを特殊召喚する。ああ憐れなるダー

ク・リゾネーターよ、その身の犠牲を我は決して無駄にしないからな」  
マリスボラス・フォーク 攻400

殉教者の手札にあったダーク・リゾネーターのカードを自分の体より大きなフォークで串刺しにして、いかにも小悪魔といった見た目の黒いモンスターがジャイアントウイルスと並び立った。うーん、特殊召喚なら使いどころはここかな?……いや、もう少しだ。もう少しだけ待とう。

「そして、場に存在する3体の悪魔族モンスターをリリースする」

『来るぞー!』

「出でよ、幻魔皇ラビエル!!」

まあ当然というかなんというか、予想はついてたけど案の定オベリスクの巨神兵っぽい見た目の幻魔。さつき十代のエリクシーラーに一刀両断必殺神剣ー!つてやられてたあのモンスターだ。

『清明、あの召喚は特殊召喚だからな!』

「そうだとは思ったよ、手札からドラゴン・アイスの効果発動!同じく手札のハリマンボウを捨てて、このカードを特殊召喚!さらに捨てたハリマンボウの効果で、ラビエルの攻撃力は永続的に500ポイントダウンする!」

宙に浮かんだ墓地へとつながる魔方陣から無数の針が飛び出してきて、はるか高くにあるラビエルの顔、その左目に何本も突き刺さる。不意を突かれて一瞬よろめいたラビエルが、右目に憎々しげな光をたたえてドラゴン・アイスをにらみつけた。

幻魔皇ラビエル 攻4000↓3500

ドラゴン・アイス 守2200

「どうだ、参ったか!」

「ふ、なるほど。これこそがこの幻魔のあまりに強大な力を抑えるために天が与えたもうた受難!いいだろう、今はこの痛みに甘んじようぞ。だが見ている、このデュエルを我の勝利により終わらせたのちにこのような枷など打ち破ってくれる!」

「……………あんま効いてないね、ユーノ」

『どつちかつつーと聞いてないんじゃないか?完全一人で盛り上がっ

てるし』

「さあ、私のメインフェイズはまだ終わらない！トラップ発動、リバイバル・ギフト！このカードは、私の墓地に眠るチューナーモンスターを1体、再び現世へと解き放つ。だが我だけがモンスターを呼び出すのは不公平というものだろう。なので、お前の場にもトークンを2体ほどプレゼントしよう。遠慮せずに受け取るがいい」

ダーク・リゾネーター 攻1300

ギフト・デモン・トークン×2 攻1500

殉教者の場には音叉を手にした赤い目の悪魔が、僕の場には2体の茶色いおたまじゃくしのできそこないみたいなトークンが攻撃表示で特殊召喚される。こ、攻撃表示!?しかもこの子オイスターマイスターより攻撃力低いし！

「さらに、ここで私の効果を使う。私はモンスターを1体リリースすることで、そのモンスター分の攻撃力をエンドフェイズまで得る！ダーク・リゾネーターよ、ふたたびその命燃やし尽くせ！」

ダーク・リゾネーターが音叉を鳴らして緑色に光る3つの光の輪になり、その輪がラビエルの体を包み込んで吸い込まれていった。なんだあの演出。

『シンクロ召喚だな。そうかそうか、あの演出こんなところでも使いたい道あったのか』

「……………」

『あ、気にすんな』

幻魔皇ラビエル 攻3500↓4800

「バトル、我が唸る拳は神をも砕く！トークンに攻撃、天界蹂躞拳！」  
天界蹂躞拳、とはよく言ったものだ。その名のごとくあたりの空気にすらも震わせながら、圧倒的な質量をもって迫る拳が棒立ちのトークンを一撃で粉碎する。そして一瞬後、これまで闇のゲームで受けてきたダメージとは比べ物にならないほどの衝撃を受けてそのまま勢いで体が後ろに吹っ飛ばされた。ぐっ、なんだこれ!?痛い、なんてもんじやない！痛すぎてむしろ気を失う心配すらない！

幻魔皇ラビエル 攻4800↓ギフト・デモン・トークン 攻15

00 (破壊)

清明 LP3500↓200

『あらー……生きてるかー、清明ー』

「くっ、もうちょい心配してくれてもいいんじゃないの?」

『いやだって今のでダメになるほどやわな奴がデュエリストなわけないだろ』

なんか納得してしまった悔しい。まあ、まだ、ね。まだいける、体だって動くし頭もはつきりしてる。……よし、頑張ろう。しかし今のは危なかった。ドラゴン・アイスの効果コストにハリマンボウを使っただけなら一撃でデュエルが終わってたぐらいだし。

幻魔皇ラビエル 攻4800↓3500

「私の攻撃力はエンドフェイズに元に戻る。ターン終了だ」

「そんなわけで僕のターン! さっきのはむちやくちや痛かったからね、お礼はたっぷり利子つけて返してあげるよ! フィールド魔法、アトランティス発動してギフト・デモン・トークンとオイスター・マイスターをリリース、地縛神のチャクチャルさんを召喚! さらにオイスター・マイスターが戦闘以外の方法で墓地に送られたから、オイスター・トークンも特殊召喚ね」

召喚に合わせて僕の全身にダークシングナーの証である紫のあざが走り、それと同時に地面からいくつもの古びた柱や建物跡のようなのが生えてきて辺りがみるみるうちに水に包まれていく。そしてその建物の中でもひととき大きな神殿跡から、シャチをモチーフにしたイメージカラー紫の地縛神が悠々と泳いでやってきた。

伝説の都 アトランティス

フィールド魔法

このカードのカード名は「海」として扱う。

このカードがフィールド上に存在する限り、フィールド上の水属性モンスターの攻撃力・守備力は200ポイントアップする。

また、お互いの手札・フィールド上の水属性モンスターのレベルは1つ下がる。

地縛神 Chacuc Chailhua 攻2900

オイスタートークン 守0↓200 攻0↓200

「そのカード、かなりの力を感じるぞ。だが、どれほどの力があるろうと我の攻撃力が上である以上、我を倒すことは不可能！そしてここで我の効果を使う。相手がモンスターを通常召喚したことで、場に幻魔トークンを特殊召喚だ。さあ深き闇より歩み寄れ、我が眷属の一員よ！」

幻魔トークン 守1000

「甘い甘い！魔法発動、アクア・ジェット！魚族モンスターのチャクチャルさんは、このカードの効果で攻撃力が1000ポイントアップする！さらに地縛神の特殊効果で、ラビエルを無視して直接攻撃！ミッドナイト・ジェットフラッド！」

『攻撃力3900のダイレクト……えげつねえマジックコンボだがむしろあつちに逆転フラグ立てさせてる気がするのは俺の気のせいかな』

『確かに、今回はいつもより気合が入っているな。まあ、デュエルに關しては私は貴方を全面的に信賴しているから文句は一切ないが』

地縛神 Chacuc Chailhua 攻2900↓3900

↓殉教者——ラビエル——（直接攻撃）

殉教者——ラビエル—— LP3400↓1400

この一撃で決めるはずだったんだけど。まああつちだつてだてに三幻魔のトップやってるわけじゃないからね、まだ耐える手が残っててもあんまり驚きはしない。だけど、ダメージ半減じゃなくて2000だけライフが減ってるってのはちよつと珍しいかも。何したんだろ。

「我は手札から闇に輝く黒き光、クリフォトンの効果を発動した。このカードを墓地に送り2000ライフを払うことで、このターンに我が受けるダメージは0になる」

「一応確認したいんだけど……要するにクリフォトンだよな？」  
「うむ」

一瞬の沈黙。だったら最初からそれだけ言えや。だけどそのまま

だとデュエルが進まないので、気を取り直してメインフェイズ2に移  
行する。

「とはいえ、することといえば……カードを1枚伏せてターンエン  
ド」

殉教者―ラビエル― LP1400 手札：0

モンスター：幻魔皇ラビエル（攻）

幻魔トークン（守）

魔法・罫：なし

清明 LP200 手札：0

モンスター：オイスタートークン（守）

ドラゴン・アイス（守）

地縛神 Chacu Chalhua（攻）

魔法・罫：1（伏せ）

「私のターン。再び時は満ちた、今こそ幻魔の動く時！その地縛神に  
攻撃せよ、天界蹂躞拳！」

「させないよ！このカードは自身の効果により、相手の攻撃対象にな  
らない！」

「ならば、ドラゴン・アイスに狙いを定めるのみ！幻魔の深き闇の力の  
前に、そのように貧弱な龍など壁にすらならぬ！」

巨大な拳が氷のドラゴンを一瞬で打ち砕き、その衝撃がこつちにま  
で伝わってくる。ダメージがないからさつきみたいに吹っ飛ばよう  
なことはなかったけど、それでも空気がびりびり振動するのが肌で感  
じられた。

幻魔皇ラビエル 攻3500↓ドラゴン・アイス 守2400（破  
壊）

「僕のターン、ここで決める！チャクチャルさんの効果を使い、直接攻  
撃を」

「待てい。たとえば光の力であろうと、闇はそれを飲み込みさらにその  
先へ向かう。エフェクト・ヴェーラーの効果発動、このカードを手札  
から捨て、相手モンスターの効果をエンドフェイズまで無効にする」  
「だったらどうしようもないから、何もしないでターン終了！」

……あと一撃、一撃さえ通ればこの幻魔との戦いも全部終わるつてのにー」

殉教者―ラビエル― LP1400 手札：0

モンスター：幻魔皇ラビエル（攻）

幻魔トークン（守）

魔法・罠：なし

清明 LP200 手札：1

モンスター：オイスタートークン（守）

地縛神 Chacu Chalhua（攻）

魔法・罠：1（伏せ）

「我のターン、見える、また一步破滅への時が近づいているのが見える！貪欲な壺を発動、墓地のジャイアントウィルス3体、マリスボラス・フォーク、ダーク・リゾネーターをデツキに戻し、カードを2枚引く！そして今引いた中から、終末の騎士を召喚する。己が味方さえも闇の底に引きずり落とす呪われし剣士よ、今こそその力解き放て！デツキからトリック・デーモンを墓地に送る！」

終末の騎士

効果モンスター

星4／闇属性／戦士族／攻1400／守1200

このカードが召喚・反転召喚・特殊召喚に成功した時、

デツキから闇属性モンスター1体を墓地へ送る事ができる。

全体的にまっくろな服装の戦士が腰の剣を抜き、おもむろに殉教者の方を振り返ってそのデュエルディスクに剣を突き刺す。そしてその剣を引っこ抜くと先端に刺さっていたトリック・デーモンのカードを手で引きちぎるように取り出してそこらへんに捨ててしまった。やっつてゐることはただの墓地肥やしなのに、なんでこんなえぐい演出なんだらう。

「さらにトリック・デーモンの効果がこの時発動する。このカードが墓地に送られた時、デーモンカードをデツキから手札にサーチ………死を呼ぶ悪魔の行進に乗り、マッド・デーモンが手札に加わる」

『……マッドか……ちよいとめんどくさいな、油断するなよ清明』



「りよーかい。まあ、今のところ見てるだけなんだけどね」

「そして、死のマジック・ボックスを発動。地縛神とやら、この死の運命からはたとえ貴様であっても逃れきれん！Chacu Chailhuaを破壊し、幻魔トークンを送り込む！」

二つの細長い箱にチャクチャルさんとずつと放置されていた幻魔トークンがそれぞれ入り込むと、チャクチャルさんの入っている方の箱がどこからともなく飛んできた無数のナイフで串刺しにされた。思わず目を覆いたくなるようなむごい光景、だけど……………。

『幻魔とやら、一つ聞かせてもらおう。仮にも邪神と呼ばれたこの地縛神が、このような見戯にも等しい仕掛けごときに屈するとても本気で思っているのか？』

串刺しになった箱のふたが開き、無傷のチャクチャルさんがその巨体を再び水中に舞わせる。ふー、危なかった……。だけどチャクチャルさん、今助けたの僕ですよ。この伏せカード、安全地帯を発動してさ。もつともここでチャクチャルさんがやられたらこっちの戦線は一瞬で崩壊するんだから、守らないなんて選択肢はあり得ないわけだけどさ。多分本人もそれがわかってて言ってるんだからさういなあ。

安全地帯

永続罫

フィールド上に表側攻撃表示で存在するモンスター1体を選択して発動できる。

選択したモンスターは相手のカードの効果の対象にならず、戦闘及び相手のカードの効果では破壊されない。

また、そのモンスターは相手プレイヤーに直接攻撃できない。

このカードがフィールド上から離れた時、そのモンスターを破壊する。

そのモンスターがフィールド上から離れた時、このカードを破壊する。

「…………マジック・ボックスの効果でモンスターが破壊できなかった場合、送りつけも行われない。攻撃表示の終末の騎士を贄とし、我の

攻撃力を上げる。が、これだけでターンエンドだ」

幻魔皇ラビエル 攻3500↓4900↓3500

「僕のターン！安全地帯のデメリット効果で、チャクチャルさんのダイレクトアタック効果はもう使えない、か」

さて、どうしようかな。このままラビエルを攻撃すれば、今の攻撃力3900のチャクチャルさんならギリギリ力押しで倒すこともできる。だけど、ここはあえて攻撃しないで効果を使うのも一つの手だろう。そうすれば1200のダメージが確実に通る。ラビエルを戦闘破壊して400ダメージをとるか、攻撃を放棄して1200バーンをとるか。まあ、ラビエルなんてパワー馬鹿がいつまでも残っていると正直邪魔でしょうがないし、攻撃してさくつと退場願おうかな。

「チャクチャルさん、ラビエルに攻めろ」『あ・ほ・かお前はあああああつ!!』「ええー!?!なんでっ!?!」

意気揚々と攻撃宣言をしようとした瞬間、全力でユーノがそれを止めに来た。なんでなのさ、僕だって安全地帯を自分のモンスターに使うデメリットは知ってるのに。次にサイクロンなんかを引かれたら、もうこれ以上チャクチャルさんを守る手段はない。だから今のうちにラビエルだけでも倒しておけば……………」

『貴方の決断はできる限り尊重したいが、さすがに今のは擁護できないな。というか闇のゲームにおいて勝負を捨てるような所業、ダークシングナーの契約者としてむしろ私が許さない。こんな所で死なれては、生き返らせた甲斐がない』

「チャクチャルさんまで、そんな」

『よしわかった、一から説明してやるからよく聞け。まずお前がここで攻撃するとして、そのあとどうする?』

言われて、今の手札に目を落とす。そこにあるのは魔法カード、特にわざわざ伏せるようなカードではない。

「まあ、そのままターンエンドかな」

『そうだろうそうだろう。で、そうしたら殉教者は何をする?』

「安全地帯が破壊できるなら破壊して、それから……………」

『ヒントをやろう。マのつくカードだ』

マのつくカード？あれ、なんかついさつきそんなカードを見たような見なかったような。

『ハイ時間切れ。正解はさつきサーチしてたレベル4貫通持ちデーモン、マッド・デーモンを召喚する、だ』

「マッド・デーモン………ああつ！そういうこと！」

そこまで言われてやっとわかった。僕の間にはオイスターマイスターをリリースした時に出した、アトランティスの効果込みでも攻守200のオイスタートークンが守備表示で残り続けている。そしてマッド・デーモンの攻撃力は1800で、僕のライフは残り200。となると、その攻撃が来れば僕の負けだ。完全に目先のターンでのボード・アドバンテージしか見えてなかったけど、それじゃあ元も子もない。なら、確かに攻撃は悪手か。だったら！

「チャクチャルさんを守備表示に変更、そして効果発動！このカードでの攻撃を放棄することで1ターンに1度、相手に守備力の半分のダメージを与える！ダーク・ダイブ・アタック！」

「むうっ!?直接攻撃の次は効果ダメージとは、神を名乗る割にずいぶん小癪な手を使うものだ」

『さすが幻魔の皇、などと偉そうなことを言っておきながらすることはひたすら物理で殴るのみのパワー馬鹿、私のような神とは考えのレベルが違う』

いやだからそこ、勝手にケンカしないの。今デュエルしてるんだから。

地縛神 Chacu Chailhua 攻3900↓守240

0

殉教者—ラビエル— LP1400↓200

「よしっ、やっとライフが並んだ。これでターンエンド」

殉教者—ラビエル— LP200 手札：1

モンスター：幻魔皇ラビエル(攻)

幻魔トークン(守)

魔法・罫：なし

清明 LP200 手札：2

モンスター：オイスタートークン（守）

地縛神 Chacu Challhua（守・安

地）

魔法・罨：安全地帯（地）

「私のターン。このターンで決めようぞ、手札のマッド・デーモンを召喚！」

マッド・デーモン

効果モンスター

星4 / 闇属性 / 悪魔族 / 攻1800 / 守 0

このカードが守備表示モンスターを攻撃した時、

その守備力を攻撃力が超えていれば、

その数値だけ相手ライフに戦闘ダメージを与える。

フィールド上に表側攻撃表示で存在するこのカードが攻撃対象に選択された時、

このカードの表示形式を守備表示にする。

「唸れ、マッド・デーモン！ボーン・スプラッシュの一撃で、オイスタートークンを粉碎せよ！」

威勢よく召喚したマッド・デーモンに、攻撃の指示を出す殉教者。だがマッド・デーモンは、まるで何かにおびえるようなそぶりを見せていつまでたっても動こうとしない。それを訝しんだ殉教者がもう一度指示を出す、やはりマッド・デーモンの足は前に進むとうしなかった。もつとも、それも無理はないだろう。守備表示のときのチャクチャルさんの放つ圧倒的なカリスマとか威圧感とかなんかそんな感じのは、それを味方にしてるこつちですら並大抵じゃあないプレッシャーを感じるんだ。それを真っ向から受けたりしたらまさに蛇ににらまれたカエル、動くことなんてできるわけがない。

『いや、なんかそんな感じの。もうちよいなんかカツコいい言い回しとかあるだろーよ』

「……………ほっといてちよーだい。チャクチャルさん、もう一つの効果発動！チャクチャルさんが守備表示でいる限り相手のバトルフェイズは封印状態、つまりラビエルだろうとデーモンだろうと、この効果

の前で攻撃をすることは不可能だよ！」

もつとも、この布陣だつてもし今殉教者の引いたカードがサイクロンとかの安全地帯を破壊することができるとしたら、そこでおしまいなことには変わりない。バトルフェイズを行わない限りメインフェイズ2には移行しない……それはつまり、攻撃宣言こそあつたもののそれが通用しない以上、いまだ殉教者のメインフェイズ1であることを意味している。

あの手札にある1枚のカード。その内容によっては、このターンで勝負がつく。

「……………カードをセットし、ターンエンドだ」

やった、そう思った。これで砂塵の大竜巻とか飛んできたら泣くしかないけど。とにかく、僕のターンだ！

「ドロー！チャクチャルさんの効果をもう一回使つて……………」

「なあ、人間よ。名はなんという」

まったく、今日はよくセリフを止められる日だ。えっと、人間ってのは多分僕のことなんだろう。むしろこの流れでそうじゃなかったらびつくりだわ。

「遊野清明。覚えといてね、ラビエル」

「ああ、覚えておこう。だがな、一つだけ言わせてくれ。お前は人間のために戦ったのかもしれないが、我にもふたたび封印されていった仲間の仇討ちという大義がある」

「それで？」

言いたいことはわからないでもないけど、だからと言って今更勝ちを譲るつもりはさらっさららない。ここまでやっというて結局負けちゃって『20XX年、世界は幻魔の炎に包まれた——』なんてオチは御免こうむりたいしね。

『高攻撃力で敵を外側から叩きのめすサイバー流とトラップ封じで内側からデッキコンセプトを破壊するサイコ流が一子相伝で受け継がれていきそうなオチだな。まあ冗談言ってる状況でもねえか、なーんか怪しいんだよなあ、あの伏せカード。止める手段がないってのがまたイラツとくるな』

そう言われて、ちょっとだけ緊張する。やだな、変なこと言わないでよユーノ。ここでチャクチャルさんの効果を使う。1200のバーンをもう一回与える。僕が勝ってハッピーエンド。それでいいじゃない。……………ねえ？

「つまり、だ。我にも最後に残った幻魔皇としての意地がある。この勝負、たとえ差し違えようとただ負けるようなことにはしない！リバースカードオープン、破壊指輪！我はフィールド上に存在する我自身を対象にしてこのカードを発動する！」

『……………っ!!』

ラビエルが右手で天を指さすと上空の黒雲から雷がその人差し指に落ち、そのまま指にまとわりついて指輪のような形になる。そして、その指輪を中心として、フィールドのすべてを吹き飛ばすような爆発が起きた。

はかいリング  
破壊指輪

通常罠

自分フィールド上の表側表示モンスター1体を破壊し、

お互いに1000ポイントダメージを受ける。

「そん、な……………」

「言っただろう、たとえ差し違えようともただ負けるわけにはいかな」と

殉教者—ラビエル— LP200↓0

清明 LP200↓0

負けた。いや正確には引き分けだけど、闇のゲームでライフが0になったことに変わりはない。魂を抜かれるってのはどんな感じなんだろうとぼんやり思った瞬間、猛烈な勢いで体中の力が抜けてきた。腕を上にあげることができない。足がふらつき、地面に崩れるのを止めることができない。今何か叫んだのは、ユーノだろうかチャクチャルさんだろうか、それともほかの誰かだろうか。あるいは、誰も何もしゃべってなんかいなかったのかもしれない。どちらにせよどんどん耳が遠くなってきたいて、もう何も聞こえない。目もかすんできて、視界に霧がかかったように何も見えなくなった。眠い、眠くて

しょうがない。世界の運命とか幻魔とか、もう全部どうでもいいや。

おやすみなさい。

## ターンEX―2 鉄砲水ともう一つの『真紅』

『…………クソッ』

保健室の一角、窓際に位置するベッドの一つ。さつきまでは見舞い客たちでにぎわっていたそこも、今では鮎川先生に消灯時間の関係で追い出されたため誰もいない。だが、それは精霊の見えない人間が見た時のこと。見るものが見れば見えただろう、シャーク・サツカーを肩に張り付かせてベッド際にたたずむ一人の少年の姿を。

そんな彼の背に、どこからともなく言葉がかけられた。

『貴方のせいではない。私が、もつと強ければ！五千年前と何も変わらない！自分と契約した人間一人も勝たせることができなくて、何が神だ…………！』

『…………いやチャクチャル、気持ちはあるがてえけどそうじゃない。あの手札じゃ他に発動できるカードもなかったし、あのデュエルにミスはどこにもなかった。ただ、勝てなかっただけだ』

『…………ああ、そうだな。すまないな、柄にもなく取り乱してしまつて』

その言葉を合図にしたかのように、再び部屋を沈黙が支配する。その空気を最初に破ったのは、今度はユーノだった。

『なあチャクチャル、こーゆーのはお前の専門だろうから聞いておくけどよ。…………こいつの、清明の魂は今どうなってるんだ？』

清明が今昏睡状態なのは、闇のゲームによって魂を抜かれたから。このまま植物状態の寝顔を見ているも回復の見込みがないが、それは裏を返せば魂さえ戻ってきたらすぐに目を覚ます、ということでもある。そして、そんな方法があるんだとすればそれを知るのは闇のゲームを仕掛ける側でもある地縛神をおいてこの中にはいない。そう思つての質問をしかけたが、返ってきたユーノの予想の斜め上に行く答えに驚いて聞き直している。

『それができるようなら私が自力で地獄の底からでも引きずり出している。ただ、妙な点がある。私の心当たりのある世界すべてを回つてみたが、どこにも清明の魂がない』



『魂がない？』

さっぱりわからない、といったユーノの顔を見かねてより詳しい説明に入っていた。

『そうだな、では最初から説明しよう。まず闇のゲームだが、これに負けて魂が抜けたからといって全てのパターンでそれがその場で消滅するわけではない。抜き取ったうえで一時保管し、その後は勝者の勝手というのが基本だ』

『何それ初耳』

『ふむ、少し性質は違うがあのアニメで未来の私が負けた時も私召喚のため生け贄になった魂が元に戻っていただろう。あれと似たようなものだ』

『なるほど納得。つてことは、まだ希望はあるってことか』

そういうことになるな、と返すチャクチャルア。だがそのあとにただ、と暗い声で付け加えた。

『その肝心の魂がどこにいるのかがさっぱりわからない。どこを探しても痕跡すら見つからないのは初めてだ。……それが分からない限り、何もできることはない』

『難しい話は俺にはよくわからないが、とにかく何かが変なんだな？つまり、もう一人ぐらい黒幕がいると』

『その可能性は極めて高い。が、よほどうまく隠れているようだな』  
『なるほど……どこからどうあたってほしいのかもわからないが、とりあえず動いてから考えるかね。悪いチャクチャル、デュエルディスク持っていたいから俺も実体化させてくれ』

ああ、と言つて数秒後。そこには、久しぶりに肉の体を持ったユーノが立っていた。そしてベッドのわきの机に置いてあった清明のデュエルディスクとテツキを腕に装着し、精霊軍団を中にひっこめさせる。最後にもう一度だけ清明の方をちらつと見て忍び足で部屋を出て行く。

と思つたら、数秒もしないうちに部屋に戻ってきた。ただし今度の人数は一人ではなく、二人である。三人目の少年と寝かされている清明の間に立ちふさがるような位置をとったユーノが、警戒しながらも

ふてぶてしく笑ってみせた。

「随分とひつきしぶりじゃねえか、富野さん？」

そこにいたのは富野……『レッド・デーモンズ・ドラゴン』を軸とした所謂ジャックデツキの使い手であり、元転生者であり現転生者狩りの一員でもある。一度ユーノの前に敗れはしたが、ユーノ自身もあれがかなりギリギリの戦いだったことは承知している。この間は、自分の方がほんのちよっぴり運が良かっただけのこと。あと挑発、つまり心理フェイズがきれいにはまったというのも大きい。そしてそれが二度続く保証は、どこにもないのだ。もつとも、そう思っていることなどおくびにも出さないのだが。

おそらくあの時のリターンマッチに来たのだろう、とユーノは踏んでいる。だとしたら、せめて清明だけでも守りきらねばなるまい。そう決意を固めたところで、ぽつりと富野が口を開いた。

「まず一つ言っとくが、俺はお前のことが大っ嫌いだ」

「じゃあ帰れよ。素敵かどうかは知らんけど、とりあえず出口はあっちだぜ？」

お互いに敵意丸出しの、愛想なんて欠片もない会話。だが、少なくとも話をする余地はあるらしい。そう判断したユーノはベッドの端によつこらせと偉そうに腰掛け、それで？と言いたげに富野の顔を見て話の続きを促す。

「……………今日は、お前と取引しに来た」

「そりやまた随分な話だこつて。ま、とりあえずはよ続き」

「俺とタッグを組んで、ある奴をデュエルでぶちのめしてほしい」「はあ?！」

これにはユーノも意表を突かれ、ずっこけてベッドからずり落ちそうになった。さっきのチャクチャルアとの会話といい今日は意表のつかれっぱなしだ、と心の中でぼやきながら尻もちをつく寸前にかろうじて体勢を立て直し、自分の耳がおかしくなったのかと割と本気で心配しながら聞き返す。

「おいちよーっと待て。つまりあれか、哀れな仔羊であるわたくしめにどうか力を貸してくださいユーノ様よろしくお願いしますなんで

もしますからと、つまりお前はそう言いたいんだな？」

「言いたくない。そもそもお前に拒否権があるはずないからなバーカ」

「……………何？」

その含みのある言い方に、何か自分にとってよからぬものを感じ取るユーノ。その後彼が口にした取引の条件は、ユーノの顔色を一発で変えさせるに十分なものだった。

「この取引を受けた場合、今からぶちのめしに行くやつが持つてるお前の相手の魂はお前の好きにさせてやるよ」

「話は聞いてやるからさっさと全部吐け」

悔しさのあまり歯を食いしばりながら声を絞り出す。清明の魂がかかるとあらば断わるなんて選択肢はない、ユーノがこの取引で完全敗北した瞬間であった。それから場所を移すからついて来いと言われ連れ立って歩きながらおおよその話を聞く。なんでも、そのぶちのめしたいデュエリストは元々彼と同じ転生者から転生者狩りになったクチらしいのだが、どうにも暴走気味なうえに仕事が雑で富野とは徹底的に気が合わなかったらしい。

「もちろん、俺はお前の方が嫌いだがな。目くそ鼻くそ程度の違いだが」

「うるせ」

そしてあの日、富野がユーノとのデュエルに負けて帰った日に事件が起きたらしい。

「……………あいつがケンカ売ってきてな。負けたんだよ、後攻ワンキルされて」

「ふんふん」

いつものノリでざまーみる、と言いかけていた自分を慌てて抑えるユーノ。何しろまだ情報が足りなすぎる、不用意な挑発はしないが吉だろう。その思いを知ってか知らずか、彼の話は続く。

……………そこまではよかった。そいつの腕が立つことは彼だってわかっていたし、自分の方が弱いという自覚もあったからまだ割り切ることもできた。だが、その後の行動が問題なのだという。

「あの野郎、そこで調子に乗っちゃまって転生者狩りの仕事を辞めて逃げ出しやがったんだ。それも、かなり最悪な方向にな」

「最悪？俺にしてみりやお前らは全員こっちが必死に毎日生きてんの邪魔してくる悪趣味野郎の集まりだけだな。あ、俺はもう死んでっけど」

「アホ。俺らは転生者を倒して世界を元に戻した後、そいつの魂はちゃんと元いた世界に返してやってるんだよ。だけどあいつの場合、何をとち狂ったのか仕留めた魂を片っ端から潰し始めてな？」

魂を潰す。つまり、存在の完全な消滅だ。正直これまでが専門的な話しすぎて今一つついていけなかったユーノも、その物騒な響きには眉をピクリと動かした。それを知ってか知らずか、富野の言葉は続く。

「お前なんぞにあんまり詳しいことまでしゃべるつもりはねーから適当にはしよるけどよ、たまたまお前らがラビエルと相打ちになったとこに居合わせたんだろうな。お前の半分のやつが魂が体から抜ける寸前にそれをやつが回収して、その時の反応を見つけた俺が場所を特定してここまで追っかけて来たわけだ。正直あいつには俺一人じゃ勝てる気がしねえが、お前程度ならギリギリ俺の足を引っ張ることもなく肉壁ぐらいにはなってくれそうだからな。せいぜい時間稼げよ、その隙に俺が止めさすから」

「おいちよつと待てコラー！」

「お、見つけた。あれだ、あの金髪」

認めてるんだか認めてないんだかわからない散々な言いように文句を言いかけた時、富野が不意に目の前の崖を指さした。

「なるほど確かに金髪だ」

生前から英語は苦手なので金髪を見ただけでちよつと帰りたくなっていたりする。

「落ち着け、日本人だバカ。…………おいてめえ、よくも俺のレッド・デーモンズを侮辱しやがったな！あの時の借りを返しに来たから勝負しろ！」

「あらら、富野センパイってばもう追いかけてきちゃったの？で、そつ

ちの男の人が助っ人？ふーん。あ、申し遅れたけど僕の名前は遊。遊戯王の遊って書いて遊あそぶね。ここで死んでもらうから短い付き合いにしかないだろうけど、とりあえずよろしく」

「……………なあ富野」

「なんだ」

「……………お前、ほんつとにあんなチャラそうな奴に負けたのか？」

物騒なセリフはガン無視することにして、見た目の印象だけで聞くことにしたらしい。

「あの男は見た目で判断しない方がいいぞ。あんな人畜無害そうな顔でも中身はとんでもない化け物だし、腕だつて立つ。そもそも、あいつがなんで転生者から転生者狩りになったかかってーとだな。あいつ、転生した世界で闇のゲーム仕掛けまくって登場人物を原作主要キャラからモブに至るまで全滅させて世界ひとつぶち壊しちまったんだよ」

「はあ!?そんなことできるもんなのか!?だいたい……………」

いくらなんでもこれだけは嘘だろうと思つて何か言おうとしたが、その声は当の本人に遮られた。

「ねえねえー、お二人さん。いいから早く始めようよー。バトルロワイヤルルールでいいからさ」

「ちつ、しょうがねえ!話は後だ、始めるぞ!」

「デュエル!!」

「あはは、先行は僕ねー。ドローして、神機王ウルを召喚!さらにカードをセットしてターンエンドつと」

神機王ウル

効果モンスター

星4 / 地属性 / 機械族 / 攻1600 / 守1500

このカードは相手フィールド上に存在する全てのモンスターに1回ずつ攻撃をする事ができる。

このカードが戦闘を行う場合、相手プレイヤーが受ける戦闘ダメージは0になる。

「ウル……………何をたくらんでやがる?俺のターン、ここは様子見が無難

か。手札断殺を発動、さらにオーロラ・ウイングを守備表示で召喚。これでターンエンド」

オーロラ・ウイング 守1600 攻1200↓800

「最後は俺のターン！最初から飛ばしていくぜ、融合を発動！手札のビッグ・ピース・ゴーレムとスモール・ピース・ゴーレムを融合して、融合召喚！来い、マルチ・ピース・ゴーレム！」

マルチ・ピース・ゴーレム 攻2600↓1900

バトルロイヤルルール。タッグデュエルのようにチームを組んで戦うのではなく、1VS1VS1VS…の形で行われるデュエルの形式の一つである。主な特徴としてすべてのプレイヤーが最初のターン攻撃宣言を行えず、全フィールドに影響を与える大嵐などのカードはすべてのプレイヤーが効果を受ける、などがある。自分の身を守りながら相手が潰しあうのをやり過ぎして満身創痍の勝者を倒す、全力で攻め込んで二人まとめて力押しで行く、事前にチームを組んで2対1の戦いに持っていく……かと思いきや同盟相手に裏切られて大ピンチになるなど、デュエリストの個性によつてその戦法も様々な試合方法は、決してメジャーではないもののタッグデュエルと並び常に一定の人気がある。

今回は、遊とユーノが手札を温存したのとは対照的に富野がいきなり全力で動く結果になったようだ。

「さらにレベル1のチューナーモンスター、ダーク・スプロケッター召喚！レベル7のマルチ・ピース・ゴーレムに、レベル1のダーク・スプロケッターをチューニング！赤き王者が立ち上がる時、熱き鼓動が天地に響く。防御に回る臆病者に、生きる価値など欠片もない！シンクロ召喚！叩き潰せ、レッド・デーモンズ・ドラゴン！」

「おいおい、また初手でそれかよ……」

ダーク・スプロケッターが勢いよく伸ばした歯車のチェーンが岩石の巨人をギリギリと締め上げ、2つのモンスターが溶け合うように合体して赤黒い悪魔の竜がさっそうと登場する。

☆7+☆1=☆8

レッド・デーモンズ・ドラゴン 攻3000

「この間の礼はたっぷりしてやるぜ、遊！」

「へえー、すごいすごい」

「カードを伏せるぜ。俺は、これでターンエンドだ」

遊 LP4000 手札：4

モンスター：神機王ウル（攻）

魔法・罫：1（伏せ）

ユーノ LP4000 手札：4

モンスター：オーロラ・ウイング（守）

魔法・罫：なし

富野 LP4000 手札：1

モンスター：レッド・デーモンズ・ドラゴン（攻）

魔法・罫：1（伏せ）

「それじゃあー、僕のターン！さあ、攻撃始めるよー。金華猫を召喚して、効果発動！このスピリットモンスターは召喚に成功した時、レベル1モンスターを墓地から特殊召喚できるんだよねー。猫さんすごい！というわけで、レベル1チューナーのバリア・リゾネーターを召喚してそのままシンクロ召喚！レベル1の金華猫に、レベル1のバリア・リゾネーターをチューニング！怪しく揺らめく紫色が、世界に静かに火を放つ。シンクロ召喚、焰紫竜ピュラリス！」

☆1+☆1=☆2

焰紫竜<sup>ほむら</sup>ピュラリス 攻800

「そしてレベル4のウルに、レベル2シンクロチューナーのピュラリスをチューニング！静かに輝く青色が、天の牙となり地を砕く。シンクロ召喚、天狼王 ブルー・セイリオス！」

☆4+☆2=☆6

天狼王 ブルー・セイリオス 攻2400

「と、ここでピュラリスの効果発動。このカードは墓地に送られた時、相手の場のモンスター全員の攻撃力を強制的に500ポイント下げます！」

セイリオスがピュラリスと同じ紫色の火炎を吐き、その炎がフィールドのすべてを舐めつくすように広がっていく。モンスターを破壊

するほどの熱さはないそれも、火傷を負わせ集中力を削ぐには十分な威力を持つていたようだ。

オーロラ・ウイング 守1600 攻1200↓700  
レッド・デーモンズ・ドラゴン 攻3000↓2500

「へっ、それでもお前のモンスターごときじゃ俺のレッド・デーモンズには勝てねえなあ！」

「そうだね、だからオーロラ・ウイングを攻撃！ウルフズ・ファンゲ天狼蒼牙！」

天狼王 ブルー・セイリオス 攻2400↓オーロラ・ウイング  
守1600（破壊）

ブルー・セイリオスが青い閃光となってフィールドを走り抜け、オーロラ・ウイングの体を噛み千切る。だが、そのまま光になって消えていったかと思われたその体はまさに掴みどころのないオーロラのようにゆらゆらと揺れて、また元の鳥の姿に戻った。

「オーロラ・ウイングは戦闘破壊された時、1ターンに1度だけ自分を表側攻撃表示で蘇らせる……今の攻撃は無意味だぜ」

オーロラ・ウイング 攻1200

「無意味？確かにそうかもねー。カードを2枚セットしてターン終了だね」

「否定しないことが余計不気味だな……ドロー、チューナーモンスター、竜宮の白タウナギを召喚！さらに水属性モンスターのオーロラ・ウイングをリリースすることで、シャークラーケンを手札から特殊召喚！レベル6魚族のシャークラーケンに、レベル4のウナギをチューニング！山をも砕くその牙で、海を蹴散らすその爪で！地鳴りとともに駆け抜ける、シンクロ召喚！神樹の守護獣―牙王！」

一瞬にして並んだ2体の魚族モンスター。そのうち片方が4つの緑色の輪になり大きいほうを包み、鎧を装備したライオンにも似た獣が一声吠える。牙王、攻撃力3100を誇る高レベル縛りなしシンクロの中でも抜群の安定感を誇るモンスターである。

☆6+☆4=☆10

神樹の守護獣―牙王 攻3100

「牙王、行くぜ！ブルー・セイリオスに攻撃！」



轟、と音がした。たったそれだけで、狼の王たるセイリオスは破壊された。あまりのスピードでの攻撃なため、いつの間にも何発の爪を、牙を叩き込んだのかすら誰にもわからなかったのだ。もしかすると、当のセイリオスにもわからなかったのかもしれない。

神樹の守護獣―牙王 攻3100↓天狼王 ブルー・セイリオス  
攻2400 (破壊)

遊 LP4000↓3300

「うわわっ！だけど、セイリオスはただじゃあやられないんだよ。このモンスターは破壊されて墓地に送られた時、相手モンスター1体の攻撃力を2400下げる！僕はこの効果でねー」

「先に言っとくが、今はまだバトルフェイズ中だ。そして牙王は俺のメイン2にならない限り、あらゆる相手カードの効果の対象にならない効果もちだからな」

「わかってるよ、うっとうしい耐性だなあ。レッド・デーモンズにさらに弱ってもらおうかな、ブルー・サブレイメイション蒼天昇牙」

レッド・デーモンズ・ドラゴン 攻2500↓100

「ああー！テメー、俺のレッド・デーモンズに何しやがる！攻撃力もう100しかないじゃねえか！」

「うるせバカヤロ、さっさとスカーレットに進化させりやいいだけの話じゃねえか！そうでなきやこつちだつてお前に押し付けたりはしねえよー！」

「それができるんなら苦労しねえわあああつー！」

「事故つたんだな!?事故つてるんだな!?そんなことで威張るんじゃねえよー！」

「おもしろーい！もつとやってよ、待っててあげるからさー！あ、その前にトラップ発動ね。奇跡の残照！さあもつと働けセイリオス、ハリイ、ハリイ！」

奇跡の残照

通常罫

このターン戦闘によって破壊され自分の墓地へ送られたモンスター1体を選択して発動する。

選択したモンスターを墓地から特殊召喚する。

天狼王 ブルー・セイリオス 攻2400

ギヤーギヤーとみにくい罵り合いを始めた二人だが、その様子に腹を抱えてケラケラと子供のように笑いながらもちやっかりセイリオスを復活させる遊を見ていつべんに富野の怒りがマックスに達したらしい。もはや喋る余裕もないのか真っ赤な顔で無言のままカードをデッキから引き、乱暴に魔法・罨ゾーンに差し込んで発動する。どれどれとそのカードを見た清明が、げげえーと驚愕の声を上げた。

「ちよ、お前、ここでブラホとか牙王まで死んじまうだろうが！」

だがもう遅い。ブラホ……本名ブラック・ホール。効果は単純明快な、フィールド上のモンスターをすべて破壊する。確かに自分の場のモンスターも巻き込む効果を持つこのカードならばセイリオスの効果は無駄打ちさせることはできるのだが、ユーノが召喚した牙王の効果はあくまで効果の対象にならないのみ。対象をとらない破壊にはとことん脆いのだ。フィールドの中心にぽっかりと真っ黒な穴が開き、その中心に向けてすべてのモンスターが引きずり込まれていく。セイリオスが、そして牙王が抵抗むなしく引きずられる様子を見て少し気分が落ち着いたらしく、今度は富野もきちんと伏せカードの発動を宣言した。

「これで少しはすつきりするぜ！さらにチェインしてトラップ、バスター・モード！このカードは俺のシンクロモンスターをリリースすることで、そのカード名を含むバスターモンスターをデッキから特殊召喚する！そして対象は当然、俺のレッド・デーモンズだ！来い、レッド・デーモンズ・ドラゴン／バスター!!」

一度はほかのモンスターともどもブラック・ホールの中に吸い込まれたかに見えるが、その一瞬前に真紅の鎧を装着して飛翔力が上がり、圧倒的な重力を振り切って飛び出したレッド・デーモンズ・ドラゴン。だがその鎧は、ブラック・ホールが消滅するのと同じにすうっと消えさった。

レッド・デーモンズ・ドラゴン 攻3000

「ようやくダメージが消えたな、レッド・デーモンズ！バスターモンス

タワーは破壊された時、墓地から素材になったシンクロモンスターを特殊召喚する効果があるんだよ！遊、お前はここで潰す！灼熱のクリームゾン・ヘルフレア！」

レッド・デーモンズ・ドラゴンが大きく息を吸い込み、必殺のブレスを放つ。だがその炎は、突然地中から生えてきた巨大な岩石の腕によつて遮られた。

「トラップ発動、ピンポイント・ガードゥ。戻っておいで、ピュラリスちゃん」

ピンポイント・ガード

通常罫

相手モンスターの攻撃宣言時、

自分の墓地のレベル4以下のモンスター1体を選択して発動できる。

選択したモンスターを表側守備表示で特殊召喚する。

この効果で特殊召喚したモンスターはそのターン、

戦闘及びカードの効果では破壊されない。

焰紫竜ピュラリス 守1400

「攻撃しても戦闘破壊できない、おまけに効果使ってもダメ。どうすりゃいいってんだよ！」

「とりあえず俺の牙王返せ馬鹿！」

遊 LP3300 手札：2

モンスター：焰紫竜ピュラリス（守）

魔法・罫：1（伏せ）

ユーノ LP4000 手札：3

モンスター：なし

魔法・罫：なし

富野 LP4000 手札：0

モンスター：レッド・デーモンズ・ドラゴン（攻）

魔法・罫：なし

「ふふふ、ドロ―！手札の灰塵王アッシュ・ガッシュを召喚、そっちのおにーさんに攻撃！」

灰塵王アツシユ・ガツシユ 攻1000↓ユーノ（直接攻撃）  
ユーノ LP4000↓3000

ついに通ったユーノへの初ダメージ。ライフの4分の1を削る一撃に多少顔をしかめるが、まだまだ闘志は消えていない。とはいうものの、アツシユ・ガツシユには効果があるのだが。

「アツシユ・ガツシユが相手に戦闘ダメージを与えた時、このカードのレベルは1アップするよ。メイン2、永続トラップのシェイプシスターを発動！」

シェイプシスター

永続罠

このカードは発動後モンスターカード

（悪魔族・チューナー・地・星2・攻／守0）となり、  
モンスターカードゾーンに特殊召喚する。

このカードは罠カードとしても扱う。

「シェイプシスター」は1ターンに1枚しか発動できない。

「レベル4から5になったアツシユ・ガツシユにレベル2チューナーのシェイプシスターをチューニング！天頂佇む白色が、穢れた地上に裁きを下す。シンクロ召喚、天刑王 ブラック・ハイランダー！」

大鎌を手にした黒白の死神が、夜空のてっぺんで急に輝いた北斗七星から舞い降りてきた。その効果は、富野もユーノもよく知っている。ゆえに二人とも渋い顔だが、正直ユーノはエクシーズ召喚主体かメインデッキオンリーで戦う作戦に切り替えればいいだけであり富野も今いるレッド・デーモンズだけである程度やっていけるようなデッキ構築なのでダメージそのものはそこまでなかったりする。

☆5+☆2+☆7

天刑王 ブラック・ハイランダー

シンクロ・効果モンスター

星7／闇属性／悪魔族／攻2800／守2300

悪魔族チューナー+チューナー以外の悪魔族モンスター1体以上

このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、  
お互いにシンクロ召喚をする事ができない。

1ターンに1度、装備カードを装備した相手モンスター1体を選択して発動する事ができる。

選択したモンスターに装備された装備カードを全て破壊し、破壊した数×400ポイントダメージを相手ライフに与える。

「カードを伏せてターンエンドだよ。さあ、せいぜいあがいて見せてよ！」

「上等だな、俺のターン！ドリル・バーニカルを召喚、手札のアクア・ジェットを発動！これが俺のマジックコンボだ！」

ドリル・バーニカル 攻300↓1300

「そしてドリル・バーニカルの攻撃！こいつは相手に直接攻撃することができ、さらにその攻撃が通るたびに攻撃力が1000ポイントアップする効果もちだ、ドリルアタック発射！」

ドリル・バーニカル 攻1300↓遊（直接攻撃）

遊 LP3300↓2000

ドリル・バーニカル 攻1300↓2300

「カードを伏せて、と。これでターンエンドだ」

エクシーズ召喚も狙うことができる手札だったが、あえて直接攻撃できるドリル・バーニカルを強化してダメージ優先の戦法をとるユーノ。自分の判断が間違っていないことを祈りつつ、富野にターンを譲り渡した。さつきみたいいな真似を勝手にされたらかなわないのでちよつと不安はあるが、まさか攻撃力が3000に戻ったレッド・デーモンズがいるのに無茶はしないだろうと踏む。どの道、今伏せたカードでは彼には見ていることしかできないのだが。

「まず魔法カード、紅蓮魔竜の壺を発動！俺の場にレッド・デーモンズがいる時、次の相手ターン終了までモンスターを出すことの禁止を条件にカードを2枚ドロウする！さらにもう1枚発動して2枚ドロウ、そのままバトルだ！ブラック・ハイランダーを焼き尽くせ、灼熱のクリムゾン・ヘルフレア！」

「攻撃するんだ。じゃあトラップ発動、ラララ火霊術、紅。炎属性モンスターのピュラリスをリリースして、その攻撃力800のダメージを、じゃあそつちのおにーさんに与えようかな」

半ば歌うように発動したカード。その効果を受けたピュラリスが、紫の火の球になってユーノに突っ込んできた。

ユーノ KP3000↓2200

「つて俺かよー熱っ」

「それでピュラリスの効果、相手のモンスターは全員弱体化ね〜」

またもや広がる紫色の炎が、ドリル・バーニカルとレッド・デーモンズを包み込んでバランスを崩させる。しまった、と力なく富野がつぶやいたが、もう遅い。今はバトルフェイズ中であり、攻撃宣言は既に済んでいる。威力の弱まったブレスをなんなく鎌で弾いたブラック・ハイランダーが、逆にレッド・デーモンズの首を跳ね飛ばした。

ドリル・バーニカル 攻2300↓1800

レッド・デーモンズ・ドラゴン 攻3000↓2500（破壊）↓

天刑王 ブラック・ハイランダー 攻2800

富野 LP4000↓3700

「お、俺のレッド・デーモンズ・ドラゴンがまた……………カードだけ伏せるぜ……………」

「何ぼきつとしてやがる、次が来るぞ！」

これで終わりではない。次は、遊のターンなのだ。だが、自分のエースがまたしても何もできなかったショックに呆然としている富野にその声は届かない。というところで全員の3ターン目が終了した。

遊 LP2000 手札：1

モンスター：天刑王 ブラック・ハイランダー

(攻)

魔法・罫：なし

ユーノ LP2200 手札：1

モンスター：ドリル・バーニカル (攻)

魔法・罫：1 (伏せ)

富野 LP3700 手札：2

モンスター：なし

魔法・罫：1 (伏せ)

「さあ、行っちゃえ〜！魔法カード、貪欲な壺を発動！墓地のバリア・リゾネーター、金華猫、神機王ウル、アツシユ・ガツシユ、セイリオスをデッキに戻して2枚引いて〜、破天荒な風を発動してブラック・ハイランダーのパワーをさらにアープ！」

破天荒な風

通常魔法

自分フィールド上に表側表示で存在するモンスター1体を選択して発動できる。

選択したモンスターの攻撃力・守備力は、

次の自分のスタンバイフェイズ時まで1000ポイントアップする。

天刑王 ブラック・ハイランダー 攻2800↓3800 守2300↓3300

「直接攻撃、デス・ボラ・スレイ死兆星斬〜！」

「つたく、今回だけだぜ？トラップ発動、ポセイドン・ウエーブ！その攻撃は俺が無効にして、さらにダメージを受けてもらう」

大上段に振りかぶった大鎌を叩き付けようとした死神の攻撃は、すんでのところまで横から飛んできた大波によって阻まれる。水圧に吹き飛ばされたブラック・ハイランダーが、遊の場に落下したのを見て危なかったな、とひそかにほっと息を吐くユーノ。ドリル・バーニカルがいることでダメージも与えられたし、まあ悪い結果ではないだろう。

遊 LP2000↓1200

「ば、馬鹿かお前！たった1枚しかない伏せカードこんなところで使つてんじゃねーよ！」

「はあ!?このやろ、人がたまに助けてやったんだからそこは土下座して俺の慈悲深さに感謝するところろーが！態度がなってねえな態度が、親の顔が見てみたいぜ。そもそも別にお前のためじゃない、1対1より2対1のほうが楽だから生かしておいてやってんだよ！」  
どちらもわかりやすいツンデレだった。

「むー、いいよ、カードを伏せてターンエンドしても」

「俺のターン！通るとは思えんがやるしかないな、ドリルアタック第二波！」

「当然通さないよー。手札から効果発動、護封剣の剣士！」

護封剣の剣士

効果モンスター

星8 / 光属性 / 戦士族 / 攻 0 / 守2400

相手モンスターの直接攻撃宣言時に発動できる。

このカードを手札から特殊召喚する。

さらにこのカードの守備力がその攻撃モンスターの攻撃力より高い場合、

その攻撃モンスターを破壊する。

また、フィールド上のこのカードを素材として

エクシーズ召喚したモンスターは以下の効果を得る。

●このカードは1ターンに1度だけ戦闘では破壊されない。

「バーニカルの攻撃力は1800……すまん、バーニカル！メイン2に手札のゼンマイシャークを召喚、さらに水属性モンスターのゼンマイシャークがいることで手札のサイレント・アングラーを特殊召喚！そしてレベル4のゼンマイシャークとサイレント・アングラーでオーバーレイ！2体のモンスターでオーバーレイ・ネットワークを構築。魂揺さぶるオーケストラが、海を渡って世界に響く！エクシーズ召喚、交響魔人マエストローク！」

☆4 + ☆4 || ★4

交響魔人マエストローク 守2300

小さな悪魔の角が生えたデザインの帽子をかぶる指揮者、マエストロークが指揮棒を構える。一度だけユーノがエクストラデッキへの存在を言及したことこそあるが、この世界で実際に登場するのはこれが初である。その効果は、自分が攻めるよりむしろ仲間のサポートに向いた能力である。

「マエストロークは1ターンに1度、オーバーレイ・ユニットを1つ使うことで相手モンスターを裏守備にできる！デイミニエンド・マーチ！」



交響魔人マエストローク(2) ↓(1)

天刑王 ブラック・ハイランダー(攻) ↓???(伏せ)

「俺はこれで、ターンエンドだ。次は任すぜ、富野!」

「…………お、俺に命令すんな! ドロー、リビングゲッドの呼び声を発動! 不屈の王者よ蘇れ、レッド・デーモンズ・ドラゴン! さらに、手札のダーク・リペアラーを通常召喚だ」

レッド・デーモンズ・ドラゴン 攻3000

ダーク・リペアラー 攻1000

「バトルだ、レッド・デーモンズ・ドラゴンで裏側になったブラック・ハイランダーを攻撃! 今度こそ燃やし尽くせ、灼熱のクリムゾン・ヘルフレア!」

レッド・デーモンズ・ドラゴン 攻3000 ↓??? 守2300 (破壊)

「さらにこの瞬間、レッド・デーモンズの効果発動! 守備表示のモンスターに攻撃したことで、守備表示になっている護封剣の剣士も破壊する、デモン・メテオ!」

ブレス攻撃でセット状態のブラック・ハイランダーを今度こそ破壊したレッド・デーモンズ・ドラゴンが、間髪入れずに太い腕を振るって護封剣の剣士を力技で叩き潰す。そして一瞬で2体のモンスターが消し飛んでから空きになったフィールドに、もそもそと這うように動く昆虫のような悪魔が後ろ足で持つ包丁で切りかかった。ちなみにその陰でレッド・デーモンズ・ドラゴンの吐くブレスの余波を受けたマエストロークは自身のもう一つの効果により、エクシーズ素材を使うことで破壊を無効にし、ちよつと焦げた服を気にしていた。

交響魔人マエストローク(1) ↓(0)

「ダーク・リペアラーで、ダイレクトアタック……………」

ダーク・リペアラー 攻1000 ↓遊(直接攻撃)

遊 LP1200 ↓200

「よっしゃあ、どうだ! カードを伏せるぜ! ざまーみやがれてんだコノヤロー!」

遊 LP200 手札:0

モンスター：なし

魔法・罨：1（伏せ）

ユーノ LP2200 手札：0

モンスター：交響魔人マエストローク（守・

0）

魔法・罨：なし

富野 LP3700 手札：1

モンスター：レッド・デーモンズ・ドラゴン（攻・

リ）

ダーク・リペアラ（攻）

魔法・罨：リビングデッドの呼び声（レ）

1（伏せ）

「へえ、少しはコンビプレーするようになってきたんだ……いいねいいねいいよ、そうこなくっちゃ！本気を出してあげるよ、ドロ！まずは魔法カード、貪欲で、無欲な壺をはつつどう。墓地から戦士族の護封剣の剣士、悪魔族のブラック・ハイランダー、爬虫類族のピュリスをデッキに戻して、またまた2枚ドロ」

貪欲で無欲な壺

通常魔法

メインフェイズ1の開始時に自分の墓地から

異なる種族のモンスター3体を選択して発動できる。

選択したモンスター3体をデッキに加えてシャッフルする。

その後、デッキからカードを2枚ドロする。

このカードを発動するターン、自分はバトルフェイズを行えない。

「相手の場と同じ属性のモンスターが2体以上いるとき、このカードは特殊召喚できるからね。今の富野、お前の場には闇属性モンスターが2体。来なよ神禽王アレクトール！」

神禽王アレクトール

効果モンスター

星6／風属性／鳥獣族／攻2400／守2000

相手フィールド上に同じ属性のモンスターが表側表示で2体以上

存在する場合、

このカードは手札から特殊召喚する事ができる。

1ターンに1度、フィールド上に表側表示で存在するカード1枚を選択する。

選択されたカードの効果はそのターン中無効になる。

「神禽王アレクトール」はフィールド上に1体しか表側表示で存在できない。

「そして忘れちゃならない通常召喚、金華猫さん再び参上、効果を使つて墓地のレベル1チューナー、チェンジ・シンクロンを特殊召喚だよー。シンクロ召喚、焰紫竜ピュラリスっ！」

☆1+☆1=☆2

焰紫竜ピュラリス 攻800

「レベル合計8……まずい、奴のエースモンスターが出るぞ！」

「ごめいさーん！さすがに一回やられてるからわかるかな？レベル6のアレクトールに、レベル2のピュラリスをチューニング！圧倒的な黒色が、世界の色を塗りつぶす。シンクロ召喚、琰魔竜 レッド・デーモン!!」

レッド・デーモンズによく似たシルエットのドラゴン。だがこちらは本家よりも筋肉質な体をしており、より黒の強いカラーリングも相まってさらに凶悪な印象を与える姿をしている。

☆6+☆2=☆8

琰魔竜 レッド・デーモン 攻3000

「貪欲で無欲な壺のデメリット効果があるから、このターン俺らが攻撃されることはない。けど……」

「けど、このモンスターには効果がある！1ターンに1度、このカード以外の場に表側攻撃表示で存在するモンスターをすべて破壊する！クリケンヘルバイン真紅の地獄炎！」

大地に足をつけてしつかりと踏ん張り、地面に向かってブレスを浴びせかけるレッド・デーモン。その地獄の炎は瞬く間にフィールド全体を覆い尽くし、レッド・デーモンズ・ドラゴンとダーク・リペアラを焼き尽くした。そしてその効果は、マエストロークにも及び始め

る。

「なんでマエストローク、お前まで……あ」

「ピュラリスの召喚に、チェンジ・シンクロン使ったでしょ？あのカードの効果は、シンクロ素材になったとき相手モンスター1体の表示形式を変えること。守備表示じゃあレッド・デーモンの効果も届かないから、ちよーつと攻撃表示になってもらったんだ。うん、これで全滅、さっぱりして気分がいいね」

「ダ、ダーク・リペアラアの効果発動……あのカードは墓地に送られた時自分のデッキの一番上を確認して、そのカードをデッキトップかデッキボトムに移動させられるからな、つーわけで俺はこのカードを確認するぜ、うん」

震え声でそう言うってデッキの一番上のカードを引き抜いた富野が見せたカードは、血涙のオーガ。守備表示にすれば壁にはなるので決してどうしようもないほど悪いカードではないのだが、一発逆転のカードでもない。彼はそれを、一瞬悩んだ末にデッキボトムに戻した。次のドローカードで逆転することに全てを賭けたらしい。

「だけどまあ、俺がこのターンでこのデカブツを倒せばいいだけの話だな。ドローク！手札からアトランティスの戦士を捨てることで、アトランティスをデッキから手札に加える。さらにそのまま発動し、手札のレベル4になった深海の怒りを攻撃表示で召喚！」

レイズ・オウ・テイブシ  
深海の怒り

効果モンスター

星5 / 水属性 / 魚族 / 攻 0 / 守 0

このカードの攻撃力・守備力は、自分の墓地の

魚族・海竜族・水族モンスターの数×500ポイントアップする。

深海の怒り ☆5 ↓ 4 攻0 ↓ 3200 守0 ↓ 3200

「これでジャストキルだ！深海の怒り、レッド・デーモンを攻撃！」

これまでの戦いで墓地に落ちて行った魚たちの魂を秘めて力を上げた深海の怒りが、右手の銛を勢いよく投げつける。まっすぐ飛んで行ったそれはきれいに命中し、レッド・デーモンはどうと倒れた。……かに見えたのだが、その銛はなんとレッド・デーモンの腹に突き

刺さる寸前のところだがっしりとキャッチされていた。それをゆつくりと構えるレッド・デーモンに、遊の得意げな声が重なった。

「最後のトラップ、魂の一撃を発動！。ライフを100払って、レッド・デーモンの攻撃力を一時的に3900アップ！」

魂の一撃

通常罠

自分のライフポイントが4000以下の場合、

自分フィールド上のモンスターが相手モンスターと戦闘を行う攻撃宣言時に

ライフポイントを半分払い、自分フィールド上のモンスター1体を選択して発動できる。

選択したモンスターの攻撃力は相手のエンドフェイズ時まで、自分のライフポイントが4000より下回っている数値分アップする。

「魂の一撃」は1ターンに1枚しか発動できない。

遊 LP200↓100

琰魔竜 レッド・デーモン 攻3000↓6900

「おいおい、うそだろ……?」

「現実だよー。反撃、レッド・デーモン！アブソリュート・ヘルドグマ極獄の絶対独断!!」

レッド・デーモンが深海の怒りの銛に火を吹きかけ、めらめらと燃え盛る炎の銛を投げ返した。だが、武器を持たない深海の怒りは避けきることができない。その銛が持ち主の体を貫く寸前、富野が動いた。

「さっきの借りはこれでチャラだかな！トラップ発動、ハー فور ストップ！相手のバトルフェイズ時、相手は全モンスターの攻撃力を半分にするかバトルフェイズを強制終了させるかのどちらかを選ぶことができる！さあユーノ、さっさと効果を選びやがれ！」

「へっ、味な真似してくれるじゃねえか。なら当然、バトルフェイズはこれで終了だ！」

いきなり何の脈絡もなく地面を割って登場した……というより生えてきたジャッジ・マンが軽々と銛を掴み、一振りして火を消すと

深海の怒りにそれを見せて何事か聞くそぶりを見せる。深海の怒りがごくごくと頷くと、満足げに微笑んでからそれを手渡して再び地面の中へ消えていった。

「そしてエンドフェイズ、魂の一撃の効果も消えるよなあ？」

「け、計算外だよ。まさかあの富野がこんなコンビプレーに自分から乗るようなマネをするなんてね」

琰魔竜 レッド・デーモン 攻6900↓3000

「勝手にほざいてやがれ、ドロー！手札の死者蘇生を発動、三度蘇れ、俺の相棒！」

これでこのデュエル3度目の復活となるレッド・デーモンズ・ドラゴンが、これで終わりにしようといわんばかりに咆哮する。それに対してレッド・デーモンは、まるで面白いやってみろと言わんばかりの表情をしているかのように見えた。それを見たレッド・デーモンズの怒りは、富野にもきっちり伝わった。

「見せてやるぜ、俺の最後のモンスター！トップ・ランナー通常召喚！」

カラフルな残像を引いて辺りを走り回る謎の走者。その姿はどこか珍妙なものだったが、あいにくと今の遊にそれを見て笑うほどの余裕はなかった。

「トップ・ランナー……その効果は確か」

「その通りだ。このカードが場にいる限り、俺の場にいるすべてのシンクロモンスターの攻撃力は600ポイントアップする！燃え上がれ、レッド・デーモンズ!!灼熱のクリムゾン・ヘルフレア!!」

レッド・デーモンズ・ドラゴン 攻3600↓琰魔竜 レッド・デーモン 攻3000 (破壊)

遊 LP100↓0

「あ、あはは、そそそんな、あはははは……」

いまだに負けることが信じられない、といった様子で呆然としている遊。その様子はどこか哀れなものだったが、ユーノにとって譲れな

いものがかかっている以上同情するつもりはさらさらない。ソリツドビジョンが消えるのとはほぼ同時に近づき、彼の胸ぐらをつかんで無言で締め上げる。と、その服の胸ポケットが不自然に膨らんでいるのが目についた。引っ張り出してみると、その中にはキャラメル箱ほどのサイズの用途不明なケース。

「富野、これ」

いくら見てもわからないらしく、あっさり富野に渡している。だが、富野はそれを一瞥するとそのまま投げ返してきた。

「ほらよ、約束のブツだ。蓋あけるだけで中身は勝手に体に戻るぜ」

「そりやどうも。じゃ、早速………ん？」

蓋を開けようと手に力を込めると、富野が彼のことを見ているのに気が付いた。そのまま何か言いたそうにしているのを見て取ったユーノが、ため息を一つついて自分から適当に話を振ってみる。

「なんかまだ言いたいことでもあんのか？あ、そっちで廃人になっているのはちゃんと持って帰ってくれよ」

「そ、その……」

「なんだ違うのか。はよ言ってみろよ」

「今回は、なんだ、俺も世話になったな。だけどな、次はお前を倒す………転生者は、許さねえよ」

そう言つて遊の体を担ぎ上げるとくるりと後ろを向き、そのままどこかへ歩いて行った。おそらくシルクハットマンのいるところにも帰るのだろう。

「ま、上等だけだな。返り討ちにしてやるぜ」

その姿が見えなくなつた辺りでぽつりと一言つぶやき、プシュツと箱の蓋を開けた。その後しばらくして植物人間状態だった清明が目覚めたことに鮎川先生が驚きのあまり椅子を蹴倒したり朝一番の登校前に見舞いに来ていた夢想や十代といった面々がどかどかどか入ってきて保健室がカオスな状態になったりと色々あるのだが、それはまた別のお話。





「あれ隼人、食べないの？風邪でもひいた？」

いつもは率先してやってきて配膳やらなんやらもちよつとは手伝ってくれる隼人が、今日はずいぶんと元気がなさそうだ。目の下にはうつすらとくまがででき、どうも顔色も心なしか悪い。もしかして病気だろうか。

「あ、そういえば清明君は知らなかったツスね。実は隼人君、明日の進級試験受けることになったんだよ」

「え、それホント!?なんで誰も教えてくんなかったのさ!」

「いや、だつててつきりもう知ってるもんだとばかり……」

「僕この一日入院中だったよ!」

「悪い悪い」

あ、十代この顔は全然悪いと思つてない顔だ。しかし、隼人が進級試験か。

「ちなみに相手は？」

「……………クロノス教諭、なんだな」

「ここで隼人が勝てば推薦がもらえて、あインダストリアルイリユージョンの I 2 社に入ることができなんだぜ!ペガサスさんからの大抜擢だ!」

なるほど、そりや緊張で胃も痛くなるうってものだ。特に隼人の場合、自分に対するコンプレックスが強いから余計に気が重いんだろう。

「(ということでは何か力になれないかな、ユーノ)」

『無茶言いやがって。……………ま、お前が心配する必要はないぜ。お前がバツタリ倒れてた間にも、世界は毎日進歩してんだ』

「(へ?)」

『あとは明日のお楽しみ、ってな。一つヒントを出すとしたら、進級試験の話は今日でできた、ってことだ』

それからも食事中に何度かせつついてみたが、詳しい意味については何一つ教えてくれなかった。一体何を知っているんだろう、この男は。

そして、午前3時ごろ。これまでずっと体は寝てる……というか倒れてる生活を送ってきたせいかな、まったく眠れずにベッドで寝返りを打ち続けていたのだが、それもいい加減飽きてきたのでふらつと外に出る。ちよつと一人で考えたいことがあったので、ユーノもサツカーも連れて行かない完全フリー状態だ。波の音を聞きながら玄関を出ると、頭上に満天の星空が広がっていた。

「うわあ……………」

思えばこのところ、夜は幻魔に警戒してばかりで星なんてまともに見る機会がなかったからなあ。考えたいことがあるとはいえ正直僕が考えてどうにかなる話でもなさそうだし、ユーノにも明日あたり相談するとして今夜はもう少しこつちをゆっくり見てこうかな。と、誰か来た。

「ふわあ……………清明、こんな夜中にどうしたんだな」

「いやそりゃこつちのセリフでしょ隼人。何やってたの一体」

まさか隼人が夜遊びだなんて、さすがに想定外すぎる。そう思ったのが顔に出てたのか、ちよつとムツとした表情で否定するように手を振った。

「多分、お前が想像したようなことはないんだな。それはともかく清明、お前に一つお願いがあるんだけど、いいか？」

「お願い？まあいいけど、内容によるよー？」

隼人のお願ひ、ね。珍しいこともあるもんだけど、まあ別に断る理由もないわけだし。

「このカードを、お前にあずかってほしいんだな」

そう言つて彼が差し出したのは、やたらときれいなイラストの魔法カード、エアーズロック・サンライズ。なにになに、効果は……

エアーズロック・サンライズ（アニメオリカ）

通常魔法

相手フィールド上の表側表示モンスター1体を選択して発動する。選択したモンスターの攻撃力・守備力を、エンドフェイズまで

自分の墓地の獣族・植物族・鳥獣族モンスターの数×200ポイントダウンする。

その後、自分の墓地の獣族・植物族・鳥獣族モンスター1体を選んで

自分フィールド上に特殊召喚できる。

「へー、羨ましいいなー。これの水・魚・海竜族版とかあったら欲しいかも。でもなんで僕に？こんないいカードなら、明日の試験で使えばいいじゃない」

そう聞くと、隼人は思いのほか真剣な顔できっぱりと言いつつ切った。

「このカードは、俺がデザインしたものをインダストリアルリユージョン社が特別にカードにしてくれたものなんだな。いうなればこのカードは、ずっとくすぶって落ちこぼれて、全部を諦めてた去年の俺との決別のあかしなんだな」

「だったらなおのこと……」

「いや、俺はこのカードを使わずに明日の試験に挑むんだな。そして、自分のことを一人前のデュエリストだと胸を張って言えるようになる。そうじゃないと、このカードを使う資格がないような気がしてならないんだな。だから、明日のデュエルが終わるまで、このカードはお前が持つててくれ」

「隼人……」

きつと何を言っても聞かないだろうな、そう思うほど隼人は決意の固い目をしていた。なら、僕にできることなんて一つしかないじゃないか。せつかく前に踏み出そうとしてるんだ、僕の方が年下なのにこんなこと言うのもおかしいけど、ここはひとつ背中を押すとしよう。

「任せてよ、隼人。そのかわり、明日はちゃんと勝つてよ？」

「わ、わかってるんだな。ありがとう、清明。もう俺は寝るからな」

「うん、お休み」

隼人の後姿を見送ってから、もう一度エアーズロック・サンライズのカードに目を落とす。その細部まできっちり書き込んであって、すごく芸術的な仕上がりのイラストを見ているとなんとなくシリアスちつくに考え事しようと思っていたのがばからしくなってくる。自然はこんなんでつかいんだ、それに比べりやどうってことない、みたいな。どれ、もう一回眠れるかどうか試してみますかね。

で、ついに試験の始まり。結論から言うと昨夜は結局ぜんっぜん眠れなかったから、今になってちよつと眠いかも。

「シニョール前田、準備はよろしいノーネ?」

「よろしくお願いします、クロノス先生」

「いいでシヨウ。それでは、デュエルを始めるノーネ!」

「デュエル!」

「シニョール前田、先行は譲るノーネ」

「それじゃあ俺のターン、ドロウするんだな。そして手札から、デス・コアラを攻撃表示で召喚!さらにカードを1枚伏せて、ターンエンドなんだな」

デス・コアラ 攻1100

「ええ!」

「オー、シニョール前田……」

思わず声が出てしまった。デス・コアラはリバーシした時にバーンダメージを相手に与えるリバーシ効果モンスター。なのにそれを、やりにもよってお世辞にもステータスが高いとは言えない攻撃表示で出すなんて。確かこの間も同じことやって怒られてたじゃないの。……このデュエル、大丈夫かなあ?

だが、今のプレイングを見ていたユーノの感想はこつちと真逆だったようだ。

『クククツ、なるほどな。いやらしい真似しこんでくれやがるぜ』

「何?おい貴様、それはどういう意味だ。俺にはあのコアラが素人並みのプレミスをしたようにしか見えんぞ」

『まあ万丈目、黙ってみてなつて。今の隼人は一味違うデュエリストだからな。あ、ちゃんと録画しといてくれよ』

「そんなことはわかってる!」

『ねえアニキ、これおいらたちも写っちゃダメかい?』

「お前らが写ったらただの心霊写真だろうが!」

プンスかしながらもちやんと手に持つカメラを構えなおす万丈目。

なんでも、今日のデュエルを見たい奴がいるから録画が必要らしい。でもそれが誰なのかは教えてくれないなんて、あいつかわらず情報を小出しにしか出さないやつだ。

「どうやらあなたは、この一年でもあまり成長していないようだしさか残念でスーノ。ですが、だからと言って手を抜くようなことはありえません。私のターン、手札からフィールド魔法、ギア・タウン歯車街を発動するノーネー！」

『お、出たなチートフィールド』

のんびりとつぶやくユーノをよそに、みるみるうちに地面からいくつもの大きさまざまな歯車が組み合わさった建物や歯車型の光を放つスポットライトがせりあがってきてちよつとした未来都市の図が出来上がる。えつと、この効果は……………

「……………解説お願い三沢っち！」

「その呼び方はやめてくれ！ギア・タウン歯車街の効果は、まず永続的に【古代の機械】シリーズのアドバンス召喚にかかるリリースの数を一つ減らすことだ。それとは別に破壊された時デッキの古代の機械を特殊召喚する効果もある」

「なるほど、センキュー」

「私は歯車街の効果により、レベル6の古代の機械合成獣をリリースなしで召喚しますーノ！」

頭が二つある獣を模した機械獣が、2つの口を開けてデス・コアラを威嚇する。本来ならば胸に開いた3つの穴のどれかに3色の歯車をはめ込むことで力を発揮するモンスターも、リリースなしで出されたらただのバナラモンスターでしかない。だけど、単純に攻撃力2300のノーデメリットモンスターをリリース抜きで出したとなれば話は別だ。

アンティーク・ギアガゼルカメラ  
古代の機械合成獣 攻2300

「機械合成獣で、デス・コアラにバトルを挑みますノーネー！」

「リバースカード、皆既日蝕の書を発動するんだな！このカードは発動時、すべてのモンスターを裏側守備表示に変更する！」

機械合成獣がデス・コアラに向けて一步を踏み出そうとした瞬間、

ふつとあたりが真っ暗になった。すぐに明かりは戻ってきたものの、すべてのモンスターがセット状態に変更されている。そして、あのカードの効果って確か。

「ぐぬぬ、私はせめてカードを2枚伏せて、ターンエンドなノーネ」

「この瞬間、皆既日蝕の書のさらなる効果が発動して、先生の古代の機械合成獣を表側守備表示にするんだな。それでそのあと、先生は今表になったモンスターの数だけ、つまり1枚カードをドロウする」

古代の機械合成獣 守1300

隼人 LP4000 手札：4

モンスター：??? (デス・コアラ)

魔法・罫：なし

クロノス LP4000 手札：3

モンスター：古代の機械合成獣(守)

魔法・罫：2(伏せ)

場：歯車街

「俺のターン、まずはこのデス・コアラを反転召喚するんだな。そしてデス・コアラはリバースした時、相手の手札1枚につき400ポイントのダメージを与える!」

クロノス LP4000↓2800

「……意外だ」

隼人、本気出せばむちゃくちゃ強いじゃん。あのクロノス先生相手に一方的にデュエルを進めてる。

「さらに手札から、吸血コアラを召喚。バトル!吸血コアラで、古代の機械合成獣を攻撃するんだな!」

もこもこした見た目のオーストラリア原産の動物、コアラをモチーフにした……のだろうが、その見た目は明らかに並みのコアラではない。なにしろ悪魔の羽と牙をもち、目も真っ赤に輝いているのだ。そんなコアラがパタパタと空を飛んで機械の獣に鋭い爪で踊りかかり、連続でひっかいて回路をショートさせた。あら怖い。

吸血コアラ 攻1800↓古代の機械合成獣 守1300(破壊)

「気張れ、デス・コアラ!クロノス先生にダイレクトアタック!さらに

この攻撃の時、手札から速攻魔法、百獣行進を発動するんだな！このカードは、自分フィールドの獣族モンスター1体につき200ポイント、獣族モンスターの攻撃力を上げる効果がある。俺の場には獣族の吸血コアラとデス・コアラがいるから、デス・コアラの攻撃力は400ポイント上がるんだな！」

「マ、マンマミーア！」

デス・コアラ 攻1100↓1500↓クロノス（直接攻撃）

クロノス LP2800↓1300

「メインフェイズ2にカードをセットして、俺のターンは終了だ」

「ぐぐぐ……シニョール前田、あなたの成長は目覚ましいです。しかし、私もこの栄光あるデュエルアカデミア実技担当最高責任者の名に賭けて、負けはしないノーネ！私のターン、モンスターをセットしてターンエンドします」

クロノス先生、あんなだけかつこつけといてやるのがそれ<sup>セット</sup>だけです。いやまあ別に悪いとは言わないけど！言わないけども！

隼人 LP4000 手札：2

モンスター：デス・コアラ（攻）

吸血コアラ（攻）

魔法・罫：1（伏せ）

クロノス LP1300 手札：3

モンスター：???（セット）

魔法・罫：2（伏せ）

場：歯車街

「俺のターン、吸血コアラで伏せモンスターに攻撃！」

吸血コアラ 攻1800↓??? 守700（破壊）

「セットモンスターはメタモルポット。リバース効果によってお互いは手札をすべて捨て、カードを5枚ドローするノーネ」

「だけど、俺にはまだデス・コアラの攻撃がある！行けえ、デス・コアラ！」

「残念ですが、手札から速攻のかかしの効果を使うノーネ！相手のダ

イレクトアタック時にこのカードを捨てることで、バトルフェイズは終了しマス」

「なら、ターン終了なんだな」

「私のターン！古代の機械砲台を召喚してセットカード、機械複製術を発動。攻撃力500である古代の機械砲台を、デッキからもう2体特殊召喚するノーネ！」

古代の機械砲台×3 攻500

これで、クロノス先生の場にはモンスターが3体。だが、そのうちで隼人の場のコアラ軍団を突破できる攻撃力の持ち主はいない。じゃあ、一体これから何をやる気なんだろう。

「そして私は最後のセットカード、魔法の歯車マジック・ギアを使用するノーネ！このカードは、自分の場のアンテイク・ギアと名のつくカードを3枚墓地に送ること―で、手札とデッキからそれぞれ古代の機械巨人を召喚条件を無視して特殊召喚することができるノーネ！現れなサイ、古代の機械巨人！」

3つの砲台がバラバラに分解されて組み合わせり、一つの光輝く巨大な歯車の形をとっていく。なんだなんだと見ているうちにその歯車が歯車街の建物の一角に吸い込まれ、ガタゴトと作業音が響いたらその工場の入り口から2体の巨人がモノアイをキュピーンと光らせてのっしのっしと歩いてきた。忘れもしないあのカード、クロノス先生の切り札だ。

古代の機械巨人×2 攻3000

「さらに手札の魔法カード、大嵐を発動するノーネ！このカードの効果によって、私は自分の歯車街とあなたの伏せカードを破壊しますーノー！」

「だったらそれにチェーンして発動、威嚇する咆哮！このカードを使ったことで、このターン先生はバトルをすることができないんだな！」

歯車の町が台風に飲み込まれ、ガラガラと崩れていく。あれ、リリース軽減能力のある歯車街をここで捨ててまでしてデッキから出したい古代の機械がいるんだろうか。クロノス先生の切り札、古代の



機械巨人には特殊召喚できないジョーズマンみたいなデメリットがあるっていうのに。

「私が歯車街の効果で呼び出すのは、レベル8で攻撃力3000の大型機械、アンティーク・ギアカシエルドラゴン古代の機械巨竜！」

「こ、攻撃力3000!?!」

なんてこつたい、クロノス先生のデッキには攻撃力3000の大型モンスターが2種類も入ってたのか。これは予想できなかった。

「ふむ、まあクロノス教諭のデッキが【古代の機械】である以上あの流れは当然か……」

「え」

「ここまででは予想できたな。もつとも、まさか生徒に対してここまで本気を出してくるとは思わなかったが」

「え」

………まだまだ勉強不足だったみたい。反省反省。

「さ、さすがクロノス先生なんだな……」

「このターン私は攻撃ができず、さらに魔法の歯車のデメリット効果により2ターンの間通常召喚を行うことができなくなったノーネ。さあシニョール前田、この布陣を突破できるものならしてみなさい」

隼人 LP4000 手札：5

モンスター：デス・コアラ（攻）

吸血コアラ（攻）

魔法・罠：なし

クロノス LP1300 手札：1

モンスター：古代の機械巨人（攻）

古代の機械巨人（攻）

古代の機械巨竜（攻）

魔法・罠：なし

「お、俺はもう、目の前のデュエルから逃げないんだな！この一年間、清明や十代たちはずっと命がけて戦い続けてた、だから俺ももう一回頑張ろうって決めたんだ！2体のモンスターをリリースして、ビッグ・コアラを召喚！」

ビッグ・コアラ 攻2700

「ビッグ・コアラの攻撃力は2700ですが、それはどうするノーネ？」

「もちろん、対策はあるんだな！永続魔法発動、一族の結束！」

「三沢」

「わかったわかった、わかったからそんな捨てられた子犬みたいな声を出さないでくれ。一族の結束……自分のモンスターをデメリットなしで常に攻撃力を800アップさせる強力な効果を持つ半面、墓地にその種族以外のモンスターが1体でもいると効力を失ってしまう永続魔法だ。獣族に手札誘発のモンスターは純粹に戦闘能力の高いグリーンやイエローのバブーンくらいしかいないことを踏まえると、今の隼人のデッキにはエフエクト・ヴェーラーや増殖するG、といったコンボや妨害用カードはまず入っていないことがわかるな」

効果だけ教えてくれればよかったのに、期待以上に濃密な解説をくれた三沢には感謝。そうかそうか、800のぽんぷあつぷ？って言うんだっけこういうの。

「だよ、ユーノ？」

『……まさかとは思うがもしかして、バンプアップのこと言ってるのか？』

「……………ハイ」

ビッグ・コアラ 攻2700↓3500

「バトル！古代の機械巨人の一体に攻撃、ユーカリ・ボム！」

ドスンドスンと大地を揺らしながらビッグ・コアラが駆け、勢いよくフライング・ボディアタックを仕掛ける。あのモフモフしてそうな体はやはりかなりの重さがあったらしく、真正面から受け止めにかかった古代の機械巨人の関節がショートして歯車がひん曲がり、あっという間につぶれてスクラップになってしまった。南無。

ビッグ・コアラ 攻3500↓古代の機械巨人 攻3000（破壊）

クロノス LP1300↓800

「俺はこれで、ターンエンドなんだな」

「なるほど、攻撃力を上げることで正面から私の古代の機械巨人を倒

しましたか。ですが、まだまだ詰めが甘いノーネ！装備魔法、重力の斧―グラールを発動。古代の機械巨竜の攻撃力は500ポイントアップする！」

古代の機械巨竜 攻3000↓3500

「これで攻撃力は同じ、古代の機械巨竜でビッグ・コアラを攻撃！」

古代の機械巨竜 攻3500（破壊）↓ビッグ・コアラ 攻3500（破壊）

「場はがら空きになりましたが、私にはまだ古代の機械巨人の攻撃が残っているノーネ！アルティメット・パウンド！」

古代の機械巨人 攻3000↓隼人（直接攻撃）

隼人 LP4000↓1000

「ターン終了します」

隼人 LP1000 手札：4

モンスター：なし

魔法・罠：一族の結束

クロノス LP800 手札：1

モンスター：古代の機械巨人（攻）

魔法・罠：なし

「俺のターン！こ、ここはこのカードで時間を稼ぐんだな。モンスターをセットして、一時休戦を発動！お互いにカードをドローして、次の先生のエンドフェイズまで受けるダメージはすべて0になるんだな。さらに闇の護封剣を発動！ターンエンド」

隼人のセットモンスターの陰から3本の闇の剣が飛び出してきて、最後の機械巨人を串刺しにする。これで機械巨人は裏側守備表示になって、ほんの少しだけ時間が稼げる。でも、ちよつともったいないかも。護封剣、別に今発動することはなかったんじゃない？

『ふむ、下手に巨人と巨竜を倒せたから自分でも気づかないうちに油断が出たか？今のミスが響いてこなけりやいいが』

あ、よかった。やっぱりミスだったんだ。いやよくないけど。

闇の護封剣

永続魔法

このカードの発動時に、相手フィールド上の全てのモンスターを裏側守備表示にする。

また、このカードがフィールド上に存在する限り、相手フィールド上のモンスターは表示形式を変更できない。

このカードは発動後2回目の自分のスタンバイフェイズ時に破壊される。

「むむむ、私のターン。魔法の歯車による通常召喚の制限はもう終わりましたから、古代の機械兵士を通常召喚してそのまま攻撃させますーノ！プレシヤス・ブリツド！」

さつきまでの巨人を小型にして片腕を丸ごと銃に取り換えたような機械兵が、無数の銃弾を乱射する。だが、その攻撃を受けるかに見えたモンスターはなんと勢いよく跳ね起きて華麗なフットワークでひよいひよいと銃弾をすべてかわしながら近づいていき、呆然とした様子の機械兵士に必殺のアップパーパンチをぶち当てた。

古代の機械兵士 攻1300↓?? 守1700

「私の古代の機械兵士が、破壊された!？」

「俺のセットモンスターは、デス・カンガルー……このカードの守備力以下の攻撃力のモンスターが守備表示のこのカードに攻撃してきたとき、その相手を破壊する。一時休戦の効果でダメージはなくなつたけど、効果の発動だけならできるんだな」

「……いいでショウ、1枚カードを伏せて、ターンエンドしますーノ」  
隼人 LP1000 手札：2

モンスター：デス・カンガルー（守）

魔法・罠：一族の結束

闇の護封剣（0）

クロノス LP800 手札：1

モンスター：???（セット・古代の機械巨人）

魔法・罠：1（伏せ）

「俺のターン、これで次のスタンバイフェイズに闇の護封剣は破壊されるんだな。ターンエンド」

「私のターン！魔法カード、貪欲な壺を発動！墓地の古代の機械砲台

を3枚と古代の機械巨竜、古代の機械兵士をデッキに戻して2枚ドロロー。ふうむ、どうせこのターン攻撃できないなら悪くないカードを引いたノーネ。魔法カード、クロス・ソウルを発動！このカードは、自分がモンスターをリリースするとき相手モンスター1体を身代りにできるカード！これによりシニョール前田のデス・カンガルーと私のセットされた古代の機械巨人をリリースして、手札から最後の古代の機械巨人を召喚するノーネ！もっとも、私はクロス・ソウルのデメリット効果でこのターンバトルフェイズを行えませんが」

古代の機械巨人 攻3000

「さらに装備魔法、巨大化を発動。このカードを装備した古代の機械巨人の攻撃力は、倍になりますーノー！」

ただでさえ巨体の古代の機械巨人の体がさらに大きくなり、頭のとつぺんが高い天井に届くほどになる。で、でかい。というか鬼かあの先生は。

古代の機械巨人 攻3000↓6000

「ターンを終了するノーネ」

隼人 LP1000 手札：3

モンスター：なし

魔法・罨：一族の結束

闇の護封剣（1）

クロノス LP800 手札：0

モンスター：古代の機械巨人（攻・巨）

魔法・罨：巨大化（古）

1（伏せ）

「お、俺のターン……………」

一目見ればわかる。隼人、完全に気合負けしてる。いやでも、攻撃力6000の貫通もちで攻撃反応カードが使えない相手なんて出されたらそりや仕方ないと思う。思う、けど……

「気張れ、隼人ー！ここで勝つんでしょー!?勝ってこのカード、エアーズロック・サンライズを胸張って使えるようになるんだって言ったじゃん！だから負けるな隼人、気張れーっ！」

「そうだぜ、隼人！オシリスレッドの意地を見せてやれ！」

「頑張れー、隼人君！」

僕が声を張り上げるのを見て、十代や翔も応援に加わる。それだけじゃない、万丈目も三沢も明日香もいつの間にかいた鮫島校長も、みんなが隼人に期待を向けている。

「清明……皆も……俺、まだまだだったんだな。ついさつき頑張るって言ったのに、また心が折れそうになって……でも、今度こそやってやるんだな！魔法カード、思い出のブランコを発動！墓地の通常モンスター1体を、エンドフェイズに破壊するかわりに特殊召喚できるんだな！俺が呼び戻すのは、もちろんビッグ・コアラ！」

ビッグ・コアラ 攻2700↓3500

「さらに手札の融合を発動！2枚目のデス・カンガルート、場のビッグ・コアラを融合！来い、俺の最強カード！マスター・オブ・OZ！！」  
両手に赤いボクシンググローブをつけた、筋肉隆々の強面コアラ……隼人のデッキで最強の攻撃力を誇る、圧倒的パワーの持ち主。なにせ2体融合で攻撃力4200なんだ、何かがおかしいってレベルじゃない。さらにOZは獣族、一族の結束の適用範囲でもある。

マスター・オブ・OZ 攻4200↓5000

「攻撃力5000では、私の古代の機械巨人にはかきませんよ？」  
「そんなこと、わかってるんだな。バトル！マスター・オブ・OZで古代の機械巨人に攻撃、さらにこの瞬間に手札から速攻魔法、野性解放を発動！OZの攻撃力はその守備力の数値と同じだけ、つまり3700ポイントアップするんだな！エアーズ・ロッキー！」

マスター・オブ・OZ 攻5000↓8700

「よくやりましたノーネ、シニョール隼人。私もこの攻撃を受け、ライフを0にしてあげたいところです。しかーし、私はあなたがたの教師。ここで手を抜いてしまつては、他の生徒たちに合わす顔がないノーネ！速攻魔法、リミッター解除発動！古代の機械巨人の攻撃力を6000の2倍、12000に引き上げるノーネ！」

マスター・オブ・OZの右パンチがうなり、機械巨人の顔面に吸い込まれる。だが、その腕に自身の左腕を絡めるように合わせてパンチ

を放つ機械巨人。先に目標に命中したのは俗に言うクロスカウ  
ター……………古代の機械巨人の一撃だった。

マスター・オブ・OZ 攻8700（破壊）↓古代の機械巨人 攻  
12000

隼人 LP1000↓0

「ま、負けたんだな」

「隼人……………」

何か言おうと思ったけど、今声をかけても月並みな言葉しか出ない  
だろうと思いい口を閉じる。ああいった状況での気持ちは大事な局面  
での負けが多い僕が一番わかっているとと思う。少なくとも僕なら、中途  
半端な同情はよけい自分が惨めになるだけだ。

「シニョール前田、あなたは立派に成長したノーネ。あそこまで私が  
追い込まれるとは思っていませんでシタ」

「……………でも、結局俺、負けちゃったんだな。だけど、俺、すごくワク  
ワクした。あんなに楽しいデュエル、初めてだったんだな」

「その通りです、前田君」

そこで口を開いたのは、鮫島校長だった。優しげな笑みを浮かべな  
がら、ボロボロと悔し涙をこぼす隼人に向かってゆっくりと話しかけ  
ていく。

「前田君、君のデュエルを見て私は確信しました。デュエルを愛する  
心を持つ君ならば、きつといいカードデザイナーになれるでしょう。  
クロノス先生、よろしいですか？」

「もちろん。シニョール前田、あなたの推薦は私が許可するノーネ。  
だから、あちらでもしっかりやってきてください！」

「……………はい、わかりました!!」

そして、その次の日。いよいよ本土に向けて旅立つ隼人をレッド寮  
総出で見送りに来ていたのだが、肝心の隼人が来ない。あとユーノも

いない。おつかしいなあ、もうへり来てるんだよ？……あ、やっと走ってきた。

「ご、ごめんなさいなんだなく！」

『悪い悪い、遅れちまった』

「遅いよ隼人、どこ行つてたの!？」

「俺の師匠に、最後のお礼を言ってきたんだな……」

師匠だのなんだのよくわからないことを言っている隼人に首をかしげつつ、胸ポケットから一枚のカードを差し出す。何があつたのかは知らないけど、まだこれを渡してなかつたからね。

「はい、これ」

「エアーズロック・サンライズ……」

一瞬嬉しそうな顔をするものの、すぐに後ろめたそうな表情がとつてかわる。もしかして、まだ負けたことを気にしてるんだろうか。気持ちはわからないでもないんだけどね。

「少なくとも僕は、受け取つていいと思うよ。昨日のデュエル、すごくワクワクしたもん」

そう言うと、やつと決心したように受け取つた。そのカードをそつとデッキに入れ、へりのパイロットに頭を下げてから乗り込んでいく。

「さようなら、みんな！これまでありがとうなんだなく！」

「またね、隼人ー！」

「じゃあな、元気でなー！」

「また戻つて来い、この俺様直々に相手してやる！」

「さよならッス、隼人君！」

そして上昇していくへり。窓にへばりつくようにこちらを見ている隼人の横の窓には隼人の精霊、デス・コアラが笑顔でぶんぶんと手を振っているのが見えた。空は、すごく晴れ渡っていた。



### ターン33 冥府の姫と『白き龍』

『もうやめてくれ。君は悪くないのはわかってる、これは俺の、大人のわがままだ。それもわかってる。だけど頼む、もうやめてくれ』

どうして、そんなに苦しそうな顔をするのって。

『君は絶対に悪くない。ただ……ただ、俺が弱いんだ。俺はこれ以上、君の視線に耐えられない』

ねえ、待ってよ。お願いだから返事をして、だつて。

『なあ兄さん、俺が一体何をしたつていうんだ。俺はちつぽけな、薄汚れた大人の一人だ。どうして、どうして兄さんはこの子を遺して逝つちまったりしたんだ』

なんで、泣いてるの？なんでそんなに、助けてほしそうな顔をしてるの？ねえ、もしかして私が邪魔なの？だったらごめんなさい、おじさんに迷惑かけるなら私、この家にいたくないよ、なんだつて。

『……ごめんな、ごめんな。おじさんが駄目な大人のせいで、君みたいなおきな子に心配かけて気を遣わせて。大丈夫だよ、君は何も悪くないんだ。悪いのは俺だ、君のまつすぐな目を見ることのできない俺なんだ』

いったいどうしたの、おじさん。ねえつてば。

『……そ、そうだよな。ごめんな、変なこと言つて。それですまないけど、お使いを頼まれてくれるかい？この手紙を三丁目のおばさんちまで届けてほしいんだ。場所はわかるよね？』

うん！私できるよ。でもおじさん、ほんとうにだいじょうぶ？

『ああ。それじゃあ、いつてらっしやい。車に気を付けてな』

はーい。じゃあ、あとでねー！

『……よし、しばらくは戻つてこないだろう。ごめんな兄さん、俺は地獄に墮ちるべきだと思うよ。俺みたいに出来の悪い弟、卑怯者の屑にあの子は眩しすぎる。こんなわがまままで最後まであの子には迷惑かけたなあ………夢想』

……  
……

………

ただいまおじさん！お手紙渡そうと思っただけどおばさんいなかったから、ポストの中に入れてきたよ。あれ、おじさんなんで机の上で寝てるの？だらしないなあ、風邪ひいちゃうよ？テーブルの上におくすり散らかして……おじさん？ねえおじさん、起きてよおじさん！

「……嫌な夢。だって」

そう言つてむくりとベッドから起き上がり、顔にかかった青い髪を軽く払いのけて洗面台へ向かう彼女の名は河風夢想。これは、ちょうど隼人がクロノス教諭と推薦を賭けたデュエルを行う日の裏で起きていた話。

さつきまで見ていたあの夢を見るのは、ずいぶんと久しぶりだ。二度と思い出したくない記憶の一部。もう忘れよう、そう呟いて軽くあくびをした彼女は、自分が空腹なことに気が付いた。朝食というにはいささか遅い時間だが、ブランチと洒落込むことにしよう。それから、今日は確かレッド寮の清明の友達がクロノス教諭とデュエルをする日だったはずだ。食べたらずれも見学しに行こう。そこまで考えたところで、足元に封筒が落ちていのに気が付いた。

「………う」

差出人も書いてない、真っ白な封筒。何気なく拾い上げて封を切ると、中には一枚の手紙とデュエルモンスターのカードが入っていた。裏向きになっていたので何のカードかはわからなかったが、まず先に手紙から取り出してみる。自分の部屋に落ちているカードということはきつと拾ってもいいはずだ、思わぬ状況で手に入ったカードを知る楽しみは後にとっておこう。

《今日の昼12時、灯台まで来い。なおその際、<sup>×</sup>同封したカードをエクストラデッキに入れることを望む——<sup>×</sup>（名前を消した跡がある。なんて書いてあったのかは読めない）<sup>×</sup>》<sup>×</sup>

時計を見ると、もうすでに11時40分。お昼も食べたいし、そもそも昼からはクロノス教諭のデュエルがあるし、今回は相手には悪い

けどご遠慮しようかな。そう思いつつ、とりあえず同封のカードを見るため表にしてみる。

「このカード……」

見たことのないカードだったが、なぜかそのカードを見た瞬間に心がざわついた。その理由が知りたい、という欲求が抑えきれなくなる。よし、予定は全部変更しよう。一日くらい断食しても倒れたりはしないだろうし。まあ多少栄養バランスが崩れて太りやすくなるかもしれないが。

「……………やっぱり行くのやめようかな、なんて」

割と本気でそう呟きながらも、手早く制服に着替えデュエルディスクにデツキをセットする彼女であった。

「あれ？」

灯台下にやって来た夢想。てつきり手紙を出した『誰か』がいると思っただのだが、そこには誰もおらずただ波の音がのんびりと聞こえるのみだった。あるいは、その時点ですでおかしかったのかもしれない。いくら見るべきものがなく暇つぶしの役にも立たない灯台とはいえ、休日の昼間から近くに誰ひとりいないという状況はありえないはずなのだ。それなのに、生徒はおろか清掃員の姿さえない。しよつちゅうデュエルアカデミア近くを飛び回りこの辺りにも巣を作っているカモメの姿すらない。この場にいるのが河風夢想ただ一人という時点で、何か違和感を感じるべきだった。もつとも、普段この辺りに近づかない彼女にそれを求めるのも酷な話なのだが。

とにかく、彼女がそれに気づいた時にはもう手遅れだった。

「……………来たな」

後ろからかけられる声。それを聞いて何となく、以前清明が『最近後ろをとられることが多い』とぼやいていたのを思い出した。最近ではそのパターンが多すぎて別に驚きもせずにああまたか、なんて思いながら振り向くようになってしまったらしい。それもそれでおかしいのではないか、などと思いつながら聞いていた記憶がある。

「誰かな？だつてさ」

「俺だよ」

「詐欺の方なら間に合ってますので、って」

そう返しながら振り向くと、そこにいたのは予想していたアカデミアの学生服姿ではなく、ごくごく一般的な服を着た30代中盤ごろの背の高い男。渋く笑ってこそいるものの、まるで笑っていないその眼を見て素早く距離をとる。

「おいおい、別に知らない仲じゃないだろうにつれねえなあ……ま、いいさ。俺が聞きたいのは挨拶なんかじゃねえ。なあ、なーんでまたお前がここにいるんだ？さっさとあのガキだけ叩きのめして帰ってくりやいいだろ、何があつたかしらねーけどかれこれ10年以上も姿くらましやがってよ、もしウチの今はもういないクソガキ2号が見つけてなけりやマジの行方不明者だつたんだぞ？」

「知らない仲でもない？10年以上……？」

何一つ聞き覚えのない単語と、会ったこともない人間の話。そもそも今年で17になる彼女にとつて、そんな前のことなど知ったことではない。だが、そう言い返せないような何かは彼女の中にあつた。確かに私は、この男を知っている………という気がする。

幸いにも、今回は向こうが勝手に話を進めてくれた。

「ん、もしかしてお前、覚えてないのか!?ちっ、めんどくさいことになってやがる。ま、今回は俺もあんま深入りする気はねえし簡単なテストだけで終わらせますかね。ほれ、構えろよ。先行は譲ってやるからさ」

「え、えつと……？」

「デュエルだよ、デュール。常識だろ？」

なるほど、それもその通りである。慌てて自分のデュエルディスクを起動させる。だからあのカードをエクストラに入れるよう指定したのか、とも理解した。そして、もう一つ大事なことがある。

「あなたが誰かは知らないけど、私も今日は予定があつて、それをちよつと楽しみにしてたの。だから手加減なんてなしの、本気で行くから覚悟してね？だつてさ」

「おおー、怖ええ怖ええ。ちつこくなっても迫力は変わんねえなあ。にしてもお前、そのヘンテコな語尾はどうしちまったんだ？前はそんな癖ついてなかったろ。ま、それもどうでもいいっちゃその通りなんだがな」

「デュエル！」

本来はランダムで決まる先行も、今回は相手がわざわざ指定してきたためスムーズに決まる。先行だと正直ちよつと困るバイス・ドラゴンなどがデッキに入っているわけではないのでありがたく頂戴してカードを引いた。

「私のターン、まずはワイト夫人を守備表示で召喚。さらにカードを1枚セットして永続魔法、漆黒のトバリを発動。ターンエンドだつてさ」

ワイト夫人 守2200

「相変わらず骸骨好きだねえ。行くぜ俺のターン！まずはカードをセットして、青き眼の乙女を攻撃表示つとくらあ」

古めかしい椅子に座る喪服を着た骸骨の女王（たぶん）と、腰まで伸びた長い銀髪に青い目の女性が対峙する。そのどちらも攻撃力は0なのだが、ワイト夫人がその守備力を生かすべく守備表示で召喚されたのとは対照的に乙女は攻撃力0をさらしだしている。

「ん、ターンエンドだぜー。ほれ、逃げも隠れもしないからさつさとかかってこいよ」

夢想 LP4000 手札：4

モンスター：ワイト夫人（守）

魔法・罫：漆黒のトバリ

1（伏せ）

男 LP4000 手札：4

モンスター：青き眼の乙女（攻）

魔法・罫：1（伏せ）

「私のターン！」

夢想は考える。あのモンスターの効果は知らないが、攻撃力0を伏せカードもなしで立たせるということは何か裏があるに違いないと。

ならばどうするか？ よろしい、今この手札で出せる限りの最大火力で立ち向かい、中途半端な策なら力技で押し切れるくらいの攻撃力をぶつけてみよう。

「ドローフェイズ、漆黒のトバリの効果を発動。ドローカードが閻属性だった場合にそのカードを墓地に送ることで、さらにカードをドローできるんだって。私の引いたカードは閻属性、ワイトだから墓地に送ってもう1枚。次に引いたのはまたワイトメア、これも墓地に送ってもう1枚。次は竜骨鬼、これも墓地に送ってドロー。次はまたワイト、墓地に送ってドロー。次は……まあいいや、これでドローフェイズは終わり。メインフェイズまで移って魔法カード、死者蘇生を発動。墓地に送った竜骨鬼を蘇生するみたい」

地面から骨の腕がにょきつと生えてきて、地面を押さえつけるようにして体が出てくる。大きく裂けた口に胸の中心の赤く光るコアがトレードマークの夢想のメインアタッカーの1体、竜骨鬼である。

竜骨鬼 攻2400

「さらにワイトキングを召喚、この子の攻撃力は墓地のワイトの数によつて1000ポイントずつアップするから、今の攻撃力は3000ね」

ワイトキング 攻3000

「つたく、エクストラなしでもほんつとよく回るよなあ……いやになっちゃう」

「バトル！ まずは竜骨鬼で攻撃！」

攻撃の指令を受けた竜骨鬼が、口から火の玉を吹き出す。このモンスターはバトルした相手が戦士または魔法使い族だった時にその結果がどうあれ破壊することのできる能力を持っている。乙女がもし戦闘耐性のようなものを持っていても、効果破壊がそのあとに待ち構えているというわけだ。だが、そんな計算は大きく狂うことになる。迫る火の玉に対して乙女が天に祈りをささげると、上空から1体のドラゴンが急降下してきたのだ。

「へへっ、乙女の効果発動……つとくらあ。このカードが攻撃対象になったときに攻撃を無効にして表示形式を変更、さらにデッキか手

札、あるいは墓地からコイツを特殊召喚だ。来な、ブルーアイズ・ホワイトドラゴン青眼の白龍

「ブ、ブルーアイズ!」

ブルーアイズホワイトドラゴン

青眼の白龍。どんなデュエリストだって知っている超有名カードであり世界にたった4枚、今は実質3枚しか存在しないはずの伝説のレアカードである。そして、その3枚を保有しているのはかの有名な海馬コーポレーションの若き社長、海馬瀬戸のはずだ。精霊世界においてカイバーマンの精霊も平気な顔してデッキに3積みしていたりもするのだが、あいにく夢想はそのことを知らない。だからとつさに気に気の良い返しができるわけでもなく、ただ目を白黒させるばかりであった。

「マジで驚いてんな……本っ気でなーんも覚えてないのか。まあいいさ、かかってきな」

だが、彼女もまた強さを求めるデュエリストの一員である。最強のバナラモンスターである青眼の入ったデッキを相手にする。その興奮に、彼女の中にあつた相手に対する不信や警戒は吹っ飛んだ。あるのはただ、デュエリストの闘争本能からくるワクワク感のみ。かかってきな、などとは言われるまでもない。

「ワイトキング、ブルーアイズに攻撃! 必殺、螺旋怪談!」

主の思いに応えるように、ジャンプしたワイトキングがブルーアイズの後ろに素早く回り込んでその首をギリギリと絞めつける。ブルーアイズが苦し紛れに放った尾の一撃がワイトキングの骨格をバラバラにするのと締め付けに限界を迎えたブルーアイズが倒れるのはほぼ同時だった。だが、地に堕ちたドラゴンの横に散らばるワイトキングの体の骨にワイト夫人がそっと手を差し伸べると、愛する妻の願いを受けたワイトキングが寄り集まってくつき元に戻る。最初からこれを狙っていたからこそ、今後の戦線維持のため乙女ではなく青眼を狙わせたのだ。

ワイトキング 攻3000↓青眼の白龍 攻3000 (破壊)

「ワイト夫人が場にいる限り、レベル3以下のアンデットは戦闘で破壊されないしカード効果も受けないよ。私はこれでターンエンド、

だって」

「俺のターン！永続魔法、ポジションエンジを発動！このカードは1ターンに1度、俺のモンスターを隣のモンスターゾーンに移動させることができる………んだが、ここで再び乙女の効果だ！このカードの効果で乙女を対象にしたことで、デッキから2体目のブルーアイズを特殊召喚！」

再び乙女が天に祈りをささげ、2体目のドラゴンが急降下して乙女のそばに寄り添う。

「さあ、バトルを始めようぜ！ブルーアイズでワイト夫人に攻撃、滅びのバースト・ストリーム！」

青眼の白龍 攻3000↓ワイト夫人 守2200 (破壊)

「だけど、ワイト夫人は墓地でワイト扱いになるモンスター！ワイトキングの攻撃力はこれで4000！」

ワイトキング 攻3000↓4000

「それがどうしたあ！トラップ発動、破壊神の系譜！俺の場にいるレベル8モンスターが守備モンスターを戦闘破壊した時、もう一度だけ追加攻撃をさせることができる！次の相手は竜骨鬼、てめえだ！ダブル・バースト・ストリーム！」

一度攻撃したはずのブルーアイズの翼が再び広げられ、ふわりと宙に舞いあがると太陽を背にして2度目のブレスを打ち出す。竜骨鬼の効果はあくまで戦士と魔法使いにのみ効力のある限定的なもの、ドラゴン族にとっては何の意味もない。

青眼の白龍 攻3000↓竜骨鬼 攻2400 (破壊)

夢想 LP4000↓3600

「メイン2、乙女を攻撃表示に変更。カードを伏せて、ターン終了だ」

夢想 LP3600 手札：3

モンスター：ワイトキング (攻)

魔法・罫：漆黒のトバリ

1 (伏せ)

男 LP4000 手札：3

モンスター：青き眼の乙女 (攻)



青眼の白龍（攻）

魔法・罨：ポジションチェンジ

1（伏せ）

「私のターン！」

ドロローしたカードをちらりと見るが、どうやらホワイトモンスターではなかったらしく漆黒のトバリの効果を使うことはなかった。だが、十分に満足のいくカードを引いたらしい。

「マッド・デーモンを召喚してホワイトキングで乙女に攻撃、螺旋怪談！」

紳士は淑女に手を上げない。だが、別に蹴ってはいかんという法はない。物言わぬ骸骨が回し蹴りを放つものの、その攻撃はまたもや祈りに応え上空から急降下してきた青いドラゴンに阻まれる。

「乙女の効果発動！その攻撃を無効にして乙女を守備表示に変更、デッキからブルーアイズを呼び出す！」

「関係ないよ、マッド・デーモンでもう一度乙女に攻撃！ポーン・スプラッシュュ！」

ホワイトキングの攻撃を止めてもらいほつと一息つく乙女の背後から、噛み砕かれた無数の骨のかけらが吹き付けられる。2体のドラゴンもホワイトキングに注意をそらされていたため、乙女をかばいに行くことができなかった。

マッド・デーモン 攻1800↓青き眼の乙女 守0（破壊）

男 LP4000↓2200

「ぐうっ！そーいやマッド・デーモン、貫通能力なんてもってやがったっけか。マイナーなカードだからすっかり忘れてたぜ」

「私にとっては頼りになるアタッカーだけどね、だって……」

そこで一度、言葉を切る。別にためを作ってから言いきろうとしたわけではない。

『だって』

その次に何を言おうとしていたのか、自分でもわからなかったからだ。確かにこのカードは、彼女のデッキを初期からずっと支え続けてくれたカードの1枚だ。物心ついて初めて組んだデッキに入ってい

たカード。だけど、それは一体いつのこと？普通に考えれば彼女の年齢を考慮して10年前くらいだろう。本当にそうだろうか。わからない。

「ん？おいしい、せっかくこっちがノツてきたつてのにサレンダーでもする気か？そりやないぜ」

「……………うん、とんでもない。カードをセットして、これでターンエンドだよ」

だがその疑問は、ひとまず脇に置いておく。今自分のすべきことは、この男をデュエルで倒すこと。そう言い聞かせる。なぜか、そうした方がいいような気がしてならなかったのだ。

「そうか、ならおれのターンだな。魔法発動、実力伯仲！俺の場にいるブルーアイズ1体とお前のホワイトキングを選択して発動し、お互いの効果を無効にする。そして、そのモンスターは攻撃も表示形式の変更もできなくなる代わりに戦闘で破壊されず、あらゆるカード効果も受け付けねえ！」

「……………っ！ホワイトキング！」

ホワイトキング 攻4000↓0

「効果無効になったホワイトキングなんざあただ的だ！さらに青き眼の乙女を攻撃表示で召喚、ポジションチェンジの効果を使ってモンスターゾーンの位置を変えつつデッキから3体目のブルーアイズを召喚！」

「これで、3体……………」

青眼の白龍 攻3000

「さあ、俺の知ってるお前ならまさかこれだけじゃあやられねえとは思うが……………ブルーアイズ、攻撃！」

「トラップ発動、闇霊術―「欲」！自分の場の闇属性、ホワイトキングをリリースすることでカードを2枚引くけど、相手は手札の魔法カードを見せてこのカードを無効にできる！」

「ならこの速攻魔法、おろかな転生を見せることで無効だ！」

ホワイトキングをリリースして発動された伏せカード、闇霊術。その効果こそ無効になってしまったものの、もとより手札が2枚ある相手

にこのカードが通るなどとは最初からあまり期待していない。重要なはその結果、ワイトキングをフィールドから引きはがすことに成功したという1点だ。

「これで私の場にはマッド・デーモン1体だけ。このまま攻撃するの？ だって」

「ちっ、うまくかわしたか。そう来なくっちゃな、まずはマッド・デーモンに攻撃！」

「マッド・デーモンもう一つの効果発動、攻撃対象になった場合このカードを守備表示にする！」

青眼の白龍 攻3000↓マッド・デーモン 攻1800↓守0  
(破壊)

「まだあと2体！ そのままブルーアイズで連続攻撃だ！」

「そうはさせないよ、ヒーロー見参を発動！ あなたが私の手札2枚の中から1枚を選んで、それがモンスターカードなら私の場に特殊召喚するよ、って」

「なら俺はその、俺から見て右のカードを選ぶ！」

「こっち？ なら……」

そう言っつて、そのカードをゆっくりと表向きにする。そのカードの種類は、モンスターカード。

「手札のスカル・マイスターを守備表示で特殊召喚するんだって」

「ちっ！ 構わねえ、やっちまえ！」

青眼の白龍 攻3000↓スカル・マイスター 守400 (破壊)

青眼の白龍 攻3000↓夢想 (直接攻撃)

夢想 LP3600↓600

「どうだ、俺のブルーアイズの味はよお？ なかなか効くだろ、こいつらの一撃は」

「う、うん……まあね、だつてさ。でも、まだまだ！」

「そーかいそーかい。さて、俺の読みが正しけりやお前はそろそろ次辺りで決めてくるな。ま、俺も一応あがけるだけあがいてみるがね。つつーわけで手札を全部伏せてターンエンドだ」

夢想 LP600 手札：1

モンスター：なし

魔法・罨：漆黒のトバリ

1（伏せ）

男 LP2200 手札：0

モンスター：青眼の白龍（攻）

青眼の白龍（攻）

魔法・罨：ポジションチェンジ

3（伏せ）

「妙だ。夢想でなくてもそう思うだろう。フィールドは、圧倒的に男の方が有利だ。伏せカードの数も多く、手札も大した差があるわけでもない。だが、男は言い切ったのだ。彼女が次辺りで決めてくる、と。自分が勝つのを諦めているという風ではなく、まるでそれが当然であり、そうでない方がおかしいのだ、といわんばかりの自信を持って。」

「だが、どんなに怪しいと思っても彼女には進む以外の選択肢がないのもまた事実である。そしてやはりというべきか、ずば抜けた彼女の運命力はこの場面でも確かに彼女に手を貸した。男の予言通り本当に引いたのだ、この状況を打開して男のライフを一気に0にできる可能性を持つカードを。」

「今引いた魔法発動、ドラゴンズ・ミラー龍の鏡……！このカードは自分の場か墓地から融合素材になるモンスターを除外することで、融合モンスターを融合召喚することができる！私がゲームから除外するのは、アンデット族の竜骨鬼とワイトキング！」

「おつと待ちな。そこでリバースカード、おろかな転生を発動！この速攻魔法は相手の墓地のカード1枚を選択して持ち主のデッキに戻す……俺はこれでワイトキングをデッキに戻させるぜ！」

「その発動にチェーンしてリバースカード、マジック・デフレクター！このカードは魔法版のトラップ・スタン、通常魔法以外のあらゆる魔法カードを無効にするんだって」

「こっちは何もねえ、龍の鏡は通すぜ。ちつくしよ、せつかく伏せた月の書までお亡くなりになりやがったか」

「なら続けるよ、だって。アンデット族モンスター2体で融合！冥府

の扉を破りし者よ、其には死すらも生温い！融合召喚、冥界龍、ドラゴネクロ！」

夢想のバツクに幻魔の扉並みに大きな怪しい門が浮かび上がり、その扉がゆっくりと開くと中の地獄のような闇からデーモンの召喚と神炎皇ウリアを足して2で割ったようなドラゴンがヌルリ、と飛んでくる。見ているだけで子供が泣き出しそうなそんな風景を、男はクツクツクと笑いながら見ていた。

「いいねえいいねえ、やっぱりやってくれる女だぜ。だけど、そいつだけじゃあ効果込みでも力不足だな。最後のトラップ、ダメージ・ダイエツト発動！これで俺の受けるダメージはこのターン半分になる」

そしてそんな男を、冷めた目で見つめる夢想。もしもこの場に普段の彼女をよく知る者が居合わせたら、そのあまりの雰囲気の違いに双子の姉妹かと思うほどだろう。それほど別人めいていたのだが、男にとってはむしろそれが狙いだったのかもしれない。事実、彼はそこでお笑って見せた。

「ああ、やっぱりな。お前は……」

「最後の手札、ワイトメアの効果発動。このカードを墓地に送って、除外されたワイトキングを特殊召喚する。この時、このワイトキングの攻撃力は5000……バトル！ドラゴネクロ、ブルーアイズに攻撃！ソウル・クラランチ！」

ドラゴネクロがズイツと迫り、ブルーアイズの体を掴んで至近距離から喰らいつこうとするが、その時の一瞬の隙をブルーアイズは見逃さなかった。それよりも一瞬早く放たれたバースト・ストリームが、ドラゴネクロの上半身を吹き飛ばす。

冥界龍 ドラゴネクロ 攻3000（破壊）↓青眼の白龍 攻3000

「本当なら相打ちだけど、ドラゴネクロが戦う相手モンスターはその戦闘で死ぬことは許されない。ただし、その魂は私のもの」

そう言った瞬間、勝ったはずのブルーアイズがガクンと急に力が抜けたように頭を垂れた。その口から白い霧のようなものが飛び出してきて、それがみるみるうちに黒く染まりながらブルーアイズの姿を

とって夢想の場に降り立つ。黒いブルーアイズが、翼を広げた。

「ブルーアイズの攻撃力は0になり、私の場にはその攻撃力とレベルをコピーした魂の成れの果て、ダークソウル・トークンが呼び出される」

青眼の白龍 攻3000↓0

青眼の白龍のダークソウル・トークン 攻3000

「ワイトキングでその抜け殻を攻撃……螺旋怪談」

ワイトキング 攻5000↓青眼の白龍 攻0（破壊）

男 LP2200↓0

「かーっ、負けた負けたっつ。んじやな、あいにく俺もこの後2、3人狩っとなきやいかん奴らがいるからな、そろそろお暇するぜー。まあでも安心したわ、なんだかんだいってやっぱお前全然変わってねえし」

「え、あ、ちよつと待……つて、だつてのに」

ライフが0になった瞬間言いたいことだけ言つて、男の姿はすうつと消えた。まるで最初から誰もいなかったかのように。だけど、この出来事が夢ではない証拠にドラゴネクロのカードはまだ夢想が持っている。なにげなく墓地から取り出してみて、じっくりとイラストを眺める。一体なんだったんだろう、このカードを出した時の不思議な感じ、まるで自分じゃない誰かがデュエルしているのを眺めていたような感覚は。それに、今もまだこのカードを見ると胸がざわつく。何かがありそうな気もするのに、何一つ思い出せない。

「……帰ってお昼にしようかな、なんて」

だけど、一人で悩んでいても何も始まらない。このどこか懐かしい気もするカードを使い続けられれば、何かの拍子に見えてくるものもあるかもしれない。根が楽天的な彼女はそう結論付け、ひとり呟いて静かに女子寮へと戻るのであった。

これは、ちよつと隼人がクロノス教諭と推薦を賭けたデュエルを行う日の裏で起きていた話。特に誰かに知られることなく起きた、世界

の片隅でひっそりと行われた一回のデュエルの話。

## ターン34 鉄砲水と完全なる機械龍

我らがオシリスレッド寮に客がやって来たのは、あの男らしく実に突然だった。アポの一つも入れてくれないものだから、お茶菓子を用意する暇もなかったほどだ。

「清明、いるか」

そう言つてその男がドアを開けた時には、さぞかし驚いたことだろう。なにせ部屋の両端には明らかに不釣り合いな古ぼけたドアが素人丸出しの建築で強引に取り付けられ、その横には万丈目の部屋に入りきらなかった家具で野ざらしになっていたのをいくつかかっばらつてきた戦利品である一級品の椅子がポン、と置いてあったりするんだからねえ。住んでるうちに僕たちはだいぶ慣れてきたからいいんだけどね。

「……………まあ、とにかく上がつてよ、カイザー」

カイザー亮。デュエルアカデミアで最強ともいわれる、サイバー流の使い手である男。そんな男がわざわざブルー寮からここまで一人でやってくるとなると、その要件は……………うん、さっぱりわかんない。

「で、何してるのそんなにキョロキョロして」

「いや、俺の寮とはずいぶん雰囲気が違うなと思つてな」

「……………具体的には？」

「味がある部屋だ」

い、いかん。悪気がないのはわかつてるけど、それでも嫌味にしか聞こえない。大体ブルー寮の方がおかしいんだよ、見た目からしてもう城だもん！そう、あれは断じて寮なんてチャチなもんじゃない。あれはどこからどう見てもただの城だよ。

『いやー、そこ抜きにしてもこの部屋は実際世にも珍しいと思うぞ。なんてつたつて壁のぶち抜きだし』

幽霊も住み着いてるし。カードの精霊もちよつとした動物園並みにいるし。あと猫<sup>フアラオ</sup>。うーん、改めて並べてみると何かがおかしい気がするけど、まあいいや。

「話が脱線したな。俺がここに来たのは、お前に用があったからだ。



明日、俺の卒業デュエルがあるのは知っているな?」

「まーね。確かあれでしょ、全校生徒から一人選んでそいつと皆の見たる前で学園最後のデュエルするっていうアカデミア恒例行事で年間行事予定表にも書いてあるあれ」

別に僕が行事予定表をじっくりと見たわけではない。台所の冷蔵庫に張り付けてあるから確かに一番見る機会は多いけど、この行事はかなり大掛かりなイベントだから誰だって知っている。十代クラスのデュエル人間だともしかしたら知らないかもしれないけど、まあさすがにそれはないだろう。この間の授業でクロノス先生もチラツと言ってたし。

『待て。もしかしてその時、十代グツスリ寝てなかったか?』

あ、そうだったかも。よくわかったなユーノ。つと、また話がずれた。

「それで、その卒業デュエルがどうしたの? あいにく十代と万丈目と翔は釣りに行っちゃったけど」

「いや、さつきも言っただろう。俺がここに来たのは、お前に用があるからだ。……そのデュエルで、俺はお前を指名する」

「ほえっ!？」

「それだけだ、明日は楽しみにしているぞ」

言いたいことだけ言つて、クルリと背を向けて出ていこうとするカイザー。ちよつと頭の中が混乱してるけど、とりあえず一つだけどうしても聞いておきたいことがあった。

「そう言ってくれるのはもちろん嬉しいよ、だけど、なんで僕なの? 十代や万丈目や三沢、それに夢想とかの方が実力的には僕よりずっと上だよ?」

心からの本音。カイザーは、決して自分が確実に勝てる相手だからとかいうゲスな理由で対戦相手を決めるような男じゃない。だからこそその理由が、僕は知りたかった。

「それはお前自身が考えろ。あえて今言うとしたら、お前にはカミューラから助けてもらった借りがあるからな。そういうことにしておこう」

……なるほど、あくまでその理由を言うつもりはないってわけか。なら、こつちにも考えがある。

「じゃあさ、カイザー。明日のデュエルで僕が勝ったら教えてくれる？その理由を」

下手をすると宣戦布告にも聞こえるそんなセリフを背中で受け取って、カイザー……アカデミアの皇帝がふつと薄く笑ったのが、見えた気がした。

「いいだろう。ではまた明日」

それきり振り返ることなく、今度こそカイザーは歩き去っていった。うーん。

「ってことがあったんだけど」

これ言ったらたぶん荒れるだろうなあ、ってことはわかった。最初からわかってたけど、まさか言わないわけにもいかないし。そもそもここで隠しても、どうせ明日にはばれる。

「ずるいぞ貴様、この万丈目サンダーを差し置いて卒業デュエル代表生徒だ?!なぜ俺ではないのだ、おかわりー」

「万丈目、いくらお前だけボウズだったからってそんなやけ食いすることないんじゃないか?」

『そうだよアニキ、十代のダンナの言うとおり。みつともないよ』

「ええい、貴様みたいな気持ち悪い雑魚にみつともないといわれる筋合いはない！大体お前もだ十代、なぜ貴様はそんなにヘラヘラしているられる！お前だってカイザーとはデュエルしたいんじゃないやなかったのか!」

バンツと机を両手でたたき、万丈目が十代を指さす。だが、当の十代は案外冷静だった。

「まあな。そりゃ、俺だってカイザーとはまたデュエルしたいさ。だけど俺、実は今すつげえワクワクしてるんだ！なんでかわかんないけど、明日はきつとすごいデュエルになる。そんな予感がするんだよ。だから、今回は清明に譲っておくぜ。多分カイザーは卒業したらプロ

に行く。そして俺がいつかデュエルキングになる。俺がカイザーとデュエルするのは、その時までお楽しみにしておくぜ！」

「十代……………」

「ふん、貴様らしい考えだ。だが一つ間違いがある。その時デュエルキングとして君臨しているのはこの俺、万丈目サンダーだ！だがまあ、それ以外の点については一理ある。いいだろう清明、今回はお前に花を持たせてやる。……………明日はしつかりな、清明」

「万丈目……………」

「気を付けてね清明君、お兄さんのサイバーデッキはわかつてると思うけど、すごく強いから。僕には応援するぐらいしかできないけど、精いっぱい応援してるから！」

「翔……………」

あ、なんかちよつと目に汗が。こ、こんなところ見せられないよ！

「ごめん皆、僕もうちよつと今日は寝るから！」

そう言い残して、顔を見せないようにして二階へと駆け上がった。後ろの方でおい、俺のおかわりはどうした！とか言ってる声が聞こえたけど、ごめん万丈目。今あの場所に戻って感動のあまり泣かない自信が僕にはない。

「ふう……………」

『やっと落ち着いたか。んじゃ、最終デッキ調整と洒落込もうかね』

「うん、そーだね」

さすがにあのカイザーが相手なんだ、中途半端に突っ込んでいったら速攻で返り討ちに合うのは目に見えてる。さーて、どうしようかなこのデッキ。

『まあ機械メタなら酸の嵐やシステム・ダウン、光メタならD・D、チェツカーとかコアデストロイあたりかねえ。ただまあ、正直言つて俺はそういうのは好かん。そもそもあのカイザーに付け焼刃のメタデッキが効くとは思えんし、卒業デュエルでそんなの使ったらお前が大ブーイング受ける未来しか見えねえし』

「そうなんだよねえ。僕も欲を言うなら使い慣れたカードで勝ちたいし」

かと言って、僕のデッキは全体的に低い攻撃力を誤魔化しながら戦っていくビートダウンデッキ。圧倒的な攻撃力でガンガン攻め込んでくるサイバー流との相性は最悪だ。コントロール系が相手ならわりと強いんだけども。うーん。

『ふむ……ならいつそのこと、逆の発想もありかもな。具体的にはこれ入れてみよーぜ』

「コレ!? あー、でも………ありかも」

『だろ?』

そんなこんなで、ゆったりと夜は更けていった。明日、絶対勝とう。

「それでは只今よりシニョール丸藤バーサス、シニョール遊野による卒業デュエルを開始するノーネー・申し遅れましたが司会はワタクシ、クロノス・デ・メデイチが担当しますーノ。ささ、それでは両選手入場ナノーネ!」

あらかじめ聞かされた話通りにクロノス先生からの超簡単な初めの言葉を聞き、僕らの入場が呼ばれたタイミングでデュエルフィールドへと登っていく。ふと見るとカイザー側の観客席は赤青黄の三色の制服でぎっしりと埋め尽くされており、その人気がうかがえる。ちなみに僕の方は………あー、うん。ですよねー。ものみごとにスツカスカだ。そんな中に座ってこつちを応援してくれてる十代たちには感謝。もしこれで誰もいなかったら戦う前から気持ちの問題で負けてたかもしれない。

『ギャラリーなんざいらねえぜ、ここで勝ったら官軍だ!』

「勝てば官軍、か」

この続きはなんだっけか。負けたら賊軍、だったかな確か。ここはひとつ、官軍になりたいもんだ。いや、こんな覚悟じゃだめだな。狙うは官軍ただ一つ、他の道なんて選択肢に入らないね!

「それじゃあ始めようか、カイザー………」学期に十代とのタッグ

デュエルではぼろ負けしたけど、僕はこの1年で大きく変わった、強くなった！それを今から証明してやる！」

「ふ、いいだろう。ならばその力、見せてもらう！」

「デュエル!!」

本来ならば先攻後攻はランダムで決まるシステムのデュエルディスプレイも、今回はちよつぷり特別仕様。なんと、指名された相手である僕が好きな方を選べるのだ。普通の相手ならば先攻をとるのが有利と一般的に言われているけど、相手はあのサイバー流。ここはひとつ、様子見も込めて後攻にしよう。

「僕は後攻を選ぶよ、カイザー。お先にどうぞ」

「ほう？ならば俺のターン、ドロー！サイバー・ラーバアを守備表示で召喚。さらに永続魔法、強欲なカケラを3枚発動。俺はこれでターンエンドだ」

サイバー・ラーバア 守800

カイザーが先行で召喚したのは、まさにサイバー・ドラゴンの幼虫のようなこじんまりとしたイモムシ型機械。意外だ、たとえ先行であつても何かしらの大型モンスターを出してくることは覚悟してたのに。そしてもっと怖いのが、あの強欲なカケラ3枚同時発動。なんとかしてせめて1枚でも除去したいところだけど、今の手札じゃ無理か。でも当面の問題はあのラーバアだね。

「僕のターン、ドロー！」

ふむ、ちよつどいいカードが来た。今回は全体的に引きがいい気がする。というかこつちも引いたか、強欲なカケラ。なんだこのカケラ祭りは。まあ使わない理由はないしありがたく使っておこう。

「ツーヘッド・シャークを召喚してそのままバトル、サイバー・ラーバアを攻撃！」

あごの部分を半機械化した青い鮫が、まずは口の上半分でラーバアを一口で噛み砕く。よし、いい調子いい調子。

ツーヘッド・シャーク 攻1200↓サイバー・ラーバア 守800

0 (破壊)

「さらにツーヘッド・シャークは、1ターンに2回の攻撃ができる！も

う一回攻撃！」

「だが、サイバー・ラーバアもまた効果がある。このカードが戦闘で破壊された時、デッキから別のサイバー・ラーバアを呼び出す！」

「む、しつこいモンスターだね。まあいいか、攻撃しちやつて！」

ツールヘッド・シャーク 攻1200↓サイバー・ラーバア 守800 (破壊)

先ほどとは逆の、口の下半分で2体目のラーバアを噛み砕くツールヘッド・シャーク。どうせ3体目が来るだろうと思っていたが、カイザーに動きはない。

「これで俺のデッキにサイバー・ラーバアはもういない、効果は使わないぞ」

「……………だったら、カードを1枚セットして永続魔法、強欲なカケラを発動。ターンエンド」

今僕が伏せたカードは、ポセイドン・ウエーブ。おそらくカイザーは次のターン、今度こそサイバー・ドラゴンかその融合体を出してくるはずだ。だけど、攻撃を1度止められるポセイドン・ウエーブを張っておけば1ターンは大丈夫なはずだ。というかむしろ、さっさとダメージを与えて何か仕掛けてくる前に倒したいから攻撃してくれる方がありがたい。

カイザー LP4000 手札：2

モンスター：なし

魔法・罫：強欲なカケラ (0)

強欲なカケラ (0)

強欲なカケラ (0)

清明 LP4000 手札：3

モンスター：ツールヘッド・シャーク (攻)

魔法・罫：1 (伏せ)

強欲なカケラ (0)

「俺のターン。まず通常のドロウをしたことで3枚の強欲なカケラにそれぞれ強欲カウンターが1つのる。さらにサイバー・フェニックス

を守備表示で召喚、ターンエンドだ」

サイバー・フェニックス 守1600

「僕のターン！強欲カウンターがたまつて、と」

ううん、もつと序盤からガンガン攻めてくると思つてただけに今の守備固めが逆に怖い……。でもここで迷つてても何もできないししょうがない、か。

『仕掛けてくるとしたらまず間違いなく次のターンだな。逆に言うと、このターンだけはこつちも動き放題だ。さいて、どうすつかねえ』  
「よし、ここはいつも通り動くよ！キラ！ラブカを召喚、さらに水属性モンスターのラブカをリリースして手札のシャークラーケンを特殊召喚！」

シャークラーケン 攻2400

「バトル、シャークラーケんでサイバー・フェニックスに攻撃！」

シャークラーケン 攻2400↓サイバー・フェニックス 守16

00（破壊）

「サイバー・フェニックスがバトルで破壊された時、俺はカードを1枚ドロウすることができる」

さいて、問題はここだ。今ツーヘッドに攻撃させれば2回攻撃で2400のダメージを与えることができる。だけど、もしカイザーの手札に速攻のかかしとかのカードがあつたらどうなる？攻撃は通らず、返しのターンでまず間違いなく攻撃を受けるだろう。何せ次のターンはカイザーの手札の数が違う、今伏せてある2枚だけで対抗できるかどうかは怪しいものだ。なら、ここはメイン2に移つてツーヘッドを守備表示にすべきだろうか。

『俺は何も言わないからな。後々まで響く選択だろうし、これは自分で考えて決めとけ』

静かに、そして真剣につぶやくユーノ。まあ、さすがにここで助け舟はくれないか。たとえあつたとしても無視しただろうけど。

僕は……………。

「攻撃、ツーヘッド・シャーク！カイザーに2回のダイレクトアタックだ！」

その一声を待ちかねていたかのようにツーヘッドが飛び上がり、一発の魚雷になったかのようにカイザーへ突進する。そしてその牙は、確かにカイザーに届いた。

「くっ……！」

ツーヘッド・シャーク 攻1200↓カイザー（直接攻撃）

カイザー LP4000↓2800

ツーヘッド・シャーク 攻1200↓カイザー（直接攻撃）

カイザー LP2800↓1600

「よしっ！」

これでカイザーの残りライフは1600、次のターンの攻撃をPOSEイドン・ウェーブで反射すれば1600ダメージが入って僕の勝ち。このままいけば、勝てる。あの男に、カイザーに！

「これでターンエンドだよ」

カイザー LP1600 手札：3

モンスター：なし

魔法・罫：強欲なカケラ（1）

強欲なカケラ（1）

強欲なカケラ（1）

清明 LP4000 手札：2

モンスター：ツーヘッド・シャーク（攻）

シャークラーケン（攻）

魔法・罫：強欲なカケラ（1）

1（伏せ）

「俺のターン、ドロ。この瞬間、2つ目の強欲カウンターが強欲なカケラにたまる。そしてそのカケラの効果発動、2つ以上のカウンターがたまったこのカードを墓地に送ってカードを2枚ドロ……俺が引くのは合計6枚だ」

そうやって6枚のカードを引くカイザー。これであっちの手札は10枚、か。さあ、このターンが正念場だ。

「もう勘づいているとは思いますが、清明。覚悟はいいな？」



「もちろんだよ、カイザー」

「ならば、俺の本気を見せてやろう！フィールド魔法、シャインスパークを発動！このカードは光属性の攻撃力を上げる代わりに守備力を下げる、お前のウオーターワールドのようなものだな。そしてエクストラデッキからサイバー・エンド・ドラゴンを除外！」

『何!?まさか!』

「生まれ落ちろ、もう一つのサイバー・エンド!Sin サイバー・エンド・ドラゴンを特殊召喚!」

何の下準備もなしにいきなり出てきたそのモンスターは、特徴的な三つ首と言いいメタリックなボディといいまさしくサイバー・エンド・ドラゴン……いや、違う。とてもよく似ているけど、あのモンスターは僕がこれまで見てきたサイバー・エンドじゃない。例えるなら、もう一つのサイバー・エンドといったところか。

Sin サイバー・エンド・ドラゴン 攻4000

「まだまだ!手札から融合を発動し、3体のサイバー・ドラゴンを融合!融合召喚、サイバー・エンド・ドラゴン!」

Sinの隣に、本家本元のサイバー・エンドがそびえ立つ。攻撃力4500の貫通もちモンスターは、はつきり言っただけでかなりまずい展開だ。

サイバー・エンド・ドラゴン 攻4000↓4500 守2800  
↓2400

『いや。Sinモンスターは強力だが、他のモンスターが攻撃をできなくさせる特殊効果を持っている。このままなら今の召喚に意味はないな。まあ、そんなことまずありえん話だが』

「まだ俺はこのターン、通常召喚をしていないな。サイバー・ドラゴン・コアを召喚し、その効果を発動。デッキから『サイバー』または『サイバネティック』と名のつく魔法、罫カード1枚をサーチ……俺はこの効果で、サイバネティック・フュージョン・サポートを手札に加える」

目も鼻もなく、こじんまりとした姿は機械の竜というより機械の蛇。なるほど、きつとあのカードが文字通りサイバー・ドラゴンたち

の核になるんだろう。

サイバー・ドラゴン・コア 攻400↓900 守1500↓1100

「そして融合回収を発動、墓地の融合1枚と融合素材となったモンスター1体を手札に戻す。これでサイバー・ドラゴンと融合を手札に戻し、そのまま発動！場のコアと手札のサイバー・ドラゴンを使用し、サイバー・ツイン・ドラゴンを呼び出す！」

サイバー・ツイン・ドラゴン 攻2800↓3300 守2100  
↓1700

「う、うわあ……………」

さつきまで何もなかったフィールドに、今は超大型モンスターが3体。

「さらに速攻魔法、禁じられた聖杯を発動。Sinの効果はこのターン無効にし、攻撃力を400アップさせる」

Sin サイバー・エンド・ドラゴン 攻4000↓4400

これで、さつきユーノが教えてくれたSinモンスターのデメリットもなくなった。これから来るのはとんでもない攻撃力の4回連続攻撃、1発でも喰らったら即死か、そうでなくてもほぼ瀕死クラス。……………頼むよ、ポセイドン・ウエーブ。これさえ決まればいくら向こうに攻撃力があっても僕の勝ちなんだ。

「ゆくぞ、バトルだ！まずはSinサイバー・エンドでツーヘッド・シャークを攻撃！エターナル・エヴォリション・バースト！」

本家の方とは違い、三つの首からそれぞれ火炎弾を打ち出して攻撃するSinサイバー・エンド。だが、その火球はツーヘッド・シャークに届く前に分厚い水の壁に阻まれた。

「トラップ発動、ポセイドン・ウエーブ！その攻撃を無効にして僕の場の水、魚、海竜族1体につき800のダメージを与えるからこれで1600のダメージ、このデュエルはもらった！」

「甘い！手札からハネワタの効果発動、このカードを墓地に送ることで俺がこのターン受ける効果ダメージはすべて0になる！」

「だ、だけど攻撃は止めきった！まだまだ負けるもんか！」

「確かにな。だが次だ！サイバー・エンド・ドラゴンで攻撃、エターナル・エヴォリューション・バースト！」

もう何度となく目にしてきた、すべてを焼き尽くす白い熱線。初めてカイザーとデュエルした時にはなすすべがなかったけど、今の僕はもう違う。

「墓地からキラー・ラブカの効果を発動、このカードをゲームから除外してその攻撃を無効に、そして攻撃力を僕のエンドフェイズまで50ポイントダウンさせる！」

サイバー・エンド・ドラゴン 攻4500↓4000

「ふっ、これも受けたか。だが、続くサイバー・ツイン・ドラゴンの2回攻撃は止めきれまい！2体のモンスターを焼き尽くせ、エヴォリューション・ツイン・バースト！」

確かに、カイザーの言うとおりだ。僕の防御札はもう、全部使いきった。どうすることもできないまま、ツーンヘッド・シャークとシャークラーケンが白い光に飲み込まれて消えていく。

「うわあああつー！」

サイバー・ツイン・ドラゴン 攻3300↓ツーンヘッド・シャーク

攻1200 (破壊)

清明 LP4000↓1900

サイバー・ツイン・ドラゴン 攻3300↓シャークラーケン 攻

2400 (破壊)

清明 LP1900↓1000

「俺は、これでターンエンドだ。さあ、お前の本気のデュエルを見せてみる！」

「くっ……」

僕の本気のデュエル、か。この手札は、かなりいいところまで来てる。具体的にはあと1枚、あのカードさえ来れば逆転できる。と、そこでユーノがあることに気が付いた。

『あーなってこーなって……待てよ？こーきてあーきて、それで……ふむ。清明、次の俺らのターンはお情けでもらったと思え』  
「え、いきなりどうしたのさっ……」

『今の攻撃、確かに俺らは捌ききつたよな』

「うん」

だいぶ危なかったとはいえ、なんとかライフも1000残ってる。もつとも、1000なんてあのモンスターたちの前じゃ大した量じゃないゴミみたいな数値だけど。

『あれ、攻撃の順番が一か所でも違ってりやラブカ効果の発動条件から言っても考えても4000以上のダメージが通る計算になるんだよ。それにカイザーが気付かないはずがねえ、いわゆる奴のリスクトデュエル、つてやつなんだろうな……手を抜かれたのは事実だし、正直これは気に入らんが』

「な、なるほど」

つまり、僕の腕じゃあまだまだカイザーに本気を出させるほどのレベルじゃないってことか。……悔しい。なんとかして、このドロークカードで大逆転してやろう。頼むよ、僕のデッキ。あのカードさえ引けば、あるいはまだわかんないんだ。

「僕のターン、ドローツー！さらにこのドロークで僕の強欲カウンターも2つになったから墓地に送って2枚ドローク……来た来た来たあ！まず魔法カード、クロス・ソウルを発動！僕はこのターンバトルフェイズを放棄する代わりに、モンスターをリリースするとき1回だけそのリリースを相手モンスターに肩代わりさせることができる！」  
「なるほど、確かにそのカードなら俺のモンスターを1体確実に墓地に送ることができるだろう。だが、まだそれだけでは足りないな」

確かに。普通はそうだろう。だけど僕の手にはこのカード、ユーノの提案で昨夜デッキに入れてみたこのカードがある！

「僕のフィールドはさっきのターンにカイザーの攻撃ですつからかんになった、つまりもうカードはない！この条件をクリアした時、爆走特急ロケット・アローは手札から特殊召喚できる！」

派手な色をした、流線形のメタリックなバカデカ電車、爆走特急ロケット・アロー。このカードは比較的緩い条件で特殊召喚できる代わりに、そのターンのバトルフェイズ不可なうえにこれがあるだけであらゆる効果を自分が発動できなくなり、さらにスタンバイフェイズが

来るたびに手札をすべて捨てなきゃいけないというめんどくさいデメリットを詰め込めるだけ詰め込んだようなモンスターだ。だが、その分りターンも大きい。

爆走特急ロケット・アロー 攻5000

「そしてここで、クロス・ソウルの効果が生きる。僕はクロス・ソウルの効果で選んだそっちのサイバー・エンド・ドラゴン……いや、Sin サイバー・エンド・ドラゴンと、このロケット・アローをリリース！ さあ、こいつが僕の切り札だ！ マイフェイバリット、霧の王降臨！」

2つの大型モンスターが消え、すこしすつきりしたフィールド上に剣を手にした鎧の魔法使いがふわりと降り立つ。さあ、ここからだ。さつきはあの攻撃力の前に散々な目にあっただけ、一気に反撃と洒落込もう！

『よし、最っ高に上等な条件で出せたな。まさかここまでうまいこといくとはな』

「いつも助けてくれてありがとう、霧の王。この攻撃力はリリースしたモンスターのもともとの攻撃力の合計になる……そしてSin サイバー・エンドは4000、ロケット・アローは5000。つまり霧の王の攻撃力は、過去最高の9000！」

霧の王 攻9000

「ほう、攻撃力9000……か。大したものだな」

そう。カイザー必殺の戦術であるパワーボンド＋サイバー・エンドでも、その攻撃力は8000止まり。日頃その数字に慣れてきたカイザーだからこそ、攻撃力9000の重みが誰よりもわかるのだろう。口調こそ静かだったけど、そこに込められた思いは伝わってきた。ちなみに今本家じゃなくてあえてSinの方をリリース対象にしたのは、やっぱりカイザーを象徴するモンスターのサイバー・エンドをこんな小技で退場させるのはやっぱり何か違う気がしたから。それと、さつきとどめを刺しに来なかったことに対する借りを返したかったからってのもある。無論カイザーはそんなつもりじゃなかったんだらうけど、気にするのはこっちなんだ。

「もつとも、このターン僕はバトルできないからね。カードをセットして、ターンエンド」

カイザー LP1600 手札：1

モンスター：サイバー・エンド・ドラゴン

(攻)

サイバー・ツイン・ドラゴン

(攻)

魔法・罫：なし

場：シャインスパーク

清明 LP1000 手札：1

モンスター：霧の王(攻)

魔法・罫：1(伏せ)

「俺のターン、ドロロー。確かに攻撃力9000の霧の王は恐ろしいが、まだわからんぞ？魔法カード、貪欲な壺を発動。墓地のSinサイバー・エンドにサイバー・フェニックス、サイバー・ドラゴン・コアにサイバー・ラーバア2体をデッキに戻して2枚ドロロー。よし、攻撃力はだいぶ下がるがいいだろう。俺は、墓地のサイバー・ドラゴン3体と場のサイバー・エンド、サイバー・ツインの合計5枚を除外。サイバー・エルタニンを特殊召喚する！」

これまでカイザーが使ってきたたくさんのサイバー系モンスターが光り輝きながら空高く昇って混じり合い、一つの大きな光になって戻ってきた。その姿はこれまでのサイバーの集合体のようで、中央の巨大な顔にそこから伸びた長い首にも顔。そして特徴的なことに、サイバー・ドラゴン系列の頭部を模したようないくつものオプションパーツが辺りに漂っている。

「サイバー・エルタニンの攻撃力と守備力は、今除外したモンスター1体につき500ポイントアップする。シャインスパークの分も含めると攻撃力は3000だな」

サイバー・エルタニン 攻2500↓3000 守2500↓2100

「だけど、その数字じゃあ僕の霧の王の方がはるかに上！」

「だが、エルタニンの効果はもう一つある。このカードが特殊召喚に成功した時、場の全ての表側表示モンスターを破壊する！受けてみる、コンステレイション・シージュ！」

エルタニンのオプションパーツの目に光がともり、その口が一斉に開いて霧の王をめがけて白い熱線を放つ。だけど、何かしらの効果で霧の王を破壊してくるのはこっちだって想定済みだよ！

「トラップ発動、デモンズ・チェーン！このカードがある限り、エルタニンの効果は無効だ！」

霧の王がゆっくりと片手を上げると地面から無数の黒い鎖が伸びてきて、エルタニン本体とすべてのオプションパーツをがんじがらめにする。おお、非常に珍しい霧の王が魔法っぽいものを使うシーンが見れた。

サイバー・エルタニン 攻3000↓0 守2100↓0

「なるほど、どうやらお前は実際、この1年で別次元の強さに到達したらしいな。だが、俺もアカデミアの皇帝と呼ばれた男。そう簡単に勝ちを譲るつもりはない！サイバー・ヴァリーを通常召喚し、第2の効果発動！このカードと俺の場の表側表示モンスター、サイバー・エルタニンをゲームから除外することでカードを2枚ドローする！そしてカードを2枚セットして、ターンエンドだ」

カイザーの場は空になった。このまま攻撃すれば勝てるけど、用心のためにもう1体モンスターが引ければ申し分ない。

「僕のターン、ドロー！」

うん。

「攻撃、霧の王！ミスト・ストラングル！」

「トラップ発動、ガード・ブロック！その戦闘ダメージは0になり、俺はカードを1枚ドローする」

も、もう1体モンスターさえ引けてたら……………！！

「メイン2。一時休戦を発動、お互いにカードを1枚ドローするよ」

『そのかわり次の相手のエンドフェイズまでお互いはダメージを受け

ない……………あーあ、絶好のチャンスだったのに」

「う、うるさいうるさい！カードをセットしてターンエンドっ！」

カイザー LP1600 手札：3

モンスター：なし

魔法・罫：1（伏せ）

場：シャインスパーク

清明 LP1000 手札：1

モンスター：霧の王（攻）

魔法・罫：1（伏せ）

「俺のターン。速攻魔法、サイクロンを発動！」

まずい。ここでこのカード、最後の守りの砦が破壊されたらたぶん霧の王の破壊まで持つて行かれる。この伏せカードはフリーチェーんじゃないし、これを止める手段はない！

「破壊するのはこの、俺の伏せカードだ！」

……………あれ？まあいいや、素直に喜んでおこう。いや、十分不気味だけど。わざわざ自分のカードを破壊するなんて、一体何をしようとしてるんだ？

「そして破壊されたサイバー・ネットワークの効果発動。このカードが破壊された時、自分の除外された光属性機械族モンスターを可能な限り特殊召喚する……………甦れ、俺のサイバー・ドラゴンたちよ！」

サイバー・ドラゴン 守1600

サイバー・ドラゴン 守1600

サイバー・ドラゴン 守1600

サイバー・エンド・ドラゴン 守2800

サイバー・ヴァリー 守0

ここか？ここでこのカードを使うべきか？……………いや、まだだ。伏せカードはこの1枚しかないんだ、ここで今の僕にとつて最後の守りの要になるこのカードを使ってまだカイザーに余力があったとしたら、そのあとの展開に対する抑止力がなくなる。だから、ここはこらえておこう。

「そしてこの効果を使った場合、俺の魔法、罫カードはすべて破壊され



るからここでシャインスパークは破壊だな。だが、それでも十分だ！サイバー・ドラゴンのうち1体を軸として、俺の場の5体の機械族モンスターで融合！出でよ、融合素材モンスターをすべて墓地に送ることとその数1体につき1000ポイントの攻撃力となる異端のサイバー、キメラテック・フォートレス・ドラゴン！」

それは、これまで出てきたサイバー流モンスターたちとは全然違っていた。さっきのエルタニンもたいがいぶつとんでた見た目だったけど、少なくともパーツの一つ一つやカラーリングはいかにもなサイバー流だった。だけどこのモンスターは違う。より正確に獲物を射止めるためなのかスコープのような模様がついた目もさることながら、その紫色を軸にしたカラーリングは白を基調とする他のサイバーとはかけ離れている。そしてまずいのが、攻撃力が5000……つまり、機械族の切り札であるリミッター解除を使った時の攻撃力が10000、今の霧の王をさらに超えてくる数値になる。くっ、前言撤回！このカードを使ってでもあのモンスターには消えてもらう！

「何を狙ってるかは予想がついたけどまだまだ僕は負けない、負けるもんか！トラップ発動、奈落の落とし穴！キメラテック・フォートレスの攻撃力が5000なら、破壊して除外してやるまでさ！」

「やはり、まだ罠が仕掛けてあったか。だがそれも俺の計算のうちだ！見せてやろう、俺のパーフェクトを！速攻魔法発動、サイバネティック・フュージョン・サポート！」

「あのカード、確かあの時の……！」

僕の記憶に間違いがなければ、カイザーが怒涛の大量展開を始めたターンにサイバー・ドラゴン・コアの効果でデッキからサーチしたカードのはずだ。そういえば、ここまでずっと使ってなかったっけ。「このカードの発動時、俺は半分のライフを払うことで1度だけ、墓地の素材を使い機械族融合モンスターを出すことができる！」

「墓地のモンスターで機械族の融合モンスター！」

カイザー LP1600↓800

カイザーのライフが、ついに僕を下回る。だけど、喜んでられる状

況じやない。まさか、まさかあの手札のカードは。

「魔法カード、パワー・ボンド発動！墓地のサイバー・ドラゴン3体を素材とし、サイバー・エンド・ドラゴンを融合召喚！そしてパワー・ボンドにより融合召喚されたモンスターの元々の攻撃力は、元々の攻撃力と同じだけアップする」

サイバー・エンド・ドラゴン 攻4000↓8000

やはり来た、サイバー流の頂点にしてカイザーの切り札、パワー・ボンドで呼び出したサイバー・エンド・ドラゴン。しまった、もしさつきネットワークを破壊してサイバー・ドラゴンを出してきたときに奈落を使っておけば！

『いや、これは悔やんでもしゃーねえ。気持ち切り替えろ、次行くぞ次！』

「まだ1枚足りんが、俺はこれでターンエンド。エンドフェイズに俺はパワー・ボンドのリスクとして4000のダメージを受けるが、そのダメージはお前の一時休戦の効果により無効となった」

「くっ………僕のターン！」

ちら、と今引いたカードを確認する。よし！これが最後の賭けだ、ここで負けたら次はない！

「カードを2枚セットして、ターンエンドにするよ」

カイザー LP800 手札：1

モンスター：サイバー・エンド・ドラゴン(攻)

魔法・罫：なし

清明 LP1000 手札：0

モンスター：霧の王(攻)

魔法・罫：2(伏せ)

「俺のターン！」

「そのスタンバイフェイズにトラップカード、和睦の使者を発動！このターンお互いのモンスターは戦闘破壊されずに、戦闘ダメージも0になる！」

『な、ん、で、それを今使うんじやお前はあああああつ！』

あ、やつちやった。しかしここは聞こえないふりしてスルー。この

効果で次のターンまで繋げれば、きつと……！

「いいだろう。カードを1枚セットして、ターンエンドだ」

『よしっ！』

そう叫んだのはユーノだったのか、それとも僕の心の声だったのか。そんなことはもうどうでもいい。次の僕のターン、ここでこのデュエルに決着をつける！

「僕のターンー！」

引いたカードは、ウォーターワールド。よし、使おう。別にカウナーされても痛くもなんともないフィールド魔法なのに、ここでこのデュエルも終わると思うと一手一手が慎重になる。これで霧の王の攻撃力は9500、あと一歩で5桁には届かないものの破格の数値には変わりない。

「いくよ、霧の王……バトルフェイズ、霧の王でサイバー・エンド・ドラゴンに攻撃！」

サイバー・エンドに真っ向から戦いを挑む霧の王が大剣を大上段に振りかぶると、その刃が魔法の光を放ちだす。だがそのまま剣を振り降ろそうとすると、サイバー・エンドもただでやられるわけにはいかんとばかりに3つの口から同時に光線を発射して抵抗してきた。するとその瞬間サイバー・エンドの体中に機械がショートするとき特有の青いプラズマが走り、なんと光線の太さが倍になる。カイザー、やっぱりあのカードを！

「攻撃宣言時にリバースカード、リミッター解除を発動させてもらった。このターンのみ、機械族モンスターはさらに倍になる。これで終わりだ、清明！」

そういうカイザーは、僕がこの1年で見てきた中で1番いい顔をしてたと思う。すぐく生き生きと、本気で本気のデュエルを楽しんでいるような。もしそうだとすれば、僕はカイザーの本気を引き出すことに成功したんだろうか。

サイバー・エンド・ドラゴン 攻8000↓16000

だけどカイザー、それじゃあ僕は倒せないよ。

「……………」

「何?」

「そのリミッター解除は僕の想定内! トラップ発動、メタル化・魔法反射装甲! このカードは自分モンスター1体の装備カードになって攻守を300アップさせるけど、それだけじゃない」

そう言っている間にもソリッドビジョンには動きがある。サイバー・エンドが自身の限界を超えて放つ光線を霧の王はその剣でがちりと受け止め、それどころか少しずつだが押し返しつつあった。そして、霧の王は一步ずつ前に進んでいく。ゆっくりではあるが、確実にあのサイバー・エンド・ドラゴンを倒すために。

「このカードを装備したモンスターが攻撃するとき、その攻撃力はさらに相手の攻撃力の半分だけアップするんだよ。今のサイバー・エンド・ドラゴンの攻撃力が16000なら、こっちは8000ポイントの攻撃力を得ることになる……覚悟はいい、カイザー? これが僕らの全力だ、ファイナルミスト・ストラングル!!」

霧の王 攻9500↓9800↓17800

そしてついに霧の王の剣が光線を完全に切り裂き、そのままの勢いでサイバー・エンドの体を一刀両断する!

霧の王 攻17800↓サイバー・エンド・ドラゴン 攻1600

0

「ついに、ついにあのカイザーに……あれ?」

おかしい。もう勝負はついたはずなのに、ソリッドビジョンによる演出上の砂ぼこりが消えない。いつまでたってもフィールド上が、そしてその向こうにいるカイザーが見えない。

「なっ!?!」

少しおさまってきた砂ぼこりの向こう側で見えたのは、信じられないもの。あるはずのないもの。そんな、どうして。

「どうしてサイバー・エンド・ドラゴンが、霧の王が、まだフィールドにいるのさ………」

いや、ただいるだけではない。霧の王が振り切ったその剣はサイバー・エンドの真ん中の首を切り落として再起不能にさせていたものの、そのまま右側の頭がぼろぼろになった状態で噛みついていてそれ以上振りきれなくなっている。さらにその右の首そのものがぐるぐると霧の王を絞めつけていて、なんとかそこから脱出しようとする霧の王も動くことができないことになっている。そして最後の、左側の首は既に口を開けていて、もう一度この至近距離で光線を打つためにエネルギーのチャージを行っている。

『いや、まさか、あれ………』

そう震え声のユーノが呟いて指さすのは、サイバー・エンドの首ではない。

『おいおい、ちょっと待てよ、まさかリミッター解除だけじゃなくて、あつちまで持ってたつての……?』

ユーノが指差しているのは、首の向こう側に広がる胴体。普段は機械でできた羽があつた部分。あつた、と過去形なのは訳がある。今その位置に生えているのは機械の翼なんかじゃない。あれはもつと生物的な、一言で言い表すなら………天使。

そしてその向こうから、カイザーの声が聞こえてくる。

「ありがとう、清明。やはり卒業デュエルの相手にお前を選んで正解だった。お前がそうやって俺の限界以上の力を使い俺を超えてくるからこそ、俺はさらにその先へゆき、もう一つ限界を突破することができる」

「すごいよ、やっぱりカイザーはものすごい。これ以上ないくらい最高に決まったのに、まだ奥の手があるんだもん」

「これ以上ないくらい、か。そうやって自分の限界を決めつけるものじゃない。それが俺からの、卒業生として贈る言葉だ。ダメーjist テップ。手札からオネストを墓地に送り、サイバー・エンドの攻撃力

をお前の霧の王の数値、17800ポイントアップさせる」

『いくらメタル化が数少ないオネスト相手にも後出しで攻撃力を上げられるカードとはいえ、リミッター解除と組み合わせられたら上昇値が追いつかねえぞ……ま、カイザーらしいといやカイザーらしいし、清明らしいといや清明らしいのかね』

霧の王 攻17800↓26700↓サイバー・エンド・ドラゴン

攻16000↓33800

清明 LP1000↓0

チャージが完了した。動けない霧の王にゆっくりと最後の首が照準を合わせ、そこから霧の王に巻きついた自分の首ごと消し尽くさんと光線を撃つ。もう奥の手なんて残ってない。僕のライフは、0になった。

「負けちゃった、か」

『そだな』

ふー、と息を吐くと、こちらに近寄ってくるカイザーの姿が見えた。試しにおーい、と手を振ると向こうも振り返ってくる。そんな光景が、なぜだがおかしかった。

「先ほども言ったが、改めて礼を言わせてくれ。いいデュエルだった、ありがとう」

「ありがとう、カイザー。こちらこそ、楽しかったよ」

「ああ、そうだな」

そう言つて、カイザーがすつと自分の右手を差し出す。その手をぐつと握り返してちよつと笑うと、カイザーも少し笑みを浮かべた。観客席にいるみんなの拍手をぼんやり聞きながら、なにはともあれ僕は幸せなけだるさに包まれていた。

こうしてカイザーは、デュエルアカデミアの皇帝は学校を去っていった。だけど、またいつかきつと会えるだろう。そうしたら、今度こそ僕が勝とう。その時までにもつともつと強くなって、最終的にはデュエルキングと洒落込むんだ。

## ターン28 (裏) 愉快なトリックスターと人工生命

あらすじ：清明ご一行、廃寮に潜り込み稲石と再会する。その後地下室にて。

「一応確認させてもらうよ。お前が明日香や万丈目をさらって大徳寺先生をこんな姿にしたのか！」

「最後の一つは間違っている。そのミイラは、はるか昔からここにあったものだ。だが、彼らを襲ったのは確かに私だ。返してほしければ、私と闇のデュエルだ！」

「上等っ！セブンスターズ、また返り討ちにしてやる！」

そう目の前の不気味な敵に啖呵を切ってデュエルディスクを立ち上げようとしたその時、スツと僕とフード男の間に立ちふさがるようにして立って勝手に自分のデュエルディスクを起動させる人が1人。

「稲石……さん？」

「なんだ、お前は。これは神聖なる七星門の鍵をかけた戦い、部外者の出る幕はない！」

フードの男が怒りのにじむ声を張り上げるが、稲石さんはそんなものどこ吹く風だ。それで？と言わんばかりに……。

「それで？」

前言撤回。言わんばかりにどころかモロにそう聞き返し、フードの男が放つ威圧感に怯むどころかむしろ堂々と胸を張る。なんで威張ってんだろこの人。

相手ばかりか味方からもそんな視線を向けられていることに気が付いたのか、やれやれと息を吐いてさらに口を開く。そのまるで緊張感のない姿が、こっちの緊張まで削いでいつてるような気がする。

「あのねー、ここは自分がかれこれ16年、いやさもう17年くらい住んでる愛しの我が家、というか島なんだよ………つまり何が言いたいかというのだね、隠し部屋なんて作ってないでさっさと出てけ」「ふん、くだらん。ここは本来私のいるべき場所、薄汚いネズミに荒らすことを許可した覚えはない」

「チューチューチュー、はいはいネズミさんですよーだ。許可しない

からなんなのさ、デュエルでもやろうっての？」

あ。なるほど、これはうまい。すごく自然な挑発の流れで断りにくい空気に持ってた。やるなあ稲石さん。

「さあ七星門の鍵の守護者よ、私とデュエルだ」

『あ、スルーされた』

稲石さん……哀れな人だ。あ、ちよつと部屋の隅つこの方でいじけだした。でも、そんな言いがかりみたいな理由で自分がデュエルしにいくような人だったつけこの人。

『少なくともお前よりや馬鹿じゃないし、何かしら思うところもあるんだろ』

「うるさい」

「さあ、どうした？ここにきて怖気づいたか、守護者よ」

おつと、そうだった。さーて、稲石さんには悪いけどここは僕が指名されてるんだ、相手のデッキも実力も未知数だけど、あの明日香と万丈目を倒すぐらいだから少なくともかなりの実力者のはずだ。気を引き締めてかからないと、僕も一瞬でやられる……つてあれ？

「デュエルディスクが」

『反応しねーな。壊れたか？』

「いやいやいや、そうじゃないでしょ清明。よく見てよ、これ！自分！」

ガサゴソと電源をいじってるうちに復活したらしい稲石さんが、バーンと腕のデュエルディスクを見せびらかしてくる。見ると、そこにはすでに「4000」のライフ表示が。

……そーいやこの人、いの一番にデュエルディスク立ち上げてあのフード男の相手する気満々だったっけか。

ん、待てよ？ということとは必然的にあのフードの相手をするのは。

「まあ自分に任せといてよ、清明。だから、しっかり見ておくように」「え、いやえつと、稲石さん？」

「い・い・ね？しっかり見ておくんだよ、本当に」

「……はい」

負けた。今のなんだかよくわからない迫力に負けた。そんな僕の



戦意喪失を見たフード男は小馬鹿にしたように鼻で笑うと、デュエルディスクを構えなおす。どうやら、稲石さんとのデュエルを引き受けたらしい。

「デュエル！」

「さあ、先攻は自分だね。モンスターをセットして、カードをセット。ターンエンドさ」

「私のターン。永続魔法、次元の裂け目を発動。先に言っておこう、私の錬金術の前ではデュエルモンスターの常識は通用しないぞ！」

いつも通りのセット戦法を使う稲石さんに対しフード男が発動したカードにより、フィールドの上空1メートルくらいの空がぱっくりと割れてどこかもわからない異世界がその中にぼんやりとうつる。次元の裂け目、確かあらゆる墓地に送られるモンスターを除外するカードだったはずだ。ということはあのフード、除外デッキの使い手なのか。

「手札から錬金生物 ホムンクルスを召喚、そのまま攻撃」

男の呼び出した人造生物が、金属光沢を放つ腕でセットモンスターを殴りつける。だが、そのモンスターも手にした数珠を振り回して鋼の拳を受け流し、なんとかパンチを受けずにすんだ。

錬金生物 ホムンクルス 攻1800↓??? 守1800

「む……………」

「セットモンスターは守備力1800のゴーストリック・キョンシー。さらにキョンシーはリバースした時、デッキから自分の場のゴーストリックの仲間の数以下のレベルのゴーストリックを手札に呼ぶ能力を持つてるからそれも使わせてもらうよ、レベル1ゴーストリック、ランタンを手札にと。あ、続けてどうぞ」

「ターンエンドだ」

「あれ、あんだだけ偉そうなこと言っておいてやるのはただ殴ってくるだけかな？ああ別に答えなくていいよ、こっちがただ言いたいこと言ってるだけだから」

フード LP4000 手札：4

モンスター：錬金生物 ホムンクルス(攻)

魔法・罨：次元の裂け目

稲石 LP4000 手札：5

モンスター：ゴーストリック・キョンシー（守）

魔法・罨：1（伏せ）

攻して、お互いビツクリするほど動きのない最初の攻防が終わる。でも油断はできない、なんてったって今デュエルしてるのは最後のセブンスターズと本物の幽霊稲石さんだから。考えてみるとある意味無駄に豪華なメンツだ。

「さて、自分も動くのでしょうか？ゴーストリックの猫娘、召喚！」  
ポン、と音を立てて活発そうな顔つきのゴスロリ風和服というなかなか新しいセンスの服を着た猫っ娘が人魂とともに召喚される。手で顔をこするしぐさなんか、まさに猫そのものである。

ゴーストリックの猫娘 攻400

「で、これも使おうっと。魔法カード、テラ・フォーミングを発動。効果でデッキのフィールド魔法1枚を手札に。うーん、今回はこれでいいかな。ゴーストリック・ミュージアムを加えてそのまま発動！」

フィールド魔法の演出によりいくつもの展示品が飾られた柵や何やらがゴゴゴツとせりあがってきて、あつという間に謎の部屋が小規模な博物館のようになる。とはいえよく見ると飾つてあるものが馬に乗った首なし騎士の像や色白のヴァンパイアの肖像画など、いささか偏ってる気もするけども。

「はい、終わり。やっぱりやめた、ここは動かないでターンエンド」

「私のターン、ドロロー。もう1体ホムンクルスを召喚する」

そっくり同じ顔、同じ体をした2体目のホムンクルス。そのホムンクルスに猫娘がいきなりとびかかり、そのままの勢いで押し倒して顔中を引っ掻き回す。

「猫娘の効果発動さ。フィールドにゴーストリック・モンスターがいる場合でレベル4以上のモンスターが召喚及び特殊召喚された時に、そのモンスターは裏側守備表示になる」

「ならば、破壊するだけのこと。最初からいるホムンクルスでゴーストリックの猫娘に攻撃！」

「冗談じゃない、そんな攻撃受けないよ。手札からゴーストリック・ランタンの効果発動、その攻撃を無効にしてランタンを裏守備で特殊召喚」

「カードを伏せる。これでターンエンドだ」

フード LP4000 手札：4

モンスター：錬金生物 ホムンクルス（攻）

???（錬金生物 ホムンクルス）

魔法・罫：次元の裂け目

1（伏せ）

稲石 LP4000 手札：3

モンスター：ゴーストリック・キョンシー（守）

ゴーストリックの猫娘（攻）

???（ゴーストリック・ランタン）

魔法・罫：1（伏せ）

場：ゴーストリック・ミュージアム

「ね、ねえ、ユーノ」

『……………おう』

正直、こんなこと言うのは間違ってるとは思う。だけどこれまで見てきたセブンスターズの戦いと比較して、どうしてもひとつだけ言いたいことがあった。

「なんかこう、地味……………だよな」

『……………おう』

当然だけど、別に悪口ではない。ただ相手のフード男がなかなか仕掛けてこないうえに稲石さん自身も相手が動くまでまるつきり動く気がないみたいだから、全然デュエルが進まないのだ。

「そして自分のドロワー。ゴーストリック・マミーを召喚、その効果を発動。1ターンに1回、自分はゴーストリック・モンスターをもう1回通常召喚できる。ゴーストリック随一の力持ち、ゴーストリック・シユタイン召喚！」

白い包帯を体中に巻きつけたミイラ男が、その太い腕でもはやおなじみになったあの料理に蓋するやつ、クロツシユのやたらと大きいの

を両手で重そうに抱えてよたよたと展示物の間を縫うように歩いてやってきて、ドスンとクロツシユを床に置いて蓋を取る。と、そこにはうずくまって隠れていたフランケンシュタイン、ゴーストリック・シュタインの姿が。

ゴーストリック・マミー 攻1500

ゴーストリック・シュタイン 攻1600

「さらにキョンシー、ランタンを攻撃表示に変更して魔法カード、破天荒な風を発動！この効果によって、シュタインの攻守は次のそっちのエンドフェイズまで1000ポイントアップ！」

ゴーストリック・キョンシー 守1800↓攻400

ゴーストリック・ランタン 攻800

ゴーストリック・シュタイン 攻1600↓2600 守0↓1000

「まずはシュタイン、表側表示のホムンクルスに攻撃！」

『この攻撃が通れば、ミュージアムの効果で4回連続ダイレクトか……決まればの話だけだな』

まあ無理だろう、と言わんばかりの口調でユーノがポツリとつぶやく。案の定というべきか、シュタインのパンチは床からよきつと生えてきた謎の回転する機械に止められる。

「永続トラップ、エレメンタル・アブソバー発動！手札からネクロフェイスを除外することでそれと同じ属性……つまり闇属性の相手モンスターは攻撃宣言を行うことができない！さらにネクロフェイスはゲームから除外された時、お互いのデッキトップ5枚のカードをゲームから除外する効果を持つ」

「デッキトップ5枚も痛いけど、アブソバーは闇属性ばかりのゴーストリックにとってはありがたいね……だったらゴーストリック共通効果を使って、シュタインと猫娘以外すべてのゴーストリックを裏側守備表示に変更。猫娘を表側のまま守備表示にしてターンエンドさ」

博物館の通路に仁王立ちするシュタインとその横にちよこんと座る猫娘のそばに、ボワンと音を立てて3つのクロツシユが設置され

る。もつとも、今回のデュエルにうごめく影は使われてないから正体は丸わかりなんだけど。

「私のターン。魔法カード、ブラック・ホールを発動！説明は不要だろうが、この効果によりすべてのモンスターは破壊されるーもつとも、次元の裂け目の効果によりその魂の行きつく先は墓地ではなく除外だがな」

「しまったー」

ぽつかりと空中に浮かんだ黒い穴、ブラック・ホールに全てのモンスターが吸い込まれて消えていく。がらんだうのミュージアムと虚しく浮かぶ次元の裂け目だけが占める空間に、仮面をつけた白い影が忍び寄る。

「次元合成師を召喚し、効果を発動。1ターンに1度デッキトップのカードを除外し、このカードの攻撃力をエンドフェイズまで500ポイントアップさせる。除外するカードは……モンスターカード、光の追放者か」

次元合成師 攻1300↓1800

「次元合成師でダイレクトアタック！」

次元合成師 攻1800↓稲石（直接攻撃）

稲石 LP4000↓2200

「くっ、これが闇のゲーム、ね。なるほどんでもない、やっぱヤバそうな相手だ」

「あれ？稲石さんって確かタイタンともデュエルして鍵ぶんどったんじゃない」

「ああ、あのチェスデーモン？ノーダメージで勝っちゃったからね、あのときは」

マジか。稲石さん、僕はあるあなたの方が数段とんでもないと思いますよ。

「ふん、奴は使えん男だった。まさか鍵を1つも手に入れることができずに倒れるとはな。まあいい、エンドフェイズに次元合成師の攻撃力が元に戻る」

次元合成師 攻1800↓1300

フード LP4000 手札：2

モンスター：次元合成師（攻）

魔法・罨：次元の裂け目

エレメンタル・アブソバー（対象・闇）

稲石 LP2200 手札：1

モンスター：なし

魔法・罨：1（伏せ）

場：ゴーストリック・ミュージアム

「さあて、さあて。とりあえずアブソバーをどうにかしないと話が始まらないね。魔法カード、大嵐を発動。このカードは発動時に自分と相手の場の魔法、罨カードを全部破壊するけど、このままだと自分のこのカードも破壊されるね。だからセットカード、アビスコーンの効果発動。このカードがセット状態のまま墓地に送られた時、相手モンスター1体を墓地に送るよ」

「む……………いいだろう、通しだ」

博物館が、闇属性の攻撃をすべて止める謎の機械が、そして空中に浮かぶ割れ目さえもが消え、フィールドが元の洞窟に戻る。随分すつきりしたもんだ。

「で、マジック・ストライカーを召喚してダイレクトアタック」

「手札からバトルフェーダーの効果発動。その直接攻撃を無効にしてこのモンスターを特殊召喚し、バトルフェイズを終了させる」

バトルフェーダー 守0

「あー、惜しい！」

「だけど、これであのフードの手札は残り1枚。そう悪いことばっかりじゃないはず。」

『……………まあ、そのかわりあつちの手札も0になったけどな』

「ま、まあきつと何とかしてくれるよ、うん。」

「ターンエンド」

「私のターン。なるほど、タイタンを倒した実力は本物ということか。いいだろう、その実力に敬意を表そう！バトルフェーダーをリリースし、黄金のホムンクルスをアドバンス召喚！」

同じホムンクルスと名がついてはいるが、さっきのホムンクルスは割と人間に近かった。服着てなかったけど。だけど今度は違う、金色に光り輝くゴーレムだ。

「黄金のホムンクルス……私の研究にとっては不完全な失敗作とはいえ、戦闘能力は十分にある。このカードのステータスは自分の除外されたカード1枚につき300ポイント上がる、よって攻撃力、守備力ともに3300アップした4800だ!」

黄金のホムンクルス 攻1500↓4800 守1500↓4800

「ヒューっ、派手だねえ。それで?そのまま自分に攻撃?」

「無論。ゆけ、黄金のホムンクルス! ゴールデン・ハーヴェスト!!」

黄金の岩のかけらが、小人の戦士を直撃する。何か仕掛けてくれるのかと思ってみていたのに、なんと稲石さんは何一つ動きを見せなかった。

黄金のホムンクルス 攻4800↓マジック・ストライカー 攻600 (破壊)

「はい、残念」

「稲石さ……あれ?」

おかしい。確かにマジック・ストライカーは破壊されたのに、全く稲石さんにダメージが入ってない。

『マジック・ストライカーが戦闘で受ける自分へのダメージは0になる……いい効果だなやっぱ』

「なるほど、そんな効果が」

「ほう。なかなかしぶといな、これでターンエンドだ」

フード LP4000 手札:0

モンスター:黄金のホムンクルス(攻)

魔法・罠:1(伏せ)

稲石 LP2200 手札:0

モンスター:なし

魔法・罠:なし

「場も手札もカードはなし、しかも相手の場には攻撃力4800か。」

いいね、面白いよ。自分のターン、ドロロー！モンスターをセットして、そのままターン終了さ」

絶体絶命の状況で稲石さんがセットしたモンスターはただの苦し紛れなのか、それとも逆転の一手なのか。それは本人にしかわからない。

「私のターン、黄金のホムンクルスで攻撃！ゴールデン・ハーヴェスト！」

だが、じつとしているわけにもいかない以上相手には攻撃しか選択肢はない。無数の黄金の岩のかけらがセットされたモンスターを破壊し……そしてその直後、黄金のホムンクルスの姿がみるみるうちに氷漬けになっていく。

黄金のホムンクルス 攻4800↓???

守800 (破壊)

黄金のホムンクルス 攻4800↓???

(セット)

「何!？」

「またまた残念。セットモンスター、ゴーストリックの雪女の効果を発動させてもらったよ。ひとつ、このカードを戦闘で破壊したモンスターを裏側守備表示にする。ふたつ、そのモンスターはこれ以降表示形式を変更できない。まあ、実質行動不能になったと思ってくれればいいよ」

「くっ……舐めた真似を！カードを1枚伏せ、ターンエンドだ」

フード LP4000 手札：0

モンスター：?? (黄金のホムンクルス)

魔法・罫：2 (伏せ)

稲石 LP2200 手札：0

モンスター：なし

魔法・罫：なし

「さあて、さあて。ドロロー、なんだかんだ言ってもまだ守備力4800だからね、まともに突っ込んだらまず勝てない。だから自分は、リバース・バスターを召喚！そして攻撃！」

リバース・バスター 攻1500↓???

(破壊)

刃の部分が自分の上半身ほどもある大鎌を軽々と手にするマント



を羽織った死神が、問答無用とばかりに守備力4800のセットモンスター……黄金のホムンクルスを真つ二つにする。え、なんで？「リバース・バスターは攻撃するとき、相手の魔法、罠カードの発動を封じる。さらに裏守備モンスターをダメージ計算抜きで破壊することができのさ。もつとも、攻撃前に発動したんならあんまり意味なかったけど……うん？」

きよろきよろと辺りを見回す稲石さん。一体何が見えるんだろう、と思ったのもつかの間、すぐに僕にも何が起きているのかが分かった。ここはついさつきまで洞窟のような部屋の中だったはずだ。一瞬だけ博物館になったりもしてたけど。だけど、おかしい。上に星が見える。いや、上だけじゃない。真ん前にも、後ろにも、それどころか僕らの足元にまで星が広がっている。

「ようやく気が付いたか。だが、まさかこのカードまで使うことになるとはな。本来ならば鍵の守護者と戦うその時までこちらの手は温存しておくつもりだったが、私のホムンクルスが倒れた以上もはや手加減する余裕はない。永続トラップ、マクロコスモス発動！今、我々のデュエルは人間の世界を飛び越え、宇宙へと転換した!!」

「マクロ……コスモス？」

「そうだ。そしてこのカードの効果により、私はデッキから原始太陽ヘリオスを1体特殊召喚する。ヘリオスの能力は、除外されたお互いのモンスターの数1体につき100ポイント。私の除外されたモンスターはエレメンタル・アブソーバーで除外したネクロフェイスにその効果で除外した4体、ブラック・ホールで破壊した2体に次元合成師の効果で1体、そしてバトルフェーダーの計9体だ。そしてお前のモンスターはネクロフェイスで除外した中のゴーストリック・フロスト、キラー・トマト、ネクロ・ガードナーの3体にブラック・ホールで破壊した5体、か」

宇宙の果てからふわふわと漂ってきた一つの太陽。その太陽の下に無数の包帯が重なり合い、組み合わせられ、人間の女のようなスタイルを映し出す。な、なんだつてのさあのモンスターは。黄金のホムンクルスが切り札じゃないなんてただのはったりだと思ってた、という

よりそうであってほしかったのに。

原始太陽ヘリオス 攻0↓1700

「自分でできることは何もないか。ターンエンド」

「ならば私のターン！ゆけ、ヘリオス！私の錬金術、最高の成果よ！」

原始太陽ヘリオス 攻1700↓リバース・バスター 攻1500

(破壊)

稲石 LP2200↓2000

「くっ……………」

これで、ついに稲石さんのライフが半分を切った。それに対し、あのフード男のライフはまだ全然減ってない。しかも、ついさっきまであのフードは本気出してなかったって言うし。流石セブンスターズ最後の一人、強い。

「リバース・バスターはマクロコスモスの効果により除外され、ヘリオスの攻撃力はさらに上がる。メイン2、カードを1枚セットしてターンエンドだ」

原始太陽ヘリオス 攻1700↓1800

フード LP4000 手札：0

モンスター：原始太陽ヘリオス(攻)

魔法・罠：マクロコスモス

2(伏せ)

稲石 LP2000 手札：0

モンスター：なし

魔法・罠：なし

「自分のターン、ドロロー……………ターン、エンドさ」

「そんなー！」

ついにこの時が来てしまった。多分あのカード、唯一の手札はセットすらできない上級モンスターなんだろう。次のターン、ダイレクトアタックが素通しになっちゃう。

「私のターン。魔法カード、闇の誘惑を発動。デッキからカードを2枚ドロローして手札の闇属性モンスター1体をゲームから除外する。そして闇属性モンスター、異次元の生還者が除外されたことでより攻

撃力の上がったヘリオスで攻撃だ！」

原始太陽ヘリオス 攻1800↓1900↓稲石（直接攻撃）

稲石 LP2000↓100

「稲石さんー！」

吹っ飛んだ稲石さんに思わず駆け寄ろうとするも、あの人はそれを地面に、いや宇宙に倒れた状態のまま片手をあげて制止した。ダメージを受け続けたことが幽霊の体にもだいぶこたえてきているのか、つかえつつかえぼくに向かってしゃべりかけてくる。

「これは、まだ、自分の………仕事、だよ。まだ、まだきつとあの男は、本気で来てないから、ね。せめて、手の内だけでも、見せて、あげるからさ………」

「でも………」

『やらせてやれ』

「ユーノー！」

いいからサレンダーしてください、そう続けようとしたところでいきなりユーノーが口を開く。開いたと思っただらいきなりなんて言うんだこの人は。鬼か。

『お前こそ分かんねえのか？多分、どのあたりからかは知らんが途中からずつとこのつもりだったんだろうよ。明らかに不自然な理由でわざわざお前より先にデュエルを挑んだのも、参加する義理も何もねえセブンスターズ戦にわざわざ関わってボロツボロにされながら立とうとしてんのも。全部次に戦うであろうお前らの誰かに少しでも情報アドを渡して、あわよくば闇のゲームを通して少しでも奴にダメージを与えようとしてんだろう』

「だったら、なおさら………」

『だーかーら、やらせてやれって。そこまで言うなら聞いてやるけど、もしお前がああの立場ならどうするってんだ？』

そう言われると、一瞬でそんな状況のイメージが思い浮かんだ。

「………耳栓詰めて聞こえないふりしてコンマ1秒でも早く立ち上がって元気いっぱいに見えるように手を振ってる僕が見える」

『お、おう。まあそういうことだ』

そう言われると何もできない。だって、たぶん僕が同じことをして  
るなら絶対に止めてほしくない、むしろなにがなんでも中途半端など  
ころでは止めさせないだろう。なら、せめてしつかりと見ていよう。  
お願いします、稲石さん。

「……続ける、よ。自分は今の攻撃でダメージを受けたから、手札の  
ゴーストリック・マリーの効果を発動……自分がダメージを受けた  
時にこのカードを手札から捨てて、デッキからゴーストリックモン  
スターを裏側守備表示で特殊召喚。おいで、ゴーストリックの魔女  
……！」

ボワン、と煙を立てて銀色のクロツシュが1つ、ふわふわと宇宙に  
浮く。ゴーストリックの魔女、でもいまさらあのカードを出しても  
うでることなんてないんじゃない。

「お前が捨てたゴーストリック・マリーもまたマクロコスモスの効果  
を受ける。したがって原始太陽ヘリオスはさらにその輝きを増して  
いく。ターン終了だ」

原始太陽ヘリオス 攻1900↓2000

フード LP4000 手札：1

モンスター：原始太陽ヘリオス（攻）

魔法・罫：マクロコスモス

2（伏せ）

稲石 LP1000 手札：0

モンスター：???（ゴーストリックの魔女・セット）

魔法・罫：なし

「自分のターン、これが最後のドロ……ッ！」

「待て……この瞬間にトラップ発動、バトルマニア！このカードは相手  
のスタンバイフェイズにのみ発動ができ、相手のモンスターをすべて  
表側攻撃表示にしたうえでこのターンの攻撃を強制的に行わせる！」

クロツシュを勢いよく宇宙の果てに蹴飛ばして、強制的に叩き起こ  
されたいかにも元気そうな顔の金髪魔法少女が幅広の魔法使い帽を  
くいと頭に合わせる。若干寝癖がはねているもののその自信満々  
な表情は、まるでこの状況を自分の力でどうにかできる、と語ってい

るようにも見えた。

ゴーストリックの魔女 攻1200

「そしてモンスターカード、Ghostrick Ghoul  
………まあゴーストリック・グールを召喚！」

ゴーストリック・グール 攻1100

稲石さんがラストドロで引いたカードは、デフォルメされてはいるもののゴーストリックでは珍しいおどろおどろしい系の見た目をしたゾンビモンスター。どれくらいおどろおどろしいかというと、味方のはずの魔女が若干引き気味の目を向ける程度には刺激的だ。

「どれほどのカードを引いたかと思えば、攻撃力1100か。私のヘリオスの方が攻撃力は上だ！」

「確かに。だけど、グールには効果がある！ゴーストリック・グールの効果発動！1ターンに1度自分フィールドのゴーストリックモンスターを選ぶことでそのモンスター以外の攻撃をこのターン封じるかわりに、自分の全ゴーストリックの力を結集させる！すべての力を、魔女に転換！」

グールが両手を合わせてまじまないのようなポーズをとると、魔女の全身が鈍い緑色に光り始める。これで魔女の攻撃力はグールと合わせたぶんで2300、つまり勝てる！これならヘリオスを倒せる！もしこの後にまだ本命がいるっていう稲石さんの予想が本当だとしても、ゴーストリックの効果を使えば裏側表示にできるからまだ希望の目はある。なんだ、あれだけ悲壮な感じだったけどこの勝負まだわかんないね。

「ゴーストリックの魔女で原始太陽ヘリオスに攻撃！ヒス・オブ・メイジ！」

ゴーストリックの魔女 攻2300↓原始太陽ヘリオス 攻2000

いや、たとえ魔女を裏守備にすることができなくても。せめて、この一発の攻撃さえ届けば、まだ希望が無くなるわけじゃない。そうだ、この攻撃さえあのヘリオスに届きさえすれば。

そんな僕のせめてもの願いは、ついに聞き取られることはなかった

た。

「攻撃宣言時にトラップ発動、血の代償。ライフポイントを500払うことで、手札のモンスターを通常召喚する！誇り高き戦士よ、そこまでこのカードを守護者に見せたいのならば見せてやろう！我が錬金術のさらなる高みのその一部を！私は場の原始太陽ヘリオスをリリースし、ヘリオス・デュオ・メギストスを召喚！」

その瞬間、太陽が弾けた。急激に大きくなったその光に体の包帯が耐え切れなくなつて燃え尽きていき、また新たな包帯が新しい太陽の下に体を構成し始める。頭を支えるためにより身長を低くし、体型を横に広げ……だが、そのスタイルが女性のそれであることは変わらずに。

フード LP4000↓3500

ヘリオス・デュオ・メギストス 攻4200

「攻撃力、4200……!?!」

「そう。ヘリオス・デュオ・メギストスの攻撃力はゲームから除外されたモンスターの数につき200ポイント、ヘリオスの倍だ。そしてアドバンス召喚を行うために原始太陽ヘリオスをリリースしたことでマクロコスモスにより除外され、もう200ポイント攻撃力が上がる。さあ、これで終わりだ。ヘリオス・デュオ・メギストスで迎撃、ウルカヌスの炎！」

稲石さんが、すまなそうにこつちを見てすぐに目を伏せる。本来なら攻撃の巻き戻しが発生するこの状況でも、バトルマニアの効果で強制攻撃をさせられる魔女にはそんなもの何の意味もない。

ゴーストリックの魔女 攻2300（破壊）↓ヘリオス・デュオ・メギストス 攻4200

稲石 LP100↓0

炎の衝撃をまともに受け、稲石さんがまた吹き飛ばされる。すぐに駆け寄ろうとしてフードに背を向けた瞬間、後ろから声をかけられた。

「どこへ行く気だ？さあ、私とデュエルだ」

「くっ……」

これはどうしようもない、申し訳ないけど稲石さんのことはほかの皆に任せよう。あの人が今のデュエルで教えてくれたいくつものことは、このデュエルを有利に進める役に立つ。

ありがとうございます、稲石さん。このフードはきつと僕が倒して、敵討ちと洒落込ませてもらいます。

「いいよ、それじゃあはじめようか。ユーノ、準備はいい？」

『当たり前だろ、誰に向かってモノ言ってるんだ』

「デュエル!!」

## ターン35 鉄砲水と菓子屋の陰謀

「まま、どうぞどうぞ遠慮なさらず吹雪さん」

「ありがとう、それじゃあいただくよ。それにしても、一体どういう風の吹き回しだい？君がブルー寮まで来るなんて珍しいじゃないか」

「さささ、どうぞどうぞ!!いいからこれ全部あげますんでまずは食べてくださいいよー!」

「あ、ああ……」

ここは、ブルー寮の吹雪さんの部屋。向かい合って座る僕の勢いに押し切られるような形で僕の持ち込んだ自家製クッキーやら自家製マドレーヌやら自家製ブラウニーその他もろもろエトセトラを少しづつ口に運び、優雅な動きで紅茶をすすった。こういう動作の1つ1つも、この人が（無駄に）モテる理由の一つなんだろう。

「……うん、おいしいじゃないか。僕もいろいろな女の子からお菓子をもらったりしたけど、これはかなりレベル高いよ。これ、君が作ったのかい？」

「それ嫌味ですか……あ、いえなんでもないです、はい。料理と菓子には少しばかり自信がありますから」

この言葉は本当。特に料理に関してはここ最近のレッド寮の食卓を仕切ってることもあってかなり色々できるようになってきた。具体的には両手で包丁を使ったり右手でキャベツを千切りしながら左手で揚げものをしたり。

もつとも、ユーノからは『ロクでもねえ特技だな』の一言でバツサリ切り捨てられたけど。

そんなことを思い出している間に、口元を軽く拭いた吹雪さんがこつちを見た。

「さて、本題に入ろう。わざわざこんなところに何も言わずにたくさんのお菓子を持ってきた、そしてこれだけの種類があるにもかかわらず1つも入ってない、おそらく意図的に避けたのであろうあるお菓子がある……これが意味するところはひとつ、違うかい？」

「さすが吹雪さん、わかってらっしゃる」



そう、ぼくがわざわざこんなにくさんの手土産まで持って来たのにはわけがある。それも、この学園中ではこの人に頼むのが一番現実的な。

「チョコだね?」

「はい!!」

そう、これが今日この場所に僕が来た意味。男子の本懐、バレンタインデーである。これまでだったら適当に冷めた目を送りつつ「リア充のバーカ」と言ってるだけの日だったのだが、今年からは事情が違う。なんとしてでももらいたい人ができたんだから。

「なるほどね。バレンタインまであと5日、それまでに彼女、河風夢想の好感度を稼ぎたいと。つまりはそういうわけだね?」

「はい……」

まさか相手までばれてるとは思わなかった。おかしいな、いつもそんなそぶりは完璧に隠してたはずなのに。なんで知ってるんだろうこの人。

「いや、そんな目で見られても……割とバレバレだよ?」

「なんですとーっ!!」

「うん。だってほら、これ見てごらんよ。ちよつとしたルートを使つてこの間もらってきたものなんだけど」

そう言つて吹雪さんが懐から取り出したのは、顔写真入りになっている1枚の名簿。よく見るとランキング形式になっているそれのタイトルはそのものズバリ、

【アカデミア女子大調査! 毎年恒例、今年のチョコをささげる人は? ランキング! ※男子禁制】

「……………一体、どんな裏ルートから持ってきたんですかこんな紙」  
「余計な詮索をしないで、書いてあることに目を通してごらんよ」

そう言われ、内容に目を通してみる。えーとなになに、吹雪さんがダントツ1位でつと。お、万丈目もいる。あ、三沢の名前も書いてあるな。カイザーはもう卒業したから全部無効票扱いとはかわいそうに。で、ちなみに僕の名前はあるのか……………あった!?

「遊野清明、全校順位79位。コメントとしてはそこそこ美形な中性

的な顔立ちがいい、という見た目的なものと料理の腕がうまく、頼めばよく色々なものを作ってくれるという優しい性格にひかれたものが多いね。デュエルの腕がいいのも評価高いよー。ただどちらにも共通しているのは本当ならもっという順位にいてもおかしくないけど、本人には意中の人がいるようなのでチョコは諦めます、という点」

「ほ、本当だ……」  
うわあ、恥ずかしい。明日からどんな顔して学校行けばいいんだろうこれ。変に意識しないのが一番なんだろうけど、ううむ。ちよつと紅茶でも飲んで落ち着こう。

「さ、これでわかったかい？ 僕に言わせればね清明君、君は自然体を装うってことが苦手なんだろう。だから、そんな君が彼女をデートに誘おうとしても……」  
「で、デートっ!？」

あまりと言えばあまりに不意打ちな爆弾に思わず嘔き出した紅茶をサツと何気なくかわし、吹雪さんは絶好調な様子で熱弁をふるう。「おつと危ない。まあとにかくだ、その様子だと厳しいようだけど。慣れないことをしようとして無駄に緊張して滑舌も悪くなって、彼女がOKを出したとしてもそのあと寮に帰って恥ずかしさのあまり悶絶することになるだろうね。食事が喉を通らず大事を取って早めに寝たら寝坊する姿が目に見えるようだよ」

「………なんですかその無駄に細かいビジョンは」  
でも、実際そう言われると思えば当たる節はある。というか、もうそんなふうになる未来しか見えないぞ僕。じゃ、じゃあどうすれば………

「って、だからそれを相談しに来たんですよ。生活費切り詰めてこれだけ作ってきたんですから、何かいい案があったらバシバシ言ってくださいよ〜」

「うーん、そう言われてもねえ」

「万丈目に聞きましたよ？ 七星門の鍵を盗ってつたのってあれ吹雪さんの入れ知恵なんですよ？」

「いや、確かにそうだけどね？ 別に手を貸さないなんて言っていない

「だけど、あの娘はちよつと難しいからね」

「あ、この人たぶん夢想にも一回手を出そうとしてたな。あの渋い顔を見る限り、よつぽどな結果だったらしいけど。うーん、それにしてもこういうことには百戦錬磨に見える吹雪さんでもダメか。」

「まあお菓子ももらったらしいも明日香が世話になつてるし、とりあえず簡単なことから試してみようか。清明君、メモの用意はいいかい？」

「はいっ、師匠！」

「こうして、吹雪さんからいくつかの作戦を伝授してもらった。してもらったのはいいけど、どれもなかなか恥ずかしいなこれ。ええい、夢想のためだ。明日からは頑張ろう。」

「バレンタインまであと4日：①まずは会話から」

「力いっぱい振りかぶって、と」

「授業のチャイムが鳴り、先生が来るまでのわずかな時間。夢想の座席は残念なことに僕の位置からかなり離れているため、話をするきっかけを作るには少しばかり強引にかねばならない。そのため  
の秘策……何の変哲もない消しゴムをぎゅっと握りしめ、夢想のいる方向に向けて狙いをつける。そう、これをブン投げて偶然を装いつつ夢想に拾ってもらおう作戦なのだ。」

「おーい、清明。何してんだ？」

「ちえすとおおっ……どわあああっ!!？」

「そつと振りかぶり、今まさにぼくの夢とか希望とかを色々乗せて夢想のもとに飛ばうとしていた消しゴムは十代が急に話しかけてくるせいで手元が狂い、あらぬ方向に飛んでいく。」

「そして間の悪いことに、その時ちようどクロノス先生が入ってきた。その顔面に、僕の消しゴムがぶつかろうとしている。」

「先生、危ないー！」

「ムウ？あ痛あ、やられたノーネ、お星さまが飛んできますーノ………」

「あつちやー……」

こつぴどく怒られたことは言うまでもない。今日は夢想と一言も話せませんでした。

バレンタインまであと3日：②花束を贈ってみよう

わー恥ずかしい。でも、ここで心が折れたら何のために昨日怒られたのかが分からなくなる。というか、こないまどき漫画ですら見ないような方法が本当に効くんだろうか。いや、ここは吹雪さんを信じよう。えっと、赤いバラの花束を……：大きさをケチらずになるべく大きいのにしよう!?か、家計が吹っ飛んでいく……。

「ということで万丈目」

「万丈目さんだ。まあいい、こんな昼間から何の用だ」

「実はこうこうこういうわけなんだけど、何かいい花屋つてある?ほら、このあたりつて野生のバラとか咲いてないし本土に行かないと花屋なんてないし」

こういうことなら、きつと金持ちに聞くのが1番だろう。いつぞやも明日香のためにいろいろやってた万条目ならこの気持ちもわかってくれるはずだ。

「……まあ、お前の気持ちはよくわかる。わかるが、今から花束を用意するのはもう無理だぞ?」

「なんでっ!?!」

言いにくそうな顔になる万丈目。と、いきなり出てきたおジャマ・イエローがかわりに解説してくれた。

『それがさあ、清明のダンナ。実は万丈目のアニキも天上院君に花束送るんだーって張り切って注文してたんだけど、最近本土とアカデミアの間に季節外れの台風が生まれてるから船が出せませんって断られてたのよ』

「バ、バカ!そのことは秘密にしておけてあれほど言っただろう!」

『で、でもダンナだって困ってるみたいだし……』

「チツ……もういい、戻ってろー見苦しいところを見せたな、とにかくそういうわけだ」

「う、うん……」

見苦しいったって別にいつもとやってることそんなに変わんないような気がするのには気のせいだろうか。いや、ここは黙っているのが得策だろう。それよりも重要なのは、花束の準備ができない点だ。しようがない、今からでも他の手を考えるか。

「ありがとね。じゃ、僕はこれで」

「待て！」

礼を言っただけで部屋を後にしようとする、意を決したような声で万丈目に呼び止められた。

「……………実はな、今の話にはまだ続きがあつてな。バレンタイン前に届けるのは無理だが、当日にはぎりぎり間に合うらしい。といっても、在庫の関係で届くのは一束だけなんだが。だからもしよかったら、お前にも数本ぐらいは分けてやってもいいぞ、うん」

「万丈目……………ありがと！夕飯何食べたい？リクエストは最優先で受けつけるから遠慮しないで言っただけでね！」

小躍りしたいのをぐっと我慢して部屋を出る。ちょうど真上にあつた太陽に、なんとなくガッツポーズして見せた。イエイツ！

バレンタインまであと2日：③恩を売っておくのも手段の一つ

「とはいえ、恩ねえ」

やっぱり定番としては困っているところを助ける、とかだろうか。そもそも彼女が僕になんとかできることを困っているとかなんて見たことないんだけど。

ちよつと前にワイトがあるカードだからという理由でエンジェルリフトを探してたのは知ってるけど、僕の小遣いとしての有り金全部ドロップンにつき込んでも当らなかつた時点でこれもダメ。ちなみに夢想が買ったなら1つ目でいきなり出てやんの。ああ、なんでこう狙ったカードが手に入らないんだろう。

そんな苦い思い出を噛みしめながら校内をぶらぶらしていると、曲がり角を曲がったところで偶然夢想の後姿が見えた。特にどうするつもりはなかつたけど、気が向いたのでこっそり後ろをついていく。ストーリーカー？言いたい奴は言えばいいさ。

「……………う？あ、清明だ、だつてさ」

もうバレたー!?え、ちよつとまだ10秒と経ってないよ。ただ勘  
良いのこの人!

「や、やあ夢想。こんにちは、今日もいい天気だねアははー」

ここでどんよりと曇ってればそれはそれでいいネタになったんだ  
ろうけど、あいにく今は空の半分くらいをまばらに雲があるという正  
直何とも言い難い天気。うわあ、一番会話にしにくい微妙な空だ。  
「様子が変だけど、何かあったの?つてさ」

これは僕が悪いんだろうか、それとも彼女が鋭いんだろうか。まさ  
か正直に話すわけにはいかない、ということぐらひは僕にもわかる。  
だって自分で言うのもなんだけど、これただのストーリーカードもん。

んー、何かいいごまかしは……よし、決めた。ごまかすネタがど  
こにもないなら、自分で作ればいいじゃない。

「(サッカー、お願い!)」

なるべくさりげなく手を後ろに組んで、デッキを軽くたたいて  
シャーク・サッカーを呼び出す。あっちの方でなんでもいいから何か  
騒ぎを起こしてくればそれを理由に逃げ出せる!

「あ、あれ清明、本当にどうしたの?保健室行こうか?だつてさ」

「え、ああ、うん、別に平気だよ、元気元気。それより夢想こそ、最近  
体調とかどうなの?」

「私?別に何も無いよ、だつて」

ますます不思議そうな顔になって首を傾げる夢想。ああ駄目だ、何  
か言うほどドツポにはまってる気がする。それにしても今のポーズ、  
かわいいなチクシヨウ。

「危ないぞ、その君!」

と、そこでようやくサッカーが何かしてくれたいらしい。切羽詰まっ  
た感じの声に振り向いて、そのままその方向に駆け出そうとしようと  
思っていた。あくまでも思ってた『いた』、大事なことなので繰り返しま  
した。ともかくそう思っていました、手もない鮫の体で何をどうやった  
のかこっちに向かって勢いよく回転しながら飛んでくる植木鉢、しか  
も中に土がたっぷり詰まった飛び切り重そうなやつを見るまでは。  
「っ!?!」

だけど大丈夫、あの程度のスピードならダークシングナーにとっては全然たいしたことない、本気出せば余裕でかわせる……と、そこまです考えた時点で背筋が凍った。もし僕がこれを避けたら、どうなる？当然あの植木鉢が止まるわけでもなし、位置的に言って僕の真正面にいる夢像にあたつちやうじやないか！つたくサッカーめ、もう少し考えてくれたってよさそうなものを！

「でーいー」

スツと腕を後ろに引いて、特攻してくる植木鉢を迎え撃つように打ち出したパンチ一発！焼き物の植木鉢程度、今の僕の体なら骨も折らずに叩き割れるはず！

だが、そんな計算すらもあざ笑うように、植木鉢の軌道がすつと変わった。野球でいうところのフォークボール、つまりは落ちる球である。全体重をかけて突き出した拳は空振りし、その腕の下を通って僕の腹にボディブロー。

「へっ？」

悲鳴すら上げる暇はなかったのは、情けない声を聞かれなくてラツキーだったと捉えるべきなんだろうか。あまりに一瞬の出来事で腹に力を込めて耐えることすらできず、そのまま意識が遠くなっていた。

「……………うー、痛てててて」

目が覚めるとそこには見知った天井、具体的には僕の部屋の天井が見えた。どうやら、誰かが運んでくれたらしい。十代かな、なんて考えながら起きあがって。

「つて、夢想!？」

「おはよ、なんだって」

そう言い、安心したような笑顔を見せる夢想。

「お、おはよう。えっと、もしかして」

夢想が運んでくれたのか、と聞こうとすると、急に彼女は時計を見てあわてたように、

「もうこんな時間、私は帰るからね、だつてさ」

そう言うが早い、びゅーつと走り去つていった。恩を売るところか、こつちが借りを作つちやつたみたいだ。吹雪さんも言つてたけど、慣れないことはするもんじゃやない、つてことだろうか。ああ恥ずかしい。

バレンタイン前日：④やはりこれがないと始まらない

「夢想ー、デュエルしよー」

「清明、もう具合はいいの？だつて。でもいいよ。デュエルしようか、だつてさ」

これが吹雪さんからもらつた最後の作戦。と言つてもやることは単純、デュエルで勝つてカツコいいところを見せるだけである。ただ、この作戦は諸刃の剣。僕がここで勝てば問題ないのだけど、もし負けたりしたらもう目も当てられないことになる。学園最強との呼び声も高い彼女相手にはかなりリスクな賭けだけど、その分当たつた時に得られるものは大きい。

だからこのデュエル、絶対負けられないんだ！

「デュエル!!」

「僕の先行、ドロロー！」

そういえば、この先攻ドロローも近々ルール改訂が行われてなくなつちやうそうだ。ううん、僕のデッキは手札消費があんまりいいとは言えないから、かなりこれは困るんだけど。反面フィールド魔法が重複するようになったから僕と相手お互いにフィールド魔法を使って、なおかつ相手がサイクロンとかで僕のフィールド魔法を破壊してきただけ場合という恐ろしく限定的な状況だけとはいえほんのちよつぴりだけチャクチャルさんが生き残る可能性も増えてきたのはよしとしよう。

まあ、今はまだ関係ない話なんだけど。

「ハンマー・シャークを召喚、そのまま効果発動。このカードのレベルを1下げて、手札から水属性でレベル4以下のモンスター1体を特殊召喚！僕がこの効果で出すのはレベル1、プリンセス鯽っ子姫！」

ハンマー・シャーク 攻1700 ☆4↓☆3



鰯っ子姫 攻0

「そして鰯っ子姫の効果発動、召喚か特殊召喚に成功したこのカードをゲームから除外して、デッキからレベル4以下の魚族を特殊召喚する！僕が呼ぶのはレベル4、竜宮の白タウナギ！」

マイクを器用にひれで抱える黄色の鰯が左右に流し目を送りながらどこかへ泳ぎ去っていくと、そのあとを追いかけるようにどこからともなく白タウナギがふらふらと泳いできた。ううん、魚の価値観はよくわからん。あれが追っかけになるほどカワイイちゃんなんだろうか。

竜宮の白タウナギ 攻1700

「さらにフィールド魔法、忘却の都 レミューリアを発動。このカードの効果で、水属性モンスターは攻守が200ポイントアップするよ」

おなじみの白い神殿。よし、当面の準備は整った。

ハンマー・シャーク 攻1700↓1900 守1500↓1700

0 竜宮の白タウナギ 攻1700↓1900 守1200↓1400

「さらにカードを2枚伏せてっと。僕はこれで、ターンエンド」

「私のターンだって。うーん……………ゾンビ・マスターを召喚。さらに手札の永続魔法、奇跡のピラミッドを発動するね」

夢想がカードを発動した瞬間、その背後に上空から光り輝く怪しいピラミッド型の何かが三角錐のとんがった部分を下にして降りてきた。そしてほのかに青く輝くそれのとんがった部分から光が走り、ゾンビ・マスターに命中する。さあ、一体何が始まるってんだ。

ゾンビ・マスター 攻1800↓2200

「攻撃力が上がった!？」

「そう。このカードは、自分のアンデット族の攻撃力を相手モンスター1体につき200ポイントアップさせるんだよ、だってさ。バトル！まずはハンマー・シャークに攻撃！」

「させないよ、トラップ発動！イタクアの暴風！」

ゾンビ・マスターが杖を振り上げた瞬間にもすごい突風が巻き起こり、たまらず振り上げた手を下して吹き飛ばされないうような地面に座り込んでやり過ぎそうとする。だけど、それこそが僕の狙い！

「イタクアの暴風……私のモンスターの表示形式を変更させるカードだね、つて」

「その通り。そしてゾンビ・マスターは防御力のなさに定評のあるアソビ族、これで守備力0がむき出しだよ！」

ゾンビ・マスター 攻2200↓守0

「むー。カードをセットして、これでターンエン……」

「エンドフェイズにリバース発動、サイクロン！今伏せたカード、そのまま破壊！」

先ほどよりもはるかに規模が小さいつむじ風が吹き、夢想の伏せていたカード……次元幽閉を破壊する。よしよし、いいカードを壊せた。

さすがにこれは予想外だったのか、ちよつと驚いた顔になる夢想。うん、普段あんな表情にはならないからなんか得した気分。

清明 LP4000 手札：2

モンスター：ハンマー・シャーク（攻・☆3）

竜宮の白タウナギ（攻）

魔法・罨：なし

場：忘却の都 レミューリア

夢想 LP4000 手札：3

モンスター：ゾンビ・マスター（守）

魔法・罨：奇跡のピラミッド

「さあ、このまま行かせてもらおうよ！僕のターン、またまたハンマー・シャークの効果発動！自分のレベルを2に下げて、レベル3のハリマンボウを特殊召喚！さらに、ツーンヘッド・シャークを通常召喚！」

今、夢想のフィールドにいるのは守備力0のゾンビ・マスターだけ。よし、勝算は十分。この勝負、いける！

ハンマー・シャーク ☆3↓2

ハリマンボウ 攻1500↓1700 守1000↓3000

ツーンヘッド・シャーク 攻1200↓1400 守1600↓1800

「バトル！まずはツーンヘッド・シャークでゾンビ・マスターに攻撃！」  
「奇跡のピラミッドのさらなる効果を発動！このカードを墓地に送って、アンデット族1体の破壊を無効にするよ！」

ツーンヘッド・シャーク 攻1400↓ゾンビ・マスター 守0

ツーンヘッドの牙がゾンビ・マスターに届く寸前、光るピラミッドが薄い壁になってその突撃を押し止める。む、そんな効果もあつたのか。

「だけど、ツーンヘッド・シャークには1ターンに2回攻撃ができるからね。そのまま連撃！」

ツーンヘッド・シャーク 攻1400↓ゾンビ・マスター 守0（破壊）

「これが決まれば！ハリマンボウ、白タウナギ、ハンマーの順で一斉攻撃、トリオ・ザ・ダイレクトアタック！」

「……………本当に？」

「へ？」

そう言われてよく見ると、先ほどツーンヘッドの攻撃でモンスターを倒したはずのフィールドには、濃い紫色の竜が一匹佇んでいた。

「あ、あれ？」

「ゾンビ・マスターが破壊されて墓地に送られたことで、手札から異界の棘紫竜きよくしりゆうの効果を発動。このカードを特殊召喚したんだよ、だってさ」

異界の棘紫竜 攻2200

「くっ、ターンエンド」

うーん、まずい。攻撃力2000越えのモンスターに対する対抗策がない。策があるとすれば、ハリマンボウでの自爆特攻ぐらいなんだろうか。でもあんまりやりたくないなあ。ポセイドン・ウェーブがあればすごいいいカモなんだけども。

「私のターン。でも清明、一体どうしたの？いつもより気合入ってる

みたいだけど」

「ちよつとしたわけありだね。今の僕は普段より当社比3割増しぐらいで強いのだ」

まさか正直に言うわけにもいかないので適当に誤魔化しておく。彼女はふーん、とよくわかってなさそうな顔で頷いていたけど、これ以上の追及はなさそうだな。

「うーん、奇跡のピラミッドの効果を使わないほうがよかったかな？ ナチュラル・ボーン・サウルスを召喚して、まずカップ・オブ・エースを発動。コイントスで表が出れば私が、裏が出れば清明がカードを2枚ドロウするね。えいっ！……ありや、裏だ」

よし、今日はある。カードを2枚ドロウして確認すると、より一層その気持ちは強まった。

「バトルするってさ。棘紫竜でハンマー・シャークを攻撃！」

紫色のブレスに、なすすべもなくハンマー・シャークが丸焼きになる。ごめんよ、でもよく頑張ってくれた。

異界の棘紫竜 攻2200↓ハンマー・シャーク 攻1900（破壊）

清明 LP4000↓3700

「そのままナチュラル・ボーン・サウルスでツーヘッド・シャークに攻撃するよ、だつてさ」

「それも受けるよ。ありがとう、ツーヘッド」

ナチュラル・ボーン・サウルス 攻1700↓ツーヘッド・シャーク 攻1400（破壊）

清明 LP3700↓3300

「……ふう」

さっきのターンで終わらせられなかったのは誤算だったけど、なんとかダメージは700で済んだ。これくらいならまだまだ平気だし、僕の間にはまだ2体のモンスターがいる。いくらでもやりようはあるね。

「カードを伏せるね。私はこれでターンエンド、だつて」

清明 LP3300 手札：3

モンスター：竜宮の白タウナギ（攻）

ハリマンボウ（攻）

魔法・罨：なし

場：忘却の都 レミューリア

夢想 LP4000 手札：0

モンスター：異界の棘紫竜（攻）

ナチュラル・ボーン・サウルス（攻）

魔法・罨：1（伏せ）

「僕のターン、ドロー！」

引いたカードはつと。お、来た来た。なんだか、このカードを召喚するのめずいぶん久しぶりな気がするなあ。

「僕はこのモンスター2体をリリースして、超古深海王シーラカンスをアドバンス召喚！」

超古深海王シーラカンス 攻2800↓3000 守2200↓2400

「そしてこの手札1枚をコストに効果発動、魚介王の咆哮！デッキからレベル4以下の魚族モンスターを、可能な限りフィールドに呼び出すよつと。カモーン、シャクトパス！オイスターマイスター！ヒゲアンコウ！ハリマンボウ！」

魚の王の咆哮に、素早くおなじみのメンツが寄り集まってくる。あ、アーチャーとかもつと優先して出すの忘れてた。まあいいか、たまにはほかの子を出しても。

シャクトパス 守800↓1000 攻1600↓1800

オイスターマイスター 守200↓400 攻1600↓1800

0

ヒゲアンコウ 守1600↓1800 攻1500↓1700

ハリマンボウ 守100↓300 攻1500↓1700

「つと、ここで今リリースしたハリマンボウの効果も発動。自身が墓地に行ったことで相手モンスター1体……どっちでもいいけど、ここはダメージ優先でナチュラル・ボーン・ザウルスの攻撃力を500ポイントダウンさせるよ」

ナチュラル・ボーン・サウルス 攻1700↓1200

よし、これで準備は万全だ。なにせ手札にあるのは死者蘇生、シールカンスのコストで捨てたのはキラール・ラブカなんだ。ここまでやっておけば、あとは力押しで押し切れるだろう。

「バトル、シールカンスでナチュラル・ボーン・ザウルスに攻撃！マリオン・ポロツカ！」

超古深海王シールカンス 攻3000↓ナチュラル・ボーン・サウルス 攻1200（破壊）

夢想 LP4000↓2200

魚の王の突撃の前に、なすすべなく骨になった恐竜が砕け散った。だが、そのバラバラになった頭蓋骨の目の部分から植物の根がよつきりと生えてきたかと思うとそれがみるみるうちに伸びて育ち、3つの赤い花を咲かせたかと思うとその中心からいくつもの種がはじけ飛ぶ。

デモンバルサムトークン×3 守100

「なっ!？」

「リバースカード、デモンバルサム・シードを発動してみたい。私の表側モンスターが破壊されて戦闘ダメージを受けた時、ダメージ500ポイントにつき1体のトークンを特殊召喚するんだってさ」

「むっ、厄介な。ターンエンド」

さすが夢想、かなりきつい一発を当てたのにそれを逆に利用されてしまった。伏せカードが1枚も用意できなかったのはかなり痛いな。

「私のターン、ドロロー。……………ねえ、清明」

「なーに？」

「この勝負、私がもらうからね」

「え？」

その自信たっぷりの言葉に、思わず聞き返す。その様子はさぞかし間抜けに映ったことだろう、と聞き返した後で思いしまった、と心の中で毒づいた。でも、そんなことをしている間にも彼女のターンは進んでいくわけで。

「プリーステス・オームを召喚して効果を発動するんだってさ。この

カードは自分フィールドの闇属性モンスター1体をリリースして800のダメージを与える効果を持つてるの」

「1体、800………」

えっと、僕のライフが残り3300だから、4回まではギリギリ耐えられるわけだ。まずデモンバルサム・トークンで3回ダメージを受けて、さらに棘紫竜で1回。で、最後に残った自分をリリースすれば合計5回。

……………ダメじゃん。

「発射！なんだってさ」

清明 LP3300↓2500↓1700↓900↓100↓0

「ま、負けた……………」

しかもものすごくあっさりとははは、こりゃチョコは絶望的かな。何か彼女が言ってた気もしたけどもう話をする気力もなかったので適当に聞き流し、とぼとぼとレッド寮に帰ることにした。

どこの道を通ったのかもよくわからないままぼんやりと寮にたどり着き、そのまま頭から布団かぶってさっさと寝ようと思ったのに僕の部屋ではなぜか万丈目が待ち構えていた。そして僕がドアを開けた瞬間、間髪入れずに土下座のポーズをとる。たいていのことなら無視しようかと思ってたけど、これにはさすがに驚いた。

「何、万丈目。どつたの？」

「どつたの、だと？すまない、清明。本当にすまん！」

この一言を皮切りにワーワーと喋る万丈目をなだめながら話を聞いていくと、なんでも花束を届けるための万丈目グループのヘリのパイロットが着地場所がレッド寮周辺に見つからないとの理由で上空から花束を投げ落として渡そうとしたらしく、その瞬間に吹いてきた風に吹き飛ばされて鼻は全部海中に消えていったそうなの。はっはっは、ここまで踏んだり蹴ったりだともう笑うしかないね。

「それでだ。なんとか海に飛び込んで拾おうとしたんだが、ほとんどが海水でダメになっていてな。なんとか見栄えのいいものがこれし

か……………」

そう言つて差し出す手の中には、真つ赤なバラが1本。うーん、花束が1本の花に、か。随分スケールダウンしたもんだ。

「万丈目グループの不始末は俺の責任も同じ、俺にこの花をプレゼントする資格はない。だから、せめてお前が受け取ってくれ。なに、俺のことなら心配するな。天上院君へのプレゼントは、何かもつとふさわしいものを考えるさ」

そういう万丈目の服は海に飛び込んだという言葉通りまだかすかに湿つていて、どれだけ必死になつて拾い集めようとしたのかがよく伝わってきた。それに、そんな震え声だと無理してるのがバレバレだよ、万丈目。

「いいよ、もう。それ、あげるよ。万丈目が頼んだ花なんだし、僕にはもう必要じゃないしね」

「必要じゃない？待て、それはどういう……………」

「はい、この話はおしまい。僕はもう今日は寝るから、夕飯はテキトーに作つといてね。お休みー」

なかなか帰ろうとしない万丈目を半ば強引に部屋から押し出し、電気を切つてさっさと布団にもぐりこむ。視界が閉ざされる寸前に見えた景色は、なんだか妙にぼやけていた。まるで、僕の目が水か何かでうるんでいるように。

そのまま眠りに落ちる寸前、壁の向こうから万丈目の声が出た。

「清明……………すまん」

と、ただ一言だけ。だけど、言いたいことは僕にはよく伝わった。

そして今日も朝が来る。バレンタインデー当日である。よつぽど今日は休もうかとも思つたけど、そこまでするのもさすがにどうかと思つたので素直に学校に行くことにする。とはいえギリギリまで布団の中で粘つてたらいつの間にか僕以外の皆はもう出発していたんだけど。ああ、今日はなんだか足が重いなあ。せめて夢には今日一日は会いたくないなあ。



「清明、おはよう。つてさ」

……と思つた矢先にこれだ。世の中の流れつてのは、よーつぽどまがつた性格とひねくれた根性を元に動いてるらしい。

まあでも、挨拶は大事。人間関係の基本だしね。

「お、おはよう、夢想」

ああ駄目だ、会いたくないっていう気持ち割とストレートに声に出てる。こんなんじゃないや嫌われても文句は言えないだろう。でも、正直今だけは一人にしておいてほしいです。

「あのさ、清明。これ、もしよかつたらね、なんだつて」

彼女にしては妙に歯切れの悪いそんな声とともに、何かが動く気配。振り返つて僕の少し後ろを歩いていた夢想の方を見ると、彼女の手には何か包みが一つ握られていた。あれつてまさか、いやまさか、ね。あそこまで情けない負け方したつてのに、さすがにそれは虫が良さすぎるつてもんだ。少しは現実見ようや、僕。

「はい、どうぞ。……………チョコだよ、だつてさ」

「え……………」

ドツキリ。何よりもまずその単語が思い浮かんでどこかにカメラマンが隠れてないか見まわすようになった辺り、僕もこの1年でだいぶ性格が荒んできたんだろうか。結論から言うと、そんなモノ見つからなかつたんだけど。

え、じゃあちよつと待つて。これがいわゆるチョコレイト？チョコもどきとかチョコだましとかそういうオチじゃなくて、いわゆる原材料力才のあのチョコ？あーうん、今すぐく混乱してます、僕。本来ならお礼を言うのが当然つてもものなのに、それすらも思いつかないし。みつともないなあ、恥ずかしいなあ、僕。

「じゃあ、もう授業始まるから、ね」

僕が完全にフリーズしているうちに、そう言つてたつと駆け出す夢想。僕は何か声をかけるわけでもなく、その後ろ姿をじつと見ていくだけだった。

ちなみに、これは後で知つたのだが。わざわざ朝一番に寮まで来て渡してくれたのは実は万丈目のおかげらしい。本当ならもつと後に

なつて渡すつもりだったのを、『だいぶ落ち込んでるみたいだから、もし奴に何か渡すものがあるなら早めに行つてやれ。……いや、奴のために今行つてほしい。頼む、この通りだ』とわざわざ頭まで下げたんだそうだ。まったく、万丈目め余計な真似を。

もつと余談。結局明日香は今年チヨコを作らず、必然的に万丈目自身は彼女からチヨコをもらえなかつたそう。あと海水に漬けたのがやつぱりまずかつたらしく、最後に残つたバラも朝見たらしなびて生ごみに直行したらしい。

……ホワイトデーにはどうせクッキー焼くし、少し多めに焼いておいていくつか皆にもあげようかな。

## 2年生編：そして、光が溢れ出す ターン36 鉄砲水と伝説のHERO

ある晴れた日のこと、レッド寮にて。

「えーっと、ようこそいらつしやいました……………かな？ いやでも一応こっちが年上なのにあんまり仕立てに出るのもなんだかなー」

『さっきから何をぶつぶつ言つとるんだお前は』

2年生になった僕ら……………この僕遊野清明ゆっのあきらに十代や万丈目、翔といったいつものメンバー。これから来るであろう新入生に対する歓迎のあいさつを考えてあーでもないこーでもないと頭を悩ませていたら、若干呆れた感じの声に邪魔された。声の主は、去年僕が入学試験直前に交通事故でポックリ逝っちゃったときからの腐れ縁な幽霊、ユーノ。デュエルの腕は僕よりずっと確かだけど、どうにもこうにも口が悪い。性格も悪い。もう慣れたけど。

「っと、それはいまさら言ってもしょうがないか。ほらあれだよ、新入生向けの挨拶。どうせレッド寮なら来るとしても数人だろうけど、コミュニケーション超大事だし」

『あー、うん。そうか、まあ頑張れよ』

「あれ、なんかノリ悪いね。そろそろ成仏しそう？」

もちろんこれはただの冗談だけど。この凶々しい存在抜群な幽霊が成仏とか、もはやただのギャグの域だ。さ、続き続き。えーと、やあやあ遠からん者は音に聞け、近くば寄って目にも見よ、我こそはデュエルアカデミアオシリスレッドの偉大なる先輩、遊野清明である……………うん、ないな。初対面でこんな挨拶されたらさすがにドン引きものだ。

「というこで十代、デュエルしようー！」

「お、デュエルか？ いいぜいいぜ、売られたデュエルは買うのが礼儀

！」

『つまりどういうことだよ。いや、聞いただけ野暮なんだろうけど』

ということでも何も無い。普段使わない脳みそを使ったせいでちよつと疲れてきたのかはたまた飽きてきたのか、なんとなくカードを使いたくなくなってきたのだ。十代なら了承してくれるだろうと思つて尋ねたら、案の定二つ返事で乗つて来たし。去年は三幻魔だの卒業デュエルだので精神的にくるものがあるデュエルばかりだったから、こういう気楽なデュエルはちよつと久しぶりかも。

「デュエル！」

デュエルディスクが指示したのは、僕の先行。うーん、今年度からデュエルモンスターズのルールが変わつたせいで先行は最初のターンにドロウできないんだよなあ。まあ、この5枚の手札で頑張ろう。沿う気持ちを切り替え、改めて手札を見る。

「僕のターン、オイスターマイスターを召喚！」

今年もお世話になるであろう、僕のデッキの切り込み役ともいえる牡蠣の戦士を召喚する。例えば、去年入学試験の時も先陣切つて飛び出してつたのはこのモンスターだっけか。

オイスターマイスター 攻1600

「さらにカードをセットして、これでターンエンド」

「俺のターン、ドロウ！エレメンタルヒーローE・HERO プリズマーを召喚！」

E・HERO プリズマー 攻1700

十代が召喚したのは、下級のHEROにしては珍しく高い攻撃力を持った宝石のように光り輝く戦士。まいったな、これじゃあオイスターマイスターが戦闘で負ける。

「なんてねっ！トラップ発動、フィッシュチャーチー！魚族モンスターのオイスターマイスターをリリースしてプリズマーを破壊、さらにカードを1枚ドロウ！」

オイスターマイスターが弾丸のように素早く走り抜け、プリズマーにタックルを仕掛ける。2体のモンスターは同時に倒れたが、僕の場合は空にはならない。

オイスタートークン 守0

「オイスターマイスターがバトル以外で墓地に送られた時、トークンを1体特殊召喚つと」

「やるな！だけど、俺だってまだ負けないうぜ！魔法カード、増援を発動。デツキからレベル4以下の戦士族、マジック・ストライカーをサーチ。そして手札のマジック・ストライカーは、墓地の魔法カード1枚を除外して特殊召喚できる！増援を除外して、特殊召喚だ！」

「むむ、あてが外れたな」

マジック・ストライカー 攻600

召喚権を使って出したモンスターを片付けてしめしめ、と思ったのもつかの間、慌てることなく次のモンスターを出してくる十代。確かあの小人の剣士には、直接攻撃効果があったはずだ。さあ、僕とオイスタートークン、どっちを攻撃してくる？

「行くぜ、バトル！マジック・ストライカーで、オイスタートークンに攻撃！ダイレクト・ストライク！」

マジック・ストライカー 攻600↓オイスタートークン 守0  
(破壊)

「むー、やっぱりモンスターを減らしに来たか」

まあ、ここまでは十分想定内。まだまだ、勝負は全然これからだね。

「メイイン2でカードをセットして、ターンエンドだ」

清明 LP4000 手札：4

モンスター：なし

魔法・罫：なし

十代 LP4000 手札：3

モンスター：マジック・ストライカー 攻600

魔法・罫：1(伏せ)

「僕のターン、ドロー。フィールド魔法、ウォーターワールドを発動！」

いくつもの水柱が地面から湧き上がり、みるみるうちにあたりの風景がソリッドビジョンのそれになっていく。さあ、ここからはこっちの攻撃だ！

「そしてブリザード・ファルコンを通常召喚して効果発動、このカード

の攻撃力がアップしているときに1度だけ1500ダメージを相手に与える！」

「なんだと？うわっ！」

ブリザード・ファルコン 攻1500↓2000 守1500↓1100

十代 LP4000↓2500

「先制攻撃はいただきね。そのまま攻撃！」

青い鷹が素早く宙を舞い、かぎ爪で小人の戦士を摘み上げて地面にたたき落とす。なかなか痛そうなその絵面に、さすがにちよつと罪悪感がわく。

ブリザード・ファルコン 攻2000↓マジック・ストライカー

攻600（破壊）

「だけどマジック・ストライカーは、バトルによる自分への戦闘ダメージを0にする。俺はダメージを受けないぜ」

あ。忘れてた。

『……あほ』

「わ、わかってたもんね！これでターンエンド！」

「俺のターン！来たぜ来たぜ、融合を発動！手札のフェザーマンとバーストレディを融合して、来い！マイファイバリットカード、エレメンタルヒーローE・HERO フレイム・ウイングマン！」

緑と赤のコントラストがよく似合う、十代がずっと使い続けているHERO。いつかは使ってくるのは予想してたけど、このタイミングで来るか……。

E・HERO フレイム・ウイングマン 攻2100

「フレイム・ウイングマンでブリザード・ファルコンに攻撃！フレイム・シユート！」

E・HERO フレイム・ウイングマン 攻2100↓ブリザード・ファルコン 攻2000（破壊）

清明 LP4000↓3900

戦闘ダメージ自体は、たいしたことないかすり傷みたいなものだ。だけど、あのモンスターが怖いのはそこじゃない。その効果だ。案の

定、すでに奴は龍の頭部のような形をしたその腕をこちらに向けて、炎を打ち出す準備をしている。

「フレイム・ウィングマンがバトルでモンスターを破壊した時、破壊したモンスターの攻撃力ぶんのダメージを与えるからな。ブリザード・ファルコンのものと攻撃力は1500、よってその分のダメージだ！」

清明 LP3900↓2400

「くっ……」

「おっと、まだ終わるには早いぜ？速攻魔法、融合解除を発動！」  
「へ？」

十代が掲げた速攻魔法。そして僕の場合にモンスターはいない。まずい、すぐくまずい。だってあのカードの効果は！

「融合モンスター1体をエクストラに戻して、その素材を特殊召喚だ！戻って来い、フェザーマンにバーストレディ！」

E・HERO フェザーマン 攻1000

E・HERO バーストレディ 攻1200

「そしてバトルフェイズ中に特殊召喚されたモンスターは、さらなる追撃ができる………2体のモンスターで同時攻撃だ！フェザー・ブレイク！バースト・ファイヤー！」

E・HERO フェザーマン 攻1000↓清明（直接攻撃）

清明 LP 2400↓1400

E・HERO バーストレディ 攻1200↓清明（直接攻撃）

清明 LP1400↓200

「あ、危なかった……」

あの2体の素の攻撃力が低くて助かった。一般的なアタッカークラスのパワーがあったら即死だった。とはいえ僕のライフはあつという間に残り200、全然気が抜ける状況じゃあない。

『だけどやっぱり融合は手札消費が荒いな。あーっという間に手札0か』

「うん、悪いことばかりでもないのかな？ただ十代のあの伏せカード、あれ気になるんだよなあ……」

気にしてたってどうしようもないのは僕もよくわかってるんだけどね。うーん、どうしたものか。ま、とりあえずドローしてから考えますか。

清明 LP200 手札：3

モンスター：なし

魔法・罫：なし

場：ウォーターワールド

十代 LP2500 手札：0

モンスター：E・HERO フェザーマン 攻1000

E・HERO バーストレディ 攻1200

魔法・罫：1（伏せ）

「僕のターン！モンスターをセット、さらにカードを伏せてターンエンド」

どうしようもない。たった200しかライフが残ってない以上下手な真似もできないし、ここはいったん引いて様子を見ようっと。

「なら俺のターンだ！ドロ、Rーライトジャステイスを発動するぜ。このカードの発動時に自分フィールドにいるE・HEROの数だけ魔法・罫を破壊するこのカードは、俺の場にフェザーマンとバーストレディがいることでお前のウォーターワールドと伏せカードを破壊だ！」

十代の頭上に『R』の文字がでっかく輝くと僕のカード2枚が破壊されて風景も元のレッド寮前に戻ってしまい、あらら、と小さくつぶやく。

「バーストレディ、その伏せモンスターに攻撃！バーストファイヤー！」

バーストレディが掌の上に小さな火炎弾を作り出し、伏せモンスターめがけて放り投げると着弾地点で小規模な爆発が巻き起こる。だが、その炎の中からゆらりと立ち上がるシルクハットに燕尾服の影が一つ。

ふふふ、勝負を焦ったね十代。

E・HERO バーストレディ 攻1200↓??? 守1800



十代 LP2500↓1900

「ペンギン・ナイトメアの効果を使うよつと。このカードはリバースした時に相手の場のカードを1枚、バウンスできる！手札に帰れ、バーストレディ！」

「うわっ!?なら、メイン2でフェザーマンを守備表示に変更、さらにバーストレディをもう1回通常召喚。ターンエンドだ」

E・HERO フェザーマン 攻1000↓守1000

E・HERO バーストレディ 攻1200

流れがこっちに傾いてきた(たぶん)ことを悟った十代がエンド宣言した瞬間、ぱあん、ぱあんと数発の銃声が響き渡る。ペンギン・ナイトメアの後ろに潜んでいた男が、手にした銀色のライフルでフェザーマンを撃ち落としたのだ。

「さつき十代がライトジャステイスで破壊したモンスター、白銀のスナイパーの効果を発動。魔法・罨ゾーンにセットされたこのカードが相手によって破壊されたターンのエンドフェイズにこのカードを墓地から特殊召喚して、相手のカードを1枚破壊する！」

白銀のスナイパー 攻1500

清明 LP200 手札:2

モンスター:ペンギン・ナイトメア 守1800

白銀のスナイパー 攻1500

魔法・罨:なし

十代 LP1900 手札:0

モンスター:E・HERO バーストレディ 攻1200

魔法・罨:1(伏せ)

「そして僕のターン。ペンギンを攻撃表示にしてフィールド魔法、忘却の都 レミューリアを発動！このカードはウォーターワールドよりも攻撃力の上がり幅こそ小さいけど、攻守まんべんなく強化できる。さらにペンギン・ナイトメアが表側表示の時、自分フィールドの表側水属性モンスターの攻撃力は200ポイントずつアップ！ま、このスナイパーさんは地属性だからどっちも関係ないけどね」

ペンギン・ナイトメア 攻900↓1100↓1300 守180

0↓2000

「バトル！えーとユーノ、攻撃するときには攻撃力の低い方からがセオリーだったっけ？」

『んなもん俺に相談するなつての。ただ、それはゴーズ警戒する時の対処法だぜ』

ちよつと不安になったので聞いてみる。確かそう習ったような気がするんだ。習ったといっても授業は寝てることが多いから、稲石さんのテスト前に受ける赤点回避用の個人授業か三沢に宿題を聞きに行つた時のことだろう。

「バトル、ペンギン・ナイトメアでバーストレディに攻撃！」

「んー、惜しいけどしょうがないな。トラップ発動、異次元トンネル―ミラーゲート―！」

急に目の前の空間がぐにやり、とねじれ曲がると、なぜか僕の目の前にバーストレディが立っていて十代の側に立っているペンギン・ナイトメアが攻撃してきて……あれ？故障？

「ちよつと中断しよつか、十代。デュエルディスクなんて複雑なもの直せるかどうかわかんないけど」

「いやそうじゃないぜ!?これがミラーゲートの効果で、このターンのエンドフェイズまで攻撃を受けた俺のHEROと攻撃してきたお前のモンスターのコントロールを入れ替えるんだよ」

「っ!？」

あつぶな！セオリー通り……では別にないみたいだけど、とにかくこつちから先に攻撃してよかつた！今のでスナイパーさんの攻撃から入ってたら戦闘ダメージで敗北確定じゃん！

ペンギン・ナイトメア 攻1300↓E・HERO バーストレディ 攻1200（破壊）

清明 LP2000↓100

さて、とりあえずライフが100だけ残った今どうするべきか。一応スナイパーさんに攻撃させればナイトメアを倒してわずかながらのダメージが通せるけど……。

「ここで攻撃してもちよこつとしかダメージも通せないのに、僕に自

分のモンスターを攻撃しろっての？冗談じゃないよ、それにミラーゲートの効果はエンドフェイズまでしか続かないんだ。スナイパーさんを守備表示に変更。カードを1枚伏せてターンエンド。戻っておいで、ナイトメア」

エンドフェイズを迎えると同時にはつと気が付いたように辺りを見回し、とてと慌てて僕のフィールドまでペンギン歩きで帰ってくるナイトメア。顔は凶悪そうだけど、こういうことはちよつとかわいいと思う。

白銀のスナイパー 攻1500↓守1200

「俺のターンだな。ドロー！自分の手札が1枚だけの時、バブルマンは手札から特殊召喚できる！さらにこのカードを特殊召喚した時自分がほかのカードをコントロールしていなければ、デッキからカードを2枚ドローできる」

「うげ、またこのタイミングでバブルマン!？」

エレメンタルヒーロー  
E・HERO バブルマン 攻800

やっぱ、なんだ。十代の引きは化け物だ。そんな思いで、十代がカードを引くのをじつと眺める。

「通常魔法、アームズ・ホールを発動。このターンの通常召喚を封じる代わりにデッキトップを墓地に送り、デッキか墓地から装備魔法1枚を手札に加えることができる！デッキからバブル・シヨットを手札に加えて、このカードをそのままバブルマンに装備！これでバブルマンの攻撃力は800ポイントアップするぜ」

E・HERO バブルマン 攻800↓1600

「バトルだ！バブルマン、ペンギン・ナイトメアに攻撃！バブル・シヨット！」

バブルマンが両手で抱えたでっかい銃から、泡の塊が打ち出される。あんな攻撃受けたら僕の負けじゃないか。まだ負けたくないし、もつと粘らせてもらうよ！

「トラップ発動、ポセイドン・ウェーブ！その攻撃を無効にして、さらに僕の場合に水族のナイトメアがいることで十代、そっちに800の効果ダメージだよ！」

水の壁が泡の一撃をはじき、そのまま十代にぶつかる。ふー、なんとか防げた。

十代 LP1900↓1100

「さすがにやるな。カードをセットして、ターンエンドだ」

清明 LP100 手札：1

モンスター：ペンギン・ナイトメア 攻1300

白銀のスナイパー 攻1500

魔法・罨：なし

場：忘却の都 レミューリア

十代 LP1100 手札：0

モンスター：E・HERO バブルマン（ショット） 攻1600

魔法・罨：バブル・ショット（バブルマン）

1（伏せ）

「僕のターン！よし、いいところに来てくれたよ！ナイトメアをリリースして、ジョーズマンをアドバンス召喚！」

ペンギンの姿が消え、全身に鋭い牙のついた口を持つ勇ましい鯨の獣人が仁王立ちする。腹についたひとときわ大きい口がちがちとかみ合わせるその姿は、とても頼もしいものに見えた。

ジョーズマン 攻2600↓2800 守1600↓1800

「ジョーズマン、頼んだよ！バブルマンに攻撃！」

「バブル・ショットの効果を発動！装備モンスターが戦闘破壊されるときに身代わりになってこのカードを破壊し、プレイヤーへのダメージも0にする！」

ジョーズマン 攻2800↓E・HERO バブルマン 攻1600

0

E・HERO バブルマン 攻1600↓800

勢いよく振られた右腕が、バブルマンの体を吹き飛ばす。だが、バブルマンはそのままくるっと空中で1回転して着地を決めるだけで、破壊はされなかった。

まあ、僕だつてそこまでは計算済みだ。これでバブルマンは攻撃表示で棒立ち状態、今ならスナイパーさんで狙い撃てる！

「というわけで頼みますよ、スナイパーさん！」

「確かにその攻撃を止めるカードは、今の俺は持ってない。だけど、HEROはただ負けるなんてことはしないぜ！トラップ発動、エレメンタル・チャージ！俺はこのカードの効果により自分の場のE・HERO1体につき1000ライフを回復する！」

白銀のスナイパー 攻1500↓E・HERO バブルマン 攻800（破壊）

十代 LP1100↓2100↓1400

「くっ、むしろ回復された！ええい、カードをセット、僕はこれでターンエンドっ！」

これで、十代にはもう手札も場のカードもない。だけど、こういう時に限ってあいつはとんでもないカードを引いてくれる。それが、十代の十代たるゆえんなんだから。

「俺のターン、ドロー！魔法発動、ホープ・オブ・フィフス！このカードは墓地のE・HERO5体をデッキに戻してカードを2枚引くことのできるカードだけど、この発動時に自分の手札にも場にもほかのカードがない場合、ドロー枚数は3枚になる！俺は墓地のプリズマー、フェザーマン、バーストレディ、バブルマン、スパークマンをデッキに戻して3枚ドロー！」

「スパークマン？そんなカードいつの間に……………」

『いや、アームズ・ホールの時に送ったデッキトップのカードだな』

「そういうことさー！」

まずいまずいまずい、あの十代に3枚もカードを引かせなんてしたら、何をやってくるかわかったもんじゃやない。だけど、妨害のカードなんて僕の間にはない。結局、指をくわえてみることにしかやることはないのだ。

「さあ、行くぜ清明！融合を発動、手札のワイルドマンとエッジマンを融合！来い、E・HERO エレメンタルヒーロー ワイルドジャギーマン！」

ワイルドジャギーマン。黄金の鎧をまとうワイルドマンの進化した姿……………そういえば聞こえはいいが、その鎧が実に中途半端な部分しかカバーしていないためどっちかというサイボーグワイルドマ

ンとか工場長のオッサンとか散々な言われようをされるある意味イラスト的な意味でもつとも不遇なHEROだ。

だが、その効果は攻撃力も相まってかなり強い。やれやれ、このセットカードがポセイドン・ウエーブだったら……いや、現実を見よう。このカードは、何かの役に立つかと思つてセットした速攻魔法、サイクロンだ。それ以外の何物でもない。

E・HERO ワイルドジャーマン 攻2600

「ワイルドジャーマンは、1ターンに相手モンスター全てに攻撃ができる！だから、もしその伏せカードで攻撃を無効にしても意味ないぜ！白銀のスナイパーに攻撃、インフィニティ・エッジ・スライサー！」

………これがサイクロンなのは黙つところかな。なんかちよつと悔しいし。

E・HERO ワイルドジャーマン 攻2600↓白銀のスナイ

パー 攻1500（破壊）

清明 LP100↓0

「かーっ、負けたかあ……」

「ガツチャ！楽しいデュエルだったぜ！」

いつも通り、びしつと満面の笑みでこちらに向かってポーズをとる十代を見ながら墓地のカードを引っ張り出してデッキに戻す。あとはシャツフルして、と。よし、これでバツチリだ。

「うん、まあ、僕も楽しかったよ。結局勝てなかったけどね」

「そりゃあなんてったって、俺は未来のデュエルキングになる男だからな。そう簡単に負けるわけにはいかないぜ」

そんなことを全く悪びれずにまっすぐな瞳で語る十代に、なんだか知らないけども思わず笑いがこみあげてきて。本当に、去年からまるで変わっていないんだから。そんなことを全く悪びれずにまっすぐな瞳で語る十代に、なんだか知らないけども思わず笑いがこみあげてきて。本当に、去年からまるで変わっていないんだから。

『なーに他人事みたいに黄昏てんだ。お前もまるつきり変わってねーよ』

「おお、俺もそう思うぜ。お前もなるんだろ？デュエルキングにさ」  
うーん、そうか、僕も変わってはいないのかな。これはどこかで聞いた話だけど、人は大抵、成長する中で大切なものを捨てちまうらしい。

なら、変わってないってことは裏を返せばその大切なものを捨ててないってことなんだろう。まあ、それなら別に悪いことじゃないのかなって思う。

と、その時、ヒューッとレッド寮に爽やかな風が吹いた。ああ、今日も気持ちのいい天気だ。それじゃあ、また原稿を考える作業に戻ろうかな。

「へ、何言つてんだ？今年のレッド寮に新入生は来ないって掲示板に張ってあったぞ？」

「えっ」

『あーあ、ばらしちまったか』

ギギギギギ、と音が出そうになるほどゆっくりと、ユーノのいる方を振り向く。こーっそりと忍び足でどこかに逃げようとする彼の後ろ姿が見えた。

「なんで教えてくんないのさー！」

『んなもん確認しないお前が悪いわ！』

ユーノを追いかけて、どたばたと走り回る。それを、十代が笑いながら見ていた。去年がおかしかっただけで、これが本来の日常なんだろう。それはそれで、ちよつと残念な気もする。命どころか魂まで賭けた闇のデュエルなんてもうこりこりなのは当然なのに、なんでそう思ったりするんだろうか。あるいはそれも、うちの神様のせいなのかもしれない。

『なんでもかんでも私に押し付けられないように』

あ、筒抜けだったらしい。たいしたもんだ、僕の神様………地縛神

Cha cu Cha ll hua は。

## ターソン37 鉄砲水と変幻忍法

授業が終わり、昼休みを告げるチャイムが鳴った。これから30分ほどは、たのしいたのしいお弁当の時間だ。少なくとも、僕たち以外にとつては。

今日は僕が珍しく寝坊してしまったため、全員分の弁当はおろか朝食すら作れていない。さすがに罪悪感を感じるが、それ以上に差し迫った問題としてとりあえず腹減った。

「さーいしよはグー、ジャーケン………ポイ！」

チョコキ、チョコキ、チョコキ、パー。最初から順に十代、翔、万丈目、僕である。つまり僕の一人負け。

「くっ………今ちよつと後出ししてなかった？」

苦し紛れに言いがかりをつけてみるも、そんなことされてないのは僕が一番よくわかってるわけで。

「馬鹿を言え。この万丈目サンダーが、そんなくだらん真似をすると思うか。そもそも元はと言えばお前が悪いんだ、諦めて買って来い」「ですよー」

逆に一喝され、さっさと席を立つ。貧乏なウチの今月分の予算を軽く確認し、なんとかドロパンを人数分買う程度の余裕はあると判断。よかったよかった、これで赤字だったら目も当てられない。

『っーかお前、最近は遊野洋菓子店で結構利益入ってきてんだろ。その金はどこに消えてんだ？』

「いや、人間き悪いね。それじゃあまるで僕が使い込みしてるみたいじゃん………というかユーノ、今日は学校来てるんだ。めずらしいね、いつもはぐーすか寝てるのに」

ちなみにこの遊野洋菓子店、正式名称『遊野洋菓子店 YOU K NOW』とは、文字通り僕が経営するオーダーメイド洋菓子(?)専門店である。何でも先だつてのホワイトデーに女子寮の皆さんで食べてくださいって送っておいた夢想用に焼いたクッキーの余りが大好評を博したらしく、相応の金は払うからまた何か作ってくれと数人がかりでわざわざ教室まで来て頭を下げられたのだ。



その時は材料費のことを気にせず、菓子作りができ、おいしく食べてもらえるうえにバイト代まで稼げるならまあいいかと引き受けたし今もその気持ちは変わってないが、正直アシスタントの一人も欲しいところである。色々試してはみたんだけど十代たちには危なっかしくて任せられないし、ユーノはそもそも幽霊だから物が持てない。サッカーや霧の王といった精霊たちはよく働いてくれるんだけど、普段からデュエルでお世話になりっぱなしなのにこんなことにまで引つ張り出すのはさすがにどうかと思うので自主規制。結局今に至るまで僕が一人で注文をこなしていることになる。

『ふむ。それで？あの金は何に使ってんだよ』

「あれねえ……注文受け付け用について無理やり寮に電話回線繋いだときに全部消えちゃった」

『はあ?』

嘘じゃない。もともとオシリスレッドは校舎から遠いうえに、デュエルアカデミア自体が海のど真ん中にある孤島なのだ。万丈目グループのコネがあつたから多少は安上がりになったものの、電気はあるけど電話がない（そもそもPDLで連絡が成り立つため必要がないという話も）ここに回線をつなげるのはなかなかお金がかかったのだ。

『そーかそーか、最近なんか工事やってると思ったらそんなことしてたのか。つーかそれにしてもそんなにねえ』

「連絡取るのが楽になるからって稲石さんの廃寮に繋いでもらったせいかも」

『もー何も言わん、好きにしてくれ……ん?』

何を言っても無駄だといわんばかりに話を切り上げ、横の方に注意を向けるユーノ。つられてそつちを見ると、なにやらわーわーと騒ぐ声。はて、なにかあつたんだろうか。

「俺が勝ったんだ、ちゃんとアンテイルルだつて言つたら!だからそのカードをさっさとよこせ!」

「た、確かに言つてたけど……でも私、いやだつて言つたよ……」

「がたがたうるせーな、どこ探しても宵闇の使者がお前の持つてる」

枚しか見つかなかったんだから諦めろよ！へへへ、これで俺のデッキもパワーアップだ」

「お、お願いです、返してください！」

「……………なんだろうこの時代劇みたいな典型的悪役。器量よしで病気のおとつっあんと二人暮らしの貧乏娘とそれに惚れこむ長屋のドラ息子みたいな。しかし宵闇の使者とは、あやつなかなか目の付け所が深い。」

おっと、ついついテレビを見る感覚で引き込まれちゃってた。さて、どうすつかねえ……………さすがに無視して購買に行くのは胸が痛むけど、そもそもあっちの女の子が本当に善玉とも限らない。

『おいチャクチャル、なんか去年に比べてこいつ性格歪んでね？心の闇増えてんだろ絶対』

『私は何もしたつもりもないのだが……………とはいえ確かに1年でトラウマになるようなこともないのにここまで心の闇が増大するのは異常なペースだな。もしかなくても、やはり私のせいだろうか』  
『ま、元が気持ち悪いぐらいのガキっぷりだったからこんなもんでちようどいいのかもしれないけどな』

なんか外野がいろいろ言ってるのを適当に聞き流し、柱の陰からもうちよつと様子をうかがってみる。ま、様子見様子見。

「悪く思わないよ。そもそもお前が勝つてりゃこんなことにはならなかったんだ、お前のデッキが弱いのが原因だろ！」

割と暴論だな、オイ。まったく、これだからアンティールってのは……………。

「白銀のスナイパー？こんなエンドフェイズにしか特殊召喚できないような遅すぎるカード使ってんじゃねえよ。そんなんだから負けたんだよ、それはこんな弱いカードをデッキに入れようと思ったお前の自業自得だ。よつて俺がこのカードは持つていく」

「あー？その1年、今言ったこと僕の前でもういつペン言つてみな」  
予定変更。もう少し黙つてみるつもりだったが、気が変わった。スナイパーさんが弱いだと？なかなか面白いこと言ってくれるじゃないの。

そいつは急に話に割り込んできた僕に一瞬ビビったようだったが、僕の制服を見てすぐににやにやと笑みを浮かべた。一瞬何がそんなにおかしいのかわからなかったけど、去年前半でのオシリスレッドの扱いを思い出してやっと納得がいった。僕と十代が昇級を蹴ったり万丈目がいきなり入ってきたりで色々あつたながらも実力を認められて最近それなりの対応をされるようになってたからすっかり忘れてたけど、そういえば元は落ちこぼれ寮という触れ込みだったんだよねあそこ。おそらく去年以前の前評判だけ聞きかじってたクチなんだろう、きつと。

「けっ、先輩だか何だか知らねーけどよ、俺はちゃんとしたアンティルールでこの宵闇を手に入れたんだ。返したりなんかするもんかよ」  
「ったく、自分からそんな念押しするってことは悪いことしてる自覚があるってことなんだよ。それが分からないうちはまだまだだなあ、なんてことを思いながら口を開く。」

「なら、後輩さん？僕とデュエルしようか。もちろんアンティルールで、ね。あいにく僕も宵闇は持つてないんだ、ちようどいいからもらつておこうかな」

「んなつ!?ふざけんなよ、だいたいオシリスレッドなんかアンティに釣り合うようなカードもつてゐるわけ……」

「(ねーえチャクチャルさん、お願いがあるんだけど?)」

『……了承。ただしこの一戦、例え貴方がもう一度死んでも勝つてくれ』

本人の許可をもらい、地縛神のカードをサツと目の前に突き付ける。このカードは世界にこの一枚しかないはずだ。つまり、アンティの条件としてこれ以上のカードはほかにない。これなら間違いなく乗ってくる、と読んでの行動である。

「な、馬鹿な、俺の知らないカードだと!?いったいそんなカードどこで……今日の俺はついてる!」

そして案の定、一発で乗ってきた。とはいえリスクは高い。こっちもチャクチャルさんを賭けに出した以上、何が何でも勝たなくっちゃね。

「デュエル!!」

僕が先行なのを確認し、初期手札をざっと眺める。これは………僕の勝ちたい思いにデッキがそのまま答えてくれたんだろうか。だとしたらありがたい、皆。遠慮なくその力を使わせてもらおうか。

「スター・ブラスト発動。1500ライフを払うことで、手札にいるシーラカンスのレベルを7から4に下げるよ。んで、レベル4のシーラカンスを通常召喚」

自分のライフを500単位で払うことで手札か場の自分モンスターレベルを1ずつ下げていくカード、スター・ブラストの効果で速攻召喚されたシーラカンス。なんだかいつもよりその後ろ姿に気合が入っているように見えるのは、たぶん気のせいじゃないだろう。それを肯定するかのようには、アカデミアの廊下にシーラカンスの雄叫びが響き渡った。

………もうちよつと近所迷惑とかも考えてくれると、私としては大変うれしい。

清明 LP4000↓2500

超古深海王シーラカンス ☆7↓3 攻2800

「さらにカードを2枚セット、それからシーラカンスの効果が発動。手札1枚を捨てて、デッキからレベル4以下の魚族を出せるだけ特殊召喚する！一斉召喚、魚介王の咆哮！」

モンスターゾーンの中央に召喚したシーラカンス。そこを中心とした残り4か所の地面が割れて間欠泉よろしく一斉に水柱が噴き出て、その水流に乗って4体のモンスターが姿を見せる。

ハリマンボウ 攻1500

ハンマー・シャーク 攻1700

オイスターマイスター 攻1600

シャクトパス 攻1600

「はい、ターンエンド」

「そんな雑魚攻撃表示でいくら並べたところで、意味ないぜ先輩サンよお！魔法発動、ブラック・ホール！このカードの効果で、場に出ているモンスターをすべて破壊だ！」

5体のモンスターが、一瞬で光さえも捉えて離さないといわれる圧倒的な宇宙の墓場、ブラック・ホールに飲み込まれる。……なんてことはなかった。

『狙いは悪くなかったな。狙いは』

「そだね。確かに5体のモンスターが破壊できるんなら使いたいところだけど、それがかんっぜんに裏目に出たね。トラップ発動、魔宮の賄賂！その発動は無効になる代わりに、カードを1枚ドロウさせるよ」

「ク、クソッ！まだだ、阿修羅<sup>アスラ</sup>を召喚して魔法カード、渾身の一撃を発動！」

『ほー、案外やるじゃねえか。阿修羅の全体攻撃をフル活用して渾身の一撃の効果で全滅狙い、悪くはないがまあ相手が悪かったな。今の清明はぶちぎれてっから強いぞー？』

渾身の一撃……確か対象モンスターによる戦闘ダメージを0にしたうえでバトル後にその相手を効果破壊するカードだったっけか。なるほど、コンボとしてはいい動きだ。

ただ一つ問題があるとすれば、今の僕にそんなものは通用しないってことだ。

「阿修羅でまずハンマー・シャークに攻撃、地獄の千手剣！」

「トラップ発動、ポセイドン・ウエーブ」

普段、このカードは魔法の筒の下位交換として見られがちである。実際、僕が使う時も相手の攻撃力がいくつであっても800ダメージしか与えられないことが多い。だけど、このカードの効果は攻撃を無効にし、自分の場にいる水、魚、海竜族1体につき800のダメージを与える効果だ。性質上、場をすべて魚で埋め尽くすシーラカンスとの相性は最高というわけ。何せ、この2枚のコンボがうまく決まれば……。

「800かける5、で4000ダメージだね」

このように、一撃で初期ライフをすべてかささらっていくこともできるんだから。

後輩 LP4000↓0

「さ、何か言うことは？後輩クンや」

「こんなのまぐれだ、覚えてろ！」

最後の最後まで小物臭たつぷりだった後輩が投げつけた宵闇の使者を空中でキャッチし、ずつとその様子を見ていた本来の持ち主に向き直る。なにか怖い人が近づいてきたかのようにびくつとされたのはまあ、見逃しておこう。初対面だしね。だけどちよつとシヨックだったり。

「えーと……君の、だよね？」

「は、はい」

「いや、そんな身構えなくても何もしないよ。ホイ」

無論人のカードを投げつけるような真似はせず、なるべく丁寧に目の前に差し出す。宵闇の使者と僕の顔を何度か見てから、そつと彼女も手を伸ばした。

「ありがとうございます……」

「ん、いいってことよ。別に気にしない……で……ね……」

セリフの途中、廊下に響くチャイムの音。それを聞いて、僕の顔がさあつと青くなつたのが見なくてもよくわかった。

『なあチャクチャル、最近お前毎日学校来てるんだからわかるだろ。まだ授業じゃねーし、あれ何？』

『説明しよう。あの音は、購買に置いてあるその日のドローパン及びあらゆる食料が完全に売り切れたことを示す、昼の糧を準備していなかったものに対する絶望の音なのだ』

『なるほどな。んで、なんでそんなハイテンションなわけ？』

『この時間帯は必ずアカデミアに昼を食べ損ねた者の絶望が感じられるからな。一応とはいえ邪神たる私としては大変気持ちがいい』

急に顔色を変えた僕を心配そうに見る女の子。そしてよく見ると、その手にはドローパンが入ったレジ袋。……よし、前言撤回。今まさに放そうとしていた宵闇の使者を持つ手にぐつと力を込める。

「え？えつと、あの……」

「僕とデュエルしよう？アンテイルルで、君が勝ったらこのカードは返すよ。だけど僕が勝ったら、その時はそのドローパンをそっくり

頂くってことで」

『うわ、人間のクズだ』

自分でも割とひどいこと言ってるなあ、とは思う。ただしこちらも今日の昼ごはんがかかっている死活問題、買えませんでしたーなんて言おうもんなら十代たちに申し訳が立たない。

その迫力に押されたのか、それともよつぽど宵闇の使者が大事なのか。ともかく彼女は、半ば押し切られるようにコクリ、と頷いた。これで後は、僕が勝つだけだ。と、その前に。

「君、名前は？僕は遊野清明、見ての通りの2年生だよ」

「私ですか？私は、葵。姓が葵で名がクラ。葵<sup>あおい</sup>クラと申します。いぎ！」

「デュエル！」

今度は僕の後攻。まあ確率は二分の一だし、筋は通ってる。それに後攻ならドローできるし、そう悪いことばかりでもない。

「私の先行。自分の場にモンスターが存在しない時、フォトン・スラッシュャーは特殊召喚されます」

フォトン・スラッシュャー 攻2100

「そして、このスラッシュャーをリリース。モンスターをアドバンスセットいたします」

攻撃力2100と下級モンスターにしては破格の数値を持つスラッシュャーをリリースしてまでセットしたんだ。きっとあの伏せモンスター、かなり厄介な守備力か効果を持っているに違いない。さて、次のドローで何かいいカードが来ればいいんだけど。

「さらにカードを伏せ、ターンエンドです」

「僕のターン、ドロー！シャクトパスを召喚して、さらに魚族のシャクトパス召喚に合わせてシャーク・サッカー特殊召喚！そしてサッカーをリリースして手札のシャークラーケンを特殊召喚」

シャクトパス 攻1600

シャークラーケン 攻2400

結論から言うと、ちょうどいいかんじの除去カードは引けなかった。なら、力づくでいってみるしかない。

「シャークラーケンで伏せモンスターに攻撃！」

シャークラーケン 攻2400↓??? 守2200 (破壊)

「セットモンスター、<sup>シルバー</sup>渋い忍者の効果を発動します。このカードがリバスしたことで、手札か墓地から忍者モンスターを裏側守備表示で特殊召喚です。お出でなさい、機甲忍者アース！アクア！」

シャークラーケンの牙が老齡の忍者を噛み砕いたと見るやその姿が煙のように消え、その隙に追加で2人の忍者が音もなくモンスターゾーンに忍び込む。でも、やってることは所詮壁を増やしただけだ。

「なら、シャクトパスで右側のモンスターに攻撃！」

『あ、いやここは黙ってエンドした方が……もう遅いな』

シャクトパス 攻1600↓??? 守1600

「ふふ、アクアの守備力は1600。その攻撃力で戦闘破壊は無理ですよ」

「む、ターンエンド……」

「待ってください、ここでリバースカード！忍法・超変化の術！私の機甲忍者アクアと先輩の場のシャークラーケンを墓地へ送ることで、デッキからその合計レベル、つまりレベル10以下のドラゴン、恐竜、海竜族モンスターを特殊召喚いたします。さあ、これこそが葵流忍術最強のしもべ！レベル8、<sup>ギヤラクシーアイズ・フォトン・ドラゴン</sup>銀河眼の光子竜！」

裏守備になっていた青服の忍者と、僕の場のシャークラーケンが光る煙に包まれる。そして2体のモンスターがフィールドの真ん中に引き寄せられ、一つに溶け合ってまばゆいばかりに光り輝く1匹の竜の姿に変化していく。

銀河眼の光子竜 攻3000

葵 KP4000 手札：0

モンスター：銀河眼の光子竜 (攻・超変化)

??? (機甲忍者アクア)

魔法・罫：忍法・超変化の術 (銀河眼)

清明 LP4000 手札：3

モンスター：シャクトパス (攻)

魔法・罫：なし



「私のターン、アースを反転召喚します。バトル！銀河眼でシャクトパスに攻撃、破滅のフォトン・ストリームです！」

銀河眼の光子竜 攻3000↓シャクトパス 攻1600（破壊）

清明 LP4000↓2600

「まだまだ！シャクトパスは、自分を破壊した相手をつかんで離さないモンスターだよ。銀河眼の装備カードになったこのカードの効果で攻撃力は0になり、さらに攻撃も表示形式の変更もできなくなるからね」

銀河眼の足元から無数のタコ足が伸び、とっさのことに飛び立つこともできないドラゴンをがんじがらめに縛りつける。どれほど攻撃力の高いモンスターでも、シャクトパスの効果の前ではただの的にしかならなくなるのだ。

銀河眼の光子竜 攻3000↓0

「ですが、アースの一撃は止まりませんよ？アース、ダイレクトアタック！」

機甲忍者アース 攻1600↓清明（直接攻撃）

清明 LP2600↓1000

「カードを伏せ、ターンを終了します」

「なら、僕のターン。ツーヘッド・シャークを召喚して、銀河眼に攻撃！」

「伏せカード、くず鉄のかかしを発動！相手の攻撃を1度だけ無効にし、このカードをセットしなおります。これぞ葵流忍術防御の型、廃棄忍法リサイクル・ロック」

一気に2体のモンスターを破壊せんとばかりに迫るツーヘッドの口の片方に、ボロボロになったかかしの片腕が強引に突っ込まれる。さすがに金属はかみ切れなかったらしく、首を振ってなんとか脱出した。

「ツーヘッドは2回攻撃ができるモンスターだからね、もう一回銀河眼に攻撃！」

「かかりましたね！この瞬間に銀河眼の効果発動、銀河忍法ゴズミック・ワープ！このカードと戦闘を行う相手とこのカードを、バトル

フェイズ終了までゲームから除外します！」

「ちえっ、かわされたか」

『いや、それだけじゃねえな。これである銀河眼はシャクトパスとも超変化ともつながりが切れた状態……ノーデメリツトの3000打点の出来上がりだ』

ユーノの言葉を聞き、はっと気づく。そうか、そっちが狙いだっただのか！じゃあもしかして、最初からシャクトパスの効果を知ったうえで攻撃を？目の前の少女について、どうやら僕の認識は甘かったらしい。さつきまでも手を抜いたつもりはないけど、本気で倒しにかからないと勝てる相手じゃなさそうだ。

「バトルフェイズ終了、とみてよろしいですか？では、2体のモンスターはお互いの場に戻ります」

「なるほどね、それで次のターンに攻撃されれば僕の負け………だけど、そううまくいくかな？自分の場に水属性モンスターがいるとき、手札のサイレント・アングラーを特殊召喚。さらにカードを1枚伏せて、ターンエンド」

サイレント・アングラー 守1400

葵 KP4000 手札：0

モンスター：銀河眼の光子竜（攻）

機甲忍者アース（攻）

魔法・罨：忍法・超変化の術（対象なし）

1（伏せ・くず鉄）

清明 LP1000 手札：1

モンスター：ツーンヘッド・シャーク（攻）

サイレント・アングラー（守）

魔法・罨：1（伏せ）

「ドロー、悪シノビを通常召喚します」

悪シノビ 攻400

黒というより灰色一色の、これまで出てきた色とりどりの忍者に比べていささか地味な色合いの忍者。若干オーバーキル気味な気がするけど、きつとこの伏せカードを警戒してるんだろう。まあ、悪い

選択じゃあないんじゃないか。

「バトル！銀河眼で効果は使わず、ツーンヘッドに攻撃です！」

「当然そんなことはさせないよ、ポセイドン・ウェーブ発動！僕の場には魚族のアングラーとツーンヘッドがいるから1600のダメージ！」

「その発動にチエーンして銀河眼の効果を使います！銀河忍法ゴズミック・ワープ！」

分厚い水の壁が攻撃を押し返し………てない！光のブレスは水の壁にぶつかる寸前に銀河眼ごとふっと消え、水が引いてから再び姿を見せた。とはいえ、攻撃をしのいだことに変わりはない。まだまだ勝負はここからだろう。

「メイン2、アースを準備表示にしてターンエンドです」

機甲忍者アークア 攻1600↓守1600

「僕のターン、この2体をリリースして………そっちがドラゴンなら、こっちもドラゴンをぶつけるまでさ。ブルーアイス・ホワイトナイト・ドラゴン青氷の白夜龍、ここに降臨！」

青い体に冷たい翼。溶けない氷でできたドラゴンが、光の竜に對峙する。とはいえ、あちらに攻撃してもどうせまた除外されるだけなのでスルーなんだけど。

「アークアに攻撃、孤高のウインターストリーム！」

青氷の白夜龍 攻3000↓機甲忍者アース 守1600 (破壊)

「へへ、ターンエンド」

葵 KP4000 手札：0

モンスター：銀河眼の光子竜 (攻)

悪シノビ (攻)

魔法・罫：忍法・超変化の術 (対象なし)

1 (伏せ・くず鉄)

清明 LP1000 手札：1

モンスター：青氷の白夜龍 (攻)

魔法・罫：なし

「私のターン、機甲忍法ゴールド・コンバージョンを発動します。私の場の忍法カードをすべて破壊し、カードを2枚ドロロー！ブルーそして青い忍

者を守備表示で召喚、カードをセットしてターン終了です」

青い忍者 守300

『清明、どっちに攻撃するかは……ま、言わんでもいいか』

「もちろん！ドローしてそのままバトル、悪シノビに攻撃！孤高のウインター・ストリーム！」

『お、ダメージ優先できたか。まあここで青倒してもうまみは少ないし、ドローを怖がらなきゃありっちゃありか』

そう言っつて明後日の方を向くユーノ。言っつてることの意味は半分もわからなかったけど、とにかく馬鹿にされてるわけじゃないことだけは理解できた。

「ならば、まず攻撃表示の悪シノビが攻撃対象になったことでカードをドロー。このままでは戦闘ダメージを受けますが私の場にはこのカード、くず鉄のかかしがありますよ！廃棄忍法リサイクル・ロツク！」

再び跳ね起きたかかしが、冷気のブレスを受け止めんとその鋼鉄の腕を広げる。が、その抵抗もそこまでだった。一瞬で氷漬けになったかかしはブレスを止めるどころか逆に吹き飛ばされ、その向こう側にいる灰色の忍者もまとめて打ち抜いた。

「そんな…!？」

「白夜龍は、自信を対象にする魔法及び罠の効果を無効にする力がある！くず鉄のかかしは無効、そして破壊させてもらうよ！通るダメージは2600、これならどうだっ！」

青氷の白夜龍 攻3000↓悪シノビ 攻400 (破壊)

葵 LP4000

これでこのデュエルの流れも変わるだろう、と思ったのもつかの間、まったく無傷の状態で葵が立っているのが見えて愕然とする。それが顔に出ていたのかちよつと満足げな様子で手札にある1枚のカード、ついさつき悪シノビの効果でドローしたカードをこちらに見せてきた。

「だ、ダメージステップに手札からクリボーの効果を発動しました……このカードを捨てることで1度だけ戦闘ダメージを0にできま

す。これぞ名づけて葵流、機雷忍法モコモコ・プロテクションです」  
いや、そんなきりつとした顔でモコモコとか言われてもどうリアクション取ればいいのか。大人の対応でスルーしながら、次の手を考える。まさかこれでもダメだったとは。

「ま、やることなんて1個しかないんだけどねー。モンスターとカードをセットして、ターンエンド」

「ならば、そのエンドフェイズに伏せカード、忍法 変化の術を発動します。自分の場のレベル1、青い忍者をリリースすることでデッキからレベル4以下の獣、鳥獣、昆虫族モンスターを特殊召喚です。お出でなさいレベル4、聖鳥クレイン！」

速攻の黒い忍者が印を結ぶとその姿が足元からもくもくと煙に包まれていき、2、3度ほど羽ばたきのような音が聞こえたかと思うとそこには真つ白い鳥が澄ました顔で立っていた。

『ほう、まあレベル4なら定番だわな』

聖鳥クレイン 守400

「聖鳥クレインが特殊召喚されたことにより、私はカードをドロースますね」

葵 KP4000 手札：1

モンスター：銀河眼の光子竜（攻）

聖鳥クレイン（守・変化）

魔法・罨：忍法 変化の術（聖鳥）

清明 LP1000 手札：0

モンスター：青氷の白夜龍（攻）

???（セット）

魔法・罨：1（伏せ）

「そして私のターン、さらにカードをドロ。魔法カード、マジック・プランターを発動してその効果により変化の術を墓地に送ってカードを2枚ドロ、そして変化の術が場を離れたことでクレインは破壊されます」

これで、葵の手札はあつという間に3枚。そして場には実質的な戦闘破壊耐性がある銀河眼。さあ、まずはこのターンを切り抜けねば。

「忍者マスターSASUKE<sup>サスケ</sup>を召喚して装備魔法、風魔手裏剣を装備です。これによりSASUKEの攻撃力は700ポイントアップします」

白装束の忍者が手に持っていた手裏剣を腰に差し、服の中から大事そうな手つきで別の手裏剣を引つ張り出す。武器を変えるだけで攻撃力が700も上がるんなら、普段からそれつかってればいいのに。

忍者マスターSASUKE 攻1800↓2500

「いざーSASUKEでセットモンスターに攻撃です。裏守備に対してはSASUKEの効果も意味はありませんが、攻撃力2500ならさすがに倒せるでしょう……!」

「確かにね。だけど、その攻撃は勝負を焦ったね! 白夜龍のもう一つの効果発動、自分の場の魔法、罫を1枚墓地に送ることで攻撃対象をこのカードに変更する!」

弧を描くようにして僕の伏せモンスターに迫る手裏剣。その時白夜龍が大きく羽ばたき風を起こすと、その風圧に煽られた手裏剣はあらぬ方へと飛んで行った。そして自分の大切な武器がなくなるピンチに一瞬だけ白夜龍から注意をそらしたSASUKEを、問答無用のブレスが飲み込んだ。

忍者マスターSASUKE 攻2500(破壊)↓青氷の白夜龍  
攻3000

葵 LP4000↓3500

「きゃっで、ですが風魔手裏剣の効果も発動! このカードが墓地に送られた時、700ポイントのダメージです!」

清明 LP1000↓300

「それに、私の場にはまだ攻撃をしていない銀河眼……長くなりましたがこの勝負、私の勝ちですね」

「ふっ……それはどうかな?」

「え?」

何も言わず、すっとフィールド上の銀河眼を指さす。すると銀河眼が突然苦しみだし、ついにはその巨体が倒れた。さて、そろそろネタバラシと洒落込もうか。

「そんな、私の銀河眼が……」

「さっきのバトルの時、だね。白夜龍の効果で攻撃対象を変更させるには、自分の場の魔法か罫を墓地に送らないといけないって。じゃあもし、その墓地に送ったカードがこれ、その前に発動していた安全地帯だったら？」

「!?」

もつと引つ張ろうと思ったけど、あの反応を見るとここまで言っただけでも何が起こったのか察したらしい。去年の僕なら絶対何言ってるのかわからなかったろうし、ほんつとうに今年の新入生は優秀だ。それともこの子が去年の三沢ポジなんだろうか。

『安全地帯は墓地に送られた時、対象にしていたモンスターを破壊する……墓地送りの効果にチェインして銀河眼を対象にとつておけば、一気に除去もこなせるって寸法だな。ただ、発動していたつてのはマナー的にもあまりよろしくないが』

「そういうこと。何か質問ある？」

「ま、まだ諦めませんよ！魔法カード、カップ・オブ・エースを発動します。コイントスで表が出れば私、裏なら先輩がカードを2枚ドロ―です……博打忍法コイントス・シヨットー！」

「あ、裏だ」

………なんか涙目になってた。かわいそうだけどここで手を抜くのは逆に失礼だから気を取り直して、と。さあ、すべてはこのターンにかかっているといっても過言ではない。今こそまさに絶好のチャンス、ここを逃したらせつかくこちらに傾いてきた流れがまたあつちに持つていかれそうだ。

「ドロ―！セットモンスターを反転召喚して、水晶の占い師のリバー効果を発動！デツキトップから2枚めくって1枚を僕の手札に、もう1枚をデツキボトムに戻す………1枚目、霧の王。2枚目、強欲なカケラ。当然霧の王を手札に加えてフィールド魔法、ウォーターワールドを発動！さらに自身の効果により、霧の王をリリースなしで通常召喚！さあ、マイフェイバリットカードのお出ましだ！」

青氷の白夜龍

攻3000↓3500

守2500↓2100

霧の王 攻0↓500 守0

水晶の占い師 攻100↓600 守100↓0

『なんだ、アクアの効果は知ってたのか。いつの間にそんなの覚えたんだ?』

「アクアの効果? なんのことそれ? 霧の王で攻撃、ミスト・ストラングル!」

『あ、ただのオーバーキル狙いで出したのね……』

霧の王 攻500↓葵 (直接攻撃)

葵 LP3500↓3000

「つづけて白夜龍、ウインター・ストリーム!」

「墓地から機甲忍者アクアの効果発動! このカードを除外して、相手の直接攻撃を無効にしますよっ!」

そうか、ユーノが言ってたのってそういうことか……。結果論とはいえ、出してよかったマイフェイバリット。

「それに、まだ手数は残ってるしね。水晶の占い師でもダイレクトアタック!」

水晶の占い師 攻600↓葵 (直接攻撃)

葵 LP3000↓2400

「カードを2枚セットして、ターンエンド」

葵 KP2400 手札:0

モンスター:なし

魔法・罨:なし

清明 LP300 手札:0

モンスター:青氷の白夜龍 (攻)

霧の王 (攻)

水晶の占い師 (攻)

魔法・罨:2 (伏せ)

「私のターン、ドロー! まだ、まだまだ諦めませんよ! 魔法カード、貪欲で無欲な壺を発動します! 墓地の戦士族の渋い忍者と鳥獣族の聖鳥クレイン、悪魔族のクリボーをデッキに戻して2枚ドロー、そして魔法カード、ブラック・ホールを使います。この効果により、場のモ



ンスターは全破壊です！」

さっきの名前も知らない後輩と言い、今日はブラック・ホールに縁のある日なんだろうか。あいにくあの時みたいに魔宮の賄賂が伏せてあるようなこともなく、3体のモンスターが宇宙の闇の中に吸い込まれていく。

ま、すぐ出てくるんだけどね。

「トラップ発動、激流蘇生！水属性モンスターが破壊された時にその全てを特殊召喚し、さらにダメージを与える………甦れ、僕のモンスターたち！」

霧の王 攻500

水晶の占い師 攻600

青氷の白夜龍 攻3500

葵 LP2400↓900

「それでも、まだです！この、私の最後のカードは死者蘇生。ここに再び蘇り、見せつけなさい銀河忍法！銀河眼の光子竜、またまた推参です！」

銀河眼の光子竜 攻3000

「とはいえ貪欲で無欲な壺を使ったターン、私はバトルフェイズが行えません。これでターンエンドです」

「僕のターン！」

ちらりと考える。もし、今銀河眼が守備表示で出されてたら………いや、それでも結局のところは変わらないか。

「霧の王で銀河眼に攻撃、ミスト・ストラングル！」

「なっ!?攻撃力500の霧の王で攻撃を!?!」

そんな叫びにお構いなく、飛び上がって光り輝く魔剣を大上段に振りかぶる霧の王。それに対し、真正面から対抗しようと体を白く光らせて光のブレスを吐く準備に取り掛かる銀河眼。2体のモンスターの間にある緊張は高まり続け、最高点に達しようとしていた。

「やむをえません、このまま戦います！破滅のフォトン・ストリーム！」

「なら、トラップカードを発動！墓地墓地の恨み！」

瞬間、地面から無数の幽霊がぽこぽこ湧き出て銀河眼の周りにまとわりついていく。いったんブレスを吐くのを中断してその幽霊たちを振り払おうとするも、払っても払っても数を増やしつつ帰ってくるそれには太刀打ちできないようだ。

銀河眼の光子竜 攻3000↓0

「このカードは、相手の墓地のカードが8枚以上あるときに相手モンスターは攻撃力を0にする！」

「いくら攻撃力を変化させても、銀河忍法の前には………あ、やられましたね」

その通りだ。ここでもし銀河眼の効果を使っても、今の彼女のライフではそのあとの白夜龍の攻撃を耐えることはできない。かといって、効果を使わなくてもそれは同じこと。つまり、

「このデュエルはもう詰み、さ」

「ええ、完全にやられました。ですが、せめて銀河眼だけには逃げてもらいましょうか。銀河忍法コズミック・ワープ！バトルフェイズが終了するまで、銀河眼と霧の王をゲームから除外します」

「白夜龍、ダイレクトアタック！孤高のウインター・ストリーム！」

葵 LP400↓0

「しょうがないですね、私の負けです。はい、先輩」

そうやって、デュエルの間に邪魔にならないようどけておいたビニール袋を持ってくる葵。持ってくるのは一向に構わないんだけど。

「えつと、これなんだっけ？」

「へ？先輩、忘れたんですか？アンティですよ、ア・ン・ティ。自分から言い出したんじゃないですか」

「……………おおー！」

「本気で忘れてたんですね。ただ、先輩の口に合えばいいんですけど」

はて、今何やらおかしなセリフが聞こえたような。ドロopanなんて元から博打みたいな食べ物だし、それに対して口に合うかどうかなんてこと言うのは無粋極まりないことだったのをこの子には一回教

えておいた方がいいのかもしれない。

そう思つて口を開こうと思つた矢先、そういえば言い忘れてましたけど、と葵が言い出した。

「それ、中身はドローパーンじゃないんですよ。私が趣味で作つてみた、ただの丸パンです。まだ修行中ですから、あまりうまくできてはいないと思いますけど」

「なるほどねえ。じゃあちよつと失礼」

少なくとも見た目はなかなかいい感じに焼きあがっているように見えるそれを1つ取り出し、ためしにちよつとかじつてみる。

「あ、美味しい」

「本当ですか？お世辞ならそう言つてくださいね、その方が私のためになりますので」

そんなことを言っているが、こちとら食べ物に関してだけはお世辞なんてもの言うつもりは全くない。単純に美味しいものならそう言うし、不味いものなら遠慮なくそう言わせてもらう。だけど、その丸パンは中のもっちり具合といいパリツとした外の皮といい、かなりレベルの高い代物だったのだ。

……………ふむ、これはちよつどいいかもしれない。

「ねえ、ものは相談なんだけど」

「はい、なんででしょうか」

「この宵闇は返すからさ、そのかわりに1つ頼みたいことがあるんだけど」

「はい？」

それから数日たって、ある日の放課後。遊野洋菓子店に注文されたもののリストを片手に調理室に向かうと、そこにはエプロン姿の葵がすでに立っていた。こういうこと言つたら今の世の中怒られるかもしれないけど、エプロン姿の女の子ってのはやっぱりいいなあ、なんてことをふと思う。夢想も頼み込んでみたら案外OKしてくれるかも……………いややつは無理だ、着てくれるかもしれないけど僕みたいな

へタレにはまずそれを彼女に頼むところが無理だ。

「先輩、遅いですよ。もうこっちのシナモンクッキーは生地の仕事込みを始めてるんですから」

「ごめんごめん、追試が難しくくて」

「またですか？まったく、本当に座学の苦手な先輩ですね」

「実技ができれば問題ない！」

「言い切らないでくださいよ」

何があつたかを簡潔に説明すると、入学したてでまだ部活にも入っていない彼女を遊野洋菓子店の店員としてスカウトしたのだ。最初は彼女ほどの腕ならいい助手になってくれるだろう、程度の考えだったのだがこれが予想以上の逸材だった。

まず彼女は勉強もしつかりできるから追試があるたびに引つかかって調理開始が遅れる僕よりもずっと菓子作りにかかる時間もとれるし、手先が器用だから初めて教えることもすぐに呑み込んでくれる。僕一人でやってた時は女子からの注文がほとんどだったけど、女の子の手作り菓子があるとわかった瞬間モチない男子勢からの注文もドカッと増えたしいいことづくめだ。別にそんなにいらないと断つたのを無理やり押し切って儲けを折半にしただけの甲斐はあつたと思う。

完全予約制オーダーメイド菓子屋の遊野洋菓子店 YOU KN OW、本日も絶賛営業中です。もしよろしければ、あなたもおひとついかがでしょう？

## ターソン38 鉄砲水と光の天使

「はい、仕込み終わりつと。葵ちゃんどう？もう準備するものないよね？」

「そうですね。予約分で作っておくことはとつくの昔に終わってます。というかいくらなんでも作りすぎですよ先輩。注文のあてもないのにこんなで作って悪くなったらどうするんですか」

「あはは。だいじょーぶだよきつと、もうすぐやる新入生歓迎集会ですぐ捌けるはずだから」

「……………すぐそれっぽいこと言ってますけど、絶対それだった今考えましたよね」

「あ、ばれた？」

まったくもう、と息を吐く葵ちゃん。さつきまでお昼だったはずなのに、ふと気が付けば太陽も沈みかかっている程度の時刻。つい熱中して商売菓子作りに精を出しすぎたようだけど、なんだかんだ言って最後まで付き合ってくれた葵ちゃんには感謝。

「さてと、夕飯も作らなきゃだしそろそろ帰ろうか。もうすぐ暗くなるし、近くまで送ってくよ」

「好き好んで自分で夕飯作ってる寮なんて先輩のオシリスレッドからいのものですけどね。じゃあ、せっかくですしお願いしましょうか。……………でも、たぶん今来ても夢想先輩には会えないと思いますよ？」

あ、バレてた。これ以上ぼろを出すのは避けようとその言葉を最後に手早く片づけを済ませ、電気を消して外に出る。連れ立って歩くとはいえ特に何か話すわけでもないが、この距離感距離感は割と気に入ってるので気まずくはない。いっぺん気を使って色々話しかけてみたこともあったけど、その時は彼女から別に気を遣わなくていいですよ、私もあの距離感距離感は悪くありませんし、ってあっさり言われたのでその言葉に甘えることにしている。のんびり歩いていると、すぐにブルー寮が見えてきた。

一応は男子禁制、あまり近づくとわけにもいかないのである程度近くまで来たあたりでそれじゃあ、と手を振って帰ろうとすると、白い

スーツ姿の少年が歩いてくるのとすれ違った。見ない顔だし新入生かな、と思いつつ軽く会釈すると、あ、という返事が返ってきた。「あの、もしかしてオシリスレッドの遊野先輩ですか？僕、新入生のエドっていいます。ぶしつけなお願ひですが、僕とデュエルしていただけないでしょうか」

「え？」

「さっきレッド寮に行つたんですけどいなかっただけです。今日はもう会えないのかと思つてたら……うわあ、嬉しいです」

さわやかな笑顔でそんなことを堂々と云つてくるエド。うん、まあ、悪い気はしない、かな。ただなんとなく、何となくだけ嫌な予感のようなものがある。よし、少し探ってみるか。

「それはいいとして、なんで僕のことか……？」

「そりゃあ、この学校で赤い制服を着ている人なんて数少ないですからね。すぐにわかりましたよ」

うーん、悪い人には見えないなあ。こういう時はしようがない、交代方式で行くか。

いわく、デュエルすれば分かり合える。

「それじゃ……」

「あ、デュエルしてくれませんか！ありがとうございます」

「うん。勝負と洒落込もうか！」

「デュエル！」

「先行は僕がもらいますね。僕のターン、ドロ………は、もうできないのでしたっけ」

む、予習不足かな？まったく、ルールぐらいしっかり覚えておかないとこの後色々困るよ？と言いたいのをぐっとこらえる。きつと先輩たちにとっては、去年の僕も同じようなふうに見えていたんだろう。先は長いんだ、僕らがこれからゆつくり教えていけばいい。あんまり頭ごなしに怒られると、やる気って急になくなっちゃうしね。

「まず、ホーリー・ライトニング光 天使 ウイングスを守備表示で召喚！」

エドの場に翼、というよりも鳥の翼の彫刻のような形をしたモンスターが召喚される。光天使、一体どんな動きをするんだろう。

光天使ウイングス 守1800

「そしてこの瞬間、ウイングスの効果発動！召喚成功時、手札からさらに光天使と名のつくモンスターを特殊召喚できる！ホーリー・ライトニング光天使…ブックス！」

次いで、本の形を模した彫刻のようなモンスター。だめだ、この後の動きが全く予想できない。

光天使ブックス 攻1600

「さらにブックスの効果を発動、手札の魔法カード1枚をコストに手札の光天使を1体特殊召喚する！魔法カード、サルガツソの灯台を墓地に送って特殊召喚、現れる光ホーリー・ライトニング天使ソード！」

光天使ソード 攻1400

やっぱり剣というより剣をモチーフにした美術品といった方がしっくりくるモンスター、ソード。手札4枚を使ったとはいえ、まさか1ターン目からいきなり3体もモンスターを展開してくるとはね。

「そして魔法カード、トランスターンを発動。僕の場合のブックスをリリースしてデッキから同じ属性、種族でレベルが1高いモンスターを特殊召喚する！光属性天使族レベル5、光神テテユスを特殊召喚」

ブックスの体から後光が放たれ、あまりの眩しさに一瞬目をそらすとそこにはさつきまでとは似ても似つかない白い羽のお姉さんの姿が。こんなにあつさりと上級モンスターを出してくるなんて、たいしたもんだ。だけど、今の動きでもうエドの手札は0。このモンスターたちをなんとかできれば、立て直しはかなり難しいはずだ。

光神テテユス 攻2400

「僕はこれで、ターンエンドです。先輩、どうぞ」

「さーて、このターンでどれくらい削れるかな？ドロー！」

うーん、初手がシーラカンスにグリズリーマザー、白銀のスナイパーと安全地帯に激流蘇生。そして今引いたのがダブルフィン・シャークか。せっかくエドが手札を使い切った今のうちに攻め込んどおきたかったけど、これはどうしようもないか。むしろ一歩間違えれば手札事故なこの状況、出せるモンスターがいるだけありがたいと思おう。

「グリズリーマザー守備表示で召喚。カードを3枚セットしてターンエンド」

グリズリーマザー 守1000

エンド LP4000 手札：0

モンスター：光天使ウイングス（守）

光天使ソード（攻）

光神テテユス（攻）

魔法・罠：なし

清明 LP4000 手札：2

モンスター：グリズリーマザー（守）

魔法・罠：3（伏せ）

白銀のスナイパーと安全地帯が伏せてあつて相手の場には攻撃表示モンスター、今の状況なら大嵐なんてむしろ歓迎したいぐらいだ。ただ、激流蘇生が破壊されるのはちよつと困るけど。とはいえあつちだつて3枚も伏せれば相当動きにくいはずだ。さあて、どう出てくるかな？

「僕のターン、ドロロー……この瞬間、テテユスの効果を発動。自分がドロしたカードが天使族ならそれを公開して、さらにドロをするこ  
とができる。まず1枚目、光天使ブックス。2枚目、もけもけ。3枚目。おや、またもけもけだ。4枚目、神聖なる球体。5枚目、大天使ゼラート。6枚目、創造の代行者 ヴィーナス。7枚目……は、さすがに無理か」

さすがに無理かじゃない。あれよあれよという間に手札0からドローフエイズだけで7参って、どうなつてんのこれ。そんな思いをよそに、まるでこれだけドロするのはわかつていたといわんばかりに平然とターンを進めていく。

「光天使ソードの効果を発動、手札から光天使を1体墓地に送ることで、エンドフェイズまでその攻撃力を自らに加算する。ブックスを捨てて、攻撃力1600ポイントアップ」

光天使ソード 攻1400↓3000

「いくらエンドフェイズまでとはいえ、レベル4でお手軽3000打



点って……………」

素の打点が低いことで有名な水属性に分けてもらいたいもんだ、まったくもう。

「そして最後にドロローしたカード、手札抹殺を発動。お互い手札をすべて捨てて、その枚数ぶんだけカードをドロロー」

「手札抹殺!? シ、シーラカンスがっ!」

「おや、ラッキーでしたね。でも、この程度じゃ終わりませんよ? ウィングスをリリースして、裁きの代行者 サターンをアドバンス召喚」

裁きの代行者 サターン 攻2400

「くっ……………」

「なるほど、今のサターンにも反応しない、ということはその伏せカードは召喚反応系ではない、と。なら、警戒するべきカードはミラフオぐらい……………いいでしょう、このまま攻撃。まずはテテユスでグリズリーマザーを破壊!」

光神テテユス 攻2200↓グリズリーマザー 守1000 (破壊)

「この瞬間、グリズリーマザーの効果によってデッキから攻撃力1500以下の水属性を特殊召喚できる! 来て、ニードル・ギルマン!」

ニードル・ギルマン 攻1300↓1700

「なるほど、そのカードは確か場に存在する限り水、魚、海竜族のモンスターは攻撃力を400アップさせる効果を持ってましたね。実質攻撃力1700、なかなかの手だ」

その言葉を聞き、にやりと笑ってみせる。こっちだつてこの1年いろいろな相手とデュエルしてきたんだ、最近来たばかりの1年にそう簡単にやられてたまるものですかつての。

「さらに僕はこのカード、激流蘇生をグリズリーマザー破壊時に発動するのさ! このカードの効果で、破壊された水属性は復活! さらに500ポイントの効果ダメージも与えるおまけつきだよ」

グリズリーマザーが地面から吹き上がった水流に乗って再び現れ、ヒゲアンコウの隣で防御の構えをとる。ふう、サイクロンとか引かれ

なくてよかったよかった。

グリズリーマザー 守1000

エド LP4000↓3500

「くっ………なら、ソードでギルマンに攻撃！」

「しようがない、その攻撃は通しだよ」

手札にシーラカンスさえいれば安全地帯使っても守りきったんだけど、残念ながら2枚目はさっきの手札抹殺でドローできなかったからね。だからヒゲアンコウには悪いけど、ここは倒れてもらって安全地帯を温存する方がいい。

光天使ソード 攻3000↓ニードル・ギルマン 攻1700（破壊）

清明 LP4000↓2700

「サターンで攻撃……はやめておこう。メイン2に永続魔法、タイムカプセルを発動。デッキからカードを1枚選んでこのカードに封印し、2ターン後に手札に加えます。カードを1枚伏せて、エンドフェイズにソードの攻撃力は元に戻る。さ、ターンエンドですよ先輩」

光天使ソード 攻3000↓1400

「僕のターン！まずグリズリーマザーを攻撃表示に変更。ここは頼むよグリズリーマザー、ソードに攻撃、そして相打ち！」

真つ青な熊のかぎ爪と、文字通りの剣がぶつかり合う。攻撃力が同じなためどちらも戦闘破壊されるが、こっちにはグリズリーマザーの効果がある。

「そして戦闘破壊されたグリズリーマザーの効果で、デッキからキラ・ラブカを特殊召喚する」

キラ・ラブカ 攻700

「そんな弱いモンスターをわざわざ出して、一体どうするつもりなんですか？」

「む。まだまだ甘いね1年、確かにこのモンスターのステータスは戦闘向きじゃない。だけど、このカードはサポーターとしてはこの上なく有能なのさ。メイン2にラブカをリリースして氷帝メビウスをアドバンス召喚、そして効果発動フリーズ・バースト！このカードのア

ドバンス召喚成功時、場の魔法、罨カードを2枚まで破壊する！僕が選ぶのはそっちの右側に伏せてあるカードと、僕の場にあるこの伏せカード！」

「何!？」

2本のつららが、それぞれエドと僕の場の伏せカードめがけてまっすぐ飛んでいく。あっちの場の撃ちぬいたカードは……：……：装備魔法に対策するカード、アーマーブレイクか。あんまりうまみがないもの破壊しちやっただかな。

「だとしても、僕のやることは変わらないけどね。チェインしてトランプ発動、安全地帯！対象はその光神テテユス！ふっふっふ、このコンボを使えば……」

「なるほど。安全地帯は対象になったモンスターを破壊から守る効果を持つている反面、自身が除去されるとそのモンスターを道連れにする効果を持つている……：……：そういうことですね」

「う、うん」

くっ、なかなか詳しいじゃないかエド。僕が去年そのコンボを思いつくのになんだけかかったかと思ってるんだ。

「ま、まあいいや。さらにフィールド魔法、忘却の都 レミューリアを発動。ターンエンドするよ」

氷帝メビウス 攻2400↓2600 守1000↓1200

エド LP3500 手札：2

モンスター：裁きの代行者 サターン（攻）

魔法・罨：1（伏せ）

タイムカプセル（0）

清明 LP2700 手札：1

モンスター：氷帝メビウス（攻）

魔法・罨：1（伏せ）

場：忘却の都 レミューリア

「僕のターン。フィールド魔法、天空の聖域を発動！」

僕の後ろにそびえるレミューリアの白い建物の真正面に、これまた真っ白い天使の城が地面からせりあがってくる。一見よく似た建物

に見えるが最大の違いは、レミューリアの周りは海が取り囲んでいるのに対しあちらは雲に包まれていることだろう。

「そして伏せてあった魔法カード、盗人ゴブリンを発動。相手のライフを500奪い、自分のライフに変換します」

清明 LP2700↓2200

エド LP3500↓4000

「そしてこの瞬間、サターンの効果を発動！天空の聖域が場にある状態で自分のライフが相手よりも上の時、このカードをリリースすることで相手ライフにその数値ぶんのダメージを与える！」

「そのために盗人ゴブリンを……うわっ！」

サターンの体が真っ白く光り出したかと思うと一つのエネルギー弾になり、それがこちらに向けて突っ込んでくる。とっさに止めようとしたメビウスをひらりとかわしたそれは、僕にぶつかって爆発を起こした。

「ライフの差は1800、さすがにこれは効いた……！」

清明 LP2200↓400

「この効果を使うターン、バトルフェイズが行えませんで。カードを1枚セット、これでターン終了です。やれやれ、闇の力を持ったカードの持ち主だっていうからどんなすごいデュエリストなのかと思ったらこの程度か。遊城十代といい遊野清明といい、何がそんなに気になるんだか」

「ん？今何か言った？」

ターン終了です、からのセリフが声が小さくてよく聞こえなかったからちよつと聞き直す。はて、十代がどうか言ってたような気がするけど。

「ああいえ、なんでもありませんよ。なんでも、ね」

「ふむ。まずは僕のターン、ドロー」

そのことについては後でゆっくり聞いてみよう、と思いつながらカードを引く。こっちのライフはもう危険領域、だけどエドのライフはさっきの回復のせいで実質削れてないに等しい。

割とまずい状況だ。だけど、だからこそ面白いともいえる。

「オイスターマイスターを攻撃表示で召喚。そしてメビウス、攻撃！  
アイス・ランス！」

オイスターマイスター 攻1600↓1800 守200↓400

「それにはトラップカード、ガード・ブロックを発動！戦闘ダメージを無効にして、カードをドロ！」

「ならオイスターマイスターでさらにダイレクト、オイスターショット！」

オイスターマイスター 攻1800↓エド（直接攻撃）

エド LP4000↓2200

ようやくまともに戦闘ダメージが通った。だけどそれはそれとして、何となく気になることが1つある。さっきからどうも、自分のモンスターがやられたことへの悲しみというかなんというか、とにかくそんなものが全然感じられないのだ。そんなものいちいち感じてられない、なんてのはデュエルディスクでデュエルをしたことのない人間だけが言える事だろう。ソリッドビジョンで立体化した、自分が信じてデッキに入れたモンスターがやられるのを見るのは意外と心に来るものがあるのだ。

だけど、目の前で平然とデュエルを行うこの男からはその意思が全く感じられないのだ。例えて言うならそう、そこらへんで適当に拾ったカードをモンスターゾーンに置いてデュエルしているかのような。それとも僕の気にしすぎ、なんだろうか。

「これでターンエンド」

エド LP2200 手札：2

モンスター：なし

魔法・罫：1（伏せ）

タイムカプセル（1）

場：天空の聖域

清明 LP400 手札：1

モンスター：氷帝メビウス（攻）

オイスターマイスター（攻）

魔法・罨：1（伏せ）

場：忘却の都 レミューリア

「僕のターン。そろそろ終わらせませよ、先輩。ゼラの戦士を召喚、そしてこのモンスターをリリースすることで手札から大天使ゼラートを特殊召喚！」

たくましい体つきの仮面をつけた剣士が聖域の奥に入ってゆき、神々しい光とともに白い翼をもった大天使になってゆつくりとエドのもとへ帰ってくる。エド、まだそんな切り札がいたのか……！

大天使ゼラート 攻2800

「ゼラートは1ターンに1度、手札の光属性モンスターを捨てることで相手モンスターをすべて壊すことができます。つまりゲームエンドですよ、先輩」

「じゃ、じゃあその今ドロしたカードは……」

「ああ、これは残念ながら光属性モンスターじゃありませんでした。僕、ドロ運はそんなにいいわけじゃないですよ。だけど運に頼る必要なんてない。お忘れですか？僕が2ターン前に発動したタイムカプセルのことを。このターンのスタンバイフェイズ、あの時除外したカードはもう手札に加わってるんですよ？手札からそのカード、神聖なる球体を捨ててゼラートの効果発動、聖なる光芒」

ゼラートが剣を掲げると後ろの神殿から光が走り、メビウスと牡蠣の戦士をいっぺんに焼き尽くす。だけど、こつちにだって効果があるんだ。

「オイスターマイスターがバトル以外でフィールドから墓地に送られたことで、オイスタートークンを特殊召喚するよ」

オイスタートークン 守0↓200 攻0↓200

「ええ、知ってますよ。ですがそちらの墓地にはキラール・ラブカもいる、どのみち攻撃は通らないですから。これでターンエンドです」

おかしい。先攻ドロ廃止すら忘れかけてたような人間が、どうして自分が使いもしないカードの効果まで完璧に把握してるんだろうか。逆ならわかる。だけど、普通そつちを忘れるものだろうか。

このデュエル、やっぱり何か裏がありそうだ。だとしたら、狙いが

何にせよさつきと決着をつけないと。

「僕のターン、ドロロー。よし！魔法カード発動、クロス・ソウル！このカードは、自分モンスターへの代わりに相手モンスター1体をリリースすることができるようになる。当然大天使ゼラートと、僕の場のオイスタートークンをリリース……七つの海の力を纏い、穢れた大地を突き抜ける！アドバンス召喚、地縛神 Chacuc Chalhua」

2体のモンスターが消え、レミューリアの奥から悠然と巨大なシャチ型モンスターが泳いでやってくる。

地縛神 Chacuc Chalhua 守2400

「これが……闇のカード！」

「正解だよ、コングラチュレーション。さあチャクチャルさん、効果発動やっちゃって。1ターンに1度このモンスターの攻撃を放棄して、守備力の半分、ダメージを与える！ダーク・ダイブ・アタック！」  
「ぐう……っ!?!」

エド LP2200↓1000

「あいにくと、もう手はないんだ。これでターンエンドさ」

これで、エドのライフは1000。チャクチャルさんを維持できれば次のターンでほぼ確実に1200ダメージを与えられ、そうすれば僕の勝ちだ。そうしたら、一体何をたくらんでるのか話してもらおうかな。

エド LP1000 手札：3

モンスター：なし

魔法・罠：1（伏せ）

場：天空の聖域

清明 LP400 手札：0

モンスター：地縛神 Chacuc Chalhua（守）

魔法・罠：1（伏せ）

場：忘却の都 レミューリア

「なるほど。うすうす気づいてるみたいだからこの際言っておきますけど、今日のところの僕の目的はその闇のカードをこの目で見るこ

と。目的は果たせたし、この勝敗はどうでもいいですよ。何もせずにターンエンドです」

「目的……………まんまと乗せられた、ってことか。まったく、完全にやられたよ。……………ダーク・ダイブ・アタック」

エド LP1000→0

「ふー……………今日のところは勝ちを譲りますよ。それでは、またいつか会いましょう」

「あ、こちらーちよつと待……………!」

呼び止めようとしたときには、その白い姿はすっかり日が暮れていた夜の闇にまぎれてしまい。一瞬サツカー、僕のシャーク・サツカーの精霊にあとをつけてもらおうかとも思ったけど多分それも手遅れだろう。

「むう。残念」

『少なくとも、今年も退屈はしなさそうだな』

「またそんな……………でも、ポジティブに考えればそういうことになるのか。頭いいねチャクチャルさん」

『私の過ごした歳月は5000年弱だからな。当然だ』

少しは謙遜することもないと思うの、この強いんだけどしょつちゆう手札で腐る上に下手すると自爆する神様は。

もつとも、そんなところもひっくるめての邪神なんだろう。ひとたび暴れだせば相手を一瞬で倒す力があるけど、失敗するとそれはそれは邪魔になる。一筋縄ではいかないけど、どこか間の抜けた。本当に、困った神様だ。

『それはそうと、1ついいだろうか』

「何、チャクチャルさん?」

『貴方の住むべきところから、激しい空腹とそれに由来する負の感情がひしめき合っているのだが。早く帰らないと大変なことになるのでは?』

「……………あ」



たっぷり3秒ほど思考停止して、すっかり夜になったあたりを見回して。

「だーっもう、夕飯作るの忘れてたー!？」

レッド寮の皆に心の中で土下座しながら、大慌てで走って帰るのだった。すると、そこにいたのは。

「ん、お前は誰ザウルス？おーいアニキ、探してた人っぽいのがこっちに来たドン！」

……………誰？

## ターン39 変幻忍者と太古の鼓動

突然だけど。混乱しているときに落ち着く方法としては、今自分に起きていることを3行でまとめしてみる、という方法がある。ちなみに本当か嘘かは知らない。何せ、小学生の時に近所の兄ちゃんから教えられた程度の知識だからだ。なんでこんなことを今思い出したのかはよくわからないけど、少なくともやってみる分には悪くないだろう。えーつと、

①何かと怪しい新入生、エドに絡まれる。

②てえへんだ旦那、夕飯の支度ができてない。

③全速力で帰ったら十代たちレッド寮メンバーの他に誰かいた。

なるほど、さっぱりわからん。改めて、玄関の前に立ってこちらに手を振ってくる筋骨隆々の男をまじまじと見る。別に野郎なんて見ても面白いものは何もないことは百も承知だけれど、ノースリーブ状に加工された、元はライイエローの制服だったとおぼしき服装やや頭に巻いた恐竜の頭のようなバンダナが目をついたのだ。

するといつまでも距離をとったまま動こうとしない僕を不審に思ったのか、もう1度声をかけてきた。

「何してるドン？もう外は暗いんだから、そんなところで立ってないで中に入るザウルス」

「う、うん。みんなごめん、ただいまー」

僕がドアをくぐると、その黄色い男も後から入ってきてドアを閉める。とりあえず説明がほしいなああと、こういう事態には一番話の通じそうな万丈目をこっそり手招きして呼び寄せる。

「(ねえ万丈目。あの人の人だれ?)」

「まずお前は飯を作れ。話は全部それからだ」

空腹のあまり話す気力もない、と言いたげにそっぽを向く万丈目。うう、やっぱり僕のせいなんだろうか。でも、別に誰かがかわりに作ってくれてもよかったのよ?と思う今日この頃。もつとも、それだけ僕の料理が評価されると思えばまあ悪い気分じゃないけども。

夕飯は手早くできるもの……よし、チャーハンでいいか。

「できたよー、チャーハン7人前ぐらい」

「相変わらずお前の作り方はアバウトだな」

そうは言うけどね万丈目さん、食べ盛りの男子高校生が相手なんだから足りない、なんてことはあっても作りすぎ、なんてことはあり得ないんだよ？これ口に出したらまた言い合いになるから言うのはぐっと我慢するけど。

「おお、待ってたぜ！」

「遅いッスよ、清明君」

「ふん、当然この俺を待たせたただけの物にはなってるんだろうな」

『とか何とか言っちゃって、あのね清明のダンナ、さつきまで万丈目のアニキったらダンナが帰ってこないからってすごく心配してたんだよ』

「んなつ……でたらめ言うんじゃない、この雑魚め！」

『キヤー、ハネクリボーのダンナ、アニキがいじめる』

『ク、クリ!』

いつも通りの、(精霊が見える人にとっては)にぎやかな食卓。翔にもなんとかして精霊を見せてやりたいものだとは思うけど、去年1年考えてもなかなかいい方法が思いつかない。

ただ、今日は決定的に違う点が1つあった。今も精霊たちがじゃれあってる机の片隅にドン！とチャーハンのおかわり分を入れたフライパンが置かれ、潰されかかったおジャマ・イエローたちが慌てて避ける。

「いやあ十代のアニキから話は聞いてたけど、本当に先輩の料理はうまいドン！これならいくらでもおかわりいけるドン！」

なんとなく浮かんだもう一杯食べれるドン、という言霊を全力で無視しながら、あのままのペースで食べられると僕らのおかわりする分がなくなること気が付いて慌てて自分の取り分を口に放り込んでいく。

そして結局追加を作る羽目になり、それもきれいに平らげたとこ

で長かった夕食も終わりを告げる。さあ、ここからはお待ちかね質問タイムだ。

「で、改めて聞くけど。君は誰？」

「俺の名前はティラノ剣山。よろしくだドン、遊野先輩」

「ユーノ？……ああ。別に下の名前、清明あきらでいいよ。それと、その先輩ってのも1人の後輩とかぶるからやめて」

「そ、そうかドン。わかったドン、清明さん」

「ん。だいぶマシになったよ。こちらこそよろしく、剣山君」

遊野先輩、なんて呼ばれるのは初めてだ。ちよつとくすぐつたいと同時に、ユーノがいるせいで非常にわかりづらい。

だけど、向こうも向こうで君付けには慣れてないよう呼び捨てで構わないドン、ときっぱり言ってきた。ならいいんだけど。

「それで剣山、おぬしはどーしてライエローじゃなくてここにいるのかね？」

「ああ、もちろん寝る時間には寮に戻るザウルス。でも、俺は天狗になつていた俺の目を覚ましてくれた十代のアニキについていくことに決めたんだドン！」

すつごくキラキラした目できっぱりと言い切る剣山。何がなんだかよくわからないけど、その迫力に負けて何も言えなくなる。あれ、でも十代の弟分って翔もだったような。するとまるでその思いが伝わったかのように、ムスツとした口調の翔が会話に乱入してきた。

「だから、アニキの第一の弟分はこの僕、丸藤翔なんだってば！そこは勘違いしてほしくないツス」

「まだ言ってるのかドン、丸藤先輩。この俺が十代のアニキの弟分になつたんだドン！」

やいのやいのと騒ぐ2人に、それをなだめにかかる十代。どうしていいのかわからず様子を見てみると、万丈目がすつと僕の横に来た。

「あの剣山とかいうふぎけた恐竜野郎についてどう思う、清明」

「いや、どうって言われてもなんて答えりゃいいのさ。まあでも、悪い人じゃないんじゃない？」

「ふむ……俺の考えすぎなのかも、な。お前、エド・フェニックスっ

というプロデュエリストを知っているか？」

エド、というといさつきまで僕とデュエルしてた新入生を思い出す。だけど、いくらなんでもあんな若いのにプロデュエリストなんてことはない、ただの偶然の一致だろう。そもそも僕でも勝てたし。

しかしそうすると、エドなんて名前に聞き覚えはないわけ。

「いや、ちよつと。それで？そのプロがどうかしたの？」

「今日十代にデュエルを挑んで、直前に買ったパック8つを組み合わせただけのいい加減なデッキであの十代を苦戦させたんだ。なんでも、この学校に新入生として入ったらしい」

「……………ん？いやいや、まさかね。まさかあのエド、確かに胡散臭かったけどアレがプロなんてことはないだろう。」

「ちなみに写真がこれだ」

「!？」

万丈目が取りだした1冊の雑誌。その翔愛読のデュエルモンスターズ情報誌には、まぎれもなくあのエドの顔写真がプリントされていた。

写真を見つめたままフリーズして動かなくなった僕を見て何かを察したのか、真剣な面持ちで顔を近づけてくる万丈目。

「まさか、お前の所にも奴が来たのか!？」

「う、うん……………なんとか勝ったけどね、明らかに手は抜かれてたよ。天空の聖域軸の天使デッキだった」

「間違いない。それがさつきも言った、パック8個の寄せ集めデッキだ」

うわあ、としか言いようがない。あれ結構強いデッキだと思っただけ、まさかそんな寄せ集めにあれだけ苦労させられたのか。ひきつった顔を見てどれほど苦戦したのか大体的見当がついたらしく、憐みの視線を向けてくる万丈目。

「……………お前の場合はあいつのプレイングがどうこうというより、デッキ枚数60枚限界までぶち込んでるのが原因だと思うぞ」

「さ、最近頑張って1枚抜いたから今は59枚だもん」

そこは全然違う。気分的にも、そして数学的にも素数かそうでない

かという明らかな違いがある。

「それは同じだバカ」

「ぶーぶー。最近ユーノに似てきてない？口の悪さとか性格の悪さとかねじれた根性とか目つきの悪さとかその他もろもろエトセトラ」

「お、お前なあ……はあ、もういい。聞いた俺が馬鹿だったのかもしれん。それに、俺たちにはまだ理解できんプロの中での常識なのかもしれんしな」

ため息とともに会話を切り上げ、つかみ合いのけんか一歩前にまで発展していた剣山と翔の罵り合いを止めに行く万丈目。と、そうだとユーノの話をして思い出したけど、1つ聞いておきたいことがあったんだ。

「そういやさ万丈目、どつかでユーノ見てない？なんか今朝からずっといないんだけど」

「ふむ、そういえば見てないな。まあ、この名探偵万丈目サンダーの力を貸してほしいというのなら別に考えてやらなくもな……」

「そっかー。おつかしいなあ、どーこ行っちゃったんだろ」

「人の話を聞け！」

多少気にかかることこそあったものの、その日はこうして全体的には平和なまま過ぎていった。結局剣山がイエロー寮に帰ってもユーノは戻ってこず、明日の朝になればひよこつと出てくるき、と自分に言い聞かせてベッドにもぐりこむ。

「うーむ」

結論から言うと、その日の昼になってもユーノの姿は見かけなかった。ただ、授業が終わってふらりと調理室に入り込むと、そこでは現在進行形で他の問題が起きていたわけで。

「だ、か、らー！こつちだつて予約でパンツパンなんですから後から来て急にそんな無茶言わないでくださいー！」

「そこをなんとか、この通りだドン！こうやって男テイラノ剣山が恥を忍んで頭を下げてるんだから、なんとか融通を聞かせてほしいザウ

ルス！」

「無理なものは無理です！そもそも、そういう話は私じゃなくて今日も追試中であろう先輩に聞いてくださいよ」

やいのやいのと顔を真っ赤にして叫ぶ葵ちゃんと剣山。個人的にはそーっと抜け出して見なかったことにしたいんだけど、さすがにそういうわけにもいきまい。一応僕の店だし。でも、入ったら何かめんどくさいことになりそうな気もするしなあ。

「なら、その先輩が来るまでここで待たせてもらおうドン」

「いや、そういう話じゃなくてですね。そもそも、先輩の頭だとパスするのにあと2、3時間はかかりますよ？」

よし、入ろう。ちよつとだけイラツときた。正論なのが特に。

「オーケー葵ちゃん、普段から僕のことをどんな目で見てるのかはよくわかった」

「せ、先輩！……追試、ボイコットはいけませんよ？」

「いや受かったからね！？僕だってたまには合格点ぐらいとるよ！？」

なんかこの後輩の中では、僕はとんでもないバカキャラとして定着してたらしい。否定はしない。否定はしないけど、さすがにあんまりな扱いだと思う。嫌味の1つや2つぐらい言おうとして口を開いたところで、さつきまで黙って見ていた剣山が割り込んできた。

「おお、清明さん！ちようどよかったドン、頼みがあるザウルス！」

その後の剣山の話をもとめるとこうなる。なんでも朝から十代の所へ向かったらそれより先に翔と鉢合わせてしまい、昨日の口喧嘩の続きをしていたらそこでこんなセリフを言われたらしい。

『じゃあ、そこまで言うんなら1つ条件があるツス。清明君がやっている洋菓子店、実はアニキはあそこの……えっと、チーズケーキが大好物なんスよ。そこまで言うんなら、それを見事アニキのところまで持っていくツス』

で、それを聞いて喜び勇んで駆け付けてきたらしい。しよ、翔……。

「えーつと、剣山？盛り上がってるどころ悪いんだけど」

「だから頼むドン、先輩！金ならちゃんと払うから、一切れでいいんで

売ってくださいドン！」

この通り、と必死になって拌み倒してくる剣山。何と言っているのか返事に困っていると、すつと葵ちゃんがそばに来てひそひそ話しかけてきた。

「先輩？そもそもココ、チーズケーキなんてメニューにありましたっけ？」

「それがあるんだよね……なんか知らないけど焼き菓子系に人気を持つてかれてほぼ注文無いから最近作ってないけど」

「（確信犯じゃないですかそれ！）」

翔としても、自分の居場所が後輩に取られそうで必死だったんだろう。それはいい。問題は、それを無関係の僕に押し付けてきたことだ。しかも翔の性格から考えて、間違いなく本人に悪気がないのが余計にたちが悪い。

うまいことこの場を収める方法としては、どうすればいいだろうか。本当のことを言ったとしても、見た感じ素直に信じてくれそうにない。それでYOU KNOWの評判が下がるだけならまだしも――

いや、それも十分よくない話だけど――怒りの矛先が翔の方に向いたとしたら、今度こそリアルファイトに発展しかねない。そうなった場合、体格の差から言って翔がえらいことになるのは避けられないだろう。そこでふとあることを思いついてちらり、と部屋の隅に置いた業務用冷蔵庫を見る。実はあの中には、もうすでに1個だけチーズケーキが冷やしてあるのだ。まだ改良途中の試作品だから美味しいかどうかもわからない代物だけど、チーズケーキには変わりない。ただ、作りかけなんだよねあれ。……今から大急ぎで作ったとしてほしい15分くらい。よし、やってみるか。

「というところで葵ちゃん、1つ頼みがあるんだけど」

「了解です。じゃあ剣山さん、こうなったらデュエルで決めましょう。私が勝ったらあなたには帰ってもらいますが、あなたが勝てばチーズケーキは渡します。それでいいですか？」

できる後輩って素敵。僕のやってほしかったこと、そっくりそのまま悟ってくれた。



「デュエルで？もちろんだドン！ただし1つ言わせてもらおうと、俺は強いザウルス。後になつて文句は言いっこなしだドン」

「そのセリフ、そっくりそのままお返ししますよ。……じゃあ頼みますよ、先輩」

僕に向かつてウインクし、デュエルディスクを構える葵ちゃん。観戦していたいところだけど、ここは我慢我慢。時間稼ぎは全部彼女に任せよう。

「デュエル！」

「先行は私ですね。モンスターをセット、さらにカードを2枚伏せませす。そしてターンエンドです」

「悪いけど、ここは最初から全力で押し通すドン！手札から俊足のギラザウルスの効果を発動、このカードを特殊召喚するドン！」

ダダダダッと、たくましい足を持った小型の肉食恐竜が見た目通りの俊足で駆けてくる。

俊足のギラザウルス 攻1400

「ギラザウルス、ですか」

「そう、このカードは手札から特殊召喚できるドン。本当はこの時に相手は相手の墓地からモンスターを特殊召喚するデメリットがあるけれど、1ターン目ならそれも関係ないザウルス。さらにギラザウルスをリリースして、暗黒ドリケラトプス<sup>ダーク</sup>をアドバンス召喚するドン！」

暗黒ドリケラトプス 攻2400

バサリと羽を広げ、恐竜と鳥の中間地点にいるような進化の途上、といった見た目のモンスター。裏守備になった葵ちゃんのモンスターを肉食獣特有の鋭い目でギリギリとにらんだ。

って、ダメじゃんこっち見てちゃ。集中集中。

「さらに手札のキラザウルスの効果を使うザウルス。このカードを墓地に送りデッキのジュラシックワールドをサーチ、そしてそのままフィールド魔法、ジュラシックワールドを発動。この効果を受けて、恐竜さんの攻守はともに300ポイントアップするザウルス」

「む、それは通せないですね。リバースカード、砂塵の大竜巻を発動。」

この効果でまずジュラシックワールドを破壊、さらに第2の効果を使って手札のこのカードをセットします」

「お、俺の恐竜さんの楽園が！」

一瞬あたりにジュラ紀だとか白亜紀だとかを連想させる巨大植物が生えてきたかと思っただけど、別にそんなことはなかったね！一瞬呆然とした剣山だったが、すぐに気を取り直して攻撃を仕掛ける。

「だったらバトルだドン！ドリケラトプスで伏せモンスターに攻撃、怪鳥！」

暗黒ドリケラトプス 攻2400↓???

守1200 (破壊)

葵 LP4000↓2800

「ドリケラトプスは貫通能力を持つモンスター、先制ダメージはもらったドン！」

「甘いですね、忍者はただではやられません。今リバースしたモンスター、カラクリ忍者 参参九さざんくの効果を発動です。相手モンスター1体を墓地に送りますよ」

「俺のフィールドにモンスターはドリケラトプスだけ……やられたザウルス」

機械の忍者をその巨体で押しつぶし、剣山のモンスターゾーンに帰っていったドリケラトプス。だがその足が地面についた瞬間、参参九がひっそりと仕掛けておいた無数の火薬玉が爆発した。何発もの至近距離での直撃にはさすがに耐えきれず、巨体が炎の中に崩れ落ちていく。

つと、また見てた。いかんいかん。

「だけど俺だってそう簡単にフィールドをがら空きのまま終わらせはしないドン、魔法カードの一時休戦を発動。お互いにカードをドローして、これでターンエンドザウルス」

一時休戦を使ったか。これで、葵ちゃんのターンが終わるまで双方ダメージは受けなくなったわけだ。派手な見た目からは予想もできないほど隙のない動きに、さすがの葵ちゃんもやや表情を硬くする。

葵 LP2800 手札：2

モンスター：なし

魔法・罫：2（伏せ）

剣山 LP4000 手札：3

モンスター：なし

魔法・罫：なし

「私のターンです。ダメージが通せないのは痛いですが、まあよしとしましょう。忍者マスターHANZOを召喚し、効果発動。デッキから忍法と名のつくカード1枚、機甲忍法ラスト・ミストを手札に加えます。カードを伏せて、ターンエンドです」

「俺のターンだドン！ラスト・ミストは確か特殊召喚したモンスターの攻撃力を半分にするカード……なら、通常召喚で攻め込むザウルス！セイバーザウルスを通常召喚して、そのまま攻撃！」

セイバーザウルス 攻1900

尻尾が剣のようにするどい、怒りで体を赤くしたトリケラトプスが突進攻撃でHANZOへと突っ込んでゆく。しかし忍者マスターはそれを避けようともせず、背中に背負った大きな鎖鎌をその足元に投げつけて転ばせる。

「これぞ忍具、鎖鎌……攻撃モンスターを守備表示に変更し、さらに攻撃力アップのカードとしてHANZOに装備します」

「鎖付きブーメラン、そのカードはラスト・ミストじゃなかったのかドン」

「はい」

なるほど。ちなみに葵ちゃんが発動したのはさっきのターンに伏せたカード。ラスト・ミストを警戒して通常召喚したモンスターが攻撃するところまで読んでいたってわけか。

……あーもう！あっちのことはひとまず無視！でないとこっちが進まない！

忍者マスターHANZO 攻1800↓2300

しかし、これだけは気になる。鎖付きブーメランはその効果発動時、必ず2つの効果を1度に使わなければいけないわけではない。つまり、わざわざセイバーザウルスを守備表示にしなくても攻撃力アップの効果だけで振り返り討ちにできたのだ。でもそれをしなかった。考

えられるものとしては相手モンスターと自分の忍者を素材として上級モンスターを呼び出す超変化の術だけど、だとしたらわざわざブルーメランをここで使う必要がない。いったい、何を狙ってるんだか。

「俺もカードをセット。ターンエンドだドン」

葵 LP2800 手札：2

モンスター：忍者マスターHANZO（攻・鎖）

魔法・罨：鎖付きブルーメラン（HANZO）

1（伏せ）

剣山 LP4000 手札：1

モンスター：セイバーザウルス（守）

魔法・罨：1（伏せ）

「私のターン！カラクリ忍者 クイック 九壺九を召喚します！」

ドリケラトプスと相打ちになって倒れていった参参九の次に現れる第二のカラクリ忍者、九壺九。両腕に持ったクナイが、電灯の光を反射してキラリと鈍い光を放つ。

カラクリ忍者 九壺九 攻1700

「バトルです、九壺九でセイバーザウルスに攻撃！」

「ぐっ、それは通すドン」

カラクリ忍者 九壺九 攻1700↓セイバーザウルス 守40

0（破壊）

「この瞬間、九壺九の効果が発動です。このカードが戦闘で相手モンスターを破壊したので墓地のカラクリモンスター、参参九を特殊召喚！お出でませ、仕掛忍法カラクリターン！」

カラクリ忍者 参参九 攻1200

「無論、私のバトルフェイズは終わってません。参参九、やってしまってください！」

「その攻撃は通せないザウルス！トラップ発ドン、化石発掘！このカードは手札1枚をコストに、墓地から恐竜さんを効果を無効にして特殊召喚するドン！マンモスの墓場を捨てて、ドリケラトプスを復活させるドン！」

「一方こちらはカラクリモンスターの共通効果によって必ず相手に攻

撃しなくてはいけないですね。……なかなかやるようですが、私の忍者はさらに先をゆきますよ？トランプ発動、機甲忍法ラスト・ミスト！自分の場に忍者がいる状態で相手が特殊召喚した時、そのモンスターへの攻撃力は半分になります！」

「なつ、それは最初のターンから伏せてあったカード！ラスト・ミストはずっと、あの時サーチするより前に伏せてあったのかドン！」  
「ええ。特に使いどころもなかったですしね」

偶然にも、1ターンの目の再現のような形になった参参九とドリケラトプスのバトル。さつきと違うところは、参参九のほうが手にした忍者刀を振りかぶって攻撃を仕掛けていることもある。だがそれ以上の違いとして今復活したドリケラトプスの体は九壺九とHANZOの忍術により半分ほど氷漬けにされており、自慢の翼も半分しかうまく開かなくなっていた。不意打ちにこそ長けているものの正面から戦いを挑む場合の戦闘力はあまり高くない参参九でも、今の体がかいだけの的になったドリケラトプスならばなんとか互角の戦いに持ち込める。2体のモンスターが、盛大な爆発を起こした。

カラクリ忍者 参参九 攻1200（破壊）↓暗黒ドリケラトプス 攻2400↓1200（破壊）

「覚悟はできてますね？HANZOのダイレクトアタック！」

HANZOが巧みに鎖鎌を振るい、その先端が剣山の体を直撃する。

忍者マスターHANZO 攻2300↓剣山（直接攻撃）

剣山 LP4000↓1700

場の状況、手札の数、残りライフ……どれも剣山が圧倒的に不利だ。しかも場にラスト・ミストが出ていることにより墓地アドバンテージも使いづらい状況になっている。ここで剣山が引くカード次第では、このターンでけりがついてしまうこともあるだろう。ただし、剣山は荒々しく笑いながらカードを引く。デュエルを楽しむその姿は、自らを弟分と主張するだけあって十代とよく似ていた。

「俺のターン！俺は今引いたモンスター、<sup>ブラック</sup>暗黒ブラキを召喚して効果を使うドン。このモンスターは召喚成功時に場のモンスター1体

表側守備表示に変更させるザウルス。忍者マスターを守備表示にして、そのまま攻撃！」

黒い体のブラキオサウルスがその長い首を伸ばし、そのままHANZOの体を押す。余りといえればあまりに単調な攻撃は逆に避けづらかったのか、バランスを崩して倒れるHANZO。その体を、のしとしと歩くブラキの大きな足が踏みつぶした。

暗黒ブラキ 攻1800↓忍者マスターHANZO 攻2300  
↓守1000 (破壊)

「これで勝負はまだわからないドン。ターンエンド」

葵 LP2800 手札：2

モンスター：カラクリ忍者 九壺九 (攻)

魔法・罨：機甲忍法ラスト・ミスト

剣山 LP1700 手札：0

モンスター：暗黒ブラキ (攻)

魔法・罨：なし

「確かに、わからなくなりましたね。だけど、それはこつちも同じことです。ドローカード1枚で、逆転の目はいくらでも作れる！機甲忍法ゴールド・コンバージョンを発動、場の忍法カードであるラスト・ミストを破壊して2枚ドロウします。カードを2枚伏せ、九壺九を守備表示に。ターンエンドです」

「なんだ、大きなことを言った割には伏せカード2枚で終わりかドン？」

カラクリ忍者 九壺九 攻1700↓守1500

若干呆れ気味の剣山の声。葵ちゃんは薄く笑うのみで、それにひとも答えない。

その静かな気迫に一瞬剣山もたじろぐが、すぐに気を持ち直す。

「まあ、どんな罨が張ってあるとしてもこのティラノ剣山、真つ向から受けて立つドン！暗黒ブラキで九壺九に攻撃！」

再びどしどしと歩き、カラクリ仕掛けの忍者を踏みつぶそうと迫るブラキオサウルス。だが、今まさに踏みつぶされる、というところで九壺九の体がピカリと光った。そして、さっきまで九壺九のいた位置

にはごろんと転がる丸太が1本。

「九壱九が攻撃対象になったことで表示形式は変更されますが……ト  
ラップ発動、忍法 空蟬の術！このカードが存在する限り、私の九壱  
九は戦闘破壊されませんよ」

暗黒ブラキ 攻1800↓カラクリ忍者 九壱九 守1500↓  
攻1700

葵 LP2800↓2700

「な、なんだ、驚いたドン。なら、メイン2で恐竜族モンスターのブラ  
キをリリース。最上級モンスター、エンシエント・タイ超古代恐獣を召喚ザウルス！」

ブラキオサウルスの姿が消え、背中から一組の翼を生やした角を持  
つ本当に恐竜なのかと疑いたくなるような恐竜が、口からビームを吐  
いて葵ちゃんを威嚇する。

ねえこれ、本当に恐竜なんだろうか。恐竜型メカとかドラゴンとか  
そんな感じにしか見えないんだけども。

超古代恐獣 攻2700

「こいつは最上級モンスターだけど、恐竜族モンスターを使う場合リ  
リース1体で召喚が可能だドン。これでターンエンドザウルス」

「いいえ。エンドフェイズにトラップ発動、忍法 分身の術！場にい  
る忍者をリリースすることで、レベル合計がその忍者以下になるよう  
選択してデッキの忍者を特殊召喚します。九壱九のレベルは4、よっ  
てレベル1の青い忍者、同じくレベル1の赤い忍者を攻撃表示で特殊  
召喚！」

赤い忍者 攻300

青い忍者 攻300

葵 LP2700 手札：2

モンスター：赤い忍者（攻・分身）

青い忍者（攻・分身）

魔法・罨：忍法 空蟬の術（無）

忍法 分身の術（赤・青）

剣山 LP1700 手札：0

モンスター：超古代恐獣（攻）

魔法・罨：なし

「私のターンです。ふふ、覚悟はいいですね？2体のモンスターをリリースし、来なさい、葵流忍術最強のしもべ！銀河眼の光子竜をアドバンス召喚します！」

銀河眼の光子竜 攻3000

ついに現れた葵ちゃんのエース、白いドラゴン。羽の生えた恐竜などおそるるに足らずといわんばかりに光を全身から放つその姿は、僕がデュエルした時と同じように圧倒的な迫力を持っていた。

「バトル！銀河忍法は使わず、そのまま超古代恐獣を戦闘破壊します！破滅のフォトン・ストリーム！」

銀河眼の光子竜 攻3000↓超古代恐獣 攻2700（破壊）

剣山 LP1700↓1400

最上級モンスターのバトルは、わずかの差で銀河眼が勝利を収めた。少しだが確実に、剣山のライフも削られていく。

「なかなかやるドン。でも、このドロウによつては……！カードをセットして、ターンエンドだドン」

ドロウカードを見た剣山の目の黒目部分が一瞬スツと細まり、まるで人間じゃなくて爬虫類か何かのように見えたのは、僕の気のせいだったろうか。ともかく剣山は何かカードを伏せ、ターンを終えた。

葵 LP2700 手札：2

モンスター：銀河眼の光子竜（攻）

魔法・罨：忍法 空蟬の術（無）

忍法 分身の術（無）

剣山 LP1400 手札：0

モンスター：なし

魔法・罨：1（伏せ）

「私のターン。おや、ここで引きましたか……魔法カード発動、成金ゴブリンです。相手に1000のライフを与える代わりにカードを1枚ドロウします、これぞ名付けて成金忍法マネーイズライフ」

剣山 LP1400↓2400

「今はこれじゃなくてモンスターが欲しかったですね。まあ引けな



かったものは仕方ありません、手札の装備魔法、愚鈍な斧を銀河眼に装備します。効果は無効になりますが、攻撃力が1000あつぷしますよ。そして攻撃です、破滅のフォトン・アックスストリーム！」

いかにも重そうな大斧を両手持ちする銀河眼が、力任せにその斧を叩き付ける。明らかに銀河眼には合っていない武器ではあるが、そのサイズの刃物ならばただ振り下ろさせるだけでもかなりの破壊力を持つことになる。

「トランプ発動、生存本能！このカードは発動時に墓地の恐竜族を外し、1体につき400のライフを回復させる。俺はギラザウルス、ドリケラトプス、キラーザウルス、ベビケラザウルス、セイバーザウルス、暗黒ブラキ、超古代恐獣の7体を除外してライフを2800回復するドン！」

銀河眼の光子竜 攻3000↓4000↓剣山（直接攻撃）

剣山 LP2400↓5200↓1200

「なるほど、回復兼恐竜のエースとして名高いディノインフイニティへの布石ですか。そんなわかりやすい手、先輩じゃありませんし私にはまるっとお見通しですよ」

「ちよっと待って！なんで僕がそこで出てくるのさ！」

さらっとひどいことを言われた気がしたのできつちり抗議しておく。もつとも、ディノインフイニティとやらがどんなカードなのかわからないから葵ちゃんの言ったことは全然間違っていないんだけど。

「まあ、先輩はいいとして。ターンエンドです」

「俺の狙いは確かにディノインフイニティだドン。そしてその手札の1枚が確実にラスト・ミストな以上、問題はもう1枚のみ。それが万が一オネストなら俺の負け、でもうまくいけば俺の勝ち。なら男剣山、ここはでっかく勝負ザウルス。俺は今引いたカード、ディノインフイニティを通常召喚！このカードの攻撃力は、除外されている恐竜族モンスター1体につき1000ポイントだドン！」

恐竜の王者、ティラノサウルスが光のドラゴンと向かい合い、天に向かつて一声吠える。どうやら、このデュエルもいよいよ終わりを迎えるようだ。

デインフィンニティ 攻0↓7000

「バトル！デインフィンニティで、効果が無効になっている銀河眼に攻撃！インフィンニティ・ファンング！」

荒ぶる恐竜の、どこまでもまっすぐな突撃。それを重量感たっぷりその斧で迎え撃つ銀河眼。

そして――

「通るか!？」

「いいえ、手札からオネストの効果を使います！エンドフェイズまで銀河眼は、デインフィンニティの攻撃力を得ますよ！」

銀河眼が斧をそこらへんに放り投げ、全身全霊の光のプレスでデインフィンニティを焼き尽くした。

デインフィンニティ 攻7000（破壊）↓銀河眼の光子竜 攻3000↓9000

剣山 LP800↓0

「くーっ、負けたドン！十代のアニキといいアンタといい、世界は広いザウルス！」

「どういたしました。あなたも強かったですけどね」

負けたというのにどこか爽やかに笑ってみせる剣山。この切り替えの早さは立派な長所だと思う。うんうん、本当に今年の新入生は優秀だなあ、と一人で頷いていると、葵ちゃんがこっそり寄ってきた。

「（それで、先輩？どうせ私が勝っても負けても作るつもりはあったんでしょ？私にできるだけの時間は稼ぎましたけど………大丈夫ですか？できましたか？）」

「あ」

そこでようやくピンときた。鎖付きブーメランとかオネスト召喚しないとかいくつか疑問点もあったけど、あれは全部時間稼ぎのためにやってくれてたのか。普段の彼女なら多少の伏せがあっても押し通すことが多いからああいう慎重プレイングは珍しいと思ったら、そういうことだったのね。

「……………ほんつとどうしようもない人ですね先輩はっ！」

「はい。ごめんなさい」

さすがに半ギレ状態になった葵ちゃんを見て、すぐさま素直に頭を下げる。今回悪いのは全面的にこちらなのはよくわかってるし、もし下手に口答えして辞められたらものすごく困るので甘んじてこの説教は受けるしかないよね。

「ぼさつと立ってないで正座しなさい、先輩！」

「あ、あの、一応聞きますけど……………」

「当然、床にですよ？」

「はい。わかってました」

この様子をそばで見ていた剣山は、助けしてくれるかと思ったけどすぐに巻き込まれたらかなわんと思っただらしくてこっそり部屋を出て行った。うん、良判断だと思う。多分立場が逆なら僕もそうしただろうし。

「先輩？いいですか？」

「は、はい！」

そして思った。ああ、これ今日も帰りは遅くなりそうだ。

ちなみに案の定というかなんとか、その日は完全下校時間ぎりぎりまで床に正座させられました。どこかで様子を聞きつけてきたらしい夢想が強制的に葵ちゃんを引っ張って行ってくれたから助かったけど、あれがなかったらと思うとぞつとする。

ユーノは今日もない。そろそろ不安になってきたけど、いったいどこで油売ってるんだろうか。

## ターン40 鉄砲水と過去の源流

「……………よしっ！もうこれで大丈夫、どんな状況が来てもサツと応えられる！」

「ふーん。じゃあひとつ質問していい？これ答えられたらテストで困ることはないだろうから帰ってもいいよ」

「え、ホント稲石さん!? よーし、かかってこいやー！」

いつもの廃寮にて。新学期最初の実力テストを前に、僕は亡霊稲石さんの個人授業を受けていた。なにせ実技がなければ進級すら怪しい程度の成績だったから、テストは気が抜けないのだ。

「じゃあ問題。自分のライフが1000、相手ライフが1500とします。相手の場にダーク・キメラが出ている状態で自分と相手がブラック・ガーデンを発動、その後召喚したカラテマンが効果を使って攻撃を仕掛けたら相手が攻撃宣言時に収縮をカラテマンに使いました。そこでチエーンして旗鼓堂々を発動、墓地の進化する人類をカラテマンに装備。さあ、この場合どっちがいくつダメージを受けるでしょう」

長い長い長い！問題長いよ稲石さん！だ、だけどこれはあくまで戦闘ダメージに関する問題なんだ。その場合、こつちには切り札がある。

「当然0以外ありえないね。なぜならその戦闘で、両者が手札からクリボアの効果を発ど……………」

「却下。それ言い出したら問題にならないでしょ?」

ですよねー。いい案だと思っただけだなあ。まあでも休みを獲得するために、脳みそをフル活用させて考える。そもそもカラテマン自身が召喚した瞬間攻撃力……………あれ?カラテマンの最初の攻撃力っていくつだっけ? いや、確か1000だったはず。だから半分の半分で250になって、そこから効果を使うけど確かあの効果は元々の攻撃力を倍にする効果なはず。つまりここまでで2000。だけど収縮で元々の攻撃力が半分になって進化する人類で攻撃力が上がって、あれそもそもダーク・キメラの素の攻撃力っていくつだっけ?」

「……………参りました。授業続けてください」

「ん。ちなみにダーク・キメラの攻撃力は1610、収縮の効果で半分になるのは進化する人類で2400になったカラテマンのもともとの攻撃力。つまりこの場合は攻撃を仕掛けた側が410ダメージを受けるからね」

まあこれがしつかり言えるならわざわざこんなところまで補習なんて来ないよね、と言いなながら手早く机の前に問題集を積み上げていく稲石さん。ポルターガイスト現象を駆使してふわふわと教科書をページが開いた状態で漂わせるその姿はまるでファンタジーによくある魔法使いのようだけど、浮かんでる本はあくまでもただの教科書だからそんな大それたものじゃない。

あ、そういえばデュエルモンスターの初期の名前、マジック M & ワイザース W っ  
て確かプレイヤーが魔法使いという設定で行うゲームなんだっけ。そこまで考えたところで、コツリと頭を小突かれた。

「あいて。教科書の角で叩くのはやめて……」

「集中集中。はい、じゃあ次はこのページね」

なんだかんだいって、この人……………じゃない、この霊の授業はわかりやすい。だからこそ、僕も最近はいわじわ成績が上がってきているのだ。入学試験時は110人中92番だったけど、今の平均はなんと88番ぐらい。これはすごい進歩だと我ながら思う。

……………いかん、いくらなんでも虚しくなってきた。

「さて、と。とりあえずこれだけ詰め込んどけば赤点は回避できるかな？間違いないと言うこと聞かないのはわかってるけど、普段から勉強しておこうね」

「あーあー聞こえなーい聞こえない〜」

私は何も聞いてませんよー？的なオーラを全面的に出しつつ、お小言が増える前にとっとと退散する。まったくもう、とため息をつきながらもこれまた心霊現象の一種なのだろうか、稲石さんが片手をあげると錆びついた門がひとりでに開いたので、そこから外に出る。

そういえば、今日はあのカイザーの試合がテレビ中継される日だったか。卒業してプロになったカイザーは当然のごとく連戦連勝で、ファンも多いと聞く。よし、夜になったら見てみようっと。

そんなことを考えつつプラプラ歩いていると、ポケットに突っ込んであったPDLが音を立てた。おや珍しい、僕の番号を知ってる人がほとんどいないからこつちから使うことはたまにあつてもこつちが呼び出されるなんてめったにないのに。どうせ葵ちゃんからの砂糖を切らしたとか小麦粉をぶちまけたとかいう報告だとは思うけど。

『もしもし清明？だつてさ』

「む、むむむ夢想!」

ビツクリした!!なんかもう例えるならチャクチャルさんが目を覚ました次の日からしばらくの間ナスカでシヤチの地上絵が一夜のうちに消えさりましたつてニュース見た時と同じくらいびっくりした。

『ちよつと、大丈夫？つて』

「え、え、え、なんで？えー嘘、なんでこの番号知ってるの!」

『ああ、それ？それは、ほら。はい、かわりに喋ってくれる？だつて……………あ、もしもし先輩ですか？私です、葵です。なんでも夢想先輩が先輩の連絡先を教えてほしいつて言つてたからこの番号伝えましたけど、もしかしてまづかつたですか？』

「い、いや。盛大に驚いただけだから。みりんと醤油を間違えちゃうようなもんだよ」

『あー、それは確かにキツイですねー。じゃ、そろそろ夢想先輩に戻りますので……………つてことなの、なんだつて』

うん。確かに店の関係でトラブルがあつたらすぐ僕に連絡ちようだいつて葵ちゃんにはアドレス教えてあつたから、確かに筋は通つてる。それにしても若干、どころかかなりカッコ悪いところを見せたよ。うな気がする。気がするんじゃないやなくて完全に見せた。くつ、今からでもなんとか誤魔化せるだろうか。

「ごめんごめん、いきなりだつたからついで。それで？どうしたのさー体」

言つてから思つたけど、今のはいくらなんでもちよつと素つ気なさ

すぎやしなかつただろうか。これで夢想到申し訳ない気持なんか持たせたらどうしよう、いやそれならまだマシなほうだ。最悪嫌われてもおかしくない。

画面の前でたらたらと冷や汗を流すその姿は、さぞかし不審に見えることだろう。けどわからない、この後どういった対応をするのがベストなのかがつたたくもってわからない。よく考えろ、僕。下手なことを言おうものなら一発で泥沼にはまり込むぞ。というか、もうすでに片足突っ込んでる気もするし。

あれこれ考えすぎて脳がオーバーヒートする寸前ぐらいのところ  
で、夢想の声が聞こえた。

『とりあえず校長室まで来て、だつてさ。鮫島校長……はいないから、代理のクロノス先生から話があるんだつて』  
「？」

今度こそ、何かやったのがばれたんだろうか。見つかったら怒られるであろうネタは身に覚えがありすぎるぐらいにあるから、もう何が見つかったのかが分からないけども。

「どうも皆さん、よく来たノーネ」

校長の椅子に満面の笑みでふんぞり返るクロノス先生。確か『臨時』で『代理』の『仮』校長になったんだっけか。鮫島校長はどこ行っちゃったんだろう。

「前置きはどうでもいい。こんなに人を集めて、一体何のつもりだ」  
むすつとした声の万丈目。こんなにももつともなことだ。何しろこの部屋には今、僕と同じように招集をかけられた万丈目に十代に三沢に明日香と夢想。メンバーがカオスすぎていったい何をやらせようとしているのかまるで見当がつかない。と思っただけこの面子、よく考えたら万丈目以外は去年のノース校対本校のタタカイに代表者として出たメンバーじゃないか。その万丈目だってあっち側のリーダーだったんだし。

「いい質問ノーネ、シニョール万丈目。実は先日、デュエルアカデミ

アノース校の校長から通信が入ったノーネ」

「ノース校から？ 一体あいつらが何の用だ。アームド・ドラゴンなら返すつもりはないと言っておいてくれ」

「そういや万丈目のアームドシリーズって、ノース校で伝説扱いされてたのを借りパクしてるカードなんだっけ。1回本人から聞いたことがあるけど、特に返せと催促されなかったから返さなかったのとこのとらしい。」

「まあまあ、とりあえずこの映像を見るノーネ。その方が話が早いですーノ」

「そう言ってリモコンをピッと操作すると、ウイイイインと天井からスクリーンが垂れ下がってきてさらに自動でカーテンが閉まった。」

「へえ、この部屋こんな機能があったのか！」

「随分とハイテクザウルス。さすがデュエルアカデミア高等部だドゥン」

「そんなどうでもいいことをしゃべっているうちに、画面にはノース校の校長……えと、名前なんだっけ。まあとにかく、校長が写った。」

『どうも、鮫島校長。お久しぶりです』

「ポチツとな。このセリフについては、彼はこのクロノス・デ・メデイチが校長となったことを知らないうちに送ったメッセージだから聞き流してほしいノーネ」

「わざわざここで一時停止を入れるクロノス先生。あれ、代理だよね？ とツツコミたくなったのは僕だけじゃないはずだ。」

『さて、こうして連絡を入れたのはほかでもありません。去年はそちらに敗れたノース校対本校の試合ですが、ぜひ今年もやりたいとの声があうちの生徒から多数寄せられました。もしよろしければ、昨年と同じ条件での5対5のチーム戦を開催したいと思っっているのですが、いかがでしょうか。返信、お待ちしております』

「ポチつと。つまり、そういうことなノーネ」

「懐かしいなあ。まさか、急にやって来たとはいえテレビ中継までされたあのノース校との戦いで鮫島校長が勝ち取ったものがトメさんのキス1回だとは思わなかった。たぶんあのノース校長もどちらか



というところの方が目当てなんだろう、きっと。

「それで？わざわざ呼びつけておいて、まさかそれだけということはあるまい」

「それには深いわけがありますノ。今日集まってもらったシニョールアーンドセニョリータにまた代表5名をしてもらいたいと思っておりますが、実はこのテープ、まだ続きがあるノーネ。またまたポチツとな」

急に真剣な顔になって、リモコンのボタンを押す先生。画面のいち……いちの……そうだ、市ノ瀬校長だ！まあとにかく、その校長が再び口を開く。

『ところで、鮫島校長。愚痴をこぼすようで申し訳ないが、私には一つ心配事があるのだが。最近このノース校では生徒たちの間でなにか宗教のようなものが流行っていて、それに影響された子が制服を白くしたり部屋を白く塗り替えたりとやりたい放題なんだ。確か名前は……光の結社、とか言ったかな。今のところ全生徒の3分の1ほどの間に広まっていて、あのサンダー四天王の言うことにすら反発することもある一大勢力を築きあげつつあるのだよ。教職者として、私に至らない点があったのは認めよう。だからせめて、私のことを反面教師にしてアカデミア本校ではくれぐれも気をつけてほしい。それと万丈目君、アームド・ドラゴンを返してくれ』

……なんだろう、これ。こんなものを僕らに見せて、一体クロノス先生は何がしたいんだろうか。

だけど、万丈目はどうやら違うことを感じたらしい。

「おい、クロノス教諭。この話、もう少し細かいところはわからんのか？とりあえずアームドは返さんと連絡を……」

「申し訳ないですが、さっぱりわかりませんノ。何回かノース校と連絡を取ろうとはしていますが、全然応答がないノーネ」

「何、応答がないだと？」

なんだか、ずいぶんと不穏な話になって来たものだ。大丈夫だろうか、ノース校。

「これは私の勘でスーが、どうもこの話には嫌な予感がするノーネ。

皆さんが引き受けたくないというのなら、なんとかして断れるよう私が直接ノース校に向いて交渉してみますが、いかがでしょう」

「なるほどな。つまり、進むか退くかここで決めてほしいと」

「その通りデス、シニョール三沢。私個人としては、この挑戦を断ることとでノース校に馬鹿にされるのは確かに悔しいでスーノ。しかし、私はそれ以前に一人の教師。生徒に少しでも危険が及びそうなことは断じて許さない、それが教師のありかただと思ってますノーネ」

おお、いい人だ。この人がこんなこと言う先生になるなんて、僕らの入学時には思いもよらなかったのになあ。だけど、その気持ちはありがたいけど、僕らだってデュエリストなんだ。なにより去年はセブンスターズ相手に闇のゲームで大立ち回りを繰り広げてきた僕らにとって、そんな新興宗教なんぞ怖くない。だから、

「気持ちはありがたいけど、俺はそのデュエル引き受けるぜ。売られたデュエルは買うのが礼儀だしな」

………なんで先に言っちゃうかなあ、十代。

「当然、俺もだ。ノース校のやつらにはまたこの俺が直々に活を入れてやる」

「私も参加するよ、だってさ」

「右に同じく、だ」

「私も参加するわよ」

………だからなんで僕より先に言いたいこと言っちゃうかなあ、この人たちは。それとも単にこっちのタイミングが悪いんだろうか。しようがない、せめて締めの一言ぐらいは言わせてもらおう。

「ってことですよ、先生。きつと大丈夫です、僕らは勝ちますから」

「とは言ったものの、具体的にどうしようかなあ」

あれからクロノス先生はまだ少し心配そうだったが特に何も言わず、そのまま流れ解散。正直、何かしようにも情報が少なすぎるのだ。

「ただまあ、特訓はしておかないとねえ」

きつとサンダー四天王だってこの1年を遊んですごしたわけじゃ

ないはずだ。なら、僕はさらにその上をいかないと格好がつかない。そもそも僕、去年は副将の鎧田にこそ勝ったけど公式の試合では万丈目に負けちゃったし。

そして、僕には1つ前々からやってみたかったことがある。いい機会なので、あの男に頼んでみよう。

「……………なるほどな。確かにこの学校中探しても、そういうことなら俺が一番だろうな。いいぜ、あの時に俺を止めてくれた借りもまだ返せてなかったしよ」

「うん、ありがとう。だけど悪いね、せっかく自分なりのデツキを作ってる最中でまたこんなことさせて」

あつさりOKはもらったけど、さすがにちよつと良心が痛む。何しろ今からやってもらうことは、例えるならばアル中が治りかかってきた人を結婚式に呼んで酒盛りさせるようなものなんだから。

「けどその男は、気にすんな、と快活に笑ってみせた。」

「実を言うとな、もうできてるんだ。ちよつと待ってろ、今持ってくるから」

「うん、頼むよ……………神楽坂」

おう、と一言返して。ライイエローにおいて三沢とは別のベクトルで秀才と呼ばれる男、神楽坂は席を立った。

「さて、と。考えてみれば、こういう頼みをされるのは初めてだな。じゃあ、俺……………いや、僕とデュエルしようか」

「うん。じゃあ、デュエルと洒落込もうか！」

「デュエル！」

先攻をとったのは、神楽坂。5枚の手札をざつと見て、一瞬で自分のとるべき最適な一手を見つけ出す。

「手札からアトランティスの戦士を捨てて効果発動、デツキからアトランティスのフィールド魔法をサーチする。そしてこのアトランティスをそのまま発動。さらに魔法カード、スター・ブラストを発動！このカードは500単位でライフを払って、手札か場のモンスター

のレベルを下げるカード……僕は1000のライフを払って、手札にいるレベル6になったシーラカンスのレベルをさらに2つ下げる！レベル4のシーラカンスを通常召喚だ！」

神楽坂 LP4000↓3000

超古深海王シーラカンス 攻2800↓3000 守2200↓2400 ☆7↓6↓4

アトランティスの効果でレベルが1下がっているシーラカンスのレベルをさらに2つ下げての、1ターン目からの最速シーラカンス召喚。普段僕の味方として暴れてくれるシーラカンスがこうして敵に回るのは、考えてみれば初めてだ。

だけど、これこそが僕の望んでいた展開。今神楽坂に使ってもらっているデッキは、去年の僕が使っていたものと同じものである。通称ミラーマッチと呼ばれるデュエルは、カードパワーが同じなぶんプレイングと運の差が物を言う。だが、神楽坂にはデュエルする際にコピーしたデッキの使い手のプレイングや癖をそっくりそのまま使うという特技がある。つまり、今僕の目の前にいるのは去年までの僕そのもの。この相手にどれだけ差をつけて勝つことができるかで、今の僕の力量も知れるというものだ。

「シーラカンスの効果を発動、手札を1枚捨てることでデッキからレベル4以下の魚族を出せるだけ特殊召喚する！魚介王の咆哮！」

魚の王の号令が、デッキの部下を呼び起こす。まさにテンプレの動き。

ハリマンボウ 守1000↓3000 攻1500↓1700 ☆3

↓2

ハリマンボウ 守1000↓3000 攻1500↓1700 ☆3

↓2

オイスターマイスター 守2000↓4000 攻1600↓1800

0 ☆3↓2

フィッシュボーグーアーチャー 守3000↓5000 攻3000↓

5000 ☆3↓2

「カードをセットして、エンドフェイズにシーラカンスのレベルは戻

る。ターンエンドだ」

「僕のターン、ドロー！」

あのデッキを使ってた僕だからわかる。あの伏せカードは恐らく、破壊された水属性を完全復活させる激流蘇生が攻撃を無効にしてダメージを叩き込むポセイドン・ウエーブだ。

「速攻魔法、サイクロンを発動！その伏せカードを破壊だ！」

「しまった、激流蘇生が!？」

「よし！とはいえ、シーラカンス越えはそうそう出せないし……モンスターを裏守備でセット、さらにカードもセット。これでターンエンド」

神楽坂 LP3000 手札：0

モンスター：超古深海王シーラカンス（攻）

ハリマンボウ（守）

ハリマンボウ（守）

オイスターマイスター（守）

フィッシュボーグーアーチャー（守）

魔法・罠：なし

場：伝説の都 アトランティス

清明 LP4000 手札：3

モンスター：???（セット）

魔法・罠：1（伏せ）

「僕のターン！永續魔法、強欲なカケラを発動。そしてシーラカンスで裏守備に攻撃、マリン・ポロロッカ！」

超古深海王シーラカンス 攻3000↓??? 守1000↓120

0（破壊）

「この瞬間、グリズリーマザーの効果発動！このカードが戦闘破壊されたことで、デッキから攻撃力1500以下の水属性1体を特殊召喚する！僕が呼ぶのはこのカード、ヒゲアンコウ！」

ヒゲアンコウ 攻1500↓1700 守1600↓1800

☆4↓3

この攻撃はもうわかっていた。だって僕だし、あそこでセットモン

スターを警戒するなんてありえない。そして引いたカードが強欲なカケラであることを自分からばらしてくれた以上、警戒することなく安心して僕のターンでモンスターが出せる。

「そして僕のターン。ダブルコストモンスターのヒゲアンコウをリリースして、青氷の白夜龍を召喚！」

シーラカンスを超えるその攻撃力は、僕のデッキの中で最大の固定値を持つ。思えば、このカードにも随分とお世話になって来たものだ。

青氷の白夜龍 攻3000↓3200 守2500↓2700

☆8↓7

「白夜龍でシーラカンスに攻撃、孤高のウインター・ストリーム！」

「へへ、悪いね！墓地からキラークラフカのモンスター効果発動！このカードをゲームから除外することで魚族のシーラカンスに対する攻撃を無効にして、さらに白夜龍の攻撃力は僕のエンドフェイズまで500ダウンするよ」

冷気のブレスは、半透明の魚によってあっさりと防がれる。しかも、攻撃力がシーラカンスを下回る結果になってしまった。

青氷の白夜龍 攻3200↓2700

「くっ、これでターンエンド」

神楽坂 LP3000 手札：0

モンスター：超古深海王シーラカンス（攻）

ハリマンボウ（守）

ハリマンボウ（守）

オイスターマイスター（守）

フィッシュボーグアーチャー（守）

魔法・罨：強欲なカケラ（0）

場：伝説の都 アトランティス

清明 LP4000 手札：3

モンスター：青氷の白夜龍（攻）

魔法・罨：1（伏せ）

「僕のターン、ここで攻め込む！まずドロートしたから、カケラに強欲力

ウンターが一つ。ハリマンボウをリリースして、ジョーズマンをアドバンス召喚！そしてジョーズマンは当然アトランティスの効果を受けて、さらにこのカード以外の自分の水属性1体につき300で攻撃力を上げていく」

ジョーズマン 攻2600↓4000 守1600↓1800

☆6↓5

「さらにハリマンボウが墓地に送られたことで、相手モンスター1体の攻撃力を500ダウンさせる」

青氷の白夜龍 攻2700↓2200

どんどん弱体化していく白夜龍に対し、攻撃力をガンガン上げていくジョーズマン。あれ、自分で言うのもなんだけど去年の僕ってこんなに強かったっけ。絶対神楽坂のやつ、ちよっと強さ盛ってるでしよ。

「このターンでケリをつけられるかな？前進あるのみ、まずはシーラカンスで攻撃！マリン・ポロロッカ！」

超古深海王シーラカンス 攻3000↓青氷の白夜龍 攻220

0（破壊）

清明 LP4000↓3200

「ぐうっ………！だけどここでトラップ発動、リビングゲットの呼び声！墓地から白夜龍を選んで蘇生、アトランティスの効果で攻守アツプ！」

魚の王の突撃を受けて一度は吹き飛ばされた白夜龍が、今の一撃でぼろぼろになった氷の翼を広げてジョーズマンの攻撃から僕をかばうように立ちふさがる。………ごめん、白夜龍。

青氷の白夜龍 攻3000↓3200 守2500↓2700

☆8↓7

「無論、ジョーズマンでそのまま連撃！」

ジョーズマン 攻4000↓青氷の白夜龍 攻3200（破壊）

清明 LP3200↓2400

「僕は、これでターンエンド」

「このターンで何かしないと………！ドロー！カードを2枚セットし

て、モンスターも伏せてターンエンド」

状況はかなりこつちが押されてる。とにかく、あの布陣をなんとかしないと僕の勝ちはない。このカードがうまく通りさえすれば、一気に逆転の目もあるんだけども。ただこのカードはかなり受身なカード、あつちが警戒してそのまま攻撃したら何もできない。

神楽坂 LP3000 手札：0

モンスター：超古深海王シーラカンス（攻）

ジョーズマン（攻）

ハリマンボウ（守）

オイスターマイスター（守）

フィッシュボーグーアーチャー（守）

魔法・罨：強欲なカケラ（1）

場：伝説の都 アトランティス

清明 LP2400 手札：1

モンスター：???（セット）

魔法・罨：2（伏せ）

「よしっ、僕のターン！カードをドロウしたから強欲カウンターがもう1つのおつて、その状態のカケラを墓地に送って2枚ドロウ！ここはアーチャーをしようかな。水属性モンスターをリリースすることで、シャークラーケンを特殊召喚！」

シャークラーケン 攻2400↓2600 守2100↓2300

0 ☆6↓5

いよっしやああああ、と叫びだしたい気分だった。馬鹿だ。昔の僕、やっぱ馬鹿だった。大体デッキの内容は大まかなところは変わってないんだ、この状況でセットなんてレベル4以上とのモンスターに対する戦闘破壊耐性もちの氷弾使いレイスか、2積みだったりピン刺しだったり時と場合で揺れ動くグリズリーマザーか苦し紛れのセットか、せいぜい警戒するとしてもリバース時に相手のカード1枚をバウンスするペンギン・ナイトメアぐらいの物だろう。つまり、あのシャークラーケン召喚はナイトメアただ1枚のみに対策した、ほぼ完全にオーバークイル以外の何物でもないわけ。



「だったらあとは、そこにできた隙をつくまで！トラップ発動、激流葬！モンスターが特殊召喚されたことで、場のモンスター全てを洗い流す！」

「な、なんだって!？」

なんだって、とはいえ、多分神楽坂個人としてはオーバーキル狙いが隙を作りやすいなんてことはとづくにわかっていただろう。だけど、今の彼はあくまでも昔の僕のコピー。その役割に徹してくれたんだから、本当に感謝しないといけない。

「だ、だけどオイスターマイスターがフィールドから墓地に送られたことで、効果発動！オイスタートークンを特殊召喚！」

オイスタートークン 守0↓200 攻0↓200

慌ててトークンを召喚する。だけど、そんなことはこっちだって織り込み済みだ。

「こっちもセットしてあったオイスターマイスターの効果が発動。カモン、オイスタートークン」

オイスタートークン 守0↓200 攻0↓200

「なっ……!？!ば、僕にはまだ通常召喚が残ってる！オイスタートークンをリリースして、2体目のシーラカンスを召喚！」

「へっ、2枚目も引いてたの!？」

いかん、これは予想外。ねえ神楽坂、僕、そんなに引きよくないよ？いや、これ言ってもどうしようもないのはわかってるんだけども。

超古深海王シーラカンス 攻2800↓3000 守2200↓

2400 ☆7↓6

「ふっふっふ、一瞬肝を冷やしたけど僕の勝ちは確定かな。シーラカンスに対して魔法カード、アクア・ジェットを発動！これで攻撃力は永続的に1000アップする」

来るか魚介王の咆哮第二陣、と身構えたのも一瞬。残り手札1枚を、貴重なシーラカンスの効果発動コストになるカードをあっさりを使う神楽坂Ⅱ去年の僕。ほんつつつとに何を考えてたんだろう、去年の僕は。ちよつとだけ、本当にちよつとだけだけど、入学当初の嫌味な性格だったクロノス先生の気持ちかわかる気がした。こりや嫌味

の1つも言いたくなりませんわ。

超古深海王シーラカンス 攻3000↓4000

「シーラカンスでオイスタートークンに攻撃、マリン・ポロロッカー！」

超古深海王シーラカンス 攻4000↓オイスタートークン 守200 (破壊)

とはいえ、攻撃力4000のシーラカンスをなんとかするのはかなり難しい。さすがに次に引いたカードはすぐコストに使うだろうし、そうなったら対象をとる効果を無効にできるようになるシーラカンスはまず倒せない。この伏せカードがうまく使えるチャンスは、あと1回。この僕のドローにかかっている。

……結局、いつもこうなるんだなあ。ギリツギリの状況まで持ち込まれて、そこからデツキに助けてもらってなんとか首の皮一枚から勝負を動かす。別に不満はないけれど、たまにはもつとこう終始相手を圧倒するデュエルとかしてみたい。

「ま、さすがにそれは高望みなのかな？」

デツキトップに手をかけ、目をつぶってそのカードに神経を集中する。俺に任せろ、そうそのカードが言っているような気がした。なら、こつちができることはただ1つ。自分のデツキを信じるだけだ。

「僕のターン、ドロー！」

ほら、そうすればきつと応えてくれる。だって、この子たちは僕の大切な仲間なんだから。

「ハンマー・シャークを通常召喚して、効果発動。このカードのレベルを1下げること、手札からレベル3以下の水属性を1体……アトランティスの効果でレベル3になつてるシャクトパスを特殊召喚！」

ハンマー・シャーク 攻1700↓1900 守1500↓1700

0 ☆4↓3↓2

シャクトパス 攻1600↓1800 守800↓1000 ☆

4↓3

「ふん、そうやってモンスターを揃えてもシーラカンスの前には」

「ああそうさ、あのアクア・ジェットを手札コストに回されてたらね。」

僕がモンスターの特殊召喚に成功したことで、このトラップの発動条件がクリア……：トラップ発動、デイメンジョン・スライド！相手モンスター1体、つまりシーラカンスをゲームから除外っ！」

次元を飛び越えてシーラカンスの後ろにワープしたシャクトパスが、その鋭い口先……：でいいのかなあれ。どちらかというど鼻面？まあとにかくその部分でシーラカンスの体を一刺しする。さすがの固い鱗もこの不意を衝いての予想外な一撃は防げなかったらしく、巨体がどう、と崩れ落ちた。

「2体のモンスターでとどめ！シャクトパス、ハンマー・シャークでダイレクトアタック！」

シャクトパス 攻1800↓神楽坂（直接攻撃）

神楽坂 LP3000↓1200

ハンマー・シャーク 攻1900↓神楽坂（直接攻撃）

神楽坂 LP1200↓0

「ふー………」

正直、まさかこんなに追い込まれるとは思ってなかった。あつちのプレイミスのおかげで助かったけど、もしかして僕自身はあんまり成長してないんじゃないだろうか。

「いや、そんなことはないさ。お前は昔のお前のプレイングの甘さを見ただけで気づけたんだろう？相変わらず、オシリスレッドにしておくのが惜しいぐらいだ」

「そうかな。そうだといいんだけど」

「それに、今ので俺も何かをつかみかけたような気もするしな。俺の、俺だけのデッキが完成するのもそう遠くはないはずだ。そうしたら、またデュエルしてくれよ？」

「うん、もちろん。いつでも相手になるよ」

こうして、朝から晩まで常にドタバタしつづけた1日は終わった。明らかに様子がおかしいノース校とか明日のテストとか不安なことはいろいろあるけど、とりあえず今日は早めに寝……：いやまだ終

わってないな、大急ぎでテレビ見ないと。カイザーの試合、もうちよつとで始まつちゃう。

そう思っていたこのころは、まだ思いもしなかった。

『互いに一步も譲らなかつたこのデュエル、勝者は……………エド・フェニックス!』

「嘘……………カイザーが……………」

あのカイザーが、学園最強のサイバー流が、十代とはまた違うHE RO、フェニックスガイ系統のモンスターを使うエドの前に一敗地にまみれるとは。

「なんだかもう、信じられな……………あれ?」

圧巻のデュエルが終わり、テレビを切つて何気なく外を見ると、窓の向こう側に見慣れた顔がちらりと見えた気がした。

「ユーノ?」

一瞬だったから確証は持てないけど、あれは多分ユーノだろう。ここ数日間、一度も顔を見せていない僕の隣人。どこに行つてたのか、たっぷり問い詰めてやろうつと。

「おーい、ユーノ?」

『……………』

何も言わずにスツと寮から離れていくユーノを慌てて追いかけて、外に飛び出す。どんどん遠くに行つちゃうユーノをさらに追いかけるうちに、いつの間にか森の中に入り込んでいた。

「あつれー?しょうがないなあ、手伝つてよサッカー」

シャーク・サッカーの精霊をカードから呼び出して、ユーノの搜索を頼む。コクリと頷いたコバンザメが、するりと空中を泳いでいった。

さてと、サッカーがあつちに行つたなら、僕はこつちに行こうかな。

『お前が探してるのは俺かい?』

「あ、ユーノ!なんだ、そこに……………た……………の……………?」

何かがおかしい。にやにやと笑うユーノに、別に不審な点はみられ

ない。だけど、何かがおかしい。ふと気が付くと、いつのまにかデュエルディスクを構えていたことに気が付いた。どうも、無意識のうちに警戒度が跳ね上がっていたらしい。

『おっと、やりあおうってんじやねえんだ。これ、ちよつと見てくれよ』

そう言っただけで彼が懐から取り出したのは、1枚のデュエルモンスターズのカードで、あのデュエルキング武藤遊戯の親友である城之内克也も愛用する由緒正しきカード、時の魔術師。

「これがどうし……っ!?!」

たのか、と言い終わる前にクラリ、と急に目がくらんできた。みるみるうちに意識が飲まれていくのを感じながら、どうすることもできない。

「くっ、サッカー……」

多分サッカーが何かしてくれるだろうから、それを頼りにしよう。そう心の中で思う。完全に意識が消える寸前、ユーノのつぶやきが聞こえた。

『安心しな、4、5日もすりや目が覚めるさ。特殊能力、タイム・マジックの発展形だとも思ってくれ………確かにやりましたよ、斎王様』

## ターン41 天上の氷炎と正義の誓い

「……………ハッ!？」

慌てて跳ね起きるとそこには、

「知らない天じよ」

「む。夢想先輩、丸藤先輩！起きてください、先輩が目を覚ましましたよー！」

「最後まで言わせてよ！」

「何馬鹿なこと言ってるんですか！」

名セリフを邪魔されたのがちよつと悔しくて怒鳴ったらその倍くらい勢いで怒鳴り返された。怖い。

「清明！」

「清明君！」

「あれ、2人とも。どつたの？」

「どつたの？じゃないツスよ、清明君！もう倒れてから4日も経ってるんすよ!？」

「何イ!？」

あー、なんかだんだん思い出してきたかも。カイザーがエドに負けて、行方不明のユーノを追いかけたら時の魔術師を見せられて、いきなり意識が飛んで……………。

「アニキが教えてくれたんすよ。あいつのサッカーが助けを呼んでるって。で、そうしたら森の中で清明君がバツタリ倒れてて」

「そのあとはもう大変でしたよ。息してないどころか心臓まで止まってきましたし。よっぽどこの人はゾンビか何かかと思いましたよ」

「あ、あははー」

ゾンビ、と言われればあながち否定もしにくい気が。うーむ、何と言ったものか。

『時の魔術師だからな。油断した、完全に我々の時間を止められた』

「(あ、チャクチャルさん。それより時間を止められたって……………)」

『どうやったのかはわからないが、どうやら彼も精霊の力を行使する能力、ないしはそれに類似したものが付いたらしい。なぜそうなった

のかはともかく、これは厄介な相手だな』

なるほど、どれくらいヤバいのかはつきりしたことはピンとこないけどとにかくヤバそうなことだけはなんとなくわかった。しかしこれ、もしもサツカーが助けを呼びに行ってくれなかったらどうなっていたんだろうか。等々とそんなことをつらつら考えていると、ついいつかり自分の世界に閉じこもってしまった。周りの心配そうな視線に気づいて慌てて咳払いし、ふと気になったことに話題をすり替える。「と、ところでさー。なんか今回、お見舞い少くない？去年保健室の厄介になったときはもつといういろいろ来てくれたつてのにさ」

適当に思い付いたことを口にしただけだったのに、一気に暗くなつた3人の顔を見て地雷を踏んだことをいっぺんに悟る。

「実はね、清明。清明が倒れた次の日、学校にエド・フェニックスが来たんだよ、だつてさ」

最初に重い口を開いたのは、夢想だった。普段は何を考えてるのか今一つ掴みづらい彼女だけど、今何か心配事があることだけはよくわかった。多分、それがこの話に関係するんだろう。

「それで、エドがアニキとデュエルしたんすよ。最初はアニキが優勢デステニールヒーローだったんだけど、そのあとでエドがこれまで見たことないテーマ、D—HEROに戦術を切り替えて、それで……」

「それで、何？もしかして負けちゃつたの？」

つらそうに顔を伏せ、コクリ、と頷く翔。その時のことを思い出したのか、なんだかこれ以上喋らせたら泣きそうな雰囲気になってきた。その様子を見て気を使ったのか、ため息を一つついて葵ちゃんはそのあとを喋る。

「それで、その十代先輩ですが。負けた後しばらくの間ショックで自分のカードのテキストやイラストを確認することができない、いくら見ても白い紙にしか見えない状態になっちゃつたんです。そして、ちようど昨日のことでしたね。先輩の隣のベッドで寝かしてあげたはずなんですけど、丸藤先輩と剣山さんが元気づけに行ったらもう方向不明になつてたんですよ」

「はあ？」

なにそのトンデモ展開。でもまあ、あの十代のことだ。あのデュエル馬鹿がカードを見ることができないうんたんなったとしたら、シヨツクの余り山にでも引きこもったってあんまり違和感ない気がする。「そ、それで？当然探してるんだよね？」

「ううん、実は清明、話はそれだけじゃないの、だってさ。エドが来たその日の夕方ぐらいから生徒の間で急に光の結社っていうのが流行りだしたの、って。」

「光の結社……………」

どこかで聞いた気がする、と思ったけどあれだ。ついさつき、じやなかった僕が倒れた日の昼、クロノス先生が見せてくれたノース校からの連絡で市之瀬校長が愚痴ってたやつだ。あの時は変なこともあるもんだ程度に聞き流してたけど、まさかこつちにまでその熱が移るとは。気づかないうちに、事態はどんどん僕の知らない方向に向けて動いて行っている気がする。

「それで、その先導をやっているのがあの万丈目君なんスよ！なんか真っ白い服をどつかから持ってきて、万丈目ホワイトサンダーって名乗って校内で目に付いた人に片っ端からデュエルを申し込んで完勝、するとなぜかその負けちゃった人も真っ白い服に着替えて光の結社バンザーイって言いだすようになって……………今日この部屋に来るのだって見つからないようにしながらだからさすがに苦勞したんスよ」

「ちよ、ちよっと待って！え、万丈目ってあの？いくらなんでもそれはないでしょ」

あのいつもゴキブリみみたいに黒い上下ばかり着ておジャマ軍団共々やたら高い生命力としぶとさを全身で表現しているようにしか見えないうんたんの万丈目が、全身真っ白？似合うとか似合わない以前にそもそもイメージできん。

でも、僕だって口ではああ言ったけど、伊達にこの1年を1つ屋根の下で暮らしてきたわけじゃない。翔がこんな嘘をつけるタイプじゃないことはよくわかってるんだ。だから、この話に嘘はない。わからないのは、何がどうなってるんなイメチェンをするまでに至ったかだ。



「で、なんで万丈目がそんなことになっちゃったの？なんかこうほら、原因とか理由とか、思い当たることは？」

「…………それは…………言いくいッスけど…………」

翔さん翔さん、その態度そのものが僕のせいだって言ってるのとは同義なんですすがそれは、とは思っても言わない。これでも翔なりに考えて気を使おうとしてくれるのだ、つてことにはもう入学して2か月目ぐらいの時には理解できてたし。ただ、こういう時にはできれば、

「私も又聞きだけど、急に外に出た清明を探しに行った時からこうなつたみたい」

そう、こんなふうにはスパツと言つてくれる方がまだマシだったりするんだよね。ありがと夢想。

「いや、いったんは寮で待つてたんスよ？だけどいきなりアニキと万丈目が清明に何かあったみたいだつて言つて外に出ちゃつて、それで僕とアニキは清明君を探しに行つたんスけど、反対側にユーノ君を連れ戻しに行くつて言つたつきり万丈目君が帰つてこなくて、それで次の日にはもう」

なるほど、少し読めてきた。僕がユーノを追いかけて外に出て、時の魔術師の効果を受けたところでサッカーが救援を求めてレッド寮に。精霊が見える十代と万丈目の二人がそれぞれ僕とユーノを探しにバラバラになったところをその光の結社とやらに狙われたつてとか。

……………畜生。

「つまり、だ。一から十まできれいさっぱり全部まとめて僕のせい以外の何物でもないよねーこれ。だいたいわかつてきたけど、まだほかにいるでしょ？明日香とか三沢、それに剣山とか神楽坂辺りは今どうしてるの？」

努めて投げやりな口調になつて、煮えたぎつてる腹の中を表に出さないようにする。自分のことを許せない。どうしてこう、迷惑をかけるんだらう。僕が1人で外に出なけりや、こんなことにはならなかつたらう。せめて誰かに声をかけておくなり、この事態を回避する方法

はいくらでもあったはずだ。下手に自分の感情を爆発させたらどうなるかわからない一方で、それを冷静に見てる自分も心のどこかにいる。もし今心の中にあるものを全部解き放ったら、ダークシグナーになったことで増幅されたらしい心の闇の力も相まってとんでもないことになるだろう。もう、闇堕ちルート待ったなしの一直線。

でも、それも面白いかもね。そう心の中でそつと続け、それに対してまたぞくりとする。

『安心しなさい。心の闇なら私の、地縛神の専門だ。私がいる限り万一そちらでコントロールし損なっても何とかできる』

……お人よしというかなんというか。本当に優しいなあ、この神様。効果も強いし、これで自爆さえしなけりや言うことなしなんだけど。つと、また話がずれた。

「まず、神楽坂君はもう光の結社ツス。剣山君はさつきまでいたんスけど、清明君が目を覚ますちよつと前に十代のアニキも心配だから山まで行ってくるドンって」

「明日香は昨日、ショック療法で万丈目君の目を覚まさせてあげるわって言うてついデュエルを挑んだの、だつてさ」

「明日香らしいね。それで、どうなったの？」

もう薄々予想はつくけど、それでもはつきりと聞いておかなきゃいけない。僕が引き起こしたとまでは言わないまでも、僕のせいで被害が圧倒的に大きくなってるのは否めないんだ。せめて今できることは、何が起きたかを正面から受け止めることだけだ。

「万丈目君、いつもとは全然違うデツキを使つてたんスよ。それでも明日香さんは強くて、あと一撃で勝てるところまで行つたんスけど、結局最後には負けちゃつて……それから急に、まるで何かに憑りつかれたみたいで光の結社の一員になって、今はかなり上位の方で片っ端から勧誘してるみたいツスよ」

「そう……それで、三沢は？」

セブンスターズの時に共に戦った七星門の鍵の守護者最後の一人、三沢大地。正直、三沢まで敵に回られたらかなり難易度が上がるからやめてほしいのだが。

「あ、そろそろですよ先輩達！今日はその三沢先輩が、万丈目先輩にデュエルを挑んでるんです！目が覚めたなら見に行きましょう、もうすぐ始まつちやいます！」

「三沢が!？」

で、保健室からそう遠くないデュエル場。去年もしばらく寝込んでた僕だからわかるけど、デュエルの際の叫び声やら爆発音やらがドアを開けると聞こえてくる程度には近い。一応防音設備は整ってるから保健室を本気で閉め切れればシャットダウンできるんだけど。なんでも、デュエルの生の音を聞かせることによりデュエリストとしての生存本能を高めて免疫系を活性化させ、強引に傷も病気も治してやろうという理由があるらしい。でもまあ、入院で退屈してる時にぱっとデュエルが見に行けるってのはありがたいよね。

閑話休題。僕たちが駆けつけると、確かにそこには真っ白な2Pカラー版万丈目と黄色いいつも通りの三沢が向かい合っていた。

「そのの貴様、誰が2Pカラーだ！俺は斎王様からの訓示を受けた白の貴公子、万丈目ホワイトサンダーだぞ！」

「げ、聞こえてたの!？」

その声を聞き、三沢もこちらを向く。もう大丈夫だ、ということ伝えるため軽く手を振ると、ほっとした様子で片手を上げて返事した。そして万丈目の方を向き、重々しく口を開く。

「万丈目……お前の目は、ここで俺が覚まさせてやる！天上院君の仇は、俺が取る！」

「ふん、1つ教えてやろう、三沢大地。俺は万丈目ホワイトサンダー、つまりは万。そしてお前の名は三沢、つまり三だ。わかったか、俺とお前の間には、戦う前からすでに9997もの差があるのだ！」

「どこかで聞いたような気がするセリフだな、万丈目。言いたいことはそれだけか？」

「無論。言葉などはもう必要ない、斎王様の正しさはこのデッキが語ってくれる」

すっかり変わったような、でも本質的にはそんなに変わってないような気がする万丈目と、上着の中からデッキを1つ取り出して素早くセツトする三沢。もつと見やすい位置に移動している僕らをよそに、黄色と白の戦いが始まった。

「デュエル！」

先攻となったのは、三沢。

「俺が召喚するのはこのカード、豪雨の結界像だ」

カエルのような水色の置物が三沢の場に召喚されると、不思議なことに室内のはずのフィールドに雲が立ち込め、あつという間に雨が降り始める。

豪雨の結界像 守1000

「このモンスターが存在する限り、お互いに水属性以外のモンスターは特殊召喚できない。まずはこのモンスターでお前の目論見を崩してやろう。カードをセツトし、ターンエンドだ」

「ちっ、特殊召喚封じか。忌々しい、俺のターン！おっ、いいカードを引いた……いいか三沢、1つ教えてやろう。俺が今引いたカード、これこそが斎王様が今朝俺に渡してくれた運命のカード。宣言してやろう、お前はこのカードの効果の前に敗北することになると！だが今は使わない、このカードともう1枚、別のカードをセツトしてライトロード・ドレイド オルクスを召喚する」

大きな石板を小脇に抱える、白い服と髪が特徴の壮年の男性が召喚される。なるほど、ライトロードか。ロクに効果は知らないけど、そういうテーマがあるってことだけは知っている。カードごとのスベックの高さが売りの戦闘集団、だったかな。

ライトロード・ドレイド オルクス 攻1200

「行け、オルクス！その小さなカエルを噛み千切ってやれ」

万丈目の声にコクリと頷いたオルクスが呪文をぶつぶつと唱えるとその姿がいきなり光り輝く一匹の狼になって結界像に突撃し、その牙であっけなく噛み砕いた。

「なるほど、オルクスがいれば自分のライトロードは効果の対象にならないからな。俺の次のカードを警戒したか」

ライトロード・ドレイド オルクス 攻1200 ↓豪雨の結界像  
守1000 (破壊)

「ふふふ、どうやら最初のバトルは俺の勝ちのようだな。エンドフェイズにオルクス第2の効果が発動し、デッキの上からカードを2枚墓地に送る。これでターンエンドだ」

三沢 LP4000 手札：3

モンスター：なし

魔法・罫：1 (伏せ)

万丈目 (白) LP4000 手札：3

モンスター：ライトロード・ドレイド オルクス (攻)

魔法・罫：2 (伏せ)

「俺のターン、ドロ」

万丈目の場にいるのは攻撃力1200のオルクスただ一人。伏せカードもないから一見攻撃し放題に見えるけど、問題はそのオルクスが光属性だということだ。となると、最優先で警戒すべきは手札にあるかもしれないあのカード。これは、うかつに攻撃できない。

……とまあ、そんなことは僕よりも三沢が一番よくわかってるだろう。その上で、何か手を打ってくるはずだ。

「俺が召喚するのは、ハイドロゲドン。このカードならばオルクスよりも攻撃力は上、そのまま攻撃だ！ハイドロ・ブレス！」

水素の名を持つ三沢の水デッキの中核を担うモンスター、ハイドロゲドン。確かに攻撃力はオルクスよりも高い、だけどそんな単調な攻撃じゃあおそらく万丈目には通用しない！

「何？おいおい、ライエロー主席のタクティクスはそんなに単調なものなのか？ならば、ダメージステップに……」

「まあ待て。俺はこの攻撃宣言に合わせる形でこのリバースカード、マインドクラッシュを使用する！宣言するのは当然、オネストのカードだ！」

「何!?……くっ、俺は手札に存在するオネストを2枚、墓地に送る……」

なんとまあ、としか言いようがない。準制限カードであり光属性に

において最も警戒しなければならぬカードであるオネスト、それをいきなり2枚とも手札に握っていたとは。そんな運命力を持ち合わせる万丈目もすごいけど、きつちりそれをカウンターして見せた三沢はもつとすごい。やっぱりあの男は敵に回したくないもんだ。

ハイドロゲドン 攻1600↓ライトロード・ドレイド オルクス  
攻1200 (破壊)

万丈目 (白) LP4000↓3600

「そしてハイドロゲドンが戦闘で相手を破壊した時、デッキから別のハイドロゲドンを呼び出すことができる！」

フィールドに水柱が噴き上がる。おそらく、あそこから2体目のハイドロゲドンが特殊召喚されるのだろう。だが、万丈目もただでやられる男ではなかった。

「甘いな。カウンタートラップ発動、真剣勝負！このカードは相手がバトルフェイズにカード効果を使用した時、その発動を無効にして破壊する。これで貴様のハイドロゲドン連続召喚は無効になったばかりか、最初の1体さえフィールドからいなくなるわけだ」

一瞬三沢が圧倒するかに見えたこのデュエルも、これでまたわからなくなってきた。次のターンに万丈目がモンスターを出せば、十中八九ダイレクトアタックを食らってしまうだろう。

「カードをセットし、ターンエンドだ」

「俺のターン。いいカードを引いた、ライトロード・アサシン ライデンを召喚だ！」

金色に輝く包丁型の短剣を逆手に握る上半身裸の細マッチョが、鋭い眼光で三沢を睨む。

ライトロード・アサシン ライデン 攻1700

「そしてライデンの効果を発動。メインフェイズに1度、デッキの上からカードを2枚墓地に送ってその中にライトロードのモンスターがいれば攻撃力を200ポイントアップする。普通に使えば何が落とせるかはわからない効果だが、今の俺には斎王様のご加護がついているからな、この程度は朝飯前だ！送った2枚のカード、ライトロード・ビースト ウォルフを自身の効果により特殊召喚！」

ライトロード・ビースト ウォルフ 攻2100

ライトロード・ビースト ウォルフ 攻2100

ライトロード・アサシン ライデン 攻1700↓1900

「デッキトップ2枚に連続してウォルフだと!?馬鹿な、そんなことが2回も連続して起きるわけがない!」

「そういえば、天上院君に光の結社の素晴らしさを教えたのも激流葬からのこのコンボだったな。さあ三沢、お前もこの3体の同時攻撃を受けてみる!まずはライデンで攻撃だ」

「させるか!永続トラップ発動、モンスターBOX!相手の攻撃ごとにコイントスを行い、当たった場合その攻撃力はエンドフェイズまで0になる……まずは裏を選択だ」

ピーン、と空に向かつて跳ね上げられる1枚のコイン。クルクルと宙を回りながら落ちてきたそれを、三沢が手の甲で受け止める。

その向きは……表!つまりライデンの攻撃力は1900のままだ。

ライトロード・アサシン ライデン 攻1900↓三沢(直接攻撃)

三沢 LP4000↓2100

「くっ……」

「ふはは、あと2回の攻撃、どちらか一方でもコイントスを外したらジャストキルで俺の勝ちか。このまま斎王様の予言したカードを使わずに勝つのもあるいはまた一興かもしれないな、ウォルフで攻撃!」  
「俺が宣言するのは、もう1度表。ゆくぞ、コイントス!」

再び宙を舞い、三沢にキャッチされるコイン。もう後がない状況で三沢が出したのは、表。これにより攻撃力が0になったウォルフの一撃は三沢に傷をつけることすらできず、すごすごと引き返していく。だけど、まだ危機が去ったわけではない。

「最後のウォルフで攻撃!」

「確率的に言って、表が2回連続で出たということは……よし、次は裏を宣言しよう」

三度宙を舞うコイン。そういえば昔、三沢に聞いたことがある。なんでも3回コインを投げて2回表が出た場合、次に表が出る確率は2

分の1よりもちよつと少ないんだとか。何回聞いてもさっぱりわからない理論だったから理解しようとするのは諦めたけど、とにかくそういうことらしい。

「そして、裏が出たな。そのウォルフの攻撃力も0だ」

「それで命拾いしたつもりか？いや、残念だがそれは違うな。やはり貴様のライフポイントは、予言通りこの伏せカードによって0になる運命なだけだ。エンドフェイズにライデンの効果によってさらに2枚のカードを墓地に送り、これでターンを終了する」

三沢 LP2100 手札：2

モンスター：なし

魔法・罠：モンスターBOX

万丈目（白） LP3600 手札：1

モンスター：ライトロード・アサシン ライデン（攻）

ライトロード・ビースト ウォルフ（攻）

ライトロード・ビースト ウォルフ（攻）

魔法・罠：1（伏せ）

「俺のターン！スタンバイフェイズにモンスターBOXは維持コストとして500のライフを払わねば自壊する。維持コストを払おう………む？」

三沢 LP2100↓1600

500のライフコストは、決して無視できる値ではない。ないのだが、永続罠は三沢の水デツキの核。ここでモンスターBOXを失うことはなんとしても避けたかったのだろう。だがなぜか、コストを払った瞬間に三沢が少し訝しげな顔をした。ちよつどこの位置からだと万丈目の背中しか見えないのだけど、なにかおかしなものでも見えたのだろうか。

「さらに魔法カード、ブラック・ホールを発動。これにより、フィールドのモンスターはすべて破壊される。その伏せカードは、俺のライフを削るためのカードなんだろう？なら裏を返せば、そのカードに俺のブラック・ホールを妨害する効果はないはずだ」

「く、忌々しい奴め。その通りだ」



「そのままオキシゲドンを召喚する。だが、攻撃はせずにカードをセットしてターンエンドだ」

オキシゲドン 攻1800

せっかく召喚された酸素の翼竜も、なぜか絶好の攻撃チャンスに攻撃をしないままターンを譲り渡してしまふ。何をたくらんでいるんだろう、三沢。ユーノ、こんな時お前がいれば何か意見の1つも聞けただろろうに。

「ちっ、余裕を見せたつもりか？いい気になっていられるのも今のうちだ、ドロー！くそっ、俺の運命力もまだ未熟だったか。ライトロード・モンク エイリンを守備表示で召喚。さらに魔法カード、おとり人形を発動。相手の伏せカード1枚を確認し、それが発動条件を満たしているトラップならば強制的に発動させることができる」

「もう少し後に使うつもりだったんだがな。このトラップは、えんこりようざんばく炎虎梁山爆……発動時に俺の場の永続魔法か永続罠の数だけライフを回復する。今俺の場には2枚の永続罠、つまり回復量は1000だ」

三沢 LP1600↓2600

「おとり人形は発動後、デツキに戻るカード。エンドフェイズにエイリンの効果を発動、デツキから3枚のカードを墓地に。よし、今落ちたライトロード・アーチャー フェリスを自身の効果で特殊召喚し、ターンエンドだ」

ライトロード・モンク エイリン 守1000

ライトロード・アーチャー フェリス 守2000

三沢 LP2600 手札：0

モンスター：オキシゲドン（攻）

魔法・罠：モンスターBOX

炎虎梁山爆

万丈目（白） LP3600 手札：0

モンスター：ライトロード・モンク エイリン（守）

ライトロード・アーチャー フェリス（守）

魔法・罠：1（伏せ）

「俺のターンだな。随分と守りを固めたようだがどうした万丈目、お前の言う運命とやらは？スタンバイフェイズにまた500ライフを払い、モンスターBOXを維持する」

三沢 LP2600↓2100

「魔法カード、マジック・プランターを発動。永続罫カード1枚、モンスターBOXを墓地に送ることでカードを2枚ドロー。さらに魔法カード、化石調査を発動。デッキからレベル6以下の恐竜族、ハイドロゲドンを手札に。そしてハイドロゲドンを召喚、そのままエイリンに攻撃！ハイドロ・ブレス！」

ハイドロゲドン 攻1600↓ライトロード・モンク エイリン 守1000（破壊）

「そして、ハイドロゲドンの効果によって別のハイドロゲドンがデッキから特殊召喚される。攻撃、と言いたいところだが、フェリスを倒すことはできないな。メイン2に魔法カード発動、ボンディングH20！場のH、つまり水素2つとO、酸素1つを化学反応させ、このモンスターを呼びだす！ウォーター・ドラゴンをデッキから特殊召喚！」

「出たな、それがお前の切り札か！」

ウォーター・ドラゴン 攻2800

ついに出了、三沢の切り札の一つ。なるほど、確かにこの攻撃力ならば次のターンの攻撃でフェリスを倒すことができるだろう。これはさすがの万丈目にもきついはずだ、そう思っていると万丈目がいきなり高笑いをしだした。

「1度真剣勝負を食らったうえでなおウォーター・ドラゴンを呼び出してみせるプレイングは褒めてやろう。だがそれがどうした、三沢あ！俺のターン、フェリスの効果を発動！このカードをリリースして相手モンスター1体を破壊、さらにデッキトップからカードを3枚墓地に送る！ヴァルキリー・アロー！」

フェリスが猫耳をピンと立てて弓を引き絞り、勢いよく光の矢を放つ。ウォーター・ドラゴンの水の体をあつかりと突き抜けて大穴を開けたその矢が、ドスツとその向こうの壁に突き刺ささった。

「やはりそう来たか！だがウォーター・ドラゴンは破壊された時再び水素と酸素に戻る、つまり墓地のハイドロゲドン2体とオキシゲドン2体を特殊召喚だ」

なるほど、三沢は最初からフェリスのあの効果のことを知っていたんだ。知っていたからこそ破壊されてもリカバリーが効くように、つまりウォーター・ドラゴンは最初から囷として特殊召喚したわけか。あれはまさしく自分で使わないカードの効果から特殊裁定まですべてを丸暗記してる化け物級の秀才、三沢だからこそできる真似だろう。

ハイドロゲドン 守1000

ハイドロゲドン 守1000

オキシゲドン 守800

「ええい、しぶとい！ライトロード・ウォリアー ガロスを召喚、ハイドロゲドンに攻撃だ！」

申し訳程度に刃のついた斧のような杖を振り回すたくましい戦士が、ハイドロゲドンを一撃で打ち砕く。

ライトロード・ウォリアー ガロス 攻1850↓ハイドロゲドン

守1000 (破壊)

「ふ、まだ俺には2体のモンスターが残ってるぞ？」

そう挑発的に笑う三沢に、いら立ちを抑えきれない様子の方丈目。だが手札のカードを使い切っている以上彼に何かができるわけでもなく、そのままターンを終えた。

三沢 LP2100 手札：0

モンスター：オキシゲドン (守)

ハイドロゲドン (守)

魔法・罫：炎虎梁山爆

万丈目 (白) LP3600 手札：0

モンスター：ライトロード・ウォリアー ガロス (攻)

魔法・罫：1 (伏せ)

「俺のターン。カードを1枚セットし、ターンエンドだ」

「ふん、モンスターも引けなかったか。ならばその隙に、邪魔な壁を排

除させてもらおうか。ライトロード・パラディン ジェインを召喚し、オキシゲドンに攻撃！この瞬間ジェインの効果により、攻撃力は300ポイントアップする」

「トランプ発動、DNA改造手術！このカードの発動時から、場のモンスターは全て俺の宣言したものになる！俺が宣言するのは、炎族！」

正統派の騎士、といった見た目のジェインが掲げる光の剣が突然燃え盛る炎の件に代わり、若干ぎよつとしながらもそのまま翼を使って防御態勢をとる翼竜に切りかかる。だがその剣先が体に触れた瞬間、オキシゲドンの体は大爆発を起こした。

ライトロード・パラディン ジェイン 攻1800↓2100↓オキシゲドン 守800 (破壊)

三沢 LP2100↓1300

万丈目 (白) LP3600↓2800

「何?！」

「ははは、酸素に火を近づけたら爆発するのは世の中の常識だぞ。オキシゲドンが炎族モンスターとの戦闘で破壊された時、お互いは800ポイントのダメージを受けることになる！」

一瞬焦った様子だったが、三沢のライフも一緒に減っていることを確認してすぐに小馬鹿にするような声になる万丈目。こういうところはまるで変わってない。

「だが、それでお前のライフまで減らしては本末転倒だな。ガロス、残ったハイドロゲドンに攻撃だ！」

ライトロード・ウオリアー ガロス 攻1850↓ハイドロゲドン 守1000 (破壊)

「これでお前の壁はもういない、エンドフェイズにジェインの効果を発動。デッキトップから2枚のカードを墓地に送る。そしてガロスの効果発動、もう2枚のカードを墓地に送り、この時墓地に送ったカードの中のライトロードモンスターの枚数ぶんだけカードをドロウする。俺が落としたのはダメージ・ダイエットと2枚目のガロス、よってカードを1枚ドロウ。ターンエンドだ」

三沢 LP1300 手札：0

モンスター：なし

魔法・罨：炎虎梁山爆

DNA改造手術(炎)

万丈目(白) LP2800 手札：1

モンスター：ライトロード・ウオリアー ガロス(攻)

ライトロード・パラディン ジェイン(攻)

魔法・罨：1(伏せ)

「俺のターン、ドロ。カードをセットし、ターンエンドだ」

「ふん、よほどモンスターが引けないようだな。だがまあ、その伏せカードにも用心するに越したことはないか。ライトロード・マジシャン ライラを召喚、効果を発動。このモンスターを守備表示にすることで、相手の伏せカード1枚を破壊する。ライト・ブレイク！」

ライトロード・マジシャン ライラ 攻1700↓守200

白い帽子をかぶったいかにもな魔法使いが杖を三沢の伏せカードに向けて、そこからその伏せカードを撃ちぬこうと光が放たれる。永続罨だったらもうこれでアウトだったろうけど、三沢が引いていたのはうまい具合にフリーチェインのカードだったらしい。

「トランプ発動、幻蝶の護り！このカードは発動時に相手モンスター1体を表側守備表示に変更する。これで、ガロスは守備表示になるな」

パタパタと無数のカラフルな蝶がフィールドを飛び回り、ライトロードの聖戦士を幻惑する。燃える斧のような杖を振って追い払おうとするものの、その前に目を回して座り込んでしまった。

ライトロード・ウオリアー ガロス 攻1850↓守1300

「往生際が悪いな。ジェイン、ダイレクトアタックだ！」

「だがジェインの強化効果は、相手モンスターに攻撃するときのみ。この状況ならば、攻撃力が上がることはない。さらに幻蝶の護りのさらなる効果により、俺がこのターンに受けるダメージは半分になる」

ガロスにまわりついてきた蝶が、一斉にジェインの燃える剣に惹かれたかのように集まってきてパタパタと目の前を飛び回る。迷惑

そんな顔をしながら振り下ろした剣は、三沢の体をかすめただけに終わった。

ライトロード・パラディン ジェイン 攻1800↓三沢（直接攻撃）

三沢 LP1300↓400

「首の皮一枚か、まったくしつこいものだ。とはいえこのデュエルに勝って光の結社の素晴らしさを伝えるのも俺の仕事、文句は言ってもらんな。ジェインの効果で2枚、ライラの効果で3枚、ガロスの効果で2かける2の計4枚を落としてさらにその中のライトロード、3枚のカードをドローしてターンを終了してやろう」

三沢 LP400 手札：0

モンスター：なし

魔法・罠：炎虎梁山爆

DNA改造手術（炎）

万丈目（白） LP2800 手札：4

モンスター：ライトロード・ウォリアー ガロス（攻）

ライトロード・パラディン ジェイン（攻）

魔法・罠：1（伏せ）

状況は相変わらず、三沢が圧倒的に不利だ。だけど、僕だつてこの1年ずつと三沢がデュエルするのを見てきたんだ。だからわかる。まだ、三沢は諦めてない。自分のデッキのことを知り尽くしている三沢が諦めてないってことは、きつとあのデッキの中にはまだ逆転のカードが眠っているはずだ。

「俺のターン、ドロー……よし、魔法カード、貪欲な壺を発動。墓地のハイドロゲドン2体、オキシゲドン、豪雨の結界像、ウォーター・ドラゴンをデッキに戻すことで、カードを2枚ドロー。カードを2枚セットしてターンエンド。いいか万丈目、俺の永続トラップは、そう簡単に打ち破られるほど甘くはないぞ？」

きつぱりと言い切ったのける三沢。わざわざそんなことを言ったということは、あの伏せカードは2枚とも永続罠なんだろう。

「俺のターン、全モンスターを攻撃表示に変更。その伏せカードで

守ったつもりか？残念だったな、ライトロード・スピリット シャイアを召喚。このカードならばたとえ貴様がグラビティ・バインドのよ  
うなカードをセットしていても、レベル3ゆえにすり抜けることが可  
能。そしてシャイアの攻撃力は、俺の墓地のライトロード1種類につ  
き300ポイントアップする」

絶体絶命のピンチかに見えた一瞬。だが、ここでも笑ったのは三沢  
だったわけで。

「いいや、そうでもないさ。トラップ発動、激流葬！まんまと油断した  
な、万丈目。俺の知っているお前ならば、こんな見え透いた言葉には  
引つかからなかったぞ？」

「何!？」

万丈目の攻勢から一転し、再び空になるフィールド。わざと永続ト  
ラップ、という三沢のコンセプトである単語を口にする事で伏せ  
カードがそうだと思いついませ、いつでも警戒すべき激流葬を安全に通  
す……頭の回転が早い三沢ならではの一手だろう。実際、僕も引つ  
かかった。ねえ、と同意を得ようとして横を見ると女性陣は、  
「心理戦の基本だよな、だって。でも即興だろうから甘さが目立つか  
な、ってさ」

「ですねー。口先八丁は立派な忍者の武器の1つ、私ならもうちよつ  
と捻れましたけど」

とかなんとか話してた。つくづく、女の子って怖いのね。

「まあいいさ。俺にはまだ切り札が残っているからな。墓地のライト  
ロードが4種類以上の時、このカードはノーコストで手札から特殊召  
喚できる！これぞ俺の真の切り札、ジャッジメント・ドラグーン裁きの龍!!」

でかい。月並みなようだけど、第一印象はそれだった。純白に輝く  
龍が、今まさに裁きを下さんと冷たい目で三沢を見下ろす。

「やはり、握っていたか……!」

「当然だ。もしこれが通れば斎王様の予言に反することになるが、そ  
の伏せカードを確認する意味も込めて一応使ってみるか。裁きの龍  
の効果を発動！ライフを1000払うことで、このカード以外のあら  
ゆるものを無に帰す！全てをなぎ倒す聖なる光、ジェネシス・レイ！」

万丈目（白） LP2800↓1800

「無論、そんなものは通さんぞ。トランプ発動、デモンズ・チェーン！この闇の鎖に縛られたモンスターは、攻撃も効果の発動もできずに沈黙するのみだ」

白い龍が全身を光らせて文字通り裁きの一撃を放とうとした瞬間、地面から無数の闇の鎖が生えてきてその羽を、口を、足を拘束する。光のエネルギーを吸い取られた裁きの龍がなんとか振りほどこうとするも、その鎖はびくともしない。

「だろうな。まあそう来るとは思っていた。だが、1つ教えてやろう。俺の手札にはまだ2体目のライラがいる、次のターンにはこいつを召喚してそんな鎖など破壊してやる。ターンエンドだ」

三沢 LP400 手札：0

モンスター：なし

魔法・罫：炎虎梁山爆

DNA改造手術（炎）

デモンズ・チェーン（裁き）

万丈目（白） LP2800 手札：3

モンスター：裁きの龍（攻・デモチエ）

魔法・罫：1（伏せ）

ふう、とひそかに息を吐く三沢。前言撤回。さっき見た時はまだ諦めてないように見えたし実際諦めてはいないものの、これ、かなり追いつめられてる。勝利のビジョンが思い浮かんでない状態だ。ポーカーフェイスは割と得意な三沢だけど、注意して見ると完全に追い込まれてる時とカードがうまく引ければ十分逆転もあり得るときの差は案外わかりやすかったりする。たかだか20年も生きてない人間の表情などお見通しだつてチャクチャルさんが言ってた。

「三沢……………」

せめて何か声をかけようとした瞬間、頭の中に声が響いた。

『……………力が、欲しいか？この勝負、勝ちたいか？』

「あれチャクチャルさん何やってんの？」

『いや、今のは私じゃないぞ』



あんまりにもチャクチャルさん初登場シーンとかぶったセリフだったためなにかこの神様がよからぬことでも考えてるのかと思っただけど、どうやらそういうわけではないらしい。

『だいたい力が欲しいか、から入るのは我々のような役どころのお約束だろう。様式美というものだ』

え、あれってそんなしような理由だったの？といたいいのをぐっと我慢する。まあ確かに、あれくらい強引な勧誘の方が手っ取り早いこともよくあるよね。じゃあそれにしても、この声はいったい誰が……………？

『どうなんだ？力が欲しいというのなら、我はその声に応えよう』

どうやらこの声は僕とチャクチャルさん、それと三沢にしか聞こえてないらしい。不思議そうにあたりを見回す三沢を、何をやってるんだといわんばかりの目で万丈目が見ている。とすると、この声は三沢あてに喋っているんだろう。

『代価などはいらぬ。ただ、我を一声呼べばよい。選ぶも選ばぬもお前の自由』

『お、お前は…………お前は一体』

『くだらぬ話だ。心の内ではもう気が付いているのだろう？自分の思いに、守りたいものに素直になればよいだけだ』

『俺の…………』

なんだろう。そういえばこの重々しい声、どこかで聞いたことがあるような気もする。

「ねえチャクチャルさん、これって止めたほうがいいのかな」

『…………いや、心配はいらなだろう。おそらくだが、あの申し出に敵意や裏はない。単純に腹に据えかねたのだろうよ、自分を倒した男があっさりと負けかかっているという事実が』

その言いつぶりからして、どうやらチャクチャルさんは声の正体に気づいているらしい。あとすこし、あとすこしで僕も思い出せそうなんだけど。

『さあ、決断しろ。力が欲しいか？』

まだ少し迷った様子の三沢だったが上の客席にいる僕をちらりと

見て、目の前で苛立っている万丈目を見て、何か決心したように頷いた。

「……………よし、わかった。俺の親友達を助けるため、俺の親友達を守るためだ。お前の力、貸してもらおうぞ」

『それでいい。カードをドロ―し、我の力を存分に使うがよい』

「ああ。万丈目、いくぞ！俺のターン、ドロ―ッ!!」

気合とともに引いたカード。その瞬間、空から天井を通り抜けて真っ赤に輝く炎がそのカードめがけて落ちてきた。あまりの迫力に怯んだ僕らをよそに、そのカードに炎がすべて吸い込まれていく。

「な、なんだ。一体何が起きているんだ！」

「さあな。実は俺にもよくわからん。だが万丈目、このデュエルは俺がもらうぞ。俺は自分フィールド上に存在する3枚のカード、炎虎梁山爆、DNA改造手術、デモンズ・チェーンを墓地に送り！手札からこのカードを特殊召喚する！」

永続トラップ3枚の墓地送り。思い出した、あの声はまさに去年の終わりに聞いたあのモンスターへの。

「降臨せよ、神炎皇ウリアー！」

去年あれだけ苦労して封印した3幻魔の1体にして、永続罠を軸として戦う他に類のない効果を持ったモンスター、神炎皇ウリア。まさか、あの赤い体をもう一度見ることになるとは。

「3幻魔だと!?!」

「ウリアの攻撃力は、墓地に存在する永続罠1枚につき1000ポイント。俺の墓地にはすでに今送った3枚に加えモンスターBOXのカードが存在する、よってその攻撃力は裁きの龍を上回る4000だ！」

神炎皇ウリア 攻0↓4000

だが、万丈目のふてぶてしい顔は変わらない。あの伏せカードにはよっぽどの自信があったりするのだろう。でも、今の万丈目は忘れてるのかもしれないけれど。神炎皇ウリアは伊達に3幻魔やってない、そんな伏せカード1枚に揺らいだりはしないのだ。

神炎皇ウリア第2の効果は、トラップディストラクション……………相

手フィールドの伏せカード1枚を、チェーンすることを許さず1ター  
ンに1度ノーコストで破壊する恐ろしい能力。三沢も言ってたけど  
おそらくあのカードはバーンカード、それも今まで使ってたけど  
ことを見ると魔法の筒のように発動条件があるカードなのだろう。  
だとすれば、まさか三沢が勝負を焦って効果の使い忘れなんて初歩的  
なミスをするはずもないし、せつかくの予言とやらもトラップデイス  
トラクションの敵ではない。この勝負、どうにか三沢が勝ってくれそ  
うだ。

だが、なぜか何かをウリアと相談する三沢。何やってんのさ、この  
まま効果を使って安全に攻撃するだけなのに。さすがに個人的な会  
話までは聞き取れないので何を喋っているかはわからないけど、なぜ  
か少しだけ嫌な予感がした。

「待たせたな、万丈目。神炎皇ウリアで裁きの龍を攻撃、ハイパーブレ  
イズ！」

そしてなぜか、最後まで効果を使わずに攻撃宣言をする三沢。ウリ  
アの2つあるうち下の方の口が開き、そこから炎を吐きだす。

「ふ、馬鹿め。勝負を焦ったか、トラップ発動！やはり斎王様のお言葉  
は正しかったようだな、魔法の筒！<sup>マジック・シンダー</sup>相手の攻撃を無効にし、攻撃モ  
ンスターの攻撃力ぶんのダメージ、つまり4000のダメージを与え  
る！」

神の炎を吸収し、そっくりそのまま跳ね返す茶筒程度の大きさの  
筒。自分めがけて襲い掛かるその炎に、三沢はふっと微笑んで静かに  
目を閉じて。

三沢 LP400↓0

「三沢ー!？」

そのまま、なにもせず吹き飛んで行った。

「う、うう………」

倒れた三沢に僕らが駆け寄る前に、万丈目がすつと手を差しのべ  
る。その手を、三沢が掴んで起き上った。

「ありがとう、万丈目。おかげで俺も目が覚めたよ」

「ふ、ようやく理解してくれたか、三沢。さあ、これがお前のホワイト学生服だ」

「おお、美しい色だな」

そんなことを言いながら、今の今まで着ていた黄色の上着を脱いで6つのデツキケースがくつついたあの服をむき出しにした後、いそいそと白い学生服を羽織る三沢。嘘………でしょ？

「どうだろう、ちゃんと似合っているだろうか」

「ああ、安心しろ。それじゃあ、斎王様に報告に行くからついてきてくれ」

「わかった。あ、その君。すまないが、その黄色い服はもういららないんだ。適当に捨てておいてくれないか？」

僕に向かって最後にそう言い、万丈目について歩いていく三沢。何と言っているのかわからないうちに、僕らをよそに2人はデュエル場の外に出て行った。

## ターソン42 冥界の河と三連コンビ

「明日あ!?!」

今聞いた言葉が信じられず、思わず大声を上げてしまう。ええ、と、校長の椅子にどっかりと座るクロノス先生が重々しく頷いた。

「え、ちよつと今なんて言いました先生、明日つてーとトウデイのことですか!?!」

「シニョール清明、気持ちはわかるけど落ち着くノーネ。それと高校生にもなつたんだからさすがにT o d a y今日の意味ぐらい覚えておいてほしかったでスーノ」

「う……め、面目ないです」

思えば、あれは今朝のことだった。学校に来たらクロノス先生から呼び出しを食らい、はて何やったのがばれて怒られるんだろうと行ってみた。するとおもむろにカーテンを閉められ、スルスルと天井からスクリーンが垂れ下がって映像が映りこんだ。あれ、これ前もやったような。そう思いながら見ていると、案の定つい数日前見たのと同じようにノース校の一之瀬校長……が……。

それだけだ。それから後のことは、正直思い出したくない。どう考えてもめんどくさい予感しかしないし。

「……………んで先生、これどーしましょう」

「こつちが聞きたいノーネ、といたいところですよーガ。今アカデミア本校の校長はワタクシ、クロノス・デ・メデイチですからネ、なんとかするしかないでショウ」

「ですよね……」

「それで申し訳ありませんが、シニョール清明。こちらも連絡がつけられないか試してみますから、そちらのことは任せますーノ」

「わかりましたよ。何かうまいこと考えときます」

「本来ならばこういったことは教師の仕事なのですが、重ね重ね申し訳ないノーネ」

「そう思うなら成績オマケしてくださいよー。じゃ、失礼します」

どんだん空気が重くなつていったので少しでも流れを良くしよう

と軽口をたたき、そのまま部屋から出ていく。扉が閉まる瞬間、電話をかけようとするクロノス先生の姿が見えた。

「って、任せますーノ、って言われてもねえ。……………どうしようかなあ」

「何の話だったの、だつてさ」

「あ、夢想。相変わらず脈絡なく出てくるよね」

「褒め言葉かな？なんだって」

別にそんなつもりはなかったけど、キラキラと輝く笑顔を見れたのでよしとする。うん、ちよつと癒されたしもうそれでいいや。

「と、そういや夢想にも関係ある話か。あんまりいい知らせじゃないんだけどさ、今年もノース校との学校対決するって話はこの前聞いたでしょ？」

「楽しかったねー、って」

「まあね。で、それはそれでいいんだけどさ。今朝になっていきなり音信不通だったノース校から連絡が入ったわけよ」

「ふむふむ」

こくこくと頷きながら話を聞く夢想。ちよつと辺りを見回して見える範囲に白い制服が1人もいないことを確認してから、改めて話の続きにかかる。

「……………多分、あつちはほぼ全滅してる」

「……………光の結社、ね」

軽く形のいい眉をひそめる夢想。さすがに勘がいい、一言で理解してくれるとは。

「うん、少なくとも一之瀬校長はもうやられてる。激しく似合ってたかったけど、白服」

「本当に全員なの？校長がそうやって言ってたの、だつて」

「いや、そうは言っていないだよね。あくまでも『ほとんど』だし。ただ、どつちかっていうとこつちの方が差し迫った問題なんだけど、どうもあつちは全校ほぼ一致で明日こつちに来ることが決定したらしいのよ」

それはまた、とため息を吐く夢想。だけど、それだけならまだいい。

明日ノース校がこつちに来るということは、光の結社の人間が一気に増えるってことだけじゃない。

「メンバー……どうしよう……」

ノース校との対抗戦が、もう明日に迫っているということでもあるのだ。去年同様5対5の団体戦ってことは、当然5人のメンバーを用意しなくちゃいけない。いけないってのに、こつちには去年の大将だった十代がいない。先鋒だった明日香や次峰だった三沢、それにこつちの代表候補として有力だった万丈目は全員光の結社入りで連絡が取れないし、そもそもクロノス先生とも話し合ったけど光の結社の人を出す気はさらさらない。

光の結社以外の人で、あと3人のメンバーを決めてほしい——  
—それが、今回クロノス先生に頼まれた僕への『お願い』だ。

「ちなみに、候補は誰かいるの？ だつてさ」

そう言われ、とりあえずぱっと思いついた人間を指折り数えていく。

「まず稲石さん……は廃寮から外に出ることができないからダメ。あとは翔や剣山、葵ちゃんぐらいかなあ、めばしいところは」

やたらと知り合いばかりだけど、別に他意はない。そもそも生徒じゃない稲石さんは別として、今名前を挙げた面々は校内でもじわじわ実力を知られつつあるかなりの腕の持ち主なのだ。ほかにも神楽坂とかが戦力として欲しかったところだけど、彼はもう光の結社の一人だからしょうがない。

「とりあえず、剣山から順番にあたってみようかな」

必要人数は3人、そして候補も3人。一発で決まればいいんだけど。もしダメだったら、あとは吹雪さんにでも頭を下げに行こうかな。

「ずいぶん楽しそうなイベントだドン、恐竜さんの力をノース校に見せてやるザウルス！」

「水臭いですよ、先輩。引き受けるに決まってるじゃないですか」

「え、僕なんかでいいんすか!? ちよ、ちよつと怖いけど、やるよ!」

「一発で決まったー!」

「いいことじゃない、だつてさ。はい、お茶飲む?」

「あ、いただきます」

いや、まさかこんなにあつさり決まるとは思つてなかった。葵ちゃんと剣山が引き受けるのはなんとなく予想ついてたけど、正直なところ翔の説得にはもつと時間があると思つてた。これまでは十代つていう超積極的なデュエルの天才がすぐ近くにいたせいでこれまでそんなに目立ってなかつたけど、翔もちゃんと成長してるんだなあ。

「でもまあ、しみじみしてる場合じゃない、か。えーつと、今年は先鋒ティライノ剣山、次峰葵・クラディー、中堅丸藤翔、副将河風夢想に大将遊野清明ですよつと」

「クラディー?」

「うん、葵ちゃんの本名だつて。縮めてクラちゃん」

クロノス先生に提出する用のメンバー表にさらさらつと名前を書き、なるべく丁寧に折りたたんで上着のポケットに入れておく。あとで出しに行かないといけないな、忘れないようにしないと。

夢想买つてくれた小ぶりなペットボトルの緑茶を一息に飲み干し、よつこらせいと立ち上がる。去年はまだ商売を始める前だったから思いつきもしなかつたけど、今年は違う。人がたくさん動くなら、そこにビジネスチャンスあり。明日からなるであろうお祭り騒ぎの雰囲気を利用して菓子類を売りまくり、なんとしてもひと儲けしなくては。たとえ光の結社でも、お金さえ払ってくればお客さん。ケーキやらクツキーやらの生地をたっぷり作つたり、最近手を出し始めた和菓子の準備をしたりと、やることはたくさんある。

「とゆーわけで、僕はもう行くからね。じゃ、また明日ー」

「うん………ねえ清明、少しいいかな、つてさ」

「んー?」

立ち上がったままのポーズで振り返り、何かを考えている様子の夢



想に向き直る。はて、なんだろう。できれば手短に済ませてほしいんだけども。

「ちよつと今日は、私にも手伝わせてくれないかな?」

「へ? 珍しいね、夢想がそんなこと言うなんて」

夢想は普段、Y U O K N O W にとつてかなりの上客ではある。しよつちゆう店に来てくれるし、買い方も気前がいい。もつとも、たいていは女子寮でのお茶会用にまとめ買いしてるだけみたいだけど。だけど、これまで厨房まで手伝いに来たことはない。そう思つての返しだった、彼女は軽く肩をすくめるのみだった。

「別に。……なんとなく、ね。嫌な予感がしたの、だつて」

ふーむ。でも、葵ちゃんのほかに手先が器用な夢想が入ってくれるんならこつちとしては断る理由はないか。ありがたく受け取つておこう。

その3分後。

「あー………これ? 嫌な予感つて」

「多分ね、つてさ」

「やっぱり? ですよねー」

フラグというか、なんというか。

「何をゴチャゴチャ言つてやがる!」

「さあ、俺たちとデュエルだ!」

「かかつてこいよ、光の結社の結束を見せてやる!」

僕ら二人の前に立ちはだかる、白い制服の3人組。よし、右から順にその1、その2、その3と呼ぼう。

「へっ、どうした? ビビつてんのかよ!」

なんと言つていいのかわからなかったので何も言わずに立っているのをどう解釈したのか、ノリノリで挑発の言葉をぶつけるその2。それを受け、その1とその3が高笑いした。

「ハハハ、無理もないぜ高野! なにせ俺たちのコンボはアカデミアでもトップクラスだからな!」

「違いないぜ、中野！いくら少しは名の知れたこの二人でも、俺たちのコンビネイションの前にはかかって来いって言う方が残酷つてもんさ！」

そう言い、また3人でわっはつはつはと笑いあう3人組。………これ、この隙に隣を駆け抜けたら逃げられるとかそういう抜け道はないだろうか。ふとそんなことを思いつき、チラツと廊下の隅に目をやる。だがその瞬間にその1、まだ名前のわからない最後の一人がデュエルディスクを素早く構えて起動させた。

「おーっと、この野中様の目をかいくぐって逃げられると思うなよ？ 3対2の変則デュエルでいっぺんに二人まとめて倒してやるからな！」

右から順に野中、高野、中野ね。よし、覚えたぞ。どうやら逃げられないっぽいし、だったらここで相手する方がいいだろう。でも、タッグデュエルならやったことはあるけど3対2つてのは初めてだな。こんな時にそんなこと言ってる場合じゃないのかもしれないけど、ちよつとわくわくしたり。

「夢想、悪いね迷惑かけて」

「ううん、何となくこうなる気はしてたから、だつてさ」

「それじゃあ………」

いつも通りの掛け声をしようとしたら、夢想と声のはもった。何が言いたいのかをすぐに理解して、アイコンタクトでタイミングを合わせる。

「デュエルと洒落込もうか（洒落込みましょう）！」

「先行はまず俺、野中がもらったぜ！よしよし、いい手札だな。カードを3枚セットして、クリバンデッドを召喚。そしてエンドフェイズ、通常召喚したクリバンデッドをリリースすることでデッキトップ5枚をめくり、その中から魔法か罫カード1枚を手札に加える。1枚目から順にタスケルトン、攻撃の無力化、速攻のかかし、ネクロ・ガードナー、だめだな。攻撃の無力化を選択して、あとは全部墓地に送ってターンエンド」

「あ、終わった？じゃあ私のターン、ドローだつてさ」

ターンが変わり、自然な動きでカードをドロウする夢想。これで彼女の手札は初期手札含めて9枚……って、あれ？同じことを思ったようで、中野が文句の声を上げた。

「へい、ちよつと待てよ!?それ、手札多くね？」

「これかな？だって2対3なんですもの、当然初期手札8枚ぐらいのハンデはくれるんでしょ？ってさ。ほら、清明もあと3枚引かなきゃ駄目だよ」

「ほえ？え、あ、うん、じゃ、じゃあ3枚ドロウ……」

あまりといえばあまりに堂々とした態度について流され、言われたとおりにカードを2枚引く。い、いいのかなあこれって。きつとあの3人組が何か言ってくるかと思っただけど、見逃すことに決めたらしい。まあ相手が夢想だから、ここでスルーしたくなる気持ちはわからんでもない。僕なんかはもう慣れてきたから平気だけど、初対面の人にとって彼女のペースというか世界観はとっつきにくいだろう。

僕がカードを引いても何も言われなかったのを見て満足そうに頷き、再び彼女のターンが始まった。

「ボーンクラッシュヤーを攻撃表示で召喚、カードを2枚セットしてターンエンドかな、だってさ」

ボーンクラッシュヤー 攻1600

今回の変則デュエルでは、未行動のプレイヤーへの直接攻撃を防ぐためにすべてのプレイヤーが1度ターンを終えるまで攻撃宣言をすることができない。夢想もそんな状況で全力で飛ばしていくのはさすがにまずいと考えたのか、当たり障りのない無難な布陣を引いたのみでターンを終了した。

「こ、この抜け目ないリアリスト女め……！俺のターンか。ドロウさせてもらいますかね」

そして次は、高野のターン。一人目の野中はかなり守りに重点を置いたデッキの使い手みたいだったけど、この男はどんなデッキを使ってくるのだろうか。

「チェーンソー・インセクト電動刃虫、召喚！」

電動刃虫 攻2400

ギユイイイインとうなりを上げる鋭いのこぎりを抱え持つクワガタムシが、ガチガチと威嚇の構えをとる。電動刃虫、高い攻撃力を持つかわりに戦闘を行うだけで相手にドロローを許すデメリットを持つたあのカードが入っているということは、かなり高野のデツキパターンは縛られるだろう。考えられるものとしては……………えっと、なんだろ。だめだ、らしくないことしようとしても結局付け焼刃の知識じゃどうにもならん。

「電動刃虫ね。【昆虫族】か【スキルドレイン】、それとも【ガーゼット】とかかな、だつてさ」

……………さつすが夢想。

「カードをセットして、ターンエンドだ」

「僕のターン！」

そして、やつと回ってきた僕のターン。合計9枚もある手札をざつと見て、何をすべきか考える。

「よし、ここは。ハンマー・シャークを守備表示で召喚して、効果発動！このカードのレベルを1下げて…………」

「おっと、待ちな！トラップ発動、スキルドレイン！1000のライフを払って発動したこのカードが場にある限り、場で発動するすべてのモンスター効果は無効に…………」

「甘いよ、つてき。トラップ発動、砂塵の大竜巻！この効果を使って、スキルドレインを破壊するみたい」

「いいや、何のためにこの野中がカードを3枚も伏せたと思っただよ！その砂塵に対してカウンタートラップ、盗賊の七つ道具を発動するぜ。1000ライフを払うことで、相手の発動したトラップを無効化する！」

高野 LP4000↓3000

野中 LP4000↓3000

うーん、さすがにこれだけ人数が増えたと組まれるチエーンの数もわけわからんことになってくるな。でもまあ要するに、夢想の砂塵が不発になってスキルドレインが通り、僕のハンマー・シャークの効果が無効になったつてことだ。残念。

「だけど、特殊召喚はさせてもらおうかな。自分フィールドに水属性モンスターが存在するとき、手札のサイレント・アングラーは特殊召喚できる！来い、サイレント・アングラー！」

サイレント・アングラー 守1400

「さらにカードを2枚セットして、ターンエンド」

「よし、俺の番だな。ドロー！へへへ、さっきのスキドレやら七つ道具やらでライフが減っちゃったろ、今回復させてやるからな。魔法発動、成金ゴブリン！デッキからカードを1枚引く代わりに相手……高野のライフを1000回復させる！」

「おう、いつもすまんな中野」

「なっ!?!」

高野 LP3000↓4000

こ、これはまずい。成金ゴブリンがカードを1枚引ける通常魔法として成り立っているのは、その引き換えに『相手』のライフポイントを1000回復させることにある。おそらく、この3人は初めから3人一組のチーム戦を前提としたデッキを組んでいるんだろう。最初の一人、野中がネクロ・ガードナーや攻撃の無力化、盗賊の七つ道具などでひたすら妨害をかける。そして中野がライフを供給する。そして最後の一人、高野がスキルドレインを生かした高攻撃力でガンガン攻め立てていく。

普通デッキを組む時は個人戦しか想定しないから、防御の手と攻撃の手をある程度バランスよく混ぜざるを得ない。だけどあの3人組は、個人戦では勝ち目なんてない攻撃特化、妨害特化、補助特化のデッキをそれぞれ組んでいるのだろう。この3人、早いとこ誰か1人でも潰さないとかなり厄介な相手になりそうだ。

「次、2枚目の成金ゴブリンだ！野中、お前も回復しとけよ」

「サンキュー、中野。今回も頼りにしてるからな」

野中 LP3000↓4000

いかん、これはいやらしい。こういう時はRPGの大原則、まずは補助役から倒すのみ。ライフ回復の中野は今のところ無視して、うまいこと攻撃役の高野をいなしながら妨害の野中を潰す。それが一番

こつちに勝ち目があるだろう。

ある程度の作戦が立ったところで、隣の夢想到アイコンタクト。彼女も考えることは同じだったらしく、すぐになっこりと頷き返す。

「カードを2枚伏せて、素早いモモンガを守備表示で召喚。ターンエンドだ」

素早いモモンガ 守1000

これでやっと全員がそれぞれの1ターン目を終えたことになる。ただ、次に動くのが真つ先に潰しておきたい妨害の野中だというのが気にかかるけど。

野中 LP4000 手札:2

モンスター:なし

魔法・罨:2(伏せ)

夢想 LP4000 手札:7

モンスター:ボーンクラツシャー(攻)

魔法・罨:1(伏せ)

高野 LP4000 手札:4

モンスター:電動刃虫(攻)

魔法・罨:スキルドレイン

清明 LP4000 手札:5

モンスター:ハンマー・シャーク(攻)

サイレント・アングラー(守)

魔法・罨:2(伏せ)

中野 LP4000 手札:3

モンスター:素早いモモンガ(守)

魔法・罨:2(伏せ)

「俺のターン、ドロロー！いいぞいいぞ、2枚の手札をセット。これでターンエンドだ」

俗に言うガン伏せ。普通のデッキならまだブラフが混じっている可能性もあるが、妨害札ばかりたまり仕込んでいるであろうあのデッキなら多分全部が本命だろう。そこを夢想がこの1ターンでどこまで切り崩せるか、それが大事なところだ。僕のデッキに自分以外

をサポートするカードなんて攻撃反応のカードぐらいしか入ってないからできることは少ないけど、任せたまよ、夢想。

「私のターン。うーん、……………どうしようかなあ、って」

あれ、夢想らしくない弱気なセリフ。と思っただけど、よく考えたら今はスキルドレインの適用状態だった。夢想のエースモンスターであるワイトキングは効果によって攻撃力を馬鹿みたいにあげていくカードだから、その効果を無効にされたら当然戦力はがた落ちする。

とまあ、それが常識というものだろう。でもきつと夢想だから、何か突拍子もないことをしてくれるに決まってるさ。

「決めた、だつてさ。魔法発動、大嵐。これで、すべての魔法カードも罨カードも破壊！」

出た、対伏せカードにおいて最高峰のカード。荒れ狂う風がフィールドを駆け廻り、全てのリバースカードを空に巻き上げようとする。だけどガン伏せは伊達じゃなかったらしく、まず野中が反応した。

「させるかよ！リバースカードオープン、神の宣告！ライフポイントを半分払う代わりに、その発動と効果は無効になる！」

野中 LP4000↓2000

「ライフを半分払ってくれたんだ、使いどころはここ一択だね。その神の宣告に対してトラップ発動、魔宮の賄賂！カードを1枚ドロウさせる代わりに、その発動を無効にさせてもらうよ」

野中の伏せカードの前に両手を広げて両手を広げて立ちほだかり、嵐の勢いを鎮めようとする白い服を着た老人。そこにどこからともなくいかにもな悪人顔の着物を着た商人風の男が走ってきて、老人の袖にスツと金貨を差し込む。揉み手しながら愛想笑いを浮かべる商人の前に、老人はため息をついて引き下がっていった。よ、よかった伏せといて。ここでこの大嵐が通らなかつたら、今後の展開がガラツと変わってくるどころだった。

「甘い甘い甘い！魔宮の賄賂に対してカウンター発動、ギャクタン！相手の罨カードの発動を無効にし、そのカードをデッキに戻させる……………これで神の宣告が有効になって、大嵐は無効だ！」

一仕事やり終えた男の顔で踵を返す商人の後ろから、何人もの警官がどやどやとやってくる。収賄は犯罪だからね、お上に見つかっちゃあどうしようもない、というわけか。

「なんて、甘いこと言ってる場合じゃないか。どーする、夢想？もうこれ、僕にはどうしようもないけど」

ちよつと不安になり、思わず口を突いて出た弱音。だが、それでも夢想は笑って見せた。

「残りライフは2000、でしょ？大丈夫、このターンで確実にとどめは刺すから、だつてさ」

「…………どーやってかは聞かないでおくから、全面的に任せたよ」

「うん。トラップ発動、八咫鳥の軀。この効果でカードを1枚ドロ―して、これで仕込みは整つたよ。魔法カード、ポルターガイストを発動するね。このカードは相手の場の魔法か罠1枚を持ち主の手札に戻すけど、この発動と効果を無効にすることはできないんだつて。さよなら、スキルドレイン」

手を触れていないのに勝手にモノが動く怪奇現象、ポルターガイスト。その名にふさわしくスキルドレインのカードがふわりと宙に持ちあがると、そのまま高野の手札に収まった。

「さらに手札からスカル・コンダクターの効果を発動、このカードを手札から墓地に送ることで、攻撃力合計がぴつたり2000になるようにアンデット族モンスターを手札から特殊召喚するよ、だつて。私が呼ぶのは、攻撃力1000のバーニング・スカルヘッド2体みたいだよ」

バーニング・スカルヘッド 守800

バーニング・スカルヘッド 守800

ガイコツの指揮者に誘われて、ふわふわと飛んでくる燃え盛る頭蓋骨ふたつ。一斉に口を開き、野中めがけて火の玉を吐き出した。

「ひいっ!?な、なんだあ!?!」

「バーニング・スカルヘッドの特殊効果発動。手札から特殊召喚に成功した時、相手に1000のダメージを与えるみたい」

「なんだと!?!それじゃあ、1000かける2で俺のライフがなくなつ



ちまうじやねえか！中野、なんとかしてくれよ！」

「はいはい。トランプ発動、フュージョン・ガード。相手が効果ダメージを与える効果を使った時、そのダメージを無効にしてエクストラデッキの融合モンスターをランダムに1体墓地に送る。重装機甲パンツアードラゴンか、まあこれしか入れてないから当然だな」

火の玉のうち1つが空中ではじけ飛ぶが、まだもう1つ残っている。そちらは妨害も受けずに、野中に命中した。

野中 LP2000↓1000

「アチャチャッ！ふう、危なかったぜ。惜しかったな、もう少しで俺を倒すことができたのによ。確かに俺の場にモンスターはいないが、墓地にはネクロ・ガードナーがいる。それに伏せカードのうち1枚がさつきサーチした攻撃の無力化だったことはわかってるんだろ、ああん？もうバーンも球切れだろうし、さすがにこのターンで俺にとどめを刺すのはなかなか厳しいもんがあるんじゃないか？」

確かにその通りだ。あれだけの布陣を張られたら、さすがに攻撃で突破するのは難しいだろう。けどまあ、それもやっぱり一般論だ。相手が悪かったね、ご愁傷様でした、としか言いようがない。

「魔法カード、ドラゴンズ・ミラー龍の鏡を発動するね。この効果で場のアンデット族モンスター2体、バーニング・スカルヘッド2体を融合、だってさ」  
「龍の鏡……？夢、ドラゴン族融合モンスターなんて持つてたっけ」

ああ、そういえば、と薄く笑う夢想。何となく、その笑顔にゾッとするものを感じた。

「まだ清明には見せてなかったね、だってさ。これが私の、もう1つのエースカード。冥府の扉を破りし者よ、其には死すらも生温い。融合召喚、冥界龍 ドラゴネクロ！」

第一印象は、鬼だった。鬼のような顔つきに上半身、そして蛇のよくな形になっていて足のない下半身。名状しがたい声で叫び声を上げる冥界の龍が、狂気に満ちた瞳で3人の敵を見下ろす。

冥界龍 ドラゴネクロ 攻3000

「大型モンスターを出しやがったよ、この女……おい野中、奈落かな

んか伏せてないのか！」

「すまん……もう神の宣告も使っちゃったし、この無力化じゃないほうの伏せカードも召喚を止めるためのじゃないんだよ。なあに、見えてるぶんだけでもこんだけ攻撃妨害のカードがあるんだ、このターンで俺を倒すなんてはつたりに決まってるさ。さらに、俺にはこのままだ正体を知られてない伏せカードもあるわけだしな。余裕余裕」

「まだ私はこのターン、通常召喚してないね。フォース・リゾネーターを通常召喚するよ」

「へ？」

フォース・リゾネーター 攻500

「フォースさんの効果を発動。このカードを墓地に送って私のモンスター1体を選択。そのモンスターがバトルを終えるまで、相手はあらゆるモンスターを対象にしたカードを発動できないからね、なんだって」

「ほ、ほう。や、やややややるじゃねえか。だがな、お、俺は知ってるんだぜ。ネクロ・ガードナーは対象をとらない効果、そんなもんじゃあ防ぎきれないもんな、うん」

ああ、あの伏せカードも対象をとるような何かなんだな、きつと。さすがに僕でもしないであろう、なかなかわかりやすい反応だ。

「なら、試してみるかな？ドラゴネクロでダイレクトアタック、ソウル・クラッシュ！」

「わーっ！俺は、墓地からネクロ・ガードナーの効果を発動！このカードを除外して、相手の攻撃を無効にする！」

半透明の闇の戦士が地面から現れ、攻撃をその身に引き受けようと野中の前に両手を広げて立ちはだかる。だが、その体はドラゴネクロの牙に引き裂かれる前に再び地面の中に引きずり込まれた。

「これが私の最後の手札………スカル・マイスターの効果を発動、だつてき。このカードを手札から捨てる、1回だけ相手が墓地で発動した効果を無効にできるみたい」

「そ、そんな〜！」

冥界龍 ドラゴネクロ 攻3000↓野中（直接攻撃）

「ちつくしよう、マジック・ジヤマーも伏せておいたつてのに、全部機能しないなんて」

「ふふふ。次は、回復役のあなたかな。でもボーンクラッシュャーで攻撃したいのに、リクルーターのモモンガがいるからやめた方がいいかな？ いいよ、このターンは見逃してあげる。ボーンクラッシュャーを守備表示に変更、ターンエンド」

「ひ、ひいっ！」

ライフが0になってその場にへたり込んだ野中に天使のような笑顔で微笑みかけ、くるりと首を回して次のターゲットと目を合わせ。すっかり気圧されて後ずさりする中野に、高野からのヤジが飛ぶ。

「バカヤロー、ノーダメージでビビってんじやねーよ！野中と違って、お前はしつかり俺のサポートしろよ」

「な、なめんなよ！だいたいアタッカーがお前だからって、いつもいつもそんなに威張りくさることはねーだろ！」

あれ、もう仲間割れだろうか。しかし、こいつら。最初のターンの連携に度肝を抜かれはしたけど、もしかして。

「多分同じこと考えてるよね、清明。この3人組は、個人での実力は下の下クラス……私もあなたも、普段通りにデュエルすれば十分倒せる相手だね、だつてさ。3人がかりというプレッシャーを相手に押し付けることである程度それっぽくはなれるけど、所詮そんなものは付け焼刃でしかないよ、つて。だから大丈夫、清明。ここは勝つよ、だつて」

「う、うん……い！」

心強い夢想の言葉。実際、一見かなりのものに見えた連携も仲間が1人倒れただけですぐにダメになったりそもそも肝心の妨害役が2人がかりとはいえほんとにあつさり突破できちゃったりと、この3人組はなんか詰めが甘い。でもなんだろう、もう一言一言がこっちの死亡フラグにしかつながつてないような気がするんですが気のせいでしょうか夢想さん。

「え、ええーい！こうなりやままよ、速攻魔法、スケープ・ゴートを発動！これにより俺の場に、4体の身代わり羊が生み出されるぜ」

羊トークン 守0

羊トークン 守0

羊トークン 守0

羊トークン 守0

「いたずらに数を増やしても、私にも清明にも勝つことはできない……それが分かっているのかな、って」

「まだまだ！魔法カード、アームズ・ホールを発動するぜ。このカードはデッキトップを墓地に送ってこのターンの通常召喚を封じる代わりに、デッキか墓地の装備魔法をサーチ！団結の力を手札に加えて、そのまま電動刃虫に装備！さらにもう1枚、さらにさらに追加でもう1枚！」

団結の力は、装備モンスターの攻守を自分のモンスターの数1体につき800もアップさせる効果を持っている、説明不要なぐらい有名なデーモンの斧と同じく単体強化の基準ともいえるカード。今の高野の場には羊トークン含めてモンスターが5体、つまり団結の力による強化値は。

「い、いちまんにせん……？装備魔法だけで、攻撃力12000の上昇？」

電動刃虫 攻2400↓14400 守0↓12000

「女から倒してもいいが、今の女に手札はない……ここは、次にターンが回ってきてまだ手札もある男を倒す！電動刃虫、やっちまえ！」  
派手に火花を散らしながら、チェインソーのような顎が鯨の体を真つ二つにせんと迫る。だけど、僕だったただ単に何も考えずにハンマーを攻撃表示にしておいたわけじゃあない。

「トラップ発動、ポセイドン・ウェーブ！その攻撃を無効にして、さらに自分の場の状況に応じて相手にダメージを与える！僕の間には魚族モンスターが2体、よって1600の効果ダメージ！」

「何!?くそ、どうすることもできねえ……」

「効果ダメージ、ね。わかったわかった、やりやあいんだろやりや

あ。リバースカード、防御輪を発動。あらゆるトラップカードによる効果ダメージは、これで0になる。惜しかったな、バーンが通せなくてよお」

む、ダメージは防いじやったか。まあいいや、攻撃を止められたんだから十分仕事したといえるだろう。生き延びれたことに対して安堵の息をつくくと、心底ブチ切れた感じの叫び声が出た。見ると、高野が顔を真っ赤にしてプルプル震えている。

「て、てめえ、中野！なんてことしやがる、よくも変なカードチェーンしやがったな！」

「はあ？お前、ダメージ止めてもらってんのになんなんだよその言いぐさ」

「俺の攻撃が防がれた、どうするピンチだ！とそこで、華麗に手札から飛び出すこの俺の最後の手札、ダブル・アップ・チャンス！そんなこともわかんねえのかよお前は、別のカード挟んだら発動できないだろうが！」

「ガキかお前は！もう俺は知らん、おいそこの二人！」

「あ、僕ら？」

よくわからない理由で再び喧嘩を始めた二人を止めてやるべきか考えながらじつと見ていると、いきなり中野がこっちに話を振ってきた。正直こっちに持ってこられても、困る。

「いきなり悪かったな、俺はもうサレンダーする。このアホは知らんから、手数かけてすまないけど思いつきり叩きのめしておいてくれ。あばよ、高野。短い間だったが、お前とのコンビなんぞもう2度とやらねえよ」

それだけ言うと1人でサレンダーし、まだまだ怒りが冷めやらないといった様子で野中を連れてどこかへ行ってしまった。あんぐりと口を開けて放心状態の高野に、わざとなのかそうでないのか夢が追いかける。追いかける。

「どうするのかな、だって。1対2なら私たちが勝つだろうし、あなたも負けないうちにサレンダーするの？」

「ち、ちくしょう、やってやらあ、やってやらあ！俺の場の電動刃虫は

攻撃力14400、そう簡単にやられはしない！」

そして、僕のターンだ。とはいえ、もうこの手札でやることなんて1つしかないんだけどね。

「僕のターン、ウミノタウルスを通常召喚。さらにサイレント・アングラーを攻撃表示に変更つと」

ウミノタウルス 攻1700

サイレント・アングラー 守1400↓攻800

「へっ、なるほど読めたぜ。その雑魚モンスターで守備力0の羊トークンを倒して、少しでも攻撃力を下げようってんだな？ いいぜ、そんなセコイ手なら痛くもかゆくもない」

「痛くもかゆくも、ね。なーにトンチンカンなこと言ってんだか。アングラー、その赤い羊に攻撃！」

サイレント・アングラー 攻800↓羊トークン 守0 (破壊)

高野 LP4000↓3200

「え……………」

「ウミノタウルスの特殊能力は、貫通。それもただの貫通じゃない、僕の場合に存在する全ての水族、魚族、海竜族にその効果は分け与えられる」

「そ、そんな、それじゃ……………」

今頃気づいたらしい高野に、夢の真似をしてにつこりと笑いかけやる。

「どつくに仕掛けは終わったのさ、あとは釣り竿引き上げるだけ。さあ、ウミノタウルス！ハンマー・シャーク！2体の羊に攻撃よろしくっ！」

ウミノタウルス 攻1700↓羊トークン 守0 (破壊)

高野 LP3200↓1500

ハンマー・シャーク 攻1700↓羊トークン 守0 (破壊)

高野 LP1500↓0

「だ、だめだ。こんなの勝てるわけなかったんだー！」

そう言い残し、こつちが声をかける前に逃げ出す高野。ふう、よくわからない相手ではあったけど、時間はずいぶん経っちゃったなあ。「突貫工事で作ってかないとキツイかな?」じゃあ、改めて手伝い頼むよ、夢想!」

「うん。任せて、だって。ただ、なんでだろう。まだ嫌な予感が消えないんだけど、なんだって」

ふむ。それは多分、すぐ行くって話をすっぱかしてデュエルしてた僕に対して怒ってるであろう葵ちゃんに僕が説教されるということだろう。

頭の中で、もうとつくに準備を始めているであろう彼女になんと言って謝ったら一番怒られる時間が短くなるかを何パターンかシミュレーションしながら走っていく。うーん、何を言っても怒られるだろうなあ……。いや、きつと道はあるはずだ。説教されるのは確定としても、その時間が1分1秒でも短くなるすんばらしい言い訳ってもんが。

だけど、別にそこまで離れているわけではない。結局思いつかないまま、あっさりと到着してしまう。こうなったら仕方がない、正直に覚悟を決めよう。

そう思っただけで自動扉の前に立とうとすると、中から1人の白い影が飛び出してきた。ぶつからないようにサツと避けると、その光の結社の誰かと思しき男は一言もしやべらないまま廊下の向こうに消えていった。まさか、葵ちゃんのところにも!?

「葵ちゃん、大丈夫!」

「先輩、ずいぶん遅かったですね。あれ? 河風先輩まで、一体どうしたんですか?」

「どうしたもこうしたも……葵ちゃん、今の誰だったの?」

「別に、としか言いようがないですね。強引にデュエル申し込まれたんですよ、まあ何とかかりましたけど」

ということは、葵ちゃんも光の結社を撃退するのに成功したんだろう。まったく、はた迷惑な組織もあったもんだ。でもまあ、そのごたごたのおかげでまさかの説教なしで済んだんだからそこは感謝。珍

しいなあ、いつもの彼女だったらそれはそれ、これはこれとして約束すっぽかしたことはキツチり叱るタイプなのに。

「さ、始めましようか。明日は商売のチャンス、でしよう？」

「もっちろん！さすがに僕の考えることもわかって来たね葵ちゃん。だけど試合が明日だし、それに響かない程度に自重しておかないとね。じゃあ夢想、悪いけどこの紙に書いた通りに小麦粉牛乳バナラエッセンスその他もろもろエトセトラ混ぜといてくんない？葵ちゃんはいつものクツキー生地ね。プレーンシナモン抹茶にチョコ……めんどくさいから省略。全部均等に作れるだけお願いねー。その間僕はこつちを作って……」



## ターンEX―3 鉄砲水と光、光、光

一人、また一人と光の結社へ入っていく仲間不安を覚えながらも、遊野清明は明日の戦いに向けて静かに眠っていた。その寝顔の横に、ちろりと動く影がある。いや、影という言葉ではまだ足りない。薄く月明かりが照らす部屋の中で、その部分にだけは光がない。それは、まさに闇そのもの。

すやすやと眠ったまま起きない清明のそばをしばらくうろろしていた闇は、やがて音も立てずにするりと窓の隙間から屋根の上へと出て行った。

人とはかけ離れた姿ながらも、まるでぽっかりと浮かんだ月を見上げるような形になる闇。その体のどこかから、小さな声が響いた。

『あの日起きたことを言ったら、貴方はどう答えるのだろうか……』

声の主である闇を、人はみなこの名で呼ぶ。地に縛られた呪われし神――地縛神 Chacu Chahuaと。

なぜ、このような台詞を独白しているのか。それは、少し前にさかのぼる。それは、ユーノが光の結社の手に墮ちる、ほんの少し前の話。

『んー？まーた来たのか、懲りねー奴』

その日は、きれいな半月が出ていた。そのうすぼんやりとした光に照らされながら、すやすや眠っている清明を尻目にぽつりとユーノが呟いた。

『行くのか？』

その声に応え、どこからともなく地縛神の声が響く。無論、なんと答えるかなどわかっていた。なのでこれは、質問ではない。ただの確認だ。

『おう。だからその間、また結界頼むわ。万一のことがあっても、全力で何とかしてくれよ？』

『そうなる前に、勝ってきてくれると有難いがな』

「ワハハ、そりやそうか。んじやなー」

ポン、と実体化して地面に降り立ち、本来のこの部屋の主……遊野清明のデュエルディスクを腕に付ける。2、3度腕を振ってしっかりと固定されたことを確かめ、彼はいつも通り気楽そうに外に出て行った。その姿がレッド寮からある程度離れたところで、寮の建物自体が青く光る炎にぐるりと囲まれる。その炎は地面を走り回り、やがて巨大なシャチをかたどった姿になった。もし、その様子を上から見ると形もなくなさぞかし驚いたろう。その姿はまさに、去年一夜のうちに跡形もなく消え去ったナスカの地上絵の姿そのものだったのだから。

その様子を一切振り返ることなく、ゆつくりと歩くユーノ。レッド寮が立地している崖の上から少し行った先の浜辺で、その足が止まった。すでにそこに立っていた先客に、友人に挨拶するような軽い調子で右手を上げる。

「よう。久しぶりだな富野。まさかまたお前の顔見る羽目になるとはなあ」

「ああ、そうだな。俺だってもう会いたくはなかったけどな、これも仕事だし自分のミスは自分でケリつけないとな」

一見すると、お互いに口が悪いながらも穏やかな会話に見えなくもない。だが、それは違う。個人的に何を考えているかはともかく、この2人はお互いに譲れないものがある敵同士なのだから。

先にデュエルディスクを構えたのは、不敵に笑うユーノだった。

「さあ、かかってこいよ。返り討ちにしてやんぜ」

「寝言は寝て言え、奇跡は2回も3回も起きないってことを教えてやるよ」

「上等上等。……つと、そうだ。1つ聞きたいんだけどよ、いつぞやお前が俺に泣きついてきたときのあのナルシスト野郎、あれどうなったんだ？」

いざデュエルで決着をつけようとした矢先、ふと気になっていたことを思い出してユーノが声をかける。それは忘れもしない数か月前、三幻魔の戦いが終わってから数日も経っていない頃の話だ。幻魔の皇と相打ちになる形で倒れた清明の魂を代価にすると持ちかけられ、暴走した1人の転生者狩りを2対1で倒したことがある。あの相手

はかなりの実力者であり、2対1であったからこそわりとライフに余裕がある状態で倒せたものの1対1ならばほぼ確実に負けていただろう。

よっほど嬉しくない記憶だったのか、あまり思い出したくなさそうにする富野にさっさと喋れと無言のプレッシャーをかけるユーノ。

「あれな。色々あったけど、今はもう全く新しい人生やってんじやね？記憶も消して、本当に1から別の人間として再スタート中、ってとこだろうな」

「ふーん」

話を振りはしたが、彼としてはそのことにあまり興味はなかったりする。ただ、ふと聞いてみたくなっただけだ。そして、もう用も済んだ。ここから先は、腕づくで自分の居場所を守るための時間だ。

「さて、と」

「今日こそは……！」

「デュエル！」

「先行はくれてやるぜ？俺ドロウしたいし」

「けっ、そりやどうも、だ。俺のターン、手札からパワー・ジャイアントの効果を発動！このカードは手札のレベル4以下のモンスターを墓地に送り、そのレベル分レベルを下げて特殊召喚することができ。レベル2のゾンビキャリアを墓地に送って、特殊召喚！」

パワー・ジャイアント 攻2200 ☆6↓4

「まだ俺は通常召喚をしていないな。来い、ドレッド・ドラゴン！」

ドレッド・ドラゴン 攻1100

「レベル4のパワー・ジャイアントに、レベル2のドレッド・ドラゴンをチューニング！大いなる風に導かれ、稲妻よりもなお速く。青きシリウスよ天を焼け！シンクロ召喚、天狼王 ブルー・セイリオス！」

☆4+☆2=☆6

天狼王 ブルー・セイリオス 攻2400

「くっ………また初手シンクロかよ」

思わずぼやく。いつもはエクストラデッキに融合モンスター以外のカードが入っていないデュエルばかり見ているので、久しぶりに見

るこの生前と同じ高速環境に合わせた思考ペースに戻すのは若干骨が折れるのだ。もつとも定期的にこの男が来るおかげで勘が鈍らずに済んでいる、という面もあったりするので決して悪いことばかりではないのかもしれないが。

「カードをセットして、ターンエンドだ」

「俺のターン！」

心底楽しそうにデッキからカードを引くユーノ。どれほど口が悪かろうが、この男もやはりデュエルが大好きな人間の一人なのだ。もつとも、そんな人間でなければ最初からこちらの世界に招いたりなどしなかったろうが。崖の上から2人のデュエルを眺めつつ、そんなことをつらつらと考えるチャクチャルアであった。

「先制攻撃はもらつてくぜ？キララー・ラブカを通常召喚、そして魚族のラブカを召喚したことで手札のシャーク・サッカーを特殊召喚だ」

キララー・ラブカ 攻700

シャーク・サッカー 攻200

「これで俺の場には、同じレベルのモンスターが2体。俺はレベル3のキララー・ラブカと、シャーク・サッカーでオーバーレイ！2体のモンスターで、オーバーレイネットワークを構築。深海を裂く沈黙が、静かな夜に悪夢を魅せる。エクシーズ召喚！ナシバーズN.O. 47 ナイトメア・シャーク！」

暗夜に広がる青い翼。鳥とも虫とも違う形のその翼の持ち主は、まるでどこかの悪夢から飛び出してきたかのように生物の常識を外れた姿をしていた。ただ、薄明かりに照らされた両腕の大きな刃のみが圧倒的な現実感を持って仄かに輝いている。

☆3+☆3||★3

N.O. 47 ナイトメア・シャーク 攻2000

「ナイトメア……シャーク……」

その効果の恐ろしさは彼らが生前いたライフポイント8000の世界ではなく、この初期ライフ4000の世界でこそ生きる。そのことをよく知っている富野が、冷や汗とともにつぶやいた。

「ナイトメア・シャークの効果を発動。オーバーレイ・ユニットを1つ

消費し、水属性モンスター1体を選択。他のモンスターがそのターン攻撃できなくなる代わりに、その1体は直接攻撃の能力を得る！ダイレクト・エフェクト！」

体の周りを飛び回る2つの光る球体のうち、片方がナイトメア・シャークの刃に吸い込まれていく。その直後、その姿が闇に消えた。急にいなくなった敵の姿を探し、ブルー・セイリオスが3組6つの目で辺りを慌てて見回す。

だが、それでも少し間に合わない。全くの無言のまま、完全に無音なうちに、悪夢の刃が振り下ろされる。

No. 47 ナイトメア・シャーク 攻2000↓富野(直接攻撃)  
富野 LP4000↓2000

「ぐはっ……………」

その威力は、彼の初期ライフのきっかり半分を一撃で奪い去った。ダメージもさることながら、心構えのできていないタイミングで大きな一撃をもらったことで富野の体がのけぞる。そのリアクションにいささかやりすぎたと思い、自分の場にそつと戻ってきたナイトメア・シャークに軽く注意する。

「よくやった。だけど、もーちよつと手加減してもんも、な？」

ユーノ。なんだかんだ言っても、根っこの方はどこまでも善人であつた。

「俺は、これでターンエンドだ」

富野 LP2000 手札：1

モンスター：天狼王 ブルー・セイリオス(攻)

魔法・罠：1(伏せ)

ユーノ LP4000 手札：4

モンスター：No. 47 ナイトメア・シャーク(攻・1)

魔法・罠：なし

「チツ、甘いこと言いやがってよ……………俺のターン！墓地からゾンビキャリアの効果を発動、手札1枚をデッキトップに戻すことで墓地からこのカードを蘇らせる」

ゾンビキャリア 攻400

「ダメージ優先は結構だが、まさかセイリオスを生き残らせてくれるとはな。レベル6のブルー・セイリオスに、レベル2のゾンビキヤリアをチューニング！赤き王者が立ち上がる時、熱き鼓動が天地に響く。防御に回る臆病者に、生きる価値など欠片もない！シンクロ召喚！叩き潰せ、レッド・デーモンズ・ドラゴン！」

ゾンビキヤリアが変化した2つのリングの間に狼の王が入り込み、さらに上の存在へと進化していく。赤と黒のコントラストが禍々しい悪魔名を持つ破壊のドラゴンが、地上に降り立った。

☆6＋☆2＝☆8

レッド・デーモンズ・ドラゴン 攻3000

「レッド・デーモンズで攻撃！灼熱のクリムゾン・ヘルフレア！」

「わかってると思うが、墓地からキラー・ラブカの効果を発動！このカードを墓地から除外することで、その攻撃を無効にして次の俺のターンまで攻撃力を500ポイントダウンさせる！」

大きく息を吸い込み、灼熱の炎を吐くレッド・デーモンズ。だがその熱がナイトメア・シャークを丸焼きにする寸前、一匹の魚が炎の前に割り込んだ。いや、割り込んだだけではない。その身を少しずつ燃えていくのも構わず、炎そのものを弾き飛ばしたのだ。

レッド・デーモンズ・ドラゴン 攻3000↓2500

「ふつ、まあそう来るよな？当然そうするよな？なんてったって、この攻撃をしのげばもう1回直接攻撃できるわけだからよ。だが、そんなの俺に言わせりゃ甘すぎるぜ！ぬるま湯生活で腕が鈍ったんじゃねーのかよ、あー？トラップ発動、バスター・モード！このカードは特定のシンクロモンスターを対象とし、そのモンスターを強化する！」

「バスター!？」

油断していたのかもしれない。考えが甘かったのかもしれない。引きが弱かった、とも言うことができる。だが、それは全て言い訳でしかない。冷や汗を流すユーノをよそに、炎を弾き返された悪魔の竜が赤い光に包まれていく。もう1つの進化系、スカーレッド・ノヴァ・ドラゴンのデザインに酷似した赤い甲冑に身を包み、より重くなった

その体を持ち上げるために翼がもう一回り大きくなる。

レッド・デーモンズ・ドラゴン / スラッシュ バスター 攻3500

「受け取りな。バスターでもう一度攻撃……エクストリーム・クリムゾン・フォース！」

より勢いを増した破壊の一撃が、キラ・ラブカの守りを失いなすべのないナイトメア・シャークを消し炭へと変えた。その時の衝撃波で浜辺の砂が派手に舞い上がり、すぐ横にいたユーノの体も爆風に吹き飛ばされていく。

レッド・デーモンズ・ドラゴン / バスター 攻3500

↓No. 47 ナイトメア・シャーク 攻2000 (破壊)

ユーノ LP4000 ↓2500

「くっ、さすがに効くな。でもまあ、おかげで目が覚めたぜ」

「はっ、そりやどうも、だ。ターンエンド」

実際、今の攻撃で彼はだいぶ目が覚めた。たった1ターンで最上級モンスターを出すことができるこの高速環境。これこそが彼のいた世界なのだ。このスピードに適応しなければ、待っているのは敗北のみ。

「ドロ、手札から爆征竜―タイダルの効果を発動。このカードと手札の水属性モンスターを墓地に送ることで、デッキのモンスター1体を落とすことができる。竜宮の白ウナギを使って、デッキの超古深海王シーラカンスを墓地に送るぜ」

ひとたび本気を出せば、どこまでも回り続ける。例えばデッキ枚数が規定ギリギリでセオリーガン無視であろうと、彼はこのデッキを使い続けていた。だからこそ、どこでどう動かせばいいのかはすべて知っている。

「魔法カード、死者蘇生を発動。俺の墓地から、今墓地に送ったシーラカンスを蘇生させる」

超古深海王シーラカンス 攻2800

「シーラカンス……悪いな、その特殊召喚にチェーンして手札から増殖するGの効果を発動。相手が特殊召喚したことで、カードをドロ」

黒く光る、不気味な動きの小さな影。Gと一般的に呼称されるそれがシーラカンスの体から飛び立ち、富野のデュエルディスクに吸い込まれていく。その様子にユーノばかりか使い手の富野までちよつと表情を硬くしていた。なにしろ、このまま特殊召喚を行わずにターンを終えたらただのジリ貧になるので、ユーノとしては嫌でも展開を行わなければならぬ。だがそうする以上、2人はこの光景を何度も何度も繰り返し見せつけられるのだ。

「そ、それで俺の展開を止めたつもりか？上等。もう仕留めるルートは見つかってるんだ、俺が勝つのとお前がバトルフェーダーあたりを引くの、どっちが早いか見せてもらおうじゃねえか。手札を1枚捨ててシーラカンスの効果発動、魚介王の咆哮！デッキからレベル4以下の魚族を、フィールドに出せるだけ特殊召喚する！来い、俺のモンスター達！」

「この一斉召喚はあくまでも1度に行う特殊召喚……ドローするのは1枚だけだ」

4体のモンスターを代表し、白タウナギの体にくっついてたGが再び飛び立って富野のデュエルディスクに入り込む。うつという顔をしながら、カードをまたドローした。

フィッシュボーグアーチャー 攻300

ハンマー・シャーク 攻1700

ハリマンボウ 攻1500

ハリマンボウ 攻1500

「レベル4のハンマー・シャークに、レベル3のアーチャーをチューニング。仲間を守る力を求め、妖精は闇を受け入れる。シンクロ召喚！永久なる守護者、妖精竜 エンシエント！」

シンクロ召喚の合計レベルは、7。キラキラと鱗粉のような光を放つ羽根をもった流線形のフォルムの竜がひっそりとシーラカンスの横に降り立つ。だが、まだ終わらない。そのドラゴンの体にも、Gはひっそりと付いているのだから。

「ド、ドロー……なあ、もうそろそろやめてくんね？」

妖精竜 エンシエント 攻2100



「お前がやったんだろが、お前が。つーか、俺だつてやめられるんらやめときたいんだぞ。さらに、レベル3のハリマンボウ2体でオーバレイ！2体のモンスターで、オーバレイネットワークを構築。星をも喰らう海竜が、新たな時代の風を呼ぶ。エクシーズ召喚！  
No. 17 リバイス・ドラゴン！」

翼に包まれた球体が、さながら巨大な眼球か黒真珠のように光り。そのオブジェがスルスルと展開されて青を基調としたリヴァイアサン、嫉妬の意味を持つドラゴンの姿へと変化していく。……そして、G。

No. 17 リバイス・ドラゴン 攻2000

「も、もう終わりだよな！ここでダウンードとか出して来たらそろそろ本気で殴るぞ！」

「やんねーよ、持ってないし。そしてフィールド魔法、忘却の都 レミューリアを発動。この瞬間にエンシエント第1の効果が発動、自分ターンに1度、フィールド魔法発動時にカードを1枚ドロロー」

落ち着いた様子でカードを1枚引くユーノ。新たなねぐらを得た2匹の竜が、レミューリアの周りを縄張りを守るかのようにふわりと飛び回る。

超古深海王シーラカンス 攻2800↓3000

No. 17 リバイス・ドラゴン 攻2000↓2200

「エンシエント、第2の効果を発動。フィールド魔法が存在する場合、1ターンに1度相手フィールドの表側攻撃表示モンスター1体を破壊する！スピリット・ベリアル森葬の霊場！」

妖精竜の目が赤く光り、呪いを受けた悪魔の竜が頭を押さえて苦しみます。痛みが限界に達したレッド・デーモンズが膝を折りかけた瞬間、富野の声が響いた。

「しつかりしろ、レッド・デーモンズ!俺はここでバスターの効果を使用!このカードが破壊された時、その鎧をパージすることで墓地から元のレッド・デーモンズを特殊召喚する!」

レッド・デーモンズ・ドラゴン 攻3000

全ての鎧が炎に包まれて消えさり、再びその身一つの姿で立ち上が

るレッド・デーモンズ。だが、彼だって／＼バスターの効果も知らずにエンシエントの効果を使ったわけではない。その証拠に、さっきのお返しと言わんばかりにユーノがにやりと笑って見せた。

「当然、そこまでは想定済みだぜ？リバイス・ドラゴンの効果発動！1ターンの1度オーバーレイ・ユニットを1つ使うことで、攻撃力を500ポイントアップする！アクア・オービタル・ゲイン！」

「そんなことしたって……いや、そうか！」

何かに気が付いたようにうめく富野だが、時すでに遅し。リバイス・ドラゴンが己の周りをクルクルと飛び回る2つの光の球のうち1つに食らいついた。

「どうやら気づいたようだが、言わせてもらうぜ？墓地に送られたハリマンボウの効果により、相手モンスター1体の攻撃力は500ポイントダウンだ」

No. 17 リバイス・ドラゴン 攻2200↓2700

レッド・デーモンズ・ドラゴン 攻3000↓2500

「クソツ、俺のレッド・デーモンズがパワー負けするだど？」

「これで終わらせてやるよ、リバイスでレッド・デーモンズに攻撃！バイス・ストリーム！」

リバイス・ドラゴンのブレスが、動きの鈍ったレッド・デーモンズを飲み込む。

No. 17 リバイス・ドラゴン 攻2700

↓レッド・デーモンズ・ドラゴン 攻2500 (破壊)

富野 LP2000↓1800

「シーラカンスで連撃、マリン・ポロロッカ！」

激流を起こしながら突進するシーラカンス。そのシンプルながらも力強い一撃も、富野の体をとらえることはできなかつた。富野とシーラカンスの間に割って入った一つの振り子のようなモンスターが、シーラカンスを強引に押しとめたのだ。

「まだだっ！もうとっくにドロウできてたんだよ、バトルフェーダーの効果を発動！相手のダイレクトアタック時にこのカードを特殊召喚し、バトルフェイズを終了させる」

バトルフェーダー 守0

これで、ユーノの攻め手はなくなった。いくらまだ通常召喚を行っていないとはいえ、バウンドダメージを手軽に与えられるブリザード・ファルコンなどのカードが手札にない以上このターンではとどめを刺しきることができない。

「残念。カードを伏せてターンエンド」

富野 LP1800 手札：3

モンスター：バトルフェーダー（守）

魔法・罫：なし

ユーノ LP2500 手札：0

モンスター：No.17 リバイス・ドラゴン（攻・1）

妖精竜 エンシエント（攻）

超古深海王シーラカンス（攻）

魔法・罫：1（伏せ）

場：忘却の都 レミューリア

「戦況は不利だ、けどまだ勝ち目はあるな。ドロロー！魔法カード、死者蘇生を俺も発動だ。蘇生させるのは当然、レッド・デーモンズ・ドラゴン！」

このデュエルだけでも2度目の復活を果たす悪魔の竜。いくらレッド・デーモンズが軸とはいえ、この異様なまでのしぶとさにさすがの彼も内心舌を巻く。

レッド・デーモンズ・ドラゴン 攻3000

「そして通常召喚、救世竜 セイヴァー・ドラゴン！」

「バスターとセイヴァーの混合型で、もし前とデッキが同じだとすればスカーレットも出せる構築………もはや頭おかしいレベルだな、ったく」

「お前に言われたくねえな。デッキ枚数60で俺と互角にぶん回すなんて十分頭おかしいだろ」

どっちもどっち、という言葉をかけている者がいなかったのは、お互いにとって幸か不幸か。

救世竜 セイヴァー・ドラゴン 攻0

「レベル8のレッド・デーモンズ、レベル1のバトルフェーダーにレベル1、セイヴァー・ドラゴンをチューニング。赤き王者の永久<sup>とわ</sup>の魂、終末の世に光を放つ！シンクロ召喚、世界を統べる！セイヴァー・デモン・ドラゴン！」

レッド・デーモンズが先ほどとは違った白い光の輪に包まれ、またもやその姿を変えていった。両腕が消えていき、そのかわりに尾はさらに長く。竜の翼はまるでトンボのような4枚羽へと変わり、空中戦での素早さをさらに高める形へ適応していく。救世の天使としての神々しさと、破滅の悪魔としての禍々しさ。相反する2つの力を同時にその身に秘めた、他のレッド・デーモンズ系統とはまた違ったコンセプトを持つ第3のドラゴンである。

セイヴァー・デモン・ドラゴン 攻4000

「セイヴァー・デモン、お前の力を見せてやれ！1ターンに1度、相手のモンスターの効果を無効にしてその攻撃力を得る！パワー・ゲイン！……だがその前に、用心に用心を重ねないと。速攻魔法、禁じられた聖槍を発動、対象はシーラカンスだ。これでその伏せカードがなんであろうが、シーラカンスはその効果に対する完全耐性を持った。だが逆に言えば、その恩恵も受けられないぜ」

超古深海王シーラカンス 攻3000↓2200

シーラカンスの体が赤い光に包まれ、苦しむ魚の王からなにかエネルギーのようなものがセイヴァー・デモンの中に流れ込んでいく。その様子を見て、富野は勝利を確信した。レミューリアの効果を受けたシーラカンスの攻撃力は2200。それを吸収して攻撃力6200かつカード効果で破壊されないセイヴァー・デモンの1撃ならば、それを止めることのできるカードは限られてくる。攻撃反応に絞るならば破壊ではなく除外を行う次元幽閉や攻撃力をそのまま跳ね返してくる魔法の筒あたりが警戒どころだし、その他フリーチェインならば月の書などが危ない。が、そんなフリーチェインで使うようなカードが伏せてあるのならそもそもセイヴァー・ドラゴン召喚時に使用してセイヴァー・デモンの召喚を防げばいいだけの話であるのでこれは除外できる。そして破壊を行わないタイプの攻撃反応カードを

使ってきたとしてもそれは十中八九トラップカードであろう。その場合は先ほどGの効果でドロートしたカード、攻撃宣言時に相手が発動したトラップを手札から捨てることで無効にできるチャウチャウちゃんの効果を使えばいい。つまり、この効果が届くと同時に彼は勝利を手にするに等しいのだ。

だが、その推測にはたつた1つだけ欠点があった。それは、今の推測全てが前提条件としてセイヴァー・デモン・ドラゴンの効果に通っていないと意味がないという点。実際その力が届く寸前、シーラカンスの力は本体もろとも一つの魔方阵に吸い込まれていった。

「何!？」

「あんまり好き勝手させるかよーリバースカードオープン、水霊術ー葵!このカードは自分の場の水属性1体をリリースし、相手の手札1枚を墓地送りにすることができる。俺はこの効果で、シーラカンスをリリースするぜ!!」

「だ、だがシーラカンスは聖槍の効果を受けた!なのになぜ……ハッ!」

痛恨の判断ミス。普段の彼ならば決してしないであろう、最悪の選択だった。この瞬間、勝負の流れは完全にユーノの方へと傾いたといえるだろう。シーラカンスが光の槍に貫かれてわななきながらも鏡の中に吸い込まれ、セイヴァー・デモンの効果が不発になる。

「悪いが、水霊術の発動条件はコスト、さ。確かにこれが効果の一部だったらパーになってたろうが、聖槍といえどもモンスターをコストに使用するだけは止められないぜ。それじゃ、改めて手札を……ほう、チャウチャウちゃんか。惜しかったな」

余裕めかしたセリフを吐きながらも、次に来るであろう衝撃に備える。なにしろこれでやることは全部やってしまったのだ、この次の攻撃を止める方法はない。2体のドラゴンのうち、どちらがやられるか。もつとも2体の効果を考えれば、そんなことはわかりきっている。

「まだ俺は攻撃宣言をしていない、妖精竜に攻撃!アルティメット・パワー・フォース!」

「まあ、そう来るよな……っ！すまん、エンシエント！」

灼熱の火炎放射とはまた違う、赤い光の奔流が妖精竜の姿を一飲みにした。たとえ効果が不発に終わっていても素の攻撃力だけで4000と圧巻の数値のそれは、またしてもその後ろにいたユーノを吹き飛ばす。

セイヴァー・デモン・ドラゴン 攻4000↓妖精竜 エンシエント 攻2100 (破壊)

ユーノ LP2500↓600

「ふー……」

先ほどの富野の判断ミスにこっそり感謝しながら、辛うじて残ったライフでデュエルを続けるために立ち上がる。実際、今のはかなり危なかった。もし先ほどの禁じられた聖槍を今の戦闘でエンシエントに対して使っていたら、ユーノのライフは0になっていたのだ。

だが、それもすべては過ぎた話。エンドフェイズを迎え、セイヴァー・デモン・ドラゴンから救世の力が抜けていく。

「チクシヨオオオオ!! エンドフェイズにセイヴァー・デモン・ドラゴンはエクストラデッキに戻り、かわりに墓地のレッド・デーモンズを特殊召喚する!!」

レッド・デーモンズ・ドラゴン 攻3000

もはや、勝負はついていた。リバイス・ドラゴンの効果を使い、攻撃力を上げつつハリマンボウを墓地に送る……あとは、このドロ―でモンスターを引きさえすればいい。そして……

「来い、ツ―ヘッド・シャーク。そしてリバイスの効果をもう1回発動、アクア・ゲイン・オービタル！」

ツ―ヘッド・シャーク 攻1200↓1400

No. 17 リバイス・ドラゴン 攻2700↓3200

レッド・デーモンズ・ドラゴン 攻3000↓2500

「これで終わりだ、富野。バイス・ストリーム！そしてツ―ヘッドでのダイレクトアタック！」

No. 17 リバイス・ドラゴン 攻3200

↓レッド・デーモンズ・ドラゴン 攻2500 (破壊)

富野 LP1800↓1100

ツーヘッド・シャーク 攻1400↓富野（直接攻撃）

富野 LP1100↓0

「チツクシヨ、今回は俺が馬鹿だった。……もうこんなことはしないからな、次こそは覚悟してろよ」

「おうおう、3日4日ぐらいなら覚えといてやるよ。んじゃ、あーばよ」

しきりに悔しがる富野を余裕たつぷりに相手しながら、くるりと背を向けて寮に戻ろうとするユーノ。その背中に、最後の一言がかけられる。

「ところで。一応この辺りには最初に昔倒した転生者の技術を応用して永続魔法、フィールドバリアを張っておいたから一応今のは誰にも見られてないけどよ、なんかさつきからこっちに来ようとしてる奴がいるぜ。俺は帰るから、見つかったらテキトーに後始末やつといてくれ」

「あ、ちよつとこら待て！………んなろー、また勝手に消えやがって」

あまりといえはあまりにぶつ飛んだ話ではあるが、それに何一つ疑問を持たない辺りはさすがにデュエリストというべきか。ぶつくさど誰もいない浜辺で文句を言いながら引き上げようとするユーノだが、それは少しばかり遅かったようだ。

「待ちなさい。そう、そこのあなたです」

当然、夜更けの浜辺に誰かほかに人がいるはずもなく。半ば諦めてゆつくりと振り向くと、そこにはかなり会いたくない相手の顔があった。

「齋王……琢磨……！」

「おや、私のことを知っていましたか。私も有名になったものです」

何が起きるかはわからないが、かなりよからぬことになってきた。なんとか脳をフル回転させてこの場から立ち去る方法を考えようと

するが、それよりも先に斎王が懐から2枚のカードを取り出した。1枚はデュエルモンスターのカードだが、もう1枚は違う。占いに使われるランプ、所謂タロットという奴である。

「聞きたそうですから先に教えておきますが、私のタロット運命が告げたのですよ。誰かの裏切りを暗示する月のカードMOONの運命を持つものがここにいて、とね。私はあなたのことを知らないが、光の結社に入るにふさわしい力を持っているようだね」

「高説ありがたいがね、生憎と死んだじーさんの遺言で宗教に関わっちゃいけないって言われてんだ。じゃ、あばよ」

ちなみにこのじーさんとやら、完全に口から出まかせである。

「ああ、待ちなさい。せめてこのカードを受け取ってもらいたい」「なに?」

受け取って、という単語についつい反応してしまうあたり、彼にも清明の貧乏性がいつの間にか移ってしまったのかも知れない。そんな彼の目が、斎王のかざした1枚のカード……時の魔術師のカードを捉えた。見てしまった。瞬間、時の魔術師が白い光を放ち、まるで意志を持つかのように斎王の手から離れてユーノの胸ポケットにすうっと入り込む。

変化は、すぐに表れた。

「これは?」

「さあてね。このカードはアルカナでもなんでもないが、かなり強い光の意思が宿っている。だが案ずることはない。さあ、私とともに光を目指そうではないか」

「……………誰……………」

必死に強がるも、さっきまでの闇のゲームに疲弊していた彼の精神は光の意思を抑えられない。地縛神の力があればまた別なのかもしれないが、肝心のカードは今レッド寮に残ってきている上に、そもそも彼自身はダークシグナーではないのでその恩恵を受けることができない。下手に出ていけば返り討ちにされかねないほどの光の意志の強さにユーノも、チャクチャルアもどうすることもできないうちに彼の意識が遠くなっていく。どうにもできずに意識が完全に吸い込



まれる寸前、せめてもの抵抗としてデュエルディスクを腕から外して砂浜の向こう側に放り投げた。それをチャクチャルアの作り出した闇が捕まえたのを確認し、彼の意識は……………。

彼は思う。ああそうだ、俺は光の結社のためにあの世から蘇ったのだと。

「……………わかった、斎王様」

「お互いに分かり合えてうれしいよ。ところで、君の名前は？」

「俺は、ユーノ。光の意思を代弁する1人、ユーノだ」

『……………結局は、これも私の力不足が招いたことか。いつかのラビエルとの戦いの時もそうだ。私には、力が足りない』

場面は、再びレッド寮屋根の上に戻る。自虐気味にそう言うチャクチャルアに、言葉をかける者はいない。虚しいほどに白い月のみだ、ただぽっかりと輝いていた。

## ターン43 ノース校と選ばれし戦士（前）

「うーん」

「いよいよ、今日はノース校との決戦の日。いつもよりちよつぱり早起きしてデツキの最終確認中、ふと思いついたことがあった。」

「シャツフルして、カットして……………上から5枚引いて……………」

ちなみに今引いたのはシャクトパス、ツーヘッド・シャーク、氷弾使いレイス、アクア・ジェット、リビングデッドの呼び声。まあそれはいいとして、そのままデツキをクルリと裏返す。1枚、2枚、3枚と順番に見てみると、案の定そのカードはデツキの下の方にあった。

『さつきから何をしているんだ？』

「あ、チャクチャルさん。ちょうどよかった、ちよつとこれシャツフルしてみてくれる？」

後ろから声をかけられたので、デツキを掴んでひよいつと後ろに投げ渡す。床にぶちまけた音がしないところを見ると、うまいことキヤツチしてくれたらしい。それにしても、今のチャクチャルさんの声の調子は何か引つかかるものを感じるような気がした。僕の気のせいだろうか。きつと、なんだかんだで僕も緊張してるんだろう。

『……………ふむ。こんなところでいいか？』

「センキュー。これをひっくり返して……………うーん、チャクチャルさんでもダメか」

デツキボトムに来ていたカードを確認し、ちよつとため息を吐く。ここまで来ると、もう偶然じゃあ済まないだろう。

『このカードが何か？』

それは、フラックフェザー

B F —疾風のゲイル。1ターンに1度相手モンスター

1体の攻守をノーコストかつ永続的に半減させることができる大変恐ろしい効果を持ったカードであり、去年のノース校対決の時に向こう側の副将、よろい鎧田から色々あつて貰うことになったものだ。なったものなのだがこのカード、性能とは全く関係ない点で1つ大きな弱点がある。

「このカード、とにかく手札に来てくれないんだよね」

なにせ、これをデッキに入れてからもう1年近くたつのだ。いくら僕のデッキ枚数が規定ギリギリなうえにピン刺しのカードとはいえ、それだけの間ずっと同じデッキを使ってきているんだからもっとドローできなければおかしいというものだろう。実際、同じくピン刺しのハンマー・シャークやらシャクトパスやらはよく手札に来てくれる。なのに、このカードのドローに成功したのはこれまででたった1度だけ……：廃寮の地下で大徳寺先生、本名アムナエルの錬金術デッキとデュエルした時の1回だけ。あれ以来デッキに入れ続けているのに、いまだにデッキ調整の最中にしか見たことがない。

「嫌われてんのかなあ」

『まあ、ありえない話ではないだろうな。それか、根本的にデッキに合わないのかもしれない』

「うーん」

じつとゲイルのカードを見つめる。一体このカード、僕にどうしてほしいんだろう。この子はもともと僕のカードじゃなかったせいか、どんなに頑張ってみてもいまだに精霊召喚ができない。だから、直接声を聞くこともできないわけで。

「……………こうしててもしょうがないし、外行ってくる」

結局どうすることもできず、またデッキの真ん中あたりに押し込んで家を出るのだった。まだ少し時間もあるし、軽く散歩でもしようかな。そう思い立ち、デュエルディスクだけ腕にはめて靴を履く。海岸に行けば、少しは気分も晴れるだろう。

しばらく歩くと、見覚えのある人影が見えた。こんな朝早い時間に崖に向かって……………なんだろう、デュエルディスクからひたすらカードを引いている。もう少し近づいてみると、何を話しているのかも聞こえてきた。

「アン、ドゥー、ドロー。アン、ドゥー、ドロー。アン、ドゥー、ドロー。む、誰かいるのか？」

「三沢ー」

そこにいたのは僕の友達の一人で、ちよつと前までライイエローの秀才と呼ばれていた男、三沢。今ではすっかり白い服になってしま

い、そのせいでイエロー改めホワイトの秀才とか何とか呼ばれてるらしい。

「えつと……」

はて、何を話せばいいんだろうか。そもそも三沢とは、彼が光の結社に入ってから一度も話していない。常に白い制服の誰かに囲まれていて何となく近寄りがかかったのもあるが、それ以上に怖かったのだ。あの時一足先に光の結社に入っていた万丈目は、僕のことなんてまるで眼中にないようなそぶりを見せていた。あの時だって実は結構へこんだのに、また誰か、僕の友達にあんな態度をされたとしたら。立ち直るのにかなり時間がかかることが容易に想像できて、だから近づくの避けていた。というか逃げた。いいことじゃないとは思うけど、こればかりは勇気が出ない。

だけど、三沢はそんな僕の心境なんてお構いなしに話しかけてくる。

「同じ学校にいながらこういうことを言うのも変な話だが……：久しぶりだな、清明」

「え？ああ、うん」

何一つおかしなところのない、ごく普通の挨拶。だというのに、とつさに反応できなかった。心のどこかでは、三沢も万丈目のようになつてしまったと勝手に覚悟していたのかもしれない。

「そうだ。今日の代表メンバーだが、なかなかの人選じゃないか？俺が入らなかつたのが少し残念だが、まあ事情が事情だししょうがないな」

「あ、あはは」

さわやかに言つて笑う三沢。その隣で、僕の笑いはさぞぎこちないものだったろう。そのまま何かを言おうとしたようだが、彼が口を開く前に聞き覚えのある声が近づいてきた。

「む。なんだ三沢、こんなところにいたのか。斎王様がお呼びだぞ」

「ああ、わかっているさ万丈目。今行く」

これまでよりも当社比3割増しぐらいに偉そうにふんぞり返つて歩いてくる万丈目……あー、ホワイトサンダー。まったく、と肩をす

くめ、三沢とともに並んで離れていく。

その遠ざかっていく背中に、思わず声を上げる。

「ま、万丈目！」

「万丈目ホワイトサンダー、だ。一体何の用だ」

声をかけはしたが、何か言おうと明確に思ったわけではない。結局何も言えないうちに、変な奴だと肩をすくめて万丈目と三沢は行ってしまった。

それから後のことは、かなり忙しかったのであまり記憶に残ってない。お菓子だけ作っというて肝心の売り手が2人ともメンバー入りしていたことをギリギリになって思い出して大急ぎで無人販売所のよなものを作ったり、ついでに朝ご飯を食べてなかったのと一緒に作った観戦客用の弁当セットを1つちよろまかして味見がてら食べてみたり、そんなこととしてたらいつの間にかノース校からの船が来ていてその対応に港まで繰り出したりと、とにかくいろんなことをしたことは覚えている。

「おはよう、清明。頑張ろうね、だつてさ」

「もちろん。今日も頼むよ、夢想」

「おはようだドン、清明さん。こんなイベントに新参者の俺を選んでくれて、改めて感謝ザウルス」

「いや、別にそんな」

「あー！一体今までどこにいたんスか清明君！おかげで朝ご飯食べられなかったんスよ！」

「いや、自分で何か作ろうよ。じゃあウチの観戦用弁当1つ譲ったげるからそれ食べてて」

「……………ああ、おはようございます先輩」

「うん、おはよー葵ちゃん」

やっと準備を終わらせ、なんとか時間ギリギリにデュエル場へたどり着く。先に来ていた皆に声をかけられたりやつたーと言いながら無人販売所に行った翔を見送ったりしているうちに、向こう側からも

誰かがやって来た。はて誰だろうと見ているうちに、ずんずんこつちに迫ってくる。照明が逆光になつて関係でなかなか顔が見えなかったが、向こうから声をかけてくるころにはそれが誰だかわかった。

「おーい、遊野清明！」

「あ……あーっ！鎧田!!」

サンダー四天王と名乗るノース校最強の4人衆。その中でもトップの実力を誇り、UF……アンデッドフェザーと自称するアンデッドワールド入りのB Fブラックフェザーを操る男、鎧田。ちょうど今朝見ていたゲイルのカードをくれたあの鎧田だ。電話ではあれから連絡を取ったこともあったけど、直接会うのはほぼ1年ぶり。だけど、どうやらあつちはその時からそんなに変わってなさそうだ。特に白くない制服を見る限りサンダー四天王はまだ光の結社に入っていないみたいだし。一緒に来たノース校の皆さん方はもう9割がた白くなってたけど。

「よう、元気にしてたか？」

「んー、まあね。そっちはどう？」

「俺か？俺もまあ、ノース校で頑張ってるぜ。ところで、サンダーは？サンダーはどこにいるんだ？」

おっと。この質問もいつかは聞かれると思つてある程度の覚悟はしてたけど、さつそく聞きに来ますか鎧田さん。直接言う気になれず、無言で客席を指さす。確かそこには、白服の本校生徒たちのど真ん中で観戦用の椅子を3人分ぐらい占領し、さらにその上にふかつふかのでっかい座布団を敷いて高級ソファーみたいにした上でふんぞり返る万丈目がいたはずだ。見てるうちに馬鹿らしくなってくるかなるべくそつちの方は向かないように気を付けてたけど。

その方向を見た鎧田も、ああ、という表情になった。万丈目、あつちでも似たようなことしてたのね。

「まあ、元気そうならそれでいいさ。ところでよ、その、言いにくいんだが……」

「何？」

何かを言おうかどうか迷っている、といった様子の鎧田。何が言い

たいのかはわからないけど、これからデュエルしようって時に余計なこと考えて集中が鈍ったままにしておくのはフェアじゃないだろう。別にフェアプレイに拘るわけでもないけど、わざわざこっちまで来たってことは僕にできるようなことなんだろう。

「その、ゲイル、あつただろ。去年お前にやった。あれ、今も持つてるか?」

「まあね。これ?」

デッキを取り出してひっくり返し……ああ、薄々わかっちゃいたけどまーたデッキボトムだ。ゲイルのカードを取って、鎧田に見せる。しばらく彼はそのカードを見ていたが、やがてなんでもないと行って元の場所に戻っていった。なんだったんだ一体。よくわからないままに、クロノス先生のアナウンスが始まった。

「あー、あー、ただいまマイクのテスト中ですー」

「何をバカなことしてるんでアールか、クロノス臨時校長」

「臨時はよけいなノーネ、ナポレオン教頭。失礼、お見苦しいところを見せてしまったノーネ。それはさておき、今年もノース校対本校の対抗試合を行いますノーネ。去年は本校側が3対2で勝利を収めました、果たして今年はどうなるのか。それでは両校、先鋒の人を出してください」

「それじゃあ先輩方、行ってくるドン!」

僕が先鋒に選んだのは、剣山。今年入学してきた関係上相手からすれば未知の人間である剣山に対してメタを張ることは不可能なはずだし、彼の物怖じしない性格ならば緊張のあまり実力が発揮できないなんてことはないだろうと踏んでの人選だ。おそらく相手は去年と同じサンダー四天王で1を担当する飯田だろうし、剣山の恐竜デッキのパワーなら十分押し切れる相手だろう……

「ファースト・バトルは任せたぞ、和田!」

あれ?

「ふん、わかった。この和田が、ノース校のために初戦を制してくる」「いや誰だお前」

思わず素で突っ込んでいるうちに、両者が向かい合う。一人で考え

ていてもらちが明かないので、軽く手招きして鎧田をもう一回呼び寄せる。

「デュエル!!」

「先行は俺がもうドン、ブラック暗黒ステゴを召喚！さらにフィールド魔法、ジュラシクワールドを発ドン！このカードがある限り、恐竜族モンスターは300ポイントアップするザウルス。これでターンエンドだドン」

暗黒ステゴ 攻1200↓1500

「ねーねー鎧田、あれ誰？」

「ああ、あいつか？あいつはノース校期待の新人の和田ってやつでな、去年で卒業した飯田先輩に代わって新しくサンダー四天王の一角を務めてもらってるんだ。つーか、お前らだってなんなんだよあのメンバー。去年と同じ奴がお前とあの女の2人しかいないじゃねーか」  
「うっ」

そこを言われるとこっちも弱い。でも去年のメンバーなんていまだ行方不明の十代やら光の結社に入った明日香やらで呼び出そうにも呼び出せないような連中ばかりだからこれは仕方ない。

「ノース校のために！ドロー。お前も恐竜族使いのようだが、この和田の恐竜族は他とは一味違うぞ？まずはジュラック・ヴェローを召喚。ジュラシクワールド、効果的用具！」

ジュラシクワールドに生い茂った大量の草をかき分け、体の一部が炎に包まれた不思議な恐竜が和田の場に召喚される。

ジュラック・ヴェロー 攻1700↓2000

こういつてはなんだが、恐竜族というのはあまりメジャーな種族ではない。どれくらいメジャーではないかという点、僕も愛用する海竜族ぐらいメジャーではない。なので、ジュラシクワールドの効果を手相手も受けるといえるのはこれだけでかなり珍しいことだ。これには、剣山もいささか驚いたようだ。

「おお、お前も恐竜さん使いなのかドン！恐竜さん使いに悪い人はいない、これはいいデュエルができそうな気がするザウルス」

「ふ、そうか。ヴェロー、暗黒ステゴに攻撃だ！」



爪を振り上げ、肉食恐竜が力強く大地を踏みしめて足元の草を食むステゴサウルスに突撃していく。だがその攻撃が届く前に敵の存在に気付いたステゴが力強く尾を一振りし、ヴェローを返り討ちにした。

「何っ!?!」

「ふふふ、罠にかかったドン! 暗黒ステゴは攻撃対象になったとき、準備表示に変更することが出来るザウルス!」

ジュラック・ヴェロー 攻2000↓暗黒ステゴ 守2000↓2300

和田 LP4000↓3700

「やるな。カードをセットして、ターンエンドだ」

剣山 LP4000 手札：3

モンスター：暗黒ステゴ(守)

魔法・罠：なし

場：ジュラシックワールド

和田 LP3700 手札：4

モンスター：ジュラック・ヴェロー(攻)

魔法・罠：1(伏せ)

「俺のターン、ドロロー! ここは一気に攻め込むドン、エレメント・ザウルス召喚! このカードは自分か相手の場に炎属性モンスターが存在するとき、攻撃力を500ポイントアップするドン。さらに、暗黒ステゴも攻撃表示に変更」

エレメント・ザウルス 攻1500↓1800↓2300

暗黒ステゴ 守2300↓攻1500

「バトル! エレメント・ザウルスでジュラック・ヴェローを攻撃だドン!」

テイラノサウルスのような恐竜が火を吐き、ヴェローを焼き尽くそうとする。同じく火を扱うジュラックとしてなんとか持ちこたえそうにも見えたが、結局は攻撃力の差の前に倒れることとなった。

エレメント・ザウルス 攻2300↓ジュラック・ヴェロー 攻2000(破壊)

和田 LP3700↓3400

「だが、ここでジュラック・ヴェローの効果を発動。表側攻撃表示のこのカードが戦闘破壊されたことで、デッキから攻撃力1700以下のジュラックモンスターを特殊召喚………ん？」

ジュラックの残り火が、新たな命を産むために真つ赤に燃え上がる。だが、それを見逃さなかったエレメント・ザウルスはその残り火をぐしやりと踏みつけて消した。

「エレメント・ザウルス第2の効果を使ったドン。自分または相手の場に地属性モンスターがいるとき、このカードが戦闘破壊したモンスターの効果は無効となるザウルス。もともと、これで場の炎属性モンスターがいなくなったからまた攻撃力はダウンするドン」

「そんな効果まで………！」

「敵陣はがら空きだドン、暗黒ステゴでダイレクトアタック！」

暗黒ステゴ 攻1500↓和田（直接攻撃）

和田 LP3400↓1900

「いい調子だよー、剣山！そのまま突っ切れー！」

「無論だドン、清明さん！」

なかなかいい調子だ。ここまでノーダメージ状態のまま、一回の間も見せずにうまくこと攻め立てている。だけど、次に何が起きるかわからないのがデュエルだ。これは僕の勘だけど、あの和田とかいう奴、何かを狙っている。キーカードを引くのをじっと待っている、そんな気がする。

「俺のターン、ドロー。ふん、やつと来たか。魔法カード、テラ・フォーミングを発動。このカードの効果により、デッキからフィールド魔法1枚を手札に加える。俺が加えるのは、ブラック・ガーデンのカードだ」

「ブラック・ガーデン………？」

知らないカードだ。まあ、わざわざサーチしたんだからすぐに使うだろう。見てればわかるかな。

「ふつ、魔法カード発動。死者蘇生の効果で、墓地のヴェローを再び呼び出す」

ジュラック・ヴェロー 攻1700↓2000

「これでコンボの布石は整ったな。魔法カード、大進化薬を発動。恐竜族モンスター1体をリリースすることで発動するこのカードは3ターンの間フィールドに留まり、その間いかなる恐竜族モンスターもリリースなしで召喚できるようになる。ふふ、俺はこの効果を使うことでこのデッキのエースカード、ジュラック・スピノスを召喚だ」

まるで火の山を背負っているかのように派手に燃え盛るひれ、じゃないか。なんていうんだっけ恐竜のあの部分。えーと……………まあとにかく燃えてる。元気よく燃えてる。それでいいじゃないか、うん。

ジュラック・スピノス 攻2600↓2900

「ふん、バトルだ。エレメント・ザウルスに攻撃！」

ジュラック・スピノス 攻2900↓エレメント・ザウルス 攻2300 (破壊)

剣山 LP4000↓3400

「くっ……………まだまだドン！」

「ふ、そうだろうな。だが、モンスターを戦闘破壊したことでスピノスの能力発動！お前のフィールドに、スピノストークンを攻撃表示で呼び出す」

スピノスの炎が体を揺らした拍子に地面に燃え移り、その炎から新しい恐竜の命が生まれる。恐竜の赤ん坊が、小さな体を精いっぱい使って火を吹いてみせる。

スピノストークン 攻300↓600

「なんだ、わざわざ俺にこんなに可愛いトークンをくれるのかドン？随分と気前のいいやつザウルス」

「ふ、馬鹿をぬかせ。もとはと言えば俺のスピノスの炎、俺に返してもらうぞ。永続トラップ発動、洗脳解除！」

その時、不思議なことが起こった。今まで剣山のフィールドで小さいなりに戦いの構えをしていたスピノストークンが、何か目が覚めたような顔になって自分の親、本家ジュラック・スピノスのところに走っていったのだ。

「ふん、決まったな。洗脳解除がある限り、あらゆるモンスターのコントロールは元々の持ち主が得ることとなる。この1体も、そしてこれからも、スピノスの炎は俺のものだ」

「なるほど、どんどん数を増やすつもりなのかドン………だけど、スピノストークンの攻撃力はたった600！そんなにかわいい恐竜さんを攻撃するのは忍びないけど、だからと言って手加減するほど大自然は甘くないザウルス！」

「ふ、そう焦るな。だからこそ、このカードを使うのだ。フィールド魔法、ブラック・ガーデンを発動！」

シユルシユルと黒い茨があたりかまわず伸び、そこかしこに生えたシダ植物やらでっかい木やらを締め付けるように成長する。ものの10秒もしないうちに、生命力あふれる古代の森が不気味な荒れ庭へと変化してしまった。

「ああ、フィールドが！」

「フィールド魔法はお互いが使用できるから、お前のジユラシツクワールドは残り続ける。だが、そんな程度の全体強化ではこのブラック・ガーデンには追いつけない。カードをセットして、ターンエンドだ」

剣山 LP3400 手札：3

モンスター：暗黒ステゴ（攻）

魔法・罫：なし

場：ジユラシツクワールド

和田 LP1900 手札：0

モンスター：ジユラツク・スピノス（攻）

スピノストークン（攻）

魔法・罫：大進化薬（0）

洗脳解除

1（伏せ）

場：ブラック・ガーデン

「俺のターン！ブラック・ガーデンだか何だか知らないけど、恐竜さんのパワーは無限大！そんな庭なんかには負けはしないドン！暗黒ステ

ゴ、スピノストークンに攻撃！」

「ふっ、随分と予想通りに動いてくれるものだな。本校の実力とやらはその程度か！カウンターでトラップ発動、暴走闘君！この永続トラップは、フィールド上のトークン全ての攻撃力を1000ポイントアップさせる強化カード。迎え撃て、スピノストークン！」

暗黒ステゴ 攻1500（破壊）↓スピノストークン 攻600↓  
1600

剣山 LP3400↓3300

「うわっ！は、ハイパーハンマーヘッドを守備表示で召喚、カードを伏せてターンエンドだドン……………」

「ふっ、待ちな。お前の恐竜、よく見たほうがいいんじゃないのか？」

「え？……ハイパーハンマーヘッド！お前、どうしたんだドン一体！」  
流れを完全に和田に持っていかれた剣山が、時間稼ぎのために出した守備モンスター。その体が、地面から伸びる茨に巻きつかれて苦しそうに膝を折る。

ハイパーハンマーヘッド 守1200↓1500

「あ、あれ？守備力は特に変わってない……………って、なんなんだこの攻撃力は!？」

「ふ、やっと気づいたか。ハイパーハンマーヘッドの元々の攻撃力は1500、つまりそこにジュラシックワールドの効果で300を足した1800になるはずだろう？だが、そうはならない。なぜならば、ここがブラック・ガーデンだからだ。このカードがある限り、召喚及び特殊召喚されたあらゆるモンスターの攻撃力は半減される。今のハイパーハンマーヘッドの攻撃力は900、だな」

「攻撃力、半減」

これは、かなりまずい。剣山のデッキは、恐竜族のパワーで押し切ることを信条としたビートダウンデッキ。シンプルで力強いが、どうしてもやることは戦闘一本と単調になりがちである。だが、どれほど元の攻撃力が高くても、それが半分になってしまっただけは一気に戦闘能力は下がってしまう。

そして、そうなれば後はもうスピノスが苦し紛れに伏せられたモン

スターを蹴散らし、生み出したトークンを洗脳解除で自分のものにして暴走闘君で強化。剣山の場は壊滅状態になり、和田の場はほとんど戦力が整っていく。剣山にとっては、デツキの相性がかなり悪いと言えるだろう。もしかしてミスったかな、順番。でも、デュエルはもう始まつちやつてるんだ。剣山の力を信じるしかない。

「頼むよ剣山！勝ったら夕飯おごるからさっ！」

「任せてくださいー！このテイラノ剣山、真っ向から受けて立つドンー！」  
「ふ、盛り上がっているところ悪いが、まだブラック・ガーデンの効果は終わってはいない。モンスターを出した側から見て相手、つまり俺のフィールド上にローズ・トークンを特殊召喚。無論、暴走闘君の効果込みでな」

ハイパーハンマーヘッドに絡みついた茨が養分を吸いとると、近くの地面から黒い風景には不釣り合いな地のように赤いバラが一輪生えてきた。なるほど、確かにそんな効果を持っているなら下手にモンスターを表側表示で出すことすらできないわけだ。実に理にかなっている。

ローズ・トークン 攻8000↓1800

って、そんなのんきにしてる場合でもない。これで剣山の場には強化されるとはいえ守備力1500のハンマーヘッド1体のみ、けど和田の場には攻撃力2900のスピノス、そして攻撃力1600、1800のトークンが1体ずつ。剣山の伏せカード次第では、このターンで決着がついてしまう。

「俺のターンー！ゆくぞ、ジュラック・スピノス！ハイパーハンマーヘッドに攻撃だ！」

ジュラック・スピノス 攻2900↓ハイパーハンマーヘッド 守1500（破壊）

「そして、スピノストークンをお前の場に特殊召喚。この瞬間洗脳解除が再び発動され、トークンは俺のものとなる。だが、ブラック・ガーデンの効果もその召喚に対して発動される。この意味が分かるか？」  
「それじゃあ、またお前の場にローズ・トークンが生まれるのかドン！？」

これで2体目。燃える炎の赤ちゃん恐竜が、炎というより火の粉を吹いて自慢げな態度をとる。そしてその直後にその体を締め付けた黒い蔦が養分を吸い取り、新たなバラを和田の場に産む。

スピノストークン 攻3000↓1600↓800

ローズ・トークン 攻800↓1800

「だけど、ハイパーハンマーヘッドの効果も発動するドン！このモンスターとの戦闘で破壊されなかった相手モンスター1体は、手札に戻るザウルス」

「今更スピノスを手札に戻したところで、大進化薬のあるこの状況なら痛くもかゆくもない。ローズ・トークンでダイレクトアタックだ」  
「がら空きになった剣山に、2輪のバラが種子を飛ばして攻撃する。だがその状況に対し剣山は、まだ笑っていた。よし、笑う余裕があるならまだなんとでもなるね。」

ローズ・トークン 攻1800↓剣山（直接攻撃）

剣山 LP3400↓1600

「ふっ、これでもう1体の攻撃が通れば」

「あんた、なかなか強いドン。でも、俺だつて強いザウルス！今の戦闘ダメージをトリガーにトラップ発動、ダメージ・ゲート！今のダメージ以下の攻撃力を持つモンスター1体を、墓地から特殊召喚するドン。甦れ、暗黒ステゴ！」

大量の茨をものともせず、先ほど倒されたステゴザウルスが再び立ち上がる。だけど、その体もまた無数の蔦に絡まれ養分を吸い取られていく。

暗黒ステゴ 攻1200↓1500↓750

ローズ・トークン 攻800↓1800

「さあ、これを見てもまだ攻撃してくるのかドン？もつとも、俺はそれでも一向に構わないザウルス」

「…………ふ、なるほどな。暗黒ステゴは攻撃対象になったとき、守備表示にできる。守備力には影響を与えない、ブラック・ガーデンの効果のわずかな隙をついたか。さらに俺の場をトークンで埋め尽くすことで、レベル7のスピノスを出すにはどれか2体をリリースせざるを

えない、か。ふ、悪くない手だ。感心するよ。場のスピノストークン2体をリリースし、モンスターをアドバンスセット。これでターンエンドだ」

ブラック・ガーデンの効果は召喚または特殊召喚時にのみ発動される……つまり、アドバンスセットからの反転召喚ならば影響は受けずに済む。ただ、問題はあのモンスターがなんなのかだ。そのままスピノスを出したのか、それとも他の最上級モンスターなのか。どちらも、可能性としては十分あり得る。

剣山 LP1600 手札：1

モンスター：暗黒ステゴ（攻）

魔法・罨：なし

場：ジュラシックワールド

和田 LP1900 手札：1

モンスター：ローズ・トークン（攻）

ローズ・トークン（攻）

???（セット）

魔法・罨：大進化薬（1）

洗脳解除

暴走闘君

場：ブラック・ガーデン

「俺のターン！よし、このカードなら！俺も、お前の場の大進化薬の効果を使用させてもらおうドン。レベル5以上の恐竜族をリリースなしで召喚……俺が呼び出すのは、竜脚獣ブラキオン！」

剣山の行動を制限しつづけたブラック・ガーデンなどまとめて踏みつぶしてやる、と言わんばかりのサイズを誇る恐竜ブラキオサウルスをモチーフにしたモンスター、ブラキオン。その圧倒的なデカさはデュエルフィールドからはみ出そうになるほどで、そんなモンスターの養分を吸ったローズ・トークンもまたそれなりの大きさのものが育ってしまった。ま、攻撃力は変わらないけどね。

竜脚獣ブラキオン 攻1600↓1900↓950

ローズ・トークン 攻800↓1800



「ブラキオンは、攻撃力ではそのロース・トークンに勝てないドン。ま、ダメもとで一応アンタの伏せモンスターに攻撃してみるザウルス」

「ふ、馬鹿め。迎え撃ってやれ、ジュラック・スピノス！」

竜脚獣ブラキオン 攻950↓?? 守1700↓2000

剣山 LP1600↓650

「そ、そりやそうなるでしょ剣山！」

なにせ、モンスター2体を使ってアドバンスセットされたモンスターなんだ。攻撃力たかだか950のブラキオンの一撃で破壊できるわけがない。むしろ、今の反射ダメージで負けなかったことを感謝すべきだと思う。

「まだ大丈夫ザウルス、清明さん。それはそうと、やっぱりそのモンスターはジュラック・スピノスだったかドン。十分想定内、メイン2にブラキオンの効果発動！このカードは1ターンに1度、裏側守備表示に変更できるザウルス！」

「ほう」

「このモンスターなら、ブラック・ガーデンも怖くないドン。さらにカードをセットし、ターンエンドザウルス」

このターンで、一気に剣山のライフが半分以下になってしまった。いくらブラキオンの守備力がジュラシックワールドこみで3300とよほどの大型モンスターでなければ突破できないとはいえ、やっぱりあの局面でのあれは無謀すぎるんじゃないだろうか。はつきり言つて、相当痛いプレイングミスだ。

「ふん、舐めた真似を。その余裕、この場で後悔させてやろう。魔法カード発動、太陽の書。このカードで、そのブラキオンを強制的に表側攻撃表示に変更させる。そして、俺のスピノスも攻撃表示に」

竜脚獣ブラキオン 守3300↓攻1900

ジュラック・スピノス 守2000↓攻2900

「な、そんなカードを持っていたのかドン!？」

「ふ、俺は俺のデッキの弱点ぐらい把握している。守備表示で逃げ切られないよう、敵の表示形式を変更するカードくらい入れておくさ」

これは初戦はこっちの負け、かな。今のブラキオン自爆特攻さえなければまだワンチャンあったのかもしれないけど……いや、ローズ・トークンがあればあれだけいる時点でもう詰みか。それに、どっちにしろこの攻撃で剣山のライフは尽きる。

「ふむ。だが、その伏せカードに対してさらに念を入れておくか。ミラーフォース対策の意味を込め、ローズ・トークン1体を守備表示に変更しておこう。」

ローズ・トークン 攻1800↓守800

「バトルだ！スピノス、ブラキオンに攻撃を行え！」

スピノスが口から火炎弾を放ち、それがブラキオンめがけてまっすぐ突っ込んでいく。体が燃えてる時点で今更だけど、恐竜のやることじゃないよね。

「うわああああっ！」

「ふ、決まったな」

炎から身を守るように剣山が体の前で腕を組み、その直後にブラキオンの体が燃え上がる。それを見た和田が、勝利を確信して一言つぶやく。

そしてその瞬間、剣山が動いた。

「……………なーんちゃって、ザウルス。この瞬間をずっと待っていたドン！攻撃宣言時にトラップ発動、魂の一撃！」

燃える炎の中でブラキオンがゆらりと立ち上がり、自信を燃やしている火を出した敵であるスピノスを見下ろす格好になる。その体の大きさからくる威圧感に、本来肉食恐竜であるはずのスピノスが草食恐竜のブラキオン相手に体を縮こまらせて恐怖する。

剣山 LP650↓325

ジュラック・スピノス 攻2900（破壊）↓竜脚獣ブラキオン 攻1900↓5575

「何、なんだその攻撃力は！」

「魂の一撃……………自分のライフを半分にする代わりに、モンスター1体の攻撃力を4000マイナス半分にしたライフの数値ぶんアップさせる一発逆転の効果だドン。これによってブラキオンの攻撃力は

スピノスをはるかに上回る5575となったザウルス！」

「あ、そうか。あれを狙っていたから剣山は、わざと自分のライフを減らすような攻撃を……………」

そこまで言いかけて、ふと気づいた。いや、違う。別にあんな自爆特攻を行わなくても、残りライフ1900の和田を返り討ちにする程度の火力は出せていた。じゃあ、一体剣山は何を警戒したんだろう？ 夢想にも意見を聞こうとした時、和田の手札にずっと温存されていた手札、その最後の一枚が姿を見せた。

「ふ、まだだ！手札から速攻魔法発動、非常食！このカードは発動時に自分の魔法か罠を任意の枚数墓地に送ることで、ライフを1枚につき1000回復する。俺が墓地に送るのはブラック・ガーデン以外の3枚、つまり洗脳解除、大進化薬、暴走闘君だ！」

和田 LP1900↓4900

なるほど、非常食か。確かに、戦闘スタイルの都合上あのデッキなら場にカードがたまりやすいから相性はいいだろう。最悪ブラック・ガーデンさえあれば相手の攻めはだいぶ遅れるだろうから、その間に墓地送りにした分をゆっくり補充すればいいだけだし。ブラキオンとスピノスの攻撃力の差は2675、勝負はまだまだ終わりそうにない。

「いいや、それじゃあやつぱり俺の勝ちだドン」

「何？お前のカードは使い切っている、俺のライフはなくならんぞ」

そう、確かにもう剣山にはこれ以上の伏せカードも、墓地から効果を発動するカードもない。なのに、これで終わりにするとはいかに。「あれだけの永続カードを使う時点で、非常食が1枚ぐらい入っている可能性は十分読めていたドン。ブラック・ガーデンも墓地に送っていたらまだわからなかったけど、それはないだろうと思っていたザウルス」

「何が言いたい！」

「竜脚獣ブラキオン、もう一つの効果を発動！このモンスターが相手から攻撃を受けて相手が戦闘ダメージを受ける場合、その数値は倍になるドン！」

「攻撃力の差は2675……倍にして、5350のダメージだと!?  
うおおおおっ!」

和田 LP1900↓0

「ふー、危なかったドン……」

「すごいじゃない、剣山!よくやった!」

やれやれと首を振ってこちらに戻ってくる剣山に手を振ると、向こうもニカツと笑って手を振り返してきた。その背中に、和田が最後に声をかける。

「テイラノ剣山、その名前は覚えてたぞ。ふん、次やるときは俺が勝つさ」

「和田、俺もお前のことは覚えておくドン。実際、お前は大したデュエリストだったザウルス」

その会話を最後に、座り込んでいた和田も立ち上がってノース校陣地へと帰っていく。まずは一勝、だけど勝負はまだまだこれからだ。

## ターン44 ノース校と選ばれし戦士（中）

「これより、5分間の休憩に入りますノーネ。選手の皆さんは次の試合の準備を、観客の皆さんもトイレは混まないうちに行っておくことをお勧めしますー」

クロノス先生のアナウンスが響く中、何気なくノース校側を見てみる。初戦は剣山が勝ってくれたけど、裏を返せば余裕のなくなったあつちはこれまで以上に本気でかかってくるということ。とはいえ次峰は葵ちゃん、あんまり心配はしていない。3番手は夢想だし、こりや下手すると僕の出番ないまま終わったりして。どれほどギスギスした空気になっているかと野次馬根性全開でのぞいてみると、意外にもそこには向こうの次峰、天田てんだしかいなかった。そのままじつと見ていると、向こうも僕の視線に気が付いて近寄ってきた。

「……何か、用か」

「あ、いや別に。ね、他のみんなどこ行っただの？」

わざわざ聞くほどのことでもないだろうけど、せつかく会話してくれてるんだからやっぱり聞いておきたい。天田は軽く肩をすくめ、若干呆れたようなポーズをとった。

「……サンダーに会いに行くんだと。で、俺も行きたかったんだけど、別にサンダーとは試合の後でも会えるし、どちらかというとな次の試合で勝つことをまず考えないといけないしな」

「なるほどねー。でも、うちの葵ちゃんも強いからね？」

「……だろうな。なにせ、去年サンダーとあそこまでの勝負をした男の選んだメンバーだからな、こちらも警戒ぐらいはするさ」

そう言ってもらうのは嬉しい。随分僕も偉くなったものだ。ちよつと気を良くしていると、辺りをきよきよと警戒するように見回した天田が、誰にも見られないように自分の体で隠しながら僕になにかケースのようなものを押し付けてきた。依然として周りを警戒しつつ、声を低くして僕に話しかける。

「……話は変わるが、何も言わずにこれを受け取ってくれ。頼む」

「え？え、あーうん」

まったく意味が分からないが、もらえるものはもらっておこう。あーでも、億に一つどころか兆に一つでラブレターとかだったらどうしょ。僕にはもう好きな人がいるし、そもそもそういった趣味はありませんってはっきり断ったほうがいいんじゃないかなろうか。

「……頼む。本当はサンダーに渡したかったんだが、サンダーが光の結社に入っていたとあつては渡しづらいんだ」

何を考えているのかはわからないけど、とても真剣な天田の目を見る。ふうむ、これは素直に受け取っておいた方が面白そうだ。何かはわからないけど、いつかこのケースの中身が役に立つ。そんな気がする。

「……誰もいない場所で、誰にも見られないように開封してくれ。使の方はお前に任せるが、できれば最終的にはサンダーに渡してほしい」

「あいよ、よくわかんないけど頼まれたよ。でも、このことって鎧田たちは」

「……あいつらは何も知らんはずだ。これはノース校に代々伝わっていたレアカード、アームド・ドラゴンの他にもう2つあるレアカードだ。教職員はおろか、あいつらにさえ気づかれないように盗ってくるのはかなり骨が折れた」

「へー、そんなものが……でも、なんで？そりゃ許可は下りないだろうけど、別にわざわざ他の皆にまで黙ってることはないんじゃない？」

「……俺の勘だが、どうも今回は嫌な予感がしてな。あいつらでさえ今一つ信用できないんだ、と言ったらお前は笑うか？」

「いや、と首を横に振る。嫌な予感、か。そういえば、夢想もつい昨日は同じことを言ってたっけ。実際、あそこで夢想がついてきてくれなかったらあの3人組相手はかなり厳しかったろう。そして、今は夢想に続き天田まで同じことを言う。気のせいだったら笑い飛ばせばいいだけだし、警戒するに越したことはないだろう。」

「……俺は、別に光の結社に恨みがあるわけではない。ただ、怖い。あそこに入った人間は、全員目つきがおかしくなる。何かわからないも

のを信仰し、そのほかのことに目が行かなくなる。つい昨日まで隣で笑っていた友が、同じ結社の人間以外とはまともに話すらしなくなる。だから俺は、光の結社をなんとかしたい。そう思うんだ」

「そっか。なら、僕と一緒にだよ。恨みなんてものは特にないけど、友達を返してほしい。言うことなんてそれだけさ」

「…………ふ。同じことを考えていたか。だが、勝負は勝負。俺は、負けはせんから覚悟しておけ」

ちよつと笑ってそう言い残し、そのまま戻っていく天田。言われたとおりにケースをポケットの奥深くに押し込み、何食わぬ顔をして夢想たちのところに戻る。さて、そろそろ時間かな。

「あーあー、それでは皆さん、お待たせしたノーネ。第2回戦、これより始めますノーネ！」

「頑張つてね、葵ちゃん！」

そう声をかけると、彼女はそつと振り向いて、普段の様子に似つかない、どこか寒気をする笑顔をして見せた。

「…………ええ、先輩」

さて、それではここで時間を少し巻き戻そう。時は、剣山のデュエルが終わる、その少し前…………丸藤翔は、走っていた。彼は今の今ままで遅い朝飯となった弁当、朝ご飯を作っておらず、しかもそのことをすっかり忘れていた清明からお詫びの品として急遽タダで貰うことになった観戦用のそれを食べていた。その間は観客席にいたのだが、いざ食べ終わって戻ろうとするとごみ箱はすでに弁当の空箱で満員状態。そこらへんに放置するわけにもいかず、わざわざ他のごみ箱を探してさまよっていたのだ。そのあたりに、彼の誠実ではあるが要領の悪さが目立つ点がよく表れているといえるだろう。

「ふー、すっかり遅くなっちゃったよ。急がないと、もう剣山君の試合

も終わりそうだったし……と、トイレトイレ」

ちなみに、彼のこの戦いにおけるポジションは副将である。5分の休憩があることも考えれば、別にそこまで全力で走る必要はないのだが。

そしてトイレに入り軽く用を足し、手を洗っていると外から声が聞こえてきた。

「ふわあぁ、ねーむい眠い。さっさと顔洗って戻りますかね」

その声に聞き覚えがある気がして、なんとなく個室の中に隠れる翔。当然ここは男子トイレの中であり、わざわざ隠れる必要なんてどこにもない。だが、なんとなく顔を合わせたくない相手なような気がしたのだ。そのまま個室の中でドアに耳を立てて様子をうかがっていると、ジャバジャバと水道の水が流れる音がしばらく続いた。どうやら本当に顔を洗いに来ただけらしい、と一息ついた次の瞬間。

「しかし、サンダーもえっぐいこと考えるよなあ……でもまあ、これが決まったらアカデミア本校も、だもんな。さすがサンダーだぜ。さ、かーえろつと」

「ま、待ってー!」

「あー?」

とても不穏な台詞を聞き、思わず個室から飛び出していた。怪訝そうに振り返った、その声の主は。

「おっと。お前は確か今年の本校側代表メンバーじゃねえか」

「お前は! 確か、去年ノース校で中堅だった……えーと、誰だっけ」  
「なんだよもう、覚えてないのかよ! 俺だよ俺、去年初手攻撃力9600のモニタージュ・ドラゴン出したサンダー四天王の百、酒田だよ!」  
「あ、思い出した。次のターン夢想さんに強制転移やられてた人だ」  
「ええーい、そんなもん思い出すな!」

じたばたと手を振り回して怒っているポーズを取った後、なんとか落ち着いたように息を吐く酒田。身長の関係で再び翔を見下ろす形になったその眼には、先ほどまでのおどけた様子とはうってかわって真剣な光が宿っていた。

「まあいいさ。さてと、お前を向こうに帰らせていらんことを考えら



れると厄介だし、多少手順は変わるがしようがねえ。お前、さつき『待て』って言ったよな？デユエリストに向かつて待てなんて言う以上、当然デユエルの覚悟はできてるんだろ？」

「え、ええ!？」

翔は別に、そこまで非戦的な性格ではない。規格外なデユエル馬鹿である十代や清明と暮らしているせいで影こそは薄い本人にそこそこの向上心があり腕も決して悪くはないため、ラーイエローへの昇格も間近である。それになにより、酒田がさつき漏らした言葉の内容も気になっていた。だから彼は少し迷ったものの、結局はデユエルディスクを構えるのだった。その様子を見た酒田が意外そうに、だが嬉しそうにニヤリと笑う。

「デユエル!」

「おいチビ、デユエルディスクの決定を待つまでもないな！先行はお前にくれてやるよ」

「……………わかった。僕が先行だ。永続魔法、マシンナイズ・フロントライン機甲部隊の最前線を発動。さらに永続魔法、マシン・デベロッパも発動」

一枚ずつ、ゆっくりと戦線を整えていく翔。去年の今頃に比べれば、自分だつて進歩している。本当ならこんな奴じゃなくて、十代アニキにそれを見せたかった。そう思いながらも、デユエルの手は休めない。「そして、ジャイロイドを守備表示で召喚。マシン・デベロッパは機械族の攻撃力を上げる効果があるけど、守備力には影響しない。カードをセットして、これでターンエンドっス」

ジャイロイド 守1000

様子見ということ、ある程度の守りを固める。決して天狗にならないようにと自分に言い聞かせながら、ちらりと酒田の様子をうかがった。

「俺のターン。手札から魔法カード、オノマトペテ連携を発動！」

「オノマト……………連携?」

聞き覚えのない単語に首を傾げる翔。彼の記憶が確かならば、酒田のデッキは最上級モンスターだらけの一步間違えれば手札事故まっしぐらな圧倒的な重さを誇るものだったはずだが。その反応が期待

通りのものだったらしく、またまたにやりと酒田が笑う。

「俺は去年、あの河風とかいう女に負けた。それで1つ賢くなったのさ。最初から馬鹿でかい攻撃力の超大型モンスターを1体出すよりも、多少総攻撃力を下げてでも戦線を分厚くした方がリスクが少ないうってことをな。オノマト連携の続きだ、手札を1枚捨てることでデッキからズババ、ガガガ、ゴゴゴ、ドドドのモンスターから1種類ずつ2枚までサーチができる。俺が手札に加えるのは、ドドドバスターとゴゴゴジャイアント。そしてドドドバスターは自分の場にモンスターがいない時、手札から自分のレベルを4にして特殊召喚できる！」

ドドドバスター 攻1900 ☆6↓4

「だ、だけどジャイロイドは1ターンに1回戦闘破壊されない効果がある！これでなんとか」

「ならないんだな、それが！自分フィールドの戦士族モンスター1体をリリースすることで、手札のターレット・ウォリアー特殊召喚！そしてターレット・ウォリアーをこの効果で特殊召喚した時、リリースした戦士族の攻撃力ぶん自身の攻撃力をアップさせる」

両肩に小さな砲台を備え付けたまさに動く城壁のような戦士が、ドドドバスターの構えていた大型ハンマーを受け継いでぐつと握りしめる。

ターレット・ウォリアー 攻1200↓3100

「驚くのはこれからだぜ！まだ残ってる召喚権を使ってゴゴゴジャイアントを通常召喚、そのまま効果発動！召喚に成功したこのカードを守備表示にすることで、墓地のゴゴゴモンスター1体を守備表示で特殊召喚できる………甦れ、ゴゴゴゴラム！さらにゴゴゴゴラムが特殊召喚された時、その表示形式は変更されるぜ。ゴラム、攻撃表示に変更だ！」

ゴゴゴジャイアント 攻2000↓守0

ゴゴゴゴラム 守0↓攻2300

「最初にオノマト連携の効果で捨てたモンスター……！」

「だから言ったら、戦線を分厚くするって。そして自分フィールドの

ゴゴゴをリリースすることで、このカードは手札から特殊召喚できる  
！ゴゴゴジャイアント、進化！ゴゴゴゴーレム―GゴールドエンフォーームF！！」

ゴゴゴゴーレム―GF 攻？

赤茶色の巨人、ジャイアントの姿が黄金色に光を放ち、その右腕に岩が集まってよりパワーアップ。胸の中心には赤く光るコアが出現し、はるかに増したパワーを制御することを可能にする金の巨人がターゲット・ウオリアー共々その岩の体から圧迫感を放ち翔を圧倒する。

「攻撃力が、ない？」

「ああ、そうさ。GFの攻撃力は決まっていない……なぜなら、攻撃力は今リリースした進化前のゴゴゴモンスターの倍の数値になるからだ！」

ゴゴゴゴーレム―GF 攻4000

「さあ、ド派手にやらせてもらうぜ！GF、ジャイロイドを攻撃だ！グレートキャノン！」

「トラップ発動、スーパージャージ！自分の場にロイドだけがいて相手が攻撃してきたとき、カードを2枚ドロ―！」

岩の拳が迫り、ジャイロイドのプロペラの付け根に直撃する。辛うじて大破は避けたものの、もう空を飛ぶことはできないだろう。

ゴゴゴゴーレム―GF 攻4000↓ジャイロイド 守1000

「二回は耐えても、もう一回は無理だろ！ゴゴゴゴラムで続けて攻撃だ！」

ずんぐりむつくりの岩石の戦士が手にした金棒を振り下ろし、すでにスクラップ寸前だったジャイロイドを完全に打ち壊す。

ゴゴゴゴラム 攻2300↓ジャイロイド 守1000（破壊）

「だけど、この瞬間に2枚の永続魔法の効果を発動！マシン・デペロツパーはフィールドの機械族が破壊された時、このカードにジャンクカウンターを2つ乗せるっす。さらに機甲部隊の最前線があるときに機械族が戦闘破壊されたら、同じ属性でより攻撃力の低いモンスター1体をデッキから呼び出せる。僕が呼び出すのは風属性のビークロイド、サイクロイド！」

壊れたヘリコプタージャイロイドの部品を組み立て、新しく自転車サイクロイドが作り出される。攻守も低いバナラモンスターだが、翔のデッキでは装備魔法の補助輪を駆使して戦う立派なアタッカーである。もつともその補助輪がない以上、ただの壁にしかないのだが。

マシン・デペロツパー(0) ↓ (2)

サイクロイド 守1000

「覚悟しな、おんぼろ自転車！ターレット・ウオリアーで攻撃だ！」

生ける城壁が、両肩の砲台から球を乱射しつつ巨大ハンマーを振り下ろす。当然そんなオーバーキル気味な一撃に単体では弱小モンスターであるサイクロイドが太刀打ちできるはずもなく、これまた一瞬でスクラップになる。

ターレット・ウオリアー 攻3100 ↓ サイクロイド 守1000

(破壊)

マシン・デペロツパー(2) ↓ (4)

「うわっ！き、機甲部隊の最前線………の効果は1ターンに1度だから使えないけど、マシン・デペロツパーにはこれでジャンクカウンターがもう2つ追加！」

「どうだ！俺はこれで、ターンエンドだ」

翔 LP4000 手札：3

モンスター：なし

魔法・罫：機甲部隊の最前線

マシン・デペロツパー(4)

酒田 LP4000 手札：2

モンスター：ターレット・ウオリアー(攻)

ゴゴゴゴレム―GF(攻)

ゴゴゴゴラム(攻)

魔法・罫：なし

モンスターこそ失ったが、今のターンの猛攻をノーダメージで防ぎ切った。そこに、翔の成長の姿が見られるだろう。そして、それに天狗にならないように気を付けながら次の一手を考える。

「僕のターン！マシン・デペロツパーの効果発動！このカードを墓地

に送ることで、その時乗っていたジャンクカウンターの数以下のレベルを持つモンスター1体を墓地から蘇生させる!」

「へっ、またジャイクロイドか? いいぜ、やってみろよ」

「いいや。僕が蘇生させるのはレベル3、サイクロイドさ」

「はあ!? ふざけてんのかテメエ!」

サイクロイド 攻800

えらい言われようではあるが、実際このタイミングではもう1度ジャイクロイドを呼ぶのが得策と言えるだろう。ただしそれは、あくまでもフィールドのみを見た場合。サイクロイドを複数採用している翔のデッキにとっては、この方が都合のいい場合もあるのだ。

「魔法カード、融合を発動。同名機械族モンスター2体………場と手札のサイクロイド2体を素材にして、融合召喚! ペアサイクロイド!」

子供用自転車のサイズが大人用のそれ程度に大きくなり、オレンジ色だったカラーも赤を基調とした攻撃的な色に変わる。椅子も通常の自転車と同じ1つから、その後ろにもう1つ備え付けられた。その姿はまさに、2人乗り用自転車。

ペアサイクロイド 攻1600

「なんだなんだ、融合までしてやっとなレベル3アタッカークラスかよ。火力がないなあ、火力がよお!」

お前の火力は高すぎる。そんな事実を言える人間がこの場にいなかったのは、翔にとっては不幸なことだったろう。

「うるさい! さらに、サブマリクロイドを召喚!」

サブマリクロイド 攻800

「そしてバトル! ペアサイクロイドは攻撃力が低い代わりにダイレクタアタッカーの力を持つモンスター。ペアサイクロイドでダイレクタアタック! ダブル・サイクロン」

ペアサイクロイド 攻1600↓酒田(直接攻撃)

酒田 LP4000↓2400

「ちっ、めんどくさい真似してくれんじやねえか」

「まだまだ! サブマリクロイドは水中や地中に潜むことができるビー

クロイド。このカードも自身の効果でダイレクトアタックができる！  
「デープ・デス・インパクト！」

地中を突き進む魚雷の一撃が、酒田の足元で爆発する。その爆風に煽られ、酒田の髪が逆立った。

サブマリクロイド 攻800↓酒田（直接攻撃）

酒田 LP2400↓1600

「どうだ！」

「面白いことやってくれんじゃねえか。だけどな、そのおかげでお前の場にいるのは大したことない攻撃力のモンスターが2体だけ。たっぷり礼をしてやるから覚悟しとけよ」

「そんなことさせるもんか！サブマリクロイドの効果発動、このカードがダイレクトアタックをした後、このカードを守備表示にできる。これなら戦闘ダメージは」

「いいや、ダメだね。ゴゴゴゴーレム―GFのモンスター効果！相手フィールドでモンスター効果が発動した時、このカードの攻撃力を1500ポイント下げることでの発動を無効にする！パワー・チェンジ・バリア！」

金色の巨人が胸のコアから人型の光線を放ち、申し訳程度についた両腕で守りを固めようとしたサブマリクロイドを強引に戦闘モードに引き戻した。

ゴゴゴゴーレム―GF 攻4000↓2500

「そんなーか、カードをセットしてターンエンド……」

「なら、俺のターンだな。ドロー、野獣戦士ピューマンを召喚だ」

野獣戦士ピューマン 攻1600

「そしてバトル、ターレット・ウォリアーでペアサイクロイドを攻撃！  
リボルビング・ショット！」

再び銃を乱射しながらハンマー片手にとびかかる動く要塞。2人乗り自転車はなかなか市販されておらず知名度も低いなかなかレアな代物ではあるが、だからといって戦闘目的の要塞に勝てるわけではない。ジャイロイドよりもステータスは高いものの耐性を1つも持っていないペアサイクロイドが、あつという間にくず鉄の塊に変化

する。

ターレット・ウオリアー 攻3100↓ペアサイクロイド 攻1600 (破壊)

翔 LP4000↓2500

「機甲部隊の最前線の効果！ペアサイクロイドは地属性、だから地属性のエクспレスロイドを特殊召喚！」

エクспレスロイド 守1600

「守備力1600、ねえ。確かにピューマンじゃ破壊できねーけど、それがなんだってんだ」

「僕の狙いはそこじゃないよ、エクспレスロイドの効果発動。このカードが特殊召喚されたことで、墓地のロイドモンスター2体を手札に加えることができる！」

「何っ!?くそ、GFの効果は強制効果だ。パワーチェンジ・バリア……攻撃力1500を犠牲にして、相手フィールドのモンスター効果を無効にする。まんまとやりやがったな」

ゴゴゴゴラム―GF 攻2500↓1000

「へへへ、どうだ！恐れ入ったか！」

うまいことエクспレスロイドの効果を使って酒田の裏をかいたのがよっぽど嬉しかったらしく、あれだけ自分に言い聞かせていたのも忘れて大威張りで胸を張る翔。だがそれは、かえって酒田の闘志に火をつけたようだ。

「ああ、恐れ入ったぜ。正直、お前みたいなチビがここまでやるとは思わなかった。だから、ここからはさらに本気だぜ！とは言ったものの他の奴らじゃ火力が足りねえし、これはしようがねえ。ゴゴゴゴラム、エクспレスロイドを攻撃だ！」

ゴゴゴゴラム 攻2300↓エクспレスロイド 守1600 (破壊)

「次、ピューマン！サブマリンロイドに攻撃！ブラック・スラッシュ！」

野獣戦士ピューマン 攻1600↓サブマリンロイド 攻800 (破壊)

翔 LP2500↓1700

「GFで……ダメージはアメリカット効果で半分になっちゃおうしな、大人しく守備にしとくか。さらに野獣戦士ピューマンのモンスター効果発動。このカードをリリースして、デッキに存在する俺のエースモンスター……異次元エースパー스타ー・ロビンをサーチする。カードをセットして、ターン終了だ」

翔 LP1700 手札：1

モンスター：なし

魔法・罫：機甲部隊の最前線

酒田 LP1600 手札：2

モンスター：ターレット・ウオリアー（攻）

ゴゴゴゴレム―GF（守）

ゴゴゴゴラム（攻）

魔法・罫：1（伏せ）

場の状況も手札もライフも、全て酒田の方がリードしている。だが、翔はもう負ける気がしなかった。先ほどの攻防で自信をつけた彼は、そのまま押し切るカードを求めてドローを行う。

「魔法カード発動、貪欲な壺！墓地のエクスペレスロイド、ペアサイクロイド、ジャイロイド、サイクロイド、サイクロイドの5体をデッキに戻してさらに2枚のカードをドロー。そして魔法カード、ブラック・ホールを発動！フィールド上の全モンスターを破壊する！」

「なに!?ここでそんなガチカード使いやがって！トラップ発動、神の宣告！ライフを半分払うことになるが、その発動は無効になるぜ」

酒田 LP1600↓800

「防がれちゃったか……カードを伏せて、ターンエンド」

「危なかったな、ったく。俺のターン、EM<sup>エンタメイト</sup>デイスカバー・ヒツポ召喚だ！」

EMデイスカバー・ヒツポ 攻800

シルクハットをつけたピンク色のカバ。だが、その攻撃力はこれまで彼が使ってきたモンスターのことを考えるとおかしなぐらいに低い。



「ディスプレイ・ヒッポのモンスター効果だ。このカードを召喚したターン、俺はレベル7以上のモンスターをアドバンス召喚できる。ゴゴゴゴラム―GFとヒッポをリリースし、アドバンス召喚！光の意思を守るため、今日も正義の大盤振る舞い！異次元エスパースター・ロビン、満を持して参上！」

異次元エスパースター・ロビン 攻3000

「スター・ロビン！いや、それよりも今光の意思って……まさか！」  
何かに気づき、はつと息をのむ翔。だがもう遅い。このことを清明たち本校メンバーに伝えるには、このデュエルを何としてでも制さなければならぬ。

「何をぼさつとしてやがる！ゴゴゴゴラムでダイレクトアタック……念のため言っとくが、ロビンが場にいる限りお前はロビン以外を攻撃できず、効果対象にもとれないぜ。その伏せカードがなんだとしても、それが対象をとる効果ならロビン以外には発動すらできないんだよお！」

ゴゴゴゴラムが金棒片手に、無防備な翔に殴りかかってくる。だが、いざ叩き付けようと金棒を振り上げた瞬間、その姿がいきなり爆発した。ゴラムだけではない。ターレット・ウォリアーが、そしてスター・ロビンまでもが同時に爆発を起こす。

「な、何をしやがった！」

「これだよ。対象を取らない攻撃反応カード、聖なるバリアーミラーフォース。これならスター・ロビンの効果に引っかかることもなく発動できて、相手の攻撃表示モンスターを全滅させられるからね」

逆転に次ぐ逆転。もつとも、ここでただで終わるほどの男ならば、彼にサンダー四天王の座は務まらないのだが。

「ゴゴゴゴラムのモンスター効果発動、このカードが墓地に送られたことでデッキからゴゴゴモンスター1体を墓地に送る。ゴゴゴゴラムを送ってターンエンドだ」

翔 LP1700 手札：1

モンスター：なし

魔法・罫：機甲部隊の最前線

酒田 LP800 手札：1

モンスター：なし

魔法・罨：なし

「僕のターン、来た！ドリルロイドを召喚、そのまま攻撃！」

両手と鼻がドリル状になったモグラをモチーフにしたと思われるロイドが、3つのドリルを駆使して突っ込んだが、その攻撃はまだ届かない。

「異次元エスパー・スター・ロビン、正義のヒーローは何度だって立ち上がる！相手のダイレクトアタック時、このカードを守備表示で特殊召喚………スター・ロビンよ永久とわに！」

異次元エスパー・スター・ロビン 守1500

「だけどドリルロイドの攻撃力は1600だし、何かしてきてもこのカードには守備モンスターを一方的に効果破壊する効果がある。そのまま攻撃だ！」

「悪いな、これだけじゃねえ！ロビンの効果の発動にチェーンして、手札のバトルフェーダーを発動！直接攻撃宣言時に特殊召喚し、このバトルフェイズは終了だ」

バトルフェーダー 守0

「そ、そんな」

翔の残りライフは1700、そしてロビンの攻撃力は3000。もし次のターンに酒田がモンスターを引かなければギリギリ持ちこたえられるが、それでもかなりライフは厳しくなる。モンスターを引いたらその時点でまず間違いなく終了と、翔にとってはかなり勝率の悪い賭けとなってしまうた。

だが、手札のない翔にはどうすることもできない。

「悪いな、俺のターンだ。ドロロー！ちっ、闇がないのに開闢かよ。つたく、運が良かったな。スター・ロビンを攻撃表示にしてドリルロイドに攻撃！ビック・リパンチ！」

異次元エスパー・スター・ロビン 攻3000↓ドリルロイド 攻1

600 (破壊)

翔 LP1700↓300

この瞬間、すでにすべての運命は決まっていたといえるだろう。バトルの神様は1回のデュエルで何度も何度も微笑んでくれるわけではない、先ほどのターンが酒田にとって最後のチャンスだったのだ。そしてそれを生かすきれなかった場合、待っているのは当然、敗北一直線であると相場が決まっているわけで。

「機甲部隊の最前線の効果で、地属性のエクスペレスロイドをまた召喚！もう一回効果を使って、墓地のサブマリンロイドと今破壊されたドリルロイドを手札に加えるよ」

エクスペレスロイド 守1600

「チツ……ターンエンドだよ、ターンエンド」

翔 LP300 手札：3

モンスター：エクスペレスロイド（守）

魔法・罫：機甲部隊の最前線

酒田 LP800 手札：1

モンスター：異次元エスパースター・ロビン（攻）

バトルフェーダー（守）

魔法・罫：なし

「僕のターン、ドロロー。このカードは……よし、魔法カード発動、パワー・ボンドー！この究極の融合カードで、手札のスクーム、ドリル、サブマリンの3体のロイドを融合！現れる、スーパービークロイド！」

3体のモンスターを用いた融合召喚。地上、地中、水中で働く3体の力が1つになり、サブマリンロイドの潜水艦型をベースに巨大化していく。

「なんだ、このモンスター!?!」

「僕のエースモンスター、スーパービークロイドージャンボドリル！」

スーパービークロイドージャンボドリル 攻3000

「味な真似しやがるぜ。だがな、ロビンは存在する限り相手はロビン以外を攻撃できず、そしてそのモンスターの攻撃力はロビンと全く同じ。それじゃあ攻撃はできねえはずだぜ！」

「ううん。それは違うよ」

「何?」

スーパービークロイドージャンボドリル 攻3000↓6000

「こ、攻撃力が……」

「これが、パワー・ボンドの力。このカードで融合された機械族は、攻撃力が元々の数値ぶんアップする！」

「く、くっ……」

「さつき、火力が足りないとか言ってたよね。だけど、今は僕の火力の方が上！行っけえ、ジャンボドリル！」

スーパービークロイドージャンボドリル 攻6000

↓異次元エスパースター・ロビン 攻3000（破壊）

酒田 LP800↓0

「ま、負けちゃった……やべ、サンダーになんて言ったらいいか」

「今は、僕の質問に答えてもらおうよ！」

半ば呆然と呟く酒田の目の前にずい、と立ちふさがる翔。一瞬視線が辺りをさまよったものの逃げることは無理だと判断したらしく、やむを得ないといった様子でぽつぽつと全てのことを話し始める。最初の内は黙って聞いていた翔だったが、話が進むにつれてみるみるうちに顔色が青くなっていた。そして話がすべて終わったとき、翔は全てを理解した。

「そ、それじゃあ……」

「ああ、そういうことだな。もうほとんどうまくいってるし、最悪ばれでも問題ないタイミングだったってわけだ。ま、ばれないに越したことはなかったんだけどな。ハハハハハ」

「は、早くみんなに伝えないと……」

酒田のことはもう放っておき、一目散に会場めがけて走り出す翔。その後ろ姿を酒田は、くっくっくと笑いながら最後まで見送っていた。

「あー、翔！今までずっと何やってたの！今一番重要なとこなんだよ！」

どたどたといかにも全速力！といったふうに顔を真つ赤にして走りこんできた翔を見つけ、つつい声を荒げてしまう。あんまり説教めいたことはやりたくないんだけど、これはいくらなんでも遅すぎる。一食食べて帰ってくるだけなのに、なんでこんなに時間がかかるんだらうか。

「はあ、はあ………そ、そんなことよりみんな！今、今の試合は……！」  
「え？まあ、見ての通りこんな感じだけだ」

葵 LP850 手札：1

モンスター：ギヤラクシーアイズ・フオトンドラゴン 銀河眼の光子竜（攻）

魔法・罫：なし

天田 LP900 手札：2

モンスター：ハングリーバーガー（攻）

魔法・罫：補給部隊

「……俺のターン、ドロロー！ふん、遅いぞ。装備魔法カード、リチュアル・ウエポンを発動。このカードはレベル6以下の儀式モンスターにのみ装備でき、その攻守を1500ポイントアップさせる」

ハングリーバーガー 攻2000↓3500 守1850↓3350

すでに儀式魔人3体の力を得てフィールドを暴れまわっていたハングリーバーガーが包み紙の鎧とポテトの剣を装着し、ますます手が付けられない強さになっていく。対する葵ちゃんも相手の特殊召喚を封じる儀式魔人リリィサーの効果に苦しみながらもなんとかエースの銀河眼召喚に成功したものの、状況はかなり苦しい。負けるな、葵ちゃん。

「ほら、翔も応援しないと」

「そうだドン、丸藤先輩。ここで俺たちが応援しないで、いつやるのかって話ザウルス！」

「これならなんとか……いや、やっぱり駄目だ！清明君、早くこの試合を止めさせて！」

「へっ？」

まったく、いきなり帰ってきて何言ってるんだ翔は。確かに状況は苦しいけど、そうなったからって棄権するのはさすがに卑怯すぎる。どうせ乗りかかった船なんだ、最後まで葵ちゃんを信じるのが筋つてものだろう。

「いいから、早く！訳は全部後で話すツス！」

「うーん、やっぱり昨日からの嫌な予感が消えないなあ、なんだって。ねえ、清明。もしかして、ちゃんと話を聞いた方がいいんじゃないの、だってさ」

「そ、そうツスよ！早くしないと！」

なんだか妙に焦って早く早くと繰り返すだけの翔に何を感じたのか、夢想まで乗り気になり始める。うーん、そうは言ってもなあ。そうこうしているうちに、試合が動き出した。

「……さらに、デビルス・コック悪魔の調理師を召喚。お前の手札に伏せカードはなく、すでにオネストは墓地。これで終わりだ」

悪魔の調理師 攻1800

さすがの葵ちゃんも、もう限界だろうか。銀河眼を打点で上回ったハングリーバーガーの攻撃を回避するには、銀河眼自身の効果を使ってお互いをゲームから除外させるしかない。だが、それをやってしまっただけのあの悪魔の調理師の攻撃が素通しになる。頼みの綱のオネストも使い切った今、このまま攻撃を待つことしかできない。………棄権、しよつかな。

「先輩、なに考えてんですか？黙って見ててくださいいよ」

「あ、聞こえてた？」

「そりやまあ、あれだけ大声で喋られたら。それに、もう遅いですよ」  
「葵ちゃん、それってどういう」

何がもう遅いのか、と聞こうとした瞬間、こちらを向いて喋っていた葵ちゃんがくりりと前を向き天田に対して声を張る。

「さあ、来なさい！葵流忍法、真正面から迎え撃ちます！」

「……その意気やよし。ハングリーバーガーで銀河眼の光子竜を攻撃、暴飲暴食メタボリック！」

「銀河眼の効果発動、銀河忍法ゴズミック・ワープ！戦闘を行う相手とこのカードを、ゲームから除外します！」

2体のモンスターが銀河の隙間に消え、装備する対象のなくなった包み紙とポテトが地面に落ちる。これで葵ちゃんの場にカードはもうないが、天田にはまだ攻撃権のある悪魔の調理師が控えている。ふう、と一拍おいたのち、天田が口を開いた。

「……終わりだ。悪魔の調理師で——」

「させませんよ?」

「……む?」

まるで目が笑ってない笑顔を浮かべ、攻撃宣言を遮る葵ちゃん。でも、もうこの状況でできることなんてたかが知れている。確か彼女のデッキにはクリボーは入ってるけどバトルフェーダーや速攻のかかしは入ってないはずだし。

「私は、いえ私たちはこの時をずっと待っていたんですよ……あなたがあがノース校最後の一人です。手札から、デイメンション・ワンダラーの効果発動。銀河眼の光子竜が効果を使った時にこのカードを手札から捨てることで、相手に効果ダメージを与えることができます」

「……なるほど、起死回生の一手というわけか。だが、俺にだって意地がある。ノース校四天王としての意地がな。速攻魔法、神秘の中華なべを発動。自分のモンスター1体をリリースし、その攻撃力が守備力の数値ぶんだけライフを回復する！俺が選択するのは、悪魔の調理師の攻撃力1800だ」

悪魔の調理師が大鍋を巧みに操り、なにやらしい匂いのする炒め物を作り出す。しかし具材にも焼き色がついてあとは味を整えるだけ、となったあたりで足を滑らせたのか、そのまま本人が鍋の中に吸い込まれてしまった。怖いよ演出！

天田 LP900↓2700

とはいえ、これで天田のライフは一気に2700まで持ちあがっ

た。いくらダメージが来るのかはわからないけど、まあバーンカードならせいぜい1000ダメージぐらいがいいところだろう。とはいえ、これで悪魔の調理師の攻撃がなくなっただから……と、そこまで考えた時、また葵ちゃんが微笑んだ。

「ライフ回復ですか。その程度のライフで逃げようなんて、いくらなんでも虫が良すぎですよ。ディメンション・ワンダラーの効果ダメージは、発動トリガーとなる銀河眼の攻撃力と同じ数値です」

「……馬鹿な！そんな数値のバーンカードが……！」

「3000の効果ダメージ。防げるものなら、防いでみてください」  
「は、早くこの試合を中止にしないと！」

そんなことを言われても、もう遅い。勝敗は既に決したのだ。

天田 LP2700↓0

「……むうっ！」

その場に倒れる天田。その様子を見た翔が、絶望したように一言も  
らす。

「間に合わなかった……これで、ノース校は全員……！」

「ねえ翔、さつきからなんなのさ一体。いい加減ちゃんと説明してよ  
！」

ただならぬ様子を感じ、いい加減はつきりさせたいと翔の方へ向き  
直る。睨みつけるように問い詰めた時、葵ちゃんの声が出た。

「その必要はありませんよ、せーんぱい。……さあ天田さん、あなた  
も私たちと共に行きましょう？もう、みんな待ってますよ」

そう言いつつ、倒れたままの天田に手を差し伸べる。その手を、  
がっしりと天田が掴んで立ち上がった。

「……無論だ。多少入った時期は遅いが、光の結社のために今からで  
も全力を尽くさせてもらう」

「え………」

はっはっは、ふふふと笑いあう二人。その姿は、とてもとても遠い  
ものに感じられた。



ターン45 ノース校と選ばれし戦士（後）

「え……………」

呆然として、声が出ない。そんな、だつて、あの葵ちゃんがいつの間。昨日会った時だつてそんな感じじゃなかったし、今朝から今までの間はほぼずっと夢想と一緒にいたはずだ。じゃあ、一体いつ。

「おいおい、なんか随分面白い顔してるじゃんかよ」

「よ、鎧田！どうもこうもないよ、いま天田が……………」

確か、鎧田はまだ光の結社に入っていないはずだ。ごく普通の格好をしてるところを見ると、サンダー四天王もまだ……………と、そこでハツと来た。もしかして、翔がずっと試合を中止するように言つたのはこのことを知つてたからなんじゃあ。

「翔！」

慌てて彼の方を見ると、悲しそうに目を伏せられた。何か言おうとしていたようだが、それより先に鎧田が口を開く。

「天田、そう天田な。いやー、実際こいつには苦勞させられたぜ。どうも途中から自分しか残っていないのを薄々勘づいてたみたいでな、ここんところ何回誘つてもデュエルしてくれないわ、なんののかんの言つてどこかへ逃げちまうか、拳句の果てにはデツキを持ち歩かないからデュエルをしないなんて荒業までやりやがるしな。でもまあ、それも今日で終わりだ。ん？どうした？なんだよ、せつかく人が話しかけてやったのにシカトか？親の顔が見てみたいもんだな。まあいいさ、じつくりたつぷり……………」

「ネタバラシ、とでも『洒落込みましょう』か、先輩？」

洒落込みましょうか、のところで器用に僕の口真似を織り込んでいきつつ会話に割り込んでくる葵ちゃん。わりと似てると思うけど、僕の口真似なんてそんなしようなものいつの間覚えたんだろう。そんなどうでもいいことを疑問に思っていると、なにか気の利いたことを言う前に口が勝手に動いていた。

「ああいいよ、耳の穴かっぽじて聞いてやるからさつさと話してちょうだい」

んー、口悪いな僕。こういう喧嘩腰な態度は友達なくすからやめようって思ってたはずなのに。でもまあ、驚いてるのは僕だけじゃない。むしろ僕以上に剣山たち外野の面々から驚きの目を向けられる気がする。無理もないか、アカデミアに来てからは基本的には穏やかな人だったからね、僕。そしてそのイメージは葵ちゃんにとっても同じだったらしく、一瞬へえ、という表情になったもののすぐにまた不敵な笑みに戻った。

「では遠慮なく。そもそも、私が光の結社の素晴らしさを知ったのはつい昨日のことです。ほら、先輩のところにも3人組が行ったでしょう？あの時私が一人でいた時、こちらにも光の結社の方が来てくださったんですよ」

「ああ、それは確かに見たよ。ちようどすれ違った」

そう、それは覚えている。その後で葵ちゃんにおかしな点が時になかったからてつきり撃退したもんだとぼっかり思ってたけど、どうやら違ったらしい。つまり、あの時からすでに引つかかっていたわけだ。「まあ、そうですね。正確に言えば、すれ違わせた、ですけど。下手に私一人でいるよりも先輩の到着した時間と同じタイミングで帰ってもらえばいかにもそれっぽいですし、実際先輩もそれに騙されてくれましたよ。もう本当に、気持ちいいぐらいあつさり」と

「……………悪かったね、単純で」

くすくすと笑う葵ちゃんに、少しむすつとしながら返す。ちよつと前までこんな嫌味な子じゃなかったのに本当に人間変わるなあ、光の結社。なんか横の方で鎧田が酸欠の金魚みたいに口をパクパクさせてるけど、もしかしてセリフを全部葵ちゃんに横からとられたせいでしょうか。話し足りないんだらうか。いつ口を出すか見守る意味も込めてもう少し放っておこう。

それにしても、この時点でもう向こうの力関係もだいたい読めたね。やっぱこの学校の女の子はいろんな意味で男より強いのかぶりだわ。

「それでも、ですね。実を言うと、これでも計画通りじゃないんですよ？」

「へえ？」

ちよつと不満げな様子の葵ちゃん。完全に僕は引つかかったのに、本来ならまだこの話に続きがあったらしい。

「いえですね、本来ならば先輩にも昨日の時点で私たちの仲間になつてもらう予定だったんですよ。確かに私一人で先輩に勝つのはちよつと苦しいかもしれませんが、一度安心させておいてからの不意打ちという形、それに何より斎王様から力を頂いて光の波動を手に入れたこのカード、私の銀河眼ギャラクシーアイズ、フォントドラゴンの光子竜のご加護があれば十分に勝算がありました。ですけど……」

そこで言葉を切り、一度僕の後ろで黙っている夢想の方にちらりと目を向ける。ああ、なるほどそういうことか。

「ですけど、まさか河風先輩まで連れてくるとは思いませんでしたよ。私だつて1対1ならばまだしも、先輩たち2人を相手にして誰にも気づかれないように勝つことができると思えるほど間抜けではありませんよ。仕方ないので、昨日はひたすらばれないように専念してました。もつとも、河風先輩は気づいていたのかもしれませんが。昨夜は、絶対に私と先輩が二人にならないように随分気を使っていらしたみたいですよ」

「あれ、そうだったっけ？」

チラツと振り返ると、軽く肩をすくめる夢想の顔。

「言つたでしょう？嫌な予感がする、って。もし清明に何かあったら」「ああ先輩方、もういいです。のろけはお腹いっぱい입니다。さーてと、他に何か聞きたいことはありますか？なければ、試合の続きと洒落込みましょう？」

多分のろけではないと思う。でもまあ、ここでそんなことに文句をつけるほど僕は野暮じゃない。むしろ夢想とのろけ話とか、その、正直嬉しい。今はそれどころじゃなさそうだ、ってことを除けばだけど。

「じよ、冗談じゃないーとつとと……」

「中断なんて、当然許されるはずないでしょう。それとも棄権しますか？2勝した時点での棄権なんて随分と馬鹿らしいことですが、もし

やりたいならここにきているお客さんに対してちゃんと多数決で聞いてみて下さいね？説得にはか、な、り、骨が折れるでしょうけど」  
「……………そういうこと。そこも抜かりはないわけね」

ざっと周りを見回してみる。ノース校が全員光の結社に入っているってことは、本校の分も合わせるとだいたい5分の4ぐらいが敵つてことか。当然、そいつらは何を言っても終わらせる気なんてないだろう。この勝負を受けた時から、すでに僕らは罠にかかっていたようだ。

特にいいアイデアも浮かばず、どうすればいいのかわからないので上を見る。当然青い空が見えるようなことはなく、野球ドーム並みに高い位置にある天井とそこに備え付けられたスポットライト含むいくつもの照明、それに火災用のスプリンクラーが見えるだけだった。「それで、この後はどうしようってのさ」

「私としてもデュエルを介さずに口約束だけでこちら側に入る、などと言われても信用できませんし、デュエルはちゃんとやってもらいますよ。先輩の持っている闇のカードとやらでも光の力を防ぐことができないのは、三沢先輩のおかげでもうわかってますし」

三沢の闇のカードというのは、ウリアのことだろう。なるほど、確かに三幻魔の1体であるウリアの正式な使い手になった三沢でもデュエルに負けた時は光の洗脳にやられてた。となれば、僕がやられた時にチャクチャルさんに守ってもらっている案も使えそうになる。闇のカードの謎パワー的なサムシングで立ち向かうのは無理ってことが、三沢という前例のせいで証明されちゃったわけか。

「さあ、諦めてデュエルを続け……………」

「そ、そろそろ代わってくれ、な？」

む、葵ちゃんに真っ向から意見を言うなんて根性あるな鎧田。僕だってあんまりやりたくないのに。

しかし、言ってることは情けないもんだ。

「ああ、まだ何か喋り足りませんでしたか？いいですよ、もう私が言いたいことは全部言いましたし」

「俺が言いたかったこともほとんど全部……………ああいやなんでもない

です。まあとにかくだ、清明。お前らもここで諦めて俺たちとデュエルしようぜ、な？」

冗談じゃないよ馬鹿。この人数比相手に戦う気なんてさらさらない、ここは戦略的撤退だ。ということでもう一度逃げ道を探して、横やら上やらに目をやる。走って逃げるのは無理そうだし、とすれば何か別の手を考えるしかない。ここにあるもので今見える範囲のものはどれも期待できそうにないし、あと近くにあるのは内ポケットの飴ちゃんと……あ、いいこと考えた。

「さあ、準備はできたか？ 大将のお前の出番はまだ先だろ、さつさと中堅のやつを出せよ」

この手なら十分なんとかなるだろう。勝ち誇った顔でそう言うってくる鎧田に、思いつきり笑ってみせる。

「やだね」

「あー？ 聞こえねえな。早く試合の続きを始めようぜ、って言うてんだよ」

「あつそ。いいよ別に聞いてなくても、どうせここでこの勝負は終わりにするし」

「何？ お前らだけでそんなことできるわけが」

ああまったく、これ以上はないくらい最高のセリフを吐いてくれる。そのセリフ、一つ一つが悪の組織の下っ端……ヒーローの逆転に痛い目を見る中間管理職ポジの悪者みたいじゃないか。こんな最高の舞台を作ってくれたなら、こちらとしても全力で期待に応えないとね。

もつとも僕のやることはたった一つ。悪の軍団に追い詰められた一般人よろしく、逆転の切り札を呼ばばいいのだ。さつとデツキケースに手をやり、当然のごとく手の中に納まった一枚のカードを高々と掲げる。これが僕の切り札だ！

「霧の王オオオオッ！」

瞬間、精霊体の霧の王がふわりとカードの中から飛び出てきて、任せておけと言わんばかりに領いて手にした大剣を一振りする。みるみるうちにあたりがどこからともなく湧いてきた霧に包まれ始めた。

それもただの霧じゃない、霧の王が生み出した魔法の霧だ。ふだん焼き菓子に使ってる安物の牛乳なんぞよりもはるかに濃くてきれいな白色が、数センチ先もよく見えないほどに辺りを埋め尽くす。いやー、精霊召喚が思いっきりできるつてのは気分がいい。ちよつとスカツとできたし。

当たり前だけどこれは想定外だったらしく、さすがの葵ちゃんも多少うろたえた声になった。

「こ、これは一体!?!先輩、何をしたかは知りませんがとにかく何かしましたね!ですが、こんなことをしたって何の意味も……!」

「そうだね。これだけやっても、多分こつそり逃げ出すのは無理だと思う。というか、こつちからも君たちどころか出口がどこかすら見えないし」

これは嘘でもなんでもない。非常灯の明かりすらここからでは見えないのだ。だけど、僕の狙いは煙幕たいて逃げ出すことじゃない。

「だけど、そろそろじゃない?カウントダウン行くよー、5、4、3、2、1」

「い、一体何を」

その言葉は、途中でかき消された。もつと大きな音が、頭上から響いてきたのだ。まず、不快感を感じるサイレンの警告音。そして、機械で合成されたよく通るけど無機質な声。

『火事です。火事です。デュエルルームにて、火災が検知されました。生徒及び職員の皆さんは、至急該当現場から避難してください。繰り返し。火事です。火事です……』

その後一拍おいて、頭上から大量の水が降ってくる。おかげでびしょ濡れになったけど、そんな程度の犠牲かまうものか。

「この水……まさか、スプリンクラーですか!?!」

「はい正解。まあ、これだけ濃い霧だからね。煙と勘違いしたスプリンクラーが消火用の水を使ったんでしょ。熱感知?そんなもの、例えば天井あたりだけ超高温の霧が出てればどうとでもできるね。それじゃ、クロノス先生!避難誘導お願いします!」

突然呼ばれて慌てて立ち上がったらナポレオン教頭の服の裾でも

踏んづけたらしく、どこかかと盛大に転ぶ音が2人分連続で聞こえてきた。どうにか起き上ったらしいクロノス先生の声が、今の騒ぎでも手放さなかったとみえるマイクで大きくなって辺りに響く。

『あー、あー、全校生徒の皆さん、及びノース校の皆さん。ただいま火災報知機が鳴りましたが、こういう場合は慌てず騒がず、なノーネ。私が誘導しますから、ちゃんと固まって決して走らないように避難するノーネ!』

いやだから、その誘導が見えないんだよ。そんな一同の心の中でのツツコミは届かなかつたらしく、意気揚々として誘導をしようとするクロノス先生。立派なことではあるんだけど、マイクのスイッチが入りっぱなしだから今壁にぶつかつたな、とかまた転んだな、っていうのが全部筒抜けなのはご愛嬌。だけど、これで邪魔する奴は全員どかせるだろう。ちゃんと避難誘導やってくれてるあの先生には感謝してもしきれない。ありがとうございます、クロノス先生。……あ、また壁にぶつかつたのか。ちよつとやりすぎたかな、霧。

「夢想、翔、剣山。皆もほら、早く避難して」

「うん……つて、清明君はどうするのさ?」

不安げに聞いてくる翔に、無言でふつと笑いかける。あ、見えないんだつた。じゃあしようがない、直接口で言おう。

「僕は、もうちよつとここに残ってるよ」

「ええー!なんでさ!早くこの隙に……」

「いやー、そうしたいのはやまやまんだけどさ」

ここで一拍間を空ける。特に深い意味はないけど。

「この霧を抑えられるのが僕(の霧の王)しかいないからね。みんなが逃げた後でゆつくり霧を消して(もらつて)、後始末だけしてから逃げるよ」

無論カツコ内は脳内のみのセリフ。葵ちゃんの前ではまだ精霊を出したことはなかったはずだから、もし聞いてたとしても僕自身がないか怪しい力を持つてるんだと勘違いしてくれるだろう。

「という(と)でほら、行った行った」

「うー………早めに帰つてくるんすよ、清明君!」

その言葉を最後に、残っていた気配が去っていった。さてと、一応もう少しの間はこの霧の中で待ちますかね。待ってる間、さつき見つけた飴ちゃんでも食べてようかな。

「まだ誰かいますかー、もう誰もいませんねー」

飴をすっかり食べ終わったぐらいのタイミングで、声を張り上げる。よしよし、どこからも返事がない。

「じゃ、やつちやつて霧の王」

みるみるうちに、電気の消えた部屋の中で霧が引いていく。とつとつとその場を離れようとして、目の前に人が立っているのに気が付いた。

「よう。やつと終わったのか」

「随分念入りでしたね、先輩」

「まーね。よくまあこんなところにずっといたもんだよ………葵ちゃん、ついでに鎧田も」

なんでだよ。なんでお前らがまだここにいるんだよ。さつきと避難してほしいなあ、色々面倒くさそうだから。という本音をぐつとこらえて、にこやかに話しかける。隙を見て逃げようかな、という考えがチラツと頭をよぎったが、それより先に鎧田が動いた。

「ついでに、か。そんな挑発には乗らないからな。無駄話は無しだ、本題に入るぜ。ああだこうだと長ったらしいのは嫌いだから、一言で言わせてもらう。ゲイルを返してくれ」

「……………へ？」

ちよつと何言ってるのかわかりませんね鎧田さん。確かに鎧田からはBFのキーカード、疾風のゲイルを1枚譲り受けた。それで僕のデッキに入っていないならまだしも、ついさつき見せてくれて言われた時にちゃんとデッキに入れてることを示した。なのに、なんで返さなきゃいけないんだ。確かあのカードは制限になって余ったからしてもらった奴のはずだし、その制限はまだ解除されてないはずだ。いやまあ、確かに使いこなせてるとは言えないんだけどね！



何も言わない僕に対してさすがに説明不足を感じたらしく、ゆつくりと鎧田が口を開く。

「まあ、その、なんだ。そもそも話、俺が2枚目以降のゲイルを持つてるって話は嘘だったんだ。俺のこのデッキはサンダー四天王になったときにサンダーのアドバイスを元に組んだものだから、できた時にはとつくにゲイルは制限カードだったんだよな。だから、1枚しか持ってなかった。もつとも、あんなレアカード2枚も3枚も集められたかどうかわからないが」

ああ、それはちよつとわかる。一度、ふと気になってゲイルの相場を調べてみたことがあるからだ。もちろん売り飛ばすつもりはなかったけど、どれくらいのカードなのか調べてみたくなつて。そして驚いたね、1枚数十万円の真紅眼カードレッドアイズほどじゃないにしろ、1枚数万円は下らないほどのレアカードだったんだから。あの時はそれを3枚も集めた鎧田すごいって思ったものだけだ。

「圧倒的にビートダウン向けのその効果、そしてBFの中でもトップクラスに緩い特殊召喚条件、黒い旋風でサーチしやすいほどよい攻撃力……：やつぱりあのカードがないと、俺のデッキは力を発揮できない。俺が光の結社、お前は残念ながらそうじゃない人間だってことは重々承知の上で、あえて頼ませてもらう。俺に、俺にゲイルを返してくれ！」

ど、どうしよう。なんて考えるまでもない。もし彼が光の結社でなければ喜んで、とまでは言わないまでもすんなり返していただろう。だけど、そうじゃない。ここは、心を鬼にすべきだろう。

「いやだ、つて言ったら？」

きつぱりと拒否。それに対し、無言でデュエルディスクを起動する鎧田。まあ、そうなる気はしてた。

「……：手荒なことはしたくなかったんだけどな。お前も光の結社に入れば、きつとすべてがうまくいくはずだ」

「喧嘩上等、つてね。ちよつと手荒になるけど、ガツンと勝って元の鎧田に戻したげるよ……：辺りはこんな暗いし、ギャラリーだって一人しかいない。だけど、中堅副将飛ばしての大將戦と洒落込もうか

！」

「デュエル!!」

「先行は僕だ、本気で行くよ!」

初期手札5枚は、3枚の最上級モンスターと2枚の魔法カードというなかなか偏ったもの。だけど、すぐに分かった。これは、このデッキが僕に伝えてくれた形の1つ。今の僕が先行1ターン目に出すことのできる中では、最高級の初手だ。

「手札から爆征竜―タイダルの効果を使用、手札の水属性とこのカードを墓地に送って、デッキのモンスター1体を墓地に。この効果で手札の青氷の白夜龍とデッキの地縛神、チャクチャルさんをまとめて墓地に送るよ」

これで仕込みは整った。あとは、一気に仕上げるだけだ。

「フィールド魔法、ウォーターワールドを発動。そして魔法カード、ソウル・チャージ!僕の墓地のモンスターを任意の数だけ蘇らせることができる代わりに、1体につき1000のライフとこのターンのバトルフェイズを犠牲にしなくちゃいけない。だけど今は先行1ターン目、そんなもの構うもんか。来て、青氷ブルーアイス・ホワイトナイト・ドラゴンの白夜龍!七つの海の力を纏まとい、穢まれた大地を突き抜ける……地縛神 Chacuチャク Chahuaチャア!」

神秘的な青い光をほのかに放つ、澄んだ氷のドラゴン。黒と紫のコントラストが印象的な、僕にとっては基本いい人なシャチの神様。高い攻撃力と強力な効果を併せ持つ、僕のデッキの中でも1、2を争う実力者たちだ。

だけど、ただ喜んでばかりはいられない。墓地からいきなり現れた2体のモンスターの代償として、僕の体から2つの光の球がとびだしてそれぞれに吸収される。心配そうにこちらを見る2体に大丈夫だ、と手を振ってみせる。別に闇のデュエルってわけじゃないから、肉体的な痛みはない……はずだしね。

青氷の白夜龍 攻3000↓3500 守2500↓2100

地縛神 Chacu Chahua 守2400

清明 LP4000↓2000

「ほう？」

「まだまだいくよ、チャクチャルさんの効果を発動。自身のバトルを放棄することで1ターンに1度、相手に守備力の半分の数値分ダメージを与える！ダーク・ダイブ・アタック！」

「おっと、手札からエフェクト・ヴェーラーの効果発動だ。このカードを捨てて、エンドフェイズまで相手モンスター1体の効果を無効にするぜ」

チャクチャルさんの巨体が白いボールのようなものに絡め取られた。なんとか自力で振り払ったものの、効果を使うために体に貯めていたエネルギーはすっかり0になってしまったようだ。うーん、ライフ差を考えるとここでダメージを稼いでおきたかったんだけど。できなかつたものは諦めて気持ちを切り替え、次のターンに繋ぐしかない。

例えば、BFにおいて警戒しなければならぬカードの1つは暁のシロツコ。あのモンスターが出てこられた日には、例え攻撃力3500の白夜龍でも過信はできない。だけどチャクチャルさんが守備表示で粘っている限り相手はバトルフェイズを行うことができないため、これは心配しなくていい。確かにコンボ攻撃は恐ろしいけど、単体火力で白夜龍に勝てるモンスターはそうはいないのだ。他にも警戒すべきカードはあるものの、基本的には戦闘ありきのBF。その戦闘を封じてしまえば、完全にとは言わないまでもある程度の抑制はできるだろう。

「頼むよ、2体とも！僕はこれで、ターンエンド」

残った手札最後の1枚はマイフェイバリットカード、霧の王。確かにこの2体をリリースしてアドバンス召喚すればウォーターワールド込みで6400もの攻撃力を出すこともできたけど、そうするよりもここはこの2体で突っ張ったほうがいいだろう、との判断だ。

「なら、俺のターンだな」

その声を聞いた時、背筋に冷たいものが走った。間違いない。鎧田のやつ、このターンで決めに来るつもりだ！

「俺の場には当然、カードが1枚もない。よって手札のB ブラックフェザー F | 逆風

のガストを特殊召喚だ」

言い終わるや否や、鎧田の方から強烈な風が吹いてきてその風圧にたまらず目をつぶる。風が止んだ時、ブラックでもなんでもないやたらとカラフルな鳥人間がいた。

BF―逆風のガスト 守1400

「そして自分の場にBFのモンスターが1体だけいるとき、手札から白夜のグラディウスは特殊召喚できる」

銀色に輝く鎧に、逆手に握った短剣。その身一つで空を駆け回るBFには珍しい、重装備な鳥人間である。もつとも同じ鳥人間と言っても全体的に人間の色が強いガストとは違ってこちらは真正銘の鳥人間、鳥の顔を持つ人型の戦士だ。確か、効果は1ターン1度の戦闘破壊耐性だったはず。

BF―白夜のグラディウス 守1500

「俺の場にはBFのモンスター。黒槍のブラストを手札から特殊召喚」

自分の身長ほどもある大槍を軽々とかつぐ、貫通能力を持った鴉天狗。テーマ内でもトップクラスの特殊召喚条件の緩さから、デツキの中核となつて縦横無尽に駆け回るメインアタッカーだ。

BF―黒槍のブラスト 攻1700

「お前はどうかやらその神とやらで守りを固めたつもりらしいな。実際、なかなか悪くはない手だ。だが、まだぬるいぜ！俺はこのターンでまだ使用してない召喚権を使い、漆黒のエルフェンを通常召喚！このモンスターはレベル6だが、自分の場にBFがいるならばリリースなしで召喚できる！」

電気の消えた薄闇の中でもなお目立つ、他の黒なんて比較にならないほどの漆黒。ブラストたちよりも一回り大きい体をした鴉天狗が、背中の翼から闇の羽を振りまきつつ闇の中から音もなく忍び寄る。

BF―漆黒のエルフェン 攻2200

「シロッコ以外にもリリースなしで出せる上級モンスターが……だ、だけど、攻撃力は白夜龍どころかチャクチャルさんの守備力以下、シロッコがないならまだどうにでもなるし、何より今はバトルフェイ

ズがスキップされて……」

「まあ、そうだな。だが落ち着け、エルフェンの効果発動！このカードの通常召喚に成功した時、モンスター1体の表示形式を変更できる！」

鴉天狗が背中中の翼を振るい、無数の黒い羽による嵐を巻き起こす。勢いよく吹き荒れる漆黒の風は、例え神であつても抗うことができない。

地縛神 Chacuc Challenger 守2400↓攻290

0

「だけど、そんなことしたつて残りの手札は1枚で召喚権も使い終わつてる。白夜龍を倒して僕に2000以上のダメージをぶつけるには、ちよつと力不足なんじゃない？」

「あのなあ……お前、俺のことをよっぽアホだと思つてんだな。よくわかつたわ。最後の手札、トランスターンを発動。自分の場のモンスターをリリースすることで、同じ種族属性でレベルが1つ上がったモンスターをデッキから特殊召喚する。闇属性鳥獣族レベル4、黒槍のブラストをリリースしてレベル5、暁のシロッコを特殊召喚！」

「そ、そんな……」

ついに来てしまった、BFの爆発力を象徴するカード。ただ立っているだけなのに、その周りをクルクルと風がはためく。エルフェンが表示形式の変更というテクニカルな揃め手を得意とする闇の上級BFだとすれば、豪快な一点集中突破能力を持つこのカードはさながら光のBFと叫ぶところだろう。とにかく、これが意味するところはひとつしかない。

………僕の、負けだ。

「はっ、当然効果はわかつてるよな？暁のシロッコの効果発動、1ターンに1度、エンドフェイズまで自分のBF1体に全てのBFの力を集中させる！シロッコ自身に対してガスト、グラディウス、そしてエルフェンの攻撃力を集中だ！」

「くっ……」

BF―暁のシロツコ 攻2000↓5900

「やれ」

たった一言の命令。シロツコがその爪を振りかざし、白夜龍に迫る。迎撃のブレスを難なくかわして懐に潜り込み、腹のあたりに一撃。まるで発泡スチロールか何かのようにあっけなく、氷の体は一本の腕に貫かれた。

「……………無様ですね、先輩。それが、ついこの間私に勝った人間の戦いですか？」

ぽつりと呟いた葵ちゃんの一言が、なぜだかひどく心に突き刺さった。

BF―暁のシロツコ 攻5900↓青氷の白夜龍 攻3500(破

壊)

清明 LP2000↓0

「……………っ!!」

一瞬ののち訪れた衝撃に吹き飛ばされ、後ろの壁に思いつきり背中をぶつけて息が止まる。つまり、ダメージが実体化している。いつの間にか闇のゲームに、と思ったが、よく考えたら負けたら光の結社に洗脳されるデュエルなんてものがまともなデュエルであるはずがなかった。あれ、じゃあなんで僕は平気なんだろう。

「ほんと、弱くなったなあお前。お前みたいな雑魚引き入れても、何の役にも立たねーよ。じゃあな」

よつぽど打ち所が悪かったらしくまだ動けない僕のところまでわざわざ来てそれだけ言い、勝手に僕のデツキを取り上げてゲイルのカードを引き抜く鎧田。その位置は、ちょうどデツキトップ。ああ、今回は力を貸してくれる気だったのか。それを生かす前に、僕がやられただけだ。

それから、10分ほど経っただろうか。まだ多少反応の鈍い体を引きずるようにして歩き、誰もいない部屋を振り返りもせずによるよると外に出る。無様、か。さつき葵ちゃんに言われた言葉が、いつまで

も脳内でリフレインしていた。確かに、今の僕はいつも以上に無様だ。それは間違いない。まったく情けなさすぎて、

「ほんっと、笑っちゃうよねえ……………」

無理やり笑ってみようとしたが、その笑顔は自虐的なものにならなかった。ちようどそれに気づいたとき、いつの間にか流していた涙が一滴、床にポツリと落ちるのが見えた。

白い光の中で

ターン46 壊れた鉄砲水

「ごめん、ごめんね、皆」

『……………?』

あれからどこをどう歩いたのかは、自分でもよく覚えてない。だけどふと気づいたら、海辺まで来ていた。何となく歩く気にならず、その場に腰を下ろす。砂が入ったら洗濯が大変になるだろうけど、そんなこと知ったことではない。誰も何も言わない。だけど、僕にはもうわかっている。僕のデッキは間違いなく、僕のために最大限に力を発揮してくれた。あの初手をきちんと思いこなしでいれば、こんなことにはならなかったはずなのに。

「もうわかっているから、気を遣わなくてもいいよ。あのターンでの正解は、白夜龍1体をリリースして霧の王のアドバンス召喚……………そうすればリリース封印能力でトランスターンはそもそも発動できないし、エルフェンの効果で霧の王を守備表示にしてもチャクチャルさんが守備表示のままだからバトルが成り立たない。そうすれば、少なくとも次の僕のターンを迎えることができた。……………違う?」

辺りには人どころか海鳥すらおらず、ひたすら波の音のみが聞こえてくる。霧の王はレベル7の最上級モンスターだが、色々個性的な点もある。その1つが、召喚に必要なリリースを1体、またはなしで済ますことのできる妥協召喚能力と、場のあらゆるリリースを封印する能力だ。白夜龍1体をリリースすればその攻撃力はウォータールールド込みで3500とまず戦闘破壊されない数値となり、しかも上級モンスターの展開すら許さない。結局のところ、あの初手5枚に無駄なカードなんてものは1枚もなかったのだ。

『だがそれは結果論だ。あの時点では、向こうの手札はわからなかった。白夜龍を残そうとする判断も、決して間違いではない』

「確かにね。だけど、僕が一番嫌なのはそこじゃないよ。僕はねチャクチャルさん、僕は別にそこまでデュエルが強いわけじゃないっての



は自分が一番よくわかってるんだよ。そんな僕がここまでいろんな相手に勝ってこれたのは、皆が僕に力を貸してくれたから。それがわかっているはずなのにあの局面、僕は自分のデツキよりも自分の浅い考えを信じたんだ。いつの間にか、実力で勝って来たなんて勘違いしてた僕がどこかにいる。それが、許せないんだよ。ねえお願いチャクチャルさん、今の僕に話しかけないでよ。……………ごめん。わがままなのはわかってる。でも少しだけ、一人にさせて」

まだ何か言い返そうとしていたようだが、結局何を言っても無駄だと悟ったらしいチャクチャルさんがその場を去っていくような気配がした。

また一人に戻って深いため息をついた瞬間、入れ替わるようにして別の気配。

「……………嫌味でも言いに来たの？」

棘のある僕の言葉に軽く首を振って、砂の上で体育座りをする僕のすぐ横にすんと、と腰を下ろす銀色の鎧。ついさつき話題にあげた張本人、霧の王だ。別に実体化させた覚えはないけれど、いつの間にかこやつも勝手に出てこれるようになっていたらしい。今初めて知った。

……………ああ、まったく情けない。無様以外の何物でもない。自分の大事なカードのことすら把握し切れてなかっただなんて。

そうやって自己嫌悪を強めていると、黙ったままの霧の王が僕の背にポン、と慰めるように手を乗せる。反射的に払いのけた。少し悲しそうなそぶりを見せた後、すうつと霧の王の姿が消えていく。やつちやつたな、と心のどこかでぼんやり思った。

これというのも、僕が勝てないから悪いんだ。心のどこかで、ぼそりとそんな声があった。そうかもしれないな、とぼんやり思う。なら、どうすればいいんだろうか。その声に問いかけると、さつきよりもはつきりした声音で答えが返ってくる。簡単だ。勝てばいい。どんな相手にも勝てるようになれば、こんなことで迷わなくてもよくなるんだ。

………気づいたら、いつのまにか体育座りのまま寝ていたらしい。ついさつきまで頭の上にあった太陽が、今では海の向こうに沈みかかっている。そのまま特に一言もしやべることなく、ただただ時間だけが過ぎていく。ひたすら日が沈んでいくのを眺めながら波の音を聞いていると、少しずつ荒んだ気持ちが悪くなり落ちてくるのが分かった。気分はいまだに最悪のままだけど、少なくとももう誰彼構わず当たり散らすようなことはないだろう。時間がたつて落ち着いたのももちろんあるけれど、なによりもこれからは勝つことだけを考えていけばいいというはつきりした目標ができたのが大きい。完全に日が沈みきつて辺りが暗くなるまでもう少し待つてから、思い切つて立ち上がる。

ゆつくりと歩いていると、すぐ横の草むらで何やら音がした。位置から言つて、まず人間ではない。別に珍しくもない狸か何かだろうと思つて特に気に留めないでいると、もう一度何か動くガサゴソという音。しかもちよつと近づいてきてる。この島の動物は基本的に野生のままなのでわざわざこんな人の多いところまで来る方が珍しいのだが、もしかしたら道に迷つたのかもしれない。さすがに見捨てる気分にもなれず、刺激しないようにそつと音のした方へと近づいていくと、そこから飛び出してきた茶色い影は。

「あれ、フアラオじゃないの」

僕の足元をのそのそと歩くのは、最近どこかに出歩いてばかりでめつたに帰つてこなくなつたオシリスレッドの正式寮長の猫であるフアラオ。ちやんとご飯食べれてるのかちよつと不安だったけど、相変わらず丸々としてるところを見ると何不自由なく暮らしているらしい。

「じゃあ、フアラオもたまには家に帰つてくるんだよ。つてあれ、どしたの一体」

ちよつと気が抜けて、そのまま通り抜けようとするが、その瞬間にフアラオが僕の目の前に回り込んできた。

「んー？よくわかんないけど、もう帰るから………つて、何？」

道の端によって通ろうとするも、またしてもそれを妨害しにくるファラオ。反対側に移動すると、今度はそつちに回り込んでくる。ぐるぐるとその場を回ること数秒、ようやくどこか来てほしいところがあるのだと察しがついた。自分のことにいっぱいはいっぱいで、そんな簡単なことに気づくのにすら時間がかかったのだ。

「わかったわかった。……ハア」

今日何度目かもわからないため息をつき、のそのそと歩くファラオの後ろを大人しくついていく。その後レッド寮へ続く道からは大きく外れ、森の中を歩くこと10分。最終的にたどり着いたのは、僕もよく知ってる場所だった。別に何かとんでもないものを期待したわけではないけど、ちよつと拍子抜け。

「ああ、よく来たね。さ、上がって上がって」

そんな家主の声がかして、ギギギと音を立てて錆びついた門がひとりでに開く。ここは廃寮、元特待寮の現幽霊屋敷だ。そして2階の窓から手を振っているのがこの主である稲石さん。そう言えば、前にここに来たのはもうテスト前だから、だいたい2週間ぐらいかな。たつたそれだけの間にいろんなことが……と、これまでであったことを思い返すと嫌な記憶を思い出しそうになって慌てて頭を振って余計な思考を追い払う。すぐ後ろのファラオを見ると、さっさと入れ、と言わんばかりの態度。ふむ、そこまで言うならお邪魔してみようかな。

「なるほどねえ、今そんなことになってたんだ」

誰かいるのを悟られないようにとわざと荒れ放題な庭や埃まるけの玄関と違い、きれいに整頓されてキャンドルの明かりがともる稲石さんの自室。入れてもらった紅茶をすすりながら、聞かれるままにここ最近の出来事を話していた。なにしろ、地縛霊の稲石さんはこの敷地から外に出ることができない。誰も訪ねてこないこの場所も相まって、本校で何が起きているのかはまるでわかっていないのだ。

「それで、わざわざ自分のところまで？」

「あーいや、そういうわけじゃなくてファラオに連れてこられて」

「ファラオが？あーなるほど、自分に手を貸せと。ねえセンセ、自分で言ったらどうなのさ」

紅茶に砂糖を入れながら、じとーつとした目でファラオを見る稲石さん。すると見つめられたファラオの口から、黄色いピンポン玉サイズの光の球がポワンと吐きだされた。そのまま光の球は僕らの方へふわふわ飛んできて、そこを中心として半透明の人間の姿が浮かび上がる。もう今更幽霊ぐらいじゃ驚かないぞ、と思いつながら見ていたのだが浮かび上がってきたその顔を見た時、思わずカップを取り落としそうになった。

「ちよつとファラオ、なんで出しちゃうのかニヤ！……あ、えーと、お久しぶりなんだにや、清明君」

「だ、大徳寺先生!？」

ちよつとくたびれたスーツを着た、長身でメガネの男。忘れようもないその顔は僕らの元教師にしてセブンスター最後の刺客、大徳寺先生こと錬金術師アムナエルだ。

「えつと、何やってんですか先生。去年成仏してませんでしたっけ」

「うん、私もそのつもりだったんだけどニヤ。まあいろいろあって、今はこうしてファラオと一緒にいるのニヤ」

そう言つて咳払いをし、まあそんなことより、と露骨に話題を変えてくる。……今の反応を見るに今まで出てこなかったのは多分あれなんだろう、いきなり出てきてびっくりさせるタイミングをうかがってたとかそういうしような理由なんだろう。とはいえ、今は深く追求する元気もないので気が付かなかつたふりをする。

「今日ここまで来てもらったのは、君のことが心配だからなのニヤ」  
「僕が？」

「うん。ファラオと一緒に私もあの場所にいたんだけど、はつきり言つてだいたいぶこつぴどくやられてたからニヤー。これでも去年までは教師だった身、元生徒のことはやっぱり気になるもんだニヤ」

ああ、やっぱりこの人はいい人なんだなあ、と思う。つくづく、いい先生だ。だからこそ、その心配に素直に答えられない自分が情けない。

「…………カウンセリングならいりませんよ、よけい惨めになるだけなんで。用がそれだけなら、もう帰りますね」

「あ、待つのにゃー！」

もうだいたいぶ落ち着いたと自分では思っていたけど、今の僕はまだこの好意を素直に受け取ることができないみたいだ。本当は嬉しいはずなのに、乾ききった眼からは何も出てこないし口を開けば嫌味が飛び出す。なんとかかしたいのに、まだまだガキの僕には自分を抑えることができない。

と、そこでさつきからずつと冷めた目で紅茶をすすっていた稲石さんがカップをコトリと置いた。

「なるほどねえ。さすが錬金術師、こうなることも予想済みでここまです引張ってきたのね。ねえ、1つ聞いてもいいかな？」

「え？」

「君はここを出て、その後どうするつもりなんだい？十代君の話はもう自分も聞いたけど、同じく行方不明にでもなるの？」

む、それについては特に考えてなかった。けどあえて何か言うなら、負けっぱなしというのは悔しい。多分十代だって、今頃新しい力を手に入れていいるだろう。特に根拠はないけど、何となくそんな気がする。というか、そうであって欲しい。

とはいえ、今この話に十代は関係ない。これは僕についての話だ。要するに一言でまとめるなら、

「強くなりたい、かな」

月並みな答えだと思う。でも、すごく正直な僕の気持ちだ。

けどその答えを聞いた稲石さんはフン、と馬鹿にしたように軽く鼻で笑った。再びカップを手に取り、残っていた紅茶を一気に飲みきってから再び口を開く。

「まあ自分だってあんまり厳しいことは言いたくないんだけどさ。無理だね」

「えっ……………」

とつさのことに言葉が出ない。気持ちを立て直す前に、稲石さんの冷たい声が飛ぶ。

「そもそもーっ聞きたいんだけどさ、強くなる、ってどういうことかわかってる？」

強くなるとは何か。そりゃあもちろん、デュエルに勝てるようになることだろう。強ければ勝つ。これはもう疑いようがない。あいあんだーすたーんど。

間違ったことを言っているつもりはないが、なぜかその答えにさらに眉をひそめる稲石さん。

「……………こりゃあ、ちよつと見ないうちにずいぶん重症だねえ。いい？強くなるなんて一口に言っても、その方法なんて星の数ほどあるからね？例えばビートダウン1つにしても一発あたりの火力を高めるか連続して細かく攻撃を仕掛けていくか。バーンデッキでも同じことが言える。矛盾した話だけど、ロマンを安定して出せるようにするとか戦線を分厚くして数の勝負を仕掛けていくかってことだね。相手のデッキ切れを狙うためにデッキを直接切り崩す方向に進化するか、ひたすら耐え忍んで何もしないうちに相手が負けるように防御力を高めるか。あんまり推奨はしないけど、なんかこう電波が出せる機械を発明して相手のデュエルディスクがカードデータを読み取れなくさせるなんて方法もある。あるいはもつとてつとり早く、相手がカードを出す前に骨を折るとかして物理的にカードを使えなくさせるなんてのも一つの手だよ。ほかにも相手が切り札の使用をためらうように仕向けるように相手の思考を誘導する話術を磨いたりするのもグレイゾーンだけどありっちゃありだろうし」

「後半が色々物騒だニヤ!？」

色々とツツコミどころもあるが、僕は一言もしゃべることができなかった。大徳寺先生、あなたは稲石さんの顔が見えない位置にいるからそんなことを言うだけの余裕があるんだ。それほどまでに稲石さんの目は冷たく、まるでその視線に物理的な拘束力でもあるかのよう。体がピクリとも動かない。

「言うだけなら、そりゃあまあそれはノーコストだろうさ。ただね、そんなただ強くなりたい、だなんて雑な願いはどう頑張っても叶わないよ。……………構えてみな。自分が相手したげるから」

「え、稲石さん……？」

「今何かしないと本気で手遅れになりそうだしね。方向を見失って負けがかさんで完全に心が折れる前に、なんとか叩き直してあげるよ。はい、構えて。早く！」

「は、はい！」

怖かったから、というよりもむしろなにがなんだかよくわからないままにデュエルディスクを構える。デッキをセットし、机を挟んだ状態のまま稲石さんと向かい合う。大徳寺先生もいつものニコニコ笑いではなく、アムナエルの時みたいない鋭い視線で僕らを眺める。うう、やりづらい。

「デュエル！」

「先行はもううよ、自分のターン。モンスターを裏守備でセット、これでターンエンド」

「僕のターン、ドロー。ここは………」

稲石さんの場には、セットモンスターが1体。またいつものゴーストリックだろうか、それとも別のリバー系モンスターだろうか。僕の手札には水属性をリリースして手札から特殊召喚できるモンスター、シャークフレイケンがいる。このカードを出したうえでさらにモンスターの攻撃力を1000ポイント上げるこのカード、アクア・ジェットを使えばほぼ確実にあのセットモンスターは破壊できるけど。

「ここは慎重に、モンスターをセット。さらにカードを2枚セットして、ターンエンド」

今セットしたモンスターは下級魚族ではかなり高めの守備力1600を誇るツーヘッド・シャークで、カードは守備力3000を誇る最強クラスの罠モンスター、メタル・リフレクト・スライムと相手の攻撃を無効にできるポセイドン・ウェーブ。これで少なくとも、このターンは持ちこたえられるはずだ。

稲石 LP4000 手札：4

モンスター：??? (セット)

魔法・罠：なし

清明 LP4000 手札：3

モンスター：??? (セット)

魔法・罨：2 (伏せ)

「自分のターン。モンスターをセット。そして最初にセットしていたモンスターの反転召喚、ゴーストリック・ワーウルフ!」

ワーウルフ、つまり直訳して人狼。ウォーンと吠える上半身裸の狼男が飛びかかってきて、4回連続で両腕の爪で僕を引き裂く。

ゴーストリック・ワーウルフ 攻1400

清明 LP4000↓3600

「ワーウルフはリバースした時、場のセットカード1枚につき100ポイントのバーンダメージを与えることができる。自分の場には1枚、そっちには3枚。まずは400ダメージからさ!」

「くっ……」

結果的には、さっきのターンはシャークラーケンで攻撃する方がよかったらしい。外した。

「それから魔法カード、大嵐を発動。場にある魔法、罨カードは全部破壊さ!」

荒れ狂う風が僕のスライムカードを、そしてポセイドン・ウェーブを吹き飛ばしていく。不味い、これで僕の場には守備力1600のツーヘッドが1体だけだ。

「止めにフィールド魔法、ゴーストリック・ハウスを発動。これで相手が裏守備モンスターしかコントロールしていない時、お互いにダイレクトアタック可能。ワーウルフ、直接攻撃!」

またまたとびかかってきた人狼が、今度は僕の肩にがぶりと噛みつく。ツーヘッド、表側守備表示で出しておけばよかったのかな。

ゴーストリック・ワーウルフ 攻1400↓清明 (直接攻撃)

清明 LP3600↓2200

「メイン2にワーウルフの効果で自身を裏守備に変更、ターンエンド!」  
「ぼ、僕のターン……」

強い。元からかなり強い人だったけど、今日の稲石さんはいつもより強い。でも、まだ勝機はある、はずだ。



「ツーヘッド・シャークを反転召喚、そして魔法カード、アクア・ジェツトを発動！これで、ツーヘッドの攻撃力は2200だ！さらに、そのままシャクトパスを通常召喚！」

ツーヘッド・シャーク 攻1200↓2200

シャクトパス 攻1600

以前までだったらアクア・ジェツトを使うたびにマジックコンボ呼ばわりしてたユーノも、今はもう僕の隣にはいない。ふと感じた寂しさをごまかすように首を振り、バトルに集中しようとする。

「ツーヘッドの能力は2回攻撃、これでゴーストリック・ハウスの効果を逆手にとればこっちからも直接攻撃ができる！ツーヘッド、稲石さんにダイレクトアタック！」

「はい残念、手札からゴーストリック・フロストの効果発動ね。直接攻撃してきたツーヘッド・シャークを凍りつかせて裏守備に変更、そしてこのモンスターを裏守備で特殊召喚」

2つの顎をもつ鮫の牙が稲石さんに躍り掛かるが、獲物を捕らえる前に突然吹いてきた冷風に当たってその体が見るみるうちに氷漬けになる。犯人と思われる厚着をした雪だるまが、見つかったことに気づいて慌ててクロツシユ……………西洋料理を入れておく蓋をかぶって隠れこむ。

「まだまだあーシャクトパスでダイレクトアタック！」

「ゴーストリック・ランタン効果。手札から裏守備で特殊召喚して、その攻撃は無効さ」

「く、くう……………」

何てことだ、まさか全部止められるとは。こうなった以上僕にできることはない。

「ターンエンド……………」

稲石 LP4000 手札：0

モンスター：??? (ゴーストリック・ワーウルフ)

??????? (ゴーストリック・フロスト)

??????? (ゴーストリック・ランタン)

??????? (セット)

魔法・罨：なし

場：ゴーストリック・ハウス

清明 LP2200 手札：3

モンスター：??? (ツーンヘッド・シャーク)

シャクトパス(攻)

魔法・罨：なし

「ドロー。カードをセットして、メタモルポットを反転召喚。お互いに手札をすべて捨てて、カードを5枚ドローしてね」

メタモルポット 攻700

「さらにカードを2枚セットして、モンスターをセット。そのままゴーストリック・ワーウルフ反転召喚で今度は600ポイントダメージって言いたいところだけど、ハウスのもう1つの効果でそのダメージは半分の300にしかならないね。だけど、減ったダメージは量でカバー。今セットした魔法カード、火炎地獄を発動。このカードは相手に1000ポイントダメージを与える代わりに自分も500のダメージを受ける……けど、ハウスの効果によってお互いが受けるダメージはこれまたその半分さ」

清明 LP2200↓1900↓1400

稲石 LP4000↓3750

じわじわと削られていくライフ。気づけばその数値はゴーストリック・ワーウルフの攻撃力と同じ……僕の手札にこの状況を打破できるカードはなく、もしあのカードの中にシャクトパスを破壊できるカードがあればハウス効果のダイレクトアタックが成立するようになり、僕の負けだ。

ああ、また勝てない。だったらもう、別にこのデュエルを続けなくてもいいんじゃないかな。そんな思いが、ちらりと胸をよぎる。

「稲石さん、もう……」

やめよう。そう言おうとした瞬間、稲石さんが諦めたように肩をすくめた。

「……ふーむ。もう1ターンだけ待とうかな。ワーウルフを裏側守備表示に変更、これでターンエンド」

どうやら、このターンでシャクトパスを倒すことはできなかったようだ。なんか綱渡りばかりで、つくづくデッキに対して申し訳ないと思う。こんなしょうもないのが使い手でいいんだろうか、ほんとは。

「ああ、僕のターンか。ドロー」

一応手札は5枚、今のドローも合わせると6枚ある。だけど、勝てる気がしない。

「速攻魔法、サイクロンを発動。対象は、えっと」

どれを破壊しようか。ハウスを破壊すればシャクトパス達がやられても返しのダイレクトアタックは防げるけど、稲石さんもあれだけドローして手札に2枚目のハウスかミュージアムが来ていないとは考えにくい。じゃあ、セットカードだろうか。とはいえ今の稲石さんのデッキはバーン軸らしいし、何も考えずにこのサイクロンを使ってもフリーチェインでかわされる可能性もある。いや、そんなのは度のデッキでも同じだし考えるだけ無駄か。

「その伏せカード、僕から見て右側の方を」  
「ん」

風が吹き、稲石さんのカードを巻き上げる。その際に見えたイラストは、つと。

「地砕き………う？」

僕でも知ってる割と有名なカード、地砕き。大地を砕く拳のイラストが印象的な、相手フィールドに存在する守備力の1番高いモンスターを破壊する対象にとらないことが厄介だったりする通常魔法カードだ。それをセットしたのは別にいい。おそらく、ワーウルフの効果で与えるダメージを増やしたかったから先に伏せたのだろう。いや待てよ、その前のメタモルポットで捨てるのを回避するために伏せたほうだったかもしれない。だがそんなことはどうでもいい、今重要なのはそれを稲石さんが前のターンに使わなかったということだ。通常魔法は他のカードと違って1度セットしてからでもそのターン中に使うことができるという特徴があり、当然稲石さんもそのことは知っている。だということに、それを使っていれば勝てる状況だったに

もかかわらずそれをしなかった。

とうか大体、今の稲石さんのプレイングはちよいちよいかしい。バーン軸なのにハウスを使ってダメージを減らすなんて本末転倒だし、さっきのターンだって十分にライフが残ってる状態でわざわざランタンまで出す意味は薄いだろう。メタモルポットだってわざわざこのタイミングで反転召喚するようなものでもないし。

「稲石さん、今、本気ですか」

自然と声が固くなる。もし舐めプされてるんだとしたら、それは嫌だ。でもまさか、あの稲石さんはそんなことするキャラじゃない。だけどそんな思いを全部見透かしているような目で稲石さんは僕の顔を見て、嫌味たっぷりの口調で返す。

「ああ、気づいた？でもね、今の君に舐めプに対して怒る権利なんてたいていそんなものがあると思う？悪いけど、今の君に文句を言う資格はないよ。……さっき君が何を言おうとしたのか、自分が気付いてないとも思った？もうやめようだなんて、随分と馬鹿にしてくれたものだね。自分が知ってる遊野清明って男は、そんなこと言うような屑じゃなかったよ、うん」

「……………」

稲石さんがなんで怒ってるのか、正直まだよくわからない。だけどその沈黙を理解と受け取ったらしくそれに気をよくしたのか、さらに口を開く稲石さん。

「勝敗だけにしかこだわらなくなるとこうなるっていういい例さ。勝ちを指摘するのは結構だけど、その路線変更に君のデッキが、何より君自身がまるでついていけてない。こういう説教みたいなのは苦手な人だけで要するにまとめるとだね、なんだ、そんな慣れないことはするもんじゃないよ」

「は、はい」

そうは言っても、勝つことができなければ何の意味もない。あなたの言ってることは、ただの理想論だ。ヒーローである十代がおらず、万丈目たちも次々と光の結社に飲み込まれていく中、僕が勝ち続けるしか道はないじゃないか。そう言いそうになるが、また喧嘩になりそ

うだったのでぐつと飲み込んだ。

だがそれすらも鋭い稲石さんにはお見通しだったようで、ため息を一つつくつまらなそうな顔でデュエルディスクの電源を落とした。デュエルが強制終了されたことで、お互いのソリッドビジョンが消えていく。

「え……………」

「もういいよ、どうやら自分と今の君とは、根本的などころで噛み合っていないみたいだし。これ以上やっても時間の無駄さ。さ、帰った帰った」

ああ、僕は勝ちたいだけなのに。チャクチャルさんに続いて、稲石さんにまで見限られた。このまま取り返しをつかないことになる前に考え直せ、という声が頭の中で響く。だけどその声は、もつと大きな声にかき消された。

いわく、この程度で見限るといふならば、所詮はその程度の仲間だったのだと。僕は何一つ悪くないのだ、むしろ自分のことをわかってほしい者にしての責任がある。だから無視してそのまま帰り、金輪際関わり合いにならない方がいい。そして僕は一瞬迷った末、その声の言うことを聞くことにした。手早くデュエルディスクの上のカードをデッキに戻し、振り返りすらせずには廃寮を出ていく。あちらから非を認めて謝るなら別だけど、それでもない限りもうここに来ることもないだろう。さあ、帰ったらどうしたら勝てるようになるか考えないと。勝とう。とにかく勝とう。勝って勝って勝ち続けないと。

そんな僕の背に、とどめを刺すかのような稲石さんの言葉が突き刺さった。

「あ、それとね。トランスターンは対象モンスターを墓地に送って発動するカードだから、君の言った通りの手札ならどっちみち詰んでたよ」

「……………さて、と。どう思うっ？」

「かなり荒れてるのニヤ」

清明がいなくなった部屋に、幽霊二人の声が響く。

「いや、そうじゃなくて。それはわかかってるけど治るかな、あれ」  
「正直、本人次第としか言いようがないニヤ。錬金術はあくまで命を作るのが目的の技、心を作ったり癒したりは専門外だから私には何とも」

あつさりと言い切った後、ただまあ、と言葉をつなげる大徳寺。

「今回の彼はどうも、単にショックを受けたなんて理由じゃすまないと思うのニヤ」

その言葉に同意を示すよう頷く稲石。大徳寺の次の発言を最後に2人の姿は幻のように消え、そしてそこには誰もいなくなった。

「なら、私にも何かできるかもしれない。ファラオ、それに君にも一緒に来てほしいのニヤ。私のかわいい教え子のため、できる限りの手は尽くしてみるのニヤ」

## ターン47 泥水と永久電力

「邪魔邪魔あー！シーラカンスでダイレクトアタック、マリリン・ポロロツカ！」

「うわあああつ！す、すみません齋王様……………」

魚の王の突撃をまともに受けライフが0になった誰か。名前がわからないどころか顔も見ただことないってことは、多分ノース校の人なんだろう。でもまあ、そんなことはどうでもよかった。吹っ飛んだ今までの相手は放っておき、周りにまだ何人かいた白い制服をぎろりと睨みつける。

「……………それで？次の相手は誰？」

まだ足りない、もつとデュエルがしたい。こんな雑魚相手じゃ物足りなさすぎる。この中で一番強そうなのは誰かな、と。

「ひええええっ！助けてー！」

リーダー格の男に目を付けた瞬間、それを感じ取ったらしくとつとこ逃げていく。金魚のフンのようにそいつについていた数人も、それを見て我先にと逃げ出していく。

「ふう、逃げちゃったか」

別に逃げるような相手に興味はない。もつと歯ごたえのある白制服を探して、ぶちのめす。ただそれだけだ。

次の獲物を探して校内をうろついていると、ちょうど三沢が階段を上っているのが下から見えた。ふむ、三沢か。さっきのとは違って、少しは楽しめそうだ。一瞬でも気を抜いたら僕がやられるかもしれない。だからこそ、潰しがいもあるだろう。

「みーさーわくーん、あーそびーましょー！」

手を振りながら声を張り上げると、びくつとした様子でこちらを見る三沢。はて、そんなに怖かったんだろうか。あ、よしよしちゃんとかっち来たね。それじゃあ……………覚悟しろ、三沢。これといって君に恨みはないけれど、あえて言うならホワイト寮に入ったお前が悪いんだ。

その1時間ほど前。ホワイト寮と化した元オベリスクブルーの一室で、何人かの生徒と齋王が白いレースのかけられた机を囲むようにして座っていた。その輪の中には、三沢の姿もある。部屋中が白で統一され、窓からはあふれんばかりの日差しが降り注いでいる。にもかかわらずどこか重苦しい空気が漂う中、齋王の言葉が響いた。

「なるほど。つまり、ここ最近遊野清明の調子がおかしい、と」

「は、はい。まさか、あいつがあんなことになるなんて……」

普段の彼にはまるで似合わない固い調子で弁明の言葉を発しようとする鎧田を手ぶりで止めて、その横にいた万丈目が代わりに口を開く。

「すみません齋王様。本来は俺たちの手で処理すべき問題なのですが、どうも去年までの遊野清明という男とあまりにも違いすぎるので、一応報告にと」

「ふむ、構いませんよ。それで、どのようなことになっているのです？」

「3日前の、ノース校にいる我々の仲間がこちらにやって来た日に俺は奴をワンキルしてやりました。そうしたら次の日、奴は体調不良とやらで一日中学校に来ませんでした。その時は別に堂とも思いませんでしたが、問題はその次の日からです。学年も出身校も関係なく、校内を歩いている光の結社の仲間が突然現れた奴にデュエルを挑まれるようになり、再起不能とまではいかないまでもボロボロにされるんです」

「ボロボロに？喧嘩でも売っているんですか？」

「ち、違いますー！」

上ずった声で何かに怯えながら叫ぶ一人の少年。齋王様の前だぞ、口のきき方に気をつけろと周りの生徒が彼を止めようとするが、それどころではない少年は制止を振り切って齋王の前に進み出る。

「俺は、その、確かにデュエルを挑まれたんです。奴と勝負した最初の一人です。あいつは間違いなく化け物ですよ！やっつてやることはただのデュエルのはずなのに、ライフが減ってダメージを受けるたびに俺



の体にまで痛みが走ったんです！しかもサレンダーすらさせてくれないし、もうどうしていいかわからなくて……！」

「なるほど。三沢君、君は確かその現場の一番近くにいたそうだね。君は去年、

わけあって闇のデュエルをしたことがあると聞いているが、これについてどう思う？」

「おそらくは奴が一方的に仕掛けたのでしよう。俺の知っている闇のデュエルは敗者が命や魂を取られるほどのものでしたが、そんなことをする気はないのだと思います」

淡々と話す三沢だが、目を見れば彼もこの事態にかなり動転しているのがわかる。それはそうだろう。たとえ進む道が違うことになっても、彼にとつて遊野清明という人間はいまだに友人なのだ。

「ふん、どうせ世間の目でも気にしているだけだろう。どうやっているのかはともかく、このまま奴を野放しにしたら、何をしだすかわかったものじゃない」

一方、万丈目をはじめ同じく彼の友人だった他の生徒の意見は違う。彼ら彼女らにとつて遊野清明とはどんな技を用いたのかはわからないが、自分らの仲間を傷つけ崇高なる斎王様の目的を邪魔する愚か者でしかないのだ。

それがわかっていいるからこそ、三沢は斎王に先手を打って進言する。万丈目たちに任せていいては、どんな過激な手を取るかわからなかったものではない。

「どうでしょう斎王様。ここはひとつ、この三沢大地にお任せください」

「待つんだ、三沢。ここはこの万丈目ホワイトサンダーに任せておいてくれ」

ここで万丈目は、あくまでも純粋な親切心から言っているだけだ。普段は威張った態度が目につくが、ここぞという時には自分の部下や味方を危険な目にあわせまいと自分が真っ先に動く。そんなカリスマ性があるからこそ、光の結社の中でも万丈目は斎王に次ぎナンバーツ一の立ち位置を得ることとなったのだ。

だがその親切心は、清明と万丈目たちを引き離したい三沢にとつては邪魔でしかない。どう言つて断ろうかと脳をフル回転させるが、その時意外なところから助け舟が飛んできた。

「いえ、ここは三沢君に任せましょう。危険な仕事ではありませんが、よろしく願いますね」

「さ、斎王様。……わかりました。頼んだぞ、三沢。気を付けてな」

という会話ののち、被害者たちに聞いた話からどうも構成がだいぶ変わったらしい清明のデッキに対抗できそうなカードを抜かりなく何枚かデッキに忍ばせてから校内をうろつきまわること数分。できれば本格的なメタデッキを組みたかつたのだが、そんな時間もなさそうなので本当に部屋にあつたカードからめぼしいものを数枚放り込んだ程度である。

「みーさーわくーん、あーそびーましょー！」

そして、話はようやく現在に至る。そんなことがあつたとはつゆ知らず、ひよいひよいと軽い身のこなしで三沢のもとにたどり着き、退路を塞ぐような位置に立つ清明。もつとも三沢も元から逃げるつもりはない、もはや言葉は不要とばかりにわざわざ白塗りした自分のデュエルディスクを構える。勝負から逃げない態度を見て一瞬嬉しそうになった清明も、そのデュエルディスクを見て露骨に嫌そうな顔になった。そのわかりやすい態度から素直なところはまるで変わってないな、と苦笑し、すぐに気を引き締め直す。

「何も言わずにすぐデュエル……どうやら、まんまと誘い込まれたかな？ まあいいさ、とりあえず病院送りだけは勘弁してあげるよ」

「それはありがたいことだな。だが、俺も負けるわけにはいかん」

「あー？ よくわかんないけど、無駄話はそろそろ切り上げようかね」  
「デュエル！」

先攻は、三沢。手札にお互いにカードをドローすることで相手のエンドフェイズまでのあらゆるダメージを0にするカード、一時休戦が来ているのを確認して少し考え込む。まだ相手の出方がつきりと

は分からない以上、先行で1枚しか入っていないこのカードをいきなり使うことは控えたほうがいいのだろうか。だが、ここで先手を打って使っておけばおそらく清明は効果が切れるまで大量展開は控えるはず、出鼻をくじく意味も込めて使うのもありだろう。

「……………俺のカードはマスマティシヤン。召喚時の効果でデッキからレベル4以下のモンスター1体、電池メン―単4型を墓地に送る。カードを1枚伏せて、これでターンエンドだ」

一瞬迷ったものの、最終的に手札で温存しておくことに決めたようだ。かわりに彼が伏せたのは、攻撃モンスターを除外することができるとラップ、次元幽閉。マスマティシヤンを囿にして使うつもりなのだがはたしてこの判断、吉と出るか凶と出るか。

マスマティシヤン 攻1500

「僕のターン。魔法カード、スター・ブラストを発動。ライフを500単位で払うことで、その分だけ手札か場の自分モンスター1体のレベルをターン終了時までダウンさせる。これで1500ライフを支払って、レベル7から4になったシーラカンスを通常召喚」

清明 LP4000↓2500

超古深海王シーラカンス 攻2800 ☆7↓4

「そしてシーラカンスの効果、魚介王の咆哮！手札1枚を捨てて、デッキからレベル4以下の魚族を出せるだけ特殊召喚する！さあみんな、今日も僕を勝たせるんだよ？」

竜宮の白タウナギ 守1200

シャクトパス 守800

オイスターマイスター 守200

軍隊ピラニア 守200

「くっ、外したか」

シーラカンスからの大量展開を止められなかったことに軽く頭を抱えそうになる三沢。それも無理はない、シーラカンスは自身が効果の対象になったときに魚族をリリースすることでその発動と効果を無効にして破壊できる効果耐性を持っているのだ。つまり、対象をとる効果である次元幽閉はシーラカンスを除外できないうえに攻撃も

止められないと、使う理由がほぼなくなってしまったのだ。

「ふふ、その伏せカードはなんだったかな？光の力なんかは頼ろうとするからそういうことになるんだよ、三沢。もつとも、今更後悔しても遅いけどね。シーラカンズでマスマティシヤンに攻撃、マリリン・ポロツカ！」

超古深海王シーラカンズ 攻2800↓マスマティシヤン 攻1500 (破壊)

三沢 LP4000↓2700

闇のゲームということ聞いた時点からある程度の覚悟はしていたが、それでもやはり慣れることのない痛みが三沢を襲う。とはいえ、本人も病院送りにする気はないと言っていただけあって、前に三幻魔の1体、神炎皇ウリアと戦った時のような意識が吹き飛ばすほどの痛みではない。ちなみにその後三沢の手に渡ったウリアのカードは、彼が光の結社に入ったときに斎王のもとへ渡っている。今は光の結社の中心部で分厚い金庫の中に封印されているはずだ。

「マスマティシヤンが戦闘破壊されたことで、俺はデッキからカードを1枚ドロウする」

「はいはい、どうぞー。それじゃあ、本番行ってみようか。このデッキのキーカード、永続魔法エクトプラズマーを発動！」

「何!?!エクトプラズマーだ?!?!」

これまでの犠牲者たちからは、これを使ったという話は一切聞いていない。それがキーカードということは、これまでの相手にはそれを使うまでもなかったということだろうか。

「清明、お前……本当に変わったんだな。以前のお前はどんな相手にも決して手を抜かずに全力で戦うデュエリストだったはずだ」

「あー、そんな時期もあったねえ。でも、僕は今すごい強いのだ。雑魚にいちいち本気出すまでもないんだよ。舐めプ、最初とある人にやられた時はすごい腹立っただけだよ。いざやってみるとすごい楽しいもんだねえ!あはハハハ!」

ぬけぬけと言い放つ清明。その眼は明らかにおかしな光を宿していて……と言えば少しは聞こえがいいが、要するにアレなクスリで

も決めたみたいな状態になっていた。その様子に心を痛めながらも、なんとか自分の言葉を届けようと別方向からのアプローチにかか

る。「それに、エクトプラズマーだってお前らしくないぞ。俺の知っているお前はモンスター射出どころか、死に出しや自爆特攻ですら嫌っていたじゃないか。モンスターのことを、カードのことをまるで1枚1枚人格があるかのように取り扱ってデュエルしていたじゃないか！」  
当たらずとも遠からず、である。実際に彼のカードには精霊が宿っているので人格があるというのもあながち間違いではない。そのため、ただでさえその手の戦法は取りたがらなかった彼は精霊が見えるようになって以降見向きもしていなかったのだが。

「なーに、勝つためさ。簡単だよ？ シーラカンスで肉の壁を作って攻撃を防ぎつつエクトプラズマーの弾を補充する。我ながら合理的な戦法だと思うけどね、あつという間に4000程度のライフなら消し去れるし、シーラカンスで殴ればこっちのライフが先に消える心配も基本しなくて済むし」

「お前……………本当に清明なのか？」

「やだね、三沢。僕は僕さ、遊野清明さ。カードを伏せて、エンドフェイズにエクトプラズマーの効果発動。モンスター1体をリリースすることでその元々の攻撃力の半分の数値だけダメージを与える！ 殺れ、軍隊ピラニア！」

リアルなタッチで描かれたピラニアが苦しみ悶えながらその場に崩れ落ち、体から引きずり出された魂が三沢めがけて突っ込んでいく。

三沢 LP2700↓2400

「くっ……………」

「どう？ 痛い？ でもね、僕がお前たちのせいで感じた痛みはこんなものじゃない。倒れるまではとことん付き合ってもらおうからね」

三沢 LP2400 手札：4

モンスター：なし

魔法・罠：1（伏せ）

清明 LP2500 手札：2

モンスター：超古深海王シーラカンス（攻）

竜宮の白タウナギ（守）

シャクトパス（守）

オイスターマイスター（守）

魔法・罨：1（伏せ）

「俺のターン、ドロー！」

シーラカンスの効果で常に魚族が現れること、そして清明のデッキがビートダウンからバーン軸に変わったことを考えるとおそらくこの先の展開でシーラカンス以外のモンスターが攻撃してくる可能性は低い、つまり次元幽閉が通る確率はほぼないだろう。そう考え、せっかく伏せた次元幽閉のことはすっぱりと諦める。

「電池メン―単四型を召喚。このカードが召喚に成功した時、手札か墓地の単四型を特殊召喚できる。先ほど墓地に送った単四型を特殊召喚だ」

電池メン―単四型 攻0

電池メン―単四型 守0

「そして俺の場に電池メンのモンスターが2体以上存在するとき、このカードは手札から特殊召喚できる。来い、燃料電池メン！」

細長い体の中心に4と刻み込まれた緑と紫の電池メン達。その2人がさつと中心を開けるように飛び退ると、空いたスペースに四角い体を持ったピンクの大型電池が召喚される。

燃料電池メン 攻2100

「それで？残念だけど、2100程度の攻撃力じゃあねー」

「確かにな。だが、俺の狙いは燃料電池メンを特殊召喚することじゃない。電池メンと名のつくモンスターが俺の場に3体以上存在するとき、相手の場のカードをすべて破壊する！食らえ、シヨートサーキット漏電！」

「……………役立たずが。トラップ発動」

3体の電池がそれぞれポーズをとって、全身から電気を発生させる。激しく火花が弾け、辺りが眩しさのあまり何も見えなくなり……………光が収まったときには、立派な焼き魚が3つ転がっていた。

「ちつ。まあいいさ、オイスターマイスターの効果発動。戦闘以外の方法でフィールドから墓地に送られた時、オイスタートークンを特殊召喚する」

オイスタートークン 守0

「無論知っているさ、ここで燃料電池メンの効果を使おう。1ターンの1度場の電池メンをリリースすることでその電力を自らに供給し、その際に発生したエネルギーによって相手の場のカード1枚をバウンスする。対象はオイスタートークンだが、トークンはバウンスできないから存在しなかったことになるな」

「……………!!」

ころりと一つだけ転がっていた牡蠣が電気力でみごとな焼き牡蠣となり、今度こそ清明の前のモンスターがいなくなる。これで燃料電池メンの攻撃力2100でのダイレクトアタックが通れば、そこで速攻魔法、突進を使用するつもりである。攻撃力が700ポイントアップした燃料電池メンの直接攻撃ならば、清明を一撃で倒すことも可能だ。

「燃料電池メンでダイレクトアタックだ」

「そのまま受けるさ」

「ならばダメージステップ、手札から突進を発動する。これにより燃料電池メンの攻撃力はさらに700ポイントアップだ！少し荒療治になるが目を覚ませ、清明！」

燃料電池メン 攻2100↓2800↓清明（直接攻撃）

清明 LP5300↓2500

「ふう。それで？今何かしたわけ？」

「馬鹿な！いや、さっきのトラップか!？」

「物わかりが良くて助かるよ、説明の手間が省けるつてもんさ。僕が使ったのは通常トラップ、デストラクト・ポジション。効果は……………」  
「自分フィールドのモンスター1体を破壊し、その攻撃力ぶんのライフを回復する、か。これもまた」

「お前らしくないカードだ、つて？」

三沢の言葉に割り込むように、ふっと笑って後を続ける清明。その笑いは狂気的ではあったが、同時にどこかさびしそうにも見えた。あるいは、それもまた光の加減だったのかもしれないが。

「……………いや、なんでもない。手札がこれしかないなら、温存するよりもドローに賭けてみるか。メイン2に魔法カード、一時休戦を発動。お互いにカードをドローして、次のお前のエンドフェイズまで俺たちが受けるダメージは0になる。そして手札のサンダー・ドラゴンの効果発動。このカードを捨てることで、デッキからサンダー・ドラゴン2体を手札にサーチできる。これでターンエンドだ」

燃料電池メン 攻2800↓2100

「僕のターン。魔法カード発動、死者蘇生。シーラカンス、お前にはまだ使い道があるからね」

清明自身の手によつて破壊された魚の王が、強制的に呼び起される。だがその鱗はどこどころ痛々しく剥がれており、王冠のような形をした謎の部位もボロボロになっている。なによりも目につくのは、顔についた大きな傷のせいで片目が完全に潰れてしまっていることだ。

だが、そんな痛々しい姿に見向きもせず淡々と手札を1枚墓地に送る清明。いや違う、と三沢はぼんやり考えた。見向きもしていないのではなく、目を背けて少しでも見ないようにしているのだ、と。

超古深海王シーラカンス 攻2800

「さあて、ね。手札を捨てて、魚介王の咆哮」

そして呼び出される、4体のモンスター。

ハリマンボウ 守100

ツーヘッド・シャーク 守1600

フィッシュボーグアーチャー 守300

ハンマー・シャーク 守1500

「ダメージは通らなくても、攻撃はさせてもらおうかな。シーラカンス、燃料電池に攻撃」

満身創痍と言えど、魚の王の勢いはピンク色の燃料電池をスクラップにするには十分なほどの威力を持つ。相変わらず身代わりのせい



で次元幽閉が使えない三沢には、それをどうすることもできない。

超古深海王シーラカンス 攻2800 ↓燃料電池メン 攻2100  
(破壊)

「これでターンエンド」

三沢 LP2350 手札：2

モンスター：電池メン―単四型(守)

魔法・罨：1(伏せ)

清明 LP2500 手札：2

モンスター：超古深海王シーラカンス(攻)

ハリマンボウ(守)

ツ―ヘッド・シャーク(守)

ハンマー・シャーク(守)

フィッシュボーグ―アーチャー(守)

魔法・罨：なし

「俺のターン、ドロ―だ」

三沢の手札にあるのは、デツキ圧縮のため先ほどのターンに効果を使ったサンダー・ドラゴンが2体のみ。このドロ―で融合のカードが来れば双頭の雷龍が融合召喚できるのだが、と少し期待していたのだが、残念ながらそう都合よくデツキに1枚しか入っていない融合を引くことはできなかつたようだ。

「モンスターを1体セット。これでターンエンド」

「ふふ、電池メンでモンスターのセット。おおかた引いたのはリバー効果のあるボタン型ってとこかな？ならまあ反転召喚なんてまずしないだろうし、攻守0の単四型も放置で大丈夫そう。となると、別に攻撃するまでもないね。だって、いいカードがまた引けたんだ。永続魔法、エクトプラズマー発動！残った手札もセットして、エンドフェイス。攻撃力1700のハンマー・シャークをリリースし、霊魂攻撃！」

金槌のような頭を持つ青い鮫が、クリクリした目をバツ印にしてぐったりとする。その体から出た霊魂が、単四型とセットモンスターを突き抜けて三沢に直撃した。

三沢 LP2400↓1550

「ターンエンド。さあーて、ライフが0になるのと意識が飛ぶの、どっちが早いかな？」

三沢 LP1550 手札：2

モンスター：電池メンー単四型（守）

???（セット）

魔法・罨：1（伏せ）

清明 LP2500 手札：1

モンスター：超古深海王シーラカンス（攻）

ハリマンボウ（守）

ツーヘッド・シャーク（守）

フィッシュボーグーアーチャー（守）

魔法・罨：エクトプラスマー

1（伏せ）

「ふざけるなよ、清明。俺は闇のデュエルなんかには負けはしないさ！ドロー、エレキリンを召喚！」

電気をパチパチと鳴らしながら、明るい黄色を基調としたメルヘンなデザインのキリンがやや窮屈そうにしながらも召喚される。その効果も知っているらしい清明が、露骨に嫌そうな顔をした。ルール違反ではないが立派なマナー違反である。

エレキリン 攻1200

「そんな顔をするもんじやないぞ。エレキリンは、相手プレイヤーにダイレクトアタックができる！エレキリンで攻撃！」

エレキリンがその長い足を持ち上げ、シーラカンスたちをわずか一歩で乗り越えておもむろに踏み下ろす。本当に踏みつけるとソリッドビジョンとはいえ心臓に悪いのでわざと微妙に狙いをそらした一撃は清明を踏みつけるとままではいかなかったものの、それでも地面を踏みしめた時の衝撃がダイレクトに伝わってくる。

エレキリン 攻1200↓清明（直接攻撃）

清明 LP2500↓1300

「エンドフェイズでのエクトプラスマーの効果は、もったいないがエ

レキリンをリリースしよう。よくやったな、エレキリン」

清明 LP1300↓700

本音を言うともう少しダメージを与えておきたかったが、それでもここまで削れば十分だろう、と三沢は考える。彼は今のターン、苦し紛れで攻撃を仕掛けたのではない。すでに罨は張つてある状態であり、あと1枚のキーカードが来るのをじっと待っているのだ。

「今の程度でいい気にならないでよ。僕のターンドロ。三沢のライフは残りあれだけ……ここは大きく賭けに出る！カードをセツトだけして、あとはこのままターンを流してエンドフェイズ、エクトプラズマー発射！」

次の標的に選ばれたのは、すでに満身創痍のシーラカンス。魂を引きずり出される苦しみを隠せないようにその場で暴れだす魚の王だったが、どんなモンスターでもカード効果とプレイヤーの意思にだけは逆らえない。力尽きる寸前最期に一声吠え、魚の王の巨体は再び地面に崩れ落ちた。

三沢 LP1550↓150

「ぐわあああつ!？」

「三沢……」

これまでのエクトプラズマーによるダメージの2倍近い数値。それをまともに受け止めた三沢もさすがに苦痛の呻きをこらえきれず、その場に膝をつきそうになる。なるが、そこで清明が叫んだ。彼がよく知っている、いつも通りの清明の声が。その声を聞き、踏みとどまって立ち直る。まさか元に戻ったのか、と清明を見るが、当の本人も彼の名を呼んだのかは自覚していなかったらしく、自分の口に手を当てて忌々しそうな顔をしていた。

「ちっ、もう起きてきやがったか……」

「何？」

それは、間違いなく清明の言葉。なのだが、どこか彼とは違う何かが目撃しているような印象を受けた。気のせいかと思い軽く首を振って頭をはつきりさせてから見直すと、その感覚はもう消えていたのだが。

三沢 LP150 手札：2

モンスター：電池メン―単四型（守）

???（セツト）

魔法・罨：1（伏せ）

清明 LP700 手札：0

モンスター：ハリマンボウ（守）

ツ―ヘッド・シャーク（守）

フィッシュボーグ―アーチャー（守）

魔法・罨：エクソプラズマー

2（伏せ）

「俺のターン、ドロー！」

今一瞬だけ起きた当の本人にもよくわからない現象が収まった。そして三沢がカードを引くのを見ながら、それにしても、と清明は大事な一瞬だというのにふと考える。相変わらずこの男には、どうも勝てる気がしない。こちらが一生懸命知恵を絞って考えた戦略が、三沢にはまるで通用しない。いや、もちろん全く通用していないということはないしある程度ダメージは通るのだが、常に全部お見通しにされているような気がしてならないのだ。実際、彼は2年生になってもいまだに三沢相手には1勝すらできていない。現校生の中でこんな相手、あとは十代とノース校から帰ってきてからの万丈目くらいのものである。

だけど、なんでこんなことを今考えているんだろうか。ふと疑問が彼の胸をよぎる。別に今じゃなくても、あとでじっくり考えればいいではないか。まるでそう、例えるならば『何か』に思考を誘導されていたかのような。なにかかんがえてはいけないことがあるかのよう。でもなにが。なにが。なにが。なにが………が………。

『難しい』こと考えるなよ、遊野清明。それよりも、さつき十代に万丈目って言ったろ？そいつらは今どうしてるんだ？十代はいまだに行方不明、万丈目は真っ白に染まってお前のことを敵としか見てないぜ。目の前にいる三沢だって、口じゃあ立派なこと言っただけ。詮は光の結社さ。お前の友を次々に奪っていった、憎い憎い光の結社

だよなあ？ほら、もつと憎むんだよ」

彼の頭の中で、また声が出た。残念ながら三沢にはその声が聞こえていない。もし聞こえていれば、たとえ清明を殴りつけてでも止めただろう。だが、清明はその声に耳を傾けてしまった。それを聞いて、自分が今すべきことを思い出す。さっきの疑問もどうでもいい。今考えることはただ一つ、光の結社を潰して皆を取り返す、ただそれだけだ。

「来い、三沢！」

「言われなくても、このターンで終わらせてやるとも」  
「えっ」

格好つけて言ってみた台詞に予想外の自信満々な返しをされ、ちよつと慌てて素が出る。そんな様子を意に介さず、三沢が待ち続けていたカードを場に出した。

「俺のカードはこのモンスター、RAIIーJINだ！」

RAIIーJIN……漢字で書くと雷神。どこことなくアメコミヒーロー風の派手な衣装に身を包み、雷の形を模した黄色のサンングラスをかけた赤髪の若い男が、派手なスパークを起こしつつ天井から飛び降りてスタイリッシュに着地する。そして全身から電気を放つと、そのパワーの一部が単四型に降り注ぐ。

「このカードは、自分フィールド全ての光属性モンスターの攻撃力を墓地の光属性モンスターの数につき100ポイントアップさせる能力を持つ。今の段階で俺の墓地にいるのは単四型、燃料電池メン、サンダー・ドラゴン、エレキリンの4体。よって攻撃力は400ポイントずつアップだ」

RAIIーJIN 攻？↓400

電池メンー単四型 攻0↓400

「た、たかがその程度で驚かさないでほしいね。それに、エクトプラスマーの効果で参照するのはモンスターの元々の攻撃力！いくらフィールドで全体強化を掛けたって無駄なのさ！さらに、ここで伏せカードのうち1枚を発動、リビングデッドの呼び声！甦れ、シーラカンス！」

超古深海王シーラカンス 攻2800

「確かにな。だが、この俺のセットモンスター……お前がボタン型だと信じこんだこのモンスターの効果がここで生きてくる。反転召喚によるリバーズ効果発動、魔道雑貨商人！」

4本の腕にそれぞれ妙なアイテムを手にした商人フアツシヨンのコガネムシが、三沢のデッキをデュエルし救から抜き出して勝手にぱらぱらとめくる。そして上から12枚ほどのカードを無造作に墓地へ突っ込むと、無言のまま1枚のカードを持主に手渡した。

「このモンスターがリバーズした時にデッキの上から魔法か罠が出るまでカードをめくり、最初に出たそのカードを手札に加える。そして残り、つまりモンスターカードはすべて墓地に送るのだが、この意味は分かるな？さらに、魔道雑貨商人自体も光属性昆虫族のモンスターカードだ」

「お、落としたモンスターは12枚、つまり上昇値は合計1600……」

RAI—JINの全身から発散される電気がさらに明るさを増す。その光は全てのモンスターに均等に降り注ぎ、みるみるうちに体が大きくなる。

「僕のモンスターは残り4体で、三沢のモンスターは3体。このターンだけなら」

「いいや、それはないな。俺が魔道雑貨商人で手札に加えたカードはこれだからだ。魔法カード、融合を発動！手札のサンダー・ドラゴン2体を素材とし、双頭の雷サンダー・ドラゴンを融合召喚！そして光属性のサンダー・ドラゴン2体が墓地に送られたことで、さらに全体強化の数値が上がることになるな」

RAI—JIN 攻400↓2200

魔道雑貨商人 攻200↓2000

電池メン—単四型 攻0↓1800

双頭の雷龍 攻2800↓4600

「ふ、ふざけんな。僕は強いはずなんだ、もう光の結社なんか二度と負けるはず……」

「光の結社、か。……………悪いな、清明。RAI—JINでツーヘツド・シャーク、攻撃表示にした単四型でフィッシュボグ、魔道雑貨商人でハリマンボウ、そして双頭の雷龍でシーラカンスに攻撃！」

4体のモンスターが一斉に放つ電流が、シーラカンスたちを飲み込んでいく。その破壊力は先ほどの漏電に勝るとも劣らない。

だが。歪みきった清明の心が、ここで最後の粘りを見せる。

「させるかああああっ！リバース・トラップ発動、破壊指輪！自分ワールドのモンスターを1体破壊して、お互いに1000ポイントのダメージを受けることになる！僕もダメだけどお前も道連れだ、三沢！」

「何っ!？」

シーラカンスの体を爆弾付きの輪が締め付け、身動きの取れない状態にしたままそれが爆発する。雷撃が清明に届くよりもさらに一瞬早く、爆発の衝撃が2人を飲み込んだ。

三沢 LP150↓0

清明 LP700↓0

「くっ……………」

吹き飛ばされた衝撃で気絶していた三沢がようやく起きた時、すでに清明はいなかった。自分よりも先に目が覚めたのか、それとも最初から意識があったのか。どちらにしても丈夫な奴だ、とつぶやいて立ち上がる。闇のデュエルのせいで節々が痛む体を引きずるようにして立ち上がり、最後にもう一度だけ周囲を確認する。やはり誰もいない。あと少しだった。あと少しであの勝負に勝つことができた。

いや、勝負自体は俺の勝ちだった。そう思い直す。勝負自体は勝っていたが、最後の最後で粘り負けしたのだ。最終的には引き分けとはいえ、あの粘りがなければ確実に三沢の勝ちだったことを考えると、実質負け試合と言っても過言ではない。そしてその粘り、土壇場になつてからのわけのわからない精神力こそが、実力では清明をはるかに上回る三沢が清明に一目置いている最大の理由である。

「まだ俺も修行が足りないか……だが、このままだとまずいな」

三沢が清明と引き分けになったことが斎王の、ひいては万丈目ら過激派の耳に入るまでそう時間はかからないだろう。だとすると、少し予定を改める必要がある。

全身の痛みにも顔をしかめながら、三沢はホワイト寮へと戻るのであった。



## ターン48 正義の闇と運命の光

「はー……………今日も結局三沢には勝てなかったか」

もはや誰もいなくなったレッド寮で、聞く人がいないことはわかっているけれどひとり呟く。もつとも、別に翔が光の結社に入ったわけではない。危険が及ぶ前にと数日前からライエローに避難させたのだ。なにしろ、この我ながら異様なまでの敵意がいつ何時無関係の翔の方に向くかわかったものじゃない。誰か人がいると見境なく怒りが込み上げてくるけど、こうして自分以外誰もいないところにいるうちは、ある程度落ち着いていられる。

……………今の僕は明らかに何かがおかしい。誰かこういうことが相談できそうな人に相談したいけれど、稲石さんとは喧嘩したまま気まぐずくて連絡が取れない。というか、多分今あの人の声を聞こうものならまたあのわけがわからない敵意が湧いてくることは容易に予想できる。ユーノだって今はいない、あの裏切り者が……………ああ、まだ。心の中にたまって来たどす黒い怒りを無理やり締め出し、平常心を保つ。他に頼りになりそうなのはチャクチャルさんだけど、あの神様もどうも最近どこかに行っているらしく、いくら探っても全然見つからない。思えば最後にチャクチャルさんの声を聞いたのも、稲石さんと喧嘩したあの日だ。元気にしてるんだろうか。あるいは、まるで言うことを聞かない僕に愛想を尽かしたのかもかもしれない。

「いや、だとしたらまずはおつちから、かな」

誰もいない部屋に、また僕の声だけが響く。僕のデッキの精霊たち。エクトプラズマーやデストラクト・ポジションなんて恐ろしいカードはデッキに入れたくないし使いたいのと思わないので、こうして我に返る時間のたびにデッキから抜こうとはしている。しているのだけど、そのたびに心の中で何かが抵抗してどうしても抜けない。モンスターを犠牲にするようなスタイルは嫌だって僕は言ってるのに、その声は少しでも相手にダメージを与えるためならモンスターごときに一々かまうなって言ってくる。どれほど抵抗しても、僕一人しかいないこの状況だどうしてもその声に勝つことができない。

かといって、他の人を呼ぼうものなら本末転倒なのだ。

「はー…………ごめんね」

誰に向けての謝罪なのか。実は自分でもよくわからない。ただ、何かに対して謝らなければいけない気がしたから謝った。それだけのことだ。すると、まるでそれを待っていたかのようなタイムミングで学生服のポケットにねじ込んでおいたPDLが鳴る。取り出そうとすると、何か別のものに手が当たった。一瞬なんだろう、と思ったがすぐに思い出した。そういえばあのノース校とのデュエルの時、天田からなにか預かってたんだっけ。あの時の彼の予感是最悪の形で中しちやっただけど、だとするとこれは一体なんだろう。いや、まずはメールか。

えー、なにに？ふむふむ。メールの送り主は夢想からで、女子寮に今届いた情報によると明日の午前11時にエド・フェニックスによる特別座談会『それはどうかな？』と言えるデュエル教室くアカデミア特別編』なるものが開催される、と。

「エド、かあ」

大人しい転校生の仮面をかぶったプロデュエリスト。思えば、僕がちょうど倒れてた間にあの男のせいだ。十代がいなくなり、そこからどんだん事態がおかしくなっていくんだ。そう考えると、何か引つかかるものがある。エドと光の結社、思ったよりも深いところで繋がりがあんなじゃないのかな。これは、行ってみるしかないだろう。人前に出たら十中八九喧嘩を売ることにはなるだろうけど、

『それならそれで構わない。そこはもうどうしようもない。僕はおかしくなったんだもの。……………だろ？』

そう、僕はもうおかしく……………って、ちょっと待てや。危なかった、もう少し気を抜いてたら今の声、ここ最近毎日のように僕だけに聞こえてくるこの声のペースに乗せられるところだった。でも実際、こんなものが聞こえるってことはおかしくなったというのもあながち間違ではないのかもしれない。

難しいことはよくわからないので、とりあえず風呂に入って布団かぶって寝ることにした。天田の渡した荷物のことは、なぜだかきれい

さっぱり頭から消し飛んでいた。

その頃の話。とうに消灯時間も過ぎて寝静まったホワイト寮の廊下を、音をたてないように注意しながら歩く人影が1人。誰であろう、三沢大地である。夜更けにもなつて、なぜ彼は痛む体を無理に動かしてまでこんなところをこそそと歩いていいのか。

そのわけは、彼の目的地にあった。そこは、光の結社の中でも万丈目や明日香、鎧田と三沢ぐらいにしか正確な場所を知られていない位置の部屋。ホワイト寮の最上階。そこに、斎王の普段寝泊りする部屋があるのだ。

誰にも見とがめられずにその部屋の前までたどり着いた彼は、ポケットから前もって準備していた針金をドアの鍵穴に入れ……：……：ようとしたところで、ふと思ひ直してドアノブをひねってみる。案の定そのドアはあつさりときき、中には机の上でタロットを広げる斎王の後姿が見えた。

こちらの侵入には気づいていないと判断し、一瞬ためらった後するりと部屋の中に入り込む三沢。わざわざ万丈目が買ってきた分厚い絨毯のおかげで足音は完全に殺されている、と思つてのことだ。

そのまま一步を踏み出そうとしたところで、振り返りすらもせず斎王が口を開く。

「教皇の逆位置。これがあなたの過去の暗示」

「魔術師の逆位置。これがあなたの現在の暗示」

とつさのことに言葉に詰まる三沢を意に介さず、そのままもう一枚のカードを確認する斎王。

「そして最後の一枚、吊された男の逆位置。これがあなたの未来の暗示ですよ、三沢大地。この意味が分かりますか？」

「何？」

さすがの三沢も、タロットにはそこまで詳しくない。名前ぐらいは一通り覚えているが、正位置逆位置の意味など一々覚えてはいないのだ。

「まず、教皇の逆位置は嘘を示します。つまりあなたは過去、私に対して嘘をついた。そして魔術師の逆位置、これはあなたが私に対して裏切りを行おうとしていることを示しています。ですが、そんなあなたの未来は吊された男の逆位置。つまり、その試みは徒労に終わるでしょう」

「……………っ！」

「あなたが最初から光われわれの結社われの仲間になる気などなく、ずっとスパイ活動が続けていたことに気が付いていないとでも思っていましたか？むしろいつ私のところに直接来るかと思っていましたよ。しかし、麗しい友情ですねえ。友人である遊野清明を心労から救うため、無理を押し強行してくるとは」

ここまで斎王の話したことは、全て当たっている。ウリアの力のおかげで辛うじて洗脳を免れた三沢はとっさの判断で光の結社内部に入り込むことを選択したが、その日のうちに闇の波動がどうたらこうたらともっともらしいことを言われてウリアのカードは没収されてしまっていた。つまり闇の力が抜けた今、あくまで一般人である彼が次に光の結社相手に負けた場合は問答無用で洗脳されることとなる。できればそれを避けるための保険として、まずはウリアを取り返しに行く予定だった。

だが、それができない理由ができた。誰であろう、遊野清明の暴走である。今日行ったデュエルによりかなり彼の精神が追い込まれていると判断した三沢は、いつまでもゆっくりしている場合ではないとまだ準備ができていないことは百も承知で斎王のもとへ乗り込んだのだ。

「そこまでわかっているなら話は早い。俺とデュエルしろ、斎王！俺が勝ったらこの馬鹿げた話をすべてなくし、二度とこのアカデミアの土を踏まないと約束してもらおう！」

「ふうむ……………いいでしょう、あなたのように優秀な手駒は、いくらいても足りることはない。ですがお忘れなきよう。あなたの運命は、このデュエルが始まる前から既に決まっているのです」

「能書きはいい、始めるぞ」

「いいでしょう。少しばかり、遊んであげますよ」

「デュエル!!」

「先行は私ですね。私が召喚するのはアルカナフォースIII―THE EMPRESS<sup>エンプレス</sup>。そして召喚成功時、このモンスター<sup>モンスター</sup>の効果が発動します。さあ、回転を止めるのはあなたですよ、三沢大地」

アルカナフォースIII―THE EMPRESS 攻1300

女帝を意味する大アルカナ3番目のカード、エンプレス。そのレールのようなマントを身に着けた頭上で、1枚のカードがゆっくりと回転を始める。不気味に回転するエンプレスのカードを注意深く見ながら、適当なタイミングで声をかける。

「ストップだ」

ぴたりと止まったその位置は、ちょうど頭が上になる形。

「素晴らしい。では、この瞬間よりエンプレスは正位置の効果が適用されます。もつとも、今発動するものではありませんがね。私はこれで、ターンエンドです」

「俺のターン、ドロード」

どうしようか、と手札を見て思案する三沢。エンプレスの効果で正位置、つまり表が出た以上、下手に残しておくのは危険だと結論付ける。だが、まだ心配はしていない。なぜならこのデッキは、光の結社のメンバーの目を盗んでずっとこの日のために隠し持っていた6つのデッキの1つ、闇属性のものだからだ。

「モンスターを1体セットし、さらにカードを……」

「待ちなさい。ならばここで、エンプレスの効果を発動。正位置が出たこのカードが存在する限り、相手がモンスターを通常召喚するたびに手札のアルカナフォースを呼び出すことができます。本来ならば高レベルモンスターを出したいところなのですが……多少は運があるようですね、私の手札にいるアルカナは全て下級モンスター。アルカナフォースIV―THE EMPRESS<sup>エンプ्रेस</sup>を特殊召喚。無論、このカードもエンプレスと同じくあなたの手で効果を決めてもらいます」

アルカナフォースIV―THE EMPRESS 攻1400

女帝の隣に降り立つ皇帝。その頭上でまたも回転したカードをじっくりと見る。そして三沢は考える。実を言うところの場面では、別に正位置だろうと逆位置だろうと別に困りはしない。その理由があるのだ。だが、万一この手が失敗した時でもエンペラーの逆位置、つまり仲間のアルカナフォースの弱体化さえ引けばいくらでもリカバリーは効く。

つまり、狙うはただ一つ。逆位置の効果だ。

「ストップだ」

そんな願いもかなわず、静止した位置はまたも正位置。残念がる三沢を愉快そうに見つめ、正位置の効果の説明する齋王。

「正位置のエンペラーは、場のアルカナフォースの攻撃力を500ポイント永続的にアップさせます」

アルカナフォースⅢ―THE EMPRESS 攻1300↓1800

アルカナフォースⅣ―THE EMPEROR 攻1400↓1900

「くっ……」

「さあ、今はまだあなたのターンですよ。これ以上私のすることはありません、どうぞ続けてください」

「カードをセットして、ターンエンドだ」

齋王 LP4000 手札：3

モンスター：アルカナフォースⅢ―THE EMPRESS (攻)

アルカナフォースⅣ―THE EMPEROR (攻)

魔法・罠：なし

三沢 LP4000 手札：4

モンスター：??? (セット)

魔法・罠：1 (セット)

「では、私のターンです。ドロー。ふうむ、なるほど。一つ、このターンでのあなたの運命を教えてください。あなたはこのターン、狙っていたことが一度はうまく行ったかに見えるものその直後に絶望を見ることになるでしょう」

「なんだと?」

「今にわかることです。エンプレスでその伏せモンスターに攻撃、EMPRESS ブレッシング!」

アルカナフォースⅢ—THE EMPRESS 攻1800↓???  
守300 (破壊)

「むっ……ええい、破壊されたモンスター、<sup>アリー</sup>A・ボムの効果発動! このカードが光属性モンスターに戦闘破壊された時、フィールドのカード2枚を破壊する!俺が破壊するのは、エンプレスとエンペラーだ」

先ほどの斎王の言葉から何か嫌な予感はしたが、ここであの2体を破壊しなければエンペラーの攻撃が彼のライフを直撃することとなり、そうすることは避けておきたかった。ゆえに彼は、斎王の予想通りの行動をとらざるを得ない。

「おやおや、私のモンスターが全滅してしまいましたねえ。ならばメイン2に移行、魔法カード、フォトン・サンクチュアリを発動します。このカードの効果により、フォトントークンを2体守備表示で特殊召喚します」

フォトントークン 守0

フォトントークン 守0

斎王の場に現れた2つの球体、そしていまだ残っている召喚権。この2つのことからこれから何が起きるのかがぴんときた三沢だが、彼の伏せカードは相手がもしアドバンス召喚をターンの初めに行った場合でも問題なくA・ボムの発動ができるようにとセットしただけのものなのでそれを止めるような効果はない。

「フォトントークン2体をリリースし、現れなさい……アルカナフォースXVII—<sup>エイティーン</sup>THE <sup>ザ</sup>MOON!」

アルカナフォースXVII—THE MOON 攻2800

これまでの人型だったアルカナフォースとはまた一味違う、まるで宇宙服を着ている宇宙人のようなデザインの化け物が、つぶらな瞳を光らせながら無数の触手をうねらせる。その頭上では、例のごとく回転するカード。

「ストップだ」

「正位置ですね、素晴らしい。カードをセットして、ターンエンドです」

「ならばエンドフェイズに速攻魔法、終焉の焔を発動。攻守0の黒焔トークンを2体、特殊召喚する」

「なるほど。終焉の焔のデメリット効果である発動ターンに召喚及び特殊召喚ができない制約も、私のターンの内に使ってしまったえば問題はない、ということですか。さすがにアカデミアの秀才と呼ばれるだけのことはある、冷静な判断です」

黒焔トークン 守0

黒焔トークン 守0

「そして俺のターン。トークンのうち1体をリリースしてレベル5、アーリー・オブ・ジャステイス

A・O・J ルドラをアドバンス召喚！」

A・O・J ルドラ 攻1900

「そして装備魔法、グラウイティ・プラスター 重力 砲を発動してルドラに装備する。このカードは1ターンに1度、装備モンスターの攻撃力を永続的に400ポイントアップできる。俺は、早速この効果を使用させてもらおう」

ルドラの背面からによつきりと砲台がせりあがってきて、ルドラが足を踏ん張って力を込めるとその先端に光がチャージされていった。

A・O・J ルドラ 攻1900↓2300

「ほう。ですが、たかだか400程度の攻撃力アップでは……………」

「これだけあれば十分だ！ルドラでムーンに攻撃、その瞬間ルドラの効果発動！このモンスターが光属性とバトルを行う時、その攻撃力は700ポイントアップする！」

砲台から放たれた一筋のビーム。それは触手で迎え撃とうとするムーンの目の前で急に勢いを増し、ガードをとる前にその胸のど真ん中に風穴を開けた。触手が力なく垂れ、目の光も暗くなってゆく。

A・O・J ルドラ 攻2300↓3000↓

アルカナフォースXVIIII—THE MOON 攻2800（破壊）

斎王 LP4000↓3800



先手を打ったのは三沢。だが、その表情は晴れない。確かにダメージは与えたが、まるで勝っている気がしないのだ。有利なのは自分はずなのに、まるでここまでの動きがすべて読まれているような。すべてが運命であり、その通りに動いているだけのような……そこまですべて考えて、バカバカしい、と首を振る。デュエルモンスタースは理論と運のゲーム、運命なんてまやかしの介入する余地はない。それが彼なりのデュエル感である。

「カードを一枚セット。ターンエンドだ」

斎王 LP3800 手札：1

モンスター：なし

魔法・罫：1（伏せ）

三沢 LP4000 手札：2

モンスター：A・O・J ルドラ（攻・重）

黒焰トークン（守）

魔法・罫：重力砲（ルドラ）

1（セット）

「私のターン。アルカナフォース0―THE FOLLを守備表示で召喚。さあ、この愚者の回転を止めるのもまたあなたです」

アルカナフォース0―THE FOLL 守0

「戦闘破壊耐性が、だがそんなものは無意味だな。ストップだ」

「確かに。ああ、このカードで正位置が出ましたか。私にとってはなかなか珍しいことですが、まあどうでもいいですね。ターンエンドです」

「俺のターン、まずは重力砲の効果を再び発動し、ルドラの攻撃力をさらに上げる！」

A・O・J ルドラ 攻2300↓2700

「そして魔法カード、アームズ・ホールを発動。このターンの通常召喚権を失う代わりにデッキトップを墓地に送り、その後デッキか墓地の装備魔法を1枚手札に加える。俺の墓地に装備魔法はない、よってデッキからブレイク・ドロウを手札に加えてそのままルドラに装備する」

やはりビックバン・シュートかメテオ・ストライクを1枚入れておくべきだったか、とやや後悔するが、今更言ってもしようがない話なのでさっさと気持ちを切り替える。

背中のビーム砲がもう1度光り輝きさらなる力を蓄えたルドラの全身が、青いオーラに包まれる。だが、その攻撃力に変化はない。

「ルドラでフルに攻撃、そしてこの瞬間にルドラと重力砲の効果が適用される!」

A・O・J ルドラ 攻2700↓3400↓アルカナフォーソ  
—THE F O O L 守0 (破壊)

「重力砲の効果……それは、装備モンスターが戦闘を行う場合、その相手モンスタ―の効果は無効化する。これにより、フルの戦闘破壊耐性は無効だ。そしてブレイク・ドローを装備したモンスターが戦闘でモンスターを破壊したことにより、デッキからカードをドローする。これで、俺はターンエンドだ」

斎王 LP3800 手札：1  
モンスター：なし

魔法・罫：1 (伏せ)

三沢 LP4000 手札：3  
モンスター：A・O・J ルドラ (攻・重&ブレ)

黒焰トークン (守)

魔法・罫：重力砲 (ルドラ)

ブレイク・ドロー (ルドラ)

1 (セット)

「私のターン。ふふふ、ふふふふふ」  
「な、何がおかしい!」

いきなり堪えきれないように笑いだす斎王を問い詰める三沢。だが、その声はどこか固い。すでにこの場の異様な空気に呑まれかかっているのだ。それが分かっているからこそ、より一層自分に気合を入れようとする。

「これは失礼。ですがね、三沢大地。あなたには見えないでしょうが、すでにあなたが私の前に倒れることになる運命のビジョンが私には

見えているのですよ。そうとも知らず、あなたはその未来に向かってひたすら進み続けている。それを見ることは、私にとってはたまらない楽しみなのですよ」

「本性を現したな、齋王……………」

普段光の結社の構成員たちに見せる紳士っぷりからは予想もできないほどに歪んだ発言に、三沢もまさかここまでとは、と驚愕を隠せない。彼は気づいていない。先ほどよりもさらに、齋王のペースに乗せられつつあることに。

「それでは、この無意味なデュエルを続けましょう。改めて私のターン、ドロー。魔法カード、『攻撃』封じを発動。この効果により、あなたのルドラは守備表示に変更されます」

A・O・J ルドラ 攻2700↓守1200

「そして通常召喚……………アルカナフォー<sup>セブン</sup>スV<sup>ィー</sup>T<sup>HE</sup> CHA<sup>リ</sup>RI<sup>オット</sup>。このカードの効果もまた、」

「ス、ストップだ！」

この局面でのチャリオットはまずい。なにがなんでも逆位置の効果を出さねば、と祈りを込めて宣言するも、またしてもカードは三沢の思いを嘲笑う。

「しまった！」

「当然、正位置。正位置を得たチャリオットで、守備表示となったルドラを攻撃！ファイラー・キャノン！」

戦車を意味する言葉、チャリオット。だがそのフォルムは実在する戦車と呼ぶにはあまりにも異形な、触手を無数に生やして浮遊する、目玉がいくつもついた2階建てのユーフォーとでもいうべき代物である。その触手から連続して放たれた光線がルドラの装甲を貫き、その体を蝕んでいく。ルドラの能力はあくまでも戦闘特価であり、己の効果も重力砲の効果もすべて攻撃力を上げる役にしかたない。2つの効果が同時に使われたことでレベル5モンスターとしては破格のステータスを手に入れたルドラだったが、その守備力は召喚された時と何も変わってはいない。

アルカナフォー<sup>ス</sup>V<sup>ィー</sup>T<sup>HE</sup> CHA<sup>リ</sup>RI<sup>オット</sup> 攻1700

↓

A・O・J ルドラ 守1200 (破壊)

A・O・J ルドラ 攻1900

チャリオットの効果が発動され、先ほど怪光線を浴びて鉄くずになつたはずのルドラが操り人形のようにぎこちない動きで斎王の場に特殊召喚される。これこそが正位置を得たチャリオットの特特殊能力、戦闘破壊した相手のコントロールを得る力である。

「行きなさい、ルドラ。黒焰トークンに攻撃！」

A・O・J ルドラ 攻1900↓黒焰トークン 守0 (破壊)

「私は、これでターンを終了します」

「俺のターン……………ドロー！よし、来たか！」

このカードが引きたい、と思つたカードがデッキトップに来ていた。ただそれだけのことだが、三沢の気持ちを奮い立たせて希望を持ち直すにはそれで十分だった。

「相手フィールド上に光属性を含むモンスターが2体以上存在するとき、このカードは特殊召喚できる！アーリー・オブ・ジャスティスA・O・J コズミック・クローザーを特殊召喚！」

効果こそ凶悪だが素の攻撃力は下級モンスターとしてもやや低めなチャリオットに、光属性相手でない力を発揮しないルドラ。コズミック・クローザーも別段特筆すべきほどの攻撃力は備えていないとはいえ、それでも上級モンスター程度の2400は持ち合わせている。だが……………

「リバーストラップ、神の宣告を発動。ライフを半分払い、その特殊召喚を無効」

斎王 LP3800↓1900

あつさりは無効にされる特殊召喚。ここで三沢も、何かがおかしいと気がついた。今の特殊召喚を無効にしなかった場合、チャリオットを戦闘破壊することで与えるダメージは700。わざわざ1900ものライフを払って止めたということは、何か他にやりたいことがあるのだろう。デビルやハングドマンといった最上級モンスターのアドバンス召喚か、あるいはアルカナ21番目のカード、ザ・ワールド

を何らかの方法で展開しての効果の発動だろうか。

「いずれにせよ、だいぶ手は読めてきた……逆を考えれば、この場さえ凌げばどうにでもなる！2体目のA・ボムを召喚し、チャリオットに自爆特攻！」

小型の爆弾が空を駆け抜け、迎撃のビームをすべてかわしてチャリオットの体に密着、そして自爆。その衝撃にルドラが巻き込まれ、全てのモンスターがその爆発ののちに消えさった。

A・ボム 攻400（破壊）↓アルカナフォーSVIII―THE

CHARIOT 攻1700

三沢 LP4000↓2700

A・ボム 守300

「自爆特攻によるダメージ、そしてチャリオットの効果によるA・ボムのこちら側への蘇生。2つの条件もいとわずにこちらのモンスターを減らそうとした、その状況判断力には敬意を示しますよ。ですが、少しばかり別方向への配慮が足りなかったようですね」

「ぐふっ……!!」

斎王の言葉も、三沢の耳には届かない。彼は今、突然全身を走った痛みの前に立っているのもやっとな状態である。

「デュエルでダメージが俺に？ま、まさか！」

「その通り、これは闇のゲーム……いえ、むしろ光のゲームと呼びべきでしょうか。もう少しよく考えてからデュエルを挑むべきでしたね。あなたにはまだ昼のダメージが残っているはずです」

「光の、デュエルだと？ふぎ、けるな！」

何とか最初のショックからは立ち直り、多少ふらつきながらもしっかりと前を向く三沢。今の彼にとってはA・ボムの攻撃力400によるダイレクトアタックすらかなりの大ダメージになるが、それを抑えることのできるカードは既がない。

「ターン、エンドだ」

斎王 LP1900 手札：0

モンスター：A・ボム（守）

魔法・罫：なし

三沢 LP2700 手札：2

モンスター：なし

魔法・罫：1（セット）

「私のターン。あなたの考えていることはわかっていますよ、三沢。あなたは私が最上級モンスターの召喚、あるいはザ・ワールドの効果のためにモンスターを残すべく先ほど神の宣告を使ったものだと思っている……そして、それは正しいです。ですが、あなたはこうも考えているはずだ。私のフィールドにはさっきあなたからプレゼントされたA・ボム1体しか存在せず、手札も今ドロートした1枚のみと。このターンに大きな動きはないと安心していませんか？魔法カード、カップ・オブ・エースを発動。このカードはアルカナフォースではありませんが、まあ似たようなものです。さあ、これもまた回転を止めてください」

「ストップ、だ」

「そして、これも当然正位置。よって、私がカードを2枚ドロートします。魔法カード、フォトン・サンクチュアリを発動。効果はもう説明しなくてもいいですよね？」

フォトントークン 守0

フォトントークン 守0

「そしてフォトントークン2体をリリース。これぞ大アルカナの頂点にしてラストナンバー、21番目のカード！アルカナフォーストゥエンティワン X X I — T H E ザ・ W O R L D ツ!!」

世界を暗示するそのカードは、これまでのアルカナフォースよりもさらに大きく、より強く。その威圧感空間を歪ませ、彼の前では時間ですらもその意のままに従うほかはないという。

アルカナフォース X X I — T H E W O R L D 攻3100

「ザ・ワールド……」

ある程度予想はしていたが、まだこのターンは無事だろうと高をくくっていた三沢。だが、まだ終わったわけではない。ザ・ワールドは当たりと外れの落差が極端に激しいアルカナ、この局面だけでも逆位置を引くことができれば勝負は一気にわからなくなる。

「ストップだ！」

その声に合わせ、ゆつくりと頭上の回転スピードが落ちていく。一度逆位置になり、しかしそのまま回転を続けて正位置になり……いや、まだ動いている！そして、そして……。

「当然、正位置。もつとも、さすがにこの効果を使うことはこのターンではできませんがね。ですが、攻撃は可能。運命に抗わないことです、オーバー・カタストロフ！」

ゆつくりと。少しずつ、世界がその体の前に光の力をためてゆく。そして、それが解き放たれた。

アルカナフォースXXI—THE WORLD 攻3100↓三沢（直接攻撃）

その攻撃が引き起こした爆発に、斎王は薄く笑みを浮かべる。これで、自分の周りをかきまわる目障りなネズミを始末できた。彼は有能な人材だ、これからは光の結社のためにその頭脳を生かしてもらおう——そして、その笑みが凍りつく。

「トラップ発動、閃光弾……相手の直接攻撃時、そのターンのエンドフェイズになる」

このターンをしのいだ三沢を見て、いささか認識を改める斎王。斎王の見ていたこのデュエルのラストターンでのビジョンは『三沢が床に倒れていて、その正面に自分が立っている』というもの。てつきり今の攻撃がそれだと思っていたのだが、まだ運命はその時ではないようだ。

斎王は運命を見通す力を持つ。だが、それはあくまでも『何がどのタイミングで起きるか』を見ることができるといふものであり、今の場合でもデュエルのラストターンでのビジョンであることはわかってもそれが具体的に何ターン目なのかまではわからない。そういう時、彼はまだ自分が光の意思を使いこなせていないことを実感するのだった。

「いいでしょう、エンドフェイズです」

「俺の、ターン……ドローっ！」

ちらりとカードを見る。このターンで何とかA・ボムだけでも除去

しない限り、かなり高い確率で斎王はザ・ワールドの効果を使うだろう、ということには三沢にも予想できた。彼は運命の存在を信じないタイプではあるが、少なくとも斎王が何らかの能力を持っていることはわかる。幸いにもA・ボムのステータスは低く、返しの戦闘ダメージさえどうにかできるならばモンスターをうまく引ければ救いはある。

モンスターを引ければ、だが。

「カードを3枚セット……これで、ターン終了だ」

そして、それは叶わない話だった。たった守備力300しかないA・ボムですら、モンスターの存在しない彼の手札にとっては十分な脅威となる。そして、斎王はその隙を見逃さない。

斎王 LP1900 手札：0

モンスター：アルカナフォースXXI—THE WORLD（攻）

A・ボム（守）

魔法・罫：なし

三沢 LP2700 手札：0

モンスター：なし

魔法・罫：3（セット）

「私のターン。モンスターを召喚するのは得策ではないでしょう、もう一度ザ・ワールドによるダイレクトアタック！オーバー・カタストロフ！」

再び光を充填した世界が、今度こそ目の前の敵を排除せんと破壊を解き放つ。そのパワーを前に、三沢は……

「やはり激流葬やミラーフォースを警戒してきたか！俺らしくもなく縁起を担いで入れただけのカードだったんだが、まさか本当に役に立つとはな。トラップ発動、チェンジ・デステニー！このカードは相手の攻撃を無効にしてそのモンスターを守備表示に変え、さらに相手は2つの効果から1つを選択する！」

世界の攻撃は空中で力を失い、三沢と斎王の間には2枚の扉……それぞれ赤と青に塗られた、何の変哲もない簡素な造りの扉が出現する。

「私に選択を、ですか？」



「その通りだ。まず1つは、俺に今攻撃が無効になったモンスター、つまりザ・ワールドの攻撃力の半分のダメージを与える効果。そしてもう1つは、それと同じ数値だけお前のライフを回復する効果。さあ、どちらを選ぶ?」

「では、ザ・ワールドの半分で1550のダメージを受けてもらいますよ」

特に斎王に迷いはなかった。それはそうだろう、彼にとって自分の勝利は確実なもの。ならば、無駄な戦いは少しでも早く切り上げるのが得策だと考えても不思議な点はどこにもない。

そして斎王の選択によりダメージを与える側、赤の扉が開いてその奥に広がる無限の宇宙のようなサムウエアからビームが飛んできて三沢を直撃する。

「うおおおおおっ!!」

三沢 LP2700↓1150

「そしてメイン2に移行。魔法カードインスタントフュージョン融合を発動。1000のライフポイントを払うことでエクストラデッキから融合モンスター、魔道騎士ギルティアを特殊召喚。そしてA・ボム及びシャインエンジェルをリリースしてザ・ワールド正位置の効果を発動、相手ターンをスキップする!ザ・ワールド……時よ生まれ!」

斎王 LP1900↓900

斎王のライフが減り、その命を糧に生まれた光を操る魔法戦士と光を倒すためだけに開発された小型兵器の2体がフィールドからかき消える。瞬間、ザ・ワールド以外のあらゆるものが動きを止めた。世界から色が失われ、モノクロなフィールドの中でただ1人、ザ・ワールドのみが動くことが可能となる。

そして、再び世界に色が戻った。

「そして時は動き出す……私のターン、ドロー。天輪の葬送士を召喚し、その召喚時効果を使用。墓地のレベル1光属性モンスター、フルを蘇生させます」

天輪の葬送士 攻0

アルカナフォース0—THE FOOL 攻0

2体のモンスターの攻撃力は、ともに0。幸いにもチェンジ・デステニーの効果を受けたモンスターは場に存在する限り戦闘に参加できなくなるため、このターンのダイレクトアタックは防げたといつてよい。ただ、それもいつまで続くかはわからないが。

「この2体のモンスターをコストに、再びザ・ワールドの効果を使いましょう。ザ・ワールド、時よ止まれ……………そして時は動き出す。私のターン、ドロー」

「ちっ、まさか今のターンでもザ・ワールドの効果が使えたとはな」

悔しそうに歯噛みする三沢だが、彼にザ・ワールドの効果を防ぐ手立てはない。残り2枚の伏せカードのみで、デッキからカードをドローするチャンスすら与えられずにこのターン、あるいは下手すると次のターンを凌がねばならないことになる。

「ふふふ、精々足掻いてみなさい。私の次なるカードはアルカナフォースI—THE MAGICIAN。さあ、回転を止めなさい」  
「こんなにも正位置ばかり出るなど、確率的に低すぎる！今度こそ、今度こそ逆位置を引いてみせる！ストップだ！」

アルカナフォースI—THE MAGICIAN 攻1100

このデュエルで三沢が止めたアルカナの回転は、計7回。そのうち全てで正位置が出る確率は、たったの128分の1である。もしここでまた正位置を出すならば、その確率はさらに半分の256分の1、とても現実的な数字ではない。

だが、回転をやめたカードはまたしても表を向く。それを見た時の三沢の表情には教学とともに、本人もそれと気づかない程度の納得が含まれていた。理性は確率論からそれを否定していたが、心のどこかではこうなることを予感していたのだ。

「正位置を得たマジシャンで攻撃！アルカナ・マジック！」

ゆらゆらと不気味なステップを踏む道化師の一撃。それに対し、反射的に三沢は残り2枚となった伏せカードの1つを発動させようとして、ギリギリのところだと思いとどまる。なぜならそれは、正位置の効果を得たマジシャンの特殊能力である。

通常だろうと速攻だろうと装備だろうと儀式だろうと、とにかく分

類が魔法カードである者が発動されたターンに自らの攻撃力を元の攻撃力、つまり1100の倍にするというもの。効果の仕様上、収縮などで半減させることもできないすこぶる厄介なこの効果は、三沢が発動させかけた伏せカードは速攻魔法、禁じられた聖槍に対しても当然働く。ちなみにこの超有名カードは、モンスター1体の攻撃力を800ダウンさせる代わりに、このターンあらゆる魔法及び罠カードに対する完全無効化能力を得させるものである。

アルカナフオーサー I-THE MAGICIAN 攻1100↓  
三沢（直接攻撃）

三沢 LP1150↓50

「ぐふうっ!!」

一撃でライフを50まで持っていていかれた三沢。すでにその体はロボロだったのが、それでも彼はまだ諦めていなかった。ひとえに、自らの友人たちを助けるために。絶対にここで引くわけにはいかないのだと。

「さて、ここまでやればもういいでしょう。このターンでさらにザ・ワールドの効果を使用してザ・ワールド自身とマジシャンを墓地に送ればもう1度あなたのターンはスキップされますが、私も今日は少し運命を操りすぎて疲れてしまいました。おそらく、いまカードをドロートしたとしてもあなたのライフを奪うモンスターを引くことはできないでしょう。これで私はターンエンドです」

3回連続で訪れた斎王のターンをなんとかしのぎ切ったものの、その代償は大きい。3枚あった伏せカードは1枚がマジシャンの効果のため発動する意味がほぼない状態にあるため残るは1枚のみとなり、ライフも既に50しか残っていない。おまけに手札も0でモンスターもない。このターンでモンスター、それもマジシャンを倒すかせめてその攻撃を防げるようなものを引かない限り、今までの苦労は全て水の泡である。

「お、俺に…………俺にターンを渡したことを後悔するんだな、斎王……………まずはトラップカード、リミット・リバーズを使用。これにより、俺の、墓地から、攻撃力1000以下のモンスターを、表側攻

撃表示で……特殊、召喚する」

カタパルト・タートル 攻1000

4本の太い足で大地を踏みしめ、背中から伸びたルドラの重力砲とは比べ物にならないほど大きなカタパルトの重みを支える機械亀。

「ばかなー！そんなモンスターはあなたの墓地に……いや、あの時か！」

斎王の脳裏によみがえる、デュエル序盤での1シーン。あの時確かに三沢は、こう言っていた。

『そして魔法カード、アームズ・ホールを発動。このターンの通常召喚権を失う代わりにデッキトップを墓地に送り、その後デッキか墓地の装備魔法を1枚手札に加える』

「あそこでデッキトップのそのカードを墓地に落としていたのですか。ですがそのモンスターも、射出する対象が自身しかいないのならば500ダメージ程度。1ターンに1度しか効果が使えない以上、そのドロカードが攻撃力1800以上のモンスターでなければなりませんね。もつとも、そのカードがそうではないことは既に分かっています」

「お得意の、運命……か……確かにこのカードは、ただの、魔法カードだが……魔法カード、モンスター・スロット……発動！」

巨大な顔を模したスロットの口が開き、3つのリールが回転を始める。そのうち左端がカタパルト・タートル、真ん中がルドラのイラストが移った面で止まった。

「モンスター、スロット……このカードは発動時に、自分の場のモンスターを選択し、それと同じ……レベルのモンスターを1体、俺の、墓地から除外する……そしてその後、カードを1枚……ドロしてそのレベルが……2体の、モンスターと、同じならば……そのモンスターを、特殊……召喚する……」

これまで受けたダメージのせいで少しずつ意識が途切れてきて、もはや立っているのもやっとといった有様の三沢の横でぐるぐるとまわり続ける、3つ目のリール。それを不敵な目で見ると斎王は、むしろ三沢に対する憐みが込み上げてきた。この若者はこれだけ運命を見

せられていて、まだモンスター・スロットなどというはかない希望にすがろうとしているのか、どれだけ願おうと自分の勝利はゆるぎなく、都合よくレベル5のモンスターをドローできるはずがないのにと。

「まあいいでしょう、どうせならたつぷりと絶望しなさい。そして運命に従うのです」

「ドロー……………ッ！」

ふらつく腕。ぼやける視界。そんな状態の中で引いたカードを確かめようとしたところで、彼の足に限界が訪れる。受け身すら取ることもできなかつた彼の体がどさり、と絨毯の上に崩れ落ちる。それでも最後の力でそのカードを改めて確認しようと腕をわずかに動かし

「三沢！」

「あき……………ら……………う？」

うまく焦点の合わない目で彼が声の方へ顔を向けると、そこにはちょうど入り口のドアを蹴破って入ってきた人影が1つ。顔を見ることはできなかつたが、その聞き覚えのある声は清明、遊野清明のものだ。その状態で、人影は声を張り上げる。

「もういいよ、三沢。僕のせいでもそんなボロボロになつて……………でも、大丈夫。あとは、僕が全部始末をつけるから。今までありがとう、あとはゆっくり寝ててよ」

「俺……………は……………」

ポン、と背中をたたき、その人影は三沢を気遣うように声をかけていく。その言葉を聞き、三沢の中で張りつめていた糸が切れた。最後の力を振り絞るのをやめ、心地よい眠りの中に引き込まれていく。

「そう、か……………よか、つた……………」

最後にそれだけ言い残し、完全に意識を失う三沢。斎王の見たビジョン通り、最後に倒れているのは三沢であった。

だが、あのビジョンにはその横に座るあの人物はいなかつたはずだ。声を掛けようとした斎王だが、その前にその人影が斎王の方を不敵な顔で向き直つた。

「ほらよ、斎王様。間に合ってよかったぜ、俺の助け」

「あなたがなぜここに来ているのです？」

その質問に肩をすくめる人影の正体は、ユーノ。ある意味では、去年から続く一連の流れの全ての始まりともいえる幽霊である。そんな彼の介入に一瞬自分の洗脳が解けたことも疑ったが、すっかり光の結社に洗脳されきった彼が自発的にそうなることはあり得ない。

「別に。ちよつとした情報が手に入ったんで、気になってきてみただけですよ。そしたら案の定、斎王様が負けかかかってるときたもんだ」「何を言っているのです。私の勝利は既に運命で……………」

そう言った斎王の言葉が、床に落ちた三沢の最後の手札を見て止まる。最後の最後に三沢がモンスター・スロットの効果でドロウしたカードには、こう書かれていた。

アーリー・オブ・ジャステイス

A・O・J リーサル・ウエポン

効果モンスター

星5／闇属性／機械族／攻2200／守 800

このカードが戦闘によって光属性モンスターを破壊し墓地へ送った時、

デッキからカードを1枚ドロウする。

さらに、この効果でドロウしたカードがレベル4以下の闇属性モンスターだった場合、

そのカードを相手に見せて特殊召喚できる。

「馬鹿な!? 攻撃力2200のレベル5モンスターだ!? そんなことあるはずが……………」

「そんなことあるはずが…つって、引いてるんだからどうしようもないさね。清明の声にはまんまと引っかけられてくれたけどな」

斎王はしばし考える。まさか三沢は、自分の見た運命を打ち破ったとでもいうのだろうか。馬鹿な話だ、最終的に自分が立っていて三沢が倒れ伏している状態でデュエルが終わっているのは確かだったではないかと自分に言い聞かせるが、それだとビジョンにはいなかった第三の存在、ユーノのことが説明できない。もしユーノがタイミングよく割り込んでくれなければ、あるいは自分は負けていたのかもしれない

ない。

だがそれも所詮はもしもの話であり、考えても詮無いことである。しばし黙っている斎王をよそに、なにやら自分の懐から一枚のカードを取りだすユーノ。それを空中に向かって無造作に投げつけると、彼の影から腕のようなものが伸びてそのカードを掴みとる。すると、どこからともかく感情を押し殺したかのような声が響いた。

『……………すまない、三沢大地。高潔なる戦士よ。恨むならただ一人、私のみを恨むがいい……………』

「おいおいチャクチャル、それじゃあまるでこつちが悪者みたいじゃないかよ。違うだろ？俺たち光の結社に逆らう奴こそが悪で、斎王様がそいつを粛清なさったんだよ」

『黙るがいい。もつとも、今の貴様には何を言っても無駄だろうがな。では、約束の品は確かに貰い受けた。2度と協力はしない』

その気配は最後にそう言い捨てて、部屋の中から去っていった。

「今のがこの島に存在する闇のカードの1枚ですね。エドに調査させた頃が懐かしいものです」

「ええ。地縛神……………厄介な奴ではありますが、我々正義は必ず勝ちますよ。もつとも、今回はちよつとした取引で協力してもらいましたかね。さっきの清明の声、あれもあいつが喋ってたんですよ。なかなか上手いもんでしょう」

取引、という単語が少し気にかかったものの、何か考えているならばあえて聞くこともあるまいと思いき口をつぐむ斎王。それだけ、ユーノの能力については信頼を置いているのだ。

それをよそに、今はただ眠り続ける三沢。その眠りが覚めた時には今度こそ、彼の精神は光の結社のものとなっていているだろう。そんな不吉な近い未来を暗示するかのように、先ほどまで晴れていた夜空にはいつの間にか雲がかかっていた。

## ターン49 鉄砲水と負の遺産

「うー、眠れな……い……い……う？」

ベッドに倒れこんでからしばらくして。体はだいぶ疲れてるのに、どうも眠ることができない。なんとはなしに目を開けてみて、次の瞬間跳ね起きた。

目の前にあったのは見慣れた天井ではなく、どこかもわからない真つ黒な空間。目に見える範囲全てがひとかけらの明かりもなく、どこまで行ってもひたすら何も無い。その中にただ一つ、僕が寝ているベッドがぼつんと置かれている。

「よう。お目覚めかい、旦那」

「!?」

上半身だけ起き上って辺りを見回していると、目の前にぱつと人の姿が現れた。間違いなくさつきまで誰もいなかったのに、まるでワイプでもしてきたかのように。その人物が男なことは体格や声の調子から分かったけど、なぜかその顔が見えない。首から上の部分だけ影がかかったようになっていて、その輪郭しか見ることができないのだ。ただ、かすかに見えるその口がニヤニヤと笑っている。

「まあ起きなよ、旦那。俺が喋ってるのにいつまでも寝てるなんて、随分と礼儀がなつちやいなじゃないか」

そう言い、ぱちんと指を鳴らす。すると、突然体を支える物がなくなった感覚がした。もつとはつきり言うど、今の今まで寝ていたベッドがふつと掻き消えた。すると当然、支えを失った僕の体は地面に変な体制のまま激突する。

「いてっ」

「おう、そりやすまなかつたね旦那。さてと、少し積もる話でもしようじゃないか」

「話？」

いきなりわけのわからないところに連れてこられて、わけのわからない奴がわけのわからないことを言いだした。いろいろとわけがわからないので、それとなく探りを入れてみる。



「えつと……どちら様？」

「おう、こりや失礼。でもまあさつきの日那もなかなか失礼だったし、ここはひとつあいこつてことでお互いに水に流しておくれよ。それで俺のことだけど、残念ながら名乗ることはできないんだ。なにももったいぶつてるわけじゃない、遠い昔、かれこれ5000年近く前に名前なんてもんは捨てちまったのさ」

5000年前？名前を捨てた？何を言っているのかちよつとよくわからないけどとりあえずわかることがある。この男は危険だ。穏やかな口調と身振りではあるけれど、一皮むけばその外面の中にはどんな本性があるか分かったものではない。もつともこれは特に明確な理由があるわけじゃない、ただの勘だ。もう少し、もう少しだけ様子を見てみよう。

「いやまったく、旦那には感謝してるんだよ？ああ、訳が分からないって顔だね。じゃあもう少し具体的に話そうか。ここまでに何があつたかはだいたい把握したけど、少し前にあのいつまで経っても役立たずな地縛神が受け切れなかった光の波動がほんの少し、ほんの少しだけ旦那の中に入り込んだらう？あの衝撃が俺を、永い永い眠りから解き放ってくれたのさ。礼代わりにとまって少しばかり殺意を高めてやったけど、気に入ってくれたかい？」

今の話はどう考えてもノース校対抗試合で僕がワンキルされた時のことだろう。でも、そこで起きた？今の話とはどんな因果関係が？それにあの口ぶり、おそらくチャクチャルさんのことも知っている。この男、ホントに何者なんだろうか一体。正直、すごく関わり合いはなりたくないけども。

でも、ここ最近悩みの種だった異様な敵意の原因はわかった。

「あれお前の仕業か！正直ね、すんごい迷惑なだけアレ。今すぐ元に戻してよ」

「へ？おいおい、そりやないだろ旦那。ああそうか、これがいわゆるアメリカンジョークってやつね。いや失礼、俺としたことがうまくネタに反応できなかった」

「……………」

どうしよう、まるで会話がつながってる気がしない。脳ミソちゃん  
とついてんだろうかコイツ。

「ま、なんだっていいさ。今日呼び出したのはな、旦那。お前の生温い  
やり方にいい加減嫌気がさしてきたんだよ。だってそうだろ？はっ  
きり言ってお前の心の闇は明らかにお前の温い人生からは不釣り合  
いなぐらいにデカい。だから結構期待してたのに、なんだかずいぶん  
しようもないことばかりやりやがって。お前みたいなのを宝の持  
ち腐れってんだよ、旦那」

「最終的に何が言いたいのかがさっぱり分かんないね。せつかくの長  
話悪いけど、僕にとっちゃあこの世に存在するあらゆる難しい話は専  
門外なのさ」

「そうかそうか、まだとぼけるか。別にそんならそれでいいさ。構え  
な、そこまで言うならお前にもう用はない、地縛神の力ごとまとめて  
俺が有効利用してやるよ。本来ならこんなゲームでわざわざ勝負す  
る必要なんてないんだけどな。知ってるか？地縛神の、つまりダーク  
シグナーの力はその時代において定められた決闘の形式に合わせな  
い限りうまく引きはがせないんだよ」

「そう言っただけで右腕を構えると、ついさっきまで何もなかったはずの腕  
にはいつの間にかデュエルディスクが装着されていた。このパター  
ンはもしやと思っただけの腕を見ると、案の定こっちにもつけた覚えの  
ないデュエルディスクが1つ。さすが夢の中、なんでもありだ。たと  
えそれが、半分も会話がつながらない言葉のデッドボールする気満々  
な相手でも。」

「お前の温いデツキなんぞ、俺が作ったデツキで焼き切ってやるよ。  
いつまでも仲良しごっこじゃ勝てないってのはもう学んだんじゃない  
かったのかね、旦那」

「はいはい、まさか夢の中でまでデュエルとはね。でもまあ、どこでや  
ろうと変わらない、か……それじゃあ、デュエルと洒落込もうか！」  
「デュエル！」

「先行は僕がもらう！オイスターマイスターを召喚し、さらに水属性  
モンスターのマイスターをリリース。シャーククラーケン、オイスター

トークンをダブルで特殊召喚！」

さつきから、なんか妙に愛想がいいというか友好的な態度ばかり取ってくる男。だけど、こうして目の前にいる僕にはわかる。これは、とにかく危険だ。下手をすると三幻魔以上に。だからといってこつちだつて一応はダークシングナー、態度を改める気は特にないけど。それはそれとして、このデュエルも十中八九闇のゲームと見て間違いないだろう。なら、ますます負けるわけにはいかない。命どころか魂まで取られる、あるいはもつとまずいことが起きる可能性もある。

シャークラーケン 攻2400

オイスタートークン 守0

「……………あれ？」

いつも通りに飛び出してくる僕のモンスターたち。その、何もおかしいところがないはずの風景にどこか違和感を感じた。だけど、それがなんだろうか、と思いを巡らす暇はない。

「俺のターン！クク、永続魔法発動、波動キャノン！」

男の場に出現したのは、いかにも危険そうな大きな砲台。発動からのターン数につき1000ものライフダメージを与える恐るべきカードだ。今はまだそこにエネルギーは溜まっていないけど、早めに終わらせないとまずいことになるのは間違いない。

……………と言うとでも思ったか。実は、僕の手札にはすでに速攻魔法、サイクロンが存在しているのだ。このターンは放っておくとして、次の僕のターンになったらさつきと破壊してやろうつと。

「そして悪魔族モンスター、カードガードを召喚。このカードは召喚時に自身にガードカウンターを1つ乗せ、そのカウンターを1ターンに1回別のカードに移し替えることができる。俺は早速この移し替え効果を使い、波動キャノンにガードカウンターを装着！甘いんだよ旦那あ、そんな程度の浅い考え、とつくの昔にお見通しだ！」

カードガード 守500

派手な紅白の、どこかエイのようなデザインの悪魔が波動キャノンの上にぺたりと両手両足を使ってへばりつく。わざわざ守備力50

0程度のモンスターを出してくるなんて、他にいいモンスターがいなかったのか、それとも今のガードカウンターとやらがそんなに大切なんだろうか。

「カードを2枚伏せてえ、フィールド魔法発動、ブラック・ガーデン！これでええ、ターンエンドオオ」

おどけたしぐさの一つ一つが何だか妙に癪に障る。だけど喧嘩は先に熱くなりすぎたほうの負けだ。

清明 LP4000 手札：3

モンスター：シャークラーケン（攻）

オイスタートークン（守）

魔法・罫：なし

??? LP4000 手札：1

モンスター：カードガード（守）

魔法・罫：2（伏せ）

場：ブラック・ガーデン

「僕のターン………ん？」

カードを引く。ここでようやく、さっきの違和感の正体に気が付いた。精霊たちの声が、さつきから全く聞こえないのだ。ここ数日は意図的にその気配や声から目をそらしてたけど、今はどれだけ意識を集中させても何一つ聞こえてこないし感じられない。

何を考えていたのか察したらしく、かすかに見える口元にいやらしい笑みを浮かべる男。

「おいおい旦那、ここは夢の中、インザドリームなんだぜ？精霊がいちいち入ってこれるわけないだろうっての」

「………まあ、筋は通ってるか。改めて僕のターン、水属性のオイスタートークンをリリースして、ジョーズマンをアドバンス召喚！この子の攻撃力は、自分フィールドの水属性1体につき300ポイントアップするよ」

「ブラック・ガーデンの効果！召喚及び特殊召喚されたモンスターの攻撃力の半分をフィールドが吸い取り、その命を養分に花が咲く。一発では殺してやらねえ、じわじわ痛めつけてやる。それが昔からの俺

の流儀なんぞな」

ジョーズマンの体に、牙に、背びれに絡みついてその棘で容赦なく締め付ける無数の茨。生命エネルギーを吸い取ったその力により、血のように赤いバラが一輪ほつと咲く。

ジョーズマン 攻2600↓2900↓1450

ローズ・トークン 攻800

「ぐっ………だけど、それ以外には何の制約もかからないはず！  
シャークラーケンでトークンに攻撃！」

シャークラーケン 攻2400↓ローズ・トークン 攻800（破壊）

??? LP4000↓2400

「そのままジョーズマンで、カードガードに攻撃！」

「まんまとかかったねえ、旦那！俺の発動するトラップカード、アルケミー・サイクルの効果により、カードガードの攻撃力は0になる！」

カードガード 攻1600↓0

ジョーズマン 攻1450↓カードガード 守500（破壊）

アルケミー・サイクルは発動ターンのみ自分フィールドのモンスターへの攻撃力を0にする代わり、自分のモンスターが戦闘破壊されるたびにカードをドロウする効果を持つ。でも、わざわざ1枚のドロウのためにそこまでするだろうか。

カードガード 守500 攻1600↓800↓1100

カードガード 守500 攻1600↓800↓1100

ローズ・トークン 攻800

「んなっ………！」

そこにいたのは、確かに今ジョーズマンの牙によって引き裂かれたはずのカードガード。しかも、それが2体に増えている。

「はっはあ！悪いな旦那、俺の方が1枚上手だったな！カードガードが戦闘破壊された瞬間に俺はトラップカード、ブローケン・ブロッカーを発動していたんだよ！このカードは守備力の方が攻撃力よりデカイ数値のモンスターが守備表示で戦闘破壊された時、同名モンスターを2体まで守備表示で特殊召喚できるのさ。そしてブラック・

ガードンによる攻撃力半減、お前の場へのトークン生成処置が終わってからガードカウンターを乗せる効果が適用され、さらにカードガードのもう一つの効果によって自身に乗ったガードカウンター1つにつき300の攻撃力がアップだ」

「長い長い長い！」

長いうえにとんでもない早口だったから半分ぐらいしか聞いてなかったけど、とりあえず攻撃しない方がよかったのは理解できた。どうしよう、サイクロンをここで使うべきだろうか。さっきまでは使う気だったけど、この男思ったよりもカードの使い方がうまい。となると正直、あの波動キャノンは他のカードの囷のような気がする。こっちがサイクロンを握ってることは向こうも知らないはずだし、もう1ターンだけ様子を見よう。それでもまだ仕掛けてこないなら、さすがに波動キャノンが見過ごせない。その場合はやむを得ないということ、下手にダメージ食らう前にさっさと発動することにしよう。

「ローズ・トークンを守備表示にして、これでターンエンド」

「俺のターン、ドロロー………これで波動キャノンはフィールドに1ターン残ったことになるな、旦那」  
「くっ」

まだだ。あんな挑発には乗らない乗らない。もつとも、サイクロンは手札にあるから今は何かしたくてもできないんだけど。

「それじゃ、カードガード2体の効果発動。自身に乗ってるガードカウンターを取り除いて、波動キャノンに計2つのガードカウンターを上乗せする」

2体のカードガードがまたもや波動キャノンにシールか何かの用にぺたりと引っつく。ただし、先ほどと違い波動キャノンはその奥の方がぼんやりと薄く光っており、少しずつパワーがたまってきているのがよくわかる。

カードガード 攻1100↓800

カードガード 攻1100↓800

「そしてゴゴゴレムを守備表示で召喚」

ゴゴゴレム 守1500 攻1800↓900

ローズ・トークン 攻800

「準備は整った、ブラック・ガーデン第二の効果を発動！このカードとフィールド上の植物族、つまり旦那のフィールドにいるローズ・トークン2体を破壊することで、墓地からその攻撃力合計と同じ攻撃力のモンスターを1体特殊召喚する！来いよ、カードガード！」

カードガード 攻1600↓1900

「よくもまあそんなにクルクルと回るもんだ……！」

というか、これは割とシャレにならない。今はまだ攻撃力2400のシャークラーケンが抑止力になってくれるけど、それがいなくなれば男のフィールドの攻撃力合計はすでに4000をオーバーしている。そうでなくともあの波動キャノンもあるし。

こんな時にユーノがいたらいつも通りの調子で上等上等って笑いながら突破してくれるんだろうけど、今はそのユーノもいない。……もうよそう、このことについて考えるのは。

「来い！」

「言われなくとも、つてな。行け旦那、ジョーズマンに攻撃力1900のカードガードで攻撃！」

音もなく宙を飛んで近づくカードガードの角による一撃。普段ならば楽々対処できたそんな攻撃も、茨に全身を蝕まれている今のジョーズマンにとっては致命傷だ。

カードガード 攻1900↓ジョーズマン 攻1450 (破壊)

清明 LP4000↓3650

「ぐっ!?や、やっぱり……！」

そして案の定襲い掛かる、闇のゲームの衝撃。もう最近はあるんだろうか、このダメージ現実化がデフォなんだろうか。

「はっはあー」想像通りの闇のゲームだぜ、気分はどうだ？カードを2枚セットして、これでターン終了だ」

清明 LP3650 手札：3

モンスター：シャークラーケン (攻)

魔法・罫：なし

??? LP2400 手札：0

モンスター：カードガード(守)

カードガード(守)

カードガード(攻)

ゴゴゴゴレム(守)

魔法・罨：2(伏せ)

「まだまだ！僕のターン、ドロー！」

守備力の低いカードガードを2体まとめて撃破できるツーヘッド・シャークあたりが欲しかったけど、残念ながら都合よくカードは引けない。伏せカードさえなければ迷わず初志貫徹のサイクロン一直線コースだったけど、あの意味ありげに伏せてあるカードが気になる。ただの波動キヤノンを守るためのブラフなのか、それともそう思わせておいての切り札なのか、あるいは何の関係もない汎用カードなのか。んー……よし、決めた。

「サイクロンを発動、対象は波動キヤノンで」

どこからともなく風が吹き、波動キヤノンを空の果てまで吹き飛ばしにかかる。まさかこれだけ展開しておいて激流葬はないだろうし、ここはダメージをきつさとなくして安心してデュエルしていたい。というか、ソリッドビジョンだと波動キヤノンの威圧感がかなり大きくて集中できません。パワーチャージがとても怖い。

「はっはあ！旦那、そんな程度は織り込み済みなんだよお？ガードカウンターの能力発動！カードに乗せられたガードカウンターは、そのカードが破壊されるときの身代わりになることができる！」

ガードカウンターなんて言うからなんとなく嫌な予感はしてたけど、本当に名前そのまんまの能力だったか……仕方ない、このままやるしかない。

「ダブルフィン・シャークを守備表示で召喚、そして効果！このカードの召喚成功時、墓地からレベル3または4の水属性魚族を効果無効の守備表示にして特殊召喚できる！オイスターマイスター、蘇生！」

ダブルフィン・シャーク 攻1000

オイスターマイスター 守200

「これで、攻撃反応でなければ……シャークラーケン、攻撃表示のカー



ドガードに攻撃！」

「自前のガードカウンターは身代わり効果を使えないからねえ。そのまま戦闘破壊だ」

背中に水をジェット噴射する装置をくくりつけてスピードが倍になったシャーククラーケンの突撃が、カードガードの平べったい体を見事に突き破る。体のど真ん中に風穴をあけられた紅白の体が、ダメージに耐えきれず爆発した。

シャーククラーケン 攻2400↓カードガード 攻1900 (破壊)

??? LP2400↓1900

「やったー！」

ここでこの攻撃が通ったのは大きい。もう相手ライフも半分まで削ったし、この調子で落ち着いて対処すればどうにかなる………と思った瞬間、またもや男の口がにやりと邪悪な笑いの形に歪む。

「さすがだね、旦那あ………こんなにも見事に罠にかかってくれるなんてよう！いくらジョーズマンを破壊するためとはいえ、なんで返しのターンに破壊されることが確定してるモンスターを攻撃表示で出したのか考えもしなかったのかい？トラップ発動、自由開放！」

男の発動したトラップ………そこから2つのビームが放たれ、それを浴びたダブルフィン・シャークとシャーククラーケンの姿が忽然と消えた。

「自由開放は俺のモンスターが戦闘で破壊された瞬間にのみ発動することができて、フィールド上からモンスター2体を選択してそいつらを持主のデッキに戻す！デッキバウンスを防げるようなカードは旦那のデッキには入ってないだろ？」

そもそもそんなピンポイントなもの防ぐカードなんてあったっけ。などとのんびり突っ込んでる暇はない！

「おっと、忘れるところだった。トラップ発動、時の機械―タイム・マシーン！モンスターが戦闘破壊された時、そのモンスターをコントローラーの場に復活させる………もう一度働け、カードガード！」

カードガード 攻1600↓1900

「だったらカードを2枚セット、これでターンエンドっ！」

「はっはあ！随分と寂しいフィールドだな、オイ？スタンバイフェイズが来たことで、波動キャノンにさらにパワーがたまる！」

これで2ターン目、もし今発動するならばダメージは2000。単体火力としてはだいぶまずい数値になってきた。

「カードガード2体とゴゴゴレムを攻撃表示、そしてバトルだ！攻撃力800のカードガードで、旦那のオイスターマイスターを攻撃！」

「1度目は防ぐ！トラップ発動、ポセイドン・ウェーブ！その攻撃を無効にして、効果ダメージ800を食らえっ！」

??? LP1700↓900

「はっはあ！なけなしの抵抗かい、旦那？だったら次だ、もう1度カードガードによる攻撃！」

「なんの！トラップ発動、ドレインシールド！その攻撃を無効にして、攻撃力ぶんのライフを回復！」

清明 LP3650↓4450

「だが、ここからは防げないだろ？ゴゴゴレムによる攻撃、ゴゴゴブロー！」

ずしりと重量感のある岩の拳が、いまだ残っていた茨にまわりつかれながらもオイスターマイスターを撃ちぬく。オイスターマイスターは攻撃力こそレベル3の中ではそこそこ高いが、守備力は低いのだ。

ゴゴゴレム 攻900↓オイスターマイスター 守200(破壊)

「そのままカードガードによるダイレクトアタック！こいつはどうやったって防げないのさ！」

カードガード 攻1900↓清明(直接攻撃)

清明 LP4450↓2550

「し、しまった……っ！」

特大のダメージに吹き飛ばされて背中をしたたかに地面に打ち付けながら、今の致命的なミスに気づいて舌打ちする。ポセイドン・

ウェーブを最初の攻撃に使ったのはいい。そうしなければ効果ダメージが通らなかつた。だが、その次のドレインシールドは悪手でしかない。あそこは1発耐えておき、攻撃力が最も高い今の攻撃まで温存しておくべきだった。

「なんで……なんでこんな…………！」

「なんだ、無意識だったのかい？もつともおおかた、オイスターマイスターがやられるところが見たくなかつたとかそんな理由だろうよ！それに、どんな理由にせよ後悔は今更遅いねえ、旦那。ねえ、今どんな気持ちだい？フィールドも手札もカードは0、ライフは既に残り半分。もし次のドロウでブラック・ホールなんかを引いたとしても波動キャノンが処理できない限り勝つことは不可能。神禽王アレクトール………今は入ってないんだよねえ？さてと、俺はカードをセットさせてもらうさ」

「うっ………」

なんでそんなことまで知ってたんだ、昔僕のデッキにアレクトールが入ってたことなんて知ってる人はほとんどいないってのに。いや、これは夢だ。忘れがちだけどあくまで夢の中、細かいところにいちいち突っ込んでたらきりが無い。

「さあ、早く最後のドロウしようや旦那。それで終わればいいよ」

「ふざけるなっ！」

反射的に言い返す。だけど、確かに今の僕のデッキである布陣をどうにかできるカードは存在しない。ここでどんなカードをドロウしようとも、もう何も………。

『その勝負、待った！』

「えっ!？」

「この声………ようやくお出ましかい、この駄神！」

大地を震わすほどの大音声が鳴り響き、足元から暗い紫色の焰が一定の形を作るように吹き出す。その姿はさながら、縦横無尽に荒海を駆けるシャチのような。僕は、この形を知っている。この炎の色を知っている。そしてなにより、この声を知っている。

『すまないな、遅くなつて』

「チャクチャルさん！」

地面からゆつくりと、僕に力をくれた地縛神が浮上する。その巨体は小学校のグラウンドをすっぽり覆い尽くすほど大きく、そして威厳に満ちている。一度聞いてみたことがあるのだが、チャクチャルさんは本来はもつと大きいらしい。あまり大きすぎるのも不便なので、基本的に若干縮めているのだそうだ。

そのチャクチャルさんが、キツと男を睨みつける。もつともチャクチャルさんの顔に目のようなものは見えないのでそちらの方へ向き直っただけなのだが、それでもすさまじいまでの威圧感である。

『……………まさか貴様の顔をまた見ることになるうとはな、  
「えっ?」』

直前の文脈から考えるに、最後に言ったのは男の名前なんだろう。でも、なぜかそれが聞き取れなかった。何か言ったことだけは理解できたけど、何をどうやっていったのか、何文字の名前なのか、それすらもわからない。それに気づいたチャクチャルさんが、軽く舌打ちをする。

『ふん。名前を捨ててまで力を欲したか?昔から何一つ成長していないな、強欲にして傲慢な人間だ』

「はっはあーなんとでも言いなよ、神さんよお。俺はお前が力をくれる、復讐させてくれるっていうからホイホイ誘いに乗ってやったんだ。なのにどうだ?シグナーとかいうふざけた奴に受けた屈辱、俺は二度と忘れねえ。俺は強くなったんじゃねえのかよ!」

「チャクチャルさん、知り合いなの?」

男の剣幕に一瞬黙ったチャクチャルさん。今の会話からだいたい予想はついたけど、本人の口から確かめたかった。

『……………あの男は、5000年前私がダークシグナーとして契約をした、いわゆる先代だ』

「ふむ。やっぱりね」

『む、驚かないのか?いや、話を聞いていればすぐにわかることか』  
「うんうん。僕が聞きたいのはその後だよ。なんでそんなのが今、現代にいるわけ?チャクチャルさんまで出てくるってことは、これはた

だの夢じゃないんでしょ？」

『まあ、な。詳しいことは後々話すから、まずは黙って私の言うことをよく聞いてほしい』

何を言い出すのかはわからないけど、なんだか妙に真剣な様子のチャクチャルさんを見て何か言うのはやめておいた。この神様がここまで真剣なんだ、こちらも真剣に聞くのが筋というものだろう。

「おいおい、1人と1尾で仲良く作戦タイムかい？強い奴ならまだしもそんな甘い奴に入れ込むなんて随分と人を見る目が曇ったもんだな、地縛神サンよお」

「…………チャクチャルさん、昔はどんなキャラだったの？」

僕にしてみれば、ややシリアスさが増してるものの割といつも通りのお方です。常にどこかすつとぼけてる食えない性格の、でもいっだってとても頼りになる神様。

『いや、その名すら捨てた先代。今の発言は聞き捨てならないな、取り消してもらおうか』

「あー？」

『ここにいる遊野清明は、私を扱うだけの力があると私が判断した…………私のマスターだ。マスターへの侮辱は私への侮辱として受け取ろう』

一瞬ぽかんとする。それは男、いや先代も同じだったようだ。けど、なんだか今の言葉を聞いて視界がぼやけてきた。慌てて、チャクチャルさんに気づかれる前に涙をぬぐう。ああ、そうだ。ユーノたちは光の結社に入った。十代は行方不明。なぜか夢想も最近見かけなくなつた。みんなみんな僕の前からいなくなつちやっただけ、それでもまだ僕は一人じゃなかつたんだ。なにせ、こんなに心強い味方がすぐそば、具体的にはデツキの中にいたんだから。

『まあ、なんだ。別に私だけがそう感じているわけではない。霧の王をはじめとして、マスターのデツキの全員は1度たりとも愛想を尽かしたことなどない。マスターが耳をふさいで、私たちの声を聞かないようにしていただけだ』

その補足がまた、僕に響く。みんな、ありがとう。胸の奥でそう呟

くと、なんだか力が湧いてくる気がした。

だが、それが先代にとつては気に食わないらしい。

「けっ、しばらく見ないうちに、随分つまんねえこと言う奴になったもんだねえ。ご立派な友情は結構だがね、旦那。アンタはもう詰んでるってことをいい加減思いだしなよ。当然、旦那が負けたら生かして返す気なんて俺にはないからね?」

「あう。ちや、チャクチャルさくん」

『そこでなぜ私を見る、マスター。よく考えてみてほしいが、ここで私をドロ―したとしてもそれはどう考えても手札事故だ』

あ、自分でそれ言っちゃうんだ。いやまあ確かにそうなんだけど。この局面では絶対引きたくないカードではあるけれど。

「じゃ、じゃあ……………」

「思い出してくれ、私が初めてマスターの前に現れた日のことを。あの時のように、もう一度』

「もう一度?」

初めてチャクチャルさんにあつた日というと、あのカミューラとデュエルした日のことだろう。あの時は確か、本気で願ったんだ。デュエルの神様お願いします、何か逆転の一手を授けてくださいって。闇のゲームによる痛みで死にかかつて、とても本気だった。そうしたら本当に神様が来て、あとでそのことに気づいて思わず笑っちゃったつけ。

『すでに…………すでに、仕込みはできている。あとはマスターの思いが、奴に届くかどうかにかかっている』

奴、とは一体誰なんだろう。それにしても、今のセリフの初めで一瞬チャクチャルさんがためらったような気がしたのが少し気になる。気のせいかもしれないけど、まるでなにかを悔やんでるような。

でも、それも後で覚えてたら聞くとしよう。目を閉じて神経を集中し、デツキトップに手をかける。そのままカードに触れた指先に思いを乗せていると、頭の中に声が聞こえてきた。いや、声ではない。明確な言葉ではないけど、何か意志の塊のようなもの。その気配が僕に近づいてきて、そのまま僕の様子をうかがっているのがわかる。きつ

と、僕の思いとやらを確かめているんだろう。

「大丈夫。僕ならきつと、君の力を使うことができる。だから、僕に力を貸してください。僕の大切な人たちを取り返すために、僕に力をください」

以前、稲石さんに言われたことを思い出す。明確な理由もないのに漠然と強くなりたいなんて言っただって、それで強くなることはできないとかなんとか。今なら、あの質問にも答えることができる。僕が強くなりたいのは、自分のためじゃない。リターンマッチ、特に喧嘩のは好きだけど復讐なんてドロドロしたのは苦手だし、そもそもこれといって憎い奴なんていない。勝ちにこだわったときに使ったあのデッキでは、三沢をはじめとしてたくさんの人を傷つけてしまった。それもまた、僕には似合わない。

「僕は、強くなりたい。大切な人を、今ここにいる大切な時間を守るために。僕は未来を見たい。皆が帰ってきて、また笑いあえる未来を。そんな感じの未来を手に入れるために、力を貸してください」

素直な気持ちで、心に浮かんだままのことを言う。すると、それを聞いていた意志が、何か決心したかのような感情を見せる。そして、デッキトップがしだいに光りだした。最初はピンク色に近い色だったけど、どんどん赤色になっていく。いや、赤という言葉は微妙にふさわしくない。例えるならば、炎の色……それも、神々しさのある聖なる炎の色だ。

チャクチャクさんの方を見る。コクリと、満足げに頷いた。

「いくよ、ドローツ!!」

引いたカードは、僕の見たことのないカード。なかなか長い効果だったけど、読もうとする前にその効果の内容が頭の中になだれ込んできた。なるほど、この能力なら!

「僕のフィールドにはモンスターカードが存在しない」

「ああ、それがどうした!今更新しいカードを手に入れたところで、どうにかなるわけないね!」

「いいや、嬉しいのさ。僕のフィールドにモンスターが存在しないなら、このモンスターの能力が使える」

「何？場にモンスターがいないなら使える能力だつて？」

ここで初めて訝しげな顔、正確には訝しげな表情の口元を見せる先代。その顔に向けてにやりと笑い、手札をばつと見せつけてやる。もつとも、これだけ距離があるとよく見えないだろうけど。

「そうさ。僕のフィールドにモンスターが存在しない時、このカードはリリースなしで通常召喚できる！これが僕の、もう1つの神！天をも焦がす神秘の炎よ、七つの海に栄光を！時械神メタイオン、降臨！」  
金属の腕、金属の胴。その巨体は、チャクチャルさんに勝るとも及ばないサイズを誇る。打が何よりも印象的なのはそのサイズではなく、特徴的な顔である。全体的に鎧のような形状をしているメタイオンには首から上のパーツがなく、顔はその胴体にでっかく映し出されているような格好になっている。

時械神メタイオン 攻0

「攻撃力0、だつて？」

「その通り。だけど、このメタイオンさんはただの攻撃力0じゃない！メタイオンでカードガードに攻撃！」

金属の腕をゆつくりと伸ばし、その指の先から計4本の炎の柱が噴き上がり、先代のフィールドにいた4体のモンスターを残さず清らかな炎に包む。

時械神メタイオン 攻0↓カードガード 攻1900

「させるかよっ！トラップ発動、ミラーフオー……！」

「この瞬間にメタイオンの効果発動！このカードは破壊されず、バトルダメージも受け付けないよ！」

「はっはあ！なるほど、確かに壁としてはなかなかじゃないか。だけど忘れてないかい旦那、こつちにはまだ波動キャノンが残ってるんだよ！」

「確かに僕はバカだけど、そこまでどうしようもなくはないつもりだよ。メタイオンのさらなる効果発動、ケテルの大火<sup>たいか</sup>！戦闘後にこのカード以外のあらゆるモンスターをバウンスして、さらにその数1体につき300ポイントのダメージを与える！戻したモンスターは計4体、そしてお前のライフはもう残り900！」



「な、何!？」

そして炎がおさまったとき、そこにはもう誰もいなかった。4体のモンスターは、天の炎に焼かれたのだ。

??? LP900↓0

「勝った……ありがとうチャクチャルさん、それにメタイオン先生」  
『先生?』

「うん。メタイオンさん、この効果つて切り札っていうより一発逆転の奥の手って感じでしょ?ほら、時代劇とかでもよくいるじゃん。悪代官とかが『先生、お願いします』って言うと『どうれ』とか言つて酒飲むのやめてゆらりと立ち上がる凄腕の人。何となくそんなイメージだから、用心棒のメタイオン先生」

『そ、そうか。まあ本人がいいならいいんじゃないか、マスター』  
「うんー!」

そんなことを言っていると、さつきまで倒れていた先代がむくりと起き上った。

「おい、おま」

「へいへい、旦那。まあ今回はちよいとばかり疲れちゃったし、ここはいったん退散しようかね。だがな、旦那。俺はまだ、復讐を諦めたわけじゃねえ。俺はそのためにだけに力を求めたんだ。それは今でも変わってねえ、そのダークシングナーの力はまた俺に返してもらうぜ。あばよ」

言いたいだけ言つて、出てきたときと同じく忽然と消えた先代。僕がこの力を持つているうちは、また会うことがあるんだろうか。できれば会いたく……ない……な……あ……。

「ごめんチャクチャルさん、もう寝るから話はまた明日ね……ふわあ」

『ああ、お休み。せめて今ぐらいいはゆっくり休んでくれ、マスター』  
それじゃあ、お言葉に甘えて。おやすみなさい。

## ターン50 鉄砲水と優しき闇

朝になって、目が覚める。朝といっても、まだ日が登るまでには少しかかるぐらいの時間だ。ここ最近寝坊気味だったけど、昨夜見た夢の中でその原因だった先代を追い払うことに成功したからか寝覚めもスツキリいい気持ち。

「さて、出ておいでサッカー」

時計を見れば午前7時、まだ登校までにはもう少し時間がある。皿洗いまで終わったところで、久しぶりに会う精霊を呼び出した。じゃれついてきた鮫の頭をよしよしと撫でながら、この後のことについて考えを巡らす。サッカーには非常に申し訳ないけれど、今日の僕は遊ぶためだけにこの子を呼び出したのではないのだ。

「チャクチャルさん、ちよつと検証するから付き合ってくんない？まず、考えないといけないのは光の結社とエドとのつながりがあるのかどうか。正直黒だと思うんだけど、まだこれといった証拠もないし一応はつきりさせておきたいところ」

『シャーク・サッカー……ああ、そのために呼び出したのか。悪くない手だと思うぞ』

「ありがと。だとすると、斎王かエドか。サッカー、どっちの方がいい？」

体全体をひねるようにして首をかしげるコバンザメ。要するに、今からこの子をどちらかの見張りにつけようというのだ。いきなり呼び出しておいでこんなこと頼むのは正直気が進まないけど、もうこれは僕一人でどうにかできるような話じゃなくなってる。だから、この信頼できる精霊たちに力を借りるしかない。ややあって、サッカーがくるりと身をひるがえして窓の外へ出て行った。

「あの方向は……エドの方か。まあ斎王のところには万丈目もいるし、近づかない方がいいか。ありがと、サッカー」

『ふむ、いくら精霊といえども見つかつた時のリスクを考えると単独行動は危険だろうな』

言われてみれば確かに、相方はいたほうがいいだろう。万が一、と

いうこともある。本当なら、そんな危ないことには付きあわせないのが一番なんだけどね。

「でも気づけてよかった。できれば次からはそういうことはもうちよつと早く言っておねチャクチャルさん。じゃあ……キラァー。ラブカ！ サツカーについて行って、同じくエドの監視をお願い。何かあったらすぐに連絡してね」

黄色の体に刃物のようなひれをいくつもつけた古代魚、ラブカを呼び出して同じく外に。さて、あつちはこれでよし、と。あとはこつちでも何か動かなくちゃ。

「とは言うものの、何すればいいのかね」

『ああ、別に何も考えてなかったのか』

呆れ声のチャクチャルさん。でもしよがないんだ、わざわざ校舎まで出てきたのに僕の顔見るだけで光の結社どころかそれ以外の生徒まで全員逃げてつちやうだもん。逆に言うところ、それだけのことをしでかしてきたんだからまあ仕方ないことなんだろうけど。

それにしても、一つ気になる。前は光の結社への無理やり力づく勧誘があったから非構成員はこっそり逃げ回るようにして動き回ってたはずだけど、今はある程度警戒が解かれてる。何か路線変更でもあったんだろうか。

「あ、清明ちゃん！ちよつとおいで！」

売店前まで来たところで、トメさんに呼び止められた。はて、なんだろう。また何かおかずのレシピでも教えてくれるんだろうか。この間教わった少ない油で店売り並みのサクツとしたコロツケを揚げるとやりかたには大いに助けられたからまたああいうのだと嬉しいなあ。

一人でワクワクしながら言われたとおりに売店の中に入る。非デュエリストである売店の人は光の結社に襲われておらず、ずっと前から通常通りに営業を続けている。むしろ光の結社に入った生徒がデッキをそれっぽくしようとする関係上、最近では光属性のパックがと

にかく売れるらしい。

「お久しぶりでーす、トメさん」

「最近顔出さないから心配してたわよ、もう。それでね清明ちゃん、昨日三沢ちゃんからこんなものを渡されてね。俺が明日になってもまだ白い制服を着ているようなら清明にこれを渡してやってくださいって。私はデュエルしないからよくわかんないけど、今日見かけた時も白い制服のままだったから渡さなきゃって思ってたね。はい、受け取ってちょうだい」

「これは……」

渡されたのは、茶封筒が1つ。見た感じ、中に手紙のようなものが入っているようだ。

「あ、もちろん中は見えてないから安心してちょうだい。じゃあ、またいつでもいらつしやい」

「はーい」

売店から出て、受け取ったものをしげしげと眺める。特に変わったところのない、ごくごく普通の100円ショップで売ってるような茶封筒だ。

「どう思う、チャクチャルさん?」

『どうもなにも、中身を見てみないうちは何ともな』

まったくもってその通りなので、封筒の口に手をかける。丁寧に糊付けされたそれをはがそうとしたところで、

「あ、清明。久しぶり、だつて」

「夢想!」

その時タイミングよく、夢想が角を曲がってきた。こちらに気づいた彼女に手を振りつつ、茶封筒をポケットの中にしまいこむ。と、そういうえばノース校の天田からもらった謎の包みもまだ開けてないな。もういい加減今日中には開封しよう。

「もう具合はいいの?」つてき。なんだか最近バトルジャンキーになった、なんて話を聞いたから」

「あー……あはは。うん、あれはちよつとした黒歴史だと思って。それで、夢想はこんなところでどうしたの?」

その質問に別に、と肩をすくめ、すぐ横の方をくいっと指差す彼女。つられてそっちの方を見るが、そこには壁しかない。

「ほら、もうすぐ講演会でしょ？プロの話なら聞いておきたいなーと思ってるね、なんだったって。もうそろそろ場所取りもしておかないと、いい場所なくなっちゃういそうだし」

「ふむふむ。じゃあ、よかったら僕も一緒に行つていい？」

「もちろん、だって」

「…………甘く見てたかな、なんだったって」

「うーん、やっちゃったかー」

ぎつしりと詰まっている人、人、人。どうやらまともにもいい場所を確保しようとするなら、それこそ朝イチで来るぐらいの覚悟が必要だったらしい。まあ相手は史上最年少プロなんだ、これぐらいの注目度はあつて当然だったか。諦めて入り口近くで立ち見していると、クロノス先生がスポットライトを浴びながらデュエル場の真ん中に立つのが見えた。

「アー、アー、ただいまマイクのテスト中なのーネ……………コホン。それでは全校生徒の皆さん、長らくお待ちさせたノーネ。これより史上最年少でプロ入りし、先日は本校の卒業生たるカイザー亮を下す圧倒的な実力を見せたエド・フェニックスさんにお越しいただいてますー  
ノ」

その後もぺらぺらと上機嫌でしゃべり続けるクロノス先生。あの人、基本いい人なんだけどあのミーハーな部分はもうちつとなんとかならないもんだろうか。機嫌がいいオーラが全身から出まくってる。

「話、長いね。だつてさ」

じつと待つのにしびれを切らしたのか、こちらに顔を寄せてひそひそとささやいてくる夢想。近づいた拍子に彼女の長い青髪が揺れて、あたりにふわっといい匂いが漂う。

『いらぬ世話かもしれないが、顔を隠した方がいいぞ、マスター。一目でわかる程度には赤い』

うるさい！と叫び返したくなるのをやっとの思いで我慢しつつ、そつと顔の向きを変える。気休めにもならないだろうけど、何もやらないよりははるかにマシだろう。

「……………どうしたの？って」

「え!? あー、いやー、そのね! 別に、別に何も無いよー、うん。確かに長いね、あはは」

「本当、どうしたの? 変な清明」

まだ何か言いたそうな夢想だったが、ちょうどその時クロノス先生の話が終わった。それとほぼ同時に、入場口の向こうからサツカーとラブカの2体がチラリと見えた。向こうも見られてることに気づいて、こちらに軽くヒレを振ってみせてくる。無事でよかった。

そしてエドが現れ、軽く笑って手を振ったりしながらクロノス先生からマイクを受け取る。一拍置いてから、いかにもプロらしい朗々とした声で話し始めた。

「アカデミアの皆さん、こんにちは。本日は私のような者のためにわざわざお集まりいただき、ありがとうございます。さて、本日の予定はこれより講演会……………でしたが、その前に一つ余興を挟みたいと思います」

余興。その単語に、場内が軽くざわつく。クロノス先生やナポレオン教頭もあの反応から見ると初耳らしいし、エドが1人で考え付いたんだろうか。それにしても、エドは喋りがうまい。聞く側の心理をつかむ言葉を発するタイミングや声のトーンを完璧にマスターしていて、話術だけでも食っていけるんじゃないかってレベルだ。

「と言っても、何か難しいことをしようというのではありません。今日、この場にお集まりいただいている中の一人と私がデュエルをする。どうです、簡単でしょう?」

デュエル、ねえ。まあそのプロとして今日はここに來てるんだし、間近でそれを実践するって意味なら別に違和感はない。相手はこのたくさんいる中から適当に決めるのかな、なんてのんびり思いほんの一瞬だけ、まさか当たるわけないだろうと気を抜いてしまった。チャクチャルさんが制止しようとしたみたいだけど、それも一瞬間に

合わず。ゆつくりと観客席を見回していたエドと、目があった。

「では、その遊野先輩。ひとつ手合せお願いしますよ」

先手を取ってきたか。イニシアチブを向こうが取る展開はあんまり好きじゃないからここはスルーしてそつと外に出よう………と一瞬思ったけど、周りの様子をうかがってそれはかなり難しいことだと分かった。最初からこうなることが分かっていたかのように手際よく、周りが白制服に固められている。これはもう、光の結社とエドに何らかの関係があると見てほぼ間違いないとみていいだろう。まあ最初から薄々わかっていたんですけどね。じゃあ最初から気を抜くなって話だけど。

「……………サツカー！ラブカ！お疲れ様、戻っておいで！夢想、合図したら一気に走り抜けるよ！」

予定変更。こつそり退出できないなら、実力行使で突破あるのみ。ただどおかしい。かなり大声で呼んだのに、いつまでたってもサツカーとラブカが帰ってこない。

「おつと、お前の探し物はこれか？」

「あ、あらら……………」

おかしいと思つたら、万丈目がドヤ顔で2匹の尻尾を掴んで持ち上げて見えた。そんなアンタ漁師が獲物の自慢するんじやないんだからもう少し丁寧に扱ってほしいね。申し訳なさそうな顔つきに2匹に気にしないで、と手を振る。しかしこれ、今思つただけど精霊が見えない人たちからしたらドヤ顔で何かを握ってる風に片手を上げる万丈目と、そこに向かって苦笑しながら手を振る僕とか言うよくわからん構図になつてるのか。

そんなことを思っているうちに、包囲の輪がじりじりと狭まってくる。よし、前言撤回。サツカーたちが捕まったままだし、ここで逃げたら夢想到まで迷惑がかかる。それに、彼女の前でとつとこ逃げ出すなんてカツコ悪いことはできないね。男は見栄張つてなんぼの生き物。

どうせやるならとことん派手にやりたいので、びしつとデュエル場の中央で仁王立ちするエドに向かって指を突きつける。せつかくな

ので前口上の1つでも叩き付けてやろう。

「それじゃあ、デュエルと洒落こ」

「おー！ーいっ!!」

「……………え?」

思わず会場全員の声ハモる。だって、僕らはこの声を知っている。大きく開け放った扉の前に立ち、逆光を背に受けるあの人影は。

「……………十代!」

僕の親友の一人、遊城十代なのだから。

「久しぶりだな、みんな! 帰ってきたら早速なんか面白そうなことやってるじゃないか、そのデュエル俺も混ぜてくれよ!」

「十代、今までどこ行ってたのさ!」

「清明、お前も元に戻ったのか! いやー、それが宇宙に行ってナントカ星人っていう喋るイルカと会ったりして、もうとにかく大変だったんだぜ。おかげで俺のHEROデッキに新しい仲間たちが増えたんだけどな。お前にも後で見せてやるよ。まあ積もる話は後でするとして、随分と白い制服が増えたじゃないか」

「ま、こつちも色々あったんだよ。さてと、エド。それに万丈目。こつちはこれで一人増えたけど、それでもやろうっての?」

このままやむやになつてくれると、こちらとしても体勢を立て直せるから大変ありがたい。どうやら万丈目はやる気満々のようだが、エドがどう出るだろうか。

「ふっ、いいだろう。今度こそ、僕の本物のHEROで……………」

「ここは撤退しよう、エド」

同じくやる気だったらしいエドと僕らの前にスツと割り込むようにして入ってきた1つの影。昨日までの黒髪から万丈目のような銀髪に代わってこそいるが、見間違えようがない。三沢だ。

「なんだと? おい三沢、一体どういうことだ」

どこか昨日までと様子が違う。そう思えるのは、多分髪の毛の色が変わったからというだけではないはずだ。もっと何か、そんな外面的なことじゃなくて根本的なところで大きな変化があったような。考えすぎ、なのかなあ。



「この二人を同時に相手にするのはまずい、と言ってるのさ。例えばエド、君であつても勝つかどうかは五分五分、いや、それより少し不利なぐらいだと思う。この一年間でこの二人を見てきた俺にはわかる、今みたいな目をしてる時にはまず負けないんだ」

「バカバカしい、そんなこと……」

「いいえ、三沢君の言うとおりです。ここは大人しく撤退しましょう。元々今日排除する予定だったのは遊野清明ただ一人、遊城十代という不確定要素が入り込んだ時点であやがついた、ということです。これもあるいは、運命の一つなのかもしれません」

「齋王……」

いつの間に来ていたのだろうか、三沢の言葉を遮る齋王。エドも齋王には頭が上がらないらしく、嫌そうな顔をしながらもしぶしぶ僕らに背を向けて引き返していった。肝心のエドがいなくなったことで、他の光の結社も潮が引くように遠ざかっていく。その中で万丈目と三沢、それにさつきから一言も喋らなかつたものの後ろに回り込んでこちらの動きを見張っていた明日香だけは最後までこちらを見ていた。

あつという間に人がいっぱいだったデュエル場には僕と十代、それに夢想の三人しかいなくなった。何となく同時に顔を見合わせて、「戻ろうぜ、レッド寮に。俺、あそこに戻るのも久しぶりなんだよ」

十代の言葉に、静かに頷いた。

「……なるほど、随分いろんなことがあつたんだな。どうりで人数が多いと思つた」

「十代がいなくなつてから、もうこっちはてんやわんやだったからねー。ね、夢想」

「そうだったね、だつて」

所変わつて我らがレッド寮、お茶など出しつつ情報交換タイム。さて、これでこっちにあつたことはだいたい話し終わつたはずだ。

「じゃ、次は十代の番ね。こんなになるまでどこほつつき歩いてたの

き」

「おう！それが話せば長くなるんだけどな……………」

「……………つてわけだ。どうだ、すごいだろ！なんてつたつてネオスは宇宙のヒーローだからな！」

キラキラした目で興奮を隠そうともせず話す十代。このひたむきさは、最近地縛神やらなんやらのおかげですっかりすれちゃった僕も見習いたいと思う。

そしてこの話、他の人ならとてもじゃないけど信じられるようなものじゃない。いつの間にか宇宙にいて喋るイルカがいて人工衛星の中のカードでデッキを組んで変なロボットとデュエルをした？でも、十代の目を見ればわかる。これは、嘘をついたりからかったりしてる目じゃない。ふと横を見ると、夢想も同意見のようだ。そういう不思議なことがあるなんて、これだから世の中面白い。

「なるほどねえ。さてと、十代。そんな面白そうな話を聞かせてくれたからには、当然やることは一つだよな？」

光の結社は大至急どうにかしたい問題なんだけど、デュエリストとしての本能には抗えない。えー、と言いたげな顔をしていながらも決して止めようとはしない夢想も無論、そんな一人である。言いながら外していたデュエルディスクを腕にはめ直し、ぐつと腕を突き出してみせる。それが示す意味を、すぐに彼は察してくれた。

「おう、もちろんだ！部屋のなかじゃ狭いから、外で勝負しようぜ」

「もちろん！」

素早く外に出て適当に距離を取り、その位置でデュエルディスクを起動。同じく起動された十代のデュエルディスクと自動的に反応し、デュエルの準備が整った。

「デュエル！」

「先行は僕！ハンマー・シャークを召喚、そして効果を発動。自分のレベルを1下げて、手札からレベル3以下の水属性を特殊召喚する。キラ・ラブカを守備表示でターンエンド」

ハンマー・シャーク 攻1700 ☆4↓3

キラー・ラブカ 守1500

「後攻は俺だな、ドロー！魔法カード、融合破棄を発動！」

「ゆ、融合破棄？」

十代が取りだしたのは、いつもおなじみの融合に亀裂が入ったようなイラストのカード。

「おう、このカードは手札の融合とエクストラデッキのモンスターを1体墓地に送って、その融合素材モンスター1体を手札から特殊召喚するカードだ。エクストラから新しいHERO、マリン・ネオスを墓地に送ってその融合素材、ネオスを特殊召喚！来い、ネオス！」

白い光が弾けたのかと思った。全体的に流線形なニューヒーロー、ネオスが空の果てから地面に勢いよく着地する。これが、十代の新しいエースカード……………！

E・HERO ネオス 攻2500

「おっと、これで驚いてもらっちゃ困るぜ。な、ネオス。まずは大地の

ネオスペーシアン  
N、グラン・モールを召喚」

N・グラン・モール 攻900

両肩にドリルを二つに割ったようなパーツを装着した出っ歯のモグラ。可愛らしい見た目だが、Nなんてテーマは聞いたことがない。どんな効果があるか分かったものじゃないから、気を引き締めないといけないだろう。

「そして見せてやるぜ、ネオスペーシアンとネオスの能力、コンタクト融合を！ネオスとグラン・モールを俺のデッキに戻すことで、このカードは融合召喚できる！E・HERO グラン・ネオス！」

光の戦士とモグラの戦士が同時に空高く飛び上がり、融合の力を使わず1つの戦士に進化する。右腕は肘の先から巨大なドリルと化し、白かった体も茶色がかった渋い色合いへと変化した。

E・HERO グラン・ネオス 攻2500

「おお……………ってあれ？攻撃力上がらないの？」

だがその攻撃力は、素材元のネオスと同じ2500。これなら2体のモンスターのうち、どちらかは残すことができるだろう……………そんな

な甘い考えは、一瞬で吹き飛んだ。

「グラン・ネオスのモンスター効果は1ターンに1度相手モンスター1体を対象に、そのモンスターを手札に戻す！キラァー！ラブカを手札に戻せ、ネビュラスホール！」

「ラ、ラブカーっ！ってことは……………」

左手から出したなんだかよくわからないエネルギー弾に吹っ飛ばされたラブカの方へ注意がそれた一瞬の隙に、ハンマー・シャークの目の前にはもう高速回転するドリルが迫っていた。

E・HERO グラン・ネオス 攻2500↓ハンマー・シャーク  
攻1700(破壊)

清明 LP4000↓3200

「くう…………やるね、十代！でも、今度はこっちの番さ！」

「おっと、まだ俺のバトルフェイズは終了してないぜ？速攻魔法、コンタクト・アウト発動！」

「コンタクト・アウト……………？」

十代が取りだしたのは、またもや聞きなれないカード。ただ、何か嫌な予感がする。あのカードを通すのはまずいと、理屈じやなくてデュエリストの本能が全力で叫ぶ。

もつとも、そんなこと言ってもどうしようもないんですけどね！

「このカードはいわば、コンタクト融合専用の融合解除。コンタクト融合は素材はデッキに戻すことで融合なしでの融合召喚を実現させただけ、このカードはその素材をデッキからもう一度引っ張ってくることができる！再び現れる、グラン・モール！ネオス！」

E・HERO ネオス 攻2500

N・グラン・モール 攻900

「あ、あらら……………」

「グラン・モールとネオスでダイレクトアタック！ドリル・モール！ラス・オブ・ネオス！」

N・グラン・モール 攻900↓清明(直接攻撃)

清明 LP3200↓2300

E・HERO ネオス 攻2500↓清明(直接攻撃)

「……………完敗した」

「まあまあ、清明。たまにはこういうことだってあるから大丈夫だよ、だつてさ。ね？」

まさかワンキルされるとは思わなかったのですすがにちよつと落ち込む。隣で夢想が一生懸命慰めてくれるけど、入学以来いまだに無敗とかいう文字通り無双の化け物デュエリストがそんなこと言つても説得力はないと思う。

「十代、強くなつたね。僕も遊んでたつもりはないんだけど」

「へへっ、ありがとうな！ただ、一気に種類が増えたせいでこれまでの俺のデッキとの折り合いが難しいんだよなあ。どうせなら全員使いたいし」

「……………デッキ枚数、60枚でもいいのよ？」

「いや、40枚に収まるようぎりぎりまで粘つてみるぜ」

「ですよー」

なかなか賛同者が現れてくれない60枚デッキの明日はどつちだ。メリットがほとんどないっていうのはすぐよくわかるんだけど、どれも大切なカードだから結局どれも抜けないんだよね。こればかりはどうしようもない。

とはいえ、やっぱりどこか寂しいもんだ。

「はあ……………」

「あれ？清明、それなに？なんだつて」

「え？ああ、これか」

ため息をついた拍子にポケットから顔をのぞかせた、トメさんからもらった三沢の手紙。せつかくだし、ここで開いてみようかな。

『あ、じゃあ私はこれで引つ込んでいよう』

その声を最後に、チャクチャルさんの気配がすうっと消えていく感覚。薄く糊付けされた開け口を開くと、入っていたのは几帳面に折りたたまれた紙が1枚のみ。どれどれ。

清明へ

これをお前が読んでいるということは、おそらく俺は負けたのだろう。なので、それを前提として話を進めさせてもらう。

まず第一に、今日までの俺は光の結社に本当に入ったわけではない。お前が地縛神の力で光の波動を防いだのと同様、俺もウリアの力で辛うじて洗脳を跳ね返すことに成功した。あれは今考えてもかなり分の悪い賭けだったが、わざと万丈目に負けるような真似をしたのもそのせいだ。

本当はそうやって光の結社の内部に入り込み内部からしかわからない情報を送るなどしてお前たちをサポートしてデュエルアカデミアを取り返すつもりだったのだが、今日の俺とのデュエルでお前の心がかかなり限界だったように思えたから急遽予定を変更することにした。すまない、お前を必要以上に追い込んでしまった。そんなつもりはなかったのだが、誰よりも仲間思いなお前がそうなり、自分を追い込むことをまるで想定していなかった俺にも責任はある。

俺は今日、斎王にデュエルを申し込む。俺が勝てば皆を元に戻してもらおうつもりだったんだが、負けたということはお前と会う時、俺はもう身も心も光の結社に染まりきっているだろう。非力な俺を許してくれ。

あまり時間がないのでゆっくり推敲することもできなかつたから少々雑な文になってしまったが、俺にはもうあまり時間がない。つきさつきこんなこともあろうかと思っただけでイエロー寮に保管しておいた対光属性用の俺のデッキを取りに行ったんだが、どうもそれがもうばれてるらしく、さつきから妙な視線を感じる。斎王のところにとどり着けるとしたら、まだ警戒が薄い今日しかない。

お前の心を追い込んだ俺がこんなことを言うのもおこがましいが、それでもこれだけは言わせてくれ。俺はお前を信じている。お前が立ち向かうならば、どんな状況だって最後の希望が消えることはない。お前にはそう思わせる何かがある。

「……………」

ど、どうしようこれ。わざわざ日付指定の手紙ってどこでどこか嫌な予感はしてたけど、まさか三沢がここまであれこれ考えてたなんて。しかもこれ、元をただせば完全に僕のせいじゃないの。先代なんかの誘惑に乗せられ手派手にやってたせいだこれ。

「うーん、一緒に頑張ろうね、清明。だつてさ」

「へ？」

「そうだぞ、何一人で難しい顔してんだよ」

「夢想、十代」

ポン、ポンと2人から両肩をそれぞれ叩かれる。左右を見るとどちらの笑顔も屈託なく、どうしようどうしようと思っていたことがバカバカしくなるぐらいで。それを見て、なんだかスツと気が楽になった。

「そう、だね」

まだ何をすればいいのかもよくわからないけど、とにかく前に進んでみよう。そうすれば、どう転ぶにせよ何かしらの道は見えてくるはずだ。少なくとも、ここでじっとしてるとは遥かにいい。

## ターン51 鉄砲水と歯車と地獄

「うーん、こりやひどい。あ、ちよつとサッカーそっちのノート取つて……うい、センキユ」

渡された大学ノートをぺらぺらめくり、つらつらと並んだ数字を電卓に打ち込んでいく。これとこれとこれが支出で、あとこれも支出で、それからこっちの数字も支出で……。

「……………寝る」

『そう来ると思った。打ち合わせ通りよろしく頼む』

ノートを閉じて全力で現実逃避しようとした矢先、いきなり背後から霧が湧きだして僕の体を包み込む。ただの霧のはずのそれは物理的な質量があるかのように僕を抑え込んで、その場を離れられないようにした。

「チャークーチャールーサーン、それに霧の王まで、何すんのさまったくもう」

『マスターの性格を考慮した結果、赤字額が6ケタを超えた瞬間に容量オーバーになるのは目に見えたからな。案の定、累計10万と63円になったところで考えるのをやめたか』

「だだだつて10万だよ!!9万までならどうかなる気がするけど6ケタだよ!!これ以上赤字が増えるところなんて見たくないよ!」

『ふむ。なら、そんなマスターにいい言葉を授けてやろう』

「な、何?」

含みたつぷりにそんなことを言うチャクチャルさんになんだか嫌な予感を覚えつつも、一応聞くだけ聞いてみることにする。

『昔から言うだろう。——男は借金背負って一人前、と』

「だったら半人前でいいよ!」

チラツとでも聞いてみようと思った僕が馬鹿だった。さて、そもそもどうしてこんなことを僕がする羽目になったのかというと、それは数時間前にさかのぼる。



「あ、その君。ちよつといいでアールか」

「はい、どしたんですかナポレオン教頭」

廊下を歩いていた僕は背が低くて小太りで、クルリとカールした立派なひげが特徴的な微妙に貴族風ファッションの人に呼び止められた。そう、こんなよくわかんない恰好した人がこの学校の教頭なのだ。あのクロノスせんせ……あー、校長代理にも負けず劣らずにキャラが立っているというなかなかとんでもない人だけど、学校での評判や印象は正直イマイチの一言に尽きる。というのもより立場が上でデュエルも強いクロノス先生と違ってあまり生徒たちと関わらあうことをせず、いまだに全校集会などの先生が全員そろう時にしかその姿を見たことのない一年生がいるほどなのだ。おまけに僕らが入学した時のクロノス先生並みにレッド寮を毛嫌いし、イエロー寮も若干見下してる節がある。ちなみに僕個人としては何度か寮長フラオの代理として話をしたことがあるので比較的知っている人ではあるのだが、どうも何度話しても小悪党という印象がぬぐえない。どうしようもない悪人ではないんだろうけど、多分この人は一生こんな感じの性格なんだろうなーと。

「最近オシリスレッドの会計状況の提出が無いようでアールが、もしかしてなにか見せられない事情でも？たとえばそう、赤字、のような？」

「ほえ？……あー、あー、あー！やですね先生、ちよつとドタバタしてただけですぐに出しますって、ホント」

「ま、吾輩も鬼ではないから明日までは待つてあげるのでアール。万一赤字になった、なんてことがあれば……約束、忘れたとは言わせないのでアール」

一方的にそれだけ言うと、のっしのっしとふんぞり返って歩き去っていく教頭。その背中を見送りながら、多分僕の笑顔は引きつっていたと思う。

さて、そもそもなんでここでひきつった顔になる必要があったのか

？これはさらに前、まだ僕が1年だった時までさかのぼることになる。と言つても話は単純で、まだ今に比べたらはるかに純真だったころの僕がレッド寮を取り壊そうと企んでた教頭の口車に乗せられて、ある1つの約束をしたのだ。それが、

『赤字が出たらその月いっぱいレッド寮は廃止、か』

「そゆこと」

考えてみたらとんでもなくむちゃくちゃな話ではあるが、その挑戦を受けた僕にも責任はあるので何も言えないのだ。ちなみに僕が最近開店休業状態な洋菓子屋『YOU KNOW』を立ち上げたのも、主にこの約束をどうにかするためだったりする。まさか半年もしないうちに電話回線が引けるようになるほど儲かるとは思わなかったけど。

「ただ、そのおかげで去年までの利益はほぼすつからかん。新しく葵ちゃんも入ったし、そこからの売り上げで十分まかなえると思っただけどなあ……………」

『油断大敵か。今回に関しては不可抗力だと私は思うが』

それもこれも、全部あの光の結社のせいなんだ。何日もかけて菓子作りのいろはを叩き込んできた貴重な戦力である葵ちゃんがいなくなったのも痛い。校内のほとんどの生徒があそこに入ったことで敵対してる僕の店に来るはずもなく、客がぱったり来なくなったのが何よりも痛い。しかも、ちょうど砂糖とかをこれまで使ってた安物からちよつとグレードアップさせたタイミングと重なってるときてる。一応さつきは計算してみたけど、正直なところそんなことするまでもなく明らかに大赤字だ。

「さーて、どうすつかねえ」

『別に金を用意するだけならいくらでもやりようはあるのだがな』

「え、どんな!？」

『催眠、恐喝、詐欺その他もろもろだ。この年頃なら警戒心も薄いからなおやりやす……………』

「やつぱり聞いた僕が馬鹿だったよこの邪神!」

チャクチャルさんの発想は物騒すぎる。しかも冗談でもなんでも

なく、素で言ってるあたりが恐ろしい。もうちょっとまともな感性の持ち主に相談したいところだけど、今すぐ会えるような相手は少ない。さすがに帰ってきたばかりの十代にこんな重い話をするのも酷だし、誰かほかの人で味方になってくれそうで、なおかつ人格者……よし、決めた。

「……………ってことなんでクロノス先生、どうすればいいんですかね僕は」

「なんでそれを私に言いに来たノーネ。申し訳ないけれどシニョール清明、この件に関してははつきり証文まで取られてるからいくら私でもナポレオン教頭に言うことを聞かせるのは無理なんでスーノ」

校長室。校長代理の札の『代理』の部分に油性マジックでバツテンを書く暇がある程度には忙しくなさそうだったクロノス先生に相談してみる。残念ながらあまり色よい返事ではなかったけど、ここはいそいそですかと帰るわけにはいかない。

「あと一か月でいいんです、それだけあればいくらでもやりようはありますから」

「そんなこと言われましても……………そもそも、私は校長として」

「……………代理」

「聞こえてるノーネ。とにかく、生徒を正しい方向へ導く立場にありますがスーノ。この場合、対外的に見れば正しいのは明らかに証文を持つてる教頭の方。もしここで私がシニョール清明に手を貸してそれが教育委員会にバレでもしたら、私の進退にもかかわってくるようなことなのーネ。さらに言わせてもらえば、今の教頭は斎王琢磨と一種の協力関係にあることは明白。遺憾ながら光の結社に学校のほとんどを制圧された今は私の地位も飾り同前、逆らうのは得策ではないですーノ」

先生、そりやないでしょう。文句の1つも言いたいのをぐっと我慢する。教育委員会云々は冗談のようだが、後半部分は確かに一理ある。どうもこの調子だと、粘ってみるだけ時間の無駄っぽい。

「……………もういいです。しつれーしましたー」

「はい、気を付けて帰るノーネ。……………ああ、それとこれは独り言なのですが」

「はい？」

帰ろうとして背を向けた矢先、ぼそりと呟くようにクロノス先生が口を開く。

「確か、今レッド寮の取り壊しに積極的なのは校内でもナポレオン教頭だけだったような気がするノーネ。裏を返せば、教頭さえ納得させることができればいいような気もしないような気がするんですー」

「歯切れ悪いですね……………そんなこと言われても、あの人を言葉で説得とかちよつと難易度高すぎますって」

「まったく、できの悪い生徒を持つとこの仕事も大変なノーネ。ここがどこだか一度じっくり考えてみるノーネ」

ほとほとあきれた様子クロノス先生。ここがどこかって？そんなもの、デュエルアカデミアに……………あ、いや、ちよつと待てよ。うん、これならいけるかもしれない。

「先生、ありがとうございます」

「はて、何のことだかさっぱりでスーノ。私は部屋に誰もいないと思っただけなのに、それをこっそり盗み聞きしていたとでも？」

そう言っつと笑い、ウインクする先生。その姿に深々と一礼して部屋を出た。ナポレオン教頭、首を洗って待ってろってんだ！

「てなわけで教頭、僕とデュエルしてください」

「ななな、藪から棒に何を言い出すでアールか!？」

「なにつて、デュエルですよデュエル。僕が勝ったら、レッド寮についての約束はなかったことにしてもらいます」

喋りながら声音や表情を微調整して、さも僕が当たり前のことを言っているような態度に見せかける。割と無茶言ってるのは承知の上だけど、ここで一気に押し切るべし。

「そもそも教頭、ここはデュエルアカデミアですよ？教頭はレッド寮をなくしたいのかもですけど、僕はそんなの嫌です。だったら、デュエルで白黒つけるしかないでしょう」

「そ、そんな横暴が教師に向かつて通るはずないでアール！」

うん、僕もそう思いますよ教頭。とは思っても言わない。態度にも出さない。出さないったら出さない。さらに畳みかけようとしたところで、思わぬ方向から援護が飛んできた。

「話は聞いたぜ、ナポレオン教頭！もしかして、生徒相手にデュエルするのが怖いのかよ！」

「十代!？」

「おう、水臭いじゃないかよ。俺だってオシリスレッドの一員なんだ、変なところで遠慮してないでちゃんと教えてくれよ」

予想外だけど、これは心強い。……結局十代の力を借りちゃったか、僕。

「そろそろ観念してもらいますよ、先生」

「ム、ムウ………だったら、こちらからも条件を二つ出すでアール。ひとつ、試合は明日、お互いの代表同士の一騎打ちで決めること。もうひとつは、その試合でそちらが負けたらその場でオシリスレッドは廃止とすることでアール」

さすがに教頭の肩書は伊達じゃないか。代表を一人選んでの一騎打ちということは、どんな人が出てきてもおかしくはない。わざわざ明日なんて指定したところから見ると、何か助っ人のあてがあるんだろう。さらに、負けたらその場でオシリスレッド廃止。かなり不利な条件を付けられてしまったけど、ここでやっぱりやめますなんて言うものならなんののかんのかんと言って逃げ切られることはほぼ間違いない。

「わかりましたよ、じゃあそれで」

「ふふふ、確かにその言葉聞いたでアール。残りわずかな時間を精々楽しむのでアールよ」

それだけ言うと、僕らに背を向けて立ち去っていく教頭。一体、何をたくらんでるのやら。

それからについては、特にこれといって何もなかった。日が西の空に沈んで、また東の空から昇る。ちなみに十代と僕のどちらが代表になるかは徹夜して話し合ったものの平行線のままだとちも譲らず、その場になってから空気を読んで決めようということでも落ち着いた。そして、今は約束の場所に来ているのだが。

「教頭………ねえ十代、あの人ってさ」

「お、おう。だよなあ」

自信満々、といった様子の子のナポレオン教頭の隣に立つのは、黒いコートに黒い帽子、そして黒手袋の顔の上半分を覆うマスクをつけた巨人。すごく、すごーくあの人見た覚えがある。

「ふふふ、それでは紹介するでアール。今回『偶然』この島に観光に来ていたプロデュエリスト、タイタンさんでアール」

あ、やつぱり。去年僕が倒したインチキ闇のデュエリストだ。とはいえ、だからといって油断はできない。今年に入ってからタイタンはインチキからすつぱり足を洗って本格的なプロデビューを果たし、より進化したデーモンデッキを巧みに使いこなすプレイングセンスと本人の強烈なキャラ性からかなりの人気を誇る大会でも上位の常連なのだ。って、翔の読んでた雑誌あった特集の受け売りだけどもっとも、インチキ云々は僕の創造である。ただ、プロの世界でチェスターモンの耐性が必ず成功するなんていかさまが通用するとは思えないし、ねえ？

「久しぶりだな、お前らあ。あの時のことについては感謝するが、今回は仕事。私情を挟むつもりはないから、覚悟しておけえ」

「さあ、給料三か月分をつぎ込んで呼び寄せた………あ、いや、なんでもないでアール。とにかくプロデュエリストの洗礼を受けるのでアール！」

「タイタン………だったら、また僕が！」

「いや、俺にやらせてくれよ！」

一瞬睨み合って、無言でお互いに拳を突き出す。僕はパー、十代は

グー。うし、相手は僕だ。

「話はまとまったかあ？ならば、いざ……………」

「デュエル!!」

「先行は僕からだ、フィツシユボーグアーチャーを召喚。そして魚族モンスターを召喚したことで、手札からシャーク・サッカーを特殊召喚！」

フィツシユボーグアーチャー 守300

シャーク・サッカー 守1000

「さらにカードを2枚伏せて、これでターンエンド」

僕の伏せたカードは、魚族1体をリリースしてフィールドのカードを破壊、その上ドロまでできるカード、フィツシャーチャージと相手の攻撃を無効にしてうまくいけばダメージのおなじみ防御カード、ポセイドン・ウエーブ。これだけやれば、いくらプロでもそう簡単に展開はできないはずだ。

「守りを固めたかあ。ならば私のターン、ドロ……………魔法カード、大嵐を発動う。魔法及び罾カードをすべて破壊だあ」

「うっ!？」

どうしよう。フィツシャーチャージをチェーン発動すれば一応大嵐を破壊して無理やりドロにつなげられるけど、それをやっちゃうとモンスターの数が減る。ここは……………通す、か。

「そしておろかな埋葬を発動。この効果によりデッキからトリック・デーモンを墓地へ送り、その効果を発動。デッキからデーモンモンスターを1体サーチするう。私に加えるのは、戦慄の凶皇―ジエネシス・デーモン。このカードはレベル8だが、攻守を半分にすることで妥協召喚が可能となる」

戦慄の凶皇―ジエネシス・デーモン 攻3000↓1500 守2000↓1000

黒い玉座に座った、いかにも魔王といった風格のデーモン。だがその威厳も通常の半分のサイズになってしまっただけは形無しである。

「やれ、ジエネシス・デーモン！フィツシユボーグを攻撃だあ！」

形無しとはいえ、皇の名前はハツタリではない。小さいながらも闇

を纏った一撃が、フィッシュボーグの体を一瞬にして包み込みひねりつぶす。

戦慄の凶皇―ジエネシス・デーモン 攻1500↓フィッシュボーグ―アーチャー 守300 (破壊)

「カードを1枚伏せてターンエンドだが、この瞬間にジエネシスの効果が発動するう。妥協召喚したこのカードはエンドフェイズに自壊だあ」

清明 LP4000 手札：1

モンスター：シャーク・サツカー (守)

魔法・罫：なし

タイタン LP4000 手札：3

モンスター：なし

魔法・罫：1 (伏せ)

さて、どうするか。伏せカードがあるとはいえ、今のタイタンの場にモンスターはない。直接攻撃を決められる可能性は十分にあるだろう。だったらあとは、自分の手札と相談か。

「ドロ―……よし来た来た、魔法カード、スター・ブラストを発動！このカードはライフを500の倍数支払って、その分だけ手札か場のモンスターのレベルを下げる事ができるカード。これで1500ライフを払い、手札のシーラカンスのレベルを7から4に変更！そのままシーラカンスを通常召喚！」

魚の王者、シーラカンス。この攻撃力2800の一撃が通れば、この先かなり有利になるはずだ。欲を言えば効果発動のためにもう1枚手札が欲しいところだったけど、無いものねだりはみっともない。

清明 LP4000↓2500

超古深海王シーラカンス 攻2800 ☆7↓4

「ほう……面白い、攻撃してみろお」

「言われなくても！シーラカンスでダイレクトアタック、マリリン・ポロロッカ！」

超古深海王シーラカンス 攻2800↓タイタン (直接攻撃)

タイタン LP4000↓1200



「よしっ！」

攻撃がしつかり決まったのを見て、ちよつとガッツポーズ。ナポレオン教頭があたふたしてるところも見えてちよつと気分がいい。

「だけど、僕はプロデュエリストというものを甘く見ていたらしい。「相変わらずなかなかやるなあ、少年。だが、今の私には及ばん。トランプ発動、フリッグのリングォ！このカードは直接攻撃を受けた時のみ発動でき、その戦闘ダメージ分だけライフを回復。さらに、その数値と同じだけの攻守を持った邪精トークンを特殊召喚するう」

タイタン LP1200↓4000

邪精トークン 攻2800

「攻撃力2800のトークンで、さらにダメージも回復？………エンドフェイズ、スター・ブラストの効果は切れるよ……」

超古深海王シーラカンス ☆4↓7

「もはや手はななろう。私のターン、ヘルポーンデーモンを召喚。さらに魔法カード、テラ・フォーミングを発動してデツキのフィールド魔法1枚をサーチ。ここは地獄への2丁目、デーモンパレス伏魔殿―悪魔の迷宮―をサーチし、そのまま発動だ。ふはははは、私のデーモンよ、その力を今こそ高める時だあ！」

いかにも魔王城といった出で立ちの黒い城がそびえ、その闇の力にあてられた邪精トークンがくねくねと踊り、ヘルポーンデーモンの腕の剣が怪しい光を放ちだす。

邪精トークン 攻2800↓3300

ヘルポーンデーモン 攻1200↓1700

「もうわかつているだろうが、このカードは自分フィールドの悪魔族の攻撃力を500ポイントアップさせる能力を持っている。バトルだ、邪精トークンでシーラカンスに攻撃い！」

2体のモンスターの攻撃力は本来互角。だが、シーラカンスではあのトークンに勝つことはできない。そして、手札も伏せカードも何もない僕では、それをどうすることもできない。

邪精トークン 攻3300↓超古深海王シーラカンス 攻2800

0 (破壊)

清明 LP2500↓2000

「くうっ！シーラカンス！」

「まだまだ、ヘルポーンでシャーク・サッカーに攻撃！」

ヘルポーンデーモン 攻1700↓シャーク・サッカー 守1000  
0 (破壊)

辛うじて、このターンは乗り切った。だけど次のターンにモンスターを引けなければ、僕の負けは確定する。

「ぐ、ぐぐぐ………」

「さっきまでの威勢の良さはどうしたあ？カードを伏せてターンエンドだあ」

清明 LP2000 手札：0

モンスター：なし

魔法・罫：なし

タイタン LP4000 手札：1

モンスター：邪精トークン (攻)

ヘルポーンデーモン (攻)

魔法・罫：1 (伏せ)

場：伏魔殿―悪魔の迷宮―

「僕のターン、ドロロー！」

起死回生の切り札、ではない。正直言ってこんな局面にこそメタイオン先生に出てきてほしかったけど、来ない者に文句言っても仕方がない。きつとまだ動く時ではないのだろう。

「死に出しは嫌いなんだけどな………ごめん、皆。ダブルフィン・シャークを守備表示で召喚して、召喚時効果を使用。墓地からレベル3または4の水属性魚族を1体特殊召喚することができる。もう一回出てきて、サッカー」

ダブルフィン・シャーク 守1200

シャーク・サッカー 守1000

「これで、ターンエンド………」

「どうした、それで終わりかあ？スタンバイフェイズにヘルポーンのコストとして500ライフを支払う。メインフェイズにヘルポーン

をリリースして、迅雷の魔王―スカル・デーモンをアドバンス召喚  
だあ！」

タイタン LP4000↓3500

攻撃力2500を誇る、デュエルキングも愛用していた通常モンスター、デーモンの召喚のリメイクカード。全身がバチバチと帯電するその姿もまた、悪魔の城から力を受ける。

迅雷の魔王―スカル・デーモン 攻2500↓3000

「我がデーモンよ、無力なその魚を引き裂けえ！」

迫りくる2体の高攻撃力モンスター相手に、なすすべもなくやられていく僕のモンスターたち。タイタン……強い。去年のあれは一体なんだったのかと聞きたくなるぐらい強い。

邪精トークン 攻3300↓ダブルフィン・シャーク 守1200

(破壊)

迅雷の魔王―スカル・デーモン 攻3000↓シャーク・サッカー

守1000 (破壊)

清明 LP2000 手札：0

モンスター：なし

魔法・罨：なし

タイタン LP3500 手札：1

モンスター：邪精トークン (攻)

迅雷の魔王―スカル・デーモン (攻)

魔法・罨：1 (伏せ)

場：伏魔殿―悪魔の迷宮―

「僕のターン、ドロ………！まだ、まだ諦めるもんか！魔法カード、ブラック・ホールを発動！フィールドのモンスターを全破壊するこのカードがあれば、戦況はまだ……！」

「いいぞ清明、これならまだ勝負は……！」

そう言いかけた十代のセリフが、途中で止まる。ブラック・ホールに対し、タイタンが伏せカードを発動したのが見えたのだ。

「いいや、その程度では私には勝てん！トラップ発動、魔宮の賄賂！お前に1枚カードを引かせる代わりに、その発動を無効にするう！」

「そ、そんな」

一縷の望みを託して最後に賄賂の効果で引いたカードはステータスもレベルも低い、この局面をひっくり返すにはあまりに力不足な縁の下の方持ちとでもいっべき効果モンスター。そんな、僕が負ける？こんな大事な勝負で？嘘……………」

「フィッシュボーグ・プランターを守備表示、これでターン、エンド……………」

フィッシュボーグ・プランター 守200

「随分とあっけなかつたな、私のターン。スタンバイフェイズに迅雷の魔王のため500ライフを支払い、邪精トークンでフィッシュボーグを攻撃！」

タイタン LP3500↓3000

邪精トークン 攻3300↓フィッシュボーグ・プランター 守200 (破壊)

最後の僕のモンスターもあっけなく破壊され、がら空きのフィールドから自らの必殺技である怒髪天昇撃の構えを取る迅雷の魔王と目が合う。今度ばかりはお手上げだ、手札も、フィールドも、何も無い。ごめん、十代。

「これで終わりだ、迅雷の魔王でダイレクト——」

「ちよつと待つノーネ！」

「むむ、この声はまさかお前でアールか！」

突然投げかけられた、聞き覚えのある声。あの子供の時にどんな育ち方すればそんな語尾が身につくのかさっぱりわからん特徴的な話し方は、この世広しといえどもそうはいない。というか、もしあの人以外でこんな喋り方してる人がいたらびっくりしてひっくり返る自信がある。

「クロノス・デ・メデイチ、ただいま参上ナノーネ！」

「一体何をしに來たでアールか、クロノス代理校長！」

「だから、代理はやめるノーネ！」

もはやお約束と化したやりとりを終え、改めて僕の方に向き直る先生。

「まったく……一人でプロと戦おうなんて、いくらシニョールと言えども無茶が過ぎるノーネ。ナポレオン教頭、話は全部私の耳に届いていましたが、高校生相手にプロデュエリストをぶつけるとはいくらなんでも生徒にとつて不公平すぎると思われるノーネ。よつてこの勝負、私ここから代わりに行わせてもらいますーノー！」

「な、なんと。それは………」

「ふつ、面白い。私はそれでも構わないぞお」

文句を言おうとした教頭を止めたのは、以外にも当事者のタイタン。なんだろう、さつきからこの人の大物オーラがすごい。去年のあの人と同一人物とは思えない。

「と、いうことですシニョール清明。あとはこの実技担当最高責任者、クロノス校長に任せるノーネ」

「でも、先生……」

「ノンノン。生徒は教師の言うことを聞くものであるからして、口答えなどしてはいけませんーノー。……それに、これは私からの贖罪の意味もあるノーネ」

「贖罪？」

不意に大真面目な顔になるクロノス先生。声もやさしく諭すような調子から、急にシリアスな感じに変わる。

「去年あなたはあのタイタンとデュエルしましたね、シニョール清明。これまで黙っていましたが実はあれは、私がこの島に招いたデュエリストだったノーネ。私が教師として未熟だったせいで入学したてのあなたたちを危険な目に合わせてしまいました。もちろんこんなことでその罪が消えるとは思いませんが、せめてこれぐらいは私にやらせてください」

マジか。マジでか。大体おかしいとは思ってたんだよ、なんで学校の廃寮にわざわざ入り込んだのかとか、なんで僕と十代の名前を知ってたのかとか。あの時はそれどころじゃなかったから疑問に思わなかったけど、あとから考えてみれば明らかに変だし。そうか、あのやたらめつたら嫌味で小物だったころのクロノス先生が呼んでたのか。

まあ、もつとも、

「そのことについては気にしないでくださいよ、先生」

「ホワッツ?しかし……………」

「今となつてはいい思い出ですし、それに」

ここで、チラツと自分のデッキを見る。思えば、あの時のタイタンとのデュエルがきっかけで僕はこうやって精霊が見えるようになれたんだ。それに、あの体験が元になって稲石さんとも知り合えた。感謝こそすれ、恨む道理なんてただの1つもありはしない。とはいえ、さすがに精霊とか何とか言っても先生には通じないだろうから、そこは適当にぼかすことにする。

「それに、大事なものがたくさん増えましたし」

「?」

「いえ、なんでもありません」

「さあ、話は終わったかあ?デュエルの続きを始めようではないかあ」  
そう言われデュエルディスクを構えるものの、その前に、と一度手を止めるクロノス先生。

「ルールを確認するノーネ。あなたのターンの中断されたところからスタートで私の手札は5枚から、ライフポイントと墓地に関してはシニョール清明のものをそのまま受け継ぐ。……………異論はありませんか?」

「ええっ!」

「ほう……………」

思わず驚きの声を上げる僕に対して、感心した様子のタイタン。それはそうだろう、何せさつき中断されたところって言ったら僕がやられる寸前、おまけにライフも通常の半分しかない。初期手札に手札誘発のカードがない限り、出てきたその瞬間に敗北確定という話にならないぐらい不利な条件だ。それを、あの先生は今からやってのけようというのだ。

「ふふん、そう簡単に狙ったカードが引けるはず無いでアール。タイタンさん、構わないからやつつけてやるでアールよ」

「クライアントがそう言うんなら、それでよかろう。迅雷の魔王で改

めて攻撃、怒髪天昇撃！」

激しい雷がジグザグに走りながら、先生めがけて襲い掛かる。だけど先生は落ち着き払った顔で、手札から1枚のカードを墓地に送った。

「手札から、速攻のかかしの効果を発動。ダイレクトアタック時、その攻撃を無効にしてバトルフェイズを終了させるノーネ。ちなみにこの効果は対象を取らない者であるからして、そのモンスターの耐性も無意味なんですーノ。……ここ、次の試験に出しますからあなたたちもよく覚えておくように」

帽子をかぶった金属製のかかしが、全ての雷を黒こげになりながらも受け止める。それを見たタイタンは悔しがるところか、以外にもにいつと笑って見せた。

「くくく、面白い。カードを伏せて、俺はこれでターンエンドだあ」

清明↓クロノス LP2000 手札：4

モンスター：なし

魔法・罫：なし

タイタン LP3000 手札：1

モンスター：邪精トークン（攻）

迅雷の魔王―スカル・デーモン（攻）

魔法・罫：1（伏せ）

場：伏魔殿―悪魔の迷宮―

「では私のターン、ドローナノーネ！シニョール清明、あなたのカードを使わせてもらいますーノ。私は、墓地からフィツシュボーグ―ア―チャーの効果を発動！水属性モンスター1体を墓地に送ることで、このカードを蘇生させることができますーノ」

「でも、クロノス先生のデッキは古代の機械でしょう？そこに入る水属性モンスターなんて」

「まったく、まだまだカードプールの知識が足りてないノーネ。確かに水属性機械族は数が少ないうえにそのほとんどが水属性用のカードですが、中にはこんな例外だってあるノーネ。手札からブリキングヨを墓地に送り、アーチャーを蘇生しますーノ」

フィツシユボーグアーチャー 守300

「さらに墓地から、フィツシユボーグプランターの効果を発動。1ターンに1度デッキトップを墓地に送り、そのカードが水属性モンスターならそのまま墓地のこのカードを特殊召喚できるノーネ。私のデッキトップは……同じく水属性モンスター、ブリキンギョ。よつてこのカードも蘇生しますーノ」

フィツシユボーグプランター 守200

あつという間に、僕のカードを巧みに使つて2体のモンスターを揃えたクロノス先生。あの人のデッキで、それが意味するところは一つしかない。

「そして、この2体のモンスターをリリース。来い、アンティーク・ギアゴレム古代の機械巨人  
！」

古代の機械巨人 攻3000

「だが、そのモンスターの攻撃力は辛うじて私の迅雷の魔王と相打ちにできる程度。次のターンに邪精トークンの攻撃で葬り去つてくれるう」

「ぼ、僕が下手にシーラカンスなんかでダイレクトアタックしたせいで……」

「シニョール清明、あまり思い悩むのはあなたの悪い癖でスーノ。魔法カード、巨大化を発動。このカードは私のライフが相手よりも低い時に装備モンスターの攻撃力を元々の倍の数値にするノーネ」

古代の機械巨人 攻3000↓6000

なんと、僕が好き勝手やつて減らしたライフを逆手にとつて無理なく巨大化のメリット効果を発動してのけた。これで、タイタンのモンスターをどちらも破壊できる。

「カードを1枚セットして、ターンエンドするノーネ」

「ええ!？」

絶好の攻撃チャンスに攻撃しなかった先生。一瞬プレミスか、という疑念が胸をよぎった。

「シニョール清明、頼むから自分のカードの効果ぐらい把握しておくノーネ。フィツシユボーグアーチャーの蘇生効果を使ったターン



にバトルフェイズを行う場合、その開始時に自分フィールドの水属性以外のモンスターはすべて破壊されるんですー。私の古代の機械巨人は地属性、破壊を免れるためにはこのターンバトルするわけにはいかないノーネ」

そ、そういえばそんな効果もあつたつけ……：……僕のデッキだと水属性以外のモンスターがそもそも自分フィールドが空の時、というアーチャーの効果発動条件と決定的に相性悪い白銀のスナイパーと同じく相性が悪いうえに効果破壊されないメタイオン先生ぐらいしかいないから忘れてた。いや、でも、これは仕方ないと思う。普段からノーデメリットで使い慣れてたし。

「さすがに教師、といったところかあ。私のターン、ドロー。スタンバィフェイズに迅雷の魔王に500ライフを払い、インターセプト・デーモンを召喚して伏魔殿第二の効果を発動。自分フィールド上のデーモンを選択し、それ以外の悪魔族を除外することでそのレベルと等しいレベルを持つデーモンを特殊召喚できるう。迅雷の魔王を選択してインターセプト・デーモンを除外、そしてレベル6のデーモン、デーモンの巨神をデッキから特殊召喚するう」

タイタン LP3000↓2500

まるでアメフト選手のような格好をした4本腕の悪魔に、迅雷の魔王が文字通りの雷を落とす。一瞬で灰になったインターセプト・デーモンの魂を吸い込んだ伏魔殿の扉が開き、新たな悪魔が1体戦列に加わった。

デーモンの巨神 攻2400↓2900

「そんなにモンスターを並べたところで、私の古代の機械巨人の攻撃力の方が上なことに変わりはないノーネ」

「確かに今は、なあ。だがこの瞬間にトラップ発動、ジエネレーション・チェンジ！自分のモンスターを1体破壊し、そのモンスターと同名カードをデッキからサーチする。デーモンの巨神を対象にとるが、この時さらに巨神の効果を発動。500ポイントのライフを支払うことで、自身の効果破壊を1度だけ無効にできる」

タイタン LP2500↓2000

「むうう、そうきましたか」

「今更気づいたかあ、これで私のライフはお前と同じ、よって巨大化の攻撃力倍加効果は消えることとなる」

古代の機械巨人 攻60000↓30000

「バトルだあ、邪精トークンで攻撃！」

「…………見事な戦術ではありませんが、まだまだ甘いノーネ！トラップ発動、闇よりの罠！このカードは自分のライフが3000ポイント以下の時に1000ライフを払うことで発動し、自分の墓地のトラップ1枚の効果をコピーするノーネ。私が使用するカードは、ポセイドン・ウエーブ！」

ポセイドン・ウエーブ…………最初のターンに僕がセットしたものの、大嵐でフィッシュチャーチャージ共々破壊された攻撃を無効にするカードだ。分厚い水の壁が攻撃を受け止め、跳ね返す。それと同時に巨人の姿が光に包まれ、再び大きくなり始めた。

クロノス LP20000↓10000

「これでああなたの攻撃は無効になりましたが、それだけではないノーネ。再び私のライフがああなたを下回ったことで、巨大化はその効力を再び発揮しますーノ。また、闇よりの罠でコピーしたトラップはその後、ゲームから除外されますーノ」

墓地からポセイドン・ウエーブのカードを抜き取り、それをポケットにおさめる。そうしている間にも、さつき一瞬縮んで見えた巨人の体が再び大きくなっていく。

古代の機械巨人 攻30000↓60000

「ちいい…………貫通能力を持つ古代の機械巨人の前には守備表示にする意味はない、かあ。ターンエンドだ」

クロノス LP10000 手札：1

モンスター：古代の機械巨人（攻・巨大化）

魔法・罠：巨大化（巨人）

タイタン LP20000 手札：1

モンスター：邪精トークン（攻）

迅雷の魔王―スカル・デーモン（攻）

## デーモンの巨神

魔法・罨：なし

場：伏魔殿―悪魔の迷宮―

「私のターン、ドロロー。墓地からフィッシュブローグープランターの効果を発動。デッキトップは水属性モンスターではありませんから、蘇生は失敗したノーネ。ですが、これでよし。ここまでで準備は整ったので、このターンで決めるノーネ!」

「面白い……やれるものならやってみろお!」

「古代の機械巨人で、邪精トークンに攻撃!アルティメット・パウンド!」

ビックサイズの鋼鉄の拳(当社比十割増し)がうなりを上げ、何気にかなり長いことフィールドに留まり続けたトークンをついに破壊する。攻撃力の差は2700、これならタイタンを一撃で仕留められる。

「だけど、その攻撃はあまりにも単調すぎる。」

「手札からクリボーの効果を発動!このカードを墓地に送り、一度だけ戦闘ダメージを0にするう!」

古代の機械巨人 攻6000↓邪精トークン 攻3300(破壊)

「これで、お前の攻撃は……」

「やはり、その程度の対策はしていましたか……速攻魔法、旗鼓堂々を発動!このカードは墓地の装備魔法1枚を選択し、フィールドの正しい装備対象に1ターンのみ装備することが出来る!」

「だが、お前の墓地に装備魔法なぞ……はっ!ま、まさかあ!」

「そのまさかなノーネ。私が先ほどプランターの効果で墓地に送ったカードは閃光の双剣―トライス、このカードを発動コストである手札1枚を踏み倒して古代の機械巨人に装備!」

右ストレートを振り切った姿勢で固まる巨人の両腕に、光る双剣が握られる。巨人の目が赤く光を放つと、その左腕がゆつくりと持ち上がった。

「トライスを装備したモンスターは、攻撃力が500ポイント下がりますが……」

古代の機械巨人 攻6000↓5500

「そのかわり、2回攻撃の能力を得るノーネー！古代の機械巨人、もう1体のデーモンに攻撃！」

「むううううう………！」

古代の機械巨人 攻5500↓迅雷の魔王―スカル・デーモン 攻3000（破壊）

タイタン LP2000↓0

「つ、強い………」

いや別に、疑ってたわけじゃないけど。一瞬の反撃すら許さないクロノス先生の猛攻の前に、あつという間に勝負がついてしまった。もうね、さつきまでの苦労はなんだったのかって。せつかくメタイオン先生の参戦で僕も強くなったのに、周りの人たちの成長がそれ以上で埋もれまくっちゃってる気がする。

「お、覚えてるでアール！」

はあ、とため息をついたところで、ナポレオン教頭が捨て台詞を吐いてこっちにベー、つと舌を出しながら走り去っていくのが視界の端に見えた。短い足でそうやって後ろ見ながら走っていると………あ、やっぱ転んだ。痛そう。

「さてと、どうもこの島に来るとろくなことにならん。表の仕事もあることだし、私もそろそろ帰るとするかあ。少年、今度機会があればまた相手してやろう」

そう言つてタイタンも、ぐずぐずしない辺りがいかにもプロらしいきっぱりとした動きでどこかへ帰っていく。

こうして、後には僕ら3人だけが残った。

「ありがとうございます、先生！」

十代と声を合わせてお礼。実際、今回は先生に来てもらわなかったらかなり危なかった。僕一人で、あのデュエルに勝つことができたとは思えない。というか無理。あんなまな板の上の鯉みたいな状態で持つてかれたら例えデュエルキングだって無理だろう。

「別に、たいしたことではないノーネ。二人とも、私がここに来たことは他の人には内緒ですからね？」

そうこともなげに言い、軽く伸びをしながら校舎に向けて帰っていきクロノス先生。僕もあんな感じの大人になりたいなあ、と思う。だって、カツコいいじゃない。

「なあ清明、俺とデュエルしようぜ！あんな凄いデュエルだったのに俺は見るだけでおしまいなんて、そりやないだろ？」

デュエル、か。いいかもしれない。もつと強くなるには格上の相手とデュエルするのがいいってのはよく聞く話だし、今の僕にはそれが足りてないような気がする。

「よし、それじゃあ……………」

デュエルディスクを構えたところで、ふと違和感に気づいた。心なしかデッキが軽いような気がする。ちょうどカード1枚分ぐらい……………1枚分……………1枚……………

「ああーっ!!」

「ど、どうしたんだよ急に」

ここに来てようやく、大変なことに気づいた。確かさっきのデュエルが終わって、それから……………。

「ク、クロノスせんせい！僕のポセイドン・ウエーブ返して下さいよー!!」

大慌てで走り出す僕を一瞬ぼかんとした顔で見つめ、その後すぐに大笑いしながら追いかけてくる十代。全く、他人事だと思って。そうは思うものの、走りながら僕もこみあげてくる笑いが抑えきれない。何がそんなにかおしいのかは自分でもよくわからないけど、何となく声を出して笑いたい気分だ。

ああもう全く、どうして僕が何かやるとほとんどいつもこんな最後が締まんない感じになっちゃうのかね。……………ま、悪い気分じゃないから別にいいか。

## ターン52 冥府の姫と天球の司

「修学旅行う？」

「そ。修学旅行だつてさ」

「そつかり、もうそんな時期かー……………」

とある午後、一定の距離を置いて周りからちよいちよい睨んでくる白服相手にガンつけなから弁当を食べていると……………どうでもいいけど、弁当つて難しいよね。朝作つて昼食べる関係上どうしても冷えるのは避けられないし、肉は炒め方によつては脂が固まりになって見た目が大変よろしくないことになる。保温機能付きの弁当箱お？そりやまあ憧れの1つではあるけど、んな金がどこにあるつてんですかねえ奥さん。奥さんつて誰だ。だいぶ話がずれたけど、とにかく弁当を食べていたのだ。するとその隣に当然のような顔をして夢が腰を下ろしてドロップパンの袋を開いた。ちなみに中身は人參。夢想にしては珍しくそんなに引きがよくなかつたほうだろうか。

「で、どこに行くんだつて」

「えーつと、クロノス先生がイタリア。ナポレオン教頭がイギリス。樺山先生がカレーの本場インドに行きたいつて言つてた気もするけどいつも通り黙殺されたから、この二つが今のところ最有力候補かな、だつてさ」

ふむ、イタリアかあ。本場ピザ、もとい、ピッツア（巻き舌）の作りかたとか教えてくれるいい講師はいないだろうか。スパゲツテイの茹で具合に関して本場の人と意見交換してみたいし。いいなあ、イタリア。でもインドもいいなあ。よくわからん香辛料とかすつごいいっぱい入ってる本場なんちゃらカレーとかも作れるようになったら料理のバリエーションがぐつと広がることは間違いない。日本人の舌に合うかどうかの問題だけど、少なくとも僕の舌には合うからまあ別にいいだろう。イギリス……………は、うん、まあ。教頭には一人で行つてもらおうかな。

「……………」

そんなことを考えていたら、それが顔に出ていたのか夢がジト目

でこつちを見てきた。

インダストリアル・イリュージョン

「清明、ここはデュエルアカデミアだよ？」 I 2 社のペガ

サスさんの故郷のアメリカならまだわかるけど、特にイベントも聖地もない外国行つてどうするの、だつてさ」

あ、はい。返す言葉もございません。

「となると、そろそろ誰かが別の候補地を出してくるころかね」

「そうなんじゃない、なんだつて。どこに行くにしても、楽しみだね」  
楽しみ、か。どうだろうか。こういうイベントはできるだけ大勢でワイワイやる方が好きなんだけど、僕の友達はほとんど光の結社入りしてるから誘いづらい。そういう意味では、来年とかに引き伸ばしてもらう方がいいなあ。さすがにその頃には光の結社も片付いてるだろうし。

「それでさ、清明」

「うん？」

「その修学旅行なんだけど」

「うんうん」

何気なく聞きながら、卵焼きを一口に放り込む。む、ちよつと砂糖多かつたかな。

「私と、一緒にどこか、行かない？なんて、思ったり………してるんだけど、どうかなー、なんて」

え。

「え、えつと夢想さん？」

「だから、もし暇なら私とどこか行かない？なんて」

マジですか。とは言わない。言いたいけど言わない。あんまりがつつくのはみつともないのだ、ここはクールに行こう。

「へえ………僕とおうふっ!!」

舌噛んだ。すぐく痛い。いかんいかん、あくまでもクールに。一度落ち着くためにお茶を飲もうとしたら、手が震えてペットボトルが倒れた。

「あつ」

僕の方に倒れたんならまだよかつた。ああ濡れちゃったな、で済ん

だだろう。ただ問題は、それが夢のいる方に倒れたということ。そしてもう一つは、その夢の着ている学生服は光の結社ほどじゃないにしろ白を基調としたものであったこと。そして極めつけはそれが染みが取れないことで有名な飲み物、コーラだったことだ。

「すみませんでした」

「い、いや別に、ね。ほら、洗えば……………」

あせあせしながらコーラのかかった部分を持ち上げて手でこする。ジェスチャーをして見せる夢。気を使ってくれてるんだらうけど、それは無駄だ。あの手の飲み物の染みがどれほど恐ろしいものなのか、僕は嫌というほど知っている。小さいころに洗うよう言われて数時間ほど頑張ってみたものの徒労に終わり、最終的には頭にきて白い絵の具を上から塗りたくってやったら速攻でばれて盛大に怒られたのは嫌な思い出だ。

「もうちょっと持ち合わせがあれば今すぐにも弁償できるんだけど、その……………」

「う、ううん！本当に気にしなくていいから、ね!?だって!」

なまじ僕らの経済状況を知ってるだけに下手に文句を言うこともできない彼女の優しさが胸にしみる。これもみんな貧乏が悪い。

「と、とりあえず何かしらの服を用意して……………」  
「手ぬるいですわ!」

ちよつと落ち着いてきたところで、僕の背中に鋭い声が叩き付けられる。それから少し間を開けて、スパーンと小気味いい音を立てて何か柔らかいものが背中当たる感覚。振り向いてみると、白いレースの手袋が床に落ちてるのが見えた。

「そのガサツなあなた、先ほどから無礼なことをしそうだったので監視させていただきましたが、あまりにもレディーに対する態度というものがなっています。よってワタクシから本場イギリス風の決闘を申し込ませていただきます!」

「スパーン!」と音が付きそうなくらいの勢いで現れたその女の子は、



左手に白いレースの手袋をつけた純白のドレスにふわっふわのカー  
ルがついた髪型と、いかにも英国人かそのコスプレのような格好だっ  
た。わざわざこの島にいるってことは生徒で、僕が会った覚えがない  
女子ってことは多分今年入学してすぐ光の結社に捕まったんだろう。  
だからきつとこんな面白おかしい動きづらそうな恰好をしてるんだ。  
本人が楽しそうだからそれでいいと思うけどね。

「夢想、この子の名前わかる？」

「うーん……覚えがないかな、なんだって。こんな派手な子はいな  
かったと思うけど」

「ちよ、ちよつとあなたたち！決闘を申し込んだのですよ、もうちよつ  
と反応なさい！それとワタクシは名誉あるデュエルアカデミアホワ  
イト寮の一員、あまが天下井ですわ、覚えておきなさい！」

目をつぶって反応を待ってるドヤ顔を放置してふたりでひそひそ  
話しこんでいると、すぐに詰め寄ってきた。あっさり名前を教えてく  
れるあたり、根は素直な子なんだろう。

「決闘？決闘デュエルじゃなくて？つてさ」

「あ、いえ、そんなことはありませんわ。ワタクシのようにたおやかな  
淑女は、ガサツな殿方のように自らの拳を振り上げるような真似は致  
しませんもの。手袋を投げたのもあくまで形式的な行事ですのでお  
間違えありませんように」

「そですか」

たとえばどんななりしててもそこはデュエリスト、ということか。実  
際プロデュエリストにはそういう人も多い。実力ももちろんだけど、  
キャラや見た目のインパクトで毎回見てる人を楽しませてくれるタ  
イプの。僕はその人がデュエルを楽しんでるならわりと見た目なん  
かは何でもいいです。

「あら、随分と静かになったわね。まあいいわ、だいたいあなた、その  
赤い恰好が気に入らなかつたのよ。いつまでも廃寮寸前のオシリス  
レッドの制服なんか着て、カッコつけてるつもりなのかしら？こう  
言っちゃあなんですけど、かなり痛い子ですわよそれは」

さつき無視したのがよっぽど効いたらしく、もはやただの悪口に

なっている非難を大人しく聞く。これで相手が男ならブチ切れて手を出してくるまで煽り返すんだけど、うーむ。別に男女差別なんてする気はないけど、やっぱり女の子相手はやりづらい。

『マスター……多分私の影響なんだろうがだいぶ腹黒くなったな』  
そう言うチャクチャルさんはだいぶ丸くなったと思う。元からそんなに悪ってふうには思わなかったけど。ちなみに僕は元から割とこんなだったはず。むしろアカデミアに入ってから大人しくなっただけで。

「ちよつとー聞いてらっしゃるの!？」

「うん、聞いている聞いている。いいよ、デュエルしようってんでしょ? なら今すぐ相手に」

「ねえ清明、ちよつと変わって。私、今日はまだ誰ともデュエルしてないから1回ぐらいデュエルしたいな、だつてさ」

「ええー!?!……しよ、しようがないなあ。じゃあそこの君、悪いけど僕パスね」

いくら夢想の頼みでもデュエルできるならここは断ろうとも思ってたけど、先手を打った夢想がこれ見よがしに茶色いコーラの染みの部分見せつけてきたせいで何も言い返せなくなった。たつた今起動したばかりのデュエルディスクの電源をもう一度切り、一歩下がって椅子に座りなおす。

「へ? え、ちよつと、ワタクシが決闘を申し込んだのはこちらの」

「僕もそう思うけど、ほらあれよあれ。レディーファースト的なサムシングよ」

とでも思わないとやってけない。まあ夢想のことだ、純粋に自分の欲望だけじゃなくて何かしらの訳があるんだろう。

「むうう………いいわよ、もうーこうなったら誰だつて相手するわ、かかっていらつしやい!」

「そう来なくっちゃ、だつて」

「デュエル!!」

「先行はワタクシね、神秘の代行者 アースを召喚! このモンスターが召喚に成功した時、デッキの代行者モンスター1枚……創造の代

行者 ヴィーナスをサーチするわ。さらに魔法カード、天空の宝札を発動。手札の光属性天使族、勝利の導き手フレイヤをゲームから除外することで、カードを2枚ドロップしますわ。これでターンエンドですの」

なんで始まったのか今一つよくわからないデュエルは、よくわからないままに進んでいた。攻撃力1000のモンスターを特にカードを伏せるわけでもなく攻撃表示で出すとは、いかにも怪しいものがある。

でも、そんなことに頓着するような夢想ではない。

「私のターン、マッド・デーモンを召喚してバトル！ボーン・スプラッシュュー！」

腹の中に頭蓋骨を持つ人型の悪魔が、勢いよく無数の骨を吹き付ける。てつきりオネストでも握っているのかと思ったが、以外にも緑の羽根を持つ天使はその攻撃にあっけなく倒れた。

マッド・デーモン 攻1800↓神秘の代行者 アース 攻1000  
0 (破壊)

天下井 LP4000↓3200

「きやあっ！こ、この程度なんでもないわね！」

「そうかな？なんだって。カードを伏せて、ターンエンド」

天下井 LP3200 手札：5

モンスター：なし

魔法・罫：なし

夢想 LP4000 手札：4

モンスター：マッド・デーモン (攻)

魔法・罫：1 (伏せ)

「ワタクシのターン、先ほど加えたヴィーナスを召喚しますわ」

創造の代行者 ヴィーナス 攻1600

続いて召喚されたのは、白と緑を基調としたアースとは違い黄色がかった色で統一されている天使。両腕を組んで黙想するその周りを、赤、青、水色の球体がぐるぐると規則正しく回っている。

「ヴィーナスは500ライフを払うことで、デッキからこのモンス

ターを呼び出すことができます。1000ライフを払うことで、お出でなさい！ホーリーシャイン・ボール神聖なる球体！」

ヴィーナスの周りを飛び回っていた球体のうち赤と水色の球が軌道から外れ、モンスターゾーンにそれぞれ移動する。ステータスの低い通常モンスターとはいえ、これでモンスターの数は一気に3体に増えた。

天下井 LP3200↓2200

神聖なる球体 攻500

神聖なる球体 攻500

「ふふふ、あなたのそのモンスターの効果はもうわかってますのよ！神聖なる球体でマッド・デーモンに攻撃！」

「マッド・デーモンは攻撃を受けた時、強制的に守備表示になる……」

神聖なる球体 攻500↓マッド・デーモン 攻1800↓守0  
(破壊)

「先ほどのお返しです、さらに2体のモンスターでダイレクトアタック！」

「きやつ！」

神聖なる球体 攻500↓夢想 (直接攻撃)

夢想 LP4000↓3500

創造の代行者 ヴィーナス 攻1600↓夢想 (直接攻撃)

夢想 LP3500↓1900

「うう、ちょっと勘が鈍っちゃったかな？」

「あら、言い訳ですか？ですが容赦は致しませんよ、メイン2にカードを2枚セットして、ターンを終了」

「夢想ー、えらく調子悪いけど体調悪いの？」

彼女にしては珍しいイマイチな立ち上がりだがだんだん心配になってきて思わず声をかける。さっきのドローパーンの時も思ったけど、どうもパツとしないというかなんというか。まあ彼女だって人間だし、そんなときもあるんだろうとは思うけどね。

「私は平気………ドロー、魔法カード、ワン・フォー・ワンを発動させてさ。手札1枚をコストに、デッキからレベル1モンスターのワイト

を特殊召喚するね。そして今捨てたワイトプリンスは、墓地に送られた時にデッキか手札からワイトとワイト夫人を墓地に送ることができる。この2枚をデッキから墓地へ移動、なんだって」

ワイト 攻300

きよとんとした顔でワイトを見つめる天下井。まあ無理もない、ワイト本人のステータスはヴィーナスはおろか球にすら勝てないのだから、女子にとっては特に何も感じないだろう。だけど男子にとっては違う。現にワイトの姿を見た瞬間、周りにいた光の結社の男子のうち約3割の顔色が変わった。というのもワイトは彼女のデッキの中である意味ではワイトキングやドラゴネクロ以上のトラウマ製造機であり、彼女にとつての裏のエースとでもいべき存在なのだ。その武勇伝は男子の間に広く伝わっており、新学期が始まって一週間の時点でワイトキングばかり警戒して守護神の矛をつけたワイトに殴り殺された、彼女に『俺が勝ったら付き合って以下略』といかいうふざけた条件でデュエルを申し込んでぼっこぼこにされたオベリスブルー生の数が最近ついに50人を突破したというのは(男子の間では)割と有名な話である。

「装備魔法、守護神の矛をワイトに装備。このカードの効果で、ワイトの攻撃力は……」

「っ!?そんなことさせないわよ!トラップ発動、神の宣告!ワタクシのライフを半分にして、その発動は無効にしますわ!」

天下井 LP2200→1100

白い服のおじいちゃんが天から後光とともに降りてきて、ワイトが手にしようとしていた矛をぺしっとはたき落としてまた後光とともに天に返っていった。相変わらず、神の警告のソリッドビジョン演出は無駄に気合が入っている。なんでも、この世に存在するあらゆる警告で無効にできるカードに対して専用モーションが用意されているらしい。青眼とかの実質検証不可能なカードを除いた全カードでの検証動画とかもあったけど、長すぎて途中で見るのやめちゃったんだよね。再生時間がものすごいことになってたのを見た衝撃は今でも覚えてるし。

「だけど、そんな話も今は特に関係ない。守護神の矛が無効になった以上、ワイトに攻めるすべはないのだ。」

「だったら、このワイトをリリースしてアドバンス召喚！龍骨鬼！」  
しかし、そこで終わるような夢想ではない。というか、その程度の相手ならいくらなんでも学校中の全員がこの1年以上ずつと負け越すなんてことになるはずがない。続けて繰り出された次の手は、夢想の操るおなじみのモンスター、龍骨鬼だ。ワイト軍団よりも火力は下がるものの、安定感と地味だがあって困るもんじやない効果が特徴の、骨軍団の副将ポジ。

龍骨鬼 攻2400

「すでに上級モンスターを手札に持っていましたのね……」

「当然。ほら、私ってばカードに選ばれすぎてるからね、だってさ。バトル、竜骨鬼で神聖なる球体に攻撃！」

体の骨を一本おもむろに抜き取ってブーメランのように投げつけた龍骨鬼。ふわふわと浮かんでいるだけの球体は当然それに耐えきれないわけがない……。いや、違う。攻撃の瞬間激しく輝いた球体から、皆のトラウマである忌々しい一組の天使の羽が生えた。

「ふふふ、残念ながらワタクシは先ほどのターンのドロワーで、このカードを手札に加えていましたのよ！あなたがカードに選ばれているというのなら、ワタクシは斎王様に、そしてその偉大なる光の力に選ばれた身。つまりは……」

「長い。早くしてね、だってさ」

「あらら、申し訳ありませんわ。手札からオネストの効果を発動！これでああなたのモンスターは……あら？」

龍骨鬼 攻2400↓2700↓4150↓神聖なる球体 攻500↓2900

ダメージ計算の瞬間、龍骨鬼の攻撃力数値が跳ね上がる。よりリアルな動きを追及するために刻一刻と動き、のんびりしていると勝手にバトル終了まで処理してしまうという微妙に不親切な仕様のソリッドビジョンをあの一瞬の間に確認して変化に気づけるだなんて、この子なかなかできる。

「トラップカード、メタル化・魔法反射装甲を発動。このカードは発動後に攻守300ポイントアップの装備カードになって、さらに装備モンスターが攻撃するときのダメージ計算時に相手の攻撃力の半分だけパワーアップさせるの。ダメージ計算時の攻撃力アップはオネストによる強化のさらに後だから、これなら押し負けないよ、だってさ。なかなか強かったけど、これで私の勝ち……あれ？」

龍骨鬼の骨を叩き付ける一撃は、確かに光の球を粉碎した。だけど妙だ、まだデュエルが続いている。

「はあ、はあ……って、手札からクリボーの効果を使わせていただきましたの。この戦闘でワタクシが受けるダメージは0になりますわよ」「へえ、今年の一年生は本当に優秀な子が多いね、ってさ」

「あら、ワタクシどもの間でも伝説の先輩、無双の女王様にそう言ってもらえるなんて光栄ですわね」

「なにそれ初耳。夢想、そんな二つ名とかもらってんの？いいなー」

「いや、私も初耳なだけ……って言ってるみたい」

「そうでしたの？もうてつきり本人公認かと思いましたが。さあ、することがないならターンエンドして下さらない？」

「え、ちよつとその話もうちよつと詳しく聞かせてくれない？って」

何が起きても余裕たつぷり、といった様子の夢想も、まさか自分に二つ名が（勝手に）つけられていたことは予想外だったらしい。僕にもその気持ちはちよつとわかる。あれ、慣れるまでは結構恥ずかしいからねえ。

「申し訳ありませんが、嫌ですわよ。そんなに聞きたければ、ワタクシたちの仲間になって齋王様に占ってもらったらいかがですか？」

「……もういいよ、だってさ。1枚セットしてターンエンド、みたい」

天下井 LP1100 手札：1

モンスター：創造の代行者 ヴィーナス（攻）

神聖なる球体（攻）

魔法・罨：1（伏せ）

夢想 LP1900 手札：0

モンスター：龍骨鬼（攻・メタル化）

魔法・罨：メタル化・魔法反射装甲（龍）

1（伏せ）

「ふふふ、ようやくワタクシのターンが巡ってきましたわね。ドロカード、マスター・ヒュペリオンの効果を発動！このカードは場か墓地の代行者1体を除外し、手札から特殊召喚できますわ。メリツト効果もちの2700打点がこんなに簡単に特殊召喚できる……まさかマスターの名にふさわしい、代行者のトップとして申し分ない能力ですわね。ちなみに除外はヴィーナスにいたします」

なぜか墓地にいるアースではなく、フィールド上のヴィーナスを除外して召喚された大天使。金色の体と太陽のように燃える翼が何とも眩しく、少しサンングラスが欲しくなってくるぐらいだ。もしかして、デュエルディスクの設定から明度いじったりしてるんだろうか。

マスター・ヒュペリオン 攻2700

「ここでワタクシ、ヒュペリオンの効果を使用しますわ。1ターンに1度墓地の光属性天使族を除外することで、場のカード1枚を破壊いたします！墓地のアースを除外して竜骨鬼を破壊……イリアコン・システイマ・ドクサ！」

ヒュペリオンが体の前で構えていた天球のうち内側から3番目、つまり地球を示す球が光りだし、そこから一筋のレーザーが放たれる。聖なる光の前になすすべなく龍骨鬼の骨が、そして胸にある核の部分が解けて消えていく。

「バトル！これで終わりにしますわ、マスター・ヒュペリオンのダイレクトアタック！」

「針虫の巣窟！」

「針虫……確か自分のデツキからカードを5枚墓地に送るカードでしたわね。構いませんわ、ヒュペリオン！そのまま攻撃なさい！」

夢想がデツキの上から5枚のカードを掴み、一斉に墓地に送る。普段はワイトを墓地に送りつけるために使うカードだけど、今この場にワイトキングはいない。

「危なかった、なんだって。自分の手札が0枚で相手が直接攻撃する



とき、墓地からタスケナイトの効果を発動！1度だけこのモンスターを蘇生して、バトルフェイズは強制終了だよ」

タスケナイト 攻1700

このターンの攻撃をしのぎ切った夢想。とはいえこれで手札も場もすっからかんだ、決して安心できるような状況ではない。

「神聖なる球体は、そうですね。これ以上のオネストがない以上、攻撃表示にする意味がありませんわ。メイン2に移行して守備表示に変更、これでターンエンドですわよ」

神聖なる球体 攻500↓守500

「私のターン、ドローなんだって。ふふふ、来た来た。ワイトキングを召喚するみたい」

「なんですって!?!確かワイトプリンスとワイト夫人には、それぞれ墓地にいる限りワイトとして扱う効果が……!」

「そう。そしてワイトキングの攻撃力は、墓地のワイトの数を1000倍した数値。そして今私の墓地にはさっきまでで4体、さらに針虫で3体の計7体のワイト一族がいるよ、だってさ」

ワイトキング 攻7000

ワイトキング、攻撃してね」

「冗談じゃありませんわ、ちよつとお待ちになりなさい！降なる気がして温存しておいたのは正解でしたわ、ワタクシはメインフェイズ終了前に手札からエフェクト・ヴェーラーの効果を使います!」

「……………しつこいね、だってさ。あ、怒ってるんじゃないからね」

エフェクト・ヴェーラーは対象にするモンスターの効果をエンドフェイズまで無効にする能力を持っている。いわゆる脳筋のワイトキングも、効果を無効にされては元のワイトよりステータスの低いモンスターになってしまう。

ワイトキング 攻7000↓0

「タスケナイトを守備表示にして、ターンエンド」

タスケナイト 攻1700↓守100

「そして、この瞬間にエフェクト・ヴェーラーの効果も切れますわね。まあ問題ありませんわ、ドロー!」

天下井 LP1100 手札：1  
モンスター：マスター・ヒュペリオン（攻）

神聖なる球体（守）

魔法・罨：1（伏せ）

夢想 LP1900 手札：0

モンスター：ワイトキング（攻）

タスケナイト（守）

魔法・罨：なし

ワイトキングのステータスは元に戻った。だけど、さっきのターンに勝負を決められなかったことで夢想のピンチに変わりはない。なにしろ、まだ天下井ちゃん墓地には神聖なる球体が、つまりヒュペリオンの効果コストが1体残っているのだから。

「墓地の神聖なる球体を除外！お受けなさい、イリアコン・システイマ・ドクサ！」

「ワイトキングを対象に墓地からスキル・プリズナーを発動！このターンの間、選んだモンスターに対するモンスター効果を無効にするよ、って」

クルクルと回る天球の中心から2番目の球体から放たれた光が、ワイトキングの正面で見えない壁に阻まれたように霧散する。なかなか思うようにいかないその様子に若干眉をひそめながらも、すぐに気持ちを切り替えたようだ。

「仕方ありませんわね。ですが、まだ終わりではありませんことよ？ フィールド魔法、天空の聖域を発動！このカードが存在する限り、天使族モンスターによるワタクシへの戦闘ダメージは0になりますわ。ですが、それだけじゃありませんの。マスター・ヒュペリオンは天空の聖域のもと、1ターンに2度破壊効果を使うことが可能となります！墓地からオネストを除外してタスケナイトを破壊、もう1度イリアコン・システイマ・ドクサ！」

夢想の墓地にこれ以上の仕掛けはなく、背中に大剣を背負った赤い騎士が光を浴びて破壊される。しかしこれ、完全にぐだってきてるね。いつまでたっても一進一退で全然進まない。だけど、そろそろ

だ。そろそろ何かしらの動きがあってもおかしくない。

「……………ターンエンドですわ」

「ドロー。ねえ、天下井ちゃん」

「はい、なんですの?」

いつになくシリアスな雰囲気です。静かに目の前の相手に話しかける夢想。その様子にさっきまでとは違うものを感じ取ったのか、やや表情を硬くして対応する。

「覚悟してね、だつてさ」

「へ?」

「魔法カード、貪欲な壺を発動。墓地のマッド・デーモン、タスケナイト、龍骨鬼、ワイトメアにワイト夫人をデッキに戻して2枚ドロー。墓地のワイトが減っちゃったから、ワイトキングの攻撃力は5000に下がるんだつてさ」

ワイトキング 攻7000↓5000

「なるほど、ここで貪欲な壺を当たり前のように引きましたか。その運命力は確かに素晴らしいですわね。それだけにもつたいないですわ、斎王様の光の御力があればその能力をさらに高めることだつて簡単でしょうに」

「ふーん。悪いけど、これは私の力じゃないよ、だつてさ。たとえば私が望まなくても、このデッキは私に力を与え続ける。いかなる形であろうとも、私が最終的な勝者になるまで、ね。だから、貴女の言葉は的外れ。私じゃなくてこのデッキそのものを勧誘したら?」つて言ってるみたい」

「は、はい?…どういうことですか?」

あなたなんとか解説しなさい、と言わんばかりの視線がこっちに向けられたのを感じるが、正直僕にも今の言葉の意味はまるつきり分からない。声のトーンやらなんやらから考えるにどうもネタや冗談ではなさそうなんだけど、真剣にしゃべっているとちよつとよくわからない。デッキが強制的に勝たせるだなんて、そんな真似精霊だらけの僕のデッキでも無理だろう。そもそも、夢想には精霊が見えないはずだ。

「うん別に、だって。聞き流してもらって構わないよ、ってさ。魔法カード発動、ドラゴンズ・ミラー龍の鏡。このカードは墓地のモンスターを素材にしてドラゴン族の融合モンスターを呼びだすカード……それじゃあいつものいつてみようか、だってさ。冥府の扉を破りし者よ、其には死すらも生温い。墓地のワイト2体を素材にして融合召喚、冥界龍ドラゴネクロ！」

天空の聖域に浮かぶ空中神殿の一部に亀裂が走り、そのまま神殿を突き破って冥界の龍が長い首を突き出す。風圧によって周りの雲もちぎれて消えてゆき、粉々になった瓦礫がただワイトキングとドラゴネクロの足元に散らばっているのみだ。別に聖域破壊されてないのにね、とか思っても言っではいけない。

「ドラゴネクロ召喚のために墓地のワイトとワイトメアを除外したから、ワイトキングの攻撃力はさらに2000ポイント下がるみたい」

冥界龍 ドラゴネクロ 攻3000

ワイトキング 攻5000↓3000

「いいえ、まだ、まだですわ！ワタクシのこの伏せカードはトラップカード、魂の一撃。あなたの残りライフ、そしてそのモンスターの攻撃力では例えドラゴネクロの特殊能力をもってしてもライフポイントを半分支払うことで自分のモンスター1体の攻撃力を4000マインナスその時点でのライフの数値だけアップさせる、このカードの突破は不可能ですわよ！」

「確かにね、だってさ。でも、だったら戦わないだけ。その眩しい天使には悪いけど、真正面からぶつかることができないなら他のところから回り込ませてもらうよ。魔法カード発動、クロス・アタック。自分フィールドに同じ攻撃力のモンスターが並んだ時、他のモンスターが攻撃できなくなる代わりにそのどちらかは直接攻撃できるようになるみたい。バトル、ワイトキングでダイレクトアタック、螺旋怪談！」

「う、嘘………」

ワイトキング 攻3000↓天下井（直接攻撃）

天下井 LP1100↓0

「おめでと、夢想。ほらほら、そんなところで座ってたら風邪ひくよー」  
「どういたしまして、なんだって………むっ」

ソリッドビジョンが消えて、辺りの風景が天空の聖域からもとの校内に戻っていった。いくら光の結社とはいえ女の子を放っておくのは趣味じゃないので、へなへなと力が抜けたようにその場にへたり込んでいる天下井ちゃんに手を伸ばす。やや夢想の視線がキツイ気がするのはたぶん気のせいだと思いたい。やっぱ怒ってるんだろうな、染みのこと。

「あら、ありがとうございますわ………つてー！ちよつとあなた、ワタクシに気軽に触れないでくださいます!?!」

おっと、思ったより元気なのね。一瞬はぼんやりしたまま僕の手を掴んだものの、すぐにはっとしたように振り払ったかと思うとそのまま立ち上がってスカートを手で踏んづけて転ばない程度に持ち上げながらパタパタとどこかへ走り去ってしまった。

「清明、今ちよつと残念そうじゃなかった?」

「え?いや、別に」

「ふーん。まあいいけど、だつてさ」

やっぱりどこかよそよそしい態度の夢想。………制服のクリーニング代っていくらぐらい出せばいいんだろうか。今月のレッド寮の赤字額をざつと暗算して、いくらぐらいまでならギリギリ出せるか考えていると、底抜けに明るい声が聞こえてきた。

「おーい、ここにいたのか清明! 今光の結社のやつとデュエルしてさ、修学旅行、童実野町に決まったぜ!!」

………え?

一瞬、ほんの一瞬だけ固まってしまった。ただでさえ光の結社関係で気苦労の多い十代に余計な心配をかけたくないので、無理やり笑顔を作り出す。

「そ、そう。デュエリストの聖地じゃん、やったね」

「おう！あー、俺もう今からワクワクが止まらないぜ！」

「あは、あはは……………」

童実野町、か。……………童実野町、か。

だけど、その瞬間自分のことで頭がいっぱいになってた僕は気づかなかった。夢想もまた、その地名を聞いた瞬間に顔がこわばっていたことに。

## ターン53 冥府の姫と純白の龍

窓から見える港が徐々に近づいてきて、ガコン、と船体に軽く衝撃が走る。特にこれといった小競り合いや事故もなく、僕らを乗せた船が童実野埠頭に到着したのだ。

「着いちゃったかあー……」

「童実野町、入学試験以来だぜー」

僕が死んで生き返ることになった地でもあるけど、それだけじゃない。少なくとも卒業までは来ることはないと思ってたんだけど、人生そううまくはいかないもんだ。

『マスター、一体何があったんだ？行先が決まっただけで勝手にそんな調子で、そろそろ私にぐらい教えてもらってもいいだろう』

「あれ、何回か言わなかったっけ？僕の記憶でもなんでも好きに漁っていいよってば」

よくわかんないけど、神様ならそれくらいのことではできるだろう。いくらチャクチャルさん相手でもあんまり歓迎はしないけど、このことについてはあまり思い出したい話じゃないから、自分で話すぐらいならむしろ勝手に探ってくれる方が個人的にはありがたい。

『マスターが言う気になるまで待たせ。例え邪神と呼ばれようと、モラルぐらいは備えている』

「……なんか、ホントに変わったよね。初対面の時はもっと威厳たっぷりだったのに」

『いまさらキャラ作る必要はあるまい』

冗談だか本気だか判別のつきにくいことを呟き、そのまま頭の中のチャクチャルさんが引いていく感覚がする。気を使ってくれてるんだろう、多分。

「えー、それでは皆さん、本日の予定ですが……」

「ああ、失礼。私たちはこの町に少し用事があるので、ここから先は別行動としてもよろしいでしょうか？」

「え？ま、まあ、そういうことなら仕方ないでアール。御機嫌よう」

「ありがとうございます。では」

ぼーっと見てたらそんな会話の後、ぞろぞろと白い集団がどこかへ一斉に歩き去っていった。後に残ったのは僕と十代、翔に剣山と夢想、そしてエドだ。

「あれ意外。いいの？斎王のどこ行かなくて」

「フン。僕は斎王の友人であって、光の結社に入っているわけではないから。彼がどこに行くかは僕も知らん。とはいえ、僕も個人的な理由からこの場からは去らせてもらいますよ」

相変わらずのデカイ態度でそれだけ言うと、斎王たちとは反対の方向に歩き去って行ったエド。おかしいな、全校、どころかなぜか当然のような顔でついてきたノース校含めて学校二つ分の人数で来たはずなのに、なんで到着3分で10人以下になるんだろう。

そのあまりと言えばあまりの様子に、行先がイタリアでもイギリスでもなかったために元からやる気のなさそうだった引率の2人が完全にやる気をなくしたらしい。

「えー、それではこれ以降は自由行動でアール。帰りの船に乗り遅れたものは置いていくので、各自そのつもりで。じゃ、そゆことで」  
「皆さん、くれぐれも気を付けるノーネ」

……多分何を言っても無駄なんだろう、今のこの人たちには。どっただけ外国行きたかったんだ。

「さて、と。じゃ、僕もちよつと自由にさせてもらおうわ」

「あれ、お前も俺たちと来いよ！あの武藤遊戯さんのお爺さんが住んでるんだ、もしかしたら遊戯さんがいるかもしれないし会いに行こうぜ！」

「清明君も行こうよー」

「そうだドン、先輩も来るザウルス」

なんか色々声を掛けられたけど、そんな気分ではないので軽く手をふって皆と別れる。と思つたら、なぜか夢想だけが同じ方向に向かって歩いてきた。ちよつと見つめっていると、気にしないで、と言わんばかりに手を振ってくる。

「私は駅に行きたいから。ここからだところちが一番近いよね、って」  
「う、うん……」



確かに、ここからちよつと行つた先のとあるケーキ屋を右に曲がつてのルートなら10分も歩けば電車に乗れる。だけど、なんでそんな地元民しか知らないようなルートを知ってるんだらう。

まあ、ここまでくればなんとなく予想つくけどね。

「清明はどこまで行くの？だつてさ」

一瞬迷つたけど、その道で駅まで行く気なら隠す意味もないだろうと観念する。そこまで隠し通したい話でもない。

「そののケーキ屋」

「ふーん」

何か聞かれたらどこまで話そうかとも思つてたけど、幸いなことにそれ以上は何も言つてこなかった。

「じゃ、僕はここで」

「……………うん、だつてさ」

別段変わったこともなく、そのケーキ屋の前にたどり着く。夢想と別れの言葉を交わしてから軽くチェックをしてみると、こじんまりとした店の周りにはごみ一つ落ちてなく、毎朝きちんと掃き掃除していることがよくわかる。ただ、そこで店のガラスがちよつと汚れてるのを放置する神経が僕にはわからない。情けない。

「コホン。……………オイコラ生きてつか馬鹿親父い！」

これが僕がここに行きたくなかつた理由。わざわざ修学旅行で自分の出身地に行くとか、バカバカしいにもほどがある。もっとも、他のメンバーを呼ばなかつた理由はもう一つあるんだけど。なるべく大声を張り上げながらドアを蹴破るぐらゐの勢いで開け放つて中に入ると案の定、すぐに反応が返ってきた。

「あー？なんだ金食い虫のドラ息子、お前こそまーだ生きてたのかよ？」

「見てのとおり、1年前から死んでるよつと。まあせつかく来たんだし、お茶の一杯でも用意しといてよ。僕は線香上げてるからさ」

「勝手にしてろ、奥の部屋な」

「はいよ。場所は変わってないね」

誰もいない店の中を突っ切つて居住スペースに入り、その奥にある

仏間に向かう。これが、他の皆を誘わなかった理由だ。この人の墓参りを欠かすつもりはないけど、そんなもの十代たちに見せたら変に氣を使われる可能性がある。今はみんないろんなことがあるのに、こんな僕一人の個人的な理由で貴重な旅行の時間を無駄にさせたくない。決して豪華とは言えないまでも大切に扱われてることがよくわかる。仏壇の前に正座で座り込み、線香を一本取り出して半分の長さに折ってからマツチで火をつける。軽く手であおいで白い煙が薄く出るようにすると、それをすつと差し込んだ。そのまま静かに手を合わせる。

「ふー……なんで起こしてくんないのさ」

『起こせるわけないだろう』

気づかないうちに、仏壇の前で眠りこけていたらしい。気づかないうちに疲れてたのか、それとも中の人に天国から呼ばれてたのか。個人的には後者の方が好きだな、そのほうがロマンチックじゃないの。「ほーう、今あの馬鹿たれはそんなことやってんのか。ったく、お前はまだ商売するほどの腕じゃねえだろってのは釘刺しといたはずなんだけどな」

「で、でも清明も頑張ってるんですよ、って」

「邪魔したねー……って。なんでいるの夢想!？」

店に戻ると、なぜかうちの親父と夢想が紅茶とケーキで優雅なティータイムを送ってた。どうなってるのこれ、と思う間もなく親父のどら声が狭い店内に響き渡る。

「ちよつと店の前に戻ってきたらこの人に話しかけられて……………」

「おう、こつちの嬢ちゃんから全部聞かせてもらったぜ。こんの親不孝もんが、なあに親にも黙って勝手に支店出してやがる! 『YOU

KNOW』はうちの店名だろうがこのアホ!」

「うっ!?そこなんでばらしちゃうのさ、夢想」

「あー、まずかったみたいだね……………ごめんね清明、だつてさ」

そう、実は僕の店の店名はうちの実家、親父のケーキ屋のものをま

るつと拝借したものだ。他の名前を付けたほうがいいのは重々承知だったけど、それでもこの名前以外はどうしてもつける気になれなかったのだ。

「ハー………悪かったよ、親父」

「つたく、それで？」

「え？」

「ちったあマトモなもん作れるようにはなってるだろうな。冷蔵庫にスポンジの余りがあるから、今すぐ一品作ってみろ」

もつと雷を落としてくるかと思っただけど、意外にも静かな親父の声。当然、受けて立つ以外の選択肢はない。

「少々お待ちを。去年の僕と一緒にしてもらっちゃ困るね」

清明が厨房の方に引っ込んでから、彼の父親……遊野堂ゆうのどうは自身の目の前のティーカップを取り、中身の紅茶を一息で飲み干した。先ほどとはうってかわって穏やかな調子で、やや緊張気味の夢想到に話しかける。

「さて、と。見苦しいところ見せちゃってますまんね、お嬢ちゃん」

「いえいえとんでもない、だって。むしろ私こそ久しぶりに親子が会うのに邪魔しちやって申し訳ありません、って」

恐縮しながら謝る夢想到を手で押しとめる仕草はどことなく清明と似ており、確かにあの二人が親子であることがよくわかるように彼女には見えた。もつとも、本人たちは否定するだろうから心の中にとどめるだけにしておくが。

だが、それが表情に少し出ていたらしい。やや訝しげな顔をする堂に対してなんでもない、という風に笑いかけ、彼女もティーカップの液体を口に運ぶ。これまで清明の淹れる紅茶を幾度も飲んできたそのれなりに舌の肥えてきた彼女ですら味わったことのない芳醇な味が口の中に広がり、思わず目を丸くした。これまで飲んできた紅茶と何も変わらない種類なのに、淹れ方が違うところまで味に差が出るものだろうか。聞いているかもしれない清明に気を使って口にはしない

が、少なくとも紅茶に関しては清明はまだまだ父親を抜くことはできないだろうとひそかに確信する。

「あの、この紅茶って」

「ああ、これか？ふふふ、コイツは妻に教わった秘伝の技だからな、<sup>清明</sup>アイツが知らなくても無理はねえだろう」

「え？どうしてですか、だって。清明のお母さんって……」

引っかかる言い方に疑問をぶつけてみると、堂はなんだあの息子彼女に向かつてそんなことも言っていないのか、と若干顔を歪ませる。

「アイツが物心ついてすぐにいなくなっちゃったよ。交通事故でな、いい女だったよ」

「あ………ごめんさい、なんだって」

「おいおい、嬢ちゃんが謝ることはないだろ？悪いのは親の話を高校でまるつきりしなかったあの親不孝もんのほうだってーの。どうせあの馬鹿息子のことだ、黙ってりやばれないとでも」

「でも、それは違うと思います、だって」

彼女にしては珍しく、人が喋ってる間に割り込んでまで声を上げる。その懸命な様子に思うところがあつたのか、堂はそれ以上何も言わずに夢想の次の言葉を待つ。

「多分清明は、私たちに同情してほしくなかったんだと思います、つて。私が清明と初めて会ってからまだ1年しか経ってませんけど、清明がそんな正確なのは十分以上に知ってます。いつだって誰かに同情されないように、誰にも気を使わせないように自分が一番気を使つて、苦しいことだって最後の最後まで一人で抱え込んで解決のめどがつくまで私たちには何も言わないし、それに、それに」

「わかったわかった。それぐらいにしときな、嬢ちゃん。でないとアイツにも聞こえちゃう」

「でも」

「それにな、俺だってそんなことは気づいてるさ。なにせアイツの親を一人で10年以上やってきてんだからな。絶つっ対アイツの前では言わんけど、アイツは俺みたいなやつから生まれたとは思えないぐらいい息子さ。どれ、そろそろ味見にでも行つてやるかね。すまな

いが嬢ちゃん、少しの間店番頼まれてくれ。紅茶の代金がわりつてこ  
とで、な」

「……………はい！」

それからしばらくの間、誰ひとりやってこない店内で大人しくして  
いる夢想。なんでこんなに美味しい店なのにお客がいないんだろう、  
と大きなお世話だと知りつつも訝しんでいると、彼女のデュエリスト  
としての感覚に何か訴えかけるものを感じた。それと同時に店のド  
アが開き、一人の男が入ってくる。

「いらっしやいませ、だつてき……………貴方は！」

「よう、久しぶり。ドラゴネクロは使いこなしてるみたいだな」

その声を聞きながら、そう言えば前にこの男と会った時もこんな感  
じだった、とぼんやり思い返していた。誰かがいてもおかしくないの  
に、彼が出てきたときは近くに鳥すら飛んでいない。去年の彼女に冥  
界龍のカードを手渡し、最後まで謎めいたことを呟きながら世界に4  
枚しかないはずの青眼の白龍を使いこなしていた男。自分の名前す  
ら名乗らずにどこかから来てどこかへと去っていった、得体のしれな  
い男。

「おいおい、そう警戒するなよ。今回はちよつと忠告に來ただけさ」

「忠告？」

この男の話に耳を傾けるのは危険だ。そう思いながらも、彼女は自  
分を止めることができない。まるで、ずっと昔から知っている、信用  
している相手の話を聞こうとしているように。

「ああ。もうじきこの町はかなりヤバいことになる。俺らが知ってる  
世界よりも数段な。つっても、お前は覚えてないんだつたな。えいく  
そ、なんて言つたもんだか……………もうなんだつていい、今すぐこの町  
から離れるんだ！頭数増えた帝使いが揃いも揃って暴走中の上位種  
精霊引き連れてこの町ごと結界に入れようとしてるんだよ！」

「……………えっ！」

一体この男は何を言っているのか。まるで漫画かアニメのような、

常識からはるかにかけ離れた発言にさすがの彼女も若干引き気味になる。そんな目で見られていることに気づいた男は舌打ちし、最善の策が駄目なら次善の策だといわんばかりにデュエルディスクを構える。

「まあ、こーなることは薄々わかってたけどな。説明してる時間が惜しい、力づくにでも引つ張り出してやるよ。下手に干渉するのはまずいってドラゴネクロの時もさんざん大目玉喰らったんだけどな、これも昔のよしみだ。ほら、さっさと構えろよ。今回はマジでヤバいんだ、改変なんて騒ぎじゃないことになる」

何を言ってるのかは1ミリも理解できなかったが、とにかく勝てばいい。ならば何も問題はない、いつも通りにカードを使えば必ず勝つ。面倒事は全て決闘で片が付く、それが常識というものだ。

だがその前に周りを見渡してそこが店内であつたことを思い出し、無言でドアの向こうの外を指さす。当然のようにそこも、人っ子ひとり歩いていないゴーストタウン状態だ。

「いいぜ、こんな狭い店じゃ俺のかわいい青眼も見栄えしないしな」  
そう言い、半ば飛び出るように外に出る男。なにを言ってるのかはいまださっぱりだが、少なくとも彼が急いでいるのは間違いなさそうだと結論付ける。巻き込まれまいと気を付けはするものの、ついついそのペースにつられて彼女も早足で外に出てデュエルディスクを構える。

「あと何分ある？早いとこ終わらせねえと俺まで巻き込まれちゃうよし、さっさと終わらせてやるよ」

「デュエル！」

「先行は俺、か。魔法カード、トレード・インを発動。手札に来たレベル8モンスター、青眼を捨てて2枚をドロウ。カードを2枚セットして、ターンエンドだ」

「私のターン！」

モンスターはなく、場には2枚の伏せカードのみ。今なら楽に攻撃が通ると思うものの、そんな簡単に事が運ぶわけがないと警戒する。

「魂を削る死霊を攻撃表示で召喚、バトル！」

魂を削る死霊 攻300

警戒するが、したからといって手札が変わるわけでもない。この手札なら返しの攻撃も十分防げると考え、いちかばちかの死霊の効果……：戦闘ダメージを与えた時のハンデス能力を使ってみることにする。大鎌を掲げた死神がふわりと宙を舞い、力任せに振り下ろす。

「おっと、そんなのに構ってる暇はないもんでな。速攻魔法発動、銀龍の轟咆せいほう！このカードは墓地のドラゴン族通常モンスターを蘇生させる能力がある！甦ブルーアイズれ、青眼！」

死霊の一撃に待ったをかけるように、青い体の巨体が地の底から現れる。その爪で鎌を払いのけようとして、

「手札からD・D・クロウの効果が発動！このカードを墓地に送って、貴方の墓地から轟咆よりも早く青眼を除外するみたいだよ」

どこからともなく飛んできた異次元のカラスがその体に特攻を仕掛け、ブルーアイズの体がぐにやりと歪んで徐々に異次元に吸い込まれていく。轟咆が発動に終わったことで再び死霊の攻撃が繰り出される、かに思えたのだが。

「いいや、カウンタートラップ、天罰を発動！手札を1枚捨てて相手の効果の発動、つまりそのカラスを無効にして破壊する！」

「っ!!」

モンスターを出さなかったにもかかわらずの余裕っぷりから伏せを何かしらの蘇生カードと予想したところまではよかったのだが、もう1枚が天罰とはさすがに見抜けなかった夢想。再び空間を捻じ曲げて戻ってきた白い龍が、今度こそ死神の鎌を防いだ。

青眼の白龍 攻3000

「さ、することないならさっさとエンド宣言しな。何度も言ってる通り、時間は全然ないんだ」

「……………カードを3枚セットして、ターンエンドするって」

男 LP4000 手札：2

モンスター：青眼の白龍（攻）

魔法・罠：なし

夢想 LP4000 手札：2

モンスター：魂を削る死霊（攻）

魔法・罫：2（伏せ）

「ほんじゃま、俺のターンですよっと。青き眼の乙女、召喚とくらあ」  
「そのカードは……………」

青き眼の乙女 攻0

前回のデュエルでも彼女を苦しめた、攻撃力3000を誇る青眼を何度でも場に出すことが可能な恐ろしい効果を持った女性モンスター。力押しが軸の彼女にとっては、こういった搦め手が得意なカードは苦手だったりする。

「嫌だから、退場してもらおうかな。トラップ発動、激流葬！だって」

召喚反応系カードの中では、奈落の落とし穴と並んで最もポピュラーな1枚。対象を取る効果からなら身を守るドラゴンを呼び出す乙女も、対象を取らない全体除去の前にはなすすべない。死霊が一緒に流れて言った気もするが、そんなことは些細な犠牲である。

「あー、俺の主力！しよーがねえなあ、つたくもう！自分フィールドにモンスターが存在しない時、フォトン・スラッシュャーは手札から特殊召喚できる！特殊召喚したコイツでそのままダイレクトだ！」

フォトン・スラッシュャー 攻2100↓夢想（直接攻撃）

夢想 LP4000↓1900

「はっ、どうだ！」

「まだまだ……………ってさー！トラップ発動、無抵抗の真相！ダイレクトアタックを受けた時、手札とデッキから同名レベル1モンスターを特殊召喚できる！来て、ワイト」

ワイト 攻300

ワイト 攻300

「一発入れたことには変わりねえんだ、どっからでもかかってこいや」  
「おっしやる通りに、だつてさ。私のターンに魔法カード発動、トライアングルパワー！このカードの効果を受けられるのはレベル1の通常モンスターだけだけど、効果はその分強いんだつてさ。エンドフェイズに自壊する代わりに、攻守2000ポイントアップするみたい」



みすぼらしい恰好の骸骨2体のかつて目があった箇所にも再び一時的な炎が宿り、それぞれ個性的なポーズで有り余る力をアピールしだす。

ワイト 攻3000↓2300

ワイト 攻3000↓2300

「それから、ワイトのうち片方をリリース。アドバンス召喚、龍骨鬼、って」

龍骨鬼 攻2400

ワイトを並べたのちに龍骨鬼のアドバンス召喚、夢想おなじみの陣形である。だが今回は、ワイト自身が戦いに出るといつもとの大きな違いがある。

「バトル、だつてさ。龍骨鬼でフォトン・スラッシャーに攻撃！」

骨の鬼が口から火の玉を吹き出し、光子の刃がそれを切り裂こうとして迎え撃つ。2つの力が拮抗………するようなくことは特になく、スラッシャーの体が炎の中に崩れ落ちる。

龍骨鬼 攻2400↓フォトン・スラッシャー 攻2100(破壊)

男 LP4000↓3700

「そのままワイトで攻撃！」

ワイト 攻2300↓男(直接攻撃)

男 LP3700↓1400

「どうかしら？だつてさ。エンドフェイズにワイトが自壊、ターンエンドみたい」

罨の張りあいとでもいうべき最初の攻防に対し、単純な殴り合いとなった今のターン。状況はやや夢想有利だが、彼女はまだ気を抜かない。

男 LP1400 手札：1

モンスター：なし

魔法・罨：なし

夢想 LP1900 手札：0

モンスター：龍骨鬼(攻)

魔法・罨：なし

「時間ないんだがなあ、俺のターン！ちっ、時間稼ぎしても意味ないつてのに……青き眼の乙女、召喚。ターンエンドだターンエンド！」

青き眼の乙女 攻0

「私のターン。さーてどうしようかな、だって。ドロ、攻撃、は……しないかな」

「ま、そうなるだろうな」

「もちろん、って。カードをセットして、ターンエンド」

男 LP1400 手札：1

モンスター：青き眼の乙女（攻）

魔法・罠：なし

夢想 LP1900 手札：0

モンスター：龍骨鬼（攻）

魔法・罠：1（伏せ）

自身の伏せカードに絶対の自信があるのか、伝説に最も近い位置にあると言えるドラゴンを前に余裕の表情で迎える夢想。一体どんな戦略を考えているのかは、その表情からはうかがい知れない。

「俺のターン。除去が来るまで待つてる暇はねえ、速攻で決めてやらあ！装備魔法、ワンダー・ワンドを乙女に装備してっと。こいつは装備モンスターと一緒にリリースすると2枚ドロする効果があるが、俺が狙ってるのはそこだけじゃないんだな、これが。装備魔法は装備されるときに当然そのモンスターを対象にとる、つまり乙女の効果が発動する！デッキより出でよ、青眼！」

青眼の白龍 攻3000

「2体目の……青眼！」

「さあ、バトルだ！青眼で龍骨鬼を攻撃、滅びのバースト・ストリーム！」

青眼の白龍 攻3000↓龍骨鬼 攻2400（破壊）

夢想 LP1900↓1300

龍骨鬼が一瞬で跡形もなく粉碎され、夢想を守る壁が存在しなくなる。だが、まだ夢想の表情から笑みは消えない。

「これで終わるか!?速攻魔法、銀龍の轟咆！墓地より蘇れ、青眼……」

「リバーストラップ、発動！横取りボーン！相手がモンスターを特殊召喚したターンのみ発動できて、相手の墓地のモンスターを守備表示で特殊召喚するんだって。こっちにおいて、青眼！」

彼女が呼び出したのは、最初に激流葬を受けた青眼。どちらも対象を取る蘇生カードであるゆえ、チェーンを組んで同じモンスターを呼びだそうとすれば後出した方が勝ち、先に使った方は不発となる。これは夢想自身も知らないことであつたが銀龍の轟咆は1ターンに1度しか使えないため、さらなるカウンターを受ける心配もない。ん

青眼の白龍 守2500

「くそっ！カードを伏せて、ターン……………終了だ」

「私のターン。あなたが何を考えてるのは私にはわからない。けど、ここはお帰り願おうかな、だつてさ。ドロー！ワイトキングを召喚、さらに青眼を攻撃表示に変更！青眼2体で相打ちに、バースト・ストリーム！」

ワイトキング 攻2000

青眼の白龍 攻3000（破壊）↓青眼の白龍 攻3000（破壊）  
無論、夢想の行動は戦術としては何も間違っていない。相手の場を空にしてダイレクトアタックを叩き込む、基本中の基本の動きである。ただ単に彼女の運がなかった、それだけだ。

「そのままワイトキングで……………」

「いいや、リバースカード発動！リビングデッドの呼び声で、もう一度青眼を呼び戻す！」

「そんない！」

青眼の白龍 攻3000

「……………攻撃はやめ。ターンエンド、って言ってるみたい」

男 LP1400 手札：1

モンスター：青眼の白龍（攻・リビデ）

魔法・罠：リビングデッドの呼び声（青眼）

夢想 LP1900 手札：0

モンスター：ワイトキング（攻）

魔法・罠：なし

「俺のターンだ。ここでワイトキングを潰す！出て来い、阿修羅！」

三つの顔と六本の黄金の腕を持つ戦い好きの鬼の神をモチーフとした、全体攻撃の能力を持つモンスター。ワイトキングは例え戦闘破壊されても墓地のワイトを除外することで蘇る能力があるが、今のワイトの数ではその能力も2度までしか使うことができない。ただ彼女にとって唯一の救いは、阿修羅とワイトキングの攻撃力の都合上最初の一撃を青眼が決めざるを得ない、逆に言えば青眼のダイレクトアタックを受ける心配はないということである。

無論、そのことにはどちらのプレイヤーも気づいている。だからこそ夢想の目には戦闘ダメージによる衝撃を受ける覚悟とともに勝負を諦めない希望の色が見え、男の顔にはダメージこそ与えられるものとのどめを刺せないことに対する苛立ちの色が見える。2人の顔は皮肉なことに、盤面の優位性とはまるで逆の表情を浮かべていた。

「バトルだ、バトル！バースト・ストリーム！」

青眼の白龍 攻3000↓ワイトキング 攻2000（破壊）

夢想 LP1900↓900

「きやあつ！ワイトキングは戦闘破壊された時、墓地に眠るワイトの魂を成仏させることで蘇るよ、ってさ」

ワイトキング 守1000

「阿修羅で攻撃！」

阿修羅 攻1700↓ワイトキング 守1000（破壊）

「まだ何かしてくるかもしれないし、最後の一回も使っちゃおうかな、だつてさ。ワイトキング、蘇生するみたい」

ワイトキング 守0

「深読みするのは勝手だが、俺にこれ以上の罨は張れないぜ？だが、的が増えたなら当然そいつもだ！」

阿修羅 攻1700↓ワイトキング 守0（破壊）

六本の腕に全身の骨をへし折られ、今度こそ物言わぬ死体に成り果てた骸骨の王の体が、ちょうど吹いてきた風を受けて静かに砂となつてどこかへ飛んでいく。その様子を悲しげに見送り、改めて彼女は男に向き直る。

「スピリットモンスターのア修羅はエンドフェイズに持ち主の手札に戻る……それじゃあ、あとは私のターンでいいよね？だつてさ。このターンのドローでどっちが勝つかが決まるからね、この空気は嫌いじゃないよ。ドローッ！」

手札もなく、伏せの1枚もない夢想のラストドロー。いつもそうであるように、負ける気はまるでしなかった。だが、デッキに手を乗せてカードを引こうとした、まさにその瞬間。

ピーピーピー。

場の雰囲気にな釣り合いなアラーム音が静かな町に鳴り響くと、それを聞いた男がいつぱんに顔色を変える。

「クソッ、時間切れかよーおい、この勝負は俺の負けだ。サレンダーだ。ぐずぐずしていると俺まで巻き込まれちゃうからな、外に出られるうちにさっさと行かせてもらうぜ。ただ、こいつはマジの忠告だ。明らかにヤバいことが起こりつつあるから、なんとかこの町の外に出ろよ！じゃなっ！」

大慌てで言いたいことだけ喋ると、くるりと背を向けてどこかへ走り去っていく。とつさに追いかけてしようとするも、まるで狙っていたかのようなタイミングの良さで後ろの店内から清明たちが出てきたので断念する。

「夢想、こんな所にいたの？一体何やって……あー、なんか急に曇ってきてるね。つたくもう、予報じゃ1日中晴れだったのに。ほら、降ってきてさうだしいったん中入ろ？」

清明の声をぼんやりと聞きながら、デュエルが強制解除させられたデュエルディスクから次に引くはずだったカードを取りだしてみる。それはトラップカード、運命の分かれ道。お互いにコイントスをして、2000ポイントのダメージか回復を受けるカード。つまりあのデュエルは、まだどうなるかわからなかった。どちらかが裏を出せば、お互いにライフが2000を切っていたあの状況ではそれが引導火力になる。

「むーそうー！」

「嬢ちゃん、早いとこ入ってきな」

「……………はい、だってさ」

いつまでも引きずっていても仕方がない。そう結論付け、カードを元の位置に戻す。そのまま店に入る寸前ふと何かの気配を感じた気がして上を見るが、そこには重苦しい空が広がっているだけだった。

今のところは。

## ターソン54 鉄砲水と『D』と冥界の札

「……………というか親父さあ、なに初対面の娘むすめに店番やらせてるわけ？  
こんな親もって恥ずかしいのはこっちなんだよ、ったくもう」

文句を言いつつ、2人で厨房から出る。ケーキ？残念だけど、まだ  
まだこの親父には勝てないことを思い知らされただけで終わってし  
まった。なんで菓子作りと紅茶にだけは異様にハイスペックなんだ  
この人は。

「何言ってるんだお前は。どうせコレなんだろう？せつかくうちの店を継  
ぐどっかの馬鹿息子以外の候補が出てきたんだ、テストぐらいやっ  
いてやらにやあいかなだろ」

僕のもつともな意見を鼻で笑い、ニヤニヤ笑いながら小指を一本立  
ててみせる親父。ちよつと顔が火照つたのを隠すためにごく自然な  
動作で反対側を向き、赤くなつたであろう顔を見られないようにす  
る。とはいえあくまで気休めで、多分バレバレなんだろう。その証拠  
に、すぐ横から聞こえてくる忍び笑いがこれ見よがしに大きくなつた  
し。

「いいじゃねえか素直な子で。お前にはどう見てももつたいないから  
な、逃げられないうちに捕まえとけよ？」

「るっさい！おーい、むーそー！」

なぜか店の外でどこか遠くを見ていた夢想に内心感謝しつつ、何を  
してるのかと彼女に呼び掛ける。まだどこか心ここにあらずといつ  
た様子だったが、それでも反応はあつたのでちよつとホツとする。

それにしても、こんなに空が曇っているのは変だ。まだお昼だつて  
のに、今にも振りそうだななんてレベルじゃないぐらい黒くて分厚い雲  
が空を覆っている。嫌な予感がすぐくするけど、ふむ。

「サッカーサッカー、なにか怪しいものが見つかったらすぐに教えて  
ね」

突然のお願いにも嫌な顔一つせず、デツキから出てきてくれる  
シャーク・サッカー。いつもすまないね、との思いを込めて頭を撫で  
てやると、気持ちよさそうに喉の奥からゴロゴロと声を出して甘えて

くる。かわいい。でもこれ鮫じゃなくて猫だよ、なんて思っている。なんか精霊が見えない2人からの冷たい視線を感じたのでそくさと店内に戻る。まったく、変な目で見ないでほしいもんだ。ここにちゃんと精霊はいるのに。

「じゃあ見張りよろし……く……く……う？」

いた。さつきまで間違いなくいなかったのに、今でははつきり見える。ビルよりもでかい精霊が町全体を取り囲むようにひい、ふう、みい……なんと、4体も。

「チャクチャルさん、解説！」

『私か!?!』

いやだつて呼んだら一発で返事くれるし、わりと博識だから何聞いても答えてくれそうだし。これ本人(?)に直接言ったら前半部分について私はペットかタクシーかとか言つて怒りそうだから口には出さないけど。

『またろくでもないこと考えて……まあい、あれは帝だな。水、炎、風、土の四大元素そろい踏みだ』

そう言われて4体の人型をもう一度ぐるりと見回してみる。よくよく見れば確かにあの一角に立ってるの、どことなくメビウスに似てる気もする。なんか角とか生えてるけど。なんかメリケンサックみたいな腕に付いてるけど。ちなみに僕の知ってるメビウスの武器はアイス・ランスという右腕を氷の槍にして突撃しつつ突き刺すというシンプルかつロマンあふれるもので、個人的には大好きな攻撃です。

「やつぱなんか違うじゃん」

『まあ聞きなさい。あれはそれぞれ剛地帝グランマーグ、烈風帝ライザー、爆炎帝テスタロス、そして凍氷帝メビウスのカードだな。従来の帝シリーズが真の力を解放した姿で、それぞれ進化前の上位互換の能力を持つ』

「なるほど、解説お疲れ様」

『うむ。それはよしとして、どうも様子が変だ。あれだけの力を持つ精霊が一度に4体というのははつきり言つて異常。何かしらの意図



があるのだろうか』

冷静な、というより明らかに面白がってる風なチャクチャルさん。困ったものだ。

「そんでそんで？そもそもあんな町の端っこに突っ立って、何やってるのさ」

『見ればわかるだろう？この町に結界を張って外から遮断している……いや、中から出られないようにしているのか？先に言っておくとあの程度の結界なら突破できないこともないが、その際のエネルギーで近くの建物ぐらひは軽く吹き飛ばさるだろうな』

「あら残念」

そんなもん僕が許可出すわけがない。絶対やっちゃだめだよ、と念を押してから改めて4つの巨体を見上げる。

「で、もうちよつと穏健な方法ってある？」

『一番単純な方法だと、そのカードの使い手を見つけ出してだな』

「……………だいたいわかったよー」

デュエルでぶちのめすか物理的にどうにかするか、とにかく力づくなんだろう、まあこつちとしても、関係ないところに迷惑がかからない範囲でなら穏健に終わらす気はあんまりない。僕の町であんなでつかいもん勝手に出すんじゃないよまったく。

「とりあえず親近感あるしメビウスから行ってみ」

「いつまでも何くつちやべつとるんだアホ息子」

「痛っー！」

集中して喋っていた最中、いきなり後頭部に激しい痛み。見ると、うちの親父が凶器と思しきレジの帳簿を片手に呆れ顔で仁王立ちしていた。

「ほれ、早いとこ店入るぞ。曇ったせいでちよつと冷えてきたしな」

「あー、えつと……」

『始まったぞ、マスター！場所はそこのビル屋上、メビウスとザボルグが動き出した！』

「ええ!?!」

なぜかちよつとうれしそうな響きを含んだチャクチャルさんの言

葉に聞き返そうとして親父の後姿から、そして店内の夢想から目を離した次の瞬間。

「だ、誰なの！一体どこから、って……………」

「おやおや、少々静かにしていただきませうか。あなたは人質、別に悪いようにはしませんよ」

「夢想?」

「嬢ちゃんっ!」

その一瞬の間に、店内の様子が激変していた。後ろから謎の男にプロレス技でいうところのスリーパーをかけられ身動きできない、というかどうもさつき一発殴られでもしたのか気を失ってる状態の夢想。そのまま長身にサングラス、そしてなぜかライダースーツというものすごく怪しい恰好のまま、その謎の男がこちらへにじり寄ってくる。「誰だっ!俺の店で何してやがる?」

「おや、人の名前を聞くなれば自分から名乗るのが礼儀ではありませんか、遊野堂さん。そうですね……………まあここは、ミスターTとでも名乗っておきましょうか。あなたの息子さんとはこれから何度も会うことになるでしょうし、以後お見知りおきを」

「ミスターT?」

あまりといえばあまりの名前である。だけど、そんな名前に反応を示した神がいた。

『この男の気配、どこかで感じた気もしていたが、やっと思い出した……………!ミスター、こいつは人間じゃない!』

「へ?」

改めていつまでも夢想に密着してるこれまで見た中でも最っ高の屑野郎をまじまじと見る。特に(やってることを除いて)おかしなところははないし、そもそも親父に見えてる時点で精霊が実体化したという線はないだろう。それにしてもぶん殴りたい、ちよつと近づきすぎでない?

『まずはその煩惱を抑えてくれ、マスター。それにしてもミスターTが1枚噛んでいたのか』

「何?知り合い?」

『昔の同業者みたいなものだ。奴自体はただの駒だからどうでもいいんだが、バックがかなり厄介でな』

よくわからないけど、チャクチャルさんがここまで言うからにはよっぽど厄介な相手なんだろう。まったく、斎王とゆかいな仲間たちだけでこつちは手一杯だったのに。なんでこう、去年もそうだったけど変なのを相手してる時に限ってまた別の変なのが割り込んでくるのかね。あの時もノース校に勝ったーって喜ぶ暇もなく封印された三幻魔とかいきなり出てきたし。

「今となつてはあれもいい思い出なんだから、人生わからんもんだね。……それで、ミスター？なんでもいいけど、その娘さつきと放してよ。見る側としてはひじょーに不愉快なだけだよ」

「これは失礼。ではそのかわり、一つこちらの条件を呑んでいただきたいのですが。あなたのも持っているこの時代にあつてはならないカード………具体的には地縛神、及び時械神のカードを今この場で処分しなさい。そうすればこの女性には一切手出しせずにお返しします」

チャクチャルさんたちと夢想、どっちか選べということらしい。だけど、それによって向こうに何の得が生まれるのか。とりあえず本人に聞いてみよう。

「(チャクチャルさん、メタイオン先生)」

『………実際問題、私たちは本来この世界に存在しえないカードだからな。消えろというのわからない話ではない。なにせ、ここにこうしている方がおかしいんだ』

この神様とは思えないぐらい弱気な発言に、一瞬こつちまで返事に詰まる。それを攻めどころと見たのか、ニヤリと笑みを浮かべるミスターT。

「さあ、どちらを選びますか？私もあまり暇ではないので、早いうちに決めていただきたいのですが。ああ、ではこうしましょう」

左腕で意識のない夢想を締め上げながら、右手をスツと親父に向けて伸ばして指を鳴らす。

「うっ……!?!」

すると一体何をやったのか、数メートル離れた位置にいた親父がいきなり地面に崩れ落ちた。

「親父っ！」

「おっと、動かなくて結構です。彼はこのように私が預かりますので。民間人は邪魔になりますからね」

親父の体が地面にぶつかると、ライダースーツと手袋に包まれた腕がその体をキヤッチする。そこにいたのは、なんとミスターT。いつの間に移動したのかと夢想を捕まえていた方を見ると、そこには依然としてミスターT。

「な、な……」

『相も変わらぬ数に頼んだ無限湧き戦法か。だが注意しろマスター、あれは見間違いでも錯覚でもない。すべて本物のミスターTだ』

「さあ、どうしましたか？あなたの大切なカードを取るか、はたまた自分のご友人、そして肉親を取るか。選んでください」

チャクチャルさんを手放すなんて、そんなこと僕にはできない。だけど、あつちの2人についてもそれは同じだ。

「どちらかを選べば、もう片方は助かります。こちらとしては、あなたがどちらを選んでも問題ないのですよ。あなたが立ち直るまでの間に、斎王の計画は完成する」

「ぐっ……」

完全に板挟みの状態。こんな時、漫画やアニメならヒーローが颯爽と現れて悪を退治してくれるんだろう。だけど、今ここにヒーローは、十代はいない。なら、どうすればいいってのさ。

「ちよつといいかな？本来ならば僕が手を出す義理はないが、斎王の企みについて何か知っているというなら話は別だ。お前たちにデュエルを申し込む、2人まとめてかかってこい！」

僕の後ろの建物の角を曲がって、ちょうどこれまで死角になっていた位置から白いスーツに銀髪の男がコツコツと革靴の音をアスファルトに響かせながら歩いてくる。僕はその顔をよく知っている。僕がユーノの時の魔術師に時間を止められているうちに学校にやって

来た、史上最年少のプロデュエリスト。

「エド・フェニックス！」

「ふん、少し様子を見てみれば情けない。そんなに手放したくないものがあるなら、自力で掴み取ればいい。それができないと、それは自分のせいではないと自分に言い聞かせながら生きていくことになるんだ」

そう言いながら何か思うところがあるのか、少し遠くを見るような目つきになったのを僕は見逃さなかった。エドとはろくに話をしたこともないしなんとなく嫌な奴だとなんとなく思ってたけど、きつと彼なりにも色々なことがあったんだろう。ほんの少し、エドに対する認識を改めた。

「それで？早く返事を聞かせてもらおうか。なんなら1対2なんてケチなことと言わない、僕のハンデとしてこの清明にパートナーをやるせるタッグデュエルにしたっていいんだぞ」

前言撤回、やっぱこいつヤな奴だ。僕がタッグ組むのがハンデとか、日ごろどんな目で見られてんだ僕。8パックデッキとはいえ僕だってエドには一回勝ってるのに。

「いいだろう。もとよりエド・フェニックス、斎王はともかくとして私はお前のことをよく思っていないからな。ここでどちらも潰せるといふならば僥倖」

「決まりだな。清明、僕の足を引つ張るなよ！」

「いや足引つ張るなて。……黙って聞いてりやみんなして好き勝手！いいよ、こうなったらやってやる！ド派手にデュエルと洒落込もうか！」

「「デュエル！」」

始まったタッグデュエル。なんだかエドの掌の上で動かされてるような気もするけど、その江戸のおかげで助かったので深くは考えないことにする。ライフポイント、フィールド、墓地の全てを共有する、近頃では珍しいルールだ。そういうやなんか三沢がこんなルールで大会してみたいとか言ってたことがあったっけ。

「先行は私だ。ダブルコストーンを攻撃表示で召喚、カードをセットし

てターンエンドだ」

ダブルコストン 攻1700

「こちらの先行は君に任せよう」

「そりやどーも。僕のターン、ドロー！」

ダブルコストンはその名の通りダブルコストになるモンスターだが、そのほかの能力は持ち合わせていない。大方もう一方のミスターTにアドバンス召喚させるつもりなんだろうけど、そうはいかない。

「モンスターをセット。さらにフィールド魔法、レミューリアを発動！」

地面から白い神殿がせりあがってきて、だいたい僕らの膝ほどの深さにどこからともなく湧いてきた水が満ちる。水属性モンスターの攻守はこれで200ポイントアップする、僕のフィールドの用意が整った。

「カードも1枚伏せて、ターンエンド」

「お前のエンドフェイズに速攻魔法、終焉の焰を発動！トークン2体を特殊召喚する」

黒焰トークン 攻0

黒焰トークン 攻0

すでにフィールド上にはダブルコストの能力を持つモンスターが存在するというのに、なぜかさらにリリース要因となるモンスターを並べるミスターT。着実に相手の場にモンスターが増えていくってのは、あんまり気分のいいものではないのだが。

ミスターT&ミスターT LP4000

モンスター：ダブルコストン（攻）

黒焰トークン（攻）

黒焰トークン（攻）

魔法・罨：なし

清明&エド LP4000

モンスター：???（セット）

魔法・罨：1（伏せ）

場：忘却の都 レミューリア

「私のターン。永続魔法、冥界の宝札を発動！そしてトークン2体をリリースし、アドバンス召喚！出でよ、ダーク・ホルス・ドラゴン！」  
全身黒く染まった2Pカラーのホルスが、まるで鳥のように甲高い鳴き声を上げる。やっぱり思った通り、アドバンス召喚で来たか。

ダーク・ホルス・ドラゴン 攻3000

「冥界の宝札がある限り、私がリリース2体以上でのアドバンス召喚に成功するたびカードを2枚ドロウする。ダーク・ホルスでセットモンスターに攻撃！焼き尽くせ！」

ダーク・ホルス・ドラゴン 攻3000↓??? 守800↓1000

(破壊)

「跡形もないか。………ほう？」

ミスターTの言うとおり、確かに僕の伏せたモンスターは黒い炎に焼き尽くされた。だけど、それで終わらせたりはしない。シウルシウルとタコの足がホルスの翼に、爪に、くちばしに、胴体に巻きついて締め付け、動きを封じていく。

「ここでシャクトパスの効果発動！このカードは自身を戦闘破壊されたモンスターに呪いをかけて動きを封じ、攻撃力を0にする！」

ダーク・ホルス・ドラゴン 攻3000↓0

「ならばこれならどうかね？ダブルコストンでダイレクトアタック！」

「まだまだっ！リバーズ発動、ドレインシールドでその攻撃を無効にする！そして無効にした攻撃力ぶん、僕のライフは回復する」

清明&エド LP4000↓5700

「ほう……カードをセットし永続魔法、悪夢の拷問部屋を発動。ターンエンドだ」

「エド、後は頼んだよ」

「頼んだよ、じゃない！フィールドがほぼ空じゃないか！もういい、ドロ―！カモン、デビルガイ！」

デステニーヒーロー  
D―HERO デビルガイ 攻600

エドが召喚したのは、レベルもステータスも共に低い下級モンスター。確かにホルスは倒せるが、ダブルコストンには勝てない。もし

かして、もつと攻撃力の高い下級モンスターを引けなかったのだろうか。

「デビルガイのエフェクト発動、このカードは攻撃表示の時に1ターンに1度相手モンスターを2ターン先の未来へ飛ばすことができる！デステイニー・ロード……消え失せろ、ダブルコストーン！」

ダブルコストンの姿がゆがみ、そのまま消えていく。

「このエフェクトを使ったターン、僕はバトルができない。だが、魔法カードを使うことならできる！魔法カード、ミスフォーチュンを発動！相手モンスター1体の元々の攻撃力の半分の数値分ダメージを与えることができる」

ミスターT&ミスターT LP4000↓2500

「いいぞー、エドーー！」

「いちいちのんきなもんだ、まったく。それはそうと、このステージは僕には合わないな。フィールド魔法、幽獄の時計塔を発動」

「え、ちよつと!?!」

いくらフィールド魔法が重複するようになったとはいえ、それは自分と相手が使う場合においての話。フィールドを共有している今、レミューリアが崩れ落ちて足元の水が引いていき、替わって地面から12時を指した時計塔がせりあがってくる。でも、いくらなんでも人のカードを勝手に上書きされるとは思わなかったぞ。

「カードを2枚セットして、これでターンエンドだ」

ミスターT&ミスターT LP2500

モンスター：ダーク・ホルス・ドラゴン（攻・シャクトパス）

魔法・罫：冥界の宝札

悪夢の拷問部屋

1（伏せ）

清明&エド LP5700

モンスター：D—HERO デビルガイ（攻）

魔法・罫：2（伏せ）

場：幽獄の時計塔（0）

「続いては私のターンだ」



「その前に、相手ターンのスタンバイフェイズを迎えたことで時計塔の針が動く、つまり時計塔に時計カウンターを1個乗せさせてもらうがね」

ギィ、ときしむ音を立てながら、驚くほどの速さで時計の針が動く。そして指し示す時間が3時となったとき、再びその動きが止まった。だが、それ以上何も起きない。

「魔法カード、帝王の深怨を発動。手札から攻撃力2400かつ守備力1000のモンスター、邪帝ガイウスを見せることでデッキからのカード以外の帝王と名のつく魔法及び罠をサーチすることができる。帝王の烈旋を加え、そのまま発動！このカードは相手モンスターをリリースしてアドバンス召喚を行うことができるカードだ。デビルガイをリリースし、邪帝ガイウスを召喚！」

邪帝。いわゆる帝シリーズの1体で、なぜか闇属性だけ2種類の帝が存在するうちの片方。えーと、効果はどっちがどっちだったっけか。

「邪帝はアドバンス召喚に成功した時、フィールドのカードを1枚除外することができる。私が選択するのは、ダーク・ホルス・ドラゴン！」

ガイウスがぐるりと自分の横を向き、胸の前に作り上げた闇のエネルギー弾を自らの横でタコ足に縛られたホルスめがけて打ち出す。動きを一切封じられたホルスは抵抗することもできず、無言のままに次元の隙間へと消えていった。

「ガイウスがその効果で闇属性のモンスターを除外した時、相手プレイヤーに1000のダメージを与える。受け取れ、エド・フェニックス！」

「ぐっ………いいだろう、だがこの貸しは高くつくぞ！」

清明&エド LP5700↓4700

1000の衝撃。だけどそれだけではない。悪夢の拷問部屋は効果ダメージが発生した時、さらに300のダメージを追加で与える効果を持つ。一見地味な削り方だけど、こういうのがじわじわとこっちの首を絞めてくるのだ。

清明&エンド LP4700↓4400

「貸しは高くつく、か。果たしてそうかな？ トラップ発動、闇次元の開放！ 自分の除外された闇属性モンスターを、攻撃表示で特殊召喚する！ 甦れ、ダーク・ホルス・ドラゴン！」

ダーク・ホルス・ドラゴン 攻3000

一度除外を経由したことでシャクトパスの効果からは切り離され、完全な姿となって甦った黒い竜。こんなコンボを仕掛けていたとは、さすがに人間じゃないだけあってデュエルの腕も相当なものだ。

『私が言うのもなんだが、人間じゃないのと強いのは関係あるのか？ 本当にそこ関係あるのか？』

「(カミューラもなんだかんだ言っただけ強かったし、タニヤも三沢相手にあそこまで強かったし。ラビエルのごときは今でも全力をぶつけあつた相手として尊敬してるよ)」

『そ、そうか』

それと稲石さん。なんとなく仲直りするきっかけがつかめなかったから最近は全然会ってないけど、ここでおみやげ買っていつてあげよう。線香とか。

「これで終わりだ！ 邪帝ガイウスでダイレクトアタック！」

「いいや。トラップ発動、D―フォーチュン！ このカードは相手の直接攻撃宣言時に発動でき、墓地からD―HEROを1体除外することディーヒーローでそのターンのバトルフェイズを強制終了させる！」

半透明のデビルガイがまるで十代のネクロ・ガードナーのように自らの体を盾にしてガイウスの攻撃をはじく。とはいえ、なかなか危ないところだった。

「1度は凄いだけ。カードを2枚伏せ、これでターンエンドだ」

「よっし、今度は僕のターン！」

威勢よく言ったものの、戦況はあまりよろしくない。なにせ攻撃力2400と3000が相手なのだ。とはいえ先ほどのダイレクトアタックの時に感じた痛みから考えても、これは数か月ぶりの闇のデュエルだ。間違っても負けるわけにはいかない。

「ちよっと強引だけど、突っ切らせてもらおうかな！ 手札から瀑征竜

「タイダルの効果発動！手札の水属性モンスター2体を除外して、このカードを特殊召喚！」

氷弾使いレイス、そしてグリズリーマザーのカードを相手に見せてからポケットに入れ、タイダルをモンスターゾーンに置く。

瀑征竜―タイダル 攻2600

「まずは1体、タイダルでガイウスに攻撃！ウェイブ・オブ・タイダル！」

「リバースカード、冥王の咆哮を発動。悪魔族が戦闘を行う時にライフを払うことで、相手モンスターの攻守をその数値ぶんダウンさせる。まあ、500ポイントも払えば十分だろう」

ミスターT&ミスターT LP2500↓2000

瀑征竜―タイダル 攻2600↓2100（破壊）↓邪帝ガイウス 攻2400

清明&エド LP4400↓4100

「タイダル！くっ、ここでカードをセット。これでもうハンドレスか、ターンエンド」

ミスターT&ミスターT LP2000

モンスター：ダーク・ホルス・ドラゴン（攻・闇次元）

邪帝ガイウス（攻）

魔法・罫：冥界の宝札

闇次元の開放（ホルス）

清明&エド LP4100

モンスター：なし

魔法・罫：3（伏せ）

場：幽獄の時計塔（1）

「私のターン。スタンバイフェイズを迎えたことで、そちらの時計塔の針がまた動くか」

その言葉通りに時計が時を刻み、先ほどからまた3時間分動いて6時を指す。だが、依然として何も起こらない。

「このカードは、墓地からレベル5以上のモンスターを除外することで特殊召喚できる。来い、邪帝家臣ルキウス！」

先ほど痛い目にあわされたガイウスをデフォルメしたマスコットの  
のような小さな悪魔。右手でお手玉サイズの闇の球をクルクルとも  
てあそびながら、挑戦的な目つきでこちらを睨みつけてくる。

邪帝家臣ルキウス 攻800

「ガイウスとルキウスをリリースし、アドバンス召喚。出でよ、闇の侯  
爵ベリアル！」

闇の侯爵ベリアル 攻2800

「冥界の宝札の効果で2枚ドロ。またルキウスがアドバンス召喚に  
使われたことで、相手の伏せカードをすべて確認することができる。  
なるほどメタル・リフレクト・スライムか、たいした問題ではないな。  
だがもう1枚は……いや、いいだろう。バトルの前に1つ教えてお  
いてやるが、ベリアルがフィールドに存在する限りお前たちはベリア  
ル以外のモンスターを魔法及び罠の対象にすることができず、攻撃対  
象にも選べない。これで終わりだ、ホルスでタイダルに攻撃！」

黒い炎が視界を埋め尽くすほどの勢いで吐き出され、みるみるうち  
に炎に邪魔されて何も見えなくなる。ここで唯一効果がありそうな  
のはエドの伏せたなんかよくわかんないカードで、フリーチェンな  
のはわかるが今使う意味があるものかどうかもわからない。

だけど、このカードを見た時のミスターTの反応が気になった。幽  
獄の時計塔はエドのデュエルディスクにセットされてるから僕には  
効果を見ることができないけど、もしかしてこのカードが役に立つの  
だろうか。どうもミスターTは効果を知っているみたいだけど、もし  
かしたら今の反応を見て僕がこのカードを使うことまで想定済みの  
高度な罠なのかもしれない。どうする？どうすればいい？

「……………ええい、どうせこのままじゃやられるんだ、こうなったらどう  
にでもなれ！リバーストラップ、エターナル・ドレッドを発動！時計  
塔に時計カウンターをさらに2つ乗せる！」

ものすごい勢いで時計の針が動き、あっという間に6時間が経過し  
て最初の12時の位置に戻る。それがきっかけになったのかこれま  
で一度もならなかった鐘がいきなり重い音を出し始め、ゆっくりと1  
2階の音が誰もいない町に響き渡った。

が、無論それだけで、ホルスの炎がこちらに到達した。

ダーク・ホルス・ドラゴン 攻3000↓清明&エド（直接攻撃）  
そのままこちらを襲うであろう戦闘ダメージに備え、とっさに顔の前で腕を組んでガードする。

だが、いつまでたつてもこちらの体を吹き飛ばす炎の衝撃が来ない。たつぷり20秒は経ってから恐る恐る前を見てみると、とつくに攻撃をやめてミスターTのフィールドに舞い戻っているホルスが見えた。あ、あれ？

「まったく……幽獄の時計塔に時計カウンターが4つ以上乗っているとき、こちらが受ける戦闘ダメージは0になる。知らずにエターナル・ドレッドを使ったのか、見ている方がひやひやする」

ジトーツとした声音のエド。さぞかし冷たい目でこちらを見てるのだろう。

「コホン。まあでも感謝するよ、おかげでこのターンは生き延びれた」  
「確かにな。カードを2枚伏せて、ターンエンドだ」

「僕のターン、ドロロー。スタンバイフェイズにデビルガイのエフェクトが切れ、先ほど除外したダブルコストンがお前の場に戻る」

ダブルコストン 攻1700

「魔法カード、デステニー・ドロローを発動。手札からD—HEROを捨てることで、カードを2枚引く。僕が捨てるのはこのカード、ダツシユガイだ」

「ならばこの瞬間、ダーク・ホルス・ドラゴンの効果発動！相手がメイソフエイズに魔法カードを使用した時、墓地からレベル4の闇属性モンスターを特殊召喚することができる。私はルキウスを選択！」

邪帝家臣ルキウス 守1000

これまでのターンでは墓地にレベル4の闇属性がいなかったため効果を発動できなかったダーク・ホルスも、ルキウスをアドバンス召喚に使用したことでようやく蘇生先を手に入れた。まあ、それもエドがなんとかするだろう。

「それがどうした！カモン、ダイヤモンドガイ！」

全身からクリスタルを生やしたトゲトゲしている戦士。攻撃力は

ダーク・ホルスやベリアルには遠く及ばないのだが。

D—HERO ダイヤモンドガイ 攻1400

「ダイヤモンドガイのエフェクト発動！デツキトップのカードを確認し、それが通常魔法ならばそのカードを墓地に送ることで次のメインフェイズにコストを踏み倒してその効果を使用できる、ハードネス・アイ！当然通常魔法、終わりの始まり。ルキウスに攻撃したいところだが、ベリアルを倒さない限り他のモンスターを攻撃することはできないからな。カードをセットしてターンエンド。これで僕もハンドレスか」

ミスターT&ミスターT LP2000

モンスター：ダーク・ホルス・ドラゴン（攻・闇次元）

闇の侯爵ベリアル（攻）

ダブルコストン（攻）

邪帝家臣ルキウス（守）

魔法・罨：冥界の宝札

悪夢の拷問部屋

闇次元の開放（ホルス）

2（伏せ）

清明&エド LP4200

モンスター：D—HERO ダイヤモンドガイ（攻）

魔法・罨：2（伏せ）

場：幽獄の時計塔（4）

「私のターン。もう終わらせてもいいでしょう、ダブルコストンをリリースしてアドバンス召喚！我が主の名のもとに、ダークネス全てを闇に染め上げる！怨邪帝ガイウス！」

一瞬先ほどと同じガイウスが召喚されたように見えたが、それを指摘しようと思った瞬間その体全体に大量の闇が吸い込まれていった。それを吸収してみるうちにその体が膨れ上がり、これまでの割とスマートな体つきから一転して筋骨隆々とした体形になっていく。

怨邪帝ガイウス 攻2800

「怨邪帝ガイウスは闇属性モンスターを利用してアドバンス召喚に成

功した時、フィールドのカード2枚を除外して1000ダメージを与え、それが闇属性モンスターだった場合同名モンスターをすべて除外させる効果を持つ。ククク、幽獄の時計塔とメタル・リフレクト・スライムを除外だ！」

もはや闇の球を作り出すようなこともせず、時計塔よりも大きくなったガイウスが腕の一振りですべて塔を叩き潰し、僕の伏せたスライムカードを同時に踏みつぶそうと一歩を踏み出す。

「やむを得ないな。リバーズカード、ダブル・サイクロンをチェーン発動！僕の場合に存在する幽獄の時計塔と、お前の闇次元の開放を破壊する！」

「むっ……………ダーク・ホルス！だがスライムの除外は確定した、よって1000ダメージは変わらず受けてもらおう」

闇次元の開放は、いわば闇属性かつ除外されたモンスター用のリビングデッドの呼び声だ。つまり、それが破壊されれば呼び出したモンスターも倒れ、モンスターが敗れば本体も破壊される。攻撃力3000を誇るダーク・ホルスを倒したのはデカいけど、スライムがやられたことでダイヤモンドガイ1体だけではこれからの攻撃をしのぎ切れない。

清明&エド LP4200↓3200↓2900

「問題ないね。時計カウンターが4つ以上乗った時計塔が破壊された時、そこに囚われていた囚人が解き放たれる！出でよ、D—HERO ドレットガイ！」

崩壊した時計塔の瓦礫を跳ね飛ばして現れた上半身裸の男。傷だらけの両手両足には重そうな鎖をつけ、顔には鉄のマスクをはめられていて口しか見ることができない。その男は自分が自由の身になったのが信じられない、といった様子でキョロキョロと辺りを見回し、手足を自由に動かせることを確認すると喜びの余り獣のように一声吠えた。

「ドレットガイは解き放たれた時、墓地のD—HEROを2体まで特殊召喚することができる。ドレット・ウォール！甦れ、ダッシュユガイ！」

D—HERO ダッシュガイ 攻2100

「だがこれだけじゃない、ドレッドガイの攻撃力は自分フィールドのD—HEROの全攻撃力の合計になる！」

D—HERO ドレッドガイ 攻0↓3500 守0↓3500

「これで形勢逆転さ。おっと、先に言っておくがドレッドガイを特殊召喚したターン、全てのD—HEROはドレッドガイのもう一つの効果であるドレッド・バリアに守られてあらゆる手段で破壊できず、僕の受ける戦闘ダメージも0になる。どうやっても突破はできないのさ」

うわあ悪い顔。というのは置いて、さすがにプロデュエリストだけのことはある。あつという間にあんな上級モンスターばかりの相手に対抗できるだけの戦力をフィールドに揃えるだなんて、並みの腕でできることじゃない。だが、ミスターTは依然として余裕の笑みを崩さなかった。

「戦闘ダメージが0になるなら、それも構わない。気が付かなかったのかね？ 私が君のダブル・サイクロンにさらにチェーンしてチェーン3にこの伏せカード……速攻魔法、サモンチェーンを発動していたことに」

「何っ!?!」

「サモンチェーンの効果によって、このターン私が行える召喚は3回になる。ルキウスをリリースし、邪帝ガイウスをアドバンス召喚！ 召喚時効果で、まずはドレッドガイを除外！」

囚人が自由を勝ち得たのもつかの間、その体が闇の中に引きずり込まれて消えていく。そしてドレッドガイは闇属性、効果ダメージは発生してしまふ。

清明&エド LP2900↓1900↓1600

「ここで私の手札も尽きてしまいましたからね。トラップカード、強欲な瓶を発動。デッキからカードを引きます。これはこれは……アドバンス召喚されたモンスター、邪帝ガイウスをリリースして怨邪帝ガイウスを召喚！ 先ほどは言いませんでしたがこのカードはアドバンス召喚されたモンスターをリリースする場合、リリース1体で特



殊召喚できるのですよ。そして闇属性モンスターをリリース素材としたことにより、残りのヒーローにも消えていただきましょう！」

2体目のガイウスが身をかがめてダッシュユガイとダイヤモンドガイを掴みあげ、そのまま握りつぶす。エドの表情はここからはちょうど横顔しか見えないが、ダメージによる痛みとは別にどこかつらそうに見えた。

清明&エド LP1600↓600↓300

「これで私の手札はなくなり、召喚権も消えた。戦闘ダメージを与えられないのなら、このままターンを終えましょう」

「まだまだ、諦めてたまるか！僕のターン、ドロー！」

引いたカードは………駄目だ！このカードだけじゃ逆転どころか次の攻撃を耐えることもできない！

「まったく、どうしようもないのはその顔を見ればわかる。僕が君に手を貸すなんてあまり気に入らないことではあるが、1つアドバイスしよう。あまり細かく言うのはルール違反だが、僕が先ほどのターン何をしたのかよく思い出してみるんだ」

さっきのターン。デステニー・ドローでカードを引き、水晶男を召喚して効果を使い………なるほど、やっと理解できた。

「さっきエドが発動したダイヤモンドガイのエフェクトを発動！終わりの始まりの発動条件およびコストを全部踏み倒して、その効果でデッキからカードを3枚ドローする！」

引いた3枚と、手札のカードを見る。よし、道は見えた！ミスターTの最後の伏せカードが気がかりだけど、ここは突っ走るしかない！「自分フィールドにモンスターが存在しない時、このカードは通常召喚できる！天をも焦がす神秘の炎よ、七つの海に栄光を！時械神メタイオン、召喚！」

この状況を変える力を持つ、大きくなったガイウスには若干及ばないものの、それでも圧巻のサイズを誇る僕の第二の神。

時械神メタイオン 攻0

「まだまだ。魔法カード、デュアルサモン二重召喚を発動。これにより僕は、このターンもう1度の召喚ができる」

「ならばその発動にチェーンしてトラップ発動、2枚目の闇次元の開放！ダーク・ホルス・ドラゴンを呼び寄せ、魔法カードが発動されたことでルキウスを蘇生！」

ダーク・ホルス・ドラゴン 攻3000

邪帝家臣ルキウス 守1000

「どうやらメタイオン先生のこととは知ってても、その効果は知らないみたいだね。わざわざありがとう、って言いたい気分だよ。来て、キングミスト霧の王！」

霧の王 攻0

「攻撃力0のモンスターを並べて、何をする気だ」

「エド、ちよつとの間黙って見てなって。墓地からタイダルの効果発動、墓地のシャクトパスと手札の氷帝メビウスを除外してこのカードを特殊召喚！」

爆征竜―タイダル 攻2600

「用意は全部整った、これで最後のバトルだ！メタイオンでベリアルに攻撃、ケテルの大火！」たいか

メタイオン先生が両手から炎を放つと、それがまるで意思のあるように動いてお互いのフィールドをぐるりと取り囲む。僕のフィールドを包む炎は、触つてもまるで熱くない奇跡の炎、俗に言う生命の火……。だがあちらのフィールドを覆うのは、清らかではあるが何人たりとも逃げられない裁きの炎、とのことらしい。自分でも消えない炎のフィールドを作ることのできるチャクチャルさんがそう言ってたからたぶん間違いない。ガイウスが、ベリアルが、痛みを感じる暇もないほどの速さで焼き尽くされて消えていく。

「これで2丁上がり！メタイオンが戦闘を行ったバトルフェイズ終了時、フィールドの全てのモンスターを持ち主の手札に戻し、その合計数×300ポイントのダメージを与える！この効果を受けるモンスターはそつちのガイウス2体にベリアル、ダーク・ホルスとルキウス。これだけならダメージは1500止まりだけど、この効果は僕のフィールドにも範囲が及ぶ！さらにタイダルと霧の王を手札に戻すことで、累計ダメージは2100ポイントだ！」

「何、まさかこれほどとは……!」

ミスターT&ミスターT LP2000↓0

きれいに声をハモらせて、同時に吹き飛んでいくミスターT。やれやれ勝ったと一息ついていると、エドがミスターTに詰め寄っていくのが見えた。

「さあ、齋王について知っていることを教えてもらおうか……なっ!？」

なんと、ミスターTの姿が服やらサングラスやらも含め全身がカードの束になって、地面にバサリと崩れた。さすがに慌てたエドがそのカードを拾い上げようとすると、そのカードたちが一斉に透明になっていき、ついには全てがまるで最初から何もなかったかのように消えてしまった。どうなってんのさこれ。

「今のが何であれ、とにかく無駄足だったか。僕は齋王に用があるんだ、君自体には用はない。その2人の介抱でもしてやるんだな」

すぐに気を取り直したエドが、どこかに歩き去っていく。一瞬引き留めようかとも思ったけど、何を言っているかわからなかったし夢想と親父のことも気になるので諦めて見送るのみにする。とりあえず二人とも呼吸は安定してるし、布団ひいて寝かしときや夜までには起きるかな。

『マスター、ちょっとダークシングナーになってくれ。2人とも放っておくだけだと目が覚めるまでに10日はかかるぞ』

「ごめんちよつと説明して」

いきなりわけのわからないことを言いだしたチャクチャルさん。話をまとめてみると、なんでもミスターTの力のせいで眠らされている2人を起こすには、自然回復を待つよりも別の力を加えてミスターT成分を追い払う方が早くて安全らしい。

「なるほどねー。あーらよつと!で?2人の額に手を置いて?」

「……っ!？」

油断してた。というより、甘く見ていた。なんだかんだいってデユ

エルでは勝てたし、別に大したことないだろうとばかり思ってた。だけど、それはとんだ思い違いだ。ものすごい勢いで、ダークシグナーの力どころか僕自身の体力まで吸い込まれる。ようやく終わるころには疲労感たつぷりで、今にも倒れる寸前ぐらいだった。けどまさか道のと真ん中で3人そろってぶっ倒れるわけにはいかないの、なんとかかよろよると立ち上がる。

『思ったよりがつつりした呪いだつたな、ミスターTめ。常人なら今意識があるだけでもおかしいレベルに消耗しているはずだ、向こうが気になるのはわかるがここはいったん抑えてくれ』

布団を敷こう。家の物の配置、変に変わってなきやいいけど。夕飯も作ろう。もう一步も動きたくないけど、夜には何か食べないとそっちの方が体に悪い。その頃には2人とも起きるみたいだけど、なにせ親父ときたらケーキと紅茶に関しては僕よりずっと上なのに他の料理及び家事に関しては駄目の一言に尽きるからね。今日初めて来た夢想じやあ冷蔵庫やらなんやらの場所もわからないだろうし、やっぱり僕がやるしかない。

親父を担ぎ上げ、夢想を背負う。何がとは言わないけど背中の方が大変柔らかくて一応年頃の男としては非常にうれしいです。

『顔赤いぞ、マスター』

「うるさいー」

最後に、もう一度街を取り囲む4体の帝を見る。誰が戦ってるのかはわからないけど、こんな調子だと僕は加勢に行けそうにない。そもそもデュエルが起きてる場所までたどり着けるかどうかも怪しいものだし、もし着いたとしても頭がボーっとして使い物になるかどうかもわかったもんじゃやない。料理なら半覚醒状態でもできるから問題ないけど、デュエルは体力だけじゃなく脳みそも使う文字通りの全身運動だからね。

でも、なんとなく十代たちならどうにかなる気がした。なぜ十代たちだと思ったのかは自分でもよくわからない。だけど、あんなにでっかく精霊が出てるんだから十代が反応しないわけがない。それと前からちよいちよい思ってたけど、どうも剣山も普通じやない何かを

持つてるみたいだし。翔はどうせあの二人の最低でもどつちかと一緒にいるだろうから、これも大丈夫なはずだ。悪いけど、夜ぐらいまでは一時的にリタイアさせてもらおう。もう異様な疲れがたまってしまうんじゃないんだ。

## ターン55 鉄砲水と冥府の姫と

「おいおいおい、どーなってんのこれ」

もう数十回目になる『おかけになった電話は、電波の届かないところか、電源が切れて…………』という電子音声に、電話を放り出したくなる。昨日ミスターTを返り討ちにしてから1日、結局宿泊先のキャンプに行く気力もなくずるずると自分の家で泥のように眠っていた。一応チャクチャルさんが根回ししておいてくれたおかげで搜索届とかは出てないはずだから、その点は安心できる。その根回しとやらは具体的にどうやったのかはすごく気になるけど。人に迷惑かけてないだろうか。若干不安だ。

ただその根回しに行ってきたチャクチャルさんが、一つ気になる情報を掴んできたのだ。それが、他にも数人が行方不明だということ……………具体的にはエド、翔、剣山、そして十代である。なのでとりあえずエド以外の全員が学校から持ち込んでるはずのPDAに連絡をつけてみたのだが。

『おかけになった電話は……………』

「もういいよ」

聞き飽きた電子音声に受話器を放り投げ、ここに来るとき持ち込んだ荷物をまとめる。

「なんだ、もう行くのか？学生は忙しいな」

「さすがに儲かってない店の店主は言うことが一味違うねー。少しは商売つ気出さなきや本気で潰れちゃうよ？」

「おうなんだ、お前の癖に親を心配するなんて珍しいじゃねえか。こりゃ今日は雪だな」

軽口をたたきながらも、親父の顔は固い。多分僕も似たような感じだろう。今回だって、友達が行方不明だと言ったら店をさぼってまで探そうとしてくれたのをこっちが引きとめたのだ。なにせ相手はデュエルを仕掛けてくるんだから、非デュエリストが不用意に首を突っ込んだりしたらどうなるかわかったもんじゃやない。なんののかんのかのといってもやっぱり僕の唯一の肉親が相手なんだから、なおさらの

ことだ。

「じゃ、行つてくるよ」

「……………おう。またな」

特に長々と話したりはしない。お互いにそういうタイプじゃないし、改まって話すのはちよつと照れくさい。そのまま振り返らずに歩き出すと、ぴよこつと横に人影が現れた。

「清明、私も一緒に。つてさ」

「夢想……………」

一瞬断ろうかと思つたけど、僕もいい加減夢想との付き合いも長いからよくわかる。彼女は自分がこうと決めたら何言つたつて聞きやしないから、説得しようと考えただけ無駄だ。なので、

「そうは言つてもねー、僕もあてなんてないんだけど」

とだけにとどめておく。

「なら、駅に行つてみない？だつて」

「駅？」

「うん。もし童実野町の外に出たなら、駅員の人がおぼえてるかもしれないし。清明もそうだけど、この制服つてわりと派手じゃない？つてさ」

自分の着ている真っ赤な制服を見ると、なんだか妙に納得できた。なるほど、確かに一理ある。それに、ここからなら一番近くの駅まで5分とかからない。

「さつすが夢想。十代たち、いるかなー」

「赤い洋服で腕にデュエルディスク付けた人かい？そういえば今朝見たねえ、2人組でしゃべってたんだけど、ここから隣町まで行くつて言つてたっけか」

「あらま。あ、ありがとうございました」

まさかとは思つたけど、まさか一発目でビンゴするとは。ラッキーというかなんというか、なんかちよつとできすぎてるような気もする。とはいえ他に手がかりがあるわけでもないの、とりあえず切符

を買う。夢想の分も合わせて2枚。高い。

『そこで二人分買うあたり律儀といつかなんというか』

「(やつぱ見栄は張りたいたいからね。まだ生活費にまでは手つけてないしギリギリオツケー。それより、頼んでた方はどうだった?)」

頭の中に割り込んできたチャクチャルさんとこれまた頭の中で会話しながら、同時にそんなそぶりを見せないように夢想とも喋る。精霊が見えるつてのは便利だけど不便だ。ちよつと気を抜くとすぐに何もないとすると会話してる危ない人扱いされる。

「はいこれ、夢想。次の電車つていつだっけ?(このままでも問題ないよね?)」

「ありがとう、だつてさ。でも清明、お金大丈夫なの?」

『問題はないが、だからこそ怪しいな。町全体を感知してみても、引つかかるものはまるでなし、だ』

「ま、なんとかね(そりゃまた……で、十代たちもいない、と)」

ここで夢想との会話を切り上げる。最初は何とかなるかとも思ってたけど、やつぱ無理だ。あのまま二つの会話を同時に続けてたらどこかで脳が限界になっていただろう。

「(少し整理させて。昨日までは確かにいた4体の帝が今朝になったらきれいさっぱり消えていて、その上十代たちとエドも消えてると。チャクチャルさん、十代たちの方はともかくとして、帝があつさり消えたことについてはどう思う?)」

『おそらくそれぞれのカードの使い手が誰かに倒されたのだろう。と言いたいところだが、あの帝どもは明らかに精霊としての能力が暴走しかかっていた。もしカードの使い手が倒れでもしたら、それこそストッパーがなくなった精霊が暴れまわってもおかしくないほどにな。だが何の痕跡も残さずに消えていったところを見ると、十中八九昨日のミスターTだろうな。おおかた元は普通の帝だったものに無理やり力を注ぎこんで強制的に進化させたのだろう』

「(それでミスターTを倒したからそのブーストが切れて、暴走しなくなつたつてこと?)」

そう聞くと、腑に落ちなさそうにしながらも肯定するチャクチャル



さん。だったら、別に何もおかしいところはないと思うけどなあ。

『それ自体はな。私が言いたいのはそこじゃないんだ、マスター。ミスターTを倒せば帝にかけられた強化が切れるというならば、なぜ奴はわざわざデュエルを挑んできた？確かにあの場面でマスターが負けるようなことがあれば、同時に私の存在もナスカに封じることができただろう。だが、そのためにわざわざ本人が直接出てくるというリスクを冒した理由がどうも納得できない』

「そりやそうだけど……でも、なんか昨日だってミスターT分裂して増えてたじゃん。あれも分身だったんじゃないの？」

『自分から仕掛ける側じゃないから今一つよくわかってないみたいだな、マスター。闇のゲームは命どころか魂まで賭けたゲーム、分身を身代りにたてられるほど甘いものではない。もつともミスターTの場合は生まれが特殊だからしばらくすれば自動で蘇ることができが、それでも決してノーリスクではない』

「他の人に闇のゲームなんてやらせたくなかったとか……？」

『そんな人間に優しい感性なんて持ち合わせていると思うか？』

「とりあえずチャクチャルさんが大嫌いな相手なのはよくわかった」

そこで駅についたので、また話がいったんストップする。ふと視線を感じたのであたりを見回すと、なんだか近くの乗客全員がじつとこちらを見ていた。よくわからないまま睨み返すと、慌ててきつと目をそらされる。奇妙な空気のまま降りると、隣の車両からこっそりと夢想が降りてきた。ついさつきまで隣にいたのに、まさかこれも光の結社が何か仕掛けたとか。どうもよくわからないことばかり起きるか、さすがく不気味だ。

「来たのはいいけど、どこから探そうかね」

「う、うーん。あれ、もしかしてあそこにいるの………ってさ」

駅前の広場に噴水があり、そこには大時計が備え付けられている、そこの前に立ち、時間を見ている赤い制服と黄色い制服の2人組がい

た。

「十代、こんなところで……」

何してんの、とは言えなかった。僕の声に振り返った赤い制服の男は、後ろから見ると十代と同じ茶髪だったがその顔はまるで別人だった。もう一人も振り返るが、こちらは知らない人だ。

「よう、遅かったな」

「だがさすがは三沢さんだぜ、本当にこいつらここまで来やがった」

「三沢!?まさか君たち!」

「その通りだ!」

そう言い放ち、二人が来ていた制服を脱ぎ捨てる。そこから現れたのは、もはやおなじみとなった白づくめの格好。なぜか髪の色まで急に白くなったのはどういうわけだ。

「あれ、光の結社なの?つてさ」

「ふふふ、その通り」

「今、童実野町にお前らみたいな邪魔な奴がいたら斎王様の計画に支障が出るんでな」

「三沢さんに相談して、お前らを街の外におびき出すための作戦とそのためグッズを考えてもらったのさ」

夢想の問いに片方が得意げに言うのと、もう片方がその後を続ける。どこかで見たことあると思っただけど、そうだ。迷宮兄弟のノリとよく似てるんだ。もつとも目の前の2人は、息こそぴったり合っているものの顔や体格はまるで似ていない。でもあの二人、どこかで見たことあるようなないような。

「さあ、大人しく俺らとデュエルを……」

「あーっ!!」

「なんだいきなり!」

「思い出した!君らあれか、元万丈目の金魚のフンやつてた取巻とりまきにしたいたに慕谷か!」

同年代とはいえとくに話をしたわけでもないし万丈目も特に昔の話はしたがらなかったからすっかり忘れてたけど、そうか。この二人もいつの間にか光の結社側に行ってたのか。そうかそうかと一人で

納得したのだが、どうやら本人たちはそれがお気に召さなかったらしい。

「金魚のフンだど？許さんぞ！」

「よせ、取巻。三沢さんに作ってもらった俺たちのアンチデツキならいくらこの二人が相手でも太刀打ちできないんだ、今はせいぜい好きなだけ言わせてやれ」

全部筒抜けなのは放っておこう。それにしても、三沢が作ったアンチデツキか。きつとガツチガチにメタってあるんだろうなあ、嫌だなあ。

「そ、そうだな。よし遊野清明、お前の相手はこの取巻様が……」

「じゃ、その君は私が相手するから、清明はそっちお願いね、つてさ」  
「え」

……さらつとんでもないこと言うなあ、夢想は。可愛い顔してえげつない。まあ僕だってアンチデツキの相手なんか好き好んでしたくないし、ここは彼女に話を合わせよう。

「あー、えつと、さ、さーこい慕谷！この遊野清明が相手だ！」

「え、おま、ちよ……」

「取巻、だっけ？私に挑むんなら、それなりの覚悟はしてもらうからね、だつて」

「こ、こんなはずじゃ……」

「それじゃあ、デュエルと洒落込みみましょうか。なんだつて」

夢想、割と本気で怒ってるな。何がそんなに気に食わないのかはわからないけど。一応僕も怒ってるっちゃ怒ってるけど、単に夢想と二人でいられるのを邪魔された恨みだからなあ。それなりの代償は払ってもらおうし当然そこを譲る気はないけど、夢想はなんで怒ってるんだろうか。僕と同じ？まさかね。

「！！デュエル！！！！」

「やってやる、やってやるさ……！俺のターン、月風魔を召喚！さらに装備魔法、竜殺しの剣を装備。これで攻撃力は700ポイントアップし、さらに戦闘するドラゴン族を破壊する効果を得たぜ。これでターン終了だ。クソツ、こいつが相手じゃ傀儡虫の効果が使えやしねえ」

月風魔 攻1700↓2400

「(ねえチャクチャルさん、今言ってた傀儡虫ってどんなのだっけ)」  
『ふむ。手札から捨てることで悪魔族かアンデット族のコントロールを1ターン奪うモンスターだな』

なるほど、夢想のワイトやら龍骨鬼やらの対策か。で、竜殺しの剣でドラゴネクロ対策もばっちり。悪くはないけど、多分それだけじゃ夢想相手でも負けてたと思うぞ。

「もつとも、今の相手は僕だけだね。ドロ―！ハリマンボウを通常召喚して、そのままリリース。水属性モンスターをリリースすればこのカードは特殊召喚できる！出てきて、シャークラーケン！」

シャークラーケン 攻2400

「俺の月風魔と攻撃力が同じだど!?相打ち狙いか」

「慌てなさんなつての。ハリマンボウが墓地に送られたことで相手モンスター1体の攻撃力は500ポイントダウン、さらに手札と墓地の水属性モンスター、シャーク・サツカーとハリマンボウを除外！唸れ、タイダル！」

タコのような触腕を持つ鮫と並び、水色のドラゴンが羽を広げる。月風魔の持つ対ドラゴンの剣を前にしても一歩も引かずに睨みつけるその姿は、まさに王者としての貫録を持っているように見えた。

月風魔 攻2400↓1900

瀑征竜―タイダル 攻2600

「ま、まだだ……まだ次のドロ―で」

「あー？やだなあ、そんなもんさせるわけないでしょ。魔法カード、アーク・ジェット発動！魚族モンスターのシャークラーケンの攻撃力は、このカードの力で1000ポイントアップするよつと」

シャークラーケン 攻2400↓3400

「ひ、ひいつ」

「バトル、シャークラーケンで月風魔を攻撃！」

シャークラーケン 攻3400↓月風魔 攻1900 (破壊)

慕谷 LP4000↓2500

「これでとどめだ、タイダルのダイレクトアタック！ウェイブ・オブ・

タイダル！」

瀑征竜―タイダル 攻2600↓慕谷（直接攻撃）

慕谷 LP2500↓0

「はい、一丁上がりつと。夢想ー、そっちはどんな感じ………うわあ」  
無事にデュエルも終わり、チラツと隣の夢想のフィールドを見る。  
もつとすさまじいことになっていた。

清明がデュエルを始めたのと同時に、夢想の戦いも始まっていた。

「本来はアンチ水属性のデツキなんだけどな、こうなったらやっつてやるさー！俺のターン、魔法カード、融合を発動！手札のベビー・ドラゴンとワイバーンの戦士を融合し、ドラゴンに乗るワイバーンを呼び出すぜ！このモンスターは相手フィールドの表側モンスターが炎、地、水属性の時のみ直接攻撃ができる！さらに龍ドラゴンズ・ミラーの鏡を発動、墓地の通常モンスターであるさっきの2体を除外することで、融合召喚！出てこいや、始祖竜ワイアーム！」

ドラゴンに乗るワイバーン 攻1700

始祖竜ワイアーム 攻2700

瞬く間に並ぶ2体のモンスターを見て、やや夢想も目の前の敵に対する認識を改める。思ったより、あくまでも最初に思ったより、という程度にはこの男は強い。

「ここでカードを伏せて、ターンエンドだ」

「私のターン、ドロー」

「今だ！永続トラップ発動、メサイアの蟻地獄！このカードがある限り、レベル3以下のモンスターはエンドフェイズごとに破壊されるぜ。本来なら遊野清明用のカードだったが、考えてみりゃホワイトにだって十分効くなあ」

ドヤ顔での語りが、彼女の苛立ちに油を注ぐ。最初のうちは1ターンぐらい様子を見ようかとも思ったが、そんな情けをかける気も消え失せた。

「魔法カード、手札抹殺を発動、つて。手札を捨てて、その枚数ぶんだ

けドロー。さらに暗黒界の取引を発動。お互いカードを1枚引いて、1枚捨てるんだって。魔法カード、ワン・フォー・ワンを発動、手札のモンスターカードを1枚捨ててデツキからレベル1モンスター、ワイトキングを特殊召喚するみたい。それとこのターン通常召喚してなかったから、ワイトキングを通常召喚」

ワイトキング 攻7000

ワイトキング 攻7000

「ちよ、ちよつと待ってくれよ……なんで攻撃力7000が2体も後攻1ターン目で並ぶんだよ……」

無論、彼女は不正などしていない。たまたま初手に手札抹殺とワイト3枚にワイトメア2枚が来て、暗黒界の取引で引いたワイト夫人をそのまま捨て、偶然引いたワン・フォー・ワンのコストにたまたま手札にあったワイトプリンスを使っただけである。どこからどう見てもオーバーキル以外の何物でもないが、その数字の大きさがそのまま彼女の怒りを物語っている。

「ワイトキング2体でドラゴンに乗るワイバーン、始祖竜ワイアームに攻撃、つてさ」

「ぎゃあああああっ!？」

取巻 LP4000↓0

「ふーんだ、だって。馬に蹴られて死んじやいなさい、だってさ。あ、清明、こっちも終わったよ」

「うう………」

放心状態でその場に座り込む取巻を見て、とりあえず、夢想のことは絶対怒らせないようになしようと固く誓った。あんなの実戦で喰らったらさすがに僕でも心が折れそうになる。

「つたく、それにしてもこれで振り出しか。十代たち、どこ行っちゃったんだか」

正確に言えば電車賃の分だけマイナスだけど、これに関しては今更どうしようもないのですっぱり諦めることにして、とりあえず念のためにもう一度だけ連絡をつけてみる。数回のコール音が鳴り、そのまま電子音声に……

『あ、清明！一体どこ行ってんだよ、探してたんだぜ？』

「じゅ、じゅじゅ十代!?今どこにいんの!?!」

『お、おう。えーっと、今は俺たちのキャンプ地にいるぜ。もっとも、俺もついさつき帰ってきたばっかだけだな。昨日からいろんなことがあつたんだ、アカデミアに戻ったら色々俺の武勇伝を聞かせてやるぜ！だから早いところこっちまで来いよ。じゃあ、また後でな!』

そこで通話が切られた。でもとりあえず電車賃をせびる相手が見つかったので、そこはまあよかったとしよう。

……………無事で、よかった。

「帰ろっか、夢想」

「ねえ、清明。その前に少しだけ付き合ってくれる、だって」  
「？」

どこか寂しそうな顔の夢想によくわからないながら黙ってついていく。駅の裏手に回り、そのまま少し進む。

「ここは…………」

「ごめんね、変なところに付きあわせて。でも、ここに来たらどうしても寄りたかったの、ってさ」

そこは、小さな墓地。ささやかなスペースにいくつかのお墓が立ち並んではいるが、周りに生えた木のおかげでうまいこと電車に乗っているときには見えないようになってる。

その中の1つ、特に目立つわけでもないごく普通の墓の前に立ち、夢想が静かに手を合わせる。年月のためかややかすれた表面にはなんとか見えるぐらいの字で河風家之一族、と彫られていた。

なんとなく空気を読んで僕も手を合わせること10数秒、夢想がゆっくりと口を開いた。

「ねえ、清明。私の喋りかたって、清明はおかしいと思う? ってさ」

「え?」

「お願い、正直に答えて。って」

いきなりの質問に虚を突かれる。だからだろうか、それとも墓地と

いう空間のよくわからない空気に吞まれたのか。割と正直に思うところを話していた。

「そりゃまあ、最初はそうも思ったださ。でも入学してからかれこれ一年以上たつて、もうすっかりそんなのどうでもよくなつたよ。どういう喋りかただろうと、何を考えていても、それ全部ひつくるめての夢想だからね」

ちなみに今のセリフを一言にまとめると慣れた、である。でもちよつとぐらいカツコつけた言い回しにしてもいいじゃない、どうせ他には誰も聞いてないんだし。

そんな答えを聞いた夢想はほんの少し笑って、それからまた真剣な顔にもどつた。

「私のお父さんとお母さんは、今ここにいるの。私が物心ついてすぐのことだから、もう二人の声も覚えてないけどね、だって」  
「えつと……」

なんて言えばいいのかわからない。物心ついた時にはもう母親がいない、という点では僕と同じだけど、それでも僕には親父がいた。口も性格も悪いけど、商売を仕込んでくれたりもした。結局何も気の利いたことが言えないまま口を閉じると、それを待っていたかのようなタイミングでまた話し始める。

「交通事故だったんだけど、その時の車には私も乗ってたの、つて。今でもぼんやり覚えてるんだ、その時の感覚は。それで、それから一月ぐらい、私は喋ることができなくなったの。お医者さんは事故のショックだつて言つてたけど、だって」

僕の母親が死んだときはどうだっただろうか。あの親父が泣いてるのを見たのは、後にも先にも事故の知らせを受け取ったその時だけだ。それだけしか覚えてない。

「ここから先の話は信じてもらえないかもしれないけど、最後まで聞いてね、だって。その時に私は、声を聞いたの」  
「声？」

「そう。その声は私に、事故のショックのせいで私が一生喋ることはできないけど、ある条件さえ受け入れてくれればその代用策を出して



くれるって言ったの、だって。まだ小さかった私は、その取引を喜んで受け入れたんだ。それで、今でもその取引は続いているの、ってさ」  
「取引……」

どうしよう。去年散々不思議なものを見てきてるから一概に嘘とは言いいられない、というか多分夢想の話は本当なんだろう。ただ口がきけないのを直すほどの力を持った奴のする取引なんて、絶対ロクなものじゃない。嫌な予感がすごくする。

『ちなみに私は死人を蘇<sup>マスタ</sup>らせたけどな』

「(ちよつとチャクチャルさん静かにしててね)」

『命の恩神に対して雑な扱いだな、まったく……』とはいえ、確かにその手の取引はだいたい裏があるだろうな』

最後に不安をかきたてるようなセリフを残し、チャクチャルさんの気配が頭の中から引いていく。

「私が何か喋りたくなると、その内容を話すことのできない私に代わってその取引の人が代わりに私の口を動かしてくれる。そのかわり、いつか必要になったときに私が1つ言うことを聞く。なんだか改めて口に出すと……ううん、出してもらおうと信じられない話だけど、全部本当だってさ。私のこの変な語尾は私本来の物じゃなくて、私が言いたいことを代わりに喋ってもらってる、いわば伝言としてついたもの、ってさ」

なんだか複雑な話になってきた。僕にとってこの世のあらゆる難しい話は専門外なんだけど、明らかによからぬ話なのは感覚的にわかる。世の中皆チャクチャルさんみたいにはほぼ無償で何かしてくれるほど甘いわけではないのだ。

でも、僕にはどうすることもできない。ダークシグナーとして生まれた僕は、いいことか悪いことかは別として普通の人にはできないたくさんのことをできるようになった。それでも、チャクチャルさんやその夢想の取引相手とやらのような『本物』には遠く及ばない。

「私の話はこれで終わり、だってさ。ごめんね、変な話を最後まで聞いてもらって。さ、帰りましょ」

重い雰囲気振り払うように明るく、夢想が墓に背を向けて歩き出

す。

「ちよ、ちよっと待ってよ！」

その後ろ姿を追いかけて少し歩き、途中で振り返って河風家の墓をもう一度見る。

「僕は、どんなことがあるうとも、夢想のそばにいたいもんだね。この先どうなるとしても、そこは譲らないよ」

改めて自分の思いを口にする、なんだか気が引き締まったような気がした。よし、僕もそろそろ帰ろう。

……そのあと帰りの電車賃が1人分しかないことが発覚したため夢想に切符を押し付けて歩いて童実野町まで行くことになったのはまた別のお話。

## ターソン56 鉄砲水と愉快な奇術師

修学旅行も無事……無事?とにかく終わり、ほんの一時だけアカデミアに平和な時間が来た。といっても光の結社が消えたわけではない。これまでやっていた腕づく力づくでの勧誘とは名ばかりの洗脳が幾分穏やかになり、目に見えて強引なことはしなくなったというだけだ。そんなある日の午後、新しく作ってみた蒸しパンが蒸しあがるのを待つ間に彼女はやって来た。

「先輩、今少し時間ありますか?」

「あれ葵ちゃん。斎王様、のところで金魚のフンやってなくて大丈夫なの?」

斎王様、の発音のポイントは一文字ずつ区切るように、なおかつたつぷりと嫌味を込めることです。光の結社ならほぼ9割がた今のでキレます。もつとも葵ちゃんはさすがにその辺の構成員とは格が違うのか、一瞬怒りに口元をゆがませながらもすぐに持ち直した。ちつ。

「……………まあいいでしょう。今日は先輩に聞きたいことがあつてきました。ついでにそのショートケーキ買おうかとも思ってたんですが、急に買う気がなくなりました」

「ごめんなさい訂正しますから許してください」

「私が言うのもなんですが、もうちょっとプライド大事にしたらどうですか?」

「そうは言ってもねー、現ナマつて大事よ?」

「なんでそんなまつすぐな目なんですか。らちがあきませんね、本題に入らせてもらいますよ?今朝、行方不明だった鮫島校長を見つけたのですがそのところ詳しく教えてください」

なんだ、という気持ち顔に出ていたのか、怪訝な顔をする葵ちゃん。でも、僕の気持ちだつて少しは考えてほしい。投網を担いで海に行ったら海岸に倒れてる校長がいたので慌てて保健室に担ぎ込んだ、その程度の話を一月中出会う人全員にする羽目になっている僕の気持ち。

「……………ってわけで、別に特別なことなんて何も無いんだけど」

「どこの世界に校長が海から流れ着くのが普通な学校がありますか。なんか先輩、しばらく見ないうちに凶太くなってませんか？」

「どの口がそんなことを。初めて会った時はあんなにしおろしかったのに」

「そういうこと平気で言っちゃうのが凶太いって言ってんですよ」  
「むー」

一瞬切り返したと思ったら、間髪入れず切り返された。残念ながら口では葵ちゃんに勝てない。

「まあ話戻すけど、本当に特に言うことなんてないんだって」

「んー……………みたいですね。先輩嘘つくの下手ですし、なにかおかしなところがあればあつさりばらすと思っただんですけど。じゃ、この辺で私は帰りますね。先輩もいつか斎王様の素晴らしさがわかるといいんですけど」

言いたいだけ言ってさっさと帰ってしまった。結局何一つ買っただけで、かなかったし。

『全校生徒の皆さん、校長の鮫島です。これから大事な発表がありますので、講堂に集合してください』

噂をすれば何とやら、か。それにしても校長、見つけた時は弱つたのにもう復活するとかさすがデュエリストだ。

「……………というわけで、今日からこのデュエルアカデミアを舞台とし、若きデュエリストたちがメダルをかけて腕を競い合う大会、ジエネックスの開始を宣言して。近日中にこの企画に賛同したプロデュエリストもこの島にやってくる。で、それまでの間に少しでも腕を磨くもよし、自らのデッキを強化するもよし。ただし、メダルを持っている生徒は最低でも一日一回のデュエルが義務付けられますので、忘れないように……………でオーケー？」

『……………ああ、そんなところだな』

なんだかいつぺんに情報を詰め込んだのでパンク気味になった頭

を冷やすこともかねて、チャクチャルさんにジエネックスの内容を確認しつつ、ついさつき配られた銀色のメダルをクルクルと回してみる。片面に『GX』と描かれた――――なんでも Generation<sup>世</sup> next<sup>次</sup>という意味が込められているらしい、決して高級品ではないもののどうしようもない安物ではない、ごく普通のメダルだ。全校生徒プラスアルファの分だけ用意してるはずなのにこのクオリティを保てるなんて、やっぱりバックに海馬コーポレーションがついてるだけのことはある。

『そ、それで、マスター。最初の相手は誰にするんだ？』

チャクチャルさんのもつともな疑問に、腕を組んで考える。十代はプロ<sup>プロ</sup>大物狙いで船で来るにしろヘリで来るにしろ確実に通ることになる港で待ち構えてるし、翔は早々に1年に無理やり勝負を挑んで逃げ切ろうとしている。剣山は剣山で頑張ってるし、その他の僕の知り合いもほぼ全員今日はデュエルを終えている。

「出遅れちゃったからねえ。うーん、どうしようか」

『何か、心当たりは？』

「心当たり、ねえ……………」

知り合いの顔をつらつらと思い浮かべる。どうせ最初なんだから、十代みたいにプロを狙うのもいいかも。どうせ負けたらメダルは総取りされるんだし、どこかでプロに当たるなら最初からいつてみたい。と、そこまで考えた時、もつと先に会っておくべきだった人の顔が頭に浮かんだ。気まずいからあんまり会いたくはないけど、どこかで謝らないといけないのはわかってるしね。

「よつこらせ、と」

『むっ…』

「まあね。ちよつと行ってくるよ。稲石さんに会いに」

稲石さん。元は豪華だったが今は見る影もない廃寮住まいの幽霊。身元も死因すべてが不明というよく考えたらとんでもなく怪しい人ではあるけれど、面倒見のいい人だ。ちよつと先代ダークシグナーのせいで荒れてた時期に喧嘩して以来会ってないけど、そろそろ仲直りしたいとはだいたい前から思っていたことだ。思っていたことではあ

るのだが。

「……………とはいってもねえ」

『そんなに、躊躇、するような、ものかね。もう、門の、前まで来て、10分は、経つぞ』

「いやー、だってさあ……………すつごい入りづらいんだよね、最後に会った時はなんかすんごい生意気なこと言っちゃったし」

ぐずぐずするのがよくないのはわかってるつもりなんだけど。そんな思いを読み取ってチャクチャルさんがため息をついたのが聞こえてきたその時。

「ああもうまったく、黙って見てればじれったい！いつまで人の家の前で立ってるつもりなのさ、自分に用があるんでしょ？だったら通すから入っといでよ！」

2階の窓から声がして、門がポルターガイスト的な何かでギイイ、と軋みながら開く。どうやら、ずっと見られてたらしい。夢想や葵ちゃんもそうだけど、この人にもあの2人とは別ベクトルで敵わないなあ、と思つて軽く肩をすくめる。

『マスター』

「何？」

『どんなに格好つけてもだいぶ情けないことに変わらないぞ』

「いや別にそういうんじゃないからね!」

「んで？」

「え、えっと」

廃寮の一室。水道はとうの昔に止まっているはずなのにどこからか稲石さんが淹れてきたコーヒーが湯気を立て、僕が手土産に持ってきた蒸しパンが小皿に切り分けておいてある。お互いに全く手を付けていないのを尻目にアラオがむしやむしやと蒸しパンを食べる音を背後に聞きながら、真剣な顔で僕と向かい合う稲石さん。この重い空気を少しでも和らげるため、蒸しパンと一緒に持ってきた小包を取り出す。

「とりあえずこれ、童実野町のお土産ね」

「へー、あそこ名産品なんて洒落たものあつたつけ。で、なにこれ」

「線香」

「……………」

「線香」

聞こえなかったのかと思ってもう一度繰り返すと、すんごいジトーツとした目で見られた。せっかく無理してちよつと高いやつ買ってきたのに、なにもそんな目で見ることないだろうに。

「……………」

「……………」

なぜか何もしやべらない稲石さん。あれ、もしかして選択ミスつただろうか。幽霊へのお土産なんだからもうこれしかない！つていう勢いで買ってきたんだけど、これについても謝ったほうがいいんだらうか。

「もういいよ、うん……。悪意がないのが一番性質タチ悪いんだけどね」

ため息をつきながら悟つたように言う稲石さん。やつぱりまづかったのか、とちよつと反省していると、それに、とさつきまでとはうってかわって心底安心したような顔でもう一度口を開いた。

「君も、もういつもの遊野清明に戻つたみたいだしね。それなら、それが一番いい。わざわざ自分たちの方でもプレゼント用意してたんだけど、もう必要ないみたいだしね」

「プレゼント？あれでも稲石さんってここから出られないんじゃない？」

「ふふ、内緒。ね、大徳寺センセ」

『そうなんだニヤ。でもよかつたニヤ、修学旅行で何人普通の生徒がいなくなるのかってハラハラしてたのは杞憂だったみたいで何よりですニヤ』

うわびつくりした。後ろを見ると、幽霊屋敷と化した廃寮にふさわしい半透明の人影が1つ。

『お久しぶりニヤ、清明君』

「どうもです、先生。相変わらず元気そうですね」

『ぼちぼちつてとこだニヤ。それより、外では鮫島校長が新しいこと

を思いついたみたいだけど、もうちょつと詳しく教えてほしいニヤ」  
なんでも、大徳寺先生が話を全部聞き終わる前にファラオが飽きてフラツとその場を離れてしまったため何が起きているのかイマイチわかってないのだという。そういうことならとジエネックスのことを一通り話すと、おお、といった感じで大徳寺先生が手をたたいた。『そういうえば、そんな感じのメダルをこの間ファラオがその辺で拾ってたニヤ。清明君、せっかくだからここで一回戦をしていかないかニヤ?』

「へ?えつと」

悪い話じゃない。多分だけど大徳寺先生とそのマクロコスモスデッキはプロにも引けを取らないほどの実力があるし、前回は辛うじて僕が勝ったけどあの時みたいにお互い色々なものを背負わないで純粋なデュエルがしてみたいとは常々思っていた。だから……。

「ぜひお願いします」

『うんうん、じゃあ二人とも頑張つてニヤ。さーファラオ、この間お前が見つけたお宝のところに案内してくれにゃ』

そう満足そうに言つてファラオの中に引つ込むと、どこかへ出かけて行つてしまった。えー……いや別に稲石さんも強いしそれはそれでいいんだけど、なんか、なんかかもやもやする。次元デッキを相手にする気だったのにいきなり相手がゴーストリックに変わったってのはなんかすんごいもやもやする。

「えつと………言いたいことはわかるよ。でも待つてる間じつとしてるのもなんだし、ね」

「そうですね。それじゃ、デュエルと洒落込みましょうか」

「デュエル!」

なんだかよくわからないノリでデュエルが始まったが、始まった以上全力で戦うまでだ。

「その意気やよし。でも、先攻は自分のターン。モンスターをセットして、ターン終了」

稲石さんお得意の、セットモンスター。だけど僕は知っている、あの人のデッキに守備力の高いモンスターはほとんどないのだ。



「だったら、このカードだ！ツーンヘッド・シャークを召喚して、アクア・ジェットとのコンボで強化！」

ツーンヘッド・シャーク 攻1200↓2200

「このモンスターは自身の能力で2回攻撃ができるよ。バトル、伏せモンスターに攻撃！」

ツーンヘッド・シャーク 攻2200↓??? 守800 (破壊)

2つある顎のうち片方の牙が、伏せモンスターをしつかりと噛み砕いた。だけど、一瞬見えたあのモンスターの姿は確か。そう思っている間にもフィールドに吹雪が吹き荒れ、ツーンヘッドの姿がゆつくりと氷漬けになっていく。

「はい残念。ゴーストリックの雪女の効果によって、このモンスターを戦闘破壊したモンスターは裏守備になって表示形式の変更もできないよ」

「くっ……ターンエンド」

稲石 LP4000 手札：4

モンスター：なし

魔法・罠：なし

清明 LP4000 手札：4

モンスター：??? (ツーンヘッド・シャーク・伏せ)

魔法・罠：なし

「さて、と。自分のターン、ドロ。ふんふん、このカードか」

ツーンヘッドにかけたアクア・ジェットが無駄になったのは痛いけど、このモンスターは守備力も1600ポイントある。リクルータークラスの攻撃力なら返り討ちにできるはずだ。

「グレイヴ・オージャを召喚。そして魔法カード、シールドクラッシュを発動。フィールド上の守備モンスター1体、ツーンヘッド・シャークを破壊してダイレクトアタック」

ツーンヘッドが守備モンスターを破壊するビームに狙い撃たれ、がら空きになったところに岩人形のごっこつした拳が襲い掛かる。身を守るカードは場にはなく、その攻撃をまともに腹に受けてしまった。

グレイヴ・オージャ 攻1600↓清明 (直接攻撃)

清明 LP4000↓2400

「ぐっ……先手を取られたか」

「ふふ。カードを伏せて、ターン終了さ」

「まだダメージは浅いね、ドロロー！オイスターマイスターを攻撃表示で出して、この魚族モンスターをトリガーに手札からシャーク・サッカーを特殊召喚。さらにフィールド魔法、ウォーターワールドを発動！」

水属性モンスターを前のめりな性能にする特別な海の力を受けて、牡蠣の戦士が力を増す。右手に握った牡蠣も、心なしか生き生きとしているように見えた。

オイスターマイスター 攻1600↓2100 守200↓0

シャーク・サッカー 攻200↓700 守1000↓600

「グレイヴ・オー ज्याに攻撃、オイスターショット！」

投げつけられた牡蠣が、岩のボディを削り取る。一瞬遅れて、岩人形の体が爆発を起こした。

オイスターマイスター 攻2100↓グレイヴ・オー ज्या 攻16

00（破壊）

稲石 LP4000↓3500

「このままサッカー、ダイレクトアタック！」

「おっと、そりやよくないね。リビングデッドの呼び声を発動、墓地に眠るゴーストリックの雪女を蘇生召喚させてもらうよ」

ゴーストリックの雪女 攻1000

再び現れた雪女の攻撃力は、1000。ウォーターワールドの力を受けたサッカーでもわずかの差で倒すことができず、僕の手札にリビングデッドにチェーンして発動できるサイクロンなどのカードはない。

「攻撃ストップ、サッカー。だったらカードをセットして、これでターン終了」

今伏せたカードはポセイドン・ウェーブ。次の攻撃を一回無効にできるうえに、場に2体の魚族モンスターがいるおかげで1600ポイントのバーンダメージというおまけがついてくる計算になる。さっ

きの攻撃が通っていればなおよかったんだけど、まあ贅沢は言っちゃ  
れないよね。

稲石 LP3500 手札：2

モンスター：ゴーストリックの雪女（攻・リビデ）

魔法・罠：リビングデッドの呼び声（雪女）

清明 LP2400 手札：1

モンスター：オイスターマイスター（攻）

シャーク・サッカー（攻）

魔法・罠：1（伏せ）

「うーん、だったらこれかな。ゴーストリックの魔女を召喚して、効果  
発動。オイスターマイスターには守備表示になってもらうよ」

金髪の少女がほうきを振り、牡蠣の戦士がぐりと片膝をつく。  
あ、まずい。何がまずいって、裏守備にされると場の表側表示の水・  
魚・海竜族の数でダメージが決まるポセイドン・ウエーブの効果が一  
減してしまう。

ゴーストリックの魔女 攻1200

「それじゃあ、バトル！雪女でオイスターマイスターに攻撃」

ゴーストリックの雪女 攻1000↓  
オイスターマイスター ??? 守200↓0

（破壊）

「そのまま魔女で攻撃！」

「くっ……トラップ発動、ポセイドン・ウエーブ！その攻撃を無効にし  
て、800ポイントのダメージを受けてもらおうよ」

「おっと、だったら自分もカード効果だ。手札のアチャチャチャンバ  
ラーは効果ダメージが発生するとき、手札から特殊召喚して相手に4  
00のダメージを与えることができる」

清明 LP2400↓2000

稲石 LP3500↓2700

アチャチャチャンバラ 攻1400

水の壁が魔女の攻撃をはじいた、と思う間もなく、その横から飛ん  
できた刀身が燃えている脇差が僕の体をかすめる。それを投げつけ  
たのは、稲石さんの場に突然現れた歌舞伎役者のように顔に隈取くまどりをあ

しらった武士。稲石さんのデッキ、相変わらずビートなのかバーンなのかロックなのかよくわかんない。まあ人のことは言えないんですけどね。

「魔女の攻撃は止まったけど、これはどうかな？アチャチャチャンバラでシャーク・サッカーにもう一度攻撃！」

アチャチャチャンバラ 攻1400↓シャーク・サッカー 攻700（破壊）

清明 LP2000↓1300

燃える日本刀の一撃が、シャーク・サッカーを切り裂く。ごめん、だけどこれはどうすることもできない。

「メイン2、雪女と魔女を自身の効果で裏側守備表示に変更。さらに永続魔法、うごめく影を発動。300ライフポイントを払うことで、自分のセットモンスターをシャッフルして位置を変えることができる」

稲石 LP2700↓2400

クロツシュに引つ込んだ雪女と魔女が、手品よろしくひとりでに宙を舞い位置をクルクルと入れ替わる。まずい、次の攻撃でうまいこと魔女を倒せればいいけど下手に雪女に突っ込もうものならまた強制的に裏守備にされる。とことん地味だけどいつの間にかこつちのライフが減っている、それが稲石さんの恐ろしさだ。

「ターンエンド」

「くっ……ドロー！僕のフィールドにモンスターがいない時、このカードはリリースなしで通常召喚できる！第2の神、メタイオン召喚！」

時械神メタイオン 攻0

「へえ、新しいカード？面白い顔だね」

「いいの、男は顔じゃないからね。メタイオン先生でアチャチャチャンバラに攻撃！」

時械神メタイオン 攻0↓アチャチャチャンバラ 攻1400

メタイオン先生が指先から炎を放ち、2つのクロツシュもろともフィールドを焼く。日が収まると、そこにはもう誰ひとり立っていない

かった。

「ダメージが……ない？」

「その通り。メタイオン先生は戦闘でも効果でも破壊されずに自分の受けるダメージを0にして、さらにバトルが終わったときに相手モンスターを全部バウンスしてその数×300のダメージを与えることができるのさ。もっとも、次の僕のスタンバイフェイズにデッキに戻るけどね」

稲石 LP2400↓1500

「くうっ、やるね。だけど、そのおかげでもう一度こっちにアチャチャチャンバラが戻ってきたからね、効果発動！効果ダメージの発生によりこのカードを特殊召喚して、400ポイントのダメージ！」

「ぐっ！」

再び投げつけられた一閃が、メタイオン先生の横をすり抜けて僕に突き刺さる。

アチャチャチャンバラ 攻1400

清明 LP1300↓900

「ま、まだまだっ！カードを1枚伏せて、ターンエンド」

稲石さんの手札はゴーストリックの魔女と雪女の2枚。手札に何があるかわかってるんだから、次の動きもある程度予想がつくつもりだ。

稲石 LP1500 手札：2

モンスター：アチャチャチャンバラ（攻）

魔法・罠：リビンググデツドの呼び声（対象なし）

うごめく影

清明 LP900 手札：0

モンスター：時械神メタイオン（攻）

魔法・罠：1（伏せ）

「自分のターン、ドロ。おっと、このカードか。モンスターをセツトして、ターン終了さ」

「僕のターン、スタンバイフェイズにメタイオン先生がデッキに戻って、と」

稲石さんのふせたあのモンスターは雪女かな。だとすれば、こつちにわざと攻撃をさせようとしている。だけど、そう見せかけておいて全く別のモンスターを伏せているのかもしれない。もしかしたら魔女という可能性もなくはないし、それならここで攻撃したほうがいい。こりや、下手に先生出したのは間違いだったかな。

「なんにせよ、今できることをやるだけかな。白銀のスナイパーを召喚！」

召喚したところで一度動きを止め、もう一度セットモンスターを見る。本当に、ここであつちを攻撃すべきだろうか。せっかく攻撃力で勝ってるんだから、アチャチャチャンバラをとりあえず破壊すべきではないだろうか。だけど、もしあの伏せモンスターが雪女か魔女、はたまた別のゴーストリックなら次のターン反転召喚してくるだろうし、そうしたらゴーストリック特有の『他にゴーストリックの仲間がいない限り召喚できない』制約もパーになって勝負の流れを完全に掴まれてしまう。そんな迷いを読み取ったのか、稲石さんがふつと笑う。そのドヤ顔が何だかイラツときて、そのおかげで吹っ切れた。

「ええい、もう！じつとしてるなんてらしくない、伏せモンスターに攻撃するよ！」

白銀のスナイパー 攻1500↓??? 守600 (破壊)

あつさりと攻撃は通った。スナイパーさんが無事ということは、あのモンスターは雪女ではない。じゃあいったい、と思う間もなく、稲石さんがモンスターゾーンから外したそのモンスターをこちらに見せた。

「その、カードは……！」

「メタモルポットのリバース効果、発動。お互いに手札をすべて捨てて、カードを5枚ドローするよ。清明、君なら絶対この場面では攻撃してくると思った。ギリギリ魔女でも破壊できない守備力1200のモンスターを引いたあたり、運も強い。だけど、まだ自分の方が読みは上だったね」

何も言い返せない。手札を捨てることなく5枚ドローできたけど、まったくそれが喜べない。なにしろ、次にターンの回ってくる稲石さ

んもまた5枚のカードを引いたのだから。

せめて、せめてこの5枚のカードで防御策を。そう思つてばつと目を通す。レベル4以上のモンスターによる直接攻撃を封じるトラップカード、バブル・ブリンガー。それに守備力3000、だけどウォーラーワールド適用下では2600の壁になる罨モンスター、メタル・リフレクト・スライム……今はこれしかない。

「カードを2枚伏せて、ターンエンド」

稲石 LP1500 手札：5

モンスター：アチャチャチャンバラ（攻）

魔法・罨：リビングゲッドの呼び声（対象なし）

うごめく影

清明 LP900 手札：3

モンスター：白銀のスナイパー（攻）

魔法・罨：2（伏せ）

「さあ、自分のターン！この手札なら、一気に勝負を決めさせてもらおうよ！」

やれるもんならやってみろ、こつちには2枚の防御札が残ってるんだ。そう言い返したいところだけど、それができなかった。稲石さんほどの実力者相手に、この2枚だけでどこまで持ちこたえられるか。

「まず、召喚僧サモンプリーストを召喚。このモンスターは召喚した時守備表示になるよ」

召喚僧サモンプリースト 攻800↓守1600

「サモンプリーストの効果。1ターンに1度手札の魔法カードを捨てて、デツキからレベル4以下のモンスターを特殊召喚。もつとも、この効果で呼び出したモンスターはターンの間攻撃できないけどね。テラ・フォーミングをコストにさあおいで、ゴーストリック・マミー」

サモンプリーストが長つたらしい呪文を不気味な口調で唱えると、天井からドスンと尻もちをついてミイラ男が落ちてきた。打ち付けたらしい腰をさすりながら、ここはどこだと言わんばかりにあたりをきよろきよろと見回す。

ゴーストリック・マミー 攻1500

「マミーは表側表示で召喚する限り、自分は1ターンに1度召喚権とは別にゴーストリックを通常召喚できる。さあ出ておいで、猫娘！だけど無論、これだけじゃないからね？さらに魔法カード、受け継がれる力を発動。自分のモンスターを1体リリースすることで、エンドフェイズまでその攻撃力を別のモンスターに加算する。マミーの力を猫娘に！」

「これで攻撃力はスナイパーさんを……」

ゴーストリックの猫娘 攻400↓1900

「バトル、猫娘で白銀のスナイパーに攻撃！」

猫ならではの素早さでスナイパーさんの懐に潜り込み、鋭い爪で連続して引つ掻く。遠距離専門のスナイパーさんは、あんなに間合いを詰められるとどうしようもない。

ゴーストリックの猫娘 攻1900↓白銀のスナイパー 攻15

00 (破壊)

清明 LP900↓500

「アチャチャチャンバラ、止めの一撃！」

「チャンバラのレベルは3だからバブル・ブリンガーは効かない………だったらこっちだ、メタル・リフレクト・スライム！守備力2600の壁でその攻撃は防ぐ！」

メタル・リフレクト・スライム 守3000↓2600 攻0↓5

00

これでこのターンは凌げるから、返しのターンでこの氷帝メビウスをアドバンス召喚して。そんな計算は、あっさり崩された。

「速攻魔法、ディメンション・マジックを発動！場に魔法使い族モンスター、この場合サモンプリーストがいることで発動できて、モンスター1体をリリースすることで手札の魔法使いを特殊召喚し、さらに相手1体を破壊する！攻撃を止めたアチャチャチャンバラをそのままリリースして、2体目の魔女を特殊召喚！」

「そんな!？」

「悪いね、清明。ディメンション・マジック第二の効果で、スライムを撃破させてもらうよ」



魔法の魔法を浴びたスライムが蒸発し、シュウシュウと音を立てて消えていく。レベル3の魔法には、これまたバブル・ブリンガーも効果がない。

「まだバトルフェイズは続いているからね。ゴーストリックの魔法でダイレクトアタック、ヒス・オブ・メイジ！」

ゴーストリックの魔法 攻1200↓清明（直接攻撃）

清明 LP500↓0

「むー………負けた負けた、完敗だあ」

完敗だ。読みの差で見事に負けた。何をしても予想済み、といった感じで対処されて、そのまま押し切られた。もうぐうの音も出ない。

「ふふ、お疲れ様」

「ちえつ、もうリタイヤか。はいコレ、稲石さんの分ね」

負けた者に対していつまでも文句を言うわけにはいかないので、潔くGXのメダルを投げ渡す。それを稲石さんがキャッチしようとして、取り損ねて床に落とす。そこに目をやったところで、ちようどファラオが帰ってきた。

「あ、お帰りなさい」

『ただいままだニヤ。メダルを持って……来た………ニヤ?』

ふわふわと出てきた大徳寺先生の視線が床に落ちたメダルの上で止まる。そのままじーっとメダルを見ていたが、幽霊だから暑さ寒さは関係ないはずなのにその顔にたたりと汗が出てきた。

まさかこの人、何か間違えたんじゃない。その思いを裏付けるように、タイミングよくファラオがくわえていたメダルをペツと吐き出す。

そこには、『DX』の文字が彫られていた。……どうみてもパチモンです、本当にありがとうございます。誰だこんなの作ったの。

『ま、まあ、今日の勝負はノーカンってことで、清明君もこれから大会頑張ればいいニヤ！怒られる前に逃げるニヤ、ファラオ！』

「あ、先生!？」

ファラオを急かして半ば無理やり部屋から出て行った大徳寺先生。

稲石さんが床のGXメダルを拾い上げ、なぜかそれを僕に差し出す。

「ま、大徳寺センセもああ言ってたしね。今日のはノーカンってことで、しつかりやるんだよ」

「で、でも」

「そもそも自分がもらったって、よく考えたらここから出られないんじゃないだろうもないからね」

グイツとこちらに押し付けられたメダルを見る。本当に、受け取っちゃってもいいんだろうか。

「律儀だねえ。だけどその律義さはちよつと独りよがりかな。逆に聞くけど、自分と君が逆の立場だったとして。ここで返そうと思ったものをさらに突き返されて本当に嬉しいかい？」

「……うーん」

「それじゃあ、こうしよう。実は君たちが修学旅行に行ってる間にこの島で地震があつてね。ただそれが妙に不自然で、どれだけ調べてもこの島だけ、それもごくごく一部分でのみしか揺れてないみたいなんだ。校舎はその部分に引つかかかってないから、自分たち以外は誰も気づいていない。大徳寺センセが錬金術の力で割り出したその震源地を教えるから、そこで何が起きたのか調べてきてよ。メダルはその報酬の先払い。これなら納得いくんじゃない？」

「うん、そういうことなら、まあ」

僕だつて本音を言えば、ここで大会を終わらせたくはなかったからメダルを返してくれたのは素直に嬉しい。だけど、それでいいのかって思いが抜けきらなかった。そこまで読んだうえでああいうことを言ってくれたんだろう。僕が迷いなくメダルを受け取れるように。なんか聞いてるだけでものすごく怪しい話ではあるけれど、きつと何とかなるだろう。手を伸ばしてさっきまで僕の物だったメダルを再びつかむと、稲石さんが空いた手で1枚のカードを取り出した。

「それと、これも。君のデッキはなかなか前のめりだからね、このカードもあげよう」

「えっ？」

「いいから受け取つときなつて。こっちは君と自分の仲直りの印さ」

じっくりと見る。確かにこの効果、僕のデッキの守りのカードとして十分な能力を持っている。いや、十分以上の素晴らしい性能だ。

「稲石さん、ありがとう！大事にするよ！」

「何、いいってことよ。それじゃ、またね」

「はい！」

こうして、ジエネックス初デュエル……に、なるのかなこれ。とにかく初っ端から負け試合という散々な結果に終わってしまった。それにしても稲石さんの話、気になるな。ものすごく限定的な範囲での地震、ね。この島すら覆えないほど狭い範囲って、それってもはや地震じゃないよね。それにさっきはスルーしてたけど、どうも今日はチャクチャルさんの様子がおかしい。なんだか妙に疲れてるといっか、弱ってるというか。今は稲石さんの頼みの話もあるしもう少し様子を見るけど、考えることがいっぱいだ。

いったん頭を使うのをやめ、稲石さんにさっき書いてもらった手書きの地図を見る。バツ印がついたところが震源地とのことだけど、この位置には行ったことがある。弱小カードとレットルを張られたものたちが捨てられていた、古井戸。万丈目や十代と一緒に潜ってカードを拾い集めた井戸のあたりだ。

## ターン57 鉄砲水と手札の天使

「あいつかわらず寂れてんねえ」

もう4回目になる頭にかかった蜘蛛の巣を払いのける作業を終え、思わず文句が出る。去年来た時も大概だったけど、今年は輪をかけてひどい。足元は雑草だらけだし、木の間には今どけたもの以外にも直径1メートル近い蜘蛛の巣がぼつぼつかかっているし、おまけにふと上を見ればカードの亡霊がゆるゆる飛び回っている。

「えーっと、道はこっちだったっけか」

こうは言ったものの、別に迷っているわけではない。地図あるし。稲石さんの廃寮を出てから一言も喋らないチャクチャルさんから何かしらの反応を返してもらおうと水を向けたのだ。

「いやー、今日は晴れてるね」

なるほど、これも無視、か。気まずい。これ以上やってもこっちが精神的にダメージ受けるだけで終わりそうだったので、諦めて無言で歩くことにする。結局例の古井戸にたどり着くまで、誰も何もしゃべることはなかった。

「どれ、もうカードは全部回収したはずだけど……」

この地点のみにピンポイントで地震なんて、カードの仕業としか考えられない。ただ問題は、そんな強力な精霊がいたのならもっと早くに誰かしらが気づいてなきやおかしいということだ。つまり、最近になって誰かが捨てたカードなのか、あるいはその逆で……。相変わらず返事してくれないチャクチャルさんを少し本気で心配しつつ、自分の考えを口に出す。

「ずっと前からあるカードがたまたま前に来たときは見つからないようになつてたか。で、いいんだよね？」

最後のセリフはチャクチャルさんへのものではない。井戸の奥深く、どうも土砂崩れか何かのせいで埋まっていたのが半分ほど出ていたらしい、かすかに見える小さなお社の一部やしらとその前でこちらに背を向けてうづくまる茶色い和服を着た銀髪の女の子に対して確認を取ったものだ。

女の子は僕が声をかけてもピクリとも動かず、ひたすらじつとうずくまっている。腰のあたりに鋭そうな鎌を指しているのが少し引つかかったが、いざとなれば霧の王たちに助けてもらえばいいさと思いつつ飛び降りてみる。

「よっ……あ痛っ!?!」

『……………』

女の子の手前格好つけようとした罰が当たったのか、着地の瞬間泥に足を取られて変な方向に足をひねってしまった、足首のあたりから嫌な感触が伝わってくる。これ、ちゃんと自力で上まで登れるだろうか。面倒だからってはしごやロープを持ってこなかった自分を呪いながら、湿った地面の上でどうにかあぐらをかく。

「い、痛ったあ……いわ、悪いけど、しばらく休ませてもらうよ」

女の子の沈黙を肯定と受け取り、そのまま持ってきた荷物に手を伸ばす。稲石さんと別れたのがお昼ちよつと前。なんやかんやで今が12時半ぐらいだから、1時ごろには動けるようになるだろう。じつとしているのも暇なので、長丁場になるかもとわざわざ寮まで一回戻って作ってきたお弁当でも食べようかと包みを開く。真つ白なおにぎりに別で持ってきた海苔を巻き、最近作ってみた浅漬けをポリポリやりながらかぶりつく。うん、ちゃんと米全体に塩の味がほんのりついて、パリツとした海苔の感触と相まってなかなかおいしい。こういうのを手前味噌っていうんだらうけど。あ、味噌もおかずとしてはいいなあ。今度こぼさずに持ち歩ける保存法を考えてみよう。いっそおにぎり自体の具にしてみようか。

『……………!』

あれ。ふと気が付くと目の前の子がこちらに振り返っていて、きれいな赤い目でじーつと残りのおにぎりを物欲しそうに見つめていた。

「えつと、欲しいの?」

『……………ッ!』

思わず声をかけると慌ててそっぽを向くが、視線はぼつちりお米の方に注がれているのが丸わかりだ。その証拠に2個目を掴もうとして手を動かすとそつちに視線がついてくる。右に動かせば右を見て、

左に動かせば左を見る、といった具合だ。ちよつと面白かったので1、2往復ほどしてから、あんまりいじめるのもかわいそうかともう一度声をかける。

「ごめんごめん。あいにく僕は動けないからね、こつちおいでよ。別に何もしやしないからさ、一緒に食べよ」

『…………』

これは、地雷踏んだだろうか。バリバリの警戒心と殺意のこもった瞳でこちらを見つめる彼女の白い顔を見ながら、冷や汗がつうつと流れていることにぼんやりと気づいた。見た目が人間の女の子だから、心のどこかで油断していたんだろうか。人間とは比べ物にならないぐらいの力を持った精霊だつてことぐらい、自力で壁を壊してお社ごと外に出たことから気づいてもよさそうなものだったのに。僕の喉に押し付けられた鋭い鉋なたがその証拠だ。目にもとまらぬスピードで後ろに回り込み、こちらの両腕を細腕からは想像もできないような怪力で抑え込みつつもう片方の手で首にこんなものを押し付けるなんて、並みの芸当じゃない。いまだに落ち着いていられるのは、もう命がけにはこの1年ちよいで慣れつこになつたからだろうか。とはいえそれは全てデュエルでの話、こんなふうには物理的に命が危ないのは初めてで逆に現実感がない。

「え、えつと」

『…………』

とにかく何か喋ろうとすると、首に押し付けた鉋を軽く動かすジェスチャーをする。いらんことしたらその場で首を斬るぞ、つてことだろう。けど逆に考えれば、ともかくも喋るお許しが出たみたいだ。

とはいえ、特に何か言いたいことを考えていたわけではない。さて、どうしようか。僕の精霊を呼び出したとしても、多分ここまで密着された状況なら何かしらのアクションを取る前にばつさりやられるだろう。というか、だから皆こんなピンチでも助けに出てこれてないんだろうし。アクア・ジェットをはじめとした魔法、罨カードを実体化させたらどうだろうか、ともチラツと考えたが、割と自由にこつちの世界に出入りできるモンスターの精霊と違ってあの手のカード

はいちいちデツキから引き出さないと実体化させることができない。チャクチャルさんが前に教えてくれたけど、この問題はカードに関する不思議な力を持つ超能力者、サイゴデュエリストのカード実体化部門でもなかなか克服できない課題だったらしい。

とにかく何か喋りつつここから抜け出すためのヒントを掴もうとして、視線をずらす。そもそもこの子は、さっきまで何もしてこなかったのになんでいきなり怒ったんだらう。解説という名の精霊通訳者、チャクチャルさんは相変わらず沈黙したままだ。どこかへ行っちゃったわけじゃないのは感じるけれど、何かアクションを起こすだけの力がないらしい。

『……………』

許可したにもかかわらずいつまでたつても何も言いださないことにしびれを切らしたのか、不機嫌そうに彼女が地面を蹴る。小石を蹴り飛ばしたらしい音に気を取られ、ふとそちらに目を動かしてみると、見えた。別にやらしい意味じゃない。なんとかこの場を生き延びるための手が見えたのだ。とはいえよくよく考えてみれば、彼女がデュエルモンスターズの精霊で、しかも人型である以上この方法が一番手っ取り早く平和的なのは明らかではなかった。単にテンパって気づかなかっただけで。

「ね、ねえ。僕と、デュエルしようよ」

『……………』

「そのデュエルディスク、君のでしょ？デュエリストならこんな物騒なものしまつて、カードで言いたいこと言えばいいんだしさ」

『……………』

ほんの少し、締め付ける腕の力が弱まったような気がした。ここはもうひと押しとみて、あえて黙ることにする。この場でペラペラしゃべることは、少なくとも彼女が相手の場合決してプラスにはならない。伝えたいことは伝えたのだから、後はそちらの判断に任せるということを態度で伝えるのだ。

『……………！』

これが結果的によかったのだらう。ふわり、と音もなく飛び上がった

た彼女は驚異的なジャンプ力で空中一回転をかましつづ数メートル離れた位置に着地した。そして腰につけていた驚くほど古いタイプの、いつかニュースで見たことあるヨーヨーの親玉かカップ焼きそばのデカイのみたいな回転式のデュエルディスク第一号ほどではないものの、そのすぐ後に開発されたモデルと思しきデュエルディスクを腕にはめる。

「自分で言い出したこととはいえ、なーんでこんなことになってるんだか。……なんだっていいよね、別に。それじゃあ、デュエルと洒落込もうか」

結局、言ってみればいつもとやってることは何一つ変わらないのだ。ならそれでいいかと納得し、カードを引く。どれ、僕が後攻か。彼女の最初の動きをうかがうべく、フィールドに目をやる。少女の見た目からは想像もつかないがなんだか妙に様になっている動きで、クイツクイツと指を動かす彼女が見えた。

……え、嘘。もう終わり？いくらカード引けない先攻だからって、ホントに何もなし？事故ったんならいいけど、ここまで何もないとかえって不気味だ。

「調子狂うなあ……」

とはいえ、僕だつてもうデュエルアカデミアの2年。こんな盤面で何を警戒すればいいかはわかる。それはずばり、冥府の使者ゴーズだ。奴の特殊能力は、フィールドで何もない状態でダメージを受けた時に特殊召喚してそれが戦闘ならダメージがそのままステータスになるカイエントトークンを生み、効果ダメージならそのダメージをこっちにも押し付けることだ。

その攻撃に対処する手は、もうこの手札に揃っている。動きを脳内で軽くシミュレーションしてから、もう一度手札を確認して動き出す。

「水属性モンスターのシャーク・サッカーを召喚して、そのままリリース！こうすることで手札のシャークラーケンは特殊召喚できる」

シャークラーケン 攻2400

「バトル、シャークラーケんでダイレクトアタック！」



シャークラーケン 攻2400↓無口な少女（直接攻撃）

無口な少女 LP4000↓1600

『……………っ！』

やっぱりお出ましか。大方の予想が当たり、シャークラーケンの攻撃をトリガーとして彼女の足元にぽっかりと深い穴が開き、冥府の階段を上って二人の使者がフィールドに乱入してくる。

冥府の使者ゴーズ 攻2700

冥府の使者カイエントークン 攻2400

だけど、その展開は予想済み。僕の手札にはフィールド魔法、ウォーターワールドがある。これを使えばシャークラーケンの攻撃力は2900まで上昇し、2体の使者でも突破できないほどの火力を手に入れることができる。あえてメイン1ではなくメイン2に使うことで、戦闘ダメージと同じ攻撃力になるカイエントークンをすり抜けるのが僕の狙いだ。

『……………』

そんな思いを見透かしたように軽く笑う彼女。手札からさらに1枚のカードを見せ、それをモンスターゾーンに置く。しまった、そのカードも持っていたのか。トラゴエディアは戦闘ダメージに反応して手札から出てくるモンスターで、手札の枚数によって変動するステータスを持つだけでなく墓地のモンスターを利用してレベルを変動させる効果と、手札のモンスターを利用して相手モンスターを洗脳する効果を持つ。一瞬嫌な予感もしたが、まさかだからといってウォーターワールドを発動しなければゴーズに一方的にやられてしまう。

トラゴエディア 攻?↓1800 守?↓1800

「メ、メイン2に移ってフィールド魔法、ウォーターワールドを発動。カードを2枚セットして、ターンエンド」

シャークラーケン 攻2400↓2900 守2100↓1700

0

無口な少女 LP1600 手札：3

モンスター：冥府の使者ゴーズ（攻）

冥府の使者カイエントークン（攻）

トラゴエディア（攻）

魔法・罨：なし

清明 LP4000 手札：2

モンスター：シャークラーケン（攻）

魔法・罨：2（伏せ）

場：ウォーターワールド

『……』

また、1枚のモンスターを見せてくる。今度は何事かと覗き込むと、それはレベルもステータスも低い天道虫。

無口な少女 LP1600↓2100

井戸の入り口の真下に立っているため日光が差し込んで明るい僕の位置とは違い、彼女が立っているのはやや奥の方。ただでさえ薄暗いうえに遠いカードを見分けるために素の視力だけでは足りずダークシングナーの力までフル稼働して、ようやく彼女が何をしたのか理解する。あれは黄金の天道虫というカードで、スタンバイフェイズからエンドフェイズまで公開することで500ポイントのライフを回復できるカードだ。

『……』

手札からレベル6のモンスター、カオス・ソーサラーを見せ、そのカードとトラゴエディアをそれぞれ指さしてから墓地に送る。なるほど、コントロールを奪う効果を使った、ってわけか。

『……！』

彼女のフィールドにいる4体のモンスターの攻撃力合計は、こつちのライフ4000なんぞはるかに上回る。なるほど、デュエルの腕もなかなかのものだ。

「だけど、まだ甘いね！リバーストラップ、バブル・ブリンガー！このカードの効果で、お互いにレベル4以上のモンスターじゃあ直接攻撃できない！」

足元から泡の壁が立ち上り、僕の周りを包み込んで攻撃を防ぐ盾になる。これでこのターンをしのいで……

『……』

「サ、サイクロン……」

永続トラップはチェーンして破壊されると、その効果が一切適用されない。結局4体の攻撃は止まることなくこちらに襲い掛かった。ええい、至善の策が駄目なら次善の策だ！

「最初の一回、トラゴエディアの攻撃はそのまま受ける！」

トラゴエディア 攻1200↓清明（直接攻撃）

清明 LP4000↓2800

「まだまだっ！次、カイエンの攻撃も受ける！」

冥府の使者カイエン トークン 攻2400↓清明（直接攻撃）

清明 LP2800↓400

あつという間にわずか400までライフが減る。これまでの僕ならこのまますすすべもなくやられていただろうけど、もう違う。これは、僕が進歩しているという僕自身への証明のデュエルでもあるのだ。

「だいぶ削られたけど、もうここで止まる僕じゃない！早速助けてもらうよ稲石さん、相手の直接攻撃宣言時に手札からゴーストリック・フロストの効果を発動！攻撃モンスターを裏側守備表示にして、さらにこのモンスターを裏側守備表示で特殊召喚！」

シャークラーケン↓???（セット）

???（ゴーストリック・フロスト）

「最後のゴーズの攻撃に対してトラップカード、ポセイドン・ウェーブを発動。その攻撃は無効にする」

『……』

攻撃を終えても特に何か言うわけでもないが、どこか不思議そうな目でこちらを見る少女。何が言いたいのかと少し考え、フロストの効果に思い当たる。

「ああ、なんでカイエン トークンの攻撃にフロストを発動しなかったのかって？」

『……』

コクリ、と頷く少女。確かに、そのタイミングでフロストを使えば

裏側表示になるということがないトークンはそのまま破壊できてい  
ただろう。

「でも、そういうわけにもいかないのよねこれが。そのシャークラー  
ケン、やっぱり僕のカードだからさ。倒すにしろアドバンス召喚の素  
材にされるにしろ、せめてその様子を見たくなかったしシャークラー  
ケンにも見せたくなかったって言うか、なんていうか。んー、なんか  
うまく説明できないけど、こういうのって気分の問題だしね」

自分のカードを自分で倒すのも、他の誰かに利用されるのも見たく  
ないし、そのカード自体にも見せたくない。ばかげた話かもしれない  
けど、あのフロストの効果を受けた瞬間のシャークラーケンのどこか  
ほっとしたような顔。それが見えただけでも、十分あのタイミングで  
使う価値はあった。と、僕は思う。だいたいそんなことを言っただけで  
せると、彼女はどこか寂しそうで羨ましそうで、でもかすかに嬉しそ  
うな微妙な表情で頷いた。そして、またこちらを手招きする。もしか  
して、あのデッキは魔法も罫もほとんど使わないフルモン寄りの「ド  
ローゴー」ってことなんだろうか。だとしたらちよつとこのカードは  
もったいないかも。

「僕のターン、ドロロー。ゴーストリック・フロストをリリースしてアド  
バンス召喚！ さあ出番だよ、氷帝メビウス！」

氷帝メビウス 攻2400↓2900 守1000↓600

「メビウスの攻撃力は2900……ここは、トラゴエディアを攻撃！  
シャークラーケンの仇、アイス・ランス！」

『……………！』

氷帝メビウス 攻2900↓トラゴエディア 攻1200（破壊）

無口な少女 LP2100↓400

トラゴエディアが倒れたことで、もうこれ以上のコントロール奪取  
は防ぐことができた。さすがに防御札はもう手札にない、ここからは  
手札が肥えるまでなんとかメビウスに持ちこたえてもらうしかない。

「任せたまよ、メビウス。ターンエンド」

励ましの声をかけ、メビウスがそれに応えてこちらを見て軽く頷  
く。それを見てまた、彼女がさつきフロストの発動タイミングについ

て話した時と同じような顔になった。

無口な少女 LP400 手札：2

モンスター：冥府の使者ゴーズ（攻）

冥府の使者カイエントークン（攻）

???（シャークラーケン・セット）

魔法・罫：なし

清明 LP400 手札：2

モンスター：氷帝メビウス（攻）

魔法・罫：なし

場：ウォーターワールド

『……………』

無口な少女 LP400↓900

スタンバイフェイズにふたたび黄金の天道虫による回復。そして魔法カード、七星の宝刀。えーっと効果はなにになに、手札かフィールドのレベル7モンスターを除外して2枚ドロート。なるほど、ゴーズじゃ勝てないと踏んでいちかばちかのドロートに繋げてきたのか。

冥府の使者カイエントークン 攻2400↓守2400

さらにカイエンも守備に変更。どうやらいいカードは引けなかつたと見える。

カードカー・D 攻800

そしてモンスターの通常召喚。カードカー・Dは召喚時にリリースすることでターンのエンドフェイズになる代わりにカードを2枚引くことができる。さらにドロートを狙ってきたのち、問答無用で僕のターンに移行する。 とはいえ、さつきから手札誘発ばっかり使ってくる彼女のデッキなら宝刀はともかくカードカーのデメリツトはほぼゼロ。そしてあつちの手札は天道虫入れて5枚、か。あやかりたいものだ。

「僕のターン、ドロート。ふむ、まずはバトル。メビウスでカイエントークンに攻撃、アイス・ランス……なっ!？」

0 氷帝メビウス 攻2900↓工作列車シグナル・レッド 守130

メビウスの氷の槍の前にいきなり割り込んできた1台の小型列車が、なんとその槍を車体で防ぎ切った。

『……』

もう何度目かもわからない手札誘発。その効果を見ると、今出てきた工作列車シグナル・レッドは相手の攻撃時に手札から特殊召喚してその攻撃を自分に誘導し、さらにその戦闘では破壊されない効果を持つらしい。

「なるほどね。だったらメイン2、モンスターをセットしてターンエンド」

無口な少女 LP900 手札：4

モンスター：工作列車シグナル・レッド(守)

冥府の使者カイエントークン(守)

??? (シャークラーケン・セット)

魔法・罨：なし

清明 LP400 手札：2

モンスター：氷帝メビウス(攻)

??? (セット)

魔法・罨：なし

場：ウォーターワールド

……強い。

何とか今は膠着状態に持っているが、手札誘発だらけのデッキを相手に膠着状態なんて愚策そのものだ。考えてみれば、これまで僕が戦ったカードの精霊はみなやたらと強い奴だらけだった。サイコ・シヨツカーしかり、ラビエルしかり。

『……』

無口な少女 LP900↓1400

そして彼女はまた、カードを引いて黄金の天道虫の効果を使うだけで自分のターンを終える。これまでとは全く違う、見たことのない異質なデッキが余計に緊張をかきたて、悪い方へ悪い方へと想像が進んでしまう。

「くっ！僕のターン、ドロップ！」

気持ちで負けていてはデュエルには勝てない。それがわかってい  
るからこそ、押し寄せる不安を振り払うために必要以上の大声を出  
す。

引いたカードは、サルベージ。墓地の水属性モンスターを文字通り  
サルベージできる効果を持つが、今の墓地にはいまだ対応カードが  
シャーク・サッカー体しかいないため発動すらできない。

「メビウスでもう一度カイエントークンに攻撃、アイス・ランスツ―」  
『……』

ピンク色の爬虫類な紳士が、紅茶を飲みながらステッキ片手にカイ  
エントークンの前に立ちはだかる。また手札誘発、それも攻撃誘導系  
の………えーつと、名前がジエントルーパー？攻撃宣言時に特殊召喚  
できて、これまた攻撃を誘導する効果があるらしい。シグナル・レッ  
ドと違い戦闘破壊耐性がないのが救いだらうか。

氷帝メビウス 攻2900↓ジエントルーパー 守1000（破  
壊）

それにしても、これで確信できた。彼女がなぜここまで執拗にカイ  
エントークンを守るのか。間違いなく、彼女は待っている。光属性に  
とって最強の手札誘発カード、オネストをドロ―するのを。だから、  
次だ。あのカイエントークンが次に攻撃表示になったとき、勝負は決  
まる。

「これで、ターンエンド」

無口な少女 LP1400 手札：4

モンスター：工作列車シグナル・レッド（守）

冥府の使者カイエントークン（守）

???（シャークラーケン・セット）

魔法・罨：なし

清明 LP400 手札：3

モンスター：氷帝メビウス（攻）

???（セット）

魔法・罨：なし

場：ウォーターワールド

『……』

無口な少女 LP1400↓1900

このライフ回復も地味ながら効いてきている。もたもたしているうちに、すっかりライフ差が開いてしまった。

『………』

そしてまた、ターンエンド。

もう、これ以上待つのは自殺行為だ。こちらの攻撃を誘っているのはわかるけど、だからといって動かないでいることもできない。ここは、そろそろ覚悟を決めよう。

「僕のターン、ドロ……セットモンスターを反転召喚、水晶の占い師！このカードのリバース効果でデッキトップを2枚めくり、そのうち1枚を選択して手札に加えることができる。デッキトップはそれぞれシーラカンスとジョーズマン、ここはシーラカンスを選択。さらに水晶の占い師とメビウスをリリースして、超古深海王シーラカンスをアドバンス召喚！」

超古深海王シーラカンス 攻2800↓3300 守2200↓1800

「シーラカンスの効果発動、手札を1枚捨てて、デッキからレベル4以下の魚族を出せるだけ特殊召喚する！行くよ、魚介王の咆哮！」

『……ッ！………！』

魚の王が空気を震わせて叫ぶ。ただどうしたことだろう、その姿が急に苦しみだし、まるで毒や呪いでも受けたかのように地面に倒れた。

「な、え？」

『………』

少女が見せてきたカードに描かれていたのは、まさに少女自身のイラスト。

「なるほど、これが君の本体ってわけね。それでデッキも手札誘発ってわけか……」

幽鬼<sup>ゆき</sup>うさぎ。フィールド上に存在する魔法か罠、あるいはモンスター効果が発動した時に手札かフィールドから墓地に送ることです。



のカードを破壊する能力を持つカード。手札からやってきていきなり破壊するとは、いかにも彼女らしいというかなんというか。

『……』

まだ何か言いたげに、こっちのデュエルディスクを指さしてくる。何事かと視線をそちらにやると、なんとシーラカンスの効果はまだ生きていて、早く魚族を出せと効果の処理途中であることを示す赤いランプが点灯している。なるほど、あくまでもできることは『破壊』であって『無効』じゃないから、シーラカンスが倒れても一度使った効果自体はまだ生きてるのか。

「そうと決まれば！出ておいで、僕のモンスターたち！」

シャクトパス 守800↓400 攻1600↓2100

ハンマー・シャーク 守1500↓1100 攻1700↓2200

0

フィッシュボーグーアーチャー 守300↓0 攻300↓80

0

キラー・ラブカ 守1500↓1100 攻700↓1200

ハリマンボウ 守100↓0 攻1500↓2000

ポセイドン・ウエーブを使っちゃったことが悔やまれるけど、これはどうしようもない。あそこで使っていなければもつと早くにやられていたのだから。

『……』

「おっと、ただこっちだけに召喚させる気はない、ってこと？やるじゃない」

こう言ったのは、彼女のフィールドにもまた、2体のモンスターが追加されたからだ。

カオスハンター 攻2500

カオスハンター 攻2500

このタイミングで出てきて、しかも彼女の手札が0になっているということはおそらくカオスハンターはドラゴン・アイスと似たような効果、つまり相手の特殊召喚に対応して手札コストを払うことで特殊召喚できるを持っているのだろう。

「やつと手札がなくなった、か。このターンはもうできることもないからね、これでターンエンド」

無口な少女 LP1900 手札：1

モンスター：工作列車シグナル・レッド(守)

冥府の使者カイエントークン(守)

??? (シャークラーケン・セット)

カオスハンター(攻)

カオスハンター(攻)

魔法・罠：なし

清明 LP400 手札：3

モンスター：シャクトパス(守)

ハンマー・シャーク(守)

フィツシュボーグアーチャー(守)

キラー・ラブカ(守)

ハリマンボウ(守)

魔法・罠：なし

場：ウオーターワールド

『……………！』

冥府の使者カイエントークン 守2400↓攻2400

工作列車シグナル・レッド 守1300↓攻1000

シャークラーケン 攻2400↓2900 守2100↓1700

0

ここを攻め時と見たのか、それともついにオネストを引いたのか。いずれにせよカイエントークンが再び攻撃態勢を取り、シグナル・レッドもまた動いた。一瞬ためらうそぶりも見せたが、シャークラーケンも再び表を向く。

『……………！』

カオスハンター 攻2500↓キラー・ラブカ 守1100(破壊)

「キラー・ラブカを最初に破壊？」

一体何を、と思う間もなく、矢継ぎ早に次の攻撃が繰り出される。

カオスハンター 攻2500↓フィツシュボーグアーチャー

守300 (破壊)

工作列車シグナル・レッド 攻1000↓ハリマンボウ 守100  
(破壊)

「ハリマンボウが破壊された時、相手1体の攻撃力を500ダウンさせる！ここは、シグナル・レッドを選択！」

工作列車シグナル・レッド 攻1000↓500

そしてついに最後の1体、カイエントークンの凶刃がハンマー・シャークに襲い掛かる。

「おっと、それは通さないよ！墓地からキラー・ラブカの効果発動、このカードを除外することで相手の水、魚、海竜族に対する攻撃を無効に……………あれ？」

いつまでたつてもラブカの半透明な体は現れず、そのまま僕のフィールドに最後まで残っていたハンマー・シャークまでもが破壊されてしまう。

冥府の使者カイエントークン 攻2400↓ハンマー・シャーク

守1100 (破壊)

「そ、そんな、なんでラブカの効果が」

『…………』

軽くため息をつき、モンスターゾーンのカオスハンターをこちらに見せてくる少女。手札を1枚捨てて特殊召喚でき、さらにこのカードがある限り相手はゲームからカードを除外できない、か。普段は怖くもなんともない効果だけど、今日に限ってはピンポイントで刺さったってわけか。

『…………』

「ああ、ターンエンドってわけね。ごめんごめん、ちよっと考え事してて」

圧倒的に不利だけど、別に勝ち目がないわけじゃない。彼女の場には攻撃力500のまま無防備なシグナル・レッドが1両。つまりこのターンで攻撃力2400以上のモンスターを何らかの方法で場に出すことができれば、あるいは。

「まだ諦めないよードローー」

恐る恐る引いた、そのカードは。

「……来た！速攻魔法、帝王の烈旋を発動！このカードは相手モンスター1体をリリースして、モンスターをアドバンス召喚できる！もう一回力を貸して、シャークラーケン……これで終わらせるよ、キングミスト霧の王」

霧の王 攻0↓2400↓2900

『……………』

「シグナル・レッドに攻撃……楽しかったよ、ミスト・ストラングル」

霧の王 攻2900↓工作列車シグナル・レッド 攻500

無口な少女 LP1900↓0

「ふー……」

『……………』

かなりギリギリだったけど、どうにか勝利。よかった、これで生きて帰れる。そろそろ足の調子も良くなってきたし、地震の原因も突き止められた。ぼちぼち潮時だろう。

「じゃあ、またね」

『……………ッ!!』

別れに手を振ると、思わずといった風にこちらに手を伸ばす。ただどなぜ手を伸ばしたのかは自分でもよくわかっていないらしく、その姿勢のまま不思議そうに首をかしげる。これはもしかして、いけるだろうか。せっかく助かった命を無駄にするような行動かもしれないことは百も承知だったけど、それでも声を掛けずにはいられなくなり、こちらからも手を伸ばす。

「ねえ、幽鬼うさぎちゃん」

『……………?』

「僕は今、どうしても強くならなきゃいけない理由があるんだ。勝つて、僕の友達を、皆を元に戻したい。だから、1つ頼みがあるんだけど。僕と、一緒に来てくれない？」

『……………』

「ダメ、かな」

『……』

一瞬目を伏せて迷いを見せたのちに、僕の差し出した手を握った。ほんの一瞬だけこれまで見たこともないほど柔らかい笑みを見せて、彼女はカードになった。

「これからよろしく、幽鬼うさぎちゃん。あ、そうだ、おにぎり食べる？」

『……………！』

パツとカードから出てきてこくこくと頷き、無表情ながら嬉しそうに残りのおにぎり1個を頬張る。そんな嬉しそうなら、こっちも作ったかいがあるってものだ。デッキの中にゴーストリック・フロストに次ぐ新しい仲間を入れ、外を見上げる。普通によじ登るのは大変そうだけど、ダークシグナーになれば余裕だろう。チャクチャルさんの力を引き出そうとして、初めて異変に気が付いた。

『マスター……………すま、ないが今は……………くっ』

「チャ、チャクチャルさん!? 一体何があつたのか、いい加減僕に教えてよ! 一人でぶっ倒れてちゃんにもわかんないよ!」

数時間ぶりにチャクチャルさんの声が聞けてほっとしたのもつかの間、その声に込められた異様な衰弱にぞっとする。まるで、全身の力が吸い取られているような……………。

「誰!? 一体誰がこんなこと!」

『奴が、奴が私の、力を……………だが、よせ、マスター……………!』

「奴!?!」

『太陽神……………ラー……………』

「チャ、チャクチャルさん!」

この言葉を最後に、もうチャクチャルさんはうんともすんとも言わなくなった。ラー、ラーっていうとあの三幻神の中で最強の神、ラーの翼神竜のことだろうか。だけど、あのカードはデュエルキングの武藤遊戯さんしか持っていない、真正銘世界に一枚しかないカードのはずだ。それがここにあるって?

何が何だか、まるで分らない。だけど、僕の大事なチャクチャルさ

んをここまで弱らせているんだ。ラーだろうとラーだろうと知った  
ことか。僕の全力で、たつぷり礼をしてやろう。

## ターン58 鉄砲水と太陽神（陽）

「どーこだー！」

少しでも犯人の気を引くべく、あえて派手に音を立てながら走り回る。チャクチャルさんは完全にしゃべる力を失う一瞬間、確かに自分の衰弱はラーの翼神竜のしわざだと言った。だけど、ここで一つ疑問が生じる。去年は何ともなかったのにここにきて急にラーのカードが世界のどこかからいつぞやの三幻魔みたいにカードの、それもチャクチャルさんほどの力を持ったモンスターのような力を吸い取るようになるというのはいくらなんでもおかしい話だ、ということだ。

つまり、何か裏がある。あまりといえばあまりのタイミングの良さから一時は斎王が何か企んでいるのかとも思ったけど、三幻神をどうこうできるほどの力を斎王が持っているのならいつまでもこのアカデミアに執着する理由がまるでわからない。だから何か、もっと別の理由が絡んでいるのだろう。そう考える方が自然だ。そしてその理由というのが、このジエネックスに繋がっているとしたら？ いや、別に鮫島校長を疑うわけじゃない。ただ、この大会には世界中のプロが集まってくる。伝説のカードがやってくるには、もってこいの場所といえるだろう。つまり、ラーはこの島に来ているのかも。その考えを裏付けるように、タイミングよく校長の声が島中に仕掛けられたメガホンから放送された。

『ジエネックス全参加者に告ぐ。大会を一時中断し、全員に外出禁止を命ず。繰り返し、大会を一時中断し、全員に外出禁止を……』

タイミングからいって十中八九これだ。むしろ違ったらどうしようってレベルだ。

「ビーング、つと。悪いね校長センセ、外出禁止は聞けそうにないわ。うちの大事な神様ここまで弱らせてくれてんだ、キツチリ落とし前だけつけてもらわないとね」

『……!!』

「ん？どしたのうさぎちゃん……おっと、センキュー！」

パタパタと飛び跳ねながら真剣な顔で僕の学生服の裾を引っ張る

幽鬼うさぎ。彼女が指差す方向の先には、何かを話している十代と、あれつて誰だろうか。ここからだその後ろ姿しか見えないけど、なんだかどこかで見たことある人な気がする。だけど、今そっちは重要じゃない。彼女が指差していたのは、その二人に近づく黒い影の方。いかにもさえない研究員、といった風体だが、なぜか見ているだけで人を不安にさせる嫌な気配を持っている。こっそり彼らから十数メートルの距離まで近寄ってみると、ちょうどその男が二人に話しかけるところだった。

「……これは、ミスター……」

む、うまく聞こえないな。さすがにこれだけ離れてれば当たり前前か、もうちよつと近寄るとしよう。ついでに回り込んで、あの研究員の背後を取れる位置に移動する。うまいこと誰にも気づかれずに絶好の位置を取り、再び耳を澄ます。

「……そのカードを返すのデース」

「返してほしければ、この『ラーの翼神竜』の入ったデッキにデュエルで勝利することですね」

ここからだと裏向きで見えないけど、なにやらカードを十代たちの方に見せつけてからそれをデッキに入れる男。あの反応からいって、間違いなく今チャクチャルさんの力を吸い取ってるらーとやらはあれで間違いないんだろう。

「いいでシヨウ、私が相手を……」

「いいや、ここは俺が!」

おつと。ここまで追いかけてきて、今更十代に出番とられちや敵わない。サツと飛び出してなるべく素早く男をプロレス技でいうところのスリーパー、早い話が首を腕で締め付ける。

「悪いね、十代。僕はこの人に恨みがあるんだ」

「あ、清明!?なんでお前がここに!」

「野暮用が積み重なってね。この人が持つてるのがラーの翼神竜、なんでしょ?で、それを倒せば万事丸く収まるんでしょ?」

「た、確かにそうデースが。彼の名前はフランツ、私の会社のデザイナーの1人デース」



それだけ聞ければ十分だ。そろそろ酸素不足で顔色が変わりだし、た男を解放して、地面に倒れこむようにして必死に息を吸うのを見下ろしながらデッキを準備する。

「き、貴様、いきなり何を……!」

「その台詞、そっくりそのままリボン巻いてシール貼って叩き返したげるよ。お前のせいで、チャクチャルさんは……!」

別に死んでないけど。……ないよね?

「ハア、ハア……よし、いいだろう。まずはお前からだ、神と戦う榮譽をやるろう」

「ボーイ、いくらなんでも無茶デース!彼のラーはコピーカードですが、それでも一介の生徒が相手をしていいものでは……!」

「まあまあ、会長さん。俺だって相手してみたいけど、ここは清明に任せようぜ。アイツもすごく強えデュエリストなんだ」

「しかし!」

「感謝するよ、十代。……神と戦う榮譽をやるろう?上等上等、その台詞もそのまま送り返してやるよ」

「デュエル!」

「先攻はお譲りしますよ、お先にどうぞ」

「後悔しても知らないよ?僕のターン。ヒゲアンコウ、守備表示!」

ヒゲアンコウ 守1600

「さらにカードを伏せて、ターンエンド」

「私のターン、ドロウ。フィールド魔法、神縛りの塚を発動!」

「な、なんだ!?!」

見たこともないフィールドカード。地面から3本の塚がせりあがり、その周りをバチバチと不穏な音を立てて雷がかすかに見える。

「このカードこそ、神をコントロールするために作り出された神を封じ、神を喚ぶデビルズ・サンクチュアリに次ぐ第二の聖域。そして魔法カード、おろかな埋葬を発動。デッキからモンスター1体、ラーの使徒を墓地に送ります。そしてレベル8モンスター、神獣王バルバロスを攻撃力1900にすることで妥協召喚。バトル、バルバロスで攻撃!」

神獣王バルバロス 攻3000↓1900

神獣王バルバロス 攻1900↓ヒゲアンコウ 守1600 (破壊)

「カードを2枚伏せ、ターンエンドです」

結局神縛りの塚とやらには何の動きもなく、それがかえって不気味だ。伏せカードは怖いけど、ここは攻めるべきだろうか。

清明 LP4000 手札：3

モンスター：なし

魔法・罫：1 (伏せ)

フランツ LP4000 手札：2

モンスター：神獣王バルバロス (攻)

魔法・罫：1 (伏せ)

場：神縛りの塚

「僕のターン、ドロー！」

引いたカードは……ふむ。攻めるのに向いた手札じゃないから、まずは場を固めて様子を見よう。いくら怒っている時だって、いや、怒っているからこそ一歩下がって様子を見る。力任せに踏み込んでいくとすぐに足元救われるからね。もとより、水属性はあまり力押しが得意なタイプではないのだ。

「グリズリーマザーを守備表示。これでターンエンド」

グリズリーマザー 守1000

「私のターン。まずはトラップ発動、ギブ&テイク！このカードの効果で私の墓地に存在するラーの使徒をお前の場に特殊召喚し、さらにそのレベルを私のバルバロスに加算する」

ラーの使徒 守600

神獣王バルバロス ☆8↓12

「僕の方にモンスターを送りつけてまでレベルを上げた？」

「惜しいが、それは少し違う。私の目的はレベル上げもそうだが、ラーの使徒をお前の場に送りつけることだ。ちなみにそのカードは特殊召喚に成功した時デッキ、手札から同名モンスターを2体まで特殊召喚できるが、そんなカードは入っていないだろうか？」

当たり前だ。こんな金ぴかのコスプレしたおっさんのカードなんて見たこともないぞ。

「バトル、バルバロスでグリズリーマザーで攻撃！トルネード・シェイバー！」

神獣王バルバロス 攻1900 ↓グリズリーマザー 守1000  
(破壊)

バルバロスの振り回す大槍が巨大熊を一撃で薙ぎ払う。だけど、グリズリーマザーは決してタダでは死なない。

「マザーの効果発動！戦闘破壊された時、デツキから攻撃力1500以下の水属性モンスターを攻撃表示で特殊召喚……ん？」

妙だ。グリズリーマザーの効果が発動できない。

「クックック、無駄だよ。ラーの使徒がフィールドにいるとき、そのコイントローラーはラーの使徒以外の特殊召喚ができない。さらに、神縛りの塚第一の効果発動！フィールドに存在するレベル10以上のモンスターが相手モンスターを戦闘破壊した時、相手に1000ポイントのダメージを与える！」

バルバロスが振り回した槍をそのまま天に掲げると、3本の塚から雷が槍に落ち、そのまま僕めがけて突っ込んできた。だけど、これはピンチじゃない。むしろあの不気味なフィールドをぶち壊すチャンスだ。

「その瞬間、手札からサイクロン発動！チェインして神縛りの塚を破壊して、バーンダメージは無効に！」

目にもとまらぬスピードで風が吹き抜け、3つの塚を風化させる。チェインして破壊すれば、この手の効果は無効になる。これで、1000のダメージを受けずに済んだわけだ。

だけど、それを見るフランツの顔はなぜか喜びに歪んでいた。

「神縛りの塚を破壊したな？この瞬間に第3の効果発動、このカードは破壊された時に、眠れる神を手札に加えることができる！デツキに眠りし神、ラーの翼神竜——スライアモート球体形を手札に！」

「なっ!？」

読んでいた？こちらが神縛りの塚を破壊することを織り込み済み

で？ただの偶然だと思いたいけど、そうも言いきれない迫力がフランスからは立ち上っていた。とにかく呼ばれてしまったものはどうしようもない、か。

それに、今くわえた謎のカード。スファイアモード？神そのものではなくて、その派生の1つがなんでわざわざカードに？

「ワッツ？フランス、なんですかそのカードは?!」

「ああ、そういえば会長には報告していませんでしたね。こんなカードを作る羽目になったのも、全てはあなたのせいなのですよ会長。あなたはラーのコピーカードを作る際、その能力を恐れるあまりバトルシテイのデータから判明したオリジナルのテキストを大幅に削減して恐ろしいほどの弱体化をした、違いますか？」

「イエース、私は確かに神の力を恐れ、唯一手元に残したそのコピーも能力のほとんどを削除しました。怖かったのデース、もう一度『神』があの力を使うことが」

よくわからないけど、このどっかで見たことある人は何か大事なことを言おうとしている。この会話は聞いておかねばならない。そんな気がした。

「その癖、研究用と言い張ってコピーカードを弱体化させたとはいえず手元においておこうとする。そんなあなたの中途半端な態度が神の怒りを招き、そして神は私を選んだ。これはいわば、私という媒体を使つてのあなたへの神罰なのですよ、会長。その一環として生まれたのが、この球体形のカード。このカードの存在により、ラーはその真の力をほんの少しだけ解放できる」

話しているうちに自分に寄ってきたのか、芝居がかった動きで両手を広げるフランス。そのうっとりした顔つきから、話し合いでどうこうなる相手ではないと会長とやらも悟ったらしく、何か言おうとするも結局その口から言葉は出なかった。

「おっと、まだ私のバトルフェイズは終わっていない。手札からジュラゲドの効果発動、このカードを手札から特殊召喚して私のライフを1000回復する。そのままフィッシュボーグに攻撃！」

フランス LP4000↓5000

ジュラゲド 攻1700↓フィッシュボーグーアーチャー 守3  
00 (破壊)

「ターン終了時にバルバロスのレベルが8に戻り、これで私はターンエンド。ああ、1つ言っておきますが、ラーの使徒は三幻神以外のあらゆるカードの生け贄にすることができないですから」

「神にしか尻尾振らないって？そりやまた随分狂信的なことって」

神獣王バルバロス ☆12↓8

清明 LP4000 手札：2

モンスター：ラーの使徒 (守)

魔法・罨：1 (伏せ)

フランツ LP5000 手札：3

モンスター：神獣王バルバロス (攻)

ジュラゲド (攻)

魔法・罨：なし

「僕のターン、ドロロー……何もせずにターンエンド」

動こうと思えば動けないことはない。だけど、まだ少し手が足りない。

「私のターン。おいおい、まさか神を見る前に敗北かい？それは勘弁してもらいたいものだね。2体目のバルバロスを妥協召喚する」

神獣王バルバロス 攻1900

「今だ！リバーストラップ、激流葬発動！バルバロスの召喚をトリガーにして、僕のフィールドの使徒を含めた全モンスターを破壊！」

「チツ……まあいいさ。私はこれで、ターン終了だ」

清明 LP4000 手札：3

モンスター：なし

魔法・罨：なし

フランツ LP5000 手札：3

モンスター：なし

魔法・罨：なし

「僕のターン、ドロロー！攻めるなら、今しかない……！ハンマー・シャークを召喚、そのまま効果を発動！自身のレベルを1下げて、手

札からレベル3以下の水属性モンスターを呼びだす！氷弾使いレイス、特殊召喚！さらに自分フィールドに海竜族のレイスを召喚したことで、シャーク・サッカーも特殊召喚する！」

ハンマー・シャーク 攻1700 ☆4↓3

氷弾使いレイス 攻800

シャーク・サッカー 守1000

「ほう、1ターンでここまで展開するとは、な」

「さあ、バトル！ハンマー、レイス、ダブルダイレクトアタック！」

ハンマー・シャーク 攻1700↓フランツ（直接攻撃）

フランツ LP5000↓3700

氷弾使いレイス 攻800↓フランツ（直接攻撃）

フランツ LP3700↓2900

「くっ……！」

またジュラゲドでも出てきたらどうしようかとも思ったけど、別にそんなこともなく攻撃は通った。これでさっきの回復分はチャラにしたうえで大ダメージを与えられたけど、なぜかフランツが笑っているのが不気味だ。

でも、もう僕の手札はない。頼みの綱の激流葬もさっき使った以上、これ以上できることはない。

「ターンエンド」

「その展開力は大したものだ。ああ、まったく。だからこそ、札を言わねばなあ！」

「え？」

嫌な予感、なんて生易しいものじゃない。何か得体のしれない、僕の間ではどうにもできないようなものがゆっくりと、でも確実に近づいてきているような。でも、どこか懐かしさも感じる。と、そこで気が付いた。ああ、そうか。この押しつぶされそうになる感覚に対する懐かしさの理由は、僕はもう2度も同じものを経験済みだからか。

「神……」

知らず知らずのうちに声が出る。この感覚は間違いない。初めてチャクチャルさんと、メタイオン先生と会ったときにも感じた独特の

ものだ。

「正解だ。出でよ、私の神!!」

「ワッツ!? フランツ、一体何を始める気なのデスか!? 今のラーは特殊召喚できず、3体のリリースを使用してのアドバンス召喚でしかフィールドに出すことはできないはずなのに……!」

「ええ、確かにその通りですよ、会長。だが、それはあくまでもラー本体の話。私の作り上げたこの球体形のカードは、そんな常識を破る力を持つ。お前のフィールドに存在するハンマー・シャーク! 氷弾使いレイス! シャーク・サッカーの3体をリリースし、アドバンス召喚! くれてやろう、神の姿を!」

僕の場合にいるモンスターたちが、一瞬で消えていく。ぽっかりと空いた僕のフィールドに、不気味な影がふつと降りてきた。上を見ると、そこにはバカバカしいほど巨大な、細かな意匠の施された黄金の球体がぽっかりと浮かんでいる。

ラーの翼神竜―球体形 攻?

「こ、これが、ラーの翼神竜?」

「その通りだ。もつとも今の神は球体<sup>スライア</sup>、神の所有者が呼び出すまで眠り続ける状態だがな。私が言うのもなんだがこのカードは少し特殊でな、相手フィールドのモンスター3体をリリースして相手フィールド上に通常召喚することができるのだよ」

そう言われてみれば、神らしい球体は空にふわふわ浮かんでいるだけとはいえ、どちらかといえば僕に近い方にあるような気がする。

「こんなのいらなから僕のモンスターたち返してほしいもんだね」

「まあそう言うな。この神もなかなか便利な能力を持たせておいたんだぞ? 戦闘対象にも効果対象にもできないから、まず1ターンでは倒されない。現に私の手札では、ラーを倒すことはできないよ。だからこれで、ターンエンドさせてもらおう」

清明 LP4000 手札:0

モンスター:ラーの翼神竜―球体形(攻)

魔法・罫:なし

フランツ LP2900 手札:3

モンスター：なし

魔法・罠：なし

こっちの場を荒らすだけ荒らしておいたくせに、なぜか偉そうなことを言つてターンを回してくるフランツ。正直言つて、このラーはかなり怪しい。いつまでも何の動きもせずになわふわ浮いているだけなんて、不気味なことこの上ない。できればここで上級モンスターを引き、さっさとこんな不気味な太陽はリリースしてしまいたいのだが。

「僕のターン、ドロロー……カードを1枚セットして、ターンエンド」

上級モンスターどころか、下級モンスターすら引けなかった。と、そのとき不気味な太陽に動きがあった。一切の沈黙を保っていたそれが、なんとゆつくりだが確実にフランツの方へと動き出したのだ。「今度はなんだつてのさ、もう！」

「先ほども言っただろう、ラーは神の所有者が呼び出すのを待っていると。ラーは相手ターンの終了時に元々の持ち主つまり私の場へと帰ってくる。無論、先ほどの生贄は戻らないがな」

サッカーたちはリリースされ損つてことか。歯噛みして上を見るも、どうすることもできずに球体が移動するのを見ていた。

「そして、私のターン。球体形のさらなる効果を発動！このカードをリリースすることで、手札またはデッキからラーの翼神竜を攻守ともに4000ポイントにして、召喚条件を無視し特殊召喚する！今こそ目覚めよ、太陽神ラー！」

言葉とともに球体が開いていき、その中に眠っていた真の姿をあらわにしていく。球体に見えていたのは、その羽で全身をすっぽり覆っていたからだ。そこから出てきた姿こそが、今度こそ嘘偽りない神。

ラーの翼神竜 攻??? ↓4000 守??? ↓4000

「くっ……」

十代も、どこかで見たことあるのは間違いないんだけど思い出せない会長さんも言葉を失っている。その様子がよっぽどお気に召したのか、満足そうに笑いながらフランツが僕を指さした。

「ラーの翼神竜でダイレクトアタック！ゴッド・ブレイズ・キャノン



！」

「ええい、ままよーリバース発動、バブル・ブリンガーツ！」

神の吐き出す火炎を、足元から立ち上る泡の壁が真っ向から受け止める。レベル4以上のモンスターによるダイレクトアタックを禁止するカード、バブル・ブリンガー……本当に『神』にこのカードが効力を発揮するのかわからない。だけど、同じ神であるチャクチャルさんやメタイオン先生には効く。なら、十分試す価値はある。

はたせるかな、無限にも思える時間の激突のちに無限に湧き出る泡の壁はついに神の炎を弾き飛ばした。

「フン、まあいい。せっかく神を喚んだんだ、一撃で終わっては張り合いないからな。カードを1枚伏せ、これでターン終了だ」

清明 LP4000 手札：0

モンスター：なし

魔法・罫：バブル・ブリンガー

フランツ LP2900 手札：3

モンスター：ラーの翼神竜（攻）

魔法・罫：1（伏せ）

「僕のターン、ドロー！」

フランツのデッキは神を召喚し、そのパワーで押し切るタイプのデッキ……だとすれば、当然神の攻撃を通すためにこちらの伏せカードを破壊するカードもたくさん入っているだろう。だとすれば、このバブル・ブリンガーにも過信はできない。

だけど、信じればデッキは必ず応えてくれる。だからお願い、僕のデッキ！

「……よし、来た！魔法カード、貪欲な壺を発動！墓地のモンスターカード5枚、ハンマー、レイス、うさぎ、サッカー、アンコウをデッキに戻して、カードを2枚ドロー！」

僕のデッキ最高峰のドローソース、貪欲な壺で引いたカードを見る。来た！

「ありがとう、先生……自分フィールドにモンスターが存在しない時、このカードはリリースなしで召喚できる！天をも焦がす神秘の炎よ、

七つの海に栄光を！時械神メタイオン、降臨！」

時械神メタイオン 攻0

「出たな、清明のもう一つの神様！」

「ふむ、なんですかあのカードは。あんなカード、私も知りませーん……！」

十代には見せたことがあるけれど、そういえばまだメタイオン先生のことを知っている人は数少ない。チャクチャルさんにも同じことが言えるけども、むしろなんでデュエルディスクが反応してソリッドビジョンを出せているのか、使ってる側がさっぱりわからないのだ。そんなカードをいきなり出されたら、そりゃあたいていの人は驚くだろう。

「ほう、会長も知らないカード？大変興味深いが、そんなものの召喚を許すわけにはいかないな。カウンタートラップ、神の警告を発動！ライフを2000支払い、モンスターの召喚及び特殊召喚を無効にする！」

フランチ LP2900↓900

メタイオン先生の鎧の顔に、ピシリとかすかな音を立ててひびが入る。最初はちっぽけな一本だったそれが瞬く間にメタイオン先生の全身に広がっていき、最後に一瞬だけ驚いた顔のメタイオン先生がチラリと見えたものの、その次の瞬間には顔を映し出す鏡のような部分が丸ごと粉々に砕け散った。魂の抜けた鎧が、ラーに首を垂れるかのようにどうと倒れた。

「く……ターンエンド……！」

あのメタイオン先生が、何もできずに倒れるだなんて、そんな。心のどこかにあった、先生さえ引けば大丈夫だろうという安易な気持ちがあっさり打ち消されて、なんだか足元の地面までもが急に頼りなくなつた気がした。

「手も足も出ないか？私のターン、ドロ……うっ!？」

また笑い、カードを引くフランチ。だがその表情が急に歪み、足から力が抜けたかのようによるめいた。

「くツ……さすがは神の力、使っているだけで負担が大きい、か。なら

ばフィールド魔法、神縛りの塚の2枚目を発動！このカードはテキストにある通りの効果のほかに、神を縛り、私への負担を弱める効果がある。さらに魔法カード、浅すぎた墓穴を発動。たがいに墓地からモンスターカード1枚を選択し、裏側守備表示で特殊召喚する。私が選択するのは、バルバロスのカードだ」

「そういうことか……わかったよ、グリズリーマザーを蘇生するよ」

これでこっちは場にはモンスターが1体。そしてラーの翼神竜のレベルは、10。神縛りの塚の効果は……。

「ラーで伏せられたグリズリーマザーに攻撃、ゴッド・ブレイズ・キャノン！」

ラーの翼神竜 攻4000↓グリズリーマザー 守1000 (破壊)

「先ほどは邪魔されたが、今度こそ神縛りの塚の効果を発動！レベル10以上のモンスターの攻撃で相手モンスターを破壊した時、1000ポイントのダメージを発生させる！」

清明 LP4000↓3000

「うわ……ッ！」

さすがに神を封じ込めると豪語するだけのことはある、すさまじいパワーのカードだ。僕みたいに大徳寺先生やラビエルといった強者との闘のデュエルを経験していなかったら、今のダメージだけで気を失いかねないほどの衝撃が体を走る。

「グリズリーマザーの効果、発動！」

それでも僕は、ここでグリズリーマザーの効果を使うことを選んだ。までもで筋の通った理由なんてものは何一つない。あえて一つ挙げるとすれば、デッキから声が聞こえたような気がしたからだ。ここが出る、と僕のモンスターが叫ぶ声だ。

僕はデュエリストとしてはまだまだ弱い。そんな僕が入学してからの戦いを勝ち抜いてこれたのは、あることに関しては並大抵のやつよりも上だったからだと思っっている。それが、自分のデッキを信じることだ。僕のカードがこうしたいというのなら、僕はそれをできる限り叶えてみせる。それができてこそ、デッキだって応えてくれ

るってもんだ。

「デツキから攻撃力1500以下の水属性モンスター、<sup>プリンセス</sup>鯉つ子姫を特殊召喚、そのまま効果発動！このモンスターをゲームから除外して、デツキから魚族のレベル4以下モンスターを呼びだす！レインボー・フィッシュ、召喚！」

レインボー・フィッシュ 攻1800

「いいだろう、ターンエンドだ」

清明 LP4000 手札：1

モンスター：レインボー・フィッシュ（攻）

魔法・罨：バブル・ブリンガー

フランツ LP900 手札：2

モンスター：ラーの翼神竜（攻）

???（神獣王バルバロス・セット）

魔法・罨：なし

僕の唯一残った手札は、相手モンスターを使いアドバンス召喚ができるようになる魔法のクロス・ソウル。つい先ほどやっていたうさぎちゃんとのデュエルを思い出す。あの時は帝王の烈旋から霧の王を出して逆転チャンスにつながられたっけか。なら、今度も僕が取るべき道は一つ。

「ドロー！」

そろそろ来てくれると思ってたよ、マイファイバリット。

「魔法カード、クロス・ソウルを発動！これで神をリリースして……！」

「残念だがそれは無理だな。神縛りの塚が存在する限り、レベル10以上のモンスターはカード効果の対象にならない」

「……それならそれで構わないさ、そのさつき蘇生してたバルバロスを選択、レインボー・フィッシュと合わせてリリース。これこそ僕の切り札、霧の王！<sup>キングミスト</sup>その攻撃力は、アドバンス召喚時にリリースしたモンスターの元々の攻撃力合計……！」

バルバロスの攻撃力3000を取り込み、霧の王の剣がラーの全身から放たれる神の光を浴びて光を放つ。

霧の王 攻4800

「く、ラー以上の攻撃力のモンスターを出してきたか。だが、クロス・ソウルのデメリットは……」

「その通り。これからバトルと洒落込みたいところだけどね、クロス・ソウルの発動ターンにバトルを行うことはできない。これで今はターンエンド」

神と王が向かい合い、一歩も引かぬにらみ合いを続ける。さあ、来るならかかってこい。こつちの方が攻撃力は上なんだ、そう考えていると、切迫した声で会長が叫んだ。

「ユー、それは危険すぎる賭けデース。あのラー自身の効果は、プレイヤー自身のライフを1000支払うことでモンスター1体を破壊するゴッド・フェニックス！もしフランツがライフポイントを回復するカードを引いたら、ユーのそのモンスターではひとたまりもありませーん！」

「えー!?そんな大事なことなんで今言うの!?まだ言わない方がマシですよなもん！」

ラーの効果が前提のデッキとしたら、当然そのコストとして必要なライフを確保するカードもフランツのデッキには入っているだろう。今、あつちのライフは900。もし101以上のライフを回復する手段を手に入れたら?あるいは、もうすでに手札に呼び込んでいたら? 「私の……」

フランツが、ゆっくりとデッキに手をかける。あのドロー次第で、今後の命運が決まる。

「ターン！」  
カードを引いた瞬間、不気味な風が巻き起こった。この気迫、一体何をドローしたというんだか。

「……ふっ。カードを伏せ、ターンエンドだ。ラーは守備表示にしない、攻撃するならするがいい。お前にその覚悟があるならばな」

清明 LP3000 手札:0

モンスター:霧の王(攻)

魔法・罫:バブル・ブリンガー

フランスツ LP900 手札：2

モンスター：ラーの翼神竜（攻）

魔法・罠：1（伏せ）

場：神縛りの塚

たった1枚の伏せカード。だけど、その1枚が怖い。一体、何を仕込んであるんだろう。あのたった1枚だけが、攻撃をためらわせる抑止力になっている。カードを引く。引いたのはチャクチャルさん……駄目だ、これはただの事故だ。

どうしよう、このターン攻撃をすべきか。サイクロンを引くまで粘るべきだろうか。それとも、あれはただのブラフでこっちが攻撃をためらうことこそが真の狙いなのだろうか。わからない。疑心暗鬼になり考えが袋小路に突入しかかった時、聞き覚えのある声がした。

「迷うなんてお前らしくないぜ、清明！」

「十代……」

「難しい顔してないで、もっとデュエルを楽しめよ。たとえコピーカードだって、お前はあのラーの翼神竜を相手にしてるんだぜ？そんなの、見るだけでワクワクするぜ！」

そうか、うん。どうやら僕も、こここのところ物事を難しく考える癖が染みついていたらしい。もっと肩の力を抜いて、気楽にいけばいい。闇のゲーム？負ければ危ない？上等じゃないか、それだって。デュエルは本来楽しむものなんだから、それができれば後悔はない。神のカード……世界広しといえど、これを相手にしたことがあるデュエリストは数少ない。光栄じゃないか、そんな中に僕が入るなんて。「センキュ―十代、もう迷わないよ。霧の王でラーの翼神竜に攻撃！神を切り裂け、ミスト・ストラングル！」

吹っ切れた僕の顔を見て満足そうに頷き、霧の王が飛んだ。ラーよりも高く飛び上がったからの太陽を背にしての大上段の一撃が、偽物の太陽神を両断する。

霧の王 攻4800↓ラーの翼神竜 攻4000（破壊）

フランスツ LP900↓100

「やった、神を倒した！」

「グレイト！さあフ란ツ、墓地から特殊召喚できないラーを失った今、あなたに勝ち筋は残されていないはずデース。大人しくサレンダーしなサイ」

ラーの姿が消えていき、会長が地面にうずくまったフ란ツのもとにつかつかと近づいていく。だがその歩みが、急に止まった。それも無理はない、フ란ツの全身からいきなり得体のしれない黒い影が噴き出てその体をすっぽり覆い尽くしたのだから。

## ターン59 鉄砲水と太陽神（陰）

「こ、これは!？」

『ふぎけるナ、まだ勝負はついていない』

フランツの声が二重に聞こえる。まるで、まったく別の何かの彼の口を動かして喋っているかのように。

「……あなた、一体誰なのですか？私の研究員を操り、ラーのカードを盗み出すとは」

『これハこれハ、ペガサス・J・クロフォード氏。久しぶり、あえてこう言わせテ貰おうカ』

「……………What?」

『こうしてお会いすルのは初だったカ、これは失礼しタ。私の名ハ、アバター。邪神<sup>デビルス</sup>アバター、という方ガわかりやすいカネ?』

「ア、アバター!？」

どうやら会長、いや、ペガサス会長。そうだ、どこかで見た顔だと思つたら、テレビや雑誌でしょっちゅう見る顔だ。デュエルモンスターズの生みの親、ペガサス・J・クロフォード氏。なるほど、そんな偉い人ならラーの翼神竜のコピーカードなんてすさまじいものを持つていても不思議はない。何しろ、オリジナルのラーだつてもとはいえばあの人が作ったカードなんだから。と、気になつていたことが一つはつきりしてスッキリしたところでペガサス会長とアバター?の話に耳を傾ける。どうやらこのデュエル、さつきラーを倒したからはい終了、なんて気楽にはいかなさそうだ。

『ソウトモ。ペガサス氏、貴方がオリジナルの、太陽神<sup>ラー</sup>をはじめとした三幻神を封じるためニ構想だけしたモノの、結局デザインのみで終わったモンスター、三邪神。ここまで来るのは苦労シタよ、この男の邪念に干渉して先ほど御覧に入れた球体形のカードを作らせ、さらにソのカードを通じて膨れ上がラせた邪念によつてこの私、アバターをカードとして作るように仕向けサせた。もつとも、この男は自力で『邪神アバター』の構想を思いついた気になつているガね』

「バカな……アバターが、私がほんの気の迷いでデザインしたあの凶<sup>まが</sup>



つ神が、カードになったデスって?」

『「そウとも。一度デザインした時点で、何をシようともし『邪神アバター』という概念はもう消すことができない。だが、概念だけではさすがの私もできるコトには限りがある。真の力を発揮するために、私自身を形あるカードにする……そのための隠れ蓑として、偽の太陽神を利用させてもらったというわけさ。さて、すまないがそろそろどいてもらおうか。今はその少年とデュエルをしている最中なものでね。箸にも棒にも力からぬ代物とはいえ、ラーを倒すとはなかなか見どころがある。それにその闇の力、ただの人間でもないヨようだしな』」

フランツ……いや、アバターがこちらに向き直る。姿かたちこそフランツのままだったが、はつきりわかる。これはさっきまで相手していたのとは全くの別人、アバターだ。

「そ、その前にさ。一つだけ教えてもらおうか、アバター」

『「ほう、何かな?」』

「とぼけないで! チャクチャルさんの力を吸い取ってグロツキーにしたのもお前だろ!」

『「ああ、あの地縛神……だつタかな? 私とよく似た性質の闇の力に満ちていたものデね、利用させてもらったよ。あの者もてつきり途中で抵抗ぐらいしてくると思っただがな、それほどの体力は残っていただろうに』」

「え?」

『「よほどこの土地に重要なものを置いてあつたらしく、ある程度吸つたあたりから残りの力でこの島全域に結界のようなものを張つたらしくてな。オかげでこの人間の体を使わねば島に入ることすらできなかつたよ』」

「チャクチャルさん……」

もしかして、いや、間違いないだろう。守ってくれたんだ、チャクチャルさんが。ありがとう、と手札で沈黙するチャクチャルさんの中に、お礼を言う。

『さて、そちらの用はそれくらいかな? 私もだいぶ、喋り方に慣れて

きた。よければそろそろ、デュエルを続けようではないか』

そう言われてみれば、確かに最初のころはぎこちなかったアバターの言葉もだいぶ滑らかになっている。フランツの体になれてきた、ということだろうか。

「ああ、いいよ。それじゃあ改めて、第二ラウンドと洒落込もう！僕はもうターンエンドだ、かかっておいでよアバター」

『いいだろう。だが、一つ訂正だ。その前、ラーが破壊された瞬間に私の伏せたりバースカード、道連れが発動！私のモンスターが墓地に送られた時、相手モンスターを破壊する。仮にも神を倒したのだ、その王にもそれなりの報いは受けてもらわないとな。……………妄念のゴッド・フェニックス』

アバターが宣言するとすぐ近くの地面がいきなり爆ぜ、地獄の底からどす黒く燃える不死鳥が舞い上がってきた。憎しみに満ちた目付きの不死鳥が、霧の王へ覆いかぶさるようにして襲い掛かる。瞬間発生した衝撃から思わず顔を守り、恐る恐る目を開けてみるとそこにはもう霧の王の姿も不死鳥もおらず、地面にぽっかりと空いた穴のみが今起きたことが現実であると物語っていた。

「霧の王が……………」

『そして私のターン。モンスターをセットし、カードを伏せる。ターン終了だ』

清明 LP3000 手札：1

モンスター：なし

魔法・罫：バブル・ブリンガー

アバター LP100 手札：2

モンスター：??? (セット)

魔法・罫：1 (伏せ)

場：神縛りの塚

「ぼ、僕のターン！ドロー……………よし！ツーンヘッド・シャークを召喚して、召喚時効果を発動！自分フィールドの魚族レベル4モンスターのレベルを1つ下げる！」

ツーンヘッド・シャーク 攻1200 ☆4↓3

ツーヘッドは2回攻撃の能力を持ち、伏せモンスターを噛み砕いた後でさらに追撃のダイレクトアタックができる。だけど、ただ召喚しただけだとお互いに効力が及ぶバブル・ブリンガールのせいでレベル4のツーヘッドは直接攻撃ができない。そこで役に立つのが、普段めつたに使わないもう一つの効果。レベルを3に下げることによってバブル・ブリンガールの適用範囲から外れ、晴れてダイレクトアタックを決められるというわけだ。あとは、あの伏せモンスターの守備力が1200未満なことを祈るのみ。

『ならばトラップカード、強化蘇生を発動！私の墓地のレベル4以下のモンスターのレベルを1つ、攻守を100ポイント上げて蘇生する。死の淵より蘇れ、ラーの使徒よ！』

ラーの使徒 守800↓900 攻1100↓1200 ☆4↓

5

「ここでラーの使徒？……あつー！」

『ラーの使徒は特殊召喚した時、手札、デッキからラーの使徒を合計3体になるまで特殊召喚できる。私はデッキから、さらに2体の使徒を特殊召喚！』

ラーの使徒 守800

ラーの使徒 守800

「だけど、いくら壁を増やしたって！ツーヘッド、まずは強化蘇生で出てきたラーの使徒に攻撃！」

ツーヘッド・シャーク 攻1200↓ラーの使徒 守900(破壊)

さて、もう一度の攻撃をどのモンスターにするか。伏せモンスターを攻撃してもいいけど、リバー効果持ちだった場合どうなるかわからない。ここは一呼吸おいて、ラーの使徒に攻撃すべきか……いや、待てよ。なんでわざわざ攻撃前のタイミングにラーの使徒を蘇生したんだ？あの伏せモンスターに攻撃してほしくない理由があるのかもしれない。ラーの使徒に攻撃を誘導しようとしているとすれば、どうする？

「もう一撃は、伏せモンスターに攻撃！」

ツーヘッド・シャーク 攻1200↓??? 守700(破壊)

鋭い鮫の牙が伏せモンスターを一撃で粉碎する。その直前、一つ目のにんまり笑った顔が見えた。

『カオスポッドのリバース効果を発動。全てのフィールド上モンスターをデッキに戻してシャッフルし、戻した数だけデッキからカードをめくってその中のレベル4以下のモンスターを裏側守備表示でセットする』

「なるほど、ラーの使徒を出したのは攻撃誘導なんかじゃなくて……」  
『初めからこれが狙いだった。私が戻すモンスターはラーの使徒2枚、よって2枚のカードをめくる。速攻のかかし、そしてレベル5のジャックス・ナイトか。速攻のかかしをセットし、ジャックスを墓地に送る』

「先を読んだつもりで、まんまと読まれてたってわけか。僕が戻すのはツーヘッド1枚、だからめくるカードも1枚。シャクトパスか」

フィールドには共に何がいるかわかっている伏せモンスターが1体ずつ。だけど、速攻のかかしがセットされているからって何ができるってんだ。あれは手札にいないと意味のないカードだからね。だから、まだこつちにも運はある。

「ターンエンド」

『私のターン。速攻のかかしを反転召喚』

「なっ!？」

速攻のかかし 攻0

不気味に佇む金属製のかかし。壁にするぐらいならともかく、この状況で反転召喚？

『魔法カード、機械複製術を発動。デッキから同名モンスターをさらに2体特殊召喚する』

速攻のかかし 攻0

速攻のかかし 攻0

さらに増えるかかしが3体。3体?……まさか!

『さすがに気付いたか、だがもう遅い。モンスター3体をリリースし、私自身を召喚!』

でろり、と音がしたような気がした。周りの木が、石が、草が地面

にかすかにかけていた薄い影が意志を持つかのようにもぞもぞと一斉に動き出し、アバターの影のもとに集結していく。そしてその影が遂にフランスの体から離れて独立した意志を持つかのごとく空中に浮かび、ぼこぼここと気持ちの悪い膨れ上がり方をしていく。そして最終的に、それは真つ黒な……本当に真つ黒な、ただの一点の染みも色むらもないのつぺりとした球体になった。

邪神アバター 攻？

「攻撃力が、ない……？」

まるでさつき僕のモンスターをリリースして召喚されたラーの球体形から全ての色を取り去ったようなその形をじっと見ていると、わけもなく寒気がした。

『伏せられたシャクトパスに攻撃……：ダークネスコンバット・イト』

闇の塊が、動きだす。影が凝縮されて人間サイズにまで縮み、さらにその姿を変えていく。最初は何が起きているのかまるで分らなかつたけれど、次第にアバターの姿が見覚えのあるものになつていった。

「な、なんでアバターがシャクトパスに」

あの姿を僕が見間違えるわけがない。僕のデッキのメインアタッカーの1体、シャクトパスを。

『これは失礼、説明がなかつたか。私自身には見ての通り、攻撃力が存在しない。だが、私にとって固定値は不要。私の攻守は、いかなる場合においても私以外の一番攻撃力数値が高いモンスターの攻撃力、それに100を足した数値となる。シャクトパスの攻撃力は1600だったな』

邪神アバター（シャクトパスベース） 攻1700↓シャクトパス 守800（破壊）

『そして、神縛りの塚はいまだ生きています。ちなみに私のレベルもまた、神と同じ10だ』

「ぐわっ!？」

清明 LP3000↓2000

ライフ1000はダメージ的にも肉体的にも痛いけれど、そんなことは気にならなかった。邪神シャクトパスの姿に、本家シャクトパスの呪いが絡みついていく。

『……………』

「シャクトパスの効果発動！このモンスターが戦闘で破壊された時、そのモンスター1体の装備カードになって表示形式の変更と攻撃を封じて、さらに攻撃力を0にする！」

邪神アバター 攻0

アバターが再び球体に戻るが、その全身には依然としてタコ足が茨のように絡みついていて。シャクトパスの効果は対象を取らないから、神縛りの塚にも妨害されなくてわけだ。

『ターン終了だ。ああ、もう1つ言い忘れていたよ。私の召喚に成功してから相手ターンで数えて2ターンの間、相手は魔法も罫も使うことができない。せいぜいモンスターが引けるように祈っておきたまえ』

清明 LP2000 手札：1

モンスター：なし

魔法・罫：バブル・ブリンガー

シャクトパス（アバター）

アバター LP100 手札：0

モンスター：邪神アバター（攻・シャクトパス）

魔法・罫：なし

場：神縛りの塚

「僕のターン、ドロー！くっ、ターンエンド」

ドローカードは魔法カード、スター・ブラスト。モンスターのレベルをライフを払うことで下げることができいいカードではあるけれど、アバターのせいで僕の魔法カードは封じられていて意味がない。それに今の僕のライフポイントだと、レベル10のチャクチャルさんを通常召喚できるようになるまでレベルダウンさせるのは無理だし。

『私のターン、ドロー。永続魔法、フィールドバリアを発動。この

カードがある限りフィールド魔法は破壊できず、新たに発動することもできない。ターンエンドだ」

清明 LP2000 手札：2

モンスター：なし

魔法・罨：バブル・ブリンガー

シャクトパス（アバター）

アバター LP100 手札：0

モンスター：邪神アバター（攻・シャクトパス）

魔法・罨：フィールドバリア

場：神縛りの塚

ありがたいことに、がら空きの場にモンスターを出されて攻撃されずに済んだ。この浮いた1ターンを生かすか殺すかは、僕次第。シャクトパスの効果が聞いているうちなら、神を倒すことも夢ではないはずだ。

「ドロー！よしっ、ハリマンボウを召喚！」

ハリマンボウ 攻1500

「アバター、今のお前の攻撃力はシャクトパスの力で0！ハリマンボウの一撃で僕の……………」

勝ちだ、ということとはできなかった。またしてもグニャグニャと球体アバターの姿が歪んでいき、その姿がハリマンボウのものになったのを見たからだ。

邪神アバター（ハリマンボウベース） 攻0↓1600

「ちよつと待ってよ、なんで攻撃力が0になったのにまた」

『「いかなる場合においても、と言わなかったか？こんな下級モンスターごときの力で、私を縛り付けられるなどと思っていたのか？」』

いくら0にしたところで、次の瞬間にはまた攻撃力が復活する。とんでもなく理不尽な話だ、これじゃあどうやったって戦闘では勝てない。魔法も罨も封じられる。これが、邪神。

「ターン……………エンド……………」

『私のターン。効果の意味も薄いとはいえこんなものをいつまでもつけておくのも目障りだ、サイクロンを発動。私にしがみついている

シヤクトパスを破壊する』

シヤクトパスのタコ足がちぎれ、それすらもアバターの体に取り込まれていく。

『バトルだ、ハリマンボウに攻撃。戦闘ダメージはわずか100だが、神縛りの塚の効果も受けてもらおう』

邪神アバター（ハリマンボウベース） 攻1600↓ハリマンボウ  
攻1500（破壊）

清明 LP2000↓1900↓900

アバターのライフはわずか100。なのに、そのたった100のライフが削れない。たった100のライフが、奪えない…。

「ハリマンボウは墓地に送られた時にモンスター1体の攻撃力を500下げる。だけど」

変身対象であるモンスターが消えたことで再びぐによくよと元の球体に戻るアバターを見て、ハリマンボウの効果である永続的な攻撃力低下も効かないことを悟る。いかなる場合も100上回る、だから下げたところでどうせすぐに元に戻るんだ。

邪神アバター 攻0

「わかったよ、ドロロー……ターンエンド」

『私のターン、ドロロー。マツシブ・ウオリアーを攻撃表示で召喚し、<sup>アバター</sup>私がその姿を映し出す』

マツシブ・ウオリアー 攻600

邪神アバター（マツシブ・ウオリアーベース） 攻700

『残念ながらバブル・ブリンガーは既に発動されているカード。私といえども従わざるを得ないため攻撃はできないが、レベル2のマツシブ・ウオリアーには関係のないことだ』

マツシブ・ウオリアー 攻600↓清明（直接攻撃）

清明 LP900↓300

「くっ……この程度！」

清明 LP300 手札：3

モンスター：なし

魔法・罠：バブル・ブリンガー



アバター LP100 手札：0

モンスター：邪神アバター（攻）

マツシブ・ウオリアー（攻）

魔法・罨：フィールドバリア

場：神縛りの塚

バブル・ブリンガーにまた救われた、か。だけど、次のドローが真正銘のラストチャンス。レベルを1下げるのにも500ライフが必要なスター・ブラストはもう手札コストにしなければならないし、さっきのターン引いたカードは使ったところで神縛りの塚の的を増やすだけのサルベージ。だから、チャクチャルさんを召喚できるかどうかはこのカード次第だ。唯一の救いがあるとすれば、アバターの魔法罨封印効果がさっきのターンで切れたということだ。このターンからは魔法カードが使える、これを生かすことができればあるいは。

「僕のターン、ドローッ！」

カードを引いた瞬間、体がすつと楽になった気がした。恐怖だとか畏れだとか、そうだったので吹っ切れたわけじゃない。今回もまたデッキが応えてくれたのが、無意識のうちにわかったのかもしれない。

「魔法カード、おろかな埋葬を発動！デッキからモンスターカード、ハリマンボウを墓地に送る。この瞬間ハリマンボウの効果をマツシブ・ウオリアーに発動、その攻撃力が下がったことでアバター、お前の攻撃力もその分下がる」

『確かに。だが、そんなことをしたところで新たなモンスターを召喚すれば意味がない』

マツシブ・ウオリアー 攻600↓100

邪神アバター（マツシブ・ウオリアーベース） 攻700↓200

「僕の狙いはそっちじゃないね。バブル・ブリンガーのさらなる効果を発動することさ！表側表示のこのカードを墓地に送ることで、レベル3以下の同名水属性モンスター2体を特殊召喚する！ハリマンボウ、カモーン！」

ハリマンボウ 攻1500

ハリマンボウ 攻1500

邪神アバター（ハリマンボウベース） 攻1600

再びアバターの姿が変わる。だけでもう、そんなものの怖くない。

「ハリマンボウ2体をリリース！七つの海の力を纏い、穢れた大地を突き抜ける！アドバンス召喚、地縛神 Chacu<sup>チャク</sup>」

Challhua<sup>チャルア</sup>！」

地縛神 Chacu Challhua 攻2900

邪神アバター（地縛神ベース） 攻0↓3000

『一度私に敗れた神に再び頼るか。もう少し見どころのある人間だと思っただがな』

「へっ、そっちこそもう少し見どころのある神様だと思ってたんだけどね、邪神さん？ねえ、チャクチャルさん。そろそろ寝たふりはやめたら？」

『……なんだマスター、いつから気づいていた？』

案の定多少つらそうではあるものの、割合びんぴんした声を返してくるチャクチャルさん。まったく、こっちの神様にも困ったものだ。

「気づいたのはついさっきだよ。チャクチャルさんが残った力でこの島全体に结界を張った、ってアバターから聞いたあたり。この島に结界を張ったつてのは、要するに誘い込みでしょ？自分のパワーを囷にしてアバターを誘い込んでから倒そうとした。違う？」

『いや、続けてくれ』

「力を吸い取られてある程度弱っていたのは本当、だけど動けなくなるほどじゃない。僕の前でそれ以上に弱ったふりして見せたのは、おおかた自分一人で片を付けようとしてたから。行動不能になつて沈黙したように見せかけてれば、僕に怪しまれずにくらでも動き回れる。だけど誤算として、僕がチャクチャルさんの想定以上にそれに怒って自力で犯人を捜し出して先にデュエルを始めちゃった。そんなところ？」

『驚いたな、正解だ。アバター、1つ教えてやろう。お前は確かに強い。三幻神を押さえつけるための抑止力というのは嘘ではなさそうだ。実際、正面から力でお前に勝てるものは数少ないだろう。だが、

まだ生まれ出でてから日が浅いな。私がナスカで生き続けてきた五千年、世界の動きを常に観察しつづけてきたその日々の深さに比べれば、力一辺倒のその生き方はあまりにも脆い』

『何……？』

『私の前にはそんな力、何の意味もないと言っているのさ。いつの日にか、もつと駆け引きを身に着けたらまた遊んでやろう。……行くぞ、マスター！』

「当り前さー！チャクチャルさんは自身の効果により、相手プレイヤーにダイレクトアタックできる！いくらアバターが強くなっても、プレイヤーへの攻撃には意味がない！流れ去れ、ミッドナイト・フラッド！」

『そんな、私が……』

地縛神 Chacu Challhua 攻2900↓アバター  
(直接攻撃)

アバター LP100↓0

「ふー……でも実際問題、お前は強かったよ、アバター」

結果的には僕の勝ちだけど、もう一度戦ったらどうなっていたかはわからない。このデュエルは実質、アバターが途中でフランツから引き継いだものだからだ。もし最初からアバターの方が出てきていたら、まったく別の結末になっていたかもしれない。

まあそんなこと、おくびにも出さないけどね。それもまた駆け引きの1つ、ハツタリをかますってやつさ。

満ち足りた気分で倒れたままのフランツが落としたジエネックスのメダルを拾い、素早く懐にしまいこむ。これもまた勝者の特権。……と、そこでこちらをじつと見つめるペガサス会長の視線に気づいた。いや、その眼は正確には僕を見ていない。僕の持つデュエルディスク、それを見つめていた。

「……………？」

「十代ボーイ、すみませんがフランツのことをお願いしマース。それ

と清明ボーイ、でしたか？ユーには少々聞きたいことがあるので、こちらに来てくだサーイ」

そう言つて森の中に足を進めるペガサス会長。そのシリアスな雰囲気、訳が分からないながらもついていく。

「(チャクチャルさんチャクチャルさん、なんなんだろいったい)」

『(そうだな。考えられる線としては、私とメタイオンのことだろうな。なにせあちらからすればいきなり見たこともないカードを使いだしたんだ、思うところも色々あるだろう)』

あ。自分の犯したとんでもないミスを前に、さーつと顔から血の気が引いていくのが分かった。そうだ、確かにあの2枚はどこを探しても世界に1枚しかないカード。そんなものを見せられてカードの開発会社がどう思うかなんて、考えるまでもないだろう。下手すると退学どころか、不正カード使用の罪で一生デュエルの表舞台からの追放もありうる。今すぐ逃げ出そうかなんてことを割と本気で検討し始めたあたりで、ペガサス会長が足を止めた。そのままこちらに振り向き、周囲に誰もいないことを確認する。

「あの、ペガサス会長」

「清明ボーイ、あなたはデュエルモンスターズが好きですか？」

「はい？……ええ、もちろんです」

何を言われるかと思つていたら、まったくの想定外の質問。思わず聞き返したが、ペガサス会長の真剣な顔を見てすぐに答え直す。もちろん好きだ、そんなことは決まっている。

するとその答えが気に入ったのか、彼はふつと笑みを浮かべた。

「そうですね。ならば清明ボーイ、あなたが使つていたあの2枚のカードについて、私は何も聞きませーん。代わりにこれを差し上げまシヨウ」

そう言つて何やら高級そうな紙を取り出し、そこにすらすらと何か文字を書いてからハンコを押し、それを僕に差し出した。読むと、  
インダストリアル・イリュージョン

1 社公認・新規カードテスター証明書、と書いてあった。  
た。

「これは……」

「もしあなたの持っているカードについてとやかく言われるようなことがあれば、その紙を見せておやりなさい。私はデュエルモンスターズの生みの親、このカードゲームについての発言力はいまだ衰えていないと自負しているマース。恐らくそれで相手も黙るはずデース」

「あ、ありがとうございます」

僕ができる限りきれいに折りたたんでその紙を仕舞い込むのを待つてから、ペガサス会長がまた口を開いた。

「さて、本題はこのことではありませーん。あなたが最後のターンに話していた相手、あれはもしかやカードの精霊、と呼ばれるものではないですか？」

「え、ええ……」

「それならばあなたのその才能を見込んで、1つ頼みがあります。この2枚のカードを預かっていて欲しいのデース」

その言葉とともに、2枚のカードを差し出してくる。受け取って確かめてみるが、なんとそのカードはどちらも白紙……テキストもイラストも何もない、裏面しかないただのカード。ペガサス会長を見返すと、重々しく頷かれた。

「イエース、ユーの言いたいことはわかります。確かにこれは白紙のカード……ですが、このカードを持っていて欲しいのです。それは新しいカードを作っている最中に偶然できたエラーカードということになっていますが、見た瞬間に私はピンと来ました。このカードはエラーカードなんかではなく、真に自分を使いこなせる主以外の手に渡りたくないだけだと」

そう言われて、改めてその白紙のカードを見る。ほんの一瞬、ほんの一瞬だけ、その真っ白な面に何かイラストが見えたような気がした。

「あつー！」

「ええ、私にも見えますシタ。精霊の見えるあなたのようなデュエリストなら、もしかしたらこのカードの心を開くことができるのかもしれない。だから私は、このカードを託したいのデース。どうです、受け取ってもらえないでしょうか？」

白紙のカードの心を開け、か。なるほど、面白い話だ。こんな突拍子もない話もすんなり信じられるあたり、つくづく不思議なことにも慣れたもんだ。

「喜んで。むしろ、こっちからお願いしたいぐらいですよ」

「ワオ！ではお礼に、私の大好きなコミック『フアニーラビット』の全巻セットを今度デュエルアカデミアに寄贈しましょウ！」

そんなのいいから水属性の新カード作ってくれ、とは言い難い雰囲気だったのでぐっと我慢する。うう、せつかくデュエルモンスターズの生みの親がいるっていうのに。

「それと、ユーたちは学生ですからまだワインは無理デスネ。ならば最高のチーズ、ゴルゴンゾーラも寄贈します」

「本当ですか!?!いよっしゃあ、ありがとうございます!!」

その後、ペガサス会長は正気を取り戻したフランチとともにアカデミアを去っていった。島には隼人も来ていたのだが、僕はなにしろずっと井戸にいたもんだから結局帰りがけに少し挨拶するぐらいしかできなかった。知ってたらもう少し校舎内にいたんだけど、残念。ちなみに、フアニーラビットとゴルゴンゾーラは今週中には届けてくれるらしい。アメコミはともかく、チーズは楽しみだ。ゴルゴンゾーラ、一体どんな料理や菓子に使ってやろうか。

その夜。地縛神は、今日も清明が寝静まった後にレッド寮の屋根の上に来ていた。考えるのは、今日のことだ。なぜ、アバターがあんなところにいたのか。確かにアバター自身の説明も筋が通ってはいたが、それでも一つ腑に落ちない点があった。それは、アバターのした話の最初の部分。

『一度デザインした時点で、何をしようとも『邪神アバター』という概念はもう消すことができない』

この部分が、どうにもチャクチャルアには気にかかっていた。本当に、そうなのだろうか。邪神といえど、作られていないのならば言ってしまうばたかがデザイン。大昔のエジプトで行われていた決闘ディアハにおける魔物カや自分たち地縛神のように最初から実体のあるものならともかく、数年前にデザインされただけに過ぎない存在がそこまで確固たる自我を持つものなのだろうか。

チャクチャルアは思慮深く、用心深い。昼に清明がやってのけた説明は、実は半分しか当たっていない。確かに彼はまだまだ余裕があったにもかかわらずあえて死にかかったふりをして清明の目を欺こうとした。だが、それがアバターを倒そうとしたためというのは間違っている。むしろ彼は清明を信頼し、あの相手ならば清明マスター一人でもなんとかできるだろうとまで思っていた。彼がやろうとしていたのは、そのさらに上。アバターの背後にさらに何らかの影があったとして、それを確かめるために動こうとしていたのだ。

だがその結果は振るわず、やむを得ないと清明の元に戻ってきたところで丁度自分が召喚され、中途半端に当たった推理が展開された。とりあえずは清明の目をごまかすためにも肯定しておいたが、それは正しいことだったのだろうか。それとも最初から自分の考えすぎで、アバターの言葉がすべてだったのだろうか。彼の疑問に答えるものは誰もいないが、その様子を隠れ見て嘲笑う影はいた。

「あはははは、さっすがに頭が切れるねー、ああいうロック系モンスタはさー。ま、せいぜい頑張って考えなよ、こっちはいろいろと準備があるんだから、さー。圧倒的な黒色が、世界の色を塗りつぶす。シンクロ召喚く、ってね」

## ターソン60 邪魔蠍団と正義の誓い

「ねーねー、そろそろこのままじゃまずいと思うんだよね」

僕が十代にそう言ったのは、ラーを倒したその日の夜だ。レッド寮の貧乏つぷりをよく知っている隼人がオーストラリア名物というカンガルー肉をわざわざ手土産に買ってきてくれたので、その僕にとつても未知の味をどう調理しようかと試行錯誤しながらのことである。

「おう、どうしたんだよ急に」

「いやさ、光の結社の話なんだけど。あ、ちよつと塩とつて塩。そのの棚にこないだ詰め替えたのが放り込んであるから」

「おう、これか？それで、なんでまた光の結社が？」

「センキュ……うわ、十代これ砂糖！これじゃなくてその隣の瓶取ってくれる？ほい、ありがと。それで、さっきの話だけどね？今日の昼、久しぶりに葵ちゃんが店まで来たんだよ」

「ふーん。それで？」

「別に用事自体は大したことなくてさ、今朝僕が見つけた鮫島校長について詳しく聞かせてくれ、つてやつ。で、それは別にいいんだけど。なんか後で思い出してふと気づいたんだけど、僕ったらフツーに葵ちゃん相手に喋ってたんだよね。ほら、翔から聞いてない？僕が一期時光の結社相手にやたらめったらデュエル売りまくってたバーサーカーソウル状態だったって話」

十代も覚えてるでしょ？と言いそうになったが、あの時期の十代はエドに負けたショックで海のどこかをさまよった末に木屋だか土屋だかでネオスパーシアン一同と出会うというんだかよくわからない体験をしていた時期だったことを思い出す。下手に追及してまた自分の負け試合のことを思い出させるのは忍びないのであの時期のことは僕の方からはあまり聞かないでいたけれど、十代なら翔や剣山辺りから僕のことを聞いていてもおかしくはない。

案の定ある程度のごことは聞いていたらしく、ああ、と頷く十代にそのまま語りかける。

「あの時はちよつといろいろあったとはいえ、あんなに憎んでたのに



いつの間にかそれに慣れてきちちゃってるんだなあ、って思ってた。僕が一番怖いのは、このままなんとなくの流れでずるずる毎日やってくるうちに光の結社そのものに完全に慣れきっちゃって、あんなもんがあるのがおかしいって考えがうすくなることなんだよね」

「ふーん。なるほどなあ、お前らしい悩み事だな」  
「褒めてるの、それ？」

どっちともつかなかったので聞いてみたが、どうも本人は特に何も考えず思ったことをそのまま口に出しただけらしい。まあ、それも十代らしいっちゃ十代らしい。

「んー、あと5分ぐらい煮込んだらごはんね。それで、どうしたらいいかな？十代はなんかアイデアある？」

「お、ようやくメシかー……でもさ、清明。そうやって考えるより前に、俺たちは全員デュエリストなんだ。だったら、デュエルをすればきつと分かり合える。そうだろ？」

ああ、まったく。十代は実にいつも通りだ。でも、今回ばかりはその方が正しいのかもしれない。いつまでも部屋で考え込んでたって、どうせ途中で昼寝して終わるだけなんだ。だったら、デュエルで解決するのが一番だろう。だけど、もうあんな無差別に襲いかかるような真似はしない。あれは実際、僕の中でもかなりの黒歴史だ。

なら、どうするか。やっぱり頭の部分……斎王を直接叩けるのが理想なんだけど、あいにくあの周りには常に警護がいるから手出しがしづらい。それを無効にするには光の結社の中でもいわゆる幹部クラス、葵ちゃんや三沢、鎧田に万丈目や明日香を狙ってみよう。

「ありがと、十代。なんか色々吹っ切れたわ。じゃ、とりあえずシンブルにステーキにしてみたから、このカンガルー肉とやらを食べてみようか」

「おうー！」  
カンガルー、美味しかったです。隼人にはあとでお礼を言うておう。

「ふー……」

その後洗い物も終わらせ、ふと窓から見える夜の海を見る。ここ数

日慌ただしかつたし、久しぶりに散歩するのもいいかもしれない。十代は今日もまだネオスピーシアンのコクタクト融合とこれまでのHEROの共存に悩んでいるらしいし、誘うのも悪いだろう。いっぺんどこまで進んだか聞いてみたのだが、メインデッキは割と完成してきたのにエクストラの15枚制限のせいで本気で頭がパンクしそうになっっているらしい。今のところは妥協案として常に全種融合体を持ち歩き、デュエルのたびにフェイバリットカードのフレイム・ウィングマン以外をランダムに入れ替えてるとのこと。大変そうだなー、融合って。

「どれ、ちょっと外の空気吸ってくるよー」

自分の部屋にいる十代に声をかけ、靴だけはいてふらりと外に出る。特に誰とも会わずに歩いてみると、いつの間にか海岸まで来ていた。静かに波の音でも聞こうかと耳を澄ませると、まったく別の騒がしい声にせつかくの音が全部かき消される。

『助けてー……アニキ………』

「ええい、うるさい！お前らは邪魔になると何度言ったらわかるのだ！」

『そんなつれないこと言わないでよ、オイラ達とアニキの仲じゃないか』

「貴様らみたいな不細工、俺は知らんといったはずだ！」

『そ、そんな〜！』

相手によっては張り倒そうかと近づいてみると、そこには段ボール箱を抱えた万丈目……あー、ホワイトサンダーとおジャマトリオがいた。どうも万丈目が段ボールを海に捨てようとしているのを、トリオが懸命に引き留めようとしているらしい。

『頼むよ、アニキー！』

「知らん知らん知らーん！」

「何やってんのさ、こんな夜遅くに」

ますます両者ともにヒートアップして声が大きくなってくるので、さすがに耐えかねて話に割り込む。するとおジャマトリオがよっしゃあ、と言わんばかりの顔でこちらのほうに飛んでくる。

『清明のダンナー、ちょうどいいところに来てくれたわね!』

『聞いてくれよ、万丈目のアニキが急に俺らのことを海に捨てるって言い出すんだよ!』

『それで俺たち、捨てないでくれって頼んでるのにアニキが全然取り付く島もなくて』

「ここぞとばかりにまくしたてる三兄弟をいったん押しとめ、万丈目に向き直る。

「なるほどねえ。んで?何か言いたいことは?」

「フン、くだらん。俺のカードを俺が捨てて何が悪いというのだ」

「……ねえ三兄弟、何?万丈目って白塗りしてからずっとこんな調子なの?」

「万丈目ホワイトサンダー、だ!」

怒る万丈目を尻目に、しみじみした顔でうんうん、と頷く三兄弟。なんか入学した時を思い出すなあ、この調子。

「ええい、なんだその目は!俺をバカにしているのか!」

「あーいや、こんな調子だと周りが大変だろうなあ……あら失礼! おっとつい本音が。」

「き、貴様……!もう許さん!遊野清明、お前にデュエルを申し込む! 時刻は明日の日の出と同時に、場所は校舎の中央入り口前だ!」

「……で、お前たちを預かってきたのか?」

再びここはレッド寮。あの後すぐに帰っていった万丈目が置き忘れていったおジャマ三兄弟を放っておくのも忍びなかつたので回収し、ちよつど水を飲みに来ていた十代と鉢合わせたのでわけを話す。ちよつと待ってる、といって2階に上がった十代が、何やらもう一段ボール箱を持って帰ってきた。見ると、そこにもカードがたくさん。

「そいつらも一緒に戦うんだろ?だったら、これも使ってけよ。これが、万丈目があの時井戸から回収してきたカードたちだ。それと、黒蠍団のカード」

「おお、懐かしい」

ちよつと去年のことをを思い出してしみじみしていると、箱の中から眼帯をした半透明の男が起き上がる。

『おお、なんだお前らか。このザルグに何の用だ？』

「おつひさー。ちよつとね、力を貸してほしいことがあつて……」

食卓机にカードを広げる。今の万丈目が四六時中あんな調子なら、友人として一発ガツンとくらわせてでも目を覚まさせてやらねばなるまい。ちよつどいい、最初のターゲットは万丈目にしよう。

ただ悲しいことに僕のデッキはすでにいっぱいいっぱいせつかくついてきたおジャマ要素を入れるスペースがない。なら、この万丈目のもとに集まっている精霊たちの力を借りてひとつ新しいデッキを作るしかないだろう。勝負は明日の朝、テストプレイをする時間があるかどうかもわからない。そんなデッキで勝とうだなんて、虫のよすぎる話かもしれない。それでも、やる価値は十分にある。光の結社がデュエルで洗脳するというのなら、こつちだって同じことをするまで。さらにこれは本人のカード、目を覚まさせる力もきつと高いだろう。

「よし、やるかー！」

『『おーっ！』』』

「ふん、遅いな。この俺を待たせるとは何事だ！」

「ああ、そりやどーも……」

日付は飛んで翌日の夜明け前。案の定まるつきり初めてのおジャマデッキにてこずりまくり、ほぼ徹夜に近い状態で勝負を迎えることになってしまった。僕だって好きでこんな時間ギリギリに来たわけじゃない、目覚ましがちゃんとならなかったのが悪いんだ。おまけにデッキ枚数はわざわざ新しく組んだにもかかわらずなぜかまた60枚。この重みが凄いしつくりくるってのは、我ながらもうだめかもわからんね。

「日が登るまであと10分といったところか。どうせギャラリーはい

ないんだ、少しぐらい早くても構わんだろう」

「万丈目……………」

「ホワイトサンダー」

たとえ光の結社に入ってカードに対する心がなくなっても、性格までは変わってなくてちよつと安心。だいたい万丈目はいつもいっつもせっかちすぎるんだよね。たとえば醤油こぼした時だって、僕が雑巾持ってくるより前に袖で拭くし。十代もその様子はよく見てたから、今朝も万丈目が元に戻った時のためわざわざあの黒い制服を探していた十代もいちばんきれいな奴が見つかるといいけどな、とか言ってた。多分もうすぐ来るだろうけど、十代もなかなか苦労人だ。

「わかったわかった。十代には悪いけど、それじゃあデュエルと洒落込もうか！」

「デュエル！」

そう言った瞬間、背中に光の当たる感覚がした。ちようど今、日が登ったのだ。

「先攻は俺だ！俺のターン、ライトロード・アサシン　ライデンを召喚する」

銀色に光る短剣を持った、褐色の肌の偉丈夫。いつぞやの三沢戦の時にも見た暗殺者が先陣を切った。

ライトロード・アサシン　ライデン　攻1700

「ライデンは1ターンに1度、俺のデッキトップから2枚のカードを墓地に送ることができる。そしてその中にライトロードのカードがあれば攻撃力がエンドフェイズまで200ポイントアップするが、今はあまり関係ないな。だが効果は使わせてもらう！……………チツ、光の援軍が落ちたか。もう1枚はライトロードのジェイン、よって攻撃力上昇。カードを1枚伏せ、エンドフェイズにライデンの効果でさらにカードを2枚墓地に。ターンを終了する」

「僕のターン、ドロー！あー……………」

まるで積み込みでもしたのかといたくなるほどきれいな揃いっぷりである。オートシヤツフル機能をダメにした覚えはないから、これもまた精霊の力なのだろう。カードの精霊とも1年近い付き合い

になるけど、いまだにこの子たちがどこまでデュエルに干渉できるのかはさっぱり見当もつかない。こんなきれいにそろうなんて、ふつうは想像つかないし、ねえ。

「ま、せっかく全員居るんだから有効活用させてもらおうよ。首領・ザルグを召喚！」

『おう、任せておきな！』

首領・ザルグ 攻1400

「ザルグだと？確かに効果はまあまあだが、そんな攻撃力ではライデンを倒すことはできんぞ」

「まあ見てなって。黒蠍団、招集！」

『出て来い、野郎どもおー！』

『『『おう!!』』』』

ザルグが号令をかけると、4人の黒を基調とした服をした男女が手に手に武器を取り駆けつける。身長も体格もばらばらな全員の共通点として、蠍の入れ墨が体のどこかに施されていた。

『畏はずしのクリフ！』

最初に名乗りを上げたのは、いかにも神経質そうな眼鏡をかけた青年。片手で眼鏡のつるを押し上げながらも一方の手で獲物の短刀をちらつかせ、同じ短刀使いのライデンを挑発して見せる。

黒蠍―畏はずしのクリフ 攻1200

『茨のミーネー！』

次いで、メンバー内の紅一点。いかにも痛そうな茨の鞭をピシリと地面に叩き付けるその様子からも、彼女の男勝りな性格は容易に想像がつく。

黒蠍―茨のミーネ 守1800

『強力のゴーグー！』

メンバー内でも1の巨漢。筋肉にぐつと力を込めて極悪な鉄球がついた重そうなハンマーを軽々と頭の上で回すその様子は、ただただ頼もしい。

黒蠍―強力のゴーグ 攻1800

『逃げ足のチックー！』

最後に名乗ったのは、ゴークとはうってかわって小柄な男。どこから来るのかさっぱりわからない自信に満ち溢れた他のメンバーとは違い、若干不安そうな様子を隠しきれないでいる。それでも木製のハンマーを精一杯掲げ、他のメンバーの何かと濃い空気に圧倒されないように頑張っている。

黒蠍―逃げ足のチツク 攻1000

そしてその4人がザルグのいるところに集まり、すっかり慣れきった動きで謎のフォーメーションを取る。

『『『我ら、黒蠍盗掘団！』』』』

そう。彼らこそが黒蠍盗掘団。去年セブンスターズの一員として学園に潜り込むも突如名探偵サンダーとなった当時の万丈目にその正体を暴かれ、その後のデュエルにおいて敗北したものの万丈目の人柄に惚れこんでカードとして彼の部屋で居候を続けていたゆかいな5人組だ。

「く、黒蠍団だ?! 貴様、いつものデッキはどうした!」

「いい? 僕はこの勝負、ただ勝つためだけに来てるんじゃないんだよ。いい加減目え覚ましてこっち帰ってこい万丈目! そしてそのために必要だと僕と十代が判断してデッキを組んだ、それが――」

『『『それが、黒蠍盗掘団!』』』』

いよし決まった。急に振ったからどうなるかと思っただけど、そこは空気読んでちゃんとやってくれた。

「ふ、ふざけるな!」

「ふざけるなつて? 僕にはそっちがやられかかっているようにしか見えないけどね。行くよ、バトルだ! 強力のゴークでライデンに攻撃!」

『むうん、ごうりきハンマー!』

ゴークがハンマーを振り上げ、ライデンの頭上に叩き付ける。と、思っただが。

「トラップ発動、バトル・ブレイク! 相手は手札のトラップを見せることでこのカードを無効にできるが、それができない場合は攻撃モンスターを破壊してバトルフェイズを終了させる!」

「ま、ま、ま……」

僕の手札は黒蠍団展開のためにもう全部使いきった。見せることができるトラップなんてただの1枚もありやしない。

「ごめん、ゴーク！」

『むうううう……！』

『ゴーク・クソツ、清明の旦那は気にすんな。俺たち全員、覚悟の上でこのフィールドに立ってんだからよ』

破壊されるというのに非難の声1つあげることなく、ゴークの体がフィールドから消え去る。それとザルグが慰めてくれたおかげで若干罪悪感は薄まったものの、残りの黒蠍メンバーではどうにもこうにも火力不足だ。1700のライデンを倒すこともできない。

「ターン、エンド……」

万丈目 LP4000 手札：3

モンスター：ライトロード・アサシン ライデン（攻）

魔法・罨：なし

清明 LP4000 手札：0

モンスター：首領・ザルグ（攻）

黒蠍―罨はずしのクリフ（攻）

黒蠍―茨のミーネ（守）

黒蠍―逃げ足のチック（攻）

魔法・罨：なし

「ふん、それで終わりか。俺のターン！別にこの盤面なら凝った動きをするまでもないな。ライトロード・パラディン ジェインを召喚！そしてこのターンもライデンの効果を発動。1枚目は死者蘇生、2枚目はライトロードのライニャン、よってアサシンの攻撃力が上昇する」

光り輝く剣を持った正統派の騎士といった姿の戦士が、ライデンの隣に降り立つ。

ライトロード・パラディン ジェイン 攻1800

ライトロード・アサシン ライデン 攻1700↓1900

「バトルだ、ジェインで逃げ足のチックに攻撃！この瞬間にジェインの効果により、攻撃力が300ポイント上昇する」



『ちくしょう、こっちはよく!?こうなったらヤケクソだ、喰らえ元気槌っ!』

光の剣が煌めき、チツクが決死の覚悟で振ったハンマーを手から叩き落とす。そして返しの太刀がうなり、がら空きになったチツクの胴体を弾き飛ばした。

ライトロード・パラディン ジェイン 攻2100↓黒蠍―逃げ足のチツク 攻1000 (破壊)

清明 LP4000↓2900

「次はライデンの番だな。攻撃するのは……そうだな、畏はずしのクリフに攻撃!」

『フン。せめて一撃は入れてやる、トラップナイフ!』

二人の持つ短剣がそれぞれ複雑な軌道を描く。だがライデンの刃がクリフを切り裂いた時、彼のナイフはほんの少し屈んだライデンの、そのさつきまで首があったあたりの空気を虚しく切り裂くだけだった。

ライトロード・アサシン ライデン 攻1900↓黒蠍―畏はずしのクリフ 攻1200 (破壊)

清明 LP2900↓2200

『チツク、クリフ!』

『よくも私の仲間にごここまで手を出してくれたわねっ!その白いの2人、覚えときな!』

いなくなった仲間を嘆くザルグに対し、キツと般若の形相でジェインとライデンを睨みつけるミーネ。やっぱ女性って怖い、ということが再確認できた。

「エンドフェイズにライデンの効果で2枚、ジェインの効果でさらに2枚デッキトップを墓地に送りターンエンドだ。どうした?随分と張り合いがないな。なんなら、今からでもデッキの変更を認めてやつてもいいんだぞ?」

「誰がやるってのさ、そんなもん。僕のターン、ドローツー……ほう」

僕が今引いたカード。このデッキは基本万丈目が持っていたカードのみで作ってあるが、そんな中でたった2枚だけ別のところから入

れたカードがある。これは、そのうちの1枚。いつか万丈目に渡してくれと頼まれ、一時的に僕が預かっていたカード。

話は変わるが、デュエルアカデミアノース校には、天田という男がいる。デュエルモンスターズ初期に登場したステータスもレベルもパツとしない儀式モンスター、ハングリーバーガーに強力な効果を持つ儀式魔人の効果を全部乗せることで超強力なモンスターへと変貌させ、それを主軸として戦うテクニカルなデッキの使い手だ。僕は直接デュエルしたところもないものの、三沢や葵ちゃんといった強豪相手に一歩も引かないだけのタクティクスも持ち合わせており、サンダー四天王としても知られている。

今年はノース校が全員光の結社に堕ちた状態の中たった一人で抵抗し続け、この時すでに構成員だった葵ちゃんたちの策略により自身も光の結社に入ってしまうものの、その直前に万丈目が持ってきた以外のノース校秘蔵のカードを僕にこっそり渡してくれた。そう、今引いたカードこそがまさにそのカードの内の1枚。

「うまい具合に墓地にモンスターが3体、か。天田、万丈目のためにこの力、ひとまず僕が使わせてもらうよ。僕の墓地の闇属性モンスターが3体びつたりの時、このカードは手札から特殊召喚できる！出だよ、ダーク・アームド・ドラゴン！」

万丈目が普段主力として愛用するレベルモンスター、アームド・ドラゴンが闇の力を得た姿。全体的に元の姿よりとげとげしくなり、凶悪感が増している。

ダーク・アームド・ドラゴン 攻2800

「な、なんだそのモンスターは！アームド・ドラゴンのダーク化だど!?!」

「うん。このカードはノース校の天田が、光の結社に入る直前に僕に渡してくれたカード。天田、言ってたよ？このカードはできたらサンダーに渡したかったけど、光の結社に入っているなら今は渡せない、みたいなこと。みんなさ、心配してるんだよ」

「ええい、ハツタリに決まっている！そのカードだっておおかたお前が奪い取ったものだろう!?!」

頭をぶんぶんと振り、必死に僕の言葉に抵抗しようとする万丈目。やっぱり口だけじゃ説得できないか。

「なら、ここで一発ぶん殴るさ。ダーク・アームド・ドラゴンは墓地の閻属性を除外することで、相手フィールドのカードを1枚破壊できる。逃げ足のチツク、罨はずしのクリフを除外してそれぞれジェイン、ライデンを破壊！ダーク・ジェノサイド・カッター！」

「何!？」

『さっきのお返しだ、今度こそ受けてみる元気槌!』

『借りは返す、トラップナイフ!』

ダーク・アームドが地面を両手で勢いよく叩くと、その地点から半透明になった黒蠍団の2人が飛び出してきてそれぞれ先ほどの反撃を加えた。

「それじゃあバトル、ダーク・アームド・ドラゴンでダイレクトアタック！受けてみる万丈目、ダーク・ヴァニッシャー!」

ダーク・アームド・ドラゴン 攻2800↓万丈目（直接攻撃）

万丈目 LP4000↓1200

「ぐはあっ!」

「次、ザルグ!」

『倒れるのはまだ早いぜ、万丈目の旦那!あーらよつと、ダブルリボルバー!』

ドラゴンの重いパンチをまともに喰らった万丈目に、追撃の弾丸が2発うなりをつけて飛んでいく。打が持ち直した万丈目は慌てることなく、手札から1枚のカードをモンスターゾーンに叩き付けた。

「甘い!相手の直接攻撃宣言時、手札からB ブラックフェザーF | 熱風のギブリの効果発動!このカードを特殊召喚だ!」

「ギ、ギブリ!?そのカードは!」

黒い中に赤のアクセントが入った独特の配色な羽根を持つカラスが必殺の弾丸の前にパツと飛び込み、なんと羽ばたいた風圧で弾丸の軌道を無理やりずらしてのけた。

B F | 熱風のギブリ 守1600

ギブリ。あのモンスターには僕も見覚えがある。通常ライトロー

ドデッキには入らないであろうカードだが、あのカードはサンダー四天王最強にして今も光の結社の中ではそこその地位を手に入れている男、鎧田の持っていたカードだ。1度万丈目がアカデミアを賭け自分の兄とデュエルするために攻撃力0統一のデッキを組む際わざわざノース校から送ってもらったカード。あの後ノース校に返したはずだけど、わざわざもう1度もらったのだろうか。

「ザルグの攻撃力じゃ勝てない……墓地のゴグは温存するから  
ダーク・アームドの効果は使わないでターン終了」

万丈目 LP1200 手札：2

モンスター：BF―熱風のギブリ（守）

魔法・罫：なし

清明 LP2200 手札：0

モンスター：首領・ザルグ（攻）

黒蠍―茨のミーネ（守）

魔法・罫：なし

「俺のターンだ。ギブリをリリースし、アドバンス召喚！出でよ、ライトロード・ドラゴン グラゴニス！」

純白の姿に金色の装飾を施されたドラゴンが、太陽を背にして天から駆けてくる。

「グラゴニスの攻撃力は、墓地に存在する戦い半ばで散っていったライトロードの正義に対する思いを受け取ることによってその種類の300倍アップする。そして今の俺の墓地にはお前に破壊されたジェイン、ライデンの他にもこいつらの効果で墓地に送られたライニャン、エイリンの計4種類6枚のライトロード。よってその攻撃力は1200ポイントアップだ！」

ライトロード・ドラゴン グラゴニス 攻2000↓3200

「残念ながらこのままザルグに攻撃してもお前のライフを0にすることはできないな。ならばダーク・アームド・ドラゴン、貴様を破壊するまでだ！」

「ダーク・アームド！」

漆黒の龍が唸り、自身の全体重を乗せた渾身の右ストレートを放

つ。だが光のドラゴンはその一撃を巨体からは想像もつかないような身軽さで上空へ回避し、再び太陽を背にする格好になる。その動きをしつかり目で追いかけるものの、太陽をまともに目にしたダーク・アームドがほんの1瞬だけ硬直する。グラゴニスには、その1瞬だけで十分だった。まばゆい光のブレスが、回避の遅れたダーク・アームドの体を包み込んで消し去っていく。

ライトロード・ドラゴン　グラゴニス　攻3200↓ダーク・アームド・ドラゴン　攻2800（破壊）

清明　LP2200↓1800

「まさかお前を相手にしてこんな単純な殴り合いをするだけのデュエルになるとはな。まったくもってつまらん、まるで張りあいがない。まあ、ダーク・アームド・ドラゴンにだけはちよっぴり驚いたことは否定しないが。エンドフェイズにグラゴニスの効果でカードを3枚墓地に送り、その中にライラのカードがあった。よってさらにグラゴニスの攻撃力は上がり、カードを伏せてターンエンドだ」

ライトロード・ドラゴン　グラゴニス　攻3200↓3500

「好き勝手言ってくれちゃってー。僕のターン、ドロー！」

とはいえ、実際これまで単純な殴り合いに終始していることは紛れもない事実。そして、真正面からの火力勝負ではぶっちゃけこのデッキはライトロードに勝てない。

「お、いいカード。魔法カード、一時休戦を発動。そのまま引いたモンスターをセットして、ターンエンド」

お互いにカードを引き、さらに次の相手ターン終了時までお互いを受けるダメージを0にする便利なカード、一時休戦をこの土壇場で引いた。ここでこのモンスターを引けたことは、まだまだチャンスはある。

万丈目　LP1200　手札：3

モンスター：BF―熱風のギブリ（守）

魔法・罫：1（伏せ）

清明　LP1800　手札：0

モンスター：首領・ザルীগ（攻）

黒蠟―茨のミーネ（守）

???（セツト）

魔法・畏：なし

「それで時間を稼ぐつもりか？ならば、このカードだ。来い、ライトロード・ドルイド オルクス！」

白い髪の毛、本を片手にした初老の老人。当然のごとくその恰好は白一色だ。

ライトロード・ドルイド オルクス 守1800

「オルクスの効果は知っているな？これで俺もお前もライトロードと名のつくモンスターをカード効果の対象にできない。そして戦闘ダメージは与えられなくとも、今のうちにそのセツトモンスターは破壊する！バトルだ、グラゴニス！」

ライトロード・ドラゴン グラゴニス 攻3500↓??? 守800

（破壊）

「この瞬間、メタモルポットのリバーズ効果発動！お互いに手札をすべて捨て、カードを5枚ドロ。もつとも、僕に捨てる手札なんてもんないんだけどね」

「フン、くだらん。戦闘を諦めデッキ破壊でもやる気か、お前は？カードを伏せ、エンドフェイズに2体のモンスターの効果で合計5枚のカードを墓地に送り、ターンエンドだ」

「それじゃあ、僕のターン！」

5枚の手札、そして今引いたカードを見て、それから場にいるザルグとミーネにアイコンタクトを取る。何をしようとしているのか察したらしい2人がコクリ、と同時に頷いた。

「ザルグとミーネをリリースして、アドバンス召喚！これがアームド・ドラゴン進化系、もう1つの形っ！現れ出でよ、メタファイズ・アームド・ドラゴンっ！」

ダーク・アームドのような姿こそしているものの、先ほどとはまるで違う。2Pカラーといっては失礼だが、まさにそんな感じだ。漆黒のダーク・アームドに対し、ライトロードと同じく純白を基調とした神秘的なカラーリングを持つ幻竜。

メタファイズ・アームド・ドラゴン 攻2800

「また、新たなアームド・ドラゴンだと……!」

「生憎このモンスターには効果はないけどね。だけど、通常モンスターには通常モンスターなりの戦い方ってものがあるってもんさ。さらに魔法カード、魔の試着部屋を発動!800ライフを払うことでカードを4枚めくり、その中からレベル3以下の通常モンスターを出せるだけ展開することができる。1、2、3、4……当たりは2枚か、なかなか悪くないね。出ておいで、グリーン!ブラック!」

『『ようやく出番だー!!』』

清明 LP1800↓1000

おジャマ・グリーン 守1000

おジャマ・ブラック 守1000

『もー、ひどいぜ清明の旦那ー!せつかく黒蠍団と一緒に戦うんだから、張り切ってこんなものまで作ったのに!』

『俺たちが出てきたときにはもう、黒蠍団が全員退場してるじゃん!』  
見ると、確かにいつもブリーフ丁の彼らが珍しく革ジャンのようなものを上半身裸の上に羽織っている。背中側にはでっかくプリントされた手書きの蠍らしき生き物の絵と、でかでかと描かれた「邪魔団、推参」の文字。多分それ無許可だろうし、本人たちに見られなくてよかつたんじゃないかな。むしろ怒られずに済んだことを感謝してもらいたいぞ僕。

「……まあ、いいや。バトル、メタファイズでオルクスに攻撃!」

「かかったな、馬鹿め!トラップカード、地縛霊の誘いを発動!この効果によりその攻撃は俺のフィールドにいる別のモンスター、すなわちグラゴニスへと誘導される!さらにその移し替えとコンボで、手札からオネストの効果を発動!攻撃力6300となったグラゴニスの1撃を受けて消えるがいい!」

グラゴニスがオルクスを守るかのごとく、メタファイズのパンチの前に割り込んで翼を開く。それを見て万丈目が一瞬勝利を確信した笑みを浮かべるも、すぐにその笑いが凍りついた。なんとグラゴニスの全身を覆う光がみるみるうちに弱くなり、やがては完全に消えて

いってしまったのだから無理もない。

メタファイズ・アームド・ドラゴン 攻2800↓

ライトロード・ドラゴン グラゴニス 攻3500↓6300↓2000 (破壊)

万丈目 LP1200↓400

「ダメージ計算時になって急に攻撃力が2000に下がった……そうか、速攻魔法か！」

「ご名算。僕は今の戦闘で速攻魔法、禁じられた聖典を発動していたのさ。このカードの効果によりフィールド上のカードは全部一時的に無効になって、モンスターは元々の攻守を使って戦闘を行う。グラゴニスも強化さえ取っ払えば元の攻撃力は2000、このアームド・ドラゴンの敵じゃないね」

『そうだそうだー！』

『これが俺たちの力だー！』

「ええい、何もしてないお前ら雑魚に言われる筋合いはなーい！」

む。今のツツコミ、ちよつと前の万丈目っぽかった気がする。なにせ万丈目のやつホワイト化してから変なところでちよいちよいシリアスぶつてるが多かったから、ああやって大声で叫ぶのを見るのは久しぶりだ。見た目は全く変化なしだけど、もしかして少しづつ僕の友人である万丈目サンダーが戻りつつあるんだろうか。だとしたら、ますますこのデュエルで負けるわけにはいかなかった。そこで大人しくしてなよ万丈目、今すぐもとに戻したげるから。

「これで、僕はターンエンド」

万丈目 LP400 手札：4

モンスター：ライトロード・ドルイド オルクス (守)

魔法・罠：1 (伏せ)

清明 LP1000 手札：3

モンスター：メタファイズ・アームド・ドラゴン (攻)

おジャマ・グリーン (守)

おジャマ・ブラック (守)

魔法・罠：なし



「俺のターン、ドロー……ふふふ、ハハハハ！」

「今度は何!？」

急にカードを見て高笑いしだったので、その異様な光景に黙っていられなくなり声をかける。

「確かにお前はよくやったさ、だが勝機は俺に訪れたようだ！俺の墓地のライトロードが4種類以上いるとき、このカードは特殊召喚できる！出て来い、ジャッジメント・ドラグーンの龍！」

グラゴニスをはるかに上回る白い巨体。ライトロードの切り札にして最も警戒していた最終兵器が、ついにその姿を見せた。

裁きの龍 攻3000

「だ、だけど……」

「おっと、皆まで言うな。お前の考えていることはわかるぞ？俺のライフは残りたったの400、そしてコイツの全体除去効果を使うのに必要なライフは1000。このターンは凌げる、そう思っているんだろう？だが、その考えこそが甘い！ロイヤルナイトを通常召喚だ！」

ロイヤルナイト 攻1300

どこか機械めいた姿の、手に剣を持つ天使が羽を広げて地面に降り立つ。だけどその攻撃力は1300と、とてもじゃないが高いとは言えない数値だ。

「バトルだ、ロイヤルナイトでおジャマ……そうだな、どっちでも構わんがここはブラック、貴様に攻撃だ！」

『げーっ!？』

あたふたとモンスターゾーンから逃げようとするも、突き出した腹が邪魔になって結局逃げ遅れたブラックをロイヤルナイトが滑空しながら一閃する。

ロイヤルナイト 攻1300↓おジャマ・ブラック 守1000

(破壊)

万丈目 LP400↓1400

「そしてこの瞬間、ロイヤルナイトの効果が発動する。戦闘で破壊したモンスターの守備力分、俺のライフを回復だ！このまま裁きの龍での連撃に移りダメージを稼いでもいいが、お前の場に伏せてあるカー

ドが目障りだな……ここはメイン2に移行し、裁きの龍の効果発動だ。ライフを1000支払い、このカード以外の全フィールドを焼く野原にする!」

『結局こうなるのかよーっ!』

万丈目 LP1400↓400

メタファイズが、グリーンが、僕の伏せカードが、真っ白い光に飲み込まれていく。何もかもなくなってしまった戦場に、万丈目の声が聞こえた。

「オルクスが消えてしまったのもまあ、必要経費の範囲内だろう。裁きの龍の効果で4枚のカードを墓地に送り、ターンエンドだ。おつと、今のカードの中にウォルフがいたな。カード効果でデッキから墓地に送られたこいつは特殊召喚される」

ライトロード・ビースト ウォルフ 攻2100

あれ。これ、もたもたしてたら本気でデッキ狙えるんじゃないやなろうか。かれこれ落としたカードは30枚以上、さらにメタモルポットの効果も1回受けさせているし。

「でもまあ、それで勝っても意味ないだろうなあ。ドロー!」

万丈目の場には攻撃力3000の裁きの龍と、攻撃力2100のウォルフ。対してこちらにはわずか3枚の手札のみ。

『ちよつとダンナ、何弱気なこと言ってるのよ!このデュエルには万丈目のアニキがあのださい服を着続ける羽目になるかどうかがかかってるのよ!』

「あ、ちよつと、喋ったら何引いたのかばれるでしょーが!」

反射的につい叫び返してから、ミスに気づき慌てて万丈目の顔色をうかがう。あ、これダメな奴だ。何引いたか丸聞こえだ。

「もー、自分からばらしに行っただから責任とってよ?おジャマ・イエローを召喚して、馬の骨の対価を発動。自分フィールドの通常モンスターを墓地に送って、カードを2枚ドロー。よし、来た来た来た!魔法カード、トライワイトゾーンを発動!墓地に存在するレベル2以下の通常モンスター3体を特殊召喚する!甦れ、3兄弟っ!」

『『おジャマ三兄弟、ふっかーっ!』』

おジャマ・イエロー 守1000

おジャマ・ブラック 守1000

おジャマ・グリーン 守1000

「そんなモンスター、3体並べたところで何の役に立つというんだ？」  
「万丈目……ほんとに覚えてないの？いつも万丈目は、こうやってこのおジャマを揃えて戦ってきてたじゃない」

『そうだけ、アニキ！』

『俺たちのこと、本当に覚えてないのかよ！』

「お、お前らみたいに不細工な奴のことなんか、この俺が覚えてなぞいるものか……」

そう返すものの、前よりもはるかに万丈目の言葉に勢いが無い。曇みかけるなら少しずつ洗脳が解けてきている今が好機と見て、さらに言葉を重ねる。ここは、万丈目の性格を考えると理詰めより情に訴えかけるのが一番効くはずだ。

「これはあとから聞いた話なんだけど、万丈目がそうやって光の結社に入ったのは元々、あの日僕を探しにわざわざ外に来てくれたからなんだって？」

あの日、とは他でもない。僕にとって、光の結社の恐ろしさを最初に味わった日。どこでいつどうやったのか、そういうことはいまだにまるで分らないけれど、しばらく行方不明だったユーノがふらりと帰ってきたと思ったら、すでに光の結社洗脳済みだった彼の不意打ちを受けてしまった日のことだ。それから数日して目覚めたら、僕を心配して探しに来た万丈目があのホワイトサンダー状態になっていて、十代もエドに負けたショックで消息不明になっていた。あんな感覚、もう2度と味わいたくない。思い出しただけで寒気がする。僕は寂しいのが大嫌いなんだ。

「な、何のことだか俺は、俺は……」

「その話聞いてからいつか言おう言おうとは思ってたんだけど、ここ  
で言わせてもらうよ。……万丈目、ありがとう」

「ッ……！」

さあ、どうだ。これでこっちが今現在出せる対万丈目用手段はほぼ

すべて使い切った。というとなんだか計算づくみたいだけど、別にそんなことはない。お礼を言いたかった、というのは紛れもない本音だ。このタイミングで利用できるとは思ったけど。

「まだ思い出せないなら、これが最後の一手。いくよ、魔法発動！」  
『『待ってましたー！イエロー！ブラック！グリーン！必殺……お  
 ज्याマ・デルタハリケーン!!』』

三兄弟が輪になり、飛び上がったからものすごい勢いで回転を始める。そのままその輪が万丈目のフィールドにあるすべてのカードを取り囲むと、先ほど裁きの龍がぶちかましたような破壊の嵐が吹き荒れる。

「う……うおおおおっ！」

爆風に万丈目の体が1メートルほど吹き飛ばされ、どきりと地面に倒れこむ。さすがに心配になって駆け寄ろうとする僕を手で制し、よろめきながらも立ち上がる。

「こんな、ことで、俺の斎王様への忠誠心は……」

まだ駄目か。思いのほか洗脳が強いせいでこちらの出せる手はもうほぼない。でもあと何か、もうひと押し欲しいところだ。と、その瞬間に声がある。こんなタイミングのいい男なんて、僕は一人しか知らない。こんな、まさにヒーローみたいなタイミングの良さは。

「お、居た居た。おーい、万丈目！お前の制服だぞ、受け取れ！」

「お前は、十代!？」

待ってました、十代。手にした黒い服を得意げに見せつけてから、それを万丈目がかけて投げつける。きれいな軌道を描いたそれが、万丈目に頭から覆いかぶさった。

「な、なんだこの変なおいは!？」

「それは醤油だよ。だいたい万丈目いつもいっつもいっつもこぼしては袖で拭き、こぼしては袖で拭くんだもん。おまけに服そのものが黒いせいで汚れも目立たないし。どうせ洗濯しないんならせめて雑巾とか使ってよ」

「そうだそうだ、今まで気づいてなかったのかよ！今日だってその服もつてくるとき、ちよつと臭かったんだぞ！」

『うんうん、万丈目のアニキだったらいくら言っても聞かないもんだから……』

「お・ま・え・ら・なあ！ええい、人の服をそんな乱暴に扱うんじゃないー！」

バサリと白い上着をそこらへんに脱ぎ捨て、久しぶりに見るいつもの格好に戻った万丈目。僕らの方ににやりと笑って見せ、デュエルディスクを構えなおした。

「待たせたな、清明。なぜおまえの場にその雑魚3兄弟がいるのかについては聞かないでにおいてやるが、今はデュエルの最中なのだろう？」

その懐かしい偉そうな調子に、思わずこちらも頬が緩む。そうか、ようやく帰ってきてくれたんだ。

「まーね。1枚セットして、ターンエンド！」

万丈目 LP400 手札：2

モンスター：なし

魔法・罫：なし

清明 LP1000 手札：1

モンスター：おジャマ・イエロー（守）

おジャマ・グリーン（守）

おジャマ・ブラック（守）

魔法・罫：1（伏せ）

「俺のターン、ドローだー……うっ!」

カードをドローした万丈目が、急に苦しみだす。そういえば引いたカード全体が、ぼんやりと薄く光ってるような……？と、再び黒い服を脱ぎ捨て、ついさつき脱いだばかりの白服を羽織りだす。向き直ったその顔は、再びホワイトサンダーのものになっていた。

「ふん、くだらん手を使いおつて。危うく斎王様への忠誠心が揺らいでしまうところだったが、そんな卑怯な手がこの万丈目ホワイトサンダーに通じるものか!!ここまで肥えさせた墓地の使い方を教えてやろう。魔法カード、暴走する魔力を発動！墓地に存在する魔法カード全て、合計9枚を除外することでその枚数の300倍以下の守備力を

持つ相手モンスターをすべて破壊する！その雑魚は全員守備力2700以下、これで消えされ！」

文字通り魔法が暴走して、四方八方に緑色の雷が飛び散る。冗談じゃない、ここまで来て負けるだなんてまっぴらごめんだね。

「だつたらリバーズの速攻魔法、瞬間融合を発動！フィールド上に存在するモンスターを使い、融合召喚を行う！僕が素材にするのはもちろん、三兄弟全員だ！」

『『おジャマ究極合体！おいでませ、おジャマ・キング！』』

黄、黒、緑の三兄弟が飛び上がって空中で一つになり、ライトロードのような光の白色とはまた違った白いモンスターになる。そう、例えるならばペンキでも頭からかぶったかのような、そういう感じの白色に。そしてその白いモンスターが、グリーン並みにムキムキな腕の筋肉を生かして雷をはじく。

『おジャマ・キング！』

おジャマ・キング 守3000

「なるほど、守備力3000ならばギリギリ暴走する魔力でも潰しきれないか……だが、瞬間融合のデメリットは俺も知っている！墓地からアマリリースの効果を発動。このカードを除外し、このターンアドバンス召喚に必要なモンスターを1体減らすことができる」

かすかに光るカード。なるほど、あれが万丈目を洗脳してるカード、葵ちゃんにおける銀河眼みたいなものか。裏を返せば、あれが万丈目を取り返す時に最後に立ちはだかるラスボスだと。そして、そのカードがモンスターゾーンに置かれた。

「ライトレイ マドールを守備表示で召喚！さあこの壁、越えられるものなら越えてみる！」

万丈目の目の前に、光り輝く氷の壁が立ちふさがる。3重にもなった分厚い壁の前に、仮面をつけた魔法使いが一人たたずむ。

ライトレイ マドール 守3000

「1つ断っておくが、こいつは1ターンに1度戦闘では破壊されない。そしてこのエンドフェイズには瞬間融合のデメリットによりお前にとって頼みの綱のおジャマ・キングも破壊される！このデュエル長

かったが、これで俺の勝ちだ！」

「あれあれ、本気？ 僕がドロ―する前からそんなこと言っちゃって、どうなっても知らないよ？」

ホワイト相手に弱気なところを見せたら何言いだすかわかったもんじゃないのであえて自信満々に強がつて見たけど、正直状況はかなり苦しい。手札のこれ1枚だけじゃあまだマドールの壁は越えられない、となると……。

「後は、この引き次第、つと！ ドロ―！」

「たった2枚のカードでマドールを倒すことなど、できるはずが……」

万丈目が、十代が、かたずをのんで見守る中、そつと手札を見る。来た！

「魔法カード、未来への思いを発動！ このカードは自分の墓地からレベルの異なるモンスターを3体蘇生させることができる！ レベル7、メタファイズ・アームド・ドラゴン！ レベル6、おジャマ・キング！ レベル4、首領・ザル―グ！」

『アニキ〜！』

メタファイズ・アームド・ドラゴン 攻2800↓0

おジャマ・キング 攻0

首領・ザル―グ 攻1400↓0

「だがいくら3体モンスターを揃えたところで、未来への思いのデメリットでその攻撃力は0で効果も無効、とどめにこのターンのエンドフェイズ、お前は4000ポイントのライフを失うことになる！ その状態で俺に勝つことなど……」

「悪いね、わざわざ説明してもらって。確かにその通りだけど、このモンスターたちは攻撃することはできる」

「攻撃力0で攻撃するだど？ 手の込んだ自殺か、それは」

「いいや、このカードを使ってから攻撃するのさ！ フィールド魔法、おジャマ・カントリー！ このカードはフィールドにおジャマモンスターがいるとき、全モンスターの攻守を逆転させる！」

一瞬にしてアカデミアが、周りにのどかな感じの家が立ち並ぶ地に変わる。そして、未来への思いは攻撃力こそ0にするものの、守備力

は一切変化させない魔法カード。僕の3体のモンスターが新たな力を得て気合十分になる中、マドールはその力をみるみるうちに吸い取られてよろめき、自分の作り出した壁に寄り掛かる。

メタファイズ・アームド・ドラゴン 攻0↓1000 守1000  
↓0

おジャマ・キング 攻0↓3000 守3000↓0

首領・ザルグ 攻0↓1500 守1500↓0

ライトレイ マドール 守3000↓1200 攻1200↓3000

「バ、バカな……!」

「これで、最後のバトル。ザルグでマドールに攻撃!」

『おうともよ。そらよ、こいつは俺からのプレゼントだ!ダブルリボルバー!』

首領・ザルグ 攻1500↓ライトレイ マドール 守1200

2丁拳銃から放たれた銃弾が正確にマドールの仮面のど真ん中に命中し、もう片方が1枚目の氷の壁を撃ちぬく。だが、敵も戦闘で1度は破壊されないモンスター。並大抵のモンスターなら致命傷になる銃撃を受けてなお、立ち上がろうとしてなおも手足を動かす。だがその頭上に、不意に影がかかった。次の瞬間、2枚目の氷の壁ごいつの間にかジャンプしていた白い巨体がマドールを押しつぶしかかる。

「ほんとはこっちにとどめを任せたかったけど、ここは天田の意志を尊重して、ね。おジャマ・キングでマドールに攻撃!」

『フライング・ボディアタック!』

おジャマ・キング 攻3000↓ライトレイ マドール 守1200  
0 (破壊)

「そ、そんな、そんなことが……いや、そう、か」

「これで終わりき、万丈目。今度こそこっちがわに戻っておいで。メタファイズ・アームド・ドラゴンで最後のダイレクトアタック!ミステイク・ヴァニッシャー!」

メタファイズの一撃が、なぜか残っていた最後の氷の壁を打ち砕



き、そのまま勢いを消すことなく万丈目へと迫る。だが万丈目はそれを避けようともせず、大人しく目を閉じてそれを受け入れた。

メタファイズ・アームド・ドラゴン 攻1000↓万丈目（直接攻撃）

万丈目 LP400↓0

「気分はどう？ 万丈目」

自分のすぐ近くで聞き覚えのある声が出て、それで目が覚めた。

「……ひどい気分だ。こんな気分になったのは、あの三兄弟と初めて会った時以来だな」

『ああん、アニキのいけず』

「そ。減らず口叩けるんならまだ余裕あるね。一応聞くけど、どっちがいい？」

そう言っただけは、俺に黒い服を投げ渡す。ついこの間まで好んで着ていた、俺特注の制服だ。最近は好みが変わって真っ白なものを注文していたが、やはり俺には黒が似合う。このハイセンスなファッションなら、いつか天上院君だって俺のことを振り向いてくれるはずだ。

『アニキは腹黒だからね』

「なんだと、この！」

なれなれしくすり寄ってきたおジャマ・イエローがなんだかずいぶんと無礼なことを言ってくるので、罰としてデコピンを食らわせる。キヤー、と悲鳴を上げて吹き飛び、そのままポン、と消えた。まったく、仕方のない奴だ。そしてその様子を笑って見ていた二人組、俺のライバルである清明と十代を睨みつける。

「お帰り、万丈目」

「お前が戻ってきてよかったぜ！」

お帰り？ 戻ってきた？ まったく、こいつらはなにを言っているんだ。俺は俺、いつだってそれは変わらない。そうだ、久しぶりにあれをやろう。

「おいお前ら、俺の名前を言ってみろ！」

一瞬ほかんとしたのち、さらに笑顔を深める2人。フン、やはりこいつらには俺が手本となってやらねばな。こいつらも仮にもデュエルキングを目指すというのなら、俺のようにただ実力があるだけではなくエンターテインメント性も必須だ。今一度、その手本を見せてやろう。スツと指を1本立てて上にあげると、2人も同じポーズをとる。そうだ、そう来なくてはな。

「一！」

「十！」

「百！」

「千！」

ここでぐつ、と一度ためを作る。このタイミングを計るのがなかなか難しいのだが、ノース校時代から鍛えてきた俺にそんな隙はない。

「万丈目……サンダー！」

「サンダー！」

「俺の名は！」

「サンダー！」

「ふふふ、ハハハハハ！」

なんだか妙に嬉しくなり、無性に笑いたくなる。しばらくの間、3人でただただ笑っていた。

## ターン61 鉄砲水と真紅の瞳

「やあ、少しいいかな?」

そう言っつていつも突然なフブキングこと吹雪さんが僕の店に入ってきたのは、万丈目が元に戻ったその日の昼休みだった。正直なところ徹夜なんてやり慣れないことをしたせいで眠くてしようがなかったが、まさか追い返すわけにもいかないのが店内に迎え入れる。お客ならもう少し頭もはつきりしたのだろうが、彼がケーキを買いに来たわけではないことだけは、雰囲気ですぐに分かった。

「はい、どーしたんです?」

「少し君と話がしたくてね。まず、万丈目君が元に戻ったらしいね。おめでとう」

「いえいえ」

少し表情を柔らかくして、まずは今朝会ったデュエルについて話を振ってくる吹雪さん。にしても、あの時観客はいなかったはずなのに、どんだけ耳早いんだこの人。

「それで、本題なんだけどね。……君は、最近の亮について知っているかい?」

「亮って、カイザーのことですか? いや、どうも世間には疎くて」

一度エドに負けてからだんだん負けがかさんできて、プロとしてのランクをどんどん落とされたところまでは僕も見ている。だけど、この様子だとまだ先の話がありそうだ。

「ふむ、君ならそう言うと思ったよ。僕の口から説明するより、この記事を読む方が早いだろう」

そう言いつつ吹雪さんがサツと差し出したのは、よく翔も読んでいるデュエル雑誌だ。何度も読み返したららしく開いて固定した跡があるそのページは、見開き1ページ使つてある特集を組んでいた。

「地獄の貴公子、ヘルカイザーに迫る……?」

どうなってるんだ、これ。悪そうな顔で腕組みするカイザーの服は、プロ入りしてからもずつと着ていた白いものから万丈目並みの全身真っ黒にチェンジしていた。イメチェンでも図ったのかとそのま

ま記事を読み進めていくと、そこには目を疑うような内容がちらちらと書き連ねてあった。

いわく、ヘルカイザーとは一時期表舞台から姿を消したカイザーが新たな戦術を手に入れ文字通り地獄の底から蘇ってからの名前である。以前のポリシーであったリスペクトデュエルをかなぐり捨て、どこまでも貪欲に勝利のみをリスペクトするその姿勢には熱狂的なファンも多く、その人気はすでに昔を上回るほどになっていると。

「えつと……」

なんだこれ、といたいのをぐつとこらえる。あのカイザーがヒーラルに移行なんて、もう何がなんだかさっぱり分からない。しかもこの写真見る限り、それがなかなかサマになっている。

「僕も初めて見た時は目を疑ったけど、これが現実みたいなんだ。彼は今、僕らの知る亮とは別の人間になっている」

「で、でもこれだってスポンサーとかに言われてのキャラ付けかもしれないし」

「その可能性も考えてみたさ。だけど昨夜の亮の試合を見て、確信したんだ。あれは亮が目指していたリスペクトデュエルのやりかたなんかじゃない。純粹に勝利のみを獲りに行く、容赦のないデュエルだ」

随分きつぱりという吹雪さん。よくよく見ると昨夜何度も試合を検証してあまり眠らなかつたのか、目の下には隠そうとしていても隠しきれないほどの隈があった。カイザーとの付き合いは僕よりもずっと長い吹雪さんがここまではずきり言うのだから、そうなのだろう。ただ一つ、よくわからない点があった。

「でも、なんでそれを僕に？こう言っちゃなんですけど、海の向こうにいるカイザーの話なんてここでしてって」

「チツチツチ。確かに君の言うことにも一理あるけど、僕はとある確かな筋から情報を手に入れたんだ。カイザーはジェネックス参加のため、明日この島にやってくる」

「……………」

とある筋ってなんだ。これまで謎に包まれてきた吹雪さんの地獄

耳の秘密にほんのちよつぴりだけ近づいた気がしたが、これ以上関わりあうとろくな目に合わないような予感がしたので追及はしないでおく。さわらぬ神にたたりなしって言葉もあるし、そもそも吹雪さんの話がどこに行くのかがいまだにはつきり見えてこない。カイザー、いやヘルカイザーが来るのはわかったけど、それをわざわざ翔や明日香じゃなくて僕の店に伝えるにはどういうわけだろう。その疑問に気が付いたらしく、ポケットに手を入れて一枚のカードを取り出す吹雪さん。

「こ、これ!？」

「そう。僕がかつて飲み込まれていたダークネスの力を封印したカードだ。この封印を解けば、またダークネスのマスクが出てくる仕掛けになっている」

そんな物騒なもんまだ持ってたのかこの人。まあ、世間の目から見れば地縛神カードだって似たり寄ったりなのだろうが。そのダークネスのカードをじつと見つめてから視線を外し、今度は僕の間を見つめて一言一言絞り出すように話す。

「僕は明日、亮にデュエルを申し込むつもりなんだ。彼が表舞台から姿を消してから今までの間に何があったのかはわからない。だけど友人として、彼にはもう一度昔のデュエルにかける思いを取り戻してほしい。そのためなら、僕はこの力をもう一度使うことだって辞さないつもりだ」

「いや待つて待つて待つて」

いくらなんでも話が飛躍しすぎている。カイザーがおかしくなったのはわかった。それはいいとして、なんでそれを止めるためにダークネスの力が必要になるというのかわからない。

そして、そんな素朴な疑問に対する吹雪さんの答えがこれだ。

「君が僕をダークネスから解放してくれた時に一瞬見せた力、あれはダークネスに負けず劣らず邪悪なものだった。闇の力を使うことで闇の力を振り払うことができるのなら、僕は喜んで亮の闇を祓うためにこの力を使おう」

そういえばあのデュエルではまだチャクチャルさんが表に出てき

てなくて、勝手に溢れてくる地縛神のパワーの影響をもらに受けていた。あのころはまだ制御の方法が全然わからなかったから、やたらと攻撃的で後先を一切考えない、ちやうど先代の呪いを受けてた時期みたいなことになってたっけ。

「だけど、そう考えれば吹雪さんの考えにも一理あるのかもしれない。毒を以て毒を制す、というわけか。」

「(実際どうなの、チャクチャルさん?)」

「とはいえ確認を取らないことには不安なので、ここは脳内で専門家に問い合わせてみる。わりと即答が多いチャクチャルさんにしては珍しく少しの間考えていたふうだったが、ややあつて答えが返ってきた。」

『間違つた話ではない。その男が何らかの外部的な要因で心の闇を増幅されているなら、という前提があつてこそその話だが。ところでマスター、この男の狙いはもう勘付いているか?』

「(そりやまあね。ありがとー)」

闇のプロから言質もとれたので、改めて吹雪さんに向き直る。そう、ここまでできたらいくら僕でもこの人が何を言いたいかわらぬ。何も言わずにデュエルディスクを起動させ、デュエルするには距離が近すぎたので少し吹雪さんとの間隔を取る。

「……………すまない。だけど誤解しないでくれ、僕は無理強いする気も、強制する気もないんだ。だけど、どうしても怖いんだ。ダークネスの力を使うことが」

「気にしないでください、吹雪さん。そのマスクをつけて、デュエルしましょう。もしまたダークネスに飲み込まれたら、力技でもう一回引っぱがしてあげますよ」

要するに僕はこれから、吹雪さんがダークネスの力に慣れるための予行の相手をするわけだ。確かに明日ぶっつけ本番でダークネス化してもしもそのままダークネスに呑まれることのリスクを考えると、この特訓は不可欠といえる。今ならたとえダークネスの制御に失敗しても、去年と同じく僕が勝てばダークシングナーの力でまた封印することができる。

だけど根はまじめで優しいこの人のことだ、ここに来るのだったって悩んで悩んで悩みぬいてのことだったに違いない。僕にもう一度ダークネスの相手をさせていいのか、と。それでもこの人は、苦しみながらもカイザーのために僕に頭を下げることを選んだ。本当は僕だってダークネスの相手をするのは怖い。だけど、吹雪さんは僕ならたてえ自分が暴走しても止めてくれると信じてくれた。なら、万が一のことがあってもその期待に応えよう。それがデュエリストとしての、というより遊野清明としての生き様だ。

吹雪さんが震える手で手にしたカードを引きちぎると、そこにはカードの切れ端ではなく鼻から上を覆い隠すブラックマスクが握られていた。ゆっくりとした動作で、それを顔につけていく。その目が完全に覆われる直前、最後に一瞬だけ不安と恐怖と罪悪感でいっぱい吹雪さんの目が見えたので、せめて僕への罪悪感だけでも薄まるようにと笑いかけてみせる。

『まったく、損する人間だよマスターは』

褒め言葉として受け取っておくよ。

「デュエル！」

「……の前に、どう？吹雪さん。ちゃんと意識ある？」

「あ、ああ、まだ大丈夫だ。僕の先攻、魔法カード、竜の霊廟を発動！デッキからドラゴン族を1体墓地に送り、それが通常モンスターならばさらにもう1体墓地に送ることができる。通常モンスターの<sup>レッドアイズ・ブラックドラゴン</sup>真紅眼の黒竜を送り、これによりさらに<sup>レッドアイズ・ワイバーン</sup>真紅眼の飛竜を墓地に。そしてカードを1枚伏せ、エンドフェイズに墓地から真紅眼の飛竜の効果を発動。通常召喚をしていないターンのエンドフェイズ、このカードを墓地から除外して墓地のレッドアイズを蘇生させる！出でよ、真紅眼の黒竜！」

真紅眼の黒竜 攻2400

1ターン目からいきなり召喚された、吹雪さんの原点ともいえる可能性の竜。今のところはまだダークネスの力も抑えられてるみたいだし、とりあえずは何も気にせず目の前の敵をどう倒すかに集中しよう。

「僕のターン、ドロロー。……ここは、モンスターをセット。カードを1枚伏せて、ターンエンド」

吹雪 LP4000 手札：3

モンスター：真紅眼の黒竜（攻）

魔法・罠：1（伏せ）

清明 LP4000 手札：4

モンスター：???（セット）

魔法・罠：1（伏せ）

「ならば僕のターン。レベル4以下のモンスターの守備力ならば十分対応できるか……トラップ発動、メタル化・魔法反射装甲！このカードは装備カードとなり、モンスターの攻守を300ポイントアップさせる」

真紅眼の黒竜 攻2400↓2700 守2000↓2300

「そして魔法カード、黒炎弾を発動。場に存在する真紅眼の黒竜の、元々の攻撃力ぶんだメージを与える。放て、レッドアイズ！」

金属のような光沢を全身に纏わせたレッドアイズが、口を開いて黒の炎の球を吐き出すと、僕の伏せカードの上を飛び越して、その衝撃が直接こちらを襲う。

清明 LP4000↓1600

「だ、だけどそのカードを使うターン、レッドアイズは攻撃ができない……」

「確かに。だが、それはあくまでも真紅眼の黒竜のみのこと。私はメタル化・魔法反射装甲を装備したレッドアイズをリリースし、デッキからこのカードを特殊召喚する！出でよ、レッドアイズ・ブラックメタルドラゴン！」

レッドアイズ・ブラックメタルドラゴン 攻2800

さつきまでの金属風なコーティングがされただけのレッドアイズとは違い、本当に体中が機械に改造されたレッドアイズ進化形態の1つ。手札に来たら一発アウトという厳しい召喚条件とメタル化の効力が失われるという大きなデメリットから、ただでさえ希少なレッドアイズの中でもさらに見ることは難しいと言われている。



だけど、今この局面においては厄介なカードだ。なにせ、黒炎弾のデメリットに縛られることがないのだから。

「つていうか吹雪さん、口調！あと一人称！」

「え？ああ、おっと済まない。では気を取り直して、バトルだ！ダーク・メガ・フレア！」

レッドアイズ・ブラックメタルドラゴン 攻2800↓?? 守30

0 (破壊)

「カードを1枚伏せ、ターンエンド。さあ、遠慮せずにかかってきてくれ」

「もっちゃん！ドロ、墓地からフィツシュボーグアーチャーの効果発動！手札の水属性を1体捨てて、このカードを特殊召喚する。さらに魚族モンスターの召喚に成功したこの時、シャーク・サツカーを特殊召喚」

フィツシュボーグアーチャー 守300

シャーク・サツカー 守1000

僕の手札にはデツキ最強の攻撃力(固定値)を誇るモンスター、ブルーアイズ・ホワイトナイトドラゴン青氷の白夜龍が控えている。このままこの2体をリリースすれば……と思ったところで、吹雪さんの口元に笑みが浮かぶ。

「甘い！永続トラップ、サモンリミッターを発動！このカードが存在する限り、お互いに1ターンに2回までしかモンスターを場に出すことができない。すでに2体のモンスターを並べた君はこのターン、もうアドバンス召喚は行えないな」

「ぐ……ターンエンド」

吹雪 LP4000 手札:2

モンスター:レッドアイズ・ブラックメタルドラゴン (攻)

魔法・罠:サモンリミッター

清明 LP1600 手札:3

モンスター:フィツシュボーグアーチャー (守)

シャーク・サツカー (守)

魔法・罠:1 (伏せ)

たいして動けないまま、的を用意するだけでターンが終わってしまった。だけど吹雪さんだって次のターン2回までしかモンスターを出すことはできないのだ、とりあえずはまだ凌げるだろう。

「僕のターン、ドロー。ブラックメタルでシャーク・サツカーに攻撃！  
ダーク・メガ・フレア！」

「今だ！墓地からキラー・ラブカの効果発動！このカードをゲームから除外してその攻撃を無効にし、さらに次の僕のターンの終わりまでブラックメタルの攻撃力を500ポイントダウンさせる！」

レッドアイズ・ブラックメタルドラゴン 攻2800↓2300

「ほう、先ほどアーチャー蘇生のために墓地に送ったカードでリリース用のモンスターを残したか。いいだろう、ならばこれでターンエンドだ」

「僕のターン、ドロー！お望みどおり出してあげるよ、僕のモンスターを。2体のモンスターをリリースしてアドバンス召喚、青氷の白夜龍！それから白夜龍でブラックメタルに攻撃、孤高のウィンター・ストリーム！」

「その攻撃は通しだ」

青氷の白夜龍 攻3000↓レッドアイズ・ブラックメタルドラゴン 攻2300（破壊）

吹雪 LP4000↓3300

「まずは一撃。さらにカードを伏せて、ターンエンド」

吹雪 LP3300 手札：2

モンスター：レッドアイズ・ブラックメタルドラゴン（攻）

魔法・罠：サモンリミッター

清明 LP1600 手札：2

モンスター：青氷の白夜龍（攻）

魔法・罠：2（伏せ）

「わたし……いや、僕のターン、ドロー」

「吹雪さん、ホント大丈夫？」

「ああ、まだ大丈夫だよ。魔法カード、融合を発動。手札のレッドアイズと、同じく手札のメテオ・ドラゴンを素材とする！」

融合。そうか、確かに融合なら一度の召喚で簡単に上級モンスターを呼び出せる。

「次はこのカードだ、メテオ・ブラック・ドラゴン！」

隕石の、そして宇宙の力を手に入れた、レッドアイズ系統の中でも最高の火力を持つモンスター。体の表面からはあまりの熱量のために陽炎が立ち、口からも灼熱の息が吹き出される。

「バトルだ、バーニング・ダーク・メテオ！」

「ブルーアイスっ！」

手を伸ばしてもどうにもならない。巨大な隕石が降り注ぎ、かわすこともままならず氷のドラゴンがその下に沈んでいく。

メテオ・ブラック・ドラゴン 攻3500↓青氷の白夜龍 攻30

00（破壊）

清明 LP1600↓1100

「くっ……だけどこれで残り手札は一気に0枚、あれさえ倒せばまだ押し通せる……」

「それは無理だな。リバーズカードオープン、融合解除を発動！メテオ・ブラックをエクストラデッキに戻すことで、墓地からその素材となった2体を特殊召喚する！」

真紅眼の黒竜 攻2400

メテオ・ドラゴン 攻2000

「これは2体を一度に特殊召喚しているためサモンリミッターに妨害されることもなく、そしてバトルフェイズ中に召喚されたモンスターはそのまま攻撃が可能となる！レッドアイズの攻撃、ダーク・メガ・フレア！」

「いいや、まだまだデュエルは終わらせない！トラップ発動、リビングデッドの呼び声！甦れ、青氷の白夜龍！」

青氷の白夜龍 攻3000

攻撃力3000のモンスターが再び蘇った今、攻撃力2500にも満たない吹雪さんのモンスターには打つ手がない。大人しくターンエンドを宣言され、辛うじてつないだドローに賭ける。

「僕のターン、ドロー！シャクトパスを召喚して……」

少し迷う。普段ならこのままシャクトパスを残しておくのも悪い選択肢じゃないのだが、なにせ相手はレッドアイズだ。悪名高き黒炎弾の2発目を食らう前になんとか勝負をつけたいし、ここは多少前のめりでも戦うべきだろう。

「そのシャクトパスをリリースし、シャークラーケンを特殊召喚！これでこのターンはもうモンスターが出せないけど、それでもいいさ。バトル、シャークラーケンでメテオ・ドラゴンに攻撃！」

シャークラーケン 攻2400↓メテオ・ドラゴン 攻2000  
(破壊)

吹雪 LP3300↓2900

「そのまま連撃、孤高のウインター・ストリーム！」

青氷の白夜龍 攻3000↓真紅眼の黒竜 攻2400 (破壊)

吹雪 LP2900↓2300

先ほど灼熱の隕石を喰らったお返しとばかりに放たれた極寒のブレスが、黒い竜の全身を一瞬にして氷漬けにして白く染める。よし、これで流れはだいぶこちらに傾いた。

「ターンエンド。どう、吹雪さん？」

「ああ、さすがにお前は強いな。去年私と戦った時よりもさらに強くなってている……くっ、いや、まだ大丈夫だよ清明君」

「……………どこが？」

さすがにこれで心配するなというのも無理があるので試しに聞いてみる。どう見ても乗っ取られかかってるんですが。

「確かにいつもと違ってこれまでなかった力が全身に溢れてくるのを感じるよ。だけど、だんだんコツが掴めてきたんだ。昔の僕はダークネスの支配から逃げ出したい、そのことばかり考えていた。だけど今は亮のためにも、ここでダークネスを逆に支配してやるっていう意志がある。自分から戦う意志を強く持つていけば、闇の力は決して敵にばかりなるものではない」

「まあ、そう言うならそうなのかもしれないけど」

「というか実際のところ、闇の力ってなんなんだろう。僕の場合はチャクチャルさんがそばにいるときは完璧に制御できてるから、今一

つピンとこない。ダークネス戦や先代に憑かれてた時みたいになるのが飲まれてる、つて認識でいいんだろうか。やっぱりよくわからない。それに、これ以上考え込んだらデュエルに身が入らなくなりそうだ。

「ま、こんだけ身近なところ地縛神にいい例がいればそのうちわかる日も来るか。大丈夫っていうならこのまま続けるよ、吹雪さん」

「ああ、もちろん」

吹雪 LP2300 手札：0

モンスター：なし

魔法・罫：サモンリミッター

清明 LP1100 手札：1

モンスター：青氷の白夜龍（攻・リビデ）

シャークラーケン（攻）

魔法・罫：リビングゲッドの呼び声（白夜龍）

1（伏せ）

「僕のターン、ドロロー。マジック・プランターを発動し、場の永続トラップであるサモンリミッターを墓地に送り2枚ドロロー。ねえ清明君、特別に見せてあげるよ。僕の手に入れた、新しい力。僕の最高の切り札を」

「え？」

吹雪さんの手札はたったの2枚。そこから出てくる切り札なんて、一体何をするんだろう。だけど、さつきまでとは気迫というか威圧感というか、そういういったものが段違いだ。

「これが僕の切り札！真紅眼融合を発動！このターン他のあらゆる召喚及び特殊召喚を封じる代わりにデッキのモンスターを融合素材にすることができ、呼び出したモンスターの名前を真紅眼の黒竜とする！」

「デ、デッキから直接の融合?！」

「まず、3枚目の真紅眼の黒竜。そしてレベル6のデーモンと名のつく通常モンスター、デーモンの召喚を墓地に送ることで融合召喚！悪魔竜ブラック・デーモンズ・ドラゴン!!」

激しく燃え盛る、蝙蝠のような翼。口からも炎が漏れ出し、筋骨隆々なその体軀はつき見たアームド・ドラゴンに勝るとも劣らない……いや、むしろ全身から立ち上る妖気だけならこちらの方が上か。破壊を振り撒くその姿は、まさに悪魔と竜の融合体という表現がしっくりくる。

悪魔竜ブラック・デーモンス・ドラゴン 攻3200

「これが、吹雪さんの新しいエースモンスター……」

「そうさ。先に言っておくけれど、悪魔竜のバトルが始まればダメージステップ終了時まで相手はあらゆる効果を発動できない。これが最後のバトル、シャークラーケンに攻撃！メテオ・フレア・オリジン！」

「最後の？」

なんだか嫌な予感がした。最後、とはどういう意味だろうか。シャークラーケンと悪魔竜との攻撃力の差は800、それを受けても僕のライフはまだ300残る。ということは、あのモンスターにバトル中のカードの発動を禁止する以外にまだ何か効果があるということ……！

「メインフェイズ終了前にトラップ発動、イタクアの暴風！このカードの効果で、相手モンスターの表示形式を全部変更するっ！」

「何?! 次の攻撃につなげる気か」

突然吹いた暴風に巨大な翼が煽られ、それが影響して業火の塊がわずかに向きをされる。直後、決して広いわけではない店の中にとつもない破壊音が響いた。その衝撃の凄まじさから、改めてその破壊力を思い知る。

悪魔竜ブラック・デーモンス・ドラゴン 攻3200↓守250

0

「ふー……危ない危ない」

「そんなカードをずっと伏せていたとはね。いいよ、攻撃してくればいい。残りの手札を伏せて、ターン終了だ」

これで悪魔竜は2500の守備力を晒すのみとなった。白夜龍で攻撃すれば楽に倒せるし、そのままシャークラーケンのダイレクトで

終わり、のはずだ。だけど、吹雪さんのあの余裕。絶対に負けるはずがないと言わんばかりのあの態度がどうにも引つかかる。あのモンスターそのものなのか伏せカードの方なのかはわからないけど、あの人はまだ何か奥の手を抱えている。

なら、次の僕が打つべき手はなんだろう。そもそもこれ、本当に攻撃を誘ってる？それともただのブラフ？最初は絶対何かあると思ってたけど、ここまで執拗に言ってくるってことはやっぱりブラフだったりするんだろうか。そう考えると、このターン攻撃する気はなかったけどやっぱり攻め込むべき？それともやめるべき？

だけど、ここで止まるなんてそれこそ僕らしくない。

「お望み通りにバトルするさ！孤高のウインター……」

「その攻撃を通すわけにはいかないな！トラップ発動、バーストブレス！ドラゴン族を1体リリースすることで、その攻撃力以下の守備力を持つモンスターをすべて破壊する！迎え撃て、悪魔竜！」

悪魔竜の瞳が真紅に輝き、おもむろに立ち上がって全身を赤熱させるとそのまま白夜龍に正面から突撃していく。燃え盛る竜と氷の竜が真つ向からぶつかり合い、激闘の末に2体の姿が光に包まれる。そして光が消えた時、どちらもフィールドには残っていなかった。

「さすがにやるね、吹雪さん。これでターンエンド」

吹雪 LP 2300 手札：0

モンスター：なし

魔法・罫：なし

清明 LP 1100 手札：2

モンスター：なし

魔法・罫：リビングデッドの呼び声（対象無）

ちよつと余裕ぶつたこと言っただけ、割と今シヤレにならないピンチです。うーむ。

「僕のターン、ドロー。ブラック・オブ・レジエント伝説の黒石を召喚し、そのまま効果発動。このカードをリリースし、デッキからレベル7以下のレッドアイズを特殊召喚する」

真つ黒な卵にひびが入り、少しづつ赤い光が中から漏れ出す。なる

ほど、あれが割れてレッドアイズが生まれるってことか。だけど吹雪さんの墓地にはすでに3体の真紅眼の黒竜がいる、精々出てくるのは真紅眼の飛竜ぐらいだろう。

だが、その予想は的外れだった。卵が割れて中から出てきたモンスター、あの姿は間違いなく本家真紅眼の黒竜……いや、違う。よく似てはいるけれど、形が少し違う。

「これがもう1つのレッドアイズ……生まれ出でよ、レッドアイズ・ブラックフレアドラゴン真紅眼の黒炎竜！」

真紅眼の黒炎竜 攻2400

「これが最後のバトルだ、ブラックフレアドラゴンでダイレクトアタック！パラレル・メガ・フレア！」

「これだけギリギリの楽しいデュエルなんだ、まだまだ終わらす気はないね。その直接攻撃宣言時、手札からゴーストリック・フロストの効果発動！攻撃モンスターを裏守備表示にして、このカードを裏守備で特殊召喚する！」

目の前に降ってきた雪の塊が、黒い炎を受け止める。厚着をした雪だるまがその上からぴよんと飛び降り、こちらに向けて親指を突き立ててみせてからいそいそとクロッシユの中に引っ込んだ。この稲石さんからもらったカードのおかげで、今回も敗北から助けってもらったわけだ。

真紅眼の黒炎竜 攻2400↓セット状態

??? (ゴーストリック・フロスト) セット状態

「ターン終了だ」

「僕のターン。あのモンスターの守備力は本家と同じ2000、だったらこのカードで勝負。フロストをリリースして、氷帝メビウスをアドバンス召喚！効果でもう使い道のないリビングデッドの呼び声を破壊しておいてからバトルフェイズ、真紅眼の黒炎竜に攻撃！アイズ・ランス！」

氷帝メビウス 攻2400↓??? (真紅眼の黒炎竜) 守2000 (破壊)

「これでまた1体撃破。僕はターンエンドだよ、吹雪さん」



吹雪 LP2300 手札：0

モンスター：なし

魔法・罫：なし

清明 LP1100 手札：1

モンスター：氷帝メビウス（攻）

魔法・罫：なし

「僕のターン。魔法カード、思い出のブランコを発動！甦れレッドアイズ！」

「ここでまたレッドアイズ!? どんだけ引きがいいってのさ」

「おいおい、それはお互い様だろう? さらに墓地から伝説の黒石、第二の効果を発動。墓地のレベル7以下のレッドアイズをデッキに戻し、このカードを手札に加える。ただし伝説の黒石は1ターンにどちらか一つの効果しか使えない、このターンは手札で温存しよう」

真紅眼の黒竜 攻2400

このターン、レッドアイズとメビウスの攻撃力は同じ。まさか攻撃してやることはあるまい。

『いや、それは違うぞマスター。思い出のブランコにはデメリットがある。エンドフェイズに呼び出したモンスターが破壊されるデメリットがな』

「バトルだ、レッドアイズでメビウスに攻撃！ダーク・メガ・フレア！」  
「なるほど、突っ込んでくるしかないってことか。しょうがない、メビウス！アイス・ランス！」

真紅眼の黒竜 攻2400（破壊）↓氷帝メビウス 攻2400（破壊）

「こうしてみると、去年君と初めてデュエルした時のことを思い出さね」

一瞬何を言っているのかと思っただけど、少しして思い出した。そういえばあの火山の中でのデュエルの時も、レッドアイズとメビウスが相打ちになる局面があったんだっけか。

「懐かしいもんですね、何せこの1年がむちゃくちゃ濃かったからもって昔の話みたいで」

「ああ、まったくだ。……まあ、まだお互いに感傷に浸るような年じゃないね。悪かった、デュエルを続けよう」

「ええ。僕のターン、ドロー!」

ここでアタッカーになるモンスターさえ引ければダイレクトアタックできたのだが、そうそううまくはいかないものだ。やむを得ない、このターン攻撃は諦めよう。

「モンスターをセット。これでターンエンドです」

吹雪 LP2300 手札：1

モンスター：なし

魔法・罠：なし

清明 LP1100 手札：1

モンスター：??? (セット)

魔法・罠：なし

「僕のターン、ドロー!貪欲な壺で悪魔竜、ブラックメタル、レッドアイズ2体、メテオ・ドラゴンをデッキに戻して2枚ドロー。ついにこのカードを引いちやったか……いや、僕だって覚悟はできている。行くよ、清明君!まず伝説の黒石を召喚してその効果で、デッキからさつき戻したレッドアイズを特殊召喚する。そしてそのレッドアイズをリリースし、このモンスターを特殊召喚!出でよ、レッドアイズ・ダークネスドラゴン真紅眼の闇竜!」

レッドアイズが闇に包まれ、より戦闘的に進化を遂げていく。体つきはよりシャープになり、高速飛行には邪魔になるだけの両足は退化し、体中にあふれ出るパワーがオレンジ色のラインとなって全身を彩る。

「このモンスターの攻撃力は、墓地のドラゴンの300倍アップする。今は1体のレッドアイズに伝説の黒石、真紅眼の黒炎竜で計900ポイント分か」

真紅眼の闇竜 攻2400↓3300

「バトルだ、ダークネス・メガ・フレア!」

真紅眼の闇竜 攻3300↓??? 守100 (破壊)

「水晶の占い師のリバース効果。デッキトップ2枚をめくり、1枚を

手札に。ダブルフィン・シャークとアクア・ジェット……ここはダブルフィン一択か」

「最後の手札を伏せ、このターンはこれで終了する。長いデュエルだったけど、そろそろ決着が付きそうだね」

「決着？確かにそうですね。でも、勝つのは僕だ！ダブルフィン・シャークを召喚、そして効果発動！自分の墓地から水属性魚族のレベル3または4のモンスターを特殊召喚する！シャーク・サッカー復活！」

ダブルフィン・シャーク 攻1000

シャーク・サッカー 守1000

「だが、これで君はこのターンの召喚権も使った。そのモンスターだけはどうする気だい？」

「無論、勝ちに行くんですよ。魔法カード、ミニマム・ガッツを発動！僕のモンスターを1体リリースすることで相手モンスターの攻撃力を0にし、さらにこのターンそのモンスターが戦闘破壊された時にその元の攻撃力ぶんのダメージを与えることができる。このサッカーの力で、真紅眼の闇竜の攻撃力を0に変更！」

真紅眼の闇竜 攻3300↓0

「なるほど、確かにその方法なら低レベルで攻守も低いモンスターが大ダメージを出すことができる、か」

「そういうこと。ダブルフィンで真紅眼の闇竜に攻撃！」

ダブルフィン・シャーク 攻1000↓真紅眼の闇竜 攻0（破壊）

吹雪 LP2300↓1300

「あとは効果ダメージで……」

「清明君、確かに君の戦略は間違っていない。だが君がこのデュエルに勝つことはできない」

「え……？」

「トラップ発動、レッドアイズ・バーン！自分フィールドのレッドアイズが破壊された時、お互いのプレイヤーはその元々の攻撃力ぶんのダメージを受ける！」

ダブルフィンに噛みつかれた真紅眼の闇竜の姿が急激に膨れ上が

り、内側から爆発する。その衝撃波は一瞬でフィールドを覆い尽くし、全部を消し飛ばした。

清明 LP1100↓0

吹雪 LP1300↓0

「引き分け、かあ……」

「いや、どちらかといえば僕の負けだろうね」

吹雪さんがダークネスマスクを取り外しながら、疲れた顔でつぶやく。

「なんで吹雪さんの負けになるんですか？」

「どうにも僕はドロ―運が悪くてね。このデツキのポテンシャルを最大限に引き出せれば、もっと早くに決着はついていたはずなのに。なまじ君や十代君、亮みたいなドロ―運がずば抜けた相手が周りにたくさんいるからそう思うだけなのかもしれないけど、それでもそういう意味じゃ君たちが羨ましくてしょうがないんだ」

「ああ……」

吹雪さんのデツキは確かに極悪だ。言ってしまうえば、レッドアイズ出して黒炎弾2発で勝負がつくんだから。でも言われてみれば確かに、この人がそのやり方で勝利を手にしたという話はあまり聞かない。だいたいレッドアイズでビートダウンして勝つイメージだ。

「まだ僕はレッドアイズの力をフルに引き出せてない。それができない以上、僕にとってはまだまだなのさ」

なるほど、と言いそうになったがそこでふと気づいた。じゃあ僕は、まだ不完全なレッドアイズにあれだけ苦戦した挙句引き分けに持ち込まれたってことか。なんか複雑な気分。

「ともあれ、ダークネスの制御も少しつかめた気もするよ。本当にありがとう、清明君。君にはいくら感謝してもしきれない」

「何回も言ってるじゃないですか。気にしないでつて。実際、僕も楽しかったですし。……次はまた、僕が勝ちますからね？」

「ああ、楽しみにしてるよ。だけどまず僕は明日、亮とデュエルする。」

もしよかつたら、君も見においでよ。じゃあね〜」

最後にそう言つて、吹雪さんは来た時と同じように突然帰つていった。全く、吹雪というより嵐のような人だ。

とはいえ明日、か。ヘルカイザーとやらにいったい何があつたのかも、直接会えばわかるかもしれない。これは、行つてみるしかあるまい。

## ターン62 鉄砲水ともう1つの『真紅』（前）

ヘルカイザー、最初の対戦相手を天上院吹雪と宣言！

僕が吹雪さんとデュエルしてからものの数時間のうちに、この知らせはアカデミア中を駆け巡った。どうも吹雪さんがどうやったのか、本当にどうやったのかさっぱりわからないがカイザーがやってくる前に先手を打って確実に彼と勝負できる状況を作り出したらしい。いい加減何やつても驚かないぞと毎回思ってるのに、いつもあの人は僕らの想像を超えてくる。

「なにせ、こんなもんまで用意してんだから」

そう言いつつ、手元の紙を持ち上げる。そこには明日の日付と、とある一点に赤い丸が付けられたアカデミアの地図。そして上に挙げたアオリ文。

「さすがは師匠だな。することなすことスケールが違う」

万丈目はそう言って感心している。感心する方もされる方もどこか少し異常な気もするけど、その意見にも一理あると思うあたり僕も少しずれているのかもしれない。

「明日は絶対見に行こうぜ、多分学校中のデュエリストが集まるぜ」

十代にいたってはもうすっかり乗り気で、ピクニック気分なのか知らんがさつきは明日の弁当は外で立ち見でも困らないやつを作ってくれなどと言ってきた。もちろん僕も見に行くつもりだし、明日の弁当はおにぎりないしサンドイッチにする気だけど。

「お兄さん……一体どうしちやっただらう……」

僕らが自分たちのことで手いっぱいだった間も、翔は肉親ということもあってカイザーの動向については調べていて、ヘルカイザーのこともだいたい前から知っていたらしい。ただこちらも色々あったせいで言い出すタイミングが掴めず、結局黙ったままなんだとか。友達なんだから次からちゃんと相談するように、と釘はさしておいたけど、翔の性格からいって本当にそうしてくれるかどうかは不安だ。

「まあ、カイザーだってきつと何か考えがあるはずだぜ。明日島に来るんだ、その時兄弟で話し合えばいいだろ？」

「アニキ……」

「さあ、俺はもう寝るぞ。お前の持ってきたアームド・ドラゴンもデツキに入れたし、今日のぶんのメダルも稼いだしな」

そう言っただけで自分の部屋に行こうとする万丈目。本来なら万丈目は今朝僕に負けた時点でジエネックスの参加資格はないのだが、どうもあのあとそこらへんでひとり適当に捕まえてメダルをさも持っているかのようふるまいつつ半ば強引にデュエルを挑んでの勝利。何食わぬ顔してその生徒のメダルを分捕ってきてメダル数1となったらしい。本来なら僕が止めるべきなんだろうけど、なにせ本人から聞いたところによるとその相手というのが適当な光の結社とのことなので黙認。負けた生徒には災難だけど、光の結社に対してはざまーみろとしか言いようがない。私怨？あーあー聞こえない聞こえない。

「うん、おやすみ……あれ？」

「どうした、清明？」

僕もそろそろ部屋に戻ろうとしてチラシを机の上に置いたところで、ちよつと引つかかるものを感じた。

「……いや、なんでも。また明日ー」

「おう」

「あ、おやすみッス」

そのまま違和感を無視して部屋に戻ろうとした途中、やっぱり無性に気になったので一度引き返してチラシを回収してから改めて2階の僕の部屋に戻る。

部屋に入ってから僕の机の上にもう一度チラシを広げ、改めて上から下までしげしげと見てみる。どうも気になってしょうがないのに、何がそんなに気になるのか自分でもわからない。多分この問題が解決しないうちは眠れないだろうな、とぼんやり思った。明日は朝からチラシに書いてある場所、ここからだとかちようど校舎を挟んで島の反対側まで行かなくちゃいけないのに。

「なんなんだろう、日付も明日って言ってたから別におかしくないし、アオリも吹雪さんにしちゃ大人しいけど別におかしくないし、地図も間違っていないし……」

一つ一つ声に出して指さし確認。小学生みただけで、これくらいしないとこの違和感はぬぐえそうにない。日付、アオリ、地図……。

『どれマスター、少し見せてくれ』

「チャクチャルさん！」

するりと後ろからチャクチャルさんの気配が近づき、じつとのぞきこまれる感覚。数秒後、ぽつりと一言。

『妙だな』

「あ、やっぱり？でも、何がおかしいのかさっぱり……」

『この位置だ。確かこの地点は港もなければヘリポートがあるわけでもない。おまけに海底は岩場だらけでわざわざ外から近づいてくる物好きもそうはいまい。船で来るというのなら港のそばを指定すれば済む話だし、飛行機やヘリも同じことだ。なぜわざわざ、こんなかけ離れた位置に移動する必要がある？』

「な、なるほど」

言われてみれば確かにそうだ、これでようやく謎が解けた。でも、そうなると吹雪さんの意図がわからない。余計にこんがらがってきた僕を見かねたのか、ここでチャクチャルさんから2隻目の助け舟が出向する。

『そういう時はな、マスター。まずは前提から疑ってみることだ。そもそもこれは、本当にあの男が作ったものなのか？』

「……どゆこと？」

『私も五千年近く人間を見てきたから考えている大抵のことはその言動を見れば予想がつくが、あれだけ友人のため真剣になっていた人間がこんな馬鹿げた広告を作る余裕があるだろうか』

……ふむふむ。さすがは長生きしてるだけのことはある。言われてみれば、今日の吹雪さんは真剣だった。いつものウクレレアロハシャツだとか10JOINだとかが吹っ飛んで見えるぐらい真剣だった。こんなにエンターテインメント性の高いチラシなんて作るだろうか。それにそもそも、明日のデュエルはダークネスの力を解放する吹雪さんにとってもあまり観客に来てほしいようなものではないはずだ。僕を呼んでくれたのも、いわば練習台になったことに対す



るお礼といったたぐいのものだろう。

「じゃあ、この地図はブラフで本当は別の場所でやるってこと？野次馬を別の場所に引きつけければ、その分落ち着いてデュエルできるし」  
『いや、その線もないだろうな』

1つひらめいたことを言ってみるが、あっさり両断される。

「なんで？」

『マスターの個人的な話にあまり立ち入るのも気が引けたが、つい聞こえたから言わせてもらおう。あの吹雪という男、マスターに見に来いと言ったのだろう？正確な場所も教えていないのに偽の情報をばらまいていてはマスターがたどり着けないではないか』

な、なるほど。何から何まで筋が通っている。となると、この紙は一体誰が何のために？

「考えてわかるわけもなし、とりあえず見に行ってみようか、ここ」  
『……この点は考えが分かれるかもしれないが、今はやめておいた方がいい。そもそも考えられることは2つあるが、まず1つは何らかの目的があつて明日この場所に人を集めたい何者がいる、ということだ』

「なら、今のうちに行けばその企みがわかるかもしれないじゃ？」

『まあ聞け。もう1つの可能性は、この場所に人を集めることで、他の場所から人目をなくす。つまり目的はこの場所に人を集めることではなくて、まったく別の場所で安全に何かを行うこと。この場合たとえばこの場所に行ってみたとしても、何も見つかるわけがない。マスターに見に来いと言った以上、少なくともあの男ではない何者がかな』

「どっちもあり得そうなもんだし、やっぱり今から見に行く分には問題ないんじゃない？」

『だから、ここは考えが分かれるといったんだ。恐らく後者だろうというのは、私の勘でしかない。それに夜間に独りで出歩くのは今の時期は推奨しないし、明日になって日が昇ってから何かしらの可能性を探せばいい。とりあえずマスターは少し休んでいてくれ、後は私が軽く当たってみる』

少しの間、チャクチャルさんに言われたことを噛み砕いてみる。

……ま、明日でいつか。今日はいろんなことが起きすぎていい加減疲れたし。

「明日のおべんと作ったら色々探ってみるから、みんなもそのつもりでね。おやすみー」

もそもそと呟いてから、布団に潜り込む。意識が消えるのはあつという間だった。

「よし、復活。おはよう、みんな」

すつきりと目覚めてデツキに声をかけ、顔を洗い、投網を打ち、畑に水をやり、ご飯を炊いたり味噌汁を作っているうちにすっかり日が昇ってしまった。まあ、これもいつものことだ。その後でまだ寝ている十代たちをたたき起こして朝ご飯を食べ、早速出発の準備に取り掛かる。

「悪いけど先に行ってるからねー。みんなのおべんとは台所に置いてあるから、あと適当にやっついて!」

「おう。なあ万丈目、アイツなんであんなに急いでんだ?」

「万丈目さん、だ。あとそんなこと俺に聞くな、本人に聞けばいいだろう」

「……清明君、もう行っちゃったつスよ」

そんな会話がうつすいうちの安物ドアの向こうから聞こえたけど、いちいち戻るようなことはしなかった。こつちもそれなりに忙しいのだ。そのまましばらく走ったところで、一度声をかける。

「チャクチャルさんチャクチャルさん、どっから行けばいいかな?」

『まず結論から言うが、案の定あの地図はブラフだ。そこで考えてみる、島のこちら半分で重要そうな場所と云えば?』

そんなこと急に言われても困る。えっと、大浴場……は向こう半分だし、港はちょうど中心あたりだし、そうだ、稲石さんの廃寮があった。そのほかに施設……あ、待てよ。廃寮といえ、確かあその地下にはアムナエルの錬金術の部屋があつて、アムナエルといえ

……

「も、もしかして三幻魔？」

『可能性は高いな』

仮にもあの三幻魔が大人しく言うことを聞くとは思えないけど、少なくとも光の結社の手に三沢が手に入れたウリアのカードがあることは間違いない。とすれば、他の2枚を自分のものにしてしまうとおかしくない、ってことか。冗談じゃない、あんな凄まじい力を持った奴らを、まだ1年もたつてないのにまた解放するだなんて。せめてあと半年ぐらいはインターバルおいてほしいもんだ。

『どうする？あそこの封印もなかなか固いものだったはずだが』

『もちろん行くよ！少しでも早いうちに止めないと』

『了解した。場所は覚えて……ほう、これはこれは驚いた』

「え？」

さつきとは一転、急にチャクチャルさんの声の調子が変わる。いつも聞きなれた親しみのあるものから、『地縛神』としての不思議なプレッシャー溢れる声に。

『前言撤回だ、マスター。まさか向こうから来てくれるとはな』

「え？」

「あはは、ばれちゃったー？でもしょうがないよね、僕悪くないもーん。下手に勘付かなけりや今頃こっちも誰にも迷惑かけずに仕事終われたんだからさー。だったらせめて、時間つぶしぐらいはしなないとねー」

へらへらと笑いながら近づいてくるその金髪の男。年は僕と同じくらいに見えるけど、この学校では見たことない顔だし、こんな若いプロがいるのならいくらエドがいるといってもニュースにはなるだろう。

というか、チャクチャルさんのことを認識できて、しかもあの口ぶりからいつて前から知っているというだけで怪しすぎるし。

「お初にお目にかかりまして……かなー、そっちの君、遊野清明だっけ？君そのものとはね。魂だけなら前に一回会ったんだけど、それもずいぶん昔の話だねー。それにしてもそっちの地縛神、つれないなー。

なんでお前が生きてるんだー、とかさ、そういう感じの驚きを表現してもいいんだよー？」

「魂……？」

よくわからないワードに眉をひそめる。だが、チャクチャルさんには意味が通じたらしい。いつぺんに苛立った様子で、男に詰め寄る。『なぜ生きている、などと聞く気はない。貴様、ここに何をしに来た？三幻魔はもつと奥地だぞ』

「だーから言ったでしょ、時間つぶしだよ時間つぶし。正直、今の僕のトップに対してはこつちも頭が上がんなくてねー、三幻魔は譲れないのよ」

危険だ。この二人が何を話しているのかは、正直よくわからない。つまりこいつは誰で、何が目的で三幻魔を集めたがついていて、チャクチャルさんとはどういう関係なのか。こういった特に知りたいところについては何ひとつわからないけど、この男の目は凄く危ない感じだ。何をしだすかわからない、近くには危険すぎるタイプだ。だけど、逃げ出すこともできないだろう。そんなへまするタイプには見えないし、そもそも僕だって尻尾巻いて逃げるなんて願ひ下げだ。

『時間つぶし？なるほど、読めてきた。お前の他に最低もう一人、封印を解きにかかっている存在がいるわけか。そうでもなければわざわざこちらを排除しに来るよりも全力で解放に力を注ぐだろうからな』  
「ありやりや、参ったねーこりやー。全く鋭いもんだよ、ボロ出したつもりはないのにどんどんこつちの秘密がばれてっちやう。でも、それでー？だつたらどうするのー？」

独特な語尾を伸ばす調子のイントネーションを何度も聞いているうちに、これまで感じていた不気味さとは別に何か思い出してきた。この喋り方、それにこの声。確かにこいつの言うとおり、どこかで一度僕はこの男に会ったことがある。そしてその時なにか、すごい理不尽を感じたような。

『決まっている、貴様にはこの場でいつぞやの借りを返す。マスター、少し下がってくれ』

「やなこつた。悪いねチャクチャルさん、僕も何となく思い出してきた

たんだ。お前が僕に何をしたのかまではまだ思い出せないけど、それでも受けた借りは返す。やられっぱなしは性に合わないんでね」

「立派ご立派く。いいよ、その勇氣に免じてハンデをつけよう。今回僕は、エクストラデッキを使わない……ってのはどうかなー？あ、答えなくていいよ。それぐらいししないと遊びにすらならなさそうだしねー。それと、僕の名前は遊あそび。せつかくだから覚えておいてよー」

エクストラを使用する、つまり融合デッキか。だけど、それで融合を使わないとはどういうことなのか。融合素材のモンスターだけのデッキでやつと遊びとは、僕もずいぶん舐められたものだ。

『違うマスター、そういうことじゃなくて……』

「なんだっていいね！それじゃあ、デュエルと洒落込もうか！」

「デュエル！」

いつも通りにカードを引く。どんな不気味なデッキを使ってくるのか皆目見当もつかないけれど、僕はいつも通りやるだけだ。

「先攻は僕。モンスターをセットして永続魔法、水舞台装置アクアリウム・セットを発動！」

僕の後ろにズズズ、と鈍い音を立てて簡易的な竜宮城が組みあがり、周りの風景もカラフルな水草や水車で彩られる。チャプン、と音がして、僕たちの周りがいつの間にかやら水中に変わっていた。と言っても無論これはソリッドビジョン、どれほど目の前の水を掻き分けても一点たりとも濡れはしないのだが。

「元相棒ユに作ってもらったちっぽけな、偽りの平和に満ちた箱庭、かな？なるほど、君にはぴったりのステージだよ。ねえー、地縛神？」

『…………』

何が言いたいのかはともかく、とりあえず馬鹿にされていることだけはわかった。それだけで十分だ。

「ああ、ごめんごめん。僕のターン、神獣王バルバロスを攻撃力1900にして妥協召喚！」

つい昨日もフランツが使っていたカードが、再び僕の前に現れる。

2日連続で同じカードを、まったく違う相手から見るとも珍しい。

神獣王バルバロス 攻1900

「さらに装備魔法、レインボー・ヴェールを装備するよー」

バルバロスの持つ槍が虹色に輝き始める。だが、それ以上の変化はみられず攻守ともに元のままだ。

「バトル、トルネード・シェイバー！」

虹色の槍を掲げての突進を、素早く一振りされたシルクハットが受け止める。器用に片翼でそのシルクハットを支えたまま、紳士服を着たペンギンが挑発的に笑ってみせる。

神獣王バルバロス 攻1900↓???

守1800↓2100

遊 LP4000↓3800

「へえー」

「水舞台装置の効果で、僕のフィールドにいる水属性モンスターの攻守は常に300ポイントアップした状態になる。さらにペンギン・ナイトメアがリバーシしたことで、相手のカード1枚をバウンスできる！吹き飛ばせ、バルバロス！」

僕の手札にはすでに、2回攻撃を行うことのできるツーヘッド・シャークのカードがある。このまま何もしてこなければ、次のターンで僕の勝ちだ。

だが、さすがにそう簡単にはいかないようだ。バルバロスが虹の槍を振り回すと、バウンスすべく飛び上がったペンギンが逆に風圧に弾き飛ばされて後ろの岩に突っ込んで目を回す。

「レインボー・ヴェールの装備モンスターがバトルするとき、その相手モンスターの効果は無効になるのさ。何もなければならカードを1枚セットして、ターンエンドさせてもらうよー」

ファーストバトルはダメージを稼げただけこっちの勝ち、と言ったところか。まずはいい調子だ、早いところバルバロスを処理してしまおう。

清明 LP4000 手札：3

モンスター：ペンギン・ナイトメア（守）

魔法・罫：水舞台装置

遊 LP3800 手札：3

モンスター：神獣王バルバロス（攻・レインボー）

魔法・罨：レインボー・ヴェール（バ）

1（伏せ）

「僕のターン、ドローー！」

バルバロスの攻撃力は1900。ペンギン・ナイトメアにはフィールドにいる限り水属性の攻撃力を200ポイントアップさせる永続効果があるけれど、それを含めてもこのままツーヘッドを召喚するだけじゃあまだバルバロス不倒すには攻撃力が足りない。それにバルバロスは妥協召喚されて自身の効果で攻撃力が下がったモンスター、効果を無効にされれば攻撃力は一気に3000に跳ね上がる。それならこちらでも大型モンスター、それもあちらの王よりもっとすごい魚の王で立ち向かうまでだ。

「魔法カード、スター・ブラスト発動！ライフポイントを500の倍数払って、その数値に応じて手札かばのモンスターのレベルを下げる！僕は1500のライフと引き換えに、手札のシーラカンスをレベル4にして召喚するよ」

清明 LP4000↓2500

超古深海王シーラカンス 攻2800↓3300 守2200↓

2500 ☆7↓4

「さらにシーラカンスの効果発動、魚介王の咆哮！手札を1枚捨てて、デッキからレベル4以下の魚族を出せるだけ特殊召喚……おいで、みんな！」

フィッシュボーグアーチャー 守300↓600

キラー・ラブカ 守1500↓1800

シャクトパス 守800↓1100

「はいはい、おきまりの流れご苦労様」

「悪かったね、代わり映えしなくて。だけどこれはどう？今手札コストとして捨てたハリマンボウの効果発動、相手モンスターの攻撃力を500ポイントダウンさせる」

神獣王バルバロス 攻1900↓1400

バルバロスの攻撃力がさらに下がった。ということとは、もしあの伏せカードがバルバロスのお供として有名な禁じられた聖杯だとして

もその攻撃力は2900までしか上がらないということだ。もしあれが聖杯のカードだった場合、攻撃力3300のシーラカンスだとギリギリ100の差で負けちゃうからね。

「まだまだ行くよ、ペンギン・ナイトメアも攻撃表示に変更！」

ペンギン・ナイトメア 守2100↓攻1400

このターンで終わらせる、とまではいかないものの、それでも攻撃が通れば大ダメージは間違いない。それだというのに、こちらがイライラするほど余裕ぶった態度を崩さない遊。完全に向こうのペースに乗せられてるな、と心では理解できているし、そもそもこういう心理合戦、つまり相手をイライラつかせることに関しては僕も決してできないわけじゃないのだが、あの遊の言動の一つ一つがはやたらめつたら見ているだけで癪に障る。もしあれがわざとやってるんだとすれば、とんでもない演技派だ。

「攻撃可能なモンスターの総攻撃力は4700、かー。まあ、頑張ってるんじゃない？」

「くっ……バトル！シーラカンスで……」

「おっと、その前によーくフィールドを見てみたらー？」

その言葉につられ、言われたとおりにフィールドに目を向ける。なんとバルバロスの虹の槍が今度は緑色の炎に包まれ、それを持つ本体もまた緑色に薄く光っていた。

神獣王バルバロス 攻1400↓3300

「攻撃力、3300？」

「イエースイエース。僕はメインフェイズ1の終了時に伏せカード、炎舞―「天権」のカードを発動したんだよねー。発動時に獣戦士族を1体選んでこのターンだけその効果を無効にし、さらにこのカード以外のカード効果を受けなくさせるのさー。それに天権はそれとは別に、フィールドにある限り獣戦士族の攻撃力を300ポイントアップさせる効果もあるのさー。これで水舞台装置のぶんの攻撃力アップは実質チャラだねー」

「……メイン2に移行、そのままターンエンド……」

今の場面では、相打ちに持ち込んだ方がよかつたのだろう。このま



まだと次にペンギンが倒されればシーラカンスの攻撃力がバルバロスを下回り、なすすべなく一方的にやられてしまうのみになる。けど、いくら戦術的に正しいことだとしてもやっぱり相打ちだとか自爆特攻だとかの指示は出したくない。そんなことばかり言ってるから、いつまでたつてもパツとしないデュエリストなのかもしれないけど。「あははー、やっぱりそこで攻撃してこなかったかー。結構結構、僕のターン。レスキューラビットを召喚して、効果発動ー。このカードを除外して、デツキからレベル4以下の通常同名モンスター2体を特殊召喚く……暗黒の竜王<sup>ドラゴン</sup>！」

暗黒の竜王 攻1500

暗黒の竜王 攻1500

緑色の皮膚を持つオーソドックスな見た目の竜が2体。特にこれといった特徴のあるモンスターではなく、なぜこの局面でわざわざ出してきたのがさっぱりわからない。ドラゴン族じゃ天権の効果も得られないし、第一あれじゃあ次のターンにシーラカンスの餌食にしてくださいと言ってるようなものだ。

『いや、マスター。これはかなり危険だ。レスキューラビットで呼び出されたモンスターはエンドフェイズに破壊されるから、シャクトパスの効果を見逃して攻撃ができる……！』

「そ、そうかつ！」

「相談かなー？まったく、仲がいいようで微笑ましいよー。遠慮はしないけどね、バトル！暗黒の竜王でペンギン・ナイトメアに攻撃、炎のブレス！」

先ほど虹色の槍から身を守ったシルクハットも、竜の炎の前には役に立たなかったようだ。そしてペンギン・ナイトメアからのブーストがなくなったことで、シーラカンスの攻撃力も200ポイントの修正を受けてしまう。

暗黒の竜王 攻1500↓ペンギン・ナイトメア 攻1400（破壊）

清明 LP2500↓2400

超古深海王シーラカンス 攻3300↓3100

「シーラカンスももう怖くないねー。トルネード・シエイバー！」

神獣王バルバロス 攻3300↓超古深海王シーラカンス 攻3100 (破壊)

清明 LP2400↓2200

「まだまだー。暗黒の竜王でシャクトパスに攻撃く、炎のブレス！」

暗黒の竜王 攻1500↓シャクトパス 守1100 (破壊)

「シャクトパスは戦闘破壊された時にそのモンスターの装備カードにできる、けどそれに意味はない、鮫の呪いは今回は使えない……」

「なるほどー、こつちとしても無駄は避けたいからねー、いい判断なんじゃない？メイン2、手札からD D D デーデーデー 覇龍王ペンドラゴンの効果を発動く。手札とフィールドからドラゴン族と悪魔族を1体ずつリリースして、このカードを特殊召喚するよー。手札の絶対王 バック・ジャックと、場の暗黒の竜王をリリースー」

D D D 覇龍王ペンドラゴン 攻2600

同じ『りゅうおう』の名がついていても、暗黒の竜王とは比べ物にならない迫力の黒い龍。なるほど、こつちが遊のエースモンスター、つてわけなのかな、多分。だとすれば、まだ次のドロー次第で光も見えてくる。

「ターンエンドく」

清明 LP2200 手札：1

モンスター：フィッシュボーグアーチャー (守)

キラー・ラブカ (守)

魔法・罨：水舞台装置

遊 LP3800 手札：1

モンスター：神獣王バルバロス (攻・レインボー)

D D D 覇龍王ペンドラゴン (攻)

魔法・罨：レインボー・ヴェール (バ)

炎舞ー「天権」

「僕のターン、ドロー！」

状況はかなり悪い。だけど、負けない。というより、負けられない。ここ最近闇のデュエルばかりやってたもんだからダメージのた

びに痛みが発生するのが当然だなんて無意識のうちに考えてたけど、よくよく考えたらこれはおかしい。もはや日常になつてたから今まで気づかなかつたけど、このデュエルもまた命がけどころか魂まで賭けた闇のデュエルだ。

『ああ、だからあんな軽くデュエルを始めたのか……私が言うのもどうかとは思いますが、マスター。命はもう少し大切に扱ってくれ』

「お互い様でしょ？チャクチャルさんだつて替えはいないんだから」  
もとより僕の命は、あつてないようなものだ。なにせ本当なら去年、入学前のあの事故の段階で死んでるはずなんだから。僕にとつてこうして今を生きている一瞬一瞬が奇跡そのもの、人生のエクストラターンだと思っている。だから、いつ終わつたとしてもそれに文句を言う権利はない。

もつとも、だからといって自分から人生終わらせにかかる気はさらさらないけどね。

「だからなのかね、今だつてデュエルそのものは全然怖くない。でも、それは勝負を諦めたからじゃないんだ。僕は、このままここで勝つ。アーチャー、ラブカをリリースしてアドバンス召喚！天をも焦がす神秘の炎よ、七つの海に栄光を！時械神メタイオン、降臨！」

時械神メタイオン 攻0

神の炎を巻き上げる、僕の第2の神。あの事故の後でもまだ生き続けている僕が見つけた、新しい可能性のカード。バルバロスには装備モンスターと戦闘する相手の効果を無効にする厄介な装備魔法、レインボー・ヴェールが仕掛けられている。だけど、ペンドラゴンを狙えばそんなことは気にしなくていい。この一撃で、勝負を振り出しに戻してやる。

「バトル、メタイオンでペンドラゴンに攻撃！」

「この瞬間、墓地から絶対王 バック・ジャックの効果発動ー！このカードを除外してデッキからカードを1枚確認、そのカードがトラップカードだった場合、フィールドにセットしてそのターン中に発動できよー」

「相手ターンにデッキからトラップ!?だ、だけど、メタイオン先生は戦

闘でも効果でも破壊できない！」

バックパックを背負ったロボットののような半透明のモンスターが浮かび上がると、その右手の肘から先のあたりがみるみるうちに赤熱していく。遊のデュエルディスクにその右手を置き、そこからカードを一枚引きぬく。そのカードを、ゆつくりとこちらに向けた。

「ドローカードは……強制脱出装置を発動！」

「なっ!？」

「この効果はわかってるよねー？破壊じゃないよ、メタイオンをバウンスさせてもらおうかなー」

さつきアドバンス召喚のリリースに使ってしまったため、僕のフィールドにはもうモンスターがない。手札にもたった今戻されたメタイオン先生と、最初からいるツーンヘッド・シャークしかない。これ以上できることは何一つないし、どうやらこんなところで年貢の納め時なようだ。

『マスター……』

「死にたくはないさ。ないけど……さすがに何にも思いつかない、かな」

「さあ、準備はいいかなー？僕のターン、一応カードを引いて〜っと。バトル、ペンドラゴンでダイレクトアタッカー」

まだバトルフェイズにも入っていないのに黒い龍が口を開くと、徐々にその口の中にエネルギーがたまっていくのがよくわかる。ああ、僕の人生のエクストラターンもここで終わりなのか。走馬灯みたいなものが見えてくるかと思っただけ、特にそうだったものは見えてこなかった。

「結局、エクストラデッキなしでも遊びにすらなんなかったかー。もう一回言わせてもらおうよ、バトル。ペンドラゴンでダイレクトアタッカー」

……こりや、本気でダメだな。ここまでシャレにならない状況に追い込まれば少しぐらいは僕も焦りだすかと思っただけ、むしろどんどん気持ちが悪く落ちていく。吐き出されるであろう炎から目を閉じようかと思っただけ、どうせならまっすぐ前を向いとどめを刺さ

れようと思いい直して改めて前を見る。ちょうどペンドラゴンの溜めが終了したらしく、その体色に合った漆黒の炎を吐き出すべく大きく体をそらせたところだった。

そして、勢いよく炎が迫る。大人しくそれを受けようとして――

「その攻撃、ちょっと待った！手札からバトルフェーダーの効果発動、このターンのバトルフェイズを終わりにして、このカードを特殊召喚する！」

バトルフェーダー 守0

「へえー。転生者……とはちょっと違うけど、この子を庇うなんてことするんだ。職務違反じゃないのかなー、富野くん？」

激しく不機嫌な顔をした別の乱入者が、突然現れた。

### ターン63 鉄砲水ともう1つの『真紅』（後）

「その攻撃、ちょっと待った！手札からバトルフェーダーの効果発動、このターンのバトルフェイズを終わりにして、このカードを特殊召喚する！」

バトルフェーダー 守0

突然現れた、第三のデュエリスト。その男の視線は僕ではなく、遊あそぶの方へ注がれていた。

「へえー。転生者……とはちよつと違うけど、この子を庇うなんてことするんだー。職務違反じゃないのかなー、富野くん？」

「けっ。勘違いすんじゃないやねえ、こいつを潰すのは俺の仕事だ。なにせユーノの奴には負けっぱなしだからな、ここで器の方に消えられたら勝ち逃げされちまう」

「男のツンデレは誰得だよー？」

「野郎のぶりっ子も誰得だろうが」

遊の相手に慣れているのか、敵意を隠しめせず適当に軽口に返事を返す彼……富野。突然のことにはしばらく言葉を失っていたけど、そんなこと言ってる場合じゃないことを思い出した。これが誰なのか、なんでユーノのことを知っているのか。余計に謎は深まったけど、とりあえず今この人は敵じゃない。なら、とことんまで利用するまでだ。「（だからチャクチャルさん、喧嘩売らないでね）」

微妙に不機嫌そうな気配を感じて、先に釘を刺しておく。いつ死んでも構わないのと自殺志願者は別物なのだよ。するとその心の声が聞こえたかのようなタイミングの良さで、富野がこちらを向く。

『……わかつている。これもマスターのためだからな』

「よお、ユーノんとこの地縛神。話はあらかた知ってるぜ、何やってんだお前ら」

『それはむしろこちらの台詞だな。なぜここまで来た？』

「何回も言わせんな恥ずかしい。気に食わねえが仕方ねえ、今回ばかりは助けてやんよ」

それだけ言ってまた遊の方に向き直る富野。デュエルディスクを

構えなおし、吐き捨てるようにして言葉を放つ。

「つー訳でこのデュエル、俺も参戦させてもらうぜ」

「ふーん、それでー？僕のメリットはなにかな？」

「せっかくだ、GX風に行こうぜ……って言いたいところだがな、俺だつて暇じゃねえから多少妥協させてもらうぜ。俺はライフ2000で初期手札3枚、バトルフェーダーを使ったから実質2枚でスタートするから、そのかわりお前も2000ライフ回復と手札3枚ドロー。もしお前が勝てば、俺も闇のデュエルのルールには抗えないからここで消え、お前がまだ生きていやがることを知る奴は誰もいなくなる。これはお前にとつても十分なメリットだと思うぜ？」

へえ、と言いたげな顔で富野を見る遊。数秒ほど思案気にしていたが、やがて口を開いた。

「本当なら不利な賭けはしない主義なんだけどねー、いいよー。君みたいな直情タイプが僕の意表をつけたんだから、それに敬意を表して乗ってあげようかなー」

軽くデュエルディスクを操作し、自身のライフ回復とバトルロイヤルルールへの移行を設定する遊。僕も設定を直し、3人目の乱入者を迎え入れる。

遊 LP3800↓5800 手札：2↓5

富野 LP2000 手札：2

「さーて、まだ僕のターンだったね。メインフェイズ2にいつてー、ターンエンドー」

「次は俺のターンだ！行くぜ、魔法発動モンスターゲート！自分のモンスターを1体リリースして、デッキから通常召喚可能なモンスターが出るまでカードをめくる。そして出たモンスターを特殊召喚して、残りのカードを墓地へ。1枚目、ハーフォレストップ。2枚目、コール・リゾネーター。3枚目、融合。4枚目……よし、バイス・ドラゴンを特殊召喚するぜ」

バイス・ドラゴン 攻2000

「ふーん？でもペンドラゴンの攻撃力は2600だよー？」

「わかってらい。バイス・ドラゴンをリリースして、ストロング・ウイ

ンド・ドラゴンをアドバンス召喚！このカードはドラゴン族を素材にアドバンス召喚した時、その攻撃力の半分を自身に加えることができる」

ストロング・ウインド・ドラゴン 攻2400↓3400

「バトルだ、ペンドドラゴンに攻撃！ストロング・ハリケーン！」

ストロング・ウインド・ドラゴン 攻3400↓DDD覇龍王ペン

ドラゴン 攻2600（破壊）

遊 LP5800↓5000

「ヒュー、強い強い。さすがに大きなこと言ってきただけのことはあるねー」

「舐めた口ききやがって……カードを伏せてターンエンド。そのお前、後のことなんか考えんな。俺がなんとかするから全力でダメージ稼げ！」

全力で稼げ、か。なら、このカードが適任だろう。初期手札からずっと手札にいたこのカードの力を見せてやる。

「僕のターン、ドロロー！ツーヘッド・シャークを召喚！さらに水舞台装置の効果で、ツーヘッドの攻守は300ポイント上昇する……！」

「ハイハイ」

ツーヘッド・シャーク 攻1200↓1500 守1600↓1900

「ツーヘッドの能力は2回攻撃！バトル、ダイレクトアタック2連打！」

ツーヘッド・シャーク 攻1500↓遊（直接攻撃）

遊 LP5000↓3500

ツーヘッド・シャーク 攻1500↓遊（直接攻撃）

遊 LP3500↓2000

途中で妨害してくるかとも思ったけど、別にそんなこともなく一気に3000のライフを削りきった。普段なら喜べるのに、さっきまで手も足も出ずにやられていたことを思うと逆に不気味だ。

「タ、ターンエンド」

清明 LP2200 手札：1



モンスター：ツーンヘッド・シャーク（攻）

魔法・罾：水舞台装置

遊 LP2000 手札：4

モンスター：なし

魔法・罾：炎舞―「天権」

富野 LP2000 手札：0

モンスター：ストロング・ウインド・ドラゴン（攻）

魔法・罾：1（伏せ）

「僕のターン、ドロ。ふんふん、2人がかりで3800ダメージか。しかも攻撃力3400の貫通持ちと攻撃力1500だけど墓地にキラー・ラブカが落ちてる状態での2回攻撃持ち。ふーん……」

追い詰められているはずなのに、まるで緊張感の感じられない態度。そこで一度言葉を切り、心底つまらなそうな顔をした。

「ま、こんなもんか。君たちのレベルにしちゃ、それなりに頑張ったんじゃないかな？僕のターン、ドロ。墓地の獣戦士族、神獣王バルバロスと手札の神機王ウルをゲームから除外して、手札からもつとも神に近いモンスター、獣神機王バルバロス<sup>ウル</sup>を特殊召喚―！さらに天権の効果で攻撃力アップ」

バルバロスの体色が灰色になり、手に持つ武器が大型の槍から2本の盾のようなものに変化する。これが真のエースモンスター、ということなのだろう。

獣神機王バルバロスUr 攻3800↓4100

「たかだか1体ぐらい、俺のターンですぐに処理して……」

「そんなことできるのかな？速攻魔法、異次元からの埋葬を発動。除外されたモンスターカードを合計3枚まで選んで持ち主の墓地に戻すこの効果で、僕はバック・ジャックとバルバロスとウルを墓地に。そして今戻したバルバロスとウルの2体を繰り返し除外して、同じ手順でバルバロスUrを特殊しようかーん」

「嘘!？」

攻撃力3800もの超大型モンスターが、こんなに簡単にポンポン

湧いてきていいのだろうか。そんな思いをよそに、もう1体の機械と獣の王がひとつになった姿が僕らの前に立ちふさがる。

獣神機王バルバロスUr 攻3800↓4100

「そんなもんでこの転生者狩りの富野様がビビるかよ、そのモンスターは相手に戦闘ダメージを与えられねえ！おいその、確かお前の手札にはまだ時械神のカードがあつたよな？」

富野の言葉で我に返る。そうだ、僕の手札にはまださつき強制脱出装置で手札に戻されたメタイオン先生がいるんだ。しかもあの大型モンスターを並べるために、遊の手札はわずか1枚まで減っている。おまけに、あのモンスターは高い戦闘能力と引き換えにダメージを与える力を失っているらしい。見かけの数字に騙されず、落ち着いて対処すればどうってことはない。

「またそうやって粋がっちゃってー。僕はね富野君、その仕事やってた時からずっと君にだけは、そういう態度の相手にだけは負ける気がしなかったんだよー。装備魔法、ニトロユニットをストロング・ウインド・ドラゴンに装備ー」

「なにっ!？」

緑色の筋骨隆々なドラゴンの背中あたりに、ガシリと重そうな爆弾が食い込む。苦痛の呻き声をあげてなんとか振り払おうとするも、自身の翼が邪魔になり腕が届かない。その姿に、バルバロスUrのうち片方が手にした武器の狙いを静かにつけた。最初僕が盾だと思ったその武器の先端がかすかな機械音とともに開き、そこから2本の砲台がのぞく。

「バルバロスUrでストロング・ウインドに攻撃、閃光烈破弾ー……  
クラック・ショット  
まったく、物々しく出てきた割には早い退場だことで。しばらくそこで眠ってな、富野くん」

バルバロスUrの持つ砲台に少しづつ光が集まり、一定の力が溜まったところで目の眩むような光線が放たれる。その光を忌々しげに見つめてから軽いため息をつき、富野がこちらを向く。

「なあ、おい」

「僕?」

「ああ。俺は駄目だ、ここまでだ。せめて最後に一撃だけ入れてやるから、後はお前が何とかしろよ」

「え、ちよつと……」

それだけ言うとは僕との話は終わりだとばかりに遊の方へ向き直り、ふてぶてしく笑って伏せカードに手をかける。遊が眉をひそめたのを見て若干満足げに、そのカードを発動させた。

「リバースカード、プライドの咆哮を発動！攻撃モンスターとの攻撃力の差のぶんだけライフを支払い、その数値プラス300だけストロング・ウィンドの攻撃力を上昇させる！」

「またそうやって粹がつて……ほんつとうに邪魔くさいったらありやしないよー？」

「うるせえー！迎え撃て、ストロング・ウィンド！ストロング・ハリケン！！」

富野 LP2000↓1300

獣神機王バルバロスUr 攻4100（破壊）

↓ストロング・ウィンド・ドラゴン 攻3400↓4400

遊 LP2000↓1700

「くっ……だけど、これで伏せカードも打ち止めだねー？バルバロスUrはまだ残ってるから、そっちで攻撃ー、閃光烈破弾クラック・ショットー」

戦闘ダメージを与えることのできない破壊の光が、ストロング・ウィンドの岩のように固く盛り上がった皮膚を貫通して背中についたままのニトロユニットごと撃ちぬく。一瞬の沈黙ののち、本体ではなくニトロユニットの方が大爆発を起こした。

獣神機王バルバロスUr 攻4100↓ストロング・ウィンド・ドラゴン 攻3400（破壊）

「もう説明もいらねいだろうけど、ニトロユニットを装備したモンスターが破壊された時、そのモンスターのもとの攻撃力ぶんのダメージがコントローラーに降りかかるんだよー」

「うおおおっ!!」

富野 LP1300↓0

富野は転生する前の命を生きていた時、いわゆるヒーローものが好きな少年だった。小学校に入る前は、毎日のように将来の夢はヒーローになることだと話していた。そんな彼もある程度大きくなり、テレビの中のヒーローがあくまでもテレビの中だけの存在なことに気づいてしまった。それがいいことなのかどうかは、彼にはわからない。ただ、そこに気がつかないまま生きていけるほど、世界が優しくなかったというだけだ。

世界で生きていくために現実を受け入れ、それでもどこかぼつかりと空いた彼の心。そんな時に偶然出会ったのが、とある漫画雑誌に付録としてついてきた1枚の白いカードだった。

当時デュエルモンスターズ……その世界では遊戯王と呼ばれていたカードゲームについては名前程度しか知らなかった彼だが、漫画が読みづらいつと雑誌からカードを切り離し、特に意識せずに袋とじを開ける。その瞬間、彼の人生は大きな転機を迎えることとなる。書いてある効果は素人以下のレベルである当時の彼にはまるで意味が分からなかったが、そのイラストにどこか心惹かれた彼はそれを保管し、そのモンスターが動くところが見られるという話を聞きつけて当時放送していた遊戯王のアニメを見るようになる。その世界観にすっかり取り込まれた彼が自らもデッキを作るようになるまで、そう時間はかからなかった。彼にとってすべてのきっかけになったそのカードの名を、レッド・デーモンズ・ドラゴンという。

彼は吹き飛ばされながら、朦朧とした意識の中でそんな走馬灯を見ていた。若いうちに死んだ後、諦めたつもりで諦めきれなかった夢、ヒーローになれると思つて転生したこと。レッド・デーモンズ・ドラゴンを生で見たかつたからというのものもあるけれど、それぐらいの役得は許されると思つていたこと。なのに、世界は廃墟になったこと。その世界の遊星が、クロウが、アキが、龍亞が、龍可が、そして他のさまざまな仲間たちが傷つき倒れていく中で嫌というほど思い知つた、自分ではジャック・アトラスの代わりに、キングの代わりになることなど不可能であつたこと。そしてもう2度とあんな思いを味あわな

いたために、誰もあんな目に合わせないために転生者狩りとしての道を選んだこと。

彼は思う。結局、俺はヒーローの器じゃなかったのだと。今の馬鹿みたいな様子はどうか。強い力を持っていたにもかかわらず救えたはずの世界ひとつ救えず、今だってせっかく出てきたのに当初の目的を果たすどころか逆に軽くあしらわれ、ただただ道化として終わっただけだ。せめて最後にカッコつけられたことだけが救いといえなくもないが、それにしたってただの自己満足なんじゃないか、と。

ああ、ちくしよう。地面に頭を打ち付けて衝撃が走った時、彼はなぜ自分がこのデュエルに参戦したのかという真の理由に気づき、ひそかに心の中で皮肉に思った。自分をはじめとした世界の行く末を知る転生者たちとは違い何も知らないうちに、どうなるのかもわからずにそれに巻き込まれている清明は、言ってみればただの被害者だ。なにに誰のことも恨まず、<sup>ダークシグナ</sup>人外の存在へ変わりながらも前向きに生きる清明の姿は、彼にとってどこか眩しいものだったのだ。転生者が自分のような悲劇を見る前に始末をつける、その思いに偽りはない。だが、彼は何も悪くない。若干の迷いを抱えた彼は、その答えをユーノとのデュエルの中に見出そうとした。だから何度振り返りにされても、彼はユーノのもとに姿を見せるのだった。

今でも彼は迷っている。その途中なのに、ここでその清明を失うわけにはいかない。だからこそ、自分よりもはるかに格上のデュエリストである遊……ユーノと2人がかりで挑んでさえ敗北を覚悟するほどの相手のデュエルに割って入るといふ自殺行為に踏み込んだのだ。

ちくしよう。彼の意識が闇に飲み込まれていく寸前、もう1度その言葉を繰り返した。今更気づいて、一体それがなんになるってんだ。せいぜい勝てよ、<sup>遊野清明</sup>ヒーロー。

「富野っ！」

地面に打ち付けられたつきりぐったりした富野の体を見て、一瞬も

う魂が抜かれたのかと思った。だが、かすかに胸が上下しているのが見えてひとまずはホツとする。少なくとも、呼吸はまだしてる。

「さあ、負け犬は放っておこうよー。続き、ねー？さ、さ、まだ終わってないんだからさー、早いところ終わろうよー」

そうだ。まだ、デュエルは終わっていない。僕がここで勝つ。富野が繋いでくれたこのライフ、ただ散らせるわけにはいかない。

「ターンエンド〜」

「僕のターン……ドロー！」

手札にいるのはさつき強制脱出装置で戻されたメタイオン先生のみ。フィールドにはツーヘッド・シャーク。モンスターがいるからこのままメタイオン先生を出すことはできないし、仮にできたとしてもそれは手札から特殊召喚できるバルバロスUrに対してはコストになるモンスターを引くまでの一時しのぎにしかない。

なら、どうにかなるまでドローすればいいだけだ。

「魔法カード、貪欲な壺を発動！墓地のアーチャー、シャクトパス、ペンギン、シーラカンス、ハリマンボウの5体をデッキに戻してシャツフル、その後2枚をドロー」

これで手札は3枚。これで効率よく遊のライフを削るには……よし、デッキが僕に伝えてくれた。この手札なら、勝てる。

「来い、ドリル・バーニカル！このカードは水属性だから、水舞台装置の効力を受ける」

ドリル・バーニカル 攻300↓600 守0↓300

「なるほどー、バルバロスUrを打点で越えられないから、倒すのを諦めてダイレクトアタッカーで僕を直接狙おうっていうんだねー？何を見せてくれるのかと思ったら、随分卑怯な手だねー」

「あいにくだけど、搦め手は水属性の十八番なんでね。バーニカル、そのデカいのは無視してプレイヤーに直接攻撃、ドリルアタック！」

ドリル・バーニカル 攻600↓遊（直接攻撃）

遊 LP2000↓1400

ドリル状になった棘を飛ばしたフジツボが、めりめりと音を立てて急激に成長していく。

「バーニカルは相手に直接攻撃で戦闘ダメージを与えた時、攻撃力が1000ポイントアップする。これでさらにパワーアップして、次のターンに攻撃を決めれば僕の勝ちだ！」

ドリル・バーニカル 攻600↓1600

「さらに墓地にキラァー・ラブカがいるから攻撃を1度は凌げる、そう言いたいのかなー？それはちよつと、いくらなんでも甘いんじゃない？」

「生憎だけど、その心配をするのはこっちの役目なんでね。次のターンの攻撃で決めるさ、カードをセットして、ツーヘッドを守備表示に変更。ターンエンド」

ツーヘッド・シャーク 攻1500↓守1900

清明 LP2200 手札：1

モンスター：ツーヘッド・シャーク（守）

ドリル・バーニカル（攻）

魔法・罫：水舞台装置

1（伏せ）

遊 LP1400 手札：0

モンスター：獣神機王バルバロスUr（攻）

魔法・罫：炎舞―「天権」

次のターンの攻撃で決める、僕は今そう言った。その言葉自体に嘘はない。だけど僕の真の狙いは、バーニカルの直接攻撃ではない。文字通りの意味での次のターン、つまり遊の攻撃だ。僕の伏せたカードは、ポセイドン・ウェーブ。今僕のフィールドには魚族のツーヘッドと水族のバーニカルがいる。つまり、遊が攻撃を仕掛けてきた瞬間にこのカードを発動すれば1600のバーンダメージが発生し、その時点で僕の勝ちが決定する。だからこそ、わざと次の僕の攻撃で終わらせる、といったようなことを繰り返したのだ。僕が狙っているのは、次は次でも次の相手ターン。さあ、攻撃して来い！

「……僕のターン。絶対王 バック・ジャックの効果発動！」

「しまった、忘れてた……！」

さつき異次元からの埋葬で除外ゾーンから墓地に戻されたバック・

ジャックの効果。デッキトップがトラップならそれをセットし、そのターンでも発動できるようにするというのがこの効果で、一体何をめくるだろうか。再び半透明の人型ロボットのようなモンスターが現れ、その右手を赤熱させて遊のディスクからカードをドロウする。

「……ちっ」

「残念だったねー。トラップカード、停戦協定をセットして発動！」

フィールドの効果モンスター1体につき500のダメージをこちらに与えるカード、停戦協定。モンスターを並べてポセイドン・ウェーブのダメージを増加させるつもりだったのが裏目に出てしまったが、せっかく富野に繋いでもらったこのライフが残っている限り諦めたりするもんか。僕のモンスターが消えたわけじゃない、この後バルバロスUrで攻撃してくるだろうから、そこをポセイドン・ウェーブで返り討ちにして勝つというプラン自体に変更はない。

「バルバロスUr、ツーヘッド、バーニカルの3体でダメージは1500。もうだいたいぶ虫の息だねー」

「ま、まだまだ……！」

清明 LP2000↓500

大丈夫。墓地にはキララ・ラブカがいて、場にはポセイドン・ウェーブのカードがある。このターン戦闘ダメージを受ける可能性は0、といってもいい。

その瞬間、足元の地面から太い鉄格子が生えてきた。と思ったらそれは鉄格子なんかではなく、僕の体を完全に包囲する檻になった。そしてあたりに響きだしたジュウウ、と何か高温の物を水に投げ入れたかのような音に嫌な予感がして僕のモンスターの方を見ると、水舞台装置の水中にあってなおも赤く溶ける溶岩の腕にわしづかみにされたツーヘッドとバーニカルが僕の頭上にいつの間にかいた怪物の口元へと運ばれていくところだった。思わず手を伸ばすけど、その手は檻に邪魔されて届かない。

「悪いねー、おおかた伏せカードは魔法の筒とかそんな感じのカードかな？……もう、終わりさ。相手フィールドのモンスター2体を生



贄にして、こいつは相手のしもべとして召喚される……」

「嘘、でしょ……」

「溶岩魔神ラヴァ・ゴーレム！」

溶岩魔神ラヴァ・ゴーレム 攻3000

「もう、攻撃する必要もないねー。ターンエンド」

ラヴァ・ゴーレム。プレイヤー……つまり僕のスタンバイフェイズごとに灼熱の体が溶け出し、ダメージを与えるという恐ろしい効果を持つ大型モンスター。そのダメージ数は、僕のライフ500を上回る数値の1000。僕のデッキには手札から捨てて効果ダメージを防げるようなカードはないから、どうあがいたところで次のドローに賭けることすらできない。

「僕の、負け……」

「その通りさー。さき、最後のカードを引いちやつてよー」

自分の死の宣告となる、デッキトップを見る。このカードを引いた時、僕のライフは0になる。もう一回死ぬこと自体には諦めもつく、というか覚悟もできているけど、僕だけならともかく見ず知らずの富野まで巻き込んでおいてあげくの果てに負けるなんて、ただただ無念すぎる。

「ねえねえ、まだかなー？それとも遅延かなー？」

「僕の、ターン………ドロー……」

ドローフエイズが終わり、お互いに発動できるカードがないことから自動的にスタンバイフェイズに移行する。その瞬間、ラヴァ・ゴーレムの体から溶岩が垂れてきて、檻の隙間を通して僕に降りかかる。それを避けるための隙間も、身を守るためのカードもない。今度こそ、終わりだ。

清明 LP500↓0

ライフが0になると同時に体中の力が抜けていき、立っていられなくなつてその場に倒れこむ。その様子を満足げに見て頷いた遊が、くると背を向けて三幻魔の封印地に向けて歩き出す。その途中で一

度立ち止まり、誰に言うともなく口を開いた。

「今回は、見逃してあげるよー。全身の力は抜かれただろうけど、しばらく大人しくしてれば夕方頃には歩けるようにはなるはずだしー。本当はさっさとどめさしておきたいんだけどねー、そういう約束だからしようがないんだよ」

「や……く、そくっ」

ゆっくりと口を動かし、どうにか言葉を絞り出す。そう、と頷き、また歩き出しながら遊がそれに答える。

「ユーノとの約束でね、まあちよつとした取引だよー。彼は君と一蓮托生だから、君に死なれちゃ困る。僕は三幻魔の力が訳あって必要なんだけど、1人じゃあの封印は解けなかった。光の結社のために、とか言っただけで三幻魔を欲しがってた彼とは、少なくとも封印が解けるまでは利害が一致してるからねー。こつそり手を組んだのさー」

「……………」

「露払いも済んだことだし、もう失礼させてもらうよー。これから封印がどうなったか見について、その結果によっては彼と三幻魔について『話し合い』してこなくちゃいけないからねー」

そして、今度こそ振り返らずに歩き去って行った遊の後姿を、ただ見つめていることしかできなかった。

『マスター、どうする？ 私を追うか？』

「……いや、いいよ。それより十代たちに連絡しよ、みんな心配してるだろうし」

そう言いながら、僕の後ろで倒れてるはずの富野の方を見て、一瞬自分の目を疑った。さっきまでそこに倒れていたはずの体は既にどこにもおらず、まるで最初から夢か幻かのようなようだった。

「どうなってんの、これ」

『私も見えていなかったからな。それより、マスター。こんなことを聞くのもなんだが、なぜそんなに元気なのだ？ 思ったよりもずっと回復が早い』

「あれ、チャクチャルさんが何かしてくれたんじゃないの？」

それに関しては僕も不思議だった。遊はついさっき、夕方ぐらいま

では動けないといった。にもかかわらず僕はもうびんぴんしてる。てつきりチャクチャルさんがパワー補給してくれたのかと思っただけど、違うらしい。

『いや……………ああ、そういうことか』

「え？」

『私からも礼を言わせてもらおう。マスターも彼らには感謝しておくといい』

そう言つて、僕の胸ポケットを示すチャクチャルさん。そこからかすかな光が漏れていたので慌てて中身を引つ張り出してみると、光っていたのは2枚のカードだった。表面が完全に真っ白な、ちよつと見ただけだとエラーカードにしか見えないカード。ペガサス氏からもらった、世界の誰もが中身を知らないカードだ。ちよいちよい取り出しては眺めてみたり話しかけたりしてみたときには何の反応もなかったから実はちよつと不安だったけど、やっぱりこの中にはまだ『何か』がいるらしい。今回は僕に力を貸してくれた、ということだろう。

「ありがとう。いつか君たちにも会いたいもんだよ」

指で軽く撫でてから、2枚ともポケットに戻す。さてと、早いところ吹雪さんの試合を見に行こう。十代よりも、ここは夢想あたりに聞いてみるか。

「あ、もしも夢想？」

『清明？今どこにいるの、って。もうとつくに試合始まつてるよ、場所は……………』

夢想到に教えられた場所にようやくたどり着いた時、すでにそこには何人もの観戦者が来ていた。半ば押しつけるようにして前に行く、だずいぶん久しぶりに聞くカイザー、いやヘルカイザーの声でした。だが彼が従えていたのは、これまでおなじみだったサイバー・ドラゴンでもツインでもエンドでもない。見たこともない闇の機械龍が、まるで下にいるドラゴンに寄生しているかのような格好で合体して、とい

うよりもむしろ取り込んでいた。

「終わりだ、吹雪！ 鎧黒竜―サイバー・ダーク・ドラゴンで真紅眼の闇竜を攻撃、フル・ダークネス・バースト！」

「うわあああああつっ!!」

吹雪 L P O

「吹雪さんっ！」

ダークネスマスクが、吹き飛んだ衝撃で吹雪さんの顔から外れる。あの力を解放しても、まだ今のカイザーには勝てなかったっていうのか。

「や、やあ、清明君……亮は、やはり強いよ……」

「喋ってないで、とりあえず医務室行きましよ。誰か、手えかして！」

肩を貸してどうにか吹雪さんを立ち上がらせ、こちらに冷たい視線を送っていたヘルカイザーを見る。あの目つき、こうやって実際に見てはつきり分かった。何があったのか、細かいところまでは知らないしわからない。だけど、きつと何かものすごく大きな変化があったに違いない。

「さらばだ、吹雪。俺はもうしばらくこの島にいる、挑戦者がいるというのならば受けて立とう」

そう一言だけ呟き、たった一人で去っていくヘルカイザー。誰も、その後ろ姿を止められなかった。

## ターン64 鉄砲水と『D』

「え!？」

あとから考えてみれば随分失礼な話ではあるが、僕の第一声はそれだった。でも、こればかりは誰も文句は言えないと思う。翔がその日の夕食後、何となくゆったりしていた時間に漏らした一言には、これまで彼の僕らにとってはそれほどの破壊力があつた。

「だから清明君、僕がお兄さんに挑戦するんだってば」

「お兄さんってーと、ヘルカイザーの?」

他に誰がいるのさ、という顔でこちらを見てくる翔。いやま、そんならそれだけ。あの翔が自分からデュエルしたいだなんて、それもカイザー時代からあれだけ苦手意識もつてたヘルカイザーに対して。

「いいじゃないか、俺は応援してやるぜ、翔」

「アニキ……ありがとう」

「それで、なんで今なんだ? お前だって見ただろう、あの師匠ですらかなり手ひどくやられていたんだぞ」

そこで十代と万丈目も会話に参加してきた。十代はまあ、なんとなくか十代らしい激励だ。万丈目の言う師匠は吹雪さんのことだろう。そうか、僕は結局ラストしか見てないけどそんなにひどいやられっぷりだったのか。

「うん、わかってるよ万丈目」

「万丈目さん……貴様何をする!」

「今話し中なんだからちよーっと黙ってようねー。続けて、翔」

もはや癖なのか条件反射なのか知らんけど、とっさに名前を訂正しようとした万丈目を押さえつけて話を促す。いい加減慣れりやいいのに、万丈目も。

「うまく言えないけど、僕が……僕がやらなきゃいけないんだって、そう思ったんだ。今のお兄さんのデュエルは間違ってる。僕の知っていた、優しくて尊敬できるお兄さんに戻って欲しいんだ」

「翔……」

「それに、僕だってこの間までの僕じゃない。見てよ、これ」

そういつてジャラジャラとテーブルにぶちまけたのは、全てジェネックスのメダル。僕がやれ店だそれうさぎちゃんだとか言ってる間、ずっと人知れず修行を続けてきたのだろう。

「今日も、元オベリスクブルーのホワイトを1人倒してきたんだ」

「オベリスクブルーを？じゃあ翔、逆に聞くけどさ、なんでまだ迷ってるのさ？」

「え？」

「そりゃ、それだけ嬉しくなさそうな顔してれば嫌でも気づくって」

僕の言葉に、十代も真剣な顔で頷く。

「リスパクトデュエル、か」

「アニキ……」

「お前のデュエルも何回か見てたけどさ、どことなくやり方がカイザーに似てるんだよな。お前の中ではカイザーのリスパクトデュエルはまだ完成してないんだろ？」

「うん、実はそうなんだ。僕はまだお兄さんには遠く及ばないのに、どうすればお兄さんに近づけるのかがわからないんだ……」

何か言おうかと思っただけど、こういったことに部外者が口を出すのは逆効果かと思ひ直す。僕に言わせりや必要以上にカイザーの背中を追いかけすぎて自分のデュエルスタイルを見失ってるようにしか見えないけど、そもそも先代からのちよつかいがあつたとはいえ怒りに任せてモンスターを捨て石にするデュエルをついこの間まで繰り返してた僕がそれを言っても説得力がないだろう。

「まあ、今日明日のうちにデュエルしていくわけじゃないんでしょ？」

ジェネックスは続くんだし、まだまだのんびりやろうよ」

「う、うん」

「気の長い話だな。まあいい、俺はもう部屋に戻る」

万丈目がそう言ったのをきっかけに、その日はそれでお開きの流れになった。結局翔の悩みを解決することはできずにその表情は暗いままだったが、たぶん大丈夫だろう。翔だって案外精神力は強い方なのだ。もう翔の仲じゃ黒歴史だろうけど、なにせこのヒト偽ラブレターに引つかかってわざわざ男子禁制の女子寮まで忍び込む行動力

があるんだから。

「大変だドン、カイザーがエド・フェニックスと正門前で鉢合わせて睨み合ってるザウルス！リベンジマッチが始まるんじゃないのかって学校中大騒ぎになってるから、アニキたちも早く来るドン！」

そんな知らせを剣山が持ち込んできたのが、その次の日。まったく、僕がいくらのんびりって言ってもヘルカイザーの方から何かやらかすんなら意味ないじゃないの。とはいえ、いくらアカデミアが広いとはいえ1つの島の中に本校プラス大会の時から帰らないノース校の皆さん方、それにプラスでわんさかやってくるプロデュエリストだ。これだけ人口密度が上がってれば、そりゃむしろ出会わない方がおかしいといえはその通りだけど。

「ぼ、僕」

「行こうぜ、翔！」

「センキューー剣山！」

僕と十代が走り出すと、若干遅れて翔も駆けだした。ま、これもいい機会といえはその通りか。あとは、これがいい方に転んでくれるのを祈るだけだ。

しばらく行くと、剣山の案内が無くてもすぐに分かった。なにせおなじみの白服軍団の他にも、今話題沸騰中のプロデュエリストかつ因縁の相手である2人のデュエルが見られるかもしれない島の外から来たプロまで一緒になって人だかりを作っていたからだ。当然というかなんというか、クロノス先生とナポレオン教頭の姿もある。仮にも生徒と元生徒に対しその態度はどうかと思わなくもないが、それもあの先生たちらしい。

「お兄さん！」

翔もなんとかしてその人だかりの中に入っというこうとするもの、いかんせん背が低くて力も一般人並みにしかない翔ではデュエリストの中を割って入るのは難しいようだ。見ても仕方がないので後ろから手を伸ばし、人だかりを片っ端から掴んではこじ開けてい

く。僕も見たいから自然と熱が入り、ついうつかりダークシングナーの力を使わないようにこらえながらの作業なので案外骨が折れる。慰謝料的な意味で怪我させたら大変だし。それでもどうにかヘルカイザーが見えるようになってくると、その間に割って入るように翔が飛び込んでいった。

「お兄さん、やめて！リベンジのデュエルなんて、そんなの間違ってるよ！」

「いいや、違うな」

「え……？」

ヘルカイザーは無視。代わりになのかなんなのか、エドが口を開く。

「あの眼を見る。どうやらこの男、僕へのリベンジなんかよりもっと上を目指しているらしい。僕だってそちらにやる気がないのならわざわざデュエルするつもりもない、集まってくれた観客には悪いが一度退かせてもらおうよ」

それだけ言っつていつもの余裕ぶつた態度で一礼し、慌てて人だかりが道を開けた中を悠々と歩き去っていく。と思ったらかすかに、本当にかすかに僕のことを手招きしているのが見えた。そつちを見てた僕だからかろうじて気づけたけど、多分他の皆はヘルカイザーと翔に気を取られて全く見ていなかっただろう。一瞬ためらった後、無言で十代の肩を軽くたたいてエドが歩いて行った方向を指さし、そのままその後を追いかける。どうもこの場所では、このまま翔とヘルカイザーのデュエルが始まるらしい。あつちも見たかったのに。

「来たよー。何の用？」

人ごみから離れた海辺。こんなに波音がする場所にわざわざ連れ込むだなんて、盗聴でも警戒してんのか。

「ここまで来れば、もしマイクが仕掛けられているとしても気休め程度にはなるからな。お前もプロになればこれぐらい嫌でも身につく」

あ、本当に盗聴警戒だった。何かプロの世界の裏事情が垣間見えた気もしたが、本題ではないのでスルー。なにせこのエドのことだ、わざわざ僕相手にプロとしての心構えをレクチャーするためだけに呼



びつけるわけがない。

「……単刀直入に聞こう。齋王について、お前はどこまで知っている？」

「と、いうと？」

こちらの目を覗き込むようにしながら、僕の返答をじつくりと考えるエド。たつぷり30秒ほどそうしてから、スツと視線を逸らした。「どうやら何も知らなさそうだな。そうか、齋王め。僕と十代にはこんなものを渡しておいて、こいつには何もしなかったのか。まったく、新年度から妙に気にしていたからもしやと思っていたんだがな」そうひとりで納得し、とんだ無駄足だったと一人ごちるエド。どうやら、まーた僕が蚊帳の外にいる間に何かあったらしい。もつとも、僕だって稲石さんのゴーストリック・フロストや古井戸のうさぎちゃん、それにペガサスさんからもらったカードのことは誰にも話してないからお互い様といえばその通りだけど。

だけど、それは全部僕の個人的なことだ。一方、光の結社並びに齋王は僕にとっても色々関係がある。おかしくなつた三沢達だけでも元に戻してもらわないと、あの齋王様万歳なテンションと卒業するまで付き合っていけとか言われても困る。

「さて、することもないしもう一度齋王でも訪ねてみるかな。どうせ会わせてもらえないだろうが」

「いやいや、待って待って待って」

本気でその場から立ち去ろうとしたので、さすがにそりやないだろうと慌てて呼び止める。すっごくめんどくさそうな顔で振り向いたエドに対し、ここでうやむやにしてなるものかと問い詰める。

「その話、もうちょっと僕にも教えてよ……ダメ？」

「ああ」

「あ、そ。だったら、悪いけど無理にでも聞きだすさ」

もうこの時点で、僕が何を言いたいのかわかったらしい。不敵な笑みを浮かべ、自分のデュエルディスクを起動させる。ここで断つたりしないあたり、やっぱりこの男も真正のデュエリストだ。

「いつかとは違って手加減はしない……本物のヒーローを見せてや

る」

「デュエル！」

「先攻は僕、か。まあいいだろう、モンスターをセットしてカードを4枚伏せ、ターンエンドだ」

まずはセットからはいるエド。表側守備表示で出せばいいのにわざわざセットなんて、あのモンスターは恐らくリバーズモンスター……それも他の手札をすべて伏せたところから察するに、かなり高い確率でメタモルポッドとみた。

「そうと決まれば、僕のターン！」

メタモルポッドへの対抗策はひとつ。徹底的にこちらの被害を減らし、逆に利用してやるのだ。とはいえ、残念ながらこちらの手札にはモンスターカードが3枚あるためどうしても2枚はそのまま捨てるしかない。とはいえ1枚は墓地にあってこそ力を発揮するキララーブカのカードだ、そこまで痛いわけではない。

「シャクトパス、召喚！」

シャクトパス 攻1600

「さらにカードを2枚伏せて、バトルフェイズ。シャクトパスで……」

「トラップ発動、邪神の大災害！相手の攻撃宣言時、フィールドの魔法及びトラップをすべて破壊する！」

「へ？」

思わず間拔けな声が漏れるが、シャクトパスの攻撃はもう止まらない。モンスターゾーンの周りを不気味な風が吹き荒れ、今伏せた僕のカードとエドの場の伏せカードを消し去りにかかる。

「そうだ、そんなカード使ったらそっちだって……」

「おいおい、まさか策なしで僕が闇雲にカードを伏せたとも思っているのか？それにチェーンして2枚の伏せカード、無謀な欲張りを発動！」

一時的な2枚のドロローと引き換えにその後2回ものドロローフェイズをスキップする大きなデメリットがあるカード、無謀な欲張り。だけどその効果も同名カードを2枚まとめて発動することで、4枚ドロローして2回ドロローフェイズを我慢するだけとなり大幅にお得なコ

ンボになる……！」

「そして今攻撃したカード、おおかたメタモルポッドあたりと読んだらうけど、その考えは浅すぎる」

シャクトパスが無数の触腕を伸ばして四方から伏せモンスターを締め落としにかかるが、カードの裏から2本の野太い岩石の腕が伸びて弾き返す。

シャクトパス 攻1600↓?? 守2700

清明 LP4000↓2900

「は、反射ダメージだけで1100持つてかれた!?!」

「そう。守備力2700、ディフェンドガイだ」

ディフェンドの名が示す通り、リリースなしで召喚できるレベル4モンスターとは思えないほどの岩の巨体が生み出す質量感。この壁を突破するのは、並大抵ではなさそうだ。

「このターン、もう僕に手はない……ターンエンド」

エンド LP4000 手札：4

モンスター：D—HERO ディフェンドガイ（守）

魔法・罫：なし

清明 LP2900 手札：2

モンスター：シャクトパス（攻）

魔法・罫：なし

「僕のターン、無謀な欲張りの効果でドロフェイズがスキップされるためドロはできない……だができる。魔法カード、デステニー・ドロを発動！手札からD—HERO<sup>ディーヒーロー</sup>を捨てることで、カードを2枚ドロする。さらにここで、セメタリーに落ちたディアボリックガイのエフェクト発動！墓地に存在するこのカードを除外する。ここで、デツキから同名モンスターを特殊召喚する。カモン、ディアボリックガイ！」

「うわっ……って、あれ?」

おどろおどろしい筋骨隆々な悪魔のシルエットに、思わず身を固くする。だがそれに反して、正体を現した悪魔はとんだこけおどし程度の能力だった。

D—HERO デイアボリックガイ 攻800

「まあ慌てるな。このデイアボリックガイをリリースし、ダブルガイをアドバンス召喚！」

次いで現れたのは、いかにも英国紳士といったたたずまいの黒服を着てシルクハットをかぶり、ステッキを手に持つ男。その攻撃力も見ただ目通りというかなんというか、デイアボリックガイよりはわずかに上だがぶっちゃけそんなに変わってない。

D—HERO ダブルガイ 攻1000

「そしてフィールド魔法、ダーク・シテイを発動する」

周りから十代のスカイスクレイパーのような摩天楼とはまた少し違う、イギリス風の建物がニョキニョキと生えてくる。霧の町ロンドンということなのか、うすぼんやりと霧がかかってきたせいで細かいところはよくは見えないのだが。

「バトルだ。ダブルガイでシャクトパスに攻撃、デス・オーバーラップ！」

紳士が異様な跳躍力で近くの建物のてっぺんまで飛び上がり、帽子とマフラーの間にわずかに見える冷たい目でシャクトパスの位置を見下ろしてから手に持つステッキで串刺しにせんとばかりにジャンプして落下速度をつけながら迫る。とつさに触碗を伸ばして迎撃しようとするも、なんとダブルガイの背中から霧にまぎれてもう1対の腕が、それも紳士の方とはまるで違う緑色に光るたくましい腕が伸びて無造作にそれを引きちぎる。

D—HERO ダブルガイ 攻1000↓2000↓シャクトパス 攻1600 (破壊)

清明 LP2900↓2500

「まさか、このフィールドって」

スカイスクレイパーとよく似た構図の夜の町型フィールド魔法。そして今のダブルガイの攻撃力倍増。

「そう言えば、このカードを使った時にお前は倒れていたんだっけな。ご想像通り、このカードはディーヒーロー版のスカイスクレイパーとでもいべきカードさ。もつとも、僕に言わせればこちらの方が本家

だがね」

やっぱりか。1000ポイントの補正はなんだかんだいってかなり大きい。アクア・ジェット使いの僕が言うんだから間違いない。もつとも、僕のアクア・ジェットのカードはついさつき邪神の大災害に吹き飛ばされたけど。

だが、こちらだってやられてばかりはいられない。紳士の杖に貫かれたシャクトパスの触碗がびくびくと動き出し、勢いよくその体を感じがらめにする。

D—HERO ダブルガイ 攻1000↓0

「おや」

「シャクトパスが戦闘破壊された時、そのモンスターは鮫の呪いを受ける。攻撃力は0になって表示形式も変更不可、さらに攻撃宣言もできなくなるよ」

「なるほど、これならダブルガイの2回攻撃も使えないな。僕はこれでターンエンドだ」

「…………ドロー！」

デIFエンドガイはともかく、その横には攻撃力0のモンスターが突っ立っているだけだという状況なのに、まるで真剣さを感じさせないエドの態度。嫌でも何か裏があるのかと勘繰らざるを得ないが、い적이がそこにいるのに戦わないというのも変な話である。

「スタンバイフェイズにデIFエンドガイのエフェクトが発動する。このモンスターはリリースなしで召喚可能な中でも5本の指に入るほどの高守備力を持っているが、その代償として相手スタンバイフェイズごとに1枚のドローを許すというデメリットがある。さあ、どうぞ」

「そりやどうも、つと。1枚ドローしてメインフェイズ、オイスターマイスターを召喚。そのままダブルガイに攻撃！オイスターショット！」

オイスターマイスター 攻1600↓D—HERO ダブルガイ

攻0（破壊）

エド LP4000↓2400

確かに攻撃は通った。ダメージも大きい。だけど、全然すかつとしないのはなぜだろう。むしろ、まんまと罠にかかったような気分になる。考えすぎ、だろうか。ダーク・シテイの効果を考えてオイスターマイスターの攻撃力じゃ不安だしブラフでもなんでも伏せカードを用意しておきたいところだけど、あいにく手札にはモンスターカードしかない。だけど、口ではそんなこと言わない。ここで隙を見せたり弱気になったりしたら、もう手はないですって自分からばらしてやるようなものだ。

「これでターンエンド。さ、かかってきな」

エド LP2400 手札：2

モンスター：D—HERO デイフェンドガイ（守）

魔法・罠：なし

場：ダーク・シテイ

清明 LP2500 手札：3

モンスター：オイスターマイスター（攻）

魔法・罠：なし

「僕のターン。まだ無謀な欲張りの効果でドローフエイズは行えずにそのままスタンバイフェイズ、ダブルガイのエフェクトが発動される。このカードは破壊された次のスタンバイフェイズ、ダブルガイ・トークンを2体場に残していくのさ」

エドの言葉に反応するかのように、霧の町を縫って2体の巨人が建物の影からやってくる。粗野な野人といっても過言ではない風体の2人はなんと驚くべきことに、ついさつきダブルガイの背中から一瞬見えたあの緑色の手と明らかに同一人物だった。

ダブルガイ・トークン 攻1000

ダブルガイ・トークン 攻1000

「それとドローフエイズできないぶん、このターンは代わりにこのカードでドローさせてもらう。魔法カード、闇の誘惑を発動！デッキからカードを2枚引き、手札の闇属性モンスターを1体除外する。今回は特に一番もなさそうだし、このドレッドガイを除外するでしょう」

ドローフエイズが行えないことをまるで感じさせない手札交換っ

ぷりは、さすがにプロといったところか。それにしても前回の童実野町でのタッグで使用していた大型モンスター、ドレッドガイを除外してまで手札に残しておきたかったカードとは何だろうか。

「これで良し、だ。僕のフィールドに存在するディーヒーローを含む3体のモンスターをリリースし、このカードを特殊召喚！カモン、ドグマガイ！」

「3体リリース、かあ……」

3体リリース。なんかこう、いつぞやのラビエルといいついこの間のラーだったりアバターだったりといい、どうもこの手の超大型モンスターにはいい思い出がない。きつと今回もろくでもないのが出てくるんだろうな、と半ば諦めていたら、それは現れた。十代のフレイム・ウイングマンがよくスカイスクレイパーのビルのてっぺんで満月をバックに立っているのとちょうど同じような構図で、霧の町を舞台に悪魔の羽を生やした闇のヒーローが威圧感たっぷり、だけどどこか気品あふれる仕草で静かに僕らを見下ろす。

デステニーヒーロー  
D—HERO ドグマガイ 攻3400

「攻撃力、3400……」

「その通り。そのエフェクトはもう少し後でのお楽しみだが、バトルは今からでもできる！オイスターマイスターを粉碎しろ、デス・クロニクル！」

ドグマガイの右腕に鎖で巻きつけられた剣が光を放ち、その体がオイスターマイスターに音すら立てず一瞬で迫る。回避も牡蠣での防御もままならないまま、上段からの斬り下ろしをまともに受けたオイスターマイスターの体が消え去った。

D—HERO ドグマガイ 攻3400↓オイスターマイスター  
攻1600（破壊）

清明 LP2500↓700

向こうの方がはるかに攻撃力は上だったためダーク・シテイによるバンプアップは無かったから、今の攻撃はぎりぎり耐えきれた。オイスターマイスターにはすまないことをしたけど。それはいいとしてあのモンスター、どうやって倒せばいい？

「僕のターンはこれで終了」

「僕のターン、ドロー」

カードを引いた瞬間、エドがかすかに笑みを浮かべた。その瞬間、ドグマガイが羽を広げてそこから黒い閃光が放たれる。僕の体をその闇が覆い、全身から力が抜き取られるような感覚がした。

清明 LP700↓350

「僕のライフが！」

「そう、これこそがドグマガイのエフェクト、ライフ・アブソリュート。自身の特殊召喚に成功した次の相手ターンのスタンバイフェイズのみ発動される、ライフ半減効果。もつとも、元から少ないそのライフではあまり意味もないかな」

落ち着け、落ち着け。ライフ半減と聞けば確かにとんでもないことだけど、350バーンとして考えればぜんぜんたいしたことない効果だ。おまけにあの効果は1回しか使えない、あとはもう目の前にいるのはただの火力馬鹿。まだ戦える！

「永続魔法、アクアリウム・ステージ水 舞 台を発動！」

霧の街のあちらこちらに熱帯の海を思わせるカラフルな岩やイソギンチャクが生え、街並みが水没してさながら水中都市、というかぶつちやけ廃墟のような有様になる。

「さらに、キラール・ラブカを準備表示で召喚。これでターンエンド」

キラール・ラブカ 守1500

今僕の使った水舞台は、フィールドに存在する限り僕の水属性モンスターが水属性以外には戦闘破壊されなくなるという強力な効果を持っている。とにかくこれで1ターンでも時間を稼いで、デイモンシオン・スライドや激流葬といったモンスター除去のカードを引けば……！

エド LP2400 手札：1

モンスター：D—HERO ドグマガイ（攻）

魔法・罫：なし

場：ダーク・シテイ

清明 LP350 手札：2



モンスター：キラール・ラブカ（守）

魔法・罫：水舞台

「そんな消極的な手で時間稼ぎのつもりか？僕のターン、ここから僕もドロローができるようになる。これで、お前はもう終わりだよ」

「なっ!?」

「確かに今、僕の手札にサイクロンなどの魔法・罫除去のカードはない。だが、もうそんなものは必要ない！カモン、ダンクガイー！」

デステニーヒーロー  
D—HERO ダンクガイ 攻1200

どことなくバスケツトボールのプレイヤーを思わせる出で立ちのディーヒーロー。彼が念を込めるとその右手に、光のボールが生まれた。それを持ったままこちらに突進してきて、ラブカの頭上高くにジャンプしてから僕に向けて叩き付ける。

「ダンクガイは手札からディーヒーローを1体捨てることで、相手プレイヤーに直接500のダメージを与えることができる。そして僕はこのエフェクトで、手札のディパーテッドガイを捨てる！」

「これは……」

清明 LP350↓0

「まったく、てんで話にならないね。その程度の実力で、むしろよくこのジエネックスを生き延びてくれたものだ」

何も言い返せない。僕は負けた。それも見事なまでの完敗だ。唯一与えることができたオイスターマイスターの攻撃さえも、ダブルガイ・トークンを生み出すための罫として掌の上で踊らされていただけにすぎない。

「だいたい、本来ならばひとつ前のターンで攻撃力10000のディパーテッドガイを通常召喚していればドグマガイと合わせての攻撃でもっと早く勝負はついていたんだ。十代のようなドロロー力でも見せてくれるのかと思ってわざわざタータン待ってやったというのに、できたことがあんなつまらない手での延命とはな」

「……………」

「最後に1つだけ忠告しておこう。お前じゃ足手まといにしかならないから、斎王に正面切つて刃向うのはやめておくことだな」

それだけ言つて、今度こそ歩き去つていくエド。最後の一言は、彼なりの優しきのもりなんだろう。この間タツグデュエルした時から思つてたけど、案外エドも最初のころの印象より悪い奴ではないのかもしれない。

だけど、その一言は僕にとつちや完全に逆効果だ。こんなところで立ち止まっていたら、何も取り戻せない。手放したくないものがあるなら、自分で掴み取ればいい。それができないと、それは自分のせいではないと自分に言い聞かせながら生きていくことになる……エドがあの時僕に向かつて、そしておそらく自分に向けても言った言葉だ。そんな人生を送るのは、少なくとも僕はまっぴらごめんだ。年下相手に人生を教わるのも癪だけど、言つてることが正しいのなら反発することもない。確かに今はまだ僕も力不足だけど、これからもっともっと強くなる。なつてみせようじゃないの。エドへのリターンマッチはその後でいい。

だけどとりあえず、今できることは自分の負けに對しけじめを示すことだろう。ポケットから僕が最初にもらったのとフランクツから奪ったジエネックスのメダルを引つ張り出して、エドの後姿に投げつける。あ、くそ、当たんなかった。もうちよいしっかり頭狙つて投げればよかった。

「覚えてなよ、次は勝つからね！」

何も言わないエド。だけど、ほんのわずかに彼が笑つたような気がした。

## ターン65 鉄砲水と移動砲台と侵略者

「翔、大丈夫？」

「ああ、今は部屋で寝てるはずだぜ」

「そう……お休み、十代」

「ああ、また明日な」

エド相手にこっぴどくやられてから戻ってくると、翔がヘルカイザー相手にこっぴどくやられていた。十代の話によると、最後まで一歩も引かずに戦い抜いたらしい。なんでも、受けたダメージがそのまま電流になって体を走るとかい言う闇のゲームを科学の力で再現したような変態兵器を用いてデュエルしたらしい。今ヘルカイザーが立っている、そして見据えているその先とやらが僕にはさっぱりわからない。

「ま、人のことばっかり心配してられない、か」

冷たいようだけど、そもそもヘルカイザーのデュエルをまだ見たことがない僕では何のアドバイスもできやしない。それに、僕だつてそろそろ目を背け続けてきた現実に向き合うべき時が来ているのだ。

「……………」

誰もいなくなった食卓机に、自分のデッキを1枚1枚確かめるようにして置く。思えばこのカードにも、このカードにも、僕は何度も助けられてきた。

だけど、それだけじゃもうだめなんだ。今のデッキのままだと、もうこの学校のペースには付いていけない。今日のエド戦は、それを僕に改めて思い知らせてくれた。組み換えよう、デッキを。水属性で戦う基本コンセプトは変えないままに、よりデッキパワーを高めよう。

もつとも、そんなふうにまくいくなら苦労しない。デッキを組み替えるということは、当たり前だけどこれまで使ってきたカードをデッキから抜くということ。稲石さんのフロストやうさぎちゃんみたいの1枚単位ならともかく、デッキそのものを見直すような改革となると、これがなかなか難しい。あーでもないこーでもないと考えていると、ふと気づけば夜中の2時を回っていた。

「……ハア」

水道水でも飲もうかと、席を立つ。するとその時、2階の方からかすかに何か動く気配がした。こんなところに入って得する泥棒がいるとは間違っても思えないので最初は気のせいかとも思ったが、もう1度気配がしたのもしかして島の外から来た人がうちの貧乏っぷりも知らずに物色しに来たのかもしれないと思い直す。とりあえず台所にあつた麵棒を掴み、足音を殺してそろそろとドアの前で待ち伏せる。

数秒後、食堂のドアノブがカチリ、と回転した。ギリギリまでひきつけておいてから、麵棒を振り下ろす！

「せりゃーっ……あれ、何やってんのこんな夜中に」

「そ、それはこつちのセリフだ！殺す気かお前は!!」

見命中する寸前に慌てて手を止める。なぜなら、そこにいたのが万丈目だったからだ。まあでもそりゃそうか、一目見ただけでブル、イエロー寮と比べても明らかに貧相なこの寮に入る泥棒なんざ初見でもいるわけないね。

「単に水を飲みに来ただけだ。で、お前こそ何やってるんだ？もう2時だぞ」

「ちようどいいや、万丈目。万丈目には明日相談しようと思ってたんだけど……」

かくかくしかじかと説明し、全部聞いたうえでの第一声がまず、

「なるほど、事情は分かった。で、なんで俺なんだ？」

「え？」

「え？じゃない。別に俺じゃなくとも、十代あたりに相談すればいい話じゃないか。相談に乗ってやるのはやぶさかではないが、なぜわざわざ俺をピンポイントで狙ってきた？」

本気で不思議そうな万丈目。だけど、そんなの決まってる。

「デッキ強化の方法として宇宙行って未知のカード拾ってくるような相手に何相談しろってのさ」

「ああ……うん、そうだな」

「わかってくれて嬉しいよ。んで、どうするのがいいかな？」

お互いに理解しあえたところで、改めて聞いてみる。

「デツキ枚数を減らせ」

「……それ以外でお願い」

「面倒くさいなお前は」

うん、悲しいことに自覚はしてる。いつそのこと、僕もテーマデツキに手を出してみようかな。そんなことを考えたその時、地面が大きく揺れた。

「な、なに!?!」

「地震か?……いや、違うな。外だ」

『んもーアニキったら、なんなのよ一体。うるさいから起きちやつたじゃない』

ふわふわと目をこすりながら眠そうにやってきたお ज्याマ・イエロー。その体をわしづかみにして、有無を言わず言いつける。

「俺も知らん、見に行くからお前もついて来い。行くぞ、清明」

「もちろん!」

で、早速外に出てみたのだが。そこには予想よりもはるかにぶつ飛んだものが地面に突き刺さっていた。

「えーつと……」

「なんだなんだ!?!」

「どうしたんだ!?!」

そのとんでもないものとは、あえて表現するならすごく正統派なデザイン(UFO)である。そんな現実の斜め上にすっ飛ばしていったようなものを前にどうしようか本気でわからなくなって固まっていたと、校舎の方から白服の2人が同じく走ってきた。あれ、野郎の顔なんざ興味はないから今一つ自信はないけど、あの2人はどっかで見たことあるような。

「お前はオシリスレッドの遊野清明!」

「それに、裏切り者の万丈目準!」

「万丈目さん、だ!お前ら、確か中野に野中、とかいったな」

「あれ、知り合い？」

そう聞くと、険しい顔でああ、と頷く。気のせいか一瞬、UFOの近くで3つの影が動いたような気がした。万丈目が離し始めたころにはまた見えなくなつたから、たぶん気のせいだろう。

「お前にも見覚えがあるはずだが、こいつらは今年のノース校との対抗戦前にお前と河風夢想の邪魔をして俺が葵・クラディーとデュエルをしている間の時間稼ぎをしていた奴らのうちの2人だ」

ああ、なんかちよつと思ひ出した。確かにいたなあ、そんな3人組。3人のそれぞれが攻撃、妨害、回復の3つの要素を担当して襲い掛かるコンビネーションはなかなか強烈で、夢想がいなくちゃ僕も危なかつた覚えがある。ただまあ所詮は3人1組で強い若干インチキ臭いデュエルスタイル、裏を返せば1人1人はそれほどでもなかつた。しかも、今はそのうちの2人しかいないわけだしね。

「光の結社を裏切つたお前に呼び捨てにされるいわれはない！そうか読めたぞ、このへんてこなものもお前らが作つたんだな？」

「前は不覚を取つたが、今はあの化け物女はいない！今すぐここでぶちのめして俺たちも光の結社幹部コース入りだ！行くぜ、中野！」  
「もちろんだ！デュエルディスク、起動！」

「フン、相変わらず人の話を聞こうともしない奴らだ。前々から鬱陶しかつたが、味方でなくなるとこここまでとはな。ここらでお灸をすえてやろう。おい清明、タツグデュエルで片を付けるぞ」

「そーだそーだ、だいたいレッド寮にこんな大それたもん作る金があるわけないじゃない！……まあいいや、それじゃ、タツグデュエルと洒落込もうかね」

そう言いつつ、万丈目に合わせてきつとデュエルディスクを起動する。やっぱりデツキだつて実戦じゃないと見えてこないこともあるよね。

その様子を見て、起動とか言っておきながらデュエルディスクを動かさなかつた2人もワントンポ遅れて2人もデュエルディスクを起動した。だけど、その様子がおかしい。なんだか2人とも体中が小刻みに震えていて、表情もさつきまでのやかましいながらに元氣そうな

ものから一転してぼんやりした無表情になっている。そもそも、この時期の学生にしては異様に起動の動作がぎこちない。まるで、今初めて見たものを見よう見まねで動かしているかのような。

その違和感は万丈目も覚えたらしく、いささか不気味そうに2人の方へ視線をやる。その一瞬だけで、『彼ら』には十分だったのだろう。足元が何かひんやりしたものに包まれた、と思っただらあれよあれよという間に全身が氷のような寒気に包まれていく。せめて万丈目に警告しようと思っただけ、それすらもできない。僕の体なのに、完全に僕のものではなくなってしまったようだ。

仕方がないので最後の手段としてチャクチャルさんに心の中で通信を、としたところで、普段聞きなれたチャクチャルさんとは違う声が頭の中に響いた。

『すいませんすいませんっ、いやほんと申し訳ないです！ごめんなさいごめんなさいその人、すぐ済みますからここは大目に見てくださいー！』

あ、いい人(?)だ。声を聞けば分かる、間違いなくこれは悪人(?)じゃない。少しだけ警戒心を解くも、それでも体が動かないことに変わりはない。とりあえずコミュニケーションが取れることが分かっただけでもよしとするか。

「(えっと……………どちら様で?)」

『ごめんなさい申し遅れました、わたしたちはグレ……………ああっ、少しだけ待ってくださいいけません、今ちよつと追われているところなんです！あの人たちに憑りついてるのが私を追いかけてここまで来てるんですけど、あなたデュエリストですよ、少し体借りますごめんなさいー！』

「おい、清明！どうしたお前までそんなにぼさつとしてーほら、はじめるぞー！」

「あ、ああ……………」

何が言いたいのかさっぱり要領を得ないうえにまだ僕は喋ることすらできない。だけど、どうやら野中と中野も今は何かに乗っ取られてるらしい。……………実質まともな人間が万丈目1人しかいない

じゃないの。

「デュエル！」

「……………」

「なんだかやりづらいな、本当にお前らどうしたんだ？まあいい、まずは俺のターンだ。魔法カード、予想GUY<sup>ガイ</sup>を発動！自分フィールドにモンスターが存在しない時、デッキからレベル4以下の通常モンスターを特殊召喚できる。来い、V-タイガー・ジェット！」

虎を模した戦闘機が、後ろ足型のジェット機から火を噴きつつ万丈目の前でホバリングする。

V-タイガー・ジェット 守1800

「さらに俺は、W-ウィング・カタパルトを通常召喚！」

W-ウィング・カタパルト 攻1300

これでV、そしてWの2体がフィールドに揃った。あとはこのまま除外すれば、融合モンスターであるVW-タイガー・カタパルトを特殊召喚することができる。先攻1ターン目から手札消費2枚で融合召喚とは、さすがに万丈目は実力者だ。

「ゆくぞ、ユニオン合体！Wは1ターンに1度、自分フィールドのVに合体して攻守を400ポイント上げることができる！」

タイガー・ジェットがウィング・カタパルトの上に陣取り、互いに磁気のようなものを放ちつつ2つの戦闘機が上下に合体する。

V-タイガー・ジェット 守1800↓2200

「カードを1枚伏せ、ターン終了だ」

「ドロー……………」

陰気くさい口調と死んだ目でつぶやきながら、中野がずっとカードを引く。録に見もしないまま、そのカードをモンスターゾーンに乱暴に置いた。

エーリアン・ソルジャー 攻1900

「エーリアンだど？おいお前、そんなデッキだったか……………」

万丈目の疑問は、誰にも届かない。しようがない、実質万丈目だけが蚊帳の外状態なんだから。

「こう、げき」



エーリアンの上級戦士が、すらりと伸びた銀色の剣を振りかざす。攻撃力の低いモンスターによる攻撃は一見無謀でしかないが、さすがにただ単に自爆しに来たわけではないようだ。

「はっ、どう」

タイガー・ジェットに向け駆けるソルジャーの足元の影が大きく膨れ上がり、ソルジャー本体を呑み込んで一回り大きなサイズになる。そのまま勢いは殺さずに突っ込んできたその一撃は、体が大きくなったのに比例して破壊力が増している。

エーリアン・ソルジャー 攻1900↓2900↓Vータイガー・  
ジェット 守2200

Vータイガー・ジェット 守2200↓1800

エーリアン・ソルジャー 攻2900↓1900

「なるほど、速攻魔法の虚栄巨影を使用して攻撃力を1000ポイントアップさせたか。だがユニオンモンスターは装備状態の時、戦闘破壊の身代わりにできる！ウイング・カタパルトをパージしてその破壊から身を護れ、タイガー・ジェット！」

万丈目の指令に従い、体の下にあつたウイング・カタパルトを切り離して辛くもその太刀から身をそらすタイガー・ジェット。勢いの止まらない剣は、地面に落ちた青い戦闘機を両断したのみにとどまつた。

『おおー。あなたの相棒さん、かなりのタクティクスですね！次の反撃を予想してあえて融合しないなんて、すごいです……って、すみません急に馴れ馴れしくしちやって！怒らないでください、次は私のターンですから！』

「(いやま、それはいいんだけどさ)」

「魔法、はっ、どう。「A」細胞増殖装置。エンド」

なにやら不気味な、無数のコードが伸びたガラスの筒のようなものがフィールドにでん、と置かれる。筒の中はなにやら液体が満たされているようで、無数の気泡が常に立ち上っている。細かいところまでは半透明なためよく見えないけど、何か今筒の中で何か生き物みたいなものが動いたような……？

万丈目&清明(?) LP4000

モンスター：V―タイガー・ジェット(守)

魔法・罨：1

中野(?)&野中(?) LP4000

モンスター：エーリアン・ソルジャー(攻)

魔法・罨：「A」細胞増殖装置

「では、ドローします」

「お、おい清明……?なんだその喋り方は」

「すいませんすいません、後でまた説明しますから！永続魔法、グレイドル・インパクトを発動！さらにモンスターカード、グレイドル・コブラを召喚します」

「おい！なんだそのカードは、お前のデッキにそんなカードは入っていないはずだ！」

おかしい。これが僕の体である以上、あるのは僕のデッキのはずなのに。グレイドルなる聞いたこともないテーマのカードに、体がほんのりと赤いコブラ。どこか非生物的な何かを思わせるその目が、月の光を浴びて妖しく光った。

「タイガー・ジェットを攻撃表示にしてここで伏せカード、ゲットライド！を発動して、墓地のWをフィールドのVにユニオン合体させます」

再び地中から戦闘機が砂を巻き上げながら発進し、空中のタイガー・ジェットとユニオン合体を果たす。これで再び攻守400ポイントアップだ。

V―タイガー・ジェット 守1800↓攻1600↓2000

「バトルします、タイガー・ジェットでエーリアン・ソルジャーに攻撃！」

V―タイガー・ジェット 攻2000↓エーリアン・ソルジャー

攻1900(破壊)

中野(?)&野中(?) LP4000↓3900

「そのままグレイドル・コブラでダイレクトアタック！」

グレイドル・コブラ 攻1000↓中野(?) (直接攻撃)

中野(？) & 野中(？) LP3900↓2900

攻撃を受けたというのに、まったく反応がない2人。改めて、不気味だ。

『すみません勝手に心読んじやって、これ終わったらすぐ出ていきま  
すから許して下さい！で、でも1つ捕捉させていただきますと、あの  
2人に憑りついていているヒトたちはあまり憑りつきとかそういうのに  
慣れていないんですよ。いつもの自分の体とはだいぶ使い勝手が違  
うから困っているんだと思います』

「(キミはえらく得意みたいだね。全然片言じゃないし、体もスムーズ  
に動かしてるし)」

『えへへ、それが私たちの生きる道ですから。って今ちよつと私調子  
乗ってましたねこんな偉そうなこと言える立場じゃないのにすいま  
せん！』

謝るだけ謝って、また体の操作に取り掛かるグレイドルさん(仮  
称)。なんとというか、目まぐるしい。

「カードを1枚伏せて、エンドフェイズにグレイドル・インパクトの効  
果を発動します。エンドフェイズにデッキからグレイドルのカード  
を1枚サーチしますね。ドール・コール！来てください、グレイドル・  
アリゲーター。さあどうぞ、悪いですがあなた方の恨みはてんで的外  
れです。お願いですからもうわかってください」

「ふざけるな！お前だ、お前が我々の仲間を！」

いまだ片言の中野に憑りついた方とは違い、野中に憑りついた方は  
これまで一言も喋らずに野中の体の動かし方をモノにすることにの  
みひたすら集中していたらしくその喋りはグレイドルさんに比べれ  
ばぎこちないもののそれなりに聞けるものにはなっていた。

「何を言っても無駄です本本当に、だったら少し頭冷やしてあげます  
からかかってくるなさい」

「だまれ！スタンバイフェイズ、増殖された「A」細胞がタイガー・  
ジェットに乗り移る！」

増殖装置の上部のふたが開き、その隙間からぬらぬらと月光を反射  
する目の生えたぶよぶよした肉の塊のようなものが飛び出る。それ

は体に生えたかぎ爪のような触手のようなものを振り回しながらびちやり、と気色悪い音を立ててタイガー・ジェットの右前脚部分にしがみつきの、金属製のボディに根を張るかのごとく触手を這わせてしがみついでいく。

V—タイガー・ジェット Aカウンター0↓1

「そして、ワーム・ゼクスを通常召喚。このカードは召喚成功時、デッキから同法の爬虫類族モンスターを墓地へ送ることができる。ワーム・ヤガンを墓地に送り、墓地からヤガンの効果発動！自分フィールドにゼクス1体しか存在しない時、墓地から裏側守備表示で特殊召喚できる」

ワーム・ゼクス 攻1800

??? (ワーム・ヤガン)

「バトルだ！ワーム・ゼクスでグレイドル・コブラに攻撃！」

緑色の地面にへばりつく十字のような形をしたモンスターが、平べったい体を伸び縮みさせるようにして猛烈なスピードで赤いコブラの近くまで移動する。一瞬のためののち、わっと飛びかかって体の中央にある口でコブラの上半身をいっぺんに食いちぎった。

ワーム・ゼクス 攻1800↓グレイドル・コブラ 攻1000(破壊)

万丈目&清明(?) LP4000↓3200

自分のモンスターが破壊されたというのに、グレイドルさんは慌てない。それどころか、僕の顔を使ってニヤリと笑ってさえている。よく見ると食いちぎられたコブラも変だ。普通モンスターが戦闘破壊されたらさつさと光になるなり爆発するなりして消えるのに、なぜか血の一滴も出ていない銀色の切断面はまるでスライムか何かのようにツルンとしている。そしてその首なしの蛇が、ゆっくりとまるで目が見えているかのように正確な動きで残りの体も全部ゼクスの口の中に飛び込んでいく。

「(うわっ!?)」

『ごめんなさい説明遅れましたけど気持ち悪いとか思わないでくださいお願いします、私たちにとってはこれでいいんです！』

あいかかわらず落ち着きなく僕にそう弁解し、また僕の体でパツと野中に向き直るグレイドルさん。なんだろう、ちよつと見てて面白くなってきた気がする。

「グレイドル・コブラが戦闘破壊されたことで効果発動……相手モンスター1体に憑りつき、その装備カードとなってコントロールを頂きます。今のあなたの場に存在する表側表示のモンスターは1体、ゼクスはこちらで預かりましょう」

何と緑色だったゼクスの体に銀色の模様が内側から浮かび上がり、その直後にゼクスが体の向きを変えて僕らのフィールドの前まで来た。なるほど、攻撃力1000のモンスターをなんの伏せカードも伏せずに出したのは、最初から破壊されることを狙っていたからなのか。

「なるほど、厄介だな。しかしわが同胞、必ずや取り戻す。カードを伏せてエンドだ」

万丈目&清明(?) LP3200

モンスター：V―タイガー・ジエツト(攻・W)

ワーム・ゼクス(攻・コブラ)

魔法・罨：グレイドル・インパクト

W―ウイング・カタパルト(V)

グレイドル・コブラ(ゼクス)

中野(?)&野中(?) LP2900

モンスター：??? (ワーム・ヤガン・セット)

魔法・罨：「A」細胞増殖装置

1(伏せ)

「俺のターン、ドロ。なんかお前ら本当に変だぞ、体調でも悪いのか？まあいい、ウイング・カタパルトのユニオンを解除して特殊召喚、そして自分フィールドのVとWをゲームから除外し、融合召喚！来い、VW―タイガー・カタパルト！」

VとWが合体を解除して螺旋を描くようにぐるぐるとまわりながら上空へと駆け上り、はるか高くで1道光を放ったかと思うと再び合体して地上に降りてきた。一見すると何一つ変わっていないように

見えるが、少なくともさっきまでくつついていた「A」細胞の姿も  
うそこにはなかった。

「甘い！トラップ発動！」

「なに、奈落の落とし穴だと!？」

せつかく融合合体したマシンも、奈落に引きずり込む落とし穴の前  
には無力だ。さっきまでの活躍が嘘のようにあっさり消えていく  
融合モンスターを一瞥して、すぐに次の手を打つ。

「ならば、モンスターを1体セットだ。そしてバトルフェイズ、ゼクス  
で裏側のヤガンに攻撃！」

「ヤガンの守備力は1800のため破壊されず、さらにヤガンが表に  
なった時相手モンスターを1体手札に戻す」

ワーム・ゼクス 攻1800↓??? 守1800

どことなくYの字のシルエットをした黄色いワームが、ゼクスの噛  
みつきを辛うじて払いのける。だが万丈目の目に慌てた感じはない。  
それどころか、笑ってさえ見せた。

「そんなことはわかっているさ、だがこれでヤガンの効果は使わせた。  
さあ、どちらのモンスターをバウンスする？」

「何？」

「俺は今、ヤガンの効果を承知したうえでこのモンスターをセットし  
た。この意味をよく考えてから、バウンス対象は選ぶことだ」

なるほど、これはえげつない精神戦だ。万丈目の言葉が単なるハッ  
タリなのか、それともあの伏せモンスターがリバース効果持ちのカー  
ドなのか。僕にもその本当のところはわからない。やがて迷いなが  
らも、野中……に憑りついた何かモンスターのうち片方を指さす。

「帰って来い、ゼクスよ」

「なるほど、俺のモンスターを残す方を選んだか。まあ構わん、カード  
を1枚伏せてターンエンドだ」

果たしてこれが吉と出るか、凶と出るか。ただ次のターンプレイ  
ヤーである中野に憑りついた奴にとっては、こういった複雑な読み合  
いはあまり好きではないらしい。

「ドロー」

スタンバイフェイズにはなったが、こちらのフィールドに表側モンスターが存在しないため増殖装置の蓋は開かない。筒の中でもぞもぞと先ほど見た細胞がうごめいているのを横目に見ながら、ソルジャーに次ぐ2体目のエーリアンがヤガンの隣に現れる。

「召喚、エーリアン・ウォリアー。ヤガンも攻撃表示に」

灰色の体をした筋骨隆々のエーリアン。剣を使うソルジャーとはまた違った、いかにも格闘戦士という見た目である。

エーリアン・ウォリアー 攻1800

ワーム・ヤガン 守1800↓攻1000

「ウォリアー、ヤガンで攻撃」

「むっ、恐れずに突っ込んできたか。これはどうしようもないな。諦めろ」

『ひ、ひどいわよアニキー！いやー!!』

エーリアン・ウォリアー 攻1800↓??? 守1000 (破壊)

文句の叫びとともに、完全にブラフでしかなかったおジャマ・イエローがあっさり引き裂かれる。がら空きになった万丈目を、ヤガンの一撃がとらえた。

ワーム・ヤガン 攻1000↓万丈目 (直接攻撃)

万丈目&清明(?) LP3200↓2200

「ちっ、一撃喰らったか」

「(万丈目!)」

『あああもとはといえば私のせいであたのご友人さんにまでご迷惑かけてごめんなさい!』

「(い、いやそんなに謝らなくても大丈夫だから、ね?)」

「セット。ターン、エンド」

万丈目&清明(?) LP2200

モンスター：なし

魔法・罫：グレイドル・インパクト

1 (伏せ)

中野(?) & 野中(?) LP2900

モンスター：ワーム・ヤガン (攻)

エーリアン・ウオリアー（攻）

魔法・罨：「A」細胞増殖装置

1（伏せ）

「私のターン、ここで先ほどの布石を使いますね。グレイドル・アリゲーター召喚！」

地面に銀色の染みが広がったかと思うとそれがみるみるうちに質量を増して銀色の水たまりとなり、ぶくぶくと泡立って緑色のワニのような姿になる。

グレイドル・アリゲーター 攻500

「またステータスの低いモンスターか」

「そして永続魔法、グレイドル・インパクトのさらなる効果を発動します！このカード以外のグレイドル1枚と相手フィールドのカード1枚、その伏せカードを選択して破壊する、グレイ・レクイエム！」

アリゲーターが飛びかかり、伏せカードを大きな口で噛み砕く。だがその寸前伏せカードが持ち上がり、ウオリアーの体がいきなり数倍にも膨れ上がって音もなく爆発した。

「惑星汚染ウイルス、活動開始。味方以外のAカウンターが乗った全生命体を駆逐し、その後もウイルスが相手フィールドに3ターンの間とどまりあらゆる生命体に寄生する」

野中の暗い声をバツクに、こつぱみじんになったウオリアーの肉片が空中でもぞもぞと動き出す。ふわふわと空中を漂うそれにはどれも目があり触手があり、空中に漂うためか羽のような形状のおぞましい部位がついていた。

「私のグレイドルコンボが封殺されましたか……」

「落ち着け、清明。俺のセットカードだ、こんなこともあるのかと用意しておいてよかった」

「セットカード？……なるほど、ありがとうございます。リバーズ

カードオープン、ディファレント ディメンション リバイバル D・D・R！手札1枚をコストに、除

外されたモンスターを特殊召喚してこのカードを装備です。VW―タイガー・カタパルトを再び召喚、そのままヤガンに攻撃！」

「ウイルス、感染」



「覚悟の上です！」

フィールドを不気味な細胞が支配する中、空のかなたから無数のミサイルが放たれて黄色のワームを一瞬で燃えカスに変える。遅れて、2台の戦闘機が融合を果たしたマシンが戦場に参戦した。だが、その全身にA細胞が侵食していく。

VWータイガー・カタパルト 攻2000↓ワーム・ヤガン 攻1000 (破壊)

中野 (?) & 野中 (?) LP2900↓1900

VWータイガー・カタパルト Aカウンター0↓1

「自身の効果で特殊召喚されたヤガンは、フィールドから離れるとき除外される……」

「そうですね。破壊効果を発動したターン、インパクトはサーチ効果を使用できません。ターンエンドです」

「ゼクス、ヤガン、お前たちの仇はきつととる……!ドローだ。スタンバイフェイズにA細胞が増殖されるが、この手札なら意味はないな」  
怒りに燃える野中が、自身の变化したデッキからカードを引く。よほどいいカードを引いたらしく、口の端が笑いに歪んだ。

VWータイガー・カタパルト Aカウンター1↓2

「魔法カード、ワーム・コールを発動。自分フィールドにモンスターが存在しないならば、手札のワーム1体を裏側守備表示で特殊召喚することができる。俺はこの効果でレベル7、ワーム・ヴィクトリーをセット。そして魔法カード、太陽の書を発動！」

「(自分で伏せて自分で反転?)」

『これは……ごめんなさい私のさっきのコンボが決まらなかったせいで、今割とピンチです』

相変わらず平謝りしながらも、グレイドルさんの声にはいささか緊張の色が見える。そうか、今そんなにきついのか。……ふむ。

「ワーム・ヴィクトリーはリバースした時、ワーム以外の表側表示モンスターをすべて破壊する!吹き飛ば、タイガー・カタパルト!」

「何!? 貴様、俺のウイルスコンボを阻害する気か!」

「何か勘違いしているようだが、お前とは今回たまたま利害が一致し

ただけでいちいちお前のデッキの都合に合わせるつもりはない。ヴィクトリー、その鉄くずを握りつぶせ！」

微妙な仲間割れを尻目に、赤い体に6本腕を持つ全身粘液で光る爬虫類とは名ばかりの異星の生物の指が戦闘機の鋼鉄のボディをまとめて掴むと、ほとんど力を入れた様子もなくそのまま驚異的な握力で握りつぶした。

「だがこれだけではない。ヴィクトリーの攻撃力は、墓地に存在する爬虫類ワームの数の500倍となる。今のままでは攻撃力0というところだが、このカードを使えばどうなると思う？魔法発動、スネーク・レイーン！手札1枚をコストに、デッキから爬虫類族モンスターを4体墓地に送る！」

「(4体!?それじゃあ最高で……)」

『口をはさむようで申し訳ありませんが、今手札コストにしたのもワームモンスター、デイミレクスですね。どどどどうしましょうあれもこれも私のせいで、本当なら先ほどのターンで私が華麗に勝利しているつもりだったんですけど失敗しちゃってすいません〜!』

つまり、一気に墓地にモンスターが5体も増えることになる。どうすることもできずに僕らが見ている前で野中は、デッキから抜き取ったイーロキン、アポカリプス、テンタクルス、ホープの4枚をこれみよがしに見せびらかしつつ墓地へ1枚ずつ送り込んでいく。

ワーム・ヴィクトリー 攻0↓2500

「デイミレクス、イーロキン、アポカリプス、テンタクルス、ホープ」

選出だな」

憎まれ口をたたく万丈目も、目の前の圧倒的攻撃力を前にその表情は険しい。っていうか、DEATH<sup>死</sup>、ね。恥ずかしながら全っ然気づかなかったぞ僕。敵ながら、なかなか洒落たことやってくれるじゃないの。

などと感心している暇はない。グレイドルさんが何をやらかした、あるいはやらかしたと思われるのかはとにかくとしてもやられているのは僕と万丈目だ。なら、このままやられたら僕らにとってはまさにやられ損以外の何でもない。

「(ねえ、ちよつと!)」

『もうこれは駄目ですかね、ごめんなさいすいません私のわがままに無理やり付きあわせたりして……』

「(いいから聞いて!なんで手札もまともに見ようとしないのさ、悪いけどちよつと体返してもらおうよ!)」

『へ?あ、あの……?』

ちなみにこの会話がだいたいコンマ5秒といったところ。チャクチャルさんと話す時もそうだけど、頭の中で会話するときはなんだか妙に時間が流れるのが遅い。もつともそのおかげで、こうやって作戦を立てることもできるんだけど。

「これで終わらせる!ヴィクトリーでダイレクトアタック!」

「いいや、まだまだデュエルは続けるさ!直接攻撃宣言時、手札からゴーストリック・フロストの効果発動!攻撃モンスターをセット状態にして、このカードを裏側守備表示で特殊召喚!」

ヴィクトリーの縦横無尽なパンチの連打が届く寸前に目の前にずどんと落ちてきた雪玉が、うまいこと一時的にはいえヴィクトリーを押しつぶす。驚いた様子の万丈目に対し、どうにか笑いかける。むう、やっぱりに急にコントロール取り戻したからか今一つ体の反応が鈍い。

「ふうー、危ない危ない。ごめんね万丈目、迷惑かけて」

「な、なんだいきなり。……だが、いつものお前に戻ったようだな。あとで何があったのか教えてくれ」

「前向きに考えとくね。とりあえず、次のターンはよろしく万丈目」

僕のこととは本当にただの時間稼ぎでしかない。フロストの相手を裏側守備表示にする効果が仇となり、次に相手にターンを回したらもう1度ヴィクトリーのリバーズ効果を使われてしまう。だから、万丈目がいかにしてヴィクトリーを処理するかにかかっているのだ。

万丈目&清明(?) LP2200

モンスター??? (ゴーストリック・フロスト)

魔法・罫:グレイドル・インパクト

備考:惑星汚染ウイルス感染中

中野(?) & 野中(?) LP1900

モンスター:???(ワーム・ヴィクトリー)

魔法・罨:「A」細胞増殖装置

「よろしく、か……ああ、任せておけ。だが、1つ訂正させてもらおう。俺は万丈目、サンダーだ！俺のターン、ドロー！」

何か秘策があるのか、いつも通り自身に満ち溢れた様子でカードを引く万丈目。

「魔法カード、黙する死者を発動。これにより、俺の墓地に存在する通常モンスター1体を守備表示で特殊召喚することができる。甦れ、おジャマ・イエロー！」

『またまたアタイの出番なのね？今度こそ活躍させてもらおうよ！………て何よこれ!?こんなフィールドにアタイを呼ぶなんて、アニキの人でなし!!』

先ほど戦闘破壊されたイエローが再び復活する。だけど、その体にも対象を選ばない節操なしな汚染ウイルスは付着する。

おジャマ・イエロー 守1000 Aカウンター0↓1

「そんな雑魚モンスターをフィールドに揃えたところで、私のヴィクトリーは守備力2500。どうあがいたところで勝てはしない！」

「誰がこの雑魚で戦うと聞いた？俺はフィールドのおジャマ・イエローと、ゴーストリック・フロストをリリースしてアドバンス召喚！」

出でよ、ライトアンドダークネス・ドラゴン光と闇の竜！

『アタイの出番これでおしまいなの?!』

2体のモンスターをリリースして召喚されたのは、ずいぶん久しぶりに見る万丈目の切り札の1枚。体のきっかり半分がしみひとつない純白、もう半分はこれまた一切の妥協がない漆黒に色分けされた白黒の竜。特殊召喚できないというデメリットを補って余りある、圧倒的な制圧力を誇る2色のドラゴンだ。

光と闇の竜 攻2800 Aカウンター0↓1

「なるほど、アドバンス召喚で最上級モンスターを出してきたか。だが、そんなことをしたところでヴィクトリーに攻撃すれば実質的に相打ちに持ち込める！」

「ならば貴様の言う通りになるかどうか、試してやろうじゃないか。バトルだ、光と闇の竜でワーム・ヴィクトリーに攻撃、シャイニングブレス！」

「ヴィクトリーは戦闘破壊されるが、リバーズ効果発動！フィールドのワーム以外のモンスターをすべて破壊だ」

真っ白い光のブレスが放たれ、ワームの強者を一瞬で薙ぎ払う。苦し紛れに伸びたヴィクトリーの腕がその首を締め落とさんと腕自体に意志があるかのような正確さでドラゴンの首を狙うが、その腕を尾の一撃でたたき落とす。

光と闇の竜 攻2800↓???(ワーム・ヴィクトリー) 守2500  
(破壊)

光と闇の竜 攻2800↓2300 守2400↓1900

「バカな!」

「これこそが光と闇の竜の効果だ。チェーンブロックを作るあらゆる効果の発動を、自身の攻守を500ポイント下げることによって強制的に無効化する」

「お前、あれだけ偉そうなこと言って、この結果がこれか」

「黙れ……!」

こつちが何も言わなくても勝手に相手がパートナーを怒らせたたり煽ったりしてくれる。分断工作を考えなくていいのは楽なもんだ。

とはいえ、楽観ばかりはしてられない。光と闇の竜の効果は確かに強力だけど、それは強制効果という分類上カード効果が発動されたら嫌でも無効化しなければならないという弱点も含んでいる。つまり、もし中野の手札に無駄打ちできるカードとある程度のアタッカーがいればこの大型ドラゴンもあっさり突破されてしまうということだ。

「俺は、これでターンエンドする」

だが、万丈目はそれを本当に分かっているのか、何もしない。ただいつものように不敵に笑い、自身のモンスターに全てを任せるのみだ。

「俺の邪魔するなら、もうパートナーなど必要ない。お前には頼らん、

1人で勝つ。ドロー、スタンバイフェイズ、「A」細胞増殖装置が起動  
！」

「くっ……光と闇の竜は、チェーンブロックを作る効果を無効にする  
……」

光と闇の竜 攻2300↓1800 守1900↓1400

「これでは終わらん。通常魔法、侵食細胞「A」発動」

「光と闇の竜……効果発動だ」

光と闇の竜 攻1800↓1300 守1400↓900

「貪欲な壺」

光と闇の竜 攻1300↓800 守900↓400

強制効果の乱用により、あれよあれよという間に光と闇の竜の攻守  
はそこらのレベル3モンスターにも吹き飛ばされるような数値にま  
で落ち込んでしまう。守備力が500未満になったため、これ以上下  
がることのないのが救いといえば救いだけだ。

「エーリアン・ハンター」

体中に青い球体を持つ、ウォリアーよりもややシャープな見た目に  
巨大な三つ叉の槍のような武器を抱えたトカゲ戦士といった風体の  
宇宙人。その目には確かに知性の光が宿っていた。

エーリアン・ハンター 攻1600

「エーリアン・ハンターはAカウンターに乗った相手を戦闘破壊した  
際、連続攻撃の権利を得る」

「なんだって!?!」

『あああどうしましょうどうしましょう、今度こそどうすればいいん  
でしようかこれ!?!』

「安心しろ、清明」

ハンターの攻撃力は、今の光と闇の竜より800多い。そして光と  
闇の竜が戦闘破壊されたら、フロストもない今度こそ攻撃を防いで  
くれるモンスターはいない。1600のダイレクトが直撃で、僕らの  
ライフは0だ。

だというのに、万丈目は安心しろという。どう安心すればいいんだ  
ろうか。

「……万丈目！」

「万丈目サンダー。慌てるな、みつともないぞ。この俺が安心しろと言っているんだ、少しは信じてくれ」

「むう」

何を言っても無駄そうなので、仕方なくこちらに槍を構えて突っ込んでくるハンターに向き合う。あの勢いからいって、おそらく光と闇の竜を串刺しにした勢いを利用してそのまま突っ込んでくる気だろう。

「やれ、エーリアン・ハンター」

エーリアン・ハンター 攻1600↓光と闇の竜 攻800(破壊)

万丈目&清明 LP2200↓1400

無防備な腹の、ちょうど白と黒の境目に槍が突き刺さる。だが2色のドラゴンはそのまま消えたりせず、槍が刺さったまま最後の力を振り絞ってハンターを突き飛ばした。

「む？」

「かかったな、馬鹿が。光と闇の竜のもう1つの効果は、自身が破壊された時に発動される。自分フィールドのあらゆるカードを道ずれに破壊する代わりに、空になったフィールドにモンスターを墓地から蘇生させる！清明、お前のモンスターをだ！」

『ええ、そんな効果もってたんですかあのドラゴン、』

そうか。万丈目は最初から光と闇の竜の能力を逆手にとって相手にアタッカーを出させ、その上でさらに攻撃力の高いモンスターを出すのが狙いだったのか。そして、僕らの墓地にはさつきグレイドルさんがD・D・Rのコストで墓地に送ったモンスターが僕のデッキ最強モンスター(固定値)が存在する！

「オーケイ万丈目。甦れ！ブルーアイス、ホワイトナイト、ドラゴン青氷の白夜龍！」

最後の力も消え、静かに消えていった白黒のドラゴンに入れ替わるかのように天空から冷風を纏いつつふわりと降りてきた氷のドラゴン。手札コスト様様だ。

青氷の白夜龍 攻3000

「バカな!?こんな方法で最上級モンスターを呼びだすだ?!」

「勝ちを急いだお前の戦術ミスだ。貪欲な壺を光と闇の竜に無効にさせるのではなくメイン2まで温存していたら、そのドロローでまだ何かできたかもしれん」

ドヤ顔でそういう万丈目の言葉を、手札0でできることもない中野に代わって次にターンが回ってきた僕が引き継ぐ。

「もつとも、そうしなくちや戦闘破壊からの連撃を考えてもギリギリこっちのライフは削りきれてなかったわけだけどね。だからまあ、誰が悪いわけでもないさ」

『すごいなんか堂に入ってますね！セリフに渋みというか迫力が出てますよ2人とも！』

「だ、だがハンターの攻撃力は1600で貴様のモンスターは3000、こちらのライフを削りきるにはまだ500ほど足りていないはずだ」

「それはどうかな、ってね。僕のターンに永続魔法、水舞台装置アクアリウム・セットを発動して自分フィールドのみの水属性モンスターの攻守を300アップ。さらにペンギン・ナイトメアを場に出すことで自分フィールドの水属性はさらに攻撃力200アップ。これでエーリアン・ハンターに攻撃、孤高のウインター・ストリーム！」

青氷の白夜龍 攻3000↓3300↓3500↓エーリアン・ハンター 攻1600 (破壊)

中野(?) & 野中(?) LP1900↓0

「お、おのれ……」

「この役立たずめ、お前のせいで負けたんだぞ」

「こちらのセリフだ。……だがまあ、約束は約束だ。いいだろう、俺たちは帰る」

約束？だがその意味を聞く前に、中野と野中の体が糸の切れた人形のように地面に崩れ落ちる。かすかに寝息が聞こえるところを見ると、単に眠っているだけのようだ。

「いよっ、お疲れ万丈目」



「ああ。そういえば、結局あのグレイドルとかいうカードはなんだったんだ？」

「おっと、そうだった！そろそろ、僕の体から出て行ってもらえないかな？」

論すように呼びかけると、僕の足のあたりをなにかが這う感触がした後で足元に銀色の水たまりができる。先ほどアリゲーターが出てきたときのように震えつつふくらみ形を変えるそれは、今度は色は銀色のままで大きな頭に長い指の上半身とスライム状の下半身を持つ、いわゆるグレイ型宇宙人の変身途中といった風体になる。とつきに万丈目が身構えるが、僕はそれをじっと見ていた。さつきまで話していたグレイドルさんがこれだと感覚でわかったからだ。

「えーつと……一件落着、でいいのかな？」

『ええはい、もちろんです！本当に本当に申し訳ありませんでした、おかげで私の命もこうして……』

「お、お前は何者だ!？」

『あなたはこちらの方の相方さん、あなたにもご迷惑をおかけしました、って私まだ自己紹介も済ませてませんね、本当に失礼なことをしてしまいすいません!』

本人はこう言っているが、自己紹介されなくても何となくの想像はつく。よく見るとその体はUFOともども砂浜の色と微妙にかぶっているせいでわかりにくいが半透明で、ちやうど見慣れたハネクリボーやらおジャマ三兄弟ぐらいの薄さだったからだ。

『私はデュエルモンスターズの精霊、グレイドル・スライムといいます。どうもおふた方は精霊が見える人間のように、それに甘えるような形となってしまうほんつとうにご迷惑を掛けました』

「わかったわかった、わかったから何があったのか説明してちやうだい?。」

その後何度も挟まる悪気のない謝罪に話を中断されながら聞いたところによると、どうもあの2人、何となく察していた通りエーリアンとワームの精霊に誤ってさつき墜落した宇宙船をぶつけてしまい、それでひたすら追いかけていたらしい。……だからって精霊世

界から現実世界に來たりすんのかな、とかこれそもそも悪いの全部こいつなんじゃ、とかいろいろツツコミどころはあるけれど、とにかくちやうどそのとき近くにいた人間の体を使ってデュエルモンスターズの精霊らしく決着をデュエルでつけることにしたらしい。俺が勝つたらなかったことにしてもらおう、という奴だ。まあこの部分はデュエリストなら至極当然だね。

『そういうわけでUFOも自動修復装置が仕事を終えている頃でしょうし、私そろそろ自分の世界に帰りますね。お騒がせして申し訳ありませんでした』

ナメクジのように、といえは聞こえは悪いが、本当にそうやってずるずると宇宙船に向けて進んでいくグレイドル・スライム。その背中を見送ろうとして、忘れていたことを思い出した。

「あれ、待つて待つて！このグレイドルカード、君のでしょ？ちゃんと持つていかないと」

『いえいえとんでもありません、今回迷惑をおかけしたせめてものお詫びの品だと思つておいてください。つて、なんか押しつけがましいですね最後まですいません、いらなければ海に捨ててもらつても全然かまいませんので！』

「でも……」

『それに、さっきまた勝手に心の中を覗いてしまつて。そのことは申し訳ないですしこんなこと言うのも差し出がましいようですが、今あなたデツキに迷いがあるんですよね？レベルもステータスも低い私たちですが、せめて何かお役にたてるようでしたら喜んで力をお貸しますので！では、さようなら！』

それ以上は声をかける暇もなく、宇宙船が宙に浮きあがる。その後カクカクと何度も左右に曲がりながら上昇し、あつという間に見えなくなつた。

「さて、俺はもう寝るとするか。清明、お前も寝坊するなよ？お前の作る朝飯はホワイト寮で食うものとは比較にならんほど美味いんだからな、寝過ぐしたりして朝から俺の期待を裏切つたりしたら承知しないぞ」

『んもーアニキったら、相変わらず素直じゃないんだから〜』

「なっ!? ええい黙れ鬱陶しい、この雑魚モンスターめえ!」

『キヤー、アニキが照れたー!』

騒がしく帰っていく万丈目とおジャマ・イエローを見て、手元のデツキに目を落とす。グレイドル、か。これからよろしく、という意味を込めてそつとデツキを撫でてから、腰のデツキケースにまとめて戻した。

## ターン66 未知の鉄砲水と帰ってきた『D』

……もう、朝か。

ふと気がつけば窓の隙間から差し込んできている日の光に目を覚まされ、ぐつと体を持ち上げる。机に突っ伏した姿勢で寝ていたのと昨日のデュエルのせいで最初のうちは若干きこちなかったが、少し手足を動かすうちにどうにか調子が戻ってきた。

「……できた」

誰に聞かせるでもないが、ぽつりとつぶやく。机の上には大量のカードが広げられ、その中心にはきっかり59枚のカードの束が置かれている。気がつけば寝落ちしていたけど、ほぼ一晩かけて組み上げたこれが僕のデッキ。純粋なパワー勝負では他の属性に一步劣る水属性がそれに対抗すべく生み出した、全く新しいコンセプトを基にする新デッキだ。

そしてこのデッキを作り上げた今、僕がすることは決まっている。手早くデッキとカードを所定の位置にしまってからくると身をひるがえし、とつとと部屋から出て行った。……まずい今何時だこれ、さっさと朝ご飯作らないとみんなに迷惑かける！

「そういえばさ、皆ジエネックスってどんな感じなの？」

「このメンバーの中では、俺が一番メダルは多いだろうな。もう数十個は集めたから、持ち歩くのに不便でしようがない」

ふと気になったので朝食を食べながら話題を振ってみると、やはり万丈目がトツプらしい。その言葉通り、ちよつと服を広げると内ポケットにはぎつしりとメダルが詰まっていた。あーあそんな乱暴に詰め込んで、ポケット破けたら誰が縫い直すと思ってるんだか。

それは向こうから頭を下げてくるのを待つとして……待てよ、万丈目のことだから敗れたら即新品を買う可能性もあるのか。それはともかくとして、他に気になっていたことを聞いてみる。

「そもそもこのジエネックスってさ、いつまでやるんだっけ」

「さあな。ただ、こんな機会が次もあるとは限らないんだ。できるだけさんのプロとデュエルしないと……ヘルカイザーだつて、いつまでこの島にいるのかわからないし。今結構仕事の予定があつて、ジエネックスに参加したのも本人の希望があつたかららしいぜ?」

「へー。まあ、今レッド寮で生き残つてるのは十代と万丈目だけなんだから、あんまし無茶はしないようにね?」

「こう言いはしたけれど、この2人がことデュエルに関して僕の言うことを聞くわけがないからあまり気持ちがこもつた言葉ではない。僕だって同じこと言われたら当然のごとく無視するだろう。もつとも、自分たちの好きにやらせたつて実力で勝ち残るタイプだからそれ以上の追及はしないでおくけど。」

あとは他愛無い話をしながら朝食を終え、洗い物まできっちり済ませてから出発準備中の2人に声をかける。

「さてと、僕もこのデツキ試したいし、ちよつとプロに頭下げて対戦してもらつてくるねー」

「ん?それなら俺が相手に……」

「そう言つてくれるのはありがたいんだけどさ、やっぱり僕もこの機会を逃したくないんだよね。全国のデュエリストがこの島に揃つてる、こんなデュエルの神様がくれたみたいないなビッグチャンスさ」

「そうか、わかった。じゃあ、お互いワクワクするデュエルをしてこようなー!」

「もちろん!じゃ、お先ー」

最後にもう一度だけディスクとデツキを確認し、他のメンバーより先に外に出る。せっかくだし、所属のライイエローで先のデュエルのダメージを癒してる翔の見舞いにも行こうかな。

「……………」と思つてからたつた数分。なんだか妙にこそそしているエドの姿を見つけ、いつも堂々とした態度の彼がこそそと動いている異質さにいっぺんに興味がそつちに移ってしまった。ごめん翔、と心の中で一度謝つてから、その後をゆつくりついていく。

「……………」何の用だ?今は取り込み中なんだ、あとにしてくれ」

「なんだ、ばれてたのね」

「プロになると、マスコミやパラツチのせいで嫌でも感覚が鋭くなるからな。お前の尾行に不備があったわけじゃない、むしろ僕が会った中でもトップレベルだ」

「昔はもうちよい完璧だったんだけどねー、こつち入学してからすっかり鈍っちゃったかね。ま、それはまた考えればいいか。どうせばれたんならはずきり聞かせてもらおうけど、何やってんの?」

ちよつとした崖の下の砂浜、普通に道を歩いていればまず見えない位置にわざわざ立ち寄ったかと思ったら、その場で振り返って開口一番にこれだ。遠まわしに聞こうとする余裕はなさそうなので、ずばりと本題に入る。だがエドは馬鹿にするように鼻を鳴らし、元の方向に戻ろうとした。

「なんでそれを言う必要がある? だいたい、センパイはつい昨日僕に負けたじゃないか。力もないくせにむやみに首を突っ込みたがるのはやめておくことだ」

うぐ。まつたくの正論に一瞬言葉が詰まるが、腰につけたデツキの重みにすぐに気を取り直す。そう、僕はもうこれまでとは違うのだ。エドも背を向けた状態ながらその自信を察したらしく、ほんの僅かに不敵な、それでいて嬉しそうな笑みを浮かべながらも一度振り返る。

「どうやら、何か掴んだようだな。面白い、予定変更だ……:と聞いたところだが、生憎僕にも外せない用事がある。斎王の相手が終わったら、また相手になってやろう」

「斎王の……?」

どういうことだろう。確かにちよいちよい気になる部分はあるけど、それでもエドは表だって斎王に刃向うような真似はしないと思っていたのに。本人も僕の顔を見て少し喋りすぎたと後悔したらしく、これ以上余計な情報を出すまいとさっさと退場しようとした。その前にさつと回り込み、ニコニコと笑いかける。

「……もうこれ以上話すことはない」

「まあまあ」

案の定のつれない言葉にもこやかに返し、そのタイミングでスツと表情をまじめなものに変える。この切り替えが肝心で、うまいことやらないと相手を怒らせるだけで終わってしまうが成功すればぐつと精神的に優位に立つことができる。言い換えれば、相手が勝手に警戒したりビビったりしてくれるのだ。今回は成功したらしく、明らかにエドの表情が変わった。

「斎王には僕も色々と恨みがあるんでね。もちろん僕だけじゃなくて、十代や万丈目たちだって立派な被害者さ。それを差し置いて自分だけで突っ込んでこうだなんて、ちよーつとムシがよすぎるんじゃない？」

「くっ……」

ここでもしエドがほんの少しでもいつもの冷静さを取り戻したら、多分僕がいくら探りを入れても無駄だったろう。というかそもそも、今僕が言っている理論にかなり無理があることに気づけたはずだ。もしエドが斎王を止めようとしているのなら、付き合いが一番長いエドにその権利があるだろうし。だけど、この時のエドはほんの少しだけそれが足りていなかったのだ。正確に言うと、足りなくなるように誘導したんだけど。

ただ正直なところ、僕としては近々光の結社に殴り込みをかける予定だったからエドにもそれに参加してほしいと思っただけなのだ。今のままだといくらなんでも人数差がありすぎるから、ここでエドほどのデュエリストが味方になるとぐつと頼もしさが増す、そんな程度の考えだった。だけどエドの一言で、また自体は僕の予想外の方向へ動き出してしまう。

「わかった。なら、今すぐここでデュエルしよう。僕が勝てば、今度こそ誰にも邪魔はさせない。それなら文句はあるまい」

「あー、いや……」

参ったな、そう来たか。微妙に言っていることがずれていることを教えようとして、寸前で思いとどまった。心のどこかに、昨日のリターンマッチがしたいという思いがあったのも否定しきれない。どれだけあーだこーだと言ったとしても僕もエドも本質はデュエリス

ト、常に戦いを求めるタイプなのだ。

「……そう来なくっちゃ。それじゃ、デュエルと洒落込もう！」

「フン。どうせやるからには、また昨日のように無様な真似を見せるなよ？」

「デュエル！」

昨日のエドとのデュエルではエドが先攻だった。だからというわけではないだろうが、今度は僕が先攻だ。本当はドロウできる後攻の方がよかったけど、まあ贅沢は言ってられない。

「まずはこのカード。グリズリーマザー、守備表示！」

グリズリーマザー 守1000

「これでターンエンド」

「良くも悪くも無難な立ち上がりだな。僕のターン、ドロウ！カモン、終末の騎士！このカードは場に出た時、デッキの闇属性モンスター1体をセメタリーに送ることができる。この効果で、ダッシュガイをセメタリーへ」

この次に繋げるための布石であろう一手を止める手段は、ない。だけど、ここでエドには選択の余地が生まれた。すなわち、グリズリーマザーに攻撃するか否かだ。属性リクルーターであるグリズリーマザーで引つ張ってこれる最高打点は1500、そして終末の騎士の攻撃力は1400。普通に考えれば、攻撃したら返しのターンで返り討ちになる。

「終末の騎士で、グリズリーマザーに攻撃！」

キラリと光る一刀が振り下ろされ、青い熊が両断される。エドは攻撃してきた。それはつまり、彼にその後の策が何かあるということに他ならない。

だけど、こっちだって馬鹿じゃない。何か企んでいるというのなら、新しい力で相手するまでさ。

「グリズリーマザーの効果でデッキから攻撃力1000、グレイドル・コブラを特殊召喚！」

「何、攻撃力1000だと!?!」

地面に銀色の水たまりが染み出し、ぶくぶくと泡立ちながら赤いコ



ブラの姿になる。

グレイドル・コブラ 攻1000

「グレイドル……？なるほど、それがお前が手に入れた力か。いいだろう、カードを1枚伏せてフィールド魔法、幽獄の時計塔を発動！」  
修学旅行でも見た、不気味な夜の時計塔。今はまだ12時を指しているけれどあの時計は僕の時計のターンが来るたびに3時間ずつ時を刻み、再び12時を指した時に恐ろしい囚人が解放される。

「これで、ターンエンドだ」

清明 LP4000 手札：4

モンスター：グレイドル・コブラ（攻）

魔法・罠：なし

エド LP4000 手札：3

モンスター：終末の騎士（攻）

魔法・罠：1（伏せ）

場：幽獄の時計塔（0）

「僕のターン、ドロー」

「この瞬間、時計塔の針が動く！」

「いいや、針は動かさせないね。相手フィールドのカードが発動したことで手札から幽鬼うさぎの効果発動、手札またはフィールドのこのカードをリリースしてそのカードを破壊する！ドレッドガイのギミックはよく知ってるんだ、そう簡単に開放はさせないよ」

時計台の前に立つ銀髪の少女が、ゆっくりと動き始めた針めがけて腰に差した鎌を投げつける。見かけからは想像できないほどの力で投げられたそれは一直線に文字盤に突き刺さり、時計台はゆっくりと崩れ落ちた。それを見た少女は無表情ながらもどこか満足げに頷き、時計台の残骸には目もくれずに引き返す。

これでエドのペースはだいぶ崩せたかと思っただが、いまだその表情に変化はない。確かにエドのエースはまだもう1体、ドグマガイが控えている。

「やらにこのターンに、ハリマンボウを通常召喚」

ハリマンボウ 攻1500

さて、どうしようか？このターングレイドル・コブラで自爆特攻して終末の騎士のコントロールを奪い、2体でダイレクトアタックすれば総ダメージはだいぶ高くなる。一応そういう戦術もあるにはある。でも、やっぱり自爆特攻はやりたくないな。

「バトル、ハリマンボウで終末の騎士に攻撃！」

「いいだろう、受けよう」

ハリマンボウ 攻1500↓終末の騎士 攻1400（破壊）

エド LP4000↓3900

「コブラでダイレクトアタック！」

「それは通せないな。速攻魔法発動、スケープ・ゴート！4体の身代わり羊が現れ、プレイヤーへの攻撃を妨害する」

グレイドル・コブラ 攻1000↓羊トークン 守0（破壊）

「1枚セットして、ターンエンド」

不本意ながらもターンを明け渡す。これでエドの場には3体のトークンが揃ってしまったわけだ。……でも、うさぎちゃんを使ってしまった今となつては今度こそ手札誘発はない。

「僕のターン、ドロ。カモン、ダイヤモンドガイ」

デステニーヒーロー  
D—HERO ダイヤモンドガイ 攻1400

「そしてダイヤモンドガイのエフェクト発動！デツキトップのカードが通常魔法ならば、その効果のみを次のターンに発動することができる、ハードネス・アイ！」

デツキトップは……通常魔法、火炎地獄。高いバーン性能を持つ厄介なカードだ。だけど、今はそんな先のことを心配している余裕はないわけだ。

「羊トークン2体とディーヒーローであるダイヤモンドガイをリリースすることで、このカードは特殊召喚できる！カモン、ドグマガイ！」

D—HERO ドグマガイ 攻3400

……早い！いつか来るかとは思ってたけど、こんなに早く召喚されるとは。昨日のデュエルで嫌と言うほどその強さを見せつけた最強のDが、今再びその悪魔の翼を開いた。

「攻撃力の低いグレイドル・コブラに攻撃したいところだが……何か

あるのは間違いないだろうな。ハリマンボウに攻撃、デス・クロニクル！」

D—HERO ドグマガイ 攻3400↓ハリマンボウ 攻1500 (破壊)

清明 LP4000↓2100

「さすがに痛い……だけど、ハリマンボウが墓地に送られたことでモンスター1体の攻撃力を500ダウンさせる。ドグマガイには攻撃の報いを受けて貰おうじゃないの」

D—HERO ドグマガイ 攻3400↓2900

「もう1枚カードを伏せる。これでターンエンドだ」

清明 LP2100 手札：1

モンスター：グレイドル・コブラ (攻)

魔法・罠：1 (伏せ)

エンド LP3900 手札：1

モンスター：D—HERO ドグマガイ (攻)

羊トークン (守)

魔法・罠：1 (伏せ)

「僕のターン、ドロロー！」

「ドグマガイのエフェクト発動！ライフ・アブソリュート！」

「ぐぐつ……」

清明 LP2100↓1050

「半分吸われて、残りはこれだけか。だけど、ここから反撃開始！リバーカードオープン、グレイドル・スプリット！このカードは自分モンスター1体の装備カードになって、攻撃力を500ポイントアップさせる！」

グレイドル・コブラ 攻1000↓1500

「今更たかだか500の攻撃力アップだと……？」

「僕が狙ってるのは、このカードのもう1つの効果さ。スプリットは自身を墓地に送ることで装備モンスターを破壊し、デッキから名前の違うグレイドルモンスターを2体特殊召喚できる。これでイーグル、そしてコブラを特殊召喚！」

コブラの体が中央から真つ二つに裂け、裂けたそれぞれが泡立つ銀色の水たまりになったかと思うと次の瞬間、そこから黄色の鳥と先ほどまでと寸分たがわぬコブラが姿を見せた。

グレイドル・イーグル 攻1500

グレイドル・コブラ 攻1000

「なるほど、アドバンス召喚のためのカードを揃えたか？」

「何勘違いしてんのさ、これだけで済むわけないでしょ？ 戦闘またはトラップの効果で破壊されたグレイドル・コブラは相手モンスター1体に憑りつき、そのコントロールは僕が得る！ カモーン、ドグマガイ！」

「僕のデイーヒーローのコントロールを奪うだど!？」

その通り。地面から伸びた銀色の網がドグマガイの全身を覆い尽くしてその体内に吸収され、額に銀色の紋章が浮かび上がった。

「これでバトル、まずはコブラで最後の羊トークンに攻撃！」

グレイドル・コブラ 攻1000↓羊トークン 守0 (破壊)

「イーグル、ドグマガイの2体でダイレクトアタック！」

「まだまだ！ トラップ発動、ピンポイント・ガード！ セメタリーに存在するレベル4以下のモンスター、ダイヤモンドガイを守備表示で特殊召喚し、このターン戦闘でも効果でも破壊されなくする！」

D—HERO ダイヤモンドガイ 守1600

一斉攻撃で逆転勝利、と洒落込みたかったのだが、さすがにプロ相手にそれは甘かったようだ。再び出てきたダイヤモンドガイを破壊する方法がない以上、別の手を考えるしかない。

「スプリットで出したモンスターはエンドフェイズに破壊されるから、ここは壁を増やすためにフィッシュボーグアーチャーを守備表示。これでターンエンド」

エンド宣言と同時に、イーグルとコブラが形を保てなくなってその場に崩れ落ちる。これは、予想以上に厳しい戦いだ。

フィッシュボーグアーチャー 守300

「僕のターン、ドロロー。メインフェイズ、ダイヤモンドガイのエフェクトで出た火炎地獄の効果発動！ 相手に1000のダメージを与え、自

分も500ダメージを受ける！」

清明 LP1050↓50

エド LP3900↓3400

「そしてこのターンも、ダイヤモンドガイのエフェクトを発動。ハードネス・アイ、デッキトップは通常魔法の貪欲な壺だ。これで次のターンに2枚のドローが約束された。もつとも、それまでお前のライフが持てばの話だがな」

「まだ僕のライフは残ってるからね。油断してるといくらでも足元すくわれるよ？」

「これだけのライフ差で言っても説得力がないがね。とはいうものの、ドグマガイを倒す手段はない。だが、わざわざ倒さなくてもこんな手段もある！カモン、デビルガイ！」

D—HERO デビルガイ 攻600

「デビルガイ……」

「デビルガイのエフェクト発動、相手フィールドのモンスター1体を2ターン後の未来に飛ばす。そこをどけ、ドグマガイ！デイスティニー・ロード！」

ドグマガイのコントロールは、グレイドルの力で一時的に奪ったものにすぎない。つまりその枷から外されたドグマガイは帰還した時、一瞬だけ僕の世界にきたのちすぐに元々の持ち主であるエドのフィールドに帰ってくることになる。まさかこんなに早く、グレイドルの弱点に気づかれるとは。

「デビルガイのエフェクトを使用したターン、僕はバトルフェイズを行えない。カードを伏せ、ターンエンドだ」

清明 LP50 手札：1

モンスター：フィッシュボーグ—アーチャー (守)

魔法・罠：1 (伏せ)

エド LP3400 手札：0

モンスター：D—HERO デビルガイ (攻)

D—HERO ダイヤモンドガイ (守)

魔法・罠：1 (伏せ)

「僕のターン！」

気になるのは、攻撃表示のデビルガイとあの伏せカードだ。確かにデビルガイは攻撃表示でしか効果を使えないが、返しの戦闘ダメージを警戒してあのカードを伏せたのかもしれない。単なるブラフなのか、それとも罠が仕込んであるのか。いずれにせよ僕のライフに余裕はない、一回でも読み間違えたらその時点でアウトだ。

「だけど、アーチャーが生き残ったのは嬉しい誤算、か。僕の墓地の水属性モンスターはグリズリーマザーにコブラ2体、それにイーグルとハリマンボウの計5体。墓地の水属性モンスターが5体のみの時、このカードは特殊召喚できる！来い、氷霊神ムーラングレイス！」

氷をつかさどる霊神の1体、ムーラングレイス。本来なら特殊召喚時にハンデス効果を持つこのカードも、あいにく今はただのバニラでしかない。だけど、今はそれで十分だ。フィールドに頼もしくそびえる白と金の姿に向かってこの局面でよく来てくれたね、と感謝の念を送る。

氷霊神ムーラングレイス 攻2800

「バトルだ、ムーラングレイス！デビルガイに攻撃しろ、ムーンライトレーザー！」

ムーラングレイスの額の角から青い光線が放たれ、デビルガイが一瞬で消し飛ぶ。

氷霊神ムーラングレイス 攻2800↓D—HERO デビルガイ 攻600 (破壊)

エンド LP3900↓1700

「やった！」

「それはどうかな？トランプ発動、ダメージ・ゲート！自分が戦闘ダメージを受けた時、その数値以下の攻撃力を持つモンスターをセメタリーから蘇生できる。僕が蘇生させるのは攻撃力2100、ダツシユガイだ！」

D—HERO ダツシユガイ 攻2100

長い足にはまるでロボットかサイボーグのように車輪がついた、流線形のボディを持つディーヒーロー。全く、いつになっても全然戦

線が途切れない。そのしぶとさには舌を巻くけれど、ダツシユガイは所詮攻撃力2100。これならムーラングレイスで押し切れるはずだ。

そう思った直後、チャクチャルさんからテレパシーが走った。

『いや、無理だなマスター』

「(あれチャクチャルさん。なにが無理なのさ)」

『ダツシユガイの効果だ。奴はフィールドのモンスターを1体リリースすることで、攻撃力を1000ポイントアップさせる効果を持っている』

「(1000ポイント?!そんなことをしたら攻撃力3100になって……ありがとうチャクチャルさん、それならそれでまだ手はある!)」

そこで会話を切り、デュエルに神経を集中させる。確かに通常ならこの時点で積みかもしれない。だけど、まだこの手札には可能性が残っている。ダツシユガイの効果は聞いた感じ起動効果とかいう奴っぽいし、だったらこれで止められる。

「さあ、これでターンエンドか?ならばさつきとエンド宣言をしてもらいたい」

「……いいや、まださ。メイン2に魔法カード、死者蘇生を発動。幽鬼うさぎを守備表示で特殊召喚するよ」

「ほう?ダツシユガイのエフェクトを知っていたのか」

「ちよつと訳あつてね。これでターンエンドさ」

幽鬼うさぎ 守1800

ダツシユガイが効果を使った瞬間、幽鬼うさぎ自信をリリースすれば攻撃を受けずに済む。これだけで止めきれるとはこつちだつて思つてないけど、確実にこのターンの抑制力にはなっているはずだ。

「僕のターン、ドロロー。ドグマガイが帰還するのは次の僕のスタンバイフェイズだが、その前に僕の新たなエースを見せてやろう」

「新しいエース……?」

「お前も僕にグレイドルを見せてくれたからな。これが僕なりのデュエリストとしてのせめてもの礼儀だ。メインフェイズ、ダイヤモンドガイのハードネス・アイが見通した貪欲な壺の効果でカードを2枚ド

ロー。カモン、ドウムガイ」

D—HERO ドウムガイ 攻1000

片腕が大型のサイコガンのような形状をした、カラーリングといい羽の形と言い全体的に戦闘機のようなイメージを抱かせるディーロー。見たことないディーローではあるけれど、だけど、こいつじゃないだろう。

「自分フィールド上の3体のモンスターをリリースし、このカードは特殊召喚できる……出でよ、究極のD！D—HERO ブルー B1000—Dディー！！」

エドの足元に酸化した血のように赤黒い空間のひずみが生まれ、その中にエドの場にいた3体のディーローが吸い込まれていく。まるで本物の血の池のように波紋が立ったひずみの中心から、僕がこれまで見てきたディーローと名のつくモンスター群からは全く異なる異質な、未知の恐怖とでもいうべき男が浮かび上がってきた。人間らしい顔とはまるでアンバランスな、まるで目のない化け物の頭部のように鋭い牙がびっしりと生えた右腕。明らかに悪魔のそれである鋭い鉤爪と、それを支えて振り回すための太い左腕。闘う前からすでにポロポロになった両の翼はその悠久の戦績を物語り、太い尾がますます悪魔的印象を強めている。

D—HERO B1000—D 攻1900

「な、なんだこれ……」

「驚いたか？まあそうだろうな。光栄に思え、このカードは僕も使うのは初めてだ。そしてこれこそが、僕が斎王に戦いを挑むことを決意した最大の理由。あいつには人知を超えた力があるが、このカードならそれに対抗できると僕は信じている。バトルだ、B1000—D！幽鬼うさぎに攻撃、ブラッディ・ファイアーズ！」

悪魔の翼を異形のディーローが広げると、そこから文字通り血の雨が降り注ぐ。幽鬼うさぎの綺麗な銀髪が、その中へ消えていつて見えなくなつた。

D—HERO B1000—D 攻1900↓幽鬼うさぎ 守18

00（破壊）



「これで邪魔者は消えたな。メイン2にB1000Dのエフェクト発動、クラブティール・ブラッド！」

攻撃を終えて翼を畳んだB1000Dの影が背中から無数の筋になって伸び、それぞれに意志があるかのごとく蠢いてムーラングレイスの巨体を縛り付ける。全力で抵抗するムーラングレイスの奮闘虚しくその体は自分よりもはるかに小さいB1000Dの方へと恐るべき力で引きずり込まれていき、なんと明らかに質量の小さいB1000Dに丸ごと吸収されてしまった。

「こ、これは……!?!」

「B1000Dは1体のみ、相手モンスターを吸収して装備カードにすることが出来る。そしてその攻撃力の半分を自らの攻撃力に加算する」

D—HERO B1000D 攻1900↓3300

「だが、これだけでは固定値が上がった代わりにずっと出しにくくなった劣化サクリファイスにすぎない。B1000Dを究極のDたらしめているもう1つのエフェクトは永続効果、このカードが存在する限り相手フィールドのあらゆるモンスターエフェクトは無効となる」

「こつちだけに作用するモンスター効果無効効果……そんな無茶な」

「例え誰がいかなるモンスターを繰り出そうと、そのエフェクトをすべて無効にするこのカードの前では無力。これだけの攻撃力があれば、戦闘で突破するのも難しいだろう。さらにカードを1枚伏せ、ターンエンドだ」

清明 LP50 手札：0

モンスター：フィッシュボーグアーチャー（守）

魔法・罠：1（伏せ）

エンド LP1700 手札：0

モンスター：D—HERO B1000D（攻）

魔法・罠：1（伏せ）

もはや僕に手札はない。場に存在するモンスターはアーチャーただ1枚のみ。そしてこのセットカードは、永続トラップのバブル・ブ

リングァー。レベル4以上であるB1000-Dの直接攻撃を完全にシャットダウンできるのみならず自身と引き換えに墓地のレベル3以下水属性同名モンスター、グレイドル・コブラを蘇生できるカードではあるが低レベルが多いディーヒーロー相手では守りの効果も微妙に心もとないうえに、蘇生効果もネタがばれている以上何らかの対策を取ってから出ない限り攻撃はしてくれないだろうから過信はできない。どちらも決め手になれない以上は最後のこのドローに、全てを賭けるしかない。

「トップ勝負、上等ってね。ドローツ！」

恐らく最後のチャンスであろう1枚のカードを引き、祈りつつそれに目を向ける。そのカードは……………。

「おや、先輩？確か先輩はもうジエネックス参加資格がないはずですが……………何してるんですか？」

「あ、葵ちゃん!？」

鋭い声を頭上から投げかけられ、咄嗟にエドとほぼ同タイミングでデュエルディスクの電源を落として手札を隠す。その声の主は、今では光の結社の中でもトップクラスの地位にいるほどの実力者である葵・クラディー。元・僕の弟子だった娘だ。

そして、かなり鋭い子でもある。おまけに僕のことをよく知っている。つまり、誤魔化すのは困難と言うことだ。厄介な相手にあつたもんだという内心を表に出さないように気を付けながら、できる限りいつも通りに対応する。

「ど、どうしたの葵ちゃん。僕みたいに光の結社の『素晴らしさ』がわかんない相手なんぞに話しかけてさ」

「私も先輩と話してるとどんどん人間の格が下がる気がするから嫌なんですけどね、先輩はあんまり放っておくと何するかわからないタイプですから時々何してるのかだけは押さえとかないといけないんですよ」

そしてこの相変わらずなきつつい物言い。これに関しては前からそうだったしそれが彼女の魅力でもあつただけで、僕と一緒にケーキ作ったりクッキー焼いたりチョコ溶かしたりしてるうちは少なくとも

とも他人のことを一方的に見下すようなことだけは言わなかったのに。

でも、少なくとも何をしてるのかは理解できた。僕の監視とは、ずいぶんと特別扱いされる身分になったもんだよ。僕のグレイドルもエドのB100-Dも、いわば対光の結社のために手に入れた切り札。こんなところでみすみす明かすわけにはいかない大事な手の内だ。だからとつきにソリッドビジョンを消すために電源を落としたんだけど、葵ちゃんの今の物言いから考えて僕らのデュエルは見えないらしい。危ない危ない。

「別に、たいしたことじゃない。彼が僕に対してサインを求めてきてね、ペンも色紙もないからどうしようかといっていたところさ」

ここでエドのナイスフォローが入る。いくらプロだからってエドのサインは別にいらんのだけど、ここでそんな空気の読めてないことを言ったら余計にこじれるだけなので大人しく頷くのみしておく。まだ胡散臭そうな視線を向ける葵ちゃんを尻目に、若干芝居がかった態度でエドがスーツの内ポケットから1冊の手帳を取り出した。そこにどこからか取り出したペンでさらさらと何事か書き、そのページを破って僕に押し付ける。

「ほら、とりあえずはこれでいいだろう？」

「何となくスッキリしないですが……まあいいでしょう。エドさん、斎王様を探しておられましたよ」

「斎王が、ねえ。わかった、今から向かおう。そういうわけで、悪いが僕は先に失礼するよ」

「そうですか。では、私もこれで。さようなら、先輩」

最後にこちらに目配せをして、エドが去っていく。ここは、エドに助けられたか。ふと渡された紙に目を向けると、そこには無駄にきれいな字で、

『勝負は預けた。伏せは秘密だ』

と書いてあった。まったく、気障なもんだ。

「せっかく引いたってのに、ねえ？」

もう片方の手に持っていた最後のドロカード、お互いの受けるあ

らゆるダメージがターン1往復の間だけ問答無用で0になる通常魔法カードの一時休戦に声をかける。まあ、向こうの伏せが分からない以上今回は引き分けということにしておこう。結局エドが先に独りで斎王のところに行つたけど、彼は勝てるだろうか。わからないし僕にはどうすることもできないけど、せめてエドが勝てるように祈つておいてあげよう。

……決してここでエドが斎王を止めてくれたらこっちが何もしなくていいから楽だなー、とかそんなことを考えたわけではない。うん、そんなわけではない。実はちよつぱり思つたりもしたけど、それはメインの思いじゃないからギリギリセーフ。ただ、十代の言葉を借りれば、エドは僕とデュエルしたんだから僕の仲間だ。仲間が勝つのを祈るのは、当たり前のことだからね。

## ハメツノヒカリ編

### ターン67 光の結社とアカデミア―1F―

「霧の王で攻撃、ミスト・ストラングル！」

「うおおおっ！」

高野 LP1200↓0

ライフの全てを失い、その場に崩れ落ちる中野、野中の連れだった3人衆最後の1人、高野。はい、一丁あがりつと。そのまま先に進むうとする僕らに、後ろから質問が飛ぶ。よっぽど混乱しているのか、ほとんど叫ぶような声音だった。

「なんだよ、いったい何しに来たんだよ!？」

「……殴り込み、さ」

その問いに、たった一言で返事する。他に聞きたいこともなさそうだったので、それを最後に振り向かず、僕らはホワイト寮の門をくぐった。

ところで、なぜ今こんなことになっているのかには、少しばかり時間をさかのぼらなければならぬ。具体的には、グレイドルの力を得てエド相手にも水入りになるまで粘れるようになった日の夜に戻る。

「ねえ皆、今から暇? 暇ならちよつと付き合っほしいんだけど」

「ん? どっか行くのか?」

「どうせここにいてももう寝るだけだ、どうしても言うなら乗っつてやらんこともない」

相変わらずふさぎ込んだ翔の部屋に食事を運んでから、他のメンバーと一緒に食堂で夜ご飯を食べる。その途中、ふと思いついたというように聞いてみた。とりあえず話の掴みが良好なのを確かめ、ならばと一気に本題に入る。

「光の結社にね、殴り込みをかけようかと」

「え? えつと、殴り込みって……俺たちがか?」

「まーね」

できる限りかるーく言ったつもりだったが、それでもやはりそのまま流すには無理のある話だったようだ。

「ど、どうする万丈目、清明の奴だいぶため込んでたみたいだぞ」

「ああ、こんなこと言いだすまで思い詰めてたとはな」

「お2人さん、聞こえてるよー。まったく失礼だね。だいたい、この夕飯の時点で何か思わなかったの?」

「何かって……このトンカツがか?」

「せっかくゲン担ぎだけのために奮発していい豚肉トメさんから買ったってのに。グラムいくらする肉だと思ってるのさ」

熱弁するも、料理に縁のないこのメンバーに食費の話をして今一つピンとこないらしい。思ったより反応が薄いのに多少がっかりしつつも、どうにか気を取り直して説得の続きに当たる。トンカツ云々はあくまでついでにすぎない。値段的にはついでどころかメインだけだ。

「まあ、それはいいとして。僕が今夜決行にしようと思ったのには他にもわけがあるのさ。エド・フェニックスだよ」

「エドが? 今日、エドと会ったのか?」

「会ったどころかデュエルもしたよ。まだギリギリ負けてない。それでエドなんだけど、実は今日……」

エドの考えや、何をしているのかといったことをここで一気に話す。さすがに本人の許可もとってないのにB100-Dについてペラペラ喋るのは失礼なんてレベルじゃないのであくまで新しいカードを手に入れた、程度の言い方にとどめておいたけど。

「……とまあ、こんな感じかね。だから今日はずっと何か起きないかと思って待ってたんだけど、この様子だとエドも駄目だったみたいだし」

「ちよ、ちよっと待てよ。そんな大事なことなら、俺たちに教えてくれたってよかったじゃないか」

あ、そーゆーこと言っちゃうんだ。だったらこっちにも言いたいことはある。

「こう言つちや悪いけど、お互い様さ。何があつたかあえて聞く気はないけど、十代も今日は何かやつてたんでしょ？それもかなりの大事を。もう長いこと暮らしてんだから、そんなの嫌でもわかるって」

まったく、まさかばれてないでも思ってたんだらうか。赤の他人ならいざ知らず、毎日嫌でも会うことになる僕に隠し事なんて通用しないってのに。

「う。……実は今日お前が出発してからミズガルド王国のリンドさんって人が来てその人が教えてくれたんだけどよ」

オージーン王子。レーザー衛星『ソーラ』。そしてその鍵を、今は十代が持っている。なんたることだ、スケールが大きすぎてなるほどね、としか言いようがない。斎王め、ただのデュエルモンスターズが強い宗教の教祖かと思つてたら、随分ととんでもない話になったものだ。

「悪い、黙つてて。でも、これで俺が知つてることは全部だ」

「いやいや、こつちこそ何も言わなくてごめん。でも、だったらなおさら急がないと。せつかく人生貰つたのに、自分勝手に世界ごと終わらせられたらいい迷惑だ」

僕がいま生きているのは、チャクチャルさんに死の淵から引つ張り上げてもらったから。このことは常々感謝してるし、だからこそ胸張つていけるような生き方をしたい。少なくともここまで聞かされてまだ動かないようじゃ、僕はこの先後悔するに決まつてる。

……いや、そうじゃない。そこで思い直した、後悔ならもうしてるか、と。もとはといえれば今日、僕はエドが勝つて最後まで信じてきて、そのせいで今日の昼にでも突撃すればいいところをこんな時間まで引き延ばしたんだ。もっと早く行けばあるいはエドと合流することだつてできただろうし、少なくとも今みたいにエドの安否すら不明なんて状況にはならなかつたはずだ。たとえ本人が嫌がったって、1発ぶん殴つてでも単独行動をさせないべきだったのかもしれない。『マスター、兵は拙速より巧遅を尊ぶ、という言葉が古代中国にはあつてだな。例え一手や二手遅れたとしても、その分正しい戦法を選ぶことが勝利に繋がる、といった意味だ。今やるべきは迷うことより、本

当にすべきことを見極めることだ』

思考が1人でどんどんネガティブな方向に向かつていくのを見計らったようなタイミングでかけられた、チャクチャルさんなりに気を使ってくれたのである。言葉が、ただ有難かった。それのおかげでどうにか気持ちを取り直し、改めて目の前の2人に聞き直す。

「……それで、どうする？無理強いする気はないよ」

「俺らが断ったら、お前1人でも行くつもりなんだろう？俺はもちろん行くぜ」

「まあ、ノース校の奴らを鍛え上げたのはこの俺だからな。もう1回ぐらいは面倒を見てやるさ。それに、天井院君とおまけに三沢を光の結社に引き込んだのも俺だから、その責任も取る。最後に、斎王には俺も1度は負けてしまった身だ。その借りを返さないうちは、俺のプライドが許さん」

「十代、万丈目。ありがとう。これで6人か」

今の校内で光の結社を問題視している数少ないこの2人も味方になつてくれれば、こちらとしても心強い。ほっと一安心だ。

「ん？ちよ、ちよつと待て。6人？俺と十代、それにお前がいて……あと3人はどこから出てきたんだ？」

「ああ、それは……」

まだそのことを言っていなかったことに気が付いて、説明しようとして口を開く。だけど結果的に、その必要はなかったようだ。

「清明せんぱーい、来たザウルスー！」

「清明、もう準備できたよ、つてさ」

「もう痛みもないし、いつでも大丈夫ツス！」

そんな声とともに、1階のドアがノックされる。まるで様子をうかがっていたかのようにピツタリのタイミングで来たそれを無言で指し示し、にやりと笑って見せる。

「当然、みんな知ってるいつものメンバーさ。おーい、こっちは2人も来てくれるっていうから、ぼちぼち行こうかー！」

叫び返す僕を見て微妙に複雑そうに顔を見合わせ、それから同時に吹き出した2人の様子が印象的だった。そこから先の様子は、特に語



るべき点はない。さすがに深夜になってまで見張りを置いているわけもなく、固く閉じられた門もこうなってはただの障害物でしかなかった。そこでたまたま出会った高野に逃げられる前にデュエルを挑み、とつと倒したうえで現在に戻るといわけだ。何かと急な話ではあるけど、人数で圧倒的に劣るこちらに勝ち目があるとすれば最短ルートでの電撃作戦で一気に敵の頭、つまり齋王を叩くしかないため仕方がない。今の音は誰にも気づかれてないはずだけど急いでいこう、ハリーハリー。

「万丈目！ 齋王の部屋までの近道とかってないの？」

元ブルー生であり、つい先日まで光の結社の一員でもあった万丈目に、ふと思いついてダメもとで聞いてみる。走りながらしばらく思案していた万丈目だったが、やがて首を横に振った。

「齋王の部屋は複雑な場所、というか隠し部屋だからな。非常口の類もないはずだ。なあに、このまま進めばすぐに齋王の部屋の前にく。その部屋の中に隠し通路が仕掛けてあるだけだ……む、あれは!?」

「……明日香、こんな時間まで起きてたら肌が荒れるよ、だつてさ」

万丈目がその人物に気づくとほぼ同時に、たまたま先頭にいた夢想が彼女に固い声で話しかける。にこりともせず壁に寄りかかり、腕組みをして僕らの前に立ちはだかつたのは、天上院明日香。まずいな、彼女の実力はここにいて皆がよく知っている。さっきの高野のように、素早く倒していけるような相手ではない。

「あら、こんな夜中にアポも取らずに人の寮に入り込んで、随分とご挨拶ね夢想。貴方達を齋王様のところには行かせはしないわ」

アカデミアの女王とまで言われる彼女の、そのさすがの気迫の前に気圧されていると、その沈黙を破つてずい、と黒い影が一步前に出た。彼の名前を呼ぶより前に、何かを決意したような声で万丈目が静かに口を開く。

「行け、お前ら。天上院君を光の結社に入れたのは俺だ、俺がどうにかする」

「あらあら、誰かと思えば裏切り者の万丈目君じゃないの。嘆かわし

いことね、斎王様も貴方のことは評価していらしたのに」

「その結果が今の俺なら、斎王の予知とやらも底が知れるな。もつとも、昔の俺は実際そうだったんだろうが」

明日香の皮肉に間髪入れずの嫌味で返してもう話すことはない。デュエルディスクを構えると、明日香もそれを見てゾツとするような冷たい笑みを浮かべ、特別製と思しき自身の純白のデュエルディスクを起動する。まだためらっている僕らを見かねたように、万丈目がもう一度僕の方へ振り返った。

「さあ行け、お前ら。この通路が一番の近道だけで、この広い寮には他にも道はある」

「万丈目……やっぱり僕も残って」

「いいから早くしろ！天上院君がここにいるということは、おそろく俺たちの奇襲は筒抜けということだ。だったらこれ以上雑魚が集まってくる前に、なんとかして斎王とのタイマンに持ち込むんだ！」

「でももしかしてもない！それにな、清明。お前なら俺の気持ちかわかるはずだ」

いきなり何を言い出すんだろうと一瞬黙ると、万丈目はこれまで見たことがないほど真剣な面持ちになった。

「これは師匠の受け売りだがな。惚れた女のために戦うのが、漢の道というものだ。お前が俺の立場なら、俺と同じ道を選ぶはずだ」

そう言われ、今の万丈目を僕に、明日香を夢想到置き換えて想像する。そう考えると、決断は早かった。

「……わかった。皆、こつち！万丈目、勝ったら連絡してよ！」

今来た道を引き返す清明たちをゆつくり見送る暇もなく、万丈目は再び目の前の敵と向かい合った。彼女が他の皆を止めようとしないうという事は、最初から明日香は万丈目ただ一人を狙い撃つために配置されたのだろう。彼女ならば万丈目を倒すことができる。そこまで察していながら、それでもあえて彼はここに残った。

無論、先ほど言ったように責任を感じているというのもある。恋心も否定はしない。だがもう一つ、彼のプライドが自分以外の助太刀を許さなかった。斎王の掌の上で遊ばれたあげく手駒にされたあの苦い敗北。その記憶が彼の高いプライドに火をつけ、あえて相手の策に乗って1対1でデュエルしたうえで正面から勝利するという発想に行きついたのだ。

「デュエルだ。行くぞ、お前たち！」

『『『えい、えい、おー！』』』』

緊張感のかけらも感じられないおジャマ3兄弟の腑抜けた掛け声をバツクに、デュエルディスクにデッキを差し込む。自動的にオートシャッフル機能が働いてシャッフルされたデッキの上から5枚が初期手札として排出され、それを右手で引き抜いてぱつと開く。

「デュエル！」

先攻は、万丈目。明日香のデッキは確か、光の結社に入ってから少し改造されたはずだ。そのことは辛うじて覚えているが、具体的にどのようなデッキになったのかは皆目思い出せない。

「いくぞ、マスクド・ドラゴン仮面竜を召喚、攻撃表示だ」

万丈目の数あるデッキの中でもアームド・ドラゴンを軸とするパターンにおいて常に前線でさまざまな立ち回りを見せる、仮面をかぶったような風貌のドラゴン。

仮面竜 攻1400

「さらに永続魔法、ワンドー・バルーンを発動」

万丈目の目の前に配置された、怪しげな箱。その蓋が勢いよく開くと、中から大量の風船が湧きあがった。

「このカードは俺の手札を任意の枚数捨てることでバルーンカウンターを乗せ、君のモンスターの攻撃力はそのカウンター1つにつき300ポイント下がっていく。このターンは1枚捨てる」

ワンドー・バルーン (0) ↓ (1)

「そして今捨てたカード、おジャマジックの効果発動。このカードが墓地に送られた時、デッキからおジャマイエロー、ブラック、グリーンを1体ずつ手札に加える。カードを伏せ、これでターンエンドだ」

「私のターン、ドロ―！魔法カード、予想GUY<sup>ガイ</sup>を発動！このカードは自分フィールドにモンスターが存在しない時、デッキからレベル4以下の通常モンスター1体を場に出せる。舞いなさい、ブレード・スケーター！」

ブレード・スケーター 攻1500↓1200

「ブレード・スケーター……」

何の変哲もない通常モンスターの1体だが、明日香がプリマモンスターとして好んで使うモンスター。精霊が見える万丈目の目だからなのか、それとも自分の意思が見せた思い込みなのか。彼には、純白の舞台上で華麗に舞うその姿も、どこか沈んだ表情に見えた。

「そして魔法カード、トレード・インを発動。手札のレベル8モンスター、氷の女王を捨てることでデッキからカードを2枚ドロ―するわ」

氷の女王という聞きなれない、少なくともこれまでの彼女のデッキには入っていなかったモンスターをコストにしての手札交換。妨害の札はなく、万丈目がただ見ている間にも着々と彼女の舞台は進行していく。

「永続魔法、異次元海溝を発動。このカードは発動時に手札・場・墓地いずれかの水属性モンスターをゲームから除外し、このカードが破壊された際に除外したモンスターを特殊召喚するわ。さて、そろそろ始めようかしら。フィールドのブレード・スケーターをリリースし、アドバンス召喚！貴女のショーの始まりよ、サイバー・プリマ！」

サイバー・プリマ 攻2300

ブレード・スケーターが一礼したのち光に包まれ、消えていったその場所に新たなプリマがエントリーする。その効果を知っている万丈目は、次に何が起きるのかを察して自分の表情が硬くなっていくのを感じた。

「サイバー・プリマがアドバンス召喚に成功した時、フィールドの魔法カードはすべて破壊される……貴方のワンダー・バルーンは破壊されたらそれきりだけど、私の異次元海溝は破壊された時に真の能力を発揮するのよ。おいでなさい、氷の女王！」

氷の女王 攻2900

雪の結晶を模した杖を持つ、文字通り雪のように色白の最上級魔法使い。以前よりもはるかに実力を増した彼女を前に、ようやく万丈目も思い出した。彼女が光の結社に入ってから見つけた自分なりのデッキへの答えは、水属性を中心とした【魔法使い族】。同じ水属性でありながらも清明の使う【水属性】とは一味も二味も違う動きを可能とした厄介なデッキである。

「……………」

だがそこで、万丈目は氷の女王に漂うかすかな違和感に気が付いた。何かモンスターの全身から、イラストにはない白い靄のようなオーラのようものが立ち上っているような。それだけでなく、明日香のデュエルディスクに置かれたカード自体も周りの壁とデュエルディスクの色に同化して見づらいがうすぼんやりと光っているように見えた。その違和感を基に、彼は自分が光の結社を抜けてすぐに清明から聞いた話を思い出す。デュエルの最中に光っているカードがあり、そのカードを通じて斎王の洗脳は届いているらしいと。要するにあのカードに気を付けていなければならないのだな、と気合を入れ直したところで、氷の女王がその杖を振り上げる。

「バトルよ！氷の女王で仮面竜に攻撃、コールド・ブリザード！」

氷の女王 攻2900↓仮面竜 攻1400（破壊）

万丈目 LP4000↓2500

「くっ……………」だが、仮面竜はリクルーターだ。戦闘破壊されたことにより、デッキから攻撃力1500以下のドラゴン族を1体特殊召喚することができる。俺はこの効果で、2体目の仮面竜を攻撃表示で場に出す！」

仮面竜 攻1400

「なら、サイバー・プリマで攻撃……………」すると思ったかしら？そんなことをしたら、アームド・ドラゴンのレベルアップコンボを手助けするだけになるものね。これでターンエンドよ」

明日香の言葉に心中で舌打ちしながらも、同時にその冷静で的確な判断力に舌を巻く万丈目。このアカデミアのレベルで並み程度の

デュエリストであれば、ダメージを優先しあの局面で追撃を行っても不思議ではなかった。実際万丈目自身も、明日香が指摘したように多少のダメージは覚悟の上でアームド・ドラゴンを呼び、レベルアップを披露するつもりだったのだ。だが、彼とて1つの戦法が駄目になったからといってへこたれるようなデュエリストではない。次に繋げるための布石は、前のターンに既に打ってあるのだ。

万丈目 LP2500 手札：5

モンスター：仮面竜（守）

魔法・罠：1（伏せ）

明日香 LP4000 手札：3

モンスター：氷の女王（攻）

サイバー・プリマ（攻）

魔法・罠：なし

「俺のターン、ドロー。魔法カード、打ち出の小槌を発動！このカードは手札から任意の枚数だけカードをデッキに戻し、戻した数だけドローする。俺は当然、おジャマ3兄弟をデッキに戻し3枚ドローを行う」

『ちよ、万丈目のアニキ!』

『アタイらの出番ってこれだけなの!』

『そんなのないぜ〜!』

何かゴチャゴチャとうるさいのをきっぱりと無視し、必死で抵抗しようとするのをカづくで、半ばデッキにねじ込むようにしながら戻す。オートシャッフルを待ち、3枚のカードを引いた。

「このカードは……よし、俺はモンスターをセットし、さらにカードを1枚伏せてターンエンドだ」

「防戦一方のようね？私のターン、ドロー。魔法カード、強欲なウツボを発動。手札の水属性モンスター2体、アイス・ブリザード・マスターとブリザード・プリンセスをデッキに戻して3枚ドロー。手札から……」

「おっと、その通常召喚待った。この瞬間にトラップ発動、おジャマトリオ！君のフィールドに、おジャマトークンを3体召喚させてもら

う」

『『どくもく、こつちでふつかーっ！』』』

氷の女王と光のプリマの脇に、なぜかバレリーナ衣装の3兄弟がノリノリで片足立ちでの回転をしながら現れる……のだが、やはり見よう見まねのバレエが特に運動神経に優れるわけでもない彼らにできるはずもなく、ずでんずでんと全員目を回してその場に崩れ落ちた。

おジャマトークン (イエロー) 守1000

おジャマトークン (ブラック) 守1000

おジャマトークン (グリーン) 守1000

「その不細工なトークンは……」

『不細工だなんてひどいわよアニキ〜！』

『『そうだそうだー！』』

「ええい、うるさいから説明の間ぐらい黙っている！それになんだその恰好は、どこからどう見ても不細工だろう!? まあいい、そのトークンはアドバンス召喚のためリリースすることができず、破壊された時300のダメージを与える効果がある！」

「それでも、まだ私の場には2体の戦えるモンスターがいるわ。バトルよ、サイバー・プリマでセットモンスターに攻撃！ 終幕のレヴェランス！」

プリマならではの平衡感覚を生かした、体の軸が全くぶれない回転蹴りが万丈目の伏せモンスターを薙ぎ倒すかに見えたが、その寸前に上空から炎を巻き上げつつ赤黒の悪魔が落下してきた。

「残念だったな、天上院君。俺はこのトラップカード、奇策を発動した。このカードは発動時にモンスター1体を捨てることで、その攻撃力ぶんだけ相手モンスターの攻撃力をダウンさせる。俺が捨てたのは攻撃力2800の炎獄魔人ヘル・バーナー、つまりサイバー・プリマの攻撃力は0だ！」

「なんですって!?!」

サイバー・プリマ 攻2300↓0↓0???

守1900

明日香 LP4000↓2100

「だけど、まだ氷の女王の攻撃が私には残っているわ」

「いや、それも無理だな。よくフィールドを見ればわかるだろうが、俺のセットモンスターはスノーマンイーター、このカードは表になったときに表側モンスター1体を破壊することができる。俺が選ぶのは当然、氷の女王だ」

「スノーマンイーター……そのカードは」

スノーマンイーター。もしもこの場に清明がいれば、やいのやいのとうるさかっただろうな。そう思い、その様子を想像して万丈目の頬が緩む。何しろこのカードは去年、まだノース校から帰ってきたばかりの万丈目がアカデミア買収を目論む実の兄とデュエルをした時に譲り受けたものだったからだ。あの時貰ったこのカードを、実は万丈目はずっとデッキに入れ続けていた。もし正面切つてその理由を問われれば、決してセンチメントな理由はなくただ単にこのカードが悪くない効果を持っているからだ、そう答えるだろう。では本心では？ 当の本人は照れから否定したり強がりしたりしているが、周りは誰でも知っている。彼は友情に篤いのだ。

「奇策の効果はエンドフェイズまでではなく、そのモンスターが存在する限り続く。つまり、次のターンで俺が攻撃力1900以上のモンスターを出せば……」

「あら、偉そうなことを言う前に、貴方もフィールドのことをよく見たら？」

「フィールドを？……なに!？」

万丈目が見たのは、雪だるまの陰に潜む怪物が氷の女王を倒している姿ではなかった。飛びかかった雪だるまが、プリマ衣装にチェンジした女王のハイキックを浴びて吹き飛ばされる姿だった。

「速攻魔法、禁じられた聖衣よ。モンスター1体の攻撃力を600ダウンさせる代わりに、効果破壊耐性と効果の対象にならない能力を得ることができる。攻撃力2300になっても、スノーマンイーターを破壊するには十分ね。コールド・ブリザード！」

氷の女王 攻2900↓2300↓スノーマンイーター 守19

00 (破壊)

「カードをセットして、これでターンエンドよ」



氷の女王 攻2300↓2900

万丈目 LP2500 手札：2

モンスター：仮面竜（守）

魔法・罨：1（伏せ）

明日香 LP2100 手札：2

モンスター：氷の女王（攻）

サイバー・プリマ（攻）

おジャマトークン（守）

おジャマトークン（守）

おジャマトークン（守）

魔法・罨：1（伏せ）

「俺のターン、ドロロー！」

戦況はどちらかという万丈目に有利。そのはずなのに、どうにも万丈目の表情は晴れない。あの伏せカード1枚と明日香の無言のプレッシャーが、万丈目を警戒させる。実際彼の手札にはすでにアームド・ドラゴン レベル LV5のカードがあるため仮面竜をリリースすればアドバンス召喚も可能、そのままサイバー・プリマに攻撃するだけで勝利は決定するはずである。だが、彼女ほどのデュエリスト相手にそううまく事が運ぶとは思えなかったのだ。その警戒が無意識のうちに、彼に消極的な判断を強いる。

「……………ゴーレム・ドラゴンを守備表示で召喚する」

ゴーレム・ドラゴン 守2000

「仮面竜でサイバー・プリマに攻撃だ」

小柄なドラゴンの炎が、攻撃力のなくなった光のプリマをあつかりと焼き尽くす。あれだけ警戒した伏せカードは、ピクリとも動かなかった。

仮面竜 攻1400↓サイバー・プリマ 攻0（破壊）

明日香 LP2100↓700

「あら、その程度かしら？」

「俺はこれで、ターンエンドだ……………」

「私のターン、ドロロー。来たわね？魔法カード、融合を発動！おジャマ

トークン2体を素材に、始祖竜ワイアームを融合召喚！」

「しまった、その手があつたか！」

『うわー、融合される〜！』

デュエルモンスターズには通常モンスター2体という緩い縛りから生み出される、驚くほどハイスペックな融合モンスターとして注目を集めた1体のドラゴンがある。効果を持たないゆえにトークンですら素材とすることができる、それがワイアームである。

始祖竜ワイアーム 攻2700

「厄介だな……」

『ア、アタイ1人だけ残してかないで〜！嫌よこんな気まずい状況！』  
「あら、これだけじゃないわよ？魔法カード、思い出のブランクを発動。墓地の通常モンスター、ブレード・スケーターをこのターンだけ蘇生させるわ」

ブレード・スケーター 攻1500

「そしてこの最後の手札、融合呪印生物―地を召喚。このカードと融合素材となるモンスターをリリースすることで、地属性の融合モンスターを特殊召喚できる……何が言いたいかはわかるわね？今こそ幕を下ろしなさい、サイバー・ブレイダー！」

入学時から常に共に戦い続けてきた、明日香のエースモンスター。プリマモンスターの頂点に位置する女戦士もまた、万丈目の目にはどこか悲しげな表情に見えた。

「相手モンスターが2体の時、サイバー・ブレイダーの攻撃力は倍になる！パ・ド・トロワ！」

サイバー・ブレイダー 攻2100↓4200

「万丈目君、やはり斎王様を裏切った今の貴方では私に勝つことにはできないようね」

「ああ、確かに君は強い。だが、俺もここで負けるわけにはいかん！ゴーレム・ドラゴンが存在する限り、相手はほかのドラゴン族を攻撃対象にすることはできない！」

「見苦しいわよ、それは敗北を引き延ばすだけの行為にすぎないのに。ならばサイバー・ブレイダーでゴーレム・ドラゴンに攻撃、グリッサー

ド・スラツシュ！」

サイバー・ブレイダー 攻4200↓ゴーレム・ドラゴン 守2000 (破壊)

サイバー・ブレイダー 攻4200↓2100

「パ・ド・ドウ……相手モンスターの数が1体になったことで、サイバー・ブレイダーの効果は戦闘破壊耐性へと変化したわ。氷の女王で仮面竜に攻撃、コールド・ブリザード！」

氷の女王 攻2900↓仮面竜 攻1400 (破壊)

万丈目 LP2500↓1000

「まだまだ！仮面竜のリクルート効果により、アームド・ドラゴン<sup>レベル</sup>LV3を特殊召喚！」

この選択は、まさに一瞬の判断だった。おそらく単純に3体目の仮面竜を出してはまた攻撃を止めてしまい、アームド・ドラゴンに繋げることはできないだろうと踏んであえてアームド・ドラゴンをこのタイミングで呼んだのだ。

「3体目の仮面竜は入っていないのかしら？始祖竜ワイアームで攻撃、オリジン・ブレス！」

始祖竜ワイアーム 攻2700↓アームド・ドラゴン LV3 守900 (破壊)

「これで貴方のフィールドにモンスターはいなくなつたわね。このターンの3回の攻撃を耐えきつたのは大したものだけど、貴方のフィールドはもうボロボロよ」

「いいや、まだだ。自分のモンスターの戦闘破壊をトリガーとして、復活の墓穴を発動！お互いに墓地からモンスターを1体選び、守備表示で特殊召喚する！甦れ、LV3！」

「私は……サイバー・プリマを呼び出すわ。ターンエンドよ」

アームド・ドラゴン LV3 守900

サイバー・プリマ 守1600

万丈目 LP1000 手札：2

モンスター：アームド・ドラゴン LV3 (守)

魔法・罫：なし

明日香 LP2100 手札：0

モンスター：氷の女王（攻）

サイバー・プリマ（守）

サイバー・ブレイダー（攻）

始祖竜ワイアーム（攻）

おジャマトークン（守）

魔法・罨：1（伏せ）

まだだ、などと強がってはみたが、実際万丈目に残された手は少ない。スタンバイフェイズにアームド・ドラゴンがレベルアップしたとしても、LV5だけでは明日香の場に存在する大型モンスターを全滅させることはできず、彼女のライフを削ることもできない。LV5が出せるのは確定として、そこからいかに試合の流れを変えるのかはこのドローにかかっている。

それを確認しながらデッキトップにかけた手が、かすかに震えているのを彼は感じた。だが、それは恐怖や怯えといった負の感情ではない。ギリギリの戦いを、彼は今全力で楽しんでいるのだ。

「俺のターン、ドロー！」

『がんばれ、万丈目のアニキ！』

「無駄よ、どんなカードを引いたとしても……」

「それはどうか？」

「……なんですって？」

その問いにはふてぶてしく笑ったのみで答えることなく、アームド・ドラゴンを指さした。

「まずはスタンバイフェイズに、こいつの効果を発動。このカードを墓地に送ることで、デッキまたは手札のアームド・ドラゴン LV5へと進化する。俺が呼び出すのは、手札からだ。さあ進化しろ、アームド・ドラゴン！」

まだまだ子供だったドラゴンが成長し、より筋肉もつき全身の棘も固く鋭く、戦闘向きの体へと変わっていく。これでもまだアームド・ドラゴンという種の中では若輩にすぎないのだが、それでも十分実戦に耐えうるだけの力を持っているあたりいかに戦闘向きの生物なの

かがわかる。

アームド・ドラゴン LV5 攻2400

「さらに魔法カード、死者蘇生を発動！このカードで俺の墓地から、炎獄魔人ヘル・バーナーを特殊召喚する！」

足元から地獄の炎が噴き上がり、その中心から6本足のトカゲか恐竜のような姿の化け物に人型の上半身を無理やりくりつけたような悪魔が這いあがってくる。下半身の化け物についた目も鼻もない口だけの顔がいびつに歪み、辛うじて笑っているのだと判別できるような邪悪な表情を形作る。

「ヘル・バーナーの攻撃力は相手フィールドのモンスター1体につき200ポイントアップする代わりに、自分フィールドのモンスター1体につき500ポイントダウンする。本来は差し引き500ポイントしか上がらないがここで魔法カード、受け継がれる力を発動！自分フィールドのモンスター1体を墓地に送ることで、その元々の攻撃力ぶん他のモンスター1体の攻撃力をエンドフェイズまでアップさせる！アームド・ドラゴンよ、ヘル・バーナーに力を託せ！」

炎獄魔人ヘル・バーナー 攻2800↓3800↓6200

「攻撃力6200!？」

『その調子よ、アニキ〜！』

ただ座ってるだけの癖になぜかドヤ顔で上から目線な声援を送るおジャマ・イエローのトークンに一瞬、攻撃対象をそっちにしてやるうかという衝動が湧きあがるが、それをなんとかこらえて目の前の氷の女王を見据える。

「帰ってくるんだ、天上院君。バトル、炎獄魔人ヘル・バーナーで氷の女王に攻撃！」

「く、応答しなさい、貴方達……！」

炎の渦が巻きあがり、氷の女王の全身を包み込む。爆風に巻き上げられて、明日香の場に伏せてあったカード……手札1枚をコストにすることであらゆるダメージを0に抑え込むトラップ、ホーリーライフバリアのカードが見えた。もしも先のターンでアームド・ドラゴンLV5をアドバンス召喚していたら勝負は決め切れず、返しのターン

で万丈目の敗北はほぼ確定していただろう。だが、それはもしもの話。手札を使い切った今の明日香にそのカードを発動することはできず、このデュエルは決した。

炎獄魔人ヘル・バーナー 攻6200↓氷の女王 攻2900（破壊）

明日香 LP2100↓0

「天上院君！」

氷の女王が倒れると同時に気を失った明日香の体を慌てて駆け寄って支え、そつと壁に寄りかからせる。目を覚ますまでそばに付き添っていかかとも一瞬考えたが、まずは清明に連絡を取ろうと思いついて自分のPDFを引っ張り出す。通話モードにしようとしたところで、自分の周りにいる大量の気配に気づいた。それと、最後に明日香が言った不可解な言葉を。

「なるほどな、ずっと見張っていたのか。まったく、人気者はつらいものだ」

皮肉めかして、いつの間にかあたりを取り囲んでいたたくさんの白い制服の集団に声をかける。どうせ返事は期待していなかったが、意外にも聞き覚えのある声がかえってきた。身長2メートルを超すハングリーバーガー使いの巨人、サンダー四天王のうち十の担当。

「……サンダー、光の結社へ復帰をもう一度お考えください。いくらサンダーでもこれだけの数を相手にできるわけありません」

「フン。天田、清明から聞いたぞ。お前がこのダーク・アームドとメタファイズ・アームドのカードを届けてくれたそうだな。その点に関しては礼を言っただけだが、この万丈目サンダー相手に随分と生意気な口を利くようになったじゃないか。ノース校での50人抜き、お前に忘れたとは言わせんぞ」

強気な言葉とは裏腹に、万丈目の表情は険しい。これだけの数を相手にデュエルして、はたして自分一人で勝ちぬけるかどうか。いや、勝てるかどうかではない。やらねばならないのだ。清明の言葉を信

じるならば、おそらく今の天上院君は洗脳が解けているはず。ならば、この万丈目サンダーが彼女を守らずして一体誰が守るといふのだ。それに、もしここで俺が倒ればこいつらはそのまま清明たちのもとへ向かうだろう。いや、ほぼ間違いなくすでに何十人かが向かっているはずだ。せめてあいつらの負担を減らすためにも、この場所ですべて下ろしたデュエルディスクを再び構える。

「……さあ、まとめてかかって来い！もう一度身の程というものを教えてやる！」

「デュエル!!」

誰も見る者も、知るものもない戦い。ひとりぼっちの戦場で、再びデュエルが始まった。

「万丈目、大丈夫かな。まだ連絡が来ないんだけど」

「ああ、アイツは強いからな。きつと大丈夫さ」

階段を上がり、ホワイト寮2階。さすがに惜しみなく高級素材を使っているだけあって防音設備も完璧、階が1つ変わっただけなのに下にいるはずの万丈目のデュエルの音が全く聞こえてこない。それとも、もう万丈目が勝ってデュエルが終わっているのか。いや、だとしたら万丈目のことだ、すぐにドヤ顔で何か言ってくるだろう。なのに連絡がないということはまさか……？

そこまで考えたところで頭を振り、それ以上のことを想像するのをやめる。仮定だとしても、そんなことを考えちゃいけない。十代の言うとおり、万丈目は強い。だから勝つし、大丈夫だ。それで間違いない。

「それよりも、1階に明日香さんがいたってことは多分この階にも誰かいるんじゃない」

「や、やめるドン丸藤先輩。そんなネガティブなことばかり言ったら、十代のアニキたちの士気だって下がるザウルス」

「あー、また間違えたね？十代のアニキは僕のアニキなんだってばー！  
「ぐ………わかったわかったドン。今はそういうことにしておくザウルス」

何の喧嘩をしているのかはいまだによくわからないけど、とにかく十代の舎弟？は翔1人らしい。でもその話題は置いておくとしても、翔の言うことにも一理ある。むしろ明日香1人だけポンと配置しておいて、他の幹部クラスが出てこなかったらその方がびつくりだ。だからおそろく、その角を曲がったあたりで……。

「どうも先輩方、グッドナイト」

ほら来た。そこに立っていたのは、葵・クラディー……これまた厄介な実力者だ。

「さて、私の相手をしてくださるのはどなたですか？本当は私だって眠いんですから、せめて選出位は早くしてくださいね」



これ見よがしにあくびをして見せる彼女だが、その目には最初からずっと一切の油断がない。こういうところ、ほんつとこの子は敵に回したくない。だけど、あえて誰か戦力を割くとしたら、長いことそばにいて彼女の細かい癖や思考パターンもある程度読めるようになった僕が適任だろう。

「だったら、僕が」

「ねえ葵ちゃん、私が相手してあげようか？つてさ」

またしても前に出ようとした僕を遮って、夢想がすつと前に出る。それを見て一瞬思案気に目を細めたものの、すぐに頷いて葵ちゃんも純白のデュエルディスクを掲げる。

「学校一の無双の女王が相手ですか。最大戦力が私の相手に動くだなんて、それもまた一興でしょう」

その言葉を聞いて、嫌でもわかった。葵ちゃんは今この場に、自分が捨て石になっても時間稼ぎができれば構わない、それぐらいの覚悟を持って立っている。無論、本人に負ける気はないだろう。だけど、いざという時には刺し違えることすら一切ためらうまい。

根はまじめない子なんだよね、葵ちゃん。今回はそれがおかしな方向に向いちゃってるだけで。

「夢想」

「大丈夫だよ清明、だって。あの子は私が元に戻すし、たとえどれだけ時間がかかっても、それが終わったら私はあなたの隣に行くから、つて」

「え？今……」

こんな時でも男というのは悲しい生き物、なかなか男心をくすぐる台詞についちよつと期待に胸を高鳴らせてしまう。だがさすがの夢想もあの内容は言つてて気恥ずかしくなったのか、プイと首を振って視線をそらしてしまう。綺麗な青い髪がサツと流れて、ふわりのいい香りが舞った。

「ほ、ほら。早く行ってよ、つてば」

「お願い夢想、一生のお願い！今のもつかいだけ聞かせて！」

割と本気のお願いだったけど、残念ながらこつちもそれほど時間が

あるわけでもないのであまり粘ることもできない。葵ちゃんの目がさつきとはまた別の意味でとてもとても冷たいのには気づかないふりをしつつ、さつきとその場を離れる。

……これ全部終わったらあとで夢想拝み倒してもういっぺん言ってもらおうと。ついでに録音でもできれば万々歳だ。

多分清明のことだから、拝み倒してでもあとでもう1回同じこと言わせようとするんだろうなあ。さすがに恥ずかしいからやめて欲しいのに、などと考えてため息をつき、まずは目の前の相手に集中しようとして改めて前を向き直る夢想。すぐにデュエルが始まるかと身構えるが、その動きを無視して葵の方がふと思いついたという風にすつと合掌する。

「……………」

「ドーモ、河風夢想Ⅱサン。葵・クラディーⅡデス……………うーん、やっぱり反応薄いですね。先輩なら確実に乗ってきてくれたんでしようが」

「え、清明が？…どういうこと？…つてさ」

「いえ、ちよつとしたネタですよ。私もニンジャ使いの端くれですから」

まるで意味が分からなかったが、何も今聞くこともないだろうとそれ以上の追及を諦める。今度清明とお話するときの話題の1つにしてみようかな、そんなことも考えつつデュエルディスクを構えた。

「デュエル！」

先攻を取ったのは、葵。相手モンスターを除去したうえで上級モンスターを繰り出す超変化の術は確かに厄介だが、ライトキング主力がレベル1の夢想としては普通のデッキよりもその恐怖は小さい。とはいえ、気を付けるに越したことはないのだが。

「このカードで勝負します。出でませ、機甲忍者フレイム！このカードは場に出た時、忍者モンスターのレベルを1上げることができません。この効果で自身を選択！」

赤い装束に金属製の片手片足を持つ忍者が、音も立てずに葵の前に片膝をつく。

機甲忍者フレイム 攻1700 ☆4↓5

「カードを1枚伏せ、ターンを終了します」

「私のターン、ドロー！精気を吸う骨の塔ボーンタワーを守備表示で召喚して、カードを1枚セット。ターンエンド、だつてさ」

とてもモンスターとは思えないような、まだ永続魔法と言った方がそれらしい文字通り様々な生物のあらゆる部位の骨のみで構成された塔がそびえ立つと、じわりじわりとその周りから人魂のような何かがにじみ出では飛び回り、フレイムに対し威嚇するような動きをしてみせる。ふと葵が気が付いた時には、いつの間にか周りの風景がお互いの足元どころか視界の続く限り果てしなく広がる無数の骨の平野に様変わりしていた。

精気を吸う骨の塔 守1500

「ターンエンドですか？……ならばエンドフェイズに永続トラップ発動、忍法 変化の術！忍者モンスター1体をリリースすることでそのレベル+3以下、この場合はフレイムのレベル5と足してレベル8以下の獣・鳥獣・昆虫族いずれかのモンスターを特殊召喚します。舞いなさい、日輪の不死鳥！炎王神獣 ガルドニクス！」

フレイムの全身から突如噴き出た炎が燃え上がり、全身を包み込んでもなおその勢いは衰えずに炎の翼に炎の尾の形をとる。やがて炎が落ち着いてくるとそこに忍び装束の男の姿はなく、太陽のごとく輝く赤い不死鳥が一羽翼を広げていた。

炎王神獣 ガルドニクス 攻2700

葵 LP4000 手札：3

モンスター：炎王神獣 ガルドニクス（攻・変化）

魔法・罫：忍法 変化の術（ガルドニクス）

夢想 LP4000 手札：4

モンスター：精気を吸う骨の塔（守）

魔法・罫：1（伏せ）

「そしてそのまま私のターン、ドローします。では、悪シおノビを召喚

！」

暗い灰色の装束で全身を覆う他には特にこれといって目を引くところのない、逆に言えば極限まで隠密に特化したかのようなベージュクナスタイルの忍者がガルドニクスの尾羽に身を潜めるようにして片膝をつく。

悪シノビ 攻400

「バトルです、ガルドニクスで攻撃！この業火羽輪、受けれるものなら受けてみなさい！」

不死鳥が翼をはためかすと、無数の真つ赤に燃える羽が何本か渦を巻くように骨の塔めがけて飛んでいく。無数の羽が突き刺さった塔は一瞬の静寂の後に燃え上がり、その場にゆっくりと崩れ落ちていった。

炎王神獣 ガルドニクス 攻2700 ↓ 精気を吸う骨の塔 守1500 (破壊)

「このまま悪シノビで攻撃を……あら？」

「残念だったね、つてさ。骨だけになってなお動く私のモンスターはまさに不死の象徴、そう簡単にフィールドは空かないよ、だって。トランプ発動、ブロークン・ブロッカー！守備力が攻撃力より高い守備表示モンスターが戦闘破壊された時、デッキから同名モンスターを2体特殊召喚できる！」

精気を吸う骨の塔 守1500

精気を吸う骨の塔 守1500

「これは……精気を吸う骨の塔の、他のアンデット族に攻撃をさせない効果2つぶんによる攻撃のロックですか。単純ながら厄介ですね。まあいいでしょう、カードを2枚伏せてターンエンドです」

両脇にそびえ立つ骨の塔の間で、夢想がカードを引く。ちょうど人魂の1つが飛んできて、そのカードを照らし出した。

「ゴブリンゾンビを攻撃表示で召喚するよ、つてさ」

骨と骨の隙間を縫うようにして、剣を持つ小鬼のゾンビが素早い動きで駆けてくる。

「バトル、ゴブリンゾンビで悪シノビに攻撃！」

ゴブリンゾンビ 攻1100↓悪シノビ 攻400

「悪シノビが攻撃表示で攻撃を受けるとき、私はカードを1枚ドロウできます。さらにこのバトルフェイズにリバースカード、強化蘇生を発動！私の墓地に眠る機甲忍者フレイムをレベル1、攻守を100上げて特殊召喚します！」

足元に広がる骨の平野の一部がいきなり爆ぜ、炎を纏った赤の忍者が骨をまき散らしながら飛びあがる。

機甲忍者フレイム 攻1700↓1800 守1000↓1100

0 ☆4↓5

「モンスターを蘇生しても……ああ、そういうこと、つてさ」

「さすがに察しがいいですね。その通り、バトルフェイズ中に私の場にモンスターが増えたことによつて攻撃の巻き戻しが発生します。それでも攻撃をしますか？河風先輩」

また攻撃宣言をすれば、その瞬間に悪シノビの効果によりさらなるドロウ加速を許してしまう。それでも攻撃するのか、との問いに、ニコリと笑つて答えて見せた。

「ゴブリンゾンビで悪シノビに改めて攻撃、つてさ」

ゴブリンゾンビが剣を振り上げたところに、悪シノビが隠し持っていた短刀を振るいその軌道をそらす。しかしその動きはフェイク、剣を手放したゴブリンゾンビが側転で距離を取ろうとした悪シノビの体を担ぎ上げるとそのまま助走をつけ、勢いよく叩き付けようとする。これぞ、プロレス技で言うところのカリフォルニアクラッシュである。

「そのあくまでも前のめりな戦闘姿勢、さすがに迷いのない判断ですね。ですが、私もここで引くわけにはいきませんので。悪シノビの効果でドロウしたのちに伏せておいた速攻魔法、巨影虚栄を発動！これで悪シノビの攻撃力は1000アップです」

スピード、角度、共に完璧な攻撃。だがその体が骨に叩き付けられる寸前、2者の体が一瞬消えた。その次の瞬間、悪シノビがゴブリンゾンビをボディスラムの体勢に担いで走っていた。技を掛ける側と掛けられる側が反転したことに気づいて逃れようとするゴブリンゾ

ンビのあがきもむなしく、その体が地面に叩き付けられた。

ゴブリゾンビ 攻1100(破壊) ↓悪シノビ 攻400 ↓1400

夢想 LP4000 ↓3700

「ねえ河風先輩、順逆自在の術……って言葉、知ってますか？」  
「……………」

彼女には聞き覚えのない単語に黙って首を振ると、やれやれ、という風のため息を1つする。

「先輩ならこの話題にも嬉々として付き合ってくれたんでしょうけどね、まああの人と私の趣味がやや古いのはお互い自覚してますよ。それはともかくとしてこの術ですが、要するに今見せたように相手が技を掛けた次の瞬間、技を掛ける側と掛けられる側が入れ替わる術のことです。だいぶ効いたでしょう？」

「……ゴブリゾンビが戦闘破壊された時、デッキから守備力1200以下のアンデット族を手札に加えられるんだって。守備力0のゾンビ・マスターを加えてカードを1枚セット。ターンエンドだっさ」

葵 LP4000 手札：3

モンスター：炎王神獣 ガルドニクス(攻・変化)

機甲忍者フレイム(攻・強化蘇生)

悪シノビ(攻)

魔法・罨：忍法 変化の術(ガルドニクス)

強化蘇生(フレイム)

夢想 LP3700 手札：4

モンスター：精気を吸う骨の塔(守)

精気を吸う骨の塔(守)

魔法・罨：1(伏せ)

「さてと、私のターンですね。おや、面白いカードを引きました。せっかく順逆自在を見せたんですから、お次は当然これでしょう。転所自在の術……それはリングを自在に変えることのできる術。炎の海でも溶岩でも、果ては煮えたぎる火口にでもです。フィールド魔法、

バーニングブラッド発動！炎属性の攻撃力は500ポイントアップし、守備力は400ポイントダウンします」

フレ임が自身の装束を脱いで素早く広げると、なんとその布が明らかに人間サイズのフレ임が着ていたとは思えないほど遠くまで広がり、完全にフィールドを覆い尽くす。いかなる仕掛けが施されているのか布であったはずの装束は完全に地面の質感へと変わり、フィールドの中央には今にも噴火しそうな火山の火口がぽっかりと口を開いていた。

炎王神獣 ガルドニクス 攻2700↓3200 守1700↓1300

機甲忍者フレ임 攻1800↓2300 守1100↓700

「だけど、私の場にはもう骨の塔によるロックが完成してるよ、ってさ。攻撃力ばかりいくら上げたって私に攻撃は届かない、って」

「そんなことは百も承知です、ですが私のモンスターの攻撃力は確かに上がりました。いいんですよ、このカードを除去しても？私としては確かに痛手ではありませんが、他のカードではなくこのカードのためには除去を使わせたと思えば悪い結果ではありませんし。そして魔法カード、機甲忍法ゴールド・コンバージョンを発動！自分フィールドの忍法をすべて破壊することで、カードを2枚ドロウ！そして変化の術によりその姿を保っていたガルドニクスは、術が切れると同時に破壊され墓地へ送られます」

ガルドニクスの姿が元の炎に戻り、それすらもあるかなきかの風にしぎれて消えていく。自分の最上級モンスターが自分のカードで破壊されたにもかかわらず、葬はそれを満足げに見送っていた。

「魔法カード、おろかな埋葬を発動。デッキから機甲忍者アクアを墓地に送ります。さらにカードを2枚セットし、ターン終了です」

「私のターン、ドロウ」

「ではこのスタンバイフェイズ、カードの効果で破壊されたガルドニクスの効果発動！不死鳥は墓地から蘇り、フィールドに存在する自分以外のモンスターをすべて破壊します！」

火山の中で溶岩が盛り上がり、その中から圧倒的なまでの熱量をも

のともせず不死鳥が再び舞い上がった。その動きが噴火寸前の火口を刺激し、限界を超えた溶岩の奔流が噴火となってフィールドのモンスターに敵味方関係なく一斉に襲い掛かった。先ほどの炎の羽とはわけが違う破壊力に、骨の塔の全てが呑み込まれて蒸発していく。「きゃあつー！」

「当然私の忍者も破壊されますが……この瞬間にトラップカード、火霊術――「紅」<sup>くれない</sup>を発動！炎属性のフレイムをリリースすることでその元の攻撃力、1700のダメージを与えます！」

溶岩に飲み込まれる寸前、フレイムが腰に差していた手裏剣を投げつける。回転しながら飛ぶそれは空中で火を放ち、燃えながら夢想の周りに着弾する。

夢想 LP3700↓2000

「私のせつかくのロックが……残念。ワイト夫人やピラミッド・タワーと共有できるブローケン・ブロッカーで精気を吸う骨の塔を召喚して攻撃ロック、悪くない手だと思ったんだけどなあ、だってさ。また改良は考えるところとして、今はゾンビ・マスターを守備表示で召喚するんだって。さらにそのまま効果発動！手札のモンスターをコストに、自分か相手のレベル4以下のアンデット族を蘇生させるみたい。私はワイトプリンスを捨てて、今捨てたワイトプリンスをそのまま特殊召喚だってさ」

ゾンビ・マスター 守0

ワイトプリンス 守0

「ワイトプリンス、あのカードは……」

「気づいたとしてももう止められないよ、って。ワイトプリンスは墓地に送られた時、手札とデッキからワイト及びワイト夫人を墓地に送る効果があるからね、デッキから1枚ずつちゃんと墓地に送らせてもらうよ、だって。カードを1枚伏せて、ターンエンドだってさ」

葵 LP4000 手札：1

モンスター：炎王神獣 ガルドニクス（攻）

魔法・罨：1（伏せ）

場：バーニングブラッド



夢想 LP2000 手札：3

モンスター：ゾンビ・マスター（守）

ワイトプリンス（守）

魔法・罠：1（伏せ）

「本当はHANNZOあたりが欲しかったんですが、これはこれでいいでしょう。機甲忍者エアーを守備表示で召喚します」

フレイムとは違い全身を若葉色の装束につつま忍者が、金属製の片腕で防御姿勢を取る。

機甲忍者エアー 守1400

「忍法 変化の術、2枚目を発動！レベル4忍者のエアーをリリースすることでデツキからレベル6鳥獣族、赤竜の忍者を特殊召喚します！」

立膝をついていたエアーが華麗な空中回転をして火口に自ら飛び込み、赤い竜か鳥のような炎のオーラを纏う、忍者にしては珍しく自身の金髪碧眼を隠そうとしない忍者が飛び出してくる。そのまま空中でその外人忍者が指笛を吹くと、赤いオーラが夢想の伏せカードめがけて突っ込んでいった。

赤竜の忍者 攻2400↓2900 守1200↓800

「朱雀忍法フェニックス・アイ……赤竜の忍者は場に出た時に墓地の忍者または忍法を除外し、相手の伏せカード1枚をチェーン不可の状態で確認したうえでデツキトップまたはボトムにバウンスすることができます。河風先輩の伏せカードは、なるほど次元幽閉ですか。こんな危ないカード、デツキボトムに帰っていたべきでしょう」

「ちえっ、仕掛けるつもりだったのになー、だって」

「私は用心深いんですよ。では、バトルフェイズに入ります。ガルドニクスでゾンビ・マスターに攻撃！」

炎の羽が宙を舞い、ゾンビ・マスターを一瞬で焼き尽くす。

炎王神獣 ガルドニクス 攻3200↓ゾンビ・マスター 守0

（破壊）

「あえてワイトプリンスの墓地肥やしに協力する理由はありませんね。ターン終了です」

ライフ差は2000、フィールドの差も歴然。だが、まだ葵は油断しない。このまま押し切れるほど、入学以来いまだ無敗記録を更新し続ける無双の女王が甘いわけがない……そんな思いを常に持っているからだ。皮肉なことに、夢想自身の普段の評判がこうして今の劣勢を生み出していることになる。

「私のターン、ドローするんだって。さすがに私もこれ以上押し切られるわけにはいかないかな、ってさ。ワイトプリンスをリリースして、龍骨鬼をアドバンス召喚！」

溶岩の下に閉じ込められた無数の骨が地中で組み合わさり、新たな力を生み出す。冷えて固まった溶岩を力任せに叩き割って地中から骨の腕が伸び、ついで鬼の体がゆっくりと引きあがってくる。

龍骨鬼 攻2400

「ワイトプリンスは墓地に送られた時、デッキと手札からワイトとワイト夫人を墓地に送ることができる、ってさ」

「ですが龍骨鬼の攻撃力は2400。バーニングブラッドの影響下では赤竜の忍者すら倒せませんよ？」

「慌てないでね。墓地のワイトプリンスのさらなる効果発動、墓地のワイト2体とこのカードを除外することでデッキからワイトキングのカードを場に出すことができる！」

龍骨鬼のあけた穴から、もう1体の骸骨が身を乗り出す。紺色のぼろ布を着込んだワイトの王が、満を持して参戦した。

「ですが、ワイトキングの攻撃力は墓地のワイト及びワイトキングかける1000。3体ものリソースを削ってしまったては、その攻撃力も微々たるものです」

「だから言ったでしょう、慌てないでね、って。速攻魔法、異次元からの埋葬を発動！除外されたモンスターを3体まで墓地に送ることができる！当然私はワイト2体とワイトプリンスを、墓地へ！」

ワイトキング 攻?↓2000↓5000

「攻撃力、5000!？」

「さらに装備魔法、光学迷彩アーマーをワイトキングに装備。このカードはレベル1モンスターのように装備できて、装備モンスターは相

手プレイヤーに直接攻撃できるんだってさ。これで最後のバトル、ワイトキングでダイレクトアタック！螺旋怪談！」

骸骨の王の姿が闇に消え、次に現れた時にはすでに葵の目の前に立っていた。そのまま殴りつけようとぐつと拳を引き、自らの腕がもげかねないほどの勢いでストレートパンチを繰り出す。

ワイトキング 攻5000↓葵（直接攻撃）

「やはりあなたは恐ろしい人ですね、河風先輩。ですが、まだ甘いです！墓地から機甲忍者アクアの効果発動、墓地にこのカード以外の忍者が存在するならば、相手の直接攻撃1回を無効にできる！」

ワイトキングの骨の拳が見えない壁にぶつかったかのように寸前で止まった。葵のそばに装束を迷彩代わりにして潜んでいた青の機甲忍者が隠密を解き、自ら肉壁となつてその一撃に割つて入つただ。

「残念でしたね、今の攻撃さえ当たっていれば私の逆転負けでしたのに」

「ターンエンド、だってさ」

葵 LP4000 手札：1

モンスター：炎王神獣 ガルドニクス（攻）

赤竜の忍者（攻・変化）

魔法・罨：忍法 変化の術（赤竜）

場：バーニングブラッド

夢想 LP2000 手札：1

モンスター：龍骨鬼（攻）

ワイトキング（攻・光学迷彩）

魔法・罨：光学迷彩アーマー（ワイトキング）

「そろそろこのデュエルも終わらせましょう、私のターン！ミスト・バレー霞の谷のファルコンを召喚！」

霞の谷のファルコン 攻2000

「このモンスターの効果は関係ありません、今関係あるのはこのカードが攻撃力2000という事実！自分フィールドの攻撃力2000以上のモンスター2体、赤竜の忍者とファルコンをリリースすること

でこのカードは手札から特殊召喚できます！出でませ、葵流忍術最強のしもべ！ギャラクシーアイズ・フォトン・ドラゴン銀河眼の光子竜！」

「ついに来たね、銀河眼……だって！」

銀河眼の光子竜 攻3000

噴煙を裂いて空のかなたから地上に降り立った、銀河の力を持つドラゴン。そのカード自体が白く光を放っているのを確認し、洗脳の鍵はあのカードに間違いないと夢想は改めて確信する。彼女にとって、先ほどのワイトキングによる攻撃が届かないことは想定内であった。ただ一度ピンチに持っていけば、必ず彼女ほどのデュエリストなら自身のエースを引き当てるだろうと踏んで、あえて光学迷彩アーマーを装備させたのだ。

「そんなに銀河眼が嬉しいですか？バトル、ガルドニクスで龍骨鬼に攻撃！」

炎王神獣 ガルドニクス 攻3200↓龍骨鬼 攻2400（破壊）

夢想 LP2000↓1200

「そのまま銀河眼でワイトキングに攻撃、と同時に効果発動、銀河忍法コズミック・ワープ！お互いをバトルフェイズ終了時までゲームから除外します！」

銀河眼の光子竜 攻3000↓ワイトキング 攻5000

骸骨の王と銀河のドラゴンの姿が同時に消えさり、主を失った鎧が地面に崩れ落ちる。次の瞬間、2体のモンスターはまたこの次元に戻ってきた。

「装備モンスターが消えたことにより、光学迷彩アーマーは装備対象がいなくなり破壊されました。これでもう直接攻撃はできませんね。これでターンエンドです」

「私のターン、ドローだつて」

光学迷彩アーマーは破壊されたが、もとより夢想にその効果を使う気はない。普段のデュエルならばいざ知らず、今回のデュエルは銀河眼のカードを破壊して洗脳を解いたうえで勝たなければならぬからだ。

「バトル、まずはガルドニクスを攻撃するんだって。螺旋怪談！」

高く高く飛び上がったワイトキングがガルドニクスの頭を掴むようにして体勢を整え、一拍のちにその頭を支点としての強烈な両足蹴りが不死鳥の顔を捉えた。

ワイトキング 攻5000↓炎王神獣 ガルドニクス 攻3200 (破壊)

葵 LP4000↓2200

「これで私も初ダメージ、ですか。ですが、不死鳥はただでは堕ちませんよ。ガルドニクスは戦闘破壊された時、デッキから同名モンスター以外の炎王を特殊召喚できます！舞い上がれ、炎王獣 ガルドニクス！」

力を失った不死鳥が火山の中へ吸い込まれるように消えていき、溶岩の中に落下する音が辺りに響く。だがその直後に火口から火の玉が1つ吐き出され、その炎が再び、先ほどまでよりも小さいとはいえないような鳥の姿に変わっていく。

炎王獣 ガルドニクス 攻700↓1200 守1700↓1300

「カードを1枚セットして、ターンエンドだっけさ」

葵 LP2200 手札：2

モンスター：炎王獣 ガルドニクス (攻)

銀河眼の光子竜 (攻)

魔法・罫：忍法 変化の術 (対象無し)

場：バーニングブラッド

夢想 LP1200 手札：1

モンスター：ワイトキング (攻)

魔法・罫：1 (伏せ)

「ドロー！いいカードを引きましたが、もはやこれが役に立つことはなさそうですね。銀河眼の光子竜で攻撃、そのまま効果発動！銀河忍法コズミック・ワープ！」

銀河眼の光子竜 攻3000↓ワイトキング 攻5000

再び銀河眼とワイトキングの姿がぼやけ、次元の壁を越えて消えて

いく。前のターンと違うのは、葬の場にはいまだ攻撃の権利を残した  
ガルドニクスがいるということだ。

「これで終了ですよ、ガルドニクスによるダイレクトアタック！」

炎の羽が乱舞し、夢想めがけて飛んでゆく。もはや身を守るもの  
ないかに見えた夢想が、最後に彼女の場に残されたカードを表にし  
た。

「リバースカードオープン、強化蘇生！効果は言わなくてもわかって  
ると思うけど、このカードで私の墓地のゾンビ・マスターをレベル1、  
攻守を100ポイント上げて特殊召喚するよ、だつてさ」

炎の羽を手にした杖のようなもので蹴散らしつつ、ゾンビを操るゾ  
ンビが地中から湧き出てきた。受動的にしか効果を使えないガルド  
ニクスはむぎむぎ墓地肥やしに付き合うするわけにもいかず、その攻  
撃を取りやめる。バトルフェイズが終了したことにより、また次元を  
越えた2体のモンスターが帰還した。

ゾンビ・マスター 攻1800↓1900 守0↓100 ☆4↓

5

「ワイトキングでガルドニクスを狙われたら私の負けですが……そう  
うまくいくと思わないでください。カードをセットして、ターンエン  
ドです」

「私のターン、ドロー！」

普段の彼女ならば迷わず攻撃するのだが、あの含みのある物言いに  
は必ず何かあると見てしばし考える。だが、その迷いも一瞬だった。

「バトル！ワイトキングでガルドニクスに」

「だから甘いつて言ってるんですよ。リバースカードオープン、ゴッ  
ドバードアタック！鳥獣族モンスターのガルドニクスをリリースす  
ることで、河風先輩のワイトキングとワイトプリンスを破壊します  
！」

ガルドニクスが文字通りの火の鳥となって、夢想のフィールドに着  
弾する。激しい爆発が巻き起こり、これで終わりかと葬が一瞬だけ肩  
の力を抜く。その直後、爆発の炎と煙をもともせず巨大な竜の腕  
が伸びた。いまだ黒い煙に覆われて夢想の姿は見えないが、静かなそ

の聲が辺りに響いた。

「冥府の扉を破りし者よ、其には死すらも生温い……」

「これは!？」

「チエーンして速攻魔法、瞬間融合を発動させてもらったみたい。フィールドのアンデット族モンスター2体を素材にして、融合召喚……」

徐々に煙が晴れてきて、夢想の姿があらわになってゆく。そして、その隣から葵を見下ろす巨大な竜も。

「冥界龍 ドラゴネクロ!」

冥界龍 ドラゴネクロ 攻3000

「破壊対象にしたモンスターを融合素材にすることでゴッドバードアタックの回避、ですか。しかもこのまま攻撃してもしうっかり銀河眼に効果を使わせたなら瞬間融合の自壊デメリットも回避できるおまけつき。ですが、ドラゴネクロは戦闘する相手モンスターの魂を引きずり出すために肉体を破壊することができないモンスター。その攻撃であえてドラゴネクロを破壊して、トークンの連撃時に効果を使えば完璧です!」

葵の必死の反論に対し、もはや夢想はただ静かに微笑むのみ。それは、すでにこのデュエルの結末を悟った者の見せる安らかな笑みだった。

「改めてバトル、ドラゴネクロで銀河眼に攻撃!ソウル・クラッシュ!」  
「無駄だと言っているでしょう!迎え撃ちなさい、銀河眼!破壊のフォトン・ストーリー……」

「あなたが銀河眼を大切にしている気持ちは立派。だけどごめんね、だって。今回、私は清明と約束したの。必ず元に戻すからって。私が清明の隣に行くから、って。速攻魔法、禁じられた聖杯を発動!銀河眼の攻撃力を400ポイントアップさせる代わりに、その効果をこのターンの間だけ無効にする!」

冥界龍 ドラゴネクロ 攻3000 (破壊) ↓銀河眼の光子竜 攻3000 ↓3400

夢想 LP1200 ↓800

「ごめんねドラゴネクロ、ってさ。だけどドラゴネクロが戦闘を行つたモンスターは攻撃力が0の魂の抜け殻になって、自分フィールドに引き抜かれた魂がダークソウル・トークンとして特殊召喚される！」  
銀河眼ががくりとうなだれ、体から何かオーラのようなものが抜け出ると同時にその瞳から生気が失われる。そのオーラは夢想の場に移動し、銀河眼のシルエットのような姿になった。

銀河眼の光子竜 攻3400↓0

ダークソウル・トークン 攻3000

「効果が無効になったなら、この攻撃は、回避手段が……」

「さあ、その闇の輝きで葵ちゃんを覆う光を吹き飛ばしてあげて、ってさ。ダークソウル・トークンで攻撃！破滅のダークフォトン・ストリーム！」

銀河眼の魂が口らしき部分を開き、そこから黒い光の奔流が放たれる。力を失った光のドラゴンがその中に消えていった。

銀河眼の光子竜 攻3000↓銀河眼の光子竜 攻0（破壊）

葵 LP2200↓0

「うう……」

「あ、あれ？気絶しちゃったかな、ってさ」

力が抜けたようにその場にへたり込む葵を見て、なにかおかしなことでもしてしまったかと若干慌てる夢想。その場に駆け寄ろうとするも、その足が途中でぴたりと止まった。

「私思うんだけど、ちよつとそういうのはずるいんじゃないのかな？って」

「おーつとつと、なんつても言えーい！すべては斎王様のために、だぜ！」

全く悪びれることなくそう返したのは、わらわらとどこからともなく集まってきた白服軍団の先頭に立つ、ノース校四天王の百こ酒田だ。知った顔だったので試しに話しかけてみた夢想も、まるで会話を



する気のないその返事に深くため息をつく。

「……もう。どうせ聞いてたんでしょう？私が清明のところに行くつて話。それなのにそういうことする人たちは、1回馬に蹴られちゃえばいいと思うの、なんだって」

「人の恋路を邪魔する奴は、つてやつか？なかなか手厳しいこと言ってくれりゃねえか。おいお前ら！一斉にかかるぞ、デツキを出せ！」

「「「へい!!」」」

一糸乱れぬ動きで夢を取り囲む十人ほどの集団がデュエルディスクを構えるのを見てどうやってもこのデュエルを制さない限りは先に進めないと悟り、彼女もまたその輪の中心でデュエルディスクを構えた。

「「「デュエル!」」」

1階の万丈目に続き、2階でもまた変則の多人数デュエルが始まった。圧倒的に不利な状況の中で、それでも夢はカードを引く。

……デュエルを続けている限り、彼女のデツキは彼女に負けを許さない。あらゆる状況だろうとも、彼女は勝ち続けることになっていくのだから。

ターン69 光の結社とアカデミア―3F―

1階で万丈目、2階で夢想と別れ、ついに僕らは3階に突入した。いまだ下にいる2人とは連絡が取れないけど、ここでいちいち戻って確認してたら何のためにあの場を任せてきたのかわけがわからない。それに、これまでのパターンから考えるとこの階もそろそろのはずだ。同じことを考えているらしく、隣を走る3人の表情も硬い。

「よう。久しぶりだな」

「……うわっ、お前かあ」

「ずいぶんひどい言いようじゃないの、オイ。なんならもつかいぶつとばしてやろうか？」

ひよっこりと顔を見せたのは、やはりこの男、というべきか。実力的には確かにどこかで出番が来るだろうとは思っていたから、あまり驚きはない。ノース校四天王最強の男、よろいだ鎧田……ノース校が対抗試合前からすでに堕ちていたことを考えると、光の結社のなかでもかなり古株の幹部だ。

「さあ、早く構えろよ遊野清明。俺とお前の戦績はこれまでで1勝1敗、もう結果の見えた勝負には違いないが、このデュエルできっちり決着つけようぜ？」

「ああ、僕がお望みなわけね……」

だからこの男には会いたくなかったのだ。葵ちゃんの時も正直危なかったけど、今のメンバーの中では僕としか接点のないこの男が出てくるとしたら、その狙いは僕以外にありえない。

「十代、翔、剣山！ここは僕が相手するから、3人とも早く先に！」

少しは悩むだろうと踏んでいたのか、すぐに決断した僕を何か珍しい物でも見るような顔で覗き込む鎧田。確かに僕だつてどうせなら斎王を相手にしたかったけど、ここに突入した時点で誰が相手だろうと覚悟はできている。誰からの挑戦も正面から受け止め、斎王に当たるまで片っ端から叩き潰していくまでだ。

「いや、ここからの僕の友人たちの反応は予想と違った。」

「いや、ここは俺に任せて先輩は先に行くドン」

「劍山君一人じゃ無理でしょ？僕だって、ここで戦う！」

「劍山、翔……なんで」

「ずい、と前に出た劍山と翔が、ほぼ同時にデュエルディスクを構える。だけど、それはおかしい。ここで戦うのは僕の役目だから、2人は十代と一緒に齋王のそこに行くのが筋というものだろうに。その思いを言葉にしようとした矢先、先手を打つようにして2人がそれぞれ親指を立てて笑いかけてきた。」

「なーに言ってるドン、もともと俺たちを焚きつけてここまで来させたのは清明先輩ザウルス。その先輩がここで勝手に離脱されたら、それこそおかしな話だドン」

「悔しいけど、それに関してはその通りだからね。さあ、早くー！」

「鎧田はとても強い。正直なところ、僕が1人で戦っても勝てるかどうかはわからない。確かにそんな僕がタイマン張るよりも、この2人で変則デュエルに持ち込む方が勝つ可能性は高いだろう。」

「だけど、それはつまり僕を齋王のところまでたどり着かせるためにこの2人が……いや、この2人だけじゃない。万丈目も夢想も、僕を齋王のところへ送るために足止めを引き受けてくれたことになる。僕なんかそんな役で、本当にいいんだろうか。あまりにも僕では力不足ではないだろうか。今更といえれば、あまりにも今更な話だろう。自覚はある。だけど、本当にこれまではがむしやりに走ってきただけで何も考えていなかったのだ。せかす劍山と翔を見ながらそれでもまだ迷っていた僕の肩が、ポンと優しくたたかれる。見ると、その相手は十代だった。」

「ほら、ここはあの2人に任せようぜ。俺とお前、どっちが先に齋王のところにつけるか競争だぜ？」

「どうやら、どんどん考えが暗い方に向かっていたのが顔に出ていたらしく、そんな十代なりの精いっぱい励ましを聞いた。わざわざ気を遣わせて申し訳ないし、それに劍山の言う通り確かに僕には、ここまでみんなを引っ張ってきた責任がある。今日突入するなんて僕のがままに付き合ってもらった以上、せめて最後まで僕が決めるしかないだろう。」

今はとにかく前に進むことが先決だと、ようやく覚悟を決め直した。

「う、うん……もし、もし負けたら、絶対承知しないからね！」

「なんだなんだ、俺の相手は雑魚2人か？考えようによつては、一石二鳥ともいえるのか」

「鳥がどうしたドン、恐竜さんの力を見せてやるザウルス！」

「けっ、鳥は恐竜が進化したんだぜ？時代遅れの化石は化石らしく、大人しく博物館にでも飾られときな！」

「なんだとー恐竜さんをバカにする奴は、このティラノ剣山が容赦しないドン！丸藤先輩も、早くデュエルの用意をするザウルス！……と、その前にこのカードをデッキに入れておくドン」

「わ、わかってるよー！」

年の功の違いか、あつさりとやりこめられた剣山が怒りに身を震わせつつもデッキに1枚のカードを紛れ込ませてデュエルディスクを構える。次いで鎧田、最後に翔がデュエルの用意を済ます。

今回適用されるルールは変則デュエル……3人対戦のバトルロイヤルルールではあるが、翔と剣山が戦いあう理由がない以上実質1対2のデュエルとなる。ドローできないのは最初の1人のみだが、ターンプレイヤーは3人目からしか攻撃宣言ができない。今回は翔、剣山、そして鎧田の順にターンが回ってくるようだ。そして自分のターン以降は2人がかりの連続攻撃に耐えなければいけないという圧倒的に不利な状況にありながら、鎧田の表情に不安の色はない。それほどまでに彼にはノース校トップとしての、そして光の結社幹部としての自信と誇りがあるのだ。

「デュエル！」

「僕のターン！スチームロイドを守備表示で召喚、カードを1枚伏せてターンエンド」

スチームロイド 守1800 攻1800

下級ロイド随一の守備力を持つ機関車型ロイドを使い守備を固め

る。先攻1ターン目としては、まあまあ堅実な立ち上がりといえるだろう。

「俺のターン、ドローだドン。魔法カード、手札抹殺！全プレイヤーは手札をすべて捨てて、その枚数ぶんだけドローするザウルス。丸藤先輩、受け取ってくれドン！手札から俊足のギラザウルスを自身の効果で特殊召喚し、その効果を発ドン。このカードはノーコストで特殊召喚できる代わりに、自身の効果で場に出した時に相手はモンスター1体を墓地から蘇生できるザウルス」

「わかったよ！僕は俊足のギラザウルスの効果で、レスキューロイドを蘇生！」

足の筋肉が発達した太古の狩人が駆けてきたのを発見し、緑の車体に白い線の入ったレスキュー車のロイドが赤ランプをつけて走ってきた。

俊足のギラザウルス 攻1400

レスキューロイド 守1800

「まだ俺はこのターン、通常召喚をしていないドン。ギラザウルスをリリースしてアドバンス召喚、暗黒ドリケラトプス！」

くちばしを持ち羽毛のようなものまで生えた恐竜とも鳥ともつかぬ巨体が、これまた何とも名状しがたい鳴き声を響かせる。今一つ恐竜には見えにくい姿だが、れっきとした剣山のエースの1体である。

暗黒ドリケラトプス 攻2400

「これでターンエンドだドン」

「おっと、ならこのエンドフェイズに墓地に落ちた上弦のピナーカの効果を発動。デッキからBFモンスター、黒槍のブラストをサーチするぜ。さて、覚悟はいいんだな？俺のターン、ドロー！フィールド魔法、アンデットワールド発動！」

ホワイト寮の白い廊下が、一瞬にして何かおぞましい、血のように赤い液体で満たされた沼地に変わる。あるいはそれは、本当に血なのかもしれないが。奇妙にねじれた枯れ木の下には無数の部位の骨がいたるところに散らばっており、明かりを浴びて不気味に白い光を放射している。

「どうだ、お前ら？俺の得意の場所はお気に召したか？」

「気味の悪いフィールドだドン……お、俺のドリケラトプスが！」

「ああ、僕のビークロイドも！」

彼らの叫びも無理はない。ドリケラトプスはその大きなくちばしが途中から無残に折れ曲がっており、腹にも穴が開いてそこから白い肋骨が覗いて見える状態に。翔のスチームロイドも煙突が折れて車輪も右の前輪が完全になくなっており、レスキューロイドもレスキュー車というより霊枢車といった雰囲気的車になっていた。だが共通しているのはどのモンスターも先ほどより目の輝きがおかしくなっており、真つ赤に光る眼を不気味に見開いていた。

スチームロイド 機械族↓アンデット族

レスキューロイド 機械族↓アンデット族

暗黒ドリケラトプス 恐竜族↓アンデット族

「言い忘れてたな……アンデットワールドは死者たちの楽園、そこに入るものは当然死者でなければならない。つまりだ、俺たち全員の墓地及びフィールドのモンスターは全てアンデット族になり、さらに種族がアンデット以外のモンスターはアドバンス召喚が行えない。そのこの恐竜使い、下級モンスターだけでどう戦う気だ？」

「くっ……恐竜さんは決してあきらめないザウルス！」

「今はゾンビだけだな。さらにご丁寧なことに、さっきお前は手札抹殺をしてくれたよなあ？ありがとうよ、俺の墓地を肥やしてくれてよ！魔法カード、生者の書―禁断の呪術を発動！俺の墓地のアンデット族になったモンスター、暁のシロッコを特殊召喚。そしてそのメガネ、お前の墓地からサブマリントロイドのカードを除外するぜ。ダイレクトアタッカーはどうかすに越したことはないからな」

ブラックフェザー

B F ―暁のシロッコ 攻2000 鳥獣族↓アンデット族

「さあ、今こそ俺のUF……アンデットフェザーの力を見せてやる！自分フィールドにBFモンスターが存在することで、漆黒のエルフェンはリリースなしで通常召喚できるぜ。さらにエルフェンは場に出た時、相手モンスター1体の表示形式を変更できる。まずは恐竜野郎、お前からだ！そのデカブツには守備表示になってもらおう！」

エルフェンが漆黒の翼を振るうと無数のボロボロになった羽が渦を巻き、ドリケラトプスを混乱させる。

B F―漆黒のエルフェン 攻2200 鳥獣族↓アンデット族  
暗黒ドリケラトプス 攻2400↓守1500

「まだまだ！自分フィールドにB Fが存在するとき、黒槍のブラストは特殊召喚できる！さらにシロッコは俺が選ぶB Fモンスター以外の攻撃を放棄することで、場のB F1体に全ての力を集結させる！ブラストに全攻撃力を集中だ！」

B F―黒槍のブラスト 攻1700↓5900 鳥獣族↓アンデット族

「ターン目でもうこんな攻撃力……なるほど、清明先輩が負けるはずザウルス」

「だけど、僕らのモンスターは全部守備表示。少なくともこのターンは……」

「甘いぜ！言っただろう、まずは恐竜野郎からだつてよ。貫通能力を持つブラストで、ドリケラトプスに攻撃！ブラック・スパイラル！」  
全身に黒いオーラを纏わせた鴉天狗のゾンビが、腐りきった肉が取れて骨の一部が見える腕で自分の身長ほどもある大槍を抱えながら空高く舞い上がり、猛烈な勢いで回転しながらドリケラトプスめがけて突っ込んでゆく。

剣山の場に伏せカードはなく、本人も自らの迂闊さを悔いたが、時すでに遅し。圧倒的な質量で迫りくる黒い竜巻のような一撃に思わず剣山が目をつむった時、自分の隣から声が出た。

「リバースカードオープン、進入禁止！No Entry!!フィールド上の攻撃表示モンスターを、全て守備表示にする！」

「何!?!」

「丸藤先輩!?!」

黒い竜巻がドリケラトプスに突き刺さる寸前にぴたりと止まり、華麗な宙返りをしてブラストが鎧田の場に帰ってゆく。その場で、3体の鴉天狗が片膝をついた。

B F―暁のシロッコ 攻2000↓守900

BF―漆黒のエルフェン 攻2200↓守1200

BF―黒槍のブラスト 攻1700↓守800

「助かったドン、丸藤先輩」

「まったく、次はないから気を付けてよね？でも、これでレスキューロイドの借りは返したよ」

「もちろん、わかってるザウルス」

この2人は普段から喧嘩ばかりしているが、その分いざという時の結束力は強い。お互いがお互いを補うことを知っているため、本人たちが認めるかどうかはともかくとしてタッグとなればかなり強力なチームとなるのだ。

「けっ、まあいいさ。あつさり1人減ったところでつまんねーだけだからな。いいぜ、俺はカードを2枚セットして、これでターンエンドだ」

翔 LP4000 手札：3

モンスター：スチームロイド（守）

レスキューロイド（守）

魔法・罠：なし

剣山 LP4000 手札：3

モンスター：暗黒ドリケラトプス（守）

魔法・罠：なし

鎧田 LP4000 手札：2

モンスター：BF―暁のシロツコ（守）

BF―漆黒のエルフェン（守）

BF―黒槍のブラスト（守）

魔法・罠：2（伏せ）

場：アンデットワールド

「僕のターン、ドロー！」

長かった一巡目のターンが終わり、続いて翔の第2ターンが訪れる。カードを引き、フィールドと手札の限られたそれから最善手を導き出す。

「魔法カード、融合を発動！手札のキューキューロイドと場のレス



キューロイドで融合召喚、レスキューキューロイド！」

レスキュー車と救急車が混じり合い、赤い車体の消防車型ロイドが赤サイレンを光らせて走ってくる。だがその車体は全体的に錆びついており、よく見るとランプもカバーが割れていた。

レスキューキューロイド 攻2300 機械族↓アンデット族

「そんな融合モンスター1体で何ができる！さあ来い、そのメガネ！」

「やってやる！スチームロイドを攻撃表示にして、まずはレスキューキューロイドで漆黒のエルフェンに攻撃！」

ところどころ破けたホースを伸ばしたレスキューキューロイドが、そこから勢いよく腐った水を放つ。だがその水流は漆黒のエルフェンを押し流す前に、突然上空に現れた竜巻に吸い込まれていった。次いで水を放つホースが、それどころかレスキューキューロイド本体と共にその横にいたスチームロイドの車体までもがその竜巻に巻き上げられていく。

「残念だったな、俺のフィールドにBFモンスターのみが3体以上いて相手がBFに攻撃してきたとき、通常トラップのブラック・ソニックは手札から発動できる。お前のフィールドの攻撃表示モンスター、全部まとめて除外してやるぜ！」

鎧田の言葉通り、2体のロイドの姿が徐々に竜巻に引きずられていく。これを通せば翔の場が空になるというピンチに、剣山が思わず叫んだ。

「丸藤先輩！」

「大丈夫！速攻魔法、皆既日蝕の書を発動！フィールド上に存在するモンスターは、全て裏側守備表示となる！」

ブラック・ソニックによる除外を紙一重でかわす翔。だが、皆既日蝕の書は効果の強力さと引き換えに高いリスクを負うカードである。「エンドフェイズ、裏側守備表示の相手モンスターは全部表側表示になり、その数ぶんコントローラーはカードをドローする……」

「おお？なんだなんだ、3枚もドローさせてくれんのか？」

「俺も、ドリケラトプスの1枚をドローするドン」

あまりにも痛い、3枚ものドロ―加速。唯一救いなのは、1枚とはいえ剣山のもとにもカードが回ったことか。歯がゆさを胸に、最後にカードを1枚だけ伏せて翔がそのターンを終えた。

「俺のターン、ドロ―だドン！このカードは……ちやんと引けてよかつたドン。まず化石調査を発ドン、このカードはデツキからレベル6以下の恐竜族をサーチするドン。俊足のギラザウルスを手札に加え、そのまま先ほどの手順で特殊召喚するザウルス。丸藤先輩！」  
「うん！もう一度ギラザウルスの効果で、今度も墓地のレスキューロイドを特殊召喚するよ」

先ほどと同じ、変則バトルロイヤルだからこそ成り立つタクティクス。少し迷った末に翔は、効果が決まれば強力なキューキューロイドよりも単純にステータスの高いレスキューロイドを選択した。

俊足のギラザウルス 攻1400 恐竜族↓アンデット族  
レスキューロイド 守1800 機械族↓アンデット族

「それがどうした？さっきも言った通り、いくら下級モンスターを並べてもこのフィールドがある限りアンデット以外はアドバンス召喚が許されないんだぜ？」

「慌てるなドン。ここで速攻魔法、禁じられた聖槍を発ドン！ギラザウルスの攻撃力が800ポイントダウンする代わりにこのターンのカードはアンデットワールドの効果を受け付けない、つまり1ターンだけ元の恐竜さんに戻るザウルス」

半ば骨が露出して、目玉も片方潰れていたギラザウルスの皮膚がみるみるうちに血色が戻り、肉付きがよくなっていく。

俊足のギラザウルス 攻1400↓600 アンデット族↓恐竜族

「ああ……？」

「アンデットワールドはフィールドと墓地のモンスターをゾンビ化させるカード、つまり手札にあるうちは恐竜さんのままというところに突破法が隠されているドン。そして、これが俺の切り札！魔法カード、大進化薬！自分フィールドの恐竜族モンスターをリリースすることでこのカードは相手ターンで数えて3ターンの間場に残り、そして

このカードがある限り俺はレベル5以上の恐竜さんをリリースなしで召喚できるドン！」

「何?！」

「さあ吠えるドン、レベル8！究極<sup>アルティメットテトラ</sup>恐獣！」

体中に生えた棘のような鱗は、より敵の体を切り裂き深く傷つけるために。大きく鋭い鉤爪は、たとえ鉄板ほど分厚い装甲を持つ敵でさえも一瞬で引き裂きその中の肉体に致命的なダメージを与えるために。太い足は自身の大きな体を支えると同時に、自身から逃げようとする臆病者を捕らえるために。体中の全ての箇所が目目の敵すべてを殲滅するためだけに異常な進化を遂げた、戦闘特化型の恐竜の進化の頂点ともいえる姿である。

究極恐獣 攻3000 恐竜族↓アンデット族

「バトル！究極恐獣は俺のどのモンスターよりも先に、必ず全ての相手モンスターに攻撃しなければならぬドン。だけどこのデメリットも、恐竜さんのパワーの前ではメリットザウルス。アブソリュート・バイト！縁起の悪い鳥どもを一網打尽だドン！」

恐獣が一声吠え、その尾でブラストを叩き伏せながらシロツコの腐れ肉をためらいなく自らの骨がむき出しになった大顎で噛み砕き、余った両腕でエルフェンの翼を力任せに引き裂く。ただの一瞬で、3体の鴉天狗は腐った肉塊とボロボロの羽の塊に変化していた。

究極恐獣 攻3000↓BF―黒槍のブラスト 守800 (破壊)

究極恐獣 攻3000↓BF―暁のシロツコ 守900 (破壊)

究極恐獣 攻3000↓BF―漆黒のエルフェン 守1200 (破壊)

「俺のアンデットフェザー軍団が……だがな、恐竜野郎。このデュエルは1対2の変則デュエルじゃねえ、ルールのにはただのバトルロイヤルルールだ。つまりだ、次にお前ご自慢の恐竜は必ず味方のメガネ野郎のモンスターを攻撃しなけりやならないのさ！」

「し、しまったドン！」

もはや持ち主の剣山ですら止められないほどの破壊衝動を腐りきってまともな思考のできなくなった脳に秘め、恐獣は次なる標的を

自分の隣にある伏せモンスターに定める。その突撃を前に、呆然と立ち尽くす翔。

剣山にとつては体の一部でもあり、彼にとつては一番大切である恐竜。口の端から泡とも腐れ汁ともつかない液体をまき散らしながら暴走の歩み続ける恐獣を見て、剣山はもう一度その向こう側にいる翔を見る。ほんの一瞬ためらった後、彼はついに覚悟を決めた。

「……恐竜さん、ごめんなさいだドン！速攻魔法、ハーフ・シャツを発ドン！究極恐獣の攻撃力を半分にする代わりに、このターン戦闘で破壊されなくなるザウルス！」

急に全身の力が抜けた恐獣が、それでも本能のままにむなしい突撃を繰り返す。腐っても鋼鉄製であるロイドモンスターの車体はその攻撃を受けてもびくともせず、自分の攻撃が通じないことを悟った恐獣がほとんど半狂乱になって体当たりを繰り返した。

究極恐獣 攻3000↓1500↓??? (レスキューロイド)  
守1800

剣山 LP4000↓3700

究極恐獣 攻1500↓??? (スチームロイド) 守1800

剣山 LP3700↓3400

究極恐獣 攻1500↓??? (レスキューロイド) 守1800

剣山 LP3400↓3100

「大丈夫!？」

「この程度、俺の恐竜さんの痛みに比べたらどうということはないザウルス……暗黒ドリケラトプス、追撃のダイレクトアタックだドン！  
怪鳥！」

折れたくちばしを大儀そうに開き、口から謎の音波を連射するドリケラトプス。それが鴉天狗たちの物言わぬ死体を粉みじんに吹き飛ばし、そのまま鎧田の体を突き抜けた。

暗黒ドリケラトプス 攻2400↓鎧田 (直接攻撃)

鎧田 LP4000↓1600

「へへっ、どんなもんザウルス！」

「思ったよりやるじゃねえか……だが、調子に乗ってられるのもここ

までだ！俺が2000ポイント以上の戦闘ダメージを受けたことで、墓地から天狗風のヒレンの効果を発動！このカードとレベル3以下のBFを選択し、効果を無効にして特殊召喚する！甦れヒレン！そして白夜のグラディウス！」

BF―天狗風のヒレン 守2300 鳥獣族↓アンデット族

BF―白夜のグラディウス 守1500 鳥獣族↓アンデット族

たった今全体攻撃により全モンスターを倒したはずなのに、またもや2体のモンスターがすぐさま場に揃う。おまけに既にドリケラトプスで攻撃を行ってしまっているため、究極恐獣でせめてスチームだけでも追撃して破壊することすらできない。

「俺の手札は残り1枚……このカードをセットして、ターン終了だドン」

「残念だったな、俺の手札はそのメガネのおかげで随分と増えた、まだまだ戦えるぜ！まずはドローだ！」

その瞬間、鎧田のデッキトップが白い光を放つ。剣山も翔も、あれこそが鎧田の洗脳の鍵となっているカードであり、あれを破壊しなければならぬのだと認識できた。

「そしてここで2枚のリバースカード、無謀な欲張りを発動！今すぐカードを2枚ドローできる代わりに、俺のドローフェイズが2回スキップされるぜ。そしてフィールド上にBFが存在することにより、残夜のクリスを特殊召喚！同じ手順により、疾風のゲイルと突風のオロシを特殊召喚するぜ」

BF―残夜のクリス 攻1900

BF―疾風のゲイル 攻1300

BF―突風のオロシ 攻400

「これで仕掛けは整った！BFチューナーのヒレン、非チューナーモンスターのグラディウスの2体をゲームから除外！さあ来い、これぞ斎王様より頂いた俺の新たなBF、極光のアウロラ！」

ヒレンとエテジアの姿が煙か幻のようにふっと掻き消え、アンデットワールドの上空にかかる分厚く暗い雲を突き抜けて七色の閃光が一筋すつと走った。その光の正体は、1羽の鳥……オーロラのごとく

つかみどころのない、見るたびに色が変わって見える不可思議な羽根を持つ異端のBFである。

BF―極光のアウロラ 守0 鳥獣族↓アンデット族

「な、なんだドンあのカード……?」

「まだだ!同じくチューナーのオロシと非チューナーのクリスを除外して、2体目のアウロラを特殊召喚!」

再び重苦しい魔界の空に走る七色の光。光を放つ2羽の鳥が、空中を自由に飛び交い螺旋を描いた。

BF―極光のアウロラ 守0 鳥獣族↓アンデット族

「次の手順は、と。だが、まずはコイツの効果からだ!疾風のゲイルは1ターンに1度、相手モンスターへの攻撃を半減できる!これでレスキューキューロイドの攻撃は半減するぜ!」

レスキューキューロイド 守1800↓900 攻2300↓150

「そして墓地に眠る、精鋭のゼピュロスの効果発動!俺のフィールドのゲイルを手札に戻してこのカードを蘇生し、俺は400のダメージを受ける……だがこれで、再び手札のゲイルを特殊召喚して効果を使うことができる!次の目標は究極恐獣、お前だ!」

BF―精鋭のゼピュロス 攻1600 鳥獣族↓アンデット族

鎧田 LP1600↓1200

BF―疾風のゲイル 攻1300 鳥獣族↓アンデット族

究極恐獣 攻3000↓1500 守2200↓1100

「BFチューナーのゲイル、非チューナーのゼピュロスを除外!現れる、これが最後のアウロラだ!」

3筋目の閃光が、またもや空を彩る。3羽の鳥が放つ光が、徐々に辺りの闇を晴らしてきた。

BF―極光のアウロラ 守0

「さて、と。なあ、なんで俺がここまでして攻撃力0のモンスターを3体も並べたか、お前らにわかるか?」

2人とも何も答えない。正確には答えないのではなく、答えられないのだ。まさに2人とも、それと同じ疑問を抱いていたのだから。

「見ていてください、齋王様。今すぐこの者らに光の裁きを食らわせて見せましょう！通常召喚、レベル2！ザ・カリキュレーター！」

電卓に手足が付いたような小さなモンスターが、無数のドクロを押しつけてアンデットワールドに立つ。その表示板にノイズが走ったかと思うと、次の瞬間32、と表示された。

「いかよく聞けよ、このモンスターの攻撃力は、自分フィールドのモンスターのレベル合計分の300倍になる！つまりだ、レベル10のアウロラが3体とレベル2のカリキュレーター自身が並んだことで合計レベルは32、9600の大火力を得ることができる！」

「攻撃力、9600!?そんなバカなドン！」

「あ、あわわ……」

ザ・カリキュレーター 攻9600 機械族↓アンデット族

「さて、まずは恐竜野郎、お前からだ！カリキュレーターで究極恐獣に攻撃、ノース・トップ・カノン！」

「ぐっ……最後のリバースカード、オープンだドン！」

「無駄だあ！消え去れ！」

ザ・カリキュレーター 攻9600↓究極恐獣 攻1500(破壊)

剣山 LP3100↓0

「はっはっは！ざまあねえなあ、そんなデカイなりしてよお！………あん？」

圧倒的な一撃でライフが0になった剣山だが、まだ彼は倒れない。最後に彼のもとに残った1枚のリバースカード、それはデュエルが始まる前にこの変則マッチ用に彼がデッキに1枚入れておいたカードだった。その効果を処理するまで、彼はまだ倒れられない。今にも意識が飛びそうなか、気力だけで辛うじてこらえて言葉を放つ。

「強欲な……贈り物、だドン。この、カードは……相手プレイヤーに、無条件でカードを、2枚ドローさせることができる……トラップ、ザウルス。丸藤、先輩……これで、あとは頼んだ、ドン……必ず、そいつを………」

翔に対して文字通り最後の贈り物を終えた剣山の体が、その場に崩れ落ちる。プレイヤーがリタイヤしたことにより、フィールドに残り

続けていたドリケラトプスの姿も最後にひとつ不服そうな鳴き声を上げつつ消えていった。

「そんな、剣山君！」

「おーっと、待ちなよ」

意識を失い倒れた相棒に慌てて駆け寄ろうとした翔を、鎧田が制止する。

「まだデュエルは終わってねえ、俺かお前のどちらかが倒れるまで続く。それぐらいわかってるよな？」

「う……」

その表情と声の調子から、せめて剣山を布団に寝かせるほどのひますら与えてくれないことを悟る。仕方なく、翔は再び鎧田に向かい合った。

昔の翔だったら、下手をするとこの時点でプレッシャーに耐えかねてサレンダーしていただろう。だが、この戦場に立っているのはアカデミア入学前の、自分に自信が持てない弱虫だった癖にすぐ調子に乗る悪癖を持ったころの彼ではない。確実にデュエリストとして成長しつつある戦士、丸藤翔なのだ。だから、彼はもう目の前の相手を必要以上に恐れない。自分のデッキを、そして何より自分自身を信じて戦い抜く強さを知っている。

「まずは、あの恐竜野郎の強欲な贈り物の処理があったな。さあ、カードを2枚引きな！それが終わったら俺はメイン2に装備魔法、レアゴールド・アーマーをカリキュレーターに発動。これでカリキュレーター以外のモンスターに相手は攻撃ができなくなり、カードを伏せてターンエンドするぜ」

「勝つまで通してくれないなら、このターンで終わらせるまでだ！強欲な贈り物のカードをドロウして……僕のターン、ドロウ！よし、これなら……リバーズカード、フュージョン・リザーブ融合準備を発動！エクストラデッキの融合モンスター、スーパードラゴンクロイドージャンボドリルを見せることで、その融合素材であるドリルロイドをサーチして、さらに墓地からさつき使った融合のカードを手札に戻す！」

「ああ……っ？」



ここで初めて、翔が何かをしようとしていることに気づいた鎧田。だが、もう遅い。

「魔法カード、融合を発動！手札のトラッククロイド、エクस्प्रेसロイド、ドリルロイド、ステルスロイドの4体を素材として、融合召喚！これが僕の切り札、スーパードロイドステルス・ユニオン！」

戦闘機型のステルスロイドとトラッククロイドが胴体部分となり、そこから伸びた手足にそれぞれ2つに分かれたエクस्प्रेसロイド、ドリルロイドが新たなパーツとして装着される。両手両足が揃った体に最後に頭がせり上がってきて、ついに数あるロイドモンスターの中でもトップクラスのサイズを誇る4体合体の巨大ロボがその全貌を露わにした。

スーパードロイドステルス・ユニオン 攻3600 機械族  
↓アンデット族

「何をしたところで、カリキュレーターの攻撃力のほうが圧倒的！惜しかったな、レアゴールド・アーマーさえなければアウロラに攻撃で俺の負けだったかもしれないによ」

「いや、このターンで僕の勝ちだ！ステルス・ユニオンは1ターンに1度、フィールドの機械族以外のモンスター1体を選んで装備カードにすることが出来る！僕が選ぶのはアンデット族モンスター、ザ・カリキュレーターだ！」

「しまった、アンデットワールドの効果が……ふ、ふざけんな、斎王様からも認められたデュエリストのこの俺が、俺がこんな奴らに……、ここは3体のアウロラで凌ぐしかねえ！」

鎧田の叫びもむなしくステルス・ユニオンの胸にあるトラックの荷台部分が開き、その中にカリキュレーターが吸い込まれていく。

「バトル、ステルス・ユニオンで極光のアウロラに攻撃！この瞬間にステルス・ユニオンの強制効果により攻撃力が半減するけど、それでもアウロラを攻撃すれば貫通能力で1800のダメージが通る！」

「なに、攻撃力半減だど？そいつはいいことを聞かせてもらったぜ、だったらまだ俺にもツキがある！リバースカードオープン、ダメージ・ダイエット！これで俺の受けるダメージはさらに半減、900だ

！」

スーパービークロイド―ステルス・ユニオン 攻3600↓180  
0↓BF―極光のアウロラ 守0（破壊）

鎧田 LP1200↓300

「残念だったなあ、このターン中にケリをつけられなくてよ！」

「いいや、勝負はもう終わっている！ステルス・ユニオンは相手モンスター―全てに攻撃することができ、さらに守備モンスターを攻撃した場合に貫通ダメージを与える！」

「何!？」

蒼白から一転して満面の笑み、そしてまた自らの敗北を悟った顔に。二転三転する表情の鎧田に、巨大ロボの拳が唸りをつけて振るわれた。

「ステルス・ユニオンで、残り2体のアウロラに攻撃！」

スーパービークロイド―ステルス・ユニオン 攻1800↓BF―

極光のアウロラ 守0（破壊）

スーパービークロイド―ステルス・ユニオン 攻1800↓BF―

極光のアウロラ 守0（破壊）

鎧田 LP300↓0

「ぐはっ！」

「か、勝った―アニキたちも心配だけど、まずはこっちを！」

倒れたままの剣山の体をどうにか起こし、近くの壁に寄りかからせる。すぐにその閉じられていたまぶたがピクリと動き、弱々しく目が開かれた。

「う、うう……丸藤先輩、デュエルはどうなったドン……」

「大丈夫。僕の……いや、僕たちの勝ちだ！」

「どうか、それはよかったザウルス。じゃあ早く、アニキたちのところに……」

いつもなら翔も、剣山が十代をアニキ呼ばわりしたことをいつもの調子で咎めただろう。だが、そんなことをしている余裕は翔にはな

かった。なぜなら、彼は見てしまったのだ。廊下の向こう側、今自分たちが来た道から何人かのホワイト生がこちらにデュエルディスクを構えて歩いてくるのを。

剣山も翔の視線の先を追い、こちらに近づいてくる彼らに気づく。そんな彼を守るように、翔が立ち上がった。

「さあ来い、お前たち！ぼ、僕が一人で相手になつてやる！」

「丸藤先輩……お気遣いはありがたいけど、いくらなんでもそりやなしだドン。俺だって、まだ戦うことはできるザウルス！」

どうにか立ち上がった剣山を翔は一瞬止めようともしたが、どうせ言ったところで聞きはしないだろうと判断してそれを諦める。返事代わりに、自分のデュエルディスクを構えた。

「デュエル!!」

ターン70 光の結社とアカデミア―4F―

「……よし、清明。確かこの部屋だよな」

「ちよつと待ってね。えつと……うん、この部屋に隠し通路が仕掛け  
てあるんだって」

ポケットにねじ込んでおいた、三沢からもらったホワイト寮地図を  
再確認する。間違いない、4階のこの部屋だ。

「なら、一気に行くぜ。セーのっ!」

「待って待って! 鍵あいてたらどーすんの!?!」

頑丈そうなドアをタックルでこじ開けようとした十代を慌てて止  
めて一応ドアノブに手を伸ばしてみると、案の定滑らかな動きで普通  
に開くことができた。まあ、あちらさんとしても僕らが入ってくるの  
は想定内みたいだし、ここで鍵締めて閉じこもるような見苦しい真似  
はさすがにしないだろう。

それに、鍵が閉まってると思う理由はもう1つある。仮に閉じこ  
もっていたとしても僕の場合は、精霊召喚の一発でドアどころか壁ご  
とぶち抜かせることもできるから特に意味はない。そのことを、霧の  
王に頼んでノース校との対抗戦のときスプリンクラーを誤作動させ  
たことから斎王だって百も承知のはずだからだ。

「うし、それじゃあ……」

「思ったより遅い到着だな、清明に十代」

勢いよく開けた部屋はさっぱりとしていて、意外にもシンプルな造  
りだった。あくまでも隠し通路のためのつなぎの部屋、ということだ  
ろうか。だけどそんな部屋の中でも僕らの目を引いたのが部屋の中  
心に置かれた一組の机と椅子、そしてそこに腰掛ける1人の男。

「三沢」

「よう。俺の思った通り、やっぱりここまで来たのはお前たち2人か」  
最後に会った修学旅行あたりで見たのと同じ銀髪に白服姿をした、  
僕の親友の1人。まあ、どこかで会うことになるのはわかった。鎧  
田と同じだ。

「十代………行って。僕がここは止めるから」

「いいのか？」

「三沢が無茶してこんなことになったのも、もとはといえば僕のせいだからね。だったら、僕が責任取ってどうにかするさ」

僕の思いが伝わったのかそれ以上何も言わず、十代が僕の横を抜けて開きっぱなしの隠し扉の方へ駆け出した。のだが、その行く手をすつと三沢が塞ぐ。

「なんだよ、三沢」

「斎王様のご命令でな。この場所まで遊城十代が来たら、他の奴はいいから俺が止めろとのことだ」

「俺を……？」

「ああ。正直理由は俺にもわからんが、俺がそんなことを知る必要はない。俺はただ斎王様の命令を遂行するだけだ」

ここでいったん言葉を区切り、それにな、と呟く。

「個人的な理由だがな、十代。お前にはまだデュエルで勝ったことがなかったはずだ。それは俺のプライドが許さない」

その言葉をどう受け取ったのか、いつになく難しい顔の十代からは読み取れなかった。だけどやがて、その手が右手のデュエルディスクに伸びる。

「清明。……斎王は、頼んだぜ」

「任せといてよ」

そのたった一言だけで、僕らにとっては十分だった。もうそれ以上は振り返ることもせず、隠し扉の中に入る。どこまで続いているのかもよくわからないような薄暗い階段を、一段飛ばしで一気に駆けおりにいった。

「さてと。ちなみに三沢、なんのデツキを使う気なんだ？」

「そうだな。やはりお前と戦うならば、この地のデツキ……もうわかっているだろうな、ジエムナイトだ」

「ジエムナイト……」

それを聞いた十代の脳裏に、かれこれ一年近く前の記憶がよみがえ

る。ノース校対抗戦の代表を決めるデュエルにおいて、三沢のジェムナイトと彼のHEROが真っ向からぶつかり合った日のことを。結局その時のデュエルはお互いにライフが0になる引き分けだったが、果たしてこの1年でより成長を遂げたのは一体どちらなのか。

その答えは、お互いのデッキだけが知っている。それをわかっているがゆえに、それ以上無駄話で時間を潰すようなことはない。デュエルをすれば、わかる。

「デュエル！」

先攻を取ったのは十代。ともに融合を使う2人の戦いは、手札消費が多いがゆえに後攻の方が動きやすい面があることは否定できない。だが、だからといって一歩も引くわけにはいかない。

「俺のターン、融合徴兵を発動！エクストラデッキの融合モンスターを相手に見せることでその素材の1体をサーチかサルベージできる代わりに、同名モンスターを俺は使用できない。俺はアクア・ネオスを見せて、その素材であるネオスを手札に加えるぜ」

十代の新たなヒーロー、ネオス。それを見た三沢がほう、と呟いた。「なるほど、それがお前の新しいカードか。確かにこの目で見せてもらった」

「このターンはネオスの出番はないけどな。まずはお前だ、ワイルドマンを召喚！そして装備魔法、最強の盾を装備。このカードの効果で攻撃表示のワイルドマンの攻撃力は、その守備力の数値だけアップするぜ」

大剣を背負った筋骨隆々の野生児的ヒーローが、真新しい盾を左手に装備する。

エレメンタルヒーロー  
E・HERO

ワイルドマン 攻1500↓3100

「なるほど、ワイルドマンの高い守備力を利用してきたか」

「へへっ、どうだ！俺はさらにカードをセットして、ターンエンドするぜ」

「確かに、1ターン目から手札消費2枚でトラップの効果を受けない攻撃力3100は大したものだ。だが、まだ甘い！魔法カード、ジェムナイト・フュージョンを発動！手札のジェムナイト・アンバー、サ

ニクス、ルマリンの3体を素材として、融合召喚！出でよ、ジエムナイトマスター・ダイヤ！」

3つの宝石の輝きが空中で混じり合い、中心に静かに燃える青い炎のような輝きを宿す1つの輝石となる。大剣を手にしたその宝石剣士が剣を掲げると、白い照明に反射して七色の輝きが辺りを照らす。「マスター・ダイヤの攻撃力は、墓地のジエム1体につき100ポイントアップする。残念ながらモンスターのみしか加算されないが、それでも融合素材にした3体。ワイルドマンを倒すには十分だ」

ジエムナイトマスター・ダイヤ 攻2900↓3200  
「おいおい、いきなりエースモンスターなんて、なかなか気合入ってるな」

「お前は手を抜いて勝てる相手じゃないからな。バトルだ、マスター・ダイヤでワイルドマンに攻撃！」

ダイヤの剣に埋め込まれた8つの宝石がそれぞれ違う色の光を放ち、それが一筋の閃光となってワイルドマンを焼き尽くす。

ジエムナイトマスター・ダイヤ 攻3200↓E・HERO ワイルドマン 攻3100(破壊)

十代 LP4000↓3900

「さあ、次はどうする？俺は、これでターンエンドだ」

「おっと、ならそのエンドフェイズにトラップ発動、トウルース・リインフォース！バトルフェイズを封じる代わりにデッキからレベル2以下の戦士族モンスター、ヒーロー・キッズを特殊召喚するぜ。そして特殊召喚に成功したヒーロー・キッズは自身の効果により、デッキから同名モンスターをさらに2体特殊召喚できる」

ヒーロー・キッズ 守600

ヒーロー・キッズ 守600

ヒーロー・キッズ 守600

アメコミチックな戦闘服に身を包んだ少年3人が揃う。結果的に十代のフィールドにモンスターを残したままターンを渡したことになるが、それでも三沢の顔に焦りの色はみられない。まだデュエルは始まったばかりなのだ。

十代 LP3900 手札：2

モンスター：ヒーロー・キッズ(守)

ヒーロー・キッズ(守)

ヒーロー・キッズ(守)

魔法・罨：なし

三沢 LP4000 手札：2

モンスター：ジェムナイトマスター・ダイヤ(攻)

魔法・罨：なし

「俺のターン、ドローだ！ヒーロー・キッズのうち2体をリリースして、アドバンス召喚！来い、ネオス！」

瞬間、光が爆発した。正義の闇の波動を受けた正しきヒーローが、光の結社の本拠地に満を持して立ち上がる。

E・HERO ネオス 攻2500

「来たか……だが、そのモンスターでは俺のダイヤは倒せん！」

「そんなことわかってるぜ！永続魔法、魂の共有ーコモンソウルを発動！フィールド上のモンスター1体を選択することで発動できるこのカードは、手札からそのモンスターのコントロールの場ネオスベーションにN

を1体特殊召喚。そして、その攻撃力を最初に選択したモンスターに加算するぜ。場のネオスを選択し、手札から風のN、エア・ハミングバードを特殊召喚！」

『ともに戦おう、十代！』

ハチドリをそのまま人型にしたような鳥人モンスターが、背中に生えた翼を器用に動かして地面に降り立つ。十代の方を振り向いて、一度ウインクして見せた。

N・エア・ハミングバード 攻800

E・HERO ネオス 攻2500↓3300

「ほう……」

「まずはエア・ハミングバードの効果を発動するぜ。1ターンに1度、相手の手札1枚につき500ポイントのライフを回復する！ハニー・サック！」

三沢の手に残った2枚の手札から大きな花が生え、颯爽と飛び立つ



たエア・ハミングバードがこれまた器用にその花ひとつひとつから丁寧に蜜を吸い取ってゆく。

十代 LP3900↓4900

「これでよし、と。バトルだ！ネオスでジェムナイトマスター・ダイヤに攻撃、ラス・オブ・ネオス！」

飛び上がったネオスが上空から加速度をつけてチョップを叩き込む。それを迎撃せんとマスター・ダイヤが大剣を構えるが、一瞬の激突の後大剣がチョップを受けた中心部分からぽつきりと折れてしまった。たまらず一歩下がったマスター・ダイヤの鎧に、もう一撃のチョップが炸裂する。

E・HERO ネオス 攻3300↓ジェムナイトマスター・ダイヤ 攻3200（破壊）

三沢 LP4000↓3900

「驚いた、まさかお得意のスカイスクレイパーも融合も使わずに攻撃力だけでマスター・ダイヤを越えてくるとはな」

「これで終わりじゃないぜ！エア・ハミングバードでダイレクトアタック、ホバリング・ペック！」

N・エア・ハミングバード 攻800↓三沢（直接攻撃）

三沢 LP3900↓3100

「さあ来い三沢、俺はこれでターンエンドだ！」

「1つ言っておこう、十代。マスター・ダイヤが倒されるのは俺の想定内……ここからが本番だ、とな」

自身のエースが倒されたというのにまるで堪えた風のない三沢の態度にどこかゾツとするものを感じながらも、それを振り払うように首を振って十代は次に三沢が何をしてくるのかの観察にかかる。

「俺のターン、ドロー！永続魔法、ブリリアント・フュージョンを発動！この効果で呼び出す融合モンスターは攻守が0になるが、代わりにデッキのモンスターを素材として融合召喚ができる！」

「何!?デッキだけで融合召喚だ!?」

長いこと融合テーマのバイオニア、ヒーローデッキを使い続けてきた十代でさえ聞いたことのない融合条件。融合の一番の弱みである

手札消費の荒さも、その素材をデッキだけで賄うのであれば関係ない。

「デッキに眠るジェムナイト・ラズリー、クリスタ、ガネットの3体を素材とし、融合召喚！これぞ斎王様のもとで俺が手に入れたジェムナイトの新たなエース、ジェムナイトレディ・ブリリアント・ダイヤー！」  
砕け散ったダイヤモンドのかけらが再び結集し、へし折れた大剣もより細身のレイピアとして生まれ変わる。胸の巨大な核石も新たなカット法により生まれ変わり、前とは一味もふた味も違う輝きを手に入れたブリリアント・ダイヤがネオスと対峙する。

ジェムナイトレディ・ブリリアント・ダイヤ 攻3400↓0 守2000↓0

「だけど、攻守0ならネオスの攻撃で……」

「無論、そうはさせない。まずはラズリーが墓地に送られたことで墓地の通常モンスター、ルマリンを回収する。そして墓地からジェムナイト・フュージョンの効果発動、墓地からジェムナイトのモンスター1体、サニクスを除外することでこのカードを手札に戻す。そのまま手札の魔法カードであるこのカードを捨てて、ブリリアント・フュージョンのさらなる効果を発動！このカードで融合召喚したモンスターの攻守を、相手ターンの終わりまで元の攻守の数値だけアップさせる」

ジェムナイトレディ・ブリリアント・ダイヤ 攻0↓3400 守0↓2000

「……バトルだ、ブリリアント・ダイヤでネオスに攻撃！切り裂け、ブリリアント・ダイヤー！」

妙な間が空いたのち、ブリリアント・レディが走る。レイピアの鋭い連撃が、ヒーローの反応速度を徐々に上回る。辛うじて両腕でガードを続けるが、それも最終的にはむなしい抵抗に終わった。

ジェムナイトレディ・ブリリアント・ダイヤ 攻3400↓E・HERO ネオス 攻3300（破壊）

十代 LP4900↓4800

「ネオス！」

「これで俺の攻撃は終わりだ、だがこのままエンドフェイズではないぞ。魔法カード、黙する死者を発動。墓地の通常モンスター、ジェムナイト・アンバーを蘇生させる。そしてデュアルモンスターであるアンバーを再度召喚しよう」

ジェムナイト・アンバー 守1400

「デュアルモンスターは召喚権を消費して再度召喚されることによつて通常モンスターから効果モンスターとなり、その効果を使用できる。そしてアンバーの能力は手札のジェムナイトモンスターを墓地に送ることで、除外されたモンスターを1体俺の手札に加えること。さつき加えたルマリンを墓地に送り、除外したサニクスを手札に。カードを1枚伏せて、ターンエンドだ」

「まさかネオスまでやられるなんて、さすが三沢だな。俺のターン、ドロー！」

フィールドに残ったのは下級モンスター2体、手札も0とあまり好ましい状況ではない。それでも十代は、自分でも知らず知らずのうちに笑っていた。この圧倒的なピンチを乗り越えることができるか、それを決定づける1枚のドロウを心から楽しんでいるのだ。

「……いいカードを引いたぜ、カードガンナーを召喚！まずはエア・ハミングバードの効果をもう1度発動し、またライフを回復するぜ」

三沢の2枚の手札が大輪の花を咲かせ、その蜜を再びエア・ハミングバードが吸い尽くす。

十代 LP4800↓5800

「また回復か。……つてちよつと待て、カードガンナーを攻撃表示だど!?!」

「ああ、俺は逃げずに戦うぜ！カードガンナーの効果発動、1ターンに1度自分のデッキを上から3枚まで墓地に送り、エンドフェイズまでその数1枚につき500ポイント攻撃力をアップさせる。俺はもちろん、3枚のカードを墓地へ！」

カードガンナー 攻400↓1900

「おつ、ラッキー。クロス・ポーターは墓地に送られた時、デッキからNのカードを1枚サーチできる。俺はこれでグラン・モール……い

や、アクア・ドルフィンを手札に加えるぜ」

運良く墓地で効果を発動できるクロス・ポーターの効果が使えた十代。最初はブリリアント・ダイヤをバウンスできるグラン・モールをサーチしようかとも思ったが、それでは駄目なことに気づいて慌てて取りやめる。三沢の洗脳の憑代となつていているのは、本人の発言からいつてもブリリアント・ダイヤで間違いないはずだ。だとすれば、それをあくまでもフィールド上で破壊しなければ洗脳を断ち切る事にならない。

「バトルだ、カードガンナーでジェムナイト・アンバーに攻撃！」

全体的におもちやのような原色の小型ロボが、目からビームを放つ。

カードガンナー 攻1900↓ジェムナイト・アンバー 守1400 (破壊)

「そのままエア・ハミングバードを守備表示に変更してエンドフェイズ、カードガンナーの効果も切れてターンエンドだ」

「いいだろう。それと同時に、ブリリアント・フュージョンの効果も切れる」

N・エア・ハミングバード 攻800↓守600  
カードガンナー 攻1900↓400

ジェムナイトレディ・ブリリアント・ダイヤ 攻3400↓0 守2000↓0

十代 LP5800 手札：1

モンスター：カードガンナー (攻)

N・エア・ハミングバード (守)

ヒーロー・キッズ (守)

魔法・罨：魂の共有―コモンソウル (ハミングバード)

三沢 LP3100 手札：2

モンスター：ジェムナイトレディ・ブリリアント・ダイヤ (ブリリアント・フュージョン)

ジェムナイト・アンバー (守)

魔法・罨：ブリリアント・フュージョン (ダイヤ)

1 (伏せ)

「俺のターン、ドロー！言っておくがな十代、ブリリアント・ダイヤは打点だけではなく、まだ使っていない効果が残っている！ジェムナイト・サニクスを召喚し、ブリリアント・ダイヤの効果発動。自分ワールドのジェムナイト1体を墓地に送り、ジェムの名を持つ融合モンスター1体を召喚条件を無視して特殊召喚できる！グラインド・フュージョン、ジェムナイト・パーズ！」

黄金色の体を持つジェムナイトの突撃戦士が、黄色がかった緑のマントをはためかせて現れる。

ジェムナイト・パーズ 攻1800

「エクストラデッキから融合モンスターを直接特殊召喚だど!?それに、パーズは確か……」

前にも一度パーズと戦ったことのある十代が、そのデュエルを思い出す。パーズの固有能力、それは確か。

「その通り、パーズは2回攻撃能力と戦闘破壊したモンスターの攻撃力と同じダメージを相手に与える能力を持つ。さらに墓地のアンバーを除外してジェムナイト・フュージョンを手札に戻し、このターンのためのブリリアント・フュージョンのコストに使う」

ジェムナイトレディ・ブリリアント・ダイヤ 攻0↓3400 守0↓2000

「さあ、バトルだ！ブリリアント・ダイヤでカードガンナーに攻撃！」  
「させるか！墓地のネクロ・ガードナーを除外して、その攻撃を無効にする！」

半透明の戦士が、レイピアの嵐からカードガンナーを守り抜く。その様子に、さすがの三沢も苦笑いを漏らした。

「さすがに凄まじい落ちの良さだな、十代。たった3枚の墓地肥やしで、2枚も墓地で力を発揮できるカードを落とすだなんて。だが、まだパーズの2回攻撃が残っている。ヒーロー・キッズ、そしてエア・ハミングバードに連続攻撃！」

ジェムナイト・パーズ 攻1800↓ヒーロー・キッズ 守600

(破壊)

十代 LP5800↓5500

ジェムナイト・パーズ 攻1800↓N・エア・ハミングバード  
守600 (破壊)

十代 LP5500↓4700

「まだ終わっていないぞ、十代！リバースカードオープン、融合解除！  
ブリリアント・ダイヤをエクストラデッキに戻すことで、その融合素  
材である3体を墓地からフィールドに特殊召喚する！甦れラズリー、  
クリスタ、ガネット！」

ダイヤの光が辺りにはじけ、今度はそれが3体のジェムナイトに分  
裂した。水晶を司るクリスタ、燃え盛る柘榴石の拳を振るうガネツ  
ト、そして瑠璃の神秘を秘めたラズリーである。

ジェムナイト・クリスタ 攻2450

ジェムナイト・ガネット 攻1900

ジェムナイト・ラズリー 攻600

「融合解除!?それを伏せてたのか、三沢！」

「ああ、これは予想外だったようだな、十代！ラズリーでカードガン  
ナーを破壊して、ガネットとクリスタでダイレクトアタック！」

ジェムナイト・ラズリー 攻600↓カードガンナー 攻400

(破壊)

十代 LP4700↓4500

ジェムナイト・ガネット 攻1900↓十代 (直接攻撃)

十代 LP4500↓2600

ジェムナイト・クリスタ 攻2450↓十代 (直接攻撃)

十代 LP2600↓150

「今のはなかなか効いたぜ、三沢。カードガンナーが戦闘破壊された  
ことで、カードを1枚ドロウする」

「これが俺の全力だ……カードを2枚伏せ、ターンエンドだ」

「なら、今度は俺の全力を見せてやらなくちゃな！俺のターン、ドロウ  
！よし来たぜ、コンバート・コンタクトを発動！手札とデッキからN  
を1体ずつ墓地へ送り、カードを2枚ドロウ。俺は手札のアクア・ド  
ルフィンと、デッキのフレア・スカラベを墓地に送るぜ」

「この局面で、さらなるドロースースだと……！」

うなる三沢とは対照的に、本当に楽しそうな様子を隠そうともせず  
にカードを引く十代。その思いが、またも十代に奇跡の引きをもたら  
した。

「魔法カード、シャッフル・リボーンを発動！俺のフィールドにモン  
スターが存在しないことで、俺の墓地のモンスター1体を効果を無効に  
して特殊召喚するぜ。戻って来い、エア・ハミングバード！」

N・エア・ハミングバード 攻800

「ここで俺は墓地から、シャッフル・リボーン第2の効果が発動。この  
カードを墓地から除外して自分フィールドのカードをデッキに戻す  
ことで、カードを1枚ドロォできる。俺は永続魔法、魂の共有―コモ  
ンソウルをデッキに戻すことで、1枚ドロォだ」

「だが、シャッフル・リボーンにはデメリットもある。2つの効果を  
使ったならばお前はこのエンドフェイズに両方のデメリットが適用  
され、そのモンスターと手札1枚が除外されることになるぞ」

冷静な三沢の指摘。だが、十代はそれを恐れない。

「まあ見てなって。俺はこのターン、まだ通常召喚をしていない。来  
い、闇のN！ブラック・パンサー！さらに死者蘇生を発動し、墓地の  
フレア・スカラベを蘇生！」

『任せてくれ、十代！』

『さあ、戦いだ！』

地面に黒い水たまりが湧きあがったかと思うと、その水がぐつと盛  
り上がってマントをつけた黒豹の姿となる。それと同時に隣で火柱  
が立ち、その中から甲虫のような角と羽を生やした人間が現れる。

N・ブラック・パンサー 攻1000

N・フレア・スカラベ 攻500↓1700

「魔法カード、スペーシア・ギフトを発動！自分フィールドのNと名の  
つくモンスター1種類につき1枚、カードをドロォする。エア・ハミ  
ングバードとブラック・パンサー、フレア・スカラベで合わせて3枚  
ドロォだ。よし！今引いた魔法カード、<sup>オ</sup>オーバーソウルを発動！  
墓地の通常モンスターのE・HERO、ネオス等特殊召喚！甦れ、ネ

オス！」

E・HERO ネオス 攻2500

「見せてやるぜ三沢、これが俺の手に入れたヒーローの力！フィールドのネオスとエア・ハミングバードをデッキに戻し、コンタクト融合！これが融合の新たな可能性の1体、エアー・ネオスだ！」

エア・ハミングバードとネオスの体が1つに溶け合い、ネオスの体をベースに風の戦士の意匠と鳥の要素を混ぜ合わせたような烈風のヒーローが降り立つ。

「コンタクト融合だ?!」

「そうさ、宇宙のヒーローの力はすごいんだぜ！エアー・ネオスは俺とお前のライフ差をそのまま攻撃力に加算する、そして俺のライフは150なのに対しお前のライフは3100だ！」

E・HERO エアー・ネオス 攻2500↓5450

「驚いたな、まさか自分のギリギリのライフまで攻撃力に変えてくるとは……！」

「すごいって言っただろ？バトルだ、フレア・ネオスでジェムナイト・ラズリーに攻撃！……ってあーっ！しまった、やっちゃった！」

ついデュエルに熱くなってしまう、肝心要のブリリアント・ダイヤの破壊をすっかり忘れていたことに今更気づく十代。慌てて攻撃を取り消そうとするが、三沢の方が反応は早かった。

「攻撃宣言時にトラップ発動、アッセンブル・フュージョン輝石融合！このカードはジェムナ

イト専用の融合カードで、トラップカードでありながら融合を行うことができる！フィールドのジェムナイト3体、ラズリー、パーズ、ガネットを素材にして、融合召喚！再び現れよ、輝きの淑女！ジェムナイトレディ・ブリリアント・ダイヤ！」

3体の宝石戦士が再び混ざり合い、レイピアを掲げる女剣士がフィールドに再び舞い降りた。その攻守はブリリアント・フュージョンによって弱体化されたものではなく、正規の手段で融合されたことで本来の数値のままとなっている。

ジェムナイトレディ・ブリリアント・ダイヤ 攻3400

「ブリリアント・ダイヤ……だったら、こうするぜ！エアー・ネオスで



クリスタに攻撃だ、スカイリップ・ウイング！」

エアー・ネオスがその翼で天空に舞い上がり、空気の衝撃波を飛ばす。それに対し水晶の戦士も、自らの核石を輝かせて真っ向から立ち向かう。激しい鉾石の拳と風の刃の応酬はやがて、風の刃がクリスタの核石をズタズタに切り裂いて決着がついた。

E・HERO エアー・ネオス 攻5450

↓ジエムナイトレディ・クリスタ 攻2450 (破壊)

三沢 LP3100↓100

E・HERO エアー・ネオス 攻5450↓2500

「この瞬間、リバースカードオープン！トラップ発動、極星宝レーヴァテイン！戦闘でモンスターを破壊した相手モンスター1体を、あらゆるカードのチェーンを許さずに破壊する！十代、これでお前のフィールドに残っているのはNの3体だけだ！」

クリスタとの戦闘に打ち勝ったエアー・ネオスが地上に帰還した瞬間、その心臓をダイヤモンドのレイピアが寸分違わずに音もなく刺し貫く。苦悶にもがく暇もなくその場に崩れ落ちたエアー・ネオスの体から、ブリリアント・ダイヤがそのレイピアを引き抜いてスツと優雅な動きで振った。

コンタクト融合ですら光の力を受けた三沢には及ばない……今度こそ勝利を確信した三沢の笑みが、そこで凍りついた。なんと、十代もまたそれを見て笑っていたのだ。

「なあ三沢、やっぱりデュエルは最高だぜ！最後の最後まで何が起きるかわからなくて、だから何よりも面白い！」

そう少年のように純粋な瞳で語る十代に一瞬虚を突かれるも、ややあつて三沢もゆっくりと何かを察したかのように微笑んだ。

「……ああ、そうだな」

「さあ、ここからが本当の本番だぜ！速攻魔法、リバース・オブ・ネオスを発動！フィールドのネオスと名のつく融合モンスターが破壊された時、ゲツキからネオスを攻撃力を1000ポイントアップさせて攻撃表示で特殊召喚する！」

エアー・ネオスが散らした羽の中から、三度フィールドに現れたネ

オス。その全身は、静かに燃える純白のオーラに覆われていた。

E・HERO ネオス 攻2500↓3500

「行つけえー！ネオスでブリリアント・ダイヤに攻撃、ラス・オブ・ネオス！」

ネオスの右腕にオーラが集中し、目も眩むばかりの光を放つ必殺の一撃を放つ。迎え撃たんと放たれたダイヤモンドのレイピアを叩き折り、そのままいささかも勢いを落とさずにブリリアント・ダイヤ本人をも切り裂いた。

E・HERO ネオス 攻3500↓ジェムナイトレディ・ブリリアント・ダイヤ 攻3400 (破壊)

三沢 LP100↓0

「う……」

「三沢！」

吹っ飛ばされた三沢が、ややあつて倒れた時に打つたらしい頭をさすりながら上半身を起こす。駆け寄ってくる十代を見て、何があつたのか思い出したらしい。

「ははは、結局お前の勝ち、か……うつ!?!」

「おい、無理して起き上がるなつて」

立ち上がるうとしてバランスを崩し、また床に座り込む三沢。その不安定な様子に十代も一瞬どうするか悩んだものの、より危険な場にいるであろう友人のもとへ駆けつけるのを優先する。

「じゃあ三沢、俺は清明の様子を見てくるからな。きつと他の奴らももうじきここまで来るはずだから、お前も動けるようになったら来いよ！」

「十代、俺は……」

三沢の言葉は、十代には聞こえなかったようだ。最後にそれだけ言い残し、十代も隠し扉の階段を一気に駆けおりにいく。その足音が完全に聞こえなくなるまで見送ってから、近くの机に寄りかかるようにしてどうにか三沢も起き上がる。軽く辺りを見回すと、斎王がなにか

手書きで書類でも作っていたのか、紙とペンが転がっていた。それをしばらくの間見つめたのち、おもむろに三沢は手を伸ばした。

一方その頃、1Fでは。

「魔法カード、クロス・アタックを発動！自分フィールドに同じ攻撃力のモンスターが存在する場合、1体の攻撃を封じることでもう1体はこのターン直接攻撃が可能となる。俺のフィールドには攻撃力2800のダーク・アームド・ドラゴンとメタファイズ・アームド・ドラゴンが存在することで、メタファイズ・アームドのダイレクトアタック！はあ、はあ……どうした、今年のノース校はその程度か？だとしたら、俺がいなかったこの1年の間にずいぶん学校のレベルが落ちたようだな！」

連戦に次ぐ連戦に息を切らしながらも、まだ闘志の消えていない目で万丈目が白服相手に啖呵を切る。すでにその近くにはライフ0になつてデュエルからはじき出された白服が山となっており、どれだけ激しい戦いが起きていたのかが垣間見える。

そんな万丈目の様子におそらく1年だろうか、まだ幼い顔立ちの連中が怖気づいたように一歩下がる……だが、そんな中でもなお重々しい雰囲気崩さない者がいた。

「……怯むな、お前たち。すべては斎王様のため、例え捨て石としての役目であろうとも、その一瞬一瞬が斎王様を助けることとなる」

「二ハ、ハイ！全ては斎王様のために！」

「天田……ええい、本当に性質タチの悪い宗教だな。そして何より、こんなくだらん中に俺がついこの間までいたということが最高に気に食わん！」

『そうよアニキ、やっちゃって！もしアニキがここで負けちゃったら、またアタイ達もぼろ雑巾みたいな扱いを……扱いを……あれ？確かに白い時の方がひどかったけど、やってることはあんまり変わってないような』

「お前は少し黙ってる！」

まだおジャマ・イエローと軽口をたたき合うだけの元気は残っているが、それも空元気に過ぎない。少しずつだが確実に、状況は悪化していた。

「天田さん、助太刀参ります！」

「おいおい、ここにきて援軍だど!？」

『ひくっ! いっぱい来ちゃったわよアニキー!』

睨む万丈目の顔に、嫌な汗が一筋流れる。それを見て、普段寡黙なノース王四天王も会心の笑みを漏らすのだった。

そして、その頃の2階では。

「ドラゴネクロの攻撃、ソウル・克蘭チでそのモンスターの魂を奪い取り、攻撃力0になった抜け殻にワイトキングで追撃の螺旋怪談、なんだって。貴方のライフはこれで0、私はこれでターンエンド。あら、この程度かしら? ってさ。貴方達の顔には見覚えがあるけど、前よりだいぶ弱くなったんじゃないの、だって」

1対多という圧倒的不利な状況ながら余裕を崩さない、この夢の言葉には訳がある。おそらくは本人たちの希望なのだろうが、ここで片っ端からやられているのは全員かつて夢に告白しては『デュエルで私よりも強かったらいいよ、ってさ』というニコニコ笑顔での言葉の前に散っていった負け犬軍団なのだ。

雪辱を晴らすためにここに集まっているのであろう彼らだが、当然無双の女王とまで呼ばれる彼女のデュエルタクティクスの前にはちよつとやそつとのこととその実力差を埋められるはずもなく、まともな時間稼ぎにもならずばったばったと倒されていく。

だがこの階を担当するノース校四天王、酒田にはそれも完全に予想の範囲内だったようだ。

「ククク……なあ、ひとつ聞いてやろう。そろそろ種明かしもしたいしな! やいやいお前、お前の相手は全部で何人だと思う?」

「え? えつと、ひい、ふう、みい……貴方も入れて19人かな、ってさ。今はもう貴方しか残ってないけど」

そう答える彼女に、これ以上ないぐらい喜色満面の笑みを浮かべる

酒田。

「残念だったなあ！俺たちのチームは全部で20人いるんだよお！」

「え？でも……」

何か言おうとする夢を遮り、今までずっと言いたくてしようがなかったという風にペラペラと早口で喋りだす。

「いいか、よく聞けよ。お前はこれまで俺たちを1人ずつ順番に相手してきたと思っっているようだが、それは大間違いだ。お前はずっと3人でのバトルロイヤルを続けてきたんだよお！」

酒田が何を言っているのかわからず、面食らう夢想。その様子に舌打ちをしつつ、つまりだ、ともう少し詳細な説明に入る。

「お前がまず最初の1ターン目をやった。そうだろ？だからお前のことを仮にプレイヤーAとする。そして次、そこでぶつ倒れてる奴の誰かがやった。これがプレイヤーBのターンだ。お前はその後、もう1度プレイヤーAのターンが来たと思っっていたようだが、それこそが間違いだ。その間にお前の知らない第3のプレイヤー、プレイヤー壺のターンがあつたんだよ！」

「え……？」

「そしてお前がワンショットキルしてプレイヤーBのライフは1瞬で0になり、それと入れ替わりでプレイヤーCがBの枠にそのまま収まった。そして何食わぬ顔してターンを終え、またプレイヤー壺のターンが回ってきた。と、まあこういうわけだ」

衝撃の告白。つまり、自分を含む19人を丸々そのプレイヤー壺とやらのための囷にしたというのだ。そして勘の鋭い彼女には、もうこの先の展開が分かっていた。さつと彼女の顔が青ざめたのを満足そうに見て、駄目押しのさらなるネタバラシにかかる。

「もうこうなると、俺が何が言いたいのかはわかってるみたいじゃねーか？苦勞したんだぜ、なにせプレイヤー壺があまり時間をかけすぎると、バトルロイヤルデュエルをデュエルディスクが認識している以上不都合が出てくるからな。運悪くキーカードがなかなか引けなかったせいで、こいつらの方が先に頭数がなくなっちゃうんじゃないかと思ってハラハラしたぜ」

デュエルモンスターズでは、前のプレイヤーがターンを終えていないのに次のプレイヤーがカードをドロウすることはできない。また、もしそんなことをしようとしてもデュエルディスクがその操作を受け付けない。なのでプレイヤー壺はそのキーカードが手札に来るまでサーチカードを使うだけのひまもなく、ひたすら目当てのカードが来るまでドローフーズにカードをドロウしていただけということになる。

そして、そんなデュエリストとしてのプライドを完全になくぐり捨てるような真似をしてまでこの20人が狙っていた、たった1つのコンボとは一体。その答えは、いつの間にか夢想の周りを取り囲んでいた17個の人魂にあった。

「それじゃあ、これは……つてさ」

「ご名算！俺たちが狙っていたコンボは、このひとつ！お前の今のエンド宣言により、終焉のカウントダウンは17ターンの目のカウントを終えた！」

終焉のカウントダウン……2000ポイントものライフを支払うことで発動し、お互いのエンドフェイズごとに1つずつカウントが増えてゆく通常魔法。そして20ターンが経過した時、発動プレイヤーはデュエルに勝利する。

いわゆる特殊勝利カードの1枚だが、このカードには他の特殊勝利カードにはないある特徴がある。1度発動さえしてしまえば、その前に勝負をつけない限り絶対にカウントを止める手段がないという点だ。そして今無双の周りに浮かぶ人魂は、もうかれこれ17ターンも前にカウントダウンが始まっていたことを表す。

「さて、そして俺のターンだ。魔法カード、成金ゴブリンを発動！プレイヤー壺のライフを1000回復させることで、デッキからカードを引くぜ」

「ちよつと酒田さん、ちゃんと名前でご呼んでくださいよー」

気弱そうな声が、すぐ横から聞こえる。誰かの部屋の扉が開き、特徴のない顔をした少年が顔を出した。

プレイヤー壺 LP2000↓3000

「はは、悪い悪い。だけどあとちよつとだ、俺たちよりも実力が上のこの化け物女を、俺たちのチームプレイで仕留めてやろうぜ！」

「は、はいー！」

「チーム、プレイ………？」

だいぶ何か言いたそうな夢をきつぱりと無視して、酒田は今引いたものと合わせて4枚のカードをセットした。一応本人たちの名譽のために断わっておくと、決して普段の彼らはこのような真似をしない。その程度のデュエリストとしてのプライドは持ち合わせている。だが高い齋王の強い洗脳術とそれによって生み出された信仰心が、自らのプライドを踏みにじってまで齋王のために戦う道を選ばせたのだ。

「ターンエンドだぜ。ひとつ教えといてやるがな、今俺が伏せたカードは大革命返し、和睦の使者2枚、奈落の落とし穴2枚だ。もうお前がどうあがいたとしても、絶対にこのデュエルは終わらせられねえつて寸法よ！」

その言葉を裏付けるかのように、18個目の人魂がぼつと灯った。そしてそのまま、もはや存在を隠さなくなったプレイヤー壺のターンが特に何もしままま終わり、19個目の人魂が灯る。

夢に残されたターンは、わずか1ターン。彼女がここから逆転をするには、この1ターンを駆使して酒田とプレイヤー壺のライフを0にしなければならない。だが、坂田の言葉を信じるならば彼の場の妨害札のせいでそれができる可能性は限りなく0に近い。

夢の表情が、スツと強張った。せめてもの抵抗として、自分の場に伏せてあつたカードを表にする。

「エンドフェイズにサイクロン……私から見て真ん中のカードを破壊するんだってさ」

「ちっ、和睦が1枚おじやんになつちまったか。だがな、それ1枚で今更何ができる！」

自分のデッキの中にある何のカードを引けば、この状況を打破できるだろうか。彼女は静かに目を閉じて、いくつものパターンをシミュレートし始める。

では、3階では何が起きているのか。翔と剣山が互いに互いの背中を守りながら、輪になって包囲する白服軍団相手に一步も引かずに大立ち回りを繰り返していた。

「速攻魔法、融合解除を発動！僕の場のスチームジャイロイドをエクストラデッキに戻すことで、融合素材となったスチームロイド、ジャイロイドの2体を特殊召喚する！そのまま2体で直接攻撃！」

「相手フィールドに守備表示モンスター以外のカードが存在しない時、ブラック・ティラノ暗黒恐獣は相手プレイヤーに直接攻撃ができるドン！さらにこのダメージステップにリバー斯卡ード、生存競争を発ドン！暗黒恐獣の攻撃力は、さらに1000ポイントアップしてとどめザウルス！」

下2階と比べ、この2人はそこまで苦勞していない。その理由はそもそもここにいるのが警戒されていた万丈目に夢想とは違い一般構成員からすればほぼノーマークに等しい2人だったおかげで出てきた光の結社メンバーも少ないうえ、もともと危険である鎧田を一番先に片付けたからだ。

そして最後の1人が倒れ、改めてほっと息をつく。

「ふう……大丈夫、剣山君？」

「デュエルしてるうちに、だいぶ痛みも消えてきたドン。でも休んでる暇はないドン、早く先に進むザウルス」

その言葉に翔も頷き、十代たちの向かった方へ歩き出す。だが、数歩も歩かぬうちにその足が不意に止まった。

「どうしたドン？」

「下の2人がまだ来ないってことは、やっぱり様子を見に行つた方がいいんじゃないかなって思つて……でもアニキも心配だし、どうしよう？」

本気で困つたような翔の様子に、剣山も一瞬考え込む。そして一度自分自身に言い聞かせるように頷くと、翔の背中をバシツと叩いた。「うわっ!?何するのさ!?!」

「丸藤先輩、悪いけどここから先は1人で行ってもらうドン。俺が代わりに下の様子を見てくるザウルス」

「え、でも……」



十代のところに行きたい気持ちは同じであることは、翔もよくわかつている。それなのにその役を翔に譲り、自分は下を助けに行くという。それがどれだけ重い決意だろうか、それを考えると素直にその提案を受け入れることをためらってしまう。その様子を見て、もう一度剣山が翔の背中を押した。

「ここで話し込んでる暇はないドン、十代のアニキのことは一時任せたザウルス！」

それだけ言い、身をひるがえして今来た道を引き返す剣山。その後ろ姿を見て、もう一度ためらって、最後に一度深々と頭を下げてから、翔もまた剣山とは真逆の方向へと走り出した。

## ターンEX―4 光の結社とアカデミア―??―

入った時にはあれだけいたメンバーも1人減り、2人減りとどんどん少なくなっていて最終的に隠し扉の奥にたどり着いたのは僕1人。

「いよいよラスボスのお出ましですね、っと」

「いいや、斎王様がわざわざ動くまでもないぜ。少なくともお前相手なら、俺で十分すぎるからな」

「うわ、ユーノ……」

扉の前で待ち構えていたその男の名前は、ユーノ。僕の……なんだろう。半身？憑依？いまだに立ち位置がよくわからないけど、僕にとってある意味では最も大切な人間だ。チャクチャルさん共々僕の命を救ってくれた、異世界から来た異邦人。

だけど、これもある程度想定済みだ。少なくとも斎王にたどり着くまでのどこかで出てくるだろうとは思っていた。まさかこんなところにいたとはね。

前回、本当に一瞬だけ会った時のことを思い出す。あの時は時の魔術師のカードを持っていたから、おそらくそれが洗脳の鍵になっているのだろう。ただ、それだけじゃデッキがまるで読めないのが困る。僕のデッキを僕が持つてる以上、何か新しいデッキを使ってるのは間違いないはずなんだけど。

「ここで迷っても仕方ないかね。いよいよユーノ、斎王の前の前哨戦だ、一丁デユエルと洒落込もう！」

「前哨戦？違うな、これがラストバトルに決まってるんだろ！」

前は時の魔術師の能力を実体化させて僕の時間を止めるという反則すれすれのチート技をぶちかましてくれたユーノだけど、今回それをやる気はないようだ。もつとも今回は僕にも油断はない、もしそんなことをしたらその瞬間ダークシングナーの力を全開にしても抵抗しよう。

『うむ。もう前回の轍は踏まない、私に任せてくれマスター』

チャクチャルさんもやる気十分だ。とはいえ、それはユーノだって

承知のはず。前と同じ手を使うような真似はしないでだろう。お互いにデュエルディスクを構えて向かい合い、いぎデュエルの掛け声を……

「おっと、そいつはさせねえぜ！お前のせいでめんどくせえことになつてんだ、落とし前つけてもらおうぜ！」

その瞬間、どこからともなくそんな声が出た。そして目の前の空間に割れ目が走り、それをこじ開けるようにして1人の青年が飛び出てくる。彼はユーノの首根っこを引っ掴むと、そのまま煙か幻のように消えさった。本当に一瞬の出来事だったのでその少年の顔もよく見えなかったが、あの顔には見覚えがある。前も同じようにどこからともなくやってきてどこへともなく消えていった、その名は。

「富野……？」

その言葉には、もう誰も返事をする人はいなかった。

ここはホワイト寮から離れた地、三幻魔の封印されていた祭壇。その目の前の空間がいきなり歪むと、中から2人の青年が転げ落ちてくる。そのうち1人は近頃珍しくもなくなったホワイトな学生服だが、もう1人はこのデュエルアカデミアではいささか珍しい私服姿である。その2人、ユーノと富野が起き上がり、お互いに相手を睨みつける。

先に口を開いたのは、ユーノの方だった。怒りを抑えるようにして、むしろ静かなほどの声でゆっくりと尋ねる。

「なあ富野、今はお前なんぞ相手にしてる暇はないんだが。斎王様が直接動くことになっちまうだろうが」

「アホか。俺もいろんな転生者は見てきたけどよ、完全に別次元から入ってきたパターンのくせに斎王に完つ全に洗脳されましたっつのはなかなかないぜ」

気楽な言葉とは裏腹に、富野の表情は不自然なほど固い。彼だつて、自分を倒すほどの腕前を持ったデュエリストがそうあっさり斎王の洗脳にかかるのは最初から思っていない。これには何か裏があ

る、そう考えるからこそはるばる次元を越えてこの世界に干渉してきたのだ。だが、いまだに何ひとつ見えてこない。直接会うことで何かしら掴めるかとの淡い希望が潰えたいま、残ったもう1つの手段に頼るべく彼はデュエルディスクを展開する。

「あー？おいおい何の真似だよ、あとで遊んでやるからとつとと失せろつつつてんだろ」

「悪いがな、そういう訳にもいかねんだわこれが。遊あそぶの奴とお前が手を組んで三幻魔で何がしたいのか、それも突き止めとかないと後々面倒なことになるのは目に見えてるからな。お前だけならまだしも、元転生者狩りもつてのが気に食わねえ。これ以上なんかやられる前にここでぶちのめして、全部吐いてもらうぜ」

「……………えーい、この屑野郎！時間無えつてのによお！」

どうあつてもここを通す気はないらしいと観念し、ならば1分でも早く片付けて斎王のところへ向かおうと気持ちを切り替えるユーノ。斎王から直接受け取ったデッキを同じく斎王から受け取った光の結社特注の白いデュエルディスクに入れ、すぐさま構えた。それを見て、富野がニヤリと笑う。

「わかってくれて嬉しいぜ」

「けっ」

「デュエル！」

先攻を取ったのは、ユーノ。5枚の手札から1枚のカードを選び出し、それをフィールドに置く。

「さあ行くぜ、一撃必殺侍を召喚！」

デフォルメされた侍装束のモンスターが、手にした薙刀を構える。

一撃必殺侍 攻1200

「さらにカードを1枚セットして、ターンエンドだ」

「ギャンブルカード……………？俺のターン、ドロロー！」

ユーノのデッキから出てくるとは思いもよらなかつたモンスターにいささか戸惑いつつも、すぐに気を取り直して自身のモンスターを出す。

「相手フィールドにのみモンスターが存在するならば、このカードは

リリースなしで召喚できる！ビッグ・ピース・ゴーレム！」

岩石に濃い顔が付いたようなモンスターが、地中からゆっくりとせり上がってくる。

ビッグ・ピース・ゴーレム 攻2100

「バトルだ、一撃必殺侍に攻撃！パワープレッシャー！」

「なめんなよ？永続トラップ、ラッキー・チャンス！を発動！このカードは俺がコイントスをするたびにその裏表を当て、見事ビンゴになったらカードを1枚ドロウできる。そして一撃必殺侍はバトルする際にコイントスを行い、当たった場合はその相手モンスターを効果によって破壊するぜ。俺はこの2枚のカード、宣言するのはともに表だ！」

「何!？」

リスク分散も何もあつたものではない、確かに当たった時のリターンこそ大きいものの外れた時のリカバリーが何もない選択。宙にコインが1つ、日光を照り返しながら真上に飛んで行き……そして、ユーノの手の甲にパシリと小気味いい音を立てて落ちる。

「当然表だ。よってラッキー・チャンス！の効果により1枚ドロウし、このバトルも一撃必殺侍が制する。切り裂け、必殺の横薙ぎ！」

侍の目がキュピーンと光り、鎧を着こんでいるとは思えないほどの素早い動きでゴーレムのパンチをかいくぐる。そのまま走り抜けると同時に、がら空きになった足を切り払った。

ビッグ・ピース・ゴーレム 攻2100（破壊）↓一撃必殺侍 攻1200

「さあ、どうするよ？」

「ちっ！カードを2枚セットして、ターン終了だ」

ユーノ LP4000 手札：4

モンスター：一撃必殺侍（攻）

魔法・罠：ラッキー・チャンス！

富野 LP4000 手札：3

モンスター：なし

魔法・罠：2（伏せ）

「俺のターン。一気に行くぜ、一撃必殺侍をリリースしてアドバンス召喚、マキシマム・シックス！」

侍の次に現れたのは、6本腕の紫の巨人。胸にくつきりと描かれた「XI」のマークが、ギラリと光った。

「こいつは召喚成功時にサイコロを1つ振ることで、その出目×200ポイント攻撃力をアップさせる。いくぜ、怒涛のサイコロ攻撃でダイレクトアタックだ！」

コイントスに次いで、今度は同じくギャンブルの代表格たるダイスロール。宙を舞うサイコロは地面にぶつかってもまだ勢いを殺しきれずにコロコロと回転し、やがて6の目を上にして静止した。

「当然6。攻撃力3100の一撃を受けてみる！」

マキシマム・シックス 攻1900↓3100↓富野（直接攻撃）  
富野 LP4000↓900

「くっそ、卑怯な真似しやがって……」

ここまで幸運が続けば、いくら洗脳済みでもさすがにそこまで腐つてはいないだろうと楽観的に考えていた富野も考えを改める。要するに、斎王に尻尾を振ることでこの男は絶対外れないギャンブルの力を手に入れたのだ。アルカナフォースを自在に止める斎王の力は、富野もよく知っている。それをそのまま、アルカナ以外のカードに転用したのである。

「卑怯？何言ってるんだ。斎王様の御力の賜物だぞ」

しかしユーノは富野の言葉には耳も貸さず、狂信者そのものの目つきで次のカードを選び出す。

「カードを2枚セットして、ターンエンドだ」

「どうやら、デュエリストのプライドも完全に見えなくなっちゃったみたいだな……だったらもう遠慮はねえ、俺も本気を出してやるぜ。俺のターン、ドローだ！」

怒りに燃える富野を、今のユーノは嘲笑う。

「お得意のバイスリゾネーターでもやってくれんのか？で、たかが攻撃力3000ぽっちのドラゴンでどう対応する気なんだ？」

「俺の相レッド・デーモンズ・ドラゴン 棒を侮辱した罪は重いぜ。だがまずはリビングデッド

ドの呼び声を発動し、ビッグ・ピース・ゴーレムを蘇生させる」

再び地中から出てくる岩石の巨人。だが、その攻撃力は6本腕の巨人にはまだ敵わない。

ビッグ・ピース・ゴーレム 攻2100

「さあ来い、レッド・リゾネーター！さらにこのカードは召喚に成功した時、手札からレベル4以下のモンスターを特殊召喚できる。出て来い、ミッド・ピース・ゴーレム！」

岩の体に濃い顔と、既に存在するゴーレムに特徴だけ見れば似ていなくもない人型の岩石の戦士が、赤い炎を後に引くリゾネーターの後ろからフィールドに特殊召喚される。

レッド・リゾネーター 攻600

ミッド・ピース・ゴーレム 攻1600

「ああ……？」

「ミッド・ピース・ゴーレムは場に出た時ビッグ・ピース・ゴーレムのカードが存在すれば、デッキからさらにこのゴーレムを効果を無効にして特殊召喚できる。出番だ、スモール・ピース・ゴーレム！」

前2体とはうってかわってコミカルで可愛いゴーレムが、短い手足を伸ばして元気よく召喚される。

スモール・ピース・ゴーレム 攻1100

「はっ、何かと思えばピース・ゴーレムの3連コンボか？」

「まだまだ！お前のフィールドに存在する永続トラップ、ラッキー・チャンス！を墓地に送ることで、このカードは特殊召喚できる！チューナーモンスター、トラップ・イーター！」

ユーノのカードの下から大口が出てきて、ラッキー・チャンス！のカードをぱくりと一口で呑み込む悪魔が現れる。ペろりと口周りを舐め、膨らんだ腹を小さな腕でポン、と叩いて見せた。

トラップ・イーター 攻1900

「ダブルシンクロ召喚を見せてやるぜ！レベル4のミッド・ピース・ゴーレムに、レベル4のトラップ・イーターをチューニング！赤き王者が立ち上がる時、熱き鼓動が天地に響く。防御に回る臆病者に、生きる価値など欠片もない！シンクロ召喚！叩き潰せ、レッド・デーモ

ンズ・ドラゴン！そしてレベル5のビッグ・ピース・ゴーレムに、レベル2のレッド・リゾネーターをチューニング！混沌の仮面被りし王者よ、天地を惑わし威光を示せ！シンクロ召喚、誇り高き！デーモン・カオス・キング！」

トラップ・イーターが4つの輪になり、ミドル・ピース・ゴーレムの全身を取り囲む。瞬間そこに光が走り、満を持して富野の切り札が場に現れた。そしてそれと同時にレット・リゾネーターもまた2つの輪になってビッグ・ピース・ゴーレムを取り囲み、肩と腕に生やした刃から真紅の炎を噴き出す黄色い仮面をかぶった悪魔の姿になる。

レッド・デーモンズ・ドラゴン 攻3000

デーモン・カオス・キング 攻2600

「おいおい、なんだかんだ言っつといて結局デーモン・カオス・キング頼りかよ」

「これをただのレッド・デーモンズ・ドラゴンと思うなよ？バトルだ、レッド・デーモンズ・ドラゴンでマキシマム・シックスに攻撃……：そしてこの攻撃宣言時にトラップカード、スカーレット・コクーンを発動！」

「そういうことか……！」

この試合初めて、ユーノの表情が歪む。赤き悪魔の竜が体を丸めたかと思うとその全身が赤く光る繭に包まれ、何度かそれが鼓動したのちに再び繭を突き破って飛び出してくる。

「やっちまえー！灼熱のクリムゾン・ヘルフレア！」

「スカーレット・コクーンはドラゴン族のシンクロモンスターに装備することで、バトルの間相手の全モンスターの効果を無効にする、か。だったらせめてこれだ、悪魔のサイコロ！サイコロ1つ振って、相手モンスター全ての攻撃力を出た目×100ポイント下げるぜ。それらよっ！」

デフォルメされた悪魔が真っ赤なサイコロを勢いよく放り投げると、それが地面でコロコロと転がる。最終的に、またも6の目を上にして止まった。

レッド・デーモンズ・ドラゴン 攻3000↓2400



↓マキシマム・シックス 攻3100↓1900 (破壊)

ユーノ LP4000↓3500

「糞が……」

「デーモン・カオス・キング！スモール・ピース・ゴーレム！ダメージが減つても構わねえ、2体でダイレクトアタックだ！」

デーモン・カオス・キング 攻2600↓2000↓ユーノ (直接攻撃)

ユーノ LP3500↓1500

スモール・ピース・ゴーレム 攻1100↓500↓ユーノ (直接攻撃)

ユーノ LP1500↓1000

「なんだなんだ、たいしたことないな。お前のことを認めてやるのは癪に障るけどよ、少なくとも昔の方が強かったぜ」

何かあるかとも思ったが、ただひたすらにダメージを受けるばかりのユーノに対しどこかがっかりしたような声音の富野。まあ楽勝なのはいいことだ、と気を取り直してエンド宣言を行う、その寸前にユーノの声が響いた。

「リバースカードオープン、ダメージ・コンデンサー……！俺が受けた戦闘ダメージをトリガーとして発動し、手札1枚をコストにそのダメージの数値以下のモンスターをデッキから特殊召喚する！今俺が受けたスモール・ピース・ゴーレムの攻撃力は500。よって、このモンスターを特殊召喚！来い、時の魔術師！」

歪んだ時計に手足が生えたような形の、帽子をかぶった小さな小さな魔法使い。だがその全身は、不気味な光に包まれていた。

時の魔術師 攻500

「時の魔術師……確かにそのギャンブル構築なら、入ってない方がおかしいか……最後の手札を伏せて、ターン終了だ」

すでに富野の場に攻撃可能なモンスターは残っておらず、わずか500ポイントの攻撃力に対しても何もすることができない。

レッド・デーモンズ・ドラゴン 攻2400↓3000

デーモン・カオス・キング 攻2000↓2600

スモール・ピース・ゴーレム 攻500↓1100

ユーノ LP500 手札：0

モンスター：時の魔術師（攻）

魔法・罨：なし

富野 LP900 手札：0

モンスター：レッド・デーモンズ・ドラゴン（攻・コクーン）

デーモン・カオス・キング（攻）

スモール・ピース・ゴーレム（攻）

魔法・罨：スカーレット・コクーン（レッド・デーモンズ）

リビングデッドの呼び声（対象無し）

1（伏せ）

「俺のターン、ドロロー。このターンで終わらせてやるよ、時の魔術師の効果！コイントスで裏表が当たればお前のフィールドのモンスターを全滅させるぜ。裏だ、やれっ！タイム・ルーレット！」

どこからともなく表れたルーレット盤の針が回転し、当然のごとく『当』の字のマス目で止まる。

『タイム・マジック！』

みるみるうちに2体の王者とゴーレムが風化して崩れ去り、風に巻き上げられて消えていく。

「さあバトルだ、さらにここで速攻魔法、天使のサイコロを発動！出た目につき100ポイント、俺のモンスターの攻撃力をアップさせるぜ。これで6を出せば、俺の……」

しかしその台詞は、最後まで続かなかった。地面からいきなり真紅の火柱が噴き上がり、その中からゆっくりと赤い王者のドラゴンのシルエットが見え始めたのだ。

「バカな、そいつは俺が今倒したはず！」

「確かにな。だが俺は時の魔術師のタイム・マジックが成功した時点でトラップカード、シャドー・インパルスを発動していた。俺のシンクロモンスターが破壊されたのをトリガーとして、エクストラデッキから同じレベルかつ種族のシンクロモンスターを特殊召喚できる」

心底つまらなそうな、失望したような声音の富野。静かにそういう

と同時に、火柱が徐々に収まってゆく。とはいえないまだその全身は炎に包まれているためシルエットしかまだ見えてこないが、翼を広げたその姿は、まるでレッド・デーモンズ・ドラゴンが再び復活したかのようにだった。

「待てーシャドー・インパルスは同名モンスターを呼ぶことはできないはずだぜー！」

「……ああ、やっぱり残念だな、これは」

「なに？」

「俺を倒したお前に勝つために、死ぬ気で手に入れた新しい切り札だったんだが。俺とレッド・デーモンズの進化を、まさかこんなつまらん相手に使うことになるなんてな」

「一体、何を呼ぶ気……」

そう問うユーノの声が途中で止まった。火柱が完全に消えてついにその全貌を露わにしたそのドラゴンは、確かにシルエットだけならば元のレッド・デーモンズ・ドラゴンによく似ていた。だが、その全身はいたるところに古傷を負ったのか、生々しい傷跡のような筋模様だらけになっていて頭の角も1本が途中から無残にもへし折れている。そして何よりも目を引く右腕は肘から先の部分が全体的に骨のようなもので覆われていて、単純に打撃の威力を高めると同時に耐久力を上げる役にも立っているようだ。

「俺の、いや、俺たちの手に入れた新たな力のシンクロモンスター……赤き王者の研磨の果てに、紅蓮の鼓動が天地を焦がす。力持ち得ぬ臆病者に、戦う価値など微塵もない！レッド・デーモンズ・ドラゴン・スカーライト！」

レッド・デーモンズ・ドラゴン・スカーライト 攻3000

「な、このカードは……」

「もうお前にできることはねえよ。スカーレッド・コクーンの効果ももう使わねえ。俺のターン、ドロ……スカーライトは1ターンに1度、コイツ以下の攻撃力を持つ特殊召喚された効果モンスター全てを破壊したうえで1体につき500のダメージを与えることができる。受け取りやがれ、アブソリュート・パワー・フレイム！」

真つ赤な炎がユーノの視界いっぱいになり、ダメージ・コンデンサーの効果で特殊召喚された時の魔術師がドロドロに溶け崩れていく。

ユーノ LP500↓0

「……はーあ、つつまんねーの。んで？とつとと洗いざらい全部吐いてもらおうか」

地面で伸びているユーノの体を、見かけ以上の怪力を発揮し片腕で首根っこ引つ掴んで無理やり起き上がりさせる富野。2、3度ほど揺さぶってみると、ようやく反応があった。

「う……」

「む。おう寝てんじゃねえこの野郎、起きろ起きろ」

さらに容赦なく揺さぶると、さすがのユーノもどうにか目が覚めたようだ。

「……なんだ、るっせーな。放しやがれ」

「おう。ほらよ」

宙づりにした状態からいきなり手を放したのだから、必然的にユーノの体は重力の法則に従い地面に叩き付けられる。それでもなんとか最低限の受け身だけは取り、頭の代わりに打ち付けた背中をさすりながら起き上る。

「えー……ちよつと待てよ、えーつと……ああ、色々思い出した。世話かけたな、これは貸しにしておけ」

「んなもんだっていい、だから今すぐ答えろ！お前、それに遊は三幻魔をどうしたいんだ？あいつらの力だけじゃ世界はどうにもならんことぐらいはお前らだつてわかつてるはずだぞ」

富野の言葉は真実である。彼は転生者狩りであり、それゆえ必然的に世界を揺るがすほどの力を持ったカード、身もふたもない言い方をすれば原作におけるボスカードもあらゆる次元で何度も見てきている。確かに三幻魔はGX世界においてかなりの力を持った世界を揺るがすカードではあるが、原作を知るユーノや元転生者狩りの遊がわ

ざわざ狙おうとするうまみは少ない。どうせ労力をかけるならば、まだ世界に隠されているより見返りの大きいカードがまだまだあるからだ。

にもかかわらず、この2人は三幻魔に何らかのこだわりを見せている。その理由を知るため、彼はわざわざこの世界に直接問い詰めたのだ。

その質問に対し、しばし何かを思い出そうとするかのように目を閉じて考え込むユーノ。富野がじっと見ていると、みるみるうちにその顔が真っ青になっていった。

「そうだ、こうしちゃいられねえ！急いで再封印しねえと面倒なことになるー！」

「はあ？おいおい、俺にわかるように説明……」

「三幻魔の固有能力だよ。思い出せ、影丸理事長はなんで三幻魔を手に入れようとした？」

「はあ？カードの生気を吸い取って……そうか、持ち主に若さと永遠の命!!」

ようやく何が言いたいのか分かったようで、富野も表情が変わる。なんでこんな簡単なことに気づかなかったのだろう、と自分で自分を呪う。

「ご名算。遊にとつて必要なのは、世界を手に入れるほどのスケールを持ったカードじゃねえ。なにしろそれが目的なら、わざわざ封印されたカードに頼らなくてもデュエリストとしての実力と転生者狩りとしての知識だけでおつりがくるレベルだからな。考えてもみる、確かにこの世界にはヤバイカードが山のように眠ってる。だがな、その中でも『持つてるだけで確実に』不老不死を保証するような代物がいくつあると思う？確かに三幻魔それ自体はそこそこ止まりかもしれないねえ。だけど、その副産物が厄介極まりないんだ」

「三幻魔はあくまで目的じゃなくて手段に過ぎない、つてことかよ……！確かに永遠の命なんてものがあれば、いくら俺たちが狩ったとしてもまたどこかの世界で生き返る」

「もつとも、その先どうするかはまだ決めてないらしいがな。俺もつ

いさつきまでは斎王のために三幻魔を集めて持っていこうとしたから、少なくとも封印の解放までは利害が一致してたってわけだ。胸糞悪い話だけだな。ぐだぐだしてる暇はねえ、行くぜ！」

「けっ、偉っそうに言いやがって、元はといえばてめえも一緒になって撒いた種じゃねえか！」

ぶつくさ言いながらも、すぐに三幻魔のうち2体が封印された場所にむけて走り出す富野。空間移動は転生者狩りといえどもおいそれとできる技ではない。いさつき使ってしまった以上、しばらくは自分の足に頼るしかないのだ。

ユーノも走り出そうとしたが、最後に一度だけ木々の間から見えるデュエルアカデミアホワイト寮に目をやった。おそらくあの中では今清明が斎王と、光の結社との因縁にけりをつけるために戦っているのだろう。

「俺が言えたことじゃねえのはよくわかってる。でもよ、必ず勝てよ、清明……！」

最後にそれだけ心の中で思い、ユーノもまたそこに背を向けて走り出した。

## ターン71 鉄砲水と破滅の光

誰ひとりいないドアの前でしばし息をひそめる。10秒、20秒と数えていつてついに1分が経ったが、結局ユーノも富野も消えたつきり帰ってこない。なんとなく嫌な予感もする、けど。

「……行くよ、皆。ここまで来たんだ、最終決戦まで一気に終わらせるんだ！」

『ああ。私達は全てマスターの味方だ、最後まで共に行こう』

チャクチャルさんの声にも励まされ、一度領いてから思い切ってドアを蹴破る。ダークシングナーの身体強化をフルに使った一撃の衝撃は重そうなドアの金具をねじ切り、蹴り開けるだけのつもりがドアがまるっときれいに吹き飛ばしてしまった。そしてそのまま勢いを減じずに向かい側の壁にぶつかるまで飛んでゆき、派手な破壊音を立てる。

「あーあ……やっちゃった」

「随分と乱暴な真似をしてくれたものだ。ここにやってくるのは最初からわかっていたが、ユーノがこんなに早く道を通すのはさすがの私も予想外だった。もう少しは粘ってくれると思ったんだがね。まあいい、最低限の時間稼ぎにはなった」

部屋に響く一見静かな、だけど紙一重の狂気を含ませた声。ついに会えた斎王は、最後に童実野町で見たときとはまるで別人のような態度だった。だけどその時、僕が注目していたのは本性を出した斎王じゃない。その隣、ぐったりしたように椅子に腰かける青年だった。後ろ姿しか見えないが、あの銀髪とスーツは見間違えようがない。

「エドー…」

僕の声にも、しかしエドは答えない。よくよく見ると、座り込んでいるにしては姿勢がおかしい。どうやら、気絶した状態で椅子に腰かけさせられているようだ。

「斎王…お前一体、エドに何を？」

「別に、まだ何も。今は少々眠ってもらっているだけさ。もつとも、お前に彼のことを心配するほど余裕があるのかね？」

「くっ……まあいいさ、斎王、デュエルだ！光の結社とデュエルアカデミアの因縁、ここでまとめて決着つけようじゃないの！」

ビツと指さして啖呵を切ると、斎王は返事の代わりに口の端を歪めて笑った。

「くだらん。私の力は以前とは比べ物にならないほど高まっている、デュエルを介さずとも人間1人に光の波動を送り込むことぐらい造作もないわ！」

そう叫び、右手を僕に向けてかざす。その掌が発光したかと思うとみるみるうちに僕の視界全体が白く染まり……そして、また元に戻った。再び色の蘇った世界を見て自分に何も変化がないことを確認すると、斎王も驚きを隠せない表情でこちらを見ていた。

「馬鹿な。運命を受け付けない、だど？」

しかしその驚きもつかの間、またすぐに狂ったような笑いを取り戻す。

「ははははは！どんな小細工をしたかはわからんが清明よ、エドにすら負けたお前がこの私にデュエルを挑むか。いいだろう、我が運命は不敗！そのことを身をもって知らしめてやろう！そして我が勝利の暁には、お前の小細工も通用しないほどの光の波動を植え付けてやる」

一体、何が今起きたんだろう。するとそのタイミングで、これまで黙りこくっていたチャクチャルさんがまたテレパシーを送ってきた。

『……ふむ』

「ん、どつたの？」

『いやマスター、少し聞いてほしい。これまではあの光の波動とやらが邪魔ではつきりわからなかったが、ここにきてようやく確信が持てた。今我々の目の前にいるモノ、どうやら本来の斎王とは別の何かのようだ』

「(別の何か?)」

『ああ、本来の人格は完全に力負けして表に出てこれていないようだな。なかなか興味深いが、5000年前の私の仲間にも似たような術を使う奴がいた。恐らくそれと同じ処置で引きはがせるはずだから、



マスターは全力であ奴を倒してくれ。そうすればマスターの中の  
ダークシングナー、つまりは私の闇の力でどうにでもなる』

なるほど。難しいことは考えなくていいから、目の前のデュエルに  
勝てと。なんだ、結局はいつも通りじゃないの。それに、この世のあ  
らゆる難しい話は最初っから僕には専門外だしね。改めて斎王とそ  
の中の何かを見て、デュエルディスクを構える。

「ようやくその気になった？それじゃあ、デュエルと洒落込もうじゃ  
ない！」

「レーザー衛星『ソーラ』はすでに動き始めている。そしてこの世界  
を、宇宙を光に染め上げる。たとえば道筋こそ変わろうと、この最終結  
果は既に確定した未来だ。なんならお前を倒し我々の仲間にした以  
降、そのまま遊城十代にけしかけるのもまた一興か」

さらりと物騒なことを言った後、自分のアイデアに酔ったかのよう  
な顔で斎王もまたデュエルディスクを構える。

「デュエル！」

命どころか魂までかかったこの勝負、先攻は僕だ。しかし、この運  
命運命ぎやーぎやー喚かれるのはいい加減飽き飽きしてきた。そん  
なこと言ったら、本来死んでなきやおかしいはずの僕が今こうやって  
仮にも生きてるのはどう説明つけるんだろう。前にチャクチャルさ  
んに聞いてみたことがあるけど、ダークシングナーとしての復活はこの  
世の理を超越した行為らしい。つまり、僕の運命は入学テストの日、  
あの事故で本来とぎれているのだそうだ。

「悪いけど、運命なんてもんは1年以上前にぶち破れることが分かっ  
たんでね。鰯<sup>ブリンセス</sup>っ子姫を召喚して、そのままゲームから除外。デツキか  
らレベル4以下の魚族、ハンマー・シャークを特殊召喚して、その効  
果を発動！自分のレベルを1下げて、手札からレベル3以下の水属性  
モンスターを特殊召喚する。来て、フィッシュボーグアーチャー  
！」

ハンマー・シャーク 攻1700 ☆4↓3

フィッシュボーグアーチャー 守300

いつもの布陣を敷けたから、とりあえず立ち上がりは良好とみるべ

きだろう。次は、斎王がどう動くかだ。

「そして永続魔法、補給部隊を発動。カードをセットして、ターンエンド」

「私のターン。フィールド魔法、光の結界を発動！」

「光の……結界？」

僕ら2人の周りを、うつすらと光る透明な壁が取り囲む。なんだかわからないけど、この中にいると本能的に嫌な気分になってくる。

「出でよ、戦車のアルカナ……アルカナフォースVII―  
THE CHARIOT！」  
ザ・チャリット

気味の悪い触手を生やした2段重ねの空飛ぶ円盤のようなモンスターが、こちらに向けて砲塔を向ける。

「アルカナフォースは全て、召喚時にその正位置と逆位置を決めることによって能力が変わる。さあ、回転を止めるのはお前だ！……と言いたいところだが、あいにく運命を選択する自由すらお前に与えられてはいない。光の結界の効果が適用中、私のアルカナは全て任意で効果を選ぶことができる。私が選ぶのは、正位置だ！」

そう言うと同時に、斎王の頭上でソリッドビジョンのチャリオットのカードが回転を始める。だがその回転は次第にゆっくりになっていき、やがてきちんと上を上に、下を下に下向きで止まった。

「戦車の正位置。よってこのモンスターが相手を戦闘破壊した時、そのモンスターを私のフィールドに特殊召喚することが可能となる！ゆけ、チャリオット！ファイラー・キャノン！」

こちらを向いた砲台から一斉に白いビームが発射され、アーチャーが焼き尽くされる。

アルカナフォースVII―THE CHARIOT 攻1700

↓フィッシュボーグ―アーチャー 守300 (破壊)

「そして、お前のモンスターは私の場に現れる。雑魚モンスターだが、まあ壁ぐらいにはなるだろう。そして光の結界適用中にモンスターを戦闘破壊したことで、その攻撃力の数値分私のライフが回復する」

フィッシュボーグ―アーチャー 守300

斎王 LP4000↓4300

「アーチャー！……だけど、この瞬間に補給部隊の効果発動！僕のフィールドでモンスターが破壊されたから、カードを1枚ドロロー！」  
思わず呼びかけるも、水槽の中にいるいまだになんだかよくわからない2体の生物からは何の反応もない。いつもはアーチャーの精霊が僕に懐いてくれてるから、呼んだら必ず近寄ってくれたのに。カードを引くことはできたけど、チャリオット、厄介な能力だ。早いうちに対処しなくちゃ。

「カードを伏せ、私はこれでターンエンドしよう。聞こえてくるぞ、お前の敗北への足音が」

清明 LP4000 手札：2

モンスター：ハンマー・シャーク（攻）

魔法・罠：補給部隊

1（伏せ）

斎王 LP4300 手札：4

モンスター：アルカナフォースVII—THE CHARIOT  
（攻）  
フィッシュボーグ—アーチャー（守）

魔法・罠：1（伏せ）

場：光の結界

「僕のターン、ドロロー！」

「この瞬間に永続トラップ2枚、死神の巡遊を発動！このカードはアルカナフォースと同じく、選択によって効果が変わる。だが唯一違う点はその選択を毎ターン行うこと。まずはこのターンだ！」

「ス、ストップ！」

鎌を持った骸骨の姿をする死神のカードが、再びクルクルと回りだす。僕の宣言によってその回転はゆっくりになってゆき、最終的にチャリオットと同じく正しい向きで止まった。

「今度はいったい、何が起きるってのさ？」

「死神の巡遊の正位置。死神が降り立ったお前のフィールドに、新たな命は芽吹かない……これでお前はこのターン、通常召喚及び反転召喚が行えない！」

「なっ!？」

『落ち着け、マスター。まやかしの死神に惑わされるな、所詮あの死神が封じることができるのは伏せモンスターをマスターが出していない今は通常召喚のみだ。ならば、他の方法でモンスターを出せばいい』

召喚封じという恐ろしい効力に一瞬度肝を抜かれるも、チャクチャルさんの一喝を受けてすぐにそれが見た目だけのこけおどしではないことに気づく。

「そ、そうだ、確かに。斎王、お前はひとつミスを犯したね！僕が封じられたのは通常召喚、つまり特殊召喚はできるんだ。ハンマー・シャークの効果をもう一度発動、さらにレベルを下げることで別のモンスターを特殊召喚する！さあ来い、マジック・スライム！」

ハンマー・シャーク ☆3↓2

マジック・スライム 守1200

「攻撃力が同じチャリオットに攻撃したら、せっかくの貴重な展開要因もやられちゃうし、そもそも自爆特攻は好きじゃないからね。だからこのターンは、アーチャーを返してもらおうよ。ハンマー・シャークでフィッシュボーグーアーチャーに攻撃！」

ハンマー・シャーク 攻1700↓フィッシュボーグーアーチャー

守300 (破壊)

「それがどうした？守備表示だから私にダメージは入らんぞ」

「そう言ってもらえるのも今のうちさ。その死神はモンスターをセットすることも止められない、モンスターとカードを1つずつセットしてターンエンド」

「私のターン！この瞬間、光の結界を維持するかどうかを決める。このカードの回転を止めてみる！」

その言葉とともに、ソリッドビジョンで斎王の頭上に光の結界のカードが浮かび上がる。なるほど、さっきみたいにこれをストップさせればいいのか。これまでのパターンから考えて正しい向き、つまり正位置の時に斎王にとってメリット効果が出てくると思って間違いないだろう。ということは、なんとか逆位置を引き当てればいいわけ

だ。3、2、1……………

「今だ、ストップ！」

「無駄だあ！」

その言葉通り、回転スピードを完璧に見極めて止めたはずのカードはなぜか正位置で停止する。

「光の結界の正位置。これにより、このターンもアルカナフォースの効果決定権とライフ回復効果はこのターンも持続する。そして速攻魔法、フォトン・リードを発動！手札からレベル4以下の光属性モンスター1体を特殊召喚する。出でよ、帝王のアルカナ……アルカナフォース<sup>フォー</sup>IV<sup>ジー</sup>—THE<sup>エン</sup> EMPEROR<sup>ラー</sup>！」

アルカナフォースIV—THE EMPEROR 攻1400

大量の機械の触手を生やした、翼の生えたなんだかよくわからない生物。どこらへんがどう帝王なのかはさっぱりわからないが、それにしてもなんでまた通常召喚もできるモンスターを特殊召喚したんだろう。

「疑問に思っているようだな、今教えてやろう！速攻魔法、地獄の暴走召喚！」

まるで心を読んだかのような……いや、そこまでできたらいくらなんでもチートなんてレベルじゃない。多分僕の顔に出てたんだろう。そう思いたい。だけど、地獄の暴走召喚か。攻撃力1500以下のモンスターの特殊召喚をトリガーとして発動され、デッキから同名モンスターを2体特殊召喚するカード。その代償に僕もフィールドのモンスターと同名カードを2体特殊召喚できるけど、あいにくとハンマーもスライムもピン刺しだ。

アルカナフォースIV—THE EMPEROR 攻1400

アルカナフォースIV—THE EMPEROR 攻1400

「そしてエンペラー3体の効果を光の結界により決定、全て正位置だ！そしてエンペラーは正位置の時、私のフィールドのアルカナフォースの攻撃力を500ポイントアップさせる！」

「エンペラーが3体……1500ポイントのバンプアップ!?」

全エンペラーの体が光の結界の中で輝きを放ち、その光が斎王の全

てのモンスターを覆い尽くしていく。

アルカナフォースVII―THE CHARIOT 攻1700

↓3200

アルカナフォースIV―THE EMPEROR 攻1400↓

2900

アルカナフォースIV―THE EMPEROR 攻1400↓

2900

アルカナフォースIV―THE EMPEROR 攻1400↓

2900

「これが、齋王の実力ってわけか……!」

確かに強い。とてもじゃないけど、あれはレベル4モンスターの攻撃力じゃない。去年命がけで戦った幻魔皇、ラビエルのほうが火力的には上だけど、あつちはラビエルだけが火力要因で他は全てラビエル関連やそれに繋ぐためのカード、そんな印象だった。だけど齋王のデッキはこのエンペラーを大量展開することで攻撃力1500のモンスターでも、アルカナフォースである限りあの青<sup>ブルーアYES</sup>眼にも匹敵する火力を持つことになる。

「他愛もないな、バトルだ!チャリオットでハンマー・シャークに攻撃、ファイラー・キャノン!」

「させるか!リバーズカード、オープン!」

チャリオットが今度は触手の先から謎の液体を発射する。だがそれはハンマー・シャークにぶつかるより先に、突如発生した大波に飲み込まれた。

「なに、破壊されていないだど?」

「トラップカード、ポセイドン・ウェーブを発動。その攻撃を無効にして、さらに僕の水・魚・海竜族モンスター1体につき800ダメージを与える!ハンマーとスライムの2体で1600ダメージ!」

齋王 LP4300↓2700

「ふん……だが、まだエンペラー3体の攻撃が残っている!まずハンマー・シャーク、そしてマジック・スライム、最後に伏せモンスターへ攻撃だ!」

「おっと、だったらこのカードで！永続トラップ、安全地帯をハンマー・シャークに発動！これでハンマー・シャークは破壊耐性を得る！」

「エンペラー3体でハンマー・シャークに攻撃してもお前のライフは残るか……ならば光の結界の効果を優先しよう、攻撃対象はそのままだ！」

アルカナフォースI V | T H E    E M P E R O R    攻2900 ↓  
ハンマー・シャーク    攻1700

清明    L P 4 0 0 0 ↓ 2 8 0 0

アルカナフォースI V | T H E    E M P E R O R    攻2900 ↓  
マジック・スライム    守1200 (破壊)

齋王    L P 2 7 0 0 ↓ 3 4 0 0

アルカナフォースI V | T H E    E M P E R O R    攻2900 ↓  
???    守500 (破壊)

齋王    L P 3 4 0 0 ↓ 4 9 0 0

光の結界の効果による齋王のライフ回復がみるみる進んでいく。だけど、今の攻撃はこっちの思う壺。ここからは反撃開始だ。

くいつと指で合図すると、エンペラーの電撃を受けて四散、派手に飛び散った銀色の飛沫が動き出して自分を倒したエンペラーに吸い込まれてゆく。一瞬の後、その額に銀色の紋章が浮かび上がった。

「スライムの破壊をトリガーとして補給部隊のドロウ。そしてこの瞬間、戦闘破壊されたグレイドル・イーグルの効果発動！相手モンスター1体の装備カードとなり、そのコントロールを得ることができる！」

「ほう？なるほど、お前も何らかの力を手に入れたわけか。だがこちらにはまだ正位置のエンペラーが2体残っている、一時しのぎの姑息な手にすぎん！」

「くっ……！そんなもん最後までわからないさ。よろしく頼むよ、エンペラー」

アルカナフォースI V | T H E    E M P E R O R (清明)    攻2900 ↓ 1900

アルカナフォースⅤ―THE EMPEROR (斎王) 攻29  
00↓2400

アルカナフォースⅣ―THE EMPEROR (斎王) 攻29  
00↓2400

アルカナフォースⅢ―THE CHARIOT 攻3200  
↓2700

僕の手にはコントロールが移ったことで、コントロールのフィールドにいるアルカナフォースしか強化しないエンペラーの効果は弱まった。だけど、まだハンマーとエンペラーで突破できる数値じゃない。

「私はこれで、ターンエンドだ」

清明 LP2800 手札：1

モンスター：ハンマー・シャーク (攻・安地)

アルカナフォースⅤ―THE EMPEROR (攻・

イーグル)

魔法・罫：補給部隊

安全地帯 (ハンマー)

グレイドル・イーグル (エンペラー)

斎王 LP4900 手札：1

モンスター：アルカナフォースⅢ―THE CHARIOT

(攻)

アルカナフォースⅤ―THE EMPEROR (攻)

アルカナフォースⅣ―THE EMPEROR (攻)

魔法・罫：死神の巡遊

場：光の結界

「僕のターン、ドロー！」

「この瞬間、死神の巡遊の効果がふたたび発動！」

斎王の頭上でまた回り始める死神のカード。あれもそのうち対処するとして、このターンはどう出るか。

「……ストップ」

「当然正位置い！よってお前はこのターンもモンスターの召喚、反転



召喚が行えない。そんな攻撃力のモンスターしかないようでは、大人しく守備表示にして時間を稼ぐ程度のことしかできない」

「悪いけどね、本気でそんなこと考えてるんなら僕に対する調査不足さ。覚えておくといいよ、僕は逃げない！僕らはこの戦い、真正面から受けて立つ！魔法カード発動、アクア・ジェット！」

ハンマー・シャークの両脇部分に小型の噴射装置が取り付けられる。魚族モンスターとアクア・ジェットのマジックコンボにより、ハンマー・シャークの攻撃力が1000ポイントアップする。

……そういえば、アクア・ジェット使うだけでマジックコンボだのなんだの最初に騒いでたのはユーノだっけか。結局なにがお約束なのかは毎回はぐらかされて教えてもらえなかったけど、また会ったら今度こそ聞いてみよう。

ハンマー・シャーク 攻1700↓2700

「バトル！ハンマーでエンペラー1体に攻撃！」

ハンマー・シャーク 攻2700↓アルカナフォースIV―THE  
EMPEROR 攻2400 (破壊)

齋王 LP4900↓4600

アルカナフォースVII―THE CHARLOT 攻2700  
↓2200

アルカナフォースIV―THE EMPEROR 攻2400↓  
1900

「これでエンペラーのバンプアップはさらに効果が薄くなったね。こは畳みかける、エンペラーで最後のエンペラーに攻撃！」

「小賢しい真似を……光の結界の回復は、例えモンスターが相打ちとなっても適用される。私のライフは減るところかさらに増える！」

アルカナフォースIV―THE EMPEROR 攻1900 (破壊)

↓アルカナフォースIV―THE EMPEROR 攻1900  
(破壊)

アルカナフォースVII―THE CHARLOT 攻2200  
↓1700

本来なら僕のポリシーとして、戦ってくれるモンスターに対して申し訳ないから自爆特攻はしたくない。だけど、デュエルモンスターズは互いに恨みっこなしの真剣勝負だ。自分のモンスターは大切だしできる限り敬意を払うけど、相手のモンスターに対してまでそれを持ち込むのはただの舐めプでしかない……と、少なくとも僕は思っている。とはいえ、これがかなりいい加減な、都合のいい論理なのは自覚がある。自分のモンスターだけが可愛いのか、なんてもし聞かれたら、正直うまく答えられる自信がない。

結局、いくら精霊が見えるっていつても僕一人にできることなんて何もないということだ。

「小賢しいのはどっちだつてのさ！こっちの僕のフィールドでエンペラーが破壊されたから、補給部隊の効果でまた1枚ドロ。メイン2に永続魔法、グレイドル・インパクト発動！そしてこのエンドフェイズにインパクト第1の効果により、デッキからグレイドルカードを1枚サーチする。おいでアリゲーター、ドール・コール！」

僕の後ろに現れたUFOのてっぺんがぱかっと開き、そこからグレイドル・アリゲーターのカードが飛び出してくる。うまいこと目の前に落ちてきたそれをキャッチして手札に加え、あまり意味ないとは思いつつも一応軽く順番を入れ替えてどれがアリゲーターかパツと見ではわからなくする。まあ、こんなもんだらう。

「私のターン。この瞬間、光の結界の効果を発動！さあ、回転を止めろ！」

「やってやるさ、ストップだ！」

いい加減逆位置が出てもおかしくないと思うけど、それでもやっぱり正位置で止まる光の結界。

「ふん。さらに魔法カード、カップ・オブ・エースを発動！このカードはアルカナではないゆえに光の結界の効果も適用されない。さあ、このカードの回転も止めるがいい」

水面に置かれて逆さ富士のように自身の影を映す金色のカップのイラストが描かれたカードが、また回りだす。このカードは知ってい

る、確か正位置で相手、逆位置で僕が2枚ドロ―できるのだ。

「今度こそ……ストップ!」

「無駄無駄無駄あ、当然正位置い!よってカードを2枚ドロ―する。そして魔法カード、フォトン・サンクチュアリを発動!このターン光属性以外のモンスターを場に出せなくなる代わりに、フォントントークンを2体特殊召喚できる!」

フォントントークン 守0

フォントントークン 守0

「私はフォントントークン2体をリリースし、アドバンス召喚!出でよ、アルカナフォースのラストナンバー!かつて最強であった者よ!アルカナフォースX<sup>トウエンティワン</sup>X<sup>ザ・</sup>I-THE<sup>ワー</sup>WORLD<sup>ド</sup>ツ!」

3本指の機械めいた腕を伸ばす、オレンジ色の炎を体内に宿した単眼の生命体。13で終わりのアルカナ最大のナンバー……だけど、それが『かつて最強であった』とはどういう意味だろう?」

アルカナフォースX<sup>ザ・</sup>X<sup>ワー</sup>I-THE<sup>ド</sup>WORLD 攻3100

「光の結界の適用により、ザ・ワールドは自動的に正位置の効果適用される。チャリオットを守備表示とし、ザ・ワールドでハンマー・シャークに攻撃!オーバー・カタストロフ!」

ゆっくと伸ばしたザ・ワールドの腕の間にエネルギーが集中し、熱光線となつて放たれる。

「ハンマー・シャークは安全地帯の効力で破壊されない!」

「だがダメージは受けてもらおう!」

アルカナフォースX<sup>ザ・</sup>X<sup>ワー</sup>I-THE<sup>ド</sup>WORLD 攻3100↓ハンマー・シャーク 攻2700

清明 LP2800↓2400

「攻撃力3100のパワーはさすがに、効く……!どう?そつちはまだいける、ハンマー?」

体中火傷だらけでボロボロになりながらも僕の言葉に頷いてみせるハンマーに少し安心しながらも、下手に安全地帯で守ったせいどころまで酷使することになったことを心の中で謝る。言いたいことはきつと、それでわかつてくれただろう。

「ふふふ、ずいぶんと美しい友情だな？その精霊と意志を通わせ使役する力、やはりなんとしてでも私の物にしてくれる！カードを1枚伏せ、ターンエンドだ」

「一人でほざいてろー！」

清明 LP2400 手札：2

モンスター：ハンマー・シャーク（攻・安地）

魔法・罫：補給部隊

安全地帯（ハンマー）

グレイドル・インパクト

斎王 LP6000 手札：0

モンスター：アルカナフォースVII―THE CHARIOT

（守）

アルカナフォースXXI―THE WORLD（攻）

魔法・罫：死神の巡遊

1（伏せ）

場：光の結界

「僕のターン、ドロー！」

「何を引いたところで、私の優位に変わりはない！死神の巡遊よ、再び奴のフィールドの生の息吹を絶つがいい」

「何度も何度も……外してたまるか、ストツプだ！」

どれほどの気合を込めても、結局死神はまたも正位置で止まってしまふ。またこのターンも、僕は召喚及び反転召喚の自由が封じられる。

「だからって、手がないわけじゃない。ハンマー・シャークの効果発動！来い、グレイドル・アリゲーター！」

再び湧き上がった銀色の水たまりは、今度は緑色のワニの姿を取る。もつとも、その足先まではせつかくの擬態もうまくいっていないようだけど。

ハンマー・シャーク ☆2↓1

グレイドル・アリゲーター 守1500

「そしてインパクト以外のグレイドルが場にいることで、グレイドル・

インパクト第2の効果の発動条件は整った。自分フィールドのグレイドルカードと、相手フィールドのカード1枚を破壊する、グレイ・レクイエム！」

壊れかけのUFOから今度は先が二又になったアンテナのようなものが伸びてそのうち片方からアリゲーター、もう片方から死神の巡遊めがけて七色の不気味な光線が発射される。2枚のカードは同時にバラバラになったが、唯一違うのは死神の巡遊が破壊されたらそれっきりなのに対しアリゲーターはバラバラになった銀色の水滴が先ほどのイーグルのようにザ・ワールドへと集結し始めたことだ。

「そしてこの瞬間、魔法カードの効果で破壊されたアリゲーターの効果発動。このカードもまた、相手モンスターのコントロールを奪う能力を持つ！やっちゃえ、アリゲーター！」

「甘いわあ！トラップ発動、亜空間物質転送装置！ザ・ワールドはこのターンの終了時まで、ゲームから除外される！」

「そんなっ!？」

大量の銀色の飛沫が今まさにザ・ワールドに命中しようとした瞬間に、ザ・ワールドの巨体が夢か幻かのようにかき消える。相手を失った銀色のしづきが空中でぶつかり合い、地面に落ちて消えていった。

「馬鹿め、私が何の対策もなしにザ・ワールドほどの大型モンスターを出すとも思ったか？」

「いや、思っちゃいないさ。だけどこれで、少なくとも死神は墓地。もう死神の力で僕の召喚は止められないね。さらに僕のフィールドでアリゲーターが破壊されたことで、また補給部隊の条件が満たされた。このカードは……ありがとう、ここで来てくれて。バトルだ、ハンマー・シャーク！そこで寝てるチャリオットに攻撃！」

ハンマー・シャーク 攻2700

↓アルカナフォースV I I — T H E C H A R I O T 守1700  
0 (破壊)

「どんなもんだ！」

「ふん、その程度か？守備表示モンスター1体が倒れたところで痛くも痒くもないわ。そしてこのエンドフェイズに、ザ・ワールドは異次

元より帰還する」

アルカナフォースXXI―THE WORLD 攻3100

齋王の言葉通り、ザ・ワールドの巨体が消えたときと同じく何の前触れもなくいきなり現れる。エンドフェイズのインパクトによるサーチも、破壊効果を使ったターンには使用できないからこのターンは使えない。だけど、それは今はいい。次だ、次の瞬間こそが勝負の一瞬！

「私のターン、ドロ―！光の結界の効果により……」

「今だ！相手フィールドで表側表示となっているカードの効果が発動されたことで、手札から幽鬼<sup>ゆき</sup>うさぎの効果が発動！このカードを捨てること、その発動されたカードを破壊する！」

ふたたび不気味に光りだす半透明の結界。そこにどこからともなく飛んできた青白く発光するお札のようなものが張りつくと、その場所から何かが弾けたような音がしたのち、そこに入ったひびがみるみるうちに結界全体に広がっていく。一瞬の間があつて、ガラス細工か何かのようにあっけなく光の結界は粉々になつて消えていった。キラキラ輝いて辺りに降り注ぐ結界のなれの果ての向こう側に一瞬見覚えのある銀髪が揺れるのが見えた気がしたけれど、もう一度よく見直した時にはそこにはもう誰もいなかった。……なんでバレッツバレなのにわざわざ隠れたんだろう、うさぎちゃん。

「馬鹿な、私の、光の結界が……！」

「どう、齋王？さすがにこれは効いたんじゃない？」

光の結界の破壊はどうやらかなり痛手だったらしく、もともと恐ろしい形相だった顔をさらに歪めて怒りを見せる齋王。だがすぐに邪悪そのものがにじみ出ているような笑いを口元に張り付けると、今引いたカードをデュエルディスクに叩き付けるようにして置いた。

「その程度のことでは勝つたつもりかね？いまだライフも私の方が圧倒的に上、そしてお前のモンスターでは私のザ・ワールドを倒すことはできない！カードを1枚伏せ、ザ・ワールドの攻撃！オーバー・カタストロフ！」

「……………っ!!」

アルカナフォースXXI―THE WORLD 攻3100↓ハンマー・シャーク 攻2700

清明 LP2400↓2000

再びザ・ワールドの放つエネルギーの塊が、ハンマー・シャークに激突する。本来ならばとうの昔に倒れるようなダメージをもう3ターンも連続で受けてなお、僕の鮫は倒れずに持ちこたえてくれた。

清明 LP2000 手札：2

モンスター：ハンマー・シャーク（攻・安地）

魔法・罫：補給部隊

安全地帯（ハンマー）

グレイドル・インパクト

斎王 LP6000 手札：0

モンスター：アルカナフォースXXI―THE WORLD（攻）

魔法・罫：1（伏せ）

「僕のターン！よし、このカードがあれば。フィールド魔法発動、忘却の都 レミューリア！そしてレミューリアの効果を発動、自分フィールドの水属性モンスターのレベルは、自分フィールドの水属性全ての数の数値だけエンドフェイズまでアップする！」

「なんだと!?!」

「ハンマーの効果！今上げたレベルをまた下げて、手札のグレイドル・コブラを特殊召喚」

ハンマーはもう僕の酷使のせいで、自身の効果を3回使用してレベルを最低ラインの1まで下げてしまった。つまり、これ以上効果を使うことはできないということだ。

ただし、それはあくまでも通常ならば、の話。レミューリアの隠された効果によってふたたびレベルが2になったハンマーは、このターンも効果を使うことができる。

ハンマー・シャーク 攻2700↓2900 守1500↓1700

0 ☆1↓2↓1

グレイドル・コブラ 攻1000↓1200 守1000↓1200

0

「また馬鹿の一つ覚えか？そんなことで……」

「ああ、わかっているさそんなこと。だから、ここから先は別の戦術を見せるからね！ハンマー、コブラの2体をリリースし、アドバンス召喚！七つの海の力を纏い、穢れた大地を突き抜ける！地縛神

Cha<sup>チャ</sup>cu<sup>ク</sup> Cha<sup>チャ</sup>ll<sup>ル</sup>hu<sup>ア</sup>！」

僕の全身に、紫色の痣がスルスルと走るのがわかる。おそらく、黒目と白目の色も完全に入れ替わっているだろう。それぐらい、僕もチャクチャルさんも本気だということだ。ここでやらなけりや僕にあとを任せて光の結社と戦ってくれてる皆にだけでなく、今の今までポロポロになりながらも僕を信じてアルカナフォースの猛攻相手に戦線を維持し続けてくれたハンマーにも申し訳が立たない。

地縛神 Cha<sup>チャ</sup>cu<sup>ク</sup> Cha<sup>チャ</sup>ll<sup>ル</sup>hu<sup>ア</sup> 攻2900

「チャクチャルさん、デュエルの方も頼むけど、それ以外にも1つ頼みたいことがあるんだけど。実は……」

『皆まで言わずとも大丈夫だ、マスター。マスターの考えることだ、あの程度の想像はつく。でなければ、何のために私の力をマスターに乗せたと思っっているんだ。本来ならばできる限り人間の出来事に首を突っ込む気はなかったが、さすがに我がナスカの大地すらも射程内とこののはあまりいい気分はしないものだしな』

「ありがとう、チャクチャルさん。バトルだ！だけど僕が狙うのは、ザ・ワールドじゃない。地縛神は、相手プレイヤーに直接攻撃ができる！」

チャクチャルさんの姿が、ふわりと飛んだ。いや違う、チャクチャルさんの体からもう1つ、半透明のチャクチャルさんが分離したのだ。そのまま半透明な方が体を垂直に立て、どこまでもどこまでも上に登っていく。すぐに天井をすり抜け、僕からも見えなくなった。

「待て、一体何をやる気だ!？」

何かに勘付いた斎王が掴みかからんばかりの勢いで怒鳴りつけるけど、今更気づいてももう遅い。チャクチャルさんも言ってたけど、何のためにこのタイミングでダークシングナーの力を全開放したと思ってるんだか。



なにせ、チャクチャルさんクラスのモンスターを実体化させるのは生半可な精神力じゃこつちが持たないからね。  
「全力で頼むよ？ミッドナイト・フラッド！」

上空……成層圏ギリギリの生物が生存できないほどの高みに、突如紫色の閃光が爆ぜた。いや、それは閃光ではない。超高速で地上から舞い上がったそれは、シャチの姿をした地縛神。清明からの命を受けたチャクチャルアは、レーザー衛星『ソーラ』を破壊せんとこの高さまで上がってきたのだ。

『——まったく、無茶をやるものだ。いくらマスターの精神力でも、私をここまで離れた距離で実体化させるとなると並の負担では済まないのはわかっているだろうに。さすがにマスターの体が持つかどうかもわからないし、なるべく早くけりをつけねばな。とは言ったものの、これは少々厄介だな』

どこか心配げにそうひとりごちるのには訳がある。地縛神信仰が行われていた5000年前ならいざ知らず、今の世は既に科学全盛期である。すでに世界各国があらゆる場所から通信用なり気象用なりの衛星を飛ばしまくったことで、いくら世界を見続けていたとはいえない科学的なことには今一つ知識の浅いチャクチャルアにはどこにソーラがあるのか一目ではわからなくなっていたのだ。

まさか全部破壊するわけにもいくまいとあちこち見まわしていると、突然たまたま近くを回っていた衛星の1つから声がチャクチャルアの心に響いた。

『こちらです、太古より大地に縛られし神よ。これ以上、破滅の光の好きにはさせない！そのために、私の言葉を信じてください』

聞き覚えのない女性の声。信用に足る人間かとのチャクチャルアの躊躇を、はるか下から伝わってくる清明の苦しみが後押しした。

『……よかろう。ソーラはどこにあるっ…』

『あちらに。お願いします、斎王を……兄を、救ってください！』

『兄？なるほど、兄妹の情、という訳か』

それ以上は何も聞かず、巨体が揺らいだかと思うとすぐに向きを変えて声の示す方向に空中を泳いでゆく。その途中で、地上から近づいてくる茶色の影に気が付いた。まごうことなき肉食恐竜のシルエツトに、なぜか見覚えのある黄色い恐竜柄の帽子をかぶったそれはチャクチャルアに気が付くと、その目を丸くした。

『む？』

『あれ、確かアンタは清明先輩のモンスター……そうか、アンタもソーラを破壊しに来たのかドン？』

『アンタ……まあいい、お前は』

『よく聞いてくれたザウルス。男テイラノ剣山、恐竜が鳥に進化したのと同じように俺も進化して、宇宙へ飛び立つスペースザウルスに進化したんだドン！』

1から10まで訳の分からない目の前の現実には、5000年の長きに渡り世界を観察しつづけていたチャクチャルアですら一瞬言葉を失う。あるいは地縛神がかって世界を支配できなかった理由は、人類の持つこの無限の可能性を軽視しすぎたことにあるのではないか。そんな考えまで頭をよぎるが、とりあえず昔の反省は後でいくらでもする時間があると気を取り直す。

『いいだろう。時間はない、私について来い！』

『わ、わかったドン！』

一方、再び地上に戻って。モンスターとしてのチャクチャルアが口から衝撃波を連続で放ち、それが斎王に迫る。

『ヒヒヒ、貴様ごときに破滅の未来は変えさせん！この瞬間に永続トラップ、ラツキーパーンチを発動！1ターンに1度、相手の攻撃宣言時に3度のコイントスを行うことでそれがすべて表ならばカードを3枚ドローする！』

コイントスと明言したにもかかわらず、なぜか死神の巡遊や光の結界と同じように3枚のラツキーパーンチのカードが斎王の頭上で同時に、それぞれ異なるスピードで回転を始める。要はあれだ、あの中で

1回でも裏を出せばいいわけだ……と思っていたら、僕がストップ宣言をする前に齋王がすべての回転を停止させた。

「正位置、正位置、そして正位置。これにより、3枚のカードをドロ―させてもらおうか！」

「そんなことたろうと思った。だけど、地縛神の攻撃はもう止まらない！」

地縛神 Chacu Chalhua 攻2900↓齋王(直接攻撃)

齋王 LP6000↓3100

「へへっ、どんな……うっ!？」

ここで限界。皆まで言い切ることもできず、立ってられないほどの痛みに膝を折る。一気に襲ってきた吐き気に思わず口を開くと、胃液どころか血の塊が湿った音とともに床に落ちたのがぼやける視界で辛うじて見えた。実を言うとチャクチャルさんが空に飛び立つてから、なんとなく胸が苦しい感じはしていた。だけど、まだいけるだろうとのんきに構えて気づかないふりしてるうちにどんどん苦しさが増し、あつという間にこれまで感じたことのないような痛みが全身を埋め尽くした。

「ふん、つまらんことを考えるからだ。運命に逆らうものの末路はみじめよのう」

「誰、が……がはっ！」

どうしようもない原因不明のその痛み、全身が消えてなくなりそうな感覚と戦いながら……いや、それは間違いだ。その原因はよくわかってる。あの事故で本来死んだ僕の魂をこの体に繋ぎとめて動かしているのは、ひとえにチャクチャルさんの持つ力だ。常にチャクチャルさんから生きるためのエネルギーを供給してもらっているようなものである。そして今、物理的なチャクチャルさんとの距離が極端に離れたことで、その結びつきもそれだけ小さく弱くなっている。普通に日常生活するだけなら僕の体に普段から溜まってる地縛神の力だけでも問題ないけれど、よりもよってチャクチャルさんの実体化までやるとなるとそのストックすらゴリゴリ削れていく。

早い話が、僕の体は今現在ダークシグナーとしても死を迎え、砂に変わろうとしているのだ。その証拠に、たった今吐いたばかりの血の塊はもう風化して消え、床には染み一つ残っていない。並大抵の痛みなら頑張る気だったけど、予想以上に実体化の僕への負担が激しい。「チャク、チャル、さん」

声を絞り出してその名を読んでも、まだ帰ってこない。意識も薄れてきたけど、ここで気を失ったらデュエル続行不可能と判断されて自動的に負けが決まってしまう。あと少し、きつとあと少しで帰ってくるはずだ。だからそれまで、石に噛り付いてでも持ちこたえれば……！

「清明っ！」

辛うじて意識を繋いでいたけど、それすらきつくなってきた瞬間に声がした。無論、僕はその声の主をよく知っている。ああ、まったくどうしてこうヒーローってやつは、毎度毎度ピンチになんなきや来てくれないのかね。

必ず来るって信じてたよ、十代親友。

「ええい、今度はなんだ！また余計な邪魔が入りよって！」

「私も来たよ、ってさ。絶対に信じてるからね、清明！」

「清明君、頑張れー！」

「何を無様な真似をしている！立ち上がれ、それでもこの万丈目サンダーを倒した男か！」

「夢想、翔、万丈目……」

応援するのは結構だけど、ちよつと僕を酷使しすぎじゃないですかね皆さん。でも、皆の声を聞いているうちに不思議と体の奥底からパワーがあふれてきて、それと同時に痛みが急に消えていく。床に両手をつき、息を荒げながらもどうにか体を起こす。次にグレイドル・インパクトを発動した時に出てきたUFOのふちを掴み、体重を預けてよろよろと立ち上がった。視界も元に戻ってきたし、もう大丈夫だ。少なくとも今、戦うことはできる。

「……斎王、デュエルを、続けよう、か……エンドフェイズに、インパクト、の、効果で2枚目のインパクトをサーチして、僕はこれで、ター

ン、エンド」

「ははははは、なんだあ、そのざまは？それで続ける？デュエルを？いいだろう、望み通りにしてやろうではないか！私のターンに魔法カード、カッブ・オブ・エースを発動。これもまた正位置い！よって、カードを2枚ドローする！」

これで齋王の手札はラッキーパンチの分も合わせて計5枚。ついさっきまで手札0だったのに、つくづく光の力というのは恐ろしい。「愚者のアルカナ、アルカナフォース0—THE FOO<sup>ル</sup>Lを召喚しよう。さらに永続魔法、コート・オブ・ジャステイスを発動！これにより自分フィールドにレベル1天使族モンスターのフールが存在することで、手札から天使族モンスターを特殊召喚できる。出でよ、恋人のアルカナ！アルカナフォースVI—THE LO<sup>バ</sup>VERS！」

アルカナフォース0—THE FOO<sup>ル</sup>L 攻0  
アルカナフォースVI—THE LO<sup>バ</sup>VERS 攻1600

チャクチャルさんの前には壁モンスターなど何の役にも立たないし、そもそもあの3体は全て攻撃表示だ。だというのになぜだろう、僕の全身には今鳥肌が立っている。あの齋王の手札、あそこに恐ろしいカードがあるのがわかる。なぜか、つい先日死闘を繰り広げたアバターの姿が頭をよぎった。

「齋王、一体何を……」  
「教えてやろう、物質<sup>マテリアル</sup>、魂<sup>スピリチュアル</sup>、神々<sup>ヘブンス</sup>……全てを統べる光の力、アルカナを越えたアルカナの力を！」

不気味な一つ目の顔、そのサイズとは不釣り合いなほど大きな体。アルカナフォースにしては珍しく触手が生えていないが、それでも全体の造形はどこかナンバー付きのアルカナに通じるものがある。

アルカナフォースEX—THE LI<sup>イ</sup>GH<sup>ト</sup>T RU<sup>ル</sup>LE<sup>ラ</sup>R 攻4000

「攻撃力4000、ザ・ライト・ルーラー……」  
「そして当然、正位置だ！」

正位置で回転が止まる、アルカナを越えたアルカナ。その巨体に圧倒されていたが、ふと気づくと周りの風景が様変わりしていた。暗い

空間の中で無数に煌めく星々の輝き、そして足元に広がる地球。

「(っ)は……？」

「見よ、あれがソーラだ。お前の神はどうやら破壊に失敗したようだなあ？」

齋王が指差した先には、ひときわ目立つ人工衛星。チャクチャルさん、一体どうしたんだろうか。こうしている間にも、僕の体は刻一刻とボロボロになっていくのがわかる。今痛みが引いて落ち着いてデュエルできてるのも、夢想や十代たちのおかげもあるけど単に痛覚が使い物にならなくなつて痛みを感じなくなった、というのも大きな要因なんじゃないだろうか。

「あの光こそが世界を、全てを浄化する！その邪魔は絶対にさせん！」  
「あー？何か勘違いしてるようだがね、世界は破滅の光なんかのものじゃない。世界はこの僕ら、ダークシグナーが最初に唾付けたものだ！こちとら5000年越しでその時を待ってるんだ、それを急に出てきた奴なんかに渡してたまるか！」

お互いに一步も引かず、にらみ合う僕ら。その膠着を打ち破つたのは、齋王だった。

「ならば、力づくで奪い取るのみよ！バトルだ、ライト・ルーラーでその時代遅れの神に攻撃い！」

「悪いけど地縛神は相手の攻撃対象にならない、よつてその攻撃は成立しない！」

「ふん、馬鹿め。私は手札から速攻魔法、禁じられた聖杯を発動していた！これにより攻撃力400と引き換えに地縛神の効果は無効となり、ライト・ルーラーの攻撃は直撃する！ジ・エンド・オブ・レイ！」  
アルカナフォースEX―THE LIGHT RULER 攻4  
000

↓地縛神 Chacu Challhua 攻2900↓330  
0 (破壊)

清明 LP2000↓1300

「補給部隊で、1枚ドロ……！」

「だがこの瞬間、ライト・ルーラー正位置の効果発動。相手モンスター

を破壊し墓地に送った時、自分の墓地のカード1枚をサルベージできる！私は再びカップ・オブ・エースを手札に加え、発動！正位置を出し、さらに2枚のカードをドローする！カードをセットし、ターンエンドだ」

清明 LP1300 手札：2

モンスター：なし

魔法・罫：補給部隊

グレイドル・インパクト

斎王 LP3100 手札：1

モンスター：アルカナフォースEX―THE LIGHT RUL

ER（攻）

魔法・罫：1（伏せ）

「僕のターン、ドロー！」

カードを引いた瞬間、チャクチャルさんの気配がまたすぐ近くに帰ってきたのが全身でわかった。今こっちのチャクチャルさんが倒されたことで、本人も強制帰還となったのだろう。ボロボロで崩れかけた体で文字通り生気が蘇り、視界も思考もさらにクリアになる。

「チャクチャルさん！」

『私が遅れたことは確かにすまないと思う、マスター。だが、せつかく場所まで特定できたんだ。もう少し粘ってくればなんとかできたんだが』

「ごめんごめん。まさかチャクチャルさんが上からぶん殴られるとは思わなかったのよね」

『うむ。ああそうだ、マスターの友人もここにいるぞ』

「え？」

そう言われてソーラの方を見ると、何やら帽子をかぶった1匹の恐竜の姿が。あの帽子、何か見覚えがあるような。

「……まさか、剣山!？」

『お、清明先輩。見てくれドン、この俺の姿！俺はスペースザウルスに進化したんだドン!』

『マスター、あれはどういうことかわかるか？私にはさっぱりわからなかったが』

「奇遇だねチャクチャルさん、僕にもちよつとよくわかんないや。つて剣山、危ない！」

『え？うわっ?!?』

いきなりソーラが動き出し、でたらめな方向を向いてエネルギーをチャージする。たまたま長い尻尾が射程内にあつた剣山が慌てて尻尾をひっこめた次の瞬間、その場所を白い光の筋が薙いだ。

「剣山、今チャクチャルさんの代わりに送るから！それまでなんとか耐えてて！」

『わ、わかったザウルス……うおっ、まただドン!?!』

ソーラの光線をまたもギリギリのところでかわす剣山を見て、一刻も早く助けを送らなくてはと今引いたカードを見る。……来た！

「魔法カード、貪欲な壺を発動。墓地のモンスター5体、うさぎちゃん、スライムアリゲーターにハンマー、アーチャーをデッキに戻して2枚ドロ。そして、サルベージを発動！墓地から攻撃力1500以下の水属性モンスター2体、グレイドル・イーグルとコブラを手札に戻す。さらに魔法カード、強欲なウツボを発動！手札の水属性モンスター2体、つまり今サルベージした2体をデッキに戻して、カードを3枚ドロ！」

貪欲な壺まで絡めて久しぶりに使ったサルベージと強欲なウツボのコンボによって、僕の手札も5枚にまで増える。ここまで引けば十分、後はこのターンでとどめをさすのみだ。

「永續魔法、グレイドル・インパクトを発動。そしてインパクトの第2の効果！グレイ・レクイエムで場のグレイドルカード、今発動した方のインパクトと斎王、お前のライト・ルーラーを破壊する！」

再びUFOから独特な色合いの光線が放たれ、ライト・ルーラーを抹消せんと迫る。だがその光線がライト・ルーラーに届く前にその体内に収納されていた竜の首のようなものが展開されたかと思うと、そこから目も眩むような光が放たれてインパクトの光線がかき消えてしまった。



「そんな!？」

「ひひひ、惜しかったなあ! 私はトラップカード、逆転する運命を発動していた! これによりライト・ルーラーの効果は正位置から逆位置となり、自身を対象を取る効果を取撃力1000ポイントと引き換えに無効にして破壊する!」

ライト・ルーラーの頭上に浮かぶ正位置のカードが手も加えないのにいきなり180度回転して逆位置となる。すると宇宙空間の一部がねじれ、UFOから放たれた光線がそこに吸い込まれていった。

アルカナフォースEX—THE LIGHT RULER 攻4  
000↓3000

『わわっ! 清明先輩、早く何とかしてくれドン! う、うわっ!』

「剣山!」

剣山の注意が一瞬こちらを向いた隙に、ソーラの照準が剣山を捉える。いまさら避けてもとうてい間に合うような位置ではなく、もうだめか、と思つた瞬間、また別の声が割り込んだ。

『ならば私が、時間を稼ぎましょう!』

するとソーラが、まるで何かに縛られているかのように動かなくなった。どうやら剣山は助かったようだけど、この声は一体誰だろう。聞き覚えのない声に誰だったかと頭をひねっていると、ピンときた顔でソーラに向かって十代が喋りかけた。

「その声、美寿知<sup>みづち</sup>だろ!」

『いかにも。そのあなた、初対面の相手にこのようなことを頼むのも気が引けますが、どうかお願いいたします。地縛神の力を持つ者よ、私の兄に巢食う破滅の光を、消し去ってください!』

美寿知、その名前だけは知っている。十代から修学旅行で何があったのか聞いた時の話に出てきた、エドと十代の2人がかりでやっと倒したという斎王の妹だったっけか。彼女がソーラを抑えてきているなら、こちらとしても有難い。

「協力感謝するよ。それに、僕にはまだ手が残ってる。このターンで決着をつけよう、斎王!」

「面白い。ライト・ルーラーを倒せるわけがなからう!」

「それができるんだな！相手フィールドにのみモンスターが存在するとき、このカードはレベルを4、攻守を0にして特殊召喚できる。来い、カイザー・シースネーク！」

カイザー・シースネーク 攻2500↓0↓200 守1000↓0↓200 ☆8↓4

「確かにそれは上級モンスターだが、所詮壁を増やしただけにすぎんではないか？」

「慌てなさんなつての。カイザー・シースネークはこの効果で特殊召喚に成功した時、手札か墓地からレベル8の海竜族モンスターを特殊召喚できるのさ。僕はこの効果で、もう1体のカイザー・シースネークを特殊召喚する！」

カイザー・シースネーク 攻2500↓0↓200 守1000↓0↓200 ☆8↓4

「モンスターが2体揃い、召喚権を残している……まさか！」

「もつとしっかり警戒するべきだったんじゃない？2体のシースネークをリリースして、アドバンス召喚！これこそが僕の、不沈の切り札！光を切り裂け、霧の王！」  
キングミスト

2体の大海蛇が辺りを包み込む霧となり、鎧に身を包む魔法剣士の大剣に吸い込まれてゆく。霧を自在に操る力を持つ魔法使い、それが僕のエースカードである霧の王だ。

「霧の王のカードの攻撃力は、リリースしたモンスターの元々の攻撃力の合計となる。そしてさらに、そこにレミューリアの効果が乗って攻守アップ！」

霧の王 攻0↓5000↓5200 守0↓200

「わ、私の……光の力が……！だが、例えそのモンスターで私に攻撃しても私のライフは残る！」

「それはどうかかな？つてね。魔法カード、パラレル・ツイスターを発動！僕のフィールドの補給部隊を墓地に送ることで、ライト・ルーラーを破壊する！」

「ライト・ルーラーの逆位置の効果は強制効果……そ、そんな、馬鹿な！」

アルカナフォーエクス―THE LIGHT RULER 攻3  
000↓2000

「1つだけ教えてあげるよ、齋王。受け売りの言葉だけ……明けない夜はないけれど、暮れない昼もまた存在しないのさ。霧の王で最後の攻撃！ミスト・ストラングル！」

大上段に振りかぶったその剣が、湧き上がる霧をその刀身に纏って伸びる。常人では持ち上げることすらできないであろうサイズになったそれを軽々と構えた霧の王が、勢いよく斬り下ろす。ライト・ルーラーを両断したその一撃は、同時に背後のソーラまでもを深々と切り裂いた。

『これで、とどめだドン！うおおーっ！』

機能が停止しかかったソーラに、剣山が最後にタツクルをぶちかます。それが駄目押しとなり、ソーラが勢いよく爆発した。今度こそ、全ては終わったのだ。

霧の王 攻5200↓アルカナフォーエクス―THE LIGHT  
RULER 攻2000 (破壊)

齋王 LP3100↓0

「申し訳ない。私の弱い心を、心の闇を破滅の光に利用されてしまつて……」

「いやいや、いいっていいって。ただまあ、次からは気を付けてよ？」  
文字通り憑き物が落ちたように腰が低くなった齋王相手に少し調子を狂わせながらも、そこにいた全員で外に出る。まるで計ったかのごとくぴったりのタイミングで、日の出の光が鋭く水平線の一番向こう側を切り裂いた。

何とはなしにしばらくの間ゆっくりと空に朝が広がっていくのを皆が無言で見つめていたが、やがて齋王がまた口を開く。

「私は今日一番に出る船に乗って、美寿知を探しに行きます。見つかるまでにどれぐらいかかるかはわかりませんが、それでもいつか会えると信じていますから」

「あれ、タロットは使わないのか？」

「こう聞く十代に悪気はないのだろう。それがわかっているからこそ、イヤミにも聞こえるようなその言葉にも斎王は静かに微笑んだ。「ええ。もうこんなものは、私の役には立ちませんから」

そういつて、懐にしまつてあつた1組のタロットを空にめがけて投げつける。思えば光の結社が来てから、ずっとそれに翻弄されっぱなしの日々だった。これからは久しぶりに、いつもの日常が戻ってくるだろう。

「おーい、シニョール清明ー！」

「あれ、クロノス先生？」

僕の名前を呼ぶ声に、そちらを向く。手に何か紙のようなものを持ったクロノス先生が、ちよどこつちに来るところだった。そしてその紙を、僕に向けて押し付けてくる。

「どうしたんです、クロノス先生？」

「どうしたもこうしたもないノーネ、それはこつちのセリフですーノ。全然連絡が取れない上ーに、寮に行つてもいないものだから徹夜で探しましたノーネ」

「あー……ごめんなさい」

「よろしい。さて、本日の要件ですーガ、シニョール清明は今年度、まだ学期テストを受けていないノーネ。このままではこの時期にもう留年が確定してしまいますーガ、シニョールについては多少考慮する余地があるので救済措置として特別に明後日……いえ、もう日付が変わつたから明日ですね。とにかく、ワタクシクロノス・デ・メデイチ監修の特別テストを行いますーノ」

「え……えええええっ!」

テスト!?なんで僕が!?と言いたいところだけど、残念ながら心当たりがないわけじゃない。確かあれは十代が行方不明になる直前のことだけど、ユーノの罫にはまつて時の魔術師のタイム・マジックをまともに受けた日。そういうえば、確かあれはテスト前日のことだったよな。そのあと時間停止を喰らつてようやく復帰したと思つたら光の結社が攻め込んできて、それ以降はもうテストどころじゃなかつ

たからきれいさっぱり忘れてた……！

「明日？全教科？」

「その通り。留年しないような点を取ることを期待してますノーネ。では、私はもう布団にくるまって眠りたいのでさよならでスーノ。ふわあ〜」

最後に大あくびをしながら、今来た道を引き返していくクロノス先生。手書きで『テストのお知らせ』と書かれた手元の紙を見て、思わず頭を抱える。

「勉強手伝おうか、清明？つてさ」

「ありがとうございますいます夢想様！三沢もできればお願いしたいんですけど……つてあれ、そういうえば三沢は？十代、一緒じゃないの？」

「あいつは俺もどこ行つたかわかんないんだよな。お前らはどうだ？」

十代がその下の階にいた、翔と夢想と万丈目に話を振る。

「僕は階段で見かけたけど、白い制服のままだったからつい隠れちゃつて……」

「私はちょうど詰みかかつてたところに通りかかつて、そこでやつたバトルロイヤルに乱入してハーピイの羽根箒とサイクロンで露払いしてもらつたよ、つてさ。正直あれが無かつたら私でもひっくり返すのは無理だったかも、だつて」

「俺も似たようなものだな。そういうえば清明、こんなものを預かつたぞ。お前に渡してほしいそうだな」

そう言つて、きれいに折りたたまれた手紙を出す万丈目。とりあえず開いて中に目を通すとそこには自分一人で片を付けるつもりが余計に面倒事を引き起こしてすまなかつたという謝罪の言葉とそれでも何とかしてくれた僕たちに対しての感謝、とりあえずウリアのカードはそちらで預かつておいてほしい旨、そしてこんなとんでもないことが書かれていた。

『(中略)さて、俺の今後のことなんだが。実は光の結社にいる最中でデュエル統一理論の第一人者、ツバインシュタイン博士からうちに助手をしに来ないかとの大変名誉な誘いを受けてな。なんでも、俺の思

考パターンが気に入ったらしい。そこで君たちに合わせる顔もないことだし、しばらくの間アカデミアを休学して博士のところまで働いてみようかと思っている。それに、この分野には俺も以前から興味があった。去年起きた不思議な出来事から考えても、いわゆるデュエルモンスターズの精霊が現実存在するのは明らかだろう。となれば、それを科学的に解明すること。それが、今の俺にとつての目標なんだ。こんな別れ方になるのは心苦しいが、今の俺にはお前に合わす顔がない。それにもし正式にみんなに別れを切り出したりして、自分の決心が鈍るのが俺には一番怖い。だから、こんな別れ方しかできない俺を許してくれ。いつかまたアカデミアに戻ったら、必ず会おう。しばしの間さらばだ、清明。三沢大地』

なんかの間違いではないかと1回読んだ後、もう1回丁寧に読み直してみる。まあ生真面目な三沢の性格からいって、これ全部本気の文章なんだろう。まったく、三沢らしい道といふかなんというか。

ちよつとしんみりしていると、今度は上からヘリコプターの音がすぐそばまで近づいてきた。その中を見ていた斎王が、喜びの声を上げる。黒服の男たちと一緒にそこにいて斎王に手を振るその女性は、美寿知だった。

ま、おおむねハッピーエンドってことでいいのかね。

「……あとは、ユーノが帰ってくれば」

小さなつぶやきを聞いたのは、チャクチャルさんたち精霊しかいなかっただろう。一体ユーノ、どこに行っちゃったんだろう？

## ターンEX―5 真紅の竜と『真紅の』竜

これは、遊野清明が斎王とそれを操る破滅の光を打ち破り、レーザ―衛星『ソーラ』が遙か上空で静かに爆発した……その、少し前の話。誰も知らない、異邦人たちの戦いの話。

「さて、と。この封印も、そろそろ焼き切れるかな？」

三幻魔の封印された祠の近くで、適当な岩に腰を下ろしてそう満足げに1人ごちる人影……遊<sup>あそぶ</sup>。1度様子を見に行こうかと立ち上がったところで、ふと森の一点を注視した。野生動物とは違う、れっきとした人間の足音を聞き分けて意味深な笑みを浮かべる。

「ふうん、へー、ほく。なーんだ、結局邪魔しにくるんだ。いいよー、こっちの方はどうせ暇だったし」

怒り心頭といった様子でそこに立つのは、転生者狩りの富野。これまでも散々煮え湯を飲まされた相手に対しても、その目の闘志はいささかも薄らいでいない。

「うるせえー！どうやって生き返ったかは知らねえがな、いったんやられた奴が2回も3回も出てくんじゃねえよ」

「自分だって散々やられたくせに、よく言うよ。それで、もう1人の方はどうしたのかな？」

もう1人、とはそこにいるはずなのに姿の見えない相手、つまりユーノのことだ。まだユーノの洗脳が解けたことは知らないはずだと内心踏んでいたが、どうやら遊の様子を見て一発で何が起きていたのかの察しがついたらしい。その勘の良さに内心舌を巻きながら、それでも表向きは平然とした様子で吐き捨てる。

「知るかよ。お前がわかっときゃいいのはただ1つ、今から俺に叩きのめされるっただけだ」

「ふうん？言うようになったねえ、負け犬クンが」

実際、遊の言葉はあながち妄言でもない。彼と富野の実力差は明白であり、例え新たに手に入れたスカーライトの力をもってしてもその差を覆すことができるかどうかはかなり分の悪い賭けだ。しかし、それでもやらねばならないのだ。それだけの理由も、覚悟もある。

「言つてやがれ……」

2人の間の緊張が徐々に高まり、空気が次第に張りつめていく。そのときたまたま、アカデミア上空を飛んでいたカラスがしわがれた声で鳴いた。その音がきつかけになつたかのように、2人して同時にデュエルデイスクを構える。

「デュエル！」

先攻を取つたのは、遊。

「僕のターンはー、これかな？幻影王 ハイド・ライド！」

ぼろぼろの幽鬼のような馬に乗つたこれまたぼろぼろの騎士……チューナーモンスターでありながら他のチューナーとシンクロを行えるという、まさに幻影の王にふさわしい効果を持つカードだ。

幻影王 ハイド・ライド 攻1500

「ターンエンドー」

「俺のターン、ダーク・リゾネーターを守備表示で召喚！さらにカードをセットして、ターンエンドだ」

音叉を持った小柄な悪魔が、富野のフィールドに現れる。1ターンに1度の戦闘破壊耐性のあるモンスターで、まずは壁を作つたところか。

ダーク・リゾネーター 守300

遊 LP4000 手札：4

モンスター：幻影王 ハイド・ライド（攻）

魔法・罨：なし

富野 LP4000 手札：4

モンスター：ダーク・リゾネーター（守）

魔法・罨：1（伏せ）

「特に動きはなし、かー。まあいいや。手札を1枚捨てることで、<sup>ザ</sup>THE トリックキーは手札から特殊召喚できるよー」

ハイド・ライドの隣に現れたのは、緑のファッションに身を包んだ謎の奇術師。クエスチョンマークをあしらつたシルクハットで帽子というより兜のように首から上全体を覆っているため、その素顔を見ることができない。



THE トリック 攻2000

「シンクロ召喚、といきたいところだけどね、生憎と僕の琰魔竜は守備表示モンスターには特に有効打がないからね。バトル、ダーク・リゾネーターに……」

「させるかよ！トランプ発動、スクリーン・オブ・レッド！このカードが存在する限り、相手は攻撃宣言できないぜ！」

大量の鏡が上空から落ちてきて、遊とそのフィールドの周りを取り囲む。トリッキーとハイド・ライドの攻撃はあちら落ちちらに移る自らの姿に幻惑され、ダーク・リゾネーターに届かなかった。

「二重の守り、ってわけね。面白い面白い、ターンエンド」

攻撃が封じられても、余裕の態度は崩さない。あえてシンクロをせずに素材となるモンスターを残したことを怪しみつつも、富野にこれ以上相手ターンでの動きに干渉する手立てはない。

「俺のターン！相手フィールドにモンスターが2体以上いる場合、このカードはリリースなしで召喚できる！パワー・インベーター召喚！」

パワー・インベーター 攻2200

「お、そろそろ来るかなー？」

「望み通り、見せてやるぜ。レベル5のパワー・インベーターに、レベル3のダーク・リゾネーターをチューニング！赤き王者が立ち上がる時、熱き鼓動が天地に響く。防御に回る臆病者に、生きる価値など欠片もない！シンクロ召喚！叩き潰せ、レッド・デーモンズ・ドラゴン！」

レッド・デーモン使い同士のこのデュエル。先に現れたのは、富野の操る元祖レッド・デーモンズだった。まさに悪魔と呼ぶにふさわしい眼光で遊のフィールドのモンスターを見下ろし、口から蒸気を吐き出した。

☆5+☆3↓☆8

レッド・デーモンズ・ドラゴン 攻3000

「バトルだ、レッド・デーモンズ！ハイド・ライドに攻撃、灼熱のクリムゾン・ヘルフレア！」

レッド・デーモンズ・ドラゴン 攻3000↓幻影王 ハイド・ラ  
イド 攻1500 (破壊)

遊 LP4000↓2500

「くっ……」

「カードを1枚セット。エンドフェイズ時、スクリーン・オブ・レッドは俺に1000ポイントのダメージを強いる。これでターンエンドだ」

富野 LP4000↓3000

相手からの攻撃を完全にシャットアウトするという強烈な効果と引き換えに、エンドフェイズごとに自らのライフを削るデメリットを持つスクリーン・オブ・レッド。それでもまだ富野の方がライフ自体は優位に立っているが、それが安心できる理由にはならないのは本人が一番よくわかっていた。

遊 LP2500 手札：3

モンスター：THE トリックキー (攻)

魔法・罫：なし

富野 LP3000 手札：3

モンスター：レッド・デーモンズ・ドラゴン (攻)

魔法・罫：スクリーン・オブ・レッド

1 (伏せ)

「それじゃあ、ハンデはもうこれぐらいにしてあげようかなー？僕のターン、僕もダーク・リゾネーターを召喚ー」

遊のフィールドにも、音叉を手に持つ悪魔が現れる。よく見ると富野が使用したそれとは音叉を持つ手が逆になっていたが、だからといってテキストまで違うわけではない。

ダーク・リゾネーター 攻1300

「おっと、手札から増殖するGの効果を使用するぜ」

「レベル5のトリックキーに、レベル3のダーク・リゾネーターをチューニング。圧倒的な黒色が、世界の色を塗りつぶす。シンクロ召喚、琰魔竜 レッド・デーモン！」

富野のレッド・デーモンズよりもより筋肉質な体が目立つ、それと

は似て非なる悪魔のドラゴン。体には何かを暗示するような漆黒のラインが走り、よりがっしりとした体を印象付けている。

☆5＋☆3↓☆8

琰魔竜 レッド・デーモン 攻3000

「出やがったな……だが俺はここで、増殖するGの効果を適用！このターンお前が特殊召喚を行うたびに1枚、デッキからカードをドロースするぜ。まずは1枚！」

あのモンスターは1ターンに1度、場の自身以外の攻撃表示モンスターをすべて破壊する効果がある……それを、彼は思い出していった。だがそこで、と思考は先ほど自らが伏せたカードにたいして向かう。俺の伏せたカードはモンスターを除外し、破壊された時に帰還させることができるデイメンション・ゲートだ。これを使ってレッド・デーモンズを一時的に逃がし、スクリーン・オブ・レッドを突破してこないならばそれはそれでよし。万一何らかの手段で突破されたなら、このカードのさらなる効果によりレッド・デーモンズを帰還させる。完璧だ、そう彼は自分に言い聞かせた。

実際、彼の作戦は間違っただけではなかった。遊の持つレッド・デーモンから受ける被害を最大限に減らす手段としては、何も間違っていないかっただけと言えよう。

彼に落ち度があるとすればたった一つ、遊のデュエリストとしての能力が去年の時点ですでに完成していることを無意識のうちに前提としていたことだ。

「さあ、かかってきやがれ！」

その安い挑発に、余裕の笑みで返す。遊のターンは、まだ始まってすらいなかった。

「魔法カード、死者蘇生発動ー。墓地からチューナーモンスター、シンクロン・リゾネーターを蘇生させるよー」

シンクロン・リゾネーター 攻1000

「トリッキー召喚の時に落としたカードか……だが、なんでこのタイミングで……？」

すでに増殖するGの効果は適用されている。みすみすドロースせ

ることになるだけなのに、なぜここで死者蘇生してまで戦闘向きでないステータスの弱小チューナーを？富野の疑問は、いささか遅かった。そして高速化する実戦では、その遅れが致命的なミスとなる。

「レベル8のレッド・デーモンに、レベル1のシンクロン・リゾネーターをチューニング！」

「なっ、なんだと!? レッド・デーモンを捨てて出すレベル9のシンクロモンスターだど!? そんな馬鹿な！」

「君の反応は、想像通りのいいリアクションだからこつちも見ていて楽しいよー。塗り潰された黒き世界を、憤怒の黒が重ね塗る。シンクロ召喚、琰魔竜 レッド・デーモン・アビス！」

レッド・デーモンの体が、一回り大きくなった。元々筋肉質だったボディにはさらに筋肉が内から湧きあがり、頭に生えた3本の角はより長く、鋭く伸びてゆく。胸からは溢れ出るエネルギーが骨の形すら変化させ、それでもなお止まることを知らないほどのパワーが光となり、まるで巨大な顔のような模様を形作る。大きくなった体を支えるために必然的に翼の形状も変化し巨大化し、全身からは弱い皮膚を突き破って補填するかのようにな数無数の棘が生えていく。そしてその両腕には、大斧を思わせる巨大な刃が装着された。

☆8+☆1↓☆9

琰魔竜 レッド・デーモン・アビス 攻3200

「レッド・デーモン・アビス……?ク、クソツ！ドローだ！」

「そう、僕にだってまだ進化する余地はあったんだよねー。まずはシンクロン・リゾネーターが墓地に送られたことで、効果発動。墓地のリゾネーター1体、ダーク・リゾネーターを手札に戻すよー。バトル、レッド・デーモン・アビスでレッド・デーモンズ・ドラゴンに攻撃！」

「さ、させるかよースクリーン・オブ・レッド、奴の攻撃を止めろ！」

低空飛行で突っ込んでくる悪魔の竜の前に、再び無数の鏡が立ちはだかる。しかしアビスがそれを一睨みすると早回しでも見ているかのようにその輝きがくすんでゆき、飛来するアビスの巻き起こす風圧だけでいともたやすくその全てが割れてしまった。

「嘘だろ!？」

「アビスはお互いのターンごとに1度、表側表示で存在するカードの効果が無効にできるのさー。さあ、その伏せカードを使うのかなー?」

「くっ……」

確かに、アビスは既にスクリーン・オブ・レッドに対して無効効果を使っている。デイメンション・ゲートを発動させれば、少なくともレッド・デーモンズだけは逃がすことができるだろう。だがそれは、アビスの攻撃がモンスターを失った富野のライフを直撃するということに他ならない。

普段の彼ならば、勝負の行方よりも自らの相棒を取っただろう。だが今回は、それでは駄目なのだ。悲壮な覚悟と共に主が目伏せたのを見て、レッド・デーモンズも自らの運命を感じ取ったらしい。それでも王者として雄々しく大空に吠え、勝ち目のない迎撃に赴いた。そして放たれるレッド・デーモンズ渾身の一撃が、アビスのより重く、より速い一撃の前に散っていった。

琰魔竜 レッド・デーモン・アビス 攻3200↓レッド・デーモンズ・ドラゴン 攻3000(破壊)

富野 LP3000↓2800

「はい、アビス・レイジ・バスター深淵の怒却拳。さらにアビスが戦闘ダメージを与えたことにより、もう1つの効果発動。墓地からチューナーモンスター1体、ハイド・ライドを守備表示で蘇生してっ」と

悪魔の竜が地面を殴りつけると、そこを中心に大きく大地が陥没する。その穴の底を突き破り、再び幻影の王が一騎駆けてきた。

幻影王 ハイド・ライド 守300

「ドローしようが問題ないね。このハイド・ライドには、それだけの価値があるのさー。カードをセットして、ターンエンドー。どう、僕の新しいレッド・デーモン?」

「クソツたれが……俺のターン、ドロー!俺は今ドローしたカード、死者蘇生を発動!甦れ、レッド・デーモンズ!」

「しぶといねー。それは通してあげるよ。で、それからどうしてくれ

るのかな?」

レッド・デーモンズ・ドラゴン 攻3000

「勝負はまだこれからだ!チェーン・リゾネーターを召喚し、効果発動!このカード以外にシンクロモンスターがいるならば、召喚成功時に更なるリゾネーターをデッキから特殊召喚できる!」

体から鎖を伸ばすリゾネーターが、その一端を富野のデッキめがけて投げつける。しかしそこにも、悪魔の竜が立ちふさがった。

「無駄だねー。そこにアビスの効果発動、その発動と効果を無効にするよー」

アビスの剛腕が唸り、鎖を引きちぎらんとばかりに襲い掛かる。だがその腕がちっぽけな悪魔に届く寸前、その姿が鎖のみを残して瞬時に消えた。

「悪いな、俺はその発動にさらにチェーンしてトラップカード、ディメンション・ゲートを発動させてもらったぜ!チェーンの効果が無効になるより前に次元の隙間へ逃げ込んだ、つまりアビスの効果は無駄打ちってわけだ!さあ、改めてチェーンの効果を使わせてもらおうぜ!デッキより出でよ、フレア・リゾネーター!」

「へえ?」

体の後ろに火を灯した、赤を基調とするリゾネーター。辺りを照らす赤い光は、果たしてどちらに向けての勝利の暗示なのか。

フレア・リゾネーター 攻300

「さらにマジック・プランターを発動!永続トラップのディメンション・ゲートを墓地に送り2枚ドロウするが、俺の狙いはそこじゃねえ。このカードが墓地に送られたことで、次元の狭間に逃げ込んだチェーン・リゾネーターは再びフィールドに特殊召喚される!」

チェーン・リゾネーター 攻100

満を持してフィールドに揃った、レッド・デーモンズ・ドラゴンと合計レベル4のチューナー2体。合計レベル12、ダブルチューニングを駆使して呼び出されるあのシンクロモンスターの名を高らかに宣言しようとした時、彼の視界がすべて黒に染まった。

「てめえ、一体何しやがった!」

「別にー。あえて言うとしたら、君が馬鹿なのさー。どうしてアビスの効果で僕がシンクロン・リゾネーターではなくハイド・ライドを蘇生させたのか、そのことを1度たりとも考えてみなかった、ねー」  
その言葉にふと思い当たることがあり、黒く染まった世界の中で遊のフィールドに目を凝らす。その名が示すように深淵アビスの底からこちらを眺めるレッド・デーモン・アビスと、その周りを取り囲んで封印するスクリーン・オブ・レッド……だが、他には？守備表示で存在するはずのハイド・ライドの姿が、ない。

「トランプカード、闇の閃光。攻撃力1500以上のモンスターをリリースすることで闇の閃光がフィールドを眩まし、発動ターンに特殊召喚されたモンスターは全て破壊されるよー」

「そうか、だからわざわざ攻撃力1500のハイド・ライドの方を……」

「2体破壊できれば上々のつもりだったけどねー。感謝感謝だよー、まさかデイメンション・ゲートを自分で墓地に送ってわざわざチェー  
ン・リゾネーターまで特殊召喚で出してくれるなんてねー」

「ぐ……」

少しづつ、闇が晴れてきた。周りの風景もまた見えてくる。だが、そこにもうレッド・デーモンズ・ドラゴンの姿はない。2体のリゾネーターも、その姿を消してしまった。このターンに特殊召喚されたからだ。

「頼みのモンスターは全滅、召喚権も使い終わった。さ、何か言うことはー？」

「速攻魔法、非常食を発動。スクリーン・オブ・レッドを墓地に送ること  
とで1000ライフ回復し、ターンエンドだ……」

「ふーん、ちゃんとスクリーン・オブ・レッドのコストは回避するんだー」

富野 LP2800↓3800

遊 LP2500 手札：2

モンスター：琰魔竜 レッド・デーモン・アビス（攻）

魔法・罫：なし

富野 LP3800 手札：5

モンスター：なし

魔法・罫：なし

絞り出すように吐き捨てられたターンエンド宣言に嫌な笑顔で頷き、颯爽とカードを引く遊。そのカードを見て、ますます顔がほころんだ。

「もう九分九厘勝負は決まったって言っていていいかもだけどー、どうやらさらにこの先をこのデッキは君に見せたいみたいだねー。僕のターン、グローアップ・バルブを召喚ー。レベル9のレッド・デーモン・アビスに、レベル1のバルブをチューニングー」

「レベル9のアビスを、さらにシンクロ素材にだと……お前、一体どこまで」

進化するつもりなんだ。問いの最後は言葉にならなかつたが、それでも遊には通じたようだ。

「さーて、ねー。木を火を土を金を水を染め上げて、漆黑よ我が世の理を包め。シンクロ召喚ー、レベル10！琰魔竜 レッド・デーモン・ベリアル！」

アビスと化したレッド・デーモンがさらなる戦いを求めた結果、その体にもう1度進化が起きた。体の表面に飛び出た骨はさながら鎧のように全身の弱い肉の部分を覆い、それでもなお溢れ出るエネルギーはまたも体に光の模様を刻みつける。角は長さこそあまり変わらないものより鋭く固くなり、ついには金属的な光沢を放つようにすらなり始めた。両腕の刃も急激なパワーアップに伴いさらに巨大化するが、それでいて本体の機動力を損ねないよう全体的には鋭角化する。悪魔の中の悪魔、ベリアルの名を関する新たなるレッド・デーモンの爆誕した瞬間である。

☆9＋☆1↓☆10

琰魔竜 レッド・デーモン・ベリアル 攻3500

「アビスの効果を捨てて出したのが、攻撃力3500……？」

富野の疑問を鼻で笑うと、地面から何やら植物のようなものが生えてきた。



「墓地のグローアップ・バルブの効果発動！。このカードはデュエル中1度だけ、デッキトップを墓地に送ることで特殊召喚できるよー」  
グローアップ・バルブ 攻100

そのまま成長を続け、すぐに全体が地上に出てくるバルブ。それをベリアルがいきなりつまみ上げると、一瞥すらくれることなく問答無用で握り潰した。

「はあ？」

「ベリアルは1ターンに1度、場のモンスターをリリースすることで墓地からレッド・デーモンを1体蘇生できるのさー。甦れ、アビス！」  
握り潰されたバルブの魂が地の底へ流れてゆき、1瞬の間の後にアビスが大地を割って再び現世へと翼を広げ飛び立ってきた。

琰魔竜 レッド・デーモン・アビス 攻3200

「バトル、2体のレッド・デーモンで……」

「まだまだ！バトルフェーダーは直接攻撃宣言時に特殊召喚され、このターンのバトルフェイズを終了させる！」

いかに悪魔の竜といえどもバトルフェーダーを止める手段は持ち合わせておらず、いかにもしぶしぶといった様子で振り上げた拳を下ろす。

一方、その主たる遊はその妨害にも特に驚いた様子は見せなかった。

バトルフェーダー 攻0

「やっぱり引いてたんだー、バトルフェーダー。だけど、そのカードは所詮使いきりのカード。次の1ターンで何をするのかなー。カードをセツトして、ターンエンド〜」

歯噛みする富野。だが事実バトルフェーダーは使い切りであり、これ以上の猛攻をしのぐカードは彼の手札にはない。しかし、ここで諦めたら世界は、数多の次元は一体どうなってしまうのか。そんな最悪の未来を防ぐため、転生者狩りは戦うのだ。

「まだまだ、まだ終わっちゃいねえ！俺のターン、ドロー！」

もはや何年になるか、もう本人ですら覚えていない。延々使い続けてきて、これまでに幾度となく彼を転生者狩りたらしめてきたその

デッキは、またしてもその期待に応えた。

「手札からパワー・ジャイアントの効果発動！手札のレベル4以下のモンスターを捨てることでこのカードを特殊召喚し、さらにその捨てたモンスターのレベルの数値だけこのカードのレベルを下げる！」

パワー・ジャイアント 攻2200 ☆6↓5

「そんな壁を作ったところで、今更……」

「甘いんだよ！さらに俺は墓地から、今コストとして送ったミラー・リゾネーターの効果を発動！このカードは相手フィールドにのみエクストラデッキから特殊召喚されたモンスターが存在する場合、特殊召喚できる！」

その名の通り鏡を背負ったリゾネーターが、アビスとベリアルをその身に映し出してにんまりと笑う。

ミラー・リゾネーター 攻100

「ミラー・リゾネーターはシンクロ召喚に使用するとき、そのレベルを相手モンスター1体に合わせるができる。俺はこの鏡に、お前のアビスのレベルを映させてもらうぜ」

「レベル9をチューナーにコピー？そんなことをして、出せるモンスターなんて……」

「いないと思うか？」

「……」

遊はこの一瞬で、自らの知識をフル回転させる。レベル9となるこの効果を通した場合、普通に考えればさらなるレベル変動なしでシンクロ召喚できるモンスターは星態龍、神樹の守護獣―牙王、天穹覇龍ドラゴアセンション、ブンボーグ・ジエツト、そしてあと1体、さらにミラー・リゾネーターの属性を変化させ、条件を満たす素材モンスターを召喚することでようやく呼び出せるようになるのである。残りたった1枚の富野の手札の中に、その召喚を成功させるための鍵が隠されているという可能性は低い。それにあのモンスターは、転生者狩りの中でも『彼女』しか持っていなかったはずだ。だが、万に一つの可能

性として富野がそれを持っているとしたら？その場合、遊はなすすべなく負けるだろう。

「くっ……アビスの効果を発動ー！ミラー・リゾネーターの効果を無効にする！」

鏡の中のアビスの目が光り、本体の動きと関係なく拳を繰り出す。表面に激突したそれは、一瞬で内部から鏡を叩き割った。

「……これで満足？望み通り、アビスの効果は使ったよ。さあ、これからどう出るのかなー？」

「ああ、俺は賭けに勝ったぜ！お前のことだ、必ず無効効果はミラーに使うって信じてたからな」

「それじゃあ、やっぱり……！」

「その通り、完全なブラフだぜ。もし今の効果が通ってたら、さすがの俺もどうしようもなかったからな。魔法カード、下降潮流を発動！このカードの効果で、俺のパワー・ジャイアントのレベルは1から3の任意の数字になる。俺が選択するのは、レベル3だ！」

パワー・ジャイアント ☆5↓3

「3体で合計レベル、5……？」

「いいや、8だ！バイス・バーサーカーを召喚！」

バイス・バーサーカー 攻1000

「そのモンスターは……まさか！」

「そのまさかさ。レベル4のバイス・バーサーカーとレベル3になったパワー・ジャイアントに、レベル1のミラー・リゾネーターをチューニング！見せてやるよ、レッド・デーモンズが手に入れた新たな力！赤き王者の研磨の果てに、紅蓮の鼓動が天地を焦がす。力持ち得ぬ臆病者に、戦う価値など微塵もない！レッド・デーモンズ・ドラゴン・スカーライト!!」

傷だらけの赤き悪魔の竜が、表裏一体の存在であるもう1つの悪魔の竜のカタチと対峙する。本来戦闘能力ではアビス、ベリアルに劣るはずのスカーライトだが、その全身から実力差を補って余りあるほどの異様なオーラを放出することで逆に2体を威圧していた。

「バイス・バーサーカーをシンクロ素材にしたモンスターは、俺に20

00ポイントのダメージを強制的に負わず代わりにエンドフェイズまで攻撃力を20000ポイントアップさせる！」

富野 LP3800↓1800

レッド・デーモンズ・ドラゴン・スカーライト 攻3000↓5000

「攻撃力5000……だけど、バイス・バーサーカーの強化はエンドフェイズまでだよー？」

「ああ、その通りだ。だがな、このターン中に全部ぶつ潰す！スカーライトは1ターンに1度、このカードより攻撃力の低い特殊召喚されたモンスターをすべて破壊した上で、1体につき500ポイントのダメージを与える！アブソリュート・パワー・フレイム！」

「そんな……！」

「アビスの効果を使ったのを恨むんだな！俺のバトルフェーダー共々焼き尽くせ、スカーライト！」

遊 LP2500↓1000

つい先ほどユーノに決めたときよりも異様に出力が上がった地獄の炎に吞まれたアビスが、ベリアルが、傷つき倒れてゆく。そしてフィールドに立っているのは、スカーライトただ一体のみ。

「バトルだ、スカーライト！とどめの一撃を食らわせてやれ、灼熱のクリムゾン・ヘル・バーニング！」

再び放たれた真紅の炎が、遊の視界を埋め尽くす。そして……。

レッド・デーモンズ・ドラゴン・スカーライト 攻5000↓遊（直接攻撃）

遊 LP1000↓1000

「馬鹿な!?スカーライトの攻撃が、効いてないだ?!」

そこにいたのは、攻撃力5000もの直撃を受けてなおびんぴんしている遊の姿だった。よく見ると炎は彼のもとにたどり着く前に見えない壁に阻まれ、ただの1欠片たりとも届いていない。

「ハー、ハー……ざーんねんでしたー、今の攻撃宣言時、ガード・ブロックのカードを発動していたのさー。この効果により1度だけ戦闘ダメージは0、しかもカードを1枚ドロースるおまけつきね」

「まったく、今の攻撃さえ効いてりや……エンドフェイズに強化が消えて、ターンエンドだ」

レッド・デーモンズ・ドラゴン・スカーライト 攻5000↓3000

确实だったはずの勝利をあと一步のところまで逃し、富野の表情にも焦りが出てくる。遊の手札、1枚はクリエイト・リゾネーターで回収したダーク・リゾネーターなことはわかっている。だがもう1枚、今ガード・ブロックで引いたカードと次のドロウで引くカードは、1体何が来る？

「僕の……」

ゆつくりとデッキに手を掛ける遊。その様子を、かたずをのんで半ば睨みつけるように見ていた。

「ターン……」

あまりの集中の結果、周りの時間の流れがひどくスローモーに感じる。それは遊も同じようで、その表情からもいつもの余裕は消えていた。

「ドロウ……おやー？」

「な、なんだ？」

カードを引いた直後、不意に地響きが始まった。地震かと辺りを見回すが、どうもすぐ近くのアカデミア本校は揺れていないらしい。今富野たちが立っているこの近辺のみが、ピンポイントで揺れている。

「そうか。残念だけど、今回は時間切れかなー？」

「待ちやがれ！逃げようだったってそうはいかねえぞー！」

「まったく、やってくれるよ。もう1人、ユーノがいらないと思ったら先に封印解除を邪魔しに行つてたなんてねー」

デュエルを強制終了させてその場を立ち去ろうとする遊に、それを引き留めようとする富野。だが遊の次の言葉を聞き、その違和感になぜか背筋が冷たくなった。

「それにしても、彼もかわいそうに、ねー。大人しくこっちに来てればよかったのに、よりによってあっちに行っちゃったかー」

「かわいそうに……？」

聞き返した次の瞬間、かすかな声が2人の耳に届いた。ユーノの声で……あれは、悲鳴？

「い、一体何が起きてやがる！俺にわかるように説明しろ！」

「やだねー。ただあえて1つ言ってあげるなら、多分今頃彼は、ねえ。頑張れば死ぬまでにあと1回ぐらい会うチャンスもあるんじゃない？まあ、こうなった以上とりあえず今回は僕も身を隠させてもらおうよー。レッド・デーモンの真の戦いは次回にお預けだねー」

「ふざけんなー！テメーのアビスもベリアルも、俺のスクーライトが焼き尽くしたじゃねえか！」

「確かに、そうだったね。正直驚いたよ、まさかあの2体を倒すなんてさー。でも、僕もまだ本気は出してないってことさー」

アビス、ベリアルにはまだ上がいる。衝撃の告白を前に言葉に詰まったその隙を見逃さず、瞬時に遊の姿は消えうせた。

残された富野もなんとか痕跡を探してその後を追おうという衝動に駆られるが、すぐに遊が残していった不吉な言葉を思い出す。

「つたく、手間がかかる！」

身を翻し、三幻魔の封印地へ走る富野。走りながらもその脳内には、最悪のビジョンがちらついて離れない。振り払おうとしてもなくならないそんな光景は、果たして現実のものとなった。彼がそこに着いた時、そこには誰もいなかったのだ。他の敵もいないかわりに、とっくに先回りしているはずのユーノの姿もない。ただひたすらに、最初から誰もいなかったかのようにがらんとしている。

「おーい、誰かいねえのかー！」

しかし、その声に対する返答はどこからも来ない。そして一番不思議なことに、あれだけの揺れがあったにもかかわらず封印もいまだ残ったままだった。

「一体ここに誰がいて、何が起きたってんだ？」

思わず誰も聞いていないことは百も承知で一言つぶやく。無作為に歩き回りながら、せめて何か少しでも手がかりになるものがないかと思回してもみだが、その場には本当に何ひとつ痕跡が残されていないことがはつきりするまでに、さほど時間はかからなかった。

「一体……」

最後にもう1度だけ眩くも、やはり誰も応えない。せめてこの次元を離れる前に、ユーノに何が起きたのかを何も知らない清明にできる限り説明しに行こうと振り向いたところで、いきなり目の前の空間が歪んだ。

「アンタは……どうしたんです？」

転生者狩り独特の次元移動法でその場に現れた人影に一瞬警戒するも、すぐに緊張を緩ませる。その男は、初代ライバルと名高い青<sup>ブルーアイズ</sup>眼を变幻自在に操るデツキを使いこなす富野の仲間であり、転生者狩りでも古株の男だ。

「よう、こんな所に居やがったのか。ようやく見つけたぜ、ちよつと手伝つてくれよ。いやな、他の次元なんだけどな。1つの場所に思ったより大勢の転生者が飛ばされてるせいで、ちよつと俺1人じゃ手が回らねーんだわ」

「え？でも俺、まだこつちでやることが……」

「頼む、それは後に回してくれ！このままじゃ俺がどやされちまうんだ、恩に着るからよ。な？それにこの次元なら大丈夫だろ、よつぽどなことでもない限りほつといてもきつとどうにかなるさ」

「え、ちよ、うおあつ！」

そして、また静寂に戻る。もうそこには、誰1人として生者の姿はなかった。

## 嵐の転入生編

### ターン72 鉄砲水の午後

その1：遊野清明の場合

「お、今日のメシはエビフライか！」

「いただきます！」

なんてことのない昼下がり、オシリスレッド寮。長かった光の結社との戦いもめでたく勝利で終わり、ようやく平和が戻ってきた。ああ、戻ってきましたとも。

「そういえば清明先輩、定期テストの方はどうなったド……」

「わーわーわー！ 剣山君、しっ！ な、なんでもないよ清明君、あはは……」

……何度でも言おう。戻ってきましたとも、ええ。我ながらよく留年しなかったものだと思うけど、終わってから軽く廃寮まで行って稲石さんに見てもらった結果赤点を下回っていたことは記憶に新しい。あんな身も心もくたくたになるような斎王とのデュエルの後でさらに詰め込みで8時間テスト勉強やった結果が緊急再試とか、もう笑うしかないなーとあの時は思ったものだ。本当に、あれで進級させてくれた先生方には感謝感謝だよ。

「先生達も、先輩のことは意地でも留年させないようになれこれ知恵を絞っているように見えますけどね。私が座学でこんな成績ばかりだったら、とつくの昔に親に連絡が行ってますよ」

とは、僕の2年次の成績表を見せたら店番中にまで広げて見ていた葵ちゃんの弁である。実際、僕もそんな節はあると思う。要するに、入学1年で校内に店を構えるような生徒に居座って欲しくないということだろう。その気持ちはよくわかる。葵ちゃんの場合は一応そのあとに、

「まあでも、今回お情けが通ったのは学校側にも引け目があるからじゃないですか？ 光の結社を追いだした功績は無視できないでしょうし」



などとフォローになつてないフォローをしてくれたのだが。

そんなことを思い出して遠い目になつてみると、いきなり十代が立ち上がった。ハネクリボーに呼ばれているらしく、笑顔を浮かべて何か話しこみながら外に出て行った。それを見て、遊びに来ていた翔と剣山も一緒になつてその後についていく。

「あ、待つドン十代のアニキー」

「どこ行っちゃうんスカー？」

万丈目も光の結社のごたごたとジェネックス優勝のどきどきに紛れてブルー寮に戻ろうとあちこち頭を下げて回つてるらしいし、翔にも今年はブルー寮昇格試験を受けさせるとか何とかいう話が持ち上がったたり消えたりしている。好むか好まざるかに関わらず、そんな風に世界は今日も動き続けているのだろう。ユーノにも意見を聞きたいけれど、あいにく彼にはあの日以来まだ1度も会えていない。

「つたく、このボロ家はこんなに広がったかね」

何となく取り残されたような気分になつて、仕方なく1人になつたレッド寮で洗い物を始める。だけどこの取り残された気分というのも、半分はつい最近判明したあることが原因なのだろう。

つい先日行われた、進級に合わせたの健康診断。皆が皆程度の差こそあれ背も伸び雰囲気も大人びていく中、僕だけは去年から1ミリ、1グラムたりとも変わっていない。いや、この表現だと語弊がある。もっと正確に言うと、僕だけ入学した時から肉体的には何一つ変化していないのだ。

とはいえ、これに関しては全くの原因不明というわけではない。先代ダークシグナーが全員早死にしたとの理由でチャクチャルさんもイマイチ自信なさげだったけれど、どうも1度僕の命が尽きて、直後にダークシグナーとなつて甦つた2年前のあの瞬間。あそこを境目として僕の老化、というより成長は完全にストップしたらしいのだ。髪や爪なんかは普通に伸びるから代謝が完全にストップしたわけではない。だから僕はもう皆と一緒に年を取っていくことはできないし、それは黙つていたつて遅かれ早かればれることだろう。

『マスター』

その声に込められたすまなきそうな様子を察知して、謝罪の言葉が飛んでくる前に先手を打つ。

「いいよ、チャクチャルさんが謝らなくても。この話は何回かしなかつたっけ？僕は生き返ったことを後悔なんてしてないし、あそこで終わるはずだった僕の人生にもう1回チャンスをくれたチャクチャルさんには本当に感謝してるんだから。それにほら、本当に目立ってどうしようもなくなったら山にでもこもって仙人の真似事でもやってみるさ」

できる限り元気に明るく言つたつもりだったが、チャクチャルさんのことは誤魔化せなかつたらしい。いや、どうやらチャクチャルさんだけではなかつたようだ。ふと見渡せば食堂の中は僕のデツキからいつの間にか出てきていた精霊でいっぱいになっていて、その不安げにこつちを見てくる様子に思わず笑いがこぼれる。

「ふふつ、ありがとう。皆、これからよろしく頼むよ」

代表として、とりあえず一番手近なところにいたサッカーの頭をよしよしと撫でる。先延ばしといえはそれまでだけど、今心配することでもない。少なくとも今は、こうやって精霊や友人と一緒に日々を過ごせることを喜ぼう。

ちょうどその時、チャイムの鳴る音がした。そして、このボロ屋には似つかない少女の声。

「すみませーん。ボク、じゃなくて私、今日からここにお世話になるんですけど。十代様はいらっしゃいますか？」

「……………ああ、ハイハイ。今出ますよー」

聞きなれない言葉に一瞬思考がフリーズするも、すぐに気を取り直してインターホンなんて洒落たものはないドアに向かう。その前に立っていたのは、見た感じ翔とどっこいどっこいか下手するとそれより一回り下ぐらいの妙に小さい、とても高1には見えないような女の子。

「えっと、どちら様ですか？それと遊城十代ならついさっき、洗い物もせずにどっか行きましたよ」

何者かわからないので、とりあえず敬語。すると、どこか慌てたように彼女も頭を下げた。

「あ、こんにちは！ボクは早乙女レイ。本当はまだ無理なんだけど、この間のジエネックスで準優勝したのが認められて飛び級でこのアカデミア高等部に入学したんだ。それで、今の話本当!?そんなく、せっかく大急ぎで走ってきたのに、十代様いらっしやらないのー!」

「えっと……まあなに、とりあえず入ってよ。立ち話もなんだし、僕も今一つ話が見えてこないし」

「それじゃ遠慮なく。えっと……」

「ああ、僕はオシリスレッド3年の遊野清明。よろしく」

しかし驚いた、もうオシリスレッドの新入生は僕らの代で終わりだとはっきり思ってたのに。それにこの子やけに十代に心酔してるみたいだけど、このレイちゃんと十代の間には一体何があったんだろう。昼ご飯も終わったばかりだけど、せっかくだから少し早めのティータイムとでも洒落込みながら聞かせてもらおうとしようかな。洗い物の前に緑茶でも飲もうかと思つて火にかけてあつたやかんを横目で見ながら、急遽お茶の葉を紅茶に取り換える。

退屈でのんびりした時間になると思つたけど、楽しい話ができそうな午後になりそうだ。

## その2：河風夢想の場合

その日彼女は、特にすることもなく暇だったので散歩に出ることにした。すつきりと晴れた気持ちのいい昼下がりの空の下、特に意味もなく彼女の思考は修学旅行の日のことに向かう。

「貴方は今、何を考えてるのかな、ってさ。清明……」

あの日、自由行動の時間でわざわざ付き合わせた隣町での墓参り。そこで教えた、彼だけには知って欲しいと思つた昔の話。いまだに、彼女のこの語尾は取れない。それはつまり、いまだに彼女自身は10年以上前の事故のショックを引きずっていて喋ることができないということだ。ふと思ひ立つて口を開き、深く息を吸い込んで自分一人

の力で言葉を話そうとしてみる。だが、

「あ……ああ……ああ……はあ、だって」

いくら神経を集中させても、喉に何かがつかえているかのようには声とは呼べない程度の音しか出てこない。まだ今日も、彼女のシヨックは癒えていないようだ。そして今の自分に変わってこの口を動かしている「何か」も、その正体も目的もいまだ一切が不明のままだ。このままずると今の生活を続けてはいけけない。いつまでも怪しい力に頼るのではなく、自分の声を取り戻す必要がある。それはわかってはいるのだが、かといってそのあてはない。むしろ下手なことをすると、この力すら彼女から抜けてしまうかもしれない。その恐怖感が、1日また1日と問題を先延ばしにしている。

「無双の女王、なんて私には過ぎた名前なんだけどなあ、なんだった」  
自嘲気味に漏らしたところで、いつの間にか見知った場所に来ていたことに気が付いた。そこはオベリスクブルー男子寮……ついこの間までホワイト寮と呼称され、わざわざ白塗りにされていた建物をまた青く塗り直す作業の真っ最中である。同級生にして友人の明日香も今日はここを見に来ると言っていたのを朝食の席で聞いたの思い出し、きよろきよろと辺りを見回して彼女の姿を探す。

「ん、明日香。やつほー、ってさ」

一瞬自分の名を呼ばれたことに当惑気味の表情で振り返る明日香だったが、すぐに声の主を認めて笑顔を見せる。

「あら、夢想。貴女もこれを見に来たのかしら？」

「まあね、って。こっちはどんな調子なの？だってさ」

漠然と青いペンキを塗りにくっている最中のブルー寮を指さす。といっても、作業の状況からいってまだまだ終わりそうもないことは目に見えているのだが。それでも律儀に何か答えようとした明日香だったがその言葉は結局、横から聞こえてきたより大きな声にかき消された。

「おお、天上院君……どうしたんだい、こんなところまで？」

どこか嬉しそうな態度をにじませた声の主は、どこからか持ってきたらしい工事現場用の警棒を振り回して周りの連中に指図する万丈

目だ。ただ夢が見ている限り、少なくとも今は自分も色塗りを手伝おうというつもりはないらしい。そしてこういう場合、よりあけすけに尋ねることがするのが明日香である。

「万丈目君、貴方はペンキ塗りを手伝わないのかしら？ 私もそうだけど、貴方にもこの白塗りの責任の一部はあるんじゃないかしら」

「う……いや、俺はジェネックス優勝者だからな。これが勝者の特権というものだ」

「別に疑うつもりはないけれど、一体いつの間に優勝できるだけ集めていたのかしらね。あ、そこは危ないわよ！」

「何？ぶあつ!？」

目の前に広がっているであろう悲惨な光景をさすがに直視していられなくなり、そこまで聞いたあたりで視線をつつとそらす夢想。計ったように落ちてきたバケツ一杯もの青ペンキを頭からかぶった万丈目がぷりぷりと怒りながらレッド寮の方へ歩き出したときも、最後までそちらの方は見ないで置いてあげた。それがプライドの高い彼に対する優しさだと判断したのだ。

「まったく、自分からオベリスクブルーに戻りたいって言い出したのに……大丈夫かしら？」

「うーん、よっぽど大丈夫だと思うけどね、つてぎ。あ、でもせっかくだし私もレッド寮には行こうかな、なんだって。今の時間なら、清明ならお茶菓子も出してくれると思うし。明日香もどう、一緒に来る？ つて」

せっかくなら自分一人よりも、人数が多い方がいいだろう。とはいえ何かと忙しい彼女のことだからあまり期待はしていなかったが、意外にもあつさり頷いた。

「そうね。迷惑じゃなければ、たまには私も行ってみようかしら。十代の<sup>ネオスベーション</sup>Nも清明君のグレイドルも、まだ話にしか聞いたことがないからデュエリストとして興味あるし」

「そう。それじゃあ出発しようか、つてぎ」

「アポは取らなくていいの？」

「今日みたいな日は清明も退屈してるか、何か面白いことしてるかの

どっちかだからね。退屈してるならいきなり行つて驚かせる方がいいし、面白いことしてるなら清明だつて連絡どころじゃないだろうからそのまま私達も混ざらないと、だつてさ」

その冷静に考えればだいたい無茶苦茶な理論の台詞の裏から『清明のところへ行けば何かがある』という全面的な彼への信頼を読み取り、思わず苦笑する明日香。そんなこととはつゆ知らず、さつきまでよりも機嫌良さそうに小さな声で聞いたことのないような歌をハミングしながら彼女は歩き出すのだった。

その3：葵・クラデーの場合

その日、彼女は深刻に悩んでいた。端正な顔にしわを寄せ、迷惑さと真剣さが入り混じつたような表情のままかれこれ5時間はその原因……机に広げられた、1枚の手紙とにらめっこしていたのだ。

やがて何かを決心したかのようにペンを取り出し、筆筒からハガキを1枚取り出しておもむろに何かをさらさらと書きだす。しかしその手は途中で止まり、結局途中まで書いたハガキはビリビリに破かれてゴミ箱に放りこまれてしまった。

再び椅子に腰かけて背もたれにたつぷりともたれかかり、ペンを耳にはさんで苦悩する姿は絵になると言えなくもなかったが、当の本人は大真面目である。

「仕方がないですかね。1人でずっと唸っていても」

独り言というよりむしろ自分自身に言い聞かせるように喋りながら、その手紙を制服のポケットになるべく折り目が真っ直ぐになるよう畳んで入れる。

「そうですね、きつと。日頃から私も先輩には迷惑かけられていますし、たまには相談の1つぐらい乗ってもらつたつて……罰は………当たり前じゃない、よね………?」

光の結社に入って以降ついでこの間までその清明に迷惑をかけたばなしだったことを思い出し、せっかくの独り言もどんどん尻すぼみになつていく。決して小心者というわけではないのだが、根はかなり真

面目な彼女にとって清明の店でのバイトをすっぽかして光の結社にかかりつきりになっていたことや、単純にあの一連の事件で清明の手助けが一切できなかつたことはかなりの負い目になっているのだ。

だからつい先日にも罪滅ぼしの一環として、彼の受けた臨時試験の問題とその回答からある程度弱いパターンを後輩なりに割り出して軽くレクチャーするぐらいのことはしようと思ったのだが、結局それも真剣に彼の成績表を見た結果諦めてしまった。なにせ苦手分野どころか、得意分野らしき箇所がロクにあつたものじゃないのだ。国数理社英プラスデュエル学のいわゆる6角形グラフも形自体はバランスが取れているのだが、あからさまにその面積が小さすぎる。オーラウンダーなどというものではなく、ただ単に全方位が弱点になっているだけだ。そのあまりのバカバカしさにさすがの彼女も、先輩は実物のカード触るデュエルじゃないと頭の回転が極端に悪くなりますね、としみじみ言うのがやつとだったほどである。

そんな出来事を思い出し、また洗脳が解けた自分を何ひとつ咎めることなくいつもの調子で『YOU KNOW』に迎え入れた彼の顔を思い出しては罪悪感が湧いてくる。その上さらに借りを重ねるような真似は凶々しいだけか。そう思うも、かといって他にこの手紙の内容を相談できるような相手もない。なにせ内容もさることながら送りつけた相手も相手なので、下手な相手に相談するとその人にまで迷惑がかかりかねないのだ。そこまで考えたところで、ふとあることに気が付いた。

「結局私も、先輩なら何とかなるって思ってるんですかね。河風先輩の癖が移っちゃいましたか」

そう考えるとなんとなく可笑しくなり、つつい口元がほころぶ。思えば日本最大級のデュエルモンスターズ専門学校、さらに全寮制というところに魅力を感じて入学する前は、まさかあんな良くも悪くも常識人の皮を被った変人が日本の高校にいるとは思ってもみなかった。「先輩からすればいい迷惑でしょうけど、今回も頼らせてもらいますよ」

結局自分一人で考えるのは諦めて、ひよいと立ちあがった。今日は

朝から頭を使いすぎたので、少々疲れしました。おそろく今日も作っているであろう先輩の作ったお菓子でもかじりながら、どうせ今日もティータイムとか何とか言ってお淹れているであろう紅茶なり緑茶なりを飲んで休憩させてもらいますか。それが終わったらこの手紙を先輩に見せて、どうしたらいいのか考えましょう。

……甘えさせてもらってばかりですね、私。この貸しも含めていずれどこかで返しますよ、先輩。

#### その4：稲石さんの場合

一方その頃、廃寮では。地縛霊の仮名稲石が、ファラオ相手に庭からむしってきた猫じやしをふよふよと振り回して遊んでいた。

「ほーれほーれ、こっちこっちー」

クルクルと動く猫じやしを追って右へ左へ走り回るファラオだったが、突然その動きが止まった。何かを嗅ぎ付けたかのように、床に開いた穴や壁にかかる蜘蛛の巣を器用に避けながらとととと走ってゆく。

「おいファラオ、そっちは危ないよー？」

『置いてかないでほしいのニヤ〜』

たまたま外に出ていた大徳寺先生の魂も取り残されたかたちになってしまい、慌てて2人でその後を追う。ようやく追いついた時にはファラオは1枚の扉の前において、中に入りたがっているかのようにほこりまみれのそれを爪で何度も引っ搔いていた。

『稲石君、この扉はどこに繋がっているんですニヤ？』

「えーっと、確か来客用の部屋だったかな？懐かしいなー、最近来てなかったけど自分が霊になって最初に目が覚めたのがここなんだよね」

『ふーん。ファラオ、何を見つけたんですかニヤ？』

「さて、あの部屋には特に何もしまっただけははずなんだけどね、つと」

そう言いながらぱちんと指を鳴らすと、ポルターガイスト現象が発生してひとりでに古ぼけた扉が開く。霊体ならではの特技をフルに



生かした技である。

「御開帳〜……あれ？」

開いた扉の中にフアラオが飛び込んでいくのと、幽霊2人の目が部屋を中心に落ちた1枚のカードを見つけたのはほぼ同時だった。

「おつかしいなあ、こんなところにカードがあつたんならすぐ気づけそうなものだけど」

『一体何のカードなんですかニヤ』

そのカードは裏返しになっているためここからではイラストが見えないが、積もった埃の量からいっても数年間誰からも触れられていない、恐らくは数年前の事故の際この寮に住んでいた生徒辺りが落としていったのだろう。

「落とされっぱなしじゃカードが泣くね。どれどれ？」

そういつて拾い上げ、ひっくり返して表向きにする。

『もしかしたら、このカードがフアラオをこの場所に呼んだのかもしれないですニヤ』

大徳寺先生も近寄ってきて、そのカードを覗き込む。

「ドラゴン族・封印の壺……？」

かのペガサス・J・クロフォード氏が一時期愛用して、かのブルーアイズ・ホワイトドラゴン青眼の白龍をもその壺の中に完全に封印してその後の勝利への布石となつた恐るべきカード、だったのも今は昔。その後のデュエルモンスターズのパワーインフレに完全に取り残され、正直なところ今となつては所有するプレイヤーは多くてもなかなかデッキに入ることはなくなつてしまったカードである。

『これはまた、珍しいものが落ちてますのニヤ』

「うん……」

確かにそれ自体、何の変哲もないただの永続トラップに過ぎない。ただなぜか、稲石さんにはそれがひどく気にかかったようだ。すっかり部屋の中に興味を無くしたフアラオが大徳寺先生の魂を飲み込んでふらりと出て行っても、まだしばらくの間身動き一つせず壺のカードをじつと眺めていた。一体なぜ、このカードがこんなにも気になるのだろう。自問するが、どこからも答えは帰つてこなかった。

その5：遊野清明の場合（その2）

「……それで、ボクはもうピーンときたの！間違いない、十代様こそが運命の人なんだって！」

「ふんふん」

レッド寮にて。あれからレイちゃんを中に入れて紅茶とクッキーを出したところ、大喜びでパクパクと食べてくれた。やっぱり自分の作ったもので喜んでくれるのは嬉しいもんだ。その後で少し水を向けてみたところ、本人も誰かに話したかったらしくあっさり2年前に何があったのかを喋りだしてくれた。こういういかにも元氣澆刺、なタイプの女の子はアカデミアではなかなか貴重な存在だから、話をしてもけっこう面白い。感情表現も豊かだし。夢想といい葵ちゃんといい、ここまで自分の感情をあげすけにしてくれることはめったにないからねえ。もっともそれはそれで、いざ感情的な面を見せてくれた時のギャップがグツとくるのは間違いないんだけど……つと、話がずれた。

「なるほど。それで、ジエネックスに準優勝して飛び級入学だっけ？なんていうか、凄いな」

「ふんふん。当然よ、恋する乙女は強いんだから！」

自信満々に胸を張る彼女のカップに紅茶のおかわりを注ぎ、改めて十代の顔を思い浮かべる。あの朴念仁の十代が、この子の想いに気づいてるなんてことがあるだろうか。レイちゃんには悪いけど、まず無いだろうな。良くも悪くもデュエル馬鹿だし。

でも、この子のそこまでやる一途さは割と気に入った。

「なるほどね、なかなか洒落た答えじゃない？道のりは厳しいだろうけど、僕は応援してるよ。多分十代もそろそろおやつ食べに帰ってくると思うから、とりあえずそれまでのんびりしててよ」

「本当？」

十代の名前を出しただけで一氣に食いついてくるレイちゃんを落ち着かせていると、いきなりドアが開いた。ちょうど僕の位置からは

その人物が見えるけど、背を向けて僕と向かい合うレイちゃんからは振り返らないと見えない位置だ。

「まさか、十代様?」

「んー、いや……」

満面の笑みを浮かべて振り返る前に慌てて髪を撫でつけるレイちゃんに、ああこれはちよつと荒れそうだなあ、と内心ため息をつく。案の定その真つ黒な、なぜかペンキまみれの服に身を包んだ彼がずかずかと上り込んでくる。

「よう、清明。今日からこの万丈目サンダーがまたこの寮で世話になることにしたぞ。俺の部屋はいじってないだろうな?」

「ああ、そりやまあ……」

「えー!?ちよつと、十代様じゃないのー!?!」

「む、なんだこの女は。この万丈目サンダー様より十代なんかの方がいいだろ?……ってよく見たらお前、ジェネックス決勝の時の女じゃないか」

「ああ、あの時の?そんなのどうでもいいわよ、恋する乙女の気持ちを踏みにじった罪は重いんだからね、このペンキ男!」

案の定ギャーギャーと口喧嘩を始める気の強い2人を、一体どうなだめるべきか考える。唯一救いなのは、そのペンキがあらかた乾いているせいで床や机が汚れずに済むということだろう。というか、万一そんな状態で入ってきたりなんかしたら間違いないその場で僕が崖下の海に蹴り落としている。

「とりあえず万丈目、風呂入ってきたら?どうせ洗濯するの僕なんだからさ」

「む、それもそうだな。今日のところはこれぐらいにしておいてやるが、清明の奴に感謝することだな」

「べーっだ。ペンキまみれの癖にー」

どうにか嵐が去った、と思ったらまたドアの向こうに人の気配。ただ今回はいきなり開くのではなく、ちゃんとその前にノックがあった。

「やつほー、清明。今いる?ってさ」

「こんにちは。あら、貴方とレイちゃんだけ？十代はいないのかしら？」

「いらつしやい、夢想到明日香。たいした家じゃないけど、まあ上がつてよ」

「どうやら、今日はよつぽど来客が多いようだ。2人を招き入れて扉を閉めるか閉めないかのうちに、またも見知った顔がひよつこり姿を見せたのだ。」

「葵ちゃん、こつちに来るなんて珍しいね」

「ええ、先輩。この葵・クラディー、本日はこれ以上先輩にご迷惑をかけるという恥を忍んでやってきました」

「……………」

「お願いします、先輩。話を聞くだけでいいですから、ご相談に乗っていただけませんか」

いつになく申し訳なきような調子の葵ちゃんに、これはただ事ではない臭いを嗅ぎ付ける。せつかく僕を頼ってきてくれたんだ、葵ちゃんのことだから勉強の話でもないだろうしじっくり相談に乗ってあげよう。

「えっと、今はちよつとお客さん多いけど…………」

「そうですか？まあ、別に他人様にどうしても知られたくないよう話ではないですから。というよりも、完全に私事に先輩のお時間を割いてもらうだけです。なんでも構いません」

「そう？よくわかんないけど、僕で良ければいくらでも力になるよ。じゃあ上がって」

葵ちゃんを中に入れ、今から何の話が始まるのかはわからないけど本人の様子を見て気合を入れ直す。するとそこに、今度はこのレッド寮でも聞き覚えのある声が近づいてきた。

「悪い悪い、急に飛び出しちまつてよ。たっだいまー！」

「もう、いつつもアニキはそうなんだから」

「丸藤先輩の言う通りだドン。いきなり独り言喋りながらどこか行っちゃうから、一体何事かと思つたザウルス」

「お帰り、3人とも」

本当に、今日は人の多い日だ。人が多くて賑やかなのは嫌いじゃないけどね。するとそこに異議を唱えるような風になやと鳴きながら、山の方から1匹の猫が降りてきた。

「フアラオも入れて3人と1匹、つて？いや、大徳寺先生も入れると4人と1匹か。まあとにかく、お帰り」

ここまでこのレッド寮に人が集まったんだ、きっと今日はこの後もまだ何か一波乱起きる……そんな気がした。こうやって平和だけと退屈な日にだって、突然何かが起こることがある。だからこそ、この世界はこんなにも面白いんだ。だからこれまでがそうだったように、これからもこの第2の人生を思いっきり楽しもう。例えこの先、何が待ち受けているとしても。

とりあえず、まずは葵ちゃんの悩み解決と洒落込もうかね。お茶っ葉とクッキーの残量をざっと思い出して、この人数でのティータイムにはどれぐらいの量を出せばいいのかを計算しながら、そつとドアを閉めた。

## ターン73 変幻忍者と黄昏の隠密

「さて、と。じゃあ聞かせてよ、何やらかしたのさ一体」  
「やらかした、つて……先輩じゃないんですから。まず、これを見てください」

レッド寮食堂、食卓机にて。なぜかどんどん人が集まってきたこのボロ家で、葵ちゃんが丁寧に折りたたまれた一枚の紙を広げた。もつとよく見ようと、部屋の中にいる全員の視線が一斉にその紙に集中する。まったく、元はといえば相談されてるのは僕なのに。皆デリカシーがないというか、野次馬根性旺盛というか。

『でも立場が違うならマスターも同じことするんだろう？』  
「うん。だから何も言わないの」

まあそれはどうでもいい。いま大事なのは、アカデミアの民度の問題ではない。その手紙はなかなかの達筆だった。字が若干丸みを帯びているところを見ると、差出人は女性らしい。少なくともレッド寮だけ見ている限り、男にこんな字は書けんよ。

「んーと？」お久しぶりです、マイシスター。あなた入学してから年に一回は実家に顔出すって言いましたよね？いつまで経っても手紙の一枚も送ってくれないので、お姉ちゃんもう辛抱たまらなくなっちゃいました。いつの間にか可愛い男の子とも仲良くなっているみたいだし、その話も含めてまた今度、なんてのんびりしたことは言わずに今日会いましょう。この学校の灯台あたりが目印には良さそうなので、場所はそこ。時間は黄昏時、風邪ひかないように格好には気を付けて来てね。お姉ちゃん待つてまーす』

「私の身内の恥、何も音読することはないじゃないですか先輩……」

「うん、今のはちよつとデリカシーなかったかな、つてさ」  
「え、僕が悪いの？」

穴があつたら入りたい、といった顔の葵ちゃんと呆れ顔の夢想にたしなめられ、なんだかこつちが悪いことをやらかしたような気になってくる。助け舟を出してくれたのは、葵ちゃんとは同学年なこともある割と話す機会もある剣山だった。

「それにしても、お姉さんなんかいたんだドン？」

「ええ。認めたくはないですが」

そのあたりで室内の視線が僕の方へ向いたのを感じ、何か聞かれる前に先手を打って答える。

「僕も初耳だね。別に隠すようなことでもないだろうに」

「なんでこの身内の恥をわざわざこんなところに来てまで拡散しなくちゃいけないんですか。あの人のノリは私が生まれて16年間というもの1度たりとも馴染めなかつたんですよ……」

「あー、確かにこんな感じの軽いタイプ苦手そうだもんね、葵ちゃん」  
「どちらかというと、この人がトラウマになってるんですがね。とんでもない天才タイプで、何やらせても私を軽く上回るところがまた」

これは面白い話だ。僕のレシピを片っ端から吸収する手際といい成績の高さといいデュエリストとしてもかなり上位な、まさにくのーと呼ぶべき身体能力といい、ぶっちゃけ葵ちゃんはとんでもなくスペックが高い。その葵ちゃんを軽く越すレベルが姉にいらるとなると、確かにそれはトラウマにもなるだろう。

するとそこで、手紙をじっくり見ていた明日香があることに気づいた。

「あら？でもこの手紙、今日来なさいって書いてあるけど。書いてから届くまで、何日か間があつたはずよね。そこは大丈夫なのかしら？」

そういえばそうだ。デュエルアカデミアは孤島にあるから、基本的に本土の方で出した手紙なんかは半月に一度ぐらいのペースでしか回ってこない。リアルタイムで連絡がしたければ、それこそ電話の1つでもかければいいだけだし。

「逆に聞きますが天上院先輩、この手紙はどこから受け取ったものだと思いますか？」

「え？そういえば、まだ手紙が届く日には3日ぐらい……」

「今朝私起きた時、扉の内側に矢文が突き刺さってたんですよ。間違いないあの人、もうこの島に来てます。まさかこの私が完全に寝首をかかれるとは思ってもありませんでしたが、あの人ならそれぐらいの

「ことやりかねません」

「矢文って、そらまた古典的な」

「そういう家系ですから。それで先輩、どうしたらいいでしょう？ 私、本当あの人苦手なんですよ……」

誰が相手でも常に同じような態度で接して個人的な好悪はあまり表に出さない葵ちゃんが、身内というのも多少はあるだろうとはいえここまで苦手意識をむき出しにするような人がいるとはねえ。

でも、これまでの話を聞いて本人の態度を見ているうちに、なんとなく見えてきたことが1つある。要するに彼女は、今誰かに背中を押してもらいたがっているのだ。多分放っておいても葵ちゃんなら、最終的にはその姉とやらのところに時間通りに向かうだろう。それでもやっぱり気は進まないところを、せめてその踏ん切りだけでもつけてもらいたい。本人も恐らく気づいてないだろうけど、心の奥底にある理由をまとめると大体そんなところだろう。

相手がそこらの野郎だったら知らんの一言で叩きだしてもおかしくないことではあるけれど、相手は僕の弟子で、後輩で、そんなもつて大切な友人だ。普段から葵ちゃんには世話になりっぱなしだし、できる限り力になってあげたいところというのもある。ここはその役目、引き受けるでしょう。

「なるほどねえ。でも、昔はどうあれ今の葵ちゃんなら大丈夫だと思うよ」

「……そうですかね」

「そりゃそうさ。それに、相手にここまで好き放題やらせておいて逃げ出すなんて葵ちゃんらしくないね。どうやったか知らないけどこの島に上り込んでおいて、うちの店に買い物1つ来ないってところも気に食わないし」

「……………」

途中から冗談めかして言ってみるも、彼女から期待したような反応はない。ふーむ、いつもなら毒舌の1つでも飛んでくるタイミングなんだけど。

「なんだったら、僕が途中までついてこっか？ここまで葵ちゃんが苦



手な人なんて、個人的にもちよつと見てみたい気もするし」

「ぜひお願いします」

「嘘っ!？」

絶対断ると踏んでたら、まさかの即答だった。しかもかなり真剣な目だし、いまさらやっぱ無しとは言えんぞこれ。でも他人の家の家庭の事情にはなるべく首突っ込みたくないなあ、この世のあらゆる難しいことは、僕にとつては専門外だし。誰か救いの手でも差し伸べてくれないかと皆を見渡すが、皆すっかり送り出しムードになっている。

「行つてらっしゃい清明、つてさ。風邪ひかないでね?」

「あ、はい」

天使のような笑顔を見せる夢想だけが癒しだった。

「夕飯には間に合うようにな。まさかこの万丈目サンダーに炊事をやれなんて馬鹿げたことは、お前なら言わんよな?」

『万丈目のアニキ、この間目玉焼き作ろうとしてフライパン1つ駄目にしたばっかじゃないの〜』

「イエロー、その話後で詳しく。万丈目、帰ってきたらお話しよっか」  
「こ、この馬鹿!あれだけ清明の前では黙っておけと念を押しただらう!」

『痛い痛い痛い、ごめんなさいアニキー!!』

いや、別に正直に言いさえすれば怒るつもりはなかったんだけども。ただ隠し通そうっていうその根性が気に食わんだけで。誰がやったのかわからないのと自首してくるかもしれないからしばらく見ないふりしてあげてたけど、なるほど万丈目だったのか。

「どう?ちよつとは落ち着いてきた?」

「……ええ」

日も沈みかかった黄昏時、隣を歩く葵ちゃんに話しかける。相変わらず険しい顔に沈んだ声だけど、ついさっきレッド寮に来た時よりは幾分マシな顔つきになってきている。ここまで来れば、後は本当に本人の覚悟の問題だろう。

「さてと……あれ、まだ来てないのか。わざわざ時間と場所まで指定しておいて……」

そうこうしているうちに、灯台前についた。時計を見ると5時15分前、まあ及第点ということだろう。絶対気圧されるわけにはいかない相手に会うときに、可能な限り相手より先に待ち合わせ場所に行くのは僕の経験上かなり有用な手だ。地の利を得ることができるだけで、不思議なほど安心感がある。相手もあの葵ちゃんが全力で嫌がるほどの人だからそれぐらい抑えているかと思っただけど、さすがに考えすぎだったかもしれない。

「先輩、後ろです！」

『マスター、前方1メートル向けジャンプ！』

ほとんど同時に聞こえてきた葵ちゃんとチャクチャルさんの声に従い、考えるよりも先に勢いよく体を前に飛ばす。着地して体勢を整え、慌てて何が起きたのかと今いた場所を振り返った。

「もー、せっかくびっくりさせようと思ったのにー。初めまして、葵ちゃんから話は聞いているかしら？いつも妹がお世話になってます、明菜・クラディーですっ！」

そこにいたのは、黒髪の葵ちゃんとは対照的にまじりつけなしの銀髪美人なお姉さん。でもやっぱり姉妹だからか、その顔立ちはどこか葵ちゃんに似通ったところがある。それにしてもこの人、この見晴らしのいい灯台でどうやって僕や葵ちゃんだけでなくチャクチャルさんの感覚まで誤魔化してこの距離まで近づいてきたんだ……？なるほど、確かに並の人じゃあなさそうだ。

「は、初めまして。デュエルアカデミアオシリスレッド3年兼洋菓子店『YOU KNOW』代表、遊野清明です。こちらこそ、いつも妹さんには迷惑かけて」

「いいのいいの、そんなにかしこまらなくて。清明君っていうのね、私のことは明菜って呼べばいいからねっ！」

親しげに話しかけてきた明菜さんが、次いで葵ちゃんに向き直る。と思つたら、目にも止まらぬ動きでそのまま彼女に抱き着いていた。一瞬の間の後、ドン引きする葵ちゃんをよそに怒涛の勢いで一気にま

くしたてる。

「もーっ！葵ちゃん、どーして入学してからお姉ちゃんに手紙の1枚も電話の1本もくれないのよ！お姉ちゃんこの1年というもの毎日毎日1日6回4時間ごとにポストを確認して、それから電話会社にも葵ちゃんから電話が来てないか問い合わせてずーっと待ってたんだからっ！なのに葵ちゃんっいたらいつまで経っても何ひとつしてきてくれないし、ずっとずっと寂しかったのにー！うわあぁーん！」

「あー、ハイハイ」

おいおいと葵ちゃんの胸に顔をうずめて泣き出す明菜さんの頭を仏頂面で雑にポンポンと叩きながら、だから言ったでしょう、先輩？とでも言いたげな目でこちらを見てくる葵ちゃん。なるほど、僕は一人っ子だから兄弟姉妹のいる生活は想像するしかないけど、こんだけシスコンな姉が毎日そばにいるとそりゃあトラウマにもなるだろう。実はちよつとだけ羨ましい気もするけど。

「それで、姉上。わざわざこんなところにまで何しに来たんですか？いくら暇人で社会不適合者な姉上でも、用もないのに来るわけないと思うんですが」

「うー……清明くーん、葵ちゃんがお姉ちゃんの記憶の中の可愛い天使なあの時のあの子より毒舌がパワーアップしてるよー！」

「え!?えーと、その……葵ちゃん、一応身内ならもうちよい大事に扱ってあげても……」

「いやです」

「うわーん！」

ここまではつさり切り捨てるあたり、本当に普段からこの姉妹はこうだったのだろう。事実明菜さんもある程度騒いで満足したのかすぐに気を取り直し、身軽な動きで葵ちゃんから体を離れた。と思っただら、次の瞬間とんでもない爆弾を落としてくれた。

「くすん。そんな冷たい葵ちゃんも可愛いけど、残念ながらただただ愛でに来たわけじゃないの。率直に聞くけど葵ちゃん、家に帰ってくる気はない？」

「……は？」

たつぷり5秒ほど空いただろうか。さすがに説明不足を感じたらしく、ため息とともに明菜さんがより詳しく語りだす。

「もちろん退学して、なんて頼むつもりはないわよー。でも葵ちゃんがいっつまで経つても連絡1つしてこないから、お父さんもお母さんも私の次ぐらいに心配してるんだからっ。だから1回でいいから、皆にその元気な可愛い顔を見せてあげてほしいなーっってお姉ちゃんは思っています」

もう入学して1年が経つというのに、いまだに葵ちゃんは自身の家庭のことを僕相手にすら録に話してくれない。お互い様といえばそれまでだし、だからこそ僕も深く立ち入ろうとは思わなかったわけだけど。だけどこの話を聞く限り、葵ちゃんは僕と違って両親と一緒に過ごして育ってきたみたいだ。

「そう、ですか……でも私は、約束しましたから。卒業して、プロになるまで、2度とこの家の敷居はまたぎません、と。だから、いくらそう言われても」

「もー、葵ちゃんのいけず。でもそう言うだろうと思った。葵ちゃん、真面目なところは昔っから全然変わってないのね。どうせこのまま私が何言っても聞くわけないだろうから、実力行使させてもらうからね」

そう言つてどこからともなく明菜さんが取り出したのは、なんとデュエルディスク。あれ結構かさばるのに、一体どこにしまつてあつたんだらう。

「もしデュエルモンスターズに関してはあなたより経験が浅い私が勝つようなことがあれば、葵ちゃんにプロは向いていないってこと。本当に不転の覚悟で家を出たのなら、この1年で私1人ぐらい軽く倒せるぐらいには成長してないかね。その覚悟を私に見せてごらん？」

「やるしかない、ですかね。姉上、後悔しても知りませんよ……!」  
灯台下の空気が、異様な緊張をはらむ。ちょうど太陽の最後のひとかけらが水平線の向こうへ消えた瞬間、最高潮まで高まった緊張が解き放たれた。

「デュエル!」

先攻を取ったのは葵ちゃん。だけど、その様子が明らかにおかしい。いつもの冷静な態度は鳴りを潜めて妙に落ち着きがないといふかなんというか、まるでこの場から逃げ出したくてたまらないかのような焦りすら感じる。

「私のターン、ドロー！私のフィールドにモンスターが存在しないことでフォトン・スラッシュャーを特殊召喚します！さらに忍者マスター HANZO<sup>ハンゾー</sup>を召喚し、召喚時効果を発動！デッキから忍法カード1枚、超変化の術をサーチしてさらに装備魔法、風魔手裏剣をHANZOに装備！攻撃力を700ポイントアップ……攻撃力2000以上のモンスター2体をリリースし、手札のこのカードは特殊召喚できます！出でませ、葵流忍法最大のしもべ！ギャラクシーアイズ・フォトン・ドラゴン銀河眼の光子竜！」

フォトン・スラッシュャー 攻2100

忍者マスター HANZO 攻1800↓2700

銀河眼の光子竜 攻3000

「さらに風魔手裏剣が墓地に送られたことにより、効果発動！相手プレイヤーに700ポイントのダメージを与えます！」

明菜 LP4000↓3300

「カードを1枚セット。私はこれで、ターンエンドです」

今の葵ちゃんはやっぱりおかしい。超変化の術は自身の忍者と相手モンスターを素材としてそのレベル合計以下のモンスターをデッキから呼び出すカードであり、どう考えても今の局面はHANZOを残しておいて相手の動きを牽制すべき場面のはずだ。それにそもそも攻撃力2700と2100のモンスターを出すことに成功したのなら、倒せない敵がいるわけでもないのだからその2体をそのまま残しておく方がよほど安全だろう。

「葵ちゃん、いったん落ち着いて！」

「うるさいから黙っててください、先輩！なんとしても、なんとしても私は姉上に勝ちます！」

めったに見せない葵ちゃんらしからぬ剣幕に一瞬たじろぐ。そんな様子を見て、明菜さんも困ったかのように眉をひそめた。

「もー、葵ちゃんったら。せっかく心配してくれてるのに、そんなこと

言うもんじゃないわよ？私のターンはまず永続魔法発動、星邪の神喰！それから魔法カード、トレード・インを発動。手札からレベル8モンスター、黄昏の忍者将軍―ゲツガを捨てて2枚のカードをドロート！」

「初手からいきなり手札交換？」

「どう思うかな、清明君？私はカードを2枚伏せて、さらにカードカー・Dを召喚。このカードをリリースしてデッキからカードを2枚ドロートして、強制的にエンドフェイズに移行してターンエンド」

意外にもそのまま何もしかけてこず、ターンを終える明菜さん。だけどあの笑い方は、かれこれ1年も葵ちゃんをそばで見してきた僕にはわかる。何か仕掛けてる時の葵ちゃんそっくりなんだもん。

葵 LP4000 手札：1

モンスター：銀河眼の光子竜（攻）

魔法・罫：1（伏せ）

明菜 LP3300 手札：3

モンスター：なし

魔法・罫：星邪の神喰

2（伏せ）

「私のターン、ドロート！レスキューラビットを召喚し、効果を発動。エンドフェイズに破壊される代わりに、デッキからレベル4以下の同名通常モンスターを特殊召喚します。お出でませ、忍術学びし魔性の猛犬！忍犬ワンダードッグ！」

忍者服を着た人間の体に首から上は犬、一昔前の犬人面とでもいうべき不思議なモンスターが、葵ちゃんの場に2体同時に召喚される。あれを忍者の一員として認めてデッキに入れるなんて、葵ちゃんの基準も結構アバウトだ。

忍犬ワンダードッグ 攻1800

忍犬ワンダードッグ 攻1800

「だったらここで……トラップ発動、リビングデッドの呼び声！墓地からさつき捨てたモンスター、黄昏の忍者将軍―ゲツガを蘇生！」

背中には月と雲がモチーフであろうシンプルなデザインの旗をさ

し、緑色のマントをたなびかせて光の竜と向かい合う忍者一族の長、ゲツガ。三日月を二重にあしらったデザインの兜が、灯台の落とす光と辺りに残るかすかな黄昏の気配を反射して、まるで本物の月のような輝きを放った。

黄昏の忍者將軍―ゲツガ 攻2000

「攻撃力2000のゲツガを攻撃表示で、リビングゲッドの呼び声まで使って特殊召喚？まあいいでしょう、いざバトルします！銀河眼よ、あの忍者の総大将を、光の力で消し去って！破滅のフォトン・ストリーム！」

「葵ちゃん!」

明菜さんが恐らく張っているであろう罫に対して、あまりにも無謀で軽率な攻撃。だが意外にもゲツガはその光の奔流を、真正面から受け止めてその中へ消えていった。

銀河眼の光子竜 攻3000↓黄昏の忍者將軍―ゲツガ 攻2000 (破壊)

明菜 LP3300↓2300

「まだですよ、姉上！忍犬ワンダードッグでダイレクト……」

葵ちゃんの張りつめた声は、途中で尻すぼみになって消えていった。たった今塵一つ残らず焼き尽くされたはずのゲツガが、何事もなかったかのように明菜さんのフィールドで仁王立ちしていたのだ。

黄昏の忍者將軍―ゲツガ 攻2800

「ふふん、びつくりした？お姉ちゃんはゲツガが破壊された時にトップカード、命の綱を発動してたんでした。このカードはモンスターが戦闘破壊された時、手札をすべて捨てることでその攻撃力を800ポイントアップして特殊召喚できる！」

「くっ……ワンダードッグでの攻撃は中止し、ターンエンドです。そしてこの瞬間、レスキューラビットのデメリットによりワンダードッグ2体は自壊します」

「だから葵ちゃん、少し落ち着いて……」

途中まで言いかけて、結局辞めた。別に見捨てるつもりはないけど、少なくとも今の葵ちゃんには何を言っても無駄だ。僕もチャク

チャルさんのパワーが暴走してたダークネスの吹雪さんとの戦いや光の結社の力が暴走してた三沢との戦いの時にはそうだったからよくわかる。こうなった以上、外野からいくら叫んだとしても何も変わらない。残念だけど自分でそれに気づくか、相手から気づかされない限り葵ちゃんに勝ちはないだろう。

「姉上、見ての通り私のフィールドにはまだ攻撃力3000の銀河眼がいます。攻撃力2800のゲツガ1体で、どう耐え抜くつもりですか？」

「もー、葵ちゃんつたらあわてんぼうさんなんだから。ゲツガのモンスター効果発動！1ターンに1度自身を守備表示に変更することで、墓地から忍者を2体まで蘇生させるよっ！黄昏の忍者ーシンゲツを2体特殊召喚！」

攻撃を終えたゲツガが槍を地面に突き立て、いつの間にか配置してあった椅子にどっしりと腰かける。するとその両脇で木の葉が渦を巻き、その中心から2体の新たな戦士……4本の腕を持ち2本の忍者刀を背負った、片目を隠す装束に青いマントの異形の忍者が音もなく現れた。

黄昏の忍者将軍ーゲツガ 攻2800↓守3000

黄昏の忍者ーシンゲツ 攻1500

黄昏の忍者ーシンゲツ 攻1500

「そうか、命の綱は攻撃力を上げるだけじゃなくて手札の忍者を墓地に送り、ゲツガの効果をサポートするために……まるで戦略に隙がない、確かに葵ちゃんが天才っていうだけのことはある」

「うんうん、さっすがは清明君！もつと褒めてもいいよ、あとでよしよししてあげるね！どう、お姉ちゃんのコンボ？葵ちゃんも清明君ぐらい素直に褒めてくれたっていいんだよ？」

「光の結社を相手にしてる間に腑抜けたんですか、先輩？そのデツキでどうやって星邪の神喰を使うっていうんですか、姉上は」

ますます態度を硬化させる葵ちゃんだけど、これはまずい兆候だ。なんとか手遅れになる前に、悪い考えの悪循環から脱出できるといいんだけど。



そんな妹の様子を知ってか知らずか、明菜さんは相変わらずの明るさだ。

「それと、さつききどうやって耐え抜くのかって聞いてたよね？その前に、まずは攻撃させてもらおうかな。魔法カード、クロス・アタックを発動！自分フィールドに同じ攻撃力のモンスターが2体以上いるとき、他のモンスターが攻撃できなくなる代わりにその1体は直接攻撃ができる！攻撃力1500のシンゲツでダイレクトアタック、月輪の太刀！」

黄昏の忍者―シンゲツ 攻1500↓葵（直接攻撃）

葵 LP4000↓2500

「たかがこの程度のダメージ……！」

「もー、そうやって意固地になっちゃうところも可愛いんだからー。それと、せっかくあるんだから今のうちに使っておこうかな。墓地からアマリリースの効果発動、このカードを除外することでこのターン1度だけアドバンス召喚に必要なリリースを1体減らすことができる。だけど私が狙っているのはそっちじゃなくて、今の除外をトリガーにして星邪の神喰の効果を活用！デッキからアマリリースの属性だった地属性以外のモンスター1体、闇属性の黄昏の中忍―ニチリオンを墓地へ。私はこれでターンエンドね」

葵 LP2500 手札：1

モンスター：銀河眼の光子竜（攻）

魔法・罨：1（伏せ）

明菜 LP2300 手札：なし

モンスター：黄昏の忍者―シンゲツ（攻）

黄昏の忍者将軍―ゲツガ（守）

黄昏の忍者―シンゲツ（攻）

魔法・罨：星邪の神喰

「確かにゲツガの守備力3000は銀河眼の力をもってしても突破できない数値……ですが、所詮それは数字のみに頼った強さ！忍者マスター―SASSUKEを召喚します！」

HANZOに並ぶ力を持ち、忍者マスターの称号を最も早く手に入

れた上忍、SASUKE。その能力は表側守備表示モンスターに攻撃した時問答無用で破壊と、まさに今のゲツガを倒すにはうつつけの力だ。

忍者マスター SASUKE 攻1800

「バトル、SASUKEで……」

「黄昏忍法、闇月あんげつ隠れ風！」

SASUKEが両の手にクナイを構え、敵將軍めがけ一直線に走ります。しかしその脇に控える2体のシンゲツがその4本の手を使って複雑な印を組むと、その名の示す通り新月の闇夜のように辺りが闇に包まれていった。

「これは……?」

「シンゲツはそのモンスター効果によって、自身以外の忍者に対する攻撃を封じ……」

「そこまで聞けば結構です、要は簡易ロックというわけですね?それならば永続トラップ、忍法 超変化の術を発動!私の場の忍者であるSASUKEとシンゲツの1体を素材とし、デッキから上級モンスターを呼びだせば……」

皆まで言うなとばかりに葵ちゃんが発動させようとした、最初のターンにサーチしていた超変化の術。だがそのカードが表になる寸前、闇にまぎれて飛んできた1枚の手裏剣が伏せカードそのものを地面に再び縫い付けた。

「超変化の術が封じられた!」

あまりといえばあまりに目の前しか見えない葵ちゃんのプレイングにむしろ悲しげな色すらにじませながら、闇の中から明菜さんの声が響く。

「ちちゃんと最後まで聞こうね、葵ちゃん?シンゲツが誘導するのは攻撃だけじゃなくて、カード効果の対象も誘導するの。私のフィールドには忍者モンスターしか存在しないから、攻撃も効果もあらゆる対象にできないの」

「そんな……」

葵ちゃんの声から、さつきまでの空元気すら失われていく。さすが

に見ていられなくなってきて、どうせ彼女の耳には届かないことを承知の上でそれでも叫ぼうとしたところで、明菜さんが一足先に口を開いた。

「ねえ、葵ちゃん?」

「なんですか、姉上……私の無様さでも笑いますか?」

「ううん、そんなことしないわよ。だけど今の葵ちゃんいっぱいっばいみたいだし、ちよつと深呼吸してごらん?」

「どうしてそんなこと……」

「いいから。お姉ちゃんからの命令ですっ」

不承不承といった様子ながら、言われたとおりゆっくりと息を吸い込んで深々と吐き出す葵ちゃん。それを何度か繰り返すうち、次第に目の光が戻り、その表情からも自棄的な様子が抜けていった。それが分かったのか、明菜さんも満足げな様子で微笑する。

「うんうん、いい顔になったわよー。今カメラがあれば1枚撮って私の宝物にしたいぐらい」

「それは、勘弁してほしいですね」

葵ちゃんも、ついつい苦笑する。でもたとえ苦笑とはいえ、葵ちゃんが笑うところなんて今日初めて見た気がする。

「むー、残念。でもどうなの、葵ちゃん?お姉ちゃんのこと、そんなに怖いかな?」

「え?」

「どうしても知りたくなったの。聞かせて葵ちゃん、そんなにお姉ちゃんのこと苦手だった?嘘は言わなくていいから、ちゃんと自分の心に聞いてごらん?」

「……」

言葉に詰まる葵ちゃん。僕らの前では苦手だ嫌だと言っている、いざ面と向かってストレートに聞かれると答えにくいらしい。

何度か喋りかけては口を閉じることを繰り返し、それでも最後にはゆっくりと、考えながら言葉を選んで話し出す。

「確かに、姉上が苦手なことは間違いないです。ですが……ですが、こうして今宵、姉上と向き合つてようやく気付くことができました。1

人で姉上から逃げてここに入学しても、結局は何の解決にもならないのだと。むしろ残った恐怖が恐怖を呼び、より一層姉上と私の距離を広げていたのだと。目を逸らしていた自分の弱さを気づかせてくれた、そんな姉上には感謝します。わざわざ会いたくはありませんでした」

「なんかえらい言いようだね、お姉ちゃんのことをそんな化け物みたいにお姉ちゃんただ、たった1人の愛する妹にはるばる会いに来ただけなのにー。でも、これで葵ちゃんの本気のデュエルが見れそうだねっ！きつかけはどうあれ、あなたがこの1年でやったことの全ては決して無駄なことじゃない。ここでしか見つけられないことを身に着ける機会だったつくさんあつたはず。お姉ちゃん、私の妹はそれができる子だって信じてるから」

「ええ。姉上に見せてあげますよ。葵流忍法の妙技、その全てを！そして姉上に私は勝ちます！」

なんののかんの言っても、姉妹ってのはこういう独特の絆で繋がってるものなんだろうか。1人つ子の僕にはよくわからない世界だけど、ついさっきまでとは別人のように生き生きした葵ちゃんを見てとりあえずホッとした。

「魔法カード、一時休戦を発動！お互いにデッキからカードを1枚引き、次の姉上のターン終了時まであらゆるダメージを0にします！そして今引いたカードをセットし、ターンエンドです」

「私のターン、ドロー。墓地からADチェンジャーの効果が発動、墓地のこのカードを除外して、フィールドのモンスター1体の表示形式を変更。ゲツガを攻撃表示にして、この瞬間に星邪の神喰の効果をもう1回適用。私が送るのは、またまた閻属性の黄昏の中忍ーニチリン」

黄昏の忍者将軍ーゲツガ 守3000↓攻2800

これで、再び墓地の忍者が2体になった。それはつまり、明菜さんのゲツガの効果を使うことでまたもや2体の忍者を1度に蘇生できるというわけだ。

「ゲツガの効果が発動、黄昏の中忍ーニチリンを2体特殊召喚！これぞ明菜流・天魔覆滅の陣！」

上りゆく黄昏の月をモチーフとするゲツガやシンゲツとは違い、沈みゆく黄昏の太陽をイメージしたのであろう茜色の忍者が2人、ゲツガを中心とした明菜さん曰く天魔覆滅の陣を形作る。

黄昏の忍者将軍―ゲツガ 攻2800↓守3000

黄昏の中忍―ニチリン 攻2300

黄昏の中忍―ニチリン 攻2300

「だけど葵ちゃんの銀河眼は、攻撃力3000。まだそう簡単には突破されないはず……」

「本当にそうかな、清明君？ニチリンの効果発動、黄昏忍法起爆朧ガマ！手札の忍者を1体捨てることで、エンドフェイズまで場の忍者1体の攻撃力を1000ポイントアップさせる！私は機甲忍者アクアを捨てて、ルール上忍者として扱うニチリン1体の攻撃力をアップ！」

黄昏の中忍―ニチリン 攻2300↓3300

「一時休戦の効果が続く限りダメージは与えられないけど、攻撃はしかけておこうかな。バトル、ニチリンで銀河眼の光子竜に攻撃！」

ニチリンが太陽のように光り輝く短刀をかざし、飛び上がった銀河眼を上から切り裂かんと迫る。

「あれ？だけど銀河眼の効果を使えば、ニチリンと自分を除外して戦闘を回避できるんじゃない？」

「それは無理ですね、先輩。銀河眼の効果は対象を取る効果ですが、シンゲツがいる限り姉上の忍者を私はカード効果の対象にとれません。つまり、私の銀河眼は今その効果を殺された状態なんです」

「よくそこまで気づけたね、葵ちゃん。私の自慢の妹だけのことはあるよー」

「そして、その対策もすでに私の手にあります！トラップ発動、バーストブレス！」

動かなかつた銀河眼がいきなり飛翔し、ニチリンの攻撃を紙一重のところまで回避する。そのまま空中で全身を発光させ、光のブレスを忍者軍団にまとめて放った。

「バーストブレスは自分フィールドのドラゴン族1体をリリースすることで発動され、その攻撃力以下の守備力を持つフィールドのモンス

ターをすべて破壊するカードです。私の銀河眼の攻撃力3000に  
対し、姉上のモンスターは最も守備力が高いゲツガでも3000止ま  
り。つまり、姉上の天魔覆滅の陣とやらはこれで崩壊します！」  
「やったー！」

光が弾け、全てのモンスターがその中に消えていく。そしてブレス  
を放った銀河眼自体も、ゆつくりと光の粒子となって夜空に消滅して  
いった。これで葵ちゃんのターンが来れば、もうあとは彼女の独壇場  
だろう。

そのあたりで、ふと違和感を感じた。気のせいだろうか……いや、  
やっぱりおかしい。確かに銀河眼は光のブレスを放ち、それにフィー  
ルドは包み込まれた。だがその銀河眼が消えた今、なぜかまだその光  
が収まっていない。それどころか、まるで雲一つ無い空で輝く太陽の  
ようにますますその眩さを増していく。

「あ、あれはー！」

あまりの眩しさに目を細めて手で顔を覆いながらも、どうにか明菜  
さんのフィールドに目をやった葵ちゃんが眩く。そこに立っていた  
のは、黄昏の中忍―ニチリン。その両腕で印を結んでいるところを見  
ると、またもや忍法を使って何かしたらしい。

「黄昏忍法、陽炎迷い昼。ニチリンはもう1つの効果として、手札の忍  
者1体をコストにこのターン終了時まで自分の忍者にたいして戦闘  
及び効果破壊耐性を与えることができるのよ。女忍者ヤエを捨てる  
ことで、バーストブレスから私の忍者は身を守ったのね」

「そんな!？」

「惜しかったわねー、葵ちゃん。このターンはまだダメージを与えら  
れないから、私はこれでターンエンドするね」

起死回生のバーストブレスすら通用せず、明菜さんの忍者を攻撃も  
効果の対象にとることもできない必殺の構え、天魔覆滅の陣はいまだ  
健在。さらに墓地には他の忍者が墓地にいるときに自身を除外して  
攻撃を無効にできる機甲忍者アクア。対するに、葵ちゃんの手元には  
伏せられっぱなしの超変化の術1枚のみ。S A S U K Eもバースト  
ブレスに巻き込まれたので、モンスターすら今はいない。

でも、葵ちゃんはまだ諦めてない。まだ何か、逆転のルートがあるのだろう。

葵 LP3000 手札：0

モンスター：なし

魔法・罫：1（伏せ）

明菜 LP2300 手札：0

モンスター：黄昏の忍者―シンゲツ（攻）

黄昏の忍者―シンゲツ（攻）

黄昏の忍者将軍―ゲツガ（守）

黄昏の中忍―ニチリン（攻）

黄昏の中忍―ニチリン（攻）

魔法・罫：星邪の神喰

「私のターン、ドロ―！魔法カード、貪欲な壺を発動！墓地のSASSUKE、フォトン・スラッシュャー、銀河眼、ワンドードッグ2体の計5枚をデッキに戻すことで、2枚ドロ―！」

「へえ……！」

個人的な考えだけど、やっぱり葵ちゃんは何か持つてると思う。僕みたいに精霊と、デッキそのものと直接心を通わせることができるわけでもないのにこの局面で最高のドロ―ソースを引くことができる運があるんだから、これは単純にデュエリストとしての運をつかみ取る力だろう。

「魔法カード、炎王の急襲を発動！姉上のフィールドにしかモンスターが存在しないことで、デッキから炎属性の獣・獣戦士・鳥獣族モンスター1体を効果を無効にして特殊召喚します！現れなさい、七色の羽根持つ紅蓮の不死鳥……炎王神獣 ガルドニクス！」

遙か上空から天をも焦がす鳥の形をした炎の塊が、まさに急襲と呼ぶにふさわしい勢いで落ちてくる。その体を包んでいた炎が消えると、見事に真っ赤な羽根を持つ巨大な鳥が羽ばたいていた。

炎王神獣 ガルドニクス 攻2700

「この不死鳥の力で今こそ決着をつけましょう、姉上！」

「望むところよ、葵ちゃん。だけど、いまだシンゲツの闇月隠れ風は有

効のまま。どうやって対処するの？」

「さあて、姉上はどう思います？このターンはカードをセットし、エンドしますよ。そして炎王の急襲のデメリットにより、ガルドニクスはエンドフェイズに破壊されます」

自らの炎に包まれ、身を焼かれた不死鳥が堕ちていく。その燃えカスすら残らず、最後の残り火も折よく海から吹いた風に流れて消えていった。

「せっかく呼び出せた最上級モンスターも、攻撃すらできずに破壊されちゃうなんてね。これからどうするの、葵ちゃん？」

「いいえ、すでに私の仕込みは終わっています。さあ姉上、カードを引いてください」

明菜さんのもつともな疑問に、不敵な笑みで答える葵ちゃん。そのデュエル序盤とはまるで違う態度がよほどおかしかったのか、明菜さんも朗らかに笑ってカードを引いた。

「それじゃあ葵ちゃんがどんなことをしてくれるのか、お姉ちゃんに見せてもらおうかな。私のターン、ドロロー！」

「この瞬間、墓地からガルドニクスの効果を発動！ガルドニクスがカード効果で破壊されたならば、その次のスタンバイフェイズにフィールドに蘇り、さらに自分以外の全てのモンスターを破壊します！これが私にできる唯一にして最後の一手、ガルドニクスの焦熱地獄！」

炎王神獣 ガルドニクス 攻2700

地面がパツクリと割れて大きな火柱が噴き上がり、その中心からまるで何事もなかったかのように赤い不死鳥が再誕する。すると残った炎が意志を持つようにうねり、忍者軍団めがけて飛びかかっている。

確かにこの効果が通りさえすれば、ガルドニクスを残したうえで忍者軍団を一掃できるだろう。だけど、ニチリンには先ほども使った忍者をコストに忍者を破壊から守る術がある。今の明菜さんの手札はドロローしたてのあれ1枚のみ、あれが忍者モンスターだとしたら……今度こそ、葵ちゃんに勝ち目はないとみていいだろう。僕が気付いた



ぐらいだ、それぐらいのことは葵ちゃんも重々承知の上だろう。

「さあ、姉上。今引いたカード、そのまま使えるものですか？」

葵ちゃんの質問に、ゆっくりと首を横に振ってこたえる明菜さん。

天魔覆滅の陣が、荒れる炎の奔流に飲み込まれた。

「葵ちゃん、よく私の天魔覆滅の陣を……だけど、まだ終わらないんだよ。シンゲツは相手によって破壊された時、デッキから忍者を1体サーチできる。2体のシンゲツのそれぞれの効果で、デッキから機甲忍者アースと黄昏の忍者將軍―ゲツガをサーチ！そして相手フィールドにのみモンスターがいるとき、アースは手札から特殊召喚できる！」

葵ちゃんも愛用する機甲忍者の1体にして、あのカイザーが使うサイバー・ドラゴンと同じ効果を持つ大地の忍者が地中から湧き上がる。

機甲忍者アース 攻1600

「さっきは死者蘇生で出したけど、実はこのカードは忍者をリリースする場合リリース1体だけでアドバンス召喚できるんだよ！再び出でよ、ゲツガ！」

黄昏の忍者將軍―ゲツガ 攻2000

「まずい、これじゃあ葵ちゃんがせっつかく崩した天魔覆滅の陣が……！」

ゲツガがさっきのシンゲツ2体を蘇生させれば、また先ほどのロツクが決まってしまう。いや、それだけでは済まない。ゲツガで破壊されたゲツガを呼び戻し、そのゲツガがさらに効果を使えば？ニチリンが1体ゲツガに変わるだけで、天魔覆滅の陣が完全に復活してしまう。

だが、葵ちゃんはここで絶望の表情ではなく、会心の笑みを漏らした。

「そう来ると思いましたよ。トラップ発動、リビングデッドの呼び声！この効果により墓地のHANZOを蘇生召喚し、さらに特殊召喚に成功したHANZOの効果によりデッキから速攻の黒い忍者をサーチします」

忍者マスター HANZO 攻1800

「ここでHANZO?……あつ！」

「今更気づいても遅いですよ、姉上！確かにシンゲツ2体での闇月隠れ風は恐ろしいロックでしたが、それはあくまでもシンゲツ2体が場に存在しない限り意味はない。つまり、ゲツガ1体しか存在しない今ならばこのカードを発動することができる！永続トラップ、忍法 超変化の術！私の忍者と姉上のモンスターをそれぞれ1体墓地に送ることで、そのレベル合計以下のレベルを持つドラゴン・恐竜・海竜族モンスター1体をデッキから特殊召喚します！」

ゲツガとHANZOの姿が煙となって消え、その煙が頭上に集まって見覚えのあるドラゴンの姿を形作る。あのドラゴンのシルエツトを、どうして見間違えることがあるだろうか。なにせ葵ちゃんがデュエルするたびに見てるからねえ。

「再び出でませ、葵流忍法最強のしもべ！銀河眼の光子竜、ここにあり！」

銀河眼の光子竜 攻3000

「私のゲツガ。もう召喚権も使っちゃったし、私はこれでターンエンドかな」

葵 LP3000 手札：1

モンスター：炎王神獣 ガルドニクス（攻）

銀河眼の光子竜（攻・超変化）

魔法・罫：忍法 超変化の術（銀河眼）

リビングゲツドの呼び声（対象なし）

明菜 LP2300 手札：1

モンスター：なし

魔法・罫：星邪の神喰

「私のターン。姉上、これでラストターンです！速攻の黒い忍者を召喚し、2枚目の風魔手裏剣を装備します！」

「あっちゃー……」

速攻の黒い忍者 攻1700↓2400

「バトルです、黒い忍者で攻撃！走りなさい、ブラック・ニンジャ！」

「墓地から水属性モンスター、機甲忍者アクアの効果を発動！このカードを除外してその攻撃を無効にして……さらにその効果をトリガーに星邪の神喰！デツキから光属性の超電磁……じゃなくて、闇属性のネクロ・ガードナーを墓地へ」

「姉上……？ガルドニクス、次の攻撃を！」

「ネクロ・ガードナーを除外して効果発動、その攻撃も無効に。残念だけど星邪の神喰は1ターンに1回しか使えないのよね、くすん」

「ここまで追い込まれていながらも、さらに2回の攻撃を止めて見せた明菜さん。なるほど、葵ちゃんが速攻の黒い忍者を召喚して、さらに今のドロウで風魔手裏剣を引いていなかったらまだライフは残っていたのか。まさにギリギリの戦い、そう呼ぶにふさわしい。」

「だけど、このデュエルもこれで終わる。最後に残った銀河眼が、もはやその攻撃を防ぐものが何もなくなくなったフィールドで全身を発光させて力を溜める。」

「銀河眼の光子竜でダイレクトアタック！破滅のフォトン・ストリーム！」

銀河眼の光子竜 攻3000↓明菜（直接攻撃）

明菜 LP2300↓0

「あーあ、葵ちゃんったら本当に強くなったのね。お姉ちゃんとしてはそうやってたくましくなった葵ちゃんもすてきだけど、やっぱり少しは寂しいわー」

「敗れてもなお飄々とした態度の明菜さんに、葵ちゃんが詰め寄る。『姉上、最後の局面でのあれは一体どういうことですか！機甲忍者アクアを除外した際墓地に送るモンスター、あそこで超電磁タートルを送っていれば私の攻撃を受けることなくまた姉上のターンが来たはず。まさか、手を抜いたのでは……』」

「目が怖いわよ葵ちゃん、それに私は本気だったわよ。ねー、清明君？」

「またもそこで僕に振ってきますか明菜さん。でも正直、僕もここは

葵ちゃんの言うことに一理ある気がする。確か超電磁タートルは墓地から除外することで、デュエル中1度だけそのターンのバトルフェイズを終了させる効果を持つモンスターだったはず。最初その名前を呼び掛けていたところを見ると明菜さんのデッキに入っていないわけでもなさそうだし、あの局面でわざわざ1度の攻撃を止めるだけのネクロ・ガードナーを優先する意味はないだろう。

そんなわけで言い淀んでいると、明菜さんも何が言いたいのかわからなかったらしい。ふくれっ面になりながら、まだ手に持っていた最後の手札を僕らに見せる。

「これは……」

「超電磁タートル？」

「うんうん。この効果って、デュエル中1度しか使用できないって書いてあるでしょ？だからデッキに入れるのも1枚でいいかなーって思ってたたら、まさかあの場面でドローしちゃうなんて思わなかったよっ」

「ああー……」

何か深いわけでもあったのか、実はわざと負けたとかそういう展開かと思ったら、思いのほか現実的な理由だった。明菜さん、本当に勝負気満々ではあったのね。まさにこの妹にしてこの姉あり、ということか。

「さてと、久しぶりに葵ちゃん成分も補給できたし、私もいったん帰ろうかな」

「あ、あの！できれば父上と母上には、私が謝っていたと伝えて……」

「ああ、あの話？ごめんね葵ちゃん、もしかして信じてた？あれ、お姉ちゃんの嘘なの」

「……はい？」

「だって葵ちゃん、ああでも言わないとなかなかその気になつてくれなかったでしょ？葵ちゃんがプロにどこまで近づけたのか、お姉ちゃんもいっぺん見てみたいなーと思って」

あつけらかなと言いつ明菜さんに、一瞬虚を突かれたといった様子の子の葵ちゃん。次第にその顔が、怒りのあまり赤くなってきた。

「それで姉上、最期にまだ何か言い残したことはありませんか……？」  
「はい、お姉ちゃん怒ってる葵ちゃんもかわいいなーって思いました！」

「姉上ーっ！やっぱり私、姉上のことは嫌いです！」

「うわーん、また葵ちゃんがいじめるー！それじゃあ、まったねー！清明君も、今度ゆつくりお茶でもしながらお話しましょうねっ！」

そう言うが早いが懐から何やら白い球を取り出して地面に叩き付けると、辺りが煙幕に包まれる。その煙玉の煙が晴れた時にはすでに明菜さんの姿は影も形もなく、そのかわりに明菜さんが立っていたところには何枚かのカードが置かれていた。

「ーっ言い忘れてたけど、葵ちゃん。それ、私からのプレゼントだよっ！去年の誕生日はお祝いできなかったから、ちよつと時期が違うけど進級祝いも一緒につてことで、よかつたら使つてねー！」

最後に、どこからともなく明菜さんの声が響く。どうやらこの明菜さんの置き土産、黄昏の忍者シリーズは最初からそのつもりで持ってきたものようだ。

「……まったく、姉上はこれだから」

どうやら怒りを飲み込んだらしい葵ちゃんが、まんざらでもなさそうな表情でカードを拾い集める。あれだけの効果を持った黄昏の忍者が葵ちゃんのデスクに入るとなると……うん、これはグレイドルの力を手に入れた僕もうかうかしてられない。

「さあ、帰りましょうか先輩。もうすっかり夜ですし」

「そだね」

来た時と同じように、2人で並んでゆつくりと歩きだす。と、ここであることを思い出した。ずつと聞いてみたいと思っただけど、行きの時は葵ちゃんの様子がアレだったからなかなか切り出せなかったのだ。

「そういうえばさ葵ちゃん、いつの間に彼氏なんてできたの？」

「すみません先輩、私にもわかるような言語で説明してください」

「いや日本語だけど。だつてほら、明菜さんからの手紙にも書いてあつたじゃん。可愛い男の子と仲良くなつてー、つてやつ。あれつて

誰のこと？一言ぐらい僕にも紹介してくれたっていいだろうに」

あの手紙を見たときから、その部分については多少気になっていった。葵ちゃんのことには入学してすぐ従業員さんになってもらってか  
らずっと仕事仕事で自由時間を押さえつけてきちゃったような気も  
するから、そんな相手ができたんなら全力でお祝いしてあげるぐらい  
のことはしてあげたい。

そう言うと、何か小さい子にものを教えるときどこから話せばいい  
だろうか、と迷う感じで今日一番のため息をつかれた。

「……先輩、先輩はもうちよつと自分が女顔寄りだつてことに気づく  
といいと思います」

「え、嘘!?これ僕のことなの!？」

「どう考えても。でも正直昔から私も思ってたんですよね、元々顔の  
パーツが女顔寄りなうえに表面の絵面だけは優男ですから、多分この  
人女装したら案外似合うんじゃないかなつて」

「日頃そんなこと考えてたの!？」

「女子力だつて高いと思いますよ?私はあまりそういうの詳しくない  
ですけど」

「……明菜さんの気持ちがちよつとだけわかるよ。葵ちゃんがいじめ  
る……」

「でも大丈夫ですよ、なんだかんだ言つて」  
「?」

「先輩の場合、見た目は問題なくて女子力も高そうですが、それ以前に  
性格の問題がありますから。そこさえわかつていれば、絶対女の子に  
は見えないです」

「……うん、もうそれは褒められてるんだと思うことにするよ」

これ以上聞いていても慰めになる気がしなかつたので、そこで話を  
切り上げる。僕自身はご飯を作つたりお茶を入れたりしたぐらいで  
ほとんど何もしてないはずなのに、なんだか今日はいろんなことがあ  
る日だった。そういえばデュエルアカデミアに他の分校から転入生  
が来るとかいう噂もあるし、もしその話が本当だとしたら明日はその  
人たちのところにも手土産持つて挨拶に行かないとね。

## ターン74 鉄砲水と灼熱の傭兵

アカデミアに、ついに始業式の日がやってきた。その間に翔も結局ブルー寮への昇格が決まったことで、アカデミア初の3年でレッド、イエロー、ブルーの全寮制覇という偉業を成し遂げた。

……正直なところこれについて僕としては、万丈目が1度ブルーに戻るとか言っておいてドタキャンしたからオベリスクブルーの枠が1人分空いたのもそれなりに大きな理由なんじゃないかと邪推したりもしてるんだけど。実際僕が最後に聞いた話では、翔に昇格試験を受けさせるかどうかすら怪しかったって話だし。とはいえ、別にそれを悪く言うつもりはない。それを掴みとった運も実力の内だし、なにより試験をクリアしたのは紛う事なき翔自身の実力だ。ただどうやっていらん推察するようになったのも、うちの地縛神のせいだろう。すっかり僕も性格が歪んだものだ。

『私か!?そこも私のせいなのか!?!』

するとまさにドンピシャのタイミングで、その翔がレッド寮にやって来た。

「アニキー、始業式始まつちやうけど出ないんスカー?……あれ、剣山君。それに清明君も」

「おはようだドン、丸藤先輩」

「やつほー、翔。その制服、なかなか似合ってるんじゃない?」

「もう、そんなのんきなこと言ってる場合じゃないっスよ?もう始業式が始まつちやうのに全然来ないから、心配して呼びに来たのに。それで、アニキはどこにいるんスカ?もしかしてまだ寝て……」

病気だとかなんだとかよりもまずまっさきにまだ寝てるんじゃないかと疑うあたりは、さすがに十代との付き合いが長いだけのことはある。もつとも、今回に限ってはそうではないのだが。

「最近出歩くのが多くなったからねえ。まあそうそうぶらつく場所のパターンがある訳でもないし、今日は天気もいいからどうせアカデミアの屋上あたりにいるんじゃない?僕は荷物の準備してすぐ行くから、悪いけど2人で先に行ってよ」

「そう？じゃあ、遅刻しないようにね」

「十代にアニキを探しに行くザウルス、丸藤先輩！」

2人が出発したのを見送る暇もなく、すぐに寮に取って返す。常連の鮎川先生からの情報によると、来るんだか来ないんだか話が揺れまくっていた留学生は結局今年、それも今日来るらしい。船が到着するまで残りわずか、なんとかそれまでにこの手土産だけは作り終えたいのに……！

「つたく、確定してたんならせめてもうちよつと早く教えてくれればいいのに！昨日の段階でいきなり言われても無理だつて！」

もつとも、これについては鮎川先生のせいではない。春休みの間は僕が再試を受けてたりしたのもあって週に2〜3日程度しか店を開かなかつたから情報がこつちに来るのが遅れたのが原因だし、なんで店を開かなかつたのかといえば僕がサボってたからだ。

ただ人間、追い詰められるとろくなことを考え付かないものだ。寮にある年代物のオーブンの火力で悠長にこのマドレーヌを焼いてたら完璧に遅刻すると踏んだ瞬間、ある罰当たりなアイデアが閃いた。素早くデッキを取り出し、その中から1枚のカードを引っ張り出す。念を込めてそのカードをかざし、神経の全てを精霊の呼び出しに集中させる。

「メタイオン先生、お願いします！これ焼くのに火貸してください！」  
『……………』

何も反応がないのでさすがに呆れられたかと思つたら、壁の向こうから半透明の金属製の腕がスツと1本伸び、その指先から炎が吹き出されてオーブンごと包み込む。その腕の根本を見ると、窓の外にどアップで大笑いする顔が1つ。僕に力を貸してくれる2体目の神様こと、時械神メタイオンは意外とノリがいいことが分かつた瞬間だった。それにさすがは神様の火だ、ボロオーブンなんぞとは比べ物にならないほど熱く、かつ一瞬で消し炭にならないほどには力をセーブしてくれている。

……電気代もかかんないし、これから火の関係は全部この神様の火に任せようかな。つと、そんなこと言ってる場合じゃないんだつた。



さつさとこれ4つに分けて、遅刻する前に講堂に潜り込まないと。かなり分の悪い賭けだけど、それでもやらなきゃ無断欠席だ。

どうにか見とがめられることなく行動に潜り込み、気を利かせた万丈目が取っておいてくれた席に座れたのがそれから10分後。

「あ、危なかった……」

「清明先輩、俺たちでもかなりギリギリだったのによく間に合ったドン」

「えへへ、それほどでも。ところで剣山、なんで当たり前みたいな顔してレッド寮の席にいるの？」

「俺は寮なんかにはこだわらないんだドン」

「……あつそ」

さすがにこんな時ぐらいイエロー寮の位置に行かなきゃまずい気もするのは気のせいだろうか。でも先生達も何も言っていないなら、きっとそれでいいんだろう。こういうところはやけにアバウトな学校だ。在校中の学生が堂々と商売しても怒られないどころか先生まで買いくる時点で今更といえど今更だけど。

とにかく始業式はつつがなく進み、軽い校長の演説の後に新入生を代表してのレイちゃんからの挨拶、と順調にスケジュールをこなしていった。そして最後に、もう1度校長から話が入る。きつとここで、転入生について詳しい説明が入るだろう。一応生徒たちに正式な発表はまだない話だし。

「さて、ここで皆さんに重大な発表があります。今年は生徒たちのさらなる発展を願い、新しい生徒たちを受け入れることにした」

ここで言葉を切り、後ろのスクリーンに電源が点くと、なにやらそこに世界地図が表示された。

「デュエルの発展を願うアカデミアには、世界各地にその分校が存在する。今年はその主席の生徒たちを、我が学園に迎え入れることにしたのだ」

おっと、これは僕も知らなかった。でも分校の首席ってことは当然ノース校も入るんだろうし、1人は鎧田でほぼ確定か。だとするとあいつの分は別に用意しなくてもよかったかな、クツキー。なんとなく

後ろを振り返ると、自分の舎弟ともいえる鎧田が転入してくることに万丈目が何となく嬉しそうな顔になっていた。

「主席か、きつと強い奴ばっかりなんだろうな！くーっ、早くデュエルしてみたいぜ！」

「まあね。鎧田とは今まで1勝1敗なんだ、今年こそはケリつけてやるさ」

僕と十代だけがこんな調子なんじゃない。ざつと周りに目をやると、ほぼ全員が主席の転入という言葉にデュエリストとしての闘志を燃やしている様子が一目でわかる。特に葵ちゃんなんかがいい例で、もはや近寄りがたいほどの闘志を噴き出している。あ、今隣の奴が少し距離を取った。

「ではまず、デュエルアカデミアイースト校のアモン・ガラム君」

拍手の中を颯爽と歩いてくる、眼鏡をかけた爽やかそうな青年。だけれどなぜだろうか、その爽やかさの中にどこことなく胡散臭さが見えたような気がした。照明の加減でたまたまそう見えただけだろうか。

「デュエルアカデミアウエスト校代表、オースチン・オブライエン君」  
次いで現れたのはデュエリストというよりもや格闘家の域に達したかのような筋肉の、黒い肌の青年。なかなか油断ならない、鋭い目をしているのが印象に残った。つてかあの腰につけてるのって、もしかして銃なんだろうか。……まさか、ね。

「デュエルアカデミアサウス校代表、ジム・クロコダイル・クック君」  
「イエーイー！」

室内でカーボーイハット、なぜか片目に包帯とツツコミどころはいろいろある。あるのは間違いないけれど、正直そんなもの全部吹っ飛んだ。意気揚々と入ってきたジムが両腕で掲げたのは、なぜかワニ。どこからどう見ても、緑色のワニなのだ。しかもちよつと目をつぶったところを見ると、どうも生きた本物らしい。サウス校つてのはワニが生徒と一緒に住んでる学校なんだろうか。

でも、正直あのノリは嫌いじゃない。ワニって肉以外の、洋菓子は食べたりしないんだろうか。今度本人に許可とって試してみよう。

「最後にデュエルアカデミアアークティック校より、ヨハン・アンデル

セン君」

「最後にだど？ノース校からは誰も来ないのか？」

ちよつと拍子抜けしたような万丈目。それについては僕も同感だけど、これから来るヨハンとやらに罪はない。拍手して入場を待つも、いつまで経つてもその本人がやってこない。

「おや、ヨハン君はどこに行ったんですか？」

「まさにゴースト、か。実は我々も、船の上では1度も姿を見ていないんですよ」

校長とアモンの話を聞く限り、誰も本人を確認していないようだ。だが不穏な空気に会場が次第にざわつき始めて、収集使なるかに思えた次の瞬間、突然転機は訪れた。誰かが、講堂のドアを勢いよく開いたのだ。

「悪い悪い、すっかり迷っちゃまって！」

突然やって来た青髪の青年を見て、座っていた十代がいきなりあつと叫んで立ち上がる。

「おーい、何やってるんだよー！」

「あれ、十代の知り合い？」

「ついさつき会ったんだ。早く座れよ、今ヨハンってやつを探して……」

「あー、十代君。彼がヨハン・アンデルセンですよ？」

鮫島校長が大声で叫ぶ十代の言葉を遮ると、信じられないといった風に目を瞬かせる十代。一体どんな出会い方をしたんだろう、この2人は。とりあえず親友がこれ以上悪目立ちするのも忍びないので、服の裾を引っ張って強引に着席させておいた。

「お前、新入生じゃなかったのか？」

「いやー、騙すつもりはなかったけどつい言いそびれちゃまって。今校長が言ってくれた通り俺がヨハン・アンデルセンだ、改めてよろしくな、十代」

「あ、ああ……」

「どうして俺たちと同じクルーザーで来なかったんだ？せつかくの素晴らしいボヤージュだったのに。まあいいさ、これからよろしくなマ

イフレンド」

まだ驚き冷めやらぬといった調子の十代の代わりにということなのか、壇上からジムが手を伸ばす。その手を掴んでよじ登ったヨハンが、そのままがっちりと言と握手した。

ちよつとごたごたもあつたけど、とにかくこれで4人の留学生が全員そろつた……と思つたら、その後ろからさらに見たことのない大男が登場した。険しく濃い顔に大きなリーゼント、そして服を着ても全然隠しきれない明らかに堅気の人間とは思えないほどの筋肉というとにかく怪しいおっさんである。そのおっさんがつかつかと前に出て鮫島校長に一礼すると、校長も頷き返して話し出す。

「さて、ここにでもう一人紹介したい人がいます。彼はこのデュエルアカデミアに臨時講師として招き入れた、プロフェッサー・コブラです」  
「ペペロンチーノ!」

「なんでアール!」

鮫川先生からの情報にもなかつたこのプロフェッサー・コブラ臨時講師なる怪しい人。鮫川先生に黙っておく理由もないはずだし、今のクロノス先生とナポレオン教頭の反応と併せて考えても、どうやらこの人の存在は本当に校長一人の中だけで決められていたことらしい。

マイクを受け取つた。そして今度は僕ら生徒側に向き直り、低く威圧感たつぷりの声で話し出す。

「デュエルアカデミア諸君、私がプロフェッサー・コブラだ。本来ならば長々とした挨拶をするところだろうが、私はそういったものを好まないし、君たちもそれから得るものはないだろう。実戦あるのみ、それが私の信念だ。そこで早速だが、我々転入組と君たち在校生側から1人ずつ代表者を出しての模擬試合を行うことを提案する。いかがですか、鮫島校長?」

ふむ。確かに僕も長話は好きだけど長い演説や挨拶は退屈なだけだからね、そこらへんよくわかつてる人だ。鮫島校長がコブラ講師の言葉に静かに頷くと、唇を歪ませてにやりと笑う。

「では、お互いの代表だが……こちらからはヨハン・アンデルセン。こちらからは遊城十代の2名というのはどうだろう。どうやらすでに

知った仲のようだし、親交を深める意味でもちようどいいだろう」

「いいでしょう。十代君、やれますね？」

「もちろんだ！こんなに早くお前とデュエルできるなんて嬉しいぜ、ヨハン！頑張ろうな、相棒！」

「ああ、俺も嬉しいぜ。互いにベストを尽くそう！なあ、ルビー！」

その声に反応して、十代の方からはいつものハネクリボーの精霊が姿を見せる。だけど驚いたことに、ヨハンの方からも青っぽいグレーの毛皮を持つ猫に似たモンスターの精霊が飛び出してきた。普通に会話してることとは、どうやらあのヨハンも僕や十代、万丈目と同じく精霊が見えるタイプの人間らしい。1つの場所にこんなに精霊が見える人が集まるなんて、つくづく世の中面白いものだ。類は友を呼ぶ、ってやつなのかね。

さて、試合開始まであと1時間ある。僕が選ばれなかったのは残念だけど、逆に考えればこの1時間を自由に使えるということでもある。コブラ講師のぶんはないけど、せめてあっちの4人には早速お菓子渡してこよう。控え室にでも行くのだろうか、入ってきたドアからまた出ていく5人をこっそり追いかける準備に入った。

「んー……サッカー、どう？」

講堂を出てから、かれこれ10分は経っただろうか。みんなどこで待機してるのか、それらしき部屋を探し回ってもなかなか見つからない。途中から精霊達まで駆り出して探し回っているのだが、この学校は無駄に部屋が多いせいかな難航してるようだ。

「駄目かー、気にしなくていいよ。ラブカは？うさぎちゃんは？イーグルも見つけられなかったって？……え、あっち？了解、ありがとー！」

一応プライバシーの問題もあるから個室は覗かないようにって厳命してたけど、それでここまでしないと見つからないってことはもしかしてもすでにそれぞれの個室ないし寮が用意されてるのだろうか。その線は十分あり得る……というかそれが普通なんだけど、ただあの4人の話だって昨日の段階でようやく校内に知らされたことな上に、

プロフェッサー・コブラについては校内でただ一人校長しか知らなかった点が引つ掛かる。そんなかつつかつのスケジュールで都合よく空き部屋なんて見つかるもんかね？

どうもよくわからなくなってきたので一度精霊たちにお礼を言つてカードに戻つてもらい、とにかく教えてもらった場所、玄関ホールへと歩き出す。するとすぐにその隅で、なにやらオブライエンとプロフェッサー・コブラが話し込んでるのが見えた。

この時、なぜ咄嗟に身を隠したのかは自分でもわからない。別に僕も悪いことを企んでいるわけではないし、やましいこともそんなにない。あえて理由をひねり出すとしたら、高校の教師と生徒の会話にしては妙に異質で重苦しいその2人の周りの空気に嫌な予感を感じた、といったところだろうか。周りには他に誰もいないことも相まってその会話が聞こえてきたが、断片的にしか聞こえなかったことも相まって今一つ要領を得なかった。ただどうも、遺跡がどうか研究所がああだとか、しばらく監視がどうかそんな物騒な単語ばかり聞こえてくる。これは、少しあの2人は警戒した方がいいかもわからないね。少なくとも、何かしら裏の顔があるのだろう。そうこうしているうちにプロフェッサー・コブラが外に出ていき、しばらくそれを見送っていたオブライエンも踵を返す。そして僕が隠れている方を真っ直ぐ見て、有無を言わさぬ調子で話し出した。

「そろそろ出てきたらどうだ？その柱の陰にいるのはわかっている」  
「う。や、やっほー」

隠れても無駄だろうし、下手に逃げたりして警戒されるよりはいつそ気軽に出ていく方がいい。そう判断して、できる限り友好的に姿を現す。次の瞬間には鋭い視線に射抜かれて、すぐに出てきたことを後悔した。

「この学校の生徒か……ここで何をしていた？正直に言え。それにその荷物、一体何を持っている？見せてみる」

そう言って指差したのは、ずっと僕が右手に下げていたそこら辺の紙袋に詰めたマドレーヌ。集音マイクでも警戒しているのか、妙にピリピリした様子で奪い取ろうとする。そしてその動きを、多分僕に対

する攻撃だと勘違いしたのだろうか。

あつと思つた時にはもう遅かつた。いきなり出てきたシャーク・サツカーが一瞬だけ実体化して、軽くとはいえオブライエンの手に噛みついたのだ。そこまで痛くはないだろうけど、不意打ちとしては申し分のない威力だろう。

「……………ッ!!」

急な苦痛に顔をしかめるも悲鳴を上げることなく、目にも止まらぬほどのスピードで手を引っ込めるオブライエン。気持ちは嬉しいけどサツカー、それは今やつちやまずい。

「お前、今のは一体何を……………」

「ご、ごめんなさいごめんなさいー!」

これ以上怒られる前に全力で謝る。だってこれ、どこからどう見ても悪いの完全に僕らだし。僕の精霊のミスなんだから、僕がその責任を負うべきだ。幸いにも根は悪い奴じゃないのか、その様子を見て若干毒気を抜かれたような表情になるオブライエン。元の落ち着いた態度に戻り、噛まれた手を一振りして話を戻した。

「ま、まあいい。今のは俺も強引だったかもしれないからな。だがいったい、本当にここで何をしていったんだ?」

「ああ、はいこれ。もう噛まないから大丈夫」

そこでようやく僕も本来の目的を思い出し、さつき強奪されそうだった紙袋を渡す。さすがに警戒した表情のオブライエンに半ば強引に押し付けると、しぶしぶといった様子で包みを開けた。中身を一目見て、その表情がいよいよ困惑したものに変わる。

「なんだ、これは?」

「マドレーヌ。美味しいよ」

「これを俺に渡して、一体どうしろと」

「ふむ、それもそうか。じゃあ最初つから説明しようか、まず僕はオシリスレッド所属生徒兼洋菓子屋『YOU KNOW』デュエルアカデミア支店取締役代表の遊野清明。それはうちの店を出してる商品の1つのマドレーヌ。ここまではオーケー?」

話の先が読めない、といった様子で無言で頷くオブライエン。その

反応にちよつと満足して勢いづき、さらに言葉を紡ぐ。

「これは悪いんだけど、転入生全員に渡しておいてくれない？今回はタダでいいからさ、美味しかったらまたぜひ買いに来てねって伝えておいて」

もし今後1人でもリピーターが増えるのであれば、ここで無料で配ったとしてもこの1年で元は十分に取れるとの計算あつてのプレゼント。だから新入生歓迎会にも何か差し入れを持っていきたいところだけど、まあ今はいいだろう。とにかく損して得取れ、が商人としての遊野家のモットーです。親父の場合損したうえで損ばつか取ってるからいつまで経っても儲からないんだ、せつかく腕はいいのに。

「あ、ああ……そうか、悪かったな、変に勘ぐつて。何か詫びをしたいところだが、あいにく持ち合わせが……」

その言葉を聞いて、1つアイデアを思い付いた。元々今日は十代だけにスポットが当たってるんで、ちよつと羨ましかったんだ。

「じゃあさ、オブライエン。僕とデュエルしてよ」

「何？」

「デュエルアカデミアウエスト校主席の実力……一丁手合せと洒落込ませてもらいたいってことさ」

「ふつ、いいだろう。ただし、後悔するなよ？」

目にも止まらぬ速さで腰に差した銃のようなものを引き抜くと、なんとその中にデツキを収める。ここでようやく、あれがデュエルディスクだったことに気が付いた。普通に考えてわかるかそんなもん。

「デュエル！」

先攻はオブライエン。ちようどいい、一体どんなデツキを使うのか、せめてその1部だけでも見せてもらおう。

「俺は、ヴォルカニック・ロケットを召喚する。そしてこのカードは場に出た時、デツキからブレイズ・キャノンと名のついたカードを1枚手札に加える効果を持つ」

先攻1ターン目のサーチは、どうしようもない。止める手立てもないので、大人しく見ているしかなかった。



「俺はこれで、ターンエンドだ」

「まずは様子見、つて？ 僕のターン、ドロー！ 僕は、シャクトパスを召喚！」

シャクトパス 攻1600

「ほう？ だが俺のヴォルカニック・ロケットの方が、攻撃力は上だぞ？」

疑問に思うというよりも、むしろからかっているようなオブライエンの言葉、さすがは主席、これをただのプレイングミスだとは思わないか。まあ、思ってもらっちゃこつちとしても歯ごたえないんだけどね。まだまだデュエルは始まったばかり、これからじっくり楽しもう。

「さらにカードを2枚セットして、ターンエンド」

オブライエン LP4000 手札：4

モンスター：ヴォルカニック・ロケット（攻）

魔法・罠：なし

清明 LP4000 手札：3

モンスター：シャクトパス（攻）

魔法・罠：2（伏せ）

「俺のターン、ドロー」

今引いたカードを見て、少しの間何かを考えるオブライエン。僕が伏せたカードに何かあるのか、それとも単純にシャクトパスの効果である自身を戦闘破壊した相手に憑りついて攻撃力を0にする効果を狙っているのかを検証しているのだろう。さあて、どっちだろうね。僕としては、攻撃してくればそれでいいんだけど……だが、そんなことを考えたのがまずかったようだ。

「先ほどサーチしたカード、ブレイズ・キャノンを発動。ブレイズ・キャノンは手札から攻撃力500以下の炎族モンスター1体を墓地に送ることで相手モンスター1体を破壊し、さらに相手に500ポイントのダメージを与える。攻撃力1000のヴォルカニック・バレットを墓地に送り、お前のシャクトパスを破壊する！」

「しまった、効果破壊か！」

砲台の銃身がこちらを向いたかと思うと、勢いよく先ほど入り込んだトカゲが撃ち出される。戦闘についてはいくらでも手が打てたけど、こういうバーン戦法を使ってくる相手だと僕の伏せカードもシャクトパスの効果も今はまるで機能しない。

清明 LP4000↓3500

「これで次はダイレクトアタック、つて？」

「いや、ブレイズ・キャノンを使うターンに俺はバトルフェイズを行えない。だが、モンスターを出すことはできる。ヴォルカニック・エッジを召喚し、効果発動！1ターンに1度、相手に500ポイントのダメージを与える！」

「くっ……い！」

2足歩行するトカゲのような生き物が、口から燃える溶岩の塊を吐き出して攻撃してくる。この伏せカードは使えず手札にも幽鬼うさぎのカードがない今それに反応してアクションを起こす手立てはなく、その直撃を受けてしまった。

清明 LP3500↓3000

お互いにまだ1度も攻撃をしていないのに、僕のライフはすでに半分近く削られてしまった。今の時点では勝負の流れは完全にオブライエンに来ている、このままだとまずい。どうにか次のドロイーでヴォルカニック・エッジかブレイズ・キャノン、せめてどちらかだけでも無力化しないと。

いや、待て待て。ブレイズ・キャノンには手札コスト、それも攻撃力500以下の炎族というかなり条件の限られたコストが必要なことを思い出した。確かにデッキのモンスターの比率はある程度そのために調整してあるだろうけど、少なくとも次のターンで早急に対策を考える必要もないか。

「カードを1枚セットし、ターンエンドだ」

「僕にはまだこの手があるね。ドロイー、グレイドル・コブラを召喚！そしてトラップカード、グレイドル・スプリットを発動！これは発動後装備カードになって、攻撃力を500ポイントアップさせる」

銀色の水たまりから赤いコブラの姿が湧きあがり、長い体でどっし

りにとぐろを巻く。普段ならここで戦闘破壊を待つところだけど、向こうにその気がないのならばこつちも無理にやるつもりはない。代わりに自分から動くまでだ。

グレイドル・コブラ 攻10000↓15000

「そしてグレイドル・スプリットのさらなる効果を発動！装備されたこのカードを墓地に送ることで装備モンスターを破壊し、デッキから名前の異なるグレイドルモンスターを2体まで特殊召喚する。イーグル、そして2体目のコブラを特殊召喚！」

コブラの体がいきなり頭から3つに裂け、そのパーツがそれぞれ独立、再生して1つは2匹目のコブラに、そしてもう1つは黄色い鳥の姿に変わる。そして残りの1つは銀色の水たまりとなって地を這い、ヴォルカニック・ロケットの足元に潜り込んだ。

グレイドル・コブラ 攻10000

グレイドル・イーグル 攻15000

「なるほど、モンスターの数を増やしたか。だがそんなことをしたところで、俺のヴォルカニック・バーンには無意味だ」

「だろうね。だけど僕の狙いはそこじゃない、トラップカードの効果で破壊された1匹目のコブラの効果発動、相手モンスター1体に寄生してそのコントロールを永続的に得る！そしてその対象とするのはヴォルカニック・ロケット！」

潜り込んでいた銀色の液体が文字通りロケットのように流線形をしたモンスターの表面を這い、その内部へと入ってゆく。

「寄生完了、ヴォルカニック・ロケットでヴォルカニック・エッジに攻撃！」

ヴォルカニック・ロケット 攻19000↓ヴォルカニック・エッジ

攻18000 (破壊)

オブライエン LP40000↓39000

「そのままバトル、コブラとイーグルでダブルダイレクトアタック！」  
「永続トラップ発動、フレイム・ウォール！このカードは墓地の炎族モンスターをゲームから除外し、相手の直接攻撃1回をストップさせる。俺は墓地のエッジとバレットをゲームから除外し、その攻撃を無

効にする！」

2体のグレイドルの猛攻が、噴き上がる炎の壁に阻まれる。惜しい、この攻撃が両方通れば大ダメージだったのに。だけど気を落としてはいられない、まだやることがあるのだ。

「だったらメイン2にリバースカード、海竜神の加護を発動！このターンレベル3以下の水属性モンスターは、戦闘でもカード効果でも破壊されない。グレイドル・スプリットには呼び出したモンスターをエンドフェイズに破壊するデメリットがあるけど、この効果が切れるより先にその処理を済ませておけばデメリットなしでイーグルとコブラを場に出したままにできるって寸法さ。僕はこれで、ターンエンド」

オブライエン LP3900 手札：4

モンスター：なし

魔法・罫：フレイム・ウォール

清明 LP3000 手札：3

モンスター：グレイドル・イーグル（攻）

グレイドル・コブラ（攻）

ヴォルカニック・ロケット（攻・コブラ）

魔法・罫：グレイドル・コブラ（ロケット）

「俺のターン、ドロロー。最初に1つ謝っておこう、正直言ってこのデュエルが始まる前、俺はお前のことを舐めてかかっていた。お前の評判はある程度聞いてはいたが、それでも俺のライフに傷を負わすことができるとは思わなかった」

「僕の名前もついに海を渡って知れ渡ったのかね。別にいいよ、舐めてくれた方がこっちとしてはやりやすいさね」

ちよつとムツとしたのでそう返すと、ほんの少し唇を歪ませて苦笑するオブライエン。まったく、ダメージ1つ通らないとかどれだけ雑魚扱いしてたんだか。だからこそひっくり返しがいるんだだけだね。

「スタンバイフェイズ、俺はフレイム・ウォールの維持コストとして500ライフを支払う。そしてメインフェイズ、俺は場のブレイズ・

キャノンを墓地に送り、その改良型……ブレイズ・キャノン→トライデントを発動する！」

トライデントの名の通り、主砲が3つに分かれた第2のブレイズ・キャノンがオブライエンの場にそびえ立つ。改良型、というからは、何か先ほどとは違う部分があるのだろう。ブレイズ・キャノンの欠点を補うような何かがある。

オブライエン LP3900↓3400

「トライデントは初期のブレイズ・キャノンとは違い、手札から炎族モンスターを墓地に送ることでモンスターを破壊し、相手に500ポイントのダメージを与える」

「攻撃力制限がなくなった、ってことか……！」

まあ、強化するとしたらその1点だろう。だがオブライエンが手札から見せたモンスターは、僕の想像を上回っていた。

「俺は攻撃力500、ヴォルカニック・バックショットを墓地に送る！まずトライデントの効果でグレイドル・イーグルを破壊し、さらにバックショットの効果を発動！このカードがブレイズ・キャノンの弾となった時手札及びデッキから2体のバックショットを追加で墓地に送り、相手モンスターをすべて破壊する！」

「なっ……！」

「殲滅せよ、バックショット！」

トライデントの3つの砲台からそれぞれ1体ずつの三つ首のトカゲが打ち出されてロケットを、イーグルを、そしてコブラをそれぞれ焼き尽くす。1瞬にして、僕のフィールドの3体ものモンスターが完全殲滅された。

「まさか3体がいっぺんにやられるなんて……！」

「まだだ！バックショットは墓地に送られた時、相手ライフに500のダメージを与える。それが3体分と、さらにトライデントの効果ダメージ500を受けてみる！」

「うわっ!?!」

清明 LP3000↓1000

地面から炎が噴き上がり、僕の全身を覆う。一瞬にして初期ライフ

の半分を奪うその熱の前になすすべもなく、まさしく僕のフィールドは焼け野原になった。

「この効果を使うターン、俺は攻撃宣言を行えない。ヴォルカニック・カウンターの守備表示で召喚し、さらにカードをセットしてターンエンドだ」

ヴォルカニック・カウンター 守1300

炎を噴き出す獣のようなモンスターが、オブライエンのフィールドで威嚇の体勢をとる。見かけに反して守備力は低いけど、さつきからバーン効果を持つモンスターが多いヴォルカニックのことだ。恐らくただの壁では済まないだろう。そしてそれより問題なのが、炎族を墓地に送るだけでモンスターを破壊して500のバーンを行うトライデント。仮に守りを固めたとしてもトライデントの1撃が飛んでくるし、かと言ってモンスターを出さなければ確かにトライデントからは身を守るけどモンスターを出せば直接攻撃されるから結局はその場でお陀仏はほぼ確定みたいなものだ。面白い、燃えてきた！

「僕のターン！これがラストチャンス……引いてみせる、ドロー！」

ドローカードを確認する。来た、このカードだ！

「相手フィールドにのみモンスターが存在するとき、このカードはリリースなしで召喚できる。天をも焦がす神秘の炎よ、七つの海に栄光を！時械神メタイオン、降臨！」

魂のこもった鎧が、天空かなたから降臨する。目には目を、歯には歯を……炎を使うヴォルカニックには、こつちも炎で対抗してやろう。

時械神メタイオン 攻0

「メタイオン先生でカウンターに攻撃、ケテルの大火！そしてこの神の炎はモンスターを傷つけることなく浄化し、さらに相手のライフを直接焼き払う！」

「何?！」

メタイオン先生の放った炎が、燃え盛るオブライエンのモンスターを包み込む。さすがに神の炎は並のものじゃない、フィールドは一瞬でメタイオン先生のみ場所となった。

時械神メタイオン 攻0↓ヴォルカニック・カウンター 守130

0

オブライエン LP3400↓3100

「時械神メタイオンがバトルした時そのダメージは0となり、さらにバトルフェイズ終了時にお互いのフィールドに存在する自身以外の全モンスターをバウンスしてその数1体につき300ダメージを与える！カードをセットして、ターンエンド。先に言っておくけど、メタイオン先生は次の僕のスタンバイフェイズにデッキに戻る効果があるよ」

「そうか。エンドフェイズに永続トラップ、ブレイズ・キャノン・マガジンを発動！1ターンに1度手札のヴォルカニックを墓地に送ることで、カードを1枚ドローする。バウンスされたカウンターを墓地に送り、1枚ドローだ」

オブライエン LP3100 手札：3

モンスター：なし

魔法・罠：フレイム・ウォール

ブレイズ・キャノン・トライデント

ブレイズ・キャノン・マガジン

清明 LP1000 手札：2

モンスター：時械神メタイオン（攻）

魔法・罠：1（伏せ）

さて。おそらく今、オブライエンは迷っているはずだ。結局このターン、トライデントが場に存在したままのことに変わりはない。トライデントの効果を知っているにもかかわらずモンスターを並べてきた僕の行動を見たうえで、あえて仕掛けてくるのか。それとも警戒し、動かないままターンを消費するのか。

「俺のターン、ドロー。スタンバイフェイズにフレイム・ウォールの維持コスト500ポイントを支払う。そして速攻魔法、異次元からの埋葬を発動。ゲームから除外されたヴォルカニック・エッジ、バレットを墓地に戻す。さらに炎帝近衛兵を召喚し、効果を発動。自分の墓地から炎族モンスターを4体選択し、デッキに戻すことでカードを2枚

ドロ―する……俺が選ぶのはバックショット2体にロケット、そしてエッジ。ドロ―！」

オブライエ恩 LP3100↓2600

炎帝近衛兵 攻1700

「魔法カード、死者転生を発動。手札1枚をコストに、墓地からバックショットを手札に加える」

これで、オブライエ恩のデッキには2体、手札に1体のバックショットがある。つまり、これでいつでもさっきの強烈な一斉射撃をまた飛ばすことができるというわけだ。なるほど、これを狙うためにわざわざ炎帝近衛兵の効果に繋がったのか。

「このデュエルもこれで終わりだ、ブレイズ・キャノン・マガジンの効果もう1度発動！手札のバックショットをコストにしてカードを1枚ドロ―し、そしてブレイズ・キャノンの効果で墓地に送られたバックショットの効果！3体を墓地に送ることで殲滅効果を発動し、1500ポイントのダメージを受けてみる！」

メタイオン先生は戦闘でも効果でも倒れないから、全滅効果ごときで破壊されたりはしない……だけど、問題は僕だ。確かに僕のライフが尽きさえすれば、モンスターがどうなろうと問題はないだろう。

「だけど、こんなところで！トラップ発動、レインボー・ライフ！手札1枚をコストに、このターン僕が受けるダメージをすべて回復に変換する！」

清明 LP1000↓2500

「かわしたか……」

「まあね。次は何を見せてくれるのさ？」

「ならば見せてやろう、俺のエースを！まずブレイズ・キャノン・マガジンはフィールド上で、ブレイズ・キャノン・トライデントとして扱う。そして場に存在するブレイズ・キャノン・トライデント、つまりマガジンを墓地に送ることで、このカードは特殊召喚できる！出だよ、ヴォルカニック・デビル！」

トライデントが地中から溢れ出る熱にぐずぐずに溶け、その残骸を吹き飛ばすようにこれまでで一番大きな火柱が噴き上がる。溶岩が



形を成したかのようなその体は常に周りの空気が揺らぐほどの熱を放ち、頭の上にはまるでたてがみのようになびくオレンジ色の炎が一筋燃え盛っている。その姿はまさに、地獄の底から熱と共に地表に現れた悪魔そのものだ。

ヴォルカニック・デビル 攻3000

「破壊ができない上に次のターンでデッキに戻るのならば、今攻撃する意味はないな。カードを1枚伏せ、ターンエンドだ」

「僕のターン、ドロロー！まずスタンバイフェイズ、メタイオン先生はデッキへと戻る。そして魔法カード、サルベージを発動。墓地から攻撃力1500以下の水属性2体、グレイドル・コブラ2体を手札に。そしてこの2体をデッキに戻し、強欲なウツボを発動。この効果で、デッキからカードを3枚ドロロー！」

バーン戦術からうってかわって、急に表れた高打点モンスター。なるほど、ビートとバーンの使い分けができるデッキという訳か。さすがはウエスト校主席、ノース校トップの鎧田に負けず劣らずの厄介な敵だ。

いや、だったというべきか。僕の手札には今のドロローで、勝つために必要な要素は完璧に揃った……………！

「魔法カード、浮上を発動。墓地からレベル3の水族モンスター、グレイドル・イーグルを蘇生！」

「む……………」

再び銀色の水たまりが湧きあがり、黄色の鳥がその翼を構成する。

グレイドル・イーグル 守500

「さらに手札から、グレイドル・アリゲーターを召喚する」

グレイドル・アリゲーター 攻500

「一体何をやる気だ？」

「黙って見てな、手札からグレイドル・スライムの効果発動！このカードはフィールドのグレイドルカード2枚を破壊することで手札から特殊召喚できる！」

グレイドル・スライム 守2000

イーグルとアリゲーターが溶け崩れ、寄り集まってグレイ型宇宙人

を模したような姿の銀色のスライムになる。その長い指で地面をさすと、その場所から銀色の水たまりがまた湧きあがった。

「この瞬間自身の効果で特殊召喚に成功したスライムと、モンスター効果によって破壊されたイーグルの効果発動！イーグルでヴォルカニック・デビルに寄生し、さらにスライムの効果で墓地のアリゲーターを蘇生！これで一発逆転だ！」

グレイドル・アリゲーター 守1500

「……まさか俺のヴォルカニック・デビルまでコントロールを奪うとは、たいしたものだ」

「褒め言葉として受け取っておくよ。バトル、デビルで炎帝近衛兵に攻撃！」

銀色の紋章が頭に輝くデビルが、火山弾を勢いよく打ち出して真っすぐ赤い鱗に覆われた竜人のようなモンスターを狙う。だがその灼熱の攻撃から一切目を逸らすことなく、オブライエンが更なる伏せカードを発動させた。

「だが、すでに一度かかった手にそう簡単にかかりはしない。その寄生が俺の計算のうちだとしたら、どうする？速攻魔法、突進を発動！」  
「モンスターの攻撃力を700ポイントアップさせるカード？そんなことしたところで、ダメージを減らす役にしか……」

「俺はこの効果を、ヴォルカニック・デビルに対して発動させる！」

唾然として見守る中、デビルの筋肉が突然盛り上がる。より強大な熱量を受け一回りも二回りも体が大きくなり、その分だけ火山弾のサイズと威力も跳ね上がった。

ヴォルカニック・デビル 攻3000↓3700↓炎帝近衛兵 攻  
1700 (破壊)

オブライエン LP2600↓600

「なんでわざわざ、自分のダメージを跳ね上げるような真似を……」  
「教えてやろう、墓地からヴォルカニック・カウンターの効果を発動！このカードと他の炎属性モンスターが墓地に存在して俺が戦闘ダメージを受けた時、このカードを除外することで俺の受けた戦闘ダメージと同じ数値のダメージを相手に与える！」

「嘘でしょ!?ぐわっ!」

突如半透明になって現れた炎の獣が飛びついてきて、その牙でしたたかに僕に噛みつく。まさに肉を切らせて骨を断つ、なんてとんでもない戦法なんだ。これだけのデュエルの腕があれば、そりゃあ主席にでもなんでもなれるだろう。

清明 LP2500↓500

「だけど、まだまだ……僕は、これでターンエンド!」

オブライエン LP600 手札：0

モンスター：なし

魔法・罫：フレイム・ウォール

ブレイズ・キャノン・トライデント

清明 LP500 手札：0

モンスター：ヴォルカニック・デビル（攻・イーグル）

グレイドル・スライム（守）

グレイドル・アリゲーター（守）

魔法・罫：グレイドル・イーグル（デビル）

オブライエンの場にはまだブレイズ・キャノン・トライデントがあり、僕の間には3体のモンスターがいる。お互いにハンドレス状態の今、次のオブライエンのターンで炎族モンスターを引かれない限り僕の負けはない。これは単純な運、リアルラックの勝負だ。

だがオブライエンは表情一つ変えることなく、無造作にも見える動きでカードを引いた。

「残念だが、このデュエルはもう終わっている。確かに運の勝負にもつれ込んだとしたら、俺の今引いたカードは2枚目のマガジンでお前の勝ちだ」

「どういう意味?」

どうも言い方が引つ掛かる。すると突然オブライエンの足元の床が爆ぜ、炎に身を包んだ小さなトカゲが跳ね上がった。見ているうちに見覚えのあるそのトカゲが、いまだこちらを向く三つ又の砲台の、真ん中の1つにするりと入り込んでいった。

「墓地に存在するヴォルカニック・バレットの効果を発動。このカー

ドが墓地に存在するとき1ターンに1度だけ、500ライフを払うことでデッキから同名カードを1枚サーチすることができる」

「なっ……!?!」

オブライエン LP600↓100

「ブレイズ・キャノン→トライデントの効果発動!今加えたバレットをコストに、グレイドル・スライムを破壊し500ダメージを与える!」

勢いよく放たれた炎の弾丸が、銀色の宇宙人型スライムの頭部に命中して爆散させる。首から上がまとめて吹っ飛ばされて統制を無くした体が銀色の水たまりになって消えていく横で、爆ぜた火の粉が僕にも降りかかった。

清明 LP500↓0

「あー、負けたー……」

悔いがないと言えば嘘になる。どれだけ追いつめたって、結局負けちやううちは僕もまだまだだ。いや、ただ負けただけならここまで悔しくはないだろう。ただ問題なのは、途中から完全に僕の行動が読まれて誘導されていたことだ。今になって思い返せば確かに、グレイドルがコントロールを奪うテーマだということを知ったあのタイミングで攻撃力3000ものヴォルカニック・デビルをのこのこ特殊召喚したのは不自然だった。

要するにあの時にはすでに、オブライエンにはこの結果が予想できていたのだろう。そして僕はまんまと読み通りにコントロール奪取した、というよりさせられたデビルで攻撃を行い、カウンターの一撃で大ダメージを受け、墓地に温存してあったバレットの効果で弾を補充したトライデントの一撃を喰らったわけだ。

ライフポイントだけ見ればパッと見ギリギリの勝負でも、デュエルの流れ自体はほぼオブライエンに持ってかれていた。これが、デュエルアカデミアウエスト校トップの実力か。

「ありがとう、わざわざ付き合ってくれて」

「いや、礼を言いたいのは俺の方だ。対人戦は久しぶりだったからな。1人で訓練しては絶対に味わえない、勝負の感覚を思い出すことができた」

「そりやどうも。……でも、次は負けないよ」

まだ心は折れてないことを示すために言い返し、右手を差し出す。一瞬その手を困ったように見ていたオブライエンだったが、すぐにその意味を理解して苦笑しつつも右腕を差し出すと、ぐっと握り返してきた。

そんなことをしている間に、すっかり時間がたってしまったようだ。ふと何気なく玄関ホール備え付けの大時計に目をやると、もはや十代とヨハンのデュエルまでほぼ間がない。

「あつちやー、まだいい席取れるかな？じやーねー、また今度会おう！あ、それとその中身、ちゃんと他の人たちにも渡しておいてよー！」  
「わかった。仕方ないな、気は進まないがそれぐらいなら問題もないだろう。引き受けた」

デュエルが始まるまで、あと10分強。まずは場所を取ることが最優先として……だけどそれ以外にも考えることが、今日のデュエルからは見えてきた。

グレイドルの寄生は恐ろしい力を持つが、その強さは攻め手が単調になる弱点と裏返しの関係にある。それでも並みの相手なら、ポテンシャルの高さを生かして押し切ることもできるだろう。だが、すでにタネがばれている者や今のように応用力の高い強者が相手だったら？目の前の敵にやみくもに寄生するだけだと、今回のように寄生相手を誘導されてこっちが掌の上で踊らされることになってしまう。かといって寄生しないという選択は、グレイドル単体での戦闘能力の低さを考えると現実的でない。元から僕のデツキに入っているモンスターたちも頑張ってくれてはいるのだが、どうしたって改造前と比べてデツキそのものの戦闘力が低くなっていることは否めないわけだ。

これはこのデツキの致命的な弱点だ。ここを補完しない限り、僕はグレイドルのポテンシャルを最大限に引き出せていない。何か改善案を考えなければならぬだろう。

## ターン75 鉄砲水と七色の宝玉

「まさかこんな形で、十代の親友とデュエルすることになるとはな。俺から言い出しておいてなんだが、せつかく精霊が見える者同士、君とはもつと別の形でデュエルしたかったよ」

そう言うヨハン相手に、僕は軽く肩をすくめて見せる。

「ま、これも頼まれごとなんでね。僕にとっては友達の人からの。それじゃあ、デュエルと洒落込もうか」

もはや何を言っても無駄と判断したのか、デュエルディスクを構えるヨハン。そしてその腕には、不気味に輝く腕輪のようなデスベルト。僕も同じく腕にはめたデスベルトを一瞥し、デュエルディスクを起動させた。

「デュエル！」

……さて、なぜ僕とヨハンがデュエルすることになったのか。その訳は、今日の昼にまでさかのぼる。

十代とヨハン、ネオスペーシアンと宝玉獣の戦いから丸一日が経った。それにしても、今日のデュエルは面白かった。たった7枚しかモンスターが入っていないデッキであそこまで戦線を維持できるだなんて、手札事故を絶対に起こさない十代と同じくヨハンもかなり精霊から愛されていることがよくわかった。

というのもこれはチャクチャルさんからの受け売りだけど、いわゆるデッキの事故率というのはひとえに自分のデッキとの相性、というかどれだけデッキが頑張ってくれるかによって決まるからだ……らしい。例えば十代のデッキなんかは、ただでさえコンボ性が高い融合軸のHEROに加えて今はうまくコンタクト融合につなげないと厳しいネオスペーシアンまで入っているから、仮に僕が渡されたとしても絶対に十代みたいなぶん回しはできない。事故が激しくて融合召喚どころか、モンスターを出すのがやつとだろう。また僕のデッキも、枚数の多さから考えるとあり得ないぐらいに事故率は低い。精霊

の皆が、陰ながら僕のデッキに力を貸してくれているからだ。ただ肝心の僕が、その力を使いこなせていないだけで。

「心機一転、これから頑張ろうねー」

精霊たちに、そして自分自身に言い聞かせて大きく背伸びをしようと、腕に付けた腕輪のようなものが電球の光を反射して鈍く光った。これこそがプロフェッサー・コブラの導入した装置……えーっと、なんだっけ。デスクなんちゃらデュエル用のデスベルトだ。いやでも、デスクって机だよ。いくらなんでも、ちよつとこれじゃあ意味が通じないんじゃないかな。うん。

「チャクチャクさん、さっきの話聞いてた？」

『まあな。ディスクロージャーデュエル、だな。マスターの横文字の割にはかなりいい線行っていたぞ』

「……前々からちよいちよい思ってたけど、結構ナチュラルに馬鹿にしてくるよねチャクチャクさん」

『それほどでも』

それ以上の追及は諦め、改めてデスベルトを見る。なんでもこの凄いやマシンは、これをつけた人間がデュエルをするたびにその熱い思いや情熱といったものをエネルギーとして抽出し、数値化することができるという代物らしい。何度聞いてもさすがは海馬コーポレーションの学校、とんでもないテクノロジーだ。

『そこが気にかかるんだ、マスター』

「え？」

そこで再び、チャクチャクさんから声がかかる。本気で訝しんでいるようなその声音に、なぜか嫌な予感がしてきた。

『確証があるわけでもないし、そもそも機械は私も詳しくないから先ほどは何も言わなかったが……この技術はどちらかという和我々寄りなのはどうも気にかかる。何かするたびにエネルギーが吸われるなんて、私も昔に頼まれて作ったことがあるが、呪いのマジックアイテムといった方が近いのかな』

「え、ちよ、それって……」

待て待て待て。とりあえず取り外そうとあれこれいじってみるが、

どうやら1度付けたら簡単には取り外せない仕様のようだ。留め金ごと捻り潰すぐらいのつもりでやれば外せなくもないだろうけど、これ壊したら弁償代いくらするんだろう、と思うとついつい手から力が抜ける。

それにこれがないと、今後の生活にも困ってしまう。なにしろ少なくともプロフェッサー・コブラが臨時講師をしているうちはここから出たデータを基にして成績が決定するせいで、もし下手にはずして一切僕の分だけデータが送られないとかになるとそのまま退学もあり得るとのことだ。なんとなくだけど、あのおっさんなら脅しじゃなくて本気でやりかねないのが怖い。

『……すまない、脅すつもりはなかったのだが。無論、技術の進歩という可能性もある。とにかくマスター、酷なようだが1度使ってみてくれ。効果の程を直接見てみないと、説明だけでは何とも言えない』  
「う、うーん……」

呪いのアイテムなんて言われると、なんだか本当にそんな風にも見えてきた。電球の光を反射するデスベルトが、妙に冷たく光っている気がするのは目の錯覚か気の迷いだろうか。

『万一厄介な代物なら、私のエネルギーを代わりに流すなり力技で解除するなり、私が責任を取ってどうにでもしてみせる。だから案じないでくれ、マスターは私が守ろう』

「ありがと。でもチャクチャルさんの言うとおり、まずはとにかく実戦で確かめてみないとね」

もしアレな代物だった場合、その相手にも迷惑をかけることになるわけだけど。まあなんだかんだ言ってもここは学校で、デスベルトはその支給品だ。まさか1年の三幻魔、2年の光の結社と続いてこれ以上何かが起きるわけもないだろう。そんなことになったら、さすがに波乱万丈の学園生活なんてもんじゃない。

なんでもデスデュエルは、今日の放課後のどこかで正式に開始のアナウンスが入るらしい。どうせなら人柱的な意味でも1番乗りがいしい、誰かいい相手を探しに行かなくちゃ。デッキの確認を最後に行い、デュエルディスクとデスベルトだけ持って外に出た。



特に行きたい場所もなかったので風任せに森の方へ歩いていくと、やがて海沿いの崖に出る。この辺りは特に高くて急な場所で、ロープの1本も張ってないのは危ないんじゃないだろうかといつ来ても思うけど事故が起きたなんて話を聞いたことがないあたり大丈夫なんだろう。潮風に当たりながらそんな場所をふらついていると、何か異様な光景が見えた。

……いや、異様ななんてもんじゃない。なんだあれは、変な奴がいるぞ。その人影はなぜか崖際の本の海に向かって突き出た枝にロープを固定し、そこに自分の足をくくりつけていた。もしロープが切れたら10メートルはあるうかというこの崖を真つ逆さまなのでこれだけでも十分訳が分からないのだが、それだけではなかった。なんとその人影はそんな天地逆転した姿勢のまままで体がぶれないようにバランスを取りつつ、腕のデュエルディスクからカードを引いていたのだ。シユールすぎて笑いも湧いてこない光景だったが、さらに近づいてよく見るとその人影は僕の見知った顔だった。

「……オブライエン!？」

今までその逆さ吊りに神経を集中させていたのか、声をかけて初めて僕が来ていることに気が付いたらしい。何か装置を操作するとロープの巻き上げ機構が働き、シユルシユルと地上に帰ってきた。

「またお前か。今度は何の用だ」

「いやそれこつちが聞きたいね。何やってたの一体」

わかるまで絶対帰らない、という態度が顔に出ていたのだろうか。一度は無視しようとしたらしいオブライエンも、僕の顔を一目見るとため息をついてあつさり口を割った。

「俺が昔から行っている訓練の一環だ。自らの身を追い込むことで神経が研ぎ澄まされ、次のドローカーカードさえもある程度読み取れるようになる」

わかったらあつち行けとばかりの鋭い視線には、肩をすくめて気づかないふりをしておいた。なんで神経が研ぎ澄まされるとドローカードが見えてくるのかはこれっぽっちもわからないけど、人の趣味にケチをつける気はない。とりあえず何をしていたのかは分かった

ので、どうせここで会ったのだからと言いたかったことを言うことにした。

「なるほど。それで修業はいいんだけどさ、昨日はありがとうね」

昨日、つまりオブライエンに頼んで持って行ってもらった手土産だ。昨日十代と意気投合してレツド寮に遊びに来たヨハンから、ちゃんと渡してもらったことに関する裏は取ってある。いや、信用してなかったわけじゃないけどね。一応職人の端くれとして、感想ぐらいは聞いておきたかったのよ。

「気にするな。一度引き受けたことだ」

「いやいや。あ、気に入ったらオブライエンも買いに来てねー、お安くしとくよー」

「……………」

営業トークにはスルーですか、そうですか。さすがに昨日の今日でオブライエンとまたデュエルするのもなんなので、そろそろ別の場所に行つてデスデュエルの相手を探しに行こうとした矢先。水平線を見つめて何かをじつと考えていたオブライエンが、ややためらいながらも口を開いた。

「なあ、少しいいか？どうしても俺には、今日やらねばならないことがあるんだが……………」

「うん？」

何か一言一言、ゆっくりと吟味するような調子で喋り続けるオブライエン。妙な歯切れの悪さに引っかかるものを感じながらも、あえてその点には何も言わずにいておいた。

「確か、遊城十代とお前は親友だったな」

「まーね。入学した時からだから、割合長い付き合いだよ」

「俺は今日、あいつとデュエルするつもりだ」

「ふんふん。きつと十代も喜ぶよ、たいがいなデュエル馬鹿だから」

何を心配しているのかと気楽に返すと、そうじゃないと首を横に振った。

「それじゃあ駄目なんだ。なあ、教えてくれ。あいつに本気でデュエルさせるためには、どうするのが一番有効なんだ？」

「本気で？いつだってデュエルには本気に見えるけど……そういうことが言いたいんじゃないんだよね、多分」

へんに気迫のこもったオブライエンの態度に、少し真面目に僕がこれまで見てきた十代の姿をぎつと振り返ってみた。だけど少なくとも僕の覚えている限りだと、十代のデュエルに対するスタンスはずっと変わっていない。

……いや、待てよ。そういうええただ一度、翔からこんな話を聞いたことがある。あれは確か、最初に廃寮に忍び込んだのがばれて迷宮兄弟と退学をかけたデュエルをした時……それからしばらく経って、僕らより先にそのタッグデュエルを終わらせた十代と翔のコンビにその時の様子を聞いてみた時のことだ。

「そういうええさー翔、あの時のタッグデュエルってそっちはどうだったの？十代と翔だとデッキも全然違うんだし、両方ゲート・ガーディアン特化のあの2人相手には結構辛い相手じゃなかった？」

「自分だってワイト使いの夢想さんと組んだくせに……。でもあの時は、十代のアニキが見たことないぐらい本気だったから」

「あれ、三沢に聞いた時はいつも通り気負わずにデュエルしてたのが一番の強みだったって言ってたけど」

そう問いなおすと、少し言葉をまとめた後で翔はこう言ったのだ。「一緒にデュエルしてた僕にはわかるんだよ。確かにそう見えたかもしれないけど、あのデュエルの時アニキはこれまでにないぐらいの実力が出てたツス」

その時は深く考えずに聞いてたけど、この会話自体はなぜだか心に残っていた。その、これまでにないぐらいの実力を出した十代が見てみたいとでも心のどこかで思ってたのかもしれない。とにかくその話が本当だとすると、十代の性格から考えて多分こういうことだろう。

「あえてなにか言うとしたなら……割とベタだけど友達、かな。友達のためなら、『これまでにないぐらい本気になる』かも」

そう言うと、また考え込むオブライエン。だけど、今度の沈黙は短かった。そしてあたりに人がいないことを確認し、僕にあることを頼みはじめた。そして最初は乗り気じゃなかったけど、最終的には僕もその話に頷くことにした。今一つ細かいところを教えてくれてないのはちよつと気に食わなかったけど、オブライエンの作戦というのはこうだ。

まず、何らかの方法で十代の友達……たとえば翔や剣山、万丈目あたりをこちらに呼び寄せておく。そして探しに来た十代をオブライエンがこいつを返してほしくば俺とデュエルだ、とか何とか言って1対1でデュエルするという、単純だけど効果的だろう作戦だ。ちなみに人質役が僕じゃないのは、僕に別の役割が与えられたからだ。というのも恐らく来るであろう十代以外のメンツがデュエルに手出ししないよう、足止めをする必要があるらしい。

……わかりづらいけど、要するにデュエルしてればいいんだろう。難しくない話なら、僕にとっては専門分野だ。

「決行は今日の夜、場所はこの木の下だ。いいな」

「了解。じゃあ、僕はいったん寮に戻るよ。夕飯の支度もしなくちゃだし、あんまり長いと僕を探しに出てきかねないし。口は割らないから安心して」

一応協力にオーケーを出す条件として、誰にも危害は加えない、その約束だけはきつちりと取り付けておいた。ちよつと警戒しすぎない気もしたけど、どうもこの2年間のことを思うといくら警戒しても足りない気がしてならないのだ。いや、もちろん僕にだってわかってる。僕もオブライエンもただの学生だ、これまでのセブンスターズや光の結社と同じノリで世の中が動くわけがない。実は、それはそれで寂しいのも否定できないけど。それでもやっぱり、心配なものは心配なのだ。

さ、約束も取り付けたし、これから少しの間は気を張ってなくちゃね。隠し事なんてちよつとワクワクするけど、それが態度に出て怪し

まねたりしたらオブライエンに顔向けできない。そんなのんきなことを考えていた。

……そしてその後は、特に変わったことはない。計画通り、日が暮れても姿を見せない翔を心配した十代が、なぜかまだいたヨハンと剣山を連れて外へと探しに行く。僕はというと声をかけられる寸前に2階の窓から飛び出て猛ダッシュで森の中に駆け込み、そこからオブライエンのいる場所とレッド寮との中間地点あたりに先回り。しばらく待っていると、無事に3人がやって来たわけで。

「やつほー」

「清明！ちようどいい、翔がいなくなっちゃったから、一緒に探して……」

「翔だったら、この向こうの崖のあたりにいるよ」

「え？お前、何言ってる……」

さすがにこのあたりで、何かがおかしいと気づいたらしい。一斉に警戒する十代たちに、慌てて止めるジェスチャーをする。このメンバで3対1とか、もう絶対に勝てる気がしない。

「十代は通っていいよ、そうさせてくれて言われてるし」

「え？清明、一体この向こうに誰がいるんだ？」

んー、なんて言おうか。まあでもあつち行けばすぐわかることだし、別に隠す理由もないか。

「オブライエン。これ以上は僕もよく知らないけど、ご指名は十代だよ」

「一体……ええい、清明！お前にも後で話を聞かせてもらおうからな！無事でいろよ、翔ー！」

一瞬迷った後、十代が森の中を走っていく。その後ろ姿を見送った後で視線を元に戻すと、こっさり回り込んでいこうとしていたヨハンと剣山が見えた。おっと危ない、まったく油断も隙もあつたもんじやない。

「非常に悪いんだけどね、こっから先は僕の時間稼ぎに付き合ってもらうよ」

「くっ……だったら俺が相手するドンー！」

真っ先に反応する剣山。そのままデュエルディスクを構えようとするが、その前にヨハンが割り込んだ。

「いや、ここは俺が相手だ」

そして、時間は冒頭の時点に戻る。グレイドル加入前の僕が手も足も出なかった、ネオスペーシアンの力を手に入れた十代。その十代と互角に戦う実力者が相手となると、これは厳しいデュエルになりそうだ。そして、だからこそ楽しいデュエルになりそうだ。

「僕のターン！グリスリーマザー、攻撃表示！」

いわゆる属性リクルーターの1体である、水色の体毛で覆われた大熊がその2本の足で大地を踏みしめる。

グリスリーマザー 攻1400

「まずはこんな所かな。僕はこれで、ターンエンド」

「俺のターン、ドロロー！何をリクルートするのか見せてもらおうぜ。来い、トパーズ・タイガー！」

『ああ、任せておけ！』

頭に角の代わりに剣を生やした、黄色がかった白い虎。トパーズをつかさどるヨハンのデツキの切り込み役だ。

宝玉獣 トパーズ・タイガー 攻1600

「これが、宝玉獣……さすがに客席から見るのと同じやって正面から見るのじゃあ、だいぶ違うね」

『ありがとうよ。まったく、デュエルアカデミア本校つてのはこんなに精霊が見える奴ばかり集まってきたんのか？向こうとはえらい違いだぜ』

「ははは、そうかもな。バトルだ、トパーズ・タイガーでグリスリーマザーを攻撃、トパーズ・バイト！そしてこの瞬間トパーズ・タイガーの効果により、モンスターに攻撃を行う時のみ攻撃力を400アップさせる！」

宝玉獣 トパーズ・タイガー 攻1600↓2000↓グリスリー

マザー 攻1400 (破壊)

清明 LP 4000 ↓ 3400

「この瞬間、戦闘破壊されたグリズリーマザーの効果を発動！デツキから攻撃力1500以下の水属性モンスター……ツーヘッド・シャークを特殊召喚！」

上下に分かれた2つの口を持つシャークモンスターの1体、ツーヘッド・シャーク。僕のデツキを割と初期のころからその攻撃的な効果でアタッカーとして支え続けてきてくれたモンスターだ。

ツーヘッド・シャーク 攻1200

「トパース・タイガーがいるのにあえて攻撃力1200のモンスターを？メイン2にカードを2枚セットし、ターンエンドだ」

まずはお互い、様子見といったところだろうか。勝負が動くのはこれからだ。

清明 LP : 3400 手札 : 4

モンスター : ツーヘッド・シャーク (攻)

魔法・罨 : なし

ヨハン LP : 4000 手札 : 3

モンスター : 宝玉獣 トパース・タイガー (攻)

魔法・罨 : 2 (伏せ)

「僕のターン、ドロロー。魔法カード発動、アクア・ジェット！このカードの効果により、魚族モンスターであるツーヘッドは攻撃力が1000アップ！さらに、ハリマンボウを召喚！」

ツーヘッド・シャーク 攻1200 ↓ 2200

ハリマンボウ 攻1500

ツーヘッド・シャークは2回攻撃の能力を持ったため、このターンで与えられる総ダメージは攻撃力の倍の4400。さらにハリマンボウの一撃が乗れば、このターンで一気にけりをつけることもできるという寸法だ。もちろんそううまくいくとは思っていないけど、その伏せてある防御札を引っぺがしてやることはできる。

「バトル、ツーヘッド・シャークでトパース・タイガーに攻撃！」

『ちいっ……！』

やぶれかぶれで爪を振り上げ突進してきたトパース・タイガーの攻

撃を、アクア・ジェットにより強化されたスピードでひらりとかわしたツーヘッド・シャークがそのまま横に回り込んで脇腹を噛み砕く。まずは一撃、これは通った！

ツーヘッド・シャーク 攻2200↓宝玉獣 トパーズ・タイガー 攻1600 (破壊)

ヨハン LP4000↓3400

「よくも俺の宝玉獣を！だが、昨日のデュエルを見ていたなら知ってるよな？ 宝玉獣は破壊されても永続魔法の扱いとなり、宝玉状態でフィールドに留まり続ける！」

その言葉通り、ヨハンの伏せた2枚のカードの横に大きなトパーズの塊が浮き上がる。だがそれだけではなく、その動きに反応して伏せカードのうち1枚が表になった。

「さらに今の破壊をトリガーとして永続トラップ発動、宝玉の集結！このカードは俺のフィールドで宝玉獣が破壊された時、デツキから別の宝玉獣を特殊召喚できる！来てくれ、サファイア・ペガサス！」

トパーズが放つオレンジ色の光に導かれ、青色の宝石……サファイアを額に持つ天馬が翼を折りたたんだ防御姿勢で特殊召喚される。

宝玉獣 サファイア・ペガサス 守1200

『どうやら私の出番のようだな、ヨハン』

「ああ、ここはお前にどうしても頼みたくな。サファイア・ペガサスはフィールドに出た時、手札・デッキ・墓地から宝玉獣を1体宝玉状態で場に出すことができる能力がある。俺はデッキに眠る宝玉獣、アメジスト・キャットを宝玉にするぜ。サファイア・コーリング！」

サファイア色の輝きが、新たな宝石……妖しく紫に輝くアメジストを展開する。昨日も思ったけど、このデツキはどの宝石も凄くキラキラしているから見てて飽きない。だって悪く言うつもりはないけど、グレイドルなんてモロに気色悪い系統だし。ビジュアル要素を全部かなぐり捨ててポテンシャルにステータス全振りしたみたいなのがっかりだし。個人的にはあの子たちもあのつぶらな瞳なんてかわいいと思うけどね、絶対対万人受けしないだけで。

「守備力1200なら、ハリマンボウでも突破できる！ツーヘッドの



2回目の攻撃は次に回すとして、今はハリマンボウで追加攻撃！」

ハリマンボウが体を開き、無数の針をミサイルのように打ち出す。だがペガサスはその翼を一振りし、なんとその全弾を撃ち返して見せた。自らの針を受けてしまい、ハリマンボウが痛みにもその小さな顔をしかめる。

ハリマンボウ 攻1500↓宝玉獣 サファイア・ペガサス 守1200↓2400

清明 LP3400↓2500

「守備力が……倍に!？」

「その通り。俺は今の攻撃時にこのトラップカード、D2シールドを発動していたのさ。この効果によって、俺のモンスター1体の守備力は元々の倍の数値になる。残念だったな、ツーヘッド・シャークから攻撃してれば少なくともダメージは受けずに済んだのに」

「ちえっ、ちよっとうかつだったかね。メイン2に移行してカードをセット、僕はこれでターンエンド」

宝玉を出して終わりかと思ったら、ちゃんと生き残る算段も立てていたってわけか。そう来なくっちゃ、面白くないね。

「俺のターン！まずは宝玉獣 コバルト・イーグルを召喚。そしてサファイア・ペガサスを攻撃表示に変更し、さらに装備魔法、宝玉の解放を装備。この効果により、サファイア・ペガサスの攻撃力はさらに800ポイントアップするぜ」

『いよっしやあー！行くぜ、ヨハン！』

サファイアの透き通るような青とはまた違う、水色に近い宝石を胸に持つ大きな鷹が、意気揚々と舞い上がる。その傍らで、ペガサスの額に輝くサファイアがその輝きをより一層増した。

宝玉獣 コバルト・イーグル 攻1400

宝玉獣 サファイア・ペガサス 攻1800↓2600

なるほど、打点で上回るツーヘッド・シャークに対して、単純に向こうも打点を上げての正面突破を仕掛けに来たわけか。でも除去カードを一切詰まないことを明言するヨハンのデッキなら、確かに攻撃力が上のモンスターに競り勝つにはそれが一番有用か。ポセイド

ン・ウエーブあたりがセットしてあればよかったけど、あいにくそんなものここにはない。

「まだまだ終わらないぜ？魔法カード、宝玉の契約！このカードの効果で、宝玉となっている俺のトパーズ・タイガーを再びモンスターとして特殊召喚する！」

「さっき倒したつてのに、もう帰ってくるの？」

宝玉獣 トパーズ・タイガー 攻1600

「さあ、バトルだ！まずはサファイア・ペガサスで、ツーヘッド・シャークに攻撃！サファイア・トルネード！」

宝玉獣 サファイア・ペガサス 攻2600↓ツーヘッド・シャーク

攻2200（破壊）

清明 LP2500↓2100

「次にトパーズ・タイガーでハリマンボウに攻撃、トパーズ・バイト！この瞬間トパーズ・タイガーの効果により、また攻撃力アップだ」

宝玉獣 トパーズ・タイガー 攻1600↓2000↓ハリマンボウ 攻1500（破壊）

清明 LP2100↓1600

これは、さすがに参った。ヨハンのデッキに上級モンスターは1体も入っておらず、それどころかモンスターそのものがたった7体しかない。なのに、僕のライフはいつの間にか半分以下になっている。上級モンスターも最上級モンスターもなしの下級ビートダウンなのにこれほどのスピードでライフが削られるとは、さすがに主席の肩書は伊達じゃない。宝石という見た目に反して戦術に派手さは一切見られないけれど、堅実にそして確実に、アドバンテージとデュエルの流れを両方持っていかれている。

もつとも、こつちとしてもやらねばなしじゃられない。

「ただどこの瞬間、墓地に送られたハリマンボウの効果発動！相手モンスター1体、トパーズ・タイガーの攻撃力を500ポイント下げる！」

『この程度、かすり傷だ……！』

宝玉獣 トパーズ・タイガー 攻1600↓1100

「大丈夫か？コバルト・イーグルでダイレクトアタック！」

「おっと、それは通せないね！相手の直接攻撃宣言時、手札からゴーストリック・フロストの効果を発動！その攻撃モンスターを裏側守備表示にして、さらにこのカードをセット状態で特殊召喚する！」

『うおっ!?寒っ!』

稲石さん譲りの、防寒着に身を包んだ雪だるまが雪玉を投げつけてコバルト・イーグルの突撃を牽制する。危ない危ない、さすがにこのライフでのダイレクトアタックは洒落にならないからね。

それにここでモンスターを場に残せたことで、次に繋げる布石ができた。

「これも防がれたか。仕方がない、俺はこれでターンエンドだ」

清明 LP：2100 手札：1

モンスター：??? (ゴーストリック・フロスト)

魔法・罫：1 (伏せ)

ヨハン LP：3400 手札：1

モンスター：宝玉獣 サファイア・ペガサス (攻・解放)

宝玉獣 トパーズ・タイガー (攻)

??? (宝玉獣 コバルト・イーグル)

魔法・罫：宝玉の集結

宝玉の解放 (ペガサス)

宝玉獣 アメジスト・キャット

「僕のターン！セット状態のフロストをリリースして、アドバンス召喚！出て来い、氷帝メビウス！」

氷帝メビウス 攻2400

「氷帝メビウス、そのカードは！」

「その通り、メビウスはアドバンス召喚時にフィールドの魔法・罫カードを2枚まで破壊できる！フリーズ・バースト！僕がこの効果で狙うのは宝玉の集結、そして僕のフィールドに存在するこの伏せカード！」

「自分のカードを？」

ヨハンの疑問はもつともだ。何しろ、このデッキにこういったギ

ミック……なんて大げさなものじゃないけど、とにかくこの組み合わせが仕込んであることを知らないんだから。僕が破壊宣言した伏せカードが、勢いよく表になった。

「メビウスの効果にチェインして永続トラップ、安全地帯を発動！このカードは発動時に攻撃表示モンスター1体を対象にとつて、そのモンスターをあらゆる破壊から守ったうえで効果対象にもならなくさせる。だけどそのデメリットとして、このカードが破壊された時にそのモンスターも破壊される……もうわかったよね？これでサファイア・ペガサスを撃破！」

安全地帯は単体除去カードです、オーケー？まあとにかくその指示に従い、メビウスがこちら側と向こう側に無数のつららを生やす。地中から生えたたくさんのそれが、2枚のカードを同時に貫いたように見えた。

そう、見えたただけだった。確かに僕の安全地帯はその中心をぐつきりと貫かれていたのだが、宝玉の集結の姿がない。

「宝玉の集結のさらなる効果をチェイン発動させてもらったぜ。このカードを墓地に送ることでフィールド上の宝玉獣1体と相手フィールドのカード1枚を選択し、その2枚を持主の手札にバウンスする効果だ。俺が選んだのは氷帝メビウスと、俺のフィールドで宝玉となっているアメジスト・キャットの2体！」

「メビウス!？」

メビウスの巨体が風となって消えさり、後にはただ融けかけのつららのみが残った。

「くっ……だけど安全地帯の破壊には成功したから、サファイア・ペガサスだけでも破壊はできたはず！」

「ああ、確かにその通りだ。だがな、俺の発動していた装備魔法、宝玉の解放にはもう1つ効果があるのさ。あのカードは墓地に送られた時、デッキから宝玉獣1体を宝玉化することができる。俺が選ぶのは、アンバー・マンモスだ」

アメジストの塊がヨハンの手札に戻り、すぐその位置には文字通りの琥珀色に輝くアンバーと力を失ったペガサスが変化したサファイ

アが輝きを放つ。こつちがどれだけ手を尽くしても、決してステータスが特筆して高いわけでも効果が目に見えてチートなわけでもない下級モンスター達の牙城を崩すことができない。頼みの綱の氷帝メビウスすら空振りに終わり、さすがにくじけそうになる心をなんとか奮い立たせた。もし使い手の僕が勝手に諦めたりしたら、その僕を信じてここまで頑張ってくれたこのデッキに対して申し訳が立たないからね。

それに、まだ手がなくなつたわけじゃない。このカードがあれば、まだ僕は戦うことができる。

「カードを一枚セットして、ターンエンド」

「俺のターン！コバルト・イーグルを反転召喚して、さらに宝玉獣 アメジスト・キャットを召喚！」

『あら、ようやく私の出番なのかしら？』

「ハハハ、悪い悪い。待たせちまつたな」

『冗談よ』

宝玉獣 コバルト・イーグル 攻1400

宝玉獣 アメジスト・キャット 攻1200

全身薄いピンク色の大型猫が、さすがに猫らしく足音ひとつ立てずにしゃなりしゃなりとヨハンを飛び越えフィールドに着地する。ここまで矢継ぎ早に召喚を決めるなんて全く、つくづくモンスターに愛されてるもんだ。

「さあ、たっぷり暴れてもらうぜ？バトルだ、3体のモンスターで……」

「わざわざ3体目のモンスターを出してきたってことは、それが通るとは思ってないんでしょ？永続トラップ発動、バブル・ブリンガー！このカードがある限り、お互いにレベル4以上のモンスターは直接攻撃できない！」

「やっぱりな。だが、レベル3のアメジスト・キャットにそのトラップは効かないぜ。ダイレクトアタックだ、アメジスト・ネイル！」

立ち上る泡の壁が、天空から襲い来るイーグルと地上から駆けてきたタイガーの攻撃をそれぞれ押しとどめる。しかしアメジスト・

キヤットだけは正確に泡と泡の間をすりと抜けて近寄ってきて、いささかも勢いを落とすことなくその長い爪を伸ばして手ひどく引っ掻いていった。

宝玉獣 アメジスト・キヤット 攻1200↓清明（直接攻撃）

清明 LP2100↓900

「痛てて……まだまだこれぐらい、生きてりや十分安いね」

「そうか。メイン2に魔法カード、鳥合の行進を発動！このカードは自分フィールドに獣・獣戦士・鳥獣族いずれが存在するとき発動でき、その種類1つにつきカードを1枚ドロウする。俺のフィールドには獣族と鳥獣族が存在するから、2枚ドロウだ。カードを1枚伏せ、俺はこれでターンエンド」

清明 LP：900 手札：1

モンスター：なし

魔法・罫：バブル・ブリンガー

ヨハン LP：3400 手札：3

モンスター：宝玉獣 アメジスト・キヤット（攻）

宝玉獣 トパーズ・タイガー（攻）

宝玉獣 コバルト・イーグル（攻）

魔法・罫：宝玉獣 アンバー・マンモス

宝玉獣 サファイア・ペガサス

さあ、どうしよう。さつきは強がってみせはしたけど、割と今余裕がない。手札の唯一残ったカードの氷帝メビウスも、リリース要因がない現状事故要因にしかなくていい。せめてアメジスト・キヤットだけでもこのターンで対処しないと、もう一度今の攻撃を喰らうだけの余裕はない。

「僕のターン、ドロウ！」

……もつとも、なんだかんだ言っていて心配はしてないけどね。僕のデッキは、そして僕のカードはありがたいことに、まだ僕を見捨てる気はないらしい。なら、このチャンスを最大限に生かすよう努力するまでだ。

「今引いたモンスター、グレイドル・イーグルを召喚！そしてバトル、

イーグルでアメジスト・キヤットに攻撃！」

地面から湧き出る銀色の水たまりが黄色の鳥となり、アメジスト・キヤットに向かってどこか最後のあがきめいた勢いで突撃を仕掛ける。

グレイドル・イーグル 攻1500↓宝玉獣 アメジスト・キヤット 攻1200 (破壊)

ヨハン LP3400↓3100

「アメジスト・キヤットを宝玉に変更……もうこれで、ターンエンドみたいだな」

ヨハンの言葉に、無言で頷く。今のターン、できる事はすべてやった。実際問題、あれ以上のことは望めないだろう。ただ残念ながらヨハンの今の表情とよく似たものを、僕は知っている。ちょうど、十代が相手の猛攻を耐えきって逆転のターンを始める……お決まりの流れに入る、その寸前みたいな顔だ。

「俺のターン、ドロロー！魔法カード、宝玉の導きを発動！このカードは自分フィールドに宝玉化した宝玉獣が2体以上いるとき、デッキから宝玉獣を特殊召喚することができる。さあ来い、ルビー……ルビー・カーバンクル！」

これまでの宝玉獣が全員それなりのサイズだったのに対し、うつつかわって小さな猫のような生き物が手札を飛び出てヨハンの肩に飛び乗る。ちょうど、十代のハネクリボーと同じぐらいのサイズだろうか。そんなカーバンクルが尻尾の先についた赤い宝石から光を放ち、休眠状態にあった宝玉たちを照らし出す。

宝玉獣 ルビー・カーバンクル 攻300

「ルビーは特殊召喚に成功した時、宝玉化した宝玉獣を可能な限りモンスターとして特殊召喚できる！照らし出せ、ルビー・ハピネス！」

宝玉獣 アンバー・マンモス 攻1700

宝玉獣 アメジスト・キヤット 攻1200

モンスターゾーンがいっぱいなためにサファイア・ペガサスは呼び出されず宝玉のまま。しかし、それでもすでに十分すぎるほどのモンスターの差だ。

「先に言っておくけど、グレイドル・イーグルは破壊された時に相手1体に寄生する能力を持っているからね。生半可な攻撃じゃあ僕のライフは削りきれないよ?」

『あら、そんなに怖い相手なら戦わないでおきましょうか。ねえ、ヨハン? 私を呼んだ意味は分かっているわよ?』

精一杯の脅しを軽く受け流し、ヨハンに意味ありげな流し目を寄せるアメジスト・キャット。それにたいして軽く頷くと、ヨハンが最後の伏せカードを表にした。

「アメジスト・キャットは与えるダメージが半分になる代わりに、相手プレイヤーに直接攻撃ができる。そしてこのバトルフェイズにトランプ発動、アサルトル・スピリッツ! このカードは発動後装備カードとなり、装備モンスターが攻撃するダメージステップ開始時に手札の攻撃力1000以下のモンスター1体を墓地に送ることで、その攻撃力分だけエンドフェイズまで装備モンスターの攻撃力をアップさせることができる。攻撃力600のエメラルド・タートルを墓地へ!」

エメラルド色のオーラがアメジスト・キャットの全身を包み、音もなく駆けだした雌豹がそのしなやかな動きを駆使してグレイドル・イーグルとバブル・ブリンガーによる2重の防御をいともたやすく乗り越え、またしても一瞬にして僕の懐へと飛び込んできた。

『残念だったわね、坊や』

宝玉獣 アメジスト・キャット 攻1200↓1800↓清明(直接攻撃)

清明 LP900↓0

………あー、また負けたー。さすがにちよつとへこんでいる横で、ずっと観戦していた剣山が興奮冷めやらぬ様子でヨハンに話しかけていた。

「あの清明先輩が、ほとんど手も足も出ずに……! 凄いドン、さすがにデュエルアカデミアアークティック校主席だけのことはあるザウルス!」



「おいおい、褒めても何も出ないぜ？それに……」

「それに？」

そこで一度後ろの会話が途切れたのと視線を感じたので、ヨハンと剣山の方を振り返る。向こうもこちらのことを、真剣そのものの目つきで見つめていた。

「そのデツキについて、何か悩んでいるんだろう？そのせいで本来出せるはずの力の半分も出せていない。それぐらいのこと、デュエルすればわかるさ」

「一体、どういうことだドン？」

剣山の反応をよそに、僕はただただ驚いていた。というのも、ヨハンの言ったことはまんま凶星だからだ。つい昨日オブライエンに完敗したことが、いまだに僕の心に暗い影を落としているのが自分でもよくわかる。

……僕自身がグレイドルの、そしてそれ以前に使ってきたモンスタ―たちの力を生かし切れていないんじゃないか。その思いは今もなお、僕を悩ませ続けている。だけど、どうすればいいのが全く分からない。もつと直接的に言えば、今の僕は行き詰っている。

だけど、十代にもまだ相談していないそれを、まさかたった1回デュエルしただけで見抜かれるとは。敵わないなあ、本当に。

「なあ、清明。1つ約束してくれよ、またいつかお前が、本当に納得できる自分なりの答えを見つけたら、その時は再戦しようって」

屈託なく笑い、座り込んだ僕に手を差し伸べてくるヨハン。その言葉に力を込めて頷き、その手を掴んで立ち上がろうとしたところで――

ドクン。

デスベルトが突然光を放ち、そこを中心に猛烈な勢いでエネルギーが吸い取られていった。これ、は……授業用の教材の一種だとは信じられないぐらいの思ったより厳しい、下手すると意識を失いかねないほどの喪失感にどうにか耐えていると、同じように苦しそうに息をつくヨハンが見えた。

「こ、今度はどうしたんだドン!？」

「おかしい、昨日十代とデュエルした時はここまでひどくは……なかった、はずなのに……」

その瞬間、なぜか昼間見たオブライエンの顔が脳裏に浮かんだ。人質を取つてでも十代の本気以上の力が見たいとの、あの時僕に彼がした不自然で無茶のある要求。当然、十代は熱くなるだろう。そしてその腕にはまっているのはデュエリストの熱い思いや情熱……すなわち、本気の力を吸い取るデスベルト。

『マスター、今私が……』

「いや、この程度なら平気、ちよつとびつくりしただけだし。それより、今は十代が！」

実際少しの間じつとしていたら、どうにか体調も持ち直してきた。すぐさま立ち上がって、いま思いついてしまったある考えに思いを巡らす。おそらく十代とオブライエンは、あの場所で今もデュエルしているだろう。そしてあんなロープも張ってない危険極まりない崖っぷちでデュエルした後で、何も知らないであろう十代達に今のデスベルトのショックが突然襲つてきたりしたら？そして、そこで思わずよろめいたりでもしたら？そのまま何かのはずみで足を滑らせたりでもしたら、本気で2人の命に関わる！

「あ、清明せんぱーい!？」

「剣山、悪いけどヨハンお願い！」

それだけ言い残し、座り込んでいた姿勢から急に立ち上がったせいで一瞬ふらついた自分の体に入れて走り出す。困惑する剣山の声を後ろに聞きながらもスピードを落とさないよう木と木の間を走り抜けていくと、今まさにそのデュエルが終わろうとしていた。

「これで終わりだ、ネオスで攻撃！ラス・オブ・ネオス！」

「十代、オブライエン、危ない……翔!？」

「清明!？」

ほんの一瞬だけ当初の目的も忘れ、翔の名前を叫んだのにはわけがある。昼間に見た、オブライエンの修行用ワイヤー装置。なんと翔は体中をぐるぐる巻きに縛られた状態で、一本だけ生えた崖際の木からちよつと昼間のオブライエンのように吊り下げられていたのだ。

「落ち着け。デュエルが終わった以上、約束は守る」

慌てて翔が吊るされている木に登り、がっちり固定されたワイヤーを掴む。誰も止めに入らないということは、僕が引き上げていいんだろう。

「翔・ちよーつと大人しくしててよ、今引きあげるから、ねっ!」

「う、うん……アニキー!」

最後のねっで腕に力を込めて翔の小柄な体を崖の上に引っぱり上げて縄をほどいてやると、すぐに十代に向かって駆け出して行った。

さて、十代と翔はともかくとして、どうしても僕にはやっておかないやいけないことがある。それも、デスベルトの影響が出る前に。ソリッドビジョンの衝撃に吹っ飛ばされてから立ち上がるうとするオブライエンのもとに行き、無言でその胸ぐらをつかんで起き上らせた。いたって落ち着いて息をつくその顔を見つつ、できる限り冷静に声を出す。もつともあまり成功したとは言えず、口から出たのは怒りを押し殺しているのがよくわかるような声だった。

「ねえオブライエン、あれはどういうこと?」

「どういう意味だ?」

「とぼけないでよ。僕は、『誰にも危害は加えない』って約束したから協力したんだよ?縛ってそこらへんに転がしておくだけならまだしも、なんであんなことする必要があつたのさ」

怒りに震える僕とは対照的に一切感情を動かすことなく、なんだそんなことかと言いたげに息をつくオブライエン。それを見て、考えるより先に手が動いていた。次に気づいた時には、すでにその横つ面を張り倒していたのだ。意外にも無言でそれを受けたオブライエンが何か言おうとして口を開いたその瞬間に、その腕に付いたデスベルトが光を放った。

「ぐっ!」

「大丈夫だったか、翔……うわっ!」

それと同時に十代のデスベルトもまた光を放ち、持ち主のエネルギーを吸い取りにかかる。どうやらこの2人に対するエネルギー吸収は僕とヨハンが受けたそれよりもう1段とキツイものだったらし

く、ふらつくどころかその場に2人して倒れこんでしまった。

よほど苦しいのか激しく息をつくオブライエンを見ているうちに、僕の怒りも干潮の海のように引いていくのが自覚できた。あーもう、だからデスベルトが仕事する前に怒ったときたかったのに。こんな苦しうなところ見せられたら、これ以上怒るに怒れないじゃない。

ただ、最後にこれだけは聞いておきたい。

「オブライエン。今のぐらいなら、避けようと思えば避けれたんじゃない？なんで喰らったのさ」

横つ面を張る寸前、オブライエンの目はしつかりと僕の腕の動きを捉えていた。そして軌道が読めたということは、避けようと思えば避けられたということだ。

そんな僕の質問に、苦しそうに息をつきながらゆつくりと答える。

「……お前には、俺を殴るだけの、正当な権利がある。そう思った、だけだ」

「そう」

それ以上何も言わなかったけど、その答えにとりあえずは満足した。次にこれまたぐったりして動けない十代のところに行き、その介抱をしていた翔の隣に座りこむ。こちらを見てくる2人に対し、頭を下げる。

「清明……」

「十代、翔、ごめん！」

「えっ？なんで清明君が謝るんスか？」

厳しい目でその謝罪を聞く十代に対し、本気で訳が分からないという様子の翔。どうやらオブライエンからは何も聞いていないようだったので、僕が彼と協力していたこと、翔を人質にとることまでは僕も一枚噛んでいたこと、ヨハンたちの足止めを今の今までしていたことなど、全てを洗いざらいぶちまけた。2人とも、最後まで何も言わずに黙って聞いてくれた。そのことが、ただひたすらにありがたかった。

「こんな危険な目に合わせて、謝って済むような話じゃないのはわかってる。だけど、どうしても言わせて。……ごめん」

最後に深々と頭を下げたまま、顔を上げるのをしばらくの間ためらう。時間にもしてみればせいぜい数十秒ぐらいだろうけど、僕にとつては何時間もそうしていた気がした。すると、そんな僕の視界に2本の手が伸びてくるのが映る。恐る恐る顔を上げると、十代と翔の笑顔が見えた。もつとも十代の方は、デスベルトのショックでだいぶやつれた笑顔になっていたが。

「気にすんなよ、清明。もう済んだことだし、それにお前だって知らなかったんだろ？な、翔」

「そうッスよ。確かに怖かったけど、こうやってアニキも助けに来てくれたし、第一清明君が謝ることじゃないよ」

「十代、翔……ありがとう」

2人の優しさが身に沁み、改めて頭を下げる。その様子が何かおかしかったのか、声を揃えて十代と翔が笑う……だけど、それもすぐに止まった。だいぶ無理して意識を保っていたらしい十代がついに限界になったらしく、そのままふらりと意識を失って崩れ落ちたのだ。

「ア、アニキー！」

翔がその体を担ごうとするも、だいぶ体格差があるうえに別段力が強いわけでもない翔にはさすがに無理だったようだ。折よくやって来た剣山におぶってもらうことにして、とにかくレッド寮に運んでいく。少し迷ったけど、意識こそ失っていないものはかなり苦しそうなオブライエンも僕が肩を貸して連れていくことにした。

「デュエルをすればわかりあえるし友達になれる、か」

「何？」

帰りの道中にふとこのフレーズを思い出して呟くと、オブライエンが聞き返す。ふつと笑って、どう説明しようかと少し首をひねった。

「いやね、僕も変わったなあって。ここに入学した時は、デュエルするだけで人と人がわかりあうってのはさすがに無理があると思ってたけど、いつの間にか僕もその考え方に染まってたみたいだし」

「……何が言いたい？」

「さっきはああ言ったけど、僕はオブライエンは悪い奴じゃないって信じてるよ。きっと今日のことも何かわけがあるんだろうし、気が向

いたらでいいからまた教えてよ」

「なぜそう思ったんだ？」

「わかるさ。だって、オブライエンは僕にとってはもう友達だもん。友達を信じないんなら、一体何を信じればいいってのさ」

オブライエンは、一言も答えなかった。だけど、僕の言葉を否定もしなかった。僕にとっては、それで十分だった。

## ターン76 鉄砲水と流離の浮雲

次の日。朝になると既にオプライエンの姿はなく、寝かしておいた枕元には完璧な日本語で礼を言う手紙が置いてあった。すごいなあ、外人なのに読み書き喋りの全部ぺらっぺらなんて。僕なんて日本語で手いっぱい英語すらまともにできないのに……つと、今は僕の学力は関係ない。ないったらない。

そして他の2人、ヨハンと十代も一晩寝たらだいぶマシな気分になったらしく、酒飲んだ次の朝の親父みたいに疲れ切った顔で次の日にはどうにか復活していた。

……朝食は1人で6人前ぐらい馬鹿食いされたけど、それで元気になったならまあ安いものだ。そう思わないとやっていけない。僕？ダークシングナーって、生前と比べてエネルギーの最大値が跳ね上がるのよ。だからちよつとやそつと吸われても……まあ多少面食らったのは間違いないけど、でもまだまだ平気だ。

「でもチャクチャルさん、これではつきりしたね。これ絶対口クなものじゃないわ」

『そうだな。いくらデュエリストでも、あのレベルを多用すれば命に関わる』

「ご飯食べて元気になれるなら問題ないけど、そのたびにあんなに食べるんじゃないわうちの食費が跳ね上がる」

『えっ』

「なに？」

『……あ、いや、そつちなのか。まあ私にとつてはなんでもいいが』

妙に歯切れの悪いチャクチャルさんを一瞥し、今日の授業を受けに行った。

そして放課後。明らかにおかしい、というかどうも周りと話が合わないことがわかる。昨日のうちに生徒の大半はデスデュエルを一度終わらせたらしいのだが、どうも僕の知ってるデスデュエルと話が合わない。皆確かにエネルギーを吸われる感じこそしたものの、精々ちよつとふらつく程度で十代のように気絶してぶっ倒れたなんてこ

とはないらしいのだ。まさか十代とオブライエンが普通よりはるかに虚弱体質だったなんて馬鹿な話があり得るはずがないし、この話を鵜呑みにするなら昨日のあの時間だけデスベルトの吸収率が格段に上がっていたことになる。

「誰が何のために、かね。僕にはさっぱり分かんないよ」

『どうだろうな。ただ我々地縛神は、本来ならばあの地上絵から解き放たれるためには大量の……あー、人間のエネルギーを必要とする。いつぞやの三幻魔の時も、復活の際に世界中のカードからエネルギーが吸い取られていた。似たようなことが起きていなければいいが』  
「うーん。下手に考えるより、片っ端から動いてみたほうがいいのかもね」

なんととはなしの不安を感じながらも、それをどうすることもできずにただ突っ立っていることしかできない。なんて、センチな気分は僕好みじゃないけれど。もつと楽しいことを考えよう、そう、例えばあそこで剣山の尻に噛みつこうとしているワニの観察のような。

……えっ？

「うわああああっ!?!なんだドン、何するんだドン!?!」

「け、剣山ー!?!」

違和感が生まれるより先に噛みついてたワニ……この学校にワニなんて一匹しかいない、ジム・クロコダイル・クックのワニだ。

「ソーリー、ソーリー! やめるんだ、カレン!」

「痛いドン! 放すザウルス!」

わーわーと騒ぐ剣山からなかなか放れようとしないうカレンをどうにか引き離し、ジムが定位置らしい自分の背中に括り付ける。

「うう……自分のワニなんだから、ちゃんと自分で管理するザウルス!」

「ソーリー、実はイエスタデイから彼女の落ち着きがなくなっただけ、その理由はもうわかってる」

「ま、まさか昨日あげたマドレーヌ……」

「ああ、君が遊野清明か。センキューベリーマッチ、あれはとてもグッドテイストだったよ。カレンも喜んでいたし、今度買いに行かせても



らう。だが、それは原因じゃないんだ。これを見てくれ」

そう言つてジムが取り出したのは、何やら四角い機械。その何かを計測するらしいメーターの針はレッドゾーン、限界ぎりぎりまで触れていた。

「これは、電波を察知することができる機械なんだ。それがこんなに反応しているということは、つまり今この学園のどこかで強い電波が発生している。カレンのような爬虫類は、電波の影響を受けると狂暴性が増すからまさかとは思つたんだが、現にこの装置が反応しているということはそうなんだろう」

「へー……それって、最近になつてからなのかね。それとも、実はこの島はずっと電波を出してる島とか?」

「いや、それはないな。俺たちがこのアカデミアに来たときはまだ、カレンも落ち着いていた。つまり、イエスタデイの夜から急にこの電波がどこかから発生しているんだ」

「な、なるほど……?」

あ、これ十代何言われてるのか半分以上わかつてないな。

「だから、今からこの電波の発生源を特定しに行こうと思つているんだが、一緒に来るかい?」

「俺は行くぜ、面白そうだしな。ヨハンも来るよな?」

「ああ、もちろん」

「じゃあ僕たちも……」

「出発ザウルス!」

「んー、じゃあ気を付けてねー」

手を振つて見送ろうとすると、なぜかジムとヨハン以外の全員の顔が固まった。

「あ、あれ?どつたの皆」

「いやいや清明、お前も一緒に行こうぜ?」

「清明先輩なら絶対我先に駆け出すと思つたドン」

「どんなイメージなの……まあ行きたいのはやまやまだけど、僕店番してなきやだし」

「えー、いいじゃんかよ。お前も気になるだろ?デスデュエルの被害

者なんだから」

「だから、きゃ」

ヨハンの言葉に、ついぼそつと呟く。小さな声のつもりだったが、ジムにはどうやら聞こえてしまったらしい。

「え？なるほど、じゃあ俺たちでこの電波の謎を突き止めにゴーだ」

「行ってらっしゃい、土産話は楽しみにしてるよ」

適当に誤魔化して、皆に背を向けて歩きだす。呼び止められたらどうしようかと思っただけど、幸いにも誰も止めには来なかった。多分ジムが何か察してくれたから、そのおかげもあるだろう。

さて、ここからは僕も一人で動かさせてもらおう。葵ちゃん、今日は店行けないから怒るだろうなあ。

「……それで、また俺のところに来たのか」

現在僕がいるのは、オブライエンの部屋。机の上に積まれたいくつかの大皿からは、オブライエンがさつきまで昨日大量に吸われたカプリーを食事から補給しようとしていたことがわかる。今朝はいつの間にかいなくなってたけど、さすがに影響なしとはいかなかったわけか。

「何度言われようと、お前に教えるようなことは何もない」

「別に、突っ込んだ話が聞けるだなんて期待してないよ。ただ1つ、前提条件として確認したいことがあるだけで」

「……何？」

ここで追い出すんじゃないかって聞き返してきたあたり、どうやら話を聞いてくれる気はあるらしい。少しは気を許してくれたのかね。

「デスデュエルって、元々はオブライエンのいたウエスト校でプロフェッサー・コブラが始めたことなんだってね」

「ああ、そうだ」

「それって、やっぱりおかしくない？だったらなんで経験者のオブライエンが1回でぶっ倒れたりするのさ。それとも何、ウエスト校ってのは生徒が毎日デュエルするたびに保健室と外を行ったり来たりす

るような場所なわけ？」

やや嫌味を混ぜつつ言い切り、オブライエンの目をできるだけまっすぐに見つめる。たつぷり30秒は沈黙が続いたが、やがて言葉を選びつつオブライエンが口を開いた。

「俺の口から言えることは、1つだけだ。確かに昨日のデスデュエルは、この俺も経験したことがないようなものだった」

「ふんふん」

「悪いがこれ以上は何も喋らん、用がないなら出て行ってくれ」

ここで一度作戦タイム。僕はこの手の駆け引きは僕はあまり好きじゃないので、心理戦の専門家にテレパシーを飛ばして意見を仰ぐ。

「(どうしようチャクチャルさん、もうひと押しすべきかな)」

『いや。これ以上押ししても頑なになるだけで何も出てこないだろうから、ここは一度退けばいい。それに、今追いかければまだ間に合う』  
「え？……まあいいや、じゃあね」

部屋を出る前に一度振り返ったが、オブライエンは既にこつちを見ていなかった。しかしよくわからない、オブライエンの話ぶりからするとやっぱり昨夜は何かがおかしかったことになる。今このデュエルアカデミアで、何が起きようとしているんだろうか。ユーノがいれば相談ができたんだろうけど、あいにく斎王戦の直前に会って以降彼の姿は一度も見えていない。まさか勝手に成仏したなんてことはないと思いたいけど、ともあれユーノの助けはないものとして考えたほうがいいだろう。

そんなことを考えながら扉を開けると、たまたま歩いていた留学生……アモン・ガラムの後姿が見えた。せつかくなので挨拶程度はと声をかけようとしたら、チャクチャルさんが割り込んできた。

『ストップマスター、この男だ。先ほどから部屋の前をうろろうろして、マスターの話を盗み聞いていた』

「(気づいてたんなら教えてよ……)」

『余計なことに気を遣わせることもないと思ってな。あの時は情報収集に集中してほしかった』

そうやって話しているうちに、こちらの様子に気づくことなくアモ

ンがどこかへ歩いていった。チャクチャルさんからそうと教えてもらってなかつたら、ついさつきまで盗み聞きをしていたなんてわからないほど堂々とした態度だ。

それにしても、盗み聞きか。こうなるとアモンもアモンでなんか怪しいから、今日はこつちを追いかけてみようかな。

「鬼が出るか蛇が出るか、尾行と洒落込ませてもらいますかね、つと」  
できる限り足音と気配を殺しながらそつと後ろにつき、見失わないようこつそりとアモンの背中を見ながら追いかける。しばらくそうしているうちになぜか学校を離れて森の中に入ってしまったが、どうやら適当に散歩しているわけでもないらしいことはすぐにわかった。明らかにアモンには何か目的地があつて、迷いなくそこに向かっている。

さらに歩き続けるうちに、遠くからかすかに十代たちの声が聞こえてきた。ふむ、怪電波の探知をしてるジムと同じような場所に迷いなく向かっているアモン……いよいよもつて怪しい。するとその声に向こうにも聞こえたのか、いきなり前を歩くアモンが全力で走り出した。

「しまつ……もう、なんだつてのさー！」

声を殺して毒つき、木の枝などを踏んで音を立てないよう気を付けながら僕もその方向に走る。木の間を通り、足元の小石を乗り越えて。

「あらー……や、やつほー」

「やあ。こんなところで奇遇だね」

こちらを真っ直ぐ見据えて仁王立ちするアモンと目が合った。いつからかは知らないが、完全に尾行がばれていたらしい。一見にこやかに見えるアモンだが、その目は全く笑っていない。

「少々時間がないから単刀直入に聞かせてもらおうが、一体なぜ追いかけてきたのか、教えてもらおうか」

「えつと……」

どうするのが一番いいだろう。まず1つ目の選択肢としては、包み隠さず正直に話すこと。これはアモンがこの電波の件を何らかの理

由から追いかけているのであれば、単純にお互いの味方が増えることになるというメリットがある。ただしこの選択は、もしもアモンがこの電波の原因である場合は彼と敵対するきつかけを自分から作り出すことになってしまい、僕の身に……いや、下手をすると十代たちにまで危険が及ぶ可能性がある。もう1つはまあ、しらばつくれるなり逃げるなり。だけどそんなもんが通用するとは思えないし、ここはひとつさりげない会話から情報を拾えるかどうかやってみよう。

「今日はいい天気だね」

外した、アモンつたらくすりともしてくれないんだもん。大体いい天気ってなんなのさ今日はがつつり曇り空だよコンチクショウ。そっういやその昔小学生のころ理科の授業で晴れと曇りの違いは空を見上げて見える範囲の6割だったか7割だったかが雲に覆われているかどうかで習ったけどさ、たまたま僕の年のその授業の日はなんか6割5分ぐらいが雲に覆われたものすっごい微妙な日だったのね。それで教室内でこれは晴れなんじゃないか派と曇りの日扱いでいいだろう派が長々と争いをしてただけどさ、普通先生つてそこは中立で貫いてくれるんじゃないのかな？僕らのその時の先生は気が利かなかったのかなんなのか、空見て一言『今日は晴れですね』ときたもんだ。そのせいでもう大変だった、僕をはじめとした曇りの日派はその日1日中晴れ派から激しい弾圧を受けて人間扱いすらされなかつたわ給食のカレーもなんか少なめに盛られるわ散々だったよ。そういうところあるからあの先生もう30代も後半だったのにいまだに独身だったんだね、間違いないざまーみろ。

つと、なんだか話はずれにずれまくった。アモンの目はますます鋭く冷たくなり、これも僕無事で帰れるのかなとかそういうレベルにまで周りの空気はなっている。

「それで？」

「はい、白状します……」

結局、諦めて正直に喋ることにした。昨日経験したオブライエンと十代の、そしてヨハンと僕のデュエルのこと。たった今ジムを中心に十代たちが怪電波を探して森の中をうろつきまくっていること。あ

とは特にないや。

話をじつと聞いた後、しばらく何か考え込むアモン。このまま逃げ切れないかとも一瞬思ったけれど、そんなことしたら余計ややこしくなりそうだったので即やめた。

「ふーん……これは案外、利用できるかもな」

「え？」

「とりあえず僕とデュエルを行おう」

「は、え!?!ちよ、話ちやんと聞いてた!?!吸われちゃうよ、下手するとその場で気絶するよ!?!」

「これでも鍛えてあるんでね。それにこのデスベルトの、そしてデスデュエルの仕組みを理解するにはとにかく自分で体験してみるのが一番良さそうだ」

いきなりわけのわからないことを真顔で言い出すアモン。慌てて止めようとするも、軽く流されてしまった。それでもさらに粘ろうとするが、ちよつと悪そうな笑顔を浮かべてさらに先手を打ってきやがった。

「おや、デュエルアカデミア本校の生徒は売られたデュエルもまともを買わないのかい?」

「ぐ。……わーっつたよ、やればいいんでしようやれば」

安い挑発なのはわかってるけど、僕だけでなくこのアカデミア全体を馬鹿にされたとあっちゃあやっぱり黙ってられない。わかりやすいなあ、僕も。

「そのかわり、やるからには勝たせてもらうからね。それじゃあ、デュエルと洒落込もうか!」

「デュエル!」

先攻は僕。いまだこのデツキの進むべき道は見えてこないけれど……それでも、僕にできるのはこの子たちを信じて戦い抜くことだけだ。ちなみにこれは恰好つけた言い方で、もつとぎっくり言うただけ単になんも思いつかないから現実逃避してるだけだったりする。

「出て来い、ハンマー・シャークツ!」

ハンマー・シャーク 攻1700

頭部がハンマーの形をした鯨が、僕の呼びかけに応えてその姿を現す。いつもならばその効果を使ってさらに展開をすることで……珍しいことに、僕の手札には現在レベル3以下の水属性モンスターがいらない。

「さらにカードを2枚セット。これでターンエンド」

攻撃力がそこそこ高いアタッカー1体に、伏せカードが2枚。とはいえ実はそのうち1枚は今使えないカードをブラフにただけだけ。でもそんなこと黙ってればわからない、ここでどう出てくるかを、まずはじっくり見させてもらおう。

「1つ忠告しておこう。熱くなるだけでは、僕にデュエルには勝てない。僕のターン、ドロー。いいカードを引いた、永続魔法発動！  
クラウド・デイン・スコール  
雲魔物のスコール！」

もくもくと雨雲が上空に広がると突然鼻先に冷たいものが当たった気がして、思わず手でぬぐってしまった。もちろんその手が軽く濡れていた……なんてことはなく、ただのソリッドビジョンの投影に過ぎない。

「この効果は今にわかる。雲魔物クラウド・デイン—アシッド・クラウドを召喚！」

緑色の雲がどこからともなく湧きあがり、少しずつ寄り集まって人のような形になる。やがてその顔、それも目に当たる部分に意志の光が宿り、どうやらこれがモンスターらしいと気づいた。

「攻撃力、500……？」

「アシッド・クラウドの効果発動。このカードの召喚に成功した時、フィールドの雲魔物の数だけ自身にフォッグカウンターを置くことができる。僕のフィールドには雲魔物が1体、よってカウンターが1つ乗る」

雲魔物—アシッド・クラウド 攻500(0) ↓(1)

「カードを1枚セット。これで、ターンエンドだ」  
「え？」

攻撃力500のモンスターを囲にして強力な伏せカードをセットする戦術、なんだろうか。ここまであからさまに罠だと、攻撃しているものかどうかわからなくなってくるな。

「どうした？これでターンエンド、と言ったんだ。アシッド・クラウドのことは煮るなり焼くなり、好きにするがいい」

清明 LP4000 手札：2

モンスター：ハンマー・シャーク（攻）

魔法・罠：2（伏せ）

アモン LP4000 手札：3

モンスター：雲魔物―アシッド・クラウド（攻）

魔法・罠：雲魔物のスコール

1（伏せ）

「うー……えーい、お望み通りぶん殴る！僕のターン、ドロー！」

今引いたカードは、これか。まあいいや、できれば初手に来てほしかったけど。

「グレイドル・コブラを召喚！さらに自分フィールドに水属性モンスターが存在することで、手札のサイレント・アングラーを自身の効果により特殊召喚！」

ピンク色の毒蛇と、チョウチンアンコウ型の魚モンスターがハンマー・シャークの隣に並び立つ。攻撃力500のアシッド・クラウドをうまく倒してダイレクトアタックすることができれば、こんな小さな攻撃力でも累計ダメージはかなりのものになる。

グレイドル・コブラ 攻1000

サイレント・アングラー 攻800

「これでよし！サイレント・アングラーでアシッド・クラウドに攻撃！」

サイレント・アングラー 攻800↓雲魔物―アシッド・クラウド 攻500

提灯を光らせての体当たりを受け、緑色の雲があっけなく四散する。やった、と言おうとしたのもつかの間、ちぎれたはずの雲が再び流れて寄り集まり、何事もなかったかのように元の形に戻ってのけた。

「言い忘れたが、僕の雲魔物はそのほとんどがある共通効果を持っている。雲魔物は守備表示の時自壊するデメリットを持ちかわりに、戦



闘によって破壊されない」

「だけど、攻撃力はこっちの方が上。せめてダメージだけでも……」  
「いや、それは無理だね。僕は今の攻撃宣言時に永続トラップ、スピリットバリアを発動していた。このカードの効果により、僕はモンスターが存在する限り戦闘ダメージを受け付けない」  
「ぐ……」

今の1ターンだけでも、アモンのデッキのコンセプトの基礎がわかってきた。戦闘破壊耐性を持つ雲魔物を攻撃表示で場に並べることで戦線を維持し、当然発生するダメージはスピリットバリアでカット。シンプルながらに厄介な戦術だけど、問題は次だ。先ほどから全く使われていないフォッグカウンター、あれは一体何の意味があるんだろう？

「これ以上することはないから、これでターンエンド」

「ならば僕のターン、ドロロー。このスタンバイフェイズに雲魔物のスコールの効果が発動、フィールドに存在するモンスター全てにフォッグカウンターを1つ乗せる！」

雲魔物―アシッド・クラウド (1) ↓ (2)

ハンマー・シャーク (0) ↓ (1)

グレイドル・コブラ (0) ↓ (1)

サイレント・アングラー (0) ↓ (1)

天から降り注ぐソリッドビジョンの水の粒が、モンスターたちの体を濡らしていく。今のスタンバイフェイズでフォッグカウンターの数だけなら一気が増えたけど、これが一体どうなるというんだろうか。

「さらに雲魔物―キロスタスを召喚する。キロスタスもアシッド・クラウドと同じく、召喚時に自身にカウンターを乗せる能力を持つ。今は雲魔物が2体いるため、乗るカウンター数も2つになるがな」

緑色で薄気味悪いアシッド・クラウドとは違い、なんだかモコモコした白い雲の体にぱっちりした目を持つ、新たなる雲魔物が召喚された。

雲魔物―キロスタス 攻900 (0) ↓ (2)

「どちらから使ってもいいが……まずはアシッド・クラウドのモンスター効果を発動。このカードに乗ったフォッグカウンターを2つ取り除くことで、魔法または罫を1枚破壊することができる。こちらから見て右の伏せカードを破壊する！」

雲魔物—アシッド・クラウド (2) ↓ (0)

アシッド・クラウドが両腕を振り上げると、僕の伏せカードだけをめがけて局地的に雨が降る。アシッドの名のごとく降りしきる酸性雨が、僕の本命の伏せカード……ポセイドン・ウェーブをグズグズに溶かしてしまった。できればブラフを狙ってほしかったけど、それを顔に出すわけにはいかない。

「次はキロスタスの効果発動、このカードはアシッド・クラウドと対になる効果を持ち、自身のフォッグカウンター2つをコストにモンスター1体を破壊する。攻撃力のあるハンマー・シャークも厄介だが……それ以上に、グレイドルの恐ろしさについては僕も聞いている。グレイドル・コブラを破壊しよう」

雲魔物—キロスタス (2) ↓ (0)

キロスタスが謎の踊りを踊ると、その周りにもっと小さなキロスタスが2体現れる。そのチビキロスタスがコブラに体当たりを仕掛け、ぶつかった瞬間にいきなり爆発した。そしてコブラは戦闘またはトランプの効果破壊に対応して寄生を行えるモンスター、モンスター効果には手も足も出ない。

「バトルだ。キロスタスでサイレント・アングラーを攻撃！」

キロスタスの攻撃力はわずか900……だが、アングラーの攻撃力はそれよりも低い800しかない。こんな時のためのポセイドン・ウェーブもピンポイントで打ちぬかれてしまったら、その攻撃を止める手段はない。

雲魔物—キロスタス 攻900 ↓ サイレント・アングラー 攻80

0 (破壊)

清明 LP4000 ↓ 3900

「まだまだ、この程度！」

「カードをセット。僕はこれで、このターンを終えよう」

清明 LP3900 手札：1

モンスター：ハンマー・シャーク（攻・1）

魔法・罨：1（伏せ）

アモン LP4000 手札：2

モンスター：雲魔物―アシッド・クラウド（攻）

雲魔物―キロスタス（攻）

魔法・罨：雲魔物のスコール

スピリットバリア

1（伏せ）

「僕のターン、ドロー！」

とにかく、厄介なのは雲魔物のスコールとスピリットバリアだ。せめてそのどちらかさえなければ相手の除去より速く攻撃力の低い雲魔物をサンドバッグにできるし、あるいは効果発動のためのフオッグカウンターを乗せられなくすることができる。

「そのためには、お前の力を借りるしかないね！ハンマー・シャークをリリースして、氷帝メビウスをアドバンス召喚！メビウスはアドバンス召喚された時に、魔法・罨カードを2枚まで破壊できる！スコールとスピリットバリアの両方を凍らせて壊しちゃえ、フリーズ・バースト！」

「くっ……！」

終始ペースを握られっぱなしだったこのデュエルにおいて、今のメビウス召喚が反撃の狼煙となったと言っても言い過ぎではないだろう。戦術の要と防御の要をいつぺんに潰されたのはさすがに痛手だったらしく、今日見る限り初めてアモンの表情が歪む。

「反撃開始、ってね。戦闘破壊はできなくても、この冷たさは受けてもらう！アシッド・クラウドを貫け、アイス・ランス！」

横に伸ばしたメビウスの右腕が、肘のあたりから凍り付いていく。やがて肘から先が完全に氷に覆われ、その先端は鋭くとがりまさに腕そのものが巨大な氷の槍のようになる。青いマントをなびかせてメビウスが走り、その右腕で緑色の雲を突き刺しにいった。だがその寸前アシッド・クラウドの姿がいきなり霧散し、その全てがキロスタス

の体に吸い込まれていく。

「攻撃前に消えた？」

「その通り。速攻魔法、フォッグ・コントロールを発動したのさ。このカードは自分フィールドの雲魔物1体をリリースすることで、モンスター1体にフォッグカウンターを3つ乗せる。アシッド・クラウドは今、キロスタスの1部となった」

雲魔物—キロスタス (0) ↓ (3)

前言撤回。まさか除去を喰らっても最低限の立て直しができるような準備ができていたなんて、オブライエンといいヨハンといい、なんでこんなデューエリストレベル高いのさ。どうも3年になってから、常に対戦相手に一歩先を行かれてばかりな気がする。

いや、ここで弱気になってたら勝てる勝負も勝てなくなる！

「次のターンの破壊効果は止められない……だったらせめて、一撃だけでも！改めてキロスタスに攻撃、アイス・ランス！」

氷帝メビウス 攻2400 ↓ 雲魔物—キロスタス 攻900

アモン LP4000 ↓ 2500

「僕の手にはトラップカードはない……ごめんメビウス、これでターンエンド」

「ふむ。多少驚いたことは認めるが、この程度は誤差の範囲内だ。ドロー、キロスタスの効果を発動。氷帝メビウスを破壊する」

雲魔物—キロスタス (3) ↓ (1)

またもやミニサイズのキロスタス2体がメビウスに特攻を仕掛け、氷を操る帝と言えどもなすすべなく破壊されてしまう。

「そして雲魔物—タービュランスを召喚する。このカードもまた、召喚時に自身にフォッグカウンターを乗せる」

雲魔物—タービュランス 攻800 (0) ↓ (2)

「タービュランスはフォッグカウンターを1つ使い、デッキまたは墓地からこのカードを特殊召喚できる。デッキに眠る雲魔物—スモークボールを特殊召喚！」

渦を巻く雲の巨人がぐつと力を入れて気張り、その頭のとつぺんの穴から暴風を吐き出しはじめる。するとその上昇気流に乗って、小さ

な小さな雲の子供がパタパタと短い手足で懸命にバランスを取りながら吐き出された。

雲魔物―タービュランス(2) ↓(1) ↓(0)

雲魔物―スモークボール 攻200

雲魔物―スモークボール 攻200

「バトルだ、全てのモンスターでダイレクトアタック！」

雲魔物―スモークボール 攻200 ↓清明(直接攻撃)

清明 LP3900 ↓3700

雲魔物―スモークボール 攻200 ↓清明(直接攻撃)

清明 LP3700 ↓3500

雲魔物―タービュランス 攻800 ↓清明(直接攻撃)

清明 LP3500 ↓2700

雲魔物―キロスタス 攻900 ↓清明(直接攻撃)

清明 LP2700 ↓1800

「ちまちまちちまと……！」

実際4体もダイレクトアタックを喰らったのにまだライフがこれだけ残っているというのは、かなり異様な事態ではある。とはいえこんな憎まれ口を叩きつつも、今の僕がピンチなのは僕自身が一番よくわかっている。アモンのデツキは決定打こそ欠けるものの、プレイングで堅実に場を固めつつフォッグカウンタから生まれるアドバンテージで押し切るデツキなんだろう。そしてそのプレイングが、火力のない雲魔物を主席にまで引き上げた最大の武器だ。さっきメビウスでスコールだけでも割っておいて助かった、あれ以上やられたら本気で立て直せなくなるところだった。

だけど、まだ手が無いわけじゃない。スモークボールはこれまで出てきた雲魔物の中でも特に攻撃力が低い、次のターンでそこをつけばダメージを稼げる。こうなったら多少のアドバンテージは度外視して、僕のデツキよりさらに低いあの攻撃力と言う弱点を生かしてダメージレースに持ち込む。やられる前にやる、それしかない。

「魔法カード、馬の骨の対価を発動。自分フィールドの通常モンスター1体をリリースし、デツキから2枚ドロウする。スモークボール

1体を墓地へ。さらに魔法カード、宝札ラッキークラウド雲を発動。カードをセットしてターンエンド……だがこの瞬間に宝札雲の効果が適用され、僕がこのターン同名雲魔物を2体特殊召喚したためにカードを2枚ドロウすることができる」

清明 LP1800 手札：1

モンスター：なし

魔法・罨：1（伏せ）

アモン LP2500 手札：3

モンスター：雲魔物―キロスタス（攻・1）

雲魔物―タービュランス（攻）

雲魔物―スモークボール（攻）

魔法・罨：1（伏せ）

「僕のターン、ドロロー……このカードで繋いでみせる！2体目のグレイドル・コブラを召喚、そしてスモークボールに攻撃！」

グレイドル・コブラ 攻1000

空から降りてくる雲にたいして立ちはだかるのは、地面から湧き上がる銀色の水たまりから生まれる大蛇。その毒牙が唸り、最も小さくて弱く、またなんの耐性も持ちえない通常モンスターのスモークボールを一噛みで噛み千切らんと迫る。

だがその牙も届く寸前、決して小さくはないコブラの体ごとふつと僕の目の前から消えてしまった。スモークボールの前にぽっかりと開いた次元の裂け目に飲み込まれ、この世界から消えてしまったのだ。

「そんな単調な攻撃は通さない。トラップ発動、次元幽閉！このカードにより、攻撃モンスターはゲームから除外される」

「コブラが……だとしても、僕のことに変わりはないね。カードをセットして、ターンエンド！」

「ふつ、随分と熱くなっているようだが……熱くなるだけでは、デュエルには勝てない。僕のターン、ドロロー！」

今アモンは、悩んでいるはずだ。確かにアモンの場に存在するモンスターの攻撃力合計は1900と僕の残りライフを上回ってはいる

が、その数値はたかだか100に過ぎない。つまり、僕の伏せカードがもし何らかの形で攻撃を妨害する、あるいはダメージを軽減するものだった場合このまま攻撃しても僕のライフは当然、残る。かといってさらに攻撃のできるモンスターを展開しようとしても、やはりこの伏せカードが枷となる。

当然僕が伏せたのはそのどちらかだ。さあ、危険を冒してモンスターを増やすか、危険を冒して攻撃するか。ふたつにひとつ、どちらを選ぶか見せてもらおうじゃないの。

「ここは攻撃だ。3体のモンスターでダイレクトアタック！」

「惜しい、命拾いしたね？トランプ発動、波紋のバリアーウェーブ・フォース！」

僕の全身をぐるりと取り囲むように水の壁が包み込み、そのまま攻撃してきた雲魔物たちの連撃を受けた部分に波紋が走る。次の瞬間、3体の雲魔物はすべて吹き飛ばされた。

「ウェーブ・フォースは直接攻撃宣言時にのみ発動できて、その効果は相手モンスター全てをデッキバウンスするのさ！」

通常召喚でさらにデッキバウンス対象のアタッカーを増やしてくれたらありがたかったけどね、そうそううまくはいかないか。プレイングセンスだけじゃなく、デュエリストとしての勘まで優れていると見える。どんなルートを使ったのかは知らないけど怪電波とデスデュエルについてもすでに当たりをつけていたみたいだし、こういう勘のいい知性派は本当に厄介だ。

そして今も、自分のモンスターをいっぺんに失ったというのにまるで慌てた様子がない。どこまで想定内なのかまるで読み切れない、そんな底知れなさがある。

「やはり、攻撃宣言をトリガーとするカードだったか。僕はこのターン、まだモンスターを召喚していない。雲魔物―ゴースト・フォッグを守備表示で場に出し、さらに2枚目の雲魔物のスコールを発動。これでターンエンドだ」

雲魔物―ゴースト・フォッグ 守0

清明 LP1800 手札：0

モンスター：なし

魔法・罨：1（伏せ）

アモン LP2500 手札：1

モンスター：雲魔物―ゴースト・フォッグ（守）

魔法・罨：雲魔物のスコール

「僕のターン！」

今引いたカードは……このカードか、悪くない。こうなってみるとさっきのアシッド・クラウドでこのブラフがスルーされたのも悪いことばかりじゃない。

「リバースカードオープン、サルベージ！この効果により墓地から攻撃力1500以下の水属性モンスター2体、グレイドル・コブラとサイレント・アングラーを手札に回収する！そしてサイレント・アングラーを召喚！」

サイレント・アングラー 攻800

「攻撃力の低い方をわざわざ出すのか？」

「繋ぎだからね。水属性モンスターのアングラーをリリースして、このカードを手札から特殊召喚！出てきて、シャークラーケン！」

シャークラーケン 攻2400

半上級モンスターのスペックを持ちながらも召喚権を使わずに出せるモンスター、シャークラーケン。タイダルのない今の僕のデッキにとっては凄く貴重な、パツと出せる自前のアタッカーだ。守備力0のゴースト・フォッグを倒すだけなら別にアングラーのままでもよかっただろうが、これまでの流れで考えるときつと何かあのカードにも効果があるだろう。ならば突破力の高いシャークラーケンで押し切る方がいいと考えたのだ。

「シャークラーケンでゴースト・フォッグに攻撃！」

シャークラーケン 攻2400↓雲魔物―ゴースト・フォッグ 守

0（破壊）

シャークラーケン（0）↓（6）

「な、なんだってのや!？」

なよなよした雲を一撃で粉碎した、と思ったら、なにやらシャーク



ラーケンの様子がおかしい。その全身に薄い雲のかけらがまとわりつき、いつまで経っても消えようとしなない。

「ゴースト・フォッグの効果発動。このカードが戦闘破壊された時、そのモンスターのレベルの数だけフォッグカウンターを好きなモンスターに乗せることができる。もつとも、今フィールドに存在するのはシャークラーケンだけがね」

またまた前言撤回。しまった。これ完つ全に裏目だ。大人しくアングラーで攻撃してからメイン2でシャークラーケんにチェンジさせておけば、あるいはシャークラーケんに拘らずにコブラで攻め込んでいけば……いや、もうこうなった以上、反省は後ですればいい。落ち着け落ち着け、これまでの雲魔物のパターンを見るに、フォッグカウンターを使って何かするモンスターは常に自身に乗ったカウンターをコストにしていた。そうだ、僕の場合に存在するシャークラーケんにカウンターが乗ったからって、何も恐れることはない。これはただのはったり、こけおどしに過ぎない。

「ターンエンド！」

「ふふふ。先ほども言ったことだが、熱くなるだけではデュエルに勝つことはできない。それを証明してみせようか。スタンバイフェイズに雲魔物のスコールの効果により、フォッグカウンターが1つ追加される」

シャークラーケン (6) ↓ (7)

「それがどうしたって？」

「永続魔法、サモンクラウド 召喚雲を発動。このカードは1ターンに1度、自分フィールドにモンスターが存在しない時手札か墓地からレベル4以下の雲魔物を特殊召喚できる。ただし、墓地から特殊召喚した場合このカードが自壊するデメリットがあるが。だがもはやそのデメリットも関係ない、墓地からアシッド・クラウドを蘇生する！」

雲魔物―アシッド・クラウド 攻500

またもや現れた、緑色の雲。僕のフィールドに伏せカードのない今、あのカードを出す意味はなさそうなものだけど。その疑問は、すぐにふり払われた。

「アシッド・クラウドをリリースし、アドバンス召喚！出でよ、雲魔物——ニンバスマン！」

これまでよりもひとときわ大きい雲が寄せ集まり、頭と腕と足がなんとか識別できる程度の人型に変化していく。だが何よりも恐ろしいのは、その巨大さだ。これまでの雲魔物が精々人間サイズだったというのに、このモンスターは身の丈5メートルは軽く超している。しかもその状態から、さらに体が一回り二回りと巨大化しつつあるのだ。

「ニンバスマンは通常時、攻撃力を1000しか持たないモンスターだ。だがこのカードはアドバンス召喚時、リリースした水属性モンスター1体につき1つのフォッグカウンターを自身に乗せる」

雲魔物——ニンバスマン (0) ↓ (1)

アモンの説明が続く中よく見ると、シャーククラーケンにまわりつく雲の切れ端が徐々にニンバスマンに吸い取られていくのが見えた。そしてその雲を取り込み、ニンバスマンが更なる巨大化を遂げる。

「そしてニンバスマンの攻撃力は、フィールドに存在するフォッグカウンター1つにつき500ポイント上昇する。自身に1つ、そしてシャーククラーケンに7つ。そのカウンター全てが、ニンバスマンの攻撃力を上昇させる」

雲魔物——ニンバスマン 攻1000↓5000

「く……い」

してやられた。これまでのパターンから正直、例えシャーククラーケンのミスが響くとしてもまさか次のターンで終わるようなことはないだろうなんて甘い期待がどこかにあったことは否めない。攻撃力1000以下のモンスターばかり出してきていたのに、ここぞという局面にこんな火力の切り札を隠し持っていたなんて。

超高速でライフを削りつつこちらの手の内を読み切り一手先の行動を仕掛けてきたオブライエンや、精霊との絆と自らのデッキを限界まで信じ抜くことでシンプルではあるが攻略しがたい強さを見せつけたヨハンとはまた違う、常にこちらの行動を上から見下ろしてくるくせにこちらからはその動きを捉えきれず、こちらの油断をつけてその表情を一変させる……まさにそのデッキと同じく雲のようなアモ

ンの強さは、認めざるを得なかった。

「バトルだ、ニンバスマンでシャークラーケンに攻撃！ダウンパワー  
シャワー！」

雲魔物—ニンバスマン 攻5000↓シャークラーケン 攻24  
00（破壊）

清明 LP1800↓0

「さて、デュエルが終わったわけだが……来たか！」  
「またか！」

ソリッドビジョンによるたくさんの雲が消え、それと連動するようにデスベルトが光を放つ。ちよつと立ちくらみがしたので大人しく座り込んで調子を整えていると、アモンが苦しそうに息を吐きながら地面にうずくまった。

しかし十代ですらデスデュエル終了後はしばらく意識がなかったことを考えると、その場で気絶してないあたりアモンも相当体を鍛えているのだろう。オブライエンといいアモンといい、服の上からでも筋肉がよくわかるプロフェッサー・コブラといい、そんなに鍛えてアスリートにでもなるつもりなんだろうか。それともどこかの兵隊とか……いや、そこまでいくのは考えすぎかな。

「なる、ほど……貴重なデータが取れた、な」

「よくわかんないけど、おめでとさん。あー、だるい……」

お互いに座り込んでいる間に、何か服の後ろをちよいちよいと引つ張られるような感覚がしたので振り返る。そこにいたのはうさぎちゃんこと幽鬼うさぎの精霊。だけどその手に持つ鎌にはカードイラストと違い、先端部分に串刺しになった機械が付いていた。相変わらず押し黙ったまま、それを見せつけるように突き出してくる。

「えっと、くれるの?」

『……』

どうやら正解だったらしく、ほんの少しだけ表情を明るくしてこくこくと頷いてからその機械を鎌の一振りで足元に落とすうさぎちゃん

ん。このレンズからいつて、恐らくこれは監視カメラだろう。わざわざ色まで塗って目立たなくしてあるところを見るに、相当慎重に仕掛けてあったに違いない。実際、僕もこんなのがすぐ近くにあるなんて全く気付かなかった。1人だけそれに気づいたこの子が、こっそり抜け出して刈り取ってきてくれたのだろう。

しかし監視カメラねえ。オベリスクブルー女子寮に仕掛けるんならいい悪いはともかくとしてわからんでもないけど、こんな森の中に仕込んで何を撮る気だったんだろう。ただ雨に濡れたような跡もなければ目立った汚れもついていないことを見ると、かなり最近のもの……具体的には、まだ設置から1か月と経ってないだろう。つまり、あのプロフェッサー・コブラが来てデスデュエルが始まる直前のあたりだ。健康に関わるようなデスデュエルの時点で薄々感づいてはいたけど、ここまで条件が重なるといよいよもって怪しい。

そんなことを考えながら完全に壊れて使い物にならないそれを見つめていると、アモンにも気づかれてしまった。

「……それは？」

「ぼくもわかんないけど、監視カメラだとき。この森の中に仕込んであったらしいけど……少なくともこれは、もう使い物にはならないね」

「そうか。すまないが、それを貸してくれないか？何が撮影されているか、誰が仕掛けたものなのか、ガラム財閥の技術ならばデータの復元や情報の送信先が割り出せるかもしれない」

「はいよ。僕が持つててもしょうがないし」

ぽいっと投げ渡したのを座り込んだままキャッチし、いやに大事そうに抱えるアモン。渡しておいてなんだけど、何か変なこと企んでなければいいけど。

いや、どうもこれまでの様子を見る限りでは、アモンもこのデスデュエルの被害者だ。どうせ僕が持つていても役には立たないこのカメラ、あげちゃっても問題ないだろう。

「じゃ、僕は帰るよ。立てる？」

「なんとかな……と言いたいところだが。ここですばらくの間、雲で

も眺めてから戻ることしよう」

「そう？」

聞き返すが、すでに返事はなかった。寝転がって目をつぶっているところを見ると、体力減少による疲れが効いて眠ってしまったのかもしれない。まあ昼寝のひとつやふたつでそうそう風邪ひくこともないだろうし、放っておけばいいだろう。

## ターン77 鉄砲水と魔性の甘味

「……確かにワタクシにも悪い点があったことは認めてやらなくもないですわ、ですけど彼女ったら」

「うーん。いまさら言い出しにくいのもわかるけどさ、どこかで一回は折れないと仲直りは難しいんじゃない？」

僕の言葉に黙ってうつむき、紅茶を優雅な仕草で飲むふわふわカールの髪形になぜか純白のドレス、そして長い白手袋といった完全にどこかのお嬢様そのものといった恰好の女の子。彼女は天下井ちゃん、以前光の結社騒ぎの際に夢想とデュエルを繰り広げたアカデミア生徒だ。

あの時は初対面の僕に問答無用で手袋を投げつけて決闘を申し込んできたり、それ以外にも利便性の概念をガン無視しているこのドレスが普段着だったりと色々アグレッシブ……というかぶっ飛んだ子ではあるけれど、実はその中身はそんなに悪い子でも常識のじの字もない子でもなく、案外素直ないい子である。もっとも、中身を知る以前に皆から距離を置かれがちなため友達ができづらかったりと苦労していたことは間違いないのだが。

ともかくそんな彼女もうちの味がお気に召したらしくこの春休みあたりから何回か僕の店に通っているうちにすっかり常連さんの1人になり、僕自身にもだんだん心を許してきたらしく最近店が暇な時を見計らって悩み相談などもしてくるようになってきたのだ。その効果があったのかはわからないが最近はその人当たりも以前に比べればはるかにマシになってきて、それに伴い次第に友人も増えてきたらしい。よかったよかった……と思っていたのだが、今日はその友達と喧嘩して本気で悩んでいる模様。

「そう簡単に言いますが、このワタクシがいくら友人とはいえ庶民に頭を下げるなどとは」

あくまで強気な発言だが、その表情は重く沈んでいてカールした髪もいつもよりへなっとして見える。頭ではわかっているけれど、とあったところか。でも、何をすればいいのか本当はわかっているのな

らば話が早い。いつぞやの葵ちゃんと同じく、ここに来たのも最後のふんぎりをつけるため、背中を押してもらいたがっているのだろう。だとすれば僕がここで何かを言わずとも、ただ話を聞いてあげればいい。ちゃんと話を聞く人がいれば、それだけでだいぶ楽になれるんだから。……なんでそれが僕の役なのかはさっぱりわからないけど。というか僕自身デツキに行き詰ってるのに、他人様のお悩み相談なんてなんで引き受けてるんだろう。

『情けは人のためならず、か。マスターらしくていいじゃないか』  
そう励ましてるのか微妙に馬鹿にしてるのか判断しかねる台詞を一言だけ残して去っていくチャクチャルさん。別に、見返り目的じゃないんだけどね。

とまあそんなこんなで結局、話が終わるころにはすでに日が暮れてしまっていた。相談自体はともかく、思ったより世間話に花が咲いてしまったわけだ。ほとんど商売にならなかったけど、たまにはこんな日もいいだろう。

「本日は、手間をかけさせて申し訳ないですわ」

「いやいや。ちゃんと仲直りできるといいね」

ティーセットを片付けながら、ひらひらと手を振って送り出す。最後に一度だけ頭を下げてそのまま出て行った天下井ちゃんだったが、すぐに引き返してきた。

「忘れ物？」

そう尋ねると、ぶんぶんと首を横に振る。そのままドレスのポケットに手を突っ込み、可愛らしい小さな包みを引っ張り出した。

「そういえば、もうひとつ要件があったのを忘れていましたの。さあ、受け取ってくださいまし」

「えっと……？」

突き出してきたのでとりあえず受け取りはしたものの、これがなんなのかよくわからない。そんな思いが顔に出ていたらしく、心底情けないという表情で補足が入った。

「まったく、察しの悪い殿方というのは困りますわ。チョコレートですわよ、チョコレート。別に私一人からの物ではなくてですね、アカ

デミア女子寮一同からの日頃の感謝の形ですけども。中にメッセー  
ジカードも入れてありますのよ、大体10人分くらい」

「い、いいの?」

「そんな無粋なことを仰るとは、野暮な殿方もあったものですわね。  
こういうことを女性から2度も言わさないことこそが、本当の紳士の  
振る舞いというものではなくて?」

「あ、ありがとう……」

確かに、今年は去年よりもチョコ関連のものがよく売れた。年々い  
わゆる友チョコや自分チョコの概念が浸透してきているおかげで  
『チョコをもらう人』のハードルが低くなり、そのぶん1人当たりの買  
う量が増えてきているからだ。とはいえ、まさか僕自身がその恩恵を  
受けることになるとは思わなかった。儲けさせてもらっただけでも  
バレンタイン様々なのに、こんな役得までもらえるとは。

「それでは、ワタクシは帰らせていただきますわ。ホワイトデーには  
ちゃんと女子寮までお返しを持ってきてくださいまし」

「オツケーオツケー、任せといてよ! 本当ありがとうね!」

今度こそ出て行った天下井ちゃんをしばらく見送ってから、改めて  
片づけに取り掛かる。いやー、まさか僕もチョコがもらえるなんて、  
幸せ幸せ。これで今年も夢想からもらえたりしたら、もう今年中の運  
全部使い果たしてもいいぐらいなんだけど。

「先輩、いますか?」

ちよつと妄想にふけっていると、ひよつこりとドアが開いて葵ちや  
んが顔を出した。

「あれ、今日は休めって言ってなかったっけ?」

つい先日僕が勝手に店をほったらかしてアモンとデュエルして  
いた間、彼女は1人でこの店を切り盛りしてしてくれた。そのお詫び  
として、今日は有給休暇ということにしておいたのだ。その彼女が、  
こんな閉店の時間になったというのに何をしに来たのだろう。

「私も色々ありましてね。はい先輩、遅くなりましたがこれとこれ」

肩をすくめてそう言いつつ、2つの包みを取り出して僕に差し出す  
葵ちゃん。む、なんかデジャヴを感じる気がする。



「葵ちゃん、もしかしてこれって」

「義理チョコですが？ いらなら返して下さい、持って帰って私が食べます」

「有難くいただきます、恐悦至極感謝の極みです」

「……テンション高いですね。引きますよ？」

割と本気で引き気味の葵ちゃんを見て少しだけ我に返り、咳払いをしてどうにか誤魔化す。と同時に、そこでようやく目の前の彼女の何とも言えない表情に気が付いた。

「そういう葵ちゃんはテンション低いね。嫌なことでもあったの？」

「嫌なこと、と言うほどでもないんですけどね。先輩、これは私からのですが、こっちの箱は誰からのものだと思いますか？」

そう言つて、2つ目の包みを指さす葵ちゃん。彼女がここまで複雑な顔になる相手……あ、なんかもう先が読めた気がする。

「今朝起きたら、私の部屋の机の上に手紙と一緒にこれが置いてありまして。明菜お姉ちゃんからのプレゼントだから、清明……あー、その、清明きゆんに渡してね、だそうです。末尾にハートマークもついてました」

思いつきり言いたくなさそうにしながら『清明きゆん』とか言つてる葵ちゃんをじつと見てるとなんだか新しい何かに目覚めそうな気もしてくるけど、それはそうとして貰えるものは素直に嬉しい。でもあの人、ついこの間この島に来たばかりなのにまた来てたんだ。しかもまた葵ちゃんの勘と女子寮の防犯装置に引っかかるの不法侵入までやってのけて、あの人には到底かなう気がしない。

「では、私はもう帰りますね。なんかもう……今日は姉上のせいで精神的にどつと疲れました……」

「はい。お返しは期待していいよ」

冗談めかしてそう伝えると、今まさに出て行こうとした葵ちゃんが振り返る。

「ええ。わたしは甘味に関しては、先輩のことを全面的に信頼していますから」

いたずらっぽくそう返す葵ちゃんは、今日初めての笑顔を浮かべて

いた。それでは、と最後に一礼して去っていくその後ろ姿を眺めつつ、改めて片付けの続きに取り掛かる。いやー、嬉しいな。まさか1日に3つもチョコが貰えるだなんて、ここに入学する前にはそんなバラ色人生想像もしていなかった。

『ずいぶん浮かれてるな、マスター』

「そりゃ、ナスカ出身のチャクチャルさんにはよくわかんないだろうねー。バレンタインにチョコ貰って喜ぶのは、日本男児の特徴さ。フンフン」

ただ、1つだけ疑念がないわけじゃあない。いや、こんなこと考えるのは贅沢の極みだって自分でもわかっちゃあいるんだけどね？ただ、誰とは言わないけど去年のこの日に僕にチョコをくれた人から、今年は何かしらないのかなーって、ね？やっぱりそこが正直1番気になるというか、なんというか、ね？

『面倒くさい……』

「なんとでも言っつてよ。でもしようがないでしょ？自分からチョコ下さいなんて、豆腐メンタルの僕に直接言う勇氣はないよ」

『はい？ああ、うん、もう……いいや、マスターがやりたいようにやってくれ』

なんだか最後が投げやりだった気もするけど、チャクチャルさんの気配が去っていく。さて、僕もそろそろレッド寮に帰ろう。ここで待ってれば夢想も来るかな？なんて甘い期待があったことも否めなけれど、これ以上粘ると十代たちのごはんがなくなってしまう。

最後に戸締りをして店を出ると、もはや誰もいなくなった廊下に僕の靴音だけが響いた。3つのチョコレートがきちんと鞆の中に入っていることを軽く上から叩いて確認し、もう1度だけ周りに夢想がいたりしないかを見回し確認してみたりして……あ、はい、誰もいませんね。わかつてますよ、ええ。別に寂しくなんてないもーん。

「さあ、帰ろうー」

未練を断ち切るためにあえて声に出してみるが、それががらんとした廊下に虚しく反響して余計にセンチな気分が増してしまう。まあこれ以上うじうじうじしてるのもいい加減みつともないし、今度

こそきっぱり切り替えよう。それに、今年貰えないからってそれは夢想のせいじゃない。今年度は商売が忙しくて、吹雪さんから必勝作戦を聞くなどの対策とアピールをさぼっていた僕に責任がある。

そうだ、去年と違い何ひとつ夢想本人に対してやってこなかった僕の自業自得なんだ。さあ、切り替え切り替え。ほら、決して悪いことばかりじゃない。義理チョコならこんなにあるし、今日は夕日がきれいだ。すでに水平線にくつつきつつあるあの夕日と、その向こうからこちらに近づいてくる人影。忘れもしない、あのきれいな青髪の持ち主は……あれ。

「夢想！」

「こんにちわ、だって」

そこで一度、会話が途切れる。何か話しかけようかとも思ったけど、テンパりまくってる僕が今この場面で口を開いてもロクなことが言えなくて自己嫌悪になるのは目に見えている。夢想も夢想で夕日の加減のせいか顔を赤くして何かを言いかげようとするも、なぜかまた口をつぐんでしまう。

……どうしよう、なぜか気まずい。会えなかったときはあんなに辛かったのに、いざ会ったら会ったでまともに会話もできないなんて。でもこうやってすぐ隣で見ると、本当綺麗だなあ。茜色の風景によく映えるこの青髪もすごいサラサラしてそうで、いつペンでいいから撫でてみたい。まあ、そこまでいくとただのセクハラだからやらなけれど。

「あ、清明？…って」

「何？」

「あ、あのね。そんなに見られると恥ずかしいよ、だってさ」

「え!?!あ、ご、ごめん！」

上目遣いでそんなことを言われ、そのあまりの破壊力にこっちまでくらくらしながらも視線を逸らす。そして、そんな小さな仕草もいちいち可愛いなあもう。

そしてふと視界の端に捉えた太陽は、いつの間にかその5分の1ほどが水平線の向こう側に沈んでいる。日が完全に暮れるまでこうし

ているのも褒められたことじゃない、とにかく何か話しかけよう。

「え、ええと、その……」

「あ、あのね、って……」

「夢想、先に言っつていいよ!？」

「ううん、とんでもないんだって!清明、お先にどうぞつてさ!」

まずい、なんであと数秒でいいから待てなかったんだ僕の馬鹿。元々場を繋ぐためだけに話しかけただけだから、お先になんて言われなくても特に言いたいことなんてないぞ。

なにか会話のネタになりそうなものがないかとあちこちを見回しているとその時、偶然彼女の腕に付いたままのデュエルディスクが目にと留まった。これ以上無言でいるのも不自然でしかないし、ここはもうこれしかない。

「ねえ、夢想。久しぶりにさ、デュエルやろうよ」

「デュエル? って」

首をかしげて聞き返してくる夢想に、デュエルディスクの支度をしながら頷き返す。やっぱり僕らはデュエリストなんだ、困ったときはカードの力を借りるのが一番。夢想も夢想で一瞬目をぱちくりさせるも、すぐにノリノリでデュエルディスクを構えた。ここで躊躇いもせずに受け入れるあたり、僕も僕だけどこの子もたいがいバーサーカーというかバトルジャンキー的な面があると思う。自分から言い出しておいてなんだけどさ。

「それじゃあ、デュエルと洒落込もうか?」

「もちろんいつでも大歓迎だよ、なんだって」

「デュエル!」

言い出しつぺの僕が先行。ふむ、悪くない手札だ。

「フィッシュボーグアーチャーを守備表示。さらにカードを2枚セットして、ターンエンド」

フィッシュボーグアーチャー 守300

「守りを固めるだけ? ってさ。私のターンに魔法カード、闇の誘惑を発動。デッキからカードを2枚ドロウして、その後で手札の闇属性モンスター1体を除外。私はワイト夫人をゲームから除外して……さ

らに手札からワイトメアの効果を発動。このカードを捨てることで、ゲームから除外されたワイト夫人を特殊召喚だつてさ」

ワイト夫人 守2200

大地が震え、地の底から古ぼけたドレスを着る女性の骸骨がせり上がってくる。さすが夢想、何ひとつ無駄のない流れるような展開だ。「さらに、冥界騎士トリスタンを通常召喚だつてさ。このカードは自分フィールドに他のアンデット族が存在するとき、攻撃力が300ポイント上がるんだつて」

冥界騎士トリスタン 攻1800↓2100

次いで現れた、赤い目の亡霊馬に騎乗する骸骨姿に青い鎧の騎士。自身の効果により攻撃力は2000オーバーと、守備力300のアーチャーを踏みつぶすぐらいならば7回は余裕で可能となるほどの数値……だけど、そんな単調な攻め手を通すわけにはいかない。

「リバースカードオープン、フィッシュャーチャーージ！このカードは魚族モンスター1体をリリースして相手のカード1枚、トリスタンを破壊してカードを1枚ドロウする！」

アーチャーが両腕から矢を乱射しつつ亡霊騎士に単身立ち向かっていき、盛大な自爆をして見事その体を大地に崩れ落ちさせた。召喚権を使って出したアタッカーをうまく倒せたのは、今回は初っ端から調子がいい証拠だ。このままいけばあの無双の女王、河風夢想の牙城を崩すことだってできるかもしれない。

だがそんな見通しは、あまりにも甘かったことを思い知ることになる。

「残念だったね、清明。魔法カード発動、生者の書―禁断の呪術、つて。このカードは私の墓地のアンデット族を1体蘇生して」

「僕の墓地からモンスター1体を、除外する……！」

生者の書による禁断の呪法の結果、たつた今地に堕ちたはずの騎馬武者が再びその両足で立ち上がる。と同時に、僕の墓地に存在することができなくなったアーチャーのカードがデュエルディスクからはじき出されてしまった。アーチャーは何度でも墓地から蘇りアドバンス召喚の素材に壁にと柔軟な働きを可能にする僕のデッキの潤滑

油、除外されたカードを再利用できない僕のデッキにとってこのピンポイント除外はこの先の展開を考えるとかなり痛い。

「バトルだよ、だって。トリスタンのダイレクトアタック！」

冥界騎士トリスタン 攻2100↓清明（直接攻撃）

清明 LP4000↓1900

「くっ……」

「ふふふ、今のは私が一枚上手だったね、だって。私はこれでターンエンド」

清明 LP1900 手札：3

モンスター：なし

魔法・罠：1（伏せ）

夢想 LP4000 手札：3

モンスター：冥界騎士トリスタン（攻）

ワイト夫人（守）

魔法・罠：なし

「だったら、次は僕がその上を行くさー！ドロー！」

先ほどのフィッシュチャーチャージのドローのおかげで、僕の手にはすでに次の一手が握られている。今度はこっちの番だ、これで目にももの見せてやる！

「相手フィールドにのみモンスターが存在するとき、カイザー・シースネークはレベルを4として手札から特殊召喚でき、さらに特殊召喚されたことでその攻守は0になる！」

カイザー・シースネーク 攻2500↓0 守1000↓0 ☆8  
↓4

「アドバンス召喚でもするの？って」

「まあね。だけど、ただのアドバンス召喚じゃあ終われないね。リバースカードオープン、グレイドル・スプリット！このカードは自分モンスター1体の装備カードとなって、その攻撃力を500ポイント上昇させる……だけど、僕がやりたいのはそこじゃない。スプリットはさらなる効果として、このカードを墓地に送り装備モンスターを破壊することで僕のデッキから2種類のグレイドルモンスターを特殊

召喚することができる！行くよスライム、アリゲーター！」

大海蛇の姿が溶け崩れ、かすかに揺れ動く銀色の大きな水たまりへと変化する。やがてその水たまりが2つに分かれ、それぞれが銀色のグレイ型宇宙人と緑色のワニを模した超生物へと変化していった。

グレイドル・スライム 守2000

グレイドル・アリゲーター 守1500

「なるほど、つてき。それで2体を使って、最上級モンスターのアドバンス召喚を……」

「言ったでしよ、その上を行くつてき。永続魔法、グレイドル・インパクトを発動！このカードに秘められた2つの効果のうち第2の力を発動、場のグレイドルカード1枚と相手のカード1枚を破壊する！僕のアリゲーターとそっちのワイト夫人を破壊、グレイ・レクイエム！」  
インパクトの発動により場に現れたUFOから2本の未知の光線が発射され、それぞれがアリゲーターとワイト夫人を飲み込む。ワイト夫人は一瞬で焼き尽くされたが、アリゲーターはその光線を浴びても再び銀色の水たまりに戻っただけだった。そして、その水たまりが音もなく亡霊馬の足元へと迫る。

冥界騎士トリスタン 攻2100↓1800

「まさか……」

「そのまさかさ。魔法カードの効果で破壊されたアリゲーターは、相手モンスター1体に寄生してその動きを操ることができる。トリスタンのコントローラーは頂いてくよ！」

音もなく近づいた元アリゲーターが、がばつと液状のまま飛び上がってその馬に、そして騎士の鎧に染み込んでその奥深くまで浸透していく。数秒もしないうちに騎士と馬の両方の額に銀色の紋章が浮かび、のしのしとこちらに向けて歩いてきた。

「さあ、お待ちかね。2体のモンスターをリリースして、アドバンス召喚！ブルーアイス・ホワイトナイフ・ドラゴン青氷の白夜龍！」

青氷の白夜龍 攻3000

「バトル！夢想到ダイレクトアタック、孤高のウインター・ストリーム！」

一瞬で大空に舞いあがった氷のドラゴンが、茜色の夕日に照らされながら力を溜める。そして狙い澄ました凍結のブレスが、守るものがないがら空きになった夢想を撃ちぬいた。

青氷の白夜龍 攻3000↓夢想（直接攻撃）

夢想 LP4000↓1000

「きゃっ！」

「っしやあー！」

さつきは確かにいいようにやられたけど、今のターンは我ながら完璧な流れだ。これは、入学以来の2年間というものただの1度も負け試合のない夢想の戦歴に初の黒星をつけられるんじゃないだろうか……いや、つけてみせる。この勝負、僕が勝つ！

「清明、最近調子悪いつて聞いてたけど？だつて」

「スランプはいい加減飽きたからね、そろそろ止めることにしたんだよ。だから夢想、この勝負は勝たせてもらおうよ？」

ちよつと調子に乗ってそんな大口を叩く僕をクスクスと楽しそうに笑って、夢想がそのまま流れるような動作でデッキに手をかけた。すると次の瞬間、これまでとはまるでレベルもランクも違う圧倒的なプレッシャー、物理的な質量でこちらを押しつぶしてきそうなほどの威圧感が辺りに満ちた。これまで僕も大概色々な相手とデュエルしてきたけれど、今彼女の発するオーラは下手をするとその誰をも上回っている。

これが、無双の女王の本気の片鱗。次のターン、彼女は全力で来る。知らず知らずのうちに頬を伝っていた冷や汗をぬぐい、せめてもの空気で笑いかけてから最後の手札をフィールドにおいた。

「……カードをセットして、ターンエンド」

「ねえ清明。今ね、私は本気で楽しいの、だつてさ」

そのまま次のターンにすぐ移るのかと思いきや、意外にもデッキトップに指をかけたままこちらに話しかけてきた夢想。一体どんな話になっていくのかわからない僕には、ただ黙って聞いていることしかできなかつた。夢想も僕の反応は特に気にした風もなく、楽しそうに言葉を紡ぐ。



「このアカデミアに来てから、色々なデュエリストとデュエルしてきたけど。私はやっぱり、清明とデュエルするのが一番楽しいかな、なんだって」

「夢想……」

「貴方の隣でデュエルするときも、貴方とこうしてデュエルするときも。いつだって清明がいるときが一番、私は楽しくとのびのびデュエルができるんだよ、ってさ」

「ありがとう。でも、どうしたのさそんな急に」

「理由なんてないよ。なんだか今まで改めて言ったことがないなーって思うと、急にどうしても伝えたくなくなっちゃって、ってさ」

やっぱり明菜さんもぶっ飛んでるけど、それ以上に夢想の言動が僕には読めない。不意打ちでそんなまっすぐにな言われたら、いくらなんでも照れるじゃない。あまりにも咄嗟過ぎたため気の利いた返しを考えることもできず、結局こんなことぐらいしか言えない自分が憎い。それでも、せめて僕の気持ちぐらいは伝わってくれただろうか。

「……ありがとう、夢想」

そんな僕の何の面白味もない返答を受けて、またクスリと笑う夢想。だけどその笑みには嫌味な部分はなく、見ているこちらも気分が晴れるような明るく爽やかなものだった。だから余計に、全身から立ち上るプレッシャーとのギャップが怖い。

「おかしな話しちゃったね、ってさ。それじゃあ、行くよ？私のターン！」

そうしたところで何がかあるわけでもないが、思わず身構える。さあ来い、夢想！

「魔法カード、ワン・フォー・ワンを発動！手札のモンスターカード、龍骨鬼を墓地に送ることでデッキからレベル1のモンスターを特殊召喚するんだって。来なさい、ワイトキング！」

「ようやく出てきたね、真打！」

大地に深々と亀裂が走り、地の底からゆっくりと骸骨の王が這い込んできてくる。とうに肉など一片たりとも残っていないその瞳に、爛々とした光が宿った。ワイトキングの攻撃力は、墓地に眠るワイト及びワ

イトキングの1000倍……そしてワイトメアとワイト夫人はそれぞれ墓地でワイトとして扱われるため、今の攻撃力は2000といったところか。

ワイトキング 攻0↓2000

「魔法カード、ワンチャン!?を発動つてさ。私のフィールドにレベル1モンスターが存在するから、デッキからレベル1モンスターをサーチ。2体目のワイトキングを手札に加えて、そのまま2枚目の闇の誘惑を発動。デッキからまた2枚ドロウして、サーチしたワイトキングを除外……さらに2枚目のワイトメアの効果で、自身を墓地に送りつつ除外されたワイトキングを特殊召喚するみたい」

先ほどの亀裂から古ぼけた棺桶が浮かび上がり、その蓋を突き破つて更なる骸骨の王がその姿を見せる。それと同時に墓地に更なるワイトが追加されたことで、2体の王者の骨の体により一層の力が漲る。

ワイトキング 攻2000↓3000

ワイトキング 攻0↓3000

「バトル、ワイトキングで青氷の白夜龍に攻撃、つて。螺旋怪談！」

骸骨の王のうち1人が飛び上がり、骨の拳を氷のドラゴンに叩き付ける。しかし白夜龍も負けじとその方向を見やり、特大のブレスで迎撃にかかった。その拳が白夜龍を捉えたのが先か、そのブレスが骨の体を塵一つ残さず吹き飛ばしたのが先か。ともかく2体のモンスターは同時に破壊された。

ワイトキング 攻3000(破壊)↓青氷の白夜龍 攻3000(破壊)

「……よし、ここは。ワイトキングの効果発動!戦闘破壊されたワイトキングは、墓地に眠るワイト1体を除外することで特殊召喚される、だって」

ワイトキング 攻0↓2000

ワイトキング 攻3000↓2000

再び地の底から這い上がるワイトキング。だけどその代償として、同じ能力を持つあの2体の攻撃力は復活に使用された分だけダウン

した……そして、それこそが僕の真の狙い。白夜龍がわずか1ターンで倒されたのは、正直夢想ならばやりかねないとは思っていた。もしここで任意効果であるワイトキングの蘇生を使わない選択を取られたら、攻撃力のさらに上昇したもう1体のワイトキングの攻撃をこの先ずっと防ぎきるのは困難だっただろう。

だけど、ワイトキングの特大火力が耐性も何もない不安定なものであることを使い手だけによく知っている夢想は、その一撃を相手に叩き込むために可能な限り慎重な手を取りたがる。ならば確実に僕のリバーズカードを最後まで警戒して、突破力を自ら殺してでも攻撃の手数を増やしてくると踏んでいたのだ。

「リバーズカードオープン、激流蘇生！僕のフィールドの水属性モンスターが破壊された時にそのモンスターを蘇生し、さらに蘇生させた数1体につき500のダメージを与える！」

「っ!!」

青氷の白夜龍 攻3000

夢想 LP1000↓500

噴き上がる水柱とともに、氷の竜が再び宙に舞う。さらに青氷の白夜龍は自身を対象に取る魔法及び罫を無効にし破壊する効果も備えているため、夢想の手札に残ったカードがもし今から使える単体除去カードだったとしてもそれを無効化することができる。耐性としては正直不完全だけど、すでにバトルフェイズに入っている今この瞬間に限ればその耐性がとても頼もしい。

唯一の不安点は、あの最後1枚のカードがワイトキングの方を強化するカードだった場合だが……だからこそ、あえて白夜龍は攻撃表示で場に出したのだ。今現在、ワイトキングと白夜龍の攻撃力の差はきっかり1000。守備力2500の白夜龍を守備表示で出したとしたら、たかだか500程度の数値差を乗り越えるカードは山のように存在する。だが1000もの差を1枚でひっくり返せるカードは少なく、そもそもその特大火力が売りの「ワイト」でそのようなカードを採用するメリットは乏しい。

この状況はどう考えても覆らない、完璧だ。そう思った。だけど、

僕はまだまだ河風夢想というデュエリストを甘く見ていたらしい。どんな状況からでも必ず勝つ、読んで字のごとく無双の女王。それが、彼女なのだ。

「速攻魔法、即神仏を発動！このカードの効果で、自分フィールドのモンスター1体を墓地へ送る。私が選択するのはたった今蘇生させたワイトキング、だつて」

いつの間にかいつもの布きれではなく法衣を身にまとっていたワイトキングが、突如生氣が抜け落ちたかのようにその場に崩れ落ちる。物言わぬ死体に戻ったその体が、ゴロゴロと転がって地中に吸い込まれていった。

「ワイトキングが墓地に送られた……じゃあ、まさか……」

「もう1体のワイトキングの攻撃力は、また3000になるつてさ。改めてバトル、もう1度ワイトキングで青氷の白夜龍に攻撃！螺旋怪談！」

ワイトキング 攻3000(破壊)↓青氷の白夜龍 攻3000(破壊)

「この瞬間に戦闘で破壊されたワイトキングは、墓地のワイトを除外して特殊召喚される。だけど貴方のドラゴンは、もうこれ以上甦ることはないね、だつてさ」

「……ちえっ」

つまり、僕が考えすぎていたわけだ。良かれと思って攻撃表示で出してしまったせいで、下手に相打ちからの蘇生に持ち込まれた。つまり、このターンでの攻撃権がリセットしてしまった。ごちゃごちゃと考えずに守備表示で出していれば、次のターンに繋げることもできた……いや、こんなものは結果論でしかない。

「楽しいデュエルだったよ、つて。ワイトキングで最後のダイレクトアタック、螺旋怪談！」

ワイトキング 攻2000↓清明(直接攻撃)

清明 LP1900↓0

「今日は勝てると思ったんだけどなー。やっぱ夢想は強いや」

できる限り明るく、空元気を全開にする。いや、実際問題3ターンの目の手札を見た時点でこれは間違いないと勝てるかと踏んだだけに逆転を喰らったシヨックも悔しさもひとしおだ。

だが当の本人はいつも通り、自分の勝利を誇ることもなくこちらに近づいてくる。

「清明とデュエルしたのも、ずいぶん久しぶりだね。でも、その時よりずっと強くなってたよ、ってさ」

「そりやどうも。最近は負け星ばかりだけどね」

「私が保証してあげる。清明はこの1年で、去年よりずっと強いデュエリストになったよ、って」

夢想は、少なくともこういった類の嘘やおべんちやらが言えるタイプじゃない……はず。少なくとも僕の知る限り、その手のことを口にしたためしはない。そんな彼女の言葉は素直に嬉しかったが、だからといってすぐに気が晴れるわけでもない。並のデュエルならまだしも、さつきのは絶対に勝るとまで思ったからなあ。

まだ浮かない僕の顔を見て、夢想がなぜか手を伸ばせば届きそうなぐらいまで近寄ってきた。そのままびしっと僕に指を突きつけ、少しすねたような調子で続ける。

「もう。私が清明の強さならいくらでも保証してあげる、って言うてるでしょう？最近ずっと行き詰って悩んでたみたいだけど、清明ならきつとさらに上の段階までたどり着けるから、って。自分だけで考え込んでないで、もっと周りを見渡してね、だってさ」

「夢想……」

そこで急に彼女の顔が赤らんだように見えたのは、単に沈みつつある夕日のいたずらだったのだろうか。ともかく自身の制服から、小さな小箱を取り出して僕に差し出した。え、これってまさか、いわゆるカカオとか砂糖とかを足したそういう感じのアレだったり。

「はい、これ。遅れてごめんね、なんだって。ハッピーバレンタイン、清明」

## ターン78 鉄砲水と『万』の結束

『あら〜？万丈目のアニキ、珍しくお勉強？』

『まつさか〜！』

「ええい、うるさいぞお前ら！」

剣山が倒れ、ジムもまたデスデュエルによって倒れた。バレンティンを挟んであれから2晩が経ったが2人ともいまだ意識が戻らず、何度か見舞いに行ったけども目覚めるそぶりすら見せないままだ。デスデュエルを見ていた十代たちの話によると、ジムは倒れる前にデスベルトを通じてエナジーが吸い取られる感覚を味わったという。僕とヨハン、十代とオブライエン、そして今回の剣山とジム。これまでに起きた終了後に人が倒れるほどの事件はこの合計3回だが、その中にもさらに程度の差がある。そしてそのほかの生徒が行うデスデュエルでは、精々終わった後でちよつとめまいがする程度でしかない、らしい。僕はそんな平和なデスデュエル経験したことないけど。プロフェッサー・コブラの持ち込んだデスデュエルに、それに対して何かしらのアクションを起こしつつあるアモン。島を飛び回る謎の怪電波と、それを追いかけるジム。そして何かを知っていそうな、だけど何ひとつ口にしらない態度のオブライエン。まるでわからない、一体これがどう繋がればスッキリするんだろう。

……などなど、せつかく柄にもなく真面目に人が物を考えていたというのに。レッド寮の安普請な壁を通じてすぐ近くから聞こえてくる万丈目と愉快的仲間たちのせいで、そんな思考も一時脇に追いやってしまった。

「入るよ万丈目ー、さつきから何やってんのいったい」

「む、清明か。ちようどいい、お前、これには出るつもりなのか？」

部屋に入ると、調べものでもしていたらしくパソコンを目の前にした万丈目がそう言って、机の上に置いてあった封筒を投げつけてきた。キャッチして見てみるが、こんなもの特に見覚えがない。

「……………なにこれ」

「何？お前は受け取っていないのか？なら説明してやろう、これは昨

日からオベリスクブルー及びライイエロー、そしてこの俺万丈目サンダーに向けて配られているアモン・ガラムからのパーティーの招待状だ。なんでもあいつのバックに存在するガラム財閥……平たく言えば万丈目グループ以上の金持ちだ、そこが身内の留学祝いでパーティーを行うんだと」

ガラム財閥、そのワードはつい先日聞いた覚えがある。確か森に仕掛けられた謎の監視カメラをアモンに渡した時に、ガラム財閥の力で映像の再生をどうこう言っていたような。財閥なんて名前の響きからいってもただ者じゃないとは思ってたけど、あの万丈目グループ以上の金持ち企業だったのか。

「ふーん。まあ今時レッド生なんて数少ないからねえ。呼ばれてないのに行きようもないし、僕は家でご飯食べてるよ。んじやき万丈目、タッパー貸したげるからもし会場でキャビアとかフォアグラとか出たらちよつと持って帰ってきてよ。いっぺんでいいから高級食材つての、食べてみたかったんだ」

「そんな貧乏臭い真似、誰がするか！」

「あら残念。冗談だよ冗談」

半分は、という言葉はさすがに呑み込んでおいた。もちろん半分は本気だったんだけど、この様子だと絶対引き受けてはくれないだろうし。

呆れ顔のまま万丈目がやれやれと首を振り、いきましたが見ていたパソコンの画面を指さす。つられて僕も見ると、そこにはガラム財閥の検索結果がずらりと並んでいた。

「別に、昔の俺ならいざ知らず今の俺は万丈目グループとは何の関わりもない身。あの男の家柄がどうだろうと、俺の知ったことではない」

『とか言っちゃって、ホントはすっごい気にしてるんじゃないの？』

『プライド高いからなー』

「やかましい、引っ込んでいろ！というか俺に話させろ……ぜい、ぜい、すまん、見苦しいところを見せたな」

怒鳴り散らしておジャマ3兄弟を追いやる万丈目に、いつも通りだから気にしないよー、なんて言葉をかけるなんて真似は僕にはできなかった。でも万丈目の場合、本人がどう思うかはともかく僕らからしてみればこれが平常運転なんだけど。

「話を戻すが、俺が気に食わんのはただ1つ。万丈目グループの後ろ盾を捨ててからというもの、俺は苦労に苦労を重ね今ここにいる。だがこのアモンはどうだ！何の気苦労もなくのうのうと暮らしてきたお坊ちやまが、この万丈目サンダーよりも今こうして目立とうとしているー！」

「ちよつとでもいい話に繋がるのかと思つた僕の感動を返せ」

口には出していないが、いつの間にかまた出てきたおジャマ3兄弟もなーんだ、といった顔で万丈目の背後にふわふわ浮かんでいる。そんな僕らの視線にも気づいていないのだろう、当の本人は大真面目な顔でさらにまくしたてる。この隙に部屋帰ろつと。

「そこで、俺は一計を考えた。この万丈目サンダーが目立つことができ、なおかつアモンの鼻っ柱をへし折ることができる作戦をな。お前も来るといふならばその際に手伝いのひとつでも頼もうかと思つたが……招待すらされていないのなら聞くだけ無駄だったな。ふふふ、今夜が楽しみだ。アモン・ガラムめ、今夜はこの俺の生まれ変わったデッキでぎやふんと言わせてやるー！」

「えっ？」

部屋の脱出もあと少しで成功するところまで行っていたが、それでも最後の一言について反応してしまうのはデュエリストとしての悲しき性……でいいのかな。

「ふふん、お前が知らなくても無理はない。何しろこの忌々しい招待状が届いてから、睡眠時間を削って作り上げた俺の持ちうるギミックを詰め込んだ一品だからな」

『アタイ達兄弟にも出番があるのよー！』

「へー……ちよつと見せてよ」

万丈目のデッキ構築力は、このデュエルアカデミアの中でもかなり高い。ちよつと前まで圧倒的トップに三沢がいて、次点に元プロでこ



この教員の……えつと、名前なんだっけ。伊藤だか加藤だか武藤だか……ああ思い出した、佐藤先生もかなりできる男らしいという話を聞いたことがあるけど、三沢はどっか行っちゃったし佐藤先生も僕らが2年に入ったあたりから影も形も見えない。病欠でも取ってるんだろうか、考えたこともなかった。

まあとにかくそこら辺の人がいない今、若干練り上がり気味とはいえ今は万丈目がトップクラスの構築力なのだ。そんなデツキを見ることで、何か僕も参考にできる点が見つかるといいんだけど。僕がデツキに行き詰まりを感じていることは同じオシリスレッド所属なだけあってよく知っている万丈目は、それを聞いて一時は快くその新たなデツキを投げ渡そうとしてくれたが、ふと何かを思いついた風にその手をひっこめた。

「ここまで来たのも何かの縁だ。悪いが清明、どうせ見るならこのデツキのテストプレイに付き合ってもらえないか？」

「僕はいいけど……」

そう言つて腕のデスベルトをチラリと見る。相変わらず不気味に沈黙したままのそれは今のところ何の反応も示していないけど、ここでデュエルをすればまたこれが仕事しておかしなことになる可能性もある。

だが万丈目はバカバカしいと軽く鼻で笑い、まるで気にした風もなくデュエルディスクを構えてのけた。

「デスデュエルについて悪い噂があるのは俺も知っている。だがな、この万丈目サウンダーはいずれカードゲーム界の頂点に立つ男だ。デュエルの1度や2度で倒れてなどいられるか。さあ、早くお前のデュエルディスクを持って来い！」

「あ、ちよつと!?!つたく、どうなつても知らないよー!?!」

なかば押し切られるような形で外に出ると、ちよつと同じパーティーの話をしていたらしい十代達にあった。十代にも招待はないのに、ホントになんで万丈目だけ貰ってるんだらう。同じレッド生のはずなのに。

「……今度本人に聞いてやろうかね。でも今は、ひとまずデュエルと

洒落込もうか！」

「デュエル！」

先攻は万丈目。さて、そのおニューのデッキの動きを見せてもらおうか。

「俺はモンスターを1体セット。さらに1枚カードを伏せて永続魔法、強欲なカケラを発動。これでターンエンドだ」

「あれ、いきなりセットだけ？てつきりもつとガンガン突っ走ってくるかと思ったのに」

「まあ待て、そう慌てるな。さあ、お前のターンだ」

「僕のターン、ドロー！」

表側守備表示で出さないセットモンスターということは、なんらかのリバース効果を持っていると考えるのが自然。幸いこのカードが来ているのなら多少の無茶はカバーできる、序盤から攻め込もう。

「ウミノタウルスを召喚！そして水族モンスターを召喚したことで、手札のシャーク・サツカーを特殊召喚！」

ウミノタウルス 攻1700

シャーク・サツカー 守1000

「相変わらずの布陣だな」

「うるさい。バトル、ウミノタウルスで攻撃！」

頭部がウミウシのような形をした海の戦士が貝のような形状の斧を振り上げ、その全身で振りかぶって叩き付ける。だがその一撃はセットモンスターに届く前に、不意を衝いて伸びてきた1本の鞭に絡め取られた。

「嘘、止められた!?!」

『なめるんじゃないわよ!』

そして辺りに響く、その鞭の持ち主の声。この声はつい先日も聞いたことがある、だけどこんなところでまた聞くことになるとは思わなかった。

ウミノタウルス 攻1700↓黒蠍―茨のミーネ 守1800

清明 LP4000↓3900

「茨のミーネ……これまで黒蠍はデュエルで使ってなかったのに、ど

ういう気の移り変わりさ」

「お前が使っているのを見て、少し気が向いたただけだ。茨のミーネの効果発動！このカードが相手に戦闘ダメージを与えたことで、デッキから黒蠍を1体サーチできる。俺は黒蠍―罨はずしのクリフを手札に加える」

「僕はこれ以上することもないし、カードをセットして……」

「おっと。バトルフェイズ終了前にリバースカードオープン、マジカルシルクハットだ。このカードは発動時にデッキの魔法、罨2枚と自分モンスター1体をセット状態でシャッフルし、このバトルフェイズの間だけ攻守0の通常モンスターとして特殊召喚する。そしてバトルフェイズが終わったことで、2枚のカードは破壊される」

「へっ?」

攻撃が終わりさつきとメイン2に行こうとした矢先、なぜか万丈目が攻撃攪乱用のカードなはずのマジカルシルクハットを発動させた。何がしたいのかわからずただ見ているうちに、万丈目の場に現れた3つのシルクハットのうち2つが消滅し、残る1つから茨のミーネが再び姿を現す。

「そしてこの瞬間、フィールドから墓地に送られたおじやマジックの効果発動！デッキからおジャマ・イエロー、グリーン、ブラックのカードを1枚ずつサーチする！」

「そういうこと……ターンエンド」

万丈目 LP4000 手札：6

モンスター：??? (黒蠍―茨のミーネ)

魔法・罨：強欲なカケラ (0)

清明 LP3900 手札：4

モンスター：ウミノタウルス (攻)

シャーク・サッカー (守)

魔法・罨：1 (伏せ)

「俺のターン、ドローだ。ドローフェイズにドローを行ったことで、強欲なカケラに強欲カウンターが1つ乗せられる。魔法カード、トランスターンを発動！この効果により茨のミーネを墓地へ送り、デッキか

ら同じ種族属性でかつレベルが1高い強力のゴークを特殊召喚する！」

『むうん!』

強欲なカケラ(0)↓(1)

黒蠍―強力 of ゴーク 攻1800

「まだまだあー出る、V―タイガー・ジェット!」

虎を模した戦闘機が、巨大ハンマーをその太腕で軽々と持ち上げる盗賊の隣に召喚される。あのモンスターは、ずいぶん久しぶりに見るけど万丈目のエースの1体……移動砲台型戦闘機械、VWXYZの布石。

V―タイガー・ジェット 攻1600

「行くぞ、バトルだ! 強力 of ゴークでウミノタウルスを攻撃! ごうりきハンマー!」

まさに斧対ハンマーの対決……なんて馬鹿なことを言っている暇はない。攻撃力はゴークの方が上で、僕の手にはステータス変動を起こすためのカードはないのだ。純粹に戦闘に持ち込まれた場合、ウミノタウルスに勝ち目はない。

黒蠍―強力 of ゴーク 攻1800↓ウミノタウルス 攻1700

(破壊)

清明 LP3900↓3800

「ゴークがバトルで相手にダメージを与えたこの瞬間、効果発動! 強力 of ゴーク第一の効果により、貴様のシャーク・サツカーにはデッキトップへバウンスされてもらおう!」

ウミノタウルスを叩き伏せたゴークの返しの一撃が、その隣にいたコバンザメにも襲い掛かる。幸い直撃こそしなかったものの、巻き起こる風圧は体の軽い魚をいともあっさりと吹き飛ばした。

「今だ、タイガー・ジェットでダイレクト……」

「リバース発動、グレイドル・パラサイト! このカードは相手の直接攻撃時に僕のフィールドにモンスターが存在しない時、デッキからグレイドルを1体攻撃表示で特殊召喚できる! 出番だよ、イーグル!」

グレイドル・イーグル 攻1500

タイガー・ジェットが自身のボディを分離させ、そのパーツひとつひとつから砲台が飛び出て僕に照準を合わせる。パワーチャージが開始されたその瞬間に足元の地面から猛烈な勢いで銀色の水が吹き出し、空中でその姿を黄色の鳥に変えていく。

その様子を見て、慌てて万丈目が攻撃命令を取り消した。

「まずい！砲撃ストップ、カードをセットしてターンエンドだ！」

さすがにそうそうコントロールはくれないか……だけど、今回は思わぬところでラツキーだった。

先ほど喰らった強力のコグによるバウンスのせいで僕のデッキトップはシャーク・サッカーに固定されてしまっていた。だけど、たった今パラサイトの効果でデッキからイーグルを特殊召喚したことで、ルール以前にマナーの問題として当然ながらシャツフルの処理が入る。つまり万丈目からしてみればダイレクトアタックできなかったばかりか、せつかくのドロー固定までもが無駄になったわけだ。

「このまま一気に波に乗る！僕のターン、ドロー……んー、フィッシュボーグーアーチャーを準備表示で召喚、さらに永続魔法、補給部隊を発動。これでターンエンド」

フィッシュボーグーアーチャー 守300

万丈目 LP4000 手札：4

モンスター：黒蠍―強力のコグ（攻）

V―タイガー・ジェット（攻）

魔法・罨：強欲なカケラ（1）

1（伏せ）

清明 LP3900 手札：3

モンスター：グレイドル・イーグル（攻）

フィッシュボーグーアーチャー（守）

魔法・罨：グレイドル・パラサイト

補給部隊

「特に波はお前のところに来なかったようだな。だがそれもそのはずだ、お前の言う波は今まさに、俺の所へ来ている！俺のターン、ドロー

！」

意気揚々とカードを引く万丈目。その自信はどこから来るのかとよっぽど聞きたくなかったが、それは勘弁しておいてあげよう。僕に波が来ていないのも否定できないところではあるし。

「ドローを行ったことで、さらにカケラにカウンターが乗る。そして2つ以上のカウンターが溜まった強欲なカケラを墓地に送ることで、カードを2枚ドローだ。Wーウイング・カタパルトを通常召喚し、そのままVとWの2体をゲームから除外し合体融合！変形だ、VWータイガー・カタパルト！」

青い飛行機型メカの上に虎型ジェットマシンが装着され、といえば聞こえはいいが要するに上に乗っただけで2体合体を名乗る変形ロボが新たに生み出される。

VWータイガー・カタパルト 攻2000

融合召喚は通すしかない。だけど、VWの固有能力は手札1枚をコストにしたモンスター1体の表示形式変更のみ。アーチャーを狙われるとそれなりに痛いし、そこからゴッグの効果でもう1度デッキバウンズ狙い？いや、それだけならまたパラサイトの効果でイーグルを呼び出せばいいし、補給部隊の効果で1枚のドローもできる。万丈目として、この状況でうかつに攻撃はできないはず。

そんな考えは、目の前で不敵に笑うその顔を見た瞬間に吹き飛んだ。万丈目、これはこのターンで仕掛けてくるつもりだ！

「魔法カード発動、モンスターゲート！このカードは発動時、モンスター1体をリリースする。そして俺のデッキを通常召喚可能なモンスターが出るまでめぐり、最初に出たそのモンスターを特殊召喚する！強力のゴッグをリリースし、発動……1枚目、魔法カード、おジャマッスル！2枚目、特殊召喚モンスター、アームド・ドラゴン LV7！」

「やっぱり、か」

墓地に送られた2枚のカードを見て、やはり万丈目のデッキにはあの2種類の要素が含まれていることを改めて認識する。このままうまいこと適当なモンスターでお茶を濁してくれればいいんだけど。

「3枚目！魔法カード、おじやマジック！」

おじやマをサーチするカード、おじやマジックが再び墓地に送られる……だがあのカードがサーチを可能とするのは、あくまでフィールドか手札から墓地に送られた時。デッキからめくられそのまま墓地に送られる形となった今、そのサーチ効果は不発となる。

「4枚目！魔法カード、融合！まだまだ行くぞ、5枚目！……ほう、ここで引いたか。レベル3モンスター、スノーマンイーターを特殊召喚！」

高らかに宣言するとともに、万丈目のフィールドに見覚えのある雪だるまが鎮座する。全く皮肉なものだ、1年の時に僕が万丈目のために渡したあのカードが、こうして僕に牙をむくとは。

……でも万丈目、あのカードをまだデッキに入れてくれてたんだ。そこはちよこつと嬉しかったり。

スノーマンイーター 守1900

「そして魔法発動、融合フュージョン識別！この効果により俺はスノーマンイーターを選択し、さらにエクストラデッキに眠るXYZードラゴン・キャノンを見せる」

「……？」

そんなもん見せてもらわなくなつたつて、エクストラにそいつがいることはわかつている。だが次の瞬間に雪だるまの形がみるみる変わっていき、まるで雪まつりの展示物並みに立派なドラゴン・キャノンの雪像へと変化した。

「このカードの効果によりスノーマンイーターは、融合召喚に使用する場合のみその名をXYZードラゴン・キャノンとすることができ！行くぞ、除外融合！V・W・X・Y・Z、5体合体！」

雪像と本物の機械が宙に舞い、分離合体を繰り返す。そして空の向こうから人型の移動砲台、アルファベットを冠するロボットの究極体が地響きとともに現れる。

VWXYZードラゴン・カタパルトキャノン 攻3000

「出たな、VWXYZ！」

予想外の方法により最低限の消費で現れた巨大ロボ……だけど、ま

だこれだけならば対処の方法もきつとあるはずだ。そんな考えを見透かしたのか、万丈目がさらに笑みを浮かべる。

「まだ終わってはいないぞ、清明。トラップ発動、融合準備！このカードはエクストラデッキの融合モンスターを相手に見せることでその素材1体をサーチし、さらに墓地から融合のカードをサルベージすることができる。俺は再びXYZードラゴン・キャノンを見せ、X―ヘッド・キャノンをサーチ。そして墓地から、先ほど名推理で墓地に落とした融合を手札に戻す」

『いよいよおいら達の出番なのね？』

『よっしゃー！』

『やってやるぜー！』

素材となる3兄弟、そして融合のカードが揃ったことで気合十分なおジャマ達。だが、意外にも万丈目の返事は冷めたものだった。

「何を馬鹿なことを抜かしている。こんなところで融合したところで、それこそ壁にしかならんではないか。WXYZZの効果発動！1ターンに1度、場のカード1枚を除外する！消え去れ、グレイドル・イーグル！WXYZZ―アルティメット・デストラクション！」

「ぐっ……いー」  
目も眩むような光線とともに、グレイドル・イーグルの姿が跡形もなくフィールドから消え去る。イーグルの能力はあくまで破壊が前提、除外には完全に無力だ。

「このままWXYZZでフィッシュボーグ―アーチャーに攻撃、そして効果発動！このカードとバトルするモンスターの表示形式を変更できる！消え失せろ、WXYZZ―アルティメット・デストラクション！」

謎の光線を受けて強制的に戦闘姿勢を取らされたアーチャーの矢が唸りをつけて飛ぶ……だけどそんなものは、圧倒的なまでの火力によるフルバーストに対しては道端に落ちている石ころほどの妨げにすらなりはしない。全身の砲台を駆使して放たれる無数の光線に雷撃が、ちっほけな魚を跡形もなく消し去った。

VWXYZZ―ドラゴン・カタパルトキャノン 攻3000



↓フィッシュボーグーアーチャー 守300↓攻300 (破壊)

清明 LP3800↓1100

「ほ、補給部隊の効果発動！自分フィールドでモンスターが破壊された時、カードを1枚ドローする！」

「やむを得ないな。俺はこれでターンエンドだ」

「危なかった……」

なんとかこのターンも凌ぐことができた。けどもう僕のライフにも余裕はない、一刻も早くこの状況をなんとかしなくては。

「そのためにも、まずはドロー！」

下手な壁モンスターはあの巨大ロボの前には何の意味もない。セットカードで対処しようとしても、万一そちらに除外を向けられたらアウト。つまりこの1ターンで、あのロボは突破して見せる！

「相手フィールドにのみモンスターが存在するとき、このカードはレベル4かつ攻守0として特殊召喚できる。カイザー・シースネーク、特殊召喚！そして水属性モンスターが自分フィールドに存在することで、手札のサイレント・アングラーを特殊召喚！」

カイザー・シースネーク 攻2500↓0 守1000↓0 ☆8

↓4

サイレント・アングラー 攻800

「モンスターを2体並べた？」

「さて、やっぱり僕の切り札はこれでなくっちゃ。2体のモンスターをリリースして、アドバンス召喚！こっからが本番だ、霧の王！」

リリース素材の攻撃力合計は、3300。そしてその数値が、そのまま振るわれる霧の宝剣の破壊力に直結する。

霧の王 攻3300

「がら空きの状態で……やるじゃないか、清明」

「そりやどうも。バトル！VWXYZを切り裂け、ミスト・ストラングル！」

今の万丈目の手札は6枚……とはいえその内訳はサーチされたまま使われていない罫はずしのクリフにXヘッド・キャノン、そしておジャマ3兄弟と融合であることがわかっている。オネストがない

ことは確認済みだから、反撃も考える必要がない。

霧の王 攻3300↓VWXYZードラゴン・カタパルトキャノン  
攻3000(破壊)

万丈目 LP4000↓3700

「チツ……だがこの程度、かすり傷だ!」

「だろうね。カードをセットして、ターンエンド」

万丈目 LP3700 手札:6

モンスター:なし

魔法・罫:なし

清明 LP1100 手札:1

モンスター:霧の王(攻)

魔法・罫:グレイドル・パラサイト

補給部隊

1(伏せ)

「俺のターン、ドロロー!魔法カード、強欲で貪欲な壺を発動!このカードは発動時にデッキの上から10枚を裏側で除外し、カードを2枚引く。そして魔法カード、おろかな埋葬を発動」

さあ、次は何を見せてくる?

「……清明。俺が今墓地に送ったカードは、黒蠍―罫はずしのクリフ。お前ならば、この意味が分かるはずだ」  
「意味?」

何を言っているのか正直わからなかったが、とりあえず考えてはみる。VWXYZは除外融合を行うため素材が墓地へは行かず、今の万丈目の墓地にいるのは魔法と罫を除けば黒蠍のメンバーが3体のみ……3体……闇属性戦士族が3体……。

「まさか!」

「そのまさかだ!俺の墓地に闇属性モンスターが3体のみ存在することで、このカードは手札から特殊召喚できる!出でよ、ダーク・アームド・ドラゴン!」

ノース校に封印されていた伝説のレアカード、アームド・ドラゴン……のダークバージョン。僕はいまだにノース校に行ったことはな

いからあんまり知った風なことは言えないけど、なんでわざわざ本体とダークバージョン、それとメタファイズバージョンを別の場所に保管していたんだろう。一緒の場所でいいんじゃないのかな。万丈目の話によるとノース校は氷山の上とかにもカードがある場所とかいう色々訳の分からない場所だし、そこも関係しているんだろうか。

なんて、よその事情に首突っ込んでる暇はないんだけどね。ダーク・アームド、その効果のえげつなさは一時使用者だったこの僕が一番よく知っている。

ダーク・アームド・ドラゴン 攻2800

「ダーク・アームド・ドラゴンは、墓地の闇属性モンスターを除外することでカードを1枚破壊する。茨のミネを除けし、グレイドル・パラサイトを破壊！ダーク・ジェノサイド・カッター！」

「チツ……」

これまで抑止力として頑張ってくれていたパラサイトが破壊される。最初に霧の王を狙ってこなかったのは、恐らく僕のこのリバースカードを警戒してのことだろう。うっかり破壊して安全地帯でも踏み抜くのを嫌ったのか、とりあえずパラサイトから破壊して一呼吸おこうという狙いでもあるのだろう。

だけど、それは完全な悪手ではない。どうせ狙うなら、霧の王を真っ先に潰しにかかるべきだったのだ。

「パラサイトの破壊は通す……だけど、これ以上はさせない！相手モンスターがフィールドで効果を発動したこの瞬間、手札から幽鬼うさぎの効果発動！ダーク・アームドには破壊されてもらうよ！」

「何?！」

漆黒のカッターが飛来してパラサイトのカードを撃ちぬいた瞬間、お返しと言わんばかりに1本の鎌が回転しながらものすごいスピードでダーク・アームドめがけて飛んでいく。柔らかい腹の部分に突き立ったそれはいささかもスピードを緩めることなく、漆黒のドラゴンの体を貫通した。

「しくじったか……ならば、X-ヘッド・キャノンを守備表示で召喚。ターンエンドだ」

X―ヘッド・キャノン 守1600

「運が悪かったねえ。僕のターン！」

とはいえ、こちらにも余裕があるわけではない。少しでも流れが向いている今のうちに、なんとかこれまでの遅れを取り戻さねば。だからここでアタッカーが引けなかったのは、僕にとってかなりの痛手と言える。

「バトル、霧の王でヘッド・キャノンに攻撃！ミスト・ストラングル！」  
天高く飛び上がった魔法剣士が、太陽を背にして大上段からの打ち込みを狙う。いくら変形合体して闘うマシンといえども、その合体相手がいないうちはただのモンスターでしかない。「豆腐でも切るようにすっぱりと真つ二つにされ、そのまま破片が爆発した。」

霧の王 攻3300↓X―ヘッド・キャノン 守1600（破壊）

「僕はこれでターンエンド！」

万丈目 LP3700 手札：5

モンスター：なし

魔法・罫：なし

清明 LP1100 手札：1

モンスター：霧の王（攻）

魔法・罫：補給部隊

1（伏せ）

「俺のターン、ドロ―！フン、ようやく来たな？魔法カード、融合を發動！手札のおジャマ・イエロー、グリーン、ブラックで3体融合！」  
『『待ってましたー！おジャマ究極合体！』』

3つの色が高速回転しながら混じり合い、白い巨体に花柄パンツ、風呂敷柄のマントをつけた最大のおジャマがその筋肉をアピールする。

『おジャマ・キング！』

おジャマ・キング 攻0

「攻撃表示……まさか！」

「そのまさかだ！フィールド魔法発動、おジャマ・カントリー！このカードが存在し場におジャマモンスターが出ている限り、フィールド

の全モンスターは攻守は逆転する！」

あたりの風景がのどかな田舎町に変わる……そしてその風景のあまりと言えばあまりのゆるさに脱力したのか霧の王が自身の剣に寄りかかり、なぜかキングの筋肉がモリモリと膨れ上がる。

霧の王 攻3300↓0 守0↓3300

おジャマ・キング 攻0↓3000 守3000↓0

「これで終わりだ！おジャマ・キングで霧の王に攻撃！行けっ！」

『おジャマ・フライングボディアターック！』

巨体がふわりと宙に浮き、次の瞬間体ごと霧の王にのしかかる。通常ならばさつとかわして終わりの単調な攻撃も、今の脱力しきった霧の王にかわす気力はない。

だがその巨体に押しつぶされる寸前、霧の王の体が文字通り霧となった。追突の寸前に相手がいなくなったことで、おジャマ・キングが勢い余って顔から地面に激突する。

「まだ何か仕掛けてきたか!？」

「リバーストラップ、儀水鏡の反魂術を発動！このカードは自分フィールドの水属性モンスター1体をデッキに戻すことで、墓地の水属性モンスター2体を手札に加える！霧の王をデッキに戻したことでその攻撃は巻き戻されたわけさ。そして墓地から、カイザー・シースネークとサイレント・アングラーを回収」

「モンスターを減らしたところで、攻撃が無効になるわけではない！もう一度行って来い、おジャマ・キング！」

『お……おジャマ・フライングボディ……』

再び技名を叫びつつ、キングの巨体が舞い上がる。だけど、僕だっただけだ策もなしに霧の王を逃がしたわけじゃない。

「相手モンスターの直接攻撃宣言時、手札からゴーストリック・フロストの効果発動！このカードはその攻撃モンスターを裏側守備表示にし、さらに自身を裏側守備表示で特殊召喚する！」

防寒具を着込んだ雪だるまが飛び出し、今まさにプレス攻撃を使用としていたおジャマ・キングに雪玉をぶつけて狙いをそれさせる。運よくそのいくつかが目に当たったらしく、たまらずにキングが再び着

地した。

「??? (ゴーストリック・フロスト)」

「おジャマ・キングをセット状態にしたことで、一時的にカントリーの効果は失われる……だがそれにより、今のキングの守備力は3000。越えられるものならば越えてみる、カードをセットしてターンエンドだ！」

「僕のターン！」

超えられるものなら？もちろんだ、そしてそのために必要なカードはたった今僕がドロ―した！」

「魔法カード、強欲なウツボを発動！手札の水属性モンスター2体、サイレント・アングラーとカイザー・シースネークをデッキに戻し、カードを3枚ドロ―する。そしてゴーストリック・フロストをリリースして、アドバンス召喚！来い、氷帝メビウス！」

「この局面で、氷帝メビウスだと!？」

青いマントを靡かせる氷の力を持つ帝、メビウス。周りの風景を一睨みすると、あれよあれよという間に街の風景が氷漬けに変化していった。

「氷帝メビウスはアドバンス召喚時に魔法・罫カードを2枚まで破壊できる。フリーズ・バーストで、おジャマ・カントリーを破壊！」

「……だがメビウスの攻撃力では、おジャマ・キングの守備力は突破できなはずだ」

「それは間違いないね。だから僕は、正面突破させるのさ！魔法カード、アクア・ジェットを発動！これにより水族のメビウスは、攻撃力が1000ポイントアップする！」

メビウスの空にかざした右腕に光が走り、おなじみのジェットが装着される。

氷帝メビウス 攻2400↓3400

「バトル！おジャマ・キングに攻撃、アイス・ランス！」

アクア・ジェットを直接腕に付けたことでいつもよりも遥かに速く、右腕に氷を纏わせたメビウス自前の槍が唸る。圧巻の守備力を持つおジャマ・キングといえど、その強化された一撃に抗うすべはな

かった。

氷帝メビウス 攻3400↓???(おジャマ・キング) 守3000  
(破壊)

「カードをセット、ターンエンドッ！」

今は一見、メビウスを従えている分だけこちらが有利に見える。だけれどそれはかなり不安定な優位でしかなく、裏を返せばメビウス意外に僕の攻め手はないことを示している。ライフも残り少ない今、もしもう一度万丈目にこの盤面をひっくり返されたら……どうだろう、これ以上さらなる逆転なんてできるだろうか。

万丈目 LP3700 手札：0

モンスター：なし

魔法・罫：1(伏せ)

清明 LP1100 手札：0

モンスター：氷帝メビウス(攻)

魔法・罫：補給部隊

1(伏せ)

「俺のターン、ドロロー！魔法カード発動、貪欲な壺！俺の墓地からおジャマ・グリーン、おジャマ・ブラック、黒蠍――罫はずしのクリフ、そしてダーク・アームド・ドラゴンをデッキに戻し、カードを2枚ドロ―する！」

VWXYZとおジャマ・キングを戻さなかったのは、恐らくこのドロ―で死者蘇生などの蘇生カードを引いた時のことを考えてだろう。正規の方法で融合されたあの2体は、条件さえ揃えば普通に蘇生させることができる。

「……クソッ、死者蘇生さえ引ければ勝てたというのに！魔法カード発動、ソウル・チャージ！俺の墓地からVWXYZ―ドラゴン・カタパルトキャノン及びおジャマ・キングの2体を蘇生させ、1体につき1000ライフを失いさらにこのターンのバトルフェイズが封印される！」

VWXYZ―ドラゴン・カタパルトキャノン 攻3000

おジャマ・キング 守3000

万丈目 LP 3700 ↓ 1700

「万丈目……」

あれだけ苦勞してようやくここまでこぎつけたというのに、いともあっさりと復活するモンスター。やっぱりこの男は、大したデュエリストだ。

「バトルフェイズは行えずとも、モンスター効果は生きている。おジャマ・キングが存在することで貴様のモンスターゾーンは3か所まで使用不能となる。俺はこの効果で、モンスターゾーンのうち2か所を封殺させてもらう」

「2か所？3つじゃなくて？」

「今にわかる。続いてVWXYZーアルティメット・デストラクション！氷帝メビウスを除外する！」

「また……！」

再び無数の光線が乱舞し、メビウスを光の中へ消し去っていく。

「カードをセット。さあ、ターン終了だ！」

「僕のターン、ドロー……」

「この瞬間にトラップ発動、おジャマトリオ！相手フィールドに3体、アドバンス召喚のためのリリース不可のおジャマトークンを守備表示で特殊召喚する！これでモンスターゾーンは全封殺、よって蘇生は無効だ！」

『『どくもく』』

「嘘でしょ？」

おジャマトークン（イエロー） 守1000

おジャマトークン（グリーン） 守1000

おジャマトークン（ブラック） 守1000

モンスターゾーンが完全封殺されたことで、モンスターを出して逆転することすらできなくなりました。仮にトークンだけで凌ごうにも、VWXYZの表示形式変更効果を使われれば次の万丈目のターンで瞬殺されてしまう、ということだろう。

「まだだ！さらにもう1枚のリバースカード、バトルマニアを発動！この効果により相手モンスターは全て攻撃表示となり、このターン攻



撃をしなければならぬ！」

『オイラ達に攻撃させるの？アニキの鬼ー！』

『悪魔ー！』

『暴力はんたいー！』

「ええい、やかましいぞお前らー！」

おジャマトークン（イエロー） 守1000↓攻0

おジャマトークン（グリーン） 守1000↓攻0

おジャマトークン（ブラック） 守1000↓攻0

どうやら自分のターンを待たず、このまま攻撃させて終わらせるつもりらしい。勝負は勝負として自分たちが特攻するのは嫌なのか僕以上の勢いで抗議するおジャマトリオだったが、万丈目がそれをバツサリと切って捨てる。

「だけど、残念。僕が今引いたカードなら、あるいは……！」

「魔法カード、ブラック・ホールを発動！フィールドに存在する全モンスターは、破壊される！」

「驚いた、まだそんな切り札を隠し持っていたとはな。だがおジャマトークンは破壊された時、相手に300のダメージを与える！」

清明 LP1100↓200

「あぐつー！けどこの瞬間、おジャマトークンが僕のフィールドで破壊されたことで補給部隊の効果が発動！カードを1枚ドローする！」

「なるほど、俺のライフは残り1700。そのドローで最後にモンスターを引き当て、その一撃に全てを賭けようという訳か。フン、基本攻撃力の低い貴様のデッキではその確率も低いが……引けたならば、面白いだろうな。いいだろう、かかってこい！」

「万丈目……やってやるとも！ドロー！」

引けたら面白い、だなんてまるでユーノや十代のようなことを言う万丈目にかすかに驚きつつも、言われるまでもなくデッキに手をかける。今掴んだこのカード、これが何を見せてくれる？

「……僕は今引いたカード、ハンマー・シャークを召喚！」

ハンマー・シャーク 攻1700

「フン、結局引き当てたか。この万丈目サンダーが、よもや破られると

はな」

口ではそんなことを言っただけだが、万丈目の表情は明るい。その笑顔に軽く手を振って応えてから、最期となる攻撃宣言を行う。

「バトル！ハンマー・シャークでダイレクトアタック！」

ハンマー・シャーク 攻1700↓万丈目（直接攻撃）

万丈目 LP1700↓0

「まったく。お前に負けたということは、俺もまだまだ詰めが甘かったということだな」

「相変わらず口が減らないねえ」

そんなことを言っているけどデスベルトが光り始める……が、これまでに比べて明らかにたいしたことない。むしろせつかく身構えていたのに拍子抜けするぐらいで、この程度なら誰だって1度や2度で倒れたりほしくないだろう。となると、何らかの方法でエネルギー吸収量が調整されてるとか？でもそんなの、なんのために？もしかしてこのデスベルト、狙いは僕らに自分は手を出さずに危害を加える事よりも吸い取るエネルギーそのものが目当てだったりするのだろうか。

わからない、まるで見当もつかない。なによりも情報が少なすぎる。

「さて、俺は今から夜までかけてこのデッキを一から調整し直すとしてよう。ご苦労だったな、清明」

『オイラ達も手伝うわよくん』

「……一度、お前ら全員クビにしてみるか。新しく使いたいカードもあるしな」

『そんなっ!?!』

「冗談だから耳元で怒鳴るな、やかましい。とはいえパワー不足なのは明らか、この欠点をどう解消すべきか……」

ぶつぶつと呟きながら部屋へと戻っていく万丈目の後姿を見送りながら、その最後の一言が頭の中に残っていた。パワー不足、ね。そういうえば三幻魔も決戦の時には世界中のカードからエネルギーを吸

い取っていたらしいし、まさか今回もそんな化け物じみたカード絡み  
だったりするんだらうか。  
まさか、ねえ。……ね？

## ターン79 鉄砲水と暗黒の中世

「万丈目が倒れたあ!？」

その知らせがレッド寮でゴロゴロふて寝していた僕のところに飛び込んできたのは、僕とのデュエル後にさらに新しく組み直したデッキを片手に意気揚々と出て行った万丈目を見送った、その夜のことだった。

「……オーケーオーケー、PDFじゃあ話しづらい、今すぐそっち行くから!」

『それが、ですね、先輩……くっ!』

「葵ちゃん?」

その知らせをわざわざ僕に伝えてくれた葵ちゃんだが、なんだか彼女の様子もおかしい。PDF越しですらわかるぐらい呼吸が乱れてるし、声にもいつもの張りが無い。今にも倒れそうなところを気力で踏ん張ってるような彼女の様子に考えるまでもなくピンときて、通話口に向かって半ば怒鳴りつけるように声を荒げる。

「もしもし、葵ちゃん!もしかして、そっちでデュエルやったの?」

『ええ……不覚、ですが……』

「なんでパーティー会場行ってまでデュエルすんのこのデュエル馬鹿!今すぐ鮎川先生連れてそっち行くから、そのまま大人しくしてなさい!それで?倒れたのは何人?」

『この場のほぼ全員、です……』

「はあ!？」

確かパーティーに招待されたのはライイエローとオベリスクブルールー男女全員+アルファだったはずだ。1人や2人ならまだしも、そんな人数が一度にデュエルをした、それはつまりどういうことだろう。自身の説明不足に気づいたらしく、通話口の向こうで苦しそうに葵ちゃんが唸る声が聞こえてきた。

『元々、アモン先輩の、発案で……会場ですね、デュエルの、大会が、始まったんです……』

「……とにかく僕もそっち行くから、いったん切るよ」

少なくともアモンは、デスデュエルの危険性をよく理解していたはずだ。そのアモンがわざわざ、被害を拡大するようなデスデュエルの大会を開く？ただでさえ今この学校で起きていることはわけがわからないのに、これ以上引つ掻き回さないでほしいものだ。

もつとも、今はそんなこと言ってる場合じゃない。あの葵ちゃんがぶっ倒れる半歩手前ということは、並の生徒なら昏睡状態一直線のパターンだろう。起きるまで寝かしておくぐらいしかできる事はないだろうけど、人手があるに越したことはない。

風呂上りで寝間着だったので学生服を羽織り寮を出る寸前に、机の上に放り出してあった僕のデュエルディスクがなぜか目についた。デュエルするつもりもないのになぜそれが気になったのかはわからない。あるいは虫の知らせ、といつてもいいかもしれない。その時は特に何をするつもりもなかったが、とにかくそれを引つ搦んでから改めて寮を飛び出した。

『軽い地獄絵図だな。だが私好みの地獄ではない』

「何言ってるんのチャクチャルさん。馬鹿なことしてないでちよつとは手伝ってもらえませんか、ね！」

そこらへんにばったばったと倒れてるイエローやらブルーやらの生徒を手当たり次第におぶさり、本校の保健室へと運んでいく。ただこのぶんだと保健室のベッドが足りないから、途中からはそれこそ体育館にでも寝かしておくしかないだろう。

ちなみに女子ばつか最優先で運んだことは偶然です。まあレディーファーストっていうしね、ボランティアでやってんだから別に順番ぐらい僕が決めてもいいよね？保健室まで運んだところで一瞬だけ目を覚ました葵ちゃんが、他に寝かされてるのが女子ばかりだった事に気づいた時点でまるで僕を見る目がまるでゴミを見るようものになっていたのもまあ気にしないでおこう。セクハラ云々言われそうだけど、否定しない範囲でうまいこととぼけておけば十分誤

魔化せる……はずだ、きつと。

そんなことを考えながら最後の1人を体育館に敷かれた簡易布団に放りこみ、鮎川先生に別れを告げてから外に出た。医療知識なんて持ち合わせていない僕がいつまでもうろちよろしていたところで、単に邪魔にしかならないからだ。それに万丈目も呼吸器までつけて寝込んでいる状態だし、こちらとしても友人のそんな姿を見るのは辛いものがある。

「……ねえチャクチャルさん、やっぱり昼間、万丈目は一発殴つてでも止めるべきだったのかな」

こうなることが予想できていなかったといえ、嘘になる。デスベルトがエナジーを吸い取る率の高い時に万丈目がデュエルをしてしまふ危険は、十分考えられるものだった。なまじ昼にデュエルした時は大した量じゃなかったから出発には何も言わないでおいただけ、今となってはそんな自分の判断が恨めしい。

『私がマスターに危ないからデュエルはするな、と言ったとして、それをマスターが聞き入れるのか?』

「う。その返しはするいよ、チャクチャルさん」

『殴つて止めようだなんてエネルギーを浪費するだけだ、ということさ』

いつになく論すようなこの言葉も、チャクチャルさんなりに慰めてくれているのだろう。それにもう1つ、今の僕に対し釘を刺そうともしている。早い話僕がデュエルをするのは私としては勧めないぞ、という意思表示だ。

なんでわざわざそんなことを言い出したのかというと、実はこれにもわけがある。先ほどまで出入りしていた保健室で、たまたま手伝いをしていたジムに出会ったのだ。そしてその時、あるものを手渡された。

「電波探知装置……ちゃんと効くかな、これ」

『私は機械はよくわからんぞ?』

デスデュエルが行われるたびにこの島を飛び交う怪電波を察知できる装置。今回のパーティーのおかげ、というかパーティーのせいだ

だいぶ電波の向かう先も特定できてきたらしいのだが、ジムが言うことにはなんでもあと一回でいいからその方向を絞り込める情報が欲しいとのことらしい。要するに、この学校でまだデュエルをやるような根性のある奴がいたらそいつの戦いを見届けろ、ということだ。ジムもジムで学校中を探し回っているが、なにせこの島は広い。だからここ数日の間に本土から取り寄せたこのスペアの電波探知装置を使つて、土地勘のある僕にヘルプをプリーズする、だそうだ。

「あんなことの後じゃあ、そりゃあデュエルしようなんてのもいないよねえ」

『まあ、そうなるだろうな……おや、誰か来たぞ』

学校の中はがらんと静まっついていて、ファラオ一匹歩いていない。すでにパーティーに出て倒れた人達の話は学校中に知れ渡つていて、偶然助かった生徒もそのほとんどが今日は寮で大人しくしているだろう。無論、デュエルだなんてもつてのほかだ。だから一応見回りをするものの正直ほぼ期待していなかったが、チャクチャルさんの言葉に後ろを振り返る。

「シニョール清明、話は聞かせてもらったノーネ！」

「クロノス先生!?!」

自信に満ちた足取りでこちらにやってくるその姿に、思わず驚きの声を上げる。今年になっていきなりやつて来た臨時講師、コブラのせいで面目丸潰れになってしばらく落ち込みムードだったはずなのに、今日は随分と元気になったものだ。

「要するに、誰かデスベルトをつけた人がデュエルをすれば問題ないのでシヨウ。ここで私がデスデュエルと一連の事態の関連性を証明できれば、あの忌々しいプロフェッサー・コブラは失脚間違いなし、逆に私はその功績により次期校長の座にぐつと近づくことができるノーネ」

「ああ……」

最近すっかり忘れてたけど、そういやこの人はこういう人だった。いつぞやのジエネックスでタイタンが来た時も庇ってくれたし、根はいい人なんだけどねえ。今回だって下心はあるだろうけど、だとして

もこれまで表だってコブラに逆らわなかったこの人が立ち上がったのは、生徒がこれだけ倒れたのが大きな理由だろう。

教育者としてすごくいい人なんだよ、その分自分の欲にもわりかし忠実なだけで。

「で、クロノス先生。誰がデュエルするんですか？」

「フン、少なくとも1人はナポレオン教頭にやってもらおうノーネ。あと1人は……まあ、それを今から探せばいいでシヨウ」

なんかもうオチが見えた気がする。そう思ったわずか5分後。

「嫌でアール、吾輩だってそんな危険なことやりたくないでアール！」  
「甘いことを言っただけじゃないよ、それでも教頭は教育者ナノーネ!？」

「そこまで言うなら、クロノス校長『代理』がやればいいのでアール！」  
案の定、わーわー言い合いながら追いかけまわす2人の先生。でもこんな非常時には、むしろこの平常運転なこの人たちが頼もしく感じる気がしないでもない。

「では、私はちよつと急用を思い出したのでこれで失礼するでアール！」

「あ、ちよ、ちよつと待つノーネ！」

あ、逃げた。

その後クロノス先生が追いかけてかかったものの、結局教頭には逃げ切られたらしい。その後もしばらく渋い顔でぶつぶつ言っていたクロノス先生だったが、ややあって何かを決心したような顔で立ち上がった。

「こうなったらこれも生徒のためそして私のため、デスデュエルだろうとペペロンチーノ一気食いだろうと私自らやってやるノーネ! さあシニヨール清明、これで探す相手はあと1人なノーネ！」

「先生……んじや僕が相手を」

「ノー。私も教師の端くれ、これ以上生徒に危険を押し付けるようなことはできませんーノ。誰か先生方から手の空いた人を探すノーネ」  
ついさつきまでナポレオン教頭を追いかけまわしてた人と同一人物だとは思えないほどまともな先生っぽいことを言いだすクロノス



先生。だけど、僕だつてここで引くわけにはいかない。例え先生が断ろうと、いくらチャクチャルさんが渋ろうと、いい加減我慢の限界だ。そもそも、だなんて結果論でしかないけれど、そもそも留学生たちがやってきたあの日、僕がオブライエンとコブラが話していたことをすつぱ抜いて学校中にリークしていれば。あるいはその次の日、翔が人質となった時にそれを校長か、いつそ本土の新聞あたりにあることないことを膨らませて匿名投稿していたら。あの時はオブライエンを信じるのが最善手だと思つたし、今でもその気持ちに変わりはない。だけど、ここまで被害が出るのがあの時もしもわかつていたのなら……どうだろう、それでも僕に同じ選択ができただろうか。

ただ確実なことは、あの時点でコブラの危険さを知らしめることができていたならばその時点でコブラの追放は確定、このたくさん被害者も出てくることになつた、ということだ。

だから僕にはせめて、一刻も早くこの事態を終わらせる責任がある。クロノス先生が僕とはデュエルしないというのなら、多少荒っぽい手を使つてでも。

そうだそうだと声がした。僕が止められたはずのこの事態のせいで、たくさん犠牲者が生まれた。僕のせいだ。僕が悪い。遊野清明が一番悪い。

「……えい」

「ムムム？ た、大変なノーネシニョール清明、火事なノーネ！ 早く消火器を……」

「無駄ですよ、先生。この地縛の炎は物を燃やす力こそありませんが、一度張られたらデュエルが終わるまで中からも外からも干渉することとはできません。さあ、デュエルと洒落込みましょう」

『待てマスター、なぜ「それ」を知っている!? 私はその結界の張り方も、そもそも結界自体見せた覚えは一度もないぞ!?』

どこか遠くから、チャクチャルさんの声が聞こえる。ぼんやりとそれを聞きながら、自分のことなのにどこか他人事のように感じていた。そういえば、なんで当たり前のように僕はこんなことができているのだろうか。チャクチャルさんと同じ紫色の炎なんて、一体どこで出

し方を覚えたんだろう。ダークシグナーにこんなことができるだなんて、僕は今の今までまったく知らなかったのに。

頭の中、どこか片隅で警鐘が鳴った……気がした。次の瞬間にはもうそれも塗り潰され、雑念は全てどこかへ追いやられた。とにかくデュエルだ、もうそれでいいじゃない。そんな僕の目を覗き込み、クロノス先生も何かに気づいたように渋々ながらデュエルディスクを構える。

「……シニョール清明、どうやら何かよくないものの影響を受けているようなノーネ。セニョール・カミューラとのデュエルであれほど光のデュエルを心がけるよう教えたというのに……まったく、できの悪い生徒を持つと大変なノーネ。しかし私の生徒が道を踏み外したというのなら、それを更生させるのは教師の使命。いいでショウ、この栄光あるデュエルアカデミア実技担当最高責任者クロノス・デ・メデイチ、今一度私の生徒に光のデュエルの力を見せてあげますーノ！」

「ええ、手合せ願います」

言い切った瞬間、自分の中で何かが手遅れになった気がした。どうでもいい、どうでもいい。

「デュエル！」

「先攻は頂くノーネ、私のターン！アンテイク・ギアキャン古代の機械砲台を守備表示で召喚。さらに魔法カード、機械複製術を発動。これにより、私のデッキからさらに2体の同名モンスターを特殊召喚できるノーネ」

その言葉通り、武骨な歯車で作られた謎の砲台がガタガタと音を立てながら合計3台フィールドに現れる。

古代の機械砲台 守500

古代の機械砲台 守500

古代の機械砲台 守500

「そして古代の機械砲台の効果を発動。このカードをリリースすることで相手プレイヤーに500ポイントのダメージを与えるノーネ。さらにこのターンのバトルフェイズに相手はトラップが発動できなくなる効果も持っていますが、先攻1ターン目なら関係ないでシヨ

ウ。私は2体の古代の機械砲台をリリースして、1000ダメージを与えるノーネ！」

清明 LP4000↓3000

「くっ……」

「まずは小手調べ。カードをセットして、ターンを終了するノーネ」

先攻1ターン目からいきなりのバーン戦術は想定外だった。ここからは僕のターンだけど、クロノス先生が操る古代の機械はバトルする際に相手の魔法と罫を封殺する効果を持つ……僕の手札には攻撃反応のポセイドン・ウェーブのカードがあるが、これが役に立つことはなさそうだ。

「僕のターン！グリズリーマザーを召喚して、バトル！古代の機械砲台に攻撃！」

グリズリーマザー 攻1400↓古代の機械砲台 守500（破壊）

「メイン2、カードを1枚セット。僕はこれで、ターンエンド」

攻撃が通ったのはいいが、正直意外だった。あの伏せカードで攻撃を防ぎ、次に繋げてくることを覚悟の上でその防御札だけでも見極めてやろうと攻撃したのだが。クロノス先生はかなりの実力者、本当に何も手をうたずにただ壁モンスターを出すだけで終わるとは考えにくい。とはいえとくに出すようなカードもなく、あの場面で攻撃しないというのも論外だろう。それに最悪、グリズリーマザーならばやらなくても後続のモンスターを呼びだせるし。

クロノス LP4000 手札：3

モンスター：なし

魔法・罫：1（伏せ）

清明 LP3000 手札：5

モンスター：グリズリーマザー（攻）

魔法・罫：なし

「私のターン！速攻魔法、ダブル・サイクロンを発動。私の伏せカードと、シニョール清明の伏せカード1枚を破壊するノーネ」

「グレイドル・スプリットが……」

僕が伏せていたのは装備カードとなるトラップ、グレイドル・スプリット。どうせ破壊されるのならポセイドン・ウエーブも伏せておけばよかったかな。

「そして私は今破壊されたカード、黄金の邪神像の効果を発動。このカードが破壊されたことで、自分フィールドに邪神トークンを1体特殊召喚！」

邪神トークン 攻1000

「さらに邪神トークンをリリースし、アドバンス召喚！出でよ、アンティーク・ギアピースト  
古代の機械獣！」

無駄のない動きで次にアドバンス召喚されたのは、これまた全身機械製の犬の姿を模した兵器。攻撃力は上級モンスターであることを考えると驚くほど低いけれど、それを補うだけの高い攻撃性能を持ったモンスターだ。

古代の機械獣 攻2000

「バトル！古代の機械獣でグリズリーマザーに攻撃、プレシヤス・フアング！」

歯車を高速回転させてその体をまるで本物の獣のように動かしながら、機械犬の鋼鉄の牙と青色熊の文字通り熊の爪が激突する。一瞬の均衡の後、牙が爪をへし折った。

古代の機械獣 攻2000↓グリズリーマザー 攻1400（破壊）

清明 LP3000↓2400

「古代の機械獣がモンスターを戦闘破壊した時、そのモンスターの効果は無効となるノーネ。ゆえにグリズリーマザーのリクルート効果は不発、カードをセットしてターンエンドしますー」

当然、リクルート効果は潰してくるか。さらにあのモンスターはその効果の都合上グレイドルをただのステータスが低い下級モンスター群にしてしまうため、グレイドルが中核となっているこのデッキにはまさに天敵ともいえる。

「となると、なんとかここで潰すしかないか。僕のターン、ドロー！グレイドル・アリゲーターを召喚！」

グレイドル・アリゲーター 攻500

僕の手札には自分フィールドの水属性モンスターを破壊しつつ手札の水属性を破壊した数だけ展開できる魔法カード、大波小波が存在する。これでアリゲーターを破壊すれば『魔法カードにより破壊された』という条件を満たしたアリゲーターの寄生効果が適用され、機械獣のコントロールを得て直接攻撃が可能……なおかつ手札に存在する攻撃力2800のモンスター、超古深海王シーラカンスを展開しつつこれまた攻撃で合計攻撃力4800を叩きつけられるという寸法だ。最低限の汎用性があるため単体でも邪魔にならず、なおかつ下級グレイドルの中でもその攻撃力の低さから特に場に出しやすいアリゲーターならば狙い撃ちも容易というこのコンボは、僕がこの間徹夜で考えたグレイドルを生かすためのカードだ。

本当は僕も、ヨハンほどではないけれどもこういう戦法は好きじゃなかったはずなただけ。最近デッキを見るたびに頭の中で声があるのだ、こんな温いデッキで勝てるわけがない、どんな手を使ってでも勝ちに行け、と。最初の内は無視できていたその声も、時が経つにつれ次第に自分の中で大きくなっていった。そして今年度に突入してからの怒涛の4連敗で、ついにその声を受け入れてポリシーを曲げることにしたのだ。

「さらに魔法カード……」

「ちよつと待つノーネ。トラップ発動、激流葬！アリゲーターの特殊召喚に反応し、フィールドのモンスターをすべて破壊しますーノー！」  
「嘘っ!？」

アリゲーターが、機械獣が、共に流され破壊される。がらがらになったフィールドは次のターン、クロノス先生の攻撃を僕にストレートに叩き込むことが容易になってしまった。僕のライフは残り2400、上級モンスタークラスの攻撃力さえ来なければまだ耐えられる。

「ターン、エンド……」

クロノス LP4000 手札：1

モンスター：なし

魔法・罨：なし

清明 LP2400 手札：5

モンスター：なし

魔法・罨：なし

「私のターン、ドロロー！魔法カード、トレード・インを発動。手札からレベル8モンスター、アンテイク・ギアガゼルドラゴン古代の機械巨竜を捨てることで、カードを2枚ドロロー。シニョール清明、このデュエルはこのターンで終わらせますカーラ、いい加減に目を覚ますノーネ！魔法カード、アンテイク・ギアファクトリー古代の機械工場を発動！」

工場、の名が示す通り、巨大な溶鉱炉のようなものがフィールドに設置される。その下部についたベルトコンベアが動き出すと、どこからともなく大量の歯車や装甲板といった部品がそこを流れて溶鉱炉に吸い込まれていく。よく見るとその部品は古代の機械砲台の砲塔や古代の機械獣の牙といった、これまでのデュエルで見覚えのあるものばかりだった。

「古代の機械工場は発動時に手札のアンテイク・ギアモンスターを1枚見せて墓地からそのレベルの倍になるよう墓地のアンテイク・ギアを除外することーで、そのモンスター召喚のためのリリースが必要なくなるノーネ。私はこの効果で墓地からレベル8の古代の機械巨竜、レベル6の古代の機械獣、レベル2の古代の機械砲台を除外し、レベル8のこのカードを通常召喚！出でよ、アンテイク・ギアゴレム古代の機械巨人！」

「嘘……でしよ……」

手札交換カードを使い新たに引かれた、たった2枚のカード。その2枚と墓地リソースをフルに使いこなしたクロノス先生が、満を持して切り札であるモノアイの巨人を繰り出した。

古代の機械巨人 攻3000

「バトルフェイズ、攻撃ナノーネ！古代の機械巨人のダイレクトアタック、アルティメット・パウンド！」

古代の機械巨人 攻3000↓清明（直接攻撃）

清明 LP2400↓0

「うう……」

強い。まるでつけ入るすきがない、実技担当最高責任者の実力をまざまざと見せつけられた。ともあれデュエルが終わったので、この地縛の炎もこれ以上維持する必要がない。さっと片手を上げると、みるみるうちにあたりを取り囲んでいた紫の火がしぼんで消えていく。

そしてそれと入れ替わるようにして、デスベルトの方が光を放ちだす。これまで以上の強烈さに思わず体勢が崩れ、壁に手をつけてどうにか耐える。これは、あの葵ちゃんに倒れただけのことはある。

「ムムッ！シニョール清明、頑張るノーネ……ギャウツ！」

そんな僕の様子を見て慌てて走りよって来ようとしたクロノス先生だけど、当然デスベルトを着けてしまった以上、その脅威は先生にも襲い掛かる。というよりこれまで何度か実感してきたように、ダークシグナーとしてある程度体力に補正がかかっている僕よりも、そういった要素のない先生のほうがきついはずだ。

「先生！」

「私のことはいいですかーら、早くその装置を……！」

苦しがりながらの言葉に、慌てて電波探知装置を引っ張り出す。その針はすでに電波の流れをキャッチしており、アカデミアの外……森の中のある一点を向いていた。あとは気を失ったクロノス先生を運んで、それからジムにこの方角を伝えて……やることはまだまだある。

『マスター。マスター！』

「なんなのさ、チャクチャルさん」

長身のクロノス先生は、わりと持ち上げるのにバランスが悪くて手間がかかる。少し集中したかったので急に話しかけてくるのはやめて欲しかったのだが、そうも言っていられない気迫に渋々返事する。『なんなのさ、ではない！まさか、まーた何か変な物でも拾ったのか！？』

「ほいっ」

ちよっと話が読めない。大体またって何さ、またって。まるでいつ

も変な物ばかり拾ってるみたいじゃん。僕がこれまでに拾ったり手に入れたりした物なんて、チャクチャルさんとメタイオン先生とゴーストリック・フロストとうさぎちゃんとかグレイドル全般と……うん、まあ、そこは否定できないかも。

「でもでも、今回はなんもないんだってば」

『……本当か？ならーつ聞かせてもらうが、あの炎はどうやって出した？やり方を教えたつもりはないが』

「あれ、前にも同じことしなかったっけ？もうずいぶん前にさ」

『は？』

「え？」

一瞬の沈黙。なんだろう、どうもチャクチャルさんと僕の間記憶の食い違いがあるようだ。さすがの地縛神といえども、5000年も長生きしてる間にだいぶ記憶力が落ちてきてるのかな？でも僕は今でもはっきりと覚えている。初めてこの炎を出してデュエルを行ったのは、そう、あれは……。

あれ？なぜだろう、その時のことが全く思い出せない。ダークシグナーのこの力の使い方はぼっちり覚えてるのに、肝心のその時の思い出がまるでない。かなり前の話なのは分かるけど、具体的な日付が出てこない。

「えつと……」

『……まあ具体的な被害もないし、しばらく様子見せざるを得ないか。だが覚えておいてくれマスター、これでも私はマスターのことを心配しているつもりなんだ』

深く追求される前に自分から話を打ち切り、それきり黙るチャクチャルさん。本当に何も拾った覚えはないのに、もはやチャクチャルさんの中では何か僕の近くに新たなカードやら精霊やらが増えたとの見方で確定してしまったらしい。いつかそのうちきつちり話し合っつてその誤解を解いておきたいとは思うけど、まずはクロノス先生を運んでしまおう。それからゆっくり、話し合う時間を取ればいいか。

そんなことを考えて、改めて一步を踏み出した……でも実を言う



と、無意識のうちに僕も感じ取っていたのかもしれない。まだほんの小さな小さな、普段なら無視できるような。でも間違いなくそこにある、僕とチャクチャルさんの間にできた溝の存在を。チャクチャルさんは僕が何かを隠していると思い、僕は僕でなぜチャクチャルさんが信じてくれないのかわからない。お互いの間に生まれたちっぽけな不信感の存在を心の奥底で感じ取ったからこそ、一度チャクチャルさんと距離を置こうとしたのかもしれない。

## ターン80 鉄砲水と泡沫の英雄

「ジムーほい、これ。確かにデータは取ってきたよ」

「ワオ、グレート！ありがとう、後はこのデータを突き合わせれば……よし、少し待っていてくれ」

ここはジムの私室。先ほどのクロノス先生と僕とのデスデュエルにより得ることができた怪電波のデータを、ジムに届けに来たのだ。何やらこの島の地図を広げてジムがああでもないこうでもないという試行錯誤しているうちに、この部屋に集まったメンバーを一通り眺めてみる。僕とジムの他にも十代、剣山、翔、ヨハン、明日香、夢想。言ってみればほぼいつものメンバーだ。あと万丈目やら三沢やらがいれば完璧なんだけど、それを望むのも無理な話だろう。

そんなことを考えていると、ジムがようやく顔を上げた。

「……オーケイ皆、この地図を見てくれ。今回清明が取ってくれたデータのおかげで、ようやくはつきりと場所が特定できた。それはこのビルディング、なぜか名前の載っていないこの建物だ！」

「どれどれ？あれアニキ、この場所って確かSAL研究所じゃないっスか？」

「ああ、あのSALか。そういやあの時清明がデュエルしたのも、割とこの近くだったな。なあ？」

「懐かしいもんだねえ」

僕ら3年組は昔のことを思い出してほっこりしていたが、それをほかんとした顔で見つめるヨハンたちには説明が足りていないことに気づく。まあ僕だって、あれは実際この目で見ていなければわけがわからなかつただろう。

スーパーアニマルラーニング

「S A L……なにをとち狂ったのかその辺の動物に専用の機械をつけてデュエリストにしようっていう実験をした変な博士が昔居てね。そこから逃げ出したのが猿のSALだったんだよ」

「モンキーがデュエルを？」

「猿のSAL……そのまんまだドン」

「あの研究所かあ……でもあそこ、SALが逃げてから研究中止に

なったんじやなかったっけ？」

今や廃墟同然になっていて、わざわざあそこに入るような物好きもいない、だとか。電気やら水道やらが生きているかどうかすら怪しい場所だけど、それだけにこれまで思いつきもしなかった。というかここでこうして名前を聞くまでSALとデュエルした僕もその存在自体すっかり忘れてたし。

「ともかく、この場所に行けば何かがあるはずだ。トウモロのモーニング……そうだな、9時ごろに改めてここに集合しよう。今日のところはしつかりスリーピングし、英気を養ってから出かけるべきだ」「おうー！」

ジムのかけた言葉に従い、そこで一度僕らも別れて各自の寮に戻ることになった。一刻も早くSAL研究所に突入したいという気持ちもあるにはあったけど、それ以上に先ほどのデスデュエルによる疲労が体にたまっているのが自分でもよくわかっていたため、あの提案は正直かなりありがたかった。今日一晩寝ておけば、ダークシングナーの身体能力の高さも相まって明日の朝には復活しているだろう。クロノス先生には悪いことをしたけど、ここでデスデュエルの秘密を解き明かしさえすればきつと無駄にはならないはずだ。

「……んじや、お休みー」

チャクチャルさんからの返事はない。まあお互いになんともなく気まずいままだし、それならそれでいいだろう。さ、寝よう寝よう。

「……おいーおいつたらー！」

「んー……」

耳元で誰かの叫び声が聞こえ、そのうるささに目を覚ます。

「何さ……十代？」

目の前にあった顔は、まさしく十代のそれだ。ただしその表情は陰しく、何やらただならぬ様子。よくよく周りを見ると、ここは僕が倒れこんだはずのレッド寮のベッドではない。どこかはよくわからなけれど、上に夜空が見えるあたり少なくとも屋外ではあるようだ。

「えつと、ハコは？」

頭を振りながら起きあがり、なんで自分がこんな場所にいるのか考  
える。……駄目だ、何も思い出せない。

「何言ってるんだ、お前？」

「え？」

思わず聞き返すが、向こうも本気で困惑しているようだ。十代は  
時々驚くほど単純なところがあるから、自分の感情がすぐ顔に出る。  
今回がまさにそのパターンといえるだろう。

「そうか、お前は気絶してて見てなかったもんな。たつた今俺がコブ  
ラとデュエルして、俺が勝ったと思ったら突然光る人間みたいなのが  
現れてよ。それを追っかけたコブラがいなくなっちゃったんだ。ヨ  
ハンたちが探しに行ってるけどな」

「気絶？僕が？え、ていうかちよつと待って、コブラ？」

「お、おう。だから今ちようどそれを聞こうと思ってたんだよ。なあ  
清明、なんでお前、俺たちより先にここに来てたんだ？」

……駄目だ、まるで会話がつかない。

「待ってよ十代、何がどうなってるのさ」

この時点で十代も僕と同じことを考えたらしく、少し考えてからま  
た口を開いた。

「俺たちは今朝、行方不明になったお前を探しにSAL研究所に行つ  
たんだ。そこで佐藤先生やオブライエンに会ったりして色々あった  
けど、とにかくコブラのところにとどり着いた。そしたらその足元に  
清明、お前が気絶して倒れてたんだよ」

「え？……ええ？」

全つ然駄目だ、話せば話すほど訳が分からなくなってくる。どうす  
りやいいんだこんなもん……そうだ、チャクチャルさんに聞けばいい  
や。今は喧嘩してる場合じゃない、とにかく何があったのかだけでも  
教えてもらわないことにはまるで話にならない。

「チャ、チャクチャルさん？」

少し待つが、いつもすぐ近くにいるはずの邪神からの返事がない。  
いくらお互い気まずいからって、いつもはこんな時に無視だなんて子

供じみた真似はしないキャラなのに。とりあえずカードから直接呼び出そうとデツキを取り出して……そこで初めて、信じられないことに気が付いた。

「精霊が、いない……」

サツカーをはじめとする小型モンスターから青氷の白夜龍といった大型モンスターに至るまで、ただの1体分も精霊の力を感じない。こんなこと、精霊が見えるようになってからは初めてのことだ。

「お、おい清明？ どうしたんだよいきなり」

「どうしたもこうしたも、皆がいなくなつて……」

「何言ってるんだ？ お前のデツキの精霊なら、すぐそこにたくさんいるじゃないか。なあ清明、俺達は友達だろ？ 頼むから教えてくれよ、一体なんでお前が俺らより先にここに来てたんだ？」

「そ、そんなこと言われても」

それはむしろこつちが聞きたいぐらいだ。それより、僕のカードの精霊がここにいる？ そんな馬鹿な、僕には何も見えないし感じることもできないのに。十代、お前は一体何を言ってるつてのさ？ 何も言えない僕を前にしばらく十代も黙つたまままでいたけど、ややあつてため息をついて立ち上がった。

「……もういいぜ、清明。お前がどうしても言いたくないなら、きつと何か理由があるんだろ？ ならもう言葉は必要ない、その代わり、俺とデュエルだ！」

「十代!？」

「何驚いてるんだよ。デュエルをすれば、きつとわかりあえる。俺はそれを信じてるし、これからも信じたいんだ。だから、せめてお前の魂を俺に見せてくれ。それができるのがデュエル、そうだよな？」

そう問いかけてくる十代の顔は、なんだか妙に深刻で。僕が気を失つてる間に何があつたのかはわからないけど、きつと十代にとつて辛いことがあつたんだろう。ここまで持論を強調してくるところからいって、誰かとデュエルをしたのに分かり合うことができなかつた、とかだろうか。なんにせよ、あの十代がここまで参ってるだなんてただ事ではない。

だとしたら、僕にできる事をするのが親友としてのせめてもの務めだろう。精霊の加護は結局見つからないけれど、それでもやれる限りのことをやるしかない。

「……わかった、十代。デュエルと洒落込もう」

腕のデスベルトが、月の光をかすかに反射して鈍く輝く。そういえば、デスデュエルは結局どうなったんだろう。でもこのデュエルを提案してきたのも十代だし、その十代はさつきコブラに勝ったって言うてたんだ。勝ったならそう心配することもないだろう。

「……デュエル！」

先攻は十代、か。十代のデッキは手札消費が恐ろしく荒い融合デッキ、後攻より1枚手札が少ない先攻は大変だろう。

「最初から飛ばしていくぜ！魔法カード、コンバート・コンタクト発動！このカードは俺のフィールドにモンスターが存在しない時、手札とデッキからそれぞれNを1体ずつ墓地へ送ることでカードを2枚ドロウする。手札のフレア・スカラベと、デッキのアクア・ドルフィンを送る。手札のフレア・スカラベと、デッキのアクア・ドルフィンを墓地へ送るぜ。そしてクレインクレインを召喚して、そのまま効果を使うぜ。このカードは召喚に成功した時、墓地に存在するレベル3モンスター1体を効果を無効にして特殊召喚できる！甦れ、アクア・ドルフィン！」

鳥の形を模したクレインがするするとロープを垂らすと、それに捕まってイルカの半魚人、とでもいうべきだろうか。まさにイルカそのものの頭部に人間のような体のついた、水を操るNが墓地から上がってくる。

クレインクレイン 攻300

N・アクア・ドルフィン 守800

「魔法カード、ヒーロー・マスクを発動！このカードは発動時にデッキのHEROを墓地へ送ることで、場のモンスター1体をその同名カードとして扱うことができる。これで俺は、クレインクレインをネオスに変更するぜ」

「これでネオスとNが揃った……コンタクト融合？」

十代がなんだかよくわからない経緯で手に入れた全く新しい召喚

方法、コンタクト融合。あれをまた見せてくれるのだろうか……と思つたら、そこで十代が笑みを見せた。

「今回は特別だ、もう1段上のコンタクト融合を見せてやるぜ！魔法カード、ネオスベーションエクステント N E Xを発動！このカードは俺のNを進化させ、同名カードとしても扱うレベル4モンスターをエクストラデッキから特殊召喚する！さあ来い、マリリン・ドルフィン！」

アクア・ドルフィンの水色がより濃い藍色になり、体つきも丸みを帯びたものから精悍な戦士へと変化していく。

N・マリリン・ドルフィン 攻900

「さらに魔法カード、スペーシア・ギフトを発動！このカードは俺のフィールドに表側表示で存在するNの一種類につき1枚のカードをドローするぜ」

「あれ？十代のフィールドにはマリリン・ドルフィンが1体だから、精々手札交換にしかならないんじゃないんじゃ？」

「甘いぜ、清明。マリリン・ドルフィンは元になったアクア・ドルフィンとしても扱うモンスター、つまり2種類の名前を持つってわけさ。よってカードを2枚ドロー！」

「好き勝手やってくれちゃって、もう」

残念ながら僕の手到手札誘発の妨害札はない。大人しく十代が何をしかけてくるか、見守らせてもらおうとしよう。

「効果……は、捨てたい手札もないからやめておくか。さあ行くぜ、お待ちかねのコンタクト融合だ！フィールドのネオスとマリリン・ドルフィンクレインクレインをデッキに戻し、コンタクト融合！さあ来い、E・HEROエレメンタルヒーローマリリン・ネオス！」

融合のカードを必要とせず、場に存在する素材モンスターをデッキに戻すことで全く新しいモンスターを生み出すコンタクト融合。マリリン・ドルフィンとネオスの形のオーラを纏ったクレインクレインが宙に飛び上がり、ネオスの体をベースに水の力がその身に吸収されていく。

E・HERO マリリン・ネオス 攻2800

「マリリン・ネオスの効果発動！1ターンに1度、相手プレイヤーの手札

1枚をノーコストで破壊する！」

「くっ!？」

マリリン・ネオスの胸から水の竜巻が吹き荒れ、その水流に僕の手札1枚が吹き飛ばされる。あのカードは、グレイドル・パラサイト……あればあるに越したことはないが、まだ致命傷ではない。それにしても、手札を『破壊する』、ね。モンスターゾーンの指定さえなければグレイドル・イーグルで待ち構えることもできたけど、それができないのは惜しい。なんか損した気分だ。

「カードを2枚セット。これでターンエンドだ」

「僕のターン！」

マリリン・ネオスは攻撃力2800の大型モンスター。しかも壁モンスターで耐えようにも、場に残れば残るだけこちらの手札が荒らされていく素敵仕様のきわめて厄介な敵だ。そんな敵に対抗する手段としては……これしかない。

「モンスターをセット。さらにカードを3枚セットして、ターンエンド」

「ずいぶん消極的じゃないか」

「どっかの誰かさんが最序盤からかつ飛ばしてくれるからねー」

十代 LP4000 手札：1

モンスター：E・HERO マリリン・ネオス（攻）

魔法・罫：2（伏せ）

清明 LP4000 手札：1

モンスター：???（セット）

魔法・罫：3（伏せ）

「へへ、俺のターンだ。まずはマリリン・ネオスの効果だ、その最後の手札を破壊しろ！」

再び荒れる水の竜巻が、唯一僕の手札に残ったカードを墓地へと叩き込む。これで3ターン目にして早くもハンドレス、この先はドロークカードに全てを賭けていくしかない。

「さらに攻め込むぜ。カードガンナーを召喚、効果発動！俺のデッキからカードを3枚まで墓地に送り、エンドフェイズまで攻撃力を1枚



につき500ポイントアップさせるぜ」

カラフルに彩られたロボットがおそらく目でであろうライトを光らせ、自らの体にパワーを充電していく。何が落ちたのかをここから知る手段はないけれど、十代のことだ。ネクロ・ガードナー辺りは警戒しておこう。

カードガンナー 攻400↓1900

「バトルだー！マリン・ネオスでセットモンスターに攻撃、ハイパーラピッドストーム！」

E・HERO マリン・ネオス 攻2800↓???

E・HERO マリン・ネオス 攻2800↓0

「またもや荒れ狂う水の竜巻に、今度は手札ではなく僕のセットモンスターが消し飛ばされる。だがその次の瞬間、竜巻を収めたマリン・ネオスの足元から地面を突き破り無数のタコ足が鎖のようにその全身を縛り付けた。」

「何!？」

「今破壊されたモンスターは、シャクトパス！このカードは戦闘破壊された時にそのモンスターの装備カードになってその攻撃力を0にし、さらに表示形式の変更を禁止する！さあ、執念深い鮫の呪いを受けてみる！」

「自らの首に巻きついたタコ足を掴み、必死に振り払おうとするマリン・ネオス。けどもう遅い、シャクトパスの力は破壊されてからが本番だ。」

「くっ……けど今、お前のモンスターはいない！カードガンナーでダイレクトアタック！」

「カードガンナーが自らのキャタピラを高速回転させ、こちらへ向けて走ってくる。だけど甘い、十代！」

「リバーズカード発動、リビングデッドの呼び声！」

「リビングデッド？けどお前の墓地にモンスターなんて……そうか、まさか!？」

「僕の発動した汎用蘇生カードに疑問を示すものの、すぐに何かに気づいた十代。流星に気づくのが早い、なにせ僕がこのデュエルで唯一

場に出したモンスターであるシャクトパスは今こうして装備カード状態でフィールドにいるのだから、他にモンスターが墓地にいればそれは1種類しかあり得ない。

「その通り！礼を言うよ十代、たった今やったこのターンでの手札破壊、あれは僕の手札を破壊したんじゃない。僕が落としてほしかったカードを墓地に送ってくれたんだ！蘇生召喚、ブルーアイス・ホワイトナイト・ドラゴン青氷の白夜龍！」

青氷の白夜龍 攻3000

ここからは反撃開始。僕のデッキの中でも最高攻撃力（固定値）を誇るこの氷の竜ならば、並大抵のHEROにも力で負けることはない。そのことは十代もよくわかっているはずだが、それでもなお不敵に笑っている。

もつとも、そうでなくつちや十代らしくない。

カードガンナー 攻1900↓400

「エンドフェイズにカードガンナーの攻撃力は元の400に戻る。カードを1枚セットして、これでターンエンドだ」

「なら僕のターナーよし来た、グレイドル・イーグルを召喚！」

銀色の水たまりから素早く形を変え生まれる、黄色の鳥めいた生命体。グレイドルの中でも屈指の攻撃力を持つイーグルがここでピンポイントで引けたのはラッキーだったとしか言いようがない。

グレイドル・イーグル 攻1500

「バトル、まずは青氷の白夜龍でカードガンナーを攻撃！ぶち抜け、孤高のウインター・ストリーム！」

「おっと、タダではやられないぜ。トラップ発動、捨て身の宝札！俺の攻撃表示モンスター2体の攻撃力合計がお前の1番攻撃力が低いモンスターの攻撃力より低い時、このターンでモンスターを表側表示で出すことが禁止される代わりにカードを2枚ドローするぜ」

思わぬドローこそ許してしまったものの、逆に言えばこのターン後続が出てくることはない、ということでもある。氷のブレスとロボットの目から放たれたビームが真っ向からぶつかり合う……が、それも数秒のこと。倍以上の攻撃力の差を前に、すぐにビームがかき消され

て消えていった。

青氷の白夜龍 攻3000↓カードガンナー 攻400(破壊)

十代 LP4000↓1400

「カードガンナーが破壊されたことで、俺はデッキから1枚カードをドロローできる」

「だとしても、まだこっちにはイーグルがいる！イーグル、マリン・ネオスに攻撃！」

両手両足に胴体に首……自由意思で動かせるほぼすべての箇所ががんじがらめに縛りつけられたマリン・ネオスに、黄色く光る猛禽が迫る。万全の状態ならば軽くあしらわれたであろうその突撃が、この状況に限っては文字通り必殺の一撃となった。

……ただ一点、その一撃が僕のライフを直撃したことを除けばそれは完璧だったのだが。

グレイドル・イーグル 攻1500↓E・HERO マリン・ネオス 攻0(破壊)

清明 LP4000↓2500

「攻撃宣言時にトラップカード、異次元トンネル―ミラーゲートを発動したぜ。俺のE・HEROが攻撃対象に選ばれた時、そのバトルの間だけ互いのモンスターのコントロールは入れ替わるのさ」

「痛てて……そんな隠し玉仕込んでたなんてね」

「マリン・ネオスはコンタクト融合の中でもかなり強いけど、お前がただやられるわけがないからな。俺だって警戒させてもらったのさ。さあ、グレイドル・イーグルのコントロールは返すぜ」

「お褒めにあずかりまして。これ以上僕にカードはない、ターンエンドするよ」

十代 LP1400 手札：4

モンスター：なし

魔法・罫：なし

清明 LP2500 手札：0

モンスター：青氷の白夜龍(攻・リビデ)

グレイドル・イーグル(攻)

魔法・罨：リビングゲッドの呼び声（白夜龍）

2（伏せ）

「俺のターン！魔法カード、オーオーバーソウルを発動！俺の墓地の通常ヒーロー、ネオスを特殊召喚する！」

E・HERO ネオス 攻2500

「そうか、さつきコンタクト融合でデッキに戻ったのはあくまでクレインクレイン……」

「その通りだ。そして魔法カード、融合を発動！手札のエッジマンと、場のネオスを融合！コンタクト融合だけがネオスの力じゃないぜ、ネオス・ナイトを融合召喚！このモンスターは、融合素材としたネオス以外の戦士族の攻撃力の半分だけアップするぜ」

場に現れたネオスが金色の鎧に全身を包むヒーロー、エッジマンの力を得てさらなる高みに進化した。素手で戦い抜いていたこれまでのファイトスタイルから一転してその右手には上下に刃のついた不思議な形状の巨大な剣を、そして左手には自らの上半身ほどのサイズがある盾を持ち、肩当てやひざ当てなどの鎧パーツもその身に着けている。

E・HERO ネオス・ナイト 攻2500↓3800

「なるほど、そのモンスターで僕のグレイドル・イーグルを攻撃すれば、僕のライフはきっかり0にできるってわけね」

「さあ、どうだろうな？バトル、ネオス・ナイトで青氷の白夜龍に攻撃、ラス・オブ・ネオススラッシュー！」

「えっ？」

十代の指示を受けたネオス・ナイトが飛び上がり、2つの刃のうち下の刀身を白夜龍の首に突き立てる。全身を振るわせて振り落とそうとするも、ネオス・ナイトがその手を緩めることにはついになかった。

E・HERO ネオス・ナイト 攻3800↓青氷の白夜龍 攻3

000（破壊）

「くっ……あれ？」

モンスターが戦闘破壊されたのに、なぜか僕にダメージが来ない。不思議に思っただけでフィールドを見ると、すでにネオス・ナイトは十代の

フィールドに戻っていた。

「ネオス・ナイトがバトルするとき、相手は戦闘ダメージを受けないデメリットがあるのさ。だけどその代わり、こいつにはHEROの中でもトップクラスの対モンスター戦闘能力がある！ネオス・ナイトは攻撃力上昇だけでなく1ターンに2度攻撃ができる、グレイドル・イーグルに攻撃！ラス・オブ・ネオススラッシュュ！」

再び走るネオス・ナイトが、今度は大上段から上の刀身を振り下ろす。グレイドルに攻撃を仕掛けるだなんて何を企んでいるのかは知らないが、イーグルは一切その攻撃をかわそうとせず、むしろ鳥の顔で精一杯にやりと笑ってその一撃を受け止めた。そして真つ二つに裂けた黄色の鳥は銀色の水たまりに溶け崩れ、地面を這ってそのままネオス・ナイトの足元へ近づいていく。

E・HERO ネオス・ナイト 攻3800↓グレイドル・イーグル 攻1500(破壊)

「この瞬間、グレイドル・イーグルの効果発動！戦闘破壊されたイーグルは相手モンスターに寄生し、そのコントロールを得る！ネオス・ナイトに憑りつけ、イーグル！」

足元に忍び寄った銀色の水たまりがわっと持ち上がり、ネオス・ナイトの全身を包み込む。完全に寄生完了かと思ったその時、水たまりが突然はじけ飛んだ。

「甘いぜ！速攻魔法発動、融合解除！これによりネオスとエッジマンの融合は解除され、グレイドル・イーグルの効果は回避される！」

「しまった……！」

E・HERO ネオス 攻2500

E・HERO エッジマン 攻2600

「そしてバトルフェイズ中に特殊召喚されたモンスターは、そのまま追撃ができる！エッジマンでダイレクトアタック、パワー・エッジ・アタック！」

「永続トラップ発動、バブル・ブリンガー！このカードが存在する限り、レベル4以上のモンスターは直接攻撃できない！」

エッジマンの突撃を、湧き上がる泡の壁が押しとめる。イーグルの

寄生がかわされたのは痛い、手札もない今ではこのバブル・プリンガーが効いているうちに早く立て直さないと。だけど下手な下級モンスターじゃ駄目だ、エッジマンノ能力である貫通効果で叩き潰されてしまう。

「一筋縄じゃあ行かないか。ターンエンドだ」

「僕のターン、ドロー！……永続魔法発動、グレイドル・インパクト。そのままエンドフェイズにインパクトの効果発動、デッキからグレイドル・アリゲーターをサーチしてターンエンド」

地面にUFOがバンツと出てきて、そのてつぺんから放たれた不思議な光線が僕のデッキに眠るアリゲーターのカードを呼び起こす。だけどサーチ効果がエンドフェイズ、次のターンでプリンガーが割られたらそこでおしまいだ。これに関してはもう、祈るしか方法がない。

十代 LP1400 手札：0

モンスター：E・HERO エッジマン（攻）

E・HERO ネオス（攻）

魔法・罫：なし

清明 LP2500 手札：1

モンスター：なし

魔法・罫：バブル・プリンガー

グレイドル・インパクト

1（伏せ）

「俺のターン！よっしゃ、ワイルドマンを召喚！」

「しまった！」

E・HERO ワイルドマン 攻1500

野生児、と呼ぶにふさわしい筋骨隆々のヒーロー、ワイルドマン。バブル・プリンガーによるロックはあくまでトラップカード1枚によるもの、つまりトラップの効果を受け付けないワイルドマンにとってはその置物にはかならない。

「ワイルドマンでダイレクトアタックだ！ワイルド・スラッシュ！」

E・HERO ワイルドマン 攻1500↓清明（直接攻撃）

清明 LP2500↓1000

「どうだ！」

「だけどこれ以上、そのダイレクトアタックは通さない！僕のターン！グレイドル・アリゲーターを召喚して、いそのままインパクトの効果を発動！自分フィールドのグレイドルカード1枚と、相手のカード1枚を破壊する！グレイ・レクイエム……エツジマン、撃破！」

UFOからまたもや光線が放たれ、アリゲーターとエツジマンがそれぞれ撃ちぬかれる。そして光線を浴びて融けたアリゲーターが水たまりとなり、またもや音もなくネオスに忍び寄る。

「これは流石に回避できないよね？魔法カードにより破壊されたアリゲーターは、相手モンスター1体に寄生する。ネオスのコントロールはもらった！」

「ネオス！そんな、お前まで……！」

今回攻撃力が上のエツジマンを狙わず、あえてネオスの方を狙ったのには理由がある。ネオスは先ほどのようにオーバーソウル等で倒しても倒しても蘇る可能性が十分にあるし、そこでコンタクト融合にでも繋げられたら目も当てられない。だったらいつそ、こちらのフィールドで待機してもらおうほうがまだいいだろうと踏んだのだ。

にしても、なんだろうこの十代の反応は。僕を相手にする時点で、ある程度はこの展開も予想ができてておかしくないはずだけど。そこは少し気になったけど、だからといって手を抜くわけにはいかない。

「バトル、ネオスでワイルドマンに攻撃！僕が言うのは初めてだねこれ……ラス・オブ・ネオス！」

E・HERO ネオス 攻2500↓E・HERO ワイルドマン  
攻1500 (破壊)

十代 LP1400↓400

「ぐああっ！」

「うっしやあーさあ十代、かかってこい！」

ネオスを奪われたことがよほどショックだったのか、衝撃に吹き飛ばされて膝をついた姿勢のままうつむいていつまでも顔を上げない

十代。10秒、20秒と経つてもまだそのままにいるその姿に、さすがに不穏なものを感じた。

「十代……？」  
「……………」

何も答えないままではあったが僕の声は聞こえたらしく、十代がゆっくりと顔を上げる。その目を覗き込んだ時、心臓を冷たい手でわしづかみにされたような衝撃が走った。前に一度死んだときも、ここまで驚きはしなかっただろう。

その目は普段の十代の目とはまるで違い、黒目どころか白目の部分まで全体的に黄色く染まり……そして何より、これまでに十代からは感じたこともないほどの怒り、憎しみ、悲しみといった負の感情がごちゃ混ぜになっていた。その視線に射られ、意識するより先に危険を察知した体が勝手に身構える。

「許さない……絶対に許さないぞ！俺の、タアアアーンツ!!」  
「うわあああああつ!!」

「んー、むにゃ……どうしたんだよ清明、まだ日も昇ってないじゃないか……ふわあ」

自分の悲鳴に、がばつと跳ね起きた。十代の半分眠ったような声が隣の部屋から聞こえ、周りを見渡すと僕の部屋のベッドの上。ふと気になって時計を見ると、まだ午前3時を少し過ぎたところだった。

「ゆ……め……？」  
『随分うなされていたな、マスター』  
「チャクチャルさん、だよな？それに、皆もデツキにいるし」  
『む？』

「よかった……」  
『はい？まあいい、私はまた寝るからな』

何も事情を知らないチャクチャルさんにとっては、僕が何を言っているのか訳が分からないだろう。まあこつちとしては精霊の皆がいなくて泣きそうだった、なんて恥ずかしい話をするつもりは一切な



い。

それにしても、なんだったんだろう今の夢は。ただの夢にしては、妙にリアルだった気もする。マリリン・ネオスだとかネオス・ナイトだとかの見たことがないモンスターが出てきたのはまあ、夢だからの一言で済ませられるとしても、あの景色の全てが、触ったカードの感触が、そして最後に見た十代のあの目が、いまだにくつきりと思いつける。

「うー……さむっ」

あの時の恐ろしさをごまかすかのように声を出してみるが、体の芯から凍り付きそうなあの感覚は消えない。とりあえず、あの悪夢を見ている間に汗だくになってしまった寝間着を取り替えよう。そうすれば気分がさっぱりして、少しはましな気分になるはずだ。だがそんな思いとは裏腹に、服を脱いでいる間も、あの十代の目がずっと頭から離れなかった。

## ターン81 鉄砲水と毒蛇の神域

『……どこへ行く気だ、マスター？』

チャクチャルさんの声が、僕の頭に響く。随分と剣呑な調子だけど、それも無理はない。つい先ほど謎の悪夢を見て飛び起きたせいで、時刻ははまだ午前3時を半分回ったところ……当然、太陽なんぞ欠片すら昇っていない。そんな時間にこっそりと、音をたてないようにいつもの学生服に着替えている僕を見咎めたうえでの発言だ。

「ちよつとね……わかったわかった、外出たら話すよ。ここで声出したら十代が起きちゃう」

適当にはぐらかそうとしたら口にごそ出さないものものすごい不快感が伝わってきたので、慌てて一言追加する。到底納得したようではなかったけれど、少なくともこの場で隣の部屋の十代をたたき起こすような真似はしないだろう。ここで待ってくれるあたり、邪神と呼ばれる割には律儀な神様だ。

「じゃ、行つてきまーす」

部屋を出る前に一度振り返り、誰もいない室内に向かって声をかける。無意味と言われればその通りだけど、こういうのは気分の問題だ。寮を出てしばらく歩いたところで、再び頭の中にチャクチャルさんの声が聞こえてくる。

『それで？』

「それで、って何が？」

『予想はついているが、一応聞かせてもらおう。どこに行き、何をする気だ？』

いつもよりやや低めの声のトーンからは、中途半端なはぐらかしやごまかしは一切聞く耳を持たないぞ、という無言の気迫を感じる。さらにテレパシーで話しかけてくるばかりで一切僕の前にその姿を現さないことで、余計にその迫力が増して聞こえる。無論、そうなることを計算づくの上での行動だろう。こういうちよつとしたテクニクだけで自分の威圧感を増幅させ、話を自分の優位に持っていく……本当に、駆け引きのうまい神様だった。

とはいえ僕としてもここですつとぼける気はない、それに隠したところですぐにわかることだし。さて、どこからどう話そうか。ゆつくりと歩きながら、慎重に言葉を選ぶ。

「僕ね、さつき、夢を見たんだ」

『夢?』

「そ。心底つままない夢だったけど、どうしても気になるんだ」

先ほど僕が飛び起きた夢……いつの間にかコブラがデュエルにより十代に倒されたとかいう昨日からの過程を全部すつ飛ばした時間軸で、わけがわからないまま十代と僕がデュエルをする夢。

ネオスペーシアン

N

の進化体だとかコンタクト融合じゃないネオスの融合体だとか、なんだか色々よくわからないモンスターばかり出てきた……そして、恐ろしい夢だった。無理に明るく表現するならば、まるで打ち切り漫画の投げっぱなしバッドエンドな最終回のような。それぐらいひどい内容の、だけど妙なりアリティのある夢だった。

このあたりで何かリアクションしてくるかと思っただけど、チャクチャルさんからの反応はない。最後まで口を挟むつもりはない、ということだろうか。それはそれで気まずいんだけど。

「内容はまあ、事細かに説明する気はないからね。見たければ勝手に見ていいよ」

ダークシグナーとして契約を結んだ僕だからなのか、それとも地縛神としての多々あるチャクチャルさんの能力の1つなのか。詳しくはわからないけど、チャクチャルさんは僕の記憶を覗くことができる。見られて困るような部分は覗いていない……のではなく、単に見て見ぬふりをしてくれるだけだろう。

だが、少しの間の後チャクチャルさんはそれを断った。

『いや。まずは話を聞かせてくれ、それからだ』

「あらそう。まあとにかく、その夢の内容、っていうかシチュエーションがどうも、ね。こんなこと言ったら笑うかもしれないけど、ちょうど明日……あ、日付変わってんだから今日か。今日の未来予知みたいな夢だったんだよ」

『別におかしくはないさ、マスター。神も精霊もこの世界には実在す

る、夢が何か意味を持ったところで驚くようなことではない、そうではないか?』

「ふむ。なるほど、たしかにそれもそうか。それで話を戻すけど、その夢によると僕は今日何らかの形でコブラのところに皆より先にいて、その場で気絶してるらしいんだよね」

『それで、マスターはそれを正夢だと思ってるのか?』

「……うん。だからあの夢みたいなことにならないために、今からコブラに奇襲をかける」

呆れてものも言えないのか、それとも何か別のことを考えていたのか。僕の告白を聞いてしばらく沈黙を保っていたチャクチャルさんの気配が、ややあつてまた戻ってきた。

『なるほど、マスターの見た夢では遊城十代がコブラを倒していた。その結末を歪めるため、自分が先に乗り込むことでコブラを倒そうと思った……それでいいか?』

「さつすがチャクチャルさん、説明が楽で嬉しいよ。で、どう思う?」  
『馬鹿馬鹿しい話だ、不確定要素が多すぎる。私なら決してそんな方法は選ばない』

これでも一応足りてない脳みそであれこれ考えた末の結論だというのに、聞き終わってからコンマー一秒すら開けずに硬い声でぼつさり切つて捨てるチャクチャルさん。うう、当然とはいえちよつとシヨツク。

『……と、言いたいところだが』

「え?」

ここで急にチャクチャルさんの声の調子が変わる。なぜか、いたずらっぽく笑ってみせるあのシャチの顔が容易に連想できた。

『いい加減に私もこのくだらん小細工には腹が立っていたからな。このような鉄の塊デスベルトごときでマスターを縛り付ける?私の時代が過去の栄光なことは私としても重々承知しているが、それを含めてもよくもまあここまで地縛神とダークシグナーを虚仮にできるものだ。マスター、力が欲しければいくらでも協力しよう。どうせやるなら徹底的に、派手に行くぞー!』

「お、おーっ……っ?」

どうしよう、まさかこっちが乗り気になるとは思わなかった。猛反発される覚悟は寮を出た時点でもうできてたけど、この反応は想定外。よっぽど鬱憤溜まっていたのかな、チャクチャルさん。そうこうしているうちに問題の場所、旧SAL研究所にたどり着いた。だけど油断はできない、この近くに監視カメラが仕込んであることはアモンとのデュエルで確認済みだ。

「カメラは任せだよ、うさぎちゃん」

気づかれないようそこら辺の茂みの陰に隠れてデツキから幽鬼うさぎのカードを引つ張り出して声をかけると、イラスト部分を通して銀髪少女の精霊が姿を見せる。彼女のスピードと観察眼、かつカメラに写らない精霊の特性をフルに生かせば5分とかからずこのあたり一帯の監視カメラは使い物にならなくなるだろう……ということでも早速出撃してもらおうとしたら、そこで心底楽しそうにチャクチャルさんが口を挟んできた。

『その必要はない。足元を見てくれ、マスター』

「へ?……うわっ!」

言われたとおりに足元を見ると、いつの間にかあたり一帯に紫色の……チャクチャルさんと同じ色をした炎の筋が走っていた。複雑なルートを通りつつ研究所をもすっぽりと覆い尽くすほどの大きなそれは静かに燃えているものの、至近距離だというのにまるで熱を感じない。

『言っただろう、派手に行くよ。そういえば、マスターにはまだ教えていなかったか?細かい使い方は後で教えるが、これは地縛神の力による結界の一種だ。本来は一度張ったが最後、内部でデュエルが終了するまで何人たりとも邪魔をすることができないという代物だが、少し応用すれば違う使い方もできる。これでこの結界がある限り、機械の視線なぞ無いも同然だ。さあ、日が昇る前に決着をつけに行こう』

相変わらず妙なやる気を全開にしているチャクチャルさんに若干調子を狂わせながらも、日が昇る前に終わらせたいのは間違いないので反論せずに進むことにする。

「自動ドアならウィーンって開いてくれるんだけど、まあ」

『キングミスト  
霧の王、任せたぞ』

前に立つてもうんともすんとも言わないドアを前に「そううまいこと行くわけないよねー」と続けようとした僕の言葉を遮り、チャクチャクさんからの指令が飛ぶ。耳元で数回ほど空気が唸り、次の瞬間には帯刀した霧の王の背後で分厚い壁が人1人通れるほどのサイズにくりぬかれて内側に倒れた。チラリと見た断面はまるでバターのようになめらかで、手にした剣の切れ味と持ち主の技量が垣間見える仕上がりとなっている。

『さて、道はできた。このまま進むぞマスター』

「あ、はい……」

『何を驚くことがある？ 私たちはマスターに従う覚悟があるからこそ精霊としてここにいる身、今日はこれまでマスターの意向もあつてしぶしぶ大人しくしていた連中が溜まりに溜まった鬱憤を晴らしたくてうずうずしているのだからな、無論私も含めて』

霧の王、お前もか。いくらなんでもこれはやりすぎだと思うんだけど、まったくもう。とはいえもう切っちゃった壁が元に戻るはずもない、悪い気はしないけど、ね。

「まあ、どうせ半分廃墟だし構わない……のかな。んじやあチャクチャクさん、ここからどうすればいいと思う？」

そう尋ねたのには理由がある、なにせこの建物は無駄に広いのだ。外から見れる部分だけでも地上3階ほどはあるから覚悟はしていたけれど、エレベーターの表示や下りの階段を見る限り地下にもそこそこの規模で広がっているらしい。別に上からしらみつぶしに当たっていてもいいけれど、それは流石に時間がかかりすぎてしまう。

『ふむ……』

『君たち、一体何の用だい？ 困るなあ、邪魔してもらっちゃ』  
「っ!？」

チャクチャクさんが何か言おうとした矢先、第3者の声が辺りに響いた。咄嗟に左右を見回すけれど、声の主の姿は見えない。だけど、どこからか視線を感じる。こちらをじっと見つめている、冷たい目つ

きが頭の中に浮かんだ。

「誰だ!？」

『ボクかい? 名乗るほどの者じゃないさ。ただ、ここから出て行ってもらえないかな? もうすぐ、本当にもうすぐ愛しの人に会えるんだ。普段ならこの場で消えてもらうところだけど、ボクは今彼に会える喜びで機嫌がいいからね。今すぐここから立ち去るなら、特別に見逃してあげるよ』

物腰こそ柔らかいけれど、その声の調子にはぞつとするほど人間味がない。いや、人間味がないというのは少し違うかもしれない。何かこの声には、病的なまでの執念のようなものを感じる。それだけに選択を間違えたときが怖い、下手なことを言うとその時点で詰みかねない。

『……もう散々愛しの彼を待ったからね、あまり辛抱強く待つ気はないんだ。早く答えてくれないかな、今すぐここから出ていくのかどうか』

「え、えつと……」

「その必要はありませんよ。これはこれは、飛んで火にいる夏の虫、だな」

突然目の前にあつたエレベーターのドアが開き、またもや廊下に響く声。だけど今度はこの謎の声とは違い、これまでの数日間で何度も聞いた覚えがある声だ。

「プロフェッサー・コブラ……!」

『探す手間が省けたな』

巨体のコブラが放つ威圧感を前に、むしろ楽しそうにすら見えるチャクチャルさん。確かに本気を出せばナスカの地上絵サイズ、そこらのビルより大きなチャクチャルさんにとっては人間基準で巨体のコブラなんぞどうということないのかもしれないけど、精々170センチ強の僕にとっては最初からガタイの差で負けている。そりゃあ喧嘩は馬鹿力だけが要素じゃない、デカけりゃいいってもんじゃないけどさ。

「遊野清明。お前がここへの一番乗りになるとは意外だったが、お前

もう少しデスデュエルに深入りしすぎたようだな。ついてくるといい、私とデュエルがしたいのだろうか？ここだとくだらん邪魔が入る可能性があるからな。それに、近づけば近づくほどより良質なデュエルエナジーを回収することもできる」

『ふうん……うまあいさ、コブラ。ボクは彼にさえ会うことができれば他に興味はない、好きにするといいよ』

「……………」

『見え透いた罫だな』

全く持つて同感だ。だけどそれは裏を返すと話が早い、ということでもある。とんとん拍子に話が進みすぎてどんどん後戻りができなくなってきた。現状への不安がちらりと頭の片隅をよぎったけれど、すぐにそんなものは別の感情に塗り潰された。それはやる気……ここまで来た以上どうやったって引くわけにはいかないという思いが、僕にクソ度胸をつけさせたのだ。それに僕が今ここにいること自体がもとはと言えば自分でまいた種、キツチリけりをつけるのが筋というものだろう。

深く息を吸い、チラリと自分が入ってきた壁の穴の方を見る。たった今通ってきたばかりの夜の森の風景が、なんだか妙に遠くに見えた。

コブラの後をついて歩き、しばらく……といっても、せいぜい数分といったところだろう。突然、コブラがある部屋の前で足を止めた。入り口の電子ロックに何事か打ち込むと、ややあってゆっくりとその扉が開く。

「これは……？」

思いのほか広かったその部屋は、中心に何の変哲もないデュエルリングが設置されていた。そしてその周りを囲むように設置された、この手の施設にはお決まりの隣の部屋からデュエルリングの様子を見るための防弾ガラス。SALも、昔はこのデュエルリングでデュエルをしていたんだろうか。一体どんな気分であの機械を身に着け、



デュエルモンキーと化していたんだろう。

「昔ここでやっていた研究の名残だ。まったく、くだらん金の無駄遣いだな？だが、まだこのデュエルリングは生きている。さあ、まだ勇気があるならばかかってこい。私は逃げも隠れもしないぞ？」

デュエルリングの片側に立って分厚い唇をゆがめ、あからさまに挑発してくるコブラ。その態度は非常に気に食わないけど、これ以上デュエリストに言葉は必要ない。もう片方のスペースに上がり、デュエルディスクを構える。これまで倒れた皆のため、そんでもってこのふざけたデスベルトのせいでのいい迷惑を受けたこの学校全員のため。さあ、デュエルと洒落込もうか……！

「デュエル！」

この後で襲い来る例の喪失感の準備なのか、腕のデスベルトがギリとオレンジの光を放つ。不穏なその色に照らされながら、先攻となったコブラがカードを引いた。

「私のターン。魔法カード、強欲で謙虚な壺を発動。デッキトップ3枚をめくり、その中で好きなカード1枚を手札に加える。ダメージ・コンデンサー、テラ・フォーミング、リミット・リバーズ……テラ・フォーミングを手札に加え、そのまま発動。デッキからフィールド魔法、ヴェノム・スワンプを手札に加える。そしてフィールド魔法発動、ヴェノム・スワンプ！」

流れるような動きでデッキを圧縮したかと思うと、得体のしれないフィールド魔法が発動される。殺風景な研究所がみるみるうちに毒沼に覆い尽くされ、半分枯れたようなねじれ曲がった木がニョキニョキと生えてくる。同時にかすかな霧が辺りを覆い、足元がぼやけてしか見えなくなる。

「ヴェノム・コブラを守備表示で召喚。カードを1枚伏せ、これでターンエンドだ」

ヴェノム・コブラ 守2000

「守備力2000か……僕のターン！」

現状の僕の手札では、このターンだけであの壁を突破することはで

きそうにない。ならここは大人しく守りを固めて、じつくりと腰を据えて戦おう。

「フィッシュボーグアーチャーを守備表示で召喚」

フィッシュボーグアーチャー 守300

攻守ともに300と低数値ながらも、緩い条件での自己再生能力を持つアーチャー。文字通り縁の下の力持ちともいえるこのモンスターを前に、なぜかコブラがやりと笑ったのが気にかかった。とはいえ、今更モンスターを変えることはできない。

「これでターンエン……」

「ならばこのエンドフェイズ時、ヴェノム・スワンプの効果発動！互いのターンのエンドフェイズごとに、場のヴェノムモンスター以外の全てのモンスターに毒を植え付け、ヴェノムカウンターを1つ置く」

「!？」

足元から霧にまぎれて小さな蛇が忍び寄る。あつと思つた時にはすでにその蛇がアーチャーに飛びかかり、矢を放つひますらなくその動力部に噛みついた。牙から分泌される猛毒が負荷を与え、バチバチと回路がショートを起こす。数秒の沈黙ののち、動かなくなったアーチャーが静かに足元の沼地に沈み込んでいった。

フィッシュボーグアーチャー(0)↓(1) 攻300↓0

「ヴェノムカウンターは1つにつき500ポイントモンスターの攻撃力をダウンさせ、この効果により攻撃力が0となったモンスターはその瞬間に破壊される」

「そんな、アーチャーが……」

コブラ LP4000 手札：3

モンスター：ヴェノム・コブラ(守)

魔法・罨：1(伏せ)

場：ヴェノム・スワンプ

清明 LP4000 手札：5

モンスター：なし

魔法・罨：なし

「私のターン。ヴェノム・スネークを召喚し、ダイレクトアタック！」

黒地にオレンジの縞が何本か入った大蛇が鎌首をもたげてこちらを威嚇した後、独の沼を保護色にして僕の足元まで忍び寄る。次の瞬間、その鋭い牙が骨まで噛み砕かんとばかりの力で足に食い込んだ。

ヴェノム・スネーク 攻1200↓清明（直接攻撃）

清明 LP4000↓2800

「くっ……まだまだ!」

「そう簡単にとどめは刺さんよ。どうせ時間はたっぷりある、極限までお前のデュエルエナジーを引き出してやろう。さらにカードを伏せ、ターンエンドだ」

「僕のターン、ドロ―!墓地に眠るアーチャーの効果発動、僕の場にモンスターがいない時、手札の水属性1体を捨てることでこのカードは墓地から特殊召喚できる!ドリル・バーニカルを捨てて甦れ、アーチャー!」

フィッシュボーグアーチャー 攻300

「さらに自分フィールドの水属性モンスター1体をリリースして、このカードは手札から特殊召喚できる!行くよ、シャークラーケン!」

シャークラーケン 攻2400

今のターンで大体、コブラの使うヴェノムデッキのコンセプトはわかった。要するにステータスの低いヴェノムモンスターをヴェノム・スワンプの効果で相手モンスターから牽制しつつ、弱り切った相手を見つめて襲う事でこちらのライフをじわじわと削っていく、そんなところだろう。けどその戦法には弱点がある。ヴェノムカウンターが乗せられるのは互いのターンのエンドフェイズ……つまり、このターン出すモンスターにはなんら制約がかけられない。モンスターは出したターンで例えば1ポイントでも戦闘ダメージを与えることに集中すれば、十分スピードでこちらが勝てる!

「バトル、シャークラーケンでヴェノム・スネークに攻撃!」

シャークラーケン 攻2400↓ヴェノム・スネーク 攻1200

(破壊)

コブラ LP4000↓2800

「ふん……この瞬間にリバーズカードを2枚発動!永続トラップ、ダ

メージ||レプトル!」

シャークラーケンの突撃を受け、毒蛇が押しつぶされて爆発する。その残骸が毒沼に降り注ぐと、深さの見当もつかないほど奥深くからゆっくりと気泡が上がってきた。

「ダメージ||レプトルは爬虫類族モンスターによる戦闘ダメージが発動した時に効果を発動し、デツキからその戦闘ダメージ以下の攻撃力を持つモンスター1体を特殊召喚することができる。出でよ、ヴェノム・サーペント!」

やがて水面が揺らぎ、その気泡の主がぼつかりと鋭い捕食者の顔を覗かせる。2つの首を持つ緑色の大蛇、しかもそれが2体だ。

ヴェノム・サーペント 攻1000

ヴェノム・サーペント 攻1000

「まだ僕はこのターンに通常召喚をしていない……モンスターをセツトして、ターンエンド」

「忘れたか?その前に、毒がこのターンもお前のモンスターを蝕む」

シャークラーケン(0) ↓(1) 攻2400 ↓1900

毒蛇にまわりつかれ、シャークラーケンの顔が苦痛に歪む。けどシャークラーケンの攻撃力は例え弱体化したとしても1900、まだもう1ターンは戦う力が残っているはずだ。

コブラ LP2800 手札:2

モンスター:ヴェノム・コブラ(守)

ヴェノム・サーペント(攻)

ヴェノム・サーペント(攻)

魔法・罨:ダメージ||レプトル

ダメージ||レプトル

場:ヴェノム・スワンプ

清明 LP2800 手札:3

モンスター:シャークラーケン(1・攻)

???(セツト)

魔法・罨:なし

「私のターン。まずはこのターン、ヴェノム・サーペントの効果を発動

！このカードは1ターンに1度、相手モンスター1体にヴェノムカウンターを置くことができる。私はこの効果を2度使うことで、シャークラーケンに2つのヴェノムカウンターを乗せる！」

「そんな!？」

呆然と見ているうちに、2匹の毒蛇が吐き出した毒の塊がシャークラーケンの体を急激なペースで蝕む。毒を受けた箇所がみるみるうちに変色し、タコ足の何本かが腐って崩れ落ちていった。

シャークラーケン (1) ↓ (3) 攻1900 ↓ 900

「大方そのモンスターでこのターンだけでも凌ごうと思ったのだろうが、目論見が外れたようだ。バトルだ、ヴェノム・サーペントでシャークラーケンへ攻撃！」

ヴェノム・サーペント 攻1000 ↓ シャークラーケン 攻900

(破壊)

清明 LP2800 ↓ 2700

それは、普段ならなんてことないような単調な一撃。だけど全身を駆け巡る毒にやられてまともに立っていることすらおぼつかない様子のシャークラーケンに、喉元を狙うその攻撃をかわすだけの体力は残っていないかった。

「まだだ。セットモンスターにもう1体のサーペントで攻撃！」

ヴェノム・サーペント 攻1000 ↓ ??? 守100 (破壊)

もう1体の蛇がするりとセットモンスターに忍びより、長い体で締め付けて爆散させる。だけど、こちらとてただやられたわけではない。毒沼の表面に、輝く水晶玉が1つ残った。

「水晶の占い師のリバー効果を発動！このカードがリバーした時にデッキトップ2枚をめくってその中の1枚を選んで手札に。もう1枚をデッキの1番下に戻す！1枚目は超古深海王シーラカンス、2枚目は……よし来た、幽鬼うさぎ！僕は幽鬼うさぎを手札に加えて、シーラカンスをデッキボトムに戻す！」

うさぎちゃんこと幽鬼うさぎは、カード効果の発動に反応してそれを破壊する能力を持つ。ヴェノム・スワンプは毎ターンのエンドフェイズにモンスターにヴェノムカウンターを乗せる能力があるから、こ

れ以降その効果を使った瞬間手札から来てこのじめつとした毒沼もボン、だ。もつとも今のフィールドにはコブラのヴェノムモンスターしかいないから、このターンで破壊することはできないわけだけど。「小賢しい真似を。まあいい、魔法カード発動、マジック・プランター！このカードで場の永続トラップ1枚、ダメージIIレプトルを墓地へ送り、カードを2枚ドロウする。ふふふ……魔法カード発動、マジック・ガードナー！このカードは発動時にフィールドの魔法カード1枚を選択してカウンターを1つ置き、そのカードへの破壊を1度だけカウンターを消費することで防ぐ。私はこれでターンエンドだ」

「チツ……僕のターン、ドロロー！」

忘れがちだけど、コブラもまたこのデュエルアカデミアに臨時講師として呼ばれるだけの實力を持つデュエリスト。相手に筒抜けの破壊カードなんて安易な手に引つかかってくれるほど、一筋縄では行かないってことか。

「なら作戦変更、正面突破だ。ツーヘッド・シャークを召喚！そしてフィールド魔法はあんただけの特権じゃない、ウォーターワールドを発動！この効果により水属性モンスターは守備力400ポイントと引き換えに、攻撃力を500ポイントアップする！」

ツーヘッド・シャーク 攻1200↓1700 守1600↓1200

「バトルだ！2回攻撃モンスターのツーヘッド・シャークで、ヴェノム・サーペント2体に攻撃！」

「いいだろう、ダメージIIレプトルは1回目の攻撃では使用しない」

つまり2回目の攻撃の時点では発動する、ということか。含みのある言い方が気になりはしたものの、ここで攻撃を仕掛けなければサーペントの効果で返しのターンでこっちが返り討ちに会ってしまう。嫌でもここは攻め込むしか手がない。双頭の蛇と双頭の鯨がぶつかり合い、やがてその捕食者対決は鯨が制した。

ツーヘッド・シャーク 攻1700↓ヴェノム・サーペント 攻1000 (破壊)

コブラ LP2800↓2100

ツーンヘッド・シャーク 攻1700↓ヴェノム・サーペント 攻1000 (破壊)

コブラ LP2100↓1400

「2回目の戦闘ダメージをトリガーに、ダメージレプトルの効果を発動。2体目のヴェノム・コブラを守備表示で特殊召喚！」

ヴェノム・コブラ 守2000

「……ターンエンド」

ツーンヘッド・シャーク (0) ↓ (1) 攻1700↓1200

わかっていたこととはいえ、結局コブラのフィールドにはいまだ2体のモンスターが残っている。駄目だ、どうも今一つ引きがよくない。モンスターだけじゃなくて、魔法か罨をもっと引いておきたいんだけど。こういう技も何もないただ殴り合いだけの展開になると、僕のデッキは苦しい。1度や2度の攻防ではよくても、それが続くにつれ素の攻撃力の低さが響いてくるのだ。

コブラ LP1400 手札：3

モンスター：ヴェノム・コブラ (守)

ヴェノム・コブラ (守)

魔法・罨：ダメージレプトル

場：ヴェノム・スワンプ

清明 LP2700 手札：3

モンスター：ツーンヘッド・シャーク (1・攻)

魔法・罨：なし

場：ウォーターワールド

「私のターン。ヴェノム・コブラをリリースし、ヴェノム・ボアをアドバンス召喚！」

これまで出てきたヴェノムの名を持つ蛇よりも数段大きな体を持つ蛇が、チロチロと舌を出してこちらを睨む。さすが上級モンスターの貫録、といったところだろうか。

ヴェノム・ボア 攻1600

「ヴェノム・ボアはこのターン自身の攻撃を封じる代わりに、相手モンスターに2つのヴェノムカウンターを乗せることができる」

「くっ……！」

「ここで幽鬼うさぎのカードを使うべきだろうか？少しの間迷ったが、結局は見送ることにした。ここでボアを破壊したとしてもうさぎちゃんに発動した効果を無効にする能力まではないから結局カウナーは乗せられるし、だったらもつと有効的なカードが出てくることもあるだろう。」

ツーンヘッド・シャーク(1) ↓ (3) 攻1200 ↓ 200

「ヴェノム・コブラを攻撃表示に変更し、バトルだ！ヴェノム・コブラでツーンヘッド・シャークに攻撃！」

「え？む、迎え撃って！」

満身創痕の状態になりながらも、最後の力を振り絞ってツーンヘッド・シャークが飛びかかってきた大蛇を迎え撃つ。普段からあまり攻撃することがないのか、若干その巨体を持て余し気味な動きのヴェノム・コブラの牙をギリギリのところかわし、逆にその喉笛を噛みちぎってみせた。

ヴェノム・コブラ 攻100 (破壊) ↓ ツーンヘッド・シャーク 攻200

コブラ LP1400 ↓ 1300

「そして爬虫類族の戦闘でダメージを受けたことで、ダメージレプトルの効果を発動。デッキより出でよ、毒蛇王ヴェノミノン！」

「ほこぼこ、と辺りの毒沼が一齐に沸き立つ。いや違う、これは全て気泡だ。この沼に潜む無数の蛇どもが、一齐に目覚めて一カ所に集まろうと動いているしるしだ。そしてその進む先には、ひととき大きな波紋が広がっている。この底なし沼の奥深くから半人半蛇の蛇の王、ヴェノミノンが同朋の死を受けて立ち上がるようとしているのだ。」

「ヴェノミノンの攻撃力は、私の墓地の爬虫類族の数の500倍となる。今墓地に存在するのはヴェノム・コブラ2体、ヴェノム・サーペント2体、ヴェノム・スネークの計5体、よって攻撃力は2500！バトルフェイズ中に特殊召喚されたモンスターはバトルを行うことができる、このままヴェノミノンでツーンヘッド・シャークに攻撃、ヴェノム・ブロー！」



毒蛇王ヴェノミノン 攻0↓2500↓ツーンヘッド・シャーク 攻  
100 (破壊)

清明 LP2700↓300

これは……まずい。ボアの効果をフル活用してコブラの自爆特攻による戦闘ダメージが発生するギリギリのラインまでこちらのモンスターは攻撃力を減らし、最小の犠牲で最上級モンスターをリクルートしたうえで追撃を行う。ボアが効果使用ターンに攻撃できないカードだからよかったようなものの、そうでなかったらこのターンでやられていた。本人の見た目に反してコンセプトこそとことん地味ながらも、その分堅実にいやらしく、そして着実に僕のモンスターとライフは減らされていく。方向性こそまるで違うものの、この戦い方はどこかゴーストリック使いの稲石さんにも似たものを感じる……気がしないでもない。そして、僕の稲石さんに対する戦績はかなり悪い。最初の1回以外に勝ち星がないレベルだ。

「カードをセットし、ターンエンドだ。どうした、もう終わりか？」  
「ま、まだまだ……僕のターン！」

今引いたカードを見て、手札にあるカードを見る。さあ考えろ、このカードだけでこのターンを耐え抜き反撃に繋ぐには、一体何が必要になる？ 下手なモンスターを出したところで、このエンドフェイズに乗るヴェノム・スワンプと次ターンのヴェノム・ボアの効果の重ねがけでまた破壊されてしまう。そしてヴェノミノンの攻撃力は、墓地の爬虫類族1体につき500ポイント。

いや、待てよ。今のフィールドの状況を活用すれば、あるいは……？

「グレイドル・アリゲーターを守備表示！これでターンエンド！」

毒沼の上を蹴りたてて、緑色のワニが立ちふさがる。攻撃力500のアリゲーターでも、ウォーターワールドがあるこの状況なら1ターンだけ耐えることができる。これで、次のコブラのターンが勝負の時だ。

グレイドル・アリゲーター 守1500↓1100 攻500↓1  
000

「ヴェノム・スワンプの効果発動！ヴェノミノンはヴェノムの名こそ持たないが、自身の効果によりヴェノム・スワンプの毒を受け付けない」

まだだ。僕のデッキで魔法と罫を破壊するカードは、今は幽鬼うさぎとサイクロン、グレイドル・インパクトと氷帝メビウスしか存在しない。1度までの破壊耐性を得たヴェノム・スワンプに貴重な幽鬼うさぎを無駄打ちするのは、せめてほかの除去手段が確保できるまで避けておきたいところだ。

グレイドル・アリゲーター(0) ↓ (1) 攻1000 ↓ 500

コブラ LP1400 手札：2

モンスター：毒蛇王ヴェノミノン(攻)

ヴェノム・ボア(攻)

魔法・罫：ダメージIIレプトル

1(伏せ)

場：ヴェノム・スワンプ

清明 LP300 手札：3

モンスター：グレイドル・アリゲーター(1・守)

魔法・罫：なし

場：ウォーターワールド

「私のターン。速攻魔法、手札断札を発動！互いのプレイヤーは手札を2枚墓地へ送り、カードを2枚ドローする。この時手札から2体目の毒蛇王ヴェノミノンを墓地へ送ったことで、さらにヴェノミノンの攻撃力が上昇する」

毒蛇王ヴェノミノン 攻2500 ↓ 3000

ヴェノミノンの攻撃力がさらに上昇し、ついに僕の白夜龍と並ぶほどの数値になった。早く対処しないと、こっちもどんどん手が付けられなくなってしまう。だけど、今はこのターンをしのぐことだけ考えたほうがよさそうだ。このまま今の2枚ドローでいいカードが引けていなければ、あるいは。こんなふうを考える相手依存の時点ですでに相当ピンチではあるけど、そういった部分でのプライドはもう諦めた。終わりよければすべてよし、石に食らいついてでも勝ちに行こ

う。

「……ヴェノム・ボアの効果発動。グレイドル・アリゲーターにヴェノムカウンターを2つ植え付け、攻撃力が0を下回ったことでスワンプの効果により破壊する」

グレイドル・アリゲーター(1) ↓ (3) 攻500 ↓ 0

吐き出された毒液が緑の体をみるみるうちに紫色に染め上げ、形を保っていられなくなったアリゲーターの体が崩れる。だがただ崩れて終わりではない、むしろ本番はこれからだ。

「この瞬間、魔法カードの効果で破壊されたアリゲーターの効果発動！ 相手モンスター1体に寄生し、そのコントロールを得る！ さあこっちに來い、ヴェノミノン！」

毒沼の上を、まるで水面に油を引いたかのごとくグレイドルの銀色が流れる。一定のスピードを保つそれがスルスルと大蛇の体にしがみつくのと、多少の抵抗の後その蛇がこちらへゆっくりと這いつつきた。その頭だけではなく、両腕の指部分を構成する蛇全ての額にも銀色の紋章が薄く光を放つ。

毒蛇王ヴェノミノン 攻3000 ↓ 0

「攻撃力が……」

わかつてはいた。僕だってそこまで馬鹿じゃない、こうなることはわかっていた。ヴェノミノンの攻撃力はあくまで『自分の』墓地の爬虫類族に依存する。僕の墓地に爬虫類族なんて1体もないから、当然コントロールが変わればその攻撃力は0になる。だけどそれでも、ここはヴェノミノンのコントロールを奪うしかなかった。ここでボアのコントロールを奪おうものなら、攻撃力3000のヴェノミノンの一撃を受けて確実に負ける羽目になった。少なくともこのターンで効果を使ったボアは攻撃ができないから、このままモンスターさえ出てこなければこのターンは凌ぐことができる。

……それでもその後どうする、という問題はまだ続くけど。ただ今この瞬間の状況では、不本意ではあるけれどこれが最善手だ。そして幸いにも、コブラの手にこれ以上召喚するようなモンスターはいなかったようだ。

「まあよからう、だがそのヴェノミノンで何ができる？ 私はこれでターンエンドだ」

『幸いというより、マスターのそれは悪運だな。あまりツキのみに頼り切っていると、後で痛い目にあうぞ？』

「うっさいやい。僕のターン、ドロー！」

チャクチャルさんにはああ言ったけど、実際僕もそう思う。もっと実力で勝てないと、どんどん強くなっていく皆のレベルに追いつくことすらできやしない。もっともっと強くならないと、僕1人だけ置いて行かれちゃう。

そこまで考えたあたりで、突然気づいたことがある。どうして僕が、いくらあの不吉な夢を見たからと言ってそれを誰かに相談するよりもこうして夢で見た未来を変えるためにここに来る道を選んだのか。寮を出た時は僕自身が気づいていなかったけど、もしかしたらこの場でコブラを倒すことで他の皆に、そしてなにより自分自身に証明したかったのかもしれない。僕はまだ皆と一緒に戦える、こうして最前線に立つ実力があるって。

『心の闇がまた広がる……程々にな、マスター。止めるだなんてことは地縛神の私が言えた立場ではないが、その力の乱用は今マスターが手にしているはずの物すらこぼれ落とす危険がある。私もこの5000年で随分と丸くなったものだ、今の私にとってマスターの幸福こそが最大の望みなんだ。そのことだけは、心の隅にでも止めておいてほしい』

諭すような口調のチャクチャルさんの声に、どうにか感情の昂ぶりも収まって落ち着きを取り戻すことができた。そうか、これが僕にとっての心の闇、か。ここ最近の負け戦が、気づかないうちに僕を変化させていたらしい。

「すうーっ………はあーっ………よし、もう大丈夫。ありがとうチャクチャルさん、ヴェノミノンを守備表示に変更。さらにカードを1枚セット、モンスターをセットしてターンエンド」

毒蛇王ヴェノミノン 攻0↓守0

コブラ LP1400 手札：2

モンスター：ヴェノム・ボア（攻）

魔法・罨：ダメージIIレプトル

1（伏せ）

場：ヴェノム・スワンプ

清明 LP300 手札：2

モンスター：毒蛇王ヴェノミノン（アリゲーター・守）

???（セット）

魔法・罨：グレイドル・アリゲーター（ヴェノミノン）

1（伏せ）

場：ウォーターワールド

「私のターン！ほう……面白いものを見せてやろう。速攻魔法発動、エネミーコントロール！このカードは2つの効果から1つを選んで発動するが、私が選ぶのは2つ目の効果。ヴェノム・ボアをリリースし、このターンヴェノミノンのコントロールは再び私が得る！」

空中に巨大なゲームコントロールが出現し、2本のコードがそれぞれヴェノム・ボアとヴェノミノンを繋ぐ。複雑なコマンドが打ち込まれると、まるで子供のおもちやのようにぎくしゃくとした動きでヴェノミノンがコブラのフィールドに戻っていった。そしてコブラの墓地にはすでに無数の爬虫類族モンスターが存在することで、またヴェノミノンの攻撃力が上昇する。

毒蛇王ヴェノミノン 攻0↓3500

「さらに魔法カード、ハーピィの羽根帚を発動！これによりお前のフィールドに存在するすべての魔法及び罨カードは破壊される！」

「え!?……何考えてんのか知らないけど、リバースカードオープン！和睦の使者の効果により、このターン僕は戦闘でモンスターを失わず、さらに戦闘ダメージも0になる！」

ウォーターワールドが、チェーン発動した和睦の使者が、破壊された墓地に送られる。そして、グレイドル・アリゲーターのカードもまたその例外ではない。

「グレイドル・アリゲーターの効果発動。相手に寄生していたこのカードがフィールドを離れた時、その寄生モンスターは破壊される

……せつかく取り戻したところ悪いけど、ヴェノミノンはこれで破壊だ！」

ヴェノミノンの体が、毒沼に倒れこむ。そのままピクリとも動かずに、その紫色の水面にゆっくりと呑み込まれて……再び、水面が沸き立ったかのごとく気泡が立ち上った。それも先ほどヴェノミノンが現れたときとは比べ物にならない、まるでヴェノム・スワンプそのものがこれから現れようとしている何者かを全身で歓迎し、歓喜に身を震わせているような異様な蠢きようだ。

そしてその様子を見て、コブラが1人佇んで狂気めいた笑みを浮かべる。

「これでいい……自分フィールド上でヴェノミノンが戦闘以外の方法により破壊された時にこのトラップカード……蛇神降臨を発動することができる。蛇神降臨の効果により私は、デッキからこのカードを特殊召喚！出でよ、毒蛇神ヴェノミナーガ！」

毒の沼地が、そこに巢食う蛇が、共に歓喜の叫びを上げる。いや、違う。これはあの蛇の神が、その体を持ち上げて深い沼の奥底、ヴェノミノンよりはるかに深淵から地上へと降臨した際の音だ。

毒蛇神ヴェノミナーガ 攻0↓4000

「ヴェノミナーガの攻撃力は、ヴェノミノンと同じく私の墓地の爬虫類族の500倍。例えば戦闘で破壊できずとも、何が隠れているのかは見ておくか。バトルだ、ヴェノミナーガでセットモンスターに攻撃！アブソリユート・ヴェノム！」

毒蛇神ヴェノミナーガ 攻4000↓??? 守200

猛毒の奔流を受けて、セットしていたモンスターが表になる。毒の前にふらつくそのモンスターの名は、ハンマー・シャーク……展開に長けた鮫の戦士だ。

「リバースモンスターでも見せてくれるかと思ったのだがな。エンドフェイズにハンマー・シャークにヴェノムカウンターが乗り、これでターンエンドだ。おっと、ヴェノミナーガにカウンターが乗ることを期待しても無駄だぞ？先に1つだけ忠告しておいてやるが、ヴェノミナーガはカード効果の対象にならず、あらゆる効果を受け付けない。

精々戦闘破壊できるように祈ることだな」

ハンマー・シャーク(0)↓(1) 攻1700↓1200

「僕のターン、ドロロー……」

現時点で4000もの打点に加え、完全効果耐性だって？そんな化け物、どう倒せっていうんだ。いや、ここで僕が諦めムードになっていては話にならない。戦闘でしか倒せないのなら、その戦闘で越えてやるまでだ。このデッキが火力で4000を超える方法は数少ない。だけどそれを可能にするカードを、僕は確かに知っている！

「魔法カード、死者蘇生を発動！僕の墓地に眠るモンスター、シャークラーケンを蘇生する！そしてハンマー・シャーク、シャークラーケンの2体をリリースし……アドバンス召喚、これが僕の切り札だ！  
キングミスト  
霧の王！」

毒の沼とそれを覆い尽くす黒い雲に、一筋の光が差し込む。分厚い雲を、不浄の沼地を、全て断ち切って霧の魔法剣士がフィールドに立ち上がった。

霧の王 攻0↓4100

「霧の王の攻撃力は、リリースしたモンスターの元々の攻撃力の合計！受け取れ、ミスト・ストラングル！」

蛇の女神がその赤い目を憎しみに燃え上がらせて両腕代わりの大蛇を、髪の毛の代わりに頭から生える山のような量の蛇を振り回す。無限にも思える蛇どもの猛攻をすべて剣で捌き、あるいは受け止め、時には断ち切り、さらには自身の周りに霧を一瞬だけ纏うことで攻撃目標を狂わせたりと、その全てをただの一撃も受けることなく、ついにその本体にたどり着いた霧の太刀が神を切り裂いた。

霧の王 攻4100↓毒蛇神ヴェノミナーガ 攻4000(破壊)

コブラ LP1400↓1300

「やったー！」

「ふふふ……やった、か。果たしてそれはどうかな？」

「え……」

ヴェノミナーガは確かに両断した。そのはずなのに、再び空に雲が戻りつつある。沼地から、いまだ不穏な気配が漂い続けている。霧の

王が何かに警戒しているかのように、振りぬいた剣を再び構えなおす。その視線が見据える先の沼が、再び膨れ上がった。まるで、何かの中から出てこようとしているかのように。やがて水面が割れ、そこから出たのは巨大な蛇だ。半神半蛇の究極の蛇の神の赤い瞳が、再びこちらを見据える。

毒蛇神ヴェノミナーガ 攻0↓3500

「嘘、い、今確かにヴェノミナーガは……」

「確かにヴェノミナーガは破壊された。だがそれがどうした？ヴェノミナーガは戦闘破壊された時、墓地の爬虫類族1体をゲームから除外することで再び墓地から蘇る。せっかくの攻撃も、徒労に終わったようだな。さあ、次は何をするのかね？」

「ぐっ……ターン、エンド……」

こう言うしかなかった。他に、何もできる事はなかった。全身全霊をかけた今の攻撃に、もうすべてのリソースを使い切った。これ以上何かを仕掛けるほどの余裕は、もうない。今はまだ霧の王の攻撃力が自己再生に力を使ったヴェノミナーガを上回ってはいるけれど、それだって持って次のターンまでだ。

……いや、心折れるにはまだ早い。僕には確かに手札もないけれど、まだ次のターンまで生き残れる可能性がある。そんな可能性があるのなら、次のドロークカードを僕が引くまでは決して諦めるものか。このデッキの一番上に眠るカード、これが僕の手に残った真正銘最後の希望だ。

霧の王(0)↓(1) 攻4100↓3600

「私のターン。このデュエルも、もう終わりにしよう。出でよ、ヴェノム・スネーク！」

このデュエルの最初の方でも見た、黒地にオレンジの縞模様を持つ蛇。

ヴェノム・スネーク 攻1200

「ヴェノム・スネークは1ターンに1度、自身の攻撃を封じる代わりにモンスター1体にヴェノムカウンターを1つ植え付ける。これで霧の王のヴェノムカウンターは『2つ』だ」



「……………ッ！」

鎧を突き破るほどの毒蛇の牙が霧の王の腕を捉え、その腕が変色していく。苦しみながらもその剣は話さなかったが、すでにヴェノミナーガをもう1度切り裂くだけの体力はその体に残っていないかった。

霧の王(1) ↓ (2) 攻3600 ↓ 3100

「バトルだ。ヴェノミナーガで攻撃、アブソリユート・ヴェノム！」

再び毒蛇の、猛毒の奔流が霧の王を飲み込む。精彩を欠く動きながら懸命に抵抗するも、その数の暴力が1匹、また1匹と抵抗を潜り抜けその体に食らいついていく。その数に比例してその全身が次第に変色していき、それと同時にますます動きも鈍くなり、そして……………その動きが、ついに完全に止まる時が来た。

毒蛇神ヴェノミナーガ 攻3500 ↓ 霧の王 攻3100 (破壊)

清明 LP300 ↓ 0

「ぐ……………僕が、負けた……………」

「さあて、それではお楽しみ時間だ。命の保証はしないがな」

『マスター！今私が』

『誰だか知らないけどさ、せつかくのデュエルエナジーなんだ。思ったよりボクの復活にはパワーが必要そうだし、邪魔をしないでくれるかい？』

『邪魔を……………するな……………！』

『へえ……………！凄いや力の精霊だけ……………ここは、止めさせない、よ！愛しの彼に……………十代に！ボクはまた会うんだ！』

ソリッドビジョンが消える。それと同時に、視界がどんどん狭くなっていく。チャクチャルさんから一瞬だけすごい勢いで供給されていた地縛神のパワーもあの謎の声がまた聞こえた瞬間に何らかの方法で断ち切られ、これまで見たこともないほどの光を放つデスベルトが僕の体力を直接、根こそぎ剥ぎ取りにかかる。

意識が途切れる最後の瞬間まで、あの謎の声が言った最後の言葉……………十代の名前が、僕の頭の中でずつとリフレインしていた。

## ターン82 鉄砲水と分岐の英雄

「あ、痛てててて……」

目が覚めたときに真つ先に感じたのは、後頭部に感じる冷たい硬さだった。痛む体に顔をしかめながらもどうにか身を起こすと、最初に見た景色とは随分様子が違う。入口どころか窓もない、床といい壁といい一面レンガ張りの……まるで、井戸か何かの底にでも閉じ込められたような格好だ。そして暗いその部屋の中には、もう1つ仏頂面が見えた。

「オブライエン？何してんのこんなところで」

「それはこっちのセリフだ。なぜおまえがここにいるんだ？」

「なぜ、つて……えっと、話せば長くなるよ？」

「構わないさ。どうせもうしばらくは、俺たちを監視しているコブラを油断させるために大人しくしているつもりだったからな。それに、俺がここに閉じ込められてからの間に何があったのかも知っておきたい」

「コブラの監視？それに、ここに閉じ込められてたって……」

「なるべく顔を動かさず、目だけで確認してみろ。監視カメラはあの位置だ」

言われたとおりに目だけを動かしてちらりとオブライエンの言う方向を見ると、確かに監視カメラが1台、広いわけでもないこの竖穴の中にいる僕たちの方を向いていた。まじまじと見つめるわけにはいかないから確証は持てないけど、多分あれも外に仕掛けてあったものと同じ品だろう。

「えっと、どっから話そうかな。実は……」

少し迷ったけど、最終的に洗いざらい全部話すことにした。どうせ見た感じ出口も何もあったもんじやないこの狭い部屋で隠し事をしたところでオブライエン相手にはすぐばれるだろうし。アモンの開催したデスデュエル大会と、その結果出てきてしまった大量の衰弱者。島を飛び回る怪電波と、その発生源がこの研究所にあること。僕が見た夢についてはさすがに言ったところで通じるわけがないので

伏せておいたけど、それ以外のことはだいたい明かしておいた。

そんなこんなで、結構時間がかかったものの僕が知る限りのほぼ全てを聞き終えたオブライエンが、ふう、と息をつく。

「……なるほどな。先に言っておくが、俺もコブラの狙いがどこにあるのかは知らん。だから俺を問いただしても、何も吐くような情報はない。所詮は使い捨ての傭兵、というわけだ」

そう言つて自嘲気味に口の端を歪めて笑い、すぐに真剣な表情に戻る。

「だが、いずれにせよコブラと敵対するという点では俺たちの狙いは同じ。ここから脱出するために、お前にも協力してもらおうぞ。まずは……そらー！」

いきなり立ち上がったオブライエンがズボンから何か金具のようなものを取り出し、先ほど自分が示した監視カメラめがけて投げつける。正確なコントロールで飛んで行ったそれが、カメラのレンズを一発で叩き割った。

「これで、向こうからこちらは見えなくなった。恐らくあの男のことだ、どうせ何にしても無駄だと高をくくつてしばらくは確認もしにこないだろう。もうすぐ十代達もこちらに乗り込んでくるならば、なおさらだ。とりあえず、この床から手を付けてみるか。このレンガを剥がして脱出できないかやってみるぞ」

「ちよ、ちよつと待つてよ。まだこっちは聞きたいことが残ってる！」

今度は足についたベルトからお好み焼きに使うヘラのような物を取り出すと、その先をレンガの隙間にねじ込む作業に入ったオブライエン。いかにもしぶしぶといった様子で頭を上げ、なんだ？という様子でこちらを見上げてくる。

「結局のところ、オブライエンは何者なの？コブラと敵対してるってのは本当？だとしたら、一体何があったの？それから……」

「お前の疑問はもつともだ。だが、その疑問に全て答えることはできない。それに、仮に俺がお前の敵だとしても、少なくともここから出るという目的だけは一致している。この場で全てを聞き出そうとい

うのは、かかる時間を考慮しても得策ではないはずだ」

ケチのつけようもない正論を前に、何も言い返せない。確かに、オブライエンがここからの脱出を図っているのは明白。僕も当然、ここからさっさと抜け出したい。オブライエンの真意がどこにあるかと、少なくともここから脱出するところまでは協力する利点が十分にある。

……確かにその通りなだけどさあ。全くもっておっしやる通りなんだけど、なんかもやもやする。大体、もしオブライエンが実はコブラ側で、ここににいるのも僕を騙すためだったりしたら？ 仮にここから出て十代達と合流できたとしても、むしろ皆のところはこの実力者オブライエンを、厄介な敵を案内するだけになりかねない。

「う……じゃあせめて、これだけ教えて。今の時間って、わかる？」  
「そうだな……俺の感覚が確かなら、そろそろ朝の8時ごろになるはずだ」

「8時い!?!じゃあ何、僕はここで4時間近くぐっすり寝てたつての!?!」  
「何度か起こそうとはしたんだがな、完全に気を失っていたからな」  
今が8時となると、ここでいつまでも悩んでいるのは何よりも最悪な選択だ。PDFは気絶している間にコブラに取られたようで気づいた時には無くなっていたが、予定通りに事が進んでいるならばいつ十代達がここに現れても不思議ではない。オブライエンを信じるか、それとも信じないか。色々難しいことを考えたところで、結局はその2択でしかないわけで。

なら、僕の返事は決まってる。

「よっ、と……いー」

その場にうずくまり、足元のレンガに指をかける。こちらを見てくるオブライエンにウインクして指に力を込め、手をかけたレンガを床から引きはがした。目を丸くするオブライエンの視線を感じながら、ぽっかりと空いたその穴をさらに広げにかかる。ダークシングナーとして生まれ変わった、というか生き返った際に得た身体能力の底上げによる馬鹿力をフルに使えば、この程度なら十分に力技でどうにかできる。

「でりやあ！……あれ？」

と、思ったのもつかの間。30センチも掘らないうちに明らかに指先から伝わってくる感触が変わり、いくら手を伸ばしてもつるつるした表面を撫でるばかりでその先が掴めなくなる。

「オブライエン、ちよつとこれ見てよ」

「今度はなんだ……鉄板か？」

「だよね」

どうも一切の継ぎ目がない、かなり巨大な鉄板がこのレンガの下には広がっているらしい。それを見たオブライエンがしばらく考えたのち、またもやポケットから何か金具をとり出した。流石にこれを素手で引きちぎるほど僕の体も凄まじいことにはなっていないので、これはこの用途不明な道具を持っているオブライエンに任せるしかないだろう。すぐにしやがみこみ、僕の開けた穴に両手を突っ込んでの作業が始まる。

「……えっと、手伝いとか」

「いらん」

よっぽど体力がいる作業なのか、歯を食いしばるようなぶつきらばうな返事しか返ってこない。下手に会話するのも邪魔になりそうなので、しばらくは大人しくしていることにする。手持ちぶたさなのですぐそばの壁にもたれて座っていると、今朝の寝不足とデスデュエルの疲れが今頃になって出てきたせいか、はたまた普段めつたに使わないうタークシングナーの力を出したせいなのか次第にまぶたが重くなってきた。すぐ隣で作業中なのに寝るなんて失礼にもほどがある、そう思っただけでなんとか起きていようとしてもまたすぐ睡魔が襲う。

「あうう……」

ごめんオブライエン。最後にその後ろ姿に手を合わせ、そのまま目を閉じる。また嫌な夢でも見るかとも思ったけど、別にそんなこともなく結局オブライエンに起こされるまで本気で爆睡していた。まあおかげで、だいぶ敗北の感触も悪夢の不安も紛らわせることができたわけだけど……逆に言うと、何か僕を眠らせようとした存在がいたわけでもなく、本気で眠くなって寝ただけだったらいい。それはそれで

情けない。

「んで、どう？出られそう？」

「だから起こしたんだ。もう少しかかるがな」

「あいよー。見ーせてっ」と

そうは言いつつも、場の状況を一目見てなんとなく想像はついた。先ほどの鉄板の一部が切られ、かすかに亀裂が走り向こう側から光が覗いている。そこを起点にこのまま押し広げ、どうにか穴をあけようということだろう。

あれ、だけどこれ光が見えるぐらい開いてるんならこのまま体重かけて踏み抜けばいいんじゃないだろうか。オブライエンもずいぶん長いことここに閉じ込められてたみたいだし、こんな簡単なことも思いつかないぐらい精神的に参ってきてるのかな。よしよし、最後のー押しは僕がやってあげよう。

「どりゃあああーっ！」

「あ、馬鹿……！」

オブライエンが焦った調子で制止しようとしたけれど、もう遅い。勢い良く飛び上がり、全体重に加えその落下速度も合わせて鉄板の上に着地。みしみしといやな音が足元から聞こえ、次の瞬間立っているはずの地面に急に喪失感が広がった。あ、これは……と思ったところで、首根つこを強烈な握力で引つ掴まれる。制服のせいで首が締まる格好になり息が止まりながらも、どうにかそのまま真下に落下するのとだけは防がれた。

「床から光が漏れてるんだ、下にある程度空間があるに決まってるだろう！そんなところで確認もせずに踏み抜いたら、下手すると命に係わるぞ!？」

「むー…むーっ！」

片腕で僕を釣り上げながらお説教が始まったので、首を指さしてさしあたりの危機をどうにか伝える。どうにか降ろしてもらったところで、今開いたばかりの大穴を改めて覗き込んだ。

「うっわあ……何これ」

レンガの下に敷かれていた鉄板……その下には通路があり、当然そ

の底には床があつた。どこに繋がっているかはわからないけれど、少なくともここから出ることはできるだろう。そしてそんな景色を見た瞬間、なぜコブラが監視カメラを封じられてから結構経つたにもかかわらず未だ顔すら見せに来ず余裕ぶっこいてるのがよくわかつた。いやまあ、こつちに来ないことについては十代達が今何かしてそつちの対応に追われてるのかもしれないけど。

結論から言うところの通路、高さが見た感じ軽く20メートルはある。大きな通路、なんてレベルではない。この高さから飛び降りたつてダークシグナーの体を支えるために無駄に頑丈になつた骨が折れるなんてことはないだろうけど、それでも着地をミスって捻挫のひとつくらいはしかねない。

「なんかいいもんじゃないの？ さつきみたいなさ」

「そうだな……待て、誰か来た」

小声で注意し、通路の片側を指さすオブライエン。数秒後、そちらの方向からなんと十代達が走ってきた。ヨハンが剣山に肩を貸してもらつてるところを見ると、恐らくデスデュエルがどこかであつたのだろう。それだけでなくよく見ると、十代の足元も若干ふらついているように見える。全員の顔にはなぜか焦りの色が見え、少しでも早く通路のもう一方の端にたどり着こうとしているかのようだ。

ガコン。

突然研究所全体が揺れ、何か巨大なものが動く音がする。十代達が走り抜けようとするその先の通路が、上から降りてきた防火扉によってゆっくりと狭まりつつある。あれだけ分厚いと、一度閉まりきつたらどうにかするのは極めて難しいだろう。なるほど、だからあれだけ焦ってるのか。おそらくはあの向こうにコブラが……そして、あの十代を呼ぶ謎の声の主がいるのだろう。

「なんて言ってる……！」

「場合じゃない、な！」

状況はまだよくわからないけど、とにかくこの通路を通り抜ける必要があるのだろう。だけど、彼らの位置と防火扉のスピードではちよつと間に合いそうにない。特に示し合わせたわけでもないのだ

が、僕もオブライエンも同じことを考えていたらしい。悠長に降りる方法を考えるわけでもなく、ほぼ同時に天井から飛び降りた。

「十代、そこどいて！」

「清明!?それにお前、オブライエン！」

オブライエンが落下しながら上着の内ポケットに手をつ込み、今度は小型の拳銃のようなものを引っ張り出す。それを防火扉めがけて引き金を引くと、銃口からワイヤーが勢いよく打ち出された。その巻き上げの力を利用して、オブライエンがターザンのように最短コースで扉にたどり着いた。そして両腕を上には伸ばし、筋肉に力を込めて降りてくる扉をがっしりと受け止める。

「くっ……早く行け、十代!そしてコブラを止めるんだ！」

「2人とも、なんでここにいるんだ!？」

「んなもん後で話したげるから!手伝うよ、オブライエン！」

やはり1人の力で支えるには無理があったらしく、オブライエンがどれだけ腕に力を入れても少しづつ、だが確実に床と扉の差は縮まっ  
ていく。その間に体を滑り込ませ、こちらに向け走ってくる十代達のため  
に重たい鉄の扉を押し上げる。両腕にずしつとくる重みは流石に並  
の物ではなく、2人がかりでもじわじわとこちらが押されてるのが  
わかる。

「早く！」

「よ、よくわからないけどわかったドン!皆、行くザウルス！」

最初に我に返った剣山の号令のもと、1人また1人と扉の向こう側  
に抜けていく。そして最後に、十代だけが残った。まだどこか呆然と  
した様子で、ゆっくりと扉をくぐる。完全にくぐりきつてもなお、十  
代はその場に残っていた。

「オブライエン、お前はコブラの味方じゃなかったのか?」

「……俺とお前は、出会い方が悪かった。それだけのことだ。さあ、早  
くしろ。そしてコブラを止めてくれ。それと……コイツのことも頼  
む」

言いざまにオブライエンが両手を離し、急に姿勢を低くしてロー  
キックを繰り出した。普段の状態ならなんとか見切れたかもしれないな



いが、なにせ今は頭上に全神経を集中させている。そんな状態ではどうすることもできず、一撃を喰らった僕の全身のバランスが一気に崩れた。

「オブライエン、何を……！」

「ここでごうすることが俺の犯した罪への罰なら、俺は潔くそれを受け入れる。だが、お前までそこに着きあわせることはない。達者でな、清明」

何か言おうとしたけれど、もう声が出なかった。十代が倒れた僕の足を引きずり、扉の向こう側へと引き上げる。その直後、分厚い鋼鉄の扉が床にがっしりと落ちきった。

「オ、オブライエン……」

「早くしろ十代！こっちの扉も閉まるぞ！」

感傷に浸っている暇もなく、ヨハンの声が響く。見ると、確かにこの通路にも上から鉄の扉が降りてきている。

「クツ……走るぜ、清明！」

「う、うん！」

2人で肩を並べて走り、かなりギリギリのところまで扉の向こうに転がり込む。そこでこちらを……正確には僕の方をじつと見つめる皆の視線に気づいた。まあ、そりやそうだよな。誰にも何も言わずに1人で乗り込んで、そのあげくがこんな何食わぬ顔してひよっこり出てきたんだ。心配、安心、そして疑念……色んな感情が渦巻いた、皆からの視線がただただ痛い。

皆の顔を見る気に慣れなくて視線を下に下げたあたりで、ふとあることに気が付いた。ここに乗り込むはずだったのは僕を含めて全部で8人、だけどここにいるのは7人だ。まるで僕の考えを呼んだかのようなタイミングで、真っ先に明日香が口を開く。

「あまり言いたくはないけれど、清明。あなたが今朝から行方不明だったから、それを探すって言って夢想はアカデミアに残ったのよ。私達もどうするか悩んだけど、もしかしたらコブラに捕まってるのかもしれないって思ってた通りここに来たの。参ったわね、彼女に連絡が取りたいのに、ここは圏外だわ」

「そんな……！」

例えば、今朝起きたら急に夢がいなくなっていたとしたら、僕はここに乗り込むよりそれを探す方を優先するだろう。だけど、それと同じことが自分にも言えるだなんて思いもしなかった。

何も言えずにただうつつむいていると、空気を変えようという風にジムが1つ咳ばらいをした。

「ウホン。オーケー皆、俺たちがここに来たのはまず第一にコブラのデスデュエルをストップさせるためだ。確かに言いたいことはいろいろあるだろうが、ここは奴のホームグラウンド。いつまでもここで立ち止まっているのは大変バッドな選択だ。だからすべてを終わらせて、それからすればいい。そうだろう、十代？」

そう言つてジムが、皆からは見えないように十代にアイコンタクトを送る。その意味をすぐ理解した十代が、大きく頷いた。

「ああ、そうだな。行くぜ、みんな！コブラはもう、すぐそこだ！」

「……ありがとう」

思いのほか小さな声でしか言えなかったお礼の言葉は、しかしちやんと2人の耳には届いたらしい。無言でこちらを向いて親指を立て、すぐ前に向き直つて歩きだした。その後ろを翔たちが追いかけて、さらにその後ろに僕が続く。……必ず説明するから、帰ったら絶対説明するから、だから、無事にここから出よう。

しばらく通路を歩くと、その行き止まりにはエレベーターがあった。エレベーターと言つてもよくある箱型のもではなく、ちょうどデュエルリングほどのサイズがある円形のステージのようだった。そしてその奥に立っているあの姿は、忘れもしないプロフェッサー・コブラ。十代達の顔を見てもニヤついていただけのコブラだったが、さすがに僕の顔を見ると表情が変わった。それはそうだろう、先ほどあんな地下室に放りこんだはずの人間がこうしてびんびんしているのだから。

「ほう？監視カメラが壊れたのは知っていたが、まさかも脱出に成功していたとはな。オブライエンから荷物を取り上げなかったのは失敗だったか。まあいい、どの道デュエルエナジーの枯渇したお前で

は立っているのもやつとだろう。そんな程度では足りない、私の興味があるのは遊城十代、お前ただ1人だ。私をデュエルで止めるの难道う？ デスデュエルで、なあ？」

「ああ、やってやるぜ！」

「……！」

駄目だ、十代。ここで勝つても負けても、どのみちコブラの思う壺になってしまう。コブラの狙いはただ1つ、デスベルトを通じて得られるデュエルエナジー。僕とコブラのデュエルのせいで溜まったデュエルエナジーがどれほどの物かは知らないが、あの謎の声は確かに『もう少し』だと言っていた。今でさえ不意打ちに近い形だったとはいえチャクチャルさんをも退けるほどの力を持ったそいつが、十分なデュエルエナジーを得たらいっただいどうなってしまうのか。

それを警告しないといけない。どうにかデュエル以外の方法で、コブラを止めなくてはいけない。それを言おうとするのに、なぜか口が開かない。異変を横にいる皆に伝えようとしても、体全体がピクリとも動かない。1人でこの金縛りから抜け出そうともがいていると、再び頭の中で例の声がした。

『いい加減しつこいねえ……今はそれどころじゃないから命は取らないけど、このデュエルが終わるまでは眠っていてもらおうよ』

その言葉を最後に、ゆっくりと視界が暗転していく。すでにステージでは、十代とコブラがデュエルディスクを構えていた。

「……おい！ おいったらー！」

「んー……」

耳元で誰かの叫び声が聞こえ、そのうるささに目を覚ます。

「何さ……十代？」

いった後ではっとした。この頭上に広がる空、そしてこのシチュエーション……ひどく似ている、あの夢と。

「コブラは、一体？」

ふと思いついたことを聞いてみる。もしあの夢の通りだとすれば、

この後に続く返事は恐らく……。

「そうか、お前は気絶してて見てなかったもんな。たつた今俺がコブラとデュエルして、俺が勝ったと思ったら突然光る人間みたいなのが現れてよ。それを追っかけたコブラがいなくなっちゃったんだ。ヨハンたちが探しに行ってるけどな」

「っ！」

一言一句違わない、十代の言葉。まさか、本当にあの夢の内容を今現実でなぞりつつあるのだろうか。

そしてその予感は、すぐに確信に変わった。佐藤先生の名前、そしていくら呼びかけても聞こえない精霊たちの声。恐らくは、あの謎の声の主が何か仕掛けたのだろう。……そして、話は核心部分へと移行する。

「頼むから教えてくれよ、一体なんでお前が俺らより先にここに来てたんだ？」

「そ、それは……」

「……もういいぜ、清明。お前がどうしても言いたくないなら、きつと何か理由があるんだろ？ならもう言葉は必要ない、その代わり、俺とデュエルだ！デュエルをすれば、きつとわかりあえる。俺はそれを信じてるし、これからも信じたいたいんだ。だから、せめてお前の魂を俺に見せてくれ。それができるのがデュエル、そうだよな？」

あの夢のラスト、あのシーンを現実にしたくないならば、このデュエルを受けなければいい。そうすれば今までほとんどあの夢通りに動いてきた十代との会話も、まったく違った方向に行けるはずだ。

だけど、僕にはそれができなかった。まず第一に、僕自身のことがある。ここでこの誘いを断るとするのは、夢のことを知らない立場から見れば僕に何かやましいことがあると思われても文句は言えない。僕がコブラと通じていたのではないということを受得させるためには、十代の言うとおりデュエルを通じて魂をぶつけ合うしか方法はないだろう。それに、やっぱり十代の顔を見ていたら、断ることなんてできなかった。佐藤先生との間にいったい何があったのかは見当もつかないが、夢で見たよりも数倍ひどい顔だ。こんな状態で突き放す

なんて真似、友人として僕にはできそうにない。

「……わかった。いいよ十代、一丁デュエルと洒落込もう」

目標はひとつ、あのラストターンの盤面から外れた結果を作ること。こんなこと意識しながらデュエルしたことはこれまでないけれど、ぶつつけ本番でやってみるしかないだろう。デュエルディスクを構え、示し合わせたようにステージの両端に分かれて立つ。

「デュエル！」

夢で見たとおおり、先攻は十代だった。相変わらず、僕の手札に妨害札はない。さあ、もうどんな手で来るかはわかってるんだ。

「最初から飛ばしていくぜ！魔法カード、コンバート・コンタクト発動！このカードは俺のフィールドにモンスターが存在しない時、手札とデッキからそれぞれNを1体ずつ墓地へ送ることでカードを2枚ドロウする。手札のフレア・スカラベと、デッキのアクア・ドルフィン

を墓地へ送るぜ。そしてクレインクレインを召喚して、そのまま効果を使うぜ。このカードは召喚に成功した時、墓地に存在するレベル3モンスター1体を効果を無効にして特殊召喚できる！甦れ、アクア・ドルフィン！」

クレインクレイン 攻300

N・アクア・ドルフィン 守800

あの時と同じ手順で、2体のモンスターが場に揃う。とくれば、次の手は手札のあのカード、そして進化からのコンタクト融合だろう。はたせるかな、その予感はずぐに現実となった。

「魔法カード、ヒーロー・マスクを発動！このカードは発動時にデッキのHEROを墓地へ送ることで、場のモンスター1体をその同名カードとして扱うことができる。これで俺は、クレインクレインをネオスに変更するぜ。さあ、今回はもう1段上のコンタクト融合を見せてやる！魔法カード、ネオスベースリアンエクステントN E Xを発動！このカードは俺のNを進化させ、同名カードとしても扱うレベル4モンスターをエクストラデッキから特殊召喚する！さあ来い、マリン・ドルフィン！」

やはり、と言うべきか。アクア・ドルフィンの体つきが引き締まり、より精悍な体へと進化していく。

N・マリン・ドルフィン 攻900

「さらに魔法カード、スペーシア・ギフトを発動！このカードは俺のフィールドに表側表示で存在するNの一種類につき1枚のカードをドロウするぜ……あれ、意外だな。俺が今2枚ドロウしたことに何も言つてこないなんてよ」

「ああ、わかっているさ。マリン・ドルフィンはルール上アクア・ドルフィンとしての名前も持つカード、だから今十代の場にいるNは1体でも、その名前だけなら2種類が場に存在する計算になるって寸法でしよ？」

「なんだよ、気づいてたのか。ちえーっ、せつかく自慢できると思つたのによ。じゃあマリン・ドルフィンの効果……は、捨てたい手札もないからやめておくか。行くぜ、お待ちかねのコンタクト融合だ！フィールドのネオスとマリン・ドルフィンをデッキに戻し、コンタクト融合！さあ来い、E・HERO エレメンタルヒーロー マリン・ネオス！」

コンタクト融合のさらなる進化の形、マリン・ネオス。コンタクト融合体なのにエンドフェイズにデッキへ戻るデメリットが発生せず、E・HEROの名を掲げる融合ヒーローであるにもかかわらず正規の方法で特殊召喚さえしてしまえば蘇生も可能という異色の戦士も、やはり夢ではなかったわけだ。

E・HERO マリン・ネオス 攻2800

「マリン・ネオスの効果発動！1ターンに1度、相手プレイヤーの手札1枚をノーコストで破壊する！」

荒れ狂う水流がランダムに選びだしたカードはやはりあの時と同じ永續トラップ、グレイドル・パラサイト。ここまではまさに、何一つ変わることもなくターンが進んでしまった。ここからは僕のターン、なるべく怪しまれない範囲でいかにあの時との違いを出すかが問題だ。

確かに極端な話、ここでドロウすれば夢とは全く違った盤面に持っていくことも可能だろう。だけど、それだと意味がない。精神が不安定になりつつある十代のため、それにここで下手をうつと本格的に周りから疑われかねない僕のためにも、ここは全力で戦い、その上

でわかりあうことが必要なんだ。

「カードを2枚セット。これでターンエンドだ」

「僕のターン、ドロー！……シャクトパスを守備表示で召喚、さらにカードを3枚セットしてターンエンド！」

シャクトパス 守800

あの時は、僕はシャクトパスをセット状態で出した。それを表側にしたぐらいで何が変わることも思えないけれど、まずは軽いジャブのよなもの。こんな程度のことでも結果が変わってくれるのなら、それに越したことはない。

「ずいぶん消極的じゃないか」

「シャクトパスの能力は信用してるから、ね」

戦闘破壊したらそのモンスターに憑りつくシャクトパスが見えてくるのに、まさかマリン・ネオスで攻撃はしないだろうというわけだ。だが結論から言うと、この手は完全な失敗で終わった。少し思い出せばわかることだったのだが、この時十代が伏せていたカードは捨て身の宝札に異次元トンネル―ミラーゲートのカード、要するにこの2枚のカードを使うためにはマリン・ネオスの攻撃力が低くなるに越したことはなかったのだ。

こんなふうにして、互いにターンを重ねていく。もちろんこれ以外にも隙を見てはいくらかの違いを混ぜていったものの、そのどれもが不発に終わったまま時間とターンだけがずるずると過ぎていく。そしてついに、あの瞬間が来てしまった。

十代 LP1400 手札：0

モンスター：E・HERO エッジマン（攻）

E・HERO ネオス（攻）

E・HERO ワイルドマン（攻）

魔法・罫：なし

清明 LP1000 手札：1

モンスター：なし

魔法・罫：バブル・ブリンガー

グレイドル・インパクト

「クツ……」

この盤面で、ターンプレイヤーである僕の手札には今引いたドロカードの他にも先ほどサーチしたグレイドル・アリゲーターのカードがある。あの時は確か、グレイドル・インパクトのグレイ・レクイエムこと破壊効果を利用してエッジマンを始末しつつネオスのコントロールを奪ったわけだ。だとすれば、ここでやるべき手は1つしかない。それに、ネオスのコントロールを奪ってこの先の融合を妨害するよりもそれよりもう1段高い攻撃力を持つエッジマンの、今この場で確実に与えられる100ポイントのダメージと固有能力である貫通を選ぶのも間違った選択ではないだろう。

このターンを境に、今度こそあの夢をただの悪夢で終わらせてやる！

「グレイドル・アリゲーターを召喚して永続魔法、グレイドル・インパクトの効果を発動！1ターンに1度このカード以外のグレイドル1枚と相手の表側カード1枚を選択して、その2枚を破壊する！受け取りな、グレイ・レクイエム！」

墜落したUFOから放たれた怪光線が、宇宙のヒーローであるはずのネオスの体を貫く。そして同じ光線を浴びて溶け崩れたアリゲーターが、全身金色の鎧に身を包んだ大型戦士に足元から寄生していた。

「魔法カードの効果で破壊されたアリゲーターは、相手モンスター1体に寄生して操ることが可能！悪いけど、エッジマンのコントロールはこっちで貰っとくよ！そしてエッジマンでワイルドマンに攻撃、パワー・エッジ・アタック！」

E・HERO エッジマン 攻2600↓E・HERO ワイルドマン 攻1500 (破壊)

十代 LP1400↓300

「ぐわあああっー！」

「どうだ……!?!」

あの時十代は、ネオスを奪われたことに対して『許せない』と言っ



た。だとすればその逆、エッジマンの方を奪えば、あるいは。祈るような気持ちで、吹っ飛ばされた十代が起き上がるのをじっと待つ。1秒が1分にも感じるほど長い時間の中で十代がゆっくりと立ち上がり、その顔を上げ、そして……………。

「ふう〜……………」

「ん、どうしたんだ？」

安堵の息を吐く僕に対し、十代が怪訝な顔をする。どうやら、僕はこの賭けに無事勝ったらしい。しかし安心してばかりはいられない、この先のデュエルは全く先が読めないのだ。

「いや、なんでもないよ。カードを1枚伏せて、ターンエンド」

「?まあいいさ、俺のターン! よっしゃあ、来たぜ! 俺の手札がこのカード1枚の時、バブルマンは手札から特殊召喚できる! そしてこのカードがフィールドに出た時自分の手札、フィールドに他のカードがないならば、さらにデッキからカードを2枚ドロウする!」

「ここでバブルマンを引いたっての!?! たく、やっぱり十代は大したもんだわ」

E・HERO バブルマン 攻800

この局面で丁度輝くカードを引きこむだなんて、本当に十代は凄い。圧倒的な運と実力と土壇場の勝負強さを持った、文字通りヒーローのようなデュエリストだ。…………羨ましい、なあ。

「信じればデッキは答えてくれるのさ。さらに俺は魔法カード、ミラクル・コンタクトを発動! このカードは俺の墓地に眠るモンスターを素材としてデッキに戻し、コンタクト融合体を特殊召喚する! 俺は墓地のネオスとフレア・スカラベをデッキに戻し、コンタクト融合! 来い、フレア・ネオス!」

燃え盛る炎の昆虫の力と、ネオスの持つ闇の力が混じり合う。甲虫を思わせる形状の羽根が背中から生え、全身の色もまさに昆虫のような黒とオレンジを基調としたカラーリングへと変化。頭部からは角のようにすらりと伸びた2本の触角が生え、そのせいかどこことなくワガタめいた雰囲気も纏っている。

「フレア・ネオスの攻撃力は、互いの魔法、罠1枚につき400ポイン

トアップするぜ。俺の場には0枚だが、お前の場にはグレイドル・アリゲーターも合わせて5枚のカードがあるな」

E・HERO フレア・ネオス 攻2500↓4500

「グレイドルは装備カードになる時、魔法・罠ゾーンに置かれる……そんなところまで逆手に取ってくるとはね」

「これがネオスの力だ！バトル、エッジマンにフレア・ネオスで攻撃！バン・ツー・アッシュュ！」

全身を炎に包んだフレア・ネオスの突進が、エッジマンを狙い撃つ。両腕でその猛撃を受け止めようとするエッジマンだが、その熱量の前にはとても歯が立たない。だけど、僕だってそう簡単にやられるわけがないね。

「攻撃宣言時にトラップ発動、聖なる鎧—ミラーメール！このカードの効果でエッジマンの攻撃力は、攻撃してきたモンスターの攻撃力と同じになる！迎え撃て、パワー・エッジ・アタック！」

エッジマンの両腕の刃が黄金色に輝きを放ち、炎の前に生気の薄れつつあった瞳に再び輝きが蘇る。なおも燃え盛るフレア・ネオスの突撃を受けながらも両腕を高く上げ、その刃をがら空きのフレア・ネオスの背中に叩き込んだ。

E・HERO フレア・ネオス 攻4500（破壊）

↓E・HERO エッジマン 攻2600↓4500（破壊）

「よし、ここで相打ちにできたから……！」

これで、十代のフィールドに残るはバブルマンのみ。だがバブルマンの攻撃力は800で、残り1000の僕のライフを削りきるにはほんの少し足りない。これで次のターン、僕がモンスターをドロウすることができれば……。

「いいや、このターンで決めるぜ！バブルマンの攻撃、バブル・シユート！そしてこの瞬間、墓地からスキル・サクセサーの効果発動！このカードを除外することで、モンスター1体の攻撃力を800ポイントアップさせる！」

「だ、だけどバブル・ブリンガーの効果でレベル4のバブルマンはダイレクトアタックが……！」

「もちろんそれも対策済みだぜ！速攻魔法、サイクロン！」

E・HERO バブルマン 攻800↓1600↓清明（直接攻撃）

清明 LP1000↓0

「……はははっ、また負けちゃったか。さつきも言ったけどさ、やつぱりたいしたもんだよ十代は」

十代が何を言おうとしたのかはわからない。だけど何かを言おうとして口を開いた、その瞬間。

世界は、光に包まれた。

「な、何だ!？」

「まだなんかあるっての!？」

どれほど長い間、その光は周りを包んでいたんだろうか。とにかく、いつの間にか気を失っていた僕が目を覚ました時……アカデミアは、どこまで続くとも知れない砂漠に囲まれていた。

## 砂漠の異世界編

### ターン83 鉄砲水と砂上の異形

「う……」

目が覚めた時、真つ先に感じたのは口の中いっぱい広がる砂の味だった。

「うえ……ぺっ、ぺっ」

何度か唾を吐き、どうにかマシンな気分になったところでおかしな点に気が付いた。僕が十代とデュエルしたのはステージ、というかヘリポートの屋上だったはずだ。当然かなりの高度があり、足元一面に砂が広がっているわけがない。地面に寝そべっていた姿勢から起き上がってみると、そこには目を疑うような光景が広がっていた。

『砂漠。それに3つの太陽、そして周りの地形ごとえぐって持ってきて配置したようなデュエルアカデミア……マスター、どうやらこれは、なかなか面倒事になってきたな』

「チャクチャルさん……」

チャクチャルさんにも同じものが見えているということとは、どうやら僕の目がおかしくなったわけではないようだ。視界の果てまで広がる砂漠と、目の前にぽつんと置かれたアカデミアの校舎。微妙に薄暗く感じる空には、3つの太陽が若干歪んだ三角形に並んでいる。

……なんかもう、ね。この学校に来てからやれセブンスターだそれ光の結社だと奇人変人びっくりシヨーみたいな相手ばかり連続で出会ってきてそろそろどんな奴が来たところで驚かない耐性も出来てきたかな、なんて思ってた矢先にこれだ。まさかの環境変動とは、いくらなんでも予想外すぎる。

「一応聞くけど、ここどこかって」

『わかるわけなからう。ただ、この感覚は人間界よりむしろ……』

チャクチャルさんの考察は、残念ながら最後まで聞くことができなかった。何気なくアカデミアに向けて一歩を踏み出したその瞬間、足元の砂が突然崩れたのだ。とつさに地面を掴もうとするも砂地では

体を支えることなどでできず、そのまま深い穴に真つ逆さまに落ちていく。

「……つとおー！」

着地。チラリと上を見てみると、別にそこまで深い所に落ちたわけではなさそうだ。次に辺りを見回すと、意外にも砂ではなくごつごつした岩壁に囲まれている。どうやら、ちよつとした洞窟のようになっているところ落ちてきたらしい。

『マスター、生きてるなー』

「2年前から死んでるよん。見てるだけじゃなくて助けてくれてもよかったのに」

『この程度で怪我するほどやわなわけがないからな。それよりほら、お客さんだ』

「え？」

チャクチャルさんが足元の一点を指し示すと、まるでそれを待っていたかのようにその部分の砂が盛り上がる。地中から文字通り生えてきたのは、1体のモンスターだった。胴体部分は背中の棘や異様に長く大きな腕といった細かい部分を除けばまだ人型に見えるが、決定的に人外なのはその頭部だ。ホースのような円柱形の首の先端には頭がなく、首の端からはいきなり歯が生えている。どうやって周りを見ているのか僕のいる位置を正確に睨みつけ、ゆっくりとした足取りで音もなく近づいてくる。

「こ、これ……」

『サンドモス。岩石族の下級モンスターだが……やはり、ここはモンスターが実体化できる世界のようなだな』

『どどどどうしよう、どうやって逃げればいい!?!』

『逃げたところで地の利はあちらにある、ならばこの場で迎撃だ。幸い、この個体の他に仲間はいないらしいな。デュエルディスクを構築ろ、マスター!』

「え、ええ……?」

とりあえずチャクチャルさんに言われたとおりにデュエルディスクを構築はしたけれど、本当にデュエルが通用するのだろうか。だっ

てこのモンスター、デュエルディスクとかデツキとか持つてる風には全然見えないし。そう思いながらこちらに近寄ってくるそれを見守っていると、僕との間に3メートルほど距離を開けてぎこちなく片腕を伸ばす。足元の砂が巻き上がりその腕に絡みつき、ある部分は広がりある部分は固まり、やがて砂製のデュエルディスクらしきものがその腕に装着された。

「できるの!?!」

『アドバイスは1つだけ。……心配はしていないが絶対に負けるなよ、マスター』

「え?」

自分から焚きつけておいたくせに、急にシリアスになるチャクチャルさん。だがどういう意味か、と聞き返す暇はなかった。デュエリストが2人そろってしまった以上、もはや残された道はデュエルしかないのだ。

「そうは言っても、本当にデュエルできるのかな……?ま、精霊相手つてのもずいぶん久しぶりだし、それじゃあデュエルと洒落込もうか、サンドモス?」

フシューフシューと不気味な呼吸音がかすかに聞こえてくる程度で、返事を返そうとするそぶりすら見られない。だけどデュエルディスクを構えたつきり襲い掛かってこないところを見ると、まるつきりこちらの話を理解していないというわけではなさそうだ。

「調子狂うなあ……デュエル!」

あの砂製デュエルディスクがどういう仕組みなのかはわからないが、デュエルする上で問題はなさそうだ。僕が先攻であることが示され、手札をざっと見渡す。

ま、初ターンだしここは様子見かな。

「ツーンヘッド・シャークを準備表示!」

ツーンヘッド・シャーク 守1600

いつもお世話になりっぱなしの2つの口を持つ青い鮫モンスター……だけど実体化しているからか、こころなしかいつもより色合いもくつきりして立体感も増して見える気がする。

「さらにカードをセットしてターンエンド」

「あ……う……」

やはり人語を喋るだけの知能はないのか、意味の分からない音を口から出しながらカードをそのデュエルディスクに置くサンドモス。すると足元の砂が盛り上がり、デュエルディスクを持つサンドモスの前に2体目のサンドモスが召喚された。

サンドモス 攻1000

「あ……」

「シールドクラッシュ……ちっ」

フィールドの守備表示モンスター1体を破壊する魔法カード、シールドクラッシュ。そこから放たれた光はツーンヘッド・シャークを一撃で粉碎し、がら空きになった僕めがけサンドモスの拳が無造作に振り下ろされる。

サンドモス 攻1000↓清明（直接攻撃）

清明 LP4000↓3000

「ぐわっ……!?!」

うっかりいつものソリッドビジョンの調子でろくに受け身も取らず受け止めてしまい、頭が割れそうな衝撃を受ける。攻撃を終えプレイヤーのところに戻っていくサンドモスと、その後ろでリバーカードをセットするプレイヤーのサンドモスを尻目によるめきかかるもどうにか踏ん張り、殴られた箇所をそつと撫でる。まだずきずきと痛むとはいえ、骨や脳に異常はない、はずだ。

とりあえずほつと胸をなでおろした次の瞬間、今更ながらあることに気づいて背中に冷水をかけられた気分になった。……今僕は、モンスター級の攻撃で物理的にダメージを受けた。今はただか1000程度ダメージで僕のライフにも余裕があるからよかったものの、もしこのままライフが0になりでもしたら？要するにこれは、闇のゲームそのものだ。負けたところで魂がどうこうなることはないだろうけど、命の保証は何一つない。再び脳内をよぎる、チャクチャルさんが最後にアドバイスと称して掛けていった不穏な言葉。

「チャクチャルさん、もしかして最初からわかってたでしょ?……後

で話聞かせてもらおうよ」

『マスターならどうせ勝つだろう。だから交戦を勧めたんだ』

「つたく、そういうことじゃなくってさあ」

仮にも命がかかっているんなら、それはもう信用とかそういうレベルじゃなくて一言断りを入れて欲しい。確かにこの命は2年前のあの日にチャクチャルさんから貰ったようなものだし、それについては今でも感謝してる。けどだからって、こんな人の命を粗末に扱うような真似はやめて欲しい。そう思うのは、僕の贅沢なんだろうか。やはり人間じゃないチャクチャルさんと僕の間には、何かどうやったらって相容れない価値観の違いがあるんだろうか。

……お互い口には出さない。だけど、感じていることは同じだろう。この間も感じた僕たちの間の、表面的には見えないような溝。個人の性格だとかいうレベルでは済まない、もっと根本的な種族としての壁。それがまた少し、広がった感じがした。

清明 LP3000 手札：3

モンスター：なし

魔法・罠：1（伏せ）

サンドモス LP4000 手札：2

モンスター：サンドモス（攻）

魔法・罠：2（伏せ）

「……僕のターン。だったらこのカードで勝負、グレイドル・イーグル！」

砂地に広がる銀色の水たまりが一点に寄り集まり、砂の色よりなお黄色い鳥の姿を模す。

グレイドル・イーグル 攻1500

「ここは攻め込む！グレイドル・イーグル、やっちゃって！」

『気を抜くな、マスター。こちらが命がけということとは、向こうもまた命がかかっていることを忘れるな！そんな単調な攻め手では……』

「あ……」

チャクチャルさんの遅すぎた警告をあざ笑うかのように、サンドモスが伏せカードを表にする。速攻魔法、月の書……モンスター1体を



裏側守備表示にするそのカードの効果を受けてセットされたサンドモスに、イーグルは無謀な突撃を仕掛けることしかできない。

だがその爪がサンドモスの体に弾かれるより前に、地中から伸びた鎖がサンドモスの腹を突き破ってイーグルを、そして僕の伏せたカードを貫いた。

「さらに爆導索のダブルコンボまで……」

爆導索。セットされた縦列全てにカードが存在する、つまり僕のモンスターと伏せカード、そして相手のモンスターと爆導索自身が一列になっているときのみ発動可能で、その列のカード全てを破壊するというトラップの中でも特に異端の効果を持つカードだ。僕はイーグルを召喚した時、特に何も考えずに伏せカードと並べるように出して、その点をうまいこと突かれた形になったわけだ。やがて貫かれたイーグルの瞳から光が消え、力なく溶け崩れて地面に落ちて染みとなる。サンドモスも砂となって地中に消えていった、かと思っただらんと次の瞬間、何事もなかったかのように平然と起き上がる。

『サンドモスは裏側表示で効果破壊された際、攻守を反転して特殊召喚する効果がある』

サンドモス 攻2000

「クッ……それじゃこっただけやられ損ってこと!?悪かったね、イーグル。カードをセットして、ターンエンド」

どうもおかしい。闇のゲームなら、これまで僕も何度か経験がある。その時は今日の前にいるサンドモスよりもはるかに格上の相手とも戦ってこれたのに、なんで今になってこんなに苦戦しているんだろうか。小さな疑問が湧き上がるが、それをじっくり考える余裕をくれるつもりは残念ながらなさそうだ。

「う……あ……」

僕のフィールドが空いたここを好機とみたのか、勢いよく次なるカードが置かれる。地属性専用リクルーター、巨大ネズミだ。

巨大ネズミ 攻1400

「あ……」

「そう簡単に通しはしない！トラップ発動、波紋のバリアーウェーブ・

フォース！この効果によりダイレクトアタック宣言時に相手フィールドで攻撃表示のモンスターは、全てデッキにバウンスされる！」  
突っ込んできた巨大ネズミが、サンドモスが、半球状に僕を守る水の壁に阻まれ弾かれる。これでとにかく、このターンの攻撃だけは防げた……。だけど虎の子のウェーブ・フォースを使ってしまった以上、これ以上の防御札はまだデッキの中に眠ったままだ。

清明 LP3000 手札：2

モンスター：なし

魔法・罠：なし

サンドモス LP4000 手札：2

モンスター：なし

魔法・罠：なし

「僕のターン！シャクトパスを召喚して、ダイレクトアタック！さっきの借りは返しておくよ！」

無数のタコ足を伸ばし、動きの遅いサンドモスに容赦のない連打を加えていくシャクトパス。

シャクトパス 攻1600↓サンドモス（直接攻撃）

サンドモス LP4000↓2400

「これで少しは……」

それ以上の言葉を続けることはできなかった。サンドモスの目のない顔を見た瞬間、その気迫に呑まれてしまったのだ。

その時になってようやく先ほどの疑問の答え、なぜはるかに実力で劣るはずのサンドモスを相手にこれまで戦ってきた相手と同じくらい苦戦しているのかを悟った。僕が今まで経験した闇のゲームは、その相手もダークネス吹雪さんにヴァンパイア・カミューラ、幻魔皇ラビエルや邪神アバターといった文字通り化け物級の力を持つ大物相手がほとんどだった。だけどそういう相手は本人が自分の実力に絶対の自信とプライドを持っていたことから、最後の最後までこっちはそれにがむしやらに食らいついていくだけでよかった。

……。だけど、この相手はそれとは全くパターンが違う。自らの限界を知り、それを誰よりも理解したうえでなお命を張ってデュエルを挑

んできています。所詮彼らにとって闇のデュエルとは、いつ終わるとも  
しれない悠久の命の中の暇つぶしのひとつでしかない。だがこの世  
界で生きるだけの何の変哲もないモンスターであるサンドモスに  
とっては、デュエルに使う一瞬一瞬が自らのいつ終わってもおかしく  
ないちっぽけな命を全力で燃やす行為なのだ。

要するに、これまでの『格上』とは意気込みのベクトルがまるで違  
う。勝ち抜いて生きのびたいというこの純粹で本能的な欲望がこの  
氣迫を、『格下』にしか出せないこの強さを生み出しているのだろう。  
これ以上はないぐらいに噛み砕くと、戦う前から覚悟で負けていた  
のだ。それは苦戦もする、というかこのままいったら本気で負ける。  
こちらも相手を潰す氣でかからないと、同じ土俵に立つことすらでき  
やしない。

「う……………う……………」

モンスターを伏せ、さらにカードを2枚と、手札に残ったカード全  
てを場に出すサンドモス。その様子を眺めながら、心のどこかでどう  
しようもないやりきれなさを感じていた。

……本当に、それでいいんだろうか。デュエルモンスターズを命を  
奪い合う手段なんかとして割り切って戦うことは、正しい考えなんだ  
ろうか。デュエルって、楽しい物じゃなかったのかな。少なくとも僕  
にとって、命の奪い合いが楽しいものだとは思えない。

清明 LP3000 手札：2

モンスター：シャクトパス（攻）

魔法・罫：なし

サンドモス LP2400 手札：0

モンスター：???（セット）

魔法・罫：2（伏せ）

「……………僕のターン、ドロー」

わからない。この世界では、確かにそれが常識なのかもしれない。  
僕らの世界の常識を持ち出すことの方が、むしろ間違ったことなのか  
もしれない。だけど中途半端に迷ったままデュエルを続けていては、  
勝てるものも勝てなくなる。

それはわかってる、んだけど。

「シャクトパスをリリースして、アドバンス召喚！出る、ジョーズマン！」

ジョーズマン 攻2600

「バトル、ジョーズマンでセットモンスターに攻撃！」

体中に飢えた口を開く鯨の戦士が、その右腕を振りぬく。伏せてあったモンスター、2体目のサンドモスがその体の4割ほどを一撃で食いちぎられ、元の砂になって崩れていった。

ジョーズマン 攻2600↓??? 守2000（破壊）

「あ……！」

「ブローケン・ブロッカー……！」

攻撃力よりも守備力の高い守備表示モンスターが戦闘破壊された時、その同名モンスターをデッキから2体まで特殊召喚するカード、ブローケン・ブロッカー。今破壊されたサンドモスは2体目、ただウエーブ・フォースのデッキバウンス能力がかえって仇になって、今の奴のデッキにはサンドモスのカードが2枚入っているためにその能力を最大限に発揮させてしまう。そして今日だけでも何度も見ただサンドモスが、またしても大地を盛り上げて砂の中から現れた。

サンドモス 守2000

サンドモス 守2000

「しつっこい……！カードをセットしてターンエンド！」

「あああ……！」

引いたカードをろくに見ることもなく、すぐさまセットするサンドモス。特に攻め込んでこないところを見ると、今は向こうもギリ貧なのだろう。だけど、いまだに迷いが抜け切れない僕と違ってサンドモスには決死の覚悟がある。この膠着状態も、長くは続かない。

清明 LP3000 手札：1

モンスター：ジョーズマン（攻）

魔法・罫：1（伏せ）

サンドモス LP2400 手札：0

モンスター：サンドモス（守）

サンドモス（守）

魔法・罨：2（伏せ）

「僕のターン！オイスターマイスターを召喚！」

オイスターマイスター 攻1600

颯爽と飛び上がったって着地する牡蠣の戦士。だがその両足が地面につくつかないかというところで、いきなりサンドモスが動いた。ああそうだ、あのカードには僕も何度もお世話になってきたからよく知っている。

「激流葬！」

『いや、まだまだ！』

チャクチャクさんの声に反応するかのようになり、もう1枚伏せてあったカードがチェーンして発動される。あのカードは速攻魔法、皆既日蝕の書？ふつとあたりの風景に影が差したように暗くなり、その闇に呑まれサンドモスが、ジョーズマンが、そしてオイスターマイスターが、徐々に消えていく。これでフィールドに存在するすべてのモンスターは、このターンの終わりまで裏側守備表示になったわけだ。

「う……あ……い！」

……そして、裏側守備表示になった全てのモンスターが激流葬によって無に変える。いや、違う。皆既日蝕の書により裏側守備表示となった効果破壊されたサンドモス2体は、またしても攻守を反転した状態で蘇生される。

サンドモス 攻2000

サンドモス 攻2000

「まだまだ！オイスターマイスターは戦闘以外の方法で場を離れた時、フィールドにオイスタートークン1体を特殊召喚できるっ！」

オイスタートークン 守0

「あ……」

構うものかと言わんばかりに腕を振り上げ、2体のサンドモスが攻撃を仕掛ける。そのうち1体が守備力0のオイスタートークンをとともたやすく踏み潰し、もう1体の剛腕がデュエル序盤とは比べ物にならないほどの速さと重さを込めて喰る。

サンドモス 攻2000↓オイスタートークン 守0 (破壊)

サンドモス 攻2000↓清明 (直接攻撃)

清明 LP3000↓1000

「……ッ!!」

先ほどの経験からガードだけは取ったものの、それでもなお強烈な一撃に声も出ない。その場でこらえきれず後ろに吹っ飛ばされるわずかな間にふと頭をよぎる、僕がダークシングナーになった直接の原因である暴走車にはねられた時の衝撃。下手をすると、あれよりも強かったかもしれない。この無駄に強靱な肉体がなければ、骨やら内蔵やらがまずいことになっていてもおかしくなかっただろう。

「い、痛たた……」

一気に勝負のバランスを向こうに傾けた、辛うじてライフを残すので精いっぱいの会心の一撃。だがその成功に驕ることなく、かといってまんまとしてやられた僕を嘲笑うでもなく、油断せずにモンスターを挟んでじつとこちらをうかがうサンドモス。

「く……」

その目のない顔と見つめ合う形になり、僕の心の中で1つの決心がようやくついた。少なくともこの世界では、デュエルは命をかけて行うものだ。そしてそれが分かったうえで、目の前のサンドモスは一歩も引くことなく戦っている。他の誰が何と言おうと、今の攻防で僕の腹は決まった。いいだろう、そこまで真剣勝負を挑んでくるのなら、もうこれ以上ぐだぐだ迷ったりしない。殺らなければこっちが殺られるというのであればサンドモス、僕はお前のライフを、そしてその先にある命そのものを一切躊躇わずに全力で狩りつくす。それがデュエリストとしての、せめてもの僕の礼儀だ!

清明 LP1000 手札：1

モンスター：なし

魔法・罫：1 (伏せ)

サンドモス LP2400 手札：0

モンスター：サンドモス (守)

サンドモス (守)

魔法・罨：なし

「僕の！ターン！ドローっ！」

今引いたカード、そして手札のカード、最後に伏せてあるカード。この3枚のコンビネーションが頭の中でスパークし、たった1つだけ僕に残された逆転の一手を導き出す。

「魔法カード、死者蘇生を発動！甦れ、ツーヘッド・シャーク！」

1ターン目に召喚したものの破壊された双頭の鯨が、再びフィールドに浮上する。

ツーヘッド・シャーク 攻1200

「そして、お次はマジックコンボ！アクア・ジェットを発動して、ツーヘッドの攻撃力を1000ポイントアップさせる！」

両脇部分に小型のジェット装置が取り付けられてツーヘッド・シャークはより強く、そしてより速く強化される。これで、サンドモスの攻撃力を上回った。

「バトルだ！ツーヘッド・シャークの2回攻撃能力で、2体のサンドモスに攻撃！」

ツーヘッド・シャーク 攻1200↓2200↓サンドモス 攻2

000（破壊）

サンドモス LP2400↓2200

ツーヘッド・シャーク 攻2200↓サンドモス 攻2000（破壊）

サンドモス LP2200↓2000

「あ……！」

露払いはできた。だがすでに2回攻撃の権利を使い切ったツーヘッド・シャークにこれ以上の攻撃はできず、これ以上ライフを減らされることもない……サンドモスは、今そんな風に考えているだろうか。だとしたら、その考えはあまりにも甘い。このターンで仕留める、と言ったら絶対に仕留めるのだ。

「リバースカードオープン、メタモル・クレイ・フォートレス！このカードは発動後にモンスターとして特殊召喚され、さらに自分フィールドのレベル4以上のモンスター1体をこの一夜城の主とすること

でその攻撃力を加算する！僕が選ぶのは当然、ツーヘッド・シャーク！」

大地が揺れ動き、砂地を突き破って巨大な岩の手が伸びる。そしてそれに続いてその巨人の首のない上半身が映えてくる。いや、首がない巨人といつては誤解がある。正確には肩から上が城壁のようになっていて、そこに乗れば下を見下ろすことができるゴーレムだ。地下からゆっくりとせり上がるその上に飛び乗ると、上半身が完全に地中から出るころにはちようど今までいた穴から地表に出るぐらいの高さになっていた。岩の巨人の上から久しぶりの地上に飛び降り、最後にちらりとほるか下にいるサンドモスを見下ろす。無論表情なんてまるで分らないが、デュエリストとしての魂だけは通じ合えた気がした。

メタモル・クレイ・フォートレス 攻1000↓2200 守1000↓2200

「……これでラストだ！メタモル・クレイ・フォートレスでダイレクトアタック！」

メタモル・クレイ・フォートレス 攻2200↓サンドモス（直接攻撃）

サンドモス LP2000↓0

「ハア……」

『だから言っただろう、どうせ勝つと。それに、いい目になったぞマスター。戦士の目だ』

あまりと言えばあまりの言い草につきカツとなり、何か言い返そうと思って口を開く。だけど言葉を発するより先に、腕のデスベルトがまたしても光り始めた。

「しまった、これまだ生きて……！」

体重が数倍に跳ね上がったかに思えるほどの倦怠感が全身を包み込み、どこかへ飛んで行こうとする意識を辛うじて繋ぎとめる。どうにか持ちこたえて重い体を引きずり、最初に思っていたより遠くに



あつたデュエルアカデミアに到着したころにはすでに3つある太陽はどれも地平線の彼方に沈み切っていた。

……精霊を召喚すれば、確かにもっと早くアカデミアに着くことだってできただろう。だけど僕にはひとつだけ、どうしても気にかかることがあつた。今日のデュエルの最後のターン、サンドモスにとどめを刺したあの瞬間。後悔するでもなく胸が痛むでもなく、何か嫌な、暗い愉悦の感情が心のどこかにあつたことを、歩いている最中ずっと思い返していたのだ。

もしかしたら、それが僕の本性だったりするのだろうか。敵の命を奪うようなデュエルを、口では綺麗事を言いながら心の奥底では楽しんでる。そんな化け物を、僕は自分の中に飼っているのだろうか。違う、と言い切るだけの自信は、ずっと歩いている間も最後まで出てこなかった。

## ターン84 鉄砲水と天部の舞姫

「……………えっと」

「……………」

「あ、はい、なんでもないです……………」

時は……………えっと、いつなんだろう今。ともかく3つの太陽がすべて地平線の向こうに沈んだから、ぎっくり夜だということぐらいしかわからない。場所はある教室、登場人物は僕と十代、翔、剣山、明日香にジムとヨハン……………ぎっくり言えば、夢を除いた旧SAL研究所突入メンバーだ。十代が不安そうに成り行きを見ている中、他の面々は多かれ少なかれ非難を含んだ目つきでこちらをじつと見ている。とりわけ、明日香からの視線が強い。どうにかアカデミア校舎にたどり着いた僕をいきなりこの教室に引っ張ってきたのも彼女で、それからもほぼ一言も喋っていない辺りに凄まじい怒りが見て取れる。

どんどん重くなってくる空気の重さに耐えかねたかのように、口火を切ったのは十代だった。

「な、なあ清明。俺はさっきお前とデュエルして、お前には何かお前なりに事情があつたんだって信じてるぜ。だけど、1人で悩んでるなんて水臭いじゃないか。一体何があつたのか、俺たちにも説明してくれよ」

ここまで来た以上もうごまかしたり逃げたりすることは逆効果にしかならないだろうし、何よりそんなことではここに居る皆も許してくれないだろう。それに、さっきも皆には後で説明するって言っちゃったし。

「どこから話せばいいのかな。えっと……………」

全てのきつかけになつたよくわからない予知夢のことから話し始める間、誰も口を挟むことはなかった。夢を見たのがきつかけだった、なんて我ながらメルヘンな話だとは思うけれど、僕らもこの2年間で世界にはいろいろ不思議なことがあることをいやというほど思い知らされたからだろうか。

「そうか、だからあのデュエルの時、少し様子が変わったのか」

「うん……。一言一句違わずに同じ盤面に持ってかれたからね、こつちも気が気じゃなかったよ」

そして、その後コブラとデュエルをしている最中にふと気が付いてしまった僕の心の闇……。ここ最近、光の結社との戦いがひと段落してからの負け続きで少し、また少しと僕本人ですら気づかないうちにひっそりと広がっていった恐怖。

「でも結局、僕は怖かったんだ」

負けることそのものではなく、その結果どんどん強くなっていく他の皆に置いて行かれるのではないかという不安。

「だってそうでしょ？皆はこの2年間で、入学した時とは比べ物にならないくらい強くなった。だってのに僕はどうだつての？新しい力を手に入れたつて、結局満足に使いこなすこともできない。一瞬スランプも抜けられた気もしてただけど、でもやっぱり現実を見せつけられてさ」

我ながら、うじうじうじと女々しいなあとは思う。だけどそれは一度口に出し始めると、もう止まらなかつた。喉の奥につかえていたような恐怖を吐き出すことにそれがまた新たな言葉を生み、何とも情けないことに全身を震えさせながらも言葉を繋ぐ。

「本当に……。もう、駄目だね……。ごめん、皆」

もはや立つていられなくなり、ずるずるとその場にへたり込んでいく。完全に膝が折れる寸前、僕の両肩をすらりと伸びた腕が強引に支えた。

「っ……。いい加減にきなさいー」

「明日香……」

これまで一言も僕とは口を利かなかつた明日香が、ついに感情を爆発させた。半ば引つ張り上げるようにして僕を再び立ち上がらせると、カツカツと足音を立てて教壇の方へ歩いていく。ぽかーんとそれを見ていると、キツと振り返って刺すような視線で睨みつけてきた。「来なさい、清明。そこまで言うなら私にも考えがあるわ、デュエルでその根性叩き直してあげる」

「え!？」

「お、おい明日香、少し落ち着けて……」

「十代は黙って！……さあ清明、こっちに来なさい？」

まっすぐな性格の明日香にとって、今の僕はそれほど見てられないのだろう。それはよくわかる。仮に今の僕を去年の今頃の僕が見たとしても、ここまで怒るかどうかはともかくイライラしてしようがないだろうし。

「駄目だよ明日香、この世界でもデスベルトの仕組みはまだ生きてる。ここでデュエルなんて始めたら、後でどんなことになるか……！」

「もちろん知っているわよ。でも、関係ないわ。貴方がいつまでもそんな調子だから……いえ、今は言わないでおくわ。ただ、本当に申し訳ないと思う気持ちがあるなら、ここで勝負から逃げるような真似はできないはずよ」

なんととはなしに含みのある言い方が多少引っかけかり、ふと思い立ってさっと後ろを向く。綺麗に全員目を逸らしたところを見ると、どうやらこの皆も知っていることらしい。その話も気になるけど、その次のセリフの方が気にかかった。

「勝負から、逃げる……」

「ええ。それでもまだくだらない言い訳をして後ろを向くなら、私もこれ以上それを止めはしないわ。その代わり、ここにいる誰も2度とあなたに手を差し出すような真似はしないと思いなさい」

数秒ほど下を向き、明日香からの最後通牒をじっくりと噛みしめる。言い方には棘があるけれど、これもつまりは明日香なりの優しさなんだろう……多分。やがて決心が付き、顔を上げて教壇からこちらを見据える彼女の顔を見上げる。

「明日香はきつついなあ……でも、ありがと。それじゃあひとつ、デュエルと洒落込もうか……！」

同じく教壇に立ち、その端と端にたがいに陣取る。デュエルディスプレイにデッキをセットし、オートシャッフル機能を作動させる。ライフポイントの表示がカシヤカシヤと増えていき、やがて4000で止まる。その様子を見つめながらも、頭の中は既にこれから始まるデュエルのことが大部分を占めていた。僕はこのデュエルを経て、何かを掴

むことができるだろうか。いや、できるかではない。明日香がデスデュエルの危険を押し僕と真剣に向かい合ってくれる以上、何も得るものなく終わらせるなんてことはそれこそ許されることではない。

「デュエル！」

掛け声をかけ、初期手札に目をやる。先攻は明日香、さあ、どう出てくる？これまで僕が見てきた明日香のデッキは融合モンスター、サイバー・ブレイダー主体の物だった。そして光の結社時代の明日香は、万丈目の話によると効果モンスターの白夜の女王を軸としたものだったらしい。今の明日香は、どちらの戦術を取ってくるだろうか。

「私のターン！カードを2枚セットして、さらにサイバー・プチ・エンジェルを召喚」

「へっ？」

思わず間抜けな声が出てしまったが、対する明日香はいたって真剣だ。フィールドに現れたのは、これまで明日香が好んで使っていた人型モンスターには似ても似つかぬ可愛いピンク色の球体に小さな手足と翼、そして天使の輪が付いたようなモンスター。ただ目を引くのは、その全てが金属製のロボットである点だ。

サイバー・プチ・エンジェル 攻300

「サイバー・プチ・エンジェルは場に現れた時、デッキからサイバー・エンジェル1体か機械天使の儀式をサーチすることができる。私は機械天使の儀式を手札に加え、ターンエンドするわ」

デッキから取り出して見せた機械天使の儀式とやらには、さすがにこの距離だとテキストまでは見えないものその名の通り儀式魔法のアイコンが。無難にサーチだけして終わったようだけど、そんな悠長なことしてる暇はあるのかね。

「僕のターン！ハンマー・シャークを召喚して、効果発動！自身のレベルを1下げて、手札からレベル3以下の水属性モンスターを特殊召喚する！来い、イーグル！」

ハンマー・シャーク 攻1700 ☆4↓3

グレイドル・イーグル 攻1500

「お決まりのパターンかしら？」

「まだまだ！水族モンスターのイーグルの特殊召喚に成功したことで、さらに手札からシャーク・サッカーの効果を発動！このカードを追加で特殊召喚する！」

シャーク・サッカー 攻200

「攻撃表示……？」

明日香の疑問も無理はない。この3体で攻撃しても総攻撃力は3400止まり、返しのターンでサッカーを狙われれば大ダメージは必須だ。だけどそれは、あくまでこのカードが手札になかった時の場合。

「永続魔法、アクアリウム・セット水舞台装置を発動！これで水属性モンスターの攻守は300ポイントアップする」

色とりどりの木々に囲まれた御殿がそびえ立ち、水に包まれた風景の中で僕の魚たちがパワーアップを果たす。これで総攻撃力は4300、そしてサイバー・プチ・エンジェルの攻撃力は300。つまり明日香が何もしかけてこなければ、一気にワンターンキルが成立する！

ハンマー・シャーク 攻1700↓2000 守1500↓1800

0  
グレイドル・イーグル 攻1500↓1800 守500↓800

シャーク・サッカー 攻200↓500 守1000↓1300

「バトルだ！サッカー、サイバー・プチ・エンジェルに攻撃！」

青いコバンザメが空中を泳ぎ、身をしながら尾の一撃を叩き付ける。だがそれよりも先に機械仕掛けの天使の翼が急に巨大化し、生物的な質感を放つ。

シャーク・サッカー 攻500（破壊）↓サイバー・プチ・エンジェル 攻300↓800

清明 LP4000↓3700

「サッカーっ！」

「攻撃力の低いモンスターから順に攻撃を仕掛ける、セオリー通りの動きね。だけど私はその攻撃に対して手札からオネストの効果発動、このカードを捨てることでこのターンの終わりまで対象の光属性モ

ンスターの攻撃力をアップさせるわ」

「くっ……」

今のオネストを、どう見るべきだろう。僕の仕掛けたワンキルを防ぐためには攻撃力500のサツカーに対してオネストをこのタイミングで切らざるを得なかったからやむを得ず使った、と考えるのが一番自然ではあるけれど、本当にそうなのだろうか。明日香の腕前は僕も知っているだけに、攻撃力300ぽっちのモンスターをオネスト1枚だけの防御に頼って攻撃表示で放置するとは考えにくいのだけども、いや、それとも僕がそう考える事すら読んだうえでの心理戦？

明日香の様子をそっとうかがうも、薄く微笑んだその気の強そうな表情からは何も読み取ることはできない。追撃を仕掛けるべきか、ここは一度退くべきか……いや、迷って勝てる相手じゃない。攻撃はできるうちにやっておかないと。

「イーグルでサイバー・プチ・エンジェルに追撃！」

「やっぱり攻撃してきたわね！トラップ発動、モンスターレリーフ！このカードは相手の攻撃宣言時に私のモンスター1体を手札に戻し、その後手札からレベル4のモンスターを特殊召喚できるカード。サイバー・プチ・エンジェルを手札に戻し、サイバー・ジムナクティスを壁として特殊召喚！」

その名の示す通り体操運動をするかのように華麗な動きで、サイバー・ガールの1体がフィールドに入場する。そのモンスター効果もさることながら、今厄介なのはその壁モンスターとして十分な守備力にある。しかもまたサイバー・プチ・エンジェルが手札に戻ったことで、次のターンにはまた召喚からのサーチを喰らってしまう事がほぼ確定してしまった。

サイバー・ジムナクティス 守1800

「だったら攻撃を中止して、ハンマー・シャークで改めてサイバー・ジムナクティスを攻撃。せめて壁モンスターだけでも取り除く！」

ハンマー・シャーク 攻2000↓サイバー・ジムナクティス 守1800 (破壊)

さすがにこれ以上の罫はなかったらしく、何も発動させずにハン

マー・シャークの攻撃を通す明日香。だけど今更攻撃が通ったところでこちらとしては手札を4枚使いモンスターを並べたあげくワンキルどころか壁モンスター1体を倒すのが精一杯というありさまだから、それを手放しに喜ぶことはできない。

「メイン2にカードを1枚セットして、ターンエンド」

明日香 LP4000 手札：3

モンスター：なし

魔法・罫：1（伏せ）

清明 LP3700 手札：1

モンスター：ハンマー・シャーク（攻）

グレイドル・イーグル（攻）

魔法・罫：水舞台装置

1（伏せ）

「私のターン！サイバー・プチ・エンジェルを召喚して効果発動、デツキからサイバー・エンジェル―韋駄天を手札に加えるわ」

サイバー・プチ・エンジェル 攻300

この小さな天使による連続サーチにより、明日香の手元にはあつという間に儀式魔法とそれに対応した儀式モンスターの1組が揃ってしまった。それ以外の手札に別のモンスターがあれば、あの儀式モンスターが出てくる……と、そこまで考えたところで明日香が驚きの行動に出た。たった今サーチしたばかりの韋駄天のカードを召喚することなく、そのまま魔法カードを使ったのだ。

「儀式魔法、機械天使の儀式を発動！私はレベル6の韋駄天を手札からリリースし、レベル6……サイバー・エンジェル―弁天の儀式召喚を執り行おうわ！」

明日香の宣言と同時に鋼鉄の祭壇がその背後に浮かび上がり、その中心からオレンジ色の炎が噴き上がる。妖しくそして美しく舞う炎の中から、赤い扇子を片手に持った全く新しいサイバー・ガールが降臨した。

サイバー・エンジェル―弁天 攻1800↓2800 守1500

↓2500



「攻撃力が上がった!？」

「ええ、そうよ。私が儀式召喚のためにリリースしたのは韋駄天のカード。サイバー・エンジェル―韋駄天はリリースされた時、私の全ての儀式モンスターの攻守を永続的に1000ポイントアップさせる!」

「そうか、そんな使い方が……!」

直接儀式召喚するためでなく、そのリリースを行うためにサーチを行う。儀式モンスターにはそんな使い方もあるのか、と学んだところでバトルフェイズに入る。……もつとも、攻撃するならしてくれればいい。僕の伏せカードはポセイドン・ウエーブ、攻撃を無効にして返り討ちだ。

「バトルよ!ハンマー・シャークに弁天で攻撃、エンジエリック・ターン!」

「トラップ発動、ポセイドン・ウエー……」

「リバースカードオープン、魔宮の賄賂!その発動を無効にする代わりに、相手はカードを1枚ドロウできるわ」

「しまった!」

弁天がふわりと宙に舞って僕のモンスターたちをひとつ跳びにスピンを決めつつ飛び越え、今まさにその上に覆いかぶさらんとしていたポセイドン・ウエーブの上にサーファアのように音もなく着地する。妨害手段を一切喰らうことなく、その扇子がハンマー・シャークの頭上に落ちた。

サイバー・エンジェル―弁天 攻2800↓ハンマー・シャーク

攻2000 (破壊)

清明 LP3700↓2900

「痛たた……」

「あら、こんな程度じゃ終わらないわよ?弁天の効果発動、弁天が相手モンスターを戦闘で破壊し墓地に送った時、その守備力分のダメージを与える!」

「ぐわっ!」

弁天の扇子が、今度はこちらに突きつけられる。ハンマー・シャーク

クの守備力は下級モンスターにしては高めめの1500、その数値がもろにこちらを直撃する。

清明 LP2900↓1400

「防戦すままならぬようね？私はこちらでターンエンド」

「……僕のターン、ドロ」

イーグルの守備力はわずか500だから、ここで壁にすれば弁天の被害も最小限で済む……だけど、そんなことをしている間に第2、第3の儀式召喚が行われることは明白。

また、このまま負けていくんだろうか。これまで通り、反撃すらろくにできずにモンスターとライフばかりがただ減って……脳内に3年になってからの負け星の数々が走馬灯のように駆け巡り、またしても膝を折りたくなる。そこでとにかく引いたカードだけでも確認しようと目を向けて、はつとした。

「霧の王……」  
キングミスト

ずっと僕と戦い続けてくれた、唯一無二の切り札。とどめを刺すフィンツシャーとなり時には反撃の狼煙となり、どんな時でも僕を支え続けてくれたカード。そうだ、何度も自分に言い聞かせてきたじゃないか。気持ちで相手に負けるようじゃ、絶対に勝つことなんてできないしな。全く、何回やってもちよつと不利になるたびにすぐそのことを忘れちゃうんだから。

ぶるぶると首を振って悪いイメージを頭からすっぱり追い出し、新鮮な気分で明日香と改めて向かい合う。気持ちの変化が伝わったのか、明日香もあら、という表情になった。

「さあて、こつからは反撃開始と洒落込むよ！速攻魔法、帝王の烈旋を発動！この効果により僕は、このターン相手モンスター1体を素材としてアドバンス召喚ができる！僕のイーグルと明日香の弁天をリリースして、アドバンス召喚！霧の王！」

2体のモンスターが霧に包まれ、空高く上がっていく。混じり合った2つの霧が人型に変化し、鎧に身を包んだ誇り高き魔法剣士の姿を取った。

霧の王 攻0↓3300↓3600 守0↓300

「霧の王の攻撃力はリリースしたモンスターの元々の攻撃力合計、さらに水属性の霧の王は水舞台装置の効果でパワーアップ！バトルだ、サイバー・プチ・エンジェルを撃破！ぶった切れ、ミスト・ストラングル！」

言い切ってからまたオネストが出てきたら、という疑念が頭をかすめたが、どうやら今度の攻撃表示はまさにそれを匂わせるためのブラフだったらしい。結果的には何もなかったから、まさに結果オーライというべきだろう。

霧の王 攻3600↓サイバー・プチ・エンジェル 攻300（破壊）

明日香 LP4000↓700

「きやあつー！だけど私は、さつきリリースされたサイバー・エンジェル――弃天の効果を発動していたわ。このカードはリリースされた時、デッキから天使族で光属性のモンスター1体を手札に加えるわ。この効果で2体目のサイバー・プチ・エンジェルをサーチ」

「……カードをセットしてターンエンド」

今は一時的に盛り返したとはいえ、僕と明日香の手札の差を考えるといまだ危機を脱したとは言えない状況だ。霧の王の固有能力である、一切のリリース行為を封じるという儀式召喚に対する強烈なメタ能力を加味してもまだ不思議なぐらい気持ち晴々している。なのになぜだろう、不思議と危機感はない。気負わずに剣を構える霧の王が隣に立っていると、不思議と心が安らぐ。いつぶりだろう、こんな気持ちになれたのは。明日香との裏表のない真っ直ぐなデュエルが、何か忘れていたものを取り戻させてくれる気がする。

明日香 LP700 手札：2

モンスター：なし

魔法・罫：なし

清明 LP1400 手札：0

モンスター：霧の王（攻）

魔法・罫：水舞台装置

1（伏せ）

「さあ来い、明日香！」

「当然よ。私のターン！サイバー・プチ・エンジェルを守備表示で召喚し、デッキから2枚目の機械天使の儀式をサーチ。さらに魔法カード、儀式の準備を発動。デッキからレベル6以下の儀式モンスター、2体目の弃天をサーチして墓地の機械天使の儀式をサルベージするわ」

サイバー・プチ・エンジェル 守200

これで明日香の手札は一気に増えたことは間違いない。だけど、今更どんなに手札を増やしたところで霧の王がいる限り儀式召喚はもうできないはず。それとも霧の王を無力化する手がすでにあるのかといぶかっていると、彼女がクスリと笑うのが見えた。

「十代や貴方じゃあるまいし、そう簡単に逆転の手は引けないわよ。だけど私も、このデッキを信じることはできる。速攻魔法、リロードを発動！全ての手札をデッキに戻し、戻した枚数だけドロするわ」  
リロード……なるほど、だから手札交換の弾を少しでも増やすためにサーチを連打していたのか。明日香の手札3枚がデッキに戻り、新たなカード3枚がドロされる。

「魔法カード、貪欲な壺を発動！墓地のサイバー・プチ・エンジェル、サイバー・エンジェル―弃天、サイバー・エンジェル―韋駄天、オネスト、サイバー・ジムナクティスの5体をデッキに戻しカードを2枚ドロ。来てくれたわね、魔法カード、融合を発動！手札のブレード・スケーターと、エトワール・サイバーを融合！融合召喚、サイバー・ブレイダー！」

明日香の初代切り札である融合モンスター、サイバー・ブレイダー。リリースを封じられたとしても、さすがにちゃんと対策はできていたってことか。

サイバー・ブレイダー 攻2100

「サイバー・ブレイダーは相手モンスターが1体のみの時、戦闘破壊耐性を得るわ。パ・ド・ドウ！」

「だけど耐性を持ったところで、霧の王の攻撃力の前には！」

「そこも当然対策済みよ。装備魔法、団結の力を発動！私のフィール

ドにモンスターが2体存在することで、サイバー・ブレイダーの攻守は1600ポイントアップするわ」

サイバー・ブレイダー 攻2100↓3700 守800↓2400

「ここに来ての力押し……いかにも明日香らしいね」

「褒め言葉として受け取っておくわよ？バトル、サイバー・ブレイダーで霧の王に攻撃！グリツサード・スラッシュュ！」

「だけどあいにく、力押しなら僕も負けちゃいないんでね。リバースカードオープン、グレイドル・スプリット！このカードは攻撃力500ポイントアップの装備カードとなり、僕のモンスター1体に装備される！パワーアップだ、霧の王！」

霧の王の片目がいきなり銀色の光を放つ。青と銀のオッドアイズとなり更なる力を解放した霧の王による剣の一撃が、サイバー・ブレイダーのスケートシューズでの回転蹴りと空中で交差する。どちらもの攻撃も致命傷には届かなく、それぞれが地面に着地した。

サイバー・ブレイダー 攻3700↓霧の王 攻3600↓4100

明日香 LP700↓300

「やるわね。私は……これで、ターンエンドよ」

「明日香……」

バトル自体は互いに破壊されなかったが、この一撃でもはや勝負は決した。もはや手札も尽きて墓地リソースもない明日香のライフでは、次のターンで霧の王とサイバー・ブレイダーがもう1度今と同じバトルを行うダメージにはどうあがいても耐えきれない。そんなことに気づかない彼女ではないだろうが、それでもサレンダーすることなく前を向いたままターンを終えた。

……僕に、同じことができるだろうか。負けたといっっては下を向き、また負けたといっっては卑屈になり、さらに負けたといっでは自分から下に沈んでいく、そんな僕に明日香のように誇り高く、デューリストとして最後まで前を向いて正々堂々と絶望しかない戦いであつても続けることができるだろうか。

「僕のターン……」

僕には何もわからない。『相手のドロ―次第では持ちこたえられる程度の負け』ばかりを味わってきた僕には、こんな『相手のドロ―すら関係なくすでに負け確定』なんて状況に置かれた時にどう動けるかなんてこと、まったく想像もつかない。もちろん理想としては、今の明日香のように最後まで誇り高くありたいと思う。だけどこんな極限の状態に置かれた時、僕からどんな本性が出るのか……僕自身すら、まるで想像がつかない。

「さあ、攻撃してきなさい！」

「き……霧の王で、サイバー・ブレイダーに攻撃！ミスト……ストラングル！」

霧の王 攻4100↓サイバー・ブレイダー 攻3700

明日香 LP300↓0

本当に。このデュエルではたまたま僕が勝ったけど、明日香にはかなわないなあ。

「ありがとう、明日香。僕とデュエルしてくれて」

「気にしないで。少しはいい顔になったんじゃないかしら？私もよかつ……」

最後までその台詞を言うことはできなかった。待っていたといわんばかりに光り出すデスベルトにデュエルエナジーを吸い取られ、その場に半ば倒れるように座り込んだのだ。

「明日香！剣山、早く保健室へ！」

「わ、わかったドン！」

「大げさね、十代。少し休めば、すぐによくなるわ……」

無論僕も吸い取られるエナジーは一緒、当然無事ではすまない。しかしダークシングナーと人間の体力の差か、チャクチャルさんが負担の一部を肩代わりしてくれているからか、僕の場合は手近な壁に身をもたれさせてどうにか一息つく程度で済んだ。とはいえさすがに疲れがたまってきたので、何か別の話題をして気を紛らわすためずっと気

にかかっていたことを聞いてみる。

「そうだ。そういえばさ、夢想はどこにいるの？全然見つからないんだけど」

そう言った瞬間、明らかに場の空気が変わった。皆がすっと目を逸らす中、剣山と十代に肩を貸してもらって起き上った明日香が弱々しく話し出す。

「それよ、清明……だから私は、貴方のためだけじゃなく彼女のために怒ったの……」

「無理すんなよ、明日香。少し休んでろって」

「いえ、これは私に言わせて……あのね、清明。貴方が行方不明になった時、一番心配してたのは彼女だったの。だから彼女は研究所に向かうのを諦めて、1人で貴方を探すんだって……」

「そ、それで……？」

ここまで聞いたところでもう予想がついたが、それでも聞かなければいけない。抑えようとしても抑えきれない声の震えを感じながらの問いに、明日香もまた返事を返す。

「さつき貴方が来る前、この世界に来たアカデミアの人たちを全員集めてみたんだけど……多分彼女は、この世界には来ていないわ」

## ターソン85 鉄砲水と天王星の主

「やつほー十代。こちら清明、異常ないよ」

目の前に広がるのは、ただひたすらに砂、砂、砂。今僕がいるのはアカデミアのてっぺん、ここに登って周りを見回し、目の前に無限に広がるこの砂漠でモンスターのおかしな動きがあればすぐさま十代達に連絡を飛ばすのが今回の僕の役目だ。今はまだ昼だから野生のサンドモスやらダンジョン・ワームやはよほどの変わり者でもない限り地中に潜んでいるはずだけど、用心するに越したことはない。

こつ、こつ、と誰かの足音がしたので振り返ると、そこには久方ぶりに見る顔がパンと牛乳、それに紙皿に乗ったゼリー状の料理を持って歩いてきた。

「よう。さつきトメさんに怒られたんだ、そんなに計算ばかりやってたら倒れちゃうから、少し外の空気でも吸って休憩してきなさい、ついでに清明ちゃんに今日の昼食を届けてやってってくれてな」

「や、三沢。まあ座ってきなよ」

「ああ、俺もまだ飯を食ってないからな。隣、失礼するぞ」

そう言って腰を下ろし、自分の分らしい僕と同じメニューをぱくつく三沢。考えてみれば不思議なものだ、ひっそりと休学して研究の道に進み始めた三沢と、よりにもよってこんな地球ですらないような場所で再会するだなんて。僕は直接見たわけではないけれど、事故に巻き込まれてこの世界に飛ばされてからというものだった1人でひたすらさまよいつけて半ば行き倒れ状態になったところを偶然こつちに来てしまったアカデミアで確保したらしい。三沢にも三沢なりに色々ドラマがあったんだろうけど、悲しいことに今の僕らにそれを気にしている余裕はなく、そのあたりの詳しい話はいまだ宙ぶらりんのままだ。

「……レイちゃん、どんな感じかな」

「ここに来る前に一応見舞いだけはしてみたが……まだ目覚めそうにはないな。十代達、ちゃんとやってくれるといいが……」

そう、これこそが三沢の話を気にしている余裕がない理由。昨夜の



校舎内、廊下で何者かに襲われて怪我を負ったレイちゃんが、いまだ衰弱状態が続いているのだ。日本にいるならいざ知らず、食料すらまともに確保できるか怪しいこの世界でちゃんとした医療設備が整っているはずもなく、頼みの綱は三沢が歩き続けている最中に見たという潜水艦の残骸のみ。正直それにしたってどう考えても怪しい代物だけど、じつとしていても貴重な物資が日々減っていくだけだ。籠城が役に立つのは、援軍が期待できるときだけである。

「十代、そっちはどう？ 変わったものでもある？」

『いや、まだ何も見えないな』

手にしたトランシーバーに声をかけると、向こうから十代のくぐもった声が聞こえてくる。電波塔なんて気の利いたものがあるわけではないこの土地で、唯一通信が期待できるのがこの、倉庫に備品として置いてあったトランシーバーだ。本当なら僕もあちら側の探索組に入りたかったけれど、誰かこっちにステイして上からウオッチする役が必要だ、なんてジムに言われるとただでさえSAL研究所の件で負い目のある僕がそれを断れるわけもなく。

……今ここに残っているのは100人弱の生徒と僕の他に、トメさんや鮎川先生、クロノス先生といった教員勢。それによく目を覚ましたもののまだ大事を取って残ってもらったことにした万丈目とここから出るための方法を考えるため体育館の壁一面に計算式を書きながっている三沢。普通なら人数の少ない十代達を心配すべきなんだけど、なんだか嫌な予感がする。そもそも、何にレイちゃんは襲われたんだ？ 外で野生のモンスターにやられたというなら、まだわからなくもない。現に、僕もここに来た直後サンドモスに襲われたし。だけど学校の中で、ということとは既に敷地内にその『何か』は入り込んでいて、しかもその『何か』には証拠を一切残さないでその場から立ち去るだけの知能がある。もしかして上から十代達を見張ってるよ、校舎内の見回りでもしてた方がよかったかな。いや、でもこれ以上独断専行するのは堪えよう。ここの生き物はハーピーを除くと基本夜行性だし、昼間はきつと大丈夫だろう。

「なあ、清明。少しいいか？」

「え？」

突然、三沢が目の前砂漠を見つめながら口を開いた。僕の返事を肯定と受け取ったのか、ぼつぼつと恐るべき内容を語りだす。

「今からする話は、まだ誰にも言っていない。単なる俺の推論だし、それでみんなの不安を煽ることもないからな。だが俺自身も整理がついていない話だから、整理するためにも誰かに聞いてほしいんだ」

「……難しい話は専門外だよ？」

シリアスな空気にそう問い返すと、少し緊張がほぐれたように微笑んだ。

「ふふつ、お前らしいな。別に、そこまで専門的な話でもないさ」

「んじやまあ、僕で良ければ。カモンカモン」

「ああ。まずお前は、俺がこの世界にはみんなよりも先に来ていたことは聞いているか？」

「ツ……あー、なんとか博士の実験で事故があつたんだって？一応大体は聞いたけど」

「ツバイン・シユタイン博士、な。まあそれはいいとして、この世界を歩き続けていたある日の夜、ふと空を見てみたんだ。今は昼だからわかりにくいけど、ここは空気が澄んでいるから星がよく見えるんだぞ」

メルヘンだねえ、などと茶化す言葉が喉元まで出かかったが、何とかこらえてそれを飲み込む。割とシヤレにならないこの環境をたつた1人で歩き続けたんだ、間違っても茶化したりなんてできるわけがない。……今夜は星でも見ようかな。

「ここは異世界だ……皆はそう思っているようだし、その考えは間違っていないはずだ。実際に太陽は3つあるし、モンスターは常に実体化してうろついているわけだしな」

「うんうん」

「だからこそ、どうしても理解しがたいことがある。俺も、最初に見たときには目を疑った」

「ふんふん」

いよいよ話の核心に達したことを察して、大人しく相槌を打つだけにとどめる。視界の端に、もはやだいぶ小さくなってしまった十代達

がなんとか識別できた。

「……ここから見える星の配置が、地球から見えるそれと酷似している。といったら、どう思う?」

「……………え?」

たつぷり10秒ほど何も言えない時間が経った後、どうにか口から出てきたのは我ながら間抜けな一言だった。この星座が地球とそっくりだってことは、つまりここは――

「地球?」

「いや、それはない。俺も最初は驚いたが、ほんの少し角度にずれがある。なあ清明、お前はと思う?ここから見える星の位置は、太陽系第7惑星……天王星から見る景色と計算上完全に一致するんだ」

天王星。話にだけは聞いたことがあるけれど、わざわざ目で確認した人間は少ないだろう。僕も見たことない。あまりの話に一瞬言葉を失うが、すぐに三沢の説にはいくつかおかしな点があることに気がついた。

「ちよつと待つてよ、天王星に空気が無いことぐらい僕だつて知ってるよ。それに第一、あの3つの太陽はなんなのさ。ココが太陽系なら、ちよつと2つぐらい多いんじゃないの?」

「お前の言いたいことはよくわかる……だが、それに対しても一応の反論はある。俺が光の結社にいたころの話だからうろ覚えと又聞きでしか知らないが、十代はあの新HEROのネオスと<sup>ネオスベーション</sup>Nを宇宙、それも木星の衛星イオで見つけたらしいじゃないか。実はその話を聞いた時から、俺は1つの仮説を立てていてな」

「仮説?」

「ああ。精霊世界が実在すること自体は、俺がここに飛ばされる前からツバイン博士もほぼ確信していた。そしてこれまでも何度かあった人間と精霊との邂逅記録……そういったものを分析した結果、精霊の世界と俺たちが普段住んでいる世界は表裏一体、とまではいかないまでもかなり近い存在である、という結論に達したのさ。木星の衛星の中に、空気があって知的生命体が確認できる星はない。だが、もしその中の星の1つに、そこから精霊世界に入り込めば十代のたど

り着いた『精霊世界のイオ』にたどり着ける場所があるとしたら？星の配置などはそのままに、精霊が暮らしているかそうでないかという1点のみに違いがある精霊世界の宇宙が広がっているとしたら？いや、それだけじゃない。俺たちの説によれば次元……そう俺たちは呼称しているが、それは全部で10以上あるはずだ」

「またスケールの大きな……」

そう言いながら僕の脳裏にもあの十代の不思議なカードたちと、それともう1つ思い浮かぶことがあった。僕の手元にあるグレイドルカードも、元はといえば宇宙のどこからふらりと地球に不時着したカードだったはずだ。あの時スライム達がやって来たのも、精霊界の地球に不時着するはずが何かの拍子で僕らの次元に来てしまったからあんなに驚いたり恐縮したりしていたんだだろうか。

いや、待て待て。仮に三沢の話が正しいとしたら、ここは精霊世界の天王星ということになる。地球との距離がどれほどあるかは知らないが、次元を越えて元の宇宙に戻ったうえでさらに地球までの距離をどうにかしないと生きてあの島には帰れない。慌てて三沢の顔を見ると、それだけで何を言いたいのか伝わったらしく重々しい顔で頷かれた。

「ああ、俺が心配しているのもまさにその反応なんだ。今この学校でパニックによる暴動が起きるような事態になっていないのは、あまりにもこの現状に現実味が無さすぎる、という点が少なからず影響を与えていると思う。精霊世界なんてお前らみたいな例外を除いてほとんどの人間には縁のない世界だから、それも無理はないだろうがな。だが、地球と天王星の間に果てしない距離があることはみんなの常識の範囲内でもわかるはずだ。この事を知った時、ここの全員がお前のように冷静でいられるか……だから、これまでこのことは誰にも話さなかつたんだ」

お互いに何も言えないまま、時間だけが過ぎていく。その沈黙を最初に破ったのは、トランシーバーから聞こえる十代の声だった。

『ザザ……おーい、清明……うやく見つけ……ザザ……から今、この丘の向こ……行って中に入……ザザ……』

「も、もしもし十代！こちら清明、繰り返す、こちら清明！電波が急に遠くなったから、多分そつちに何かいる！」

言いざまにさつきまで十代達が歩いていての方を見ると、ちょうど砂の丘のようになっていてとこで固まっている姿がなんとか見えた。今はギリギリ見えるけど、あの丘を降りでしたらこつちから視認することはもうできないだろう。そのことを追加で伝えると、とぎれとぎれながらもなんとか返事が聞こえてきた。ここで引くわけにもいかないし、なるべく慎重に行ってみるとのことらしい。

「十代……」

「なあに、あいつらなら心配はいらないさ。さて、俺もそろそろ計算に戻るかな。何か手伝えることがあったら遠慮なく言ってくれ」

そう言つて、三沢も校舎内へ帰つていく。確かにこれだけ距離が離れていたなら、いくら心配してもどうしようもない。ここはあのメンバーを信じて、僕は僕なりにこの場所でどつしり待ち構えてるとしよう。動くものが視界からすべて消え、少し視線を外して辺りをぐるっと見回してみる。校舎の裏手、裏口のすぐ近くにそれはいた。最初は何かモンスターが近づいてきたのかとも思ったが、それがこちらの視線に気づいて上を向いた瞬間理解した。

「あいつ……！」

『マスター……！』

あのオレンジ色に発光する、男とも女ともつかないが人型であることだけはわかる何か。間違いない、あいつがSAL研究所で僕とチャクチャルさんの前に何度か現れてはこちらの邪魔をしてきたり、頭の中に直接話しかけてきたあの存在だ。

「どうやったかは知らないけど、あいつまでこつちについてきたつての……!?!」

すぐに下に降りて応戦を……と立ち上がったところで、頭の中に独断専行の4文字がちらつく。そうだ、つい昨日だって良かれと思って暴走した結果、十代達に迷惑ばかりかけてきたじゃないか。ここで僕が駆けつけたら、またあの時の二の舞にならないだろうか。だけど、あいつをあのままにするわけにはいかない。あの十代ラブ（仮名）、

放っておいたら何をするのか見当もつかない恐ろしさがある。

「……十代っ！」

せめて連絡だけでも、と叫んだ声に、しかし肝心の返事は帰ってこない。僕からの声は、向こうに届いているのだろうか？向こうでも僕と連絡が取れなくなつて、なんとか連絡を取ろうと叫んでいるのだろうか？ザーザーと不調を訴えるトランシーバーを握る手にもついつい力がこもり、みしみしといやな音がする。

「くそっ！」

何をしだすかもわからないあいつを野放しにするわけにはいかない。だけど、今の僕の立ち位置であるこの場所を勝手に離れては、もし十代達に何かあったとしても誰も対応できなくなる。歯噛みしながらも、結局どちらに動くとも決めかねてしまう。

そんな僕の優柔不断さが、どうやら奴にはお気に召さなかつたらしい。小首を傾げるような仕草をしてなかなか降りてこないこちらを見つめたのち、ずっとその右腕を上げた。

次の瞬間、奴の真後ろの大地が割れた。巨大な亀裂の中からゆつくりと浮かび上がってきたのは、巨大な球体の岩。複雑な黄色の模様が彫りこまれた青い球体と、その中央に刻まれた顔。その瞳が鈍い光を放ち、アカデミアを睥睨する。

「な、何?!」

『これはこれは……大物のお出ましか。来るぞ、マスター』

チャクチャクさんの言葉通り、その意志を持つ球体は一定の高さまで浮かび上がると、そのままこちらに向けて進路を変えた。音もなく空中を滑るように動き、じわじわと校舎に近づいてくる。このままだと激突するだろうし、そうなたら相手はあれだけ大きな岩石の塊だ。被害がどれだけ出るかもわかつたものじゃないけど、どう考えてもただでは済まないだろう。オレンジ色のそいつには顔はあつても口がないが、それでも何を言いたいかは理解できた。どうする?と、僕に問いかけているのだ。このままでは確実に被害が出るが、それでもなおまだそこに残り続けるのか、と。

「くっ……やっつてやる!せめて十代が戻ってくるまで、アカデミアは

僕が守る！出てきて、グレイドル・イーグル！」

黄色い鳥の形をしたグレイドルの精霊を呼び出し、そのまま実体化させる。ここが精霊世界だからなのか、ありがたいことにいつもより僕にかかるカード実体化の負担が少ない。質量を持って舞い上がるその足を片手で握りしめ、空いた手で無造作に地面の方を指さす。

「イーグル、お願い！今すぐ僕を下まで運んで！」

悠長に階段やエレベーターを使っている暇はない。僕の意図を察したイーグルの翼にぐつと力がこもり、ふわりと体が宙に浮く感覚に包まれる。次の瞬間にはすでに、猛スピードでの滑空が始まっている。みるみる近くなってくる地面に半ば身を投げ出すように着地し、一定のスピードで動き続ける球体とアカデミアの中間地点に陣取って仁王立ちしつつ声を張り上げる。

「ちよつと待ったあ！これ以上アカデミアに近づくななら、僕が相手だ！」

これ見よがしに腕を掲げ、デュエルディスクを見せつける。この球体にもデュエルができるのだろうか。それはわからないが、なにせここはサンドモスですらデッキを持つ世界だ。そんな世界にいるんだから、きつとこいつも僕の見たことないカードの精霊兼デュエリストに違いない。それにしたってこんな手も足もないただの球体にまでそんな理論が通じるのかは1つの賭けだったが、どうやら僕の声は無事に届いたようだ。球体の前進がぴたりと止まり、その視線がすつと下にいる僕の方へ向く。ゾツとする冷たい目だ……だけど、こんな視線ごときにビビってなんかいられない。第一、幻魔皇ラビエルや邪神アバターが乗っ取ったフランスのように、もつと恐ろしい目だっけてきた経験が僕にはある。

「デュエルだよ、デュエル。僕が勝ったら、大人しく退いてもらうよ」  
僕が負けたら？その疑問は、あえて口にはしない。最初から負けるつもりなんてさらさらないことを相手に見せつけ、少しでも精神的優位に立つ……交渉の基本だ。参考資料はチャクチャルさんの受け売りだけど。それにしてもこれ、どうやってデュエルするんだろう。デュエルディスクをつける腕も、カードを持つ指もないこの体では、

とうていデュエルモンスターズなんてできそうにないけれど。

その疑問は、すぐに晴らされた。僕の目の前で砂がうねり、それ自体が生き物のように寄り集まって砂の巨人……不格好な、けどサンドモスと同じ砂製のデュエルディスクをその左腕に装着した巨人の形になった。多分、このモンスターの膨大な力を砂に込めることで自在に砂を操っているのだろう。なら、こいつに勝てばそれでいい。単純な話だ。

「それじゃ、デュエルと洒落込もうかね」

目の前の名称不明な巨人も、のろのろとその腕を動かして自家製デュエルディスクを構える。その前にあのオレンジ色の奴は、と辺りを見回すと、僕らのデュエルを觀賞しようとしてもいうつもりなのか、特に動きもなのまま離れた位置から対峙する僕らの方へ視線を向けているのが見えた。あの様子なら、とりあえずはデュエルに集中していても問題なさそうだ。

「デュエル！」

サンドモス戦の時もそうだったけど、僕一人だけの掛け声はやつぱりちよつと寂しいものがある。そんなことをかんがえながらも、後攻ということでは相手の出方をうかがうことにする。

「むん……」

喋ってるんだか砂が動いた拍子に擦れて音を立ててるんだかわからないような音を発し、デュエルディスクに一枚のフィールド魔法が置かれる。すると辺りの砂の中から、無数の投石器がせり上がった。き

『フィールド魔法、岩投げエリア。1ターンに1度、モンスターの戦闘破壊の代わりにデッキの岩石族モンスターを墓地へ送るカードだな』  
「相手だけモンスターの場持ちがよくなるわけね。厄介な」

まだ先攻1ターン目ということもあってか、その後はモンスターをセットしただけで終わった巨人。おそらくあのモンスターも岩石族……となると、やはりそれなりのモンスターで攻撃しなければ硬い守備力に弾かれて終わりだろう。

「僕のターン、ドロロー！砂漠はどうも味気なくつていけないね。」



フィールド魔法、ウォーターワールドを発動！」

あくまでソリッドビジョンとはいえ、乾ききつていた砂漠に潤いが蘇る。一瞬で水没したあたりの風景を尻目に、この大量の水によって力を増した僕のモンスターを召喚する。

「どうせ戦闘破壊が防がれるなら、無理にそつちを狙わなくても……  
ドリル・バーニカル！」

ドリル・バーニカル 攻3000↓800 守0

「ウォーターワールドは、水属性モンスターの攻撃力を500ポイントアップさせる代わりに守備力を400ポイント下げる効果を持つカード……だけど、守備力0のこのカードにはそんなデメリット関係ないね。さらにドリル・バーニカルは、相手プレイヤーにモンスターがいてもダイレクトアタックできる！撃ちぬけ、ドリルアタック！」

巨大なフジツボとでもいうべきモンスターの体中に生えた大量のドリルのうち1本が本体を離れ、砂の巨人に向け放たれる。かわすことも防御することもなくその攻撃を受け止めた巨人の腹に大穴があくが、本人は痛がるそぶりすら見せずに飛び散った砂がまた集まってその傷口を塞いでいく。

ドリル・バーニカル 攻800↓砂の巨人（直接攻撃）

砂の巨人 LP4000↓3200

ドリル・バーニカル 攻800↓1800

「ドリル・バーニカルはダイレクトアタックに成功するたびに、攻撃力を1000ずつアップさせる特殊効果がある。早く処理しないと、次のターンには1800のダイレクトアタックを飛ばすからね？僕はこれで、ターンエンド」

いい調子だ。裏側守備表示で出したということは、巨人のフィールドにいるあれは恐らくリバースモンスター。攻撃を受けつつ墓地肥やしをし、なおかつリバース効果を僕のターンで使おうという相手の思惑を、どれも読みやすいとはいえ全て外してやった。今回はいっぴなく調子がいい、これも明日香の激が効いたんだろうか。

砂の巨人 LP3200 手札：3

モンスター：???（セット）

魔法・罨：なし

場：岩投げエリア

清明 LP4000 手札：4

モンスター：ドリル・バーニカル（攻）

魔法・罨：なし

場：ウオーターワールド

「むん……い」

そして訪れる巨人のターン。さっきあれだけかき回してやったにもかかわらず、まるで何事もなかったかのようにさつき伏せたモンスターを表にする。全身に包帯を巻いたような姿の岩石の小人が、見かけによらない俊敏さでにやにやと笑いながら颯爽と飛び上がった。

??? ↓ダミー・ゴーレム 攻800

『あれは、ダミー・ゴーレム！』

チャクチャクさんの叫びも時すでに遅く、反転召喚されたダミー・ゴーレムがその効果を発動する。あの一見レベルもステータスも低いモンスターは、リバース効果として渡す対象を自身に限定した強制転移を内蔵している。つまり、リバースしたあのカードと僕のモンスター1体のコントロールを入れ替えてしまうのだ。そして僕のフィールドには、攻撃力が上がったドリル・バーニカルしか存在しない。にやついたままダミー・ゴーレムが僕のフィールドに着地し、バーニカルが巨人のフィールドに送りつけられる。

「むん……」

巨大ネズミ 攻1400

「通常召喚まで……ちよつと、してやられたかな」

僕の眩きをきっかけにしたかのように、2体のモンスターの攻撃が降りかかる。手札にもそれを回避する手段はなく、その2連撃が僕のライフを容赦なく奪っていく。

巨大ネズミ 攻1400 ↓ダミー・ゴーレム 攻800（破壊）

清明 LP4000 ↓3200

ドリル・バーニカル 攻1800 ↓清明（直接攻撃）

清明 LP3200 ↓1400

ドリル・バーニカル 攻1800↓2800

「まだ、まだ……！」

このターンの猛攻に、一気に半分以下にまでライフが削られる。さあ考えろ、一体どうすればいいだろうか。岩投げエリアは1ターンに1度とはいえ墓地に『岩石族を』送ることで『モンスター』の『戦闘破壊を防ぐカード……つまり、向こうのフィールドにいる限り僕のドリル・バーニカルもその効果の適用圏内ということになる。実質1度の戦闘破壊耐性を得たに等しい、攻撃力2800にまで膨れ上がったあのカードを次の僕のターンのうちに倒さない限り、僕の負けは確実に言っている。その困難さがわかっているのか、明らかに砂の巨人も余裕ぶった態度でターンを終える。

「僕の、ターン！」

だけど、ここまでやられてただやられっぱなしなんてのは性に合わない。この借りはきっちり、利子までつけて返さないとね。

「相手フィールドにのみモンスターがいることで、カイザー・シースネークはレベル4、攻撃力0となって特殊召喚できる！そのままカイザー・シースネークをリリースして、アドバンス召喚！こっからは反撃だ、氷帝メビウス！」

氷帝メビウス 攻2400↓2900 守1000↓600

一瞬だけフィールドに現れた海蛇の姿はすぐに消え、全てを凍てつかせる氷の帝が召喚される。ウォーターワールドの援護を受けて攻撃性能を尖らせながら、冷気の波が投石機を次々と凍らせ破壊していく。

「メビウスはアドバンス召喚に成功した時、フィールドの魔法・罫を2枚まで破壊できる。岩根げエリアを破壊だ、フリーズ・バースト！」

「むん……」

「ごめんね、バーニカル……バトルだ、ドリル・バーニカルに攻撃！アイス・ランズ！」

右腕を巨大な氷の槍で覆ったメビウスが、マントをはためかせて走る。その巨体によるスピードの乗った一撃は、無数のドリルをもともせずその奥にある本体を刺し貫いた。

氷帝メビウス 攻2900↓ドリル・バーニカル 攻2800（破壊）

砂の巨人 LP3200↓3100

どうにか最大の危機は脱した。とはいえまだライフ的には倍以上の差がつけられている現状に変わりはなく、利子どころか借りすら口々に返せていない。どうしようもない現状に歯噛みしながらも、ともかくできるだけのことをしていかないと話にすらならないと思います。

「カードをセットして、ターンエンド」

砂の巨人 LP3100 手札：3

モンスター：巨大ネズミ（攻）

魔法・罠：なし

清明 LP1400 手札：2

モンスター：氷帝メビウス（攻）

魔法・罠：1（伏せ）

場：ウォーターワールド

「むん……」

こちらとしては到底満足できる結果ではないとはいえ、先ほどの僕の反撃に何か思うところがあつたのだろう。あるいはこのターンで勝負を決めるつもりが、それをまんまと阻まれたことに對する苛立ちか。心なしか上から見下ろす球体の視線も先ほどよりとげとげしさが増した気もするし、その真下でカードを操る巨人の動きもやや乱雑になってきたように見える。

「あれは、一時休戦?」

『墓地肥やしに専念するつもりか!』

魔法カード、一時休戦。たがいにカードを一枚ドローすることで、次の僕のターンが終わるまでお互いに一歳のダメージを受けなくなる魔法カード。メジャーな使い方として防御のほか、リクルーターがいる状態でノーダメージのまま連続自爆特攻を行うことで急速な墓地肥やしを行うというものがある。そう、まさにこの盤面のよう。」「むん……」

『来たー！』

「んなこと言われたって、妨害なんてできないよー」

巨大ネズミが走り、メビウスに返り討ちにされる。そして属性リクルーターである巨大ネズミが同名モンスターをデツキから呼び出し、呼び出された巨大ネズミがまた走る。一切プレイヤーへの反射ダメージがない状況の下その作業が3回行われるが、それを止める手段は僕の手元にはない。

巨大ネズミ 攻1400 (破壊) ↓氷帝メビウス 攻2900

巨大ネズミ 攻1400 (破壊) ↓氷帝メビウス 攻2900

巨大ネズミ 攻1400 (破壊) ↓氷帝メビウス 攻2900

「むん……」

「巨大ネズミはこれで弾切れ、じゃあ本命のモンスターを見せてもらおうか」

同名モンスターがデツキに入れられるのは3枚まで、なのでこれ以上ネズミの突撃が行われることはない。まだ最後のリクルート対象が残っているとはいえ、制約により攻撃力1500以下のモンスターしか呼び出せないからせいぜい攻撃表示の壁を呼ぶのがいいところだろう……そう思っていたら、地面が突然膨れ上がった。地下から何かが凄い勢いで地上に出てきたのだ。そのサイズはただ者ではなく、到底攻撃力1500以下とは思えないほどの威圧を放っている。

激昂のムカムカ 攻1200 ↓2800

『激昂のムカムカ、か。その攻撃力は素の数値1200に加え、手札の枚数1枚につき400ポイントの上昇がされる……だが、妙だな。今のメビウス相手にはそれでも力不足なはずだが』

チャクチャルさんの指摘通り、手札が4枚の今の巨人ではウォーラーワールドの補正が乗ったメビウスにはあと1歩攻撃力が届かない。やっぱり攻撃表示の壁なんだろうか、と思ったところで上空の顔と目が合った。……ここで攻めてくる、あれはそういう目だ。

はたせるかな、ムカムカが全身から怒りの余り蒸気を吹き上げつつ砂漠の砂を巻き上げて突っ込んでくる。それに対して氷の槍を右腕に作り出し、迎え撃たんとメビウスが構える。2者が戦場で交差する

直前、一陣の風が吹き抜けた。これは、ただの風邪なんかじゃない。その証拠に、さつきまで辺りに満ちていたはずの水がみるみるうちに吹き飛ばされていく。

「サイクロン……！」

気づいた時にはもう遅い。速攻魔法サイクロンを発動したことにより手札が減った激昂のムカムカは攻撃力が下がる……だが、ウォーラーワールドを失ったメビウスの攻撃力はそれ以上に下がっていき、その攻撃力の差は0となった。

激昂のムカムカ 攻2800↓2400（破壊）↓氷帝メビウス  
攻2900↓2400（破壊）

「まさか相打ちしてくるなんて……だけど、メビウスはそう簡単には倒れない！リバーズカードオープン、激流蘇生！このカードは水属性モンスターが破壊された時そのモンスターをすべて蘇生し、その蘇生した数1体につき500ポイントのダメージを与える！蘇れ、メビウス！」

一度は大地に倒れそうになったメビウスの瞳に再び生氣が宿り、氷の槍を地面について再び立ち上がる。激昂のムカムカに蘇生手段は用意していなかったようで、これ以上巨人のフィールドにモンスターが出てくることはなかった。

氷帝メビウス 攻2400

「むん……」

これでターンエンド、次のターンはメビウスでダイレクトアタックだ……なんて、そこまで都合よくは流石にならないらしい。まあ当然だろう。墓地から巨大ネズミ3体のカードを取り出した巨人が、それをまとめて除外ゾーンと思しき場所に放りこむ。あ、いいなーあの機能。海馬コーポレーションのデュエルディスク、バトルシテイ当りの時代とは違って除外系カードの種類が増えたこの時代になってもいまだに除外されたカードを入れておく場所がないんだよね。なんか技術的な兼ね合いで難しいらしいけど、だからといってポケットに突っ込むことを推奨するのはどうかと思うのよ。

と、今はそれどころじゃない。わざわざ墓地のモンスターを除外し

たということ、当然それをコストにするカードが何か発動されたというわけで。メビウスとともに警戒態勢に入った僕の目の前に、案の定次なるモンスターが現れる。さて、今度はどんなごつい奴が出てくるんだろう。そんな思ひは、そのモンスターの全身を見た瞬間に砕かれた。

「……え？」

それは、これまでの岩石カードとはまるで毛色の違うモンスター。カラフルな全身はまさに子供の遊ぶブロックを組み合わせてドラゴンを作ったように角ばっていて、これまでとは別の意味で非日常的なその姿はもはやファンシーと言ってもいいレベルに達している。だが、ついつい気が抜けた僕とは対照的に、チャクチャルさんが息を呑む。

『あれは、ブロックドラゴン！』

なんでこんなに警戒するのか、という疑問はすぐに解けた。割とふざけた見た目なのに、なんだこの守備力!?

ブロックドラゴン 守3000

『それだけじゃない。ブロックドラゴンが存在する限り、相手の岩石族モンスターは戦闘以外の破壊が不可能になる。単純にステータスでゴリ押しするしかないな』

「なるほど、効果破壊ができない、か……ありがとうメビウス、まだ岩投げエリアが残ってたら本格的に突破が面倒になってるところだった」

ウォーターワールドで打点の底上げもできない現状、メビウスのした仕事は大きい。もちろん2枚目、3枚目の岩投げエリアが出てくる可能性も否定はできないが、それより前にあのドラゴンもどきを倒せばいい。ターンを終えた巨人に変わり、僕もデッキからカードを引いた。

「ドローー」

効果破壊のできない守備力3000の壁、か。効果破壊できない……いや、待てよ。さつき一時休戦のドローで引いたこのカードと、もう1つ今引いたこのカードを使えば……そうか、いいこと思いつい

た。

「グレイドル・アリゲーターを召喚。さらに永続魔法、グレイドル・インパクトを発動！」

グレイドル・アリゲーター 攻500

「グレイドル・インパクトは1ターンに1度、僕のグレイドルカードと相手フィールドのカードを1枚ずつ破壊できる！僕が選択するのはアリゲーターとブロックドラゴンの2体、グレイ・レクイエム！」

派手に落下したUFO……グレイドル・インパクトから2筋の怪光線が放たれ、それぞれブロックドラゴンとアリゲーターに照射される。アリゲーターはみるみる溶けて銀色の水たまりに変化していったが、ブロックドラゴンは見た目からは想像もつかない強靭さを発揮してその光線に耐える。いや、耐えてしまう、というべきか。その足元に、液体状になったアリゲーターが迫る。

「ブロックドラゴンは効果破壊できないけど、魔法カードの効果で破壊されたアリゲーターの効果発動！相手モンスター1体に寄生して、その動きはこつちで操る。ブロックドラゴン、有難くいただくよ！」

「むん……」

ブロックドラゴンの額に銀色の紋章が浮かび上がり、こちらのフィールドに移動する。とはいえ、まだ見かけほど戦況がよくなったわけではない。このターンは一時休戦の効果が残っているため一斉攻撃で大逆転ができず、相手ターンにはブロックドラゴンのこの強力な耐性がむしろ仇となってしまう。通常グレイドルの効果でコントロールを得たモンスターはそのグレイドルが場を離れた時自壊するが、ブロックドラゴンはその自壊にすら耐えぬいてしまう。つまり、もし次に装備カード状態のアリゲーターが除去されたらこのカードは破壊どころか向こうのフィールドにまた帰って行ってしまふのだ。……そうだったら、今度こそ止める手段はない。

「これで、ターンエンド」

砂の巨人 LP3100 手札：2

モンスター：なし

魔法・罠：なし



清明 LP1400 手札：2

モンスター：氷帝メビウス（攻）

ブロックドラゴン（攻・アリゲーター）

魔法・罨：グレイドル・アリゲーター（ブロック）

グレイドル・インパクト

「むん……」

今はこちらが上回っているものの、その優位も決して盤石なものではない。いずれにせよ、このターンに巨人がどう動くかでこちらの動きも決まってくる。

何をしかけてくるか、と緊張に包まれるが……もう手が無いのかそれともまだ何かを狙っているのか、単にカードを1枚伏せただけで終わった。あの1枚、苦し紛れに伏せた程度なら別にいいけれど、もし何かを狙っているとしたら？ 僕のライフは残り少ない、それこそ魔法の筒1枚でどちらを攻撃させても逆転敗北だ。だけど逆に、あのカードがミラーフォースのようなカードだとしたらブロックドラゴンの耐性で押し通せる。

「僕のターン、ドロ……」

残念、グレイドルカードは引けなかった。こうなるとアリゲーターとあの伏せカードに対してインパクトの効果を使うしかあのカードを除去する方法はないけれど、そんなことをしたらせつかく手に入れたブロックドラゴンが……僕の取れる手は2つに1つ。このまま攻撃させるか、手札のこのカードを出すか。前者ならば通りさえすればゲームエンドに持ち込めるけれど、後者の方がどちらかといえば安定性は高い。チャクチャルさんはこういう時とことん放任主義だから、アドバイスは一切期待できない。あの伏せカードをどう警戒するべきか……よし、腹は決まった。

「ここは、この手でいく！ 僕は2体のモンスターをリリースして、アドバンス召喚！ 出でよ、ブルーアイス・ホワイトナイト・ドラゴン青氷の白夜龍！」

青氷の白夜龍 攻3000

いちかばちかの賭けだけれど、賭ける価値は十分にあると見た。らしくないな、とは思わなくもない。あの2体で攻撃してこのターンで

終わらせることに賭ける道を、昔の僕なら選んでいただろう。少し慎重になったのか、それとも単に臆病になったのか。少し考えてみるけれど、その答えは出なかった。

「むん……」

「え？このタイミングで何か……？」

『ブロックドラゴンはフィールドから墓地に送られた時、デッキからレベル合計が8になるよう岩石族モンスターを最大3体まで手札に加える効果を持つ。アドバンス召喚のためにリリースしたことで、その条件を満たしてしまったか』

限界の3体を加えて手札の補強を図るか……とも思われたけど、意外にも加えた数は1体。レベル8の岩石族の時点でだいぶ絞り込めそうだけど、何がいたっけな……こんな時三沢がいてくれたら即座にわかるんだろうけど、そこまで贅沢は言ってられない。

「とにかく今はバトルだ！ダイレクトアタック、孤高のウィンター・ストリーム！」

「むん……」

やはりあのカードは攻撃反応だったらしく、白夜龍のブレス攻撃に反応して表になる。その正体は……。

「攻撃の、無力化？」

モンスターの攻撃を無効にしたうえでバトルフェイズを終了させるカード、攻撃の無力化。これは、アドバンス召喚の道を選んだのは大正解だったか。なぜなら、このモンスターにはその重さにふさわしい特殊効果がある。一度は時空の渦に飲み込まれた冷気のブレスが、数秒の拮抗の後その渦を吹き飛ばして巨人の体を直撃した。

「白夜龍は、自身を対象にする魔法・罫の効果は無効にして破壊する！そんなカードじゃ止められないよ、思いつき叩き込め！」

青氷の白夜龍 攻3000↓砂の巨人（直接攻撃）

砂の巨人 LP3100↓100

「これで、どうだ……！そしてこのターンのエンドフェイズにグレイドル・インパクトのもう1つの効果を使って、デッキからグレイドル・イーグルをサーチする！ドール・コール！」

3000もの戦闘ダメージを直接叩きこまれて、無事で済むわけがない。上空に浮かぶ球体の表情からは何も読み取れないが、確実にあのデカブツにもダメージは通っているはずだ。

砂の巨人 LP100 手札：3

モンスター：なし

魔法・罠：なし

清明 LP1400 手札：3

モンスター：青氷の白夜龍（攻）

魔法・罠：グレイドル・インパクト

「むん……」

圧倒的に追い詰めた状況にもかかわらず、妙に落ち着いた様子でカードを引く巨人。1枚の魔法カードを、その手札から発動した。

『あれは、フォトン……』

「サンクチュアリ……」

チャクチャルさんのセリフの後半を奪う。フォトン・サンクチュアリは、2体のモンスタートークンを呼び出すことのできるカード。確かにあのカードがあれば、フィールドが空のこの状況からでも一瞬で最上級モンスターを場に出すことができる。だけどあのカードには、確か発動ターンの光属性以外の展開を禁じる制約があったはず。地属性がほとんどの岩石族で、巨大ネスミまで3積みしているのに光属性モンスター？その疑問に答えるかのように、上空で動きがある。その瞬間、ようやくぴんときた。

「まあ、いつか来るとは思ってたよ？うん」

『随分と遅いお出ましたな』

上空の球体が、ゆっくりと前進する。今まさにぼくとデュエルしているこのカードの精霊が、ついに戦線に直接参加したのだ。

The <sup>ザ・</sup>des<sup>テイ</sup>pair <sup>ウラヌス</sup>URANUS 攻2900

『ウラヌス……？』

「知ってるの、チャクチャルさん？」

『先ほどの話は私も聞いていたが、ウラヌスとは天王星の意。もしあのモンスターがこの世界の主だとしたら、あの仮説もあながち間違っ

てはいないのかもな』

「へー……ま、なんにしたってあれがこの世界のラスボスってわけだ。だったら勝負だ、ぶっ倒す！」

気合を入れ直したところで、球体改めウラヌスの両目がそれぞれ赤と緑に光を放った。どうやらこの2色の中から1つを選べ、と言いたいらしい。赤と、緑？どちらを選んでもろくなことにならなさそうではあるが、選ばなければいけないというのなら……まあ、適当でいいか。

「せっかくだから、赤で」

そう言った瞬間、巨人のデュエルディスクから1枚のカードが飛び出す。そのカード……安全地帯をこちらに見せてから、フィールドにセットする。なるほど、赤……つまりトラップをアドバンス召喚の時にデッキから直接場に引っ張ってこれる能力があるわけか。緑って言うってたら魔法カードを引っ張ってきたんだらう。これはなかなか厄介だ。破壊からモンスターを守る安全地帯というのがとくに。

「むん……」

だが、このターンはこれ以上動かない。当たり前だ、せっかく出したところ悪いけど攻撃力はこっちの方がまだ上回っているんだから。さらにカードを1枚伏せたのみで、あつさりとターンを渡してきた。

「僕のターン、ドロー」

「むん……」

「このタイミングでマインドクラッシュ……？」

宣言したカードとその同名カードを相手の手札からすべて叩き落とすトラップ、マインドクラッシュ。使うにしても、なぜこのタイミングなのか。一体何をしたいのかわからない。ただこの宣言が必要なカードをどうやって口の無いコイツが扱うのかと見ていると、頭の中にカードのイメージが伝わってきた。この黄色い姿は……グレイドル・イーグルか。確かにさっきサーチしたのはウラヌスも見ていたわけだし、狙いどころとしては無難だろう。そしてまずいことに、僕が今引いたカードはよりにもよって2枚目のイーグル……あちらさんとしては思わぬ幸運だろうが、まんまと1：2交換をさせてし

まった。

『それもあるが、これでグレイドル・インパクトの効果はまた使えなくなっただな』

「あっー！」

確かに、僕の手札のグレイドルカードがなくなってしまったことでこのターンもグレイ・レクイエムは使えない。そのままでは自身と安全地帯を守ったところで、残りライフたかだか100のウラヌスでは次の攻撃を耐えきることができないだろうに。

わざわざ無意味なことにごここまでくだわるわけもないし何かがあるのだろうが、その何かが分からない。仕方がない、とにかくこの攻撃が通れば僕の勝ちだ。

「迷ってたってどうにもならないね。バトルだ、もう1度白夜龍で攻撃！孤高のウィンター・ストリーム！」

「むん……」

安全地帯がウラヌスを対象に発動され、破壊耐性を手に入れる。だけどそんなことしたところで戦闘ダメージは通る、このブレス攻撃で終わりだ……だが次の瞬間、信じられない出来事が起きた。攻撃を仕掛けたはずの白夜龍が、渾身のブレスを耐えきられた上に反撃の怪光線を受けて力なく地面に落下したのだ。

「なっ……！ブルーアイスっ！」

青氷の白夜龍 攻3000(破壊)↓The despair U  
RANUS 攻2900↓3200

清明 LP1400↓1200

「なんで攻撃力が……安全地帯に打点アップなんて能力はないはずなのに……！」

『ウラヌスのさらなる効果か。魔法罫が発動されるたびに攻撃力が上がるのだとしたらマインドクラッシュがトリガーになっっていないのはおかしい、となると恐らくは表側で存在する魔法罫の数だけ攻撃力が上がる能力、といったところか』

チャクチャルさんの冷静な分析のおかげで、僕にもウラヌスの能力が次第に見えてきた。まず召喚成功時にデッキから魔法か罫を相手

に選ばせてその種類のカードを直接セットする能力、そして表側表示の魔法・罠に対応して300ポイント単位で攻撃力を上げていく能力。一筋縄じゃない相手なのはよくわかったけど、とにかくこのターンは守りを固めないとダイレクトアタックを喰らってしまう。

「ツーンヘッド・シャークを守備表示、エンドフェイズにインパクトの効果でグレイドル・インパクトの2枚目をサーチ、ドール・コール……」

ツーンヘッド・シャーク 守1600

ウラヌス LP100 手札：1

モンスター：The despair URANUS（攻・安全地帯）

魔法・罠：安全地帯（ウラヌス）

清明 LP1400 手札：2

モンスター：ツーンヘッド・シャーク（守）

魔法・罠：グレイドル・インパクト

いや、まだだ。お互いにギリギリの戦いになっては来たが、まだ終わったわけじゃない。

「むん……」

幸いにも、ウラヌスもこのターンでモンスターは引けなかったらしい。代わりに、引いたカードをそのまま発動した。

「装備魔法、ジャンク・アタック……！」

装備モンスターが戦闘でモンスターを破壊するたびに、そのモンスターの攻撃力の半分のダメージを与える装備魔法、ジャンク・アタック。一見すると地味ではあるが、モンスター同士の殴り合いではこのバーンは意外と効いてくる。そしてウラヌスの攻撃力は、チャクチャルさんの推理通り永続カードが増えたことでさらに上がる。

The despair URANUS 攻3200↓3500

「むん……」

The despair URANUS 攻3500↓ツーンヘッ

ド・シャーク 守1600（破壊）

清明 LP1400↓800

ツーンヘッド・シャークの攻撃力は1200、その半分で600ダ

メージ。僕のライフでは、この程度のダメージすらかなり痛い。けど、なんとかこのターンをしのぐことができた。さあ覚悟しろよ、安全地帯に守られているウラヌスは無理でも、それを守る安全地帯を直接吹き飛ばしてやる。

「僕のターン、2枚目のグレイドル・インパクトを発動。そして1枚目のインパクトの効果で、今発動したインパクトと安全地帯を破壊！グレイ・レクイエム！」

再び怪光線が乱舞し、ウラヌスを守る安全地帯という壁の排除にかかる。安全地帯は強力だがその反面自身が除去された時に守っていたモンスターも一緒に破壊されてしまう諸刃の剣、これでウラヌスもまとめて撃破だ。

「あれ……？」

だがそんな希望も、脆くも崩れ去る。ウラヌスの体が盾となり、安全地帯までこちらの光線が届かずに霧散したのだ。

『存在するだけで魔法・罠に破壊耐性を与える効果……？』

「そんな効果まで……どうすりゃいいってのさこれ！」

ウラヌス以外のモンスターが出てこないというのなら、このままこちらがモンスターを出さなければ安全地帯のもう1つのデメリットによりダイレクトアタックされることはない。だけど、現実にそんな可能性はあり得ないだろうから現実的じゃない。かと言って半端にモンスターを出したところで、ジャンク・アタックの餌食になるだけだ。

八方ふさがりか、と思ったところで、まだドロウしてから見ていなかったカードの存在を思い出す。……そうだ、まだ僕にも希望は残っている。このカードが、真正銘最後の賭けだ。

「魔法カード、手札抹殺を発動。たがいに手札を全部捨てて、その枚数ぶんだけカードを新しくドロウする！」

僕の手札は、手札抹殺を除くとたった1枚。つまり、ドロウできるのもたったの1枚。この1枚が最後の記望、これに全てがかかっている。このピリピリする緊張感、実はあんがい嫌いじゃない。一度深呼吸して気持ちを整え、スツとデッキトップに手を乗せる。

「はああああっっ！」

気合一閃、たった1枚のカードを引きぬく。感じる、僕のデツキから伝わってくる鼓動を。そうだ、これだ。このカードなら……！

「僕はこのターン、このカードを召喚する！天をも焦がす神秘の炎よ、七つの海に栄光を！時械神メタイオン、降臨！」

瞬間、炎が踊る。時械神の名を冠する、僕のチャクチャルさんと並ぶもう1つの神。メタイオン先生が降臨したのだ。

時械神メタイオン 攻0

「ウラヌスに攻撃、ケテルの大火！」

時械神メタイオン 攻0↓The despair URANUS  
S 攻3500

「メタイオン先生によるバトルではダメージが発生せず、このカードは戦闘で破壊されない……だけどその効果発動、時械神がバトルを行ったことにより世界のモンスターは全て創生される！自分以外の全モンスターをバウンスし、その数1体につき300ポイントのダメージ発生！」

安全地帯と言えども、対象を取らないバウンス効果までは防ぎきれない。そしてその炎はモンスターをリセットするのみならず、相手プレイヤーを焼く力がある。

ウラヌス LP100↓0

「っしやあっ！」

ウラヌス、さすがに御大層な名前してるだけあってかなりの強敵だった。そして、腕のデスベルトがまた光を放つ。デュエルで足止めをした時点でこうなることはわかってたけど、だからといってこれはどうしようもない。ぜいぜいと荒い息を吐いて地面に座り込んでいると、上空のウラヌス本体もまた支えを失ったかのようにゆっくりと落ちていくのが見えた。ズン、という腹に響く低い音がして、その巨体が落下の勢いで半分ほど柔らかい砂に埋まる。あの様子を見る限り、やはりデュエルで負ける＝死に繋がるというのは天王星の名を冠



するあのモンスターであつても例外ではないようだ。

『もう害を及ぼすことはない。せめて最期を看取ってやつたらどうだ、マスター』

チャクチャクさんの厳かな口調に後押しされ、疲労の余り痛む全身をどうにか動かしてウラヌスの落下地点まで歩く。1分と歩かないうちに、その体に触れる事さえできるような位置まで近づいた。

「せめて静かに眠ってもらいたいね……あれ？」

その位置まで来て、初めて気が付いた。ウラヌスの前面は特に傷もないのだが、ちょうどデュエル中には見えなかった背面にかなり大きな、しかも深い傷がついている。精霊の体がどれほど頑丈な物かは知らないが、僕らの世界の生き物を基準に考えればこれはどう見ても致命傷だ。しかもこの傷、古いものじゃない。かなり新しい、まだやられてから1日と経っていないような新しい傷だ。

「二体……」

誰が、と言おうとした言葉は続かなかつた。ウラヌスの傷から見覚えのあるオレンジの光、デュエルエナジーが猛烈な勢いで外に出て行っている。何かに導かれるように流れ出ていくそのエネルギーの行きつく先は、僕らのデュエルをずっと観戦していたオレンジ色の人型。ウラヌスの持つ膨大なエネルギーをすつかり吸い取ったそいつは、スキップでもせんばかりの勢いで校舎へ向けて音もなく進んでいく。

「ま、待てっー！」

この傷の形に見覚えがある事に、その時ようやく思い至った。いまだ倒れたままのレイちゃんも腕にも、まさにこのウラヌスの傷を縮小したような跡が付いていたんだ。ウラヌスとレイちゃんが同じ奴にやられたとしたら、その相手は恐らくあの得体のしれないあいつだろう。もしかしたらウラヌスはアカデミアを襲おうとしたのではなく、自身に傷を負わせた奴を追ってここまで来たのかもしれない。となると僕は戦う必要もない怪我人を相手に勝負を挑み、それで勝って1人で悦に入っていたことになる。

「クソッ！」

とにかく奴を追いかけなくちゃ……慌てて走り出そうとするも、無視できないレベルで溜まり続けたデスデュエルによる疲労のせいで足がもつれ、無様に顔から転んでしまう。それでもどうにか立ち上がろうとしたところ、背後から誰かが僕を呼ぶ声が聞こえた気がした。振り返ると、ウラヌスの瞳が動いてこちらをはずきりと見つめている。あの怪我に加え今のデュエルエナジー流出で、先ほどとは比べ物にならないほど弱っているのが一目でわかる。ほとんど生気の抜けたその目が、僕に何かを訴えようとしていた。

『マスター……』

「うん、大丈夫。僕にもわかるよ、チャクチャルさん」

何かを喋ってきたわけではないが、何が言いたいのかはなんとなく理解できた。半ば無意識のうちに立ち上がって手を伸ばすと、ウラヌスの目が最後にひととき強い光を放つ。砂に戻って地面と同化しかかっていたウラヌスのデュエルディスクから1枚のカードが解き放たれると、その強大な念動力に支えられて僕の手ひらにふわりと乗った。そのカードに記された名前を、そつと読み上げる。

「The despair URANUS……」

一体ウラヌスは、いかなる思いで僕に文字通り自身の分身であるこのカードを託したのだろう。自分の命を奪う一因となった『奴』に無念の復讐を託したのか、何か自分の命のあかしを世界に残したかったのか、自分を倒した相手である僕に対しての敬意の表れのつもりだろうか。いずれにせよ、それがどんな思いであれ。

「僕も地縛神の使い手、地縛神官の端くれさ。その思いは確かに受け取った、The despair URANUSは決して消えさつたわけじゃない。僕とこのカードの中で、生き続ける」

その言葉を聞くと、満足そうにそつと目を閉じる。吹き抜けた一陣の風が足元の砂を巻き上げ、目に入った砂をぬぐった時にはもうウラヌスの巨体は跡形もなくなっていた。ただど今のデュエルが夢じゃない証拠に、僕の手元にはウラヌスのカードが残されている。

『そのカード、本人の魂の一部が宿っているな。厳密にマスターの目の前にいるのと同じ個体ではないだろうが、何かの拍子に精霊として

覚醒することも十分ありうる』

「そうなの？」

いつか、このカードからも精霊が出てきてくれるのかもしれないのか。だとしたら、それはちよつと嬉しいな。

だけど、今はそのことをいつまでも考えている暇はない。一刻も早く十代達と連絡を取らないと、どう考えたってこのままで終わるはずがない。まだ少しだるい体にムチ打って、校舎に向かって歩き出した。

## ターン86 冥府の姫と白き魂

遊野清明が別の次元における天王星でウラヌスと、ひとりぼっちの死闘を繰り広げていた——その少し後。かつてデュエルアカデミアが存在していたその場所を前に、静かに立ちすくむ人影があった。

「清明……」

白を基調としたアカデミア女子特有の制服に、肩までかかる青い髪。校舎という障害物が消えたことで島の向こう側からダイレクトに吹き付ける海風にその髪を揺らされながらも、特に気にした様子もなく立ち続ける。彼女の名は河風夢想……SAL研究所攻略の際には暴走したあげく行方不明となった清明を探すため、単身島中を探し回っていたことでたまたま大規模な校舎の神隠しの難から逃れる格好となった幸運な生徒の1人である。

「……」

ふと彼女が上を向くと、雲1つ無い青空には何機もの飛行機やヘリコプターが旋回している。それを見ながら、おそらくあれは今回の事態を受けて派遣されたデュエルアカデミア親会社、海馬コーポレーションの物だろう、とぼんやりとあたりを付ける。

そして、そんな彼女の推測はただの勘ではない。事実、驚異的な情報統制能力によりこの事件からすでに1日が経過している今でさえあらゆる新聞、テレビニュースにおいてこの事実を揉み消され、ひた隠しにされている……1人や2人ならまだしもこれだけの規模を誇る建物と人数に対してそんなことができる権力があるとすれば、それは海馬コーポレーションぐらいのものだ。恐らく裏では、そうして稼いだこの時間のうちになんとかアカデミアと生徒たちを元に戻す方法はないかと会社お抱えの学者たちが頭を捻っていることだろう。

「よう」

「また貴方？…だつてや」

そんな彼女の背後から、気安く気楽な調子で声がかかる。だが彼女はその声の主を一瞥すらせず、まるで最初から彼がここに来るのがわ

かっていたかのように返答した。先ほどまで誰もいなかったのに、な  
どという当然の疑問すら、その声の調子には含まれていない。

そのまま、たつぷり数秒が経過した。最初に声をかけた男がわざと  
らしく咳払いをすると、ようやく彼女もそちらへと振り返る。

「……」

どこか心ここにあらず、といった様子だった彼女も、さすがに目を  
丸くする。その男は、確かに彼女の記憶の中、つまりは1年前の進級  
前後の時期であり、また修学旅行での童実野町の出来事にあるそれと  
同一人物だ。だが、彼女の記憶と比べてなんと変わり果ててしまった  
ことだろうか。着ている服がいたるところに焼け焦げがつき穴が開  
いているならば、それを着ている男自身はさらに消耗している。痩せ  
こけた頬や服に開いた穴から見え隠れする全身には無数の傷や火傷  
の跡が痛々しく刻まれ、ただ目のみが以前と変わらぬ光を放ってい  
る。気力は衰えていないのだろうか、遠目に見ても今にも限界を迎え  
そうなその体が、ぐらりと揺れた。そのまま倒れそうになるところ  
を、どうにかといった様子で持ちこたえる。

「へへ、ちよつとしくじつちまっつてな。お前相手に誤魔化したって仕  
方ねえからはつきり言うが、俺はもう長くないみたいだ」

「長くない、つて……どういいうこと？早く……医者、に……つて……」  
そういう夢想の声が、次第に弱くなつていく。頭上を飛び回ってい  
るへりに助けを求めようとして、あることによろやく気が付いたの  
だ。つい先ほどまで島全体を包んでいたへりの飛行音が、いつの間  
にかぴたりと止んでいる。へりだけではなく、そこら辺を飛んでいたは  
ずの海鳥の声さえも聞こえない。咄嗟に上を見ると、確かにそこにへ  
りはあった……空中に静止して、ピクリとも動かない状態で。

「……これも貴方が？だつてさ」

思いのほか冷静な声が出た、と彼女は思った。そして、そんな冷静  
な思考をする余裕がある自分にもおや、と思う。明らかに異常な事態  
に巻き込まれているにもかかわらず、なぜ心の中には驚愕の感情が芽  
生えないのだろう。

まるで、この名前も知らない男がこんな状況を作り出すのを前にも

見たことがあるかのように。

「いまさらとぼけんなつての、もうこつちだつて時間は……無駄口叩く余裕は、さすがに俺にも無えな」

それはつまり、肯定ということだろう。神出鬼没なところといい、改めて目の前の男の人知を超えた力を思い知る。それでは、それほどの男がこれほどまでに追い込まれるとは、一体何が起きたのだろうか。そんな目線に気づいたのか、ひらひらとおどけて手を振ってみせる。「お前に関係あるこつちやねえよ。こつちの話だ、仕事のな。それに、もう終わった話だ。転生者の集団は全滅、俺たちの被害は俺1人。結果としちやあ、悪くねえさ」

目の前の男が何を言っているのか、夢想にはまるで理解できない。だが彼はそんな夢想の困惑にまるで気づくことない。というよりも、もはやそこまで注意を払うだけの余裕がないのだろう。よろよろと体勢を立て直そうとした結果ギリギリのところまで保っていたバランスをかえつて崩し、背後の倉庫の壁にもたれかかる形でずると座り込む。彼が背をついた箇所には、本人も気づいていないようだがべつとりと血の跡が付いていた。

「悪いな、今日ここに来たのは他でもねえ。さつきも言った通り、俺はもう長くないわけだが……思えば俺も、長いことデュエルばかりやって来たわけだからなあ。どうせ死ぬなら最後に1回、全力で悔いのない勝負つてもんがしたくなつたのさ。それが、これまで俺と戦ってきたこのデツキに対する最高の供養にもなるだろうしな。となると、俺にとつてその相手は1人しかいないって寸法よ。なあ、う……いや、『今は』河風夢想、だつたか？せつかく次元を越えて会いに来たんだ、最期の頼みぐらい聞いてくれよ」

何を馬鹿な、と言うこともできた。それだけ喋る元気があるのなら、それこそ医者に見せればよさそうなものだ。今ならまだ、助かるかもしれない。もちろん他の誰かが同じことを言いだしたのなら、彼女も問答無用で医者に担ぎ込んだだろう。だが、彼女にはそれができなかった。する気にならなかつた、と言い換えてもいい。目の前の男は何か医学では計り知れないような部分で終わりを迎えようとして

いて、そんな自分の運命を受け止め、今更それに抗うつもりもない。そんな常識で考えてはあり得ないような話が、理屈を超えて納得できたのだ。

「……構えて、つてぎ。デュエルと洒落込みましょう、だって」

だからこそ、彼女はゆっくりとデュエルディスクを構える。消えた校舎と清明たちのことも、目の前の男のひどい怪我也、もはや彼女の眼には入らない。時間の止まったような特殊な世界で、そこにいるのはただ2人のデュエリスト、それだけだった。

「……デュエル」

「俺のターン。魔法カード、ドラゴン・目覚めの旋律を発動。手札1枚を捨てて、デツキから攻撃力3000以上かつ守備力2500以下のドラゴン族モンスターを2体までサーチする。俺が引き込むのはブルーアイズ・カオス・MAX・ドラゴン、そして青ブルーアイズ・シャイニングドラゴン眼の光龍のカードだ」

「ブルーアイズ……」

世界にもたった4枚しか存在しない伝説級のレアカード、青眼の白龍。それをためらいもなく使いこなすこの男の正体も、あのカードが本物なのかそれともカラーコピーのような代物なのかも、最後まで彼女には判別できない。ただわかつているのは今引きこんだその亜種ともいえる2枚が、得体のしれない力を持つカードだろうということだけだ。

「今捨てたモンスター、ホワイト・オブ・レジェンド伝説の白石の効果発動。青眼の卵たるこのカードが墓地に送られたことで、ブルーアイズ・ホワイト・ドラゴンデツキから青眼の白龍を1体サーチする」

流れるように無駄のない動きでのサーチ連打。3枚もの最上級モンスターを手札に抱え込みながらも、まだ先攻1ターン目ということもあつてその全てを展開する気はないらしい。

「青き眼の乙女を攻撃表示で召喚。カードをセットして、ターンエンドだ」

青き眼の乙女 攻0

一見すると攻撃力0のか弱い女性型モンスター、青き眼の乙女。し

かしその恐るべき効果……いささか受動的な面が目立つとはいえ、緩い条件で除外ゾーン以外のどこからでも青眼の白龍を呼び出す特殊能力をこれまでの対戦で知る夢想の表情は硬い。

「私のターン、だつてさ。終末の騎士を召喚して、モンスター効果発動……その発動にチェーンして速攻魔法、手札断札を発動。そしてチェーン3以降にのみ発動できる速攻魔法、サモンチェーンを発動するつてさ。これにより私はチェーン3のサモンチェーンの効果でこのターン通常召喚を3回行うことができ、チェーン2の手札断殺でお互いに手札を2枚捨てて2枚ドロ。そしてチェーン1、終末の騎士の効果でデッキから闇属性モンスター1体を墓地へ」

終末の騎士 攻1400

サーチの連打に対抗するかのように、チェーンの乱舞を使いこなす夢想。だが、彼女の狙いはむしろここからが本番といえる。

「私が墓地に送ったカードはワイトプリンス、このカードは墓地に送られた時デッキからワイトとワイト夫人を1体ずつ墓地へ送る、つてさ。そしてその効果が、さらに1回……手札断殺で墓地に送った2枚のカードのうち、1枚は龍骨鬼。だけでもう1枚は、2体目のワイトプリンスなんだつて」

「そしてワイトプリンスとワイト夫人は墓地でのカード名をワイトとして扱う……おいおい、もうワイトが6枚かよ。前の時よりさらに殺意が上がってんな」

「まずはこの子で……ワイトを召喚、だつて」

ワイト 攻300

颯爽と地面から骨の腕を突き上げ、墓の下から出てくるかのように召喚されたのは、骸骨たちを束ねる骨の王……ではなく、墓地に送られずにまだ1枚だけ残っていた通常モンスターの方のワイト。守護者の矛が手札にあれば彼女もそれを使いワイト本体をアタッカーにするところだが、あいにくとそのカードはいまだ引き込めていない。「魔法カード、馬の骨の対価を発動。自分フィールドの通常モンスターを墓地に送って、カードを2枚ドロするつてさ」

カードを2枚引きながら、心の中で7体目、とカウントする。手札



断殺と馬の骨の対価……彼女にしては珍しく、2度にわたる手札交換を行った末に満を持して、狙っていたカードが手札に加わった。

「これできっかり3回目の通常召喚。おいで、ワイトキング。だってさ」

またもや地面を突き破り、地中から骨の腕が虚空に突き出される。先ほど現れてすぐ消えたワイトと動きそのものは同じ……だが、その肉のこそげ落ちた腕に込められた力は、一目見ただけでもそうとわかるほどの違いがある。

「ワイトキングの攻撃力は、墓地のワイトと自分の同名モンスター1体につき1000、だって」

ワイトキング 攻0↓8000

「ははっ、やるじゃねえか。だけど、その打点一本槍のモンスターでどうやって乙女の効果を潜り抜けるんだ？」

口ではそう言いながらも、その口調に相手を舐めた部分はない。何か手を打ってくるであろうことに気づいたうえで、あえて聞いているのだ。だから彼女も、素直に笑って残りの手札をデュエルディスクに置く。

「このターンで決めるから、って。魔法カード、強制転移を発動！私の終末の騎士と、貴方の選んだモンスター1体のコントロールを入れ替えるんだって」

そのための切り札こそが、まさにこのカード。どんなモンスターが相手の場に居ようとも、こちらから攻撃目標を送り出してしまえばその守りは一瞬で瓦解する。彼女にとって大切なのは乙女を処理することではなく、終末の騎士を送りつけること。攻撃力1400の終末の騎士では、7000もの一撃には耐えきれない。

「なるほど、そう来たか」

「……？」

だが、男の表情にまだまだ絶望や焦りといった色は浮かんでこない。恐らく、あの1枚だけ存在する伏せカードにその秘密があるのだろう……が、さすがの彼女も伏せカードが怪しいからといって即座にそれを破壊できるカードが引けるわけではない。いつまでも残しておく

よりは、いつそ今使わせる方がいいだろう。彼女の決断は早かった。「バトル、だって。ワイトキングで、終末の騎士に……」

「リバース発動、ホーリージャベリン！ 相手モンスターの攻撃時、その攻撃力はそのまま俺のライフに加算される！」

ワイトキング 攻8000↓終末の騎士 攻1400（破壊）

男 LP4000↓11000↓5400

ワイトキングの拳は半透明な光の壁によって遮られ威力を減衰し、そこから伝わるエネルギーが生命力となって辺りに満ちていく。一撃でゲームエンドまで持ち込むことも可能な大火力が、むしろ足を引っ張る結果となったかたちである。

そしてこのターンで決め切れなかった以上、夢想の場には彼女にとつてはなんの役に立たない乙女と、一応戦闘破壊時に蘇生できる効果こそあるもののここまで成長した今となつてはそんな耐性もないよりはマシ程度の役にしか立たない打点一本のワイトキングしかない。少しためらった末、ここは安全策を取ることにした。

「魔法カード、一時休戦を発動。デッキからお互いにカードをドロウして、次の貴方のエンドフェイズまであらゆるダメージは0だつてさ。私はこれでターンエンド、だって」

「おっと、ならエンドフェイズに墓地から太古の白石の効果発動だな。もうひとつの青眼の卵たるこのカードは墓地に送られたターンのエンドフェイズに孵化し、デッキからブルーアイズと名のつくモンスター1体を特殊召喚する効果を持つ。俺が呼び出すのは本家本元、青眼の白龍！」

瞬間、止まった時の中で無音のうちに光が爆発する。その一瞬後、轟く羽音とともに伝説とまで呼ばれる龍……その姿が、アカデミアの空を彩った。

青眼の白龍 攻3000

男 LP6400 手札：5

モンスター：青眼の白龍（攻）

魔法・罫：なし

夢想 LP4000 手札：1

モンスター：ワイトキング（攻）

青き眼の乙女（攻）

魔法・罨：なし

「さて、俺のターンだな。魔法カード、トレード・インを発動。手札にいるさつきサーチした青眼をコストに、カードを2枚ドロウだ。よしよし、デビル・フランケンを召喚するぜ」

物々しい武装に身を包んだ、でもどこか古風な印象のする重火器満載の人造人間。だがそれも道理、このカードはデュエルモンスターズ黎明期から融合モンスターを時に禁止カードとして、時に制限カードとして眺め続けてきた歴戦の勇者ともいえるモンスターである。

デビル・フランケン 守500

「そのカードは、まさか……」

「そのままかだぜ。デビル・フランケンの効果発動、俺のライフポイント5000をコストとしてエクストラから融合モンスター1体を攻撃表示で特殊召喚できる！ブルーアイズ・アルティメット・ドラゴン青眼の究極竜！」

1つの体に3つの頭を持つ、デュエルモンスターズ全てのカードと

- いうくりの中で見てもいまだに効果のないモンスターの中では最大にして最強の固定攻撃力を持つ、世界中にも海馬瀬人の持つただ1枚しか存在しないはずのレアカード……これまでの彼のデュエルにおいては表に出てくることのなかった、進化した青眼の姿がここにあった。

男 LP6400↓1400

青眼の究極竜 攻4500

「まだだ！魔法カード、バーストストリーム滅びの爆裂疾風弾を発動！このターン青眼の白龍の攻撃が封じられる代わりに、相手モンスターをすべて破壊する！」

「きやあつー！」

フィールドの青眼がその口を開き、全てを消し去る光のブレスが視界を埋め尽くす。ワイトキングが、青き眼の乙女が、まるで最初から存在しなかったかのように消えさった。

「露払いはばっちりだな。儀式魔法、カオス・フォームを発動！俺は

フィールドからレベル8の青眼の白龍をリリースし……太古の混沌に湧き上がる力秘めし蒼の瞳よ、根源の雄叫びと共にその翼翻し、深淵の淵より降臨せよ！ブルーアイズ・カオス・MAX・ドラゴン！」

青眼の姿が、リリースされたことで一度消える。次の瞬間、大地がその奥深くから碎け吹き飛んだ。地面に開いたその穴から現れたのは、儀式により地中奥深くに眠る混沌の力を取り込み、より攻撃的に爆発的な進化を繰り返した青い眼の龍。瞳の青はさらに深く鋭くなり、触れただけですべての敵を引き裂きそうなその皮膚からはいたるところから湧き上がる混沌の力が発光体となつて表面に具現化する。体そのもののサイズも先ほどからは一回りも二回りも巨大化し、並び立つ究極の名を冠した竜に勝るとも劣らないほど巨大なドラゴンへと変貌していた。

ブルーアイズ・カオス・MAX・ドラゴン 攻4000

「これだけじゃまだ終われねえ、終わらせられるわけがねえ。究極竜よ、お前の魂は貫つてくぜ。俺は青眼の究極竜をリリースすることで、手札のこのカードを特殊召喚する……さあ、現れるがいい。全てを消し去る光の龍、青眼の光龍！」

究極の竜が、3つの首で天を見据えてその翼を広げ大空へ飛び立つ。雄大に宙を進む竜は輝きながら天高く昇って行き、天頂に達したところでその動きを止め……そして、またもや光が弾けた。やがて空の色が元に戻った時にはもはや究極竜の姿はどこにもなく、そこにいたのはより高次元の存在となった龍。シルバーメタリックの体は動かない太陽の光を反射して神々しく輝き、胸の部分に新たに加えられた澄んだ青い水晶体はそれ自体が呼吸しているかのようにその蒼の深みが刻一刻と変わっていく。

「このモンスターの攻撃力は、俺の墓地のドラゴン族1体につき300ポイント上昇する」

青眼の光龍 攻3000↓4500

今この男の墓地に存在するドラゴン族でその存在が確認できているのは伝説の白石と太古の白石、青眼の白龍と青眼の究極竜の4体。恐らく、手札断殺の際手札から太古の白石と同時にもう1体別のドラ

ゴンを墓地に送っていたのだろう、と頭の中で見当をつける夢想。あの新たなドラゴンには、手札1枚を消費してさらに究極竜を墓地に送るだけの隠された効果があるのだろうか……と、そこまで予想する。「手札から、青眼のブルーアイズ・オルタナティブ・ホワイト・ドラゴン 亜白龍の効果が発動！このカードは通常召喚できず、手札の青眼の白龍を相手に公開することで特殊召喚できる！」

海を割りその中から水柱と共に舞い上がる、第3の龍。一時休戦の生きているターンだからかろうじてその攻撃は抑えられるが、この先それが続く保証は……ない。

青眼の亜白龍 攻3000

「ダメージが通らないんじゃない。ターンエンドだ」

攻撃力4500の光龍に4000のカオス・MAX、そして3000の亜白龍。それぞれいまだその効果を明らかにしてはいないが、そのどれもが一騎当千の圧倒的な力を持つ、いずれ劣らぬ化け物ぞろいであることはこのソリッドビジョンであってもなお衰えない全身から立ち上るプレッシャーからも見て取れる。

そしてそんな威圧感を前にして、彼女は畏れるのではなく、ただの少しも気負わずに。果たして本人も気づいているのかいないのか、その口元をうつすらと、強者と出会えた喜びに綻ばせすらしながらに。

「私の、ターン。……ドロー！だって」

何の躊躇いも起こさずに、ただ自らの前に広がる勝利のみへと手を伸ばす。

「魔法カード、ドラゴンス・ミラー 龍の鏡を使うよ、つてさ。墓地のモンスターを素材として、ドラゴン族の融合モンスターを呼びだすカード……私はワイトキングと龍骨鬼、この2体のモンスターをゲームから除外。冥府の扉を破りし者よ、其には死すらも生温い……融合召喚、冥界龍 ドラゴネクロ」

空が割れて、青眼の光龍が舞い降りた。大地が割れ、カオス・MAXがその姿を見せた。海が割れ、亜白龍が現世に現れた。ならば、冥府の龍はどこから現れる？知れたことだ、その名の示す場所はただ1つ。何もない空間にひびが入り、粉々に砕けた世界の向こう側には1

つの門。その扉がゆっくりと開くと、向こう側の世界に溢れていた大量の瘴気が現世へと溢れ出る。そして、その向こうに巢食っていた冥府の龍もまた目を覚まし、新たな獲物を求めて冥府の門を超える。

冥界龍 ドラゴネクロ 攻3000

ドラゴネクロは戦闘で相手モンスターを破壊せず、代わりにその魂を抜き取って自らの戦力とする特殊能力を備えている。カオス・MAX・ドラゴンにでも自爆特攻を行い、攻撃力4000ものダークソウル・トークンを呼び出せば勝利は確定する……そこまで考えたところで、もう1枚残った手札に目が行った。このまま攻撃すれば勝利は確定している以上、わざわざこのカードを使う意義はどこにもない。ない、はずなのに。

「はあ、はあ……」

「うん？なんだってんだ……？」

息が荒くなる。頭が、締め付けられるように痛む。自分の中の何か、このカードを使えと言っている。その衝動は収まるどころかどんどん強くなっていき、それに伴い次第に意識が遠くなっていく。そしてついに、その時が来た。

「お、おい……」

突然の異常に何かを言おうとした男の目が、驚愕に染まった。一瞬の沈黙ののち、ゆっくりと歓喜の色がその顔に広がっていく。彼が見たものは現実なのか、それとも大量出血による衰弱が見せた死の淵の幻影なのか。

「私は魔法カード、アドバンスドローを発動。レベル8以上のモンスター、ドラゴネクロをリリースすることでカードを2枚ドロウする！」

喋っているのもそこにいるのも、間違いなく河風夢想だ。だが、低レベルが身上的のワイト使いである彼女のデッキにレベル8以上のモンスターを要求するアドバンスドローの入る余地などあるのだろうか？少なくとも彼女自身に、そんなカードを採用した覚えはない……では、今デュエルしているのはいったい誰なのか。今使われている手札は、そしてその腕に装着されたデッキは一体誰のものなのか？

「フィールド魔法、ダークゾーンを発動！この効果により闇属性モンスターは500ポイントアップし、守備力は400ポイントダウンする」

いまだ開き続けている冥界の門から流れてきた瘴気は世界を埋め尽くし、先ほどまで晴れていた空も風いでいた海も地獄と見まごうほどに荒れている。そんな中3体の青眼のみが、まるでそれに反抗するかのようにいまだ変わらぬ光を放っていた。

デビル・フランケン 守500↓100 攻700↓1200

ブルーアイズ・カオス・MAX・ドラゴン 攻4000↓4500  
守0

「チューナーモンスター、劫火の舟守 ゴースト・カロンを召喚！」

木製の船に乗った、現世と地獄を隔てる川を繋ぐことのできる力を持った異形の船守。ランタン代わりに鬼火を灯し、冥界の門を抜けてその船が現世へと流れ着く。無論、このカードも夢想自身がデッキに入れた覚えはない。

そもそも、今デュエルを続けている彼女は何者なのだろうか。かつての事故を機に自分の意思で言葉を発することができなくなったはずの夢想が今や普通に言葉を発していることを、彼女自身は自覚できているのだろうか。

劫火の舟守 ゴースト・カロン 攻500↓1000 守0

「ゴースト・カロンは自分フィールドにこのモンスターしか存在しない時、自身と墓地の融合モンスターを素材としてエクストラデッキからシンクロモンスターを特殊召喚できる。冥府の大河の流れを紡ぐ、永久の嘆きが此岸に響く。ステュクスシンクロ……冥界濁龍 ドラゴキュートス」

冥府の門を叩き割って現れた荒ぶる白き龍は、その名をドラゴキュートスという。ドラゴネクロが冥界の中でも特に現世に近い場所である河であるステュクス、そしてその最下層を流れる河キュートスの環境に順応して亡者の嘆きをその身に浴びつつその魂を取り込み、自己強化の果てにたどり着いた嘆きの龍。

冥界濁龍 ドラゴキュートス 攻4000↓4500 守200

0↓1600

「は……ははっ、こいつは、こいつは凄げえ！」

心底おかしそうに、そしてどこか嬉しそうに大笑いする男。その笑い声が響く中、ドラゴキュートスの胸に着いた幽鬼の口がゆっくりと開いた。

「バトル。デビル・フランケンに攻撃、冥界ゴースト・ストリームの幽鬼奔流！」

最初のターゲットは、ちっぽけな人造人間。そちらに目を向けることすらなく幽鬼の奔流が放たれると、その小さな命は一瞬で握りつぶされた。

冥界濁龍 ドラゴキュートス 攻4500↓デビル・フランケン  
守400（破壊）

攻撃は終了した。しかしドラゴキュートスは、次なる獲物の嘆きを求めてもう1度その首をもたげる。

「この瞬間、ドラゴキュートスの効果発動。戦闘で相手モンスターを破壊し墓地に送ったならば、もう1度の連続攻撃が可能となる。次の獲物はあれ……青眼の光龍に攻撃、冥界ゴースト・ストリームの幽鬼奔流」

「はははっ……いいぜ、迎え撃て青眼の光龍！シャイニング・バースト！」

今度の獲物は、デビル・フランケンほど簡単にやられる気はないらしい。冥界の力を得た幽鬼のブレスと、光り輝く退魔のブレスが正面からぶつかり合った。双方のブレスはどちらもその勢いが衰えないばかりか、次第にその力が増していく。そしてその力の拮抗が限界を迎えた時、中心で爆発が起きた。

冥界濁龍 ドラゴキュートス 攻4500↓青眼の光龍 攻4500（破壊）

「うおおっ！」

ドラゴキュートス、いまだ健在。では、もう1体のドラゴンは？全身全霊を注ぎ込んだそのブレスは、青眼の光龍からその命すら奪っていた。もはや体を浮かべることすらできず、力なく白き龍が落下する。その全身は次第に黒ずんでゆき、地面に落下する前に灰となって風に消えた。



「ドラゴキュートスは戦闘で破壊されない。ブルーアイズ・カオス・M  
AX・ドラゴンに攻撃、ゴースト・ストリーム冥界の幽鬼奔流」

「けっ……混沌のマキシマム・バースト!」

通常ならば相打ちとなるほどの戦いを経ても、幽鬼の追撃はいまだ止まらない。混沌の龍が全身から破壊の光を拡散させて迎え撃とうとするも、その一撃はもはや遅い。

冥界濁龍 ドラゴキュートス 攻4500↓ブルーアイズ・カオス・MAX・ドラゴン 攻4500 (破壊)

あれだけたくさんいた青眼も、残るは亜白龍ただ1体のみ。ドラゴキュートスの破壊の嵐は、フィールド全てを殲滅するまでは終わらない。

「……いいぜ、来いよ」

「青眼の亜白龍に最後の攻撃。ゴースト・ストリーム冥界の幽鬼奔流」

冥界濁龍 ドラゴキュートス 攻4500↓青眼の亜白龍 攻3000 (破壊)

男 LP400↓0

「……ああ、わざわざ手間掛けさせて悪かったな。もうこれで、悔いはねえよ」

全てのソリッドビジョンが消え、止まった時の中で再び青空が戻ってきた。そんな空を眺めながら、男が体勢を直す。夢想……いや、その彼女もまた、返答代わりに軽く頷いた。もしかしたら何か言おうとしたのかもしれないが、男が先にそれを押しとめた。

「まったくよ、最後の最後まで勝てないだもんなあ。でもま、最後の最後に最高の思い出ができたぜ。……悪い、消えるトコ見せたくねえんだ。時間が動くまで、あっち向いててくれねえか」

最後に一度だけ、片手を上げて。彼女が言われたとおりにした瞬間、頭上で再びヘリのプロペラ音が鳴りだした。すぐさま振り返ると、もうそこには誰もいない。それを確認したことでほんの少しだけ表情を沈め……彼女もまた糸が切れた操り人形のように、その場に気

を失って倒れた。

のちに頭上を行き交うヘリのうち1機に救助された時にはすでに、夢想の中からその記憶は抜け落ちていた。彼女が覚えていたのは、ドラゴネクロを融合召喚したら頭痛がしたところまで。まさか青眼を使う男とデュエルしていました、なんて話を正直にするわけにもいかない。ので適当に誤魔化しはしたが、その間も彼女の心は晴れなかった。救助してくれた人たちの、彼女は学校が消えているのを改めて見たショックで気絶したのだろう、と勝手に解釈したのがいい方に出てあまり深く追求されなかったのは幸いだったろう。

そんな彼女の一日の裏で、砂の異世界では次なる異変が密かに進行していた。

## ターン87 鉄砲水とゾンビ軍団

十代ラブを唱えて止まないオレンジの人影を追って、校舎に入り込む。違和感は、自動ドアをくぐった最初の一步の時点ですでに立ち込めていた。

「あれ……?」

野生のモンスターを警戒するために、この辺りには余裕のある生徒を中心に臨時の警備隊が配置されていたはずだ。なのに、今のロビーには人影どころかアラオー匹いない。そういえば、ついさっきまでの僕とウラヌスのデュエルにも、あれだけ派手にデカいのとやりあっていたんだから出てきてしかるべきのギャラリーが1人も出てこなかった。

様子がおかしい。ウラヌスとのデュエルにかかった時間は、せいぜい30分と経っていない……そのタイムラグの間に、ここの警備隊が全員退避せざるを得ないような何か起きたんだ。まだ手に持っていたトランシーバーに、周囲に気を配りながら声を張り上げる。

「十代!十代!聞こえてんなら返事してくれろ!」

建物の中に入ったせいもあってか、どうも電波の調子が悪い。一度外に出て、連絡だけ取ってから出直すか……なんて考えたところで、ふらふらとこちらに歩いてくるライエロー生徒に気が付いた。

「なんだ、皆いるんじゃない。駄目だよ勝手に持ち場離れちゃー」

『清々しいまでに自分のことは棚に上げたな、マスター』

「(ああしなきや校舎は今頃瓦礫の山だったろうしねえ。今回の僕は流石にノーカンでしょ)」

言い合っている間にもその彼は前かがみな姿勢のまま、特に何か喋るでもなくふらふらと近寄ってくる。一言も喋らないままついに3メートルほどの距離にまで近寄ってきたところでようやく顔を上げるとその目の周りにはこれでもかといわんばかりに隈がかかっており、貼り付けたような不気味な笑顔とのギャップのせいで余計に薄気味悪い表情に見える。

「どつたの、何か落ち込むことでもあった?……なーんて、そーいう感

じじやなさそう……だね」

「……エル……」

「あー？エル？」

「デュ……エル……デュエル……！」

聞き取れないほどの声で喋るので思わず聞き返すと、腕に装着したデュエルディスクを起動させながらも少し大きな声で言い直された。デュエル？僕と？見たところこの彼にもデスベルトは装着されているし、はつきり言っただけ目も言動も正気の沙汰とは思えない。

「売られた喧嘩はなんとやら、だけど悪いけど今回はパスで、ね」

「デュエル……！」

しかし、なおもしつこく食い下がってくる。まるで話が通じない、というか全然会話にならない。どうやらこれは、腹くくって1戦やるまで放してくれなさそうだ。

「うー……ったく、後悔しても知らないよ？」

一歩下がってデュエルディスクを起動させると、ニヤニヤと笑いながら向こうも電源付けっ放しのデュエルディスクをそのまま構える。なんだかさっぱりわからないけど、とにかく早く終わらせて皆を探そう。というか、ウラヌスとのデュエルでこっちも割とへとへとだからあまり長引かせることはできない。

「デュエル！」

「えへ、えへ……」

何が嬉しいのか、ニタニタと笑いながら自分のことを指さす。ああ、もしかして先攻が取れたことに対するリアクションなんだろうか。

「俺は、こいつを……召喚」

異次元への案内人 攻1400

フードをかぶって顔のよく見えない人型モンスターが召喚され、フィールドに現れた……それはいい。当然のことだ。ただ1点、なぜかそのモンスターが僕のフィールドに現れたということを除けば。

『異次元への案内人は、召喚された時その強制効果によりコントロールを相手に移す……他にも効果はあるが、そもそもこんな序盤に出す

のに向いたカードではないはずだが』

「相手フィールドにのみモンスター……俺は、こいつを、特殊召喚」

チャクチャルさんの疑問の答えは、すぐ明らかになった。僕のカイザー・シースネークやカイザーのサイバー・ドラゴンのような特殊召喚条件を持つモンスターの1体、ギラギランサーだ。

ギラギランサー 攻2200

「カードを伏せて、たーーンエンドオオ」

無駄に伸ばした、妙に腹の立つ発音でエンド宣言を行った瞬間、ギラギランサーの槍が光を放つ。

イエロー生徒 LP4000↓3500

「な、何?!」

『ギラギランサーのプレイヤーは、エンドフェイズごとに500ライフを失う。ただのデメリットだ、無視して構わないぞ』

「あ、そう……んじゃ僕のターン、ドロ―!」

「永続トラップはあつどおおう、群雄割拠だあ」

伸ばした発音というよりもはや1周回ってタイタンみたいになってきたイエロー生徒の発動したカードは、群雄割拠……互いのフィールドに出せるモンスターの種族を1種類のみ固定するロックカードの1種だ。普段ならそんなものたいした痛手ではないが、今僕のフィールドにはよって戦士族の異次元の案内人がいる。正直なところ、邪魔でしようがない。

「えーつと、えーつと……」

もう一度状況を整理する。僕のフィールドにはギラギランサーより攻撃力の低い異次元の案内人1体のみで、これが群雄割拠のどちらかを処理しない限り自前のモンスターを場に出すことはできない。

……いや、待てよ。確か群雄割拠のロックには、一見完璧に見えても穴があつたはずだ。三沢だか稲石さんだったかは覚えてないけど、とにかくどつちかに教えてもらった裏技的豆知識だ。

「僕は、モンスターをセットする!」

よしよし、やっぱりだ。僕のセットしたモンスターはエラーを起こしてデュエルディスクに弾かれることもなく、無事にフィールドに現

れる。群雄割拠はあくまで表側のモンスターのみを単一にするカードで、セツトすること自体に制約は一切かからない。となると僕のデッキにとつて、とにかくモンスターをフィールドに出すことさえできれば群雄割拠のロックなんていいカモにしかならないわけだ。

「魔法カード、シールドクラッシュを発動。このカードの効果で、今セツトしたグレイドル・アリゲーターを破壊！」

怪光線に照らされてアリゲーターのカードが一瞬だけ表を向いた、かと思うとすぐさまどろどろに溶けて銀色の水たまりになってゆく。ここまで来れば流石に次の展開もわかったのだろう、相手の表情が謎のにやつきからほんのわずかに変化した。

「魔法カードの効果で破壊されたアリゲーターは、相手モンスター1体に寄生してそのコントロールを操る。バトル、ギラギランサーと異次元の案内人でダイレクトアタック！」

「うわああああ……」

ギラギランサー 攻2200↓イエロー生徒（直接攻撃）

イエロー生徒 LP3500↓1300

異次元の案内人 攻1400↓イエロー生徒（直接攻撃）

イエロー生徒 LP1300↓0

「いっちょ上がり、つと。ちっ……」

わかりきっていたこととはいえデスベルトが起動し、倦怠感がさらに増す。チャクチャルさんが減るデュエルエンジーをある程度肩代わりしてくれているから持ちこたえられてはいるが、逆に言えばその分が無かつたらもつと早くに倒れてもおかしくはないほど、ここ最近では馬鹿みたいな頻度でデスデュエルをやりすぎた。これ以上無茶をするのは、ちよつと本気で控えたほうがよさそうだ。さすがにここらで一度休憩を挟まない、いい加減辛いものがある。

改めて皆を探そうと背を向けたところで、背後からまたしても声がした。

「デュエル……デュエル……」

「なっ!?!」

たった今倒したはずのイエロー生徒がゆらりとした動きで起き上

がり、デュエルディスクを構えたままの姿勢で迫ってくる。

「冗談じゃない、もうやらな……」

い、と最後まで言い切ることはできなかった。イエローの彼の背後から、いつの間にかほかにも10人以上の生徒がのろのろした動きで起動済みのデュエルディスクを構えたまま僕めがけて歩いてくるのが見えたのだ。

『これ以上続けていると、走って逃げるだけの体力も残らないかもしれんな……』

「僕もそう思うよ。ここはとつとと逃げるに限る！」

さつと反転し、ふらふらと歩いて追いかけてくるだけの集団から距離を取る。なぜか1人も走ってくる相手はいなかったため、小走り程度のスピードでも楽に引き離すことができた。そのまま階段で2階まで駆け上がり、足音を抑えて手近な教室に逃げ込んだ。ドアをきつちりと閉めて僕が入った痕跡を消し、いざというときすぐ出られるように廊下に近い方の机に適当に腰を下ろす。

「と、とりあえずこれで……」

「デュエル……デュエル……」

「んなわけないかあ……」

振り返ると、今まで机の陰に隠れていたのか1人のブルー生徒がのろのろとこちらに向けて歩きだしていた。こいつの顔にも案の定、ひどい隈と貼り付けたような笑い顔がある。出来ればスルーして逃げたいところだけど、あのブルーの顔には見覚えがある。といっても別に直接の知り合いというわけではないが、確かこの学校の陸上部で短距離のエースを張っている奴だ。1階の奴らみたいに歩いてのろのろ来るだけならなんてことはないけど、もし全力ダッシュさせたら爆発力じゃ勝てる気がしない。

となると、やはりこれしかないか。デュエルディスクを構え、せめて早く終わらせてその隙にここを脱出しようと心に決める。

「デュエル！」

今度の先攻は僕。もつともだからといって、特に目立った動きができるわけでもない。

「ハリマンボウを召喚。これでターンエンド」

ハリマンボウ 攻1500

「うわあ、ははは……」

喜びの声らしきものを上げながらブルーの彼が発動したのは魔法カード、ソウルテイカー。相手のライフを1000回復させる代わりにモンスター1体を破壊する、割と癖の少ない通常魔法の除去カードだ。当然そのカードから出た光はハリマンボウを直撃し、そのまま後ろにいた僕にも命中する。

清明 LP4000↓5000

「ハリマンボウ！これでがら空きか、クソツ」

「うおお……さらに、これ……」

空いたフィールドに召喚されたのは、3人1組で申し訳程度の鎧を着て見るからに痛そうな棍棒を担いだ、緑色の戦士。まさしくあれは、ゴ布林突撃部隊だ。そしてその姿が、みるみるうちに教室の天井に届きそうなほど大きくなっていく。あんなエフェクトがカード効果で起きるとしたら、間違いない。装備魔法、巨大化……相手よりライフが下の状態で装備された時、装備モンスターの攻撃力を元々の数値の倍にするという単純明快だがその分強力なカードである。

ゴ布林突撃部隊 攻2300↓4600

「行けえ！」

大きくなったゴ布林による3連撃が、守ってくれるモンスターのいない僕の体を滅多打ちにする。4000以上のダメージを1度に受けて、ライフカウンターの数字もみるみるうちに減っていく。

ゴ布林突撃部隊 攻4600↓清明（直接攻撃）

清明 LP5000↓400

「あ痛つつ……案外やるじゃないの……！」

さすがはブルー、さっきのイエローとは格が違うという訳か。けど今のダイレクトアタックのおかげで、巨大化のデメリット効果が発動する。というのも、あのカードはあくまでライフポイントで下回るプレイヤーが馬鹿火力で1発逆転を狙うのがコンセプトのカード。ライフポイントが逆転した瞬間、その強化は弱体化……それも、元々



の攻撃力を半分にするという強烈なものへと変貌する。

ゴブリン突撃部隊 攻4600↓1150

「ひひひ……」

攻撃力がダウンしたためか、どつと疲れた様子でその場に寝転がりすやすやと寝息を立て始めるゴブリンたち。ゴブリン突撃部隊は、そういうえば攻撃を終えたバトルフェイズ終了時に守備表示になるデメリット効果がある……なるほど、デメリットとデメリットをうまいことかみ合わせて被害を最小限に抑えたわけか。

ゴブリン突撃部隊 攻1150↓守0

「僕のターン！」

幸いにも相手フィールドに伏せカードはなく、このまま一気にけりをつけたところだ。というより、そうしないとこのデュエルの音を聞きつけていつまたこんな奴らが襲ってくるかわかつたもんじやない。戦闘はなるべく回避するに限る。とはいえゴブリン突撃部隊を倒すのにモンスターが1体いるとして、その後さらにあの4000のライフを奪えるほどのモンスターを展開するには……いや、そうか。このカードを使えばいい。

「ウミノタウルスを召喚して、さらに手札からシャーク・サッカーの効果発動。水族モンスターの召喚に成功したことで、このカードは特殊召喚できる！」

ウミノタウルス 攻1700

シャーク・サッカー 攻200

「さらに水属性モンスターのシャーク・サッカーをリリースして、手札からシャークラーケンを特殊召喚！」

シャークラーケン 攻2400

「バトル、ウミノタウルスでゴブリン突撃部隊に攻撃……そしてこの瞬間、ウミノタウルスの効果適用。自分フィールドの水・魚・海竜族すべてに貫通能力を与える！そのままシャークラーケンでダイレクタアタック！」

ウミノタウルス 攻1700↓ゴブリン突撃部隊 守0（破壊）

ブルー生徒 LP4000↓2300

シャークラーケン 攻2400↓ブルー生徒（直接攻撃）

ブルー生徒 LP2300↓0

「はあ、はあ……悪いね、リターンマッチは受け付けないよっ！」

負けたブルー生徒がその場に倒れこむのを確認し、とっとと背を向けて退散する。背後でまた彼が起き上がる気配がしたが、もうこれ以上は構ってられない。

「一体この学校、どうなっちゃったってのさ……！もしもし、もしもし！こちら遊野清明、こちら遊野清明！誰か聞いてたら返事して！」

トランシーバーは依然として雑音を流すのみで、まともに人の声が聞こえてこない。期待を込めてシャカシャカと振ってみるも、当然そんなことで電波状況がよくなるなら苦労は……あ、何か聞こえてきた。

『……ザザ……先輩!?清明先輩なのかドン!?!』

「剣山！イエスイエス、僕だよ僕！今これ何がどうなってるの、ってか皆どこ行っちゃったの!?!」

『まさか先輩、今校舎の中にいるザウルス？そこから体育館までどれくらいかかるドン』

体育館？よくわからないが、ざっと頭の中に学校の地図を思い浮かべてみる。今いる場所がここで、体育館の位置がこの位置だから？今いる場所を大まかに伝え、だいたい5分とかからないはずだと付け加える。数秒の間後、すまなさそうな声がトランシーバーから聞こえてきた。

『なら、申し訳ないけど俺たちは迎えに行けそうにないザウルス。十代のアニキたちはともかく、丸藤先輩も行方が分からないし……先輩、その近くにゾンビ生徒はいるかドン?』

「ゾンビ生徒?」

聞き覚えのない単語ではあるけど、何のことを言いたいのかはよく分かった。ゾンビ、確かに言い得て妙だ。

「あれね。散々相手してへとへとだけど、あれなんなの一体?デスデュエルしかけてくる割に妙に手ごたえ無いし、そのくせ倒してもなんかぴんぴんしてるし」

『詳しいことはわからないけど、安全な場所に着いたらわかっていることだけでもまた説明するドン。とにかく先輩、もう体育館に無事な人たちはほとんど避難しているから、先に行って待ってほしいザウルス』

「りよーかーい。どうにかやってみるわ、んじやまた後で」

そこで通話をやめ、周りにゾンビ生徒がいなかったことを確認する。音が小さいせいで結構大きめの声になってたから、見つからなかったのは本当に運がよかった。あとは、この運が続くことを祈るだけだ。用心しいしい歩いていくと、前の方をふらふら歩くゾンビ生徒がいるのが見えた。幸いまだ気づかれてはいないけど、近くに身を隠せそうな遮蔽物はない。かと言ってこのまま後ろをついて歩くのもリスクが高い。ちようど男子トイレがあつたので、少しの間やり過ごすつもりで中に滑り込んだ。一応個室ひとつひとつも見回って、中にゾンビ生徒が潜んでいないかだけ確かめる。一番最後の個室の奥、掃除用具の入ったドアも念のため開けてみる。

「……!!」

とつさに声が出そうになるのを全力で抑え込むため、口を両手で覆う。個室ならまだしもまさかこんな狭いところには誰もいないだろうと思っていたのに、うずくまって丸まっている人がいたのだ。最初の動転がひとまず落ち着くと、その後ろ姿にはよく見覚えがある。

「翔……?」

「怖かったっス、ずっと隠れてたんスよ……」

体育座りのまま、今にも泣きだしそうな声を上げる翔。そういえば剣山も翔は行方不明だつて言ってたけど、そんなところには隠れてたら見つかるわけもない。でもそのおかげで、外のゾンビたちに捕まえることもなかったんだろう。実際捕まったところでどうなるのかは知らないけど。

「まあ、とりあえず無事でよかったよ。さ、体育館まで行こう」

「体育館……?」

「ああ、聞いてないから知らないか。そりやそうだね、さつき剣山に聞いたんだけど、とりあえず体育館に避難してるんだつてさ。ほれ立つ

て、ここだっていつまで無事かは分かんないんだし」

「うん……そうだね」

なんというか、うかつだったとしか言いようがない。よく知った相手だって先入観があったせいで、うっかり気が緩んでいた。ゆつくりと持ち上がった翔の顔に濃い隈と薄ら笑いが確認できたときには、すでに走って逃げだすには遅すぎた。

「でもその前に、デュエルしようよお……」

「翔、とつくにやられて……!」

「ねえねえ清明君、僕とデュエル」

じりじりとにじり寄る翔から、一歩ずつ下がっていく。背中が壁に着いたところで、少なくともここに留まり続けるのは最悪の選択だということに今更ながらに気が付いた。このトイレの入り口は僕の入ってきた1か所しかなく、位置の関係上窓もない。誰も潜んでいなければある程度安全な場所ではあるのだが、反面ここでぐずぐずしてそれを外のゾンビ生徒に聞きつけられると完全に逃げ道がなくなる。

『そりやあまあ、そうだなあ』

「チャクチャルさん、気づいてたなら一言注意してよ!」

『あんまり堂々と入ってくものだから、てつきり何か策でもあるのかと』

「僕にそんな深いこと考える知能があるように見える!?!」

『……………ふむ』

そこは当然否定するか、せめて即答して茶化してほしかった。そんなたつぷり時間かけて真剣に考え込まれると、その、自分で言い出しといてなんだけどちよつとへこむ。

「おっと、逃がさないよお。デュエル、しようよお」

「ぐ……………」

これ以上ここに留まっていると、このまま翔が大声でもあげたら終わりだ。元気な時ならいざ知らず、わっと集まってくるであろう10人単位のゾンビ生徒全員を起き上がらなくなるまでデスデュエルで叩きのめすだけの余裕はない。

これまで戦った2人の例から考えると、ゾンビ生徒たちはデスデュ

エルに敗れたら確かにその時だけは倒れるものの、またすぐ何事もなかったかのようには蘇る。だけど逆に言えば、そのわずかな時間には隙が生まれる。とすればやむを得ない、デュエルして勝って隙を作り、そこでとつと逃げ出そう。デュエルディスクを構えると、翔もまたにやにや笑いながらデッキをセットする。

「デュエル！」

先攻は……また僕か。まあでも、このカードがあるなら先攻でよかったというべきか。

「ハンマー・シャークを召喚！さらにカードをセットして、ターンエンド」

ハンマー・シャーク 攻1700

いつもならここでさらに展開するところだけど、今日は珍しいことにハンマー・シャークの効果で場に出せるレベル3以下の水属性が手札にいない。ま、そんな日もあるさ。

「僕のターン、ドロゥ。魔法カード、苦渋の決断を発動。デッキからレベル4以下の通常モンスターを墓地に送って、その同名モンスターをサーチ。サイクロイドを墓地と手札に」

翔が愛用するのはその全てが機械族で構成された、デフォルメされたイラストが特徴のピークロイドデッキ。癖がなく使いやすい効果を多く持つ下級モンスターで戦線を維持しつつ、整えた手札からパワー・ボンドで高攻撃力の融合ロイドを召喚して勝負を決めるのが基本戦術だ。おまけに機械族の特権、リミッター解除まで当然搭載している。なので下手に動くと、こちらがワンキルされることさえありうるのだ。だから用心を……。

「ダークジェロイドを召喚、効果発動……。このカードが場に出た時、相手モンスター1体の攻撃力を800ポイントダウンさせる」

「へ？」

そこに出てきたのは、ピークロイドとは似ても似つかぬ8本の手だか足だかわからん部位を持つケンタウロスめいた悪魔。下半身に着いた口から闇の瘴気を吐き出し、ハンマー・シャークを絡め取る。

ダークジェロイド 攻1200

ハンマー・シャーク 攻1700↓900

「翔？タイムタイム、何それ!？」

「えー、何がだい?」

「ロイドは!?ロイドどこ行ったの!？」

「あはははは、変なこと言うなあ。ロイドなら、ここにいるじゃないか……」

そう言っ指差したのは、ダークジェ『ロイド』。いやまあ、いるけど。確かにロイドだけど。名前さえついてりやなんでもいいんだろうかコイツは。そしてまた、地味にいくつかのロイドカードに対応してるところがなんかむかつく。

「バトル、ダークジェロイドでハンマー・シャークに攻撃……」

ダークジェロイド 攻1200↓ハンマー・シャーク 攻900

(破壊)

清明 LP4000↓3700

「へへへへへ、やったやった」

「舐めんな！トラップ発動、激流蘇生！このカードは水属性モンスターが破壊された時にそのモンスターを蘇生し、その数1体につき500ダメージを与える！甦れ、ハンマー・シャーク！」

ハンマー・シャーク 攻1700

翔 LP4000↓3500

「このまま攻撃されると困るなあ……メイン2、悪夢の鉄檻を発動。互いのプレイヤーは2ターン、このカードが場に残る限り攻撃宣言ができない。さらにカードをセットして、ターンエンド」

足元から刺つきの檻が生えてきて、僕の周りを半球のドーム状に囲い込む。なるほど、これでハンマー・シャークからの反撃を止めるつもりか……でもやっぱり、これはビークロイドに入れるカードじゃないと思う。翔め、ゾンビになった時にデッキ改造でもしたのかな。

「僕のターン、ドロロー」

まあ、なんだっていいさ。それよりも、この程度のロックで僕の攻撃を本当に防いだとも思ってるんだらうか。だとしたらそれは舐められすぎだ、このカードの力を見せてやる。

「ハンマー・シャークの効果発動。自分のレベルを1下げて、手札からレベル3以下の水属性モンスター1体を特殊召喚する！来い、氷弾使いレイス！」

ハンマー・シャーク ☆4↓3

氷弾使いレイス 攻800

「そんなにモンスターを並べたって……」

「こつからが本番さ！手札から、真竜皇バハルストスフューラー Fの効果を発動！このカードは自分の水属性を含むモンスター2体を破壊して手札から特殊召喚でき、さらに破壊した2体がどちらも水属性だったなら、追加効果としてフィールドか墓地の魔法・罠を2枚まで除外する権利を得る。悪夢の鉄檻とその伏せカードを除外しろ、ハイドロ・ハウリング！」

強大な水の力を操る真竜の皇、バハルストスが虚空に吠える。その叫びは大気を震わし、エネルギーの暴走により歪んだ時空へと、鉄檻と伏せカードを吹き飛ばしにかかる。除外したカードは……魔法の筒か、危ない危ない。

真竜皇バハルストスF 攻1800

「除外されちゃったよー。でもまだ、その攻撃力じゃライフを削りきれない……」

「いいや、このターンで決めてやるね。魔法カード、埋葬されし生け贄！このカードはアドバンス召喚のリリースを、フィールドじゃなくて互いの墓地からまかなえる。ハンマー・シャークとサイクロイドをリリースして、アドバンス召喚！これが僕の新たな力、絶望の妖星！The despair URANUS！」

僕がついさつき手に入れたばかりの、新たな仲間。よろしく頼むよ、ウラヌス。

The despair URANUS 攻2900

「ウラヌスは自分フィールドに魔法・罠カードが存在しない状態でのアドバンス召喚に成功した時のみ発動する効果がある……まず最初に、相手プレイヤーは永続魔法か永続罠、好きな種類を選ぶ」「選ぶ？じゃあ、永続魔法でいいや」

宣言を受けたウラヌスの両目が魔法カードの色、緑色に光を放つ。

「なら僕は、永続魔法を1枚アツキから選んでフィールドにセットすることができる。強者の苦痛をセットして、そのまま発動！この効果で相手モンスターはそのレベル1につき100ポイント攻撃力がダウンして、ウラヌスは自分フィールドで表側の魔法・罠1枚につき攻撃力を300アップさせる！」

ダークジェロイド 攻1200↓800

The despair URANUS 攻2900↓3200

「ひいひい……」

「悪く思わないでよ、バトル！バハルストス、ウラヌスでそれぞれ攻撃！」

真竜皇バハルストスF 攻1800↓ダークジェロイド 攻80

0 (破壊)

翔 LP3500↓2500

The despair URANUS 攻3200↓翔(直接攻撃)

翔 LP2500↓0

「じゃ、またー！」

走って逃げようとするも、足がうまく動かない。疲労の余り膝が震えてまともに歩くことすらできず、どうにかトイレの外に出たところで派手に転んでしまう。その派手な音が、このあたり一帯のゾンビを全員呼び寄せてしまったらしい。

「う、うわぁ……」

さっきの翔で確信したけど、このゾンビ生徒1人1人ははつきり言って弱い。複雑な思考に向いていないのか、どいつもこいつも僕にワンキルされるレベルなんだから全っ然たいしたことない。翔だつて本当はもつと強いはずなのに、あそこまで実力が落ちてるんだからお里が知れるというもので、ただあの無尽蔵の体力で自分の被害も構わずデスデュエルを仕掛けてくる人海戦術が厄介なだけだ。それだけに、まんまとその戦略に引っかかっている自分が恨めしい。多分まともに戦えば、僕ですらこの連中に負けることはまずないだろう。だ



というのに、それをやるだけの体力は僕にはもうない。じわじわと包围網を狭めてくるゾンビ達を中心に、デッキから1枚のカードを抜き取った。

「こうなったらもう、最後の……ごめんね、毎度毎度こんな仕事押し付けて、さ……」

「デュエル〜」

「俺と勝負だ〜」

「デュエルしようぜえ〜」

がやがやとうるさい外野を尻目に、そのカードをデュエルディスクにそつと置く。

「霧の王……いよろしくお願い、体育館まで、連れてっ、て……」  
キングミスト

文字通り最後の方で、霧の王の精霊を実体化させる。その召喚に今度こそ体力を使い果たして意識が完全に消える寸前、そつと体を抱きかかえられる感触を感じた……気がした。やっぱり僕は駄目だなあ、こうやって助けを借りないとまともに体育館まで行くことすらできないだなんて。そんなことを思いながらも、不思議と安心感に包まれていて。何日ぶりだろうか、何にも気兼ねなく安らかに意識がフェードアウトしていった。

## ターン88 鉄砲水と黒騎士の刃

ようやく目が覚めたときには、簡易ベッドの上に寝かされていた。「うっ……」

最初に感じたのは、やたらと全身が砂っぽいことだった。口の中はじやりじやりするし、服や靴の中も細かい砂粒のせいでこそぐつたいというか、気持ち悪い。ウラヌス戦の後も雑魚無双とはいえ連続で戦ってきたからだろうか、全然気づかなかったけどこんな砂まみれだったのか。

「清明先輩、起きたのかドン」

「清明……」

「剣山、それに明日香……おはよ。目覚めは最悪だけどね」

それから話を聞く限り、どうも剣山たちが体育館の入り口前でやたらとノックする音がするのでゾンビでないことを確認してから開けてみたところ、その場に倒れてる僕を発見して慌てて運び込んだらしい。ありがとう霧の王、とデュエルディスクに差したままのデツキを軽く撫でて感謝を伝える。

「でも、無事に会えてよかったザウルス」

「まったく。それで、今無事なのってここにいる分で全員なの？いくらなんでも少くない？」

ただっ広い体育館には、トメさんたち生徒以外の人員を含めてもせいぜい30人ほどしかない。ここに来た時の人数が100人近かったことを考えると、僕が見てきたよりも事態は深刻なようだ。

「このゾンビ化現象は、本当に突然起こったの。ゾンビになった生徒にもある程度の知能はあるから、校内放送で体育館が拠点です、なんて呼びかけるわけにもいかないし……だから私と剣山君で、まだ学内に残り残された生徒たちの回収を何回かに分けてやってる最中なのよ。ごめんなさい、本当は貴方も迎えに行きたかったのだけど」

「いや、気にしないで。多少無茶はしたけど、僕ならどうにかなったわけだし……それより、十代達は？それにレイちゃんもいないっぽいけど」

悪気があったわけではないが、そこはあまり聞いてほしくない部分だったらしい。目を逸らしながらも、まず剣山が口火を切る。

「十代のアニキたちは、まだ帰ってきていないドン。あと数分もしたらまた学校中を他の隠れた生徒を探しがてら探ってみるザウルス、けど……」

そこまで言って、急に言い淀む剣山。その言葉の後を、目を逸らしたまま明日香が引き継いだ。

「レイちゃんは鮎川先生と一緒に保健室にいるはずなんだけど、あの辺りは特にゾンビの数が多いのよ。何回か近寄ろうとはしたんだけど、そのたびに10人以上に見つかったからそれを振り切って逃げるのに精一杯で」

「そんな……」

レイちゃんのように昏睡状態でも、あのデュエルゾンビにはなるのだろうか。ならないならならぬで傷の手当てを早くしないとイケないけど、もしなるとしたらあの怪我のまま校内を彷徨ってデュエルを仕掛けるようになってしまう。ただでさえあんなひどい怪我なのに、そんな無茶をする体力が彼女に残っているとは思えない剣山たちもそのことはよくわかってはいるが、それでもどうにもできない自分たちを悔やんでいるようだ。なら、僕がするような下手な慰めはかえって迷惑になるだろう。

「……明日香先輩、そろそろ時間だドン」

「そうね。それじゃあ清明、私たちはもう1回見回りに行ってくるから。先に言っておくけど、ついてくるなんて言わないでよ？ 貴方の体だってもうボロボロなんだから、少しは休みなさい」

まさに僕も行こうか、と言おうとしたタイミングで出鼻をくじかれる。さすがになんのなんのでもう2年の付き合いになる明日香、よくわかっていらっしやる。もっともあの連戦がだいぶ堪えているのも確かなので、今回ばかりは無理を通すよりその言葉に甘えさせてもらうことにしよう。

「じゃあせめて、何かあったら連絡してよ。トランシーバー、持ってるでしょっ？」

僕が最初にこの校舎に入った時も使ったトランシーバーを軽く振って見せると、剣山も頷いて自身の着ている改造学生服の胸ポケットを指し示す。

「んじゃ、月並みだけど……2人とも、気を付けて」

「わかってるドン」

「ええ」

慎重に少しだけ扉を開き、開閉の瞬間を見ているゾンビがいないかどうか確かめる。幸い誰もいなかったらしく、同時に頷くと用意してあった台車を押して出て行った。多分、いざとなったらあれのパワーで多少強引に蹴散らしてでも逃げるつもりなんだろう。何回かやっていた、というだけあって手慣れた様子だったけど、だからといって彼らの危険度が減ったわけではない。なにせ敵は何度倒してもすぐ起き上がってくるうえにデュエルの音を聞きつけてぞろぞろ集まってくる、1度でも捕まったらほぼアウトと見て間違いないであろう相手だ。

「よっ、と……」

最初は寝直そうかとも思ったが、いくらなんでもすぐそばで友人が頑張ってるのに自分だけぐーすか寝てるのは性に合わない。かといってまたいらんことをしたりしたら今度こそ取り返しがつかないレベルの大惨事を招きかねないので、あまり大がかりに動くこともできない。幸い、ずっと寝てたのがよかったのか体力にもとりあえずデステュエル1〜2回分ぐらいはできるほどの余裕がある。せめて、戸締りの確認ぐらいはしておこう。なにせここは体育館、非常口や観客席まで考えると意外と出入り口になるような場所が多い。1か所でも鍵を付け忘れている場所があったら、それこそ大惨事だ。あの2人がそんな単純なミスを起こすとは思えないけど、こういうのはいくら確認したって減るものじゃないし、なにより何か動いてないとこつちが落ち着かない。

2階に上がり観客席から下を見下ろすと、なまじ場所が広いこともあって余計にそのスカスカ感が目立った。こっちは力尽きればゾンビになるのに、向こうを正気に戻す方法がわからないっていうのは、

だいぶ厄介な話だ。僕が気を失っても向こう側に入らなかったのは、チャクチャルさんかメタイオン先生辺りの力が作用したんだろうか？今思えば、あの時点でゾンビ化していても不思議じゃなかった。まあ、わからないことをいつまでも考えていたってらちが明かないわけだけだ。

「戸締り、よーし……ん？」

軽く引つ張ったり押ししたりして、ドアが簡単に開かないことを確かめる。次の場所に行こうと背を向けたところで、扉の向こう側からかすかに声が聞こえてくることに気が付いた。万一逃げ遅れた生徒が自力でここまで来たんだとしたら大変なので、ドアにぴったりと耳をつけて何を言っているのか少しでも聞き取ろうとする。つい力を入れすぎたのだろう、ダークシグナーの力を解放することを示す痣がシウルシウルと這うように体を走っていくのが見えた。それと同時に、まるで直接目の前で聞いているかのように外の音がクリアに聞こえるようになる。またこうやって無駄遣いして……デメリットとかあるのかは知らないけど。

『……万丈目くくん、そっちはどうだい？』

『いや、駄目だな。みんなどこへ行っちゃまったんだろうなあ、せっかくデュエルしようぜってこの万丈目サンダー様がわざわざ言いに来てやってるつてのに』

この声、どうやら話し相手はすでにゾンビ化した翔と万丈目のようだ。よかった開けなくて。そんなことを考えているうちも、2人の会話は続いていく。

『そういえば万丈目君、この体育館って誰か調べたのかい？』

『いや、俺はまだだぞ〜？』

まずい。このままここに立てこもってることがばれたら、ますます外に出られなくなる。確かにこれだけの人数で生活している以上遅かれ早かれどこかで悟られることではあるけれど、いくらなんでも即日はずい。でも、また僕の判断だけで勝手なことしたら本気で愛想尽かされかねない。

『じゃあさ、少し調べてみようか』

『ああ、そうだな……む、鍵がかかっているな』

『この入口小さい方だし、しょうがないツスよ。もっと大きな入口が、下の階にあったはずツスよ』

『ようし、じゃあそこまで行くか。十代、清明、天上院くん、一体どこにいるんだー、デュエルしようぜー』

『アニキ、デュエルしましょうよ』

ゆっくりと遠ざかっていく足音。あのスピードで1つ階を降りて正面の入り口から入ってくるとすると、残った時間はせいぜい5分というところか。僕をする勝手な行動は周りの迷惑になる、でもこんなもの聞いちゃった以上、まさかなかったことにするわけにもいかない。どうする？どうすればいい？

「……」

ちらりと下を見る。急にこんな異世界に飛ばされて、しかもよくわからないうちに外にはゾンビがうろつきまわっているのだ。無理もないことだけど、ほとんどの人影はもう動く気力すらないかのようにぐったりと座り込んでいる。もしここにゾンビが入ってきたら、一瞬で大惨事になることは間違いないだろう。

「あーもう……行くよ、チャクチャルさん」

『推奨はしないぞ？マスターの体が本調子でないことは明らかだし、私としてはむしろあの下の人間を囿にマスターに逃げてもらいたい』  
「……チャクチャルさんってさ、たまにびっくりすることさらつと言うよね」

『私は人間ではないからな。マスター以外は割とどうでもいい。それに、有象無象が10人いるよりマスター1人いるほうがよほどマシだからな』

「さいですか、愛が重いよまったく」

ここもまた、僕とチャクチャルさんの間にある相容れないことのひとつなんだろう。今のところは静観するようだけど、表だって協力してくれるわけではない。まあ、それでも構わない。

そつと体育館を抜け出し、後ろ手にドアを閉める。サッカーを精霊体のまま壁抜けさせて鍵を中から掛け直してもらい、もしみんなが先

に帰ってきたときに最低限の説明だけはしてもらえよう。そのま  
ま残しておいた。改めて周りに他のゾンビがいないことを確認し、翔  
と万丈目が向かっていった方へ足音を忍ばせながら移動する。ふら  
ふらと歩いているだけの2人の背中はずぐに見つかり……その瞬間、  
後ろから肩を叩かれた。この学校に今いる中で、こういうことをして  
きそうな心当たりは1人しかいない。

「や、葵ちゃん。もう体調はいいの?」

「先輩にばかり任せて私が寝ているだなんて、クラディー家の名が泣  
きますから。ですがまあ、無駄話はまたの機会にしましょう。私がど  
ちらか片方を引きつけますから、先輩は残った方をお願いします」

言うが早い。が、僕の肩越しに何か白いものを投げる葵ちゃん。弧を  
描いて地面に激突したそれは、中から色い煙をまき散らし……煙玉と  
は、また忍者らしいチョイスをしたものだ。

「おいでなさい。デュエルがしたいのでしたら、私が相手になりま  
しょう!」

わざと足音を大きく立てつつ、葵ちゃんが遠ざかっていく音がす  
る。若干何が起きたのかわかっていなかった前の2人も今の声で我  
に返ったらしく、ゆっくりとした足取りで葵ちゃんの走っていった方  
へルートを変える。

よし、今だ。考えるより先に体が動いていた。大きく足を上げ、ド  
スンと足音を立てる……ただそれだけの動きで、2人のゾンビがゆっ  
くりとこちらを向き直る。

「へい、お2人さん?」

「よう、清明。俺とデュエル、しようぜえ〜」

「いやいや万丈目君、ここは僕が昨日のリベンジするのが先ツスよ」

「万丈目サンダー。なあ清明、お前も俺とデュエルしたいよなあ?」

正直言つて、どっちでも知ったこつちやない。僕がしたいのは、こ  
いつらはこの場から引き離すことだけだ。

「じゃんけんでもすれば?」

「ならそうするか……じゃん、けん」

「ぼん!」

高校生2人が目の下に隈を作りながら不気味な笑顔でじゃんけんするという無駄に気持ちの悪い、今夜の夢に出てきそうな光景を見せつけられはしたが、今回の挑戦権は万丈目が先に勝ち取ったらしい。

「さあ、行くぜ〜?」

「じゃあ、僕は向こうの子とデュエルしてくるツスよ」

「葵ちゃん……いや、こっちはこっちでデュエルと洒落込もうか、ね！」

「デュエル!」

先攻は僕……あのモンスターに来てほしかったけど、ないなら仕方がない。

「僕のターン、キラール・ラブカを守備表示で召喚!これでターンエンド!」

キラール・ラブカ 守1500

ラブカの陰に隠れて、じわじわとさりげなく後ろに下がっていく。

1歩、2歩、3歩……よし、ここで止まっておこう。

「俺のターン、レスキューラビットを召喚。そのまま効果でこのカードを除外してデッキからレベル4以下の同名通常モンスター、闇魔界の剣士、ダークソードを2体特殊召喚する」

闇魔界の剣士 ダークソード 攻1800

闇魔界の剣士 ダークソード 攻1800

漆黒の鎧で身を包んだ闇の剣士……あんなカード、ただでさえごちゃ混ぜ状態でパンパンな万丈目のデッキには入っていないかつたはずだ。翔のダークジェロイドといい、ゾンビ化した生徒はデッキをいじりたくなる傾向でもあるのだろうか。

「まだだ。魔法カード、融合を発動。俺は手札の漆黒の闘龍ドラゴンと、場のダークソードを融合。来い、闇魔界の竜騎士、ダークソード!」

廊下の向こう側から矢のような勢いで飛んできた小型の龍に、ダークソードがその鎧の重さをものもしない動きで素早く飛び乗る。その手綱を素早く操って闘龍を制止させ、竜騎士となったダークソードがその剣をこちらに向けた。

闇魔界の竜騎士 ダークソード 攻2200



「バトルだ！闇魔界の剣士で、キラー・ラブカに攻撃！」

闇魔界の剣士　ダークソード　攻1800↓キラー・ラブカ　守1500（破壊）

龍を持たない剣士の一撃が、とぐろを巻いていたラブカをバツサリと切り裂く。その風圧にたまらず目をつぶり、再び開いた時には、すでに音もなく竜騎士が目の前まで迫っていた。

「竜騎士でダイレクトアタックだ！」

闇魔界の竜騎士　ダークソード　攻2200↓清明（直接攻撃）

清明　LP4000↓1800

「ぐっ……！」

「この瞬間、竜騎士の効果が発動する。戦闘ダメージを与えたことで、相手の墓地のモンスターを3体まで除外！キラー・ラブカには、効果を使う前に退場してもらおうかあ」

キラー・ラブカは万丈目の言うとおおり、墓地にあつてこそ真の力を発揮するモンスター。効果を使う前に除外されては、実際どうしようもない。

「フィールド魔法、遠心分離フィールドを発動。カードをセットして、魔法カード馬の骨の対価を発動。通常モンスターのダークソードを墓地に送ることで、カードを2枚ドロローしてターンエンドだ」

1ターン目からきつちりライフを削られたうえ、墓地リソースを奪われ手札増強までされてしまった。流石万丈目、例えゾンビになっても、厄介な相手であることに変わりはないか。

清明　LP1800　手札：4

モンスター：なし

魔法・罫：なし

万丈目　LP4000　手札：3

モンスター：闇魔界の竜騎士　ダークソード（攻）

魔法・罫：1（伏せ）

場：遠心分離フィールド

「僕のターン、ドロロー……よし来た！出番だよ、シャクトパス！」

シャクトパス　攻1600

タコと鮫が合体したような見た目の、僕にとっては古い付き合いのアタッカー。今回はこの子の効果やステータスというよりも、身体特徴を頼りにさせてもらおう。

「しつかりお願いねー！万丈目、こっちだ！」

シャクトパスのタコ足を腕に巻きつかせ、さらにその状態から別の足をグイッと伸ばして適当な壁に吸盤で張り付かせる。あとは伸ばした足が戻る力に身を任せれば、僕が走るよりもはるかに速いスピードで移動ができる寸法だ。こうやって逃げ回るふりをしつつ、少しでも体育館から遠くにやつちやわないと。

「待て、逃げる気か？」

『あらー、見事に逃げちゃったわねん』

『きつと俺たちがいい男過ぎるからだな』

『俺たち3兄弟には敵わないってことさ』

なんか後ろの方で万丈目と一緒にゾンビ化したらしいおジャマトリオからものすごい失礼な勘違いをされてる気がするけど、無視だ無視。と思っただけど、それはそれで腹が立つのでやっぱり少しだけ懲りてもらおうとしよう。

「魔法カード、アクア・ジェット！このカードと魚族モンスターのシャクトパスによるマジックコンボで、攻撃力1000ポイントアップ！そのままダークソードに攻撃だ！」

シャクトパス 攻1600↓2600↓闇魔界の竜騎士 ダークソード

「させるか。速攻魔法、融合解除を発動。これで闇魔界の竜騎士は、闇魔界の戦士と漆黒の鬪龍に分離するぜえ」

闇魔界の剣士 ダークソード 守1500

漆黒の鬪龍 守600

シャクトパスの突進を、素早くドラゴンから飛び降りてかわすダークソード。着地と同時に、主従がともに防御の姿勢を取って追撃に身構える。さて、ここで攻撃の巻き戻しが発生したから僕には改めて攻撃する権利が与えられたわけだけど、ここはどちらを攻撃すべきだろう。このドラゴンがいなければダークソードはただの通常モンス

ターのアタッカーにすぎないが、このモンスターの1800という打点はなんらかの強化を使うか上級モンスターを出さない限り僕のデッキに突破手段は少ない。ならばダークソードを攻撃すればいいのかもしれないが、通常モンスターは何の効果も持っていない代わりにはほどのレスキューラビットのようなサポートカードを数多く持つ。特に蘇生手段はひときわ多く、ここで倒したとしてもまたすぐ蘇る恐れは十分にある。

「ええい、ままよーシャクトパス、ダークソードにこのまま攻撃！」  
アクア・ジェットを背負ってスピードを増した一撃が、ダークソードの剣よりも速くうねる。守備体制をとるダークソードにも、その全てを防ぐことは叶わなかった。

シャクトパス 攻2600↓闇魔界の剣士 ダークソード 守1500 (破壊)

「さらに、カードを伏せてターンエンド」

さっきのターンはこのカードも、ラブカを手早く墓地に送るためにあえて伏せなかったけど、そのせいで痛い目にあった。今度は出し惜しみなしで行こう。

「俺のターン……カードを1枚セットして、おジャマ・イエローを守備表示で召喚。ターンエンドだ」

『うっふっふん』

おジャマ・イエロー 守1000

清明 LP1800 手札:3

モンスター:シャクトパス(攻)

魔法・罠:1(伏せ)

万丈目 LP4000 手札:3

モンスター:漆黒の鬪龍(守)

おジャマ・イエロー(守)

魔法・罠:1(伏せ)

場:遠心分離フィールド

「僕のターン！」

おジャマ・イエローを融合もせずに出すだなんて、よっぼど追いつ

められているんだろう。このまま押し切れれば、勝利は近い。

「ハリマンボウを召喚して……」

「その瞬間にトラップカード、死のデツキ破壊ウイルスを発動。攻撃力1000以下の閥属性、漆黒の闘龍をリリースすることで相手の手札、場の攻撃力1500以上のモンスターをすべて破壊するぜ」

「シャクトパス！ハリマンボウ！」

シャクトパスの動きが止まったことで、タコ足を利用して距離を取る戦法がもう使えなくなる。そして静かに倒れこむその2体だけではなく、僕が手札に抱えていた超古深海王シーラカンスのカードもウイルスに侵されて消えていく。やってくれたもんだ、万丈目。

「さらにこのウイルスの副作用として、相手はデツキから攻撃力1500以上のモンスターを3体まで選んで破壊することができる。さあ、どうする？」

なるほど、本来あのデツキのコンセプトとしては何も知らない相手がウイルスの効果で墓地に強力モンスターを送り込み、場が壊滅したところでダークソードが一撃を仕掛けてその主力となるであろうモンスターをそっくり墓地から除外し、相手のモンスターを場に出すことなく処理する、というところか。単純ながら理にかなった戦法だが、先に融合をしてデツキを自分からばらすところがゾンビの限界なんだろうか。そう考えれば、翔と同じくこの万丈目だって普段よりはるかに弱くなっている。なら、僕にも勝機はある。

「だけど、とりあえず今はウイルスの効果処理だ。バブル・ブリンガーを引いた時のためと、カイザー・シースネークを引いた時のために今から下準備だけでもしておこう。」

「僕は攻撃力1500、グレイドル・イーグル2体と攻撃力2500、カイザー・シースネークを破壊して墓地に」

「このカードのデメリットとして、俺は次のターン終了時までダメージを相手に与えることができない……さあ、ターンを続けるよお」

万丈目め、わかってて言ってるんな？もう通常召喚をしたこのターン、これ以上の展開は許されない。というかそもそも、僕の手札にはもうモンスターがない。

「……ターンエンド」

「俺のターン、ドロロー。馬の骨の対価をもう1枚発動、おジャマ・イエローを墓地に送ってまた2枚ドロローする」

『そんなく、あぐれ〜』

まさか壁にすら使わないとは、ゾンビ化してもおジャマの扱いは変わらないらしい。だがその見返りにいいカードを引いたらしく、にやりと笑ってカードを場に出す万丈目。

「魔法カード、戦士の生還を発動。墓地の戦士族モンスター、ダークソードを手札に戻してそのまま通常召喚。さらにカードをセットしてターンエンドだ」

闇魔界の剣士 ダークソード 攻1800

清明 LP1800 手札：3

モンスター：なし

魔法・罫：1（伏せ）

万丈目 LP4000 手札：3

モンスター：闇魔界の剣士 ダークソード（攻）

魔法・罫：1（伏せ）

場：遠心分離フィールド

「僕のターン！」

『何か企んでいる……のか？』

カードを引いたところで、いきなりチャクチャルさんが声をかけてきた。突然すぎてつんのめりそうになるけれど、何とか踏みとどまって聞き返す。

「どうしたのさ、いきなり？」

『マスターの攻め手が遅いのはいつものことだから別にいいが、妙にあの人間の攻撃ペースが遅い』

「でも、さっきのターンはウィルスのデメリットで……」

『そこじゃない、私が言いたいのは最初のターンの話だ。融合解除を伏せるのではなく、バトルフェイズに使って追撃されていればマスターはとつくに負けていたぞ？』

その指摘を受け、今更ながらに冷や汗が出る。本当だ、あの時は気

づかなかったけど、本来ならこのデュエルはとっくに負けていても不思議じゃなかった。となると、次の疑問が出る。なぜ万丈目は、わざわざ勝ちを逃すような真似をしたのか。

「ゾンビだから、馬鹿になつてて気づけなかったとか……なんて、ないよね、うん」

『私なら、そう楽観はしないがな。いずれにせよ短期決戦に持ち込めるならそれに越したことはない、そのことだけ覚えておいてくれ』

なるほど。とはいえ、短期決戦ねえ。この手札でそれは、どう頑張っても無理そうだ。そしてそれを狙っているんだとしたら、かなりまずい方向に事態は動きつつある。

「……ターンエンド……」

「俺のターン。装備魔法、聖剣アロンダイトをダークソードに装備。ダークソードの攻撃力を500下げ、相手の伏せカード1枚を破壊する！」

ダークソードの持つ剣が姿を変え、シンプルな長剣になる。それを一振りすると、生じた風圧が僕の伏せカードを切り裂いた。伏せカードはポセイドン・ウエーブ……まずい。

闇魔界の剣士　ダークソード　攻1800↓1300

「バトルだ、ダークソードでダイレクトアタック！」

「まだまだっ！手札からゴーストリック・フロストの効果発動！相手のダイレクトアタック時にそのモンスターを裏側守備表示にし、このカードを裏側守備表示で特殊召喚する！」

「ちっ……ならばトラップ発動、リミットリバーズ！漆黒の鬨龍を蘇生し、セットされたゴーストリック・フロストに攻撃！」

漆黒の鬨龍　攻900↓???(ゴーストリック・フロスト)　守100  
(破壊)

フロストによつてかろうじて張られた壁も、追撃であっさり突破される。時間稼ぎだろうとなんだろうと、短期決戦にしたあげく僕が負けては意味がない。ただ万丈目も攻撃力900のモンスターをわざわざ追撃に出したということは、手札に2枚目のあのカードが来ているのだろう。

「メイン2、手札から融合を発動！フィールドの2体のモンスターを素材とし、再び闇魔界の竜騎士　ダークソードを融合召喚する！」

闇魔界の竜騎士　ダークソード　攻2200

「さらにカードを伏せ、ターンエンドだ」

清明　LP1800　手札：4

モンスター：なし

魔法・罨：なし

万丈目　LP4000　手札：1

モンスター：闇魔界の竜騎士　ダークソード（攻）

魔法・罨：リミット・リバーズ（対象無し）

1（伏せ）

場；遠心分離フィールド

もし万丈目が何か企んでいる、とすると、このターンでけりをつけておきたい。とはいえ僕の手札には今ウィルスカードの影響でモンスターすらない、このドローでどうにかするしかないだろう。

「ドロー……よし来た。魔法カード、トレード・インを発動！手札からレベル8の青氷の白夜龍を捨てて、デッキからカードを2枚ドローして……よしよしよし、フィールド魔法発動、半魔導帯域。さらに埋葬されし生け贄を発動！墓地のシャクトパスと漆黒の鬨龍をリリースして、アドバンス召喚！行くよ、チャクチャルさん……地縛神　Chacu Challhua！」

チャクチャルさんはフィールド魔法がないと維持できない。万丈目が張るだけ張って一切使っていない遠心分離フィールドと合わせて2枚体制なら、たとえばあの万丈目の伏せカードがサイクロンなどであってもどうにかなるだろう。

「半魔導帯域？くそつ、激流葬が……」

「あ、危なかった……」

半魔導帯域はその効果により、互いのメインフェイズの間フィールドのモンスターは相手のカード効果の対象にならず、カード効果でも破壊されない。もしこれを使わず激流葬を喰らったとしても、万丈目のダークソードは破壊された時遠心分離フィールドでその素材モ

ンスターを特殊召喚できる。用心のために使ったカードだけど、結果的には大正解だったらしい。

地縛神 Chacuc Challhua 攻2900

「まあいいさ。俺のライフはまだ4000、そのダイレクトアタックをしたとしても……」

「最近ワンショットキルばかりだねえ……ゾンビ相手だと出しやすいのかな？ 装備魔法、巨大化を装備！ 僕のライフが万丈目よりも下だから、チャクチャルさんの攻撃力は2倍！ そして地縛神はその効果により、相手プレイヤーにダイレクトアタックができる！ これで終わらせる、ミッドナイト・フラッド！」

地縛神 Chacuc Challhua 攻2900↓5800

↓万丈目（直接攻撃）

万丈目 LP4000↓0

「ぜい、ぜい……はあ、んじゃね万丈目」

「万丈目サンダ……おいおい清明、勝ち逃げなんてずるいじゃないか……なあ、みんな？」

「みんな？」

聞き返した直後、たまたま背後にあったドアが開く。そこから出てきたのは、総勢10人以上のゾンビ軍団。なるほど、こっちが逃げるつもりでも、まんまと誘導されてたってわけか。

「最後にひとついいことを教えてやるよ、清明。お前たちが体育館に立てこもってることは、俺たちもとつくに知ってるんだぞ？ ただ急に行っちゃって逃げられるだろうから、しばらくは様子を見るけどなあ。なにせ食料は全部おれたちが抑えてるんだ、いつまでも中にはいられないだろう？ だからお前が体育館から俺を引き離そうとしてる様子、見てて笑っちゃまいそうになっただぜ。さあ、わかったら俺とデュエルしようぜ」

「そういうことか……！」

ゾンビたちは馬鹿だから隠れ場所に気づかなかったんじゃないかと、



その狙いは最初から兵糧攻めにあつた……なんとしてもこの情報、持って帰つて伝えなくちゃいけない。

「おっと、逃がさないぜ〜」

じりじりと迫るゾンビ軍団。またさつきみたいにかードの実体化で切り抜けるか……と思つた刹那、僕とゾンビ軍団の間に見覚えのあるボール状のものが投げ込まれた。と、そのボールが小規模な爆発を起こして辺り一面に濃密な煙が満ちていく。視界が奪われたところでききなり手首のあたりを何者かに掴まれ、思わず振りほどこうとしたところで耳元で抑えた声があった。

「手にかかる先輩ですね。早く逃げますよ」

「葵ちゃん……センキュー」

掴まれた手を引つ張られるのに合わせ、煙にまぎれて走り出す。そこから体育館に戻る途中で1人のゾンビにも出会わなかつたのはあの場所に僕が見た以上の数が詰めかけていたのか、それとも別の場所……剣山たちのところに集合しているのか。いずれにせよ、ゾンビ軍団には予想以上に知恵があるらしいことがわかつただけでも大収穫だ。収穫といつたら収穫だ。そういうことにしておかないと、無断外出が明日香にばれたら今度こそどんな目に会うかわかつたもんじやないし。

「葵ちゃん、一応聞くけど責任被つてくれる気は……」

「嫌です。天上院先輩には、先輩1人で説明してください。私は布団かぶつて病人のふりしてますから」

「あ、ずるい!」

## ターン89 炎の幻魔と暴食の憑依

「……で、どうするかねほんとに」

夜が来た。結論から言うと、僕も葵ちゃんも無断外出にはおとがめなし。というより、ちょうど十代達が帰ってきたりそのまま鮎川先生とレイちゃんを助けに行ったりと、それどころではなかったようだ。結果鮎川先生こそゾンビにされてしまったものの、なんとか助かったレイちゃんは薬がうまくいこと効いたのか、意識こそ戻らないものの呼吸も安定して小康状態になっている。なのでそれについてはとりあえず心配しなくていいが、他にも差し迫った問題がある。

「食糧庫は奴らの手のなか。兵糧攻めは、俺達に援軍が期待できないこの状況では最も効果的な方法だ」

オブライエンの言葉に、僕は押し黙る。そう、食糧問題だ。辛うじて災害用の水と食料はあるものの、それだつてこの人数がいつまでも食べていける量があるわけではない。今日のところはトメさんの頑張りもあつてまだ持ちこたえているが、既に不満は爆発寸前だし、事実このままだと空腹と栄養失調でますますこちらが弱ってしまう。辛うじて発電エリアだけはこちらが押さええてはいるが、砂まみれになつて精密機械は全部パーだからもはやただの鉄くずと見たほうがいいだろう。せめて僕の店があれば砂糖ぐらいは手に入ったのだが、それも奴らの側にある。

「トウデイはもうミッドナイトだ。夜に動くとき夜行性のモンスターがいるかもしれない、今日のところはスリープして体力を節約しよう」  
結局いくら考えても結論は出ず、ジムの一言によりこの日は大人しく寝ることにした。願わくばこの悪夢のような生活も、明日になれば3つの朝日と一緒に無かつたことにならないか、なんて子供じみたことを考えながら目を閉じると、なんだかんだいつても体には疲労が残っていたらしく、あつけないほど早く眠りにつくことができた。

次の日。当然ゾンビがいなくなるようなことはなく、僕らは守りを固めることにした。どうせ場所がばれているならと知らない机やパイプ椅子などを積み上げて派手に通路を遮断する者、ありあわせの木

材と釘でバリケードを作る者、オブライエンなどは銃のメンテナンス……ではなく、デュエルディスクの手入れに余念がない。クロノス先生はここに来てようやく先生らしいことをやり始め、ゾンビ化した生徒のリストを作り出している。その結果、実に厄介な案件が持ち上がった。

「やあまだー！てえらおかー！やまなかあー！どこ行ったこのやろ、とりあえず殴るからさっさと出て来い！」

3人の生徒が行方不明になったのだ。といっても、ゾンビがバリケード内部に忍び込んだわけではない。トイレの窓にあったバリケードが強引に中から引っぺがされ、そこから外に抜け出したようだ。そこが一番食糧庫に近い場所なことを考えると、つまりはそういうことなんだろう。

「特に腹を空かせていたからな、あの3人は」

「すまないドン、俺がああ3人に気づいてさえいれば……！」

「それは言いっこなしでしょ？僕だって寝てたし、皆だって寝てたよ」  
出て行ったのが昨夜ならまだ無事である可能性もあるし、少人数の探索部隊を編成するか……そんな話が持ち上がったところで、いきなり校内放送が響いた。放送室も奴らの手の中にあるため、一斉に緊張が走る。もし大音量で黒板を爪でひっかく音がエンドレスに流れてきたりしたら、それは何よりも恐ろしい攻撃になるだろう……いや、割と真面目に。

『おはよう、生徒諸君。僕はこの世界の支配者、加納マルタンさ』

「マルタン……」

レイちゃんと同時期に入学した、やたらと大人しいライイエローの男子だ。友達を作ろうとしない様子を見かねたのか何度かレイちゃんが世話を焼くのを見たことがあるし、そんな彼女が僕の店に連れ込んで甘いものを半ば無理やり一緒に食べたりにしているから僕も面識がある。この世界に来たことは知っていたけど、それ以降ずっと行方不明だったからもうゾンビになったものかと思っていたけど……いずれにせよ、この放送に答えが隠されているのだろう。

「マルタンー！お前、無事だったのか!？」

『その声、十代だね。やあ』

十代の叫びに、ノータイムで返事を返すマルタン。校内放送で会話を成立させるだなんて、どんな仕掛けがあるんだってんだ。

「マルっちー！マルっちなの!？」

「レイちゃん……」

友達が行方不明ということ、色々と思うところもあったのだろう。今朝になって意識が戻ったレイちゃんが、まだふらつきながらも起き上がってスピーカーに呼び掛ける。

『その呼び方、やめてくれないかな？僕はゾンビたちの王、マルタン帝国の支配者なんだ。まあそんなことより、今日は君たちに取り引の話があるんだ』

「取引？」

マルタンが僕らに突き付けた条件は、こうだ。まずマルタン側は、食糧庫にある食料をこちらにいくらか分け与える。そのかわりこちららは、あの砂に埋もれた発電施設を渡す……確かに食料は欲しいが、まだ発電所も完全に死んだと決まったではない。三沢辺りが見れば、案外なんとかなる可能性もある。とはいえ発電所が動いたとしても、電気を食べて生きていくわけにはいかないのも事実。好条件なだけにどう考えても怪しいこの提案に対し、十代はデュエルでの賭けを提案した。勝ったものが全部取るその案は意外にも受け入れられ、ジム、オブライエン、ヨハンとこちらの出すメンバーも決まった。いざマルタンの呼びかけに従い外に出……ようとしたところで、オブライエンが僕の肩を叩いた。

「この話にはどう考えても裏がある。食料と聞けば、ここにいる生徒たちの目は全てデュエルに注がれるだろう。その間、奴は誰にも邪魔されずに動き放題になる……頼む、俺もなるべく早く終わらせるから、先に発電所に行つて守りを固めておいてくれ」

「オーケー。でも、なんで僕を選んだの？もっと強い、例えば十代とかでも……」

「いや。お前の精霊を呼び出す力は、俺の見たところヨハン、十代と並んでお前がトップだ。ヨハンは今からデュエルに行くし、十代はこの

集団の中でリーダー役を担ってもらわねばならない。今この瞬間に腹を空かせた生徒による暴動が起きていないのは、あいつのリーダーシップによるところが大きいからな。ここで自由に動けるのは、お前しかないんだ」

「ん。じゃ、早いとこ援軍に来てね。ワンキルしてよワンキル」

「ははは、お前らしいな。もちろん善処する」

これなら正式な頼みがあつてのことだし、僕の独断専行にはならな  
いだろう。いざとなつたら明日香にはオブライエンがやれつて言つ  
た、で押し通せばいいし。何事もなかつたかのように出ていくオブラ  
イエンの背中に軽く手を振り、こつそりと外に向かう集団から離脱す  
る。誰にも見られないよう気を配つたつもりだが、この男相手にはそ  
うもいかなかったようだ。

「……や、三沢」

「話は聞いていたぞ、清明。どの道発電所は俺も一度は見ておきた  
かつたんだ、付き合うぜ」

つくづく三沢相手には妙な縁があると思う。ま、僕に単独行動とか  
正気の沙汰とは思えないから見張りがいるつてのはちようどいいけ  
どき。もしゾンビに見つかつても最悪2人がかりなら正面突破もや  
り易くなるし、何よりデスベルトを装着していない三沢はものすごく  
心強い……とも思つたが、あちらはあちらでどこかに集まつているの  
かなぜか1人も見つけられずに発電所までたどり着いた。到着す  
るや否やあちこちの機器をいじつて復旧作業を急ぐ三沢の横で、地平  
線の向こうまでアカデミア以外ひたすら砂だけが広がる地形を見渡  
し警戒する。これだけ周りに何もないと、どこから何が来てもすぐわ  
かるから気が楽でいい。

そんな場合ではないのはよくわかつているが、昨日からずっとバリ  
ケードだらけの校舎内にいたせいで久しぶりに見るとどこまでも広が  
る空を見上げてちよつとのどかな気分浸っていると、突然離れた場  
所から光が弾けるのが見えた。それとほぼ同時に地面が揺れ、その光  
の根元から何本もの柱が付き出してくる。

「うおっ!?!」

三沢が叫ぶ後ろで、なにかパチパチと火花が飛ぶような音がかすかにした。もしかしたら今のショックで、発電システムが多少なりとも生き返ったのかもしれない。

だが、それは同時にこの砂漠にいた何かを叩き起こす役目も果たしたようだ。僕の目の前でゆっくりと砂が持ち上がり、その奥からざらざらと怒りに燃える瞳が覗く。それはゆっくりと周りの状況を確認するように動き、やがて火花を立てるコード相手に悪戦苦闘している三沢の方を向いて止まった。

ずる、ずると砂を纏ったままにその何かが動き出して、ようやく我に返る。僕も三沢もここで逃げようと思えば逃げられるかもしれない……だけど、もしここで逃げだしたらマルタンが食料と交換してまで欲しがったこの発電所は恐らく徹底的に壊されるだろう。あの目はそういう目だ。

「なら、ここはデュエルで！」

当然肌身離さず持ち歩いていたデュエルディスクを構えようとしたが、それよりも先に三沢が前に出た。

「まあ待て、清明。お前にはその、デスベルトとやらが付いているんだろう？今年度の授業が始まる前に休学した俺に、その装置はない。つまり、ここは俺の出番というわけだ」

そう言つて、アカデミアにあつた予備の旧式デュエルディスクをガシヤンと起動させる三沢。これで案外頑固なところもあるこの男のことだ、何言つても聞きはしないだろう。

「清明、お前はそのコードを繋げておいてくれ。何本かショックで外れたところがあるから、それをくつつけるだけでいい。感電には気をつけるよ！」

「了解！」

言われたとおりに駆け寄ると、素人目に見てもコードを繋ぎ直した程度でどうこうなるものではないことは明らかだった。僕てもできる作業ということでも最大限妥協した指示だったんだろう。すまない三沢、うちの神様共々機械オンチで。とにかく何十本もあるコードを適当に手に取り、どれがどこと繋がるのかを確認にかかり始めたところ

ろで、後ろからデュエルの声が聞こえてきた。

「デュエル！」

「先攻は俺が貰う。来い、きつね火！」

きつね火 守200

「まずは、これでターンエンドだ」

きつね火……あのカードを三沢が使うのは、僕も見ることがない。おそらくあのデッキは、三沢の使う6つの属性デッキの中でもこれまで使われることがなかった1つ、炎属性の物ということだろう。

「俺のターン、ドロー」

あ、喋れんのかコイツ。サンドモスなんかは一切人語ができなかったのに、こちら辺の区分はつくづくよくわからない。とはいえそのアクセントや発音にはやはりどこか違和感があり、目の前の存在がやはり人外であることが感覚的に伝わってくる。

「ボタニティ・ガールを召喚し、きつね火ニ攻撃スル」

椿の名を持つ人型の花が、にやにやと笑いながらその花卉を飛ばしてきつね火を襲う。

ボタニティ・ガール 攻1300↓きつね火 守200 (破壊)

「カードを1枚セットして、ターンエンドシヨウ」

攻撃力1300のボタニティ・ガールをまるで三沢を挑発するかのよう立たせておいたまま、ターンを終える謎の精霊。しかしその宣言と同時に、三沢の目の前に小さな炎が灯る。

「きつね火は表側表示で戦闘破壊されたターンのエンドフェイズ、俺のフィールドに蘇るモンスターだ。残念だったな、攻撃が無駄になつて」

きつね火 守200

三沢 LP4000 手札：4

モンスター：きつね火 (守)

魔法・罫：なし

??? LP4000 手札：4

モンスター：ボタニティ・ガール (攻)

魔法・罫：1 (伏せ)

……これで三沢には、何一つ損をしないままにまたターンが回ってくる。抜け目ない三沢のことだ、このターンで一気に仕掛ける算段が付いているのだろう。

そして案の定というべきか、手札から一気に3枚ものカードを引きぬく三沢。次の瞬間には、きつね火がふわふわと揺れていただけのフィールド全てを埋め尽くす勢いの炎が乱舞していた。

UFOタートル 攻1400

炎の精霊 イフリート 攻1700

怨念の魂 業火 攻2200

「3体のモンスターだと?!馬鹿ナ!」

「別に驚くほどのことをしたわけじゃないさ。それじゃあ、種明かしと行こうか。まず俺は手札からこのカード、怨念の魂 業火を特殊召喚した。このカードは俺のフィールドに炎属性モンスターが存在するときに手札から特殊召喚でき、その後場の炎属性モンスターを破壊する効果を持つ。よってきつね火の存在をトリガーに特殊召喚し、そのままきつね火を破壊した、という訳さ。そして次にこのモンスター、炎の精霊 イフリートだ。このカードは、俺の墓地から炎属性モンスター1体を除外することで特殊召喚できる。ここでもきつね火には仕事を果たしてもらったわけだ。そして最後にUFOタートルだが、これはただ単に通常召喚しただけだな」

長い説明を後ろに聞きながら、ここしばらくデュエルから離れて研究ばかりやっていたにもかかわらずまるで鈍っていない三沢の腕に内心舌を巻く。ひとつひとつ言われればわからなくもないが、あの展開ルートをデュエルが始まってからの短い時間だけで思いついたのだろうか。

「そうそう、もう一つ注意しておこう。俺は業火を特殊召喚する前に永続魔法、補給部隊を発動していた。このカードにより、1ターンに1度俺のモンスターが破壊されるたびに俺はカードを1枚ドロウする。きつね火の破壊によりカードを引かせてもらったから、このターンはもう使えないがな。さあ、バトルだ!まずはUFOタートルで攻撃!」



UFOタートル 攻1400↓ボタニティ・ガール 攻1300  
(破壊)

??? LP4000↓3900

「ふん……だがこの瞬間、ボタニティ・ガールの効果が発動スル。このカードが墓地に送られたことでデッキから守備力1000以下の植物族モンスター、捕食植物スキッド・ドロセーラをサーチダ。さらにトラップカード、リグレット・リボーンを発動。今破壊されたボタニティ・ガールを守備表示で蘇生するガ、蘇生したモンスターは次の俺のエンドフェイズに破壊サレル」

「だがボタニティ・ガールはフィールドから墓地に送れさえすればサーチ効果が発動できるため、俺が攻撃しようがしまいが結果は同じ、か……」

ボタニティ・ガール 守1100

サンドモスの時もそうだったけど、カードの精霊だからこそ、カードのことを知り尽くしているというべきか。どちらに転んでも確定でサーチが行われるといういやらしい状況に持ち込まれてしまった三沢だが、その迷いはほんの一瞬だった。

「だとしても、ここで攻撃してダメージを通す！バトルだ、イフリート！そしてイフリートの攻撃力は、自分バトルフェイズの間300ポイントアップする！」

炎の精霊 イフリート 攻1700↓2000↓ボタニティ・ガール 守1100 (破壊)

「ボタニティ・ガールの効果。捕食植物フライ・ヘルをサーチシヨウ」  
「だが、これでお前の場はがら空きだ。やれ、業火！」

怨念を燃料として無限に燃え盛る壺の家紋部分が光り、そこから勢いよく炎が噴き出る。その衝撃は僕の場所から見ているだけでもとんでもなく熱そうだったが、当の精霊はというと自分の全身が燃えているにもかかわらず、まるで無頓着のまままで火を消そうともしない。どうやら、炎の熱がまるで効いていないようだ。

だが、その全身を隠す砂にとってはそうでもなかったらしい。業火の一撃がなにかを狂わせたのか、謎の精霊の全身から、ずっと身にま

とつていた砂が次第に剥がれていく。

怨念の魂 業火 攻2200↓???(直接攻撃)

???  
LP3900↓1700

「さあ、お前の正体を見せてもら……何!？」

やがて業火の炎も収まってきて、ついに三沢の相手の正体が明らかになる。あ、なんかあのモンスターには見覚えがある。確かそれなりに歴史のあるモンスターだ……けど、名前も効果も出てこない。

「チャークチャールさーん」

『わかったわかった。奴は、固有の名を持たない闇属性かつ悪魔族のモンスター。カードとしての名はブラッド・ソウル……憑依するブラッド・ソウルだ』

ブラッド・ソウルね、了解。当然博識の三沢もその名前に思い当たったようだが、どうも様子がおかしい。尋常ではないぐらいに険しい顔をしていて、話しかけられる雰囲気ではない。チャクチャールさんにもう1度ヘルプを求めようとした時、ようやく三沢が口を開いた。

「憑依するブラッド・ソウル……そうか、そういうことか。悪魔族の前がこんな砂漠のど真ん中に生息しているはずもない、マルタンに呼ばれたか?」

「マルタン? ああ、今はそんな名前の人間に憑いてるんだってナ。マルタン様と言いな、様ト」

「マルタンが!？」

あのモンスター、マルタンが召喚した精霊だって言うのか。確かにマルタンがデュエルするところは見たことがなかったけど、だからといって精霊が見える僕や十代に気づかれることなく精霊と共に過ごしていたなんて考えにくい。となると、この世界に来てからブラッド・ソウルには出会ったのだろうか? だけど、三沢の言う通りこの砂漠世界に悪魔族がすんでいるとは考えにくい。となると、一体あのモンスターはどこからやって来たんだ。

僕には何も理解できないが、どっちみちその答えを出すのは僕の役目じゃない。今その本人とデュエルしているのは、三沢だ。

「……まあいい、デュエルを続行するぞ。俺はカードを1枚セットし

て、ターンエンドだ」

「俺のターン、闇の誘惑を発動！カードを2枚ドロシテ、手札から闇属性モンスターであるフライ・ヘルを除外スル。そして、スキッド・ドロセーラを召喚！」

砂地から静かに生えてきたその草は、一見ただの薄気味悪い木にも見える。だが不気味な暗い配色の幹の先から伸びる枝は自らの意思でうねうねと動き、その先端の葉……いや、歯は自らの届く範囲にいる獲物全てを喰らい尽くさんとばかりに硬質な噛みあわせる音をカチカチと響かせている。何よりも凄まじいのは、その幹だ。木のこぶなどでは決してない、見間違えようもない目がいくつも不規則に辺りを見回している。

捕食植物スキッド・ドロセーラ 攻800

「永続魔法、超栄養太陽を発動。場のレベル2以下の植物族をリリースして、デツキからそのレベルプラス3以下の植物族モンスターのリクルートを行ウ。出でよ、フライ・ヘル！」

捕食植物フライ・ヘル 攻400

スキッド・ドロセーラとはうってかわって、貧弱ともいえるほど細く弱々しい胴体を持つ植物。だがその胴体は決してデイスアドバンテージなどではなく、むしろ進化の過程で獲得した強みであることがわかる。禍々しく開くその葉の『口』は不釣り合いなほどに大きくそして力強く、細い……つまり軽い胴体を引きずって空中の獲物をも捉えることができる仕組みになっているのがわかる。

「この瞬間、スキッド・ドロセーラのモンスター効果発動。このカードがフィールドから離れた時、相手フィールドの特殊召喚されたモンスター全てに捕食カウンターを1つ乗せ、捕食カウンターのついたモンスターレベルは1にナル」

地面から飛び出してきた小さな頭。それは昔、植物の1部だったのだろう。獲物に食らいついて放さないその性質からいって、もしかしたら種子の性質が異常な進化を遂げた結果なのかもしれない。ただ僕に言えるのは、少なくともそれが意志を持ち、自らの力で動きだすに至った過程を想像なんてしたくないということだ。

炎の精霊 イフリート(0) ↓ (1) ☆4 ↓ 1

怨念の魂 業火(0) ↓ (1) ☆6 ↓ 1

「さらにフライ・ヘルの効果を使用。1ターンに1度、相手モンスター1体に捕食カウンターを1つ乗セル」

UFOタートル(0) ↓ (1) ☆4 ↓ 1

これで、三沢のモンスター全てに捕食カウンターが乗った。カウンター、ということは、やはりそれを利用する専用のカードを使うのだろうか。

「魔法カード、デュアルサモン二重召喚を発動。増えた召喚権を利用シ、俺自身……憑依するブラッド・ソウルを召喚スル！」

実体を持たない、悪魔の形をした精神体。目の前のデュエリストと、うり二つのそのモンスターが、口が耳まで裂けるほどの笑みを浮かべた。

憑依するブラッド・ソウル 攻1200

「ちっ、やはり持っていたか……！」

そのモンスターを見て、なぜかますます顔が険しくなる三沢。その理由は、僕にもすぐわかることとなった。それと同時に、なぜ三沢がこのモンスターを見ただけであそこまで反応していたのかも。

「ブラッド・ソウルのモンスター効果！このモンスターをリリースすることデ、相手フィールドのレベル3以下のモンスター全てのコントロールを永続的に得ル！」

捕食カウンターから得体のしれないオーラが三沢のモンスターたちを覆い、そのオーラにあてられたモンスターが一斉に持ち主であるはずの三沢に牙をむく。大量展開により圧倒的優位に立っていたはずのデュエルが、わずか1ターンでそっくりそのままひっくり返った。

そして、1枚で大量にコントロールを奪取するこの能力。もしゾンビ生徒たちのゾンビ化がなにか得体のしれないオカルトパワーではなく、カードの精霊の力による洗脳としたら？たった1枚で何体ものモンスターのコントロールを永続的に奪うこの能力がもし人間相手に使われたとしたら、あのゾンビ化にもすべて説明がつく。つま

り、この精霊こそがこの事件の元凶……！

「クツ……！」

「モンスターがいなければ補給部隊もただの紙くずだなア？ 終わりだ！ お前のモンスター3体による一斉攻撃で片を付けてやるぜ！」

「三沢っ！」

炎がフィールドを埋め尽くし、今度は三沢を覆わんとする。このモンスターが犯人であることがほぼ明らか以上、三沢にはなんと少しでもここで勝ってもらわないといけない。だが、すでに攻撃は行われている。ここまでか……と思ったその時、目も眩むほどの光と共に天空から大量の剣が三沢を守るように降ってきた。

「安心しろ、清明。俺は永続トラップ、光の護封霊剣を発動した。このカードはプレイヤーのライフを1000ポイント払うことで、攻撃を1度無効にできる。俺は3000のライフにより、3体の攻撃をすべて無効にしたのさ」

三沢 LP4000↓3000↓2000↓1000

「つまらない真似ヲ……だが、そのライフではすでにその効力も打ち止めダナ。フライ・ヘル！ 奴にダイレクトアタックをしろ！」

捕食植物フライ・ヘル 攻400↓三沢（直接攻撃）

三沢 LP1000↓600

「ぐわっ！」

「三沢！」

確かに三沢はデスベルトを着けていないから、デスデュエルの影響そのものは受け付けない。けどそれは、カードが実体化するこの世界でのデュエルによるダメージをも受け付けないという意味ではない。ダメージを受ければ痛い、それは当たり前のことだ。

それは頭ではわかってはいるけれど……やはり友人が目の前で苦しむ姿というのは、何度見たって慣れるようなもんじゃやない。

「苦しメ、苦しメ。おっと、UFOTートルはリクレーターだったカ？ そんなものを残すわけにはいかないナ、メイン2に業火のモンスター効果を使用スル。炎属性モンスターのUFOTートルをリリースし、エンドフェイズまで攻撃力を500ポイントアップさせようカ。

カードをセットシテ、ターンエンドダ」

怨念の魂 業火 攻2200↓2700↓2200

三沢 LP600 手札：1

モンスター：なし

魔法・罨：補給部隊

光の護封霊剣

ブラッド・ソウル LP1700 手札：2

モンスター：炎の精霊 イフリート（攻・1）

怨念の魂 業火（攻・1）

捕食植物フライ・ヘル（攻）

魔法・罨：1（伏せ）

「俺のターン、ドローだ！」

ブラッド・ソウルが指摘した通り、すでにライフが3ヶタしかない無い三沢にはこれ以上護封霊剣の効果は使えない。つまり、あの手札2枚だけでこのターンをしのがなければならぬのだ。そんな絶体絶命の状況で三沢が引いたカードは……。

「マスマティシヤンを守備表示で召喚し、効果発動。このカードの召喚成功時、デッキからレベル4以下のモンスター1体を墓地に送る。そして俺は、たった今墓地に送ったモンスター……カーボネドンの効果発動！このカードを墓地から除外し、デッキからレベル7以下のドラゴン族通常モンスターを特殊召喚する！出でよ、ダイヤモンド・ドラゴン！」

マスマティシヤン 守500

ダイヤモンド・ドラゴン 守2800

わずか1枚の手札からどうにかモンスターを2体並べ、ひとまず守りを固める三沢。だが、ブラッド・ソウルはそれを嘲笑う。

「守備力2800……それで壁のつもりか？1つ教えてやるが、フライ・ヘルは自身よりレベルの低いモンスターとバトルするときその相手を効果破壊する能力がアル。そして捕食カウんターの乗ったモンスターはレベルが1にナル、この意味が分かるか？」

「そんな!？」

先ほどUFOタートルにやって見せたように、フライ・ヘルには自力で相手モンスターに捕食カウンを乗せる効果がある。つまり、タイマンかつ自分から攻め込む場合、あのモンスターに敵はいないことになってしまう。そんなのが相手となると、いくら守備力2800を誇るダイヤモンド・ドラゴンであってもその数字に意味はない。

「わかっているさそんなこと。魔法カード、七星の宝刀を発動！手札またはフィールドのレベル7モンスターを除外し、デッキからカードを2枚ドローする！」

「チイツ……！」

ダイヤモンド・ドラゴンをも踏み台にし、カードをドローする三沢。なるほど、最初からあのカードを壁モンスターにして使うつもりはなかったのか。

「……カードを2枚セットし、ターンエンドだ」

「どうやら、逆転のカードは引けなかったようだな？ドロー、スタンバイフェイズに業火のモンスター効果、自分フィールドに火の玉トークンを特殊召喚スル」

「わかっているさ、そんなこと！リバースカードオープン、デモンズ・チエーン！この効果によりその効果は無効になり、攻撃もできなくなる！」

業火が収められた壺に鎖が巻きつきがんじがらめに縛りつけ、中の怨霊が出てこれないような封印が施される。これで業火からの攻撃は防げる、けどまだ場には2体もの攻撃可能なモンスターが存在していることに変わりはない。

「まあいいサ、フライ・ヘルの効果でマスマティシヤンに捕食カウンを乗せてオコウ」

マスマティシヤン (0) ↓ (1) ☆3 ↓ 1

「バトルだ、フライ・ヘルでマスマティシヤンに攻撃！」

「……いいだろう、それは通しだ」

「ならこの瞬間、フライ・ヘルの効果発動！マスマティシヤンを効果で破壊シ、その元々のレベルをフライ・ヘルは喰らウ！」

マスマティシヤンは、戦闘で破壊された時に1枚ドローさせる効果

を持つ。フライ・ヘルのモンスター効果で破壊することで、その貴重なドロースらも奪おうという訳か。

捕食植物フライ・ヘル ☆2↓5

「補給部隊の効果は効果破壊にも対応する、そちらの効果でカードを引かせてもらおうぞ」

「行きな、イフリート！効果により攻撃力を300アップさせ、ダイレクトアタックだ！」

「させるか！永續トラップ、六芒星の呪縛！六芒星の罨が相手モンスター1体を縛り付け、その行動を封じる！」

「そんな古いカードで命を繋ぐか、忌々しい……」

「なにせこの世界に来た時、俺のデッキは持っていなかったからな。ごく少数のカード以外は、ほとんどがアカデミアにあったありあわせの物さ」

言われてみれば、さつき使ってたUFOタートルやダイヤモンド・ドラゴンのテキストもやたら古かった気がする。ATKとかじゃなくて攻、守ってステータスが書いてあったし、リリースじゃなくて生け贄表記だったし。

「フン。これでターンエンドだ」

三沢 LP600 手札：1

モンスター：なし

魔法・罨：補給部隊

光の護封霊剣

デモンズ・チェーン（業火）

六芒星の呪縛（イフリート）

ブラッド・ソウル LP1700 手札：3

モンスター：炎の精霊 イフリート（攻・1・六芒星）

怨念の魂 業火（攻・1・チェーン）

捕食植物フライ・ヘル（攻）

魔法・罨：1（伏せ）

「俺のターン！」

いくらさつきのターンを耐えきったとはいえ、あのカードはどれも



一時しのぎにしか過ぎない。ここで逆転しなければ、今度こそ道はない。だけど、不思議と心配には思わなかった。三沢はよく十代や僕のこと一番での引きをずば抜けていると言って羨んでいたが、僕に言わせれば三沢だって大概だ。三沢に任せておけば、必ず勝ってきてくれる。そんな安心感は、昔も今もまるで変わっていない。

そして、そんな三沢が引いたカードは。

「来たな……！俺は、俺のフィールドに表側表示で存在するトラップカード3枚をコストとして墓地に送る！」

「何ダト!？」

「まさか!」

聞き覚えのある召喚条件とともに、異世界の空にその咆哮が響き渡る。あの赤い体は、3幻神のうち1枚、オシリスの天空竜にも類似するあの禍々しい巨体は、間違いない。

「出だよ、神炎皇ウリア!そしてこのカードの攻撃力は、俺の墓地の永続トラップ1枚につき10000ポイントとなる!」

神炎皇ウリア 攻0↓3000

「ふざけた真似ヲ!」

「俺がこの異世界で、なぜデツキも無しに生き延びることができたと思う?このカードを持っていたから、並みの精霊はよほどのことがない限り近寄ろうとしなかったのさ。まずはその伏せカードを破壊する、ハイパー・デイストラクション!」

ウリアの特殊能力の1つ、チェーンを許さずに伏せカードを破壊する能力。しかし、その口から衝撃波が放たれることはなかった。

「ククク……マルタン様から、そのカードについては一応聞いていたサ。三幻魔の1体でありながら人間の側に着いたつまらん精霊として、そしてその弱点もナ。お前は攻撃力こそ墓地にに応じて上がっていくが、守備力は変化シナイ。さらに売りの伏せカード除去能力も、召喚成功時に発動させちまえば畏れるに足りないツテナ。俺はお前の召喚時にトラップカード、手のひら返しを発動させてイタ。このカードは元々のレベルと違うレベルを持つモンスターが存在するとき、フィールドのモンスターを全て裏側守備表示に変更スル……ウリア

はともかく、俺の場のモンスターは全てレベルが変動している、よつて条件を満たすのもたやすいという訳サ」

神炎皇ウリア↓???

炎の精霊 イフリート↓???

怨念の魂 業火↓???

捕食植物フライ・ヘル↓???

「そう、か。俺はカードを1枚セットし、ターンエンドだ」

「残念だったナア、せつかくの切り札も不発に終わってヨウ！俺のターン、ドロー！」

「……」

悪魔的な笑いと共にカードを引くブラッド・ソウル。だがもはやそのカードを見ることすらせず、今さつき裏側になったモンスターたちをまた攻撃表示に変更していく。それに対して三沢はエンド宣言以降一言も喋らず、じつと静かな目でフィールドを見つめている。

「バトルダー・フライ・ヘル、裏側になったウリアに攻撃シロ！」

フライ・ヘルが、その名の通り空中を植物とは思えないほど機敏な動きで飛来するそしてその牙が、裏側のカードに収められたウリアにかぶりついて……次の瞬間、灰になって燃え尽きた。

「エ？」

捕食植物フライ・ヘル 攻400（破壊） ↓神炎皇ウリア 攻3000

ブラッド・ソウル LP1700 ↓0

「エ？」

デュエルの敗者として、静かに全身が消えていく様子を何が何だかわからない、という様子で呆然と見つめるブラッド・ソウル。やがてその視線が、三沢の場に1枚表になったカードの上で止まった。

「最終……突撃……」

「……命令」

セリフの後半を、僕が受け継ぐ。三沢が最後に発動したカードは、最終突撃命令。発動したが最後まで全てのモンスターを表側攻撃表示で固定する、強力だが諸刃の剣ともなる永続トラップの1枚だ。

「ウリアの弱点といったか？そんなもの、使い手の俺が一番よく理解しているさ。そこが狙われやすいウィークポイントなら、当然対策も取ってある。それがこのカード、最終突撃命令だ」

「そん……ナ……」

その言葉を最後に、消えていくブラッド・ソウル。その姿が完全に風にかき消されたのを確認し、三沢がこちらを向いた。ちょうどその時、僕の作業も終わりを告げた。たまたま繋いだコードがよほど大事な物だったらしく、いきなりどこかの画像が電線と電線の間投影されたのだ。その画面の向こう側の人物の顔を見た瞬間、三沢の顔色が変わる。僕に対する礼もそこそこに、かぶりつかんばかりの勢いでその画像の前に陣取った。

『誰か、聞こえるか！誰か、この通信を聞いている者はいないのか!?!』  
「博士！俺です、三沢です！」

博士、との呼称を聞いて、僕もそれが誰なのかをようやく理解できた。あのおじさんこそツバインシユタイン博士……おそらくは人間の中で誰よりも、このモンスターが存在する異世界について詳しいであろう人物だ。

## ターン90 科学水龍と神の雷

『いいかね三沢君、我々はく……』

「はい、博士！」

ついに僕らの元いた世界とのコンタクトに成功した……のはいいけれど、ツバインシユタイン博士と三沢の会話は専門的すぎて門外漢の僕には何がなんだかさっぱりわからない。まあ、三沢本人が理解できているのだからそれでいいだろう。

それよりも、僕には気がかりなことがあった。先ほど突然地面からそびえ立ったあの何本もの柱、どうも嫌な予感がする。

「おい、清明！」

「オブライエン！」

そのタイミングで丁度来てくれたのはオブライエンとそのゆかいな仲間たち。ブルーベレーとか何とかいうチーム名で呼ばれる、オブライエン本人がこの世界に来てから突貫工事で鍛え上げた選りすぐりの猛者たちだ。そのブルーベレーがサツと発電所の周囲を囲むように散らばり、一瞬の間も見せずに警戒態勢に当たる。その様子を見て頷いたオブライエンが、見張りの仕事を取られて一気に暇になった僕に語りかける。

「すまなかつたな、清明。まず結論を言うと、やはりあのデュエルは囲だった。マルタンの狙いは発電所でも食料でもなく、あの柱の根元にあるらしい。すでに十代が彼を追っている」

「十代が？1人で？」

多分、十代なら1人でも勝つだろう。彼はそういう男だ。僕が今から追いかけたとしてもできる事なんてせいぜい露払いがいいところだろうし、それ以前に足を引っ張る可能性すらあるだろう。その話題はそれまでにして、1つ気になることについて聞いてみた。

「そういえばオブライエン、ゾンビ生徒ってどうなってるの？ちよつと減ったりとかしてない？」

ついさつき三沢は、明らかにマルタンの息のかかったコントロール奪取能力持ちの悪魔族カード、憑依するブラッド・ソウルを撃破した。

もしこれで生徒たちのゾンビ化が解けているなら、それに越したことはない。

だが、オブライエンはそんな希望的観測に対してあっさりと首を横に振った。

「駄目だな。あの3人は正気に戻ったようだが、むしろその後で不意を突かれて襲われ、ゾンビ化した生徒が何人かいる。ちゃんとした数はまだ把握できていないが、楽観はできないだろう」

「そう……」

となると、他にもまだ洗脳担当のモンスターが潜んでいるのだろうか。だとすると、それをいちいち探すよりも頭、つまりマルタン自身を直接叩く方がよさそうだ。十代には、いつも負担ばかりかけてるけど。

すると後ろの通信で聞き覚えのある声が出た。ぼやけた映像を見ると、そこには見覚えのある顔2つが。

『清明！』

「夢想！それにエド！」

『僕をおまけ扱いとは、相変わらずいい根性だなお前は。まあいい、今の話は聞いていたか？すぐテニスコートに向かってくれ』

相変わらず年下とは思えないほどデカイ態度のエドがなんか言ってるけど、んなもん無視だ無視。たかだか数日顔を見てないだけなのに、なんだかもうずいぶんと顔を見ていないような気がする。

「夢想……」

何か言おうと思っていたはずなのに、何もセリフが出てこない。顔を見たら言いたいことはいくらでもあったはずなのに、その全てが吹き飛んだ。天上天下古今東西、男は美少女の涙にや弱いつて相場が決まってるもんよ。

『よかった……本当によかった……つて、私……！』

「……ごめん」

申し訳なさや嬉しさなどがこみあげてきていっばいになり、博士やエドの目も気にせず泣きじゃくる夢想の顔を直視できず、目を逸らしてそれだけ返すのが精一杯だった。多分放っておくといつまでもそ

うしていただろうから、そのあたりで一度映像の前から引き離してくれた皆にはむしろ感謝すべきだろう。

「……ゴホン。では博士、もう一度確認します。見つかったレインボー・ドラゴンの石板からカードが完成しだいこちらの世界に転送装置を使って送り込み、その精霊の力を利用してアカデミアを元の場所にワープさせる。ただしレインボー・ドラゴンのカードを送るためには膨大なデュエルエナジーが必要となるため、こちらとそちらの世界でそれぞれデュエリストを用意してそのエナジーを賄うためにデュエルさせる……これでよろしいですね？」

『ワシにもこんな青春があつたもんじゃのう……いや、失礼した三沢君。その通り、これで理論上は完璧じゃ。これで君たちを、この世界に帰還させられる。ただ次元の裂け目はとても不安定なものであり、失敗の可能性を少しでも抑えるためになるべく迅速に行動してもらいたい』

「はい、博士。よし、テニスコートに行くぞー！」  
「ブルーベレー、お前たちもついて来い。俺たちも行くぞー！」

テニスコートに向けて全員が出発する。僕もついていこうとして、もう一度だけ振り返った。またこちらを覗き込んでいた夢想と再び目が合い、どうしていいかわからず咄嗟に親指を立てていた。それを見て一瞬あつげにとられた顔をするも、優しく微笑んで同じくサムズアップで応える夢想。そこで発電システムの調子が一時的に悪くなったらしく、画像が急に乱れて何も見えなくなった。砂嵐状態のテレビのようにザーザーと無意味な音が流れたままの映像に背を向けて、すでにいくらか先行しているメンバーと合流しに向かった。……本当駄目だなあ、僕。ヘタレとか臆病とか言われても言い返せそうにないや。

『ヘタレ。臆病。これでいいか、マスター？』

「……そういうのはいらぬです」

なんでこの神様からナチュラルに悪口言われなきやいかんのだ。流星に空気読めてなかったと反省してくれたのか、それ以降向こうからコンタクトは取ってこなかった。

「そんな……あいつらは……!」

「嘘、でしょう……? マルタン、本当にあの封印を……」

僕や明日香が言葉を失ったのも、無理はないと思う。あれからブルーベレーの皆さん、そしてクロノス教諭という多大な犠牲を払いながらもなんとかゾンビ生徒たちを潜り抜けテニスコートにたどり着いた僕たち。そこでツバインシユタイン博士の指示に従いデュエルエナジーを発生させるためのデュエル……向こうの世界からはヘルカイザー、こちらからはヨハンが出ることを決め、たまたまナポレオン教頭がアカデミアに借り受けていたデュエルシステムの機械を使つての史上初の試み、次元を隔ててのデュエルが行われようとしていた。お互いにデュエルの準備もすっかり完了し、広いスペースが必要だから、とかそんな程度の理由でドーム状の屋根を開いて……その結果、すでに解放された3幻魔のうち三沢のところにいるウリアを除く2体、ラビエルとハモンの実体化した姿をばっちり見上げるようになっていた。

「こっちはもうデュエルするだけだったのに……!」

ヨハンの声には早く元いた世界に帰りたい、という焦りや初めて見る3幻魔への畏怖の他にも、ずっと待ち望んでいたレインボー・ドラゴンをまだこの手にできないのかという苛立ちが見え隠れしている気がする。まったく、こんな時でもデュエル馬鹿つてのはこうだから困ったものだ。

よく見ると3幻魔の足元には、左腕が怪物のような奇妙な形になっているマルタンがいる。そのマルタンと僕らの目が合うと、何事か頭上のラビエルとハモンに向かって話しかけた。すると2体の幻魔がそれに頷いてそれぞれ青と黄色のエネルギーの塊を放出し、それがかわす間もなく僕らの目の前まで来て光と同じ色のマントをつけた人型の悪魔……幻魔の殉教者、と呼ばれる姿になる。そのうちの1体、ラビエルの放った青マントの殉教者が口を開いた。

「久しぶり、だな。遊野清明」

「ああ、まったくだね。もう2度と会うことはないと思ってたんだけど?。」

忘れもしない1年の最後、セブンスターズとの戦いに始まった闇のデュエルの日々、そしてその締めくくりとなったラビエルとの死闘の記憶が甦る。思えばあの時も、こうして殉教者の姿を取ったラビエルとデュエルしたんだっけか。

「私はその名を覚えた人間は、お前ただ1人だけだ。光栄に思うがい」

「そりやどうも、だ」

あつちはそう言うが、僕にとってもラビエルの名前は忘れられない。なにせあのデュエルは僕にとって初めての、最終的に勝利できなかった闇のデュエルだ。チャクチャルさんの力をもってしてさえ、あの時の僕には引き分けるだけで精一杯だった。その結果魂を抜かれたはずの僕が、なぜこうして今を生きているのか……ユーノもチャクチャルさんも何も教えてくれないけど、なんとなくあの2人が何かしてくれたような記憶がおぼろげながらある。

「我々がこうして解放されたのは、お前たちのやろうとしていることを止めるためだ」

「つまりマルタン様が、お前らを倒せとき。もつとも私の狙いはただ1つ、裏切り者のウリア!お前を倒す、ただそれだけだ!そのご自慢の機械を粉々にされたくなければ、私の挑戦を受けろ!」

そう言って黄マントの殉教者が三沢を……より正確に言えば、三沢のデュエルディスクとその中に眠るウリアをすごい剣幕で指差す。どうやらそれを受けて、三沢とウリアが何かテレパシーでの会話をしたらしい。覚悟を決めた表情でデュエルディスクを構え、ハモンの方へと歩きます。それを止めたのは、意外にも向こう側で見ていたツバインシユタイン博士だった。

『待ちたまえ、三沢君!』

「申し訳ありません、博士。しかし私の狙いは俺です、幸いここから先の操作に専門知識は必要ありませんし、俺が席を外しても……」

『違う、そういうことを言っているのではない。この転送システムは



デュエルアカデミアほど巨大な質量を持つ物体を運ぶにはデュエルエナジーが足りていないが、これぐらい小さなものならば今の状態でも飛ばすことができる！戦う前にこれを受け取ってくれ、三沢君！」

そう言っただけかケースのようなものを投げる博士。弧を描いて転送装置の真上に飛んで行ったそれが装置から放たれた光を浴びると、次の瞬間にはテニスコートの真上に突然現れた。重力に従い落ちてきたそれをキャッチし、中身を確認した三沢の顔がパツと輝く。

「これは、俺のデツキじゃないですか！」

『うむ。やはり使い慣れたものが一番良いじやろうからな。健闘を祈っておるぞ、三沢君』

「ありがとうございます、博士！」

これまで使っていた借り組みで寄せ集め状態だった炎属性のデツキを引き抜く三沢。そこからウリアのカードを取りだして送られてきた新たなデツキに入れ、それをデュエルディスクに差し込んだ。

「さあ、待たせたな」

「まずはウリアとそのおまけを倒す。それが終われば、我に屈辱を味あわせたあの女を……」

あの女、というのは夢想のことだろう。綺麗な逆転勝利だったからねえ。しかし三沢をおまけ扱いとは、大胆というか傲慢というか。

ともかく2人のデュエリストが、特に示し合わせる風もなくテニスコートの両端に分かれる。そこから互いに構えを取るのも、ほぼ同時だった。

「デュエル！」

「先攻は俺からだ！カードを3枚セットし、カードカー・Dを召喚！召喚したこのカードをリリースすることでデツキからカードを2枚ドロ―し、このターンのエンドフェイズになる。俺はこれで、ターンエンドだ」

先手を打った三沢は、まずドロ―から仕掛けた。フィールドに現れすぐ消えた平べったい車の効力により手札を増やし、3枚の伏せカードでハモンのターンを迎え撃つ準備を固める。

「我のターン！永続魔法、天変地異！さらに永続魔法、デーモンの宣告

を発動！」

殉教者の背後に、僕らには読めない悪魔文字がびっしりと書かれた巨大な石板がせり上がる。だけどそれより問題なのは、あの天変地異のカードだ。天変地異とデーモンの宣告が揃った時、そのプレイヤーは1ターンに1枚のカードをドロウできるのと等しい……なにせ超有名なコンボだ、僕だって知っている。

「天変地異の効果により、互いのプレイヤーはデッキを表側表示にする。そしてデーモンの宣告は1ターンに1度私のライフ500を支払うことでカード名を宣言し、デッキトップがそのカードならばそのまま手札に加えることができる。このターンは……ほう、強者の苦痛か」

天変地異の効力でデッキが表側になっているこの状況では、どんな馬鹿だってデッキトップの中身なんて外すわけがない。当たり前のようにデッキの一番上にあったカード、強者の苦痛を手札に入れた。

ハモン LP4000↓3500

「さらに我は番犬ーウオッチドッグを召喚。バトルフェイズに入るが、このカードは攻撃力0なため攻撃はせずメイン2に移る」

番犬ーウオッチドッグ 攻0

「ウオッチドッグは召喚したターンのメイン2にのみ効果を使うことができる。手札の魔法カード1枚を捨て、デッキから永続魔法1枚を場にセット。この効果で我は2枚目のデーモンの宣告をセットしそのまま発動、500ライフを払いバッド・エンド・クイーン・ドラゴンを宣言。当然これも手札に加える。カードをセットしてターンエンドだ」

ハモン LP3500↓3000

「止められない、か……」

3枚も伏せてあるのだからなにか1枚ぐらい妨害系のカードがあるかとも思ったが、現実はそううまくはいかないようだ。全ての効果を素通しした結果、ハモンのデッキは大きく回転し始めてしまった。

三沢 LP4000 手札：3

モンスター：なし

魔法・罨：3（伏せ）

ハモン LP3000 手札：5

モンスター：番犬―ウオッチドッグ（攻）

魔法・罨：デーモンの宣告

デーモンの宣告

天変地異

1（伏せ）

「俺のターン、ドロー！来い、ハイドロゲドン！」

久々に見るその姿は、水素をモチーフとした4つ足の恐竜。となる  
とあれは間違いない、6つの属性デッキの中でも三沢が最も愛用す  
る、ウオーター・ドラゴン軸の水属性デッキだ。

ハイドロゲドン 攻1600

「……あれ？」

攻撃力ではハイドロゲドンが上なうえ、あのカードはモンスターを  
戦闘破壊するたびに同名カードをリクルートする能力がある。つま  
りこのままハイドロゲドン2連撃を加えれば三沢の勝利……なのだ  
が、なぜかその本人が動こうとしない。あの伏せカードがいかにもな  
罨なのは僕だって見ればわかる。だけど、案外ブラフの可能性だって  
あるしとりあえず攻撃してみないと始まらない、なんて僕なんかは思  
うけど。

そして躊躇いつつも、最終的には三沢も同じ結論に達したらしい。

「バトルだ、ハイドロゲドン！ハイドロ・ブレス！」

「リバースカードオープン、レインボー・ライフ！手札1枚をコストと  
し、このターン我の受けるあらゆるダメージを回復に変換する！」

ハイドロゲドン 攻1600↓番犬―ウオッチドッグ（破壊）

ハモン LP3000↓4600

「しくじったか……？だが、ハイドロゲドンのモンスター効果発動！  
相手モンスターを戦闘破壊し墓地に送ったことで、デッキからハイド  
ロゲドンを特殊召喚する！」

ハイドロゲドン 攻1600

本来ならば追撃をするはずのハイドロゲドン。だがレインボー・ラ

イフの効力はターンの間ずっと続くため、ここで攻撃したらみすみす敵のライフを増やすだけになってしまう。

「それで終わりか？ならば私のターン、ドロロー！……ほう、どうやらお遊びは終わりのようだな。我はデーモンの宣告の効果を2回使い、降雷皇ハモンとツイーンツイスターをそれぞれ手札に加える！」

「降雷皇……ハモン！」

ハモン LP4600↓4100↓3600

ついに手札に加えられた3幻魔の一角、ハモン。そしてその特殊な召喚条件は、すでにフィールドに揃ってしまっている。

「まずは手札より、バッド・エンド・クイーン・ドラゴンのモンスター効果！自分フィールドに永続魔法が3枚以上存在するとき、このカードは手札から特殊召喚できる！さらに自分フィールドから永続魔法3枚を墓地に送ることで、我はフィールドに降臨する！出でよ、降雷皇ハモン！」

バッド・エンド・クイーン・ドラゴン 攻1900

降雷皇ハモン 攻4000

「早い……！」

思わずそんな声が出る。「天変地異コントロール」のギミックをフルに生かして必要なカードを高速で手札に揃え、バッド・エンド・クイーン・ドラゴンと降雷皇ハモンの永続魔法3枚というサーチの利きにくい召喚条件をこれだけのターンで満たしてくるだなんて。三沢ですらようやくハイドロゲドン2体を並べただけで、まだエースモンスターウォーター・ドラゴン召喚の条件すら満たしていないというのに。

改めて実感する。あの時は相手が夢想だったから印象がぼかされていただけで、このハモンもやはり3幻魔……凄まじいまでの実力者だ。どうして僕の周りには、人格に一癖もふた癖もあるくせにやたら強い奴ばかり集まるんだか。

「行け、バッド・エンド！ハイドロゲドンを破壊しろ、トラジエディ・ストーリーム！」

「くっ……リバーズ発動、デモンズ・チェーン！これにより降雷皇ハモ

ンは効果が無効となり、攻撃が不可能になる！」

「愚かな、先ほど手札に加えたカードを忘れたか！速攻魔法、ツイントイスターを発動！手札から強者の苦痛を捨て、フィールドの魔法か罠を2枚まで破壊する！デモンズ・チエーン及び真ん中の伏せカードには、そのまま墓地へ送られてもらおうか！」

「ぐっ！」

2本の竜巻が巻き起こり、三沢の発動した2枚のカードがそれに飛ばされて消えていく。だが攻撃封じのコンボが破られてなお、三沢の目から闘志が消えることはなかった。

「もちろん忘れるわけがない。俺はツイントインスターにさらにチエーンして破壊されるカード、強欲な瓶を発動していた。これによりデッキからカードを1枚ドロウできる。そして今俺が発動したデモンズ・チエーンは、このカードを通すための罠だ！リバーズカードオープン、銀幕の障壁<sup>ミラーウォール</sup>！このカードが存在する限り、相手攻撃モンスターは銀幕に写る己自身を攻撃し、攻撃力が半分となる！」

バッド・エンド・クイーン・ドラゴン 攻1900↓950 (破壊)

↓ハイドロゲドン 攻1600

ハモン LP3600↓2950

「くだらん真似を……！だが、少なくとも貴様の場の永続罠の数はまだ1枚のみだな」

「確かに、だがこのくらいは必要経費だ。さらに相手モンスターを破壊し墓地へ送ったハイドロゲドンの効果で、デッキから3体目のハイドロゲドンをさらに呼び出させてもらおうか」

ハイドロゲドン 守1000

「だが、たとえ攻撃力が半減しよう和我が一撃ならば！喰らいて滅びよ、失楽の霹靂！」

大量の雷が銀幕の壁を叩き割り、今度こそハイドロゲドンに届く。確かに数値的なダメージこそだいぶ抑えられたものの、それでもこの世界で3幻魔の一撃だ、三沢の体にかかる負担は想像するだけで恐ろしい。

降雷皇ハモン 攻4000↓2000↓ハイドロゲドン 攻16

00 (破壊)

三沢 LP4000↓3600

「さらに我が特殊能力発動。相手モンスターを葬った時、追加で1000ポイントのダメージを与える！受けて見よ、地獄の贖罪！」

「ぐわあああつ！」

三沢 LP3600↓2600

「どうした、これで終わりか？ならばカードを1枚伏せ、永続魔法、強欲なカケラを発動。ターンエンドだ」

三沢 LP2600 手札：3

モンスター：ハイドロゲドン (攻)

ハイドロゲドン (守)

魔法・罨：銀幕の障壁

ハモン LP2950 手札：3

モンスター：降雷皇ハモン (攻・銀幕)

魔法・罨：強欲なカケラ

1 (伏せ)

「ぐ……俺のターン！このカードは……よし、銀幕の障壁は維持コストとして毎ターン2000のライフを要求するが俺はそのライフを払わず、このカードを自壊させる」

三沢を守るために張られていた鏡の幕にひびが入り、粉々に砕け散る。と同時に、障壁によって減らされていたハモンの攻撃力がまたしても元に戻ってしまう。

降雷皇ハモン 攻2000↓4000

「なんだ、まだライフは残っているのに自壊させるのか？」

「黙って見ている！俺はオキシゲドンを召喚し、魔法カード……ボンディング―H2Oを発動！フィールド上に存在する2つの水ハイドロゲドン素と

1つの酸オキシゲドン素を結合させ、デッキから水の化身を呼び起こす！出でよ、ウォーター・ドラゴン！」

ウォーター・ドラゴン 攻2800

満を持して現れた、三沢のエースたる水の化身。だが銀幕の障壁が消えて攻撃力4000になったハモンの前では、その攻撃力も届かな

い。これなら障壁を維持していれば……そう思った直後、彼が別のカードを手札から出した。

「装備魔法、幻惑の巻物を発動。このカードを降雷皇ハモンに装備することで、その属性を俺が自由に決めることができる。そして炎属性を宣言することで、ウォーター・ドラゴンの効果を適用。このカードが存在する限り、あらゆる炎属性モンスターと炎族モンスターの攻撃力は0となる！」

降雷皇ハモン 光↓炎 攻4000↓0

「バトルだ！ウォーター・ドラゴンで降雷皇ハモンに攻撃、アクア・パニッシュャー！」

「小癪な真似を……だがまだ甘い。カウンター罠、攻撃の無力化を発動！攻撃は無効となり、バトルフェイズは終了する！」

「そんな、三沢の攻撃がかわされた!?!」

大きく広げられたハモンの黄金の翼が盾代わりとなり、ウォーター・ドラゴンの吐き出した水のブレスを弾いて逸らす。明後日の方向へと飛んで行った水流が、砂漠のはるか遠くに着弾して重い音が響いた。

「これで、ターンエンドだ……」

ウォーター・ドラゴンの効果が生きている以上まだ絶体絶命というほどでもないが、今のターンでとどめを刺し損ねたことを悔やみつつターンを終える三沢。一方ハモンは今のカウンターに気をよくしたのか、余裕の面持ちでカードを引き……僕らにとっては運のいいことに、引いたカードはそのまま召喚できるモンスターではなかったらしい。少しだけイラツとしたままに、自らの分身を再び立ち上がらせる。

「スタンバイフェイズ、私のフィールドから永続魔法1枚を墓地へ送ることでバッド・エンド・クイーン・ドラゴンは蘇生が可能となる」  
バッド・エンド・クイーン・ドラゴン 攻1900

先ほど振り返りに会い葬られたドラゴンが、強欲なカケラを墓地に送ることでまたもやフィールドに現れる。最初からドロー目的じゃなくて、この蘇生効果を使うためだけに使ったということか。

「速攻魔法、サイクロンを発動。我はこのカードで幻惑の巻物を破壊する」

幻惑の巻物が破壊され、ハモンの属性が炎から光に戻ってしまう、これでせっかくの属性変更も台無し、ウォーター・ドラゴンの効果から逃れてしまった。

降雷皇ハモン 炎↓光 攻0↓4000

「バトルだ、我自身でウォーター・ドラゴンに攻撃！失楽の霹靂！」

降雷皇ハモン 攻4000↓ウォーター・ドラゴン 攻2800

(破壊)

三沢 LP2600↓1400

「追撃の地獄の贖罪！」

「うおおおっ！」

三沢 LP1400↓400

テニスコート中に、三沢の絶叫が響く。無理もない、あの場で三沢が受けているのは、実体化した精霊による本物の雷撃なのだから。

「まだまだ……！ウォーター・ドラゴンには、もう1つの効果がある！」  
そう。ウォーター・ドラゴンは破壊されても、墓地からハイドロゲドン2体とオキシゲドン1体を蘇生する特殊能力を備えている。その3体のモンスターを壁にすれば、ハモンの攻撃は防げずともバッド・エンド・クイーン・ドラゴンのダイレクトアタックは受けずに済む。

ハイドロゲドン 守1000

ハイドロゲドン 守1000

オキシゲドン 守800

「くだらん。速攻魔法、エネミーコントローラーを発動！この効果によりハイドロゲドンを攻撃表示に変更する！バトルだ、バッド・エンド！」

バッド・エンド・クイーン・ドラゴン 攻1900↓ハイドロゲド

ン 守1000↓攻1600 (破壊)

三沢 LP400↓100

「バッド・エンドがバトルによりダメージを与えた時、相手は手札を1



枚選んで墓地へ送り、我はカードを1枚ドロウする。残った最後の手札1枚、墓地へと送ってもらおうか」

「……ああ、いいだろう」

確かにハモンの言うとおり、残り1枚しかない手札では選んでも何もあつたものではない。デュエル序盤から使われることなくずっと手札にあつたカードが、ゆっくりと墓地へ送られた。

これで三沢はハンドレス、対するハモンは今のドロウも含めてまだ3枚も手札を残している。状況は不利……だけど、まだ負けたわけじゃない。きつと何かできる事があるはずだから、まだ三沢の目は死んでない。

三沢 LP100 手札：0

モンスター：オキシゲドン（守）

ハイドロゲドン（守）

魔法・罨：なし

ハモン LP2950 手札：3

モンスター：降雷皇ハモン（攻）

バッド・エンド・クイーン・ドラゴン（攻）

魔法・罨：なし

「俺のターン、ドロウ！」

最後の最後に三沢が引いた1枚のカード……それを、静かにフィールドに伏せる。あのカードがなんにせよ、次のハモンのターンで決着がつくだろう。

「このカードをセットして、ターンエンドだ」

「我のターン。我が一撃で残ったモンスターのうちどちらかを攻撃すれば、地獄の贖罪により貴様の敗北は確定する……結局ウリアの奴は出てこなかったが、まあいい。もはや考えることもあるまい、ハイドロゲドンに攻撃する！失楽の——」

「この瞬間、リバースカードオープン！」

ハモンが全身から走らせる稲妻が、三沢の目の前に出現した巨大な鏡に全て吸収される。その鏡は目の前の風景を模写するのではなく、かすかに覗いて見えるその中にはハイドロゲドンとオキシゲドンが

1体ずつ写りこんでいた。

「馬鹿な!？」

「俺はフィールド上の2体のモンスター、ハイドロゲドンとオキシゲドンをゲームから除外することで永続罫、デイメンション・リフレクターを発動した。このカードは発動後に闇属性レベル4の魔法使い族としてフィールドに特殊召喚され、その攻守は相手モンスター1体と同じになる」

デイメンション・ミラーージュ 攻4000 守4000

鏡が吸収した稲妻のエネルギーを内部に溜め込み、自らの力へと変換していく。最初はうつすらと、だが次第に力強く、鏡そのものの表面が内部から光を放ち始めた。

「そしてデイメンション・ミラーージュは特殊召喚に成功した時、自らの攻撃力の数値分だけ相手プレイヤーにダメージを与える!これで終わりだ、降雷皇ハモン!」

臨界点を超えたエネルギーは破壊光線として真っ直ぐに解き放たれ、防御姿勢を取ったハモンの黄金色の翼をあつさり突き破ってプレイヤーとしてのハモンを直撃する。

「ぐ、ぐおおおお……!!」

ハモン LP2950↓0

「なぜだ、なぜ我が2度も人間ごとときに……!」

『その理由を知りたいか?』

ソリッドビジョンが消えてゆく中、その場に倒れこむハモン。うわごとのようになぜだ、なぜだと呟き続けるその姿に、どこからともなく声が降り注いだ。

「……その声、ウリアか……フン、私の無様な姿を嗤いにでも来たか?」

『まさか。いいか、お前が敗北した原因はただ1つ。人間を侮っていたことだ』

「何?」

ゆつくりとハモンを論すウリアの声。僕らも、ラビエルも、誰も何も言わなかった。

『以前の私もそうだった、だからこそ敗れた。今回お前は私との戦いを求めるあまり、真の相手である目の前のこの人間のことを見ていなかった。だからこそ私はこのデュエルの前、この人間に密かに頼んだのだ。万一私のカードをドロウしたとしても、このデュエルに限り私を召喚しないでくれと。案の定お前は常に心のどこかで私が場に現れることを意識してのデュエルしかできず、その結果実力を十分に発揮することができていなかった』

「それでは、まさか貴様は……！」

『ああ、そうだとも。バッド・エンド・クイーン・ドラゴンにより墓地に送られたカード、あれが私だ。お前はいつまでも手札で召喚条件を満たしていない私、そして墓地に送られ蘇生もできない私の幻影を無意味に意識し続けていたのだ』

「まったく……このハモンともあろうものが見事に裏をかかれた、ということか……」

その台詞を最後に、黄マントの殉教者が最初にこちらへ飛んできたのと同じような黄色い光となって砂漠の向こう、マルタンの方へと飛び去っていく。これで残る妨害役はラビエルただ一人、ここまで来たら僕も引くわけにもいかないだろう。

「ハモンめ。まあいい、遊野清明。いぎ、あの時の決着をつけようではないか」

「……オーケイ。僕も1年前とは違うってことを見せたげるよ、つと！」

あの時は引き分けに終わった相手。あれから丸1年と少しの間に、どちらがより成長できたのか。その答えを、今からカードに聞いてみよう。

## ターン91 鉄砲水と幻魔の皇者

「ラビエル……勝負の前に、ひとつ聞かせてもらおうか」  
「ほう？」

「マルタンに憑いてるのが誰かは知らないけど、わざわざ荒事担当に三幻魔を復活させるなんて、なんでそんなに手のかかることをする必要があったのさ？いや、それだけじゃないか。プロフェッサー・コブラといいゾンビ軍団といい校舎にけしかけたウラヌスといい、マルタン自身はお膳立てばかりで全然動こうとしない。強大な力を持つ精霊なのはわかるのに、だったらなんでそのご主人様は自分から動かないのさ」

これは、実はずっと気にかかってきた疑問でもある。大量の精霊を使役するその力に加えてアカデミアごと次元移動指せるだけの實力を持つていながら、なぜかマルタンは……いや、あのオレンジ色の人影は決して僕らに直接攻撃してこない。十代に会いたい会いたいというのなら、それこそピンポイントで神隠しにでも合わせる方がよっぽど簡単はずだ。なのに、それをしてこない。一から十まですることなすこと全てが回りくどいのだ。

過去1度だけとはいえ、ラビエルと直接対峙した僕にはわかる。奴は嘘をつくようなタイプじゃない……少なくとも、この疑問に対する答えを持っているならば、それを誤魔化したりするような真似はしないはずだ。

「ククク……そうか、お前らは何も知らぬのか」  
「だから聞いているんだっての」

「まあよからう。他ならぬ遊野清明、お前の頼みだ。我々の勝負の最中そんなくだらぬことに思考を裂いて興味が冷めることがないよう、憂いは先に断っておいてやろう。とはいえ私も認めたくはないが、奴の力により封印を解かれた身……全てを口にすることはできないが、ヒントぐらいは与えておこう。奴は確かに強い、だが同時に、奴は誰よりも弱い。奴の最大の強みはその弱さにこそあり、それゆえもし私が奴と会いまみえることがあれば、奴に対し私は特に敗北するだろう」

「……そんなポエム聞きたくて聞いてんじやないんだけどね。さっぱりわかんないんだけど」

もつとこれこれこんな訳で、とか説明してくれないと、僕の脳味噌じゃついていけない。ただ、『私は奴に特に敗北する』という部分が妙に引つかかった。日本語としてはむちやくちやだけど、言いたいことはわからんでもない。要するに、極端に相性が悪いってこと？確かラビエルの効果は、元からの高打点に加えさらに自軍モンスターの魂を文字通り生贄としてさらにその火力を増大させる力押しスタイルだったはずだ。それがとくに相性が悪い……どういうことだろう。

「もうよからう。これ以上私は口を割らぬ、もはや言葉は蛇足でしかない」

「そうね、僕もあの時の引き分けには納得いつてないし、リターンマッチと洒落込ませてもらおうか……」

「デュエル！」

しかし、まさかこうしてラビエルと再びデュエルするだけでも驚きだなんてもんじやないのに、その舞台がこんな異世界だなんて、ねえ。人生何が起きるかわからないとはよく言ったものだけど、それにしただって限度つてもんがあるんじゃないかと思う。

「先攻は僕だ！ 永続魔法、補給部隊を発動！ さらにフィッシュボーグーアーチャーを準備表示で召喚して、この魚族モンスターの召喚をトリガーに手札のシャーク・サッカーの効果発動。出ておいで、サッカー！」

フィッシュボーグーアーチャー 守300

シャーク・サッカー 守1000

「まずはこれでターンエンド……かかってきな、ラビエル！」

最低限の壁モンスターと、それが破壊されたとしてもその行動をトリガーとしてのドロウを行う補給部隊。次の1ターンを耐えきることきえできれば、さらなる展開に繋げるルートもすでに考え付いている。我ながら、これは悪くない立ち上がりだ。

「私のターン。何だそれは、壁でも出したつもりなのか？ だとすれば……遅いな」

「え？」

ラビエルが心底冷たい声で告げたその言葉が、まるで死刑宣告のように胸に突き刺さった。嫌な予感が全身を包み、ふと気がつけば気づかぬうちに出ていた冷や汗が首を伝っていくのを感じた。

「魔界発現世行きデスガイドを召喚し、その効果を発動する。これによりデツキからレベル3の悪魔族、メタボ・サツカーを特殊召喚」

ラビエルの姿からは想像もつかない、赤いショートヘアの女性型モンスター。営業スマイルと共に手を振ると、その背後からのつそりと不気味な姿の悪魔が這いずるように現れる。

魔界発現世行きデスガイド 攻1000

メタボ・サツカー 攻800

「魔法カード、デュアルサモン二重召喚を発動。このターンに限り召喚権を1つ増やし、それを利用し2体のモンスターをリリース。怨邪帝ガイウスを召喚し、アドバンス召喚時の効果を発動。闇属性モンスターをリリースしたことで全フィールドから合計2枚までのカードを選択しゲームから除外し、相手プレイヤーに1000ポイントのダメージを与えろ。消え去れ、雑魚どもよ」

「サツカー・アーチャー！」

ガイウスがその両腕にそれぞれ1つずつ闇の塊を発生させ、それを無造作に投げつける。光さえも歪んで消える得体の知れない暗黒は正確に僕の2体のモンスターを捉え、あつという間もなくその存在ごと消え去った。

怨邪帝ガイウス 攻2800

清明 LP4000↓3000

「さらに、闇属性モンスターのアドバンス召喚に利用されたメタボ・サツカーの効果を墓地から発動。アドバンス召喚のためのリリース不可なメタボトークン3体を、全て守備表示で特殊召喚する」

ガイウスの足元の地面が膨れ上がり、植物が成長するのを早回しで見ているかのようにそこから先ほどリリースされたメタボ・サツカーそっくりのモンスターが3体伸び上がる。

メタボトークン 守0

メタボトクン 守0

メタボトクン 守0

「これで3体のモンスターが揃った……」

ああもう、ここまで見せられれば嫌でも察しが付く。さっきまで雲一つなかったはずの空にはいつの間にも暗雲立ち込め、不穏な雷鳴が遠くの方でバックサウンドのごとく低く響きわたる。

「悪魔族モンスター3体をリリースすることで、私自身は特殊召喚できる！全てを潰す破壊の御子、幻魔皇ラビエル！」

メタボトクン3体が消え、その代わりに巨大な人型の魔神が大地を割って地の底からその姿を明らかにする。

……なるほど、言うだけのことはある。確かにこれはあまりにも早い。しかもご丁寧にもその隣にまで最上級モンスターを立たせる徹底ぶりだ、あの時よりもはるかに腕が上がっている。

幻魔皇ラビエル 攻4000

「これで終わりとは、私の復讐の日々も報われぬ気がするが……もはや語ることはないな、消え去れ人間よ！奥義、天界蹂躞拳！」

「清明っ！」

後ろから誰かの声が聞こえたが、振り返らずに大丈夫だと軽く手を振りかえす。実際そのラビエルの拳は風圧だけでテニスコート中の窓という窓をすべて叩き割りながらも、がら空きになった僕の体を捉えることはなかった。瞬間的に目の前に組み上がった氷の壁が、その一撃に対する盾となったのだ。

「……ほうっ！」

「手札から、ゴーストリック・フロストの効果発動。相手のダイレクトアタック時にこのカードを裏側守備表示で特殊召喚し、さらにその攻撃モンスターをセット状態に変更する……悪いけど、僕だってあの日からはずつとずつと進化してるのさ」

??? (ゴーストリック・フロスト) 守1000

「なるほどな……いいだろう、先ほどの非礼は詫びておこう。だがこの戦い、勝利を得るのは私だ。ガイウスで攻撃」

怨邪帝の太い腕に薙ぎ払われ、防寒具を着た雪だるまが一瞬で吹き

飛ぶ。これは防げない攻撃で、どうしようもない……ワンキルを防いでくれたフロストと、このカードを僕にくれた稲石さんに心の中で礼を言う。

怨邪帝ガイウス 攻2800↓?? 守100 (破壊)

「僕のモンスターが破壊されたことで、補給部隊の効果発動。これにより、カードを1枚ドロロー！」

「私はこの手札を伏せ、ターンエンドだ」

強がっては見せたけど、状況はすこぶるつきで悪い。僕の計画だと本来は、2体のモンスターのうちどちらかでも生き残ればそれを起点に2体のモンスターを並べ、さらにそれをリリースして超古深海王シーラカンスをアドバンス召喚、その効果である魚介王の宣告でデツキの魚族を大量リクルートするつもりだった……まさか2体とも、しかも除外されるとは。これだとアーチャーの蘇生能力も使うことができない。

清明 LP：3000 手札：2

モンスター：なし

魔法・罫：補給部隊

ラビエル LP：4000 手札：1

モンスター：幻魔皇ラビエル (攻)

怨邪帝ガイウス (攻)

魔法・罫：1 (伏せ)

「僕のターン、ドロロー」

計画は変更だ、どう動くにしても要となるアーチャーがいなくなつた以上、このラビエル相手に悠長に2体のモンスターを召喚権を残したままで並べることがまず無理だろう。幸い、仕切り直しにはもつてこいのカードが手札に来てくれた。

「魔法カード、強欲なウツボを発動。手札から超古深海王シーラカンスとオイスターマイスター、この2体の水属性モンスターをデッキに戻してシャッフルしてカードを3枚ドロロー！」

最初期のころから共に戦ってきたモンスター2体をデッキに戻し、改めてカードを引き直す。僕の思いは、どうやらデッキに伝



わっつらしい。

「モンスターをセット、カードを1枚伏せてターンエンド」

「ドロー。1ターンの猶予も、結局期待はずれか？ガイウス、露払いを任せるぞ」

ガイウスの腕がまたもや振りぬかれる。ガイウスから攻撃してこのモンスターを撃破、ラビエル自身の一撃でとどめを狙っているのだろう。もちろん戦術としては極めて真つ当だし、立場が逆なら僕だってそうするだろう。

ただこの場合、普通に殴ってきてもらうことそのものが僕の手のひらの上なだけで。

怨邪帝ガイウス 攻2800↓?? 守1000 (破壊)

「補給部隊の効果で、また1枚ドロー」

「再び手札誘発でも引けたのか？もう終わりにしよう、この天界蹂躪……」

そこまで言ったところで、我慢できなくなってにやりと笑う。

「させるかあ！引つかかったね、ラビエル！僕が今伏せたモンスターは、グレイドル・コブラ！このカードは戦闘破壊された時に相手モンスター1体を選び、そのモンスターに寄生してコントロールを得る！」

ガイウスの拳に押しつぶされ、銀色のしぶきとなったコブラがガイウスを飛び越え、その向こう側の総大将……ラビエルめがけて飛んでゆく。幻魔を幻魔で倒すとしたら、これほど皮肉の利いた最後もないだろう。

そして無事に付着し、グレイドルとしての能力をいかに発揮しにかかるコブラ。だが喜びもつかの間、何か様子がおかしいことに気が付いた。普通の相手ならばとうに体内に潜り込んでいるはずの銀の液体が、表面を覆うのみで進まない。ラビエルの方も寄生完了を示す銀の紋章が浮かび上がらないし、片目が銀色のオッドアイになるはずの瞳は依然として両方とも赤い光を放つままだ。

やがてラビエルがゆっくりと腕を上げ、自らの体に着いたコブラをひと払いする。すると驚いたことに、コブラだった銀の液体が一斉に

薙ぎ払われて地面に落ちて消えていった。

「コブラ!？」

「カウントラップ、闇の幻影。闇属性を対象としたカードの効果を無効にし、破壊する!」

「ラビエル……は、そっぴや闇属性だったね。やってくれるじゃん……だけど、僕もそれなりにしぶといんでね!リバースカードオープン、強化蘇生!この効果により墓地のコブラをレベル1、攻守100ポイントアップした状態で特殊召喚する!」

グレイドル・コブラ ☆3↓4 守1000↓1100 攻1000↓1100

ラビエルの巨体に比べると、あまりにちっぽけなコブラの威嚇。だがそれは、今まさに動こうとしていた幻魔の皇を停止させるには十分な効力を発していた。

「いいだろう、カードを伏せてターン終了だ」

さて。グレイドルの何よりの強みは、この初見殺しの才能だ。それが回避された以上、ラビエルもこれからはためめに攻撃を仕掛けるような真似はしてこないだろう。ただセットするだけで相手の攻撃待ちなんて雑な戦法は、もう2度と通用しない。そういう意味ではこのターンは何とかしのいだのではなく、むしろ仕留めきれなかった致命のターンともいえる。

次のターンからが、本当の勝負だ。

清明 LP:3000 手札:2

モンスター:グレイドル・コブラ (守・強化蘇生)

魔法・罨:補給部隊

強化蘇生 (コブラ)

ラビエル LP:4000 手札:1

モンスター:幻魔皇ラビエル (攻)

怨邪帝ガイウス (攻)

魔法・罨:1 (伏せ)

「僕のターン!」

引いたのは……このカードか。せめてインパクト、グレイドル・イ

ンパクトのカードさえ来れば、コブラと相打ちであのラビエルを倒すことも夢ではないのだが、引けない物はどうしようもない。それに、このカードだって悪い物じゃない。今は使うべきじゃないというだけだ。

「このまま、ターンエンド……」

「私のターン。まずはクリッターを召喚し、私の効果を発動。その魂を贄とし、攻撃力をこのターンの間吸収する」

クリッター 攻1000

幻魔皇ラビエル 攻4000↓5000

「いくら攻撃力を上げたところで、コブラは突破できないよ！」

言うだけ言っではみたけれど、無論僕だってそこまで馬鹿じゃない。ラビエルの狙いは攻撃力を上げることではなく、その副産物……クリッターの特殊効果の能動的な発動だ。

「クリッターはフィールドから墓地に送られた時、デッキから攻撃力1500以下のモンスター1体をこのターンの使用不可という制約付きでサーチすることができる。私はこれで、D・D・クロウをサーチする」

デッキ圧縮を果たすラビエル。なるほど、確かに墓地から効果を発揮するグレイドルにとつては、フリーチェーンでこっちの墓地を除外してくれるあのカラスは天敵ともいえる。なかなかいやらしい準備をしてくれたが、だがそれだけでは済まない、済まさないとその瞳が物語っていた。まさか、もう仕掛けてくるっての!?

「私はこのターン、バトルを行う！行け、ガイウスよ！そしてこの伏せてあった速攻魔法、禁じられた聖衣を発動する。この効果を受けた私の分身はこのターン攻撃力600ポイントと引き換えにカード効果により破壊されず、さらにカードの対象とならない！」

「なっ……コブラ！」

幻魔皇ラビエル 攻5000↓4400

怨邪帝ガイウス 攻2800↓グレイドル・コブラ 守1100

(破壊)

対象を取るグレイドルの効果が、先ほどからピンポイントでカウン

ターされている。実際この寄生の際にいちいち対象を取ってしまう点はグレイドルたちの数少ない弱点だけど、まさかその点をこんな早く見抜かれるとは。それにガイウスの攻撃でコブラが破壊されたことで、強化蘇生までついでに破壊されてしまった。

「だけど、まだ僕にはドロローが残されている。」

「ラビエルが奪えなくても、グレイドル・コブラの効果をガイウスに発動！さらにチェーンして補給部隊の……」

「速攻魔法、サイクロン！いい加減そのドロロー加速に付き合うのも飽きたわ！」

このラビエルの詰めの判断が、僕の命を繋いだとわかっていい。もしもドロローを放っておいて装備カード状態のコブラを破壊されていたら、僕にはもう攻撃力5000のラビエルによるダイレクトアタックを止める手段はない。どうやら最初のゴーストリック・フロストがよほど気に食わなかったらしく、確実に手札誘発を引く可能性を潰しに来たようだ。もう僕のデッキに眠るカードの中で、相手の攻撃に手札から干渉できるカードは存在しないというのに。

そしてそのおかげで、コブラはガイウスの体に乗っ取りにかかる。ラビエルの側にもこれ以上の防御札はないらしく、ようやく寄生が完了した。

「立て、ガイウス！」

「承知の上よ！天界蹂躞拳、塵芥へと還るがよい！」

幻魔皇ラビエル 攻4400↓怨邪帝ガイウス 攻2800（破壊）

清明 LP3000↓1400

「ぐっ……！」

いくら攻撃力2800を誇るガイウスとはいえ、ラビエルの前ではただの的にしかならない。寄生したコブラもろともその拳の前に塵一つ残さず消失し、今度こそ僕のフィールドは空になった。

「ターンを終了する。そしてこの時、私の効果と禁じられた聖衣の効果は同時に消える」

幻魔皇ラビエル 攻4400↓4000

清明 LP：1400 手札：3

モンスター：なし

魔法・罫：なし

ラビエル LP：4000 手札：1

モンスター：幻魔皇ラビエル（攻）

魔法・罫：なし

奴の手札には実質グレイドルの効果が無効化できるカードであるD・D・クロウがいる。状況は最悪の一手手前、ただここで折れるわけにはいかない。ここで僕が勝利を諦めたら、後ろにいる皆は、このアカデミアはどうなる。それに何より、そんな結末は僕自身が認めない。この2年近くに渡る僕の歴史が、グレイドルやフロスト、幽鬼うさぎとの出会いが、デュエルの日々が、全て無駄だったことになってしまう。

「僕のターン、ドロー！」

確かにラビエルは強い。だけど、決して無敵の存在じゃない。モンスターの手札に以上、どこかに攻めどころはあるはずだ。

「魔法カード、強欲で貪欲な壺を発動。デッキトップ10枚を裏側表示で除外したのち、デッキからカードを2枚ドロー。よし、埋葬されし生け贄を発動！このターン2体のリリースを行いモンスターをアドバンス召喚する場合、フィールドではなく互いの墓地からモンスターをリリースできる！僕の墓地からはグレイドル・コブラを、お前の墓地からはメタボ・サッカーをそれぞれ除外し、アドバンス召喚！来い、絶望の妖星！The <sup>ザ</sup> <sup>ディ</sup> <sup>ス</sup> <sup>ペ</sup> <sup>ア</sup> <sup>ウ</sup> <sup>ラ</sup> <sup>ヌ</sup> <sup>ス</sup>！」

真ん中に顔のついた、岩石の巨大な球体がせり上がる。このモンスターはこの砂漠で出会ったカード、このカードならば、ラビエルに対抗するだけの力を持っている！

「ウラヌスは僕のフィールドに魔法も罫も存在しない状態でのアドバンス召喚に成功した時、その特殊効果を発動できる。ラビエル、お前が永続魔法か永続罫、好きな方を選びな！そして僕は宣言された種類のカード1枚を、僕のフィールドにセットできる」

「魔法か、罫か……いいだろう、好きな永続魔法を選ぶがいい」

「永続魔法……グレイドル・インパクトをデッキからセットして、そのまま発動。そしてウラヌスは僕のフィールドで表側表示の魔法か罠1枚につき300ポイント攻撃力がアップする」

The despair URANUS 攻2800↓3100

「だけどこれだけじゃないはずだね、ラビエル?」

「……ああ。相手がモンスターを通常召喚するたびに、幻魔トークンを1体特殊召喚する」

幻魔トークン 守1000

「邪魔邪魔、そのトークンには退場願おうか。装備魔法、ビッグバン・シユートを発動! 装備モンスターの攻撃力を400アップして貫通分ダメージを与える効果を付与、さらに表側の魔法カードが増えたことでウラヌスの攻撃力アップ!」

The despair URANUS 攻3100↓3500

↓3800

「バトル、ウラヌスでトークンに攻撃!」

The despair URANUS 攻3800↓幻魔トークン 守1000 (破壊)

ラビエル LP4000↓1200

このデュエルではまだ初ダメージだからラビエルのライフは残っているが、それでも一気にその半分以上を削ることができた。手札の状況や残りライフを考えると、恐らくこのウラヌスが最後の希望になるだろう。流星にこれ以上、このデュエルで大型モンスターを引っぱり出す余裕があるとは思えない。

チャンスは1回、勝負は1瞬。このターンでの攻撃はこれまでだけで、なんとしてでも、ここでこのデュエルを終わらせる。

「カードを2枚伏せてエンドフェイズ、グレイドル・インパクトの効果でデッキからグレイドル・パラサイトを手札に加える。ドール・コール! さあかかって来い、ラビエル!」

「いいだろう、ドロ―! 闇の誘惑を発動、カードを2枚ドロ―し手札の闇属性モンスター、D・D・クロウをゲームから除外する」

ラビエルも考えることは同じだったようだ。グレイドルへの最大

のメタになりうるカラスを捨ててまで新たなカード2枚を手札に残す道を選んだ……おそらくあの2枚とフィールドのラビエルのみで、これ以上デュエルを続けることなく決着をつける気なのだろう。

「まず魔法カード、火炎地獄を発動！私が500ポイントのダメージを受ける代わりに、相手に1000ポイントのダメージを与える！」  
「熱っ……！」

清明 LP1400↓400

ラビエル LP1200↓700

一瞬だけこちらが優位に立ったライフも、捨て身の火炎地獄によりまた僅差とはいえひっくり返される。確かに熱い、だけど今更バーンダメージぐらい、死ななきや十分安い安い。

「さらに魔法カード、ナイト・シヨットを発動。相手のセットカード1枚を、チェーンを許さずに破壊する。私が選択するのは……右の伏せカードだ」

「僕のスキル・サクセサーが……」

本来スキル・サクセサーはフリーチェーンでモンスターの攻撃力を400ポイントアップさせるカードなのだが、ラビエルの言った通りナイト・シヨットのせいとそのチェーンが許されずになすすべなく破壊される。本当なら攻撃してきたところを返り討ちにする気だっただけに、少し表情が歪むのが自覚できた。

「墮ちるがいい、絶望の妖星とやら！受けて見よ、天界蹂躞拳！」

幻魔皇ラビエル 攻4000↓The despair URA

NUS 攻3800 (破壊)

清明 LP400↓200

「残り200……そのライフ、必ず我が拳で削りきってくれようぞ。私はこれでターン……」

「待ちな！」

「……何？」

ラビエルが驚くのも無理はない。ウラムスが沈んだ今、フィールドを支配しているのはラビエルのみ。その目の前にほのかに赤く光る剣を手にして立っているのが、モンスターではなくプレイヤーの僕自

身なのだから。

「何のつもりだ、遊野清明」

「別に？ただ、これを受けてもらいたくってね」

そう言っつて、手に持っている剣をこれ見よがしにかざしてみせる。少し訝しげな顔でそれを見た後、ややあつてラビエルが息をのむのが聞こえた。

「その形状……まさか！」

「そのまさかさ。トラップ発動、極星宝レーヴァテイン！このカードは戦闘でモンスターを破壊したモンスターに対してのみ発動でき、一切のチェーンを許さずに対象となったモンスターを破壊する！そう……れっ、とー！」

まっすぐに投げつけた剣は何の抵抗もなくラビエルの心臓を貫き、やがて陽炎のようにラビエルの巨体が砂漠の空に消えていく。

「く……いー」

「そして、これをラストターンにしてみせる！僕のターン、ドロー！」  
もはやお互いのフィールドにカードはなく、僕の手札にもさつきサーチした永続トラップ、グレイドル・パラサイトしかない。このドローカードで通常召喚可能なモンスターが引ければ僕の勝ち、もし引なければ残りのライフから考えてもまず間違はなくラビエルの勝ち。

ここまで来た以上、小難しい戦略は必要ない。原点に立ち返つての1発ドロー勝負、いいじゃない。皆が、ラビエルが、そして僕自身が生じつつ見つめる中、ゆつくりと今引いたカードを表側にしていく。

「ありがとう。いつも僕を、助けてくれて。僕は今引いたカード、霧の王を自身の効果によりリリースなしで妥協召喚！」

フィールドの中心に空の果てから落ちてきた青い光が走り、その光の中からゆつくりと僕がどんなカードよりも信頼する最強の魔法剣士がその一步を踏み出す。

霧の王 攻0

「モンスターを……引いたか……」

「ああ。墓地からスキル・サクセサーの効果発動、このカードをゲーム



から除外して霧の王の攻撃力を800ポイントアップさせるよ」

霧の王 攻0↓800

そう、これこそがとにかく通常召喚できるモンスターさえ引ければよかつた理由。ラビエルのライフが800を下回った時点で、たとえ僕がどんな攻撃力のモンスターを引いたとしてもこの結果は変わらなかった。

もしも、ラビエルが自身のライフを気にして火炎地獄を温存していたら？もしも、ウラヌスの召喚時にラビエルが永続トラップを宣言していたら？もしも、クリッターでD・D・クロウ以外のカードをサーチしていたら？どれか一つでもここまでの流れに狂いが生じていたら、あるいはこのデュエル、もっとほかの結末を迎えていたのかもしれない。もつとも、それこそ考えたって詮無いことではあるが。

「そう、か……私が負ける、か」

そう言っただ腕を広げ、霧の王の一撃を黙って受け入れるようなポーズをとるラビエル。このデュエルが終わることに一抹の寂しさを覚え、そんなことを感じる自分自身にやや驚きながらも、霧の王に最後の宣告をかける。

「バトル。霧の王でダイレクトアタック……ミスト・ストラングル」

最後の一撃は高揚するでも感慨に浸るでもなく、ただただ静かだった。そんなもの、なんだろうか。

霧の王 攻800↓ラビエル（直接攻撃）

ラビエル LP700↓0

「……」

「……」

僕もラビエルも、今度こそ今生の別れとなるであろうこの時も、特に何を話すこともなかった。お互い、言いたいことは全てデュエルで伝えあった。いまさら言葉なんて、蛇足にしかない。

最後にラビエルの目を見ると、向こうもまっすぐに僕の目を見返してくる。ほんの少し、その口元が笑った気がして……ラビエルが自身

のカラーリングと同じ濃い青い光となり、マルタンのもとへ飛んで行った。

「ぐっ……い！」

余韻もへつたくれもなく、問答無用で襲い来るデスベルトの力に膝をつきそうになるも、最後まで光の行く末を見続ける。僕にとつての三幻魔との戦いは、今この時を持ってようやく完結した。

## ターン92 鉄砲水と叛乱の齒車

ハモンを、そしてラビエルを、辛うじて退けることに成功した僕ら。だけど、これで一息つくにはまだ早い。そもそもこのテニスコートに來た理由は、ヨハンとカイザーに次元を挟んでのデュエルをさせるためなんだから。

先ほどのデスデュエルの疲れが体を重くしているものの、こんな面白そうなデュエルを見逃す手はない。重い体を引きずるようにしてそこらの壁に寄りかかり、観戦の姿勢に入る。

「あとは任せたよー、ヨハン」

「ああ、任せてくれ！レインボー・ドラゴンのカード、必ず受け取ってやるさー！」

元氣よく返すその姿は本当に嬉しそうで、心から自分の宝玉獣を愛しているのがよく伝わってくる。そして2人がそれぞれの場所でデュエルディスクを構え、ついにデュエルが始まった。

「デュエル！」

さあ、どんな勝負になるのか……今まさに最初のカードが場に置かれようとしたその時、全身に悪寒が走った。何か、物凄く悪意に満ちた視線がこの場に送られている。他の皆はデュエルに集中していたり周りを警戒していたりで気づいていないみたいだけど、皆からは少し離れたこの位置もよかったのかすぐに気付いた。

体のたるさも全部吹っ飛んで、その視線の來た方向……ちようどラビエルたちが入ってきたのとは真逆、テニスコートの奥を睨みつける。そこにちらりと人影が見えた瞬間、半ば無意識のうちに体が動いていた。ふらふらと歩く自分をどこか他人事のように捉えながら、一歩また一歩とヨハンたちから遠ざかっていく。

もしもこの時誰か1人でも僕の動きに気づいていてくれたら、そしてたとえ一言でも僕に声をかけてくれたら、あるいはまったく別の結果になったのかもしれない。しかし幸か不幸か最後まで誰にも気づかれず、テニスコートからは死角となつている物陰にふらふらと入り込んだ。そこで気楽そうにくつろぐ青年の顔を見て、先ほどの視線の

正体はこの男だと確信する。

「お前は……！」

「はい、また会ったねー。遊あそぶさんのご登場だよー」

以前このヘラヘラした奴と会ったのは、確かカイザーがヘルカイザーになって最初にこのアカデミアに戻ってきたときのことだったろうか。あの時も、結局意味深な言動ばかり繰り返して何がなんやら僕にはわからなかった。

ただ明らかなのは、この男はとても危険な存在だということ。これはもう理屈じゃなくて、デュエリストとしての本能だ。

身構える僕を鼻で笑い、ヘラヘラとした笑みを口元に張り付けたまま遊が口を開く。そこから出てきた言葉は、僕にとっては全くの予想外なものだった。

「ユーノ。……ねえ、彼に会いたくないかい？」

『なに……!?!』

僕より先に反応するチャクチャルさん。そういえば、チャクチャルさんも遊のことは僕より前から知っていたんだっけ……だが、それは後でいい。それよりも、今は遊の話に集中すべきだ。光の結社との決着を待たずに、僕には見当もつかない理由から何処へかと去っていったユーノ。今どこにいるのか、何をしているのか……なんでもいい、知りたかった。

「どういうこと? ユーノがどこにいるのか、知ってるの?」

「ああ、知ってるよー。で、どうなの? 知りたい? 知りたくない?」

見え透いた罫だ。この異世界にまで突然現れて、唐突にユーノのことを持ち出すなんて裏があると思えない。だけど、ユーノがいなくなっただけその理由にこの男が何らかの関わりを持っているであろうことは、ほぼ間違いないとみていいだろう。なにせ遊と敵対しているらしい男、富野に連れ去られるような形で最後にユーノは消えたのだ。いまだにユーノを取り巻く話は全体像が見えてこないためうさくさいことこの上なく、信用するかどうかは置いておくとしても、今のところ唯一の情報源として話を聞く価値ぐらいはあるはずだ。

「……知り、たい」

「そうそう、そうやって素直なのが人間一番だねー。だけど、ただでは教えられないかな」

「何が言いたいのか……！」

会話のペースを完全に握られ、どんどん泥沼にはまり込んでいく感覚がする。だけど、僕にはもうどうしようもない。主導権はあちらにあるのだ。

そして遊は、そんなこちらの心中も見透かしたように……というか多分、見透かされてるんだろう。その上でおちよくつてきてるのだろう。

「あつはは、警戒してるねー。別に何も無いよ、ただの気まぐれ暇つぶし。まーせっかくだし、デュエルでもしてもらおっかな？僕が相手すると瞬殺だし、この人とさ」

そう言つて背を返し、返事も聞かないうちに背後にあつた扉を開く。そこから出てきた、ずっと待ち構えていたらしい人影を見て、顔が引きつるのが分かった。つい先ほど、僕らをこのテニスコートに入れるためたつた1人でゾンビ軍団の足止めを買つて出てくれた、僕らにとつて最高の教師。

「クロノス先生ー」

「デュエルゾンビ、だっけ？なんも考えてないから気楽でいいねえ。面白いデュエルしてくれればそれでいいからさー、ちよつと相手してあげてよー。そしたら教え上げるよ」

「さあ、授業を始めるノーネ……」

元から不健康そうな顔なうえにデュエルゾンビ特有の隈などのせいでさらに不健康そうになった顔でにじり寄ってくるクロノス先生から、じりじりと下がって距離を取る。当然向こうはその分だけ近寄ってくるのでまた下がると、すぐ後ろの壁にぶつかってそれ以上下がれなくなった。やっぱり洗脳をかけてるモンスターがどこにどれだけいるかわかったもんじやないのと、レインボー・ドラゴンのカードが来さえすれば帰る目途が立つからってゾンビたちを放つておいたのはまずかったか。少し前に三沢が倒した憑依するブラッド・ソウルだけで終わりなら、こんな難しいことにはならなかったのに。

いくらゾンビ化で多少いつもより実力が落ちているだろうとはいえ、この人を相手どるのは厳しい戦いになるだろう。でも、ここで逃げただけならヨハンたちのデュエルまで妨害されるかもしれない。それだけならまだしも、あの次元を隔ててのデュエルを実現させているなんとか装置が壊されでもしたら、今度こそ積みだ。

「わかったよ。僕がやってやるとも！僕が勝ったら、ユーノの情報は吐いてもらうからね！さあ先生、実技の時間と洒落込みませうか！」

まだ十代達は、ヨハンとカイザーのデュエルに集中していて僕らの動きには気づいていない。ちょうどレインボー・ルインやら宝玉の樹やらのソリッドビジョンが邪魔になって余計にこちらが見えにくい、というのもあるかもしれないが。

「デュエル！」

クロノス先生の古代の機械は、攻撃時に魔法と罫を封じる共通効果を持つ。とはいえ、このデツキは基本戦術が受け身のグレイドル。モンスター効果の発動が通れば特に問題はないので、警戒すべきは戦闘破壊したモンスターの効果を無効にしてしまう古代の機械獣アンティーク・ギアビーストぐらいだろう。

「ツーンヘッド・シャークを召喚。これでターンエンド」

ツーンヘッド・シャーク 守1600

「私のターン、ドロースするノーネ。まずカードを1枚セットして、アンティーク・ギアソルジャー古代の機械兵士を召喚。さらに魔法カード、同胞の絆を発動。2000ライフを払うことで、デツキから場のレベル4以下のモンスター1体と同じレベル、属性、種族のモンスター2体を特殊召喚するノーネ。古代の機械兵士は地属性機械族、よって私はこの2体をデツキから呼び出すノーネ」

銃になっっている右腕を兵士が掲げると、それを目印にしたかのようにそこから錆びついた機械のモンスターと真新しい小型の車が出てくる。古代の機械は……そういえばあれも、地属性機械族のテーマだったか。

だがそこから出てきたモンスターは、僕がこれまでに見たことのない

いタイプの古代の機械だった。

クロノス LP4000↓2000

古代の機械兵士 攻1300

アンティーク・ギアワイパー

古代の機械飛竜 攻1700

ブラネット・パスファインダー

惑星探査車 攻1000

「小型のドラゴン……？」

「ああ。言い忘れてたけど、そのデッキはちよこつと改良させてもらったよ。ほら、もう手の内は割れてるつてのにただ戦うんじゃないよ。じゃないでしよー？」

「外道な……！」

クロノス先生本人の許可も取らずにデッキを改造、そのくせ言うことが『改良』だって？人間としてもうきんくさいし信用できないけど、デュエリストとしてもただの屑じゃないか、遊。

「古代の機械飛竜の効果発動。このカードが場に出た時、デッキから古代の機械と名のつくカード1枚をサーチできる。私はこの効果で、古代の機械巨人を手札に加えるノーネ」

サーチ効果により即座に手札に加えられた、クロノス先生の切り札にして象徴のカード。どうやらゾンビになっても、クロノス先生のデッキは万丈目ほど変わったわけではないらしい。むしろ万丈目が『ダークソード』なんてどっから持ち出したのかって話ではあるけれど。

「そして惑星探査車は、フィールドの自身をリリースすることでデッキからフィールド魔法を1枚サーチしますーノ。私が選ぶのは当然このカード、ギア・タウン歯車街。そしてこのカードを、そのまま発動するノーネ」

フィールドに一斉に広がる、大きささまざまな大きさや色の歯車で構成された機械都市。となるとやはりこれは、次のターンに今サーチした古代の機械巨人をアドバンス召喚するための下準備なのだろう。

だが、そう思ったのも1瞬だった。

「魔法カード、トレード・インを発動。レベル8の古代の機械巨人を捨てまして、カードを2枚ドロウしますーノ」

「自分から古代の機械巨人を手放した……？」

「あとは、次のターンのお楽しみナノーネ。同胞の絆を発動したターンはバトルができないので、これでターンエンドしますーノ」

清明 LP4000 手札：4

モンスター：ツーヘッド・シャーク（守）

魔法・罠：なし

クロノス LP2000 手札：4

モンスター：古代の機械兵士（攻）

古代の機械飛竜（攻）

魔法・罠：1（伏せ）

場：歯車街

「僕のターン、ドローー！」

ツーヘッド・シャークの攻撃力は、1200と低い。だけどクロノス先生の場の機械の戦士たちもまた、下級モンスターとしてはそういった攻撃力ではない。このカード1枚あれば、一気に攻め込むこともできる。

「ツーヘッドを攻撃表示にして魔法カード、アクア・ジェットを発動！さらにダブルマジックコンボ、忘却の都 レミューリアを発動！この2枚の強化カードによる相乗効果で、ツーヘッド・シャークのステータスは大幅にアップ！」

ツーヘッド・シャーク 攻1200↓2200↓2400 守1600↓1800

2枚のカードの重ねがけにより、一気にツーヘッドの攻撃力が元の倍にまで跳ね上がる。だけど、まだ足りない。そこからさらにダメ押しを加えるため、手札のカードを引っ張り出す。

「グレイドル・イーグルを召喚。もちろんこのカードも水属性、レミューリアの効果でステータスが上昇するよ」

グレイドル・イーグル 攻1500↓1700 守500↓700

「バトル、グレイドル・イーグルで古代の機械兵士に攻撃！」

グレイドル・イーグル 攻1700↓古代の機械兵士 攻1300

（破壊）

クロノス LP2000↓1600



「さらにツーヘッド・シャークで古代の機械飛竜に攻撃！」

ツーヘッド・シャーク 攻2400↓古代の機械飛竜 攻1700

(破壊)

クロノス LP1600↓900

「……」

あの伏せカード、てつきり何か仕掛けてくるかと思っただが……僕の考えすぎだったのだろうか。なににせよ、ツーヘッドの2回攻撃能力でもう1度攻撃すればこのデュエルは終わる。

……ちよつと拍子抜けした感じはあるが、デュエルゾンビが基本的に雑魚になることを思えばまあこんなものだろう。むしろやたら強かった万丈目がいろいろおかしいだけで。

「これでとどめ！ ツーヘッド・シャーク、もう一回……」

「トラップ発動……リビングデッドの呼び声、ナノーネ。古代の機械飛竜を攻撃表示で墓地から蘇生し、その効果でデッキから古代の機械射出機アンティーク・ギアカタバルトをサーチしますーノ……」

バラバラに砕け散った歯車がもう一度集結し、再び蘇った空飛ぶ機械の龍。なるほど、あのサーチ効果は特殊召喚でも使えるわけか。

古代の機械飛竜 攻1700

「仕留め損ねたか……だけど残しとく理由もないね、構わないからそのまま攻撃！」

ツーヘッド・シャーク 攻2400↓古代の機械飛竜 攻1700

(破壊)

クロノス LP900↓200

「伏せるようなカードもないし、このままターンエンド」

古代の機械の共通効果の前では、せっかく握ったグレイドル・パラサイトも魔法・罨ゾーンを圧迫するカードにしかない。相手モンスター<sup>ト</sup>の直接攻撃に反応してデッキからグレイドル1体をリクルートする効果、便利といえば便利なんだけど。

「ニヨホホホ……シニョール清明、なかなかの攻撃でしたが、伏せカード1枚出せないようならここからは私のターンナノーネ。永続魔法アンティーク・ギアフオートレス、古代の機械要塞を発動。さらに先ほどサーチしたこのカード、

古代の機械射出機を発動し、その効果で古代の機械要塞を破壊する  
ノーネ」

「わざわざ破壊するために発動……?」

そう言うが早い、歯車街の全歯車が急速稼働を始める。重い稼働音の響く中、急ピッチで製造された2体の機械戦士が地上に降り立った。

アンティーク・ギアゴレム

古代の機械巨人 攻3000

アンティーク・ギアガジェット

古代の歯車機械 攻500

「古代の機械巨人!?そのカードは特殊召喚できないはずじゃ!」

「ノンノン、これは古代の機械射出機の効果ノーネ。自分フィールドにモンスターがない時、手札から発動したこのカードは自分フィールドの表側カード1枚を破壊することでデッキから古代の機械を召喚条件を無視して特殊召喚することができます。さらに古代の機械要塞は破壊された時、手札か墓地から古代の機械を1体特殊召喚することができる、私はこの効果で古代の歯車機械を特殊召喚したノーネ」

「そんな無茶苦茶な……」

「さらに私にはこのターン、まだ召喚権が残っていますー。わたしは歯車街の効果により古代の機械を召喚する際のリリースを1体軽減し、古代の歯車機械をリリースしてレベル9、古代の機械熱核竜をアドバンス召喚するノーネ!」

それは、僕にとって全くの未知な機械龍。おそらくあのカードも射出機や飛竜同様、遊がどこからか持ってきたカードなのだろう。他の古代の機械と同じく錆びついた金属の鎧に包まれたその体はサイズこそおなじみの巨人や以前見たことのある巨竜とほぼ変わらないが、異質な点として体の中央にはその名の示す通りリアクター……その部分だけ他のクロノス先生従来の古代の機械カードとは異質な感じを放つ真新しい見た目のコアが内蔵されており、そこから不気味な赤いエネルギーの流れが全身に伝わってどくどくと脈打っている。

古代の機械熱核竜 攻3000

「これでジ・エンド、授業終了ノーネ。まずは古代の機械巨人でツ

ヘッド・シャークに攻撃、アルティメット・パワード！」

巨人の右こぶしが振るわれ、いくら攻撃力が倍にまで強化されたとはいえそれでも2400止まりのツェヘッドの牙が打ち砕かれる。

だけど、僕のもう1体のモンスターは戦闘またはモンスター効果による破壊を自分の力として操るグレイドル・イーグル。魔法か罠で除去をかけてこなかったということは、このターン攻撃を仕掛けてくるような真似はしてこないだろう。それとも、ゾンビ化で馬鹿になったから突っ込んでくるとかだろうか。だとしたらさすがに笑ってやろう。

古代の機械巨人 攻3000↓ツェヘッド・シャーク 攻2400  
(破壊)

清明 LP4000↓2400

「さらに、古代の機械熱核竜でグレイドル・イーグルに攻撃！と同時に効果発動、このカードが攻撃する場合、相手プレイヤーはダメージステップ終了時まで魔法・罠・モンスター効果を使用することができません」

「モンスター効果が……！」

胸のコアがひとときわ赤く輝き、熱核竜がその口から熱線を吐き出す。それをまともに浴びたイーグルの全身がどろどろに溶けていき、銀色の液体を通り越してそのまま蒸発していった。

古代の機械熱核竜 攻3000↓グレイドル・イーグル 攻1700  
(破壊)

清明 LP2400↓1100

「さらに古代の機械熱核竜の効果発動。このカードが攻撃を行ったダメージステップ終了時に、フィールドの魔法か罠カードを1枚破壊するノーネ。レミューリア、破壊！」

「ぐうっ……ま、まだ、次のターンになれば！」

僕に残った手札のうち、1枚はグレイドル・パラサイト。だがもう1枚は攻撃力こそ300と低い、その効果により相手プレイヤーに直接攻撃ができるドリル・バーニカルのカード。クロノス先生の残りライフはこれまでの過程ですでに200、これなら。

だがそんな思考を読んだかのごとく、不気味な笑顔を作るクロノス先生。その笑みに応えるかのごとく、機械の龍の尾が動いた。まるで槍のように突き出されたそれが、僕の体を直撃する。

古代の機械熱竜 攻3000↓清明（直接攻撃）

清明 LP900↓0

「な、なん、で……」

「ガジェットモンスターを素材とした古代の機械熱竜は、1ターンに2度の攻撃が可能となるノーネ」

「く……」

負けた。完敗だ。たった1ターンで、初期値そのままだったはずのライフポイント全てが奪われた。膝をつく僕の目の前でゆつくりとソリッドビジョンが消えていくと、入れ替わりにその向こう側からパチパチとやる気ない拍手をしながら遊が歩いてくるのが見えた。

「いやー、負けちゃったねえー？ 残念残念、だけど負けちゃったんだし、何か罰を受けてもらおうかなー？ じゃ、お仕置きっつと。あ、もうそっちはどうでもいいよー」

明らかに楽しそうに指を鳴らすと、クロノス先生がまるでおもちゃのスイッチでも切ったかのように唐突にその場に崩れ落ちる。かすかに胸のあたりが上下しているところを見ると、単に気を失っただけのようだ。

そしてクロノス先生についてはそれでいいが、気になるのはその次の不穏な言葉だ。

「お仕置きっつと」

「そ、お仕置き。だって負けちゃったんだもんねー、まさかそれでペナルティー無しなんて甘い話があるなんて思っつてないよねー？」

足元の床に突然穴が開き、遊が喋る間にもみるみるそれは広がっていく。穴、といっても明らかにただの穴ではない。中が闇に塗り潰された、得体の知れない異空間に繋がっているような代物だ。どうにかそこから逃げ出そうとして、よりによってこの最悪のタイミングでデ

スベルトが光り出す。ほんの一瞬だけ動きが鈍った隙に人間が余裕で入れるぐらいのサイズになると、ゆっくりとその中に僕の体が沈み始めた。

「うわ……これは！」

「ユーノは今、異世界にいるんだよ」

「え？」

「せっかくだし、同じところに送ってあげよう。別に今はそこで野垂れ死んでも生き残っても、どっちでもいいや。ほら、この間会った時に君の味方してた富野っていたでしょ？君が『ストーリー上明らかにおかしな場所と時で』死んだりしたら僕の居場所を彼にばらすことになっちゃうからそういう意味では生き残ってくれる方が楽でいいけど、別に来たら来たで今度こそ返り討ちにすればいいだけだしねー」

相変わらず、何を言ってるのかの半分も理解できない。むしろ脳がどこかで、理解することを拒否しているような感覚さえ感じる。けどこの穴が異世界に繋がるトンネルのようなもので、この向こう側の世界にユーノがいるのはわかった。もうすでに体の半分以上が暗闇に沈んでいて、どうあがいても抜け出すことはできそうにない。精霊の力を借りようにも、デュエルディスクもカードを引く腕もすでに足元に沈んでいる。

なら、せめてできることをするしかない。

「……十代っ！」

「どうした、清明!?……うわっ、本当にどうしたんだよ!?!」

大声で、親友の名前を呼ぶ。幸いにも僕の声は届いたらしく、すぐに駆けつけてきてくれた。絶句する十代の後ろからも、どかどか其他のメンバーが口々に叫びながら走ってくる。

「……十代、訳を説明してる暇はないんだ。ちよつとドジ踏んじやつてね、今から別の世界に飛ばされるのさ」

「あ、清明」

たったこれだけ話している間にも、僕の体は既に肩まで沈んでしまった。視点が低いので見上げるような形になりながらも、これだけ

の取り返しのつかないことをしてしまった人間としてせめて最後の責任を果たすために声を上げる。

「僕のごとは気にしないでもいいから、皆は早くレインボー・ドラゴンのカードを……必ず、絶対、アカデミアを元の世界に戻して！せめてみんなだけでも、正しい世界に帰って！」

「なんなんだよ、一体何が起きてるんだよ……！」

「いつかまたどこかで会えたら、その時はきつと話すから、さ。皆のごとは頼んだよ、十代<sup>ビロー</sup>」

最後に半ばやけくそで目一杯カッコつけたところで、全身がすつぽり呑み込まれる。それとほぼ同時に、僕の意識も闇に飲み込まれた。

## 霸王達の戦い編

### ターン93 鉄砲水と精霊の森

「う……痛っ」

目が覚めたのは、固い地面の上……なんかつい最近も同じようなことがあった気がするけど、あの時は下が砂漠の砂だからまだマシだった。今回はただの地面の上なため、そこでずっと寝ていた体のあちこちが痛い。

ぼんやりした頭でそこまで考えたあたりで、だんだん思考がはつきりしてきた。十代達は、あの砂漠の異世界から脱出できたんだろうか。レインボー・ドラゴン、見てみたかったな。

「だけどもあ、まずは自分の心配しなきゃ、ねえ？」

独り言ではない。チャクチャルさんに同意を求めるつもりで声に出したのだが……なぜか、いつまで経っても返事が返ってこない。さつきはあれだけ馬鹿馬鹿しい負け方したわけだし、そうでなくても最近すれ違いぎみだったからついに愛想尽かされたのかな。気にはかかるけども、チャクチャルさんがコンタクトを取らないと決めたのなら今は僕から無理に話しかけることもないだろう。そもそも向こうの方が圧倒的に年上なんだし、下手なこととはしないに限る。

気持ちを切り替えて周りを改めて見まわすと、どこかの暗い森の中にいるようだ。頭上にはこんもりと葉が生い茂っていて空が見えないし、いかにも樹齢長そうな木々や僕の寝ていた地面にはうっすらとした苔が覆いかぶさって余計に鬱蒼としている。

「すいませーん、誰かいませんかー!？」

とりあえず大声で怒鳴ってみるが、自分の声がむなしく響くだけで終わる。仕方がない、こういう時はとりあえず川を探せばいいという話は聞いたことがある。なんといっても水があればとりあえず命は繋げられるし、川の流れに沿ってひたすら下流に行けばどんな森や山からも抜け出せるからだそう。こんな話を最初に聞いた時にはあくびしながら聞き流してたものだけど、そのおかげでやることができ

てパニックにならずに済んでいるのだから人生何が幸いするかかわらない。

とにかく水の流れる音でも聞こえないかと耳を澄ますと、ほんのかすかに音が聞こえた。といつてもそれは期待していた川の流れる音なんかじゃない、何か、かなり大きい犬のような動物が、かすかに唸っているような……。

チツ、と舌打ちし、それに反応するように唸り声がさつきよりも近くで聞こえたことに自分を呪いたくなる。何やってんだ僕、下手に大声を出しただけでなく舌打ちまでして2回も場所を教えるなんて。よく考えればこの世界にだつて精霊がいることぐらい予想がつきそうなものなのに、なんでその程度のことを最初に考えなかったのだろう。幸い苔のおかげで足音はほとんど吸収されるはずだし、とにかく距離を取って……いや、それをしたって匂いなりなんなりで追いかける可能性の方が高い。ここはひとつ、待ち構えて返り討ちにしよう。

「ハンマー・シャーク、ツーヘッド・シャーク、召か……え？」

腕につけっぱなしのデュエルディスクに手を伸ばし、デッキからカードを取りだそうとして、謎の唸り声とか水場の位置とか、そういうのはもう全部頭から吹っ飛んだ。

確かにデュエルディスクはある。だけどそこにはまっぴらであるはずの、僕のデッキが1枚もない。デッキ入れのスペースはぽっかりと空いていて、僕のカードがどこにもない。

「嘘、どこに……」

チャクチャクさんにテレパシーを飛ばすが、よほど遠くにいるのかうんともすんとも帰ってこない。周りを見回しても、当然落ちているはずもない。そして、逃げ出すわけでもなくいつまでもそんなふうに悠長にしている隙を見逃してもらえないはずもなかった。ふと気が付いた時には唸り声の主は既に木を2、3本ほど離れたところに移動していて、声どころかその息遣いすら感じられるようになっていた。それと同時に、なぜか肉が腐ったような嫌な臭いが空気に上乘せされる。



「くっ……」

今からでも背を向けて走り出す？ いや駄目だ、土地勘は向こうにある。この状態だと、獣型モンスターどころか人間相手でも振りきれないだろう。木の上に登る……のもその間無防備になるし、そもそもあのモンスターに木登りができないなんて保証はどこにもない。地面に落ちていた苔むした石を手に取り、唸り声の方向に向き合ってそれを構える。どうせ何やっても詰むんなら、いつそ真正面から相手してやろう。腐ってもダークシグナー、体力勝負なら僕は並の人間を遥かに上回る。タイマンなら案外追い払えるかもしれない。

石を握りしめながら、そろそろと唸り声が聞こえる木に向かって歩き出す。向こうも、まさか獲物が自分から喧嘩を売りに来るとは思うまい。つまりは先手必しよ……。

「っ!!……こん、のおっ!」

左肩に強烈な痛みと熱い息の感触、そしてかすかに漂う腐臭がのしかかる。どうにか頭を後ろに向けると、黒色の獣の顔とその中に輝く鈍く濁った瞳が見えた。そしてその牙が突き刺さっている僕の肩が、噴き出す血の色でただでさえ赤い制服が真っ赤に染まってきたのを見て、ようやく何が起こっているのか理解した。

つまり、目の前で唸っているのは囷だったわけだ。よく考えればそりやそうだ、こんな自分の位置がバレバレなのにわざわざ隠れてるんだもん。その隙にもう一匹が後ろに忍びより、目の前の敵に警戒した獲物を安全に襲う。まったくもって合理的だ。

だけど、僕もこんなところで2回目の死を迎えるわけにはいかない。理由はともかくとして、チャクチャルさんはここにいない。いたとしても、1度生き返った人間がもう1度蘇らせてもらえるのかはわからない。だから、ここは自力で生き延びるしかない。右手にまだ握っていた石を手放し、その獣の首根っこを無理やり掴む。牙がさらに深く食い込んできた痛みに泣きそうになるも、背負い投げの要領で身を捻りながら背中中の獣を地面に嫌というほど叩き付ける。噛みつきが緩んだすきに強引に傷口を引き離し、駄目押しにその下顎を骨も折れよとばかりの勢いで全力で蹴りつけた。

「ハア、ハア……ざまあみろってんだ！」

起き上がろうともがいている獣から目を離さないまま、じりじりと後退していく。傷口から出る血がぼた、ぼた、とその軌跡をたどってくるのを見て、逃げ出すことは絶対に無理だと改めて悟る。これだけ血が出ると、その後を追いかける事なんて子供でもできるだろう。

このまま向こうが逃げ出してくれれば問題なかったのだが、残念なことにそれは無理だったらしい。顎の骨が砕けたらしく口を歪に開いたままだらんと舌を垂らしながらも、いまだ戦意衰えぬといった様子で立ち上がる黒い獣。そして、相方の苦戦を見かねたらしいこれま様子でうかがっていただけのもう1匹の獣がその隣に並んだ。

「う、うわあ……」

結構本気出して蹴ったはずなのに、まさかまだ向かってくるとは思わなかった。しかも増えたし。じりじりと距離を詰められ、今まさに2体の獣が飛びかからんとした、その時。

「トラップ発動、閃光弾！」

「え!？」

瞬間的に辺りに光が弾け、視界がすべて強烈な目の痛みと共に白く塗り替えられる。近くにあったはずの木の幹に寄りかかろうと思わず伸ばした右手の手首が、皺だらけの人間の手に掴まれた。何が何だかわからないままに、その手の主が押さえた声で話しかける。

「早く、私についてきなさい。疫病狼は執念深い狩人だ、閃光弾も長くは持たん」

その声に含まれる不思議な迫力に呑まれ、抵抗する気にもならず引つ張られるままに歩いていく。どこをどう歩いたのか、目が見えないなりに感覚で覚えようとしたもののすぐに諦める。何度やり直しても、さつきから同じところをぐるぐる回っているように感じられてしょうがないのだ。しかし案内人が終始確固たる足取りで歩いていくため文句をつけることもできず、かれこれ30分ほど進んだだろうか。

「さあ、上がるといい。ここに椅子があるのがわかるかね？座って傷を見せてみなさい、今治癒をかけよう」

導かれるまま椅子に座り、言われたとおり血染めの制服を脱いで傷口を出す。何か聞き取れない言語でしばらく呟いたかと思うと、傷の痛みが次第に和らいでいくのを感じた。

「これは……」

「すまないが動かないでくれ。出血は止めたが、疫病狼の牙はその名の通り病気を運ぶ。もう少し様子が見たいから少々ここで待っていてなさい、お茶でも持つて来よう」

「は、はい」

よくわからないがたしなめられたので、代わりにようやく見えるようになってきた視界で、腕を動かさないようにそつと辺りを確認する。ここは、書齋だろうか。ぎっしりと古めかしい本が詰め込まれた見上げるほど高い本棚が果てしなく並び、ランプの明かりが点々と優しい光でその中を照らしている。今座っている椅子も年代物の木製で、よく手入れされているのが一目でわかる。

傷口に改めて目をやるとさつきまで肉がえぐれて血が溢れていたはずの肩にはすでに新しい皮膚ができていて、傷跡こそくつきり残っているものの動かす分にはちよつとくすぐったく感じる程度で何の支障もない。

この短期間でここまでの治療を成し遂げた謎の技に感嘆していると、書齋のドアがかすかに軋む音を立てて開いた。

「ほれ、飲みなさい。毒などは入れておらんよ」

先ほどから声だけ聞こえていた主の姿をようやく直接見て、思わず目が丸くなった。冗談めかして言ってくれた言葉も聞き流し、その人の姿を穴が開くほどまじまじと見る。

その人は……いや、人、という呼び方も性格ではないのだろうか。ともかく、僕は彼を知っている。白い縁取りがされた緑色のローブと、その左胸に着いた勲章。深い髭と頭髪には白いものが混じり、全体的に濃い灰色となっている。右目に当たる部分には眼球がなく、代わりに開いたまぶたの間からは謎の光がかすかに発せられ、頭にすっぽりとかぶった王冠のような帽子をほのかに照らしている。

「辺境の大賢者……」

あれはもう、1年は前のことだろうか。ある歴史の授業中、雑談の一環として突如話し出されたフリード軍の歴史。ならず者傭兵部隊やら切り込み隊長やらのカードと共に、フリード軍をバックアップする賢者という設定があったと紹介された話をたまたま覚えていたのだ。

そもそも授業中にカードのバックストーリーが雑談とはいえ浮かび上がってくるあたりがさすがのデュエルアカデミアという感じもするが……まあ、その話は今はいい。実際、それを聞いていたおかげで目の前の精霊の正体がわかったのだから。

「その名で呼ばれるのも、随分と久しいな。今の私は賢者なんてものじゃない、ただの隠居の老人さ。さあ、冷める前に飲むといい」

そう言われ、慌てて差し出されたカップを受け取る。ほんのり湯気の立つ中の液体は一見紅茶のような色だが、菓子屋としての僕の人生でも嗅いだことのないような不思議な香りと味がした。

「えっと……ありがとうございます。このお茶も、それから、先ほども助けていただいて」

「そう畏まることもない。ただ、君に一体何があったのか教えてもらえないかね？そのデュエルディスクも、私の知っている物とは少し型が違うようだが……」

不思議と断りにくいその声の調子に誘われてか、あるいは砂漠の異世界では飲む余裕のなかった淹れたての熱いお茶にほだされてか、自然と口が開く。気が付くと、あの砂漠の世界であったこと全てを打ち明けていた。当の本人ですらいまだに信じられないような内容にも大賢者は口を挟まず、優しげなまなざしで時折頷きながら最後まで聞いてくれた。

「僕の話はこんなところですよ。あの、こんな話でも信じてくれるんですか？せめてデツキサさえあれば、僕のカードの精霊たちに証明してもらえるのに……」

「ああ、君の目は嘘をついているようには見えない。それに、もし嘘ならもつとそれらしい話を作るだろう。それと君のデツキだが、少なくとも君のいた近くには落ちていなかった。恐らく、次元の壁を超える

際に何かの拍子でデュエルディスクから外れてしまったのだろうか」「そう、ですか。せめてチャクチャルさんと連絡が取れるぐらい近くに行ければ……」

もう一度テレパシーを試みるも、やはりあちらからは遠すぎるためか何も伝わってこない。そこで、老人の眉に初めて皺が寄った。

「それなんだがね。君の話を信じないというわけではないが、どうもその部分だけ腑に落ちないんだ。君の言うチャクチャルさん、とは、本当にあの『地縛神』なのかね?」

「あ、それなら証拠も出せますよ。ほら」

チャクチャルさんが近くにいないのにエネルギーの乱用をするのはどんなリスクがあるかわからないので、ほんの1瞬だけダークシグナーの力を表面に出す。パツと体中に紫の痣が走るも次の瞬間にはその全てが消え失せたが、地縛神のことを知っているのなら証明はこれで十分だろう。

そんな軽い気持ちで見せた痣だったが、その結果は僕の思った以上のものだった。老人の顔がサツと青ざめ、自分の手にしていたカップが床に落ちるのも構わずよろよろと数歩下がる。その後どうにか落ち着きを取り戻したが、いまだ顔色は悪いままだ。

「あ、あの、大丈夫ですか……?」

「……君は、本当にその神の力をその体に宿しているというのかね? 本当にそれでいいのかね?」

「はい?」

本気で訳が分からない、というのが顔に出ていたらしい。軽く息を吸って気を落ち着かせると、質問を少し変えてきた。

「どうやら、君は自分の持つ力の性質も知らずに使っていたようだな。無知は悪ではないが、この場合はいささか危険すぎる。君は、これまでも自分の中の黒い衝動に突き動かされたことがないかい?」

「えっ、と……」

どうしよう、心当たりしかない。思い返せばカミューラ戦、いやその前のダークネス吹雪さん戦に始まって光の結社洗脳中、近いところだとコブラ戦やゾンビ化したクロノス先生戦など、僕がダークシ

グナーになつてから怒りに身を任せたことは数多い。ただその場合、勝率はお察しだけど。

「そもそも、地縛神というものがそもそも何者なのか。これも知らないというのかね？」

「地縛神が……う？」

そういえば、そんなこと考えたこともなかった。最近はちよつとすれ違いぎみだったとはいえ僕が生き返ったあの時からずっとそばに居てくれて、辛い時には力を貸してくれたし、何度も何度もその圧倒的な力で絶望的な盤面をひっくり返してくれた、何物にも代えられない大切な仲間にして神様。

そんなチャクチャルさんの過去を本人は特に言いだそうとしなかつたし、だから僕もずっと聞かなかつた。いや、むしろ聞かないようにしていた。だから昔のチャクチャルさんについて僕が知っていることは五千年前からカミューラ戦の時までずっとナスカの地で地上絵として封印されていたことと、その封印前には先代のダークシグナーとしてある男を僕と同じく死の淵から引っ張り上げていたことぐらいだ。

……この老人が知っている話を聞いてしまったらもう後には戻れない、そんな予感がする。今ならまだ、全ての話を聞かなかつたことにしてここから出ていくことだってできる。そうすればチャクチャルさんと再会してもこれまで通りに、過去のことなんて何ひとつ詮索せずにそれなりの関係を保ったままでいられるはずだ。だけど、本当にそれでいいのだろうか。僕の知らないチャクチャルさんの話を知る格好の機会から逃げるのは、正しいことなんだろうか。それに僕が時折暴走するときもチャクチャルさんの過去、というかその力が絡んでいるのだとしたら、もしかするとあの怒りを制御できるヒントが隠れているかもしれない。

しばらく迷つた後、僕も覚悟を決めることにした。

「……教えてください、お願いします」

それを聞いて老人が重々しく頷き手を伸ばすと近くの本棚から1冊の本が音もなく抜け出して滑空し、その手にすっぽりと収まつた。

「私のしていることは、もしかしたら間違っているのかもしれない。君が何も知らないというのなら、それは知らない方が幸せなのは間違いないだろう。だが、やはり君は知っておいた方がいいと私は思う。自分の力のルーツを知ることとそれを制御する、それは魔法も人生も変わりないことだからな。何も知らずに行使するには、その力はあまりに強大すぎる。君の言う、五千年前に地縛神が封印された際の出来事……それは我々の世界にも、文献として伝わっているのだよ」

そう言いながら慣れた手つきで飛んできた本のページをめくり、やがて目当ての箇所にとどり着いたのかその手が止まる。そのページを開いたままこちらに持ってきて、僕にそつと渡して中を読むように促した。

「こ、これって……」

まず最初に目についたのは、その挿絵だ。古めかしい紙の上に生き生きとした筆遣いで描かれているのは、紫の模様が入った黒いシャツの姿を模したモンスター……まぎれもなくチャクチャルさんが、どこかの石造りの都市を蹂躪しているイラストだった。その隣には見たことのないモンスター、チャクチャルさんと同じような黒い体にそれぞれ違った色の模様がついた、動物をモチーフとしている存在が同じように暴れまわっている。この二足歩行するトカゲのようなモンスターが掴んで口に運ぼうとしているのは、もしかしなくても人間だろうか。握られた拳の隙間から、いくつもの人の手足が覗いている。

「かつて人間界で行われたシグナーとダークシグナー。彼らが操った6体のドラゴンと、地縛神の戦いに関する文献だ。私が直接見たわけではないが、この本の著者は信用できる人物だ」

挿絵からひとまず目を離し、本文に目を通す。そこに綴られていたのは、古代ナスカの地に起きた破壊の記録……字面を追っているだけで目を覆いたくなるような、地獄絵図と呼ぶにふさわしいものだった。たくさんの人の命が地縛神の糧となり、その被害がナスカを飛び出し世界に広がらんとしていた。そんな時に突如現れた、腕に赤き龍の痣を持つ人間たち……シグナーの活躍により全ての地縛神は封印されダークシグナーは灰となり、生き残りのナスカの人々はその跡地

である地上絵を祀り、2度と封印が解けないよう祈り続けた、らしい。読み終えたのを確認し、何も考えることができずにぼうつとしている僕の肩に手を置く大賢者。優しい声からは、心の底から心配してくれているのが伝わってきた。

「今日はもう遅い。ここに泊まるといい」

大賢者の館の1室、僕にあてがわれた客間。あの後夕食までごちそうになり、勧められるままにベッドに潜り込んだものの、混乱した頭でずつとあの本のことを考えていたせいでお礼すら言えなかったし、何を食べたのかも思い出せなかった。

申し訳ないとは心の中でチラリと思うものの、そんな思考もまたすぐあの本の内容にかき消される。チャクチャルさんが、あのチャクチャルさんが、あんな風に世界を、街を、何の罪もないナスカの人を……何かの間違いだ、と思う一方で不思議とあの内容は本当のことだ、と信じる気持ちもあつた。

「寝よう。寝よう寝よう、もう今日は寝る！」

誰もいない部屋の中で自分に言い聞かせるように叫び、無理やり目をつぶる。眠気は全然感じなかったのではばらくかかるかと覚悟していたが、意外なほどあっさり意識が薄れていった。

『よお、旦那』

誰かが呼んでる声がある。うるさいなあもう、人がせつかく寝たつてのに。また起きたら現実と向き合わなきゃなんだから、せめて寝てる時ぐらい邪魔しないでほしいものだ。

『おいおい、俺のこと忘れっちゃったのかい？寂しいねえ旦那』

いや待て、この声には聴き覚えがある。そうだ、確かあの時もこんな……そこまで考えた時点でいっぺんに前の記憶を思い出し、ベッドから瞬間的に跳ね起きた。にやにやと笑い、だがその目は全く笑っていない目の前の男をあらん限りの敵意を持って睨みつけ身構える。

「生きてやがったのか……！」

『まあな。いやー苦勞したぜ、あのクソ神に気づかれないようひたす



らじつと存在隠して、お前が奴と離れるこの瞬間をずっと待ってたんだからよお。なにせ、前回は奴が勘付いたせいでとんだ邪魔が入ったからな』

あの時と同じく夢に出てきた……夢といっても、嘘の存在というわけではない。体を失った後も精神体となつて害虫以上のしぶとさで生きながらえてきた、先代ダークシグナー。

あの時はチャクチャルさんが助けに来てくれたし、メタイオン先生が覚醒することで存在ごと消し去った、はずだったのだが。目の前で気楽そうにしているこの男はいかなる方法を使つてか、神々の攻撃をも耐え抜いてしつこく僕の頭の中にいたらしい。

「それで、何しに来たのさ」

悔しいけど、チャクチャルさんも他の仲間もない今の僕ではこの男にはどうやっても勝つてこない。僕は賢者にも指摘されたように自分の持つ力がどんなものかすらロクに把握できていないのに対し、相手はその力を5000年間研磨しつづけてきた化け物だ。こうして夢の中に入り込んで話をする技ひとつとってみても、僕には一体どうやっているのか見当もつかない。力づくで追い出せない以上、黙つて相手のペースに乗るしか方法はない。

『いやいや、そう警戒しなさんなよ旦那。あの老いぼれの話はなかなか面白かったが、どうやらお前は半信半疑だったみたいだからな。せっかくだから、面白いものを見せてやろうと思つてよお』

「面白い……？」

その言葉に含まれた不穏な調子に、咄嗟に目を閉じようとして……できない。目を閉じるどころか、指一本ピクリとも動かさない。強引に力づくで動こうともがいている僕を嘲るように笑い、ぱちりと指を鳴らす先代。突然周りの景色が真夜中の、妙に古めかしい街に切り替わった。

「こ、こころは……」

『我が麗しの今は亡き故郷、今でいうところのナスカの地さあ。ククク、ほれ、あつちで火事が起きてるだろ？』

指さした方を反射的に見ると、石造りの建物から盛大に火が上がつ

ていた。月明かりが霞むほどの光を放つその火事のせいで、電灯のひとつもないのに周りの景色はくつきりとよく見える。その2階部分には逃げ遅れたらしい人がいて懸命に外に助けを求めているが、周りにはみなパニックになっていて誰も上の叫び声に耳を傾ける者はいない。

幻覚か何かだ。そう頭ではわかっているのだが、その光景の余りのリアルさについて助けを求めている人のもとへ1歩を踏み出しそうになる。すると突然、雲もないのに上空に影がかかった。

『ほれ、俺のお出ましだ』

その言葉に上を見ると上空に浮かんでいたのは、巨大なシャチのシルエット。その上には、僕と同じフードつきのローブをすっぽりとかぶった男が座り込んで愉快そうに笑っている。

「チャクチャルさん！」

僕の声が聞こえないかのように……いや、実際聞こえないのだろう。これはあくまで映像、今起きていることじゃない。悠然と紫色の軌跡を引きながら星の海を泳ぐその姿は、まぎれもなく見慣れた地縛神のものだ。そして上に乗った男が下を指さして何事か叫ぶと、チャクチャルさんも動きを止めて燃え続ける家を見下ろして口をゆつくりと開く。

次の瞬間、目の前の家が吹き飛んだ。呆然としてチャクチャルさんを、たった今中に人が残っていた家に向かって攻撃をぶちかました地縛神を見る……上の男は今の光景がたいそうお気に召したようで、体を震わせて大笑いしていた。周りでパニックになっていた人々も全員上を見て、その場にどつしりと浮かぶ神の姿を捉えていた。

それに気づいた男が、眼下の人々をざっと手で指し示してチャクチャルさんに何事か呟く。再びその巨体を震わせ、まるで水中を泳ぐかのように流麗な動きで神が動こうとする。その次に起きることが予想できていながらも、僕の体は動かない。僕の声も、今ここにいる人たちには届かない。目の前の人たちの表情ひとつひとつまではつきり見えていながら、どうすることもできない。

「や、やめ……」

そしてまた、破壊の嵐が吹き荒れる。人が、家が、木が、岩が、全  
てがなすすべなく吹き飛ばされ、打ち付けられ、その後には廃墟すら  
も残らない。もはや動くものが何もなくなくなったことを確認した男が、  
暇そうにしながらまた別の方角を指す。その先には、また別の街が。  
そこで急に視界が暗転し、気が付くとまた最初の部屋の中に戻って  
いた。

『おっと、終わったと思ったか？残念だったな旦那、まだ終わりじゃね  
えときたもんだ。そーらよつと』

また指を鳴らすと再び視界が暗転し、今度は別の街……山のふもと  
の小さな街が燃えていると真ん中に切り替わる。あちらこちらで火  
の手が上がる上空には巨大な2羽の鳥の地縛神がその翼で月を覆い  
隠し、山の向こうからは人型の地縛神がその上半身を突き出してあの  
ラビエルに勝るとも劣らない太さの剛腕をゆつくりと逃げ惑う人々  
めがけて伸ばしている。トカゲの地縛神はその細い腕と伸びる舌で  
人間を目につくままにその口へ運んでいるし、蜘蛛の足元では目がう  
つろな人々が操られているかのようなぎこちない動きで逃げる人に  
襲い掛かっている。猿の地縛神も、長い尾をクルクルと巻いたまま器  
用にバランスを取って跳ね回っては足元を無邪気そうに破壊し続け  
ている。

このままだとこの小さな街に住む人が全滅するまでにはそう時間  
もかからないだろう。そう思った矢先、僕のすぐ横をすり抜けて何人  
かの地縛神の宴から逃れた人が街の出口に向かって走っていくのが  
見えた。お互いを励まし合い、物陰に隠れながらなんとかここまで来  
たのだろう。外に出たからといって助かる保証などまるでないが、そ  
れでもここにいるよりは未来があると踏んだらしい。あと少し、あと  
少しで壊れていく街から外に出られる……そこまでたどり着き、彼ら  
の顔にもようやく希望の色が見えてきたところで突然集団の先頭が  
足を止めた。その見上げる先には、いつの間にか出口に回り込んで外  
から覗き込む巨大なシャチの姿。

ああ、そうだ。こんなわざわざ持ち上げてから叩き落とすようなや  
り方で心を徹底的に折っていくなんて、いかにもうちの神様ならやり

そんなことだ。絶望の色を張り付けて膝から崩れ落ちる生き残りの人たちに、そつとチャクチャルさんが上空から近寄ってゆく。彼らの姿が闇に飲まれたところで、こちらの視界も再び暗くなった。

『はっはあー…どうだい気分は、最高だろう？お前ご自慢の地縛神は、ずつとお前の前じや猫被ってて何も言わなかったからなあ？いやあ、なかなかあの様子は傑作だったってーもんよ』

「うるさい……」

もうこんな話、これ以上は聞きたくない。だけど、拒否する声にも力が入らない。

裏切られた、というのは少し違う。僕はチャクチャルさんから過去を問いたださなかったしあちらも言わなかった、それだけのことだ。それはわかっただけはいるけれど、やっぱりなぜ言ってくれなかったのかという悲しみが大きい。僕はチャクチャルさんのことをずっと信用して……いや、そもそもそれは僕だけの勝手な思い込みじゃなかっただろうか。

最初からずつとチャクチャルさんの目的は5000年前の復讐を果たし、再びあの文献や今の映像のような世界を作り出すこと……そのため、こうしてその機会をうかがっているのだとしたら？だとすれば僕を生き返らせたわけにも説明がつく。自身のカードを突破口としてナスカの封印を破るために利用されたのだとしたら？三幻魔を共に撃退したのも、邪神アバターを闇に葬り還したのも、光の結社と敵対したのも、単に地縛神とダークシグナーの世界には不要な存在だったから、というだけの理由なのだとしたら？

仲間を、それも命の恩神を疑うなんて最低だ、そんな声が自分の中から聞こえてくる。僕自身も、やっぱりチャクチャルさんのことを信じた。だけど、そんな思いを丁寧に打ち砕くように、先代の言葉ひとつひとつが胸に突き刺さる。

『いやまったく、ひでえ話だなあ、オイ？あいつはずつとお前を騙してたんだ。流星の俺も同情するぜー、なあ？お前がこれまで必死こいて守ってきた世界は、最後には誰よりも信じてた、あの味方面したクソ神の手でおじちゃんになるって寸法なんだからよお。だがこいつは効』

果的だ、それは俺も認めるぜ。何しろ持ち上げて落とすこの方法なら  
確實にお前にのしかかる絶望はそれだけデカイ、それまでの間にお前  
が勝手になまっちょろい信頼関係を築いた気になつてたんならなお  
さらだ。見事な計画つてもんだぜ』

「し、信じないよ、そんな話……」

『そうか？じゃあ聞かせてもらうがね旦那、そもそも俺が最初にダン  
ナの夢に出てきたとき、あいつはなーんであんなに怒つてたんだい？  
簡単だよ旦那、俺とあいつが会えば、遅かれ早かれ俺はあいつが何を  
企んでるかに気づく、それがよくわかつてたのさあ。おまけにお前  
は馬鹿だから、あいつがお前のことを心配してくれたんだと思ひ込ん  
でますます信用するようになる。あいつにとつちやあ願つたり叶つ  
たり、一石二鳥狙いの寸法だったのさ』

何か言い返さないと。そう思うのに頭が麻痺したようになって、何  
も口に出すことができない。振り切りたいのに振りきれない、闇がず  
ぶずぶと底なし沼のように僕の足元から包み込んでいくような錯覚  
を感じながら、どうすることもできずにただ黙っていた。

……もしかしたら、そうなのかもしれない。先代は僕よりもはるか  
にチャクチャルさんとの付き合いが長い、僕よりもずっとあの神様の  
気持ちを読み取ることができるのかもしれない。一度そんな思いが  
湧き上がるともう止められず、次から次に悪いことばかりが頭に浮か  
んできた。チャクチャルさん、答えてよ。どこにいるのかわからない  
けど、今すぐここに来て全部否定して。僕の命を助けてもらったの  
に、そんな相手を恨んだり憎んだりなんて、僕はしたくないよ。お願  
いだから早く来て、僕が手遅れになる前に。

『……んあ？おいおい無粋な真似してくれんじゃねえか、一体なん  
だつてんだ？』

突然先代がベッドの横から立ち上がり、ドアの向こうをじつと見つ  
める。そんな様子を僕は気にも留めなかったが、そのドアの向こうか  
ら叫び声が聞こえてきたときは流石にそうも言つてられなかった。

「……何っ!？」

自分の声の大きさによく目が覚め、当然のごとく誰もいない部

屋の中でがばつと起き上がる。全く気が付かないうちに凄い汗をかいて呼吸も荒くなっていたが、部屋の外から何度も物のぶつかるような音とくぐもった悲鳴が断続的に聞こえてくるためそれをぬぐうことすら考えつかなかった。

「大丈夫ですか!?今そつちに……」

「いや、来てはいかん!」

ドアノブに手をかけた時点で向こう側から聞こえてきたのは、苦痛を帯びながらもきつぱりとした静止の言葉。その迫力に、思わず手を離して1歩退く。また魔法を使ったらしく、内側からしか閉められないはずの鍵がゆっくりと回ってロックされるのが薄暗い部屋の中でも見えた。

「いいかね、よく聞きなさい。この森を抜けたら、南西の方角に向けてまっすぐ進むのだ。私の記憶通りの場所に今も拠点を構えているのなら、徒歩で1日の位置にフリード軍の非戦闘員たちの街があるはずだ。そこに行き、匿ってもらいなさい。そしてこう伝えるのだ、辺境の大賢者はすでに死んだと」

「死んだ? 一体何を……!」

「説明している暇はない、早く逃げるのだ! 君のためだけではない、私自身のためにも! 私は敗れた、すでに時間はない……!」

その言葉を最後に、急に老人の口調が変わる。声そのものは本人の物で間違いないが、そこに宿った意思だけが別の存在に入れ替わったような……まるで悪魔のようなけたたましい笑い声が聞こえてきて、ドアノブがものすごい力でガチャガチャと回される。見た目以上に頑丈な代物らしく今はまだ侵入を食い止めているが、このままでは数分と持たずに破壊されるだろう。

どうやら本当に、悠長に話すことはできないようだ。ドアの正面にある窓のそばに走り、鍵がかかっていることを確認して全力で引き開ける。涼しい夜の空気が流れ込んでくると入れ替わりに、2階から外に身を躍らせた。

飛び出す寸前後ろのドアが破壊された音がしたが、もう振り返る暇はない。デツキのないデュエルディスクだけを腕に、来た時の格好の

ままで森に飛び出した。

## ターン94 蹂躪王と暴食の憑依

一体、どれほどの時間を走っただろう。常に暗く葉が生い茂り、上からの光を遮るこの森の中では、時間感覚などあつてないようなものだ。もう疲れた……ような気もする。眠りたい……ような気もする。辺境の大賢者の館を抜け出してからというもの、ずっとこんな調子だ。まるで夢の中で動いているかのように、何もかもが他人事を感じられる。

ただ、これが現実な証拠もある。僕が何かの理由で足を止めたりスリッドを緩めたりするたびに、後ろから悪魔の笑い声が聞こえてくるのだ。そもそも、いくらダークシングナーの僕でも本物の悪魔が本気で捕まえに来たら逃げ切れるわけがない。なのに僕がまだ生きているのは、ひとえにあの悪魔が僕をギリギリまでいたぶって追い詰めるつもりだからだろう。今はまだ体も動く……だけど、それすらも限界に達してピクリとも動けなくなるその時をあの悪魔は待っている。

逆に言えば、こうして走っている限り身の安全は保障されるということだ。何とも皮肉な話ではあるけれど、この森に潜む疫病狼の群れも自分たちより格上の悪魔が狙っている獲物の僕に手を出そうとはしてこない。今もまたちよつとした群れのすぐ近くを通り抜けたが、どいつもこいつも耳を伏せて尾を垂らし我関せずを貫いているため唸り声一つ出すこともしない。

そうして走り続けてから、結局どれほど経ったのだろうか。その時は、本当に突然訪れた。無限に続くかに見えた暗い森の前方から突然光が射し、ふらふらと誘われるようにそのまま行くと突然森が終わっていたのだ。

夕日が、今にも地平線と触れ合いそうな様子が見える。あと数十分もしないうちに、電気なんて気の利いたものがないこのあたりも真っ暗になるだろう。

「ぬ、抜けた……！」

「なんだ、もう終わりか？ならばこれ以上追い回す意味もないな」

喜びもつかの間、手を後ろに伸ばせば届くほどの距離でゾツとする



ほど冷たい声がする。後ろを振り返ると、そこにはまるで疲れた様子で立つ悪魔の姿があった。頭には紫色の、巨大なカールした角が一對生え、背中からは蝙蝠のそれを思わせる形の翼がやや控えめなサイズではあるが付いている。全身は鎧を着ているかのように硬質化し無数の棘が生えていて、なおさらその猟奇的なシルエットを目立たせている……が、僕が見ていたのはそんなところじゃない。その悪魔が身にまとっていた緑色のローブには、見覚えがある。森の中を走り抜けてきた割には汚れが少ない上質そうなそれは、間違いなく辺境の大賢者が着ていたものだ。

そんなことじゃないかとは思っていたが、それでもどこかで信じたくなかった……そんな希望も、もはや完全に打ち砕かれた。最後に聞いた老人のあの不穏な台詞、入れ違いに僕を追いかけたきた目の前の悪魔。やはり大賢者は、この悪魔に体に乗っ取られたのだろう。言葉を失う僕を見て、悪魔がふと意表を突かれたような顔になる。1瞬の沈黙ののち、その身を震わせ口を耳まで裂いて笑い出した。

「クククク、ワハハハハッ！これは面白い、ああ全く面白い！人間、私のことがわかるかね？」

「え？」

耳をふさぎたくなるような笑いのなかで放たれた謎の質問に虚を突かれ、まじまじとその悪魔を見る。その姿には何一つ見覚えがなかったが、燃えるような目にはどこか見覚えがあった。どこだったか、そう遠くない過去に一度、確かに見たことがあるような。だけど、悪魔の知り合いなんてそれこそ腐れ縁のラビエルぐらいしか僕にはいない。

だが、そこでふと引つかかるものを感じた。ラビエル……アカデミアで戦い、その後砂漠の異世界でも戦った。砂漠の異世界……そうだ、あの世界でもこんな目の持ち主を僕はみた。

「憑依するブラッド・ソウル！」

「おやおや、思い出してくれて嬉しいよ。もつとも、今の私は憑依しか能のない下級悪魔ではなく魔人……そう、魔人　ダーク・バルターとなったがね。この体の持ち主だったご老体には気の毒なことをした

が、この体は魔力に満ちていて実に私にはよく馴染む」

気の毒、と口では言いながらもその嘲り口調からはとてもそんな思いは感じられない。前は人外の存在が無理に人の言葉を喋っているような調子だったが、今はベースとなった辺境の大賢者が人型モンスターだからかその台詞や言い回しにも違和感がなく、それどころか砂漠で三沢と戦っていた時には見られなかった冷たい知性すら感じられる。また黒いドロドロした負の感情が体の底から湧き上がってくるのをなんとか押しとどめ、睨みつけるだけにとどめておいた。……ここでいくら怒ったところで、デツキが無くデュエルができない僕がこの悪魔に勝てる可能性は0だ。

「そら。受け取りたまえ」

ブラッド・ソウル改めダーク・バルターが賢者の物だったローブの中からカードの束を取り出し、こちらに向けて放り投げる。反射的に受け取ったそれは、やはりというかなんというかデュエルモンスターのカード。その意図がわからず警戒したままの僕に、ため息をついて幼児にものをひとつひとつ教えるかのごとき口調でダーク・バルターが話し始めた。

「これはこの可哀そうなご老体が生前使っていたデツキだ。ご老体の記憶によれば、君には今デツキがないのだろうか？」

「何がしたいわけ？」

「そう喧嘩腰にならないでくれたまえ。これは私からの最大限の温情なのだから」

「温情？」

「そうだとも。一つ賭けをしてみないかね？今から君と私がデュエルをする。君が勝てば、私は今度君に一切手を出さないと約束しよう。だがもし君がこの賭けを断るか、あるいは敗北すれば私は君を喰う。人間の肉は、我々悪魔には大変な珍味でね。特に、絶望や恐怖している物ほどいい味が出る」

要するに、わざとひとかけらの希望を与えたうえで敗北というどん底に突き落とそうということだろう。勝てば見逃すだなんてこれ以上はない餌を目の前にちらつかせておいて希望を膨らませ、その上で

叩き潰す。単純ながら効果的で、それでいて本人の負担もさほどではない。

本来ならこんな勝負、受けるべきではない。せめて使い慣れた僕のデッキがあるならまだしも、たった今渡されたばかりの内訳もわからないようなデッキであの三沢相手に善戦したこの悪魔とやり合おうだなんて、普通に考えたらまともな神経持った奴のやることじゃない。

……だけど、賢者さんは僕を助けてくれた恩人なんだ。憑依される最期の瞬間まで僕のことを案じてくれた、そんな人に対してこんな仕打ちをした外道。

『絶対に生かしておくものか……』だろうか？ああそうだ、その調子だ。全部解放して全力で行きな、旦那』

自分の声が二重に聞こえる。いや違う、僕の内側のもうひとつの声……先代ダークシグナーの世界全てに対するどす黒い怒り、闇雲な破壊衝動、もはや起源すらわからなくなったまま膨れ上がった憎しみ、そういったものが僕と同調しつつある。普段だったら何とか抑えようとしたであろうこの感情にも、今回ばかりは身をゆだねたい。

無言でデッキをデュエルディスクにセットし、機械を起動させる。今日は怒りに囚われてはいるが、頭は自分でも驚くほど冴えている。あるいは最初から、チャクチャルさんより先代を信用していた方がよかったのかもしれない。

「では、賭けは成立ということでしょうか？」

「御託はどうだつていいさ。どうせ僕が勝つ！」

「なるほどなるほど、大変いい気迫だ。では……」

「デュエル！」

「先攻は差し上げよう。最後のね」

「僕のターン！」

何が差し上げようだ、後攻ドローしたいだけじゃないか。まあいい、この手札なら……なるほど、このデッキのコンセプトが読めてきた。

「まずは、王立魔法図書館を守備表示で召喚する」

ズズズ、と地響きが起こり、地中から巨大な本棚が生えてくる。一見古ぼけたつくりのそれからは、魔力が内側から溢れてぼんやりと緑色の光が放たれている。

王立魔法図書館 守2000

「そして魔法カード、デュアルサモン二重召喚を発動。このターン2回の通常召喚が行えるようになるのと同時に、魔法カードが発動されたことで図書館に魔力カウンターが1つ乗せられる」

王立魔法図書館 (0) ↓ (1)

本棚から緑色の光がより一層強く溢れ、1つの球体となつて元の明るさに戻った本棚の周りをふわふわと浮遊する。まずは、ひとつと。

「それで……魔法カード、魔力掌握を発動。このカードの効果で図書館に2つ目の魔力カウンターを乗せて、さらに魔力掌握をデッキからサーチ。そして魔法カードが発動されたことで、さらに1つ追加」  
再び、そして三度本棚から光が放たれ、合計3つの光球がその周りを浮遊する。

王立魔法図書館 (1) ↓ (2) ↓ (3)

「王立魔法図書館に貯まった魔力カウンターを3つ消費することで、効果発動。デッキからカードを1枚ドロウする」

引いたカードは、これか。大丈夫、「魔力カウンター」はテーマ(?)デッキの中でもかなり癖が少なくて扱いやすい部類、いくら僕でもゆっくりなら間違えようがない。

「魔法カード、トゥーンのもくじを発動。デッキから同名カードを加え、魔力カウンター1つ追加。さらに2枚目をそのまま使つて3枚目をサーチ、魔力カウンター追加して最後の1枚を発動。これ以上トゥーンのもくじはデッキにないから、今度は別のトゥーンカード……トゥーン・デーモンをサーチ。ここまでで図書館に3つのカウンターが貯まったから、これを消費してまた1枚ドロウ」

王立魔法図書館 (0) ↓ (1) ↓ (2) ↓ (3) ↓ (0)

「……魔法カード、闇の誘惑を発動。カードを2枚ドロウして手札の闇属性モンスター、トゥーン・デーモンをゲームから除外。さらに魔

力カウンターを1つ乗せて通常魔法、増援を発動。デッキからレベル4以下の戦士族モンスター、終末の騎士をサーチしてさつき増やした召喚権を使ってそのまま召喚。その効果でデッキから闇属性モンスター、熟練の赤魔術師を墓地に送って墓地から赤魔術師の効果発動。墓地のこのカードを除外して、王立魔法図書館に魔力カウンターを追加。これで増援と合わせて魔力カウンターは3つ、もう1枚ドロースる」

終末の騎士 攻1400

王立魔法図書館 (0) ↓ (1) ↓ (2) ↓ (3) ↓ (0)

魔力掌握は1ターンに1度しか発動できないから、これ以上デッキを回すことはできそうにない。もつともこれだけ引けば、1ターン目としては十分すぎるぐらいだろうけど。防御札がロクに引けなかったのがちよつと気がかりだけど、確かブラッド・ソウルだった時の奴のデッキは打点低めの「捕食植物」だったはずだ。とすれば、出てくるモンスターも精々攻撃力2000に届くか届かないかぐらいのはず。

「……よし、カードを1枚セットしてターンエンド」

「では。私のターン、ドロローしよう。さあ出でよ、イービル・ソーン」  
地面が盛り上がり、刺つきのパンパンに膨らんだ実が1つ付いた植物の芽が伸びる。

イービル・ソーン 攻100

「このカードは自身をリリースすることで相手プレイヤーに300ダメージを与え、さらにデッキから同名カードを2体まで特殊召喚することができる。イービル・バースト！」

膨らんだ実がいきなり弾け、無数の刺が降り注ぐ。ダメージは大したことない、それよりもモンスターが増える方が厄介だ。

清明 LP4000 ↓ 3700

イービル・ソーン 守300

イービル・ソーン 守300

「この効果で特殊召喚したこのカードは効果を使用することができない……だが、その他の用法に制限はない。魔法カード、トランスター

ンを発動。私のフィールドからレベル1闇属性植物族のイービル・ソーンを墓地に送ることで、デツキから同じ種族属性でレベルが1つ上のモンスターを特殊召喚できる。レベル2、プレデター・プランツ捕食植物サンデウ・キンジーを呼ばせてもらおう。トランスターンを使ったことで、君のその図書館にカウンターを乗せておきたまえ」

突然ピンク色の蔦が伸び、イービル・ソーンを絡め取る。そのまま蔦は飛んできた位置に戻り、自らの主が開いた口の中に収納された。そう、口だ。今伸びてきたのは紛れもなく蔦、だがそれが放たれたのは間違いなく口。

ではそれは、動物なのか植物なのか？僕が以前見た捕食植物は、もっと植物要素が強かったはずだ。だが今回ダーク・バルターが繰り出した捕食植物は、むしろ動物としての要素を前面に押し出した根本的に異なる種。緑色のエリマキトカゲにも似たその生物が、葉の部分から生えた毛の先の粘液を滴らせつつのしと自らの足で歩きだした。

捕食植物サンデウ・キンジー 攻600

王立魔法図書館(0)↓(1)

「サンデウ・キンジーは自身を素材とし、融合カード無しでの融合召喚が可能となる。私は、場のイービル・ソーンとサンデウ・キンジーを

融合召喚？以前見た戦術とは何もかもが違う新たな捕食植物の戦術……だがそれを止めるとしたら、ここしかない。幸い、たくさんのドローのおかげでそれを妨害できるカードも手札にはある。

「チェーンして手札からエフェクト・ヴェーラーの効果発動。このカードを捨てて、サンデウ・キンジーのモンスター効果をこのターンの終わりまで無効にする！」

再び舌……いや、蔦を伸ばして残ったイービル・ソーンを絡め取ろうとしていたサンデウ・キンジーの動きが止まった。僕の予想外の妨害に対しても、ダーク・バルターの口元が笑いの形に歪む。そんな程度の抵抗がどうした、とその目が語っている。

「おやおや、これは大変だ。私のモンスターの効果が無効になってし

まったよ」

「そういうのはいいから、早くターンエンドすれば？」

「まあそう言ってくれるな、私のターンはまだ終わっていないのだから。さて、ではここでひとつ残念なお知らせだ。君は今のエフェクト・ヴェーラーで多少なりとも私の攻めを遅らせたつもりだろうが、正直なところ私としては痛くも痒くもないのだよ。魔法カード、融合を発動。再び捕食植物モンスター、サンデウ・キンジーと閥属性モンスター、イービル・ソーンを融合する」

「最初っから持ってたのか……!」

2体のモンスターが宙に舞い、不思議な渦の中で1つに融けあう。だけど僕にはそれを止められない悔しさに歯噛みしつつ、ただ見ていることしかできない。

「融合召喚。現れよ、捕食植物——キメラフレッシュア!」

大地が割れ、新たな捕食植物が先端がパツクリ割れて牙のついた鳶を腕代わりにその裂け目から這い出してくる。体色こそ他の捕食植物と同様に一見地味なようだが、これまでのパターンと大きく違うのはその先端に咲いた一輪の花だ。せつかく体が保護色を纏つてもこのどぎついピンク色と白のまだら模様、そして何より花卉から漂う悪臭のせいでその姿を見過ごすことは難しいだろう。その花は頭のよくな役割も果たしているらしく、蜜だか涎だかわからない液体をべつとりと垂らしながら巨大花が真っ直ぐにこちらを向いた。

捕食植物キメラフレッシュア 攻2500

王立魔法図書館(1) ↓ (2)

「驚いたかね? キメラフレッシュアこそ、私がこのご老体に憑依して得た魔力を浴びて進化した捕食植物の集大成。光栄に思うがいい、君がこのカードを実戦で見た最初の人間だ。では、前説はこの程度でいいだろう。キメラフレッシュアの第一の効果を発動。このカードは1ターンに1度、自分以下のレベルを持つモンスターを除外することができる! 貪欲な狩人よ、その図書館を捕食するがいい!」

キメラフレッシュアがそれ自体人間の胴よりもはるかに太いサイズの鳶を伸ばし、本棚をいっぺんに丸呑みする。バリバリと強靱な歯が木

製の棚を噛み砕く音が辺りに響き、それが数回続いたのちに蔦の先端が何かを飲み込むように動く。再び先端が開いた時、そこには木のかけらしか残っていないかった。

「くっ……」

「次にバトルだ。キメラフレッシュで終末の騎士に攻撃……と、この時、キメラフレッシュのさらなる効果発動。このカードはバトルを行う際、地中に根を張り一時的に養分を摂取し攻撃力を1000ポイントアップさせると同時に毒性を持つ花粉を花卉から放出し、鋼鉄すら腐食させるそれが相手モンスターの攻撃力を1000ポイントダウンさせる。受けてみるがいい、サポート・ツーン紫炎の棘」

その言葉通りに、キメラフレッシュが地中に蔦の一部を伸ばして大地の養分を吸い取る。みるみるうちにパンプアップされ強靱になった蔦がしなり、その花の中心から吹きつけられた花粉を受け膝をついた終末の騎士を頭から一飲みにする。

捕食植物キメラフレッシュ 攻2500↓3500↓終末の騎士

攻1400↓400 (破壊)

清明 LP3700↓600

「う……あっ……い……」

3000ポイントオーバーのダメージが直撃し、脳まで揺さぶられるような衝撃をまともに受ける。吹っ飛んだはずみで倒れるも、よろめきながらなんとか起き上がる。

「それでいい、その最後のターンまで続けるといい、その抵抗を。君が最後のカードを引いた時、私の前に屈するときの絶望の顔が今から楽しみだよ。カードを2枚セットし、ターンエンドだ。ここでキメラフレッシュの一時的なドーピング効果が切れる」

捕食植物キメラフレッシュ 攻3500↓2500

清明 LP600 手札：3

モンスター：なし

魔法・罨：1 (伏せ)

ダーク・バルター LP4000 手札：1

モンスター：捕食植物キメラフレッシュ (攻)



魔法・罨：1（伏せ）

「僕の、ターン……ドローっ！」

「スタンバイフェイズに永続トラップ、聖なる輝きを発動させてもらおう。これでこのカードが存在する限り場の全てのモンスターは表側表示となり、互いにモンスターをセット状態で場に出すことができなくなった。どうしてもモンスターを守備表示にしたければ表側守備表示で出せばいいが……キメラフレシアの効果からモンスターをセットして逃れようなどという甘い考えは捨てることだな」

ある程度手の内もわかっている相手だという勝算があったから、このデュエルを受けた時にはそこまで悲観的ではなかったけど……強い。予想外に強い。なんとか立ち上がりこそしたものの、モンスターのセットまで封じられより一層絶望的な状況に追い詰められただけだった。

その時だった。突然一陣の風が吹き、ダーク・バルターのローブと僕の学生服が揺れた。それ自体は、本当にただの風だったのかもしれない。だがその風圧に揺れた学生服の胸ポケットからたまたま何か飛び出してきて、深く考えないまま反射的に僕はそれを掴んだ。

「これは……」

そうだ、デツキがこの世界に来る際に行方不明になったシヨックですっかり忘れてたけど、このカードは胸ポケットに入れてあったから無事だったんだ。

これは、かつて邪神アバターと戦った際にデュエルモンスターの創始者、ペガサスさんから受け取った白紙のエラーカード。ペガサスさんはあの時、この2枚のカードには自分でもわからない力が秘められていると言っていた。もしこのカードの力が使えれば、あるいはこのキメラフレシアの牙城を打ち砕くことができるのだろうか。

……いや、今更すべては遅すぎる。もうデュエルは始まっているのに、新しいカードをデツキ外から付け足すなんてできるわけがない。しかもそのカードにしても、ひたすら白紙でただのエラーカードにしか見えない代物なのだ。後悔してもどうにもならないこのカードよりも、今引いたばかりのカードは……。

「速攻魔法、リロードを発動……自分の手札全てをデッキに戻して……」

最後の最後の小さな希望、リロード。今の手札だけではカメラフレシアを倒すことはできないので、これはありがたい。全てをデッキに戻し、改めて仕切り直そうとデッキトップに手をかけた時、その手の上からもう1本別人の腕が重なるのが見えた。

「!?」

『まあ待ちなよ大将、こいつはいい。まったく、面白いもんばつか引つ張り出してくれるぜ大将はよお』

「先代!」

『おう、俺だ。まあそんなことより、そのドロワー待ちな。そんで今大将が引つ張り出したカード、もーいつぺん見てみなよ』

なぜその声に従おうと思ったのかはわからない。ただ吸い寄せられるようにデッキから一度手を放し、言われたとおり胸ポケットに入れ直した2枚のカードの内1枚をすつと出して白紙の面を覗き込んだ。

思わずあつと声が漏れる。さっきまで白紙だったはずのそのカードの表面は真っ黒に染まり……と言っても、単に黒塗りされていたというのではない。空間にぽっかり空いた穴を手で持っているかのごとく、カードの向こう側に無限の空間が広がっているように見えたのだ。

「こ、これは……?まさかお前!」

『いんや、こいつは俺じゃねえ。見てみな、あの空を。見えるか、あの隕石がよ?』

スツと天を指差す先代の指した先には確かに赤く輝く、空に尾を引いた状態にもかかわらずそれ以上動くことなくその場所に留まり続ける不思議な隕石らしきものが。なぜだろう、あれを見ているとどうにも不安な気持ちになってくる。

『ややこしい理論はどうせわからねえだろう大将にもわかるように言うのだな、このカードはどうやら扉の役割を果たす力を持っているらしいな。大将の中にいい感じに育ってきた心の闇と、あの隕石の持つ

力がうまいこと共鳴し合ってこのカードを媒体にして力が飛び込もうとしてもがいてるってとこか。だがまだ足りねえな、大将が心の闇を解放しない限り、うまくこの扉は開かねえ』

こんな奴の話なんて、聞いちゃいけないのはわかってる。わかっているのに、この話にはどこか引き込まれる所がある。僕がずっと持っていたカードとして覚醒させることができなかったこの白紙のカードの1枚が、今まさに目覚めようとしている。そのヒントがこの先代の話に隠されている。そう思うと、耳を塞ぐことがどうしてもできなかった。

『だがまあ大将のことだ、自力で扉が開くところまで待つてたらその前にあの低級悪魔に喰われちゃうだろうな。だがせつかくできた2代目がこのまま無駄死にするのは俺としても惜しい、そこで俺はひとつ考えた、だったらこの俺が一肌脱げばいいってな』

「な、一体何を……!」

『決まってるだろう、大将。俺がこの世から消えるのさ』

「え……?」

突然の宣言についていけない僕に対し、底意地の悪い笑顔を向ける先代。

『わかってねえなあ。俺の存在が消えさっても、俺がこれまでため込んできた怒りや憎しみはそのまま残る。それを大将にまるつと叩き込めば、いくらヘタレの大将でも出力全開ってなもんだ』

「騙されるもんか、何を企んで……!」

『べつにいい?そもそも、俺は別に生きてようが生きてまいがどっちでもいいからなあ。ただあの糞神に落とし前つけさせて、この世に地獄を持ってこれさえすれば手段は問わんよ』

「そんな、無茶苦茶な!」

『はあ?おい、少しこつち向け』

ここでいきなり髪を掴まれ、無理やり顔を近づけて僕の目を覗き込む先代。まぎれもなく人間の顔、けどその目は深く、暗くて、根本的に人間とは異なる種族であることが一目見ただけで本能的に察せられる。

『見たか？これが、俺だ。ダークシグナーだ。こうなった以上、俺らに無茶なんてことあり得ない。そう望むならなんだってできる力を手に入れる代わりに人間であることをやめる、それが俺らが強制的に受けた呪いだ……じゃ、時間切れだ。ああまったく、大将がどうなるのか楽しみだぜ』

その言葉のみを置き土産に、先代の姿が消える。5000年前からいた化け物の最期にしては、意外なほどあっけなかった。と同時に、心の底から先代の言った通りに負の感情が湧きあがる。

「え……あぐ、あ、ああ……!!」

怖い、いやだ、こんなものに飲み込まれたくない。湧き上がる衝動に必死に抵抗しようとするも、それよりも速いスピードでどす黒い怒りが心の中を占めていく。無限にも思える、だけど実際にはほんの1秒もかかっていない戦いはやがて決着を見せた。

……憎い。僕の恩人をあんな悪魔の姿にしたダーク・バルターが憎い。手始めに奴を倒し、その全てを奪ってやろう。モンスターも、ライフも、勝利も、何一つ貴様にくれてやるものはない。

「おいおい、どうしたのかね？サレンダーでもする気かな？」

デツキにカードを戻したままいつまでも動こうとしない僕にしびれを切らしたダーク・バルターの声に、軽く片腕を上げて応える。

ああ、待たせたな。これで終わらせよう、全部。不思議と、どうすればいいのかわかっていた。あるいは、このカード自体が何らかの形で僕に語りかけていたのかもしれない。まるでそうするのがさも自然なように、白紙だったカードをデツキにかざす。黒みを帯びた濃い紫色の光がカードから放たれ、その光を浴びたデツキもやがて同じ色に光り始める。今や僕の物となった先代の負の感情と宙に浮かぶ隕石の力が共鳴し、その全てがこのカードを通じてデツキに宿される。

やがてすべての力を移し終えた白紙のカードがまず光を失い、その役目を果たしきって灰になって風に消えていく。デツキの光もやがて落ち着き、全てが表面上は元に戻った。

「……リロードの効果で、デツキに戻したのと同じ枚数、つまり3枚の

カードを新たに引く」

ああ、やつぱり。そこにあつた3枚のカードのうち2枚は、僕のこれまで見たことのないカード。白紙のカードの力により、その全てが書き換えられた新たなデッキ。カードたちが呼んでいるのがわかる、今すぐ俺たちを暴れさせろと。この力と僕の力が組み合わされば、全てを破壊しつくすことだって夢物語ではないと。

だが手始めに、ダーク・バルターだ。憎い、憎い、憎い。

「フィールド魔法、KYOUTOUウオーターフロントを発動！そして魔法カード、ハーピイの羽根箒！このカードでお前の魔法、罨カードを全て破壊する！」

「今更そんなカードで……まあいいさ、私の聖なる輝きも、茨の壁も破壊される」

「まだだ！そして今フィールドから2枚のカードが墓地へ送られ、さらに羽根箒のカードも発動したことで墓地へ送られた。これにより、フィールドから墓地へ送られたカード1枚につき1つの壊獣カウンターがウオーターフロントに乗ることとなる」

ウオーターフロントに突如、3色のライトが灯る。眠っていた灯台に光が宿り、遙か遠く間からでも識別できる強力な光がぐるぐると辺りを照らし出した。

KYOUTOUウオーターフロント(0)↓(3)

「そしてカウンターが3つ以上乗ったウオーターフロントの効果発動！1ターンに1度、デッキから壊獣モンスター1体をサーチすることができる。来い、雷撃壊獣サンダー・ザ・キング！」

全く知らないモンスターの名前が、自然と口について出る。だがそれは何もおかしなことではない。今となつては、このデッキの意思が僕の意思だ。デッキ自身が自分の回し方を何よりも心得ているのだから、それを僕が知つていてもそれは当然のことだ。

ともあれ、これですべての準備が整った。あとは、決定された勝利を手順通りに掴むだけだ。

「レベル10のモンスター？あいにくだが、私にはいくらそんなものをサーチしても召喚するためのリリースがないように見えるのだ

がね」

「高説ありがとう。言いたいことはそれだけ？なら僕は捕食植物キメラフレシアをリリースし、お前のフィールド上に、多次元壊獣ラディアンを特殊召喚する！来おい、ラディアン！」

「私のモンスターをリリースだと!?ラヴァ・ゴーレムタイプのモンスターか！」

灯台の光のうち1本に照らされたキメラフレシアの姿が消え、その場所には空間を割って黒い人型モンスターが特殊召喚される。奴こそがラディアン……僕の新しいデッキの、新しいメンバーの1体だ。

多次元壊獣ラディアン 攻2800

KYOUTOUウオーターフロント(3)↓(4)

「……まあいいさ。私はこのターンのエンドフェイズ、墓地に送られたキメラフレシア最後の効果によりデッキから融合またはフュージョンと名のつくカードを1枚サーチすることができる。墓地の融合モンスターを蘇生させるカード、再融合をサーチすればいいだけのことだからな」

「エンドフェイズ、ねえ……そんなもの、本当に来ると思う？」

「どういう意味だ？」

「このターンで終わらせる、それだけの意味さ。ラストターンと洒落込もうよ、ねえ？手札に眠りし壊獣のカードは、相手フィールド上に壊獣モンスターが存在するとき手札からノーコストで特殊召喚できる！出る、雷撃壊獣サンダー・ザ・キング！」

上空に黒い雷雲がかかり、その隙間から3つの首を持つ白き龍の姿をした壊獣が光と共に降りてくる。これこそがサンダー・ザ・キング……このデュエルを一撃で終わらせる力を秘めた、今回の切り札だ。

雷撃壊獣サンダー・ザ・キング 攻3300

「ノーコストで攻撃力3300のモンスターだ?!だが例えそのカードで攻撃をしてこようが、私の受けるダメージは精々500。キメラフレシアはその効果により、一方的に攻撃力4500までのモンスターを葬り去れることを忘れたか！」

「お前こそ忘れたか、ダーク・バルター！このターンはラストターン、

すでに勝負は終わってるんだ！サンダー・ザ・キングの固有效果、帯電を発動！」

サンダー・ザ・キングの周りにプラズマが発生し、溢れ出る電気のエネルギーにより体が薄く光を放ち始める。そして3つの頭にそれぞれ生えた角がさらにその電力を増幅させ、強化する。ややあつて、全身に雷を纏った白き龍の姿がそこにはあつた。

KYOUTOUウオーターフロント(4) ↓(1)

「サンダー・ザ・キングはフィールドに存在する壊獣カウンターを3つ取り除くことで、このターン相手はあらゆるカード効果を発動できなくなる。伏せカードは既に除去したけど、墓地や手札から抵抗することも許さない」

「チツ……」

やはりあの1枚、何らかの手札誘発を隠し持っていたのだろう。だがそんなもの、通すわけがない。一切の希望という希望を根こそぎ奪い、完膚無きまでに叩きのめしてやる。

「バトルだ！サンダー・ザ・キングでラディアンに攻撃！」

3つの首のうち1つが口を開け、稲妻型の雷撃光線を放つ。ジグザグと宙を裂いたそれはラディアンを直撃し、ラディアンも無駄な抵抗はせずさっさとフィールドから立ち去った。

雷撃壊獣サンダー・ザ・キング 攻3300 ↓多次元壊獣ラディアン 攻2800 (破壊)

ダーク・バルター LP4000 ↓3500

「ぐおおっ……この力……！」

「トラップ発動、リバイバル・ギフト！このカードは僕の墓地からチューナー1体を蘇生させ、相手フィールドに攻守1500のギフト・デモン・トークンを2体特殊召喚する！甦れ、エフェクト・ヴェーラー！」

エフェクト・ヴェーラー 守0

ギフト・デモン・トークン 攻1500

ギフト・デモン・トークン 攻1500

KYOUTOUウオーターフロント(1) ↓(2)

「このタイミングでリバイバル・ギフトだと……？はっ、まさか！」

訝しむダーク・バルターが、ある可能性に気が付いてサンダー・ザ・キングを見上げる。宙を舞う白き龍の姿を見たときの絶望の表情は、なかなかの見ものだった。サンダー・ザ・キングの3つの頭のうち1つはすでに攻撃を終えていたが、まだ残り2つが帯電したまま僕の命令を待っていたのだ。

「その通りさ、ダーク・バルター。サンダー・ザ・キングは帯電の能力を使ったターン、1ターンに3回までモンスターに対しての攻撃が可能になる。もつとも、ダイレクトアタックはできないからお膳立ては必要だけどね」

「2体のトークンを生みだすりバイバル・ギフト……そうか、そのために……」

「ご名算。サンダー・ザ・キング、残り2回の攻撃権を使用してギフト・デモン・トークン2体に攻撃しろ！」

雷撃壊獣サンダー・ザ・キング 攻3300↓ギフト・デモン・トークン 攻1500 (破壊)

ダーク・バルター LP3500↓1700

雷撃壊獣サンダー・ザ・キング 攻3300↓ギフト・デモン・トークン 攻1500 (破壊)

ダーク・バルター LP1700↓0

ライフポイントを失ったダーク・バルターが雷撃を受けて吹き飛び、ゴロゴロと地面を転がる。その姿を見て、背後に鳴る稲妻の音を聞きながら僕は……ただひたすらに、笑っていた。ずっとずっと、笑っていた。



## ターン95 蹂躪王と怪異の演目

「……はあ」

ため息をつき、鉄格子のはまった小さな窓の隙間から空を見上げる。どんよりと厚い雲が立ち込めた夜空は、僕の気分にもぴったりだった……なんて、詞的なことを言う気分にもなれない。そもそもそんな相手もない。僕は今ここに、一人きりだ。

だが、自分の境遇に文句をつける気はない。そんな凶々しいこと、ちらりと考える気にすらならない。石造りで殺風景な部屋のせいで無性に冷たく感じるベッドに寝そべっていると、自然とあの時のことが頭をよぎってきた。そう、あれは、僕がサンダー・ザ・キングの特殊能力を使つてダーク・バルターにとどめを刺したあのデュエルが終わつてからのこと。といっても、大した話ではない。こんな何も無い部屋にいと、それぐらいしかすることがないのだ。

「あ……ぐ……」

地面に無様に転がったダーク・バルターの方から、かすかなうめき声が聞こえてくる。しつこい奴だ、サンダー・ザ・キングの3回攻撃を受けてまだ息があったか。

「もつとも、生きてて可哀そうには思うけどね。ねえ?」

同意を求めて頭上を仰ぐと、ゴロゴロと途方もなく巨大な生物が喉を鳴らすような音が帰ってきた。そこにいたのは、まさしくたつた今死闘を制したばかりのサンダー・ザ・キングの白い巨体。なぜデュエルが終わったのにソリッドビジョンが消えていないのかはいまいち謎だが、これはむしろ都合がいい。

「まあ、生かしておくのも禍根が残るしね。どーせ今更許す気もないし、構わないから遠慮なくとどめ刺しちやってよ」

僕の命令を待っていた、といわんばかりに、サンダー・ザ・キングの全身に再びプラズマが走り出す。別に普通に攻撃するだけでもよかつたのにわざわざ帯電能力まで使っているところを見ると、オー

バーキルは承知のうえで最大火力で終わらせる気のようにだ。それだけ、僕のダーク・バルターに対しての怒りやら憎しみやらが深いことをこの龍は読み取ってくれたのだろう。そしてそんな知能があるところをみると、どうやらこの壊獣たちも精霊の力を宿しているらしい。それとも前提が逆で、精霊として自我があるからこそこうして僕の呼びかけに応えてくれたのだろうか。どちらにせよ、そんな鶏が先か卵が先かなんて話は僕には関係ないことだ。

ともあれ見かけによらないその細やかな気遣いに心の中で感謝しつつ白い巨体に走るプラズマの量が徐々に増えていくのを見守っていると、やがてその量も最大に達したのが感覚で理解できた。じつとこちらを見るサンダー・ザ・キングの3つの頭に、そつと頷いて口を開く。

「これで終わらせる！ 行け、サンダー・ザ・キ……ん?!」

今まさに最終命令を出そうとしたその時、うめき声と共に苦しみ続けるダーク・バルターの体がふとしたはずみにごろりとひっくり返って仰向けになった。あらわになったその顔……それはすでに悪魔のそれではなく、その体の元となった辺境の大賢者のもの。

「……っ！ ストップストップ、攻撃中止して！」

頭上の三つ首龍に精一杯の大声で攻撃を強制中断させようとしたが、すでにそれをするには遅すぎた。それでも辛うじて2つの首を明後日の方向に伸ばして雷撃のブレスを飛ばすサンダー・ザ・キングだが、残りの首からは既にブレスが老人に向かって放たれている。

気が付けば、半ば無意識に体を動かしていた。僕の体では小さすぎて盾にすらならないことは承知の上だが、それでも動かすにはいられない。いまだ体を動かすこともできない老人の前に行き、今にも到達しそうな雷撃との間に立ちふさがる。大賢者の体を持ち上げてブレスの直撃範囲外に持つていければそれが最善なのだが、それをするにはあまりに距離が離れすぎていて先にブレスが届いてしまう。

「くっ……！」

目の前が真っ白くなるほどの迫力と眩しさに目を閉じ、歯を食いしばって両手を広げ仁王立ちする。

その直後、想像をはるかに超える衝撃と全身の筋肉が痙攣するほどの電撃が僕の体に降りかかった。悲鳴を上げようにも口が動かず、全身の細胞ひとつひとつが電気の方に屈して痛みを訴える。これまでの闇のデュエルで受けた痛みは、よくも悪くもそのほとんどが物理的な衝撃ばかりだった。直接体を襲う電撃という全く未知なタイプの痛みの前には僕のちっぽけな覚悟など何の役にも立たず、意識が途切れる際にはこれでこの瞬間だけでも痛みから解放されるという喜びが真っ先に来たほどだった。

そして、今。一体何があつたのか、僕には何もわからない。サンダー・ザ・キングの一撃をまともに浴びて意識が飛んだ僕が目覚めたのが、だいたい数時間前。一体あれからどれぐらいの時が経っているのか、そもそもここはどこなのか、まだ誰にも会っていないため話を聞くことができておらず、大事なことは何一つわからない。

「痛っ……」

ぼそりと声が漏れる。まだ電気の後遺症が体に残っているらしく、下手に動くとも重い痛みと共に筋肉が突っ張るような感覚になる。少し動くだけでもこのぎまだ、走ったりするなど問題外だろう。

それでもどうにか上半身を起こしたところで、部屋のドアノブがゆっくりと回るのが見えた。じつと見つめていると、音をたてないよう慎重な動きでドアが開きその隙間から人の顔がのぞく。まさか起きていたとは思わなかったのである。僕と目が合うことたつぷり5秒、ドアも開けっ放しでその人が元来た方向へ駆けていった。騒々しい声がこつちまで聞こえてくるけど、いいんだろうか。

「隊長、隊長！あの子供、目が覚めました！」

「何？わかった、私が行こ……待て、この馬鹿者！ドアも閉じずに報告に来るやつがどこの世界にいるか！」

「ひえっ、も、申し訳ありません！」

「まあいい……戦闘経験のない者にそこまで期待するのも筋違いだからな。ただ、次は無いと思え」

……なんか、この隊長とやらはずいぶん苦勞しているらしい。心の中で同情していると、全身緑色の軍服のようなものに身を包んだ男が

きびきびした動きで入ってきた。ヘルメットとゴーグルで顔を隠しているため素顔はよくわからないが、恐らくこの男が隊長とやらだろう。

「目が覚めたようだな。私は……そうだな、デュエルモンスターズでいうところのバックアップ・ウォリアーという者だ。私自身はただの戦士族だが、今はここでフリード軍後方支援部隊を率いている」  
「バックアップ・ウォリアーさん……」

復唱すると満足げにうむ、と頷き、その後一言ぼそりと付け足す。  
「済まないね。私も本名を名乗りたいのだが、まだ君が敵になるか味方になるかもわからないからな。なにせこのご時世だ、ほいほいと本名を教えるわけにはいかないのだよ、遊野清明君」

このご時世、という言い方も引つかかったが、それ以上に気になることがあった。バックアップ・ウォリアーとは初対面のはずだが、僕の名前をなぜ知っているのだろうか。そんな訝しげな視線に気づいたらしい軍人が、ぼつが悪そうに肩をすくめる。

「あまりプライバシーに干渉したくはなかったが、これも仕事なのでね。君が眠っているここ数日の間に、少々荷物をチェックさせてもらったよ。といっても、身に着けていた学生証や財布以外はデュエルディスクとデッキ、それと白紙のカードが1枚程度しかなかったようだが」

言われて服の中を探ってみると、確かにいつも入れてある位置に学生証がない。バックアップ・ウォリアーが差し出したそれを受け取り、間違いなく僕のものであることを確認してまた仕舞い込む。白紙のカードは、これで残り1枚。

「あの、僕のデュエルディスクは……」

「その前に、聞かせてもらいたい。一体、君に何があったのかを。私があの恐ろしい雷撃と、それを放つ白い龍の姿を見て駆け付けた時にはすでにデュエルは終わっていて、その場所には君と辺境の大賢者が倒れていた」

「そ、そうだ！あの人は、あの人は無事なんですか!? くっ……!」

急に動いたせいでまた痛み出した体に怯んでいるうちに、バック



「南南西だど？その方角には串刺しの落とし穴が仕掛けてあったはずだ、投石部隊にはそこに誘導するよう命じて……」

『だ、駄目です隊長！とんでもない速さです、もう本陣まで……うわあーっ！』

「おい、応答しろ！誰か！誰かいないのか……チツ、私が出よう。君はここで待っていてくれ」

「いえ」

思いのほか冷静な、というよりむしろ冷たい声が出た。驚いて振り返る軍人の目には、さぞかし奇異に映ったことだろう。なぜとは説明できないけれど、強いていえば感覚でわかる。今この場所に近づきつつある敵襲……その殺意は、真っ直ぐ僕に向けられている。それに体が勝手に反応し、ダークシグナーとしての力が強制的に開放されつつあるのだろう。今僕の目は紫色を帯び始め、制服の下では紫の痣が体の表面を這い続けていることだろう。

「僕が、行きます。すいませんが、デツキを返して下さい」

「……わかった。ついてきなさい」

これ以上の説得は時間の無駄だと諦めたのか、それとも僕の調子に押し切られたのか。なににせよ、話が早いのはいいことだ。ベッドから起き上がったのを確認し、無言で部屋を後にするバックアップ・ウオリアーの後ろに続く。いくらか歩くことになるかとも思ったが、何のことはなくすぐ隣の部屋に入ってしまった。その部屋の壁に立てかけてあるのは、確かにアカデミア仕様のデュエルディスク。

「あれが君のデュエルディスクだ。デツキには一切触れていない、これは同じデュエリストとしての私の名誉に誓おう」

「ありがとうございます」

「少し、待っていたadakimashiyouka」

デュエルディスクを手を取ったちようどその時、どこからともなく低い声が石造りの部屋に響いた。咄嗟に周りを見回すも、僕とバックアップ・ウオリアーの他には動くものは何もない。あえて挙げるとすれば、部屋の奥の暖炉で炎が赤々と燃えているぐらいだろうか。

だが、僕よりも歴戦の戦士であるバックアップ・ウオリアーにはそ

の気配が感じられたらしい。まさにその暖炉に向けて、手にした巨大な銃を腰だめに構える。ワンテンポ遅れて、僕にもはつきりと分かった。あの炎、ただ単に火が燃えているんじゃない。

「誰だー！」

「おやおや、もう見つかってしまいましたか。さすがはフリード軍後方支援部隊隊長、バックアップ・ウオリアーさんといったところでしようか？ ですが、今回私が用があるのはあなたではないのですよ」

暖炉の炎が揺らめき、みるみるうちに膨れ上がって形を変えていく。筋肉質な上半身からは4本もの腕だけでなく蝙蝠状の翼までもが生え、毛深い下半身は足先の蹄と合わせて羊など動物のそれを連想させる。もつとも、そんな当たり前の動物は2足歩行などしやしないであろうという1点を除けば、の話ではあるが。

だが、それまでのパーツはどうか人型の体裁を成していたのだが、首から上だけはどうにもしようがない。もろに山羊といった風体のそれには、あのダーク・バルターのそれとよく似た角もついている。もつとも、向こうのそれよりもサイズは小さい代わりによりカールしているというささやかな違いはあるが。

「その山羊面、聞いたことがあるぞ。貴様がレッサー・デーモンか」

「おや、私の名もずいぶん広まったようで光栄ですね。いかにも、私の名はレッサー・デーモン。お初にお目にかかります」

その物腰こそ丁寧だが、レッサー・デーモンのその目はまるで笑っていない。常に周りの存在全てを小馬鹿にした感じを隠そうともしていない悪魔、そんな点までダーク・バルターとどことなく似通っている。

「さて、私も今回こうして足を運んだのは、なにもあなた方と遊びに来たわけではないのですよ。早速本題に入らせていただきますが、あなた、私達と共に戦いませんか？」

レッサー・デーモンが僕の方を向き、蹄でコツコツと床を叩きながら問いかける。真意をはかりかねて無言のままにいる僕に自らの説明不足を感じたらしく、咳払いひとつとともに改めて悪魔が語りだす。

「つまりですね、私はあなたの実力をそれなりに評価しているのですよ。ブラッド・ソウルはただの小物のつまらない悪魔でしたが、辺境の大賢者の体に憑依するという大金星を挙げて名実ともに魔人となった彼の戦闘力、ひいてはデュエルの腕前は決して侮れないものがありました。それをあなたは、あつさりと圧倒的なまでの力を持って退けた。その力をお貸しただけならば、我々暗黒界による侵攻計画もより一層楽になるというものです」

「暗黒界？ 侵攻？」

「……少し前のことだ。元々この世界は暗黒界により統治されていたのだが、穏健派の龍神グラフアを筆頭とする彼らによるあくまでも名ばかりの支配のもとで我々も平和な日々を過ごしていた。だがある日、あの空に留まり続ける不気味な彗星が現れてからすべてが狂いだした！」

バックアップ・ウォリアーが、レッサー・デーモンを睨みつけ銃口を向けたままその話をさらに補足する。

そしてどうやら今から語られる話は、この世界の根幹となる重要なストーリーのようだ。何ひとつ聞き漏らすまいと神経を集中させ、この世界の歴史に耳を傾ける。

「……取り乱してすまなかつたね。といつても、あとは単純この上な話さ。グラフアはその日を境に謎の失踪、その代理として急遽暗黒界のトップに立った魔神レインは突如、暗黒界の全兵力を傾けこの世界の全てを圧倒的な力で侵略することを宣言した。あの彗星が出るまではグラフアほどの穏健派ではないにせよ、少なくとも無益な戦争を仕掛けるような男ではなかったのだがな。そしてこれまで紳士的だった騎士ズール、武神ゴルド、軍神シルバといった面々までまるで熱に浮かされたようにレインの宣言に逆らうどころか嬉々として従う始末だった。私たちはその無差別な悪魔どもに抵抗するために勇者フリードの名の下に志を同じくして集まった抵抗軍、というわけさ」

この世界は、サンドモスとかの原生モンスターがやりたいように生きていた砂漠の異世界とはまるで違う。高い知能を持ち、組織立った



行動をとる悪魔とそれに対抗する人々という構図は、現代日本に生きてきた僕にとってはなんだか現実味がない話に思える。

だけど、これがこの世界の現実だ。そしてこんな殺伐とした日々を過ごしている原因らしき天頂の彗星、思えば僕がこの世界を生き抜くための武器、僕の力そのものとして手に入れた壊獣デツキもあの彗星の力が白紙のカードを通じて流れてきた結果生み出されたものだった。

何かある。なんだか見当もつかないけど、怪しい力がこの世界には今まさに干渉しつつある。なら、僕が今するべきことは……。

「1つだけ確認させろ、レッサー・デーモン」

「おや、どうしましたか？」

「ブラッド・ソウル……ダーク・バルターも、お前たちの言う暗黒界の仲間だったんだね？」

「ふうむ。私個人としては、あんな粗野で下級な者と同類扱いしていただきたくないのですが……そうですね。彼もまた、私と同じく魔神レイン様の元で働いていたことには変わりはありません。さ、これで満足でしょうか？ならば、そろそろご返事を聞かせていただきましょう。私達と共に来るか、それともここでその兵隊さんともども命を捨てるか。ふたつにひとつでお願いします」

「そんなもん決まってるさ、レッサー・デーモン！砂漠の異世界では僕の親友も世話になったし、こつちでは辺境の大賢者をも襲い乗っ取った。そんなお前らと、僕が？土下座して僕の下に就くってんなら考えてやらんこともないけどね、身の程ぐらいわきまえてきなつてんだ！」

まっすぐ山羊頭の目を見て啖呵を切る。また少しづつ、黒い負の感情が心の底から湧き上がってきているのを感じる……影響を受けた結果随分と傲慢な言い草になってしまったけど、この場合かえってその傲慢っぷりがよかったらしい。悪魔の顔がみるみるうちに怒りで赤く染まり、口が耳まで裂けた笑みを浮かべだした。

「……いいでしょう。では、後々の憂いになりそうな要素はここで断っておきます。始末して差し上げますから、私とデュエルしなさい」

い」

「もちろんさ。表に出よう、ここじゃ狭すぎる」

「よろしい。お待ちしておりますよ」

言うが早いがレッツサー・デーモンの姿がまた炎に戻り、勢いよく暖炉の中に引つ込んでいく。

一応暖炉の中で燃えているのがただの火であることを確認してからデュエルディスクを腕に装着し、こちらも電源を入れた。数秒としないうちに眠っていた機能が息を吹き返して準備万全の状態になった……と言いたいところだけど、なんだか内部から妙な音がするのとデュエル機能が復活するまでにワンテンポ遅いのが気にかかった。まあ、あれだけの雷撃を僕と一緒に受けたんだ、内部の機械がおかしくなったとしても全然不思議はない。幸い今はまだ動かし、なんとかなるだろう。

「君……」

何か言おうとしていたバックアップ・ウォリアーを手で制し、一言だけ言い残して外に出る。

「大丈夫です、勝ちますから」

「デュエル！」

もはや何も互いということはせず、外に出るなりカードを引く。瞬間、今引いたばかりの手札から強い力が流れ込んでくるのが分かった。それに反応して、心の中のどす黒い感情が膨れ上がっていく。なるほど、つまりこのカードを使えば使うほど僕はこうやって先代の怒りや憎しみに蝕まれていくわけか。どうりで、デュエルディスクを外していた時は何も感じなかったわけだ。

「これは、短期決戦じゃないとまずいかな……」

「私が先攻を取りましょう。私は、E M エンタメイト ジンライノを守備表示で召喚します。さらにカードを1枚セットし、ターンエンドです」

E M ジンライノ 守1800

4本の腕のうち1本にデュエルディスクをつけてそれと対になる

手で手札を持ち、さらに空いた腕を動かして巧みにカードを動かす  
レッサー・デーモンがまず呼び出したのは、太鼓を背負ったサイの姿  
をしたモンスター。

まずは守備固め、ということだろうか。別に、それ自体は何も悪く  
ない。ただ、僕のデッキにそんなものまるで効かないというだけだ。

「僕のターン、ドロロー！よし、永続魔法、壊獣の出現記録を発動。さら  
にお前のフィールドからジンライノをリリースし、海亀壊獣ガメシエ  
ルを特殊召喚する！」

「私のモンスターを……」

海亀壊獣ガメシエル 攻2200

ジンライノの姿が消え、その場所に青い甲羅を背負った巨大な亀の  
ようなモンスターが鎮座する。守備力1800の下級モンスター相  
手にリリース能力を使うのは少しもつたいない気もするが、だからと  
いって出し惜しみしてはこのデッキだとして動くに動けないことにも  
なりかねない。要するに4000ライフを削ればこっちの勝ちな  
んだから、最初から飛ばしていく方が効率的だ。

「さらにこの瞬間、出現記録の効果発動。手札から壊獣が特殊召喚さ  
れたことで、このカードに壊獣カウンターを1つ置く。そして手札の  
粘糸壊獣クモグスは、相手フィールドに壊獣が存在することにより手  
札から特殊召喚できる！来い、クモグス！」

空中から落下してきた巨大なクモが、6本の足を巧みに使い着地の  
衝撃を分散させる。口をガチガチと噛み鳴らし、僕の敵であるレッ  
サー・デーモンに対して敵意もあらわに威嚇の構えに入った。そして  
それだけでなく、また壊獣が手札から特殊召喚されたことで出現記録  
に2つ目のカウンターが乗せられる。

粘糸壊獣クモグス 攻2400

壊獣の出現記録 (0) ↓ (1) ↓ (2)

「バトル、クモグスでガメシエルに攻撃！」

命令を受け、クモグスが巨体に似合わぬ俊敏な動きでガメシエルに  
躍り掛かる。ガメシエルもその甲羅にこもるようなことはせず、むし  
ろ自分から進んで鎌のようになっていてその爪先を受け止めた。

粘糸壊獣クモグス 攻2400↓海亀壊獣ガメシエル 攻220

0 (破壊)

レッサー・デーモン LP4000↓3800

「ふん……私のフィールドでモンスターが戦闘破壊されたことにより発動条件を満たした速攻魔法、イリユージョン・バルーンを発動します」

そう言うと同時に、辺りをどこからともなく飛んできた無数の風船が取り囲む。電気も通っていないシンプルな石造りの建物や土がむき出しになった地面などが辺りに広がる異世界の風景にその色とりどりの風船はどう見てもミスマッチで、それがこのあたりの空間に異様な雰囲気醸し出していった。

「このカードの効果により、私はデッキの上からカードを5枚めくって確認。その中にEMと名のつくモンスターが存在すれば、そのうち1体を選んで特殊召喚が可能となります。まず1枚目はトラップカード、エンタメ・フラッシュ。2枚目は速攻魔法、超カバーカーニバル。おやおや、では3枚目。出ましたね、EMセカンドンキー。ですが、このモンスターではまだ少し力不足ですね。4枚目。いいカードを引きました、EMソード・フィットシュ。そしてラスト5枚目は魔法カード、EMキャスト・チェンジですか。私はこの中からEMソード・フィットシュを選択し、特殊召喚しましょう」

EMソード・フィットシュ 攻600

風船のうち1つが割れ、中からリーゼントと蝶ネクタイが特徴的な魚が飛び跳ねる。なんでわざわざレベルもステータスも低いこのモンスターをチョイスしたんだ、そんな疑問はすぐに解消された。

「ソード・フィットシュのモンスター効果を発動します。このカードが場に出たことにより、相手モンスター全ての攻守は600ポイントダウンします」

「なっ!?!」

クモグスの固有効果は一応使えるし、それを使えばソード・フィットシュの効果を回避することはできる。ただそれをやると次のレッサー・デーモンのターンを、僕は壊獣カウンターのない、バナラ同然

のクモグスのみで凌ぎ切らなければならない。ただどこで攻守600ポイントも下がってしまうと、クモグスのステータスでは下級モンスターにすら戦闘破壊されかねない。

ほんの少しだけ迷った末、クモグスの効果は温存することにする。1度きりしか使えない効果、まだ使うには早すぎる。

「何もしてこない、ですか。なるほど?」

意味深な呟きを残すレッサー・デーモンだが、悪魔のささやきなんかには耳を貸したら向こうの思う壺だ。

粘糸壊獣クモグス 攻2400↓1800 守2500↓1900

「これで僕は、ターンエンド」

清明 LP4000 手札：3

モンスター：粘糸壊獣クモグス(攻)

魔法・罫：壊獣の出現記録(2)

レッサー・デーモン LP3800 手札：3

モンスター：EMソード・フィッシュ(攻)

魔法・罫：なし

「私のターンですね。ドロー、EMハンサムライガーを召喚します」

これまでの動物型モンスターからがらりと趣を変えた、目元涼やかな剣士のモンスター。

EMハンサムライガー 攻1800

「攻撃力1800……!」

このままでは攻撃力の下がったクモグスが相打ちに持つていかれる……だが、レッサー・デーモンの狙いはそんな甘いものではなかった。

「この瞬間、ソード・フィッシュのもう1つの効果が発動いたしますよ。自分フィールドにモンスターが出たことで、さらに相手モンスターの攻守を600ポイントダウンさせます」

「これでクモグスの攻撃力は1200……だとしても、このターンだけでも凌ぎ切る!クモグスの特殊能力、縛鎖……壊獣カウンター2つを消費して糸を吐き、召喚または特殊召喚に成功したモンスターに対

しこのターンの間だけその攻撃と効果を封じ込める！」

クモグスが口から吐き出した糸がハンサムライガーの全身を絡め取り、がんじがらめにしてその動きを封じる。何が悲しゆうて野郎の拘束なんぞのお膳立てをしなければいけないのかはともかく、これでクモグスがこのターン攻撃されるリスクはなくなった。

その一方でソード・フィッシュの効果は素通しにするしかないのは少し気に喰わないが、この効果を受けてもまだ攻撃力はこちらの方が上だ。

粘糸壊獣クモグス 攻1800↓1200 守1900↓130

0

壊獣の出現記録(2)↓(0)

「これでハンサムライガーは攻撃できないし、ソード・フィッシュは攻撃力不足。残念だったね、クモグスが突破できなくてさ」

「いえいえ。むしろ、私としてはお礼を申し上げたいぐらいですよ。まったく、気持ち良いほど私の思い通りに動いてくださって」

「え？」

アタッカーが縛りつけられ身動き取れなくなっているというのに、なぜか嘲りの笑みを浮かべるレッサー・デーモン。手札からゆっくりと、見せつけるように1枚のカードを表にした。

「手札からEMスライハンド・マジシヤンの効果発動。このカードは自分フィールドのEMをリリースすることで、手札からの特殊召喚が行えます。ハンサムライガーをリリースしてさあお出でなさい、千の技持っ熟練の奇術師よ！」

突如フィールドに人ひとり入れるほどのサイズの大砲が現れたかと思うと、上空を向いたその先から赤と青の2色に塗られた玉のようなものが発射された。そして発射された何かは空中で素早く体勢を整え、上半身をすっぽりと覆い隠すような赤いスーツを着込んだ奇術師の姿となって着地しこちらに向けて一礼して見せる。よく見ると青色に見えていたのは奇術師の下半身で、上半身と同じ赤のスーツどころか足すらないその腰から下には真っ青な鉱物のような柱がむき出しになっている。

EMスライハンド・マジシャン 攻2500

「そして私のフィールドにモンスターが特殊召喚されたことで、再びソード・フィッシュの効果が発動されます」

「クモグス……！」

粘糸壊獣クモグス 攻1200↓600 守1300↓700

「では、そろそろバトルいたしましょうか。まずはスライハンド・マジシャンでクモグスに攻撃いたします」

スライハンド・マジシャンが手にした杖を一振りすると、その軌跡に沿って純白の鳩が翼を広げて飛び出し矢のようにクモグスめがけ突っ込んでいく。無数の鳩はクモグスにぶつかって途端爆発を起し、その炎の中にボロボロになった巨体が崩れ落ちていった。

EMスライハンド・マジシャン 攻2500↓粘糸壊獣クモグス  
攻600（破壊）

清明 LP4000↓2100

「ぐうっ……！」

「まだ終わりではございませんよ？さらにソード・フィッシュでダイレクトアタックいたしましたよ」

EMソード・フィッシュ 攻600↓清明（直接攻撃）

清明 LP2100↓1500

「ふむ、こんな所ですかね。メイン2、スライハンド・マジシャンもう1つの効果を使っておきましょう。1ターンに1度手札を1枚捨て、フィールドで表側になっているカード1枚を破壊します。私が破壊するのは当然そのカード、壊獣の出現記録です」

「うわっ！」

スライハンド・マジシャンが今度は杖からビームを放ち、僕の場合最後に残っていたカードまでもが破壊される。今の手札コストでレッサー・デーモン側も残り手札は1枚になったが、それを差し引いても圧倒的にあちらが有利なことに変わりはない。

当然向こうもそれはよく承知しているらしく、余裕の態度を隠そうとさえないままターンを終えた。

「僕のターン、ドロー！」

このカードは……よし。今度はこつちが、さっきのおかえしと洒落込んでみようじゃないか。けどその前に、この手札ならうまくいけばあの山羊頭の悪魔に1発キツイのを喰らわせてやることができるはずだ。

「魔法カード、死者転生を発動。手札を1枚捨てて、墓地からモンスター1体を回収する。そしてスライハンド・マジシャンをリリースして、今回回収したガメシエルを再び特殊召喚！そして相手フィールドの壊獣の存在を起点に、次にこつちが出す壊獣はこれだ！戦え、壊星壊獣、ジズキエル！」

全身を未知なる金属と神秘の武装で包んだ、たった1体で星をも滅ぼす力を持った戦闘機械ジズキエル。その蛇のような下半身は金属製とは思えないほど滑らかに動き巨体による高速移動を支え、両腕に当たる部分にはどちらも先端に必殺のパルスを発生させる装置が、その他にも全身にそのひとつひとつが1国の軍隊にも匹敵するほどの武装が無数に備え付けられている、まさに戦うために生まれてきた壊獣だ。

海亀壊獣ガメシエル 攻2200

壊星壊獣ジズキエル 攻3300

「バトルだ、ジズキエルでソード・フィッシュに攻撃！」

この攻撃が通れば、一気に大ダメージを与えることもできる。だが必殺の衝撃波がソード・フィッシュの体を捉える寸前、2体のモンスターが割り込んでその壁となったのがかすかに見えた。その直後衝撃波が大地を砕き、立ち込める砂煙で視界が塞がれる。

それが晴れた時僕が見たものは、何事もなかったかのように佇むソード・フィッシュとレッサー・デーモンの姿だった。

壊星壊獣ジズキエル 攻3300↓EMソード・フィッシュ 攻600

「ダメージが0……それに、ソード・フィッシュがまだフィールドに？」

「惜しかったですね。並みの相手ならば確かに今の攻撃で戦意喪失級のダメージを負っていたのですが……この私を相手にしたのが



運の尽きでしたね。私は今の攻撃に対して、手札のEMバリアバロンバクと墓地のジンライノのモンスター効果を使用させていただきました。この2体はそれぞれ手札から捨てることで戦闘ダメージを0にし、また墓地から除外することでEMの破壊を1度だけ無効にします。この2枚を同時に使ったことで、貴方の攻撃は何も成し得ることなく終わったというわけです」

ここまで来ると笑うしかない。いくらなんでも、あの攻撃でノーダメージはないだろう。こんなことならガメシエルを狙っておけば少なくともジンライノの効果は使えなかったのに、などと後悔してもすでに後の祭りだ。あとはこの1枚のカードが、どこまで働いてくれるかにかかっている。

「……カードを1枚セットして、ターンエンド」

清明 LP1500 手札：0

モンスター：壊星壊獣ジズキエル（攻）

魔法・罨：1（伏せ）

レツサー・デーモン LP3800 手札：0

モンスター：海亀壊獣ガメシエル（攻）

EMソード・フィッシュ（攻）

魔法・罨：なし

「私のターンですね。ああ、これはこれは素晴らしいカードを引きました。ですがまず、スタンバイフェイズに先ほど手札コストとして墓地へ送ったキララー・スネークの効果が発動しましょう。墓地に存在するこのカードは、スタンバイフェイズに自分の手札に戻すことが可能となるのです。そしてメインフェイズに魔法カード、強欲で貪欲な壺を発動。デツキトップから10枚を裏側で除外し、その後カードを2枚引かせて頂きます」

ここに来てのドローストースと墓地発動の効果により、枯渇した手札を3枚まで回復させるレツサー・デーモン。また厄介なカードを引いてくれたものだ。

「EMガンバッターを召喚し、まずはソード・フィッシュの効果を使いましょう。私のモンスターの召喚により、ジズキエルの攻守を600

ポイント下げさせていただきます」

「……ふん」

EMガンバッター 攻1500

壊星壊獣ジズキエル 攻3300↓2700 守2600↓2000

さつきから、この効果が本気で鬱陶しい。数字が結構大きいうえに回数制限がないものだから、いくらこつちで大型モンスターを出してもみるみるうちに弱体化してしまう。

「そして次に、ガンバッターの効果を発動。1ターンに1度このカード以外のEMをリリースすることで、墓地からそのモンスターとは別の名を持つEMをサルベージいたします。この効果でソード・フィッシュをリリースです」

「EMのサルベージ……まさか!」

「もうお分かりになられたようですね。私が回収するのは、EMスライハンド・マジシャン……そしてこのカードを、場のEMことガンバッターをリリースすることで再び手札から特殊召喚します!」

ガンバッターが自身の背中にソード・フィッシュを乗せ、それを待ち構えていたちっこいのがロープを引いて弓のように発射する。元々が流線型のボディなだけあってすごい勢いで飛んで行ったソード・フィッシュが、いかなる記述を用いたのかスライハンド・マジシャンの姿になって地面に降り立った。

EMスライハンド・マジシャン 攻2500

「スライハンド・マジシャンの……」

「させるか! 召喚成功時に永続トラップ発動、壊獣捕獲大作戦! このカードは1ターンに1度壊獣を裏側守備表示にして、さらにこのカード自身に壊獣カウンターを1つ乗せる。僕はこの効果を、ジズキエルに対して発動!」

壊獣捕獲大作戦(0)↓(1)

ジズキエルが裏側守備表示となり、先手を打って守りを固める。そしてソード・フィッシュとの効果の因果が切れたことでジズキエルの守備力は再び2600に戻り、ガメシエルはもちろんスライハンド・

マジシャンですら突破できない数字となった。

これが僕の作戦の第一段階。さて、次にどうしてくるかな？上手いこと引つかかってくれるかな？こっちのそんな思いにも気付かず、このターンで仕留める算段がパーになったことで露骨にイライラしだすレッサー・デーモンの姿はなかなか見えていて楽しかった。

「スライハンド・マジシャンの効果は表側表示のカードにしか使えない……ならば、その邪魔なカードをこのターンでは破壊しておきましようかね。スライハンド・マジシャンの効果発動！手札を捨てて、壊獣捕獲大作戦を破壊しますとも！」

再びキラー・スネークが捨てられ、壊獣捕獲大作戦のカードが破壊される。壊獣カウンターを置けるカードがなくなったことはそれなりに痛い……だけど、思わず笑ってしまった。

「プツ……あつはっはっ！」

「なんですか、その不愉快な笑いは。気にいりませんね」

「そりやどーも。だけどこっちとしては『お礼を申し上げたいぐらいですよ。まったく、気持ち良いほど私の思い通りに動いてくださって』ってね！」

なるべく似せて声真似まで披露してやると、レッサー・デーモンの額に深々と不愉快そうな皺が刻まれる。いいねえその顔、写真に撮っておきたいぐらいだ。

「こういうとき、壊獣捕獲大作戦のさらなる効果発動！このカードが相手によって破壊された時、僕はデッキからカードを2枚ドロースる！」

「なんですって!?!」

「わざわざありがとうね、破壊してくれてさ。しかも、キラー・スネークを回収したターンに墓地に送ったってことは……」

「くっ……カードをセットしてガメシエルを守備表示に変更。エンドフェイズ、墓地に存在するすべてのキラー・スネークはゲームから除外されます……」

海亀壊獣ガメシエル 攻2200↓守3000

これで手札コストのあてもなくなり、僕のターンがまた回ってく

る。

「このデュエル、そろそろ終わりにさせてもらおうよ！僕のターン、ドロー！」

先ほど大作戦の効果で引いた2枚と、今ドローしたばかりの1枚。この3枚があれば、十分にける。

「ジズキエルを反転召喚して装備魔法、巨大化を発動！こっちのライフが相手より下回ってることで、ジズキエルの攻守は倍加する」

壊星壊獣ジズキエル 攻3300↓6600 守2600↓5200

「攻撃力、6600ですって?!」

「まだまだあ！魔法カード、シャイニング・アブソープ！相手フィールドに光属性モンスターが存在するとき、その攻撃力を全ての自分のモンスターに加算する！本当なら光属性の壊獣とセットで使いたかったけど、この際贅沢は言えないね。光属性のスライハンド・マジシヤンの攻撃力は、ジズキエルが頂くよ」

壊星壊獣ジズキエル 攻6600↓9100

「攻撃力……9100……!」

「バトルだ！ジズキエルでスライハンド・マジシヤンに攻撃！」

ジズキエルが両腕にエネルギーチャージを行い、その先端を真っ直ぐスライハンド・マジシヤンに向ける。限界突破したエネルギーが今まさに放たれようとした時、レッサー・デーモンが最後の悪あがきに出た。

「トラップ発動、ドタキャン！相手モンスターの攻撃宣言時に自分フィールドのモンスターを全て守備表示にし、さらにこのターンに破壊されたEMは全て持ち主である私の手札に戻ります！これで次のターンに再びスライハンド・マジシヤンを召喚し、今度こそとどめを刺してあげますよ！」

再び芽生えた逆転勝利の可能性に、レッサー・デーモンの勝ち誇った表情に一瞬だが安堵の色が走ったのを僕の鋭くなった目は見逃さなかった。

そして、今の僕はそれをすぐさま絶望に塗り替えることに対して暗

い高揚と満足感を感じるのだ。

「速攻魔法、禁じられた聖槍を発動！このカードの効果でスライハンド・マジシャンは攻撃力が800ポイントダウンし、このターン魔法と罠の効果を受け付けられない！これでドタキャンの効果で守備表示にならないスライハンド・マジシャンは、攻撃表示のままバトルを行ってもらおうよ」

「ぞ、そんなこと……ひっ！」

「もう観念しろ、レッサー・デーモン！ジズキエル、お前の力を見せてやれ！」

壊星壊獣ジズキエル 攻9100↓EMスライハンド・マジシャン  
攻2500↓1700

レッサー・デーモン LP3800↓0

「ぐわああああっ！」

デュエルの敗者となつたレッサー・デーモンの姿が、悲鳴と共に消えてゆく。だけどまだだ、まだ破壊したりない。そうだ、何を遠慮することがある。このあたり一帯をジズキエルの武装で焼け野原に変えて、それから他のことは考えればいいじゃないか。

「叩け、ジズキエ……うっ！」

振り返つたところでこちらを遠巻きに見守っている後方支援部隊の人たちと目が合い、すんでのところで我に返る。デュエルディスクを殴りつけるほどの勢いで電源を落とすと、辛うじてジズキエルの姿も消えていった。

……今のは危なかった。たまたま正気に戻れたからよかつたものの、あと少しこのデュエルが長引いていればそれだけ心の闇も膨れ上がっていただろうし、そうなっていたら自分を止められたかどうかはわからない。はあはあと荒い息をつきながら、ふらふらと村に背を向けて歩きます。

そういえば、とふとおかしな点に気づいた。デュエルはとづくに終わったのに、まだデスデュエルの衝撃が襲ってこない。気になって腕

を見ると、そこにあつたはずのデスベルトの姿は影も形もなかった。

「あれ……？」

「ま、待つてくれ！」

訝しんでいるうちに後ろから声をかけられ振り返ると、バックアップ・ウオリアーがこちらへ走ってくるのが見えた。さすがの軍人の脚力ですぐ僕に追いつき、切羽詰まった様子で話しかけてくる。

「まず、君には礼を言わせてほしい。君のおかげで、我々後方支援部隊のみならずここにいた皆さんの民間人達も助かったよ」

「……たまたまですよ。ええ、たまたまです」

そうだ。僕がこのデュエルを受けた時には、悪魔への復讐のことが頭になかった。バックアップ・ウオリアーをはじめとしたここにいるカードの精霊や、それ以外の人々を守るために戦うなんて正義の味方チックなことはまるで考えていなかった。

今回はたまたまそれが結果としてこの村を守ることに繋がったが、次もそううまくいくとは限らない。それどころか、僕自身がここを壊滅させる可能性すらある。だから、僕はここには長居しない方がいい。そしてそれを見抜いたからこそ、バックアップ・ウオリアーも無理に引き留めることができないのだろう。

「そうだ。僕が腕に付けてた機械つて、どこ行ったか知りませんか？」

「ああ、あの腕輪のことか……ひどく強い電圧をかけられたせいで中身がぐちゃぐちゃになっていたから、とりあえず外しておいた。なにやらロックがかかっていたようだが、それも完全に壊れていたからね。まずかつたのなら、今すぐ誰かに取ってこさせるが……」

「いえ、ならいいんです。そこら辺に捨ててといてください」

強い電圧というのは、あのサンダー・ザ・キングの一撃のことだろう。普段なら喜ぶべきことなんだろうけど、このタイミングでデスベルトが壊れたというのは、果たしていいことなんだろうか。少なくともあれが生きていれば、僕が心の闇に飲まれて暴走したとしてもデュエルのたびに体力が吸収され、どこかのタイミングでストッパーになつていたかもしれないのだが。皮肉なもんだ、よりにもよって楽しくデュエルすることを何よりも妨害していたデスベルトが取れたこ

とを素直に喜べなくなるだなんて。

「では、お世話になりました。ご飯、美味しかったです」

「……すまない」

苦痛に満ちた声音で、バックアップ・ウオリアーが敬礼する。この少年は我々の恩人なのに、なぜそれがたった1人で出ていこうとするのを引き留めるところか、何もすることができないのか。そんな悔しさがあふれる声音だった。

最後にその姿に手を振り、再び前を向く。さて、どこに行く？何も決めてはいないが、遊の言葉を信じるならばこの世界のどこかにユーノがいるはずだからそれを探すのもいいだろう。それに、あの赤く宙で光る隕石のことをなんとかして調べてもみたい。壊獣の出現にあの隕石の力が関係していることを考えると、暗黒界の暴走とやらにも無関係ではないはずだ。

いずれにせよ、まずはその暴走したという暗黒界の様子を見に行ってみよう。とにかくこの目で確認しないことには何とも言いようがないし、軍を作るほど組織だつて動いているのならそこに情報も集まるはずだ。うまくすれば、ユーノの消息も手に入るかもしれない。

方針、だなんて大げさなものでもないが。とりあえずの目標を決め、レッサー・デーモンが最初に飛んできた方向に見当をつけて歩き出した。

## ターン96 墓場の騎士と最速の玩具

バックアップ・ウォリアーたちフリード軍後方支援部隊と別れてから、何日が経過しただろうか。その間、僕はひたすら歩き続けていた。寝る間も惜しみ、食事すらろくな調理をせずにひたすら動き続けたのには2つのわけがある。

そのひとつが、最近この世界で新たな動きがあったという情報が入ったこと。ぽつぽつとこの地で暮らしている人々から食料を分けてもらったりする交渉の際に聞いたところによると、なんでもつい最近暗黒界におかしな動きがあったらしい。狂王ブロンがデュエルに敗北のち消滅し、異世界からやって来た赤い服の男がその後釜に着いた……とか何とか。

もつともこういった話は伝わっていくうちにどこかで尾ひれがつくものだし、どこまで真実が含まれているかなんてわかったものではない。というかそもそも、狂王ブロンのくんだりはともかくとしてもダーク・バルター、レッサー・デーモンとそれなりに上級な悪魔を叩き潰してきた僕の話も少し混じってるんじゃないかと睨んでいる。赤い服の男つてのがいかにもそれっぽいし。とはいえ、ここまで大規模に広まっている噂が全くの事実無根とは考えにくいし、やはり会ったこともないけどブロンとやらにも何かあったのはほぼ確定だろうから、自分の目で確認しておきたい。それに、会う人会う人全員から僕のオシリスレッドの学生服をおかしな目で見られるのは流石にもう勘弁してほしくなってきたし。

そして、もう1つの理由。噂話レベルの赤い服の男よりもむしろ、こちらの方が僕にとっては緊迫した理由だ。

「いたぞ、奴だ！」

「奴を仕留めれば、俺たちもこんな下つ端からはおさらばだぜえ！」

「ようしお前ら、左右に散れ！挟み込んで逃げ道を塞ぎ、3人がかりで倒してやる！どんな化け物だかは知らないが、俺たちがチームを組めば勝てるわけない！」

「おーう！」



2体の悪魔を倒した時点で、どうも僕は暗黒界からマークされる存在になってしまったらしい。何体も襲い掛かってくる下級悪魔を返り討ちにして吐かせてみたところ、どうも少額ながら僕には懸賞金がかけられているようだ。あれから何日も立っているの、その額もさらに上がっているかもしれない。そのため、今もチラリと見える賞金稼ぎ気取りの輩がしよっちゅうやってくるのだ。そのため、おちおち寝ている暇もない。それでも不思議と動き続けていられるのは、認めたくはないが先代の力のおかげだろう。僕の体が人間離れしつつあるのはダークシグナーになった時から気づいてはいたが、この壊獣デツキを手に入れてからはそのスピードが加速度的に跳ね上がっている。まるで疲れは感じないし、夜目も耳も効くようになっていく早く接近を感じ取れる。

「奴め、森に入って隠れる気か！」

「そうはいくか！俺たちの方が早いぜ、逃げ切れるわけがねえ！」

「俺たちも突っ込んでいって包囲しなおすぞ！」

今も、馬に乗って追いかけてくる3体の悪魔から身を隠すため近くの森に入り込んだところだ。返り討ちにすれば楽なのは重々承知だし、相手も下級なだけあってデュエルの腕も低いことはわかっているのだが、そういう訳にもいかない。僕の壊獣デツキは呪われたデツキ、使えば使うだけ心の闇を押し広げていってしまう。ここ数日はデュエルを控えて逃げ回ることに専念しているため精神状態も割と落ち着いているが、もしこれ以上デュエルをし続ければ僕はダークシグナーとして、辺境の大賢者の家で見せられたあの悪夢をこの世界に広げてしまう可能性すらある。あの時感じた破壊への高揚、敵といわず味方といわず全てを見境なく潰しまわる快感、あんなものに吞まれるわけにはいかない。この世界のためだなんて格好つけるつもりはない、ただ単純に僕のためだ。僕が悪魔に堕ちないためにも、このデツキを使うわけにはいかない。

「ちつくしよう、どこ行きやがったあの人間！」

「俺たちが撒かれたのかよお!?!いやでも、まだ近くにいるはずだぜ！」

「ん、今そつちの方で草が動いたぞ！俺が正面から行くから、お前らは左右に散らばるんだ！」

「おう！」

どたばたと走り回った挙句、新しい目標へ向けて走り去っていく3体の悪魔。それをしばらく見送ってから、もう帰ってこないことを確信して今の居場所……木の上の葉が生い茂った中から滑り降りた。どうやら、今回もデュエルは回避できたようだ。もつと長いことこの場所で息を潜めることも覚悟していたけど、ちょうど向こうに動物でもいたのか茂みがガサガサ動いてくれたおかげで思ったより早く助かった。

だが元の道に戻ろうと森の奥に背を向けた瞬間、背後で木の枝が折れる音がかすかに聞こえた。慌てて木の幹に体をくつつけるようにして身を隠し、恐る恐る覗き込む。先ほどの3人組が見ていた場所にある茂みのさらに奥から、落ち葉やら枝やらを踏みつける音が一定のリズムで聞こえてくる。

……前言撤回。動物なんかじゃなくて、本当にここには誰か潜んでいるようだ。それも、自分がいることを全く隠す気のない何かだ。

「……」

できる限り気配を消して、何が来るのかを待ち構える。足音が聞こえるぐらい近くにいるのなら、今更下手に隠れたり逃げたりして動くとかえって見つかりやすくなってしまう。あの3人組を撒けて気が緩んでいたのだろう、なんにせよ最初に近づいてくるのに気づけなかったこちらのミスだ。となると、なんとかここで隠れてやり過ぎすしかない。

じつと足音の方を見ていると、やがてその主の姿が見えてきた。額に生えた鬼のような2本角、筋肉質な体と銀色の金属めいたパーツ、鋭い鉤爪に翼に尻尾……ああくそ、また悪魔か。それもあの迫力、かなりの実力者だ。これまで適当に撒いてきた雑魚とは一味違う、久々にかなり危ない感じの相手だ。

「……」

息を限界まで潜めて、指一本動かさないように神経を集中させ周り

の空気に溶け込む。大丈夫だ、落ち着け、ほらあの悪魔がすぐ横を通り抜けていく、もう少しだ、これでこのまま行き過ぎれば逃げ切れる……だがそこで、すぐ目の前まで来た悪魔が足を止めた。何かを探すかのように、左右に目を走らせ始めた。

「……！」

1秒1秒が何時間にも感じられるほどの沈黙の時間が過ぎ、何も見つけられなかったらしい悪魔が再び歩き出す。その姿を見送ってからさらに10分ほどその場所で留まり続け、物音ひとつ聞こえなくなったところを見計らって慎重に体を動かし始める。力の入れすぎで強張った手足をほぐし、ゆっくり息を吐き出す。

「よう」

「な、なななな……！」

突然の声に飛び上がらんまでに驚き、ぎこちなく首を後ろに向けて腕を組んだ状態で、僕が動き出すのをじっと待っていたらしい鬼のような例の悪魔がそこにいた。

逃げる？ 駄目だ、身体能力で本物に敵うわけがないのはダーク・バルターを振りきれなかったときに実証済みだ。迎え撃つ？ そつちの方がまだ可能性がありそうだが、デュエルとなるとこのデツキを使うしかない。でもだからといって、このままここで捕まえられるなんて冗談じゃないし、でも、でも……と色々な思考が頭の中をぐるぐるした状態で固まっていると、悪魔の方が両腕を上挙げて手のひらを広げて見せた。

「……あー、なんだ。ビビらせたんなら謝るが、俺はこの通り手を出すつもりはないからな。ほら、見ての通り丸腰だ」

困ったような声で言い、1歩下がって僕から距離を取る。

……あれ？ よくわからないが、この悪魔は他とは違うのだろうか。仮に僕を騙そうとしているのだとしても、後ろを取られた時点で不意打ちし放題だったろうにそんなことする意味がない。命がけだから絶対選択ミスはできないのに、どうすればいいのかまるで見当もつかない。あれこれ考えていると突然あたりに小さな、しかしはつきりと聞こえる音が響き渡った。音源は僕の腹……まあ、ここ数日ろくに料

理もできてなかったからね、しゃーないよね。

なんとなく気まずい空気が流れてしばらくしたところで、鬼がやれやれとため息をついてどっかりとその場に胡坐をかいて座り込んだ。懐に手をつ込み、小包のようなものを取り出して開ける。中に入っていた子供の頭ほどもあるおにぎりを一つ掴みとり、グイッとこちらに突き出してきた。

「ほれ、食えよ。ツナ入ってんぞツナ」

「……いただきます」

だいぶ躊躇いはしたが、食欲には勝てなかった。一応割ってみると、なるほど確かに具は僕も知っているツナだ。どうせ食べるんならもう自棄だ、後は野となれ山となれ。僕もその場に座り込み、手近な木にもたれかかって手の中のおにぎりに噛り付いた。

それから、目の前の悪魔とは色々なことを話した。一度吹っ切れると案外話しやすく、これまで悪魔と見るだけで逃げ回ってきたのがバカバカしく思えてくるほどあっさりとしたものだった。

……彼の名はケルト。昔はその高い実力から、暗黒界の鬼神とまで呼ばれた武人らしい。どうりでプレッシャーが半端ないわけだ。しかし数百年前に自身を上回る実力の持ち主であった龍神グラフィアや魔神レインに暗黒界の統治を託し、自らの武を鍛えるために武者修行の旅に出る。そのため、今となってはその名を知るものも数少ないとのことらしい。事実、僕がこれまでこの世界を歩いていた中でもケルトなんて名は聞いたことがない。

そんな彼がこうしてこの地に戻ってきたのは、まさにこの世界がいま陥っている混乱が原因だ。暗黒界による突然かつ無差別な侵攻の話を目にして、その真偽を確かめ問い詰めるべくやって来たのだ。そして様々な情報を寄せ集めた結果、空に輝くあの隕石が怪しいということに気づいた彼は自分までその波長に呑まれる前にとこの森の中へ入り、空から降り注ぐ隕石の光を遮断することで今まで正気を保ち続けてきていたらしい。しかし昼夜を問わず降り注ぐこの赤い光の

前では下手に動くこともできず、思案に暮れていたところ僕をたまたま見つけた、とのことだ。

もちろん、このケルトが嘘をついている可能性だってある。けど、僕はその言葉を信じた。というよりも、信じようとした。常に狙われ、寝ても覚めても命の危険が付きまとうこの世界の殺伐とした空気に芯から疲れ切った今、なんでもいいから人の話を信じたかった。いくら過去の負の歴史を見せつけられたとはいえ、僕も根っここのころではまだまだ現代っ子なんだということを感じする。

「とま、俺の話はこんなとこだな。んで、お前さんはどうしたんだ？見た感じ随分余裕なさそうだけどよ」

問われるままに、ぼつぼつと話し出す。さすがに異世界から来ました、なんて話をする気にはなれなかったので砂漠の異世界までのことは適当に誤魔化しつつ、この世界に来てからのことを整理しつつまとめてみる。たとえ相手が人間じゃないとしても久しぶりにするまともな会話ということもあってか、気が付けばバックアップ・ウォリアーにさえ言わなかったダークシグナーと先代のことまで喋っていることに自分でも驚きながらも、最終的には洗いざらい喋っていた。どんだけ会話に飢えてたんだろうかと苦笑しつつ最後まできっちり喋り終わると、黙って聞いていたケルトがぼりぼりと鋭い爪のついた腕で自分の頭を搔いた。

「なんっつーかこう……ガキのくせに随分ませた奴だとは思ってたが、お前も色々あんだな」

ダークシグナーの呪いにも等しい闇の力にいつ心をやられるかもしれない僕に対して警戒も躊躇いも見せず、それだけ言っただけに寝転がる。僕にとっては人生の全てがひっくり返ったように感じるこの衝撃……チャクチャルさんの過去やダークシグナーの負の歴史も、これくらい人生経験を積みばこんな風に流せるようになるのだろうか。

……少なくとも、今の僕には絶対にたどり着けない境地だ。自分の丸太のように太い腕を枕にしたケルトが、目を閉じてまた口を開く。「なかなかの話だったが、とりあえず今日はもう寝とけ。ここ数日ま

ともに寝れてねえんだろ？誰か来たら俺が教えてやるから、ガキは睡眠が足りねえと大きくなれんぞ」

「で、でも」

「でももだってもねえよ。第一、お前俺らの本拠地の場所わかってんのか？どうせ俺も明日には出るんだ、案内してやるから今日は休んどけ」

言われてみれば確かに、僕が知ってるのはあくまでは暗黒界の軍がこっちの方にいるという程度の大まかな方向だけだ。黙っていても向こうの方から賞金稼ぎが来てくれるのでこれまでは道に迷わずやってこれたが、これから先もそれが続く保証はないわけだし。

これで捕まったりしたらお笑いだなあ、などと考えながら横になる。なんかここ数日、必要最低限だけとはいえそのたびに心を蝕んできたデュエルでだいぶ荒んできたせいで、すっごい自暴自棄になつてる気がする。普通なら絶対警戒するであろうこんなシチュエーションを普通に受け入れてる時点で、もうどうなったとしても文句の言いようがない。

ただ幸か不幸か、そのまま寝付くことはなかった。目を閉じるか閉じないかのうちに、ケルトがいきなり立ち上がって周りの闇に視線を向け始めたからだ。

「何の用だ、ああ？」

ケルトのドスの利いた低い声に答えるかのように、森の奥でなにか巨大な者が動く音がする。このサイズ感、恐らくは身の丈2メートルはあるケルトとほぼ同サイズ。やがてのっそりとこの場に姿を現したのは、ケルトよりもさらに一回り大きな黒い翼を持つ、顎のあたりから一組のねじれた角が生えた悪魔だった。

「随分と久しい顔だな、ケルト」

「んだよ、お前かよ……ラチナ、なんでお前の顔なんか帰ってきて最初に見なきやいけねえんだ」

「悪かったな、お前好みの美女じゃなくて。お前がここを出て行つてからのことで積もる話も色々あるんだが、生憎今日は忙しくてな。その楽しみはまたの機会にするとして、ひとまずそこをどいてくれ」

ケルトと今ラチナと呼ばれた悪魔の2人は知り合いらしい……のだが、どうも空気が不穏だ。一瞬迷ったが、ひとまずここは狸寝入りで様子をうかがうことに専念する。第一、今更逃げたところで逃げ切れるほどの距離はない。

「おいおい、一体何があつたつてんだ？随分とまあ怖い顔してんじやねえか」

「お前には関係ないことさ。そうだ、なんならお前も一緒に来るか？霸王様は、その人間に用があるらしいからな。暗黒界の闘神と呼ばれた俺の他に鬼神ケルト、お前が加わってくれるならこの侵略も安泰だ」

やはり、狙いは僕か。それにしても、霸王？新しく出てきたワードの持つ禍々しい響きに、目を閉じながら緊張が高まっていくのを感じる。だがそれは意外にも、同じ暗黒界であるケルトにとっても初耳の単語だったようだ。

「おい、ちょっと待てや。霸王つて誰だ？そんな肩書の奴は俺がいたときにはいなかったはずなんだがな」

「そうだったな、お前はまだ知らないのか。霸王様は素晴らしいお方だよ。数日前に突如現れ、ブロン亡き後に彗星のごとく我々を纏め上げた。あのお方のおかげで、我々の侵攻は大幅に効率化された。あのお方こそ、まさしくこの世界を統べるにふさわしい人物だ」

わずか数日前に現れ、ブロンが消えた後釜に着いた霸王、ね。これまで何度か聞いてきたあの噂話は、どうやら思った以上に正確だったらしい。となると、その霸王とやらが赤い服を着ていたというのもおそらく本当のことだろう。

まあ常識的に考えれば、十代がここにいるなんてことあるわけないんだけどね。ここ最近皆に会ってないから、少しおセンチな気分になっただけだろう。よくない兆候だ、もつと気張っていかないと。

「おい、ちょっと待てよ」

思わぬところで手に入れた情報からふらふらと連鎖式にどこかへ行こうとしていた思考が、ケルトの不機嫌そうな声で現実を引き戻さ

れた。

「ん、どうした？」

「そりゃこつちのセリフだ馬鹿、どうしちまったんだお前ら？黙って聞いてりゃ侵攻だの侵略だの、俺の知ってる暗黒界はどこに行っちゃまったんだよ？ここに戻ってきてから色々と見たけどよ、こんな無差別な攻撃がお前らの言う侵略なのか？なあ、答えろよ。俺が納得するような答えが出せないっつーなら、このガキは渡せねえな。成り行きとはいえ同じ飯食った相手だ、欲しいからってハイそうですかなんて差し出しゃしねえよ」

「……変わってないな、お前は。昔から自由で身勝手に、実力はあるくせに帰属意識がまるでない。そのせいでお前がここを出て行ってからは、お前の存在自体つい最近までなかったことにされていたからな」

「当たり前だ、俺は変わっちゃいねえよ。何があろうと、どこに行こうと、俺そのものは変わりようがねえ。勝手に変わってんのはお前らだ、昔はもつとまともな奴らだったつてのに」

何があろうと、どこに行こうと、俺は俺……か。黙って聞きながら、その発言には少しばかり思うところもあった。僕はこんな風に、自分のことを胸張って言えるだろうか。ダークシグナーとして少しづつ破滅の道に近づきつつある僕と、元人間の遊野清明としてその運命を避けようとしている今の僕。わからない。

「昔の話はいい。そうか、どうあってもその人間を渡さないというのなら、仕方がない。鬼神ケルトは異国の地で風来坊のまま死んだ、昔の縁で墓ぐらいは立ててやろう」

「物騒な話だな、オイ。なんで昔の仲間と潰しあわなきやいけねえんだ」

「嫌なら霸王軍に來い。霸王様も、お前の帰還とあらばお喜びになれるだろう」

「交渉決裂だな。なんだかわからねえが、そんなポツと出の野郎なんぞの下にいられるかよ」

2人の二の腕に闇が纏いつき、それが晴れた時その箇所にはデュエ



ルディスクらしい装置が装着されていた。じりじりとスペースを確保するため横に移動しながら、ケルトが密かに僕に向かってアイコンタクトを送る。感謝の気持ちを込めて小さく頷き、ラチナの目に留まらないようにゆっくりと起き上る。いぎという時には逃げる、そう言いたいのだろう。

「準備はいいな?」

「お前こそな」

「デュエル!」

「先攻は俺だ。カードを3枚セットして、闇の誘惑を発動。デツキからカードを2枚引く」

闇の誘惑、本当に便利なカードだ。2枚引いた後で闇属性を除外すればいいから、まずデメリット効果が適用されることなんて……。

「手札に闇属性モンスターがあればそれを除外するんだがな。あいにく俺の手札はトラップだけだ、これをすべて捨てとくぜ」

なんと、デメリット効果が発動してしまった。手札に除外できる闇属性が存在しない場合、全てのカードは墓地へ捨てられる。不敵に笑いながら手札3枚をまとめて墓地へ送り込むケルトにまさか手札事故か、とこつちが生きた心地がしなかったが、ケルトの調子にはまるで焦りや緊張がみられない。

「手札も使い切ったな。ターンエンドだ」

「ならばこちらから行くぞ、ドロー。手札のスピードロイドSRベイゴマックスは、自分フィールドにモンスターが存在しない時に特殊召喚できる」

いくつものコマが連なりあつたようなモンスターが、それぞれ高速回転しながらそれ自体1つの生き物のように現れる。

SRベイゴマックス 攻1200

「さらにベイゴマックスが場に出た時、デツキから別のSRを1枚手札に加えることができる。SRバンブー・ホースをサーチし通常召喚、効果により手札から別のSRを特殊召喚できる。出でよ、タケトンボーグ」

SRバンブー・ホース 攻1100

SRタケトンボーグ 攻600

ベイゴマの隣に竹とんぼと竹馬が並ぶ。なんだこの展開力。

「タケトンボークの効果発動。このカードをリリースし、デッキからSRのチューナー1体を特殊召喚する。ただしこの効果を使用するならば、このターン風属性以外のモンスターが出せなくなる制約を受けるがな。電々大公を特殊召喚する」

竹とんぼ型モンスターが空中で展開し人型のロボットになったかと思うと、その姿が消えて雷マークの電々太鼓を手にした人型モンスターが特殊召喚される。

SR電々大公 攻1000

「ちんまいモンスターばかり並べやがって、それからどうする気だ？」

「ワンターンキル、だ。永続魔法、一族の結束を発動。俺の墓地に存在するモンスターの種族が単一の時、その種族を持つモンスターの攻撃力は800ポイントアップする。タケトンボークは機械族、よって俺の場の機械族は攻撃力が上昇する」

SRベイゴマックス 攻1200↓2000

SRバンブー・ホース 攻1100↓1900

SR電々大公 攻1000↓1800

「そんな……！」

思わず小さく声が出る。1体ごとのステータスは大したことないSRだが、その分展開力は高い。その展開力に全体強化が加わることで、総攻撃力はあつという間に4000を軽く上回る。

「バトルだ、電々大公で攻撃！」

「悪いが、そんなもん通せねえな！俺は今のダイレクトアタック宣言時、墓地に存在する3枚のトラップの効果をもとめて発動する！」

「墓地からトラップ……やはり仕込みは整っていたか」

「ほざけ！幻影騎士団シャドーベイル3枚は攻撃力0かつ守備力30

の通常モンスターとなり、守備表示で俺のフィールドに特殊召喚される！さらに最終突撃命令をチェインして発動、これでフィールドの全モンスター、つまり俺のシャドーベイルは全員が攻撃表示になるぜ」

木々の地面に落とす影が揺らめき、その中から影の騎士が騎乗する漆黒の馬が3体同時に飛び出す。青白く燃えるたてがみは風もないのに揺らめき、この世ならざるものであることを物語っている。そうか、この効果をまとめ使ったためにあえて闇の誘惑を手札にモンスターがない状態で発動したわけか。だけどせっかく壁となるシャドーベイルも、最終突撃命令の効果で低いどころか皆無の攻撃力を晒してしまう。一体、何を考えているんだろう。

幻影騎士団シャドーベイル 守300↓攻0

幻影騎士団シャドーベイル 守300↓攻0

幻影騎士団シャドーベイル 守300↓攻0

「ここは攻めるのみか？電々大公で攻撃継続」

「だったら次のトラップだ、ジャステイブレイクを発動！俺の通常モンスターが攻撃対象となった時に発動し、攻撃表示の通常モンスター以外のモンスター全てを破壊する！」

幻影の騎士が突如鳴り響いた雷鳴をバツクにSRの軍団へ一斉に攻めかかる。周りの地形まで効率的に生かした騎士たちの連携攻撃に、個々の実力では遥かに上回っているはずの玩具のモンスターたちがなすすべなく倒されていった。

「……カードをセットし、ターンエンドだ」

ケルト LP4000 手札：0

モンスター：幻影騎士団シャドーベイル(攻)

幻影騎士団シャドーベイル(攻)

幻影騎士団シャドーベイル(攻)

魔法・罫：最終突撃命令

1(伏せ)

ラチナ LP4000 手札：3

モンスター：なし

魔法・罫：一族の結束

1(伏せ)

「俺のターン、ドロード。まず伏せておいた魔法カード、マジック・プランターを発動。俺の場の永続トラップ、最終突撃命令を墓地に送っ

て2枚ドロウする。フィールド魔法、ダークゾーンを発動！閥属性モンスターは攻撃力が500ポイントアップする代わりに、守備力が400ポイントダウンするぜ」

幻影騎士団シャドーベイル 攻0↓500 守300↓0

幻影騎士団シャドーベイル 攻0↓500 守300↓0

幻影騎士団シャドーベイル 攻0↓500 守300↓0

これで、シャドーベイル達にほんのわずかながら攻撃力が生まれた。それはつまり、戦闘ダメージを与えられるということだ。

「さらに魔法カード、アームズ・ホールを発動。デッキトップを墓地に送って、装備魔法1枚をサーチ。俺がサーチするのはこのカード、折れ竹光だ。そしてこのカードをそのままシャドーベイル1体に装備する」

中央のシャドーベイルの持っていた武器が光り、真ん中あたりでぽつきりと折れた竹光に変化する。あれでは武器にならないし、現にシャドーベイルのステータスは何一つアップしていない。

「攻撃力が0ポイント上がる無意味な効果しか持たない壊れた武器か。小汚い騎士にはお似合いだな」

「これを見てまだ同じことがほざげんのか？魔法カード、黄金色の竹光を発動！装備カードの竹光が俺のフィールドに存在することで、カードをさらに2枚ドロウする」

「ドロウソースか……！」

「魂を吸う竹光がありやあなお良かったんだが、贅沢は言えねえな。やれ、シャドーベイル！一斉攻撃でダイレクトアタックだ！」

シャドーベイルが掲げる折れ竹光に怪しい影がかかり、無数の靈魂がその刀身に纏わりつく。人馬一体となり森を駆けるシャドーベイルが、今まさにそのへし折れた竹光でラチナの体をしたたかに打ち付けようとしたその時、モーター音を立てて四角く平べったいマシンが飛び出してきた。

「なにっ？」

「相手モンスターの直接攻撃宣言時、手札からSRメンコートの効果を発動できる。このカードを攻撃表示で特殊召喚し、相手モンスター

は全て守備表示となる……相変わらず複雑なようできてその実単純な攻め手だな、ケルト」

幻影騎士団シャドーベイル 攻500↓守0

幻影騎士団シャドーベイル 攻500↓守0

幻影騎士団シャドーベイル 攻500↓守0

SRメンコート 攻100↓900

減っていく手札のリカバリーが難しいデッキを使っていた僕にはよくわかるけど、あれだけのリソースをつぎ込んだの攻撃が防がれたのはケルトにとつてもさすがにかなり痛いはずだ。かといって、あの残り1枚の手札はこの攻撃を通すために使うようなものではないらしい。

「クソが！カードを2枚セットして、ターンエンドだ！」

「どうやら、ここで種切れのようだな。墓地に存在するバンブー・ホースの効果を発動。このカードを除外することで、デッキから風属性モンスターを墓地に送る。SRシエイブー・メランを墓地へ送り魔法カード、スピードリバースを発動。墓地からSRを特殊召喚する。甦れ、シエイブー・メラン」

SRシエイブー・メラン 攻2000↓2800

「レベル4で攻撃力2800か、案外やるじゃねえか……！」

「無理に強がる必要はないぞ？さらにSRダブルヨーヨーを召喚し、その効果を使う。墓地からレベル3以下のSR、ベイゴマックスを蘇生する」

文字通り2つのヨーヨーを横したモンスターが勢いよく回転し、先ほど動きを止めてスクラップになったベイゴマックスに再び命を吹き込む。そして、ベイゴマックスが特殊召喚に成功したことでまたあのサーチ効果が使用可能となってしまう。

SRダブルヨーヨー 攻1400↓2200

SRベイゴマックス 攻1200↓2000

「ベイゴマックスの効果でSRパチンゴーカートを手札に加える。これ以上の展開は無理か、ならばメンコート、ベイゴマックス、ダブルヨーヨーでシャドーベイル3体に攻撃！」

SRメンコート 攻900↓幻影騎士団シャドーベイル 守0(破壊)

SRベイゴマックス 攻2000↓幻影騎士団シャドーベイル 守0(破壊)

SRダブルヨーヨー 攻2200↓幻影騎士団シャドーベイル 守0(破壊)

「俺のシャドーベイルはモンスターとしてフィールドを離れた時に除外される……といたいたいところだがな、俺は最初の攻撃宣言時に永続トラップ、王宮の鉄壁を発動していたんだよ。これで除外されるカードはすべて墓地へ行く、つまりシャドーベイルは再び墓地でお前に一太刀浴びせる隙を窺ってるってわけだ」

「そうだ。いくらフィールドを空にされようとも、王宮の鉄壁により守られている限り幻影騎士団は倒れない。傷ついても倒されても、相手の直接攻撃に合わせて何度でも蘇る。」

「なるほど、解説感謝しよう。だが構わない、シェイブ・メランで攻撃だ」

「話聞いてたのか？墓地に存在するシャドーベイルは、ダイレクトアタックの宣言にたいして何度でも蘇る！帰って来い、シャドーベイル共！」

再び木々の影の隙間から駆け抜けてくる幻影の戦士たちが、鋭角的なボディを持つ戦闘機械の円弧を描く一撃から自らの主を守る壁となつて立ち上がる。だがその騎士の一人に、突如ラチナの方から伸びてきたコードが突き刺さる。

「速攻魔法、エネミーコントローラーを発動。この効果のうち1つ目のものを使い、シャドーベイル1体を攻撃表示に変更する。そして攻撃表示のシャドーベイルにシェイブ・メランで改めて攻撃だ」

幻影騎士団シャドーベイル 守300↓0 攻0↓500

幻影騎士団シャドーベイル 守300↓0 攻0↓500

SRシェイブ・メラン 攻2800↓幻影騎士団シャドーベイル

攻500(破壊)

ケルト LP4000↓1700

「ぬおおおおっ！」

「2体残した貴様らにも消えてもらおうか。メイン2にトラップカード、爆導索を発動。このカードの存在する縦一列にあるカード全て……シエイブー・メランとシャドーベイル、そして王宮の鉄壁を破壊する」

「何っ!？」

シャドーベイルの無限蘇生のカギを握っていた王宮の鉄壁が同時に破壊されたことで、今破壊された方のシャドーベイルはゲームから除外されてしまう。これで残りのシャドーベイルは、墓地に存在しているのとフィールドに残るものの計2体のみだ。

「ターンエンドだ。もはや大勢は決した、サレンダーしろ……かつての戦友に対する最後の情けだ、このままその人間を引き渡すというのなら、これ以上こちらも深追いはしない」

確かに、場の状態だけ見ればもつともな話だ。それは、当事者たる僕も認めざるを得ない。そもそもケルトが今戦っているのは、ついさつき会ったばかりの僕のためだ。そんな行きずりの相手に、こころで命を懸けてくれただけでもすでに十分すぎておつりがくるレベルだ。

だがケルトは、あくまでもにやりと笑ってみせる。最初のターンに見せたのと同じように不敵に、胸を張って立ち上がる。

「寝言は寝て言え、馬鹿。やっぱりお前は俺の知ってる闘神ラチナじゃねえな、昔のお前ならそんなくだらねえ質問なんて考えすらしなかったろうぜ」

「そうか。その世迷い事はともかく残念だよ、どうやらお前のことを買い被っていたようだ。鬼神ケルトにも、自分にとってどちらが得な道かを選ぶ頭ぐらいはあると思っていたんだがな」

「損得じゃねえよ、こういうのはハートの問題だ。てめえらはおかしくなってる、だから俺は戦う。それが昔のよしみで俺がしてやれる唯一のことだからな」

「我々が変わったというのなら、それは紛れもなく進歩したんだよ。いつまでも懐古趣味に拘っている鬼神殿とは違って、ね」

ケルトはこのデュエルが始まる前から何回も、ラチナが昔から変わってしまったと言いつづけている。当の本人は取りつく島もないけれど、今のケルトの心中は一体どうなっているのだろうか。変わってしまったがゆえに、そして自分だけが変わっていないがために感じる悲しみ……もしかして、先代ならケルトの気持ちを理解できたのだろうか。かつての仲間もすでに死に絶え、唯一残った地縛神は5000年の間に僕が知るチャクチャルさんになっていて。そう考えると、あの男も憐れむべき奴だったのかもしれない。

……いやいや、僕は何を考えているんだ。先代が悲しもうが嘆こうが、それは全て自業自得でしかないじゃないか。ざまあみやがれと言いつづけて笑いこそすれ、くれてやる同情なんて欠片すらない。先代の力は僕のデツキを通じて、今もなお僕を蝕み続けている。こんな思考をするようになったのも、その結果のひとつだろう。先代の力が勝手に身に着きつつあることで、僕の思考パターンまでもが影響されつつある。

ケルト LP1700 手札：0

モンスター：幻影騎士団シャドーベイル（守）

魔法・罠：1（伏せ）

場：ダークゾーン

ラチナ LP4000 手札：1

モンスター：SRベイゴマックス（攻）

SRダブルヨーヨー（攻）

SRメンコート（攻）

魔法・罠：一族の結束

「デュエルを続けるぜ。俺のターン、ドローだ！」

この状況を覆すカードを求めてカードを引くケルト。手に入れたものは決して望みのものではなかったが、それでもまだ次に繋ぐ希望がほんの少しだけ見えた。

「永続魔法、暗黒の扉を発動！このカードが存在する限り、互いにモンスター1体でしかバトルが行えないぜ。まだまだ終わらせやしねえよ、ターンエンドだ」



「それで大量展開からの一斉攻撃というこちらの持ち味を潰した、か。だが、その程度の抵抗は私としても当然織り込み済みだ。まずは墓地に存在するスピードリバースの更なる効果を発動、このカードを除外することで墓地からSRをサルベージする。なんでもいいが、そうだな。電々大公を手札に戻し……これで準備は整った。見せてやろう、このデッキの真の切り札を！魔法カード、融合を発動！」

「融合だど!?こんなバラバラのモンスターしかいないのにか!？」  
「それがいるのだよ、まさに今召喚するのにおあつらえ向きのモンスターがな。ベイゴマックス、ダブルヨーヨー、メンコート、パチンゴカート、電々大公のロイドと名のつく機械族モンスター5体を素材とし、融合召喚！出でよ、極戦機王ヴァルバロイド！」

周りの木々をなぎ倒して現れた紅色の巨大戦闘用マシン。その鋼のモノアイに光が宿り、煙突から一斉に蒸気が噴き上がった。流石は5体ものモンスターをいっぺんに素材としての融合モンスター、そのサイズも威圧感もこれまでのSRとはわけが違う。ここまですつと展開力で攻めてきたラチナが使う、まるでファイトスタイルを変えての一点突破用決戦兵器。そして、こうして全ての戦力をヴァルバロイドに集中させることで、暗黒の扉はほぼ使い物にならなくなった。

だがそれは逆に言えば、これ以上のものは出てこないということの意味する。現にラチナは今の融合召喚ですべての手札を使い切った、このヴァルバロイドを倒すことができればまだ逆転の目もある。

極戦機王ヴァルバロイド 攻4000↓4800

「バトルだ、ヴァルバロイドでシャドーベイルに攻撃！」

「墓地に存在する永続魔法、ファンタム・デスピア幻影死槍の効果を発動！自分フィールドの闇属性モンスターが破壊されるとき、代わりにこのカードを除外することができる！」

ヴァルバロイドの極太光線の照射に対し、幻影の騎士が自らが地に落とす影に手を突っ込んで取り出した漆黒の槍を構えて身を守る。槍はボロボロになって消し飛んだものの、シャドーベイルとその馬は辛うじて持ちこたえた。

極戦機王ヴァルバロイド 攻4800↓幻影騎士団シャドーベ

ル 守 0

「ハッ! どうだ……!」

「まだまだ。ヴァルバロイドはその効果により、1度のバトルフェイズに2度の攻撃ができる。どうやらアームズ・ホールのコストで抜け目なくそんなものを落としていたようだが、もう次はあるまい。そしてヴァルバロイドは戦闘で相手モンスターを破壊した時に1000ポイントのダメージを与える、戦闘ダメージは通らずともそのダメージは受けてもらうぞ」

ヴァルバロイドが再び始動する。ビームの第2射は、今度こそ幻影の騎士からその力を奪い去った……かに見えた。だが近くの地面ごと抉り取ったヴァルバロイドのビームによる砂煙が晴れた時、そこにいたのは亡霊の馬に跨り自らの武器を持つ不屈の戦士、シャドーベイルの姿だった。よく見るとその周囲には、まるでシャドーベイルの思いを託し、その力を分け与えたかのように無数の靈魂が飛び回っている。

極戦機王ヴァルバロイド 攻4800↓0↓幻影騎士団シャドーベイル 守0

「何!? ヴァルバロイドの攻撃力が……!」

「トラップ発動、墓地墓地の恨み。相手の墓地にカードが8枚以上存在するとき、相手のモンスター全ての攻撃力を0にする。シャドーベイルは、幻影騎士団は決して倒れない不屈の闘志が持ち味でな。その程度の連撃じゃあ、挫けてやるわけにはいかねえんだ。だが今のは危なかった、礼を言うぜ。わざわざ融合で墓地のカード枚数を増やしてくれてよ」

「あの状況から、攻撃力4800のヴァルバロイドが……プレイングミスだったというのか……! だが、まだライフポイントは4000全て残っている。暗黒の扉はお前にも影響をもたらすカードだ、そんな状況の中かだか攻撃力500のシャドーベイル1体で、どうダメージを出すつもりだ?」

「ダメージも何もねえ、このターンで俺は勝つぜ。今の一撃をカウンターできなかつたその瞬間にお前の負けは決まったんだよ、ラチナ。」

俺のターン、ドロー！」

自らの使うデッキと同じく、不屈の闘志でカードを引くケルト。その鬼の表情が、ニヤリと笑顔の形に歪んだ。

「このスタンバイフェイズ、魂を吸う竹光のカードは自壊する。だがもう必要ねえな、シャドーベイルを攻撃表示にして装備魔法、下克上の首飾りを装備！このカードは通常モンスターにのみ装備でき、そのモンスターが自身よりレベルが上のモンスターとバトルする際にその攻撃力は、レベル差1につき500ポイントアップする！」

「シャドーベイルのレベルは4、だが……！」

「ヴァルバロイドのレベルは12、よって攻撃力は4000ポイントアップだ！」

幻影騎士団シャドーベイル 攻500↓4500

「く……こんなカード相手に……！」

「だから言っただろう、このターンで俺が勝つって。行きな、シャドーベイル」

騎士の一閃が、機能停止したヴァルバロイドのコアを最短距離で刺し貫く。そのまま駆け抜けていった後ろで、ヴァルバロイドが爆発した。

幻影騎士団シャドーベイル 攻4500↓極戦機王ヴァルバロイド 攻0（破壊）

ラチナ LP4000↓0

「こんな、なぜ、なぜだ……！」

「……あばよ、ラチナ。いつか俺もそっちに行くから、そんな時はまともになつてろよ」

「御許しください、霸王様あ……！」

その台詞を最後に、ラチナの姿が消えていく。その様子を黙った見送った後、ケルトが僕の方を向かないまま話しかけてくる。

「今のを見てお前、どう思った？」

「え？えつと……」

「いやすまん、言葉が足りてなかったな。俺はともかく、霸王とやらに一度会ってみたくなったぜ。ラチナはいけすかねえ野郎だったが、どっか俺と似たところもあってな。それが最後の最後まで霸王とやらに惚れ込んで、こんなふうになっちまうとはな」

その時、ようやく気付いた。ケルトの肩が、小さく震えている。どんな表情をしているのかはここからでは見えないけれど、今その背中は泣いている。自分の仲間が隕石のせいで狂い、謎の霸王の僕となつて働く姿を見なければいけないというのは、一体どれほど辛い気持ちになるだろう。

「だからともかく、いっぺんそのアホ面拜んでやってな。この礼はたっぷりしてやらんと、な。日が昇ったら俺は出るが、お前も来るんだろ？何かの縁だ、一緒に行こうぜ」

「……もちろん」

振り返ったケルトの顔には、先ほど背中に見えた悲哀などまるで感じさせないいつも通りの不敵な笑みが浮かんでいる。だから僕も野暮な事は言わずただ頷いて、長い夜が明けけるのを元通り静かになった森の中で待ち続けた。

## ターソン97 蹂躪王と墓場の騎士

ケルトと出会ってからの森を抜ける旅は、それまでの強行軍とはまるで違うものだった。細かな点はいろいろとあったが、何よりも会話相手がいたという点が大きい。たった1人で暗黒界の拠点のはつきりした場所もわからずに何となくの方向だけを頼りに彷徨い続けていたあのころと比べると、今はまるでVIP待遇でも受けているかのようなぬるさだ。それに人数が倍になったことで、交代で眠る余裕さえ出てきたのも素晴らしい。実際この数日間に、荒んでいた僕の心にもだいぶ余裕が出てきた。木の実を採って食べたり、近くの川から魚を獲って焼いて食べたり、ケルトが見つけた薬草から僕らの世界には存在しない薬、ゴブリンの秘薬と呼ばれる苦い粒を収穫したりもした。

だが、どんな旅にも目的がある以上必ずゴールが存在する。僕らにとってもそれは例外ではなく、ついにその時は訪れた。

「ようやく出たな。俺がいた時と何も変わつちやいねえ……あれが暗黒界の中枢だ」

森が唐突に途切れ、急に視界が開ける。目の前、といってもまだまだ数キロは向こうに広がっていたのは、恐ろしく巨大な城だった。分厚く重苦しい城壁で囲まれたその周りには、まるでそれ取り囲むように小規模な城下町が広がっている。流石に悪魔の城、その上空には馬鹿みたいに分厚い雷雲も常備されているのがなんだか妙におかしかった。

「あれが……」

「おう。さてと、お前もなにか上着かなんか着たほうがいいな。その赤い服じゃいくらなんでも目立ちすぎだ」

言いながらケルトがマントを引っ張り出し、全身に巻きつけるようにして体を隠す。巨体なうえに翼や角まで生えているケルトが正体を隠すにはとてもじゃないが十分とは言い難い代物だが、そもそもケルトの場合元々この場所の出身だからこの程度でいいのだろう。それより問題は僕で、言われて初めて気が付いたが確かにこのオシリスレッドの制服は遠くからでもよく目立つ。1人だった時には自分の

服が赤いのはわかっていたけど、だから目立つだろうというところまで考えが回っていなかった。

だからあれだけ付け狙ってくる連中に見つかっていたのか、と自分から強行軍をハードモードに引き上げていたうかつきに舌打ちし、パツと思いついた上着を引っ張り出す。何も無い空間からいきなり構成される灰色に紫の模様が入ったフードつきローブ……要するにダークシグナーとしての神官服だ。この服が5000年前にあれだけの大虐殺と共にあったことを思うと吐き気を催しそうにはなるが、この際背に腹は代えられない。全身を包むデザインなうえにフードで顔まで隠せるから、実際個人的な感情に目をつぶれば悪い選択ではないだろう。

「よし。まずは酒場でも行くか？ 景気づけに一杯やろうぜ、おごつてやるからよ」

「僕まだ未成年！」

「あー？ シャーねえなあ、だったらミルクでも飲んでろよ」

やいのやいのと言いながら、森を離れて街に近づいていく。この近くは常にかかっている分厚い雲のおかげで頭上の赤い彗星は隠されている、その光を浴びる危険がないためこうしてケルトも普通に出歩けるのだ。

……後になって思えば、なぜそんな結論に達したのかが本当にわからない。そもそもそんな浅はかな考えが仮に正しいのだとしたら、なぜ他の暗黒界はみなおかしくなってしまったのか。なんだかんだ言っても数百年ぶりの故郷に浮かれすぎみだつたらしいケルトはともかく、本来一番警戒しなければいけない立場にもかかわらずそんなことすら考えつかなかった僕の馬鹿さ加減は、すぐ後でたっぷりと呼ぶことになる。

しかしその時はそんなこと考えすらせず、フードをなるべく目深に被つてうつむきがちにしながらケルトの後をついていくだけだった。

そんな僕が最初に異変を感じたのは、街に1歩入ったその瞬間だった。それなりに広い道の両端には民家らしき家が建ち並び、それなりに生活感もある……のだが、なぜか誰もいない。人や悪魔どころか、

鳥の1羽や犬猫の1匹すら通りを歩いていない。ケルトもかすかに眉をひそめているところを見るとこれが日常風景というわけでもないらしく、なにかただならぬことが起きているらしい。なんとはなしに顔を見合わせて呆然としてしていると、少し進んだ先にある十字路の部分に人影が現れた。

「おい、ちよつとそこの……」

ケルトが声をかけるかかけないかのうちに、向こうもこちらの存在に気が付いたらしい。ビクツとした様子で立ち上がると、脇目もふらず今来た道をそのまま逃げ始めた。

「お、おい!?なんだってんだこん畜生、追っかけるぞ!」

「合点!」

とにかく誰かに話を聞かないことには、この町のただならぬ様子のわけは掴めない。僕らが同時に1歩を踏み出した次の瞬間、足元を軸にいきなりの飛翔感が全身を包みこんだ。なぜか天地が逆転し、頭の上に地面がある……と、そこでようやく自分が宙吊りになっていることが理解できた。と同時に、暗黒界の軍勢に完全に一杯喰わされたことを悟る。まさかこんな単純な手に引つかかるとは、なんて考えてももう遅い。

「ななな……!」

「クソツたれがあつ!」

すぐ隣では、僕と同じようにケルトが宙吊りになって暴れている。だけどケルトには僕と違って強靱な翼がある、それを開けば……ということを指摘しようとした時、地面から2本の黒い鎖が伸びてきた。ぐんぐん伸びるその片方がケルトの体を、次いでもう1本が僕の体をがんじがらめに縛りつける。一見ただの鉄製に見えるそれが肌に触れた瞬間、みるみるうちに全身から力が抜けていった。

「こ、これは……」

「デモンズ・チエーン。無駄さ、その鎖はあらゆる相手を縛り付けて特殊能力すら無効とする力を持つ魔の鎖。いくら暴れても切れるわけではないだろう!」

周囲の家々から、僕らがこのシンプルな罠にかかるのを待っていた

らしい悪魔どもがぞろぞろと湧いてくる。その先頭に立つリーダー格らしき長槍を手にした悪魔が、手にする1枚のカードをこちらに見せながら近寄ってきた。

「みてーだな。お前も下手な抵抗はやめとけ、引つかかって怪我するぞ」

吊るされながらも先に落ち着きを取り戻したケルトの言葉に、しぶしぶ僕も動くこうとするのをやめる。精々できるのは、僕らを下ろしに来ようとする下級悪魔を思いつき睨みつけてやることぐらいだった。

それから。宙吊りの状態から地面に降ろされ……というより叩き落とされた僕らは、デモンズ・チェーンに上半身を縛り付けられたままその指揮官、なんでも尖兵ベージというらしい悪魔に連れられて街の中心部に向かわされていた。賞金首になっていているらしい僕はともかく、なぜケルトまで？そんな疑問は、次第に城の一角に近づいていくにつれだんだん険しくなるケルトの表情を見てひとまず脇に追いやった。

「この方向、一体何が……？」

「……ああ、こつちには確かな」

「うるさいぞ、静かに歩け！」

先頭に行くベージがデモンズ・チェーンの先端を力任せに引っ張ったため、バランスを崩して転びそうになるところを何とか踏みとどまる。しかしケルトはそれを最後に押し黙ってしまい、僕も何も言うことができなかった。

そのまま少し歩くと、やがて小さな円形の建物が見えてきた。僕はあんな感じの建造物を知っている、あの形は忘れようたつてそうはいかない。ニヤニヤと笑いながらその中に僕らを引いていくベージの顔を見ても、僕の予想が間違っていないことはよくわかった。

「闘技場……」

そう。円柱の底に当たる位置にはむき出しの地面が広がり、その周



りを取り囲むように設置された高い壁と観客席。これはいつぞやのセブンスターズ事件の際、アマゾネスのタニヤが作らせていたものとそっくりだ。もっともタニヤの闘技場がシンプルなできたものに對し、この闘技場は石造りの悪魔像やらなんやらでござと不気味に飾り立てられているという違いはあるが。まあ、いかにも悪魔らしいといえばらしくもある。

「へへへ……ほらよ、入りな！」

ドン、と背中を突き飛ばされ、よろめいた拍子に押し出される。背後で分厚い鉄の門があり、完全に進退窮まってしまった。そのすぐ横では、同じようにケルトも立っている。

下から見上げると観客席には様々な悪魔族モンスターが座り、嫌な笑いを浮かべながら立ち尽くす僕ら2人を見下ろしている。ここまですればこいつらがどんな悪趣味なことを考えているのかは嫌でもわかる……が、誰がそんなこととしてやるか。手当たり次第に睨みつけていると、いつの間にか上に登っていたベージュがメガホンのようなものを手にして声を上げた。

「静粛に、静粛に！ここに捕らえたるはここ数日、我らが同胞を虐殺して回っていた恐るべき賞金首の人間1人！」

「なーにが虐殺って？自分から喧嘩売ってきたくせに」

誰も聞こえなかったのかあるいは無視したのか、いずれにせよ僕の声は観客の沸き立つ叫びにかき消された。

「そしてかたや、ここに捕らえたるはかつて我らが同胞でありながらも我らから離反、忌むべき歴史として暗黒界の書物からもその名を抹消された裏切り者のケルト！」

「ケツ、若造がデカイ口叩きやがって」

意外にも、こちらの方が歓声が大きかった。当然のごとくケルトの喧きは届かず、代わりに返ってきたのは殺せ、殺せ……そんなコールだった。ベージュはその反応に満足したように手で制し、再び静まり返った闘技場に声を張り上げる。

「本来ならば兩名すぐさま処刑と致すところですが、どうでしょう皆様。本日はお日柄もいい、ここにおわせられる我らが霸王様の許可を

得て、僭越ながらこのページがひとつ趣向を凝らしました」

その発言に、咄嗟にページが叫んでいる方に目をやる。ページのすぐそばにどっしりと座る、トゲトゲした黒い鎧を身につけた男……あれが、霸王なのか。でも、あの眼はどこかで見たことあるような。どうにか思い出そうとするも、再び始まったページの講釈にその試みは中断を余儀なくされた。

「ここまで言えば、聡明なる皆様方にはもうお分かりでしょう。本日はこの2人の大罪人に、互いの命を賭けてデュエルをしていただきませう！」

「ふっぎけんな！」

「おやおや、そんなことを言っているのですか？とはいえ、もちろんただではあなた方もやる気が出ないでしょう。そこでこのデュエル、勝ち残った方にはこの霸王様への挑戦権が与えられます！」

「なに？」

そこで、ケルトが反応する。霸王と僕を見比べ、やがて場内の熱気に負けじと声を張り上げた。

「おい、俺はこの勝負乗ったぞ！だから早くこの鎖を外しやがれ！」

「なっ……！」

「もちろんですとも！速攻魔法、ツインツイスターを発動！この効果により、あなた方を縛るデモンズ・チェーン2枚を破壊します！」

つむじ風が吹き、みるみるうちにボロボロに錆びていったデモンズ・チェーンが勝手に切れて地面に落ちる。言葉を失う僕と対照的に、笑顔さえ浮かべながらケルトがデュエルディスクを取り出す。

「け、ケルト……！」

「い・い・か・ら・合・わ・せ・ろ！」

二の句が継げない僕に、ケルトが目の前にいるからギリギリ聞き取れる程度の小声で指示を飛ばす。反応する暇すら与えず僕につかつかと近寄り、観客席に向かって大声で宣誓する。

「よおーし、いいかあ！お前らの言う通りにするのは気に喰わねえが、背に腹は代えられねえ。今からこの俺、鬼神ケルトがこの人間をぶち殺してやるぜええっつ！！」

うおおおお、と割れんばかりの歓声が闘技場全体に響いた。その興奮のどさくさにまぎれ、急にたつた今の叫びが嘘のように冷静さが戻ってきたケルトが僕にあることを耳打ちする。

……なるほど、そういうことね。ややあってピンと来た僕も、気乗りしない風を装いながらデュエルディスクを起動させる。数日ぶりに使うディスクはまだ調子が悪いままでなんとなく異音が聞こえてくるけど、まあよほどのことがない限り大丈夫だろう。

「それでは皆さん、ご覧下さい！彼らは我らが敵ですが、その実力はともにも確か。どちらが勝利を手にするか、賭けをなさる方はお早めにお願いたします！」

ページの声を背後に聞き、仮にも命のやりとりであるこの世界でのデュエルモンスタースターズを賭けの対象にして笑いだすその神経に顔をしかめる。

まあいいさ、今はデュエルだ。そして、周りの様子に神経を使わなくては。ケルトもまた僕の方を見据えるふりをして、さりげなく周囲の警戒の薄い部分を探っている。

「デュエル！」

「先攻は僕が貰った！僕のターン……これでターンエンド！」

「こりやあ傑作だ、あの人間はドローゴーだつてよ！」

「まともなデッキも組めないガキは、おうちに帰ってママのミルクでも飲んでなあ！」

何もせずのターンエンド宣言に、客席から嘲りの声と嘲笑が聞こえてくる。努めて気にしないようにするけれど、それでも顔が怒りで赤くなるのを感じる。治安度の悪い童実野町でたつぷり鍛えられたおかげで母親関係のことを言われるのは慣れたつもりだったが、久しぶりに聞くとやっぱりまだ駄目らしい。

怒りを力づくで抑え込み、ケルトから見えるように壁のある一点を視線で示す。ややあって、向こうがゆっくりと首を横に振るのが見えた。そして即座にそれを誤魔化すかのように、必要以上の大声でカードを引く。

「俺のターン、ドローだ！カードを一枚セットしトラップカード、

幻影騎士団シエード・ブリガンダインを発動するぜ。このカードはトランプだが、俺の墓地にトランプが存在しない場合のみセットしたターンでも発動が可能となる。そして閥属性レベル4、攻撃力0守備力300の通常モンスターとして特殊召喚されるぜ」

日陰者の鎧。自身が表に出てきて亡霊の姿をむき出しにしていたシャドーベイルとは違い、その名が示すごとく鎧の中にその身を潜める幻影となった騎士の目の光が灯る。

幻影騎士団シエード・ブリガンダイン 守300

「さらにカードをセットし、ターンエンドだ」

「おいおい、鬼神がビビってんのかあ〜？」

「レベル低いデュエルだなあ、もっと面白いことやれよ！」

僕とは違い、またまた飛んできた嘲笑も涼しい顔で聞き流すケルト。早くやれ、とその目が物語っていた。

清明 LP4000 手札：5

モンスター：なし

魔法・罫：なし

ケルト LP4000 手札：4

モンスター：幻影騎士団シエード・ブリガンダイン（守）

魔法・罫：1（伏せ）

「僕のターン、ドロー！」

よし、来た！僕の手札にあるカードは魔法カード、妨げられた壊獣の眠り。ブラック・ホールと同等のモンスター全破壊効果に加え、互いのフィールドに1体ずつの壊獣を攻撃表示で特殊召喚するという恐ろしい効果を持つ壊獣サポートの中でもトップクラスのパワーカードだ。この旅の間、請われるがままにケルトにも見せた僕のデッキ……その中に入っていたこのカードを引くこと、それが僕に課されたケルトからの指令だった。

『俺は適当にターンを流しておくから、とにかくお前はあの眠りのカードを引け。そしたら展開した2体の大型モンスターを一度に呼んで、一斉攻撃でこの闘技場の防御の薄い部分をぶち壊させる。そのままここはケツまくって逃げるぜ、今のままじゃどうにもならねえ』

この世界でのモンスターは全てソリッドビジョンではなく、質量を持つ。だからこの闘技場でも、デスマッチをすると見せかけてモンスターを出し、その攻撃等を利用して逃げ出そうとする者が後を絶たなかったらしい。もちろん暗黒界も馬鹿ではない、そんな場合での対策も取つてある……のだが、その準備には少し時間がかかるらしい。

つまりこの眠りのカードのように、1枚をポンと発動するだけで最上級モンスターを2体も呼び出せるカードは彼らにとっても想定外の範囲外なのだ。しかも、僕が呼び出すのはただのモンスターじゃない。その攻撃力はあの伝説を作り上げたモンスター、青眼の白龍をも上回る3300。そう、サンダー・ザ・キングとジズキエルだ。この2体呼び出してすぐさま大暴れさせれば、この連中の対策が間に合う前にこの闘技場ごと叩き壊すこともできるはずだ。

とにかくここは逃げて体勢を立て直す、それさえできれば後はどうにでもなる。

「僕は手札の魔法カー……え？」

だが必殺の切り札、妨げられた壊獣の眠りの名を宣言することはできなかった。突然目の前でケルトが自らの手札をバラバラと取り落とし、両腕で頭を押さえて苦しみだしたのだ。それもただの苦しみ方ではなく、こうやって押さえていないと目の前で頭がぱっくり割れるのではないかと思うほどの尋常ではない様子だ。

「ぐわあああっ！うおお、ぐっ、ぐわあああっ！！」

「け、ケルト!?!」

「おやおや、始まったようですね。皆様方、どうぞ今しばらくの間デュエルを中断して悲劇に包まれた、このお2人の様子をお楽しみください」

「どういう意味さー！」

苦しみ悶えるケルトとは対照的に、心底愉快そうなベージの声。突然起きたこの異常にもなんら驚いた様子の無いその声の調子に嫌な予感が膨れ上がってくるのを感じながら、遥か上のベージを問い詰める。

そしてそんな僕に答えるのも楽しくてしょうがない、といった様子

を隠そうともせず、ゆつくりと気取った様子で話し出した。

「では逆に聞きますがね。そもそもあなた、本当に何も起こらないとも思っていたんですか？」

「え？」

「この分厚い雲が光を遮っているから、降り注ぐあの赤い光の影響も受けずにすむ……もしそんな浅はかな考えでノコノコとこの場所に出てきたのであれば、それはお笑いですねえ。考えてもごらんさない、ここは我々悪魔の居城。そんな場所なのですから、当然この雲は数百年以上晴れたためしがありませんよ。にも関わらず、この雲が常に空を覆っているにも関わらず、私達はこうしてあの光の力で悪魔としての本分、つまりこの破壊と侵略の喜びに目覚め、ここにいらつしやる偉大なる霸王様という素晴らしい指導者も得た。ここまで言えば、もうお分かりでしょう？」

「それじゃ……まさか、あの隕石は……」

「その通り。光が地上に届こうが届くまいが、あの美しい血のように赤い光の力にはなんの関係もありませんねえ。今はちようどあなたのご友人、我々が鬼神も自らのくだらない理性と悪魔としての荒々しい衝動との間に揺れ動いているようですが、すぐにその戦いも終わるでしょう」

油断していた。ケルトが森の中に隠れてあの隕石の影響を受けなかったのは光を浴びなかったからではない、単にまだ光を浴びた量が少なかったからか。これは光を浴びていないから正気でいられるという本人の言葉をなんとなく信用し、ろくに確かめもしなかった僕にも責任はある。それにしても、このページの物言いは少し引つかかる。光の力というこのワード、それにこの光への心酔っぷり。斎王……いや、さすがにないだろう。破滅の光はあの時、斎王を倒して確かに消滅させたはずだ。

「ううう……おい、よく聞け！」

苦しげな、低いケルトの声。僕に向けて何かを伝えようとしているその様子に、慌てて背後の彼に向き直る。どうにか痛みと苦しみのピークは過ぎたらしく、もう先ほどまでのようにのたうち回ってはい

ない。

「俺は、もう駄目だ。これ以上は耐えきれそうにない」

「な、何を……」

「黙って聞け馬鹿野郎！」

切羽詰まったケルトの気迫に押され、口をつぐむ。代わりに再び話し出したケルトの言葉を聞き洩らさないよう、集中して耳を傾ける。

「悪いな、ドジ踏んじまってよ。だが最後に、お前にひとつ頼みがある。俺にこの場で、なんとかしてとどめを刺せ……ああ、何も言うんじゃない。文句言いたいのは山々だろうがな、もう俺には俺自身が止められそうにない。俺は多分、今からお前を殺しにかかるだろう。だからお前は、それをなんとかして止める。そしてお前だけでも生き延びて、なんとか元の世界に変えるんだ。いいな！」

「そ、そんな急に……」

「ああクソ、時間切れだ。いいな、手加減なんてしたら負けるのはお前だからな。俺の分まで絶対に生き延びろ……ぐっ！」

その言葉を最後に、再びケルトの体がその場に崩れる。再び起き上った時、その目からはもはやさつきまでの理性的な光は消えさつていた。そしてその目を見て、もう何を言っても無駄なんだと悟る。もうあれは、僕が見てきた気のいい悪魔ではない。破壊の嵐を巻き起こす恐るべき悪魔、暗黒界の鬼神と呼ばれるにふさわしい恐怖と畏怖の対象でしかないのだ。

僕の心を蝕むダークシングナーの魂が、僕に戦え、目の前の敵を潰せと囁く。うじうじと悩まなくてもいいというのは、この場合ではむしろ喜ぶべきことなのかもしれない。この世界は弱肉強食、いつまでも迷いがあるようではここで死ぬのは確実に僕だからだ。

「ケルト……」

「ああ、いい気分だ。すがすがしいぜ、まったくよ。さあ、デュエルの続きを始めようぜ！」

「こうなった以上、もはや彼の戦いを止めることはできません。あなたが生き残るための道はただ一つ、鬼神ケルトを自らの手で下すことのみ！ さあ御集りの皆様方、いよいよ本気のデュエルスタートでござ

います！どうぞ戦士たちの邪魔をしないよう口を閉じ、拍手をもつて見守つて差し上げましょう！」

観客の悪魔どもも、最初からこうなることはわかっていたらしい。僕らだけが真剣になって、どうやって逃げだすかを考えていたということか。

……いや、まだだ。まだ眠りのカードは僕の手の中にある。

「魔法カード、妨げられた壊獣の眠りを発動！フィールドのモンスターをすべて破壊し、デッキから壊獣を互いの場に1体ずつ特殊召喚する！これでシェード・ブリガンダインを破壊して……」

「通すかよ、そんなもん！トラップ発動、死のデッキ破壊ウイルス！攻撃力1000以下の閥属性モンスターをリリースして相手フィールドと手札に存在する全ての攻撃力1500以上のモンスターを破壊！さあ、そのたくさんある手札を見せてもらおうぜ？」

「くっ！僕の手札にある七星の宝刀以外は全部モンスターカードだ……」

手札に存在する攻撃力1500以上のモンスター……それはつまり、今の僕にとつてこの手札ほぼ全てを意味する。最上級モンスターばかりの壊獣が片っ端からウイルスに感染していき、ガメシエルにラディアン、ジズキエル、サンダー・ザ・キングの4枚をまとめて墓地に送りこんだ。

「おいおい、その眠りのカード以外はモンスターばかりかよ？だがこれで終わりじゃねえ、さらにウイルスは相手のデッキにも感染し、相手は攻撃力1500以上のモンスターを3体まで選んで破壊することができるとぜ」

「……遠慮しておくね。これ以上墓地にモンスターを送ることもないや」

「そうかよ？なら待たせて悪かったな、次は妨げられた壊獣の眠りの効果を処理するぜ。と、言いたいところだがなあ」

ここで意味ありげに言われて、初めて僕も気が付いた。先ほどフィールドに存在した唯一のモンスター、シェード・ブリガンダインがウイルスのコストとしてリリースされたことで、妨げられた壊獣の



眠りで破壊できたモンスターは0体だった。そしてモンスターを破壊できない限り、このカードのリクルート効果は不発となってしまう。つまり僕は今、残り少ない手札のうち1枚の効果すら何もすることができないまま不発に終わってしまったのだ。当然、これ以上できる事などあるはずがない。

「くっ、ターンエンド！」

「俺のターンだ。このターンのエンドフェイズまで、俺はウイルスカードのデメリットでお前にダメージを与えられない。だがな、だからといってこのターンを無駄に過ごすほど俺は甘くないんでな。カードを2枚セットし、カードカー・Dを召喚！このカードをリリースすることでカードを2枚引き、このターンのエンドフェイズになるぜ」

紙のように薄い車が現れてすぐ消え、ケルトがカードを2枚引く。先ほどのウイルスもそうだけど、ライフこそ変動がないとはいえじわじわとこちらがアドバンテージを取られつつある。それでもいまだ目立った動きがないのは、僕の壊獣もケルトの幻影騎士団も基本が受け身なデッキだからだろうか。

清明 LP4000 手札：1

モンスター：なし

魔法・罫：なし

ケルト LP4000 手札：4

モンスター：なし

魔法・罫：2（伏せ）

「僕のターン！このメインフェイズ1の開始時に魔法カード、貪欲で無欲な壺を発動！僕の墓地から種族が違う3体を選んでデッキに戻し、その後でカードを2枚ドロウする。悪魔族のラディアン、水族のガメシエル、機械族のジズキエルを戻してドロウ……さらに、墓地に存在する妨げられた壊獣の眠りのさらなる効果を発動！」

まだまだ。たとえウイルスで壊滅しようとも、まだ僕らは戦うことができる。

……本当にこれでいいのかは、僕にはわからない。もしかしたら、

ケルトを倒さず正気に戻すような方法があるのかもしれない。けど、それを探すことに気を散らした瞬間に僕は敗北する。ケルトは、それほどまでに強い。少なくとも、よそ事を考えながらの片手間ですうにかできる相手じゃない。

結局、僕だつて死にたくないだろう。1度生き返った時点でもう自分の命に執着はないと思っていたのに、我ながらこの浅ましさが嫌になる。皆が笑つて終わるハッピーエンド、その道を探すことすらせずにこうして本気で戦う事を、少しでも自分が助かる可能性の高い道を優先している自分がある。ケルト本人だつて最後には僕に倒されることを望んでいた……そんなもの、ただの詭弁でしかない。昔に比べて変わってしまったのは先代のせいなのか、それとも僕そのものが変化しつつあるのか。それ以上考えることを放棄して、ただ勝利に向けて感覚を集中させる。そして、僕は次のカードを繰り出した。

「妨げられた壊獣の眠りは墓地から除外することで、デツキから壊獣を1体サーチすることができる。粘糸壊獣クモグスをサーチして、七星の宝刀を発動！手札からレベル7のクモグスを除外して、カードを2枚ドロロー！」

手札1枚の状態から、どうにか4枚まで増やすことができた。だが、ここに来てこのデツキの弱点が露呈した形になってしまった。相手フィールドにリリースするモンスターがない限り、このデツキはうまく動けないのだ。そして、そんな場合に備えてのカードはいまだ手札にきていない。最もそのカードがあったとしても、貪欲で無欲な壺のデメリットによりこのターンバトルを行うことができないからあまり意味もないのだが。

「フィールド魔法、KYOUTOUウォーターフロントを発動！カードを1枚セットして、ターンエンド」

結局、またがら空きのままターンを流すしかない。歯がゆいけれど、どうすることもできない。

「俺のターン。幻影騎士団クラックヘルム、召喚だ！そしてリバーズカードオープン、幻影騎士団シャドーベイル！このカードは場のモンスター1体の攻守を永続的に300アップさせる、だがそれだけじゃ

ねえ。ファントムのカードが墓地に送られたターンの間、クラックヘルムの攻撃力はさらに500ポイントアップする」

「ひび割れた兜に靈魂が入り込み、さながら兜をかぶった人魂のような幻影の騎士の姿になる。首元に巻かれた赤いボロボロのマフラーは、生者だったころの名残だろうか。」

幻影騎士団クラックヘルム 攻1500↓1800↓2300  
守500↓800

「バトルだ！クラックヘルムでダイレクトアタック！」

「この程度のダメージ、まだ……！それに場から墓地にシャドーベイルのカードが送られたことで、ウォーターフロントには壊獣カウンターが1つ乗った！」

幻影騎士団クラックヘルム 攻2300↓清明（直接攻撃）

清明 LP4000↓1700

KYOUTOUウォーターフロント(0)↓(1)

「これでターンエンド。クラックヘルム自身の効果はここで切れるが、シャドーベイルによる強化はさつき言った通り残り続けるぜ」

幻影騎士団クラックヘルム 攻2300↓1800

清明 LP1700 手札：2

モンスター：なし

魔法・罠：1（伏せ）

場：KYOUTOUウォーターフロント(1)

ケルト LP4000 手札：4

モンスター：幻影騎士団クラックヘルム(攻)

魔法・罠：1（伏せ）

「僕のターン！クラックヘルムをリリースして、そっちのフィールドに雷撃壊獣サンダー・ザ・キングを特殊召喚！そしてクラックヘルムが墓地に送られたことで、ウォーターフロントの壊獣カウンターがまた増える」

3つの首を持つ白き雷の龍。以前は僕のフィールドでワンキルの立役者になつてもらったが、今回は敵役をお願いしよう。

雷撃壊獣サンダー・ザ・キング 攻3300

KYOUTOUウオーターフロント(1)↓(2)

「そしてサンダー・ザ・キングの存在に反応し、僕の手札から別の壊獣がフィールドに目覚める！出る、多次元壊獣ラディアン！」

突然空間にひびが入り、そこから1本の腕が突き出す。その腕がひびを内側から押し広げ、ある程度開いたところで漆黒の人型壊獣がそこを通つてするりと抜け出てきた。ラディアンとサンダー・ザ・キング、奇しくもこれは僕が最初に壊獣を使った時の組み合わせだ。

多次元壊獣ラディアン 攻2800

「ラディアンの特異能力、分身を発動！壊獣カウンターを2つ消費して、攻撃力2800のラディアントークンを場に特殊召喚する！」

突然ラディアンの姿がぶれ、その輪郭が2重に見える。ずれはみるみるうちに大きくなっていき、やがて完全に独立した瓜二つのラディアンがもう1体現れた。これこそが、場にモンスターがあまり並ばない怪獣の弱点を補うことができる数少ない特殊能力、分身だ。

KYOUTOUウオーターフロント(2)↓(0)

ラディアントークン 攻2800

「ほう？だが、んなことしたところで俺にテメエが寄越したこのデカブツの方が強いみてーだがな？」

「もちろんそれも対策済みさ！魔法カード、シャイニング・アブソープを発動！相手フィールドの光属性モンスター1体を対象に、その攻撃力を僕の全てのモンスターに加算する！」

多次元壊獣ラディアン 攻2800↓6100

ラディアントークン 攻2800↓6100

KYOUTOUウオーターフロント(0)↓(1)

サンダー・ザ・キングの攻撃力は3300。これがラディアンとラディアントークンに乗せられることで、総攻撃力は12200……確かケルトの墓地にはシャドーベイルのカードがあるからワンキルとはならないだろうが、それでも先ほど受けたダメージのお返しには十分だ。

「バトル！ラディアントークン、そしてラディアンで攻撃！」

2体の異星人が飛びかかり、その剛腕で宙に浮く龍を引きずり落と

す一撃を叩き込む。だがその攻撃はともにサンダー・ザ・キングの体をすり抜け、有効打どころかまるでダメージにならなかった。

「攻撃が外れた……う？」

「永続トラップ、ファントム・フォッグ・ブレイド幻影霧剣を発動。このカードの対象となったモンスターは幻影となる」

「幻影に？」

確かに言い得て妙だ。こちらの攻撃がまるで最初からモンスターなど存在しないかのようにすり抜ける様は、確かに幻影と呼ぶにふさわしい。

「そうさ。効果は無効となり攻撃宣言もできないが、代わりに相手からの攻撃対象になることもなくなる。だがモンスターが存在するごとに変わりはないから、直接攻撃を仕掛けることもできない」

「あと一歩だったのに！カードをセットしてこのターンのエンドフェイズ、シャイニング・アブソープの効果は切れる……」

多次元壊獣ラディアン 攻6100↓2800

ラディアントークン 攻6100↓2800

「俺のターンだ。速攻魔法、非常食を発動！幻影霧剣を墓地に送ることで1000ライフ回復し、さらに幻影霧剣が消えたことでこのデカブツは幻影から再び実体になる。さらにフィールドからこの2枚のカードが墓地に送られたことで、その灯台にカウンターが2つ乗るんだよな？」

「壊獣カウンターが3つ……しまったー！」

ケルト LP4000↓5000

KYOUTOUウオーターフロント(1)↓(3)

「まだまだ。墓地の幻影霧剣は自身を除外することで、墓地に眠る俺の騎士を今再びフィールドに呼び起こす！幻影騎士団は倒れない、今こそ目覚めろクラックヘルム！」

先ほどリリースされたクラックヘルムが、再びひび割れた兜と共に蘇る。これでモンスターは2体、だけどサンダー・ザ・キングには特殊能力がある……！

「さあ、お前のモンスターの効果を使わせてもらおうぜ！サンダー・ザ・

キングはフィールド上の壊獣カウンターを合計3つ取り除くことでこのターンモンスターへの3回攻撃が可能となり、さらにターン終了時まで相手はあらゆるカードの効果が発動できない!」

「だけど、その効果に対してのチェーンはできる!トランプ発動、ハーフ・アンブレイク!このターン僕のモンスター1体、多次元壊獣ラディアンは戦闘で破壊されず、さらにラディアンの戦闘による僕へのダメージは半分になる!」

サンダー・ザ・キングの帯電が始まり、空気中に電気の余波が満ちていく。あらゆる効果の発動を封じ込めるよりも前に、ラディアンのうち1体が防御姿勢を取る。サンダー・ザ・キングだけが相手ならこれでも使わない方がダメージを抑えられたけど、クラックヘルムまで出てきたとあれば話は別だ。さすがにそこまでの攻撃を受け切る余裕は、僕のライフにはすでにない。

KYOUTOUウオーターフロント(3)↓(0)↓(1)

「仕留め損ねたか?だが、ともかくダメージは受けてもらうぜ!バトルだ、サンダー・ザ・キングでラディアンに2回、ラディアントークンに1回の攻撃!」

3つの首が一斉に雷撃のブレスを放ち、視界の全てが白く染まる。だが空を裂き大地を砕くその衝撃にも、ラディアンはどうか踏みとどまって堪えてくれた。

雷撃壊獣サンダー・ザ・キング 攻3300↓多次元壊獣ラディアン 攻2800

清明 LP1700↓1450

雷撃壊獣サンダー・ザ・キング 攻3300↓多次元壊獣ラディアン 攻2800

清明 LP1450↓1200

雷撃壊獣サンダー・ザ・キング 攻3300↓ラディアントークン 攻2800(破壊)

清明 LP1200↓700

「クラックヘルムでの攻撃はできねえなあ……カードをセットしてターンエンドだ」

辛うじてこのターンは耐えきれた……だけど、サンダー・ザ・キングをどうにかする方法はいまだにない。いや、あることはあるのだが、あのカードを引けるかどうか。

清明 LP700 手札：0

モンスター：多次元壊獣ラディアン（攻）

魔法・罠：1（伏せ）

場：KYOUTOUウォーターフロント（1）

ケルト LP5000 手札：4

モンスター：雷撃壊獣サンダー・ザ・キング

幻影騎士団クラックヘルム（攻）

魔法・罠：1（伏せ）

「いや、引いてやる！絶対引いてみせる！僕のターン、ドロー！」

今のターンの攻防を経て、また少し考えが変わった。弱気を振り払い、迷いを捨て、目の前の敵を越えることだけをただ望みカードを引く。僕の心の闇を媒体にして顕現したこのデッキは、僕がそうありたいと望めばいくらでも強くなる。僕が怒りに囚われた時、悲しみに呑まれた時、憎しみに満ちた時。きつかけは何でもいいが、とにかく勝利を求める感情の爆発をトリガーとして、限界を超えた更なる力を僕にもたらしてくれる。だがこの時僕を動かしていたのはそういった負の感情ではなく、もつと純粹に強者と戦うことのできる昂揚感、そして自分自身への義務感。ただそれだけだった。

僕がこの世界に来て初めて会った精霊、辺境の大賢者は道があったとしても、それを進むかどうかは僕が決めることだと言った。僕が進むと決めた道は、きつと一番いい道ではないのだろう。だけど、僕にはみんなが助かるような道を探すことはできない。ならば、せめて最高の選択でないなりに精一杯に足掻いてみせよう。

もつといい道があるのではないか、そんな風に考えることは確かに大事だ。でもそれは、もし失敗してもその原因を、そもそも自分が正解を選ばなかったからだという部分に押し付けて言い訳を作るものにもなってしまう。自分から逃げ道を作りそこそこもるのではなく、不完全な道なりに1度選んだ以上は最後まで歩ききってみせる。そ

してそのために、誰にも負けない力が欲しい。この場を制する力が欲しい。

そして、その願いは……届いた。

「さあ、何を引きやがった……？」

「僕が引いたカードは、魔法カード。2枚目の、妨げられた壊獣の眠り！このカードで、今度こそフィールドのモンスターをすべて破壊する！」

「甘いぜ！・トラップ発動、幻影剣ファントム・ソード！このカードはモンスター1体の攻撃力を800ポイント上昇させる装備カードになるが、ここで使うのはもう1つの効果だ。装備モンスターが破壊される場合、その破壊の身代わりとできる！そして幻影霧剣の効果で蘇生されたクラックヘルムは、墓地へ行かずゲームから除外されるぜ。おおかたモンスターを大量破壊して壊獣カウンターを一気に溜めたうえでリクルートした怪獣の効果を使うつもりだったんだろうが、アテが外れたな。俺の場にはいまだサンダー・ザ・キングがいる、そして壊獣はその特性により、互いのフィールドに1体ずつしか存在できない。つまりそのリクルート効果はまた不発だ！」

サンダー・ザ・キングが再び幻影の存在となり、闘技場に巻き起こる嵐から回避する……かに見えた。雷撃の龍は幻影となりフィールドに留まるどころかその色がどんどん薄くなり、半透明から輪郭のみがかすかに見える状態へ、そしてついには存在ごと完全にフィールドから消え去った。

「馬鹿な!？」

「悪いけど幻影剣にチェインしてカウンタートラップ、ギャクタンを発動させてもらったよ。相手のトラップが発動した時にその発動を無効にし、さらにそのカードを持主のデッキに戻す。幻影剣は最初からなかったことになって、サンダー・ザ・キングは今度こそ破壊されたのさ。そしてラディアンとサンダー・ザ・キングの2体に加え、僕の発動した2枚のカードが墓地に送られたことでウォーターフロントの壊獣カウンターはその上限の5つまで追加された。怪獣がどちらの場にもいないことで、眠りのリクルート効果も問題なく発動でき



る！行くぞガダーラ、敵はガメシエルだ！」

昆虫にしてはあまりに恐ろしいほどのサイズを誇る巨大な戦闘蛾の壊獣、ガダーラ。対照的に全身が海のように青い亀の壊獣と対峙するその姿は、圧倒的でありながらも僕の心情を反映するかのようにごこか悲哀のようなものも感じられた。そして闘技場の中心で、その2体が激しくぶつかり合う。小手先の技など何も無い力と力のぶつかり合いを制したのは、当然ながらガダーラの方だった。

KYOUTOUウォーターフロント(1) ↓(5)

怪粉怪獣ガダーラ 攻2700

海亀壊獣ガメシエル 攻2200

怒炎壊獣ドゴラン 攻2700 ↓海亀壊獣ガメシエル 攻2200

0 (破壊)

ケルト LP5000 ↓4500

「メイン2にウォーターフロントの効果を発動。壊獣カウンターが3つ以上乗っていることで、デッキから壊獣を1体サーチできる。2体目のガメシエルを手札に加えて、ターンエンド」

ただ単にデュエルをする、のではなく僕自身はつきりと強さを求めたことで、さらに力を引き出してくれた僕のデッキ。初ダメージはたかが500ポイントに過ぎないが、ここからが反撃のターンだ。

「チィッ……俺のターン！幻影騎士団ダスティローブを召喚し、さらに手札から幻影騎士団サイレントブーツを特殊召喚！このカードは俺の場に幻影騎士団が存在するとき、特殊召喚することができる！」

幻影騎士団ダスティローブ 攻800

幻影騎士団サイレントブーツ 攻200

2体の幻影の騎士が、ケルトを守る壁として立ちはだかる。彼らが憑代としているのはそれぞれズダボロのローブに杖、そして柔らかなブーツとズボンだろうか。と見る間に、ダスティローブが体のそばを浮遊する杖を振り回してなにやら呪文を唱えだす。

「ダスティローブは自身を守備表示にすることで、場の闇属性モンスター1体の攻守を次の相手のターン終了時まで800ポイントアップさせる。対象はもちろん、このサイレントブーツだ」

幻影騎士団ダステイローブ 攻800↓守1000

幻影騎士団サイレントブーツ 攻200↓1000 守1200  
↓2000

サイレントブーツの攻守が申し訳程度に上昇する……だが、そこに何の意味があるのだろうか。たとえば攻撃力が上がったとしても、素の攻撃力の低さが災いしてその数値はようやく4ケタに届いたといったところ。

だが、僕は忘れていた。このケルトが操るデッキには、もう1つ別のギミックが隠されていることを。

「装備魔法、折れ竹光をダステイローブに装備！さらに装備魔法、妖刀竹光をサイレントブーツに装備！この2枚はどちらも装備したところで攻撃力が上がるわけでもねえが、妖刀竹光には特殊能力が存在する！俺の場の他の竹光を手札に戻し、このターン装備モンスターの直接攻撃を可能とする！」

「ダイレクトアタッカー……！」

サイレントブーツの攻撃力は、ダステイローブの支援込みでもわずか1000。だが、僕のライフはそれよりもさらに低い700しかない。僕の方に傾きつつあった流れを強引に引き戻しにかかるケルトの反撃……それも今の動きで手札をすべて使い切ったことを考えると、真正銘最後の賭けだろう。

「バトルだ、サイレントブーツでダイレクトアタック……！」

「ガダーラの特異能力、風葬を発動！壊獣カウンター3つをコストにガダーラは自身の鱗粉をたっぷりと含む特殊な風を巻き起こし、自分以外の全てのモンスターの攻守を半減させる！」

「だが、サイレントブーツの攻撃が止まるわけではない！」

KYOUTOUウオーターフロント (5) ↓ (2)

幻影騎士団ダステイローブ 守1000↓500 攻800↓400

幻影騎士団サイレントブーツ 攻1000↓500 守2000  
↓1000

ガダーラの羽ばたきが暴風を起こし、その風に乗ってガダーラ自身

のカラフルな鱗粉がフィールドを包み込んでいく。いかに幻影の騎士といえども超自然の力には敵わないらしく、周囲を霧のように包む鱗粉に苦しみその場で力を失っていく。それでもなお挫けないサイレントブーツの一撃が、僕のどてっ腹を踏み抜いた。

幻影騎士団サイレントブーツ 攻500↓清明（直接攻撃）

清明 LP700↓200

それにしても、今はかなりギリギリだった。返しの反撃を警戒して僕のフィールドに出す怪獣にガダーラをチョイスしたのは、どうやら大正解だったようだ。ここでもしダメージを最優先にジズキエル辺りを出していたら、今のターンを乗り切ることとはできなかつたろう。やはり、少しずつ流れはこちらに傾いてきている。今の攻防はそれを崩すどころか、ますますその思いを強くさせた。

「ターンエンドだ……」

清明 LP200 手札：1

モンスター：怪粉怪獣ガダーラ（攻）

魔法・罫：なし

場：KYOUTOUウオーターフロント（2）

ケルト LP4500 手札：1

モンスター：幻影騎士団ダステイローブ（守）

幻影騎士団サイレントブーツ（攻・妖刀）

魔法・罫：妖刀竹光（サイレントブーツ）

「僕のターン、ドロー！魔法カード、トレード・インを発動。手札からレベル8のガメシエルを墓地に送り、カードを2枚ドローする！」

KYOUTOUウオーターフロント（2）↓（3）

この状況では特殊召喚するうまみも少ないガメシエルをコストに、再び次の可能性を求めて手札交換を行う。トレード・インのカードが送られたことでウオーターフロントのカウンターもまた追加され、もう1回ならガダーラの効果も使えるようになった。

この状況でドローした2枚のカードは……よし。見えた！

「永続魔法、怪獣の出現記録を発動！このカードは1ターンに1度場の壊獣を破壊し、別の壊獣に入れ替えることができる！僕はこのガ

ダーラを入れ替え、この怪獣を僕の場に呼び出す！今こそ目覚めろ、ドゴラン！」

ガダーラの体が風に消え、入れ替わりに全身を紅蓮の炎に染め上げた巨竜が雄叫びを上げる。その姿はまさに壊獣の王と呼ぶにふさわしいほどの威厳に溢れていて、まるでこのデュエルがここで終わることを暗示しているようでもあった。

怒炎壊獣ドゴラン 攻3000

KYOUTOUウオーターフロント(3)↓(4)

「攻撃力3000か。だがたとえサイレントブーツに攻撃したところで、まだ俺のライフは余裕で残るな！」

「こんなもんじゃ終わらせない！ドゴランの効果、覆滅を発動！壊獣カウンター3つをコストに、相手フィールドのモンスターをすべて破壊する！」

「その効果を使ってくる、だと!?!」

ケルトの驚きをよそに、ドゴランの全身が自らの熱で真紅に輝く。ほんのわずかな溜めの後で大きく身を逸らし、あらゆるものを焼き尽くすまで決して消えない終焉の焰をその口から吐き出した。破壊の熱量に飲み込まれ、サイレントブーツとダステイローブが燃えカスひとつ残らず完全にこの世から消滅する。やがて炎を吐き終え、大きく肩で息をするドゴランの姿のみがフィールドにはただ残っていた。

KYOUTOUウオーターフロント(4)↓(1)↓(4)

「俺のモンスター2体と妖刀竹光が墓地に送られたことで、実質ノーコストでの発動ってわけか。だがな、俺はここで墓地に送られた妖刀竹光のさらなる効果を発動！このカードがフィールドから墓地に送られたことで、デッキから竹光を1枚サーチする。俺が手札に加えるのは通常魔法、黄金色の竹光だ！」

黄金色の竹光……たしか竹光が存在するときのみ発動できる、カードを2枚ノーコストでドローする強力なドローソースだったはずだ。なるほど、このターンを耐えきればケルトの手札にはさつきバウンスした折れ竹光のカードがある、次のターンでそれをドゴランに装備すればそのコンボでさらにドローができるという訳か。

確かにこの状況では最善のサーチだろう。それに、ドゴランには強力な効果の代償として自らの効果を使ったターンに攻撃ができないというデメリットがある。それを踏まえれば、次のターンまで生き残る目は十分にあると踏んでのことだろう。

「だけでもまだ、まだだ！魔法カード、アドバンスドローを発動！自分フィールドのレベル8以上のモンスターを墓地に送り、2枚ドロースる！」

もし次のターンを回すようなことがあれば、確実にケルトは僕にとどめを刺すだろう。ケルトに続く道を見事に焼け野原にしてくれたドゴランに心の中で礼を言いつつさらに次のカードを、このターンでなんととしても勝利を掴むためのカードを引く。

「墓地に存在する、妨げられた壊獣の眠りの効果を発動。このカードをゲームから除外して、テツキから最後のサンダー・ザ・キングをサーチする。そして魔法カード、埋葬されし生け贄を発動！僕の墓地のドゴランとケルトの墓地のダステイローブをゲームから除外して、手札から最上級モンスターをリリースなしで通常召喚する！今こそフィールドを支配しろ、サンダー・ザ・キング！」

いつかのダーク・バルター戦ののように、フィールドを睥睨する蛇のような体をした機械の壊獣。今回もフィニッシュャーになるのは、このカードこそがふさわしいだろう。

雷撃壊獣サンダー・ザ・キング 攻3300

「魔法カード、一騎加勢を発動。このカードの効果を受けてサンダー・ザ・キングの攻撃力は、ターンの間1500ポイントアップする」

雷撃壊獣サンダー・ザ・キング 攻3300↓4800

「だが俺の墓地には……ああいや、クソが！」

「そう、僕のダイレクトアタックに反応してモンスターとして蘇るトランプカード、シャドーベイルがいる。そんなことは百も承知さ、だから僕はサンダー・ザ・キングの固有能力、帯電を発動！」

KYOUTOUウォーターフロント(4)↓(1)

相手フィールドにモンスターがいないから帯電の3回攻撃は意味がない。だけどこの力をメインフェイズのうちに発動しておけば、バ

トルフェイズにしか発動できないシャドーベイルの蘇生効果はもう使えなくなる。

「このデュエル、僕の勝ちだ！サンダー・ザ・キング、ダイレクトアタック！」

3つの首が雷撃のブレスを放ち、空気がその衝撃に震える。ドゴラの起こす炎の嵐とはまた違った雷の爆発が、その身を守るべきカードを封じられたケルトの体を吹き飛ばした。

雷撃壊獣サンダー・ザ・キング 攻4800↓ケルト（直接攻撃）

ケルト LP4500↓0

「うう……」

「ケルト！」

デュエルが終了し、最後の攻撃で吹き飛んで後ろの壁に激突したときりピクリとも動かないケルトのもとへ走る。息も絶え絶えといった様子で僕の呼びかけに顔を上げるケルトの目にもはや生氣はほとんど残っていないかったが、さっきまでの狂気もまたきれいに消えていた。

苦しそうにしながらもどうかにかにやりと笑って見せ、自力で起き上がろうとしてその場に膝をつく。慌てて肩を支えようと、かすかな声で言葉を発した。

「……よう。よくやったな、やるじゃねえか……」

「そんな、無理にしゃべらなくていいから！」

「いや。どうせもう長生きはしたしな、今更後悔はねえよ。お前のおかげで正気にも戻れたし、何ひとつ悔いはねえさ」

「そんな……！」

ケルトの体が、うすぼんやりと発光し始める。ゆっくりと、その全身が光の粒子になって消えていきつつあるのだ。その様子をちらりと見降ろし、ケルトが最後の言葉を残す。

「いいな、なんでもいいから生き延びろ。気にすんなつつてんのにそんなにお前が気に病むんならもう俺は知ったこっちゃねえが、だっ

たら俺の最後の頼みぐらい聞け。いいな、絶対生き残れ。俺の分までしつかり生きろよ。おら、返事しろ返事」

「う、うん……約束する、必ず僕は生きて帰る。元の世界に戻るって」「よし。あばよ……」

「ケルト……」

その言葉を最後に、ケルトの姿が消えていく。一緒にいたのはほんの短い間だけだったけれど、心にはぼつかりと穴が開いてしまったように、どれだけここ数日彼に依存していたのかが痛感できる。

そのままどうするでもなく立ち尽くしていると、やがてパチ、パチ、パチ、とゆつくりと手を叩く音が聞こえてきた。その方向へ視線をやると、その主は霸王……やがて霸王が手を叩くのをやめて立ち上がり、ここに来て初めて言葉を発した。

「いい余興だった。これから褒美として、この霸王が直々に相手してやろう」

それを聞いて、思わず自分の耳を疑った。

言葉の内容にはない。それは最初から聞かされていたし、それを忘れていたわけではないからだ。でも今の声、あの声には聴き覚えがある。それは、僕がこの2年間毎日のように顔を突き合わせていた相手の声。この世界にいるはずのない、でも疑いようのないあの声。

「十代……?」

その言葉に返答をしてくれるものはなく、かわりにむなしく風だけが吹く。やがて闘技場の入り口が開き、そこから霸王が入ってきた。

## ターン98 蹂躪王と荒廃のHERO

霸王が1歩、また1歩と歩を進める。やがて僕の正面で立ち止まり、これまで影に覆われていたその顔が明らかになる。目の色は黄色と、僕の知る彼のそれとは違う。それに彼は、あんな冷たい全てを見下すような目をしたことはなかった……いや違う、僕はあんな顔をした彼を見たことがある。正確には夢で、だが。だから断言できる、それに親友の顔なんて見間違えようがない。

「やつぱり……十代!」

なぜ十代がこの世界に来ているのか。その恰好はなんなのか。色々と聞きたいことが頭の中でごちゃ混ぜになり、その名前を呼ぶだけで精一杯だった。だが霸王、いや十代は僕の叫びに耳を貸さず、それどころか表情ひとつ変えることなくその鎧に付いた回転式デュエルディスクとでもいうべき禍々しい機械を起動させる。そして口を開くと、これまた十代の声から冷酷な声音が発せられる。

「貴様ら。それを片付けておけ」

それ、と言いなながら霸王が指差したのは、主を失いその場に転がったままのケルトのデュエルディスクとローブだ。すると慌てて走ってきた何匹かの悪魔がそれを抱え上げ、後ろの門を通って運び出していった。

「片付けるって……どこにやる気なのさ!」

「どうやらこの人間は、ここに來るとき周りもよく見ていなかったようだな」

僕の質問に、真上からベージの声が霸王の代わりに答える。そちらを睨みつけるとわざとらしくおお怖い、と震えて見せた後、教えるのが楽しくてしようがないといった様子でケルトの形見が運ばれていった方を手で示した。

「それじゃあイチから話すとだな、この闘技場のあっち側は崖になっているんだよ。それも下まで50メートルはある断崖絶壁、おまけに底には馬鹿みたいに深い急流が流れているせいで俺たち悪魔でも無策で突っ込んだらただじゃあ済まないほどのな!」



先ほどの、闘技場の司会者としてのわざとらしい敬語はすっかり鳴りを潜め、恐らくこちらが素の性格なのであろう口調で意気揚々と喋るベージ。それは別にどうでもいいのだが、その内容は聞き流すわけにはいかなかった。そこまで聞けば、最後まで聞かずともその先は予想できる。

「それじゃあ、ケルトの道具は……」

「今頃は魚の餌だろうなあ！それとも、海竜にでも食われたか？」

「この……！」

「茶番はもういいだろう。貴様も構えろ、この霸王が直々に相手してやる」

ついカツとなってベージに突つかかかっていこうとした僕の背に、霸王の言葉が冷たい氷の刃のように突き刺さる。そうだ、今はあの雑魚を相手にしている場合じゃない。

ドクン、と胸の奥で何かが身じろぎするのを感じた。その正体はわかっている。この霸王の持つ、こうして向かい合っているだけでもわかる恐るべき力に僕の心の闇が反応しているのだ。戦え、倒せ、そう何度も繰り返し求め続ける声が聞こえてくる。

そしてそれと同時に目の前で消えていったケルトに対するやりきれない思いや悲しみが次第に退いていき、その代わりに僕の心を戦闘への高揚感が満たしていく。後ろ向きな感情は、戦うためにはふさわしくないからだ。効率よく敵を圧倒するためには、僕の感情すら塗り潰され書き換えられていく。

「くっ……！」

みるみる高まる衝動を感じながら、ケルトの最後の願いを思い出す。あの時ケルトは消える直前、僕に生き残れと言った。それはつまり、あの瞬間にケルトは正気に戻れたということだ。まるで、斎王を倒したらその体に取りついてた破滅の光が消えていったあの時のように。つまり、今回のあの隕石による赤い光が破滅の光と関係している……？いや、そう考えるにはいくらなんでもまだ少し早いだろう。だがあの時のように、洗脳された相手を倒せば正気に戻せるのはまず間違いないと見ていいはずだ。

……この思考も、本当は誰のものなのかわかったものじゃない。この僕『遊野清明』が考え付いた希望の光なのか、それとも何でもいからただデュエルすることだけを求める破壊魔の『僕』が、僕から躊躇いを消すためにでっち上げた出まかせの方便なのか。

だけどどちらにせよ、僕はこの誘いに乗ることを決めた。斎王をはじめとする光の結社のことを思えば実際分の悪い賭けでもないし、そもそもここでこのデュエルを受けなければこの闘技場から出ることは不可能だろう。自力で逃げ出すことも精霊の力を借りることもできないのなら、目の前の霸王を元の遊城十代に戻して扉を開かせるほかにできる事はなさそうだ。

「勝負だ、十代！…こんなところで会うとは思わなかったけどね、それじゃあデュエルと洒落込もう！」

「十代？我が名は霸王。それがこの世界を統べる者の名、そして今から貴様を永劫の闇に突き落とす者の名だ」

「……あ、そう。ふざけたことばっか言っただけで、アカデミアに帰るよ！」

「デュエル！」

先攻はまたも僕。このデツキに先攻はとことん向いていないが、こうなつた以上やるしかない。

ただ心配なのは、僕のデュエルディスクだ。先ほどのケルト戦が始まった時からすでに怪しかったが、あのデュエルでの衝撃のせいですます不調がひどくなってしまったらしい。ディスクの中心に位置する青い球体は不規則に点滅を繰り返し、耳を澄ませば先ほどよりひどくなつた異音が断続的に聞こえてくる。

そういえば、先ほどのデュエルではちよいちよいヤジを飛ばしてきた観客も今は大人しい。それだけ、霸王に期待しているのだろう。愚かにも霸王軍に敵対した僕と言う贅を、自らのトップである霸王が完膚無きまでに蹂躪する様を一瞬たりとも見過ごすまいとしているのだろう。

「アウエー上等、やれることをやるだけ、か。カードを2枚セットしてターンエンド」

「ドロ。永続魔法、守護神の宝札を発動。手札5枚を捨てることでカードを2枚ドロする。E・HERO エレメンタルヒーロー クレイマンを召喚」

E・HERO クレイマン 攻800

やはり、と言うべきか。何度も十代が……この『霸王』ではない、僕の知る『遊城十代』が壁として融合素材としてそして時にはアタッカーとして愛用してきた、大地の力を持つHERO。本当に、このモンスターをまさかこの世界で見ることになるとは思わなかった。

「バトルだ。クレイマンでダイレクトアタック、クレイ・ナックル！」  
巨体が闘技場の大地を踏みしめて動き、重い拳が無防備な僕に叩き込まれる。

E・HERO クレイマン 攻800↓清明（直接攻撃）

清明 LP4000↓3200

「この程度のダメージで……！」

「だろうな。この程度で倒れるようでは、とてもこの俺の相手は務まらないぞ」

余裕ぶつこいてはいるが、今の霸王の攻撃はどう見てもミスだ。確かに効いたことは効いたけど、致命傷には程遠い800ダメージのためにはわざわざこちらのリリース先を呼び出してくれたんだから、これはむしろ感謝してもいいレベルだろう。

だが、そんなことを考えていられるのもそこまでだった。攻撃を終えて霸王のフィールドに帰還したクレイマンの姿が光に包まれ、足元から消えていったのだ。

「え!?!」

「メイン2に魔法発動、馬の骨の対価を発動した。これにより俺のフィールドから通常モンスター1体を墓地に送り、カードを2枚ドロする。カードを伏せ、ターンエンドだ」

「墓地に送り……またフィールドが空に……！」

最初から、全て計算づくだったってわけか。たとえクレイマンの攻撃力であっても僕の間ががら空きな以上ダイレクトアタックは可能だし、攻撃が終われば用済みどころかむしろこちらの起点になるからさっさと墓地に放りこむ。確かにこちらの手の内が割れている以上

最も効率のいい、リスクを最小限に抑えつつ最大限のダメージを出せる動きだ。しかも守護神の宝札によるたった2枚のドロワーだけでピンポイントにクレイマンと馬の骨の対価を引くあたり、引きの強さは十代のころからまるで変わっていない。

こりやあ、ひどい相手にぶつかつたものだ。とてもじゃないが一筋縄では行きそうにない。

清明 LP3200 手札：3

モンスター：なし

魔法・罨：2（伏せ）

霸王 LP4000 手札：2

モンスター：なし

魔法・罨：守護神の宝札

1（伏せ）

「僕のターン、ドロワー！」

霸王はリリースを警戒してモンスターを残さない戦術をしている……逆に言えば、先ほどの埋葬されし生け贄のように手札の壊獣を自身の効果に頼らず場に出すためのカードを引けば、モンスターのいない霸王にはダイレクトアタックが直撃する。

の、だが。駄目だ、この手札だとまだ動けない、今欲しいのは防衛のカードじゃなくて反撃のカードなのに。

「……さらにカードを1枚セットして、ターンエンド」

「俺のターン。この瞬間守護神の宝札のさらなる効果が適用され、このカードが存在する限り俺が通常のドロワーで引く枚数は2枚となる」先ほどのドロワーと合わせ、霸王の手札は既に3枚。つい先ほど5枚もの手札を捨てたことを考えると、信じられないほどの枚数だ。

「来い、バーストレイディ。そのまま攻撃しろ、バースト・ファイヤー！」  
「このカードはまだ……ぐわっ！」

バーストレイディの攻撃力は1200。クレイマンよりは上だが、いくらなんでもこの攻撃に対しこのカードを使うのはもったいなさすぎる。

E・HERO バーストレイディ 攻1200↓清明（直接攻撃）

清明 LP 3200 ↓ 2000

「ぐっ……」

自分で通すと決めた攻撃とはいえ、やはり食らうと結構痛い。服の端に火が燃え移ったのをみ消す僕を見て、霸王が心の底から馬鹿にするようにため息を漏らした。

「随分期待外れな相手だな。ジム・クロコダイル・クツクとかいったか。奴の方が貴様より遥かに楽しめた」

「ジム!? どういうこと、なんでジムの名前が……!」

さすがに今のは聞き過ぎせず、慌てて問い詰める。僕の知る限り十代とジムの間に直接の対決はなかったはずだから、もし今の言葉が事実だとすればそれはつまり、どういう経緯かは知らないがジムがこの霸王を相手にしたということになる。そして、今この場にいるのが霸王ということとはつまり、ジムは……。

「よ、よくもー!」

「だったらどうした? カードを1枚伏せてターンエンドだ。さあ、貴様なりの抵抗を少しは見せてみろ」

清明 LP 2000 手札 : 3

モンスター : なし

魔法・罠 : 3 (伏せ)

霸王 LP 4000 手札 : 2

モンスター : なし

魔法・罠 : 守護神の宝札

2 (伏せ)

「僕のターン、ドロー!」

今の告白を受け、僕の内部でまた少し闇が増える。衝撃も悲しみもすべて燃料とし、怒りと闘志だけがただ高まっていく。もはや僕のライフは残り半分……だがそれすらも、いいハンデだと思えるように思考が書き換えられていく。デュエル前にも同じことが起きたが、重要なのは怯まずに相手に食らいつくこと。ここで弱気な思考は、ただ勝負の邪魔でしかない。

「スタンバイフェイズにトラップ発動、デストラクト・ポーション。俺

のフィールドのバーストレディを破壊し、その攻撃力分ライフを回復する」

バーストレディが苦悶の表情を浮かべ、次の瞬間その体が粉々に砕けて消える。これでまたリリース要因が消えた……けど、このカードさえあれば。

霸王 LP4000↓5200

「やっと来たの？遅い遅い、何やってんのさ。魔法カード、七星の宝刀を発動！手札からレベル7モンスター<sup>ディアラント</sup>の粘糸壊獣クモグスを除外し、カードを2枚ドロウする。そして装備魔法、<sup>ディメンション</sup> D・D<sup>リバイバル</sup>を発動。手札を1枚捨てることでゲームから除外されているモンスターを特殊召喚し、さらにこのカードを装備する。クモグスを特殊召喚！」

空中高くから風切り音とともに大蜘蛛の壊獣が落下し、8本の足を使い着地の衝撃を分散させる。さあ、ここからは僕のターンだ。あつんと澄ました嫌味な顔に、ジムの分まで一撃叩き込んでやる。

粘糸壊獣クモグス 攻2400

「いくら回復したところで、クモグスの攻撃力はその数値より上！バトル、クモグスでダイレクトアタック！」

粘糸壊獣クモグス 攻2400↓霸王（直接攻撃）

霸王 LP5200↓2800

「どうだ！」

「温いな。所詮この程度か」

クモグスの一撃をまともに受けても、顔色一つ変えない霸王。張りあいはないが、こちらが有利なことに変わりはないので気にしない。さすがに、今の攻撃だけで正気に戻るだなんて都合のいい展開は最初から期待してなかったし。

「今のうちに言っつてな。ターンエンド」

「俺のターン、守護神の宝札により2枚ドロウ。魔法カード、闇の量産工場を発動。このカードは墓地の通常モンスターを2体選択し、そのカードを手札に加える。クレイマンとバーストレディを回収し、ダーク・フュージョンを発動する」

「ダーク……フュージョン……?」

「そうだ。手札及びフィールド上のモンスターを素材とし、悪魔族の融合モンスターを融合召喚する」

クレイマンとバーストレディの2体が宙に浮き、上空に生まれた怪しげな黒い渦の中に飲み込まれて混じり合う。通常の融合ならば、あの2体の組み合わせを指定しているのはランパートガンナーだ。だけど霸王は今、悪魔族の融合モンスターと言った。一体、どんなモンスターが目を覚ますというんだか。

「来い、<sup>イービルヒーロー</sup> E—HERO ヘル・スナイパー!」

そして僕がその黒い渦を仰ぎ見た瞬間に上空の暗雲を貫いて、紅色の邪悪なHEROが地上に降り立った。素材が同じだけあって女性型モンスター、右腕が巨大な銃になっているなどランパートガンナーに似た部分も存在するが、それでもあれは十代のモンスターではなく、霸王のモンスターだ。なまじ類似点があるだけに、余計にその思いが強くなる。

E—HERO ヘル・スナイパー 守2500

「イービルヒーロー……? だけど、ようやく特殊召喚してくれたね。この瞬間を待ってたんだ、リバースカードオープン! 速攻魔法、終焉の地! 相手がモンスターを特殊召喚した時に、デッキからフィールド魔法を発動する…… KYOUTOUウォーターフロント、発動だ! そして終焉の地のカードが発動後フィールドから墓地に送られたことで、このカードには壊獣カウンターが乗せられる」

KYOUTOUウォーターフロント (0) ↓ (1)

ウォーターフロントが発動され、このデッキもようやくエンジンが回り始めてきた。このカードの力は霸王も知っているはずだが、その表情は依然としてピクリとも動かない。

「ターンエンドだ」

清明 LP2000 手札:2

モンスター: 粘糸壊獣クモグス (攻・DDR)

魔法・罨: D・D・R (クモグス)

2 (伏せ)

場：KYOUTOUウオーターフロント（1）

霸王 LP2800 手札：2

モンスター：E—HERO ヘル・スナイパー（守）

魔法・罠：守護神の宝札

2（伏せ）

「僕のターン！きて……」

状況を整理しよう。まず、クモグスの攻撃力ではヘル・スナイパーの守備力を越えられない。僕の手札には怒炎壊獣ドゴランのカードがあるからこれでリリースすることはできるけれど、それをやったところでクモグスの攻撃力2400ではドゴランの3000に勝てないからやる意味がない。この伏せカードを使えば話は変わってくるけれど、それはやめておこう。もっと面白い手を思いついた。

「そうさ、このカードがあれば問題ないね。魔法カード、妨げられた壊獣の眠りを発動！フィールド全てのモンスターを破壊し、互いのフィールドに壊獣を攻撃表示で特殊召喚する！」

クモグスの姿が消えていき、それと同時に装備されていたD・D・Rもまた墓地に送られる。だが、ヘル・スナイパーの姿は消えない。フィールドに留まり続け、冷たい銃口をこちらに真っ直ぐ向けている。

KYOUTOUウオーターフロント（1）↓（4）

「眠りのカードが効かない？」

「無駄だ。ヘル・スナイパーは、魔法の効果によっては破壊されない効果を持つ」

「そんなピンポイント耐性を……！だけどクモグスが破壊されたことで、リクルート効果の条件は満たした。さあ出番だジズキエル、敵は眼前ラディアンだ！」

僕のフィールドにジズキエル、霸王のフィールドにラディアンの姿が同時に現れる。ヘル・スナイパーを今ので破壊できなかったのは計算外だけど、まだ手はある。流れは僕の方にあるはずだ。

壊星壊獣ジズキエル 攻3300

多次元壊獣ラディアン 攻2800



「さらにリバーカードオープン、スキル・サクセサー！このカードはモンスターへの攻撃力をこのターンの間400ポイントアップさせる。僕はこの効果をジズキエルに対して発動……そしてこの瞬間にジズキエルの特殊能力、神鏡を発動！壊獣カウンター3つをコストとしてカード1枚を対象を取る効果を無効にし、さらにカード1枚を破壊する！僕が破壊するのは覇王、お前のヘル・スナイパーだ！魔法カードに耐性があるなら、モンスター効果で破壊するまでさ！」

KYOUTOUウオーターフロント(4) ↓(1) ↓(2)

ジズキエルの表面に一瞬鏡のような光沢が走り、表になったスキル・サクセサーから放たれた光線が反射され別の方向に飛んでいく。その先にいたヘル・スナイパーが、回避動作すら取れずその光に巻き込まれた。

「どうだ！」

「墓地からトラップ発動、スキル・プリズナー。このカードは墓地から除外することで自分フィールドのカード1枚を選択し、このターンの選んだカードを対象としたモンスター効果を無効とする。これによりヘル・スナイパーを対象としたジズキエルの効果は無効となった」

「壊獣カウンターは……だめだ、2つじゃもう1回神鏡の能力は使えないか……」

壊獣壊獣ジズキエル 攻3300 ↓3700

ジズキエルの効果そのものを止められたことで、スキル・サクセサーの効果もジズキエルをわずかながら強化する。あのスキル・プリズナーのカードは、最初に守護神の宝札で捨てた5枚のうちの1枚だったのだろう。結局この効果でも倒すことのできなかったヘル・スナイパーが、相変わらず片膝をついた姿勢で僕に対して狙いを定め続ける。まさか融合までしておいてできることが魔法破壊への耐性だけなんてことがあるはずもないし、恐らくあのカードにはさらなる効果があるのだろう。だけど、ここでラディアンを残しておいたら返しの覇王のターンで特殊能力である分身を使用、貴重な壊獣カウンターを消費させられるうえに攻撃力2800ものトークンを出されてし

まう。ならば、どちらかに攻撃するべきか？

迷いはほんの数秒だった。そして一度道を選んだ以上、もう後悔なんてしてられない。

「頼むよ、ジズキエル！ラディアンに攻撃！」

金属製の壊獣が雄叫びを上げ、腕の砲から極太の光線を叩き込む。その衝撃は霸王にも届いたはずだが、やはりその表情は揺るがない。

壊獣壊獣ジズキエル 攻3700↓多次元壊獣ラディアン 攻2800（破壊）

霸王 LP2800↓1900

KYOUTOUウオーターフロント（2）↓（3）

「メイン2にウオーターフロントの効果を発動、壊獣カウンターが3つ以上存在することでデッキから2枚目のラディアンをサーチする。これでターンエンド」

「この程度か？ならばスタンバイフェイズ、ヘル・スナイパーのモンスター効果発動！ヘルショット！」

これまで片膝をついたまま沈黙を守ってきたヘル・スナイパーが、ついに動き出す。構えた右腕に闇のエネルギーが集まり、光弾となつて放たれたそれがジズキエルの横をすり抜け僕に直接襲い掛かる。

清明 LP2000↓1000

「ヘル・スナイパーは表側守備表示で存在するとき、自身のスタンバイフェイズごとに1000ポイントのダメージを相手プレイヤーに与える」

「ま、まだまだ……」

「まだ俺のターンは続いているぞ。魔法カード、戦士の生還を発動。俺の墓地から戦士族モンスター、バーストレディを回収する」

戦士の生還、あれは墓地の戦士族1体のみを対象とするカードのはず。壊獣カウンターは3つあるし、ここでジズキエルの効果を使うべきだろうか。けどすでに効果を使った以上、ヘル・スナイパーが次にあの凶弾を放つのは次の霸王のスタンバイフェイズ。そんな相手を今更、このタイミングで破壊する価値があるだろうか。

いや、効果の出し惜しみはよくないか。それに、ヘル・スナイパー

も融合ヒーロー。ならば墓地に送ってしまったえば、融合ヒーローの性としてごく一部の例外を除けばもう蘇生も帰還もできないはずだ。

「ジズキエルの特異能力、神鏡！戦士の生還を無効にし、ヘル・スナイパーを破壊する！」

霸王が発動した戦士の生還のカードに先ほどジズキエルが身にまとったような光沢が走り、そこから放たれた光が今度こそヘル・スナイパーを撃ちぬき消滅させる。まったく、随分てこずらせたもんだ。

KYOUTOUウオーターフロント(3)↓(0)↓(2)

場ががら空きになり、サルベージも失敗した霸王。だがその口元には薄い、嘲りを隠そうともしない笑みが浮かんでいた。

「礼を言うぞ、このタイミングでその効果を使ってくれて」

「え……？」

囧。その言葉が脳裏をよぎる……が、もう手遅れだ。

「速攻魔法、コズミック・サイクロンを発動。1000ライフを払うことで、フィールドの魔法または罠を1枚除外する。俺が除外するのは当然、KYOUTOUウオーターフロントだ」

「しまったー！」

ウオーターフロントは自身の壊獣カウンターを使用しての破壊耐性があり、さらに対象を取る効果に対しては牽制のできたジズキエルがいる。そのおかげで油断していたけど、霸王の狙いは最初からウオーターフロント一択。

こうして壊獣カウンターを乗せるカードがなくなってしまった以上、もはやジズキエルもただ攻撃力が高いだけのバニラモンスターに過ぎない。そして攻撃力だけで安心できるほど、この男は甘くない。

霸王 LP1900↓900

「やってくれるじゃん……！」

「さらにトラップ発動、ヒーロー・ブラスト。俺の墓地から通常モンスターのE・HEROを1体回収する。俺が手札に戻すのはクレイマンだ。この後でさらに別の効果があるが、今はその条件を満たしていないので使えないな」

この状況でクレイマンを手札に戻すだなんて、まさか壁にするつも

りでもあるまい。また手札にあるのだろうか、融合召喚を行うためのカードが。その思考を裏付けるように、先ほども見たあのカードを再び霸王が発動させる。

「魔法発動、ダーク・フュージョン。手札のスパークマンと、クレイマンの2体を融合させる!」

再び空に暗雲よりもさらに暗い渦が生じ、その中に2体のモンスターが吸い込まれていく。あの組み合わせを指定するのは通常ならサンダー・ジャイアント、それが今度はどう生まれ変わるといえるのか。

その疑問に答えるかのごとく、そのサンダー・ジャイアントと瓜二つと言つてもいいほどよく似たシルエットの巨体が渦の中から大地に降り立った。そう、カラーリングは似ても似つかないとはいえシルエットだけならこの2体は意外なほど……ランパートガンナーとヘル・スナイパーの時よりも基となつたヒーローによく似ている。これはもしかして、少しずつ十代としての人格が目覚ましつつある影響……とかだつたりするのだろうか。

「来い、E—HERO ライトニング・ゴーレム!」

E—HERO ライトニング・ゴーレム 攻2400

攻撃力だけで言えば、ジズキエルの方がはるかに上。だけど、霸王がそんなミスするはずがない。

「ライトニング・ゴーレムは1ターンに1度、相手モンスターを破壊する。ボルテック・ボム!」

「ジズキエル!」

ライトニング・ゴーレムが合わせた両掌の間に灰色の球体を作り上げ、それをジズキエルに飛ばす。ジズキエルの全長からすればはるかに小さいそれには、一体どれほどのエネルギーが込められていたのか。食らった箇所を中心に火花やプラズマが走り、ダメージコントロールすら間に合わずに巨体が悶えてその場に崩れ落ちた。

「やれ、ライトニング・ゴーレム。ヘル・ライトニング!」

「まだまだ!トラップ発動、イタクアの暴風!フィールドを暴風が掻き回し、全てのモンスターの表示形式は変更される……!」

E—HERO ライトニング・ゴーレム 攻2400↓守1500

ここでダイレクトアタックを喰らえば終わりだ、これ以上このカードを出し惜しみする理由もない。ライトニング・ゴーレムの巨体でも風の力には抗えず、手について防御姿勢を取る。

「ほう？ならばこのターンは待ってやろう。ターンエンドだ」

清明 LP1000 手札：3

モンスター：なし

魔法・罫：なし

霸王 LP900 手札：0

モンスター：E—HERO ライトニング・ゴーレム(守)

魔法・罫：守護神の宝札

1 (伏せ)

「僕のターン、ドロロー！よし、これならギリギリ行ける！永続魔法、怪獣の出現記録を発動。そしてライトニング・ゴーレムをリリースして霸王、お前のフィールドに怒炎壊獣ドゴランを特殊召喚する。さらにその壊獣の存在に反応して、手札に眠る多次元壊獣ラディアンを僕のフィールドに攻撃表示で特殊召喚！」

ライトニング・ゴーレムの姿をかき消し、再びフィールドに君臨する2体の壊獣。これ以上は流石に余裕がない、なんとかこのターンで終わらせてやる……！

怒炎壊獣ドゴラン 攻3000

多次元壊獣ラディアン 攻2800

「怪獣の出現記録は、手札か墓地から壊獣が特殊召喚されるたびに壊獣カウンターが乗せられる。この2つのカウンターを消費してラディアンの特異能力、分身を発動！攻撃力2800、ラディアントーカーを僕のフィールドに特殊召喚する！」

怪獣の出現記録 (0) ↓ (2) ↓ (0)

ラディアントーカー 攻2800

空間を突き破って腕を出し、そこからにゆるりとフィールドに現れるラディアンがそっくりさん。ここでさらに念を入れて壊獣の出現記録の効果を使い、あのガダラをもっと攻撃力の低いガメシエルあたりに入れ替える手もある。だけど、気になるのは霸王のあの伏せ

カード……あれは確か、かなり最初のうちから伏せられていたカードのはずだ。何かはわからないが下手に動いて発動条件を満たしたりでもしたらまずいし、いけないことをわざわざする必要はまあ、ないだろう。

「バトル、ラディアントークンでドゴランに攻撃……と同時にこのダメージステップ、墓地からスキル・サクセサーの更なる効果を発動。このカードを除外し、モンスター1体の攻撃力を800ポイントアップさせる！行け、ラディアントークン！」

ラディアントークン 攻2800↓3600↓怒炎壊獣ドゴラン  
攻3000（破壊）

霸王 LP900↓300

「ラディアンで追撃、これで終わりだ！」

ラディアンがその拳を振り上げ、眼下の霸王に叩き付ける。派手な激突音とともに砂煙が発生し、視界が完全に塞がれてしまったが、でもこれで全てにけりがつく。

そしてその砂煙の向こうから、霸王の声が闘技場全体に響き渡った。

「墓地からネクロ・ガードナーの効果発動。このカードを除外し、攻撃を無効とする」

「なっ!?」

次第に視界が晴れてくる。そこで僕が見た光景は、半透明の戦士がその身を盾にしてラディアンの拳から霸王を庇っているところだった。

「どうした？まだ何かすることがあるならば、気が済むまですればいい。その全てを打ち砕いてくれる」

「ターン……エンド……」

ネクロ・ガードナー。あれもまた、最初に守護神の宝札で墓地に送ったカードの1枚なのだろう。あと一撃、あと一撃で終わるはずなのに、残ったリソースすべてを使い切ってもなお、その一撃が届かない。

「俺のターン。トラップ発動、無謀な欲張り。カードを2枚引く代わ

り、その後2ターンの間俺のドローフエイズはスキップされる。そして墓地からグローアップ・バルブの効果を発動。デツキトップを墓地に送り、このカードをデュエル中1度だけ蘇生させる」

「無謀な欲張り……！」

そりや守護神の宝札で毎ターン2枚ドロォできるなら、わざわざデメリットのキツイ無謀な欲張りなんて発動を控えるわけだ。だけど、そんな考察はどうでもいい。

それより何より問題なのは前の僕のターン、霸王のフィールドにも墓地にも防御札はネクロ・ガードナー1枚しか存在していなかった、その点だ。あの時に躊躇わず壊獣の出現記録で霸王のドゴランをガダーラなりガメシエルなりクモグスなりに入れ替えておきさえすれば、スキル・サクセサー込みの攻撃で霸王のライフを0にすることができていたはずだ。僕のミスのせいで、最後の最後に詰めの一手を読み間違えたせいで、このデュエルを終わらせることができなかった。何が一撃が届かない、だ。デツキは僕に十分応えてくれていた、その力を持って余したあげく自分から勝利を遠ざけたのは、僕以外の誰でもない……！

グローアップ・バルブ 守100

「グローアップ・バルブをリリースし、E―HERO マリシヤス・エツジをアドバンス召喚。このカードはレベル7だが、相手フィールドにモンスターが存在するならばリリース1体でアドバンス召喚できる」

エツジの名を持つものの、全身を黄金の鎧に包んだヒーローである本家エツジマンとは真逆のスマートな体に長い鉤爪を持つ悪のヒーローが霸王の場に召喚される。僕の中にはそのエツジマンとは似ても似つかぬ姿がヘル・スナイパー、ライトニング・ゴレムと闇堕ちとはいえ順調に本家に近づきつつあった流れの中で、また十代が遠ざかってしまった象徴であるかのようにように映った。

E―HERO マリシヤス・エツジ 攻2600

「この俺との勝負から逃げ出さなかった褒美として、貴様にはジムとかいう男と同じやり方でとどめを刺してやろう」

「え？」

そう言う霸王の手札にある、ここから見るだけでもわかるひととき濃い闇のオーラを放つ1枚のカード。そのカードをかざし、デュエルデスクに叩き付けるようにして発動した。瞬間、そのカードめがけ全てのものが吸い込まれるような力が発生し、その場に全力で踏ん張っていないとまともに立ってられないほどの吸引力に体が持つていかれそうになる。

「な、何なのさもう！」

「見せてやろう！心の闇が作り出した、最強の力の象徴！絶対無敵！究極の力を解き放て！発動せよ！超融合！」

「超……融合……？」

超融合。その名を宣言すると同時に、カードの力がさらに膨れ上がる。この力、この壊獣たちが束になったのと同様、下手すればそれ以上のものを感じる。

そしてその吸い込む力が限界を超えた時、これまで防御姿勢を取って耐えていたラディアントークンが飛ばされて吸われていった。同時にマリシヤス・エツジも飛び上がり、自分からその流れに飲み込まれていく。

「超融合は、俺の手札を1枚捨てて発動する。そして互いのフィールドから融合素材を墓地に送り、その融合モンスターを融合召喚する！」

「僕のフィールドから融合!? そんな無茶苦茶、通るもんか！」

「人のモンスターをリリースして戦う貴様がそれを言うか？ 所詮俺も貴様も同じ穴のムジナ、その間に違いがあるとすればそれはひとつ。俺はこの世界を統べる者、霸王となることを選択したということだ！俺は俺自身のマリシヤス・エツジと、貴様のレベル6以上の悪魔族モンスター、ラディアントークンを素材として融合召喚！出でよ、E—HERO マリシヤス・デビル！」

マリシヤス・エツジの姿をベースにラディアントークンの力が取り込まれ、その背には漆黒の翼が生える。両腕の鉤爪はさらに深く鋭く長くなり、無駄なパーツは取れてむしろその全体像はよりシャープに



変化していく。闇の炎が最後にその全身をひと撫ですると、後に残ったのは霸王と同じ冷たい目をした悪魔そのものだった。

E—HERO マリシヤス・デビル 攻3500  
「魔法カード、破天荒な風を発動。マリシヤス・デビルの攻守を、さらに1000ポイントアップさせる」

たった1人で戦場に立つHEROを、旋風が包み込む。その風に乗って、マリシヤス・デビルが翼をゆつくりと広げ飛び立った。

E—HERO マリシヤス・デビル 攻3500↓4500 守2100↓3100

「これで終わりだ。マリシヤス・デビルでラディアンに攻撃、エッジ・ストリーム！」

「う、うわあああつ！」

上空から爪を一閃し、闇の刃を飛ばすマリシヤス・デビル。迫りくる敗北の二文字への恐怖からか、ふと気が付けば無意識に自分の左腕を顔の前にかざして少しでも衝撃を和らげようとしていて……その腕の隙間から最後に見えた、霸王の瞳。あの眼を見た時、それまでの予想が確信に変わった。

あの眼に宿る不気味な力、あれは間違いない、破滅の光がこの霸王に何らかの形で関わっている。でも、それが今更わかったところで僕はもう……。

E—HERO マリシヤス・デビル 攻4500↓多次元壊獣ラディアン 攻2800 (破壊)

清明 LP1000↓???

「……え？」

「何？」

僕と霸王の声が同時に発せられる。闇の刃はラディアンの体を貫通しそのままの勢いで僕が構えた右腕に、より正確に言えばそこに取り付けられた僕のデュエルディスクに深々と突き刺さっていた。色々と限界が近かった僕のデュエルディスクだが、この攻撃が決定打

になったらしい。フィールドゾーンはバチバチと激しい点滅を繰り返し、ライフカウンタ―は数字にすらなっていないでたらめな文字を示したまま動こうとしない。

実質的にはこのデュエルが僕の敗北で終わったのは間違いないのだが、デュエルディスプレイのライフ表示が0にならない以上内部処理的にはまだ終わっていない扱いになるらしく、ラディアンとマリシャス・デビルの実体化したソリッドビジョンもまた消えていかない。

「霸王様、ご無事で！」

「おい、早く門を開けろ！」

僕の背後でがやがやと声がある。異常事態を感じ取った観客が、自らの主の無事を確認するためにこちらに押し寄せてこようとしているらしい。だが、その声を聞いて我に返った。僕はまだ生きている、体が消えたりしていない。

そして頭の中で再び蘇る、ケルトの遺言。なんでもいいから、生き延びろ――！

「もしかして……ラディアーン!!」

咄嗟にあることを思いつき、この敵だらけの場において唯一の僕の味方であるラディアンの名を叫ぶ。ラディアンは辛うじて立っているものの、既に虫の息だ。無理もない、普通のデュエルならばとつくの昔に破壊されているほどの攻撃を喰らったのだから。それでも多次元壊獣は僕の意味に応えるため最後の力を振り絞り、ちょうど開いた闘技場の門めがけてその剛腕を叩きつけた。すると鉄の門が跡形もなく吹っ飛び、近くにいた悪魔どももまとめて吹き飛ばされる。派手に地面がえぐれ、またもや土煙が周辺の視界を遮った。

「ぐわーっ！」

「は、霸王様！」

やはり、今のタイミングならケルトの言っていた、モンスターをわざと暴れさせて脱走を図るものを止めるためのシステムも作動していないらしい。少し考えれば当たり前だ、もしそのシステムが生きたままならばあの悪魔どもだってここに入れるとは思えないのだから。恐らく誰かがここに入るために、そのスイッチを切ったのだろう。

「そうと決まれば……ありがとう、ラディアン！」

何でもいいから生き延びる。そのためにはどんな恥だろうとも、まっすぐ胸張って受け止めてやる。たとえそれが、デュエルディスクの故障にかこつけて負け確定な勝負を放り出して逃げ出すような手であつてもだ。この屈辱は必ず利子をつけて返してやるとして、早くしないとこの土煙もすぐに晴れてしまう。今はそれまでになるべく遠くに逃げるんだ。

幸い妨害も受けずどうか外に出ると、目の前にはほんの数メートルのところ一面崖が広がっていた。下を覗き込むと気が遠くなるような距離を隔ててごうごうと轟く水の音がして、最初にベージが言っていた崖の話の思い出す。でたらめに走ってどうにか外に出たと思つたら、一番最悪なルートを選んでしまったらしい。

「も、もう……！」

だけど、今更引き返す時間はない。すでに背後からは、追手の足音やら羽音やらが聞こえ始めている。恐らくこのまま闘技場の縁を周っていけばこの崖以外の場所に出れるのだろうが、そんなことをしていてもあつという間に捕まってしまうだろう。

と、なるともう、残された道はここしかない。まだアドレナリンが体に満ちているせいか、不思議とここで死ぬとは思わなかった。にもかかわらず足を踏み出す勇気が出ないのは、僕に残った人間性の表れだろうか。

「いたぞー！」

「馬鹿な奴だ、よりによつてここに出るとはな」

やはり地の利はあちらにあるようで、早くも外に出た追手が早速僕を見つけたらしくそんな会話が聞こえてくる。

……タイムアップだ。深呼吸して意を決し、助走をつけて崖の端から宙に躍り出る。ほんの一瞬の浮遊感の後、重力に従い猛烈な勢いで体が下に引っ張られた。加速の最中に両手両足を体に引き付けるように縮め、頭を守るように空中で姿勢をできるだけ整える。ちらりと下を見るとぐんぐんと水面が近づいてきていて、最後の瞬間に大きく息を吸い目を閉じた。

次の瞬間、脳を揺さぶるような衝撃をまともに受けて視界が真っ白になった。

## ターン99 蹂躪王と鉄砲水

ふと気が付くと、固い地面の上に寝かされていた。体の上には毛布が掛けられ、すぐ横からは暖かな熱気と共に焚火のパチパチという音が聞こえてくる。

少し体を動かそうとするも、まだうまく手足が動かない。川に飛び込んだせいではぬれの全身はまだ乾ききっておらず、湿った制服が余計に動きを邪魔する。それでもどうにかしようと思っていると、枕元から聞き覚えのある声があった。

「よ。起きたか、久しぶりだな」

「その……声……」

「ああ、動くな動くな。火が近いぞ馬鹿」

静止の声も耳に入らず、軋む体を無理やり持ち上げる。どうにか上体だけ起こし、その辺で拾ったらしい木の枝で焚火をかき回す彼と目が合った。

「……ユーノ」

「おう。ほんつと久しぶりだな」

何か言おうと思ったけど、疲労が溜まっている体にとって焚火の誘惑はあまりにも強すぎた。次第に重くなる体を支えきれず、地面にずるずるとへたり込む。重いまぶたを支えきれなくなった時、再び意識が闇に沈んだ。

「ふー……」

清明が再び眠り込んだのを確認し、深くゆっくりとため息をつくユーノ。今の短い会話だけで無意識のうちにかいていた冷たい汗をぬぐい、近くの岩にもたれかかる。

「なんなんだよ今の……こいつ、こんなプレッシャー強い奴だったか？」

遊野清明。最後にユーノが見た時には、ダークシグナーとなったことにより常人を越える力こそ持っていたものの、そんなものを感じさ

せない良くも悪くもただの少年<sup>ガキ</sup>でしかなかったはずだ。

だが、今の彼はあの時と外見こそ同じではあるが、その中身はまるで違う。全身を包む悲哀や狂気寸前の危うさの作り出す雰囲気はその年にはまるで似合わない独特の威圧感をもたらし、目の光にもどこか影が入りじつと見ているとその中に吸い込まれて消えてしまいそうな錯覚を催す。もはやそれは、少し見ただけでまともな人間ならば本能的に危険を察知するほどの存在になっていた。

そしてポツリと吐き出した、一見、誰に言うでもない独り言にしか聞こえないその言葉。しかしそれに反応するかの如く、地面に落ちた彼の影が揺らめき形を変える。人の形から伸びる、人ならざる影。そのシルエットはまるで、一匹のシャツが丸まっているようにも見える。そしてどこからともなく響く、第三者の声。

『ああ。私達のいないうちに、また面倒事に巻き込まれたようだな。それも、特別厄介なものに』

「待てやコラ、何他人事みたいなこと言ってるんだ。だいたい、なんでお前らがコイツと離れてたんだよ」

突然の声にも驚く様子を見せず、むしろムツとした様子で言葉を返すユーノ。どうやらあまり聞かれたくないところを疲れたらしく、答える声の調子がやや弱くなる。

『それは説明しただろう……ここに飛ばされるときに引き離されてな、まさかマスターより先にこつちと合流するとまでは思わなかったが』

「なーにが合流だ、デツキごと地面に埋まつたところ俺が引っこ抜いただけじゃねえか。にしても、いつの間にか霸王軍まで話進んできたのな。俺が最後に見た時は光の結社編クライマックスだったのに、時の流れは速いねえ」

『マスター、本当になにをやってたんだかな。せつかく寝入ったことだし、少し探ってみるか。少し手伝ってくれ、まず……』

しばらく話が続いたのち、ユーノの影が元の人型に戻る。その本体があらかじめ横に積んであった土を焚火にかぶせて強引に火を消して周りが闇に包まれたところで、呼吸こそ妙に浅いものの清明がぐつ

すり眠りこんでいることを確認して足音を殺しつつ立ち上がる。

そのまま忍び足を維持しながら清明の枕元に立ち、その額に指を当てた。

「これでいいのか？」

『ああ……あ、いや、これは面倒だな。やめよう』

「あん？」

わざわざそれなりに真面目に立ち上がってまで付き合ってるのに、なんだそのオチは、といういら立ちを隠そうともしないドスのきいた声に、慌ててすまなさそうに声が付け加える。

『いや、方法はこれでいいんだがな。思ったよりマスターの精神が抵抗してきて、うまく中が覗けないんだ。たかだか数日でどうやってこんなこと覚えたのかはわからないが、少し荒療治で行くしかないな』  
「荒療治？いいねえ、いい響きだ。よくわからんが俺もやるぜ」

すぐに機嫌を直しノリノリになるユーノに対し、声が少しの間沈黙する。数秒後、いつになく真面目な調子で返事が返ってきた。

『単純で助かる、と言いたいところだがな。昔のよしみで1つ忠告しておくが、それはやめた方がいい。生きて帰れる保証はないぞ』

「あん？待って待て、そもそも何やるつもりなんだよそれ」

『んー……ものすごく雑に説明するとだな、今からマスターの心の中に魂を潜り込ませて記憶を読み取り、それからこうなつた原因を直接、場合によっては力づくでどうにかする。前の世界のように霊体だった時ならまだしも、この世界に来て精霊と同じく実体化しているだろう？下手に肉体から魂を引きはがすとだな、その手の素質がないとうまく帰ってこれなくなることもあるからな』

「ええ、なんだそれ……」

直球な死の宣告に、さすがのユーノもやや困惑する。一時はそれで引き下がるかに見えたが、すぐにまたあることを思いついてぱちんと手を叩く。

「ん、待てよ？そもそも俺自身、コイツに取りつく形で向こうの世界では生きてたんだよな。つてことは、もし失敗して精神がぶつ壊れたりしたら、俺はどうなるんだ？」

『正直予想もつかない……が、2人分の魂から残ったエネルギーをかき集めてマスターを生き返らせたわけだからな。少なくとも、あまりいい影響は出ないだろうな』

それを聞いて恐れるどころか、だったら、と笑って見せるユーノ。「やっぱ俺も行くぜ。どうせ駄目ならとりあえず足掻いて死にたいしな」

『……もう勝手にしてくれ。それなら私がサポートするから、メインの動きは任せるからな。その方がむしろやり易い。まずマスターの額に手を当てて、今度は目をつぶってくれ。私がいいというまでな』  
「よしきた」

降ろした手を再び額に当てると、清明が軽く身じろぎする。また寝息が安定したところを見計らって、すつと目を閉じた。

『よし、着いたぞ』

「早っー」

彼が目を開けると、そこはもう別世界。右も左も真っ暗な中、足元にただ1本の光る道が通っていた。

「……これか？」

『そのまま奥に進んでくれ。その先にマスターの……なんと説明したものか、心の核と言うか、自我そのものと言うか、まあとにかく視認できる形でマスターそのものがあるはずだ』

左右と同じく黒く塗りつぶされた空を仰ぎ問いかけると、頭の中に直接声が聞こえる。その声に素直に従い、歩きながらも気になるらしく改めて周りを見渡す。しかしそこには道しるべともなる足元の光以外、本当に何ひとつ見える物がない。確か霸王十代の心の中には大量の鏡、あるいは窓のようなものがびっしりと取り囲んでいる風景があったはずだが、ここで何も見えないのは清明本人が侵入を拒んでいるからだろうか。

そんなとりとめもないことを思い出しながら進んでいくと、やがてうづくまって背を向ける人影が見えてきた。

「おーい」

聞こえない距離ではないはずだが、赤い服に黒髪の少年……清明は



ピクリとも反応しない。仕方なしにユーノがさらに近寄ると、小さな声で何事か呟き続けているのが聞こえてきた。

「約束だから、生き残らなきゃ。絶対元の世界に帰るって僕が言ったんだ。でもその前に、奴を倒す絶対倒す必ず行つてやるから早く立ち上がらなきゃ」

そこまで聞いたところで訳もなく背筋が寒くなり、ぱつと離れて声の聞こえない距離まで後退するユーノ。さすがに引いた、と言った調子で、もう一度漆黒の空に問いかける。

「お、おい……なんかむつちや病んでるけどこれどうなってんだ？こんなキャラだったっけコイツ」

『礼を言うぞ、そこまで近づいてくれたおかげでこっちもだいたいマスターの心が読みやすくなった。で、肝心の心の中だが……これは、なんといかひどいな』

「ひどい？なんだそりゃ」

『元々、マスターの心は外部要因に影響されやすいタイプだった。それはわかるな？』

「あ、ああ。なんとなくわからんでもないぞ」

ユーノの脳裏をよぎったのは、ダークネス吹雪戦や光の結社戦で我を忘れ地縛神の力や破壊の光にあっさり呑み込まれては暴走したりしかけていた清明の姿。後者に関しては彼も人のことを言えた立場ではないのだが、清明の流されやすさ、影響されやすさについては共に過ぎた短い日々だけでも嫌と言うほど思い知っていた。

『まあ、これは私が元々1人分しかなかったエネルギーを蘇生のために2つの魂で分けたわけだから、不安定になるのは仕方ないんだがな』

「……ふむ」

『多分、ここ数日の間に心の闇を無理やり押し広げさせるため色々吹き込まれた結果また揺らいだんだろう。とりあえず、なんとかそのマスターと意志疎通できないか？』

「お、おう。おい、清明！。元気してつか……って、無視かよ」

努めて明るく声をかけるも、まったく反応することなく体育座りで

うづくまつたままの清明。やれやれとため息をつき、近寄ってその二の腕を掴んだ。それでも抵抗しなかったので、思い切り腕を引き上げて強引に立ち上がらせる。そこまでやってようやく、ぼんやりした目で目の前のユーノを認識したらしい。どこか焦点の定まらないぼんやりとした目のまま、のろのろと口を開く。

「あれ、僕……」

「人が呼んだらさっさと返事しろコノヤロ。ほれ、立てるか？」

手を放すと少し体が揺らいだが、そのまま再び座り込むようなことにはならなかった。まだどこかふらふらしている様子を危なっかしそうに眺めながら、もう少し意識をはっきりさせるためさらに話しかける。

「なんか色々あつたんだろうけどな、まあとりあえず無事でよかったなあ」

「無事……無事？僕が？」

「なんだ、普通に返事できるじゃねえか。俺もそうだけど、こいつらも懐かしいんじゃないか？」

そう言い、自身が着ている服のポケットにこれ見よがしに手を突っ込んでみせる。わざと大げさに手を動かし、その様子をぼんやり眼で追っていることを確認してからゆっくりとあるものを掴んで持ち上げてみせた。まだピンと来ていないらしい清明に、その手に握ったものを広げて突きつける。

「お前のデツキだ。なんで無くなったのかは聞いたから文句は言わねえが、もうこんな大事な物手放すんじゃないぞ」

「聞いた……誰に？」

ユーノの何気ない言葉に、ほんの少しだけこれまでより強い反応を見せる清明。だがその目を一瞬よぎった怪しい光に気づかぬまま、問われるがままにあつさりと答えてしまう。

「え？そりやお前、チャクチャルアに決まってるだろ。お前の神さんだぞ、ちゃんと拝んどけよ」

『あつ……』

不穏な気配を感じ取った声が慌てて止めようとするも、時すでに遅

かった。その名を聞いた瞬間、それまでの夢うつつの状態から一転して目を見開き、憑りつかれたような表情でユーノに詰め寄る。

「今すぐそれをこっちに寄越して！早く！」

「はあ？どうしたんだよ急に」

「早く！」

謎の剣幕に押し切られ、よくわからないまま言われるままにデツキを渡しそうになるユーノ。それに待ったをかけたのは、他ならぬ清明本人の言葉だった。

「こんなもの、今すぐ……！」

「やっぱやめた。おいおい、穏やかじゃねえなあ。とりあえず少し落ち着けや」

「ふざけないで！ユーノは知らないんだ、この地縛神は昔、古代ナスカで……」

古代ナスカ。その言葉を聞いただけで、何となく何があったのかを察しとる2人。

『あー……そういうことか。大体察したぞ』

「俺も。でもなあ、もう昔の話だし、第一この神さんのおかげで俺らは今生きてるんだぜ？そこんところもよく考えてだな」

「ふざけないでって言うてるでしょ！もういい、まさかユーノまで5000年前に何が起きたのか知ってて僕に黙ってたなんてね。有難いことにここは僕の心の中らしいけど、わざわざ踏み込んでくるなんていい根性してるじゃない。今の僕はお前らの知ってた僕じゃない、2度と生きて帰れると思うな！」

雑な反応が、さらに怒りを増幅させたらしい。お互いに内心お前のせいだと毒づくユーノと地縛神をよそに激昂して啖呵を切り、デュエルディスクを構える清明。現実世界では壊れて使い物にならなくなっていたはずのデュエルディスクだが、精神世界であるこの場所にその事実は通用しない。

その全身からは本人は気づいているのかいないのか紫色のオーラが揺らめきだし、爆発寸前の感情が辺りに満ちる。それを見てチャクチャルアが、無駄と知りつつ説得を試みる。

『……確かに、私は私の過去についてマスターに何も伝えなかった。ダークシングナーがなんたるか、その根本すら教えなかった。それに關して弁解するつもりはない。だが、私は……』

「もういいぜ。どーせ何言ったって聞きやしねえんだ、だったら一発ぶん殴ってこつちの言うこと聞かせる方が楽でいいってもんよ。せつかくだ、このお前のデッキで相手してやるよ」

「好きにしな。忌々しい悪魔どもが」

「やさぐれてんねえ。そんなじゃ、手加減は抜きでやらせてもらうぜ」

「デュエル！」

精神世界でのデュエル。真つ暗な世界で、清明が暗い笑みを浮かべて挑発するように手招きする。

「先攻はくれてやるよ。かかってきな、ユーノ」

「なんだ、そんなにドローしたいのか？なら遠慮なくいかせてもらうぜ、俺のターン！……ん？」

初期手札である5枚のカードを見て、思わず眉をひそめるユーノ。彼の知る清明のデッキは、彼自身が生前愛用していたシーラカンス軸の【魚族】を中心にメビウス等で脇を固めた水属性ビートであったはず……だが、今の手札には見慣れぬカードが混じっている。

その戸惑いを読み取ったチャクチャルアが、軽く解説する。といっても、すでにデュエルが始まってしまっている以上その説明は極めて簡素なものにとどまったが。

『マスターにも色々あったんだ』

「らしいな。こんなカード、どこで見つけてきたのやら。もうすっかり、このデッキもあいつの色に染まってきてるんだな……まあでもこれも何かの縁だ、あのアホぶっ飛ばすためにお前らの力も貸してもらうぜ。グレイドル・イーグルを召喚！」

清明がこの世界にたどり着くまで愛用していた、彼の見つけた新しい戦い方を象徴するモンスターでもある黄色い鳥。漆黒の空間に舞い上がり、大きな目を悲しげに見開いて元の自らの主をじっと見つめた。

「グレイドル・イーグル……」

「ああ。お前のカードだ。俺は、これでターンエンドするぜ」

頭上を飛ぶイーグルを見上げ、ほんの少し辛そうに目を伏せる清明。だが、その迷いもほんの僅かだった。すぐに顔を上げ、明らかに危険な光を宿したままの目でカードを引く。

「僕のターン！グレイドルの特殊効果は敵に回すと確かに厄介だけど……それが、どうした！グレイドル・イーグルをリリースしてユーノ、お前のフィールドに怪粉壊獣ガダーラを特殊召喚！そして相手フィールドに壊獣が存在することで、手札から怒炎壊獣ドゴランを僕のフィールドに特殊召喚する！」

「何!?!俺のモンスターをトリガーに、最上級モンスターをコストも無しで特殊召喚だあ!?!」

怪粉壊獣ガダーラ 攻2700

怒炎壊獣ドゴラン 攻3000

まったくの意表をついた展開に、ユーノが驚きの声を漏らす。それが期待通りの反応だったらしく、暗い歪んだ笑みが彼の顔に浮かんだ。

そしてその反応にわけもなく苛立ち、嫌味の1つでもかえしてやろうと口を開く。

「グレイドルといいこの壊獣、だっけか？俺がいなくなった途端こんなカードばかり引き寄せやがって、お前のそれはそれは素晴らしい性格がよーくにじみ出てる素晴らしいデッキだなあ、オイ！」

「なんとでも言うがいいさ。初見だもんね、辛いよね？だけどこのデッキに慣れて対策練られる前に、できるだけ削らせてもらうよ。速攻魔法、突進を発動。これでドゴランの攻撃力を700アップさせて、攻撃だ！やれ、ドゴラン！」

「クソツ……!」

怒炎壊獣ドゴラン 攻3000↓3700↓怪粉壊獣ガダーラ

攻2700（破壊）

ユーノ LP4000↓3000

「カードをセットしてターンエンド、これでドゴランの攻撃力は元に

戻る……ほら、今のうちに念仏でも唱えたら？」

「言ってくれませ。あいにく俺は地縛神教徒でな……あ、やべ。地雷踏んだ」

『アホかあーっ！』

売り言葉に買い言葉とばかりに何も考えずに投げつけたあまりといえはあまりの言葉に、いつもの落ち着いた口調もかなぐり捨てたチャクチャルアの叫びが響く。清明の目はその名を聞いた瞬間ますます険しくなり、全身のオーラもさらにその闇を濃くした。

その原因となった当の本人であるユーノもその様子をポリポリと顎を掻きながら顔をひきつらせ眺めていたが、不意に一転して真面目な表情になる。

「……なあ、清明よ。お前もそんな抱え込んでないで、こうやってもつと気楽になろうぜ。もつと気負わずに馬鹿やってたって、どうせ勝手に日は沈んで登ってくんだからよ」

『……』

自分が掛ける言葉は逆効果にしかならないだろうと、あえて黙ったままユーノの説得に任せるチャクチャルア。しばらくの沈黙ののち、清明がポツリとつぶやいた。

「もう無理だよ。今の僕は、いろんなものを背負ってる。僕のために犠牲になって、僕のために消えていった人たちがいる。だからもう、全部終わらせるまで止まるわけにはいかないんだ。人の魂を、命を犠牲にして死人を蘇らせる地縛神の力……そんな命を持った僕にできる事なんて、せめてそれぐらいしかないんだ。さあ、デュエルを続けようよ」

「頑固だねえ。つたく、しょうがねえ。お前がなんて思おうが知ったこつちやねえからな、意地でも連れ帰しちやる」

怒炎壊獣ドゴラン 攻3700↓3000

ユーノ LP3000 手札：4

モンスター：なし

魔法・罫：なし

清明 LP4000 手札：3

モンスター：怒炎壊獣ドゴラン（攻）

魔法・罨：1（伏せ）

「俺のターン、ドロー！」

確かに話是可以する。だが、まだ言葉は届かない。清明の閉じた心は、まだ戻ってきそうにない。なら、もつとカードで語るしかない。ここはそういう世界なのだ。それを信じ、次のカードをユーノは手に取る。

「魔法カード、強欲なウツボを発動。手札から水属性の水弾使いレイスとハリマンボウをデッキに戻し、カードを3枚ドロウする。そして2体目のグレイドル・イーグルを召喚するぜ。さらにフィールド魔法、ウォーターワールドを発動。これで水属性モンスターの攻撃力は500ポイントアップし、守備力が400ポイントダウンする」

グレイドル・イーグル 攻1500↓2000 守500↓100

「元のご主人様がどんな使い方してたかは想像できるがな。俺は遠慮なく勝ちに行かせてもらうぜ、悪いな。永続魔法、補給部隊を2枚同時に発動してバトルだ、グレイドル・イーグルでドゴランに攻撃！」

「自分から来たわけね……！」

グレイドルによる特攻からのコントロール奪取コンボ。清明ならばやらなかったであろう戦法だが、ユーノにとってはそんなこと関係ない。イーグルも躊躇なく、むしろそれこそが俺の戦いだと言わんばかりに翼を大きく広げドゴランにまっすぐ突っ込んでいった。

そしてドゴランがその腕を振るい、イーグルの体を四散させる。

グレイドル・イーグル 攻2000（破壊）↓怒炎壊獣ドゴラン  
攻3000

ユーノ LP3000↓2000

「ぐうっ……！だが、これで戦闘で破壊されたイーグルのモンスター効果と、補給部隊の効果が発動！まず俺のモンスターの破壊をトリガーに、補給部隊の効果2枚分により2枚ドロウ。次にイーグルの効果で墓地から発動。ドゴランの装備カードとなり、そのコントロールを……」

「そのデッキはもともと僕のもの。グレイドルの弱点なんて、使い手

の僕には手に取るようにわかる！リバースカードオープン、壊獣捕獲大作戦！このカードは1ターンに1度場の壊獣1体を裏守備に変更して、壊獣カウンターを1つ乗せることができる。イーグルの効果にチェインしてドゴランを裏守備に変更、これで装備カードをドゴランに付けることはできなくなった！」

清明の場のカードが表になり、そこから光のネットが放たれドゴランを頭から包み込む。そのネットに阻まれ、銀色の雨となり頭上から降り注いでいたグレイドルが弾かれ地面に消えていった。

壊獣捕獲大作戦(0)↓(1)

「なるほどな……すっかりそのデッキを使いこなしてるってわけか。だが俺だって負けちゃいられねーな、カードを3枚伏せてターンエンドだ」

「僕のターン、まずドゴランを反転召喚する」

怒炎壊獣ドゴラン 攻3000

生存競争こそ自壊したもののいまだ健在の3000打点を持ち再び立ち上がるドゴランを前に、いささかもひるむ様子の無いユーノ。期待通りの反応がないことに舌打ちしながらも、例え魔法の筒やミラーフォースのような逆転のカードを使われたとしてもいざとなれば壊獣捕獲大作戦でまた逃げられるのだからと気を取り直しドゴランに指示を飛ばす。

「バトルだ、ドゴランでダイレクトアタック！」

「相手の直接攻撃宣言時に永続トラップ、グレイドル・パラサイトを発動！俺のフィールドにモンスターが存在しないことで、デッキから攻撃表示でグレイドルを特殊召喚するぜ。グレイドル・アリゲーターを召喚！」

足元から湧き上がる銀色の水が急激に盛り上がり、緑色のワニ型生物に変化する。イーグル同様やる気に満ちた態度で四肢を突っ張り、太い尾を振り回す。

グレイドル・アリゲーター 攻500↓1000 守1500↓1000

「何を企んで……いや、だとしても踏み越えてやる。構わず攻撃だ、ド



「ゴラン！」

主の指示を受け、ドゴランがその口から灼熱の火炎を迷いなく吐き出す。鋭く伸びたそれが足元のアリゲーターの体を飲み込もうとした瞬間、大量の水がその炎を阻む壁となる。

「そのカードは……ずいぶん久しぶりに見たね」

「だろう？ トラップ発動、ポセイドン・ウェーブ！ 相手の攻撃を無効にし、俺の場の水・魚・海竜族1体につき800ポイントのダメージを与えるぜ。これはグレイドル・アリゲーターの分だ！」

「ふん、そんなこつたらうと思つた！ チェーンして壊獣捕獲大作戦の効果を使い、ドゴランを裏守備にすることでそのダメージを回避する！」

壊獣捕獲大作戦 (1) ↓ (2)

「おいおい、800ダメージを回避するために攻撃力3000を裏にしたのか？ 甘いところは変わってねえな」

「冗談でしょ？ 僕には他にやりたいことがあつたのさ。メイン2に魔法カード、太陽の書を発動。裏守備になつたドゴランを表側攻撃表示に戻して永続魔法、壊獣の出現記録を発動。1ターンに1度場の壊獣1体を、デツキに眠る別の壊獣と入れ替える！ チェンジ、ガメシエル！」

にやりと笑いからかうように問いかけるユーノに笑みを返し、2枚のカードを連続発動させる清明。するとドゴランの姿が光の粒子となつて消え、新たに呼び出されたのは巨大な亀のような形をしたモンスター。本来ならば守備的なステータスをもつガメシエルだが、ウォーターワールドの影響を加味して攻撃表示で呼び出されファイティングポーズをとる。

海亀壊獣ガメシエル 攻2200↓2700 守3000↓2600

「ほらほら、わざわざドゴランより攻撃力が低いモンスターを出してあげたんだよ？ 来るなら来るでさっさと突っ込んできなつて」

「言うじゃねえか……！」

「誰に似たんだかね！」

今度はこつちの言い返す番だと言わんばかりにそう言つてのける清明の顔は、まるで憑き物が落ちたかのように晴れ晴れとしていた。つい先ほどまでの淀んだオーラからはまるでかけ離れたその表情に戸惑うユーノに、チャクチャルアがこつそり耳打ちする。

『やはりマスターは根つからのデュエリスト、ということだな。こうして戦い続けたことで、ほんのわずかにだが自我が強くなってきている。光の結社、デスベルト、そしてこの精霊世界とこのところ敗北は死か、そこまでは言わずとも何らかのデメリットのあるデュエルばかりだったから、今の精神世界でのデュエルは色々たまつていたものを解放するにはもつてこいのいい機会なのだろう』

「なるほどな。要するに、徹底的にデュエルしてやりや機嫌がよくなるつてことだな？ わかりやすい奴」

『そう言つてやるな。つい数年前まで一般人だったマスターに、モチベーションも動機もないままに闇のデュエルを延々やり続けるとうのは確かに酷な話だったしな。本人が気づいていなくても、ただでさえ蘇生してから色々騙し騙しでどうにかやつてこれた精神にかかる負担は相当な物だったろう。だからおそらく、その部分を取っ掛かりにして心の闇を無理やり広げられたんだろう。まったく、つまらん真似をしてくれる』

「…………ふむ」

何事か考えているのか、ユーノが生返事を返す。その瞳に、何かを決意したような色が見えた。

ユーノ LP2000 手札：0

モンスター：グレイドル・アリゲーター（攻）

魔法・罫：グレイドル・パラサイト

補給部隊

補給部隊

1（伏せ）

場：ウォーターワールド

清明 LP4000 手札：2

モンスター：海亀壊獣ガメシエル（攻）

## 魔法・罨：壊獣捕獲大作戦（2）

### 壊獣の出現記録

「とはいえ、それぐらいわかりやすい方が話が早くていいってもんよ。行くぜ、俺のターン！永続魔法、グレイドル・インパクトを発動。このカードの……」

引いたカードのテキストを素早く確認し、パラサイトでアリゲーターをリクルートした自分の判断が正しかったことを確信するユーノ。まだ俺の勘も鈍っちゃいないな、そう心中で呟いてから引いたばかりのカードをフィールドに出す。

だがその瞬間、清明とガメシエルがともに動いた。ガメシエルの巨体が体の前にその両手を持ってきて手のひらで何かを包み込むような姿勢を取ると、その両腕の間に超自然の水の渦が生まれる。次第に大きくなっていったそれが解き放たれると、渦はまっすぐユーノのフィールドに飛んで行き発動されたばかりのグレイドル・インパクトのカードを巻き込んで呑み込んだ。

「グレイドル・インパクトの効果、グレイ・レクイエム……アリゲーターとのコンボで僕のカードを破壊しつつ、魔法カードの効果で破壊されたアリゲーターの寄生効果も使おうってわけね。でも悪いけど、その戦術もお見通しさ！インパクトの発動時に場の壊獣カウンター2つをコストとしてガメシエルの特殊能力、渦潮を発動！あらゆるカードの発動を無効とし、それをゲームから除外する！」

「何っ!?!」

### 壊獣捕獲大作戦（2）↓（0）

清明は自分でもそう言うだけあって、グレイドルの動きを熟知している。手札の関係もあって単純な手しか使えていないとはいえ、自分の繰り出すコンボが片っ端から防がれることに内心顔をしかめつつも、すぐにユーノも気を取り直す。

「ええい、だったら次だ次！すまん、アリゲーター！グレイドル・アリゲーターでガメシエルに攻撃！」

「攻撃？そうか、補給部隊……仕方ない、迎撃だガメシエル！」

自らの効果がかかわれることを知りつつ、それでも最後に残された

可能性に繋げるために怯まずガメシエルに襲い掛かるアリゲーター。当然のように太い尾の一振りに打ち払われて弾けた体が銀色の水となり寄生を凶るも、またもや放たれた光の網がガメシエルを守る盾となる。

グレイドル・アリゲーター 攻1000 (破壊) ↓海亀壊獣ガメシエル 攻2700

ユーノ LP2000 ↓300

壊獣捕獲大作戦 (0) ↓ (1)

「戦闘破壊されたアリゲーターの効果にはまた壊獣捕獲大作戦をチェーン発動して回避する、けど……」

「そう、この補給部隊2枚の効果発動は止められないな。アリゲーターの破壊をトリガーに、またカードをドロウする……おつ、お前も来てくれたのか」

「？」

多大なライフと貴重なモンスターをかなぐり捨ててまでユーノが掴んだ、たった2枚の可能性のカード。それを見ていきなり妙なことを口走るユーノに怪訝な顔を見せる清明に対しても何度目かもわからない不敵な笑みとともに、最後の伏せカードが表になる。

「慌てなさんなよ、こういうのは下準備が大事なんだ。永続トラップ、バブル・ブリンガーを発動……して即効果発動するぜ。このカードを自分ターンに墓地に送ることで、墓地からレベル3以下の水属性同名モンスター2体を特殊召喚することができる。甦りな、グレイドル・イーグル共！」

泡の壁がほんの少しだけ湧き上がってすぐに消え、最後に残った2つの泡が弾けてその中からそれぞれ瓜二つの鳥型グレイドルが翼を広げて飛び立った。

グレイドル・イーグル 攻1500 ↓2000 守500 ↓100

グレイドル・イーグル 攻1500 ↓2000 守500 ↓100

「ここまで来たら、もうわかるよな？グレイドル・イーグル2体をリリースして、アドバンス召喚！」

2体のイーグルが光を放ち、足元から消えていく。入れ替わりに

フィールドに現れたモンスターを見て、清明の目が驚きに見開かれた。

「さあ行くぜ、霧の王！」

「霧の、王……！」

常に第一線でエースモンスター兼フェイバリットカードとして清明と共に戦い続けてきた最大の切り札、霧の王。漆黒の世界の中でも全身をほのかに発光させて清明の心を照らし、その剣を正眼に構えてあらゆる魔を断たんと静かにその瞬間を狙い続ける。

「今更効果の解説は必要ねえな？もしこのカードでもお前が戻ってこないなら、もう俺たちにできる事は何もねえ。だがこの霧の王、今のお前には随分ぶっ刺さるみたいだな」

霧の王には2つの効果がある。ひとつはそのアドバンス召喚の際、リリースしたモンスターの攻撃力の合計が自らの攻撃力となること。グレイドル・イーグルはフィールドによる強化込みで攻撃力2000となっていたため、その本来の攻撃力の合計である3000にウオーターワールドの補正がかかり攻撃力は3500となる。

だが、ここで重要となるのはふたつめの効果だ。霧の王がフィールドに存在する限り、互いのプレイヤーはいかなるリリースも行うことが不可能となる。ユーノ側もアドバンス召喚が封じられた形になるが、それ以上に基本的なデザインとして相手モンスターをリリースすることが大前提の壊獣使いである清明はそのコンセプトを根本から崩壊させられた形となるのだ。

霧の王 攻0↓3000↓3500

「やってくれるね、まったく」

「カードをセットしてターンエンド。頼むぞ、霧の王。もうリソースほとんど使い切っちゃった、お前がやられたらどうしようもなくなっちゃまう」

事実ユーノは霧の王召喚により一気に優位に立ったように見えるが、その過程で消費したカード枚数もライフも多い。またこれは当人しか知らぬことではあるが、残るカードも決してこの状況をさらにひっくり返された時に輝く逆転のカードではない。また残り少ない

ライフではグレイドル・パラサイトも実質役に立たず、もし霧の王が倒れたらそれ以上のデュエル続行は難しいだろう。それに対して清明の手札ははまだユーノよりは潤沢だが、肝心のモンスターの攻撃力はその壊獣も3500を上回らないため、盤面としては五分と五分。次の清明のターンが、その後の展開を決める。

「僕のターン、ドロー！」

そう叫ぶ清明の顔からは、もうすっかり当初の暗い色は抜け落ちていた。その様子を見て、ユーノの脳裏にふと自分と清明が二心一体であるという事実がよぎる。流されやすく影響をすぐ受ける清明の精神状態が現在進行形でこうして良好になってきているのは、もしかしたら彼の片割れである自分がデュエルを楽しむ心を前面に押し出しているからなのかもしれない。いずれにせよ関係ないことだ、結果さえどうにかなればそれでいいとそこで考えるのをやめ、目の前の清明の動作のひとつひとつに神経を集中させる。

「引きが悪いけど、なんとか手はあるか。ガメシエルを反転召喚して、壊獣捕獲大作戦でまた裏守備に変更。これで壊獣カウンターをまた増やしてから、ターンエンド」

壊獣捕獲大作戦(1) ↓ (2)

ユーノ LP300 手札：1

モンスター：霧の王(攻)

魔法・罨：グレイドル・パラサイト

補給部隊

補給部隊

場：ウォーターワールド

清明 LP4000 手札：2

モンスター：??? (海亀壊獣ガメシエル・セット)

魔法・罨：壊獣捕獲大作戦(2)

壊獣の出現記録

「俺のターン、ドローだ。次はグレイドル以外の奴も見せてやるぜ！出てきな、ツーヘッド・シャーク！」

「よりによって、このタイミングでそのカードか……！」

ツーンヘッド・シャーク 攻1200↓1700 守1600↓1200

2つの頭を持つ恐るべき青き鮫が、久しぶりに主と出会えた喜びとその主の状況に対する悲しみにその牙を打ち鳴らす。例えモンスターを出されてもアドバンス召喚ができないのなら出てくるのは下級モンスター、それ1体の攻撃ぐらいどうにでもなるだろう。そう甘い予測を立てていた清明にとっては、今最も出てきてほしくないタイプのモンスターだ。

「さあぶった切れ、霧の王！そしてツーンヘッド・シャーク、お前の2回攻撃で連続ダイレクトアタックだ！」

「うわっ！」

霧の王 攻3500↓??? 守2600 (破壊)

ツーンヘッド・シャーク 攻1700↓清明 (直接攻撃)

清明 LP4000↓2300

ツーンヘッド・シャーク 攻1700↓清明 (直接攻撃)

清明 LP2300↓600

「ようやくまともに反撃できたな。どうだ、少しは効いたか？」

「まさかここで2回攻撃のツーンヘッドを引いてくるなんて、やっぱりユーノは大したもんだよ……でも、まだ負けてられないね。僕のターン、ドロロー……魔法カード、名推理を発動！相手がレベルを1つ宣言し、僕はデッキを上から通常召喚可能なモンスターが出るまでめくる。そしてそのモンスターのレベルが宣言通りだったらそこまでに出了たカード全部を墓地に送るけど、もし違っていたらそのカードを特殊召喚できる！さあ、どのレベルにするの？」

「ここでそんなカード引くかね普通、お前もお前でたいがいな引きだな。まあいいさ、俺が宣言するのは8だ」

ユーノにとってはまだ未知のテーマである壊獣。彼の知る3体、ドゴラン、ガダーラ、ガメシエルのレベルがいずれも8だったことから推測した数字である。その推測自体は何も間違っておらず、むしろ与えられている情報を最大限に生かしたグッドアンサーといえるだろう。

ただ、それが決してベストアンサーとイコールの存在ではなかったというだけのことだ。

「1枚目……レベル10、雷撃壊獣サンダー・ザ・キング。この怪獣は当然、通常召喚もできる。残念だったねユーノ、サンダー・ザ・キング召喚！」

爆発的に光が弾け、三つ首の白き龍が光の中から現れる。清明の方に構えていた霧の王も、先に対処すべき存在の登場に反応して剣先をそちらに向けて構え直した。

雷撃壊獣サンダー・ザ・キング 攻3300

「ツーヘッド・シャークには確かに参ったけど、そこで僕のライフを削りきれなかった詰めのがさが敗因だったね。バトル、サンダー・ザ・キングでツーヘッドに攻撃！」

3つの首に雷の力が集中し、同時に3本のブレスが放たれる。螺旋を描き絡み合いながら進む破壊の波動がツーヘッド・シャークの体を飲み込む寸前、そのブレスの間に霧の王が割って入った。

重い踏みこみとともに大上段から叩き落とさんばかりに振り下ろされた剣閃が、全てのブレスを両断して左右に散らした。さらにそのままの勢いで飛び上がった魔法剣士が、今度は振り下ろした剣を逆袈裟に切り上げつつサンダー・ザ・キングと交差する。

1瞬のうちに、勝負は決まった。霧の王が音もなく着地したその背後で、必殺の一撃を受けた雷龍が力なく地に墮ちる。

「そ、そんな……なんで霧の王が……？」

「詰めが甘いだあ？笑わせんなよ、鏡見てから物言ってみろつての。俺はこのダメージステップにトラップカード、援護射撃を発動した。この効果によりツーヘッドの攻撃力は一時的に俺のフィールドの別のモンスター、つまりきりの王の攻撃力だけアップしたのさ」

「く……」

雷撃壊獣サンダー・ザ・キング 攻3300 (破壊) ↓ツーヘッド・

シャーク 攻1700 ↓5200

清明 LP600 ↓0



「……………んで、調子はどうか？」

「あー、うん、なんかだいたいぶすつきりした、かな？チャクチャルさんにも、また後でちゃんと謝らないと。何も教えてくれなかったのはやっぱりちよつと不満だけど、ね」

戦いも終わり、静かな時間が戻ってきた。もはや最初に見た時とは別人のように元の穏やかさを取り戻した清明が、ちよつぱり照れくさそうに小さく笑う。それを見て、ユーノもまたふつと口の端を歪めて笑った。

「そうかい、そりやよかった。もう俺も一々助けてやれないからな、こつからは自分<sup>デメエ</sup>でなんとかするんだぞ」

「……………え？」

言葉に込められた不穏な意味を感じ取り不吉な予感に包まれる清明をよそに、何ひとつ気負うものがないといった様子のまま両腕を広げてユーノが呟く。

「さあ、やっちゃつてくれて構わねえぜ。こればかりは俺が自分でやるわけにもいかないからな。第一やり方もわかんねえしよ」

『……………承知した』

言うが早いのが、ユーノの体が手足の先から次第に薄くなっていく。その様子と穏やかな覚悟を決めた表情に、闘技場で消えていったケルトの様子が頭の中で重なり合い、清明の顔色がサツと変わる。

「ちよつと待つてよ、どうする気なのさユーノ！」

「ああ、俺らもいろいろ考えたんだけどな。やっぱり、こうするしかないんだわ。悪く思うなよ」

「だから、何を……………！」

『魂の統一、とでも呼ぶべきか』

「チャクチャルさん！」

清明の悲痛な叫びに対し、あくまで冷静に、重々しく声が響く。下手に感情を表に出すのは逆効果にしかない、との計算づくでの行為である。

『彼がこうすることを最初に思い付いた時には、私も止めはしたのだ』

がな。だが、これしかマスターの精神を安定させる方法がないことは私が一番よく理解している。だから、彼の提案を受け入れた』

「能書きはどうでもいいから、何をやろうとしてるのさー!」

『マスターの精神の不安定さ、外的要因への影響されやすさは確かにマスター自身の性格によるところもある。だがそれ以上に、私がダークシグナーとして蘇生させる際に本来1人分であるべき復活の力を2人の魂に分けてしまったことが何よりも大きな原因なんだ。そのせいでマスターの魂には根本的な歪みが生まれ、それが最初に私の力を認知したあの女ヴァンパイヤ戦や昨年 of 破滅の光に呑まれた時、そしてつい先ほどまでの状態を引き起こしている』

「……それで?」

彼自身にも自覚はあった。なぜ僕は自分を抑えきれず、新たな力に呑まれて溺れ、その結果人に迷惑をかけることになるのだろう。その悩みはずっと彼の中にあっただが、思いもよらぬ形で今その理由が明らかされていた。

反論したいのは山々だが、当の本人に思い当たる点がある以上それもできない。それで、と聞き返すのがやつとの清明に、目の前でさらにその存在が消えつつあるユーノが笑いながら口を開く。

「おいおい、まだわからねえのか? 簡単なことさ。その力が2人で足りないなら、1人にまとめりゃいい。俺の魂をお前に丸ごとくれてやりゃあ、残ったお前はようやくまともになって万々歳って寸法よ!」

「そんな……!」

「だいたい、俺みたいなのがいっまでも引つ付いてる方がおかしいんだぜ、世間常識では。なーに、そう捨てたもんじゃねえさ。俺は確かに消えるが、何もかもなくなるわけじゃねえからな。お前が俺のことを覚えてる限り俺がお前の一部として生き続ける、その腐れ縁は終わらんよ。なにせ好き嫌いとはもかくとして、俺たちは二身一体なんだからな」

「でも、でもー!」

「ただまあ、せっかくなら最終回<sup>卒業式</sup>までは見たかったってのと、最後にもういつペンぐらい富野のアホ面拜んでおきたかったってのはあるか

もな……そうだ、ほれ。俺がお前にできる、正真正銘最後のプレゼントだ」

そう言いつつ半透明の手で自らのデュエルディスクを開き、エクストラデッキから15枚のカードを取り出して差し出す。泣きそうになりながらもぐつとこらえてそれを受け取った清明に、もう一度おなじみのニヤリとしたふてぶてしい笑顔をしてみせる。

「いいか、俺がお前にやったデッキは、このエクストラがあつて初めて100パーセントの力を発揮する。ただ諸事情あつてお前に使わず気はなかつたが、俺がこうなつた以上このカードの行く末はお前が決める。今はまだ力を封印してあるから白紙のままだが、どうせお前融合モンスターなんて使わねえんだからとりあえずエクストラデッキの中にぶち込んで。本当に本当にどうしようもなくなつた時、そいつらはお前を必ず助けてくれるはずだ」

「うん、うん……い」

ユーノの透明化が、ついに顔にまで及び始めた。それに気づきいよいよ時間切れが迫ってきていることを悟り、最後に何か気の利いた名言っぽいことでも言つてやろうともはやほとんども見えなくなつた手を振ってみせる。

「んじやー……あれだ。少なくとも俺は、ここまでやつてきて楽しかつたぜ。あとはお前が、ありつたけのハッピーエンドを掴みとるだけだ。しっかりやれよ、デュエリスト遊野清明」

その言葉を最後に、ユーノという男の存在は世界から完全に消えた。

『起きたか、マスター』

目を覚ますと、すでに朝になつていた。といつても、厚い雲のせいで太陽などはまるで見えないのだが。

「……おはよう」

今の今までずっと見ていた夢の内容を思い出す。そして、それが夢でなくて現実であることも。もつと悲しむかと思つていただけ、自分

でも意外なぐらい晴れやかな気分だった。あるいはこれも、魂の歪みとやらが治った影響のひとつなのだろうか……だがその考えが間違っていること、そしてその疑問への答えはすぐに分かった。

僕がユーノのことを覚えている限り、奴は僕の中で生き続ける。例え話したり見たりできなくなっても、あの男がいなくなってしまうたわけではない。だから、悲しんだり寂しがったりすること自体がお門違いなのだ。

「さて、とー」

やるべきことはたくさんある。ケルトとの約束、親友である十代へのリターンマッチ。それに十代やジムがこの世界にいるということとは、他のメンバーも来ている可能性が高いはずだ。一体、何から手を付けようか。

……まずは、ご飯でも食べようかな。

## ターン100 鉄砲水と大蛇の深淵

『マスター、何をやっているんだ？さっきから穴など掘って』

「色々あって僕のデュエルディスクは壊れちゃったから、ね。ユーノは持ってたみたいだけど、体ごと消えちゃうしさー。でもこの子もこれまで頑張ってくれたんだから、これぐらいはね」

ただの物と言ってしまえばそれまでだ。だけどこのデュエルディスクは入学以来ずっと使ってきた、三幻魔とも光の結社とも共に戦い抜いてきた物なので、なくなってしまうと寂しい。あの霸王とのデュエルで僕がとどめを刺される寸前にデュエルディスクが壊れたのは、ディスクそのものが最後の最後に身を挺して僕を守ってくれた……なんて考えるのは、あまりにもメルヘンだろうか。

でもそのおかげで、僕は今ここにいられる。機械には疎い僕でもあの実体化していたマリシヤス・デビルの攻撃をまともに喰らったデュエルディスクがもう二度と動かないことはわかったので、ユーノの分と一緒にせめてものお礼として墓を作って埋めているのだ。

『……そうか』

笑われるかと思っただけど、それ以上何も問われることはなかった。あるいは、何か察してくれたのかもしれない。そんな気遣いもできる、それがこの邪神だ。まったく、ありがたい仲間に囲まれたものだと思う。

やがて全ての作業が終わり、最後に手を合わせて立ち上がる。もう、ここに来ることはないだろう。土まみれになったその手を洗うため、僕が霸王から逃げる際飛び込んだ川に向かう。飛び込んだ位置から比べるとだいぶ下流まで流されてきたらしく随分緩やかな流れになっていたが、逆に言うとそのだけの間ずっと水中にいてよく生きていられたものだと思う。

『……それなんだがな、マスター。実は、これは本当は教えるつもりはなかったのだが』

「なに、また隠し事？」

手を洗い、ハンカチなんぞ持っていないのでふるふると振って水を

飛ばしていると、いきなり話しかけられた。ダークシグナーの呪われた命のこと。チャクチャルさんの過去のこと。一切合財黙っていたことは、もう割り切ったし蒸し返すつもりもない。チャクチャルさんにしたって、別に悪意があったわけじゃないことは長い付き合いだからなんとなくわかる。ないが、まーだ何かあるとなれば話は別だ。意識せずともだいたいぶ剣呑な言い方になる僕にただでさえ歯切れの悪かった口調をますます言いにくそうなものにながら、ぼそぼそと声が頭の中で聞こえる。

『まず、地縛神U<sup>ウル</sup>ru……蜘蛛の地上絵については知っているな？奴の能力が一番わかりやすいのだが、奴の手で蘇ったダークシグナーは小蜘蛛を人間に仕込むことでその行動、思考をコントロールできる』  
「ああ、それで……」

脳裏に蘇る、先代が夢で見せた古代ナスカの記憶。他の地縛神が直接人を襲っていたのに対し、蜘蛛の地縛神の足元では本体が見下ろす足元で人間が人間を襲う異常な光景が広がっていた。妙だとは思っただけど、あの場面にはそんな仕掛けがあったのか。

『あれと同じで、我々はそれぞれ固有の特色をダークシグナーに付与することができるといっても、蘇生の際に魂を引き上げる作業などで自然と魂がこちら寄りになりそうになってしまう、というべきか。私の与える能力は正直このご時世で役に立つようなものでもないから黙っていたのだが、まさかこんな形で役に立つとは思わなかった』  
「ふむふむ。で、僕は何ができるの？」

『説明するより体感する方が早いな。ちよつと歩いてみてくれ』  
「どう？」

言われたとおりに川に沿って数歩進んでみるが、別に変わったことは感じない。すぐに訂正が入った。

『いやそうじゃなくて、川の上いだ。大丈夫だ、いける』

「え、ちよ、水上……」

『ええい、まどろっこしい』

そんなやりとりだけで後ろから突き飛ばされ、咄嗟に体勢を立て直すこともできず前が出る。そのまま足が水中に突っ込み……

——パチン。

突っ込まなかった。恐る恐る足元を見ると、靴の裏が水面に付いた状態でそれ以上体が沈まない。

『私はシャチの地縛神……それゆえ海の、ひいては水の力を強く持つ。難しく考える必要はない、要するにあらゆる水が私に、そしてその系譜を継ぐマスターに味方するということだ。最初からそれが当然であるかのように、水上を自由に歩くことができる。そのみでなく、もはや水中すらマスターにとって枷とならない。抵抗を受けることなく自在に潜り、呼吸や会話すら可能となるだろう』

「水上歩行に水中呼吸……河童や半魚人の域だね、こりゃ」

カードの精霊世界、命を賭けたデュエル、ちよつと見ない間にわけわかんないことになっていた親友、面便り思いダークシグナーの話。ここ数日のうちに色々なことがありすぎて、なんだかもうこの程度では驚かなくなってしまった。あまりに現実感がないせいで、まだ少しピンと来ていないのかもしれない。ゆつくりと片足を持ち上げ、また降ろす。着水の衝撃により水面に波紋が走りその感覚がかすかに伝わってくるが、足場としては依然として安定したままだ。

「じゃあ、この川を下ってくる間にも」

『無意識のうちに呼吸をしていたんだろな。でなければ酸欠だ』

水上歩行に水中呼吸。びつくり人間的能力には間違いないのだが、ついさつき例として挙げられた洗脳能力を持つ小蜘蛛とかいうオカルトと比べると、なんとというか、こう。

「……確かに使い道少なそうだね、今時」

『私もそう思う。むしろよく役に立ったものだ』

しかしそう考えると、あの時川に飛び込んだのはどうも僕にできる最善手だったらしい。破れかぶれで突っ込んだだけのつもりだったのに、これは運が向いてきたと言っているのだろうか。

「そのあなた、そろそろ話す気になりましたか？もう1度聞きましよう、ここで何をしているのですか？」

水上の感覚に慣れるためパチャパチャ歩いていると、唐突に誰かの声がある。一瞬見つけたかと焦るものの、よく聞くとその声は川向

うから聞こえていた。音をたてないように耳を澄ませていると、その声がさらに続く。

「ふーむ……だんまりですか。あまり感心できませんねえ。このワタクシが誰だか、わかっただけいらつしやらないので？」

それに対し、小馬鹿にしたような返事が聞こえる。意外にも女性、それも明日香みたいにかにも気が強そうなのが声だけでわかるタイプの声だった。

「ふん。知っているとも、暗黒界の術師。頭脳労働担当がこんな僻地に何の用だ」

「質問しているのはワタクシですよ？ですが、まあいいでしょう。フリード軍かその他有象無象の残党か、そんなことはどうでもよろしい。霸王様に害をなす愚か者、その罪は万死に当たります。デュエルを続けましょう、もはや方にひとつもあなたには勝ち目のないこのデュエルを、ねえ」

「くっ……！」

どうやら、川向うでデュエルが行われているらしい。深い森のせいでまるで見渡すことはできないが、その奥で小規模な爆発音や火花が何度も上がる。だがそれよりも、僕の心に残ったのは顔も見えないあの女性の言葉だった。

「暗黒界の術師……？」

暗黒界。そして霸王。そしてこの戦略的に重要とも思えない川の近くとなると、これはもう十中八九狙いは僕だ。確かに闘技場を逃げ出してからそれなりに時間が経っているとはいえ、もう霸王の手がここまで伸びていたことに背筋が凍る思いになる。僕がまだ見つかっていないのは、ほんの少しだけ運がよかったからにすぎない。

『どうやらそのようだな。どうする、マスター？私はいつでもその判断に従おう』

「どうする、ってっ？」

聞き返しながらも、何が言いたいのかはわかっていた。敵が目と鼻の先にいるこの状況、僕に示された道はふたつにひとつ。戦うか、逃げるかだ。僕のほんのわずかな理性は、逃げたほうが賢明だとささや



いていた。まさかこの近辺の悪魔があの声の主だけだなんてことあるはずない、ここはやり過ぎて安全を確保する方がいい。それに、デュエルディスクを失った今の僕が出て行ってもおめおめと捕まるだけだ。あの悪魔が僕をいまだ捕まえていないのは、裏を返せばいまだ僕が見つかっていないという何よりの証明。ならば……というわけだ。

まったくもって合理的、かつわかりやすい。なにがなんでも霸王……十代のことを救い出すためなら、余分なリスクはわずかにでもない方がいいに決まってる。せつかく拾った命、ここで余分に危険にさらす選択はあり得ない。

とはいえ、僕の答えは決まっている。ここで今絡まれてる人を放っておいたら後々後悔するに決まってるし、そもそもこれ以上霸王軍から逃げるのはいい加減腹が立つ。それに霸王の部下ということは実力は確実に霸王以下、そんな相手とのタイマンを避けるようでは霸王に勝つなんて夢のまた夢だ。おまけに本来ならまず越えられないこの川の流れも、もはやただの道でしかない。

「行くよチャクチャルさん、こっちから喧嘩吹っかけてやる」  
『よしきた。そう言うと思った』

水面をひよいひよいと走り、まともに泳いだらどれだけかかるかわかったものじゃない反対側の岸にもすぐに到着する。だがその間に、走る間ずっと聞こえてきていた激しい金属音や爆発音もぱったりと聞こえなくなってしまった。

嫌な予感に襲われながらも先ほどから目星をつけておいた場所の様子をうかがおうとすると、ちょうどその寸前に先ほどの声がかまた聞こえてきた。

「どうやらここまでのようですねえ。ではワタクシ自身、暗黒界の術師 スノウのダイレクトアタックでとどめといたしましょう」

その宣告の直後、ひととき激しい爆発が起きる。草を掻き分けどうにかその場所にたどり着いた時には、すでに何もかもが終わっていた。

「そんな……！」

大賢者、ケルト、そしてこの女性。僕は力を手に入れてるはずなのに、どうしてこうも結果を出せないのだろう。

いや、まだだ。まだやることは残っている。目の前の悪魔……スノウは筋肉質だったケルトとは対照的に細身な体で、全身を包む白いマントの他に片手には魔法使いのような杖を手に行っているのが目立つ。そのスノウが突然の乱入者に怪訝そうに眉をひそめるが、すぐにその目が喜色に輝いた。大げさに両手を広げ、こちらにじりじりとにじり寄ってくる。

「おお、これはこれは。恐らくこのあたりに流れ着いているだろうとは思いましたが、死体ではなく生きていらしたとは。ですがどちらでもよろしい、あなたの身柄を霸王様に献上すれば、ワタクシの地位はますます安泰。いやあ、こんな僻地までわざわざ来たかいがあるというものです」

「ふざけんなー！」

「下品な言葉ですなあ。ですがその言葉は本来、私が言いたいのですよ？あの霸王様にいやしくもイチ人間の分際で、どいつもこいつも刃向いたがる。寛大なるあの御方は少し前のジム、とかいうワニ男もあなたも分け隔てなく自らの手をお汚しになられています、ワタクシにはそれが我慢ならないのですよ」

さらに近寄ってくるスノウの不気味さに負け、思わず後ずさる。その反応にさらに喜んだらしいスノウが腕に付いたデュエルディスクらしき装置を構え、既に起動済みのそれを構える。

「あなたが霸王様に敗北を喫したのちみじめにもここまで逃げてきた際、ご自身のデュエルディスクを壊したという情報は既に入ってきています。あのケルトを破った実力は勝算に値しますが、大人しく投降なさい。ワタクシとて自分の手を汚さずに終わるのならその方が楽ですからねえ」

「それは……」

「それはどうか？」

いきなり、地面に倒れていた女戦士が割り込んできた。先ほどの

デュエルに敗北したためその体は既にケルトの時と同じように光となつて消えかかっているが、それでも無理に上体を起こして鋭い目でスノウを睨みつける。その瞳から、まだ闘志は消えていなかった。「……おやあなた、まだ生きてらしたんですか？ 嫌ですなぁ、往生際の悪いのは。ですがあなたのライフは既に0、もはや消滅も時間の問題でしょう？」

「そんなことはわかってる！ 少年、受け取れええっ！」

そう言つて自分が腕に付けていたデュエルディスクを外し、腕の力だけで数メートル離れた僕に向かって投げつける。どうにかキャッチできたものの、その衝撃で手にジンと痺れが走った。

「それを使つてくれていい、だが1つだけ頼みがある、少年。いつか私の仲間と会つてくれれば、エルナは最後まで戦いの中で堂々と散つていった、そう伝えて欲しい」

エルナ、それがこの女性の名だろう。仲間とは誰なのか、なぜこの場所に来ていたのか、聞きたいことはたくさんあるけれど、その時間がないことはますます勢いを増した光の粒子からも見てわかる。だから僕は何も言わず、ただまっすぐエルナの顔を見て頷くだけにしておいた。それを見て、彼女の顔がふつと綻ぶ。

「ありがとう……」

その言葉を最後に、彼女の姿が完全に消える。残つたのはただ1つ、僕の手に残るデュエルディスクのみ。だけどこの既製品とは微妙に細部の違うどこかシックな感じのデュエルディスク、どっかで前にも見たことがあるような気がする。記憶を辿つてこのデジャヴを解消したい誘惑に駆られるが、今はそれは後回しだろう。差し込みつばなしだったエルナのデツキを引き抜いて形が崩れないようデツキホルダーに入れ、その代わりに僕のデツキをセットし直す。オートシャツフル機能、ライフ表示機能……よし、動作に問題はない。

「待たせたね、スノウ。第二ラウンドと洒落込もうか……！」

「まったく、今日は面倒な日ですねえ。しかしあなたのデツキは水中に飛び込んだことで使い物にならなくなっているはず、とすれば恐らくは間に合わせの紙束。ワタクシは暗黒界の術師、そんな戦略が通用

するなどと勘違いなさらぬよう」

それを聞いて、ようやくこのスノウが妙に強気な理由が分かった。もう壊獣はない、だから僕にも勝てる、つまりはそういうことか。

「デュエル！」

「僕のターン！」

「なら、今に吠え面かかせてやる。最初に5枚の手札を引く、ただそれだけで感じる。僕のデッキの鼓動を、このカードたちと共に戦う感覚を。」

「グレイドル・アリゲーターを守備表示で召喚、さらにカードをセツト。これでターンエンド」

グレイドル・アリゲーター 守1500

「ではワタクシのターン。魔法カード、スネーク・レインを発動。手札を1枚捨てることで、デッキから墓地へ爬虫類族モンスター4体を送り込みましょう。お逝きなさい、レプティレス・ナージャ。そして邪神官チラム・サバクを3体」

いきなり墓地肥やしにより、4体ものモンスターを墓地に送りこむスノウ。爬虫類族、か。

「魔法カード、悪夢再びを発動しましょうかねえ。ワタクシの墓地に存在する守備力0の闇属性モンスターを2体回収し、手札に。これで準備は整いました。手札の邪神官チラム・サバクは手札が5枚以上存在するとき、リリースなしでの召喚を可能とします」

邪神官チラム・サバク 攻2500

手札の枚数でリリースを減らせる、という聞いたこともないような召喚効果を持つ、下半身の代わりに無数の蛇がうごめく邪神官。確かにスネーク・レインの手札コストを考慮しても最初のドロローを合わせ手札は5枚、条件は問題なく満たしている。

「バトル。チラム・サバクで攻撃！」

無数の蛇の頭が一斉にこちらを向き、牙の生えた口を開きビームを放つ。その光にアリゲーターが呑みこまれ、体が削られ千切れていく。

だが、その状況を楽しむかのようにアリゲーターの巨大な口がにや

りと笑いの形に歪んだ。最後にはこちらに向けて器用に尻尾を振ってみせる余裕まで感じさせながら、その姿が消滅する。

邪神官チラム・サバク 攻2500↓グレイドル・アリゲーター 守1500（破壊）

「この瞬間、戦闘破壊されたアリゲーターの効果発動！グレイドルは破壊されてなお相手モンスターに寄生し、その体を掌握する！こっちに來い、チラム・サバク！」

たまたま開いていた蛇の口のひとつから、銀色の液体が飛び込む。その後人型の上半身が数秒間空気を掻きむしり苦しむようなジェスチャーをするも、すぐにその顔から表情が消え額に銀色の紋章が浮かぶ。これで、攻撃力2500は僕のものだ。

「ふむ……ターンエンドしましょう。なんですかあなた、人のモンスターをリリースする下品なテーマの次は人のモンスターを奪う下品なテーマですか？人格がそのままデツキに現れていますよ」

「わかる？いやー人格者って辛いね、どれだけ隠そうとしても、このにじみ出る品格は隠しきれなくてさー」

我ながら子供っぽいとは思うけど、ついつい言い返さないと気が済まない。もうちよい気の良い返しができれば満点だけでも、思ってたよりスノウの煽り耐性は低かったらしい。ちよつと見ているだけでもはつきりと、その苛立ちが手に取るようにわかる。

清明 LP4000 手札：3

モンスター：邪神官チラム・サバク（攻・アリゲーター）

魔法・罨：グレイドル・アリゲーター（邪神官）

1（伏せ）

スノウ LP4000 手札：4

モンスター：なし

魔法・罨：なし

「僕のターン、ドロー！」

引いたカードは……青氷の白夜龍、か。このカードはレベル8だから、このターンでアドバンス召喚することは不可能だ。なんとかしてもう1体モンスターを並べられればこのターンでけりをつけるこ

とも十分狙えたけれど、この手札とこの伏せカードではそれも厳しい。

「だったら、攻撃するしかないか。チラム・サバクでダイレクトアタック！」

再び蛇の口が開き、幾筋ものビームが撃ち込まれる。先ほどと違うのは、そのビームがすべてスノウの体を直撃したという点だ。

邪神官チラム・サバク 攻2500↓スノウ（直接攻撃）

スノウ LP4000↓1500

「ま、こんなところかね。ターンエンド」

先ほどのスノウのターン、悪夢再びで回収していたチラム・サバクは2体。それから1体を出したきり何のカードも使用していないため、次にスノウがカードを引けばその瞬間に手札は5枚となり2体目のチラム・サバクの召喚条件が整うこととなる。

そこまではいい、問題はそこからだ。相打ち覚悟で突っ込んで来るようならこの伏せカード、グレイドル・スプリットを装備して返り討ちにできるのだが。

「ワタクシのターン。今の一撃はなかなか痛かったですよ……霸王様に差し出す前に、このワタクシ自身の手であなたを八つ裂きにしてやりたいと思うほどにはねえ！ドロー、手札が5枚存在することで邪神官チラム・サバクを召喚！」

「来たか……！」

邪神官チラム・サバク 攻2500

「そして魔法カード、暗黒界の取引を発動。互いに1枚のカードを引き、その後手札を1枚捨てます。ワタクシが捨てたカードはこのワタクシ自身、暗黒界の術師 スノウ。そしてこの瞬間その効果が発動し、デツキから暗黒界カードを1枚サーチします。暗黒界の門をサーチ。さらに装備魔法、レプティレス・アンガーをワタクシの場のチラム・サバクに装備。これにより、攻撃力が800ポイントアップします」

「800……!?!」

チラム・サバクの顔に、まるで民族衣装の一部のようにカラフルな

仮面が装着される。仮面というアイテムの持つ特有の不気味さにチラム・サバク自身の紫色の肌が相まって、形容しがたいミスマツチさを醸し出していた。だがそんなことより聞き捨てならないのは、その800という強化値だ。発動後装備カードとなるグレイドル・スプリットを使ってもその上昇値は500と、向こうのチラム・サバクにはわずかに及ばない。

邪神官チラム・サバク 攻2500↓3300

「攻撃の前に、もう少しデッキを回しておきましょう。先ほどサーチした暗黒界の門を発動し、その効果を発動。ワタクシの墓地に悪魔族モンスターが存在するとき、それを除外することで手札の悪魔族を1体捨て、さらにカードをドローできます。最初に墓地に送った暗黒界の斥候 スカーを除外してワタクシが捨てたカードは暗黒界の狩人 ブラウ、その効果により自身が手札から捨てられたことでさらにもう1枚ドロー。おや、これを引きましたか。2枚目のスネーク・レインを発動、今度はレプティレス・ナージャ2枚にレプティレス・バイパー、さらにレプティレス・ヴァースキを墓地へ」

「……？」

どうも読めない。暗黒界なのかレプティレス軸の爬虫類族なのか、デッキパターンが今一つ絞り込めないのだ。そもそもこれまでの相手にテーマデッキの比率が高かったせいもあって、余計に翻弄される。

ただ見た感じサーチのスノウにドローのブラウに門、そして取引と、暗黒界関連のカードはあくまでデッキの潤滑油としての採用に留まっているような印象を受ける。スネーク・レインを2枚使えるだけ爬虫類族がデッキに入っていることを考えると、本命は爬虫類側にある……はずなのだが、どうにも読み切れない。墓地を肥やし、デッキを回し、最終的に何がしたいのだろうか？ただ1つ言えることとして、これだけでは終わりそうにない。

「お待たせいたしました。そろそろ苦痛が欲しいころでしょうから、たっぷりと味あわせてご覧にいきましょう。では、バトル」

2体の神官がぶつかり合い、共に蛇のビームを打ち合う。しかしそ

の力が拮抗していたのもほんのわずかな間のみで、僕のフィールドにいる方の邪神官がやがて押し負けて敗れ去る。

邪神官チラム・サバク 攻3300↓邪神官チラム・サバク 攻2500 (破壊)

清明 LP4000↓3200

「そしてこの瞬間、戦闘破壊されたチラム・サバクの効果発動。1ターンに1度戦闘破壊された時、このカードは守備表示で特殊召喚されず。この時このカードはチューナーとして扱うようになりますが、まあだからといってどうということはありませんがねえ」

「しまったー！」

邪神官チラム・サバク 守0

せっかくアリゲーターでコントロールを奪ったモンスターが破壊されたのみならず、相手フィールドに戻ってしまった。守備表示固定ならば攻撃されることはないためそこは唯一の救いだが、それにしてたつてこのターンを凌いだけに過ぎない。

それにしても、あの蘇生能力はなかなか厄介だ。1ターンに1度とはいえ戦闘破壊してもデメリットなしで蘇るのだから、最低でも2回連続で攻撃を仕掛けないとまともにフィールドから引きはがすことができない。ただ1回でも倒しさえすれば2体目もそのターンは効果を使えなくなるから、どうにかして攻撃の手数を増やすことができれば見た目よりは楽なはずだ。

「ターンエンド」

清明 LP3200 手札：4

モンスター：なし

魔法・罫：1 (伏せ)

スノウ LP1500 手札：1

モンスター：邪神官チラム・サバク (攻・アンガー)

邪神官チラム・サバク (守)

魔法・罫：レプティレス・アンガー (チルム)

場：暗黒界の門

「僕のターンー！」



すでに、次にとるべき手はわかっていた。あとは、このドロイーでモンスターが引けさえすれば……よし！

「サイレント・アングラーを召喚してトラップ発動、グレイドル・スプリット！」

自分の場に他の水属性が存在すれば手札から特殊召喚できる魚族、サイレント・アングラー。だけど今回重要なのはその効果じゃなくて、このカードが通常召喚できるレベル4のモンスターだということだ。

サイレント・アングラー 攻800↓1300

スプリットが発動五足装備されたことで、アングラーの攻撃力は500ポイントアップする。でも問題はそこではない。どの道このカードでは、チラム・サバクを倒すことは不可能だ。

「そしてスプリットの効果を発動。このカードを墓地に送り装備モンスターを破壊し、デッキから2種類までのグレイドルを1体ずつリクルートする！来い、イーグル！コブラ！」

グレイドル・イーグル 攻1500

グレイドル・コブラ 攻1000

「そのまま2体で守備表示のチラム・サバクに攻撃、再生能力も関係ない！」

「フン……」

グレイドル・イーグル 攻1500↓邪神官チラム・サバク 守0

(破壊)

イーグルの突撃を受けて倒されたチラム・サバクが、再びその傷を治して立ち上がる。その頭を、コブラの牙が再び薙いだ。

グレイドル・コブラ 攻1000↓邪神官チラム・サバク 守0(破壊)

壊)

「メイン2。僕のフィールドの水属性、イーグルをリリースすることでシャークラーケンは特殊召喚できる。そしてこのターンのエンドフェイズ、スプリットの効果で呼び出したコブラは自壊。だけどトラップの効果で破壊されたコブラはアリゲーターと同じく相手モンスターに寄生し、その動きを操る！」

シャークラーケン 攻2400

2体のグレイドルの姿がでろでろに溶けていく。後に残った銀色の水たまりがスルスルと動き、仮面をかぶったほうのチラム・サバクの体に足元の蛇から浸透していく。

「ターンエンド。さあどんなもんだ、ってね」

強がってはみせたが、どうも久々すぎてデツキの回りが心なしかぎこちない気がする。早く勝負勘を取り戻さないと、この世界では文字通りの命取りだ。デツキのカードはそれぞれ頑張ってくれているのだから、これは僕の問題だろう。それとも、ついさつきやっておいた「仕掛け」がまだうまくいっていないのだろうか。

「また、コントロール奪取ですか。本当に下品この上ない……！ワタクシのターン！魔法カード、悪夢再びを発動！墓地のワタクシこと暗黒界の術師 スノウ、レプティレス・ヴァースキの2体を回収。そして暗黒界の門の効果を発動、墓地の狩人 ブラウを除外してスノウを捨て、カードをドロースノウの効果で暗黒界の取引をサーチ。そしてそのまま発動、たがいにドロースノウを手札を1枚捨てますねえ」

またしても手札交換に精を出すスノウ。妨害手段がない以上指をくわえて見ているしかないが、どうにも気に喰わない。そして取引の効果で引いたカードを見て、あからさまにスノウが笑う。

「やっと引きましたか。では、そろそろそのやりたい放題も終わりにさせてもらいますよ。まず下準備として、ダーク・グレファアを通常召喚。このカードは1ターンに1度手札の闇属性を捨てることで、デッキから闇属性を墓地に送ることができます。先ほど回収したレプティレス・ヴァースキを捨て、デツキからレプティレス・メデューサを墓地へ」

ダーク・グレファア 攻1700

漆黒の剣士が掲げた剣を無造作に振るうと、その剣風がスノウのデュエルディスクからカードを1枚巻き上げて闇に送り込む。今の手札コストも含めるとこれでスノウの手札は1枚のみ、どうするつもりだろうか。

「ではお待ちかね、本日のメインと行きましようかねえ。手札から邪

龍アナンタを特殊召喚！このカードはワタクシの墓地と場に存在する爬虫類族をすべて除外することで特殊召喚し、攻守はその際に除外したカード1枚につき600ポイントアップします。ワタクシの墓地には現在8体の蛇が存在するため、そのステータスは攻守ともに4800！」

邪龍アナンタ 攻0↓4800 守0↓4800

「攻撃力4800……！」

過剰なまでの墓地肥やしは、この切り札に繋げるための布石だったのか。いや、墓地の爬虫類族に応じて攻撃力が上がるカードを使っていたプロフェッサー・コブラとの対戦経験があるにもかかわらず、似たようなカードの存在を見抜けなかった僕にも責任はある、か。

だけど、僕もただやられっぱなしでは済まさない。

「相手がモンスターを特殊召喚した時、手札ドラゴン・アイスの効果を発動する！手札からこのカードを捨てて、そのまま墓地から自身を特殊召喚！」

ドラゴン・アイス 守2200

「壁モンスターですか。まあ、無駄なんですけどね。バトル、アナンタでチルム・サバクに攻撃！」

アナンタの無数の首が伸び、自分よりもはるかに大きい蛇を前にして動けないチラム・サバクの体をそれぞれ噛み千切り呑み込んでゆく。いくらレプティレス・アングアの効果を受けていても、この攻撃には耐えきれない。

邪龍アナンタ 攻4800↓邪神官チラム・サバク 攻3300

(破壊)

清明 LP3200↓1700

「そしてチルム・サバクは、チューナーとなって復活する。さらにこの瞬間、装備対象が存在しなくなり破壊されたワタクシの装備カード、レプティレス・アングアの効果発動。相手モンスター1体の攻撃力は800ポイントダウンします」

「なっ!?!」

地面に落ちて割れた仮面から不気味な瘴気が立ち上り、隣にいた

シャークラーケンの体を包む。これで攻撃力は1600、ダーク・グレファアでも戦闘破壊ができる数値になってしまった……!

邪神官チラム・サバク 守0

シャークラーケン 攻2400↓1600

「続けてバトル。ダーク・グレファアで攻撃!」

ダーク・グレファア 攻1700↓シャークラーケン 攻1600

(破壊)

清明 LP1700↓1600

「くっ……! けどまだ、僕にはドラゴン・アイスが……!」

「いないようだがねえ。エンドフェイズにアナンタのさらなる効果発動! ワタクシのエンドフェイズが来るたびに、フィールドのカード1枚を破壊する!」

一度動きを止めたはずの邪龍が、再びその鎌首をもたげる。ドラゴン・アイスの氷の体を容赦なく噛み砕き、被っていた鉄の仮面を残して全てを呑み込んだ。

清明 LP1600 手札:2

モンスター:なし

魔法・罫:なし

スノウ LP1500 手札:0

モンスター:邪龍アナンタ(攻)

邪神官チラム・サバク(守)

ダーク・グレファア(攻)

魔法・罫:なし

場:暗黒界の門

「僕のターン、ドロー」

モンスターは根こそぎ倒された。伏せカードもない。さすがに暗黒界の術師を自称するだけのことはあり、この悪魔もまたかなり強い。普通なら、この場を1ターンでひっくり返すことは不可能だろう。これまでの僕だったら、あるいはここで心が折れていたかもしれない。だけど、今の僕はもう違う。僕を助けに来てくれた、僕を支え続けてくれた、この力は負けたりしない。

「もうおしまいだ。ここで終わりにする、スノウ！」

「なんですって？あなた法螺を吹くのも結構ですが、もう少し現実を見てから物を言ったらどうなのですか？」

怪訝な顔になるスノウ。だけどそもそも、このデュエルを始めた時から奴の敗北は決まっていた、といっても過言ではない。僕の戦力を見誤ったその時点で、もはや勝ち目は0になっていたのだ。

「僕はお前の邪龍アナンタをリリースし、手札から怒炎壊獣ドゴランを特殊召喚！そして相手フィールドの壊獣に反応して、手札から壊星壊獣ジズキエルが僕のフィールドに目覚める……！」

「馬鹿な！壊獣?!そのデッキは既に失ったはずでは……」

炎を吐き空をも駆ける恐竜型の壊獣と、1体で星をも破壊し尽くす侵略兵器の壊獣がフィールドに現れる。

怒炎壊獣ドゴラン 攻3000

壊星壊獣ジズキエル 攻3300

「失った？馬鹿言わないでよ。この子たちは僕のために来てくれて、僕もこの子たちと共に戦うって決めたんだ。どんな方法で断ち切ろうとしても、僕は必ず仲間と戦う！」

「く……こんなところで、このワタクシが……！」

そう、これこそが僕の「仕掛け」。まだ試行錯誤の段階とはいえ、これまで使っていたデッキに壊獣の力を取り入れた、僕自身が新たなステージへ上り詰めるための新しいデッキだ。そしてこのジズキエルの攻撃力と、スノウのダーク・グレファアの攻撃力の差は1600。そして、スノウのライフは1500。どうしようもない敗北を前にスノウの顔が絶望に歪み、その場に尻もちをついて少しでも後ろに下がろうと無駄な努力を繰り返す。

奴のあの表情に嘘はない。どうやら、墓地のカードの中にも奴を助ける力を持ったカードはなさそうだ。そう判断し、今にも破壊の光線を撃ちだそうとするジズキエルを手で制する。

「さあどうする、スノウ？2つ、2つだけ選ぶ道を残しておいてあげるよ」

「2つ……？」

自らの命が失われようとするこの状況で掴める可能性があるのなら、例えそれが藁であつてもスノウには手を伸ばすしか方法はない。案の定乗ってきたことに軽い可笑しさを感じながらも、指を2本出してこちらの条件を伝えた。

「まず1つは、潔くこのまま戦士として僕のジズキエルの攻撃を受けて散ること。もう1つはこの場でサレンダーして。そうすれば命だけは助けてやるからとつとと覇王のところに行つて、僕からの伝言を伝えてもらおうか」

「な、なんですつて、そんなこと」

「いーんだよ別に？そんな大した話でもないし、ここで普通にデュエルを終わらせてもゼーんぜん困らないし。ジズキエル、ダーク・グレファアーに……」

「わ、わかった、わかりました！サレンダーしますとも、ワタクシの負けです！」

「そりやよかった。悪いね、ジズキエル」

少し不満げに唸りながら、ジズキエル達の姿が消えてゆく。まだ尻もちをついたままのスノウを見下ろし、改めて話しかける。

「さて、それじゃあ伝言を頼もうか。文面は、そうだね……『この遊野清明様が地獄の底から帰つてきたから、首洗つて待つてなバーカ』。こんだけでいいや」

「へっ？い、いえ、わかりましたああっ！」

あまりといえばあまりの文面に1瞬あつげにとられたらしいスノウだったが、すぐに気を取り直すと手にした杖が黒い光を放つ。その光に包まれ、スノウの姿がその場から消えた。とりあえずその結果に満足していると、チャクチャルさんの心底面白がっている声が頭に響く。

『なるほど、考えたなマスター。いやはや、これからは忙しそうだ』  
「あはは。やっぱりこの手の心理戦は、僕が何考えてもチャクチャルさんにはお見通しか」

『当然。だが、いかにもマスターらしい手の打ち方だな』

そう、これは僕にとって1種の賭け……十分勝機があると踏んだか

からこそできる、霸王に対しての軽い牽制だ。

そもそも霸王は十代の別人格、どれほど変わろうとも根っこにあるのはまさしく遊城十代そのものであるはず。入学してオシリスレツド所属になって以来ずっとひとつ釜の飯を食ってきた僕だからその思考パターンはある程度予想がつくが、少なくとも十代ならあんなふざけた内容の伝言を伝えるためだけにわざわざ部下を見逃してやった時点で、こちらが喧嘩売ってることにはまず気が付くはずだ。

そしてこれは十代ではなく霸王に会って何となく感じたことなのだ。少なくとも奴はそれを笑ってスルーできるタイプではない。というよりも、癖の強い悪魔を完璧に纏め上げるためには舐められたらおしまいだとわかっているのだろう。例えば侵略の最中だろうと、自分のことをコケにした僕のことを最優先で排除しようとする動き出すはずだ。僕の搜索に戦力を注げばこの侵攻はストップするか、それが無理でも多少遅らせることぐらいはできるだろう。その間に、フリード軍に頑張ってもらおう。

……脳裏にここで出会った人々、霸王軍の侵攻を受けて戦ったり逃げ出したり、いずれにせよその影響を受けて平和な暮らしを捨ててきた人たちの顔が蘇る。この世界に来て何があったのかは知らないが、十代は元々僕らの世界の人間だ。なら、これ以上無関係の人を巻き込んでいい道理なんてあるはずがない。このケリは僕らでつける、それがせめてもの責任だ。

「だけどその分、皆にはまた働いてもらうからね。そこだけは、本当にごめん」

『気にすることはない。半端な状態で止まるぐらいなら、これぐらい突き抜けたほうがずっと面白くなる。これは私だけの意見ではない、精霊われわれ一同の総意だ』

「……うん。ありがとう」

反対されたらどうしようかと心配していたが、どうやらそれも杞憂だったらしい。やれやれと肩の力を抜いたところで、突然背後から刺すような視線とピリピリ来るほどの殺気を感じた。何かをかすかに吹くような音も聞こえはつと振り返ったその足元、つま先すれすれの

位置に小ぶりな矢が突き刺さる。さらに木々の向こうから、落ち着いた調子の声が聞こえてくる。

「これ以上警告はしない、妙な真似をすれば次は当てる。両手を上に挙げ、デュエルディスクを外して地面に置け」

『言われたとおりにしておいた方がいいな。相手の油断を誘う方が後々楽でいい』

「(……だね)」

言われたとおりにホールドアップし、デュエルディスクを外してから足元に置く。それを見て、明らかに動揺した気配が森の中から伝わってきた。

「そのデュエルディスクは、我々の……!? 貴様、それをどこで手に入れた！」

「えつと……」

「待て。あの男の顔、どこかで見た気がする。それにあの服装、あれは……」

どこから説明したものかと言いついでいると、さらに第三者の音が聞こえてきた。あれ、この声、どつかで聞いたことあるような。やがて草むらを掻き分ける音とともに、長い赤髪を後ろで結んだ女性が姿を見せる。その腕に装着されたデュエルディスクを見た時、ようやくすべてを思い出した。なぜこのタイプのデュエルディスクに見覚えがあったのか。あつて当然だ、2年ほど前に見た彼女のそれと同じだったからだ。そう、彼女の名は。

「アマゾネスのタニヤ！」

かつてのセブンスターズとの戦いで、わざわざコロッセオまで造って舞台を整え三沢と激闘を繰り広げた女戦士のタニヤ。あまりにも予想外の再開に、しばらくの間二の句を注ぐことができなかった。



## ターン101 覇王の粛清

あれから。接点こそ薄いものの三沢の友人ということで口添えしてくれたタニヤのおかげもあり、なんとかあの場で射抜かれるようなこともなく、彼女たちアマゾネスに案内されてとある場所に来ていた。簡易式の家やテントが立ち並び村というより難民キャンプのようなその場所をよく見ると、女だけの村というアマゾネスの伝統とは程遠く男や老人、カードの精霊の姿もちらほらと見ることができた。

「ここは……」

「それは私より、彼から聞いてくれ  
「彼?」

タニヤの言葉に聞き返すと、ちょうどキャンプ地の中央に位置するテントから1人の男が出てきた。タニヤに向かって手を振り、次いで僕に視線を送るその目が驚愕に見開かれる。多分、僕も同じような顔をしているだろう。忘れもしないその顔、十代やタニヤ同様まさかこの世界に来てみるとは思いもしなかった顔だ。

「三沢!」

「清明!」

……あれ、なんかデジャヴ。反応がワンパターンな気がするけどこれしか言いようがないのだからしょうがない。

「それで、三沢達は何やってんの?」

さらに30分後。ひとまず客分として迎えられた僕は三沢の仮住まいとなったテントの中で胡坐をかきながら、そもそもあの砂漠の異世界で別れてから皆に一体何があったのかを聞き出していた。

それにしても、まさかヨハンが行方不明になつていたとは。しかも、次元のゆらぎを通して異世界に着いたと思つたら最初は全く無関係の世界って、何やってんだか。その世界で三沢は1人、ヨハンはいなくても僕がこの世界にいるかもという希望を元に残つて搜索を続けていてくれたらしい。

「何やってんのはぐ」挨拶だな。わざわざお前のために残ってやったというのに」

「ふーん……タニヤのため、じゃなくて？」

「ゲホツ、ゲホツ……！うるさい！」

ちやうど目の前のコップから水を口に含んだ瞬間を見計らって、三沢にとって一番突っ込んでほしくないであろう点を指摘する。予想通りの反応ににやにやと笑みがこぼれ、それを見て一杯喰わされたことを悟った三沢が呆れ顔になる。

「まったく。お前、そんなキャラだったか？」

「僕にも色々あつてね。少し性格が悪くなったのさ。それで真面目な話、ここはなんなの？」

「ここは、簡単に言えばまさに難民キャンプそのものだな。霸王軍による戦火からかろうじて逃れたものの行き倒れ寸前になっている人たちを見つけてしまつてな、まさか放っておくわけにもいかずタニヤと俺でこの拠点を作り上げたんだ」

「でも……」

さすがに直接口に出すのははばかられるが、ここでまともな戦力になりそうなデュエリストは三沢とタニヤを除くとほんの数人のアマゾネスぐらいしかいない。あとは老人や子供、あるいは怪我人ばかりだ。いくら三沢達が強くても、霸王軍から隠れきれるとは到底思えない。それをどう言おうか迷っていると、三沢が先手を打って周りを見回して見せた。

「言いたいことはわかるさ。俺だって、こんな場所がいつまでも持ちこたえるとは思っちゃいない。だが話によるとここから南に行つた先に、霸王と戦おうという人たちが立てこもる最後の要塞都市が存在するらしい。そこにこの人たちを入れることができなにか、お前も会つたアマゾネスのエルナが聞きに行つてくれたんだが……」

そこで言葉を濁す三沢。そうだ、その後のことは僕がよく知っている。アマゾネスのエルナ。誇り高く戦士として戦い散っていく、僕にデュエルディスクを渡してくれた女戦士だ。今はアマゾネスの人たちに彼女のデュエルディスクは返しておいたので、彼女にも墓を作る

ようなら手を合わせに行こうと心の中で誓う。彼女がいなければ、スノウともまともに戦えやしなかった。

「ごめん。せめて僕が、あと少し早く会っていれば……」

「お前が謝ることはない。タニヤもその仲間も、誰もお前のことを責めたりはしないさ。ともあれ、エルナのデュエルディスクを確認したところ手紙が入っていてな。要塞都市では俺たちのことを歓迎してくれるとのことだから、近々ここは引き払うつもりだ。お前も来い、清明」

なぜこんな僻地に暗黒界の手の者がわざわざ来ていたのか。そしてそれと時を同じくして、この場所にやってきた僕。頭のいい三沢のことだ、その2つを結び付けてあいつらの目当てが僕であることにはもう察しがついているだろう。それでもなおこうやって言ってくれる、その優しさに対しほんの少しだけ心が揺らぎかける。

でも、駄目だ。霸王に対してあからさまに喧嘩を売った以上、少なくともしばらくの間は僕の周りがこの世界で一番危険な場所になるはずだ。既に今だって、スノウの報告を受けた悪魔どもがここにめがけて進軍を始めていても不思議はない。もしも僕がこの人たちのことを、三沢達のことを本当に考えてその友情に応えようというのなら、むしろ今すぐこの場所を離れてなるべく目立つようにならなくてはならぬ方向に霸王軍を誘導すべきだ。無言で首を横に振る僕を見て、それ以上の説得は諦めてくれたようだ。食い下がることはせずひとつため息をついて、ふと思いついたという風に変える。

「そういえば清明、デュエルディスクのあてはあるのか？ ディスクを持たずにうろつきまわるなんて、正気の沙汰じゃないぞ」

「うーん……まあ、最悪霸王軍に襲われたどっかの村で家探しでもするよ。ひとつづぐらいは動くのも残ってるだろうし」

「乱暴な話だな。少しここで待っていてくれ」

そう言い残し、ふらりとテントを出ていく三沢。やがて戻ってきたとき、その手には青い金属製の輪っかのようなものと数枚の紙が握られていた。その全身から立ち上る、さあ聞いてくれ！と言わんばかりのオーラについつい流されて、最も彼が欲しがっているであろうセリ

フをぶつけてみる。

「なにそれ」

「よくぞ聞いてくれた。これは俺が霸王軍に対抗するためこの世界で完成させた新型デュエルディスク……の試作品だ」

「デュエルディスク？それが？」

三沢の持つそれはどこからどう見てもデュエルディスク要素はなく、ただのブレスレットか腕輪にしか見えない。第一、カードを置くスペースどころかデッキを置く場所すらついていない。ただよく見るとただの金属の輪つかではなくその内側に無数の点が模様のようにあしらわれていて、見ようによつてはその色も相まってまるで星海を切り取つてそのまま持つてきたかのようにも見えた。

だがそれだけで、やはり見慣れたデュエルディスクを連想させるパーツは何一つついていない。三沢は僕の訝しげな視線も当然の反応だと領き、ブレスレットの方を脇に置くと代わりに手にしていた紙を地面に広げる。そこには三沢らしく、例によつて例のごとく大量の数式と共に丁寧なデッサンが描かれていた。

「そもそも霸王軍は当たり前だが、基本的にデュエルディスクの有無で相手がデュエリストかどうかを判断する。デュエルディスクが無ければカードだけ持つていても何の意味もないし、あれはカードを置くスペースを確保しなければいけないせいで遠くからでもよく目立つからな。だから俺は、その部分さえクリアすれば奴らの目を誤魔化したうえで戦力を確保できるのではないかという結論に至った」

「ふんふん」

そう言つてデッサンの一つ、従来のデュエルディスクの絵を指さす三沢。言いたいことはよくわかるし、確かにもつともなことだ。確かにデュエリストだとわかれば奴らは人海戦術もお構いなしで向かってくるから、非武装の一般人のふりをすれば捕虜になるぐらいはあるだろうがそれでも道中のリスクを大きく減らすことができる。少しだけ興味が湧いてきたので、そのまま先を促す。

「だが当然、これまでの俺たちの常識だとそんなことは不可能だ。カードを置くスペースがなくなればデュエルは不可能だし、そこを削

る技術は海馬コーポレーションの最先端科学でも難しいだろう。そこで俺が目につけたのが、科学とは全く別の未知なる力……カードの精霊による超自然の力や魔法だ。俺らしくもない話だがな」

「ふんふんふん」

確かに、理論的で科学的な三沢にとっては苦渋の決断だろう。異世界に渡り次元を越えることすらツバインシユタイン博士と共に科学の力でやってのけたのだから、今更それとは全く違う異質なものを利用する事を決めるまでにはどれほどの試行錯誤があつたのかは、想像に難くない。

「そこでまず考えたのが、このパターンだ。この図を見てくれ」

そう言つて次に指差したデッサンは、何やら人間が手首から肘のあたりにかけて金属製の小手のようなものを装着している図だった。そこから矢印が伸びた次の画には、その小手から光の線が伸びてそこにカードが置かれている。

「カードを置く場所を実体ではなく、いつそ光……電気でも魔法でもなんでもいい、とにかくスイッチ一つでそれを展開してデュエルができるようになればいいんじゃないかと思つてな。だがこれは、俺の知識不足と機材不足のせいで計画だけに留まつた。そこで次に考えたのが、これだ」

次に、その隣のデッサンを指さす。先ほどの案と同じような機械をつけた人間の図だが、隣の図と比べても明らかにその機械は一回り大きくなっている。そこから伸びた矢印では、スイッチを押すことで折りたたまれていたカードを置くスペースがその機械から展開される図が描かれていた。さらにその隣に、メカメカしい片眼鏡のようなものも描かれている。

「この案よりも少し現実的に、ソリッドビジョン展開システムをこの片眼鏡……仮称としてD・ゲイザーと俺は呼んでいるんだが、こちらに分けてデュエルディスクの機能を2つのパーツに分けるアイデアだ。これならソリッドビジョンシステムを付ける必要がないため、だいぶサイズを小さくすることができる。これは割といい案だと思つたんだがな……科学技術を前面に出しすぎたせいで、この世界で

はかえって作れない代物になってしまった。今あるデュエルディスクを解体する機材どころか、原料となる金属の確保も期待できないからな」

「三沢らしいミスだね」

「……どういう意味だそれ」

「ごめん、許して。それで、その次はどうしたの？」

「あくまで否定はしてくれないのか……まあいい、話を戻すぞ。この2つが代表案で、あとはVR空間を利用してのデュエルだとか、デュエルディスクは腕に装着するという前提を覆していつそ機動性も高めるために乗り物、例えば自転車やバイクに組み込んでみたらサイズを気にしなくてもいいんじゃないかとか、我ながらここで実現させるには厳しいようなアイデアばかり浮かんできてな」

なんでそんなこと思いつくんだろう、とは思っても言わない。頭に浮かんだことをいちいち口に出してたんじゃいつまでたっても話が進まないのだ。それに、わざわざこんな失敗談を話しているということは、その先に言いたい何かがあるのだろう。持ってきたきり触れられていないあのブレスレット型デュエルディスクも気になるし、ここは素直に頷いておく。

「それで、色々と試した結果どうにか1つだけ完成したのがこれだ。論より証拠、これを左腕に嵌めてみてくれ」

言われたとおりにブレスレットを受け取る。金属製にも見えるそれは見た目に反して意外と軽く、僕の腕の太さにぴったりサイズのまるであつらえたかのようにしっくりと来た。

「次に、この水をかける。動くなよっ」

目の前のコップを持ち上げ、こちらが反応する間もなく中身をそのブレスレットにぶちまける。1瞬ひやりとする感覚が腕に来たが、抗議するより前に目の前で起きた光景に言葉を失った。ブレスレットが淡い青の光を放ち、かかった水をすべて吸い取っていく。ほんの1秒ほどで光は収まり、後には水滴1つ残っていないかった。

「えっ？ちよつと待って何これ」

「これでいい。次はそのブレスレットをデュエルディスクのつもりで

構えてくれ。ボタンがあるのが見えるか？それを押すんだ」

ここまでくればもうどうにでもなれ、だ。言われたとおり構えてみると、確かにボタン、というよりもむしろブレスレットのデザインの一部分のような盛り上がりが見えた。左手ではどう曲げても届かないので、恐る恐る右手でそれを押してみる。

そこから先は一瞬だった。腕輪から半透明の膜のようなものが飛び出て、それが見慣れた形……デュエルディスクのそれへと変化する。よくよく目を近づけて見るとその膜は水でできており、腕輪のある箇所から出て別の場所へ吸い込まれる流動を延々続けていた。

「これが俺が今できる最高の技術、名付けて水妖式デュエルディスクだ。従来の物から金属パーツのほとんどを取り外し、足りない部分は外部から加える水を使い精霊……特に水属性の力を借りてこのように展開する。あくまで試作品段階だからまだ欠点もあるがな」

「水妖式デュエルディスク……」

好奇心に耐えかねて展開中のそれにそっと触ってみるが、間違いなく動き続けている水なのにいくらつついても指はまるで濡れない。デッキから適当にカードを引っ張り出してモンスターゾーンに置いてみると、普通のデュエルディスクを使った時と同じく虹色に光る回路が水面に走り目の前にソリッドビジョンが現れた。カードを離すとソリッドビジョンも当然消え、後には全く濡れていないカードが残る。

「凄い……」

僕にはこの仕組みはまるで理解できないし、多分聞くだけ時間の無駄だろう。この世のあらゆる難しい話は、僕にとっては専門外だ。だけど、目の前の三沢が完成させたこの技術がこれまでの科学の枠を超越した代物だということはわかる。……元の世界に帰ったら、サインとか貰っておこうかな。この技術を発表すれば三沢大地の名前は世界に語り継がれそうだし、そうしたら気軽にもらいに行けなさそうだし。

だが、意外にも三沢の顔は晴れない。これまでの口ぶりや長い前フリから考えるとてつきりもつとドヤ顔してくるのかと思ったのだが、

さつきからちよいちよい挟んでくる欠点とやらがよほど気に喰わないのだろう。

と、こちらが何もしていないのにいきなり水の流れが途切れた。新たな水の供給がなくなったデュエルディスクはあつという間に縮んで消えていき、後には元のブレスレットのみが残った。その様子を見た三沢が驚くわけでもなく目を閉じてため息をついたところを見ると、どうもこうなることはわかっていたらしい。

「その欠点がこれ、燃費の悪さだ。ある程度は貯水も効くようにしたんだが、どうしても回路に無駄が多くてな。コップ1杯程度だとあの程度しか持たずにデュエルが不可能になる。もし実戦中にそうなたら最悪だ」

「……うーん」

「すまない、本当は俺の普通のデュエルディスクを渡してやりたいんだが。見ての通りここは非戦闘員が多いから、今だってここを維持するのにかなりカツカツの状態なんだ。エルナのデュエルディスクも本当は彼女の物ではなく、他のアマゾネスが使っていたものを借りていただけだったからな」

エネルギーが切れたらただのブレスレットにしかならないわけか。コップ1杯であの程度しか持たないってことは、かなり時間配分には気を付けないと肝心な時に使えなくなりそうだな。

「とまあ、こんなところだ。正直こんな危なっかしい物を使わせるのは気が進まないが、家探しして使えるかどうかかわからないデュエルディスクを探すよりはまだマシだろう。なあ、今からでも考え直して俺たちと要塞都市まで行かないか？」

これを渡すのはよほど気が引けるのか、もう一度説得にかかる三沢。だけど、僕の答えはやっぱり決まってる。心配そうな三沢に少し笑いかけて、ブレスレットを改めて腕に付け直した。

そうだな、ここまでできておいて。散々周りに迷惑かけて、何人もの犠牲を出して。それなのに今更、当の本人が引くわけにはいかない。すぐ行ってやるから待っている霸王、ここからは僕の逆襲と洒落込もう。



所変わり、霸王城。かつては暗黒界の主たる龍神グラフアの居城であったが、主無き今では霸王による侵略の拠点となっていた。近日霸王の命により行われるという要塞都市への総攻撃のため続々と悪魔や一部の魔法使い、あるいはそのしもべの精霊が集結しつつある中、1体の悪魔が何かに追われるかのようにボロボロになったマントにも構うことなく最上階、霸王の居室へ向けて走っていた。その名はスノウ……旧暗黒界のもとで術師として名を上げ、赤き隕石の力を浴びてからも霸王の元でその頭脳を振るってきた実力派である。

誰も止める者がなのままに最上階にたどり着いた彼が、扉の前に片膝をついて叫ぶように声を絞り出す。

「霸王様、ご報告したいことが！」

「なんだ」

扉の向こうから聞こえてくる冷たい声に今更ながら冷や汗が吹き出してくるのを感じたが、すでに時遅し。ただ頭を垂れ、震え声で報告を続けるしかない。

「い、以前霸王様の前から無様にも逃げ出した壊獣とかいカードを使う人間ですが、奴はまだ生きておりました！ワタクシがこの目で確認しましたので間違いございません！」

「ほう？」

「報告は以上でございませすー！」

対して興味を引いた風もない返事にむしろ安堵し、早めに切り上げてその場から離れようとするスノウ。だが、それは許されなかった。立ち上がるうとした彼の背後から、分厚い石の扉を通して氷のように冷たい言葉の刃が放たれる。

「それで？」

「は、はい？」

「それで、貴様はどうしてきた？そいつの死体でも持ち帰ってきたか」

「い、いえ、それが……で、伝言を預かってまいりました。そ、その、

『この遊野清明様が地獄の底から帰ってきたから、首洗って待つてな

「バーク」とのことでございます」

姿を見てもいないのに伝わってくる霸王の威圧感に破れかぶれになり、清明からの伝言を伝えるスノウ。言い終えた瞬間、ますます強まってきたプレッシャーにその場にへたり込みそうになる。もはや悪魔のプライドも何もなく、願うことはただ一つ。この場から逃げ出したいという、ただ一点のみだった。

しかし、その望みは決して叶わない。霸王の次なる言葉、そのひとつひとつが死刑執行の宣告のごとくスノウに突き刺さる。

「なるほど。つまり貴様は人間相手に無様にも負けたうえに、そのくだらない言葉を俺に伝えるためだけにわざわざ生かされておめおめ逃げ帰ってきたというわけか」

「そ、それは……」

「それだけで万死に値する罪。そうですね、霸王様。意見具申させて頂きますが、こやつの処刑方法はこのカオス・ソーサラーにお任せを」  
「カオス・ソーサラー様！」

一体どこから聞いていたのか、カツカツと靴音を響かせて自然と会話に入ってくる霸王の側近の一人、カオス・ソーサラー。その言葉の内容に、ゆっくりと絶望が全身にしみわたってくる……だが以外にも、それを止めたのは霸王本人だった。

「まあ待て。今の俺は機嫌がいい、貴様にも一度だけチャンスをやろう」

「ほう。どのようなチャンスをくれてやるおつもりですか？」

「その貴様、俺とデュエルしろ。俺は融合モンスターを使わずに戦ってやるから、戦闘でも効果でもどちらでもいい。俺のライフに1ポイントでも傷をつけられたら、その時点で貴様の罪は帳消しとしてやろう」

「そ、そんな……」

「拒否するならすればいい。ただその場合、貴様の処分はカオス・ソーサラーに一任しよう」

「か、畏まりましたっ！」

ほんのわずかな保身の可能性だが、今のスノウにとってはそれにす

がる他に方法はない。どの道上級魔法使いであるカオス・ソーサラーの手にかければ、下級モンスターでしかない彼は抗うすべはないのだ。霸王からは見えていないと知りつつも土下座するスノウの頭をカオス・ソーサラーが掴み、無造作に立ち上がらせる。

「霸王様もお人が悪い。了解しました、闘技場に観客を集めてまいります。さあ、お前はこっちに来い！」

そこから先の行動は早かった。皆が見たがっているのだ、無力な獲物が圧倒的な力の前にねじ伏せられ、抵抗虚しく希望潰えて倒される様を。断末魔の瞬間、絶望に歪む犠牲者の顔を。その視線を痛いほど感じながら、つい昨日まで優雅に上から見る側だったはずの闘技場にスノウが引き出される。

逃げ出さないよう鎖につないで引きずってきたベージュの姿が消えると同時に反対側の入り口から、ゆっくりと霸王が死神のごとく歩いてやって来た。その足音が近づくにつれ、またもや恐怖がぶり返す。だがすでに、闘技場には彼と霸王の他に誰の姿もない。

「く……く……」

「さあ、始めよう。精々バーンカードでも引けるように祈ることだな」互いのデュエルディスクが示したのは、スノウの先攻という結果。そこでスノウは思考する。確かに1ポイントでもダメージを与えれば敵前逃亡の罪が消えるルールがある関係上、たとえ火の粉や雷鳴レベルのカードであっても先攻でバーンを行うことさえできればそれが最善手だ。

さらに追加ルールとして、霸王は今回融合モンスターを使わないという縛りがある。仮に初手でバーンカードを引くことができずとも、メインデッキのモンスターだけで戦うのならば所詮は融合素材、少しは時間的猶予があるはずだ。

十分勝機はある。霸王の名の大きさに惑わされるな。

そう萎みそうになる心を必死で奮い立たせ、カードを引きぬく。もっと単純なことに気づけなかったのは、そちらに意識が行き過ぎたからだろうか。上から観戦する悪魔も魔法使いも、もはや彼を同士ではなくまな板の上に乗る解体前の魚を見るような目でしか見つめて

いなかっただことにもし気が付くことができなければ……。

「デュエル！」

恐る恐る手札を見て、声にならない叫びが漏れる。手札にあるカードはどれもバーン能力を持たないカード……もちろんバーンメタのカードを霸王が握っている可能性も0ではないとはいえ、最も可能性が高い先行逃げ切りの夢は潰えてしまった。

となれば彼に残されたのは次善の策、攻撃の機会が訪れるまでただ守りを固める事のみ。

「ワタクシは魔法カード、スネーク・レインを発動！手札1枚をコストにデッキから4体の爬虫類族、レプティレス・ナージャ3体に邪神官チラム・サバクを墓地に。そして装備魔法、継承の印を発動！ワタクシの墓地に同名モンスターが3体存在する場合、そのうち1体を蘇生しこのカードを装備します。蘇りなさい、レプティレス・ナージャ！」

蛇の下半身に、人間の女の子のような上半身。先だつて清明とのデュエルで使用したカードであるチラム・サバクや邪龍アナンタとは真逆の蛇人間が、継承の印をネックレスのように首からかける。いかにも蛇らしい赤い舌をチロチロと出し、その場にとぐるを巻いて座り込んだ。

レプティレス・ナージャ 守0

「レプティレス・ナージャは戦闘で破壊されず、さらにナージャとバトルを行ったモンスターの攻撃力は0となります。さらにワタクシはこのターン、まだ通常召喚を行っておりません。暗黒界の斥候 スカーを準備表示！」

スカーレットの名が示すごとく、スノウ自身も含め暗めの配色が多い暗黒界の中では珍しい全身合を赤に染められた下級モンスター。戦闘能力こそ低いものの、バトルで破壊された際にレベル4以下の暗黒界を手札に加えるというまさに序盤でこそ輝く斥候の名にふさわしい特殊能力を持つ。

暗黒界の斥候 スカー 守500↓800 攻500↓800

「さ、さらにカードをセットします。ターンエンド、です……」

彼の伏せたカードは、モンスター<sup>の</sup>守備力を2倍にするトラップ、仁王立ち。悪夢再びで回収可能な守備力0のモンスターを多く採用する彼のデッキとの相性は一見最悪だが、実はそれこそが彼の狙いである。その隠された手札に存在する手札誘発モンスター、牙城のガーディアン。攻撃されたモンスターの守備力を1500ポイント上昇させるこのカードと組み合わせることで、その守備力は例え元の数値が0のナージャであっても不意打ちで3000、守備力500のスカンボを使い、これまでも何人ものデュエリストが見た目の数値に騙され安易に繰り出した低攻撃力の貫通能力持ちモンスターを返り討ちにしてきたものだ。

……だが、霸王はその努力を嘲笑う。心底馬鹿にしていることを隠そうともせずに鼻で笑い、緩慢なまでの動きでカードを、この戯れを終わらせる最後のピースを引いた。

「俺のターン。魔法カード、ヒーローアライブを発動。俺が表側表示のモンスターをコントロールしていない時、ライフ半分をコストにデッキからレベル4以下のE・HEROエレメンタルヒーローを特殊召喚する。来い、バブルマン！」

この場に清明やジムといった、霸王十代を倒すため戦っていた戦士たちがいればなんと言っただろうか。かつて十代と共に戦った水のE・HEROが、今は他のヒーロー同様霸王に使役されている。

霸王 LP4000↓2000

E・HERO バブルマン 攻800

「場にバブルマンが存在するとき、このカードは発動できる。速攻魔法、バブルイリュージョンを発動！」

バブルマンが腕の発射口から無数の泡を噴き出し、それがシャボン玉のようにふわふわと闘技場を漂う。思わずスノウが周りを見回し、自分の周りを取り囲むシャボン玉を払おうと腕を振る……だが、それだけだ。シャボン玉はいつまでも割れることなくふわふわと浮かんでいるだけで、何も仕掛けてくる様子がない。

「このカードはもう少し後でのお楽しみだ。相手フィールドにモンス

ターが存在するとき、E―HERO<sup>イーベルヒーロー</sup> マリシヤス・エッジはリリース  
1体で召喚できる。出でよ、マリシヤス・エッジ!」

E―HERO マリシヤス・エッジ 攻2600

霸王の愛用する悪のヒーローの1体にして貫通能力を持つ最上級  
モンスター、マリシヤス・エッジ。そしてその登場に、スノウが内心  
ガツポーズをする。どちらでもいい、そのまま攻撃さえしてくれれ  
ば返り討ちで反射ダメージ、そうすればこのデュエルも終わり晴れて  
自由の身となる。さあ霸王、何を止まっていらっしゃる。

「装備魔法、サイコ・ブレイドを発動。このカードは発動時に100単  
位でライフを支払い、その数値だけ装備モンスターの攻撃力を上げ  
る」

霸王 LP2000↓400

E―HERO マリシヤス・エッジ 攻2600↓4200

マリシヤス・エッジが刀身が緑色に光る剣を掲げると、霸王の体を  
通してその生命エネルギーが剣に流れ込んでゆく。その数値は16  
00ポイント……準アタッカーの一撃に相当する数値をライフから  
削られ、1ターン目にしてわずか3ケタにまでライフを減らしながら  
も、まるで意に介した様子はない。その鬼気迫る光景に、むしろ上か  
ら処刑を覗く観客の方が圧倒されて闘技場が静寂に包まれる。針一  
本落ちただけでも音が響き渡りそうな沈黙の中、そんなことにすら気  
づく余裕もなくスノウは自身の頭脳をフル回転させていた。牙城の  
ガードイアンと仁王立ちのコンボで対応できる数値を早くも越えて  
きたことに内心焦りながらも、それを気取られないようにと平静を装  
う。

幸い、今のマリシヤス・エッジの貫通をレプティレス・ナー ज्याに  
受けたとしてもまだこのターンは凌ぐことができる。そうすればレ  
プティレス・ナー ज्याの効果により、マリシヤス・エッジの攻撃力は  
0となる。あとは返しのでターンでスカーを攻撃表示にし、ただ攻撃す  
ればいい。ただそれだけで済むはずなのに、彼の脳裏をよぎるのはマ  
リシヤス・エッジの一撃で自分のライフが尽きる最後の瞬間の光景ば  
かり。

なぜだ。なぜこんな不吉な予感ばかりが出てくるのだ。全てを見下すような霸王の目に見つめられると、自分が処刑の瞬間を待つ死刑囚にでもなった気がしてならない。

「く……い」

「バトルだ。マリシヤス・エッジで、暗黒界の斥候 スカーに攻撃。ニードル・バースト！」

「スカーに!?」で、ですがこのダメージステップにトラップカード、仁王立ち……さらにその発動にチェインして、手札の牙城のガーディアンの効果が発動! 守備力を4000にすることでダメージを抑え、戦闘破壊されたスカーの効果でデッキからワタクシ自身、暗黒界の術師スノウのサーチを……!」

マリシヤス・エッジの持つ剣が振り切られ、胴から離れたスカーの頭が宙を舞う。反射ダメージこそ狙えなくなったものの、ここで3800ものダメージを受けたら例えライフが残っていても体が限界を迎える可能性もありうる。もしそうなれば、デュエル続行不可能となったプレイヤーは即敗北の掟に従い返しの際に繋ぐことさえ不可能になる。特大ダメージを受けてなお平然としていられる精神力は、それこそ霸王のように特別な存在でなければ持ち得ないのだ。即座にそれだけ考え、咄嗟に2枚の防御札を使い切る。

スノウ LP4000↓0

「え?」

斬り飛ばされたスカーの首が、ボトリと地面に落ちる。何が起きたのか把握することもできずただ0になった自身のライフカウンターを呆然と見つめるスノウの前に、バトルを行った2体のモンスターがステータスが表示される。

霸王 LP400↓200

E—HERO マリシヤス・エッジ 攻4200↓8000↓

暗黒界の斥候 スカー 守500↓2000↓4000 (破壊)

「攻撃力、8000……?」

いくら守備力が4000であろうとも、きつかり一撃で初期ライフの全てを削り取るマリシヤス・エッジの一撃。敗北の結果を受けて、ス

ノウの体から光の粒子がふわりと飛び出す。その勢いは増し続け、その体が次第に透け始めるのを感情の無い目で見降ろしながら、霸王が手にした1枚のカードを見せた。

「トランプカード、魂の一撃。モンスターへの攻撃宣言時に俺のライフを半分にすることで、4000から俺のライフを引いた数値だけモンスター1体の攻撃力をアップさせる。通常トランプカードはセットしなければ発動できないが、俺が最初に発動した速攻魔法……バブルイリユージョンの効果により、このターン1枚だけ手札からトランプをプレイすることが許された」

「そん……な……」

薄れゆく意識の中で、あることに気づいたスノウが戦慄する。何枚ものカードにより互いのステータスが変化していった結果、受けた貫通ダメージはライフポイントと同じ4000。まさか霸王は、この結果すら想定したうえで、サイコ・ブレイドのライフコストを『1600』としたというのか。始めからワンターンのみを想定していたのなら、もつと少ないライフコストでも十分だったはずだ。またオーバーキルする気ならば、上限ギリギリの1900ポイントでもよかつたはずだ。だが霸王はきっかり1600ライフを支払い、ジャストキルを達成させた。

「まさ、か……霸王様、貴方は……」

こうなることすら、全てが計算の内だったというのか。最後まで言い切ることのできなかつたその言葉を最後に、デュエルディスクだけを遺して敗者が消える。勝者ただ1人のみが立つ闘技場の中心で、デュエルディスクを収納形態に移行させた霸王が声を上げた。

「いいか、これが敗者の末路だ。貴様らもこうなりたくなければ、出撃の準備を済ませておけ。恐らく逃げ出したネズミは俺の注意を引きつけたつもりだろうが、人間1人ごときに構ってやるほど俺は暇ではない。今ここに宣言しよう、霸王軍は明日、要塞都市に総攻撃をかける！」

闘技場を中心に、悪魔たちの歓声が低く轟く。その中心で霸王は部下の興奮をも意に介さず、頭上に光る赤い彗星をただじつと見つめて



いた。

## ターン102 霸王達の戦い（前）

三沢達と離れてから、2日目の朝。ようやく見えてきた霸王城を、僕は複雑な思いで見上げていた。普通に歩けばもう少し早くたどり着けたはずだが、囿役としてわざと目立つように歩いたり、そうかと思えばふらつと身を隠したり、と色々気を遣って歩いてきたため余分な時間がかかってしまった。

……そう、かかってしまった、だ。どうやら霸王は僕の安い挑発には乗ってくれなかったらしく、スノウを追い返してから僕に対する追手はまるで来ていない。その部分を僕が読み間違えたせいで、陽動に賭けた時間は完全に無駄になってしまったわけだ。この遅れが、命取りにならないければいいけれど。

しかしこうして見ると、霸王城は大きい。前回放りこまれた闘技場も大きかったけど、あれが目じやないぐらいのサイズだ。しかも城の周りには前来た時にはいなかった巨大なドラゴン族モンスターや鳥獣族モンスターの精霊が飛び回っており、実物以上に大きく見えてくる。これだけのモンスターが来ているということは、つまりそれだけ霸王軍の招集が進んでいるということだろう。

『騎乗型のモンスターがああの数か……食料も与えないわけにはいかないだろうし、いくらああの大サイズの城でもあまり悠長にしている余裕はないだろうな。下手すると今日の内には進軍が開始されるとみて間違いないだろう、マスター』

「りよーかい。だったら急ごうか、今日中に霸王を倒せば何も問題ないわけだし。改めて第2ラウンド、リターンマッチと洒落込もうかね……！」

口癖ともなった呟きで気合を入れ直し、霸王城までの道をただ歩き出す。幸い徴兵が進んでいるせいか、城を正面に見ながらの一本道でも誰ともすれ違うことはなかった。城壁の前まで来たところでダークシングナーのマントを体に巻きつけて顔を隠し、極力目立たないようにそつと上空の様子を窺う。見回りの兵士が何度か近くを通ったが、デュエルディスクが腕に付いていないことを確認したら話しかける

事すらすらに遠ざかっていった。難民か何かだと思われたんだろう。「んー、やっぱり空路かなあ。チャクチャルさんはどう思う?」

空路、というのは上空を飛び回るドラゴンたちのことだ。あれだけいればこっさり僕がモンスタ―を出して混ざっても気づかれる可能性は低いだろうし、一度入り込んでしまえばあとは適当な窓から何食わぬ顔で入り込めばいい。悪くないアイデアだと思ったが、うちのブレインはやや否定的だった。

『やめた方がいいな。確かに侵入まではさしたる困難もないだろうが、そこからどうする? 入り込んでしまえば地の利は敵方にある。徴兵のせいで見回りの密度も増しているだろうしな』

「なるほど……ん? あれ?」

チャクチャルさんの言葉ももつともなので、空路は諦めて改めて空を見上げる。そこでふと目に付いたのが、1匹の鈍く光る生体金属の龍だった。霸王城の回りをぐるぐると周回するほかのモンスタ―と違い、明確な目的を持って城内に着地しようとするコースを辿っていたため下から見ると目立っていたのだ。さらによく見ると、上には3人の騎士が乗り込んでいる様子が辛うじて見えた。

それはいいのだが、あのモンスタ―はどこかで見た気がする。もちろんここは精霊世界なのだから見たことがあるモンスタ―がいても何も不思議ではないのだけれど、でもなぜか気になる。

「ねえチャクチャルさん、あれ……あ、もういいや」

一縷の望みをかけてうちの邪神の記憶に頼ろうとするも、指さした時にはすでにその機械龍は霸王城の中に入ってしまっていた。仕方ない、多少気にはなるけれどあれは後回しにしよう。どうせ僕もあの中に入るわけだし、何かの機会でまた見ることもあるだろう。

「どっかに抜け穴でもないもんかね。お城って言ったら隠し通路のひとつやふたつ抱えてナンボじゃないの?」

『あるとしても、外から見つかりやすければ意味がないからな? それこそ内通者でも抱えていない限り探す手間ですら逆で時間がかかるだろうな。なるべくリスクを抑えて侵入するとなると、ふむ』

「もし、その人。すみませんが、水を一杯もらえませんか」

「え、僕ですか？」

どこからなら入れそうか霸王城を見上げていると、戦争の気配から逃げてきたのだろうか、ぼろきれのような服を着た1人の老人が話しかけてきた。片目は怪我でもしたのか包帯が巻かれており、痩せこけたその体は一目見ただけでも相当ひどい状態にあることがわかる。

一応水妖式デュエルディスクには川の水を限界まで補充しておいたからある程度は余裕もあるし、三沢のところからもらってきた水筒の中身もまだほとんど手を付けていない。何より下手に断わるとその場で倒れそうな老人の様子を見たらとてもじゃないが断りきれず、首にかけていた水筒を外して差し出した。

「おお、ありがとうございます……！」

「あんまり飲みすぎないでくださいね？」

残った片目を輝かせてかすかに震える手を伸ばした老人が、水筒を受けとろうとしてバランスを崩す。そのままこちらの体にもたれかかるような格好になると、細い体からは想像もつかないほどずっしりと体重がかかってきた。どこにそんな肉がついているのかと驚きつつも、どうにかその体を支えて起き上がらせようとした……その時、こちらの耳元に顔を近づけた老人が先ほどの弱々しい声とはまるで違う低い声でそつと囁いた。

「……霸王と戦いたいなら、後ろに付いて来なさい」

「え？」

「おお、すみません。では、一口だけ頂きます」

またもや弱々しい声に戻り、一口だけ中身を飲んで水筒を返す老人。そのまま今にも倒れそうな足取りで背を向け、ふらふらと霸王城から離れていく。その後ろ姿はやはりただの老人そのもので、さっき聞いた声は気のせいだったのかと首をひねりそうになる。もしここにいたのが僕1人だったら、そのまま見送っておしまいだったかもしれない。

『ハリーハリー、マスター。あの老人の言うことは、聞いておいて損はない。我々の疑問に対する最適解があるはずだからな』

「え、ええ……？」

わけがわからなかったが、チャクチャルさんがわかっているならそれでいい。どうせこの世のあらゆる難しい話は、僕にとつての専門外だ。素直に老人の後をついていくと、今にも倒れそうな足取りの癖に意外なほど早く歩いてゆく。

やがてそのまま数分ほど経つと、老人は突然向きを変えてもはや住む人もいなくなつたのであろう見捨てられた家、屋根にも穴が開き壁も崩れかかっている廃墟の中にふらりと入っていった。もうどうにでもなれと、僕もその後につき腐りかけた扉を押しつけて中に入る。待ち構えていた老人が、家の中に誰もいないことを確認するかのように入り口を見回してから口を開いた。

「……来たか。霸王を倒しに行くんだな？」

その声は先ほど僕に囁きかけたときと同様に力強く、どうやらこちらがこの老人の本性らしい。いよいよもって正体が掴めないが、ただ者ではなさそうな様子に無意識に全身に力が入る。

「あなたは一体、誰なんですか？」

老人の質問を無視してそう聞き返すと、包帯に覆われていない方の目が品定めするように僕を見て細まる。ややあつて再び口を開くと、思ってもみなかった名前が飛び出てきた。

「私の名は、グラフィア。かつて暗黒界の龍神とまで呼ばれた悪魔だ」

「グラフィア……！」

名乗られて真つ先に思い出したのは、バックアップ・ウォリアーから聞いたこの世界の話だった。龍神グラフィアはつい先日まで暗黒界を統治していたが、例の彗星が空に現れると同時に突如姿を消したというあれだ。この老人が、本当にそのグラフィアだというのだろうか。

老人の真意を測りかねていると、地面に落ちた老人の影が急に伸びる。目の前の体は指一本動いていないのに、その影だけがより巨大に筋肉質に、そして禍々しい人型の龍の姿へと変化していった。それと同時に室内を小型の嵐のような風が吹き荒れ、かすかに残っていた家具が宙を舞う。こちらの表情が引きつったのを満足げに見て、再び影が元のサイズに戻っていった。

「……えつと」

『あ、そいつ本物だからなマスター』

「先に言つてよ！」

「わかつてもらえたようで嬉しいよ。本題に戻るが、君の目的は霸王、そうだろうか？」

「……なんでそれを？」

なるほど、この老人がグラフィアだというのは間違いないだろう。それはいいが、なぜこのタイミングでよりによって僕相手に接触してきたのだろう。というか、初対面なのになんで僕の狙いが霸王にあることを知っているのか。

「こう見えても、かつては龍神とまで呼ばれた身だからな。それに君は今、この近辺ではそれなりに顔が知られているのだよ。なにせ理由はどうあれ霸王に真つ向から刃向つて生き延びた、ただ一人の戦士だからな。そのフードで顔を隠していたのと目撃情報にあつた全身の痣がないから今までは気づかれなかったんだろうが、その目を見ればわかる。この世界では誰も見たことのない未知のテーマ、壊獣を使い鬼神ケルトを下した人間というのは、間違いなく君のことだろう」

ケルト。こんなところで聞くとは思わなかったその名前に、少し言葉詰まらせる。その無言を肯定と受け取り、グラフィアがこちらの目を真つ直ぐ見据える。

「勘違いしないでくれ。ケルトはいい部下だったが、君を相手にその仇討ちなどする気はない。むしろ鬼神の名に相応しい、誇り高い最期を遂げさせてくれたことに礼を言いたい。辛い仕事だったろうが、彼の魂がせめて安らかにあることを祈つてやってくれ」

「その……」

「時間がない、今は霸王だ。君も見ての通り、霸王城は難攻不落の要塞だ。ましてや今は徴兵により集められた悪魔により普段より監視の目が増している。だが奴らを束ねているものの根底にあるものは、あくまで霸王への恐怖ではない。霸王さえトップから消えれば烏合の衆となり、情けない話ではあるが少し突いただけでその残党も崩壊するだろう。そこで霸王城に乗り込むため、君に私が力を貸そう」

「わかりました。でも、どうしてなんです？どうしてグラフィア、あなた

は……」

「なぜ私がまともでいるのか、かね？それともなぜ私が直接出向かないのか、かい？どちらにせよ答えは単純だ。残念ながら、今の私はここにこうしていることだけでも精一杯なのだよ」

そう言い、腕に巻いた包帯を外して中身を見せる。老人に擬態したその腕には、人間ではありえないほどの力で無理やり引き裂かれたような傷跡がいくつも生々しく残っていた。傷口からにじむ濃厚な血の匂いが室内に満ちるのにも構わず天井越しに空の一点、あの隕石が浮かぶ場所のあたりを指し示す。

「もう何度も、あの光で自我を失いそうになってきた。辛うじて正気を失う寸前に私の力のほとんどを使い逃げ出すことには成功したものの、それも完全ではない。意識が吞まれそうになるたびに私は、こうして自らの体を引き裂いてきた。痛みだけが、私の意識を明瞭にさせてくれた。かつての魔力も、そして再生能力すらも失い、そうまでしてわずかな闇に逃れ正気を保つても、あの光のせいでもともて外を出歩くことは不可能なまま。日に日に落ちていく体力を実感しながら幾度となく心折れそうになってきた私にとって、霸王と戦おうという君の存在は最後の希望といってもいい」

「そりやまた、随分都合のいい時に僕が来たわけね」

「少しは手を貸してくれる気になったかね？甘言は悪魔の得意分野だから、まだ欲しければいくらでも囁こう」

あ、これ最初はただのいい人かと思っただけど、さすがに悪魔の大將やってただけのことはある。今までの発言だつてどこまで本気かわからない、とことん食えないタイプだ。こんな相手を信用すると痛い目に合いそうではあるけれど、ここで僕を騙す理由はグラフィアにはない。もし霸王の内通者ならば、わざわざこんなところまで誘い込まずとも霸王城前でかかってくれれば兵士たちが勝手に気付いて加勢しに来ていただろうし。

「もういいよ。それで？何してくれるの？」

うつすらとはいえ本性が見えた以上、敬語を使ってやる義理もない。ため口に切り替える僕には何も言わず、部屋の片隅を指さした。

すると何の変哲もないただの床がうつすらと光を放ち、魔方陣らしきものが浮かび上がる。

「そこに立つといい。この廃屋は万一のために私が作っておいた霸王城からの脱出経路のひとつでな。転移用のトラップ、デイメンション・ゲートが仕込んである。本来はあちらからこちらへ来るためのルートだが、最上階にある王室の真正面に出ることができない」

「……本当？」

「とつくに察しているだろうが、嘘をつく理由は私にはない。もつとも君にとつてはこんな都合のいい話、疑念を抱くのもわからなくもないがな。なので、私ももう少し本音を言おう。正直なところ君がうまくやってくれれば、私は自分の手を汚さずに邪魔者が消えてくれるのをただ見ているだけで済むので大変楽なのだよ。仮に君が失敗したとしても、私への被害はこのルートが使えなくなる程度だからな」

大変腹黒いけど、これぐらいはつきり言われるとむしろ好感が持てる。こういうのを清濁併せ持つ、とか言うんだろうか。なるほど、これは間違いない大物だ。暗黒界を統治してきたという肩書にも納得できる。

ともあれ、ここまで来たらグラフィアの話に乗るしかなさそうだ。思い切つて魔方陣の中に飛び込むと、視界がぐにやりと歪み始めた。時間が経つにつれますますひどくなる歪みの中で、最後にグラフィアの声が聞こえた。

「私はこれでも、ケルトのことは武人として信用していた。そのケルトが君を信じたのなら、それに足る何かを君は持っているのだろう」

何か言い返そうかと思っただけど、結局声にならなかった。口を開くか開かないかのうちに、周りの風景が一変したからだ。ごつごつした石造りの巨大な建物、間違いない。ここが霸王城だ。

だけどそれよりも、目の前の人物に話をつけねばなるまい。まさに今王室に入ろうとしていたのであろう、見覚えのある褐色の男。目を丸くしてこちらを見つめる友人に、とりあえずフレンドリーに手を振って笑いかけてみた。



「……えっと。やつほー、オブライエン」

「な、何？清明、なのか？だがなぜここにいる、そんなはずがない、え？」

冷静沈着なイメージが強かったが、さすがに刺激が強すぎたらしく混乱するオブライエン。まあそりやそうだ、僕の方は三沢から聞いた話や霸王戦で聞いたジムの名前やらでオブライエンがこの世界に来ていることは知っていたけれど、オブライエンからしてみれば砂漠の異世界で勝手に行方不明になったはずの僕が、こんなわけのわからない場所できなり空中から生えてきたわけだから、ねえ。立場が逆なら僕だって自分の頭がおかしくなったのかと思うはずだ。

だからじっくり説明してあげたいところだけど、あいにくそんな暇はない。ここは霸王城、いつ何時悪魔どもに気づかれるかわかったものではないからだ。それにわざわざこんなところに居るところを見ると、どうせオブライエンも目的は僕と同じだろう。

「色々言いたいことはあるだろうけど、全部後で説明するよ。それよりオブライエン、僕と手を組まない？」

「どういう意味だ？」

「そのままの意味さ。正直タイマンだと厳しいけど、2人がかりなら霸王だって……！」

「……いいだろう。お前を信用しよう。そのかわり、後でちゃんと説明はしてくれよ」

「わかってるって、飲み込みが早くて助かるよ。んじゃこれ、軽くでいいから目を通して。ちよつとわけありで、だいぶデツキパターン変わったからさ」

オブライエンが知っている僕のデツキには、まだ壊獣のカードが入っていないはずだ。流石に初見のデツキでタッグをさせるのは厳しいだろうと、デツキを取り出して放り投げる。オブライエンが空中でキャッチしたそれに素早く目を通し、何か聞きたそうなのを堪えて僕に返す。そして自身のデツキをおもむろに取り出し、何枚かカードを入れ替え始めた。何を思いついたのかは知らないが、まあいいだろう。改めて受け取った僕のデツキを握り、目の前の扉を開け放つ。

「さて……改めて、覚悟しな霸王。地獄の底から帰ってきてやったんだ、とつと出てきて相手しな！」

窓から外を見下ろしていた、忘れもしない鎧姿のあの男。奴が僕の声に反応し、ゆっくりと振り返る。

「侵入者と聞いて何かと思えば、貴様らか。臆病者と負け犬が示し合わせて寄り添って、その程度の浅知恵でこの霸王に敵うとも思ったのか？」

負け犬というのはまあ、認めたくはないけど僕のことだろう。オブライエンが臆病者扱いされるあたり、僕が見ていないうちに何があったのか知りたところだけど、それこそ後でいくらでも聞けばいい。オブライエンが銃型のデュエルディスクを目にも止まらぬスピードの慣れた手つきで早抜きし、僕も腕輪のスイッチを起動して水の膜を放出させる。限界まで水が溜まったこの状態でどれだけ持つのかはよくわからないが、ここで出し惜しみはあり得ない。僕らの目を見て何を読み取ったのか、それ以上挑発してくることもなく霸王も円盤状デュエルディスクを回転、そして展開させた。

「いいだろう、2人まとめて相手してやる。ルールはバトルロイヤル方式、貴様らの次に俺のターンが来る。ただし俺にはハンデとして、1つだけ条件を加えさせてもらう」

「条件だと？」

「貴様らはどうせ2人がかりで来るのだろう？それに条件といっても、大したものではない。通常のバトルロイヤルルールでは全てのプレイヤーにターンが1巡するまで誰も攻撃が不可能だが、今回のみ3人目のプレイヤー、俺から攻撃の権利を得る。どうだ？」

霸王の提案を受け、こちらにちらりと目をやったオブライエンと視線が合う。正直、実質2対1のデュエルに対してこの条件は破格の提案だ。最悪霸王のみ手札10枚からスタート、とか言われても文句は言えないのに、攻撃権を1ターン早く霸王に回すだけで済むとは。

無論、これが霸王の自信の表れなもの、そしてその自信に相應しい実力が奴にあることもわかっている。悔しいが、奴は強い……僕が命のかぎり全力を尽くしてさらに奇跡を味方に引き入れ、そこまでやつ

てもうまくいけば引き分けに持ち込めるかもしれない、という程度だろう。その奇跡をこの1戦で引き当てるといって根拠のない確信があるからこそ、僕の方もここにこうしているわけだが。

「いいよ。後悔しても恨まないですよ?」

「後悔?それが必要なのは貴様らの方だろう。せつかく拾ったその命を、わざわざ自分から無駄にしにきたことにな」

「デュエル!」

「先攻は俺からだ!魔法カード、トレード・インを発動!手札からレベル8のヴォルカニック・デビルを墓地に送り、カードを2枚ドロースる」

戦いの火蓋を切ったのは、オブライエン。エースモンスターであるヴォルカニック・デビルを素早い状況判断で切り捨て、手札の質を高めにかかる。あの迷いのない判断は、さすがオブライエンとしか言いようがない。

「そしてヴォルカニック・エッジを召喚。このカードは1ターンに1度、攻撃宣言を放棄することで500ポイントのダメージを相手に与える。受け取れ、霸王!」

二足歩行する炎のトカゲ型モンスターが口から火炎弾を吐き、霸王の足元に着弾したそれが勢いよく燃え上がった。通常では攻撃できないデメリットの方が大きいこの効果も、どうせ攻撃ができない先攻1ターン目ならばノーリスクで発動できる。

ヴォルカニック・エッジ 攻1800

霸王 LP4000↓3500

「やるね、オブライエン。どう、霸王?少しは効いたかな?」

「……温いな」

炎の勢いが次第に弱まってくると、残り火の中心から傷一つない霸王が姿を現す。さすがに、500程度のダメージじゃ痛みの内にも入らないってわけか。

だが、その反応はオブライエンの予測の範囲内だったらしい。

「わかっているさ、この程度の炎じゃお前の鎧を剥がすことはできない。だが、次だ!魔法カード、トランスターンを発動!俺の場のヴォ

ルカニツク・エツジを墓地に送り、同じ炎属性炎族でレベルが1つ上のモンスターをデッキから特殊召喚する。来い、ヴォルカニツク・ハンマー！」

ヴォルカニツク・エツジが炎に覆われ、その中で進化を遂げる。より強靱な表皮とそれを動かす力強い筋肉、そしてさらに激しい炎を操る能力を身に着けた上級ヴォルカニツクだ。

ヴォルカニツク・ハンマー 攻2400

「ヴォルカニツク・ハンマーはエツジと同じく、攻撃を放棄することで俺の墓地に存在するヴォルカニツク1体につき200ポイントのダメージを与える。400ポイントのダメージを受けてみる！」

再び放たれる火炎弾。先ほどの物より威力こそ劣るものの、2連打すれば多少は効いてもおかしくない。だが炎に包まれた霸王が無造作に腕を振ると、まるで服に付いた糸くずをはらうかのように炎が四散して消えていった。

霸王 LP3500↓3100

「これでも効きやしないか……ならば魔法カード、闇の指名者を発動。モンスターカード名を1つ宣言し、そのカードが相手のデッキにあるならばそれを手札に加えさせる」

「オブライエン……？」

「俺が宣言するのは清明、お前のデッキのカードだ。その名は、怒炎壊獣ドゴラン」

闇の指名者自体、オブライエンのデッキとのシナジーは皆無だ。まさか先ほどカードを入れ替えていたのは、あのカードをデッキに入れるためだったというのか。このバトルロイヤルで、自分の火力が多少落ちることになっても僕のことをサポートするために。

申し訳なさに襲われながら、デッキに眠っていたドゴランを公開して手札に加える。恥ずかしい話だが僕は自分が戦うことで頭がいっぱいで、オブライエンのサポートなんてまるで考えていなかった。こちら辺が人間性の差なのだろう。

「確かにドゴランは僕のデッキにある。ありがとう、オブライエン」  
「気にするな。それに、これは俺のためでもある。カードを2枚セツ

トしてターンエンド……うまくやれよ、清明」

そう言い、意味ありげな視線を僕に向けるオブライエン。俺のためでもある……普通に考えれば、霸王を倒すために僕の戦力を増加させることで結果的に勝利が近くなるとか、そんな意味だろう。けどあの視線に込められていたもの、そしてあの言葉に含まれていたものがそれだけとは思えない。

「……僕のターン、ドロー」

考える。そもそも、なぜオブライエンはドゴランを指定した？ 霸王のフィールドに出すためなら、攻撃力が最も低いガメシエルの名を出せばいい。僕のフィールドにアタッカーを出したいのなら、ジズキエルがサンダー・ザ・キングの方がわずかとはいえドゴランより打点が高い。何かドゴランにしかできないこと、ドゴランでなくてはならない理由があるはずだ。怒炎壊獣ドゴラン……レベル8炎属性恐竜族、攻撃力の3000とは裏腹に守備力は低めの1200。固有效果は壊獣カウンター3つを消費しての相手モンスター全破壊。レベル8の、恐竜族、炎属性……まさか。ある1つの可能性が頭をよぎった。ヴォルカニックと同じ炎属性、オブライエンのフィールドにはモンスターが1体、ドゴランの攻撃力は3000……考えれば考えるほど、その可能性が正しいように思えてくる。なるほど、そういうことか。「僕はオブライエンのヴォルカニック・ハンマーをリリースして、怒炎壊獣ドゴランをオブライエンのフィールドに攻撃表示で特殊召喚する。さらに相手フィールドの壊獣の存在に反応して、怪粉壊獣ガダラが手札から僕のフィールドに目覚めるよ。さあオブライエン、やっちゃって！」

怒炎壊獣ドゴラン 攻3000

怪粉壊獣ガダラ 攻2700

2体の壊獣が並び立ち、共通の敵である霸王と戦う構えを見せる。オブライエンがにやりと笑い親指を立て、伏せたばかりのカードを表にした。

「任せておけ！ トラップ発動、火霊術―紅！ 俺の場の炎属性モンスター1体をリリースし、その元々の攻撃力のダメージを相手に与える

！受けてみる、霸王！」

ドゴランの全身が燃え盛り、巨大な火の塊となって霸王に襲い掛かる。その全身を覆う漆黒の鎧を、紅蓮の業火が引きはがさんとばかりに覆い尽くした。

霸王 LP3100↓100

「ぐっ……い！」

燃え盛る炎の向こうから、これまで眉一つ動かさなかった霸王のかすかな苦悶の声が聞こえた。流石にこれだけの炎の力は、霸王といえども無視しきれなかったらしい。

「やった！」

「よくやった、清明」

「貴様ら……い！」

わずかな喜びに浮かれる僕らの前に、炎を制した霸王の憎しみに満ちた声がかかる。背筋の凍りそうな冷たい視線と恐ろしい声音にもめげず、オブライエンが語りかけた。

「今のは俺の、清明の、そしてジムの分の一撃だ。その様子を見ると、少しは効いたようだな……十代」

霸王の心の闇を示すような鎧はところどころ焼け焦げ、あるいは熱量に屈し溶けている。オブライエンが奴のことを霸王ではなく十代、と呼んだのは、その鎧の様子を見てほんの一瞬だけでも十代の人格が表に出たりしないだろうか、という効果を期待してのことだろう。

だが十代は……霸王は、以前として霸王のままだった。

「なんとでもほざくがいい。さあそこのお前、貴様のターンはまだ終わっていないぞ」

「わかってるよ。永続魔法、グレイドル・インパクトを発動。そしてこのエンドフェイズにインパクトの効果により、デツキからグレイドル・イーグルを手札に加える。ドール・コール！」

霸王のライフは、ターンが回ってくる前にオブライエンの奮戦によりすでに100ポイントまで減った。いい調子だ、これならいける。何とかこのターンさえしのぎ切れれば、僕らの勝利だ。

「俺のターン、ドロ。魔法カード、デストロイ・パッチワーク魔玩具補綴を発動。デツキから

融合1枚及びエッジインプモンスター1体を手札に加える。俺が加えるのは、エッジインプ・シザーだ」

「融合を？」

霸王が使うテーマであるE―HEROイービルヒーローは、確かダーク・フュージョンによる融合召喚を得意とするカードだったはずだ。なのにあえてノーマルの融合を手札に加えたのか。

「そんなにこのカードが気になるか？だが生憎、これはただの手札コストだ。永続魔法、守護神の宝札を発動。手札を5枚捨てて発動し、カードを2枚ドロウする」

「また、あのカードを……！」

以前の僕との戦いでも使用し、融合召喚の連打による霸王の荒い手札消費を補ってきた厄介なカード。なるほど、発動できれば確実に手札が1枚増える魔玩具補綴は、守護神の宝札自身が手札事故要員になる可能性を少しでも軽減するためのカードだったということか。これで霸王の手札は3枚、引いたカードによっては融合召喚も十分にありえる枚数だ。

だが、そこから先の霸王の行動は僕の予想をはるかに超えていた。「魔法カード、ダーク・コーリングを発動。このカードは手札または墓地のモンスターを素材に、ダーク・フュージョンでのみ融合召喚できるモンスターを融合召喚する。俺は墓地の悪魔族モンスター、エッジインプ・シザーと岩石族の地球巨人 ガイア・プレートを素材とし、融合召喚！来たれ、E―HERO ダーク・ガイア！」

「E―HERO版のミラクル・フュージョン……ほんと、何から何まで元とよく似たものが揃ってるってわけね」

墓地融合。確かにその方法ならば、手札消費を大幅に抑えたうえで強力なモンスターを場に出すことができる。だがまさか、それを可能にするカードがE―HEROにもあったなんて。

だがオブライエンはそんなことより、霸王の場に現れたモンスターそのものに気を引かれたらしい。はつきりと息をのむ音が、僕のところまで聞こえてきた。

「ガイア・プレートだ?!それに、ダーク・ガイア……そのモンスター

は……！」

「どうしたの、オブライエン？」

「奴が今融合素材にしたガイア・プレートは、ジムのエースモンスターだった。そしてあのダーク・ガイアは、そのジムにとどめを刺したモンスターだ」

「そんな……」

ジムを倒したモンスターの素材を、よりにもよってジムのモンスターにするとは。オブライエンの心を全力でおりにくるあたり、やるこたがえげつない。

あるいは、とぼんやり考える。霸王の言葉通りならば、ダーク・ガイアを召喚するためには岩石族のモンスターが必要となる。もしかしたら僕のラディアントークンを奪った時のように、あの恐ろしい霸王の象徴ともいえるカード……超融合で素材にしたのかもしれない。「ダーク・ガイアの攻撃力は、素材としたモンスターの攻撃力の合計となる。エッジインプ・シザーの攻撃力は1200、ガイア・プレートの攻撃力は2800。よってその数値は4000だ」

E—HERO ダーク・ガイア 攻4000

「攻撃力4000を、手札1枚でポンと出してくるとはね……」

無理に笑って見せようとしてみるも、さすがに顔が引きつる。あれだけの大ダメージを与えてライフ的には既に瀕死のはずなのに、勝負の流れが霸王に傾きつつある嫌な感じがする。

「まずは目障りな貴様からだ。ダーク・ガイアでダイレクトアタック！」

「オブライエン！」

ダイレクトアタック、ということとは、その相手は1人しかいない。ドゴランを射出したことでその身を守るモンスターが存在しなくなったオブライエンの方を向いたダーク・ガイアが、頭上に炎に包まれた巨大な隕石を出現させる。

「トラップ発動、竜魂の幻泉！このカードは俺の墓地のモンスター1体を守備表示で蘇生させ、その種族を幻竜族として扱う。甦れ、ヴォルカニック・ハンマー！」



「構わん、ダーク・ガイアでそのまま攻撃する」

再び蘇るヴォルカニツク・ハンマーに、ダーク・ガイアが狙いをつけ直す。守備表示ならば戦闘破壊されたところで、オブライエンにダメージは通らない……だがその時、不思議なことが起こった。浮かんでいるダーク・ガイアを中心に辺りの風景が引き寄せられるかのようにぐにやりと曲がり、防御態勢を取っていたはずのハンマーが強制的に立ち上がらされたのだ。

ヴォルカニツク・ハンマー 攻1500↓攻2400

「何!?!」

「ダーク・ガイアの攻撃宣言時、相手モンスターを攻撃表示とすることができる。さらに融合モンスターがバトルを行う攻撃宣言時に速攻魔法、決闘融合―バトル・フュージョンを発動。その攻撃力がバトルの間、相手モンスターの攻撃力分アップする」

「それじゃあ、オブライエンにダーク・ガイアの攻撃力4000がそのまま……!」

「消え失せろ!ダーク・カタストロフ!」

止める暇も、そんな手段も、僕にはありやしなかった。隕石が雨あられと降り注ぎ、その衝撃がオブライエンを吹き飛ばす。わずかに撃、たった1ターン。オブライエンの命は、ほんの1瞬で燃え尽きた。

E―HERO ダーク・ガイア 攻4000↓6400↓ヴォルカニツク・ハンマー 攻2400 (破壊)

オブライエン LP4000↓0

「ぐわあああああつ!」

「オブライエン!」

ダメージが体に響いたのか、吹き飛ばされたまま起き上がることもすらできないオブライエンの体から光の粒がふわり、と放たれる。ライフが尽きたことで、消滅が始まっているのだ。どうすることもできないのはわかっているが、それでもじっとしていられずそのそばに駆け寄る。

「清明、こ、これを……」

苦しそうに息を吐きながら、オブライエンが自身の胸ポケットから

何か球状のものを取り出して差し出す。何の金属でできているのか、これまで見たこともない光沢だ。

『オリハルコンか？随分珍しいものを』

「オリハルコン？」

チャクチャルさんの呟いたその名前だけは、僕でも聞いたことがある。伝説の金属の1つで、とにかく凄い代物らしい。そんなものをなぜ、オブライエンが持っているのだろう。

「知っているのか？これはジムの瞳にはめ込まれていた、オリハルコンの眼……不思議な力が宿っているらしい。ジムの形見だったが、俺は見ても通りこのざまだ。だからこれは、お前に託す……！俺の、そしてジムの思いを奴に、十代に伝えてやってくれ……！」

「わかった、約束する。絶対に僕が、十代をあの鎧から引きずり出して元に戻す！」

「頼んだ、ぞ……これで俺のミッションは、完了だ……」

その言葉を最後に、オブライエンの姿が完全に消滅する。残ったのは主を失ったデュエルディスクと、最後に手渡されたオリハルコンの眼のみ。そのデュエルディスクをガンマンよろしく腰に差し、オリハルコンの眼の方はそっとポケットに入れる。

しばらく見てて、オブライエンにジム。2人が繋いでくれたこのミッション、残りの手順は僕が引き継いだ。

「待たせたね、霸王。さあ、第3ラウンドと洒落込もうか！」

## ターン103 霸王達の戦い（後）

オブライエンが倒れ、霸王城の王室にいるのは僕と霸王の2人のみ。さつきまでは隣にオブライエンがいる心強さからあまり感じなかったが、いざこうして1対1で向かい合おうと霸王のプレッシャーをひしひしと肌で感じる。

だけど、ここで弱気になるなんてありえない。オブライエン、ジム、ケルト……たくさんの人たちの想いを受け継いで、僕はここにいます。

「さあ霸王、お前のターンはまだ終わってないよ」

「なんだ、茶番は終わったのか？カードをセットし、ターンエンドだ」  
カードをセットしたことで、霸王の手札は0枚になった。だが次にターンを回してしまえば霸王は永続魔法、守護神の宝札の効果によりドローフエイズのドロローで2枚ものカードを引いてしまう。

……オブライエンの奮闘もあり、霸王の残りライフはたった100。この僕のターンで、なんとしてでも奴を潰す。それが僕が受け継いだ、彼のミツシヨんだ。

「僕のターン、ドロロー！」

霸王の従えている恐るべきモンスター、攻撃力4000のダーク・ガイアを倒す方法は……ない。だけど僕の手には先ほどサーチしておいた1枚のカードが、僕にとってはこれまで禁忌手に等しかった、ある方法がある。

今からすることは、以前の僕なら絶対やろうとしなかっただろう。だけど今の僕は、これまでの遊野清明ではない。僕の中に生き続けるユーノの思考パターンや戦術の癖が、僕の人格にも多少なりとも影響を与えているのがわかる。

「行くよ、グレイドル・イーグル！」

硬い石の床からにじみ出る銀の水たまりがぶくぶくと泡立ち、黄色い鳥の姿を模した侵略者はその翼を広げた。

グレイドル・イーグル 攻1500

「バトルだ、イーグル！ダーク・ガイアに攻撃！」

やっとわかってくれたのか、とでも言いたげに一声鳴き、その羽を震わせてイーグルが自分よりはるかに強い相手に向かつて矢のように突っ込んでいく。これまで自爆特攻はモンスターを捨て駒にするみたいで、人の戦法にケチをつける気はないが自分がする分には嫌だった。だけど、もしかしてそんな僕を見て。ずっとそんなことを言ってグレイドルの力を十分に発揮させてやらず、勝てたかもしれない勝負で負け続けてきた僕を見て。彼らはずっと、その悔しさに歯噛みしていたのだろうか。

グレイドル・イーグル 攻1500 (破壊)

イービルヒーロー  
↓E—HERO ダーク・ガイア 攻4000

清明 LP4000↓1500

先ほどのように隕石を繰り返すこともせず、岩石の腕を無造作に振るうダーク・ガイア。ただそれだけでイーグルの全身がバラバラに砕け、プレイヤーの僕にまでその衝撃の余波が襲う。だけど、僕はその瞬間だけダーク・ガイアに生じた隙を見逃さなかった。水滴となって飛び散ったイーグルの欠片は壁に床に跳ね返り、銀の雨となってダーク・ガイアへと再び襲いかかっていく。

「この瞬間、戦闘で破壊されたイーグルは相手モンスター1体に寄生してその動きを操る！今僕が受けたダメージは倍近くにしてそっくり叩き返してやる、さあやれ、ダーク・ガイア！ダーク・カタストロフ！」

「甘い。トラップ発動、デストラクト・ポーション！俺の場のダーク・ガイアを破壊し、その攻撃力だけライフを回復する。ダーク・ガイアよ、俺の糧となれ！」

かりそめの姿を脱ぎ捨てて真の姿となったグレイドルの猛攻を前に、ダーク・ガイアが四散する。その中心から抜き出された魂が霸王の鎧に吸収されると、オブライエンの火霊術によってボロボロになったはずの鎧が逆再生でも見ているかのように修復されていく。

霸王 LP100↓4100

「まだ、まだだ！ガダーラ、行けっ！霸王にダイレクトアタック！」

極彩色の羽根をはためかせ、ガダーラが暴風を巻き起こす。モンス

ターを自分から捨てた霸王にそれを止めるすべはなく、直撃を受ける……だが、霸王のライフはまだ残っている。

怪粉壊獣ガダーラ 攻2700↓霸王(直接攻撃)

霸王 LP4100↓1400

「耐えきられた……カードを1枚セットして、エンドフェイズにグレイドル・インパクトの効果を発動。デッキからグレイドル・アリゲーターをサーチしてターンエンド」

清明 LP1500 手札：5

モンスター：怪粉壊獣ガダーラ(攻)

魔法・罨：グレイドル・インパクト

1(伏せ)

霸王 LP1400 手札：0

モンスター：なし

魔法・罨：守護神の宝札

「俺のターン、守護神の宝札により2枚ドロウ。ほう、このカードを引いたか。なら貴様にも少しは役に立ってもらおうとしよう。モンスターとカードを伏せ、ターンエンドだ」

意味深な台詞とともに、不気味なほど静かにターンを終える霸王。今の一撃で仕留めきれなかった時点である程度の反撃は覚悟していたが、ここまで何もしてこないとなるとそれが逆に不気味だ。

「だからって、ここで退いたら勝ち目はない、か。ドロウ！」

ドロウカードは……守備表示モンスター1体をそのプレイヤー間わず破壊することができる魔法カード、シールドクラッシュか。あの伏せモンスターを対象にすれば、リバースモンスターだったとしてもその効果を使わせることなく破壊できる。そうではないただの壁モンスターだったとしても、先ほど魔法破壊に反応して憑依能力を使うグレイドル・アリゲーターをサーチするところを見ていた霸王がそれに対抗するためセット状態で場に出したと考えればつじつまは合う。

となると、危険なのはもう1枚の伏せカードの方か。何が出てくるかわからないから、こちらも万全の状態で臨むとしよう。

「フィールド魔法、KYOUTOUウオーターフロントを発動。さら

に永続魔法、補給部隊も発動。そしてグレイドル・アリゲーターを召喚」

グレイドル・アリゲーター 攻500

先ほどと同じような銀の水たまりが、今度は緑色のワニを模して起き上がる。ここでアリゲーターを使うのも少々勿体ないが、勝負をつけるのに出し惜しみはしてられない。もしあのカードがモンスターの破壊をトリガーに発動するタイプなら厄介だ、先にあちらから破壊しておこう。

「これで準備は整った！グレイドル・インパクト第2の効果、グレイ・レクイエムを発動！僕のグレイドル・アリゲーターと、その伏せカードを破壊する！」

UFOの残骸から放たれた2筋の謎光線が、僕の指定した2枚のカードめがけてまっすぐ飛んでゆく。まず伏せカードを破壊し、その後モンスターを引きはがして直接攻撃。これが今の僕にできる、最大の攻撃かつ最良の一手だ。だが怪光線が届く前に、伏せカードの方が表になる。

「トラップ発動、裁きの天秤。相手フィールドに存在するカード枚数の合計が俺の手札、フィールドのカードよりも多い場合、その差だけカードをドロウする。俺の手札は0、場にもこのモンスターと守護神の宝札、そして発動中の裁きの天秤の3枚のみしかカードが存在しない」

「僕のフィールドには……ちっ、カードが6枚ある、か」

「そうだ。よってカードを3枚ドロウさせてもらう」

伏せカードを警戒しすぎたあまり、万全の状態で霸王を攻略しようとしての準備が裏目に出ってしまった。しかも、せっかくサーチしたアリゲーターまでその力を発揮することができなかったし。

やや弱気になる心を、懸命に奮い立たせる。破壊効果をかわされたからといってどうということはない、今はまだ僕のターンなんだ。まだ僕の優位は揺らいでいない。

「KYOUTOUウオーターフロントはフィールドから墓地にカードが送られた時、1枚につき1つの壊獣カウンターを乗せる。アリゲーター

ターと裁きの天秤は、方法はどうあれ墓地に送られたことには変わりがないね。さらに僕のフィールドでアリゲーターが破壊されたことで、補給部隊により1枚ドロウする」

KYOUTOUウオーターフロント(0)↓(2)

「魔法カード、シールドクラッシュを発動！何を伏せてたのかは知らないけど、そのモンスターには退場願おうか！」

KYOUTOUウオーターフロント(2)↓(4)

シールドクラッシュのカードからも光線が放たれ、伏せモンスターが焼き払われる。当然だ、どんな耐性持ちのカードだってセットされた状態で直接除去されてはたまったものではない。

相変わらず沈黙を保ったままなのが少し気にはなるけれど、とにかくこれで霸王の場は今度こそがら空きだ。

「これで今度こそ、終わらせる……いやれ、ガダーラ！」

怪粉壊獣ガダーラ 攻2700↓霸王(直接攻撃)

再び舞い上がったガダーラの羽ばたきが、霸王城の内部に嵐を巻き起こす。今度こそこの一撃で、この戦いも終わる……そのはずだった。

だが、しかし。辺りの柱をなぎ倒し、調度品を窓から外に吹き飛ばす風の奔流の中で、霸王の周りだけ何かに守られているかのようにそよ風ひとつ届いていない。ダメージが、まるで入っていない。

「まさか、またネクロ・ガードナー……！」

「いや、それは違うな。よく見てみることだ」

「え？あれはまさか……そんな!?!」

『クリクリ……』

霸王の言葉と、その聞き覚えのある苦しげなうめき声を受け、ようやく気が付いた。霸王のフィールドで、半透明の小さなモンスターが半透明の壁を貼っている。

「ハネクリボー!?!」

『ク……クリ……』

霸王の出したあのモンスターは、入学時から十代を支え続けてきていた精霊のカード、ハネクリボー。そしてその特殊能力は、フィール

ド上で破壊されたターンの間、プレイヤーの受ける戦闘ダメージを0にするというもの。僕のシールドクラッシュをトリガーに、このターン覇王は守られている。

だが、純白の翼で空をパタパタと飛び回るいつもの自由そうな姿はそこにはない。全身をまるで拘束具のように闇のオーラが包み、それにより動きを封じられて空を飛ぶどころかまともに動くことすらおぼつかない、憔悴しきった様子の精霊がそこにいた。

十代の中の覇王に封じられたのか、それともハネクリボーが十代の闇を肩代わりして少しでも主人への負担を和らげようとしているのか。僕にそれを判別する手段はないが、いずれにせよハネクリボーはもう限界に近い。早く覇王を倒してあの呪縛を断ち切らないと、力を使い果たして消滅しかねない。

「だったら、ここは……メイン2に魔法カード、一時休戦を発動。互いにカードをドローして、次にそっちのターンが終わるまであらゆるダメージを受けなくなる。さらにウォーターフロントに壊獣カウンターが3つ以上存在するとき、1ターンに1枚新たな壊獣をデッキからサーチすることができる。海亀壊獣ガメシエルを加えて、ターンエンド」

K Y O U T O U ウォーターフロント (4) ↓ (5)

ここで覇王にもカードをドローさせるリスクは大きい。だがそれ以上に、何の準備もないまま覇王にターンを回すことは避けたかった。次の覇王のターン、僕が一時休戦を使わなかったとしても通常のドローだけで奴の手札は5枚になる。E—H E R Oの全体的な殺意の高さを見ると、その枚数を持たせることは危険だ。下手をすると、次のターンだけで僕のライフが削りきられる危険まである。だったらたとえ1枚のドローを許しても、次のターンに殺られる危険を排除するべきだ。

耐えきれるかどうかわからない一か八かの賭けなんて、覇王の前には通用しない。そんなものが許されるのは、リスクを承知で勝ちにくいときだけだ。

清明 LP1500 手札：4



モンスター：怪粉壊獣ガダラ（攻）

魔法・罫：グレイドル・インパクト

補給部隊

1（伏せ）

場：KYOUTOUウオーターフロント（5）

霸王 LP1400 手札：4

モンスター：なし

魔法・罫：守護神の宝札

「俺のターン、ドロロー。まずは墓地に存在するトラップ、ブレイクスルー・スキルの効果を発動。このカードを除外し、貴様のモンスターの効果を無効にする」

「ガダラ！」

ガダラには壊獣カウンターをコストに3つ消費して自分以外の全モンスターの攻守を半減させる特殊能力、風葬がある。それをわざわざ封じてきたということは、ダメージを与えられないのは承知のうえでガダラを倒しに来たか。

でも来るなら来い、一応こちらにもセットカードはある。

「魔法カード、ダーク・フュージョンを発動！手札のE・HERO<sup>エレメンタルヒーロー</sup>フェザーマンと、バーストレディを融合させる！」

フェザーマンとバーストレディ、いつもならばフレイム・ウィングマンを召喚する流れだ。だがあのカードはただの融合ではなく、ダーク・フュージョン、恐らくはあのカードも闇に囚われているだろう。

「融合召喚！E—HERO インフェルノ・ウィング！」

天使の片翼と竜の頭を模した腕を持ち、フェザーマンとしての特性が表に出たフレイム・ウィングマンとは対照的な一対の悪魔の翼と竜の腕を持つ、バーストレディの要素を強く持つ闇の女性型ヒーロー。やっぱりあのカードも、か。しかも、少しの間見ないうちに随分元となったヒーローからかけ離れた姿になっている。マリシヤス・エツジも大概だったけど、もはやあのモンスターには元の面影すら残っていない。類似した特徴を持つヒーローが存在しないダーク・ガイアもそうだったけれど、心の闇はいまだ十代をがっちり掴んでいるという訳

か。

E—HERO インフェルノ・ウイング 攻2100

「さらに魔法カード、破天荒な風を発動。インフェルノ・ウイングの攻守は、次の貴様のターンが終わるまで1000ポイントアップする」

E—HERO インフェルノ・ウイング 攻2100↓3100  
守1200↓2200

「バトルだ。怪粉壊獣ガダラに攻撃、インフェルノ・ブラスト！」

悪魔のヒーローが腕を広げると、闇の炎が放たれる。ガダラの体に絡みつくように伸びたそれが、じわじわとその体を焼き尽くしにかかり始めた。

「させるか！トラップ発動、グレイドル・スプリット！このカードを装備カードにすることで、ガダラの攻撃力を500ポイントアップさせる！」

「墓地に存在するトラップ、ファントム・ナイツ幻影騎士団トウム・シールドは、自分のターンに除外することで相手の場に存在するトラップ1枚の効果を無効とする。従ってグレイドル・スプリットは墓地へ送られる！」

「しまった……！」

E—HERO インフェルノ・ウイング 攻3100↓怪粉壊獣ガダラ 攻2700（破壊）

頼みの綱だったスプリットを無効化され、攻撃力で劣るガダラが炎に沈む。一時休戦により戦闘ダメージは入らないものの、その熱波は見ている僕にも届き火傷しそうなほど全身が熱くなる。

でも、今の僕はそんなことに構っている余裕はなかった。今、霸王は確かに幻影騎士団と言った。ジムのエースカードだったというガイア・プレートのみならず、ケルトの幻影騎士団まで奪い取ったというのか。怒りのあまり歯を食いしばる僕をさげすむような目で見て、霸王がいかに馬鹿にするようにパチパチと手を叩く。

「くそっ、補給部隊でドロォー！」

「貴様の洞察力……いや、その臆病は褒めてやろう。結果的とはいえ、それで命を繋いだのだからな」

「…………どうだい？」

「インフェルノ・ウイングがモンスターを破壊した時、本来ならばそのモンスターの攻守どちらか高い方のダメージを相手ライフに与えることができる。偶然とはいえそれを回避したのだから、まったく大したものだ。だが、もう一時休戦の効果も切れる。次はないと思え、カードを2枚伏せてターンエンドだ」

「この……！」

人を馬鹿にしたその物言いと冷たい声色に、さらに頭に血が上りかける。すんでのところを沈めてくれたのは、僕の頭に響くチャクチャルさんの声だった。

『落ち着け、マスター。いいか、なぜ奴は言わずともいいようなインフェルノ・ウイングの効果を自分から話したのだと思う？あれはただの挑発だ、乗って理性を失えばそのまま敗北する。いいか、逆に考えてみるんだ。確かにマスターは今のターンかなり危なかった。だがそれはつまり相手にしてみれば、今のターンで仕留めきれなかったということに他ならない。マスターがイラついているのと同様、奴もまた勝負を思うように終わらせられない苛立ちを感じているはずだ。それ故にこちらのミスを誘うため、あえて心理戦に出た。敵を自分の中で必要以上に強大にすることはない。相手を見て、その力を混じり気なく見極めることだ』

説得を受けて、少し落ち着いた頭で覇王を見る。その黄色い目には全てを呑み込む怒りや悲しみといった負の感情と傲慢な王者の態度、そしてその裏にはかすかだがちらちらと苛立ちを感じる。それはそうだろう、侵攻の準備も色々あるはずのこの時期に僕らに捕まっていた、しかも1度倒したはずの相手にも関わらず粘られているのだから。

そうだ、確かに覇王は強敵だが、そこに人格がある以上つけ入るすきはある。悔しいが実力差は圧倒的、けど必要以上に奴を恐れることはない。むしろ恐れれば恐れるほどに、その感情を糧に覇王の闇はさらに増大してしまう。平常心を保ち、今のカードでできる事を考えるんだ。

……待てよ？そもそもなんで、覇王はこの僕のターンが始まるタイ

ミングで心理戦を仕掛けてきたのだろう。例えばあの挑発に僕が引つ掛かったままだったとすると、どうしただろう。当然ウォーターフロントで壊獣をサーチ、さっきのターンでサーチしたガメシエルと合わせて展開、バトルさせただろう。でも、僕の手元にガメシエルがあることは霸王もよく知っている。

もし、もしもだ。最も手軽かつ単純にダメージを与えられる方法であるそれ以外のルートを僕に考えさせないがために、この瞬間を狙い澄まして僕を怒らせようとしたんだとしたら？怒りは思考を単純にする、それを計算していたのだとしたら？

「……そりゃどうも、お褒めに預かりまして。僕のターン、ドロ。まずKYOTOUウォーターフロントの効果を再び発動し、デツキから雷撃壊獣サンダー・ザ・キングをサーチする。そしてインフェルノ・ウイングをリリースし、そっちのフィールドに海亀壊獣ガメシエルを特殊召喚！」

「……ふん」

海亀壊獣ガメシエル 攻2200

インフェルノ・ウイングの姿が消え、その場所には代わりに僕が送り付けたガメシエルが居座る。後は、サンダー・ザ・キングを特殊召喚して攻撃すればいい。だけど、僕の考えが正しければ、恐らくはこのタイミングで仕掛けてくるはずだ。

「トラップ発動、マインドクラッシュ！雷撃壊獣サンダー・ザ・キングのカード名を宣言し、そのカードが相手の手札にあればそれを捨てさせる。もつとも貴様が今サーチしたばかりのカードだ、ないはずがないがな」

サンダー・ザ・キングを墓地に送る。だが僕は、内心では会心の笑みを浮かべていた。チャクチャルさんからのヒントがあったとはいえ、ついに霸王がこちらの予想通りに動いてくれた。ほんのわずかだが確実に、これまで常に霸王と共にあった勝負の流れがこちらに傾いてきた。これである霸王に一泡吹かせられるかもしれない、ここからが真正正銘の反撃ターンだ。

「相手フィールドにのみモンスターが存在するとき、カイザー・シース

ネークはレベル4、攻守0として特殊召喚できる。さらに相手の壊獣に反応して、手札からもう1体のガメシエルを僕の場に特殊召喚！」  
カイザー・シースネーク 攻2500↓0 守1000↓0 ☆8  
↓4

海亀壊獣ガメシエル 攻2200

これで、下準備は整った。グレイドル、そして壊獣。どれだけ新たな力をデツキに組み込んでも、いかなるギミックを仕込んでも、結局最後はその努力の全てがこのカードに帰結する。僕のデュエリストとしての原点にして頂点、最強無敵のマイフェイバリット。

「さあ、これこそが僕の切り札だ！2体のモンスターをリリースし、アドバンス召喚！霧の王！」  
キングミスト

その瞬間、暗い部屋の中を青い光が満ちた。霧の宝剣を軽々と持ち上げた魔法剣士が、その切っ先をぴたりと霸王に合わせる。

「霧の王……。さあ霸王、覚悟してもらおうか。霧の王の攻撃力は、リリースしたモンスターの元々の攻撃力の合計になる。バトルだ、ガメシエルに攻撃！ミスト・ストラングル！」

力強く石の床を踏み締め、鎧の重さを感じさせない動きで魔法剣士が宙に舞った。空中で剣を2度、3度と振り回すたびに、持ち主の意思を受けて魔力を帯びた剣自体が自らも力を解放して光を放ち始める。そしてその輝きが頂点に達した時、大上段からの一刀が大気を、闇を、霸王城を切り裂いて振り下ろされた。

霧の王 攻0↓4700↓海亀壊獣ガメシエル 攻2200（破壊）

「おのれ、おのれええ！トラップ発動、ダメージ・ダイエット！このターン俺の受けるあらゆるダメージは、半分になる！」  
「なっ!?!」

剣風をまともに受け、鎧が再び崩れていく。だが霸王の瞳の憎しみは、いまだ衰えを知らないかのように燃え盛っていた。ギリギリの局面で発動されたダメージ・ダイエットにより、本来2500受けるはずのダメージは半分の1250止まりとなってしまう。ライフ減少のストップと同時に鎧の崩壊も止まり、満身創痕ながらも霸王はまだ

立っていた。

霸王 LP1400↓150

「貴様の攻撃はそれで終わりか？ならばエンドを宣言しろ」

「……ターンエンド」

清明 LP1500 手札：2

モンスター：霧の王（攻）

魔法・罨：グレイドル・インパクト

補給部隊

場：KYOUTOUウォーターフロント（5）

霸王 LP150 手札：0

モンスター：なし

魔法・罨：守護神の宝札

「俺のターン、ドロー」

あのターンは、まぎれもなく僕の全力だった。それでもなお霸王を仕留めきれなかったことで、僕の心の中で何かが折れてしまった。頭が真っ白になり、何も考えられない。目の前にいるはずの霸王の声も、なんだかやたらと遠く感じる。

やるだけのこととはやった。勝つために全力を出した。それでも駄目だったんだ、これ以上何をしたらって敵うわけない。だから、もういいじゃないか。そんな情けない幻聴まで聞こえてきた。だが何よりも恐ろしいのは、その声に耳を傾けようとしている自分がいることだ。それほどまでに、今のターンで燃え尽きてしまったとでもいうのだろうか。

「速攻魔法、ダブル・サイクロンを発動。俺の場の守護神の宝札、そして貴様のグレイドル・インパクトを破壊する」

霸王の言葉が耳に届くが、話している内容がほとんど頭の中に入っていない。インパクト？ああ、そういうえばさっきのターンでサーチしてなかったような気がする。でもそれも今更いいや、もうどうせ殺るのなら、まだるっこしいことしてないでさっさと殺っちゃってくれ。そんな自暴自棄な考えまでもが頭を駆け巡る。

「俺の手札がこのカード1枚のみの時、手札のバブルマンは特殊召喚

できる。さらにこの時俺の手札とフィールドに他のカードが存在しないことにより、カードを2枚ドロウする」

E・HERO バブルマン 守1200

「俺の墓地から魔法カード、ダーク・コーリングを除外することで、手札のマジック・ストライカーを特殊召喚。装備魔法、レインボー・ヴェールを装備する」

マジック・ストライカー 攻600

あのカードも、十代が昔から使っているモンスターの1体。こんな時にE―HEROじゃなくてそのカードを持つてくるなんて、まったく皮肉が効いたことだ。たださえ心折れた僕に、さらに駄目押しの精神ダメージを与えようともいうのだろう。

「バトル。マジック・ストライカーで霧の王に攻撃。この瞬間レインボー・ヴェールの効果により、相手モンスターの効果は無効となる」力を失いその場に膝をつく霧の王の無防備な背をめがけ、小人の一撃が叩き付けられる。僕のフェイバリットカードが、反撃の象徴が、その場に崩れ落ちた。

マジック・ストライカー 攻600↓霧の王 攻4700↓0 (破壊)

清明 LP1500↓900

「くっ……」

「ターンエンドだ。もう諦めろ、貴様はこの俺に勝てん。サレンドーするというのがなら、俺は命までは取ろうとは言わん」

『俺は、か。惑わされるなマスター、あんなものはただの狂言回しに過ぎない。いいか、ここは敵陣だぞ？もしここで敗北を認めれば、仮に霸王が手を出さずともマスターにとどめを刺しにくる輩はこの城内に腐るほどいる事を思い出すことだ』

「でもチャクチャルさん、さすがにちよつと、もう一回逆転するだけの気力が湧いてこない、かな……？」

『惑わされるな！それにもう一度よく状況を見てみるといい。マスターが疲弊しているのと同じく、霸王もまた平静こそ装っているものの限界も近いはずだ。その証拠がこの盤面だ、偉そうなことを言っ

はいるがもはや融合モンスターを出すことすらできていない。搦め手といえは聞こえはいいが、これ以上戦うためのリソースが底を尽きてきているだけだ。それだけ奴も……』

チャクチャルさんが何か言っているが、半分も頭に入っていない。代わりにのははは、と力のない笑いが漏れる。多分今の僕は、さぞかしひどい顔をしているだろう。これまでどれだけ霧の王1枚に依存していたのかが、今更ながらによくわかる。霧の王を出したうえでの反撃は、これまで僕にとっての常勝パターンだった。確かにそれでも負けた経験がないわけではないが、そんな時でも大体その攻撃1回で決着がつく、霧の王と同時に負けるパターンばかりだった。

でも今回みたいに、霧の王だけが先に負けてしまうなんてのはこれまでなかった。ずっと一緒にやって来た相棒が先に力尽きて、僕だけがまだまだ戦闘可能な状態にあるなんて初めての経験だ。

情けないと思う。なにをうじうじしてるんだと馬鹿にされても仕方ないし、実際これが他人事だったらそう思っていたことだろう。でも、なぜだろう。折れてしまった僕の心は、立ち直ろうとする気配すらないままだ。

もうこの手をデッキに載せて、サレンダーすれば楽になれるのかな。何を馬鹿など叫ぶ自分があるが、そんな心の声とは無関係に腕がゆっくりと動く。サレンダーしようとする自分の体を、まるで別人の動きを見ているかのような感覚で見降ろしていた。

『清明……』

手が今まさにデッキにかかるようにしたその瞬間、誰かの声が聞こえた。その声はオブライエンのもののような気もするし、ジムのものにも聞こえた。あるいはケルトや、辺境の大賢者といった人々だったような気もする。もしかしたら、その全員だったのかもしれない。

だが確実に言えるのは、霸王ともチャクチャルさんとも違うその声を聞いた瞬間、まるでバケツ一杯の冷たい水でも被ったかのように意識がはつきりしたことだった。すっきりした頭に諦めや絶望とは違う、不思議な気力が少しずつ湧いてくる。

「これは……」



ポケットの上からでもわかるほど、オリハルコンの眼が赤く輝いている。そつと取り出してみると、その光は直視したら目が潰れそうなほどの強さになっていた。手の上のそれをぐつと握りしめると、不思議と力が湧いてくる。あれだけ心を占めていた絶望が、消えていく。そうだ、このデュエルは僕一人の物じゃない。どうして、そんな大事なことを忘れかけてしまったんだろう。霸王を倒すため、そして十代を救い出すために僕らはたくさんさんの犠牲を払ってきた。ここに来た時点で僕らの後ろに道はない、最後の最後まで突き進むのみだ。「だから、僕はサレンダーなんてしない。この手はそんなことをするために付いてるんじゃない、カードを引いて戦うためにある！」

勝負を捨てるためではなく、続けるために改めてデッキに手をかける。目の錯覚だろうか、一瞬その手に何人もの手が重なって見えた気がした。

「僕のターン、ドロー！」

引いたカードは……死者蘇生、か。確かに文句なしに強力なカードではあるけれど、この局面で有効活用はできるのだろうか。さあ考えろ、これまで僕らが使ってきたカードは何がある？

ただ打点の高いモンスターならば僕の墓地の壊獣達……ドゴラン、ガダーラ、ガメシエル2体、サンダー・ザ・キングがいるが、それらを蘇生させてもダメだ。バブルマンは守備表示だし、マジック・ストライカーは自身のバトルで発生するプレイヤーへのダメージを0にする特殊能力を持っている。壊獣カウンターは溜まっているから固有能力も使おうと思えば使えるが、それ込みで考えても霸王のライフには届かない。でも諦めるものか、何のためにオブライエンが倒れていったと思ってるんだ。

……そこまで考えて、はつとした。そうだ、そうだった。

「霸王。まったく大したもんだよ、僕だけじゃ絶対にこの勝負、勝てなかった」

「うん？」

「僕1人だったら、勝てなかった。魔法発動、死者蘇生！」

「死者蘇生だと？今更そんなカード1枚に何ができる」

「確かにね。これがタイムマンだったら、このカードでもどうにもできなかったさ。だけど霸王、敗者には敗北した時点で目もくれなくなるお前にはわからないだろうけど、僕には仲間がいる。たとえ傷つき倒れても、その戦う魂は今もこの場に残っている！僕が蘇生召喚するのは、このカードだ！」

表になった死者蘇生のカードが光り、その輝きに照らされた地面から炎の柱が噴き上がる。そしてその中心から、1体のモンスターがフィールドに蘇った。硬い鎧のような、それでいてしなやかな外骨格に身を包み、口の端からチロチロと舌の代わりに火を噴き出すその姿は。

「オブライエンの墓地から蘇れ、ヴォルカニック・エッジ！」

ヴォルカニック・エッジ 攻1800

「馬鹿な、そのカードは！」

「ああ、そうさ！オブライエンがこのデュエルに参加していたから、僕はこのカードを呼び出すことができた。このオリハルコンの眼を通じて僕に力をくれたから、ここで死者蘇生を引くこともできた。この世界で何があったのかなんて僕は知らないし、言いたくないならそれでもいいさ。でも」

ここで一度言葉を切り、目の前の存在……より正確に言うなら、その奥に幽閉された親友に届かせるつもりで言葉を放つ。

「いいからとっとと帰って来い、十代！ヴォルカニック・エッジは1ターンに1度、自身の戦闘を放棄することで相手ライフに500ポイントのダメージを与える！」

霸王の墓地のダメージ・ダイエットには自身を除外することでプレイヤーへの効果ダメージを半減させる能力があるが、それを使ったとしても霸王のライフはそのダメージに耐えきれない。僕の命令と共に火炎弾が飛び、闇の鎧の中心を直撃したそれが大爆発を引き起こした。

「うおおおおおー！」

霸王 LP150↓0

「まだまだ、まだ足りない……！……こんなところで、この俺が……！」

爆炎が収まった時、そこには信じられない光景が広がっていた。ライフが0になってなお、収まることを知らない闇の力。十代の中の霸王の執念。恐るべきことに、霸王の人格はデュエルによる敗北イコール消滅というこの世界のルールすらも捻じ曲げ、強引に現世に留まろうとしている。霸王の鎧が炎の中に消えていくそばから復活し、再び十代の体を覆い尽くそうとすつつあった。

『マスター、それを使え』

「うん、わかってる」

不思議と、何をすればいいのかはわかっていた。もはや三沢特製の水妖式デュエルディスクに溜めておいた水も空になり、例え霸王が向かってきてももう一度デュエルを行うことは不可能という切迫した状況にも関わらず、むしろ落ち着いた気持ちで孤独に戦い続けるそのそばへと歩み寄る。

いまだまばゆいほどに光り続けるオリハルコンの眼をぐつと握りしめ、そのままその拳で復活しつつある鎧の中心を殴りつけた。

その瞬間、世界が真っ白になるほどの光が放たれた。何も見えなくなるほどの光が収まった時、霸王の鎧は消えていた。そこに倒れて気を失っているのは、久しぶりに見る親友の姿。

「十だ……」

「君は、清明!?なぜ君がこんなところに?」

「こんなところでお前の顔を見るとはな……その様子だとうまくいったようだが、オブライエンはどうした?」

ちようど後ろから入ってきたのは、なんとエドにヘルカイザー。ああそうか、なんか霸王城を下から見た時に目に止まった機械龍に見覚えがあると思ったら、あれだ。カイザーがヘルカイザーになって新しく手に入れたとか言うエース、サイバー・ダークとかいうモンスターだ。吹雪さんとデュエルしてるのを最後に少し見ただけだったから、今の今までどうしても思い出せなかった。

って、そんなこと今はどうでもいい。

「話は後で。いつまでもこんな辛気臭いところに居ないで、とつと外に出よ……うおわっ!？」

まったくの不意打ちだった。ズシン、ズシンという何か重いものがぶつかるような音とともに、霸王城が大きく揺れる。岩肌穴がくりぬいてあるだけの窓から外を覗くと、霸王城めがけて何体ものモンスターが攻撃を仕掛けていた。その攻撃に対抗している霸王軍は数では勝るとはいえリーダーを欠く状態での士気はお世辞にも高いとは言えず、結果としてかなりいい勝負になっている。混乱に包まれ怒号の飛び交うその戦場の最前線から、僕にとって聞き覚えのある声が聞こえてきた。

「さあ、我々を苦しめてきた霸王は既に亡き者となった！敵は幾万有りとしても、全て烏合の衆でしかない！今こそ我らの、本物の悪魔の誇りを取り戻す時が来た！怯むな、かかれ！」

「グラフィア……まさかっ！」

まるでタイミングを計ったかのような、グラフィア達による霸王軍への強襲。偶然とは思えないほどのタイミングの良さに何かピンと来るものを感じ、ばつと水筒を……一番最初にグラフィアにあった際、老人の姿に粉していた彼に水を所望され差し出したそれを持ち上げてまじまじと見る。案の定、底の一点にほんの数ミリほどのサイズではあるが盗聴器らしき機械が付いていた。完全にしてやられたことに呻きつつ、もう遅いとはいえそれを引きはがして踏み潰す。ただ僕を手駒として霸王退治に行かせるだけでなく、その様子をこんなもので仕掛けて窺ってたなんて、本っ当に油断も隙もない。

「これ以上ここにいるのは、たしかに危険そうだな。退散してから君の話は聞かせてもらう」

「十代は気絶したままか。まあいい、出でよ、鎧黒竜―サイバー・ドラゴン―」

その様子を遠巻きに見ていた2人が、用が済んだなら出ていくぞとばかりに脱出の準備に取り掛かる。サイバー・ドラゴン・ドラゴンの背に十代を背負って飛び乗る2人の例に倣い、僕もその後ろに座らせてもらうことにした。デュエルディスクに水が残っていないせいで、僕

のデツキの精霊に頼むこともできそうにないからだ。

漆黒の金属製の羽根を広げ、鎧黒竜が空を駆ける。何度か眼下の戦鬨の流れ弾が飛んできたが、その全てを危なげなく躲したのちに僕らは外の闇の中に消えていった。

## ターン104 封印の神と『D』

サイバー・ダーク・ドラゴンの上で、いつの間にか僕は眠っていたらしい。ふと気が付けば、夜の闇が頭上に広がっていた。焚火を中心に囲んで座るエド、ヘルカイザー、そのほかにも見慣れた、でもここで見るとは思わなかった顔がいくつかあった。

「おはよ、エド。ヘルカイザーも……それに翔にクロノス先生、おジャマ・イエローもいるの？あと、そっちの人は？」

再会を懐かしむ気持ちより見知らぬ人への警戒が表に出るあたり、僕もだいぶこの世界に染まってきたと思う。翔の顔を見た時は記憶にあつた彼とはなんだかだいぶ違う様子になんとなく違和感があつたけれど、少なくとも偽物とかそういう話ではなさそうだ。それに、そのことをいつまでも考える暇もない。そんな僕の声に反応して、の中で唯一の新顔が僕の方を見て会釈する。随分と意志の強そうな、でもどこか思いつめたような目をした女性だ。

「この人はエコー。アモン・ガラムの……まあ、知り合いとだけ言っておこう。この2人と一緒にいたところをたまたま見つけたんだ。それにしても、ようやく起きたのか？まったく、よくこんな状況で眠れたな。大胆というか無神経というか」

「剛毅と呼んでくれてもいいのよ？で、ここどこ？」

「さあな、俺らもこの世界の地理にはそこまで明るくない。ただ少なくとも、覇王城からはだいぶ離れたことは確かだな」

「まさか君も、この世界にいたなんてね」

「驚き桃の木ナノーネ」

「会えて嬉しいわよ、清明のダンナ」

僕がぐっすり眠っているうちに、サイバー・ダーク・ドラゴンはどこかに降り立っていたらしい。その指示を出していたはずの主のヘルカイザーでさえどこだかわからないというのもひどい話だけど、さしあたり追手などの問題はなさそうだ。

それにどれほど飛んでいたのかはわからないけれど、きちんとした固い地面に座るのは久しぶりな気がするからそれだけでありがたい。

背伸びをして凝った筋肉をほぐし、近くの木陰に寝かされている十代の方を見る。

「さて、目が覚めたのなら君にもそろそろ話してもらおうか。聞いた話では、君は砂漠の異世界で行方不明になったはずだ。その君が、なぜ霸王と戦っていた？」

「ああ、そういえばそんな話だったっけね。えーつと、まず……」

この世界で目覚めてから出会った人や、起きたことの話。辺境の大賢者、バックアップ・ウォリアーのいた村、そして鬼神ケルトと狸爺のグラフィア。色々なことがあったが、少し前にも三沢に話した内容だったおかげで思いのほかスムーズに話すことができた。それをすんなり信じてもらえたのも、三沢の時と同じだ。現に目の前で精霊が動き回っているのだから、今更信じるも信じないもない。

「なるほどな。待てよ、清明。その話が本当なら、今そのデュエルディスクは使い物にならないのか？」

「え？……あつ！エド、この近くに川や池とかない!？」

「いや、ここに来るまでに水場なんて見ていないな」

「だ、だとしても今からでも探しに……」

「やめるノーネ、シニョール清明。夜は危険が危ないノーネ」

僕の水妖式デュエルディスクは、水を入れなければただの腕輪でしかない。霸王戦で貯水しておいた全てを使い切ったせいで、今の僕はデュエルをすることすらままならない。クロノス先生の心配もよくわかるけれど、この世界での唯一の武器が使えない方がよっぽどリスクが高いし危険だ。

だが立ち上がったその時には、もうすでに手遅れだった。さっきまで雲一つなかった夜空がぼやけたかと思うと、動く間もなく濃い霧が流れ込んできたのだ。これまで霧の王に何度か霧を出す魔法を頼んでいた僕にはわかるが、この異様なスピードは明らかに人為的なものだ。何が目的かはわからないけれど、視界が塞がれた以上下手には動けない。

沈黙のうちに時間が過ぎ、やがて霧が晴れてきた。一体どんな術を使ったのか、先ほどまで屋外にいたはずの僕らはなぜかどこかの洞窟

の中にいる。でもそんなことより、目の前の人間の存在が問題だった。不気味で冷酷な笑みを浮かべる、眼鏡をかけたその男。どう考えても、この霧はこの男が引き起こしたのだろう。

「……アモン！」

案の定、再会を喜び合うなんてことはできなかった。アモンの語った自らの話は、それを聞く僕らを驚愕させるには十分すぎる破壊力を持っていた。久々に見る異形の腕……それを見て呟いた十代の言葉借りるならば、ユベルの腕。その力のみで飽き足らず、この地に眠るといふ神の力をも求めてエコーを贄にせんと迫るアモン・ガラム。そしてそれを阻止すべく立ち上がったダークヒーロー、エド・フェニックス。

正直何が起きているのか、僕にはアモンの話をすべて聞いてもよくわからない。むしろわかりたくない、というのが正しいか。あれだけの力と物量でこの世界を実際に統一しかかった霸王の裏で、こんな物騒なことが進んでいたなんて。それじゃあオブライエンが、ジムが、そしてケルトや大賢者が命を捨ててまで僕に託してきたものは、一体なんだったんだ。霸王の人格を倒し十代に戻せば、この世界にも平穏が戻るはずじゃなかったのか。それなのに目の前で、霸王と同等の力を持った存在が野心に燃えて動き出そうとしている。狙いの神とやらがなんなのかわからないが、その力で霸王に対抗しようとしていたということは恐らく霸王の象徴、超融合と同等以上に危険な力を秘めているのだろう。アモン、なんなんだお前は。ようやく戦乱が止まり小休止を迎えたこの世界に、何の権利があつてこんなことをするつてんだ。

しかも、霸王とアモンには決定的な違いが1つある。霸王軍の生み出した犠牲は、無差別な侵略により生まれたいわばランダムなものだ。だがそれとは違い、アモンは確固たる意志を持ちピンポイントでエコー1人の命を犠牲にしようとして動いている。それが意味すること、エコーのアモンへの想いも、すべて理解したうえで平然と乗り越えてその先に進もうとしている。

どちらがいいなんてことは、もちろんない。あるわけない。ないけ



れど、どちらが恐ろしいかと言われればそれはアモンの方だ。他の物には目もくれないかわり、絶対に目的を果たそうとする……そんな狂信的な勢いは、今は亡き先代ダークシグナーにすらなかったものだ。

「デュエル！」

そしてその2人のデュエルを前に、デュエルをすることすら満足に果たせない僕はただ無力だった。できる事はただ言葉を掛けることと、あとは精々このデュエルの行く末を見守っていることぐらいだった。

「エド！」

「うん？」

「……勝ってね」

「任せておけ。僕が先攻だ、アモン！父さんの残したラフスケツチを元に完成させた僕のニューフェイス、使うならプロの舞台でと思っていたが、まさかこんな所が初陣とはな。カモン、ドリルガイ！」

ニューフェイスの言葉通り、見たことない新たなD—HEROを召喚するエド。その名が示すようにその片腕はまさにドリルそのもの、もう片腕も一見普通に見えるがよく見ると指が5本のすべてドリル、さらに全身からもドリルが突き出ているとダイヤモンドガイの水晶並に自己主張の激しいモンスターだ。

デステニーヒーロー  
D—HERO ドリルガイ 攻1600

「ドリルガイの召喚、特殊召喚に成功した時、エフェクト発動。手札からこのカードの攻撃力以下の攻撃力を持つディーヒーローを特殊召喚できる。カモン、ダイヤモンドガイ！」

D—HERO ダイヤモンドガイ 攻1400

「さらに僕はダイヤモンドガイのエフェクト、ハードネス・アイを発動。1ターンに1度デッキトップをめくり、そのカードが通常魔法ならばそのカードをセメタリーに送る。そしてそのエフェクトのみを1ターン後の未来に送り、発動することができる。デッキトップは通常魔法、置換融合だ。よってこの効果を僕は次のメインフェイズに発動させることを宣言しよう。カードを2枚セットして、ターンエンドだ」

初手ダイヤモンドガイからのハードネス・アイという、定番の布陣を組んできたエド。それにしても、置換融合？DはEと違って、融合召喚に頼らない戦術が特徴だったはずだが。おそらくあれも、ドリルガイ以外のニューフェイスへの布石なのだろう。

「それで終わりか？ならば僕のターン、ドローだ」

対するアモンは、雲魔物の使い手だったはずだ。戦闘破壊されないメリットと引き換えに、守備表示になっただけで自壊するという1歩間違えればサンドバックにされかねないデメリットを背負う不思議なモンスター群。

だがアモンの出したモンスターは、雲魔物とは似ても似つかぬ潜水服を来た人型のモンスターだった。

「ディープ・ダイバーを攻撃表示で召喚」

ディープ・ダイバー 攻1000

「雲魔物じゃない……？」

「ああ、そういえばまだ誰にも見せていなかったね。これまで使っていたデツキは、こつちさ」

その言葉を受け、アモンが腰につけた別のデツキケースを取り出す。そして次の瞬間、そのデツキをいきなり投げ捨てた。地面に落ちたはずみで留め金が外れ、40枚のカードが僕らの足元に散らばる。

「な、何を……!?!」

「もう、このデツキは必要ないのさ。この神の封印さえ解ければ、それを従える僕こそが最強の存在となるからな。さあエド、改めてデュエルを続けようか。僕は永続魔法、強者の苦痛を発動。これにより君の全てのモンスターは、そのレベル1につき100ポイントの攻撃力を失う」

「くっ……」

ドリルガイとダイヤモンドガイは、そのどちらもレベル4。ただでさえステータスが低いエドのモンスターには、わずか400ポイントの弱体化でさえ大きく響いてしまう。

D—HERO ドリルガイ 攻1600↓1200

D—HERO ダイヤモンドガイ 攻1400↓1000

「もう1枚永続魔法、補給部隊を発動。バトルだ。ダイヤモンドガイに攻撃！」

「相打ち狙いか……迎え撃て、ダイヤモンドガイ！」

ディーブ・ダイバー 攻1000 (破壊) ↓D—HERO ダイヤモンドガイ 攻1000 (破壊)

2体のモンスターの攻撃力が同じだったため、戦闘ダメージは発生しない。だが補給部隊は互いのターンに1度ずつコントロールの場でモンスターが破壊されるたびにカードをドローできる敵に回すと厄介なカード、これではダイヤモンドガイを失っただけエドの方がやや損か。だが両者のモンスターが戦闘破壊された時、洞窟の壁にDのシグナルがくつきりと浮かび上がったのはエドのフィールドからだった。

「僕は今の戦闘破壊をトリガーにトラップカード、デステニー・シグナルを発動！これにより手札、またはデッキからレベル4以下のディーローを特殊召喚できる。カモン、ディバインガイ！」

D—HERO ディバインガイ 攻1600↓1200

十代の多用するトラップ、ヒーロー・シグナルのディーロー版により特殊召喚されたのは、背中に巨大な輪を背負った新たなヒーロー。

これでダイヤモンドガイが破壊されたにもかかわらず、エドのモンスターの数自体はまだ変わらず2体のままとなった……だがその状況を見ても、アモンは不気味なほどに反応を示さない。

「もういいかな、エド？ならばこちらも場のディーブ・ダイバーが破壊されたことで補給部隊の効果によりカードを1枚引き……さらにこのバトルフェイズ終了時、ディーブ・ダイバーの効果を墓地から発動。自身が戦闘破壊されたバトルフェイズ終了時、デッキからモンスター1体を選びデッキトップに置く。僕が選ぶモンスターはこのカード、封印されしエクゾディアだ」

「エクゾディアだ?!」

エクゾディア。頭と四肢を手札に全て揃えることで問答無用の勝利が確定する、恐るべき可能性を秘めたカード。相手がそれを利用し

ての勝利を狙っているとなると、通常想定される対ビートダウンでの戦術は通用しない。むしろ対策すべきはその手札、そこに何体のパーツが存在するかだ。

だが、エド・フェニックスもまた、ただのデュエリストではない。世界のトップを走るプロとして、当然そのようなデッキと対戦した経験もあるはずだ。

「さて、僕のターンはまだ終わっていないかったな。永続魔法、デーモンの宣告を発動。1ターンに1度500ライフを支払カード名を1つ宣言し、デッキトップがそのカードならば手札に加えることができる。当然このターンに宣言するのは、封印されしエクゾディアだ」

アモン LP4000↓3500

宣言も何もあつたものじゃない。あのカードは、たった今デーブ・ダイバーの効果で置いたばかりのカードじゃないか。これで、最低1枚のパーツがアモンの手の中にあることになる。

「さらに魔法カード、浮上を発動。墓地からレベル3の水族モンスター、デーブ・ダイバーを守備表示で蘇生させる。カードを伏せ、これでターンエンドだ」

デーブ・ダイバー 守1100

エド LP4000 手札：0

モンスター：D—HERO ドリルガイ（攻）

D—HERO デイバインガイ（攻）

魔法・罫：1（伏せ）

アモン LP3500 手札：2

モンスター：デーブ・ダイバー（守）

魔法・罫：強者の苦痛

補給部隊

デーモンの宣告

1（伏せ）

「僕のターン、ドロロー。このメインフェイズ、ダイヤモンドガイのエフェクトにより墓地の置換融合を発動！これにより僕のフィールドのモンスターのみを素材とし、融合召喚を行う。運命の岩盤を穿つ英

雄よ、天与の使命背負いし英雄よ、暗黒の未来を統一し、理想郷へと歩むがいい！カモン！ディーヒーロー、デリストピアガイ！」

ドリルガイとディバインガイが飛び上がり、空中で混じり合い新たな姿となる。額にDの文字を意匠として刻み込み、全身を青いボディスーツのようなもので完全に覆った青いヒーロー。だがその姿はディーヒーロー特有の英国風というよりはむしろアメコミ的で、まるでヒーローの存在しない世界<sup>デリストピア</sup>でダークヒーローが無理に正義のヒーローであることを強要されているような歪さが感じられる。その歪さこそがまさに、決してユートピアではないデリストピアとしての象徴なのだろうか。

D—HERO デリストピアガイ 攻2800↓2000

「おいおいエド、融合召喚をしたのはいいが、むしろドリルガイ2体の方が僕に与えられるダメージは高かったんじゃないか？」

そう、アモンの言う通りだ。確かにせっかく当てたダイヤモンドガイの効果を使いたいという気持ちはわからなくもないが、強者の苦痛が存在する以上高レベルモンスターをわざわざ呼び出すのはむしろ悪手のはず。ディーブ・ダイバーの守備力を突破できないというのならわからなくもないが、ドリルガイのままでもギリギリ戦闘破壊からのダイレクトアタックという動きは可能だったはずだ。

だが、それこそがエドにとっては最高の展開だった。

「いや、むしろ礼を言うよアモン、君が強者の苦痛を使ってくれて。これで、デリストピアガイのエフェクトのために僕が下準備をする必要がなくなったわけだからね」

「なんだと？」

「今にわかるさ。だがまずはデリストピアガイのファーストエフェクト発動、スクイズ・パーム！このカードが場に出された時、墓地のレベル4以下のディーヒーロー1体の攻撃力分のダメージを与える。僕が選ぶカードは当然、ドリルガイによる1600ダメージだ！」

アモン LP3500↓1900

デリストピアガイの効果により、アモンのライフが一気に半分近く削られる。だが本命はむしろ、その次の効果だった。デリストピアガ

イが掌をかざすとそこに穴が開き、凄まじい勢いで周りの空気が、そしてアモンのデーパー・ダイバーが吸い込まれていく。

「デイストピアガイのセカンドエフェクト発動、ノーブルジャスティス！このカードの攻撃力が変化しているときに1ターンに1度、カード1枚を破壊しその数値を元に戻す！」

「効果破壊か……！」

デーパー・ダイバーは、アモンの言葉通り戦闘破壊でなくては効果を使えない。しかもアモン唯一のモンスターが破壊されたことで、もはやその身を守るものは何もない。補給部隊によるドロウのリスクはあるものの、確実にエクゾディアのパーツをデッキトップに置くデーパー・ダイバーの破壊を優先したのだろう。

「バトルだ、デイストピアガイ！デイストピアブロー！」

デイストピアガイが飛び上がると、その拳に光が集まる。落下速度を加えての渾身の一撃が、アモンめがけてまっすぐに突っ込んでいった。

そう、確かにこの攻撃が通りさえすればエドの勝ちが決まる。けど、1度だけとはいえアモンとデュエルをした僕にはわかる。あのアモンが、こんな簡単に勝負を譲るわけがない。その予感、すぐに正しいことが明らかになった。

「単調な攻撃だな。トラップ発動、次元幽閉。攻撃モンスター1体を除外する！」

もはや守るものはないと思われたアモンの目の前の空間に亀裂が走り、その向こう側に亜空間が覗く。デイストピアガイの抵抗虚しく、その体が徐々に亀裂へと吸い込まれていく。

「エドー！」

エドの攻撃を見越したうえで発動された、アモンの次元幽閉。だが、これでまた逆転されてしまうのか、なんてことをちらりとでも思った僕は、まだまだエド・フェニックスという男を甘く見ていたらしい。

「やはりトラップを張っていたか。こちらもありバースカードオープン、デイメンション・ゲート！僕のフィールドからデイストピアガイ

を表側で除外する！」

その体が完全に亀裂に吸い込まれ閉じ込められる寸前、デイストピアガイが再び飛び上がる。額のDの紋章が赤く輝くと、その姿が蜃気楼のように消えていった。

「デイメンション・ゲート……なるほどな」

「どうやら気が付いたようだな。デイメンション・ゲートは相手の直接攻撃宣言時に自ら墓地へ送ることができ、またこのカードが墓地に送られた時に今除外したデイストピアガイを帰還させることができる」

「そういうことか」

2人の会話を聞き、ヘルカイザーも真剣な目で呟く。何の話をしているのかさっぱりわからない、という僕の視線に気づいたのか、誰に言うともなくエドの狙いをもう少し詳しく話してくれた。

「デイストピアガイは特殊召喚に成功するたび、先ほどのバーン効果を発動させる。アモンがエクゾディアでの勝利を狙っているのならば直接攻撃を狙うことはまずないだろうが、それでもエドがデイメンション・ゲートを何らかの方法で墓地に送ることができればほぼ確実に1600のバーンダメージが発生すると見ていいだろう。だがアモンのライフは既に1900、つまり……」

「そうか、発動に500ライフが必要になるデーモンの宣告は、アモンにはもう使えないんだ！」

「アモンの手札のエクゾディアパーツは先ほど引いた1枚か、仮にある手札全てがパーツだとしても3枚のみ。自らの引きの強さに頼りあるかどうかも分からないパーツ名を宣言しようにも、まだ最低2枚のパーツが必要ならばこれはさすがに分が悪いな」

デイメンション・ゲート1枚で次元幽閉を不発に終わらせたばかりか、間接的にデーモンの宣告すら無力化させることに成功したエド。たった1枚でここまで相手を翻弄させるあたり、恐るべき使い手だ。「闇の誘惑を発動。カードを2枚引き、手札から闇属性モンスターのディアボリックガイを除外。これでターンエンドだ、さあ、僕の場にモンスターはいない。攻撃するならご自由に」

「くだらない真似を……！」

「くだらない？僕に言わせれば、君の方がよほどくだらないと思うがね。どれほど甘い言葉を並べたところで、君のやろうとしていることはおかしい。エコー、彼女がどれだけ君のことを……！」

「君がどう思おうと、それこそ君の感情に過ぎない。これは僕とエコーの話なんだ、そこに首を突っ込まないで貰おうか。ねえ、エコー。どうなんだい？」

「私……私は……」

「僕がこの世界を支配する王となるためには、この神の力が必要なんだ。そしてその力を解放するための生贄は、僕が最も愛するヒトでなければならぬ。僕が唯一愛した女性……エコー、君でなければならぬんだ」

「私が、アモンの……」

「頼むよ、エコー。僕が王になるためには、どうしても必要なことなんだ」

「ノー、シニョーラ、エコー！行つては駄目なノーネ！」

デュエルが一筋縄ではいかないと見るや、作戦を変えてエコーに甘く語りかけるアモン。誰の制止の言葉も耳に入っていないのだろう、1歩、また1歩と震える足取りでアモンの指差した閉ざされた扉へと向かつてしまう。

「まさか、このデュエルの最中に彼女を贄にするつもりなのか……？」

ヘルカイザーの呟きは、質問よりも確認としての意味合いが強かつたろう。そして言葉を返すことなく、愚問だなど言いたげに口の端を歪めて笑つたのみにとどめるアモン。

この神がどんなものかはわからない。だがこの状況でその封印を解こうということは、もしその力が解放されたならばエドが優勢の今の状況をもひっくり返すことができるだけのポテンシャルを秘めているのだろうか。

「やせる……」

か、と言い切ることはできなかつた。自分から贄となろうとしにくいエコーを力づくにでも止めるため踏み出した瞬間、どれだけ力を込



めてもピクリとも足が動かなくなったのだ。見ると、僕らに向けてアモンが例の異形の腕を向けて力を込めている。あの腕が不思議な力を使い、動きを封じているのだろう。ならばとチャクチャルさんにテレパシーを飛ばしてみるものの、なぜかうんともすんとも返事が返ってこない。

「おいおい、無粋な真似はよしてもらおうか。エコー、僕の愛しい人よ。あと少し、ほんの少しで僕はこの世界の王になれる。エコー、そのためには君が、君だけが必要なんだ」

「くっ……い……おい、アモン！今はデュエルの最中だ、早くターンを進めろ！」

ゆっくりだが確実に、封印に近づくエコー。その様子に焦りの色を浮かべたエドが、エコーが生け贄になるより早くこのデュエルを終わらせるべくアモンに催促する。その様子に気をよくしたのか、満足げにアモンがカードを引く。

「ああ、そうだったな。エコー、何も今すぐ決める必要はない。君の決心が早ければ早いだけ、僕が王となる時も早くなるが……信じているよ、エコー。ドロー、防覇龍ヘリオスファイアを守備表示で召喚。さらにカードを伏せ、これでターンエンドだ」

防覇龍ヘリオスファイア 守1900

エド LP4000 手札：1

モンスター：なし

魔法・罫：デイメンション・ゲート（ディストピアガイ）

アモン LP1900 手札：2

モンスター：防覇龍ヘリオスファイア（守）

魔法・罫：強者の苦痛

補給部隊

デーモンの宣告

1（伏せ）

ヘリオスファイアは一見ただの壁モンスターでしかないが、相手の手札が4枚以下かつプレイヤーが自身以外のモンスターをコントロールしていない場合に限り相手は攻撃宣言を一切行えなくなる守りの

効果を持つ。手札が1枚のみのエドにとっては、厳しい相手と言える。

「ここでヘリオスファイアを引いてくるか……僕のターン、ドロロー！カモン、ドレッドサーヴァント！」

時計の針のような武器を手にした、ドレッドヘアのデーヒーロー。ステータスの低いそれを、エドはあえて攻撃表示で場に出した。

D—HERO ドレッドサーヴァント 攻400↓100

「ドレッドサーヴァントは幽獄の時計塔の針を進める効果を持つが、今このフィールドに時計塔は存在しない。だがこのカードは戦闘破壊されセメタリーに送られた時、僕のマジック、トラップを1枚破壊するセカンドエフェクトを持っている」

「なるほど、その効果でデイストピアガイを復活されたくなければうかつに攻撃表示にはできない、というわけか。だがいいのか、そんな悠長なものを狙っていて？僕がモンスターを攻撃表示で出したうえでヘリオスファイアの守りを潜り抜けなければ自爆特攻すら不可能だし、そもそもエクゾディアの入ったこのデッキにアタッカーなど本当に入っていると思っているのか？」

「そう思うなら思っておけ。僕はこれでターンエンドだ」

意味深な一言と共に、ドレッドサーヴァントの召喚のみでターンを終えるエド。いくらプロとはいえ、流石にこのターンの引きだけでヘリオスファイアを除去することはできなかったようだ。

「では、ドロロー。ターンエンドだ」

引いたカードをちらりと見ただけで、何も言わずターンを回すアモン。ヘリオスファイアの効果を生かすためにモンスターを引いたもの出せなかったのか、あるいはエクゾディアパーツを素引きしたのか……だ。驚くほど動きのないターンの往復だったが、それでもエドのデイストピアガイ、アモンのエクゾディアというフィールド外から互いが相手にかかるプレッシャーに息の詰まるような空気の重さを感じる。

エド LP4000 手札：1

モンスター：D—HERO ドレッドサーヴァント（攻）  
魔法・罫：デイメンション・ゲート（ディストピアガイ）  
アモン LP1900 手札：3  
モンスター：防覇龍ヘリオスファイア（守）  
魔法・罫：強者の苦痛

補給部隊

デーモンの宣告

1（伏せ）

「僕のターン……ターンエンドだ」

どうやら完全に動けなかったらしく、まったく何もせずターンを終えるエド。こうしてターンを費やしているうちに、アモンがエクゾディアのパーツを引ききるかもしれない。その焦りが、手に取るようにこちらにも伝わってくる。

「ドロー。カードを1枚セットし、ターンエンド」

攻めあぐねて落ち着きを失っていくエドとは対照的に、どんどん余裕を取り戻していくアモン。次のターン辺りで何とか流れを取り戻さないと、このままずるずると引き延ばされパーツを揃えられてしまいかねない。勝負の流れというものは、誰が何と言おうとも実在するものなのだ。

エド LP4000 手札：2

モンスター：D—HERO ドレッドサーヴァント（攻）

魔法・罫：デイメンション・ゲート（ディストピアガイ）

アモン LP1900 手札：3

モンスター：防覇龍ヘリオスファイア（守）

魔法・罫：強者の苦痛

補給部隊

デーモンの宣告

2（伏せ）

「もう少し、もう少しだけ待ってくれ、エコー！僕のターン、ドローー！」  
悲痛な叫びとともに、デッキに願いを託してカードを引くエド。そして、その思いは……通じた。ドローしたカードを見たエドが、はっ

とした表情になる。

「アモン。どうやら、エクゾディアの完成を見ることはなさそうだな」  
「なに?」

エドの言葉に眉をひそめ、不愉快そうな表情を露わにするアモン。そんなアモンに、エドがたった今引いたばかりのカードを表にした。  
「そのカードは!」

「そう。通常魔法、手札抹殺を発動する。先ほどのディープ・ダイバーやそのデーモンの宣告を見る限り、恐らくそのデッキはエクゾディアをデッキからサーチ、及びドロワーして揃えるタイプと見た。となると、一度パーツを落としてしまえばその回収は難しい、違うか?」  
「……」

「沈黙は肯定と受け取ろう。これがセメタリーを経由してサルベージするタイプのデッキだったら少々厄介だったが、そんなこともなさそうで安心したよ。さあ、全ての手札を捨ててもらおうか!」

たがいに全ての手札を捨て、その枚数だけドロワーする手札抹殺。無言でエクゾディアパーツを含む3枚のカードを墓地に送るアモンに対し、エドも2枚の手札を捨てて新たなカードを引く。

「さらに魔法カード、マジック・プランターを発動。僕の場のディメンション・ゲートをセメタリーに送り、カードを2枚ドロワーする。そしてディメンション・ゲートがセメタリーへと送られたことにより、異次元の彼方から僕のディールヒーローが帰還する! 暗黒の未来を再び統べる、デイストピアガイ!」

D—HERO デイストピアガイ 攻2800↓2000

ここに来て帰還したエドの新たなエース、デイストピアガイ。特殊召喚の成功、そして強者の苦痛を受けたことにより、再びその2つの効果を使用する用意は整った。額のDの紋章からの光線と、掌を向けての吸引攻撃の2つが流れるような動きで行われ、アモン本人とそのフィールドに襲い掛かる。

「もう説明は不要だな? デイストピアガイのダブルエフェクト発動! まずセメタリーのドリルガイを選択、スクイズ・パーム!」

アモン LP1900↓300

「次いでその、僕から見て右側の伏せカードを破壊し、ディストピアガイの攻撃力を元に戻す、ノーブル・ジャスティス！」

「ふん、残念だったな。破壊されたトラップ、運命の発掘の効果も墓地から発動！このカードが相手により破壊された時、墓地の同名カードの数だけドローを行う。僕の墓地には今破壊されたこのカードの他に、手札抹殺により墓地に送られた1枚が存在する。よって2枚をドロー！」

D—HERO ディストピアガイ 攻2000↓2800

せつかくの破壊効果も、よりよって破壊された時に効果を発動するカードに使ってしまったせいでまともに生かせなかったエド。しかもヘリオスファイアよりも伏せカードを優先したせいで、このターンはまだ攻撃することもできない。

だが、エドはまだ諦めていなかった。アモンが手札抹殺で運命の発掘を墓地に送りドロー数の増加に繋がったように、この男もまた勝利への布石をあの時ちやっかり打っていたのだ。

「ただだ、セメタリーに存在するディアボリックガイのエフェクトを発動。このカードを除外することで、デッキより同名モンスターを特殊召喚する。カモン、アナザーワン！さらにデビルガイを召喚！」

D—HERO ディアボリックガイ 攻800↓200

D—HERO デビルガイ 攻600↓300

ドレッドサーヴァント、デビル、そしてディアボリックにディストピア。計4体ものディーヒーローがフィールドに揃った時点で、やっとエドの狙いが僕にもわかった。

もしかして、最初からこうなることを予測してあえてドレッドサーヴァントの効果も事前に宣言していたのだろうか。攻守が低く耐性があるわけでもないドレッドサーヴァントは、ただ出すだけでは壁にすらならない。だがいかにも攻撃されたがっているような状況をあえて作ること、逆に相手の攻撃を封じて結果的に場に生き残らせる、そんな高度な駆け引き。考えすぎかもしれないが、エドならやりかねない。なぜなら、奴はそういう抜け目のないデュエリストだからだ。

「僕はこのうちデイストピアガイ以外の3体のディーヒーローをリリースし、手札からこのカードを特殊召喚する！出でよ、究極のD！ディーヒーロー、Bl<sup>ブ</sup>oo<sup>ル</sup>o<sup>デー</sup>o<sup>デー</sup>！」

僕との戦いでも、その圧倒的な力によりわずか1枚で場を制圧しかけた究極のディーヒーロー。エドの足元に突如湧き出した血の池から、その英雄というよりもむしろ悪魔めいた存在がゆっくりと浮かび上がってきた。

D—HERO Bl<sup>ブ</sup>oo<sup>ル</sup>o<sup>デー</sup>o<sup>デー</sup>D 攻1900↓1100

「Bl<sup>ブ</sup>oo<sup>ル</sup>o<sup>デー</sup>o<sup>デー</sup>D……だと？」

「そう、これこそが究極のDの姿。バトルだ、デイストピアガイ！デイストピアブロー！」

「馬鹿な、ヘリオスファイアの効果で攻撃は……！」

「それはどうか？Bl<sup>ブ</sup>oo<sup>ル</sup>o<sup>デー</sup>o<sup>デー</sup>Dが場に存在する限り、相手の場に存在するすべてのモンスター効果は無効となる。よってヘリオスファイアも、ただ守備力が高いだけの下級モンスターに過ぎなくなった」

その言葉通り、ヘリオスファイアの呪縛から解放放たれたデイストピアガイが飛び上がりざまの拳を叩き込む。本来攻撃力では最初から勝っていたその一撃は、長いことフィールドに鎮座していたヘリオスファイアをついに粉碎した。

D—HERO デイストピアガイ 攻2800↓防覇龍ヘリオスファイア 守1900 (破壊)

「ヘリオスファイアの破壊により、カードをドローする」

「もう遅い、これで全て終わらせる……！Bl<sup>ブ</sup>oo<sup>ル</sup>o<sup>デー</sup>o<sup>デー</sup>Dでダイレクトアタック、ブラッディー・ファイアーズ！」

D—HERO Bl<sup>ブ</sup>oo<sup>ル</sup>o<sup>デー</sup>o<sup>デー</sup>D 攻1100↓アモン (直接攻撃)

伏せカードもヘリオスファイアも取り除かれて焼け野原となったアモンのフィールドに、鎮魂歌のごとくBl<sup>ブ</sup>oo<sup>ル</sup>o<sup>デー</sup>o<sup>デー</sup>Dの血の雨が降る。レベルの割に素の攻撃力が低いBl<sup>ブ</sup>oo<sup>ル</sup>o<sup>デー</sup>o<sup>デー</sup>Dには強者の苦痛の影響も大きい、アモンのライフはそれ以上に少ない。文字通りの血煙が視界を遮り、その中にアモンの体が消えていった。

「これで……」

精根使い果たしたと言わんばかりのエドが、エコーに声を掛けようとする。だが、その言葉が最後まで続くことはなかった。突如血煙を突き破って伸びた1対の太い腕、鎖に繋がれた黄色い2本の腕が、B100-Dの血を無造作に振り払ったのだ。そのまま掌を合わせるようなポーズをとった腕の間に、次第に炎が集まっていく。

「何!?これは……!」

アモン LP300

それを見た瞬間、思わず自分の目を疑った。アモンのライフが、まだ減っていない。そしてますます強くなる炎の向こうから、アモンの声が洞窟に反響して聞こえてくる。

「エド。君の犯したミスはたった1つ、僕の2枚の伏せカードのうち運命の発掘の方を破壊してしまったこと。たったそれだけのこと、だがその致命的なミスがこの結果を生んだんだ。B100-Dの存在が、魔神の怒りを呼び起こした。永続トラップ、魔神<sup>エクゾディア</sup>火炎砲……1ターンに1度手札、またはデッキからエクゾディアパーツまたはその派生形のエクゾディアカードを墓地に送ることで、相手の場のモンスター1体をバウンスする。千の軍勢を一夜にして焼き滅ぼす、魔神の怒りを受けてみる!」

その言葉をきっかけに、エクゾディアの物であろうその両腕が限界まで溜めていた炎の力を解き放つ。究極のDの名を関するB100-Dが、僕をあれほど苦しめ行動を縛ってきたエドの切り札が、塵一つ残さず焼き滅ぼされた。

「魔神火炎砲……B100-Dの効果の範囲外からの攻撃だと……!」

エースモンスター<sup>の</sup>喪失に、歯噛みするエド。だが、B100-Dの敗北はそれ以外にも思わぬところに影響を及ぼしていた。それまでは血の雨に阻まれて前に進めずその場に立ち尽くしていたエコーが、またふらふらと封印の扉へ近づき始めたのだ。どれほど力を込めても動けない僕ら、そして目の前のデュエルに精一杯で声を張り上げることしかできないエドには一瞥もくれず、エコーがついに扉の前に立つ。

そこからは、突然だった。自らを解放する贄の接近に反応した神が、力づくで封印の向こう側から手を伸ばす。逃げようともせず突っ立っていたエコーの体を無造作に握りしめた巨大な腕が、彼女を掴んだままゆっくりと持ち上がる。

「エコー！・エコー！」

エドの必死の呼びかけにも、もはやエコーは何も応えない……かと思われたけれど、それは違ったようだ。眠るようにぐったりとしていたエコーの目がかすかに開き、か細く途切れそうな声が聞こえてくる。

「エド……貴方を巻き込んでしまい、ごめんなさい。でも私は、愛する人に思いのまま生きて欲しかった……」

「もういい、喋るなエコー！その思いのために君が犠牲になるなんて僕には理解できない！あんなものはその場しのぎに過ぎない、次のターンでは必ず僕が勝つ！だから今ならまだ間に合うはずだ、こちらに戻ってきてくれ！」

「理解できないなら、それでいいの……ただ私と、アモンがわかってさえいけば……私はアモンを愛しているし、アモンも私を愛する人と呼んでくれた、ただそれだけで……だから……」

「エコーッ！」

エクゾディアによく似たその腕の中で、エコーの体が光に包まれ始める。この世界に来てから何回も見てきた光景、敗者が消滅する瞬間と同じものだ。ああなってしまった以上、止める方法を僕は知らない。そんなものを知っていたら、ケルトやオブライエンだって……いや、今はあの2人のことはいい。消えていくエコーの姿を直視して見られなかったのか、エドがうつむいて目を逸らすのがわずかに見えた。

そしてそれとは対照的に、アモンの顔が暗い歓喜に歪む。その表情をエコーは最後まで見ることがなかったのが、彼女にとってはせめてもの救いだらう。とでも思わないとやってられない。多分本人は気づいていないだろうが、それほどまでにアモンの笑みは壊れていた。「ありがとう、エコー。僕の最愛の人。これでたった今から、僕は王と



なった」

「ふざけるな……」

「うん？」

その場に膝から崩れ落ちかけたエドが再び立ち上がり、憎しみを込めてアモンを睨みつける。多分今のエドの心の中は、かなり不安定な状態になっているはずだ。何度も同じようなことになってきた僕には、その気持ちがよくわかる。そしてこんな時、何を言っても無駄だということも。

だけど怒りのパワーは爆発力こそ確かにあるが、反面恐ろしく脆い代物だ。ねじ伏せられる前に勝負を決めないと、厄介なことになりかねない。

「お前が王だと？ エコーの命を踏みにじって得たその力か？ そんなこと、この僕が認めるものか！」

「なら、試してみるかい？ 一応、まだ君のターンは続いているが」

「いいだろう……！ 僕は魔法カード、デステニー・ドローを発動！ 手札のディーヒーロー1体を墓地に送ることで、カードを2枚ドローする。バウンスされたB100Dを墓地に送り、ドロー！」

エクゾディアのパーツのほとんどは、手札抹殺と魔神火炎砲によって墓地にある。おかしい、エドの言った通りアモンのデッキはサルベージ型ではなくサーチ型の「エクゾディア」のはずだ。勝ち筋がまだ残っているとは思えないのに、なぜあんなに余裕があるのだろう。

だがその異常さも、激情に囚われたエドは見過ごしてしまう。尤もそれも無理はない、そもそも僕がそのことに気づけたのだって、こうして身動きひとつとれない状況で第三者として見ているという特異な状況にあったからこそだ。

何も起きないでくれ、アモンのはったりであってくれ。心からそう願うが、同時に嫌な予感が徐々に大きくなっていくのも感じる。

「速攻魔法、サイクロン！ 魔神火炎砲を破壊する！」

「いい判断だ。このカードは1ターンに1度しか効果を使えないからな」

強力なバウンス能力を秘めたカードが破壊されてなお、平然とした

様子のアモン。その様子を見て、嫌な予感が確信に変わった。間違いない、まだアモンは何かを隠している。

「カードを1枚セットし、セメタリーに眠るディバインガイのエフェクト発動！ 僕の手札が0枚の時にセメタリーの自身と他のディーヒーロー1体を除外することで、デツキからカードを2枚ドロースる。デビルガイとディバインガイを除外し、ドロース…そして今伏せた魔法カード、死者蘇生を発動！ ダイヤモンドガイを守備表示で召喚し、エフエクト発動！ デツキトップの通常魔法、デス・メテオをセメタリーに送る！」

「やった！」

土壇場でのエドの引き、そしてその落ちの良さに思わず声が出る。デス・メテオは発動さえすれば、問答無用で相手に1000のダメージを与える通常魔法。本来ならばその火力と引き換えに相手ライフが3000以下の時に使えないというデメリットがあるものの、ダイヤモンドガイの効果ならば発動コストも条件も、その全てを踏み倒して結果だけを利用することができる。

D—HERO ダイヤモンドガイ 守1600

「さらに僕は、この2枚のカードをセットする。これで次の僕のターンのメインフェイズ時、僕の勝利が確定した。例えお前が本物の王だとしても、この結果を覆すことは不可能だ！」

「なるほどな。確かに通常ならば、この状況はいかんともしがたいだろう…：普通なら、な。今の僕はもうこれまでのアモン・ガラムではない、この世界の新たな王だ。王の前に、そんな小細工が通用すると思うな！ このターンで終わらせてみせよう、光栄に思うがいい。この王の最初の相手を務める榮譽を、お前にくれてやるのだからな。ドロース！」

連続してのドロースにより、アモンの手札は既に7枚。だが肝心のエクゾディアパーツは、そのうち3枚が墓地にある。残りの2枚はデツキに眠っているのか、それともすでに手札にあるのか。仮に手札にあったとして、パーツの揃っていないエクゾディアでいったい何をしようというのか。だが、アモンはそんな疑問などお構いなしに更なる

行動に出た。

「魔法カード、おろかな埋葬を発動。デッキに眠るエクゾディアパーツ、封印されし者の右足を墓地へ。さらに手札の封印されし者の右腕……僕はこのカードを召喚する」

封印の扉が内側からひしゃげ、右腕がそこから飛び出して……だが、その手首はまだ内側の空間から鎖に繋がれており、体の他の部分には出られないようだ。

封印されし者の右腕 攻300

「何を企んでいるのかは知らないが、ここでその腕を潰せば問題ない！速攻魔法、エネミーコントローラー！僕が選択するのは2つ目の効果だ。ダイヤモンドガイをコストとして、その右腕のコントロールをこのターンのエンドフェイズまで得る！」

巨大なゲームコントローラーがエドの頭上に現れ、2本のコードが伸びてそのうち1本がダイヤモンドガイに繋がれる。そしてもう1本がフィールドをうねり、蛇のような動きで右腕に迫る。だがそのコードを突然扉から出てきたもう1本の腕、手首の鎖を強引に引きちぎって自由になった巨大な魔神の左腕が空中で握りつぶした。

しかもそれだけにはとどまらず、自分が引きちぎった鎖を振り回すことでもう片方の端にいたデイストピアガイの体を束縛し、そのまま軽々と宙に舞わす。縛られたまま周りの壁に何度も何度も叩きつけられたデイストピアガイの体から次第に生気が抜けていき、力を失い地面に落ちるまでにそう時間はかからなかった。

「速攻魔法、デイメンション・マジック。僕の場合に魔法使い族モンスターへの封印されし者の右腕が存在することにより発動条件を満たしたこのカードの効果により、右腕をリリースして手札の魔法使い族、封印されし者の左腕を特殊召喚。さらに追加効果により、デイストピアガイには退場してもらった」

封印されし者の左腕 攻300

「デイストピアガイが……だが、僕のライフはまだ4000ある。いくらモンスターを除去しようとしても、エクゾディアを狙うデッキで1ターンに4000ダメージなんて出せるはずがない！」

エクゾディアは他に例を見ないその独特な勝利条件から、他のデッキとは全く違う構築をすることをプレイヤーに半ば強いている。相手ライフがたとえ1だろうと1万だろうとパーツさえ揃えれば勝ちなのだから、相手ライフを削るようなカードを入れる必要がないというのもその1つだ。なのでエドの言葉は確かに真理、何ひとつ間違ったことは言っていない。だが、そう自らに言い聞かせるよう叫ぶたびに、アモンの顔に無知な相手を馬鹿にするような愉悦の色が広がっていく。そしてそれが、ますますこちらの不安感をあおっていく。

「これ以上何もするな、早くターンエンドしろ！」

エドも同じことを感じているらしく、口調こそ強気だが半ば懇願するように叫ぶ。このターン、このターンさえ凌げれば、ダイヤモンドガイとデス・メテオのコンボが成立する。なんとか、エドのライフが残った状態でアモンのターンを終えさせることができれば。

「僕は」

やめろ、これ以上何もしないでいい。今すぐそのカードから手を放すんだ。

「封印されし者の左腕を」

やめてくれ、なぜそんなに笑っているのさ。このままじゃエドが、エドが。

「リリースし、このモンスターを特殊召喚する」

だけど、僕らの願いは叶わない。アモンが手札から1枚のカードをデュエルディスクに置くと、ほんの1瞬の静寂が洞窟を包んだ。そして、何の前触れもなく封印の扉が、その内側から強い力を加えられ弾け飛ぶ。

そこからゆっくりと、ついにその姿を見せた魔神の名を僕らは知っている。いや、仮にもデュエルモンスターズに触れたことのある人間ならば、誰もがその名を呼ぶことができるだろう。

「エクゾディア……」

「確かに似ている。だが正確には、少し違うな。これこそが僕にもたらされた王の力……出でよ、召喚神エクゾディア！」

エコーの犠牲により、ついに完全に封印から解き放たれてしまった

魔神、召喚神エクゾディア。その腕が、足が、そして頭が、黄金の炎に包まれ秘められた力を解放する。

「召喚神エクゾディアの攻撃力は、僕の墓地に存在するエクゾディアパーツ1枚につき1000ポイントとなる。そして、僕の墓地には今、5枚すべてのパーツが揃っている」

召喚神エクゾディア 攻5000

「バトルだ。先ほどの魔神火焰砲とはわけが違う、エクゾディアの本気を見せてやろう。やれ、魔神火焰砲！」

魔神が両腕を合わせ、再び火炎を放つ。その輝き、勢い、そして火力の全てが桁違いに膨れ上がった一撃を前に、エドが最後のカードを発動させる。

「トラップ発動、聖なるバリア……」

「ミラーフォースか。だが無駄だ、召喚神エクゾディアは、あらゆるカード効果を受け付けない！」

その言葉通り、ミラーフォースの発動によりエドの前に展開された半透明の壁は、魔神の炎とぶつかった瞬間に粉々に砕け散った。全ての手を使い尽くしたエドの姿が、炎の中に吞まれて見えなくなる。

「うわああああっ！」

召喚神エクゾディア 攻5000↓エド（直接攻撃）

エド LP4000↓0

「ふう。さてと、本来なら君たちも始末する方がいいんだろうが、残った君たちの中で最も強いのは、十代か。それともヘルカイザー、君の方かな？でもどちらにせよ十代は霸王の力の抜け殻に過ぎず、ヘルカイザーもエドに負ける程度の腕だったか。なら、どちらにもいまさら用はない。なら今日はせつかく僕が王となった記念となる日だ、特別に見逃してあげよう。元の世界に戻るといふのなら、温かく見送つてやろうじゃないか。さあ召喚神よ、こんなところに長居する必要はない。やることは山積みなんだからな」

あのエドが。僕のことを軽く手玉に取ったこともあるほどの実力

者のエドが、魔神の暴力的な力を前にわずか1ターンで敗北するのを、僕はただ見ていることしかできなかった。もつともプライドの高いエドのことだ、仮に僕が参戦できる状態であったとしても乱入での加勢なんて絶対に許さなかつただろうが。

あとわずか1ターンで勝利がもたらされるといふところまで、アモンのことを追い詰めていた。もはや九分九厘、エドの勝利は確定していたはずだった。

だが、それでも、最後に立っていたのはアモンだった。自己犠牲なんかじゃない、できるだけの手段を尽くしただけだ、だから前に走って朋友を救え——消滅する寸前、エドが残した最期の言葉に従い洞窟から逃げ出す途中でふと振り返ると、少し気になるものが見えた。エドとデュエルしている最中、アモンの左腕はずっと異形のそれだったはずだ。だが逃げ出す僕らを冷たく見るアモンの左腕は、いつの間にか普通の人間の物になっていた。

「何してるノーネ、早く逃げるーノ！」

「は、はい！」

アモンの高笑いをバックに、十代をおぶったまま凄い勢いで走るクロノス先生の言葉に背中を押されるようにしてとにかく走る。幸いにも一本道だった洞窟を抜けて外に出ると、朝焼けの空が頭上に広がっていた。

「朝、か……」

エドのデュエルを見ているうちに、いつの間にか夜が明けていたらしい。空を見て感傷に浸る間もなく、背後で洞窟が崩れる音がする。洞窟の壁を突き崩し、巨大魔神がゆっくりと立ち上がった。その肩を玉座代わりとして座るアモンが、もう足元の僕らには目もくれずエクゾディアに指示を出す。魔神がゆっくりと歩きだすのを見てようやく我に返り、ばつと振り向くとヘルカイザーと目が合った。クロノス先生たちは恐らく十代をまた寝かしに行ったのだろう、この場からは離れている。

「僕は、アモンを止めてくる。この世界には、これ以上霸王の系譜はいらない」

言葉の端々にまで覚悟を込め、ヘルカイザーの目を見たまま宣言する。脳裏をよぎるのは、霸王のせいで傷つき倒れ、そして消えていったたくさんの人や精霊たち。

何か止めてくるかと思っただけど、意外にもそんなことは一言も言わなかった。どれだけの気持ちでこんなことを言ってるのか、察してくれたのかもしれない。

「悪いな。本当は、俺もついていきたいところだが……」

「十代の方も、なにかしらケアが必要だろうしね。それに翔も、あれなんか憑いてるみたいだし……こつちこそ悪いね、厄介ごと全部押し付けてるみたいで」

そう言うと、ヘルカイザーが微苦笑を漏らす。その表情は、久しぶりに見るヘル化する前のカイザーに近いものだった。

「そんなことを気にしていたのか。あいつらには、俺の方から上手く伝えておく。十代の奴も、もう少し様子を見てから俺の命に代えても叩き直してやろう。翔には……どうだろうな。もうゆっくり話し合うだけの時間が俺にはない、せいぜい俺の最後の生き様を見せてやれるぐらいだ」

「最後の……？それに今、命に代えてもって……」

「清明。俺がアカデミアを卒業する際、なぜお前を卒業デュエルの相手に指名したか、まだ話したことはなかったな」

「ああ、そうだね。確か、僕が勝ったら教えてくれるんだっけ？」

露骨に話を逸らしに来たことには気づいたが、ここで話を逸らすということがどういう意味かを分らないほど僕は馬鹿じゃない。だからあえて、ヘルカイザーの話に付き合うことにした。

忘れない、忘れられるわけがない、目の前の男と僕の卒業デュエル。突然レツド寮にやってきて僕のことを指名し、僕が勝てばその理由を教えてやると言うだけ言って去っていったアカデミアの皇帝。その後の結果は僕の負けだったから、結局そのちゃんとした理由は聞かずじまいだったのだ。

「お前には自覚はないだろうが、不思議な力がある。十代が皆を照らし良くも悪くも影響を与える太陽のような男だとすれば、お前はさな

がら天の川だ。太陽のように自分から何かしているわけではないのに、不思議と他の存在を引き付ける。流れ星のごとく燃え盛り空を翔けるわけでもなく、月のごとく1歩退いた位置から皆を照らすわけでもなく。ただそこに自由にいるだけでなぜか周りを巻き込んでいく、宇宙そらの鉄砲水だ。一度お前のことを見つけた者の記憶には必ずお前の印象が残り、もう一度見ることができれば不思議な温かさが皆を包む。かくいう俺も、その十代とはまた違った魅力に惹かれてな。それが、あえて十代ではなくお前を……遊野清明を、あの時選んだ理由だ」

僕にはよくわからない。だけど、ヘルカイザーが言うならきつとそうなのだろう。

「少し買いかぶりすぎな気もするけどね」

「自覚はないだろうな。その方がお前らしい。さあ行け、清明。お前は自分の選ぶ通りに、常に自由な存在であることが一番性に合っている。そのお前が決めたのなら、こちらのことはこの俺に任せて存分にやってこい」

そこまで聞いたところで、我慢できずにふふつと笑う。何がおかしい、と問いたげなヘルカイザーに、思ったことを率直に言う。

「ごめん、なんだかちよつと安心してさ。どんなに外面が変わっても、信じる理念が変わっても、やっぱり中身は僕の知ってるアカデミアの皇帝、カイザーそのままだったからさ」

「そう見えるか?」

「うん。もちろんあの時のカイザーと今のヘルカイザーは全然違うさ。だけど本当に奥の奥、一番奥の芯の部分は何一つ変わってないね。帰ったら吹雪さんにも聞いてみればいいよ、多分僕と同じことを言うだろうから。それじゃ、ヘルカイザー。またいつか、手合せをお願いしてもいいかな?サイバー・ダークの相手、一度でいいからやってみたいんだ」

「……わかった。ただし、生半可な覚悟で俺の相手が務まるとは思わないよ?」

「お手柔らかにお願いします。じゃあ霸王に続きもう1回、王様倒しての下克上と洒落込んでくるよ」



その言葉を最後にヘルカイザーに背を向け、エクゾディアの背中を  
目印に歩き出す。

もちろん、一筋縄でいく相手ではないだろう。それでも、ここでア  
モンを止める必要がある。出来なからうがなんだろうが、それでもや  
らなくてはいけないのだ。

## ターン105 鉄砲水と封印の神

「……アモン！アモン・ガラムー！」

一日中エクゾディアを追いかけまわし、アモンに声をかけることができたのはなんと日が西の空に沈もうとする黄昏時だった。カイザーたちと別れたのが早朝だったことを考えるとひどいタイムロスだが、仕方がない。下手にエクゾディアが実体化しているときに勝負を挑んでも踏みつぶされるのが落ちだろうから、アモンがエクゾディアをカードに戻すわずかな隙ができるまで付かず離れずの距離を気づかれないように進むしかなかったのだ。

でも不思議と、その時間を辛いとは思わなかった。アモンだって人間だから必ずどこかで下に降りる時が来るのはわかっていたし、こんな耐久レースごときで音を上げていたらそれこそケルト達に天国だか地獄だかで笑われてしまう。それにそのおかげで、道中見つけた湧き水から水妖式デュエルディスクに水を入れ直すこともできた。

一度眠りにつくつもりだったのか、適当な木にもたれかかって座るアモン。僕の声に反応して閉じていた眼を開き、ゆっくりと立ち上がった。

「……驚いたな。まだ何か用か？エドの仇でも討ちに来たか？」

「霸王は僕の手で倒した。この世界にもう王はいらない、だから今度にはアモン、お前の番だよ」

オブライエンの存在はあえて伏せておく。どうせ黙つとけばばれることはないだろうし、それだけのことで必要以上にこっちを警戒してくれるならこちらとしてもその方がやりやすい。

そのことを知っているのは僕らを除くとグラフィアぐらいだろうが、あの老獪な悪魔のことだ。おおかた自分の息がかかった人間が霸王の支配に終止符を打った程度の大まかなことしか表には出さず、なんとなく美談っぽく纏め上げて流布していることだろう。グラフィア側にもオブライエンの存在を表に出すメリットがない以上、わざわざ登場人物を増やす必要はないはずだ。

「なるほどな。それで、わざわざ止めに来たという事か？まったくご

苦勞なことだ。エクゾディアの力を手に入れるため、僕がどれだけの犠牲を払ったのかは君も見ていただろう？それでもなお、今更僕を止められるとも思ったのか？僕はこの世界の王となる。それが、彼女にできる最大限の手向けだよ」

「……へえ。だつたらうちも言わせてもらうけど、僕はこの場で絶対にその覇道を止めてみせる。それが、霸王を倒せばきつと平和が戻ると信じて！こんな僕のために！命を賭けて道を開いてくれた、ケルト達への手向けなんだ！」

できるだけ感情を抑えようと努力はしていた。けれど、いざアモンを目の前にしているとだんだん心の底からこみあげてくるものを抑えられなくなってきた、最終的には声を荒げてしまった。

でもそれは、それだけ僕も本気で怒っていることの裏返しだ。怒っているというより、半ば呆れていると言った方が近いかもしれない。エドと対峙していたときにも感じたが、本当に何の脈絡もなく突然この世界に現れて、ようやく戻ってきたはずのあるべき世界を自分の欲望のためだけに再び消し去ってしまおうとするこの男のことは理解できない。そして、そんなもの最初から理解したいとも思わない。

「君の手向け、ねえ。生憎だが、君の実力はもう知っている。アカデミアではあれだけ何かありそうな様子を見せておいて随分と齒ごたえの無い相手だったから、逆に拍子抜けしたものだ。エクゾディアの肩慣らしとしての役目もエドがやってくれたわけだし、君の挑戦を受けるメリットがないね。それに霸王を片付けたと言っても、オブライエンあつての手柄だろう？君一人の力じゃないはずだが」

「なんでそれを……!?」

挑発の方は聞き流すこともできるが、問題はその後の言葉だ。なんでもオブライエンのことを、アモンが知っているんだろう。まさか、あのデュエルをアモンもどこからか見ていたのか。だとすると、アモンの手は思ったより広い範囲に届くことになる。嫌な汗が流れるのを感じる中そんな流れを変えたのは、僕にとって、そしてそれ以上にアモンにとって予想外な声だった。

「いいじゃないか、受けてあげれば」

「なんだと!？」

「その声……!？」

どこからともなく響く声。この声には、聴き覚えがある。プロフェッサー・コブラのもとに忍び込んだ時、姿を見せずに僕の頭の中に直接話しかけてきた謎の声。十代を病的に愛していて、それ以外の全てをどうでもいいと一言で切り捨てた、あの不気味な存在。デュエルエナジーを手に入れた後は砂漠の異世界でも暗躍し、ウラヌスを囮に校舎に忍び込んでゾンビ生徒軍団を生み出したりとやりたい放題やってくれたオレンジ色の人型。

今度はどこに潜んでいるのか、と左右を見回す僕に対し、アモンの反応ははつきりしていた。自分の左腕を何かを見つけようとするかのように憎々しげに見降ろし、鋭い目つきで舌打ちする。

「君、確か前にも何回か会ったよね？フッフ、アモン。この人間はしつこいから、たとえここで撒いてもどうせまた思いもよらない場所から何回でも出てくるさ。なら、ここで彼の気が済むまで相手してやればいい」

「待て、何を勝手なことを!？」

「おやおや、王になる人間が1度は勝てた相手からの挑戦を拒むのかい？ボクは少し別件で用があるからね、席を外させてもらおうよ。どちらが勝つにせよ、戻ってくるまでには決着をつけておいておくれ」

「この……!？」

煽り言葉を置き土産に、得体の知れない気配が遠ざかっていく。これこれ3回目の遭遇だというのにまたもや喋りたいだけ喋ってどこかへ行ってしまった「何か」に対してもはや呆然とするしかない僕とは対照的に、いら立ちを隠せないアモンが自身の左腕から僕の方へ視線を移す。

「ふん、まあいいさ。あの化物も、いずれは僕の糧となる。それに、奴の言うことも一理あるからな。遊野清明、思えばお前は確かにしつこかった。アカデミアにいた時からな」

「みんなして人をゴキブリみたいに……んで？デュエル、受けてくれるの?？」

「ああ、いいだろう。せいぜい、寝る前の暇つぶしぐらいにはなってもらおうじゃないか」

「オーケイ、子守唄とでも洒落込もうか。永眠前の暇つぶしにね！」

売り言葉に買い言葉を吐き捨て、ほぼ同時にデュエルディスクを展開する。結果的にこうしてデュエルを受けさせることに成功したわけだから、今回ばかりはあの人型に感謝しておこう。

「デュエル！」

「先攻は僕か。ディープ・ダイバーを守備表示で召喚！カードを伏せて、ターンエンドだ」

アモンが最初に繰り出したのは、エド戦でも使っていた潜水服に身を包むモンスター。戦闘破壊されたターンのバトルフェイズ終了時にデッキのモンスター1体をデッキトップに置くことができる、明確に手札に加えたいカードのあるエクゾディアにとっては心強いサポートカードだ。

ディープ・ダイバー 守1100

「僕のターン、ドロロー！」

アモンのデッキには今、最低でも2種類の勝ちパターンが存在する。まず最初に、通常通りエクゾディアを手札に揃えての特殊勝利。そしてもう1つ、そのパーツをリリースすることで特殊召喚できる超大型モンスターである召喚神エクゾディアによるビートダウン。あの時のアモンは通常の特勝勝利をエドの機転で妨害された瞬間に召喚神の戦術にシフトしていたが、今日の前のアモンが取ろうとしているのは、どちらの方法による勝利なのか。

いや、もちろん隙あらばどちらも仕掛けようとはしているのだろうが、その2パターンのうちでより優先的に行おうとしているのはどちらだろう。手札にパーツを揃えなくてはならない本家に対し墓地のパーツの種類で攻撃力が変動する召喚神はそのコンセプトから言っても真逆の存在であり、どちらかを本命の勝利手段としてもう片方をサブにとどめるような使い方をしない限り中途半端に手札と墓地にパーツが分散するという最悪の状況に陥りかねない。そしてそんなミス、アモンは絶対にしないだろう。

となると、それを知るためにもここはあえてあの誘いに乗ってやるべきか。もちろんリスクは高いけれど、それがわからなくてはこちらも壊獣の使い時が掴めない。完全耐性を持つ召喚神をもローリスクで始末できる壊獣カードも、その枚数には限りがある。召喚神が出てくるまで温存すべきなのか、出てくるモンスターに対して片っ端から使って強引にでも短期決戦を狙いに行った方がいいのか。それがある程度見られると思えば、あえての攻撃も悪くない。

「ハンマー・シャークを召喚、攻撃表示。そしてバトル、ディープ・ダイバーに攻撃！」

ハンマー・シャーク 攻1700↓ディープ・ダイバー 守1100 (破壊)

伏せカードと共にアモンは沈黙したまま、自らのモンスターが破壊されるのを無表情に見ている。もっとも戦闘破壊されることが仕事のディープ・ダイバーを守るなどありえないから、あの伏せカードがミラーフオーズや次元幽閉のような攻撃反応でない保証はない。

あれこれ考えていると、アモンが口の端を歪めて軽く笑った。

「そんなにエクゾディアが恐ろしいか？ 無い知恵を絞って懸命にこちらの手を読もうとするのは結構だが、せっかく相手してやってるんだ。もっと本気で来てもらわないと、僕も……それにエコーも興冷めだろう」

「この……」

『まあ待てマスター。今の言葉、一理あると私は思う』

「あれ、チャクチャルさんまでそんなこと言うの？ ていうか、今まで一体どこにいたのさ」

『その話は後です、それよりも今だ。だいたい、私だってこういうことはあまり言いたくないぞ。私が口でどうこう言うより、マスター自身が一度痛い目にあった方がよっぽど身につくだろうからな。だが、流石にこれは目に余るぞ』

「……何が？」

アモンの言葉だけなら、腹は立つけれどまあ挑発のたぐいだと聞き流すことができただろう。だがチャクチャルさんの話は別だ。信用

するブレインが不穏なことを言いだしたのだから、その言葉には聞いておく価値がある。

『どうもマスター、あの壊獣を純で使っている間に変な癖がついたよ  
うだな。それとも、これもユーノの魂の影響か？だがおおかた怒りに  
任せて流されるような、自分本位なデュエルが多かったのだろう？』  
「う。それはまあ、その……」

『だろうと思った。もちろん、相手の次の行動を先読みすることが悪  
いと言いたいのではない。それは使いこなせれば、マスターの立派な  
武器のひとつとなるだろう。だが問題は、相手を見ずに自分の中だけ  
で思考を完結させていたことだ』

「相手を？」

『そうだ。長々と自分の殻に閉じこもって考えたあげく、やったこと  
はただ殴るだけ。これでは何も考えずに突っ込むのと、結果だけ見れ  
ば変わらない。長考が悪いのではなく、その時に相手を、盤面全体を  
見る視野を失ったのが悪い。しかもそのあげく、出した結論すら空回  
りする羽目になる。私なら、恐らくエクゾディアパーツをサーチする  
ぞ』

「バトルフェイズ終了時、ディープ・ダイバーの効果発動。僕はデツキ  
から、封印されしエクゾディアをデツキトップに置く」

チャクチャルさんの宣言と重なるように、アモンがエクゾディアの  
頭をこちらに見せてからデツキの上に置く。その時になってようや  
く、僕は自分の作戦の致命的な欠陥に気が付いた。

『そうだ。あのように召喚神やドロースーツとなりうるモンスターで  
はなくパーツを選ばれては、特殊勝利を狙うのか召喚神のリリース要  
因にするのかはわからないままだ。まだ見えないエクゾディアの影  
に怯むあまりにこのターンはみすみす敵に塩を送ったな、マスター』

なんてことだ。自分の考えにかまけていたばかりに、パーツを持つ  
てくるというごくごく当たり前の選択肢があったことにまるで気が  
付かなかった。確かにアモンの立場になってみれば、たとえ彼がどち  
らの勝利方法を軸として考えているにしてもパーツを手札に置く作  
業は必要不可欠。それなのにこんなことをやらかした僕を見たら、ア

モンどころかケルトやオブライエン、それにエドにまで笑われてしま  
う。

もつとよく見るんだ。場を、相手を、この世界全てを。怒りの、そ  
して無意識な恐怖のあまり視野が狭くなっていったのは、あの時のエド  
じゃなくて今の僕だ。

「ありがとう、チャクチャルさん。もう大丈夫」

『自分を客観的に見られるようになれば、ひとまずは大丈夫だろうな。  
マスター、確かにあの魔神は恐るべき力を秘めている。だが、そんな  
一朝一夕の力を手に入れただけでただの人間が王になれるのなら、マ  
スターはあの人間より遥かに年季が上の地縛神官だ。1つの世界な  
どと小さい獲物に拘る程度の王など組み伏せ、その先に進め』

その言葉を最後に、また静観モードに入るチャクチャルさん。天然  
なのかわざとなのか、いちいち言い回しが妙に悪役寄りなのが引つ掛  
かるけど、背中を押してくれたのはよく理解できた。

「僕はこれで、ターンエンド」

アモン LP4000 手札：3

モンスター：なし

魔法・罠：1（伏せ）

清明 LP4000 手札：5

モンスター：ハンマー・シャーク（攻）

魔法・罠：なし

「僕のターン、ドロー」

これでアモンの手札には、エクゾディアの頭が加わった。でもまだ  
最序盤、デュエルはここからだ。

「ふむ。エア・サーキュレーターを召喚する。このカードが召喚に成  
功した時、手札2枚をデッキに戻すことでカードを2枚引くことができ  
る。だが、それだけではない」

次いでアモンが繰り出したモンスターは、まるで換気扇に手足のつ  
いたようなモンスター。その中央を貫いて、1本の鎖が伸びてきた。

エア・サーキュレーター 守0

「攻撃力2000以下のモンスターが召喚されたことでトラップカー



ド、チェーン・デストラクション連鎖破壊を発動。これにより、僕のデッキからさらに2枚のエア・サーキュレーターを破壊し墓地に送る。そしてエア・サーキュレーターは破壊されたとき、1体につき1枚のカードをドロウできる」

「デッキ圧縮して2枚ドロウ……やってくれるね」

「こんなものではないぞ？どれ、君にもひと仕事してもらおうか。僕は自分の墓地に存在するすべてのモンスターをデッキに戻し、手札から究極封印神エクゾディアを特殊召喚する！」

アモンを中心に風が渦巻き、彼の着ているマントが大きくはためく。その背後に音もなく、第3のエクゾディアとでも呼ぶべき魔神が現れた。西の空に沈んでいく夕日の最期の残滓に照らされたその姿は、実際エクゾディアとよく似ている……だがよく見ると、その細部はまるで異なっている。違う、このモンスターはエクゾディアじゃない。

究極封印神エクゾディア オス 攻0

「な、なんなのさこれ……！」

「彼はエクゾディアオス。僕がエコーを招き入れたあの封印の洞窟で、エクゾディアを縛っていた封印の扉を守る番人ともいうべき存在だ……いや、だったと言うべきか。突然襲い掛かれた時はいささか驚いたが、今ではエクゾディアの封印を解いた僕を主人と認めたようだね。今では実に忠実なしもべだよ」

アモンの言葉を肯定するかのように、エクゾディアオスが唸る。見上げるほど高い巨神の息吹が、その足元で対峙する僕にまで届き空気が震えた。

「エクゾディアオスに装備魔法、ワンショット・ワンドを装備。このカードは魔法使い族の攻撃力を800アップさせる……バトルだ、エクゾディアオス！天上の雷火 エクゾード・ブラスト！」

「攻撃!？」

攻撃力0などところを見るに効果でエクゾディアをサポートする系のカードなのかと思ったが、普通に殴りかかってくるタイプのモンスターだったらしい。両腕を振り上げてから勢いよく振り下ろすと、そ

れだけで夕焼け空を切り裂いて稲妻が走った。

究極封印神エクゾディオス 攻0↓800↓1800↓ハンマー・  
シャーク 攻1700 (破壊)

清明 LP4000↓3900

「攻撃力が上がった……!?!」

攻撃が命中する寸前まで、エクゾディオスの攻撃力は強化を含めてもハンマー・シャークより900ポイントも下回っていた。それを覆す突然の強化に驚愕する僕を満足げに見つめ、アモンがデッキから1枚のカードを引き出して墓地に送りこむ。

「エクゾディオスは攻撃宣言時、デッキからモンスター1体を墓地に送る。そしてこのカードの攻撃力は、僕の墓地に存在する通常モンスター1体につき1000ポイント上昇する。僕はこの効果で通常モンスター、封印されし者の右足を送ったのさ」

「召喚神……!」

墓地にエクゾディアパーツを送ることが出来る能力。それはつまり、アモンのデッキに潜む召喚神の攻撃力を上げる作業に他ならない。だが僕の呟きを聞いて、アモンの笑みはより深くなった。

「確かにそれもある。だがその答えでは50点、といったところだな。エクゾディオスはエクゾディアに劣るが、だからといって並のカードと一緒にされては困る。エクゾディオスもまた究極封印神の名に相応な力を持つカード……このカードが自身の効果だけで5枚のパーツを墓地に送ることに成功した時、プレイヤーの勝利が確定する」

「5回攻撃すれば特殊勝利……いいね、面白くなってきた。やってやろうじゃん」

「今度は空元気がい?それもいつまで持つことやら。まあいいさ、ワンショット・ワンドの効果発動。装備モンスターがバトルを行った後にこのカードを破壊することで、カードを1枚ドロウする。さらにカードを2枚伏せて、ターンエンドだ」

究極封印神エクゾディオス 攻1800↓1000

「僕のターン!」

エクゾディオス……今はまだ攻撃力1000だが、次のアモンの

ターンまで残しておけば攻撃宣言と同時にまず間違いなく2000となり、さらにエクゾディアパーツを墓地に送られる。その特殊勝利能力もさることながら、あまりもたもたしているとなぜか倒すことができてもその後には控えている召喚神の攻撃力も上がっていく。

だとすると、今は最優先でエクゾディアウスをどうにかするしかない。リソースの温存なんてダメだ、そんなこと考えている余裕はない。

「僕はエクゾディオスを……」

「させるものか！ 永続トラップ、ヴァニティ・スペース 虚無空間を発動！ このカードが場に存在する限り、互いのプレイヤーはモンスターを特殊召喚できない！」

「うっ!？」

「あいにく、君の手はわかっている。おおかた壊獣カードを使うつもりだったんだろうが、そう簡単には通さないよ」

手札に存在する壊獣、粘糸壊獣クモグスに指を掛けた瞬間、フィールドが薄闇に包まれた。あらゆる特殊召喚が封じられてしまうこのフィールドでは、特殊召喚による展開がコンセプトの壊獣は機能不全に陥ってしまう。グレイドルによるコントロール奪取も、この手札では不可能だ。

アモンの場に伏せカードはまだ1枚ある。無理に攻撃したところで、何らかの反撃を受ける可能性の方が高いだろう。なら、もう1ターンの間エクゾディオスを生き残らせることもやむなし、か。

クモグスから手を離してその隣にあったカードを取り、デュエルディスクに置く。地面に湧いたおなじみの銀の水たまりから、いつもより小ぶりなグレイ型宇宙人の幼体のようなモンスターが大きな目をぱちくりさせつつ現れる。

「グレイドル・スライムJr.ジュニアを召喚、守備表示」

グレイドル・スライムJr. 守2000

「さらにカードをセットして、ターンエンド」

アモン LP4000 手札：2

モンスター：究極封印神エクゾディオス（攻）

エア・サーキュレーター（守）

魔法・罨：虚無空間

1（伏せ）

清明 LP3900 手札：4

モンスター：グレイドル・スライムJr.（守）

魔法・罨：1（伏せ）

「壁モンスターで守備か。果たして、そんな悠長なことを言っている暇を僕が与えると思うかな？エクゾディオスでそのモンスターに攻撃……そしてこの瞬間エクゾディオスの効果によりデッキから通常モンスター、封印されし者の左足を送る。僕の墓地にカードが送られたことで虚無空間は自壊するが、これによりエクゾディオスの攻撃力はさらに1000ポイント上昇する！」

「どうやら、初めから虚無空間は1ターン凌げれば十分と使い捨てるつもりだったらしい。躊躇のない攻撃宣言を受けてエクゾディオスが再び雷を放ち、天からの裁きのごとく叩き下ろされたそれがJrの不定形の体を焼く。だが、エクゾディオスの攻撃力は倍になったとはいえいまだ2000止まり。体中から煙を出しながらも、銀のスライムはその衝撃に耐えきった。」

「そう思った次の瞬間、雷撃の勢いがさらに跳ね上がる。流石にこの衝撃と熱量には耐えきれず、小さなスライムの体が溶け崩れる。」

究極封印神エクゾディオス 攻1000↓2000↓3000

↓グレイドル・スライムJr. 守2000（破壊）

「Jrの守りが破られた!？」

「言っただろう、暇は与えないと。トラップ発動、奇跡の軌跡！ミラクルルーカーカスこのターン対象としたモンスターが与える戦闘ダメージが0になる代わりに、攻撃表示のエクゾディオスはこのターンの間攻撃力を1000ポイントアップし、さらにモンスターへの2回攻撃が可能になる！」

「2回攻撃……!？」

「先ほどのワンショット・ワンドを装備した時もあったけれど、どうもエクゾディオス自体には召喚神にあったようなカード効果への耐

性が付いていないらしい。その辺も含めてアモンはエクゾディオスのことをエクゾディアに劣る、と表現したんだろうが、耐性がないということとはつまり自分のカードを使つてのコンボも可能ということだ。

「こんちくしょう、もつともらしい顔して何が『劣る』だ。確かに単体でのカードパワーでは下回るかもしれないが、見方を変えれば1ターンに1度、通常攻撃しかできない上に完全耐性が邪魔になって貫通能力を付与することも難しい召喚神よりも、この究極封印神はよほど相手にするのが厄介だ。」

「ただし奇跡の軌跡のデメリットとして、相手はカードを1枚ドロ―できる。さあ、引くといい」

「……ドロ―!」

言われたとおりにカードを引く。確かに今の攻撃には耐えきれなかったけれど、Jrの死は無駄にはならない。崩れて溶けた銀の水たまりは消えずにその場に残り、やがて震えたかと思うと再び別の形に盛り上がってゆく。

「Jrは戦闘で破壊された時、デッキからグレイドルを1体特殊召喚できる。僕がこの効果で呼び出すのは、グレイドル・イーグル!」

グレイドル・イーグル 攻1500

「後続を残す効果か。しかもそのカードは……だが、むしろ好都合だ。こちらからエクゾディオスの2撃目的を用意する必要がなくなつたからな。エクゾディオスで追撃、そしてこの瞬間、封印されし者の左腕を墓地に!」

「ここで突っ込んでくるの!?!?!?!?!悪いね、イーグル。また頼むよ」

任せておくと一声高く鳴き、黄色の鷹が上空高くに舞い上がる。狙うはただ一点、目の前にそびえ立つ巨神の顔面だ。翼を体にぴっちり付け、1本の黄色い槍のようにイーグルが迫る。当然その突撃は巨神の腕によりあっさりと払いのけられ、一撃を受けたイーグルの体が空中で銀の水滴となって弾け飛ぶ。

究極封印神エクゾディオス 攻3000↓4000↓グレイドル・

イーグル 攻1500 (破壊)

「ぐううつ……イーグルが戦闘破壊されたことで、効果発動！エクゾディオス、こつちに来い！」

奇跡の軌跡のデメリットにより戦闘ダメージこそ通らないものの、大地を揺るがすほどの雷がこう近くで乱れ飛んではこちらの体にも全く影響がないとは言えない。体の芯からジンジンくる痺れを感じながら、弾け飛んだイーグルの体が銀の雨となってエクゾディオスに降り注ぐ様を見守る。いかに究極の封印神とはいえそこは耐性を持たないモンスターの悲しさ、銀の液体が浸透していったその額に銀色の紋章が輝いた。

ゆつくりと向きを変え、僕の元へと来る巨神……だが、1歩を踏み出すごとにその全身から神の力が抜けていく。僕の墓地に、エクゾディオスの攻撃力を決定づける通常モンスターはいないからだ。

究極封印神エクゾディオス 攻4000↓1000

「ターンエンド。これで、奇跡の軌跡による強化も終わる」

究極封印神エクゾディオス 攻1000↓0

「これで構わないさ。エア・サーキュレーターに攻撃、そしてこの瞬間エクゾディオスの効果発動！僕のデッキから通常モンスターのレインボー・フィッシュを墓地に送り、エクゾディオスの攻撃力アップ！天上の雷火 エクゾード・フレイム！」

究極封印神エクゾディオス 攻0↓1000↓エア・サーキュレーター 守0（破壊）

先ほどまで僕のフィールドに降り注いでいた裁きの雷が、うってかわってアモンの場にいた換気扇のお化けに叩き込まれる。下級モンスターへの攻撃にも劣る程度の威力とはいえ多少はアモンにも衝撃が伝わっているはずだが、当の本人は眉一つ動かさない。

「先ほど説明したが、エア・サーキュレーターが破壊された時にプレイヤーは1枚ドローできる。神の名を持ちながら無様にコントロールを奪われたあげく、唯一の取り柄の効果すら逆利用されるとはな。所詮はまがい物、この程度が限界ということか」

「はっ、偉そうに……今のセリフだけでアモン、お前の底が知れるってもんさ。本物の王様は、部下に対してそんな口の利き方なんてしない

もんだよ」

「だが現に、エクゾディウスは君のフィールドでその無様な姿を晒している。エドといい君といい、どうしてそうこちらの事情に首を突っ込みたがるんだい？あの洞窟で君らが見た光景こそが僕とエコーの愛の形、そしてこれがエクゾディオスと僕の主従関係の形だ。どうこう言われる筋合いはない、それより終わったなら早くターンを終えてくれ」

「何言っても効かないし、聞きやしないわけね。そういうどうでもいいところだけは霸王とそっくりだよ、ターンエンド」

アモン LP4000 手札：4

モンスター：なし

魔法・罫：なし

清明 LP3900 手札：6

モンスター：究極封印神エクゾディオス（攻・イーグル）

魔法・罫：グレイドル・イーグル（エクゾディウス）

1（伏せ）

「僕のターン。さて、そろそろ遊びも終わりにしようか。封印されしエクゾディアを召喚する」

モンスターを失ったアモンの場に通常召喚されたのは、最初にサーチしておいたエクゾディアの頭部。となると、次の手は読めている。

封印されしエクゾディア 攻1000

「そしてこのパーツをリリースし、手札からこのカードを特殊召喚。エコー、僕に力を！」

エクゾディアの頭部が揺らめいて消え、その場所に現れたのはエクゾディウスよりもさらに一回り大きな魔神。いまだデツキか手札に眠ったままの右腕のみを残し、両足と左腕、そして頭部が黄金の炎に包まれてその力を解放している。

「その攻撃力は、墓地のパーツの1000倍……出でよ、究極の魔人！召喚神エクゾディア！」

召喚神エクゾディア 攻4000

「攻撃力4000……！」

こちらのエクゾデウスとの攻撃力差は、きっかり3000。確かに大ダメージは必至だが、幸いこれまでの応酬で僕はまだほとんどダメージを受けていない。自身の効果以外での強化を受け付けない召喚神相手なら、何もしなくてもぎりぎり耐えきれる数値だ。

だがそれを聞きつけ、アモンが鼻で笑う。

「4000だど？言っただろう、遊びも終わりにすると。魔法発動、おろかな埋葬！残る右腕のパーツを墓地に送り、エクゾディアは今完全なる姿となる！」

唯一黄金の炎が覆っていなかった召喚神の右腕が、体の他の部分のように光に包まれる。まさにエドを葬ったときそのままの姿が、今度は僕に牙をむいた。

召喚神エクゾディア 攻4000↓5000

「エクゾディオス、それに遊野清明。君たちの役割はもう終わった。後は、僕の邪魔にならないように仲良く退場していてくれ。エクゾディアで攻撃、エクゾド・ブレイズ魔神火焰砲！」

2体の魔神がそれぞれ両手に力を込め、聖なる火炎と天上の雷をぶつけ合う。だが、2つの力が拮抗していたのはほんのわずか、1秒にすら満たない時間だけだった。ジグザグに走る雷撃がみるみるうちに炎に呑みこまれ、そのまま押し切られていく。エクゾディオスの体を火焰の砲撃が貫いたのは、その直後だった。

「……ッ！トランプ発動！」

辛うじて場のカードを表にするのが精一杯だった。逃げる暇もなく襲いかかってきた炎の余波に身を焼かれ、苦痛のうめき声が喉の奥から漏れる。それでも叫び声を上げなかったのは、勝負の最中そんなみつともないことはできないなどという意地ではない。口を開いたらその中まで焼かれるという、もつと本能的な恐怖からだった。

召喚神エクゾディア 攻5000↓究極封印神エクゾディオス  
攻1000↓1500 (破壊)

清明 LP3900↓400

「ほう、これを耐えたか」

「グレイドル・スプリットは……発動後、装備カードに……なって、エ



クゾディアウスの、攻撃力を……500ポイント、アップさせた……」  
「なるほどな。エクゾディアウスは墓地に送られる場合、ゲームから除外される。これでターンエンド……と言いたいところだが、エクゾディアの強大な力にはリスクも伴う。その真の力を発揮できる期間に限りがあるエクゾディアは、毎ターン終了時に墓地からパーツ1枚を強制的にサルベージしてしまう」

その言葉とともに、アモンの背後に立つ召喚神の左腕を包んでいた黄金の炎が消える。これで、今もなお力を解放しているのは下半身と右腕、そして頭部の4か所だ。

召喚神エクゾディア 攻5000↓4000

「まったく、困ったものだよ。ターンエンドだ」

まだ少しふらつく足でどうにか踏ん張っていると、ふいに体が軽くなった。腕を見ると、みるみるうちに全身をまだら模様に変えていた火傷の後が引いて肌が元通りになっていく。

こんなことができるのは、僕の知る中には1人……というか1柱しかない。タイミングよく、その声が頭の中に聞こえてきた。

『これで大丈夫か、マスター？』

「ありがとね、チャクチャルさん。助かったよ」

『あの神聖な炎は、私をはじめとした闇の神の力とは対極の存在。いつまでも放っておくと、マスターの命を保っている闇の力を全て食いつぶしかねない代物だからな。それはそうと……まさかとは思いますが、ちゃんと気づいているよな、マスター？』

「もちろん。何がサルベージしてしまう、なんだかね」

召喚神の攻撃力が下がっても、チャクチャルさんの声から警戒の色はいまだ消えていない。そしてそれは、僕も同じだ。これで召喚神の攻撃力が下がっても、嬉しくもなんともない。

アモンはこのサルベージ効果をいかにもデメリットだと言わんばかりの口調で説明していたけれど、そんなこと心にも思っていないだろう。もしこれが本当にデメリットなら、強欲な壺だって使うだけで2枚分デッキデスに近づくデメリットカードだ。手札にパーツを5種類そろえれば特殊勝利する本家エクゾディアと墓地のパーツに依

存する召喚神は、先ほども考えた通り致命的に噛み合っていないように見える。それでもこの2つのギミックを同時に仕込む以上、一度でも墓地にパーツを落とした時点で本家を使つての特殊勝利は考えなくていいものだとばかり思っていた。

でもアモンは、そしてこの召喚神は、そんな単純な考えで読めるほど甘くなかった。エドはアモンのデッキに墓地のパーツをサルベージする方法はないと思っていたが、今の効果を見る限り恐らくはサルベージを使つての特殊勝利も長期戦になった場合の選択肢として視野に入れているはずだ。

短期決戦では召喚神に分があり、かといって長期戦に持ち込めばエクゾディアの封印が解ける。どちらに転んでも隙がないアモンのデッキが、王の名に恥じない代物であることは認めざるを得ない。

「でも僕は負けないね。アモン、確かにお前の道の後ろにはエコーがいるのかもしれないけど、僕の後ろにはもつともつとたくさんの人たちがいる。僕がこの場で戦うために、全てを投げ打った戦士たちの魂がある。だから絶対、後には引けないのさ。ドロー！」

僕の手札には、先ほどは妨害されて出せなかった粘糸壊獣クモグスのカードがある。けれどその対となる、こちらのフィールドに呼び出せる壊獣をまだ引けていない。

それに、今引いたこのカード。これを使えば、単にクモグスを出すよりもなかなか面白いことができそうだ。少なくともアモンの度肝を抜くことはできるだろうし、このタイミングで引いたということは、このカード自身も多少なりともそれを望んでいるのだろう。

「よし、わかった。魔法カード、埋葬されし生け贄を発動！僕の墓地からハンマー・シャークを、そしてアモン、お前の墓地から封印されし者の右腕を除外することで2体分のリリースとし、アドバンス召喚を行おう！」

「除外か……くだらない真似を！」

そう、除外だ。召喚神の右腕の炎が消え、その攻撃力はさらに下がる。明らかに苛立った様子のアモンを見る限り、どうやらさすがのエクゾディアも除外には弱いらしい。だがそれも無理はない、召喚神も

本家も使えるということとは、たった40枚のデッキの中に墓地肥やしとサーチとサルベージの要素がすべて入っているということだ。そのうえさらに除外にまでメタを張っていても、それこそデッキがパンクしてしまう。

僕の60枚デッキは、ドローカードでどれを引いても十分戦えるという良く言えば精鋭ぞろい、悪く言えば戦略性やコンボ性が低い集団だからこそ成り立っているようなものだ。

召喚神エクゾディア 攻4000↓3000

「おっと、ここからが本番なんだから驚くのは後にしてもらいたいね。僕が2体のリリースで呼び出すのは、このモンスター……出でよ、レベル8！」

そのカードをデュエルディスクの水の膜に置くと、宵闇の空に輝く満天の星の光が急に薄らいだ。見渡す限りの空を塗り潰すように、巨大な入道雲が湧き上がる。やがて巨大な人型の上半身のような形に落ち着いたその雲の中央がプルプルと震えたかと思うと、巨大な体に相応しい巨大な一つ目がゆっくりと開いた。

そのモンスターを見てアモンの目が驚愕に見開かれたけれど、気づいた時にはもう遅い。

「ここは任せるから、しっかり働いてもらうよ？ 雲魔物―アイ・オブ・

クラウディア

ザ・タイフーン！」

雲魔物―アイ・オブ・ザ・タイフーン 攻3000

「なぜ、お前がそのカードを……！」

無言の入道雲の巨大な目玉に見降ろされながら、アモンが驚きの声を出す。その反応に少し満足したからというわけではないが、お望みに通りにネタバラシと洒落込むことにした。と言っても、別にそうたいした話があるわけではない。

「そんなタイミング、ひとつしかないじゃない。エドと戦う前、もういいらないとかなんとか言って、自分のデッキを捨てたでしょ？ 逃げるときには手一杯だったから他のカードは無理だったけど、あのときたままこのカードだけが吹き飛ばされて僕の足元まで飛んできたのさ。その時にちよろつとね」

「人の捨てたカードを拾うとは、何とも手癖の悪いことだ」

「僕は貧乏性だからね。それに、この子の声が聞こえた気がしたんだ。もう1度でいいから、アモンのところに連れて行ってほしいって。たとえ捨てられるにしても、それでも最後にもう1回会いたいって」

これは本当のことだ。エドが倒れ、洞窟から逃げ出そうとしていたあの時、たまたま目の前に飛んできた1枚のカード。それはまるでアモンのデッキそのものが最後の力を振り絞り、このたった1枚を代表として僕に託したように感じたのだ。

いくらアモンが許せないといっても、そのカードに罪はない。それにこの世界に来た当初はデッキと離ればなれになつていた僕にとつては主人から一方的に別れを告げられ、そればかりか無造作に捨てられたこのカードたちの境遇が他人事とは思えなかった。

そして今、アイ・オブ・ザ・タイフーンとアモンがこうして対峙している。アモンがどんな対応をするのか、と黙って見ていると、ややあつてアモンの肩が遠目に見てもわかるほどはつきりと震えだした。「ククク。クククククツ、ハハハハハ！」

どうやら笑いをこらえていたらしいが、抵抗虚しく突然笑い出すアモン。心底愉快そうにひとしきり笑い終えると、僕らの方へあらためて向き直った。しかしその顔には、いまだ先ほどの笑いの残滓が残っている。

「何を言い出すのかと思つたら、そんなことか。別に僕の捨てたカードを君がどうしようと勝手だが、そんな勝手なことを思われるのは滑稽で、そして心外だな。僕にはカードの精霊の声を聞くような力はない。全てを捧げる覚悟はできていたはずだ。ならば僕も遠慮するつもりはない、全てを踏み台としても僕の目標、世界を統べる王となる。エコーも、そのデッキも、最終的な存在意義は全てそのための犠牲としての役割に収束するのさ」

何の迷いもなく言い切るアモンを見て、次いでそんな彼をどこか悲しげな丸い瞳で見つめるアイ・オブ・ザ・タイフーンを仰ぎ見る。

……ああ、うん。エコーといい雲魔物といい、これだけ好かれてい

るところを見ると、アモンも決してどうしようもない奴ではなかったんだろう。恐らく、昔はそれなりの理想に燃える正しい青年だったはずだ。でなければ、ここまで人望を集められるはずがない。

なのに一体、どこで何が狂ったのか。何がいつからおかしくなったのか。僕にとっては知ったことではないが、頭上でまたたく悲しげな瞳を見ているとこちらまでやりきれない気持ちになってくる。

もう、アモンに対する怒りは消えていた。こんな姿を見ていると、もはやそんなもの通り越して憐れみしか感じない。頭上の入道雲に合図すると、こちらの意図を察してくれたかのように静かに頷いた。もう、終わりにしよう。

「……デュエルを続けよう、アモン。魔法カード、アクア・ジェットを発動。マジックコンボで水族モンスター、アイ・オブ・ザ・タイフーンの攻撃力は1000ポイントアップする。これで召喚神エクゾディアに攻撃、パーフェクト・ストーム」

風が吹き、周りの木々がバサバサとせわしない音を立てる。アイ・オブ・ザ・タイフーンには自身の攻撃宣言時、場の雲魔物以外全てのモンスターの表示形式を変更させる効果がある。だが今この場にいるのは、カード効果を受けないためその影響がない召喚神のみ。迎え撃たんとばかりに大地を踏みしめ放たれた炎が風雨を貫いて雲の中心に大穴を開けたのと同時に、暴風が召喚神を薙ぎ倒す……だが召喚神の姿が消えていったのに対し、ちぎれ飛んだ雲は再び空中で何事もなかったかのように寄り集まって元の姿に戻った。

雲魔物―アイ・オブ・ザ・タイフーン 攻3000↓4000

↓召喚神エクゾディア 攻3000 (破壊)

アモン LP4000↓3000

「エクゾディアは戦闘破壊された時、手札のパーツの数だけドロークできる。僕の手札には先ほど回収した左腕が1枚、よって1枚ドロークだ」

死してなお、自らの主人のためにドロークという希望を繋げようとする召喚神。思えば、召喚神も哀れなものだ。エコーを、雲魔物たちを、そしてエクゾディアウスを自分から切り捨てていったアモンに今も唯

一従っている、どこまでも封印を解いた者に対して忠実な僕。そう考  
えるとあの召喚神にも先ほどまでの恐れではなく、ひたむきに付き従  
う姿へのもの悲しさすら感じる。

「ターンエンド」

アモン LP3000 手札：3

モンスター：なし

魔法・罫：なし

清明 LP400 手札：4

モンスター：雲魔物―アイ・オブ・ザ・タイフーン（攻）

魔法・罫：なし

「ドロー」

引いたカードを見たアモンが、明らかに苛立った表情になる。前か  
ら持っていた手札を発動し、引いたカードの方は即座に墓地に送りこ  
んだ。

「魔法カード、死者転生を発動！手札を1枚捨て、墓地から召喚神エク  
ゾディアを回収する。そして左腕を召喚し、そのままリリース！復活  
しろ、エクゾディア！」

召喚神エクゾディア 攻4000

再び降臨し、アイ・オブ・ザ・タイフーンと睨み合う召喚神。右腕  
を除く全身を黄金の炎に包みそびえ立つその表情には、エド戦の時に  
は見られなかった確かな感情の色が……あくまでもアモンのために  
戦おうとする、はつきりとした強い意志が感じられる。なんだろうこ  
の既視感、まさか封印を解く際に、このカードの中にエコーの最期の  
想いが入り込んだのではないだろうか。馬鹿げた話だけれど、アモン  
を守るかのように両腕を広げる召喚神の姿が……ある種盲目的とも  
いえるその献身が、あの時のエコーとだぶって見えた気がした。

そんな考えを、頭を振って追い払う。あながち妄想とも言い難い話  
ではあるが、どうせ知る由もないことだ。そうしている間に、フィー  
ルドではまた動きがあった。無限に続くかと思われた互角の睨み合  
いも、エクゾディアの左腕から再び力が失われていったのをきっかけ  
に終わりを迎えた。

「エンドフェイズ、エクゾディアの効果により墓地の左腕を回収する……」

召喚神エクゾディア 攻4000↓3000

悔しげな言葉とともに、デュエルデスクの墓地から吐き出されたカードを手札に加えるアモン。だけど、これは誰にもどうしようもない。召喚神の守備力は0なため、仮に召喚神を守備表示で出せば、もし僕の手札に他の通常召喚可能なモンスターがあればそれを出して攻撃するだけでアイ・オブ・ザ・タイフーンの直接攻撃が通ってしまう。ゆえに、アモンは召喚神を攻撃表示で出さざるを得ないのだ。エンドフェイズごとに攻撃力が下がる召喚神は一方的に倒されダメージを受けると知りながら、それでも他に方法はない。

「僕のターン。召喚神エクゾディアに攻撃、もう1度パーフェクト・ストーム」

再び嵐と炎がぶつかり合い、先ほどと同じく魔神が地に墮ちる。そしてアモンが、またその死に際に発動した効果でドロウを行う。何もかも、ついさっきのターンと同じだ。違うのはアモンの手札の総数と、そのライフの数値。そのどちらも確実に、0へと近づいている。

雲魔物―アイ・オブ・ザ・タイフーン 攻4000↓召喚神エクゾディア 攻3000 (破壊)

アモン LP3000↓2000

アモン LP2000 手札：2

モンスター：なし

魔法・罠：なし

清明 LP400 手札：5

モンスター：雲魔物―アイ・オブ・ザ・タイフーン (攻)

魔法・罠：なし

「僕のターン！くっ、またか……！死者転生を発動、手札を1枚捨てることで召喚神エクゾディアを回収。さらに左腕を召喚して、そのままリリースする！」

三度現れる召喚神。だがそれ以上アモンにできる事は何もなく、またも自らの前でも場に出たばかりの召喚神が力を失っていく。

召喚神エクゾディア 攻4000↓3000

「ドロー。アイ・オブ・ザ・タイフーンで攻撃する」

ドローカードは、バブル・プリンガー。こちらもモンスターがなかなか引けないが、これはデツキの方が空気を読んでアモンのカードであったアイ・オブ・ザ・タイフーンに決着をつけさせようとしているのだろう。だがアモンの方は、純粹に状況打開のカードが引けないようだ。これは無限ループなどではない。アモンのドローによっては、いくらでも違った内容に持って行けたはずだ。だがまるで凶ったかのように2体の大型モンスターが激突し、三度魔神が力尽きる。その絵面はまるでただ1体、どこまでも忠実な召喚神のみを除いて自分のデッキにまで愛想を尽かされたように僕の目には映った。

雲魔物―アイ・オブ・ザ・タイフーン 攻4000↓召喚神エクゾディア 攻3000（破壊）

アモン LP2000↓1000

「ぐううっ……！エクゾディアの効果により手札の左腕を公開し、1枚ドローする！」

ドローしたカードを見て、アモンの顔が歪む。だがそれは歓喜にではなく、格下であるはずの僕に押されているというのにいつまでたってもデュエルの流れを思い通りに修正できない苛立ちの……そしてその奥に潜む、次第に現実味を帯びてきた消滅の可能性に対するかすかな恐怖の表れだ。

「ターンエンド」

アモン LP1000 手札：2

モンスター：なし

魔法・罫：なし

清明 LP400 手札：6

モンスター：雲魔物―アイ・オブ・ザ・タイフーン（攻）

魔法・罫：なし

「馬鹿な、そんな馬鹿なことがあるはずがない！そうだろうエコー、僕はこの世界の王となってみせる！そのために君のことまで犠牲にして、ようやくここまでやって来たんだ！それを今更妨げる権利など、



「どこの誰にもない！ドローツ！」

アモンにとって最後のチャンス、ここで退かなければ敗北が確定する状況でのドロロー。いつもの冷静さはどこえやら、髪を振り乱して必死の形相でカードを引くアモン。その顔が示したのは、絶望の色だった。

無言で、その場に膝から崩れ落ちるアモン。その腕がまるで見えないう誰かに支えられているかのように不自然な動作で動きだし、その引いたカードをデュエルディスクにそつと置く。

「死者転生……」

思わず僕が呟いたそのカードは、このデュエルで3度目の発動となる。再び手札1枚をコストに召喚神が墓地から手札に舞い戻り、やはり不自然な動きで召喚された左腕のパーツを憑代としてフィールドに顕現する。

アモンのそばに寄り添うように、そして庇うように僕の前に立ちふさがった召喚神。アモンが完全に戦意喪失しているところを見るに、あの召喚神自身が意志を持って最後の抵抗に乗り出したのだろう。アモンを守りぬくことも、勝利に導くことも、もう不可能とわかっているはずだが、それでも黙って見ていることはできなかつた。そんなところだろうか。

となると、やはりエコー。意識があるかどうかは知らないが、アモンを守りたい、その手助けをしたいという彼女の強い思いだけは、体が消滅した今もあの召喚神の中で生き続けているのだろう。

だが、そんな彼女の最後の意地も、エンドフェイズと共に終わりを迎える。

召喚神エクゾディア 攻4000↓3000

「……ねえ、アモン。これだけ愛される素質はあったのに、どうしてこんなことになっちゃったんだらうね。説教なんて柄じゃないから長々とは言わないけどさ、1つだけ。そのことに気づけなかつたのか、気づいていたのにその大切さに気づけなかつたのか。どっちにしろその時点で、人間アモン・ガラムの中にあつた王者の素質は、消えてなくなっちゃったんじゃないかな」

僕の声が、彼に届いているのかは知らない。僕はただ、言いたいことを言っただけだ。

「もう終わりにしよう、アモン。アイ・オブ・ザ・タイフーンで攻撃、パーフェクト・ストーム」

雲魔物―アイ・オブ・ザ・タイフーン 攻4000↓召喚神エクゾ  
デイウス 攻3000（破壊）

アモン LP1000↓0

「エコー……」

最後に彼が呟いたのは、自分のために最後まですべてを犠牲にした恋人の名前だった。そしてその体が、光となって消えていく。その光の最後の一粒を見送って、僕もデュエルディスクを片付けた。

「何があったのかなんて興味ないけどさ。本当に、何がいけなかったんだろうね」

「おやおや、君が勝ったのか。意外だね、てつきりアモンがもう少し頑張るかと思っていたけど」

ぼつりと呟いた言葉に、返事を返すものは誰もいない……なんてことはなかった。一体このデュエルをどこから見ていたのか、どうやら戻ってきていたらしい例のオレンジの人型の声に振り返る。

「ヨハン……?」

だがそこにいたのはいつものオレンジの人型ではなく、砂漠の異世界で僕が消えた少し後に行方不明になっていたらしいヨハン……のはずだ。きつぱりと断言できなかつたは、目の前の存在が本当にヨハンなのか自信が持てなかつたからだ。なるほど、確かに背格好もその顔も、ひとつひとつ見ていけばそれはヨハンそのものだ。服装が様変わりしているのも、まあこの世界に来てから着替えたんだろうということでは理解できる。

だけど、まずあの眼だ。僕が知っているヨハンの目は、あんな不敵な光を湛えたオッドアイではなかつたはずだ。しかもその全身から立ち上る危険な雰囲気も、とうていあのヨハンと同一人物だとは思え

ない。

「お前は一体誰なのさ？」

「いやだなあ、気づいているんだろう？いや、君に名乗るのは初めてだったかな？ともあれ、ボクがユベルさ。もつとも、この体は確かにヨハン・アンデルセンの物だけだね。それよりも、あのエクゾディアを倒すとはね。勝者にはボクからのご褒美だ、ボクの城に招待してあげるよ」

そう言うや否やヨハン……いや、ユベルの背後の地面が盛り上がり、石造りの巨大な扉が生えてくる。自分の背丈よりはるかに大きくて重そうなそれを片腕だけで無造作に開きながら、もう片方の手で僕を手招きする。

「さあ、ついておいで」

その言葉を最後に、先に自分が扉に入ろうと背を向ける……その瞬間、突然僕のデッキから1枚のカードが飛び出した。空中で勝手に実体化し、先ほどの召喚神並みに巨大な球体が出現する。さらに問答無用で正面部分のギミックが動き、巨大な砲台が伸びる。

「待って、ウラヌス！あの体はヨハンの……！」

The <sup>ザ</sup>des<sup>デイ</sup>pair<sup>スペア</sup> UR<sup>ウ</sup>AN<sup>ラ</sup>US<sup>ヌス</sup>。砂漠の異世界では囷として使われるためだけにユベルに致命傷を負わされ、その後はカードとして僕のデッキに入り込んでいた天王星の主。その経緯を考えればユベルに対してのこの反応も無理はないけれど、奴の言葉を信じるならばあの体はヨハン本人、ならここで消し飛ばさせるわけにはいかない。何をしようとしているのかわかったところで止めようとするが、もう遅かった。チャージを終えた砲台から、白い光線がユベルの無防備な背中めがけて放たれる。

「ぐっ……！」

至近距離で見た光の眩しさに、たまらず腕で顔を覆う。ようやく光が収まって恐る恐る前を向いた時、そこには信じられない光景が広がっていた。

確かに、攻撃を仕掛けたのはウラヌスの側だったはずだ。それなのに不意打ちを食らったはずのユベル本人は傷一つなくぴんぴんして

いて、逆にウラヌスの体を貫通して大穴があいている。まるで、たった今放った自分の攻撃を、そのまま自分で受けたかのように。

「ん、今何かしたかい？ さあ、早く入っておいで」

にやにやと笑いながらこちらを見て、ユベルが扉の中に消えていく。あちらも気になるけど、今はウラヌスが先だ。駆け寄ったウラヌスの巨体からは既に光の粒が出てきていて、何をしたとしても先が長くないことが一目で判別できた。

「ウラヌス……い」

痛々しいその光景に絞り出すように出した声に、すでに力を失いつつある球体がかすかに反応する。傷口から岩石の欠片をまき散らしながら、転がるようにしてこちらを向いた。だがその目に助けを求めるとような色はなく、黙って自分の運命を受け入れようとしている。

『承知した。マスターには私から伝えておこう』

突然チャクチャルさんが一言喋ると、ウラヌスが安心したように眼を閉じる。どうやら、僕にはわからない会話がこの2体の間であったらしい。そのまま唸り声一つあげることもなく、ウラヌスの姿が消えていった。同時に、僕が持っていたウラヌスのカードからも色が抜けて白紙になっていく。

短い間とはいえ、ウラヌスは僕の仲間だ。とはいえあまりにも突然のこと過ぎて、まだ実感が湧いてこない。半ば呆然と突っ立っている僕の頭に、チャクチャルさんの声が聞こえる。

『マスター、伝言だ。自分が今何をされたのか、そこにユベルの持つ力のヒントがあるはずだ。私の二の舞にならないよう、私の死を無駄にせず戦ってくれ。そして、生き延びて自分の世界に帰ることを成功させて欲しい……だそうだ』

生き延びろ。つい先日もどこかで聞いたことのある言葉だと思ったら、あれだ。霸王城近くの闘技場で、最後の瞬間に正気に戻ったケルトが僕に向かって言った言葉だ。

あー。ちよつと、これは、辛いかもしんない。

「……ねえ。僕って、そんなに早死にしそうなことばかりやってるように見えるかな」

泣き出しそうになるのを堪えるためとはいえ、我ながら随分つまらないことを言ったと思う。見えるも何も、現に何回も何回も死にかかっているとこの傍から見てるぶんには、危なっかしくて仕方がないのだろう。だけど今更どうしようもない、それが僕の性分だ。

涙の波のピークが過ぎ去り、どうにか気持ち落ち着かせて歩き出す。行先はもちろん、開きつばなしのままのユベルがくぐっていったドアだ。どんな仕組みかは見当もつかないが、その向こう側には全く別の空間が広がっている。これが、ユベルの城とやらがある場所か。

ユベルに次元を移動する力があることは、これまでの経緯から想像がつく。となると、僕が元の世界に帰るためには、この先は避けては通れない道だ。デュエルアカデミアからの腐れ縁、そろそろきっちり清算する時がきたのだろう。

意を決して、扉の中の空間に1歩を踏み出した。

## ターン106 鉄砲水と優しき闇

扉をくぐると、そこには異世界が広がっていた。

まあ、そんな気はしてた。というか見えてたし。そこは先ほどまでの山の中とはまるで違う、かすかに霧のかかった薄暗い世界。周りを見回してみると、どうやら随分と高台にいるらしい。そして目の前には巨大な城らしき建物と、霸王城前の闘技場を彷彿とさせる円形の舞台。これがユベル城、か。

円形の端にはヨハンの体に乗っ取ったユベルが立っていて、何を考えているのかイマイチわからない笑みを浮かべながらきよきよと周りを見回す僕を見ていた。

「この場所に人間を招いたのは、君が初めてだよ。もうすぐ十代も来るだろうけどね」

特に返事を求めるといふ風もなく、ユベルが独り言のように喋り出した。この、僕がここにいてすべての元凶に対して言いたいことは山のようにあるが、いざ対面すると何から話せばいいのかよくわからない。黙ったままの僕にお構いなく、一方的に話し続ける。

「十代が来るまで、もう1時間とかからないはずだ。もし時間がある時なら、暇つぶしに君と遊んであげてもよかつたと思ってるんだよ？ だけど、ボクは彼を歓迎する準備をしなくてはならないんだ。君はなかなか興味深い存在だけれど、あくまで十代と比べなければの話だからね」

ユベルの話の雲行きが怪しくなってきたあたりから、用心して動きを悟られないようにデッキに手を伸ばしておいた。なるべくさりげなく、ゆつくりと手を後ろ手に組む。自分の演説に夢中なユベルが僕の動きに気づかないでいるうちに、そつとカード1枚を手の中に滑り込ませた。

少し用心しすぎな気もしたけれど、相手はこれまで散々なことをやってくれた大迷惑者だ。そして案の定、その豹変は一瞬だった。

「だから……もう消えな！」

ヨハンに乗っ取ったユベルのオッドアイが突然光ると、足元の床を

ぶち抜いて巨大な茨が蛇のように僕に襲い掛かる。不意打ちならどうしようもなかったけれど、あらかじめ心の準備をしておいた分だけ僕にもリアクションを起こす余裕があった。

「霧の王<sup>キングミスト</sup>」

手の中のカードを掲げると、相棒とも呼べる霧の魔法剣士が傍らに実体化する。銀色の剣閃が煌めき、寸断された茨のかけらが足元にバラバラと崩れ落ちた。

「だけど、そこまでだ。僕には、ここからさらに霧の王をけしかけて反撃するなんて道は選べない。目の前にいるのはユベルだが、その体はヨハンの物であることを忘れてはいけない。それに、あのウラヌスの不可解なやられ様はまだ記憶に新しい。一体何をどうすれば、あんなことになるのか。その謎を解かない限り、下手に動けない。」

「フン……」

ヨハンの体に乗っ取った影響か、それともこのユベル城の世界にそういう作用があるのか。ありがたいことに、ユベルにも今の茨攻撃以外には打つ手がないようだ。問答無用で次元の狭間に飛ばされでもしたら、さすがにどうしようもなかったろう。互いに下手に動くこともできず、舞台を挟んで睨み合う……そんな状態を先に解いたのは、意外にもユベルからだった。

「ボクとしては、このままこうして千日手の睨み合いを続けていてもよかったんだけどね。少なくとも退屈していたうちは、それだけでもそれなりに楽しめたはずさ。でも今言った通り、ボクはこれから忙しいんだ。力づくで消えてもらえないなら、別の手を使うまでさ」

言いながら、ヨハンの体でデュエルディスクを構える。今回はアモンに憑いていた時のように、あの化け物の腕を出すつもりはないらしい。

僕もデュエルディスクを展開させ、首から下げておいた水筒の中身を全部その上に振り掛ける。ついさっきのアモン戦だけでだいぶ水を使ってしまったから、この水筒の分だけでもないよりはマシだろう。これで、あと1戦するぐらいはできるはずだ。

考えてみるとこれだけ振り回されてきたのに、その張本人のユベル

と直接戦うのはこれが初めてだ。もう何も、言うことはない。この長かったユベルとの戦い、その最終決戦と洒落込もう。

「デュエル！」

「先攻は僕が貰った。グレイドル・イーグル、守備表示！」

いつも通りの銀色の水たまりが、素早い動きで空中へはばたく黄色の猛禽に姿を変える。アモンがグレイドルのことを知っていたことを考えると、ユベル相手にも初見殺しは通用しそうにない。ならばわざわざセットするだけ無駄なこと、それよりもユベルがどんな手を打ってくるかを見るところでしょう。

グレイドル・イーグル 守500

「ターンエンド」

「ボクのターン、ドロロー。フィールド魔法発動、アドバンスド・ダーク！」

まるで分厚い雲でも空にかかったかのように、足元がすつと暗くなる。だがもちろん、そんなものは空のどこにもない。それどころか、見渡す限り太陽なんて始めからこの空間には出ていない。

「アドバンスド・ダークがあるかぎり、ボクの使う宝玉獣は全てA

アドバンスド

宝玉獣へと変化する。実際に見せたほうが分かりやすいかな？出る、A宝玉獣 アメジスト・キャット！」

ヨハンの体を使う時点でなんとなく予想はできていたが、やはり出てきたのは宝玉獣。場に紫色の宝石……アメジストが現れ、それが弾けてピンク色の雌豹になった。だけど、あのアメジスト・キャットは、僕が知っている彼女とは違う。赤く光る眼に敵意むき出しの牙、そして何よりヨハンの宝玉獣は、宝玉からモンスターになる際に闇の力を放つたりはしなかった。

宝玉獣 アメジスト・キャット 攻1200 地↓闇

「属性が変わった……？」

「そうとも。A宝玉獣は宝玉獣とは違い、全ての属性が闇に統一されている。これも悪くない輝きだろう？ヨハンの記憶によれば、君は以前にも彼に敗北したそうじゃないか。言っておくが、今の僕はそれよりも強い。確実にね。バトルだ、アメジスト・キャット！アメジスト・



ネイル！」

しなやかな動きで、音もなく雌豹が迫る。イーグルの効果を知らないのか、とも思ったが、すぐにそんなわけないと思い直した。そうだ、アメジスト・キャットには与えるダメージが半分になる代わりに、直接攻撃が可能となる効果がある。案の定その効果を使っていたらしく、イーグルの上をさらに飛び越えた雌豹の爪が直接僕に躍りかかった。

「くっ……！」

宝玉獣 アメジスト・キャット 攻1200↓清明（直接攻撃）

清明 LP4000↓3400

「まずは一撃さ。どうだい、あの時よりも痛いだろうか？カードを3枚伏せて、ターンエンドだ」

「はっ、冗談。痛いって言うなら、それこそあのエクゾディアやダーク・ガイアの方がよっぽどだったね」

「そうかそうか。なら楽しみに待っているといい、君にも特別にあの痛みを味あわせてあげよう」

言い返すもののユベルはくすくすと笑うだけで、怒った様子もなくさらりと返す。『あの』痛み、という表現が少し引つかかるもの、どうせこれ以上突っついてても何も情報を漏らしてはくれないだろう。

清明 LP3400 手札：4

モンスター：グレイドル・イーグル（守）

魔法・罫：なし

ユベル LP4000 手札：1

モンスター：宝玉獣 アメジスト・キャット（攻）

魔法・罫：3（伏せ）

場：アドバンスド・ダーク

伏せカードが3枚。既にフィールド魔法枠には十代戦でも使っていたレインボー・ルインという専用カードがあるにもかかわらず、その上さらにアドバンスド・ダークなんてカードをヨハンが使うとは思えないから、おそらくあれはユベルの手で追加されたカードなんだろう。他にどれだけデッキが組み換えられているのかはわからないが、

ヨハンのデッキには確かカウンターカード以外のあらゆる除去カードが入っていないはずだ。となると、あの伏せカードもこちらの妨害目的の可能性は薄いだろう。

「僕のターン！水属性のグレイドル・イーグルをリリースして、手札のシャークラーケンは特殊召喚できる。さらにグレイドル・スライムJr.を召喚し、効果発動。このカードの召喚時、墓地のグレイドル1体を蘇生召喚できる！」

シャークラーケン 攻2400

グレイドル・スライムJr. 守2000

グレイドル・イーグル 攻1500

「モンスターが3体か。エドみたいにならなくてもDでも出すのかい？」

無視だ無視、よりもよってお前がエドの名前を出すなんて、そんなわかりやすい挑発に乗ってやるほど暇じゃない。もつともユベルも今に乗ってくるとは思っておらず、単におちよくなってきただけのようだ。今更言動のひとつひとつに腹を立てては、また視野が狭くなりかねない。気を付けよう。

ただしこの苛立ちの報いは、痛みできっちり受け取ってもらうとしよう。

「……バトルだ！シャークラーケン、アメジスト・キャットに攻撃！」  
無数のタコ足が地面を割りながら進むほどの勢いで伸び、雌豹を締め上げて破壊する。勢い余った足の何本かがそのままユベルに叩き付けられ、砕かれた床から砂煙が起きて一時的にその姿が見えなくなった。

シャークラーケン 攻2400↓宝玉獣 アメジスト・キャット

攻1200（破壊）

「うん？……チツ」

思わず舌打ちしてしまう。煙が晴れて見えてきたのは、まるでぴんぴんした姿でにやにやと笑うユベルの姿だった。どうやら、ダメージは入らなかつたらしい。

「アドバンスド・ダークの効果発動。ボクの宝玉獣がバトルして戦闘

ダメージを受けるとき、デツキから別の宝玉1体を墓地に送ることでそのダメージを0にする。つまりこのコバルト・イーグルを送ることで、1200の戦闘ダメージを帳消しにしたのさ。そして、墓地でコバルト・イーグルもまたA宝玉獣に変化する」

その言葉通り、コバルト・イーグルのカードをこちらに見せてから墓地に送るユベル。アドバンスド・ダークの効果は墓地にまで及ぶ、ということか。でも、それが一体何の役に立つというのだろうか。そこまで急速に墓地を肥やして、ヨハンは何がしたいのだろう。

そこまで考えて、1つだけピンとくる名前があった。レインボー・ドラゴンだ。結局砂漠の異世界では僕はあのカードを見ることがないままこの世界に飛ばされたから、それが一体どんなドラゴンなのかは知る由もない。でもあの墓地肥やしの速さから考えると、恐らくはそれがレインボー・ドラゴン召喚の鍵なのだろう。そう考えればあの召喚神エクゾディアと同じようなものだ……だが、今の僕の手札には、あの時墓地のパーツを除外して活路を切り開いてくれた埋葬されし生け贄のカードはない。

僕の疑問をよそに、ユベルの目の前に紫色の宝玉が浮かび上がる。ただしその全体は黒いもやのような闇の力に包まれ、輝きはすっかりくすんでしまっている。

「宝玉獣はフィールドでモンスターとして破壊されても、永続魔法として場に残る。これは君も知っているだろう」

「ああ。でも、アドバンス・ダークの効果はダイレクトアタックには反応しないんだね？行け、イーグル！」

「惜しいねえ、もう少しで今の攻撃も届いたのに。相手モンスターの直接攻撃宣言時にトラップカード、カウンター・ゲートを発動。今の攻撃を無効として1枚ドロウし、そのカードがモンスターカードならば表側攻撃表示で召喚することができる。来い、A宝玉獣 エメラルド・タートル！」

緑色のエメラルドが闇の輝きを受けてひびが入り、弾けて亀のモンスターになる。当然といえば当然だけど、エメラルド・タートルもやはり闇の力に飲み込まれているか。

宝玉獣 エメラルド・タートル 攻800 水↓闇

「もう攻撃はできない。これでターンエンド」

宝玉と化してもなお、宝玉獣はプレイヤーをサポートする。それがわかっているからこそ、ここはせめて戦闘ダメージだけでも与えておきたかったのだが。ヨハンの実力にユベルの抜け目なさというか性格の悪さが加わって、なかなか一筋縄ではいきそうにない。

「ボクのターン。出でよ、A宝玉獣 ルビー・カーバンクル!」

さらに真紅の宝玉から、子猫のような小動物の精霊がその姿を見せる。でもルビーは攻守ともに低く、とてもシャークラーケンやJrを突破できるほどではない。装備カードで強化でもするつもりなのだろうか。

宝玉獣 アンバー・マンモス 攻300 光↓闇

「ルビーは場に出た時、宝玉状態の宝玉獣を可能な限り特殊召喚できる。ルビー・ハピネス!甦れ、アメジスト・キャット!」

ルビーの尾から放たれた赤い光に導かれ、紫の宝玉が砕けて再び雌豹が現れる。また直接攻撃狙い、だろうか。

宝玉獣 アメジスト・キャット 攻1200 地↓闇

『……いや、違うな。突っ込んでくるぞ!』

「えっ?」

チャクチャクさんの警告も、時すでに遅かった。緑の亀が、真紅の幻想動物が、紫の雌豹が、同時に攻撃を仕掛けてくる。

「バトルだ!エメラルド・タートル、ルビー・カーバンクル、アメジスト・キャットの3体でシャークラーケンに攻撃!そしてその反射ダメージはアドバンスド・ダークの効果によりデツキのA宝玉獣、トパーズ・タイガー、サファイア・ペガサス、アンバー・マンモスに肩代わりさせ、破壊された3体を宝玉化させる」

「なっ!」

しまった。まだ心のどこかに、目の前の相手がヨハンであるという意識があったのかもしれない。少し前の僕以上にモンスターとの絆を大切にし、7体の宝玉獣を家族とまで呼んだ彼が自爆特攻なんて手は使わないだろうと、無意識のうちに思い込んでいたのかもしれない

い。

後悔してもしきれない中、3体のモンスターが無謀な突撃をしては力尽きて宝玉へ姿を変えていく。だが、その無謀は無駄ではない。宝玉の数が増えていくごとにユベルの笑みは深くなり、デツキからは別の色の宝玉が墓地へ送られる。

そして、ついに場と墓地に7種類の宝玉が出揃った。

宝玉獣 エメラルド・タートル 攻800 (破壊) ↓シャークラー  
ケン 攻2400

宝玉獣 ルビー・カーバンクル 攻300 (破壊) ↓シャークラー  
ケン 攻2400

宝玉獣 アメジスト・キャット 攻1200 (破壊) ↓シャークラー  
ケン 攻2400

「墓地肥やしか……！でも、ユベル！これでお前のモンスターはもういない！次のターンで……！」

「期待通りの反応をありがとう、と言っておこうか。でも残念だったね、まだ終わらないのさ。トラップ発動、虹の引力！」

アドバンスド・ダークにより闇に包まれたフィールドから、突然闇の柱が噴き上がる。柱？いや、違う。よく見るとその闇はそれぞれ濃さも色合いも違う7色になっている。赤、オレンジ、黄色……これは、虹の7色だ。闇の虹が天高く噴き上がり、その中央で何か……恐ろしく巨大な何かが発動した。

「虹の引力を発動するためには、場と墓地に合計7種類の宝玉獣が存在することが必要となる」

「やっぱり、それでアドバンス・ダークを……！」

「そういうことさ。虹の引力に導かれ、デツキより出でよ！究極宝玉神 レインボー・ダーク・ドラゴン！」

虹が砕け散り、巨大な竜が宵闇の空に舞う。黒みがかった灰色の体にはそのラインに沿うように7つの宝玉が埋め込まれ、そこから放たれるそれぞれ違った色の光がくすんだ全身と漆黒の翼をほのかに照らしている。これが究極宝玉神、か。まさか本物より先に闇墮ち状態の姿を見ることになるとは思わなかったけれど、そんな姿でさえ本来

この竜が持っていたのであろう高貴な美しさ、神々しさは少しも損なわれていない。

究極宝玉神 レインボー・ダーク・ドラゴン 攻4000

「攻撃力4000……」

「まだ今はバトルフェイズ、よってこのレインボー・ダークはさらなる追撃が可能！グレイドル・イーグルに攻撃、レインボー・リフレクション！」

「……何を企てるかは知らないけど、イーグルっ！頼むよ！」

黒き虹の竜の宝玉がひときわ光を放ち、一度後ろにのけぞったレインボー・ダークが口から破壊の閃光を撃ちだす。黄色の猛禽は自分の力を遥かに勝るその一撃から逃げもせず真っ向から立ち向かい、闇の中に呑まれてその偽りの姿が溶けていった。

「うっ……ぐっ……！」

究極宝玉神レインボー・ダーク・ドラゴン 攻4000↓グレイド

ル・イーグル 攻1500（破壊）

清明 LP3400↓900

エクゾディアの炎に勝るとも劣らないほどのダメージをもろに食らい、一瞬意識が飛びかけるのを辛うじて繋ぎとめる。確かに痛いけど、でもこれでイーグルの特殊能力を発動できる。戦闘で破壊されたことでグレイドルの原型である銀色の水たまりになったイーグルが、レインボー・ダーク・ドラゴンに憑依を……。

「いじましい努力だが、やはり死人に口なしさ。アドバンスド・ダークのさらなる効果発動！究極宝玉神がバトルする際、相手モンスターの効果はバトルフェイズ中無効となる！」

「効果無効……？」

その言葉通りに銀色の水たまりを維持していた生命力が失われ、みるみるうちにぐずぐずに崩れて地面の染みとなって消えていってしまう。死人に口なしとは、随分と言ってくれるものだ。

「魔法カード、レア・ヴァリユを発動。君がボクの場の宝玉から一つを選んで墓地に送る代わりに、カードを2枚ドロウする。さあ、どれがいいか選んでもらって構わないよ」

「どれにしたって大して変わらないだろうに……エメラルド・タートルを選ばせてもらうよ」

「いいだろう、2枚ドロウだ。これでターンエンド」

清明 LP900 手札：3

モンスター：グレイドル・スライムJr. (守)

シャークラーケン (攻)

魔法・罠：なし

ユベル LP4000 手札：2

モンスター：究極宝玉神 レインボー・ダーク・ドラゴン (攻)

魔法・罠：宝玉獣 ルビー・カーバンクル

宝玉獣 アメジスト・キャット

1 (伏せ)

場：アドバンスド・ダーク

思わぬ追撃により、ほぼ初期値だったはずのライフが1ターンでわずか3ケタにまで削られてしまった。だけど……そんな思考は、突然聞こえてきた声に中断せざるを得なくなった。

「清明！ユベル！」

「十代！」

ユベル城に突然現れたのは、十代とクロノス先生、それに翔。ヘルカイザーの姿が見えないことに対する不安が胸をよぎったが、今はよりによってユベルと台詞がハモったことの方が気に喰わない。でも、向こうも向こうで同じことを思ったのかすっごい不愉快そうな顔になるのが見えたから良しとしよう。十代に会えた嬉しさからか、先に苛立ちを抑え込んだユベルがにっこりと笑う。

「ああ、やっと来てくれたんだね、十代……！」

「ユベル！これ以上俺の仲間に手を出すな！」

その声の調子を聞いて、なんだか肩の荷が一気に下りたような気がした。ヘルカイザーが十代にどんな荒療治をしたのかはわからないが、どうやらよほどうまくやってくれたらしい。ここまで力のこもった十代の声は、随分久しぶりに聞く気がする。これならもう、僕が気を揉む必要はなさそうだ。

「もういい、清明。ユベルの相手はこの俺が……」

「まあ待ちなよ、十代。悪いけど今は僕とユベルのデュエル中なんだ、順番待ちなら後ろで並んでなっつて」

……ただし、心配をやめるのとデュエルの中断は全く別の話だ。意外な答えに言葉を失うギャラリーに、ちよつと振り返つて笑いかける。呆然とした顔でこちらを見ている十代と目が合うと、なんだか無性におかしくなった。

だがあいにく、肝心の対戦相手の方はそんなこと欠片も思つてくれていなかったらしい。

「……何のつもりだい？十代が来たのなら、もう君なんかには用はない。特別に今ならとどめは刺さないで置いてあげるから、早くサレンダーするといい」

この闇のデュエルが日常の世界であるユベルにここまで言わせるとは、一体どれだけ十代との勝負を心待ちにしてきたのだろう。僕から見ても破格の条件での譲歩ではあるが、それでもここは譲れない。キツパリと首を横に振つてみせた。

「そうしたいのは山々だけど、そうも言つてられない理由が2つばかりあってね。まず最初に、僕がここにいるのは僕の意味だけじゃないってこと。ここまで僕を生かし続けて、背中を押してくれた人や精霊たち。辺境の大賢者、ケルト、オブライエン、ジム、三沢とタニヤ、エドにヘルカイザー、グラフィア……それに、ウラヌス。どう？パツと思いつくだけでもこれだけいるんだ。名前も知らない、でも僕のために祈ってくれてる人達も合わせると、それはそれはすごい数になるだろうね。そして、その皆が平和を望んでいたし願っている」

「それがどうしたのさ。このボクにお説教かい？」

「まさか。アモンにも言つたけど、説教なんて柄じゃないもんね。でも言つたでしょう、理由は2つって」

ここでユベルの方を正面切つて向き、なるべくふてぶてしく見えるように笑つてやる。これまで散々僕らの生活を引つ掻き回してくれた礼だ、これぐらいの嫌がらせは僕にも許されるだろう。

「……もう1つってのはね、ユベル。お前が嫌がることをしたりその



望みとは真反対に動いてやるのが、割と楽しくてしようがないのさ。だからそう願えば願うほど、絶対十代には替わってやらないって気持ち湧いてくるね。さあユベル、今の相手はこの僕さ。まだまだ勝負は始まったばかりなんだ、楽しいデユエルと洒落込もう！」

ユベル、煽るのは割と得意でも煽り耐性は低めらしい。苛立ち、怒り、不愉快……そういった負の感情を隠そうとすらすらせず、それがまたこちらの気分を良くさせる。うーむ、歪んでるなあ。きつとユーノの魂のせいだ。全部そういうことにしておこう。

十代達から見てもしばらくまともには会わないうちに僕はだいぶ変わっていったらしく、止める事すらせず呆然と見守るのみ。

「僕のターン、ドロロー！さあ、ここからは反撃と洒落込ませてもらうか！」

ギャラリーのおかげで少し調子が出てきたのか、何をするのが最も効果的なのかが見えてきた。せっかく大掛かりな準備に専用サポートまで使ってきて出てきてもらったところ悪いけど、あのドラゴンにはさくつと退場してもらおう。だって攻撃力4000だもん、馬鹿正直に上から殴りつけられるのなんて霧の王位しか僕のデッキにはいない。

素直に立ち向かって勝てないなら……他の方法でどかせるしかないじゃない？

「レインボー・ダーク・ドラゴンをリリースしてユベル、お前のフィールドに海亀壊獣ガメシエルを攻撃表示で特殊召喚。さらに相手フィールドの壊獣に反応して、僕は手札から壊星壊獣ジズキエルを同じく攻撃表示で特殊召喚！」

「レインボー・ダークを……随分無粋な真似をしてくれるじゃないか……！」

「相手モンスターをリリース!？」

本気でこめかみをぴくぴくさせて怒るユベルに対し、壊獣モンスターに唾然とする十代達。ああ、そういえば十代には見せたことなかったっけか。僕が2回戦ったのは、あくまで霸王であって十代じゃない。全くその時の記憶がないわけではないんだろうけど、じゃあ全部覚えているかといえばまたそれも違うのだろう。侵攻中の記憶や

返り討ちにした战士们の断末魔とかの、強く印象に残ったことなら  
思い出せるとかそんな感じなんだろうか。

海亀壊獣ガメシエル 攻2200

壊星壊獣ジズキエル 攻3300

「おつと、まだ終わらないよ。さらに僕は、シャークラーケンとJr.  
の2体をリリースする！七つの海の力を纏い、穢れた大地を突き抜け  
ろ……アドバンス召喚！出でよ、僕の神！地縛神 Chacu<sup>チャク</sup>  
Challhua<sup>チャルア</sup>！」

ユベル城を背後に対峙する2体の壊獣。その戦場に、その2体に勝  
るとも劣らない巨大な体躯を持つ漆黒と紫のシャチがさらに参戦し  
た。地縛神を維持するためにはフィールド魔法が必要となるが、あり  
がたいことにまさにそのフィールド魔法をユベルが張ってくれてい  
る。アドバンスド・ダークにより闇に覆われた大地を憑代に、地縛神  
はこの世界でその力を解放できる。

地縛神 Chacu Challhua 攻2900

「……なるほどね。追い込まれた割に随分自信たっぷりだと思ってい  
たけど、そんな奥の手を残していたのか」

今更気づいても、もう遅い。そう、これこそが僕の、一発逆転を可  
能とする必殺の布陣。ジズキエルでガメシエルを攻撃すれば110  
0ポイントの戦闘ダメージがユベルに入り、さらに攻撃力2900の  
チャクチャルさんがダイレクトアタックを仕掛ける。その合計戦闘  
ダメージは、きっかり4000……わずか1ターン、手札3枚で完成  
する逆転のワンターンキルだ。

あとは、この2回の攻撃さえ通ってくればいい。何もしてくる  
な、これで全て終わらせろ。ありったけの祈りを込めて下した号令  
に、まずは機械の獣が咆哮を上げる。

「バトルだ、ジズキエル！ガメシエルに攻撃！」

「ぐっ……！」

壊星壊獣ジズキエル 攻3300↓海亀壊獣ガメシエル 攻22

00（破壊）

ユベル LP4000↓2900

「これで終わりだ！行っちゃって、チャクチャルさん！ミッドナイトフラッド！」

大気を震わせ、巨大なシャチが口から放つパルスがユベルへと迫る。それが激突する寸前、ユベルがおもむろに自分のデッキに手を掛けたかと思うと上から数枚をわしづかみにし、それを何のためらいもなく目の前に投げ捨てるようにしてばらまいた。

「何を!？」

地縛神 Chacu Chalhua 攻2900↓ユベル(直接攻撃)

空中に飛び散ったカードが半球状の力場を作り、半透明の壁が地縛神の一撃を阻む。その様子にはと息を呑んだのは、意外にもこれまでじつと勝負を見ていた翔だった。

「あの動き……まさか、お兄さんの!」

「知っているノーネ、シニョール翔!」

「あのユベルの伏せていたカード、あれは、まさか……」

その驚きようを見て、今初めて翔の存在に気が付いたと言わんばかりにユベルが笑う。先ほどの悔しがりもどこへやら、今の防御がすっかり元の余裕と皮肉めいた態度を取り戻させてしまったらしい。

「おや、ヘルカイザーの弟君じゃないか。そうとも、君の予想通りだよ。ヘルカイザーのカード、さっきの記念に1枚貫っておいたのさ。トラップ発動、パワー・ウォール……ダイレクトアタックにより受けるダメージを、デッキのカード1枚につき500ポイント軽減させる。6枚のカードを捨てさえすれば、今の攻撃もダメージは0だ」

「ヘルカイザーが……!?!」

それで、ようやく分かった。いや、これまでなるべく考えないようになしていた事実を突き付けられた、というべきか。なぜ、ヘルカイザーがここに来ていないのか。ユベルはあの時、アモンから離れてどこに行っていたのか。ヘルカイザーを相手に戦っていたのだとすれば、ちょうど僕とアモンのデュエルが終わったぐらいのタイミングで奴が戻ってきたことにもつじつまは合う。

そうか、ヘルカイザーが倒されたのか。後で相手してくれるって、

約束したのにな。

……嘘つき。

いや、悲しむのは後でもできるし、少なくとも今はその時ではない。感傷を一時的に切り捨て、代わりに皮肉を叩きつける。

「……霸王も霸王で手癖悪かったけど、あれもお前譲りだったわけね。悪いね、チャクチャルさん。伏せカードが読めなくて」

『いやいや、気にすることはない。あれで十分仕込みはできた』  
「仕込み？」

なんか、またよからぬことでも企んでたんだろうかこの神様は。返事代わりによくすすくと上機嫌そうに低く笑い、ユベルに注意を向けるように促す。

『ほらマスター、今から面白い物が見えそうだぞ』  
「え？」

つられるままにユベルに視線を戻すが、特にさっきまでと変わったところは見られない。何が起きたのか、と改めて問いたただそうとしたところで、異変が起きた。

「うっ……っ？」

ユベルが突然胸を抑え、苦しそうによたよたと数歩前に出る。少しの間何かを堪えるように立っていたが、やがてその体がゆっくりと地面に倒れた。

「え、ちょ、何したのほんとに!？」

『まあ見ていてくれ。すぐに化けの皮が剥がれるはずだ』

いくら意識がユベルの物でも本来あの体は僕らの友人、ヨハンのものだ。それがここまでおかしい様子を見せられるとさすがに心配になってくるが、有無を言わさぬ調子に押し止められてただ見ていることしかできない。僕、十代、クロノス先生、翔。4人が遠巻きに見守る中で、気絶しているヨハンの体からオレンジ色の人型が幽体離脱さながらにふわりと浮き出た。何度も見てきたあの姿、僕が見間違えるはずがない。

「ユベル！」

『よしよし、うまくいったようだな。さあマスター、もう遠慮すること

はない。次からは勝ちに行くぞ」

「ありがとう、チャクチャルさん。さあユベル、僕はカードをセツトする。これでターンエンドだ！」

「やって……くれたね……！」

満足げなチャクチャルさんとは対照的に、これまでで一番憎々しげな怨嗟の声が入型の口から聞こえてくる。思わず身震いしたくなるのを堪えてまっすぐ見返してやると、これまでデュエルエナジーの塊だった人型がさらに変化する。めきめきと音を立てて一対の翼が生え、左腕の肉と骨が飛び出てぎこちなく変形し、腕に直接デュエルディスクを生やしたような形になる。頭が、手が、足が、そして全身が新たに実体化した悪魔の姿を構築し、やがて完成した肉体がその二色に輝く眼をゆつくりと見開いた。

「これが、ユベル……」

そこにいた存在を、なんと形容すればいいのだろうか。まさに悪魔、と呼ぶには少し人間に近く、かといって絶対に人間であるとは言いやうがない異形の存在。どちらの特徴も持つがゆえに、そのどちらにもなりきることのできない人型。

そうか、こいつが。これが、ユベルか。

「ボクに1つ、たった1つだけ誤算があったとすれば、それは君のことだと今になって思うよ。コブラが拠点にしていたあの廃寮で。最初に君たちを送った砂漠の世界で。始末する機会はいくらでもあったはずなのに、毎回君は生き延びてきた。その結果がこれさ……まさかボクの真の姿を、十代以外に晒さなければならなくなるとはね。とんだ屈辱だよ」

苛立ちや怒りが極限を通り越して1周したのか、ユベルの声は思いのほか淡々としていた。だからこそ、これまで以上に油断できない。真の姿まで引きずりだした以上、もう遊びや不要な挑発を入れるつもりは全くないだろう。本気で、この僕を殺しにくる。でも、僕にだって負けられない理由がある。

「ボクのターン。メインフェイズ開始時に魔法カード、貪欲で無欲な壺を発動。このターンのバトルフェイズを放棄し、さらに墓地から種

族の異なるモンスター3体をデッキに戻すことでカードを2枚ドロ―する。ボクが選ぶのは獣族のトパーズ・タイガー、水族のエメラルド・タートル、ドラゴン族のレインボー・ダーク・ドラゴンだ」

制約こそ多いものの強力なドロ―ソース、貪欲で無欲な壺。バトルフェイズを放棄してきたということとは、このターンはまだ仕掛けてこないのだろうか。ただ今引いたあの2枚のカード、なんとなく嫌な予感がする。

その予感は、案の定すぐ現実のものとなった。

「魔法カード、宝玉の恵みを発動。墓地のA宝玉獣2体、アンバー・マンモスとサファイア・ペガサスを宝玉化させて魔法・罨ゾーンに置く」先ほどの自爆特攻のせいで、すでにユベルの場には宝玉が2つ。さらに2つを追加することで、場には4つの宝玉が闇に包まれている。その4つがそれぞれの色の光を放つと、フィールドの全てが4色の光に包まれた。

「魔法カード、宝玉の氾濫を発動！ボクの場に存在する4種類の宝玉を墓地に送り、フィールドのカード全てを墓地に送る！」

『これは……しくじったな。すまない、マスター。少し離脱する』

「チャクチャルさんは悪くないよ。それより、そんな効果のカードが宝玉獣に……！」

いくらヨハンが除去カードを使わないからと言って、それは宝玉獣のサポートに除去カードが1枚も存在しない理由にはならない。そんなことも考えつかなかった自分の馬鹿さ加減に自己嫌悪を抱きながらとつさに上を見上げると、ジズキエルとチャクチャルさんと目が合った。無理だ、いくらレベル10を誇る大型モンスター2体でも、フィールド全てのカードを墓地に送る、なんて除去に耐えきれぬわけではない。アドバンス・ダークの闇もろともフィールドが光に塗り潰されて上書きされ、再び周りが見えるようになった時には僕の場は空っぽに、そしてユベルの場には3体の宝玉獣がうずくまっていた。

「この効果で墓地に送った相手のカードの枚数まで、ボクは墓地から宝玉獣を蘇生させることができる。君の場に存在したカードは3枚、よってこの3体を蘇生する」

宝玉獣 アメジスト・キャット 守400  
宝玉獣 アンバー・マンモス 守1600  
宝玉獣 コバルト・イーグル 守800

アドバンスド・ダークが存在しなくなったことで、3体の宝玉獣もまた解き放たれたはずだ……だが貪欲で無欲な壺のデメリットを意識してか守備表示での展開であり、彼らも闇の力から急に解放された影響か、自らの使い手であるヨハン同様気を失ったまま動き出す気配すら見られない。

「さらに魔法カード、浅すぎた墓穴を発動。互いに墓地からモンスターを1体ずつ選択し、裏側守備表示で特殊召喚する」

僕が蘇生召喚させるのは、グレイドル・イーグル。チャクチャルさんを呼び戻したいのは山々だけど、アドバンスド・ダークまで消えてしまった以上この地に地縛神は留まれない。ならステータスが単純に高いジズキエルや守備力3000のガメシエルもいいけれど、ここで選ぶべきカードはやはりコブラだろう。ユベルは何を蘇生させたのか……宝玉獣のどれかだろうと言いたいところだが、気になるのはあのパワー・ウォール……捨てられた6枚のカードの内容を、僕は知らない。

「ターンエンド。十代、しばらくそこで待っていてくれ。どうやら彼は、どうしてもここで死にたいらしいからね」  
「やめろ、ユベル！清明も……！」

何か言いかけたのを手で制し、それよりもヨハンの体を、と合図する。我に返ったクロノス先生が慌てて走り出し、いまだ倒れたままのヨハンを抱え上げて十代のところに戻っていった。

よくわかってるじゃん、ユベル。ただし消えるのは、僕じゃない。

清明 LP900 手札：0

モンスター：??? (セット)

魔法・罫：なし

ユベル LP2900 手札：1

モンスター：宝玉獣 アメジスト・キャット (守)

宝玉獣 アンバー・マンモス (守)

宝玉獣 コバルト・イーグル (守)

??? (セツト)

魔法・罨：なし

「お前だ、ユベル。僕のターン、ドロロー！」

僕のライフはわずか900……これは、アメジスト・キャットが効果を使ってダイレクトアタックすればたったの2回、何らかの方法で強化されれば一撃で吹き飛ぶ事も十分ありうる程度の数字でしかない。じゃあ真つ先にそれを……と言いたいところだが、そうなる厄介なのがあのアンバー・マンモス。あのカードがいる限り、僕からの攻撃は他の宝玉獣に届かない。

とても、思っているんだろうか。だとすれば、随分と僕も舐められたものだ。

「墓地からトラップ、ブレイクスルー！スキルの効果発動。このカードを除外することで、このターンアンバー・マンモスの効果を無効にする。これで、他の宝玉獣にも攻撃が通る！行くよ、ツーヘッド・シャーク！」

ここで引いたのは、昔から僕が切り込み役として信頼している2つの口を持つ青い鮫。相手フィールドに守備力の低いモンスターが大勢いるなら、まさにこのカードの出番として相応しい。

ツーヘッド・シャーク 攻1200

「悪く思わないでよ……バトルだ、ツーヘッドでアメジスト・キャットに攻撃！」

ツーヘッド・シャーク 攻1200↓宝玉獣 アメジスト・キャット

ト 守600 (破壊)

「宝玉化能力は使わない。アメジスト・キャットを墓地に送る」

「そして……」

ここで少し言いよどむ。2回攻撃が可能なツーヘッド・シャークは、まだもう1度だけ攻撃が許されている。この2回目の攻撃、どこを狙うべきだろうか。アンバー・マンモスはある守備力を抜けないから論外として、コバルト・イーグルなら確実に戦闘破壊できる。でも、あの伏せモンスター……どうにも怪しい。返しのユベルのターンで



ツーンヘッドがアンバー・マンモスに倒されて500ダメージを受けるのはほぼ確定している。だからライフを少しでも温存しておこうとイーグルは守備表示のままにしておいたけど、これは少し判断ミスだったかもしれない。

「ええい、ままよーそのセットモンスターに攻撃！」

猛然と突っ込んでいった鯨の牙が、セットモンスターに深々と食い込み噛み千切る。岩石のかけらが大量に飛び散り、何に攻撃をしたのかようやく分かった。

ツーンヘッド・シャーク 攻1200↓??? 守600 (破壊)

「あのカード……そういうことか」

「メタモルポットのリバーズ効果発動。たがいに手札をすべて捨て、カードを5枚ドローする。せつかく姿が変わったんだ、仕切り直しと行こうじゃないか」

ユベルに5枚ドローさせるのは危険だけど、あながち悪いことばかりでもない。というより、むしろ伏せモンスターに攻撃したのは結果的に大正解だったと言えるだろう。なにせ今はこちらのターン、ここで5枚も手札を増やせるのは純粹にありがたい。今の盤面だと正直ジリ貧だったので、ここで何らかの防御札を引ければ後々楽になる。

「カードを伏せて、ターンエンド」

さあ、攻撃して来い。僕が今伏せたカードはグレイドル・スプリット。アンバー・マンモスがツーンヘッドに攻撃してきたら、そのままこれで相打ちの返り討ちだ。

だがまるで、そんな考えを読んでいると言わんばかりにユベルが冷笑する。読んでいる？ いや、まさか。偶然だ、偶然。きつとユベルも何か、それなりのカードを引いただけだろう。

「ボクのターン。ふふ、ボクを本気で怒らせたお礼に見せてあげるよ。アンバー・マンモスとコバルト・イーグルの2体をリリースして、アドバンス召喚！これこそがボク自身……ユベル！」

そこに現れたのは、もう1体のユベル。悪魔の翼に黒と灰色の体、女性的な顔立ちに不気味なオッドアイ、そして額に開いた第3の目。間違いない、目の前のユベルそのものだ。

だけど目を疑ったのは、そこに示されたある数値だ。

ユベル 攻0

「攻撃力0……? 攻撃すれば、ダメージが通る状況だったのに……」

「おいおい、君がモンスターへの攻撃力だけしか見ていないのはどうなんだい? あれだけ厭らしいカードを喜んで使う人間の言葉とも思えないな。魔法発動、ジェノサイド・ウォー!」

ジェノサイド・ウォー。効果はまさに単純明快、このターンにバトルを行うモンスターを敵味方問わずすべて破壊するカードだ。でも、それをわざわざアドバンス召喚、それも自分自身を出してから発動した? 確かにジェノサイド・ウォーにはメインフェイズ1にしか使用できない制約があるが、それにしたってこのターン使う意味がどこにある?

「何を……」

「愚問だね、もちろんこうするのさ。ボク自身でそのセットモンスターに攻撃、ナイトメア・ペイン! そしてボクは、自身の戦闘により発生するダメージを0にできる」

セットされたままのグレイドル・イーグルにユベルが手を伸ばすと、その目が赤く光る。するとまるで操られているような動きでイーグルが自分から表側になり、ユベルめがけて突っ込んでいった。

「イーグル!」

ユベル 攻0↓??? (グレイドル・イーグル) 守500

無理やり突撃を強制されたイーグルが、意識をはっきりさせるためか首を振りつつこちらのフィールドに戻ってくる。なるほど、少しわかってきた。魔法カードによる破壊なら、イーグルは寄生効果を発動できない。それが狙い……いやでも、まだわからない。戦闘を行ったことでユベルの破壊も確定したというのに、なぜ笑っていられるのだろうか。

「エンドステップ、ジェノサイド・ウォーの効果が発動する。君のグレイドル・イーグルと、ボク自身にこの痛みが降りかかるのさ」

もしかしたら、とも思ったが、特に効果破壊耐性を持つわけでもないらしい。溶け崩れて消えていくイーグルと共に、ユベルがあっさり

と自壊していった。

だがその時、フィールドをアドバンスド・ダークよりもさらに濃い闇が包んだ。ますます暗くなっていく闇から、何かおぞましい存在がこちらを見下ろした。

「これは……！」

『それ』を一言で表すならば、2足歩行する双頭の竜といったところだろうか。ユベルと同じ濃い紫色の被膜の翼に、肉食恐竜のそれを思わせる強靱な脚。全身は毛皮と筋肉に覆われ、太い尾が背後にちらちらと見える。

だが、僕がそれを見て寒気がしたのは、そんなよくある身体的特徴からではない。『それ』には眼がある……当然竜の頭部にもそれぞれ2つずつ付いてはいるが、あれが本当に見えるのかは疑わしい。なぜならば、体の中央少し上、首の付け根。そこに、赤く光る巨大な一つ目が鎮座している。自身の巨大な手の中にすら納まるか疑わしいほど巨大なその目が生きている証拠にピクリと下に動き、そこにいた僕を見下ろした。その時そこを通じて見えたのは、冷たく暗い知性の光……そしてそれこそが、僕の寒気の原因。あれは、間違いのない。あれは……ユベルだ。

「この痛みにより、ボクはこの醜くも美しい姿に進化する。デツキよ  
り出でよ、ユベル—Das<sup>ダ</sup> Das<sup>ダ</sup> Abscheulich<sup>ア</sup> Ritte<sup>リッ</sup>ター  
！」

ユベル—Das Abscheulich Ritte<sup>リッ</sup>ター 攻0

一体何をどうすれば、まだ辛うじて人型だったあの存在がこんなモンスターに変異するのだろうか。それがわからないからこそ背筋が凍り、同時になにか恐ろしい闇の世界が垣間見えた気がした。チャクチャクさんに聞けば、何か教えてくれるかもしれない……いや、やめておこう。いくら僕でも、首を突っ込むべきでない世界があることぐらいはわきまえている。

「カードを2枚伏せる。見せてあげよう、進化したボクの力、この忌まわしき騎士の力を！ユベル—Das Abscheulich Ritte<sup>リッ</sup>ター  
の効果発動、自分のエンドフェイズごとにフィールドに存

在する自分以外すべてのモンスターを破壊する！フェロー・サクリ  
ファイブス！」

「ツーヘッドー……クソツ、仲間？<sup>フェロー</sup>そんなもんがどこにいるって？」

全てを破壊する暴君の力に巻き込まれ、フィールドに残っていた  
ツーヘッド・シャークまでもが破壊される。再びリセットされて誰も  
いなくなったフィールドを、ユベルがその一つ目で睥睨する様が見え  
た。

清明 LP900 手札：4

モンスター：なし

魔法・罠：1（伏せ）

ユベル LP2900 手札：2

モンスター：ユベル―Das Abscheulich Ritter  
er（攻）

魔法・罠：2（伏せ）

「僕のターン！」

結局、あのユベルが持つ効果の全貌はまだ不明のままだ。あれだけ  
大掛かりに攻撃力0のモンスターを出しておいて、まさか肝心の効果  
が全体破壊のみなんてことはないだろう。最低限、戦闘ダメージを0  
にする効果ぐらいは受け継いでいるはずだ。

なら、次は戦闘破壊ができるかどうか試してみようじゃないか。

「シャクトパスを召喚！そのまま攻め……！」

き、と言い切る寸前、これまで感じたこともないほど嫌な予感がし  
て言葉が詰まった。攻撃しようとしていたシャクトパスも、突然固  
まった僕を気遣うように伸ばそうとしていたタコ足をひっこめる。

その瞬間僕の脳裏をかすめたのは、あのウラヌスの死。自分の攻撃  
を自分で受けたような不自然な傷痕。そして次に、砂漠の異世界でラ  
ビエルから聞いた言葉がリフレインする。

『奴は確かに強い、だが同時に、奴は誰よりも弱い。奴の最大の強みは  
その弱さにこそあり、それゆえもし私が奴と会いまみえることがあれ  
ば、奴に対し私は特に敗北するだろう』

あの時のラビエル渾身のポエム、そしてウラヌスの傷。攻撃力0で

あるにもかかわらず戦闘ダメージを0にする、噛み合ってはいるがまるで戦闘することを前提としているかのようなユベルの効果。そうか、そういうことだったのか。どうしてあんなに時間はあったのに、今までわからなかったんだらう。

「……やつとわかったよ、ユベル。お前がなんなのか」

「へえ？じゃあ、その推理を聞かせてもらおうか」

「ユベル、お前の能力は反射。戦闘ダメージだけを跳ね返すのか、攻撃そのものを跳ね返すのかまではわからないけど、とにかく攻撃を仕掛けた瞬間僕にその痛みが降りかかる。それも自分から攻撃した場合には発動しないけど、相手に攻撃された時なら使うことのできる、ね。違う？」

「……いつ気づいた？」

にやにや笑いをひっこめ、スツと真面目な表情になって問いかけるユベル。あの反応から言って、やっぱりそういうことなんだろう。

「むしろ今まで気が付かなかった僕が馬鹿だったんだけどね。でも不用意にウラヌスの攻撃を、よりもよって僕の目の前で反射して見せたのはまずかったね。あの時ウラヌスは命を賭して、僕に最大限のヒントを与えてくれたんだ」

「あの時か。君が絡むとどうも判断ミスが多くなるな。だが、今更それに気づいたところでなんになる？」

忌々しげに吐き捨てるが、確かにその言葉は間違っていない。けど、このカードを使えば話は別だ。謝罪の意味を込めてシャクトパスをちらりと見ると、覚悟を込めた目でコクリと頷き返してくれた。ごめん、シャクトパス。

「バトルが無理なら、こうするまでさ！魔法カード、妨げられた壊獣の眠りを発動！フィールドのモンスター全てを破壊し、互いの場に壊獣を1体ずつリクルートする！」

「破壊効果か……ならばトラップ発動、安全地帯！この効果によりボクは相手の効果の対象にならず、さらに相手の効果と戦闘によつては破壊されない！」

「くっ……でも、シャクトパスが破壊されたことでリクルート効果は

このまま発動する！出て来い、粘糸壊獣クモグス！雷撃壊獣サンダー・ザ・キング！」

まさか、こんなところで完全にミスだと思っていたシャクトパスの召喚が生きてくるとは思わなかった。なにも破壊できなければそれで終わりだが、1体でもモンスターの破壊ができさえすれば、妨げられた壊獣の眠りでデツキの壊獣を呼び起こすことができる。

粘糸壊獣クモグス 攻2400

雷撃壊獣サンダー・ザ・キング 攻3300

「生き残るのは勝手だけど、それなら無視しておけばいいもんね。バトルだ、サンダー・ザ・キング！クモグスに攻撃しろ！」

サンダー・ザ・キングの3つの頭にそれぞれ光が集まり、3本のブレスが螺旋状に絡み合いながら打ち込まれる。だがその瞬間、フィールドに風が吹くのを感じた。それだけなら別になんてこともないが、風の勢いはあれよあれよという間に強くなっていき、立っているのもやっとというぐらいの暴風となってフィールドを駆け廻る。

「これは!？」

「トラップ発動、邪神の大災害。相手モンスターの攻撃宣言時、場の魔法、罠をすべて破壊する。君のその伏せカードも、ボクの安全地帯もね」

「安全地帯も!?そんなことをしたら……!」

安全地帯は強固な体制をモンスターに与えるが、その反面自身が場を離れた時に対象モンスターも道連れにする欠点を持つ。それをわかって僕がの伏せカード1枚を除去しにくるとは考えにくい……だがいずれにせよ、こちらの攻撃を止める理由はどこにもない。大蜘蛛は雷撃を浴びて爆発四散、その余波がユベルを襲う。

雷撃壊獣サンダー・ザ・キング 攻3300↓粘糸壊獣クモグス

攻2400 (破壊)

ユベル LP2900↓2000

「……」

ダメージは通った。ユベルも、半ば自滅に近い形で破壊された。さあ、次はなんだ、何が来る。

「本当に、大したものだよ。ボクを本気で怒らせただけでなく、ここま  
でボクに本気を出させるとはね」

闇の向こうから聞こえてくるユベルの声は、やはり余裕たっぷり  
で。やがて見えてきたその『ユベル』は、さらに禍々しさを増してい  
た。

基本的な姿形は第二段階がベースだが、そこに込められた力は先ほ  
どの比ではない。翼の数はさらに増え、首の付け根からは竜の頭に加  
えもう1つ、山羊のような角を持った悪魔の首が生えた。両膝には無  
作為に辺りをねめ回す捕食者の瞳が開き、次なる犠牲者を探すかのよ  
うに光っている。

だがそれより何より目を引くのは、胸の位置にできた顔……そう、  
顔だ。馬鹿馬鹿しいほど巨大な3つの目に、その下の鼻。口からはご  
丁寧に牙まで覗いているとパーツひとつひとつは人間離れしている  
ものの、でもあれは最初のユベルと同じ。真正正銘、人間の顔だ。

「いいだろう、もうボクも出し惜しみはなしだ。これがボクの、終焉に  
して究極の姿。第二段階の僕がフィールドを離れることでのみ特殊  
召喚できる、もうひとつのユベル……ユベル―Das  
Extremetraining Drachen!」

ユベル―Das Extremetraining Drac  
hen 攻0  
「ターン……エンド」

手札、場、墓地。駄目だ、これ以上はどこを見ても、何も打ってお  
ける手がない。このユベルもこれまでと同じく、攻撃された時にしか  
反射できないモンスターなら……そんな淡い考えが浮かぶも、すぐに  
頭を振ってそれを打ち消した。きつと無理だろう、このユベルはこれ  
までとは格が違う。

それを裏付けるように、全ての力を解放しきったユベルが体中の目  
見開いて睨みつける。すると先ほどのイーグルよろしく、サンダー・  
ザ・キングの体が操られるように動きだした。全身に力を込めてもが  
きながらの抵抗もむなしく、振り上げられた3つの首に雷の力が溜  
まってゆく。

「深き悲哀の竜よ、サンダー・ザ・キングに攻撃しろ。この瞬間モンスター効果によりボクへの戦闘ダメージは0となり、さらにバトルによってボクは破壊されない」

わずかな沈黙の後、3本のブレスが強制的に放たれた。しかしそのどれもが敵を捕らえることができずにユベルの前で霧散し、代わりにユベルの双頭の竜が同時に火を放つ。そのうち1本がサンダー・ザ・キングの体を焼き尽くし、もう1本は僕めがけてまっすぐに飛んできた。逃げ……られ、ない、か。

「そしてこのダメージステップ終了時、ボクの効果が発動する。戦闘を行ったモンスターの攻撃力分のダメージを君に与え、そのモンスターを破壊する効果がね」

ユベル | Das Extremier Trauring Drachen 攻0

↓雷撃壊獣サンダー・ザ・キング 攻3300

清明 LP900↓0

膝の力が抜けて立っていられなくなり、その場に倒れる。不思議と、怖いとは思わなかった。この世界であれだけの相手を消滅させてきたのに、今更自分が消えるからといってそれを拒否するのはいくらなんでも虫がよすぎるというものだ。そもそも僕は本当なら、もう3年も前に死んでいるはずの身。それがあれだけ全力で戦って、その上で負けたんだ。負けたという結果自体に不満はあれどデュエルそのものに悔いはないし、そのリスクも受け入れたうえで戦っていた。

それにここで僕が倒れても、まだ大本命の十代が残っている。きつと十代なら何とかしてくれるだろう、そんな甘えもあったかもしれない。遠くでその十代が何か叫んだ気がするけど、何を言ったのかはよく聞こえない。それでも消滅の影響で早くもぼやけかかってきた視界に、彼が走り寄ってくるのは見えた。

「清明！」

「よっ。悪いね十代、またハマこいたよ」



「何言ってるんだ、馬鹿野郎！」

あらら。あまり深刻になってまた面倒なことになられても困るからできるだけ軽く退場しようと思ったのに、どうやら逆効果だったらしい。重くなっていく体をどうにか動かして、肩をすくめて笑ってみせた。十代の肩に手を置き、その目を正面からまっすぐに見る。

「やっぱりヒーローの真似事は、僕には少し荷が重かったのさ。駄目だねー、やっぱり……でもまあ、できるだけのことはやっておいたさ。後は本職に任せるから、絶対生き残ってよ。親友」

まだ何か、最後にユベルに捨て台詞のひとつでも言つてやろうかとも思っただけど、残念ながらそれ以上は口が動かなかった。

あれだけやりたい放題に暴れまわった割には、意外なほどあっけなく。こうして僕の存在は、この精霊世界から消え去った。

## ダークネス・カウントダウン ターン107 冥府の姫と変幻忍者

河風夢想の朝は早い。もとより眠りの浅い彼女にとって早起きはいつものことだったが、ここ数日はそれがより顕著になっていた。その日も、まだ太陽が昇るか昇らないかというほどの時間にアカデミア女子寮特有の豪華なベッドの中でぱっちり目を覚ましていた。

そのまま上半身を起こすとまるで何かを探しているかのように周囲を見回し、ややあつて時計を見つめて時間を確認してからため息をついた。

「……はあ」

昨日もまた、彼は帰ってこなかった。今日は、今日こそは、帰ってくるだろうか。それはか細い、何の根拠もないただの希望でしかない。それでも、それだけを頼りにするしかなかった。でもその希望も、ここ数日は維持し続けるのに限界が来ようとしている。それがわかっていくからこそ、彼女はもう一度ため息をついた。

2時間後。すっかり出てきた太陽の光を浴びつつ、制服に着替えた彼女は寮を出た。朝食はまだだが、どうせこの時間ならば『彼女』があつた場所にいるはずだ。まさか拒否はされないだろうから、そこでご相伴に預かればいい。誰ともすれ違うこともなく——当然だ、今はアカデミアも臨時休校で、しかもまだ朝早い時間なのだから——  
——がらんとした本校舎に入ると、勝手知ったるある教室への道を辿って行った。案の定、他の教室がすべて電気が切られているのに対し、その場所だけはドア越しに光が漏れている。

ひとつ。ふたつ。軽いノックをすると、どうぞ、と声が聞こえたので扉を開け中に入る。明るい電気の下でエプロン姿の少女がこちらを見て呆れ顔半分、笑顔半分といった表情で軽く手を振るのが見えた。

「いらっしやいませ、河風先輩。洋菓子店『YOU KNOW』、デュエルアカデミア支店にようこそ。とはいっても今日も開店休業です

から、そう大したものはお出せませんよ?」

「おはよう葵ちゃん、つてき。今日もおじやまするからね、だつて」  
洋菓子店、YOU KNOW。かつては遊野清明が学校内でトメさんからもらった材料を使い、実家がケーキ屋であるというスキルをフルに生かし勝手に始めた小遣い稼ぎだったものを、何をどうアカデミア側にねじ込んだのか2年の初めに使わない教室を丸々借りることに成功し、万丈目グループとのコネまで使い冷蔵庫付きの調理場と食事スペースまで完備させて堂々と始まった商売である。裏を返せば、この元教室はレッド寮の彼の部屋以外で最も遊野清明という存在を感じることできる場所だ。

それもあつて彼女は毎日ここに通い、そのたびに葵はそんな彼女をこうして出迎える。おそらく葵も、彼がいつまでも帰つてこないことでダメージを受けているのだろう、そう彼女は分析している。ただいつまでもその傷跡を引きずり、半ば機械的にここにやってくる河風<sup>わか</sup>夢想<sup>たし</sup>とは違い、葵<sup>か</sup>・クラ<sup>の</sup>グレイ<sup>じょ</sup>ーはその現実と自分の心に折り合いを見つけ、その上で彼が大切にしていたこの店の一員として掃除をし、空気を入れ替え、こうして毎日店番をしに来ているのだろう。その芯の強さこそが、彼の良き相棒としてこの店を回してきた葵の強さなのだから。

そして、そんな強い彼女のそばにいて自分で自分を誤魔化し、自分も強くなったかのような錯覚の中に身を置こうとしている自分の弱さに今日も自分が嫌になる。仮に彼女がここにいてくれなければ、明日行こう明日行こうとずるずる引つ張つた拳句いつまでも足を運ぶことはなかっただろう。まだ彼のいない日常に割り切れていない自分にとつて、この場所に居続けることはあまりにも辛すぎる。

「……………どうかしましたか?」

「あ、ううん。なんでもないよ、つて」

「そうは見えませんがね。少し待つててください、どうせ今日も朝食まだですよね?」

ぼうつと葵の横顔を見たまま立っていたことに気づき、心配そうに覗きこむ彼女に笑いかけてから手近な椅子に座る。肩をすくめて調

理場に引っ込んだ彼女が、ややあつて3つのお盆を器用に持つて戻ってきた。今日のメニユーは白米に味噌汁、焼き鮭に浅漬け。日本人の朝食と聞いて何となく誰もがイメージするような、けれど実際にこのメニユーを毎日作るのは結構骨が折れるあれだ。

1つを夢想の前に置くと、もう1つの同じメニユーが載ったそれを正面の机に置く。最後の1つはなぜか少し離れた机に置き、戻ってきて夢想の正面の席に座る。どちらが先に言いだすでもなくほぼ同時に両手を合わせて「いただきます」と呟いてから箸を取った。葵はこういう時には最初に味噌汁を一口飲んでから他に手を付けるタイプだが、夢想はまず浅漬けから口に運ぶ。今日もその法則に従い一口齧るが、すぐにその目を丸くした。

「美味しい……！だって。葵ちゃん、これもあなたが作ったの？つてさ」

混じりけ無しの本気の発言だったが、どうやら葵にとつてはあまり嬉しい発言ではなかったらしい。苦虫を噛み潰したような顔になり、いやいやと言った様子で自分も浅漬けを口に入れる。

「……ええ、確かに、味は、間違いないですね」

その引つかかる物言いに少し首を傾げた後、ふと彼女はあることを思い出した。そういえば前にも、このいつだってハキハキと毒を吐く少女が妙に歯切れの悪くなった時がある。その時も、彼は笑つて彼女に付いていったっけ……そこまで思い出したところでまた明後日の方向に飛びそうになった思考をどうにか引き戻し、頭に浮かんだある可能性を確かめる。

「お姉さんかな、だって？」

「……わかりますか」

「前の時と同じ顔してるから、つてさ」

明菜・クラディー。夢想自身はまだ会ったことがないが、葵の姉だという。良くも悪くも規格外な人だという話は目の前の葵にも、そして彼にも聞いていたので彼女も名前だけは知っている。そして、その読みは当たったらしい。

育ちがいい彼女には珍しく、うんざりした顔で浅漬けを箸で指しな

がら語りだした。

「今朝起きたらタツパーに入ったこれが、姉上直筆の便箋たっぷり6枚分の私宛てラブレターと一緒に私の部屋の冷蔵庫に入っていました。私寝る前鍵かけたはずなんですけどね、どこから入ってきたんでしようね。だからたぶん、今もこの辺のどこかにいますよ姉上。わざわざこの島まで来て、手紙だけ置いて帰るなんてあの人がするはずありませんから」

諦め顔で淡々と語る葵に、まさかそんなことはあるはずないだろうと言おうとする夢想。

なにしろ今は生徒が異世界に行ったつきりという異常事態の真つただ中、海馬コーポレーションの全技術を尽くしてこの島は完全に外の世界から隔離されている。食料はこれまでの業者との取引を一時的にストップして海馬コーポレーションが自社ヘリですべてを取り仕切り、手紙を送る連絡船は完全に停止させられた……そんな甘いものではない。インターネットからも完全に遮断され一切の情報の送信が不可能になり、妨害電波のせいで島の外には電話一本繋がらない。こんな状況で、いかに生徒の家族といえど第三者がこの島にやっつけてくれるはずがない。だが、そんな彼女の口から言葉が出ることはついになかった。いきなり天井の一角、排気口が内側から取り外されたかと思うとそこから人間の頭が飛び出したのだ。

「おー、葵ちゃんがお姉ちゃんのことそこまでわかってくれてたなんて！ ゆうべは可愛い寝顔も見れたし、もうお姉ちゃんこれだけで葵ちゃん成分補給できて10年は戦えるよ！」

「……………ほら、わかりますか河風先輩。今この人天井裏から出てきましたよね。こういう人なんですよ」

「え、えつと……初めまして、ですって、さ……？」

「はい、はじめましてっ！ 私の葵ちゃんがいつもお世話になってるね、明菜・クラディーですっ！」

入学以来初めて見せるほどひきつった笑顔で、突然天井裏から物音ひとつ立てずに降りてきた金髪の女性……明菜の方を見ようともしない葵に、さすがの夢想もただ挨拶をする程度しかできなかった。だ

が明菜の方はそんなことにもお構いなしに夢想の方を向いて明るい笑顔を見せ、その手を握ってぶんぶんと上下に振る。その表情や髪の色、全体の雰囲気こそ全く違うものの、こうして並んでいると明菜と葵は顔のパーツひとつひとつはどれもよく似ており、さすが姉妹という印象を抱かせる。

「……姉上、その辺でやめてあげてください。河風先輩が困っちゃってるじゃないですか」

「えー？」

そう言いながらもしぶしぶ手を放し、一步下がったところでようやく放置されたままの3つ目のお盆の存在に気が付いたらしい。またもやパツと表情を明るくすると、反射的に1歩下がった妹に喜色満面ですいっと詰め寄る。

「葵ちゃん葵ちゃん、あれって葵ちゃんの手料理!?あれ私食べていいの!？」

「……いらなら下げますよ」

「いやったあ!ありがどうマイラブマイシスター!いっただけきまーす!」

意外にも、と言うべきか、さすが葵の姉、と言うべきか。あれだけ大騒ぎしていた人間と同一人物とは思えないほどきちんと椅子に座り、手を合わせてから箸を取った明菜が真っ先に手を伸ばしたのは、いまだ湯気を立てている味噌汁の器。そんなところも姉妹なんだなあ、と見ていると、再び自分の朝食に手を付けながら葵が姉に話を向けた。

「それで、姉上。一体今度は何しに来たんですか?というか、今かなりがっちり遮断されてるのによく入って来れましたね」

「ああ、そのことね。そうなんだよ葵ちゃん、お姉ちゃんもうすっごい苦労したんだから。ここ最近急に電話しても繋がらなくなっちゃったから、もしかしてまた反抗期にでもなったののかなって思っさ。なら今会いに行ったらまた葵ちゃんが反抗期の時の可愛い可愛いすね顔が拝めるかもって思うと、もうお姉ちゃんいてもたってもいられなくって」

その発言に、何も言わずに形のいい眉をひそめる葵。話以上に凄なお姉さんだね、という夢想の視線をどうとらえたのか、補足するようにポツリと呟いた。

「姉上は中身こそこんなのですが、あらゆることに対してとんでもなく有能な化け物なんですよ。その姉上がここまで言うのなら、常人には突破は不可能ですね。海馬コーポレーションが何を考えているかはわかりませんが、本気でこの島と外を隔絶したがつているのは確かですよ。でも人間が消えた以上いつまでも隠し切れるものでもないでしょうし、この先どうするつもりなんでしょうね」

「待ってるんじゃないかな、だってき。きつと……きつと、またいつもみたいに厄介ごとを全部片づけて帰ってくるから。それまで時間稼ぎしてるんだよ、って」

きつと帰ってくる。むしろ自分に言い聞かせるようにそう言うと思つたよりもずっと大きな声が出た。その突然の感情の高ぶりには正面の葵が目丸くし、少し離れた席の明菜も箸を止めて夢中に目を向けたが、一番驚いていたのは当の本人だった。

そんな様子を見て何事か思案したのち、明菜がふと箸を置いた。ごちそうさまでした葵ちゃん、と手を合わせ、いつになく真剣そうに青い……ではなく正面の夢中ににじり寄る。

「ねえねえ河風ちゃん、なんでそんなに元気ないの？お姉ちゃんが可愛い妹の友達のよしみで相談乗ってあげようか？」

「え？いえ、私は大丈夫です、って」

「そうかな？なんだか今にも心が折れちゃいそうに見えるけど……もしかしてお腹痛い？」

一応そこまでは真面目な顔で聞き耳を立てていた葵も、最後の一言にはガクツとつんのめった。曲がりなりにも自分からシリアスに持ち込んでおいてからの、そのあまりといえはあまりの言葉に入学以来どこぞの先輩のせいで無駄に鍛えられたツツコミとしての本能がつい彼女に口を滑らせてしまう。

「何先輩みたいなこと言って……あ」

「先輩？ああそうそう、清明君。そういえばあの子どこ行ったの？ま

た来たからお茶しようねって約束してたからずっと探してたんだけど……あれ？」

地雷を踏んだ。そのことに気づいたのは、ほぼ姉妹同時だった。清明の名が出た瞬間、さつきまで辛うじて普通に受け答えしていた夢想の目から生気が消えたのだ。うかつだった、一見元氣そうでもかなりまいってるのはわかっていたはずなのに、と自責する葵とんだかわからないが清明の話題はまずかつたらしい、と察した明菜が、咄嗟のアイコンタクトを交わして慌てて話題を変える。

「あ、えーっと、そういえば葵ちゃん、最近お勉強は頑張ってるの？お姉ちゃん気になるなー！」

「ええ、そうですねーもつとも、ここ最近はお休みですが！」

「へえー、お休みなんだ！いいなあー、お姉ちゃんもお休み貰って一日中葵ちゃんの顔眺めてたいのになー！」

「いえ、そんなにいいものでもないですけど……いえ姉上、この話はやめましょう」

すんでのところでのこのままこの話題を続けていては話を変えた意味がなくなること気づいた葵が、寸前でストップをかける。少なくとも、これ以上夢想の目のハイライトが消えていくのはかろうじて食い止められた。

そこで困ったのが明菜である。昨日島に来たばかりの部外者である彼女にはまだ事態の全貌が掴めておらず、そのため一体どんな話題なら問題ないのかがよくわかっていない。そこで何か話題の種類になるものでもないかと左右に素早く目を走らせ、たまたま目に付いたものは葵……ではなく、その腕に付いたデュエルディスクだった。

「そうだ、河風ちゃん。お姉ちゃん、河風ちゃんがデュエルするところ見てみたいな」

「デュエル、ですか？」

たとえどんだ底の気分でも、その一言には反応するのがデュエリストの性。わずかにハイライトを取り戻した夢想に、満面の笑みで頷いてみせる。

「うんうん。ほら葵ちゃんも、準備して」



「あ、私がやるんですか？姉上、前はデツキにデュエルディスクまで用意して、ルール覚えてから来てたじゃないですか」

「言ったでしょう、ここに来るのに苦労したって？私1人で警戒網抜けてくるだけでもすごい苦労したんだから、あんな大きな機械持つてくる余裕なかったんだもん」

頬を膨らませて拗ねる姿はとてもこの中で最年長の女性がやっていい仕草と呼べるようなものではなかったが、少なくとも似合ってはいたことは間違いない。もし、私がこんなことをしたら？姉の様子を見た葵の脳裏にそんな考えがチラリと頭をかすめたが、そんな考えはすぐに追いやられた。いや、よそう。葵・クラディーは気がふれたと思われるのがオチだ。

「なんで浅漬け持つてくる余裕はあったんですか……まあいいですけど。河風先輩、どうですか？その気分でないなら、無理に始めなくても」

「ううん、いいよ。始めようか、ってさ」

意外にもしつかりした声でそう微笑むと、若干生氣を取り戻した顔でデュエルディスクを起動させる夢想。その回復の早さに驚くと同時に、葵の心にも強敵を前にした高揚感が隠しようもなく湧きあがってくるのを感じた。

結局、この学校に……デュエルアカデミアに通うことを選んだ時点で、私も河風先輩も、そういう人種なのだろう。なにをさしおいてもデュエルが大好きで、カードに触っていることが何よりも気晴らしになる、そしてそれはいつだって変わらない。

「では河風先輩、手合せ願います」

「うん。それじゃあ、デュエルと洒落込みましょう？だってさ」

いつの間にか清明から移ったいつもの口癖に少しだけ反応するも、また地雷を踏むのはさすがの葵もごめんなので特に何も言わないことにした。恐らく今のは、本人も完全に無意識で発した言葉なのだろう。

「デュエル！」

「先攻は私が頂きます。黄昏の忍者―シンゲツを召喚です」

どこからともなく吹き込んだ風に数枚の木の葉が渦を描くように舞い、その中心に右腕が2本あるかわり左腕の無い異形の忍者がその2本の右腕で印を結んだ体勢で現れる。

黄昏の忍者―シンゲツ 攻1500

「あつーそれ、それ私のあげたカード！ 葵ちゃんずっと使っていてくれたんだねお姉ちゃん嬉しいよー！」

「姉上、申し訳ないですが少々静かにしていただけると」

「ちえー、黙って見学してまーす。えへへ、でも嬉しいな。私のプレゼント、ずっと持っていてくれたんだ。えへへー」

「あーねーうーえー？」

「はーい。そんな怖い顔しなくてもわかったわよー」

どうにか姉を黙らせ、改めてカードに向き直る葵。あの姉の前で当の本人から貰ったカードに先陣を切らせては当然こんな反応になるであろうことに考えが至らなかつた数十秒前の自分に心の中で舌打ちするが、気づいていたからといってやる事が変わったわけではない。目の前の相手はあの学園最強との呼び声も高い、公式記録全戦全胜を誇る『無双の女王』河風夢想だ。

それも、あの目を見ればわかる。あれはさっきまでの腑抜けた様子を微塵も感じさせない、相手を倒すことだけを考えた戦士の目だ。いちいち私情を挟んでいては、食らいつくことさえ難しい。

「さらにカードを2枚セットで、ターンエンドです」

「シンゲツだけ出してエンドなんてずいぶん静かだね、ってさ」

「お氣遣いなく。河風先輩の強さがどれほどのものかは、私も身に染みてよくわかっていきますから」

「じゃあ、私のターンだね、ってさ。私は、ワイトプリンセスを召喚。

このカードが召喚した時、デッキからワイトプリンセス1体を墓地に送るってさ。さらにこの瞬間、墓地に送られたワイトプリンスはデッキに眠るワイト、ワイト夫人を1体ずつ墓地に呼ぶよ」

ワイトプリンセス 攻1600

お姫様ファッション、お坊ちゃん風、そしてクモの巣の張った喪服に紫色のローブ。様々な服を着ているものの、どれも中身は肉片1つ

残っていない動く骸骨だ。その骨が入り乱れ入り混じり、ゆつくりと積み上がっては消えていく。

「魔法カード、ドラゴンズ・ミラー龍の鏡を発動するってさ。墓地に存在するアンデット族、ワイトとワイト夫人の2体を素材に、融合召喚！冥府の扉を破りし者よ、其には死すらも生温い……冥界龍 ドラゴネクロー！」

「早い……！」

突如として無双の背後に現れる、固く閉ざされた冥界の門。だが、それを縛り付ける鎖が突如弾け飛んだ。内側から開いた扉から数多の靈魂と共に、冥界に潜む龍にして夢想の忠実なるしもべ……ドラゴネクロがその身を現世に滑り込ませる。

「バトル。ドラゴネクロ、攻撃だつて。ソウル・クランチ！」

「ですがそれは、通しません！シンゲツ！」

葵の号令に従い、黄昏の忍者がその2本の片腕で新たな形の印を組む。すると周りの空気が瞬時に凍り付き、シンゲツの体を中心に氷の網が張り巡らされてドラゴネクロを、そしてワイトプリンセスを縛り上げる。

「トラップ発動、機甲忍法フリーズ・ロック……このカードは私の場に忍者が存在し、相手が攻撃を宣言した瞬間をトリガーとして発動します。これにより河風先輩の攻撃は無効となり、さらにバトルフェイズも強制終了。またこのカードと私の忍者がフィールドに残っている限り、フリーズ・ロックにより相手モンスターは表示形式の変更ができません」

早速仕掛けられた後攻ワンターンキルを辛うじて防いだ、そう思ったのもつかの間、安堵の吐息すら吐かせる暇もなく夢想が追撃に動く。氷の網に全身を縛られ封じ込められたかに見えたドラゴネクロの瞳がいきなり輝き、大きく開いたその口から闇の炎がフィールド中を焼き尽くしにかかる。

その炎に炙られ、フリーズ・ロックの氷の網にわずかな緩みが生まれる。ドラゴネクロの巨体は動けずとも、それよりずっと小さなワイトプリンセスがドレスをばたつかせながらもその網から抜け出た。

「葵ちゃん、トラップ1枚じゃあ私は止められないよ、つてさ。速攻魔

法、月の書を発動。フリーズ・ロックにチェーンしてドラゴネクロを裏側守備表示にすることで、フリーズ・ロックのトリガーとなった『ドラゴネクロの』攻撃は『フリーズ・ロックの効果で』無効にならず、したがって攻撃を無効にした後で発生するバトルフェイズ終了効果は適用されないからね、だつてさ」

「効果の抜け道をついてきましたか……さすがに一筋縄ではいきませんね」

「ありがとう、つて。でも、ワンターンキルは躲されちゃったけどね。続けてバトル、ホワイトプリンセスでシンゲツに攻撃」

ホワイトプリンセス 攻1600↓黄昏の忍者―シンゲツ 攻1500（破壊）

青い LP4000↓3900

「シンゲツは破壊された時、デッキから別の忍者をサーチする力を持ちます。私がこの効果で加えるのは、機甲忍者アースのカードです」  
シンゲツをここで失ったのは痛手だが、このターンはこの程度の戦闘ダメージで済んだだけ良しとしよう。そう自分に言い聞かせ、新たな光の忍者を手札に加え入れる。

「なら私はこれで、ターン……」

「ではエンドフェイズに永続トラップ、明と宵の逆転を発動します。このカードは1ターンに1度手札から光または闇の属性を持つ戦士族を捨てることで、デッキから同じレベルでその対となる属性を持つ戦士族を1体手札に加えます。このターンでは光属性でレベル8のギヤラクシ・ナイト銀河騎士を捨て、デッキから闇属性レベル8の黄昏の忍者將軍―ゲツガを選びましょう」

「機甲忍者アース、それにゲツガ……なるほどね、やるじゃない、つてさ。いいよ、私はこれでターンエンドだつて」

手札に加わった2枚のカードから、早くも次のターンに何が起こるのかを察する夢想。とはいえサーチしたカードを隠すことは不可能、ここで動きが読まれるのは仕方がないと本人も割り切っている。

葵 LP3900 手札：3

モンスター：なし

魔法・罨：機甲忍法フリーズ・ロック

明と宵の逆転

夢想 LP4000 手札：3

モンスター：???（冥界龍 ドラゴネクロ）

ワイトプリンセス

魔法・罨：なし

「私のターン！」

「頑張れ葵ちやー……はい、わかったってばー」

またしても集中を削ぎに来た姉を睨みつけて黙らせると、もう1度このターンにやることを頭の中でおさらいする。まずは、下準備からだ。

「このターンも明と宵の逆転を使います。今度捨てるのは闇属性レベル4の忍者マスター HANZO、サーチするのは光属性の……じゃあ、成金<sup>ゴルド</sup>忍者にしておきましょうか。そしてサーチも終わったところで魔法カード、貪欲で強欲な壺を発動です。デッキトップ10枚を裏側で除外し、カードを2枚ドロップします……ふむ、これですか。まあいいでしょう、悪くないです。相手フィールドにのみモンスターが存在する時、手札の機甲忍者アースを特殊召喚することができます」

機甲忍者アース 攻1600

「さて、これでこちらの準備は整いました。場の忍者を素材としてアドバンス召喚する際、このカードはリリース1体で出すことが可能です。お出でませ葵流忍術、その扇の要！黄昏の忍者将軍―ゲツガ！― 三日月をあしらった兜をかぶる、鎧姿の忍者の頭領。その攻撃力はわずか2000と、自身のリリース軽減能力を計算に入れてもなお低い……だがこのゲツガ、その真の力は単純な数値などではない。

「ゲツガの効果を発動！攻撃表示のこのカードは1ターンに1度、墓地に眠りし忍者2体を場に呼び戻すことで守備表示にすることができます！甦れ、葵流の忍者軍団よ！」

ゲツガが自らの手にしていた槍を頭上で回転させた後地面に突き刺すと、大地が裂けてその割れ目から2体の忍者が音もなく飛び上がる。それを見たゲツガは重々しく頷き、最前線より1歩退いた位置か

ら戦局を見定めんとばかりにその場にどっしりと座り込んだ。

黄昏の忍者将軍―ゲツガ 攻2000↓守3000

黄昏の忍者―シンゲツ 攻1500

忍者マスター HANZO 攻1800

「河風先輩相手にいまさら言う必要もないでしょうが、私の場に忍者が戻ったことでフリーズ・ロックの表示形式変更不可の能力が復活していることをお忘れなきよう。さらにHANZOは特殊召喚に成功した時、デツキから新たななる忍者を加えることができます。2体目のシンゲツをサーチし……では、バトルです。シンゲツで裏側守備表示のドラゴネクロに攻撃!」

2本の片腕にそれぞれ忍者刀を握りしめた黄昏の忍者が駆け、振るわれたその刃が見事に竜の首を落とす。だが冥界の龍の生命力は、やはりこの世ならざる力を持っていた。切り落とされた首は落下する前にシンゲツの体を捉え、その牙が忍者の体ではなく、その魂を食いちぎった。

黄昏の忍者―シンゲツ 攻1500↓??? (冥界龍 ドラゴネクロ)  
守0 (破壊)

「ドラゴネクロの効果発動。ドラゴネクロと戦ったモンスターはその魂を抜き取られ、肉体は死ぬこともできずただ現世に留まり続ける、つてき。シンゲツと等しいレベル、攻撃力を持つダークソウル・トークンを私の場に特殊召喚する見返りに、貴女のシンゲツの体にはもう防御を行う魂は宿っていない、ゆえにその攻撃力は0になる、だつてさ!」

黄昏の忍者―シンゲツ  
ダークソウル・トークン 攻1500 ☆4

黄昏の忍者―シンゲツ 攻1500↓0

「ええ、わかっています……ですが、まだ私のバトルフェイズは続いています。HANZOでホワイトプリンセスに攻撃!」

「なら、ホワイトプリンセスのさらなる効果を……うーん、やっぱりいいかな、つてき。その攻撃は通すんだつて!」

「……?」

含みのある言い方に何かあると思いつつも、攻撃が通るのならば何

も問題ないと気持ちを切り替える。HANZOの投げつけた手裏剣は見事に骨のお姫様を撃ちぬき、骨の体を土に還した。

忍者マスター HANZO 攻1800↓ホワイトプリンセス 攻1600 (破壊)

夢想 LP4000↓3800

「葵ちゃんがダメージいったー!……もう、いいじゃないそんな怖い顔しなくっても!お姉ちゃんに可愛い可愛い妹の応援ぐらいさせとってば!」

「私はカードを1枚伏せて、ターンエンドですっ!」

普段では絶対見ることのできないであろうムキになって怒る葵というレアな絵面に、夢想の口元にも自然と笑みが浮かぶ。だが幸か不幸か、姉の方を向いていた彼女には気づかれなかったようだ。

「ふふっ、私のターン、ドロー。私はダークソウル・トークンをリリースして、アドバンス召喚するって。出でよ、龍骨鬼!」

龍骨鬼 攻2400

無数の人骨を組み合わせてできた骨の鬼。その巨体が一步を踏み出すと、体を構成する骨がべき履きと割れる不気味な音が鳴り響いた。だがそんなことにもおかまいなしに鬼が上半身を大きくのけぞらせ、次の瞬間その口から火炎弾を吐き出した。

「バトル。龍骨鬼でシンゲツに攻撃、つてき」

当然、その狙いはシンゲツ。というよりも、シンゲツ自身の効果により他の忍者への攻撃が不可能となっているこの状況では、シンゲツを狙うしかない。もつとも、彼女にとっても他のモンスターを狙うつもりはなかったのだが。

ともあれ、この攻撃が通れば大ダメージが入る。だがそんな攻撃を通すつもりは葵にはないし、正直なところ攻撃を仕掛けた夢想の方もここでダメージが通るとはまるで期待していなかった。彼女がそこまで甘い相手なら、先ほどのターンを凌ぐこともできずこのデュエルにも早々にけりがついていたはずだ。

となれば、恐らくはあの伏せカード。おそらく、あのカードの正体は……。そしてその読みに反応したかのように、にやりと笑った葵が

1枚のカードを表にする。

「そんな単調な攻撃、通しませんよ？ トラップ発動、忍法 変化の術！」

もはやその目に光もなく、生きることすらできずただその場に立っているだけの木偶と化したに思われたシンゲツの体から、いきなり白い煙が立ち上がる。全身がその煙に包まれてもまだかすかに見えるそのシルエットがうごめき、変形し、新たな忍者装束を織り上げてゆく。

「変化の術は忍者1体をコストに、そのレベルプラス3以下のレベルを持つ昆虫、鳥獣、獣族モンスターを特殊召喚します。私はレベル4のシンゲツをコストとし、お出でませ、レベル7……黒竜の忍者！」  
煙が晴れた。そこに立っていたのは、漆黒の装束に身を包んだ1人の忍者。だが見よ、その足元を。電灯に照らされ地に伸びたその漆黒の影……その形は、本当に人間の物だろうか？ 4つ足の獣が、眼前の獲物に飛びかからんと筋肉に静かな力を込めている、そんな形をしていないだろうか？

黒竜の忍者 攻2800

「これからは形勢逆転ですよ、河風先輩。せっかく始めたこのデュエル、どうせならその無双の女王の名前も返上していただきましょうか」

「その恥ずかしい名前、別に私が言い出したわけじゃないんだけどなあ、ってさ。でも、ここは攻撃を続けさせてもらうよ。龍骨鬼で改めてゲツガに攻撃、だつてさ！」

龍骨鬼の攻撃力では、ゲツガの守りを打ち崩すことはできない。それは互いによくわかっている。だが、龍骨鬼には効果がある。自身と戦闘を行った戦士族または魔法使い族を、その結果に関わらず破壊する効果が。シンゲツの退場は確かに大ダメージこそ防いだものの、同時に攻撃から身を呈して忍者を守るシンゲツの盾を失ったことに他ならない。何の制限もかかっていない今、再び吐き出された火球がゲツガに迫る。

「それが単調だと言っているんです。黒竜の忍者の効果発動、百獣忍



法ハイド・プレデター！私の場から忍者モンスターのHANZOと忍法カードのフリーズ・ロックをコストとして墓地に送り、その龍骨鬼をゲームから除外します！」

黒竜の忍者の足元の影が突然本体とは無関係に動き出し、文字通りに地を這う4つ足の獣が龍骨鬼に飛びかかる。その姿がすつぽりと影の中に入り込むと、骨の鬼が底なし沼のようなその影の中へ沈み落ちていった。

「また腕を上げたね、葵ちゃん。だったら私は、カードを1枚セットしてターンエンド」

「お褒めに預かりまして。このエンドフェイズに、このターンも明と宵の逆転を使わせていただきます。先ほど加えた光属性の成金忍者を捨て、デツキから2体目のHANZOを手札に」

夢想がいつになく攻めあぐねる中で、着々とデツキを回していく葵。切り札たるドラゴネクロもすでに堕ち、墓地のワイトもいまだ肥えているとは言い難いこの状況だけ見れば葵の圧倒的優位だが、まだまだここで気を抜くわけにはいかない。

葵 LP3900 手札：3

モンスター：黒竜の忍者（攻・変化）

黄昏の忍者将軍―ゲツガ（守）

魔法・罫：忍法 変化の術（黒竜）

明と宵の逆転

夢想 LP3800 手札：2

モンスター：なし

魔法・罫：1（伏せ）

「私のターン！ゲツガを攻撃表示にし、再び効果発動！甦りなさいHANZO、そして成金忍者！」

再び将軍が立ち上がり、その槍で大地を割って光と闇の忍者をフィールドに呼び戻す。

黄昏の忍者将軍―ゲツガ 守3000↓攻2000↓守3000

忍者マスター HANZO 攻1800

成金忍者 守1800

「特殊召喚されたHANZOの効果により、デツキから機甲忍者エアーを手札に加えます。そして闇の誘惑を発動、2枚ドロの後先ほどサーチした2体目のHANZOを除外します。よし、うまく引けましたね……成金忍者の効果発動！手札からトラップカード1枚を捨て、デツキからレベル4以下の忍者をさらに特殊召喚します！忍法影縫いの術をコストにお出でなさい、女忍者ヤエ！」

女忍者ヤエ 攻1100

成金忍者が小判を1枚頭上に放り投げると、その小判が爆発して中から緑色の髪をしたくの一が現れる。マフラーをなびかせ印を組むと、フィールドに小型の竜巻が起きた。その風に流され、夢想の場に唯一残っていた伏せカードが空高く巻き上げられる。

「女忍者ヤエは手札の風属性モンスターをコストに、相手フィールドの魔法・罠を全て手札に戻します。言うまでもありませんが、捨てたのはこれもたった今サーチした機甲忍者エアーです。では河風先輩、覚悟！まずは女忍者ヤエの攻撃です！」

葵の場の忍者軍団が臨戦態勢に入り、その先陣を切つてヤエが飛び出していく。風のように走り抜け、身を守るカードが何もない夢に一撃を加えた。

女忍者ヤエ 攻1100↓200↓夢想（直接攻撃）

夢想 LP3800↓3600

「あれっ？ダメージ少くない？」

再三の妹の言葉をまたもや無視した明菜が疑問を発する。だが、今回ばかりは葵にもそれを咎める余裕はなかった。攻撃力が急激に下がったのは、ヤエだけではない。場の全ての忍者が、急激な力の喪失に苦しんでいる。

忍者マスター HANZO 攻1800↓600 守1000↓

0

成金忍者 守1800↓600 攻500↓0

黄昏の忍者将軍―ゲツガ 守3000↓600 攻2000↓0

黒竜の忍者 攻2800↓700 守1600↓0

「ハ、これは……！」

「惜しかったね葵ちゃん、だって。私は手札から、ワイトプリンセスのもう1つの効果を発動したんだってさ。このカードを捨てることで、場に存在するすべてのモンスターへの攻守はこのターンの間そのレベルの300倍だけ減少するよ、って」

「レベル4でも攻守1200ダウン……とんでもない倍率ですね。だから特にゲツガと黒竜の被害がひどいわけですか。さすがは河風先輩です、ヤエのバウンスが通った時点で勝てたと思っただけですけどね……ですが、まだ私の忍者たちには戦う力が残っています。HANZO、黒竜の2体で続けてダイレクトアタック！」

2体の忍者が辛うじて立ち上がり、追撃に移る。本来の実力の半分も発揮できない状況とはいえ、それでもその連携攻撃は確実に夢想のライフを削り取った。だがその数値は、これまでの攻撃をすべて合わせてもまだ初期ライフの半分にすら届かない。今のターンを勝負どころと見て出し惜しみせずカードを使った葵にとっては、まるで褒められた結果ではない。

忍者マスター HANZO 攻600↓夢想（直接攻撃）

夢想 LP3600↓3000

黒竜の忍者 攻700↓夢想（直接攻撃）

夢想 LP3000↓2300

「耐えきられたのは痛手ですが、まだ負けたわけではありません。ターンエンドです」

「これでこのエンドフェイズ、ワイトプリンセスの効果は切れて葵ちゃんの忍者も復活する……」

明菜の言葉通り、全ての忍者が一時的な弱体化から復帰し元の攻撃力を取り戻す。だがそこに、夢想が一気に攻め込んだ。

「私のターン！墓地のワイトプリンスは、自身とワイト2体を除外することでデッキからワイトキングを呼ぶことができるって。墓地ではワイト扱いになるワイトプリンセス2体を除外して、おいで、ワイトキング！」

床を割り、1本の骨の腕が飛び出す。その穴をこじ開け、ゆっくりと1体の骸骨が這い上がってきた。顎が外れるほどに大口を開けて

笑いながら、満を持して骸骨の王が忍者軍団と対峙する。

ワイトキング 攻0

「出ましたね、ワイトキング……！ですが、今の墓地コストですでに河風先輩の墓地にワイトは0枚。墓地のワイトの数が攻撃力に直結するワイトキングをそこまでして出したところで……！」

葵の言葉は正しい。初手の龍の鏡、そして今のワイトプリンスと墓地除外を連打してきた夢想の墓地のワイトは既に根こそぎ除外されつくしており、結果とし今のワイトキングは素のワイトにすら劣る程度の攻撃力しか持ち合わせていない。だが、彼女は忘れていた。つい先ほど自分の手でバウンス下ばかりのカードの存在を。

「速攻魔法、異次元からの埋葬だってさ。除外されたワイトプリンス2体とワイト夫人の3体を墓地に戻して、それぞれの効果で墓地に送られた瞬間自身のカード名をワイトとして扱うよ、だって。これで墓地のワイトは3体、ワイトキングの攻撃力も上がるからね、って」  
ワイトキング 攻0↓3000

「さらに続き、行くよ。手札からワイトメアの効果を発動！このカードを捨てて、除外された私のワイトを墓地に戻すんだって。そしてワイトメアも、墓地にあるかぎりワイトとして扱うよ」

ワイトキング 攻3000↓5000

「このままヤエが攻撃を受ければ3900ダメージ、ですか。それは流石に見過ごせない……やむを得ませんね。ならばこちらも黒竜の忍者の効果をもう1度発動、百獣忍法ハイド・プレデター！私の場から黒竜の忍者と変化の術を墓地に送り、女忍者ヤエを除外します！」

再び影の獣が唸り、自群のヤエをその中に引きずり込む。だが、それは諸刃の判断でもある。変化の解けた黒竜の忍者の姿が次第に薄れ、風と共に消えていく……すると夢想の龍骨鬼が、そして葵のヤエが再びフィールドに帰還した。

「変化の術が場を離れた時、この効果で呼び出したモンスターもまた破壊されます。もっとも今回は、その黒竜の忍者も自身のコストに使用したのであまり関係ありませんが。そして黒竜の忍者は自身が場を離れた時、それまでに彼が自身の術で除外したモンスター全てを場

に戻ってしまう効果を持ちます」

女忍者ヤエ 守200

龍骨鬼 攻2400

「なるほど、それで私のモンスターも？確かにこのターンでの敗北は免れたみたいだけど、ってさ。それならせめて、ダメージは通しておこうかな。バトル、ワイトキングでHANZOに攻撃！」

ワイトキング 攻5000↓忍者マスター HANZO 攻18

00（破壊）

葵 LP3900↓700

「くうっ……！」

「続いて龍骨鬼。ゲツガを攻撃して反射ダメージを受けるけど、モンスター効果でゲツガには破壊されてもらうからね、ってさ」

骨の拳が忍者の1人を吹き飛ばした横で、放たれた火球をゲツガが槍で切り払う。しかし戦士を殺すあやかしの炎はそれだけでは消えず、むしろ槍を伝ってその体を包み込み、内と外から忍者將軍を焼き尽くした。

龍骨鬼 攻2400↓黄昏の忍者將軍—ゲツガ 守3000

夢想 LP2300↓1700

「またまた形勢逆転だね、だって。カードをセットして、私はこれでターンエンド」

葵 LP700 手札：2

モンスター：女忍者ヤエ（守）

成金忍者（守）

魔法・罨：明と宵の逆転

夢想 LP1700 手札：0

モンスター：ワイトキング（攻）

龍骨鬼（攻）

魔法・罨：1（伏せ）

「やってくれますね、本当に……私のターン！魔法カード、マジック・プランターを発動です。私の場から明と宵の逆転を墓地に送り、カードを2枚ドロ―します」

いくらここでドロースーツを引いたとはいえ、逆転のチャンスは恐らくあと1回あるかどうかというところだろう。またもや逆転された盤面を見ながら、葵はそう結論付けた。墓地にあれだけのワイトが溜まってしまった以上、圧倒的攻撃力を持つワイトキングを出す方法はいくらでもある。だが不思議と、諦める気持ちは微塵も湧いてこなかった。

いや、違う……すぐにそんな疑問を打ち消した。諦めないのは、不思議でもなんでもない。この私は、葵・クラディーは、デュエリストなのだから。そしてデュエリストは、どんな時も自分の信じるモンスターと固い絆で結ばれている。たった今引いたカードを見て、かすかな笑みが彼女の唇に浮かんだ。そしてそのカードを、そのまま場に出す。私はどんな相手にも、このカードと共に最後まで戦い続ける。

「女忍者ヤエと成金忍者の2体をリリースし、アドバンス召喚！ さあご覧あれ、これこそが葵流忍術最強のしもべ！ 銀河眼の光子竜ギョラクシーアイズ・フォトン・ドラゴン！」

銀河眼の光子竜 攻3000

全身から光子を放つ白き光の竜。葵のエースモンスターが、ついに召喚された。すぐさまその全身の光を強め、放たれた光のプレスが龍骨鬼の胸のコアを消し飛ばした。

「ワイトキングには今は敵いません……が、まずそちらの骨には消えていただきます。行きます。銀河眼で龍骨鬼に攻撃、破滅のフォトン・ストリーム！」

銀河眼の光子竜 攻3000 ↓ 龍骨鬼 攻2400 (破壊)

夢想 LP1700 ↓ 1100

「カードを2枚伏せ、ターンエンドです」

伏せカード、そして場の銀河眼。これで今できる事はすべてやった、後はこのデッキをただ信じ、次のターンを全力で迎え撃つまでだと静かに闘志を燃やす葵。明菜も今だけは妹の集中を守ってあげようと、何も言わずに気配さえ殺してただじっと2人の勝負を見つめている。そしてそんな姉妹とは対照的に、こんな詰め局面になってもなお自然体のまま夢想がカードを引いた。

「私のターン、ドロ……そろそろ終わらせるよ、葵ちゃん。ワイトキングの2体目を召喚、だつてさ」

骸骨の王が、さらに増える。いくらこうなることも想定済みとはいえ、6000打点が2体も並ぶそのプレッシャーは無視できるものではなく、葵が小さく息をのむ音が明菜の耳にも届いた。

ワイトキング 攻6000

「トラップ発動、貪欲な瓶！このカードは私の墓地のカード5枚をデッキに戻すことで、カードを1枚引きます。私が選ぶカードはHANZO、貪欲で強欲な壺、リリース・ロック、影縫いの術、変化の術です」

「へえ……？」

夢想の意味ありげな視線の意味は分かっている。このカードは、先ほどのターンで銀河眼を引く前から手札にずっとあつたもの。なぜ使わなかったのか、そしてまたなぜこのタイミングで使うことにしたのか。それを知りたいというのだろう。

「だけど、そこに疑問を持つてくれたことはむしろ葵にとつては思わぬ僥倖だった。答えようとする動作のひとつひとつがたつた今引いたカードを見た時の表情の動き、そして咄嗟に隠しきれなかった驚きの色……そういったものをすべて誤魔化してしまえるいい隠れ蓑になったからだ。このカードを引いた以上、絶対にその存在を悟られるわけにはいかない。」

「発動コストの関係上、どうしてもデッキのカードを増やさなければ使えませんでしたからね。なるべくならまだ使いたくはなかったのですが、ゲツガさえも倒れた今となっては今更墓地のカードを後生大事に抱えているわけにはいきませんから。セットしておいた方がよかつたのは間違いないでしょうけど、破壊対象に選ばれたりでもしてせつかく減らしたデッキをまた増やすのはつまりませんでしたので」

「夢想は何も言わないが、とりあえず今の答えで納得してもらえたらいい。それ以上追及することもなく、ワイトキングに攻撃指令を下した。」

「バトル、ワイトキングで銀河眼の光子竜に攻撃、だつてさ」

「やらせはしません！トランプ発動、忍具・鎖付きブーメラン！このカードは発動後銀河眼の攻撃力を上げる装備カードになると同時に、攻撃モンスターを守備表示に変更します！」

銀河眼がその腕で器用に刃を構え、そこから伸びた鎖がワイトキングの体を縛り上げる。その独特な攻撃力の算出方法から圧倒的な爆発力を誇るワイトキングも守備力は0、一度表示形式を変えられてはどうにもならない。

銀河眼の光子竜 攻3000↓3500

ワイトキング 攻6000↓守0

「むっ……」

わずかにむくれる夢想。その表情を見た時、葵は9割がた勝利を確信した。

実を言うとやらせはしない、などともっともらしいことを言ってみたが、今の鎖付きブーメランは彼女にとってはあくまでただの匣でしかない。夢想の場に唯一伏せられた謎のリバースカード、もしあれが仮にこちらのカードを無効にする何らかのカウンターカードであるならば、何かよほどの理由がない限り鎖付きブーメランを無効にするため発動してきたはずだ。だが、それをしなかった……と、いうことはつまり、あのカードがカウンター系統である可能性は大きく下がった。それどころか、なんならただのブラフである可能性まで出てきたことになる。だとすれば、貪欲な瓶で手札に引き込んだ彼女にとって最後の切り札、ディメンション・ワンダラーの発動を止めることは不可能になる。

そう、ディメンション・ワンダラー……いわゆる手札誘発の1体であり、その効果は場の銀河眼の光子竜が効果によりモンスターを除外した際、手札から捨てることで相手に3000ものダメージを与えるというもの。葵は思う。まさかいくら夢想といえど、あんなギリギリになってから1枚だけ引いたカードがよりにもよってこのモンスターだなんてことは思いもよらないだろう。おそらく彼女は、このまま2体目のワイトキングで追撃をしてくるはずだ。バトルフェイズ



開始時に唯一の伏せカードだった鎖付きブーメランは使わせたのだから、あとは銀河眼に効果を使わせてその装備を引きはがさせるために。だがその瞬間、3000の効果ダメージが彼女に降りかかることとなる。わずか500の攻撃力を下げさせるために、敗北という代償を払ってもらおう。万一彼女が何かを警戒して攻撃をしてこなかったとしても、それならそれでこちらから攻撃し除外効果を使えばいい。

「……なら、バトル。もう1体のワイトキングで改めて銀河眼に攻撃、つてさ」

だが、夢想は引かない。ワイトキングが、彼女の予想通り動きだした。とはいえ……さらに彼女は思考を引き絞る。もうひとつだけ、可能性がないわけではない。それは、夢想の伏せカードがカウンターカードではあるが、ピンポイントでモンスター効果だけを無効にする類のものであることだ。それならば鎖付きブーメランに無反応だった理由にもなるし、なおかつ銀河眼か、デイメンション・ワンダーか……どちらにせよその発動が無効になってしまえば、この最後のチャンスも徒労に終わってしまう。そうなってはもうお手上げだ。

こればかりは、そうでないことをただ祈るしかない。

「銀河眼の効果発動、銀河忍法コズミック・ワープ！このカードと相手モンスターがバトルするとき、互いのモンスターを一時的にゲームから除外します！」

「でもこれで鎖付きブーメランは装備対象の消滅による自壊が起きるよ、つてさ」

「承知です！」

ワイトキングの骨の拳が命中した瞬間に銀河眼の全身がこれまで以上に激しい光を放ち、目も眩むような閃光とともに2体のモンスターが次元の狭間に消えていく。そう、ここまではいい。わかっている、予想通りの流れだ。あとはこのカードさえ、通れば……！

だが次の瞬間、そんな彼女の想いは打ち砕かれた。デイメンション・ワンダーの効果が発動しようとした寸前、場に再び閃光が走ったかと思うと、銀河眼だけが再び場に現れたのだ。しかもその手には

失われたはずの鎖付きブーメランが握られており、これはつまり除外自体が行われていないことを意味している。

「トランプ発動、闇霊術―欲。私は闇属性モンスター、つまり銀河眼の効果対象になったワイトキングをリリースして、デツキからカードを2枚ドローできるつてき。だけど相手はこのカードの発動を、手札の魔法カード1枚を見せるだけで無効にできる。どう、葵ちゃん？」

「……いいえ、通します」

彼女の手札は、デイメンション・ワンダラーを含む2枚。だがその2枚はどちらもモンスターであり、闇霊術を無効にすることはできない。それにどちらにせよ、銀河眼の効果は除外するモンスター2体が効果解決時に場に残っていない限り不発となってしまうため、コストとしてリリースされた時点でどうしようもない。

だが、結果としてまだ銀河眼とデイメンション・ワンダラーの2枚は彼女の手元に残っている。夢想の行為は確かに予想外だったが、結局のところ敗北を先延ばしにただけに過ぎない……そう自分に言い聞かせた。そうだ、この2枚が揃っている限り、私に負けはない。無双の女王に、今日こそは土をつけてみせる。

だがそんな彼女の決意を打ち砕くように、夢想は引いたカードを見て笑う。その笑みは葵にとっては勝利を掴んだものの笑みであったが、同時に明菜の目にはそれは、どこか寂しそうにも見えた。ああ、またか。また私は、勝ち続けるのか、と。

「……ありがとう、葵ちゃん。楽しかったよ、つてき。速攻魔法、エネミーコントロールを発動。葵ちゃんがさつき守備表示にしたワイトキングをリリースして2つ目の効果を発動、銀河眼の光子竜のコントロールをこのターンに限り私が見るよ、だって」

「そんな、これでは……」

銀河眼が奪われ、葵の場のモンスターがいなくなる。デイメンション・ワンダラーは相手の場の銀河眼が効果を発動した場合でも効果を使えるものの、そもそも銀河眼は相手モンスターとの戦闘でしか効果を使えない。

敗北の二文字が重くのしかかる中、銀河眼のブレスが部屋を白く染

めた。

「バトル。銀河眼の光子竜でダイレクトアタック、破滅のフォトン・ストリーム……つてさ」

銀河眼の光子竜 攻3500↓葵（直接攻撃）

葵 LP700↓0

「また負けましたか……本当、なんなんですか河風先輩……」

「でも葵ちゃんカッコ良かったよ！お姉ちゃんもう感動しちゃった！」

「あーはいはい。絶対いけたと思っただんですけどね」

悔しそうに笑う葵に、夢想も屈託のない笑顔を返す。

「葵ちゃん、また腕が上がってたね、つてさ。前よりもさらに強くなってたよ、だつて」

「それで勝てなかったら世話ないんですけどね」

和やかに語り合う2人の横で、明菜がうーんと背伸びした。自然と強調される胸のふくらみに対しなぜ姉妹なのにスペックだけではないのかとこんなところにまで格差がつけられなくてはならないのかとじつとりとした視線を送る葵のことを知ってか知らずか、明菜が明るく話しかける。

「じゃあ、お姉ちゃんはそろそろ帰るからね。楽しかったよ、葵ちゃん」

「あ、そうなんですか。わかりました姉上、では」

「少しは引きとめてよ！大事な大事なお姉ちゃんなんだよ!？」

ぶーぶー言いながらも手早く荷物をまとめ、入ってきたのと同じ天井裏から出ていこうとする明菜。だがその瞬間、突然アカデミアが揺れた。それは文字通り、ほんの一揺れ……何かがこの島に降り立ったような、ごく小さく短いものだった。

「地震？あれ、止まりましたね」

「んー……多分だけど、外が怪しいかな。お姉ちゃんは誰かに見つかるわけにはいかないからこの隙に島を出るけど、葵ちゃんと河風ちゃ

ん、見に行ってみたら？じゃあね、また来るねっ！」

その言葉を最後に今度こそ天井に身を滑らせ、忍者らしく一切の痕跡も残さずに消えていった明菜。残された2人は思わず顔を見合わせ、ややあつて同時に外に出た。なぜだか知らないが、ある予感がしたのだ。こんな非常識なことをやつても不思議がない人間など、彼女たちの知る限りあの明菜と……それと、もう1人しかない。

外に出て走ると、すでに人だかりができていた。さらに近づくと、その興奮したざわめきが聞こえてくる。その何かを取り囲んでいる生徒たちを強引に押しつけて円の内側にたどり着いた瞬間、夢想の目に数週間ぶりの明るい光が宿った。何かを言おうとして言葉に詰まり、あふれる涙のせいで視界がにじんで何もかもがぼやけて見える。それでもどうにか息を吸い、やっとの思いでただ一言だけ絞り出した。

「……お帰り、清明！」

## ターン108 鉄砲水と死神の黒翼

『聞いているか、遊野清明！ここで会ったが百年目、俺たち二人の因縁も、そろそろけりつけようじゃねえか！』

校長室に入って開口一番、巨大なモニターから聞こえてきたのは聞き覚えのある大声だった。

僕ら……そう、自分から向こうに残った三沢、そして完全に行方不明となったアモン以外の死んだと思っていた僕ら全員は、デュエルアカデミアで蘇った。少し遅れて帰ってきた十代は何も教えてはくれなかったけど、それでも皆、なんとなくわかった。きつと、彼に救ってもらったんだろう。僕があれだけ手を尽くして、新たな力を手に入れてまで戦い抜いてもできなかったことをやってのけたんだから、まったく大したヒーローだ。

そしてそれから、もう数週間が過ぎた。最初は情報統制の解除や事後処理に追われて忙しかったアカデミアにも平和な日々が戻り、随分久しぶりにまともな学生生活が始まるうとしていた。

その矢先である。僕と……それと万丈目が、校長室に呼び出されたのは。レッド寮の改造、学生の身でありながら大っぴらな商売と、やましいことと後ろ暗いことしかない僕だけならまだしも、万丈目とは珍しい。なんだろうと首をひねりつつ2人して繰り出し、そして冒頭に戻る。

それにしても、相変わらずこの男はやかましい。モニターの中で無意味に胸を張る、忘れもしない顔……ノース校の現トップにして元サnder四天王の頭、鎧田の顔を見ながら思ったことは、多分僕も万丈目も同じだったろう。

「今朝、ノース校からこんな映像が届きました。どう思いますか、2人とも？」

そこで一度映像を止め、鮫島校長が呆れと諦め、そして面白がっている雰囲気がないまぜになった表情で入ってきた僕らを見る。

「いや、どうと言われても……」

「それで、校長。鎧田の奴、一体なんでこんなものを送ってきたんで

す」

反応に困る僕に変わり、万丈目がもつともな疑問を口にする。それもそうだろう、と頷いて校長が再生ボタンを押すと、よほど全力で叫んだらしく少しスツとした顔になった画面の中の鎧田も再び喋りだす。なんだ、まだ続きがあるのか。

『あースツキリした……で、だ。今年もやろうぜ、毎年恒例の俺らノース校と、お前らアカデミア本校の対抗合戦をよ。はつきり言っておくがな、清明。どうせこれ見てんだろ？俺とお前の戦績は1勝1敗、こりやあどうあつても俺たちの卒業前に決着をつける必要がある。ここまで来て引き下がるようなら、それは男じゃねえからな』

「1勝1敗で……洗脳状態の時までカウントすんの？」

「言つてやるな。あいつは2年前からそういう男だった」

そんな会話をする僕らのことなど、当然画面の中の彼は知る由もない。

『……ただまあ俺らだって何かと忙しいんだ、あんまり派手にお前ら本校の相手してやれるほど暇じゃない。そこで、だ。今年は無駄なバトルロイヤルも勝ち抜き戦も抜きだ。俺とお前、代表2人のタイマン1発で決着つけようじゃねえか。日付はきっかり3日後の正午、首を洗って待つてやがれ！』

そこで再生が終わった。なんとなく、ノース校校長のあの気弱そうなんだか気が強いんだかよくわからない顔が頭をよぎった。きつと今年も、鎧田に押し切られたんだろうなあ。ノース校から本校に来るなんて、あの人数を連れてくるとなると船の燃料代だってえらいことになるだろうに。

「……ねえ万丈目、万丈目が最初にこのイベント始めた時からずっと思ってたんだけど、なんで毎回ノース校側が条件出してくんの？たまにはこっちが決める自由とかないの？」

「なぜ俺を見る。俺だつてもう本校の人間だぞ」

「いや、いろいろ考えるとどうも元凶が隣にいる気がして」

まあ、本気で追い詰めるつもりはない。ちよつと答えづらい質問で追い込んで遊んでみただけだ。話が終わる気まで静観する気だった

らしい鮫島校長の視線に気づき、ため息一つついて答えを返す。色々言いはしたけれど、そんなの答えは決まってる。

「上等。そんなに負け越して卒業したいなら、一丁デュエルと洒落込もうじゃないの。こう伝えといてください、僕の方はいつでもいいですから」

「よろしいんですね？」

「そりゃあもう。あそこまで言われてすつこんでるようじゃあ、それこそ男がすたりますから」

そこまで言ったところで、いきなり背中に衝撃が走る。何事かと振り返ると平手でバン、と叩いた張本人の万丈目が、にやりと笑っているのが見えた。

「よく言った、清明。一応あれでも俺の元手下だ、あいつらの手前お前のことをおおつぴらに応援してやるわけにはいかんが、3日後は楽しみにしているからな」

「そりゃどうも。じゃあ、これで失礼しまーす」

奴に会うのもかれこれ1年……いや、光の結社関係のごたごたが全部終わるまであいつら島に居たからせいぜい半年ぶりか。それでも意外と楽しみにしている僕がいることに、自分でも少し驚いた。

その日の夕食の席では十代にもそのことを報告しておいたが、残念ながら期待していたような反応は貰えなかった。特に口を挟むことなく最後まで聞いた後、たった一言だけ。

「ふーん。頑張れよ」

そう言っただけ席を立とうとしたのは、いくらなんでもひどいと思う。いいから当日は見に来い、と厳命はしておいたけれど、あの様子だと来るかどうかは半々といったところだろうか。

まったく、どうもあの世界から帰ってきてからというもの、十代の様子がおかしい。大人びたといえれば聞こえはいいけれど、なんか全体的に冷めた様子が目立つ。前みたいに力いっぱい笑うようなこともすっかりなくなっただし、そのうち何か考えないといけないだろうか。十代がいつまでもこんな調子だと、毎日1つ屋根の下で顔付きあわせてる僕の調子が狂う。

そんなことを考えていたりしているうちに、気づけば3日などあつという間に過ぎていた。ああ、こんなに何事もなく日々が過ぎるなんて、一体どれだけぶりだろうか。

そんな感じでしんみりしていたら、ついにその時が来た。付いてきた万丈目や学校トップの立場として出迎えないわけにはいかない鮫島校長らと一緒に港に出てじつと水平線を眺めていると、小さな点のようなものがその先に見えてきた。やがてその点はぐんぐん大きくなり、やがて何隻もの船団となって近づいてくる。やはりというべきか、その先頭を走る船の先頭には鎧田が立っていて、こちらを認めて大きく手を振る様子が見えた。

「なんだなんだ、出迎えかー!? 久しぶりだなコノヤロー! あ、サンダー! お久しぶりです、元氣してましたかー!」

「相変わらずうるさい奴だな、お前は! そんな遠くからわざわざ挨拶しなくていいから、早く上がってこい!」

負けず劣らずの大声で返す万丈目の顔は、言葉とは裏腹に実に生き生きとしていた。面倒見のいい万丈目のことだ、去年別れてからもサンダー四天王たちのことはずっと気にかけていたんだろう。留学生が来るときも、ノース校の名前には1人だけ反応してたし。

葵ちゃんには試合中の売り子としてなるべく愛想よく振る舞うことと、万丈目のコネを使い万丈目グループ経由で仕入れておいた大量の缶ジュースやらこの3日で作りためておいた菓子類やらをどんな手を使ってでも全品売りさばくことをお願いしておいた。

最初にこのお願いをした時の『何考えてんですか先輩は?』とでも言いたげなゴミを見るような目は忘れられないけど、今日がビジネスチャンスなのは動かしやうのない事実。それに彼女なら、なんのканの言っても後者はきっちりやってくれるだろう。前者については、とりあえず言っではみたけどぶっちゃけそんな期待してない。普段の僕に対するみたいにあまり手厳しく毒を吐かずに、そつなく対応して



もらえれば十分だ。ここで重要なのは実質男子校状態になっているノース校からくる健全な男子高校生に、葵ちゃんという客観的に見てもかなりの美人を売り子としてぶつけることだ。去年は光の結社絡みのごたごたでそれどころじゃなかったけど、これは絶対うまくいくはずだとはあの頃からずっと思っていた。まさか実現するころには僕が3年になってるとまでは思わなかっただけで。

というわけで本業の方は心置きなく葵ちゃんに押し付け、僕はこちらに集中すればいい。一番大きなデュエル場の中心で鎧田と向かい合い、水妖式デュエルディスクを展開する。

「おおっ、なんだそれ!?!どこで売ってんだそんなの!?!」

「あ、わかるー?でも悪いけど一点物でね、予備もなければ売る気もないよ」

この三沢謹製デュエルディスクは、どう見てもオーバーテクノロジーの域をはるかに通り越した代物だ。どう考えても目立ってしようがないからこそこの世界では使わずにしようかとも一時は思ったが、それは霸王軍に対抗するためこの試作品を一生懸命作り上げた三沢に対して失礼というものだろう。いつか彼が帰ってきたらアツプグレードとかしてもらえるかもしれないし、それまではテスター役の意味も込めて使い続けるつもりだ。

……ただ、やっぱこれ目立つよね。僕にとって幸いだったのは、こんな雑な説明でも納得するほど鎧田が大雑把、というか無頓着だったことだ。

「そっか、なら仕方ねえな。まあお前らが本校だしな、アイテムも回つてきやすいんだろ。だがな、デュエルはディスクでやるわけじゃねえ」

いやデュエルディスクでやるんですが。これ以上ぐだぐだ漫才するのめどうかと思うので、喉まで出かかったその言葉はぐつと飲み込んだ。

もう、本校とノース校の観客の期待値は最大まで高まっている。いいねえこの感じ、最近では野外でやたら暗い中ひとりぼっちの戦場ばかりだったんだ、ギャラリーたくさんつてのは悪くない。いよいよ

もって元の世界に戻ってきたんだなあ、なんてしみじみできる。

「俺たちの実力でやるもんだ！行くぜ、清明！」

「上等上等！わざわざ来てもらったところ悪いけど、返り討ちと洒落込んであげようか！」

「デュエル!!」

先攻を取ったのは……僕。 鎧田相手に後攻を譲るのはあまり嬉しくない……というより、僕のデッキは相手の出方で強さが変わる後攻特化型だ。もう少し先攻向きのカードも入れたほうがいいかもしれない、なんてことを思いつつ、まずは様子見から入ることにする。

「グレイドル・アリゲーターを守備表示で召喚！さらにカードをセツトしてターンエンド、どっからでもかかってきな！」

床に広がる銀色の水たまりと、そこから湧き出す緑色のワニ。普段はインパクトとのコンボ攻撃ばかりしているから、こうやって壁として配置するのは久しぶりだ。

グレイドル・アリゲーター 守1500

「なんだなんだ、それで終わりか？そんな程度で俺に勝とうってんなら……遥かに遅いぜ！俺のターン、ドロロー！永続魔法、黒い旋風を発動だ。そして来い、ブラックフェザー B F | 蒼炎のシユラ！」

B F | 蒼炎のシユラ 攻1800

巨大な腕を持つ、二足歩行する鳥人間。黒というより藍色に近い翼をはためかせると、フィールドに置かれた黒い旋風のカードからその名の通り風が吹いた。

「黒い旋風は俺がB Fの召喚に成功した時、その攻撃力以下の攻撃力を持つ同胞をサーチできる。俺はこの効果で月影のカルートを加えるぜ。バトルだ、シユラ！」

鋭い爪の二連撃が唸り、アリゲーターの体が深々と切り裂かれる。だがその傷口から血が飛び出すようなことはなく、かわりに滲み出た銀色の液体がシユラの爪が触れた場所から翼に、腕に、そして上半身全てに浸透していく。

「なんだこれ、気色悪っ。とにかく、シユラがモンスターを戦闘破壊したことで――」

「わざわざ攻撃お疲れ様。グレイドル・アリゲーターが戦闘破壊されたこの瞬間——」

「効果発動！」

互いに声がハモったその瞬間、2体のモンスターの効果が同時に発動された。僕のアリゲーターはその寄生効果を使い、額に銀色の紋章が浮かんだシユラのコントロールをこちらに移す。一方鎧田のフィールドもそれで空にはならず、シユラ最後の抵抗により呼び出されたターバンを被り器用に翼を丸めて弓を持つ漆黒の鳥がすでに狙いをつけていた。

BF―上弦のピナーカ 攻1200

「へえ……」

「俺のモンスターが盗られるとはな。だがシユラの効果により攻撃力1500以下のBF、上弦のピナーカを効果を無効にして特殊召喚させてもらったぜ。そしてお前も見ただろ？ さっきサーチしたこのカードをよ！ ピナーカでシユラに攻撃、このダメージ計算時に手札から月影のカルートの効果を発動！ 手札からこいつを捨てて、ピナーカの攻撃力はこのターンの間1400ポイントアップする！」

ギリギリと引き絞られた弦から1本の矢が放たれ、正確無比なその一撃がシユラの心臓をストレートに射抜く。

『少し痛いけど、まあ悪くない。あのカードを下手に温存されるよりはずっとマシだ』

「うん、わかっている。まだまだこの程度……！」

BF―上弦のピナーカ 攻1200↓2600↓BF―蒼炎のシユラ 攻1800 (破壊)

清明 LP4000↓3200

「どうだ？ さらにカードを1枚セットして、ターンエンドだ」

まさかこの序盤で躊躇なくカルートをぶつこんでくるとは思わなかったが、今のターンの攻防は間違いなくこちらの負け。さすがはノース校四天王のボス、アリゲーター1体でノーダメージに抑えられるほど甘い相手じゃない。

とはいえこちらでもストレートに負けるつもりはない、すでに次への

仕込みは済んでいる。

清明 LP3200 手札：3

モンスター：なし

魔法・罠：1（伏せ）

鎧田 LP4000 手札：3

モンスター：BF―上弦のピナーカ（攻）

魔法・罠：黒い旋風

1（伏せ）

「僕のターン！相手フィールドにのみモンスターが存在することで、手札からカイザー・シースネークを特殊召喚。ただしこの方法を使う場合その攻守は0になり、レベルも半分の4に下がる。そしてトラップ発動、グレイドル・スプリット！このカードを装備カードとしてシースネークに装備して、攻撃力500ポイントアップ！」

カイザー・シースネーク 攻2500↓0↓500 守1000↓

0 ☆8↓4

「攻撃力たかだか500……？いいぜ、何するつもりか見せてもらおうじゃねえか」

「もちろん。グレイドル・スプリットはこのカードを墓地に送ることで装備モンスターを破壊し、さらにデツキからグレイドルを2種類リクルートすることができるのさ。出て来い、グレイドル・スライム！さらにもう1体は……ここは用心しますかね、グレイドル・コブラを特殊召喚！」

大海蛇の巨体が消え、後に残ったのはグレイ型宇宙人を模したスライムに、赤いコブラを模したグレイドル2体。よしよし、これでこっちも問題なく行けそうだ。

グレイドル・スライム 守2000

グレイドル・コブラ 攻1000

「モンスターが2体……」

「そっちの得意なフィールドはわかってるんだ、それまでにやりたいだけやらせてもらおうさ。このグレイドル・スライムをリリースしてアドバンス召喚、氷帝メビウス！」

6つの属性のうち、最も僕が得意とする属性……水を司る氷帝が、周りの空気を凍てつかせつつ場に現れる。急激な温度変化のせいであたりに白い靄が立ち込め、その中を縫うように氷の槍が飛んだ。「メビウスの効果発動、フリーズ・バースト！アドバンス召喚に成功したことで、その伏せカードと黒い旋風を破壊させてもらうよ」

「まあ当然、そう来るよなあ……黒い旋風はくれてやるがな、もう片方は譲らないぜ！速攻魔法、スワローズ・ネストを発動！俺の鳥獣族モンスター、つまりピナーカをリリースすることで、それと同じレベルの鳥獣族を1体デッキから特殊召喚する！ピナーカのレベルは3、よって同じくレベル3の白夜のグラディウスを特殊召喚する！」

BF―白夜のグラディウス 守1500

ピナーカの姿が空高く飛び去って行き、銀色に輝く鎧をガチガチに着込んだ鳥人間のモンスターが代わりに着地する。それはまあいい、ただ破壊されるのを指をくわえて見ているようなキャラではない。ただ問題は、それがスワローズ・ネストだったことだ。

「嘘、なんでそんなカード入ってるの!？」

スワローズ・ネストは鳥獣族専用の優秀なサポートカードだ。鳥獣族で統一された「BF」に入っているも本来なら何もおかしくはない。だがあの鎧田、あの男のデッキはいわゆる変態構築……通常とはまるで違ったコンセプトを前提として組まれたものだったはずだ。それを考えればはつきり言って、鳥獣族サポートなんて事故要因にしかないはずなのだが。

「なんだ、負け惜しみか？そりや確かにさっきのターンで使つてればさらに1000ぐらいのダメージは稼げたらうけど、防御カード抜きでターン回すのはちよつとなあ」

「いやそつちじゃなくて、そのデッキ確か……」

「ああ、そういうことか。これぐらいなら教えてやるが、少し枚数を減らして純構築に寄せてみたんだよ。子供<sup>ガキ</sup>が見たらトラウマになりかねないって言われちゃったからな」

「言われたって……誰に?」

「その話は後だぜ！グラディウスは1ターンに1度戦闘破壊されない

モンスター、メビウスの攻撃は寄せ付けないぜ！」

確かに、一見するとこの状況は僕にとって圧倒的不利だ。ただもしもの時のために保険を打っておいたのが、まさか本当に役立つとは。

僕が合図を送るとメビウスの横にいたコブラの体がでろり、と効果音の付きそうな勢いで溶け崩れ、銀色の液体となったグレイドルが足元からグラディウスに迫ってゆく。

「カードを1枚伏せてターンエンド。この瞬間、グレイドル・スプリットの効果により呼び出したコブラは自壊するよ。ただしただの自壊じゃない、トラップの効果で破壊されたグレイドル・コブラは相手モンスターに寄生して、そのコントロールを操る！シユラに続いて白夜のグラディウス、そのモンスターもこっちにもらおうか！」

「はあ!?またかよ、クソッ！」

足元から鎧の隙間を縫って浸透したグレイドルの力で、グラディウスの額にも銀色の紋章が浮かび上がる。ダメージこそ与えられなかったけど、これで鎧田の場は今度こそがら空きだ。

「だがな、俺だつてただやられるわけじゃねえ。上弦のピナーカは墓地に送られたターンのエンドフェイズに、デッキから別のBFを1体サーチすることができ。さあ、お前の次の相手はこのカードだけ。そして俺のターン、手札から朧影のゴウフウを特殊召喚！このカードは俺の場にモンスターが存在しない時に特殊召喚でき、さらにリリースできない朧影トークン2体を特殊召喚する。そして俺の場にBFが存在するとき、さつきピナーカの効果で加えた漆黒のエルフェンはリリースなしで召喚できる！」

不気味な3本の竜巻が吹き、真ん中の1本から全身を鎖で縛られた鳥型モンスターが鋭い目つきでこちらを睨む。さらにその竜巻に乗り、その二つ名の示す通り全身を漆黒の羽根で包む鳥人間が重い音とともに着地した。

たった2枚のカードから、そのうち3体の攻守が0とはいえ4体もの頭数を揃えられるとは。もちろん、BFの展開力を舐めていたわけではない。いくら場を空にしてもある程度リカバリーを効かせてくるだろうとは思っていたけれど、まさかここまでやられるとは。

BF―朧影のゴウフウ 守0

朧影トークン 守0

朧影トークン 守0

BF―漆黒のエルフェン 攻2200

「おいおい、何ももう終わりました、みたいな顔してんだよ。まだまだこっからが楽しいんじゃないかねえか、なあ？俺がこの通常召喚に成功したことで、漆黒のエルフェンの効果発動！お前の場にいるグラディウスの表示形式を変更させるぜ。おっと、俺の場にBFが存在することで手札から残夜のクリスも特殊召喚だ」

「ぐ……い！」

BF―白夜のグラディウス 守1500↓攻800

BF―残夜のクリス 攻1900

「バトルだ！クリス、エルフェンの2体でグラディウスに連続攻撃！」  
本来メリットのはずのグラディウスの戦闘破壊耐性が、とんでもないデメリットとなってこちらに牙をむく。強制的に立ち上がらされたグラディウスの体が空中で2体の鳥人間の連携の前に翻弄され、鎧の守りもむなしく一方的に突き崩される……寸前、地面から吹き上がった水柱がとどめの一撃を済んでのところで中断させた。

BF―残夜のクリス 攻1900↓BF―白夜のグラディウス  
攻800

清明 LP3200↓2100

鎧田 LP4000↓3200

「エルフェンの攻撃が止められた、だと？」

「1回は通すけど、そこまでき。トラップ発動、ポセイドン・ウエーブ。攻撃を1度だけ無効にして、さらに僕の場合に水族のメビウスがいることで800ポイントのダメージを与える！」

「なるほどな、さすがにまったくの無策じゃなかったわけか。俺は全然構わないけどよ、それくらいの歯応えはないとわざわざここまで来た意味がないからな。カードをセットしてターンエンドだ」

「言いたい放題言ってくれちゃって……まだまだっ！」

強がってはみたものの、戦況は思ったよりも厳しい。しかも先ほど

エルフェンの効果をメビウスではなくグラディウスに回したところからも考えて、あの伏せカードは何かの防御札のはずだ。だが、僕だってまだこれですべての手を見せたわけではない。

そう、ライフの差はまだわずか800、まだまだ負けたわけじゃない。

清明 LP2100 手札：1

モンスター：氷帝メビウス（攻）

BF―白夜のグラディウス（攻・コブラ）

魔法・罨：グレイドル・コブラ（グラディウス）

鎧田 LP3200 手札：2

モンスター：BF―漆黒のエルフェン（攻）

BF―残夜のクリス（攻）

BF―朧影のゴウフウ（守）

朧影トークン（守）

朧影トークン（守）

魔法・罨：1（伏せ）

「さあ次行くよ、僕のターン。魔法カード、サルベージを発動！墓地から攻撃力1500以下の水属性、グレイドル・アリゲーターとグレイドル・コブラを回収する」

「なんだ、また寄生戦法か？」

「いいや違うね、デッキ任せの博打戦法さ！魔法カード、強欲なウツボを発動！手札から今回回収した2体の水属性をデッキに戻し、改めてカードを3枚ドロウする！」

サルベージと強欲なウツボ、最近滅多に決まらなかった強力な手札交換コンボで全てのカードをデッキに戻し、改めて3枚を引き直す。そろそろ息切れしてきたから、ここで継続的に手札を増やせるようなカードに来てほしい……そんな願いを、ありがたいことに僕の信頼するデッキは聞き入れてくれた。

「さあ、第2ラウンドと洒落込もうか！フィールド魔法、KYOUTO Uウォーターフロントを発動！」

地面から巨大な、天にも届くサイズの灯台がせり上がり、周りの風



景が海沿いの都市に変化する。そしてこのカード……ちよつともつたいない気もするけど、他に手はないから仕方ない。

「そして僕はこの、メビウスとグラディウスの2体をリリース。アドバンス召喚、怒炎壊獣ドゴラン！」

怒炎壊獣ドゴラン 攻3000

灯台に負けず劣らずの巨体を誇る、怒りの炎を操る恐竜型壊獣。せいぜい人間大のサイズしかないBF軍団を前に、たった1匹で向かい合い……おもむろにその体が赤熱したかと思うと、口から炎のブレスが放たれた。

「フィールドから墓地にメビウス、グラディウス、装備カードのコブラ。この3枚のカードが送られたことでウォーターフロントに壊獣カウンターが3つ乗り、その3つをすべて消費してドゴランの効果発動、覆滅！相手モンスター全てを焼き尽くし、破壊する！」

装備カードというグレイドルの特性があったからこそできた、アドバンス召喚による強引なカウンター生成からの効果発動。まあ正直、ここで引けたのがそれだけの見返りがあるドゴランでなければ絶対やらなかったと思う。

ともあれ辺り一面に炎が走り、逃げ遅れた鳥たちが火の中に沈んでいく。そしてトークン以外のモンスターは破壊され墓地に送られたことでまたそれが壊獣カウンターの足しになり、灯台のてっぺんから鋭く空を裂く3本の光の筋が通った。

KYOUTOUウォーターフロント(0)↓(3)↓(0)↓(3)

「くっ……流石に一筋縄じゃいかねえな、やってくれるじゃねえか」

「そりやどうも、つと。この効果を使ったターン、ドゴランは攻撃できない。でも、まだまだ動くことはできる！ウォーターフロントは壊獣カウンターが3つ以上貯まっているとき、1ターンに1度壊獣を1体サーチすることができる。この効果で怪粉壊獣ガダラを手札に加え、さらに魔法カード、トレード・インを発動！レベル8のガダラを墓地に送り、カードを2枚ドロロー！」

ウォーターフロントの効果とにかく無駄がないおかげで、ようやく僕のデッキも息を吹き返す。よし、このカードを引くことができた

か。

「永続魔法、壊獣の出現記録を発動。このカードの効果で僕の場のドラゴンを破壊して、デッキから別の壊獣を特殊召喚できる」

これで多次元壊獣ラディアンを呼び出せば、ウオーターフロントの壊獣カウンター2つをコストに分身能力を発動。攻撃力2800のラディアントークンとの連続攻撃で大逆転勝利も狙える……だけど、それは果たして本当に正しい選択だろうか。悩む僕の背中を押すように、チャクチャルさんの声がする。

『そもそも、先に警戒を始めたのはマスターだからな？確かにラディアンならば決まれば勝利もできるだろう……だが、このターンが始まる前に何を考えていたかを思い出すことだ』

僕が何を考えていたか、か。そうだ、メビウスにエルフェンの効果を使わなかった理由を訝しんでいたんだ。ここまでの動きに対し沈黙を貫いてきたことから考えて、あの伏せカードは召喚反応や効果反応の類ではない。となると、残る選択肢は攻撃反応？魔法の筒のような対象を取るカードが相手ならジズキエル無双の始まりだ、で済むけれど、相手は鎧田。1回のミスが致命傷になりかねない相手だ、ここはさらに用心しておこう。

「……い、海亀壊獣ガメシエル！」

迷った末に呼び出したのは、巨大な海亀。壊獣の中でもワーストクラスに低い攻撃力を持つこのモンスターだが、内に秘めた効果はトックラスに強力だ。

KYOUTOUウオーターフロント(3) ↓ (4)

海亀壊獣ガメシエル 攻2200

「このガメシエルには一切の制限がかかってない、よってバトルもできる。ダイレクトアタックだ、ガメシエル！」

「2200はいくらなんでもデカいからな。トラップカード、マジック・シリンダー魔法の筒を発動！その攻撃力、そっくりそのまま跳ね返してやるぜ！」

「やっぱり攻撃反応か……なら、貫った！ガメシエルの特殊効果、渦潮を発動！壊獣カウンター2つをコストにその発動を無効にして、さら

にゲームから除外する！」

「何!？」

「悪いねえ、今回は僕の読み勝ちさ！」

灯台から伸びる光のうち2本がふっと消え、ガメシエルの巻き起こした水の大渦が表になったトラップを巻き込んで押し流していく。今度こそ邪魔立てされることなく、太い尾の一撃がクリーンヒットした。

KYOUTOUウオーターフロント(4)↓(2)

海亀壊獣ガメシエル 攻2200↓鎧田(直接攻撃)

鎧田 LP3200↓1000

「ちつくしょう……!」

「ほらほら、さっきまでの威勢はどうしたのさ?」

『なあマスター、急に出てくるその小物っぽさはどうにかならないのか?』

失礼な。小物じゃないもん、空気読んでヒールやっただけだもん。グレイドルと壊獣の2大嫌がらせテーマを両立させようとしている時点で、今の僕はどう見てもただの悪役。それは自覚してるし、なら盛り上げるためにはそれ相応のムーブっちゅうもんが必要不可欠だ。

『……私の好みは同じ悪役でも、せめてもう少し大物なのだが』

「大物ってことは偉いんでしょう?やだよ偉いのなんて、肩こつちやうもん。僕は下っ端のプロだよ」

『随分弱そうなプロもあったものだな』

脳内でわあわあ言い合っているうちに、鎧田もすっかり気を取り直したらしい。ガメシエルの力を知りながらいまだ衰えない闘志を燃やし、次の一手を求めてデツキに手を掛けるのが見えた。

「まだまだ巻き返してやるぜ、俺のターン!相手フィールドにのみモンスターが存在するとき、このモンスターはリリースなしで召喚できる!来い、暁のシロッコ!」

シロッコのリリース軽減能力は、発動するタイプの効果ではない。つまりそれは、ガメシエルの鉄壁の守りをすり抜けて使用することができるということだ。鎧田め、もうそのことに気づくとは。

BF―暁のシロッコ 攻2000

「俺はこれで、ターンエンドだ」

残り2枚の手札で何かしてくるかと思いきや、意外なことに召喚だけでターンを終える鎧田。楽観的に考えるなら、たんに手札事故を起こして少しでもダメージを軽減させるためやむを得ずシロッコを出したというところだ……けど、どう考えてもそんなにうまくいくとは思えない。

おそらく、次に僕がどう動くかがかなり重要になってくるはずだ。

清明 LP2100 手札：1

モンスター：海亀壊獣ガメシエル（攻）

魔法・罠：壊獣の出現記録（0）

場：KYOUTOUウォーターフロント（2）

鎧田 LP1000 手札：2

モンスター：BF―暁のシロッコ（攻）

魔法・罠：なし

「僕のターン、ドロー」

落ち着いて、初めからよく考えてみよう。ウォーターフロントに載った壊獣カウンターは2つ、つまりガメシエルはまだ最低でも1回効果を使うことができる。そして、それは鎧田も十分承知しているはずだ。

ちらりと視線を上に向け、頭上でライトを放つウォーターフロントを見上げる。カウンターが2つということは、逆に言えばこのカードの持つサーチ効果も使えないということ。もつとも仮に使えたとしても、ガメシエルの攻撃力は壊獣の中でもワーストクラスなのにシロッコをリリースしてもっと強いモンスターを出してどうするとうさらに根本的な問題があるのだが。

僕の手札は、今引いたカードを合わせて2枚。グレイドルがあれば迷わず寄生に繋げたのだが、それもこのターンでは無理だ。いかにも罠でございと言わんばかりのあのシロッコに、カウンターが1度しか使えないこの状況で本当に攻撃するべきだろうか？もう少し待つべきではないだろうか？

それともそう思わせる事こそが攻撃表示シロツコ棒立ちエンドの真の狙いで、場面外から掛けるプレッシャーだけで鎧田が逆転のチャンスをうかがっているのだろうか。鎧田は敵に回すと油断ならないタイプだから、そのどちらも可能性は同じだけある。

ややあつて、ついに覚悟を決めた。ただしこの判断、後になってから何回も後悔することになる。もしここでもう一度盤面をよく見ていたら、普段から痛い目にあつて覚えさせるスパルタ式の教育方法を好むチャクチャルさんが僕の判断にいいとも悪いとも言わず無言で見えていたわけをもう少しでも考えていたら、結果はまた変わっていたのだが。

「……………ここで退くなんて僕じゃない！ガメシエル、バトルだ！暁のシロツコに攻撃！」

「手札からBF―極夜のダマスカスの効果発動！このカードを捨ててシロツコの攻撃力をこのターンの間500ポイントアップ、これで返り討ちだ！」

どこからともなく飛来した短剣を掴み取つて新たな得物を手にしたシロツコが、その巨体からは想像もできないほど軽やかな動きで踊りかかったガメシエルを迎え撃たんと構えを取る。これを通したらシロツコの攻撃力は2500、これは止めるしかない。

「ガメシエルの特殊能力、渦潮を発動！ダマスカスの効果を無効にして、除外する！」

KY O I T O U オーターフロント(2) ↓(0)

攻撃の前に放たれた渦潮が、シロツコの手には一時は握られた短剣を弾き飛ばす。これで捉えた、そう思った瞬間、突然に空気を切り裂いて2本目の短剣が飛んできた。まるでそうなるのがわかっていたかのように自然な動きで伸びたもう片方の手がその短剣を逆手に握り、翼を広げガメシエルの頭上まで飛び上がったシロツコがその甲羅に覆われていない部分、脳天に必殺の一撃を当てた。

「…、これは……………!?!」

「悪いなあ、今度の読み合いはまた俺の勝ちだな？どうあがいたところで、無理に突っ込んできた時点でお前の負けは決まってたんだよ

！」

事実その通りなので何も言い返すことができず、ただ歯を食いしばって睨みつける。そんな視線にわざとらしく震えてみせ、ようやく種明かしに入った。

「念のため、これまでずっと温存しておいてよかったぜ。そのデカ亀の効果にチェーンしてもう1枚、手札から2枚目のダマスカスの効果を発動したのさ。止めようが止めまいがシロツコの攻撃力は結局500ポイントアップするんだよ、真正正銘の返り討ちだぜ！」

海亀壊獣ガメシエル 攻2200(破壊) ↓BF―暁のシロツコ  
攻2000 ↓2500

清明 LP2100 ↓1800

KYOUTOUウオーターフロント(0) ↓(1)

「手札から捨てられたダマスカスはカウントしないけど、ガメシエルがフィールドから墓地に送られたことでウオーターフロントに壊獣カウンターが追加で1つ乗る……」

灯台に明かりが再び1つだけ灯ったそのタイミングで、チャクチャルさんの冷静な声が聞こえてきた。最初からこうなることがわかっていたからこそ、これまで不自然に黙って何も言っていなかったのだ。

『惜しかったな、マスター。私なら今のターン、それを使っていた』『それ?』

『壊獣の出現記録、だ。確かにガメシエルのカウンター能力は強力だが、それに頼りすぎると今のような手痛いしっぺ返しを受けることになる。素直にガメシエルを破壊して別の壊獣をリクルートすればその過程でKYOUTOUウオーターフロントの壊獣カウンターは3つになり、コストにカウンター3つを要求する壊獣でも効果を使うことができた。ジズキエル、サンダー・ザ・キング、ガダーラを呼べば今のような最悪の事態だけは避けられたはずだし、上から殴ることに長けたあの3体ならうまくすればこのターンで終わらせることも可能だったはずだ』

「出現記録、か……」

そこまで丁寧に解説されて、やっと今のターンで自分が何をしでかしたのか理解できた。壊獣カウンターが2つあり、なおかつガメシエルが僕の場にいるという事実だけで完全に満足して、そこで思考停止していたことに今更ながら気づく。ガメシエルの強力なカウンターは確かにこちらで使えばこの上なく強力な武器になるが、それは目的でもゴールでもない。

あくまでも最終目標はこのデュエルの勝利を掴むことで、そのための手段の1つだ。それを忘れていては本末転倒、今みたいに痛い目にあつて終わる。壊獣の独特な動きを使い慣れてないというより、単に僕自身のセンスの問題だろう、これは。

……またひとつ賢くなれたのは全然問題ないんだけど、今までよくこんな程度のセンスで命がけのデュエルなんてやってたものだ。もう入学してから2年以上経つんだから、いくら毎年デッキがバージョナアップしているとはいえ、もう少しぐらい成長があつてもよさそうなものだけだ。

『センスの問題とか言い出されたら私にもどうしようもないが……とにかく場数を踏んで慣れることが一番の近道なんじゃないか?』

「おいおい、何固まってんだよ。お前のターンだぞ、さっさとしろよ」  
鎧田の声に我に返る。さっさとしろよ、と言われても、今の僕にできる事は1つしかない。幸いまだ召喚権は残っている、ここはじつと我慢の時だ。

「グレイドル・スライムJr. を守備表示で召喚。これでターンエンド」

最近やたら出番の多い、先ほど現れたスライムの幼体といった見かけのグレイ型宇宙人が今回も壁としてシロッコの前に立ちはだかる。その守備力はシロッコではギリギリ突破できない2000、そしてこの布陣で最も警戒すべき仮想敵2体のうち片方である漆黒のエルフェンはすでに破壊済みだ。まさか上級モンスターのエルフェンが2枚以上入っているとも考えにくいし、警戒すべきはもう1体の方だけだ。

もつともこればかりはこちらにできる事はなく、あのカードを引か

ないことを祈る程度しかないのだが。でもきつと、鎧田なら引くだろう。なぜって、この男は真のデュエリストなのだから。

グレイドル・スライムJr. 守2000

「行くぜ、俺のターン！魔法カード、貪欲な壺を発動！カルート、エルフェン、クリス、ピナーカ、ダマスカスの5体のモンスターをデッキに戻し、カードを2枚ドロー……そろそろこの風景にも飽きたよなあ、俺がアレンジしてやるぜ！フィールド魔法発動、アンデットワールド！」

アンデットワールド。互いの場、そして墓地のモンスター全てがアンデット族に書き換えられ、さらにアンデット族以外のアドバンス召喚が禁止される悪夢のような空間。アドバンス召喚をほとんど利用しないくせに爆発力と展開力を併せ持つBFと組み合わせることで、相手にのみこの空間のデメリットを押し付ける……それが鎧田の、僕も僕で大概だけどこいつもこいつで結構いやらしい基本戦術だ。読んで字のごとく文字通りのゴーストタウンと化したKYOUTOUで、僕らのモンスターが気味の悪い動く死体へと変化していく。

グレイドル・スライムJr. 水族↓アンデット族

BF―暁のシロッコ 鳥獣族↓アンデット族

「これで俺のBFは、全てU アンデットフェザー Fへと進化した。さらにもう1枚行くぜ、黒槍のブラスト！」

「あー、やっぱり引いちゃったか」

僕がここで引かれることを恐れていたカードの1枚、黒槍のブラスト。自らの背丈ほどもある漆黒の槍を手にした鴉天狗の姿もまた、召喚された瞬間にはすでに腐肉へと変化していたが、その身に秘めた特殊能力は生前のままいささかの衰えもない。そしてそれは、その横のシロッコも同じことだ。

「もうどうなるかは、言わなくてもわかるよな？暁のシロッコの効果を発動！1ターンに1度俺の場のBF1体に、他の全てのBFの攻撃力を集中させる！」

BF―黒槍のブラスト 攻1700↓3700 鳥獣族↓アンデット族



「そして、黒槍のブラストは……」

「ブラストは、貫通能力を持つ。バトルだ、ブラストでその小つさいスライムを攻撃！ブラック・スパイラル！」

僕の言葉の後半を引き取るかのように高らかに宣言し、ブラストが支持を受けて高く飛び上がる。空中から槍を構えて一文字に突っ込んでくる姿はまさに、獲物を正確に貫く死神の翼が生えた死の弾丸だった。その衝撃は銀色のスライムを貫通しただけに留まらず、なおも収まりきらない衝撃波が僕に直接届く。

B F―黒槍のブラスト 攻3700↓グレイドル・スライムJ r.  
守2000 (破壊)

清明 LP1800↓100

K Y O U T O U オーターフロント (1) ↓ (2)

「ジユ、J rの効果発動！戦闘破壊された時、デッキから別のグレイドルを特殊召喚できる……来て、イーグル！」

ゴーストタウンに四散した銀の水滴が再び集まったかと思うと先ほどまでのグレイ型宇宙人スタイルから一転した黄色い鳥の姿となって蘇り、低空にホバリングする。こんな首の皮1枚で繋がったようなライフで貫通能力を持つブラストを立たされた以上、イーグルに繋げるのはかなり分の悪い賭けだ。アドバンス召喚が封じられた現状、そのリリースに当てることすらできない。鎧田にもう1ターン回したら、どうあがいても確実に僕が負ける。

でも、次のドロワーであのカードさえ引くことができれば、話は全く変わる。この反撃のため残されたたった1ターンをうまく使えるかどうかは、すべてこの1枚の引きにかかっている。

ねえ、そんな賭けて素敵じゃない？

グレイドル・イーグル 攻1500

「100足りないか……運がよかったな、ターンエンドだ。ここでシロッコの効果も切れる」

B F―黒槍のブラスト 攻3700↓1700

清明 LP100 手札：1

モンスター：グレイドル・イーグル (攻)

魔法・罨：壊獣の出現記録(0)

場：KYOUTOUウオーターフロント(2)

鎧田 LP1000 手札：0

モンスター：BF―暁のシロツコ(攻)

BF―黒槍のブラスト(攻)

魔法・罨：なし

場：アンデットワールド

「僕のターン……ドロー！」

ゆつくりとデッキに手をかけ、この勝負の明暗を分けることになるたった1枚のカードを引きぬく。見るのが怖いような、でも早く見たような、そんな矛盾する感情で板挟みになりながらも、そつと手の中のカードをこちらに向けた。この一挙手一投足に、鎧田の、そして会場中の注目が集まっているのを肌で感じる。本当に久々に味わう、表舞台特有のこの緊張感。

ここでひと波乱起こさなければ観客が、そして僕が面白くないし、何よりこのまま負けるなんて、それは真のデュエリストのやることじゃない。このシチュエーションに僕のデッキは、ばっちりと応えてくれた。

「さあ、何を引いたんだ？」

不敵に笑う鎧田だが、すでに奴も余力の全てをさつきの攻撃に費やしたために、これ以上罨が仕掛けられてないことはわかってる。だとすればこの勝負、これで決まる。

にやりと笑い返し、そのカードを場に出してみせた。

「グレイドル・イーグルの2体目を召喚！」

ゴーストタウンに浮かび上がる、銀色の液体が変態した1羽の黄色い鳥の姿。これだ、まさに僕は、このカードを引ききたかったんだ。

グレイドル・イーグル 攻1500 水族↓アンデット族

「また寄生効果か？だが、お前のライフはもう残り……」

「忘れたの？グレイドルの真価は、戦闘だけじゃないってことを！僕の墓地に存在する、グレイドル・スライムのモンスター効果を発動！場のグレイドルカード2枚を破壊し、墓地のこのカードは特殊召喚で

きる！」

グレイドル・スライム 守2000 水族↓アンデット族

2体のイーグルの体がどろりと溶けて足元で混じり合い、倍のサイズになった水たまりが中央から盛り上がりつつ再びグレイ型宇宙人の上半身へと変化する。ゴーストタウンのメインストリート、その中央に陣取ったスライムの上半身がおもむろに両腕を差し出してその長く細い指を真っ直ぐ前に向けると、指の先から不可思議な光線が放たれてシロツコとブラストに命中した。

「な、なんだ……まさか！」

「そのまさかさ！モンスター効果で破壊されたイーグル2体は、それぞれ寄生効果を発動！僕の元に来い、アンデットフェザー達！」

「2体同時にだと……？そんなの、そんなのありかよ……！」

ありなんだな、これが。マナーはともかく、ルールはちゃんと守った戦術なんだから。寄生、というよりも洗脳の一撃を受け、額に銀の紋章をつけられたシロツコとブラストがスライムの両脇に並び立つ。もはや壁となるモンスターのいなくなった鎧田を、今やこちらの側に付いた2体のアンデットが死神の羽根をまき散らしながら疾風のようなスピードで切り裂き、貫いた。

「バトルだ、シロツコでダイレクトアタック！」

「ち、ちくしよおお！」

BF―暁のシロツコ 攻2000↓鎧田（直接攻撃）

鎧田 LP1000↓0

こうしてデュエルアカデミアノース校と本校との、ずるずると毎年続いた結果なぜか3年間にわたることとなった戦いには一応のピリオドが打たれた。リーダー格のサンダー四天王も、そのライバルだった僕も、来年にはもう卒業してしまう。多分だけど、そうなれば彼らがわざわざ対抗合戦しにくることはないだろう。結局この葵ちゃん売り子作戦は、今年の一回が最初で最後のチャンスだったということだ。まあ、それでもここ最近の開店休業をある程度補える程度には黒

字になったから良しとしよう。

そして時がたち、オレンジ色の夕日が水平線の向こうに沈もうとする時間。慌ただしく帰っていかうとするノース校の面々を見送りに来た僕らは、殿を務めるためギリギリまで港に残っていた鎧田と最後の会話をしていた。

「鎧田！」

「……なんだ、お前かよ。いいか遊野清明、今回は俺の負けだ。それは認めてやる。だがこの屈辱、次は世界中の人が見てる前で晴らさせてもらうからな」

そう言っただけで指を突きつける鎧田。リベンジは歓迎するけど、世界中？だがその言葉には、僕より先に万丈目が反応して会話に入り込んできた。

「鎧田、それはどういうことだ？　そういえばお前、さつきも子供が見たら怖がるって言われたから純構築に寄せてみたとか言ってたよな。ノース校で何かあったのか？」

その疑問に誇らしげな顔を見せる鎧田。その口から放たれた言葉は、僕ら2人を驚愕させるには十分な破壊力を持っていた。

「実はですねサンダー、この間ノース校にプロリーグの視察って人が来て。俺のデュエルスタイルがえらく気に入ったみたいで、卒業したらぜひうちに来てって連絡先まで貰ったんですよ」

「なにい!？」

「嘘っ!？」

「ところが本当なんだよ、清明。今日だってノース校に帰ったらまたその準備があるから長居できないわけだしな。なんなら、名刺も見せてやろうか？　一応その後で調べてみたけど、身元は確かな老舗の団体からのお誘いだぜ。お前もどうせ、卒業したらプロの道に進むんだろ？　今日の借りはそこで利子つけて返してやるから、その時まで覚悟決めておけよ」

「……出港だ。ではサンダー、お元気で」

「おっと。悪いな天田、今行くぜ。じゃあな清明、また会いましょうサンダー！」

それだけ言って船に飛び乗ると、ゆっくりとノース校の船団が動き始める。次第に加速して離れていく船の上で、大きく鎧田がこちらに手を振っているのが最後まで見えた。

「ふうー……」

慌ただしかった1日に一区切りついた時特有の奇妙にけだるい独特な感覚や、爆弾発言を唐突にぶち込まれた時にありがちな思考が追いつかないあの感じ。そういったものがごちゃ混ぜになり、ため息を吐くことしかできずに振り返る。すると、同じような表情の万丈目と目が合った。

「な、なあ、清明」

「あー、うん、言いたいことはわかるよ……」

「俺たちの進路、か……」

卒業。その言葉の意味するところは、頭ではわかっているつもりだった。だけど僕には、そしておそらく万丈目にも、その先の進路のことなんてまるで頭になかった。卒業したら、進学するなりプロ入りするなり、あるいは別の道に進むなり……とにかく、なんかしなくちやならない。

言葉にするとそれは当然のことだけど、不思議なことにこれまではそこに考えが至らなかつた。それだけに今の発表、校舎こそ違えど同じ系列の高校に通う同級生がもう進路を明確に決めたというこの事実、僕らの心にずっしりと重くのしかかることとなった。

## ターン109 鉄砲水と冥界の札師

嵐のように現れて、その日のうちに去っていったノース校の鎧田たちの来襲からさらに数週間経った、ある晴れた午後。店番しながら売り物の紅茶を自分で淹れて柄でもなく優雅なティータイムと洒落込んでいた時、その知らせはやって来た。

「先輩、いますか？あ、またそれ飲んでたんですか……」

「そうは言うけど葵ちゃん、作ったのは僕とはいえこんだけ甘い香りのお菓子に囲まれてさ、なんで水道水で我慢しなきゃいけないのさ。それに大丈夫大丈夫、これお客さんに出した後の出洩らしだし」

「まだ新品の茶葉使われた方がマシです」

「えー……」

このやりとりは、もう何度も何度も僕らの間で議論されてきたものだ。互いに相手の頑固さから説得が不可能なことはよくわかっているため、今ではすっかり形骸化してちよつとした挨拶がわりでしかない。そんなことより、と気を取り直した葵ちゃんが、用心深さと好奇心が半々に入り混じった目で廊下の方をちらつと見る。

「先輩、知ってますか？今、またちよつと面白そうなことになってますよ」

「へーい万丈目ー。何やってんの？」

なぜかカードの詰まった段ボール箱を抱えて廊下を歩く見慣れた黒い後ろ姿に声をかけると、見た目より重いのか振り返りすらせずに返事が返ってくる。

「む、清明か。なんでも、カードをデュエルディスクがうまく読み込まない不具合が見つかったらしくてな。この名探偵万丈目サンダーの名に賭けて、不良品のカードを探し出してやろうと、まあそういう訳だ」

「不良品、ねえ。ちよつと見せて？」

段ボールの中のカードを1枚適当に拾い上げ、サクツと展開した

デュエルディスクの上に置いてみる。だが、それまでだ。三沢謹製の水妖式デュエルディスクはうんともすんとも言わず、ソリッドビジョンは浮かび上がらない。確かにこれは、不具合としか言いようがないだろう。

「なるほどね……あれ？」

納得してカードをダンボールに戻したとき、その中に全体的に、なにか黒い靄のようなものがかかって見えた気がした。もつとよく見ようと目を細めたけれど、気のせいだったのかたまたま影がかかっただけだったのか、それきり何もおかしなものが見えることはなかった。

「どうしたんですか？」

その様子を見咎めたのか、万丈目の隣を歩いていた見覚えのない生徒が不審そうに聞いてくる。あまり心配させるのもなんなのでたぶん気のせいだろうと結論付け、安心させるように手をひらひらと振ってみせた。

「ああいや、気のせいかな……？えつと……」

「いやだなあ、忘れたんですか？藤原ですよ、藤原優介」

ほんの一瞬だけ思考に影がかかったような感覚がしたが、それもほんのわずかな間だけだった。ああそうだ、『思い出した』。特に話した覚えはないけれど、確かにれつきとしたうちの生徒だ。

でも、仮にも3年間なんのかなので顔を合わせてた相手なんだから、名前を思い出せなかったことは素直に謝っておかないと。

「ごめんごめん、咄嗟に出てこなくて」

「あはは。気にしないでいいですよ、影が薄いのは本当ですから。では万丈目君、次はコンピューター室に行つてシステムをチェックしよう」

「なんか手伝おつか？」

「なに、この程度この万丈目サンダーが1人がいれば十分だ。天上院君たちにも手伝ってもらつてるし、そこまでの人数はいらないだろう。じゃあな」

「んじゃねー」

再びえつちらおつちらと、段ボール箱を抱えたまま歩き出す万丈目に藤原。確かに葵ちゃんと言ってた通り面白そうな話ではあつたけど、カードの不具合なんて僕にどうにかできる範囲じゃない。回収作業ぐらいなら手伝えそうだけど、無理に手伝うのも万丈目に悪いだろう。また店に帰ろうと後ろを向いたその時、ぽつりと頭の中で声がした。

『……なあ、マスター。今の人間だが』

「え、藤原？どうかしたの、チャクチャルさん？」

『ふむ、なら先に謝っておこう。すまないマスター、せいっ』

その何ともやる気のない掛け声とともにチャクチャルさんが何をやったのかはわからないが、その瞬間全くの不意打ちで後頭部をガツンと殴られたような衝撃が脳の内側から走った。衝撃そのものはそこまで痛いというほどでもなかったが、全く警戒していなかったところに1発喰らったせいでも前につんのめってしまった。なんとか転ぶようなこともなく体勢を立て直しはしたが、やはりあまりいい気はない。

「何すんのさ、もう」

『もう1度聞こう。今の人間は？』

「だから、藤……あれ？」

藤原？誰だそれ？ついさっきまではわかっていたはずなのに、その内容が何ひとつ思い出せない。入学試験？いや、違う。七星門の鍵を校長から預かった時？いや、あの時も藤原なんて奴いなかった。光の結社の時、砂漠の異世界、そして霸王の世界……記憶のどこをひっくり返しても、あんな男見た覚えがない。

「え、あれ？でも確かにさっきまでは……あれ？」

『かかったふりかとも思ったが、やっぱりか。マスター、今度洗脳耐性の訓練しような。ギリギリまで正気を保たせたままで人心を操り、記憶を操作する。大したテクニクでもないが、いざかかると案外厄介だからな』

「洗脳？」

「ああ。恐らく、あの大量の闇の力を受けたカードが原因だろうな。



マスターは外部からの影響を受けやすい体質だから、あの程度触れただけでも記憶改修にかかってしまったのだろう。あの藤原という人間、少なくともただの人間と思わない方がいい。何かはわからないが、あのカードも合わせてかなり面倒な力の残滓を感じる。あれだけの数のカードが媒体になっていたとすると、恐らくはこの島全土にあの人間の記憶が植えつけられているとみていいだろう」

割といつも余裕のあるチャクチャルさんが面倒と称するということは、それだけ恐ろしい力を持っているのだろう。話し込んでいるうちにもどんどん思考のもやが消え頭がはつきりして、それと同時に藤原なんて聞いたこともないという確信が強まっていく。だが、当の本人は既に万丈目を連れて行ってしまったためここにはいない……そこまで考えたところで、ようやくはつと気が付いた。

「そうだ、万丈目が！」

まだ『藤原』を名乗るあれが何者なのか、何の目的があつてアカデミアに潜り込んでいるのかはわからない。だけどチャクチャルさんが相手になければ違和感すら抱かせないほどの大規模かつ精巧な精神操作の手際からいって、かなり強大な力を何か目的があつて使おうとしているのは確かだろう。確かに万丈目は強いし、精霊を見る力もある。だけどそれだけでなんとかなるほど、甘い相手ではないだろう。

『マスター。その自分がやられたからってむやみに相手を持ち上げる悪い癖はやめような』

あ、ばれてた……じゃなくて、今はとにかく万丈目だ。あの怪しいカード回収と一緒に手伝ってるらしい明日香たちも心配ではあるけれど、今ぶつちぎりで危険なのは藤原と共に行動している万丈目のはず。

だが、結局コンピューター室に向かうことは叶わなかった。突然何の前触れもなく廊下中の電灯が消え、辺りが闇に包まれる。いやちよつと待った、いくら停電したからって今はまだ昼間。こんなに暗くなるなんてありえない……そう思った矢先、頭の中でチャクチャルさんの警告する声が短く聞こえた。

『来るぞー!』

何が、なんて聞き返す余裕はない。デュエルディスクを構えて背を壁に付け、どこからとも知れない強襲に出来る限り備えておくのが精一杯だった。そして再び何事もなかったかのように電気がついて、また周りに明るさが戻ってくる。ただし先ほどまでとは違い、そこにいたのは僕だけではなくなっていた。全くの突然に、まるでスイッチを押したら電気が付いたかのように唐突に、あの男が僕の前に立っていた。

「ミスターT……!」

「童実野町以来だな。君は真実にあまりにも近づきすぎた……いや、違うな。君の意思に関係なく、君の存在そのものがこの世界の真実そのものを破壊しにかかっている」

「は？何が言いたいのさ？」

僕の質問にも答える様子はなく、首を横に振ってまた話し始めるミスターT。なるほど、会話のキャッチボールをする気はまるきりないらしい。

「遊城十代。確かに、彼も脅威となる存在ではある。だが彼はあくまで、真実に近づきすぎたが故に危険な存在となったにすぎない。だが君は違う。存在するだけで刻一刻と真実は歪み、君の存在を受け入れるように世界は改変される。我々だけの話ではない、君の存在は世界にとって危険すぎるのだよ」

それだけ言っつて、腕のデュエルディスクを広げるミスターT。表情がピクリとも動かない上に黒いサングラスをかけているためその顔からは何も読み取れなかったが、とにかく言葉で解決する気がまるでないことだけはよくわかった。

『油断するな、マスター。この気配、闇のデュエルだ』

「……うん、わかってる」

そうだ、この空気が張り詰めているような、それでいて重苦しいような不思議な感覚。霸王の異世界から帰ってこれた時は今度こそこの手の危険からは足を洗ったと思ったのに、まさかこんなに早くこの感覚を再び味わうことになろうとは。

正直、怖い。でも、恐ろしいのは闇のデュエルそのものじゃない。負けたら死ぬ。そのことはよくわかってるはずなのに、僕はこの状況を本心では歓迎している。またこの緊張感の中に身を置く感覚を、心の底では楽しんでる。そんな僕自身が、僕は一番怖い。いつから僕は、こんなふうになつてしまったんだろう。命を賭けるデュエルなんて間違っている……そう言い切ることが、今の僕にはできそうにない。

「準備は整ったかね？では、始めよう」

僕には、そのことを悩む暇は与えられなかった。とりあえず今を生き延びるためにその疑問を、そして人としての葛藤を脇に追いやり、目の前の敵を消し去るために戦つて。それが終わったらまた次の相手が現れ、またとりあえずその場を切り抜けるために戦つて。そんなことを繰り返しているうちに、今では疑問に思う心さえ風化して消えてしまっていた。それは、いいことだったのだろうか。戦士としては、それでいいのかもしれない。ダークシグナーとして考えれば、それはむしろ望ましい進化のはずだ。だけどつい3年ほど前までは確かに生きていた人間、遊野清明という個人としてみれば、果たしてそれは手放しに喜べる変化なのだろうか。

『マスター？』

黙りこくつたままの僕の様子に何かを感じたのか、チャクチャルさんがかすかに心配そうな声で呼びかける。

そうだ、元をただせばこの神様が僕の人生に入り込んだ時から、全てが変わつたんだ。あの場で終わつたはずの僕の人生は地縛神の力で再び動き出し、その時から少しずつ僕の体は、そして精神はその影響を受けて変化していった……。

「なんて、ね。無駄さ、ミスターT」

「ほう？」

そこまでだ。その意思を込めて口の端だけでかすかに笑い、目の前のグラサン男のその目の奥を真っ直ぐ見返してやる。表情こそ全く変わらないものの、わずかに不快そうな色がその顔に走つたのが見えたと気がした。

「確かに、僕はもう3年前の遊野清明じゃない。良くも悪くも、ね。だけど、もういい加減にあの霸王の世界で腹を決めたのさ。もう純粹に人間だった頃は戻らない、それだってかまわない。この3年間の思い出に、僕は自身を持って言い切ることができる。チャクチャルさんがくれたこの第2の人生、これにはそれだけの価値がある。そこを起点に僕の心の闇を増幅させようだなんて生温い考え、もう僕には通用しない！僕はデュエリストにしてダークシグナー、遊野清明！この名のもとにミスター……いや、トウルーマン！お前はここで倒される、それが僕の突きつけてやる真実だ！」

「なるほど。ならば、力づくで排除する必要があるようだ」

よほど切り替えが早いのだろう。おおかた僕の心の闇を増幅させ戦わずして勝つつもりだったのだろうが、それが失敗しても淡々と呟いたのみで改めてデュエルディスクを構えなおす。今度はふりではなく、本当にデュエルに持ち込む気のようなだ。

「望むところさ。行くよ、チャクチャルさん！皆！」

『マスター、その前にひとついいか？』

「ん？なに？」

『大したことではないのだがな。その……ありがとう、そう言ってくれて。私も……いや、時間を取らせてすまなかつたなマスター。この戦いも、そしてこれからも、私達で共に勝とう』

普段絶対に聞くことのできないであろう、この地縛神の素直にもほどこがある言葉について目を丸くする。だけど、ここで茶化したりするほど僕は無粋じゃない。ここでいらんこと言わなきゃ、どこかでまたデレてくれるかもしれないし。

だからにっこりと笑い、こう言うにとどめておいた。これもまぎれもない、僕の本心だ。

「当然でしょ？さあ、それじゃあデュエルと洒落込もうか！」

廊下には依然として人の気配すらなく、どうやらミスターがT何らかの方法で人払いをかけたらしい。それなら、こちらも気兼ねなく戦えるってもんだ。

「デュエル！」

先攻を取ったのは、ミスターT。まあ、何も問題はない。

「私が先攻か。ならば、ダーク・クルセイダーを召喚」

何が来るかと身構える僕に対しまずミスターTが出したのは、漆黒の鎧にポロボロの赤いマント。そして自らの体ほどに太い大剣を掲げた、仮面の戦士だった。

「ダーク・クルセイダーは手札の闇属性モンスターを墓地に送ることで、1体につき400ポイント攻撃力をアップさせる。とりあえずこの1枚、ダーク・ネフティスを送っておこう」

ダーク・クルセイダー 攻1600↓2000

「さらに、魔法カード、闇の誘惑を発動。カードを2枚ドロシー、手札からこの闇属性カード、異次元の偵察機を除外する。カードを1枚伏せ、異次元の偵察機の効果を発動。このカードは除外されたターンの終わりに帰還する」

突然空間に穴が開き、球体形をした小型の宇宙船のような機械がその中から現れる。

異次元の偵察機 攻800

これで攻撃力2000越えのアタッカー1体とおまけのように呼び出されたモンスター、そして伏せカードが1枚。先攻1ターンの目の布陣としては、普通ならば何もおかしくはない、のだが。軽く眉をひそめると、チャクチャクさんの同調するような声がした。

『怪しいな。わざわざマスターを名指しで狙いに来た以上、デッキの下調べも済んでいるはずだ。とてもその対策ができているとは思えない……となると、鍵はあの伏せカードか』

「だよね」

サイクロンでも引けていればよかったのだが、あいにくとそんなカードは手札にない。仕方がないから次善の策として、何を企んでいるにせよここはあえてその罠に足を踏み入れてやろう。

「グレイドル・コブラを召喚し、さらに水族モンスターの召喚に成功したことで、手札のシャーク・サッカーを特殊召喚！」

グレイドル・コブラ 攻1000

シャーク・サッカー 守1000

攻め込むだけならコブラで十分だったが、用心のためサッカーにも壁として出てきてもらう。守りとしては不安定だけど、久々の出番に本人の気力は十分だ。

「バトル・コブラでダーク・クルセイダーに攻撃！」

「いいだろう、迎え撃て」

グレイドル・コブラ 攻1000 (破壊) ↓ダーク・クルセイダー  
攻2000

清明 LP4000 ↓3000

ピンク色の大蛇が飛びかかったところを、重そうな大剣を一振りして空中で返り討ちにする漆黒の戦士。だが、その攻撃はただの囷。切断面から血の代わりに噴き出た銀色の液体が、かわすこともできないほどの至近距離で騎士の体をまだらに染める。その液体がびくびく、とかすかに蠢きながら、一斉に騎士の鎧や仮面の隙間からその体内へと潜り込んでいった。

「く……さあ、これでコブラのモンスター効果を発動！ダーク・クルセイダーに寄生し、そのコントロールを得る！」

額に銀の紋章が浮かび上がった戦士が、剣を片手にこちらのフィールドへやってくる。本当ならわざわざ攻撃力の高いダーク・クルセイダーに攻撃してやる義理はないのだが、残念なことに異次元の偵察機の攻撃力はギリギリコブラを下回る。ここで何か仕掛けてくるかと思っただが、ミスターTは沈黙を保ったままだ。コブラの効果を無効にするカードじゃないとなると、あの伏せカードのトリガーは戦闘ダメージ？それとも攻撃宣言？

いや、考えていても仕方ない。僕のライフは今の攻撃で1000減ってしまった、それを少しでも取り戻すためにはここで攻撃するしかない。畏なら畏で結構、早いうちに引っぺがしておこう。

「やれ、クルセイダー！異次元の偵察機に攻撃！」

「トラップ発動、ギブ&テイク。私の墓地からモンスターを君の場に守備表示で蘇生し、そのレベルを私のモンスターに与える」

ダーク・ネフティス 守1600

異次元の偵察機 ☆2 ↓10

闇の炎が地面から噴き上がり、その流れに乗って漆黒の不死鳥が舞い上がる。無理やり呼び出された不死鳥が不満げに翼を広げた拍子に体中の炎が飛び火し、新たな獲物を見つけたとばかりにダーク・クルセイダーの体に広がり、焼き尽くし始めた。

「こ、これは?」

『ダーク・ネフティスの強制効果か。特殊召喚された際に場の魔法・罠を1枚破壊する、本来ならその対象を選べるのはコントローラーのマスターだが……』

「今この場にある魔法カードは装備状態のコブラのみ。だから強制的にコブラが破壊されて、連鎖的にダーク・クルセイダーも破壊された……ってわけね」

「理解が早くて助かるよ。さて、どうする?」

どうするも何もない。僕のフィールドに攻撃可能なモンスターはなく、これ以上バトルフェイズを続ける意味はない。それにしても気になるのが、なぜギブ&テイクとダーク・ネフティスのコンボなどという回りくどい手を使う必要があったのかだ。事実引つかかっている以上あまり偉そうなことが言えないのも確かだが、何もこんな手を使わずともグレイドルを妨害する方法はいくらでもあったはずだ。

何か別の狙い、あるいは他のコンボが用意してあるのだろうか。だとすればそれが発揮される前に潰すに限るけれど、そううまくいくかどうか。

「カードをセットして、ターンエンド」

「この瞬間、ギブ&テイクによるレベル変動効果は消える」

異次元の偵察機 ☆10↓2

ミスターT LP4000 手札:2

モンスター:異次元の偵察機(攻)

魔法・罠:なし

清明 LP3000 手札:3

モンスター:シャーク・サッカー(守)

ダーク・ネフティス(守)

魔法・罠:1(伏せ)

「私のターン。シャーク・サッカーをリリースし、手札から君のフィールドにこのカード、サタンクロースを守備表示で特殊召喚する」

サタンクロース 守2500

「サッカー!？」

シャーク・サッカーの姿が、突然白い袋を背負った赤い悪魔の姿に成り替わる。でも、サッカーの守備力はわずか1000。それをリリースしてまでわざわざ僕のフィールドに守備力2500ものモンスターを出してきたのは何のため……ああいや、そういうことか。

『用心が完全に裏目に出たな』

チャクチャルさんの簡潔な評を聞き、無言で頷く。僕だって壊獣、グレイドルの両テーマの使い手だ。コントロール関係はある意味専門分野なんだから、ミスターTの次の行動など容易に予想がつく。ましてやこの男……いや、人間ではないのだからこの呼び方が正しいかどうかも分からないがこの存在は今回、僕のことをピンポイントで消しに来ている。となれば、この程度のメタカードは予定調和だろう。「魔法カード、所有者の刻印を発動。フィールド全てのモンスターのコントロールは、その元々の持ち主の元に戻る。ダーク・ネフティス、サタンクロースの2体は返してもらおうか。そして、ダーク・ネフティスを攻撃表示に変更する」

「やつぱり……!」

ダーク・ネフティス 守1600↓攻2400

グレイドルによる寄生の努力を1枚で無に帰す恐るべきメタカード、所有者の刻印。今の僕のデッキは相手フィールドにモンスターを展開する壊獣のおかげであるカードにもある程度の耐性があると言える状態だが、今はないカードのことを話しても仕方ない。

ミスターTが今回使っているデッキはグレイドルにメタを張りつつ、自分は送り付けたモンスターを奪い返して戦うことをコンセプトとした……まあ、そんなところだろう。そして、その狙いは今のところ気持ちいいくらい綺麗にはまっている。

「バトルだ。行け、異次元の偵察機」

「だからって、舐めんなあ!トラップ発動、波紋のバリアーウェーブ



フォース！相手がダイレクトアタックを宣言した時、相手フィールドの攻撃表示モンスター全てを持ち主のデッキに戻す！」

球体が側面に付いたアームで殴り掛かってきたのをトリガーに、僕の体の前面に半球状の水のドームが展開される。攻撃を受け止めてはその勢いを受け流す水の守りが、その名のごとく波紋を立てて2体のモンスターを吹き飛ばした。

これで2体のモンスターがデッキへとバウンスされ、ミスターTの場に残ったのはサタンクロス1体のみ。かなり応えていてもおかしくないはずなのだが、以前としてその表情は変わらないままだ。

「ならばエンドフェイズ、サタンクロスの効果を発動。このカードが自身の効果で特殊召喚されたターンのエンドフェイズ、コントローラーはカードを1枚ドロウする」

「そんな効果まで……」

まさに一方的に送り付けて帰還というあのデッキのためにあるようなドロウ効果により、こちらからの被害を最小限に抑えるミスターT。余裕の表情はそういう訳か、と納得はしたが、やはりミスターTは強い。ずっと前に童実野町で戦った時も思ったけど、とにかく動きに無駄がないのだ。

『だが、それは奴の一番の弱みでもある』

「どういふこと？」

奇妙なことを口走るチャクチャルさんに聞き返すと、僕を元気づけるためかすぐに答えが返ってきた。

『奴らに人間のような心はなく、従って常に冷静かつ無駄のない戦いが可能となる。それは確かに強みでもあるが、魔術の札……デュエルモンスターズはそれだけで勝負が決まるほど単純なものではない。それは、マスター自身がよく知っているはずだ』

「ふむふむ」

『確かに奴のデッキにはそつがなく、常に安定している。だがそれがなんだ？マスターの組んだデッキには1枚1枚に思いを込めて選び取ったマスターの魂が宿り、精霊の力が宿っている。奴にとってカードは手段でしかなく、引き出せる力はカードに記された情報によるそ

れを決して上回ることはない。いくらスペック上は優秀でも、所詮それ止まり……実戦にそんなものは、気休め程度の役にしか立たないからな』

「ありがと、チャクチャルさん。だいぶ気が楽になったよ」

「どうやら、もう少しこの神様のデレ期は続くらしい。絶対にいらんこと言っただけから終わらせないようにならねえと固く心の中で誓い、目の前の勝負に気持ちを戻した。」

「僕のターン、ドロロー。さあ、今度はこっちの番だ！フィールド魔法、KYOUTOUウオーターフロントを発動！そしてサタンクロスをリリースして多次元壊獣ラディアンをお前のフィールドに攻撃表示で特殊召喚、フィールドからカードが墓地に送られたことで壊獣カウンスターを1つウオーターフロントに乗せさせてもらおうよ」

KYOUTOUウオーターフロント(0)↓(1)

多次元壊獣ラディアン 攻2800

「さらにグレイドル・アリゲーターを攻撃表示で召喚。さあ、バトル！アリゲーター、ラディアンに攻撃！」

ありがたいことに手札誘発の類はなかったらしく、なんの妨害も入らないままのしのと這って行ったアリゲーターが大口を開けてラディアンのかぶりつこうとして踏みつぶされる。闇のデュエルで受けた2000ポイント以上の大ダメージがもろに体に響いたため額からは嫌な汗が流れ、呼吸も少し荒くなる……でも、これでいい。これはあくまでもコンビプレーの一環、これこそが僕の狙いだ。文字通り、さっきのお返しをしてやろう。

グレイドル・アリゲーター 攻500(破壊)↓多次元壊獣ラディアン 攻2800

清明 LP3000↓700

KYOUTOUウオーターフロント(1)↓(2)

「アリゲーターの効果でラディアンに寄生して、このコントロールは返してもらおうよ。帰ってきたラディアンでそのままダイレクトアタック！」

僕の元に戻ってきたラディアンが、その腕を地面に叩き付けて衝撃

波を起こす。するとミスターTの体がそれに吹き飛ばされて天井に嫌な音を立てて激突、受け身すら取らずに人形か何かのように落下した。並の人間なら良くて全身骨折、悪くすれば命に係わりかねないほどの衝撃のはずだったが、ややあつて相も変らぬ不気味な笑みを口の端に張り付けつつ平然と起き上がってみせた。やっぱり、ライフを0にする以外の物理的なダメージはまるで受けないってわけか。

多次元壊獣ラディアン 攻2800↓ミスターT（直接攻撃）

ミスターT LP4000↓1200

「次行くよ次、メイン2にラディアンの効果、分身を発動！壊獣カウナー2つをコストにラディアンは次元の壁を砕き、別の次元からラディアントークン1体を呼び寄せる！」

ラディアンが無造作に腕を振り回すと、空の一角に突然ひびが入る。ひびは広がって裂け目になり、その向こう側の世界からラディアンそっくりの異星人がするりと空間の隙間を通過してやって来た。

KYOUTOUウオーターフロント（2）↓（0）

ラディアントークン 攻2800

「倒しきれなかったのは惜しいけど……ターンエンド」

今のターンは確かにミスターTの場をがら空きにしたうえでダイレクトアタックも決められたけど、そのためにこちらが支払うことになった代償もかなり大きい。ライフは一気に3ケタにまで減り、手札にもう壊獣のカードはない。

でも、そのことに後悔はしていない。認めたくはないがさつきまでのターンまで、流れは確実に僕ではなくミスターTの側に来ていた。それをこちらに引き寄せるためには、それ相応の代償を支払わなければならぬ。

『それに不完全とはいえ相手がメタを張り始めた以上、長丁場の戦いはリスクが大きい。短期決戦を狙うこと自体はそう悪い話ではないな』

「不完全……やっぱそう思う？」

それについては僕も気になっていたところだが、チャクチャルさんも同感だったらしい。頭の中で、重々しく頷く気配がした。

『ああ。どうせ対策するなら壊獣にも何らかの手を打てばいいのに、先ほどから見ている限りあれではまるで対グレイドルだけを想定したデツキだ。奴が異世界での出来事を知るすべがないはずはない、まるでわざと不完全なデツキを組んで挑んできたかのようにすら見える……だが、今はとにかくこのミスターTを倒しておこう。どうせ一時しのぎにしかならないだろうが、放っておくわけにもいかないからな』

チャクチャルさんの言葉にも一理ある。何がしたいのか今一つはつきりしない不完全なメタ、意味深な発言、どうにもイライラすることばかりだけど、とにかくこの場を……と、そこまで考えたところでふとあることに気づき苦笑した。とりあえずこの場を、なんて、これじゃあついさつきこのデュエル前にミスターTが僕の心をへし折りに来たとき誘導した思考そのものじゃないか。

とにかく、気をしっかり持つことだ。あまり疑心暗鬼になりすぎるとかえって周りの物が見えなくなることとは、これまでの3年間で嫌というほど痛い思いをして学んできた。

ミスターT LP1200 手札：2

モンスター：なし

魔法・罨：なし

清明 LP700 手札：1

モンスター：多次元壊獣ラディアン（アリゲーター・攻）

ラディアントークン（攻）

魔法・罨：グレイドル・アリゲーター（ラディアン）

場：KYOUTOUウオーターフロント（0）

「私のターン、ドロロー……」

「？」

気のせいかな、今ミスターTがカードを引いた瞬間、それを見もせず何か別の場所に気を取られたような気がした。サングラスの奥の視線は僕の方を向いているが、恐らく僕のことを見ているわけではない。

となると、その後ろだろうか。罨の可能性も考えながらもつつい

つられてチラリと背後に目をやるが、当然静まり返った廊下には虫一匹飛んでいない。よくわからぬ不気味な沈黙が数秒間続いたが、何か考えがまとまったらしいミスターTがまた動き出した。

「ああ、私のターンだったな。私の墓地の闇属性と光属性の数が等しい時、そのどちらかの属性をすべて除外することで手札のこのカードは特殊召喚できる。出でよ、カオス・ソルジャー——宵闇の使者——」  
体の半身を純白、もう半身を漆黒の鎧に包んだ、開闔と対を成す宵闇のカオス・ソルジャー。これが奴の今度のエースモンスター、というここといいのだろうか。

カオス・ソルジャー——宵闇の使者—— 攻3000

「さらにこの瞬間、光属性を素材とした宵闇の使者の効果を発動。バトルフェイズを放棄することで、フィールドのモンスター1体を除外する。私が選択するのは、ラディアントトークン……」

「だったらここで、手札からモンスター効果発動！相手フィールドでモンスター効果が発動した時、手札のこのカードを捨てることで破壊する……お願いね、幽鬼うさぎー！」

宵闇の使者が剣を振りぬき、次元を切り裂く斬撃を放つ。だがそれと交差するように僕の背後から目にも止まらぬスピードで飛んできた1本の鎌が、正確にその白黒に分かれた境目に突き立った。後ろを振り向いて親指を立ててみせると、無い胸を張ってちよつと得意げに微笑む銀髪の女の子がすうつと消えていくのがチラツと見えた。

これで、宵闇の使者は倒した。とはいえ、これで終わるはずもない。この程度で手詰まりになるような相手なら、もつとすんなり勝負は……。

「ターンエンドだ」

「え……？」

『ん？』

あつさりと終えられたターンに、僕だけでなくチャクチャルさんまで意表を突かれる。でもラッキー、よりも怪しい、という感想が真っ先に出てきたのも無理はないと思う。まだミスターTには召喚権だつて残っているし、手札だつて2枚もある。にも関わらずターンを

終わるとは、よほど手が悪いのだろうか。

いや、相手は人外の存在だ。手札事故なんて可能性、まずありえないだろう。何を企んでいるのか、僕には見当もつかない。

『……だが、殴るしかないだろうな。不本意だが、何かあればその時はその時だ』

チャクチャルさんですら、何が奴の狙いなのか絞り切れていないようだ。となるとこの神様の言うとおり、とにかく殴って確かめるしかない。

「僕のターン。ラディアン、そのままダイレクトアタック！」

多次元壊獣が再び動く。恐らくこの攻撃は何らかの方法で無効になるか、ミスターTには届かないだろう。だがラディアンの体がぐんぐん迫り、その腕が振りかぶられても、ミスターTは微動だにしない。そして、そのまま腕が振り下ろされてもお、ミスターTは何もアクションを起こさなかった。

多次元壊獣ラディアン 攻2800↓ミスターT（直接攻撃）

ミスターT LP1200↓0

勝った。でも、まるで勝った気がしない。何を考えているにせよ、闇のデュエルで倒れたのだからそのまま消えるはずだ。だがそんな常識すら通用しないのか、何事もなかったかのようにミスターTは立ち上がった。あの霸王ですら全力で抗うのがやっとだった闇のデュエルの決まりをいとも簡単に無視してのけるあたり、その底しれない力的一端を感じさせる。

「おめでとう、今回は君の勝ちだ。今日のところはここまででいいが、また会いにくるよ。その時まで、せいぜい楽しんでおくといい」

そしてその言葉だけを残し、出てきたときと同じように唐突に消え去った。

『待……いや、逃げられたか』

一体、何を考えていたのだろうか。あの最後のターン、もう少し何かやろうと思えば十中八九できたはずだ。にもかかわらず何もしな

かった……まるで、勝負を途中で投げ出したかのように。だとすれば、そんなことをする理由とは何だろう。

情報が少なすぎて、何も思いつかない。こんがらがってきた頭をふるふると振ったところに、聞きなれた声が飛び込んできた。

「あ、清明だ。どうしたの？って」

「夢想……いいいや、大したことじゃないよ。うん、ちよつとね。それよりそっちこそ、どうしたのさこんなところで」

こちらの質問には答えず、代わりに向けられた探るような視線に気づかないふりをして耐える。

霸王の世界に行ってる間に彼女がどんなことになっていたのかはあれから葵ちゃんにたつぷり聞かされたし、そうでなくとも僕が帰ってきてすぐの憔悴しきった彼女の顔を見れば、どうなっていたのかは容易に想像がつく。もう彼女には一生分の心配をかけたんだ、さらにミスターTの話なんてできるわけがない。

まだ納得はしていないようだったが、結局この場での追及は諦めてくれたらしい。最後にもう一度じつとりとした視線を向け、話を切り替えた。

「清明も、変なカードを集めてた話は聞いてたんだよね？だって。それで集めたカードを置いておいたんだけど、目を離したすきに誰かが全部燃やしちやっみたいで……今万丈目君たちが犯人捜ししてるんだ、ってさ」

「燃やした!?カードを!?と、とにかくそこまで案内して!」

既に燃えカスになってしまったのなら行つたところで何ができるわけでもないが、それでもじつとしていられなかった。それにしても、万丈目が犯人探しをしているということは、少なくとも今は何事もなかったわけか。元来た道を先に立って走り出す夢想の後姿に、結果は見えているとはいえふと気になって先ほどの疑問をぶつけてみた。

「そういえばさ、夢想。藤原優介……って名前、知ってる?」

突然の変な質問にも素直に少し考え込み、走りながらゆっくりと首を横に振る夢想。何を言ってるのかと言わんばかりの口調で、不審そ

うに逆に聞き返す。

「どうかしたの、清明？そんな名前の方は聞いたことがないよ、だつて」

「え!？」

『む？これは……予想外の反応だな』

突然大声を出して驚く僕に、いよいよ不審そうな目を向ける夢想でも、こちらも今の言葉のせいでそれどころではなかった。夢想は、藤原優介の存在を知らない？

え、ちよつと待つて、これはいったいどういうことだろう。チャクチャルさんの推察が正しければ、藤原の存在に関する偽りの記憶は既にアカデミア中に広まっていなければおかしいはずだ。にもかかわらず、夢想はその影響を受けていない。そういえばさっきのミスターTも、途中で何かに気が付いてから妙にあっさり勝負を切り上げていた。そしてそのすぐ後で、夢想がこの場にやって来た……いや、さすがにそこまでは考えすぎか。夢想を疑うなんて、そんなことする意味はない。彼女と過ごしてきた、この3年間の記憶に嘘はない。彼女は僕の仲間で、それと……かけがえのない、大切な人だ。

「ごめんごめん、夢想。じゃあ、その場所に案内してよ」

「うん。こつちだよ清明、つてさ」

再び彼女の後について歩きながら、今浮かんだばかりの疑心の炎を頭の中で打ち消そうとする。だけどいくら努力してもその小さな小さな種火は消えず、いつまでも頭の中でくすぶり続けていた。



## ターン110 鉄砲水と英雄、空爆

夢想の後について、アカデミアの外に出る。校舎の裏手のちよつとした死角になつている一点から、かすかな煙と焦げ臭いにおいが漂つてくるのを感じた。万丈目や明日香、翔に剣山といつたいつものメンバーがやつてくる僕らを認めてあいさつ代わりに手を上げる。

「……これがその、燃やされちゃったカード？」

「そうよ。誰がこんなことを……」

焼け跡から半分以上灰になつてしまい、もはやデュエルディスクも認識してくれないであろうカードの残骸を何気なく拾い上げる。まだ使えそうならこつそりちよろまかしていこうかとも思ったけど、これは流石に無理だろう。辛うじて残つていた文字やイラストから察するにこれは大木炭18、昼夜の大火事、終焉の地、か。何とも皮肉なラインナップだこつた。

燃えカスをまた元の場所に戻すと、呆然としたままの皆の顔が見えた。なんとはなしに眺めまわしたところでようやく、あることに気づいた。

「あれ、藤原は？」

藤原。まだ敵か味方がわからないが、少なくともただの人間ではない謎の存在。なぜかこの生徒に成りすまし、なぜかカード回収に手を貸していた。あれ、やつてることだけ取り上げると稲石さんみたただのお人よしな気がする不思議。

だが、そこで返つてきた反応はおおいに訳の分からないものだった。

「藤……原？えっと、誰だったかしら……？」

「確かに聞き覚えがあるような気はする……んだがな」

「え……？」

これはおかしい、明らかにおかしい。百歩譲つて明日香辺りがわからないのはまだいいとして、ついさつきまで一緒に行動していたはずの万丈目までこんなにはつきりしないのは、どう考えても普通じゃない。手伝うだけ手伝つて記憶消してどっか行くとか、ホントに何がし

たかったんだあの男。ますます困惑する僕をよそに、話は別の方向にまとまり始めていた。

「こうしていても仕方ない、まずはこの犯人を捜すでしょう」

「でも万丈目君、そんなのどうするんスか？」

「決まっているだろう、捜査の基本は足だ。辺りに怪しい奴がいなかったか聞き込みに行くぞ！」

「そんなのカードが詰まった段ボール抱えて校舎中歩き回ってた万丈目先輩の名前が挙がるだけだと思っただろう……」

「なんだと!？」

「アニキなら、こんな時どうしたかなあ」

ワーワーと言い争う万丈目と剣山の隣で、翔がポツリと呟く。不思議なことだが、その名前が出た瞬間ぴたりと場が静まり返った。

「そうだな。この名探偵サンダー1人でも十分だが、ここはまた奴にも華を持たせてやるとするか」

「最近はずっと寮にこもってばっかだけど……」

「じゃあ、ちよつとアニキのことも呼んでくるッス」

「あ、ちよい待ち翔。僕もいったん部屋に戻るよ、カバンが店に置きっぱだから戻しておきたいし」

「清明が行くなら私も行こうかな、ってさ」

「なら、私たちは聞き込みね。行くわよ、万丈目君、剣山君」

今はこの場にいない十代の存在が中心となってようやく動き出すあたり、彼の影響力の強さがよくわかる……なんて、しみじみしてる場合じゃない。最近の世捨て人っぷりは目に余ってたし、これもちようどいい機会だろう。

だが結論から言って、この考えは不発に終わった。レッド寮にたどり着いた時十代はそこにはおらず、ファラオもどっか行ってしまったため大徳寺先生に話を聞くこともできなかつたのだ。

「散歩でもしてんのかね、ったくもう。じゃあ僕は海の方を探しに行くから、翔は火山の方、夢想は海の方をお願い。見つけたらちゃんと連絡すること、いい？」

「了解、って」

「わかったよ」

レツド寮の前でさらに三手に分かれ、それぞれ割り当てた場所に十代を探しに行く。ただし、僕の狙いはそこではない。適当に海の方へふらふらと歩き、周りに誰もいないことを確かめてからデュエルディスクを展開する。

「……チャクチャルさん、どう？」

『少し待っててくれ、今探してる』

散歩、ねえ。一応口ではああ言っておいたけど、僕だってそんなものを本気で信じてはいない。このタイミングで行方不明ということとは、まず間違いないミスターT絡み。恐らく、僕のところに見れたのと同様に十代にも何らかの形で接触したのだろう。あの十代のことだからただでやられるなんてことはないだろうが、だからといって放置なんてありえない。これでも親友のつもりだ、そこまで冷たくはない。

『お、いたいた。校舎……を出て、島の端の方向か？追いかけるか、マスター？』

「当然。今も動いてるの？」

『そのようだな。真つ最中ではなさそうだ』

なるほど、少なくとも今は安全ということか。とにかく合流しようとして、チャクチャルさんの示した方向へと早足で崖沿いの森の中を歩き出した。ありがたいことに、常に正確な相手の位置をナビしてくれるチャクチャルさんがいるので見失う恐れはない。なので周りの様子に気を配りながら歩く余裕すらあったが、僕が見る限りいたって普通の海沿いの光景だけが広がっていて、この場所に新たな危機が迫りつつある……かもしれない風にはとてもじゃないが見えない。海は穏やかで空はそこそこ晴れ、海風が心地よく吹いている。

見た感じの世界は凄く平和で、のどかで、きれいなものだ。本物のヒーローならこの景色を見て、この世界を救おう、守ってみせるといふ決意を新たにしたりするのもかもしれない。だけど僕は、そんな大それたことは思わなかった。というかいい加減、ヒーローの真似事をするのは懲りた。この世のあらゆる難しい話は僕にとっては専門外、

もつと世の中単純に行こう。敵が喧嘩を売ってきた、だから残さずぶちのめす……ほら、だいぶわかりやすくなった。それでいいし、それだけでいい。下手に気負ったって空回りするだけなのは、この数年で身に染みた。本当に生きてんだか死んでんだかもよくわかんないような化物には、そんな程度で十分だ。

そんなことを考えていると、突然道が開けた。長かった森を抜けたらしく、その先に十代の後ろ姿が見えた。声を掛けようとするも、その向こうにさらに2つの人影がいるのに気づいた。1人は老人で、なんか見た覚えはあるんだけど誰だったか思い出せない。でも、もう1人はよく知った顔だった。

「齋王……？」

この時点でさつと身を隠し、耳を澄まして木陰にまぎれてじりじりとにじり寄る。なぜ齋王がこの島にまた来たのか、なぜ十代がそこにいるのか。なんだかわからないけれど、なんだか面白そうなことやってんじゃないの。やがて少しずつ、会話の内容が耳に入ってきた。どうやら齋王たちが十代に何かを伝えに来たものの、肝心の十代がどうもつれない態度らしい。

「……我々に啓示が下ったということは、君も気づいているのだろう。だからこそ、君はその原因が自分にあると感じ、1人でこの島を出ようとした。違うかね？」

「さあな」

「鮫島校長から聞いたが、ついさつき退学届けを出してきたそうじゃないか。だが十代、もはや話はそんな単純な次元ではないのだよ。調査チームの調べによれば、この島に何らかのエネルギーが噴出しようとしていることを突き止めた。あくまで仮説だが、こちら影丸会長の三幻魔、私の光の波動、そして君のユベル……これらの事件が複合的にこの次元へと負担をかけ、その結果その中心であったこの島に新たな事態を引き起こそうとしているのだろう」

ふむふむ。多分、僕もその片棒はかっいでいるのだろう。この地縛神の存在がどれだけ次元を揺さぶったのかはわからないが、この際その割合は問題じゃない。それに齋王の言葉のおかげで、もう1つ思い

出したことがある。あの齋王が車椅子を押すよぼよぼの老人、あれは影丸会長だ。確かに言われてみれば、アカデミアのパンフか何かで写真を見たことがある。三幻魔の時は色々ニアミスして会えなかったから、こうして直接顔を見るのは初めてだ。

それにしても、いないと思っただら退学届なんて書いてたのか十代。まあたそうやって勝手なことやって。

「それで、なんでそれを俺に知らせに来たんだ？」

「これは、我々がデュエルモンスターズを悪用した報いかもしれん。身勝手なのは承知の上だが、我々はいまだ入院患者。十代君、君にこの事態を収拾してほしい」

そう言って、頭を下げる齋王と影丸会長。多分この結論にたどり着くまでに、何度も何度も考えたのだろう。十代に、またしてもすべてを押し付けてしまったていいのか。あれだけ世界を救ってきた本物のヒーローを、またしても新たな戦いの最前線に押し付けるなんてことが許されるのだろうか。だけど、他に道はなかった。だからこそその苦しみを堪え、断腸の思いで頭を下げている。

今の2人の気持ちを想像すると盗み聞きする僕には図々しい、という思いより先に同情すら湧いてきたが、十代の出した結論はどうやら違ったらしい。

「俺達は同じ穴の貉だから、俺にその尻拭いをしろってか？」

珍しい、というか僕もほぼ聞いた覚えのない十代の皮肉と、その内容の正しさに押し黙る大の大人が2人。ああもう、見てらんない。

「同じ穴の貉、ねえ？確かにそうも言えるだろうけど、僕の見立ては少し違うかな」

「清明!? どうしてここに!?!」

「君は……そうか、君もここにきていたのか」

あ、しまった。情報収集だけやるつもりだったのに、見てられなくなってついつい口出しちゃった。こうなった以上仕方ないので、身を隠すのは諦めて藪の中から立ち上がる。せめて最初からここで出てくる予定だった風に見えるようになるべくさりげない動きで制服中に付いた木の葉や小枝を払い落とし、極力澄ました顔で十代の目を真っ

直ぐ見据えてやる。

「お久しぶり、斎王。さて、十代。この状況だけど、僕はこう読んだね。踊るアホウに見るアホウ……なら、同じアホなら踊らにやそんなさ。ここまで来た以上、僕は今になって見るアホウにはなりたくないね。1人でどっか行こうだなんて、そりゃちよつと水臭いんじゃないの？」

この時十代が何を言おうとしていたのかは、わからない。まっすぐに見返してくる彼の目は深く、そこから何らかの感情を読み取ることが難しかった。それに、もし彼が何か言い返そうとしていたのだとしても、それはすでに遅かった。突然島全体を揺るがすような地響きが起き、空間がぱっくり割れてその裂け目から奴が現れたのだ。

「これはこれは御揃いで。また会ったね遊城十代、それに遊野清明」

「お前は！」

「ミスターT、また来たの？懲りないね」

あの反応から見ても、やはり十代のところに来ていたのは間違いないかったらしい。あつちに行ったりこつちに来たり、何ともせわしない奴だ。

「清明、お前もこいつに会ったのか？」

「ちよつとした仲でね、互いに互いが大っ嫌いなのさ。斎王、それに影丸さんも。ここは逃げたほうがいいと思うよ」

「本来ならば私も戦うのが筋なのだろうが……そうさせてもらおう。本当にすまない」

それだけ言って車椅子を押し、近くに止められたへりに乗り込む2人。パイロットは別にいたらしく、ドアが閉まるや否やプロペラが回転を始めた。そしてほんの一瞬目を離れたすきに、ミスターTはその底知れない力を新たな方法で開放していた。

「逃げるなら別に追いはしない。私があるのは君らの方だ」  
「増えた……？」

「相変わらず何でもありだねえ」

なぜか二重に聞こえる声に振り返ると、そこにいたのは背格好から服装、ちよつとした仕草までそっくりそのまま、まるで同じな2人の

ミスターT。童実野町でも見せられた技だから僕にとつてはそう驚くことでもないが、初見の十代は意表を突かれたらしい。

「我々はこれで2人、そして君たちも2人。1対1ではいささか厳しい相手だからね、タツグデュエルで勝負と行こうじゃないか」

言うが早い、僕と十代の立っている部分を残していきなり周りの地面が崩れ落ちる。さつきまでここにあつた大地の落ちていく先は、海は海でも火山の下を流れる溶岩の海。一体どれほどの力を使えばこんなことが可能なのか、ぽつんと残った2本の円柱状の岩の上に、僕らだけが辛うじて立っている格好だ。

「嘘でしょ、こんなこともできるの!？」

『……ふむ。しつかりな、マスター』

「そんな他人事みたいに言っちゃって……でもいいね、悪くない。こんなのを相手にできるんだ、逆に燃えてきたね」

「断ることはできないってわけかよ……仕方ない、清明！」

「当然。話が早いのは嫌いじゃないよ、タツグデュエルと洒落込もう！」

「「デュエル!」」

タツグデュエル。霸王の世界でもオブライエンとタツグを組んだけど、あの時は相手が霸王1人という変則デュエルだった。こうして本来の意味でのタツグデュエルをするのは久しぶりだが、腕が鈍っていないからいいのだが。

そして最初のターンはミスターT側。僕らから見て右にいる方が、おもむろに手札の1枚をデュエルディスクに置いた。

「私のターン、ジェネクス・ニユートロンを召喚する」

まず先陣切つて場に召喚されたのは、黒を基調にオレンジ色のパーツをとどこどこに持つ人型の機械。あのカードは確か……駄目だな、止められない。

ジェネクス・ニユートロン 攻1800

「カードを2枚伏せてエンドフェイズ、このカードのモンスター効果を発動。召喚に成功したターンのエンドフェイズ、デッキから機械族のチューナー1体を手札に加える。私が選ぶのはこのカード、

サウンドウォリアー  
音響戦士ピアード

「次は俺のターンだな。最初から飛ばしていくぜ、融合を発動！手札のエッジマンとスパークマンで融合召喚！来い、プラズマヴァイスマン！」

エレメンタルヒーロー  
E・HERO プラズマヴァイスマン 攻2600

こちらのフィールドで先陣を切ったのは、金色の鎧に雷を纏った巨体の融合ヒーロー。帯電したその体がひとときわ強く発光したかと思うと、その両腕から雷がジエネクス・ニュートロンめがけて空気を割いて飛んで行く。見事に命中したその激しい雷に身を撃たれ、体の機能が完全に停止したジエネクスの戦士が力なく眼下の溶岩へと落ちていく。

だが、それだけでは終わらなかった。やはり今の十代は一味違う。最初から飛ばしていくとの言葉は伊達ではなかった。

「プラズマヴァイスマンの効果発動、手札1枚を捨てることで相手フィールドの攻撃表示モンスター1体を破壊する！そして墓地に送ったネクロダークマンは、墓地に存在する限りデュエル中1度だけヒーローをリリースなしで召喚できる。来い、ネオス！」

E・HERO ネオス 攻2500

あつという間に場に並ぶ、最上級モンスター2体。これで総攻撃力は5100と、攻撃がすべて通ればワンターンキルも狙えるほどの数値だ。ただど気になるのは、ミスターTのあの2枚もの伏せカード……しかし、それを忘れるような十代ではなかった。最後に残った手札1枚を、惜しげもなく発動して見せる。

「魔法カード、Rーライトジャステイスを発動。俺の場のヒーロー1体につき1枚、場の魔法・罠カードを破壊するぜ。俺の場にはネオスとプラズマヴァイスマンの2枚、よってその2枚の伏せカードを破壊する！」

「いいだろう、ならばこのカードを発動する。トラップ発動、ダメージ・ダイエット。この効果により、このターンの間私が受けるダメージは全て半分となる」

「惜しい……！」



「だとしても、バトルだ！プラズマヴァイスマンで攻撃！」

E・HERO プラズマヴァイスマン 攻2600↓ミスターT&ミスターT（直接攻撃）

ミスターT&ミスターT LP4000↓2700

再び放たれた電撃が、2人のミスターTの体を真つ向から貫く。この攻撃は確かに命中したし、ダメージ半減とはいえライフも減らせた。闇のデュエルのルールに従い実体化したダメージのせいで、その全身からはかすかに煙が立ち上っている。

だが、それだけだ。2人のミスターTは自分の体が出す煙に気づいてすらいなような様子で平然と立っており、実際まるで効いていないのだろう。そこに、今度はネオス渾身の手刀が上空から襲いかかった。

「行け、ネオス！ラス・オブ・ネオス！」

E・HERO ネオス 攻2500↓ミスターT&ミスターT（直接攻撃）

ミスターT&ミスターT LP2700↓1450

大ダメージを与えた割に、十代の表情は冴えない。それどころか、若干の焦りさえ見れる。だが、それも無理はない。もはや手札を使い切った十代に、これ以上取れる手はないからだ。こちらの優位に変わりは無いといえれば確かにそうなのだが、多分十代はこのターンだけでけりをつけるつもりであれだけ展開したのだろう。

……早い話が、わずか2ターン目にして早くも息切れを起こしている。今のターンはいいとして、次のターンを戦い抜くことができるのだろうか。さらに次のターンはどうなる？その思いでいっぱいになっているのだろう。

ま、そこをどうにかするのがパートナーの仕事なんだけどね。僕のデッキは持久戦に強い、勝負は始まったばかりだ。

十代&清明 LP4000 手札：十代0清明5

モンスター：E・HERO プラズマヴァイスマン（攻）

E・HERO ネオス（攻）

魔法・罫：なし

ミスターT&ミスターT LP1450 手札：ミスターT3ミスターT5

モンスター：なし

魔法・罫：なし

「私のターン。魔法カード、融合を発動。手札の機械族モンスター、ジェネクス・ニュートロンと炎族の灼熱ゾンビを融合する。出でよ、起爆獣ヴァルカノン！」

起爆獣ヴァルカノン 攻2300

足元の溶岩が突然膨れ上がり、爆炎と共に機械の体を持つ獣が宙に舞う。だが攻撃力は十代のモンスターの方が上回っている……そんな考えをあざ笑うかのように、巨体に似合わない驚くほど俊敏な動きでヴァルカノンがプラズマヴァイスマンにしがみついた。振り払おうともがくも、鋼鉄の腕は捉えた得物を決して放そうとしない。その尻尾の先に火がともったかと思うと、猛烈な勢いでその小さな炎が本体に走っていくのが見えた。

それが火薬のたつぷり詰まっているであろう本体に点火するまでには、瞬きするほどにもかからなかった。視界が真っ赤に染まるほどの炎の塊が目の前で急成長し、解き放たれたエネルギーが零距离でプラズマヴァイスマンの巨体を跡形もなく吹き飛ばす。そしてその余波は、ダメージという形で僕らにも等しく襲いかかった。

「ヴァルカノンの融合召喚に成功した時、その効果である融爆を発動する。自身と相手フィールドのモンスター1体を破壊し、その相手モンスターの攻撃力分のダメージを与える」

「プラズマヴァイスマン……ぐわっ！」

「十代……熱っ！」

十代&清明 LP4000↓1400

「UFOタートルを守備表示で召喚する。最後にカードを伏せ、これでターンエンドだ」

UFOタートル 守1200

まだ使っていないなかった召喚権により呼び出されたのは、炎の属性リクルーター。もつとも戦闘破壊で後続を呼ぶのなら、それ以外の方法

でどかしてやればいい。幸いここからは僕のターンだ、僕にはそれができる。

「ドローして、と。じゃあ、僕も最初っから行かせてもらうよ。UFO タートルをリリースして、粘糸壊獣クモグスをそっちのフィールドに特殊召喚！」

粘糸壊獣クモグス 攻2400

クモグスを出して、次はどうするか。普通のデュエルならこの手札のモンスター、グレイドル・コブラで攻撃し、多少のダメージ覚悟で奪い取ってネオスと2体で攻撃を仕掛けるのもありだろう。だが、これはタッグデュエル。僕の失敗は僕だけでなく十代の迷惑にもなる以上、あまり身勝手な行動は控えたほうがいい。特に今こちらのライフは半分以上削られている、いくら全ての攻撃が通れば勝てるとはいえ追加で1400ものダメージを受けるのはリスクの方が大きいか。「……グレイドル・コブラを召喚。バトル、ネオスでクモグスに攻撃！ラス・オブ・ネオス！」

E・HERO ネオス 攻2500↓粘糸壊獣クモグス 攻2400 (破壊)

ミスターT&ミスターT LP1450↓1350

「次、コブラでダイレクトアタック！」

グレイドル・コブラ 攻1000↓ミスターT&ミスターT (直接攻撃)

ミスターT&ミスターT LP1350↓350

迷いに迷った末、僕が取ったのは安全策だった。あの奴らの場の1枚の伏せカード、あれがどうにも気になって仕方なかったのだ。少なくとも攻撃反応ではなかったようだが、すでに攻撃を終えた以上後戻りはできない。あとできる事は、今の判断を後悔する時が来ないように祈るだけだ。

「メイン2にカードを2枚セットして、ターンエンド」

十代&清明 LP1400 手札：十代0清明2

モンスター：E・HERO ネオス (攻)

グレイドル・コブラ (攻)

魔法・罨：2（伏せ）

ミスターT&ミスターT LP350 手札：ミスターT3ミス  
ターT0

モンスター：なし

魔法・罨：1（伏せ）

「私のターン。まずトラップ発動、戦線復帰。このカードにより、私は墓地から灼熱ゾンビを守備表示で特殊召喚する。そしてこのカードが墓地からの特殊召喚に成功した時、私はカードを1枚ドロウできる」

灼熱ゾンビ 守400

片割れの伏せておいた蘇生カードを使ってモンスターを場に出しつつ、実質ノーコストでのドロウまで行うターンプレイヤー側のミスターT。こうして何のためらいもなく相方のリソースを使うことができるのも、同一人物によるタッグならではの奴らなりの強みだろう。

「魔法カード、フュージョン・リカバリー融合回収を発動。墓地から融合カード1枚と、融合に使用されたモンスターであるジェネクス・ニュートロンを手札に加える。そしてこの融合を発動、手札の機械族モンスター、音響戦士ピアーノと場の炎族モンスター、灼熱ゾンビを素材とする」

「機械族と炎族……まさか!」

「そう驚くことでもないだろう?再び現れよ、起爆獣ヴァルカノン。そしてネオスを破壊せよ!」

起爆獣ヴァルカノン 攻2300

ついさつき木っ端微塵に吹き飛んだはずの起爆獣が、またしても尾の導火線に火をつけた状態で溶岩の海から浮上する。そのまま伸ばした鋼鉄の腕でネオスを鷲掴みにしようとしたが、伸ばしたはずのその両腕はネオスの体に触れることもなく胴体から切り離されて溶岩の中へと落ちて行った。何が起きたのかわからないと呆然と切り落とされた切断面を眺めるヴァルガノンに、追い打ちをかけるような鎌の一撃が深々と突き刺さる。その投擲主である銀髪の少女の姿がほんの一瞬だけ、熱で揺らめく蜃気楼の向こう側に見えた。そちらの方

向に感謝の意をこめて片手を上げ、ミスターTへと向き直る。

「悪いね、2回も3回も同じ手が効くと思つた？手札から幽鬼うさぎの効果を発動。このカードを捨てて、場で効果を発動したヴァルカノンには破壊されてもらったよ」

これなら少しは意表をつけたかとも思つたが、やはりサングラスに隠された顔からは何の感情も読み取れない。あるいはこの人格も見せかけで、そもそもこの存在には感情そのものがないのかもしれない。そんな考えすら浮かんでくる。

「だが、目的の半分は果たされた」

その言葉通り、今の一撃はネオスの至近距離での自爆そのものが止められたわけではない。特大ダメージがこちらに入ることこそ辛うじて避けられたものの、ネオスの姿もまた爆風の中に消えていった。

「ごめん、十代」

「気にするな。それより、来るぞ！」

「私はジェネクス・ニュートロンを召喚する」

ジェネクス・ニュートロン 攻1800

その言葉通り、ミスターTが次なるカードを場に出す。1ターン目にも見た人型のロボが、かすかなモーター音とともに動き出した。でもミスターTはグレイドルの能力を知っている、わずかなダメージを稼ぐためだけに仕掛けてくるような真似はしないだろう。となると1ターン目にも使っていた、エンドフェイズに発動するサーチ能力が狙いか。

だが次の瞬間、改めてミスターTの思考回路が常人の域ではないことを思い知らされた。放っておけばサーチが問題なく使えるはずのこの状況で、目先のダメージを優先してきたのだ。

「ジェネクス・ニュートロンで攻撃する」

ジェネクス・ニュートロン 攻1800↓グレイドル・コブラ 攻1000 (破壊)

十代&清明 LP1400↓600

「正気!?ならコブラの効果を発動、対象は当然そいつだ！」

重たい金属の拳を喰らって弾け飛んだコブラの体が、ジェネクス・

ニュートロンの全身にへばりつくように再集結する。わずかな関節の隙間から内部に入り込み、精密機械のコントロールを狂わせる。

それにしても、こうなることがわかっていてあえて攻撃してくるとは。何らかの罠を張るのは間違いないだろうが、それにしたってあそこは1ターンぐらい大人しくしていたっておかしくない状況だっただけだ。これは闇のデュエル、命がかかっているとすれば普通ならまず間違いなくそうするし、せめて多少なりとも躊躇してから行動に移すはずだ。

だが、ミスターTにはそれが無い。次の十代のターンで罠が無効化されるかもしれないといったリスクを一切考慮しないその姿勢は、そもそも生物の概念に当てはまるかどうかとも怪しいあの存在だからこそ取れる戦術なのだろう。そんな生き急ぐような戦術、少なくとも僕はやる気もないしやりたくもない。

「カードを1枚伏せる。永続魔法、未来融合―フューチャー・フュージョンを発動。ターンエンドだ」

未来融合……発動時こそ何も起きないものの、それから1回目のスタンバイフェイズに融合素材をデッキから墓地に送る。そこからさらに次のスタンバイフェイズで融合召喚を行いモンスターを出す、まさに時間差で融合を仕掛けてくる未来融合の名に相応しいカードだ。

そしてこれまでのパターンから考えると、恐らく狙いはまたヴァルカノン。うさぎちゃんも墓地にいる以上、もう1度あれが融合召喚されたら今度こそ止めるすべはないだろう。かといって2ターン後にこちらがモンスターを出さないでいたら、自爆こそ防げるもののそのまま直接攻撃を喰らってしまいそれでは本末転倒だ。猶予は後2ターン、それまでの間にあれを破壊するなりなんなりで無力化しないと、終わる。

とはいえ僕にできる事はない、ここは奇跡を呼ぶ十代の引きに命を預けよう。

「俺のターン、ドロ―！」

さあて何を引いたか、だがなんといつてもあの十代だ。この局面で

無意味なカードなんかは絶対引かないだろう。しかし意外にも引いたカードを一瞥しただけで、それを使うことなくすぐに攻撃に移った。

「バトルだ、ジエネクス・ニュートロンでダイレクトアタック！」

「トラップ発動、ドレインシールド！攻撃を無効にし、その攻撃力分我々のライフを回復する」

ミスターT&ミスターT LP350↓2150

せつかく減らしたライフが、また大幅に回復されてしまう。とはいえまだ1800ポイントでよかった、と言えるかもしれない。僕も十代も融合召喚や壊獣を駆使しての大型モンスターを出すことは割と得意だから、それらの攻撃に対して使われていたらこんなものじゃすまなかった。

……ま、これぐらいポジティブに考えてないかね。僕がここで気落ちなんてしてられない。今一番焦りを感じているのは当の十代のはずだから、これ以上下手にプレッシャーを与える必要はない。

「……魔法カード、命削りの宝札を発動。手札が3枚になるようカードをドロウする代わりにこのターンの特殊召喚が封じられ、このターン相手の受けるダメージも0になる」

制約こそ多い物の強烈なドロウソース、命削りの宝札。なるほど、十代の引きはこのターンで勝負を決めるよりも、さらなるドロウソースを選んだわけか。確かに手札がなかった今の十代にとっては、その効果を最大限発揮できるカードではある。3枚のカードを引き、それを素早く確認した十代が軽く頷く。

「まず魔法カード、E―エマージェンシーコールを発動。デッキからE・HERO1体、ワイルドマンを手札に加えて守備表示で召喚するぜ」

ジエネクス・ニュートロンの隣に、その大剣を体の前で構えて身を守りつつ片膝をつくヒーローが召喚される。確かに現在、守りを固めるには下級ヒーローの中でも割と高めの守備力を誇るこのカードが適任だろう。十代のデッキにはより守備力のあるクレイマンも入っているが、ワイルドマンには一切のトラップを受け付けない耐性があ

る。

E・HERO ワイルドマン 守1600

「さらにカードを1枚伏せて、エンドフェイズに命削りの宝札のデメリットでこの最後の手札も捨てる。だがこのダンディライオンは墓地に送られた時、綿毛トークン2体を守備表示で特殊召喚できる！」

綿毛トークン 守0

綿毛トークン 守0

その名の通りたんぽぽの綿毛に顔が付いたような何ともファンシーなトークン2体がさらに召喚されたことで、こちらのフィールドもだいぶ守りが盤石となる。わずか1ターンでの成果としては上々だろう。

十代&清明 LP600 手札：十代0清明2

モンスター：ジエネクス・ニユートロン(攻・コブラ)

E・HERO ワイルドマン(守)

綿毛トークン(守)

綿毛トークン(守)

魔法・罨：3(伏せ)

ミスターT&ミスターT LP2150 手札：ミスターT0ミス

ターT0

モンスター：なし

魔法・罨：未来融合―フューチャー・フュージョン

「私のターン。このスタンバイフェイズに未来融合の効果により、私のエクストラデッキから重爆撃禽 ボム・フェネクスを見せる。そしてその融合素材である炎族モンスターと機械族モンスター、灼熱ゾンビと音響戦士サイザスを墓地に送る」

意外にも見せてきたモンスターはこれまでのヴァルガノンではなく、新たな融合モンスター……確かあれも、計算方法こそ違えどバーン効果を持つモンスターだったはずだ。となると、依然として次のミスターTたちのターンがピンチなことには変わりはない。

「魔法カード、ソウル・チャージを発動。このターンのバトルフェイズが行えなくなる代わりに、私の墓地から1体につき1000ライフを



支払うことでモンスターを蘇生する。灼熱ゾンビ2体を蘇生し、それぞれの効果によりカードを2枚ドロウしよう」

ミスターT&ミスターT LP2150↓150

灼熱ゾンビ 守400

灼熱ゾンビ 守400

ついさつき回復したばかりのライフをそれ以上に投げ捨て、強引な2枚ドロウに繋いでいくミスターT。凄まじく強引な手ではあるが、これでミスターTは2体のモンスターと2枚の手札を同時に手に入ってしまった。これから起こることへの嫌な予感に、口の中が乾いていくのを感じる。それは十代も同じなのか、若干表情が硬くなっている様子が見えた。

「私も魔法カード、融合回収を発動。融合カード1枚と、素材となった音響戦士ピアノを回収する」

「また……」

いや、またも何もない。元々が同一人物なのだから、同じようなカードばかり使って当然だ。つい先ほど片割れがやったことと同じような流れにより、三度現れた融合の渦に2体のモンスターが混ざり合う。そう、三度だ。いくらタッグである程度のカード消費を補えるとはいえ、本来かなり消費が激しいはずの融合召喚を全て正規の方法でこれだけ連続でやってのけるとは。

「融合を発動。手札の機械族、ピアノと場の炎族、灼熱ゾンビの2体を融合する。重爆撃禽 ボム・フェネクス！」

ひとときわ派手に溶岩を跳ね飛ばし、灼熱の翼に身を包んだ鋼鉄の不死鳥が炎の羽根をまき散らしつつ舞い上がった。察するに、これこそが今回のミスターTの切り札なのだろう。

重爆撃禽 ボム・フェネクス 守2300

「カードを1枚伏せて……」

「あのカードは……まずい！」

ボム・フェネクスの効果は1ターンに1度、場のカード1枚につき300ポイントのダメージを相手に与える。ミスターTたちの場にカードは4枚、そして僕らの場にはトークンも含めて計7枚。せっか

く出てきた2体の綿毛トークンがむしろ仇となり、こちらのフィールドを見下ろした不死鳥が甲高い声とともに炎の翼を一振りする。体を離れた大量の燃え盛る羽根が11本こちらに飛んでくる。いや、よく見たらあれば羽根なんかじゃない。1体1体が全て小型の不死鳥、その身を爆弾として突っ込み、点や線ではなく面で相手を制圧するための、まさしく絨毯爆撃としか言いようのない決戦兵器だ。

「十代！」

「わかってる！効果を発動する前に、先にこっちのカードを使わせてもらうぜ！速攻魔法、神秘の中華なべを発動！俺の場のジェネクス・ニュートロンをリリースして、その攻撃力か守備力の数値だけライフを回復できる！俺が選ぶのは当然、攻撃力の1800だ！」

ジェネクス・ニュートロンとその体に寄生していたグレイドル・コブラ、さらに発動された神秘の中華なべのカードが墓地に送られ、こちらへ突っ込んできていた小型の不死鳥のうち3羽が空中で暴発する。これでダメージは900ポイント減って2400、そして回復分を合わせた僕らのライフも2400。

「まだ足りないか……！十代、構わないから僕のカードも使っちゃって！」

「だけど、清明……」

目に見えた敗北を回避するためには、もう1枚なんでもいいから場のカードを減らすしかない。小学生でもできる計算を目の前にしてなお十代が迷うのにも、それなりの理由がある。普通に使っても使いづらいこの伏せカードはタッグデュエルで、それも相手ターンに使うにはあまりにもデメリットが大きすぎるからだ。だから僕も一応伏せはしておいたけど、よほど確実に勝負を決めたいときにしか使うつもりはなかった。でも背に腹は代えられない、躊躇いながらも十代は2枚目のカードを表にした。

「すまない、清明！トラップ発動、無謀な欲張り！カードを2枚ドロースする代わりに、2ターンの間ドローフエイズをスキップする！」

「なるほどな。だが私にもこれ以上場のカードを増やすことはできない、ボム・フェネクスの効果発動だ」

場のカードがまた減ったことで、さらに1体の不死鳥が空中で爆散する。しかし、いまだ残った7体が僕らの至近距離、射程圏内にたどり着いてで自爆を繰り返し始めた。1体1体の衝撃はヴァルガノンの自爆の方がはるかに上ではあったが、身を守るためには爆発の起きる1か所のみ集中していればよかったあちらとは違い周りの空間全てを攻撃範囲とするボム・フェネクスは、総合的な威力ではむしろあちらを上回る。

息が詰まるほどの熱と目を閉じていても眩しく感じる閃光、無限に続くかと思われた轟音がようやく止んだ時、僕らは共に肩で息をしてどうにか立っている状態だった。でも、どうにか……まだ、2人とも生きている。

十代&清明 LP600↓2400↓300

「まだ耐えきったか。だがそこまでして繋いだ命、本当にそのドロークードが使えるようになるまで持つかね？」

ミスターTの言葉が、冷たく刺さる。無謀な欲張りは、ドローフエイズが2回スキップされるカード。そしてこのミスターTのターンでは、まだ僕らの側のターンプレイヤーは十代だった。その状態で無謀な欲張りを使った、その意味は1つ。2枚ドロークードする代わりにドローフエイズが1度封じられる十代とは違い、僕は一方的にドロークードを封じられたのだ。

今のはそうしなければいけなかった状況とはいえ、状況はかなり悪くなった。首の皮1枚で繋がったのはいいが、その先のドロークードで希望を掴むこともできなくなった。僕に残されたのはこの手札1枚と、最後の伏せカード1枚のみ。だけどドロークードできないとなると、このカードも僕には役には立ちそうにない。

「ターンエンドだ。せいぜい頑張りたまえ」

「いいや、まだだぜ！ トラップ発動、極限への衝動！ このカードは俺の手札2枚をコストに、アドバンス召喚以外ではリリースできないソウルトークン2体を特殊召喚する！」

「十代!?!」

「お前のドロークードを奪っちゃった以上、俺にできるのはこれぐらいだ。

このカードを使ってくれ、とどめは任せたぜ清明！」

ソウルトークン 守0

ソウルトークン 守0

せっかく引いたカードを全てを捨て、残りのモンスターゾーンを生めるようにトークンが特殊召喚される。これでは僕も下級モンスターの召喚ができないんだけど……と何気なく墓地を見て、思わずこの状況も忘れて笑い出しそうになった。

ああもう、十代。お前はやっぱりすごいよ、本物のヒーローだ。これならあるいは……このターンで、勝てるかもしれない。

「僕のターン！ドローフェイズをスキップして、墓地に存在する置換融合の効果を発動！このカードを除外して墓地の融合モンスター、プラズマヴァイスマンをエクストラデッキに送ることでカードを1枚ドローする！」

十代が土壇場で墓地に送ったカードのうち1枚、置換融合。このドローにより無謀な欲張りのデメリットが帳消しになったわけだが、十代の奇跡を呼ぶ引きの強さはそれだけでは収まっていなかった。さらに、もう1枚！

「墓地から魔法カード、シャッフル・リボーンの効果が発動！場のワールドマンをデッキに戻し、さらにカードを1枚ドローする！」

肝心なのはここからだ。いくらカードを引いたとしても、それが使えなければ無駄に引いただけになりかねない。

だが、幸いにもその心配をする必要はなかった。僕のデッキは、僕が信じる限りいくらでも僕に伝えてくれる。どちらから使ってもいいけれど……まずは、このカードからだ。

「魔法カード、妨げられた壊獣の眠りを発動！場のモンスター全てを破壊し、デッキから壊獣2体を互いの場にリクルートする！これで終わりだ、ミスターT！」

「果たしてそうかな？トランプ発動、神の宣告。ライフ半分をコストに、その発動は無効となり破壊される」

ミスターT&ミスターT LP150↓75

万能カウンターの神の宣告も、元が少ないミスターTにとっては驚

くほど軽いコストで効果を無効にできる強烈なカードとなる。これで眠りのカードは不発に終わったがもはやミスターTに伏せカードはなく、逆に言えばこれ以上の妨害がさらに出てくることはない。なるほど、神の宣告、か。これは、こちらを先に使っておいてよかった。「僕らの勝ちさ、ミスターT。十代、お言葉に甘えて決めさせてもらおうよ」

「ああ、存分に頼むぜ」

ちらりと顔を見合わせて頷き合い、お許しが出たところで手札に残った2枚のカードを表にする。

「フィールド魔法、KYOUTOUウオーターフロントを発動！さらに綿毛トークンとソウルトークンを1体ずつリリースして……さあ行くよ、チャクチャルさん。七つの海の力を纏い、穢れた大地を突き抜ける！地縛神 Chacu Chalhua！」

溶岩の海が、一瞬にして灯台の照らす闇の大海原に染まる。ボム・フェネクスの炎の輝きを打ち消すような深い紫色の光が走り、闇のシャチがその眼前へ浮上した。

地縛神 Chacu Chalhua 攻2900

『ここまでのようだな。この場はこれで退いてもらおう』

「おのれ……やはりその力、この世界の理を根底から覆すほどの力」「やはり君は危険な存在だ。もはや猶予は残り少ない、早急に排除の必要がある」

前に戦ったミスターT同様、こいつらも回避不可能な自らの消滅に付いて思うところは特にないらしい。なら負け犬の遠吠えは放っておいて、こちらも気兼ねなく最後の1撃を加えよう。

「バトルだ、地縛神は相手に直接攻撃ができる！ミッドナイト・フラッシュ！」

地縛神 Chacu Chalhua 攻2900↓ミスターT&ミスターT（直接攻撃）

ミスターT&ミスターT LP75↓0

「どうだー……あれ、また逃げられた？」

『そのようだな』

戦いが終わるとそこにミスターTの姿はなく、なぜか周りの様子も元に戻っていた。おそろおそろさつきまで空中だった部分に足を乗せてみるが、もう1度崩れ出したりするようなそぶりは全然ない硬い地面だ。

「もしかしてあれも、ただの幻覚だったの？」

『そうだな』

即答するチャクチャルさん。ん、待てよ。ここまで即答できるってことは、もしかして……。

「もしかしてチャクチャルさん、最初っから気づいてたの？」

『そうだが?』

「そんなら教えてくれたってよかったじゃん！落ちたら絶対まずいと思っただけで神経使ってたのに！」

『いや、幻にかかってマスターのやる気が出るなら放っておいても害はないかと思っただけ』

もつともらしいけど、これは嘘だ。絶対この邪神、内心ニヤニヤしながら見てたに違いない。どうりで今日に限って、デュエル中にも全然口出ししてこないと思っただけ。

なんだか納得いかない思いにとらわれていると、ふと横から着信音が聞こえてきた。どうやら、十代に電話らしい。差出人の相手を見てずっと真剣な表情になった十代が、無言でその電話に出る。デビルイヤーは地獄耳、これぐらいの距離なら何とかいけるはずだと、僕も耳をそばだててその会話内容を聞き取ろうと集中する。

すっかり耳に入ってきたその会話内容は、またも僕を驚かせるに十分な物だった。

## ターナー111 鉄砲水と紅蓮の黒竜

その日の夜、医務室。どうやら十代、僕らには一切内緒でオブライエンと連絡を取り合い、藤原優介という男について僕らが出会う前から調査していたらしい。下手に隠したりして、もし僕らが何か嗅ぎ付けたらそのまま首を突っ込むことぐらいわかんなかったのかねこの男は……なんて、今日の昼まで夢想到ミスターTの存在を隠そうとしていた僕に言えたことではないけれど。

だから僕に、十代を責める資格はない。その気持ちは、痛いほどよくわかるからだ。でもだからといって、このわだかまりがすんなり溶けるわけではない。なんとなく目を合わせるのも気まずいような空気の中でオブライエンが廃寮から連れ帰ってきて、現在気を失っている吹雪さんの看病をしながら、なぜこんなことになったのかを思い返していた。元々はこのアカデミアで見つかったのと同じ、デュエルディスクに反応しない妙なカードの謎を追っていたらしいオブライエンがその途中で名前を見つけ出し、調査したという藤原についての内容……それをまとめると、だいたいこんな風になる。

一、藤原優介は実在する人間。

二、ただし彼は、もう何年も行方不明のはず。

三、彼が行方不明になったのは、例の特待生用だった廃寮。

そしてアカデミアに上陸したオブライエンが廃寮に向かったところ、撮られたのは数年前の彼の写真と瓜二つな『藤原』に襲われていた吹雪さんを発見。調査を諦めて吹雪さんの安全を優先させ、なんとかここまで逃げ切ってきたらしい。稲石さん何してたんだろ。

なぜか廃寮にいた吹雪さん、藤原の行方不明と同時期にダークネスの力に取り込まれ、セブンスターズとの戦いまで同じく消息不明だった吹雪さん、そして藤原と吹雪さんは同級生、さらに言えばその寮まで同じ……ここまで材料が揃ったんだ、僕も十代も、考えていることは同じのはずだ。吹雪さんは多かれ少なかれ、必ず何かを知っている。それだけに、こうして彼が眠り続けている間のタイムロスが惜しい。

「兄さんー」

そんな時医務室の扉が開き、予想していた顔が飛び込んできた。明日香への連絡はした覚えがないけれど、ここの担当は鮎川先生だし、まああの人なら明日香に連絡を入れるだろう。となると、それ聞いたらそりゃこっち来るよね。眠っているとはいえ規則正しく呼吸する兄の顔を見てようやく周りを見る余裕ができたのか、僕らを一通り見回すその視線が目をして壁にもたれかかっていたオブライエンのところまで止まる。当然の反応だろう、僕だってこんな状況じゃなければもつと彼を質問攻めにしていたところだ。だが彼女が何か口を開く前に、気配だけで察したらしいオブライエンが先回りして話し出す。

「俺も君たち同様、あの謎のカードの調査をしていた。この島に来たのはその過程で藤原優介の名が挙がったため、君の兄さんを見つけたのは偶然だ」

「久しぶりね、オブライエン。でも兄さんが……どうして？」

「それも調べはついている。この件に関しては君たちの方が詳しいだろうが、かつて影丸会長の行っていた三幻魔の力を利用して不老不死の肉体を手に入れるための実験、2年前に起きたというセブンスターズ事件の後、その被験者となっていた特待生たちは行方不明となっていた1人を除いて全員解放された」

「それは僕も初耳だけど、それが藤原なの？」

思わず口を挟んだ僕にも無言で頷き、すぐ話を続ける。

「そうだ。そもそも藤原優介は丸藤亮、天上院吹雪と共に天才と呼ばれるほどの生徒だった。十代の話と俺の調べた結果を総合した仮説だが、どうも藤原はその時から君たちのよく知る力、ダークネスの力を研究していたらしい」

なるほど、そう繋がるのか。確かに三幻魔の研究にあたり藤原がダークネスの力を研究することに影丸会長が賛成、少なくとも黙認していたとすれば、巡り巡ってその力がセブンスターズの一員として僕らに牙をむいたことにも何となく説明がつく。

ただわからないのはなんで藤原の研究していたはずの力の象徴、



ダークネスのマスクを吹雪さんが付けていたのかだ。やっぱりこれ以上は、吹雪さんに直接話を聞かないとダメということだろう。だがそんな視線の動きだけでも、僕の考えは明日香に伝わったらしい。口を開くより先に僕らと吹雪さんのベッドの間に割り込み、1歩も通さないとばかりにその前に立ちはだかる。

「駄目よ、兄さんはこんな状態なんだから。鮎川先生にも聞いたけれど、まだしばらくは絶対安静よ」

「だが、明日香だって今の話は聞いただろ！ 真実は吹雪さんしか知らないんだ、頼む吹雪さん起きてくれ！」

今にも詰め寄って吹雪さんを強引に叩き起こさんばかりの十代と、それを険悪な目で睨みつける明日香。僕も個人的には十代寄りの考えだけど、そこまで必死じゃないぶんもう少しだけ周りが見える。はつきり言っただけは悪手中の悪手、あんな態度じゃあ明日香だって意固地になるだけだ。このままではうちが明かないのでオブライエンにアイコンタクトし、何が言いたいか察してくれた彼と2人がかりで十代を押さえつける。そのまま扉まで引つ張っていき、そこで改めて明日香に話しかける。

「はい、そこまで。明日香、とりあえず僕らはいったん帰るけど、どうするの？」

「私は……もう少し兄さんに付き添っているわ」

「あ、そ。んじゃねー」

大人しくはなったもののまだ不服そうな十代を外に出し、もう少し別の角度から調査を続けるらしいオブライエンのことを手を振って見送る。さて、次はこつちを説得する番だ。

「清明、お前ならわかるだろ!? 今すぐにでも吹雪さんに話を聞かないと、次に何が起きるか……！」

「わかってるって。だけど、あのままだと明日香は絶対あの場所から動かなかったよ？ 鮎川先生が明日香に伝えちゃったなら、それを前提に動かないと。花瓶の水替えでも見舞いの品の用意でもなんでもいいけど、次に明日香があ部屋を出るときがチャンスだからね。最悪窓から入ることになったって吹雪さんには起きてもらおうさ」

「……いや、それには及ばないよ」

一体どうやって、あの部屋を出たというのか。ひどく苦しそうに息をつき壁にもたれかかりながらも、吹雪さんがそこにいた。腕には起動済みのデュエルディスクを付け、その手には1枚のカード……ここから見てもわかるほどに闇の力が感じられる、前にも見た覚えのあるカードが握られていた。通常のカードとは違い名前も効果もなく、ただ鎖に縛られた漆黒のマスクが1つ浮かんでいるだけのイラストのカード。

「ダークネス……」

「ああ、明日香には本当に申し訳ないと思うけど、この力で少しの間眠ってもらったよ。それより2人とも、僕を、もう1度あの場所に……」

そう言いながらも、今にもその場に倒れこみそうな吹雪さん。慌てて駆け寄って肩を貸し、十代を先頭に歩き出した。いくら本人たつての願いとはいえ、本当にこんなボロボロの人を連れ出していいんだろうか。そう思いはしたが、それを口にはできなかつた。僕も真実を知りたい、という好奇心も否定できないが、それだけではない。肩を貸した時に見えた、吹雪さんの目。なによりも大事にしている妹のことまでこの人らしからぬ力技で振り切つて、それでも自分のすべきことを成そうとしている目。あんな目をした人を前に、体に無理が来てるんだから今は休みましょう、なんて言えるわけがない。

結局、最後の方は肩を貸すというよりなかば背負うようになりながらも、いつもの廃寮にたどり着いてしまう。元この生徒だけあつて迷うことなく奥に入っていくのを支える途中で、物陰から半身だけ出してこつそりこちらを窺う廃寮の幽霊、稲石さんの姿も目に入った。僕と目が合ったことに気づくとすぐに人差し指を唇にあてて黙っていて、とジエスチャーし、幽霊らしく足元からすうつと消えていった。そういえばあの人、一体誰なんだろう。この廃寮は行方不明こそ出しているものの、死人が出たという話はない。ここがお化け屋敷扱いだった頃は特に疑問にも思わなかつたけど、こうして廃寮そのものの秘密が少しずつ明らかになると、その中心でいまだ謎に包まれ

たままのあの人の正体が今更になって気になってきた。一体どこから来て、なぜ死んで、なぜここにいるのか。それに関しても、今度問い詰めに来た方がよさそうだ。

そう心に決めたところで、吹雪さんの足が止まった。そこはちょうど広間のようになっている部屋で、今では見る影もないものの当時は豪勢な場所だったのでだろう。当時を懐かしむように目を細めて見回してから、ダークネスの仮面が封印されたカードを取り出す。

「ここまで来れば、もういいだろう。十代君か清明君、君たちのどちらでもいい。無論無理強いはしないが、今から僕はこのダークネスの力を再び開放する。それが、これまで僕が目を背けてきた真実を取り戻すための唯一の方法だ」

「吹雪さん……」

「こんなことを君たちに頼むのは、間違っているかもしれない。だがお願いだ、僕とここで、デュエルしてくれ。ダークネスの力に飲み込まれるか、それとも真実を再び手に入れられるかは、その結果にかかっている」

「わかったぜ。なら俺がその相手……」

「いや、ここは僕が出るよ」

「でも清明、これはただのデュエルじゃ済まないんだぞ！」

止めようとする十代を鼻で笑い、その顔の前に指を2本立てる。ゆっくりと1本ずつ折り曲げ、諭すように言い聞かせた。

「あのねえ十代、ダークネスの力を解放した吹雪さんの相手なら、僕はこれまで2回もしたことがあるんだよ？ぶっつけ本番の十代よりはきつと、安定すると思うよ。それともーひとつ、さつきも言ったと思うけど、僕だつてもう見るアホウでいるのは嫌なんだから。同じアホなら踊らにや損損、ぜひと踊りに加わりたいね」

『その例え、そんなに気に入ったのか？』

うん、実はお気に入りだったり。まあ、僕の好みはこの際どうだっていい。きつぱり目を見て言い切ると、しぶしぶながら十代も引いてくれた。……なんか最近相手の目を見て言い切るとそれだけで僕の意見が通ることが多いんだけど、チャクチャルさんの力で無意識に催

眠でもかけてたりするんだろうか。

『私をなんだと思ってるんだ……ほらマスター、あちらがお待ちかねだぞ』

「オーケイ。んじゃ十代、観客頼むよ。さあ悪かったね吹雪さん、それじゃあデュエルと洒落込もうか！」

その言葉と同時に、吹雪さんがダークネスの仮面をつける。たちまち噴き上がる闇のオーラにその全身が包まれ、仮面の下から見えるその表情も闇が広がるにつれ苦痛に歪んでいく。今吹雪さんの中では、ダークネスの記憶だけを引っ張り出してなおかつその力に自身が呑みこまれないようにするための苦しい戦いが始まっているはずだ。

つまり、僕がこのデュエルですることは2つ。ダークネスの力を少しでも外敵である僕に向けさせることで吹雪さんの自我にかかる負担を軽減させ、同時にダメージを与えることでその封印された記憶に対してのショック療法を行う。荒療治にもほどがあるけれど、ダークネス絡みとならこれぐらいしないと記憶を取り戻すなんて不可能だろう。やがて吹雪さんの内部での孤独な戦いも小康状態になったらしく、どうにか自分を抑えてゆつくりとそのデュエルディスクを構築した。

「ああ、甦るぞ、ダークネスの力が！行くぞ、遊野清明！」

「デュエル！」

先攻を取ったのは僕。吹雪さんの使う真紅眼デッキは、高打点と馬鹿火力バーンを両立させながらも決して力押し一辺倒にはならないテクニカルな面も見せる、なんとも掴みどころのないデッキだ。以前戦った時にはダークネスの力からその新たなる可能性、悪魔竜ブラック・デーモンズ・ドラゴンなる切り札も披露してもらったっけか。

そんなデュエリストを相手に先攻を取るには、やや不安の残る手札か……いや、このカードなら何とかできるか。

「ツーンヘッド・シャークを守備表示で召喚。さらにカードをセットして、ターンエンド」

ツーンヘッド・シャーク 守1600

「俺のターン、ドロロー」

そういえばいつの間にか、吹雪さんの一人称が俺になっていた。これもダークネスの力の影響だろうから、なるべく早く揺さぶりを掛けないと……いや、落ち着いていこう。自分のペースを崩した状態で押し切れるほど、あの人は甘くない。

「魔法カード、カード・フリッパを発動。手札1枚を捨て、相手の場に存在するモンスター全ての表示形式を変更する」

無数の糸が伸びて鮫の体を絡め取り、無理やりその姿勢を変えて攻撃態勢を取らせる。ツーヘッドの攻撃力はレベル4モンスターにしては低いため、攻め込む際や雑魚散らしにこそ向いているものものこうなると弱い。

ツーヘッド・シャーク 攻1200

「さらに、レッドアイズ・ベビードラゴン真紅眼の幼竜を召喚する。バトルだ、ツーヘッド・シャークに攻撃！」

「相打ち狙い……？ 迎え撃て、ツーヘッド！」

真紅眼の幼竜……あれも、初めて見るモンスターだ。生まれたての状態だった黒竜の雛よりは大きいものの、本家真紅眼と比べれば確かに顔立ちも幼くサイズも小さいその竜が、口から小さな火炎弾を吐き出した。

真紅眼の幼竜 攻1200（破壊）↓ツーヘッド・シャーク 攻1200（破壊）

特に攻撃力が変化するギミックもなく、同時に破壊される互いのモンスター。だが、吹雪さんはその過程で3枚もの手札と召喚権を使った。

おかしい、絶対割に合わない。そう思った矢先、案の定廃寮内の淀んだ空気を切り裂いて漆黒の竜の翼が吹雪さんを守るように広がった。

「真紅眼の幼竜は戦闘で破壊された時、デッキからレベル7以下のレッドアイズを特殊召喚し、その装備カードとなって攻撃力を300アップさせる。出でよ、レッドアイズ・ブラックドラゴン真紅眼の黒竜！そして攻撃しろ、ダーク・メガ・フレア！」

真紅眼の黒竜 攻2400↓2700

天上院吹雪というデュエリストの代名詞でもある絶対不変のエースモンスター、真紅眼の黒竜。なるほど、攻撃力1200の幼竜にとって、ツーンヘッドはなんとしても攻撃表示に変えたい絶好のカモだったってわけか。さらにその攻撃力は300上がって2700と、このまま続く直接攻撃を許せば僕のライフは一気にその4分の3近くが削られる。

正直、他の相手ならそれもそれでアリだろう。ある程度相手に展開を許したうえで返しの一撃を叩き込む、それがこのデッキの理想の動きだ。でも相手はダークネスの力をも使う吹雪さん、そんなにライフを削らせたら僕のターンがどうこう言う前に即死する可能性すらある。

「勿体ないけど……トランプ発動、波紋のバリアーウエーブフォー！相手のダイレクトアタック宣言時、攻撃表示モンスターは全てデッキに戻る！」

「さすがに一筋縄ではいかないか。いいだろう、カードをセットしてターンエンドだ」

必殺の黒炎弾を辛うじて僕の前に張られた水の壁が防ぎ、真紅眼にその威力を跳ね返す。これでこのターンはノーダメージでしのげた、けれどその代償として貴重な防御札をこんな序盤で、それもたった1体のモンスターに対して使ってしまった。やむを得ないことだったとはいえ、この判断が凶と出なければいいけれど。

清明 LP4000 手札：4

モンスター：なし

魔法・罠：なし

吹雪 LP4000 手札：2

モンスター：なし

魔法・罠：1（伏せ）

「僕のターン！来い、グレイドル・アリゲーター！」

グレイドル・アリゲーター 守1500

ほこりまみれの床から湧き上がる、銀色の水たまりがひとつ。そしてそれがプルプルと震えて盛り上がり、緑色のワニの姿となる。これ

で攻撃を待ち構えるのも一つの手だ、だけど……。

「ここはあえて、前に出る！水属性モンスターをリリースして、手札のシャークラーケンを特殊召喚！」

シャークラーケン 攻2400

「ほう……」

仮面の下で、面白そうにかすかに笑う吹雪さん。出してしまった以上、今更後悔しても始まらない。伏せカードも気になるけれど、ここは絶好の攻め時と見た。

「バトル、シャークラーケン！吹雪さんにダイレクトアタック！」

シャークラーケン 攻2400↓吹雪（直接攻撃）

吹雪 LP4000↓1600

何かしらの抵抗をしてくるかと思っただけど、特にそんなこともなく攻撃を直に受ける吹雪さん。さっきまで何もしなくても倒れかかった人と同一人物とは思えない動きでその衝撃に持ちこたえ、平然とした様子を見せる。普段なら喜ばしいことだけど、あれも全部ダークネスの力のおかげだと思うと素直には喜べない。体力そのものにまで影響が出ているということとは、かなり侵食が進んでいるはずだ。

「ありがとう清明君、少し意識がはつきりしたよ。だが、まだ記憶を取り戻すには足りていない。遠慮することはない、このままデュエルを続けよう」

だが、そんな不安を読み取ったのだろう。今ここで辛いのは、苦しむのは吹雪さんのはずなのに、また口調が元に戻った吹雪さんが、相手である僕のことを安心させるような言葉をかけてくる。全く、そこで僕が気を遣われてどうするんだ。

「……ターンエンドです」

「ぐっ、また……いいだろう、ならばそのエンドフェイズにトラップ発動、レッドアイズ・スピリッツ！このカードの効果により、俺の墓地に存在するレッドアイズ1体を蘇生する！蘇れ、真紅眼の黒竜！」

真紅眼の黒竜 攻2400

再びその声音から優しげな色が消え、身にまとうオーラが膨れ上がる。それにしても、墓地から真紅眼か。たった今1体をデッキバウン

スしたばかりなのにこうして出てきたところを見ると、どうやらあのカード・フリッパは展開の起点としてツーヘッドを攻撃表示に変更しただけでなく、手札のあのカードを墓地に送る役目も果たしていたらしい。どうりで、手札コストを躊躇せずに使ってきたわけだ。

いや、待て待て待て。何か変だ。

『だな。真紅眼の幼竜を攻撃に合わせて蘇生させていれば攻撃が抑制でき、仮に攻撃されてもリクルートに繋ぐことができた。わざわざ戦闘ダメージを受けてまでこのタイミングでの、それも真紅眼の黒竜の蘇生を優先させた、ということとは……』

「真紅眼の幼竜じゃなくて、本家じゃないとできないこと。メイン2でこつちの手札に壊獣があってもどうにもできない、確実にあのレツドアイズを場に残した状態でターンが回ってくることが重要になるカード……」

チャクチャクさんの言葉を引き継ぎ、場の状況から推察できることを口に出すことで考えを整理する。その言葉を、再びチャクチャクさんが引き継いだ。

『だが、黒炎弾ではないだろうな。あのカードなら2400のバーンダメージが与えられるとはいえ、それで自分も2400の戦闘ダメージを受けるのはやはり割に合わないだろう。これで彼の場に伏せカードはないから、メタル化・魔法反射装甲の線もない。となると、答えはおのずと見えてくるか』

場に真紅眼の黒竜が存在することを条件とする、黒炎弾以外のもう1つのカード。ダークネスの力を得た吹雪さんの操る、ある意味もつともシンプルな進化の形ともいえる黒を越えた漆黒のドラゴンのあの姿が、僕の脳裏に浮かんだ。

「場の真紅眼の黒竜をリリースすることでのみ、このカードは特殊召喚できる。出でよ、レッドアイズ・ダークネスドラゴン真紅眼の闇竜！」

闇の力を纏う真紅眼が、その闇の中で急速な勢いで自己進化を遂げる。高速で高高度を飛行するためにはむしろ邪魔となる両腕は退化し、全身のフォルムをより鋭角的にすることで空気抵抗を少なく。体表には溢れ出るそのエネルギーが従来無かったオレンジ色の模様



という形で浮き出て、かすかに脈動しながら薄く光を放っている。やはり来たか、吹雪さん第一の切り札。

真紅眼の闇竜 攻2400↓3000

「このカードの攻撃力は、俺の墓地に存在するドラゴン族1体につき300ポイントアップする。今は真紅眼の幼竜、そして真紅眼の黒竜の2体だから600ポイントだ。さらに手札から、ブラックメタルドラゴン黒鋼竜の効果を発動する。このカードは装備された闇竜族の爪となり、その攻撃力をさらに600ポイントアップさせる。焼き尽くせ、ダークネス・ギガ・フレイム！」

「ぐっ……い！」

真紅眼の闇竜 攻3000↓3600↓シャークラーケン 攻2

400 (破壊)

清明 LP4000↓2800

先ほどとは比べ物にならないほどの熱量を誇る暗黒の火炎弾が、シャークラーケンを呑み込んで跡形もなくその身を消し去る。まだまだ序盤ゆえに強化値が少なかったことも幸いして僕へのダメージは1200止まり、それでも体の奥からガツンと来るこの衝撃はさすがダークネスの力、霸王やユベルと対峙した時のそれにも勝るとも劣らない。

邪魔にならないようにとの配慮かこれまで黙ってデュエルを見守っていた十代が叫びかけたのを察して手で押し止め、吹雪さんの次の動向に神経を集中させる。まだ何か伏せカードを仕込んでくるようなら本気でどうしようかとも思ったが、幸い今の動きだけでこのターンにできる事はやりきっていたらしく、そのままターンが僕に移った。

清明 LP2800 手札：3

モンスター：なし

魔法・罫：なし

吹雪 LP1600 手札：1

モンスター：真紅眼の闇竜 (攻・黒鋼竜)

魔法・罫：黒鋼竜 (闇竜)

「僕のターン、ドロ……よし、遠慮はしないよ吹雪さん。真紅眼の闇竜をリリース！そして吹雪さんの場に、怒炎壊獣ドゴランを特殊召喚する！」

「俺の真紅眼を……！」

怒炎壊獣ドゴラン 攻3000

切り札の一角があっさりリリースされ、さすがに苛立ちを隠せない様子の吹雪さん。だが、ただリリースするのを黙って見てくれるわけではないようだ。闇竜の姿が消え去るその直前、その失われた腕となっていた黒鋼竜がその体から飛び出し、吹雪さんのデュエルデスクに潜り込むのが見えた。

「黒鋼竜はフィールドから墓地に送られた時、レッドアイズカードを1枚サーチする能力を持つ。俺が手札に加えるのはこのカード、レッドアイズ・インサイトだ」

大きく真紅眼の黒竜が描かれた魔法カードをこちらに見せてから、手札に加える吹雪さん。気になるカードだが、魔法カードならば少なくともこのターンは何もしてこないだろう。それよりも今は、僕のやるべきことをやるまでだ。

「相手フィールドに壊獣が存在するとき、手札から別の壊獣を特殊召喚することができる。さあ行くよ、雷撃壊獣サンダー・ザ・キング！」  
黒色で炎を操る真紅眼シリーズとは対照的な、白い鱗に雷の力を誇る3つ首の巨大龍。あの悪魔竜ブラック・デーモンズすらも単純な打点では上回る、ジズキエルと共に壊獣の最高打点を誇る大型モンスターだ。

「バトル！ドゴランにサンダー・ザ・キングで攻撃！」

雷撃壊獣サンダー・ザ・キング 攻3300↓怒炎壊獣ドゴラン 攻3000（破壊）

吹雪 LP1600↓1300

先ほどこちらのフィールドを漆黒の炎が薙ぎ払ったお返しと言わんばかりに、純白の雷撃が吹雪さんの場をその眩い光で白く染める。通常召喚できるモンスターがいればさらに追撃と洒落込めたところだが、強欲なウツボで引いた3枚のうち残り2枚のこの手札はどちら

もモンスターではない。

それにしても、妙に今回吹雪さんが大人しいのが気にかかる。もつと早い段階から大型モンスターがガンガン出てきてバーンの炎が乱れ飛ぶ展開になっていてもおかしくないはずなんだけど、さつきから1体ずつモンスターを出しては殴ってくるだけだ。あのカイザーの親友な吹雪さんが相手を舐めてデュエルするわけがないし、もしかして僕が不用意に隙を見せるのを狙っている？自分のライフが尽きるギリギリを見定め、その直前まで僕が優位な状態でデュエルを進めることで慢心を誘おうというのだろうか。仮面の奥の吹雪さんの目はここからでは見えないけれど、なにせ相手はダークネスだ。一応、その可能性があるということだけは頭に入れておこう。

「カードを2枚セットして、ターンエンド」

「俺のターン。魔法カード、レッドアイズ・インサイトを発動。このカードは発動コストとしてデッキからレッドアイズ1体を墓地に送り、さらにレッドアイズ魔法または罫を1枚手札に加える。俺が墓地に送るのは真紅眼レッドアイズ・ライトニング・ロードの凶雷皇―エビル・デーモン、手札に加えるのはこのカード、真紅眼融合レッドアイズ・フュージョンだ」

「来た……！」

思わず息を呑む。忘れもしない、あれこそが吹雪さんの切り札。どんな劣勢からでもわずか1枚でダークネスの力を受けた恐るべき融合モンスターを呼びだすことのできる、紅き竜のもたらす可能性を開くための扉。

そして今、その扉が開かれた。

「魔法カード、真紅眼融合を発動！このカードを発動するターン他の方法によるあらゆる召喚、特殊召喚が封じられるものの、俺の手札、フィールド、そしてデッキから融合素材を墓地に送り、レッドアイズの力を受け継ぐ融合モンスター1体を融合召喚する」

「でも、悪魔竜じゃサンダー・ザ・キングには勝てない！メテオ・ブラック・ドラゴンは効果を持たないモンスター、それならまだ……」

「良い読みだが、まだ甘いな。俺が融合するのは、メテオ・ブラックではない！デッキに眠る真紅眼の黒竜、そして同じくデッキのレベル6

ドラゴン族、レッドアイズ真紅眼の凶星竜―メテオ・ドラゴンを融合―!

新たな真紅眼の名を持つモンスター2体が素材として墓地に送られ、廃寮を真紅の閃光が満たす。その全身を極寒の宇宙にあってなお燃え盛る妖星の業火に包み、岩石よりもなお堅い隕石の鱗を鎧として持つ、深淵の宇宙からその力を得た真紅眼の新たな可能性、新たな闇の光。

「出でよ!流星竜メテオ・ブラック・ドラゴン!」

流星竜メテオ・ブラック・ドラゴン 攻3500

「攻撃力3500!?!」

これでは、サンダー・ザ・キングでも太刀打ちできない。この2枚の伏せカードのうち片方でも装備カードとなり攻撃力を500ポイントアップさせるグレイドル・スプリットがあれば返り討ちも狙えたが、あいにくそういうことができるカードではない。

「メテオ・ブラックの真価はその攻撃力だけではない。行くぞ、清明!このカードが融合召喚に成功した時、手札またはデッキからレッドアイズ1体を墓地に送ることでその攻撃力の半分の数値だけダメージを与える!俺が選択するのはこのカード、デッキに眠るレッドアイズ・ワイバーン真紅眼の飛龍、その攻撃力は1800。よって900のダメージを受けてもらおう」

「熱っ……!」

清明 LP2800↓1900

デッキから落としたのは3体目の真紅眼……ではなく、それが小型化したような亜種ともいえるモンスター。あのモンスターは確か、通常召喚を放棄したターンのエンドフェイズに墓地から除外することで墓地のレッドアイズを特殊召喚する効果を持つてたはず。このターンは真紅眼融合の効果でどの道発動できないけれど、目先のダメージより墓地にあのカードを送り込んで次への布石を打つことを優先したという訳か。

そして、あの流星竜にはまだ攻撃の権利が残っている。全身を覆う業火がより一層その激しさを増し、その名の示す通り空の彼方から飛来して襲い来る1つの流星そのものになった流星竜がおもむろに燃

え盛る火炎弾、隕石の塊をその口から放った。サンダー・ザ・キングのさらに上空から飛来してきたそれに対して僕ができる事と言えば、せめてダメージを少しでも抑えるだけだった。

「バトルだ、メテオ・ブラックでサンダー・ザ・キングに攻撃。ダークネス・メテオ・ダイブ！」

「トランプ発動、壊獣捕獲大作戦！1ターンに1度場の壊獣を裏側守備表示に変更して、このカードに壊獣カウンターを1つ乗せる。当然このターンは、サンダー・ザ・キングを対象に！」

流星竜メテオ・ブラック・ドラゴン 攻3500↓雷撃壊獣サンダー・ザ・キング 守2100（破壊）

壊獣捕獲大作戦（0）↓（1）

これでなんとかダメージを抑えた……と言いたいところだが、減らしたダメージはわずか200。他の人ならまだしも、黒炎弾やらなんやらで4ヶタダメージをポンポン出してくるこの人にとっては200なんて誤差にしかならないだろう。壊獣カウンターもまだ1つでは何の意味もなく、仮に次のターンで壊獣を出すことに成功してもその種類によつては固有効果が使えない。

「いつまでその防御が持つか、見せてもらおう。これでターンエンドだ」

「また……？」

確かにこのターン、他のモンスターを出すことは許されない。下級モンスターのセットならできたはずだけど、そもそも下級モンスター自体が少ない吹雪さんのデッキではこのターンそれができなくても不思議はない。

でもやっぱり、さつきから伏せカードすらほとんど出してこないのは何か変だ。強力なモンスターこそ繰り出してくるものの、妙に攻め手が単調というか……今の吹雪さんは、さつきも感じたようにギリギリのタイミングを探っているように見える。となると、じつと溜めている力が解放される前に勝負を決めないとまずいだろう。そのためには、まずは目先の流星竜をどうにかしなければ。吹雪さんは何一つ特別なことをしていないのに、疑心暗鬼に陥った僕の心の中で焦りだ

けが勝手に増大していく。

清明 LP1900 手札：0

モンスター：なし

魔法・罨：壊獣捕獲大作戦（1）

1（伏せ）

吹雪 LP1300 手札：2

モンスター：流星竜メテオ・ブラック・ドラゴン（攻）

魔法・罨：なし

「ぼ、僕のターン！」

このカード……悪くない、悪くないけれど、今ここで欲しいようなカードじゃない。この僕の場の最後の伏せカード、これがうまく機能して次の1ターンだけでも持ちこたえられればなんとか、というところか。

『いや、悪くないどころかむしろこれはチャンスかもしれないな。確かに分の悪い賭けを凌ぐ必要もあるが、うまくいけばその分のリターンはかなり大きい。違うか、マスター？』

確かに、チャクチャルさんの励ましにも一理ある。それにどうせ、僕の手札はこれ1枚。できることはこれだけしかないのだから、迷うまでもないか。

「永続魔法、グレイドル・インパクトを発動。そしてこのターンのエンドフェイズ、インパクトの効果を発動する。デッキからグレイドルカード1枚を手札に加える、ドール・コール！来い、グレイドル・アリゲーター！」

インパクトのサーチはエンドフェイズと遅く、このターン中に持ってきたカードを使うことはできない。この次の吹雪さんのターンを、この伏せカード1枚で防げるか。そこが勝負の分かれ目だ。

「俺のターン。魔法カード、ドラゴンズ・ミラー龍の鏡を発動！墓地に眠るレッドアイズの名を持つ通常モンスター、真紅眼の黒竜とレベル6かつデーモン名を持つ通常モンスター、真紅眼の凶雷皇―エビル・デーモンを除外し、融合召喚！」

「あの素材……てことは……」

宇宙の力を浴びることで空中戦にその活路を開いた流星竜とは違い筋骨隆々な体躯に悪魔の翼を持つ、接近戦に重きを置いた真紅眼の可能性のひとつ。前回のデュエルでも見せてもらった、ダークネスの力を受け継ぐモンスター。

「悪魔竜ブラック・デーモンズ・ドラゴン！」

悪魔竜ブラック・デーモンズ・ドラゴン 攻3200

2体ものレッドアイズ融合体が並び立ち、鋭い眼光が足元の僕を射抜く。1瞬で相手ライフを吹き飛ばす破壊力を秘めたモンスター2体、そのプレッシャーはまだ攻撃すら行われていない今でも凄まじいものがある。

「まだまだ。魔法カード、闇の量産工場を発動！墓地の通常モンスター、真紅眼の黒竜と真紅眼の凶星竜の2体を手札に加え、闇の誘惑を発動。カードを2枚ドロし、手札から闇属性モンスターである真紅眼の凶星竜を除外する。さらに、紅玉の宝札を発動。手札からレベル7のレッドアイズを墓地に送ることでカードを2枚ドロし、デッキからレベル7のレッドアイズ、レッドアイズ・ブラックフレアドラゴン真紅眼の黒炎竜を墓地に送る」

やっぱり、吹雪さんは待つていたんだ。僕が手札を使い切り、息切れを起こすこの瞬間を。そうとしか思えないほどの勢いで、これまでのターンが嘘のようにデッキを回していく吹雪さんの動きを、背筋に冷たいものを感じながらただただ圧倒され、ひたすら眺めているしかない。

「魔法カード、死者蘇生を発動。墓地から黒鋼竜を蘇生し、フィールドからドラゴン族であるこのカードを除外する！手札より出でよ、レッドアイズ・ダークネスメタルドラゴン！」

それはダークネスの力のみを純粹に受け継いだ真紅眼の真か、真紅眼の闇竜……その、さらなる進化の形だった。全身を黒光りする黒鋼の鎧で覆い、機動力を若干落としたかわりにより純粹に強化された戦闘能力を手に入れた姿。

レッドアイズ・ダークネスメタルドラゴン 攻2800

「このカードは特殊能力として、1ターンに1度手札か墓地からドラゴン族モンスター1体を特殊召喚することができる。蘇れ、真紅眼の

幼竜！」

真紅眼の幼竜 攻1200

ここでも目先の打点より、次に繋げるリクルート効果持ちモンスターを優先するということか。もっとも今の吹雪さんの場合は明らかにオーバーキル状態、さらなる打点を求める理由は確かにない。それだけ、この伏せカードを警戒しているのだろうか？

『だとするならば逆に考えれば、あの1枚残った手札もマスターのカードを除去する類のものではないようだな。もしできるのならばさつさと使い、そのまま1度攻撃して終わらせていただろう』

「相変わらず微妙に引き弱いところがあるからね、吹雪さん」

吹雪さんの弱点というか傾向は、毎回やりたい放題にぶん回す癖に肝心なところでこれだけ引ければ勝ち、という手札が揃わないことだ。極端な話先攻で真紅眼の黒竜を特殊召喚し黒炎弾を2枚揃えればよほどバーンメタに特化しない限りまず防げないような先攻ワンキルが成立するのに、僕はあの人をやってのけたことをこの3年間近くの学生生活でこれまで1度も見たことがない。

ただしそれは、だからといってあの人弱いということには結びつかない。至善の策が取れないぶん次善の策に関しては徹底的に手を抜かず、一切のミスを出さずに行う。だから厄介なんだ、この人は。「バトルだ、悪魔竜ブラック・デーモンズ・ドラゴンで攻撃。この瞬間より悪魔竜の効果により、相手は一切のカード効果を発動できない！」

「なら、それより前にこのカードを使う！トラップ発動、バブル・ブリッガー！このカードがあるかぎり、互いのレベル4以上のモンスターは直接攻撃できない！」

「なるほどな。だが、そのカードも万能ではない。レベル4以上が直接攻撃できないのなら、レベル3のモンスターで攻撃すればいいのだろうか？真紅眼の幼竜でダイレクトアタック！」

泡の壁が張り巡らされ、最上級ドラゴン3体の攻撃をシャットアウトする。だがそのわずかな隙間を縫って、ごくごく小さな火炎弾が僕の元に届いた。



真紅眼の幼竜 攻1200↓清明（直接攻撃）

清明 LP1900↓700

「カードを1枚伏せる。そしてこのターンのエンドフェイズ、墓地から真紅眼の飛龍の効果を発動。通常召喚を行っていないターンのエンドフェイズに墓地のこのカードを除外することで、墓地のレッドアイズを蘇生する！出でよ、真紅眼の黒炎竜！」

吹雪さんの場をさらに埋めなるべく呼び出されたのは、本家によく似ているものの細部が微妙に違うまた別の黒き竜……いわば4体目の真紅眼の黒竜とも呼べる存在だ。次のドロウで……さて、どうなるか。

真紅眼の黒炎竜 攻2400

清明 LP700 手札：1

モンスター：なし

魔法・罨：壊獣捕獲大作戦（1）

バブル・ブリンガー

グレイドル・インパクト

吹雪 LP1300 手札：0

モンスター：流星竜メテオ・ブラック・ドラゴン（攻）

レッドアイズ・ダークネスメタルドラゴン（攻）

悪魔竜ブラック・デーモンズ・ドラゴン（攻）

真紅眼の黒炎竜（攻）

真紅眼の幼竜（攻）

魔法・罨：1（伏せ）

「僕のターン、ドロウ！魔法カード、貪欲な壺！」  
「ほう」

グレイドル・インパクトとグレイドル・アリゲーターのコンボを使えば、流星竜にアリゲーターを寄生させつつ幼竜を攻撃して吹雪さんのライフを0にできる。だが、吹雪さんだってそんなこと百も承知で幼竜を特殊召喚したのだろう。となると、あの伏せカードが怪しい。あるいはこれも疑心暗鬼なのかもしれないが、ここは1つでも対応を間違えると倒れるのはこちら、慎重に行こう。

そんな状況を打破すべく土壇場で引いた貪欲な壺によりギリギリ僕の墓地にいた5体のモンスター、ツーンヘッド・シャーク、ドゴラン、サンダー・ザ・キング、グレイドル・アリゲーター、シャークラーケンの全てをデッキに戻してカードを2枚引く。このカードか……なるほど。よくわからないけれど、アリゲーターのコンボではなくこちらに召喚権を使え、そうデッキが言っているのだろうか。いつになっても、どんな時も。やっぱりこのカードこそが僕の切り札、絶対不変のマイフェイバリットか。それがまだ僕に力を貸してくれるのなら、今日も一緒に戦おう。

「相手フィールドにのみモンスターが存在するとき、カイザー・シースネークはレベルを4、攻守0にすることで手札から特殊召喚できる。そしてこのカードはレベル7の最上級モンスターだけど、自身の効果により召喚に必要なリリースの数を任意の数だけ減らすことができる！シースネークをリリースして、アドバンス召喚！こいつが僕の切り札だ、霧の王！」

突如ピンポイントで発生した濃霧の彼方から銀の鎧を煌めかせる魔法剣士が単身現れ、真紅の瞳を持つ竜の軍団にその剣を向けて対峙した。圧倒的な竜たちを前にいささかもひるむことなく構えるその背中が、僕にとってはただただ頼もしい。

「霧の王の攻撃力は、リリースしたモンスターの元々の数値。つまりカイザー・シースネーク本来の高げくりよく、2500を霧の王は得る。さあ、バトル！ここは……真紅眼の幼竜に攻撃！ミスト・ストラングル！」

このデュエルを通じて、改めて実感できた。ダークネスは、つくづくとんでもないほどの力を秘めている。ダークシグナーとなった僕らはもはや驕りでもなんでもなく、本来人間の手にしていい力以上の能力を手に入れた。だがその力をもってしても無から新しいカードを生み出すようなことはできず、カードを創造するにはあくまで存在するがまだカードとしての生を受けていない精霊からの自発的なコンタクトを必要とする。そうやって手に入れたのがこのグレイドルや壊獣、チャクチャルさんなんかもそのくくりに入れていいだろう。そ

のうちグレイドルに関しては完全に成り行きだったが、チャクチャルさんは僕の負けたくないという恐怖。壊獣は僕の負けたくないという怒り。そういったものが限界を超えた時にはじめて彼らはその勝敗を逆転させるため、僕の元に来てくれた。

でも、ダークネスは違う。吹雪さんが新たな可能性として生み出した悪魔竜に流星竜、ダークネスメタルドラゴンは、いずれも全く何もないところから吹雪さんの精神力とダークネスの力が合わさっただけで突然、さながら全くの無から宇宙を創りだした超新星爆発のように現れたモンスターだ。

あんな仮面に封印されて力の一部分しか発揮されないような状態で、にもかかわらずダークシグナーにすら不可能なことを当たり前のようにやってみせる。あの力をこれ以上暴走させたりしたら、次のターンではまたどんな化け物が生み出されるかわかったものじゃない。

ここで決める。なんとしても。僕の思いを載せた一刀はダークネスメタルの火球を潜り抜け、悪魔竜の獄炎を切り払い、黒炎弾を纏う妖星の一撃をも真つ向から叩き伏せ、たった一つ残された僕に向いた勝利の可能性、真紅眼の幼竜を深々と切り裂いた。

霧の王 攻2500↓真紅眼の幼竜 攻1200 (破壊)

吹雪 LP1300↓0

「ぐおおおおっ！」

吹き飛んだ衝撃で、吹雪さんの場に置かれていた最後の伏せカードが表になる。トラップカード、バーストブレス……ドラゴン族モンスター1体をリリースすることで、その攻撃力以下の守備力を持つモンスター全てを破壊するカード。フリーチェーンで打てるあのカードなら、もしアリゲーターとインパクトのコンボを狙っていたら通常召喚の時点で場が壊滅させられていた。カイザー・シースネークの特殊召喚に対して使わなかったのは、僕が召喚権を使うのを待っていたから。しかし吹雪さんの想定に反して僕が召喚した霧の王はその特殊能力として、場に出た瞬間から互いのプレイヤーによるあらゆるリリースを禁止する。もし最後に強欲なウツボを使ってこの3枚を引

き当てていなければ、このターンでは決着はつかなかっただろう。となると、吹雪さんとダークネスの力はまた……いや、もうよそう。ダークネスはまた封印できた、それでよしとしよう。

何かの拍子にそのダークネスの仮面がひび割れて吹雪さんの顔から外れ、床に落ちて無機質な音を立てる。もう今度こそ、この世の表舞台に出てくるんじゃないよ。

「吹雪さ……」

「兄さん！」

床に倒れこんだまま起き上がろうとしない吹雪さんの元に駆け寄ろうとした時、後ろから鋭い声が聞こえた。振り返らなくても誰がどんな顔をしているか想像はついたが、無視するわけにもいかないのゆっくりと顔を声のした方向に向ける。そこには、予想より十倍は陰しい顔と冷たい目をした明日香が走ってきて、吹雪さんの半身を起こして背中を支えてやりながら僕のことを視線だけで殺さんとばかりに睨みつけていた。

そりゃあ、明日香からしたらそうだろう。彼女にしてみれば僕らは、絶対安静の自分の兄と一緒に医務室を抜け出したあげく体に負担のかかる無茶な闇のデュエルをさせ、あげくの果てにぶっ飛ばした張本人なのだから。しかし、誰にも言わずに来たはずなのにどうしてここがわかったんだろう。その疑問に答えるように、広間の入り口から声がする。

「今日は随分不用心でしたね、先輩。歩いた後に沿って小枝が折れたり、石を蹴り飛ばした跡があったり、きちんと見れば綺麗に通った後の道ができていましたよ。しかもこの廃寮、正門が開けっ放しになっていましたし」

「葵ちゃん……」

なるほど、彼女も追ってきてたのか。確かに追跡されることなんて考えてなかったから、通った後の痕跡は一切消していない。そんなわかりやすいものを辿ることなんて、彼女にとっては朝飯前だろう。正

門が開いていたというのは、恐らく稲石さんが手を回したに違いない。そこまでわかつたところで何か口を開こうとするものの、今の戦いのダメージや疲れがどつと襲ってきたせいで上手く思考がまとまらない。

僕が無言のままなのを見て、明日香と僕の周りの空気がどんどん険悪になる。それに待ったをかけたのは、その原因となった張本人である吹雪さん自身だった。

「いいんだ明日香、彼らを責めないでくれ。彼らは僕のがままに付き合ってもらっただけだから……それより、ようやく思い出せたよ。あの時何があったのか。なぜ僕がこの、ダークネスの力を持つに至ったのか。その全てをね」

今から吹雪さんの語る話には、何か重要な意味がある。しんと静まり返った廃寮内でゆっくりと語りだされたその話を、一言たりとも聞き逃すまいと僕らは耳を傾けた。

## ターン112 鉄砲水と五行の竜魂

「元々僕と亮、そして藤原優介の3人は友人だった。いや、このことはもう君達も知っているか。そして彼は、間違いなく才能があった。僕や亮も今ではキングやカイザーだなんて大げさな名前で呼ばれているが、彼の才能は僕らをはるかに上回っていたんだ」

ゆつくりと、吹雪さんの声が廃寮に響く。やはりどこか、昔を懐かしむような調子で。記録を調べるだけでは決して知ることのできない、僕らの知らない当時の記憶が当事者により語られていく。

「ただいつからか、彼の情熱はその方向を少しずつ変えていった。それがダークネスの研究だ。僕がようやく彼の研究に気づいた時、そしてそれがどこまで進んでいたのかを知った時には、もう手遅れだった」

そこで一度言葉を区切り、足元に落ちていたままのダークネスの仮面を拾い上げる。その仮面を、険しい目でじっと見つめた。

「彼はやがて、この仮面を作り出してしまった。闇の世界のさらに先、ダークネスの力を直接引き出すための道具を。だが彼はその代償として、自分の魂を捧げてしまったんだ。僕はそれを止めることができず、最後に彼からもう不要になったというこの仮面を渡された。それから僕はテストデュエルの最中に別の次元に飛ばされ行方不明になり、そこで生き残るためにこの仮面をつけた。その後のことは、君達の知る通りさ。ダークネスに気を許したつもりはなかったが、仮面をかぶり続けるうちにダークネスに意識を飲み込まれ、記憶も自我も録にないままセブンスターズとして立ちはだかつてしまった」

「じゃあ吹雪さん、代償に魂を捧げたってことは、藤原は……」

つい口を挟んだ僕の言葉に、悲痛な面持ちで小さく頷く吹雪さん。もし吹雪さんの話通りなら、藤原はダークネスに自ら進んで心を開け放ったことになる。となると、その結末は碌な物じゃないだろう。だが、今の説明には決定的にかけているものがある。なるほど、確かにダークネスの仮面が現にこうしてある以上、まったくのたらいまわしというわけではないだろう。何より、吹雪さんにはここで嘘をつく理由が

ない。

なら、だ。万丈目たちと共に不良品のカードを回収していたあの藤原は、誰なんだ。

「ああ。恐らく……藤原は、ダークネスに取り込まれ、死んだ……」

「嘘だー！」

懸命に無い頭をフル回転させていると突然、力強い声が響いた。その声に含まれた強い怒気に、反射的に全員の視線がその場所に集中する。その顔を見た時、吹雪さんが小さく息を呑んだのが分かった。それはそうだろう、むしろその程度の反応で済んだことが不思議なぐらいだ。僕らはいさつきも彼に会っているのだからまだしも、吹雪さんにとって彼はもうすでに故人のはずなのだから。

「藤原……！」

その『藤原』が、怒りの表情もあらわに吹雪さんへと詰め寄る。そのままその襟元を掴みあげ、信じられないという呆然とした表情のまま抵抗もせずにいる吹雪さんを片腕で持ち上げる。

「ぐ……」

「よくも、マスターを見殺しに……！」

「やめろー！」

誰よりも早く我に返り、というよりも、まるでこうなることが最初からわかっていたかのように十代がその間に割り込む。無理やり『藤原』の手を放させたところで、チャクチャルさんがポツリと呟いた。『マスター？……なるほど、精霊か。変化だけならまだしもこの世界で実体化までしてくるとは、大した根性だ』

「精霊？あの藤原が？」

「ああ、そうだ。こいつの真の姿はデュエルモンスターの精霊、オネスト。藤原が行方不明になる前に持っていたカードのな」

「なんで十代がそんなこと……あーいや、ごめん。聞くだけ野暮だったわ」

そもそも、藤原について最初に調べていたのは十代とオブライエンだ。たまたま僕の周りにやたら集まってくるから時々忘れそうになるが、精霊のカードは本来とんでもなく珍しい。そんな貴重な代物を

藤原が持っていたのなら、それが捜査の過程で浮かび上がってきてもおかしくはない。

それより今は、オネストだ。さすがに正体を明かされるとは思っていなかったのか、虚を突かれたように抵抗を緩める。その姿が光り輝いたかと思うと、数多のデュエリストの逆転の切り札に、そしてどめの一撃に貢献してきた羽の生えた天使型モンスターへと変化した。「ぼくのこともお見通しという訳か。確かにこれが、ぼくの本当の姿さ」

「オネスト、お前がいくら吹雪さんを責めたって、それで藤原は戻ってくるわけじゃない。自棄になるのはやめるんだ」

「黙れ！ マスターさえいれば、今デュエルモンスターズ界に起きている異変だつて止めてくれたはずだ。だが、お前たち人間はそのマスターを見殺しにした！」

そう言つて再び暴れ出すオネストの肩に、十代が真剣な顔で手を掛ける。瞬間、見ているこっちが叫びそうになった。十代の瞳の色が、普段の黒から緑とオレンジのオッドアイに……そしてあの全身から立ち上る黒いオーラ、あれには嫌というほどの見覚えと、同じくらい大きな苦い思い出がある。

「ユベル……！」

「そうだ、清明。お前にはいつか教えるつもりだったんだけどな、隠していたのは悪かった。とにかく、オネスト。見ての通り、俺の魂は今ユベルと一体化している。俺の中のユベルの魂が、俺に力を与えている。影丸や斎王は、お前の言うその異変の原因が俺にあると言っていた。なら、俺がその異変に片を付ける！ だから俺を信じてくれ、オネスト！」

「……いいだろう」

これもまたユベルの力の賜物か、決意を秘めた顔でゆつくりと頷くオネスト。にしても十代め、今さらつと言つた言葉、『俺が』片を付ける、ね。あくまで自分一人で終わらせるつもり、ということだろう。本っ当に頑固な親友だ、あと何回説得すれば気が済むんだか。そこは『俺』じゃなくて『俺ら』でしようが。



『あ、そっちなのか』

「何があつたかは知らないけどね。まあユベルもあれだけラブコール送ってたんだから願つたり叶つたりだろうし、十代がいいならそれでいいんじゃない？」

『それで済ませるとは、何ともマスターらしい割り切り方だな』

褒めてる……んだよね？ともあれ落ち着いた、というよりむしろ観念したらしいオネストが、彼の知るかぎりの異変について話しはじめた。それによると、今僕らの世界で起きている不良品のカード事件は、進行しつつある異変のほんの一角でしかないらしい。

そもそもデュエルモンスターのカードは、精霊界と僕らの世界を繋ぐ扉の役割をしている。これに関しては、少なくとも僕はすんなり理解できた。霸王の世界で壊獣が来てくれた時に、ペガサス会長から貰った白紙のカードがまさに扉となってその魂を呼び寄せたのを思い出す。カードの書き換えまでやってのけたあれはさすがに極端な例としても、大まかな原理はあれと同じだろう。だがそれとは別に、精霊界とは別の場所に繋がってしまうカードもまた存在する。それが闇の力に汚染されたカード、僕らが不良品だと思っていたあれのことだ。あのカードたちをそのままにしておくと、やがて闇の住人がこちらの世界に侵食してきてしまう。それを止めるために、オネストは自らのマスターである藤原へと実体化してまで危機を伝えに来たわけだ。

伝えたかったことを伝えた安心感からか、ほんのわずかにオネストの表情が緩む。そのごくごく小さな隙を、奴らは見逃さなかった。何もない空間から突然暗黒の球体が浮かび上がり音もなく飛来してオネストの体に直撃、そのまま吹き飛ばした。

「何!？」

「情報共有は終わったかね？オネスト、君が遊城十代か、できることなら遊野清明の始末をして欲しかったのだが……どうやらそれも期待できなさそうだ。やはり、我々が手を下すしかないのだろう」

「ミスターT！まあたお前か！」

「ミスターT……トウルーマンか！油断するな、そいつこそがダーク

ネスの使者……うっ！」

全身から煙を出しながら辛うじて攻撃の飛んできた方を向いたオネストが、相変わらず神出鬼没に表れたミスターTの顔を見て声を絞り出す。しかしポロポロの体で無理に叫んだのがよくなかったのか、そこで力尽きてその場に倒れこんでしまった。

「十代はオネストを、明日香達は吹雪さんをお願い！こいつは僕が相手する！」

「でも、清明……！」

「なにぐだぐだ言ってるの！このオネストのことを一番よく知ってるのは十代なんだから、そこに十代が行かないでどうすんのさ！」

「う……気をつけるよ、清明！」

みんながそれぞれの怪我人を抱えて部屋の隅に散る中、僕1人が中央に陣取ってミスターTと睨み合う格好になる。これで最悪、稲石さんがいざとなれば皆をこの廃寮から逃がしてくれるだろう。

「いいだろう、今回の相手は君1人か」

「そーいうことになるんじゃない？またまた返り討ちにしてあげるから、楽しいデュエルと洒落込もうよ」

相変わらずのグラサンのせいで表情が読めないその顔に向けてニヤリと笑いかけ、クイツクイツと指を曲げて挑発する。だいぶダメージを受けたらしいオネストのことも心配だけど、だったらなおさらここで負けるわけにはいかない。これまでのミスターTは連敗続き、そろそろ敵も本腰を入れてくる頃だろう。

「デュエル！」

「私の先攻だ。魔法カード、ドラゴン・目覚めの旋律を発動。手札を1枚捨て、デツキから攻撃力3000以上かつ守備力2500以下のドラゴン族を2体まで手札に加える。私が加えるのはこのカード、カオス・エンペラー・ドラゴン混沌 帝 龍——終焉の使者——2体。そして魔法カード、調和の宝札を発動。手札から攻撃力1000以下のドラゴン族チューナー、亡龍の戦慄—デストロドーを捨て、カードを2枚ドロウする」

あの開闢の使者と対となる、フィールドのみならず互いの手札までもを全て墓地送りにする壮大なりセット能力を持つ超大型ドラゴン、

終焉の使者。その特殊召喚には開闢の使者と同様、墓地に光属性と闇属性の2体存在しなければいけないけど……すでに墓地には闇属性のデストルドー、そして目覚めの旋律で捨てられた手札コストが1枚。

正直とても嫌な、予感がする。

「墓地の光属性モンスター、星間竜パーセクと闇属性モンスター、デストルドーをゲームから除外することで、このカードは特殊召喚できる。出でよ、混沌帝龍―終焉の使者よ」

「やつぱり……」

混沌帝龍―終焉の使者― 攻3000

案の定、1ターン目から出てくる最上級モンスター。ただ幸いなのは、このターンがまだ先攻1ターン目だということだ。こちらのターンに何かする効果を持っていないのなら、なんとも処理できる。

「魔法カード、黄金の封印櫃を発動。デッキからカード1枚を除外し、2ターン後のスタンバイフェイズに手札に加える……だがあいにく、そこまで待つつもりはなくてね。魔法カード、原初の種を発動。私の場に開闢の使者か終焉の使者が存在するとき、除外されたカード2枚を選択して手札に加える。先ほど除外したパーセクと、今除外した未来融合―フューチャー・フュージョンを回収し、そのまま発動。次のターンのスタンバイフェイズにこのカードが残っていれば融合素材をデッキから墓地に送り、さらに次のターンでも残っているならばその融合モンスターを融合召喚する」

黄金の封印櫃と原初の種のコンプにより、パーセクを手札に戻しつつデッキに眠っていた未来融合を即座に加えるミスターT。なんとも嫌らしい一手だ、なんとしてでもあの未来融合は次の僕のターンのうちに破壊しなければ。今回のミスターTのデッキはドラゴン族メイン、となると恐らくあれが来る。

「最後にカードを1枚伏せ、ターンエンドだ」

これでミスターTの手札は残り2枚、しかしその中身はさつきサーチしたもう1体の終焉の使者にパーセクだとわかっている。少なくとも、手札誘発に関しては警戒しなくてもよさそうだ。

「僕のターン！」

ドローカードは……よし、氷帝メビウス！そして手札には特殊召喚可能なカイザー・シースネークもある、とにかくこれで未来融合だけでも破壊するしかない。破壊しなくちやいけないから破壊する、あまりにも単調な一手ではあるけれど、これしか僕に打つ手はない。これが通れば儲けものだ。

「相手フィールドにのみモンスターが存在するときこのカードは攻守を0、レベルを4にして特殊召喚できる。来い、カイザー・シースネーク！」

巨大な海蛇型のモンスターが、長い体をくねらせてフィールドに特殊召喚される……と、突然その姿が爆発した。

「カウンタートラップ、昇天の剛角笛グレイトホーンを発動。相手の特殊召喚を無効にして破壊し、そのメインフェイズを強制的に終了させる。ただし、相手はその見返りにカードを1枚ドローできるがね」

「メインフェイズが……!?クソツ、ドロー！」

やられた。壊獣、グレイドル……僕のデッキのメインギミックは一見型破りな特性を持つテーマだが、基本的には他の大抵のデッキと同じくメインフェイズ1を経由しなければ下準備してもその後の攻撃が次のターンまでできずにワンテンポ遅れてしまう。まんまとしてやられた……なら、次だ。このターンのうちに終焉の使者も未来融合も除去できなかったのはかなり痛い、今のドローでこちらにもまだ可能性は繋がれた。

「バトルフェイズを何もせずにメイン2に移行、これなら文句はないんだよね？僕もカードをセットして、ハリマンボウを攻撃表示で召喚。ターンエンド」

ハリマンボウ 攻1500

「ほう……」

そう、ハリマンボウはあえて攻撃表示で出させてもらった。このターンであやがついた以上、無理に氷帝の召喚を狙うのはやめた方がいいだろう。さあ、攻撃するならしてくれればいいさ。

ミスターT LP4000 手札：2

モンスター：混沌帝龍―終焉の使者―（攻）

魔法・罫：未来融合―フューチャー・フュージョン（0）

清明 LP4000 手札：4

モンスター：ハリマンボウ（攻）

魔法・罫：1（伏せ）

「私のターン。このスタンバイフェイズ、未来融合の効果の半分が発動する。エクストラデッキのF・G・Dファイブ・ゴッド・ドラゴンを選択することで、その素材となるドラゴン族モンスター5体をデッキから墓地に送る。私が素材とするのはエクリプス・ワイバーン3枚と霊廟の守護者、トライホーン・ドラゴンだ」

「やっぱりそのカードか……」

ドラゴン族で未来融合といえばデュエリスト誰もが真っ先に名前を挙げるであろうカード、F・G・D。ドラゴン族5体という驚異の素材の緩さは、未来融合と組み合わせることでデッキから任意のドラゴン族5体を墓地に送ったうえであわよくば融合までできるというおろかな埋葬5枚分プラスアルファという豪快なコンボを可能とする。

どうも今回のデュエルは先ほどの剛角笛といいミスターTの理想的な初手といい、今一つ流れがよろしくない。ここらでなんでもいい、何か勝負の流れを引き寄せに行かないと。

『いや。今奴が選んだカード……残念だがそれだけでは済まないぞ、マスター』

「さらに私は、墓地に送られたエクリプス・ワイバーン3枚の効果と同時に発動。このカードが墓地に送られた時、デッキから光または闇属性でレベル7以上のドラゴン族モンスター1体を除外することができる。これによりそれぞれ古聖戴サウラヴィス2体、そしてオッドアイズ・セイバー・ドラゴンを除外する」

「また除外……？」

『当然、ただで済むわけがないな』

チャクチャクさんの不吉な言葉に応えるかのごとく、ミスターTが次の手を示す。

「魔法カード、ドラゴンズ・ミラー龍の鏡を発動。私の墓地から今落とした5体のモンスターを除外することで、ドラゴン族限定の融合召喚を行う」

「なっ……そのモンスターが出てくるのは、次のターンじゃ……」  
「言っただろう？あいにくそこまで待つ気はない、と。融合召喚、出でよF・G・D！」

予想よりもさらに1ターン早く、地が弾けた。水が爆ぜた。炎が舞った。風が荒んだ。そして闇が、その力全てを統合した。デュエルモンスターズに存在する、神を除いた6つの属性……そのうち光以外の5つの力を掌握する、それぞれの属性ごとに分かれた5つの首を持つ恐るべきドラゴン。僕も何度か見たことはあるが、こうして実物を相手にするのは初めてだ。その力は小難しい効果など一切ないシンブルなものだが、それゆえにその身に秘められた破壊力はまさしく超大型モンスターの名に相応しい。

F・G・D 攻5000

もしあの攻撃力からの一撃をまともに受けたりしたら、一体どれほどの苦痛を浴びることになるだろう。これまでの闇のデュエルでは、受けるダメージは2000台、多くて3000台までだった。それだというのにあの火力馬鹿なモンスターは、1回の攻撃だけでその倍近い5000ダメージを叩きだす。命はおろか魂まで懸かった闇のデュエルにアドレナリンが駆け巡る僕の脳内を、それでも隠しきれない死の気配と冷たい予感がほんの少しだけ掠めていく。

そしてそんな浮き足立っていた僕を諫めてくれたのは、やはりチャクチャルさんだった。

『惑わされるな、マスター。確かにF・G・Dの正面突破力はかなりのものだ……だが、マスターもそれは未来融合を発動された時点で覚悟の上だったはずだ。実物を目の前にして臆するのは勝手だが、まず次に打つべき手を考える。違うか？そもそもマスター、ついさつき自分でも言ったばかりだろう。最上級モンスターだろうと、マスターのターンに何かする効果を持っていなければいくらでもどうにかできる。もつと我々のフィールドコントロール能力を信じてくれ』  
「うん……」

そうだ。確かに高い攻撃力はそれだけダメージも出すが、ただそれだけだ。それはつまり寄生のいいカモ、リリースにもつてこいの弾ということと同義になる。そうするためにも、まずはこのターンを耐えきることだ。

『あ、いや、1つだけ言っておくとすれば、今回グレイドルは少々分が悪いかもしれないな。対抗するなら壊獣を軸に据えるといいだろう。あと私もいるぞ』

「……？」

「除外されたエクリップス・ワイバーン3体の効果を発動。このカードが除外された時、自身の効果で除外したドラゴン族モンスターを再び手札に加える。そして星間竜パーセクはレベル8だが、自身の効果により私の場にレベル8の混沌帝龍が存在することでリリースなしで召喚できる」

星間竜パーセク 攻800

「攻撃力800……？」

『本命はそつちじゃないな。来るぞ！』

「私の場の光属性モンスター1体をリリースし、さらにデッキからオッドアイズ・ドラゴン1体を墓地に送る。これにより、手札のオッドアイズ・セイバー・ドラゴンは特殊召喚できる」

オッドアイズ・セイバー・ドラゴン 攻2800

パーセクの細い体が即座に消え、全身に光輝く白銀の鎧をまとった2色の眼を持つ龍がかわりに現れる。だがそれだけじゃない、今の動きで墓地には光属性のパーセクと闇属性のオッドアイズ・ドラゴンが送られた、ということは……。

「手札の混沌帝龍の効果……を使うと思ったかね？それもいいが、ここは伏せカードを用心させてもらおう。バトルだ、混沌帝龍で攻撃！」

オーバーキルになるほどの展開を避け、あえて混沌帝龍の1体を手札で温存したままバトルに入るミスターT。ここでF・G・Dから攻撃されたら目も当てられないことになっていたが、ありがたいことに攻撃力がそれより低い終焉の使者から攻撃してきてくれた。なら、こ

のカードで迎え撃てる！

「攻撃宣言時に手札から、水精鱗<sup>マーメイル</sup>―ネレイアビスの効果を発動！このカードを捨てて手札の水属性モンスター、氷帝メビウスを破壊することで、場の水属性モンスターであるハリマンボウのステータスは破壊されたメビウスの分だけアップする！」

メビウスは攻撃力2400、守備力1000の上級モンスター。その力が丸々ハリマンボウに加算されたことで、終焉の使者をも返り討ちにするだけのパワーを得た。

ハリマンボウ 攻1500↓3900 守1000↓1100

混沌帝龍―終焉の使者― 攻3000（破壊）↓ハリマンボウ 攻3900

ミスターT LP4000↓3100

「最初のダメージは貰ってくよ、ミスターT」

「この程度、ほんのわずかな延命に過ぎない。F・G・Dでもう1度攻撃！」

5本の首からそれぞれ属性の異なるブレスが飛び、それが空中で混じり合って1本の破壊光線となる。いくらメビウスの力を得たハリマンボウでも素のスペックが違いすぎる、正面からぶつかり合っては勝てるわけがない。

F・G・D 攻5000↓ハリマンボウ 攻3900（破壊）

清明 LP4000↓2900

「ぐうっ……でもこの瞬間、墓地に送られたハリマンボウの効果発動！相手モンスター1体を選んで、その攻撃力を500ポイントダウンさせる！当然この対象は、オッドアイズ！」

「ここまで攻撃しても伏せカードは使わずか。ならば手札のサウラヴィスの効果を発動、このカードを手札から捨てることで、私のモンスターを対象を取る相手の効果を無効とする。オッドアイズ・セイバー・ドラゴンでダイレクトアタックだ」

無数の針が飛んでいくも、空中で不可視の壁に遮られてオッドアイズに届かない。サウラデイスにそんな効果があるなら、チャクチャルさんが対象を取るカードばかりのグレイドルで攻め立てることに渋



い顔だったのも納得だ。しかも、そのサウラデイスがもう1枚手札にある状態……でも、ハリマンボウを躲された以上ここでこのカードを使うしかない。

『少々勿体ないが、やむを得ないか。マスター、今だ』

「わかつてる！ 永続トラップ発動、グレイドル・パラサイト！ このカードは相手のダイレクトアタック宣言時に僕のフィールドにモンスターがいけない場合、デッキから攻撃表示でグレイドル1体を特殊召喚することができる。グレイドル・イーグル！」

オッドアイズ・セイバー・ドラゴン 攻2800↓グレイドル・イーグル 攻1500（破壊）

清明 LP2900↓1600

「戦闘破壊されたイーグルの効果で、F・G・Dを対象に寄生能力を発動する……けど……」

「当然手札から、2枚目のサウラデイスの効果を発動。再びその発動を無効にする」

「この……」

黄色い鷹がその羽を目いっぱい広げ、終焉の使者の放つ炎から僕を守る盾となってくれる。ドロドロに溶けたイーグルは銀色の液状となってミスターTのドラゴンに近づこうとするも、再び張られた不可視の壁にその動きが遮られてしまう。

危なかった、もしミスターTがもう1体の混沌帝龍を特殊召喚することを選んでいたら防ぎきれなかった。しかもあの場面ではグレイドル・パラサイトがあるなんて相手にわかるわけなかったのだから、一概に温存もミスターTのプレミとは言い切れない。

今生きているのは本当に、たまたま僕の運が良かったただけだ。あるいはミスターTの運が悪かった、ともいえる。

「いいだろう、私はこれでターンエンドだ」

「僕のターン！」

ぼやぼやしていると次のターンには未来融合の効果が発遂してあのF・G・Dがもう1体追加される、とはいえ僕のライフは既に残りわずかで、グレイドルの効果能動的に使うための最も簡単な手段で

ある自爆特攻はもうできそうにない。

とにかく、カードを引いてから考えよう。これで手札が3枚になり……この手札なら、行けるか？もうサウラヴィスは使い切れ、奴の場には伏せカードもない。攻め込める隙があるとしたら、それは間違いない。今だ。

「グレイドル・スライムJr.<sup>ジュニア</sup>を守備表示で召喚。そしてJrは召喚成功時、墓地のグレイドルを特殊召喚することができる。このカードでイーグルを蘇生！」

グレイドル・スライムJr. 守2000

グレイドル・イーグル 攻1500

「さらにグレイドル・スライムの効果を発動！場のグレイドルを2枚破壊することでこのカードを特殊召喚、そして墓地のグレイドルを守備表示で蘇生できる。僕が選ぶのはJrとイーグル、蘇生させるのはJr！」

グレイドル・スライム 守2000

グレイドル・スライムJr. 守2000

「モンスターを交換したところで……いや、そういうことか」

ここまで来てようやくミスターTも気が付いたようだが、今更気が付いても遅い。破壊されたイーグルが再び銀色の水たまりとなり、今度こそ遮られることなくF・G・Dの足元から浸透してその5つの頭へと同時に乗っ取りを仕掛ける。

「モンスター効果で破壊されたグレイドル・イーグルは、相手モンスターに寄生できる！さあ、今度こそそのデカブツは貫つてくよ」

ドラゴンの中での孤独な戦いは、いつも通りイーグルの勝利で収まった。5つの首が一斉に雄叫びを上げ、さっきまでの主人にその牙をむく。

「ついでにこいつも持つてきな、混沌帝龍をリリース！多次元壊獣ラディアンを、お前の場に攻撃表示で特殊召喚！」

多次元壊獣ラディアン 攻2800

ここまでやっても、まだミスターTのライフを削りきるにはあとわずかに足りない。それは気にいらぬが、ここでライフをここまで減

らしておけば発動にライフコスト1000が必要となる終焉の使者の効果はギリギリ使えない。ミスターTが戦力を温存して正気を逃す様を見ていたのだから、僕の方は出し惜しみせずに総力戦で挑むとしよう。

「バトルだ、F・G・D！ラディアンに攻撃！」

F・G・D 攻5000↓多次元壊獣ラディアン 攻2800（破壊）

ミスターT LP3100↓900

「どうだ……ったって、どうせ効いてやしないんだよね。ターンエンド」

埃っぽい室内で爆発が起きたせいで、もうもうと煙が立ち上り一時的に視界が効かなくなる。ややあつて少し空気が落ち着いてきたとき、案の定びんぴんした状態のミスターTが煙の向こうに立っているのが見えた。

ミスターT LP900 手札：1

モンスター：なし

魔法・罨：未来融合―フューチャー・フュージョン（1）

清明 LP1400 手札：0

モンスター：F・G・D（攻・イーグル）

グレイドル・スライム（守）

グレイドル・スライムJr.（守）

魔法・罨：グレイドル・パラサイト

グレイドル・イーグル（F・G・D）

「私のターン。このスタンバイフェイズに、未来融合の効果が再び発動する。出でよ、F・G・D！」

結局2ターンの間に止められなかったことで再び融合効果が発動され、2体目のF・G・Dが融合召喚される。まあ、どうにかあれが2体並び立つことだけは防げたということですよとしよう。

F・G・D 攻5000

「あえて200のダメージを上乗せすることで、私のライフを1000未満に下げる……悪くない戦略だが、少々浅かったな。バトル、私

のF・G・DでそちらのF・G・Dに攻撃。そしてこのバトルステツプ、手札からジュラゲドの効果を発動。このカードを特殊召喚し、私のライフを1000回復する」

「回復……でもF・G・Dは、地水炎風闇属性モンスターとの戦闘では破壊されない！」

「もちろん知っているとも、だからこそ狙わせてもらったのだ。そして私のF・G・Dもまた、同様の耐性により破壊されない」

「え……？」

「ターンエンドだ。最後のな」

ジュラゲド 攻1700

ミスターT LP900↓1900

F・G・D 攻5000↓F・G・D 攻5000

2本の破壊光線がぶつかり合い、またもや爆発が巻き起こる。爆風から身を守りながら、今のミスターTの言葉の意味を考えていた。ジュラゲドが出したいだけならグレイドル・スライムを狙ってそのまま戦闘破壊することもできたのに、なぜミスターTはそれをしなかつたばかりか、よりにもよって戦闘破壊できずダメージも通らないF・G・Dを攻撃対象としたのか。何か、僕のモンスターを減らしたくないわけがあった？

そこまで考えたところで、ミスターTが片手に持つ最後の手札1枚が目飛び込んできた。そうか、そういうことか。終焉の使者はプレイヤーのライフ1000をコストに互いのフィールドと手札全てを墓地に送り、さらに相手の墓地にその効果で送り込んだカード1枚につき300のダメージを与える効果を持つ。僕のフィールドには今スライム、Jr、パラサイト、そして装備状態のイーグルの計4枚のカードがあり、次のドロローによつてはそれがさらに増えて5枚になる。そして僕のライフは現在、1400。終焉の使者の効果1発で僕を仕留める圏内に持つていくためには、ここでイーグルが装備カードとなつていふことが必要不可欠だったのだ。ジュラゲドのもう1つの効果を使つて無理にダメージを通す方法もあったが、次の僕のターンを確実に凌ぐためモンスターの頭数を残しておく手を選んだのだ

ろう。

こうなると、この勝負は僕のドロー次第。上級モンスターや最上級モンスターを引ければ、アドバンス召喚でこちらのカードの合計数を減らすことができるだろう。だが下級モンスターや永続魔法、罠なんかを引いてしまった場合、消費することができずにダメージが増やされて終わる。

「く……い！」

どちらを引けるか、可能性は五分五分といったところ……いや、違うか。腹の底から笑いがこみあげてきて、堪えきれずに口の端が歪む。

「失敗したね、ミスターT」

「ほう？それはどういう意味かね？」

「よりにもよってこの僕に向かって、そんなデツキトップ次第の勝負を仕掛けるなんてさ。それを引いたら勝てるってんなら、この場で今すぐ引いて見せるさ！僕のターン、ドロー！」

そうだ、僕のデツキはいつだって、僕が願えば応えてくれる。だからこそ僕はこれまでも、自分よりはるかに強いような相手とも戦ってこれたんだ。それはこれまでも変わらないし、これからだってずっと一緒だ。デツキトップにそつと指を掛けると、不思議と心が落ち着くのを感じた。

もう大丈夫だ。このドローで、全部終わらせよう。決意を込めてそのカードを引き、そつと表に向けて確認する。ほら、引けた。

「これで終わりだ、ミスターT！ジュラゲドをリリースして、粘糸壊獣クモグスを攻撃表示でそつちのフィールドに特殊召喚！」

「このタイミングで……2枚目の壊獣カードを……！」

粘糸壊獣クモグス 攻2400

「これでジュラゲドの効果はもう使えない、バトルだ！F・G・Dで、クモグスに攻撃する！」

5つの首がまたしても動き、螺旋状に絡み合い1本の極太光線と化したブレスが闇を切り裂いて飛んでいく。

F・G・D 攻5000↓粘糸壊獣クモグス 攻2400（破壊）

「さあミスターT、どうせまた生きてるんでしょ？今度こそ洗いざらい、知ってること全部吐いてもらおうか！」

「ふつ、今君の目の前にいる我々も、そして君が知っていることも。全てはまだ、真実の断片に過ぎない。いずれまた会おう」

「あ、コラ待てー！」

今回も捕まえようとはしたものの、またしても時すでに遅く。捨て台詞と共に煙のように消えていくミスターTを睨みつけるも、結局そのまま見送ることしかできなかつた。

『放っておけ。どうせまた向こうから来るだろう』

「専守防衛はあんま好きじゃないんだけどね。まあいいや、逃がしちゃったもんは。十代、そっちはどう？」

言いながら振り返るとそこにオネストの姿はなく、十代が1人で1枚のカードを手にしたままうつむいていた。僕の質問に、ゆつくりと首を振る。

……そうか、助からなかつたのか。

『そもそも精霊がこちら側の世界で実体化すること自体、たまにいる私のように特殊な例を除くと莫大な体力を消費するからな。むしろあれだけ動き回っていた上で致命傷を受けたのだから、ここまで持っただけでも大したものだ』

「オネストの魂は、俺が受け継いだ。せめて俺にできる事は、それぐらいだったからな。見てくれ、清明」

そう言いつつ、十代が握っていたカードをこちらに向ける。そこには見慣れた通常のイラストとは違い、天使の羽根を生やして飛翔するネオスの姿がくつきりと描かれていた。

「エレメンタルヒーロー E・HERO オネステイ・ネオス……オネストの魂を受け継いで生まれた、ネオスの新たな姿だ。この力を使って必ず、俺があいつの願いを叶えてやる」

「十代……違うでしょ？」

「えっ？」

「さつきも思ったけど、そこは『俺が』じゃない、『俺たちが』さ。オネストの魂を十代が受け継いだってんなら、一緒にいた僕たちだってその思いは受け継いださ。この世界も精霊界も、ダークネスなんかに売り渡したりできるもんか。それにほら、きつとみんなだって思うところは同じはずだよ」

広間の入り口の方を指さすと、ちょうどオブライエンを先頭に夢想、万丈目、翔、剣山のおなじみのメンツが走ってはいってくるころだった。僕らのことを認識したオブライエンが、仏頂面で不平を漏らす。

「……まったく。何かやるなら、せめて行先ぐらいは伝えて欲しいものだ。お前たちの足跡を見つけるまで、随分手間取ったぞ」

「そうだと清明、それに十代も。この名探偵サンダーを差し置いて、謎が解けるわけが無からう」

「アニキ達、今度は何してたンスか？急にいなくなったってオブライエンから聞いて、心配してたンスよ」

「ようやく見つけたドン。こんな気味悪い廃寮、早く出るザウルス」

「みんな……！」

「んじや、もう帰ろつか。もういい加減眠いし」

気が付けば、窓の向こうから見える空は既にほのかに白くなってきていた。いつの間にか夜が明けて、今日もアカデミアに朝が来たんだ。

と、ここでお開きにできればよかったのだが。それはそれは重い、じつとりとした視線を背中に感じて恐る恐る振り向くと、満面の天使のような笑顔と目が合った。あ、まずい。顔は笑ってるのに、目が全然笑ってない。

「清明、汗と埃でだいぶ汚れてるよ、ってさ。一晩中何をしたらそう なっちゃうのか、いっぺん教えて欲しいなあ、ってさ」

「う。ですからですねえーと、その点につきましてはですね、えーと……」

「あーきーらっ？」

「……はい」

「また清明がいなくなつたつて聞いて……すつごく、すつごく心配したんだよ?…つて」

そんな風に言われると、僕も弱い。その時になつて初めて気づいたが、よく見ると彼女の澄んだ瞳には涙が溜まつて今にも零れ落ちそうになつてゐる。

ああもう、どうやら僕も覚悟を決めて全部打ち明けるしかなさそうだ。一体、どこから話せばいいだろう?…いずれにせよ、長い夜……いや、長い朝になりそうだ。



## ターン113 鉄砲水とシャル・ウイ・デュエル？

「あのー、すみません」

「……」

「しよ、少々お時間の方頂いてもよろしいでしょうか……？」

「……」

「え、ええと……」

胃が痛くなる緊張感に包まれ、爽やかさのかけらもないただ不快なだけの嫌な汗が全身から流れるのを感じる。ともすれば零れ落ちそうになる決意と勇気をどうにか寄せ集め、カラカラになった口を必死に動かして言葉を紡ぐ。

「む、夢想さん……」

「私忙しいから。じゃあね、ってさ」

「あ、えつと……はい」

駄目。もう限界。その場にへたり込みそうなほどの疲労感と敗北感がずつしりとのしかかってくるのを尻目に、その当の本人である彼女……河風夢想は僕のことを一瞥すらせずに背を向けて女子寮の中へ回れ右していった。いかにも高級そうな扉が重々しく閉ざされ、それがまた彼女の拒絶の意思を嫌というほど強調する。

「あまが天下井さん、これで何回目でしたっけ」

「日数なら今朝で4日目。あの方がおへタレになった回数なら3日前からざつと63回目ですわ」

随分と失礼な会話と共に手元のメモ帳に今回の結果を書きこみながら校舎の影からこちらを見ていた2人の女子生徒は、代行使用のお嬢こと天下井ちゃんにいつもの葵ちゃん。天下井ちゃんはまだ覗き見に罪悪感があるからか目を合わせるとさつと視線を逸らすぐらいの可愛げがあるのだが、問題はもう1人の方だ。彼女が今更変に遠慮するようなタマじやないことは、僕が一番よく知っている。

「……おはよ、2人とも」

「おおおおはようございませすわ、ワタクシたまたま、そう、たーまーたーまー！ たった今！ ここを通りかかったのですが、本日もいい天

「気ですわね！」

「いやめっちゃ曇ってますし、そもそも先輩最初っから気づいてましたよ。おはようございます、今日も元気にへタレてますね」

「今日ばかりは何も言い返せない……」

「当たり前です。そこで先輩が下手に言い訳を重ねる程度の男だったら、私もとつくに見限ってます」

「で、ですわね！」

相変わらずド直球な物言いではあるが、そのストレートさが今の僕にはむしろありがたい。下手な同情や気遣いは、余計に気まづくなるだけだ。

「今回ばかりは先輩が悪いですからね。ミスターTでしたっけ？隠すなら最後まで隠し通す、打ち明けるなら報告連絡相談は即座に。半端に隠して結局ばれるだなんて、それは河風先輩も怒りますよ」

「うぐっ」

「そもそも、ついこの間まで河風先輩がどれだけ先輩のことで心を痛めてたかはわかっていたんでしよう？私達が砂漠の世界から帰還してからは先輩がいなくて知っただけでどんどん衰弱して行って、見ていられなかった……のは、私がいちいち口にしなくてもよく知ってますよね？ならなんで、まだそういうことするんですか。少しは懲りたらどうですか？」

グサグサと容赦のない言葉が胸に突き刺さる。廃寮でミスターTを退けたあの日、僕は夢想到の奴との戦いについて包み隠さず打ち明けさせられた。隠し通せるとは最初から思っていなかったけれど、せめてこの戦いに終止符を打つまで夢想には蚊帳の外にいて欲しかったのだ。これ以上彼女をおかしなことに巻き込むまいと思つてのことだった、その結果がこのざまである。

最悪のタイミングで彼女もこの戦いに首を突っ込むこととなり、立場が逆なら僕もそうしたであろうように、それを隠そうとした僕に対して激怒した。全てを聞き終えた彼女が僕の元から去っていく直前に言われた言葉は、今もはっきりと耳に残っている。

『ねえ、清明。貴方は私のことを、私が思っていた半分も信じてくれて

なかつたんだね、ってさ』

あれを聞いた時の絶望感を完璧に表すことのできる日本語を、僕はちよつと思いつけそうにない。そしてこの数日間、向こうが攻めてこないのをいいことになんとか彼女と仲直りしようと暇さえあれば女子寮まで通いつめてはいるのだが……結果はいつもああだ。初日こそ不審者を見る目が向けられていたが、昨日あたりからはそれを通り越したのか周りからの視線が見てられない、という同情めいた含みをもって刺さるようになった。マシになったと言えばそうなのだが、それはそれでまた別の意味で辛い。

「葵ちゃん、天下井ちゃん。お願い、助けてなんて言わないから、せめて何か手を貸して！」

「……ぼちぼち泣きついてくるんじゃないかと思ってましたよ。これ以上先輩に腑抜けられても迷惑なので、1つ貸しでよろしければ」

「仕方ありませんわね。ワタクシのとおきを見せて差し上げましょう、少々お待ちなさい」

自信満々な顔で踵を返し、私服のドレスを揺らしながら女子寮へ消えていく天下井ちゃん。なんのこと？という視線を送るも葵ちゃんもわからないらしく、軽く肩をすくめるだけの返事しか返ってこなかった。

しかし、僕が正面から何度通い詰めても何も進展がなかったことも事実、ここは彼女のとっておきに賭けてみるしかない。祈るような気持ちでしばらく待っていると、何かポスターのようなものを片手にととてと帰ってきた。

「いいこと？ 貴方が何をなさったのかは知りませんが、本当に反省しているとおっしゃるのならば！ その答えは、これしかありえませんか！」

「ばばん！ と効果音が付きそうなほどの勢いで、僕の目の前にそのポスターが広げられる。

「何これ。パーティー？ ペアデュエル大会？」

「ええ。今から1週間後にワタクシたち卒業アルバム製作委員会が主催となって開く貴方達への卒業祝いのようなものなのですが、その一

環として男女ペアを作ったのペアデュエル大会というものを予定していますの。貴方にもパティシエとして腕を振るって頂こうかと2、3日中には打診する予定でしたから、考えてみればちょうどいいタイミングですわ」

「……………この男女比でペアデュエル？正気？」

「もちろん、殿方の比率の多さはワタクシも重々存じておりますわ。ですのでパートナーをご所望ならば、少しでも早いうちにアプローチを掛けたほうがよろしくてよ？」

そう言っていたはずらっぽく笑い、小さくウインクして見せる天下井ちゃん。

……なるほど、そういうことか。確かにデュエルが絡む話ならあるいは今の夢想も耳を傾けてくれるかもしれないし、これならいかにもデュエルアカデミアらしい口実だ。期限がまだ1週間あるというのも素晴らしい。

「本日の授業後に改めて全校に向けて発表を行う予定でしたが……少しぐらいフライングしても問題はないでしょう。とはいえ、一応は他言無用でお願いいたしますわ」

「任せといて。あ、なるべく早いうちに予算だけ教えてね。ある程度はYOU KNOWの売り上げとレッド寮運営費から持ってこれるけど、こつちもそれだけじゃ動けないからさ」

「かしこまりましたわ。では、ご武運を」

「では河風先輩は私が……」

「ストップストップストップ葵ちゃん！今はいいから！まだ呼んでこなくていいから！」

「ヘタレですねえ。私は構いませんが。では、授業がありますのでこれで」

「失礼しますわ」

軽く会釈し、2人が背を向けて去っていく。手の中にある押し付けられたペアデュエル大会のチラシを眺めながら、彼女を何と誘おうかと思いをフル回転させた。

……で、それから3日後。

「助けて葵ちゃん！」

YOU KNOWにて。臨時休業の紙を扉に張り付けたため、店内はいたって静かだった。そこにいたのはせっせと昨晚作ったクッキー生地型の抜きとデコレーションに精を出す葵ちゃん……と、その目の前で頭を床につけて土下座する僕の2人だけだ。

「ええ……わかりましたからとりあえず後輩に土下座はやめましょうよ、プライドないんですか？」

「逆に聞くけどさ、あると思う？」

「……軽率な質問でした。でも先輩、気づいてなかったんですか？正直、そこまで深刻に考えることもないと思いますけど」

「えっ……らしよつと。というところ？」

若干本気で驚いた風の葵ちゃんの言葉に、姿勢を正して起き上がる。僕は基本的に女子寮には入れないから、その中での話は同じ女子か、あるいは何でも知ってる吹雪さんに頼るしかない。そして、その吹雪さんは残念ながら目下それどころじゃない。

「最近の河風先輩、後ろめたそうな顔で無意味に玄関前をうろろろしては外に出ようとして思いとどまったり、寝不足なのか朝は元気がなくていつも以上に不思議っぷりが増したりと散々なんですよ。先輩との痴話喧嘩をどこで折れるかのタイミングを計りかねてるんだらうって、今女子寮ではもっぱらの噂です」

「……本当？」

「そこで嘘ついてどうするんですか。それに河風先輩、ここ数日受けた他の男子からのアプローチは全部断ってるんですよ？下手な事は言えませんが、それでもまだ脈自体はあると思いますよ」

それについては、何度か居合わせたことがあるので僕も知っている。いっそすがすがしいぐらいの勢いで特攻しては玉砕していく男子の姿を、安心と不安の入り混じった複雑な気持ちで物陰から見ているのだ。

……ちなみに、これはストーカー行為では断じてない。ないっただけ。多分。最近の夢想、今回ばかりは本気で僕に愛想を尽かしてしまっただけで話しかけようとしてもそもそも目すら合わせてくれ

ず、近づこうとすれば露骨に席を立たれる始末。呆然と立ち尽くしたところにとどめとばかりに本気で嫌がつているような冷たい視線が向けられて、最終的には僕が近寄ろうとするだけでどっか行っちゃうぐらいになっちゃったから、ね？

「傍から見るとただのこじらせたストーカーでしかないですが？ やりすぎて内地から警察呼ばれないようにしてくださいね、私としても犯罪者の後輩なんて御免ですから。それで話を戻しますが、あの人も割と頑固なところありますからね……ここ数日間先輩が押ししても押しでも効果がないのでしたら、少しアプローチを変えてみましょうか」「推して駄目なら引いてみな、ってやつ？」

「いえ、もつとガンガン押ししましょう。先輩がそれやると多分このままうやむやになって終わります。それはもう明確にそうなる未来が見えますね」

いくらなんでもそんなことは……とりたいところだけど、ここまできつぱりと言い切られると、なんだかそうなる気がしてくるから強く出れない。

いや、違うか。そもそも僕一人でこのチャンスを生かすことができなかつたから、今こうして葵ちゃんに泣きついていているわけで。間違っても、彼女に強く出られるような立場ではない。

「……それで、どうすれば……」

「あ、言い返す気力もないですか。相当重症ですね……とりあえず先輩はここで待っていてください。河風先輩は私がうまいこと連れてきますから、もう手つ取り早くそれで決着ケツリつけたらいかがです？」

そう言つて彼女が指差したのは、僕の左腕にはまつた青い腕輪。僕の大事な、デュエルディスク。

「あ、結局こうなるのね」

「それはまあ、場所も場所ですし。だつてここ、デュエルアカデミアなんですよ？ 困つた時こそカードに頼りましょうよ」

真つ当なのかずれてるのか、そもそも本気なのか渾身の冗談なのかすら判断に困るようなことを平然と真顔で口にするあたり、葵ちゃんもしつかりデュエル脳が染みついた人種なんだということをはしひ

しと痛感する。

もつとも、僕もそのお仲間であることに変わりはない。

「いや、それはもちろん僕も考えたんだけどさあ……」

「はて、何か問題でも？」

煮え切らない態度の僕に、ちよつと不満げに小首を傾げる葵ちゃん。そう、この作戦にはひとつだけ、致命的な欠陥がある。いつになく渋い顔の僕から何かあると察したのか、じつところらを見つめてくる彼女の視線からすつと目を逸らす。

「実は……」

「実は？」

表面上はいつも通りクールぶっているけれど、付き合いの長い僕にはわかる。このキラツキラした目、内心では好奇心に満ち溢れているはずだ。

というか、少し考えればこんなこと、彼女ならすぐわかりそうなもののだが。

「だってあの夢想だよ？なんべん考えてみても、チャンスがその1回だけなら全然勝てる気がしないんだもん！」

「……じゃ、河風先輩呼んできますね」

「待って！」

聞いてやって損した、とばかりにひよいつと立ち上がり、静止の声も聞かずにすたすたと出ていく葵ちゃん。と、目の前で閉められた扉が開き再び彼女の顔が見える。

「わざわざ言う必要もないとは思いますが、もし逃げ出したらどうなるかはわかってますね？今ならまだ痴話喧嘩で済みますが、今度こそ破局待ったなしですよ？」

それだけ言い捨てて、無情にも再び目の前で扉が閉められた。うう。

それから、きつかり10分後。もう150回目ぐらいになる人の字を手のひらに書いては飲み込む作業を続けていた僕の耳に、控えめなノックの音が聞こえてきた。こんな大人しいノック音、葵ちゃんが出すはずがない。というかそもそも、葵ちゃんがこの部屋に入るのに

ノックなんてするわけがない。そろそろ、覚悟を決める時が来たのだろう。一体どうやって夢をここに来させたのかは知らないけれど、それをやってのけてくれた葵ちゃんに心の中で礼を言う。

「お邪魔するね、って。葵ちゃん、私に話して……」

聞きなれた声が聞こえてきて、すぐにおずおずと扉が開く。その向こうに立っていたのは、当然のごとく彼女。

「あれ、清明？なんでここに……って、葵ちゃんはどこ？ってさ」

ああ、そういうことね。ついさっき言ったばかりの礼の言葉を、心の中で即座に取り消す。僕がいることは明かさず、夢をこの場に呼びつけて……まったく、なんてややこしい丸投げをしてくれたんだ。どうせ今頃葵ちゃん、『良いことをすると気持ちがいいですね』とかドヤ顔で呟きつつその辺でドロパンでも食べてるんだろう。その光景がパツと目に浮かぶ。

彼女をどうしてくれるかは後で考えるとして、問題は今を僕がどう切り抜けるかだ。あれだけ会いたかった相手なのに、こうして話をすることをずっと待っていたはずなのに、なぜだろう。はつきり言っただけ、めっちゃ気まずい。

「む、夢想……」

「……何？ってさ」

「あ、あのさ。ペアデュエル大会ってあるじゃない？まだペアが決まってるなら、僕と一緒に出不い？」

言った。ついにこの話を切り出してしまった。人間不思議なもので、いざこまで来てしまうと逆に精神が落ち着いてくる。単に引き返せないところまで来てやけくそになってるだけだという意見もある。僕はどちらかというと、後者の説を支持する派だ。

「………で？話は終わったかな？ってさ」

「いや、あの、えーと」

数日ぶりに夢の綺麗な瞳に真っ直ぐ見据えられ、付け焼刃のやけっぱちがまたしても心の中で崩れ落ちていく。

……いや、駄目だ。ここで心折れるだなんて、そんなこと僕自身が許さない。僕のために知恵を絞ってくれた天下井ちゃんや、とんでも



なく強引な手段とは言えそれでもここまで夢を引き連れてきてくれた葵ちゃんも許さないだろう。咳払いして息を吸い、腹に力を込めて全身に気力を漲らせる。なけなしの決意と勇気をかき集めて体内で活性化させ、ここを勝負どころと畳み掛けた。

「夢想、僕とデュエルしてもらおうよ！僕が勝ったら、大会では僕とタツグ組んでもらうからね！」

「私が勝てば、どうなるのかな？だって」

「僕が何か1つ、なんでも言うことを聞く……とか？」

「私に聞いてどうするの、って。でもそうだね、2つ」

「……？」

「お願いの数は2つ。それならいいよ、そのデュエル受けてあげる、だって」

スツと指を2本立て、それをこちらに向けて彼女は笑う。数日ぶりに見るその笑顔は、眩しいほどに魅力的で。それと同時にどこか、背筋が寒くなるような妖艶さを含んでいるように見えた。あんな顔さされたら、何を言われたとしても断れそうにない。その言葉の意味を脳が理解するより先に、気が付けば僕は頷いていた。

「……わかった」

「……しようせーりーっ、ってさ。じゃあ、早速始めようか？」

またしても微笑み、彼女がデュエルディスクを起動する。なんだかいいようにあしらわれている気がしてどこか釈然としないが、話すらまともにできなかつた昨日までに比べればこれでも御の字だ。後は僕が結果を出すだけ……だ。うん。大丈夫、きつと行ける。男遊野清明、一世一代の大勝負と洒落込もう。

「デュエル！」

「先攻は私みたい。墮ち武者デス・サムライを召喚して、効果発動するよ」

墮ち武者 攻1700

「このカードは召喚成功時に、デッキからアンデット族1体を墓地に送るよ、だって。私が墓地に送るのは……」

「そう好き放題はさせないね！その効果発動に対して手札から、幽鬼ゆきうさぎの効果を発動！このカードを捨てて、今効果を発動した墮ち武

者を破壊する！」

兜を被った首だけの侍らしき亡霊が、異様に長い舌を垂らして宙に浮かぶ。だがその上空から銀光一闪、切れ味鋭い鎌の一撃が頑丈な兜ごとその生首を唐竹割りにする。その真下にチラリと見えた銀髪の少女がこちらを見て軽く頷き、自分の仕事に満足げに消えていった。

これで、墓地肥やしこそ止められなかったとはいえ召喚権を使つて出したモンスターは撃破できた。夢想の場はがら空き、次のターンで一気に攻め込めば……そう思った時、異変が起きた。真つ二つにかち割られて地面に転がる堕ち武者の兜から人魂のようなものがゆらりと浮かび、みるみるうちに大きくなって実体を……朽ちた喪服に身を包む貴婦人の骸骨の姿を取り始めたのだ。

ワイト夫人 守2200

「ワイト夫人……？」

「好き放題させてくれてありがとう、だつてさ。まず堕ち武者の効果で私は、デツキからワイトプリンスを墓地に。さらに墓地に送られたワイトプリンスはその効果で、デツキからワイトとワイト夫人を1体ずつ選んで墓地に送ることができるようよ、つてさ」

「それは僕だつて知ってるさ。でも、それは今ワイト夫人が場にいることの説明には……」

「言つたでしょう、好き放題させてくれてありがとうつて？落ち武者はもう1つの効果として、表側の状態で相手の効果で破壊された場合に、デツキからレベル4以下のアンデット族を特殊召喚することができるんだよ、つてさ」

「……！幽鬼うさぎは、むしろ悪手だつたつてこと」

「私にとってはありがとう、けどね。これでターンエンドだよ、つてさ」

ここで幽鬼うさぎを失つたのは、自業自得とはいえかなり痛いかな。他の相手ならいざ知らず、よりにもよつてあの夢想……いや、ここで退いてはいられない。

「僕のターン！フィッシュボーグ—アーチャーを守備表示で召喚して、そのままリリース！場の水属性モンスター1体をリリースするこ

とで、手札のシャークラーケンを特殊召喚できる！」

フィッシュボーグーアーチャー 守300

シャークラーケン 攻2400

まだ夢想は、エースモンスターを出していない。壊獣もグレイドルも、今はまだ出すべき時ではない。本来ならあのワイト夫人も放っておきたいぐらいだが、あのカードには自軍のアンデット族の一部に破壊耐性を与える効果を持っていたはずだ。となると、せっかく倒せるのに放置するのもあとと困る時が来るだろう。

「そのままバトル。シャークラーケン、攻撃！」

シャークラーケン 攻2400↓ワイト夫人 守2200（破壊）

「さらにカードを1枚セットして、ターンエンド」

今はまだ、これでいい。夢想のターンを確実にいなし、一撃を叩き込む時を狙い定めよう。

夢想 LP4000 手札：4

モンスター：なし

魔法・罨：なし

清明 LP4000 手札：2

モンスター：シャークラーケン（攻）

魔法・罨：1（伏せ）

「私のターン。魔法カード、シャッフル・リボーンを発動、って。私のフィールドにモンスターが存在しない時に私の墓地からモンスターを蘇生できるけどその効果は無効になって、さらにフィールドに残しておくでエンドフェイズに除外されるよ。ワイトプリンスを蘇生して、そのままリリース。龍骨鬼をアドバンス召喚、だって。これでワイトプリンスがまた墓地に送られたから、デッキから2枚目のワイトと3枚目のワイト夫人を墓地に送るね」

それなりの効果とステータスを武器に戦う骨の鬼、夢想の準エース的存在の龍骨鬼。だけど狙いはそこじゃなくて、むしろリリース要因としてワイトプリンスを墓地に送ることだろう。そんな目で見てみるとはつゆ知らずに少し首をかしげて手札を見つめた後、何かを決意したらしい夢想がさらに動く。

「永続魔法、補給部隊を発動。そのままバトル、龍骨鬼でシャークラーケンに攻撃、だって」

「うっ!? 迎え撃て、シャークラーケン!」

召喚したまま居座ってくればこっちのターンで起点にできたのだが……ま、僕が夢想のデッキをよく知ってるのと同じように、夢想だって僕のデッキはよく知っている。みすみす攻めの起点を放置するような真似、するわけないか。

龍骨鬼 攻2400（破壊）↓シャークラーケン（破壊）

「補給部隊の効果発動、私のフィールドで龍骨鬼が破壊されたからカードを1枚引くよ、ってさ。む……メイン2に墓地からシャツフル・リボーンのもう1つの効果を発動するってさ。このカードを除外して私のフィールドからカード1枚、補給部隊をデッキに戻してもう1枚ドローするって」

「え、なにで……?」

補給部隊で思うようなカードを引けなかったのか、形の良い眉を小さくひそめてからなんの躊躇いもなく補給部隊をデッキに戻してさらなるドローを狙う夢想。補給部隊は場に維持すれば維持するだけアドバンテージを稼げるカード、いくらこのターンでの仕事は終わったとはいえデッキに戻すというのは少々違和感がある。それとも、そのリスクを冒してまで引きたいカードがあるのだろうか? とにかく夢想はカードを引き、今度は悪くないドロー内容だったらしい。少し満足げな表情になって次のカードを繰り出した。

「魔法カード、生者の書―禁断の呪術―を発動。このカードの効果で墓地のアンデット族モンスター、ワイト夫人を蘇生して清明の墓地からフィッシュボーグ―アーチャーのカードを除外するね、ってさ」

ワイト夫人 守2200

再び蘇るワイト夫人とは対照的に、僕の墓地からはじき出されるアーチャーのカード。当然、このカードの自己再生能力も読まれていたか。あまり除外ゾーンを使わないこのデッキでは、除外されることはそのまま出番が終了することに繋がってしまう。えげつない手だ、だからこそ燃えてくる。

「このターンのエンドフェイズに、シャッフル・リボーンのデメリット効果で私は手札を1枚除外するよ、だつてさ。これでターンエンド」  
「僕のターンー！」

いまだ僕も夢想も、直接ダメージこそ受けていない。だけど認めたくはないが、状況は握実に悪くなつてきている。勝負の流れは少しまた少しと、夢想の方へたぐり寄せられている。

でも、夢想の方もここまでの流れをノーリスクでこなしてきたとはあながち言い切れない。このターンでのダイレクトアタックを封じつつアーチャーを除外するために発動した生者の書なんだろうけど、皮肉にもそれはせっかく自分から消した壊獣の起点を再び場に残してしまうという欠点にもなっている。モンスターを残すことが欠点だなんて、つくづく妙なテーマもあつたものだ。攻撃力0のワイト夫人を守備表示で出すあたりグレイドルの寄生攻撃への対策はばっちりできているようだけど、今の僕をそれだけで止めることは不可能だ。

「ワイト夫人をリリースして夢想、そつちのフィールドに怒炎壊獣ドゴランを特殊召喚。さらに相手フィールドに壊獣がいるとき、手札の海亀壊獣ガメシエルは攻撃表示で特殊召喚できる！」

突如夢想の足元から突然炎が噴き上がり、火炎の軌道に乗つて2足歩行する巨大な恐竜型の壊獣がフィールドを揺るがして着地した。そして、その直後それに呼応するかのように僕の足元からも水柱が噴き上がり、中心から巨大な甲羅を背負う青い亀のような壊獣がドゴランに真っ向から向かい合う。

怒炎壊獣ドゴラン 攻3000

海亀壊獣ガメシエル 攻2200

「来たね、壊獣。でも清明、貴方のモンスターのほうが攻撃力が低いんじゃない？つてさ」

「これでいいのさ。リバース発動、壊獣捕獲大作戦！このカードの効果でドゴランを裏守備に変更して、さらに壊獣カウンターを1つ乗せる！」

壊獣捕獲大作戦(0) ↓ (1)

怒炎怪獣ドゴラン 攻3000↓??? (セット)

表になったカードから光の網が発射され、ドゴランの頭上で大きく広がったそれがその全身を包むように覆いかぶさる。ドゴランは攻撃力こそ高いものの守備力はわずか1200、壊獣限定の使い減りしない月の書ともいえるこの壊獣捕獲大作戦は、色々な意味で相性抜群だ。

「……」

ここで、手札をちらりと見る。僕の手札には一応グレイドル・イーグルのカードもあるにはある。ここでこいつも召喚すれば、一応の追撃のダイレクトアタックはできるけれど……すでに夢の墓地に存在するワイト、ワイト夫人、ワイトプリンスの合計枚数は6体。1500ポイントのダメージは魅力的だが、返しのターンでワイトキングが出てきたら、3ターン目にしてその攻撃力は6000。ワンシヨックキルを決められて終わりだ。この子は攻めに回すより、地雷としてセットしておこう。

「バトル、ガメシエルでドゴランに攻撃！」

安全策に逃げた、ということもできるだろう。だけど、ここで次のターンに夢がワイトキングを出してこないことに賭けるといっているくらいなんでも分が悪い。勇気と無謀を一緒にするな、とはよくいったものだ。

海亀壊獣ガメシエル 攻2200↓??? (怒炎怪獣ドゴラン) 守1200 (破壊)

「さらにモンスターを1体セットして、これでターンエンド」

夢 LP4000 手札：2

モンスター：なし

魔法・罫：なし

清明 LP4000 手札：0

モンスター：海亀壊獣ガメシエル (攻)

??? (セット)

魔法・罫：壊獣捕獲大作戦 (1)

「私のターン、つてき。手札からワイトメアの効果を発動。このカー

ドを捨てて、除外されたワイトキング1体を特殊召喚することができ  
るってさ」

「ワイトキング……！」

その瞬間になって、ようやく理解した。なぜ夢想は先ほどのター  
ン、まだ使いみちのある補給部隊を捨ててまでシャツフル・リボーン  
の効果を使ったのか。最初から、彼女の目当てはドロウ効果なんか  
じゃなかった。彼女の目的はむしろその後半のデメリット効果、その  
ターンのエンドフェイズに手札を1枚除外すること。恐らくワイト  
メア、シャツフル・リボーン、ワイトキングの3枚は、かなり初期か  
らその手札に来ていたのだろう。ワイトプリンスの効果を使い高速  
で墓地を肥やし、ある程度の枚数が溜まったところでデツキを回転さ  
せながらワイトキングの特殊召喚を決めるコンボを決める。この  
デュエルの始めからずっと、僕は彼女の手の上で踊っていたにすぎな  
かったんだ。

そして今、その必殺のコンボが決まろうとしている。ガメシエルの  
攻撃力は最上級モンスターにしてはやや低めではあるがそれでも2  
200、だけど今特殊召喚されたワイトキングは墓地の仲間の数だけ  
攻撃力を上げ、その総数はこれまでに6体。そしてワイトメアが捨て  
られたことで、その数は7体。

ギリギリ僕のライフを1撃で0にする、うんざりするほどに美しい  
計算されつくした流れ。

「ワンショット、キル……！」

ワイトキング 攻7000

「さあ、どうするのかな？ってさ」

「決まってる！もう1度トラップ発動、壊獣捕獲大作戦！このカード  
の効果でガメシエルを裏守備に変更して、さらに2つ目の壊獣カウ  
ンターを乗せる！」

再び光の網が発射され、今度はガメシエルの頭上で大きく広がる。  
これで、このターンは凌げる……！

「甘いよ清明、ってさ。速攻魔法、ツイーンツイスター……手札1枚をコ  
ストに場の魔法、罨カードを2枚まで破壊できる。1枚しか破壊する

カードがないから勿体ないけど、壊獣捕獲大作戦の発動にチェーンして破壊させてもらうからね、だつてさ」

光の網が、突風に吹き流されて砕け散る。これでガメシエルは攻撃表示のまま棒立ち、次の攻撃には耐えられない……けど！

「壊獣捕獲大作戦の、さらなる効果を発動！相手によつて破壊された時、カードを2枚ドロウする！」

やつぱり夢想は強い。こつちの取る戦略1つ1つの、さらに上から攻められているような感覚になる。こんな早い段階なのに、もうこれが生き残るための最後のチャンスだ。だが僕がそうやって2枚のカードを引く一方、目の前に立ちふさがるワイトキングの威圧感がさらに高まる。そうか夢想、あのツインツイスターの手札コストでさらに別のワイトを捨てたのか。だけど見方を変えれば、これで夢想の手札は0。このワイトキングの攻撃を耐えきりさえできれば、あるいはまだ勝機もある。

ワイトキング 攻7000↓8000

「くっ……！」

「バトル。ワイトキングでガメシエルに攻撃するね、つてさ」

ワイトキングが1歩、また1歩と死神さながらに歩み寄る。いや、あながち比喻でもないかもしれない。その細身の体に秘められた力は、初期ライフの2倍……その攻撃はすでに、かすただけで即死しかねないレベルにまで達している。

でもまだ、僕には戦う術が残されている。この土壇場で、生き残る力がある。

「手札から水精鱗マーメイ——ネレイアビスの効果を発動！僕のフィールドに存在する水属性モンスター、ガメシエルを対象にこのカードを捨てて、さらに手札から青氷の白夜龍を破壊！これによりフィールドのガメシエルの攻守は、破壊したもう1体の分だけアップする！」

ガメシエルの全身に青いオーラが走り、通常の2倍の以上の力を手に入れた大亀がワイトキングの無造作に振るわれた拳をその甲羅で受け止めようと手足をひっこめる。

だが、その抵抗も今の化け物じみた力の骸骨の王には敵わない。防



御などお構いなしに放たれる一撃は衝撃波が発生するほどの勢いをもって爆発音と共に叩き付けられ、数秒の間の後ひび割れた甲羅と共に壊獣は地に倒れた。

ワイトキング 攻8000↓海亀壊獣ガメシエル 攻2200↓  
5200 (破壊)

清明 LP4000↓1200

「ぐ……い！」

「へえ、耐えきったんだ。偉いね、だって」

夢想の口調や表情からは、その言葉が賞賛なのか皮肉なのかを判別することはできなくなった。どちらでも構わない、手札も墓地リソースも使い切った彼女が何と言おうとも、デュエルを終えることができなかった以上このままターンを終えることしかできやしないのだから。

「僕のターン……ドローっ！」

ここでこのカードか……悪くはない、だけどさほど良くもない。とはいえ攻め手が枯渇している僕にとって、このカードを使う以外に方法はな。

「メインフェイズ1の開始時に魔法カード、貪欲で無欲な壺を発動。僕の墓地から種族の異なるモンスター3体をデッキに戻して、カードを2枚ドローする。水族のガメシエル、恐竜族のドゴラン、魚族のシャークラーケンを戻して……」

貪欲で無欲な壺。ドローソースとして考えればそこそ有用だが、反面その使用には発動ターンのバトルフェイズ封印という致命的なデメリットがある。このテンポの遅れが後々どこまで響いてくるか、そしてこの2枚のドローでどこまで体勢を立て直せるかだ。

「魔法カード、テラ・フォーミングを発動。デッキからフィールド魔法、KYOTOUウオーターフロントをサーチしてそのまま発動、さらにツーヘッド・シャークを守備表示で召喚。これでターンエンド」

強力なフィールドリセットカード、妨げられた壊獣の眠りぐらいは引きたかったが……それはただの無い物ねだりではない。このツーヘッド・シャークと伏せモンスター、地雷として出しておいたは

いいがさすがに読みやすかったのか全然殴られないグレイドル・イーグルの力だけで、次のターンを乗り切るしかない。

ツーヘッド・シャーク 守1600

夢想 LP4000 手札：0

モンスター：ワイトキング（攻）

魔法・罠：なし

清明 LP1200 手札：0

モンスター：ツーヘッド・シャーク（守）

???（セット）

魔法・罠：なし

場：KYOUTOUウォーターフロント（0）

「私のターン。魔法カード、ドラゴンズ・ミラー龍の鏡を発動、だって」

なけなしのカードをつぎ込んだでの防御に手いっぱいな僕を嘲笑うかのように。まるで図ったかのようなタイミングで夢想がドロートしたのは、ドラゴン族専用の融合カード。となると、次に出てくるモンスターはもう決まっている。

「私の墓地からアンデット族の龍骨鬼と堕ち武者の2体を除外することで素材にして、融合召喚。冥府の扉を湯葉りし者よ、其には死すらも生温い……冥界龍 ドラゴネクロ！」

「フィールドから墓地にカードが送られたことで、KYOUTOUウォーターフロントにその枚数ぶん壊獣カウンターが乗せられる……！」

燦然と輝く灯台の光に誘われたかのように、数多の靈魂を引き連れた冥界の龍が現世へと召喚される。夢想にとってはワイトキングに並ぶもうひとつのエースモンスター、ドラゴネクロだ。

KYOUTOUウォーターフロント（0）↓（1）

冥界龍 ドラゴネクロ 攻3000

「あのモンスターは……うん、まずドラゴネクロでセットモンスターに攻撃、だってさ」

ドラゴネクロがその首を伸ばし、伏せられたイーグルに攻撃する。これで戦闘破壊されたイーグルの効果を発動して、とそこまで考えて

ようやく気付いた。ドラゴネクロの特殊能力は……まずい！

だが今頃気づいても遅いとばかり、黄色の鳥は無残にもすでにその牙に囚われていた。翼や嘴を使つての抵抗が無駄と知るや体を溶かしてスライム状にすることで脱出を図ろうとするも、それよりも早く冥界の牙がその体の奥へと食い込んでいく。やがて2、3度その体が痙攣し、動かなくなったところで地面に吐き出された。そしてドラゴネクロの周りを浮遊する靈魂の1つが軌道を変え巨大化し、漆黒の鳥の姿となつてその場にホバリングする。

冥界龍ドラゴネクロ 攻3000↓???(グレイドル・イーグル) 守500

ダークソウルトークン 攻1500 ☆3

「ドラゴネクロは自らに相對する相手モンスターを戦闘破壊せず、その魂だけを闇へと送るモンスター。戦闘相手の攻撃力は0になり、そのレベルと攻撃力をコピーしたダークソウル・トークンが私のフィールドに特殊召喚される……つて、今更説明しなくても知つてるよね？なんだつて」

「……最初から、このモンスターがグレイドルだつて知つてて放置してたわけね。自爆特攻ができないくらい僕のライフが削られるのを待つて、そのうえでドラゴネクロを呼び出すなんて、丁寧過ぎて涙が出るよ」

「貴方は私のことを信用してないのかもしれないけど、私は清明の強さを知つてるからね、つて。最後まで手は抜かないよ、つてさ」

「……！」

違う、信用してないだなんて、そんなことあるはずがない。反射的に声を上げようとしたものの、口を開くより前に夢想が首を横に振つて止める。

「言葉じゃないよ。貴方もデュエリストなら、私に伝えたいことは100万の言葉より1枚のカードで語つて、だつて。続けるよ、清明。ダークソウル・トークンでグレイドル・イーグルに攻撃！」

ダークソウル・トークン 攻1500↓グレイドル・イーグル 守500 (破壊)

KYOUTOUウオーターフロント(1)↓(2)

抜け殻と化したイーグルの体に、闇に落ちたその魂が上空から襲い掛かる。当然なすすべもなく破壊されるが、グレイドルの仕事は破壊されること。ドラゴネクロにより魂を奪われても、その寄生効果を使うことは自由なままだ。

……とはいうものの、僕に寄生効果の選択肢はないに等しい。なにせ夢想の場には、まだ攻撃宣言をしていないワイトキングが残っている。もしドラゴネクロかダークソウル・トークンをここで選んだ場合、あの攻撃力の前に攻撃表示でモンスターを立たせるという手の込んだ自殺行為にしかならない。言い換えるとこのターンを僕が生き抜くためには、イーグルの効果対象をワイトキングを選ぶか初めから発動しないでツーヘッドを壁にするかの2択しかない。

「グレイドル・イーグルが戦闘で破壊されたことで、ワイトキングの装備カードとなってそのコントロールを得る、けど……」

「ワイトキングの攻撃力はプレイヤーの墓地依存、きちんと特化したわけでもないデッキが持つて行っても怖くもなんともないよ、つてさ。ターンエンドするよ」

そう、それだ。ワイトキングの攻撃力は、その時のプレイヤーの墓地の状況により常に変動する。ワイトを墓地に送りこむことに特化された夢想のデッキとは違い、このデッキにそんなギミックはない、というよりそもそも僕のデッキにワイトは1枚たりとも入っていない。さっきまであれだけ猛威を振るったワイトキングも、こうなるとただの骨でしかなくなってしまう。使い手としてそれがわかっているからこそ、夢想もワイトキングが最後までフリーでいられるように攻撃順を調整していたのだろう。

ああ全く、本当につくづく大したものだ。僕がどれだけ力を振り絞っても、まるで勝負になる気がしない。辛うじて食らいつくので精一杯だ。でもだからって、ここで負けるわけにはいかない。食らいついていけるといいうことは、言い換えればまだ負けてないということだ。

ワイトキング 攻8000↓0

「僕のターン、ドロロー！」

そして負けてないということは、まだ反撃の機会を掴むチャンスがあるということに等しい。そしてそういった一発逆転のドロロー勝負は、僕とこのデツキの得意とするところだ。

「ワイトキングとツーヘッド・シャークをリリースして、アドバンス召喚！いくよ、雷撃壊獣サンダー・ザ・キング！さらに装備状態のグレイドル・イーグル含むカード3枚が墓地に送られたから、ウォーターフロントのカウンターも一気に最大値まで乗っけさせてもらうよ」

ワイトキングは攻撃力0になってしまったが、モンスター頭数が必要なアドバンス召喚にはそんなこと関係ない。2体のモンスターが僕のフィールドから消え、代わりに全身から電気を放つ3つ首の巨大竜が現れた。

雷撃壊獣サンダー・ザ・キング 攻3300

KYOUTOUウォーターフロント(2) ↓(5)

「壊獣をアドバンス召喚することで自分フィールドにだけ最上級モンスターを召喚して、なおかつ壊獣カウンターも限界まで溜める……そんな戦法もそういえばあったね。だけど、私に1度見た戦法が通用するかな？つてさ」

「……」

夢想の言葉は正しい。この戦法はまさについて先日行われたノース校の将、鎧田戦で僕が一発逆転の奇策として行ったものと同じだ。だが奇策が奇策として通用するのは最初の1度のみ、2度目以降はただの戦術の1つでしかない。ましてや夢想は、あの試合を全て見ている。

でも、不利な賭けなのは承知の上だ。この程度のリスクでぐちぐち言っていたら、それこそ何もできなくなる。

「ウォーターフロントは1ターンに1度、壊獣カウンターが3つ以上乗っているときにデツキの壊獣1体をサーチすることができる。2体目のガメシエルを手札に加えて、さらにサンダー・ザ・キングの固有效果発動、帯電！」

巨大竜の全身にプラズマが走り、激しい火花がその全身を光に染め

る。体から漏れ出す電撃はフィールド全体を覆い尽くし、その影響は夢想の場のカードにも及び始めた。

KYOUTOUウオーターフロント(5) ↓ (2)

「サンダー・ザ・キングが壊獣カウンターを3つ消費するとき、その真の力が解き放たれる。相手プレイヤーは今からエンドフェイズまであらゆるカード効果を発動することができず、さらにサンダー・ザ・キングの攻撃は3体の敵モンスターを1度に葬り去る！さらにおまけだ、これも持つて行ってもらおうか。ドラゴネクロをリリースして、ガメシエルをそつちに特殊召喚！」

海亀壊獣ガメシエル 攻2200

KYOUTOUウオーターフロント(2) ↓ (3)

「へえ……！」

「バトル！2回連続攻撃だ、サンダー・ザ・キング！」

雷撃壊獣サンダー・ザ・キング 攻3300 ↓ 海亀壊獣ガメシエル 攻2200 (破壊)

夢想 LP4000 ↓ 2900

雷撃壊獣サンダー・ザ・キング 攻3300 ↓ ダークソウル・トロン 攻1500 (破壊)

夢想 LP2900 ↓ 1100

KYOUTOUウオーターフロント(3) ↓ (4)

「ど、どうだ……！ターンエンド！」

ギリギリとはいえこのターンだけでライフを逆転し、フィールドの状況も一気にひっくり返すことができた。だがなぜだろう、まるで優位に立ったという気がしない。いつも捌いてる、まな板の上の名前もよくわかんないその辺で釣ってきた魚の光景がちらちらと脳裏に浮かぶ。あと1撃、1撃だけこちらの攻撃を当てれば僕の勝ちなんだ。今の連続攻撃で壊獣カウンターもまた余裕ができたんだ、次のターンさえ乗り切ることができれば……！

夢想 LP1100 手札：0

モンスター：なし

魔法・罠：なし

清明 LP1200 手札：0

モンスター：雷撃壊獣サンダー・ザ・キング（攻）

魔法・罠：なし

場：KYOUTOUウオーターフロント（4）

「私のターン。清明、楽しいデュエルだね、つてさ。正直、もつと早く終わるデュエルかと思ってたけど、だって」

「ふふん。負けるわけにはいかないもんね」

「でも、楽しい時間はそろそろおしまい。惜しかったね清明、ワイトキングを召喚、つてさ」

言葉も出ない僕の前で床が割れ、ぱっくり開いた裂け目からゆっくりと骨の腕が突き出される。緩慢な動きで這い上がってきたのは、ついさつき墓地に送ってやったはずの骨の王。

ワイトキング 攻9000

「くっ……そう……！」

「バトル。ワイトキングで攻撃、なんだって」

ワイトキング 攻9000↓雷撃壊獣サンダー・ザ・キング 攻3

300（破壊）

清明 LP1200↓0

「また、負けた……！」

その場に座り込み、床に拳を叩きつける。八つ当たりなんてしても何も変わらないのはわかっているけれど、この悔しさと虚しさをどこかにぶつけずにはいられなかった。またしても、僕の実力は夢に届かなかった。

「じゃあ清明、約束ね、つてさ」

「約束ねでしょ？ああうん、わかっているよ。この話はこれでおしまい、きっぱり諦めます。これでいい……よね？」

「……馬鹿。そっちじゃないよ、だって。言うこと、聞いてくれるんでしょ？」

「ああ……」

素で忘れてたけど、そういえばそんな約束もした気がする。それも2つも。完全に忘れていたことがお気に召さなかったのか、ちよつと

むくれながらも夢想が指を1本立てる。まあ約束したうえで負けたのはこつちなんだ、何を言われても潔く受け止めよう。あ、でもこれ以上私に関わらないで、とか言われたらどうしよう。登校拒否にでもなろうかな。

「じゃあ、まず1つ目。これからは私に隠し事はなしでね、つてさ」「はい……」

当然の要求だろう。大人しく頷く僕に、2本目の指を伸ばす。

「それと、2つ目は……」

「それでは本日お集まりいただいた3年生のみなさん、これより本日のメインプログラム！3年生と下級生対抗による、ペアデュエル対決を行うザウルス！」

時は流れ、ペアデュエル大会当日。司会の剣山が絶好調でマイクを握るのを遠くに聞きながら、僕はといえば厨房で、本業に精を出していた。

「葵ちゃん、これ10人前サイズの酢豚とグラタン持つてって！それが終わったらこのおでんも仕込み終わるからそっちもよろしく」

「かしこまりました。お任せください、先輩。しかしひつどいメニューですね、せめて地方ぐらい統一したらいかがですか？」

「んなこと言ったって、どうせバイキングだしねえ。嫌なら食べなくていいんだよ？」

「めっそうもない。では、配膳行ってきます」

……そう、パーティーの真っ最中にもかかわらずなぜか厨房に立っているのだ。当初のパーティシエという話はどこへやら、いつの間にか総料理長にまで格上げされていた。幸いトメさんたちがその半分を担当してくれているが、それでも残りに関しては僕がリーダーだ。おかげで仕事量は飛躍的に増えてしまい、その結果として一応僕も卒業生であるにもかかわらずなぜか祝われる側でなく祝う側に回るという珍事態が起きてしまっている。本当に、どうしてこうなった。せめてもの抵抗かつ先日の償いとして、助っ人という名の生贄に葵ちゃん



を引きこめたのが唯一の救いだろうか。

ま、そうは言っても別に本気で嫌だというわけではない。デュエルできないのはちよつと残念だけど、こうして厨房に立って予算のことを気にせず思いつきり作りたいものを作れるというのはなかなか得難い経験だ。それに、この仕事にはもう1つ役得なことがある。両手に大皿を載せているにもかかわらずまったくバランスを崩さず出て行った葵ちゃんの背中を見送って、隣で卵焼きを器用に丸めるエプロン姿の彼女にも声をかけた。

「そつちはどう、夢想？」

「上手くできたかな、だってさ。清明、ちよつと味見してくれる？」

そう、夢想だ。彼女の持ち出した条件の2つ目は、自分にもこのパーティーを手伝わせること。意図は読めなかったけれど、厨房に立っている間ずつと彼女のそばにいられて、しかも怒っていたのも全部キャラにしてくれるというならば安いものだ。大人数の料理は普段やり慣れていないと料理慣れした人でも調子が狂うことが多いため、なるべく調理が簡単なものを割り振っておく必要があるのがちよつとばかり頭を使うところではあるが。ちなみに葵ちゃんは今回、そのくの一ならではの体力とバランス感覚を生かしての下準備と給仕に集中してもらっているため厨房はお休みだ。

「どれどれ、じゃあ……」

「ううん、ほら。あーん、だって」

「え!？」

菜箸で卵焼きをつまみ、僕の口元までそつと持ち上げて笑う夢想。え、ちよつとまつて、今なんて言ったの、え!?

混乱している間に卵焼きはずんずん進み、もはや僕の唇にぶつかりそうなほど近くまで寄ってきていた。混乱してわけのわからないまま、言われるがままに口を開く。

「ほらほらどうぞ、つてさ。あーん」

「い、いただきます……」

今この場に鏡があれば、さぞかし耳まで真っ赤になった姿が見えたことだろう。当然、そんな状況で味なんてわかるわけもない。夢想は

夢で最初から自分が何をやったのかは無自覚なのか、そんなことはつゆ知らずに感想を求めて期待たつぷりの目で見つめてくる。

そんな膠着状態を打ち壊したのは、折よく帰ってきた葵ちゃんの冷めた一言だった。

「あの、先輩方には大変申し訳ありませんが、いちやつくのはこれ終わってからにしていただけです?」

「え、あ、そうだよね、うん!じゃあ葵ちゃん、そろそろ終盤だろうし冷蔵庫の中からホールケーキ持ってきて!ほら夢想も、それだけ出しちゃったら葵ちゃんのこと手伝ったげて!」

「むー。せつかくいい雰囲気だったのに……って」

「いや否定してくださいよ。砂糖吐きますよ?では、私もしばらくペアデュエル観戦してきますので」

「そこで置いてかないで!」

ああもう、とてもじゃないけど今は夢想と目が合わせられない。しかも観戦してきますってなんだ、んな余裕があるならわざわざ声かけるんじゃない。

外の騒ぎに耳を傾けると、どうやら十代と明日香のペアが注目を集めているらしい。よっぽどのハマでもしない限り、優勝はあの2人だろう。どうせ振られたんだろうし、後で万丈目慰めに行ってやろうかな。若干の現実逃避も兼ねてそんなことをぼんやりと考えながら、胸の奥である1つの思いを感じていた。

……こんな日が、ずっと続けばいいのにな。

## ターン114 鉄砲水と表裏の皇帝

「はー……葵ちゃん」

「どうかしましたか、先輩？」

のどかな昼下がり、いつもの放課後。珍しく誰も来ない店の中で、退屈を持って余し隣の葵ちゃんに話しかける。

「いや、暇だねって話」

「……どうかしてたのは頭でしたか」

「あら辛辣。つれないねえ、コミュニケーションは大事だよ？」

「今度はパワハラですか。始末に負えませんね」

なんだかんだ言いつつ会話自体には付き合ってくれるあたり、葵ちゃんも暇してるのだろう。彼女の性格から考えて、本気で相手したくない時は返事すらしてこないはずだ。

とその時、廊下から何やら人の動く気配がした。葵ちゃんも同時に気づいたらしく、すぐに全身をシャキッとさせて一瞬で仕事モードに移行する。

「すいません、ちよつといっすか？」

「あれ、翔？はいどうぞ、いらっしやませー」

ノックと共に聞きなれた声が出て、すぐに扉が開く。そこにいた彼の……いや、彼らの様子を見て、なぜこんなに時間がかかったのかが理解できた。そこにいたのは、翔だけではなかった。彼の押す車椅子は空っぽで、その前には彼の兄にして漆黒のコートに身を包む僕らの大先輩。かつてカイザーの名で知られ今ではヘルカイザーの通り名を持つ男、丸藤亮が立っていた。

「カイザー……」

「おじやましてすいません。でもどうしても兄さんが、清明君に会うって聞かなくて。リハビリもかねてってことで鮎川先生の許可も貰ったから、僕も付いてきたんだよ」

リハビリ、という言葉が重くのしかかる。霸王の異世界で僕と別れた後、彼はユベルと戦っていたのは僕も知っている。大激戦の末に力尽きたものの、十代がユベルと一体化したのちどうにか僕らと共に帰

還した、とも聞いていた。ただこれまでの無茶なデュエルが当たり絶  
対安静の面会不可という話だったから、あの時に別れて以来僕らが顔  
を会わずのはこれが初となる。

久しぶりに見るカイザーは少々やつれてはいたが、体の状態と反比  
例するかの如くその目の狂氣的ともいえるキラキラとした輝きは相  
変わらず、どころかあの時よりさらに深みが増しているようにも見え  
た。全てを射るようなその眼差しを真っ向から受けて立ちすくんで  
しまった僕に、落ち着いたいつもの口調で話しかけてきた。

「久しぶりだな、清明」

「ああうん、そつちこそ。元気？……っていうのもおかしいけど」

そんな間抜けな返事をしながら、頭の中では彼が体調を顧みずこん  
などころまでわざわざやって来たわけを考えていた。なんて、そんな  
もの思い当たる節は1つしかないのだが。

吹雪さんも以前チラリと似たようなことを言っていたが、それより  
付き合いがはるかに短い僕でもよくわかる。この男の本質はどれだ  
けの時が経つても、僕が彼と初めて出会った3年前からまるで変わら  
ない。目の前のことに真っ直ぐで、ストイックで。それこそが皇帝の  
皇帝たる証、自分の身体よりもその精神に重きを置く、誇り高く生真  
面目な彼の生き様。

「約束」

そう呟くと、カイザーの表情にかすかな変化があった。やっぱり、  
思った通りだ。

「約束……守りに来てくれたんだ」

「当たり前だ。それに、仮に俺にその気がなかったとしても、このデッ  
キがそんなことは許さないだろう。俺にもっと戦えと、もっと戦わせ  
ろと、そう囁いてくるこのカードがな」

そう言つて、こんな時でも腕に付けているデュエルディスクに視線  
を落とすカイザー。カードが囁く、ねえ。正直なところカイザーの  
デッキから精霊の気配は感じられない、けど……サイバー・ダークは  
なにせあのヘルカイザーとこれまでを戦い抜いてきた曰くつきの  
カードだ、精霊とは別に何かの力が宿っていてもおかしくはない。そ

れがロクなものかどうかはともかくとして。

「約束？お兄さん、何の話？」

完全に置いてけぼりになっていた翔が、そこで口を挟む。あの時翔はいなかったから、この話を知らなくても仕方がないだろう。聞かないでいてくれるとこちらとしても何かと楽だったが、そういう訳にもいくまい。

「あの霸王の異世界で、約束したんだ。またいつか、サイバー・ダークと手合せ願っていたって」

「そんな……！無茶だ、お兄さんはデュエルなんかできる体調じゃないのに！」

「まず、これだけ遅くなった非礼を詫びさせてもらおう。すまなかった」

翔のいたって当然の非難もどく吹く風、平然としたまま軽く頭を下げるカイザー。一見健康体そのものに見える、けどよく注意して見ればすぐわかる。本来彼の体は、今こうしてここに立っていられることさえ奇跡みたいなものだ。当人は精一杯隠そうとはしているが、いくらカイザーの精神力が並はずれていてもそのボロボロになった体は嘘をつけない。ちよつと小突いてしまえばすぐ倒れそうな危うさが、ギリギリのバランスで成り立っている。こんな状態でデュエルすれば、たとえダメージの実体化がない普通のデュエルであつても凄まじい負担がかかってしまうことは想像に難くない。

「お兄さん、もうやめよう！約束でもなんでも、今は駄目だよ！」

「心配性だな、翔。だが、このデュエルを退くつもりはない。約束はもちろんだが、俺にはこのデッキに借りがある。ならば……！」

口調こそ静かだが、その言葉には強い意志の力が隅々まで込められているのがわかる。普通に考えれば翔の言っていることの方が正しいんだらうけど……だけどなぜかはわからないが、目の前のカイザーはもうそんな次元を越えたところに居るような、そんな印象を受けた。もう肉体がどうこうといったくりに捕らわれず、もっと高次の存在となつているような。だからこそこんな、自分の身体を顧みないような行動もできるのだろうか。

それに、これはあまり大きな声では言えないけれど。この静かな闘志にあてられたのか、僕自身も心の底からかすかに高揚感が漲ってくるのを感じている。単純に、この強者と戦いたい。その闘争心がただのエゴでしかないことは否定できないけれど、それが僕の正直な気持ちだ。だから僕は、そつちからも何か言つてやつてくれ、という翔の視線に気づかないふりをした。悪く思わないでほしい、なんて、言えた義理ではないけども。彼のためだけではなく僕自身のためにも、カイザーの願いを叶えたい。あの時の約束を果たしてもう1度、真つ向からカイザーと戦いたい。

「ならば翔、お前も来い」

「え………？」

「ヨハンに憑依したユベルとの戦いで、俺はお前に何を教えてやれた？お前にはまだ、これから変わる余地が残されているだろう。俺のデュエルをもう1度見ることで、お前も何かを掴むことができるかもしれない」

「そんな、僕は……」

「お前はこれまで、傍観者だったのだろう。今度は、お前が変わっていく番だ」

傍観者、という単語に何か思うところがあつたのか、急にさっきまでの勢いを失い暗い表情でうつむく翔。

ま、なんか色々あつたんだろう。愉快な話でもなさそうだし、別に深くは聞かないさ。それより大事なことは、なんだか場の空気が今の一言でガラリと変わったことだ。

「……あんまり無茶するようなら、絶対に途中ででも止めてもらうからね？」

「ああ、好きにすればいい」

あ、決まった。そして、カイザーが再び僕に向き直る。

「今すぐ、などと言うつもりはない。今日の深夜0時、灯台の下。それでいいか？」

「もちろん。正真正銘、今の僕にできる全力で挑みます。だからよろしくお願ひします、カイザー」

そして、翔に付き添われたままカイザーは帰っていった。早速デッキ調整をしようか、とボタンを押して腕輪型デュエルディスクを展開させたところで再び扉が開き、いつの間にかいなくなっていた葵ちゃんの顔がひよつこりと覗いた。

「お話し終わりましたか、先輩？」

「葵ちゃん、悪いけど今日はもう店じまいね。もう暇なんて言ったられないね、これからすっごく面白くなりそうなんだ！」

言いながら、堪えきれない笑みがこぼれる。そんな僕の様子を怪訝そうに見つめ返したのち、彼女は肩をすくめて帰り支度を始めた。ほんと察しのいい後輩で助かるよ、葵ちゃん。

それからのことは、ほとんど覚えていない。ただレッド寮に戻り、新しく入れたいカードとこれまでのデッキの中身を1枚1枚並べて何度も確認して擦り合わせた作業だけは覚えている。というより、そればかりやっていたらいつの間にか夜になっていた、というのが正しい。だがその甲斐もあって、今の僕に用意できる最高のデッキが組み上がった……はずだ。

「よし。行くよ、皆」

自らを鼓舞するようにそう声をかけ、デッキをそつと撫でて外に飛び出る。だいぶ余裕を持って寮を出たつもりだったが、灯台に着いた時には既に2人とも先に来ていた。だがカイザーは当然として、翔も何も言わない。ただ無言で、互いがそこにいることを認め合うのみだ。お互い覚悟はとうに決まっているのだから、これ以上の言葉は蛇足でしかない、ということだろう。そういうことなら、話は早い。互いに向かい合い、それぞれのデュエルディスクを構えたのは同時だった。

「デュエル！」

「じゃあカイザー、僕が先攻と洒落込ませてもらうよ！フィールド魔法KYOUTOUウオーターフロント、永続魔法グレイドル・インパクトを発動！」

本物の灯台にかぶさるようにソリッドビジョンの灯台が構築され、そこから放たれる光に照らされながらUFOが煙を吐きつつ落下す

る。なんともカオスな風景ではあるが、この2枚がこの最序盤から同時に手札に揃った意義は大きい。維持すれば維持するだけアドバンテージを獲得できるこの2枚は、僕の通常より枚数の多いこのデッキを回すうえで重要なエンジンとなってくれる。

「モンスターをセット。このエンドフェイズにインパクトの効果を発動、ドール・コール！デッキからグレイドルカード1枚、グレイドル・コブラをサーチしてターンエンド」

「俺のターン。サイバー・ドラゴン・コアを守備表示で召喚し、効果を発動。デッキからサイバー、またはサイバネティクと名のつく魔法・罠カード1枚を手札に加える。俺がサーチするのはフィールド魔法、サイバーダーク・インフェルノだ。そして、このインフェルノをそのまま発動！」

サイバー・ドラゴン・コア 守1500

……インフェルノ地獄。その物騒な名に相応しく、灯台の街がみるみるうちに暗い炎に包まれる。なるほど、ここがヘルカイザーの地獄ヘルってわけか。

「そして魔法カード、融合を発動。手札のサイバー・ドラゴン、そして場のサイバー・ドラゴン・コアを素材に、融合召喚」

そして発動されたのはサイバー・ダークの関連カード……ではなく、ノーマルの融合。まずは表サイバーで牽制、ということだろう。だがその牽制は、それ1枚でも既に十分フィニッシャーになりうるほどのポテンシャルを秘めたカードだ。コアはサイバー・ドラゴンとしても扱うカード、となるとあの素材指定で召喚されるのは恐らく、2800の攻撃力を持ちながら2回攻撃の権利を持つあのカードだろう。

だがその予想は、即座に打ち砕かれた。サイバー・ドラゴン2体が空中で混じり合い生まれた機械龍……それは断じて僕が心に思い描いたあのカードではない。黒いキューブ状の物体がいくつも組み合わさってできたいびつな胴体から、てんでバラバラにそれぞれ細部が異なる機械龍たちの3つの首と1本の尾が生えている。そのどれもが不規則に動き、うねり、身をくねらせる様は、まるで歪んだ胴体か



らそれぞれの龍が自らの体を切り離し、逃げ出そうとして暴れているようにも見えた。

「出でよ、キメラテック・ランページ・ドラゴン！」

「サイバー・ツインじゃない……？」

キメラテック・ランページ・ドラゴン 攻2100

こんなモンスター、卒業デュエルの時も見ただ覚えがない。その見た目もさることながら、サイバー・ドラゴンを素材としているにもかかわらずその攻撃力が素の状態から変わっていない点もまた余計にその不気味さを引き立てている。

「キメラテック・ランページ・ドラゴンは融合召喚に成功した時、その素材の数だけ場の魔法・罫を破壊できる。俺が選択するのは清明、お前の場の2枚だ！」

黒いキューブが鈍く発光すると、3つの首のうち2つがまるで電流でも走ったかのように自らの身体への抵抗を止めた。そのまま操られているようなぎこちない動きでこちらを向き、口を開いてそれぞれが2枚のカードめがけて熱線を吐く。そのうち1本はすぐにUFOを炎の中に消し去ったが、もう1つの目標物……この地獄においてなおもその中心で屹立する灯台は、しぶとかった。炎に舐められ、焦げ付き、その一部を溶かしながらも、機械龍の攻撃を耐え抜き、前と変わらぬ光を閃かせて見せたのだ。

「グレイドル・インパクトはともかく……カイザー、さつき使った融合の魔法カードは、1度フィールドで発動されてから墓地に送られた。つまり、フィールドから墓地にカードが行った段階で僕のウォーターフロントには怪獣カウンターがコアの分も合わせて2つ乗っていたわけさ。そしてこのカードは、自身の壊獣カウンター1つをコストに破壊から身を守ることができる。さらに破壊されたインパクトも墓地に行ったから、カウンターをもう1回追加させてもらおうよ」

KYOUTOUウォーターフロント(0)↓(2)↓(1)↓(2)

「破壊には失敗したか……ならば、キメラテック・ランページのさらなる効果を発動！デッキから光属性の機械族モンスターを2体まで墓地に送ることで、その枚数だけこのモンスターは攻撃回数を増やす。

サイバー・ドラゴン・ツヴァイ、そして超電磁タートルの2枚を墓地に送り、バトル！まずは第一打！」

再び、黒いキューブが不気味に発光した。と、今度は先ほど攻撃をしてこなかった最後の首が同じく抵抗を止め、こちらに向けられる。伏せモンスターを破壊し、さらに2回の直接攻撃が成功すればワントーンキルが成立する……だけど、そんな虫のいい話を通すわけにはいかない。僕だって、それ相応の覚悟を持ってこの場に臨んでいるんだ。

キメラテック・ランページ・ドラゴン 攻2100↓??? 守150

0 (破壊)

KYOUTOUウオーターフロント(2)↓(3)

「この瞬間、戦場で破壊されたグレイドル・アリゲーターの効果発動！相手モンスター一体に寄生し、機械だろうがなんだろうがそのコントロールを掌握する！当然対象は、キメラテック・ランページ！」

熱線を受けて弾け飛んだ銀色の飛沫が、空中で向きを変えその攻撃の発生源へと一斉に飛びかかる。当然、何か回避策は持っているだろうとあまり期待はしていなかったが、意外なことに見ているこちらが拍子抜けするほどあっさりとは結合魔龍はこちらの支配下に置かれた。見ていた翔にとってもその展開は予想外だったらしく、小さな悲鳴が漏れる。

「お兄さん！」

「あ、あれ？」

『……いや、まだ仕掛けてくるぞ』

チャクチャクさんの警戒を促す低い声が、脳内に響く。その言葉を待っていたかのように、目の前のカイザーも次なる一手に向けて動き出した。

「相手フィールド上のみモンスターが存在するとき、墓地のサイバー・ドラゴン・コアのさらなる効果が発動できる。このカードを除外し、デッキからサイバー・ドラゴンを特殊召喚する」

サイバー・ドラゴン 攻2100

「なるほど、リカバリーは万全、ってわけね」

軽口を叩きながらも、内心では言いようのない不安感に包まれていた。サイバー・ドラゴンとランページの攻撃力は同じ、相打ち狙いを棒立ちでエンド……なんて、カイザーらしくもない。まだ何か、僕の見落としている戦術があるのだろうか。

その時、ふとある情景が脳裏に浮かんだ。あれは、卒業デュエルの時。どうしても忘れていたんだろう、サイバー流にはまだ、あのカードがあることを。しかし思い出せたときにはすでに遅く、カイザーのサイバー・ドラゴンと僕の場のランページが空中で混ざり合いさらなる機械龍へと変化を遂げていくところだった。

「あのカードは……！」

「場に存在するサイバー・ドラゴン1体及び、それ以外の機械族モンスター全てを墓地に送る。融合召喚！キメラテック・フォートレス・ドラゴン！」

メタリックな輝きを放つ、龍というよりむしろ蛇に近い挙動をする異端のサイバー流。その攻撃力は、素材とした機械族モンスター1体につき1000。

キメラテック・フォートレス・ドラゴン 攻2000

KYOUTOUウォーターフロント(3) ↓(5)

やられた。攻撃力こそ下がったものの、これでアドバンテージは一気にカイザー側に傾いた。唯一の救いは、一気に3枚のカードが墓地に送られたことでウォーターフロントのカウンターが上限の5つまで溜まったことだけ……それも、この手札だとあまり慰めにはならない。

清明 LP4000 手札：3

モンスター：なし

魔法・罠：なし

場：KYOUTOUウォーターフロント(5)

カイザー LP4000 手札：2

モンスター：キメラテック・フォートレス・ドラゴン(攻)

魔法・罠：1(伏せ)

場：サイバーダーク・インフェルノ

「僕のターン、ドロロー。KYOUTOUウォーターフロントに壊獣カウンスターが3つ以上存在するとき、その光は1ターンごとに1体の壊獣を呼び寄せる！来い、怪粉壊獣ガダーラ！」

これで手札に壊獣が1体、そして僕の手札にはグレイドル・コブラのカード。フォートレスをリリースしてこのガダーラを呼び、そのままコブラで自爆特攻。流れで寄生すれば大ダメージを通せるが、それは僕のライフも一気に削られる諸刃の剣だ。サイバー流相手には1度の気の緩みが死に直結するから、確実に倒しきれない状況でもない限り極力ライフは温存しておきたい。

「ここは、グレイドル・コブラ召喚！そのままフォートレスに攻撃！」  
グレイドル・コブラ 攻1000（破壊）↓キメラテック・フォートレス・ドラゴン 攻2000

清明 LP4000↓3000

「戦闘破壊されたコブラの効果でフォートレスに寄生、そのまま追撃のダイレクトアタック！」

その召喚条件を考えれば最低クラスの攻撃力しかないとはいえ、それでもダイレクトアタックならば初期ライフのきっかり半分を削り取るだけのパワーはある。両目のあるべき場所に付いたスコープが静かに獲物を求めて動き、その中心に捉えたカイザーめがけて熱線が撃ち込まれる。

「甘い。トラップ発動、パワー・ウォール！相手の攻撃により発生するダメージ500ポイントにつき1枚のカードをデッキから墓地に送ることで、戦闘ダメージを打ち消す！」

「これも防がれた……！」

キメラテック・フォートレス・ドラゴン 攻2000↓カイザー（直接攻撃）

カイザーがデッキから4枚のカードを抜き取り、自分の前に無造作に投げる。そのカードたちが空中で半透明の力場を作り、機械龍の攻撃を完全に受け止めた。だが考えてみれば、こうなることぐらいフォートレスを攻撃表示で融合召喚した時点で気づけたはずだ。わざわざ起点になるよう出してきたのだから、当然その理由があること

ぐらい攻撃前に読めてしかるべきだった。

これで僕はこのターン、攻撃力2000のモンスター1体と引き換えに1000ものライフと手札のコブラを失った。エンドフェイズまでに、このターンにできる事は……。

「永続魔法、強欲なカケラを発動。ターンエンド」

「俺のターン。肩慣らしはそろそろ切り上げて、ここからは本気で行くぞ。出でよ、サイバー・ダーク・キール！サイバー・ダーク・クロウを装備しろ！」

ついに僕の前に現れた、サイバー・ダークの1体。細長い蛇のような漆黒のボディが、月光を反射して鈍く光を放つ。その体から無数のコードが地下へと伸び、無数の鉤爪をわきわきと不気味に動かす小型の機械龍に接続される。

「……？」

「サイバー・ダーク・キールは召喚に成功した時、墓地からレベル3以下のドラゴン族モンスター1体を自身に装備できる。そして、その攻撃力がこのカードに加算される」

サイバー・ダーク・キール 攻800↓2400

下級モンスターとしても明らかに低いわずか800の攻撃力が、一気に同レベル帯でも最高クラスの2400にまで膨れ上がる。これがサイバー・ダークの戦術、なるほど確かに自らを高めることで圧倒的な攻撃力を生み出す表サイバーとは根本的に異なる存在だ。

「サイバー・ダーク・クロウ……？あんなカード、見たことない……」

初見の僕にとってはそういうものか、で済む話だったが、過去に1度裏サイバーと戦ったことのある翔にとっては見過ごせない違和感があったらしい。これまでのデュエルでカイザーが使ったことのないカード、というわけか。普通ならそんなこともあるよね、で済むような話だが、サイバー流のカードを引きこむ力を知っている僕みたいな立場からすると若干引つかかる話だ。説明を求めてカイザーに視線を送ると、その意味を汲み取ったのかキールに装備された状態のカノンを見上げた。つられて僕もクロウの方へ眼をやったところで、カイザーの静かな声が聞こえる。

「確かに、翔の言う通りだ。このカードはユベルとの戦いまでは、俺のデッキには入っていないかった。いや、そもそもサイバー・ダーク・クローなんてカードはどこにも存在すらしていなかった」

「どういうことなの、お兄さん？」

「俺はあの戦いで、自分の輝きを最高に出し尽くしたつもりだった。あれ以上は望むべくもない、限界以上を引き出せたデュエルだと思っていた。だが、それは俺の考えが甘かったらしい。俺自身はともかく、このデッキには……サイバー流にはまだ、進化の余地が存在する」

「進化の、余地……」

風は、凧いでいた。ほんのかすかに押し寄せては灯台にぶつかり、また引いていく波の音だけがかすかに聞こえる。

「その境地にたどり着くのが未来の俺なのか、それともそうでないのかはわからん。だが俺はあの戦いから再びこの世界に流れ着くまでに、裏サイバー流……サイバー・ダークの新たな地平を確かに見た。このクローこそがその証、その進化への布石となる1枚だ。だが俺はいまだその地平を、その進化を完全にはものにはできていない。ならばどれほど時がかかろうと、なんとしてもその新たな進化を形にしてみせる。それが俺の使命であり、戦いを求め続けるこのデッキに対してのせめてもの礼だ」

「カイザー……」

「つまらない話を聞かせたな、清明。バトルだ！サイバー・ダーク・キールで攻撃、ダーク・ウィップ！」

キールの細長い体が鞭のようにしなり、その尾の一撃が自身より巨大な機械龍の装甲を打ち砕く。その勢いでキールの体がもう一捻りされ、返しの尾の一撃が今度は僕を直接襲った。

サイバー・ダーク・キール 攻2400↓キメラテック・フォートレス・ドラゴン 攻2000 (破壊)

清明 LP3000↓2600↓2300

「なんで、ダメージが……!?!」

「サイバー・ダーク・キールがモンスターを戦闘破壊した時、相手ライフに300の追加ダメージを与える。さらに今の戦闘のダメージ計

算時、サイバー・ダーク・クロウの効果が発動した。装備モンスターが戦闘を行うダメージ計算時、俺のエクストラデッキからモンスター1体を墓地に送る。俺はこの効果で、サイバー・エンド・ドラゴンを選択する」

装備状態であることを前提とした効果により、さらにカイザーの墓地にカードが送り込まれる。表サイバー流の切り札中の切り札、サイバー・エンドを墓地に送るほどの戦略だ、何を狙っているかはまだわからないが、着実にその準備を整えつつある事は間違いない。

清明 LP2300 手札：2

モンスター：なし

魔法・罫：強欲なカケラ（0）

場：KYOTOUウオーターフロント（5）

カイザー LP4000 手札：2

モンスター：サイバー・ダーク・キール（攻・クロウ）

魔法・罫：サイバー・ダーク・クロウ（キール）

場：サイバーダーク・インフェルノ

「僕のターン！まずはこのドローフエイズ、通常のドロウをしたことで強欲なカケラに強欲カウンターを1つ乗せる。メインフェイズにはウオーターフロントの効果で、多次元壊獣ラディアンをサーチさせてもらうよ」

強欲なカケラ（0）↓（1）

最初のターンに張られて以降、いまだ沈黙したままのサイバーダーク・インフェルノ。名前からしても間違いなくサイバー・ダークのサポートカードなのだろうが、どんな効果を持っているにせよこの僕のみ、全カードの中でも最強クラスのモンスター除去である壊獣の力までは防げまい。

それにしても、こういう展開になってくると最初にサーチしたのがガダラというチョイスはちよつと失敗だったと思う。このデッキでは貴重な、どんな相手の攻撃も真っ向から戦闘で突破できる要員だったから持ってきておこうと選んだけれど、この状況なら他の壊獣の方がなにかとよかっただろう。

「サイバー・ダーク・キールをリリースして多次元壊獣ラディアンを、ラディアンが存在に反応して手札のガダーラを、それぞれのフィールドに特殊召喚！さらにガダーラはその特殊能力、風葬によって壊獣カウンスター3つをコストに鱗粉の風をフィールドに撒き散らし、自身以外の攻守を半分にする！」

次元の壁を越える宇宙人が、風起こす大怪物が、一度にフィールドをその巨体で埋める。機械龍が我が物顔に蹂躪していた場の空気が、1瞬にして書き変わった。

多次元壊獣ラディアン 攻2800↓1400 守2500↓1250

怪粉壊獣ガダーラ 攻2700

KYOUTOUウオーターフロント(5)↓(2)

「ほう、これがお前の手に入れた力か。サイバーダークインフェルノがある限り装備カードをもつサイバー・ダークは相手の効果対象にならず、効果破壊もされなかったのだが……まさか、耐性の上から攻めて来るとはな」

『油断するな、マスター。わかってるな？』

賞賛の声に応える余裕もなく、チャクチャルさんの警告が聞こえる。無論、何が言いたいのかはわかっている。手札にはアタッカーになるハンマー・シャークのカード、けれどももし僕が今のカイザーの立場だとしたら、ここで追加ダメージの誘惑に駆られての通常召喚は愚の骨頂だ。勿体ないけれど、このターンは下準備と割り切ろう。

「……バトル！ガダーラでラディアンに……」

「墓地の超電磁タートルを除外することで、効果発動。デュエル中1度だけ、バトルフェイズが強制的に終了される」

先ほどランページの効果で落としていた超電磁タートルにより、ガダーラの攻撃が強制的に止められる。

でも、これでいい。カイザーなら間違いなく壊獣のデメリット、壊獣はそれぞれのフィールドに1体ずつしか存在できない点を逆手にとって、ラディアンをこのターン生かすことで次に僕が新たな壊獣を手札に加えたとしてもカイザーのモンスターをリリースして除去、の



流れを不可能にしてくるはずだと思った。だからこのターンはバトルを捨てて超電磁タートルの守りを引つpegす、それができれば十分だ。そんな悠長なこと言ってる相手じゃないのは百も承知だけど、だからといって墓地のカードに干渉できるカードなんてそもそもこのデッキには入っていない。

「ハンマー・シャークを守備表示で召喚。ターンエンド」

『それでいい。なかなか成長したな、マスター』

お褒めに預かりまして、だ。上から目線なのは気に入くないけど。

ハンマー・シャーク 守1500

「俺のターン。まずお前のカード、多次元壊獣ラディアンの効果を使わせてもらおう。壊獣カウンター2つをコストに、ラディアントークンを特殊召喚する」

KYOUTOUウォーターフロント(2) ↓(0)

ラディアントークン 攻2800

何度も僕のフィールドで発動してきたラディアンの効果は、今回は僕に対して牙をむく。しかもこれで、ウォーターフロントを破壊から守るカウンターがすべてなくなってしまった。

「さらにサイバー・ダーク・エッジを召喚。このカードもまた、召喚時にレベル3以下のドラゴン族1体を墓地から装備できる。サイバー・ダーク・カノンを装備！」

小柄な胴体とは明らかに不釣り合いな巨大な金属の翼を持つ、2体目のサイバー・ダーク。その全身からはキールの時と同じように無数のコードが伸び、またしても先ほどと同じように、だが先ほどのクローとはまた違い、丸い頭部がどこか芋虫のような印象を抱かせるサイバー・ダーク・カノンと結合する。

サイバー・ダーク・エッジ 攻800 ↓2400

「これでいい。速攻魔法、ダブル・サイクロンを発動！俺のフィールドに存在する魔法・罠カードと、お前のフィールドの魔法・罠カードを1枚ずつ破壊する。俺のフィールドからは装備カードとなったサイバー・ダーク・カノン、そしてお前のフィールドからはKYOUTOUウォーターフロントが破壊される」

さつきまで凪いでいた空に、突然不吉な風が吹く。荒れる波が押し寄せる中でカウンターの尽きた灯台が、光を失ってゆつくりと倒壊していった。

「ウォーターフロントが……！」

「まだだ、サイバー・ダーク・カノンの更なる効果を発動！ 装備状態のこのカードが墓地に送られた時、デッキからカードを1枚ドロースる」

カイザーがカードを引く。まずい、そう思ったのは予感なんかではない。まぎれもない確信だ。そして案の定その確信は現実が変わり、カイザーはそのカードを即座に発動する。

「魔法カード、サイバーダーク・インパクト！ を発動！ 俺のフィールド、手札、墓地のいずれかに存在するホーン、エッジ、キール3体のサイバー・ダークをデッキに戻し、融合召喚を行う！ 出でよ、鎧黒竜―サイバー・ダーク・ドラゴン！」

「ついに出了、お兄さんの裏サイバー流エースモンスター……！」

ホーンの頭部、エッジの翼、キールの尾。フィールドと墓地から飛び立った3体の下級サイバー・ダークのパーツ同士が組み合わさり、1体の巨大な機械龍となって空中で僕のガダラと対峙する。あの姿は僕も異世界で見た、どころかその背に乗ったこともあるが、こうして戦う姿を見るのは初めてだ。

「サイバー・ダーク・ドラゴンが特殊召喚に成功した時、墓地に存在するドラゴン族1体を装備することができる。この効果にはレベル制限がないが、今回はサイバー・ダーク・カノンを選択する。だがこのカードにはさらにそれとは別に、攻撃力を俺の墓地に存在するモンスター1体につき100ポイントアップする効果もある」

装備対象にレベル制限がないうえに、さらに率こそ悪いとはいえ自己強化まで備えているとは。今のカイザーの墓地にモンスターは何体いる？ サイバー・ドラゴン・コアと超電磁タートルは確かゲームから除外されたはずだからその2枚は含めなくてよく、カノンも装備対象として墓地から剥がされたからそれも計算に入れる必要はない。それでも、融合素材やらなんやらでカイザーの墓地にモンスターは最

低6体。パワー・ウォールで落とすカードのうち、何かわかっていない物があと2枚。もしそれがすべてモンスターだとしたら……ということは、素の攻撃力はたかだか1000でしかない鎧黒竜の今の攻撃力は……。

「攻撃力、3400……！」

そうだ、と言わんばかりに金属の龍が咆哮し、ホーンの物であったその頭部に漆黒のエネルギー弾が生成される。当然その狙いはただ1つ、自らの前に立ちふさがるガダーラだ。そしてその真の力を発揮するための壊獣カウンターが枯渇した今の状況では、どうあがいてもガダーラに勝ち目はない。

鎧黒竜―サイバー・ダーク・ドラゴン 攻1000↓2600↓3400

「行くぞ、バトルだ。サイバー・ダーク・ドラゴンで、怪粉壊獣ガダーラに攻撃！フル・ダークネス・バースト！」

「ガダーラっ！」

鎧黒竜―サイバー・ダーク・ドラゴン 攻3400↓怪粉壊獣ガダーラ 攻2700(破壊)

清明 LP2300↓1600

「ぐっ……！」

「カノンを装備したモンスターがバトルを行ったことで、デツキからサイバー・ダーク・キールを墓地に送る。次いでラディアントークンで、ハンマー・シャークに攻撃！」

これも、異世界ですつと実体化していた影響だろうか。サイバー・ダーク・ドラゴンの攻撃の余波は明らかにソリッドビジョンの範疇に収まらず、その衝撃により発生したとしか考えられない本物の風圧が僕の全身にぶつかり学生服をはためかせる。だが、そんなことを気にしている暇はなかった。プレイヤーの攻撃命令には逆らえず、ラディアントークンの体が闇に溶ける。次元を飛び越えて背後から振り下ろされた一撃が、ハンマー・シャークの後頭部を狙い打った。

ここまではまだモンスターたちが壁となつてダメージを抑えてくれたけれど、もはや僕の場合に味方はいない。体中にまだ鱗粉が付いた

ままのラディアンと目が合ったが、お互いどうすることもできない。  
ラディアントークン 攻2800↓ハンマー・シヤーク 守1500  
0 (破壊)

「さらに多次元壊獣ラディアンでダイレクトアタック!」

多次元壊獣ラディアン 攻1400↓清明 (直接攻撃)

清明 LP1600↓200

「ぐぐ……ぐつ……!」

「メイン2に魔法カード、七星の宝刀を発動。俺のフィールドからレベル7のラディアントークンを除外することで、カードを2枚ドロースする」

攻撃を終えたラディアントークンを除外することで、実質ノーコストでの2枚ドロウを行うカイザー。自分のモンスターをコストにしていけないのだから、やってることは強欲な壺と変わらない。

「魔法カード、おろかな埋葬を発動。デッキからサイバー・ダーク・エツジを墓地に送る。カードを1枚伏せ、ターンエンドだ」

もはやライフは風前の灯とはいえ、なんとかこのターンも凌ぎ切れた。ならば、まだ希望はある。このデュエル、次のターンが正念場だ。その覚悟を読み取ったのか、かすかにカイザーが微笑したように見えた。

清明 LP200 手札:1

モンスター:なし

魔法・罨:強欲なカケラ (1)

カイザー LP4000 手札:1

モンスター:鎧黒竜―サイバー・ダーク・ドラゴン (攻・カノン)

多次元壊獣ラディアン (攻)

魔法・罨:サイバー・ダーク・カノン (鎧黒竜)

場:サイバーダーク・インフェルノ

「僕のターン、ドロ―!」

引いたカードを見て、笑みがこぼれる。こんなギリギリの局面で駆けつけるだなんて、なかなか来るべき時つてものをわかってるじゃない。ここで来てくれるってことは、当然お膳立てもできてるんだよね

？

「ドローを行なったことで強欲なカケラに2つ目のカウンターを乗せて、2つのカウンターが貯まったカケラの効果発動。このカードを墓地に送ることで、さらにカードを2枚引く！」

最後に引いたカード2枚を合わせ、僕の手札は計4枚。これだけあれば、まだ戦える！」

「魔法カード、ハーピィの羽根箒を発動！相手フィールドの全ての魔法、そして罨カードを破壊する！これでサイバー・ダーク・カノンも破壊されて、サイバー・ダーク・ドラゴンの攻撃力はダウンする！」

「お兄さんの切り札が……」

鎧黒竜―サイバー・ダーク・ドラゴン 攻3400↓1800↓1900

装備していた分の攻撃力が下がった反面自己強化の数値が上がるため、結果として攻撃力の低下は1500ポイント止まりで終わる。カノンの効果による1枚ドローも許してしまうが、それはもう必要経費として諦めるしかない。だがそこで、あることに気が付いた。ドロー効果を合わせても、今のカイザーの手札は2枚のはずだ。だが彼の手札は今、見間違えでなければ3枚存在する。

「サイバーダーク・インフェルノが相手により破壊された時、デッキから融合、またはフュージョンと名のつくカード1枚をサーチできる。サイバネティック・フュージョン・サポートを加えさせてもらった」

サイバネティック・フュージョン・サポート……忘れてくても忘れられない、機械族専用の融合召喚を墓地リソースで行えるようになる速攻魔法だ。首を振って不穏な予感を振り払い、目の前のサイバー・ダーク・ドラゴンに意識を集中する。

「相手フィールドの壊獣の存在に反応して、手札から粘糸壊獣クモグスを攻撃表示で特殊召喚して……さらに速攻魔法、帝王の烈旋！このターンのアドバンス召喚は、相手モンスター1体をリリースして行うことができる」

粘糸壊獣クモグス 攻2400

これで、準備はすべて整った。呼び出すは絶対不変、未来永劫の僕

の切り札。

「クモグス、そしてラディアン！2体のモンスターをリリースして、アドバンス召喚！」

このデュエルが始まってからずっと押されっぱなしだった僕に残された、最後の反撃の狼煙。2体の壊獣の姿が霧に包まれて消えてゆき、その中央から一筋の太刀が走る。

「さあ、あの時のリターンマッチと洒落込もう！行くよ、霧の王！」キングミスト

霧の王は、リリースしたモンスターの攻撃力の合計がそのまま攻撃力となる。思えば卒業デュエルの時も、最後はこの霧の王とサイバー・エンド・ドラゴンの一騎打ちだった。あの時からカイザーは変わったけれど、僕だってもうあの時とは違う。恐らくこれが、このデュエルで僕が出す最後のモンスターになるだろう。

霧の王 攻0↓5200

「フツ、あの時の、か。いいだろう、来い！」

「もちろん！霧の王でサイバー・ダーク・ドラゴンに攻撃、ミスト・ストラングル！」

大きく飛び上がった霧の戦士が、その宝剣で全体重を乗せた大上段からの一撃を浴びせかけると、サイバー・ダーク・ドラゴンもわずかに顔を上に向け、再び顔の前で発生させたエネルギー弾でそれを迎え撃たんとする。互いの攻撃のエネルギーが激突し、激しい爆発が起きた……だがその衝撃波が僕らの元に届くより先に、どこからともなく発生した深い霧が全てを包み込んでいく。

勝負は、1瞬で決まった。発生した時と同じような唐突さで霧が晴れていき、みるみるうちに視界がクリアになっていく。その向こうに立っていたのは力尽きたサイバー・ダーク・ドラゴンの頭部に剣を突き立て、静かにその亡骸を見下ろす霧の王だった。

霧の王 攻5200↓鎧黒竜—サイバー・ダーク・ドラゴン 攻1

900 (破壊)

カイザー LP4000↓700

「どうだ……カイザーっ！」

あの時、表サイバーの龍に倒された霧の王が、今度は裏サイバーの

龍を切り伏せた。だがやはり気になるのは、あの時カイザーのサーチしたサイバネティック・フュージョン・サポート……だがサイバー・エンド・ドラゴンが先ほど墓地に送られた以上、あのカードが目当てではないだろう。となるとまさかさつき言っていた、裏サイバーの新たな地平とやらだろうか。

いや、でも、あれはカイザーでさえもまだものにできていない存在だと明言されたはずだ。まさか、このデュエルを通じて次のターンで『それ』を覚醒させるつもりだろうか。あまりにも危険で、分の悪い賭け……第一その新たな境地のモンスターが目覚めなかった場合、何も召喚することができずに終わる可能性すらある。

そんな物思いは、カイザーの目を見て吹き飛んだ。あれは……本気だ。本気で僕とのデュエルを通して、その境地に登り詰めつつある目だ。知らず知らずのうちに鳥肌が立っていたのを精神力で抑え込みにやりと笑ってみせる。いいだろうカイザー、僕が生き証人だ。その姿はつきりと、その命の輝きを、最後まで僕がこの目で見据えてやるさ。

「ターンエンド。今のが僕の全力だ、さあ来いカイザー！ただしここまで引つ張ったんだ、その結果が生半可な力程度なら、僕らがこの手でぶった切ってやる！」

「感謝するぞ、清明……。お前のおかげで、俺は今新たな境地に最も近いところに居る！俺は生きている、その命の輝きを、さらに激しく燃え上がらせてみせる！……俺のターン、ドロート！」

静寂が場を包んだ。僕も翔も、そしてカイザー本人も、物音ひとつしないその瞬間が、僕には永遠のものとも感じられた。

そしてその均衡が、カイザー自身の手によって破られる。

「速攻魔法、サイバネティック・フュージョン・サポート……そして魔法カード、パワー・ボンドを発動！俺のライフを半分払い、墓地のサイバー・ダーク・カノン、サイバー・ダーク・キール、サイバー・ダーク・エッジ、サイバー・ダーク・クロウ、そして鎧黒竜―サイバー・ダーク・ドラゴンの5体をゲームから除外する！」

「5体のサイバー・ダークでの融合召喚!?そんなモンスターが……！」

カイザーが最後に引いたのは、彼の信じる究極の融合カードにしてサイバー流の象徴、パワー・ボンド。融合召喚した機械族の攻撃力を元々の数値分引き上げる凄まじいメリットと引き換えに、その力の代償としてエンドフェイズに挙げた攻撃力がそのままダメージとしてプレイヤーに降りかかるデメリットを併せ持つハイリスクハイリターンのカードだ。カイザーのライフはもはや残りわずか、どう考えてもエンドフェイズのデメリットには耐えきれない。このターンで決め切るつもりなら、真正面から迎え撃つまでだ。霧の王も考えることは同じなのか、正眼の構えで自身の剣を強く握りしめる。

そうして僕らが見守るその目の前で、ついに裏サイバーの究極の境地がその目を覚ました。

「出でよ！ 鎧獄竜―サイバー・ダークネス・ドラゴン！」

「これが……！」

その機械龍は、まさに限界を超えて更なる進化にたどり着いた鎧黒竜だった。ホーン、エッジ、キールの3体の特徴を併せ持ちながら、装甲の薄かった胸部からはクロールの特徴である鉤爪が出現して補強され、その背にはカノンが自らの体をそっくりそのまま巨大な砲台として据えつけられる。だが何よりも恐ろしいのはそんな外見だけの特徴ではなく、一目見るだけで伝わってくる全身から立ち上る圧倒的なパワー。それは合体の相乗作用なのか1体1体の時どころか鎧黒竜とさえも比べ物にならない、完全に制御された洗練されつくした暗黒の力。

「パワー・ボンドの効果により攻撃力は倍になり……さらにサイバー・ダークネス・ドラゴンが特殊召喚に成功した時、墓地のドラゴン族または機械族モンスター1体を自身に装備できる。サイバー・エンド・ドラゴンを装備する！」

「サイバー・エンド・ドラゴンがサイバー・ダークネス・ドラゴンに……」

翔が震え声で復唱する中、シルバーメタリックな輝きを放つ三つ首の機械龍が漆黒の機械龍に装着される。これが、表裏一体サイバー流の究極の形なのか。偶然なのか必然なのか、その攻撃力が2重の強化



を受けて倍々式にはね上がる。

カイザー LP700↓350

鎧獄竜―サイバー・ダークネス・ドラゴン 攻2000↓4000  
↓8000

「攻撃力、8000……でも！」

僕の声に霧の王がコクリと頷き、圧倒的な力の差を前に怯むことなく剣を構え直す。その眼前で、サイバー・ダークネス・ドラゴンが前段発射に向けて力を溜めはじめる。背中の砲、<sup>カン</sup>頭部からのエネルギー弾、そして吊り下げられたサイバー・エンドの3つの頭に、それぞれ別のエネルギーが充填されていく。

「行け、サイバー・ダークネス・ドラゴン！エヴォリューション・ダークネス・バースト！」

「迎え撃て、霧の王！ミスト・ストラングル！」

鎧獄竜―サイバー・ダークネス・ドラゴン 攻8000↓霧の王  
攻5200（破壊）

清明 LP200↓0

霧の王の一閃と機械龍の砲撃が激突し、世界が白い光に包まれる。目を閉じてもお届け強烈な光の中で、何か動くものがかすかに見えた。強烈な逆光のためぼんやりとしたシルエットしか確認できなかったが、こちらに向けて咆哮するその姿はまるで機械の翼を生やしたサイバー・ドラゴンのような……だがその姿をもっとよく見ようとしたところで、光が収まってしまった。デュエルが終わったことでサイバー・ダークネス・ドラゴンの姿も消え、後に残ったのは僕とカイザー、そして翔の3人のみ。

「今のは……」

今見えた光景は、ただの幻覚だったのだろうか。でもあの映像が僕に与えたあまりにも鮮明な印象は、到底そうは思えなかった。立ちすくむ僕の目の前で同じく立っていたカイザーががっくりと膝をつき、次いでその場に崩れ落ちる。

「お兄さんっ！」

「カイザー！」

翔と2人で駆け寄ると、カイザーはよほど痛むのか心臓の位置に手を当てて苦しそうに息をつきながらも、それでも満足げに笑っていた。

「……清明、お前もあれを見たのか？」

「お兄さん、喋っちゃだめだ！今すぐ鮎川先生のところに……！」

「そうだろう、お前も確かに見たはずだ……！」

翔の言葉も耳に入っていないかのように、熱に浮かされたような調子で喋りつづけるカイザー。じゃあやっぱりカイザーもあの光景を、僕と同じあの未知なるサイバー・ドラゴンを見ていたんだ。小さく頷くとそれに満足したのか、胸にやっていた手を何かを掴み取ろうとするかのように星空へ伸ばす。震えながらもその手を握りしめ、さらに声を絞り出す。

「俺は見た、まだ見ぬサイバー流の進化、その更に果てを！サイバー・ドラクネス・ドラゴンは、確かに裏サイバー流の境地かもしれない。だが、表サイバー流にも進化の道は残されている！あの1瞬の光の中で俺は見た、瞬間が永遠ノヴァインフィニティとなる様を！」

握りしめた手を緩慢な動きで自身の腕に持っていき、今にも気を失いそうなかで自らのデツキを取り外す。どうにか掴んだそれを、自分を抱き起す翔に向けて差し出した。

「お兄さん、これは……？」

「翔、俺のデツキはお前に託す。次世代のサイバー流を見つけるのは俺ではない、ここからはお前の仕事だ。頼ん……だ、ぞ……！」

それだけ言ったところでついに力尽きたのか、翔の手の中で気を失うカイザー。手の空いた僕が鮎川先生を呼びに行かなくちやいけないんだろうけど……駄目だ。さすがに、今のデュエルで精神力を使い果たしたせいであらうこれ以上はちよつと動けそうにない。地面に大の字に倒れると、頭上には満天の星空が見える。

カイザーの掴もうとした新たな可能性の光も、この中のどこかにあるのだろうか。そんなことを考えながら、静かに意識を手放した。

## ターン115 学園英雄と邪魔の化身

「あ、ちよいとそこ行く兄さん姉さん、観戦のお供にポップコーンいかがですか？・YOU KNOW謹製サンドイッチ、今ならお安くしときますよー」

「あ、サンドイッチを頂くノーネ」

「クロノス先生、お買い上げありがとうございます」

デュエルアカデミアはこの日、いつになく熱気に包まれていた。デュエル場には全校生徒や先生どころかテレビカメラまでもが詰めかけ、その中央で対峙する赤と黄の2人がデュエルを開始するその瞬間を今か今かと待ちわびている。ポップコーンのようなおやつ類やサンドイッチなど軽食を山積みにしたトレイを持ち歩いて売りまわりつつ、チラリと時計に目をやった。

……あと5分で、このデュエルが始まる。それまでにこの中身を全部売り切れれば……じゃなくて。そもそも、なぜこんなことになったのか。デュエル場にいるいつも通りの十代とその真向いの黄色い人影、それはライエローの生徒ではない。なぜか無駄によくできたおジャマ・イエローの着ぐるみという無駄にシニールな格好に身を包んで無然とした顔になっているのは、情けないことに僕もよく知ってる顔だった。

「……なーにやってんだか、万丈目ったら」

僕が最後に彼に会ったときは、まだいつも通りの万丈目だったのだ。ラストスパートでの売り抜けを目指して体は積極的に動きつつ、頭の中ではあの日のことを振り返っていた。

「ええい、なぜこの万丈目サンダーともあろう男が！」

「るっさい万丈目ー！」

ぼろいレッド寮の壁を通じてガンガン伝わってくる大声に僕がキレたのは、太陽もすでに天頂を通り過ぎて西の空へと次第に落ちかかってくるような、だけどまだ夕方と呼ぶにはあまりに早すぎる、そ

んなけだるい時間だった。レッド寮は数年前に僕が仕組んだ大改造により、2階の部屋の壁をいくつかぶち抜いて部屋数を減らす代わりに1部屋当たりの広さを倍にしてある。何をやってるのかは知らないが最初はあまり邪魔するのも悪かろうと部屋の隅に移動してやり過ぎそうとしてみたのだが、十代は朝から釣りばかりだし翔はブルーに移籍したしで誰も止めないのいいことに苛立ちの声はいつまでたつても収まりそうになかったので、ついに僕が重い腰を上げたのだ。

「む、清明。何の用だ、今の俺は機嫌が悪いぞ」

「はいイエロー、今の通訳して」

『んくつとねえ、万丈目のアニキったらここ最近ずっといろんな会社にプロデュエリスト契約の申し込みしてるんだけど、もう不採用通知だけでババ抜きできるぐらい集まっちゃったのよん。それでイライラしちゃってるわけ』

「ご苦労さん。で、何？申し込み？」

「ああ。聞けば天上院君や翔は、もう進路先を決定したそうではないか。ならばこの俺も兄者達との約束を果たしてカードゲーム界を制するため、プロデュエリストになる道をそろそろ確立させておこうと思ってるな」

『そうなのよ！万丈目のアニキったら見た目通り結構頑固だから、実家の力なんか借りんって万丈目グループに頼らないでプロ入り目指してるのよ、偉いと思わない？』

「見た目通りは余計だ……ん、どうした？」

「いや……偉いね、万丈目」

その時思わず口にした言葉は、僕の紛れもない本音だった。恐らくいつぞやのノース校四天王の将、鎧田の存在にも刺激されていたのだろうが、万丈目はこうして自分の将来を見据え、前に踏み出すべく胸を張って足掻いている。

いや、万丈目だけではない。今の話にも出てきた、明日香や翔だってそうだ。それぞれ目指す場所は全く違えども、このアカデミアからさらに先の道へ飛び出していこうとしている。じゃあ僕は、どうなん

だろう。霸王の世界で辺境の大賢者さんは僕に、目の前の道を進むかどうかは僕の自由だ、そんな言葉を残していった。僕の目の前に、道は何本あるんだろう。僕が選ぶことのできる道の中で、未来に繋がっているのはどれだろう。そう自問しているうちにすっかり毒気が抜けてしまった僕の顔を、心配そうに万丈目が覗きこんでいた。

「おいおい、なんだその腑抜けた顔は。お前もどうせ、狙いはプロ入りなんだろう？お前もこの俺のライバルの1人としての自覚を持って、もっとしやつきりしろ」

「うん……」

万丈目なりに心配して、励ましてくれているのだろう。それはわかっているしその心遣いが身に染みるけれど、そんな程度の軽口にも反応する気分にはなれずに万丈目の顔がますます険しくなる。だからその時クロノス先生がレッド寮を訪れ、有無を言わず万丈目を引きずって行ったことに一番ほっとしていたのは、もしかしたら僕の方だったのかもしれない。

それからたつぷり1週間、万丈目は島から姿を消した。

「んでクロノス先生、本当になんでこんなことになったんですか？」

どうやら、あの恰好は見かけ以上に動きやすいらしい。両腕をぐるぐると回して着ぐるみの感覚を確かめる万丈目の様子を見下ろしながら、全ての原因らしいこの人に話を聞くことにする。

「私にもさつぱりナノーネ。私はただ、プロ志望の夢に燃えるシニョール万丈目にプロの世界を間近で見てもらおうという親心で、エド・フェニックスに土下座ーニャして付き人としてもらっただけナノーネ」

「付き人!?よく万丈目にそんなの務まり……あーいや、すいません先生。なんでもないです」

あのプライドの高い万丈目に……と言おうとしたところで、改めてデュエル場を見た。360度どこからどう見ても色物デュエリストにしか見えない彼のよく言えば吹っ切れた、悪く言えば手段を選ばな

くなつた姿を見れば、この1週間のうちに彼に何かがあつたことだけはわかる。僕の口からはそれがいいとも悪いともいえないけれど、あえて外野として思ったことを率直に言わせてもらえば、せつかく万丈目みたいに実力があるデュエリストがネタ要員みたいなことをするのはなんだか複雑な気分だ。

「まあ、シニョール万丈目もプロの世界を見て色々思うところがあつたようですし、今は彼のデュエルを見守つてやるのが一番ナーネ。それよりも私としてはシニョール清明、あなたが彼とのデュエルに立候補していないことが不思議なノーネ。鮫島校長にはシニョール十代と一緒に、あなたの名前も推薦しておいたのですが」

「あ、あはは……」

言えない。いい小遣い稼ぎになりそうだったから辞退したなんて、この人の前では絶対に言えない。

まあさすがに、理由がそれだけなんてことはないけれど。いくらペガサスさんから邪神アバター事件の時に新規カードテスターとしての証明書を貰つたとはいえ、壊獣といいグレイドルといい一般流通されていけないカードだらけで構築されたこのデッキを全国放送で振りかざすのは流石にはばかられたのだ。特に今回は貴重な万丈目のプロ(?) 初試合、僕が出ようものなら彼に申し訳が立たない。十代にもネオスやネオスペーシアンがあるとはいえ、僕が出るよりは遥かにマシだ。

「あ、お買い上げありがとうございます」

トレイに載せた最後のサンドイッチが売れたちようどそのとき放送開始を知らせるブザー代わりのチャイムが鳴り、僕もクロノス先生の横の空席に腰を下ろした。空のトレイを抱えてうろついたつて邪魔なだけだし、僕もこのデュエルは見たい。ふとデュエル場を挟んで反対側の客席を見ると、たまたま座つてこちらを見ていた葵ちゃんが目が合った。僕が目で問いかけると、当然ですと言わんばかりに空になったトレイを持ち上げてこちらに見せつける。よしよし、彼女の方も売り子はきつちりやつてくれたようだ。

今回のデュエルはテレビ放送、しかも生中継ということでアカデミ

ア側も演出に気合が入っているのか、客席の電気が消えると同時にその中央で向かい合う2人にスポットライトが当たる。マイクを持った女性レポーターがその姿をバックに、カメラに向かって営業スマイルを投げかけた。

「全国のデュエリストの皆さん、こんにちはー！今回のデュエルチャネルはここ、海馬コーポレーションのお膝元ともいえるデュエリストの聖地、デュエルアカデミア本校におじゃましていますー！」

ここでわざとらしくマイクを持ったまま耳に手を当てる。あざとい。少なくとも葵ちゃん、僕がどう頼んでもあんなポーズとつてくれないだろう。

「んん？おじゃま？そうです、今回のスペシャルマッチ。デュエルアカデミアにお邪魔したのは、私だけではありません！デュエルアカデミア代表として立ち上がった彼、遊城十代君の相手を務めるのはデュエリスト界に突如現れた期待の新星にしてあのエド・フェニックスの一番弟子！その名も……おじゃ万丈目！」

その名を呼ばれると同時に、万丈目に一斉にスポットが当たる。さつきはボロカスに言っちゃったけど、そこで気後れせずに咄嗟にポーズが取れるあたりは流石万丈目、大したもんだと思う。ある程度そうやってポーズをとらせた後に再び照明が落ち着いたのを確認して、カメラが再びレポーターに向き直る。

「共にその実力は未知数の2人、一体どんなデュエルを見せてくれるのか！それでは……」

「デュエル！」

「行くぞ十代。姿を現せ、アサルトワイバーン！」

先攻を取ったのは万丈目……ではなく、おじゃ万丈目。滑空するドラゴンを最初に繰り出したところを見ると、デッキ内容はこれまでと変わっていないらしい。

アサルトワイバーン 攻1800

「さらにカードを3枚セットして、ターンエンドだ」

「あーっと、先攻はおじゃ万丈目！その使用デッキはドラゴン族でしようか！」

「遠慮なくやらせてもらうぜ。まずはヒーローに相応しい、戦う舞台に場所を移さないとな！フィールド魔法、スカイスクレイパー！そしてバーストレディを召喚！」

地面から無数のビルが伸び、周りの景色が眠らない町の満月の夜に様変わりする。ビルの間をやりにくそうに飛び回るアサルトワイバーンの前に立ちはだかるのは、炎の塊を片手でもてあそぶヒーロー。

エレメンタルヒーロー  
E・HERO バーストレディ 攻1200

「二方の遊城十代君のデッキはヒーローデッキ！バーストレディの攻撃力ではアサルトワイバーンには敵いませんが……！」

「このままバトルだ。バーストレディで攻撃、バーストファイヤー！この瞬間スカイスクレイパーの効果により、自分より攻撃力が上の相手モンスターに攻撃するバーストレディの攻撃力はこのバトルの間1000アップするぜ」

デュエル番組のレポーターをやっているだけのことはあり、あの人はスカイスクレイパーの効果を知っているらしい。バーストレディが十代の声に合わせて炎の塊を投げつけるとその火球が空中で巨大化し、アサルトワイバーンの体を捉えた。

E・HERO バーストレディ 攻1200↓2200↓アサルトワイバーン 攻1800（破壊）

おじゃ万丈目 LP4000↓3600

「……フン。この程度は必要経費だ」

「なら……カードを3枚伏せるぜ。さらに永続魔法、補充部隊を発動してターンエンドだ」

「エンドフェイズに速攻魔法、魔力の泉を発動！相手の場で表側表示の魔法・罠の数だけカードを引き、その後自分の場で表側の魔法・罠の枚数だけ手札を捨てる。補充部隊とスカイスクレイパーで2枚ドロし、魔力の泉自身で1枚を捨てさせてもらうぞ」

「十代君、果敢に攻め込むもおじゃ万丈目にはまるで効いていない！次は再びおじゃ万丈目のターン、一体どんなデュエルを魅せてくれるのでしょうかっ！」



まだ序盤の小競り合いにもかかわらず、仕事ゆえかノリノリで実況を続けるレポーターのお姉さん。そのハイテンションぶりにつられてか、気づけば僕まで拳を固く握りしめていた。

おじや万丈目 LP3600 手札：2

モンスター：なし

魔法・罠：2（伏せ）

十代 LP4000 手札：0

モンスター：E・HERO バーストレディ（攻）

魔法・罠：補充部隊

3（伏せ）

場：摩天楼―スカイスクレイパー―

「俺のターン、ドロロー！よし、来たか……まずは魔法カード、死者蘇生でアサルトワイバーンを蘇生する。そのままバーストレディに攻撃！」

アサルトワイバーン 攻1800↓E・HERO バーストレディ

攻1200（破壊）

十代 LP4000↓3400

先ほどやられた仕返しとばかりに、上空から再び飛来したアサルトワイバーンが滑空からの突撃でバーストレディを仕留める。十代はそれに対し1瞬伏せカードの方に目をやるも、結局何もせずにその攻撃を受けた。あえて攻撃を受けたとなると、あの伏せカードは恐らくあれ、だろう。その予想を裏付けるように、ビルの谷間を縫うようにして空にHの文字が照らし出される。

「トラップ発動、ヒーロー・シグナル！バーストレディがバトルで破壊されたことで、デッキからフェザーマンを特殊召喚するぜ」

戦闘破壊をトリガーとしてレベル4以下の新たなヒーローを場に出すことができるカード、ヒーロー・シグナル。おジャマの姿に身を包んでも万丈目は万丈目、そのデュエルの腕前を警戒してか守備表示でフェザーマンが呼び出される。

E・HERO フェザーマン 守1000

「ふっ……クツクツ、あーっはっはっはー！」

「な、なんだ？」

場にフェザーマンが出た瞬間いきなり笑い出した万丈目に、さすがの十代も困惑した表情を見せる。十代だけではなく会場中がざわめき百戦錬磨のお姉さんがつかの間言葉を失う中、ようやく笑いの発作が治まったらしい万丈目が着ぐるみから突き出た目の部分をびよんびよん揺らしながら十代を真っ直ぐ指差す。

「いいか、十代。今の方じ……おじゃ万丈目を、これまでの俺と同じだと思うな！ 貴様のここまでの行動は、何から何まで俺の想定範囲内ではない！」

「なんだって……？」

またいつもの大言壮語か、とも思ったが、本人の様子はその恰好以外いたって大真面目なままだ。指さしたままの手をデュエルディスプレイに置き、ようやくいつもの見慣れたふてぶてしい笑みを浮かべる。

「その証拠を見せてやろう。まずはアサルトワイバーンの効果により、モンスターの戦闘破壊に成功したこのカードをリリースすることで手札から別のドラゴン族1体を特殊召喚できる。出でよ、アームド・ドラゴン LV5！」

「あ、あーっと、おじゃ万丈目、バトルフェイズ中にモンスターを特殊召喚したーっ！ これならばあのアームド・ドラゴンはこのターンの間に、さらなる追加攻撃が可能となります！」

デュエルが進んだことでようやく先ほどの奇行のショックから立ち直ったのか、再び声を張り上げるお姉さん。その解説に合わせるかのように、アームド・ドラゴンが摩天楼の夜空に咆哮した。

アームド・ドラゴン LV5 攻2400

「そんなことしたって、フェザーマンは守備表示。俺にダメージは通らないぜ」

そう、十代は今、フェザーマンを守備表示で特殊召喚した。ただ万丈目のあの自信たっぷり目つきは、ただ単に追撃で壁モンスターをどかせるというだけでは説明がつかない気がする。まだ何か、ある。

「永続トラップ、最終突撃命令を発動！ このカードが存在する限り、全てのモンスターは攻撃表示を強制されることになる」

「うっ!?!」

E・HERO フェザーマン 守1000↓攻1000

「まだまだあー! 追撃のダブルトラップ、おジャマデュオを発動! このカードの効果により十代、お前のフィールドにおジャマトークンを2体プレゼントしてやろう。無論、最終突撃命令の効果で攻撃表示となるがな。さあ行け、雑魚ども!」

『どくもく』

気の抜ける声とともに、これまで見たことのない赤と青の、でもどこからどう見てもおジャマ3兄弟の仲間であろう2体のモンスターが十代の場に飛び出してフェザーマンの両脇に座り込む。

おジャマトークン (赤) 守1000↓攻0

おジャマトークン (青) 守1000↓攻0

「うわっ、なんだお前ら?」

『レッドです』

『ブルーです』

『2人合わせて……おジャマしまーす』

座ったまま十代の方に向き直り、申し訳程度に頭を下げる2体のおジャマ。そんな2体を尻目に、万丈目が残った最後の手札を叩きつけるようにして発動したのが見えた。

「そしてこれが、正真正銘最後の1枚だ。速攻魔法、竜の闘志!」

「あーっと、あのカードは! おじゃ万丈目、強烈なコンボを仕掛けてきました! たとえ立場はおジャマした側でも、デュエルには一切手を抜かない! それがプロデュエリスト、エド・フェニックスの教えなのか!?!」

「竜の、闘志?」

『ワンターンキル……ではないが、なかなかのオーバーキル狙いだな』  
やや興味を引かれたらしいチャクチャルさんの眩き。それに疑問符を投げかけるより前に、万丈目自身が今発動したカードの効果を意気揚々と説明し始めた。

「このカードは俺の場に存在するこのターンの間に特殊召喚されたドラゴン族モンスター1体を対象とし、そのモンスターの攻撃回数を発

動ターン中に特殊召喚された相手モンスターの数だけ増やすことができる。十代、この意味が分かるか？」

「フェザーマン、それにお前の出したおジャマトークンが2体……！」  
「そういうことだ。合計4回の連続攻撃を受けて、このおじや万丈目の前に沈むがいい！アームド・ドラゴン LV5でまずそっち側のおジャマトークンに攻撃、アームド・バスター！」  
『せっかくの出番なのにーっ!』

まずアームド・ドラゴンが攻撃の対象に選んだのは、赤い方のおジャマ。飛び上がらんばかりに驚き悲惨な叫びをあげるレッドの前に、その拳を防ぐように半透明の壁が張られた。

『あ、あれ?』

「トラップ発動、ドレインシールド!その最初の攻撃を無効にして、その攻撃力分だけ俺のライフを回復するぜ」

『た、助かったあゝ』

十代 LP3400↓5800

「見苦しいぞ、十代!アームド・ドラゴン、追撃のアームド・バスターだ!」

「ぐっ……!」

『結局こうなるのねーっ!』

今度こそアームド・ドラゴンの突撃を止めるものはなく、振り上げられた拳がレッドの脳天に叩き付けられる。これで残る攻撃は、あと3回。

アームド・ドラゴン LV5 攻2400↓おジャマトークン(赤)

攻0(破壊)

十代 LP5800↓3400

「この瞬間に補充部隊の効果で、俺が受けたダメージ10000ポイントにつき1枚カードをドロウするぜ。今受けたダメージは2400、だから2枚だ」

「2400?それだけでは済まさんぞ、十代」

「なに?」

含みのある言い方に十代が眉をひそめた瞬間、その足元で小規模な

爆発が起こる。

十代 LP3400↓3100

「な、なんだ?」

「言い忘れていたが、そのトークンは破壊された時に相手に300のダメージを与える。いくらカードを引いたところで、このターンのうちにライフを0にしてしまえば問題は無い!もう1体のおジャマトークンに攻撃しろ、アームド・ドラゴン!」

その声を聞いたアームド・ドラゴンが間髪入れずに今度は反対側の腕を振り上げ、そのまま無造作に反対側にいる青い方のトークンに振り下ろす。

『いやーんっ!!』

そんな断末魔が聞こえてきたが、お互いそれに構っている余裕はないらしい。十代も万丈目も互いの顔から目を逸らさず、次の行動への緊張感が否が応にも高まっていく。

アームド・ドラゴン LV5 攻2400↓おジャマトークン(青)

攻0(破壊)

十代 LP3100↓700↓400

「補充部隊の効果を再び発動!カードを2枚ドロウする!」

「だからどうした!さあ十代、泣こうがわめこうがこの一撃で全て終わりだ!アームド・ドラゴンでフェザーマンに最後の攻撃、アームド・バス……何!」

最後に残ったフェザーマンにも攻撃を食らわせるべく、アームド・ドラゴンが頭上で両腕を組む。おもむろにそれを振り下ろそうとしたところで、突然その動きが止まった。最後に残ったフェザーマンが、巨大な楯を両手で構えている。

「惜しかったな、万丈目。お前、すっげえ強くなったんだな。でも俺だって、そう簡単にはやられないぜ!」

「どうした、アームド・ドラゴン!なぜ攻撃しない!」

「トラップ発動、ヒーロー・ヘイロー。このカードは攻撃力1500以下の戦士族モンスターに対する装備カードとなり、装備モンスターに対して攻撃力1900以上の相手モンスターは攻撃できないぜ!」

「十代君、この1ターンで勝負がつくかというところを見事に耐えきったーっ！勝負は依然おじや万丈目が優勢とはいえ、これは目の離せない展開になってまいりました！」

「ふん、さすがは十代、と言っておこう。この俺のライバルの1人として、それぐらいのことはしてもらわないとな。アームド・ドラゴンがバトルで相手モンスターを破壊したことにより、このターンのエンドフェイズに更なる進化を遂げる！デツキより出でよ、LV7！」

アームド・ドラゴン LV7 攻2800

このターン好き放題に暴れまわったLV5の姿が光に包まれ、さらなる戦闘力を得た姿……LV7へと成長を遂げた。さつきまであれだけとどめを刺そうとしていたのが防がれたにもかかわらず、おじや万丈目の表情はどこか嬉しそうだ。悔しいという思いよりも、十代とのデュエルを楽しむ気持ちの方が大きいのだろう。そしてその気持ちは戦っている彼らだけではなく、この会場にいる観客にも伝染してその熱気を上げていく。

「頑張れーっ、おじや万丈目ー！」

「負けるな、十代！」

そんな声援がちらほらと飛びかう中、反撃を誘うように万丈目がターンを終える。十代の手札はドロローも合わせると5枚、まさにピンチの後にはチャンスあり、だ。

「俺のターン、融合を発動！手札のバブルマンとスパークマン、そして場のフェザーマンで3体融合するぜ。来い、E・HERO テンペスター！」

3体融合という重い素材を可能としたのも、先ほどライフをギリギリまで減らした見返りに得たドロローの賜物。フェザーマンの翼にスパークマンの戦闘スーツ、そしてバブルマンの銃と素材となった戦士たちの要素全てを併せ持つその姿は、まさにテンペスター嵐の名が示すごとくこのデュエルにおける万丈目優位の流れに風穴を開けるべく現れた大型ヒーローだ。

E・HERO テンペスター 攻2800

「攻撃力は互角、だがあのカードは……」

「バトルだー！テンペスターでアームド・ドラゴンに攻撃、カオス・テンペスト！」

翼を広げてビルの間を縦横無尽に飛び回るテンペスターが、右腕の銃を狙い定めて嵐のエネルギー弾を打ち放つ。その素早い動きに翻弄されつつもアームド・ドラゴンの放つ反撃の剛腕がテンペスターの胴体に着弾したのと、テンペスターの一撃が正確にその巨体の中心を捉えたのはほぼ同時だった。

E・HERO テンペスター 攻2800↓アームド・ドラゴンL  
V7 攻2800 (破壊)

「あーっと、これはどうしたことかーっ！2体のモンスターの攻撃力は互角、そしてスカイスクレイパーの効果は相打ちでは発動しない、にもかかわらず倒れたのはアームド・ドラゴンただ1体のみです！」  
「……だそうだぞ。種明かしをしてやったらどうだ、十代。何をしたかはわかってるんだ」

「じゃあ、そうさせてもらうぜ。俺は今のターン、テンペスターの効果を発動していたのさ。俺のフィールドにある補充部隊のカードを墓地に送り、テンペスター自身をその対象とする。これでテンペスターはもう戦闘破壊されなくなったのさ。これでターンエンドするぜ」

すでにライフが1000を切ったことにより実質置物と化していた補充部隊のカードを自分から墓地に送ることで、アームド・ドラゴンを一方的に撃破する。さすがに残りライフ400の状態で、それも最終突撃命令の効果で攻撃表示が強要されるこの局面で追撃用のモンスターを場に出すことは控えたらしくそのままターンを終えはしたが、今日も十代の天性のデュエルセンスはこんな表舞台のプレッシャーの下にさらされようと全く影響されていない。

だが万丈目もまた、これまでのサンダーとは一味違う。先ほどまでの優勢を一瞬で覆されてなお、その自信はいささかも揺らいでいない。それだけなら割といつも通りだが、今日の万丈目はあの逆転劇を味わってなお、いささかも自身の敗北する可能性を感じずに戦っている。エドのところに行ったのがなんで着ぐるみを着て帰ってくる羽目になったのかは知らないが、少なくともメンタルに関してはぐつと

強化されているようだ。

おじや万丈目 LP3600 手札：0

モンスター：なし

魔法・罨：最終突撃命令

十代 LP400 手札：2

モンスター：E・HERO テンペスター（攻）

魔法・罨：なし

場：摩天楼―スカイスクレイパー―

「俺のターン、ドロロー！魔法カード、マジック・プランター。俺のフィールドから永続トラップの最終突撃命令を墓地に送り、カードをさらに2枚ドロローする。さあ、おじや万丈目の底力を見せてやろう！墓地に存在するトラップ、おジャマデュオのさらなる効果を発動！このカードを除外し、デッキからカード名の異なるおジャマ2体を特殊召喚することができる。来い、雑魚兄弟！」

『『どーもどーもー』』

おジャマ・ブラック 守1000

おジャマ・グリーン 守1000

デッキから現れたのは見慣れたおジャマ3兄弟のうちの2人、突き出た腹のブラックに無駄にマッシュブな一つ目のグリーン。この2体が来たということは、まさかあの手札は。お姉さんもそれに気が付いたらしく、あえて何も言わずにマイク片手に次の動きを見守っている。

「おジャマ・イエローを守備表示で召喚し……さあお前ら、出番だ！」

『『りよ〜か〜い〜！』』

万丈目の掛け声におジャマ3兄弟が宙に舞い、互いの尻をくっつけるようにして輪っかを作るとそこから高速回転を始める。もはやあまりの回転の速さに3体それぞれの顔すら識別できなくなったところで、輪っか自体が1つの生物のように動きだした。テンペスターを囲むように移動すると、その中のテンペスターどころか周りの摩天楼まで崩壊を始めていく。

『ついに全国デビューだー！』



『俺達兄弟の絆の力!』

『たつぷり見せてあげるわよ〜ん!』

「魔法カード、おジャマ・デルタハリケーン!!おジャマ・イエロー、ブラック、グリーンの3体が場に存在するとき、相手フィールドのカード全てを破壊する!」

「おじや万丈目、これは凄い!逆転に次ぐ逆転、これにより十代君の場は一気に空きだーっ!」

戦闘破壊耐性を得たテンペスターといえど、効果破壊に対しては全くの無力。3体揃ったおジャマ達の不思議な力に、十代の場のカードがすべて吹き飛ばされていった。やがて自分たちの仕事の結果に満足げなおジャマ達がようやく回転をやめて着地し、万丈目の元に戻っていく……だがその途中で、ふとイエローがあることに気がついた。

『ねえ万丈目のアニキ、ちよつといい?』

「なんだいきなり、やかましい。今は本番中だぞ」

『もう、それはわかってるわよ。でもアニキ、もう手札が1枚もないじゃない?おいら達は次のターン、どうすればいいのさ』

その質問に万丈目はちよつと眉をひそめ、なんだか随分と久しぶりに見る悪人面をしてみせる。

「俺が知るか、そんなこと。せいぜい狙われるのが自分じゃないことを祈ってるんだな」

『「……」』

実にあっさりと、なんてことないように言い放たれた内容に、最初3兄弟がそれぞれ顔を見合わせる。それから数秒後、少しでも自分が他の2人の後ろに隠れることで次のターンをやり過ごせる確率を上げようとする醜い争いが盤上で始まった。……兄弟の絆の力、ねえ。

とはいえ、それはあくまで精霊の視認できる僕らだから見える世界での話。アカデミアのほとんどの観客も、レポーターのお姉さんも、自分たちが全国放送に兄弟喧嘩を流していることなど気づいてすらいないだろう。ちよつとソリッドビジョンが荒ぶってるな、程度の認識止まりのはずだ。

まあそれはさておき、イエローの指摘通り手札の無い万丈目にはこ

のターンでできる事は既にある。ターンプレイヤーは再び十代に移り、本人公認の奇跡を呼ぶドロローが行われる。

「俺のターンだな。魔法カード、ミラクル・フュージョンを発動！」

「十代君、ここにきてまたもや怒涛の引きの良さを見せる！ミラクル・フュージョンは通常の融合とは違い、ヒーロー限定となった代わりにその素材を墓地からも選ぶことができるようになります！」

さつきから、あのお姉さんの知識量が凄い。ただのレポーターかと思ったら、このデュエルで使われたほとんどのカード効果を把握している。逆に言うと、そのお姉さんでも咄嗟に効果の出てこなかったテンペスターって一体……いや、もはや何も言うまい。僕は好きだよ、あのデザイン。

そんなことを考えている一方、フィールドでは既に融合が始まっていた。墓地から融合素材として除外されるのは、フェザーマンとバーストレディ。使い手が十代となると、ここで登場するヒーローは「奴」しかありえない。僕にとつての霧の王と同じように、十代にとつての永久のマイフェイバリット。

「融合召喚、フレイム・ウイングマン！」

E・HERO フレイム・ウイングマン 攻2100

「ついに現れたか……」

「いや、まだだ！さらに魔法カード、融合回収フュージョン・リカバリーを発動。融合召喚に使われたスパークマンと融合を墓地から回収し、そのままこの融合を発動……手札のスパークマンと、場のフレイム・ウイングマンで融合召喚！全力で行くぜ、シャイニング・フレア・ウイングマン！」

十代のフェイバリットカード、フレイム・ウイングマンがスパークマンの光の力を受けてさらなる高みに登る。全身のほとんどを包みこむ丸みを帯びた純白の鎧はそれ自体がほのかに暖かい光を放ち、聖なる光を纏いフィールドに立つその姿はまさに聖戦士という形容がふさわしい。2度にわたる融合を経て呼び出されたこの白い戦士こそが、融合軸ヒーローの頂点とも呼べる存在だろう。

そしてその効果は素材となったフレイム・ウイングマンの力を受け継ぎつつ、より攻撃的なものへと進化を遂げている。

「シャイニング・フレア・ウイングマンの攻撃力は、墓地に存在するE・HERO1枚につき300ポイントアップする。俺の墓地に残るヒーローはバブルマン、テンペスター、フレイム・ウイングマン、スパークマンの4体、よって1200ポイントアップだ」

E・HERO シャイニング・フレア・ウイングマン 攻2500  
↓3700

「だが、俺の場のおジャマ3体はどれも守備表示で、しかもその攻撃力は0。いくらシャイニング・フレア・ウイングマンを呼び出そうと、俺にダメージは通らないはずだ」

そう、確かに万丈目の言葉は正しい。でもその正しさは、あくまで常人を基準とした場合の言葉でしかない。十代の引きの強さの前では、常識すらも脇にどいていく。

「魔法カード、HEROの遺産を発動。俺の墓地から素材モンスターが指定された融合ヒーローのテンペスターとフレイム・ウイングマンをエクストラデッキに戻し、カードを3枚ドロウするぜ。そして魔法カード、Hーヒートハートを発動！このターンの間シャイニング・フレア・ウイングマンその攻撃力を500ポイントアップし、さらに貫通能力を得る！」

「十代君、一切攻撃の手を緩めない果敢な攻めっぷりだ！貫通能力を得ての攻撃で、おじゃ万丈目のモンスターとライフを一気に削る作戦、これが、デュエルアカデミア代表の実力なのでしょうか！」

HEROの遺産により墓地のヒーローが減り、シャイニング・フレア・ウイングマンの輝きがやや落ちる。しかしその光を補うかのようには、燃え盛るHの文字がそのバックに堂々と現れた。

E・HERO シャイニング・フレア・ウイングマン 攻3700  
↓3100↓3600

「バトルだーじゃあ、えっと……おジャマ・ブラックに攻撃！シャイニング・シュート！」

『嫌だあーっ！』

E・HERO シャイニング・フレア・ウイングマン 攻3600  
↓おジャマ・ブラック 守1000 (破壊)

おじや万丈目 LP3600↓1000

なんだかものすごく切実な断末魔とともに、ブラックの体が爆散する。さすがの十代も、あそこまで明確に拒否されると若干やりにくそうだ……かと思っただが、全然そんなことはないらしい。やっぱ十代、ちよつとドライになつちやつてるな。

それがいいことか悪いことかは、僕にはよくわからない。もしかしたらそれが成長する、っていうことなのかもしれないけれど。

「またこれで逆転だな。カードをセットして、ターンエンドするぜ」

E・HERO シャイニング・フレア・ウイングマン 攻3600  
↓3100

おじや万丈目 LP1000 手札：0

モンスター：おジャマ・イエロー(守)

おジャマ・グリーン(守)

魔法・罫：なし

十代 LP400 手札：1

モンスター：E・HERO シャイニング・フレア・ウイングマン

(攻)

魔法・罫：1(伏せ)

「互いにライフは残りわずか、いよいよこのデュエルも終盤に差し掛かってまいりました！フィールドの状況だけで見るならば大型モンスターがいる十代君の方が有利ですが、おじや万丈目、このドローで奇跡を起こせるのか!？」

「俺のターン、ドロー！魔法カード、馬の骨の対価を発動！フィールドから効果モンスター以外のモンスターであるおジャマ・グリーンを墓地に送ることで、カードを2枚ドローさせてもらおうぞ」

『せっかく助かったのによ……』

あまりといえはあまりのこの扱いには本人も思うところあったらしく。ぶつくき言いながらグリーンが墓地に送られる。これで万丈目の手元には2枚の手札と、フィールドのおジャマ・イエローのみ。自分が最後まで生き残ったことにこっそりと安堵の息を吐くイエローだったが、次の瞬間その表情が凍りついた。そのまま万丈目のセ

リフを遮り、イエローにしては珍しく万丈目相手に食い下がっている。

「お、もう1枚引いたか。2枚目の馬の骨の対価を発動、おジャマ・イエローを……」

『ちよちよちよちよつと待つて万丈目のアニキ、そこはもつとこう、最後に残ったおいらが知恵と勇気を振り絞って兄弟の敵を取るとか、そういうカツコいいストーリーがあるもんじゃないの!?!』

「……なんだと?」

『だからもつとほらく、いい加減コストにするとかじゃなくつてさあ、たまにはおいらだつてアームド・ドラゴンのダンナやVWXYZのダンナみたいバリバリつと活躍したいのよ』

「お前は自分の底が知れた知恵や勇氣より先に、俺のデツキを絞るのを手伝え!おジャマ・イエローを墓地に送り、カードを2枚ドローする!」

『アニキのいけず、ケチンボ、鬼、悪魔、万丈目!』

「やかましい!それにこの手札なら、お前にはどうせまたすぐに働いてもらうことになる」

『へ?……アニキ、このカードつて!』

カードとしては墓地に送られたものの、イエローの精霊がふわふわと浮き上がつて万丈目の手札を覗き込む。その表情がぱあつと明るくなったところで、万丈目が満足げに笑った。

「そういうことだ。さあ待たせたな、十代。魔法カード、貪欲な壺を発動!墓地のおジャマ・イエロー、ブラック、グリーン、そしてアサルトワイバーンとアームド・ドラゴン LV5の5体をデツキに戻し、カードを2枚ドローする」

「おじや万丈目も怒濤のドローを見せ、なんと手札をわずか1枚の状態から4枚にまで回復させた!この勝負、まだまだどちらに勝利の女神が微笑むのか予想が付きません!」

まるで十代のような引きを見せつけ、手札を1ターンで爆発的に増やす万丈目。お姉さんも言っていたけどこのデュエル、もしかしたらもしかするかもしれない。そう考えているのは僕だけでは無いよう

で、会場中の空気までもが次第に変化してきた。

「フィールド魔法、おジャマ・カントリーを発動！カントリーは1ターンに1度、手札のおジャマカード1枚を捨てることで墓地のおジャマ1体を蘇生することができる」

「墓地のおジャマ？でも万丈目、もう3兄弟はデツキに……」

「甘いぞ、十代。甦れ、おジャマ・ブルー！」

『はいなー』

万丈目の呼びかけに応じておジャマの里に立ち並ぶ家の1軒の扉が開き、その中から青いおジャマが口紅を塗りながら登場する。

おジャマ・ブルー 守1000

「どうだ十代。これが俺の手に入れた、新たなるおジャマの力だ！」

「そんなカードいつの間に……いや、あの時か！」

「おじや万丈目、なんと4色目のおじやまを特殊召喚したーっ！あのカードは一体いつの間に墓地に送られたのか、後にVTRで解説を行いたいと思いますー！」

『魔力の泉だな。手札を捨てる余裕があつたのはそこしかない』

チャクチャルさんの解説に、ようやく僕も得心する。確かにあの時、万丈目は魔力の泉のデメリットでドロしたのち手札を1枚捨てていた。そんな手札コストが、こんな詰めタイミングになって生きてくるとは。

「この瞬間おジャマ・カントリーのさらなる効果と、捨てられたおじやマジックの効果が発動する。おじやマジックは手札かフィールドから墓地に送られた時イエロー、ブラック、グリーンの3体をデツキから手札に加え、カントリーは場におジャマモンスターいる限り全てのモンスターの攻守を逆転させる！」

「シャイニング・フレア・ウイングマン……！」

シャイニング・フレア・ウイングマンの素の守備力は2100あるうえ、攻撃力上昇効果は攻守が入れ替わろうと引き継がれる。とはいえ、ここで攻撃力がダウンするのは十代にとっても嬉しい話ではないだろう。しかも万丈目の手札に再びあの3体が集結した、ということ、この後の展開も容易に想像がつく。

おジャマ・ブルー 守1000↓0 攻0↓1000

E・HERO シャイニング・フレア・ウイングマン 攻3100

↓2700 守2100↓2500

「魔法カード、融合を発動！手札のおジャマ・イエロー、ブラック、グリーンで融合召喚だ！もう1度行って来い、お前たち！」

『ついにこの時が来たのね！おいらたちに任せて、万丈目のアニキ！』

『『おジャマ究極合体！』』』

白い体の大部分を占める巨大な顔に対してあまりにも貧弱な申し訳程度の体、そして胴体というよりもはや顔から直接伸びる手足。風呂敷のマントが風もないの着地の衝撃にたなびき、下半身と頭にかぶった赤い花柄パンツがきりりとカラーアクセントとして映える。

「出でよ、おジャマ・キング！」

『むんっ！』

おジャマ・キング 攻0↓3000 守3000↓0

「できました、おジャマ・キング！あの異様な風体のモンスターこそが、おじゃ万丈目の操る最後の切り札なのでしょうか！」

「おジャマ・キングもまた、カントリーの下で攻守が入れ替わる。バートルだ、十代！ゆけっ、おジャマ・キング！」

勢いよく膝を曲げて飛び上がり、キングの巨体が宙に舞う。手足をばたつかせて必死に飛距離を稼ぎ、どうにかシャイニング・フレア・ウイングマンの頭上にたどり着いた。巨大な口が重々しく開き、低い声が会場全体に響き渡る。

『フライング・ボディアターック！』

叫び終わると同時に体を前傾姿勢にし、重力に従ってそのまま頭のパンツから落下を始める。呆然としてその様子を見上げたまま動けないシャイニング・フレア・ウイングマンに変わり、十代が伏せカードを発動させる様子が見えた。

「トラップ発動、攻撃の無敵化！このカードの効果でシャイニング・フレア・ウイングマンは、このターン戦闘でも効果でも破壊されない！」  
「やはり防いだか、おジャマ・ブルーを守備表示で出しておいたのは正解だったな。だがそれも予想の範囲内だ、ダメージだけは受けてもら

うぞ」

おジャマ・キング 攻3000↓E・HERO シャイニング・フレア・ウイングマン 攻2700  
十代 LP400↓100

「十代君、健闘してはいますがもはやそのライフは風前の灯！果たしてもう1度奇跡は起きるのか、それともこのままおじや万丈目が勝利の栄光を手に入れるのでしょうか！」

攻撃の無敵化は使い切りのトラップ、これで十代にこれ以上身を守るすべはない。でも、これまでも十代はそんな状況から何度も奇跡の大逆転を成し遂げてきた。次のターンにまた逆転が成り立つのか、それとも万丈目がそれを耐えきるのか。いずれにせよ、次の十代のターンで全てが決まる。

「さあかかって来い、十代。カードをセットしてターンエンドだ」

万丈目からの誘いに一度目を閉じてからデッキに手をかけ、深呼吸する十代。沈黙の一瞬の後カットと目を見開き、勢いよくカードを引いた。

「俺のターン、ドロロー……魔法カード、Rーライトジャステイスを発動！このカードは発動時に俺のフィールドに存在するE・HEROの数だけ、場の魔法・罫を選んで破壊する。選べるカードは1枚……おジャマ・カントリーを破壊し、これによりすべてのモンスターの攻守は元の数値に戻る！」

「……でそんなカードを引いたか……！」

十代のラストドロローは、おジャマ・キングの攻撃力がシャイニング・フレア・ウイングマンのそれを上回っているという前提そのものを覆す魔法・罫破壊カード。頼みの綱だったカントリー消滅により、全てのモンスターの攻守が元々の数値へと入れ替わっていく。

おジャマ・キング 攻3000↓0 守0↓3000  
おジャマ・ブルー 守0↓1000 攻1000↓0  
E・HERO シャイニング・フレア・ウイングマン 攻2700  
↓3100 守2500↓2100

「これが最後のバトルだな。シャイニング・フレア・ウイングマンでお



「ジャマ・キングに攻撃、シャイニング・シュート！」

「確かにこれが最後のバトルだ十代、ただしお前にとつてのな。リバースカード……何!?おい、どういうことだ……?」

攻撃に合わせ、最後の伏せカードを使おうとする万丈目。だが突然、その動きが止まった。着ぐるみの耳の部分を押さえつけ、慌てた様子で何かを空に問いかける。恐らく、この距離だと観客やお姉さんにはあの声は聞こえていないだろう。現に隣のクロノス先生も、万丈目のおかしな様子には気が付いた風もない。ダークシングナーゆえの向上した身体能力の持ち主である僕だからこそ、辛うじて耳に入ってきたようなものだ。

結局、そのまま光り輝くヒーローの攻撃はおジャマ・キングに命中した。どこかスツキリしない物を残しながらも、勝負はついたのだ。

E・HERO シャイニング・フレア・ウイングマン 攻3100

↓おジャマ・キング 攻0 (破壊)

おじや万丈目 LP1000↓0

「あーっと、ついに決着！長きにわたる激闘を制したのはデュエルアカデミア本校代表、遊城十代君でした！会場では現在、このどちらが勝ってもおかしくなかった素晴らしいデュエルを魅せてくれた遊城十代君、そしてあと1歩届かなかったおじや万丈目の両者に盛大な拍手が響いています！注目の新人、おじや万丈目のこれからの成長に我々デュエルチャンネルとしても大いに期待しつつ、今回の中継フェイズはここでおしまいです！名残惜しいですが、来週もまたデュエルチャンネルでお会いいたしましょう！」

レポーターの人が、カメラに向かって締めの一言を述べる。その後ろで、十代が倒れた万丈目の方へ近寄っていくのが見える。万雷の拍手のせいでかき消され、恐らくマイクも拾えていないほどの小さな声ではあったが、なんとか十代が最後にかけて言葉を僕だけは聞き取ることができた。

「万丈目、今日のお前は強かったぜ。だけどメディアに注目されるた

めに最後にわざと負けるなんて、お前がエドから学んだことがそれだったら、正直がっかりだ」

やはり十代も、最後の万丈目の様子が引つ掛かったのだろう。それだけ言うとは何も返さず、ただ悔しそうにうつむくだけの万丈目の方を振り返りもせずに会場から出て行ってしまった。

だがその時の万丈目の表情が何となく気にかかった僕は、クロノス先生にあることを頼むことにした。訝しまれながらも了承を貰い、熱気冷めやらぬ会場を2人で後にする。すぐに目的の場所、コンピューター室にたどり着き、手近な1台を起動させて教員専用のページを開いてもらう。こればかりは僕1人ではどうしようもないので、クロノス先生の手が必要だったのだ。

「それにしてもシニョール清明、さっきのデュエルのデータが見たいだなんて、一体どういう風の吹き回しナノーネ。確かに教員用のホームには生徒たちの成績をつけるために、常にデュエルデータは送信されてきますーが……」

「あ、最初の方じゃなくて、ラストターンのあたりをお願いします。万丈目が最後に伏せていたカードのあたりを。どうしても、気になることがあったんですよ」

最後に万丈目が伏せていた、だけど使われなかったカード。十代はそれを、わざと負けるために発動しなかったのだと読んでいた。正直僕も同じ気持ちではあるけれど、それでも違うと心のどこかでは思っていた。それを裏付けてくれる、確たる証拠が見たかったのだ。昔はいざ知らず今の万丈目はそんなインチキするような奴じゃない、そう信じたかった。だが祈るような気持ちのなかで出てきたカードデータは、そんな思いを一瞬で吹き飛ばす現実を押し付けてきた。

「やややのや、これは一体どういうことナノーネ」  
「このカードは……」

僕もクロノス先生も、その結果に言葉を失う。画面に映っていたカードの名は、メタバース。発動時にデッキからフィールド魔法1枚を手札に加えるか直接発動することができる、フリーチェーンのトランプカード。

もし万丈目が最後のシャイニング・フレア・ウイングマンの攻撃宣言時にこのカードを使つてもう1度おジャマ・カントリーを発動させていれば、再び攻撃力の逆転が起きておジャマ・キングによる返り討ち、どころかそのダメージで万丈目の最後の逆転が成立していた可能性が高い。

カントリーが1枚しか入っていない可能性も一応あるとはいえそんなことはまずないだろうし、第一あの最後の言葉を聞く限りでは途中で発動させる気が満々だったはずだ。

にもかかわらず、万丈目は最後の最後で勝負を捨てた。

「万丈目……どうして……」

思わずつぶやくが、どこからも返事はない。それも当然だ。クロノス先生も、その疑問への答えは持ち合わせていないのだから。

ターン116 邪魔の化身とラスト・『D』（邪）

「……なにこれ」

僕の目の前には、大量の雑誌がある。どれも表紙にドヤ顔の万丈目……いや、着ぐるみ着用のおじや万丈目がどーんと様々なポーズを決めた状態で写り、大文字で特集タイトルが綴られている。『君の心におジャマします——大型新人、おじや万丈目の素顔に迫る』『デュエリスト対談「おじや万丈目」』『おジャマショック到来!? LVモンスター品薄相次ぐ』『ファン必読! おじや万丈目、今月おジャマするスケジュール一覧』『怒涛の新連載! 「3匹のおジャマ」』『万丈目グループ、株価爆上げ!? 超上流へと「おジャマします」』『下着販売メーカーも嬉しい悲鳴!? 花柄赤パンツ売上前年度300%増』などなど……なんかもう凄いね、うん。

雑誌の束をいったん脇にどけ、テレビをつけるとちょうどニュース番組がやっていた。

『視聴者の皆さんおはようございます、KCデュエリストニュースの時間がやってまいりました。本日のゲストは今話題の彼、おじや万丈目さんです!』

……知ってた。この万丈目バブルとでもいうべき現象はあの十代とのデュエルからかれこれ1週間経った今でも衰える兆しすら見えず、それどころか日が経つにつれますます加熱しているような節さえある。もちろん友人として、僕も素直に喜びたいところではあるのだが……どうにも、そんな気分にはなれないでいた。

もちろん、その原因はわかっている。あの十代とのデュエル、ラストターンの攻防。土壇場で勝負を捨てた万丈目のことを十代は見限ってしまったらしくあれ以来世間の流行にもどこ吹く風、万丈目のまの字も口にしたことはないが、僕はまだそこまで割り切れそうにはない。

とにかく、もういつペンでいいから彼に直接会いたい。万丈目は本当に、勝負を投げ出してウケを狙うほどの色物としてやっていくつもりなのだろうか。それならそれで、そんな生き方も彼の人生なんだから

う。その覚悟を決めたうえでその道に飛び込んだのなら、僕個人として何か言う権利はない。ただ、それでも最後に本人と会って話をしてみたかった。この話、どうもまだ何か裏がある気がする。

それとも僕がそう思いたいだけで、単に現実を見れていない事の表れなのか。だとしたら、やっぱりそれは悲しいものだ。

「遊野さーん、宅配が届いてますよー」

「はい？」

レッド寮のうつすい壁を通じて聞こえてきた声に思考を中断され、ドアを開けて声の主を確かめる。名前は覚えていないけれど、顔なじみのアカデミアの事務員さんだ。その手の中には、ごくシンプルな小包が一つ。

「……僕に？」

「今日の便で朝一に届きましたよ。じゃあ、この紙にサインお願いします」

「はあ、どうも……？」

僕に荷物なんて、誰だろう。親父……なわけないし、童実野町に友人なんて呼べる生易しい関係の奴はいない。

今でこそ海馬コーポレーションが睨みをきかせているおかげで少しはマシになったらしいが、僕が子供時代のあの町の治安と民度はそりやあもうひどかった。そんなところに母親を事故で亡くしたケーキ屋の息子だなんて差別点の塊みたいなガキが放りこまれたもんだから、常にターゲットを探していた連中からしてみればさぞかし鴨がネギ背負ってきたように見えただろう。親無しだの片親だのケーキ屋だのと散々にいじめられ馬鹿にされ、それでも生きるためにもがいているうちにめきめき鍛えられて、喧嘩ばかり強くなっていったものだ。あの時は特に意識していなかったけれど、毎日のように喧嘩騒ぎを起こしては素手だったりその辺の石ころや木の枝だったり、あげくの果てには工事現場の鉄パイプまでちよろまかしては数人単位で返り討ちになっていた僕も客観的にみるとかなりの不良だったのだろう。

ま、今となつてはもはや昔のことだ。それに、あの経験もそう悪いことばかりではない。ダークシングナーになつてから著しく底上げさ

れた身体能力は、あの時期に少しでも体力消費を抑えて効率的に逃げ回ったり隠れては不意打ちしたりといった体の動かし方を頭に叩き込んでおかなければ絶対に使いこなせなかったろう。

とと、つい昔のことを思い出してしまった。そう愉快的記憶でもないし、なるべく頭の片隅で放置しておきたかったのに。それはともかく、今はこの小包だ。

「箱の中身はなんじゃろな、つと。カード？」

『うわーん、清明のダンナ〜ッ！』

「!?」

『へ?……きやんっ!』

包みを解いた瞬間、見えてきたのはデュエルモンスターズのカードの裏面。何気なく拾い上げて表にすると、その中から黄色の顔が奇声とともに迫ってきた。咄嗟のことに受け止めてやる余裕もなくさつと身をかわすと、そのまま僕の顔の横をすり抜けて後ろの壁に頭から突っ込んでいく。ベシリ、という嫌な音がして、気を失ったらしいその見慣れた精霊……おジャマ・イエローが床に倒れた。

「イエロー!?なんでここに……」

手の中に残ったカードも、当然おジャマ・イエロー。精霊憑きということは、どう考えてもこれはもう万丈目のカードだろう。完全にのびてしまったイエローを持ち上げ、とりあえず机の上に寝かせておいた。今のうちに、十代も呼びに行こう。どうせ興味は持たないだろうけど、そのせいで隠し事をしたみたいになるぐらいなら最低限彼の耳にも入れておいた方がいいだろう。

「なあ清明、今聞き覚えのある声が……」

「あ、お帰りー」

と思っただけど、わざわざ僕が出向くまでもなかった。釣り竿片手にちやうど帰ってきたらしい十代が、ドアを開けてひよっこり顔を出す。

「おジャマ・イエローじゃないか。何してるんだ、こんなところまで？」

「そんなもんこつちが聞きたいんだけどね。ほーれ、起きろー」

『うーん……はっ!』

もう少し寝かせてやるつもりだったけれど、十代のほうから来たなら話は別だ。カタツムリで遊ぶ時の要領でちよいちよいと触角のような目をついてやると、すぐに跳ね起きて辺りを見回す。僕らの顔を認識すると、突然その両目からぶわっと涙が溢れ出した。

『よかった、会えてよかったわ〜！お願い、万丈目のアニキを助けてあげて！』

「助けて？万丈目を？」

「どういうことだ？」

『実は……』

涙ながらにおジャマ・イエローが語りだした話は、なかなか嫌な話だった。エドのために開発されたという最後のDカードとその紛失、十代と万丈目のデュエルに賭けられていたエドの進退、そしてその全てが現おじや万丈目のプロデューサー、マイクの手のひらの上で起きていたこと。

そういえばエドも、光の結社事件の時にはかなり手慣れた様子で盗聴対策を考えて動いていた。プロの世界つてのは、どうしてこう生々しく嫌な話ばかりついて回るのだろう。それを呑み込んでこそそのプロの表舞台、だなんて口で言うのは簡単だけど、なんともスツキリしない話だ。

『……って言うことなのよ。でもマイクってあの嫌な男、用心深くて全然隙がないものだから、アニキもそのカードがどこにあるか探すチャンスもないって……だからオイラがこうやって、小包に隠れてアカデミアまで来たってわけ。お願い、このおジャマ・イエローの顔に免じて、アニキをあのプロデューサーから解放してあげて！』

「事情は分かったけど、そんなこと言われてもな……大体、万丈目はこの島の島に居ないんだろ？俺らのところに来てどうしろってんだよ」

『それについては、え〜つと……あつたあつた、これよおこれ！』

十代のもつともな指摘に1瞬言葉に詰まるも、部屋の中を見回してあるものを見つけたイエローがすぐに気を取り直す。そのままふよふよと飛んで行った先には、さつき僕がのけておいた大量の雑誌の束。その中の1冊を指さして、もう片方の手でこっちこっちと手招き

する。その本の表紙にはおじや万丈目のアップ写真と、その特集記事のタイトル。

『ファン必読！おじや万丈目、今月おジャマするスケジュール一覧』  
……これ？」

『そう、これなのよん』

言われるがままにはらばらとページをめくると、イエローお目当てのページはすぐに見つかった。横から十代が覗きこんでくる気配を感じながら、予定表とやらの該当箇所を読み上げる。

「えつと……2日後にアカデミアで、我らがデュエルの一番星、おじや万丈目対地獄帰りのダークヒーロー、エド・フェニックスによる師弟対決？」

『アニキの話だと、この時にもそのプロデューサーはくつついてくるはずだから、この島についてから試合が終わるまでに何とかしてほし  
いって。だからお願い、ねっ？』

「そんなこと言われてもなあ……要は、試合中にこっさりその最後のDカードとやらを盗んで来いってことだろ？」

これだけ言われても、十代はあまり気が乗らないらしい。僕だって  
タイムマンや闇討ちならともかく、盗みになんて手を染めたことはない。  
い。

ないが、そういうことがいかにも得意そうな人は知っている。ただ  
あの人に頼むとなると、別の場所から物凄いきかめっ面が僕に向けら  
れるのは目に見えている。かといって他にあてもなく、気は進まない  
がため息を1つついてPDFを取り出す。番号を打ち込みながら、イ  
エローに釘を刺しておいた。

「イエロー。今から代引きで送り返したげるから、帰ったら万丈目に  
伝えといて。これ、いっこ貸しだからね」

……なんてことを言ってから、時は流れて2日後。再びやって来た  
テレビカメラや取材スタッフといった部外者でアカデミアが賑わう  
中、僕もまた本業に精を出してい……られたら、どれほど儲けが出た  
だろう。確かにおじや万丈目デビュー戦の時にも大々的な売り出し  
をやったばかりなので今回はスルーしてもよかったといえればよかつ



たのだが、だからといって何もせずに見過ごすのはあまりにもつたない。

残念ながら、今日は少し勝手が違うのだ。「当日需要はいいんですか？」という葵ちゃんの問題を振り切つてまで、本日休業の宣言をしたのには理由がある。

おジャマ・イエローから助けを求められて、はや2日。マイクなる悪徳プロデューサーについてはその道のプロに代わりに頼んでおき承諾も得たのだが、その時からなぜか全く彼女と連絡がつかない。最初の反応が結構乗り気だったからこの件は早いところ、それも万丈目たちが島に来るより先に片付くだろうと踏んでいただけに、正直この展開は想定外だ。とにかく万丈目とは本番前に話し合っておく必要があると思つたので、本業はすつぱり諦めたのだ。

「万丈目、万丈目」

「万丈目サンダー、だ。それよりその声、清明か？」

普段は更衣室の扉におじゃ万丈目様、と書かれた張り紙を張つただけの控え室の前に立ち、軽くノックして返事も聞かずに即ドアを開ける。放送開始までは、まだ少しある。まだ着ぐるみは着なくていいのか、いつもの黒服姿の万丈目がそこにいた。

僕の顔を認めて何か言おうとしたのか口を開きかけたのを手で制し、まず謝ろうと頭を下げる。

「万丈目、実は……」

「準、入るぞ」

まだ話し始めるかどうかのうちに扉が開き、どこかで見た覚えのある2人組の男が入ってくる。その顔を見て、万丈目が息を呑んだ。

「兄さん達、どうしてここに？」

「どうしたもこうしたもない。お前がついに政界、財界の我々に続きカードゲーム界にプロデビューしたと聞いてな、祝いの言葉を言いに来たんだ」

その言葉を聞いて、僕もようやく思い出した。この2人は万丈目長作と、同じく万丈目長次。僕らの知る万丈目の実の兄だ。財界、政界、カードゲーム界の頂点にこの3兄弟で君臨する事が目標のエリート

コンビで、2年前にはアカデミアの買収をかけて万丈目と兄弟対決をしたこともある。その時に顔を見ていたのだから、それは見覚えがあつて当然だ。

それにしてもわざわざ2人そろつてアカデミアまでそれを言いにくるあたり、元々の兄弟仲は悪くないのだろう。買収事件のせいか何となく嫌味なエリートのエイメージが先行していたけど、この万丈目の兄だけあつて案外根は悪人でもないのかもしれない。現に万丈目も、突然の登場の驚きが覚めてからはどこか嬉しそうだ。

「すまない、わざわざこんなところまで来てもらつて」

「なに、気にするな。それよりも、お前に渡したいものがあつてな。俺たちはデュエルモンスターズについては素人同然だが、万丈目グループの財力を結集してお前にぴつたりだと思われるカードを製造したんだ。もつと早くに渡してやるつもりだったんだが、思いのほか開発に時間がかかつてしまつてな。これならばそのデッキの形を崩さずに入れられるはずだ、ぜひ使ってくれ」

「兄さん……」

「じゃあな、準。俺たちはこの後も他の仕事があるからお前の雄姿を特等席で見ることができないが、お前のことは応援しているぞ」

「……ああ、ありがとう」

それだけ言うとやつて来たときと同じように、嵐のように2人の万丈目は去つていった。万丈目の手元に残された3枚のカードを大切そうに撫で、1枚ずつ丁寧にデッキとエクストラデッキに入れていく。その作業が終わつてから、改めて僕の方に向き直つた。

「清明、お前がこうして俺のところに来た理由はわかつている。俺もこの数日ずつと観察していたが、最後のDカードはマイク本人が常に肌身離さず持つているらしい。まったく、用心深いことだ」

そう吐き捨てる万丈目の表情には、兄の前では隠していた焦り、苛立ち、そういつたものが色濃く表れていた。だが、それも無理はないだろう。イエローから聞いた話によれば、マイク本人が直接現場に向いて指揮を執るのは今回がラストチャンス。これ以降彼は仕事を持ってきては裏方から指示を出すことに徹するそうだから、カメラの

前で直接罪を叩きつけられるのは今日が最後なのだ。

万丈目が深く息を吸い、僕の顔を真っ直ぐに見つめる。その目には、すでに硬い意志の力……誰が何と言おうとも聞こうとしないであろう、この男らしい負けん気の強さが宿っていた。

「よく聞いてくれ、清明。今日の試合で奴は俺とエドに途中まで本気で戦わせた後、適当なタイミングで八百長の指示を出すらしい。その時になったら合図を出すから、奴を取り押さえるのを手伝ってくれ」「そりゃ構わないけどさ。万丈目、でもそれって……」

今日の一戦は、全国放送の生中継だ。たとえ悪徳プロデューサーの持ってきた仕事でも、エドのネームバリューも相まって全国から注目の集まる大チャンスには違いない。そんな大事な時に、プロとしてはまだ駆け出しの万丈目がアクシデントを自分から起こしていくというのか。僕はまだプロでもなんでもないからともかくとして、仮にもプロがこれだけ大きな機会を棒に振るなんて……成功しても失敗しても、失うものが大きすぎる。

「皆まで言うな。カードを盗んだのが奴だとしても、元はといえばそれを止められなかったのはエドの付き人だった俺の不始末。本当ならば俺一人で片を付けたいところだが……いつも世話になってすまないな、清明」

それでもう話は終わりとはばかりに立ち上がり、ロッカーから例の着ぐるみを引っぱり出す。もう着替えるから出ていけ、ということだろう。ま、チャクチャルさん並みに貴重な万丈目のドレスシーンが見れただけでもよしとしますか。できれば万丈目なんかより女の子、特に夢想やレア度高そうな葵ちゃん辺りの方がよかったんだけどなあ。

……なんて考えているとは、まさか万丈目も思うまい。それにしても、こうやって聞くだけです穴だらけのプランではあるが、事前の仕掛けがだめになった以上この策に乗るしかない。1度だけ領いて、控え室を出て行った。

「お待たせしました全国各地のデュエリストの皆さん、デュエルチャ

ンネルのお時間です！今回私たちはなんと、つい先日も訪れた海馬コーポレーションのお膝元、デュエルアカデミア本校へとまたまたおジヤマしています！」

ついこの間も来たレポーターのお姉さんが、またしてもマイク片手にカメラに向かつて元気にしやべる。あの人も、まさかこんなすぐにまたここに来ることになるとは思わなかったろう。と、ここであの時と同じように、あざとく耳に手を当てて体を傾ける。

「……おやおや？おジヤマ？そうなんです！なんと今回デュエルを行うのは、つい先日この番組でデビュー戦を捉えたあの大型新人、おじや万丈目！対するは最近まさかの電撃引退を果たしたプロデュエリストにしておじや万丈目の師、貴公子エド・フェニックス！なんと彼はこの1戦に自らの復活を賭けているとのことですが、これは自らを追い込むことで師弟の情を切り捨て、本気のデュエルをするという決意の表れなのでしょう！そうだとすれば、おじや万丈目にとっては何と凄まじい試練となるでしょう！」

なるほど、エドの引退をそう絡めてきたか。感心しながら見守っていると、デュエル場の両端から今日の主役2人がゆっくりと歩いてきた。たった1人でやってくるエドに対し、後ろにいかにも小物そうなスーツ姿の男を控えさせる万丈目。恐らく、あれがプロデューサーのマイクとやらなんだろう。

「両者ともに気合は十分、一触即発の雰囲気は漂っております！もはや2人に言葉は無用、ということでしょうか！それでは私も、もはや語ることはありません！視聴者の皆さんとともに、このデュエルを最後まで見守っていきましょう！」

カメラの死角になる位置で、やや体より大きめな上着を羽織って帽子をかぶりマスクをつけた上に眼鏡までしているせいで表情どころか性別すら読めないのスタッフらしき人が自分の手首をこれ見よがしに叩くジェスチャーをする。そのまま片手を大きく上に挙げ、開いた指を1本ずつ折りたたんでいく。あれが、本番のカウントダウンがわりなのだろう。5……4……3……

「そこまで堕ちたか、万丈目……！」

神経を集中させていた僕だからかろうじて聞き取れた程度の小声で、エドが苛立ちを見せる。多分、八百長の存在がエドにも伝えられたのだろう。間違っても試合を断られないように、こんなギリギリになるまで伝えない。効果的かもしれないが、やり口がいちいち汚い。2……1……。

「デュエル！」

カウントダウンを終えたスタッフが、相変わらずカメラの死角を縫って足音を殺し後ろに引いていく。撮影の手伝いでもするのかと思ったら、万丈目陣営のすぐそばまで歩いていきそのまま観戦モードに入ってしまった。随分くつろいでいるけれど、撮影とかいいんだらうか。

そんな動きには誰も気づかず、ついに2人のデュエルが始まった。万丈目の言葉通りなら、少なくとも今はまだ2人とも本気で戦うはずだ。

「僕の先攻だ！魔法カード、デステニー・ドローを発動。手札のドレツドガイをセメタリーに送ることで、カードを2枚ドローする。モンスターをセット、さらにカードを2枚セットしてターンエンドだ」

エドにしては大人しい立ち上がりで、守りを固めるだけでターンが交代する。だが万丈目の着ぐるみに包まれた表情には、ひとかけらの油断もない。

「俺のターン、ドロー！魔法カード、ワン・フォー・ワンを発動！手札のモンスター1体をコストに、デツキからレベル1モンスターを特殊召喚する。来い、カオス・ネクロマンサー！」

「あーっと、おじゃ万丈目、またしてもデツキを変更したのか？カオス・ネクロマンサー、あれは墓地のモンスターの数により攻守を変動させるモンスターです！ですが今のおじゃ万丈目の墓地には、たった今コストとして墓地に送った1体しかモンスターが存在しないぞ！」

カオス・ネクロマンサー 攻0↓300

「カオス・ネクロマンサー……」

確かに、レポーターのお姉さんに見覚えはないだろう。あの時万丈目はただのいち生徒だったのだから、あるわけがない。だけど、この

学園にいる僕らは知っている。あれは万丈目がかつて1度だけ使用した縛りデッキ、【攻撃力0】において逆転の切り札となったカードだ。

あれ以来使ってこなかったあのカードをここでデッキに入れてきたということは、その意味するところは1つ。万丈目はこの1戦、自分の持ちうるすべての戦術を使って実力でエドに勝とうとしている。

……負けるな、万丈目。エドにだけじゃない、この決してきれいとだけじゃないプロデュエリストの世界に、それを象徴するあのマイクなんかに、負けるな、万丈目。

「カオス・ネクロマンサーをリリリースして、アドバンス召喚だ。来い、アームド・ドラゴン LV5!」

「出ました、おじゃ万丈目の切り込み隊長!アームド・ドラゴンの咆哮が、再びこのアカデミアに轟いたあつ!」

レポーターお姉さんの言葉通り、アームド・ドラゴンが吠える。だがその体が着地するかしないかのうちに、いきなり光に包まれた。

アームド・ドラゴン LV5 攻2400

「これだけではないぞ、エド。魔法カード、レベルアップ!このカードの効果により、本来の条件を無視してLVモンスターのアームド・ドラゴンは進化する!」

アームド・ドラゴン LV7 攻2800

「おじゃ万丈目、いきなり最上級モンスターを特殊召喚しました!レベルアップ!を用いての奇襲戦法、まさしくLVモンスターの強みを最大限に生かしての上級戦術です!」

「攻撃力2800、か」

「バトルだ、アームド・ドラゴン。セットモンスターを粉碎しろ、アームド・バニッシャー!」

わずか1ターンで現れたLV7が、剛腕をエドの眼前に叩き付ける。1瞬だけレイピアらしき武器を手にした仮面の人型モンスターが見えた気がしたが、すぐにその姿もかき消えた。

アームド・ドラゴン LV7 攻2800↓???  
守700 (破壊)

「この瞬間、バトルで破壊されセメタリーに送られた幻影の魔術士の

エフェクト発動！デッキから攻撃力1000以下のヒーロー1体を、  
守備表示で特殊召喚する！カモン、デイフェンドガイ！」

アームド・ドラゴンに張り合うかのように、煉瓦の体を持つ巨漢の  
デイーヒーローがあまりの重さに砂埃を巻き上げて着地する。片膝  
立ちになるその姿はまさに鉄壁の盾で、いかなる攻撃も通さないとの  
気概が強く伝わってくる。そして実際その守備力は、レベル4の下級  
モンスターとしては高いを通り越してもはや異常の域だ。

デステニーヒーロー  
D—HERO デイフェンドガイ 守2700

「そのモンスターを起点に守りを固めるつもりだろうが、甘いぞエド。  
メイン2に移行してアームド・ドラゴンの効果を発動！手札のモン  
スター1体を捨てることで、そのカードの攻撃力以下の攻撃力を持つ相  
手モンスター全てを破壊する、ジェノサイド・カッター！」

「おじや万丈目の捨てたあのカードは……攻撃力1000、黒蠍—茨  
のミーン！一方エドの繰り出したデイフェンドガイは守備力こそ2  
700を誇りますが、攻撃力はわずかに100！これはおじや万  
丈目、先の先を見越しての容赦ない追撃だーっ！」

アームド・ドラゴンが腕を振り、三日月形をした光のカッターを連  
射する。顔色一つ変えないエドをよそにデイフェンドガイめがけて  
まっすぐ飛んで行ったそれは、しかしその巨体に到達する寸前で見え  
ない壁に阻まれたかのように明後日の方向へ向きを曲げる。

万丈目の舌打ちが聞こえた。エドの場で、1枚のカードが表になっ  
ている。

「だがアームド・ドラゴンのエフェクトには、致命的な弱点がある。そ  
れは裏側守備表示のモンスターに対し、その効果は何の意味もないと  
いうことだ。速攻魔法、皆既日触の書を発動！全フィールドのモン  
スターを裏側守備表示とするこの効果なら、アームド・ドラゴンも空振  
りだな」

「なんとエド・フェニックス、アームド・ドラゴンの効果の裏を付いた  
！おじや万丈目、これでは完全にコストの払い損だ！これこそが新人  
のおじや万丈目と、プロとしての経歴も長いエド・フェニックスとの  
実戦経験の差だというのでしょうか!？」

いや、一概にそうとも言いきれない。確かにデIFフェンドガイの破壊こそ失敗はしたが、見方を飼えれば伏せカードを使わせたともいえるし、アームド・ドラゴンが低い守備力を晒してしまうのともかく手札コストの損失に関してはそこまで痛手でもない。ただ手札を無駄に捨てただけならともかく、皆既日蝕の書には強力な性能と引き換えにそれなりのデメリットもあるからだ。

「逃がしたか。ならばカードを1枚伏せ、これでターンエンドだ。そしてこのターンのエンドフェイズを迎えたことで……」

「……皆既日蝕の書のもう1つの能力により、お前のアームド・ドラゴンはリバースされる。そしてその数1体につき1枚、お前はデッキからドロウすることが許される。だが、ただでというわけにはいかないな。永続トラップ、便乗を発動！このカードは、相手プレイヤーがカード効果によるドロウを行った時にのみ発動できる」

万丈目の言葉の後を継ぐように、説明の後半をエドが行う。だけど、便乗か。あのカードは確か、これ以降万丈目がカード効果によるドロウを行うたびにエドもまたカードを2枚引くようになるカードだったはずだ。恐らく、本来は表側守備表示だと相手にドロウさせるデメリットの発生するデIFフェンドガイとのコンボで使う予定だったのだろう。万丈目の予想外の猛攻に、このターン中に便乗を発動するためには皆既日蝕の書を切らざるを得なかったというところか。

万丈目も同じ結論に至ったらしく、少し嫌そうな顔こそしたもののすぐに気を取り直す。

??? ↓アームド・ドラゴン LV7 守1000

「便乗……まあいいだろう、この1枚は引かせてもらおうぞ」

「このわずか往復1ターンの間に、目まぐるしく戦況は変化しております！しかしアームド・ドラゴン、その守備力はわずか1000！これはおじや万丈目にとって、かなりの痛手と言えるでしょう！」

おじや万丈目 LP4000 手札：1

モンスター：アームド・ドラゴン LV7 (守)

魔法・罫：1 (伏せ)

エド LP4000 手札：2



モンスター：??? (セット・ディフェンドガイ)

魔法・罨：便乗

「僕のターンだ。魔法カード、カップ・オブ・エースを発動。このカードは発動時に正位置か逆位置かをランダムに決定し、正位置なら僕が、逆位置ならお前が2枚ドロウする。さあ万丈目、この回転を止めてみる！」

「……ストップだ」

かつて斎王も愛用していたドロウソース、カップ・オブ・エース。あの時は斎王自身の能力も合わせることで実質3枚積める強欲な壺となっていたが、今回はその恩恵もなく、真の意味でのギャンブルカードになっている。エドの頭上で回転するカードが、万丈目の声によりゆっくりと停止した。

「……あーっと、おじや万丈目、逆位置を引き当てた！さすがの運の強さ、やはりこれが持っている男、おじや万丈目の実力なのでしょう！」

「当然だ。エド、2枚のカードを引かせてもらおうぞ」

「構わないさ。ただしこの瞬間便乗の効果により、僕もカードを2枚ドロウする。さらにもう1枚、2枚目のカップ・オブ・エースだ」

「……ストップだ」

再びエドの頭上で回転するカードに、万丈目がストップをかける。だが万丈目の強運も2度は続かなかつたらしく、今度は先ほどと真逆の位置で停止した。

「残念だったな、これにより今度は僕だけがカードを2枚引く。デステニー・ドロウを発動。手札からドリルガイをセメタリーに送り、さらにカードを2枚ドロウ。ディフェンドガイを反転召喚し、ヴィジョンヒーローV・HERO ヴァイオンを召喚！そしてヴァイオンは召喚に成功した時、デッキからヒーロー1体をセメタリーに送ることができる。行け、ダイハードガイ！」

??? ↓ D—HERO ディフェンドガイ 攻100

V・HERO ヴァイオン 攻1000

便乗とカップ・オブ・エースのコンボにより、回転がどちら向きに

止まろうと必ず2枚のドロローをするという結果を導き出したエド。その潤沢になった手札から召喚されたのは、なんとEでもDでもない新たな種別のヒーロー、ヴァイオン。まさかヒーローつながりということ以外にシナジীর無いカードが入るわけもないし、恐ろしいことにディーヒーローは今なおエドと共に進化を続けているらしい。となると、次に何が出てくるのかはもはや本人以外の誰にも予想がつかない。

そして今回エドのとった戦術は、新たに手に入れた力の解放だった。

「万丈目、まさかお前がこのカードの初陣を飾る相手になるとはな。ヴァイオンのセカンドエフェクトによりセメタリーのダイハードガイを除外することでデッキから融合を手札に加え、そのまま発動する。場のディーヒーロー、ディフェンドガイと闇属性モンスター、ヴァイオンの1体を素材として融合召喚！鉄壁の意思もつ英雄よ、運命すらも幻惑する英雄よ。地獄の底にて結集し、仇なす者に致命を与えよ！カモン、ディーヒーロー、デッドリーガイ！」

「エド・フェニックス、なんとここで融合を使用！これまでのE・HEROから現在のD・HEROにデッキを変更して以降、初となる融合召喚ですっ！一体いかなるモンスターが現れるというのでしょうか！」

ディフェンドガイとヴァイオンが飛び上がって空中で混ざり合い、以前見たディストピアガイともまた一味違う第2の融合ディーヒーローとなる。スマートではあるが無駄なく筋肉のついたしなやかな身体が青く見えるのは、そんな色のスーツを着ているからではない。人型こそとってはいるが、明らかに人外であることを示す濃い藍色の肌には骨とも金属ともつかない材質の無数の棘が静かに光り、その両腕の先にある5本の指の先からは、血のように紅い捕食者の爪が伸びている。肌の色と同じ、暗い藍色のマントに全身を包んだ中でひときわ目立つ、どこか泣いているようにも見える醜悪な顔の眼の奥で、静かな知性を湛えた眼光が瞬いた。

D・HERO デッドリーガイ 攻2000

「デッドリーガイ……？」

「まあそう慌てるな、すぐにこいつのエフェクトも見せてやるさ。だがその前に魔法カード、死者蘇生を発動。セメタリーに眠るドリルガイを攻撃表示で復活させる」

デッドリーガイの横に、以前アモン戦でも見せた全身からドリルをこれでもかと生やす新ヒーロー。確かあのカードには場に出た時に手札から下級ディーヒーローを特殊召喚する効果もあつたはずだが、今回はその効果を使わないようだ。

D—HERO ドリルガイ 攻1600

「さて、待たせたな。デッドリーガイのエフェクトを使わせてもらう。互いのターンに1度ずつ手札を1枚捨てることで、デッキからディーヒーローをセメタリーに送る。その後僕の場のディーヒーローは、このターンの終了時までセメタリーに眠るディーヒーロー1体につき200ポイントの攻撃力を得る！」

デッドリーガイが片腕を宙に掲げると、その掌を中心に紫色の人魂が1つ、また1つと浮かび上がる。その数は合計4つ……仮にあの人魂1つが墓地のディーヒーロー1体を表しているのだとすれば、先ほど捨てた手札コストも何らかのディーヒーローなのだろう。

D—HERO ドリルガイ 攻1600↓2400

D—HERO デッドリーガイ 攻2000↓2800

「覚悟しろ万丈目、ドリルガイでアームド・ドラゴンを攻撃だ。そしてドリルガイは守備表示モンスターを攻撃するとき、貫通ダメージを与える」

「おのれ……！」

D—HERO ドリルガイ 攻2400↓アームド・ドラゴン L

V7 守1000 (破壊)

おじや万丈目 LP4000↓2600

「おじや万丈目、これは手痛いダメージですっ！このままエド・フェニックス、わずか1ターンで押し切ってこのデュエルを制するの?!」

「ふざけるな、そう簡単にやらせはせん。リバーストラップ発動、ダ

メージ・コンデンサー！手札1枚を捨てることで、今俺の受けた戦闘ダメージ以下の攻撃力を持つモンスター1体をデッキから特殊召喚する。来い、破面竜！」  
ネイキッド・ドラゴン

墓地から万丈目を守るように立ちふさがったのは、万丈目の愛用するドラゴン族専用リクルーターの仮面竜……ではなく、よく似てはいるが別物の竜。まるで仮面竜の仮面が破れたようなその顔の口元からは、呼吸するたびにひゅうひゅうと小さな炎が吐き出されている。

破面竜 攻1400

「攻撃表示……？」

「そうだ。そして今捨てられたカード、おじやマジックの効果によりデッキからおじやマ・イエロー、ブラック、グリーンを1枚ずつ手札に加える」

訝しむエドに対し口の端を釣り上げて笑い、手札コストの損失をチャラにする3枚サーチを行う万丈目。その様子に最初にピンと来たのは、意外にもレポーターのお姉さんだった。

「おじや万丈目、デッドリーガイに攻撃力では遥かに劣る破面竜を、なんと攻撃表示で繰り出した！これは戦闘破壊された場合に発動できるリクルート効果を発動するため、ダメージ覚悟でエドの攻撃を誘っているというのでしょうか!?もしそうだとすれば、なんとという捨て身の戦法なのでしょう！さあどうするエド・フェニックス、ここであえてこの誘いに乗って戦闘を続けるのか、それともここは引くのでしょうか!？」

多分あのお姉さんに悪気はないんだろうけど、あんな言い方されたらあのエドが引くわけがない。案の定、罠と知りつつ万丈目の望みどおりに、デッドリーガイが爪を振りかざして飛びかかる。

「いいだろう、万丈目。何を企んでいるかは知らないが、その下手な誘いにあえて乗ってやろう。デッドリーガイ、破面竜に攻撃しろ！」

D—HERO デッドリーガイ 攻2600↓破面竜 攻1400

0 (破壊)

おじや万丈目 LP2600↓1400

「ぐっ……この瞬間、破面竜のモンスター効果発動！このカードが戦

闖破壊され墓地に送られたことで、デツキから守備力1500以下の幻竜族モンスター1体を特殊召喚する。俺が呼び出すのは守備力1000、メタファイズ・アームド・ドラゴン！」

デッドリーガイが素手で破面竜の体を深々と切り裂いた刹那、白色の輝きが弾け飛ぶ。その光の中心で先ほどドリルガイの攻撃により傷つき倒れたアームド・ドラゴンが、ドラゴン族という枷から解放されて更なる高みへと幻界突破を成し遂げる。

メタファイズ・アームド・ドラゴン 攻2800

「おじや万丈目、大逆転の最上級モンスターです！これはエド・フェニックス、手札に融合1枚しかカードの無い現状ではやや厳しい相手か!?!しかしデッドリーガイは先ほどのエドの言葉通りならば相手ターンにも効果を使えるモンスター、まだ結果はわかりません！」

デッドリーガイとメタファイズ・アームド・ドラゴンを間に挟み、エドと万丈目が睨みあう。つかの間の拮抗状態を打ち破り、再びエドが動く。

「僕の手札はこれで2枚。これをそのまま伏せ、ターンエンドだ」

「エド・フェニックス、なんと自分から手札をすべて伏せた!?!デッドリーガイの効果は手札コストがないと使えませんが、このままではおじや万丈目のメタファイズ・アームド・ドラゴンに攻撃力で敵いませんが……?！」

お姉さんの疑問は、僕ら全員の頭に浮かんだことでもあった。デッドリーガイは、墓地の仲間の数に応じてフィールドにいる仲間の攻撃力の底上げを行う。なのにここでその効果を使うための手札を消してしまえば、素の攻撃力だけではメタファイズの攻撃力に追いつけない。いくら伏せカードが2枚あるとはいえ、発動前に除去されるリスクも考えればその両方を伏せることが良手とは思えない。

だがターンを譲ったエドの表情を見て、すぐにその狙いが分かった。エド・フェニックスという男には、第一印象だけならクールに見えるもののなかなかどうして熱くなりやすい一面がある。恐らくあれは、先ほどの万丈目に対する意趣返しのようなものだろう。さあ攻撃力を下げてやったぞ、攻撃できるものならやってみる。そう挑発し

返しているのだ。

そして万丈目も、それがわからないほど鈍くはない。ないが、そこで攻撃しないという選択肢もまた、万丈目にはないだろう。ターンが移り、新たなカードを引く。それを見て少し意外そうな顔になるも、すぐさま表情を引き締めそれを発動する。

「ありがとう、兄さん……速攻魔法、おジャマツチングを発動！」

「おジャマツチングだと……？」

「一体なんでしょう、あのカードは……？私もこのレポーターの仕事を始めから数年経ちますが、あれは見たことのないカードです！これは、ますます目が離せない展開になってまいりました！」

おジャマツチング、僕も見なかったカードだ。プロのエドやレポーターですらその存在を知らないということは、あれがさつき万丈目兄から貰っていた3枚のカードの1つということだろう。

「おジャマツチングは手札かフィールドのおジャマカード1枚を墓地に送り、デッキから同名カード以外のおジャマ1体とアームド・ドラゴン1体をデッキか墓地から手札に加え、その後そのうち1体を通常召喚することが可能となる。俺が捨てるカードとして選ぶのは、おジャマツスルだ。出てこい、おジャマ・ブルー！」

『はいな〜』

おジャマ・ブルー 守1000

「さらに、俺の墓地に存在する闇属性モンスターは地獄戦士<sup>ヘル・ソルジャー</sup>、カオス・ネクロマンサー、黒蠍―茨のミーネの3体のみ。最高のマツチメイクを見せてやろう、エド。この条件が整ったことにより、手札に加えたダーク・アームド・ドラゴンは無条件で特殊召喚できる！」

ダーク・アームド・ドラゴン 攻2800

メタファイズ化し純白になった片割れとは真逆の進化を遂げた、闇に染まる漆黒のアームド・ドラゴン。これで万丈目のフィールドにはおジャマ・ブルーを中心に、白黒2体のアームド・ドラゴンが並び立つ。そして、ダーク・アームドの効果の恐ろしさは、僕もよく知っている。

「なんとということでしょう！おじや万丈目、先ほどの敗北寸前だった

状況をひっくり返し、2体もの最上級モンスターを召喚権すら使わずに並べてみせました！恐らく地獄戦士は最初のターン、ワン・フォー・ワンのコストで墓地に送ったものと思われれます！」

「ダーク・アームドの効果を発動。墓地の闇属性モンスター1体を除外するごとに場のカード1枚を破壊する、ダーク・ジエノサイド・カッター！地獄戦士を除外し左の、そしてカオス・ネクロマンサーを除外して右の伏せカードをそれぞれ破壊し、最後に茨のミーネを除外してデッドリーガイを破壊する！」

「ならば2枚のトラップ発動、そのどちらも強欲な瓶。そして自身への破壊効果にチェインして、デッドリーガイのエフェクトを発動！強欲な瓶2枚分によりカードを2枚ドロウし、この増えた手札のうち1枚を捨ててデッキのデューヒーローをセメタリーに。さあ、この2枚の効果は通させてもらおうか」

D—HERO ドリルガイ 攻1600↓2600

モンスターを重点的に狙っていれば理論的にはこのターンで勝負を決め切る事も十分狙えた盤面だったが、さすがに伏せカードを放置するリスクの方が大きいと判断したようだ。3発の闇のカッターが空を裂き、ほぼ同時に着弾して3枚のカードを破壊する。しかし結論から言えば伏せは2枚とも完全なブラフ、結果論とはいえこれは痛い。

「バトルだ、エド。メタファイズ・アームド・ドラゴン、ドリルガイに攻撃しろ！」

純白の剛腕が光の軌跡を描きながら振り下ろされ、デッドリーガイの死に際のあがきで大幅に強化されているとはいえ元々のステータスが下級モンスター止まりのドリルガイを上から叩き潰す。まずは、1撃！

メタファイズ・アームド・ドラゴン 攻2800↓D—HERO

ドリルガイ 攻2600

エド LP4000↓3800

「通ったーっ！エド・フェニックス、この師弟デュエルにおいて初めてそのライフに傷が付きました！しかもまだおじや万丈目のフィール

ドには、その攻撃命令を待つダーク・アームド・ドラゴンが控えてお  
ります！」

「続けて攻撃だ、ダーク・アームド！」

待ってましたとばかりに漆黒の剛腕が天を指し、唸りをつけて叩き  
下ろされる。これで、2撃……！

ダーク・アームド・ドラゴン 攻2800↓エド（直接攻撃）

エド LP3800↓1000

「おじゃ万丈目、ダブル・アームド・ドラゴンによる怒りの反撃です！  
エド・フェニックス、いまだその闘志は衰えてはいませんが、2人の  
ライフポイントはこれで逆転いたしました！」

「カードを1枚伏せる。さあ、どう……どうん？」

ここで何か言おうとした万丈目が急に訝しげな顔になり、言葉を途  
中で切る。それと同時にエドも表情が一変し、露骨に不愉快そうなそ  
ぶりを見せる。まさか、そう思ったところでほんのわずかに客席の方  
を向いた万丈目と目が合い、そこで予感が確信に変わる。



ターン117 邪魔の化身とラスト・『D』（魔）

……なるほど、このタイミングでか。確かに今ここで八百長の指示を出せば、今の逆転で勝負の流れに乗った万丈目がそのまま押し切れた風に見えなくもないだろう。だけど、その指示が出たのなら打ち合わせ通り僕の出番だ。観客席の高さは一番低い場所で精々10メートルもないぐらい、余裕で飛び降りられる。

『マスター、その前にあれを見てみるといい』  
「へ？」

手すりに手をかけて身を乗り出そうとしたところで、チャクチャルさんが何かを見つけたようだ。あれ、とやらの指す方に目を向けると、ついさつき放送前のカウントダウンをしていたスタッフがじわじわと万丈目陣営に近づいていくところだった。

それにしてもあの人、確かにそこにいるのになぜか視線が滑るといふか、眼には見えているのに存在感が極端に感じられないというか、とにかくなにかがおかしい。僕だって、チャクチャルさんが教えてくれなければあの人があることに気づきもしなかつただろう。

『ただの人間に、少なくともテレビ屋にできる動きではないな。足音どころか気配まで完璧に断っている、相当の修練を積まなければ無理な芸当だ』

「まさか……」

『まあ、そういうことだろうな。何を考えているんだか』

話し込んでいるうちにスタッフ……いや、「彼女」はマイクの真後ろまで回り込み、ここで初めて僕の視線に気が付いたかのように小さく手を振ってきた。だから僕も小さく頷いて息を吸い、きつぱりと叫ぶ。

「明菜さん、今です！ やつちやつてください！」

「はい清明ちゃん、まっかせといてー」

そこからの行動は、とにかく素早い一言だった。それまで着ていた撮影スタッフの衣装を脱ぎ捨てて私服姿に戻った明菜さんの両手にはずつと隠し持っていたらしい丈夫そうなロープが握られており、

それを使つて恐らく自分に何が起きたのか理解する暇もなかったであらうマイクをすぐさま後ろ手に縛りあげる。「姉上えええ!?!」とかいう叫び声が客席のどこかで小さく聞こえた気もするが、たぶん気のせいだ。きつと気のせいだ。絶対、何があつても、それは気のせいだ。……いいじゃない、今ぐらい夢見たつて。あ、駄目だ。葵ちゃんこつち来た。

「い、一体何の騒ぎだこれは!?!」

「ごめんねおじさん、これもお仕事だからね。清明ちゃん、あつたよー!」

ものすごい剣幕で僕の場所に詰めかけてくる葵ちゃんを尻目に、完全にマイクの動きを封じた明菜さんがサツと手を振る。ただそれだけで、もうその中には手品師のように一枚のデュエルモンスターのカードが握られていた。

「ありがとうございます、それじゃあ……よつと、失礼」

捕まる前にさっさと逃げようと手すりを乗り越えて、ちょうどその真下を走っていた警備員の上に飛び降りる。多分何が起きたかもわからなかつたであろう彼にクツション代わりになつてもらい、そのまま気を失つたのを確認して立ち上がる。そのあたりでただ茫然としていたレポーターのお姉さんがようやく我に返り、カメラマンに合図を送つて実況を再開する。

「こ、これは前代未聞の事態です! デュエルを中断して突然現れた2人の乱入者、彼らはいったい何者だというのでしょうか!?! そしてその目的は!?! どうやら、何か一枚のカードを持っているようですが……?」

「明菜さん、それを……えつと万丈目、これどうすりやいいの?」

「……最後まで締まらん奴だな、お前は。そのVIP席に千里眼グループの会長がいるから、まずはその人に確認してもらえ」

「だって、明菜さん」

「はいはい。会長さん、このカードでいいのかしら?」

明菜さんが表向きにかざしたカードは、エドのD—HERO特有のカード名部分が青い文字で印刷された特別仕様で……なんだろうあ

れ、融合モンスター？少なくとも、かなりレベルが高いのは見て取れる。

「それは間違いなく、紛失していた最後のDカードだ。マイク、なぜ君がそのカードを持っているのかね？」

「そ、それは……」

「言いたくないなら僕が言おうか。アンタがカードを盗み出すなんて卑怯な手を使ったせいで、エドは引退に追い込まれたんだ。違う？」

無言で唇をかみしめ、下を向くマイク。その沈黙が、十分に肯定の意思を表していた。

「なるほど……エド、理由が何であれこうしてカードが見つかった以上、君の引退する理由はもはやない。そのカードを使いこれからもプロデュエリストとして、よりいっそうの活躍を期待しよう。その君、すまないがそのカードはエドに渡してやってくれ」

「はい、どうぞ」

「会長……」

明菜さんが手渡したカードをエドが受け取り、それをエクストラデッキに入れる。これで一件落着、といけば文句なかったのだが、まだ何かひと悶着あるらしい。絶望した様子で縛られていたマイクが暗い目になって突如立ち上がり、止める間もなく大声でわめき散らす。

「き、聞けえ！確かに俺があのカードを盗んだ、だがそれなら、その万丈目はどうだ!? 奴は俺と組んでイカサマ試合をした、そうだろう？ つまりと奴は同罪、なあ万丈目え！」

「な……なんと、これは衝撃の告白です！エド・フェニックス引退の真相は1枚のカードの盗難であり、その犯人が見つかったかと思えば、当人の口から明かされたおじや万丈目のイカサマ疑惑！おじや万丈目さん、今の言葉は真実なのでしようか!?!」

「……ああ、本当だ」

吐き捨てるようにして呟いた言葉に、レポーターもまさか肯定されるとは思わなかったのか言葉を失ってしまう。

次から次に訪れる展開による混乱が会場を埋め尽くし、誰もがシン

と押し黙った。そんな針一本落とした音ですら響き渡りそんな静寂を切り裂いて突如素っ頓狂な、この雰囲気には場違いなほどの大声が上がる。

「なに、万丈目！お前、俺とのデュエルでずるしてたって言うのかよ！」

「十代……」

いつの間に下に降りてきていたのか、入場口のところから十代が走ってきた。当の万丈目はというとあのデュエルから一体どれだけ苦しんでいたのか、非難する十代と目を合わすことすらせず辛そうに顔を伏せる。

確かに当事者として思うところはあるだろうし、十代の言い分の方が正しいのもわかる。だけど、さすがにここで万丈目を責めるのはやりすぎじゃないか。お前本当におジャマ・イエローの話聞いてたのか……僕の送った非難の視線もどこ吹く風、デュエル場に上がって着ぐるみの襟をぐつとつかむ。

これ以上無茶するようなら、僕が止めに行こう。だがそう決意した矢先に十代の続けた言葉は、なんとも意外なものだった。

「それじゃあお前あのデュエル、わざと弱いふりをして……あれ？それってイカサマなのか？なあ？」

はいはいはい、そういうことね。十代からのパスを受け、すつとぼけたふりして僕も声を上げる。

「あのね十代、そんなのイカサマなんていう訳ないじゃん。ただまあ、まだ万丈目の本気ってやつを僕らに見せてないのは間違いないけどさ。まさか、こんなところでこのデュエル中断するなんて言わないよね？」

言いながらさりげなく手を後ろに回し、後ろから睨みつけているであろう葵ちゃんにハンドサインを送る。やっぱり彼女の察しの良さはどんな時でも頼もしく、すぐに反応してくれた。

「それは困ります、もっとデュエルを魅せてくださいよー！」

その葵ちゃんの一声がトリガーとなって、会場のあちこちからデュエル続行を望む声が上がりが始める。始めはまばらだったそれが次第

に一体化し、やがて割れんばかりの万丈目、そしてエドに対してのコールへと変化していった。その中心で、万丈目の顔が次第に明るくなっていく。ぱつと着ぐるみを投げ捨てると、いつもの黒服で統一された万丈目の姿がそこにはいた。

「いいだろう、もうこんなくだらん小細工は俺には必要ない」

『ああん、オイラの着ぐるみがかく！せつかく男前になってたのに、アニキだったら！』

「待たせたな、エド！ここからが本番だ、デュエルを再開するぞ！」

「望むところだ、本物のプロとの格の違いを教えてやろう！」

「デュ、デュエル再開！視聴者の皆さん、デュエル再開です！おじや万丈目の姿を捨て、真の姿となった万丈目！果たしてどのようなデュエルが繰り広げられるのでしょうか、なんだか私まで興奮してまいりました！」

ついにおじや万丈目であることをやめた万丈目。再開したこのデュエルは、ちょうどエドのターンが始まる寸前だった。吹っ切れたような顔で笑う万丈目に笑みを返し、エドがカードを引く。

「僕のターン、ドロロー！ダブル・アームド・ドラゴンか……確かに厄介だが、所詮僕のディーヒーローの敵ではない。魔法カード、手札抹殺を発動。互いに手札全てを捨て、捨てた枚数だけドロローする。もつとも僕は本来捨てるこの一枚の他に、便乗によりさらに2枚のドロローを行うがな。そしてマジック・プランターを発動、便乗をセメタリーに送りもう2枚ドロロー。さあ、これで準備は整った。融合を発動し、手札のデュフェンドガイとディアボリックガイを素材として融合召喚！鉄壁の意味もつ英雄よ、輪廻の運命を放浪する英雄よ。暗黒の未来を統一し、理想郷へと歩むがいい！カモン、デイストピアガイ！」

D—HERO デイストピアガイ 攻2800

アモン戦でもエドが使用した、破壊にバーンという2種類の強力な効果を状況に応じて使うことができるディーヒーローのニューフェイス。両手でアルファベットのDをかたどったポーズをとると、そこから赤い光が放たれた。

「デイストピアガイのファーストエフェクト発動、スクイズ・パーム。

このカードが特殊召喚に成功した時、セメタリーのレベル4以下のデーヒーロー1体の攻撃力分のダメージを相手に与える……そして僕のセメタリーには、先ほどデッドリーガイが送り込んだ攻撃力1600のデイバインガイが存在する！これで終わりだ、万丈目！」

「なんとおじゃ万丈目改め万丈目、真の力を我々に見ることなくこのダメージだけで決着がついてしまうのか!? エド・フェニックスによるプロの洗礼は、これほどまでに厳しいものなのではないでしょうか！」

「万丈目！」

万丈目の残りライフは1400、確かにこのダメージには耐えきれない。でも、あそこまで啖呵切っておいてこんなあっさり負けるなんて、それこそ万丈目が許すはずがない。放たれた怪光線が万丈目に届く寸前、その周囲に光の膜が張り巡らされて威力が半減した。

「トラップ発動、ダメージ・ダイエツト。発動ターンに俺が受ける、あらゆるダメージは半分になる」

万丈目 LP1400↓600

「万丈目、エドのデイストピアガイの登場を読んでいたかのように華麗に敗北を回避しました！しかも2体のアームド・ドラゴンとデイストピアガイの攻撃力は同じ、これではエドもうかつに攻撃はできません！」

「攻撃ができない？ 甘いな、何を言っている。デッドリーガイの送り込んだデーヒーローは、2体いることを忘れたか！セメタリーに眠るデーヒーロー、ダイナマイトガイのエフェクト発動！自身を除外することで次のお前のターン終了時まで、デイストピアガイの攻撃力を1000ポイントアップさせる。バトルだ、ダーク・アームド・ドラゴンに攻撃！デイストピア……ブローツ！」

デイストピアガイに被さるように、体中に爆発のエネルギーを漲らせた巨漢のヒーローの半透明の姿が1瞬だけ見える。デイストピアガイの全身がそのオレンジ色のエネルギーに包まれ、筋肉が戦闘服の下で盛り上がる。エネルギーを抑えきれないと言わんばかりに飛び上がる、そのままの勢いで帯電した拳の一撃が闇のアームド・ドラゴンの懐深くに突き刺さった。

D—HERO デイストピアガイ 攻2800↓3800↓ダー  
ク・アームド・ドラゴン 攻2800 (破壊)

万丈目 LP600↓100

「ぐっ……ダメージ・ダイエットの効果は、戦闘ダメージにも有効となる！」

「首の皮1枚で繋がったようだが、まだ僕のターンは続いている。デイストピアガイのセカンドエフェクト発動、このカードの変化した攻撃力を元々の数値に戻すことで、場のカード1枚を破壊する！消え去れメタファイズ・アームド・ドラゴン、ノーブルジャスティス！」

ダーク・アームドを殴り倒したデイストピアガイが間髪入れず、その隣にいた光のアームド・ドラゴンに片手をかざす。するとそこから零距离で解き放たれた破壊の衝撃波が、幻竜の体をも吹き飛ばした。

D—HERO デイストピアガイ 攻3800↓2800

「なんということでしょう！光と闇のアームド・ドラゴン、わずか1ターンで駆逐されてしまいました！辛うじて敗北こそ回避したものの、デイストピアガイとはなんと恐ろしい効果を持っているモンスターなのでしょいか！」

「まだ終わりではない、セメタリーに眠るディアボリックガイのエフェクトも発動だ。自身を除外することで、デッキから同名モンスターを特殊召喚する。カモン、アナザーワン！」

D—HERO ディアボリックガイ 攻800

「攻撃表示だと……？エドめ、また何か企んでいるのか？」

「さあね、どうだろうか。カードを1枚伏せ、セメタリーからデイバインガイのエフェクト発動。僕の手札が0枚になったことで、このカードと同じくセメタリーのディフェンドガイを除外してカードを2枚ドロウする。ターンエンドだ」

確かデイストピアガイの2つ目の効果は、相手ターンでも発動できたはずだ。つまり、今ここでわざわざあのモンスターの攻撃力を下げる意味は何一つない。強いて言うならば今のうちにモンスターを減らすことで次のターン万丈目に最上級モンスターをアドバンス召喚するためのリリース要因を残さなかったということぐらいだが、それ

にしたってやはり今やるようなことではない。しかもあのディアボリックガイの不自然な攻撃表示、そして1枚の伏せカード。

……どう見たってあからさまに怪しいが、ついさつき万丈目は同じく怪しい伏せカードにまんまと釣られて強欲な瓶2枚にダーク・アームドの効果を使ってしまうという致命的な失敗をやらかしてしまっている。どうしてもあの時の記憶が蘇り、冷静な思考力を削いでいるのだろう。

「俺のターン……兄さんたち、もう1度力を貸してくれ！魔法発動、おジヤマ改造！」

「なんと万丈目、未知の力を誇るディーヒーローに対抗し、2枚目の未知なるおジヤマカードを発動しました！ですが彼の手札にいた3体のおジヤマはすでに手札抹殺により墓地に送られ、残るは場にいたままのおジヤマ・ブルーのみ。これで万丈目、一体何を成し遂げようというのでしょうか！」

「このカードは発動時に俺のエクストラデッキから光属性で機械族の融合モンスター1体を見せ、さらにデッキ以外の場所から任意の枚数だけおジヤマモンスターを除外する。そして除外した数まで、その機械族融合モンスターの素材を1種類ずつどこからでも呼び出すことができる！XYZゾードラゴン・キャノンを見せることで俺の墓地のおジヤマ・イエロー、グリーン、ブラックを除外し、代わりにデッキからX、Y、Zを特殊召喚だ！」

『結局俺たちや最後まで』

『コスト要因なのかよーっ！』

『アニキのいけず〜！』

そんな切ない叫びが聞こえた気もしたが、万丈目もその声に構ってやるほどの余裕がないらしい。それとも、集中しすぎていてその声も耳に入っていないのかもしれない。まあ3兄弟もついでこの間、割とやりたい放題に暴れたからか本気で自分たちの待遇を嫌がっているわけではないようだ。あくまであれも、いつものちよつとしたじゃれ合い程度の意味合いなのだろう。

ともかく3枚のカードが除外されると同時に、アルファベットの



名を冠する3体のマグネットモンスターが合体前のまだ分離した状態でデイストピアガイの眼前に着陸する。

Xーヘッド・キャノン 攻1800

Yードラゴン・ヘッド 攻1500

Zーメタル・キャタピラー 攻1500

「まずはお前らの合体だ！ゆけつ、X、Y、Z！この3体のマグネットモンスターを除外することで、XYZードラゴン・キャノンを特殊召喚する！」

Yの胴体の中央にXの下半身である球体が接続され、その横を補強するかのように2つに分離したZが左右にそれぞれ接続される。あの海馬瀬人がバトルシテイにおいて神のカード召喚のための足掛かりとして採用しておきながら、それ単体で並のモンスターならば蹴散らすことのできる力を持つ大型融合モンスターだ。

だが、万丈目のマグネットモンスター戦術にはさらにその先があることを、僕らは知っている。

XYZードラゴン・キャノン 攻2800

「魔法カード発動、融合識別。フュージョン・タグエクストラデッキのモンスター1体を見せることで、このターン指定したモンスターを融合素材にする際そのモンスターとして扱うことができる。これによりおジャマ・ブルーは、VWータイガー・カタパルトの名を得る」

「これで万丈目、フィールドにその1体ごとの召喚すら難しいとされる2種類のマグネット融合体を、1体は同名カード扱いになっただけとはいえずか1ターンで並べました！となるとまさか、狙いはあのロマンカードでしょうか!？」

「XYZ、そしてVW……この2種類が全て場に揃った時、それらを除外することでさらにその先のマグネットモンスターの特殊召喚が可能となる。さあ受けてみるエド、この5体合体を！出でよ、ヴァイトウズイVWXYZードラゴン・カタパルトキャノン！」

せつかく完成した2種類の合体がいきなり解除され、新たに命じられた5体合体に応じた組み合わせにそれぞれのパーツが重なり合っていく。XYZの手札を捨てて場のカードを破壊する効果を使わな

かったということとは、よっぽど使いたくないカードしか手札に残っていないのだろうか。

ともかくまず総司令塔となる頭をVが、重い体全体を支える両足をWが引き受け、さらに背面にはYの機械の翼が目一杯広がることで両足だけではバランスを崩しそうになる体全体の調整器官としての役目を果たす。胴体を支えるXの両腕が相変わらず分離したままのZのパーツをがちりと握りしめることで両腕代わりにすること、人型をした1体の超火力移動砲台の姿がついに現れた。

VWXYZードラゴン・カタパルトキャノン 攻3000

「ドラゴン・カタパルトキャノンは1ターンに1度、無条件で場のカード1枚を除外する。これでその、目障りこの上ない伏せカードには退場してもらおうか、VWXYZーアルティメット・デストラクション！」

「やはり、このカードを除去しに来たか。だが残念だったな、万丈目。トラップ発動、Dーフュージョン……このカードは僕のフィールドに存在する、デーヒーローのみを素材としての融合召喚を行う。暗黒の世界の英雄よ、輪廻の運命を放浪する英雄よ。悠久の時の果てに得た、理想郷にて安息の時を！カモン、ダスクユートピアガイ！」

「フリーチェーン……また逃げたか！」

「なんと、デイストピアガイにはまだもう1段階の進化が残されていました！専用の融合カードにより呼び出された、その姿は……キヤツ、眩しいです！」

眩しい。僕も、それが第一印象だった。全身を黄金色に輝く鎧に包む、頭部そのものがDの一文字をあしらったデザインのラスト・ヒーロー。モチーフがモチーフだからか暗い色合いばかりだった既存のデーヒーローの中にあつて一際目立つその光は、まさに黄昏の太陽のような存在感を放っていた。

DーHERO ダスクユートピアガイ 攻3000

「ダスクユートピアガイがその融合召喚に成功した場合、僕はもう1度だけ融合を行うことが許される。手札のデーヒーロー、ドグマガイとBlOODを素材とし、この最後のDを呼び出そう！カモン、

Dragon D—END！」

太陽のようなダスクユートピアガイと並ぶかのように、ついにエドの手に渡った最後のDカードがその謎に包まれたボールを脱ぐ。

それはB—Dの持っていた悪魔的荒々しさと、ドグマガイの洗練されきった力。全く毛色の違う、だけどどちらも比類なき圧倒的な2つの力の集大成だった。左腕と胸部にはどちらも龍の頭部を模した鎧と武器が装着され、龍を使役するドラグーンの名を相応しいものに見せている。そのほかにもドグマガイの蝙蝠のような翼とB—Dの持っていた悪魔そのものの鮮血の翼を足して2で割ったような赤い翼からは龍の爪が生え、背面では新たに生えた太い龍の尾が血を求めてでもいるのか、かすかに動いていたのも見えた。

Dragon D—END 攻3000

「これが……最後のD……」

いつもの実況も忘れて見入っていたお姉さんが呟いた言葉が、いまだ手放さなかったマイクに拾われて反響する。それだけ、誰も何も言えなかったのだ。

いや、それは違った。この中でたった1人だけ、いまだ闘争心を燃やし続けている男がいた。

「エド・フェニックス！」

万丈目だ。ただ1人万丈目だけが真正面から2体のデューヒーローの究極融合体を見据え、一歩踏み出しながら声を張り上げた。

「この俺は、万丈目サンダーは、こんなところで止まりはしない！ V W X Y Z、奴に……最後のDとやらに攻撃するんだ！ V W X Y Z—アルティメット・デストラクション……そしてこのダメージ計算時に速攻魔法、リミッター解除を発動！ 倍となった攻撃力で、全てまとめて吹き飛ばしてやれ！」

2体の攻撃力は、互角。相打ち狙いで体中の全砲門の照準を最後のDに合わせるドラゴン・カタパルトキャノンに対し、Dragon D—ENDもまた右腕に装着された剣を一振りしてそれに立真っ向から立ち向かう。その反撃をリーダーが捉えた瞬間 V W X Y Zの全砲門から迸る光の奔流が一気に倍となり、あまりの衝撃に自らの体

をも破壊しながら眼前の敵に向かって突き進んでいく。目も眩むような閃光と轟音が走り、2体の大型モンスターの生み出した破壊のエネルギー乱舞が場を荒らしまわった。

VWXYZードラゴン・カタパルトキャノン 攻3000↓600  
0↓Dragoon D-END 攻3000

どこまでも続くかに思われたその衝撃がようやく静まった時、WXYZの姿はすでに辛うじて原形こそとどめているものの全身の砲台は破裂してポロボロ、エネルギーも枯渇寸前のも見るも無残なスクラップ寸前になっており……対してエドのフィールドには、いまだ無傷の状態で2体のディーヒーローが立っていた。

「馬鹿な!? 攻撃力はこちらが圧倒的に……!」

「確かに。だが僕はダスクキュートピアガイのセカンドエフェクト、アナスタシム・グリームを発動していた。互いのターンに1度ずつ場のモンスター1体を選ぶことでそのターンそのモンスターは戦闘でも効果でも破壊されず、バトルダメージも0となる。この効果でDragoon D-ENDは守られていたから万丈目、このターン破壊されるのはリミッター解除のデメリットを受けることになるお前のモンスターだけだったということだ」

「ダスクキュートピアガイ、その真の力は自らの仲間を呼び、仲間を守ることにありました! 破壊とバーン効果を持つデリストピアガイを進化させることで、仲間のためにその力を解放するダスクキュートピアガイとなる……なんとという奥が深いカードなのでしょう! 対する万丈目、このターンで勝負を決めるべく呼び出した頼みの綱のWXYZの攻撃すらエドには通らず、それどころかリミッター解除のデメリットまで背負う形になってしまいました! ここまでの健闘むなしく、ついに力尽きてしまうのかあーっ!」

ここまで戦ってきた万丈目に対しこんなこと言いたくはないが、確かにその言葉は正しいと僕も思う。おジャマ達からのサポートを受けながら戦ってきたアームド・ドラゴンが倒れ、WXYZも今まさに機能停止しようとしている。こんな状況で、さらにこの場をひっくり返すような手が万丈目に残されているとでもいうのだろうか。

いや、答えはノー、だ。万丈目とは3年間も腐れ縁が続いてきた僕だからこそ、その限界もよく知っている。これ以上の番狂わせなんて、それこそ奇跡でも起きなければ無理だろう。万丈目本人もそのことは承知しているからか、厳かな顔になって壊れかけのVWXYZを無言で見上げる。

と、その時、その右腕が高々と宙に掲げられた。皆の視線が自然とそこに集まる中でおもむろに1度指を鳴らすと、まるでそれがきつかけとなったかのようにVWXYZの目に再び光が宿る。破損した砲台や装甲、使い物にならなくなった部品が次々にパージされ、まだ辛うじて動く部分だけが残された。

パチン。もう1度指を鳴らすと、次に現れたのは半透明のアームド・ドラゴン。それも1番最初にドリルガイによつて倒されたはずの、LV7の亡霊だ。

「なんだ一体!?何が起きてる!?!」

「やはりエド・フェニックス、貴様は確かに凄腕のプロデュエリストだ。だが俺もこの試合、絶対に負ける訳にはいかない。これが兄さんたちにより俺に贈られた、最強にして最後の力。アームド・ドラゴンとVWXYZの2体による、禁断の変形合体モンスター。あの2体はこのデュエル中どちらも特殊召喚に成功したことで、すでにその召喚条件は整っている」

実に真つ当なエドの言葉に、そこでようやく万丈目が答えた。静かな、しかしよく通る声音で、はっきりと語りだす。そうこうしている途中にも、亡霊のはずのアームド・ドラゴンの体のあちこちを補強するかのようVWXYZの残ったパーツが鎧となり盾となりそして武器となつて組み合わさり、枯渇した自らのエネルギーの代わりにドラゴンの持つ原初的な生命エネルギーを注入され息を吹き返していく。生身の体に機械の力が組み合わさり、まさに本人が言った通りの禁断の変形合体モンスターが次第にその全容を現していく。

「俺の墓地のアームド・ドラゴン LV7と、場のVWXYZードラゴン・カタパルトキャノンをゲームから除外する!さあその姿を見せろ、アームド・ドラゴン・カタパルトキャノン!」

新たな力を得たアームド・ドラゴン……いや、生まれ変わったVW  
XYZ……いや、違う。アームド・ドラゴン・カタパルトキャノンが、  
龍の咆哮と機械の咆哮の入り混じった産声を上げる。よく見ると背  
後から黒煙が噴き上がっている辺りやはり相当に無理のかかる合体  
なのだろうが、当の本人はまるでそんなこと気にした様子もなく目の  
前の強敵に対し好戦的に両腕を打ち合わせる。

アームド・ドラゴン・カタパルトキャノン 攻3500

「なんだこの合体は、ふざけた真似を……!」

「そのふざけた真似の力を思い知るがいい、エド!墓地の魔法カード、  
おジャマツチングのさらなる効果を発動。たった今除外したおジャ  
マ3兄弟をデッキに戻すことで、カードを1枚ドロウする。フン、こ  
こでお前を引くことになるとはな。まあいい、カードを2枚伏せて  
ターンエンドだ」

「な、な、なんなのでしようこのモンスターは!まさに異形!奇怪!悪  
魔的発想による融合失敗の産物としか思えない代物ですが、その身に  
秘めたパワーは間違いなく本物です!一体我々の前に、どのような戦  
い方を見せてくれるというのでしょうか!」

本当に、何を考えてこんなカード作ったんだあの兄弟。いくらカー  
ドについては素人同然とはいえ、もうちよつとなんかなかったのだろ  
うか。いや、むしろこのぶつ飛んだ発想力こそが、さすが万丈目の一  
族と言うべきなんだろうか。

ともあれ、これで満を持してエドと万丈目それぞれの最終決戦兵器  
がフィールドに並んだ。こうなると後はもう、どちらが先に倒れるか  
の戦いだ。

万丈目 LP100 手札:1

モンスター:アームド・ドラゴン・カタパルトキャノン(攻)

魔法・罫:2(伏せ)

エド LP1000 手札:0

モンスター:DHHERO ダスクユートピアガイ(攻)

Dragon D-END(攻)

魔法・罫:なし

「僕のターン！Dragon D-ENDのエフェクト発動、インビシブル・D！このターンのバトルフェイズを放棄することで相手モンスター体を破壊し、その後そのモンスターが表側表示だったならば、その攻撃力分のダメージを与える！お前の墓地には除外することで効果ダメージを半減できるトラップ、ダメージ・ダイエツトがあつたようだが、それを使つてもこの効果は防ぎきれまい！」

最後のDが龍の顎を開き、その目に映るもの全てを火の海にする火炎弾を吐き出す。だがその質量を前に万丈目は避けようともせず、アームド・ドラゴン・カタパルトキャノンがその前に立ちはだかつた。「ならばこのタイミングで、こいつの効果を発動だ。相手ターンに1度デッキからカードを1枚除外し、全弾発射！エド、貴様の場も、墓地も、全てのカードを根こそぎ除外する！この効果ならば、貴様のダスクコートピアガイからの干渉も受けることはない！やれ、アームド・ドラゴン・カタパルトキャノン！」

「全てを除外だと？速攻魔法、禁じられた聖杯！指定したモンスターの攻撃力を400ポイントアップさせる代わりに、そのモンスター効果をこのターンの間無効にする！」

「させるか！速攻魔法、禁じられた聖槍！対象モンスターの攻撃力を800ポイント下げること、このターン魔法、罠に対する完全耐性を与える！」

「……だが、Dragon D-ENDのエフェクトは既に発動している。たとえこちらが除外されようが、どのみち効果ダメージでお前の負けだ万丈目！」

「それはどうかな、その心配は俺には無用だ。トラップ発動、魂のリリース！手札のモンスター1体を特殊召喚し、そのモンスターがフィールドに存在する限り、俺はあらゆるダメージを受けない！」

カウンター合戦を万丈目が制したことにより、遺憾なくその実力を発揮したアームド・ドラゴン・カタパルトキャノンが火炎弾に対抗するかのよう全力掃射を行う。3体のモンスターが火球と閃光に飲み込まれ、全てが消えてなくなつていき……ぽっかりと空いたフィールドに唯一残っていたのは、誰もが見慣れたあのモンスター。万丈目

が魂のリレーで呼び出した、ただ1体だけだった。

「なんと万丈目、この効果さえも凄いだーっ！しかし魂のリレーはそのデメリットとして特殊召喚したモンスターがフィールドを離れた時に自身の敗北が確定する、モンスターとプレイヤーが文字通り一蓮托生となる効果を持っています！果たして万丈目が最後に選んだのは、一体どのモンスターなので……あ、あれは?！」

「俺が特殊召喚したのは、こいつだ。これが最後の戦いだ、おジャマ・イエロー!！」

おジャマ・イエロー 攻0

『よーし、いってらっしや……え?あれ、もしかしてオイラのこと?』『お前の他に、どんなおジャマ・イエローがいるというんだ。いいからシャキツとしろ、それでも俺のエースモンスターか!』

『エース?オイラが……?』

感動のあまりぶわっと泣きはじめるおジャマ・イエローからは照れ隠しからか顔を逸らし、すぐにエドの方へと向き直る。

「……ターンエンドだ」

「俺のターン。貴様の負けだ、エド!おジャマ・イエローでダイレクトアタック!」

『ええ!?でも、オイラの攻撃力は……』

「何をゴチャゴチャ言っている、いいからさっさと攻撃して来い!」

『わ、わかったわよん、もう……でやあくっ!』

おジャマ・イエローが、その足でフィールドをてちてちと真っ直ぐに走る。前だけを見て懸命に走っている彼の眼には入らなかつただろうが、彼1歩を踏み出すごとに周りの風景が次第に変化していった。地面から家が、策が生え、足元が床から土がむき出しの地面へと変わっていく。

「フィールド魔法、おジャマ・カントリーを発動。このカードが存在してなおかつおジャマモンスターが存在する限り、フィールドのモンスターへの攻守は逆転する」

『でやあくっ……おジャマ・パ〜ンチッ!』

イエローが跳んだ。その小さな腕を懸命に伸ばし、エドの頬を平手



で力いっぱい打ち据える。

おジャマ・イエロー 攻0↓1000↓エド（直接攻撃）

エド LP1000↓0

「や……やりました、ついに決着です！勝者は万丈目、なんとあのエド・フェニックスを打ち破る快挙を成し遂げました！」

「万丈目、この借りは必ずプロの世界で返す。だが今は、それより先にやるべきことがあるだろう？」

「俺のやるべきこと……違ーうっ！」

「え？」

レポーターお姉さんの言葉に、突如一声叫んでデュエル場の中央まですかずかと歩く万条目。おもむろに立ち止まると会場全体を見渡し、指を一本天に掲げた。

「いいかお前ら、準備はいいな！この俺の名は……一！」

当然、僕らのやるべきことも決まっている。会場全員が腕を振って声を張り上げ、一体となってコールを飛ばす。

「十！」

「二百！」

「二千！」

ここで一度言葉を止め、ワンクッション置くことで会場の期待がさらに高まる。その熱気が最高潮に達したところで、それを解き放つ万丈目の声が響き渡った。

「……万丈目、サンダー！」

「三サンダー！サンダー！サンダー！」

## ターン118 鉄砲水と決別の歯車

その日、僕が授業を受けるために校舎に足を踏み入れると、なにやら教室前に人だかりができていた。その中に夢想の青髪が見えたので、近寄って話しかける。

「やつほー。なに、また今日もなの？」

「そうみたい、だって」

また、というのは、教室前に張り出された張り紙のことだ。そこにはただ簡潔に、今日の授業は臨時でお休みするノーネ、とだけ書かれている。

別にそれだけなら、ああ今日は休みなんだなよっしやラッキー、だけで済む。実際、僕もこの張り紙が出てくるようになった初めのころはそう思っていた。

ただ問題は、それがあまりにも長すぎることだ。

「これで……3日連続？」

「うん。そろそろ危険かな、って」

それは、去年までなら考えもしなかったであろう問題。クロノス先生が授業をボイコットすることによる、シンプルにしてきわめて厄介な問題。有り体に言うと、出席日数不足だ。本来なら先生がちよつとやそつと授業をしなかつたぐらいではどうということもないのだが、これまでのセブンスターズ戦や光の結社騒ぎ、とどめの異世界騒動のしわ寄せでこれまでもさんざん授業が潰れまくった結果、僕らの世代は毎日毎時間休まず出席してもかなりギリギリでしか卒業できない。そんな状態で先生側がこの調子だと全員留年、の文字が本格的に笑い話ではなくなってしまう。

「クロノス先生だって、それはよくわかってるはずなんだけどね」

「でも先輩方、覚えていますか？最近のクロノス教諭、いつにもまして……その……ご乱心なようでしたが」

実技担当最高責任者による全体講義が休講となれば、本来僕らの1コ下である彼女たちにも無関係な話ではない。ひよつこり会話に入ってきた葵ちゃんが、何か波風立たない表現を模索した末に結局諦

めたのかいつも通りさらりと毒を吐く。ただ言葉のチョイスこそあれだけでも、僕もそこに関しては何感だ。

「ライフ計算のためナノーネ、とか言って数学どころか小学校の算数レベルの計算やらされたり……」

「先日は座学なのに腕立てやらされたりもしたね。ハードなデュエルには体力が必要だのなんだの言ってる」

「体調でも悪いのかな、って」

「だとしても、早く良くなってもらわないと困るんだけどね」

進路も心配ではあるけれど、卒業できないだなんてそれ以前の問題だ。いや、全然僕にとっても他人事ではないんだけど。

「こうしちゃられない、もう限界だ！皆、クロノス先生を探しに行くぞ！」

お、背後でなんか始まった。がやがやと騒ぐ声に振り返ると、度重なる授業中止にしびれを切らしたらしいオベリスブルー男子、正直顔はわかるけど名前わかんない奴が周りのイエロー生やブルー生を集めて演説を始めていた。

「お前たちだって、もうそろそろ進路は決まってるんだろう？この間だって、万丈目がプロに入ったばかりだ。なのにクロノス先生がこの調子だと、俺たちもう1年この学校にいななくちやいけなくなるぞ！？」

そうだそうだ、もう俺内定貰っちゃってるんだ、早くクロノス先生を見つけ出せ……そんな賛同の声が、ぽつりぽつりとあちこちで上がる。

「いいか、クロノス先生は多分、この校舎のどこかにいるはずだ。まず上から順に探さず、ただし全員で行くんじゃない。1階に何人か待機して、逃げ出さないように玄関を押さえておくんだ」

「おう！」

「じゃあ俺、十代のアニキを探してくるドン！どうせ今日もどこかで釣りしてるはずザウルス」

「あ、待って！十代様のところならボクも行く！」

言い出しつぺの彼の指示に従い100人弱の集団がどやどやと上

への階段を駆け上がり、それとは別に10人程度がホールへと走り出す。さらに剣山とレイちゃんが校舎外に向かうと、大教室前には僕と夢想、それに葵ちゃんの3人だけが残された。夢想に関してはいまだに何考えてるのかわからない節があるからここに残ってもそう不思議ではないが、葵ちゃんまでこっちにいたとは意外だ。

「あれ、葵ちゃんどっちか行かなくていいの？」

「あまりほいほいと人の指示を聞くのは好みではありませんので」

「あ、そ……ん？」

何気なく流したけど、よくよく考えたらそれはただのボツチ思考では？ 葵ちゃんいっつも看板娘やってくれる割に一向に彼女の友達を名乗る人が出てこないとは思ってたけど、彼女との付き合いも2年近くなつたここに来て今更そんな切ない理由知りたくなかつたぞ。

「……なんですかその目。1人の方が性に合ってるんですから、ほつといってくださいよ」

「あー、貴女はそういうタイプだもんね、だつてさ」

夢想は優しいからそこでとりなすけど、ボツチは皆そう言うんだぞ。まあ彼女の場合、意地でも認めようとはしないだろうけど。

「大体、そんなこと言うなら先輩方こそこんなところで油売つていいんですか？」

「んー……ぶつちやけ1人の追い込みにあの人数動かすのつて、むしろ悪手にしか見えないんだよね。しかも上からしらみつぶしにー、なんて思いつきり作戦ばらしちゃつてるし。多分クロノス先生も、本気で逃げる気ならそろそろこの辺を1回通ると思うよ」

「ああ、確かにそれも一理ありますね」

「そうそう。だからあつち行つた皆にはいい感じに陽動やつてもらおうかなつて」

「むむむ、ちよつとそこをどくノーネー！」

まるであらかじめ待ち構えていたかのようなタイミングでどたと足音を立て、クロノス先生の長身が廊下の向こうからこちらに走ってくる姿が見えた。

「ほら」

「おー。それで先輩、どうしますか？」

「どうしますかかって言われても……やっぱ授業はやってもらわないと、ねえ」

「ですわね」

葵ちゃんにそう返し、3人揃って廊下を塞ぐようにサツと広がる。通れないことに気づいたクロノス先生がぶつかると直前急ブレーキをかけようとするも勢い余ってその場にこけて、受け身も取れずに顔を強打する。鼻を押さええて少し涙目になりながらも、よろよろと起き上がる。

「アルデンテーテ、どうしてどいてくれないノーネ……」

「申し訳ありませんが、私に言われましても先輩の指示ですので」

「あーおーいーちゃんー？」

しれっとこちらに罪をなすりつけてくる後輩を睨みつけると、その倍ぐらいにきつい視線で睨み返された。さてはこの女、まーだこの間明菜さんアカデミアに呼んだこと根に持ってたな。あれは事故、というかあの人の独断だつて散々説明したつてのに、もう。

「シニョール清明、それは本当ですーか？」

「いえ違……」

「重ね重ね申し訳ありません、クロノス先生。私だつて何度も止めたのですが、先輩は言いだしたら引かない人ですから」

否定のセリフにかぶせるよう、1歩前に出た葵ちゃんがこれでもかとばかりにまくしたてる。駄目だこりゃ、完全に人のことを売りにかかっている。もしかして今日は最初から、こうなることを全部予期して僕のそばにいたんだろうか。そういえばさつき最初に夢想との話に入ってきたときも、妙に彼女らしからぬ積極的な登場だった気がする。げに恐ろしきは女の執念、そう言ったのは誰だったろう。その言葉の意味を痛いほど理解していると、クロノス先生の矛先はこれまで事態を静観していた夢想に向いた。

「セニョーラ夢想、実際のところはどうかノーネ」

さつつすがクロノス先生、授業ボイコットはともかく人間はできてる。ちゃんと聞いた話を鵜呑みにせず第三者に確認を取るあたり、伊

達に教師生活やってない。夢想ならきつと、僕の無実を訴えてくれるはずだ。

「うーん……でも清明、たった今言ってたよね。『やっぱ授業はやってもらわないと』って、なんだって」

「うっ!?」

『八方ふさがりだな、マスター』

チェックメイトを告げるチャクチャルさんの声がなんだかひどく楽しそうに聞こえたのは、絶対に気のせいではないだろう。完全にどうせ他人事だからって静観モードに入ってるな、あの邪神。

そして夢想からのお墨付きを得たクロノス先生が、改めてこちらに視線を向ける。当然先生の方が背が高いので、自然と僕がその顔を見上げる格好になった。

「シニョール清明、教師に向かって随分な態度ナノーネ」

「そんなこと言うならクロノス先生だって……」

「言い訳無用！私は教師として、そんなデュエリストにあなたを育てた覚えはないノーネ！そのゴルゴンゾーラのようにカビの生えた根性を叩き直してあげますから、こっちに來るノーネ！」

「……ど、どこにですか？」

「情けない、それでもデュエリストですーカ？ここはちようどデュエリング近く、いい機会ですので久しぶりに……そう、あなたの言葉を借りるならば、実技授業と洒落込んでやりますーノーネ！」

「え、ちよ、夢想に葵ちゃん、助け……あぐっ」

なんだかおかしな話になってきたのでとりあえず逃げようとした首根っこをさつと掴まれ、あの細い腕のどこにそんな筋肉が付いているのかと聞きたくなるような怪力ですると引きずられていく。見かねた夢想が1度手を伸ばして制止しようとしたものの、葵ちゃん何かを耳元で囁くとその手をひっこめ、こちらに申し訳なさそうに一瞥して彼女に引っ張られるまま廊下の反対側に消えていった。

ああ、もう！葵ちゃんには後でたっぷり反省と後悔してもらおうとして、今は自分の心配だ。引きずられながらどうにか首を動かし、クロノス先生の方を向く。

「ちよ、ちよつと待つてくださいいよ！本気ですか先生!？」

「さあ入るノーネ、シニョール清明。先攻は差し上げますからさつきと準備しますーノー！」

「ええ……」

何が何だか、というのが本音だけど、こうなった以上口でどうこう言っても何も変わらなさそうだ。なら僕もさつきと気持ち切り替えて、目の前のデュエルに全力で向き合う覚悟を決めるとしよう。

そう思い直すと、一気に自分の中でスイッチが切り替わるのを感じた。さつきまでの困惑はどこかに捨てきつて、今僕の全身を占めているのは単純な闘志。そういえば、クロノス先生とデュエルするのなんていつぶりだろう。確か砂漠の異世界で、ゾンビ化した先生と戦わされた時が最後だったはずだ。思えば入学試験でこそ勝てたものの、それから3年間僕はこの人に1度も白星を挙げていない。卒業までにあと何回実技の授業があるかは忘れたけれど、ここを逃すと下手したらもうチャンスはないだろう。

……絶対に、負けない。

「ほう？少しはいい面構えになったノーネ」

「おかげさまでですよ、先生。思えばあの時、先生に勝ったからこそ僕はこの学校に入ってこれたんだ。だったらもういつペンあなたに勝つて、凱旋と洒落込んでやりますよ。3年間で僕が、それとこのデツキがどれだけ成長したか、嫌というほど味あわせてあげます」

「私の暗黒の中世デツキの恐ろしき、どうやら少しデュエルしないうちにつきり忘れてしまったようなノーネ。よろしい、ならば教師として、もう一度たっぷり刻み付けてあげますーノー！」

「デュエル!」

先ほどのクロノス先生の言葉通り、僕の先攻が既に設定されている。あの人の使う古代の機械は、自分が攻めこむときにきわめて厄介な効果を持つモンスター群……さて、どうしようかね。どうしようつたって、攻めるしかないか。

「僕のターン。グレイドル・イーグルを召喚、これでターンエンドです」

グレイドル・イーグル 攻1500

すっかり切り込み役として定着した黄色い鷹状のイーグルが、本物の鷹よろしく僕の差し出した腕を止まり木がわりに着地する。守備表示でセットしてもよかったけれど、クロノス先生の切り札である古代の機械巨人は貫通能力持ちだ。どうせダメージを受けるなら、高い攻撃力の方で迎え撃とう。

「それで終わりとは、ずいぶん舐められたものナノーネ。私のターン、まずカードを1枚セットしましーテ、アンティーク・ギアワイパー古代の機械飛竜を召喚。このカードが召喚、または特殊召喚に成功した時、1ターンに1度だけデッキから別の古代の機械1枚をサーチすることができるノーネ。この効果で古代の機械箱を選び、さらにドロー以外で手札に加わった古代の機械箱はそのモンスター効果で、デッキからもう1枚攻守どちらかが500ポイントの地属性機械族モンスター……アンティーク・ギアフレーム古代の機械素体をサーチできますーノ」

わずか1体のモンスター召喚から芋づる式にサーチを行い、結果的に2枚のカードを新たに手札に加えるクロノス先生。古代の機械飛竜の方は前のデュエルでも使っていたのをそのままデッキに入れただけなんだろうけど、古代の機械素体？あれは初めて見るカードだ。

そんな用心を知ってか知らずか、おもむろに機械仕掛けのワイパーンが動く。

「バトル、古代の機械飛竜でグレイドル・イーグルに攻撃するノーネ！」

「やっぱり……！」

グレイドルモンスターには、戦闘破壊に対応して相手モンスターに寄生する効果がある。それを承知なはずのクロノス先生があのもンスターを攻撃表示で召喚してきた時点で何かあるとは思ったが、案の定仕掛けてきたか。となるとあの未知のカード、古代の機械素体の効果は手札誘発か何かだろうか。ともあれ古代の機械飛竜がその口をぱかりと開くと、喉の部分に内蔵されていた噴射口からまるで本物の竜が吐いているかのように火炎弾が打ち出される。咄嗟にイーグルが僕の腕から飛び立ち、その炎を大きく広げた翼で受け止めた。



古代の機械飛竜 攻1700↓グレイドル・イーグル 攻1500  
(破壊)

清明 LP4000↓3800

「まずは一撃。ファーストダメージは頂いていくノーネ」

「この程度！この瞬間、戦闘で破壊されたイーグルの……あれ？」

本来ならば、炎を浴びて溶け崩れたイーグルはスライム状になって地表を移動、不意をついてワイバーンに寄生してコントロールを奪うはずだ。だが、いつまでたってもその気配がない。

「古代の機械の能力がすべて同じだとは、思わない方が身のためノーネ。古代の機械飛竜は自身が攻撃する間、相手の魔法、罠の発動を防げないかわりに、モンスター効果の発動を許しません。さあ、これでターンエンドしますーノ」

清明 LP3800 手札：4

モンスター：なし

魔法・罠：なし

クロノス LP4000 手札：6

モンスター：古代の機械飛竜(攻)

魔法・罠：1(伏せ)

「突破してくる覚悟はしてたけど、まさか手札すら減らせないとはね……まだまだ、ドロー！」

今引いたカードは……地獄の暴走召喚、ねえ。自身の特殊召喚を許さない古代の機械巨人を高速召喚をしての制圧を軸にするクロノス先生相手なら悪いカードじゃないんだけど、よりによって今ここで引くのはまずい。となると、なんとか元から手札にあるカードで……ん？なんだろう、何か引つかかる。待てよ……？

『ふむ。マスターが自力で考えるのなら、私は余計な口出しはすまない。下手な手を打って後悔する前に、よく考えてカードを選ぶことだ』

何かを感じながらもその何かがわからず苦しむ僕にアドバイスでもくれるのかと思いきや、相変わらずの放任主義でまた静観モードに入るチャクチャルさん。ただあの口ぶりからして、チャクチャルさん

もこの手札から何かに気が付いたようだ。そして恐らくそれは、僕が引つかかっているのと同じことだという予感がする。先生の場合には召喚、特殊召喚時にサーチを行う古代の機械飛竜、僕の墓地にはグレイドル・イーグルがいて、今手札には地獄の暴走召喚とそのトリガーにできる魔法カード、浮上がある……。

駄目だ、わからない。ここで地獄の暴走召喚を使うことがベターな手だとは、どうも思えない。じゃあいったい、何がこんなに引つかかっているんだろう。

懸命に手札を睨んで考えていると、突然その思考をぶった切るようにして頭上のスピーカーから聞き覚えのある声が突然降ってきた。

『コホン。全校生徒の皆さん、2年の葵・クラディーです。皆さんお探しのクロノス先生の行方ですが、つい先ほど遊野先輩と遭遇、今現在デュエル場にてデュエルをしています。恐らくこのデュエルで先輩が勝てば、クロノス先生は授業を再開していただけるでしょう。全校生徒の皆さん、先輩の応援のため至急お集まりいただくようお願いします。以上、緊急連絡でした』

「むむむ、しまったノーネ！まさか最初からこれを狙って、こうなったらこの勝負は一度預け……」

「いたぞー！」

「確かにクロノス先生だ！」

「こんなところにいたのか！」

「ギャビーン！囲まれてしまったノーネ!？」

……なるほど。あの時見捨てられたのは僕への復讐がてら、自分が放送室にたどり着くまでの間クロノス先生を足止めしておくことまで兼ねていたとはね。葵ちゃんったら、ほんとと抜け目ないんだから。ここまでのいいように使われると、なんかもう怒る気も湧いてこない。しかも、ちやつかり僕が勝てば授業再開だなんておかしな条件付けてるし。あんな全校放送で明言されれば、いくらそれが根も葉もないデタラメでも面と向かっては否定しづらいだろう。特に今回の場合クロノス先生だって、本当は授業をしないなんてありえないことだという負い目があるはずだからなおさらだ。

でもだからって、こんなえげつない情報操作するかね、普通。仮に今年の卒業失敗しても、絶つ対に葵ちゃんのことを面と向かって敵に回さないようにしよう。

まあ内容はともかく、その効果が抜群だったことは間違いない。今の放送を聞いてすぐにわらわらと集まってきた全校生徒が、アリの子1匹逃げ出せないほどにデュエル場を取り囲む。こんなに一度に詰めかけて、すっ転んだらどうする気なんだか。

……いやいやいや、待てよ？今なんて言った、一度に？そうか、そういうことか。これは結果的には、葵ちゃんのおかげといえるのだろうか。ともかくこの状況のおかげで、ようやくさつき自分が何に気が付こうとしていたのかがわかった。だとしたらここでの正解は、こうだ。

「まんまとしてやられましたね、僕も先生も。やられたものはどうしようもないから、デュエルは続けますよ」

「まあいいでショウ。あなたやシニョール十代のようなラーイエローに昇格しようという意志すら見られないドロップアウトボーイズごときに、早々敗北する私ではないノーネ。よろしい、もし私がここで負けたーラ、授業でもなんでもやってやりますーノ」

「今の聞いた、皆!!言質は確かに取ったからね!そうと決まれば魔法カード、浮上を発動!僕の墓地からレベル3以下の水族モンスター、グレイドル・イーグルを表側守備表示で蘇生!」

グレイドル・イーグル 守500

「そして相手フィールドにモンスターが存在し、僕の場合に攻撃力1500以下のモンスター1体が特殊召喚された時。速攻魔法、地獄の暴走召喚を発動!僕のデッキからさらに2体、グレイドル・イーグルを攻撃表示で特殊召喚!」

再び蘇ったイーグルの全身がぶるぶると小刻みに震えたかと思うと、その全身が突然2つ、そして3つにアメーバよろしく分裂増殖していく。結果的に僕の場合には、元の姿と寸分変わらない3体のイーグルが残ることとなった。

グレイドル・イーグル 攻1500

グレイドル・イーグル 攻1500

「ですが地獄の暴走召喚はその強力な展開能力の代償として、相手プレイヤーにも場のモンスターと同名モンスターを可能な限り並べさせてしまいますーノ。私もデツキから、さらなる古代の機械飛竜を……なるほどシニョール清明、確かに悪知恵に関してはだいぶ成長したようなノーネ」

古代の機械飛竜 攻1700

古代の機械飛竜 攻1700

案の定3枚入っていた古代の機械飛竜の残り2体がフィールドに呼び出され、その効果を発動しようとしたところでクロノス先生も気づいたらしい。口角を釣り上げ、感心したように薄く笑う。

「ええ。古代の機械飛竜のサーチ効果は、同名ターン1でしか使えない。複数体を一度に引つ張り出しておけば、効果を使われるのは1体分で済みますからね」

これこそが、僕の気づいた効果の抜け道。特殊召喚時サーチ相手に地獄の暴走召喚を発動するなんてありえないという固定概念に捕らわれなければ、案外これも悪い手でもない。確か古代の機械にはデツキリクルートを行う古代の機械射出機アンティーク・ギアカタバルトなるカードもあつたはずだから、デツキ内の古代の機械飛竜を全部他の場所に移すことにはそれを防ぐ意味もある。

「ですが、やはり1枚はサーチをさせてもらいますーノ。私が手札に加えるのは2枚目の古代の機械箱、このカードにするノーネ。そして再びその効果により、デツキから今度は攻撃力500の古代の機械砲台アンティーク・ギアキャノンをサーチ」

「結局手札を2枚増やされた事に変わりなしか……だとしても、今更やることに変わりはない！バトル、グレイドル・イーグルで攻撃表示の古代の機械飛竜に攻撃、ダメージを受けてそのまま寄生！」

グレイドル・イーグル 攻1500（破壊）↓古代の機械飛竜 攻1700

清明 LP3800↓3600

再び黄色の鷹と機械の小竜の攻撃が激突し、あつけなく四散した

イーグルが今度こそその銀色の体を精密機構の内部へと滑り込ませる。

「これでよし、次に2番目のイーグルで……」

「1体は通しますが、カウンタートラップ発動、攻撃の無力化！ 残念ですーガその攻撃は時空の渦に飲み込まれ、バトルフェイズも強制終了と相成るノーネ」

「しまったー」

イーグル3体の攻撃でクロノス先生の場を一掃しつつ奪い取ったイーグルでダイレクトを決めてやろうとするも、それはあっさりと未然に防がれる。となると当然、返しにあのゴーレムを召喚してくるだろう。イーグルの効果が飛竜に通用しないのはわかったけれど、当然巨人に対しても何らかのグレイドル対策カードが手元にあるはずだ。

となると、多少の危険は承知のうえでこのカードを使うべきだろう。ともかく、無防備な状態でターンを明け渡すのは絶対にまずい。「メイン2に魔法カード、一時休戦。互いにカードをドローして、次の先生のターンが終わるまでの間あらゆるダメージを0にする」

「早速逃げの一手ノーネ？ ではありがたく、ドロー」

僕のデツキにとって大事なドロージャーエンジンとなるグレイドル・インパクトや補給部隊、ウォーターフロントはまだ引けていない。とりあえず次のターンの安全こそ確保できたものの、そこから先は完全に未知の戦いになる。

「……ターンエンド」

『ま、あの攻撃が通った場合に得られたリターンの大きさを考えれば多少のリスクはやむを得ないだろう。この程度で済むなら安いものだ、私でもあの場面なら暴走召喚を使っていた。だからそう気に病むな』

「そうは言うけどさあ……」

『ああ、そうなると気になるのは発動タイミングだな。なぜ最初の攻撃だけはわざわざ通したんだ？』

現実問題としてクロノス先生の場には3体ものモンスターが揃い、手札も先ほどのサーチのおかげでまだまだ潤沢にある。鬼が出るか

蛇が出るか、どちらにせよより一層気を引き締めていこう。

「私のターン。速攻魔法、リロードを発動。手札全てをデッキに戻し、その枚数だけドロワーできるノーネ。そして2体のモンスターをリリースして、アドバンス召喚！出でよ、古代の機械巨人―アルティメット・パウンド！」

1瞬召喚して即攻撃宣言でもしたのかと思っただが、どうもそういう訳ではないようだ。何気にあの人が最初から自分1人で始めたデュエルでは初めてかもしれない、リリース軽減やトークン召喚などの小細工なしに見るアドバンス召喚により呼び出されたその姿は、特徴的な左腕の爪といいそのモノアイといいまさに先生のエース、古代の機械巨人。

だが……ほんの少し。本当に少しだけ違う。表面の光沢、内側から覗く歯車の色やわずかなサイズ。そういった細かな違いが、その巨人をこれまで見てきた同型の巨人とは別物だと無言で物語っていた。

古代の機械巨人―アルティメット・パウンド 攻3000

「永続魔法、アンテイク・ギアフォートレス古代の機械要塞を発動。そしてバトル、まずは古代の機械飛竜を奪い返すノーネ！」

地響きとともにそのもう1人の巨人が足を踏み出すことに、その周辺に床をかち割って歯車仕掛けの巨大要塞が浮上する。もちろんソリッドビジョンなことは百も承知なのだがその巨大さはフィールド魔法並みで、巨人がその歩みを止めた時には既にデュエル場全体が要塞の内部に取り込まれていた。

そして、そんな要塞の内部で僕らを見下ろす巨人のモノアイが1瞬光を増す。おもむろに振りかぶられた拳が、要塞の破壊もお構いなしに叩き落された。

古代の機械巨人―アルティメット・パウンド 攻3000↓古代の機械飛竜 攻1700

「一時休戦の効果で、ダメージは……」

「確かにダメージ『は』、通りませんーノ。ですが相手モンスターを戦闘破壊したことで、アルティメット・パウンドの効果発動！手札の機械族モンスター、古代の機械箱を捨てることでその横のグレイドル・

イーグルに連続攻撃！」

「連撃効果!?ならイーグル、あのデカブツに……」

「もちろん、そんな失策を犯すほどこのデュエル担当最高責任者の称号は軽いものではないノ。古代の機械要塞の効果により、このターン場に出された古代の機械は相手の効果対象にならず、相手の効果で破壊されないノーネ！」

次いでもう片腕を振つての爪の一撃が、イーグルの体を大きくえぐる。いつものように衝撃に逆らわず液状に溶けて寄生に取り掛かろうとしたイーグルだったが、その突撃はしかし大量の機械部品や歯車、そして瓦礫に阻まれて肝心の巨人まで届かない。今の一撃が勢い余って要塞内部を破壊し、大量の部品が盾となる格好で跳ね上がったのだ。

古代の機械巨人―アルティメット・パウンド 攻3000↓グレイ  
ドル・イーグル 攻1500 (破壊)

「さらにこの効果は、1ターンに2回までの使用ができる。アルティメット・パウンドよ、その目障りな黄色い鷹に、最後の攻撃をくれてやるノーネ！」

古代の機械巨人―アルティメット・パウンド 攻3000↓グレイ  
ドル・イーグル 守500 (破壊)

再び押しつぶされたイーグルが液状になつての特攻を仕掛けようとするも、またもや破壊された要塞の内部機械にその突撃が阻まれる。

それにしても、あんな隠し玉を手札に抱えていたなんて。もしさつききターン、次のターンぐらいならいくらなんでも大丈夫だろう、と一時休戦を出し渋っていたら?かなりギリギリの選択だったことに気が付いて、どつと冷や汗が噴き出る。用心はし過ぎぐらいでちょうどいい、か。あ、今の575だ。清明心の俳句。

『……それだけ余裕があるならまだ私が出る必要はないな。豪胆、というよりはむしろ紙一重の方だが』

ちよつと考えるぐらい別にいいじゃない、もう。TPOをわきまえて口には出さなかったのに、心読むことはないでしょうに。

そんな冷たいチャクチャルさんは放っておいて、今はクロノス先生だ。古代の機械要塞によって得られる耐性はあくまでこのターンのエンドフェイズまで、次の僕のターンになれば耐性は消えるしダメージも通る。なんとかグレイドルを呼び込むことができれば……だがそんな考えすらも見透かしているかのように、クロノス先生が白い歯を見せて笑う。

「まさかシニョール清明、私がこのアルティメット・パウンドを無防備に立たせたままでターンを譲る、そんな馬鹿なこととは思っていませんよネ？アルデンーテ、まだ私の実技授業はこれからが本番ナノーネ！魔法カード、アイアンロールを発動！私の場に機械族モンスターが存在するとき、私の墓地からレベル4以下の機械族モンスターを効果を無効にして特殊召喚できるーノ。甦れ、古代の機械砲台！」

どうやらついさつき、アルティメット・パウンドが連続攻撃を行う際に捨てたモンスターだったらしい。要塞の床の一部が開いてひっそりと小型の砲台が地面からせり上がってくるものの、効果が無効なためかその歯車は完全に沈黙している。

古代の機械砲台 攻500

「そして魔法カード、機械複製術。この効果で、攻撃力500以下の機械族をデッキから増やすことができる」

古代の機械砲台 攻500

古代の機械砲台 攻500

「……」

攻撃力500の機械砲台が、さらに2門追加でせり上がってくる。でもいまさらモンスターを増やしたところで通常召喚は行えないはずだし、あのカードの自身をリリースして相手にダメージを与える効果だつて一時休戦中の今は何の意味も持たない。と、なるとクロノス先生の狙いは当然……。

『コスト、だろうな』

「これで準備は整ったノーネ。魔法カード、魔法の歯車<sup>マジック・ギア</sup>を発動。私のフィールドからアンティーク・ギアと名のつくカード3枚を墓地に送ることで、手札、そしてデッキから古代の機械巨人を1体ずつ召喚条



件を無視して特殊召喚できますーノ！さあ覚悟するノーネ、シニョール清明！」

せつかく出てきた機械砲台3門だったが、再び床が開いて要塞内に収納されていく。その直後、要塞全体が揺れた。要塞の壁が崩れ、その向こう側の暗闇で輝く赤い光が2つ。自らの開けた大穴をくぐり、2体の巨人がアルティメット・パウンドの横に並び立った。

古代の機械巨人 守3000

古代の機械巨人 守3000

「嘘でしょ……？あんなデカいのが3体？」

「ノンノン、残念ながらそううまくはいかないノーネ。魔法の歯車のデメリットにより、私のフィールドに存在する古代の機械巨人以外のモンスターはすべて破壊されますーノ」

その言葉通り、2体の巨人がやってくると同時にアルティメット・パウンドの体の表面にプラズマが走る。関節部分からは嫌な感じのする黒煙が噴き出し、モノアイの光も頼りなく点滅する。先ほどの3連撃が嘘のようにあっけなく限界を迎えたもう1つの巨人は、仲間たちと並び立つのを待たずしてその場に崩れ落ちた。

「ですがアルティメット・パウンド、あなたの犠牲は無駄にはなりません。このカードがフィールドで破壊された時に私は墓地から古代の機械1枚を、そしてデッキから融合の魔法カード1枚をそれぞれ加えることができますーノ。さらに今サルベージしたカードは古代の機械箱、またまた効果を発動して守備力500の古代の機械騎士をサーチするノーネ」

「またサーチ……それに、融合？」

「ニョホホホ。これが年の功、あなた達みたいな小童とは年季が違うノーネ」

悔しいけど何も言い返せない。このデュエルが始まってからというものの、全てのターンでドロロー以外にもサーチを行っている無駄のない動きは本物だ。おまけに古代の機械巨人は攻撃表示、あれじゃあグレイドルを引けても自爆戦法が使えないときた。

だがそれ以上に気になるのが、デッキからサーチされた融合のカー

ド。融合？そんなものクロノス先生、これまで使ったことあったっけ？

「なにやってんだ、清明ーっ！」

「俺もう就職決まってるんだぞ、負けたら承知しないからなー！」

外野が言いたい放題言ってくれちゃって、まあ。なら今すぐこつち来て場所替わってみろ、ってんだ。

清明 LP3600 手札：3

モンスター：なし

魔法・罫：なし

クロノス LP4000 手札：4

モンスター：古代の機械巨人（守）

古代の機械巨人（守）

魔法・罫：古代の機械要塞

「ドロー」

……仮に融合召喚をするにしても妨害手段があるわけでもなし、考えていたところでどうもならない。守備表示に困るなら、無理やりにも攻撃表示の奴を出してやればいい。そのためにも、このカードが役に立つはずだ。

「魔法カード、強欲なウツボを発動。手札の水属性モンスター、サイレント・アングラーと氷帝メビウスの2体をデッキに戻してカードを3枚ドローする」

これでこのデュエルも5ターン目。確率とかあんま計算したことはないけど、これまでこのデッキを使ってきた体感的にはそろそろ1枚ぐらい手札に来てもおかしくないはずだ。勢いよく引き抜いた3枚のカードに目をやって計算通り、どころかそれ以上の結果によしよしと頷く。

「古代の機械巨人1体をリリースしてクロノス先生、そっちの場に海亀壊獣ガメシエルを特殊召喚！」

要塞の内部を縫って四方八方から飛んできた水流が、片膝で防御姿勢を取る巨人の片方を押し流す。みるみるうちに水没していく姿が見えなくなっていく、やがて完全に包まれたところでその真上から落

下してきた巨大亀がその水の塊ごと押しつぶした。

よしよし、これでまずは1体。でも、まだ終わりじゃない！

海亀壊獣ガメシエル 攻2200

「そしてグレイドル・コブラを召喚。ガメシエルにコブラで攻撃！」

床から先ほど四散したグレイドルのかけらがうぞうぞと寄り集まり、先ほどのイーグルとは違い赤いコブラを形作る。一度体を縮めて足の無い体で器用に踏ん張り、勢いよく大亀に飛びかかっていった。ガメシエルがその太い尾の一振りです突撃を阻むと、その衝撃を利用してコブラの体がまたも四散する。

グレイドル・コブラ 攻1000（破壊）↓海亀壊獣ガメシエル  
攻2200

清明 LP3600↓2400

「ぐっ……でもこれで、コブラは効果が発動できる。もう1体の古代の機械巨人、こっちで預からせてもらいますよっ」と

「ぐぬぬぬぬ、私の古代の機械巨人2体が……思い返せばあなたはそれこそあの入学試験の時から、人のモンスターをリリースするわ奪い取るわと、やりたい放題この上なかつたノーネ」

「勝てば官軍ですよ、勝てば」

「ならば教育的指導の一環として、ドロップアウトに相応しい負けた賊軍にしてやるから覚悟するノーネ！」

古代の機械巨人を奪い取った……のはいいが、あいにくと守備表示なため追撃には移れない。一応守備力3000はあるため壁としても申し分ないけれど……手札にこのカードがあるのだから、その兼ね合いも考えてここは動かしておこう。

「メイン2に奪い取った古代の機械巨人を攻撃表示に変更。さらにカードを2枚伏せて、ターンエンドです」

古代の機械巨人 守3000↓攻3000

「私のターン。魔法の歯車のデメリットによりこのターン、そして次のターン私は通常召喚ができないノーネ。ですがその程度のこと、何の障害にもなりません！手札から魔法カード、アドバンスドロウを発動！私の場のレベル8モンスター、あなたの寄越してきたガメシ

エルをリリースして、カードを2枚引くノーネ」

「でもこれで、先生の場合は空になった……」

「ノンノン、全然問題ないノーネ。私の狙いはむしろ、あなたの送りつけてきた邪魔なモンスターをなくすこと……私のフィールドにモンスターが存在しないことで、このカードの発動条件が満たせたノーネ！魔法カード、アンティーク・ギアカタバルト古代の機械射出機を発動！私の場の古代の機械要塞を破壊して、デツキからこのカードを特殊召喚するノーネ！出でよ、古代の機械素体！」

「しまった、狙いは最初時から……！」

気づいた時にはすでに遅い。条件を満たしたことによりデツキリクルートが行われ、先ほどサーチされたもののすぐにデツキに戻された人型の古代の機械が特殊召喚される。

古代の機械素体 攻1600

「さらにさらに、破壊された古代の機械要塞の最後の効果を発動。表側のこのカードがフィールドで破壊された時、手札か墓地のアンティーク・ギア1体を特殊召喚できますーノ。古代の機械巨人やアルティメット・パウンドには特殊召喚制限があるので呼び出すことができますーンが、このカードにはそんな制限はないノーネ。甦りなサイ、古代の機械飛竜！そしてその効果で、デツキからアンティーク・ギアガレージ古代の整備場をサーチするノーネ」

古代の機械飛竜 攻1700

「すげえ……」

要塞が破壊されたことで再び周りの風景が元の校内に戻っていく中、そんな眩きがギャラリーの誰かからポツリと漏れる。ああ、まったくだ。まるで召喚に制限がかかったターンの動きだとは思えないこの展開っぷり、やっぱりこの人は凄い。何度立ち向かっても圧倒的な強さを見せてくれる、ずば抜けたデュエリストだ。

だけど僕はその人に、ここで勝たなくっちゃいけない。それがこの人から3年間ずっと授業を受けてきた生徒として、絶対にこなさなくちゃいけない最低限の礼儀だ。そんな思いを知ってか知らずか、クロノス先生のターンはまだ続く。

「今サーチした魔法カード、古代の整備場を発動。私の墓地から古代の機械巨人をサルベージするノーネ。そして、古代の機械素体の効果を発動。私の手札1枚を捨てて、デッキから最後の古代の機械巨人をサーチしますーノ」

これでクロノス先生の手札には、古代の機械巨人が2枚。特殊召喚のできないモンスターをそんなに抱えていったい何を……いや、そうか。クロノス先生の手札には、さっきアルティメット・パウンドが死に際にサーチしたあのカードがある。

「どうやら気づいたようなノーネ？魔法カード、融合を発動。手札の古代の機械巨人2体と、場の古代の機械素体の3体を素材として、融合召喚！今こそ進化するノーネ、古代の機械超巨人！」

アンティーク・ギア・メガトン・ゴーレム

メガトン、の名が示すように相当な重量級らしく、これまでの古代の機械巨人をも上回るほどの地響きを起こして大量の砂埃と共に空から降ってきた融合体が着地する。やがてそれも収まり、僕らの前にその姿を現した古代の機械の融合体、その巨人の姿は。

『なかなか壮観だな』

その胴体から飛び出ているのは融合素材数を反映したのか、なんと合計6本もの巨大な鋼鉄の腕。そんな思いつく支える下半身はといえば、もはや人型というよりも移動要塞のような6本の鋼鉄の足。僕らを、そして僕の側に立つ巨人を無感情に見下ろすモノアイが、獲物を発見して光を強めた。

古代の機械超巨人 攻3300

「これだけで終わらせる気はないノーネ。あなたのしぶとさは私もよく知っているから、手加減は抜きで。装備魔法、グラヴィティ・プラスター重力砲を装備し、1ターンに1度攻撃力を400ポイントアップさせますーノ」

古代の機械超巨人 攻3300↓3700

「さあ覚悟するノーネ、古代の機械超巨人で古代の機械巨人に攻撃！」「バトルフェイズに入る前に永続トラップ発動、ディメンション・ガードイアン！このカードの対象になっている限り古代の機械巨人は、あらゆる方法で破壊されない！」

「だとしても、ダメージはそのまま通るノーネ！」

古代の機械超巨人 攻3700↓古代の機械巨人 攻3000

清明 LP2400↓1700

超巨人がその6本の足で体重からは予想もつかないようなスピードで走り、こちらの巨人の眼前に迫る。2体の巨人の右こぶしがほぼ同時に唸り、次の瞬間には轟音と共に互いのパンチがぶつかり合っていた。とはいってもそのその体重も出力も圧倒的に超巨人の方が上、腕力の差で巨人がじりじりと押しこまれていく。

それでもなんとか、巨人は踏ん張った。辛うじて破壊されることなくのぎ切ったところで、超巨人の左腕のうち1本がゆつくりと持ち上がっていくのが見えた。まさか、と思う間もなく、その鋼鉄の爪が無防備な巨人の背中に振り下ろされる。

「古代の機械超巨人は古代の機械巨人を素材としたことーデ、その枚数ぶんだけ1度のバトルフェイズに攻撃が可能なノーネ。私が素材とした古代の機械巨人は2体、よってもう1度攻撃させていただきませーノ」

古代の機械超巨人 攻3700↓古代の機械巨人 攻3000

清明 LP1700↓1000

「なかなかのしぶときですが、その粘りもこのターンまでノーネ。ターンエンド」

辛うじてこのターンはどうか生き延びれたが、ここからどうする？古代の機械巨人の進化体ということは、十中八九あの超巨人も貫通能力は受け継いでいるだろう。となると、巨人を破壊されない壁として置いておくわけにもいかない。

そして更に輪をかけて状況を厄介にしているのがあの装備魔法、重力砲だ。通常の装備魔法とは違い1ターンに1度攻撃力をアップさせていくためその上昇値に際限がなく、たとえ重力砲そのものを破壊したとしても上がった攻撃力はそのままモンスターに残される。おまけに追加効果として装備モンスターが戦闘を行う相手の効果は無効にしてくるため、攻撃を仕掛けるなら純粋にその数値で上回るしかない。

まったく、ここに来て随分きついモンスターを出してくれたもの

だ。

清明 LP1000 手札：1

モンスター：古代の機械巨人（攻・コブラ・ガーディアン）

魔法・罨：デイメンション・ガーディアン（巨人）

1（伏せ）

クロノス LP4000 手札：2

モンスター：古代の機械超巨人（攻・重力砲）

魔法・罨：重力砲（超巨人）

「僕のターン！」

仮にここで壊獣を引くことができたとしても、僕の手札に他の壊獣がない以上巨人の攻撃力で対処できることが大前提となる。超巨人を残しておくよりははるかにマシだが、それにしたって一時しのぎでしかない。ただ唯一光明が見えると思えば、この僕に残った手札デュエル開始時からずっと手元にあった、僕の大切な1枚。もし、もしも、ここであのカードを引くことができれば、あるいは……。

『違うな、マスター。もしも引ければ、ではない』

「え？」

『もつと自信を持つんだ。もしも、はない。引くと言ったら引く、確実に次で引き当てる。それぐらいの気概を見せてみる』

「言ってくれるねえ……でもま、そりゃその通りだね。わかったよ、これまでそうして来たみたいに、今日だって必ず引いて見せるさ。ここからが反撃開始、ドロロー！」

このデッキの中にとった1枚眠る、この状況を打破して逆転に繋がられるカード。それが今、僕の元に……届いた。

「魔法カード、妨げられた壊獣の眠りを発動！全てのモンスターを破壊して、デッキから互いの場に1体ずつの壊獣をリクルートする……でも僕の場の古代の機械巨人は、デイメンション・ガーディアンの効果で破壊から守られる！消え去れ、超巨人！」

壊獣を呼ぶ破壊の嵐がフィールドに渦巻き、超巨人が、そしてその横の飛竜が飲みこまれて粉々になる。だが宣言通り怪獣を呼び出そうとデッキに手を掛けたところで、ふと僕の頭上に影がかかった。実

内なのにどういふことだろうと何気なく見上げると、そこには信じられない存在がいた。

「な、こ、これは……」

「やはり計算通り、効果で除去しにきましたネ。光栄に思いなサイ、私の教師人生の中で、生徒相手にこれを見せるのは初めてナノーネ。融合召喚された古代の機械超巨人は、相手の効果で場を離れた時に後続となるさらなる融合体……古代の機械究極アンテイク・ギア・アルティメット・ゴーレム巨人を特殊召喚するノーネ！」

古代の機械究極巨人 攻4400

超、を越えた究極の巨人、これがクロノス先生の真の切り札だといふのだろうか。手の本数は2本、それを支える足は4本と伝説の魔獣ケンタウロス、そんな言葉を想起させるその姿はパーツの数だけ見れば超巨人の方が上だが、そんなもの微塵も感じさせない規格外さを誇るのはまさにその腕だ。ベースとなる古代の機械巨人と同じものをそのまま流用していた超巨人とは違い、あらゆる面で戦闘に特化されたカスタムの加えられたその両腕はおそらくひと打ちで山をも砕き、海をも叩き割るだけの出力を秘めているだろう。重心を整えるためか背面から飛び出る尾のようなコードが、地面を重く打ち据える。

『マスター？マスター！』

そんな最終兵器を前にして完全に固まっていた僕だったが、頭に直接響くチャクチャルさんの声でどうにか現実に戻された。そうだ、落ち着け。確かに古代の究極巨人は恐ろしいモンスターだし、超巨人が倒れても即座に現れるその様はクロノス先生のよくわからないこの勝負にかける執念の象徴そのものにも見える。

でもそれも、今の僕の敵ではない。あのデカブツをたたっ切る算段は、すでに僕の手の中にある。

「妨げられた壊獣の眠りの効果でクロノス先生のフィールドに多次元壊獣ラディアンを、そして僕のフィールドにはこのカードを！来い、壊星壊獣ジズキエル！」

単純な攻撃力だけで考えるなら、クロノス先生の場に出すのはわずかに400ポイントの差とはいえより攻撃力の低い粘糸壊獣クモグス



の方が適役だったろう。ただクモグスは古代の機械と同じ地属性……ないと思うが、万一地属性サポートが使われた場合のことも計算に入れて閻属性悪魔族かつレベル7なためアドバンスドロウのコスト役にもならないラディアンを選んだ。

多次元壊獣ラディアン 攻2800

壊星壊獣ジズキエル 攻3300

「今更攻撃力3300のモンスターを出した程度で……」

「確かにこのジズキエルですら信じられないことに、今の盤面だったら力不足。だけど僕の手札には今、僕と一緒に戦い抜いてきた原点にして頂点の切り札がある！攻撃力3000の古代の機械巨人、そして同じく3300のジズキエル。この2体をリリースしてアドバンス召喚、霧の王！」

「その攻撃力はアドバンス召喚の際にリリースしたモンスターの合計値……まったく、そういうえばあの時も、あなたは私の古代の機械巨人をリリースしてその攻撃力を断りもなく一方的に奪っていったノーネ」

どこか遠い目をして、クロノス先生が昔を懐かしむ。あの時、というのは無論、全ての始まりとなったあの入学試験デュエルのことだろう。そしてその目の前で、霧の王がその剣を正眼に構えて究極巨人と対峙した。

霧の王 攻0↓6300

「クロス・ソウルを使ってたあの時とは手順が違いますよ、手順が」  
「でも本質はそのまま、そういうのを馬鹿の一つ覚えと呼ぶノーネ」  
「うっ」

『これは見事に一本取られたな』

「ち、違うもん。こーいのはね、苔の一念岩をも通すつてのさ。今からそれを証明してやる、さあ頼むよ霧の王！古代の機械究極巨人に攻撃、ミスト・ストラングル！」

ここでラディアンを狙えば、クロノス先生のライフは残り500まで減らせる。それはそれで魅力的な案ではあるし一瞬そうすることも考えたが、すぐ思い直して先に危険度が高い方を排除しておくこと

にした。それに、妨げられた壊獣の眠りで呼び出したモンスターには攻撃できる限り必ず攻撃宣言をしなければならぬ。デメリットが附属する。もし上手いこといけば、ここで究極巨人を倒すだけでなく返りにラディアンへの攻撃を暴発させることもできるかもしれない。

そして僕の指示を受けた霧の王が飛び上がり、振りぬかれた剛腕を紙一重の動きで回避して究極の巨人の脳天に自らの剣を振り下ろす。分厚い金属の体に深々と食い込んだ刀身を伝って、黒いオイルがまるで血のように垂れて地面に落ちた。ややあつてその両腕も力を失いだらりと垂れさがり、モノアイの光もみるみるうちに薄くなる。究極の巨人もまた、超巨人の後を追うようにその機能を停止した。

霧の王 攻6300↓古代の機械究極巨人 攻4400（破壊）

クロノス LP4000↓2100

……こ、これで今度こそ、今度こそ倒したはずだ。だがそんな僕の淡い希望を打ち砕くかのように、一度は光を失ったはずのモノアイが再び点灯する。崩れ落ちた体が身震いし、自らの体の残骸を押しつけて三度巨人が起き上がる。だが度重なるダメージにもはやその姿は融合体としての力を完全に失っており、シンプルかつ力強い、そして見慣れた巨人がそこにいた。あの入学試験の時からずっと、1度もあいまみえることのなかった僕らのエースモンスターが、卒業間際のこのデュエルになってようやくフィールドで対峙したのだ。

古代の機械巨人 攻3000

「ま、まーだ次が出てくるの……？」

いつの間にか、息の上がつてきた自分に気づく。始末しても始末してもこれでもう大丈夫だろうと思つたたびにまた形を変え姿を変えて切れ目なくフィールドを支配し続ける巨人ども、一撃でも食らったら即そこでデュエル終了になるような大型モンスターのラッシュに、いい加減単純な体力ではなく精神が疲弊してきたのだ。

「古代の機械究極巨人は破壊された時、自分の墓地の古代の機械巨人1体を召喚条件を無視して特殊召喚できますー。それからシニョール清明、それは当たり前なノーネ……このデュエルは、私は絶対に負けたくないノーネ……」

それは、デュエリストとしてみれば何もおかしなところのない言葉だ。負けたくない、そんなもの誰だってそうだ。だけど、今の言い方には少し引つかかるものを感じる。

「……クロノス先生。そもそも、なんで授業を突然止めちゃったりなんてしたんですか？」

こうして今デュエルしている理由も、結局のところ元をたどればそこに起因する。「このデュエルに」負けたくないということは裏を返せば、負けて授業を再開したくないという思いが根底にあるはずだ。これだけ長い間デュエルを続けてきたのに、まだその理由を誰も聞いていない。

全生徒が、そしていつの間にかその中に混ざっていた鮫島校長やトメさんの視線が集中する中でわずかに沈黙の時間が流れ、次の瞬間クロノス先生が誰も予想しなかった行動に出た。なんとその両目にいきなり大粒の涙が溢れ、恥も外聞もなく男泣きに泣き崩れたのだ。

「マンマミーヤー！」

「えっ？」

「あなた達が卒業なんてしたら、皆とはそれでお別れになってしまいますーノ！そんな寂しいことをこれ以上我慢して、授業なんてとてもじゃないけど私にはできないノーネ！こんなこと私の教師生活の中でも初めての経験だから、もうどうしていいのかわからないノーネ！」

「ええ……」

呆れ半分ではあるが、もう半分は……実は、クロノス先生の言うことも少しわかる。

この3年間は、僕の人生の中でも特に濃い年月だった。開幕死んじやったし、僕。それからも学校で商売始めたり、命どころか魂まで賭けて闇のデュエルを繰り返したり……あの時は無我夢中だったけど、ふと振り返った今なら自信を持ってこう言える。確かに、辛いこともあったけれど。それでもこの3年間はかけがえのない大切な、そして楽しい時間だった。そんな時間が終わるのは、僕だって嫌だ。そしてその思いは、多かれ少なかれここにいる皆が抱えているはずだ。

もしかしたら、授業をボイコットして今クロノス先生の位置に立っていたのは、僕自身や他の生徒の誰かだったかもしれない。でも先生がその役を引き受けてくれているからこそ、僕らはこうしてそれを止める側に踏みとどまっていられる。考えようによってはあの人は今、僕ら全員の持つ弱さをたつた1人で全て抱え込み、越えるべき最後の壁として立ちはだかつてくれているのかもしれない。

そう考えればあの人は、やっぱり最高の教師だ。なんて、少し美化しすぎたろうか。ま、そんなのもたまにはいいだろう。ロマンチックは嫌いじゃない。

「ムムム……さあ、わかったら、早くターンを譲るノーネ！」

ようやく少し落ち着いたクロノス先生が涙を袖でぬぐい、若干赤い目のまま立ち直る。

「……ターンエンド！」

次のターンだ。次のターンで、全ての運命が決まる。なら僕も、覚悟を決めてどっしりと迎え撃つのみだ。

「私のターン！」

このドロウで、クロノス先生の手札は計3枚。ただそのうち1枚は、先ほどサーチした古代の機械騎士かサルベージした古代の機械箱のどちらかと見てほぼ間違いないだろう。少なくともどちらかは古代の機械素体の効果を発動するために手札コストとして使われたはずだから、両方が手札にある可能性はまずない。どちらも今更この状況に影響を与えるカードではないだろうし、何よりクロノス先生はこのターンもまだ魔法の歯車のデメリットである通常召喚不可の制約を受けているからこれは無視しても問題ないはずだ。となると、警戒すべき残りは2枚。

「魔法カード、受け継がれる力を発動。私のフィールドから多次元壊獣ラディアンを墓地に送り、その元々の攻撃力を古代の機械巨人にこのターンの間加算するノーネ」

「墓地に送り、か……」

霧の王はフィールドに存在する間互いのプレイヤーにあらゆるカードのリリースを許さない永続効果を持っているが、墓地に送り発

動するカードまでは防げない。ただそれでも古代の機械巨人の攻撃力は、霧の王にあと1歩のところでは届かない。

古代の機械巨人 攻3000↓5800

「墓地のトラップカード、スキル・サクセサーを発動！このカードを外し、古代の機械巨人の攻撃力をこのターン800ポイントアップさせるノーネ！」

「……っ！」

違う。手札コストは、古代の機械箱でも古代の機械騎士でもない。第三の手札は、とづくにこのターンへの布石として墓地に送られていたんだ。更なる強化を受けた古代の機械巨人の攻撃力が、なんとこのターンだけで霧の王に追いつき、そして追いついた。

でも……でも、それでも僕は。

古代の機械巨人 攻5800↓6600

「これが私の本気、私の持てるすべてナノーネ。長かったこのデュエルにもここで決着をつけてやりますーノ、アルティメット・パウ……」  
攻撃宣言をしようとしたクロノス先生の言葉が、途中で止まる。その視線の先には、霧の王……片目を銀色に染めたオッドアイとなり、さらに上の力を得た僕の、そして僕たちの姿があった。

霧の王 攻6300↓6800

「……すいません、先生。トラップ発動、グレイドル・スプリット。このカードを霧の王の装備カードと、して……こうげ、き、力を、500ポイント……」

そこまで言うので限界だった。必死にこみあげてくる涙を隠すために下を向き、両目に力を入れて溢れ出るそれをなんとかせきとめようとする。すいません、そんな謝罪の言葉を、震え声でもう1度吐き出す。クロノス先生が負けたくないという気持ちの源を知ってしまった以上、このカードを発動することに対しての躊躇いは大きかった。もしここで僕がこのまま負ければ、誰も卒業しなくて済む。

だけど、それでも、僕はここで勝つことを選んだ。墓地にスキル・サクセサーがあったということは、残る手札は先ほど見た2枚だということ。つまりクロノス先生にはもう、これ以上打つ手はない。

後悔がないといえ、大嘘になる。自分の手でこの生活との訣別の一手を打ったのだから、それが悲しくないわけがない。

自分に言い聞かせる意味も込めて、何度でも言おう。それでも僕は、ここで勝つ道を選んだのだ。

「私の墓地から古代の機械射出機の効果を使って……いえ、グレイドル・スプリットには確か、モンスター2体をリクルートする効果もあったノーネ。私はこれで、ターンエンドしますー」

不思議と、クロノス先生の口調は穏やかだった。憑き物が落ちたように微笑むクロノス先生の横で、強化カード2枚の効果が切れた古代の機械巨人の出力が通常の状態に戻っていく。

古代の機械巨人 攻6600↓5800↓3000

「さあシニョール清明、何をぐずぐずしているノーネ。私が教師として全力で受け止めてあげますから、あなたも生徒として全力でぶつかってくるノーネ！」

きっぱりと言い切るクロノス先生の声に後押しされるように、涙を振り払って顔を上げる。

「霧の王っ！古代の機械巨人に攻撃……ミスト・ストラングルウツツ！」

それは、ほとんど絶叫に近かった。もう一度だけ繰り返し返そう。それでも、これがぼくの選んだ道だ。迷いも後悔もあるけれど、それでも僕は前を向こう。

霧の王 攻6800↓古代の機械巨人 攻3000（破壊）

クロノス LP2100↓0

こうしてクロノス先生の授業ボイコット事件は終わりをづけ、その翌日からは無事に授業も再開された。時々ふとしたきっかけでしみりした空気になったりすることもあったけど、それぐらいの変化は仕方ないだろう。また、何事もない日常が戻ってきたのだ。

……約1名を除いて。

「チクショウ、こんなことになるなら、ちゃんと授業受けとけばよかつ

たっつ！」

ああ、今日も大量にサボりまくった授業のツケとしてこれでもかとはばかりに補習を受ける十代の悲鳴が校舎に響く。申し訳ないけど、これに關しては僕も散々口を酸っぱくして注意はしてたしねえ。僕知らないっつと。

## ダークネス・クライマックス ターン119 科学水龍と大地の龍脈

「俺はこのメイン2にハードアームドラゴンとメタルデビル・トークンをリリースして、絶対服従魔人を召喚！これでこいつは効果破壊もされずにカード効果の対象にもできず、さらに破壊したモンスター効果は無効になる！さあ遊野先輩、これなら……」

「わーっただわーっただ。んじゃそれリリースして、代わりにドゴランあげるからさ」

僕の目の前にそびえ立っていた、後輩クンの呼び出した巨大な赤い魔人の姿が風に消え、代わりに炎を操る強大な壊獣が現れる。さよーならー、と手を振り見送ってから、次のカードをすぐに出す。

「……え？」

「で、イーグル召喚。ドゴランに攻撃して、戦闘破壊されたイーグルの効果でドゴランに寄生。3000ダイレクトで終わりね」

「う……嘘だあーっ！」

メタルデビル・トークンは強力な効果と引き換えに、その維持に毎ターン1000ものライフコストがかかる。その上で攻撃力3000のドゴランの攻撃をまともに喰らえば、まあこんなものだろう。

「はい2点もーらい。おらおら、次は誰？誰でもいいからかかっておいでー」

これ見よがしに手招きするも、今のワンショットキルを見てすっかり氣勢が削がれたらしい。周りを囲む人垣が一斉に下がり、ざわつくのが見て取れた。まったく情けない、自分から来ておいてその態度はないだろうに。

さて。そもそもなんで僕がデュエルしている……もとい、デュエルしていたのかというと、それは今日の昼にまで遡る。

「全校生徒の諸君、本日集まってもらったのは他でもない。いよいよ



今年も、卒業デュエルの時がやって来た。泣いても笑っても、3年生諸君はこれが最後の学生生活となる。悔いのないように、全力を出し切り、デュエルに挑んでもらいたい！」

全校集会を開き、こんな演説をする鮫島校長。卒業デュエル、かあ。思い返せばこの3年間、なんだかあつという間だった気しかしい。思い返すともなくぼんやりと過去の記憶に浸っていると、壇上では校長からクロノス先生にバトンタッチした。つい先日授業ボーイコットをやっていた人間と同一人物とは思えないほど本人なりにキリリとした表情で、僕らに向かって一礼したクロノス先生が声を張り上げる。

「それでは皆さん、今年の卒業デュエルのルールを発表しますノーネ。卒業生の目的は、デュエルをすることで蓄積する得点を重ねて100点にすること、ただ1つノーネ。デュエルするたびに勝敗にかかわらず各1点をベースとして、1年生に勝つことができたらさらに1点。2年生に勝てば2点、同じ3年生に勝てば3点がさらに加算されますノー。同じ相手との連戦や敗北による減点はナッシング、累計点数が100点に達すればその生徒は晴れて卒業デュエルをクリアしたとみなしますノー」

勝敗に関わらず1点は入ってくるなら、これで落第することはまずないか。要するに、本当に最後のお祭りイベント的な意味合いなのだろう。

「そしてこの卒業デュエル期間中に皆さんの溜めた点数は、そのままデュエルアカデミアの最終成績になりますノー！」

「主席となった生徒にはかのキング・オブ・デュエリスト、武藤遊戯のレプリカデツキをインダストリアル・イリユージョン社から贈呈されるという。繰り返しですが、君達には悔いの残らないよう、全力でデュエルに取り組んでほしい」

話を再び引き取った鮫島校長の言葉を最後に、ついに卒業デュエルが始まった。レプリカデツキ……昔、神楽坂が持ち出してちよつとした騒ぎになったアレのことだろう。あの事件ももう2年前か、早いもんだと思いつつながらチラリと振り返る。案の定あの時のことを思い出

していたらしく若干きまり悪そうな神楽坂と目が合って、その様子が何ともおかしくてついつい笑ってしまった。

その横では翔や万丈目、明日香に最近ようやく復活した吹雪さんがそれぞれ楽しそうに言葉を交わし、それぞれバラバラの方向へと歩きます。お互いに長い付き合いでその手の内も強さも知り尽くしているからこそ、直接の対決は後に回そうということだろう。それについては、僕も同感だ。ぐっと背伸びをして、レッド寮に向けてふらりと足を向ける。新入生も入ってこなくなり来年からは事実上の廃寮となる僕らの家に、せめて最後にもう1回だけでも人を集めたい……なんて、ちよつとメルヘン過ぎるだろうか。

そして、今だ。どうやら、僕の思考パターンというのは僕が思っている以上に読みやすかったらしい。

『え、それ今更言うのかマスター』

「素でツツコムはやめてチャクチャルさん」

レッド寮にたどり着いた僕を待っていたのは、わらわらと集まっていた後輩たちだった。僕と、それから十代は確実にここにいるはずだと、卒業デュエルのルールが発表されるや否やわざわざ真っ直ぐここまで来たらしい。そこまでしてくれたんなら、僕も少しは先輩らしいところを見せるとしよう……と思っつつい張り切っちゃったけど、さすがに初っ端からのワンショットキルはやり過ぎだったろうか。いや、でもなあ、せつかくキルできるのに見逃すのもちよつと……。

あーだこーだと悩みながらさっきのデュエルで墓地に行ったカードを引き出そうとして、ふと気が付いた。デュエルディスクのエネルギー残量が、もうほぼ0に近い。このデュエルディスクとも霸王の世界からの付き合いだけど、つくづく実感したことが1つある。

……三沢本人も釘を刺してたけどこの水妖式デュエルディスク、本当に燃費が悪い。腕輪状態からの展開、さらにデュエル中の処理までを水のエネルギーだけで賄おうというんだから当然といえば当然なんだらうけど。

「ごめん皆、いったん部屋に戻っていい？すぐ戻るから」

誰も止めてこなかったので、ありがたく寮内に入らせてもらう。勝ち逃げみたいで申し訳ないけど、そんなこともあるさ。ふと人波の向こうに、十代がデュエルしている姿も見えた。相手は……ホルスの黒炎竜と王宮のお触れ、いわゆるお触れホルスの布陣だ。強力な相手に苦戦しているようではあるけれど、最終的に十代ならなんの勝つだろう。

部屋に入つてすぐのところにある洗面台の蛇口をひねり、水の冷たさに顔をしかめながらも腕輪にどばどばと水をかけ始める。だがもの数秒もしないうちに突然、全身に悪寒が走った。この感覚、覚えがある。

「ミスターT……！」

『最近大人しかったからな。ようやく尻尾を出してきたか』

やむを得ない、この緊急事態に悠長に補給してる暇はない。表口にはまださっきの後輩たちがいるだろうから、窓側に回り込んで飛び降りよう……としたところで洗面台まで取って返し、慌てて蛇口を逆方向にひねり水を止める。出しっぱなしは水道代へのダイレクトアタックだ。

今度こそ窓を開けて飛び出すと足音を立てないように着地、島の奥に向けて走り出した。ミスターT独特の闇の気配というか嫌な感覚が、みるみる近くなってくる。

『そこだー！』

チャクチャクさんの叫びに応じて足を止め、サツと周囲を警戒する。

……いた！たった今まで誰かとデュエルしていたらしく、腕に付けたデュエルディスクの光が消える瞬間がちやうど見えた。相手は、誰かはわからないが後輩のイエロー生だ。あの怯えた様子からいって、恐らく瞬殺されたのだろう。

「さて。では約束通り、君には消えてもらおう」

「ひ、ひえ……く、来るな！近づくな！」

「やらばだ」

ミスターTがすつと片手を伸ばし、腰が抜けて座り込んだまま必死に後退しようとするイエロー生に近づいていく。状況からいって、ぎりぎり間に合ったってところか。

「待て、ミスターT！」

伸ばした手が、ぴたりと止まった。ゆつくりと振り返るその顔のサングラスの奥は相変わらずうかがい知れないが、その表情を見れば明らかに僕の乱入に苛立っているのがわかる。

「もう私に気が付くとは、まったく暇なことだ」

「もう僕に気づかれるとは、まったく無能なことだ」

できるだけ口調をまねて言い返してやると、さらに苛立ちが増したのが伝わってくる。突然のことに思考が追いつかないのか呆然としたまま成り行きを見ていたイエロー生を見下ろし、無言で顎で指し示す。それでも動こうとしないので、ちよつぴり声を荒げて活を入れた。

「早く行きな！」

「う、うわあ〜っ！」

さすがのイエロー君もそこでようやく我に返ったのか金縛りが解けたかのように跳ね起き、這う這うの体でレッド寮の方に向かって走り出す。その背中が木々の向こうに完全に隠れたのを確認してから、ミスターTへと向き直る。

「ここまで邪魔するつもりならば仕方がない、お前から消えてもらおうとしよう」

「よく言うよ3戦3敗。その連敗記録、もういつペン伸ばしてあげようか？」

売り言葉に買い言葉を返しながらも、そう笑う口の端が引きつってはいないだろうかと不安になる。なにせこのデュエルディスク、あんな1瞬水をかけた程度の今の状態だとせいぜい1ターンやそこらしか動きそうにない。電源が切れたから仕切り直し……なんて甘い話の通じる相手じゃないだろうし、そうなった以上強制敗北とみなされるのがオチだろう。

となると、僕に残された道はただ1つ。このミスターT相手に、つ

いさつき後輩にやったようなワンキルをぶちかますしかない。なんのかんの言ってもミスターTは僕が3連勝できたことが不思議なくらいの強敵だ、口にするほど簡単にいく話でもないのは僕が一番よくわかってる。でも、ここでやるしか道はない。ここに駆けつけた時点で、こうなることはわかっていたんだ。

あれ?……てかこれ、今気づいたんだけど。最初にミスターTの気配を感じた時点で、すぐそこでデュエルしてた十代を引っ張ってくれば割となんとかあったのではないだろうか。

……もうやめよう、この話は。仮定はどこまでいっても、あくまで仮定でしかない。

「さ、さあ来い!」

「では望み通り。デュエ……」

「おっと。そのデュエル、俺が代わりに引き受けよう!」

完全に自業自得な決死隊の覚悟でデュエルディスクを構えたところで、どこからともなく鋭い一喝が飛ぶ。1瞬十代が来たのか、とも思ったが、すぐに打ち消した。いや違う、どうしてこの声を忘れられるだろう。僕とミスターTが向かい合うすぐ横の空間が突然ぐにやりと曲がり、陽炎でも起きてるかのよう不安定に揺れ始める。そこからぬつと人の足が出てきたかと思うと、すぐにその上半身が1歩1歩踏み締めるようにしてゆつくりと近寄ってきた。

ああやっぱり、間違いない。ずいぶん遅い登場だけど、待ってたよ同士。

「三沢!」

「ああ、久しぶりだな。遅くなってすまない、こちらの世界に戻るための仕掛けがなかなか整わなくてな。そちらの世界に今何が起きているかは、俺もだいたい知ってる。お前がミスターT、だな?」

相変わらず、この男の話が早い。ミスターTも僕より三沢を最優先で倒すべき対象と判断したらしく、僕のことなどすでに眼中にないと言わんばかりに三沢の方を向く。デュエルディスクを構えるのは、ほぼ同時だった。

「いかにも。多少なりとも私の知識はあるようだが、その上で私の前

に姿を現すとはな」

「俺の友人が無茶したからな。もつとも、その原因は未成品を渡した俺にもあるわけだが」

「面目ないね。ここは任せるけど……気を付けて」

「ああ。せつかくカツコつけて帰ってきたんだ、どうにかしてみるさ」  
「デュエル！」

「先攻は俺が貰った。マスマティシヤンを召喚し、その効果でデッキからレベル4以下のモンスター、オキシゲドンを墓地に送る。まずは基盤固め、カードを伏せてターンエンドだ」

マスマティシヤン 攻1500

オキシゲドン………ということはあのデッキは、三沢が6つの属性デッキの中でも特に愛用している水のデッキ、ウォーター・ドラゴンを軸としたあれだろう。相変わらず堅実な進め方だ。

「私のターン。キラートマトを召喚し、バトル。マスマティシヤンに攻撃する」

キラートマト 攻1400

キラートマトは攻撃力こそマスマティシヤンに劣るものの、その真価はまさに戦闘破壊されることそのものにある。いわゆる属性リクルーターにとって、攻撃力1500というのはほどよい起点づくりにしかならない。

「おっと、ただで通すわけにはいかないな。トラップ発動、鎖付き爆弾！このカードは俺のモンスター1体を選択し、その装備カード

となって攻撃力を500ポイントアップさせる。迎え撃て、マスマティシヤン！」

マスマティシヤンの握る杖が長い鎖の先にダイナマイトのくくりつけられた物騒な武器になり、その鎖を振り回してキラートマトに反撃する。いくら化け物トマトとはいえ元々攻撃力では劣っていたのだ、当然パワーアップした1撃を受け切れるわけがない。

キラートマト 攻1400 (破壊) ↓マスマティシヤン 攻1500 ↓2000

ミスターT LP4000 ↓3400

「少々計算外のダメージだったかい？だが、今のはほんの挨拶代わりだ。こんな物じゃ済まさないぞ」

「キラートマトの効果により、戦闘破壊され墓地に送られたことで攻撃力1500以下の閥属性モンスターを攻撃表示で特殊召喚する。2体目のキラートマトを召喚し、もう1度マスマティシヤンに攻撃。そして3体目を呼び出し、もう1度攻撃だ」

「何!?!……ふん、噂通りの戦い方だな」

通常なら、無駄に増えるダメージを嫌って大人しく攻撃をやめる場面だろう。だが、ミスターTにその手の常識は通用しない。痛みを受けないのいいことに自分へのダメージを顧みずに初志貫徹するあのファイトスタイルには、僕も十代も苦しめられてきた。

キラートマト 攻1400 (破壊) ↓マスマティシヤン 攻2000

ミスターT LP3400 ↓2800

キラートマト 攻1400 (破壊) ↓マスマティシヤン 攻2000

ミスターT LP2800 ↓2200

「そして3体目の効果を発動。儀式魔人デモリツシヤンを特殊召喚する。カードを1枚伏せ、ターンエンドだ」

「リリーサーではない?……まあいい、儀式魔人ということは儀式デッキか」

3体目のキラートマトが倒れ、最後に呼び出されたのは自分の身長よりも巨大な斧を担いだ太った小人。どうやら今回のミスターTは、儀式召喚を操るらしい。

三沢 LP4000 手札:3

モンスター:マスマティシヤン (攻・爆弾)

魔法・罫:鎖付き爆弾 (マスマティシヤン)

ミスターT LP2200 手札:4

モンスター:儀式魔人デモリツシヤン (攻)

魔法・罫:1 (伏せ)

「俺のターン。ここは臆さず攻める、ハイドロゲドンを召喚。さらに

装備魔法、やりすぎた埋葬を発動！手札からレベル8のウォーター・ドラゴンを捨てることでそれ以下のレベルを持つオキシゲドンを蘇生、このカードを装備する！」

「出たー！」

ハイドロゲドン 攻1600

オキシゲドン 攻1800

ハイドロゲドン、そしてオキシゲドン。三沢得意の化学式戦法は、すでに完成間近にまで到達していた。もつとも、今回はそこまでたどり着く前に勝負がつきそうだ。

「バトルだ、ハイドロゲドン！儀式魔人デモリツシャーに攻撃、ハイドロ・ブレス！」

「トラップ発動、メタバース。このカードの発動時、デツキからフィールド魔法1枚をサーチするか、そのまま場に発動する。私は、チキンレースを発動しよう」

「なるほど、だから最初にキラートマトをぶつけてきていたのか。万一にも俺のライフがお前を下回らないように……！」

チキンレースは近頃のフィールド魔法にしては珍しく、互いのプレイヤーに影響の及ぶカード。ライフポイントが低い方のプレイヤーが、あらゆるダメージを受けなくなる。恐らく三沢の言った通り、あの3連自爆特攻は、単なるデツキ圧縮だけではなくライフ調整の意味も兼ねていたということだろう。悔しそうに唸る三沢だが、ハイドロゲドンの攻撃は止まらない。

ハイドロゲドン 攻1600 ↓ 儀式魔人デモリツシャー 攻1500 (破壊)

「だがこれで、ハイドロゲドンの効果を発動だ。このカードが相手モンスターを戦闘破壊したことで、デツキから更なるハイドロゲドン1体を特殊召喚できる」

ハイドロゲドン 攻1600

これで三沢の場にはマスマティシヤンの他に水素、水素、そして酸素の3分子が揃った。となると、結局導き出されることになった化学式は1つ。



「このメイン2に魔法カード、ボンディングH20を発動。ハイドロゲドン2体とオキシゲドン1体を素材として結合召喚、俺の墓地に眠るこのモンスターを呼び戻す！出でよ、ウォーター・ドラゴン！」  
ウォーター・ドラゴン 攻2800

そして現れた、炎属性と炎族の天敵ともいえる三沢のエースモンスター。あのややこしい召喚条件を今回もまるで苦戦した様子もなく満たすあたり、どうやら異世界暮らしの生活でもその腕は鈍っていないようだ。だがミスターTは、そんなウォーター・ドラゴンのプレッシャーを目の当たりにしても涼しい顔のままだ。

「さらにターンを終える前に、お前の発動したチキンレースの効果を使わせてもらう。ターンプレイヤーは1ターンに1度1000ライフを払うことで、3つの効果から1つを選択して発動できる。俺が選ぶのは、1枚ドローする効果だ」

三沢 LP4000↓3000

抜け目なくミスターTのカードを逆利用し、無くなった手札を補充する三沢。そのカードを一瞥してそのまま場に伏せ、ミスターTにターンを回した。

予想外の粘りを見せられたとはいえ、ここまではおおむね三沢のペースとっていいだろう。

「私のターン。まず、私もチキンレースの効果を発動する。1000ライフを払い、1枚ドローだ」

ミスターT LP2200↓1200

たった今三沢が使ったものと同じ効果により、ミスターTもまたカードを引く。これで奴の手札は6枚、さあ何をしてくるか。

「アーマード・ビーを通常召喚し、その効果を発動する。ウォーター・ドラゴンの攻撃力は、このターンの間半減される」

巨大な蜂のモンスターが鋭い尾を向け、毒針を水龍に打ち込む。いかに体が水とはいえ毒までもを無効にすることはできなかつたらしく、苦痛の音が森に響いた。

アーマード・ビー 攻1600

ウォーター・ドラゴン 攻2800↓1400

「ウォーター・ドラゴン！」

これで、アーマード・ビーの攻撃力がウォーター・ドラゴンを上回った。けどウォーター・ドラゴンには、破壊された時に墓地の素材となったモンスターを蘇生する強力な効果がある。たとえばここでわずかにダメージを受けたとしてもオキシゲドンの攻撃力は1800、十分対応可能な範囲だ。

「チキンレースを張り替えてフィールド魔法、天空の虹彩を発動。このカードは1ターンに1度私の場で表側のカードを破壊することで、デッキからオッドアイズと名のつくカード1枚を手札に加えることができる。私はアーマード・ビーを破壊し、オッドアイズ・グラビティ・ドラゴンをサーチする」

「オッドアイズ……」

オッドアイズ使いのミスターT、といえば、あの廃寮で戦った奴を思い出す。でもあの時の奴の戦術はF・G・Dファイブ・ゴッド・ドラゴンを融合しての力押しで、オッドアイズはあくまでアクセント的な扱いだったはずだ。となるとあれからデッキを変えたのか、それとも別のミスターTなのか……いや、そもそも奴に別固体、なんて概念が存在するのだろうか。

まあ、存在しようがしまいがそんなもの別に知りたくもない。出てくる端から全員潰していけば、それで済む話だ。

「儀式魔法、大地讃頌を発動。手札の地属性儀式モンスターと同レベルになるようにモンスターをリリースすることで、そのモンスターを儀式召喚する。私は手札のレベル4モンスター、エレメント・デビルと墓地のレベル3、儀式魔人デモリッシャーを自身の効果によりリリースの代わりに除外することで、儀式召喚！降臨せよ、オッドアイズ・グラビティ・ドラゴン！」

その圧倒的な質量と重量により、着地しただけで大地を揺るがす巨漢のドラゴン。オレンジ色の身体にはまるで鎧のように岩と化した鱗が生え、桁外れの体重を支えるためかその両足はこれまでに僕が見てきたどのオッドアイズよりも太く力強い。

オッドアイズ・グラビティ・ドラゴン 攻2800

「オッドアイズ・グラビティ・ドラゴンの効果発動。このカードが特殊

召喚された際、相手フィールドに存在する魔法及び罨カードは全て持ち主の手札に戻る」

「やむを得ない、か」

どうやら三沢の場のカードは、フリーチェーンの物ではなかったらしい。重力の龍がおもむろにその片足を上げてドシン、と踏み鳴らすと、それだけで着地点を中心としたクレーターとともに衝撃波が走り三沢のカードを巻き上げる。

『それは違うなマスター。どうせあの効果にはあらゆる効果がチェインできない、儀式召喚を通した時点で手遅れだ』

チャクチャルさんの補足が聞こえるが、残念ながら今の余波にこっちまで巻き込まれて倒れないようにするので精いっぱい返事をする余裕がない。弱体化したウォーター・ドラゴンと、それを守るべき伏せカードを失った三沢の場を一瞥し、重力の龍が灰色と暗いオレンジの2色が螺旋状に絡まったブレスを放った。

「バトルだ。オッドアイズ・グラビティ・ドラゴンで、ウォーター・ドラゴンを攻撃する」

オッドアイズ・グラビティ・ドラゴン 攻2800↓ウォーター・

ドラゴン 攻1400 (破壊)

三沢 LP3000↓1600

「ぐっ！だがウォーター・ドラゴンが破壊されたことで、効果発動……!？」

発動宣言した瞬間、三沢の顔が苦痛に歪む。闇のデュエルの痛み……にしてはタイミングがずれていた気がするし、今度は何が起きているというんだらう。目に見えない何かに耐えているのか、背を丸めて足元がふらつきながらも辛うじて膝をつくようなことはなかった。

三沢 LP1600↓1100

「オッドアイズ・グラビティ・ドラゴンが存在する限り、相手プレイヤーはカード効果を発動するには500のライフコストを払わねばならない」

「カード1枚で500……?？」

かの極悪な永続魔法、魔力の枷を思わせるプレイヤーに直接干渉す

るタイプのロック効果。しかも、自分には何のデメリットもなく相手だけを一方的に縛る効果ときた。早いとこあのドラゴンを除去しない限り、何かするごとに三沢のライフが削られてしまう。

ただこれで、なぜ最初のターンにキラ・トマトで儀式魔人リリサーを特殊召喚しなかったのかの理由が分かった。儀式モンスターが存在する限り特殊召喚封じの効果を発揮するリリサーでは拘束力が強すぎて、あのオッドアイズの効果を生かせる場面がかえって少なくなってしまう。あえて特殊召喚は通すという隙を見せることで、場の展開のためにカード効果を使わせようという腹なのだろう。効果的かつ卑劣な手だが、それは同時に慢心でもある。ガツチガチに場を固めに来ない以上、必ず逆転のチャンスはあるはずだ。

「ウォーター・ドラゴンの効果で、墓地のハイドロゲドン2体とオキシゲドンを特殊召喚する！」

どうにか持ち直したらしく、再び背筋を伸ばした三沢が墓地から3枚のカードを引っ張り出す。その言葉通り、再び分離した水素と酸素のモンスターが場に解放された。

ハイドロゲドン 守1000

ハイドロゲドン 守1000

オキシゲドン 守800

「私のオッドアイズ・グラビティ・ドラゴンが存在する限り、君が発動できるカードは後2枚。せいぜい考えて選ぶことだな。さらに装備魔法、リボンリボンをオッドアイズ・グラビティ・ドラゴンに装備してターンエンド」

オッドアイズに装備された装備魔法……あれは確か、装備モンスターが戦闘破壊された時にそのモンスターを1度だけ復活させるカードだったはずだ。これで戦闘破壊に対する備えも十分、というわけだ。

三沢 LP1100 手札：1

モンスター：ハイドロゲドン（守）

ハイドロゲドン（守）

オキシゲドン（守）

マスマティシヤン（攻・爆弾）

魔法・罨：鎖付き爆弾（マスマティシヤン）

ミスターT LP1200 手札：1

モンスター：オッドアイズ・グラビティ・ドラゴン（攻・デモリツ  
シヤールリボン）

魔法・罨：リボーンリボン（オッドアイズ）

場：天空の虹彩

「忠告には感謝するが、まだ負けたわけではない。俺のターン、ドロ  
ー！」

これで三沢の手札は2枚。その中身を一目見て、まるで最初から計  
算づくだったといわんばかりの躊躇いの無い動きで次の行動に取り  
掛かる。

「俺はマスマティシヤンをリリースして、デューテリオンを守備表示  
でアドバンス召喚する。さらにカードを伏せて、ターンエンドだ」

「デューテリオン……？」

1ターン目からずつと破壊されることなく留まっていたマスマ  
ティシヤンが消え、代わりにハイドロゲドンとよく似た姿の2種類目  
の水の恐竜が召喚される。アドバンス召喚が必要な上級モンスター  
とは思えないほど低いそのステータスに関しては僕も人のことは言  
えないのでいいとしても、僕の記憶が正しければ、あんなモンスター  
三沢は持っていないはずだ。

デューテリオン 守1400

不審げな僕の声は、どうやら聞こえていたらしい。まださっきのダ  
メージが体に残っていて苦しいだろうに、そんな様子を微塵も感じさ  
せない笑顔で三沢が振り返る。

「おいおい清明、俺だって研究者以前にデュエリストなんだぞ。向こ  
うの世界にいる間に、この化学式デッキも強化しておいたのさ。もつ  
とも、まだ少しコマが足りないがね」

コマが足りない……つまり、デューテリオンだけではまだ不足とい  
うことか。でもあの余裕は、決して空元気ではない。それだけ、その  
先にあるカードのことを信用しているのだろう。だがどれだけ信用

していいように、まずはこの次のターンを乗り切らないことには話にならない。

「私のターン。ユニオンモンスター、バスター・ショットマンを召喚。このカードをオッドアイズに装備することで、その攻守を500ダウンさせる」

バスター・ショットマン 攻0

オッドアイズ・グラビティ・ドラゴン 攻2800↓2300 守2500↓2000

青いカラーリングの人型ロボットが召喚されたかと思うと、すぐさまその全身を変形させて巨大な砲になる。オッドアイズ・グラビティ・ドラゴンが重力波を放ちそれを引き寄せ、体の前面に装着する。合体と同時に結合部分から火花とスパークが走り、オッドアイズの体が不気味なプラズマに染め上げられた。

「バトルだ。オッドアイズ・グラビティ・ドラゴンで、オキシゲドンに攻撃する」

オッドアイズ・グラビティ・ドラゴン 攻2300↓オキシゲドン守800（破壊）

三沢の場で守りを固めていた4体のモンスターのうち、酸素を司る恐竜が破壊される。残るモンスターはこれで3体……と思うや否や、合体するだけで沈黙を保っていたバスター・ショットマンの砲に突然エネルギーが溜まり始める。その両手足を変化させてできた計3門の砲口から、一斉にエネルギー弾が放たれた。着弾と同時に目も眩むような閃光が発生し、やっとそれが収まった時にはすでに三沢のフィールドを埋め尽くしていたはずのモンスターは1体も残っていなかった。

「バスター・ショットマンの装備モンスターが戦闘で相手モンスターを破壊した時、フィールド上に存在するその破壊されたモンスターと同じ種族のモンスター全てを破壊する。従ってオキシゲドンと同じ恐竜族のハイドロゲドン、そしてデューテリオンはすべて破壊だ」

「随分派手にやってくれたな……」

「そして、このターンも天空の虹彩の効果を発動する。バスター・

ショットマンを破壊し、デッキから2枚目のオッドアイズ・グラビティ・ドラゴンを手札に。これにより、場のオッドアイズ・グラビティ・ドラゴンの攻守は元に戻る」

「なるほどな。アフターケアも織り込み済み、か」

オッドアイズ・グラビティ・ドラゴン 攻2300↓2800 守2000↓2500

バスター・ショットマンの装備が無理やりとはいえ外されたことで、ダウンしていた攻守が元の数値に戻る。三沢はこんな時でも冷静に分析しているからあまり悲壮感はないけれど、このターン生き残れたのは本当に辛うじてなレベルのはずだ。今回は何とか三沢のターンに繋がるけれど、場のモンスターが全滅してしまった以上次はないと見ていいだろう。となると三沢の言うコマとやらが揃うかどうかは、次のドロートだ1枚にかかっている。

「俺のターン、ドロート！」

かたずをのんで見守る中、三沢がその運命のカードを引き抜く。真剣な表情のままそのカードに目をやり……そして、その口元が勝利の確信に綻んだ。

「このデュエルはここで終わりだ、ミスターT！トラップ発動、ボンディングーDHO！このカードは発動時に俺の手札または墓地のデューテリオン、ハイドロゲドン、オキシゲドン

D、H、Oを1体ずつデッキに戻し、手札または墓地からこのモンスターを結合召喚する！」

三沢 LP1100↓600

従来のボンディングとは異なる原子配列により、新たなる化学式が構築される。結合により生み出されたそれは、古龍らしく水の髭が生えていたり目つきがより鋭くなっていたりするなどの細かい点を除けば、一見普通のウォーター・ドラゴンとほとんど変わりがないように見えた……だが、違う。その迸る水龍の体の隣に、さらにもう1本同じ水龍の首が持ち上がる。双頭のウォーター・ドラゴンが、2つの口で同時に吠えた。

「水を超えし重水の龍！ウォーター・ドラゴン………クラスター！」

ウォーター・ドラゴンークラスター 攻2800

「だがその攻撃力は、私のオッドアイズと同じ。引き分けといたいところだろうが、あいにくオッドアイズにはリボンリボンが装備されていることを忘れたのか？」

「忘れちゃいないさ。そしてこの瞬間、俺の理論が完成する。オッドアイズ・グラビティ・ドラゴンの効果でさらに500ライフポイントを支払い、この新たなウォーター・ドラゴンの効果を発動！特殊召喚成功時、相手フィールドに存在する効果モンスター全ての効果をターン終了時まで無効にし、その間その攻撃力も0にする！」

「何!？」

クラスタアの全身から溢れ出る藍色のオーラが、二色の眼を持つ重力の龍を包み込む。抵抗虚しくその全身から力が抜けていき、小山のような存在感の龍がその場に力なく横たわった。

三沢 LP600↓100

オッドアイズ・グラビティ・ドラゴン 攻2800↓0

「いくらリボンリボンにより蘇生ができようと、先にプレイヤーのライフが尽きてしまえばその効果には何の意味もない。バトルだ！ウォーター・ドラゴンークラスタアでオッドアイズ・グラビティ・ドラゴンに攻撃、オキシダン・パニツシャー！」

「ぬ……ぬおおーっ！」

ウォーター・ドラゴンークラスタア 攻2800↓オッドアイズ・

グラビティ・ドラゴン 攻0 (破壊)

ミスターT LP1200↓0

「お前たちが何をしようが、世界はもうじき真の闇に包みこまれる。それがダークネスの力……」

『まづいマスター、また逃げるぞー！』

チャクチャルさんの警告も時すでに遅く、ミスターTの姿が闇に包まれたカードの束となり、それもすぐに消えていく。結局、また取り逃がしたのか。追いかけたところでどうせ捕まらないのはわかつていたのでため息一つつき、代わりに三沢の方に目を向ける。デュエル



を終えてデッキにカードを戻している最中だったが、僕の視線に気が付くと作業の手を止めた。何か言おうとしたところで、新たな人影が息を切らしてやって来た。

「どこだ、ミスターT……って、清明？それに三沢も!?清明はともかく、なんでお前がここにいるんだ？」

「おいおい、久しぶりの再会なのに随分なご挨拶だな十代。まあいい、話せば長くなるから要点だけまとめろぞ。向こうで次元世界について研究している最中に、ふと気になるデータを見つけてな。2、3日前から、この次元でだけ妙に空間の歪みの発生が多いんだ。色々と資料をあさってみた結果、ダークネスが闇の世界から干渉する際に副作用として空間にわずかな歪みが生じることがわかったんだ。それでダークネスがこの世界に侵攻しようとしていることを知って、慌てて駆け付けてきたというわけさ。だがこの様子を見ると、お前たちもそれには気づいていたようだな」

「ま、色々あってね。十代がいけずだったせいで、ちよつとばかし情報共有には時間がかつちやつたけど」

なんとなく投げつけた軽い嫌味にも、肩をすくめただけで答ええない十代。反省してねーなこいつ。

「待てよ？それじゃあ三沢、その歪みがどこにできるのかがわかれば、次にミスターTがどこに出てくるのかがわかるってことか？」

「それだけじゃない。ダークネス本体がやってくる時も、ある程度はその位置を察知できるはずだ」

十代の疑問に、あつさり肯定する三沢。これは、もしかしなくてはかなり有力な情報だ。逃げ足が恐ろしく速いうえに神出鬼没なせいで見つけられなかったミスターTがどこから来るのかを事前に察知できるのなら、これまでよりもその対応がぐつと楽になる。

「それで、次は奴はどこに現れる？頼む三沢、教えてくれ！」

「ああ、それは……」

詰め寄る十代に三沢が答えようとしたところで、場違いな電子音が鳴り響く。音の発生源は、十代のPDFだ。一度追及の手を止めて通話に出ると、向こうからオブライエンの声がかすかに聞こえてきた。

『十代、至急童実野町まで来てくれ。明らかに様子がおかしい』

「童実野町だな？わかった、すぐに行く！」

それだけ返し通話を終了する十代に、三沢が真剣な面持ちで語りかける。

「どうせ俺が止めたところで聞きはしないだろうが、せめて十分気をつけろよ、十代。俺の計算が正しければ、次に奴が現れるのはまさにその童実野町……そしてその次は、このアカデミアだ」

冷たい風がひゆう、と僕らの間を吹き抜ける。ふと気が付けば、さつきまで晴れていたはずの空はどんよりと曇っていた。それが僕らの未来の何かを暗示しているのかは、わからない。

……嫌な、天気だ。

## ターン120 鉄砲水と変幻の銀河

「……どう、三沢？」

眩しいほどに明かりの灯る部屋の中、ひたすら机に向かう三沢に声をかける。少し待ってみたが反応がないあたり、こちらの声も届かないほど集中しているのだろう。

三沢がこの世界に突然帰ってきて、そうかと思えば入れ替わるようにオブライエンからの連絡を受けて童実野町へと駆けつけていった十代からは、いまだに何の連絡もない。返り討ち……なんてことは、十代に限ってあり得ないだろう。あれだけ大口叩いておいてあっさり負けた僕や、まだ異世界でのトラウマがぬぐい切れていない皆に配慮してか本人は隠しているつもりらしいけど、今の十代にはあのユベルが付いている。最初に彼……彼女？の姿をこっちの世界でまた見た時にはさすがにびっくりしたけれど、十代がそれでいいならきつとあの後で何かがあったんだろう。それに、下手に野生のSALでも拾ってこられるより食費も世話の手間もかからないから楽なもんだ。「よし。清明、できたぞ。ちよつと動かしてみてくれ」

いきなり椅子に座ったまま振り返った三沢が、僕に向かって青い輪っかを投げてよこしてきた。三沢の解説をBGM代わりに聞きながら、ようやく返してもらえたそれを元通り腕にはめ直す。

「これまでは霸王に対抗するために突貫工事で作った間に合わせの品だったからかなり無駄も多かったが……これで、エネルギー効率はいぶマシになったはずだ。給水機能もそっくり取り替えたから、半永久的とまではいかないがそうそうエネルギー不足になることはないだろう」

ミスターTを撃退したのち、三沢がまず取り組んだのは意外にもアカデミア生徒たちに危機を伝えることではなく、以前僕が貰った三沢謹製水妖式デュエルディスクの手直しだった。確かにやってくれるならそれに越したことはないけれど、それはちよつと悠長すぎやしませんかね。

そう聞いた僕に、なんてことはないといった風に軽く笑いながらこ

う返したのだ。

「そうは言うが、今この話を下手に広めてどうする？ 確かになまじ俺たちの代にはこれまでの不思議な経験があるから、この話も今更信じない奴はいないだろう。そしてそこから生まれる恐怖はパニックを生み、それはダークネスにとって格好の餌になる。なに、大丈夫だ。俺の計算によれば、奴らが次にこの世界に現れるまでまだ少しは時間がある。勝負に出るのはもう少し情報を絞り、戦う準備ができてからでいい」

確かに、その光景は容易に目に浮かぶ。何から何まで正論尽くしの三沢の言葉に渋々黙る僕の顔を見て、何がおかしいのかより一層笑みを大きくする。

「計算は俺がやっておくから、お前はもう少し今の時間を楽しんで来い。卒業デュエルのシーズンなんだろう？ せっかくのイベントを邪魔する権利なんて、ダークネスだろうとありはしないさ。十代だって、何かあつたらその時点で連絡してくるだろうしな」

口調こそ柔らかいが、要するに邪魔だから出てけということだろう。確かに、この世のあらゆる難しい話は専門外だと公言して憚らないような僕にこれから始まる三沢の膨大な計算の手伝いなんてできそうにない。

「それに、そのデュエルディスクもせっかく改造までしたんだ。戦闘データをいくらか確保しておきたいから、そのテストも頼む」

『適材適所、だな。マスター、駄々こねてないで大人しくした方がいいだろう』

追い打ちをかけるような頭脳派2人の言葉に畳みかけられ、半ば押し出されるように部屋の外に出る。よほど集中したいのか、扉をくぐった瞬間内側から鍵のかかる音がした。

「…………じゃ、行くっか」

体よく締め出された感否めないけど、ここにずっといてもどうにもならない。諦めて左の手首で輝く腕輪をひと撫でし、ふらりと曇り空の下に足を向けた。

「よし、勝った勝った。えっと、3点貰い……で、いいんだよね？」  
「うう……」

「じゃーねー」

半ば憂さ晴らしのように倒された後輩君には申し訳ないが、もともとデュエルを挑んできたのは向こうの方だ。当たり前といえば当たり前なのだが、いまだこのアカデミアの誰もがすぐそこまで迫っている脅威には気づいていない。だからといって、それを責めることなどできるはずもない。そんなもの、普通は気づくはずもない。

むしろ、三沢から釘を刺されたとはいえこんなのにんびり卒業デュエルなんてやっていて、目の前の危機から目をそむけているのは僕の方なのかもしれない……なんて、柄でもない方に思考が飛んでしまった。

「やめだやめ。これで累計……えっと、93点か」

卒業までに必要な点数は、最低100点。最低2人、最高でもあと7人とデュエルすれば、晴れて僕にも卒業資格が手に入る。1度デュエルした相手とは点数に入らない以上、他に戦ってない相手は……なんて、そんなのもう決まってるじゃないか。2年生の彼女と、3年生の彼女。最低でもこの2人に勝ってこそ、僕も胸を張って卒業できるってものだ。考えながら歩いていたら無意識のうちに慣れた場所、普段僕がいる1教室の前に着いていた。電気がついていてということ、案の定彼女はこの中にいるのだろう。軽くノックしてから返事を待たずにドアを開けると、かすかにシナモンとバニラエッセンスの混じった甘い匂いが漂ってきた。

「やっほー、精が出るねえ」

「いらっしやいま……自分の店放り出してどこで油売ってたんですか、先輩」

暖かく迎え入れられたかに思ったのもつかの間、冷たい視線と言葉が突き刺さる。別にそういう趣味があるわけじゃないけれど、そんな態度にどこかほっとしている自分もいた。ま、彼女の場合はこうでなくつつやね。変にしおらしくなると、そっちの方がよっぽど気持

ち悪い。

「何かまた失礼なこと考えてませんか？」

「滅相もない」

「そうですか」

聞き分けのいい言葉とは裏腹に1ミリも信じていない視線に射抜かれ、適当に肩をすくめる。2年間も付き合ってきたのだからさすがにもう慣れたものだが、日頃からあの眼光に慣れていない気の弱い人ならあの眼で睨みつけられるだけでビビってあることないこと自分から白状してしまうだろう。

「まあいいです。それよりも、先輩には少し聞きたいことがあったんです……今、時間空いてます？」

聞きようによつてはなかなか過激な台詞を無自覚に吐きながら、エプロンの前ポケットに突っ込んであったらしいデュエルディスクをそつと取り出す葵ちゃん。こういう時だけ以心伝心なんだから、本当にいい後輩を持ったものだ。それとも彼女も僕もただの戦闘中毒者か、だ。

「先輩とこうしてデュエルするのは、私が入学した時以来ですね」

向かい合ったところでぼつりと言われて、ふと思いつく。確かに、彼女との出会いもこうしてデュエルが絡んでいた。僕が勝ったらこの店、YOU KNOWの看板娘兼助手になつてもらおう……とか、そんな感じだったっけか。それがまさかこの2年でここまであまり役になるとは、スカウトした僕にとつても予想外だったけど。

「あそこで負けたおかげで今の葵ちゃんがあるんだから、少しは感謝してもらいたいね」

「いいですよ」

「へっ？」

どうせまた憎まれ口でも叩かれるかと思つていたから、思わぬ素直な返事に完全に虚をつかれてしまった。思わず間抜けな声を上げて彼女の顔をまじまじと見返すと、してやったりといわんばかりの笑顔で迎えられる。

「先輩が勝つたら、ですが」

「……なるほど。じゃ、なおさら負けられないね。オーケイ、デュエルと洒落込もうか」

これは、発破をかけてくれたのだろうか。この大事な時に平常心を保てないだけならまだしも、それを悟られたあげく後輩に心配かけるとは、僕もまだまだだ。

でも実際、今の軽口のおかげで少しだけ気が晴れたのも事実だ。今必要なのは切り替え、後で必ず来る戦いの時に備えて心と体を静めておくことだ。

「デュエル！」

葵ちゃんが相手となれば、僕の手の内は割れていると考える方が自然だろう。となれば下手な小細工を狙うより、正攻法でストレートにこのデッキの持ち味を生かすのみだ。

「僕のターン。モンスターをセットして、ターンエンド」

「セットですか。リバースモンスターですか、あるいは……」

「さーてね。どう思う？」

「どちらにせよ、すぐにわかることですね。私もモンスターをセットし、カードを2枚伏せてターンエンドです」

近頃のデュエルにしては珍しく、互いにセットしたのみでターンが再び回ってくる。誘われているのか、単に様子見だけなのか……どちらの可能性としては十分あり得るだけに、余計に読みづらい。この緊張感のある読み合いは、他の後輩たちとの卒業デュエルとは一味違う。

清明 LP4000 手札：4

モンスター：1（セット）

魔法・罫：なし

葵 LP4000 手札：3

モンスター：1（セット）

魔法・罫：2（伏せ）

「僕のターン。来い、ツーヘッド・シャーク！」

ツーヘッド・シャーク 攻1200

ただまあ、彼女の意図がどちらにせよ結局最後には突撃するのだから

ら読みもへったくれもないのだが。切り込み役としてこれまでもずつとお世話になってきた双頭のこの鮫は攻撃力こそ若干低いものの、葵ちゃんが得意とする忍者は守備力がそこまで高いわけでもない。1撃目の攻撃で破壊し、続く連続攻撃の効果でもう1撃当てる。うまくいけば儲けものだし、それだけの価値はある。

「バトル！」

「伏せモンスターは裏守備のまま、ですか。ならば、このカードでお相手しましょう。トラップ発動、鎖付きブーメラン！この忍具・鎖鎌は不用意に踏み込んできた敵の動きを封じ込め、表示形式を変更します」

「む……」

床から伸びてきた1本の鎖が、先端に付いた刃物をおもり代わりにぐるぐると回転しツーンヘッドの体を絡め取る。ま、当然伏せカードが2枚もあれば止めてくるか。だけど表示形式の変更ということは、少なくとも戦闘破壊に失敗したツーンヘッドが攻撃表示のまま突っ立った状態でターンを終える最悪の事態にはならず済んだ。今はそれでよしとしよう。

ツーンヘッド・シャーク 攻1200↓守1600

「ターンエンド」

「いいんですか、先輩？そんなにのんびりしていて」

エンド宣言をした瞬間、背筋がぞくつと来た。あの眼は本気だ、獲物を見る目だ。間違いない、来る！

「私のターン、ドロロー！セットモンスターを反転召喚、白い忍者！このモンスターのリバース効果により、先輩のセットモンスターを破壊します！白砂忍法ホワイト・ディフォーム！」

白装束に身を包む忍者が印を組むと、その足元から純白の砂が舞い上がる。風もないのに飛んできたそれがセットモンスターの上に雪のように降り注いだかと思うとみるみるうちに僕のカードが砂の中に埋まっていき、ほんの数秒のうちに完全にその姿が消えてしまった。僕のあのモンスターはグレイドル・アリゲーター、戦闘破壊や魔法破壊にこそ強いもののモンスター効果は何のトリガーにもできない



い。

「やってくれるね、葵ちゃん」

「やる？お言葉ですが、この程度でやってくれる、なんて評さないでいただきたいですね。やってくれる、というのは、こういうことを言うんですよ！永続トラップ発動、忍法 超変化の術！私の忍者と先輩の表側表示のモンスターを1体ずつ墓地に送り、そのレベル合計以下のレベルを持つドラゴン、恐竜、海竜族モンスター1体をデッキから特殊召喚します！ツーンヘッド・シャークと白い忍者のレベルは共に4、よって私が呼び出すのはレベル8！」

「レベル8のドラゴン族、つてことは……！」

「ようやくお察しいただきましたか。お出でませ、葵流忍術最強のしもべ！ギヤラクシーアイズ・フオートンドラゴン銀河眼の光子竜！」

白い忍者を中心にストロボでも焚いたかのような光が走り、ほんの1瞬だけ部屋の中のあらゆるものから色が抜けて白黒の静止画となる。その中でひとときわ輝いていたのが、巨大な1体のドラゴン。葵ちゃんの切り札、銀河眼の光子竜だ。

銀河眼の光子竜 攻3000

「まだ少し、打点が足りませんか？忍者義賊ゴエゴエを召喚します」

忍者義賊ゴエゴエ 攻1500

巨大なキセルを振り回し、大量の小判を覗かせる赤装束の忍者がさらに召喚される。これで僕のフィールドにはモンスターがいないにもかかわらず、葵ちゃんの場の総攻撃力は4500とこちらのライフを上回った。

「手札が4枚しかないのは少し不満ですが、まあいいでしょう。どうせオマケの効果ですし。まずはゴエゴエ、ダイレクトアタック！」

「くっ……！」

忍者義賊ゴエゴエ 攻1500↓清明（直接攻撃）

清明 LP4000↓2500

飛んできた小判が突き刺さり、確実にライフを削っていく。

「忍者義賊ゴエゴエが戦闘ダメージを与えた時に相手の手札が5枚以上であれば2枚のハンドスが行了りましたが、そこだけは命拾いしまし

たね。ですがいくら手札を溜めこんでいても、それを使う機会がなければ完全に無意味！行きますよ銀河眼、破滅のフォトン・ストリーム！」

「ホント、いくらランダムとはいえハンデス持ちはなかなか危なかったよ。相手モンスターのダイレクトアタック宣言時に手札から、ゴーストリック・フロストの効果発動！攻撃モンスターを裏守備にして、さらに自身を裏守備で特殊召喚する！」

「む……一筋縄ではいきませんか」

全身に光をチャージし、今まさに放出しようとしていた銀河眼の前に、雪の壁が立ちはだかる。防寒具を着込んだ雪だるまにして稲石さん譲りのゴーストリックの一員が、今回も僕を守ってくれた。

銀河眼の光子竜 攻3000↓???

「ダメージが通らなかつたのは無念ですが、考えようによつてはこれも感謝ですね。銀河眼が裏守備になったことで超変化の術との因果が途切れ、私もこのカードを自由に使えるようになりましたから。メイン2に魔法カード、機甲忍法ゴールド・コンバージョンを発動！私の場の忍法をすべて破壊し、デッキからカードを2枚ドロップします」

内心では攻撃を防がれるのも織り込み済みだったのか、口では無念といいつつも大して痛手を受けた風もなくすぐさま次の手に移る葵ちゃん。引いたカード2枚がお気に召したらしく、わずかにその口角が上がる。

「永続魔法、隠密忍法帳を発動。このカードは1ターンに1度手札の忍者を捨てることで、デッキに眠る忍法1枚をフィールドにセットすることが可能となります。私はこのターン手札の機甲忍者エアーを捨て、デッキの忍法 分身の術を選択。これにてターンエンドです」

葵ちゃんの場に今度は巨大な巻物が現れ、結んであった紐が自動でしゆるしゆると解かれる。中には達筆でただ一言『分身の術』と書かれており、その4文字が巻物の表面から手品か何か……いや、本物の忍術のように浮き上がってフィールドに降り、1枚のカードとなってセットされる。仕事を終えた忍法帳はまたしても自動で紐が巻かれ、元の巨大な巻物に戻っていった。今はまだいいけれど、あれを長く放

置しておくといろいろと面倒なことになりそうだ。

清明 LP2500 手札：4

モンスター：??? (フロスト)

魔法・罨：なし

葵 LP4000 手札：2

モンスター：??? (銀河眼)

忍者義賊ゴエゴエ (攻)

魔法・罨：隠密忍法帳

1 (分身の術)

「僕のターン！」

氷帝メビウスでも引くことができれば完璧だったのだが、これはこれで悪くない。まずはあのセットされた銀河眼、奴から退場してもらおう。

「覚悟はいいね葵ちゃん？その裏守備の銀河眼をリリースして、僕の手札からそっちのフィールドに粘糸壊獣クモグスを特殊召喚させてもらおうよ」

「私の銀河眼が……先輩、性格悪いってよく言われませんか？言われてないなら私が言っただけですよ？」

「褒めてんでしょそれ？さらにグレイドル・イーグルを召喚してフィールド魔法、KYOUTOUウオーターフロントを発動！」

粘糸壊獣クモグス 攻2400

グレイドル・イーグル 攻1500

「そのモンスターを出してからウオーターフロント、ですか」

「何が伏せてあるかはわかってるからね、一応の保険みたいなものさ。さて、反撃開始！イーグルで忍者義賊ゴエゴエに……」

「止められませんし百も承知でしょうが、せめて嫌がらせぐらいはしておきましょうかね。永続トラップ発動、忍法 分身の術！私の場の忍者をリリースすることでそのレベル以下のレベルになるよう、デッキの忍者を任意の数だけ表側攻撃表示および裏側守備表示で特殊召喚します。私が呼び出すのは守備力1800、ゴールド成金忍者！」

ゴエゴエがひらりと飛び上がり、足元に煙玉を叩きつけて煙幕を張

る。煙の中で一体いかなる入れ替わりが行われたのか、富士山をかたどった派手な装束に黄金の小手を装着した小太りの新たな忍者が着地してすぐにかき消えた。

その成金忍者は、守備力1800。となるとイーグルで戦闘破壊できず、かといって守備表示なため自爆特攻することすらできない。僕にとつて1番嫌なステータスのモンスターをピンポイントで呼び出すあたり、さすが葵ちゃんというべきか。攻撃せずに放置しておくのも1つの手ではあるが、すでにゴエゴエがリリースされ場から墓地に送られたことで自動的に壊獣カウンターがウオーターフロントに1つ乗せられている。

「だったらダメージは痛いけどリターンの方が大きい、か。イーグル、そのままクモグスに攻撃！」

グレイドル・イーグル 攻1500 (破壊) ↓粘糸壊獣クモグス  
攻2400

清明 LP2500↓1600

KYOUTOUウオーターフロント (0) ↓ (1) ↓ (2)

墓地に2枚目のカードが送られたことで、灯台に2つ目のライトがともされる。そして破壊されたイーグルが、銀色の液体となって大蜘蛛の足元へと忍び寄る。

「戦闘破壊されたイーグルの効果で、クモグスに自身を寄生。これによりクモグスのコントロールはこっちに写って、そのまま成金忍者に攻撃！」

「まあ、攻撃するならそこまですますよね。成金忍者は守備表示、私へのダメージは0です。分身の術はこれで、無意味にフィールドに残り続けます」

粘糸壊獣クモグス 攻2400↓???

KYOUTOUウオーターフロント (2) ↓ (3)

これで、やれることは全部やっておいた。そして、多少のダメージ覚悟のうえでイーグルに突っ込ませたおかげで、この効果をこのターン中に発動できる。

「メイン2にウオーターフロントのさらなる効果を発動。壊獣カウ

ターが3つ以上貯まっていることで、デッキから壊獣を1体サーチできる。来い、ドゴラン！」

3本に増えた灯台の光に導かれ、新たな壊獣がデッキから手札に加わる。これでよし、と。

「これでターンエンド」

「では、私のターン。先輩が私のモンスターを利用してくるのであれば、私も同じことをしてやりましょう。このターンの隠密忍法帳の効果により、ルール上忍者として扱う黄昏の中忍―ニチリンを捨て、2枚目の超変化の術をセットします」

「また超変化……」

「お互い様です」

再び巻物が自動で開かれると、その中には先ほどと同じように達筆で『超変化の術』という5文字が黒々と書かれていた。そして再びその文字が巻物から離れ、1枚のカードとなってフィールドに置かれる。

「さて。これで次のターンはいいとして、このターンは何をしておきましょうかね。魔法カード、増援を発動。レベル4の戦士族、忍者マスターHANZOをサーチしてそのまま召喚。召喚に成功したHANZOは、デッキから忍法1枚を手札に加えることができますが……」

「これ以上サーチは通せないね。クモグスの特殊効果、縛鎖！壊獣カウンスター2つをコストにして召喚または特殊召喚されたモンスターの効果をそのターンの間だけ無効、さらに攻撃も封じる！」

忍者マスターHANZO 攻1800

KYOUTOUウオーターフロント(3) ↓(1)

縦横無尽に白い糸が走り、灰色の装束を着た忍者の全身を締め上げる。印も結べず武器も振るえず、打つ手のなくなったHANZOが全身に力を入れて強引に引きちぎろうとするも、その瞬間に隙ができたことには変わらない。

「まあ、そうしますよねえ。カードをセットして、ターンエンドです」  
エンド宣言と共に、HANZOが縛鎖から脱出する。これで再びあ

のモンスターは自由に動けるようになったが、すでにその効果を発動するタイミングは逃している。

清明 LP1600 手札：3

モンスター：??? (フロスト)

粘糸壊獣クモグス (攻・イーグル)

魔法・罫：グレイドル・イーグル (クモグス)

場：KYOUTOUウォーターフロント (1)

葵 LP4000 手札：0

モンスター：忍者マスターHANZO (攻)

魔法・罫：隠密忍法帳

忍法 分身の術

2 (伏せ)

「僕のターン……」

「メインまで待つとHANZOが飛ばされますからね。このスタンバイフェーズに永続トラップ発動、忍法 超変化の術！私の場のHANZOはレベル4、そして先輩のクモグスはレベル7。この2体を墓地に送ることでレベル7のドラゴン族、白竜の忍者を特殊召喚します！」

灰色の忍者が腰に差していた忍者刀を抜き、クモグスの足元めがけ投げつける。一文字に飛来したそれが大蜘蛛の本体ではなくその影に突き刺さった瞬間、クモグスの巨体が金縛りにでもあったかのように触角1本動かなくなる。先ほど縛られた礼だとばかりに動けなくなったクモグスにHANZOが悠々と近づいていき、その体に触れた瞬間夢か幻のように2体のモンスターの姿が揺らめき煙となって薄れて消えていった。どこへともなく流れていくその煙はやがて渦を巻き、渦の中心から明るい茶髪をなびかせて純白の装束に身を包むくの一が足音ひとつ立ってず葵ちゃんの前に片膝をついて着地した。

白竜の忍者 攻2700

KYOUTOUウォーターフロント (1) ↓ (3)

「最上級モンスターは立派だけど、僕の手札にドゴランがいるってことを忘れてない？せっかく満を持して出てきてもらったところ悪いけど、そのモンスターもリリースさせてもらおうよ」

「お待ちを、先輩。まだスタンバイフェイズは終了していませんよ？白竜の忍者を特殊召喚したところでもう1枚の永続トラップ、2枚目の分身の術を発動！」

「しまったー！」

「先ほどお見せした、ゴエゴエを成金忍者に入れ替えるような小技ではありません。真正銘文字通り、真の分身をお目にかけてみせましょう！リリースするのは白竜の忍者レベル7、よって呼び出せる忍者のレベル合計もまた7！」

白竜の忍者が立ち上がって印を組むと、その体から竜の形をしたオーラが立ち上る。上空へと駆け上がっていった竜が頭上で4つに分裂し、フィールド上の4カ所にその頭から猛然と落下する。激しい光の爆発が4つ立て続けに起き、光が収まった後その場所にはそれぞれ別の忍者が立っていた。

「忍者マスターHANZO……」

「その通り、2体目です。そしてレベル1の青い忍者<sup>ブルー</sup>2体と赤い忍者<sup>レッド</sup>1体、これはセット状態で特殊召喚させていただきました。また特殊召喚に成功したHANZOの効果により、デッキから……では、機甲忍者アースを手札に加えます」

KYOUTOUウオーターフロント(3) ↓ (4)

『渋い<sup>シルバー</sup>忍者を呼ばない辺り、さすがにマスターの戦い方を熟知しているな。遊び半分挑発半分の、なにかと中途半端なミスターTのメタ張りとは大違いだ』

「……どゆこと？」

葵ちゃんの展開を見て、チャクチャルさんが一言感心したように唸る。なぜここで渋い忍者の名前が出てくるのかわからず困惑する僕に、これ見よがしに大きなため息とともに補足が入る。

『まだわからないのか、マスター。分身の術でレベル6の渋い忍者を裏守備で呼び出せば、そのリバー効果でさらに墓地の忍者を蘇生することもできた。だがそうしなかったのは、マスターが壊獣使いだからだ。リリースされるなどの要因でそのリバー効果を使えずともさほど痛手ではないレベル1と、特殊召喚された時点ですでに仕事を

終えているHANZO。見事にリリースするほどのうまみの無いモンスターのみを選んで呼び出している』

「なるほど……」

『この程度なら自分で気が付いて欲しいものだがな』

ついさっきは僕のことを性格悪いだなんだ言ってくれたけど、彼女も彼女で大概だと思う。とはいえ、まだ手がないわけではない。ダブル忍法を駆使しての大量展開はなかなか見事だったけれど、今の作戦にはひとつ大きな欠点があったからだ。

「ありがとう、って言わせてもらおうよ葵ちゃん。おかげでKYOUTOUウオーターフロントには、またこれだけたくさんのカウンターが貯まった！このターンのウオーターフロントの効果ではデツキから壊屋壊獣ジズキエルをサーチして、このジズキエルをHANZOをリリースして葵ちゃんの場に特殊召喚。さらに相手フィールドの壊獣に反応して、手札のドゴランを特殊召喚する」

「これは……」

壊屋壊獣ジズキエル 攻3300

怒炎壊獣ドゴラン 攻3000

足の無い体に両腕の付いた全身兵器の金属の大蛇と、体の奥から無限に溢れ出るエネルギーを炎として纏う壊獣王。2体が対峙したのち、おもむろにドゴランの炎の勢いが跳ね上がった。1瞬間をのけぞらせて息を吸い、地面に踏ん張って火炎放射をぶちかます。

「ドゴランの効果発動、覆滅！壊獣カウンター3つをコストにして、ドゴランの放つ怒りの炎が相手フィールドのモンスター全てを薙ぎ払う！」

ジズキエルが、そしてセットされた3体の忍者が、まとめて消し飛んでいく。やがてその炎の勢いも弱まっていき、火炎放射に全力を使い果たしたドゴランが肩で息をつきながらその場に崩れこんだ。

KYOUTOUウオーターフロント(4) ↓ (1) ↓ (5)

「ドゴランは効果を使ったターン、自分から攻撃することはできない……だけど、他のモンスターなら攻撃ができる！魔法カード、サルベージを発動！墓地の攻撃力1500以下の水属性モンスター2体、



ツーヘッド・シャークとグレイドル・イーグルを回収して、ツーヘッドをそのまま通常召喚。そしてツーヘッドは召喚時、フィールドのレベル4魚族のレベルを1つ下げることができ。さつきはこの効果を使わなかったせいで痛い目にあったからね、今度は忘れずに使わせてもらうよ」

ツーヘッド・シャーク 攻1200 ☆4↓3

「ここでそのカードですか……これは、思ったより痛いですね」

「さらにさらに、こっちも忘れないで貰いたいね。ゴーストリック・フロストを反転召喚して、この子も攻撃に参加してもらうよ」

このデュエルの最序盤に銀河眼の攻撃を防いでもらって以降、ずっとセット状態のまま放置していたフロストを反転召喚する。これまで散々ダメージを受けてきたんだ、今こそ反撃の時。

???↓ゴーストリック・フロスト 攻800

「バトル、ゴーストリック・フロストとツーヘッド・シャークでのダイレクトアタック。さらにツーヘッドは自身の効果により、1ターンに2回攻撃ができる!」

「致し方ありませんね……全部受けましょう」

ゴーストリック・フロスト 攻800↓葵 (直接攻撃)

葵 LP4000↓3200

ツーヘッド・シャーク 攻1200↓葵 (直接攻撃)

葵 LP3200↓2000

ツーヘッド・シャーク 攻1200↓葵 (直接攻撃)

葵 LP2000↓800

あと1体何かアタッカーが居さえすれば……なんて、仮定の話をして仕方がない。ドゴランは、先頭前の露払いという大事な仕事をよくやってくれた。

「メイン2にゴーストリック・フロストの効果を発動。自身を裏守備にして、カードを伏せてターンエンド」

ゴーストリック・フロスト 攻800↓???

「先輩、今の攻撃はなかなかでした」

「なんでそんな上からのの?」

葵ちゃんと話していると、どうも向こうのペースに飲み込まれる。ちなみに以前聞いたところによると、彼女も彼女で僕と話すときは同じことを感じながら喋っているらしい。

「ですがまだ、私も負けたわけではありません！私のターン、ドロ―！」

これで葵ちゃんの手札は、さつきサーチしてたアースも合わせて2枚。

「……仕方ありませんね、隠密忍法帳の効果！手札のアースを捨ててデッキから機甲忍法ゴルド・コンバージョンをセットし、そのまま発動します。隠密忍法帳、分身の術、超変化の術をすべて破壊することで2枚ドロ―です」

三度巻物が開くと、案の定そこに書いてあったなぜか平仮名表記の『ごおるど・こんばあじょん』の文字が躍る。役目を終えた3枚の忍法がまとめて破壊され、葵ちゃんの手札として生まれ変わった。

「ふむ、少しはマシになりましたね。魔法カード、ワン・フォー・ワンです。手札からモンスターカード1枚を墓地に送り、デッキからレベール1モンスターの銀河眼ギョウクンシールアイズ・クラウドラゴンの雲箒を特殊召喚します」

銀河眼の雲箒 攻300

「このモンスターは自身をリリースすることで、墓地のこのモンスターを蘇生できます。再び蘇りなさい、葵流忍術最強のしもべ！銀河眼の光子竜、ここに在り！」

やはり、と言うべきか。心のどこかで、彼女なら絶対再び自らのエースを出してくると思っていた。1度や2度リリースしたぐらいでは、その闘志は折れやしない。それほど葵・クラディーと銀河眼の光子竜は、強い絆と信頼で結ばれている。

そしてそう来なくっちゃ、こつちとしても面白くないね。

銀河眼の光子竜 攻3000

「随分余裕そうですね、先輩？何か仕掛けがあるんでしょうが、だとしても正面から突破させていただきます！ツ―ヘッド・シャークに攻撃、破壊のフォトン・ストリーム！」

「トラップ発動、ポセイドン・ウェーブ！その攻撃を無効にして、さら

に僕の場に魚族モンスターが1体いることで800のダメージを……」

「銀河眼の光子竜の効果発動、銀河忍法コスミック・ワープ！銀河眼と戦闘モンスターをバトルフェイズ終了時まで除外することで、対象を失ったそのトラップは不発になりますよ」

光のブレスを大波が水の壁となって弾こうとした瞬間、ブレスごと銀河眼の姿がサツと消える。水が引き、こちらの反撃を完全に透かしたところで再びその巨体が光と共にやってきた。

「惜しかったですね、もし私が選んだカードがこの銀河眼でなければ……まあ、言っても詮無いことですが」

「タラレバは言うだけみつともないしねー。それに僕としては、攻撃そのものを止められただけで割と満足だよ」

「ドゴラン、ですか。果たしてそううまくいきますかね？カードを1枚セットして、ターンエンドです」

僕にとってポセイドン・ウエーブが最後の守りだったのと同じように、葵ちゃんにとつてもあの伏せカードが最後の頼みなんだろう。ならここはひとつ、先輩としてバシツと決めてあげないとね。

清明 LP1600 手札：1

モンスター：??? (フロスト)

怒炎壊獣ドゴラン (攻)

ツーンヘッド・シャーク (攻)

魔法・罠：なし

場：KYOUTOUウォーターフロント (5)

葵 LP800 手札：0

モンスター：銀河眼の光子竜 (攻)

魔法・罠：1 (伏せ)

「僕のターン。ウォーターフロントで多次元壊獣ラディアンを持ってきて、銀河眼の光子竜をリリースして特殊召喚。このまま攻撃してもいいけど……まずドゴランの効果発動、覆滅！消し飛べー！」

多次元壊獣ラディアン 攻2800

息を整えたドゴランが再び炎を活性化させ、破壊の爆炎がフィールド

ドをひと舐めする。

「あれ？意外とあっさり？」

「無論トラップ発動、リビングゲツドの呼び声！たとえ刀折れ矢尽きようと、私に戦う意志ある限り！銀河眼の光子竜は、何度でも蘇ります！」

なるほど。破壊を防ぐのではなく、破壊即蘇生か。ドゴランはこのターン攻撃できない、だから攻撃できないだろうと言いたいのだろう。

銀河眼の光子竜 攻3000

だけど葵ちゃんには、1つ見落としていることがある。一体葵ちゃんと銀河眼の光子竜の間に過去に何があったのか、どんな歴史がその信頼の間に刻まれているのか、それは僕にはわからない。だけど、それを言うなら僕だって同じだ。ずっとずっと、最高の相棒が。葵ちゃん象徴が銀河眼であるのと同じように、僕にもずっと戦ってきた切り札が、この手の中にはすでにいる。

「ドゴラン1体をリリースして、アドバンス召喚！さあ行くよ、霧の王キングミスト！」

再び全力の1発を放ち動けなくなったドゴランを霧の渦が足元から包み込み、その全身を濃密な白の中に隠していく。必然的に巨大になった渦はそのまま中のドゴランの質量を無視したかのようにみるみる圧縮されて人型サイズにまで縮み、その流れを断ち切るようにして1人の全身鎧を着こんだ魔法剣士が中央からドゴランと入れ替わりに登場する。

「それ、引きましたか……」

さすがの葵ちゃんもこれ以上の回避手段はなく、若干その表情がこわばる。刀折れ矢尽きようと、何度でも蘇る……なるほど、その言葉に嘘はないだろう。だがそれも、葵ちゃん本人に戦う力が残されている限りのことだ。

「霧の王の攻撃力は、リリースしたモンスターの元々の数値の合計。今回は1体だけだから、ドゴランの攻撃力が丸々コピーされて3000！」

霧の王 攻3000

「じゃあ葵ちゃん、これで終わらせるよ！バトル、霧の王で攻撃！」

「先輩、ゴーストリック・フロストもツーヘッド・シャークもいるのにあえてリリースを1体にして銀河眼と攻撃力を並べてきたのが最高に厭らしいですね。そんなの、銀河忍法で逃げの一手なんて私のプライドが許しません。その挑戦、正面切って受け止めるしかないじゃないですか！銀河眼の光子竜、破滅のフォトン・ストリームです！」

霧の魔法剣と、目も眩むような光子のブレス。1瞬の交差の後、その剣が深々とドラゴンの胸を切り裂き、光が霧の王の鎧を貫通して腹の部分に風穴を開けた。

霧の王 攻3000（破壊）↓銀河眼の光子竜 攻3000（破壊）

「くっ……！」

「今だ、ツーヘッド・シャーク！」

双頭の鮫の牙が空を裂き、とどめの一撃を与える。これで、終わりだ。

ツーヘッド・シャーク 攻1200↓葵（直接攻撃）

葵 LP800↓0

「……結局、先輩には最後まで勝てませんでしたか」

ソリッドビジョンが消えていく中、葵ちゃんがぼつりとつぶやく声が耳に入った。その声がかすかに震えているように思えたのは、僕の気のせいではないだろう。こういう時に何か気の利いた言葉のひとつでもかけてやれるのが、いい先輩ってもんなんだろうけど……あいにく、僕はそんな柄じゃない。でも、こんな状態の葵ちゃんは僕も初めて見る。せめてできるのは、それなりに美味しいであろう紅茶の1杯でも淹れることぐらいだ。親父には敵わずとも、商売人として一通りのコツは僕も抑えている。

黙って立ったまま悔しさと泣きたいであろう気持ちをかみ殺す葵ちゃんを椅子に座らせ、沸騰させない程度にお湯を沸かす。時械神の炎を出せるようになったおかげで、この辺の手順はだいぶ楽になっ

た。本来は茶葉から淹れるのが正しいスタイルなんだろうけど、個人的には最近のKC印のティーパックがかなり性能が良いのでそれで十分。こっちの方が楽だし、デュエルアカデミアは海馬コーポレーションのお膝元だから若干余所より安く買える。葵ちゃんは砂糖とかは入れないストリート派だったっけか、と思いつながら3日前に焼いたばかりのシナモン入りクッキー（売り物）の封を適当に開ける。あとでこれ一袋分は給料から天引き……は、可哀そうだから勘弁してあげよう。餞別代りの僕からの奢りだ。

「ほい、どうぞ」

「いただきます」

小声とともに、一礼してカップに口をつける。ちゃんと返事ができるあたり、こちらで作業している間に多少は気分も晴れてきたようだ。向かいの席に座り、葵ちゃんの整った顔立ちを見ながらクッキーをつまみ、僕の間もついでに用意した紅茶を飲みつつのんびりと飲み終わるのを待つ。

「ごちそうさまでした。先輩、これは1つ貸しにしておいてください……それと」

1杯ひっかけてほしい復活したようで再び声にも張りが出て、目にも光が戻ってきた。テーブルにバンと手を付いて勢いよく立ち上がり、強気な笑みを浮かべる。

「来年、私が卒業するまで首を洗って待っていてください。葵流に不可能の文字はありません、次こそはリベンジしてみせます」

「ふーん……いいねいいね、その意気やよし。なんべんだって返り討ちつて洒落込んだげるから、いつでもかかっておいで」

「約束ですよ？」

「二言はないよ」

葵ちゃんの笑みに応えるようにこちらもニヤリと笑い、手元のカップを持ち上げる。葵ちゃんも何がしたいのか気がつくとすぐに自分のカップを持ち上げ、2人でそれをテーブルの中央で軽く合わせる。中身のないカップ特有のカチンと硬質な音がして、その音が奇妙に大きく店内に響いた。

約束、か。ならそれを守るためにも、  
ダークネスには負けてられな  
いね。

## ターン121 百鬼の疾風と虚無の仮面

『アカデミアの皆さん、校長の鮫島です。生徒の皆さん、そして教師の皆さんも卒業デュエル及びその関連作業に忙しいとは思いますが、一時デュエルを中断してください』

葵ちゃんとのティータイムを終えたところで、突然室内のスピーカーからかすかな環境音が鳴る。普段は授業も何もあつたもんじやないこの元教室のスピーカーが動いたということは、恐らく全校に向けてあらゆる場所のスピーカーを一斉にオンにしたのだろう。

ややあつて鮫島校長の声が部屋中に、いやこの様子だと恐らくこの島中に響いた。このタイミングでの緊急放送、それもデュエルアカデミアでは大抵の事よりも優先されるはずのデュエルを中断させてまで話すこととなれば、それはもう目下一番の問題事であるダークネス関連しかありえない。

「デュエルの中断……？」

デュエルを中断、という言葉の異常性に、葵ちゃんがいぶかしげに呟く。それにしても三沢も、鮫島校長を利用しての全校放送とはうまい手を考えたものだ。確かにこの方法なら、校長自らがデュエルを中断させるという最初の掴みの強さも手伝つてこの島のどこにしようかと話を聞き逃す心配は一切ない。少なくとも、僕なら絶対そんなことまで気が回らなかつただろう。スピーカーの方には視線を向けたままさつき出したクツキーをもう一枚つまもうとしたが、袋のあるはずの場所まで手を伸ばしても指先には何も触れない。どうなっているのかとテーブルの上に視線を戻すと、クツキーの袋を自分の手元に抱えて今日一番のジト目で探るような視線を向けてくる葵ちゃんと目が合った。

「……何？あとおやつ返して」

「私まだ2枚しか食べてないんですけど。それはそれとして先輩、何か知ってますね？」

「ほう。その根拠は？」

「いくつかありますが、一番わかりやすかつたのは今の返しですね。」



もし本当に何も知らないのなら、先輩はもう少しわかりやすいリアクションをするはずですから」

「鎌かけたっての?」

わかりやすい誘導に引っかかったことに今更気づき、顔をしかめる。今のは僕の不注意も大きかったけど、本当に油断も隙もない。

「……まあ、いいや。それなりに真剣な話だから、葵ちゃんもしっかり聞いときなよ」

「どうやらそのようですね。そうさせていただきます」

珍しく言い返さない僕の態度から何かを感じ取ったのか、いつもの毒吐きや軽口も叩かず神妙に耳を澄ませる葵ちゃん。かたずをのんで見守る中、再びスピーカー越しに若干くぐもった鮫島校長の声が聞こえてきた。

『全校の皆さん、これよりアカデミアでは避難訓練を開始します。校舎で大規模な火災が発生した前提で、かつて本校で三幻魔事件が発生した際に建設されたコロッセオに生徒及び教師の皆さんには集合してもらいます。防火扉はすべて閉鎖しますので、各階の非常口より外に出てコロッセオにて集合してください。またこの避難訓練が終了し学内の全生徒の安全が確認されるまではいかなる理由に置いても単独行動は禁止しますので、最低でも2人以上のグループを組んで行動するようお願いします。それでは、質問等は現地で改めてお受けしますので』

なんだか無茶苦茶な内容を話すだけ話して、始まった時と同じように唐突に放送が切れる。え、避難訓練?どゆこと?訳が分からず完全にフリーズしているところに、すかさず葵ちゃんの言葉が突き刺さる。

「先輩。なーにがカッコつけて『それなりに真剣な話』なんですか?」「ちよちよちよ、ちよつと待って!え、ええ?あれ?」

いったい僕の知らないところで、何が起きているんだ。混乱するあまりいっぱいになって言葉に詰まる僕に追い打ちをかけるかのように、ポケットに突っ込んであったPDFが着信音をけたたましくわめきたて始めた。

「え、ええ!? なんなのさ、もう……!」

「いや先輩、今のは冗談ですよ。何かしらあるのは察しがつきましたから、テンパってないで出てあげればいいじゃないですか」

冷静な葵ちゃんにたしなめられて落としそうになりながらも着信を知らせるそれをどうにか引つ張り出し、着信相手も見ずに通話ボタンを押す。なんでこの間の悪い時に電話してきやがるんだとの怒りを込め、画面に何か映るより先にヤケクソ気味に怒鳴りつけた。

「はいもしもし遊野です!」

『俺だ、三沢だ。今の放送は聞いたな? よく聞いてくれ、少し頼みたいことがある。細かいことは後で説明するから、今すぐ廃寮に向かってくれ。到着したら連絡を頼む』

じゃあな、との言葉を最後に、それだけ言って通話が切れてしまう。……まるで意味が分からない。でも三沢があそこまで説明不足な状態で人に指図せざるを得ないということは、なにかそうせざるを得ない理由があるんだろう。それにこのわけのわからない状況の中、問題を先延ばしにしたいだけとはいえ当面の目標がはつきりしたのはありがたい。少し落ち着きを取り戻してPDFをポケットに再び突っ込んだタイミングを見計らい、葵ちゃんが席を立った。

「私には、何がどうなっているのかまるでわかりません。わかりませんが、先輩と他に何名かが何か大掛かりなことを始めようとしていることだけはわかりました」

言いながらカウンターの後ろに素早く回り込み、さっとかがんで持ってきていたらしい彼女のカバンを持ち上げる。そのまま部屋を出て行こうとしてドアまですたすたと歩き、途中でぴたりと足を止めた。振り返って僕と目を合わせ穏やかに、でも力強く語りかけてくる。

「何を企んでいるのかは知りませんが、先輩がやろうとしているのなら私はその判断を信じますよ。だから、私からは何も言いませんし聞きません。先輩のことですから、失敗するとも思いません。ですが、せめて一声ぐらいは掛けさせてもらいます……(´▽`)武運を、先輩」

「葵ちゃん……」

「では、私はコロッセオの方に向かいますので。それと……これは、最初に約束しましたからね。先輩、ありがとうございます」

すつと一礼し、部屋の外に出ていく葵ちゃん。最後のありがとうございました、というのは、元々デュエル前に言っていた僕が勝ったら3年分のお礼を言う、というあれだろう。言い出しつぺの僕ですら適当な軽口として忘れていたのに、そこをないがしろにしない辺り彼女の律義さがよくわかる。でもその背中を見送りながら、僕が噛みしめていたのはその前の発言だった。あの用心深い葵ちゃんがあえて今起きようとしていることに踏み込まず、それどころかあそこまで言い切ってくれるとは。普段の葵ちゃんがどんな性格なのかよく知っている僕だからこそ、今の発言の重みもわかる。今更ながらに、彼女が僕に寄せてくれていた信頼の強さを思い知らされた。

「姉上、どうせ近くにいるんでしょう？単独行動は厳禁ですからね、姉上でもないよりはマシなのでついてきてください」

「わーい！葵ちゃんがお姉ちゃんのこと呼んでくれたっつー！」

「うわ本当にいたんですか。いい加減私も言い飽きたんですがストーリーカードですよそれ、やっぱついてこないでください」

「んもー葵ちゃんつたら、いつでも反抗期可愛いんだからー。あ、それと清明ちゃんも！お姉ちゃんこの間清明ちゃんが依頼してくれたあれなかなか楽しかったから、また助けが必要な時はいつでも呼んでくれちゃっていいからねー！」

……明菜さん、まーたこっち来てたのか。あの人は自由だなあ。さて、僕も急がないと。

ライイエロー。推薦や繰上りが入るオベリスクブルーを別格として、一般の入学生の中でもオシリスレッド相当以上の成績を持つものが割り当てられる寮……と、かつて触れ込まれていた場所だ。3年前に入学した遊城十代、遊野清明といった規格外の筆記はからきしだが実技だけはできる勢、そして2年前に筆記実技共に高水準だが本人の強い希望により例外として入寮を認められた早乙女レイなどの存在

によりもはやその組み分けは完全に形骸化してしまい、オシリスレツドとの明確な差別点が建物そのものぐらいしかないことから、今となっては寮監の樺山教諭ともども「一番地味な場所」呼ばわりされるようになって久しい。

そんなラーイエローの一室に、三沢大地の部屋はあった。かつて彼がツバインシユタイン教授に師事しアカデミアを離れた後も、樺山教諭の計らいにより卒業するまではという期限付きで新しい入居者を迎えることなく残されていたのだ。

しかしかつては綺麗な物であったその部屋も、今となってはその面影もない。壁といわず床といわず窓といわず、ありとあらゆるスペース全てに耳なし芳一のごとくびっしりと手書きの数式が敷き詰められているからだ。その数式の中心で、黄色い学生服を着たこの部屋の主がさらに目の前の紙に向かって図やグラフ、数式を書き込んでいく。

「後は清明に頼むとして……それにしてもおかしい、どういうことだ……?」

「何が、だい?」

彼以外には誰もいないはずの部屋に、空虚な声が響く。顔をこわばらせて弾かれたように振り返る三沢が、侵入者の顔を見てふっと力を抜いて苦笑した。

「なんだ、清明か。脅かさなくてくれよ」

「ははは。それで、どうしたんだい?」

今三沢は確かに目の前の存在を「清明」と呼称した。だが、そんなことがあり得るだろうか? 廃寮に向かったはずの男が、なぜここにいる? 遊野清明という男はこうして向かい合っているだけで、背筋が寒くなってくるようなゾツとする気配を放っていただろうか? 彼は元々三沢本人の頼みによりこの部屋を出て行ったのだから、その三沢が呼び出さない限りそうそう勝手に戻ってくるような真似はしないはずだ。

考えるまでもない。ダークネスの力を使った常識の操作だ。もつとも普段の三沢であれば、かすかに感じたその違和感をより突き詰め

て考え、その洗脳を打ち破ることも可能だっただろう。だが不幸なことに、今の彼にその余裕はなかった。つい先ほど童実野町に向かった十代から届いた、たった一通のメール。そこに記されていた内容が彼の思考の大部分を占め、かすかな違和感を突破口ではなく気のせいとして封殺してしまったのだ。

だから、三沢は口にしてしまう。自分が遊野清明だと思ったその存在に、手持ちの情報を自分から開示してしまう。

「さつき、十代から連絡があつてな。童実野町の人間は……どうやらすでに、ダークネスに飲み込まれてしまったらしい」  
「ほう、それはそれは」

悲痛な表情の三沢とは対照的に特に驚いた風もなく返す、目の前の「遊野清明」。だが、彼の出身はまさにその童実野町だったはずだ。ほんの少し考えれば、子供でもわかる違和感。だが、目の前の問題に気を取られた三沢はやはりそれに気づくことができない。

「だがおかしいんだ。俺の計算が正しければ、そんなことが起きるはずがない。そもそもダークネスがこちらの世界に侵攻するためには、まずミスターTを差し向けて人間を心の闇に取り込み、ダークネスそのものの力を増す必要がある。こんな早くからこれほどのスピードで攻めてくれるわけがないんだ」

「なるほど。例えるならば、ダムのようなものだ。貯水湖の水を増せばそこから放出される水の勢いも増していくが、それでも限界が来たらやがてダムは決壊し、一度に押し止められていた水が溢れ出る」

「ああ、そうだ。その例えに従えば、ダークネスはまだダムを壊す……つまり次元を越えて自身がこの世界にやってくるために、貯水が続いている状態のはずだ。だが、童実野町が丸々飲み込まれるところまで来ているとなると、すでに貯水どころか決壊寸前まで事態は切迫している」

「なぜだと思う？」

どこか嘲るような響きを含んだその言葉に、躊躇いつつも三沢が口を開く。

「可能性は2つ。まず1つが、俺の計算が最初からすべて間違ってい

た場合だ」

「それから？」

かすかに面白がるように、「遊野清明」がその先を促す。

「もう1つは……ダークネスに、何らかの協力者が存在するパターンだ。あちらの世界からダムを押しただけでなく、こちら側からそのダムに穴をあければその分だけ水の放出は早くなるからな。ダムの決壊を待たずとも、その穴が大きければダークネスはこちらの世界に出てこられる」

「なるほど、なかなか面白い見解だ。そして、君はやはり優秀な人間だよ。想像以上の速さで、私の語る真実トゥルーに近づきつつある」

「なんだと……？」

そこまで言われてようやく、三沢の警戒心が働き始める。ダークネスが彼に自分の犯した失策を思い知らせて心の闇のつけ入る隙を作るべくわざと仕掛けていた洗脳を緩め、これまで彼が見過ごしていたいくつもの違和感が1度に浮かび上がりその脳内を駆け巡る。次の瞬間には全てを察した三沢が、すぐ横の机に飛びついていた。

卓上に置いてあったデュエルディスクを拾い臨戦態勢を整える彼の前で、もはやその必要もなくなった「遊野清明」としての化けの皮を剥いだ闇がかりそのめの人型を露わにする。デュエルディスクを取った拍子に放り投げられたPDFが床に激突し、硬質な音が立った。

「ミスターT！」

「そう。真実を語るもの、トゥルーマンだ。君との先ほどのデュエルは、なかなか面白い出し物だったよ。だが、もはや君は舞台から降りた人間だ。どれほどアンコールを望まれようと、おいそれと登場すべきではないと思うがね」

「何を訳の分からないことを……！」

たたり、と彼の首筋を一筋の汗が伝う。

ミスターTを名乗るこのダークネスの手先が神出鬼没なのは今に始まったことでもないし、その情報を事前に得ていた彼も当然その心構えはしてきたつもりだった。つい先ほど実際に対峙した時も、今の

ように不吉な気配は感じなかった。だが初めてこの闇の具現化した存在とたった1人で向かい合ったとき、所詮人間にすぎない彼のちっぽけな覚悟などすぐに打ち砕かれそうになってしまう。

ようやく彼は理解した。先ほどの対峙の際には、この闇そのものの化身はその実力を隠していたのだ。どこまでもちっぽけな石ころのような存在でしかない自分が何かのはずみで、辺り全域に広がる深く広い闇の底へ加速をつけて転がり落ちていく……ふと脳裏をよぎったそんな不吉なビジョンを振り払おうとするも、否定しようとしてもしきれない恐怖心がカラカラに乾いていたが、それに構う余裕もない。気が付けば唇がカラカラに乾いていたが、それに構う余裕もない。

「訳が分からない、か。そうだろうな。ならば、もう少しわかりやすい話をしよう。君の出した仮定をあまり周りに触れ回られては、こちらとしても少々困るのだよ。知りすぎた、と言ってもいい」

「だから実力行使、というわけか？」

「そう思ってもらって構わない」

「……いいだろう。だがこの俺が、一筋縄で済むと思うなよ！」

意識的に放った威勢のいい言葉に、久しぶりの帰還とは言え見慣れた部屋の中。だが彼の耳には気合を込めたはずの自分の言葉も虚しく響いて聞こえ、彼の眼には妙に寒々しく弱い光の照明が辛うじて部屋の中を照らしているように映った。

「ええい、始めるぞー！」

冷たい空気に抵抗するかのように一際大声を出し、自らを鼓舞して向かい合う。ひとりぼっちの戦場で、世界の命運を握るための戦いが始まった。

「デュエル！」

「先攻は私が貰おう、このモンスターをセットする。さらにカードを伏せ、ターンエンドだ」

カードをセットしたのみでターンを渡すミスターT。まるで正体の掴めないそのセットモンスターが、三沢の心を占める絶対ミスや敗北は許されないという焦りによって何倍も大きな脅威に見えるさせているのを彼本人も自覚していた。それ故に、彼はその恐怖を乗り越

えるためにあえて正面から戦うことを選ぶ。

「なら、俺のターンだ。来い、牛頭鬼！」

牛頭鬼 攻1700

三沢の呼びかけに応えフィールドに現れたのは、巨大な木槌を得物とした2足歩行する黒牛の化け物。相方の馬頭と共に地獄の門を守るとされる、由緒正しきジャパニーズ・アンデッドの一角だ。

「牛頭鬼は1ターンに1度、デツキから妖怪、つまりアンデット族1体を墓地に送ることができる。このターン俺は、馬頭鬼を選んで墓地に送らせてもらう」

「牛頭と対を成す馬頭か。君の地属性相当のデツキは、ジエムナイトだと記憶していたが」

「その通り、これは地属性のデツキではなく、疾きこと風の如くを貫く風の属性デツキだ。ただしひとこと言っておくが、今から吹き荒れるのはただの風じゃない。百鬼を率いるあやかしの風だ！永続魔法、竜操術を発動！」

締め切られたはずの部屋に、一陣の風が吹き始める。牛頭鬼の周りを包むように渦巻くその風に乗って飛来した1匹の小型の龍が、自らの体を鍛え上げられた業物、ほのかなピンク色の柄を持つ剛槍として妖怪の手の中に委ねた。

「竜操術は1ターンに1度手札のドラゴン族ドラグニティを1体俺の場のモンスターに装備し、さらにドラグニティが装備されている限りそのモンスターの攻撃力を500ポイントアップさせる効果を持つ。これによりこのターン、このドラグニティーコルセスを牛頭鬼へと装備させてもらおう」

牛頭鬼 攻1700↓2200

「バトルだ。牛頭鬼でそのセットモンスターへと攻撃！」

牛頭鬼 攻2200↓??? 守800 (破壊)

新たな得物を手に入れた牛頭鬼が、全て砕けると言わんばかりの勢いでコルセスをセットされたモンスターへ叩き込む。吸い込まれるようにその中心を貫いた穂先に1瞬だけ毛の1本も生えていない黒い体に何本もの赤い筋模様が走る4つ足の悪魔が見えたが、すぐ



に破壊されて消えていく。だがその存在を見て攻撃をわずかに後悔すると同時に、三沢はミスターTのデッキが前回とはまるで異なるものであることを確信した。

「墓地に送られたモンスターは、魔犬オクトロス。このカードの効果により、デッキからレベル8の悪魔族モンスター1体を手札に加える。私が選ぶのはこのカード、仮面魔獣マスクド・ヘルレイザーだ」

ミスターTが取り出して見せたのは、かつてのバトルシテイにおいて武藤遊戯と海馬瀬人のタッグチームを苦しめた通称仮面コンビの切り札の一角である青い枠のモンスター。

「また儀式モンスターか？よほどお気に入りなのかな。だが俺も、装備状態のコルセスカの効果を使わせてもらおうぞ。このカードを装備したモンスターがバトルで相手モンスターを破壊した時、デッキから装備モンスターと種族、属性が等しいレベル4以下かつ同名以外のモンスター1体を手札に加えることができる。酒吞童子をサーチし、カードを2枚伏せてターンエンドだ」

サーチを許してしまったのは痛い、こちら荒い手札消費をサーチ効果でカバーできたのだから、そう悪い立ち上がりではないはずだ……三沢の脳は、そう初ターンでの激突の状況を分析する。ただ同時に、儀式主体の相手は勘弁してほしかった、ともぼんやり思った。

とはいえ彼自身も様々なタイプのデッキを操るデュエリストとして他人よりも幅広い戦術をカバーしていると自負しているし、事実儀式モンスターに関してもしリトマス死の剣士を主軸としたデッキを1つ組んでみた経験がある。それでもなお前述の感想に繋がるのは、単純に経験の問題だ。そもそも儀式デッキは、メインモンスターのみで戦うデッキや融合デッキに比べその絶対数が少ない傾向にある。カード1枚1枚の効果やそこから考えられるコンボなどは全て残さず彼の頭には入っているものの、実戦を通じて得られる間合いや呼吸をまだ獲得しきれていない。清明の話によれば、それまでのミスターTは融合やダークモンスターのデッキを主に使っており儀式に手を出したのは先ほどの三沢戦が初だったという。こちらの実戦経験の少なさを承知したうえであのデッキを持ってきたとしても驚かない

ぞ、と自らに釘を刺した。

ミスターT LP4000 手札：4

モンスター：なし

魔法・罫：1（伏せ）

三沢 LP4000 手札：1

モンスター：牛頭鬼（攻・コルセスカ）

魔法・罫：竜操術

ドラグニティーコルセスカ（牛頭鬼）

2（伏せ）

「私のターン、マンジュ・ゴッドを召喚。召喚時の効果によりデッキから、高等儀式術を手札に加える」

マンジュ・ゴッド 攻1400

オクトロスのいた場所に召喚されたのは、儀式召喚のお供とも呼ぶべき儀式に関しての万能サーチャーだった。その効果によって新たに手札に加わった儀式魔法と、先ほどサーチされたばかりの儀式モンスター。すぐさま部屋を中心に魔方陣が浮かび上がり、その中心からおどろおどろしい異形の影が蒸気の漏れるような呼吸音と共に這い上がってくる。

それは辛うじて人型の上半身と、その首の上にあるはずの頭部を覆い隠すまるで拷問でもされているかのようにむごたらしく素肌に見える縫い付けられた仮面。だが、そんな特徴もこのモンスターを語る上ではまだマシな方だ。その下半身に至ってはもはやこれは何だ、と形容するのもおぞましい肥大した尾、としか呼びようのない不気味な肉塊と、それらすべてを支え這い回るのに適した昆虫のような太い脚。体内から直接生えてきているらしい無数の絶望、悲哀、怨嗟の感情をあらわにする面の瞳の奥に一齐に鈍い光が灯り、いくつもの視線が三沢の全身を舐めまわすようになぞる。

「儀式魔法、高等儀式術を発動。デッキからレベル合計が8になるよう通常モンスターを墓地に送ることで手札の儀式モンスター、レベル8の仮面魔獣マスクド・ヘルレイザーを儀式召喚する」

仮面魔獣マスクド・ヘルレイザー 攻3200

そう言いながら自らのデッキに手をかけて2枚のレベル4通常モンスター、メルキド四面獣と仮面呪術師カースド・ギュラを墓地へと送り込むミスターT。その仮面モンスター2体を見て真つ先に三沢の脳裏に閃いたのは、眼前のマスクド・ヘルレイザーと対を成すもう1体の仮面魔獣の存在。目下のところ早急な対策が必要なのはこちらの仮面魔獣だが、片割れの存在を意識してのプレイングも必要になってくると頭の片隅に止めておく。

だがまるでそんな浅い考えは筒抜けだと言わんばかりに、もう1枚のカードが発動された。

「さらに魔法カード、黙する死者を発動。墓地の通常モンスターであるメルキド四面獣を守備表示で特殊召喚し、このカードとマンジユ・ゴッドの2体をリリースする」

「なに、すでに手札にあったのか！」  
「そういうことだ。出でよ、仮面魔獣デス・ガーディウス！」

何も無い空中にいきなりぼ、ぼ、ぼ、と3つの青い面がぐるぐると回りながら浮かび上がる。やがてそのうち1つを頂点としてその少し下の位置に横並びで2つが並ぶ三角形を作ったところで回転が止まり、その面の後ろから隠れていた首が、そしてその3つの首を併せ持つ本体が闇の衣を取り去って今にも消えそうなほどに弱まった照明のもとへとその全身を晒す。

異様に長い3つの首と、その半ばほどから繋がる1つの胴。4つの鉤爪に3本指の足こそ持つものの、少なくともすぐ横のあからさまに異形とわかるマスクド・ヘルレイザーに比べればおおむね人型に近寄っているようにも見える。だがなんととっても異様なのは、その胴の中央だろう。よく見ればその腹のあたりには、人間の上半身らしき形をした人形が埋め込まれている。それも一目見ただけで嫌悪感と異様な物への恐れを覚えるであろう、全身を拘束具に縛られた状態だ。繰り返すが、それはただの人形でしかないはずだ。誰が何のためか、この悪魔の体にそんなものを埋め込んだのか、なぜそれを強靱な悪魔の肉体のみならず拘束具まで使って縛り付けなければならなかったのか、なぜ悪魔はその爪で人形を引きはがそうとしないのか、そし

てそもそもあの人形は何を意味しているのか。全てを知るものはや存在しないだろうし、これからも現れることはないだろう。

仮面魔獣デス・ガーディウス 攻3300

「く……い！」

「まずはこちらからだ。マスクド・ヘルレイザーで牛頭鬼を攻撃する」  
「トラップ発動、針虫の巣窟！俺のデッキの上からカードを5枚墓地へ！」

ヘルレイザーが手にした杖を振り回し、その先端から破壊の閃光を放つ。それがコルセスカを構える牛頭鬼に命中する前に、三沢が動いた。

「ランダムな墓地肥やしか。アカデミアの秀才を名乗る割には、ずいぶんと運頼みな戦術のようだが」

「そう呼ばれていたのも昔の話だがな。それに、これは運頼みなんかじゃない。ただの確率の問題だ。俺はこのデッキを組む際、手札や場を経由せず直接墓地に置かれても問題なく仕事のできるカードを中心にカードを選んだ。従ってこの針虫の巣窟は、たとえどんなカードが落ちようと9割以上の確率で何らかのアドバンテージを俺にもたらす！」

「ならば私も、そのアドバンテージのご相伴に預かるとしよう。速攻魔法、魔力の泉を発動。相手フィールドで表側の魔法、罠カードの数だけデッキからカードを引き、その後自分フィールドで表側の魔法、罠の数まで手札を捨てる。竜操術、ドラグニティーコルセスカ、そしてその針虫の巣窟の存在により3枚を引き、魔力の泉自身の存在により1枚を捨てる」

ともにカードを引くため、自らのデッキに手を掛ける。かたや引き抜いた3枚のカードから1枚を選びゆつくりと墓地に送ったのに対し、もう片方は引き抜いたデッキトップ5枚に目を走らせてすぐさま墓地に送る。その直後、閃光をまともに受けた牛頭鬼の姿が1瞬で消し飛んだ。

仮面魔獣マスクド・ヘルレイザー 攻3200↓牛頭鬼 攻220

0 (破壊)

三沢 LP4000↓3000

「ぐっ……痛い出費だが、この程度はまだ必要経費だ。墓地に送られた牛頭鬼はその効果により自身以外の墓地のアンデットを除外し、手札のアンデットを呼び出すことができる。達人キョンシーをコストとし、酒呑童子を守備表示で特殊召喚！」

酒呑童子 守800

「戦闘ダメージを最小限に抑える算段か。だが、それも時間稼ぎに過ぎないな。デス・ガーディウスで攻撃、ダーク・デストラクション」  
3面の怪物が両腕を体の前に構え、手のひらから闇のエネルギー波を放出する。瓢箪を手にした小柄な鬼が、その波に飲み込まれ砂へと還っていく。

仮面魔獣デス・ガーディウス 攻3300↓酒呑童子 守800

(破壊)

「やってくれる……だが、この程度ならまだリカバリーはいくらでも効く。永続トラップ発動、リビングデッドの呼び声！俺の墓地のモンスター1体を、墓地から攻撃表示で特殊召喚する。甦れ、土地鋸！」  
牛頭鬼が倒れ、酒呑童子もまた敗れた。しかし、彼の操る妖怪デツキはその圧倒的なしぶとさが何よりの強み。何度傷ついても必ず誰かがすぐさま立ち上がる、モンスターを途切れさせない継戦能力に関しては並のデツキとは一線を画している、そう本人も自負している。  
そして次に繰り出されたのは、蛇。しかしそれはただの蛇と呼ぶには異様に全長が短く、それと反比例するかのよう<sup>つちのこ</sup>に胴体が明らかに通常より太い大蛇だ。その蛇が体を丸めて自らの尾を口に咥え、1つの輪となって転がったかと思うとみるうちに加速して猛スピードで2体の仮面魔獣の周囲を回り始めた。

土地鋸 攻1600

「土地鋸のモンスター効果発動！このカードが特殊召喚に成功した時、自身以外の特殊召喚されたモンスター全てを裏守備表示にする！」

「なるほど、それも針虫の巣窟で墓地に送ったカードか。ならばカードを伏せ、ターン終了だ」

大蛇の回転が風の流れを生み、その流れがやがて小型の竜巻にまで成長する。その渦に閉じ込められた2体の仮面魔獣が、脱出することもかなわず強制的に裏側守備表示へと状態を上書きされた。

仮面魔獣マスクド・ヘルレイザー 攻3200↓???

仮面魔獣デス・ガーディウス 攻3300↓???

「ここからは俺のターンだ！まずは墓地の馬頭鬼をゲームから除外することで、墓地のアンデット族1体を蘇生させることができる。この効果で再び牛頭鬼をフィールドに呼び戻し、自身の効果で2体目の馬頭鬼……いや、怨念の魂 業火を墓地に送る。さらに通常召喚だ、出て来い九蛇孔雀！」

再び地の底より蘇る牛頭鬼。その横にさらに召喚されたのは、一見緑色を基調とした羽根を持つごく普通の美しい孔雀だった。しかしその羽をパツと広げると、そこには当たり前の目玉模様はただの1つも存在せずその代わりに自由気ままにうねり舌を出し牙を見せる9匹もの蛇の影がまるで絵画のごとくくつきりと存在しており、やはりこの存在もただの鳥などではないことを物語る。

九蛇孔雀 攻1200

「そして俺の墓地に存在する妖怪、九尾の狐の効果を発動。このカードは俺の場のモンスター2体をリリースすることで、手札または墓地から自身を特殊召喚することができる。黄泉より帰れ、九尾の狐！」  
土地鋸と九蛇孔雀、2体の妖怪が全く熱を発しない妖かしの炎……狐火に包まれる。そのまま音もなく燃える2つの人魂に挟まれるような格好で、黄泉帰りを行った9本もの長い尾を持つ白面金毛の狐がゆらりと飛んで着地した。

九尾の狐 攻2200

「さらに、今リリースされた九蛇孔雀の効果を発動。このカードがリリースされたことにより、デッキまたは墓地からレベル4以下の風属性モンスター1体を手札に加えることができる。そしてこのターンの竜操術により、サーチしたドラグニティーブランドイストックを九尾の狐に装備する！」

人間ほどもある巨大な妖怪狐の、その尾と対比してあまりにも細く

たおやかな胴体に巻きつくようにして緑色の幼竜が武器として鎧として装備される。竜操術により竜の力をも我がものにした傾国の大妖怪がそれを見て勝ち誇るように小さく鳴くと、それに呼応するようにしてブランディストックも満足げにクリクリした丸い眼をしばたかせた。

九尾の狐 攻2200↓2700

「バトルだ。九尾の狐でマスクド・ヘルレイザーに攻撃、九尾槍！そして自身の効果により黄泉帰りを果たした九尾の狐は、貫通能力を得る。先ほど貰ったダメージ、耳を揃えて返させてもらおうか！」

九尾の狐 攻2700↓??? 守1800（破壊）

ミスターT LP4000↓3100

九尾の狐の持つ尾のうち1本が鋭く伸び、鋼の槍と化してセットカードを貫く。いともあっさりとは仮面魔獣の片割れを下した直後、さらに別の尾がもう片方のカードめがけて伸びた。

「ブランディストックを装備したモンスターは、1ターンに2度の攻撃ができる。もう1度攻撃しろ、九尾槍！」

九尾の狐 攻2700↓??? 守2500（破壊）

ミスターT LP3100↓2900

モンスター越しとはいえ闇のデュエルでの2連撃をまともに受け、ミスターTの体を構成する闇がわずかに揺らぐ。だがそんなことはまるで意に介した様子もなく、デッキから1枚のカードを取り出した。

「見事な攻撃だった、と言いたいところだが、これからその代償を支払ってもらおう。デス・ガーディウスが破壊されたことで、場に1枚の仮面を残すことができる。その仮面は相手モンスター1体に装着され、そのコントロールを私ができる。デッキより魔法カード、遺言の仮面を発動！対象は無論、九尾の狐だ」

「そんなものは知っていたさ。だがあいにくだがミスターT、いくらダークネスの力があるうともこの俺に見えているカードの効果で不意を突こうなどは百年早い。速攻魔法、炎王円環を発動！場の炎属性モンスター1体を破壊し、墓地から別の炎属性モンスター1体の特

殊召喚する。九尾の狐を破壊することで、怨念の魂よ甦れ！」

2度にわたる攻撃を終えた九尾の狐に、仮面魔獣の亡骸から放たれた最後の仮面が迫る。しかしその顔が復讐の仮面に包まれる直前、誇り高い大妖怪は自らの体に火を放つことで遺言の仮面、そしてブランドイストックごとその命を炎の中へと還していった。

しかし、それで終わりではない。音もなく燃え盛るその火柱に誘われたかのように、炎の中心がぶわっと膨らんだかと思うとそこに人の顔らしきものが浮かび上がる。

怨念の魂 業火 攻2200

「おっと、これだけじゃないぞ。九尾の狐が破壊された時、場に2体の狐トークンを特殊召喚する」

狐トークン 守500

狐トークン 守500

巨大な怨念の集結により生み出されたあやかしの炎と、その横で輝く2つの小さな狐火。3つの炎が部屋を赤く照らし、揺らめく蜃気楼の中で三沢が最後の指示を出す。

「続けて、業火でダイレクトアタック！」

業火が一際大きく燃え上がり、その口から火炎弾を吐き出す。眼前のミスターTめがけ一直線に飛んで行ったそれが目標に狙いたがわず命中し、炎がすべてを終わらせる……はずだった。

「馬鹿な！」

三沢がそう叫んだのも無理はない。業火の吐き出したはずの炎は命中して爆発するどころかその寸前でみるみるうちに勢いを無くし、凶悪な爪と杖……ついさつき大妖怪の手を持って直々に闇へと還されたはずの悪魔の、その一撃をもって霧散させられたのだ。

仮面魔獣マスクド・ヘルレイザー 攻3200

仮面魔獣デス・ガーディウス 攻3300

「なぜ、そのモンスターが2体とも復活して……」

疑問の声が、途中で絶句に変わる。違ったのだ。モンスターは、「2体」ではない。2体の仮面魔獣の全身から伸びてその動きを操る闇の糸が、その背後に隠れて見えなかった3体目のモンスターの手元へと



続いている。

死霊操りしパペットマスター 守0

ミスターT LP2900↓900

「パペットマスターだと……？だが、そのカードの召喚に成功し、なおかつ効果を発動したということは……まさかつ！」

死霊操りしパペットマスター。攻守ともに0でレベル6と単体でのステータスだけを見るならば扱いにくいことこの上ない闇属性悪魔族のモンスターだが、その真価はパペットマスターの名が示す通りの特殊能力にあった。

すなわち、アドバンス召喚に成功した際にプレイヤーの墓地から悪魔族を2体蘇生させることのできる力。プレイヤーに2000という莫大なライフコストこそ強いものの、自らの傷つき倒れた仲間の亡骸をレベル制限や効果無効といった後々に響く枷も無く蘇生ターンの攻撃不能というだけの傀儡として再び現世に呼び戻す恐ろしい特殊能力に比肩するカードはいまだ数少ない。

だが、待つてほしい。前述したように、パペットマスターはアドバンス召喚に成功しなければただの攻守0のバニラに過ぎないはずだ。そして九尾の狐の猛攻により、あの1瞬の間ミスターTの場にモンスターは存在しなかったはずだ。では、アドバンス召喚に必要なリリース要因をどこから調達したのか？そして何より、なぜ三沢のターンのバトルフェイズにもかかわらずアドバンス召喚が成立しているのか？何かに気が付いた三沢に答えを提示するかの如く、そのカギとなる2枚の伏せカードがミスターTの場で表側になっていた。

「量子猫、それにライバル・アライバル……！」

発動した瞬間にモンスターとなる永続トラップ、量子猫。そして互いのターンのバトルフェイズにモンスターを召喚することが可能となる速攻魔法、ライバル・アライバル。この2枚のコンボにより、相手ターンでの不意打ち気味のアドバンス召喚……そして、2体の仮面魔獣の蘇生をやったのけたのだ。

「さあ、どうするかね？モンスターの数が増えたことで攻撃が巻き戻ったが、業火も牛頭鬼もいまだ攻撃の権利を残している」

「そんなことはわかっている！牛頭鬼でパペットマスターに攻撃する……！」

牛頭鬼 攻1700↓死霊操りしパペットマスター 守0（破壊）  
木槌の一撃が人形遣いを頭から叩き潰し、その衝撃で闇の糸が切れて仮面魔獣が自由になる。だが三沢にすでに手札はなく、九尾の狐の黄泉帰りも1ターンに1度しか使えない関係上これ以上はどうあがいてもターンを譲るほかはない。

「ターン……エンドだ……」

ミスターT LP900 手札：0

モンスター：仮面魔獣マスクド・ヘルレイザー（攻）

仮面魔獣デス・ガーディウス（攻）

魔法・罫：なし

三沢 LP3000 手札：0

モンスター：牛頭鬼（攻）

怨念の魂 業火（攻）

狐トクン（守）

狐トクン（守）

魔法・罫：竜操術

リビングゲッドの呼び声（対象無し）

「私のターンだ。牛頭鬼を、そして業火をそれぞれ攻撃する」

2体ずつのの妖怪と魔獣がぶつかり合い、互いの獲物が火花を散らす……だが、勝負は最初から見えていた。すぐに牛頭鬼の木槌はマスクド・ヘルレイザーの杖の一撃で持ち主の首ごとへし折られ、その後を追うように業火の巢食う鐘もすぐにデス・ガーディウスの鉤爪によって玩具のようにあっさり引き裂かれてしまう。

そして闇のデュエルの厳格なルールは、今度は三沢に対して牙をむく。モンスターたちの激突の衝撃で壁まで吹き飛ばされた三沢がどうにか立ち上がろうとしたところで、今の戦闘中にモンスターが押さえきれなかったダメージがプレイヤーである三沢の脳へと伝わり、その刺激により彼自身が作り出した痛みが全身へと襲い掛かる。

「ぐわあああっ！」

仮面魔獣マスクド・ヘルレイザー 攻3200↓牛頭鬼 攻1700  
(破壊)

三沢 LP3000↓1500

仮面魔獣デス・ガーディウス 攻3300↓怨念の魂 業火 攻2200 (破壊)

三沢 LP1500↓400

「ぐ……はあっ……!」

先の戦いでオツドアイズ・グラビティ・ドラゴンの効果により大量にライフコストを支払った時の締め付けるような苦痛とはまるで違う、もっとシンプルで原初的な痛み。このまま痛みで全身をゆだね、意識を手放し全てを諦めてしまえば楽になれるのかもしれない。

だが、それを許せない責任感が彼にはあった。今回のダークネス戦の作戦の全ては、彼の頭の中にある。鯨島校長には多少話を通しておいたが、それでも細かいところを知るのは自分しかない。まだやるべきことがある限り、俺が倒れるわけにはいかない。荒い息を吐きながら、全身の痛みから目を逸らして立ち上がる。

「さあ、ミスターT……! デュエルを続けるぞ……!」

「ほう、立ち上がるか。だがそれに何の意味がある? お前ももうじき、ダークネスに包まれることになる……! ターンエンドだ!」

「そんなこと、まだわからない!」

会話から心の闇をこじ開け、そこから侵食を始める。ミスターTの作戦だと頭では理解しつつも、ついカツとなってその言葉に応えてしまう。閉まったと思ったころには、すでに遅かった。淡々としたミスターTの言葉が、獲物を締め付ける毒蛇のごとく三沢に絡みつく。「こうしてお前一人が戦っていても、その戦いを誰が知る? 誰も知りたくない、永劫に孤独な戦いだ。誰からも感謝されることもなく、そのあげくすべては失敗してあらゆるものがダークネスに取り込まれる。ならその努力に、一体何の意味があるのかね?」

「だ……黙れ! 俺のターン、ドロォ!」

自分の心の中に入り込み、わずかなスキマをこじ開けようとするその言葉から必死で耳を逸らし、目の前のデュエルと自らのデッキに全

神経を集中させてカードを引く。そんな状態の中、恐らくこれが最後のターンになるであろうこの局面で引いた1枚。それを見た瞬間、三沢の脳はフルスピードで回転を始めた。

そしてその先に掴んだのは、勝機。いや、それはそう呼ぶにはあまりにもか細く不安定な物だった。しかし他のどのカードでもなく、このカードでなくては引き当てられなかった勝利への可能性が、ほんのわずかにだが生まれたのだ。

「俺のフィールドには今、アンデット族の狐トークン2体が存在する。この2体の存在を道標とし、冥界の入口より罪人への迎えが現れる！出でよ……火車！」

確率的にはとても低いと言わざるを得ないその可能性に、三沢は賭ける。信じれば、デッキは答えてくれる。

そして火車が、現世に招来した。それは、炎に包まれた車輪と共に彼岸より来たる自我を持つ冥界の車。罪人の死体を冥界の底へと持ち去り、その魂を未来永劫成仏することさえ許さない場所へ連れ去っていくと言われる伝説の妖怪である。獲物を見つけたその目が光り、車の前面にかかっていたすだれがおもむろに開く。その奥に広がっていたのは車の内部ではなく、無限に広がり中には何ひとつ存在しない完全な闇。そしてすだれが完全に上がりきると同時に、闇が見る者すべてを引き寄せる強烈な吸引力を放ち出した。明らかにサイズが違う2体の仮面魔獣の姿がねじれ、歪み、手足を振り回しての抵抗虚しくその車内へと……それどころか無差別悩みは本来味方であるはずの狐トークンですらも吸い込んでしまう。

全ては、ほんの1瞬だった。火車の通った跡には、あれほどたくさいいたはずのモンスターはもはや1体すらも残っていない。ただ1つ、火車のみを残して。

「火車の特殊召喚に成功した時、火車以外の全てのモンスターは持ち主のデッキへと戻される。デス・ガーディウスが遺言の仮面を遺す事件はフィールドから墓地に送られること、よってこの方法ならばその効果も封殺される」

「だが、火車は本来自らのアンデット族とコンボで使うべきカード。

もともと攻撃力が不定の火車は自身の効果でデッキに戻したアンデット族の数によってその数値が変動するが、お前が召喚条件として用意したのはデッキに戻ることのできないトークン2体。それでは攻撃力は0としかならないはずだ」

火車 攻? ↓0

そう、ミスターTの言葉は正しい。トークンはあくまでカードとして存在しない以上、デッキに戻るといふ現象が起こりうるはずもない。つまり火車が自らの効果でデッキバウンスに成功したのは、実質的には悪魔族である仮面魔獣2体だけでしかないのだ。

だが、三沢の見つけた勝機はそんな浅い言葉では揺らがない。そんなもの、このカードを引いた時にはすでに理解していたのだから。

「わかつているさ。だが俺にはまだ、この墓地のカードがある。墓地の魔法カード、シャツフル・リボーンの効果を発動！俺の場の表側表示のカード1枚をデッキに戻すことで、デッキからカードを1枚ドロウする。俺が選ぶのは、このリビングデッドの呼び声だ」

土地鋸を蘇生して以降、ずっと何の効果も持たないカードとして場に留まっていたリビングデッドの呼び声。それをたった1枚のカードのみを求めて新たな手札に変換し……道が、開けた。

「魔法カード、ガルドスの羽根ペンを発動！」

「何?」

ここで初めて、ミスターTの表情が変わる。それは、疑い。目の前の人間が、何を考えているのかわからないという疑念。このデュエルが始まってから初めて、三沢の思考がミスターTの論理を上回った瞬間だった。

「その様子だと解説の必要もなさそうだが、一応宣言させてもらうぞ。ガルドスの羽根ペンは俺の墓地の風属性モンスター2体をデッキに戻し、場のカード1枚を持ち主の手札に戻す。2体のドラグニティを戻し、俺が選ぶのは火車、お前だ！」

翠緑の風が吹き、轟々と燃える火炎の車がまるで燃え尽きたかのようになくなっていく。地獄の熱気がふっと和らぎ、ついにフィールドには何もなくなつた。

「火車は、自分フィールドにアンデット族が存在しない限り何の役にも立たないカード。そんなものを手札に抱え、何をするつもりだ？」  
「いいや、違うさ。俺がやりたかったのは火車を手札に戻すことじゃない、これで俺のフィールドにモンスターはいなくなった！墓地のトランプ、もののけの巣くう祠の効果を発動！このカードをゲームから除外することで、墓地のアンデット族1体を効果を無効にして特殊召喚する……もう1度黄泉より帰れ、九尾の狐！」

九尾の狐 攻2200

「今度こそ最後のバトルだな、ミスターT。九尾の狐でダイレクトアタック、九尾槍！」

再び現世に復活した白面金毛の大妖怪が、尾の一撃を飛ばす。ミスターTの宗元に吸い込まれるように打ち込まれたそれが、その闇の体を串刺しにした。

九尾の狐 攻2200↓ミスターT（直接攻撃）

ミスターT LP900↓0

「よく考えてみるがいい。こうして私を倒したところで、その活躍を誰が知る？勝とうが負けようが誰も知りようがない、誰も見ていない。それでもその戦いを続ける意味があるのかね？」

ライフをすべて失ったミスターTの体が、捨て台詞と共に薄れて消えていく。どうにか撃退に成功した安心感も相まって、考えてはいけないと思いつつもつい思考がミスターTの発言の方へと延びる。誰からも知られない、ならばそこに何の意味があるのか、か。

「もうこんな時間か……」

これ以上考えると本格的に危険な方に傾きそうな思考を誤魔化すために壁にかかっていた時計の方を見て、わざわざ小さく口に出してつぶやく。気が付けば、ミスターTとのデュエル開始から30分が経過していた。そろそろ鮫島校長は皆にこの危機を、そしてこれから始まる作戦を伝えることができただろうか。そう思う彼の注意を、床に転がったままのPDFの着信音が引いた。拾い上げて通信相手の名

を確認し、通話ボタンを押す。

「天上院君、どうし……」

『残念だったね、吹雪だ。今明日香からPDFを借りてね、いつの間に妹のアドレスなんて手に入れていたんだい？もっとお堅いタイプだと思っていたが、なかなか隅に置けないところもあるじゃないか』

「いや、これはセブンスターズの時に……それよりどうしたんですか、俺相手に」

通話相手……天上院吹雪の非常事態とは思えない第一声に、返す言葉も思わず呆れ声になっているのを自覚する。とはいえ当の本人も本気ではなかったらしく、すぐに真面目な表情と声色に切り替えた。

『鮫島校長から、今コロッセオで発表があったよ。ダークネスの話は知っていたが、まさかこの学園にここまで深く入り込んでいたとはね。正直、今の段階でもここに全校生徒がいるとは思えない。すでに何十人単位で向こうの世界に引き込まれている、そう考えるのが妥当だろう』

「……すみません、俺の判断が遅れたせいで」

何十人単位、という言葉が、三沢の胸に重くのしかかった。計算に間違いがあったのかダークネスに力を貸す第3者が存在するのは依然わからないままだが、一足早く手を打つためにこうしてアカデミアに戻ってきたのにもかかわらず後手後手に回らざるを得ず、完全に被害を防ぎきることができなかった後悔に包まれる。

『いや、責めているわけじゃない。君がこうして警告してくれたから、まだ無事な生徒もたくさんいるんだ。それよりも君の立てたという作戦だが、その……』

珍しく言いよどむ吹雪に、思わず笑いかける。もっともな反応だ、と思った。俺だってツバインシユタイン博士の下で学んだ次元世界に関する理論や、霸王の異世界で得たこの次元での常識など通用しない様々な知識がなければこんな話、到底信じられるものではなかっただろう。

『確かに、光がある限りその裏側には必ず闇もある。それ故にダークネスは不滅で、消し去ることは不可能だ。そのことは、他ならぬダー

クネスの力に取り込まれていた僕がよくわかっている。となれば、君の言う作戦は確かに奴に対して数少ない有効な対抗手段となり得るだろう。だが、本当にそんなことが可能なのか？」

本当に、そんなことが可能なのか。それは彼自身、この段階に至るまでの間に何度も自分に聞いてきたことだった。だが、いや、だからこそ、彼はその返事をすることに迷わない。そう問われて迷いや躊躇いを生じるような段階は、とうの昔に自分の手で通り過ぎたのだから。

『……いや、すまないね。君のことを信用していないわけじゃないんだが、そうとられてもおかしくない発言だった。必ずこの作戦、成功させよう。僕たちも陰ながら、できる事がないか探ってみるよ』

「はい、お願いします。では」

通話を切り、再び机に向かう。想定外のスピードのせいで多少計算が狂ってしまったため、その修正を行わなければならない。気が付けば、心の中のもやもやした気分は消えていた。そうだ、俺のやることにはちゃんとした意味がある。これが、この戦いで俺の役目だ。

このタイミングで電話をしてきたということとはもしかしたら、あの人は自分の心が揺らぎそうになっていたことを察知していたのかも知れない。ふと、そんな考えが頭をよぎる。一時的にとはいえダークネスの力を手に入れていたあの人ならば、ダークネスがまず自分に手を出そうとしてきたことに気が付けてもおかしくないだろう。だとしてもそれはそれでいいじゃないか、今の会話のおかげで俺は自分の気持ち新たにすることができたのだから。

再び猛烈な勢いで、紙の上をペンが走り始めた。



## ターソン122 鉄砲水と紫毒の記憶

「何の用だい？こんな辺鄙な場所に」

どこかの部屋。電気すらついていない部屋の中で、その主が荒れ果てた部屋の中を手で指し示しながら愉快そうに来客に尋ねる。尋ねられたその人影はしかしそれには答えず、返答代わりに無言で主へ向けて右手をかざす。

部屋の主がその行動に不信を抱き何かアクションを起こそうとしたのだとしても、それはあまりにも遅すぎた。その右手と連動しているかのように頭に内部から割れるような痛みが走り、立つことも喋ることもままならずその場にうずくまって頭を抱える。辛うじて開いた視界に、手をかざした側の足が見えた。突然の行動にもまるで反応することなく、1歩ずつゆっくりと向かってくる。

「う……い」

それでも距離を取ろうとしてどうにか体を反転させ、そのまま腕を前に出して這ってでもこの場を離れようとする。だがその両腕を頭から離れた瞬間、より一層の痛みが彼の脳内で弾けた。またしてもその手を自らの頭部に戻し、赤ん坊のように丸まった状態でその場に転がり続ける事しかできない部屋の主の元にたどり着いた人影は、次にその手を腰につけられたデュエリストの証、デツキケースに伸ばす。倒れたままの部屋の主には目もくれずその中から1枚のカードを探り当てた人影は、何も言わずにその1枚を再びデツキへと戻す。それはかろうじて理解できたものの、どうすることもできない部屋の主に侵入者が一声囁く。

「これでいい。だが今起きたこと、そしてお前の正体はもう少し後、その時が来るまで忘れるがいい。全てはダークネスのために……」

その言葉を最後に、侵入者が踵を返す。あまりの痛みに耐えかねた部屋の主が意識を失う寸前まで見ていたものは、その侵入者の黒いブーツだった。それが名をトゥルーマン、通称ミスターTと呼ばれる存在であったことは、知る由もない。

森の中にひっそりとたたずむ、かつて特待生のためという触れ込みで作られた廃寮。この場所から三幻魔の研究の結果として吹雪さんが次元を飛ばされ、いまだ行方知らずの本物の藤原優介もダークネスの世界へと旅立っていった、デュエルアカデミアの暗部。この場所には、何の因果か入学当初から僕も深く関わってきた。そんなこの場所に、この緊急事態に訪れることになろうとは。三沢の考えることはさっぱりわからないけれど、ここに入るのならあの人に一言声をかけておく方がいいだろう。

「稲石さーん、ちよつとちよつとー」

大声で呼びかけるも、廃寮の地縛霊から返事はない。いつもならたとえ返事がなくとも、こちらの声が聞こえた証拠に門がポルターガイストでひとりで開いて道を開けてくれるはずだ。けれど、今日は閉ざされて錆びついたうえに蔦まで絡みついたこの門はそれが当然と言わんばかりに閉ざされたままでピクリとも動こうとしない。仕方がないので構わず門を乗り越えていつも通り伸び放題に伸びた庭の雑草を掻き分けて、その先の巨大な扉をぐいぐいと開ける。相変わらずのほこりまみれの室内の空気はしんと静まり返っていて、ついこの間ダークネス吹雪さんと戦ったあの時の熱気が嘘のようだ。

「稲石さんってば、ちよつと出てきてよー」

返事はない。視界に入る中で動くものといえば、辛うじて見える窓の外の曇り空に飛ぶ1羽の鳥の影だけだ。何かがおかしい。あの人はこの地縛霊だから、この寮の外に出ることはできないはず……と、そこまで考えて、あることを思い出した。そもそも、あの方は誰なんだろう。稲石という名前も本名かどうかは怪しいものだし、地縛霊だという情報ひとつにしてもあの方がそう自称しているだけだ。これまで何度も浮かんでは来たが、そのたびに後で本人に聞こうこれが終わったならあの人に直接聞きに行こうとひたすら後回しにして塗りつぶしてきた疑問。

だがそれが形になる前に、思考が強引に中断された。一体どこから出てきたのか、背後から肩を突然人間の手で叩かれたのだ。その感触

よりも、制服越しでも体に伝わるその冷たさにぞつとしながら振り返る。

「やあ、どうしたんだい？」

「うわっ!? な、なんだ稲石さん……」

「なんだとはご挨拶だね、まったく。それで？」

多少ムツとした様子の稲石さんに、ぎこちなく笑いかける。その手は離されたというのに、いまだにその感触が肩に残っている。

「……それが、僕にもよくわからないのよ。とにかくここに行つてろつて言われただけで。だからまあ、とにかく聞いてみようと思つてさ」

何が何だか、という顔でこちらを見つめてくる稲石さん。その感想ももつともで、自分の言葉ではあるものの我ながら下手な説明だ、と笑いたくなる。聞かされる方はいい迷惑だろうが、僕だつてわからない物はわからない。そもそも、稲石さんをこの話に巻き込めとは三沢には言われていない。ただこの彼がこの廃寮を指定してきた以上現地の住人である稲石さんの助けがあつたほうが何かとスムーズに行くだらうし、世界どころか次元規模で起きているダークネスの侵攻は稲石さんにとつても他人事ではないはずだ。

とにかくとPDFを引つ張り出し、稲石さんの視線を感じながら三沢に通話を繋ぐ。ありがたいことに、この島の内部は例え火山にしようが森の奥地にしようが、この廃寮内でさえ決して圏外にはならない。海馬コーポレーションの開発した、世界中どこにいてもデュエルが楽しめるデュエルディスクの中央コンピュータ接続技術を転用した強力通信技術のおかげだ。三沢もこちらからの連絡を待つていたらしく、ワンコールすら待たされることなくすぐに通話が繋がった。

「あ、三沢？ こつちは今寮に入ったとこだけど」

『そうか。そつちは無事だったみたいだな』

「そつちは……?」

含みのある言葉に目を凝らしてよく見ると、三沢の方には画面越しでさえはつきりと疲労の色が見える。ついさつき僕の店で連絡をも

らった時には、いくらなんでもここまでの消耗はしていなかったはずだ。

「……何かあったの？」

『少しばかり野暮用がな。だが今は俺のことはどうでもいい、そこに行ってもらった理由を説明するぞ』

適当に言葉を濁しつつ、真剣な顔になる三沢。ここからがいよいよ本題だと、稲石さんが画面を背後から覗き込む気配がした。

『まず結論から言おう。今回の目当ては、その廃寮の地下……セブンスターズのアムナエルがかつて遺した、錬金術の遺産だ』

アムナエル。セブンスターズ最後の1人にして、元オシリスレッド寮長の大徳寺先生。現在ではファラオの体内に魂を取り込まれて魂だけでも元気で……？やっているけれど、精霊の見えない三沢はそれを知る由もない。マクロコスモスとか原始太陽ヘリオスとか、今となってはすっかり懐かしい話だ。

いや、そうじゃなくて。昔の記憶に浸ることなんて、後でいくらでもできる。その後、とやらがこの先の未来にあればの話だけ。そのために戦うんだ。

「アムナエルの錬金術……なんで？」

『一言で乱暴に説明するならば、それがエネルギー源として必要だからだ。そもそも、今回の事件で俺の立てた作戦はツバインシユタイン博士が昔発表した多次元理論が基になってな。なあ清明、四次元世界についての話をお前は聞いたことがあるか？』

「……チャクチャルさん、説明！」

『はいはい。んー、マスターでもわかるようにか……かなり面倒な仕事だが、まあやってみよう』

なんだかすごく失礼な前置きだった気もするが、ここで言い返すと本格的に話が進まない。ぐっと堪えて下唇を噛み、黙って頭の中に響く声に意識を傾ける。

『我々の今存在する世界の物質には、全て幅、奥行き、そして高さの3つの要素がある。これはわかるな？だからこの世界は三次元、そう言いかえることができる。紙に描いた絵には長さや幅があっても奥行

きが存在しない、二次元という言葉にはそういう意味があるわけだ』  
「ふんふん。幅、奥行き、高さ……ん？じゃあ4つ目って何？あと何が  
あるの？」

『時間だ。三次元世界の概念からすればありえない話だが、我々が物の  
の高さや幅、奥行きを決められるように四次元世界では時間を4つ目  
の枠として自由に操作できる、まあそんなところだ』  
「なるほどなるほど」

そして画面越しに、今聞いた話をそっくりそのまま繰り返す。よく  
知ってたな、というあからさまに訝しげな視線とチャクチャルさんか  
らのじつとりとした何か言いたげな気配の両方に対しきっぱり気づ  
かないふりをしていると、三沢もあまり時間がないことを思い出して  
話題を次に移した。

『だいぶざつくりした説明だが、確かに大まかなところはそんな認識  
で構わない。そもそも博士の理論によれば時間と空間は紙一重の物  
であり、両者の差はない。それは人間もデュエルモンスターズも関係  
なく最も原初的な本能の奥底に刻み込まれている情報であり、時計も  
次元の数も12となっているのは偶然ではなくその本能が無意識に  
そうあることを求めていたからだ。もともと、学界ではとても認めら  
れなかったらしいがな』

「だろうね」

デュエルモンスターズの精霊に独自の世界があることだって、この  
目で直に精霊を見なければ僕も到底信じられないことだったろう。  
学会とか論文とかはさっぱりだけど、そこに他の次元の話なんてぶっ  
飛んだ理論を持ち込んだらどんな目で見られるのかぐらいは僕だっ  
て想像がつく。

即座に同意した僕にかすかに悲しげに小さく頷き、いよいよ三沢の  
話も一番重要なところに入り始めた。

『そして、ここからがこの作戦の一番重要なところだ。これまでにも  
俺たちは何回か、ある程度のエネルギーと空間の不安定さという2つ  
の条件が揃った時に別の次元へと人間、それどころかアカデミアの建  
物のような巨大な質量をも飛ばすことができるという実例を見てき

ただろう？この四次元理論に従えば、俺たちに認識できないだけで三次元間の移動と残る4つ目、時間の移動にはそう大差がない。ゆえに次元を飛ばすほどのエネルギーを準備し、ほんの少し別ベクトルに傾ければ対象をはるか未来や過去へ飛ばすことも可能となるはずだ。ここまで言えば、わかるな？』

「まさか……それでダークネスを？」

『そうだ。ダークネスは俺たちのいるこの世界と表裏一体の存在、一時的に追い払うことはできるかもしれないが決して消し去ることは不可能だ。だが可能な限り遠くの未来へと送ることができれば、その時が訪れるまでにまた準備ができる。倒すことができないが、先送りすることはできる』

「おおー」

『もつとも、あのデスベルトだったか？さすがにあれに匹敵するほどのエネルギーをこの短期間で生み出すのは難しく、アカデミアの電力を集中させる程度ではとてもじゃないがパワーが足りない。そこで俺が目をつけた最後の可能性が清明、今お前のいる廃寮にあるはずの錬金術の力なんだ。それでも範囲を絞ることで必要となるエネルギーを最小限に抑えるため、ダークネスの出現位置の特定にもこんなギリギリまで時間をかけた。理論は既に完成している、後はエネルギーの問題だけだ』

「……なるほどね」

ただの使いっぱしりだと思ってたけど、これはなかなかどうして重要な仕事だ。今更か。とはいえどうにか笑顔で返したものの、そんな僕の顔はひきつっていなかっただろうか。いくらなんでも僕だけプレッシャー重すぎませんか、三沢っちゃんや。

「それで、具体的には何を探せば？」

『賢者の石、だな。錬金術の最高成果とも言われる、不可能を可能に変える石。そこに秘められた力は、生命すら生み出すという。錬金術は俺も基礎知識程度しかないが、大徳寺先生の授業内容は全て頭に入っている。力を引き出す程度のことではできるはずだ』

「な、なるほど……？」

賢者の石、どんな形をしてるんだろう。色は？サイズは？そもそも石というけれど、要するに宝石みたいなものをイメージしておけばいいんだろうか。わからないことだらけだけど、見切り発車は今に始まったことではない。

覚悟を決めた僕をよそに、ふとほこりまみれの廊下に動く影が見えた。あの茶色いシルエット、見間違えようがない。

「フアラオー・ちよつとこつちおいで！」

最近食事時だけフラツと帰ってきて普段どこにいるのかと思ったから、ここで暮らしてたのかあの猫。僕の声に反応してピクリと耳が動き、ゴロゴロと喉を鳴らしながら近寄ってきたフアラオの頭を撫でてやる。気持ちいいの大きな口を開けてあくびしたその喉の奥から、優しい光を放つ球体がふわりと飛び出た。最近久しぶりに会う、アムナエルこと大徳寺先生だ。

「早速ですけど今の話聞いてましたか、大徳寺先生？」

『もちろんだニヤ。それにしてもさすがは三沢君、賢者の石とはいいところに目を付けるニヤ。私がかつて作成した賢者の石は私の病ひとつ治せなかった不完全な代物に過ぎないけれど、それでもホームクルス作成用に数だけはそれなりに残してあるニヤ。次元を超える理論は私にはわからないけれど、全てかき集めればかなりのエネルギー量にはなるはずだニヤ』

「それじゃあ……！」

『付いて来るニヤ。どうせあれはもう、アムナエルには不要なものだ』

最後の一瞬で語尾が消えたのは、大徳寺先生としてではなく錬金術師アムナエルとしての言葉だったのだろう。再び引っ込んでいく魂を再び呑み込むと、それを待っていたかのようにフアラオが歩き出す。この方向は間違いない、かつてのアムナエルの研究室だ。

「こつちはなんとかめどが付いたかな。じゃあ三沢、終わったらそつちに届けるから。いったん切るよ！」

『ああ、頼んだ。だが油断するなよ、どうもダークネスの侵攻スピードがおかしい。ダークネスだけではなく、そこに協力する第三者が存在する可能性もある。あまり時間はないと思った方がいい』

不吉な言葉を最後に、通話が切られる。ダークネスの協力者なんて、そんな人生に絶望した人がどこかにいるのだろうか……なんて、間違ってもダークシグナーに言われたくはないだろう。ともかく、今はフアラオだ。研究室までの道はまだ覚えていたが、賢者の石の在り処は大徳寺先生にしかわからない。黙ってその後に稲石さんと共についていくかと思っただが、数歩進んだところで振り返った。てっきり稲石さんも付いて来るかと思っただのに、なぜかその場に立ち止まっている。

「あれ、稲石さん？」

「……ごめんね。全部、思い出した」

聞き取れないほどに小さな声でそう呟いた次の瞬間、手に持ったままのPDFに全くの不意打ちで強烈な力が加わった。咄嗟のことで抵抗することすらできないうちに、ポルターガイストで奪い取った僕のPDFを稲石さんが自分の手の中でクルクルともてあそぶ。

「いない……」

しさん、と続けることはできなかった。突然力を込めて僕のPDFを床に叩き付けた稲石さんが、全力でそれを踏み抜いたのだ。いくら海馬コピーレーション製とはいえ、所詮は通信機械。たった1踏みで液晶も内部の機械も全部まとめて破壊され、素人目に見ただけでも修復不可能なぐらいスクラップにされてしまった。

「えっ？」

突然の奇行に言葉を失う僕の横を通り過ぎ、フアラオの歩いて行っただ方への道に立ちふさがるかのように仁王立ちした稲石さんがその右腕を持ち上げる。気が付けば、そこにはデュエルディスクが装着されていた。

「……は通せない。絶対に」

「何を……」

『マスター、よく見ろ！』

チャクチャルさんの言葉に、息を呑む。これまでどうやって隠していたのか、今やはつきりと見える。稲石さんの全身からは、さっきまで影も形もなかった抑えきれないどす黒い闇の瘴気が漂っている。



た。

「稲石さん、それ……」

『やめておけ、マスター。説得は考えるだけ時間の無駄だ、恐らくはミスターTだな。先回りして……洗脳か？表層意識だけは普段通りに取り繕い、何かあらかじめ設定しておいたきっかけにより効果を生じる。一目見た限りでは本人そのものであるがゆえに怪しまれずに送り込むことができ、なおかつ内部ではこちらの手足として動かせる。私も昔、好んで使った手だ。先ほどの会話の中にトリガーが、例えば賢者の石、やダークネス、という単語に反応して解放されるよう仕込んであったのだろう』

「稲石さんまで、そんな……!?!」

『割とマスターは、向こうからは敵視されてたからな。外堀を埋めに来ても驚きはしないが。ただ、以前オネスト事件の際にここに来たときにはおかしいところはなかったからな。洗脳されたのはかなり最近、まだ浅い段階だと見ていいだろう』

「ってことは？」

『カードだ。デュエリストに対しての最も手軽な洗脳はカードを媒体としてのものだから、そのカードを正面から攻略すれば流れを断ち切ることも可能はずだ』

きつぱりと言い切るチャクチャルさん、そして目の前で闇のオーラに包まれる稲石さん。ふうつと息を吐き、水妖式デュエルディスクを腕輪状態からデュエルモードへと変形させる。なんだか無性におかしくなつて、ついつい笑つてしまう。

「なんだ……ふふっ」

『どうした、マスター？』

「いやね、チャクチャルさん。どれだけややこしい話になつても、結局腕づく力づくなんだなあつて思つたら、ね。最高じゃない、そういうわかりやすい話なら大いに僕の専門だよ。稲石さん、ちよつとばかり荒療治と洒落込むから勘弁してね！」

「デュエル！」

「先攻は僕が貰つた！グレイドル・スライムJr. を守備表示で召喚、

これでターンエンド」

普段よりも小さめの銀色の水たまりが床から湧き、それが形を変えておしゃぶりを啜えたようなビジュアルの子供スライムへと姿を変える。なりこそ小さいがこれでも守備力2000、並みのアタッカーの攻撃ならば余裕で受け止めることができる凄腕の奴だ。最も稲石さんのデツキを考える場合、守備固めが役に立つとはあまり思えないのが難点だが。

グレイドル・スライムJr. 守2000

「まずは様子見、かい？自分のターン、モンスターをセット。そしてフィールド魔法、ゴーストリック・パレードを発動！」

僕らの立っている廊下に、色とりどりの電飾が一行に走る。カラフルな風船がふわふわと浮かび、こんな状況でもなければなかなか楽しい眺めだっただろう。

稲石さんの使うテーマ「ゴーストリック」は、他のゴーストリックが存在しない限り表側での通常召喚ができないという共通デメリットを抱えているうえにレベル5以上の上級モンスターが僕の知る限り1体も存在せず、下級モンスターにしてもステータスがお世辞にも高いわけではないというかなり変則的なテーマだ。反面相手ターンでもお構いなしに効果を使う高い奇襲性能と裏側守備表示を自在に操るトリッキーな戦闘スタイルを持ち、ひらひらと相手を翻弄しては軽くても確実にダメージとアドバンテージを積み重ねていく、これまでのデュエルでは僕が勝てはしたものの正直かなりやりづらい相手だ。まして今の僕は壊獣とグレイドルの力を得た結果、相手が力押しであればあるほどいいカモにできるというデツキの方向性が完全に定まってしまった。デツキの傾向だけでみれば、あまり相性はよろしくないと言わざるを得ないだろう。

そして、稲石さんはそこでターンを終えた。だがこの1ターンは隙を見せたんじゃない、すでに次への布石が張られていると見たほうがいい。

清明 LP4000 手札：4

モンスター：グレイドル・スライムJr. (守)

魔法・罨：なし

稲石 LP4000 手札：4

モンスター：???(セット)

魔法・罨：なし

場：ゴーストリック・パレード

「……僕のターン」

今引いたカードで、どうにかゴーストリック・パレードかあのセツトモンスターを除去できれば……駄目か。一見すればただの手札事故で苦し紛れにモンスターを出しただけのように見えるような場だが、あの稲石さんのデッキに限りそんな間抜けなことになるはずがない。普段の感覚でうかつに突っ込んでいっても致命打を与えるどころか、向こうのデッキの回転を速めるだけにしかないだろう。

となると、今はまだ動けない。そんなの僕好みのやり方ではないけれど、このターンはまだ攻め込めない。とつととターンを回そうとしたところで、注意深くこちらを観察していた稲石さんがふと思いついたように口を開く。

「何もしないでターンエ……」

「へえ、随分のんびりだね。自分としては別にどっちでも構わないけど、いいのかいそんな調子で？時間、そんなになんじやない？」

「この……」

『落ち着けマスター、惑わされるんじゃない』

頭に血が上りかけたところを見計らって、タイミングよくチャクチャルさんが釘を刺す。おかげで、売り言葉に買い言葉を叩き返す前に少し辺りを見回す余裕ができた。

そうだ、いくら急いでるからって無策で突っ込むのは試合放棄も同然。確かに決着そのものは早く済むだろうけど、内容が負け試合では元も子もない。だからこの言葉、ほんの1瞬でも強引に攻め込みそうになった自分への戒めもこめて改めてはつきりと言わせてもらおう。

「ターンエンド！」

「ふーん。自分のターンは……そうだね、カードをセット。さらにモンスターをもう1体、裏側守備表示でセットしておこうかな」

「また……！」

「ほらほら、そんな調子で大丈夫？」

稲石さんの煽りは、ある意味当たっている。どうも今回はデュエルに身が入らないというか、今一つ調子が乗ってこないのだ。理由はわかってる、焦っているんだ。さっきの三沢の様子から言って、まず間違はなく何らかの形で向こうも襲撃を受けたんだろう。いまだっていつ第二陣がやってくるかわからない中、僕の帰りを待っているはずだ。

僕がこの仕事を成し遂げさえすれば、このダークネスとの戦いにもひとまずけりがつけられる。だというのに肝心の僕は、目的まであと1歩というこんなところで足止めされている。おまけにPDFが壊されてしまった以上、誰かにこの緊急事態を伝える事すらできない。精霊の誰かをこつそり送り出す手もなくはないけれど、送り出したところで精霊が見えるメンツのうち十代は童実野町だし万丈目はこの島のどこにいるかわからない。鮫島校長の放送に従ってコロツセオに集まってるとは思うけど、そこまで単独行動させるリスクを考えるとかなり分の悪い賭けだろう。

となるとやはり、ここは僕がどうにかするしかない。デュエル開始直後はやる気満々で啖呵を切ったけれど、こういう時に稲石さんの戦闘スタイルは本当に厄介だ。

清明 LP4000 手札：5

モンスター：グレイドル・スライムJr. (守)

魔法・罨：なし

稲石 LP4000 手札：3

モンスター：??? (セット)

??? (セット)

魔法・罨：1 (伏せ)

場：ゴーストリック・パレード

「僕のターン……よし。永続魔法、グレイドル・インパクトを発動！続けてその第1の効果、グレイ・レクイエムを発動。僕の場のグレイドルカード、Jrと稲石さんの伏せカードを選択して、その2枚を破壊

する！」

目下のところ貼られたはいいが何の作用も及ぼすことなく沈黙を続けるゴーストリック・パレードやセットされっぱなしのモンスターも不気味ではあるが、どれか1枚を破壊するとしたらあの伏せカードからだろうか。大量の誇りを巻き上げつつ廊下に不時着したUFOから2本の光線が発射され、僕の指定した2枚のカードを同時に撃ちぬいた。

いや、様子がおかしい。破壊されたはずの伏せカードのソリッドビジョンが消えず、それどころか伏せられたままかすかに振動している。チェーンして発動されたのかとも勘ぐったが、そういうわけでもないらしい。

「やっぱりそう来たかい？でもはずれ。破壊されたトラップ、コザツキーの自爆装置の効果を発動。セットされたこのカードが破壊されたなら、それを行ったプレイヤーに1000ダメージを与える」

稲石さんの言葉を待っていたかのように、その伏せカードが爆発する。熱と爆風をともに浴びて咄嗟に顔を両腕で守りながら、今の言葉が脳内でリフレインする。

「やっぱり？読まれてた……？」

『手の内はお見通し、という訳か。面倒だが……』

何かを訝しむ様子のチャクチャルさん。すぐに、その歯切れの悪さの原因が分かった。確かに爆風を受けたはずなのに、そよ風ひとつ感じない。

清明 LP4000

「残念。ゴーストリック・パレードが発動されている限り、相手プレイヤーはあらゆるダメージを受け付けられないだった」

おどけた様子の稲石さんだが、さすがにそれを信じられるほど純粹じゃない。だって相手はあの稲石さん、自分のカード効果を忘れるなんて凡ミスを犯すようなレベルの人じゃないはずだ。

警戒を強める僕の顔を見て、稲石さんがくすくすと笑う。

「ねえ。それよりこのカード、懐かしいとは思わないかい」

言いながら役目を終えたコザツキーの自爆装置をデュエルディスプレイ

クから引き抜いて、墓地に送る前に一度こちらに見せてくる。向こうのペースに乗せられるだけだと頭では分かりつつも、ついその言葉にまじまじとその1枚のカードを眺めてしまう。その反応に満足したのか、滑らかな調子で話し続けた。

「今ならカードプールも増えて、地雷目的ならもっとダメージ効率のいいカードもあるけどね。でもせっかくだから、このカードで引っ掛けてやりたかったのさ」

薄く笑いながら、ゆつくりと見せつけるように墓地に送る。コザツキーの自爆装置、あのカードは……ああ、思い出した。もう2年も前の記憶、稲石さんと初めて会ってデュエルした時のことだ。確かあの時のラストターン、マジカルシルクハットを使い最後のギャンブルとして選んだ2枚のカードのうち1枚があれだったっけか。あの時は僕もまだまだガキで、これからの学生生活に何が待っているかなんて考えもしなかった。

……もつともたとえ考えていたところで、こんな強烈に濃い2年間の出来事を予想できたはずもないんだけれど。

「なるほど。だからそのカードを……何？あの時のギャンブルの借りは返したってわけ？」

「深読みしすぎさ。昔を振り返るちよつとしたお遊びだよ、お遊び。それで？モンスターがいなくなったみたいだけど、またターンエンドかな？」

「まさか。グレイドル・コブラを通常召喚！」

UFOの中からスルスルと這い出てきた、ピンク色をした1匹の大蛇を模したグレイドルがとぐろを巻いてチロチロと舌を出す。

グレイドル・コブラ 攻1000

「コブラでその、右側のセットモンスターに……」

「いいや、それは無理さ。なぜならこの瞬間に、ゴーストリック・パレードの効果を適用。お互いに裏側守備表示モンスターへの攻撃は禁止され、その場合の攻撃は全て相手プレイヤーへのダイレクトアタックに。そして相手モンスターの直接攻撃宣言時、パレードの陽気に誘われたデッキのゴーストリックカード1枚を自分は手札に加え

ることができる……ぐっ」

勢いをつけて飛びかかった大蛇の攻撃を、セットカードがすつと躲す。勢い余って飛び込んだ先は、そのプレイヤーである稲石さんだった。鋭い牙がその左腕に深々と食い込み、顔をしかめながらも右手でデッキから今井のカードを引き抜いた。

グレイドル・コブラ 攻1000↓稲石（直接攻撃）

稲石 LP4000↓3000

「痛たた……でも自分が戦闘ダメージを受けたことで、今サーチしたゴーストリック・マリーの効果を発動。このカードを手札から捨てて、デッキから別のゴーストリックを裏側守備表示で特殊召喚する。ゴーストリック・グール！」

確かにダメージは通った。だけどその代償として、稲石さんの場のモンスターはこれで3体。この人とのデュエルはいつもこうだ。なんだか知らないうちに、勝手にアド差をつけられる。

「ターンエンド……」

「もうちよつと引き延ばすか、それとも……ドロー。おやおや、これは攻め込めつてことなのかな？ フィールド魔法、ゴーストリック・ハウスを発動！」

廊下を走る電飾がパツと消えて、代わりに現れた古めかしい燭台に火が灯る。ゴーストリックの基本となるフィールド、互いのダメージを半減させるお化け屋敷だ。

「そしてグール、イエティ、キョンシーの順で3体のモンスターを反転召喚。キョンシーがリバースしたことで、場のゴーストリックの数以下のレベルを持つゴーストリックを手札に加える。場のゴーストリックは自身含めて3体、だからレベル3のゴーストリック・マミーをサーチする」

??? ↓ゴーストリック・グール 攻1200

??? ↓ゴーストリック・イエティ 攻300

??? ↓ゴーストリック・キョンシー 攻400

「まだまだ行くよ。場にゴーストリックが存在することで、ゴーストリック・マミーは表側表示で問題なく召喚できるようになった。さら

にマミーが場に存在するとき、自分はもう1度ゴーストリックを通常召喚できる。おいで、人形」

ゴーストリック・マミー 攻1500

ゴーストリックの人形ひとがた 攻300

展開を補助するマミー、そして追加で召喚される球体関節のゴーストリック。相変わらず目立ったパワーカードを使うわけでもないのに、いつのまにか盤面が埋め尽くされている。

「グレイドルの効果は知っているからね、このまま攻撃するような勿体ない真似はしないでおくよ。その前にゴーストリック・グールは1ターンに1度、自分の場の全てのゴーストリックの攻撃力を1体に集約することができる。自分が今選ぶのは、マミーにしておこうかな」類似、というかほぼ同じ効果を持つBFのシロッコと比べ、ゴーストリックの戦闘能力は低い。それでも稲石さんのプレイヤースキルがあれば、ノース校の鎧田が使うシロッコと同じぐらいの脅威になる。

ゴーストリック・マミー 攻1500↓3700

「3700……」

グレイドル・コブラの攻撃力は1000で、当然次に来るのは大ダメージだ。ゴーストリック・ハウスはほとんどのダメージを無差別にプレイヤー問わず半減するけれど、唯一ゴーストリックの与える戦闘ダメージだけはその限りでない。流れは今、確実に稲石さんの方へ傾いている。だけど、決して僕に付け入る隙がないわけじゃない。使っても使わなくてもデメリットの関係で場の合計攻撃力自体は変わらないグールの効果を使うということは、裏を返せば1度攻撃した後で戦闘破壊されたコブラの効果を通るということ。つまり、このターンでこちらのライフを0にする術をあの人は持っていない。運はまだ、僕にもついているはずだ。

「バトル。グールでグレイドル・コブラに攻撃！」

ミイラ男がが棍棒のような太い腕を振り上げ、他のゴーストリックたちが後ろで見守る中で単身攻撃を仕掛ける。迎え撃とうとした蛇の体は1瞬で銀色の液状に叩きつぶされ、その衝撃がこちらの体を震



わせた。

ゴーストリック・マミー 攻3700↓グレイドル・コブラ 攻1000 (破壊)

清明 LP4000↓1300

「まだまだ……！戦闘破壊されたコブラの効果で、ゴーストリック・マミーへ寄生しそのコントロールを得る！」

文字通り床の染みになったかと思われたコブラが、本来の液状の姿に素早く形を変えてマミーの包帯の隙間を縫うようにその全身へ浸透していく。抵抗する暇もなく、その額に複雑な紋章が浮かび出た。「グールの効果を使ったターン、他のモンスターは攻撃できない。だからこのメイン2に、自分は全てのゴーストリックたちの効果を一齐発動。1ターンに1度、自身を裏守備にすることができる。このカードも伏せて、ターンエンド」

こちらでコントロールを奪ったマミー以外のモンスターが、全てどこからともなく取り出したクロッシュの中にその姿をすっぽりと収める。

さつきまで貼られていたパレードも含め、ゴーストリックの僕が知る3種のフィールド魔法は、すべて裏守備モンスターへの攻撃を禁じる共通効果を持っている。つまり今稲石さんに攻撃したければ、いやでもダイレクトアタックせざるを得ないのだ。それで攻撃を通じたとしても、ハウスの効果でそのダメージはたった半分。おまけにその後棒立ちになる僕のモンスターに、またグールの集約した攻撃力での一撃が叩き込まれる。よほど高い数値をキープできるモンスターを出さなければ、モンスターを出すことすらどうてい割に合わない……。ああもう、今はこんなことしてる暇ないってのに。

清明 LP1300 手札：4

モンスター：ゴーストリック・マミー (攻・コブラ)

魔法・罫：グレイドル・インパクト

グレイドル・コブラ (マミー)

稲石 LP3000 手札：2

モンスター：??? (グール)

（キョンシー）

（イエティ）

（人形）

魔法・罨：1（伏せ）

場：ゴーストリック・ハウス

「僕のターン！よし、これなら……！」

デッキは今回も、僕のために全力で応えてくれた。今引いたカード、そしてこの手札。脳が一気に活性化し、鈍化した時間の中でカードだけがぐるぐると回る。大丈夫、今日の僕には運がある。先ほどのようなピンチでも、ギリギリで生き残ることが出来る運が。だからこの作戦も、きつと通るはずだ。まずこの効果を使って、それからこつちを出して、それからこのカードを。よし、これならこのターンで終わらせられる！まずはその一環として、このカードから……。

『待てー！』

このターンで終わらせるための、最初の1枚。それに手をかけた時、柄にもなく珍しい若干慌てた様子なチャクチャルさんの制止がなかった。

「何ー！」

『黙って見ていれば様子がおかしいぞ、マスター。ここの空気に飲まれたか？一度体をほぐして、深呼吸の1つでもしてみることだ』

そう言われて初めて、気づかぬうちにひどく全身が緊張で強張っていたことに気が付いた。ガチガチに張りつめた筋肉が、いまにも限界を迎えそうになっている。言うことを聞かない体から無理やり力を抜き、体中の毒素を全て吐き捨てるイメージで大きく呼吸する。

「……ぐっ！はーっ、はーっ、はーっ……」

『時間がないから早く終わらせたい、その論理は単純だが真理でもある。裏を返せばそれは、相手にとつてそこを抑えた行動さえ心がけていれば必ずマスターの冷静さを削ぐことができる明確な弱点にもなる。そもそもそんな致命的な弱点を用意した状態で戦わざるを得ない状態に持つていくこと自体私はどうかと思うが、この際それはいいだろう。私もマスターにそこまでの裏読みは期待していないし、その

前提で話を進めよう』

「それちよつとひどくない？」

『悪運に頼らず読み合いができるようになってから物を言ってくれ。あれだけ自分自身で釘を刺しておいて、舌の根も乾かぬうちに相手のペースに乗せられるようではただのピエロでしかないからな？』とはいえ、そんなピエロの面倒を見るために私はマスターのそばにいるんだ。いいかマスター、焦ることが悪いとは言わん。マスターの場合特に、追い詰められた方が力が出る節もあるからな。だが自分から焦ると他人の手のひらで焦らされるのには天と地ほどの差があり、今回は典型的な後者の例だ』

「……」

『わかったな？ま、その様子なら少しは頭も冷えただろう。それに散々言いはしたが、今回ばかりはマスターが悪いともあながち言い切れないしな。よくあたりを見てみればいい』

チャクチャルさんの指摘通りだった。あれほどカツカしていた頭は潮が引いたかのように熱が消え、知らず知らずのうちに目の前の狭い範囲しか見えていなくなった視界もまた広がって冷静な視点から周り全体の動きを掴むことができる。

そして再びはつきり見える、稲石さんの全身を絡め取るダークネスの力の片鱗。恐らくあれが負の力を放ち、それに僕のダークシグナーとしての負の力が呼応して半ば暴走状態になり、その結果として必要以上に闘争心を高めていたのだろう。その証拠に自分の腕に視線を落とすと、今はまだ薄いものの目を凝らさなくても見える程度には紫色の線のような痣が浮かび上がりかけていた。この様子だと、眼もいくらか紫色になりつつあるはずだ。何度か目を瞬かせてもう1度息を吸いこむと、その痣がすうっと消えていく。あれがダークネスの計算内なのかそれとも予想外の副産物なのか、そんなことはどっちでもいい。タネさえ割れてしまえば、どんな手品も小手先の技に過ぎない。

「待ってて稲石さん……まずは永続魔法、補給部隊を発動。それからこのターンもグレイドル・インパクトの破壊効果、グレイ・レクイ

エムを発動。装備カード状態のコブラと、そのセットカードを破壊する！」

今の手札から考えて、ここでハウスの方を狙い打ちすればこのターンで勝負を決めることも不可能ではない。現に今、僕はそれをやろうとしていた。もちろん並の相手、ごくシンプルなビートダウンが相手ならばその選択肢も十分ありだろう。だが相手は稲石さんで、使用デッキは手札誘発満載の何が飛び出てくるかわからないゴーストリックだ。2枚も手札が残っているのに全ての攻撃が通るだなんて、冷静に考えればよほどのことでもなければありえない。

「ダストフォース……！」

砂塵のバリアーダストフォース。攻撃宣言に反応して相手の攻撃表示モンスター全てを反転召喚不可の裏守備に変更させる、つまりゴーストリックフィールド魔法の元で稲石さんのモンスター全てをダイレクトアタッカーにしかねないトラップ。もし何も考えずに突っ込んでいたら、次のターン何が起きたか……考えたくもない。

ここで僕が負けでもしたら、外部との連絡手段を壊された以上その情報を伝えることもできず三沢の作戦には致命的な遅れが生まれるだろう。改めてその事実を自分に言い聞かせ、冷や汗をぬぐって次のカードを使う。

「装備状態のコブラが破壊されたことで、その対象だったゴーストリック・マミーも破壊。僕のフィールドでモンスターが破壊されたから、カードを1枚ドロウさせてもらうよ。そして魔法カード、妨げられし壊獣の眠り！場のモンスターをすべて破壊して、デッキから壊獣2体を選んで互いのフィールドに1体ずつ特殊召喚する！」

ある意味では僕の切り札とも言える、強烈なフィールドリセットカード。ただフィールドのモンスターを全破壊するだけならばブランク・ホールと変わりないが、このカードの真価はその次の効果にある。4体ものゴーストリックがクロッシュごとまとめて吹き飛ばされ、屋敷も砕けよとばかりに2体の超大型モンスターがその力を解放した。この効果で呼び出したモンスターは、攻撃可能な限り必ず攻撃を行わなくてはならない。ダストフォースが破壊されていなければ

ば、つくづくどうなっていたことやら。

雷撃壊獣サンダー・ザ・キング 攻3300

海亀壊獣ガメシエル 攻2200

「これだけじゃないさ。さらに通常召喚、ツーヘッド・シャーク！」

「へえ……」

ツーヘッド・シャーク 攻1200

「このターンで終わらせられる可能性よりも、伏せカードの除去を優先してくるとはね。正直びっくりだよ、これは絶対引つかかると思ってたのに」

「あいにく、僕は1人じゃないからね。悪いね稲石さん、うちのブレインは超優秀なのさ」

「みたいだね。でも、それってただのイカサマじゃないかい？勝負は1体1が原則、そうだろう？」

これも精神的な揺さぶりだろうか。とはいえ、その言い分にも一理ある。だからただ肩をすくめ、こう返すのみにとどめておいた。

「僕が卑怯じゃないなんて、いつどこの誰が決めたのさ。正々堂々やろうだなんて、一言も言った覚えはないね。バトル、サンダー・ザ・キングでガメシエルに攻撃！」

「ゴーストリック・ハウスで、ダメージは半分になるよ」

サンダー・ザ・キング 攻3300↓海亀壊獣ガメシエル 攻22

00（破壊）

稲石 LP3000↓2450

「ツーヘッド・シャークは、1ターンに2回の攻撃ができる。そのままダイレクト2連撃！」

「1回目の攻撃に対し手札からゴーストリック・ランタンの効果を発動して相手モンスターへの直接攻撃を無効、その後自身を裏守備で特殊召喚する。2回目もゴーストリック・ハウスの効果で直接攻撃になるけど、それはまあ仕方ないかな」

ツーヘッド・シャークの持つ2つの口のうち片方の牙が稲石さんの片腕、先ほどゴブラの噛んだ反対側にがっしりと食い込……まなかった。稲石さんの腕の代わりにツーヘッドが噛みついたのは、その間に

割って入った1個のランタン。攻撃が不発に終わったのを確認し、そのランタンの主……かぼちや頭に魔法使い帽をかぶった新手のゴーストリックがクロツシユの中に身を潜める。その隙をついてツーヘッドのもう片方の口が開き、キツチリと噛みついてから満足げに空中を泳いで帰ってきた。1回目の攻撃が止められた、か。

ツーヘッド・シャーク 攻1200↓稲石（直接攻撃）

稲石 LP2450↓1850

???（ゴーストリック・ランタン）

「ふー……やっと少しはダメージを返せたかな。カードを伏せてターンエンド」

これで稲石さんと僕、両者のライフ差は550まで縮まった。そしてあの眠りのカードをきっかけに、どうにか流れはこちらに傾きつつある。いくら稲石さんでも、1度展開したものを破壊されてからもう1度あれだけの数のゴーストリックを並べるとは至難の業であるはずだからだ。そしてゴーストリックは、数を並べない限り1体1体はそこまで脅威になりえない。今のランタンのように厄介なカードは多々あるが、それにしたって厄介止まり。もう1度揃えられより先に1体ずつ潰していけば、勝機は残っている。しかも稲石さんの手札は、既に残り1枚まで減っているのだ。

「自分のターン。魔法カード、強欲で貪欲な壺を発動する」

デッキトップ10枚もの裏側除外の代償として、禁止カードである強欲な壺と同じ問答無用の下準備なしでの2枚ドローを可能とする強力なドローソース、強欲で貪欲な壺。これで、あの人の手札は残り3枚。

「永続魔法、魔力節約術を発動。このカードの効果で発動コストの2000ライフを無効にして通常魔法、天声の服従を発動。自分がこれから宣言するカード目が相手デッキにある場合、相手はそのカードを渡すか、攻撃表示でこちらのフィールドに特殊召喚するかを選ぶことができる」

「天声の服従？」

強力カードではあるけれど、僕のデッキから欲しいカードなんて何

があるというのだろう。グレイドルは元々のプレイヤーのフィールドで破壊されないと効果を発動できないから、奪い取るメリットなんてどこにもない。壊獣を奪ったところで、壊獣カウンターの存在しない現状サンダー・ザ・キングと正面から戦えるのは辛うじて相打ちに持つていけるジズキエルぐらいのものだ。

一体何を宣言するつもりなのかと訝しんでいると、わからないのかと言わんばかりに稲石さんが薄く冷笑する。

「君のデッキのカードの中で、自分が今間違いないで入っているだろうと言い切れるカードはそう多くない。だけど、1枚だけ君なら絶対にデッキから抜きはしない、それが確実にわかるものがあるのさ」

「何を……まさかっ！」

稲石さんが知る、確実に僕のデッキに入っているであろうカード。そんな条件を満たすある1枚のカードの存在に思い当たり、慌ててデッキを手で抑えてしまう。その様子を見てほらやっぱり、と笑みを深くし、そのカードの名をあの人は口にした。

「やっぱりね。君なら絶対、大事にすると思っていたよ……戻ってくるんだ、ゴーストリック・フロスト！」

「ああ……」

ゴーストリック・フロスト。以前稲石さんから僕のデッキには防御が欠けているから、と分けてもらい、その後ずっと愛用してきた防寒具を着た雪だるまのモンスター。あのカードが無ければ負けていた、そんなデュエルも数多い緊急時の守りの要。そのカードが稲石さんのポルターガイストに操られ、勝手にデッキから抜き出される。思わず伸ばした手もすでに届かずに、僕のゴーストリック・フロストは稲石さんの手の中に収まった。

まるで、自分の一部をえぐられたような悲しみ。でもそれに浸る余裕も時間も、僕は持ち合わせていない。眼前の稲石さんもまた、それを許しはしなかった。

「手札に加える、でいいのかな？もっとも今回はどちらにせよ、フィールドに出すことになるけど。ゴーストリック・ランタンを反転召喚して、このフロストを通常召喚」

??? ↓ゴーストリック・ランタン 攻800

ゴーストリック・フロスト 攻800

「フロストを……?」

ゴーストリック・フロストは相手の直接攻撃に反応して効果を発動できる手札誘発モンスター。間違っても、通常召喚して使うようなカードではない。

何を企んでいるのか、稲石さんが次に取り出したのは最後に残った手札……ではなく、自身の服のポケットに入っていた見知らぬ1枚のカード。それを大事そうに指で撫で、話すでもなく語りかけてくる。「これ、なんだかわかるかい? ああいや、答えを聞いているわけじゃないから安心していいよ。この話は、もう君にはしたんだっけ? 確かまだったよね。ちょうど今年度の始まってすぐごろだったかな、偶然この寮のある部屋で見つけたんだ」

クルクルと手の中でそのカードを回しながら、ペースを落とさずに話し続ける稲石さん。ただでさえ廃寮は暗いうえに光の加減もあつてか、すぐ近くにあるそのカードの表面、その正体がうまく見えてこない。ただ単に時間を引き延ばしにかかっているだけの中身の無い話だと断じることが簡単だったが、なぜかそれをするのははばかられた。この話は、僕が聞いておかなければいけない。理由も根拠もまるでないが、そんな予感がした。

「ずっと、これがなんなのかわからなかった。ただの古いノーマルカード、昔のここの住人の忘れ物だろう。何度も自分にそう言い聞かせたけれど、なぜか気になってしょうがなかった」

ようやく回転を止めたカードが、稲石さんの人差し指と中指に挟まれた状態で静止する。ようやく僕にも見えたその名は、ドラゴン族・封印の壺。本人の言葉通り何の変哲もない、デュエルモンスターズ黎明期から存在するノーマルカードだ。

僕もそのカードを確認したのを確かめてか、再び封印の壺のカードが稲石さんの手の上でクルクルと回される。それと同時に、また稲石さんの口が開いた。

「だけど今朝になって、ようやく少しだけわかってきたんだ。この



カードは本来、ドラゴン族・封印の壺じゃない。あるドラゴンの魂が文字通りに封印されて、今こうやって目に見えるこのカードに姿を変えさせられた。そしてその封印を解くために必要な力を、ダークネスが自分に与えてくれた。ほら、こんなふうに……！」

言うなり、稲石さんの腕に静かな力がこもる。細い腕に筋肉の筋が浮かび上がり、その上を舐めるようにして闇の力が広がっていく。その闇の行きつく先は、封印の壺のカード。その全てを取り込み、次第にカードそのものが暗い光を放ちだす。

「稲石さん、何を……！」

「わからないかい？これこそが、ダークネスが協力と引き換えに自分にくれた力。通常魔法、融合を発動！自分の場の闇属性モンスター2体を素材に、融合召喚！奇怪と怪奇に誘われ、飢えた牙持つ邪龍よ啗え！さあ出てくるんだ、スターヴ・ヴェノム・フュージョン・ドラゴン！」

ランタン、そして僕のフロストが、融合素材となって消えていく。すると廊下に突然、紫色の触手……いや、何本もの植物の蔓が伸びた。太さも長さもまちまちではあるが、いずれも共通点としてその先端にはぷっくりと膨れた花のつぼみがある。そしてそのうちの1つが、僕らの見る前でゆっくりと開いた。

だがそれは、間違つても真つ当な花なんかではなかった。いや、それは花ですらないのかもしれない。動物の口のように中央から2つに割れたその内側には控えめながらもびっしりと牙が生え、花弁らしきものは見当たらない。そうこうしているうちに他の蔦から生えるつぼみもまた、同じように開き始める……だが駄目だ。どれも最初のひとつと同じく、植物とは思えない獲物への貪欲さをむき出しにする動物的な代物でしかない。べちゃり、と湿った音がしてそちらに視線を動かすと、天井を這っていた「蔦」から生える「花」が「咲いた」拍子に、貪欲気に真下の床まで「蜜」……いや、「涎」を垂らしていたところだった。

何かがおかしいとしか言いようのないそんな光景につい顔をしかめていると、頭の中で声がした。

『本体はあそこか。ずいぶん遠くにいるな』

そう言われてチャクチャルさんが注意を向けた、最初に鳶が伸びてきたその根元となる方向、稲石さんのいるずっと後ろの廊下に目を向ける。始めは暗闇になっていて何も見えなかったが、1瞬赤い光、ぞつとするほど冷たい知性を感じさせる爬虫類の瞳が瞬くのが見えた。あの暗闇にまぎれてこの捕食者、いまだ全貌の掴めない謎のドラゴンが鳶を伸ばし、静かに獲物を待っているのだろう。

スターヴ・ヴェノム・フュージョン・ドラゴン 攻2800

『マスター、聞いてくれ。あれだけのモンスターを封印していたとなると、それを破るために必要な力も相当なものだったはずだ。おそらくあのスターヴ・ヴェノムには、洗脳のため分け与えられたダークネスの力のほとんどがつき込まれているだろう。となるとどう転ぶにせよ、あのモンスターが鍵になりそうだ。奪おうなどと考えずに、さっさと破壊してしまえよ?』

「さあ、スターヴ・ヴェノムの効果発動!このカードの融合召喚に成功した場合、相手フィールド上に特殊召喚されたモンスター1体を選んでその攻撃力をターン終了時まで加算する!当然選べるのは、サンダー・ザ・キングさ」

鳶のうち1本がおもむろに張り付いていた壁を離れ、白き三つ首のドラゴンの体を締め付けた。食い込んだ鳶は貪欲にその体に根を張り、根から吸い取られた雷撃の力が鳶を通して闇の奥の本体へと運ばれていく。だけど僕もチャクチャルさんも、当の本人であるサンダー・ザ・キングでさえそれには慌てなかった。

スターヴ・ヴェノム、確かに恐ろしい効果ではある。だけど、その対策となるカードは既にこの手の中にある。

『なかなか攻撃的な効果だが、欠点がないわけではない。今だ、マスター!』

「もちろん。速攻魔法発動、月の書!スターヴ……いや、サンダー・ザ・キングを選択して、裏守備に変更する!これで特殊召喚されたモンスターは僕のフィールドからいなくなつた、よってスターヴ・ヴェノムの効果は不発!」

雷撃壊獣サンダー・ザ・キング 攻3300↓???

「躲されたか……だとしても、いや、そうか。これ、自分で思いついたのかい？だとしたら、なかなかやるね」

「まあね。稲石さんのカードの効果、ちよこつと使わせてもらったよ」  
そう。本来ならばこの緊急回避、素直にスターヴの方に発動する方がツーヘッドも攻撃されることなく済む。にもかかわらず、僕はサンダー・ザ・キングを裏にすることで効果を不発にさせることを選んだ。なぜか。

その答えは稲石さん自身の発動したこのフィールド魔法、ゴーストリック・ハウスにある。これまでも再三見てきたようにこのフィールドには、互いの裏守備モンスターに対する攻撃を禁止する効果がある。本来ならば守備表示だとスターヴ・ヴェノムの攻撃に耐えきれないサンダー・ザ・キングも、ハウスに守られることで攻撃されず返しの僕のターンに安全に反転召喚できる。おまけにハウスのもう1つの特殊能力、ダメージ半減が適用されるためツーヘッドとスターヴ・ヴェノムが戦闘しても僕のライフはまだギリギリ残るという寸法だ。次のターンで稲石さんにより多くのダメージを与えるためには、スターヴ・ヴェノムにはまだ攻撃表示のままでもいいもらわなければいけない。となると、僕の受けるダメージなんて些細なものだ。

もちろん、普段ならばこれだってなかなかの、それもハイリスクローリターンなギャンブルだ。だが今の稲石さんは融合召喚で今度こそ手札を使い果たしてしまい、墓地にも発動できそうなカードは存在しない。次に稲石さんがカードを引くまで、この盤面に不確定要素は存在しない。

「狙い通りなんだろうけど、ここで引くわけにはいかないか。スターヴ・ヴェノムでツーヘッド・シャークに攻撃」

暗闇の奥でまたも赤い瞳が瞬くと、天井に伸びていた鳶の1本が突然外れて鞭のようにツーヘッドの体をその死角から打ち据える。例え鳶の1本といえど、その威力はさすがにドラゴンの一部、というべきか。

スターヴ・ヴェノム・フュージョン・ドラゴン 攻2800↓ツ

ヘッド・シャーク 攻1200 (破壊)

清明 LP1300↓500

「ゴーストリック・ハウスで、ダメージは半分になる……さらに補給部隊で、また1枚をドロウさせてもらうよ」

「やってくれるね、本当に。でもいいよ、自分はこれでターンエンドさ」

ここまでは計算通り。でもその言葉を聞いた瞬間、せっかく感じていた勝利への高揚感も引いていった。手札をすべて使って出したエースモンスターが大した成果も挙げぬまま今まさに破壊されようとしているのに、なんで稲石さんにはこんなに余裕があるのだろうか。まるで、まだ何か隠し玉があると云わんばかりのこの様子はなんだ。

いつそリリースしてやろうか、そんな考えも頭をかすめた。僕の墓地にある妨げられた壊獣の眠りは、自身を除外することでデッキから壊獣1体を手札に加える効果も持つ。これを使って適当な壊獣をサーチすれば、あのスターヴ・ヴェノムを戦わずして墓地に送ることもできる。

だけどそれで、ダークネスの力を掃うことができるのか。仮にそれをして勝てたとしても、ダークネスの力が残ったままならば稲石さんはもう1度僕の前に立ちふさがるだろう。その場合、最悪稲石さんはスターヴ・ヴェノムをもう2度と出してこない可能性まである。となるとやはり今、あのドラゴンを打ち破る必要がある。

清明 LP500 手札：4

モンスター：??? (サンダー・ザ・キング)

魔法・罠：補給部隊

グレイドル・インパクト

稲石 LP1850 手札：0

モンスター：スターヴ・ヴェノム・フュージョン・ドラゴン (攻)

魔法・罠：魔力節約術

場：ゴーストリック・ハウス

「ドロウ。これは……」

あの余裕の真意はなんだろう。スターヴ・ヴェノムにはなんらかの

耐性があつて、それを使ってこの攻撃を耐えようとしている？それとも融合時の他に、まだ攻撃力を上げる手段を持つていて返り討ちにしようとしている？仮にその正体を破壊耐性だと仮定すれば、一応この手札ならもう1撃を与えることもできる。さっきの様子だと、チャクチャルさんもあのカードに対する知識は薄いようだからそちらからのアドバイスもあまり期待できない。グレイドルカードさえあればもう1度インパクトをぶちかまして様子を見ることもできるのに、あいにく手元にそれを用意する手段はない。

などとぐだぐだ考えては見たが、要するに道は2つに1つ。このまま前のめりに攻めるか、手持ちを温存してサンダー・ザ・キングだけで様子を見るか、だ。だけどこのターン、稲石さんに打てる手は限られていくわけだし。あの人の手札がないなんて、こんな絶好の機会そうはない。

『悩ましい所ではあるが、ここまでくるとマスターの好みの問題だな。突き放すような言い方になるがどちらの考えにも一定の理がある以上、選択を左右するのは自分しかない』

「なら……僕はこのまま、前に出る！手札からシャーク・サッカーを召喚して、そのままリリース！場の水属性モンスター1体をリリースすることで、手札のシャークラーケンが特殊召喚できる！」

シャークラーケン 攻2400

「特殊召喚可能な上級モンスターか。なるほどね、だけど攻撃力2400程度じゃあ、自分のライフを削りきることはできないみたいだけど？」

「そんなの僕だってわかってる。でもそのこのカードがあれば、話は別さ。魔法カード、アクア・ジェットを発動！魚族モンスターのシャークラーケンは、その攻撃力を1000ポイントアップさせる！」

「まだそんな手が……」

シャークラーケン 攻2400↓3400

これで、こちらの場の累計攻撃力は6700。しかも今の稲石さんの物言いだと、スターヴ・ヴェノムはどうやら破壊耐性を持つモンス

ターではないようだ。何を企んでいるにせよ、この2体なら真正面から押し切れる。

「バトル！シャークラーケンでスターヴ・ヴェノム・フュージョン・ドラゴンに攻撃！」

「ゴーストリック・ハウスの効果！」

シャークラーケン 攻3400↓スターヴ・ヴェノム・フュージョン・ドラゴン 攻2800（破壊）

稲石 LP1850↓1550

シャークラーケンが口から青い光線を放って廊下の向こう、暗闇の奥のドラゴンの本体に猛攻を加える。相変わらず雌その姿は見えず悲鳴1つあげなかったものの、その闇の中からはつきりと苦痛の感情が伝わってきた。廊下銃を走る紫色の蔦がみるみる枯れていき、1本また1本と力なく床に落下する。

「よし……稲石さん！」

これで、ダークネスの影響を受けたカードは突破できた。となると、光の結社事件の時と同じならばこれで稲石さんの洗脳も解けるはずだ。稲石さんを包む闇の力が消滅前の最後の抵抗とばかりに暴れ回り、その場で飛ばされないように立っているのがやっとなほどの暴風が吹き荒れる。

そしてその終わりは、始まった時と同じように唐突に訪れた。力を使い果たした闇が霧散していき、稲石さんの体がそこから解放される。立ち尽くす稲石さんに近寄ろうとした時、静かだが真剣な声が頭に響いた。

『……待て、マスター。何かがおかしい、どうも様子が気にかかる』

チャクチャルさんが何に気を取られたのか僕にはわからないが、この邪神はそういうたちの悪い冗談を言うタイプではない。言われたとおりに立ち止ると、ようやく意識のはつきりしてきたらしい稲石さんの声がした。

そしてその内容に、またしても背筋が寒くなる。

「スターヴ・ヴェノム・フュージョン・ドラゴンが破壊されたことで、最後の強制効果を発動。フィールド上の特殊召喚されたモンスター

は、すべて破壊される」

主の死と共に枯れ果てたはずのスターヴ・ヴェノムの蔦に、花に、最後の生命が宿る。でたらめにあちこちから枝分かれしてはその先端に無数の花を咲かせ、廊下全てが紫の蔦と黄色い花で埋め尽くされたところでその牙の奥から一斉に花粉らしき粉を吐き出しては再び枯れていく。辺りに充満した花粉はほんの数秒と経たないうちに濃密な煙幕となって僕の視界を奪い、その煙の向こうから僕のモンスターの断末魔の悲鳴が聞こえた。

「そんな……！」

眠りの効果でデツキから呼ばれたサンダー・ザ・キングに、自身の効果で出てきたシャークラーケン。僕のフィールドにいたのは、2体とも特殊召喚されたモンスターだ。だけどそれより信じられないのは、いくら強制効果とはいえまだデュエルを続ける意思が稲石さんにあるということだ。闇の力を吸ったカードは倒したはずなのに、どうして。

「稲石、さん？」

僕の呼びかけに、今初めて気が付いたという風に目を瞬かせながらこちらを見る稲石さん。その目の中にあっただのは、もはやダークネスの影響など受けてはいないことは明白な冷静な自我だった。

「どうして……！」

「どうして？随分と変な質問だね、それは。ところで、ターンエンドしないのかい？」

『考えることは後でもできるから、今はとにかくありつただけの準備をしておくんだ、マスター。どうもこのデュエル、ここからはこれまでに以上に嫌な予感がする』

「くっ……補給部隊で1枚ドローして魔法カード、一時休戦を発動！互いにカードを1枚ドローして、次の相手ターン終了時までには発生する全ダメージは0になる。さらに、墓地の妨げられた壊獣の眠りの効果も発動。このカードを除外して、粘糸壊獣クモグスをサーチする」

何もかも予想外のことだらけだけど、少なくとも最後の一言に関しては僕もチャクチャルさんと同意見だ。それは理屈ではなく、もつと

原初的なデュエリストとしての本能でわかる。今の稲石さんは、ダークネスの洗脳時よりも明らかに危険な存在だ。とっておきの防衛札をここで切り、次のターンでの安全を確保。さらに壊獣のサーチを見せつけることで、大型モンスターを展開もある程度牽制しておく。

その準備を満足げに見やり、稲石さんもカードを引いた。

「それにしても、解放できたのがやつとスターヴ・ヴェノム止まりとはね。ダークネスの力といっても、こんなものか」

言いながらポケットからさつききのドラゴン族・封印の壺のカードを取り出し、スツとひと撫でする。何か硬質なものが壊れるような音とともに、まばゆいばかりの光がカードから溢れて稲石さんの顔を照らした。

「これでよし、と。確か今、壊獣をサーチしていたよね？それは困るなあ、手札抹殺を発動。互いのプレイヤーは全ての手札を墓地に送り、その数だけ新たにドローする」

「……」

稲石さんは今一時休戦で引いたカードを、僕は僕で手札の全てのカードを捨てる。牽制しつつデッキ圧縮もかねてのサーチだったけれど、それが裏目に出てしまった。でもこのドローで別の壊獣が引ければ……駄目か。

「スターヴ・ヴェノムは確かに十分強いカードだけど、まだその力を全て解放できているわけじゃない。魔法カード、ドラゴンズ・ミラー龍の鏡を発動。墓地のスターヴ・ヴェノムと捕食植物サンデウ・キンジーを除外して、融合召喚！変異と異変に誘われ、邪龍の牙よ全てを貪れ！……グリーン・ヴェノム・フュージョン・ドラゴン！」

暗闇の奥に本体を隠すことをやめた毒龍が、ついにその姿を白日の下にさらけ出した。先ほどまで見えていた蔦と花から仮にスターヴ・ヴェノムを花の姿と仮定するならば、このグリーン・ヴェノムはさしずめその花がさらに時を経て結んだ果実の龍というべきだろうか。体中のあちこちにあるたわわに実った果実のような丸いエネルギー体が、余計にそんな印象を抱かせる。黄色い瞳がギラリと僕を見下ろし、その口がパキパキと音を立てて開く。



グリーデー・ヴェノム・フュージョン・ドラゴン 攻3300

一時休戦を使っていなければ、僕のライフはここで尽きていた。稲石さんがなぜまだ戦いを続けるのかはわからないけれど、ここまで本気で来るといふのなら僕も本気で迎え撃つしかない。僕のこの両肩には今、世界全体が乗っかかっているといつても過言ではない。稲石さんに僕の邪魔をしなければいけない理由があるというのなら、僕にもそれをどうしても許せない理由がある。

「ターンエンド」

そして、稲石さんのターンが終わる。僕も迷わない、もう覚悟は決めた。グリーデー・ヴェノム、どんな効果を持っているかはわからないけれど、その真価を発揮させる前に潰してやる。

清明 LP500 手札：4

モンスター：なし

魔法・罫：補給部隊

グレイドル・インパクト

稲石 LP1550 手札：0

モンスター：グリーデー・ヴェノム・フュージョン・ドラゴン（攻）

魔法・罫：魔力節約術

場：ゴーストリック・ハウス

「ドロー！ 相手フィールドにのみモンスターが存在するとき、カイザー・シースネークは攻守0、レベルを4にして特殊召喚できる。そしてこの効果で特殊召喚した時、さらに手札か墓地からレベル8の海竜族を特殊召喚できる。墓地のカイザー・シースネークよ、今ここに甦れ！」

「そうか、手札抹殺で……！」

カイザー・シースネーク ☆8↓4 攻2500↓0 守1000

↓0

カイザー・シースネーク ☆8↓4 攻2500↓0 守1000

↓0

現れる2匹の大海蛇。しかしそれも、これから始まる出来事の序章に過ぎない。2体の姿が純白の霧に包まれ、その霧の彼方から僕の切

り札がついにその姿を見せた。

「これで2体のモンスターが揃った。この2体をリリースして、霧の王をアドバンス召喚！その攻撃力は、リリースしたモンスターの合計になる」

霧の王 攻0↓5000

「……確かにそれで攻撃すれば、大ダメージが発生する。だけど、その先がないね。ゴーストリック・ハウスの効果でダメージは半減し、わずかにだけまだライフは残る。そのわずかなライフがあれば、それで十分さ。ひとつ教えておくけれど、グリーディー・ヴェノムはスターヴ・ヴェノムよりもさらに強力な破壊効果を持つ。たとえばアドバンス召喚された霧の王だからといって免れることは叶わない、破壊時のモンスター全破壊効果をね」

「なら、破壊する前にライフを削りきるさ。フィールド魔法は既にあるんだ！魔法カード、死者蘇生を発動！さあ行くよチャクチャルさん、七つの海の力を纏い、穢れた大地を突き抜ける！地縛神 Chacu Chalhuaっ！」

『よしてきた。これでゲームセットか』

地縛神 Chacu Chalhua 攻2900

「地縛神、これだと……」

「そう。これで終わりさ、稲石さん。Chacu Chalhuaで攻撃、ミッドナイト・フラッド！地縛神は相手フィールドにモンスターが存在しても、ダイレクトアタックができる！もつとも、それもゴーストリック・ハウスに半減されるけどね」

地縛神 Chacu Chalhua 攻2900↓稲石(直接攻撃)

稲石 LP1550↓100

「くっ……」

「たとえばグリーディー・ヴェノムの効果だろうと、稲石さんのライフが尽きれば意味はない。バトル、霧の王で最後の攻撃、ミスト・ストラングル！」

霧の王が飛び、毒龍が迎え撃つ。先手を打って放たれた紫色の破壊

光線を剣の腹で受け止めその向きを逸らし、そのまま振り切られたその一撃が龍の首を狩った。

霧の王 攻5000↓グリーンディー・ヴェノム・フュージョン・ドラゴン 攻3300 (破壊)

稲石 LP100↓0

「稲石さん！」

吹っ飛ばされて壁に激突し、糸の切れた操り人形のようにその場に崩れ落ちた稲石さんに、ソリッドビジョンが消えるのも待たずに駆け寄ろうとした。敵だろうがなんだろうが関係ない、稲石さんは僕の大事な友人だ。

だが途中で、その足が止まってしまふ。目の前で今、何かが起きようとしている。稲石さんの体からそしてその服からも、漆黒のオーラが溢れ出ている。あれは洗脳に使われたダークネスの力、ではない。確かにダークネスの力ではあるが、あの黒い霧のようなオーラには見覚えがある。ミスターTが不意に現れたり消えたりする時、決まって漏れ出ている闇の一部だ。

「まさか、稲石さんに化けて……」

「いや、違うよ。自分は自分、それは間違いない」

思い当たった可能性も、弱々しいがはっきりした声で本人が否定する。でもそれはそうか、霧の王にチャクチャルさんと、僕の2大エースを両方持ち出してやっとな勝つことができるほどの相手。ミスターTにそれは、いくらなんでも役不足だ。じゃあ、こうしている今も全身から溢れ出ている消えていくその闇はどう説明するのか。もう1度立ち上がる力も残っていないのか、その答えを壁にもたれて座り込んだままぼつぼつと話し始める。

「にわかには信じられないだろうけどね。自分は元々、ここの生徒なんかじゃなかったのさ。その稲石ってのも、当然偽名だよ。本名は……いや、そんなもの存在しない、って言った方が正しいかな。自分とはとある人間の魂をベースにしてダークネスが造った存在しない人

間、つくりものの人格。手駒……の、できそこないさ。自分には、本来なら残るはずのなかつた前世の記憶がかすかに残っている。だからこうして体も与えられず、幽霊として捨てられてただけどね。ちよつとした理由があつてこの場所に来ていた前世の自分は、最後の最後に力の一部をそのエースカードだったグリーディー・ヴェノムと共に封印して、この場所に隠した。たとえその記憶の大部分を失つていても、どこかにそのかけらが残っていた。だから自分は、ずっとこの廃寮に留まっていたんだ。今ようやく、はつきりと思い出せたよ」

『嘘……ではないな。この土壇場で自らの狂気に飲み込まれ、現実とその狂気の狭間が曖昧になつたというのなら話は別だが、そういうわけでもなさそうだ』

「だから、その体も今……」

いまだ闇に分解されつつある稲石さんの体に目を向けると、稲石さん本人も自らの消えゆく体に目を落とす。声を上げて笑うものもの、すぐに咳込んでしまう。

「ああ、そうさ。闇のデュエルの敗者は闇に喰われるけれど、作り物の魂だけの存在な自分の場合は跡形もなく消えてももとの闇に帰る。もつとも、ここに来てからもう17?いや、18年だったかな?もういい加減にガタが来てたからね、そろそろ成仏する頃合いだったのかもね」

自分という存在が、今まさに消えようとしている。たとえ作り物の命だろうと、それが怖くないわけがない。それでもいつも通りに飄々とした態度で強がってみせる稲石さんに、なんと声を掛けようとしたのかは自分でもわからない。でも僕が口を開いた瞬間、それを止めたのは稲石さん本人だった。

「いいから。自分にこれ以上構っているだけの時間は、今の君にはないはずだよ?それに稲石なんて存在はもともと存在しない、始めからこうなるのが自然の摂理さ。本当はもつと、自分の前世についても色々な話をしたい。君にとつても、これは無関係な話じゃないからね。だけでもう、それだけの時間はない……ただね、1つだけ君を心配する友人として、最後にアドバイスしてあげるよ」

「え……？」

次第に体の消滅が加速していき、もはやしゃべるのも辛そうだ。それでも稲石さんは僕の目を真っ直ぐに見て、最期の言葉を絞り出す。「自分は今朝まで放置されていたレベルのできそこないだけど、より手駒として質の高い完成品が君の近くにいる。恐らくは、つい昨日までの自分と同じようにその記憶を消された無自覚の状態だね。昔、あんな人が死んだ。自分はその人の魂の半分を元にして作られた人格、だけど彼女はその人の残りの魂にダークネスが手を加えて捉えた本物の生命。おそらくそれが、君たちの言うダークネスのこちら側からの協力者だ。いや、仮にダークネスが関係なくても、君は彼女と戦わななくちゃいけない。辛い戦いになるだろうけど、どうしても回避することはできない。君は君自身が考えるよりずっと前からダークネス、それから自分の前世たちには目をつけられていた存在なんだよ」

「い、一体何を……」

「わからないかい？河風夢想。1度しか彼女には会っていないけれど、前世の記憶を取り戻した今思い返せばはつきりとわかる。彼女は自分と同じ、自分のオリジナルだ。でも覚えておいてほしい、君が死ぬことは、自分も彼女も願ってはいない。気を……付けて……」

河風夢想。彼女の名を口にしてすぐ、稲石さんの体は、そして魂は2度と手の届かないところに消えてしまった。たくさんの謎と、大きな悲しみと引きかえに。

早く動かなくちゃいけない。三沢に頼まれた賢者の石を、早く調達しなくては。頭ではわかっているのに、いつまでも体が動かかなかった。さつきまで人がいたとはとても思えない何の変哲もない壁をじっと見つめたまま、いつまでもその場に固まっていた。いつまでも、いつまでも。

## ターン123 真紅の暴君と紅蓮の災厄

どれくらい、じつとしてただろう。ほんの数分だったようにも思えるし、もう何週間か、それどころか1か月近くここでこうしていたような気もする。

いずれにせよ、僕はどうにか立ち上がった。本音を言えば、まだしばらくはここに居たい。だけど稲石さんは、もうここにはいない。生命ですらない存在に対してこう称することが正しいかはともかく、殺したからだ。他の誰でもない、この僕が。

「あの時と、同じか……」

誰に向けたものでもない言葉が、先ほどまでのデュエルの衝撃で割れてしまったらしい窓から飛び込んできた風に乗って流れていく。霸王の異世界で出会った、暗黒界の鬼神 ケルト。あの時と同じだ。どうしようもなく周りの状況に流されるまま戦って、その結果として勝ったあげく目の前で消えていくところを見せつけられる。常勝不敗、無双の女王。夢想も自分が望まぬ勝利を重ねるたびに、こんな気持ちも味わってきたのだろうか？

そこまで考えたところで、稲石さんの最後の告白が再び蘇る。河風夢想は、ダークネスの手駒である、と。気が付けば、歯が折れるんじゃないかと感じるほどに強く歯を食いしばっていた。……何が何だか、やっぱり僕にはわからない。ただ1つわかっていることは、稲石さんはあんな内容の嘘をつくような人じゃないということだ。

夢想到に会いたい。でも、今は夢想到に会いたくない。矛盾する2つの思いを抱え込み、僕はまたしてもいつもの手段、目の前の問題から目を逸らすことにした。その場を離れて当初の目的、賢者の石の回収に向かったのだ。そうやって目を背け続けた結果稲石さんにこの手だとどめを刺すことになったというのに、結局僕は何も変わっていない。賢者の石の方も一刻を争う問題だから、それにPDFを稲石さんに壊された現状夢想到に連絡を取る手段はない……それはすべて、もつともらしく聞こえる言い訳でしかない。そんなの、自分が一番よくわかっているはずなのに。

外の光も差し込まない、暗い階段を降りる。確か2年前に来たときは、この先にアムナエルの研究室があったはずだ。案の定たどり着いたその一室は、2年分のほこりが積もっていることを除けばまさに僕の記憶のままの部屋だった。その上に、真新しい猫の足跡が点々と続いている。

「……大徳寺先生！フアラオ！」

『やあ、ようやく来たのかニヤ。さあフアラオ、いい子だからそれを渡しておくれ』

あれだけのデュエルの間一向に戻ってこないと思ったら、どうやら大徳寺先生が先に準備を済ませておいてくれたらしい。どっしりと歩くフアラオが中身のぎっしりと詰まった小袋をくわえて僕の足元までやってきて、おもむろにそれを床に落とす。慌てて拾い上げると、見た目よりもずつと重い手ごたえが返ってきた。

「じゃあ、これが……」

『昔私が作った、試作品の賢者の石だニヤ。私とフアラオのことはいいから、早く三沢君のところに戻ってあげなさい。幸運を、祈るニヤ』  
「はい……ありがとうございます」

しつかりと小袋を抱え、すぐに背を向けて走り出そうとしたところでふと気になって、1度だけ振り返った。

「大徳寺先生、1つだけいいですか？もし……もしも迷った時は、僕は何を信じればいいんでしょうか」

言うてからなんだそれと、自分の言葉の稚拙さに笑いそうになる。夢想がダークネスの駒だなんて話、いくら稲石さんの言葉でもそうおいそれと言いふらすわけにはいかない。あの人から直接聞いた僕だって、いまだ彼女を信じたい気持ちと稲石さんの言葉の間で揺れ動いている状態なのだ。出来る限りぼかしたつもりが、今度は抽象的になりすぎてしまった。もう少し言葉を継ぎ足そうとしたが、それより早く大徳寺先生の返事が返ってきた。

『清明君。君が何の脈絡もなくそんな質問をするとは思えないから、何か人には言えないわけがあるんだろうニヤ。ならその理由は聞かないけれど元寮長として、そして元先生として生徒の悩みに答える

と、君は少し自分の中で全てを抱え込もうとしすぎていると思うのニヤ』

生前と同じように穏やかな声で、大徳寺先生が喋る。その言葉を、僕はただじつと聞いていた。

『君には確かに、他の人にはない特別な力がある。だけど、それは君という存在のほんの一部の特徴でしかないのニヤ。例えその力がなかったとしても、君という存在にはただそこにいるだけで周りを巻き込む不思議な魅力がある。だから、我慢や必要以上の気遣いなんてする必要はどこにもないのニヤ。君は、君のやりたいことをやりたいようにやる。それが一番うまくいくし、もし君の目が曇って間違った道を選ぶようなことがあれば、その時は君に惹かれて集まってきた仲間たちがきつとその目を覚まさせてくれるのニヤ』

同じだ、とぼんやり思った。ヘルカイザーも、霸王の異世界で別れるときに僕のことをそうやって称していた。常に自由でいるのが一番お前の性に合っている、とも。どうしてあの言葉を、今まで忘れていたんだろう。

『最初から最後まで常に完璧な答えを出すことなんて、神様だってできっこないのニヤ。難しく考えすぎないで、いざとなったら助けてもらう。そのぐらいの気持ちで、自分の直感を信じればいい。少なくとも、私はそう思うよ……少しは気が楽になったかニヤ？』

「……ええ。ありがとうございます、大徳寺先生」

『その分だと少しは気が楽になってくれたみたいで、私としても教師冥利に尽きるのニヤ』

実際、大徳寺先生に相談してよかった、そう思った。さつきまであれだけ先の見えなかった未来が、押しつぶしてきそうな不安が、だいぶマシなものになった気がする。自分の直感を信じればいい、か。

「ま、チャクチャルさんも何かあったら頼むよ。いいでしょ？」

『当然だ。私はマスターのことをマスターとして認めはしているが、盲信するとまで言った覚えはない。見限る予定もさらさらないが、あまりマスターが馬鹿なまま放置しておく私までそんな目で見られかねないからな』



平然とそう言い放ったのち、愉快そうに含み笑いする気配が伝わってきた。まったく、呼び方がいくら変わろうと、どこまでいつても口の減らない邪神だ。つられて僕も口元がほころぶ。

『それで？今のマスターにとつて、優先順位1番に来るものは何だと感じたんだ？』

その言葉に、足を止め目を閉じて考える。難しく考えなければ、結局のところ2択。夢想を探すか、三沢のところに行くかだ。ダークネスとの戦いをいったん頭の隅にやり、純粹に自分がどちらに行きたいのかを探る。

「……行こっか、チャクチャルさん。三沢のところに」  
『ほう』

「意外？確かに夢想も気になるけど……でも、決めたんだ。僕はもう少し、僕の知ってる方の夢想を信じてみるよ」

稲石さんの最期のメッセージでは、夢想は自分と同じようにダークネスの手駒としての記憶が消されているという話もあった。裏を返せばそれは、記憶を取り戻すまでは彼女は僕の知る「河風夢想」であるということだ。それが偽りの記憶、偽の人格であろうとも、僕の知る彼女はあの夢想だ。男女がどうこうではなく1人のデュエリストとして、僕は僕が知るあの彼女ならきつとなんとかなると信じよう。

『それならそれで構わないとも。なら行くか、マスター』  
「おー」

後悔なんて、しない。それに夢想のことだ、こっちが気を揉んでたのが馬鹿馬鹿しくなるぐらい、あつさりした顔して葵ちゃんたちと一緒にコロッセオにいてもおかしくない。また駆け出して廃寮を飛び出し、敷地を出たところで最後にもう1度だけ振り返る。もはやそこに住まう主を完全に失った建物は、ひどくちっぽけなしろものに見える。また湧き上がってきた感傷に意志の力だけで蓋をして、後ろ髪引かれる思いを断ち切り前に向き直る。

『次から次へと……！』

チャクチャルさんが、僕の思いまで代弁するかのようには呻いた。錆びついた門を抜けたすぐ目の前で空間が歪み、別の世界へと繋がって

いるであろう裂け目が生まれている。とつとこ逃げ出すことも咄嗟に考えたけれど、周りを見てすぐに諦めた。いくら長いことほつたらかしの廃寮とはいえ、身を隠しながら逃げるほど草木が生えているわけではない。今来た道を引き返すのもいいが、それだといつまでたつても前に進めない。ならばどうせミスターTだろうし、ここで1発返り討ちと洒落込んでやるのも一興か。

……返り討ちにできれば、の話だけど。少なくとも、鼻歌歌いながら勝てるような相手ではない。覚悟を決めてデュエルディスクを構え、裂け目の向こうから来るであろう人影に臨戦態勢を整える。

『……いや、違うな』

「え?」

ゆつくりと、空間の裂け目の向こうから人影がやってくる。その姿を見てポツリと、チャクチャルさんが漏らした。

『あれは違う、ミスターTではない!』

「やあ。君の方と会うのは……確か2回目だったかな?」

声とともにその主が裂け目を潜り抜け、こちら側へと世界に足を踏み入れる。役目を果たしたことで閉じていく裂け目には目もくれず、気安いとも取れる調子で話しかけてきたこの男には確かに見覚えがある。

「遊……い」

「へー、覚えてたんだ。その通り、遊さんだよー」

遊。僕はこの男について、ほとんど何も知らない。突然何の前触れもなくやってきて、少なくともユーノのことを知っていて、凄腕のデュエリスト。なぜ僕のところに来てきたのか、フルネームはなんなのか、そんなこと何ひとつわからない。だけどたった1つ、厳然たる事実がある。理由も目的もわからないが、僕のデュエリストとしてか、元人間としてか、それとも争いを求めるダークシグナーとしてのものか……いずれにせよ僕には、理屈ではなく本能でわかる。

この男は、敵だ。

「おおー、怖い顔。調子はどう?この世界のダークネス、どんな感じかなー?」

おちやらけた様子でおどける遊の、どう考えてもダークネスの襲来を知っているとしか思えない言葉に目を丸くした。ついさつき稲石さんにPDFが壊される前、三沢との通信で聞いた話を思い出す。その2つが頭の中で繋ぎ合わされ、1つの推論が突然閃く。

「まさか、ダークネスの協力者つてのは夢想じゃなくて」

「なーんだ、もうそこまで気づいてたんだ。ご明察、ダークネスもダークネスで正史より抵抗が大きいせいで攻めあぐねてたみたいだからねー、ちよつとだけ焚きつけておいてあげたのさ。もつとも、今言つた彼女も無関係じゃないんだけどねー」

「夢想……」

「おつと、喋りすぎちゃったかなー？口封じ、口封じつと。今回は生かしてあげる理由もないし、パパツと終わらせちやおつかかな」

それだけ言つて、獲物に飛びかかる獣もかくやとばかりの身のこなしてさつとデュエルディスクを構える遊。それまで意図的に抑えていたのだろう殺気が周りに浸透し、ただ向かい合っているだけで息苦しきすら覚えるほどに空気が重くなる。

正直、今のわざと漏らしたのだろう一言だけでも、聞きたいことは無数にできた。正史？稲石さんの言葉通り、夢想も無関係ではない？断片的にピースは集まってきているものの、確信に迫るための一番重要な部分がすつぽりと抜け落ちてしまっているせいで僕にはいまだに話が掴めない、そんな印象だ。だけどそんな疑問は後回しにして、今はとにかくやるしかないらしい。以前1度だけ、この男と戦った時のことを思い出す。まだ壊獣もグレイドルも手に入れていない頃の話ではあるけれど、明らかにあちらも本気を出していない状態で軽く手玉に取られてしまった苦い記憶だ。

「じゃ、始めよつかー？」

その言葉を合図に、デッキから初期手札となるカードを……。

「いいや、その勝負俺が受けるぜー」

「……チツ」

突如頭上から響くその声に、露骨に遊が舌打ちする。過去1度だけ聞いた覚えのあるその声からワンテンポ遅れて、遊がやってきたとき

と同じような空間の裂け目が頭上に生じた。そこを潜り抜け、第3の人影が着地する。

「確か……」

「まーた君かい？目障りだねー……」

僕に背を向け、つまり遊と向かい合う形で突如現れたこの男もまた、僕は知っている。なんの予兆も前触れもなくやってきて、何もかも知っているような顔をして勝手に話を進めていく。何もかも前回、光の結社との戦いに入る少し前と同じだ。

「富野！」

「おう。今は……そうか、お前だけだったな。ユーノの野郎、勝ち逃げしやがって」

こちらを見ずに話しかけてくる口調こそ荒っぽいのが、少なくとも彼は……富野は、ユーノの死を悼んでいる。それが伝わってきただけで、彼と文字通りの一心同体だった僕もなぜだか少し救われた気がした。同時に、遊とは別ベクトルで得体の知れないこの男のことを、少なくとも今は信用しようという気が湧いてくる。

「……なあ、その地縛神。実際のところ、奴はどこまで教えたんだ？」

真剣なトーンで謎めいたことを口にする富野。その表情をこちらから見ることはできないが、問われたチャクチャルさんには何のことだか心当たりがあるらしい。いつでも余裕綽々なうちの神様にしては珍しい程にシリアスな調子で、すぐさま返答する。

『いや、まだだ。だが、そろそろ知るべき時だと私は思う』

「だろいな。最近のこの世界は、前はさほどでもなかったはずの正史とのズレが少しずつ大きくなってきてやがる。誤魔化し続けるのも限界なら、いつそ思い切ってこっち側のルールを知るほうがいいかな……不本意だがな」

謎めいた短い会話の後、チャクチャルさんが身じろぎするような気が配がした。まるで何か重要な話をする際、人がその姿勢を正す時のように。

『デュエリストである限り、誰もがその本能的に強さを求める。いつ

かはこうなる。それが遅いか早いかの違いだけだ』

「それは同感だ。つたく、面倒事押しつけやがってよお……」

ぼりぼりと頭を掻き、初めて富野が僕の方を向く。その仏頂面の奥に、なにか重大なことを成し遂げようとする人間に特有の緊張、迷いの色が透けて見えた。

「おい。お前は今から、俺たちのデュエルを見ているんだ。いいな、絶対に目え逸らすんじゃないぞ」

「な、何を……」

『急いでいるのは百も承知だが、ここは彼の言うとおりにしてくれ、マスター。私を手取り足取り教えるよりも、実戦を目の当たりにした方が理解も早くなる。このデュエルは、今後のマスターにとっても無関係な話ではない』

依然として訳が分からないが、2人の調子からそれが偽りのない本心であることは理解できた。このデュエルには、これからの僕にとって重大な意味を持つ何かがある。黙って頷くと、それを合図にしたかのように2人のデュエリストが同時にカードを引き抜いた。

「あ、相談タイムは終わったかい？なら……」

「デュエル！」

何が起きるといふのか。何を起こそうといふのか。喉元まで出かかった疑問を、ぐつと飲み込む。黙って見ていること。それが、今の僕に選べる中で最良の選択肢だったからだ。

「先攻か、悪くないねー。風来王　ワイルド・ウィンドを攻撃表示で召喚、カードを2枚伏せてターンエンド」

緑のマントを身に着け、2足歩行する獣人。下級モンスターを出してカードを伏せるだけという、誰にだってできるごく当たり前のターン。

風来王　ワイルド・ウィンド　攻1700

「行くぜ、俺のターン！魔法カード、調和の宝札を発動。手札から攻撃力1000以下のドラゴン族チューナー、ギャラクシーサーペントを捨てて2枚ドロウする。さらにこの手札からレベル4以下のモンスター1体を捨てて、パワー・ジャイアントを特殊召喚！そしてこいつ

のレベルは、たった今捨てたモンスターのレベルの数値だけダウンするぜ」

パワー・ジャイアント 攻2200 ☆6↓4

寶石を身に着けたきらびやかな巨人が、レベル4となって特殊召喚される。ということは、捨てたのはレベル2モンスターか。この時点でワイルド・windの攻撃力を上回るモンスターを出すことに成功したため、このまま戦闘を行えば小さいとはいえダメージを与えることができる。

だが、彼はそうしなかった。

「まだ俺には通常召喚が残っている。コーナーモンスター、インフルーエンス・ドラゴンを召喚するぜ。このカードは1ターンに1度、俺のモンスター1体をドラゴン族に変更できる」

インフルーエンス・ドラゴン 攻300

パワー・ジャイアント 岩石族↓ドラゴン族

「へえー……」

意外半分、愉快半分といった調子で、僕の方を1瞬チラリと見た遊が声を漏らす。僕？だがそんなことには目もくれず、2体のモンスターを並べた富野が声を張り上げた。

「いいか、しっかり目え見開いてるよ！これで俺の場には、素材となるコーナーモンスターとそれ以外のモンスター1体以上が揃った！レベル4のコーナー以外のモンスター、パワー・ジャイアントにレベル3のコーナーモンスター、インフルーエンス・ドラゴンを……チューニング！」

チューニング、なる謎の言葉を宣言すると同時に、それは起きた。世界が動いた、といってもいい。インフルーエンス・ドラゴンがそのレベルと同じ3つの光弾に分裂したかと思うと、そのひとつひとつが光の輪に変化する。完成した3つの輪が一行に連なると、その中央をパワー・ジャイアントがまっすぐにくぐり抜けていき、それと同時にその姿から急速に色が抜けて輪郭だけとなる。よく見ると、内部にはそのレベルと等しい4つの光弾が真っ直ぐに並んでいたが、それも1瞬見えたただけだった。すぐに光の柱に塗りつぶされ、全てが消えてい

く。

「大地揺るがす勝利の鉄槌、威光と共に振り抜き砕け！シンクロ召喚、エクスプロード・ウイング・ドラゴン！」

☆4＋☆3＝☆7

エクスプロード・ウイング・ドラゴン 攻2400

まるで爆発寸前の爆弾のように、膨れた丸い瘤を背負った2足歩行のドラゴン。2体のモンスターの姿が消えた後に新たに現れたその姿を見た時、真つ先に受けた印象はそれだった。ごつごつした筋肉質の胴体や尾とは対照的に細い腕と脚、だがその先端の手足はその体軀に相応しい堂々たる竜。

「エクスプロード・ウイング・ドラゴン……」

「そうだ。これがシンクロ召喚……基本的に1体以上のモンスターと1体のチューナーモンスターを素材とし、そのレベル合計と等しいレベルのモンスターをエクストラデッキから呼び出す、誇り高き白枠のカードだ」

そう言つてモンスターゾーンに置いたばかりのカードを1度持ち上げ、こちらに見せてくる。エクスプロード・ウイング・ドラゴン……当然1度も見たことのないそのカードは、富野の言葉通り通常、効果、儀式、融合モンスターのどれとも違う白い枠で囲まれていた。

「シンクロ、召喚……」

震える声でそう呟いた、直後。腕輪の姿に戻しておいたはずのデュエルディスク内部で、何かがほんのわずかにその言葉に共鳴したのがわかった。永年の眠りから、満を持して目覚めたかのように。

無意識のうちに、腕輪をそつと撫でていた。そうか。君たちは、ずつと一緒にくれたんだ。

「バトルだ！エクスプロード・ウイング・ドラゴンでワイルド・ワインドに攻撃、キング・ストーム！」

あのドラゴンの攻撃力は2400で、素材となった2体のモンスターの攻撃力合計は2500。普通に考えればむしろダメージを減らす悪手にしかなくていいように見えるが、そこは富野に、そして新たな力、シンクロモンスターに抜かりはなかった。

「この瞬間、こいつの効果を発動するぜ。このモンスターが自身より攻撃力の低いモンスターとバトルを行う時、その相手モンスターを破壊して攻撃力分のバーンダメージを相手に与える。1700ダメージは貰ってくぜ」

鋭く吐き出された火炎が、ウルを捉えて包み込む。火球の中に封じ込めた直後、それが内側から派手に爆発した。

エクスプロード・ウイング・ドラゴン 攻2400↓風来王 ワイルド・ウィンド 攻1700

「どうだ……ん？」

敵を倒した炎が、揺らめき消えていく。だが、それだけだ。その炎の向こう側で、無傷の遊がヘラヘラした笑みを浮かべていた。

「危ない危ない、4000ライフ制でバーンは危険だつてー。僕はその効果にチェーンしてトラップカード、アルケミー・サイクルを発動していたのさ。このトラップによりワイルド・ウィンドの攻撃力は0になって、バーンダメージをフィールドでの攻撃力に依存するエクスプロード・ウイングの効果で受けるダメージは実質無効になったのさ」

「チツ、さすがに避けられたか。これ1枚だけカードを伏せてターンエンドだ」

アルケミー・サイクル。本来ならば自分モンスターの攻撃力を0にする代わりにその効果を受けたモンスターが戦闘破壊され墓地に送られるごとに1枚のドローを行えるカードだが、今回はドロー効果を度外視して純粹に攻撃力を0にできる、という点に着目して使われた形になる。遊も言及していた通り、この手のバーンカードにしては珍しくフィールド依存のダメージを与える点も向い風だったといえるだろう。

いずれにせよ、ダメージは通らなかつたのだ。

遊 LP4000 手札：2

モンスター：なし

魔法・罫：1（伏せ）

富野 LP4000 手札：2



モンスター：エクスプロード・ウイング・ドラゴン（攻）

魔法・罠：1（伏せ）

「僕のターンー、まあ、これでいいかな？ トラップ発動、シンクロ・マテリアル」

「そのカードは……！」

「その君はシンクロ初心者だからねー、ちゃんと解説してあげるよ。シンクロ・マテリアルは相手モンスター1体を選んで発動して、このターン僕が行うシンクロ召喚の素材としてその相手モンスターを使うことができるのさ。ただし、バトルフェイズは行えなくなるけどね。でもよかったよ、うまいこと闇属性ドラゴン族のエクスプロード・ウイングを出してくれてさー。同じレベル7でもこれでデーモン・カオス・キングでも出してたらどうしてやろうかと思ったけど、杞憂になったよー」

悔しそうに歯噛みする富野に対し、余裕の態度を崩さない遊。確かに2体のモンスターを消費して出したモンスターをこうもあっさり展開のついでで除去されるなんて、たまったものじゃないだろう。汚いやり口だ。

『は？』

「え？」

……たっぷり数秒考えて、さっきの考えは取り消すことにした。ま、勝負は非情だしね。たまにはそんなこともある、むしろシンクロモンスターの召喚に合わせてタイミングよくあんなカードを持ち出した遊の手腕を褒めるべきだろう、うん。

「チューナーモンスター、ドレッド・ドラゴンを召喚。そのままレベル7のエクスプロード・ウイング・ドラゴンに、レベル2のドレッド・ドラゴンをチューニング。塗り潰された黒き世界を、憤怒の黒が重ね塗る。シンクロ召喚、琰魔竜 レッド・デーモン・アビス！」

先ほどと同じように、召喚されたドレッド・ドラゴンが2つの光の輪になってその中心をエクスプロード・ウイングが通り抜ける。光の柱が走り、その中からさらなるドラゴンが咆哮とともに着地した。だがそれはドラゴン、とひとくくりに呼称するよりも龍人、と呼ぶ方が

感覚的には近いかもしれない。格闘戦に特化したようなマツシブな赤黒の体には筋肉が浮かび上がり、その両腕には大斧を思わせる巨大な刃が生えている。悪魔のような巨大な翼がゆっくりと開くと、地獄の底から漂ってくるような威圧感とその巨体から満遍なく放たれる。

琰魔竜 レッド・デーモン・アビス 攻3200

いくら相手のおぜん立てがあつたとはいえ、わずか2枚の消費からおもむろに解き放たれた3200打点の恐るべきドラゴン。しかもエクストラデツキのカードということは、変な場面でドロ―してしまい手札事故を引き起こす危険性もない。逆に肝心な時に引くことができず出せなかつた、なんてこともない。素材さえ用意できれば、ハングレスの影響すら受けない力。

これが、これがシンクロ召喚。ユーノが、そしてチャクチャルさんがこの力を僕に隠していたのも頷ける。この力は、これまでのデュエルの常識をいっぺんに塗り替えてしまう可能性すら秘めている。もし何の備えも準備も無しにいきなりこんな力を受け取っていたら、どうなっていたらどうか。向かうところ敵なしとまでは言わないが、並大抵の相手に対しては一方的に蹂躪できるはずだ。その結果は増長、そして慢心だろう。大切なカードとして、仲間として共に戦うどころか、完全にこの力に溺れてしまっていたらどうか。そして、カードパワーだけに頼ったデュエルは脆い。身分不相応な力を手にした驕りはプレイングや勝負勘を曇らせ、結果的に今の僕よりはるかに弱い雑魚デュエリストができあがっていたはずだ。

「バトルできないんじゃないやねー。ターンエンド」

「エクスプロード・ウイング……まだだ！まだ終わっちゃいねえ、俺のターン！」

巨大な赤黒の龍と対峙して、怯むことなくカードを引く富野。ほんの1瞬の思考の後、流れるような動きでカードを選び出した。

「レッド・スプリンターを召喚し、効果発動。俺の場に自身以外のモンスターがいない状況で召喚、特殊召喚に成功した時、手札か墓地のレベル3以下の悪魔族モンスター1体を特殊召喚することができる。俺はこの効果で……」

「露骨な誘導だけど……いいよー、乗ってあげようかなー。レッド・デーモン・アビスの効果発動。1ターンに1度、相手の場のカード効果1枚を無効にできる!」

レッド・スプリンター 攻1700

炎をまとった馬のようなモンスターがいななき、その全身がかすかな光を放ち出す。だがその瞬間を狙い澄ましたかのように、地獄の底から響くような吠え声とともに悪魔の龍がその腕を一振りする。剛腕による無造作にも見えるその動作はただそれだけで巨大な旋風を巻き起こし、フィールドの向こう側にいるはずのレッド・スプリンターを吹き飛ばした。辛うじて倒れる寸前に体勢を立て直すも、その効果は完全に中断されてしまっている。

だがそれは当然、そのカードを前から知っていたらしい富野にとっては織り込み済みの動作だった。

「問題ねえなあ!トラップ発動、リバイバル・ギフト!俺の墓地のチューナー1体を効果を無効にして蘇生し、代わりに相手フィールドにギフト・デーモン・トークン2体を特殊召喚するぜ。戻って来い、ギヤラクシーサーペント!」

ギヤラクシーサーペント 攻1000

ギフト・デーモン・トークン 守1500

ギフト・デーモン・トークン 守1500

先ほど調和の宝札によって墓地に送られていたレベル2のチューナーモンスターが蘇生され、通常召喚されたレッド・スプリンターと合わせてまたしてもチューナーとそれ以外の組み合わせが成立する。それと同時に遊のフィールドに2体ものトークンが生み出されるが、そんなもの意に介した様子もない。

すぐさま光の輪が生まれ、2体のモンスターが新たな力を生み出すべく新たな命へと生まれ変わっていく。

「レベル4のレッド・スプリンターに、レベル2のギヤラクシーサーペントをチューニング!赤き闘志が燃え上がる時、熱き雄叫び強者を挫く。シンクロ召喚、レッド・ワイバーン!」

体から炎を噴き上げる、レッド・デーモン・アビスに比べあまりに

もちっぽけな小型龍。にもかかわらずそのドラゴンは、1歩も引かない挑戦的な目で深淵の龍と向かい合った。

☆4＋☆2＝☆6

レッド・ワイバーン 攻2400

「先に言っておくが、まだまだ序の口だぜ！魔法カード、死者蘇生を発動！俺の墓地からチューナーモンスター、レッド・リゾネーターを蘇生する。そしてレッド・リゾネーターの特殊召喚に成功したことで俺はお前のフィールドからアビスを選択し、その攻撃力分だけライフを回復するぜ」

レッド・リゾネーター 攻600

富野 LP4000↓7200

見慣れない、ということとは先ほどパワー・ジャイアントの特殊召喚のために墓地に送られたのであろう、レベル2のチューナーモンスター。そしてレッド・ワイバーンはシンクロモンスターだけど、何も言っていないところを見るとチューナーモンスターではないらしい。と、なると。息をするのも忘れて、目の前の炎の乱舞に見入っていた。

「まずはこの効果からだな。レッド・ワイバーンは1度だけ、相手フィールドに自身より攻撃力の高いモンスターがいる場合に効果を発動できる。ライフは回復したしもう用済みだ、失せな！フィールド上で最も攻撃力の高いモンスター、つまりアビスを破壊する！」

小柄なワイバーンが限界までその身を反らせて吐き出した火球は見る間に巨大化し、自身よりもはるかに大きなアビスの体を包み込むほどの大きさとなる。今度はアルケミー・サイクルの罫もなく、無効効果も使い終えたアビスがなすすべもなくその炎の中にどうと倒れた。

「よくも……」

「許さない、ってか？だがな、次のターンなんてくれてやるつもりはないぜ。レベル6のレッド・ワイバーンにレベル2のチューナーモンスター、レッド・リゾネーターをチューニング！赤き王者が立ち上がる時、熱き鼓動が天地に響く。防御に回る臆病者に、生きる価値など欠

片もない！シンクロ召喚！叩き潰せ、レッド・デーモンズ・ドラゴン！」

真紅のワイバーンと悪魔がシンクロし、さらなる高みのモンスターへと昇華する。そのドラゴンはついさっきまで場を制圧していたアビスと実際似通ってはいたが、それでいて何もかもが違っていた。筋肉質なアビスとは対照的に細くしなやかな、それでいて力強さを感じる手足……そしてあの赤黒の炎よりも、ずっと明るく紅い鮮烈な炎。

レッド・デーモンズ・ドラゴン 攻3000

「このカードで終わらせてやるよ。速攻魔法、竜の闘志！」

「それは……！」

このデュエルが始まってから、いや、もっと前から常に遊の顔に張り付いていた余裕の仮面が、初めて揺らぐ。

竜の闘志。あのカードはこのターン自分が特殊召喚したドラゴン族1体の攻撃回数を、同一ターンで相手フィールドに特殊召喚されたモンスターの数だけ増やすカードだ。そして遊のフィールドには、たった今呼び出されたギフト・デモン・トークンが2体。つまり今レッド・デーモンズ・ドラゴンは、合計3回の攻撃が可能となったことになる。

……あれ？確かにレッド・デーモンズ・ドラゴンの攻撃力は高いけれど、ギフト・デモン・トークンは両方守備表示だ。それはこれから2回攻撃で蹴散らすとしても、ダイレクトアタック1回ではライフを削りきれないはず。なんて、心配するのもおこがましいのだろうか。

「バトルだ、レッド・デーモンズ！灼熱のクリムゾン・ヘルフレア！」  
レッド・デーモンズ・ドラゴン 攻3000↓ギフト・デモン・トークン 守1500（破壊）

火炎放射が宙を裂き、1瞬でトークンを焼き尽くす。だがその攻撃は2段構え、敵を滅ぼしてなお勢い衰えぬままに拡散した炎がフィールドを舐めつくした。巻き込まれるようにして、もう1体のトークンも焼き尽くされる。

「こ、これは……っ！」

「これこそがレッド・デーモンズ・ドラゴンの効果、デモン・メテオ！ 守備表示に対し攻撃を行った後で、相手の場に存在するすべての守備表示モンスターを破壊するぜ。だが竜の闘志は継続中だ、あと2回の連続攻撃で沈めてやるよ！ 灼熱のクリムゾン・ヘルフレア！」

再び火炎放射が放たれ、爆発が巻き起こる。僕の位置にいてなお感じる、凄まじいまでの熱気と爆風。

レッド・デーモンズ・ドラゴン 攻3000↓遊（直接攻撃）

遊 LP4000↓1000

「これでラストだ。灼熱のクリムゾン・ヘルフレア！」

三度火炎放射が放たれ、爆発が巻き起こる。僕の位置にいてなお感じる、凄まじいまでの熱気と爆風。

だがその中で、遊は平然と立っていた。

遊 LP1000

「……性悪野郎、そんなもん持ってたのか」

「まあねー。ねえ、勝ったと思った？ 勝てたと思ったー？」

先ほどの驚愕もただの演技だったのか、元通りの余裕の表情を浮かべて笑う遊。舌打ちの音が、富野の背中越しに小さく聞こえた。あの状態から伏せカードも無しにノーダメージどころかライフ回復に持ち込むなんて、僕に心当たりは1枚しかない。

「まさか……！」

「ああ、ノーダメージで凌ぐなんて、それができる手札誘発は限られる。回復が入ってないところを見るとジユラゲドじゃあないだろうが……」

富野も同意見だったようで、補足するように吐き捨てる。それに応じて、やる気のないパチ、パチ、パチという拍手の音が聞こえてきた。「ご名算ー、偉い偉い。いやー惜しかったねー。ちなみに今使ったのはこれ、ジェントルーパーさ。君の羅の予想通り、攻撃宣言時手札から特殊召喚できるカードだよー」

「ごんの……！ ターンエンドだー！」

計算づくの煽りと、理屈抜き腕前の腕前。どちらか1つだけでも厄介なのに、それらが組み合わさることで対戦相手のペースを乱す。焦りや

怒りは甘いプレイングを生み、実力がそこで生まれた隙をこじ開ける。なまじ強いのは間違いないだけに、本当にたちの悪いデュエリストだ。

今はまだ、富野も冷静さを完全には失っていない。ギリギリとはいえ、なんとか踏みとどまっている。なんとか、このまま進めばいいんだけど。

遊 LP1000 手札：1

モンスター：なし

魔法・罠：なし

富野 LP7200 手札：0

モンスター：レッド・デーモンズ・ドラゴン（攻）

魔法・罠：なし

「さーてと、僕のターン。墓地に存在するワイルド・ウィンドは、自身を除外することでデッキから攻撃力1500以下の悪魔族チューナーをサーチすることができるよー。ぴったり攻撃力1500の幻影王 ハイド・ライドをサーチして、そのまま召喚。さらに自分フィールドにチューナーがいることで奇術王 ムーン・スターを手札から特殊召喚して、その効果で墓地のジユラゲドを選択。選んだレベールをコピーするよー」

幻影王 ハイド・ライド 攻1500

奇術王 ムーン・スター 攻800 ☆3↓4

目まぐるしく2体のモンスターが召喚され、またしてもシンクロ召喚の準備が整う。戦う主力モンスターを全てエクストラデッキに放りこむことで、メインデッキを素材調達用として割り切った構築にできる、ということだろうか。そういう意味では融合デッキも似たようなものだが、十代やエドだつてここまで割り切った構築はしていない。

「さて。レベル4のムーン・スターに、レベル3のハイド・ライドをチューニング。天頂佇む白色が、穢れた地上に裁きを下す。シンクロ召喚、天刑王 ブラック・ハイランダー！」

☆4+☆3=☆7

天刑王 ブラック・ハイランダー 攻2800

巨大な鎌を手にした、白を基調とする死神のような悪魔。レベル7で攻撃力2800というのは破格の数値ではあるけれど、レッド・デーモンズ・ドラゴンには敵わない。とすると、狙いはその効果だろうか。

「装備魔法、ビックバン・シユートをレッド・デーモンズ・ドラゴンに装備。そしてブラック・ハイランダーの効果を発動！装備魔法を装備した相手モンスター1体に装備されたそれをすべて破壊して、1枚につき400のダメージを与える！」

レッド・デーモンズ・ドラゴン 攻3000↓3400↓3000

富野 LP7200↓6800

微弱な効果ダメージ……いや、狙いはそこじゃない。確かビックバン・シユートには、重大なデメリット効果がある。レッド・デーモンズ・ドラゴンの巨体が、強力な重力に吸われていくかのような動きでねじれ、消えてしまう。

「この瞬間、破壊されたビックバン・シユートの効果発動。このカードが場を離れたことで、装備モンスターのレッド・デーモンズ・ドラゴンには除外ゾーンに退場してもらうよー」

「レッド・デーモンズが……！」

「さてさてー、露払いは終わり。バトル、ブラック・ハイランダーでダイレクトアタック、デス・ボイラ・スレイ死兆星斬！」

死神が飛び、空中から鎌を振り下ろす。肩から腰にかけてを斜めに深々と切り裂かれた富野がそのまま倒れかかり……何とか踏みとどまり、荒い息で体勢を整える。

天刑王 ブラック・ハイランダー 攻2800↓富野（直接攻撃）

富野 LP6800↓4000

「これでようやく初期ライフかー、回復が生きてよかったねー」

「ああよかったぜ、これで次の反撃も安心してできるからな！俺のターン！」

すでに遊は全ての手札と場のカード、さらには墓地リソースまで使い終えている。必然的にターンが移り変わり、富野がカードを引く



……だが、彼もまた手札は今引いた1枚のみ。威勢だけは確かにいいのだが、あれでは誰が聞いても空元気には聞こえないだろう。

「来たぜ！魔法カード、命削りの宝札！このターンの特殊召喚が封じられる代わりに、手札が3枚になるようカードをドローできる！」

いや、そうじゃない。この男もまた、デッキを信じるデュエリストの1人。ならば、必ずデッキはその思いに応えてくれる。3枚ものカードを一気に追加でドローし、その内容に目を走らせる。

「モンスターをセットし、残り2枚のカードも伏せる。このターン終了時に俺は全ての手札を失うことになるが、あいにくとこの通りだ。捨てる手札なんて、1枚も持ってねえな」

遊 LP1000 手札：0

モンスター：天刑王 ブラック・ハイランダー（攻）

魔法・罠：なし

富野 LP4000 手札：0

モンスター：???（セット）

魔法・罠：2（伏せ）

「悪あがきには見えないんだけどねー、ドロー。おや、まったく皮肉なものだね。こっちも魔法カード、命削りの宝札を発動ー。同じく手札が3枚になるようにドローしてからブラック・ハイランダーでセットモンスターに攻撃、デス・ボラ・スレイ死兆星斬」

なんとここに来て、両者がほぼ同じタイミングで引いた同一のドローソース。これまた同じくその効果が最大限に生かせる3枚ドローを決め、またしても大鎌が空を裂く。

だがその一撃は、硬質な金属音と共に伏せモンスターを切り裂く寸前で止められた。それを成し遂げたのは、小さな悪魔がその手に持つ1本の巨大な音叉だった。

天刑王 ブラック・ハイランダー 攻2800↓??? 守300

「さすがにお前も息切れしてきたみたいだな、ああ？ダーク・リゾネーターは1ターンに1度、戦闘破壊されないぜ」

「息切れ、ねー。まあいいよ、カード3枚を伏せてターンエンド。でもまさか忘れてるとは思わないけど、ブラック・ハイランダーがいる限

り互いのプレイヤーはシンクロ召喚が行えない。シンクロ召喚を封じられた君のデッキに、あと何枚ブラック・ハイランダーを突破できるカードがあるのかなー?」

シンクロモンスターをメタるシンクロモンスター? ああ、ややこしい。どうやら僕が思うよりもはるかに、シンクロモンスターは奥が深い世界らしい。しれっと3枚の手札をすべて伏せることでデメリツトを回避し、悠々とターンを譲り渡した。

「3伏せるときでビビってられるかよ! それにその答えはもう、俺の場に伏せられてるぜ! 俺のターンにリバースカードオープン、デモンズ・チェーン! この効果によりブラック・ハイランダーは効果が無効となり、さらに攻撃も封じられる。これでシンクロは復活だ!」

「フン。まー、当然そのカードは入ってるよねー……君のデッキなら」  
「さらにメイン1の開始時に魔法カード、貪欲で無欲な壺だ。俺の墓地から異なる種族を持つ3体のモンスター、岩石族のパワー・ジャイアントとドラゴン族のレッド・ワイバーン、悪魔族のレッド・リゾネーターをデッキに戻してカードを2枚ドロウ。ただしこのターン、俺はバトルフェイズを行えないが……これなら十分だ。2枚目の永続トランプ、強化蘇生を発動! 俺の墓地からインフルーエンス・ドラゴンを蘇生してそのレベルを1、攻守を100ポイント上昇させるぜ!」  
インフルーエンス・ドラゴン 攻300↓400 守900↓1000 ☆3↓4

「2体のチューナー……?」

遊の言葉から察するに、先ほどブラック・ハイランダーの攻撃を受け止めたあのダーク・リゾネーターもチューナーなのだろう。しかも富野の言いつぶりによれば、これからバトルフェイズの行えないデメリツトを帳消しにできるほどのモンスターを呼び出すつもりらしい。

僕の想像の2歩も3歩も先を行くシンクロモンスター使い同士の戦いに、かけられる言葉なんてあるはずもなかった。一体どんな効果を持つモンスターを出せば、あそこまで大きなことが言えるというのだろうか。

「さあ、めんどくさい下準備はこれで最後だ。マジック・ホール・ゴー

レムを通常召喚する」

マジック・ホール・ゴーレム 攻0

「遊ーいつぞやのお望み通り、見せてやるよ。それとお前もいいか、こいつはちよつとばかり特別なシンクロだからな。真似しようなんて思うんじやねえぞ！」

「う、うん」

不意打ち気味にこちらを振り返り釘を刺してくる富野。わけのわからないままとつさに頷いた僕に頷き返し、また前を向いて高らかに声を張る。

「これが俺の手に入れた、レッド・デーモンの新たな進化だ！レベル3のマジック・ホール・ゴーレムに、レベル3、ダーク・リゾネーターと、レベル4となったインフルーエンス・ドラゴンをダブルチューニング！」

ダブルチューニング。その言葉通りに、これまでのパターンとは異なり2体ものチューナーが同時に光の環……いや違う、燃える炎の輪へと変化する。その合計7つもの輪が偶然にも同じ輪の形をしたゴーレムとともに、またしても未知なるモンスターへと生まれ変わっていった。

「紅き王者が悪魔喰らう時、天地創造の叫びが上がる。行く手遮る有象無象に、惑う価値などどこにもない！シンクロ召喚、レベル10！レッド・デーモンズ・ドラゴン・タイラント！」

これが。これが富野の切り札、エースモンスターか。目が覚めるように紅い鮮烈な炎が噴き上がり、その火柱の中央で1体のドラゴン、更なるレッド・デーモンが咆哮した。

強大な翼に4本もの巨大な角、先が3つに分かれた尾などは本人の言葉通り悪魔と呼ぶにふさわしい意匠で、さらには体の細い部分を的確に補強するかのように鎧めてあちこちを守る皮膚が、その全身を先ほどのレッド・デーモンズ・ドラゴンより一回りも二回りも巨大に見せている。だが何よりも目を引くのは、全身に何本も走る傷跡のようなオレンジ色の筋模様だった。あまりに膨大なエネルギーを抱えているからかその模様はかすかにそれ自体がオレンジ色に発光し、溢

れる熱量が体の周りに陽炎のような揺らめきさえも発生させている。

☆3+☆3+☆4||☆10

レッド・デーモンズ・ドラゴン・タイラント 攻3500

「なるほどー。それが君の持つもうひとつのレッド・デーモン……スカーライトの正当進化なわけねー」

「ああ、そして今からこいつの力を見せてやる！タイラントの効果の前には、敵も味方もありやしねえ。1ターンに1度自身以外の全てのカードをまとめて破壊する、アブソリュート・パワー・インフェルノ！」

おもむろに暴君の名を持つそのレッド・デーモンが右腕を振りかぶり、それを地面に振り下ろす。ただそれだけで、僕の視界が真っ赤に染まった。1瞬遅れて僕の位置にまで叩きつけられた呼吸が苦しくなるほどの熱波の中で辛うじて、効果を封じる悪魔の鎖に繋がれたブランク・ハイランダーがほんのわずかにだけでもがき、しかしすぐに動かなくなつて燃え尽きていくさまが見えた気がした。

「乱暴な真似してくれるね……今破壊されたカードのうち、1枚は発動タイミングの無かつたトラップ、破壊神の系譜。だけど残りの2枚、これ実は同じカードだったんだー。それがこのカード、運命の発掘。このカードが相手に破壊された時、僕は墓地の同名カードの数だけカードを引くことができる。運のいいことに全体破壊でまとめて墓地に送ってくれたから、それぞれ2枚が2枚分で4枚ドロウさせてもらうよー」

「4枚だと!?クソが……！」

遊の残りライフは、2000。攻撃力3500を誇るタイラントの攻撃を当てる事さえできれば、1瞬で吹き飛ばすほどの数値でしかない。だが、それができない。これ以上はないほどの格好のチャンスで、バトルフェイズは封じられている。もつともあの貪欲で無欲な壺を使わなければ、そもそもこのチャンス自体が生まれなかったのだ。

「気張ってくれよ、タイラント……！俺はこれで、ターンエンドだ……！」

遊 LP1000 手札：4

モンスター：なし

魔法・罨：なし

富野 LP4000 手札：1

モンスター：レッド・デーモンズ・ドラゴン・タイラント（攻）

魔法・罨：なし

「僕のターン。魔法カード、星屑のきらめきを発動！僕の墓地からドラゴン族シンクロモンスターのアビスを選択して、そのレベル合計と等しいレベルになるように墓地からモンスターを除外。レベル7のブラック・ハイランダーとレベル2のドレッド・ドラゴンを墓地コストに、選んだレベル9のアビスを蘇生するよー。まだ何かしてくるかもしれないし、一応無効効果をタイラントに対して使っておこうかな」

つい先ほど、タイラントが地面に穿った大穴。そこでいまだチロチロと燃えるオレンジの炎が、地の底から湧き上がってきた赤黒の炎に全て呑みこまれた。一気に地獄の底のような風景が広がる中、大穴の奥底から倒れたはずのアビスが再びその足で大地を踏みしめた。

琰魔竜 レッド・デーモン・アビス 攻3200

「そしてチューナーモンスター、フォース・リゾネーターを召喚。さらに場にシンクロモンスターがいることで、これもチューナーのシンクロン・リゾネーターは手札から特殊召喚できるよー」

フォース・リゾネーター 攻500

シンクロン・リゾネーター 攻100

「まさか……」

これ見よがしに呼び出された、チューナー以外のモンスターに2体のチューナー。そして2人の使う、それぞれタイプの異なる「レッド・デーモン」デッキ。となると、ここまで来て次の展開が察せないほど鈍感になった覚えはない。

「それがアビス、ベリアルの次、か。何が来るかは知らねえが、全力で足掻かせてもらうぜ！相手がモンスターの特殊召喚に成功した時、手札のエクストラ・ヴェンラーは特殊召喚できる！」

エクストラ・ヴェーラー 守200

富野に残された最後の手札から、闘牛士のような見た目のモンスターが特殊召喚される。それを見た瞬間、ほんの1瞬だけ遊が露骨に不愉快そうな顔をしたが、すぐにその表情も消えていった。

「……まあ、いいよ。レベル9のレッド・デーモン・アビスにレベル2のフォースとレベル1のシンクロン、2体のリゾネーターをダブルチューニング……そして全てが塗り潰されて、闇へと消えた世界の末路。シンクロ召喚、終焉の絶対破壊神……琰魔竜王 レッド・デーモン・カラミティ」

レッド・デーモンズ・ドラゴンとしての基本の形を保ったまま進化を遂げたのが富野のタイラントならば、それと向かい合うこのドラゴンはなんだろう。王者としての面影を残しつつも、悪魔の力がより色濃く出た進化の形だとしても呼ばばいいのだろうか。

アビスからの真価にあたり異常な変異を繰り返した体からはさらに2本もの新しい腕が生え、盛り上がる筋肉のせいで大木のように太くなったその手足からはなお有り余るエネルギーが鋭く巨大な何本もの棘となって突き出ている。タイラントと比べてもさらに重量感のある巨軀を宙に舞わせるための翼はそれ自体がさらに分厚く強大なものとなり、広げられたそのせいでただでさえ巨大なその姿を倍ほどの大きさに見えるようにも錯覚してしまう。タイラントのそれよりもより低く重々しい、しかし威圧感という点では甲乙つけがたいそのカラミティの咆哮が、目の前の似て非なるものへの怒りを露わにするかのように空気を震わせた。

☆9＋☆2＋☆1＝☆12

琰魔竜王 レッド・デーモン・カラミティ 攻4000

「カラミティがシンクロ召喚に成功した時、まず最初の効果を発動。このターン相手はフィールドで発動するカードの効果が使えなくて、さらにこの効果に対して何かをチェインすることもできない。もつともその様子だと、発動できそうなカードはないみたいだねー」  
「フィールド完全封殺で攻撃力4000だど？なんて効果してやがる」

「さらに墓地に送られたシンクロン・リゾネーターの効果で、墓地からフォース・リゾネーターを回収。本当は封殺効果なんて序の口なんだけど、今回はそれが裏目に出たかな。仕方がないから魔法カード、『守備』封じを発動。守備表示のエクストラ・ヴェーラーには攻撃表示になってもらうよー」

エクストラ・ヴェーラー 守200↓攻600

「クソツ、エクストラ・ヴェーラーは失敗だったか……?」

「……まったく、それ本気で言ってるんなら大したものだよー? 全くの偶然だけで1ターン命を繋ぐなんて、さ! カラミティでエクストラ・ヴェーラーに攻撃、クリムゾン・アフソリユート・シレイク真紅の絶対破壊!」

意味深な発言と共に号令を飛ばし、カラミティが狙いを定めたのはレッド・デーモンどうしの対決ではなくその横の小さな闘牛士だった。元から生えていた方の両腕を組み合わせて大きく振りかぶり、一拍空いたのちに大地も砕けよとばかりの馬鹿力で振り落とす。言葉にすればこれだけのシンプルな攻撃だが、その衝撃は空気を伝わり辺り一帯にまで破壊の風を吹かせるほどのものだった。大地にはタイラントが作ったそれと重なるように新たなクレーターが生まれ、吹こうにも衝撃を受けた何本もの木が耐え切れず攻撃地点を中心とした同心円状にへし折れていく。そしてその勢いは、至近距離でその攻撃を見ていた僕と富野にも襲い掛かった。

琰魔竜王 レッド・デーモン・カラミティ 攻4000↓エクストラ・ヴェーラー 攻600 (破壊)

富野 LP4000↓600

「ぐ……わあっ!」

だが、それで終わりではなかった。クレーターを中心に地に伏せたままピクリとも動かないエクストラ・ヴェーラーに、新たに生えたもう2本の腕を構えるカラミティ。その両腕の間に禍々しい地獄の業火という言葉を具現化したような火球が出現し、それが加速度的なスピードで巨大化していく。あっという間にその両腕に抱えきれないほどのサイズに成長した火球を眼下に向けて振り下ろすのかと思いきや、意外にもその逆でおもむろに宙へと放り投げた。

だがそれは、決してカラミティが攻撃の手を緩めたというわけではない。解き放たれた火球は上空で制止したのち弾け、無数の隕石となって地表へと降り注いだのだ。

「カラミティがモンスターを戦闘破壊した時に発生する効果、ヘル・カラミティ・メテオ地獄の災厄弾。今回ばかりは残念なことに、カラミティは戦闘破壊した相手モンスターの攻撃力分のダメージを相手ライフに与えるんだよねー」

「そうか、それでタイラントじゃなくて、エクストラ・ヴェーラーを……」

隕石の雨の中、ようやく得心した風に頷く富野。エクストラ・ヴェーラーは緩い特殊召喚条件に加え、おまけのようなバーンメタ能力を持つ。自身の効果による特殊召喚が成功したターン、プレイヤーの受けるすべての効果ダメージは相手プレイヤーが代わりに受けるようになる。これは発動する効果ではないためカラミティでも無効にできず、手札誘発のためアビスでも止められない。特殊召喚の効果を通さざるをえなかった時点で、ライフがすでに2000まで減っている遊は攻撃力3500を誇るタイラントを戦闘破壊できなかった、という訳か。でもエクストラ・ヴェーラーならばその攻撃力が低いから、高い戦闘ダメージを与えたうえで自身に降りかかるダメージも最小限で済ませることができる。

具体的には今の奴のライフでも、問題なく受け切れるほどには。  
遊 LP1000↓400

「カードを1枚セットして、ターンエンド」

正真正銘、奴の最後の手札がフィールドに伏せられる。タイラントの効果を承知のうえで伏せたということは、速攻魔法かトラップか。いずれにせよ、次が勝負の分かれ目になるだろう。もう2人とも、これ以上の展開に割けるだけのリソースを準備する余裕はないはずだ。  
「俺の……ターンー！」

このターンで決着がつくか、それともまたしても耐えきられるか。いずれにせよ、富野にとってこのデュエル最後の1枚となるであろうカードが引き抜かれた。



「このターンもタイラントの効果発動、アブソリユート・パワー・インフェルノ！吹き飛ば、カラミティ！」

再び全身に炎の鎧をまとい、タイラントが吠える。宙へと舞い上がった暴君の拳が地表で見上げるカラミティへと襲い掛かると、カラミティもまた地獄の炎を全開にしつつその右腕で迎え撃つ。互いに似通っていて、それでいて全く異なる暴君タイラントと災厄カラミティの拳が、文字通り天地をひっくり返すような衝撃を引き起こした。

「速攻魔法、禁じられた聖衣を発動！カラミティの攻撃力を600下げることでこのターンカード効果の対象にならず、さらにカード効果で破壊されない効果を付与する！」

琰魔竜王 レッド・デーモン・カラミティ 攻4000↓3400  
2大竜の激突が、ようやく終了する。だが、今のぶつかり合いに勝者はいない。攻撃を仕掛けたタイラント、それを迎え撃ったカラミティ、そのどちらも依然として自らのフィールドに睥睨して相手を睨みつけている。

だけど、本当にそうだろうか。今の衝撃に、カラミティ側は目に見えないが深刻なダメージを負っていないだろうか。現にその翼の端にはついさつきまで存在しなかったわずかな焦げ跡が存在し、地表を覆う地獄の炎の勢いも明らかに先ほどよりも弱まっている。無論、依然としてその力は強大であり、並みの相手ならばたやすく蹴散らすことができるだろう。だが極限のレッド・デーモン同士の戦いにおいては、すでに大勢は決してしまっているのかもしれない。

「バトルだ。行くぜ、タイラント！琰魔竜王 レッド・デーモン・カラミティに攻撃！」

またしても明るいオレンジの炎を燃え盛らせるタイラント、そして地獄の炎で食らい尽くさんと覚悟の瞳で拳を握るカラミティ。2色の炎が乱舞し、鼓膜の割れるような衝撃音が響く。一見すると拮抗しているように見える2つの力だが、少しずつその差が出始めていた。明るい炎が地獄の業火を侵食し、呑み込み、じわじわとだがカラミティの体にまで広がっていく。

「確かに攻撃力では上回っただろうけど、その差は100！まだ僕の

手にはフォース・リゾネーターがある、カードさえ引けるならいくらでも戦える！」

「いや、今度こそこれで終わりだ！速攻魔法、超再生能力を発動！」  
超再生能力？この場に全く関係のない遅効性のあるドロークカードに、僕だけでなく遊もその真意を測りかねて眉をひそめる。だが次の瞬間、タイラントの纏う炎の勢いが一層激しく鮮烈になった。

「そしてこの瞬間、タイラントのもう一つの効果を発動するぜ。バートルフェイズ中に魔法が罫が発動した時、その発動を無効にして攻撃力を500アップさせる！これでとどめだ、獄炎のクリムゾンヘルタイド！」

「この、力は……！」

レッド・デーモンズ・ドラゴン・タイラント 攻3500↓4000

↓琰魔竜王 レッド・デーモン・カラミティ 攻3400（破壊）  
遊 LP400↓0

「は……！」

ライフが尽き、ぐらんと大の字に寝転がる遊。さすがに体力と精神力が限界に來たのか、その場で膝をつく富野。どちらに行くべきか迷っていると、ふらふらになりながらも富野がどうにか立ち上がった。幾度も転びそうになりながら遅々とした足取りで寝ころんだままの対戦相手の元へ向かおうとする彼に、慌てて肩を貸す。

「……悪い」

「いやいや」

気を失っているかと思ったが、意外と遊の意識はしっかりしているようだった。眼を開いて寝転がったまま、ダークネスの力なのか暗い雲の立ち込める空を見上げている。

「よう、気分はどうだ？」

「最悪だねー。よりもよってレッド・デーモンとの同門対決で負けるなんてき、プライドズタズタだよ」

「……そうか」

富野の返事は短い。でも案外、今の遊の気持ちをも最も理解しているのは、同じレッド・デーモン使いとして勝利した彼なのかもしれない。そんな感傷を振り払い、今度は僕が尋ねる。

「もう観念して、洗いざらい吐いてもらうよ。どうしてダークネスに手を貸したりなんて」

「いやいや。君が聞きたいのは、そっちじゃないはず。本当に君が知りたいのは、彼女……河風夢想のはずさ。違うかなー？」

凶星だった。この男は、夢想についてまだ何か僕の知らない情報を持っている。例え聞いたことを後悔することになったとしても、それでも無関係ではいられない話を。押し黙った僕を見てゆるゆると息を吐き、やや苦しそうにくすくすと笑う。

「正直なのはいいことだよ。さて、彼女だけど。彼女は元々、僕たちの仲間だったんだよね。僕も、それからその富野クンもいる、ある組織のね」

「……初耳だな。それにしても、随分べらべら喋るじゃねえか」

「アビスやベリアルならまだしも、カラミティまで引つ張り出して負けたんだ。もうこれ以上の奥の手はないしー、闇のゲームを仕掛けた以上どうせこの先長くはないしー。だったら、最後まで大人しく観念するさ」

先ほどの激しい衝突の結果生まれたクレーターや、薙ぎ倒された木々を見る。あの時は自然すぎて何も思わなかったけれど、現実に影響が出ているということは確かに闇のゲームだったのだろう。

「ここから先は富野クン、君も知らない話さ。『彼女』は元々古株でね、つい最近討ち死にしちゃったけど、青眼使いのおっさんがいただろう？あの人の同期だったのさー。だからあの人もちよくちよくこの世界まで来てたみたいだけど、まあそれは関係ないね」

彼女、というのは夢想……いや、稲石さんの話と併せて考えるなら、その大元になったオリジナルの人格のことだろう。先が長くないというのは本当のようで、こうして話している間にみるみる衰弱していくのが手に取るようにわかる。だから、何も口を挟めなかった。

「18年ぐらい前だったかな？ある時、彼女はこの世界に来了。新しい転せ……獲物が来る兆候が見つかったからね。だけど、彼女はそこで1つへまをした。どうやらこの世界のバランスが、何かの拍子で崩れちゃったんだろう。偶然彼女の存在に気づいたダークネスは、その外敵を排除するため？それとも、単に世界の混乱を起こすため？今となってはわからないけれど、とにかく彼女にちよっかいをかけた。間の悪いことに、そのせいで大事故が起きたのさ。18年前の童実野町、自動車同士の正面衝突事故。両者の車にはそれぞれ母子2人と家族3人が乗っていて、片方は赤ん坊の男の子を置いて母親が。もう片方はこれまた赤ん坊の女の子を残してその両親が。全く突然に3人の犠牲者が生まれたものの、奇跡的に赤ん坊2人だけが助かった事故……」

みるみるうちに顔が青ざめていくのが、鏡で見なくてもわかった。その事故は、僕も知っている。いや、知っているなんてものじゃない。相手が目の前で急速に弱っているということも忘れ、思わず震え声が出る。

「まさか、その事故って」

「その通り。その不幸な事故を起こした両者の名字は、新聞には載らなかったとはいえ少し調べればすぐにわかる。男の子の方が遊野。女の子の方は河風。君達のことだよ」

「夢想が……あの時の生き残り……？」

物心つく前に僕が母親を失ったあの事故については、これまで努めて考え無いようにしてきた。当時の新聞記事は何度も読んでいたからもう1人相手方にも生き残った人がいるとは知っていたけれど、それが誰なのかはこれまでも意図的に探さないようにしてきた。

なぜか。探し出して、その人に会ったとして、それでどうしたいのかがわからなかったからだ。その相手を目の前にした時、自分が何をするのか予想できなかった。激情に駆られて殴りかかるかもしれないし、ひどいことを言うかもしれない。僕には親父がまだいたけれど、その子は両親がいなくなった。それが頭ではわかっているけど、実際にその人を相手にするとその時どうするのか、僕自身でさえわから

ない。それが怖かったのだろう。

そういえば、といまさらながらに、修学旅行の時夢想と行った隣町の墓地を思い出す。あの時夢想は両親の墓を前にして、なんと行っていた？ 交通事故、物心ついてすぐ。あんな昔から、ヒントは目の前に転がっていたんだ。それに僕は気づかなかったのか、それとも無意識に目を逸らしていたのか。今となってはもう、僕にだってわからない。

「彼女は責任感が強かったからね。あの時女の子の一家と君の母親は全員即死だったけれど、実は男の子、遊野清明だけは時間の問題とはいえまだ息があった。それを見て彼女は、この事故は私のせいで起きたんだと自分を責めに責めたあげく、その命を投げ打って唯一まだ命が残っていた君に自分の生命のすべてを譲り渡したのさ」

あまりの話に頭が真っ白になり、何も言うことができなかった。僕も本来は、あの事故で死んでいた？ それを夢想の前身である『彼女』が命を投げ打って助けてくれた……あまりにも信じられない話だが、不思議と疑う気にはなれなかった。それどころか僕の中のどこかで、ずっと足りなかったパズルのピースがかちりとはまった時のような納得さえ感じる。

『待て。その女の子が即死したのなら、マスターの知る彼女はなんなの？ ダークシングナーではないはずだ、それに第一他の地縛神はまだナスカで眠りにについている』

チャクチャルさんが今の話の矛盾点に気づき、鋭く問いたです。確かにそうだ。夢想が即死したというのなら、僕らの知る夢想は？ だがその答えも、遊は既に掴んでいた。

「簡単だよ。彼女は確かにその命こそ消えたけれど、まだその場に強い後悔や悲しみ、自分自身への怒りや贖罪の思いといった負の感情の残滓が残っていた。それをダークネスが拾い集めて死んだはずのその女の子に注入して、いつでも手駒として使えるように蘇らせたのさ。記憶を消され、自分が何であるかもわからずにただ死に際の負の念だけを利用され。今君が見ている彼女は、誰も望んでいなかったはずの哀れな存在だよ。その挙げ句、今まさに彼女はダークネスの完全

な手駒に成り果てた」

「そ、そんなの」

「横暴だと思ukai? ひどすぎると思ukai? でも、ある意味ではこの話はとても残酷に筋が通っている。君は彼女の口調について、本人から説明を受けたことはあつたかい?」

事故のショックで口がきけなくなつた彼女に、ある時謎の声が聞こえた。声の主が彼女の言葉を代弁して会話を可能とする代わりに、いつか彼女は声の主になかをしなければならぬ。あの時からききな臭い話だとは思つていたけど、よく考えればうちの神様だつて第一声が『力が欲しいか?』だつたからどこもそんなものだろうと思つて記憶の片隅に放りこんでいた記憶だ。

『契約か』

その張本人が今更、厳かな口調で問いかける。遊がコクリ、と頷いた。

「そう。純粋な交換条件、忌々しいことに単体では非の打ちどころのないダークネスとの完全な契約さ。さつきも言つた通り、彼女は責任感が強かつたからね。もはや元の人格すらなくなつた今でもその名残が影響しているのか、馬鹿正直にそれを遵守しているのさ。だがこの話、おかしいとは思わぬかい? 元々彼女を蘇らせたのはダークネス自身、それが自分のつくりだした欠点を埋め合わせるために契約を迫る? 馬鹿馬鹿しい、これはただのマッチポンプさ。つくられて日の浅い、まだ幼い彼女の精神にダークネスに対する借りを背負わせるためにわざわざ仕組まれた、ね」

話を聞くうちに握りしめた拳が、白くなるほどに力を込めていた。ダークネス。僕、夢想、稲石さん、その両親、僕の母親、そして夢想や稲石さんのオリジナルといえる『彼女』……一体、どこまで僕らの人生を引つ掻き回せば気が済むんだ。そのうえ、この世界までよこせだど? ふぎけるな、お前には砂粒ひとつくれてやるもんか。

「燃えてるねー。まあ頑張つてよ、もう僕には関係ない話……だし、ね……」

そこでついに、遊が力尽きた。空を見上げるその目から、みるみる

光が消えていく。その体が風と共に、塵となって流れていく。

## ターン124 鉄砲水と、覚悟

遊の死に際に残した話を、僕のルーツとも言うべきその話を、じつくりと噛みしめる。ちらりと盗み見た富野の表情は彼が言葉を失っていることを如実に表しており、どうやらこの話は彼にとつても初耳だったらしい。ダークネス、夢想、稲石さん、そして僕。複雑にもほどこがある人間関係が、よりにもよってこのとんでもなく忙しいタイミングで一斉に襲い掛かってきやがったわけだ。

『マスター』

「……わかってる」

せつつくようなチャクチャルさんの言葉に、そんな気はなかったがつい吐き捨てるように答えてしまう。すでに稲石さん戦、そして今の遊戦のせいで生まれたタイムロスはかなり大きい。この賢者の石を三沢に届ける、元々そのために僕はここに来たのだ。結果的にはそれが、ダークネスに対する何よりの復讐にも繋がる。色々と、割り切れないものはある。頭の中はぐちゃぐちゃだ。それでも、僕がここでやらなくちゃいけないんだ。やりたいようにやればいい。カイザーや大徳寺先生の言葉が蘇る。なら、これが今の僕がやりたいことだ。

「……じゃあ、僕はこれで」

「ああ」

短く富野に別れを告げ、よろよろと立ち上がる。しっかりと地面を踏み締めているはずの自分の両足が、なんだかひどく頼りないものを感じた。

最後に一礼し、くるりと背を向ける。もう、彼に会うことはないだろう。ふらつく足に活を込めて走り出そうとした僕の背中に、最後に富野の声が被さってきた。

「……なあ、遊野清明」

立ち止まり、しかし振り返らずに耳を澄ます。やや歯切れ悪く、しかしはつきりとした声だった。

「……お前は、俺みたいになるなよ。仲間を、友達を、ライバルを……全部失うようなハマ、絶対にすんじゃねえぞ。もう後輩はいらねえ。」



お前みたい扱いにくそうな奴、なおさらだからな」

何があつたのか、なんて絶つ対に聞く気はない。なんか重い話っぽいし、間違いなく暗い話だし。なんでこの忙しい時にそんなめんどくさい上に長くなりそうな話を聞いてやらなきゃいかんのだ。

ただ、まあ。その言葉の実感のこもった重みは、そこに込められた彼の本音は、確かに受け取った。背を向けたまま片手をあげ、大丈夫だとアピールする。1度も振り返らないまま、たつと地面を蹴って駆けだした。

普通に走るだけじゃ、もう間に合わないかもしれない。走りながら顔の前に片手を持ってきて拳を握り、ぐつとひと撫でするように横に動かす。ただそれだけで、全身に蛇が絡みつくように紫の痣が走る。視界がクリアになり、これまで目に入らなかつた世界の隅々までもが目に飛び込んでくる。そしていつもの赤い制服を包むように、灰色の地に紫の筋模様が入ったフード付きローブが全身を包んでいた。少し手をやって視界にかかつていたフードの位置を調整すると、これまでとは比べ物にならないほどの速度で周りの景色が後ろにすつとんでいった。このスピードなら、恐らくライイエロー寮までは2、3分で着けるはずだ。

『……なあ、マスター』

「何？」

チャクチャクさんの声も、ダークシグナーの力を解放して一時的にその結びつきを強めたからかいつもより明瞭に聞こえる。だからこそ、その声に含まれたわずかな躊躇いにも気づくことができた。スピードは落とさないまま問いかけると、思い切つたように語りかけてくる。

『どうも今のマスターは、見ていて不安なんだ。ひとつ、私と約束してくれないか？』

「約束？」

たまたま木の上にいた、野生の猿と目が合った。こんなに校舎の近くまで来ていたところを見るとかなり人に慣れている、もしかすると野生に帰つたSALだったのかもしれない。もつともこちらにその

確信が持てなかったように、あちらが僕のことを認識できたかは怪しいものだ。ほんの1瞬自分の目の前を駆け抜けていった、灰色と紫の風にしか見えなかったことだろう。

「約束、つて？」

何かよほど切り出すのを躊躇うようなことなのか、少しの間沈黙が流れた。あまりの気まぐさにもう1度聞き直そうかとさえ思ったところで、ようやく返事が返ってくる。

『先ほどの話がすべて真実だとして、というよりも、あの話は恐らく真実だろう』

「だろうね」

あっさり肯定した僕がよっぽど意外だったのか面食らった様子のチャクチャルさんに、思わず笑ってしまふ。少し説明が足りなかったのも、もう少し詳しく話すために自分の胸をポンと叩いて見せた。

「僕にはわかるよ。根拠もないし覚えてないけど、僕の中の何かが教えてくれる。あの話は本当だ、つて」

『そうか』

また沈黙。いきなりネズミが1匹足を横切ったため、スピードを落とさないまま踏みつぶさないように軽くジャンプしてそれを避ける。すぐ着地してまた走り出したのを合図に、かつてないレベルで歯切れの悪いチャクチャルさんが再び口を開く。

『約束してもらいたいのは、マスターの想い人についてのことだ』

「……うん」

ああ、やっぱりその話か。もうこれ以上避けては通れない、どこかで必ずしなくてはならなかった話だ。それでもやっぱり、触れて欲しくない話題だと思うのはわがままだろうか。

『こんな所で会話を誘導する意味も無し。私とマスターの仲だ、率直に言わせてもらおうぞ。あの女、マスターに殺せるのか？』

「殺……い」

稲石さんを看取った時から、すでにその覚悟はできていたはずなのに。情けないことに投げかけられた言葉の重みを受け止めることもできず、走る足がもつれる。地面が突然の勢いで迫ってきたかと思う

と、受け身を取る暇もなくそこに顎から叩きつけられた。

「ぐっ……」

悲鳴を押し殺してすぐさま立ち上がり、ローブに付いた埃を払う。チャクチャルさんの声は冷たかったが、今の僕にはその冷たさの中に潜む作りもののような嘘くささも聞き取れた。この神様は口こそ悪いけれど、どこか僕には甘い所もある。だからこそこんな、わざと突き放した言い回しをチョイスしたんだろう。

なんて頭ではわかっているけど、やっぱり面と向かってド直球に聞かれるとガツンと来るものがある。

『冗談や笑い話では済みそうにないから、今のうちに確認させてもらう。実力が足りているかはともかく、マスター自身の覚悟の問題としてだ。あの女は恐らくダークネスにとっても最後の守り、切り札中の切り札。今後あの女と対峙してとどめを刺せる状況に陥った時、マスターにそれができるのか?』

「僕は……」

『地縛神たるこの私に命の尊厳などもつともらしく、そして反吐が出る言葉を口にする資格はない。あの女のような存在を果たして「生きていく」と呼称することができるのか、などという話は哲学者人にも任せておけばいい。だが、これだけは私と約束してほしい。あの女に与えられた偽りの命を、マスターの手で終わらせると』

今度は、僕が無言になる番だった。その沈黙の隙間を、自嘲気味なチャクチャルさんの声が埋めていく。

『私を卑怯だと蔑むか?冷血と嘲るか?だが私も所詮、その程度の力しか持ち得ない』

卑怯?冷血?そんなこと、口が裂けても言えるわけがない。僕にはわかる。チャクチャルさんがどんな気持ちで、この通告をしているのか。要するにチャクチャルさんは、やっぱり僕に対してどこまでも甘い。優しいんだ。

今チャクチャルさんは僕を追い詰めていると見せかけて、実際はその逆……僕に、逃げ道を作ろうとしている。もしここでこの約束に僕が領けば、ほんのすぐ後に来たるべき彼女との勝負に僕が勝ったとし

て、その時彼女にとどめを刺すことになる最後の決断を『約束だから』  
というのを言い訳にして行えるだろう。さらにその後でいくらその  
決断を後悔したとしても、怒りの矛先は最初にこの約束を持ち出した  
チャクチャルさんに向けることができる。決着をつけなくてはいい  
ない僕ではなく、たまたまそこにいただけのチャクチャルさんが。本  
来ならば僕が一人で背負うべきその重みを、全て肩代わりして背負お  
うというのだ。

目頭が熱くなり、にじみはじめた視界から溢れそうになるものを精  
神力だけで強引に押さえつける。チャクチャルさんの献身に対する  
感謝の念もあるが、それ以上に自分の情けなさが身に染みだからこそ  
溢れた涙だった。僕が背負うべき業を他人が背負うと申し出て、それ  
を恥じるどころか歓迎までしている自分がいたからだ。

『マスター?』

突然泣きそうになっていた僕を案じてか、心配げに声をかけてく  
る。それがまた情けなくて、そしてありがたかった。深く、荒く呼吸  
しつつフードを目深にかぶり、固く閉じた両目に力を込めてどうか  
涙を振り切る。この優しさに身をゆだねる、それは許されないこと  
だ。

……僕と、夢想。共にあの交通事故の生き残りで、ダークネスに人  
生を何もかも捻じ曲げられた者同士。にもかかわらず僕は『彼女』か  
ら再び人間としての生を与えられ、彼女はダークネスに『彼女』の無  
念を含めその全てを利用される手駒としての偽りの生を与えられて。

結局のところ僕ら2人の運命を分けたのは、たまたま僕だけが即死  
せず虫の息で生きていたというだけの単純な理由でしかない。彼女  
と僕の立ち位置は、そっくりそのまま真逆でも何もおかしくはなかつ  
た。

でも、だからこそ、だ。誰よりも河風夢想に近くて、誰よりも河風  
夢想から遠いところにいる。この話に幕を引けるのは、僕しかいな  
い。僕の手で、全て終わらせる必要がある。それが僕のダークネスに  
できる精一杯の抵抗であり、『彼女』に向けられる最大限の手向けだ。  
そして、その責任は当然僕が負う。それが筋だ。

……なんて即答できたら、それはどれだけ立派なことだろう。未来を向いて前に進む、高潔で誇り高い覚悟だ。だけど僕は、どこまでいっても僕でしかなかった。そうするのが正しいはずなのに、自分のエゴのせいでこの期に及んでまだ迷う。そのくせくだらない意地ばかり張って、手を差し伸べてくれたチャクチャルさんの優しさに素直に甘える事すらできないでいる。

「僕は……」

「あ、あそこだクロノス先生！」

「わかつてるノーネ！シニョール清明、そこをどきなさい！」

言いかけた言葉はしかし、突如聞こえてきたたましい排気音と聞き覚えのある2つの声のせいで中断された。なぜか見覚えのある、しかしどこで見たのか思い出せないおんぼろの軽トラがガタガタと危なっかしく揺れながらこちらに近づいてくる。明らかに止まりきれないであろうその勢いにさつと森の中に逃げ込むと、案の定その直前まで僕のいた場所を踏みつぶすようにしてどうか、といった様子で停車した。開きつ放しの窓から、だいぶ久々に見た気がする親友の顔が飛び出した。

「無事だったか、清明！」

「十代！」

「と、止まったノーネ……」

「それにクロノス先生も……なんでここに？」

運転席に突っ伏した、いかにも疲労困憊なクロノス先生をちらりと見る。ぐったりとしたままの先生に変わり、十代が笑いながら返す。「どうもこうもないぜ。色々あって童実野町から戻ってきたら、お前と連絡が取れなくなっちゃって三沢が焦ってたな。ちやうどクロノス先生がこの車でまだ避難できてない生徒がいはいか見回りしてたから、廃寮まで様子を見に行くところだったのさ」

「車はトメさんが食材運搬に使ってるのを借りたノーネ……ペペロンチーノ、まさかこんな危ない物に乗っていたとは夢にも思わなかったノーネ……」

言われてよく見れば確かにこの軽トラは、トメさんがいつも使って

いたものだ。よくエンストしては立ち往生して、道中押しして動かすのを手伝った覚えがある。しよっちゆうエンストするだけあつてかなり古い型みたいだし、そりゃあこんな森の中だと乗り心地は最悪だろう。

「あ、そうだ！ちよつと待つてろ、今三沢に連絡するからな」

そう言つて自分のPDFを取り出し、少し画面をいじつてからこちらに手渡してくる。コール音1回の後、液晶に親友の顔が浮かんだ。

『どうした、十代……いや、清明か!?』

「ハローハロー。悪かったね、後で話すけどこつちも色々あつたのよこれが。でもほら、確かに賢者の石は採つて来たよ」

ポケットにねじ込んでおいた小包を引つ張り出し、画面の向こうからも見えるように顔の近くで軽く振つてみせる。画面越しでもわかるほどに安どの色がその表情をかすめたのを見計らつて、また小包をポケットに戻す。

「で？これから僕は、どうすれば？」

『今から説明する。その前にまず確認だが、十代とクロノス先生も今そこにいるんだよな?』

「おう、俺たちもいるぜ」

『ならよし。まず、清明の持つている賢者の石を持って1度俺のところまで来てくれ。それが終わつたら十代、お前はそのままアカデミアの正面入り口に攻撃を頼む。特に大きな空間の歪みが2カ所確認された、恐らく藤原優介はそちらに出てくるはずだ』

「藤原、優介……」

その名を口にした瞬間、十代のデッキがかすかに光を放つ様子が見えた。彼が1枚引きぬいたそのデッキトップにあつたカードは当然というかなんというか、E・HERO オネスティ・ネオス。傷つき力尽きたオネストの魂を託され新たな力を得た、もうひとつのネオスの姿だ。オネストはもともと藤原のカード、やはり主の名に反応したのだろう。

『そちらにはヨハンと……それから、さつきコロッセオから連絡があつたんだが。どこで聞きつけたかは知らないが、どうも吹雪さんも

単独でそちらに向かったらしい。あの付近ではミスターTも存在が確認されている、下手をするともうすでに交戦している可能性もあるから、なるべく急いでくれ』

「吹雪さんが……わかったぜ」

『それから清明。お前にはこれから、もう1か所の大きな歪みが観測された場所に向かつて欲しい。お前にはさつきも話したと思うが、ダークネスの出現位置は2つまで特定ができた。だが、どうしてもそこから先を1か所に絞り込む決め手が見つからなくてな。藤原優介が陽動だった場合、ダークネスがもう片方の座標からこの次元に現れる可能性も否定できない』

「了解。まさかとは思うけど、ダークネスが分身して2カ所からいっぺんに出てくる……なんてことはないよね？」

冗談めかして言いはしたが、あいにく誰も笑わなかった。当然だ。なにせ、相手は闇そのものなのだから。尖兵のミスターTだってコピーやクローンのレベルで増えるのだから、その親玉であるダークネスがそれぐらいのことやってのけないなんて保証はどこにもない。たちの悪い冗談どころか、普通に有り得る未来の仮定でしかない。

だいたい僕のせいで重く立ちこめてしまった沈黙を最初に振り払ったのは、三沢だった。

『……それで、清明。お前に行つてほしい地点なんだが、ずいぶんと半端な位置でな。本校からレッド寮に向かう道の、ちょうど中間地点あたり……と言え、お前ならわかるな？』

ああ、と頷く。なにせ3年間ずっと通ってきた道だ、鮮明に頭に浮かぶ。それと同時に、三沢がそれを訝しむ気持ちもよくわかった。あの辺りは確か、本当に何の変哲もないただの道でしかなかったはず。なんでまた、ピンポイントでそんな場所を？

『その近くを抜けてコロッセオにたどり着いた生徒の証言を聞く限りでは、その近くにはミスターTも見当たらなかつたらしい。先ほどはああ言いはしたが、正直なところ戦略上の重要度は正面入り口の方が上だと思う。だから悪いが、そっちにはお前1人で行つてもらいたい』

「わかったよ、こればっかりはしゃーないね」

『すまない。そしてクロノス先生ですが、すみませんが十代と入れ替わるかたちで俺をその車に乗せて発電施設まで連れて行ってください。賢者の石の力を借りて電気エネルギー、そして先ほどから何力所かで行われているらしいデュエルによって発生して今もこの島を飛び交っているデュエルエナジーを増幅し、時間移動システムの仕上げにかかります』

「むむむ、責任重大なノーネ」

その口調は硬かった。でも、それも無理はない。なにせ今伝えられた三沢の作戦は何から何まで全部、この車がちゃんと動くことを前提として立てられている。成り行き上とはいえその運転手を務めることになったクロノス先生は、ある意味ではこのダークネス撃退作戦の要だ。

自分が何か下手をすれば、作戦全てが瓦解しかねない。そのプレッシャーがいかほどのものかは想像もつかないが、それでもそれを隠して極力普通に振る舞おうとするあたりはこのメンバー唯一の教師として、そして大人としての風格を感じさせる。

「じゃあこっちは任せてくれ、清明。必ず、後でまた会おうぜ」

「もちろん。賢者の石、確かに預けたからね」

十代の差し出した右拳に、こちらも拳を軽く合わせる。すぐにその手を放し、軽トラの助手席へと再び乗り込んでいく。向こうは引き返せばいいとして、僕はどっちに行けばいい？ここからレッド寮と本校の間だと……この場所なら、来た道をまた引き返すことにはならずに着むだろう。方角を確かめてから僕も僕の戦いに向かおうとしたところで、背後から鋭い声が飛ぶ。

「シニョール清明！」

声の主、クロノス先生がこちらを見ていた。再びエンジンが動き始めた軽トラの窓から顔を出し、真っ直ぐに語りかけてくる。

「私からあなたにかけられる言葉は、もはや一つだけでスーノ。私には今あなたが何に苦しんでいるのか、それはわかりません」

「先生……」



苦しんでいる、とは、よく言ったものだ。表に出したつもりはなかったけど、きつぱりとお見通しだったか。

「なのでこれは無責任な言葉かもしれませんが、それでも言わせてもらいます。必ず成すべきことを成し遂げて、皆で悔いなく卒業式を迎えるノーネー！」

「……はいー」

その言葉を最後に、狭い道でどうにかUターンを決めた軽トラがガタガタと揺れながら去っていく。大きく手を振ってそれを見送り、その姿が完全に見えなくなる前に自分から背を向けた。成すべきことを悔いなく、か。その言葉を何度か頭の中で反芻し、それから先ほどのチャクチャルさんの問いにまだ返事をしていなかったことを思い出した。僕の成すべきこと。悔いを残さないこと。皆で、卒業式を迎えること。皆で。

ふと、あるアイデアが頭の中に閃いた。いや、それはアイデアなんて呼ぶのもおこがましい。あまりにも現実とかけ離れた、綺麗事の理想だけを固めたかのように稚氣じみた夢。だけどそれを、口にせずにはいられなかった。

「ねえ、チャクチャルさん。さっきの話だけど」

『ふむ』

こちらの声の調子から、早くも何かを察したらしい。何を言い出すのかというかすかな警戒と、それでも抑えきれないらしい好奇心を、その短い言葉の端々から感じる。それには気づかないふりをして、なるべく何気ない調子で問いかけてみる。

「そもそも、本当にどうにもならないのかな。全部丸く収まるハッピーエンドは、もうありえないのかな」

『と、いうと?』

これだけで多分、チャクチャルさんには僕の言いたいことが伝わっているはずだ。だけどあえて問い返してきたのは、それを僕自身の言葉として語ってみるというのだろう。だから僕も、思い切って言葉を続けた。本来固めるべき覚悟に比べるとあまりにも浅ましく身勝手な、だけど切実な小さな叫びだった。

「夢想のことは、とつくの昔にどうにかできるレベルを超えたのかも  
しれない。だけどそんな物騒な話より先に、本当に夢想をこつち側の  
世界に引き戻す方法はないのかな、って」

『助けたい、と？傲慢だな。少しでも自分の気に入らないことには必  
ず他に満足できる選択肢があつて、その全てが自分の思い通りになる  
と？そもそも当人の意思も考えずに自分のエゴだけで手を差し伸べ  
ることが救いになると？なあマスター、それは本気で思っているのか  
？』

即座に投げ返された言葉は冷徹で、残酷で、だけど正しかった。夢  
想を倒すのではなく、助ける。単純な言葉だが、まさに言うは易しだ。  
20年近く前の死人、ダークネスの傀儡でしかない魂を今更、人間の  
世界に戻す？B区はそれを望んでいる、それは間違いない。だけど彼  
女は、本当にそれを望んでいるのだろうか。違うかもしれない。皆の  
言うとおり、彼女をこの運命から解放するために戦うことが最善の行  
動なのかもしれない。

……でも。自分を強いて口を歪め、顔だけでもぐつと笑ってみせ  
る。無理を通しさえすれば、道理は向こうから引つ込むのだ。

「僕を誰だと思ってるのさ。砂粒1つから水1滴まで、世界は全部こ  
のダークシグナー様の所有物なんだよ。僕を中心に宇宙は動いてる  
んだ、僕のやることは無条件で正しいに決まってるよ」

大それた言葉だと思う。だけど、これでいい。  
要するにこれは、逆転の発想だ。世界を何もかも思い通りに動かし  
たいのなら、それができる存在になるしかない。逆に言えば僕こそが  
その存在だと言い張って周りがそれを信じれば、そんな僕の思い通り  
に世界の方が動く。世界を思い通りにできるから神なのではなく、神  
だからこそ世界はその意思に従う。そして僕はダークシグナー、いわ  
ば地縛神の神官だ。彼女の、夢想のためならば、どんな道理でもひつ  
くり返して見せよう。僕にはそれだけの力があり、それだけの仲間が  
いる。多分。

そんな宣言にさすがのチャクチャルさんも二の句が継げず、少しの  
間黙りこむ。若干不安になってきたタイミングで、低く重々しい、抑

えきれなくなつたかのような笑い声が聞こえてきた。

『ククク……ハッハッハー！いいだろうマスター、その意気は気に入つたぞ。そしてよくぞ言つた、その根拠なき自信と果てなき欲望こそが人間で、それこそがダークシグナーだ。愚かで、傲慢で、救いようもなく、そしてだからこそ素晴らしい。それこそが生というものだ』

言葉の端々から、チャクチャルさんの若干の驚きが含まれた歓喜の鼓動が伝わってくる。その一方で僕自身も、今の言葉を口にしたことで何か吹っ切れたような気分を味わっていた。これまで自分自身を縛り付けていた何かが、すつと消えさつたような。今ならば何でもできそうな、初めてダークシグナーになつたあの時よりも遙かに上の高揚感が無限に溢れ出て、それが体の隅々にまで瞬時に行き渡る。だからだろうか、こんな突拍子もない、たとえ思いついたとしても検討することすら諦めるような案が閃いたのは。

「例えば、だけどき。僕が夢想到勝てば、ダークネスにとって夢想はもう用済みになるわけだよな」

『その可能性は高いな。そもそもあの女を手駒に置いたのも、マスターの……引いてはマスターの中に遺されたその魂の名残を警戒してのことだろう。たとえ能力が劣ろうと、イレギュラー要素の無いミスターTだけで基本的な用は足りるからな。それでは不十分だと判断したからこそそのあの女……となると、その仕事すら果たせない駒をわざわざ手元に置き続ける意味はないはずだ』

「そうすると、どうなるの？消えちやうとか？」

『最終的にはそうなるだろうな。だが仮に私が急にマスターとの繋がりを断ちきつたとしても、マスターの体が即座に灰になるわけではない。今のマスターの身体には私が供給し続けるものとは別に少しづつ備蓄されてきた私のエネルギーが溜まっていて、それを使うことで時間的余裕が生まれるからだ。ダークネス式の蘇生は私の行えるものとは厳密には異なるだろうが、おおむねそこは同じはずだ』

「……つていうことは、さ」

考えをまとめながら、ゆっくりと口にする。無論、目の前の差し迫つた危機を忘れたわけではない。だけどこの点についてだけは、ど

うしても今のうちに考えをまとめておきたかった。

「勝負が付いたらどつちにせよダークネスは夢想を切り捨てて、そこからエネルギーを使い果たして消えちゃうまでの間、夢想は完全に自由になれるってこと？ ねえチャクチャルさん、そこを狙い澄まして無理にでも新しくエネルギーを流し込むって……できる？」

『マスターが言いたいのは、要するに接ぎ木だな？ 根、つまりダークネスからの供給が止まって枯れるまでの間に私に命を繋ぎ直して、そのまま眷属にしろと？』

「お願い、チャクチャルさん」

頷いた。しよせん素人の浅知恵ではあるが、今までの話を聞く限りではどうにかなりそうな気もする。夢想が解き放たれたその瞬間に僕の命を維持し続けるこの地縛神の力を代わりのエネルギー源とすれば、夢想が消えることもなくなる……はずだ。推測に推測を重ねたか細い光でしかないが、それでも唯一の光明だ。

『……可能性が無いわけではないが、それでもだいたい厳しいだろう。前例も無論、皆無だ。そもそも、ダークネスがあの子に取った蘇生が本当に私のそれと同じものか、その部分から既に推測でしかない』

ここで一度言葉を切る。再び発せられた言葉には、心底愉快そうな響きがこもっていた。

『だが、マスターがそう願うのなら、きっとできるのだろう』

「それじゃあー！」

『賭けてみるのも、そう悪くないだろう……次元を越えた異邦人に、そして地縛神たる私に。過去に2度も死の因果を超え、本来あるべき現世の理から逃れて現世に留まり続けたマスターの可能性にな。それに私自身、そんなマスターの果てなき欲望の行きつく先を見てみたくもなったからな』

「ありが……」

『ただし。そもそもマスターに勝ってもらわなければ、この話は全部白紙に戻るからな。それも、マスター自身がそのとどめを刺すんだ。マスター自身の手で勝敗を付けることによりマスターとあの子の間に簡易的な繋がりを作り、それを頼りに私が……まあ要するに極端な

話、デツキレスなどで決着をつけられると私には手が出せないからな』

感謝の言葉を遮り、間髪入れずに釘を刺すチャクチャルさん。とはいえ夢想の「ワイト」も、僕の壊獣やグレイドルといった面々も、そんな搦め手とは縁がない。盤面を支配して、殴る。それが1点集中突破スタイルか、相手フィールドまでも巻き込んだのコントロール型かの違いだけだ。一応覚えてはおくけれど。

「わかった。夢想にはずっと負けっぱなしだったけど、3年分の借りはまとめて返すさ……次は、次だけは、僕が勝つ。勝つてみせる。そういうことでしょ、チャクチャルさん？」

『ならばよし。その意気だ、マスター』

とんだ道草になってしまったが、そのおかげで得られたものは大きい。諦めさえしなければ、必ず打開策は見えてくる。今はまだ細かい糸のような不確かなものでしかないが、その先端には僕が望む未来がくくりつけられていると信じよう。

足を上げ、大地を踏みしめて1歩を踏み出した。さあ、待ってる  
ダークネス。長い準備はようやく終わり、ここからはついにこっちの  
ターン。反撃開始と洒落込もうじゃないか。

## ターン125 鉄砲水と小さな挽歌

『む？……出遅れたなマスター、来客だ』

「ああうん、わかっているよもう！この忙しい時に……！」

いざ反撃だ、と気合を入れ直して1歩踏み出すか踏み出さないかのうちに、突然それはやってきた。周囲の木陰に、覆い隠された闇の向こう側に、第三者の気配がある。こんな芸当ができるのは、僕の知る範囲では奴しかいない。

「とつとと出て来い、ミスターT！」

「「よかろう」」

「あ、あら……？」

先手を打って声を張ったところまではよかったが、まさかその返事が真正面だけでなく四方八方から聞こえてくるとは思わなかった。ざっざっざつと足音を立て、僕の周りをぐるりと取り囲むようにコピペ集団がわらわらと湧き上がる。もつともミスターTは1人いたら30人はその辺に潜んでいてもおかしくない相手、1人目を見つけた段階でこうなることぐらい覚悟しておくべきだったのだ。

「まずかった……かな？」

『かもしれない』

冷や汗がひとすじ、頬を伝う。頭ではわかっていたつもりだったが、チャクチャクさんとの会話に少しばかり時間をかけ過ぎた。時間は、時間はどれだけ残っている？あまりないだろう。だからといって助けを呼ぼうにもPDFはスクラップ、投降するふりをして隙をみて逃げ出す……ことも難しいだろう。精霊を実体化させての召喚、それも大型モンスターを呼んで物理的に蹴散らす手もないではないが、当然それはミスターT側も真つ先に警戒する部分のはずだ。僕としても、どこまで精神力が削られるかわかったものじゃないその方法は本当にギリギリまで使いたくはない。なにせこの世界は、精霊が元々実体を持つ霸王の異世界や砂漠の異世界とはわけが違うのだ。もつと訓練すれば消費を抑えての使役も可能だろうけど、少なくとも今の僕には夢のまた夢だ。そしてこうしている間にも1人、また1人と包囲

網を作るミスターTは増えていく。

「こうなったら……!」

やぶれかぶれだろうがなんだろうが、結局これしかない。腕輪から水妖式デュエルディスクを展開、即座に構えて周りをじろりと睨みつける。闇のゲームもそれはそれで体力の消耗が激しいけれど、いつまで続けなければならぬかもわからない精霊召喚よりはまだマシだ。とはいえいつかはそれも視野に入れなければならぬだろうけど、とりあえずこれを何体か間引きしてからでないか。

『マスター、まさか……』

「しっかりとついてきてよ、チャクチャルさん？ さあ、消えたい奴からかかってこい!」

『ああ、やはり力技か。仕方ない、付き合おう』

威勢よく啖呵を切り、構えたまま周囲を威嚇する。無謀な挑戦をあざ笑うかのようにミスターTたちの冷酷な笑みが濃くなり、一周即発の雰囲気は辺りに充満する。

だがそれが爆発する寸前、突然事態が動いた。

「うおおおお! 邪魔だああ、どけどけどけえっ!」

僕よりも数段ヤケクソな声が森に響き渡り、それに遅れて何人、いや何十人単位の足音がこちらへ近づいてくる。こちらを見ていたミスターTの視線が一斉にそちらを向き、僕も背を伸ばして覗き込む。アメフトやラグビーばりのタックルで包囲陣をこじ開け、見覚えのある男たちがミスターTから僕を守るかのように人の壁を作る。

「なんとか間に合ったぜ……遠からん者は音に聞け、近くば寄って目にも見よってんだ! デュエルアカデミアは北の果て、無敵のノース校番格、鎧田翼! 本校だけで何おっばじめてやがる、俺らも当然混ぜてもらおうからな!」

「鎧田!」

あまりといえはあまりに唐突な乱入に呆気にとられてその名を呼ぶと、それに応えるかのように人壁の一角から身の丈2メートル近い巨漢が低い声で宣言した。

「……サンダー四天王が十、次鋒の天田、いざ参る。先攻は貰った、儀

式の下準備を発動。この効果によりデツキから儀式モンスターのハングリーバーガー。さらにその名が記された儀式魔法、ハンバーガーのレシピを手札に加える」

「それに天田……サンダー四天王まで……」

ノース校のサンダー四天王。元々はまだ僕らが1年の際、本校を飛び出した万丈目が流れ着いたノース校でお山の大将となって勝負を挑んできたときのメンバーだ。毎年毎年、特に僕とこの鎧田との間にはなにかと腐れ縁が続いていたが、それもつい先日僕の勝ち越しという結果で幕を閉じた。

……あれ以来この男はまたノース校に戻り、卒業後のプロ入りもすでに決まっていたはずだ。それがなぜこの本校に、それも仲間のノース校生まで引き連れて当たり前のような顔をして来ている？まさかこれもミスターTの変装か、とも疑りかけたところで、こちらの心を讀んだかのようにタイミングよくミスターTと睨みあっていた鎧田が振り返る。

「なにぼさつとしてやがる。せつかくノース校から俺たちがはるばる来てやったんだぞ？事情はだいたいわかってるから、感謝しながら早く行け！……テメエの相手は俺たちだぜ、グラサンのおっさんよお。ワールド魔法、アンデットワールドを発動！」

「でも、どうして……」

もちろんこんなことを聞く暇がないのは百も承知だ。だけど芽生えた不信任と相まって、どうしても聞かずにはいられなかった。

「なんだ、そんなことか。元々卒業前にもう1回、俺たちのサンダーにサプライズで会いに行こうって話は前からあつただけだな。なんでも、最初に本校とデュエル大会した時にお前たちの側にいた……三沢とか言ったか？そいつの知り合いだとかいう筋肉ムキムキでバインバインのねーちゃんが何時間か前にノース校まで来たんだよ。だいぶ焦ってるみたいだから話を聞いてやったら、あのサンダーがいるこの本校で今、世界規模のともんでもないことが起きてるっていうじゃねえか。ちようど船の準備もできてたわけだし、サンダーのためならってんで血の気の多い奴らを引き連れて大慌てで海を渡ってきた



のさ。ねーちゃんにも一緒に行こうぜって言ったんだけど、また別の所にも顔を出さなきゃいけないっていうからな」

筋肉でバインバインで三沢の知り合い……間違いない、アマゾネスのタニヤだ。霸王の異世界からまたこっちに来ていたのは三沢だけなんだとなんとなく思っていたけど、どうやら彼女は彼女でこちらの世界で動いていたらしい。そしてその救援要請の成果が、このドンピシャのタイミングで現れたという訳か。

もちろん、この話が全部ミスターTのひねり出した真っ赤な嘘という可能性も否定はできない。だが、無駄に用心深い奴のことだ。もし作り話で油断を誘うならばこんなありえるかありえないかのギリギリの線を攻めてくるよりも、もつとそれらしい嘘を考え付くだろう。迷ったのは、ほんの1瞬だった。

「……この場は任せたからね、ノース校！」

「おう、とつとと行って来い！いいなお前ら、本校の奴らなんかは後れを取るんじゃないぞ！」

最後に一声だけ残して身を翻し、鎧田の威勢のいい声とそれに応える鬨の声に背中を押されるようにして走る。すぐさまそれに気づいたミスターT軍団が手を伸ばして捕まえようとしてきたが、そのたびにそれをノース校生が身を挺して作り上げた人の壁が押し返しては片っ端からデュエルでその場に釘付けにしていった。

でもミスターTはいけ好かないが、気に食わないことに手ごわい相手だ。最初こそ不意を突かれていただろうが、その動揺も長くは持ちはしない。歯を食いしばって足を動かしようにか包囲網を抜けようとするも、どうやら十代の側に藤原優介がいる分ミスターTはこちらに分身を裂いていたらしい。まるで途切れることなく同じ顔が湧き出してくる状態から抜けられずに苦戦するうち、次第に僕を守ってくれていたノース校の人員も1人また1人と数が減っていく。

「こん……のっ！」

このままではジリ貧なのは目に見えている。誰も口には出さないが、徐々に焦りの空気が色濃くなってくる。

だが、その時だった。その場にいたミスターTを何体か吹き飛ばし

て突然、何の前触れもなく空間に闇の穴が開いた。そしてその奥底の闇の中から響き渡るのは、ゆっくりとした愉悦の笑い声。初めのうち遠く小さく聞こえていたその声も、謎の穴を通して急速にこちらに近づいてきているらしく次第に大きくなってきた。

そして僕は、この声の主を知っている。

「この声って、まさか……！」

「そう、まさかだ。まさか、君にまた会えるとはね。それも太古よりうろろうと目障りだった憎き闇、そのおまけまで引き連れてきてくれるとは僥倖だ。トゥルーマンよ、この私の名をよもや忘れたとは言うまいな？だが悪魔は礼節を重んじる、一応の礼儀として名乗らせてもらおう。我が名はグラフィア、またの名を暗黒界の龍神。次元を越えられる力は、君の専売特許ではないのだよ」

「グラフィア！」

覇王の異世界における最大勢力、暗黒界の中でも最高の力を持ちながらもユベル事件の一環でその力を失い、雌伏の時を過ごしていた龍神。

あの時僕がこの悪魔に出会った時間はほんのわずかでしかなかつたけれど、それだけでもわかるいかにも悪魔らしい狡猾で抜け目ない性格の持ち主だ。個人的には決して嫌いな性格ではないけれど、間違っても敵に回したくはなく、かといって味方にしてもいいように利用されることが目に見えている、どちらに転んでもこちらにほとんど利が無いという大変やりづらい相手だ。

そのグラフィアが、あの時変身していたのと同じボロボロの老人姿で結界通路の上部から頭をひよいと出す。真下にいた僕を見つけると悪魔というより小悪魔的な笑みを浮かべ、そのままこちらを見下ろして気安く声をかけてきた。

「よもやまた会うことに、それも君の世界で再会できるとはね。君の頭に浮かんでいるであろう当然の疑問には、聞かれる前に返答しておこう。覇王が消えてその残党も散った後、再びあの世界は私を首領として暗黒界がその大部分を統治することになったのだが、霸王城の再建も終わらぬうちにあるアマゾネスが謁見を申し出てきてね。ここ

まで言えば、察しはつくだろう？それに暗黒の闇を住処とする我々にとつても、ダークネスの手下はいろいろと目障りな存在なのだよ。つまりあの時と同じく、互いの利害が一致したわけだ。ここでトウルーマンの存在を消せるのであれば、それに越したことはない」

三沢にタニヤと僕が再会したのはグラフィアと出会う前だから、本来ならば僕とグラフィアの会話を知るはずもない彼女がグラフィアに援軍を頼んだという点には時系列的に違和感が生じる。だけど、なにせこの悪魔のことだ。僕を見出した自分の眼力を証明し喧伝するため、あの戦いの話を広めていてもおかしくない。

そうこうしているうちにその全身を結界通路から現して着地したグラフィアがその腕を空中で一振りすると、ただそれだけで巻きおこつた闇の風がひしめいているミスターTのうち何人かをまとめて吹き飛ばし、その体が闇を纏う無数のカードになっては崩れていく。

「さあ、行きたまえ。これは君に対しての貸し1つとしておこう」

「ありが……」

『待て、ストップだマスター。そこは私が言うとおりに返しておくといい。いいか？まずこう言うんだ——』

「え、ええと？」とんでもないね、グラフィア。僕からそっちへの貸しは2つ、これでようやくトントンさ。なんだって僕は霸王を倒しただけじゃない、あんたに水だつて1杯恵んでやったんだよ？……えつと、これでいい？」

『悪く思うな、龍神よ。悪魔の甘言……まあ仕事熱心なのは結構だが、私のマスターに対して勝手に悪魔が貸しを作られては困るのでな』

「そうかい？残念だよ、ずいぶんと優秀な参謀が付いているじゃないか」

目の前ではばったばつたとミスターTが薙ぎ倒されていくのと同時進行で、うちの地縛神フレイムとどんな時でも狡猾な悪魔が僕を挟んで高度な舌戦を繰り広げる。

だがそんな一方的な光景を目の当たりにしても残るミスターTは表情1つ変えず、残った者どうしで互いの顔すら見合わせない不気味な意見交換をする……いや、こいつらがすべて同じミスターTという

存在であることを考えると、むしろ独り言と言った方が正確なんだろうか。そのサンングラスの奥の視線は例外なく、数人単位で自らを消し飛ばしていくグラフィアではなく僕の元へ注がれていた。

「これもまたイレギュラー、存在してはならない異物か」

「やはりあの男、あまりにも危険」

「真実が、さらに強く歪みつつある」

「なれば排除するしかあるまい」

相も変わらず何の話をしているのかはわからない、でも僕にとって悪い話なことだけはよく分かる。そして思わぬところで利害が一致して加勢に来てくれたグラフィアという存在にも、ミスターTは急速に適応しつつある。

まだ、足りない。この状況を覆す、なにか強烈で鮮烈なもうひと押しが。となると、やはり精霊召喚しかないのだろうか。今度こそ、僕も覚悟を決めるべきなのだろうか。さつき鎧田の登場により腕輪に戻しておいたデュエルディスクに目を落としたまさにその瞬間、地面が大きく揺れた。地震ではない。なにかもつと単純で、単発的な振動だ。まるで、恐ろしく巨大でかつそれにふさわしい質量を供えたものが、大地を揺るがして動き出したかのような。

「手札の白夜のグラディウスを自身の効果で……どわつとと!?なんだ、噴火か!?!」

「……俺のハングリーバーガーによって戦闘ダメージを受けたな?ならばこの瞬間、儀式素材となった儀式魔人プレコグスターの効果が発動する。さあ、手札を一枚捨ててもらおうか。それと落ちて着け鎧田、それとも違うようだ」

天田がデュエルの腕を止め、島の中央に位置する火山を仰ぐ。雲に覆われた暗い夜空の中で、僕らにとっては見慣れた火山は沈黙を保っていた。そうこうしている間に、またしても大地がどうん、と揺れる。だが、今度はそれだけではすまなかった。グラフィアが明後日の方向を見つめ、むう、と唸る。

「これはまた、大物だな」

その言葉の真意を問い返す暇は、誰にもなかった。間髪入れず次に

訪れたのは振動だけではなく、視界を埋め尽くすような巨大な拳……そう、拳だ。魔法カードの方の地砕きさながらに叩き込まれた巨大で青い筋肉質な右腕が、大量のミスターTだけを正確に巻き込んで衝撃波とクレーターを生み出した。

「魔技、天界蹂躪拳。影なるものよ、闇に沈み魔に吞まれるがよい」

この見覚えのある巨大な拳。そして上空から重々しく聞こえてくる、相も変らぬ中二病が炸裂したようなもったいぶった言い回し。忘れられるわけがない、僕はこの持ち主を知っている。世界を揺るがす三幻魔の一角にして、その最強との呼び声高き悪魔の皇。

「……ラビエル！」

「久しいな。だが、もはや我々に言葉は不要。道中の障害は排除しておこう、成すべきことを成し遂げに行くがよい」

三幻魔は砂漠の異世界でユベルが封印を解いて叩き起こしたのを追いついたのち、再びユベルが回収して……その後ずっと、行方不明のままになっていたはずだ。再封印されたわけではないことはこっちの世界に帰ってきてから1度見に行ったから確認済みだが、なぜこのタイミングでこの場所に？

『残念だが、私も何も知らないぞ。とはいえ、今は奴の言葉に理があることも認めねばなるまい』

聞きたいことは山ほどあるが、確かにそれは後でもできる。今やるべきは別にある、か。ラビエルは恐ろしい悪魔で、人類の脅威、三幻魔……でも、僕はそんなラビエルと2度もデュエルをしてきた。まるで少し前の十代みたいな物言いになってしまいが、デュエルを通じて向かい合うことで、敵味方を超越して分かり合えた部分が僕らの間には確かにある。だから、僕にはわかる。彼は少なくとも今この瞬間だけは間違いなく、僕の味方だ。共に戦ってくれる、心強い仲間だ。

再び目の前を巨大な拳、天界蹂躪拳が振り下ろされる。その着弾の衝撃を心地よく体全体で感じながら、ズタズタになった包囲網の中でも特に薄い場所に目をやる。おそらく、これが最大にして最後のチャンスだろう。いまだ戦っている富野、グラフィア、そしてラビエルの顔を順番に見渡して、別れの挨拶代わりにすつと片腕を上げる。それを

最後に、僕は戦場から脱出した。

「やっぱりここにいたんですね、先輩」

「やっほー清明ちゃん、来ちゃった。てへっ！」

それを見計らっていたかのように頭上から聞きなれた女性の声が出て、ぱつと上を見上げる。真上の木の枝に乗ってバランスの悪さなどまるで気にしていないかのようにこちらを見下ろす、くの一姉妹がひらひらと手を振っているのと目が合った。

「葵ちゃん、明菜さんも」

「先輩のいるところには、いつだって人が集まりますからね。騒ぎを探せば一発ですよ」

「うん、それも清明ちゃんの魅力だとお姉さん思うけどね……させて、葵ちゃん」

「わかってます、姉上。今回私がコロッセオを抜けて先輩を探していたのには、少し訳がありました」

「お姉ちゃんは付添いだよー。また遊びに来たらなにかおかしな空気だったからね、大事な大事な葵ちゃんは、いざとなったら私が守るんだから」

「姉上ちよつと黙っててください、話が進みません。実は先ほど電話を頂きました、先輩に向けて伝言を頼まれたんですね。連絡しようと思っただけれど、PDFが音信不通になっているから、と」

そう言っただけでそれまで乗っていた木の枝から飛び降り、数メートル近い落下の勢いを膝だけで完璧に殺し無音で着地する葵ちゃん。明菜さんもそれに続き飛び降りたがこちらは着地の際、明らかに葵ちゃんより無造作な動きで飛び降りたにも関わらず無音どころか周りの空気すらもピクリとも動かなかった。といってもこれは葵ちゃんの技量が未熟なのではなく、この人が規格外なだけだ。

「伝言？誰から？」

「河風先輩からです。『場所はわかるよね、清明？3年前、私が初めて清明に話しかけたところ。待ってるからね？』ってさ』だ、そうですが」「夢想が……」

僕を待っている。つまりはまあ、そういうことなんだろう。もう今

度こそ先送りは通用しない、真正正銘の決着をつけるべき時だ。ただその事実を突きつけられても、落ち着きこそすれ驚きはしなかった。正直、心のどこかでそんな気はしていたからだろう。

ダークネスの侵略とこちらの抵抗が始まってから、不自然なまでに誰の前にも姿を現さなかった夢想。そして記憶を取り戻した稲石さん……夢想の片割れ。極めつけは二手に分かれて来いと言わんばかりの、2カ所あったダークネス出現ポイント候補。ここまであからさまにヒントは出ていたのだから、いくら僕でもさすがに察するというものだ。

黙りこくった僕を見かねてか、明菜さんが僕の後ろに回り背中をポン、と叩く。

「夢想ちゃんってこの前会った子だよな？なにに清明ちゃん、告白？告白やっちゃうの？」

「皆が皆、姉上みたいに年柄年中頭の中お花畑だと思わないでくださいね？あえて深くは聞きませんし、事情はやはり分からないままですが、先ほども言った通り私は先輩の判断を信じます」

フリーダムな明菜さんの言動について頭痛でも起こしたのか、心底渋い顔でこめかみを指で押さえながらもそれをたしなめる葵ちゃん。心から力づけようとしてくれる彼女の言葉と明菜さんの底抜けの明るさに、これから先起こるであろう避けられない戦いに対してもほんの少し救われた気分になる。

「ありがとう。じゃ、ちょっと行ってくるよ」

「ええ。コロッセオでは今、万丈目先輩と天上院先輩が中心となつて皆さんを纏め上げています。なので私と……この呼んでもいないのにやってきた姉上しか自由に動けませんでしたが、それでも皆さん先輩については口を揃えて言っていましたよ。必ず、戻って来いと」

「……わかつてる。夢想も連れてそっちに帰るよ。必ずね」

「追手は私たちにお任せください。これより先輩の元へは、1歩たりとも進ませません」

「私も手伝うねーっ！」

そう真剣な目で告げてデュエルディスクを構える姉妹の視線の先

には、今まさに闇の中からその姿を現そうとするミスターTの姿があった。鎧田たちが何十人単位で食い止めてくれているのにまだ分身する余力があるとは、つくづくとんでもない奴だ。それとも、それだけ向こうも必死なのか。

この2人の実力は折り紙つきだが、それでもたった2人でミスターTを相手するなんて危険過ぎると言わざるを得ない。でも、この目になった葵ちゃんがここで自分の意見を曲げたりしないことも僕はよく知っている。議論するだけ時間の無駄だし、これ以上夢想を待たせるわけにもいかないだろう。そのまま2人に背を向けたところで、葵ちゃんもポツリと呟いた。

「……それと、これも先ほど言いましたが。先輩、ご武運を」

「そつちもね」

それで、今度こそ最後だった。後ろから聞こえはじめた戦闘音がやがて遠ざかるにつれ、次第に聞こえなくなっていく。一時の静寂に包まれながら、あの時と同じだと振り返る。入学式の夜、僕が夢想と初めて出会った日。あの時も彼女は、こうやって夜道を歩いていた僕に向こうから声をかけてきたんだ。あの時は、まだこの学園生活がどんな波乱に満ちたものになるのかなんてことを知る由もなくって。

でも、おかげでこの3年間はまるで退屈しなかった。たくさんの仲間がいて、数多くのライバルがいて、果てしない敵がいて……。

「でもそれよりも何よりもここには君が、夢想がずっといたんだよ。月が綺麗ですね……なんて、そんな天気でもないけどさ」

月明かりは分厚い雲のはるか上に押しつけられ、地表には街灯1つ点いていない暗い道。それでもそんな暗闇の中で、彼女の横顔は何よりも輝いて見えた。

何を見るでもなくぼんやりと視線を宙に彷徨わせていた彼女が、僕が声をかけたことでようやく気が付いたようにこちらを向く。形のいい眉に、すつきりとした鼻。ふつくらとした瑞々しい唇に、彼女のトレードマークともいえる肩まで伸びた明るい青髪。綺麗だ、と思う。月並みで陳腐な言葉ではあるけれど、この3年間で彼女と顔を合わせる度に、ずっと感じてきたことだ。この思いが揺らいだことは、



1度もない。

「死んでもいいわ……なんて返せたらいいのだけれど。あいにく私の生は、もうとつくに終わっていたの」

ふつと皮肉気に、だけどそれ以上に寂しげな笑みを浮かべて返す夢想。その様子にほんのかすかな違和感を抱き、すぐその正体に思い当たる。彼女の特徴でもあり、その身を縛り付けていたダークネスの呪いでもある伝聞調の語尾。それが、きれいさっぱり消えていたのだ。探るような視線の意味に気づいたのか、彼女が今度は屈託のない笑みを浮かべる。

「ああ、これ？稲石さん……つまり、あれもある意味では私だけだ。あの人だって記憶さえ取り戻せば、ダークネスの力を取り込んでスターヴ・ヴェノムをグリーディー・ヴェノムという真の姿に変化させることができた。なら、私がいままでダークネスの支配に甘んじる道理なんてないでしょう？」

なんで彼女がああ廃寮での戦いを知っているのか、なんて聞くのは野暮だろう。彼女とあの人はどこまでも同一人物に近い存在、それぐらの情報は共有していてもおかしくない。

そしてそれよりも、今の話には重要な情報が含まれている。

「じゃあ今、夢想は自由なの？ダークネスの支配から抜け出して……」  
もしかしたら、戦わなくてもいいかもしれない。だがそんな淡い期待を打ち砕くようにびしょと一本突き出した指を自らの唇に当て、静かにとジェスチャーで示す夢想。その様子に気圧されて僕の言葉は尻すぼみに消えていき、入れ替わるように彼女が口ずさむ。

「……私が取り戻したのは清明のために命を投げ打った『彼女』の記憶、そして自分の言葉と名前、それだけ。ダークネスの力が私の偽りの命の全てだし、私はそれに抗えない、それは今も変わらない。私は直接ダークネスに刃向えないから、代わりにラビエルを探し出してそっちに行ってもらったの」

「ラビエルが……」

あの幻魔は僕に、なんと saying していたっけ。成すべきことを成し遂げに、か。もしかしたら奴は、こうなることがわかっていたのかもしれない。

ない。

「だけどそのことについては口に出さず、代わりにもう一つの気になった点を問い返した。」

「名前？」

「そう、名前。河風夢想、なんて名前は、その字の示す通り夢でしかない。ようやく取り戻した、私の本当の名前は——河風現<sup>うつつ</sup>。できることなら、清明にだけは私の本当の名前で。現<sup>うつつ</sup>って、そう呼んでもらいたいかな」

河風現。それが彼女の名前。稲石さんの笑顔が、ちらりと胸をよぎった。あの人も最後の最後まで、僕に本名を明かさなかった。これは、あの人の名前でもあったのだろうか。

「河風……現」

そう呟くと、彼女の笑顔が満足げで、だけどどこか儂いものに変わる。

「ありがとう、そう呼んでくれて。私のことを、私だけの名前で呼んでくれて。ねえ、清明。最後にたった一つだけ、聞かせてもらってもいいかな」

「……」

最後。それはつまり夢想との……いや、現との戦いの時が着実に迫ってきていることを示していた。僕が無言で頷くと、彼女は一度息を吸った。そしておもむろに意を決したように、真剣な目でまた口を開く。

「清明。あなたも、私と同じ側に来てくれない？世界も何もかも全部捨てて、ずっとずっと私と一緒にいてくれないかな……なんて頼んだら、あなたはとうする？」

「僕は」

この時、はつきりと感じたことが一つある。たとえば僕がこの場を生きて延びて100年生きたとしても、僕はこのまま一生この瞬間のことを後悔するし、この時の自分を許すことはない。おそらく、きつと、だろ、だなんて曖昧な言葉ではなく、絶対にそうだ。じゃあこの問いにはなんて答えればいいのか、そもそも答えなんてものがある問いな

のか。

そんなことはどうだっていい。この時、現が全てを賭けて僕と真剣に向き合っていたこの瞬間。彼女の問いかけに、僕は即答することができなかった。彼女とそれ以外の全てを天秤に載せ、どちらかを選ぶことが咄嗟にできなかった。そんな選択はしない、どちらも手に入れてみせる……そう啖呵を切ることすら、この時僕には思いつけなかった。

彼女にとってみれば、ここで言葉に詰まられるぐらいならばまだ断られた方が良かっただろう。僕が断りさえすれば、まだ割り切つて戦うことができるはずだ。それで彼女の心が少しでも楽になることに気づいていたならば、僕は喜んでその選択肢を選べただろう。逆に、彼女の誘いに乗った場合。それはそれで、この先一生後悔を抱えたまま生きていくことにはなるだろう。それでも彼女だけはそこにおいて、何もかもを捨てた僕の罪を2人で分かち合ってくれたはずだ。

「僕は……」

だけど、僕はこの時。どちらにも選ぶことができず、第3の選択肢を示すこともできず、ただ言葉に詰まってしまった。無限にも思えるほんの数秒が過ぎ、ふつと現が笑う。その笑顔はこれまで見てきた彼女の笑顔の中では一番に寂しそうで、その諦念が含まれて……違う。僕が見たかった彼女の顔は、そんなものじゃない。僕は、そんな顔を彼女にさせたくなんて断じてない。

だけど、時間は決して巻き戻らない。ただ後悔だけをあとに残し、彼女の優しさがその隙間を埋める。

「……ううん、ごめんね、清明。変なこと聞いちゃって」

違う。謝るのは僕の方だ。誰よりも答えを欲しがっていた彼女に唯一答えを示せた僕が、その程度のことすら果たせなかった。全部僕のせいだ。そんな優しさをくれるぐらいなら、怒ってくれた方がよほどマシだ。

だからもう、そんな顔しないでよ。

「じゃあ、始めようか。私とあなたの、最後のデュエルを」

## ターン126 遊野清明と河風現

「先攻は……ああ、私じゃないか。なら、お先にどうぞ」

可愛らしく小首を傾げ、デュエルディスクが自動的に決定した順番を確認する夢想……いや、現<sup>うつ</sup>。1撃が重い上に止めづらい彼女を相手にする際先攻は遠慮願いたいのが、なってしまうものは仕方がない。もつとも夢想から現へと名を変えた、というよりも真の名を名乗るようになったことで、デツキまで変えてきてもおかしくはないか。

それに……初期手札5枚を見て、初動を考える。それに、これならそう悪い手札でもない。とはいえ、いくらそうやって自分を奮い立たせてみても、緊張のあまり喉が渴いているのはどうしようもない。それでも努めてタフに笑い、いつものセリフを吐いた。

「じゃあ、デュエルと洒落込もうか」

人間というのは本当に単純なものだ。僕がまだ人間の範疇にいるのかどうかはさておき、決まったタイミングで決まった動きをする、あるいはお決まりの言葉を口にする。それをルーチンワークの一環として組み込む、ただそれだけで、どれだけひどい精神状態だろうとも少しはマシな気分になれる。スイッチが入る、と言い換えてもいいだろう。

「デュエル！」

「僕のターン。マーメイド・シャークを守備表示で召喚！」

マーメイド・シャーク 守300

僕が最初に呼び出したのは、魚の身体から人型の上半身らしきパーツ……疑似餌？が突き出し、さながら上半身が貧弱な人魚のような格好のモンスター。ステータスもレベルもほぼ最低値だが、この子にはこの子にしかできない仕事がある。

「このカードの召喚に成功した時、僕はデツキからレベル3から5の魚族モンスター1体をサーチできる。レベル3のチューナーモンスター、フィツシュボーグアーチャーを手札に！」

「チューナー……」

これでいい。シンクロモンスターを呼び出すには、とにかくチューナーが必要。ぶつつけ本番、付け焼き刃にもほどがある新しい力ではあるけれど、それぐらいしないと到底歯が立つ相手ではない。ユーノの遺した最後の力、ありがたく使わせてもらおう。

「さらにカードをセットして魔法カード、成金ゴブリンを発動。相手ライフ1000と引き換えに、カードを1枚ドローする。こっちは先に引きたかったんだけどなー、フィールド魔法発動、KYOUTOUウォーターフロント。これでターンエンド」

正直、守りとしてはかなり薄い布陣だ。しかもウォーターフロントの壊獣カウンターを手札を減らさず乗せられるからと入れておいた成金ゴブリンでそのウォーターフロントを引くという微妙に締まらない立ち上がり。だけど、そんなこと言ってたって始まらない。さあ現、どう返してくる？

現 LP4000↓5000

「チューナー……なるほどね。なら魔法カード、ワン・フォー・ワンを発動。手札のモンスター、ワイトプリンスを墓地に送ってデッキからレベル1モンスター、ワイトプリンスを特殊召喚」

ワイトプリンス 攻0

KYOUTOUウォーターフロント(0)↓(1)

どうやら真の名前を思い出した今も、彼女のデッキは変わらないままらしい。そのことに、心のどこかで安堵していた自分を感じて少し嫌になる。もっともそんな感傷は、次に彼女が持ち出したカードの前に跡形もなく吹っ飛んだ。

「チューナーモンスター、ユニゾンビを召喚。そして効果発動、1ターンに1度デッキのアンデット族モンスター1体を墓地に送ることで場のモンスター、ユニゾンビのレベルを1つ上げる。この時墓地に送った2枚目のワイトプリンスの効果で、デッキからさらにワイト1体とワイト夫人1体を墓地に。そしてユニゾンビ第2の効果で、私の手札1枚をコストにもう1回ユニゾンビのレベルを上昇させるね」

ユニゾンビ 攻1300 ☆3↓4↓5

「なっ……」

フィールドを経由して魔法カードが墓地に送られたことで、そびえ立つ灯台から闇を切り裂きどこまでも走る光の筋が放たれる。だがそんなことよりも、あのカードだ。ユニゾンビ、レベル3のチューナーモンスター！

衝撃のあまり声も出ない僕の反応を見て彼女はクスリ、と笑い、物わがりの悪い子供に対して丁寧な常識を諭すかのような調子で語りかける。

「そんなに驚いた？でも、私が誰かは知ってるでしょう？」

だから、要するに。やつぱり僕は、この期に及んでもまだ目の前の彼女のことを心のどこかで河風夢想だと、僕がよく知る彼女だと思っ  
ていたんだろう。

彼女はもう僕が知っていた夢想ではない、河風現という同一人物にして別人なんだと頭では理解していても、心ではよくわかっていなかった。だからこうやって彼女が現なんだと、シンクロ召喚だって使いこなす別世界のデュエリストなんだという確固たる証拠を見せつけられただけで脳を直接殴られたかのような衝撃を感じる羽目になる。未練たらたらで女々しいにもほどがある、馬鹿馬鹿しいほど滑稽な話だ。頭を振って気を持ち直し、揺らぎかけた戦意をかき集めて火をつけ直す。しつかりしろ、僕。

慣れた手つきで……実際慣れたものなのだろう、テンポよくチューナーとそれ以外のモンスターが並んだことになる。彼女の場に存在するモンスターの合計レベルは、6。

「の、前に。フィールド魔法、チキンレースを発動。ターンプレイヤーはそれぞれ1000ライフを払って、3つの効果から1つを発動できる。私が選ぶのは当然、1枚ドロウする効果」

現 LP5000↓4000

「じゃあ改めて。レベル1のワイトプリンスに、レベル5になったユニゾンビをチューニング。冥府の大河に流るる調べは、運命を叩く鎚の歌。シンクロ召喚、獣神ヴァルカン」

☆1+☆5=☆6

獣神ヴァルカン 攻2000

KYOUTOUウォーターフロント(1)↓(3)

2体のモンスターを素材として呼び出されたのは、2足歩行の獣人にして鍛冶屋。場のカードがさらに2枚墓地に送られたことでその輝きを増した灯台の光に照らされたその太い腕に、力強く握りしめられた巨大な鎚がおもむろに地面に振り下ろされた。

「まず、シンクロ召喚に成功したヴァルカンの効果を発動。互いの場で表側のカードを1枚ずつ選んで、それを手札に戻す。ただし私が選んだカードと同名カードは、このターンもう発動できない。KYOUTOUウォーターフロントは壊獣カウンターを身代りに破壊耐性を得るけれど、それもバウンスには無力」

「しまったー」

現の言う通り、これはこのカードの宿命ともいえる弱点だ。場のカードが墓地に行くだけでカウンターが乗るという性質上破壊にはめっぽう強いウォーターフロントも、バウンスや除外には無力。というよりも、そんな除去は最初から想定されていない。せつかく乗った壊獣カウンターごと、灯台が薄れて消えていく。

『しかもチキンレースを回収されたか。ドローはお預けだな』

「墓地に送られたホワイトプリンスの効果で、もう1組のワイトとワイト夫人を墓地に。さらに、私の墓地から闇属性モンスターであるワイトと光属性モンスターのホワイトプリンスをゲームから除外して、手札のカオス・ソーサラーを特殊召喚する」

カオス・ソーサラー 攻2300

ヴァルカンの隣に、これは僕も知っているカオスモンスターが並ぶ。最初のワン・フォー・ワンの時点で、すでにここまで計算済みだったわけか。守備姿勢を取るマーメイド・シャークを見て、そのまま伏せカードに視線を移す。まだ、大丈夫だ。このターンは、まだ凌げる。「カオス・ソーサラーの効果を発動！1ターンに1度自身の攻撃権と引き換えに、場のモンスターを除外する。私が選ぶのは当然、マーメイド・シャーク」

漆黒の魔法使いが右手から光、左手から闇の軌跡を残しつつその両腕をゆつくりと円を描くように回転させる。そしておもむろに組み

合わされた光と闇の衝突点から白黒の波動が解き放たれ、マーメイド・シャークを吹き飛ばす。これを防ぐ手立てはなく、また僕のデッキに除外は専門外なため再利用手段はない。お疲れ様、と心の中でねぎらい、次元の狭間へ消えていくその姿を見送った。

これで、僕の場合はがら空き。現も言った通りこのターンカオス・ソーサラーはもう攻撃できないから、当然次に彼女はヴァルカンでダイレクトアタックをしてくるはず。だが彼女は、ここでわずかに思案した。

「ねえ、清明。いいもの見せてあげようか」

「……？」

ちよつとお茶しようか、とでも言うかのようなそのフランクさは、この場にはもつともそぐわないものだった。面食らい警戒する僕を尻目に、モンスターゾーンの2枚のカードをつまみ上げる。

「これは、清明もまだ知らないでしょ。私のフィールドには、これでレベル6のモンスターが2体。私は、この2体のモンスターでオーバーレイ！冥府の大地に彷徨う者よ、巡礼の果てに死の安息を。エクシース召喚、巡死神<sup>ビルグリム</sup>リーパー！」

カオス・ソーサラーが黒、ヴァルカンが赤の奔流となって、現の足元に開いた宇宙のような穴に吸い込まれる。その直後音もなく爆発が起こり、開いた穴の内側から新たなモンスターが生まれ出た。ひどく腰の曲がった老人のような姿に、その背から生えたボロボロの翼。姿勢のせいでよく判別がつかないが、それでもその身長よりも高いと思われる巨大な大鎌を杖のようにして寄りかかる不気味な死神……だが何よりも目を引くのは、その体の周囲を衛星のように絶えず飛び回る2つの球体だ。このいかにもな死神らしいモンスターの雰囲気には全く似つかわしくないそれからは、しかし確かに強い力を感じる。

☆6＋☆6＝★6

巡死神リーパー 攻？↓1000 守？↓1000

「エクシース召喚？シンクロとも違う……？さらに別の召喚方法があるってこと？」



『あれは……』

「そう。同じレベルのモンスターを組み合わせることでエクストラデッキから召喚できる、清明からすれば異世界……それとも遠い、もしかしたら近い未来かな？そこで手に入る、新しい力。そしてリーパーの攻守は、互いの墓地に存在する闇属性モンスター1体につき200になる」

チャクチャルさんの返事を奪うかのように、現の説明が入る。それにしても今の反応、やっぱチャクチャルさんはエクシーズ召喚のことも知ってたな。どうせなら教えてくれても……とも思ったが、よく考えれば富野からシンクロを教わって以降、休む暇もなく大慌てで走っただけだった。そんな暇、とてもじゃないがどこにもないか。

そして盤面に意識を戻せば、あれだけ大掛かりに出てきた割にリーパーの攻撃力はわずか1000。ん、1000？確かここまで彼女が使った闇属性モンスターはシンクロ召喚で墓地に送られたユニゾンビとワイトプリンスで2、さらにワイトプリンス2回分の効果で4体のモンスターが送られたから合計6、だけどカオス・ソーサラーの召喚コストでそのうち1体が除外され、そのカオス・ソーサラーが今のエクシーズ召喚で使われたから……あれ、計算が合わない？

『それは違うぞ、マスター。これがエクシーズモンスターの唯一無二の特性なのだが、エクシーズ召喚に使われ素材となったモンスターは召喚後もオーバーレイ・ユニット……さつきマスターも気にしていたあれだ、あの光の球体となってフィールドでも墓地でもない場所に留まり、そのモンスターのサポートを行う。サポートと言ってもまあ、9割方は効果発動のコストだがな』

「ここで私は、巡死神リーパーの効果を発動。オーバーレイ・ユニットを1つ消費することで、互いのデッキから5枚のカードを墓地に送る。この時闇属性モンスターのカオス・ソーサラーを使うことで、さらに墓地の闇属性が1体増えることになる」

光球の1つが軌道を変えてリーパーの鎌に吸収され、赤い目を光らせて死神がその鎌を振るう。刃から放たれた闇の衝撃波が、僕のデッキと現のデッキに襲いかかった。墓地に行くカードに目を通すと、案

の定ワイト系統が2枚。さすが現の引き、というべきか。一方こちらもダブルフィン・シャーク、グレイドル・イーグル、地獄の暴走召喚、サイレント・アングラー、貪欲な壺と魔法カードの2枚を除けばそう悪くないのはまだ救いだ。

巡死神リーパー(2)↓(1) 攻1000↓1800 守1000  
↓1800

「骨犬マロン、ワイトメア、タスケルトン、シャツフル・リボン、ワイトキング……闇属性モンスターは、これで合計9体。うん、まあまあかな。バトル、リーパーでダイレクトアタック！」

「させるか！永続トラップ、バブル・ブリンガーを発動！これでレベル4以上のモンスターは直接攻撃を」

『駄目だ！』

チャクチャルさんの警告も、一手遅かった。大量の泡の壁がリーパーの鎌から僕の身を守るため噴き上がるも、そんなものまるで意に介さずに壁を切り裂いて飛び出した刃が僕の体をそのまま袈裟斬りに振り下ろされた。まるで想定外の攻撃にろくな防衛も取れず、傷口から噴き出た血が見えてから少し遅れて激痛が走る。

巡死神リーパー 攻1800↓清明(直接攻撃)

清明 LP4000↓2200

「え？」

『遅かったか。とりあえず気を確かに持て、その傷も痛みもマスターにしか見えないまやかしだ』

「わかっ……てる！」

止まらない出血に、現実そのものな痛み。それなりに闇のゲームも経験してきた僕だが、これほどまでにリアルなものにはお目にかかったことが無い。それだけダークネス、あるいは現が本気でかかってきているのだろう。だがどれだけレベルが高かろうと、これはチャクチャルさんの言う通り単なるまやかし、こけおどしにしか過ぎない。出血？そうだ、こんなに僕の血が液体のまま残るはずがない。斎王戦の時もそうだったが、ダークシングナーとなって以降の僕の体はそれ以前とはわけが違う。あの時僕の吐いた血は、地面に落ちるかどうかの

うちに灰となって風に消えていった。

だからこれは、偽物だ。弱い自分を精神力で押し潰してきつきまで傷のあった箇所を改めて見下ろすと、そこには何の変哲もない学生服だけがあった。嘘のように痛みも消え、何事もなかったかのようにリーパーも元の位置に戻る。その様子を見て、先ほどの光景を思い返した。

「まだまだあついで、チャクチャルさん？バブル・ブリンガーは確かに発動したのに、なんで攻撃が？」

『すまない、これを言うのを忘れていたな。エクシーズモンスターはその特殊な召喚の性質上、そのどれもがレベルという概念を持たない。そのかわり、基本的に素材となるモンスターのレベルと同じ数値のランクを持つ。バブル・ブリンガーはモンスターのレベルを参照して攻撃を抑制するカード、従ってエクシーズを縛ることは不可能なんだ』

「レベルに、ランク？」

フィールドにも墓地にもないオーバーレイ・ユニットに、レベルではないランク。シンクロ以上に馴染むのが大変そうな概念だが、チューナーを用意せずとも使える分出しやすさは上というわけか。ふと気になって、もう一度チャクチャルさんに問いかける。

「そういえば、このデッキはどうなの？あのエクシーズってのも使えるんだよね？」

『ああ。それは私が保証しよう』

「……オーケーオーケー、ならしつかり使いこなしてみるさ」

『その意気だ』

しかし考えようによっては、このタイミングでエクシーズ召喚のことを知ることができたのはむしろよかったのかもしれない。きつき感じたショックも何もかもをさらに上から吹き飛ばすほどに抑えきれない未知なるカードへの高揚感、そしてそれにどう対処し適応できるかが今は心の中を占めている。

ああ、そうだ。いつだってそのずば抜けたセンスと引きの強さで、僕のことを驚かせてくれる。たとえば名前が変わろうと、河風現は河風

夢想とその本質は何ら変わりない。そして僕だつてどんなに外面を取り繕つたとしても、その本性は立派な戦闘<sup>バトルジャンキー</sup>狂だ。

そう考えると、この不利な盤面を前にしていてもつい口元がほころんだ。この心境の変化はさすがの彼女にも予想外だったのかやや困惑した顔になるも、すぐに彼女も気を取り直す。

「ごめんね、とは言わないから。だから清明も、下手なことは考えないで本気できてね。それに、本気じゃない限り私には絶対に勝てないよ。もつとも本気で来れば勝てるかなんて、またそれは別の話だけど」

傲慢だ、とは思わなかった。現自身も、その言葉に自分の実力に対する過信は一切存在していなかった。それが天地がひっくり返っても否定しようもない、純然たる事実だったからだ。彼女も僕も、彼女が最強であることをよく知っている。それでも僕は、彼女をダークネスから奪い返して手に入れるために勝たなくちゃ……いや、勝つ。

清明 LP2200 手札：3

モンスター：なし

魔法・罫：バブル・ブリンガー

現 LP4000 手札：0

モンスター：巡死神リーパー（攻・1）

魔法・罫：なし

「僕のターン。シンクロ……それにエクシーズ……」

カードを引く。ついさつき知ったシンクロ召喚、そしてたった今知ったエクシーズ召喚。さつきはああ言っただけけど、わずか半日もしないうちにこれだけたくさんの情報をいっぺんに詰め込まれて、さらに実戦での応用なんてできるだろうか。

でもできなからうがなんだろうが、今すぐにも実戦レベルにまで仕上げるしかないのもまた事実。この2つの力は、使うことができやっとなスタートライン。ただでさえ強敵の現に対してそのカードプールにまでアドバンテージを与えては、もう勝利など絶望的だ。実際に彼女が夢想だった時も、カードプールは全く同じだったにもかかわらず全戦全敗だったのだから。今必要なのはチューナーと

チューナー以外のモンスター、そして同じレベルのモンスター。できないはずがない、なにせこのデッキは僕とともに、どんな戦いも乗り切ってきた最高のデッキなのだから。

……よし、見えた。

「手札の水属性モンスター、アーチャーを墓地に。これで、ホワイト・ステイングレイ白棘 は特殊召喚できる」

「へえ、チューナーを捨てるんだ」

白棘  攻1400

コストを払って僕の場合に特殊召喚されたのは、純白のエイ。これで、まずは1体。

「そして魔法カード、サルベージを発動。さっきのリーパーの効果には、僕からも礼を言わせてもらうよ。おかげで墓地に落ちてくれた攻撃力1500以下の水属性、ダブルフィン・シャークとサイレント・アングラーを回収、そのまま召喚！そしてダブルフィンは召喚成功時、僕の墓地からレベル3または4の魚族モンスターを特殊召喚することができる。甦れ、フィツシュボーグアーチャー！」

『それでいい。この釣り上げ効果で、モンスターが3体になったな』

ダブルフィン・シャーク 攻1000

フィツシュボーグアーチャー 守300

「次！僕の場合に水属性モンスターがいるとき、手札のサイレント・アングラーは特殊召喚できる！」

トリを務めるのは、チョウチンアッコウのような姿をした普段からアドバンス召喚のための潤滑油のような役割を果たしてくれているモンスター。これで、4体！ダブルフィン・シャークのデメリットによりこのターン僕は水属性しか特殊召喚できない……でも、僕にはわかる。そんな程度の制約で、これから起こることは止められない。今か今かと出番を待つ、エクストラデッキでずっと眠っていた新しい仲間の鼓動を感じる。

「仕上げに、さっきバウンスされたウォーターフロントをもう1回発動してと。じゃあ、まずはこっちから行こうか。レベル4のサイレント・アングラーと、ダブルフィン・シャークでオーバーレイ！」

どうすればこの声に、この鼓動に応えることができるのか。自然と体の内側から湧いてくる衝動に突き動かされてカードを手に取ると、ソリッドビジョン上では選んだ2体のモンスターが先ほど現がやったのと同じように青い2つの光となって僕の足元に開いた穴へと吸い込まれていく。デュエルディスクのエクストラデッキに当たる場所が光を放ち、そこから1枚のカードが飛び出した。

「三千世界を張り巡れ、海原に紡がれし一筋の希望！エクシーズ召喚、ナシバース  
No. 37！希望識竜スパイダー・シャーク！」

「へえ……」

その姿を見て、現が感心したような声を漏らす。これが、僕のはじめてのエクシーズモンスター。一見すると純白の体を持つ蜘蛛に海竜の尾が伸びたかのような、でもよく見ればその蜘蛛の脚に見えたのは一番前の両腕にあたる2本を除けば全て海中を自在に駆け回るための鰭だ。そのすらりと伸びた流線型の両腕からは鋭い爪が伸び、さらに右腕にはくつきりと37、の文字が刻まれている。

希望を識る竜、いい名前だ。この力を文字通りこのデュエルの希望にできるかどうかは、僕の腕次第だ。

☆4＋☆4＝★4

No. 37 希望識竜スパイダー・シャーク 攻2600

「エクシーズ召喚の素材、オーバーレイユニットは墓地に行かないから、ウオーターフロントのカウンターにはならないんだっけ？でも、だったらシンクロ召喚だ！レベル4の白棘に、レベル3のフィッシュボーグアーチャーをチューニング！」

またもや、何をすればいいのかわかる。初めてそのチューナーとしての真の力を解放したアーチャーがレベルと等しい3つの輪になり、1列となったそれがステイングレイの体を包む。合計レベルは、7。「快刀乱麻に凍てつかせ、七つの海裂く神の槍！シンクロ召喚、氷結界の龍！グングニール！」

そしてこれが、僕のはじめてのシンクロモンスター。氷結の文字通り氷のように白い体に、頭部をはじめ全身に見られるどこか雪の結晶のような意匠。だがその内側からは自身がただの雪像ではないこと

を語るかのように、赤く燃えるエネルギーが光となってかすかな輝きを放っていた。

☆4＋☆3＝☆7

氷結界の龍　グングニール　攻2500

KYOUTOUウオーターフロント(0)↓(2)

『だが、グングニールの効果は手札が無いと使えない。墓地の様子から見ても、このターンで仕留めきるのはどうやっても無理だな』

「わかってる……でも、今は攻めるしかないからね。バトル、グングニールで巡死神リーパーに攻撃、グレイシャーファンクス！」

グングニールの瞳が、ひときわ赤く光った。翼を広げ超低空飛行でリーパーとの距離を詰め、鎌による防御すら許さないほどの超速で鉤爪が振り下ろされる。だがその攻撃は、リーパーの細い体をバラバラに裂く寸前で止められた。1匹の子豚の骸骨が、その間に割り込んでいたのだ。

「墓地からタスケルトンの効果発動。デュエル中1度だけ、モンスターが行う戦闘を自身を除外して無効にできる」

「承知の上さ。だけどタスケルトンはこれで打ち止め、次の攻撃はもう止められない。スパイダー・シャークで連撃、スパイダー・トルネード！さらにこの攻撃宣言時にスパイダー・シャークのオーバーレイ・ユニット1つを消費して効果発動、オーバー・レイン！」

初陣を邪魔されて渋々といった様子で帰ってきたグングニールに代わり、すぐさまスパイダー・シャークが海中の鮫めいた俊敏な動きで追撃を仕掛ける。その口元に軌道を変えた光球が吸い込まれると背中の赤い球体から一斉に純白の蜘蛛糸が噴出し、縦横無尽にフィールドを走る粘性の糸は正確にその獲物であるリーパーの体を縛りつけた。

『スパイダー・シャークはモンスターの攻撃宣言時、オーバーレイ・ユニット1つを使い相手モンスター全ての攻撃力を1000ダウンさせる。さらに先ほど除外したタスケルトンもまた闇属性、従ってリーパーの攻撃力は実質1200下がることになるな』

No.37　希望識竜スパイダー・シャーク(2)↓(1)　攻26

00

↓巡死神リーパー 攻1800↓1600↓600 (破壊)

現 LP4000↓2000

KYOUTOUウオーターフロント(2)↓(3)

「よし！さらにこのメイン2で、壊獣カウンター3つ以上乗ったウオーターフロントの効果を発動。デッキから、壊獣1体をサーチできる！来い、海亀壊獣ガメシエル！」

もつと何か防御カードがあればよかったのだが、あいにく手札はこのガダーラ1枚のみ。それは現もお互い様だけど、彼女の手札にあるのはさつきバウンスしたチキンレース。このターンのうちにライフを1000以下まで削れなかった以上、さらなるドローを行われるとみて間違いないだろう。その時このグングニールとスパイダー・シャーク。それにただでさえ彼女のデッキには効き目が薄いのに、ここに来てダメ押しのようにエクシーズモンスターを拘束できないことが分かったバブル・ブリンガーだけでどこまで耐えきれるか。

「なーんて、心配してもしようがないか。ターンエンド」

「私のターン。まずチキンレースを発動して、このターンも1000ライフを払って1枚ドロー」

現 LP2000↓1000

「魔法カード、ドラゴンズ・ミラー龍の鏡を発動。私の墓地から融合素材モンスターであるワイトキングと巡死神リーパーを除外して、ドラゴン族の融合モンスターを融合召喚できる」

「来たね……！」

融合素材は、アンデット族2体……来た。来てしまった。むしろ遅かった、と言うべきか。ワイトキングと双璧を成す、彼女のエースモンスター。相手の肉体に滅びさえも許さず、ただ魂のみを冥府へと引きずり落とす暴虐の龍。

「冥府の扉を破りし者よ、其には死すらも生温い。融合召喚……冥界龍 ドラゴネクロー！」

冥界龍 ドラゴネクロ 攻3000

KYOUTOUウオーターフロント(3)↓(4)



ドラゴネクロは戦闘したモンスターを戦闘破壊させないかわりにその攻撃力を0とし、さらにそれと等しいレベル、攻撃力を持つダークソウル・トークンをプレイヤーのフィールドに特殊召喚する能力を持つ。そう、これもレベルだ。となるとレベルを持たないスパイダー・シャークは、たとえ攻撃されても参照する数値が存在しない以上ドラゴネクロもトークンを生み出せないはずだ。

……となると、現の狙いはグングニール。スパイダー・シャークは相手の攻撃宣言に対してもその強力な効果を発動できるが、攻撃そのものを止められるわけじゃない。しかも悪いことに、今は彼女の方が僕よりもライフが少ない。つまりチキンレースのもう1つの効果により、このライフが逆転するまで彼女はダメージを受けないのだ。

「バトル。ドラゴネクロでグングニールに攻撃、ソウル・クランチャー」  
長い首が伸び、氷結の龍の誇り高き魂を噛み砕かんと幽鬼のような顔が迫る。ここでスパイダー・シャークの効果を使えば、グングニールの攻撃力が弱体化したドラゴネクロより上となり返り討ちにできる……でも、駄目だ。仮にそんなことをしたとしても、ドラゴネクロの呪いは止められない。次にグングニールのダークソウル・トークンがグングニールの抜け殻を攻撃した際に打つ手がなくなってしまう、僕のライフが尽きてしまう。

結局、首元にその牙を深々と埋め込まれた氷結界の龍の体から力が、魂が少しずつ抜き取られ、しだいに抵抗が弱々しくなりやがて完全にその目から光が消えうせるのを、僕はただ指をくわえてみていることしかできなかつた。

冥界龍 ドラゴネクロ 攻3000↓氷結界の龍 グングニール  
攻2500

清明 LP2200↓1700

「今更言うまでもないだろうけど。ドラゴネクロがレベルを持つ相手モンスターとバトルしたことで、その魂は抜き取られる」

やっと、ドラゴネクロがグングニールの抜け殻を放り出した。だがその口元にはいまだ半透明のグングニールの魂ががちりと押さえられており、冥界の龍の牙を通じてその内部に少しずつ穢れが入り込

んでいく。

氷結界の龍 グングニール 攻2500↓0

氷結界の龍 グングニール  
ダークソウル・トークン 攻2500 ☆7

「続けて、ダークソウル・トークンでグングニールにもう1度攻撃。ダークグレイシャーファランクス！」

「もう1度スパイダー・シャークの効果発動、オーバー・レイン！最後のオーバーレイ・ユニットを使って、相手フィールドの全モンスターの攻撃力をこのターンの間だけ1000ポイントダウンさせる！」

再び噴出した糸が雨のごとく降り注ぎ、冥府の龍と闇に捕らわれた氷結龍の魂の動きを奪う。だがその動きを完全に封殺するには至らず、物言わぬ抜け殻と化したグングニールの体をそのかつての魂が一爪の元に打ち砕いた。

No. 37 希望識竜スパイダー・シャーク (1) ↓ (0)

冥界龍 ドラゴネクロ 攻3000↓2000

氷結界の龍 グングニール  
ダークソウル・トークン 攻2500↓1500↓氷結界の龍

グングニール 攻0 (破壊)

清明 LP1700↓200

KYOUTOUウオーターフロント (4) ↓ (5)

「ぐううっ……いまだ、まだ戦える……！」

『首の皮1枚で繋がった、といったところか。さすがに危なかったな』  
「まだ、戦うの？なんて、聞くまでもないんだよね。ならいいよ、私も相手してあげる。カードを1枚伏せて、ターンエンド」

ひどく悲しげな表情で、そっとカードを伏せる現。違うんだ、現。僕は、君にそんな顔をさせないようにするためにここに立ってるんだ。

……それなのに。彼女と目を合わせていられなくなり、つい一度目を伏せそうになる。だけど、それこそ許されないことだ。彼女が助けを、最後に救いを求めて伸ばした手を、僕は掴むどころか全力で踏みにじった。その上彼女から目を逸らすだなんて、そんなこと許されるはずがない。

そんなことを言っておきながら、その一方でこうやって僕は彼女に

手を伸ばすために戦っている。その矛盾からはあえて目を逸らし、皮肉な思いと全部まとめて闘志の炉にくべておいた。

冥界龍 ドラゴネクロ 攻2000↓3000

氷結界の龍 グングニール 攻1500↓2500

清明 LP200 手札：1

モンスター：N0. 37 希望識竜スパイダー・シャーク（攻・0）

魔法・罫：バブル・ブリンガー

場：KYOUTOUウオーターフロント（5）

現 LP1000 手札：0

モンスター：冥界龍 ドラゴネクロ（攻）

氷結界の龍 グングニール  
ダークソウル・トークン（攻）

魔法・罫：1（伏せ）

場：チキンレース

『……何かがおかしい』

「え？」

自嘲気味な様子を察して話題を切り替えてくれようとしたのか、チャクチャルさんの声が頭に響く。

『確かあちらの墓地には通常魔法、シャッフル・リボーンが落ちていたはずだ。もはやこれ以上効果を使えるほどライフの余裕はない、ならばなぜあれをわざわざ残しておいた？』

「そういえば……うん」

シャッフル・リボーンは若干制約の厳しい蘇生カードとしても使えるが、むしろその真価は墓地にあつてこそ発揮される。墓地の自身を除外することで自分の場で表側のカード1枚をデッキに戻し、カードを1枚ドローできる効果……確かにチキンレースの恩恵を受けられない、どころかダメージ0の効果を受けているのが僕である以上、あれをわざわざ残す意味は全くないはず。

「こつちがダメージ0を利用してグレイドルで突っ込んできたところにカウンターでサイクロン、とか？」

『いずれにせよ、1枚のドローよりも優先する理由があつた伏せカードには含まれているのだろう。今の段階ではまだ安易に結論を出すの

は危険だが、用心しておくことだ』

用心と言われても、あの伏せカードを破壊できる手札なんてない。多少のリスクはあるけれど、ここは今引いたこれに頼ってみるか。

「魔法カード、トレード・インを発動。手札からレベル8のガメシエルを捨てて、カードを2枚ドロウ。さらにこのターンもウォーターフロントに壊獣カウンターが3つ以上乗っているから……」

乗っているから、何をサーチするべきだ？ 万能カウンターのガメシエルの2枚目をこちらに出せば伏せカードなんて怖くはないが、いかにせん攻撃力が低すぎてドラゴネクロはおろかダークソウル・トークンにも勝てやしない。同じ理由で攻撃力2400のクモグスも却下。ジズキエルなら対象を取る効果にはめっほう強いうえ攻撃力も申し分ないけれど、逆に言えばあの伏せカードが対象を取るものでなければ無力になってしまう。ガダーラの無差別攻守半減も悪くはないが今使うとスパイダー・シャークの攻撃力まで下がってしまうし、ラディアンは向こうに出すからそれも却下。となると生けるサンダー・ボルトとしてトークンもろとも薙ぎ払った後スパイダー・シャークで攻撃ができるドゴランか、効果を使うまでが隙だらけとはいえないとたび発動さえできれば帯電能力であらゆるカードの発動を許さないサンダー・ザ・キングか……。

「……来い、怒炎壊獣ドゴラン。そしてダークソウル・トークンをリリースして現、そっちのフィールドに多次元壊獣ラディアンを特殊召喚！ 相手フィールドの壊獣反応に誘われて、手札のドゴランを特殊召喚！」

今回選んだのは、たとえこのターンで決着をつけられなくともウォーターフロントとのコンボで壊獣カウンターを即座に貯められるドゴラン。どちらが良かったのか、この選択が本当に正しいのかは、わからない。

だけど、わからないならわからないなりに前に進むしかない。ドゴランが大きく息を吸うと、その全身が押さえきれない怒りの炎によりメルトダウン寸前の高熱を放ち赤く光る。

多次元壊獣ラディアン 攻2800

怒炎壊獣ドゴラン 攻3000

「ドゴランの特殊効果、覆滅を発動！場の壊獣カウンター3つをコストに、相手フィールドの全てのモンスターを消し飛ばす！」

解き放たれた火炎がKYOUTOUの街並みを焼き、さらには冥界の龍をも呑み込み焼き尽くしていく。炎の影響で5つあったライトのうち3つから光が消えた灯台に、再び2つの光が追加で灯いた。その光といまだくすぶる炎に照らされて闇に浮かび上がる現も、そんな彼女の目の前の伏せカードも、いまだ動きはない。

KYOUTOUウオーターフロント(5) ↓(2) ↓(4)

「これでドゴランはこのターン攻撃できない……もつとも、どうせバブル・プリンガーが残っているからレベル8のドゴランにダイレクトはできないけど。だけどエクシーズモンスターにレベルは存在しない、従ってこっちはこのまま攻撃ができる！行くよ、スパイダー・シャーク！スパイダー・トルネード！」

スパイダー・シャークが俊敏に宙を舞い、致命となるべき一撃を叩き込みに音もなく迫る。その距離が3メートルにまで縮まっても、現は動かなかつた。2メートル。それでもまだ、動かない。1メートル。やはり動かず、その端正な顔立ちと相まって彼女は彫像か何かだったかのような錯覚まで起きそうになる。30センチ、20センチ、そしてついに彼女の細い首をスパイダー・シャークの爪が捉えるまで、あとわずか10センチ。そこでついに、彼女が口を開いた。

「惜しかったね、清明……トラップ発動」

No. 37 希望識竜スパイダー・シャーク 攻2600 ↓現(直接攻撃)

小さな声だったが、僕の耳にははっきりと届いた。だがそれが聞こえた直後、スパイダー・シャークの攻撃が命中する。土煙がのせいで一時的に視界が奪われる中、何が起きたのか探るため必死に目を凝らす。確かに攻撃は届いたが、デュエルはまだ続いている。一体何のカードで現はこの危機を脱したのか、それがわからない。

それに先に気が付いたのは、チャクチャルさんだった。ほとんど呻くように、してやられたと漏らす。

『マスター。そっちじゃない、手元だ。自分の手元をよく見てみるんだ』

「手元……え？」

清明 LP2000↓8000

「ラ、ライフが8000も……!?!」

「そう。私が発動したカードは、ヒロイック・ギフト。相手ライフが2000以下の時、それを8000に引き上げることでカードを2枚ドロウする。そしてチキンレースの効果により、ライフが相手より下のプレイヤーはあらゆるダメージを受け付けない」

「それでチキンレースを、ってことね……」

土煙もようやく晴れてきて、次第に現の姿が見えてくる。やられた。最高の好機だったのに、まんまとやられた。自然と生じた莫大な、この明らかに2枚程度のドロウでは割に合わないライフ差だ。当然のように攻撃力5桁のワイトキングを繰り出してくる彼女にとってはあつて無いようなもので、限りなく低いリスクで敗北を防ぎカードを2枚引いたという結果だけがある。

「ならせめて、僕にも使わせてもらおうよ。せつかくライフはあるんだ、メイン2にチキンレースの効果発動。1000ライフを払って1枚ドロウ、そして補給部隊をそのまま発動。まさか、こんな緊急防御まで用意してたなんてね」

清明 LP8000↓7000

同じ1000ライフを払うにしても、ここでチキンレースを自壊させておけば返しにシャッフル・リボーンの効果を使われることも防げる。確かにそれは間違いないけれど、こつちも手札は既にカツカツでそこまでやっている余裕がない。やっと引けた貴重なドロウソースを発動しながら呻くと、意外にも現は首を横に振った。

「ううん、違うよ。私はただ、清明なら必ず1ターンでドラゴネクロを倒す、そう思っただけ。そうしたら、やっぱり思った通りに越えてきた。だからこのカードを使わざるを得なかった、それだけ」

「……そりゃどうも、だ。カードを1枚セットして、ターンエンド」

夢想の時からそうだったけど、彼女は僕の実力を過大評価しすぎだ

と思う。もつとナメられるぐらいの方が色々やり易いのに、なんて憎まれ口を叩いたところで、彼女からの高評価を素直に喜ぶ僕がいるのもまた事実。

とはいえ、やりにくいのも冗談ではなく本当の話だ。次のターンのドロローも合わせて、中盤以降の墓地が肥えてきた彼女にあれだけの手札を持たせるのは非常に危険だ。

「私のターン。墓地のシャッフル・リボーンを除外して、チキンレースをデッキに戻して1枚ドロロー」

今度こそ役目を終えたいらしいチキンレースが撤去され、彼女の手札が4枚になる。まあ想定内といえば想定内、問題はここからだ。

「私が召喚するのはこのカード。チューナーモンスター、劫火の舟守

ゴースト・カロン！」

劫火の舟守 ゴースト・カロン 攻500

「チューナー、か」

となると当然、次はシンクロ召喚か。オールを片手に人魂を浮かばせ、木製の小さな船に乗るボロボロの骸骨船頭。そいつがそのオールを地面に勢いよく突き刺すと、裂け目から大量の霊魂が凄まじい勢いで噴出する。やがてその波に乗り、巨大な影が地の底からゆっくりと浮かび上がってきた。あのモンスターは、たった今倒したはずなのに。

「ドラゴネクロ？」

「そう、ゴースト・カロンの効果発動。私のフィールドにこのカードしかモンスターが存在しない時、自身と私の墓地の融合モンスター1体を除外することでそのレベル合計と等しいドラゴン族シンクロモンスターを疑似的に呼び出すことができる。見せてあげる、清明。これが、ドラゴネクロの真の姿。冥府の大河の流れを紡ぐ、永久の嘆きが此岸に響く。ステュクスシンクロ……冥界濁龍 ドラゴキユートス！」

ゴースト・カロンに導かれ、冥府の底から浮かび上がったドラゴネクロ。そつと伸ばした骨の腕がその頭頂部に触れた時、両者は不気味なほどに白い光に包まれた。その光は1つとなり、新たなモンスター

へと生まれ変わっていく。ドラゴネクロのレベルは8、そしてゴースト・カロンのレベルは2。

「レベル10のシンクロモンスター……」

☆8+☆2=☆10

冥界濁龍 ドラゴキュートス 攻4000

再び開いた冥界の門を叩き破り、さらなる力を入れたドラゴネクロ……いや、ドラゴキュートスがその白き威容を見せつける。亡者たちの嘆きを、その魂を無差別に取り込み飽くことなく喰らいつくした自己強化の果てのいびつな龍。

「ゴースト・カロンの効果を使うターン、私はドラゴン族以外の特殊召喚が封じられる。だけど逆に言えば、例え何者であろうともその通常召喚が縛られることはない。魔法カード、デュアルサモン二重召喚を発動。このカードによって手に入れた2度目の召喚権で、私はこのカードを通常召喚する。その攻撃力は、墓地のワイト及びワイトキング1体につき1000……お出でなさい、ワイトキング」

地面が爆ぜ、1本の骨の腕が地中から突き出る。ゆつくりと動くその腕が地面を押さえて力を込めると、全身に毛の1本、肉のひとかけらも残っていない藍色の服を着せられた骸骨が地中からその全身をあらわにした。ああ、ついに今回も来てしまったか。正攻法では絶対に勝てない、彼女のエースである骨の王。墓地のワイト及びワイトキング扱いのカードは、合計8枚。

ワイトキング 攻8000

『これは……その、壮観だな。たった1ターンで攻撃力4000と8000を揃えてきたか』

「驚きはしないよ。現は、彼女は僕の知ってる夢想と同じなんだから。これぐらいのことはやってくる、彼女はいつだってそうだった」

実際、このまたもやひっくり返された状況を前に、僕は自分でも驚くほどに落ち着いていた。チャクチャルさんにも言った通り、どこかでこうなることがわかっていたのかもしれない。彼女なら、絶対にこの程度の逆境は1ターンで跳ね除けると。

「バトル。まずはワイトキングで怒炎壊獣ドゴランに攻撃、螺旋怪談



！」

ワイトキングがまさに王者の風格すら感じさせるような尊大な足取りで、自分よりも遙かに巨大なドゴランに迫る。そこから放たれる必殺の拳は、いかに壊獣の王とはいえど耐えきれぬ道理はない。

ワイトキング 攻8000↓怒炎壊獣ドゴラン 攻3000（破壊）

清明 LP7000↓2000

KYOUTOUウオーターフロント（4）↓（5）

「ごっつ！ほ、補給部隊の効果！僕のフィールドでモンスターが破壊されたから、カードを1枚ドロ……！」

『大丈夫か、マスター？』

初期ライフ全てを持っていったなお余りあるほどの特大ダメージが戦闘を通じてこちらにフィードバックし、呼吸が止まり細胞1つ1つが揺さぶられるほどの衝撃が内臓に直で響く。あの火力馬鹿のラビエル戦ですら、これほどのダメージを1度に受けたことはない。変な話ではあるが、ヒロイツク・ギフトによるドロのせいで生まれたこの状況、ヒロイツク・ギフトが無ければ死んでいた。

『よし、そんなこと言ってられるうちはまだ余裕あるな。いいか、心が折れたらその時点で負けだからな。勝負はもちろんのこと、闇のゲームそのものにもだ。さあ、次が来るぞ！』

「あき……ううん、なんでもない。続けてドラゴキュートスでスパイダー・シャークに攻撃、ゴースト・ストリーム冥界の幽鬼奔流！」

「く……！」

冥界の濁流に飲み込まれ、スパイダー・シャークがついに倒れる。当然ダメージがこちらにも通る……でも、さっきの一撃に比べればまだダメージも常識的な範囲だ。もしかすると、後から強烈な一撃を与えてこちらの意識が飛ぶのを抑えるため、わざとこの順番で攻撃してくれたのかもしれない……なんて、さすがに考えすぎか。

冥界濁龍 ドラゴキュートス 攻4000↓No. 37 希望識

竜スパイダー・シャーク 攻2600（破壊）

清明 LP2000↓600

「補給部隊は1ターンに1回しか使えないけど、スパイダー・シャークには最後の力が残っている。効果発動、ラスト・リザレクシオン！このカードが破壊された時、僕の墓地から自身以外のモンスター1体を蘇生できる！蘇れ、グングニール！」

氷結界の龍 グングニール 守1700

跡形もなく押し流されたスパイダー・シャークのいた場所に、かすかな希望のかけらが光る。先ほどゴースト・カロンとドラゴネクロが放っていた病的な光とはわけが違う、瑞々しい生命力に満ち溢れたその光から、再びその魂を取り戻した氷結の龍が咆哮と共に恐るべき2体のモンスターの前へとたつた1体で立ちはだかった。

「これで、次のターンで……」

「グングニールの効果は、手札を捨てることでその枚数だけ場のカードを破壊する……確かに私がこのままターンを回すことしかできなかったら、わからなかった。でも詰めが甘いよ、清明。私は、そんなに甘くない。そんなもの、私が残すわけがない。この瞬間、戦闘で相手モンスターを破壊しなおかつ墓地に送ったドラゴキュートスの効果を発動。このカードはこのターン、もう1度だけモンスターに攻撃できる！」

「グングニール……っ！」

かすかに紡がれた希望の一筋が、再び解き放たれた冥界の濁流に飲み込まれて消えていく。思わず伸ばした手が虚しく空を切るその目の前で、神槍の名を持つ誇り高き竜は最後まで雄々しく翼を広げていた。まるで押し寄せる奔流の余波から、後ろに立つ僕を守ろうとするかのように。

冥界濁龍 ドラゴキュートス 攻4000↓氷結界の龍 グングニール 守1700 (破壊)

「カードを伏せて、ターンエンド。このターン終了時にシャツフル・リボーンのデメリットで手札が1枚除外されるけど、今の私に手札はないからそれは実質無効になる」

抜け目なくデメリットを回避したところで、またターンが僕に回ってくる。どうにか、今回も生きて凌げはしたわけだ。だけど、もうこ

れ以上は持ちこたえられそうにない。おそらく、僕が攻めるチャンスは多くてあと1回。次のターンまでならまだ捨て身で攻めに行けるけれど、返しに自分の身を守れない。だから、それ以上は無理だ。7000あったはずのライフをたかだか1ターンで600まで減らしてくるような相手に、下手な引き伸ばしは通用しない。ワイトが墓地に貯まっていない序盤ならまだしもすでにワイトキングがあればだけの攻撃力を手に入れた現状、これ以上このデュエルをだらだらと続けたところで現のドロロー1枚1枚が僕にとっての死刑宣告になるだけだ。そしてこの予想は、決して絶望でも悲観でもない。

でも逆に言えば、まだあと1ターンは自由に動ける。このエクストラデッキからは、今も僕に呼ばれることを待っている新たなカードの鼓動を感じることができる。とにかく次のターン、次のターンで終わらせる。それができなければ、もうおしまいだ。僕がだろうか、世界がだろうか。それとも彼女が、かもしれない。

清明 LP600 手札：1

モンスター：なし

魔法・罨：バブル・ブリンガー

1 (伏せ)

場：KYOUTOUウオーターフロント (5)

現 LP1000 手札：0

モンスター：ワイトキング (攻)

冥界濁龍 ドラゴキユートス (攻)

魔法・罨：1 (伏せ)

「僕のターン。頼むよ、僕のデッキ……！」

でも、この際なんだっていい。もう1度だけ僕に戦う力を、ここから現を救うだけの力を……！力を込めてデッキトップに指をかけ、目を閉じて呼吸を整えてからまた前を向く。せつかく紡いだ希望をも無に帰すほどの圧倒的な彼女の力に対抗できる最後の奇跡を、これで終わりとなるほどの切り札を。

「……ドロロー！」

引いた。力強く。極限に達した集中が脳内にアドレナリンを爆発

させ、鈍化した時間の中で自分の腕がスローモーに振り切られるのが見えた。そしてその先に握られた、1枚のカード。永遠にも続きそうなその時間の中でそっとそれをひっくり返し、刻まれた正体を確かめる。

「これ……」

『ほう。ここで引いた、か。まだわからないぞ、これは』

僕の引いたカード。そこには……何も描かれていなかった。イラストやテキストどころか色すらついていない、全くの白紙のカード。かつてペガサスさんに貰った、未知なるカードの片割れ。稲石さんと共に消えてしまったゴーストリック・フロストの穴を埋めるためにこっそり入れておいた、不思議な1枚。

いまだにこの真の姿も、僕にこれを使うことができるのかもわからない。そもそももう片方の白紙のカードが壊獣の力を解放するための扉の役割を果たすものだったことを考えると、これが本当に単なるカードなのかも怪しいものだ。だけど僕のデッキは、このカードをこの土壇場で僕に託してくれた。このカードは、この極限の状況で僕の手元にやってきてくれた。なら、迷う理由はどこにもない。

「現。僕はこのターン、このカードを使う！」

「それって……白紙の、カード？」

白紙のカードを見せつけるように突き出し、その奥底で眠る力に心の中で呼び掛ける。君が誰かはわからない。だけど、この1回だけでも構わない。お願いだ、僕に力を貸してくれ。僕のことなんてどうだっていい、目の前の彼女を、現のことを。僕が一番大切な人を、この呪われた運命から解き放つために。

するとその瞬間、カードを持つ指先がかつと熱くなった。思わず腕を引き戻すと、白紙のカードがその内側から光を放ち始めている。今まさに、このカードは目覚めようとしていた。

『よくやった、マスター。さあ、何が来る？』

「……ありがとう」

小さく呟くと、さらにその輝きが増していく。そして次の瞬間には、白紙だった面に色が、イラストが、そしてテキストが浮かび上がった。

た。それと同時にその使い方、そしてその奥で僕の声を待つ精霊の思  
いすらもいつぺんに届く。なるほど。この力なら、確かに。

「まだ僕のターンは始まったばかりだったね、現。宣言通り、この  
カードを使わせてもらおうよ……このスタンバイフェイズ、通常のド  
ローによつて手札に加わったこのカード。R U M―七皇の剣を  
改めて公開する！」

「そのカードは……」

本来この世界には存在しないはずのエクシーズモンスター、さらに  
その中でもごく一部にのみ対応する専用サポート。様々な因果や道  
理を超越し、巡り巡つて僕の手元に来たカード。このデュエルの、僕  
にとつて逆転の切り札となるべき1枚。

「そしてこのメインフェイズ。このカードを公開し続けたことで、そ  
の発動条件は整った。七皇の剣、発動！」

精一杯に腕を伸ばし、七皇の剣を天高く掲げる。今こそ僕の元に、  
そしてその力を貸してくれ。

「このカードの発動時に僕はエクストラデッキか墓地からオーバーハ  
ンドレッド・ナンバース1体を特殊召喚し、さらにその先の境地、カ  
オスの力を解き放つ！ N o . 1 0 1 ! S . H .  
A r k K n i g h t ……そして！」

上空の分厚い雲が割れ、空の彼方からゆつくりと白い箱舟が降りて  
くる。その中央部から射出されるように漆黒の人型をした何かが飛  
び出し、上空で静止した箱舟をあとに1人得物らしき真紅の槍を手に  
この地上へと降り立った。

だがその姿は、僕がこれまで見てきた2種類のエクシーズモン  
スターとは異なっていた。オーバーレイ・ユニットが光の球として本体  
の衛星のように周りを飛び回るのではなく、もつと硬質なクリスタル  
となつてその足元に配置されていたのだ。

「霖雨蒼生の時は来た、想い託されし不沈の守護者！ C N o . 1 0  
1 ! S . H . D a r k K n i g h t !」

C N o . 1 0 1 S . H . D a r k K n i g h t 攻2800

「S . H . D a r k K n i g h t ……」

「そうさ。だけど、まだこれだけじゃ終わらないね。僕にはまだ、このデュエルで見せていない心強い仲間たちがいる！トランプ発動、グレイドル・スプリット！これを1つ目の効果で攻撃力500アップの装備カードとしてダークナイトに装備して、そのままもう1つの効果に。このカードを墓地に送って装備モンスターを破壊、さらにデッキから2種類までグレイドルをリクルート！さあ行くよ、スライム！イーグル！」

漆黒の槍術師がその足元から粒子となって消えていき、入れ替わるようにそれぞれグレイ型宇宙人の上半身と黄色い鳥を模した2種類のグレイドルが特殊召喚される。そしてグレイドル・スライムは、チューナーモンスターだ。

グレイドル・スライム 守2000

グレイドル・イーグル 守500

「補給部隊で1枚ドロ。そして同じくこの瞬間、カオスオーバーレイ・ユニットを持った状態で破壊され墓地に送られ、なおかつ墓地に進化前のアークナイトが存在するダークナイトの効果が発動！このカードを蘇生し、さらにその元々の攻撃力分ライフを回復する！リターン・フロム・リンボ！」

清明 LP600↓3400

不沈の守護者は、破壊程度では蘇る。そしてここからが、その特殊能力の真骨頂だ。

「ダークナイトの更なる効果発動、ダーク・ソウル・ローバー！1ターンに1度特殊召喚された相手モンスター1体を選択し、自身のカオスオーバーレイ・ユニットとして吸収する！消え去れ、ドラゴキユートス！」

ダークナイトがその槍でドラゴキユートスを指し示すと、2体の全身を包むかのように赤いオーラが立ち上る。するとドラゴキユートスの巨体がダークナイト側に引きずられるように吸い寄せられていき、両者の距離が縮まると同時に赤い光もしだいに力強さと深みを増していく。やがてそれが臨界点まで達した瞬間、あれほど大きく恐ろしかったドラゴキユートスの体が光の中で急激に圧縮された。いや

違う、ダークナイトの召喚時にもあった足元のクリスタル、カオスオーバーレイ・ユニットに変換されたのだ。

「ドラゴキュートスが……」

「だけどこの効果だけじゃ、通常召喚されたワイトキングには敵わない。だからこそ、もう1度シンクロ召喚！レベル3のグレイドル・イーグルにレベル5チューナー、グレイドル・スライムをチューニング！」

次に何をすればいいのか、カードが語りかけてくるもうすっかりおなじみになった感覚。スライムといいJrといいずっとチューナーって書いてあったからこの唐突なチューナー要素はなんなのかと思っていたけれど、まさかグレイドル自体がシンクロテーマだったとは。もつともこの子たちも元はといえばある日突然宇宙から墜落してきたカード、未知の召喚法をものにしていても不思議ではない……のかもしれない。

「変幻自在な不定の恐怖は、星海旅する魔性の生命！シンクロ召喚、グレイドル・ドラゴン！」

☆3＋☆5＝☆8

グレイドル・ドラゴン 攻3000

イーグル、コブラ、アリゲーター、そしてスライムにそのJr。これまで僕と共に戦ってきたグレイドルたちがその力を結集させた、変幻自在の真骨頂たるシンクロ体。まさかこんな隠し玉をこれまで抱えていたなんて、まったくあのスライムも人が悪い。

ただどうしてグレイドルは、このどうしても負けられないデュエルを受けてその隠されたとおきの力を僕に明かしてくれた。その思い、決して無駄にはしない。

「シンクロ召喚したドラゴンの効果発動、グレイドル・トルピード！シンクロ素材となった水属性モンスターの数まで、場のカードを破壊できる！当然選ぶのはその伏せカード、そしてワイトキングだ！」

ドラゴンの流体金属を思わせる独特な質感のボディが波打ち、無数の突起が生じたかと思うとそれらが一斉に本体を離れ有機体ミサイルとなって雨あられのごとく降り注ぐ。着弾、そして爆風に巻き込ま

れ、ワイトキングがただの骨へと還っていく。だがもう1枚の狙いだった伏せカードは、爆発に巻き込まれる寸前表を向いた。

「……速攻魔法、大欲な壺！除外されているドラゴネクロ、タスケルトン、巡死神リーパーの3体をデツキに戻すことでカードを1枚ドロ―！」

『ブラフだったか……？』

チャクチャルさんが訝しむ。それならそれでいい、このまま押し通すまでだ。確かに僕の場のバブル・ブリンガーの効果によりレベル8のグレイドル・ドラゴンは現在ダイレクトアタックが封じられ、レベルを持たないダークナイトも蘇生効果を使ったターンには攻撃できない制約がある。

「ただ僕にはそれ以前から、ずっとずっと切り札として一線を張ってきたこの1枚がある。」

「バブル・ブリンガーのさらなる効果を発動！このカードを墓地に送り、レベル3以下の同名水属性モンスター2体を効果を無効にして特殊召喚する！」

グレイドル・イーグル 攻1500

グレイドル・イーグル 攻1500

「ランク3……ううん、違うか」

「さすがにわかってんじやん、現。これで、バブル・ブリンガーによる制約は消えた。この2体のモンスターをリリースし、アドバンス召喚！その攻撃力は、リリースしたモンスターのそのの合計値。これこそが僕の切り札……霧の王！」

2体のイーグルがどこからともなく立ちこめた霧に包まれ、そのまま消えていく。そして霧の彼方から、どれほどカードが増えようとも決して変わらない僕の切り札が姿を見せた。

霧の王 攻0↓3000

シンクロモンスター、エクシーズモンスター、そして効果モンスター。つい昨日までは、とてもじゃないが想像もしなかったような絵面だ。そしてその努力も、あと1回の攻撃で報われる。河風現に、無双の女王の二つ名に、ついに土をつける時が来た。



「霧の王、これが最後の攻撃だ！ダイレクトアタック、ミスト・ストラングル！」

ダークナイトとドラゴンがこじ開けてくれた結果、もはや現の場にカードは存在しない。この攻撃を、なんとしても届かせる。だがその剣閃は、天から無数に降り注ぎ大地に突き刺さった光の大剣によって阻まれた。

「光の護封霊剣！」

「なっ……」

動きを封じられたのは、霧の王だけではない。グレイドル・ドラゴンも、元より動きのとれないダークナイトも、僕のモンスター全てが光の剣に囲まれ身動きを取れなくなる。これだけ全てを賭けた攻撃だったというのに、またしても届かないというのか。自分の目を、耳を疑い呆然とする僕に、淡々とした中にも隠しきれないほんのかすかな焦りを含んだ現の声がぼんやりと聞こえる。

「……このカードを墓地から除外することで、ターン内の相手の直接攻撃は全て封じられる。危なかった、本当に危なかった。これは、私にとつても最後の1枚だった」

「で、でも、そんなカード……」

答えは聞くまでもないが、それでも口に出さずにはいられなかった。いつの間に、だなんて、現にあのカードを墓地に送る暇があったのは1回しかない。後攻1ターン目、このデュエルが始まってすぐに召喚されて効果を使ったユニゾンビ。ワイトプリンスを墓地に送った方にばかり目が行っていたけれど、あの時あのカードはデッキのアンデット族だけでなく、さらに手札を1枚捨ててもう1度効果を使っていた。手札を、1枚。

あんな最初の最初から、いざという時の奥の手となるような最後の守りを仕込んでいたわけだ。この手札にも、そして僕のモンスターにも、攻撃を封じられた今これ以上彼女のライフを削る手段はない。

『マスター……』

「……わかってる。でもまだ、まだ負けたわけじゃないんだ。最後の最後まで、絶対に諦めてたまるもんか……！ KYOUTOUウォー

ターフフロントの効果により、デツキから海亀壊獣ガメシエルをサーチする……！クソッ！」

血を吐くような後悔の声。手札のある1枚、たった今サーチしたガメシエルが見えたからだ。

……海亀壊獣ガメシエル。攻撃力こそレベル8にして2200と特筆すべき数値ではないものの、その効果は場の壊獣カウンター3つをコストに相手のカードの発動を無効にして除外するという協力無比な代物。七皇の剣からのダークナイト、さらにスプリットからのグレイドル・ドラゴンで現の場を焼け野原にする、ここまでではない。もしもその後、バブル・ブリンガーで蘇生した2体のイーグルをリリースして呼び出したのが、あらかじめメイニーでサーチしておいたこのカードだったら。本来光の護封霊剣はフリーチェーンでいつでも使えるが、彼女はその性格からいっても今回のようにバトルフェイズに入るギリギリまで使わなかっただろう。スタンバイフェイズのこちらにとって絶対に止められない、どうしようもないタイミングでいきなり発動するようなことはせず、メインフェイズに一通りの展開を終えたのを見極めてから発動するために取っておいたはずだ。

あのカードは、彼女にとって文字通り真正銘最後の守り。裏を返せば、それさえ押さえることができれば必ず攻撃は通っていた。つまりこのターンは僕にとって最後の攻撃が許されたターンであると同時に、彼女に勝つことができた最初で最後のチャンスでもあったのだ。無論、霧の王が悪いわけではない。ましてや、チャクチャルさんにも一切の責任はない。全てあと1歩だったというのに、最悪のタイミングで読みを間違えた僕の責任だ。

ああ全く、どこまで皮肉な話なんだろう。ついさつき彼女がせめてもの救いを求めて伸ばした手を踏みにじった僕が、今度は彼女を救うため自分から伸ばしかけた手をも自身の手で払いのけたなんて。僕はただ彼女を助けたい一心で、本当にそれだけの理由から限界以上に自分の力を引き出して、未知のカードからも力を借りて戦って。そのくせ、肝心なところで彼女を無駄に苦しめる事ばかりしている。

『こんな言葉が慰めにならないことはわかっているが、たとえそれに

気が付いていたとしても結果は変わりなかつただろう。サーチ効果がチエーンブロックを組む以上、ガメシエルを手札に加えた時点でその目論見も先読みされた可能性も高い……もつとも、サーチのタイミングによつてはデツキ圧縮の一環とみなされスルーされた可能性も否定はできないが』

僕の手札には、このターン補給部隊で引いた幽鬼うさぎと今サーチしたガメシエル。辛うじて、心はまだ折れていない。まだデュエルを続けて、最後まで足掻くことができる。だけどそれは決して前向きなものではなく、ここまで彼女を苦しめたあげく手前勝手に勝負を降りるような行為は僕のデツキを、そして何より彼女のことを侮辱する行為だとわかつていたからだ。ターンエンド、と告げる自分の声は、悔しさのあまり我ながら情けないほどにか細く震えていた。

「私のターン。そう、このカード……なら、私も。まずは、3体目のワイトキングを召喚」

ワイトキング 攻9000

現が召喚したのは、先のターンに大欲な壺でドロートした方のカード。ああ、やつぱりだめだったか。発動を介さず永続効果で攻撃力を変えるワイトキング相手には、さすがの幽鬼うさぎも使うタイミングが無い。先ほどダークナイトで挟んだ回復も、あの火力を前にすれば誤差の範囲程度のものだ。確定した敗北を前に、むしろ心が落ち着いてくるのを感じていた。先ほどの失敗のせいでいまだに酷い気分なことは変わりないが、それでも穏やかな気持ちじゃんと心中に広がってくる。

「地縛神、壊獣、それに……ううん、カードの精霊だけじゃないか。人間だって、それ以外だってそう。清明にはそうやっていつだって誰かを惹きつけて、一緒にいたくなる魅力があるね」

バトルフェイズに入る、その前に。死闘には似つかわしくないほど不思議と穏やかで優しい声とともに、現がそつと微笑んだ。

「……そりやどうも。なんか最近、同じことをよく言われるよ」

何か企んでいる、だなんてことは思いもしなかった。彼女は気高い、真のデュエリストだ。だからこちらにも空元気を振り絞り、素直な

気持ちで答えることができた。口角を上げてちよつと笑いそう返すと、現もおかしそうにクスクス、と笑う。そしてまた、小さく続けた。「そしてそれは、私も同じ」

言葉に詰まる。こんな時に気の利いたセリフの1つでも返せれば、どんなによかっただろう。その沈黙をよく聞こえなかつたと解釈したらしく、またしてもからかうように小さく笑う。

「もう1回言うのは、さすがにちよつと恥ずかしいかな。ねえ、清明。清明がこの勝負に込めた覚悟。そしてその、デュエリストとして自分の限界を超えるほどの想い。デュエルを通じて私には、全部伝わって来たよ」

ぶんぶんと強く、首を横に振る。伝わったからといって、それがなんの役に立つ。僕が求めていたことは、たとえそれが伝わらなかつたとしてもいいから、とにかく結果を出すことだ。そんなこともできなかった僕に、優しい言葉をもらう資格はない。

「こんなこと言うと、清明は嫌がるかもしれないけど。ありがとう、清明。こんなに本気で、私と戦ってくれて。こんなにワクワクするデュエルを、最後に私としてくれて。最高のプレゼントだったよ」

何を言わんとしているのか、その真意は掴めない。だけど、なぜだか嫌な予感が頭の片隅をよぎった。もう攻撃さえすればそれでこのデュエルは終わり、新たにカードを使う理由はない。それなのに彼女の手が最後の手札1枚、このドローで引いたそれへと伸びていく。

「何を……？」

「私には、清明の気持ちには応えられない。だから、清明はもつと生きて。そうすればそのうちきつと、私なんかよりずっといい子だつて見つけられるはずだから。でもやっぱり、ちよつとだけ妬けちやうけどね」

『まさか……』

「駄目だ！」

嫌な予感が、ますます大きく強くなる。現が何をしようとしているのか、それを止めるためにデュエル中だということも忘れて駆け寄ろうとする。

でもその時にはもう、何もかもが手遅れだった。

「魔法カード、未来への思いを発動。私の墓地から異なるレベルを持つモンスター3体を攻撃力0、効果を無効にして特殊召喚する」

獣神ヴァルカン 攻2000↓0

ワイトプリンス 攻0

ユニゾンビ 攻1300↓0

そして呼び出される、3体のモンスター。だけど問題はそこじゃない、確か未来への思い、あのカードのデメリットは！

「ターンエンド。そしてこのエンドフェイズまでにエクシーズ召喚をしなかったことで、私のライフは4000失われる」

「現っ……っ！」

現 LP1000↓0

デュエルは終わった。あれだけの大型モンスターが飛び交い激しく激突した勝負の最後とは思えないほどにあっさりと、全てが消えていった。

「現っ！」

目を閉じて糸が切れた人形のように力なく、後ろに倒れこむ現。どうにか間に合って、地面にぶつかると寸前に抱え上げた。そのまま名前を叫んで揺さぶるけれど、反応はなくその体もぐったりしたままだ。

「現……そ、そうだ、チャクチャルさん！僕が勝ったんだよね、なら早く！」

『……無理だ。最初に釘を刺しておいたはずだ、デツキレスなどで逃げられるとそもそもマスターと彼女の間に繋がりが生まれず、私の力も届かないと。最後の最後に自分の手でライフを尽きさせた場合も同じこと、こういった手を使われると私にできる事など何も無い』  
「ぐ……っ！」

確かにこの決戦前、この作戦を決めた時からチャクチャルさんはそんなことを言っていた。どこにも持っていきようのない怒りと焦りが、体中を駆け巡る。

「だ、だったら、僕はこんな勝ち方認めない！こんなやり方で、あの現に勝ったなんて言えるもんか！こんなの無効だ、ありえない、もう1回勝負だ、現！だからお願い、目を覚ましてよ……」

『……やめておけ、マスター。それよりも、ほら』

「え……？」

チャクチャルさんの押し殺したような声に、再び腕の中の現に目を落とす。ほんのかすかで弱々しくではあるが、その首が多少持ち上がりその目は再び開いていた。口が開き、大儀そうに言葉を絞り出す。

「……あはは。終わったね、清明」

「現！」

その体を抱き寄せたところで、背筋が寒くなるような事実に気が付いた。ついさつき抱き止めた時、彼女の体はこんな不気味なほど軽くはなかった。でも今の彼女は片手どころか、指1本でも軽々と支えられるだろう。いたって普通の感触、人間らしい重みすら、彼女の身体からは急速に失われつつある。それは、終わりが近いことを何よりも物語っていた。

「ほらほら、そんな顔しないで、清明。私のことよりも、そうね、清明は大丈夫なの？ちゃんと卒業できる？」

「そんなこと……」

『マスターもとうに気づいているだろうが、もう長くはない。悔いを残さないよう、今のうちに話しておくことだ』

「うん……」

チャクチャルさんに諭され、息を吸って気持ちを静めようとする。多分現は、最後の最後に僕の泣き顔なんて見たくはないだろう。だから辛いだろうに、苦しいだろうにこんな話題まで振ってくれて。稲石さんもそうだった。

これだけ甘えさせてもらっておいて、まだこっちはばかりが苦しい顔なんてできるわけがない。

「ああ、おかげさまで大丈夫だよ、現。3年間ずっと負け越してたけど、最後の最後に遊野清明は河風現に大勝利してぴったり100点、それでめでたく卒業決定。そう決めて、ずっと探してたんだから」

「ふふっ、そうだったんだ。ごめんね、もっと早く、会いに行ければよかったんだけど」

「今だって、まだ遅くはなかったさ」

「ねえ、清明。もつとよく、顔を見せてくれる？」

腕の中の現の存在が、また更に希薄になる。いよいよ終わりが近いことを本人も察したらしく、最後の力を振り絞って上半身を起こした。だから僕も、その目を覗き込むようにして顔を近づける。じっと目を合わせ……不意に、朗らかに笑いだした。

「ふふふっ、真剣な顔しちやっつて。ねえ清明、キスしてもらえるかもって思った？」

「んなっ……!」

「隠してもだーめ。清明って、変なところですよつごく真面目なんかもん。もしそんなことしたら、この先ずつと私に悪いからー、とか言つて他の子を好きになるのに引け目を感じちやうでしょ」

「そ、そんなこと」

「ないの？」

「……あるかも」

ほらね、と得意げな顔になる現。僕はといえば、謎の気まり悪さに必死で耐えていた。こんな最後の最後まで、まるで弱みを表に出さない。強い女の子だ、本当に。とてもじゃないけど、やっぱり彼女には敵わない。

「ちゃんと約束できる? これからもつといい子のことを、私よりずつと大事にしてあげられるって」

「あー、それは」

「ちゃんと目を見て」

「……ハイ」

しびしび頷くと、よろしい、と頷き返された。

「じゃあこれ、ご褒美ね」

その言葉の意味を理解するよりも早く首の後ろに手を回され、完全に不意を突いてぐつと下に押し付けられる。彼女の顔がさらに近づくと同時に唇にほんの1瞬触れた、柔らかな感触。

「……！」

「てへ。ごめんね、やっぱり私も我慢できなくて。でも約束、ちゃんと守ってね」

顔が熱い。頭の中が混乱して、口を開くも言葉が何も出てこない。その時、突然東の空からさつと朝日が差し込んで現の顔を照らした。これ幸いと上空に目を向けると、たった今まで空を覆っていた雲がみるみるうちに消えて朝焼けの空が一面に広がっていく。

「これ……」

「ダークネスが倒れた、そういうこと。今頃はそっちの計画も成功して、はるか未来に飛ばされたのかな」

「じゃ、じゃあー！」

「おめでとう、清明。じゃあ、そろそろ私も時間かな」

もはやその感触すら希薄になってきた彼女の体を、無言で強く抱きしめる。彼女もそっと僕の背中に手を回し、それに応えてくれた。

さようなら、とは言いたくなかった。ならこんな時には何を言えばいいのか僕の足りない頭ではわからず、ただただ力を込めて抱きしめることしかできなかった。そうしている間にも現の体は薄く、軽く、最初から存在しなかったかのように消えていく。それでも彼女には、僕の想いは確かに伝わったらしい。

「うん。幸せに、ね」

その言葉を最後に、現が消えた。朝日の照らす中で自分の腕に目を落とすが、もはやその手は何も掴んではいなかった。視界がにじみ、ぼやけてほとんど何も見えなくなる。何度も何度も頬を涙が伝い、地面に落ちる。

しばらくの間、ずっとそうしていた。それを咎める者はどこにもおらず、僕はいつまでも、いつまでもただ泣いていた。



you know あなたのことを知っている  
ターン127 鉄砲水と遊戯の王

「本日は、我々卒業生のために盛大な卒業式を行っていただいたこと、心よりお礼申し上げます。時が経つのは早いもので……」

凜とした明日香の声が、講堂に響き渡る。さっきまでおいおいと男泣きに泣いていたクロノス先生と剣山が頭を冷やすためにつまみ出された今、全校生徒が静かにその声に耳を澄ませていた。

……いや、違うか。ただ1人、ただ1人だけ、この場にいない人がいる。僕が誰よりも助けたかった、誰よりも勝ちたかった、彼女はもういない。今年の卒業生は、3年前の入学生より1人少ない。たとえば僕だけでもそのことは決して忘れない、忘れられるわけがない。

「……このデュエルアカデミアで、多くの友人達、先生達と出会い、デュエルを通して、数多くのことを学んできました。時には戦い、励まし合い……」

明日香の卒業生代表答辞はまだ続く。実際こういつた役どころに關しては、彼女はまさに適任だろう。それにしても、あの入学式がもう3年前か。

「たとえこれから別々の道を歩いていこうと、遠い場所で暮らしていこうと、私達は仲間です」

答辞もいよいよ佳境に入る。周りに耳を傾ければかすかに鼻をすする音や、涙をぬぐっているのであろう布音が聞こえてきた。まったく皆単純というか、涙もろいというか。

『随分スレたことを言うようになったものだな。無理に幼くなる必要はないが、もう少し年相応な態度になってもいいんだぞ?』

チャクチャクさんの入れてくる茶々にも、いつものようなそれを面白がっている響きが無い。あの日、あの現との死闘以来、僕の何かが決定的に変わってしまったことに、誰よりも敏感に気付いているのだろう。卒業、か。もちろん、それに対しての感慨が無いわけじゃない。だけど、少なくともまだしばらくの間は、僕の涙は枯れたままだろう。

「ありがとう、みんな……ありがとう……デュエルアカデミア。そして……さようなら」

明日香の演説が終わる。結局、涙は一滴もこぼれなかった。周りと共に拍手しながら、そんな自分を苦々しくも思う。現を失ってから数日、あの時流し続けた涙が止まったその瞬間から、ずっとこうだ。

まるで自分の心の一部が、死んでしまったかのように。感情の動きが明らかに鈍くなり、少し気を抜くと無意識のうちにため息ばかりがこぼれ出る。先日何気なく鏡を覗いてみたら、随分ひどい顔をしていた。表情にも覇気がないのはもちろん、特に目だ。あれは冷めた目、というよりも台所で見慣れた死んだ魚の目に近い。その変化を自覚しつつもだからどうしようという気が湧いてこないあたり、かなり重症なんだろう。

「それでは、これで卒業式を終わります。卒業生の皆さんは今夜行われる卒業パーティーまでは完全に自由時間となりますので、ぜひ悔いを残さないよう皆さんが単立つこのデュエルアカデミアに、そして後輩たちに別れを告げてきてください」

鮫島校長のその言葉を最後に、この島で過ごす最後の自由時間が訪れる。自由といっても、どこで時間を潰そうかな。レッド寮の自室も、もう荷物はまとめて本土行きの船に乗せてしまったため、今更戻ったところで本当に何も無い。となると、まあ、あの場所しかないか。正直なところ、今はあそこにもあまり近寄りたくはないけれど。

「はあ……」

また、だ。我ながらやる気のないため息をこぼし、重い足を半ば引きずるように、それでもいつもの場所を目指し歩き出す。

……後ろから万丈目たちがこちらを見て、心配そうな視線を向けていることにも気づいていた。ただ僕の方がそれに背を向け、気づいていないふりをしただけだ。悪いね、こんな日にまで心配かけて。でもちよつと、僕はもう駄目みたいだ。

誰もいない階段を上り、がらんとした廊下を渡り、明かりのついたある部屋に。目をつぶっていても来ることができ、僕にとってはレッド寮と同じほどに馴染んだ場所だ。

「終わったよー」

「お疲れ様でした、先輩……と呼ぶのも、もう厳密には違うのでしょうか」

「そのへんはご自由にどうぞ」

扉を開けると、光がパツと目に飛び込んできた。食べ物も少しもおいしく見えるようにと、かつての僕が本気でパンフレットとにらめっこして決めた色と明るさだ。だけどあの熱気も、今の僕にはもうないだろう。一番入口に近い椅子に無造作に腰を下ろすと、店番をしていた葵ちゃんは何も言わずに湯気の出る紅茶のカップを2つ持ってきた。それを机にそつと置き、僕の対面に当然のような顔で腰かける。

「……自慢じゃないけど、財布は空だよ？」

「最後まででもしい先輩ですね。私からの卒業祝いです、おごりますから大人しく飲んでください」

「ありがとう」

僕はストリート派だけど、葵ちゃんは紅茶を飲むときにその余裕があれば必ず輪切りのレモンを乗せる。今回もその例に漏れず、彼女のカップには薄いレモンが浮かんでいた。それをストローで突つつきながら、ポツリと彼女が呟く。

「……先輩」

「なーに？」

ストローなんて使うのは勿体ないので、封を切らず脇にのけてカップに直接口をつけて一口。ふむ、悪くない。茶葉の量、湯の温度、どれも及第点だろう。洋菓子はともかく紅茶に関してはほぼノータッチだったから、僕がいつも淹れるのをひたすら見て覚えたのか。そういえば彼女がここに入って来た当初、とりあえずお祝い代わりに1杯淹れてあげた時は目を丸くして飲んでたっけ。

そんな昔の記憶を思い出しながら顔を上げると、さすがにこの数日でめつきり薄くなった僕の感情も動かされた。こちらをまつすぐ見つめていたのは、これまでに見たこともない彼女の顔……いまにも怒りだしそうな、それでいて今にも泣きだしそうな不安に包まれた表情

の葵ちゃんが、そこにはいた。身を乗り出してこちらを覗き込む彼女の目は、この至近距離でとはいえこちらから見てもわかる程度に潤みかかっている。

「どうして、私達には何も言ってくれないんです？ダークネスとの戦いが終わったあの日、先輩にいつたい何があったんですか!?!私達は勝ったんですよ！なのに先輩だけずっとそんな顔ばかりして、今にもこの場で倒れて死んじやいそうな……!-!いつたい何を見て、何があったらそんな風になっちゃうんですか!?!」

最初のうちこそまだ抑えた口調だったもののすぐにヒートアップしていく、ずつと堪えていたのであろう、およそ普段の葵ちゃんからは想像もつかないほどに突然な感情の爆発。その迫力に気圧されて黙り込んでいると、ますますその目を潤ませてこちらの肩に片手を置き、消え入りそうな声で畳み掛ける。

「先輩の様子を見ていたら、苦しまないでくださいなんて言えませんが……だからせめて、誰かに教えてください。どうしてあんなに頑張った先輩が、たった1人で苦しむ必要があるんですか。せめて、私たちにもそれを背負わせてくださいよ……」

こんな葵ちゃんは、僕も初めて見る。多分彼女は、本気で僕のことを心配してくれているんだろう。だけど今の僕には、こんな彼女の言動1つ1つが何よりも突き刺さる。もう、河風夢想は……あるいは河風現は、どこにもいないんだと嫌でも思い知ることになるからだ。

理屈も理由もわかりはしないが、あの戦いが終わった時にはすでに、現、という人間の存在は世界中から消えていた。この僕、それに僕と一緒にいたチャクチャルさんたち精霊を除き誰も、彼女のことは覚えていない。まるで、そんな人間など最初からどこにもいなかったかのように。それに気づいた瞬間から半狂乱になってアカデミア中を駆けずりまわり、調べられる限りのあらゆる資料をあたった結果、例の事故の記事が見つかった時にはまるで足元の地面が崩れ落ちたかのような絶望感がしたものだ。曰く、その交通事故の結果として僕の母親と河風一家は全滅。唯一の生き残りが遊野家の車に乗っていた赤ん坊の男の子……つまり、僕だ。初めから、現はあの事故で死ん

でいたことになっていた。世界の歴史が、明らかに僕の知るものから変わっていた。

なら、こんなこと言えるわけがない。初めからいかなかったことになってる人間を救えなかったから、なんて話に、一体何の意味がある？確かに僕たちはダークネスに勝った。奴を未来の果てに飛ばすことで、今の危機は去った。その喜びにいないはずの人間、誰も知らない記憶の話で水を差す必要はない。この苦しみは、結局彼女を救えなかった僕に対しての罰だ。だからゆっくりと首を振り、苦笑する。多分、恐ろしく空虚な笑みしか浮かばなかったろう。

「……なんでもないよ、なんでも」

そんな僕の態度は、当然のことながら彼女の感情を逆なでするだけに終わったらしい。肩にかけたままの手がぎゅつと拳を握り、その腕に力がこもり……辛うじてその腕を振り抜くことをやめ、代わりに涙と共にきつとこちらを睨みつける。

「先輩の……馬鹿っ！」

感情のままに吐き捨てたような捨て台詞と共に店を飛び出し、これでもかとはかりに力を込めて閉められた扉が目の前で派手な音を立てる。馬鹿、か。ごもつともだ。

『ごもつともついでに、私からも苦言を呈しておこう。マスターのアホ』

「わーお、ストレートな」

『ああ、これはすまなかった。あまりオブラートに包むと、その頭では理解できないのではないかと思つてな』

チャクチャルさんの言葉にも、いつにもまして棘がある。そうさせたのも、僕のせいだ。頭ではわかるけれど、だからどうしようという気はまるで湧いてこない。

『あまりこういった話は、私も好きではないのだが。マスターがいつまでもそうやって腑抜けていて、それを彼女は喜ぶと思うのか？』

「もう現は喜べないし、悲しむこともできないよ。んでもって、そうさせたのは全部僕さ」

『……だろうな。ならもう勝手にしてくれ、私が本気でやると説得で

はなく洗脳になりかねないから自重するぞ。どうせ時間は無限にある、マスターが自力で乗り越えるまで気長に見させてもらおうとするさ』

ため息交じりに、頭の中に響く声が退いていく。だが今回はいつもの呼んだらすぐ来るであろう距離感とは違い、もはや声すら届かないほど遠くに行ってしまうかのような感覚がした。怒らせちゃったかな。

そして、そんなつかの間の孤独も長くは続かなかった。先ほど葵ちゃんが勢いよく飛び出て行った扉が再びゆっくりと開き、確かに見覚えのある……しかしまさかまた直接見ることになるとは夢にも思わなかった顔が見えたのだ。

「お久しぶりです、清明ボーイ。卒業おめでとうございマース」  
「ペガサスさん……？」

片目を常に長髪で隠す、どれだけ時事に疎い人間でもその顔と名前を知らない人はいないであろう世界で最も知名度の高い男の1人。  
インダストリアル・イリユージョン

I 2 社の総帥、ペガサス・J・クロフォード。

「Oh、どうしたんですか？確かにデュエルアカデミアのスポンサーは海馬コーポレーションですが、私はデュエルモンスターズの生みの親。その学校で卒業式が行われるとあれば、当然顔を出す権利はあるはずデース。それに実を言いますと、清明ボーイ。あなたに渡した白紙のカード、あなたに託した身としてはあの行く末が気になっていましてね。丁度今夜の卒業パーティーにサプライズゲストとして呼ばれていたのです、ついでに顔を出させていただきました」

白紙のカード。1枚は壊獣に、もう1枚は次元を越えてやってきた魔法カード……ランクアップマジック R U M——サ・セブンス・ワン七皇の剣に。あの力を手に入れた時は、必ず勝てると思った。だけど、その結果がこれだ。もう2度と戻らない彼女と、無様に生き残った負け犬。カードは応えてくれたのに、肝心な僕のプレイングがそのすべてを台無しにした。

複雑な思いが胸をよぎり、若干の間が開く。ペガサスさんの表情が訝しげなものになってきたところで、ようやく我に返った。

「この子たちは、確かに応えてくれましたよ。そして多分……ペガサ

スさんには、これを見る資格があると思います」

シンクロモンスターやエクシードズモンスターをユーノもチャクチャルさんも頑なに僕に隠していたのには、きつとそれなりの理由があるはずだ。壊獣はともかくこの七皇の剣をペガサスさんに見せるという行為は、もしかしたらその思いを裏切ることになるのかもしれない。だけど元はといえばペガサスさんから貰ったカードを独断で当人に見せないというのもおかしい話だし、それに何よりも今の僕の精神状態では、もうそんなことはどうでもいいとしか感じなかった。いくら強力な力を秘めたカードでもこんなゴミみたいなプレイングしかできないようなへボの手に残しておくぐらいなら、いつそ元の持ち主に返す方がずっと有意義だろう。デュエルにかける情熱もあの日以来燃え尽きてしまったし、返せと言うならもうそれでいいや。

もうやる気はないが、それでも捨てたりしまい込んだりする踏ん切りもつかず一応身に付けておいたデツキから壊獣一式と七皇の剣を引っ張り出し、それを手渡す。何かを察したような顔でそれを受け取ったペガサスさんが、これまで見たことが無いほど真剣な目でそのテキストに目を通していく。

「なるほど……どうやら、私の見立ては正しかったようデース。この未知なるカードは、おそらく私が持っていていいものではありません。とはいえ感謝します、私にまだ見ぬデュエルモンスターの一端を見せてくれて。デュエルモンスターの創始者として、心からお礼を言わせてください」

「……どうも」

本来なら嬉しいはずの賞賛の言葉も、まるで心に響かない。行儀が悪いとは思いつつも、返されたカードをぼんやりとうつぶむいて見つめる僕を見かねたのか、さっきまで葵ちゃん座っていた椅子に腰かけたペガサスさんが、昔を思い出すかのように明後日の方向に視線を向けつつ語りだす。

「清明ボーイ、今のあなたのような目をした人間を、私は一人知っていたマース。それは他ならぬ、かつての私自身……かつて誰よりも愛した恋人を病で失い、ただ真っ白な心のカンバスを見つめる事しかできな

かった私デース」

「え……」

恋人を失った。僕の記憶が正しければ、この人にそんな過去があったなんて話は聞いたことが無い。わずかに顔を上げると、ペガサスさんの片目と視線が合った。

「あなたに何があつたのかは、あなたも聞かれたくはないでしょう。ですが私には、今のあなたの思いは痛いほどわかりマース。しかし理解できるがゆえに厳しいことを言わせてもらいますが、あなたはそれを乗り越えなければなりません。思い出を忘れるのではなく、自らの一部として受け入れるのデース。私はそれを引きずり続ける苦しみを、よく知っていますから……」

ここで言葉を切り、髪に隠れた左目のあるであろう部分にそつと手を当て、残った右目も閉じて物思いにふけるペガサスさん。その間に僕はといえば、今の話をずつと考えていた。忘れるのではなく、受け入れる……でも、そんなことができないわけがない。僕にとってあのデュエルは、間違いなく全てだった。その上で、僕はその勝負に負けたのだ。それは、何度後悔してもしきれない。

再び目を開いたペガサスさんが立ち上がり、失礼しマース、と断りを入れて懐から携帯電話を取り出す。おもむろに番号を打ち込み、どこかに電話をかけだした。

「ハイ、私デース。申し訳ありませんが、少しこちらに来ていただけますか？場所は……ええ、その通りデース。では、よろしく願いますネ」

それだけ言って通話を切り、携帯をしまい直したペガサスさんが再びこちらに向き直る。

「とはいえ、いくら口で説明したところでとてもすぐに立ち直れるものではないでしょう。むしろ他人の言葉など、あなたの今抱えている空虚の前には何の役にも立ちほし……そこで勝手ながら清明ボーイ、あなたにはこれからここに呼んだ人とデュエルをしていただきマース」

「え？えつと……え？」



「これからここに来る彼もまた、ある意味では私たちと同じ苦しみを  
知る者……しかし私とは違い、彼は自らの手でその関係に終止符を打  
ちました。その決意を抱くまでに一体どれほどの覚悟が必要だった  
のか、私には想像もつきません。ですがそんな彼と対すること、  
きつと見つかる何かがあるはずデース。ああ、噂をすれば彼がやって  
きましたね」

それは僕にも聞こえていた。こちらに近づいてくる控えめな足音  
が、ちようど店の前で止まったからだ。そして、ノックの音が小さく  
響く。

「どうぞお入りください……遊戯ボーイ」

「こんにちは。君が遊野清明君、だね？話は聞いているよ」

「えつと……は、はじめまして……」

扉を開いて現れたのは、僕らにとっては生ける伝説にして童実野町  
の誇り。デュエルキングの称号をほしいままにする、最強無欠のデュ  
エリスト。武藤遊戯が、そこにいた。

「そんなに緊張しなくてもいいよ。同じデュエリスト、もつと気楽に  
やろう。それに、コピーカードとはいえあのラーの翼神竜を倒した  
デュエリストには、僕も1度会ってみたいと思っていたんだ……だけ  
ど、今は本調子じゃないみたいだね」

立ち上がることも忘れ座ったまま半ば呆然と挨拶した僕に屈託の  
ない笑顔で笑いかける遊戯さんに、ペガサスさんがすまなさそうに声  
をかける。

「申し訳ありません、遊戯ボーイ。予定には無かった話ですが、見ての  
通り1度火の消えてしまった彼のマインドを再び取り戻す、その手伝  
いをあなたにはしていただきたいのデース」

「なるほどね、ペガサス。なぜ僕を呼んだのか、何となくわかった気が  
するよ。それにいくらサブライズゲストだからって、夜までヘリの中  
にいるのも退屈だったしね。じゃあ、清明君。僕とのデュエル、受け  
てくれるかい？」

「僕は……」

デュエルキングと直接戦える機会なんて、人生で何度あるかわかつ

たものじゃない。それはわかっているけれど、どうしても踏ん切りがつかなかった。デュエルの力をもつてしても何もなしえなかった僕に、今更カードを通じて何かを学ぶことができるのだろうか。この人と、戦う資格などあるのだろうか。デツキに目をやり、またその場であつむく。

「もしユーにどうしてもその気が起きないというのなら、私もそのまま無理強いをする気はありません。ですがそれでも断る前に、もう一度だけ考えていただきたいのデース。本当に、それでよろしいのですか？」

諭すような言葉に、また顔を上げる。理屈ではなく直感で、これが僕に与えられた最後のチャンスなのだと思した。ここでもう一度立ち上がるか、勝負に背を向けて心の折れた負け犬のままにいるか。この差しのべられた手を払いのけることは簡単だけど、その代償は計り知れないほどに大きいだろう。

だけど、それでも。全身を覆って離さない、気怠い疲労が上回る。このまま、敗者のままでいたい。もう2度と目を覚まさず、ぬるま湯な世界の中で自分の傷をみじめにしたらしく舐めまわしながら無為に時間が経つのをただ眺めていたい。

だが、その欲求に身を任せることもまた、僕には許されなかった。まるで誰かに支えられるかのように、誰かが肩を貸してくれているかのように、体が勝手にぎこちなく、そしてゆっくりと立ち上がる。今のは、一体？

『わかっているだろうが、私たちではないぞ』

真つ先に思い当たった原因に先手を打った形で否定され、ぼんやりと周りを見回す。当然のことながら、遊戯さんとペガサスさんの他には誰もいない……いや、今ほんの1瞬だけ、視界の隅で青い長髪が揺れたように見えたのは気のせいだったのだろうか。その箇所を注視しても、やはりそこには誰もいない。気配すらない。

だけど、それでも僕はこう思うことにした。とつくに成仏した彼女が、わざわざ腑抜けた僕の尻をけ飛ばしに来てくれたんだと。ああまったく、僕がすべてにやる気をなくしたきつかけとなった当の本人

まで、そうやって背中を押ししてくるとはね。結局、どこにも逃げ場はないってことか。ならこの勝負、僕のために受ける気力はなくなっても、彼女のために受けてみせよう。

「……遊戯さん。よろしく、お願いします」

「うん、よろしく。じゃあ、カットを頼むよ」

そうやって差し出されたデュエルキングのデッキを受け取り、僕も自分のデッキを渡す。デッキをシャッフルしながらも、こうして触っているだけでも感じる圧倒的なパワーに威圧されそうになる。やがて返ってきたデッキをデュエルディスクに戻すと、僕も手にしていたそれを本来の持ち主の手に渡す。1歩下がってデュエルを見守るペガサスさんの射抜くような鋭い視線を感じながら、5枚の手札を引く。ああ、この感触もあの時以来だ。それを楽しむ気分にはなれないけれど、それでも彼女がそう望むなら、今だけでも前を向いていよう。「デュエル！」

「僕の先攻！モンスターをセットして、さらにカードを2枚セット。さあ、かかっておいで！」

遊戯さんの立ち上がりは、モンスターと伏せカード……これだけでは、何とも言いようがない。伏せカードも気になるけれど、わざわざセット状態で場に出したところを見るとあのモンスターはリバースモンスターだろうか。それとも遊戯さんを代表する壁モンスターの1体、マシユマロンという線もあるか。なら、わざわざ正面から攻撃して効果を使わせることはないか。

「僕のターン。そのセットモンスターをリリースして遊戯さん、そちらのフィールドに粘糸壊獣クモグスを攻撃表示で特殊召喚します。そして相手フィールドの壊獣に反応して、手札から怪粉壊獣ガダーラを特殊召喚」

粘糸壊獣クモグス 攻2400

怪粉壊獣ガダーラ 攻2700

早速揃った2体の壊獣で、いきなり布陣を突き崩す。だけどこれだけじゃ終われない、まだ僕には召喚権が残っている。

「さらに、ツーンヘッド・シャークを召喚。先に言っておきますが、この

カードは2回攻撃の能力を持っています」

「僕のモンスターを除去したうえで自分も大型モンスターをコスト無しで特殊召喚……なるほど、なかなかやるね」

「お褒めいただきまして。このままバトルフェイズに……」

「いや、このターンは通さないよ。トラップ発動、重力解除！表側表示のモンスター全ての表示形式は入れ替えられる！」

「躲された……」

怪粉壊獣ガダーラ 攻2700↓守1600

ツーヘッド・シャーク 攻1200↓守1600

粘糸壊獣クモグス 攻2400↓守2500

攻撃表示だった3体のモンスターが一斉に守備体勢を強要され、せっかくのバトルフェイズも攻撃可能なモンスターが存在しないまま流れてしまう。全ての攻撃が通ればいきなり遊戯さんのライフを半分以上削ることもできたけれど、さすがにそれは調子が良すぎたか。そしてまずいことに、ガダーラの守備力はクモグスの攻撃力どころか並みの下級アタッカーすら下回り、ツーヘッド・シャークと同じ数値の1600。とはいえ、僕の手には防御札はない。

「なら、ターンエンドです」

「エンドフェイズにトラップ発動、リミットリバーズ！この効果により僕の墓地から、攻撃力1000以下のモンスター1体を攻撃表示で特殊召喚できる。甦れ、マシユマカロン！」

伏せてあったもう1枚のカードが発動され、シヨツキングピンクの巨大なマカロン型モンスターがクモグスの隣に並ぶ。このターンの攻防はまだほんの挨拶みたいなもの、ここからが本番だろう。

マシユマカロン 攻200

清明 LP4000 手札：3

モンスター：怪粉壊獣ガダーラ（守）

ツーヘッド・シャーク（守）

魔法・罫：なし

遊戯 LP4000 手札：2

モンスター：粘糸壊獣クモグス（守）

マシユマカロン（攻・リミット）

魔法・罨：リミット・リバース（マシユマカロン）

「僕のターン、ドロー！」

ここで引いたカードを見た遊戯さんが、なぜか後ろのペガサスさんの方をちらりと見る。ペガサスさんも何が言いたいのか察したらしく、すぐに重々しく頷いて見せた。意思疎通が成り立つ中で1人話に取り残される僕に、遊戯さんが向き直る。

「ごめんごめん。ただ、本当にこのカードを使っているのか少し確認したくてね」

「確認？」

これは遊戯さんと僕のデュエルなのに、ペガサスさんの意見がなぜ必要になるのだろう。余計に訳が分からなくなる中で、遊戯さんが動いた。

「僕はこのマシユマカロンを守備表示に変更し、この瞬間リミット・リバースのさらなる効果を発動。蘇生モンスターが守備表示になった時、このカードと蘇生モンスターをまとめて破壊する！」

マシユマカロン 攻200↓守200

せっかく呼び出されたマシユマカロンが、守備表示になった瞬間に自壊する。だがその別れた欠片がもそもぞと動き出し、まったく同じ2体のマシユマカロンに増殖した。

マシユマカロン 守200

マシユマカロン 守200

「そしてマシユマカロンは1ターンに1度、破壊された時に分裂復活する。これで僕の間には、3体のモンスターが揃った！」

「3体……？」

武藤遊戯、いまだ残る召喚権、そして場には3体のモンスター。とくれば、それらの符号が示す意味は1つしかない。でも、そんなはずはない。あのカードは消失した、そう聞いている。

「天空に雷鳴轟く混沌の時、連なる鎖の中に古の魔導書を束ね、その力無限の限りを誇らん——オシリスの天空竜、召喚！」

ここは室内だというのに、激しい雷鳴が轟いた。3体ものモンス

ターがすべてリリースされ、そのかわりに現れた鮮烈な雷光に照らし出されるあの赤い姿は、まさに究極のモンスター。いや、モンスターなどと呼ぶのもおこがましいか。数あるデュエルモンスターズの中でも頂点に位置し規格外とされる存在、三幻神のうち1体……オシリスの天空竜。そしてその攻守は、プレイヤーの手札1枚につき1000ポイント……つまり遊戯さんの手札は2枚だから、そのどちらも2000となる。

オシリスの天空竜 攻?↓2000 守?↓2000

「ど、どうして神のカードが……!」

「それは私からお答えしましょう。ユーがフランツ、いえ、邪神アバターによる恐るべき事件を解決してくれてから、私は考えたのデス。実際のカードとして完成させていないはずのアバターがああして自我を持ってしまった以上、同じくかつての私が着想だけ残しておいた残る2枚の邪神カード……オシリスの天空竜に対応する邪神イレイザー、そしてオベリスクの巨神兵に対応する邪神ドレット・ルート。その2体もいつか第2、第3のアバターとしてあのような事件を引き起こすかもしれない。元はといえばそのような存在を作り出した私の責任ですが、私はその可能性を恐怖しました」

「嘘でしょ、あんなのがまだ2枚も……?」

アバターの持つ、あの悪夢のような強さを思い出す。どんな相手よりも常に攻撃力が100高くなる、不定形にして無敵の邪神。正直もう1度奴と戦ったとして、また勝てるビジョンがさっと思ひ浮かばない、あれはそれほどの強敵だった。それと同格の存在があと2体、いつ目覚めてもおかしくない状況にあつたというのか。乾いた僕の声に自責の念からか目を伏せ、それとこのオシリスがどう関係しているのかの説明が続く。

「はい。ですが3幻神の研究を続けるうち、ある変化が起きていたことに気が付いたのデス。あれは、神のソリッドビジョンを調べている最中のことでした。ある研究員がほんの不注意から、ソリッドビジョン投影のためデュエルディスクに置かれていたその神のレプリカを素手で触ってしまったのです。私も彼もその後起こるであろう

う悲劇を恐れましたが、バット、彼に神の裁きが下ることはついにありませんでした。しかしこれは、コピーカードの使用者は神の怒りに触れるという従来の常識に反していマース。そこで私は慎重に実験を繰り返した結果、少なくとも遊戯ボーイが今召喚しているコピーカードからは使用者に裁きをもたらず能力が消えていることに気が付きます」

「で、でも、どうしてなんですか？」

食いつく僕に、ゆっくりと首を振るペガサスさん。

「それはわかりません……しかし、私はある一つの仮説にたどり着きました。恐らく神のカードは、たとえコピーであっても自らの存在を脅かす邪神の存在に気が付いたのでしょう。そこでまたフランツのような犠牲者が生まれるよりはと、裁きの力を緩め邪神の誘惑に屈することなく自らを使いこなせる真のデュエリストを求めたのだ、と。そこで私は今話をすべて明らかにしたうえで、遊戯ボーイに白羽の矢を立てました」

「だから僕は、こうしてこの神のカードを再びデッキに入れているのさ。もつともさすがにレプリカだから、本物よりは効果も控えめになっているみたいだけど」

「その通りデース。例えばそのオシリスの場合、上級呪文にあたる魔法、罠の効果こそーターンのみ受け付けるもの他のカード効果は完全に受け付けない、いわゆる神の耐性は削除。またその代表能力である召雷弾も、真の姿とは異なり守備表示で召喚されたモンスターには発動できないように調整を施してありマース」

その言葉に、アバター戦で出てきたラーを思い出す。そういえばあのラーも、バトルシティのビデオで見たときにはあつたけどコピーカードになった時に消えた耐性を神縛りの塚で補ったり、アドバンス召喚時にリリースしたモンスターの攻守を束ねる能力が消えていたっけか。

だけどあのラーも、そしてこのオシリスも。とてもじゃないがこの迫力、これが人の手で弱体化させられた神だとは思えない。まだ召喚されただけで攻撃すらしていないというのは、全身の毛が逆立ち肌が

焼けつくようなひりひりした感覚がする。

「じゃあ、デュエルを続けようか。オシリスで怪粉壊獣ガダーラに攻撃、超電導波サンダー・フォース！」

2つの口が上下に重なるオシリス独特の頭部のうち下側の口がおもむろに開き、その奥から溢れんばかりの力が迸る。そしてそこから放たれた雷撃が、視界を白く染めガダーラを消し飛ばした。

オシリスの天空竜 攻20000↓怪粉壊獣ガダーラ 守16000  
(破壊)

「ガダーラ！」

「これで僕は、ターンエンド」

オシリスの召喚、さらにガダーラが倒されたことで戦局は一気に遊戯さんの側に傾いた。いくらツーンヘッドでも、さすがに手札を2枚保持した状態のオシリスを相手するのは荷が重いだろう。さて、あのオシリスとどう戦うべきか……ここまで考えたところで、いつの間にかすっかりこの勝負に集中している自分に気が付いた。確かに余計なことを考えていてどうにかなる相手でないのはその通りなのだが……こういう時に役に立つかどうかはともかく一緒に戦略を練ってくれるあの神様がいてくれないのは、やっぱり少し心細い。

『マスターがデレたと聞いて。どうだ、少しはマシな気分になれたか？』

「チャクチャルさん！」

ひよこっと思考に割り込んできた地縛神に、思わず驚きの声が出る。釘を刺しに来たのは例外としても、さっきの去り際の言葉からいってもう当分会えなくてもおかしくないと思っただけに、これは本当に不意打ちだった。

『そりゃあ、マスターがやる気になったのなら私も協力を惜しむつもりはないさ。大体、マスターは根が単純だからな、それなり以上の強敵をぶつけておけば、あとはこう……闘争本能的な？勝手に燃え上がって勝手に元気が出るなんてわかりきっていたからな。それを自分でやろうとしないから、いつまでたってもあの調子だったというだけ。ましてや相手はデュエルキング、この世界で用意できる相手と



しては最高峰だろう。でかしたぞ、マスター』

「……ありがとう」

なんか言葉の端々から微妙に馬鹿にされているような気もするけど、まあ今回ばかりはあれだけ心配させたのだから何を言われても言い返す資格はない。チャクチャルさんの言った通り、ほんの10分前と比べてもだいぶマシな気分になれたのは確かだ。もちろんまだ絶好調とまでは言えないし、ペガサスさんの言っていたこのデュエルを通じて見つけられる何かというものもわからない。だがこの感覚は、まるでオシリスの一撃が僕の心の奥底にうじうじと淀んでいたものを幾分祓ってくれたかのようなのだ。それとも、これがラーをアバターの手から取り戻したことに関する三幻神なりの借りの返し方だったのかもかもしれない。

「ヤーて……ドロー！」

とにもかくにも、今欲しいのは壊獣だ。神だろうが仏だろうが、リリースの魔の手から逃れることは不可能。結果論とはいえせつかく初手に来た2枚を早々に使ってしまったことが、つくづく悔やまれる。

『む、珍しいな。まだ少し腕が鈍っているか?』

「いや、これだって悪くないさ。カードを1枚伏せてターンエンド」

どうやら、このターンは大人しくしているということらしい。そんなデッキのメッセージに従い、素直にセットのみでターンを終える。もちろん、何も考えていないわけではない。次のターンは生き残れるという、それなりの算段あつてのことだ。オシリスの天空竜は攻撃力が手札に依存するがゆえに、召雷弾で牽制しながらモンスターを並べて一気に勝負をつけようにもあまり手札を派手に使うことができないジレンマを抱えている。なにせ手札1枚ならその攻守はたったの1000、ツーヘッドすら突破できないほどの数値になるのだから。

清明 LP4000 手札：2

モンスター：ツーヘッド・シャーク（守）

魔法・罫：1（伏せ）

遊戯 LP4000 手札：2

モンスター：オシリスの天空竜（攻）

魔法・罫：なし

「僕のターン。ベリー・マジシャン・ガールを召喚！」

ベリー・マジシャン・ガール 攻400

ドロー、そして召喚されたのは十代のカードエクスルーダーよりもなお幼い、幼女どころかまだおしゃぶりをくわえた赤ん坊のようなちっこい魔法少女。オシリスのステータスもそれに合わせて1瞬だけ3000になり、またすぐ2000に戻る。

「そして召喚に成功したベリー・マジシャン・ガールは、デッキからマジシャン・ガール1体をサーチできる。来い、ブラック・マジシャン・ガール！」

なるほど、サーチ効果持ちか。確かにそれなら手札を減らすことなく、なおかつ戦線を広げることができる。これによりオシリスの攻守がまた3000に上がる……だが、遊戯さんの側にそれで終わらせる気はないようだった。

「そして、僕のフィールドに存在する魔法使い族モンスター1体をリリースする。これにより手札から、沈黙の魔術師―サイレント・マジシャンを特殊召喚！」

魔法幼女の姿が消え、うっつかわって青と銀を基調とした体のラインがくつきり浮き出る服装の理知的な美女といった趣の魔法使いが特殊召喚される。その攻撃力は、ベリーよりは高いもののそれでも1000止まり……いや、さらにその数値が上がっていく。

「沈黙の魔術師の攻撃力は、僕の手札1枚につき500アップする。よって今の攻撃力は、2000！」

沈黙の魔術師―サイレント・マジシャン 攻1000↓2000

「攻撃力2000が2体……」

『それだけではないな。沈黙の魔術師は1ターンに1度、相手の魔法を無効にして破壊できる。そしてオシリスの前では、守備表示で召喚しない限り攻撃力2000以下のモンスターの起動効果は使えないも同然……気をつける、マスター。あれは、ただ漠然と合計攻撃力が高くなるようにモンスターを並べているのではない。着実に、こちら

の打つ手を1つ1つ潰しに来ている』

強い。ただオシリスのカードパワーに任せてがむしやらに突っ込んでくるのではなく、かといって複雑なコンボだけに頼り切るわけでもない。要所要所でとてつもなく重いはずの神のカードを難なくアドバンス召喚したかと思えば、こうして最低限の手札消費で別のモンスターも並べてみせる。テーマデッキでもなんでもない、言ってしまうと特定の動きが存在しないデッキにもかかわらず、まるでこうなることが最初から予定調和であったかのように無駄のない展開。それを可能にするカード知識と分析力、そして咄嗟の判断力と運。どうしてこの人がデュエルキングと呼ばれているのか、その底知れなさを改めて思い知った。

「バトル、まずはオシリスでツーヘッド・シャークに攻撃！」

オシリスの天空竜 攻2000↓ツーヘッド・シャーク 守1600 (破壊)

再びオシリスの口が開き、放たれる雷撃がガダラの時のようにツーヘッド・シャークに襲い掛かる。この攻撃はこちらが守備表示だからダメージは受けない、だけどこれで僕の場合にモンスターはいなくなつた。

「沈黙の魔術師で攻撃、サイレント・バーニング！」

女魔術師の全身がまばゆい白い光を放ち、その光の中で振り抜かれた彼女の杖から白い衝撃波が飛ぶ。だけど、それをただ受けてやるほど僕だって甘くはない。

『不幸中の幸いなのは、ロックされた箇所が1ターンに1度の魔法に1部のモンスター効果と、トラップに対して無力であることだ。となれば、まだ勝機はある』

「わかっているって。永続トラップ、グレイドル・パラサイト！このカードの効果により、相手の直接攻撃宣言時に僕はデッキからグレイドルを攻撃表示で特殊召喚する！出番だよ、グレイドル・イーグル！」

その攻撃が届くより先に、丁度その間に割り込むような位置で銀色の水たまりが床から湧く。もぞもぞと震えながら盛り上がるそれは、すぐに黄色い鳥を模したグレイドルへと変化した。

グレイドル・イーグル 攻1500

「壁モンスターかい？ だけど相手フィールドにモンスターが特殊召喚されたことで、オシリス第2の口が開く。グレイドル・イーグルに特殊攻撃、召雷弾！」

オシリスの上側の口が開き、先ほどのような雷撃とは違う雷の光弾が発射される。空気を歪ませるほどの質量で迫るそれが、現れたグレイドル・イーグルの姿を瞬く間に呑み込んだ。

グレイドル・イーグル 攻1500↓0（破壊）

『今だ！』

「この瞬間、モンスター効果で破壊されたイーグルの特殊効果発動！ 相手モンスター1体に寄生し、そのコントロールを得る！ そしてこの効果は墓地でモンスター効果として発動し、装備魔法として適応される。つまり、例え沈黙の魔術師でも止めることは不可能。僕がこの効果で選ぶのは、沈黙の魔術師だ！」

できればこちらとしても、ここはオシリスを奪いたかった。だけど僕の手札は2枚で、このターンにパツと使える手札増強のカードもない。そして沈黙の魔術師は確か、破壊時に手札がデッキから新たなサイレント・マジシャン1体を特殊召喚する能力を持っている。

つまりここでオシリスを奪っても相打ちの起点に持つていかれるばかりか、十中八九がら空きになった僕に後続として呼び出される攻撃力3500、サイレント・マジシャン LV8のダイレクトアタックが襲い掛かるといふ最悪の結果が起きるだけになっていた。だからこれが、今の僕にできる最善手だ。最善手の、はずだった。だけど遊戯さんの、デュエルキングの戦略は、そんな浅い考えを軽く上回る。優しい表情のほずなのに見ている側の背筋が寒くなる、そんな微笑を浮かべつつ1枚のカードを手札から発動する。

「速攻魔法、ディメンション・マジック！」

「そのカードは……！」

「そう。僕のフィールドに魔法使い族が存在するとき、モンスター1体をリリースすることで手札から別の魔法使い族を特殊召喚できる。効果の対象となった沈黙の魔術師をリリースし、ブラック・マジシヤ

ン・ガールを特殊召喚！」

『これは……驚いたな。ロックどころか、もしグレイドル・パラサイトでの妨害がなければこのターンで一気にけりをつけるつもりで来ていたのか』

さすがのチャクチャルさんも、この容赦のない攻めっぷりには閉口したように呟く。一方フィールドではグレイドルによる寄生を回避した沈黙の魔術師が、今度は明るい金髪の魔法少女へと入れ替わっていた。今はまだ墓地にその師であるブラック・マジシャンが存在しなためその効果が生きることはないが、それでもその攻撃力は2000ある。ああ全く、どうせなら翔にも見せてやりたい光景だ。

ブラック・マジシャン・ガール 攻2000

オシリスの天空竜 攻2000↓0 守2000↓0

「ブラック・マジシャン・ガールで攻撃、黒<sup>ブ</sup>・魔<sup>ラ</sup>・導<sup>ク</sup>・爆<sup>バ</sup>・裂<sup>イ</sup>・波<sup>ニ</sup>！」

「ぐっ……！」

ブラック・マジシャン・ガール 攻2000↓清明（直接攻撃）

清明 LP4000↓2000

「……まさか、そんなカードをずっと隠し持っていたなんて。完全に一本取られました」

「いや、あの短時間でオシリスの召雷弾を逆利用するコンボを思いついて、しかもそれを使ってみせた君も凄いよ。3年前に僕がオシリスの効果を跳ね返した時は、事前に対策を練る時間もあつたわけだし」

遊戯さんの言葉に、驕りや欺瞞の色はない。おそらく、本当に本気で賞賛の言葉をかけてくれているのだろう。この謙虚さも、さすがは王者の風格というべきか。

「僕は、これでターンエンド。さあ、君の番だよ」

「わかってます……じゃあ、ここからは逆転劇と洒落込ませてもらいますよ！僕のターン、ドロー！」

状況は圧倒的に不利……でも、諦めようとは思わなかった。感じることを拒んで久しかったデッキとの、カード1枚1枚との一体感。考えてみれば、神ならずでにランクが1段上のラーだつて僕たちは倒し

たんだ。なら、今更恐れるものは何もない。

「……って、これ」

『うわ、まーたそういうややこしくなることをするんだからこのマスターは……』

あ、やつちまった。真つ先に浮かんだのは、そんな感想だった。この大事な局面で引いたドローカードは、よりにもよって七皇の剣。確かに超強力なカードではあるけれど、いくらなんでもデッキの方がこれは変な方向に張り切りすぎているのではないだろうか。でも確かに、ついさつきペガサスさんに見せた後でデッキ内にいっしょよくたにして入れたのはほかでもない僕自身だ。あの時はどうせもうデュエルなんてやらないだろうと思ってたから構わず突っ込んでしまったのが、完全におかしな方向に転がったか。

……この世界では誰も知らない、知るわけのないエクシーズモンスターのサポートカード。しかもドローしたターンのスタンバイフェイズに公開することでのみ効果が使えるという関係上、とりあえず保留していざとなったら使うことも辞さない、というような使い方もできない。このターンで使うか、諦めて手札で腐らせるか、だ。でもここでドロー一枚を完全に無駄にするような贅沢をしてもどうにかなるような相手……なわけがない。

完全にフリーズした僕に助け舟を出したのは、他でもないペガサスさんだった。

「清明ボーイ。ユーが何のカードを引いたのか、私には心当たりがある。リマース。ユーがそれを躊躇うのにも、何か理由があるのでしょうか……ですが私に、デュエルモンスターズの生みの親に、このゲームの持ち得る新たな可能性の力を、ぜひ見せていただきたいのデース。それでよろしいですね、遊戯ボーイ？」

「よくわからないけど、清明君。遠慮はいらないから、君の全力でかかっておいで。僕も全力で、1人のデュエリストとしてそれに応えるから。大丈夫、君がそうしてほしいなら、僕たちはここで起こることを誰にも言わない。それにデュエルモンスターズがらみの不思議なことには、もう慣れっこだからさ」

2人の言葉を頭の中で繰り返し、ついで手の中の七皇の剣を見る。  
……ま、いいか。それに、僕だつて知りたい。この新たな力を得た僕が、最強のデュエルキング相手にどこまでやれるのか。掛け値なしに本気の全力で、この戦いを終えたい。

「……ええい、もうどうにでもなれ！僕が引いたカードは、RUM―七皇の剣！このカードはドロ―したスタンバイフェイズからメインフェイズ開始時まで相手に公開することでのみ、その効果を発動できる！」

「ドロ―した時に見せることで効果を発動できる魔法カード？」

「その通り。遊戯ボーイ、私達は今、デュエルモンスターの新たな時代の幕開けを目にしているのデ―ス」

さも知つたような言い方だが、ペガサスさんだつてこのカードを見たのはついさつきが初めてのはずだ。まったく調子がいいというかなんとというか、ずるい大人だ。それはともかく七皇の剣が発動に成功したことで、空に七つの星が赤い光を放つ。白い箱舟が地底から浮上し、その中央からあの時と同じように黒い人型のものが射出される。「このカードの効果によりエクストラデッキから直接オーバーハンドレッド・カオスナンバーズを特殊召喚し、さらにそのモンスターをカオス化させることができる。霖雨蒼生の時は来た、想い託されし不沈の守護者！カオスナンバーズ C N o . 1 0 1、サイレント・オナーズ・ダークナイト S ・ H ・ D a r k K n i g h t !」  
数日ぶりに会う漆黒の騎士の背中では、やはりただただ頼もしかった。オシリスの口が開き再び放たれる召雷弾を、感電しながらもその槍でがっしりと受け止める。

C N o . 1 0 1 S ・ H ・ D a r k K n i g h t 攻 2 8 0 0 ↓  
8 0 0

「手札1枚で召雷弾を耐えきれぬ攻撃力のモンスターを特殊召喚するとはね。それに、ナンバーズ、だっけ？確かに、聞いたことのないカードだ。これが、君の手にした新たな時代の幕開けになるカードかい？」

「ええ。ですがダークナイトの力は、まだこんなものじゃないですよ！効果発動、ダーク・ソウル・ローバー！―ターンに1度相手ファイ

ルドに特殊召喚されたモンスター1体を、自身のカオスオーバレイ・ユニットとして吸収する！」

ダークナイトが今回その槍を向けたのは、ブラック・マジシャン・ガールだった。というかそもそも、アドバンス召喚された神には通じないし。ドラゴキユートの時と同じく全身紅いオーラに包まれた魔法少女がクリスタルへと変換され、ダークナイトの足元に配置される。

CNo. 101 S・H・Dark Knight (1) ↓ (2)

「吸収能力、か」

あまり驚いた様子もないのは、そもそもここにいるペガサスさんのエースからしてサウザンド・アイズ・サクリファイス……モンスター吸収の元祖ともいべきカードの使い手だからだろう。そして遊戯さんは、そのペガサスさんを正面から破ったことのある経験の持ち主だ。おそらく今だってその脳内ではこの光景に衝撃を受けるでもなく、どうやって僕のダークナイトを倒すかだけを考えているはずだ。「だとしても、このターンにやることは変わらないね。ダークナイト、その手で神を叩き伏せろ！オシリスの天空竜に攻撃、ニライカナイ・ファンタズム！」

反撃に放たれたサンダー・フォースを紙一重で回避し、漆黒の槍術師が振るう剛槍が神の開いたままの口内からその脳天まで深々と突き刺さる。1瞬の沈黙の後に神の瞳から次第に光が消え、その巨体もまた空に浮くだけの力を失いその場に崩れ落ちた。

CNo. 101 S・H・Dark Knight 攻800 ↓ オシリスの天空竜 攻0 (破壊)

遊戯 LP 4000 ↓ 3200

「よし……よくやった、ダークナイト！」

いまだ効力を発揮する召雷弾のせいで、神の攻撃力は0であったにもかかわらずダメージは微々たるものだ。でも重要なのはそこではない、オシリスをこの手で打ち倒したというその事実だ。

またもう1度、デュエルを通じてこんな気分になれるなんて。昨日どころかつい30分前の僕に言ったとしても、到底信じられない話だ



ろう。

清明 LP2000 手札：2

モンスター・CNo. 101 S・H・Dark Knight(攻・  
2)

魔法・罫：グレイドル・パラサイト

遊戯 LP3200 手札：0

モンスター：なし

魔法・罫：なし

「オシリスを……なるほど、でも僕だって負けないよ。ドロ、エルフの聖剣士を召喚！」

エルフの聖剣士 攻2100

オシリスが倒れ、手札も0枚の遊戯さんがここでドロしたの、レベル4にして攻撃力2100を誇る二刀流の剣士。しかもあのモンスター、確か効果が……。

「バトル、エルフの聖剣士でダークナイトに攻撃！」

いくら軽装とはいえ鎧を身に着けた剣士とは思えないほどに優美な動きで聖剣士が迫り、その剣を振りかざす。対するダークナイトも自身の槍で迎え撃とうとするも、その動きはあからさまに精彩を欠いている。いまだ神の裁き、召雷弾のダメージが深刻に残っているのだ。

エルフの聖剣士 攻2100↓CNo. 101 S・H・Dark

Knight 攻800 (破壊)

清明 LP2000↓700

「この瞬間、相手に戦闘ダメージを与えたエルフの聖剣士の効果を発動。デツキから、場のエルフの剣士の数だけカードをドロする」

「ぐ……でもこっちも、破壊されたダークナイトの効果発動！カオスオーバーレイ・ユニットを持ったこのカードが破壊され、なおかつ墓地に進化前のNo. 101 サイレント・オナズ・アークナイト S・H・Dark Knightが存在するとき、墓地から蘇り僕のライフを回復する！僕たちはまだまだ倒れない、リターン・フロム・リンボ！」

CNo. 101 S・H・Dark Knight 攻2800

清明 LP700↓3500

地面にぼつかりと暗い魔方陣が開き、辺獄の底より不死身の槍術師が蘇る。これでダークナイトの攻撃力はリセットされ、エルフの聖剣士のそれを大きく上回った。次のターンで一気に攻め込んで……だがその思考を、天から降り注ぐ光の剣が中断させる。

「魔法カード、光の護封剣！3ターン後に自壊するまでの間、相手プレイヤーの攻撃を禁止する」

「また……！」

ダークナイト、そしてそれを封じる無数の光の剣。あの嫌な記憶を思い出してちよつと顔がこわばるが、それでも強いて自分を奮い立たせる。しっかりとしろ、僕。あのデュエルとこのデュエルは別物、ちよつと似たシチュエーションになったからといちいちトラウマになつてなつてたらきりが無い。

「僕のターン！む……！」

『あらら』

手札は3枚もあるというのに、護封剣を破壊できるカードがない。サイレント・アングラー、水精鱗マーメイド―ネレイアビス、そして今引いた雷撃壊獣サンダー・ザ・キング。1枚1枚はいいカードだけど、今手札にあつてこれをどうしろと？いやまあ、やる事が無いわけではないけれど。

「ちよつと勿体ないけど、しかたないか。エルフの聖剣士をリリースして、雷撃壊獣サンダー・ザ・キングを遊戯さんの場に特殊召喚！そして相手フィールドに特殊召喚されたサンダー・ザ・キングを対象に、このターンもダーク・ソウル・ローバー！」

CNo.101 S・H・Dark Knight(0)↓(1)

攻撃できるわけでもないのに、自分で出して自分で吸収して……コンボといえば聞こえはいいが、ただのアド損気味な自作自演だ。それでもこのダークナイトは今の僕にとって生命線、まだ力尽きさせるわけにはいかない。

「ターンエンドです」

宣言と同時に光の剣の一部が消えていき、ほんの少しだけフィールド

ドがスッキリする。とはいえいまだ3分の2は残り続けており、僕と  
ダークナイトの行動を阻害しつづけている状態だ。

清明 LP3500 手札：2

モンスター：CNo. 101 S・H・Dark Knight(攻・  
1)

魔法・罫：グレイドル・パラサイト

遊戯 LP3200 手札：0

モンスター：なし

魔法・罫：光の護封剣

「僕のターン。レッド・ガジェットを準備表示で召喚し、効果発動。  
デッキからイエロー・ガジェット1体をサーチして、ターンエンド」

レッド・ガジェット 守1500

守りに徹する遊戯さんが呼び出したのは、場に出た時に仲間のサー  
チを行う3色ガジェットのうち1体。デッキ圧縮と手札増強を兼ね  
る、厄介な効果だ。それも、こちらの攻撃が封じられているこの状況  
では毎ターンコンスタントにアドバンテージを積み重ねられる。

「僕のターン！ 永続魔法、強欲なカケラを発動。ターンエンドです」

これは護封剣の除去なんて考えずに、どっしり構えているというお  
告げだろうか。確かにこの状況で、効果発動までに2ターンかかる強  
欲なカケラはマツチしていると見えなくもないが。でもどうせ遅行  
性のカードなら、グレイドル・インパクトの方が引きたかったのだが。  
ともあれこのエンドと共に残る剣のうちさらに半分が消え、フィー  
ルドの包囲もだいぶスカスカになってきた。このままだと本当に、何  
かするより先に時間切れで自壊する方が早そうだ。

清明 LP3500 手札：2

モンスター：CNo. 101 S・H・Dark Knight(攻・  
1)

魔法・罫：グレイドル・パラサイト

強欲なカケラ

遊戯 LP3200 手札：1

モンスター：レッド・ガジェット(守)

## 魔法・罨：光の護封剣

「僕のターン。イエロー・ガジェットを守備表示で召喚し、また効果を発動。これで、デッキからグリーン・ガジェットを手札に。さらにこのイエロー・ガジェットを対象に魔法カード、同胞の絆を発動！」

『ほう……い』

感心するチャクチャルさんの声に反応したかのように黄色い歯車モンスターが腕を振り上げ号令をかけると、それに応えた2色の歯車がさらにデッキから呼び出される。ただしそれもノーコストとはいかず、同時に遊戯さんのライフもみるみるうちに減っていく。

遊戯 LP3200↓1200

レッド・ガジェット 守1500

グリーン・ガジェット 守600

「僕のライフ2000とこのターンの展開、及びバトルフェイズをコストに、選んだ下級モンスター1体と同じ属性、種族、レベルを持つモンスター2体を特殊召喚する。さらにこの特殊召喚したガジェットたちの効果で、デッキからそれぞれイエロー、レッドのガジェットを手札に。これでターンエンドだよ」

「いいんですか？いくら護封剣があるからって、2体も特殊召喚して」  
思わずそう聞いた僕に、遊戯さんがふつと笑って返す。

「その君のモンスター、ダークナイトの特性はわかったからね。カオスオーバーレイ・ユニットが1つでもあるかぎり蘇生効果を使うことができるなら、最初に1体を吸収された時点でその意味では対策をする意味は薄い。なら、ここは準備に徹させてもらうよ。それにいくら不死身といつてもどうやら1ターンに2回の破壊、あるいは破壊以外の除去には対応しきれないようだしね」

「……」

無言ではあったが内心、その発想に舌を巻く。たったあれだけのターン見ていただけで、もうダークナイトの特性と弱点をここまで把握したというのかこの人は。実際、遊戯さんの言葉はすべて正しい。正しいだけに、その大人しそうな顔に隠れた洞察力と行動力が恐ろしい。

「さあ、君のターンだよ」

「は、はい！」

『気圧されるな、マスター。ダークナイトの効果の穴は、元より見ていれば自然と気が付く程度のもの。それが早いか遅いかの違いだけだ』  
「そ、そりゃわかってるんだけどさあ……このターン通常のドロウをしたことで、強欲なカケラに強欲カウンターが1つ乗ります。さらにこのターンのダーク・ソウル・ローバーで、グリーン・ガジエツトを吸収！」

確かに返す言葉もないけれど、でもやっぱり怖いものは怖い。とはいえこちらにどうすることもできないのもまた事実、まずはできる事を1つ1つやっていくまでだ。

……このデュエルは、これまで多かつた即座に決着がつくタイプとは全く異なる異質な勝負だ。長く複雑で険しい戦況を、正解かどうかもわからず1歩1歩踏み締めながら進めていく。どの行動が正解なのか、それとも失敗だったのか、それは最後までわからない。派手なワンキルの恐怖とは無縁だけれど、どこで道を踏み外して押し切られるかわからない緊張感が常に付きまとう。

強欲なカケラ(0)↓(1)

CNo. 101 S・H・Dark Knight (1)↓(2)

そしてドローカードは、幽鬼うさぎ。できればガジエツト展開前に来てほしかったけれど、だったとしてもサーチが止められない時点で大して変わらないか。このまま手札で温存して、このうさぎちゃんにはまたしかるべき時に働いてもらおう。カード内のイラストに彼女の精霊がだぶって見え、前回のデュエルに参加できなかったこともあってかふんすとやる気たつぷりに無い胸を張る様子が見えた。

「ターンエンドです」

そして、ついに3ターンが経過したことで全ての護封剣が消える。まさか本当に自壊するまで待つことになるとは思わなかったが、この稼がれた時間が後々まずいことにならないか。遊戯さんの手札はひたすらガジエツトのみと完全に割れているものの、だからといって安心はできない。

清明 LP3500 手札：3

モンスター・C.N.O. 101 S・H・Dark Knight(攻・  
2)

魔法・罫：グレイドル・パラサイト

強欲なカケラ(1)

遊戯 LP1200 手札：3

モンスター：レッド・ガジェット(守)

イエロー・ガジェット(守)

レッド・ガジェット(守)

魔法・罫：なし

「僕のターン。手札抹殺を発動！」

やられた。互いの手札をすべて捨ててその枚数だけドロウする、あの意味では究極の手札交換カードに一気に背筋が寒くなる。まさか遊戯さん、あの護封剣を発動した時からこれを狙って、ずっと手札補充にターンを費やしていた？いや、そんなはずはない……と思っていた。

とにかく遊戯さんの手札から3枚のガジェットが一齐に墓地に送られ、僕の手札からは幽鬼うさぎにネレイアビスと貴重な手札誘発2枚が捨てられる。これで遊戯さんの手札は未知の3枚、そして場には3体のガジェット。嫌でも蘇る、先ほどのオシリスの威圧感。オシリスは既に倒れたから、残る神はオベリスクの巨神兵とラーの翼神竜。だけど、神のカードはとにかく重い。使い手の遊戯さんだって、それはよくわかってはいるはずだ。2種類目の神が、あのデッキに入っているという証拠はない。ただ逆に、入っていないという保証もない。結局のところ、何もわからないのだ。

「さらに、2体のレッド・ガジェットをリリースして……」

2体。ということとは、神ではないということだ。その事実になかなからずほっとするが、すぐそんな感情を抱いたことを後悔した。さつき遊戯さんがダークナイトの効果の穴に付いてわざわざ確認していた、その意味をもっとよく考えるべきだったのだ。

「来い、破壊竜ガンドライ！」

『ガンドラ……！まずい物を引かれたな、これは』

破壊竜ガンドラ 攻0

ガンドラ。漆黒の巨体を持つ、禍々しき破壊の竜。そしてその効果は、ダークナイトの不死身をもってしてなお上回る。

「ガンドラは僕のライフを半分払うことで、自身以外のフィールドのカード全てを破壊しゲームから取り除き、その枚数に応じて自身の攻撃力を上昇させる。そしてダークナイトの蘇生効果は、除外からでは発動できない」

「くっ……！」

「効果発動、そして攻撃！デストロイ・ギガ・レイズ！」

その体中からまばゆく紅い破壊の光を放射し、フィールドの全てを焼き払いにかかるガンドラ。ダークナイトが、強欲なカケラが、グレイドル・パラサイトが、そして巻き添えを食う形で遊戯さん自身のイエロー・ガジェットが、その光の中に断末魔の声すら上げる暇なく消えていく。さらにその光の余波は、相手プレイヤーである僕にも襲い掛かった。

遊戯 LP1200↓600

破壊竜ガンドラ 攻0↓1200↓清明（直接攻撃）

清明 LP3500↓2300

「なるほど、カオスオーバーレイ・ユニットはフィールドのカードとしては扱わないのか。カードを2枚伏せて、ターンエンド。そしてこのエンドフェイズ時、召喚されたガンドラは墓地へ送られる」

どうやら、あの手札に追撃要因はいなかったらしい。フィールドを荒らし放題に荒らしていったガンドラもまた墓地で眠りにつき、これで遊戯さんの場はがら空き……だけど、とても素直には喜べない。あの2枚の伏せカード、あれは一体なんだ？ともあれ、まずはこのカードを使ってから考えるか。

「フィールド魔法、KYOUTOUウォーターフロントを発動。さらに魔法カード、強欲で貪欲な壺を発動。コストとしてデッキトップ10枚を裏側で除外し、カードを……」

「そこでトラップ発動、精霊の鏡！プレイヤー1人を対象にした魔法

効果を、僕の元に移し替える。コストは君に払ってもらうけど、2枚ドローの効果は僕が貰うよ」

「嘘?」

そんなピンポイントなカードを、よりにもよってこのタイミングで引いていたとは。僕のデッキが虚しく削られていき、その横で遊戯さんの手札が0から2枚に潤う。

KYOUTOUウオーターフロント(0)↓(2)

『なんとまあ、つくづくえげつない真似を。だが、見方を変えればこれで伏せカードは半分になったわけだ。つまり危険も半分、行くぞ、マスター!』

「……フィールドから墓地に2枚のカードが送られたことで、ウオーターフロントに壊獣カウンスターが2つ乗ります。魔法カード、埋葬されし生け贄!このカードの効果により互いの墓地からモンスターを1体ずつ除外し、それをリリース要因として最上級モンスターをアドバンス召喚します!」

互いのデュエルディスクからそれぞれ、幽鬼うさぎとオシリスの天空竜がはじき出される。これでよし、と。いくら神とはいえ、除外ゾーンまで追いやつてしまえばさすがに何もできないだろう。

「さあ、一気に終わらせるよ!七つの海の力を纏い、穢れた大地を突き抜ける!召喚、地縛神 Chacu Chacu Challenger!」

地縛神 Chacu Challenger 攻2900

KYOUTOUウオーターフロント(2)↓(3)

そして満を持して現れる、僕の神。フィールド魔法にリリース軽減カード、そして最上級モンスター。これだけのカードを一気に引き込めたことを考えれば、あの手札抹殺もこちらにとって悪い事ばかりではなかったかもしれない。

「……」

『私の召喚は通った、か。さて、どうする、マスター?』

だが、あと1歩。あと1歩のところまで追いつめたからこそ、最も警戒しなくてはならない。チャクチャルさんの言葉も、つまりはそういう意味だろう。あの伏せカード1枚に、手札2枚。チャクチャルさ



んはダイレクトアタッカーとしても使えるが、攻撃を放棄することでバーンを与えることもできる。そしてそのどちらを選んだ場合でも、それが通りさえすれば遊戯さんのライフは尽きる。目の前にいるのが並の相手であれば、まあ適当にその時の気分からどちらでとどめを刺すかを選んでいただろう。だが、あの人はなんといつでもデュエルキングだ。戦闘、効果、どちらに対する対抗策を引いてもおかしくない。

「壊獣カウンターが3つ溜まったウォーターフロントの効果で、1ターンに1回デッキから壊獣をサーチします」

時間稼ぎを兼ねてわざとゆっくりとガメシエルのカードをデッキから取り出し、それを見せたうえで手札に加える。考えろ、考えるんだ。どちらの選択の方が、リスクが少ないと言える？ 神のカードが入っている時点で、この学校に置いてある遊戯さんのレプリカデッキのレシピの知識は既に役に立たない。現にマシユマカロンや沈黙の魔術師などは、あのデッキには入っていなかったはずだ。となると、何が飛び出してきたもおかしくはない。

例えば効果でダメージを与えにくい場合、有力な対抗策としては地獄の扉越し銃のような反射系やホーリーライフバリアーのような無効系、マテリアルドラゴンのような吸収系が考えられる。あるいはエフェクト・ヴェーラーやブレイクスルー・スキルのような効果そのものを無効にしてくることも十分考えられるだろう。逆に戦闘を選んだ場合は、ダメージを0にするクリボーならまだいい方でモンスター破壊のミラーフォース、最悪攻撃を跳ね返す魔法の筒マジック・シンダーの存在がちらつく。

『バーンを狙う場合「ダメージ」か「私の効果」のどちらかを無効にする、あるいは搦め手として「私の守備力」を0にすればいいから無効手段が多い分耐えきられるリスクはやや増すものの、やられた場合のこちらのリスクも低い。対して戦闘をするのならば無効化のリスクそのものはやや小さいが、その分してやられた際の被害が大きくなる、といったところだな。もちろん、ライフ回復で正面から耐えきられる可能性もある。どちらのリスクを重視するか……こればかりは

判断の分かれるところだろう、下手に横から口を出すよりもマスターに任せよう。その結果がどうなろうと、誰もマスターを恨みはしないとも』

長々ともつともらしく語られたけど、要するにこっちに丸投げして逃げやがったなこの邪神。とはいえ、元より僕もそのつもりだ。この判断は誰かに任せるのではなく、この場で戦い指示を出すデュエリストである僕自身が下すのが筋だろう。

ややあつて、ついに覚悟が決まった。

「僕はこのターン、チャクチャルアの効果を発動！1ターンに1度自身の攻撃を放棄することで、その守備力の半分の数値だけ相手にダメージを与える！ダーク・ダイブ・アタック！」

迷った末に僕が選んだのは、バーン効果の方だった。チャクチャルさんの守備力は2400、つまり1200のダメージが通る。頼むから、このまま何もしてくるな……だがそんな思いも、あっさり打ち碎かれる。

「手札から、クリアクリボアの効果を発動。ダメージを与える相手モンスターの効果をも、このカードを捨てることで無効にする！」

『……駄目か』

マトリョーシカのように入れ子構造のクリボアが、その体内にチャクチャルさんの放つ闇の衝撃波を吸収する。手札誘発……ということとは、あの精霊の鏡でコピーした僕の強欲で貪欲な壺が引かせたカードということか。このターンは僕のやることなすこと全てが裏目に出た、というべきか、要所要所でマストカウンターばかりを決めてきた遊戯さんのデュエルセンスと豪運を恐れるべきか。

今の展開に3枚のカードをいっぺんに消費したため、今の手札はサーチしたガメシエルしかない。この際ブラフでもなんでもいいからせめて伏せられるカードが欲しかったが、そんな贅沢は言ってもらえない。

「ターンエンドです」

清明 LP2300 手札：1

モンスター：地縛神 Chacu Challhua (攻)

魔法・罨：なし

場：KYOUTOUウォーターフロント(3)

遊戯 LP600 手札：1

モンスター：なし

魔法・罨：1(伏せ)

「僕のターン……ふっ」

カードを引いた遊戯さんが、突然楽しそうに微笑む。突然の変化に虚を突かれた僕に、笑いながら語りかけてきた。

「ごめんごめん、でもなんだか楽しくって。たくさんの見たこともないカードを使いこなす君とこうして戦うのが、今とても楽しいんだ」「遊戯さん……ええ、そうですね。僕も……僕も。このデュエルが、こうしてあなたと戦っていることが……楽しい、ええ、そうです。とっても、とっても楽しいです！」

デュエルが、楽しい。その言葉を言おうとした時、喉の奥に詰まるような感覚がした。大切な人を救えなかった僕が、デュエルを楽しんでいるなんて言っているのだろうか。そんなこと、口が裂けても言えないのではないだろうか。それでも、自分に嘘はつけなかった。やや苦労したもののとにかく1度口に出してしまおうと、なんだかすうっと体が軽くなった気がした。それと同時に、理解する。

デュエルは、楽しい。そうだ、世界がどれだけ変わろうと、この世で何が起きようと。この原理だけは変わらないし、決して変えてはいけない。それは、デュエリストとしての自分自身を否定することになっってしまう。もちろん、それは現のことを忘れるということにはならない。彼女との記憶も僕の初恋も、忘れられるはずがない。けどその記憶とトラウマに縛られてデュエルを楽しむことすら忘れてしまふのはデュエリストたる自分自身、そして誰よりも何よりも彼女に対する冒険に他ならない。こんなことにすら気づかなかつた……いや、はじめからわかっていたのかもしれない。それでも僕はこの数日、こんなわかりやすいことから逃げ続けてきた。

「ありがとうございます、遊戯さん。おかげで、大切なことを思い出しました」

「そうかい？それなら良かったよ。でも、手加減はしないからね！」  
「もちろん、望むところです！」

威勢よく啖呵を切ると、また遊戯さんが微笑む。そしてさっと真剣な顔に切り替わり、ドロークカードを流れるような動きでデュエルデスクに置いた。

「カードをセットして、ターンエンドするよ」

『また伏せカード、か』

「僕のターン！まずはこのターンもウオーターフロントの効果で、怒炎壊獣ドゴランをサーチします」

これで、僕の手札には2体の壊獣。でも先のターンで遊戯さんがモンスターを出さなかったせいで、いくら貯めこんだところでこの子たちの展開ができない。ガメシエルさえこちらのフィールドに出せていれば、あとはもう万能カウンターで守りながらチャクチャルさんで確実に攻め落とせたのだが。ならせめてトレード・インでも来て手札交換できないかと思いつながら引いたドロークカードは、目当ての代わりにそろそろ来るころだろうとは思っていたいつもの1枚。まったくもう……だけど、おかげでこのターンにやるべきことはよく分かった。僕は僕らしく、いつも通り行けということか。いいだろう、そこまで言うなら乗ってやろうとも。

「まずはもう1度、チャクチャルアの効果を発動。ダーク・ダイブ・アタック！」

「手札から、ハネワタの効果を発動！このカードを捨てることで、このターン僕が受ける効果ダメージは0になる！」

『ええい、またか！』

2度にわたり自慢の効果を防がれ、たまったものじゃないと言わんばかりのチャクチャルさん。とはいえ、ここまでは一応計算通り。これで決着が付けばもちろんそれに越したことはなかったけれど、正直なところどうせこうなるんじゃないかとは思っていた。

「構いませんよ。僕はこのチャクチャルアをさらにリリースして、アドバンス召喚！これが、僕の切り札だ！そろそろ幕引きだ、霧の王！」  
『久しぶりにフィニッシャーがやりたかったところだが、仕方ないな。』

その役は譲るから、きっちり決めて来い』

地縛神が消えていき、KYOUTOUが霧に包まれる。灯台の街に降り立ったのは、僕にとっても永遠のフェイバリットカード。

「霧の王は最上級モンスターですがそのリリースを任意で減らすことができ、そしてその攻撃力はリリースしたモンスターの合計値。この場合、チャクチャルアのをそのまま受け継ぎます。そしてモンスターが入れ替わったことで、チャクチャルアのバトル不可になる制約もなくなりましたよ」

霧の王 攻0↓2900

遊戯さんは何も語らないが、少なくともその目の闘志はまだ消えていない。だけど僕も、ここで怯むわけにはいかない。覚悟は、既に定まった。このまま攻撃して何が起きるといえるのか、この目で見させてもらおう。

「バトル！霧の王でダイレクトアタック、ミスト・ストラングル！」

霧の魔法剣士が距離を詰め、その宝剣を大上段に掲げた。そして全身全霊を込め、生ける伝説を越えるための刃が振り下ろされる。

「墓地からクリアクリボーの効果を発動！相手の直接攻撃宣言時にこのカードを除外して、デツキから1枚ドロウする。そしてそのカードがモンスターカードならば特殊召喚することができ、さらに相手はそのモンスターに攻撃しなければならぬ！」

先ほどのマトリョーシカ型クリボーが再び墓地から現れ、次々に何重もの中身が開いていく。その一番奥、ひときわ小さいクリボーの中に配置されていた1枚のカードを、さっと遊戯さんが手に取った。

「……僕の引いたカードはモンスターカード、クリボー！」

「でしようね……！」

デュエルキングたるものが、この極限の状況で魔法や罫を引いてお茶を濁すわけがない。ここでモンスターを引いてみせる、だからこそ王者なのだ。しかし、クリボーか。このまま守備表示で壁にしてもいいし、ウォーターフロントの壊獣カウンターを増やすことを嫌うのなら特殊召喚せずに手札誘発として戦闘ダメージを0にしてもいい。防御札としては理想的な1枚だが、オベリスクあたりを引かれて特殊

召喚、そのまま返り討ちにされなかったことに関しては良かったと喜ぶべきか。

「僕はこのクリボーを、攻撃表示で特殊召喚する。そしてクリアクリボーの効果により、君の霧の王の攻撃は強制的にこのクリボーへと誘導される！」

「攻撃表示!?!」

クリボー 攻300

ちよこんと鎮座するクリボーに、霧の王の剣が強制的に向けられる。本来ならば遊戯さんのモンスターが増えたことで起こるはずの攻撃の巻き戻しも、先ほど説明にあったように発生せずそのままバトルへと移行する。振り下ろされた剣が深々とクリボーに食い込んだ瞬間に遊戯さんの場にあつた最後の伏せカードが表を向き、同時にクリボーの全身がかつと光りだす。あれは……機雷化? いや、違う。

「永続トラップ、ディメンション・スフィックス！」

半透明なスフィックスの幻影が、クリボーを包むように浮かび上がる。その目が不気味な光を放つと、なんと霧の王の剣が少しずつ押し戻され始めた。両腕に力を込めて押し込もうとするも、それを上回る反発の力が少しずつ、少しずつ、突き刺さったはずの剣が不可視の力に押し返される。

「ディメンション・スフィックスは、僕のフィールドに存在する表側攻撃表示のモンスターを対象にしてのみ発動ができる。そして対象となったモンスターが相手モンスターとバトルを行う際のバトルステップに1度だけ、2体の攻撃力の差の数値だけ相手にダメージを与える」

霧の王の攻撃力は、2900。そして、クリボーの攻撃力は300。僕のライフは……2300。この攻撃が通れば遊戯さんのライフは0になるが、それより先に僕のライフが0になってしまえばデュエルはダメージ計算前に強制終了する。ライフ回復、クリボーの攻撃力を引き上げる、あるいは霧の王の攻撃力を下げる……いずれのカードも、手札にはない。ここまで、か。

『これは……どうしようもない、完敗だな』

「ありがとうございます、遊戯さん。お疲れ様、霧の王、それにみんな」

「うん。楽しいデュエルだったよ、僕の方こそありがとうございます」

清明 LP2300↓0

「……はあーっ、負けたーっ！」

ソリッドビジョンが消えてゆく。負けはしたけれど、それでも始まる前に比べたらはるかに気分は爽快だった。そんな僕の耳に、パチパチパチと力強い拍手の音が響く。

「ブラボー遊戯ボーイ、そして清明ボーイ。お2人とも大変素晴らしいデュエルを見せていただき、ありがとうございます。私もこのゲームの創造主として、とても鼻が高いデース」

「はは、お礼を言うのはこっちの方ですよ」

「そうだね。今日はありがとうペガサス、このデュエリストに合わせてくれて」

「ノンノン、私はただ若者に可能性を示しただけ、それを掴みとったのは紛れもなくあなたたち自身デース。清明ボーイ、どうやら一皮むけたようです。では遊戯ボーイ、私たちはそろそろお暇しましょうか」

「そうだね。じゃあね、清明君。きつと君なら、もう何があっても大丈夫だよ」

そう別れを告げる2人の声、そしてその目はとても温かかった。溢れる感謝の思いに胸が詰まり言葉が出てこず、ただただ深く頭を下げる。ドアが開き、そして閉じる音に顔を上げると、もう伝説のデュエリストたちの姿は消えていた。

夢見心地のままさつきまで座っていた席に戻り、すっかり冷めた紅茶をすすする。熱くほてった体と心が多少冷めてきたところで、またドアが開く。多少怒りを呑み込んだのか、それでもまだ仏頂面の葵ちゃんが入ってきた。

「失礼しますー！」

「お帰り、葵ちゃん。さつきは悪かったね」

「……あれ？」

まさかさつきまで死んだ魚の目で座ってた張本人がああ短時間でここまで復帰したとは思っていなかったのだろう、完全に鳩が豆鉄砲を喰らったような顔でこちらをまじまじと見つめてくる葵ちゃん。その様子がなんだか無性におかしくて、笑いをこらえながらも姿勢を正し、遊戯さんたちにしたように頭を下げる。

「ありがとね、葵ちゃん。これまで全部、ずっとずっと」

「えっと、先輩、何があつたんですか？ああいえ、言っていたただかなくても結構です。私の先輩が戻ってきたのなら、それで構いません……それと、私からも。どういたしまして、先輩。卒業、おめでとうございます」

差し出された彼女の手を固く握り返したところで、なんだか店の外が騒がしいことに気が付いた。ちらりと視線を向けると、何人もの見知った顔と目が合う。説明を求め葵ちゃんに視線を戻すと、ああ、と悪びれる様子もなくさらりと口を開く。

「先輩がああ調子でしたので、とりあえず賑やかにすればつられて少しは良くなるかと呼んでみたんですよ。もっとも、いらぬお節介だったようですが」

「そりやどうも。まあせっかく来たんだし、入っておいでよ」

声をかけるとそれを待っていたかのように、わっと人がなだれ込む。三沢、万丈目、翔、剣山、明日香、吹雪さん、天下井ちゃん……大なり小なり僕のかげがえのない仲間、そして友達だ。そしてその奥には、トメさんやクロノス先生の姿まで見える。葵ちゃん、どんな呼び込みやったらこんな大勢引つ張ってこれたんだろう。

「そりやあもう、葵ちゃんったら一生懸命だったからね。お姉ちゃんもまさかああ葵ちゃんがここまでやる娘だとは思わなかったよ」

「……なんで姉上が当然のような顔して混ざってるんですかね。私呼んでないんですけど」

「あーん、葵ちゃんったら辛辣なんだからー。でもそんな照れ隠し葵ちゃんも可愛いよ！清明ちゃん、また今度さつき隠し撮りした写真見



せてあげるからね！」

「今すぐデータ全部寄越して下さい！」

「やだよー、これ私の観賞用と葵ちゃん布教用と保存用だもーん！」  
「真ん中から特に嫌な予感しませんがせん！」

わーわー言いながら逃げる明菜さんと、それを追いかける葵ちゃん。その後ろ姿を目で追っていると、今度は三沢と万丈目が近寄ってきた。

「何があつたかはわからないが、終わりよければすべてよし、だな」  
「全くだ、無駄に心配させよつて。ほら清明、お前にもこれを書いてもらうぞ」

そう言つて懐から取り出したのは、一枚の紙。開いてみるとそこにはたくさんの似顔絵と、それぞれの一言メッセージが添えられていた。

「これは？」

「十代の奴に、な。どうせあいつのことだから、卒業パーティーなんて待たずにこの島から飛び出して行つてしまふだろう。だからせめて俺たちからのサプライズとして、あいつの荷物にでもこれを仕込んでやろうと思つてな。だからお前も何か書くんのだ」

そういえば、これだけたくさんの人がいるというのに十代の姿はどこにもない。あの野郎、つれない奴だ。一緒に渡されたペンを手に取り、少し迷つた末にこう書いた。万丈目がそれを覗き込み、よせばいいのにわざわざ音読する。

「なにになに？『童実野町本店「YOU KNOW」絶賛営業中』？なんだこれ、宣伝じゃないか」

「いや違うんだつて、場所はここだからいつでも会いに来いな……ね？」

「まったく、お前らしいといえはお前らしいな」  
「……三沢、それ褒めてんだよね？」

一応聞いてみるも肩をすくめて笑うのみの三沢と、それを見て笑う他の皆。結局明菜さんには逃げ切られたらしい葵ちゃんが息を荒げながら帰つてきて、みんなして笑っている絵面に眉をひそめる。

うん、悪くない。確かにこのアカデミアに入学してからは色々あったけれど、なんだかんだいっても最後にはこうやって笑って卒業することができたら……それは、悪くない。ちよつと唇をほころばせて、なんとなく窓の外に視線を向ける。どこまでも広がる彼女の髪のように青い空の奥で、現も少し微笑んだ気がした。

## 番外編その1 鉄砲水と絆の英雄

「ハイ！皆！卒業生代表、遊野清明でーす！えー、本日はお忙しい中このデュエルアカデミア同窓会にお集まりいただきで……いいやもう、以下略！かんぱーい！」

「乾杯！」

最初ぐらいはちゃんと挨拶らしいことでも言おうかと思っただが、途中で我慢できなくなつて手にしたグラスを高々と掲げる。でも、どうやらその場にいた皆も同じ気分だったらしい。我ながら雑な開会の言葉にも一切の文句はつかず、そこかしこで一斉にグラスが打ち鳴らされた。おおむね良好な雰囲気の中始まったことを壇上からざっと確認し、飲みほしたグラスを置き両手を自由にしてから僕自身もそそくさと親友たちのところへ向かう。

しかしその道中、横から首に手を回された。ヘッドロック状態のままぐりぐりとこちらを締め付けてくる張本人、直接会うのは5年ぶりな万丈目が絡んでくる。とはいえこの男に関してはプロデュエリストという関係上メディア露出も多いし、正直こちらとしては久々に会った新鮮味というものがない。それはそれとしてこのやろ、さてはもう酔つてんな？

「お前なあ……司会と料理は僕がやるからお金出して！とか言われたからわざわざ万丈目グループとして招待状から会場まで全部手配してやったんだぞ？その結果がああ挨拶か？」

「……てへ」

「てへじゃない！大体この忙しいプロデュエリストの予定まで同窓会で開けさせておいてだな……」

「明日香も呼ぶよって言ったたら即OK出したくせに……わーったわーった、僕が悪かつたつてば。そういやさ、話変わるけどそっちはどうなの？3兄弟とか元気にしてる？」

『オイラ達なら毎日元気よん、お久しぶりね清明のダンナ〜』

『イエーイ！』

「こら、まだ俺の話は……」

勝手に出てきた3兄弟の精霊によってわずかに拘束が緩んだ隙にヘッドロックから脱出し、これ以上絡まれる前にひらひらと手を振ってその場を後にする。そこへタイミングよく横から手渡された次のグラスを受け取り、また中身をくつと飲む。

「センキュー三沢、ちょうどまた喉乾いてたんだ」

「あれだけ大声で騒いでいたんだ、そうだろうと思ってな。それにしても、お前に会うのも久しぶりだな」

これまた5年ぶりに会う三沢は、学生のころよりもさらに大人びていた。それでもその瞳に宿る芯の強さは、あのころからまるで変わっていない。

「三沢こそよくここに來れたね？向こうでタニヤといたらさすがに打つ手なかったから半分諦めてたんだけど」

「別に、年中向こうの世界にいるわけじゃないさ。科学技術だって俺たちが学生だったころとはわけが違う、だいぶ行き来も安定するようになってきたしな。それにここだけの話、最近は次元転移の技術に海場コーポレーションが内密に援助してくれるようになったんだ。いずれは冥界に行く技術を確立させる、とかなんとか言ってるな」

「冥界、ねえ……」

そういえばあそこの社長がこの前テレビで、わが海場コーポレーションが次に目指す目標として次世代型デュエルデスクに搭載予定の新機能は、質量を持つソリッドビジョン……その名をパワービジョンと呼ぶ！世界中のデュエリストたちよ、その時を震えて待つがよい！ワーハッハハハ！とかなんとか演説してたっけか、と思いで出す。精霊の世界でならカードは実体化する、つまりはそういうことだろうか？

……ま、いずれにせよ僕みたいな一市民にはあんまし関係のない話だ。そういう難しい話は、思う存分専門家に頭を捻ってもらおうとしよう。

と、ここで三沢の表情がふつと真面目なものになった。誰かが聞き耳を立てていないかと周りを見回してから、声を潜めて語り掛ける。「それでな、清明。お前に会ったらずっと聞いてみたかったことがあ

るんだが」

「……どつたの、そんなシリアスしちゃって」

体勢

そんな軽口とは裏腹に、僕も真面目に聞こうと体勢を整える。三沢が真面目になるということは、それなり以上に重要な話だからだ。

「3年前、だったか。ちょうど俺は向こうの世界にいたからあまり詳しくは知らないが、確かペガサス氏主催でデュエルモンスターズのイベントが行われたことがあったな？ それ自体は別にいつものことだが、あの時俺はちょうど次元を超えてエネルギーを観測する実験をしていてな。何気なくこの世界に的を絞ってみたら、明らかにおかしな反応が見つかったんだ」

「……と、いうと？」

一度話を切った三沢に先を促すと、もう一度誰かがこの話を聞いていないか確かめて、再び口を開く。

「あのエネルギーは明らかに異常だ。5年前のダークネスとの戦いで俺が打ち立てた時間移動と性質やエネルギーの動き方はよく似ていたが、次元移動特有の空間のひずみまでこの世界には発生していた。しかもそのエネルギーは、その量もさまざまに膨大だった。自然発生ではありえない、俺たちの今の常識を上回る何らかの人為的な力が必要となるほどにな」

「それを僕に話して、どうしようってのさ」

「ただ聞きたいだけだ。お前はその時のことを何か知らないかとな。言い忘れたがこの話の何よりも奇妙な点は、そのエネルギーの流れが唐突に消えたんだ。まるで最初から何もなかったかのように世界は元に戻り、ツバインシユタイン博士に連絡を取ってみても向こうでは何も観測されていないという。実際その日、何かおかしなことが起きたという話も聞かないしな」

「……機械の故障とかじゃないの？」

「それは俺も真っ先に考えた。だが、何度点検してもおかしなところは見つからなかったんだ」

「うーん……」

首をひねるふりをしながらも、頭の中では足りない脳みそをフル回転させる。三沢の言う、3年前のあの日。この世界に何が起きたのか、僕は知っている。正確に言えばこの僕、遊野清明と遊城十代……そしてデュエルキング武藤遊戯と、未来からの訪問者不動遊星。この4人だけが、あの日起きたことを知っている。

ただその内容をはたして目の前の男にはなんと言おうかと考えながら、同時に頭の片隅ではあの日のことを思い出していた。

あの日起きたことに最初に気づいたのは、僕ではなくチャクチャルさんだった。僕にとってそれはいつもと変わらない朝、いつもと変わらない1日の始まりに過ぎなかった。

「おう、新聞持ってくんのにいつまでかかってんだ穀潰し！」  
「るっさい親父！」

罵声に背中を押されるように家を出て、今日の新聞を手取る。何気なく目に入ったその一面記事には、でかでかと廃墟、それもまだ火事の火すら消え切っていないものが映っていた。

『また人間が派手にやったのか。いつの時代もご苦労なこと……いや待て。マスター、今すぐそれを開け！』

「へ？ん、こらう？」

背中越しにそれを覗き込まれるような感覚。チャクチャルさんが時事問題に関心を持つのは割といつものことだが、この日は少しばかりわけが違っていた。慌てて言われたとおりに折りたたまれた新聞を広げると、その写真の下半分があらわになった。それを目にしたチャクチャルさんは満足して引っ込むどころか、ますます気配を強め新聞をひったくらんばかりの剣幕で睨みつける。

『まさか……いや、これは……』

完全に自分の世界に入り込んでしまったチャクチャルさんからは何を聞いても答えなんて得られそうにないので、仕方なく僕もその記事に目を通す。えーっと、この写真は昨日発生した犯人不明、凶器不明の大規模破壊活動？幸い死者は皆無、しかし歴史的建造物が碎かれ

怪我人多数……ふんふん。

だがそこまで読んだところで、チャクチャルさんがじつと見ていたのはその部分ではないことに気づいた。その横に添えられた小さな解像度も荒い雑な写真だ。なになに、事件の様子を偶然とらえたらしい写真、ねえ。何やら3つ、白く巨大なものが映っているのがわかる。そのうち1つは機械的な光沢を放ち、1つは細長い体のラインに沿うように7色の光を放ち、もう1つは……なんだこれ。ほかの2つにかぶってるせいで、ただでさえ何の写真かさっぱりなのに、余計にわかりづらくなっている。それでもチャクチャルさんには、その部分だけで十分だったらしい。絞り出すような声を、僕は確かに聞いた。

『スターダスト・ドラゴン……なぜ貴様が「此処」にいる……!』

それから先はまさにとんとん拍子、というの少し、言葉の使い方がおかしいだろうか。親父に新聞を叩きつけて自分の部屋に入ると、チャクチャルさんの言われるがままに荷作りをする。いくらせっついても説明ひとつしてくれないので訳も分からないままにパスポートと数日分の着替えといくらかの食料を用意し、なけなしの現金を財布に詰め、大切な腕輪……水妖式デュエルディスクを装着する。親父に今日は店を手伝えない旨を伝え、百の嫌味と千の小言が飛んでくる前に靴を履いてさっさと朝の街に飛び出した。ここから空港に行くためには、まず電車に乗らねばならない。自家用ジェットのある海場コーポレーションやヘリ持ちの万丈目グループとは違い、遊野家はあくまでただの庶民だ。

「飛行機か……高いんだよねあれ」

『なんなら私が乗せていくか？実体化しても構わないぞ』

「いや、遠慮しとくよ」

恐ろしいことに、チャクチャルさんはいつもの軽口をたたいているのではない。ド派手に実体化してあちこちから見られるリスクを考えたうえで、なおそれでも構わないからと大真面目に提案しているのだ。いったい、あの写真から僕知らない何を読み取ったんだか。いずれにせよ、この暗躍好きな神様にここまで言わせる何かが、この写真にはあるのだろう。なら、僕がそれを疑う理由は何一つない。

『……マスター、いいか?』

ここから空港へ行くには、まず電車に乗らねばならない。駅に向かう途中で、チャクチャルさんの声が聞こえる。ようやく口を開く気になっただけの神様が、ぽつぽつと語りだした。

『私があの写真にこだわる理由だが。マスターのことだ、私の口から出たスターダスト・ドラゴンの名は聞き逃してはいないだろう……無言は肯定と受け取るぞ?そのドラゴンだが、あれはシンクロモンスターだ。それも太古に我らが故郷、ナスカの地において赤き龍の、そしてシグナーの手足となり我ら地縛神、ひいてはあの先代も含めたダークシグナー達と死闘を繰り広げた悔りがたき6体の竜のうち1体だ』

「シンっ……!!」

思わず叫びかけたところで、周りから一斉に向けられた奇異の視線に気が付いた。愛想笑いを浮かべながらどうにか平静を装い、ゆっくと大きく息を吐く。

「なるほどね。それで、こんなに急いでたんだ」

『ああ。私も目を疑ったが、奴らの姿を見間違えはしない。なぜシンクロモンスターがこの時代に顕現しているのか。確かにそこも解せないが、もっとわからないことがある。私の知る彼の竜は仲間のため、守りのためにその力を振るうことはあれど、こんな無差別な破壊のために戦うことは決して良しとはしなかったはずだ』

「あのほら、遊や富野みたいに別の世界から精霊の入ってないカードを持ってきたんじゃないの?」

シンクロモンスターといえれば真っ先に思い出す、僕にその使い方を教えてくれた異世界からの来訪者たち。あれ以来彼らやそのお仲間と会ってはいないが、その記憶は今もはっきりと残っている。

『それならそれで筋は通るし、その意味では話が楽になるのだがな。だが困ったことにその場合、別の問題が提起される。いくら異世界からの客人といえど、この世界であまり好き放題されて黙っているわけにもいきまい』

「ああそうか……じゃ、一発シメに行きますかかってこと?」



『正義の味方の真似事も、たまには悪くないだろう。第一私としても、かつての仇敵がいいように使われているというのはあまり気分のいいものではないからな』

「ここでアクシヨン起こしておけば、うまくいけば次のシグナーに対して恩も売っておけるしね」

『そういうことだ。よくわかってるじゃないか』

そういうことなら納得だ。どうせ忙しくなるだろうし、ともかく今は体を休めて次に備えようと駅のベンチに深く腰掛けなおす。

その瞬間、不意に地面が大きく揺れた。幸いにもその揺れはほんの1瞬で治まったが、反射的に周りの様子を見渡す。あんな変な揺れ方が、ただの地震なわけがない。案の定この揺れの原因、なんて小難しいことは考えるまでもなくはつきりと見えた。ついさつきまでこの街の象徴であった海馬コーポレーションのビルがあるはずの場所が、揺らいでいた。比喻でもなんでもなく、まるで存在そのものが消えかかっているかのように不安定に揺らぎ、消えかかっている。どんな種類の攻撃を受けているのかはわからないが、1つだけはつきりしていることがある。狙われたのは、今飛び出そうとしていたこの童実野町だった。

「ねえ、チャクチャルさん」

『わからん』

あれは一体、何が起きているのか。そんな疑問も質問どころか呼びかけの時点でばっさりと言い切られる。なんだそりゃ、と閉口しかかったタイミングを見計らったかのようにだが、と言葉が続く。

『あの揺らぎ、そして存在の希薄化。なあ、マスター。あの時と似ている、そうは思わないか?』

精一杯にぼかした言い方は、この神様なりのせめてもの気遣いだろうか。目の前で起きている異変にもう1度だけ視線を向けるといまだに癒えない傷、思い出したくもない何よりも大切な記憶を呼び起こす。

確かに似ている、といえば似ている。彼女が、河風現が僕の腕の中で消えていったあの時と。

「……でも、それとこれと何の関係が」

『あくまで私の仮説だが、仮にあの時と同じように海馬コーポレーションそのものが消えようとしているのなら？あの女は消滅後、我々以外の歴史から完全にその姿を消した。それと同じ歴史改変が、どこかの時代で起きているのなら？』

「歴史が……!?!」

その単語の意味するものに、言葉を失う。三沢の編み出したなんたら理論によれば、時間移動は決して夢物語ではない。それはあの、ダークネスとの戦いでも証明されたことだ。だけどそれを成し遂げるには、想像もできないほどのエネルギーとそれを扱う膨大な知識が必要となる。それはこの邪神、チャクチャルさんですら成し遂げられないほどのことだ。それをいとも簡単に、それも海馬コーポレーションという歴史上とんでもなく重要な役割を果たす代物に対してやってのけようとしているとは。今回の敵はヤバい、と、だいぶ遅ればせながら脳内で警鐘が鳴り響いたところで、ようやくなじみのある景色が見え始める。過去で何かが起きつつある地、童実野町に到着したのだ。

「でも、そんなの僕にどうしろってのさ？いくら駆け付けたくても、できることなんてないじゃない」

大前提として、僕は時間軸を自由に移動できない。いくらダークシグナーに人知を超えた力があるからといっても、それは完全無欠の全知全能とは決してイコールで繋がらない。それは、その力の源たるチャクチャルさん本人が一番よくわかっているはずだ。だが意外にも邪神の口から飛び出た言葉は、その同意でも諦観でもなかった。

『そうとは限らないぞ。あれを見ろ、マスター』

そんなアバウトな指示のもと示されたものは、確かにあれ、としか形容しようのないものだった。空間にぽっかりと浮かんだ歪み……いや、穴だろうか。前にも何度か、あれとよく似たものを見たことがある。例えばアカデミアの研究施設で、ユベルの手により砂漠の異世界に飛ばされた時。例えば僕のモンスター、多次元壊獣ラディアンを特殊召喚した時。ダークネスとの死闘の際に次元の壁を越えて霸王

の異世界からグラフィアが救援に来てくれた時も、あれとよく似たものが発生していた。だけど、わかる。この穴を作ったエネルギーは、それらとは比べ物にならないほど大きい。

『……おそらくこれは、余波のようなものだろうな。過去、あるいは未来で、歴史を揺るがすほどの何かが起きている。そのエネルギーがでたらめに暴れたのか、予想を超えて溢れ出したのか。結果、この簡易的なタイムホールとしてこの時代に発生したのだろう』

「えーつと、つまり？え、なに、ここに入れてってこと？」

『少なくとも、こんな大それたことをして暴れている馬鹿のところにはたどり着けるだろうな』

「そんな他人事みたいな……帰ってこれなかったらどうするのさ」

『マスター』

時間の移動は、チャクチャルさんでさえ専門外。ということとはつまり、何かとんでもないことにならない保証なんて一切ないというわけだ。さすがに当然の反応として尻込みする僕に、チャクチャルさんが頭を下げる気配がした。

『頼む』

たった3文字の、シンプルな言葉。だけどそこに込められた万感の思いは、痛いほどに伝わってきた。まったく、もう。そんな真剣に頼まれたら、断り切れるわけないじゃないの。タイムホールの向こう側で何が起きても反応できるよう、デュエルディスクを腕輪から展開する。

『……すまん』

「まったくもう、いいよいいよ。それにしても、こーいうのっていつもと逆だよね」

『？』

「いやほら、いつもは僕が無茶言ってフォロ―頼んでたじゃん？いつもお世話になってる分、こーやってチャクチャルさん側から無理言ってくるのって新鮮だなんてさ。よし、行くよー！」

軽く息を吸い、開いたままの空間の穴に意を決して飛び込む。ほんの1瞬の浮遊感ののち、再び地に足が付き体が重力に引っ張られる地

球人としておなじみの感覚。あ、意外と到着早いのね。

「えつと……」

あたりを見回す。ここはどこだろう、なんて悩むことはなかった。見覚えのある噴水に、その中央から延びる時計。なんのことはない、生まれた時から見慣れてきた童実野町の一角だ。ただ気になることに、まだ日も高いというのにたった3人しか人影が見当たらない。僕がちょうど真後ろに到着したため、彼らはまだ僕の存在に気づいていないようだ。

まず1人目、あれはもう見ただけで分かる。あの特徴的な髪型は、デュエルキング武藤遊戯しかありえない。そしてその横の2人目だけど、あの茶髪もさることながらオシリスレッドの学生服をわざわざこんなアカデミアから遠く離れた地で着ているということは、その手のコスプレでなければ十代だろう。そして3人目は……。

『お前か！』

遊戯さんに負けず劣らず個性的な髪型で、赤いバイクのようなマシンを手で押している3人目。その横顔を、そしてその瞳を見た瞬間、理屈ではなくダークシグナーの本能が叫びだした。『あれ』だ。『あれ』がチャクチャルさんはじめとする地縛神にとって、そして自動的に僕にとつても不倶戴天の敵となる存在、シグナーだ。

突然の叫びに驚いた3人が一齐にこちらを向き、驚愕と困惑の視線が痛いほどに突き刺さる。そんなもの気にする余裕もなくシグナーに詰め寄ろうとしたが、それよりも先に反応したのは十代だった。明るく片手をあげてこちらに駆け寄ろうとして、途中で思いとどまり思案顔になる。

「久しぶりだな、清明……あ、でも今の時代だと俺のこともまだ知らないのか。な、なんて説明するかな……」

「いや、わかるよ十代。卒業式以来だね？」

今のセリフから推測するに、どうやらこの時代は過去。それも少なく見積もっても僕がまだ、アカデミアに入学するより以前の時期のようだ。それはともかく、そう返されるのはさすがの十代も予想外だったらしい。

「清明？お前、いったい……」

「悪いね。色々話したいことはあるけども、今はちよつと取り込み中のだよ」

「おい、お前は……」

遊戯さんも何か言いかけていたが、超ど級の無礼を承知で言わせてもらえば今はそれどころではない。まっすぐにその3人目の名前も知らないシグナーへと距離を詰め、同時に全身に紫の痣を走らせ空中から灰色のフード付きローブを自動生成する。白目と黒目はとうに反転し、これまた紫の光を放っていることだろう。直立不動の鋭いまなざしでそれを見つめているシグナーも、僕が何であるかは分かっただらしい。それが宿命とはいえ逃げ出しもせず、それどころか表情すら変えていないのは誉めてやろう。クール&クレバー、そんな単語が脳裏をよぎった。

「遊星も、もしかして知り合いなのか？でも、遊星は未来から来たんだろ？」

「ええ。なので、知り合いというわけではないですが……すみません十代さん、それに遊戯さん。これは、俺たちの問題です」

「話が早くて助かるよ。えっと、遊星っていうんだって？僕としちや特に直接恨みがあるわけじゃないんだけど、ね。お互い難儀なことだよねえ」

肩をすくめ、ウインクしつつなるべく空気を重くしないように話しかける。そう、いくら不倶戴天の敵とはいえ、僕自身が彼に恨みがあるわけではない。ただこの命を地縛神に拾われた身としては、シグナーと出会ってしまった以上ここで見て見ぬふりというわけにもいかない。これが最低限のけじめだからだ。

「どうする、場所変える？」

「いや、ここでいいだろう。赤き龍よ、もう少し俺に時間をくれ！なぜダークシグナーがこの時代にいるかはわからないが、それが俺の使命ならばここで決着をつけよう」

上を仰ぐように叫んだ遊星の声に応えるかのように、けたたましい咆哮とともに上空に長い影が差す。あの龍に、実体はあるのだろうか

か。その名のごとく赤い光で構築された全身に白い光の筋が走る、さながら肉体というよりもむしろエネルギー体と形容する方がしっくりくるような姿を見ながらそんなことを思う。

『ふん。久しいな、赤き龍よ。色々諸事情によりこちらは私とこのマスター1人だが、そちらもシグナーが1人しか用意できていないのなら差しさわりのない』

一体どんな思いでチャクチャルさんがそう口にしたのか、その歴史と重みは僕には計り知れない。でも恨みや憎しみといった感情を超越した、万感の思いがこもっていることだけは伝わってきた。

「おい清明、それに遊星も」

まだ何か言いかけた十代の肩を、事の成り行きを静観していた遊戯さんがポンと叩いて止める。

「十代。俺達には理解できないが、彼と遊星の間には何か、戦わなくてはならない理由があるのだろう。ならば、デュエリストに言葉は必要ないはずだ」

「遊戯さん……わかった、だけど後で俺にも説明しろよ！」

声援だか何だかわからない言葉を背中で受け止めて、改めて遊星と相對する。油断なくこちらを見つめるその目は確かに強者のそれだ……でも、まだ青い。おそらくこの男は、まだ自分の中の真の力を解放しきれていない。そして、それに自分では気づいていない。惜しい、と思う。もっとも、相手する立場としてはその方がやりやすいのは確かだ。

「一応自己紹介しておこうか？僕はダークシグナー、遊野清明。それじゃあ、デュエルと洒落込もうか！」

「俺は、不動遊星。全力で行かせてもらう！」

望むところだ。さて、僕は後攻か。どう出てくるか、じっくり見させてもらうとしよう。

「俺のターン、トライクラーを守備表示で召喚！ターンエンドだ」

トライクラー 守300

遊星が最初に召喚したのは、レベル3のわりにはステータスの低い3輪を持つ機械族モンスター。ふむ、下級1体出してエンドか。てっ

きり富野や遊びたいに初手からガンガン回してシンクロモンスター、それもあのスターダスト・ドラゴンを出してくるかと思っていたが、まあシンクロ使いにも色々いるのだろう。単にあの2人がおかしかっただけかもしれない。

「僕のターン。ツーンヘッド・シャークを召喚」

ツーンヘッド・シャーク 攻1200

そっちが様子見で来るなら、こっちはいつも通り前のめりに攻め込むまでだ。攻撃を誘っているのなら別にそれでも構わない、なにが出てくるかその策に乗ってやろう。

「行けっ、ツーンヘッド！そのままトライクラーに攻撃！」

2つの口を持つ鯨が、その鋭い牙と頑丈な顎で敵を噛み砕きにかかる。伏せカードの正体を見極められるかとも思ったが、まだ発動の時ではないらしい。

ツーンヘッド・シャーク 攻1200↓トライクラー 守300（破

壊）

「俺はこの瞬間、戦闘で破壊されたトライクラーの効果を発動。手札またはデッキからヴィークラー1体を特殊召喚する！」

ヴィークラー 守200

噛み砕かれてスクラップと化したトライクラーの代わりとして、すぐさま2輪に人型の上半身をくつつけたような黄色と青を基調とするモンスターが特殊召喚される。ふむ、リクルーターか。それもレベル3のトライクラーから出てくるレベル2……となると、もう1回攻撃しても後続が出てくる可能性の方が高いか。普段の相手ならわざわざデッキ圧縮に付き合ってもないけれど、何せ相手はシンクロ使いであることがほぼ確定しているシグナーだ。あれを残しておけば、後々よりレベルの高いシンクロモンスターに繋がれかねない。

「ツーンヘッド・シャークは、1ターンに2度の攻撃ができる。そのヴィークラーにそのまま追撃させてもらうよ」

ツーンヘッド・シャーク 攻1200↓ヴィークラー 守200（破  
壊）

「ならばヴィークラーの効果により、デッキからアンサイクラー1体を特殊召喚する」

「やっぱりか……」

アンサイクラー 守100

ヴィークラーの跡を継ぐように特殊召喚される、一輪車に人型の上半身をつけたようなモンスター。ま、想定内といえば想定内だ。レベル2をレベル1にしたことが後々どう響くか、肝心なのはそこだけだ。

「カードを1枚セットして永続魔法、グレイドル・インパクトを発動。このターンのエンドフェイズにその第2の効果、ドール・コール！デッキからグレイドルカード1枚、グレイドル・イーグルをサーチするよ」

遊星の表情からは、特に何も読み取れない。実際彼も、これだけでは僕のデッキがどんなものかはわからないだろう。ここまではお互いほんの挨拶代わり、次からが本番だ。かかっておいでと手招きのひとつでもしてやりたくなかったけれど、あまり挑発することもないだろう。

遊星 LP4000 手札：4

モンスター：トライクラー（守）

魔法・罫：なし

清明 LP4000 手札：4

モンスター：ツーンヘッド・シャーク（攻）

魔法・罫：グレイドル・インパクト

1（伏せ）

「……俺のターナー！」

遊星の冷静そうな瞳に闘志の光が宿ったのを、僕は見逃さなかった。来るか。

「俺の手札からモンスターを1枚墓地に送ることで、クイック・シンクロンは手札から特殊召喚できる。さらにジャンク・シンクロンを召喚！このカードは召喚時、俺の墓地に存在するレベル2以下のモンスター1体を効果を無効にして特殊召喚できる。甦れ、クリア・エフェ



クター！」

「あんなモンスター……ああいや、たった今捨てたやつか」

ちよつと顔をしかめている間にも、遊星の場にはポンポンとモンスターが並ぶ。この展開力は、さすがのシンクロ使いだ。

クイック・シンクロン 攻700

ジャンク・シンクロン 攻1300

クリア・エフェクター 守900

「行くぞー！レベル2のクリア・エフェクターとレベル1のアンサイクラーに、レベル5のクイック・シンクロンをチューニング！そしてクイック・シンクロンはシンクロ素材とするとき、別のシンクロンモンスターの代わりとして扱うことができる。俺が選択するのは、ロード・シンクロン」

「出たな、シンクロ召喚！」

チューナー以外のモンスター2体が一列に並び、クイック・シンクロンが自身のレベルと同じ5つの光の輪となってそれを囲む。それを見て楽しそうに叫んだのは、後ろで観戦中の十代だった。見なくてもわかる、きつとこの時代には存在しない召喚法を前にして年甲斐もなく少年のように目をキラキラさせていることだろう。

「集いし希望が新たな地平へいぎなう。光さす道となれ！シンクロ召喚！駆け抜けろ、ロード・ウォリアー！」

☆2 + ☆1 + ☆5 ≡ ☆8

ロード・ウォリアー 攻3000

「くっ……」

光の柱から現れたのは、ベージュがかつた黄金の鎧と背中から延びる何本もの排気口、そして硬質のマントに身を包む王者の風格すら漂わす戦士。いきなり攻撃力3000とは、なかなかやってくれるじゃないの。

「クリア・エフェクターがシンクロ素材となった時、俺はカードを1枚ドロウできる。さらに、ロード・ウォリアーの効果を発動。1ターンに1度、デッキからレベル2以下の機械族または戦士族モンスター1体を特殊召喚できる。出でよ、チューニング・サポーター！さらに魔

法カード、機械複製術によりデツキから攻撃力500以下の機械族であるチューニング・サポーターをもう2体特殊召喚する！」

ロード・ウォリアーのマントから光の道が天高く伸び、その光に導かれるようにして鍋を被った小人のようなモンスターが遊星の場に特殊召喚される。そしてそれが、さらにもう2体。まだ遊星の場には、召喚してクリア・エフェクターを釣り上げたきり何もしていないジャンク・シンクロンが1体。ということは、この符号が意味するものはまさか。

チューニング・サポーター 守300

チューニング・サポーター 守300

チューニング・サポーター 守300

「レベル1のチューニング・サポーター3体にレベル3、ジャンク・シンクロンをチューニング！そしてチューニング・サポーターはシンクロ召喚に使用する際、自身のレベルを2として扱うことができる。俺はこの効果を2体分使用することで、レベル8のシンクロモンスターを呼び出す！」

3体のチューニング・サポーターと、3つの光の輪になったジャンク・シンクロン。通常ならレベル6となるべき組み合わせが、シンクロ召喚に特化されたチューニング・サポーターの力によりさらに高みへと上り詰めていく。

「集いし闘志が怒号の魔神を呼び覚ます。光さす道となれ！シンクロ召喚！粉碎せよ、ジャンク・デストロイヤー！」

☆2＋☆2＋☆1＋☆3＝☆8

ジャンク・デストロイヤー 攻2600

次いで現れた2体目のレベル8シンクロモンスターは、まるで翼のように広がる十字の剣と本来の両腕の下に生えた一对の副腕が特徴的な黒い鎧の闘士。その攻撃力はロード・ウォリアーよりも劣っているが、この状況でわざわざ呼び出された以上はそれ相応の効果を持っているはずだ。

「この瞬間、シンクロ素材として墓地に送られたチューニング・サポーターとシンクロ召喚されたジャンク・デストロイヤーの効果それぞれぞ

れ発動！チューニング・サポーター1体につき1枚のカードをドロ―し、さらに素材としたチューナー以外のモンスター1体につき1枚のカードを破壊する、タイダル・エナジー！」

遊星が3枚のカードを引くと同時に、ジャンク・デストロイヤーの4つの拳が握りしめられその目がギラリと光る。チューナー以外の素材は3体、そして僕の場のカードも3枚。この効果で場をこじ開けてダイレクト2回で終わり……なるほど、やっぱとんでもなく強いなこいつ。

「だけど、まだ終わりじゃない！相手がモンスターを特殊召喚した時、手札を1枚捨てることで手札、または墓地のドラゴン・アイスは特殊召喚できる。この効果で手札のドラゴン・アイス自身を捨てて、そのまま墓地から特殊召喚！」

溢れるエネルギーの波に3枚のカード……ツ―ヘッド、グレイドル・インパクト、そして防御用だったポセイドン・ウェーブが破壊され、更地になった僕のフィールドに金属の仮面で素顔を隠す氷の竜人が片膝をついた防御姿勢で呼び出される。危ない、危ない。

ドラゴン・アイス 守2200

「モンスターを呼び出したか。ならば、バトルだ！ジャンク・デストロイヤーでドラゴン・アイスに攻撃、デストロイ・ナックル！」

「この攻撃を通せば次はロード・ウォリアーから3000ダメージ……いやだめだ、それはさすがに通せないか。手札から水精鱗マーメイド―ネレイアビスの効果発動！手札のこのカードを捨てて同じく手札の水属性モンスター、グレイドル・イーグルを破壊。そしてそのステータスを、このターンの間ドラゴン・アイスのに加算する！」

グレイドル・イーグルは攻撃力1500だが、守備力はわずか500しかない。それでも、ぎりぎりではあるがジャンク・デストロイヤーの攻撃を受けけることはできる。4本の拳から放たれる乱舞を、氷の腕ががっしりと受け止めた。

ジャンク・デストロイヤー 攻2600↓ドラゴン・アイス 守2200↓2700

遊星 LP4000↓3900

「ぐっ！」

「遊星が初ダメージだ！」

「だが、彼が今の攻撃を止めるために支払った代償は決して軽くはない。それに対し遊星はチューニング・サポーターの効果により手札は豊潤、さらにフィールドの状況でも圧倒的優位は変わらない。このターンをしのいだ彼がどう反撃するかが見ものだな」

はしやぐ十代とは対照的に、冷静な分析をする遊星さんの声が聞こえる。実際、ドラゴン・アイスはともかくネレイアビスまでこのターンで切ることになるとは思わなかった。ただここで手札2枚を切るリスクよりも、3000のダメージをこんな序盤で受ける方が痛い。切り替えていこう、切り替えて。

「ロード・ウォリアーでもう1度攻撃、ライトニング・クロー！」

これは耐えきれず、なすすべなく王者の爪に氷の体が引き裂かれ仮面が地に落ちる。それでも、ドラゴン・アイスはよくやってくれた。また手札が余ったら、その時はよろしく頼むとしよう。

ロード・ウォリアー 攻3000↓ドラゴン・アイス 守2700

(破壊)

「そしてカードを2枚伏せる。俺はこれでターンエンドだ」

『それだけではない。クリア・エフェクターは、自身を素材としたシンクロモンスターに効果破壊への耐性を付与するもう1つの効果がある。覚えておくといい、マスター』

伏せカードが2枚、そしてフィールドには2体のウォリアー。さらに手札まで3枚も抱え、遊星さんの解説通りデュエルはまだ序盤のくせに一気に追い込まれてしまった。だけど不思議と、まだまだ負ける気はしなかった。

「僕のターン、ドロロー……よしよしよし。まずは魔法カード、サルベージを発動。この効果で僕の墓地から攻撃力1500以下の水属性モンスター2体、ツーンヘッド・シャークとネレイアビスを回収する。1つ教えてあげるよ、遊星。シンクロ召喚は、なにもシグナーだけの技じゃないのさ！チューナーモンスター、グレイドル・スライムJr.を召喚、そしてこのカードは召喚時に墓地のグレイドルモンスター1

体を蘇生して、それと等しいレベルの水族モンスターを手札から展開できる。墓地と手札からそれぞれレベル3のグレイドル・イーグル、そしてネレイアビスを特殊召喚！」

グレイドル・スライムJr. 攻0

グレイドル・イーグル 攻1500

水精鱗―ネレイアビス 守2000

「通常のチューナー……：ダークシンクロではない、本来のシンクロモンスターか」

「ダークシンクロ？え、なに、まだ何か種類あんの？まあ、当面僕には関係ない話だからいいけどさ。レベル3のイーグルとネレイアビスに、レベル2のスライムJr. をチューニング！」

「清明もシンクロ召喚だ?!」

うーん、十代はやっぱ食いついてきたか。そりやそうだよなあ。後でペガサスさんの新カードテスト証明書でも見せとけば誤魔化せるかな。確か卒業証書とかといっしょに部屋の中に保管してあったはずだ。

ともかく3体のモンスターが飛びあがり、シンクロの輪の中で1つになる。このシンクロ召喚もあの時以来使うことがなかったから2年ぶりだけど、こっちの腕がなまっていなければいいのだが。

「変幻自在な不定の恐怖は、星海旅する魔性の生命！シンクロ召喚、グレイドル・ドラゴン！」

☆3＋☆3＋☆2＝☆8

グレイドル・ドラゴン 攻3000

水銀めいた光沢を放つ体に、鳥のような黄色い翼。ワニのような鋭い牙が生えた巨大な口と、ピンク色のコブラが生えているかのような尾。様々なグレイドルの記憶を受け継いだ戦闘用の合体形態が、2体のウォリアー相手に頭と尾にそれぞれついた計4つの目で睨みつける。

「グレイドル・ドラゴンはシンクロ召喚成功時、その素材となった水属性モンスターの数まで場のカードを破壊できる。僕が選ぶのは遊星、お前さんの伏せカード2枚とジャンク・デストロイヤー、お前だ！グ

レイドル・トルピード！」

「ジャンク・デストロイヤーを？」

破壊耐性のことを知らないギャラリー2人から一斉に注がれたいぶかしむような視線も意に介さず、ドラゴンの体表にさざ波が走る。不定形のボディが変態して文字通りその身を削ることで放たれた無数の小型有機体ミサイルが雨のごとく降り注ぎ、僕が指定したロード・ウォリアー以外の3枚のカードを焼き尽くす。

「どれどれ？破壊したのはくず鉄のかかしに……スキル・サクセサー？」

『フリーチェーンで発動し、ロード・ウォリアーの攻撃力を400アツプさせることもできたはずだ。だがそれをせず、あえて破壊されるがままにしていたわけか。となると、考えられる理由は2つ』

「(グレイドル・ドラゴンの効果を最初から知っていたか、それとも僕の狙いを読み切ったか……いいねいいね、どっちにしても楽しいよ) 遊星に聞こえないようテレパシーで行われたチャクチャルさんとの短い意見交換を終える。最後の一言は、嘘偽りない僕の本音だ。目の前の文字通りに時代が違う、アカデミア卒業以来随分と出会っていなかった久方ぶりの強敵を前にどうしようもなく心が高揚し、自然と口元が好戦的に緩む。それを見た遊星のポーカーフェイスが若干困惑した風に揺らぐのを見て、より一層楽しくなった。

「おっと、忘れないうちにフィールドから墓地に送られたネレイアピスの効果を発動。デッキからカードを1枚引き、その後手札を1枚捨てる。永続魔法、補給部隊を発動！」

サルベージしたきりだったツーヘッド・シャークを墓地に送り、代わりのドロークカードを即座に発動する。そろそろ手札が枯渇してきたこのタイミングでこのカードを引けたのは、実際ありがたい。

「さあ、バトル！悪いねグレイドル・ドラゴン。早速だけどロード・ウォリアーに攻撃、グレイドル・スパーク！」

「迎え撃て、ロード・ウォリアー！ライトニング・クロー！」

ドラゴンが翼を広げ宙に飛び、全身からエネルギーを放出することで発光しながら急降下突撃を敢行する。カウンターを合わせるよう

にして放たれた王の戦士の右拳がそれと激突し、行き場を失ったエネルギーギーが派手な爆発を起こすことで2体のモンスターがともにその爆風の中へと飲み込まれる。

グレイドル・ドラゴン 攻3000 (破壊) ↓ロード・ウオリアー  
攻3000 (破壊)

「僕のフィールドでモンスターが破壊されたことで、補給部隊の効果によりカードを1枚ドロウ。さらにグレイドル・ドラゴンが破壊された時、僕の墓地から水属性モンスター1体を効果を無効にして特殊召喚できる。甦れグレイドル・イーグル、そしてダイレクトアタックだ！」

爆発によりバラバラに飛び散ったドラゴンの体を構成する流体金属めいたグレイドルの欠片が空中に集合し、互いに再びくつきあつて黄色い鷹を模した姿となる。そして遊星のフィールドに、もはやその突撃を防ぐモンスターはいない。

グレイドル・イーグル 攻1500 ↓遊星 (直接攻撃)

遊星 LP3900 ↓2400

「くっ……」

「清明のダイレクトアタックが決まったぜ、遊戯さん！」

「ああ。先ほどのターンは遊星も見事な攻撃だったが、君の友達も1歩も引かない反撃だったな」

「そりゃそうですよ、なんたつて俺の親友ですから」

親友、か。目の前でああまではつきり言い切られるときさすがに少し照れ臭いけど、その評価はありがたく受け取っておこう。でも親友なら卒業してからもせめて1回ぐらいはうちまで何か買いに来い、挨拶もなしに世界中ほつきまわってからに。

「いいもん引けた、2枚目の補給部隊を発動。僕はこれで、ターンエンド」

遊星 LP2400 手札：3

モンスター：なし

魔法・罫：なし

清明 LP4000 手札：0

モンスター：グレイドル・ドラゴン（攻）

魔法・罫：補給部隊

補給部隊

「俺のターン、調律を発動。デッキからシンクロンチューナー1体をサーチし、その後デッキトップのカードを墓地に送る。俺が選ぶカードは、ニトロ・シンクロンだ。さらに魔法発動、ワン・フォー・ワン！手札のモンスター1体をコストに、手札またはデッキからレベル1のモンスターを特殊召喚する。出でよ、ターボ・シンクロン！」

ターボ・シンクロン 攻100

専用サーチ効果を持つ魔法カード、調律を使いサーチされたニトロ・シンクロンが、すぐさま手札コストとして墓地に送られる。なるほど、モンスターをコストにする必要があるワン・フォー・ワンを使うためにやむなく貴重なサーチを使ったってことか。

そしてそこまでして遊星が次に呼び出したのは、緑色のデフォルメされた車のようなモンスター。シンクロン……確か、あのカードもチューナーモンスターだったはず。となると、もう次のシンクロの準備が整っているというわけか。

でも来るなら来い、多少のダメージは受けてやろうとも。ただし戦闘破壊してみる、このイーグルの効果で即座にそのシンクロモンスターをパクつてくれよう。今の特殊召喚に反応して墓地のドラゴン・アイスを蘇生させることもできるけれど……手札は1枚、さつき引いた貪欲な壺。わざわざデッキをこれ以上分厚くすることもない、次のドロローが終わってからでいいだろうと思って放置してあったけど、やっぱりさつきのターンのうちに使っておくべきだったかな？いずれにせよ、せっかく発動条件も満たしているこれを使わずに捨てるのはさすがにもったいない。

「そして、スター・ブライイト・ドラゴンを召喚。このカードが召喚に成功した時、自身以外のモンスター1体のレベルを2つまで上げることができる。ターボ・シンクロンのレベルを1つ上げる」

「レベル6、か」

スター・ブライイト・ドラゴン 攻1900



ターボ・シンクロン ☆1↓2

「レベル4のスター・ブライト・ドラゴンに、レベル2となったターボ・シンクロンをチューニング！集いし絆が更なる力を紡ぎだす。光さす道となれ！シンクロ召喚！轟け、ターボ・ウォリアー！」

『これは……』

☆4+☆2||☆6

ターボ・ウォリアー 攻2500

遊星3体目のシンクロモンスターは、先の2体に比べるとやや小柄なものの上級クラスとしては及第点以上の攻撃力を備えた赤い塗装のウォリアーだった。腰に装着されたタイヤが激しく回転し、体内のエンジンに命が宿る。

その姿を見たチャクチャルさんが何か言いかけたが、そのセリフの続きはこの機を逃さず畳みかけようと判断したらしい遊星の次なる宣言にかき消された。

「さらにここで、墓地からスキル・サクセサーの効果発動。このカードを除外し、ターボ・ウォリアーの攻撃力を800ポイントアップさせる。バトルだ、ターボ・ウォリアー！アクセル・スラッシュ！」

「来たね！」

ターボ・ウォリアー 攻2500↓3300↓グレイドル・イーグ

ル 攻1500（破壊）

清明 LP4000↓2200

「今度は遊星がいった！でも、清明のカードには効果があるぜ」

「その通り。けどまずは、補給部隊2枚の効果でそれぞれ1枚ずつドロウ。戦闘で破壊されたグレイドル・イーグルは相手モンスター1体に寄生して装備カードになり、装備モンスターのコントロールは僕のもとに移る。なかなか面白かったけど、次のターンで終わりだ遊星！」

両断されたイーグルが銀色の液体に溶解崩れ、ターボ・ウォリアーの精密部品の内部へと音もなく侵入にかかる。この作業が終了した時、ターボ・ウォリアーの機構は完全に僕のものとなる。

だが、そう言い切った際の遊星の表情の変化を僕の目は見逃さな

かった。遊星はその時、確かに笑っていたのだ。

「やはりな……だが、それはどうかな？」

「なんだって？」

『ああ、このターンに関してはマスターの完敗だな』

「え？」

チャクチャルさんの不吉な発言に呼応するかのようには、フィールドでも何かが起きていた。されるがままに寄生されていたかに見えたターボ・ウォリアーが突然エンジンを全開に噴かすと、その衝撃に液状のグレイドルがその内部から振り落とされて消えはじめたのだ。

「残念だが、ターボ・ウォリアーはレベル6以下のモンスターの効果の対象にならない。確かにそのモンスターの効果は恐るべきものだが、それもターボ・ウォリアーには無効だ！」

「嘘!！」

さらにスピードを増して回転するエンジンが新たな力を生み出し、ついにグレイドルの力が完全に弾き飛ばされた。何事もなかったかのように遊星の側に立つターボ・ウォリアーを前に、思わず歯噛みする。

「やってくれるね、遊星。グレイドル・イーグルの効果を知ってたのかい?！」

「いや、違う。ただグレイドル・ドラゴンが破壊されたあの時、攻撃力が200程度しか差がないのなら場を離れた時の手札交換効果を持つネレイアビスを蘇生させてもよかったはずだ。そしてお前は十代さんが認めるほどのデュエリスト、わずかなダメージのためだけにネレイアビスを捨ててまでグレイドル・イーグルを蘇生させたとは考えにくかった。つまりグレイドル・イーグルには手札交換よりも優先するだけの効果がある、そう思ったのさ。もっともその効果にターボ・ウォリアーの耐性が通用するかどうかは賭けだったがな。だが、どうやら俺はこの賭けに勝ったようだ」

答えてくれないかとも思ったけど、思いのほか饒舌に話してくれた。無口なようであり、案外話しやすいタイプなのかもしれない。そしてあの1瞬でそれだけのことを見抜く洞察力、そこから耐性持ちの

ターボ・ウオリアーを呼び出す応用力。

うん。やつぱりこの男、強いデュエリストだ。カードパワーとか引きの良さじゃない、純粹にデュエリストとして強い。つくづく今のうちに戦えてよかったけれど、もっと成熟してからの彼と戦えないことが惜しい。残りの手札1枚を伏せてターンを終える遊星の姿を見ながら、改めてそう思った。

ターボ・ウオリアー 攻3300↓2500

「僕のターン。魔法カード、貪欲な壺！墓地のグレイドル・スライムJr.、グレイドル・イーグル、グレイドル・ドラゴン、ツーンヘッド・シャーク、そしてネレイアビスの5体をデッキに戻して2枚ドロウ。トレード・インを発動、手札からレベル8のカイザー・シースネークを捨ててさらに2枚ドロウする」

目まぐるしく引き込まれたドロウソースと手札交換カードにより、手札の中身がくると入れ替わる。だけど、おかげですっかり準備は整った。さあ、さっきの借りを利子付けて叩き返してやる時だ。

「手札からカイザー・シースネークの効果を発動。相手フィールドにのみモンスターが存在するときレベル4、攻撃力0としてこのカードを特殊召喚し、さらに手札か墓地からレベル8の水属性かつ海竜族モンスターを攻守0として特殊召喚できる。たった今捨てたもう1体のカイザー・シースネークを蘇生！そしてこの2体目もまた、特殊召喚されたことでレベルが4になる。チューナーモンスター、グレイドル・スライムJr.を召喚！本来は召喚時に蘇生効果が使えるけど、あいにくついさつき墓地のグレイドルは全部デッキに戻しちゃったからね」

カイザー・シースネーク 攻2500↓0 ☆8↓4

カイザー・シースネーク 攻2500↓0 守1000↓0 ☆8

↓4

グレイドル・スライムJr. 攻0

「今度こそ覚悟しときなよ、遊星。レベル4になったカイザー・シースネークに、レベル2のJr.をチューニング。鉄網珊瑚てつもうさんごの時の果て、目覚めよ海に抱かれし秘宝！シンクロ召喚、コーラル・ドラゴン瑚之龍！」

☆4＋☆2＝☆6

瑚之龍 攻2400

海中で長き時を過ごすうちにその体はやがて珊瑚をまとい、それと一体化した文字通り赤珊瑚色の龍。あいにくとレベル6モンスターであり攻撃力でも劣るこのカードにターボ・ウォリアーを倒すことは不可能……だけど、この場においては十分だ。

「瑚之龍は1ターンに1度、手札を捨てて場のカード1枚を破壊できる。ターボ・ウォリアーが対象に取れないなら、そのセットカードを狙うまで！効果発動、コーラル・グローアップ！」

瑚之龍が一吠えすると、遊星の伏せカードの真下から樹木のような珊瑚が急速に成長してそれを突き破り破壊した。だがカードを1枚除去されたというのに、遊星に焦りの色はない。

「まだだ！このカードが墓地に送られたことで、墓地のリミッター・ブレイクの効果発動！デッキからスピード・ウォリアー1体を特殊召喚する！」

「墓地発動……！」

スピード・ウォリアー 守400

どうやら良かれと思っただけなしの手札をつぎ込んだ破壊効果は、完全に裏目だったらしい。フルフェイスシユノーケルのような部品で顔を包む機械の戦士が、ターボ・ウォリアーの隣に片膝をついて現れる。モンスターを残させるのはあまりいい傾向ではないけれど、今更なかつたことにはできないことだ。

「まあいいさ。だとしても僕は、今できることをやるだけだしね。いいこと教えたげるよ遊星、瑚之龍は確かにシンクロモンスターだけど、同時にチューナーモンスターでもある！レベル4のカイザー・シースネークにレベル6のシンクロチューナー、瑚之龍をチューニング！」

「シンクロモンスターのチューナーだ?!?そんなカードが存在するのだろうか!?!」

「お、これには食いついてくれた？嬉しいねえ、そう来てくれないとこっちも張り合いがないよ。完全無欠の海の主、神気宿りし眠れる臥

竜！シンクロ召喚、ホワイト・オラ・バイファムート白鬪気双頭神龍！」

☆4＋☆6＝☆10

白鬪気双頭神龍 攻3300

グレイドル・ドラゴンよりなお一回り大きい、僕の持つ最大サイズのモンスターであるチャクチャルさんやジズキエルとも張り合えるほどのサイズを誇る超大型シンクロモンスター、白鬪気双頭神龍。偉そうなことを言ってはいるが、僕だってこのカードを使うのはこれが初めてだ。というか、カードイラストでしか見たことなかったけどお前こんなデカかったのか。

「シンクロモンスターでチューナー……それってどれぐらい凄いですか、遊戯さん？」

「いや、俺に聞かれても」

実は僕もよくわからない。でも本家シンクロ使いの遊星があそこまで驚愕しているところを見ると、なんかよくわかんないけどとにかく凄いだろう。凄いぞ瑚之龍、強いぞバイファムート。

……そんな凄いカードなのに、こんな頭の悪い感想しか出てこないところが申し訳ない。

「ととと、忘れるところだった。この瞬間自分ターンでのシンクロ召喚に成功した白鬪気双頭神龍と、シンクロ召喚された状態から墓地に送られた瑚之龍の効果を発動。神龍トークン1体を守備表示で特殊召喚し、カードを1枚ドローする」

双頭を持つ最強の魚の周りに神気が立ち込め、その姿が二重にぶれて見える。これこそがこのバイファムートを守る盾であり、またその力を増すための矛でもある特殊能力だ。

神龍トークン 守3000

「まだ驚いてるところ悪いけど、このままバトルさせてもらうよ。白鬪気双頭神龍でターボ・ウォリアーを攻撃、ホワイト・メロウ・クロニクル白の晴朗軌跡！」

バイファムートの双頭のうち片方が鎌首をもたげ、開いた口から純白の波動を放つ。赤い戦士がその中に飲み込まれ、跡一つ残さず消え去った。

白鬪気双頭神龍 攻3300↓ターボ・ウォリアー 攻2500

(破壊)

遊星 LP2400↓1600

「うおおおっ！」

遊星の悲鳴を聞きながらも、気分は今一つ晴れなかった。このターンで彼にとどめは刺せない。予想外のリミッター・ブレイクにより、モンスターは残してしまった。今は手札こそないが、それでも次のドロがある。

僕の遊星というデュエリストに対する見立てが正しければ、また彼はこの状況を巻き返してくるだろう。頼むよ、バイファムート。僕が次のターンを無事に切り抜けられるかは、君がどれだけ持ちこたえてくれるのかにかかってるんだから。

「カードを1枚伏せて、ターンエンド」

遊星 LP1600 手札：0

モンスター：スピード・ウォリアー(守)

魔法・罫：なし

清明 LP2200 手札：1

モンスター：白鬨気双頭神龍(攻)

神龍トークン(守)

魔法・罫：補給部隊

補給部隊

1(伏せ)

「俺の……ターン！」

さあ遊星、なにを引いた？あの様子だと、案の定何か仕掛けてくる気らしい。

「俺は、シンクロン・エクスペローラーを召喚！このカードは召喚時、墓地のシンクロン1体を効果を無効にして特殊召喚できる。甦れ、ニトロ・シンクロン！」

「ニトロ・シンクロンを……？」

シンクロン・エクスペローラー 攻0

ニトロ・シンクロン 守100

釣り上げ効果により甦る、ニトロ・シンクロン。これで遊星の場の

合計レベルは、6。確かに遊星の墓地に、ほかにレベル2のチューナーは存在しない。まさか、あの調律は手札コスト用のモンスターを引つ張ってくるためだけでなく、最初からこの盤面を想定したうえであのカードをサーチ先に選んでいたとでもいうのだろうか。シンクロン・エクスプローラーを引いたとき、レベル6のシンクロ召喚を可能とする盤面を用意するために。

考えすぎかもしれないが、もしもそこまで考えてのすべて計算づくな行動だとしたら……まったく、赤き龍はとんでもない人材を発掘してくれたものだ。

「レベル2のスピード・ウォリアーとシンクロン・エクスプローラーに、レベル2のニトロ・シンクロンをチューニング！星雨を束ねし聖翼よ、魂を風に乗せ世界を巡れ！シンクロ召喚、スターダスト・チャージ・ウォリアー！」

☆2＋☆2＋☆2＝☆6

スターダスト・チャージ・ウォリアー 守1300

遊星が4体目に召喚したのは、星屑のように煌めく機械の翼をひるがえす新たななるウォリアー。そのステータスはこれまでのウォリアーたちの中でも断トツに低く実際遊星も守備表示でシンクロ召喚しているが、無論それだけではないだろう。なら、ここでドラゴン・アイスを生かさせるべきだろうか……いや、相手の効果が分からない以上、下手に手を出すのはやめておこう。

「スターダスト・チャージ・ウォリアーがシンクロ召喚に成功した時、俺はデッキからカードを1枚ドロウできる……ドロウ！」

なんとまあ、この土壇場でドロウ効果に繋がるとは。さあ、次は何を引いたんだ？

「死者蘇生を発動！俺の墓地からミスティック・パイパーを特殊召喚し、その効果を発動。このカード自身をリリースすることでカードを1枚ドロウし、それがレベル1モンスターならばさらにもう1枚ドロウができる。俺がドロウしたのはレベル1のガード・オブ・フレムベル、よってもう1枚だ」

ミスティック・パイパー 攻0

死者蘇生により見慣れない笛を持つ道化師のようなモンスター……おそらくあの調律の後半の効果で墓地に送られたのだろう、ミスティック・パイパーが現れたかと思っただけなら瞬時に消え、代わりに遊星の手札が2枚増える。

「魔法カード、調和の宝札を発動！手札から攻撃力1000以下のドラゴン族チューナー、ガード・オブ・フレムベルを捨てることでさらにカードを2枚ドローする！」

『またか』

口には出さないが、僕も同感だった。たった1枚のドローから繋げてスターダスト・チャージ・ウオリアー、ミスティック・バイパー、調和の宝札とこのターンだけで計5枚ものドローに成功しているのだから、相手する側としてはそう言いたくもなるといえるものだ。

だが、そのドローのラッシュもようやくひと段落着いたらしい。

「……カードを2枚伏せて、ターンエンドだ」

「やるな遊星、まさかあんなにドローするなんてな」

「ああ。ただ引きがいいだけじゃない、彼のデッキとの深い絆がそれを可能にしたのだろう」

もはや実況に解説と化した後ろの2人も感嘆の声を漏らす中、再び僕にターンが巡る。あそこまでぐるぐる回して得た2枚のカードだ、当然ブラフではないだろう。どのタイミングでこちらにあの2枚が牙をむいてくるか、見極めを間違えたら倒れるのはこちらだ。

「僕のターン。魔法カード、アクア・ジェットを発動！このマジックコンボで魚族モンスター、白鬨気双頭神龍の攻撃力はさらに1000アップ！そして神龍トークンを攻撃表示にして、バトルフェイズ。スターダスト・チャージ・ウオリアーに攻撃！」

バイファームートの先ほどとは違う側の首がぐわりと動き、星屑の戦士へと純白の波動を放つ。仕掛けてくるとしたらここだろうか……だが意外にも、まだ遊星はピクリとも動かなかった。

白鬨気双頭神龍 攻3300↓4300

神龍トークン 守3000↓攻3300↓スターダスト・チャージ・ウオリアー 守1300 (破壊)



「何もなし、か。なら続けて白鬨気双頭神龍で遊星にダイレクトアタック、白の晴朗軌跡！」  
ホワイト・メロウ・クロニクル

攻撃を終えた側と入れ替わるようにバイファムートの最初に動いた方の首が目覚め、追撃のダイレクトアタックを仕掛けに行く。さあ、これを止めないとライフが尽きるぞ。

「トラップ発動、トゥルース・リインフォース！このカードは発動ターンの俺のバトルを封じる代わりに、デッキからレベル2以下の戦士族モンスターを特殊召喚できる。来い、マッシュ・ウオリアー！」

「構わない、攻撃続行！さらに速攻魔法、終焉の地！相手がモンスターを特殊召喚した時、デッキからフィールド魔法1枚を直接発動できる。これが僕のフィールドだ、KYOUTOUウオーターフロント！」

「フィールド魔法か……」

巨大な石の歯車を盾のように掲げる戦士……確かあのカードは、1ターンに1度破壊されない壁モンスター。なるほど、確かにあれならば緊急回避にはもってこいだろう。そんなことを考えている間にも、バイファムートの攻撃はその頑丈な盾に受け止められていた。

だが、それは確かにこの一撃こそ止められたかもしれないが、決して安くない代償を支払うことにもなる。ほんの少しだけ、遊星の表情が変化した。そう、彼は僕が当然使うであろうフィールド魔法に依存するモンスター、地縛神を知っているのだ。ふふふ、すでに自分のライフが即死圏内にある状況でフィールド魔法を張られるというのはたまったものじゃないだろう。しかも僕のチャクチャルさんは、確実に場に出る隙を今か今かと伺っている。

そう、こんな風に。

白鬨気双頭神龍 攻4300↓マッシュ・ウオリアー 守1300

「確かに攻撃を耐えきれぬマッシュ・ウオリアーなら、僕が今のドロイーで召喚できるモンスターを追加で出していたとしてもライフを守り切れるってわけか。でも、そりゃちょっとばかり虫が良すぎるってもんさ。そろそろお楽しみ時間だよ、遊星！トラップ発動、リビングデッドの呼び声！」

「リビンググデッドだど？まさか！」

遊星は、さつき死者蘇生を発動した時に自動的に僕の墓地も見ている。つまり、僕の墓地にあのカードが落とされていることも知っている。そんなに出してほしいなら、お望み通りに満を持して呼んでやろう。

「力を維持するために必要なフィールド魔法は遊星、お前さんのおかげで発動できた。瑚之龍の効果を使った時にはもう、とつくに仕込みは終わってたのさ！七つの海の力を纏い、穢れた大地を突き抜ける！地縛神 Chacu Chalhua！」

「地縛神……！」

童実野町の中心で、闇が増幅した。ぽつかりと地面に空いた深淵の穴から、黒を基調とした全身に紫の模様が描かれる巨大なシヤチが浮上する。やっぱりシグナーとダークシグナーの戦いなら、うちの神様にもしかるべきタイミングで出てきてもらわないと。

地縛神 Chacu Chalhua 攻2900

『待ちくたびれたぞ、マスター』

「真打は遅れてやってくるもんさ。でもほら、そのおかげで最高のシチュエーションなんだから堪忍してよ。いくらマツシブ・ウオリアーの防御性能が優れていても、モンスターを無視して直接相手プレイヤーに攻撃ができる地縛神の前では無力。さあチャクチャルさんどつと締めちやって、ミッドナイト・フラッド！」

「これは決まったか!？」

マツシブ・ウオリアーの横をすり抜け、闇のパルスが空を裂く。十代が叫ぶ。遊星の場に残された、最後の1枚が表を向いた。

「トラップ発動、星墜つる地に立つ閃光！直接攻撃を宣言した相手モンスターは攻撃力が俺のライフを上回るとき、その攻撃を無効にしてデッキからカードを1枚ドロー。さらに俺のエクストラデッキから、スターダスト1体を特殊召喚できる！」

『しまった……！』

「これも止められたっ!？」

あと1歩で勝負が決まると思われたその時、天より振り下ろされた

まばゆい星々の煌めきである光の柱がチャクチャルさんの攻撃を受け止め霧散させる。

「お前がダークシグナーである限り、必ず最後には地縛神を呼び出すであろうことは読めていた。ならば俺もこの戦い、シグナーとして迎え撃とう！集いし願いが新たに輝く星となる。光さす道となれ！飛翔せよ、スターダスト・ドラゴン！」

星の色をした光の柱が砕け、その中心から星屑の名を持つ天翔けるシグナーの竜がついにその姿を見せた。できればあれを出される前に決着をつけたかったところではあるけれど、それこそ虫が良すぎるってもんか。

スターダスト・ドラゴン 攻2500

「遊星もエースモンスターを出したぜ、遊戯さん！」

「見事な逆転だな。だがスターダスト・ドラゴンの特殊能力はこの状況にそぐわないし、攻撃力でも彼の場のモンスターを下回っている。エースモンスターを呼び出しただけで勝てるわけではないことは、彼自身が一番よくわかっているはずだ」

ダークシグナーの地縛神と、シグナーのドラゴン。対峙すべくして出会ってしまった2体のモンスターが、フィールドを挟み向かい合う。そうか。あれが、スターダスト・ドラゴンか。知らず知らずのうちに流れていた冷や汗を隠すように、努めて余裕を込めて虚勢を張る。

「真打登場はそっちもかい？だけどフィールドから墓地に星墜つる地に立つ閃光のカードが送られたことで、ウォーターフロントには壊獣カウンターが1つ乗せられる」

KYOUTOUウォーターフロント(0)↓(1)

スターダスト・ドラゴン。その特殊能力は不明だが、現状何も打つ手はない。終焉の地なんてまだるっこしいカードではなくテラ・フォーミングあたりから直接ウォーターフロントをこのターンの初めに握ることさえできていれば今頃壊獣カウンターは3つ溜まっていたはずだし、そこから壊獣をサーチしてとっとリリースでご退場願うこともできていたはずだ。でもまあ、あまり文句ばかり言っても

つまらないしもつと前向きにいこう。

遊星 LP1600 手札：1

モンスター：スターダスト・ドラゴン（攻）

マッシュ・ウォリアー（守）

魔法・罨：なし

清明 LP2200 手札：1

モンスター：地縛神 Chacu Chailhua（攻・リビエ）

白闘気双頭神龍（攻）

神龍トークン（守）

魔法・罨：補給部隊

補給部隊

リビングゲッドの呼び声（地縛神）

場：KYOUTOUウォーターフロント（1）

「俺のターン。そろそろ、この戦いに決着をつける時だ」

「それについて僕も同感だね。それで？」

「これが俺の、最後の賭けだ！カードを2枚伏せてターンエンド、さあ、来い！」

これまでの印象とは違ってかわつての熱い叫びとともに、残り2枚の手札を勢いよくセットする遊星。スターダスト・ドラゴンは攻撃表示のまま、これがいったい何を意味しているのか。いずれにせよ、遊星の目には本人の言葉通り最後の賭けに挑む者に特有の強い覚悟が燃えている。あれはブラフでも何でもなし、本気で遊星はあの2枚、それとスターダスト・ドラゴン、あるいはマッシュ・ウォリアーか。ともかくこの最大でも4枚のカードから、これだけ不利な状況をひっくり返しての勝利を狙っている。

「……なら、こっちも出し惜しみなしだ！僕のターン、ドロー！」

『結局、マスターはこのカードなんだな』

ドローカードを覗き込み、半分呆れたように笑うチャクチャルさん。まったくだ。だけど、これは僕の誇りでもある。いつでも一緒に戦ってきた、最高最大のフェイバリットカード。

「神龍トークン1体をリリースして、アドバンス召喚！このカードは

レベル7だけど、召喚の際にリリースを任意の数まで減らすことができる」

「あれは……」

「出たぜ、清明のエース！」

バイファムートを取り巻く神気が上空に揺らめき、優しい白色の霧となつて滞空する。その霧の世界の向こうから、全身鎧の人影がやってきた。その攻撃力は、リリースしたモンスター合計の合計。

「さあ、クライマックスと洒落込もう！行くよ、霧の王！」

霧の王 攻0↓3300

ちなみに、ここで神龍トークンをリリース先に選んだことにもちやんと理由がある。バイファムートは相手ターンに1度、自分フィールドにトークンが存在しないときに神龍トークンを生み出すことができるのだ。つまり、実質消費なしでこの攻撃力の霧の王を出せることになる。

ま、残念ながらもこのデュエルでそれを使う機会は訪れないだろうけど。

「何を企んでるかは知らないけど、まずはシンクロ対決だ！白闘気双頭神龍でスターダスト・ドラゴンに攻撃、白の晴朗軌跡！」

攻撃宣言を行ったことで、一時的に神気を失ったバイファムートの口元にエネルギーが集まりだす。だがそれこそが、遊星のずっと待ち望んでいたタイミングだった。

「トラップ発動、炸裂装リアクティブ・アーマー甲！このカードの効果により、攻撃宣言を行った相手モンスター1体を破壊する！」

「今更1体止めたところで……」

「さらに！カードを破壊する効果が発動したことでスターダスト・ドラゴンの効果発動、ヴィクティム・サンクチュアリ！このカードをリリースすることで、その発動を無効にして破壊する！」

スターダストの全身が、その名の示す如く星屑のような無数の光の粒に包まれる。

「そして！スターダストがリリースされ炸裂装甲と共に墓地に送られたことで、俺の墓地に存在するカードは30枚となった！これにより

発動条件を満たしたトラップ、残骸爆破を発動！この効果により、相手プレイヤーに3000ポイントのダメージを与える！」

遊星に残された最後のカードにして逆転の切り札、残骸爆破。なるほど、確かにこの方法ならば僕のライフを1瞬で0にできる。スターダスト・ドラゴンの効果を最大限に生かしたコンボで墓地の枚数を調整するそのタクティクスも、実際大したものだ。

……だからこそ。こう思うのはもう3度目だけど、やっぱり改めて思う。まだ実力の開花しきっていないうちに彼と戦えたことは本当に僥倖であり、またとびきりの不幸でもある。だってこうして、今はまだ僕の方が上にいるのだから。

「霧の王……」

何をしろとも明確に伝えていない、ただその名を一言叫ぶだけの短い命令。それでも僕の相棒にして切り札は、僕の命令を読み取ってくれた。その剣の切っ先を星色の光に包まれ今まさにその中へ消えようとしていたスターダスト・ドラゴンへと静かに向けると、光の粒子の勢いが急速に衰えていく。やがて光は完全に消え失せ、何事もなかったかのようにすべてが元に戻った。

「馬鹿な、スターダストの効果が……！」

「惜しかったね、遊星。霧の王がフィールドに存在する限り、互いのプレイヤーはいかなる場合のリリースも行うことが許されない」  
「……くっ」

炸裂装甲が発動に成功し、墓地に送られた。だけど、遊星の墓地のカードは29枚。あと1枚、足りない。そしてそれを用意する前に、このデュエルは終わる。悔しそうにうつむいた遊星が、再び顔を上げて僕の目をまっすぐに見る。その覚悟に心の中で敬意を表し、そつと最後の指令を下した。

「チャクチャルさん。遊星にダイレクトアタック……ミッドナイト・フラッド」

地縛神 Chacu Chailhua 攻2900↓遊星(直接攻撃)

遊星 LP1600↓0

「……ふう」

そつと息をつく。気を張り詰めっぱなしで脳もずつとフル回転、疲れる戦いだった。でも、最高に楽しい時間だった。デュエルが終わったことを見届けて、十代と遊戯さんが再び僕らのところに近寄ってくる。だけど僕にはそれとは反対側、最後の一撃のショックかその場に座り込んで自分の手を見つめて呆然とつぶやく遊星の姿が気になった。

「俺は……まだ生きている、のか？」

「あつたりまえでしょ、そんな物騒な。ほれ、立てる？」

「あ、ああ」

近寄って手を伸ばしてやると、素直にそれを掴んで立ち上がる遊星。その時のキョトンとした表情とさっきまでの真剣な顔のギャップに、思わず小さく笑ってしまう。

「ごめんごめん、つい、ね。まあ真面目な話としてお前さんと僕じゃシグナーとダークシグナーでも生きてる時代がそもそも違うし、そもそも僕は現世に恨み残してこうなったクチじゃないからね。礼儀、というかひとつのけじめとして喧嘩は売らせてもらったけど、それが終わればそんなのはもう関係ないさ」

「なんだかよくわからないけど、お前たち仲直りできたのか？」

なんだか不思議なものを見るような顔で僕と、それから十代をかわるがわる見る遊星。ややあつて、立ち上がる時に掴ませたままの僕の手をぐつと握り返した。

「このデュエルを通じて、ダークシグナーにもあなたのような人がいることを学びました。清明さん、俺と手合わせしてください、ありがとうございます」

「いやいや、こっちこそ楽しいデュエルだったよ」

固く握手する僕らを見て満足そうに大きく頷く十代と、そつと微笑む遊戯さん。赤き龍がどうかは知らないが、少なくともチャクチャルさんの方はシグナー相手に勝利したからか、それとも久々のフィニツ

シャーになれたからか満足そうだしめでたしめでたし、ということでもいいだろう。

「……いや、まだ1つ、聞きたいことがあったんだ。」

「ところでさ、少し聞きたいんだけど」

「ええ、なんですか？」

「皆、いったい何があつてこの時代に集まつてたの？」

それを聞いてなぜか3人が顔を見合わせ、何とも言い難い複雑な表情を一斉に浮かべる。首をひねる僕の肩を、十代がポンと叩いた。

「それなんだけどな、もう大変だったんだぜ？遊星よりもさらに先の未来から、パラドックスってデュエリストが……」

「……ら。おい、清明！」

三沢に肩を揺さぶられながら自分の名前を大声で呼ばれ、ようやく我に返る。いつの間にか、がつつりあの日のことに思いをはせていた。そうだ、三沢にあの話をどう話そうか。あの時に十代から聞いた時空を超えるデュエリスト、パラドックスのこと、そしてあの後、元の世界に帰っていった遊星のこと。あの事件によつて様々な時代で起きた一時的な歴史の改変は全部赤き龍がその帰り際になかったことにしてくれていたと思つていたけれど、まさか霸王の異世界から偶然その時の様子を見られていたとは。

うんうんと唸っていると、先にため息をついたのは三沢だった。

「まあいいさ。観測に成功した以上、何か起きたことは間違いないからな。いつの日か必ず、3年前に何が起きたのかを俺自身の力で突き止めて見せるからな。あまり全部ネタバレラシしてもらつては、研究の面白みもなくなつてしまう」

そういつて景気づけのつもりなのか、手にしたままのグラスの中身をぐいっと一気に開ける。空になったグラスをテーブルに置き、じやあ後でな、と手を振つて人並みの中に消えていく。ほかにも懐かしい顔はたくさんいるから、そちらの挨拶に向かったのだろう。



今度こそ壁の花となったところで、遊星とのデュエルに思いをはせる。結局この2年間、あれほどに僕の全てを燃やし尽くすほどのデュエルは経験していない。心当たりは何人かいるのだが、十代はあれ以降もまた世界中ほっつき歩いていて今日だって会えるかどうかわかったものではないし、カイザーはサイバー流道場を翔に譲って以降決して自分では戦わない生活を送っているという。

ただ僕が求めているのは、そういう意味での強者ではない。あの2人は確かに馬鹿みたいに強いけれど、だからといってシンクロモンスターを、あるいはエクシーズモンスターを、遠慮せずに出せる相手ではない。僕だけが持つカードというのならばまだしも、僕だけが所有する概念というのはフェアではない、だけどまたエクストラデッキの彼らと一緒に戦いたいという抗いがたい誘惑。

だから僕は今、悩んでいる。全力を気兼ねなく出し切れる相手との戦いに対しての渴望を癒すために、時折頭をよぎっては離れないある突拍子もない考えに。

「どうしようかね……」

自分でも気づかなかったけれど、もしかしたら今日ここで同窓会を企画したのはどんな形にせよ、この自分の中の迷いにけりをつけようと思ったからかもしれない。ふとそんなことも考えて、口からこぼれた小さな言葉は室内の喧騒にまぎれ、ちぎれてどこかへ消えていった。

## 番外編その2 鉄砲水とGX

夜は続く。それはつまり、まだまだ宴が続くということでもある。「こんな成長したあなたたちに出会うことができ、私は今自分の教師生活の中でも一番に感動しているノーネエエエエ！」

「お、俺も先輩方にまた出会えて、心の底から嬉しいザウルスウウウ！」

「ほらほら、2人ともわかったから！レイちゃん、悪いけれど手伝ってくれるかしら」

「任せて明日香さん！ほら2人とも、ボクが今お水持つてくるから、ちよつと落ち着いてね！」

だいぶ酔いも回ってきたのだろうか。いきなり会場のだ真ん中で感極まって大声コンテストでもやってんのかと言いたくなるようなレベルで泣き崩れるクロノス先生とそれを見て一緒にもらい泣きする剣山、そして見て見られないとばかりにその世話を焼く明日香とレイちゃん。先生はともかく本来ならあの2人に関しては僕らの後輩なんだからこの同窓会に来ていることはおかしいのだが、あんまり一緒にいるんできたことが多かったので呼ぶリストの中にこっそり放り込んでおいたのだ。ちなみに、同じ理由でカイザーもこの会場にいる。もつとも彼の場合、翔が半ば強引に連れてきたという側面の方が大きい気もするが。

レイちゃんが持つてきた水をまだ涙目のまま素直にごくごくと飲む2人を見てみると、ふらりと近づいてきた彼女が話しかけてきた。「なーに壁の花してるんですか。主催なんだから余興のひとつでもやってみてくださいよ」

そちらを振り返ると、久しぶりに見る後輩の姿。さすがにあの時から5年も経てば元から高かった背もさらに伸び、顔立ちも大人びてだいぶ全体の雰囲気も変わっている。

だけど、一目見ればわかる。彼女の本質は、僕と一緒に毎日厨房に立っていたころから変わっていない。だから僕も微笑んで、あの時と同じように言葉を返す。その隣の人は……うん。ダークシングナーに

なつて以降成長や老化といった単語から一切無縁になつて不老の体を手に入れた僕が言うのもなんだけど、ほんとの人は何回会つても初対面の時から見た目変わらないな。

「おひさ、葵ちゃん……と、やつぱ来たんですね明菜さん。1か月ぶりですわね」

「うん、ひつさしぶり清明ちゃん！なんてつたつてこの成人式すら出席しなかった葵ちゃんが清明ちゃんからのお誘いは断らないで同窓会に行くつていうんだからね、これはもうお姉ちゃんとして可愛い可愛い妹の晴れ姿をじっくり押さえておかなくちや！」

「なんで余計なことばかり言うんですか姉上は！すみません、どうしても途中で撒けなくて……いやちよつと待つてくください先輩。1か月ぶり？姉上が？」

謝罪の途中でふと、僕の発言をいぶかしむ葵ちゃん。明菜さん、なんとなくそんな気はしてたけどやつぱ黙つてたのか。別に言つたところで減るものでもないし、別にどうだっていいだろうに。

「葵ちゃん知らなかったの？明菜さんうちの常連さんだよ」

「うんうん。お姉ちゃんよく紅茶飲んでケーキ食べておしゃべりしに行くんだ、ねー」

「ねー」

これは本当のことだ。よく、といつても月に1度か2度程度だが、ちよつと店が暇になるような時間をピンポイントで突くようにやつて来ては1時間ほど僕を駄弁り相手に指名して居座つていく。正直暇な時間とはいえやることがないわけではないので困らないと言えば嘘になるけれど、結構金払いがいいうえ会話のセンスも妹と同じく僕と波長が合い、なにより美人さんは目の保養にもなるので断じて嫌ではない。

「……本当になにやつてるんですか」

「やつぱ明菜さん頭いいから喋つてて楽しいのよ」

「お姉ちゃんの見過ごしてた葵ちゃんのお話とかも聞けてとっても楽しいよ、ねー」

「ねー」

「……変わりませんよね、2人とも」

何か言いかけたけれども結局言葉を切り、特大のため息とともに呆れ顔で言い放つ葵ちゃん。失礼な。しかし言い返す前に、そんな彼女の表情がほんの少し優しくなる。

「でもなんだか、ちよつとだけですが安心しましたよ。先ほどお見かけた時は何か様子が変わりましたが、先輩はそうやって変に大人ぶるよりもそれぐらいの方がしっくりきます」

「ちよつとちよつとマイシスター、あなたの愛しのラブリーお姉ちゃんは？」

「まずそのごちゃごちゃした形容詞全部取っ払ってください。姉上はいつになったら大人になっていただけませんか？」

「んもー、ここは人が多いから素直になれないって？この恥ずかし屋さんめ。うりうりー」

「うわ、ちよ、どんな変換してるんですか引っ付かないでください姉上！」

相変わらず仲のよさそうな姉妹に小さく笑いながら、グラス片手に衝突事故を避けるべくちよつと距離をとる。あの姉妹のことだからそんなへまはしないだろうけど、姉妹愛を邪魔するのも悪いだろう。だが抱き着く明菜さんを引き離そうと苦心しながらも、葵ちゃんが最後にポツリと呟いた一言がひどく胸に突き刺さった。

「やっぱり迷うなんて、先輩らしくありませんよ。いつも通り、お好きなようにやってみてください。それで当たって砕けた時のフォローのためなら、私たちはいつだって駆け付けるんですから」

見抜かれてた、か。なんとなくそれ以上葵ちゃんと顔を合わせていることが気まじくなくなり、気持ち足早に距離を置こうとする。しかし、これが裏目に出た。後ろに足を踏み出したところで、誰かの背中につかっってしまったのだ。

「おっと失礼……あれ、十代じゃん。来てたんだ」

「ん？よお、清明。到着したのはついさっきだけだな」

そこにいたのは、遊城十代。もう卒業してから5年、前回の騒動から数えても2年も経つというのに、なぜかその恰好はあの時と同じ赤

い制服姿のまま。僕だつて見た目は変わっていないかもしれないが、さすがに卒業したにもかかわらず外で制服を着るような真似はしない。僕や明菜さんの前に、こいつが一番変わってないんじゃないだろうか。

そんな視線を向けられていると知つてか知らずか、2年前の時と同じように屈託なく喋りかけてくる。ああ、こんなところもまったく昔のままだ。

「ときどき思うんだ。なんだか、夢みたいだと思わないか？」

「なに、遊星の話？あつちの世界で元気にやってんのかね」

あの時空を巻き込んだ大事件のことは、今でも夢みたいな時間だつたと思う。でもそれは、僕が事件解決後に乱入者としていきなり首を突っ込んだからよくわかつてないだけだと思つていた。当事者としてずっと戦つてきた十代がそんなことを口にするのは、なんだか意外だ。

でも予想に反し、違う、と彼は首を横に振つた。

「それだけじゃなくてさ。卒業してから5年つてことは、俺たちがデュエルアカデミアに入学してからだと8年だろ？たつたそれだけの間に、いろんなことがあつたよなつて」

「変なものでも食べた？卒業パーティーすらほっぽり出してどっか行つちやつたくせに、過去語りなんてらしくないじゃないの」

憎まれ口をたたきながらも、その言葉につられて僕も入学からのことをぎつくりと思ひ出す。ユーノと出会い、入学試験の相手にクロノス先生が出てきて、それでもなんとか入学生の端っこに紛れ込めたかと思えば真つ当な学園生活からかけ離れた集団、セブンスターズとの戦いが始まつた。思えば、あれがひとつのきっかけだったのだろう。それからというもの、普通の高校生ならば絶対に一生関わりあわないであろう闘争の日々が僕らにとつての「日常」となつたからだ。

光の結社、ユベル、2つの異世界、ダークネス、不動遊星……そして何よりも、現。たくさんの仲間がいて、数多くのライバルがいて、果てしない敵がいて。どの戦いでもほぼ常に最前線にいた僕にとつては辛いことも多かつたけど、楽しいことも多かつた。僕にとつてあの

やたら濃い日々は、思い出したくもないことも全部ひつくるめて大切な思い出だ。

同じく過去のことを思い返しているのか、どこか遠い目の十代。学生時代はなんだかんだありつつも基本的にはいつだって前を見ていた彼がこんな表情をするのは実際珍しいが、まあ野郎のレアな表情なんぞに価値はない。先に現実に戻ってきたのは、僕の方だった。

「それで？しんみりするのはまだちよつと早いんじゃない、まだ始まったばつかなんだからさ」

「いや。1つ気になってな。なあ、清明。お前、何か様子が変わらないか？」

「お前もか……ああいや、こつちの話。ちなみに、なんでそう思ったの？」

「さつき万丈目から聞いたけど、そもそもこの同窓会自体がお前が言い出したんだってな。俺が言えたことじゃないかもしれないけど、お前だって自分からそういうことを言い出すタイプじゃないだろ？」

「あー、そういうことね」

言葉に詰まる。僕自身にも自覚はなかったけれど、確かにそれはあるかもしれない。視線を逸らすことも許さないとばかりにまつすぐこちらの目を見つめながら、畳みかけるように言葉を続ける。

「俺にはお前が何を悩んでるのかわからないけど、俺たちはいつだって相談に乗るぜ。いや、それともこつちの方が向いてるか？」

そう言うのにやりと笑い、これ見よがしに左腕のデュエルディスクを軽く持ち上げる。一見ふざけているようにも見える態度だが、彼の目はいたって本気だ。

「俺たちはデュエルアカデミアで、大事なことは全部デュエルで決めてきたじゃないか。嫌とは言わせないぜ、それに俺だってワクワクしてるんだ。2年前の時は結局、お前とは戦えなかったんだからな」

「それそつちが本音じゃないの？」

思わず突っ込みを入れたつも、気づけば十代の提案にすっかり乗り気になっている僕がいた。わかったよ、と降参の印に両手を挙げ、ざつと周りを見回す。皆思い思いに旧交を温めるのに忙しく、こちら

に注意を配っているような視線はない。とはいえ僕の感知能力は明菜さんの隠密技能以下だからあの人が本気で隠れていればどうしようもないが、まあその時はその時だ。

「外行こっか、十代。ここはちよつと手狭すぎるしき」

景気づけにグラスに残った中身を一息に飲み干し、近くの机にこっそりと置く。手ぶらになったところで部屋を後にすると、どちらが示し合わせるともなく2人して屋上の方向へと向かう。鍵の開いていたドアを開くと、雲一つない夜空に抱かれたほどほどのスペースが目には飛び込んできた。さすがに空気の澄んだデュエルアカデミアに比べると満天の星空とまではいかないが、その代わり眼下には色とりどりの照明が光って見える。

もつとも、今回はここに風景を見に来たのではない。あたりを見回すのもそこそこに距離をとって向かい合い、互いのデュエルディスクを展開する。

「いいか清明、本気で来いよ。お前がシンクロモンスターを使いたがらないのはこの2年間ニュースにもなっていないから予想はつくけどよ、俺が構わないって言ってるんだ。そんな半端なデュエルやつたら承知しないぜ。本気で戦うからこそ、デュエルもそれに応えてくれるんだからな」

「十代……わかったよ、そこまで言うなら全力全開と洒落込ませてもらうさ」

静かな高揚が全身を満たし、2年ぶりに味わうその心地いい感覚にしばし身をゆだねる。シンクロモンスターの存在を知る相手と戦えるのはあの時以来。それはつまり、2年ぶりに僕も本気のデュエルができるということだ。心にずつとたまり続けていたあのもやもやした感覚が、嘘のように引いていく。

「さあ……」

「デュエル！」

「まずは俺のターンからだな。行くぜ相棒、ハネクリボーを守備表示で召喚！」

ハネクリボー 守200

先手を取った十代が真つ先に召喚したのは、精霊としてはともかくデュエルでその姿を見ることは随分久しぶりな十代の相棒、ハネクリボー。なんだか懐かしい1枚を見てほっこりしているうちに、十代はさらに次の行動へ移っていた。

「さらにカードを2枚伏せて永續魔法、補充部隊を発動。さらに魔法カード、命削りの宝札を発動！発動ターンの相手へのダメージと特殊召喚を封じる代わりに、手札が3枚になるようにカードをドローするぜ」

初手から下級モンスター1体の他は全部魔法と罠、そして最後の1枚が命削りの宝札とは。まるで衰えることを知らない相変わらぬとんでもない引きの良さに内心閉口しつつも、まるで子供のように純粹に目を輝かせて3枚ものカードを引く十代をじつと見守る。さあ、次は何を見せてくれる？

「カードを2枚セット。そしてこのエンドフェイズ、命削りの宝札3つ目のデメリットで俺の手札を全部捨てる。さあ、ターンエンドだ」  
3枚中2枚をさらに伏せ、最後に余った1枚を墓地に送り込む十代。これで伏せカードは4枚……まあ、十代のことだ。まず間違いなくあの4枚のどれかにモンスターの戦闘破壊をトリガーにヒーローを呼び出すカード、ヒーロー・シグナルはあるだろう。あるいは大穴で伏せカードに仕込んだドローストースと進化する翼から無理矢理ハネクリボーをLV10に進化させる大技をしてくるかもしれない。

「さーて、どうすつかね……僕のターン、ドロー！」

ざつと手札を見る。とりあえずヒーロー・シグナルがある前提で考えると、あのハネクリボーにはうかつに攻撃できない。そして進化する翼も一応警戒すると、攻撃表示モンスターをあまり並べることが得策ではない。でも悠長に構えていても融合ヒーローの爆発力に押し切られることは必須、とするとここはあのカードで行くか。

「来い、ホワイト・ステイングレー白棘 ☒！さらに僕のフィールドに水属性モンスターが存在することで、手札のサイレント・アングラーは特殊召喚できる。

さあ覚悟しな十代、水属性レベル4モンスターの白棘☒とサイレント・アングラーでオーバレイ！」



「オーバーレイ？シンクロ召喚じゃないのか!？」

白棘☒ 攻1400

サイレント・アングラー 守1400

1瞬にして僕のフィールドに現れる、純白のエイと茶色のアンコウ。何が起きるのかと見守る十代とハネクリボーの視線を感じながらも2体のモンスターが水色の光となって天に昇り、次いで螺旋を描きつつ僕の足元に開いた宇宙のような空間の穴へと飛び込む。次の瞬間には空間の内部で光が弾け、新たなモンスターが生み出されその姿を見せた。

「二天四海に響く轟き、呼びて覚ますは同胞の牙！エクシーズ召喚、バハムート・シャーク！」

☆4＋☆4＝★4

バハムート・シャーク 守2100

2足歩行をする異形のドラゴン、あるいは鮫ともつかない古の怪魚の名を冠する偉大なる海竜が、背中に生えた4枚もの羽根のようなヒレを広げ仁王立ちする。そしてその周囲には、まるでその衛星であるかのように一定の軌道で回る2つの光球。

「うおお!?!……って、あれ？守備表示なのか?！」

るせい。こつちだってそんなガン伏せしてなきや余計なこと考えずに攻撃表示で出してたわい。

「いいんだよ、これで。今回頼りにしてるのはバハムート・シャークの攻撃力じゃない、その効果なんだから。バハムート・シャークの効果発動！オーバーレイ・ユニットを1つ使うことで、エクストラデッキからランク3以下の水属性エクシーズモンスターを1体特殊召喚できる。ゴッド・ソウル！」

バハムート・シャークが自身に纏う光球の1つに食らいつくと、瞬間的にそのエネルギーを大幅に増幅させることで偉大な海竜に宿る真の力が解放される。胸にずしんと響くようなその咆哮に応えるようにして現れた新たなモンスターは蛇のように細長い体に鎌のような両腕、暗夜を覆うように不気味に開いた翼と既存の生物の特徴を詰め込んだ悪夢の住民のような姿だった。

「如法暗夜を引き裂くは、沈黙にして悪夢の刃。出でよ、ナンバーズ No. 47

……ナイトメア・シャーク！」

バハムート・シャーク(2) ↓(1)

No. 47 ナイトメア・シャーク 攻2000

「オーバーレイ・ユニット？ランク？いやそれより、エクストラデッキからモンスターを特殊召喚するモンスターだと？」

十代が驚くのも無理はない。僕だってこんな特殊な効果を持つモンスター、この子以外には見たことがない。だけどまだ、やるべき手順は残っている。エクシーズモンスターの本気は、まだまだこんなものじゃない。

「そしてこの瞬間、特殊召喚に成功したナイトメア・シャークの効果が発動。手札か場に存在するレベル3の水属性モンスター1体を選んで、自身のオーバーレイ・ユニットとして吸収できる。僕が選ぶのは、手札のグレイドル・コブラだよ」

「グレイドルカードを吸収させる、だと？」

手札のグレイドル・コブラをナイトメア・シャークの下に重ねると、ナイトメア・シャークの周りにも光球が1つ現れた。しかしそれはバハムート・シャークを囲むそのように衛星軌道を描くことはなく、即座にその腕の刃へと吸収された。

No. 47 ナイトメア・シャーク(0) ↓(1) ↓(0)

「さらにナイトメア・シャークのもう1つの効果を発動、ダイレクト・エフェクト！このカードのオーバーレイ・ユニットを1つ使い、僕の場の水属性モンスター1体を選択。そして選択したモンスター以外の攻撃を封じる代わりに、そのモンスターは相手にダイレクトアタックができる。当然僕が選ぶのは、ナイトメア・シャーク自身。さあ、バトル！ナイトメア・シャークで攻撃！」

ナイトメア・シャークの体が、夢か幻のように闇に揺らぎ溶け込んでいく。次の瞬間にぱつと現れた不可視の斬撃は、なんと十代の背後から振り下ろされた。どうやら姿を消すと同時に彼の背後まで超スピードで回り込んだらしいけれど、音を立てないどころか気配すらまるで感じさせずあのスピードであれだけの巨体を移動させるとは。

こうして近くで見ているだけの僕ですら驚いたのだから、全くの不意打ちを受けた十代はもつと驚いただろう。

No. 47 ナイトメア・シャーク 攻2000↓十代(直接攻撃)  
十代 LP4000↓2000

「ぐわっ……くっ、まだまだあつ！やるな清明、だけど今のダメージのもとに俺の永続魔法、補充部隊の効果が発動するぜ。受けたダメージ1000ポイントにつき1枚、だから2枚のカードをドロールド」

これで十代の手札は2枚。本当はこのドロームたいがいリスクが高いからやりたくはなかったが、そんなこと言っただけであれもできないこれもできないでは勝機を掴むことなんて永久にできやしない。ライフを半分にできた、それだけで今は良しとしよう。

「さらにカードをセット。これでターンエンドだよ」

今この瞬間だけを切り取ってみれば、大型モンスター2体を並べた僕の方が盤面としては有利。だけど十代にはこれまでのドロいで得た、莫大なアドバンテージがある。

そう、問題は次のターンだ。きつきは命削りの宝札のデメリットを前提に動いていたためにドロウ枚数を除けば割と大人しかったけれど、その制約も消えた次のターンからは……まあ、何をしてくるかかわかったものじゃない。心してかからねば。

十代 LP2000 手札：2

モンスター：ハネクリボー(守)

魔法・罠：補充部隊

4 (伏せ)

清明 LP4000 手札：2

モンスター：バハムート・シャーク(守・1)

No. 47 ナイトメア・シャーク(攻・0)

魔法・罠：1 (伏せ)

「俺のターン。リバースカードオープン、テラ・フォーミング！このカードの効果でデッキのフィールド魔法、フュージョン・ゲートをサーチしてそのまま発動。そしてトラップ発動、チェーン・マテリアル！」

「嘘でしょ……！」

素材を除外するという特有の癖こそあるものの、フィールド魔法という性質上プレイヤーの素材が尽きない限り何度でも融合召喚を行えるフュージョン・ゲート。そして攻撃不可や自壊という様々なデメリットを受ける代わりに、1ターンだけ融合素材をデッキや墓地からも調達できるようになるチェーン・マテリアル。この2枚が揃った時にどれだけ様々なコンボが生まれるのかは、昼寝混じりに聞いていた授業中に教えられた覚えがある。

「まず俺のデッキに眠るワイルドマンとネクロダークマン、さらにスパークマンとエッジマンを除外して融合召喚！来い、ネクロイド・シャーマン！プラズマヴァイスマン！」

エレメンタルヒーロー

E・HERO ネクロイド・シャーマン 攻1900

E・HERO プラズマヴァイスマン 攻2600

まず先陣切って飛び出したのは、錫杖を手にし複雑な模様の入れ墨を全身に刻んだ上半身裸のヒーローと、それとは対照的に強化スーツを身に着けたスパークマンとでもいふべき黄金の鎧で手足の先端と胸を覆った電を纏うヒーロー。ネクロイド・シャーマンが印を結んで怪しげな呪文を唱えると、バハムート・シャークの全身に突然不気味な言語による文言が浮かび上がる。

「ネクロイド・シャーマンの効果だ。このカードは特殊召喚に成功した時に相手モンスター1体を破壊して、その代わり相手モンスター1体を蘇生させる。攻撃表示で甦れ、サイレント・アングラー」

サイレント・アングラー 攻800

苦しむ暇もなく唐突に破壊されたバハムート・シャークの代わりに、その素材だったはずのアングラーが攻撃表示で無理やり引きずり出される。だけど、それを嘆く暇はない。何せ十代の場には、まだ2か所も空きスペースがあるのだから。

「デッキのネオス、そしてレベル4以下の効果モンスターであるプリズマーを除外するぞ。融合召喚、ブレイヴ・ネオス！」

E・HERO ブレイヴ・ネオス 攻2500

そして、さらにもう1体。ネオスを除外した時点ですっきりネオ

ス・ナイトの姿を見ることになるのかと思っただけけれど、予想に反して十代が呼び出したのは全く違う未知のネオスだった。前者を鎧で守り剣で戦う文字通りの騎士とするならば、こちらはさながら格闘戦士としてのネオスというべきだろうか。銀色を基調とした大まかなフォルムはそのままに全身の赤と青の模様はより色濃くなり、全身の筋肉はさらに太く発達し両肩に肩パッドのようなパーツが追加されている。

それにしてもわからないのは、なぜここまでデッキの主力モンスターをきつぱりと除外できるのかだ。十代のデッキは除外をそんな頻繁に扱うわけでもなく、攻撃できないこの状況で蘇生不可能な融合ヒーローをがむしやらに呼びまくって何がしたいのだろう。

と、そこまで考えてふと、あるカードの存在を思い出した。これまでに除外された融合素材はワイルドマン、ネクロダークマン、スパークマン、エッジマン、ネオス、プリズマー……ああやつぱり、綺麗にあの4体は温存してあったのか。となると間違いない、奴が来る。

「どうやら気づいたみたいだな。その通り、次に俺が選ぶのは地水炎風を司る4体のヒーロー……クレイマン、バブルマン、バーストレディ、フェザーマンだ。出でよ、究極のヒーロー！E・HERO エリクシーラー！」

E・HERO エリクシーラー 攻2900↓3500

ヒーローどころか全融合モンスターの中でも上位の重さを誇る、4体もの融合によってはじめてその姿を見せる究極のヒーロー。さすがの十代にもやはり扱いが難しいのか、その姿を見たのは随分久しぶりだ。確か、前に見たのは第一次ノース校親善試合の時だったろうか。それはともかく、闇を滅し他の光を色褪せさせる黄金の輝きをもって降臨したそのヒーローの、能力は……！

「エリクシーラーはもともとの光属性の他に地水炎風の4属性としても扱い、その攻撃力は相手フィールドにいる自身と同じ属性のモンスター1体につき300ポイントアップする。だけどそれだけじゃないぜ、この融合召喚に成功した時、互いの除外されたカードはすべて持ち主のデッキに戻る。さあ帰って来い、俺のヒーローたち！」

4連続融合の代償として除外された10体ものヒーローが、エリクシーラーの輝きを浴びて十代のデツキへと再び戻っていく。これで実質十代は、チェーン・マテリアルたった1枚の消費から4体もの融合ヒーローを呼び出したことになるわけだ。

「さらに魔法カード、アドバンスドローを発動。俺のフィールドからレベル8のプラズマヴァイスマンをリリースし、カードを2枚ドロースする。そしてこれでまた、俺のモンスターゾーンに空きができた。デツキに戻した……そうだな、フェザーマンとスパークマンを再び除外融合、グランドマン！」

E・HERO グランドマン 攻0↓2100

「グランドマン……？」

当然のような顔をして呼び出されたのは、ブレイヴ・ネオス同様これまで全く見たことのない新たなヒーロー。だがその姿はまるでフェザーマン、バーストレディ、スパークマン、クレイマンといった十代愛用のヒーローが合体したかのようにも見えた。となるとあの両手の甲に取り付けられた銃は、バブルマン由来の品物だろうか。

「そうさ。そしてこいつの攻撃力は、素材としたヒーローのレベル1つにつき300ポイントアップする。もつともこのままターンエンドすると、ヒーローたちが全員破壊されちゃうからな。速攻魔法、星遺物を巡る戦い！俺の場のエリクシーラーをエンドフェイズまで除外し、その攻守の数値だけ相手モンスター1体を弱体化させるぜ」

弱体化、というよりもこの一時的な除外によってチェーン・マテリアルとの関係をリセットすることが目的なのだろう。どちらにせよナイトメア・シャークの攻守はともに2000、エリクシーラーのそれには遠く及ばない。

No. 47 ナイトメア・シャーク 攻2000↓0 守2000  
↓0

「カードを1枚伏せて、ターンエンド。そしてこのターン終了時、除外されたエリクシーラーが帰還して他のヒーローたちは破壊される。ごめんな、みんな」

E・HERO エリクシーラー 攻2900↓3500

怒涛のターンが終わり、十代のフィールドにはハネクリボーとエリクシーラーだけが残った。一方こちらの場には、オーバレイ・ユニットは使い切り攻守も0になったナイトメア・シャークとバハムート・シャークの代わりとして強制的に引き出されたサイレント・アングラ。確かに手痛い被害ではあるけれど、当初覚悟していたものよりはずっと軽傷で済んだ。墓地に融合体を溜め込んで何を企んでいるのかは知らないけれど、そっちが準備に時間をかけるならばこっちはその隙に攻め込むまでだ。

「僕のターン、融合ラッシュには度肝を抜かれたけどね、十代。まだ詰めが甘いよ。どうせそれだけ融合するなら1回、伏せカードを破壊できるワイルド・ウィングマンでも呼んでおくべきだったのさ。トラップ発動、グレイドル・スプリット！このカードを攻撃力500ポイントアップの装備カードとして、ナイトメア・シャークに装備する」

まあ、単にワイルド・ウィングマンが今回の十代のエクストラに入っていないかった可能性もあるけれど。しかし、仮にそうだとしてもそれは僕の責任ではない。

「さらにスプリット第2の効果で、装備状態のこのカードを墓地に送り装備モンスターを破壊。その後デッキから、グレイドルモンスターを2種類まで特殊召喚できる。行くよスライム、出てこいコブラ！」

ナイトメア・シャークが再び闇に消え、2体のグレイドルがそれと入れ替わるように特殊召喚される。グレイ型宇宙人を模したチューナーモンスターのスライムに、大蛇を模したピンク色のコブラだ。これでグレイドル・コブラは2体目、バブル・ブリンガーが引ければそれを使つての蘇生コンボも見えてきた。

グレイドル・スライム 守2000

グレイドル・コブラ 守1000

「来るか、シンクロ召喚！」

「お望み通り、見せてあげるとも。レベル3のコブラに、レベル5のスライムをチューニング！」

スライムが5つの光の輪となり、その中央をコブラが潜り抜ける。合計レベルは、8。だけど今呼ぶのは、いつものグレイドル・ドラゴ

ンじゃない。今更あちらをシンクロ召喚して伏せカードを叩き割ったところで、その方法を問わずとにかく自身が破壊されたターンにプレイヤーへの戦闘ダメージを1ターンの間だけ0にできるハネクリボーが存在する以上このターンにとどめを刺すことは不可能だからだ。

この問題を解決し、なおかつ進化する翼による不意打ち進化コンボにも対抗できるカード。そんな都合のいいモンスターが、果たして存在するのだろうか？答えはイエス、だ。

「光機燦然日輪の下、語り継がれし波濤の勇魚！シンクロ召喚、ホワイト・オーラ・ホエール白鬪気白鯨！」

白鬪気白鯨 攻2800

雄大に宙を泳ぐ、白いクジラとしか言いようのない巨大なモンスター。そう、クジラだ。そのレベルとモチーフにふさわしい巨体がおもむろに大きな口を開き低い雄たけびを上げると、空気すらもビリビリと震えるような感覚がした。5年越しでようやく得た自らの出番に、歓喜の叫びをあげているのだろう。

「ク、クジラ？」

「そう、クジラさ。だけどただのクジラじゃない。白鬪気白鯨はシンクロ召喚に成功した時、相手フィールドの攻撃表示モンスターをすべて破壊する！」

何たる驚くべき肺活量か、白鯨の叫びはまだ続いている。その音波に共鳴したエリクシーラーがやがて耐え切れず膝をつき、ついには地に堕ちていく。一方でハネクリボーは守備表示であつたためその大音波にも耐えきっていたが、だからこそここに勝機が生まれる。

「さあ、バトルだ。白鬪気白鯨でハネクリボーに攻撃！そして白鬪気白鯨は守備表示モンスターに対し、貫通能力を持つ。ハネクリボーは破壊されたターンのダメージを0にできるけど、自身の戦闘で受けるダメージに対しては無効。これで終わりだ、十代！」

見た目に反して驚くほど軽やかに動く白鯨が、その圧倒的巨体と質量をもってハネクリボーを押しつぶしにかかる。ただあんな風には言いはしたけれど、これでそのまま終われるほど十代のデュエルは甘く



ない。それでも一応望みをかけてはみたけれど、正直本当でこのターンに終われるなんて期待はほとんどしていなかった。

そして案の定白鯨の巨体が地面に届くよりも前に、十代の場にある3枚の伏せカードのうち2枚がほぼ同時に表を向く。

「トランプ発動、ゴブリンのやりくり上手！このカードは墓地の同名カードに1を足した数だけカードを引き、その後俺の手札1枚をデッキの1番下に戻す。さらにチェーンして速攻魔法、非常食を発動！俺のフィールドから魔法、罫カードを任意の枚数墓地に送り、その数1枚につき1000ライフポイントを回復するぜ。俺が選ぶのはこの、たった今発動したゴブリンのやりくり上手だ」

「やーっぱりか……しぶといね、十代」

1枚のカードが墓地に送られ、十代のライフが白鯨の貫通ダメージを受けてなお余りある数値まで回復する。これでこちらとしてはこのターン中に十代を仕留め損ねたわけだけれど、それだけじゃない。ゴブリンのやりくり上手は今、発動後の効果が適用されるよりも前に非常食のコストとして墓地に送られた。つまりその効果解決時には、「墓地にある同名カード」の1枚として計算される。もっと平たく言えば、彼のドローク枚数は今のコンボにより1枚余計に増えたのだ。そして十代が引いたカードは、3枚。となると最初に発動していた命削りの宝札のデメリット、あそこですでに1枚は墓地に送っていたのだろう。

白鬮気白鯨 攻2800↓ハネクリボー 守200 (破壊)

十代 LP2000↓3000↓400

「へへへ、ピンチの後にはチャンスありつてな。補充部隊、ハネクリボー、さらにヒーロー・シグナルを3枚同時に発動！今受けた2600のダメージをもとにカードを2枚ドロークし、ハネクリボーの悲鳴をシグナルとして俺のデッキから更なるヒーローを呼び出すぜ。来い、バーストレディ！」

E・HERO バーストレディ 攻1200

やっぱりあったのか、ヒーロー・シグナル。どうせこのターンダメージは通らないけれど、だからと言ってはいそうですかとターンを

渡すほど僕だって甘くない。

「白闘気白鯨は自身の効果により、1ターンに2回までモンスターに攻撃ができる。せめて破壊させてもらうさ、そのままバーストレディに攻撃！」

「2回攻撃……ハネクリボーの効果がなかったら本気で危なかったな。助かったぜ、相棒」

白闘気白鯨 攻2800↓E・HERO バーストレディ 攻1200（破壊）

「メイン2に入って、サイレント・アングラーを守備表示に変更。さらに永続魔法、グレイドル・インパクトを発動するよ」

サイレント・アングラー 攻800↓守1400

派手な落下音とともに、上空から半壊したUFOが僕の足元に落ちてくる。十代が次に何をしてくるかは、全く予想がつかない。白鯨の生命力ならば大抵の相手には余裕をもって立ち向かえるけれど、困ったことに十代はその「大抵」の枠に入らないタイプのデュエリストだ。何が飛び出してきたてもいいように、最大限の備えをしておこう。

「エンドフェイズにインパクトの効果、ドール・コールを発動。デッキからグレイドルカード1枚、グレイドル・スライムJr. をサーチする……さあ、来い！」

十代 LP400 手札：5

モンスター：なし

魔法・罫：補充部隊

場：フュージョン・ゲート

清明 LP4000 手札：3

モンスター：白闘気白鯨（攻）

サイレント・アングラー（守）

魔法・罫：グレイドル・インパクト

「俺のターン。さあ、ヒーローの反撃開始だぜ！俺のフィールドにモンスターが存在しないことで魔法カード、コンバート・コンタクトを発動。手札とデッキからそれぞれ<sup>ネオスペーシアン</sup>Nのエア・ハミングバードとグラン・モールを墓地に送り、カードを2枚ドロウする」

「……」

前々から引きが強いとは思っていたけれど、ちよつと今日の十代は、いくらなんでもカード引きすぎではないだろうか。デッキなくなるぞコラ。こつちがようやく1ターンに1枚のサーチができるグレイドル・インパクトを引けて喜んでいるというのに、そんなことお構いなしにやれ命削りの宝札だそれ補充部隊だやりくり上手だと即効性のあるドロースースばかりきて、挙句の果てには手札交換と墓地肥やしを兼ねるコンバート・コンタクトとは。

世の中の言葉に言い表せない理不尽のようなものを深く感じながらも、ともあれ十代がカードを引く。すぐに次の行動が決まったらしく、意気揚々と別のカードを発動した。

「魔法カード、戦士の生還を発動。このカードの効果で俺は、墓地の戦士族1体を手札に戻すことができる。帰って来い、バーストレディ！」

「バーストレディ……」

せつかく倒したバーストレディが、再び手札へ戻っていく。ここで戦士の生還を使わせただけマシ、とみるべきか。そんなことより、気に掛けるべきは次の行動だ。貫通能力を持つ白鯨の前に、守備力わずか800のバーストレディでは壁にすらならない。となると、やはり融合か。

「だったらー！ここで手札の増殖するGを捨てて、効果発動！このターン相手がモンスターを特殊召喚するたび、僕はカードを1枚ドロースる。さあ、どうする十代？融合する、それともしない？」

「やってくれるな。でも、ヒーローはそんな脅しには屈しないぜ！フュージョン・ゲートの効果で、手札のバーストレディとクレイマンの2体を除外融合だ。来い、ランパートガンナー！」

E・HERO ランパートガンナー 守2500

粘土でできた体を持つクレイマンの頑健さと、バーストレディの持つ炎の力を合わせたヒーロー。巨大な盾と粘土の巨体で身を守りつつ右腕の銃をぶちかます過激派の女戦士……なるほど、確かにあのモンスターならばこちらがどんな布陣を引いていようともお構いなし

で攻撃ができ、さらに返しのターンでグレイドルによる自爆特攻を防ぐことができる。

僕が十代を警戒してカードを選んでるように、十代も僕のデッキを警戒したうえでモンスターを選んでいるのだろう。こればかりは仕方ない、どれほど新たな力を手に入れようとも変わることのないデッキの根幹は、互いに知り尽くしているのだから。カードを1枚引きながら、改めてそのことを再認識する。

「ここからが本番だぜ？魔法カード、ネオス・フュージョンを発動！」「ネオス・フュージョン……？」

今度はこちらが、十代のセリフをオウム返しにする番だった。聞きなれないカード名のそれが発動された瞬間、周りの風景が黒一色の夜空から緑色を中心とした優しい色合いの宇宙空間のような場所に代わる。これは間違いない、ネオスペースだ。

「ネオス・フュージョンは発動ターンにこれ以上の特殊召喚を封じる代わりに、ネオスを含む素材2体で融合召喚できる融合モンスター1体を手札、場、そして俺のデッキから素材を墓地に送ることで特殊召喚ができるネオスペースの切り札さ。行け、ネオス！そしてフレア・スカラベ！」

「デッキからコンタクト融合を!?ええい、ドロー！」

ネオス特有の融合、コンタクト融合を行う魔法カード。なるほど、それで急に場所が切り替わったのか。あの1枚のカードの中には、ネオスペースの力が凝縮されているのだろう。十代が選んだのはフレア・スカラベ……となると、その融合体はあのカードか。

「出でよ、フレア・ネオス！そしてフレア・ネオスの攻撃力は、フィールド全てに存在する魔法、罠カード1枚につき400ポイントアップするぜ。ここで俺がカードを1枚伏せることで、その枚数は4枚だ」

E・HERO フレア・ネオス 攻2500↓4100

甲虫めいた硬質の羽根と鋭く伸びた2本の角が特徴的なネオスの進化の1つ、炎を操るフレア・ネオス。僕らの場にあるカードの存在そのものをその力として取り込んだことで、その攻撃力が白鯨を上回ってしまう。ただ僕にとって不幸中の幸いだったのは、この状況で

選ばれていたらそれぞれの能力から即死級のダメージを叩き出していたエア・ネオスのエア・ハミンググバードが直前のコンバート・コンタクトで墓地に送られ、グラン・ネオスのグラン・モールがなぜか選ばれなかったことだろう。フレア・ネオスの火力は決して馬鹿にはできないが、まだあの2体に比べれば勝算は残っている。

「行くぜ、フレア・ネオス。白鬨気白鯨に攻撃しろ、バーン・ツー・アツシュー！」

「ぐっ！」

全身を炎に包み業火の弾丸と化したフレア・ネオスが、自分よりもずっと巨大な白鯨に突撃する。たちまちその巨体の全身に燃え広がった炎が、ネオスペースを赤く照らす。

E・HERO フレア・ネオス 攻4100↓白鬨気白鯨 攻2800 (破壊)

清明 LP4000↓2700

「熱ちち……でも、白鬨気白鯨は生と死の輪廻を巡る海の化身。破壊によって死を巡ろうと、その命は再び母なる海に蘇る。白鬨気白鯨の最後の効果、発動！このカードが破壊されたときに墓地から別の水属性を除外することで、自身をチューナー扱いとして蘇生することができる」

「何!？」

白鬨気白鯨 攻2800

ナイトメア・シャークを墓地から取り除く。すると炎を打ち消すかのような派手な水しぶきと共に、傷ひとつない体で白鯨が現世に帰還した。これはさすがの十代も予想外だったらしく、その顔にほんの少しだけ焦りの色が浮かぶ……だがすぐに、その表情も心からデュエルを楽しむ満面の笑みに打ち消された。

「やるな、清明！シンクロも、エクシーズも、凄いいモンスターだぜ！」  
「気に入ってくれて嬉しいよ。それで？もう終わりかい？」

「とんでもない、勝つのは俺だ！ランパートガンナーは守備表示の時、攻撃力を半分として相手プレイヤーにダイレクトアタックができる。やれ、ランパート・ショット！」

E・HERO ランパートガンナー 攻2000↓1000↓清明  
(直接攻撃)

清明 LP2700↓1700

着実にダメージを稼ぐことで、グレイドルの自爆特攻戦法が確実にやりづらくなつていく。今の僕のライフの数値だと、このデュエル中には可能だとしてもせいぜい1度がいいところだろう。

それはいいのだが、1つ気になることがある。コンタクト融合体であるフレア・ネオスは、このエンドフェイズに十代のエクストラデッキに戻るものがほぼ確定している。そのデメリットを踏み倒せるネオスペースやインスタント・ネオスペースのカードが手札にあるのなら、フレア・ネオスの攻撃力をさらに上げるためメイン1の時点でさっさと発動していただく。そうなると次のターンで十代の場に残るのはランパートガンナーのみになるが、その守備力では白鯨の攻撃に耐えきれない。そして僕の場合には白鯨の他に、いまだサイレント・アングラーが残っている。素直に考えれば僕の勝利はほぼ確定だが、先ほどのセリフから考えると十代はこの勝負を捨てておらず、まだ何か仕掛けがあることは間違いないだろう。さあ、今度は何を見せてくれるのだろうか。

「このエンドフェイズ、ネオスペース外にいるフレア・ネオスはデッキに戻る。だがその効果発動時、墓地に眠るネオス・フュージョンのもう1つの効果を使うぜ。このカードを除外することで1ターンだけネオスペースの力をネオスに与え、デッキに戻る効果の身代わりとなる！」

フレア・ネオスがフィールドに留まりターンが移り替わると、それと同時にネオスペースの風景が薄れていき、元の地球の夜空が頭上に戻る。なるほど、デッキに戻る効果の身代わりね。シンプルだけど、それゆえに説明の必要がないほどに強力だ。

「だったら……ドロー！」

白鯨のパワーがあれば、ランパートガンナーは恐れるに足らない。あの伏せカードはちよつと気にかかるけれど、それはそれだ。増殖するGと今のドローで、欲しかったパーツはこちらにも揃った。

「ヒーローも結構だけど、そろそろ壊獣大決戦と洒落込もうじゃないの。フレア・ネオスをリリースして十代、そっちのフィールドに怪紛壊獣ガダーラを特殊召喚。そして相手フィールドの壊獣反応に呼応して、手札の怒炎壊獣ドゴランは特殊召喚できる！」

せつかくバウンスを免れたフレア・ネオスがリリースという形で墓地に送られ、代わりに十代のフィールドには極彩色の羽根を持つ巨大な蛾の壊獣が呼び出された。その撒き散らされる大量の鱗粉に誘われたかのように、怒りの炎ですべてを焼き払う壊獣の中の壊獣、壊獣王がどこからともなく現れ吠える。相手モンスターをお構いなしに押しつけ、好き勝手な盤面をこちらの都合で作る……これこそ、僕が十八番とする戦術だ。

怪紛壊獣ガダーラ 攻2700

怒炎壊獣ドゴラン 攻3000

「出たな、壊獣モンスター！」

「ああそうさ、出してやったとも。でも僕はこのターン、まだ通常召喚が残っているからね。グレイドル・スライムJr. を召喚し、この時僕は墓地からグレイドルモンスター1体を蘇生できる。甦れ、コブラ！」

ジズキエルと白鯨がそびえ立つ横で、銀色の水たまりがぶくぶくと2か所床に湧き上がる。それぞれその中央がぐつと盛り上がったかと思うと、おしゃぶりを啜えたグレイ型宇宙人の赤ん坊とピンク色に怪しく光を反射する大蛇に擬態したようなモンスターが召喚される。

グレイドル・スライムJr. 守2000

グレイドル・コブラ 守1000

「おっと、ここで墓地に存在するグレイドル・スライムの効果発動。場のグレイドルカード2枚を破壊して、自分自身を蘇生召喚。そしてこの効果での特殊召喚に成功したことで、たった今破壊したコブラをまた蘇生させる」

グレイドル・スライム 守2000

グレイドル・コブラ 守1000

赤ん坊の方のグレイドルが突然どろりと溶けて銀色の水たまりに

1度戻り、再び中央から盛り上がって今度は成長した姿のグレイ型宇宙人となる。これで合計レベルは、8または9となった。

「レベル3のグレイドル・コブラに、レベル5のグレイドル・スライムをチューニング。変幻自在な不定の恐怖は、星海旅する魔性の生命！シンクロ召喚、グレイドル・ドラゴン！」

☆3+☆5=☆8

グレイドル・ドラゴン 攻3000

この5年間でわずか4戦とはいえ、エクストラ勢にお呼びがかかるたびにほぼ毎回のペースで出ずっぱりグレイドルの名を持つ竜……とは名ばかりのキメラめいた合体生物。でも仕方がない、状況を選ばない破壊効果の優秀さもさることながら、動いているとちよいちよい引つかかる水属性縛りに対してこのカードは便利すぎるのだ。「グレイドル・ドラゴンのシンクロ召喚に成功した時、素材とした水属性モンスターの数までカードを破壊できる。そのセットカードとフュージョン・ゲートをぶち抜け、グレイドル・トルピード！」  
「悪いな、それも読んでいたぜ！リバーズカード、オープン！トラップ発動、リビングデッドの呼び声！この効果で、俺の墓地のモンスター1体を攻撃表示で蘇生するぜ」

「リビデ？今更発動したつてもう遅……あつ！」

もう遅い、なんてとんでもない。まさか十代、僕が除去することまで読み切ったうえであのカードを伏せていた？チェーン処理によって十代の墓地から再び、小柄のもこもこした体に天使の翼が生えたモンスターが1瞬だけ蘇る。

「もう1度頼むぜ相棒、ハネクリボー！」

ハネクリボー 攻300

そしてグレイドル・ドラゴンがその身を変態させることで文字通り身を削り放った有機体ミサイルが2枚のカードに着弾、爆破する。するとリビデことリビングデッドの呼び声が破壊されたことでハネクリボーもまた連動して破壊される……だけど、十代にとってはそれこそが狙いだった。

完全に掌の上で踊らされ、グレイドル・ドラゴンという貴重な除去



を無駄打ちしたことに思わずうめき声が漏れる。でも、どうしようもない。

「ハネクリボーが破壊されたことで、その効果発動。このターンもまた、俺が受ける戦闘ダメージは0だ」

「くっ……」

これだけこちらが押ししていたはずなのに、またしてもそのピンチを潜り抜けてしまった十代。粘るなあ、もう。

「……ダメージが通らなくても、バトルまでできなくなったわけじゃない。ドゴランでガダーラに、白鬮気白鯨でランパートガンナーにそれぞれ攻撃」

壊獣王が大怪虫に組み付いて空のかなたにぶん投げ、その横では白鯨が粘土のヒーローを押しつぶす。無事に僕の手元に帰ってきたガダーラをそつと墓地に送り込んだところで、これ以上できることもなくバトルフェイズを終えた。

怒炎壊獣ドゴラン 攻3000↓怪紛壊獣ガダーラ 攻2700  
(破壊)

白鬮気白鯨 攻2800↓E・HERO ランパートガンナー 守  
2500 (破壊)

「エンドフェイズにまた、グレイドル・インパクトの効果が発動。今回サーチするのは、2枚目のグレイドル・インパクトにしておくよ」

十代 LP400 手札：2

モンスター：なし

魔法・罫：補充部隊

清明 LP1700 手札：3

モンスター：白鬮気白鯨(攻)

グレイドル・ドラゴン(攻)

怒炎壊獣ドゴラン(攻)

サイレント・アングラー(守)

魔法・罫：グレイドル・インパクト

「俺のターン。なんだかワクワクしてきたぜ……ドロー！」

全くこの男は、いつだってこの調子だ。ハネクリボーでピンチを凌

いだとはいえ、何か状況が良くなったわけではない。だというのに、ドロローできれば何とかなると言わんばかりのこの態度。そして実際どうとでもしてしまうのだから、つくづく相手にしていて恐ろしい。「魔法カード、ミラクル・フュージョンを発動！俺の墓地からフレア・ネオス、ランパートガンナー、グラン・モール、ネクロイド・シャーマン、エリクシーラーの5体を除外することで素材とし、融合召喚！」  
「はあ!？」

思わず声が出た。この土壇場でミラクル・フュージョンを手にしたことに、ではない。それはもうターンを渡した時点でこちらとしても半ば諦めている。問題なのは、その融合素材だ。5体も要求する上にそのうち4体が融合モンスター、しかもなぜかNのグラン・モールまでその中にしれつと混ざり込んでいる。なんだ一体、こんなでたらめな素材から何が出てくるというのだ。

「融合素材はネオス、N、HEROの名前を含むモンスターそれぞれ最低1種類ずつの合計5体！見せてやるぜ、ゴッド・ネオス！」

E・HERO ゴッド・ネオス 攻2500

暗夜を断ち切るかのように、金色の閃光が走る。その光の中央から姿を見せたのは全身に黄金の意匠を身に着けた、これまでの人間サイズだったネオスたちとは異なり巨大化したそのサイズも合わさってまさにその名の示すがごとく神々しきすらも感じるネオスの姿がそこにあった。

「ゴッド・ネオス……」

「そうさ。だけどもまずは魔法カード、HEROの遺産を発動。俺の墓地からヒーローを融合素材とする融合モンスター2体をデッキに戻すことで、デッキからカードを3枚引く。プラズマヴァイスマンとグラッドマンには、エクストラデッキに戻ってもらうぜ。これで準備は整った、ゴッド・ネオスの効果発動！1ターンに1度俺の墓地から指定されたモンスター1体を除外し、攻撃力を500ポイントアップしたうえでその効果を得る。このターンに俺が選ぶのはブレイヴ・ネオス、お前だ！」

ゴッド・ネオスの背後に1瞬、筋肉質な格闘戦士ネオスの姿がダ

ブって見える。そうか、そういうことだったのか。あの馬鹿みたいに重い素材条件をクリアし、なおかつそのあとも毎ターン安定して墓地のヒーローが持つ強力な効果を使う。3ターン目のチェーン・マテリアルによる融合召喚の乱発……あれはすべてこのターンに、ゴッド・ネオスに繋げるための布石だったのか。仮にゴッド・ネオスの召喚に失敗したとしてもHEROの遺産があればリカバリーも容易にできる、隙のない戦術。

だが、それに気づいたときにはもう遅い。500ポイントといわず、ゴッド・ネオスの攻撃力がさらに上昇していく。

E・HERO ゴッド・ネオス 攻2500↓3300

「ブレイヴ・ネオスの効果によりその攻撃力は、俺の墓地に存在するN及びHERO1体につき100ポイント上昇する。そしてまだ俺の墓地に残っている仲間はネオス、フレア・スカラベ、エア・ハミングバードの計3体だ。さらに装備魔法、アサルト・アーマーとライトイレイザーの2枚をゴッド・ネオスに装備し、そのままアサルト・アーマーの効果を発動。装備状態のこのカードを墓地に送ることで、装備モンスターはこのターンのみ2回攻撃が可能となる」

ゴッド・ネオスがその手にナックル型の近未来的な武装を握りしめると、先端から光の刃が伸びる。その全身がアサルト・アーマーの効力を受けて黄金のオーラを放ち、すべての準備が整ったところでその目が鋭く光った。

「バトルだ。ゴッド・ネオスで白鬨気白鯨に攻撃！」

ゴッド・ネオスが胸の前で手を向かい合わせると、その間に聖なる白い光の塊が浮かび上がる。十分な大きさに育ったそれをライトイレイザーの刃に乗せるように解き放つと、その圧倒的な威力は白鯨の丈夫な皮膚を貫通しその中央に大穴を穿った。

E・HERO ゴッド・ネオス 攻3300↓白鬨気白鯨 攻28

00 (破壊)

清明 LP1700↓1200

「でもたとえ破壊されようと、白鬨気白鯨は蘇る！」

「いいや、ここでライトイレイザーの効果発動！」

「えっ……しまったっ！」

僕が記憶の底からあの装備魔法の効果を引つ張り出したのに呼応するかの様に、ライトイレイザーがひときわ強く輝きを放つ。そうか、だからこんなにも強気に攻撃を仕掛けてきたのか。

「装備モンスターが戦闘を行った時、その相手モンスターはゲームから除外される。これでお前のモンスターの輪廻は断ち切ったぜ！さらにゴッド・ネオスが戦闘で相手モンスターを破壊したことで、ブレイヴ・ネオスからコピーしたもう1つの効果を発動！デッキからE・HERO　ネオスの名が記された魔法、罠カード1枚を手札に加えることができる。俺がサーチするのはこのカード、ネオスベースエクステンションNEXTだ！」

偶然とはいえこちらに見せる時の指で隠れていたせいでテキストまでは見えなかったが、どうやらあのNEXTとやらはトラップカードらしい。そしてあれもまた、ネオス・フュージョンやゴッド・ネオスと同じく僕にとっては未知なるカードだ。

とはいえトラップならば、どんな効果を持っていようともまず伏せなければ使い物にならないはず。一応僕の手札と場にはそれぞれ1枚ずつグレイドル・インパクトがあり、この2枚を使えばとりあえず1枚は十代のカードを破壊できる。ゴッド・ネオスも危険だけど、まずこのターンに伏せられるであろうNEXTとやらを狙うべきだろうか。いや、さっきのリビデのように、この思考すらも十代の策の中なのか？

『NEXT……私も知らないカードだな』

「チャクチャルさん！どこ行つてたのさずつと」

突然思考に割り込んだできたのは、この同窓会が始まって以降なぜかずっと大人しくしていたうちの地縛神だった。いくら呼び掛けても反応がなかったので多少は心配していたのだが、何事もなかったかのようにしれつと戻ってくるその様子について非難がましくなる。

『少しばかり野暮用でな。今はそんなことよりも、こちらに集中した方がいいのでは？』

「あー、まあね」

露骨に話を逸らされた気もするが、残念ながら一理ある。改めて

ゴッド・ネオスを見上げ、その偉容に身震いする。怖いのではない。どうやって奴を倒そうかという武者震いだ。だがまずは、とにかく次の攻撃を凌がねば。

「ゴッド・ネオスでもう1度、今度はグレイドル・ドラゴンに攻撃するぜ。レジエンダリー・ストライク！」

そして再び光球が弾け、水銀状となって逃げようとするグレイドルの集合体を細胞ひとつ残さず焼き滅ぼす。グレイドル・ドラゴンは本来、破壊され墓地に送られた時に僕の墓地から自身以外の水属性モンスターを効果無効状態で蘇生する能力を持っている。だけどそれはあくまで、墓地に送られて初めて発揮される力。破壊された後に墓地に行くことを許さず除外するライトイレイザーが相手では、その能力も何の意味もない。

E・HERO ゴッド・ネオス 攻3300↓グレイドル・ドラゴン 攻3000(破壊)

清明 LP1200↓900

「やられた……ほんつと、やってくれるよ十代……！」

蘇生持ちのグレイドル・ドラゴンに、輪廻蘇生の白鬨気白鯨。ドゴランの打点も合わせ結構固い守りの布陣を引いていたつもりだったのに、まさか1ターンすら持たないとは。

「戦闘破壊に成功したことで、再びブレイヴ・ネオスの効果を発動。今度はフィールド魔法、ネオススペースをサーチするぜ。そしてこのメイソ2に通常魔法、打ち出の小槌を発動。手札を任意の枚数選んでデッキに戻し、その枚数分だけドローする。この効果で2枚戻して、2枚ドロー。カードを1枚伏せてターンエンドだ」

メイソ2に入った時点で、十代の手札は4枚だった。つまり手元には1枚だけ残して、残りはすべて手札交換に回したということになる。ネオススペースを発動しなかったということは、よほどのことがない限り少なくともそちらは手札交換の枚数を増やすだけのためサーチされたということになる。

まあ、それはいい。問題なのはあの未知なるカード、NEXTがどうなのかということだ。あの伏せカードのうち少なくとも片方はN

EXTなのか、それともすでに十代の手元には存在しないのか。

「僕のターン、ドロロー。このメイン1の開始時に魔法カード、貪欲で無欲な壺を発動。種族の違うモンスター3体をデッキに戻して、カードを2枚ドロローする。僕が選ぶのは海竜族のバハムート・シャーク、昆虫族の怪紛壊獣ガダラ、そして水族のグレイドル・スライム」

『ただしこの発動ターン、マスターはバトルを行えない……やむを得ないとはいえ、かなり痛い出費だな』

チャクチャルさんの冷静な分析は、ぐうの音も出ないほどにその通りだ。あと少しでゴッド・ネオスを攻略できるというのに、そのパーツが手札にない。仕方のないこととはいえ、ここでこの制約は痛すぎる。

「改めてメイン1に永続魔法、グレイドル・インパクトを発動。そしてそのまま効果発動、グレイ・レクイエム!場のグレイドルカード1枚と相手フィールドのカード1枚を選択し、それを同時に破壊する。僕が選ぶのはまずもう1枚のグレイドル・インパクト、そして……ここはゴッド・ネオスじゃない、その伏せカードを破壊する!」

ゴッド・ネオスの効果は、もう把握した。そして仮にEXTが耐性付与や対象をとる効果への身代わり効果でないならば、その対策も多大なる犠牲を支払い手に入れたドロローによりすでに僕の手の中にある。となると残る不確定要素はあの未知のカード、(多分)EXTそのものだけだ。UFOの下部からにゅっとアームが伸び、その先端に取り付けられた光線銃から名状しがたい色のビームが伏せカード目掛け放たれる。

だが。

「残念だったな清明、これじゃないぜ?チェーンして速攻魔法、ダブル・サイクロンを発動!俺の場の補充部隊とお前のグレイドル・インパクトを対象に、その2枚を同時に破壊する」

「NEXTじゃない……!?!」

『ほう』

なんとチェーン発動され表を向いたのは、ネオス関連どころかトランプですらない全く別のカードだった。そして十代が選んだのは

効果を発動した側のグレイドル・インパクトで、これにより僕のグレイドル・インパクトは2枚とも破壊されてしまう。それにしてもダブル・サイクロン、ねえ。僕がNEXTについてあれこれ考え警戒していたのは全くの杞憂で、あのカードはとっくの昔に手札交換の弾としてデッキで眠っているとでもいうのだろうか。

『いずれにせよ一杯食わされたな、マスター』

「みたいね……次行くよ、次!」

よし、ちよつと落ち着いてきた。いつまでもフリーズしていたって使い終わったグレイドル・インパクトが返ってくるわけでもなし、ここは切り替えて次に行こう。

「魔法カード、サルベージを発動。これで墓地から攻撃力1500以下の水属性モンスター、白棘とグレイドル・コブラを回収。そのまま白棘の効果に繋げて、手札の水属性モンスター1体を捨てることで特殊召喚する。これで揃った、レベル4のモンスター2体でオーバレイ!」

白棘 攻1400

回収したグレイドル・コブラをそのまま墓地に送ることで、場に展開された純白のエイ。そして僕の間にはもう1体、早々に引っ張り出されたはいいけれど様々な要因から互いに放置しっぱなしでデュエルの流れを見つめてきていたサイレント・アングラーがいる。2体の魚がまたしても光の軌跡を描き、空間の穴へと吸い込まれる。

……この2体の素材ならば僕のはじめてのエクシーズモンスター、スパイダー・シャークを呼ぶこともできる。だけど、ここでそれを選ぶのは愚策。ここは確実に、まず目の前のゴッド・ネオスを片付けるのみ。

「哀鴻遍野の嘆きを背負い、錨を上げよ救済の方舟! No. 101!」  
サイレント・オナーズ  
S・H・Ark Knight

僕らのいるビルの下からゆっくりと浮上する、白い方舟。これまでは専用サポート、七皇の剣の効果で一足飛びに進化形態とか本体のダークナイトを呼び出していたため、こうしてアークナイト単体での起用は何気に初めてだ。

「でけえ……」

「アークナイトの効果を発動！自身のオーバーレイ・ユニット2つをコストに相手フィールドに表側攻撃表示で存在するモンスターを吸収、自身の新たなオーバーレイ・ユニットにする！消え去れゴッド・ネオス、エターナル・ソウル・アサイラム！」

「吸収能力だ?!」

アークナイトから無数のアンカーが打ち出され、その鎖がゴッド・ネオスの全身を縛り上げる。恐るべき力を誇る巻き上げ機構が、その巨体を船内へ有無を言わさぬ勢いで格納にかかる。神の名を持つネオスといえど、その救済の一撃に抗うことはできない。

No. 101 S・H・Ark Knight (2) ↓ (0) ↓ (1)

「これでよし……なんて、言えればいいんだけどね」

『うん?どうかしたのか、マスター?』

確かにゴッド・ネオスは倒した。バトルができず戦闘を介さない効果を持つチャクチャルさんのカードがまだ引けていない以上、あとはこのターンでの決着を諦め今できる限りの迎撃準備をするだけだ。となると、後はこの手札を伏せればいい。それがベターな解だ。

「そのはずなんだけど、なんかこう……嫌な予感、っていうのかな。小細工よりも、今使えるカードの力を限界まで出し切ったほうがいいよな、そんな予感がするんだよね」

『ふむ』

黙って僕の話聞くチャクチャルさん。理屈で考えれば、このカードを今使う理由は何一つない。むしろ返しの十代のターンで柔軟性がなくなり、そちらの方が致命的な結果を生む可能性の方が高いといえる。

それはよく頭ではわかっているのだけれど、それでも直感が僕にささやくのだ。それでは不十分だ、と。

『まあ、その予感とやらは私にはさっぱりわからないが』

ほんのわずかな間を置き、チャクチャルさんの確信に満ちた声が入り、頭の中に響く。



『筋の通った理屈とマスターの予感、どちらを信じるかと問われれば私は喜んで後者に従おう』

……本当に、この邪神は言うことがズルい。そんな風に言われたら、何も言い返せない。理性と直感の間で迷ってた僕が、なんだか馬鹿みたいじゃないか。

ああいいとも、そこまで言うならお望みどおりにしてやるさ。僕は5年前に現を救えなかった時からずっと、僕自身のことはまったく許す気はないし、信じてもない。だけどチャクチャルさんがそう言うのなら、チャクチャルさんが信じた僕を今この瞬間だけでも信じてみよう。その結果がどうなろうと、もう悔いはない。

「速攻魔法、ランクアップマジック R U M—クイック・カオスを発動！僕の場のナンバーズを選択し、そのモンスターをカオス化させランクアップする！」

方舟の中央がおもむろに開き、漆黒の人型が飛び出した。同じく方舟から飛んできた得物である深紅の槍を空中で掴み、ドゴランの横に音もなく着地する。

「霖雨蒼生りんうそうせいの時は来た、想い託されし不沈の守護者！C N o . 1 0 1、サイレント オナーズ ダーク ナイ ト S . H . D a r k K n i g h t !」

C N o . 1 0 1 S . H . D a r k K n i g h t 攻2800

「ランクアップ……？けど何をしようとも、このターン攻撃できないことに変わりはないぜ」

「もちろん、それは忘れてないさ。だけどせっかくここまで来たんだ、僕がやりたいことはわかるんじゃない？」

「おつ、なるほどな。ついに来るのか、お前のエースモンスターが！」「そうさ。どれだけカードが増えようと、どれだけデッキが変わろうと、絶対不変の僕の切り札。その攻撃力は、アドバンス召喚の際にリリースしたモンスターの合計値……クライマックスだ、霧の王！」

怒りの炎を操るドゴランと、光届かぬ深淵より浮上した騎士。真逆の色を持つ2つの力が組み合わさり、突如立ち込めた霧の彼方から全身鎧の魔法剣士がゆっくりと歩を進める。

霧の王 攻5800

「残りの手札は1枚……僕はこれを伏せて、ターンエンドする。これ

が僕の全て、今の僕の集大成。さあ十代、これを超えられるものなら超えてみる！」

「面白れえ、見てろよ清明！俺の引きは奇跡を呼ぶぜ……ドロー！」

十代の手札は3枚。何をしてくるかはわからないけれど、ここまで来たらダメ押しにこれも使ってしまったおう。

「トラップ発動、グレイドル・スプリット！このカードを霧の王に装備し、攻撃力をさらに500ポイントアップさせる！」

霧の王 攻5800↓6300

霧の王の片方の瞳がグレイドルの力を受け入れることで突如銀色に染まり、青と銀のオツドアイと化す。正真正銘、これで僕にできることは何ひとつなくなつた。あとは十代がどう出るか、それを見ているだけだ。

そして十代が、こちらを見て目を輝かせ笑う。

「魔法カード、アームズ・ホールを発動！俺のデッキから一番上のカードを墓地に送り、デッキか墓地から装備魔法1枚を手札に加える。俺が選ぶのは墓地のカード、アサルト・アーマーだ。そして今、俺のフィールドにはカードが存在しない。これにより手札のNEXTは、場に伏せることなく発動できる！」

「手札から……それで伏せなかつたってわけ？」

「ああ。正直お前なら、間違いなくゴッド・ネオスも超えてくるって信じてたからな。ちょうど補充部隊を破壊できるダブル・サイクロンも引けたわけだし、それなら手札に持っていた方が安全だと思つたのさ。NEXTは俺の手札、そして墓地からネオス、及びNの仲間を任意の数だけ選んで守備表示で特殊召喚できる！甦れ、ネオスペースの戦士たち！」

圧巻の光景だった。これまでフィールドに出ることなく融合素材として、そして墓地の1枚としてデュエルに干渉し続けていたモンスターが、一斉にフィールドに集結する。グロー・モスに関してはこのデュエルではまだ見た覚えはないが、あれは今のアームズ・ホールのコストで墓地に潜り込んだのだろう。

E・HERO ネオス 守2000

N・フレア・スカラベ 守500

N・エア・ハミングバード 守600

N・グロー・モス 守900

「そして俺は今特殊召喚したこの4体すべてをデッキに戻し、融合召喚。これがネオスペースの集大成、クアドラプルコンタクト融合だ！ さあ行くぜ、コスモ・ネオス！」

4体融合。召喚のために融合魔法が必要となったゴッド・ネオスのような亜種とは違い、ネオスペーシアン本来の融合魔法を必要としないコンタクト融合……その中でも3体素材によるトリプルコンタクト融合を通り越した、まさに最高峰のコンタクト融合。そして現れた最後のネオスもまた、まさにコンタクト融合という概念の集大成に相応しいものだった。以前十代から見せてもらった3体のトリプルコンタクト融合……マグマ、カオス、ストームの3種類を思わせる意匠を全身に抱きつつ、それでいてそのどれとも厳密には異なる2組4枚の翼をもつヒーロー。

E・HERO コスモ・ネオス 攻3500

「コスモ・ネオス……」

「もうお前もカードは使い果たしたみたいだから意味はないけど、コスモ・ネオスの効果を使っておくぜ。このカードの特殊召喚時から相手は1ターンの間フィールドで発動するあらゆる効果が発動できなくなり、さらにこの効果に対して相手はカードをチェーンできない。そして装備魔法、アサルト・アーマーを装備。2回攻撃の効果を使わない場合、このカードは装備モンスターの攻撃力を300ポイントアップさせる」

『封殺か。大したものだが、それからどうする気だ？アサルト・アーマーを装備したということは、攻撃する気はあるようだ』

「さあね。それならそれで、どっしり構えて迎え撃つまでさ」

E・HERO コスモ・ネオス 攻3500↓3800

「さあ、バトルだ！コスモ・ネオス、霧の王に攻撃しろ！」

「振り返ちだ、霧の王！ミスト・ストラングル！」

コスモ・ネオスと霧の王がフィールドの中央でぶつかり合い、剣と

鉤爪が激突の衝撃で無数の火花を散らす。それでも攻撃力の差で少しずつ霧の王が押し始めたところで、十代が残る手札1枚を発動した。

「この瞬間手札からこのカード、オネスティ・ネオスの効果を発動！手札のこのカードを捨てることでフィールドのヒーロー1体を対象に、その攻撃力を2500アップさせる！」

「3800に2500……つてことは！」

『相打ち、か』

コスモ・ネオスの背に、さらに一対の天使の翼が生える。光の力を得たことで2体の実力は完全に均衡し、どちらも1歩も引かぬままに剣戟の音と火花だけが激しさを増していく。そして……。

E・HERO コスモ・ネオス 攻3800↓6300（破壊）↓

霧の王 攻6300（破壊）

「くっ……うわっ！」

「うおおっ！」

幾たびもの激突に限界まで達したエネルギーが、爆発を起こした。霧の王が、コスモ・ネオスが、僕が、十代が、一度にその爆風にのみ込まれて耐え切れずに後ろに飛ばされる。どうにか着地して前を見ると、ちようど起き上がったところの十代と目が合った。何とはなしに笑いあい、また向かい合う。

これで互いに手札も尽き、フィールドもすっからかん。すべてが振出しに戻り、あとはもう先にモンスターを出せた方が勝ち……だけど、不思議ともう戦う気は失せていた。今の爆発が闘志も悩みも全部一緒に吹き飛ばしてくれたように、不思議と晴れやかで穏やかな気持ちだけが残っている。またこちらを見ていた十代と目が合い、向こうも向こうで同じことを考えていることを悟った。

そして十代も、僕が悟ったことに気づいたのだろう。2人して同時にデュエルディスクに手をやり、同じタイミングで電源を切った。十代のデュエルディスクは元の収納形態に、僕の水妖式デュエルディスクは腕輪に。心地いい疲労感からその場に座り込むと、十代も同じようにその場に腰かける。先に口を開いたのは、僕の方だった。

「この決着は、いつか必ずつけさせてもらうよ。だけど今は、これでお預けにしよう」

「ああ。いつでも受けて立つぜ。だけど今は……ガツチャ！」

そう言い切ってポーズを決めた十代と一緒に、訳もなくおかしくなつてその場で笑い出す。勝負はつかず、か。決着の先延ばしだなんてある意味、僕らしい結末といえるかもしれない。ただ今の戦いを通して、いつの間にか僕の気持ちははつきりしていた。笑いの発作が収まったところで、改めて口を開く。

「ねえ——」

「なんだお前ら、こんなところにいたのか！見たか皆、この名探偵サンダーの推理力を！」

「推理力って、1階から順番に探し回っただけじゃないつか」

「むしろ屋上に来たのは一番最後だドン……」

「なんだお前ら、卒業してから5年も経つというのにまだ捜査の基本が足だということもわからないのか？まあいい、おい清明、十代はともかく企画者のお前が勝手に抜け出してどうする。まったく心配させよって、随分探したぞ」

ちやうど口を開いたタイミングで屋上のドアが開き、がやがやと好き勝手喋りながら大勢の人がなだれ込んでくる。こつそり抜け出したことはもうちよつと気づかれなかつたけど、思ったより早くバレてたのね。

立ち上がって見渡すと、僕のアカデミアでの友達ほぼ全員ここにきているようだ。ならまあ、これはこれでいいタイミングだろう。

「ごめんごめん、悪かったね。でもちよつと、皆に聞いて欲しいことができたんだ」

「なんだと？まだ俺の話は……」

「お聞きしましょう、先輩」

まだ何か言いたげな万丈目の言葉を途中で断ち切って、葵ちゃんが「我々の代表」のような顔をして1歩前に出て僕と向かい合う。5年ぶりの再会とはいえさすがにあれだけ付き合いが長いと、こうやって僕が珍しくシリアスな顔をしているときにはそれなりに対応を切り

替えてくれるからありがたい。

ちなみに万丈目はどちらかというところ、こちらがシリアスしているのを悟ったうえで自分の態度を変えようとしないうはた迷惑なのか大物なのかよくわからない奴だ。それはそれで肩肘張らずに済むからありがたい時も……まあ、ごく稀にはある。三沢なんかは臨機応変に空気読むんだけどなあ。

「実は僕、卒業した時からずっと、ずっと頭の片隅で思ってたことがあるんだ。このままここにいてべきなのか、ここにいていいのかな、つて。僕がこのままこの場所にいて、せつかく手に入れた力も使わずに宝の持ち腐れで腐らせていてもいいのかな、なんてさ。だけど最初のうちはそれでもいいや、とも思ってたんだ。2年前にちよつとした事件があつて、そこに巻き込まれるまでは。まあ、それはもう終わった話なんだけどね」

2年前、というワードに、三沢の眉がピクリと動く。まあ僕や十代が答えを言わずとも、三沢ならきつといつか自力でたどり着くだろう。しかし全員しんと静まり返つて、思うがままの言葉を推敲もせずにとだ並べるだけの要領を得ない僕の話に耳を傾けてくれている。それだけのことに、しみじみ心が温かくなる。

「詳しくは今はい言えないけどその事件で、卒業以来だから……3年ぶりか。随分久しぶりに僕も本気を出してさ。使える力を出し惜しみせずに、全部引っ張り出して戦つて。楽しかった。本当にその瞬間が、楽しかったんだ」

ここで一度話すのをやめ、一呼吸置く。遊星とのデュエルで感じたあの感覚を、もう1度思い出す。

「それから今日までの2年間は、もうそれでもいいや、なんて思えなくなった。もつともつと遠くの世界に行つて、僕自身がどこまでやれるのかを確かめたい。どうしようもなく弱い僕が、このデッキとどこまで強くなれるのかを僕自身が知りたい。もちろん、皆が弱いなんてことは思つてないよ。それどころか多分ここにいて皆なら、僕の新しい力にも平気な顔して渡り合えると思う。でも僕が手に入れた新しい力は、壊獣やグレイドルとは種類が違う。もつと根本的な、デュエル

モンスターズそのものの常識を揺るがすような力。それを一方的に僕だけが使おうなんて、少なくとも僕はそれで勝っても嬉しくもないし、負けたとしてもこれまでみたいになれなれない。だからやっぱり、これはこの皆を相手には使えないんだ」

シンクロモンスターに、エクシーズモンスター。一般流通していない特殊なモンスターという点ではある意味十代のコンタクト融合やバトルシテイで使われた本家神のカードと似ているが、前者はあくまで融合モンスターの一部であり、後者もあえて神をも恐れないう方をやるならば圧倒的な能力の数々や3体リリースという召喚の特殊性に目をつぶればメインデッキに入るモンスターという枠内の産物だ。やはり僕が持つ2種類のカードは、その特殊性が違いすぎる。

気兼ねなくこの力を使いたい、だけどここにはそれはまず不可能だろう。だろうというか、僕が一方的に不必要な負い目を感じているだけなのだろうけど。次元の壁を超え、全く別の世界……例えばユーノや富野のいたという、シンクロやエクシーズが当たり前前に存在する世界。どれほどかかるかもわからないけれど、そんな場所を見つけ出すしかない。

「だけどこの場所には、この世界には、僕の大切な思い出がたくさん詰まっている。だからどうしても踏ん切りがつかなくて……それで今日は、同窓会を頼んで集まってもらったんだ。こうやって皆の顔を見ればここに残るか、それとも外に出ていくか、どっちにしても最後の一押しを決める勇気が貰えるかなって」

「それで、どうだったんですか？先輩」  
改めて、ここにいる全員の顔を見渡す。葵ちゃんの促しに、首を縦に振って答える。

「今日皆と会って、話をして、改めて確信できたよ。この世界の思い出はどれだけ離れても、どれだけ時間が過ぎたとしても、絶対に忘れない。なら、迷いはもう消えた。どんなところに行くことになるのかもわからないけど、僕はここを出ていくよ。それが、僕の選んだ道だから……今までずっと、ありがとう」

嘘偽りのない感謝の気持ちから、深々と頭を下げる。言い切った瞬間

間、ふつと肩の荷が下りた気がした。長々と語ってしまったが要するにこれは、僕個人のただのわがままでしかない。それでもずっと胸につかえていたものを全部吐き出してしまったことで、だいぶ気が楽になっっているのが自分でもよくわかった。

それでも、こんな訳の分からない話をいきなり聞かされた皆の方はたまったものじゃないだろう。ちよつと心配になって顔を上げると、じつとこちらを見つめていたいくつもの顔と目が合った。

「……ほら、何をボーっとしてる。こうなつたからにはさっさと戻るぞ、お前たち」

最初に動き出したのは、万丈目だった。くるりと身を翻してもと来たドアの方へ歩いていくと、それに続き1人、また1人とビルの中へ戻ろうとしはじめる。賛成にしろ反対にしろ少なくとも何かしらは言われるとばかり思っていたけれど、まさか全くのノーリアクションとは。完全に予想外の反応にたじろいでいると、すでに戻り始めていた三沢が急に振り返って僕を手招きしだした。

「なんだ清明、いつまでもそんなところで立ち止まって。お前には早く来てもらわないと困るんだぞ。何せ今日の同窓会は今から、お前が主役になつたんだからな」

「僕が？なんで？」

「なーに言ってるんですか先輩。ご自身でおっしゃられたこと、もう忘れたんですか？」

「ええ？」

ますますわからず余計こんがらがる僕に、葵ちゃんがため息をついて片手を差し出す。反射的にその手を掴んだところで、彼女は小さく笑つてこう言った。

「当然です。本日現時刻をもってこの同窓会は、先輩のお別れパーティーになつたんですから。出席拒否なんて、絶対に許しませんよ？」

それから。お別れという名目で再開したパーティーは、ずっと続く



かのようにも思われた。最後の1瞬までそんな皆との記憶を胸に刻み込もうとする僕に仲間たちがかかる訪れては激励の言葉をかけてくれ、たびたび視界が潤んだのは否定しない。けどそんな時間も、いつかは終わる。朝日と共に開きを迎え、改めて全員に別れを告げた時には、気合を入れて泣くのを堪えていた。最後に見せたのが泣き顔だなんて、何の自慢にもなりはしないからだ。

まだ早朝すぎて誰もいない童実野町をしばし歩くと、見慣れた自宅にたどり着く。次にここへ来るのは、いつになるのだろうか。いつか必ず戻ってきて、十代との決着もつけなくてはならない。それまでは、野垂れ死になんて絶対できないな。

「ただいま……」

この時間だと多分親父は、もう今日の仕込みのために起きているだろう。案の定すでに電気がついていた家の中にそっと入ると、厨房から親父の顔が出てきた。

「……」

「……」

朝帰りに対する説教でも飛んでくるかと身構えるも、なぜか何も言わずにじつとこちらを見つめる親父。ついその様子につられてしまい、こつちも固まったまま目を合わせていること数秒。

「ちゃんと、母さんにも挨拶してけよ」

そう一言だけ残り、また厨房に引つ込む親父。言葉を失う僕に、厨房の奥から追加の言葉が届いた。

「20年間近く顔つき合わせてきた馬鹿息子が、急に少しはマシな顔になって帰ってきたんだから何かあったぐらいの察しもするさ。俺を誰だと思ってるんだ、これでもお前の親だぞ？」

「親父……わかった、行ってきます。またいつか、必ず様子見程度には帰ってくるよ」

向こうから見えないことは承知だったが、それでも厨房に向けて深く頭を下げる。そのまま仏間に行き、直接顔を合わせた記憶もない色褪せた写真の中の母さんに手を合わせる。見守っていてくれなんて言いません、せめてこれからもこの家で、親父と一緒にいてやってく

ださい。

次いで僕の部屋に入り、荷物を軽く整理する。どんな旅になるのかさっぱりわからないし、本当に必要なものだけを最小限にあまりかさばるものは持って行かない方がいい。それはわかっているのだが、どうしても諦めきれない大物があった。デュエルアカデミアの卒業アルバム、僕にとっての思い出の結晶だ。

『いいじゃないか、持っていけば』

そんなチャクチャルさんの声に背中を押されるように、どう見てもかさばるそれをどうにか背囊に放り込む。案の定ちよつと不格好に形が出てしまったが、それぐらいはよしとしよう。

「そういえば、チャクチャルさんはこれからどうするの？ナスカに帰る？」

『何を寝ぼけたことを。むしろ逆にこちらが聞かせてもらいたいものだがなマスター、私抜きで次元を超えて、そこからいったいどうやって生きるつもりだ？』

「え？……あつ」

『待て、本気で別れるつもりだったのか!?この8年間マスターがこうして現世に留まっていられるのは誰の力だと思っているんだ!私からの供給を絶ってみろ、3日もせず血も肉も骨も全部灰になるぞ!?!』

「いやー、あはは……ごめん。じゃあ、一緒に来てくれるの?」

『どうもまーだ、我々は意思疎通ができていないようだな。なあマスター、なんのために昨夜はわざわざ私があちこち駆けずり回ったと思っているんだ?運がいいぞマスター、ちょうどこの近くに次元の揺らぎが起きている箇所が見つかったんだ』

目を丸くする僕に、チャクチャルさんが若干いたずらっぽい調子で付け加える。

『それと聞かれる前に答えておくが、仮にも8年越しのパートナーが延々抱えていた悩みにも気づけないほど衰えた覚えはないぞ。この私、権謀術数の地縛神相手にマスターの浅い人生経験が隠し事などできてたまるか』

「チャクチャルさん……」

『ほら、早くしないとどんどん日が昇るぞ。朝日に追い立てられる出発というのも乙なものだ』

そんな泥棒の逃走みたいなのスタイルのどこをどうひっくり返せば乙なんて感想が出てくるのかはさっぱりわからないけれど、きつと5000年以上生きて地球のことは知り尽くしたチャクチャルさんなりに次元を越えた未知の世界に対し興奮しているのだろう。単に美的センスが根本的に異なるという可能性も捨てきれない。

「じゃあチャクチャルさん、それに皆も。改めてこれからも頼むよ。これからも、まだまだデュエルと洒落込もうか！」

## おまけ 鉄砲水の軌跡

原作キャラについて

ここからは表題通り、原作キャラについての反省。

……なんというか、バランズ悪いというか格差大きいですね。三沢と万丈目の2人が大優遇、十代とカイザー、それにエドが優遇、吹雪とオブライエンがまあ普通からちよつと不遇気味……で、あとは全員不遇に両足突っ込んでる程度の描写だったと個人的には反省してます。斎王やコブラといった敵キャラならまだいいんですが、問題なのはそれを味方キャラでやっちゃってるんですよ。

公式から強化貰ったにもかかわらずそれを披露する場に恵まれなかった剣山と翔も大概ですし、OCG化の機会に致命的に恵まれなかったせいでデュエルが語られることすらなかったジムやレイもあんまりな扱いでした。ですが特にひどいというか申し訳ないと思ってるのは、なんといつても明日香です。まさか個人成績の勝ち星0のままストーリー全部終わってしまうとは。サイバー・エンジェルはサイバー・エンジェルで出番が1戦しかなく美朱濡どころか荼吉尼すら出ていないままという恐ろしく中途半端な有様ですし……何度か繰り返した覚えがありますが、別に明日香や機械天使が嫌いなわけではないんです。なぜか出番を作れなかっただけで。

1期前半（入学ノース校特別試合戦）

ストーリー総括

みんな大好き入学編。当初GX自体セブンスターズまでで最終回にする気だったんですけどね。となるとこのあたりですでに全体の半分ぐらい消化していた？

それはともかく読み返してみても感想としては……まあ、よくこれ見てついてきてくれる人がいたもんだなあ。5年以上経てば私自身の感性も変化するのでしょうか、それを差し引いてもまだまだ稚拙。文章というより字の塊。というかこれだけ前の自分で書いたものを見直せって何の拷問？しかもこれ書くためだけにそれを自分からやるとかMっ気でもあるのか私は。あとこの頃はまだ、私自身執筆

を始めて間もない時のあれですので物書きのセオリーがよく分かってない感が強いですね。三点リーダー（……↑これ）の使い方とか人数分だけ律義に積み重ねてた」とか。そういったものの相乗効果で余計にやってらんない気分になる負の無限ループ。

とまあいつまでもけちよんけちよんのボロツカスにしているもきりがないですので、もう少しストーリー的な部分を語りましょう……と思ったけどこの辺はよく考えると原作なぞってるだけだからノース校が一大勢力になったことぐらいいしか話すことがなくそれすらもできない絶望。よーし次行くぞ次。

初出オリキヤラ（登場順）

1、遊野清明<sup>ゆののあきら</sup>

ダークシグナーとして手に入れた不老の体と人間枠を超えた身体能力、そしてカードの精霊召喚術を持つ一応主人公。まずメタ視点の話ですが、彼を書く上で個人的に意識していたことは「隙あらば負ける主役」でした。いろんな敵に突っ込んでいってはいや負けるのかよ、というところで負ける。とは言いつつも実際読み返してみると負けてもストーリーに影響ないところで勝っている場合もなんだかんだいってそれなりにあるので、もうちよつと黒星付けとけばよかったかなーなんて思ったり。でもその点を別にすればあの微妙にずれた彼ならではの感性はなんのかわの私も変に気負うことなく自然体で書くことができ、個人的には動かしやすい、いいキャラでした。一人称が僕なのは主役を書く上でただのこだわり。散々書けたので割と満足。

それと彼を語る上で外せないのが、時代と共にデツキ内容が変化しまくっていった点。ベースがこの作者の愛用デツキということもあり時代の変化と共にその軸は【シーラカンス】↓【魚軸グレイドル】↓【壊獣】↓【水属性軸壊獣グレイドル】と私自身思いもしなかった形でガンガン変わっていききました。そして増えていく嫌がらせ要素。やっぱこれ敵の使うデツキだよ。なんのかわのライフ調整はしやすかったのでそういう意味でだけは向いていたのかもしれませんが、はいお前のモンスターリリース！寄生！とかやっぱ味方の使うムーブ

じやねえ。楽しかったけど。

で、ここからはキャラクターとしての裏話。結局本編では匂わせる程度しかできませんでしたが、彼の幼少期から中学生ぐらいまでの時期はなかなか荒れてました。まあ子供は基本残酷だし、生まれてすぐに起きた重大事故で奇跡の生還者になったなんて経歴と生まれで目をつけられてない方がびっくりするわ。まして原作時点ではやたら治安の悪いことに定評がある童実野町育ちだし。

そして生き抜くためにあくまで徹底抗戦の構えをとった彼はその後、常に1対多での喧嘩に適応した結果の戦闘スタイルが素手の暴力のみならず口先、凶器、不意打ち上等卑怯万歳の姿勢を身に着け、メインウェポンはその辺の工事現場からかっぱらってきた鉄パイプ。その日々が本編でのやたら折れない闘争本能と時折見え隠れする危険思想、あと壊獣グレイドルなんて理不尽極まりない嫌がらせデツキを生き生きとぶん回す姿の原点になっている、というお話。でも実際それぐらいの気骨がないとあの世界でモブとしてならともかく我を張って生きていくとか無理そう。

その後、まあKC城下町だし機会には事欠かないであろうデュエルモンスターズに出会いその世界に魅入られ、闘争心の行き場がリアルファイトからカードに移ったことで本編開始時の穏やか成分強めの人格を維持することに成功。無頓着な父親に代わり家事技能もメキメキと伸ばし、デュエルアカデミアへの進学を志し勉強期間の少なさゆえに怪しいものだった筆記試験も辛うじて通過。そして1話へと繋がることに……なお入学後も校内で堂々と商売を始める、どうせ誰も来ないからと寮の壁をぶち抜き大部屋を作る、備品漁りのため立ち入り禁止の廃寮に平気な顔して出向くなど本性は今一つ変わっていない模様。

修学旅行時は童実野町に戻ることを嫌がっていたそぶりも見せたものの、そこから卒業までには精神的にも成長して吹っ切れたのか卒業後は実家のケーキ屋『YOU KNOW』にて仕事を続ける日々を5年間送っていた。

……が、最終的には闘争本能と冒険心を抑えきれずにデツキ片手に

どこかに旅立つことに。きつと元気にやってるよ、たぶん。

エースモンスター：霧キングミストの王

2、ユーノ

メタ視点担当。元々こちら側の世界の人間で、清明の初期デツキ「シーラカンス」要素は本来こちらが主体。

で、彼ですが。正直、実はあまり語りたくないキャラだったり。どうせ終わった今だからぶっちゃけられますが、完全に持て余している様子が読み返しているだけでも手に取るように伝わってくる人。もつと正直な話をする未来の知識持ちだけど歴史がどう変わろうがあまり介入したがるらない、そもそも私自身彼が何をしたいのかもよく分からない（考えてない）とコンセプトの時点で割と失敗したキャラで、後述のチャクチャルさんにはサポーターとしての彼に失敗した際に蓄積したノウハウが詰め込んであったり。そういう意味では決して無駄ではなかったキャラクターですが、まあそんなもん本編で連載と並行してやるなって話ですね。

最後は闇落ちした清明を救うために退場。ただその前の空白期間が長く、そこで彼がいなくても本編が問題なく回ることがよく分かったうえで決定でした。ある意味私の力量不足に振り回された作中1番の被害者。すまん。

エースモンスター：霧の王

3、河風かわかぜむせう夢想

メインヒロイン兼ラスボス。名前の夢想は後に明らかになるもう1つの名前、現うつとの対比であると同時に無双の言い換えでもあり、要するに主人公がコンセプト上不可能な何があるかと必ず勝つ、を体現させたお方。もつと言うと公式チートの俺TUEE系。

最序盤こそ独走していたヒロインレースに後述の葵ちゃん、及びなぜかチャクチャルさんまで顔を出したり出さなかったりし、しかも良かれと思って付けた語尾のキャラ付けがやっぱり若干使いつらい（ちゃんと意味があるものだから消すこともできない）、葵ちゃんの補完役としての異様なまでの使い勝手の良さ、そもそも最強キャラ自体がストーリーに絡ませづらいという怒涛の三重苦によって中盤から

はやや影が薄くなりつつも要所要所できっちりヒロインムーブをぶちこんできたやればできる子。

デュエル面に関しては、どれだけ好き勝手に追い込んでも墓地肥やしの際と召喚権さえ渡せば余裕の逆転可能という点からあまり悩む必要がなく、最強キャラとしてとても書きやすいデツキでした。あとドラゴネクロの口上は個人的に一番のお気に入り。

エースモンスター：ワイトキング、冥界濁龍 ドラゴキユートス

#### 4、ノース校四天王

一応それなりに出番もあつたので記述。もとはと言えば万丈目が選び抜いたノース校の精鋭4人衆。先鋒から順に飯田いいた（初代）、和田わだ（2代目）、天田てんだ、酒田さけだ、鎧田よろいだ。

ぶつちやけ名前の由来からしてサンダー四天王だし全員〇〇田にしようとか、〇〇の部分も一番だから飯田、サンダー四天王の十だから英語にしてテン、なら天田……とかそういうレベルで、ほぼモブキャラに毛が生えた程度にしか思っていなかったことが非常にわかりやすく見えてくる人たち。名字だけで下の名前すら未設定だし。唯一大将の鎧田のみは例外で、彼だけ名前の由来が使用デツキBFの代表シンクロ（当時基準）であるアーマード・ウイングであつたため翼というちゃんとした個人名をつけた覚えがあります。でも名乗る機会最後まで訪れなかった。

彼らもまた実際書き分けもできなくせに登場人物ばかり増やしたがる私の悪い癖の産物で、世代交代含めると計5人もいたくせにきちんと私の中で個性あるキャラクターとして成立したのが大将の鎧田と参謀の天田しかいなかった印象。反面この2人に関しては要所要所で出番もセリフも少ないなりに用意できただけに色々惜しい。

#### 5、

……ここに三沢大地って書こうかと思つたけどさすがに悪ノリが過ぎるので自粛。空気ネタはTPOを弁え、用法用量を守つて使いましろう。

#### 1期後半（セブンスターズ）

ストーリー総括



原作に沿いつつもちよつとずつオリジナル色が濃くなってきた時期。その反動でセブンスターズと銘打ちながらきちんと1話使つて描写したメンバーが半分ぐらいいしかないという。

それと思ひ出深いのが当時は失樂園もOCG化されておらず、4000しかないライフのもとで揃えるまともなサポーターもうまみもない(時期の関係上アーミタイルが出せない)三幻魔が揃うまで悠長に待ち構えるなんて絶対に無理だときっぱり判断した結果苦肉の策として影丸会長は原作通り十代に画面外で倒しておいてもらい、第二ラウンドとして三幻魔それぞれに自身特化デッキを作ってもらい分割して戦うというなんだかよく分からないことにした点。今となっては昔のことなので正直私もよく覚えていませんが、ちょうど直前にチャクチャルさんの存在が受け入れられたことで私自身が精霊の擬人化という概念に対して何らかの手ごたえを感じていた時期だったのかもしれない。

それとは別に印象深い回はターン35のバレンタイン回。生まれて初めて1話丸々ラブコメに挑戦してみた回なので印象も強いですが、それだけに読み返していて一番精神的にきつかったです。内容が云々以前に自分で書いたラブコメを、それも5年近く前のものを読み返すことそれ自体がもはや拷問の域。

初出オリキャラ

## 6、チャクチャルさん

終身名誉サブヒロインその1。でも男女の区別はないタイプの神様で、どうせならこつちこそ女神にしておけばよかった感は否めない……さすがにあざとすぎるから今のままでいいや。本名は地縛神

Cha cu Ch a i l h u a

動かしてみても初めて分かったユーノの欠点を解消したサポーターキャラ……というとなんだかぼつと出みたいですが、この神様については精霊の代表ポジションとして最初からここで出そうという構想自体はありました。霧の王もこの立ち位置の有力候補ではありましたが、デュエル面での切り札にしてフェイバリットカードであるあらにそれ以上の役割を負わせるのは何か違うだろうと迷った末こち

らを選択。結果的にはデュエル内での出番自体が少なめなため空いた時間で清明のフォローに回ったり補足をしたりと大事な戦いではほぼ必ず切り札として呼び出されていたあちらとは別方向に個性を出すことができ、最低でも5000年という年の効と知識量から清明だけではどうにもならないような場面も解決に導くブレイン担当としてよきコンビに。

とはいえこの神様についてもキャラクターとしては正直なところまだまだ手探りでしたが、ターン49で清明を自分の正式な使い手と受け入れ呼び方をマスターに変えてからは書きながらこつちが驚くほどすら言葉が出てくるようになり落ち着くところに落ち着くとはこういうことを言うんだなあとしみじみ感じた記憶。

## 7、富野

転生者狩りの狩りがやりたかった、という一発ネタだったはずの人。サンダー四天王もそうですが、基本的に私の出す登場人物は名字だけだと出番少な目、どこるか下手すると1話限り、下の名前まで決まっていたらそれなりにレギュラー化させるつもりで考えてます。ただ彼を軸とした転生者狩りの面々はもう少し設定を練れば現の正体やエクストラ勢の開放といった話を進めるための設定として使えるんじゃないか、と思い直し最終的にはそれなりに出番が生まれることに。

使用デッキが「レッド・デーモン」なのは……なんででしょう。もはや覚えてません。ですが初出時には思いもよらなかつたことにその後漫画版からのアビスベリアルカラムティ3兄弟、AVからのスカイライントとたくさんの派生に恵まれたことを考えるとぴったりのチョイスでしたね。ある意味書けば強化が来るジnkス第一号とも。

エースモンスター：レッド・デーモンズ・ドラゴン

## 8、稲石

……この人なんで準レギュラーなの？

いや、というのも上記の富野やサンダー四天王はなんだかんた言いつつもう1回ぐらいは出番作るかな？と思いつつながら出したキャラで

したが、この幽霊に関しては本気でふと書きたくなった単発ホラー回のオチ要因でしかなかったはずでした。そんな一発キャラ中の一発キャラであるにも関わらず何も考えずに舞台を例の廃寮にしたせいで、あ、これアムナエル戦でもう一回行くんだから顔出ししとこ↓隼人の卒業回にも強化イベントが後付けでいいから欲しいな、この人に任せとこ↓あ、ここで出番作れば話がスムーズに（以下略）の流れでいつの間にか存在感があるどころかストーリー的にもかなりの重要キャラに。なんで？

ちなみに完全な後付けとはいえ現の魂の片割れにして夢想の出来損ないという重要な設定が付いてしまったのでここに書き捨てておきますが、この人実は性別不詳なんですよね。頑なに性別を断定できる外見描写は避け、会話にも地の文にも彼や彼女といった単語は一切使って……ないはずです。あつたとしたらそれはミスです。で、この人の大元である2人はどちらも女性。まあつまり、そういうことです。以前とある方からの感想で「彼」と呼称されているのを見たときはPC前でガッツポーズしてた覚えがあります。ただひとつ問題があるとすれば、それが本編に何一つ影響を与えない死に設定であったことぐらいでしょうか。ならここに書く必要もないですが、せっかく動いてくれたキャラクターなので書き手としてのせめてものけじめ、あるいは供養とでも思っておいてください。この後語り自体がそういうノリで思いつくままに書き連ねています。

エースモンスター：ゴーストリック・マミー（多分）

9、男

結局名前一文字も出てねえんでやんの。さすがにこれだけじゃ誰のことだかさっぱりなので補足しておく、現関係のイベントを進める際よく顔を出していた青眼使いの転生者狩りです。その界限ではかなりの古株であり生前の現とも親交が深かったらしく、彼女のエースたるドラゴネクロをまだ夢想であった彼女に渡したのも彼。彼は彼なりに色々ドラマがあつたのでしようが、そのへんは特に描写されることもなく最期は現相手に人生最後の大勝負を挑んだ末に静かに消えていきました。ただ肝心の現がその時期は砂漠の異世界に飛

んで行った清明にいつぱいいつぱいな時期だったせいで今一つそれどころじゃなかったという。一時の夢のように後に禍根を残さず退場できた、という点ではいかにも彼女関係のキャラクターらしいといえるかもしれませんが。

ちなみにこの人も書けば強化されるの体現者の一人。黙ってても強化される青眼をこう称するのはなんか間違ってる気がしなくもないですが、この人初登場時にはまだカオスマAXすらいなかったんですよ。

エースモンスター：ブルーアイズ・ホワイト・ドラゴン青眼の白龍

10、三幻魔

一応擬人化したので。三幻魔と銘打ちつつもほとんどラビエルの話になります。前述のように融合できない都合上3体を一度に使う戦術上の理由が全くありませんでしたので3分割し……たことは果たして良かったのか悪かったのか。ハイペースで更新できるならともかく私のペースだとリアルタイムで読む人はダレてなかったかな。ただここだけの話、書く側にとってはすごい楽なんですよねこの形式。少なくとも連戦が続く間はストーリー構築に全く脳味噌使わなくても半自動で話が進んでくれるし。

そしてラビエルですが、ホントにコイツ何であんなキャラになったんでしょう。稲石さんはいつの間にか準レギュラーに居座ってましたが、こっちはこっちで当初はその予定もなかったのになぜかライバルポジションに鎮座することに。ウリエル、ハモンとアカデミアサイドが2連勝した以上ここから意外性が欲しかったのと、うちの主人公特有の負け癖が変な形で噛み合った結果相打ちにしかただけで因縁を3期まで残そうなんてつもりは全くなかったんですがねえ。それでも4期ラストでの再登場が割と好評だったことを考えると、それもまた決して無駄ではなかったのでしょうか。

エースモンスター：三幻魔

2期（光の結社）

ストーリー総括

とりあえず破滅の光に絡めておけば割と何やってもいいんじゃない

いかと調子乗り始めたあたり。起きたイベントを見返してみるとなぜかタイタンが出てきたりなぜか恒例行事となったノース校との親善試合が挟まったりなぜか三沢推しがピークに達したりとオリジナル色がだいぶ強まってきてますが、新キャラを絡めてストーリーを作らるるのではなく前に出たキャラの再登場を重点しているあたりがまだまだ過渡期。清明のデッキに強化イベントが入りグレイドルの力を手に入れたのもこの時期ですが、それよりも何よりも葵ちゃんの加入が一番この話のその後に影響を与えたイベントでした。

印象深いデュエルはフランチ（アバター）戦ですかね。ラーを倒すと本命のアバターが出てくる構図は前から決めていましたが、その少し前にOCGでもスフィアモードが解放されたことはいいいアクセントになったと思います。不死鳥まで解放済みだとさすがに完成されすぎていて逆にアバターの存在感が霞みそうなので、何かとちよいどいいタイミングでした。

初出オリキャラ

11、葵・クラディー

終身名誉サブヒロインその2。たまに頂いた感想等を見る限りではオリキャラの中でも一番人気が高かった気がします。しつかり者の後輩キャラ（女）が書きたい！毒舌だけど根はいい娘が書きたい！ニンジャ！という欲望のハイブリッドから生まれた色々業の深いお方。反面私の書きたい要素が詰め合わさった娘ですので、裏を返せば何をさせるにしてもすっごい書きやすかったです。

ただそんな彼女も、初期のころは設定に悩んでいました。その名残がエースモンスターとしてチョイスした銀河眼の光子龍です。彼女、当初は転生者狩りからのスパイにしてもいいように意識していたんですよね。なのでレッド・デーモンズや青眼と同じくライバルの使う3000打点ドラゴンである銀河眼をエースとし、もし清明がシンクロやエクシーズを躊躇なく使い始めるようなら正体を明かしその隠された効果であるエクシーズメタ能力によって戦いを挑む、なんてのもちよつと考えてました。まあ没になったのでこの設定墓場に放り込んでおきます。

あと彼女を描写するにあたり意識していたことは、「(清明には)信用も信頼もしているが恋心はない」「安易にデレさせない」この2点です。いや、これ常に意識しておかないと本気でヒロイン食っちゃいそうだったので。その結果たまに見せる彼女なりのデレ描写は毒舌な性格も合わさり非常にわかりにくいものになりましたが、とある感想によるとそれもまた彼女の魅力として捉えていただいたりもしたので人生どう転ぶかわからないものです。

名前通りのハーフですが、それが何かの役に立ったり生かされることはついに最後までなかった。ちなみに母方が日本人の血です。

エースモンスター：ギラクス・シーアイズ・フオートン・ドラゴン銀河眼の光子龍

## 12、後輩

本来単発キャラをここに乗せる気はなかったですが、こいつに限り今でもちよつと悔やんでいることがあるので例外措置。誰かというとなんか37、葵ちゃん初登場回のワンショットキル食らって退場したかませです。入学当初の葵ちゃんに勝ったと思しき描写があり、腕前はそれなり……と言いたいところですが、多分相手するのがめんどくさくなった彼女がわざと手を抜いたんだと思う。

で、なんでこんなのにわざわざ専用スペースを割いたのかというと。彼が葵からアンティで奪おうとしていたカードはカオス・ソルジャー——宵闇の使者——でした。しかし当の本人はそれ以降、最初から最後まで宵闇を出したどころかドローした描写すらありません。これがやりたくてそんなチョイスをしたのかというと、本来彼は光の結社の先兵としてもう1度清明ないし葵にリベンジを挑む予定でした。その際考えていたデッキが「カオス・ソルジャー」……今思えば馬鹿馬鹿しい一発ネタですが、遊戯王界限では割と知名度の高い例の世界に1枚しかないステンレス製の通常モンスター版カオス・ソルジャーをバニラサポートガン積みで専用デッキ組んで、なんてのを考えてました。なぜお蔵入りになったのかというと彼が一時退場した直後に公式がカオス・ソルジャーの強化を打ち立て、突如超戦士をはじめとするニューフェイスにより儀式軸が文字通り別物の強さを得て生まれ変わりこれが俺の激レアカード、カオス・ソルジャー（ステンレス

製)だあ!とかやらせるのがなんか馬鹿らしくなったからです。でもやっぱりやってみればよかったかな。

……あれ、そうするとこんなのも書けば強くなるの系譜? いや書いてなかったけど。

### 13、天下谷<sup>あまがひ</sup>

ストラク3箱の代行天使使い。修学旅行の行き先を賭けて夢想と戦った1発キャラ……かと思いきやその後もデュエル描写こそなかったものの日常パートでたまに出番のあったお嬢様。卒業アルバム作成委員会所属あたり、割と面倒見はいいのかもしれない。

彼女に関しては、原作回のプリンセス・ローズを見ていてふと思ったコテコテのお嬢様キャラが書きたい欲の化身です。本当にそれだけでストーリーに絡ませるつもりは全くありませんでしたし事実全く絡んでませんが、それだけに気楽かつ自由に書けた気がします。ですわ口調楽しかった。やっぱり突き抜けたキャラはそれだけで一定の刺激になりますね。

### エースモンスター：マスター・ヒュペリオン

#### 14、遊<sup>あそび</sup>

転生者狩りその3。名字なのか名前なのかは不明な漫画版フィニッシュ「レッド・デーモン」使い。富野だけではどうも進まない話を無理矢理動かすために急遽導入されたテコ入れ要因でもあり、レッド・デーモン対決がふとやりたくなって出てきた要因。彼を描写し続けてつくづく痛感したことは、私の人物描写の幅の狭さです。もっと危険人物らしさ、やべーやつつぽさを出したかったのですが、どうしてもただ痛いだけの奴との壁を越えられなかった印象。そこを突き抜けることができるかどうかで物書きとして一皮むけるのかもしれないですが、まだ私が動く時ではなかったようです。猛省。

### エースモンスター：琰魔竜 レッド・デーモン

#### 3期 (異世界)

#### ストーリー総括

砂漠の異世界から霸王の世界まで。この辺の清明は基本的に本編よりちよつと外れた場所を動いていますね。本編の裏側、みたいな話を

書きたかったのもありますが、それ以上に十代が霸王墮ちするまでの鬱展開を描写したくなかったという方が大きいです。砂漠の異世界では中途半端に引き分けという形で終わってしまったラビエルとの因縁にケリをつけさせ……た代償にその後アーミタイルが1ミリも出てこなくなるというトンでもない欠陥を抱え、霸王の世界では海に向こうからずっと待ちわびていた壊獣が来日。情報公開当初は同じ水属性ということもあり同時来日するバージエストマを組み込むつもりでしたが、やはりあの豪快さに惚れ込み急遽予定変更。本編で十代が手に入れたE—HEROと同じく清明が闇落ちして手に入れたデッキにもかかわらず当然のような顔をしてしれっと浄化後も居座り、そのまま清明側のメイン火力として定着するというお話的にはよく分からない立ち位置に。

印象深いデュエルとしては、長い因縁を消化したラビエル戦も捨てがたいですがやはりラストのユベル戦。十代の今後を考えると清明がいくら気合い入れようが勝ってはいけないデュエル、どこまでなら粘っていいのかの線引きに悩んだ覚えがあります。結局は一応主役であることを踏まえ最大限の譲歩として第3形態まで引つ張りだしましたが、まあ妥当なところでしょう。でもレインボー・ダークはリリースで始末する。

そのほか思うところがあるのは、霸王関連ですかね。E—HEROは敵役としてのスペックがなかなか高いので、演出や選出にもうちよつとこだわればもつといいデュエルが作れた気がする。

初出オリキャラ

15、明菜・クラディー

シスコンの姉にしてフィジカル面では作中最強。ドテンプレな超ハイスペックで妹LOVEのお姉ちゃんキャラが書きたかった。

この人も私の中ではなかなかの曲者で、最初は登場回のあとがきにもある通り黄昏の忍者シリーズにもつとやる気があれば出番が比例して増えていくというだけの葵ちゃん強化イベント専用キャラでした。でもそこに本物のくノ一としての身体能力を付与した結果便利屋として、特有のハイテンションを付与した結果状況を明るくする



ムードメイカーとしての立場としても定着することに。一発キャラだからこそ濃くしようと思っただけなら濃いからこそ定着したというよくわからない逆転現象の結果存在感を放つことになった人でした。

スレンダー体系で毒舌家、母方の血が色濃い黒髪の妹と出るところは出て引つ込むところは引つ込んだニコニコ明るく父方の血が強い金髪の姉といろいろ対照的な2人ですが、まあこれは深く語るまでもないテンプレといえばテンプレ、よくいえば王道ですね。

エースモンスター：黄昏の忍者將軍―ゲツガ

16、The <sup>ザ</sup>des<sup>デイ</sup>pair<sup>ペア</sup> URANUS<sup>ウラヌス</sup>

砂漠の異世界の主。一応断っておきますがあそこが精霊世界における天王星だなんて話は原作ではどこにも出てきません。ユベルへの復讐心を胸に清明に同行し、力及ばず敗れたもののその能力のヒントを与えることには成功した……と言えば聞こえはいいけれど、要するに相性いいかな？と思って入れてみたけど最終的にはやっぱり使わずらなくて抜けていったカード。唐突に出てきたけれど単発でしか出番のなかったカードには大体そんな理由がありますが、ストーリー的な意味を持たせられただけ一番優遇されているので代表として特筆。

エースモンスター：The despai a URANUS

17、憑依するブラッド・ソウル↓魔人ダーク・バルター

ユベルの影響で砂漠の異世界に現れたカードの精霊で、使用デッキは自身の効果を最大限に生かすための【捕食カウンター】↓純【捕食植物】。単発かと思いきや霸王の世界でも再登場したりサイクル系キャラ。辺境の大賢者やバックアップ・ウォリアーはそれぞれ1話しか出てないのになーんでそのあたりの味方キャラ差し置いてこっちが優遇されてんですかね。

まあ真面目に話をするとまず本人が悪魔族ということもあり悪役として使え、その後融合体の設定を絡めることでもう1回進化した悪役として出番が作れる、という割と貴重な立ち位置のカードではあるんですよね。ハ・デス軍周りはバックストーリーがわりとバック単位でしっかりしているのではなおさら組み込みやすくて、中でも大賢者を憑

依先に選ぶあたり知性派っぽかったこいつに白羽の矢が立つことに。

話は変わるけどそろそろあの三つ巴の戦争の行方を誰か教えてく  
れませんかね。切り込み隊長もハ・デスも最近はずっかり身内にかか  
りつきりで、タイラント・ドラゴンなんて開戦以降どこで何やってん  
のかすらさっぱりだし。いい加減に竜魂の城から出てこいや。

エースモンスター：憑依するブラッド・ソウルブレデター・プランツ↓捕食植物キメラ  
フレシア

18、暗黒界の鬼神 ケルト

公式設定の邪悪なりに誇り高き大物感溢れる暗黒界とGXで霸王  
の部下でしかなかった今一つ大物感のない暗黒界をすり合わせた結  
果生まれたユベルの影響論。この辺の設定に困ったらとりあえずユ  
ベルのせいにしとけ感<sup>2</sup>期の光の結社の系譜であり、4期のダーク  
ネスにそのまま受け継がれます。そしてさらに時を経るとドン・サウ  
ザンドのせいへ。

そしてこのケルトですが、暗黒界のトップであるグラフアは古狸系  
の胡散臭さ重点にすることは割と早くから決まっています、じゃあ誇り  
高さの要素をどこに持つてくるかということ<sup>3</sup>で荒っぽいながらも  
色々考えてるあのようなキャラ付けになりました。ケルト、ラチナ、  
グラフアの3体はGX放送後に新規登場した暗黒界ということ<sup>4</sup>で本  
編には影も形も出てきていない都合上なおさら出しやすく、じゃあ攻  
めのケルトと守りのラチナのどちらを味方側に置くか、と考えた結果  
見た目が騎士っぽいという理由<sup>5</sup>だけでこちらを選択。1歩違ってい  
ればラチナとケルトの立ち位置は真逆だったかもしれませぬ。

エースモンスター：ファントムナイト幻影騎士団 シャドーベイル  
19、暗黒界の龍神 グラフア

清濁呑み込む器を持つ暗黒界の元君主。魔神レイン以上の暗黒界  
のトップが存在し、なおかつそれが本編未登場というこの状況は話を  
作る上で大変やりやすかったです。【暗黒界】使いの人には申し訳な  
いですが、執筆中に新ストラクチャーデッキ、デビルズ・ゲートR発  
売決定！とか出なくてよかった、あと今更カラレス収録決定とか言わ  
れても正直反応に困る時期でしたからそれもなくてよかった、とこの

あたりの執筆中は1日ごとに安心していった思い出。普通なら杞憂で済むような話ですが、コズミック・ブレイザー・ドラゴンやデス・キマイラ・ドラゴンすらめでたく収録される最近の事情を考えると正直いつ出てきてもおかしくない時期でしたからね。

本人のキャラクターとしては、正直暗黒界最強の肩書きを頼りにちよつと便利屋にしすぎたかなあと。この辺のさじ加減は難しいものです。

#### 4期（ダークネス）

##### ストーリー総括

ここにたどり着いたときには、私としても色々と感慨深いものがありました。いや、エタらずにちゃんとここまでこれたんだなあって。別に実際そんなことはないんでしようが（というより単に母数が多いだけ）失踪に定評のあるGX二次、なんて前評判を聞いて書き始める前は正直ちよつと怖かったんですね。実際書き始めるとこれはこれで楽しいものなので、迷ってる人はぜひ投稿を始めてみましょう。この4期というくりの中であんなにいつても印象深い回は現戦……と、万丈目対エドですね。

まず後者の話からすると、当初は無難にダスクユートピアガイと白黒アームドを出す程度で終わらせるつもりでした。ほかにやりたいことも特になかったし。が、その少し前に公式からのデュエリストへの挑戦（と私は受け取りました）こと悪魔合体の申し子、アームド・ドラゴン・カタパルトキャノンが爆誕。「やあぁーってやろうじやないかオラアア！」と本気になった結果として前後で2話に分けるほどなつがい回になってしまいました。楽しかったのは間違いないけれど後書きにも書いた通りまだ出したりないモンスターはいっぱいいいたので、あれでもまだちよつと消化不良ですが。

で、現戦の話です。あの終わり方そのものは、かなり初期から決まっていたと思います。ですがそれってどうなんだろう？と自分でもここにたどり着くまでに散々迷い、それでも最終的に初志貫徹する形で決まった彼らの恋の、そしてデュエルの結末でしたが、私がこの作品に込めてきた思いを全て出し切る事ができた回だと私自身は自負してい

ます。試合に勝って勝負に負けて、最後の決まり手は未来への思い。後悔はありません。

初出オリキャラ

20、『彼女』

本編開始前にダークネスの罠により死傷者4人の自動車事故を引き起こす原因となり、自責の念から唯一の生き残りであった当時の清明に自らの生命力をすべて受け渡し、死してなお残った後悔や悲しみの残留思念をダークネスに分捕られた転生者狩り。すべての始まりとなったこの人が最後のオリキャラ紹介枠になるこの流れ好き。現の名前は本来、彼女の本名でした。

……ならば本編ラスト、自らを現と名乗り愛する者との戦いを経て自らの意志で散っていった彼女の人格は夢想と現、厳密にはどちらのものだったのか？どちらのものでもあり、どちらのものでもないんでしょう、多分。身もふたもないけれど、こういう話はあまりはつきりさせない方がいい気がします。これに関しては、聞かれても答えませんよ私は。

ラスト（最終決戦）

最後の番外編、清明対十代。最終的には勝負持ち越しとなりましたが、あの子の展開もほんの少しだけ考えてあります。まず返しのターンの清明がデッキトップの一時休戦をドロウし即座に発動、十代はそのドロウで並行世界融合を手に入れたフエザーマンとバーストレイディから満を持してフレイム・ウィングマンを呼び出し……さらにその後？さあ、どうなるでしょう。きつと、私にすら思いもよらない手をあの2人ならば見せてくれることでしょう。

よし、こんなところですかね。改めまして、最後に一言ご挨拶を。

これまで長らく遊野清明の物語に付き合っていたいただき、ありがとうございます。私1人だけでは、これだけ長い期間1つの話を書き続けることなどできなかつたでしょう。幾度となく頂いた感想、指摘、応援、あるいはお気に入り登録。そういったものの1つ1つが、執筆

者としての私をつくる血であり肉でした。

この物語はここで幕を引きますが、またよろしければ次の作品でお会いしましょう。